旧約聖書

創世記

第一章
一はじめに神は天と地とを創造された。二地は形なく、むなしく、
やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。
三神は「光あれ」と言われた。すると光があった。四神はその光を見
て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。五神は光を昼と
名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日で
ある。
六神はまた言われた、「水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ」。
七そのようになった。神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞ
らの上の水とを分けられた。八神はそのおおぞらを天と名づけられた。夕
となり、また朝となった。第二日である。

九神はまた言われた、「天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現
れよ」。そのようになった。一〇神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集
まった所を海と名づけられた。神は見て、良しとされた。一一神はまた言
われた、「地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ
果樹とを地の上にはえさせよ」。そのようになった。一二地は青草と、種類
にしたがって種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ木とをは
えさせた。神は見て、良しとされた。一三夕となり、また朝となった。第
三日である。
一四神はまた言われた、「天のおおぞらに光があって昼と夜とを分け、し
るしのため、季節のため、日のため、年のためになり、一五天のおおぞらに
あって地を照らす光となれ」。そのようになった。一六神は二つの大きな
光を造り、大きい光に昼をつかさどらせ、小さい光に夜をつかさどら

せ、また星を造られた。一七神はこれらを天のおおぞらに置いて地を照ら
させ、一八昼と夜とをつかさどらせ、光とやみとを分けさせられた。神は
見て、良しとされた。一九夕となり、また朝となった。第四日である。
二〇神はまた言われた、「水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のお
おぞらを飛べ」。二一神は海の大いなる獣と、水に群がるすべての動く生
き物とを、種類にしたがって創造し、また翼のあるすべての鳥を、種類に
したがって創造された。神は見て、良しとされた。二二神はこれらを祝福
して言われた、「生めよ、ふえよ、海の水に満ちよ、また鳥は地にふえよ」。
二三夕となり、また朝となった。第五日である。
二四神はまた言われた、「地は生き物を種類にしたがっていだせ。家畜と、
這うものと、地の獣とを種類にしたがっていだせ」。そのようになった。
二五神は地の獣を種類にしたがい、家畜を種類にしたがい、また地に這う

すべての物を種類にしたがって造られた。神は見て、良しとされた。
二六神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人
を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地の
すべての這うものとを治めさせよう」。二七神は自分のかたちに人を創造さ
れた。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。二八神
は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせ
よ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。二九
神はまた言われた、「わたしは全地のおもてにある種をもつすべての草と、
種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。これはあなたがた
の食物となるであろう。三〇また地のすべての獣、空のすべての鳥、地を
這うすべてのもの、すなわち命あるものには、食物としてすべての青草
を与える」。そのようになった。三一神が造ったすべての物を見られたとこ

ろ、それは、はなはだ良かった。夕となり、また朝となった。第六日である。
第二章一こうして天と地と、その万象とが完成した。**二**神は第七日に
その作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休
まれた。**三**神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日
に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。
四これが天地創造の由来である。
主なる神が地と天とを造られた時、**五**地にはまだ野の木もなく、また野
の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す
人もなかったからである。**六**しかし地から泉がわきあがって土の全面を
潤していた。**七**主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き
いれられた。そこで人は生きた者となった。**八**主なる神は東のかた、エデ
ンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。**九**また主なる神

は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の
中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。一〇また一つの川
がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった。一一
その第一の名はピソンといい、金のあるハビラの全地をめぐるもので、一
二その地の金は良く、またそこはブドラクと、しまめのうとを産した。一三
第二の川の名はギホンといい、クシの全地をめぐるもの。一四第三の川の
名はヒデケルといい、アッスリヤの東を流れるもの。第四の川はユフラ
テである。

一五主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、こ
れを守らせられた。一六主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園
のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。一七しかし善悪を知
る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬ
であろう」。

一八また主なる神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のた
めに、ふさわしい助け手を造ろう」。一九そして主なる神は野のすべての獣
と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれに
どんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名
となるのであった。二〇それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべ
ての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。
二一そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つ
を取って、その所を肉でふさがれた。二二主なる神は人から取ったあばら
骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。二三そのとき、人
は言った。

「これこそ、ついにわたしの骨の骨、
わたしの肉の肉。

　男から取ったものだから、
　これを女と名づけよう」。
二四それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。
二五人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わな
かった。

第三章
一さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾
であった。へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなと、
ほんとうに神が言われたのですか」。二女はへびに言った、「わたしたちは
園の木の実を食べることは許されていますが、三ただ園の中央にある木の
実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけない
からと、神は言われました」。四へびは女に言った、「あなたがたは決して
死ぬことはないでしょう。五それを食べると、あなたがたの目が開け、神

のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。六女
がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには
好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与
えたので、彼も食べた。七すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であ
ることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。
八彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を
聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に
身を隠した。九主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいる
のか」。一〇彼は答えた、「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは
裸だったので、恐れて身を隠したのです」。一一神は言われた、「あなたが
裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなと、命じておいた木から、
あなたは取って食べたのか」。一二人は答えた、「わたしと一緒にしてくだ

さったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。一三
そこで主なる神は女に言われた、「あなたは、なんということをしたのです」。女は答えた、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」。一四主なる神はへびに言われた、

「おまえは、この事を、したので、
すべての家畜、野のすべての獣のうち、
最ものろわれる。
おまえは腹で、這いあるき、
一生、ちりを食べるであろう。
一五わたしは恨みをおく、
おまえと女とのあいだに、
おまえのすえと女のすえとの間に。

彼はおまえのかしらを砕き、
おまえは彼のかかとを砕くであろう」。
一六つぎに女に言われた、
「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。
あなたは苦しんで子を産む。
それでもなお、あなたは夫を慕い、
彼はあなたを治めるであろう」。
一七更に人に言われた、「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなと、わたし
が命じた木から取って食べたので、
地はあなたのためにのろわれ、
あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。
一八地はあなたのためにいばらとあざみとを生じ、

あなたは野の草を食べるであろう。
一九あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、
あなたは土から取られたのだから。
あなたは、ちりだから、ちりに帰る」。
二〇さて、人はその妻の名をエバと名づけた。彼女がすべて生きた者の
母だからである。二一主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、
彼らに着せられた。
二二主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、
善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久
に生きるかも知れない」。二三そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出
して、人が造られたその土を耕させられた。二四神は人を追い出し、エデ
ンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道

を守らせられた。

第四章一人はその妻エバを知った。彼女はみごもり、カインを産んで言っ
た、「わたしは主によって、ひとりの人を得た」。二彼女はまた、その弟ア
ベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となっ
た。三日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主に供え物とした。四
アベルもまた、その群れのういごと肥えたものとを持ってきた。主はアベ
ルとその供え物とを顧みられた。五しかしカインとその供え物とは顧み
られなかったので、カインは大いに憤って、顔を伏せた。六そこで主は
カインに言われた、「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのです
か。七正しい事をしているのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし
正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています。それは
あなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません」。

八カインは弟アベルに言った、「さあ、野原へ行こう」。彼らが野にい
たとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。九主はカイ
ンに言われた、「弟アベルは、どこにいますか」。カインは答えた、「知り
ません。わたしが弟の番人でしょうか」。一〇主は言われた、「あなたは
何をしたのです。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいま
す。一一今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この
土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。一二あな
たが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あ
なたは地上の放浪者となるでしょう」。一三カインは主に言った、「わたし
の罰は重くて負いきれません。一四あなたは、きょう、わたしを地のおもて
から追放されました。わたしはあなたを離れて、地上の放浪者とならねば
なりません。わたしを見付ける人はだれでもわたしを殺すでしょう」。一五

主はカインに言われた、「いや、そうではない。だれでもカインを殺す者は
七倍の復讐を受けるでしょう」。そして主はカインを見付ける者が、だれ
も彼を打ち殺すことのないように、彼に一つのしるしをつけられた。一六
カインは主の前を去って、エデンの東、ノドの地に住んだ。
一七カインはその妻を知った。彼女はみごもってエノクを産んだ。カイ
ンは町を建て、その町の名をその子の名にしたがって、エノクと名づけた。
一八エノクにはイラデが生れた。イラデの子はメホヤエル、メホヤエルの子
はメトサエル、メトサエルの子はレメクである。一九レメクはふたりの妻を
めとった。ひとりの名はアダといい、ひとりの名はチラといった。二〇アダ
はヤバルを産んだ。彼は天幕に住んで、家畜を飼う者の先祖となった。二
一その弟の名はユバルといった。彼は琴や笛を執るすべての者の先祖と
なった。二二チラもまたトバルカインを産んだ。彼は青銅や鉄のすべての

刃物を鍛える者となった。トバルカインの妹をナアマといった。
二三レメクはその妻たちに言った、
「アダとチラよ、わたしの声を聞け、
レメクの妻たちよ、わたしの言葉に耳を傾けよ。
わたしは受ける傷のために、人を殺し、
受ける打ち傷のために、わたしは若者を殺す。
二四カインのための復讐が七倍ならば、
レメクのための復讐は七十七倍」。
二五アダムはまたその妻を知った。彼女は男の子を産み、その名をセツ
と名づけて言った、「カインがアベルを殺したので、神はアベルの代りに、ひ
とりの子をわたしに授けられました」。二六セツにもまた男の子が生れた。
彼はその名をエノスと名づけた。この時、人々は主の名を呼び始めた。

第五章
一アダムの系図は次のとおりである。神が人を創造された時、神
をかたどって造り、**二**彼らを男と女とに創造された。彼らが創造された
時、神は彼らを祝福して、その名をアダムと名づけられた。**三**アダムは百
三十歳になって、自分にかたどり、自分のかたちのような男の子を生み、
その名をセツと名づけた。**四**アダムがセツを生んで後、生きた年は八百年
であって、ほかに男子と女子を生んだ。**五**アダムの生きた年は合わせて九
百三十歳であった。そして彼は死んだ。
六セツは百五歳になって、エノスを生んだ。**七**セツはエノスを生んだ後、
八百七年生きて、男子と女子を生んだ。**八**セツの年は合わせて九百十二歳
であった。そして彼は死んだ。
九エノスは九十歳になって、カイナンを生んだ。**一〇**エノスはカイナンを
生んだ後、八百十五年生きて、男子と女子を生んだ。**一一**エノスの年は合わ

せて九百五歳であった。そして彼は死んだ。
一二カイナンは七十歳になって、マハラレルを生んだ。一三カイナンはマ
ハラレルを生んだ後、八百四十年生きて、男子と女子を生んだ。一四カイナ
ンの年は合わせて九百十歳であった。そして彼は死んだ。
一五マハラレルは六十五歳になって、ヤレドを生んだ。一六マハラレルは
ヤレドを生んだ後、八百三十年生きて、男子と女子を生んだ。一七マハラレ
ルの年は合わせて八百九十五歳であった。そして彼は死んだ。一八ヤレド
は百六十二歳になって、エノクを生んだ。一九ヤレドはエノクを生んだ後、
八百年生きて、男子と女子を生んだ。二〇ヤレドの年は合わせて九百六十二
歳であった。そして彼は死んだ。
二一エノクは六十五歳になって、メトセラを生んだ。二二エノクはメトセ
ラを生んだ後、三百年、神とともに歩み、男子と女子を生んだ。二三エノク

の年は合わせて三百六十五歳であった。二四エノクは神とともに歩み、神
が彼を取られたので、いなくなった。
二五メトセラは百八十七歳になって、レメクを生んだ。二六メトセラはレ
メクを生んだ後、七百八十二年生きて、男子と女子を生んだ。二七メトセラ
の年は合わせて九百六十九歳であった。そして彼は死んだ。
二八レメクは百八十二歳になって、男の子を生み、二九「この子こそ、主
が地をのろわれたため、骨折り働くわれわれを慰めるもの」と言って、
その名をノアと名づけた。三〇レメクはノアを生んだ後、五百九十五年生
きて、男子と女子を生んだ。三一レメクの年は合わせて七百七十七歳であっ
た。そして彼は死んだ。
三二ノアは五百歳になって、セム、ハム、ヤペテを生んだ。
第六章一人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生まれた時、二神

の子たちは人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとった。
三そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は
肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であろう」。四そのころ、ま
たその後にも、地にネピリムがいた。これは神の子たちが人の娘たちの
ところにはいって、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士であ
り、有名な人々であった。
五主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつ
も悪い事ばかりであるのを見られた。六主は地の上に人を造ったのを悔い
て、心を痛め、七「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。
人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったこと
を悔いる」と言われた。八しかし、ノアは主の前に恵みを得た。
九ノアの系図は次のとおりである。ノアはその時代の人々の中で正しく、

かつ全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。一〇ノアはセム、ハム、
ヤペテの三人の子を生んだ。
一一時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。一二神が地を見られ
ると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからであ
る。一三そこで神はノアに言われた、「わたしは、すべての人を絶やそうと
決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは彼らを地とともに
滅ぼそう。一四あなたは、いとすぎの木で箱舟を造り、箱舟の中にへやを
設け、アスファルトでそのうちそとを塗りなさい。一五その造り方は次の
とおりである。すなわち箱舟の長さは三百キュビト、幅は五十キュビト、
高さは三十キュビトとし、一六箱舟に屋根を造り、上へ一キュビトにそれを
仕上げ、また箱舟の戸口をその横に設けて、一階と二階と三階のある箱舟
を造りなさい。一七わたしは地の上に洪水を送って、命の息のある肉な

るものを、みな天の下から滅ぼし去る。地にあるものは、みな死に絶える
であろう。一八ただし、わたしはあなたと契約を結ぼう。あなたは子らと、
妻と、子らの妻たちと共に箱舟にはいりなさい。一九またすべての生き物、
すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて、あなたと
共にその命を保たせなさい。それらは雄と雌とでなければならない。二〇
すなわち、鳥はその種類にしたがい、獣はその種類にしたがい、また地の
すべての這うものも、その種類にしたがって、それぞれ二つずつ、あなたの
ところに入れて、命を保たせなさい。二一また、すべての食物となるも
のをとって、あなたのところにたくわえ、あなたとこれらのものとの食物
としなさい」。二二ノアはすべて神の命じられたようにした。

第七章一主はノアに言われた、「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさ
い。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわた

しは認めたからである。二あなたはすべての清い獣の中から雄と雌とを
七つずつ取り、清くない獣の中から雄と雌とを二つずつ取り、三また空の
鳥の中から雄と雌とを七つずつ取って、その種類が全地のおもてに生き残
るようにしなさい。四七日の後、わたしは四十日四十夜、地に雨を降らせ
て、わたしの造ったすべての生き物を、地のおもてからぬぐい去ります」。
五ノアはすべて主が命じられたようにした。

六さて洪水が地に起った時、ノアは六百歳であった。七ノアは子らと、妻
と、子らの妻たちと共に洪水を避けて箱舟にはいった。八また清い獣と、
清くない獣と、鳥と、地に這うすべてのものとの、九雄と雌とが、二つず
つノアのもとにきて、神がノアに命じられたように箱舟にはいった。一〇
こうして七日の後、洪水が地に起った。

一一それはノアの六百歳の二月十七日であって、その日に大いなる淵の

源は、ことごとく破れ、天の窓が開けて、一二雨は四十日四十夜、地に降
り注いだ。一三その同じ日に、ノアと、ノアの子セム、ハム、ヤペテと、ノ
アの妻と、その子らの三人の妻とは共に箱舟にはいった。一四またすべて
の種類の獣も、すべての種類の家畜も、地のすべての種類の這うものも、
すべての種類の鳥も、すべての翼あるものも、皆はいった。一五すなわち
命の息のあるすべての肉なるものが、二つずつノアのもとにきて、箱舟に
はいった。一六そのはいったものは、すべて肉なるものの雄と雌とであっ
て、神が彼に命じられたようにはいった。そこで主は彼のうしろの戸を閉
ざされた。

一七洪水は四十日のあいだ地上にあった。水が増して箱舟を浮べたので、
箱舟は地から高く上がった。一八また水がみなぎり、地に増したので、箱舟
は水のおもてに漂った。一九水はまた、ますます地にみなぎり、天の下の

高い山々は皆おおわれた。二〇水はその上、さらに十五キュビトみなぎっ
て、山々は全くおおわれた。二一地の上に動くすべて肉なるものは、鳥も
家畜も獣も、地に群がるすべての這うものも、すべての人もみな滅びた。
二二すなわち鼻に命の息のあるすべてのもの、陸にいたすべてのものは死
んだ。二三地のおもてにいたすべての生き物は、人も家畜も、這うものも、
空の鳥もみな地からぬぐい去られて、ただノアと、彼と共に箱舟にいたも
のだけが残った。二四水は百五十日のあいだ地上にみなぎった。
第八章一神はノアと、箱舟の中にいたすべての生き物と、すべての家畜と
を心にとめられた。神が風を地の上に吹かせられたので、水は退いた。
二また淵の源と、天の窓とは閉ざされて、天から雨が降らなくなった。
三それで水はしだいに地の上から引いて、百五十日の後には水が減り、四
箱舟は七月十七日にアララテの山にとどまった。五水はしだいに減って、

十月になり、十月一日に山々の頂が現れた。
六四十日たって、ノアはその造った箱舟の窓を開いて、七からすを放っ
たところ、からすは地の上から水がかわききるまで、あちらこちらへ飛び
まわった。八ノアはまた地のおもてから、水がひいたかどうかを見ようと、
彼の所から、はとを放ったが、九はとは足の裏をとどめる所が見つから
なかったので、箱舟のノアのもとに帰ってきた。水がまだ全地のおもてに
あったからである。彼は手を伸べて、これを捕え、箱舟の中の彼のもとに引
き入れた。一〇それから七日待って再びはとを箱舟から放った。一一はと
は夕方になって彼のもとに帰ってきた。見ると、そのくちばしには、オリブ
の若葉があった。ノアは地から水がひいたのを知った。一二さらに七日待っ
てまた、はとを放ったところ、もはや彼のもとには帰ってこなかった。
一三六百一歳の一月一日になって、地の上の水はかれた。ノアが箱舟の

おおいを取り除いて見ると、土のおもては、かわいていた。一四二月二十七
日になって、地は全くかわいた。一五この時、神はノアに言われた、一六
「あなたは妻と、子らと、子らの妻たちと共に箱舟を出なさい。一七あなた
は、共にいる肉なるすべての生き物、すなわち鳥と家畜と、地のすべての
這うものとを連れて出て、これらのものが地に群がり、地の上にふえ広が
るようにしなさい」。一八ノアは共にいた子らと、妻と、子らの妻たちとを
連れて出た。一九またすべての獣、すべての這うもの、すべての鳥、すべ
て地の上に動くものは皆、種類にしたがって箱舟を出た。
二〇ノアは主に祭壇を築いて、すべての清い獣と、すべての清い鳥との
うちから取って、燔祭を祭壇の上にささげた。二一主はその香ばしいかお
りをかいで、心に言われた、「わたしはもはや二度と人のゆえに地をのろ
わない。人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである。わたし

は、このたびしたように、もう二度と、すべての生きたものを滅ぼさない。
二二 地のある限り、種まきの時も、刈入れの時も、暑さ寒さも、夏冬も、昼
も夜もやむことはないであろう」。

第九章 一 神はノアとその子らとを祝福して彼らに言われた、「生めよ、ふ
えよ、地に満ちよ。二 地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべて
のもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、三
すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草
をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与
える。四 しかし肉を、その命である血のままで、食べてはならない。五 あ
なたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。い
かなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、
報復するであろう。

六人の血を流すものは、人に血を流される、
神が自分のかたちに人を造られたゆえに。
七あなたがたは、生めよ、ふえよ、
地に群がり、地の上にふえよ」。
八神はノアおよび共にいる子らに言われた、九「わたしはあなたがた及
びあなたがたの後の子孫と契約を立てる。一〇またあなたがたと共にいる
すべての生き物、あなたがたと共にいる鳥、家畜、地のすべての獣、すな
わち、すべて箱舟から出たものは、地のすべての獣にいたるまで、わた
しはそれと契約を立てよう。一一わたしがあなたがたと立てるこの契約に
より、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、ま
た地を滅ぼす洪水は、再び起らないであろう」。一二さらに神は言われた、
「これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物と

の間に代々かぎりなく、わたしが立てる契約のしるしである。一三すなわ
ち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約の
しるしとなる。一四わたしが雲を地の上に起すとき、にじは雲の中に現れ
る。一五こうして、わたしは、わたしとあなたがた、及びすべて肉なるあ
らゆる生き物との間に立てた契約を思いおこすゆえ、水はふたたび、す
べて肉なる者を滅ぼす洪水とはならない。一六にじが雲の中に現れると
き、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物と
の間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」。一七そして神はノアに
言われた、「これがわたしと地にあるすべて肉なるものとの間に、わたし
が立てた契約のしるしである」。
一八箱舟から出たノアの子らはセム、ハム、ヤペテであった。ハムはカ
ナンの父である。一九この三人はノアの子らで、全地の民は彼らから出て、

広がったのである。
二〇さてノアは農夫となり、ぶどう畑をつくり始めたが、二一彼はぶどう
酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。二二カナンの父ハムは父の
裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。二三セムとヤペテとは着物
を取って、肩にかけ、うしろ向きに歩み寄って、父の裸をおおい、顔をそ
むけて父の裸を見なかった。二四やがてノアは酔いがさめて、末の子が彼
にした事を知ったとき、二五彼は言った、
「カナンはのろわれよ。
彼はしもべのしもべとなって、
その兄弟たちに仕える」。
二六また言った、
「セムの神、主はほむべきかな、
カナンはそのしもべとなれ。

二七神はヤペテを大いならしめ、
セムの天幕に彼を住まわせられるように。
カナンはそのしもべとなれ」。
二八ノアは洪水の後、なお三百五十年生きた。二九ノアの年は合わせて九
百五十歳であった。そして彼は死んだ。
第一〇章一ノアの子セム、ハム、ヤペテの系図は次のとおりである。洪水
の後、彼らに子が生まれた。二ヤペテの子孫はゴメル、マゴグ、マダイ、ヤ
ワン、トバル、メセク、テラスであった。三ゴメルの子孫はアシケナ
ズ、リパテ、トガルマ。四ヤワンの子孫はエリシャ、タルシシ、キッテム、
ドダニムであった。五これらから海沿いの地の国民が分かれて、おのおのそ
の土地におり、その言語にしたがい、その氏族にしたがって、その国々に
住んだ。

六ハムの子孫はクシ、ミツライム、プテ、カナンであった。七クシの子孫は
セバ、ハビラ、サブタ、ラアマ、サブテカであり、ラアマの子孫はシバとデダン
であった。八クシの子はニムロデであって、このニムロデは世の権力者と
なった最初の人である。九彼は主の前に力ある狩猟者であった。これ
から「主の前に力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが起っ
た。一〇彼の国は最初シナルの地にあるバベル、エレク、アカデ、カルネ
であった。一一彼はその地からアッスリヤに出て、ニネベ、レホボテイリ、
カラ、一二およびニネベとカラとの間にある大いなる町レセンを建てた。
一三ミツライムからルデ族、アナミ族、レハビ族、ナフト族、一四パテロス
族、カスル族、カフトリ族が出た。カフトリ族からペリシテ族が出た。
一五カナンからその長子シドンが出て、またヘテが出た。一六その他エブ
スびと、アモリびと、ギルガシびと、一七ヒビびと、アルキびと、セニびと、

一八アルワデびと、ゼマリびと、ハマテびとが出た。後になってカナンびと
の氏族がひろがった。一九カナンびとの境はシドンからゲラルを経てガザ
に至り、ソドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムを経て、レシャに及んだ。二〇
これらはハムの子孫であって、その氏族とその言語とにしたがって、その
土地と、その国々にいた。
二一セムにも子が生れた。セムはエベルのすべての子孫の先祖であって、
ヤペテの兄であった。二二セムの子孫はエラム、アシュル、アルパクサデ、
ルデ、アラムであった。二三アラムの子孫はウヅ、ホル、ゲテル、マシであっ
た。二四アルパクサデの子はシラ、シラの子はエベルである。二五エベルに
ふたりの子が生れた。そのひとりの名をペレグといった。これは彼の代に
地の民が分れたからである。その弟の名をヨクタンといった。二六ヨク
タンにアルモダデ、シャレフ、ハザルマウテ、エラ、二七ハドラム、ウザル、

デクラ、二八オバル、アビマエル、シバ、二九オフル、ハビラ、ヨバブが生
れた。これらは皆ヨクタンの子であった。三〇彼らが住んだ所はメシャか
ら東の山地セパルに及んだ。三一これらはセムの子孫であって、その氏族
とその言語とにしたがって、その土地と、その国々にいた。
三二これらはノアの子らの氏族であって、血統にしたがって国々に住ん
でいたが、洪水の後、これらから地上の諸国民が分れたのである。
第一一章一全地は同じ発音、同じ言葉であった。二時に人々は東に移
り、シナルの地に平野を得て、そこに住んだ。三彼らは互に言った、「さ
あ、れんがを造って、よく焼こう」。こうして彼らは石の代りに、れんが
を得、しっくいの代りに、アスファルトを得た。四彼らはまた言った、「さ
あ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名
を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう」。五時に主は下って、人の

子たちの建てる町と塔とを見て、六言われた、「民は一つで、みな同じ言葉
である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事は、も
はや何事もとどめ得ないであろう。七さあ、われわれは下って行って、そこ
で彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう」。八こうして主
が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てるのを
やめた。九これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地
の言葉を乱されたからである。主はそこから彼らを全地のおもてに散らさ
れた。

一〇セムの系図は次のとおりである。セムは百歳になって洪水の二年の
後にアルパクサデを生んだ。一一セムはアルパクサデを生んで後、五百年生
きて、男子と女子を生んだ。

一二アルパクサデは三十五歳になってシラを生んだ。一三アルパクサデは

シラを生んで後、四百三年生きて、男子と女子を生んだ。
一四シラは三十歳になってエベルを生んだ。一五シラはエベルを生んで後、
四百三年生きて、男子と女子を生んだ。
一六エベルは三十四歳になってペレグを生んだ。一七エベルはペレグを生
んで後、四百三十年生きて、男子と女子を生んだ。
一八ペレグは三十歳になってリウを生んだ。一九ペレグはリウを生んで後、
二百九年生きて、男子と女子を生んだ。
二〇リウは三十二歳になってセルグを生んだ。二一リウはセルグを生んで
後、二百七年生きて、男子と女子を生んだ。
二二セルグは三十歳になってナホルを生んだ。二三セルグはナホルを生ん
で後、二百年生きて、男子と女子を生んだ。
二四ナホルは二十九歳になってテラを生んだ。二五ナホルはテラを生んで

後、百十九年生きて、男子と女子を生んだ。
二六テラは七十歳になってアブラム、ナホルおよびハランを生んだ。
二七テラの系図は次のとおりである。テラはアブラム、ナホルおよびハラ
ンを生み、ハランはロトを生んだ。二八ハランは父テラにさきだって、その
生れた地、カルデヤのウルで死んだ。二九アブラムとナホルは妻をめとっ
た。アブラムの妻の名はサライといい、ナホルの妻の名はミルカといって
ハランの娘である。ハランはミルカの父、またイスカの父である。三〇サ
ライはうまずめで、子がなかった。

三一テラはその子アブラムと、ハランの子である孫ロトと、子アブラムの
妻である嫁サライとを連れて、カナンの地へ行こうとカルデヤのウルを出
たが、ハランに着いてそこに住んだ。三二テラの年は二百五歳であった。テ
ラはハランで死んだ。

第一二章一時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別
れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。二わたしはあなたを大
いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなた
は祝福の基となるであろう。
三あなたを祝福する者をわたしは祝福し、
あなたをのろう者をわたしはのろう。
地のすべてのやからは、
あなたによって祝福される」。
四アブラムは主が言われたようにいで立った。ロトも彼と共に行った。
アブラムはハランを出たとき七十五歳であった。五アブラムは妻サライと、
弟の子ロトと、集めたすべての財産と、ハランで獲た人々とを携えて
カナンに行こうとしていで立ち、カナンの地にきた。六アブラムはその地を

通ってシケムの所、モレのテレビンの木のもとに着いた。そのころカナン
びとがその地にいた。七時に主はアブラムに現れて言われた、「わたしはあ
なたの子孫にこの地を与えます」。アブラムは彼に現れた主のために、そ
こに祭壇を築いた。八彼はそこからベテルの東の山に移って天幕を張っ
た。西にはベテル、東にはアイがあった。そこに彼は主のために祭壇を
築いて、主の名を呼んだ。九アブラムはなお進んでネゲブに移った。
一〇さて、その地にききんがあったのでアブラムはエジプトに寄留しよう
と、そこに下った。ききんがその地に激しかったからである。一一エジプト
にはいろうとして、そこに近づいたとき、彼は妻サライに言った、「わたし
はあなたが美しい女であるのを知っています。一二それでエジプトびと
があなたを見る時、これは彼の妻であると言ってわたしを殺し、あなたを
生かしておくでしょう。一三どうかあなたは、わたしの妹だと言ってくだ

さい。そうすればわたしはあなたのおかげで無事であり、わたしの命はあ
なたによって助かるでしょう」。一四アブラムがエジプトにはいった時エジ
プトびとはこの女を見て、たいそう美しい人であるとし、一五またパロ
の高官たちも彼女を見てパロの前でほめたので、女はパロの家に召し入
れられた。一六パロは彼女のゆえにアブラムを厚くもてなしたので、アブ
ラムは多くの羊、牛、雌雄のろば、男女の奴隷および、らくだを得た。
一七ところで主はアブラムの妻サライのゆえに、激しい疫病をパロとそ
の家に下された。一八パロはアブラムを召し寄せて言った、「あなたはわた
しになんという事をしたのですか。なぜ彼女が妻であるのをわたしに告げ
なかったのですか。一九あなたはなぜ、彼女はわたしの妹ですと言った
のですか。わたしは彼女を妻にしようとしていました。さあ、あなたの妻
はここにいます。連れて行ってください」。二〇パロは彼の事について人々

に命じ、彼とその妻およびそのすべての持ち物を送り去らせた。
第一三章一アブラムは妻とすべての持ち物を携え、エジプトを出て、ネ
ゲブに上った。ロトも彼と共に上った。
二アブラムは家畜と金銀に非常に富んでいた。三彼はネゲブから旅路を
進めてベテルに向かい、ベテルとアイの間の、さきに天幕を張った所に
行った。四すなわち彼が初めに築いた祭壇の所に行き、その所でアブラ
ムは主の名を呼んだ。五アブラムと共に行ったロトも羊、牛および天幕
を持っていた。六その地は彼らをささえて共に住ませることができなかっ
た。彼らの財産が多かったため、共に住めなかったのである。七アブラム
の家畜の牧者たちとロトの家畜の牧者たちの間に争いがあった。そのこ
ろカナンびととペリジびとがその地に住んでいた。
八アブラムはロトに言った、「わたしたちは身内の者です。わたしとあな

たの間にも、わたしの牧者たちとあなたの牧者たちの間にも争いがな
いようにしましょう。九全地はあなたの前にあるではありませんか。どう
かわたしと別れてください。あなたが左に行けばわたしは右に行きます。
あなたが右に行けばわたしは左に行きましょう」。一〇ロトが目を上げて
ヨルダンの低地をあまねく見わたすと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる
前であったから、ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、
すみずみまでよく潤っていた。一一そこでロトはヨルダンの低地をことご
とく選びとって東に移った。こうして彼らは互に別れた。一二アブラム
はカナンの地に住んだが、ロトは低地の町々に住み、天幕をソドムに移し
た。一三ソドムの人々はわるく、主に対して、はなはだしい罪びとであった。
一四ロトがアブラムに別れた後に、主はアブラムに言われた、「目をあげ
てあなたのいる所から北、南、東、西を見わたしなさい。一五すべてあ

なたが見わたす地は、永久にあなたとあなたの子孫に与えます。一六わた
しはあなたの子孫を地のちりのように多くします。もし人が地のちりを数
えることができるなら、あなたの子孫も数えられることができましょう。一
七あなたは立って、その地をたてよこに行き巡りなさい。わたしはそれを
あなたに与えます」。一八アブラムは天幕を移してヘブロンにあるマムレの
テレビンの木のかたわらに住み、その所で主に祭壇を築いた。

第一四章
一シナルの王アムラペル、エラサルの王アリオク、エラムの王
ケダラオメルおよびゴイムの王テダルの世に、二これらの王はソドムの王
ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アデマの王シナブ、ゼボイムの王セメベル、お
よびベラすなわちゾアルの王と戦った。三これら五人の王はみな同盟し
てシデムの谷、すなわち塩の海に向かって行った。四すなわち彼らは十二
年の間ケダラオメルに仕えたが、十三年目にそむいたので、五十四年目に

ケダラオメルは彼と連合した王たちと共にきて、アシタロテ・カルナイム
でレパイムびとを、ハムでズジびとを、シャベ・キリアタイムでエミびと
を撃ち、六セイルの山地でホリびとを撃って、荒野のほとりにあるエル・パ
ランに及んだ。七彼らは引き返してエン・ミシパテすなわちカデシへ行っ
て、アマレクびとの国をことごとく撃ち、またハザゾン・タマルに住むア
モリびとをも撃った。八そこでソドムの王、ゴモラの王、アデマの王、ゼ
ボイムの王およびベラすなわちゾアルの王は出てシデムの谷で彼らに向か
い、戦いの陣をしいた。九すなわちエラムの王ケダラオメル、ゴイムの王
テダル、シナルの王アムラペル、エラサルの王アリオクの四人の王に対す
る五人の王であった。一〇シデムの谷にはアスファルトの穴が多かったの
で、ソドムの王とゴモラの王は逃げてそこに落ちたが、残りの者は山にの
がれた。一一そこで彼らはソドムとゴモラの財産と食料とをことごとく

奪って去り、一二またソドムに住んでいたアブラムの弟の子ロトとその
財産を奪って去った。
一三時に、ひとりの人がのがれてきて、ヘブルびとアブラムに告げた。こ
の時アブラムはエシコルの兄弟、またアネルの兄弟であるアモリびとマ
ムレのテレビンの木のかたわらに住んでいた。彼らはアブラムと同盟して
いた。一四アブラムは身内の者が捕虜になったのを聞き、訓練した家の子
三百十八人を引き連れてダンまで追って行き、一五そのしもべたちを分け
て、夜かれらを攻め、これを撃ってダマスコの北、ホバまで彼らを追った。
一六そして彼はすべての財産を取り返し、また身内の者ロトとその財産お
よび女たちと民とを取り返した。
一七アブラムがケダラオメルとその連合の王たちを撃ち破って帰った時、
ソドムの王はシャベの谷、すなわち王の谷に出て彼を迎えた。一八その時、

サレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒とを持ってきた。彼はいと高き
神の祭司である。一九彼はアブラムを祝福して言った、
「願わくは天地の主なるいと高き神が、
アブラムを祝福されるように。
二〇願わくはあなたの敵をあなたの手に渡された
いと高き神があがめられるように」。
アブラムは彼にすべての物の十分の一を贈った。二一時にソドムの王はア
ブラムに言った、「わたしには人をください。財産はあなたが取りなさい」。
二二アブラムはソドムの王に言った、「天地の主なるいと高き神、主に手を
あげて、わたしは誓います。二三わたしは糸一本でも、くつひも一本でも、
あなたのものは何にも受けません。アブラムを富ませたのはわたしだと、
あなたが言わないように。二四ただし若者たちがすでに食べた物は別です。

そしてわたしと共に行った人々アネルとエシコルとマムレとにはその分を
取らせなさい」。

第一五章

これらの事の後、主の言葉が幻のうちにアブラムに臨んだ、
「アブラムよ恐れてはならない、
わたしはあなたの盾である。
あなたの受ける報いは、
はなはだ大きいであろう」。
二アブラムは言った、「主なる神よ、わたしには子がなく、わたしの家を継
ぐ者はダマスコのエリエゼルであるのに、あなたはわたしに何をくださろ
うとするのですか」。三アブラムはまた言った、「あなたはわたしに子を賜
わらないので、わたしの家に生れたしもべが、あとつぎとなるでしょう」。
四この時、主の言葉が彼に臨んだ、「この者はあなたのあとつぎとなるべき

ではありません。あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです」。五そ
して主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることが
できるなら、数えてみなさい」。また彼に言われた、「あなたの子孫はあの
ようになるでしょう」。六アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認
められた。
七また主は彼に言われた、「わたしはこの地をあなたに与えて、これを継
がせようと、あなたをカルデヤのウルから導き出した主です」。八彼は言っ
た、「主なる神よ、わたしがこれを継ぐのをどうして知ることができますか」。
九主は彼に言われた、「三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山
ばとと、家ばとのひなとをわたしの所に連れてきなさい」。一〇彼はこれ
らをみな連れてきて、二つに裂き、裂いたものを互に向かい合わせて置い
た。ただし、鳥は裂かなかった。 一一荒い鳥が死体の上に降りるとき、

アブラムはこれを追い払った。
一二日の入るころ、アブラムが深い眠りにおそわれた時、大きな恐ろし
い暗やみが彼に臨んだ。一三時に主はアブラムに言われた、「あなたはよく
心にとめておきなさい。あなたの子孫は他の国に旅びととなって、その
人々に仕え、その人々は彼らを四百年の間、悩ますでしょう。一四しか
し、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの
財産を携えて出て来るでしょう。一五あなたは安らかに先祖のもとに行き
ます。そして高齢に達して葬られるでしょう。一六四代目になって彼らは
ここに帰って来るでしょう。アモリびとの悪がまだ満ちないからです」。
一七やがて日は入り、暗やみになった時、煙の立つかまど、炎の出る
たいまつが、裂いたものの間を通り過ぎた。一八その日、主はアブラムと
契約を結んで言われた、

「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。
エジプトの川から、かの大川ユフラテまで。
一九すなわちケニびと、ケニジびと、カドモニびと、二〇ヘテびと、ペリジ
びと、レパイムびと、二一アモリびと、カナンびと、ギルガシびと、エブス
びとの地を与える」。

第一六章一アブラムの妻サライは子を産まなかった。彼女にひとりのつ
かえめがあった。エジプトの女で名をハガルといった。二サライはアブラ
ムに言った、「主はわたしに子をお授けになりません。どうぞ、わたしのつ
かえめの所におはいりください。彼女によってわたしは子をもつことに
なるでしょう」。アブラムはサライの言葉を聞きいれた。三アブラムの妻サ
ライはそのつかえめエジプトの女ハガルをとって、夫アブラムに妻とし
て与えた。これはアブラムがカナンの地に十年住んだ後であった。四彼は
ハガルの所にはいり、ハガルは子をはらんだ。彼女は自分のはらんだのを

見て、女主人を見下げるようになった。五そこでサライはアブラムに言っ
た、「わたしが受けた害はあなたの責任です。わたしのつかえめをあなたの
ふところに与えたのに、彼女は自分のはらんだのを見て、わたしを見下さ
げます。どうか、主があなたとわたしの間をおさばきになるように」。六
アブラムはサライに言った、「あなたのつかえめはあなたの手のうちにある。
あなたの好きなように彼女にしなさい」。そしてサライが彼女を苦しめた
ので、彼女はサライの顔を避けて逃げた。
七主の使は荒野にある泉のほとり、すなわちシュルの道にある泉の
ほとりで、彼女に会い、八そして言った、「サライのつかえめハガルよ、あな
たはどこからきたのですか、またどこへ行くのですか」。彼女は言った、「わ
たしは女主人サライの顔を避けて逃げているのです」。九主の使は彼女
に言った、「あなたは女主人のもとに帰って、その手に身を任せなさい」。

一〇主(しゅ)の使(つかい)はまた彼女(かのじょ)に言(い)った、「わたしは大(おお)いにあなたの子孫(しそん)を増(ま)して、
数(かぞ)えきれないほどに多(おお)くしましょう」。一一主(しゅ)の使(つかい)はまた彼女(かのじょ)に言(い)った、
「あなたは、みごもっています。あなたは男(おとこ)の子(こ)を産(う)むでしょう。名(な)をイ
シマエルと名(な)づけなさい。主(しゅ)があなたの苦(くる)しみを聞(き)かれたのです。一二彼(かれ)
は野(の)ろばのような人(ひと)となり、その手(て)はすべての人(ひと)に逆(さか)らい、すべての人(ひと)の
手(て)は彼(かれ)に逆(さか)らい、彼(かれ)はすべての兄弟(きょうだい)に敵(てき)して住(す)むでしょう」。一三そこで、
ハガルは自分(じぶん)に語(かた)られた主(しゅ)の名(な)を呼(よ)んで、「あなたはエル・ロイです」と言(い)っ
た。彼女(かのじょ)が「ここでも、わたしを見(み)ていられるかたのうしろを拝(おが)めたのか」
と言(い)ったことによる。一四それでその井戸(いど)は「ベエル・ラハイ・ロイ」と呼(よ)
ばれた。これはカデシとベレデの間(あいだ)にある。

一五ハガルはアブラムに男(おとこ)の子(こ)を産(う)んだ。アブラムはハガルが産(う)んだ子(こ)
の名(な)をイシマエルと名(な)づけた。一六ハガルがイシマエルをアブラムに産(う)んだ

時、アブラムは八十六歳であった。

第一七章

一アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、
「わたしは全能の神である。
あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。
二わたしはあなたと契約を結び、
大いにあなたの子孫を増すであろう」。
三アブラムは、ひれ伏した。神はまた彼に言われた、
四「わたしはあなたと契約を結ぶ。
あなたは多くの国民の父となるであろう。
五あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、
あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。
わたしはあなたを多くの国民の

父とするからである。
六わたしはあなたに多くの子孫を得させ、国々の民をあなたから起そう。
また、王たちもあなたから出るであろう。七わたしはあなた及び後の代々
の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となる
であろう。八わたしはあなたと後の子孫とにあなたの宿っているこの地、す
なわちカナンの全地を永久の所有として与える。そしてわたしは彼らの
神となるであろう」。
九神はまたアブラハムに言われた、「あなたと後の子孫とは共に代々わた
しの契約を守らなければならない。あなたがたのうち一〇男子はみな割礼
をうけなければならない。これはわたしとあなたがた及び後の子孫との間
のわたしの契約であって、あなたがたの守るべきものである。一一あなた
がたは前の皮に割礼を受けなければならない。それがわたしとあなたがた

との間の契約のしるしとなるであろう。一二あなたがたのうちの男子はみ
な代々、家に生れた者も、また異邦人から銀で買い取った、あなたの子孫
でない者も、生れて八日目に割礼を受けなければならない。一三あなたの
家に生れた者も、あなたが銀で買い取った者も必ず割礼を受けなければ
ならない。こうしてわたしの契約はあなたがたの身にあって永遠の契約と
なるであろう。一四割礼を受けない男子、すなわち前の皮を切らない者は
わたしの契約を破るゆえ、その人は民のうちから断たれるであろう」。
一五神はまたアブラハムに言われた、「あなたの妻サライは、もはや名を
サライといわず、名をサラと言いなさい。一六わたしは彼女を祝福し、ま
た彼女によって、あなたにひとりの男の子を授けよう。わたしは彼女を
祝福し、彼女を国々の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王た
ちが出るであろう」。一七アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で言った、

「百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなって、どう
して産むことができようか」。一八そしてアブラハムは神に言った、「どうか
イシマエルがあなたの前に生きながらえますように」。一九神は言われた、
「いや、あなたの妻サラはあなたに男の子を産むでしょう。名をイサクと
名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約
としよう。二〇またイシマエルについてはあなたの願いを聞いた。わたしは
彼を祝福して多くの子孫を得させ、大いにそれを増すであろう。彼は十
二人の君たちを生むであろう。わたしは彼を大いなる国民としよう。二一
しかしわたしは来年の今ごろサラがあなたに産むイサクと、わたしの契約
を立てるであろう」。

二二神はアブラハムと語り終え、彼を離れて、のぼられた。二三アブラハ
ムは神が自分に言われたように、この日その子イシマエルと、すべて家に

生れた者およびすべて銀で買い取った者、すなわちアブラハムの家の人々
のうち、すべての男子を連れてきて、前の皮に割礼を施した。二四アブラ
ハムが前の皮に割礼を受けた時は九十九歳、二五その子イシマエルが前の
皮に割礼を受けた時は十三歳であった。二六この日アブラハムとその子イ
シマエルは割礼を受けた。二七またその家の人々は家に生れた者も、銀で
異邦人から買い取った者も皆、彼と共に割礼を受けた。

第一八章 一主はマムレのテレビンの木のかたわらでアブラハムに現れら
れた。それは昼の暑いころで、彼は天幕の入口にすわっていたが、二目を上
げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。彼はこれを見て、天幕
の入口から走って行って彼らを迎え、地に身をかがめて、三言った、「わが
主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら、どうぞしもべを通
り過ごさないでください。四水をすこし取ってこさせますから、あなたが

たは足を洗って、この木の下でお休みください。五わたしは一口のパンを
取ってきます。元気をつけて、それからお出かけください。せっかくしもべ
の所においでになったのですから」。彼らは言った、「お言葉どおりにして
ください」。六そこでアブラハムは急いで天幕に入り、サラの所に行って
言った、「急いで細かい麦粉三セヤをとり、こねてパンを造りなさい」。七
アブラハムは牛の群れに走って行き、柔らかな良い子牛を取って若者に渡
したので、急いで調理した。八そしてアブラハムは凝乳と牛乳および
子牛の調理したものを取って、彼らの前に供え、木の下で彼らのかたわら
に立って給仕し、彼らは食事した。
九彼らはアブラハムに言った、「あなたの妻サラはどこにおられますか」。
彼は言った、「天幕の中です」。一〇そのひとりが言った、「来年の春、わた
しはかならずあなたの所に帰ってきましょう。その時、あなたの妻サラ

には男の子が生れているでしょう」。サラはうしろの方の天幕の入口で聞
いていた。一一さてアブラハムとサラとは年がすすみ、老人となり、サラは
女の月のものが、すでに止まっていた。一二それでサラは心の中で笑っ
て言った、「わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみ
などありえようか」。一三主はアブラハムに言われた、「なぜサラは、わたし
は老人であるのに、どうして子を産むことができようかと言って笑ったの
か。一四主にとって不可能なことがありましょうか。来年の春、定めの時
に、わたしはあなたの所に帰ってきます。そのときサラには男の子が生
れているでしょう」。一五サラは恐れたので、これを打ち消して言った、「わ
たしは笑いません」。主は言われた、「いや、あなたは笑いました」。
一六その人々はそこを立ってソドムの方に向かったので、アブラハムは
彼らを見送って共に行った。一七時に主は言われた、「わたしのしようとす

る事をアブラハムに隠してよいであろうか。一八アブラハムは必ず大きな
強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるの
ではないか。一九わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、
正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかって
アブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」。二〇主はま
た言われた、「ソドムとゴモラの叫びは大きく、またその罪は非常に重い
ので、二一わたしはいま下って、わたしに届いた叫びのとおりに、すべて彼
らがおこなっているかどうかを見て、それを知ろう」。
二二その人々はそこから身を巡らしてソドムの方に行ったが、アブラハ
ムはなお、主の前に立っていた。二三アブラハムは近寄って言った、「まこ
とにあなたは正しい者を、悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。二四たと
い、あの町に五十人の正しい者があっても、あなたはなお、その所を滅ぼ

し、その中にいる五十人の正しい者のためにこれをゆるされないのですか。
二五正しい者と悪い者とを一緒に殺すようなことを、あなたは決してなさ
らないでしょう。正しい者と悪い者とを同じようにすることも、あなたは
決してなさらないでしょう。全地をさばく者は公義を行うべきではあり
ませんか」。二六主は言われた、「もしソドムで町の中に五十人の正しい者
があったら、その人々のためにその所をすべてゆるそう」。二七アブラハ
ムは答えて言った、「わたしはちり灰に過ぎませんが、あえてわが主に申し
ます。二八もし五十人の正しい者のうち五人欠けたなら、その五人欠けた
ために町を全く滅ぼされますか」。主は言われた、「もしそこに四十五人
いたら、滅ぼさないであろう」。二九アブラハムはまた重ねて主に言った、
「もしそこに四十人いたら」。主は言われた、「その四十人のために、これを
しないであろう」。三〇アブラハムは言った、「わが主よ、どうかお怒りにな

らぬよう。わたしは申します。もしそこに三十人いたら」。主は言われた、
「そこに三十人いたら、これをしないであろう」。
三一アブラハムは言った、「いまわたしはあえてわが主に申します。もしそこに二十人いたら」。主は言われた、「わたしはその二十人のために滅ぼさないであろう」。
三二アブラハムは言った、「わが主よ、どうかお怒りにならぬよう。わたしはいま一度申します、もしそこに十人いたら」。主は言われた、「わたしはその十人のために滅ぼさないであろう」。
三三主はアブラハムと語り終り、去って行かれた。アブラハムは自分の所に帰った。

第一九章
一そのふたりのみ使は夕暮にソドムに着いた。そのときロトはソドムの門にすわっていた。ロトは彼らを見て、立って迎え、地に伏して、
二言った、「わが主よ、どうぞしもべの家に立寄って足を洗い、お泊まりください。そして朝早く起きてお立ちください」。彼らは言った、「いや、わ

れわれは広場で夜を過ごします」。三しかしロトがしいて勧めたので、彼ら
はついに彼の所に寄り、家にはいった。ロトは彼らのためにふるまいを
設け、種入れぬパンを焼いて食べさせた。四ところが彼らの寝ないうちに、
ソドムの町の人々は、若い者も老人も、民がみな四方からきて、その家を
囲み、五ロトに叫んで言った、「今夜おまえの所にきた人々はどこにいる
か。それをここに出しなさい。われわれは彼らを知るであろう」。六ロトは
入口におる彼らの所に出て行き、うしろの戸を閉じて、七言った、「兄弟
たちよ、どうか悪い事はしないでください。八わたしにまだ男を知らない
娘がふたりあります。わたしはこれをあなたがたに、さし出しますから、
好きなようにしてください。ただ、わたしの屋根の下にはいったこの人た
ちには、何もしないでください」。九彼らは言った、「退け」。また言った、
「この男は渡ってきたよそ者であるのに、いつも、さばきびとになろうとす

る。それで、われわれは彼らに加えるよりも、おまえに多くの害を加えよう」。彼らはロトの身に激しく迫り、進み寄って戸を破ろうとした。一〇その時、かのふたりは手を伸べてロトを家の内に引き入れ、戸を閉じた。一一そして家の入口におる人々を、老若の別なく打って目をくらましたので、彼らは入口を捜すのに疲れた。

一二ふたりはロトに言った、「ほかにあなたの身内の者がここにおりますか。あなたのむこ、むすこ、娘およびこの町におるあなたの身内の者を、皆ここから連れ出しなさい。一三われわれがこの所を滅ぼそうとしているからです。人々の叫びが主の前に大きくなり、主はこの所を滅ぼすために、われわれをつかわされたのです」。一四そこでロトは出て行って、その娘たちをめとるむこたちに告げて言った、「立ってこの所から出なさい。主がこの町を滅ぼされます」。しかしそれはむこたちには戯むれごとに思

えた。
一五夜が明けて、み使たちはロトを促して言った「立って、ここに
いるあなたの妻とふたりの娘とを連れ出しなさい。そうしなければ、あな
たもこの町の不義のために滅ぼされるでしょう」。一六彼はためらっていた
が、主は彼にあわれみを施されたので、かのふたりは彼の手と、その妻
の手と、ふたりの娘の手を取って連れ出し、町の外に置いた。一七彼らを
外に連れ出した時そのひとりは言った、「のがれて、自分の命を救いなさ
い。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まっ
てはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」。
一八ロトは彼らに言った、「わが主よ、どうか、そうさせないでください。
一九しもべはすでにあなたの前に恵みを得ました。あなたはわたしの命を
救って、大いなるいつくしみを施されました。しかしわたしは山まではの
がれる事ができません。災が身に追い迫ってわたしは死ぬでしょう。二

〇あの町をごらんなさい。逃げていくのに近く、また小さい町です。どう
かわたしをそこにのがれさせてください。それは小さいではありませんか。
そうすればわたしの命は助かるでしょう」。二一み使は彼に言った、「わ
たしはこの事でもあなたの願いをいれて、あなたの言うその町は滅ぼしま
せん。二二急いでそこへのがれなさい。あなたがそこに着くまでは、わたし
は何事もすることができません」。これによって、その町の名はゾアルと呼
ばれた。二三ロトがゾアルに着いた時、日は地の上にのぼった。
二四主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降ら
せて、二五これらの町と、すべての低地と、その町々のすべての住民と、そ
の地にはえている物を、ことごとく滅ぼされた。二六しかしロトの妻はうし
ろを顧みたので塩の柱になった。二七アブラハムは朝早く起き、さきに
主の前に立った所に行って、二八ソドムとゴモラの方、および低地の全面

をながめると、その地の煙が、かまどの煙のように立ちのぼっていた。
二九こうして神が低地の町々をこぼたれた時、すなわちロトの住んでい
た町々を滅ぼされた時、神はアブラハムを覚えて、その滅びの中からロト
を救い出された。
三〇ロトはゾアルを出て上り、ふたりの娘と共に山に住んだ。ゾアルに
住むのを恐れたからである。彼はふたりの娘と共に、ほら穴の中に住ん
だ。三一時に姉が妹に言った、「わたしたちの父は老い、またこの地には
世のならわしのように、わたしたちの所に来る男はいません。三二さあ、
父に酒を飲ませ、共に寝て、父によって子を残しましょう」。三三彼女たち
はその夜、父に酒を飲ませ、姉がはいって父と共に寝た。ロトは娘が寝た
のも、起きたのも知らなかった。三四あくる日、姉は妹に言った、「わたし
は昨夜、父と寝ました。わたしたちは今夜もまた父に酒を飲ませましょう。

そしてあなたがはいって共に寝なさい。わたしたちは父によって子を残し
ましょう」。三五彼らはその夜もまた父に酒を飲ませ、妹が行って父と共
に寝た。ロトは娘の寝たのも、起きたのも知らなかった。三六こうしてロ
トのふたりの娘たちは父によってはらんだ。三七姉娘は子を産み、その
名をモアブと名づけた。これは今のモアブびとの先祖である。三八妹も
また子を産んで、その名をベニアンミと名づけた。これは今のアンモンび
との先祖である。

第二〇章一アブラハムはそこからネゲブの地に移って、カデシとシュルの
間に住んだ。彼がゲラルにとどまっていた時、二アブラハムは妻サラのこ
とを、「これはわたしの妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、
人をつかわしてサラを召し入れた。三ところが神は夜の夢にアビメレクに
臨んで言われた、「あなたは召し入れたあの女のゆえに死なねばならない。

彼女は夫のある身である」。四アビメレクはまだ彼女に近づいていなかっ
たので言った、「主よ、あなたは正しい民でも殺されるのですか。五彼はわ
たしに、これはわたしの妹ですと言ったではありませんか。また彼女も
自分で、彼はわたしの兄ですと言いました。わたしは心も清く、手もいさ
ぎよく、このことをしました」。六神はまた夢で彼に言われた、「そうです、
あなたが清い心をもってこのことをしたのを知っていたから、わたしもあ
なたを守って、わたしに対して罪を犯させず、彼女にふれることを許さな
かったのです。七いま彼の妻を返しなさい。彼は預言者ですから、あなた
のために祈って、命を保たせるでしょう。もし返さないなら、あなたも
身内の者もみな必ず死ぬと知らなければなりません」。
八そこでアビメレクは朝早く起き、しもべたちをことごとく召し集めて、
これらの事をみな語り聞かせたので、人々は非常に恐れた。九そしてアビ

メレクはアブラハムを召して言った、「あなたはわれわれに何をするのです
か。あなたに対してわたしがどんな罪を犯したために、あなたはわたしと
わたしの国とに、大きな罪を負わせるのですか。あなたはしてはならぬこ
とをわたしにしたのです」。一〇アビメレクはまたアブラハムに言った、「あ
なたはなんと思って、この事をしたのですか」。一一アブラハムは言った、
「この所には神を恐れるということが、まったくないので、わたしの妻のゆ
えに人々がわたしを殺すと思ったからです。一二また彼女はほんとうにわ
たしの妹なのです。わたしの父の娘ですが、母の娘ではありません。
そして、わたしの妻になったのです。一三神がわたしに父の家を離れて、行
き巡らせた時、わたしは彼女に、あなたはわたしたちの行くさきざきでわ
たしを兄であると言ってください。これはあなたがわたしに施す恵みで
あると言いました」。一四そこでアビメレクは羊、牛および男女の奴隷を

取ってアブラハムに与え、その妻サラを彼に返した。一五そしてアビメレ
クは言った、「わたしの地はあなたの前にあります。あなたの好きな所に
住みなさい」。一六またサラに言った、「わたしはあなたの兄に銀千シケル
を与えました。これはあなたの身に起ったすべての事について、あなたに
償いをするものです。こうしてすべての人にあなたは正しいと認められ
ます」。一七そこでアブラハムは神に祈った。神はアビメレクとその妻およ
び、はしためたちをいやされたので、彼らは子を産むようになった。一八こ
れは主がさきにアブラハムの妻サラのゆえに、アビメレクの家のすべての
者の胎を、かたく閉ざされたからである。

第二一章一主は、さきに言われたようにサラを顧み、告げられたようにサ
ラに行われた。二サラはみごもり、神がアブラハムに告げられた時になっ
て、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。三アブラハムは生れた子、サ

ラが産んだ男の子の名をイサクと名づけた。四アブラハムは神が命じられ
たように八日目にその子イサクに割礼を施した。五アブラハムはその子イ
サクが生れた時百歳であった。六そしてサラは言った、「神はわたしを笑
わせてくださった。聞く者は皆わたしのことで笑うでしょう」。七また言っ
た、「サラが子に乳を飲ませるだろうと、だれがアブラハムに言い得たであ
ろう。それなのに、わたしは彼が年とってから、子を産んだ」。
八さて、おさなごは育って乳離れした。イサクが乳離れした日にアブラハ
ムは盛んなふるまいを設けた。九サラはエジプトの女ハガルのアブラハム
に産んだ子が、自分の子イサクと遊ぶのを見て、一〇アブラハムに言った、
「このはしためとその子を追い出してください。このはしための子はわたし
の子イサクと共に、世継となるべき者ではありません」。一一この事で、ア
ブラハムはその子のために非常に心配した。一二神はアブラハムに言われ

た、「あのわらべのため、またあなたのはしためのために心配することはな
い。サラがあなたに言うことはすべて聞きいれなさい。イサクに生れる者
が、あなたの子孫と唱えられるからです。一三しかし、はしための子もあな
たの子ですから、これをも、一つの国民とします」。一四そこでアブラハム
は明くる朝はやく起きて、パンと水の皮袋とを取り、ハガルに与えて、肩
に負わせ、その子を連れて去らせた。ハガルは去ってベエルシバの荒野に
さまよった。

一五やがて皮袋の水が尽きたので、彼女はその子を木の下におき、一六
「わたしはこの子の死ぬのを見るに忍びない」と言って、矢の届くほど離れ
て行き、子供の方に向いてすわった。彼女が子供の方に向いてすわったと
き、子供は声をあげて泣いた。一七神はわらべの声を聞かれ、神の使は天
からハガルを呼んで言った、「ハガルよ、どうしたのか。恐れてはいけな

い。神はあそこにいるわらべの声を聞かれた。一八立って行き、わらべを取
り上げてあなたの手に抱きなさい。わたしは彼を大いなる国民とするであ
ろう」。一九神がハガルの目を開かれたので、彼女は水の井戸のあるのを見
た。彼女は行って皮袋に水を満たし、わらべに飲ませた。二〇神はわらべ
と共にいまし、わらべは成長した。彼は荒野に住んで弓を射る者となっ
た。二一彼はパランの荒野に住んだ。母は彼のためにエジプトの国から妻
を迎えた。

二二そのころアビメレクとその軍勢の長ピコルはアブラハムに言った、
「あなたが何事をなさっても、神はあなたと共におられる。二三それゆえ、
今ここでわたしをも、わたしの子をも、孫をも欺かないと、神をさしてわ
たしに誓ってください。わたしがあなたに親切にしたように、あなたもわ
たしと、このあなたの寄留の地とに、しなければなりません」。二四アブラ

ハムは言った、「わたしは誓います」。
二五アブラハムはアビメルクの家来たちが、水の井戸を奪い取ったことに
ついてアビメルクを責めた。二六しかしアビメレクは言った、「だれがこの
事をしたかわたしは知りません。あなたもわたしに告げたことはなく、わ
たしもきょうまで聞きませんでした」。二七そこでアブラハムは羊と牛と
を取ってアビメレクに与え、ふたりは契約を結んだ。二八アブラハムが雌
の小羊七頭を分けて置いたところ、二九アビメレクはアブラハムに言った、
「あなたがこれらの雌の小羊七頭を分けて置いたのは、なんのためですか」。
三〇アブラハムは言った、「あなたはわたしの手からこれらの雌の小羊七頭
を受け取って、わたしがこの井戸を掘ったことの証拠としてください」。三
一これによってその所をベエルシバと名づけた。彼らがふたりそこで誓い
をしたからである。三二このように彼らはベエルシバで契約を結び、アビメ

レクとその軍勢の長ピコルは立ってペリシテの地に帰った。
三三アブラハムはベエルシバに一本のぎょりゅうの木を植え、その所で永遠の神、主の名を呼んだ。
三四こうしてアブラハムは長い間ペリシテびとの地にとどまった。

第二二章
一これらの事の後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにおります」。
二神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。
三アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクとを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた。
四三日目に、アブラハムは目をあげて、はるかにその場所を見た。
五そこでアブラハムは若者たちに言った、「あなたがたは、ろばと一緒にここにいなさい。わたしとわら

べは向こうへ行って礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰ってきます」。
六アブラハムは燔祭のたきぎを取って、その子イサクに負わせ、手に火と
刃物とを執って、ふたり一緒に行った。七やがてイサクは父アブラハムに
言った、「父よ」。彼は答えた、「子よ、わたしはここにいます」。イサクは
言った、「火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」。
八アブラハムは言った、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるで
あろう」。こうしてふたりは一緒に行った。
九彼らが神の示された場所にきたとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、
たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた。一〇そ
してアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした時、一
一主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼
は答えた、「はい、ここにおります」。一二み使が言った、「わらべを手にか

けてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひ
とり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者で
あることをわたしは今知った」。一三この時アブラハムが目をあげて見ると、
うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って
その雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた。一四それ
でアブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。これにより、人々
は今日もなお「主の山に備えあり」と言う。
一五主の使は再び天からアブラハムを呼んで、一六言った、「主は言わ
れた、『わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あな
たのひとり子をも惜しまなかったので、一七わたしは大いにあなたを祝福
し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにす
る。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、一八また地のもろもろの国民はあ

なたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従っ
たからである』」。**一九**アブラハムは若者たちの所に帰り、みな立って、共
にベエルシバへ行った。そしてアブラハムはベエルシバに住んだ。
二〇これらの事の後、ある人がアブラハムに告げて言った、「ミルカもま
たあなたの兄弟ナホルに子どもを産みました。**二一**長男はウヅ、弟は
ブズ、次はアラムの父ケムエル、**二二**次はケセデ、ハゾ、ピルダシ、エデ
ラフ、ベトエルです」。**二三**ベトエルの子はリベカであって、これら八人は
ミルカがアブラハムの兄弟ナホルに産んだのである。**二四**ナホルのそばめ
で、名をルマという女もまたテバ、ガハム、タハシおよびマアカを産んだ。
第二三章一サラの一生は百二十七年であった。これがサラの生きながら
えた年である。**二**サラはカナンの地のキリアテ・アルバすなわちヘブロン
で死んだ。アブラハムは中にはいってサラのために悲しみ泣いた。**三**アブ

ラハムは死人のそばから立って、ヘテの人々に言った、四「わたしはあな
たがたのうちの旅の者で寄留者ですが、わたしの死人を出して葬るため、
あなたがたのうちにわたしの所有として一つの墓地をください」。五ヘテの
人々はアブラハムに答えて言った、六「わが主よ、お聞きなさい。あなたは
われわれのうちにおられて、神のような主君です。われわれの墓地の最も
良い所にあなたの死人を葬りなさい。その墓地を拒んで、あなたにその
死人を葬らせない者はわれわれのうちには、ひとりもないでしょう」。七ア
ブラハムは立ちあがり、その地の民ヘテの人々に礼をして、八彼らに言っ
た、「もしわたしの死人を葬るのに同意されるなら、わたしの願いをいれ
て、わたしのためにゾハルの子エフロンに頼み、九彼が持っている畑の端
のマクペラのほら穴をじゅうぶんな代価でわたしに与え、あなたがたのう
ちに墓地を持たせてください」。一〇時にエフロンはヘテの人々のうちにす

わっていた。そこでヘテびとエフロンはヘテの人々、すなわちすべてその
町の門にはいる人々の聞いているところで、アブラハムに答えて言った、
一一「いいえ、わが主よ、お聞きなさい。わたしはあの畑をあなたにさしあ
げます。またその中にあるほら穴もさしあげます。わたしの民の人々の前
で、それをさしあげます。あなたの死人を葬りなさい」。一二アブラハムは
その地の民の前で礼をし、一三その地の民の聞いているところでエフロン
に言った、「あなたがそれを承諾されるなら、お聞きなさい。わたしはそ
の畑の代価を払います。お受け取りください。わたしの死人をそこに葬
りましょう」。一四エフロンはアブラハムに答えて言った、一五「わが主よ、
お聞きなさい。あの地は銀四百シケルですが、これはわたしとあなたの間
で、なにほどのことでしょう。あなたの死人を葬りなさい」。一六そこでア
ブラハムはエフロンの言葉にしたがい、エフロンがヘテの人々の聞いてい

るところで言った銀、すなわち商人の通用銀四百シケルを量ってエフロ
ンに与えた。
一七こうしてマムレの前のマクペラにあるエフロンの畑は、畑も、そ
の中のほら穴も、畑の中およびその周囲の境にあるすべての木も皆、一
八ヘテの人々の前、すなわちその町の門にはいるすべての人々の前で、ア
ブラハムの所有と決まった。一九その後、アブラハムはその妻サラをカナ
ンの地にあるマムレ、すなわちヘブロンの前のマクペラの畑のほら穴に
葬った。二〇このように畑とその中にあるほら穴とはヘテの人々によっ
てアブラハムの所有の墓地と定められた。

第二四章一アブラハムは年が進んで老人となった。主はすべての事にア
ブラハムを恵まれた。二さてアブラハムは所有のすべてを管理させていた
家の年長のしもべに言った、「あなたの手をわたしのももの下に入れなさ

い。三わたしはあなたに天地の神、主をさして誓わせる。あなたはわたし
が今一緒に住んでいるカナンびとのうちから、娘をわたしの子の妻にめ
とってはならない。四あなたはわたしの国へ行き、親族の所へ行って、わ
たしの子イサクのために妻をめとらなければならない」。五しもべは彼に
言った、「もしその女がわたしについてこの地に来ることを好まない時は、
わたしはあなたの子をあなたの出身地に連れ帰るべきでしょうか」。六ア
ブラハムは彼に言った、「わたしの子は決して向こうへ連れ帰ってはならな
い。七天の神、主はわたしを父の家、親族の地から導き出してわたしに
語り、わたしに誓って、おまえの子孫にこの地を与えると言われた。主は、
み使をあなたの前につかわされるであろう。あなたはあそこからわたしの
子に妻をめとらねばならない。八けれどもその女があなたについて来るこ
とを好まないなら、あなたはこの誓いを解かれる。ただわたしの子を向こ

うへ連れ帰ってはならない」。九そこでしもべは手を主人アブラハムのもも
の下に入れ、この事について彼に誓った。
一〇しもべは主人のらくだのうちから十頭のらくだを取って出かけた。す
なわち主人のさまざまの良い物を携え、立ってアラム・ナハライムにむ
かい、ナホルの町へ行った。一一彼はらくだを町の外の、水の井戸のそば
に伏させた。時は夕暮で、女たちが水をくみに出る時刻であった。一二彼
は言った、「主人アブラハムの神、主よ、どうか、きょう、わたしにしあわ
せを授け、主人アブラハムに恵みを施してください。一三わたしは泉の
そばに立っています。町の人々の娘たちが水をくみに出てきたとき、一四
娘に向かって『お願いです、あなたの水がめを傾けてわたしに飲ませて
ください』と言い、娘が答えて、『お飲みください。あなたのらくだにも
飲ませましょう』と言ったなら、その者こそ、あなたがしもべイサクのた

めに定められた者ということにしてください。わたしはこれによって、あ
なたがわたしの主人に恵みを施されることを知りましょう」。
一五彼がまだ言い終らないうちに、アブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカ
の子ベトエルの娘リベカが、水がめを肩に載せて出てきた。一六その娘
は非常に美しく、男を知らぬ処女であった。彼女が泉に降りて、水が
めを満たし、上がってきた時、一七しもべは走り寄って、彼女に会って言っ
た、「お願いです。あなたの水がめの水を少し飲ませてください」。一八する
と彼女は「わが主よ、お飲みください」と言って、急いで水がめを自分の手
に取りおろして彼に飲ませた。一九飲ませ終って、彼女は言った、「あなた
のらくだもみな飲み終るまで、わたしは水をくみましょう」。二〇彼女は急
いでかめの水を水ぶねにあけ、再び水をくみに井戸に走って行って、すべ
てのらくだのために水をくんだ。二一その間その人は主が彼の旅の祝福

されるか、どうかを知ろうと、黙って彼女を見つめていた。
二二らくだが飲み終ったとき、その人は重さ半シケルの金の鼻輪一つと、
重さ十シケルの金の腕輪二つを取って、二三言った、「あなたはだれの娘
か、わたしに話してください。あなたの父の家にわたしどもの泊まる場所
がありましょうか」。二四彼女は彼に言った、「わたしはナホルの妻ミルカ
の子ベトエルの娘です」。二五また彼に言った、「わたしどもには、わらも、
飼葉もたくさんあります。また泊まる場所もあります」。二六その人は頭を
下げ、主を拝して、二七言った、「主人アブラハムの神、主はほむべきかな。
主はわたしの主人にいつくしみと、まことを惜しまれなかった。そして
主は旅にあるわたしを主人の兄弟の家に導かれた」。
二八娘は走って行って、母の家のものにこれらの事を告げた。二九リベ
カにひとりの兄があって、名をラバンといった。ラバンは泉のそばにいる

その人の所へ走って行った。三〇彼は鼻輪と妹の手にある腕輪とを見、また妹リベカが「その人はわたしにこう言った」というのを聞いて、その人の所へ行ってみると、その人は泉のほとりで、らくだのそばに立っていた。三一そこでその人に言った、「主に祝福された人よ、おはいりください。なぜ外に立っておられますか。わたしは家を準備し、らくだのためにも場所を準備しておきました」。三二その人は家にはいった。ラバンはらくだの荷を解いて、わらと飼葉をらくだに与え、また水を与えてその人の足と、その従者たちの足を洗わせた。三三そして彼の前に食物を供えたが、彼は言った、「わたしは用向きを話すまでは食べません」。ラバンは言った、「お話しください」。

三四そこで彼は言った、「わたしはアブラハムのしもべです。三五主はわたしの主人を大いに祝福して、大いなる者とされました。主はまた彼に

羊、牛、銀、金、男女の奴隷、らくだ、ろばを与えられました。三六主人
の妻サラは年老いてから、主人に男の子を産みました。主人はその所有
を皆これに与えました。三七ところで主人はわたしに誓わせて言いました、
『わたしの住んでいる地のカナンびとの娘を、わたしの子の妻にめとって
はならない。三八おまえはわたしの父の家、親族の所へ行って、わたしの
子に妻をめとらなければならない』。三九わたしは主人に言いました、『も
しその女がわたしについてこない時はどういたしましょうか』。四〇主人
はわたしに言いました、『わたしの仕えている主は、み使をおまえと一緒
につかわして、おまえの旅にさいわいを与えられるであろう。おまえはわ
たしの親族、わたしの父の家からわたしの子に妻をめとらなければならな
い。四一そのとき、おまえはわたしにした誓いから解かれるであろう。また
おまえがわたしの親族に行く時、彼らがおまえにその娘を与えないなら、

おまえはわたしにした誓いから解かれるであろう』。
四二わたしはきょう、泉のところにきて言いました、『主人アブラハムの
神、主よ、どうか今わたしのゆく道にさいわいを与えてください。四三わ
たしはこの泉のそばに立っていますが、水をくみに出てくる娘に向かっ
て、「お願いです。あなたの水がめの水を少し飲ませてください」と言い、
四四「お飲みください。あなたのらくだのためにも、くみましょう」とわた
しに言うなら、その娘こそ、主がわたしの主人の子のために定められた
女ということにしてください』。
四五わたしが心のうちでそう言い終らないうちに、リベカが水がめを肩
に載せて出てきて、水をくみに泉に降りたので、わたしは『お願いです、
飲ませてください』と言いますと、四六彼女は急いで水がめを肩からおろ
し、『お飲みください。わたしはあなたのらくだにも飲ませましょう』と言

いました。それでわたしは飲みましたが、彼女はらくだにも飲ませました。
四七わたしは彼女に尋ねて、『あなたはだれの娘ですか』と言いますと、『ナ
ホルとその妻ミルカの子ベトエルの娘です』と答えました。そこでわた
しは彼女の鼻に鼻輪をつけ、手に腕輪をつけました。四八そしてわたしは
頭をさげて主を拝し、主人アブラハムの神、主をほめたたえました。主
は主人の兄弟の娘を子にめとらせようと、わたしを正しい道に導かれ
たからです。四九あなたがたが、もしわたしの主人にいつくしみと、まこと
を尽そうと思われるなら、そうとわたしにお話しください。そうでなけれ
ば、そうでないとお話しください。それによってわたしは右か左に決めま
しょう」。

五〇ラバンとベトエルは答えて言った、「この事は主から出たことですか
ら、わたしどもはあなたによしあしを言うことができません。五一リベカが

ここにおりますから連れて行って、主が言われたように、あなたの主人の
子の妻にしてください」。
五二アブラハムのしもべは彼らの言葉を聞いて、地に伏し、主を拝した。
五三そしてしもべは銀の飾りと、金の飾り、および衣服を取り出してリベ
カに与え、その兄と母とにも価の高い品々を与えた。五四彼と従者たち
は飲み食いして宿ったが、あくる朝彼らが起きた時、しもべは言った、「わ
たしを主人のもとに帰らせてください」。五五リベカの兄と母とは言った、
「娘は数日、少なくとも十日、わたしどもと共にいて、それから行かせま
しょう」。五六しもべは彼らに言った、「主はわたしの道にさいわいを与え
られましたから、わたしを引きとめずに、主人のもとに帰らせてください」。
五七彼らは言った、「娘を呼んで聞いてみましょう」。五八彼らはリベカを
呼んで言った、「あなたはこの人と一緒に行きますか」。彼女は言った、「行

きます」。五九そこで彼らは妹リベカと、そのうばと、アブラハムのしも
べと、その従者とを送り去らせた。六〇彼らはリベカを祝福して彼女に
言った、
「妹よ、あなたは、ちよろずの人の母となれ。
あなたの子孫はその敵の門を打ち取れ」。
六一リベカは立って侍女たちと共にらくだに乗り、その人に従って行った。
しもべはリベカを連れて立ち去った。
六二さてイサクはベエル・ラハイ・ロイからきて、ネゲブの地に住んでい
た。六三イサクは夕暮、野に出て歩いていたが、目をあげて、らくだの来る
のを見た。六四リベカは目をあげてイサクを見、らくだからおりて、六五しも
べに言った、「わたしたちに向かって、野を歩いて来るあの人はだれでしょ
う」。しもべは言った、「あれはわたしの主人です」。するとリベカは、被衣

で身をおおった。六六しもべは自分がしたことのすべてをイサクに話した。
六七イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとって妻とし、彼女
を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た。
第二五章一アブラハムは再び妻をめとった。名をケトラという。二彼女
はジムラン、ヨクシャン、メダン、ミデアン、イシバクおよびシュワを産
んだ。三ヨクシャンの子はシバとデダン。デダンの子孫はアシュリびと、レ
トシびと、レウミびとである。四ミデアンの子孫はエパ、エペル、ヘノク、
アビダ、エルダアであって、これらは皆ケトラの子孫であった。五アブラハ
ムはその所有をことごとくイサクに与えた。六またそのそばめたちの子ら
にもアブラハムは物を与え、なお生きている間に彼らをその子イサクか
ら離して、東の方、東の国に移らせた。
七アブラハムの生きながらえた年は百七十五年である。八アブラハムは

高齢に達し、老人となり、年が満ちて息絶え、死んでその民に加えられた。
九その子イサクとイシマエルは彼をヘテびとゾハルの子エフロンの畑にあ
るマクペラのほら穴に葬った。これはマムレの向かいにあり、一〇アブラハ
ムがヘテの人々から、買い取った畑であって、そこにアブラハムとその妻
サラが葬られた。一一アブラハムが死んだ後、神はその子イサクを祝福
された。イサクはベエル・ラハイ・ロイのほとりに住んだ。
一二サラのつかえめエジプトびとハガルがアブラハムに産んだアブラハ
ムの子イシマエルの系図は次のとおりである。一三イシマエルの子らの名
を世代にしたがって、その名をいえば次のとおりである。すなわちイシマ
エルの長子はネバヨテ、次はケダル、アデビエル、ミブサム、一四ミシマ、
ドマ、マッサ、一五ハダデ、テマ、エトル、ネフシ、ケデマ。一六これはイ
シマエルの子らであり、村と宿営とによる名であって、その氏族による十

二人の君たちである。一七イシマエルのよわいは百三十七年である。彼は
息絶えて死に、その民に加えられた。一八イシマエルの子らはハビラから
エジプトの東、シュルまでの間に住んで、アシュルに及んだ。イシマエ
ルはすべての兄弟の東に住んだ。
一九アブラハムの子イサクの系図は次のとおりである。アブラハムの子は
イサクであって、二〇イサクは四十歳の時、パダンアラムのアラムびとべ
トエルの娘で、アラムびとラバンの妹リベカを妻にめとった。二一イサ
クは妻が子を産まなかったので、妻のために主に祈り願った。主はその願
いを聞かれ、妻リベカはみごもった。二二ところがその子らが胎内で押し
合ったので、リベカは言った、「こんなことでは、わたしはどうなるでしょ
う」。彼女は行って主に尋ねた。二三主は彼女に言われた、
「二つの国民があなたの胎内にあり、

二つの民があなたの腹から別れて出る。
一つの民は他の民よりも強く、
兄は弟に仕えるであろう」。
二四彼女の出産の日がきたとき、胎内にはふたごがあった。二五さきに出た
のは赤くて全身毛ごろものようであった。それで名をエサウと名づけた。二
六その後に弟が出た。その手はエサウのかかとをつかんでいた。それで名
をヤコブと名づけた。リベカが彼らを産んだ時、イサクは六十歳であった。
二七さてその子らは成長し、エサウは巧みな狩猟者となり、野の人と
なったが、ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた。二八イサクは、し
かの肉が好きだったので、エサウを愛したが、リベカはヤコブを愛した。
二九ある日ヤコブが、あつものを煮ていた時、エサウは飢え疲れて野か
ら帰ってきた。三〇エサウはヤコブに言った、「わたしは飢え疲れた。お願

いだ。赤いもの、その赤いものをわたしに食べさせてくれ」。彼が名をエ
ドムと呼ばれたのはこのためである。三一ヤコブは言った、「まずあなたの
長子の特権をわたしに売りなさい」。三二エサウは言った、「わたしは死に
そうだ。長子の特権などわたしに何になろう」。三三ヤコブはまた言った、
「まずわたしに誓いなさい」。彼は誓って長子の特権をヤコブに売った。三
四そこでヤコブはパンとレンズ豆のあつものとをエサウに与えたので、彼
は飲み食いして、立ち去った。このようにしてエサウは長子の特権を軽ん
じた。

第二六章一アブラハムの時にあった初めのききんのほか、またききんが
その国にあったので、イサクはゲラルにいるペリシテびとの王アビメレク
の所へ行った。二その時、主は彼に現れて言われた、「エジプトへ下って
はならない。わたしがあなたに示す地にとどまりなさい。三あなたがこの

地にとどまるなら、わたしはあなたと共にいて、あなたを祝福し、これら
の国をことごとくあなたと、あなたの子孫とに与え、わたしがあなたの父
アブラハムに誓った誓いを果そう。四またわたしはあなたの子孫を増して
天の星のようにし、あなたの子孫にこれらの地をみな与えよう。そして地
のすべての国民はあなたの子孫によって祝福をえるであろう。五アブラハ
ムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、
おきてとを守ったからである」。

六こうしてイサクはゲラルに住んだ。七その所の人々が彼の妻のこと
を尋ねたとき、「彼女はわたしの妹です」と彼は言った。リベカは美し
かったので、その所の人々がリベカのゆえに自分を殺すかもしれないと
思って、「わたしの妻です」と言うのを恐れたからである。八イサクは長ら
くそこにいたが、ある日ペリシテびとの王アビメレクは窓から外をながめ

ていて、イサクがその妻リベカと戯れているのを見た。九そこでアビメレ
クはイサクを召して言った、「彼女は確かにあなたの妻です。あなたはどう
して『彼女はわたしの妹です』と言われたのですか」。イサクは彼に言っ
た、「わたしは彼女のゆえに殺されるかもしれないと思ったからです」。一
〇アビメレクは言った、「あなたはどうしてこんな事をわれわれにされたの
ですか。民のひとりが軽々しくあなたの妻と寝るような事があれば、その
時あなたはわれわれに罪を負わせるでしょう」。一一それでアビメレクはす
べての民に命じて言った、「この人、またはその妻にさわる者は必ず死な
なければならない」。

一二イサクはその地に種をまいて、その年に百倍の収穫を得た。このよ
うに主が彼を祝福されたので、一三彼は富み、ますます栄えて非常に
裕福になり、一四羊の群れ、牛の群れ及び多くのしもべを持つようになっ

たので、ペリシテびとは彼をねたんだ。一五またペリシテびとは彼の父ア
ブラハムの時に、父のしもべたちが掘ったすべての井戸をふさぎ、土で埋
めた。一六アビメレクはイサクに言った、「あなたはわれわれよりも、はる
かに強くなられたから、われわれの所を去ってください」。
一七イサクはそこを去り、ゲラルの谷に天幕を張ってその所に住んだ。
一八そしてイサクは父アブラハムの時に人々の掘った水の井戸を再び掘っ
た。アブラハムの死後、ペリシテびとがふさいだからである。イサクは父
がつけた名にしたがってそれらに名をつけた。一九しかしイサクのしもべた
ちが谷の中を掘って、そこにわき出る水の井戸を見つけたとき、二〇ゲラル
の羊飼たちは、「この水はわれわれのものだ」と言って、イサクの羊飼
たちと争ったので、イサクはその井戸の名をエセクと名づけた。彼らが
彼と争ったからである。二一彼らはまた一つの井戸を掘ったが、これをも

争ったので、名をシテナと名づけた。二二イサクはそこから移ってまた一
つの井戸を掘ったが、彼らはこれを争わなかったので、その名をレホボテ
と名づけて言った、「いま主がわれわれの場所を広げられたから、われわれ
はこの地にふえるであろう」。
二三彼はそこからベエルシバに上った。二四その夜、主は彼に現れて言
われた、「わたしはあなたの父アブラハムの神である。あなたは恐れてはな
らない。わたしはあなたと共におって、あなたを祝福し、わたしのしも
べアブラハムのゆえにあなたの子孫を増すであろう」。二五それで彼はその
所に祭壇を築いて、主の名を呼び、そこに天幕を張った。またイサクの
しもべたちはそこに一つの井戸を掘った。
二六時にアビメレクがその友アホザテと、軍勢の長ピコルと共にゲラル
からイサクのもとにきたので、二七イサクは彼らに言った、「あなたがたは

わたしを憎んで、あなたがたの中からわたしを追い出されたのに、どうし
てわたしの所にこられたのですか」。二八彼らは言った、「われわれは主が
あなたと共におられるのを、はっきり見ましたので、いまわれわれの間、
すなわちわれわれとあなたとの間に一つの誓いを立てて、あなたと契約を
結ぼうと思います。二九われわれはあなたに害を加えたことはなく、ただ
良い事だけをして、安らかに去らせたのですから、あなたはわれわれに悪
い事をしてはなりません。まことにあなたは主に祝福されたかたです」。
三〇そこでイサクは彼らのためにふるまいを設けた。彼らは飲み食いし、三
一あくる朝、はやく起きて互に誓った。こうしてイサクは彼らを去らせた
ので、彼らはイサクのもとから穏やかに去った。三二その日、イサクのし
もべたちがきて、自分たちが掘った井戸について彼に告げて言った、「わた
したちは水を見つけました」。三三イサクはそれをシバと名づけた。これに

よってその町の名は今日にいたるまでベエルシバといわれている。
三四エサウは四十歳の時、ヘテびとベエリの娘ユデテとヘテびとエロン
の娘バスマテとを妻にめとった。三五彼女たちはイサクとリベカにとって
心の痛みとなった。

第二七章一イサクは年老い、目がかすんで見えなくなった時、長子エサ
ウを呼んで言った、「子よ」。彼は答えて言った、「ここにおります」。二イ
サクは言った。「わたしは年老いて、いつ死ぬかも知れない。三それであな
たの武器、弓矢をもって野に出かけ、わたしのために、しかの肉をとってき
て、四わたしの好きなおいしい食べ物を作り、持ってきて食べさせよ。わ
たしは死ぬ前にあなたを祝福しよう」。
五イサクがその子エサウに語るのをリベカは聞いていた。やがてエサウ
が、しかの肉を獲ようと野に出かけたとき、六リベカはその子ヤコブに言っ

た、「わたしは聞いていましたが、父は兄エサウに、七『わたしのために、し
かの肉をとってきて、おいしい食べ物を作り、わたしに食べさせよ。わた
しは死ぬ前に、主の前であなたを祝福しよう』と言いました。八それで、
子よ、わたしの言葉にしたがい、わたしの言うとおりにしなさい。九群れ
の所へ行って、そこからやぎの子の良いのを二頭わたしの所に取ってき
なさい。わたしはそれで父のために、父の好きなおいしい食べ物を作りま
しょう。一〇あなたはそれを持って行って父に食べさせなさい。父は死ぬ
前にあなたを祝福するでしょう」。一一ヤコブは母リベカに言った、「兄エ
サウは毛深い人ですが、わたしはなめらかです。一二おそらく父はわたしに
さわってみるでしょう。そうすればわたしは父を欺く者と思われ、祝福
を受けず、かえってのろいを受けるでしょう」。一三母は彼に言った、「子
よ、あなたがうけるのろいはわたしが受けます。ただ、わたしの言葉に従

い、行って取ってきなさい」。一四そこで彼は行ってやぎの子を取り、母の
所に持ってきたので、母は父の好きなおいしい食べ物を作った。一五リベ
カは家にあった長子エサウの晴着を取って、弟ヤコブに着せ、一六また
子やぎの皮を手と首のなめらかな所とにつけさせ、一七彼女が作ったおい
しい食べ物とパンとをその子ヤコブの手にわたした。
一八そこでヤコブは父の所へ行って言った、「父よ」。すると父は言った、
「わたしはここにいる。子よ、あなたはだれか」。一九ヤコブは父に言った、
「長子エサウです。あなたがわたしに言われたとおりにいたしました。ど
うぞ起きて、すわってわたしのしかの肉を食べ、あなたみずからわたしを
祝福してください」。二〇イサクはその子に言った、「子よ、どうしてあな
たはこんなに早く手に入れたのか」。彼は言った、「あなたの神、主がわた
しにしあわせを授けられたからです」。二一イサクはヤコブに言った、「子

よ、近寄りなさい。わたしは、さわってみて、あなたが確かにわが子エサウ
であるかどうかをみよう」。二二ヤコブが、父イサクに近寄ったので、イサ
クは彼にさわってみて言った、「声はヤコブの声だが、手はエサウの手だ」。
二三ヤコブの手が兄エサウの手のように毛深かったため、イサクはヤコブを
見わけることができなかったので、彼を祝福した。二四イサクは言った、
「あなたは確かにわが子エサウですか」。彼は言った、「そうです」。二五イ
サクは言った、「わたしの所へ持ってきなさい。わが子のしかの肉を食べ
て、わたしみずから、あなたを祝福しよう」。ヤコブがそれを彼の所に
持ってきたので、彼は食べた。またぶどう酒を持ってきたので、彼は飲ん
だ。二六そして父イサクは彼に言った、「子よ、さあ、近寄ってわたしに口
づけしなさい」。二七彼が近寄って口づけした時、イサクはその着物のかお
りをかぎ、彼を祝福して言った、

「ああ、わが子のかおりは、
主が祝福された野のかおりのようだ。
二八どうか神が、天の露と、
地の肥えたところと、多くの穀物と、
新しいぶどう酒とをあなたに賜わるように。
二九もろもろの民はあなたに仕え、
もろもろの国はあなたに身をかがめる。
あなたは兄弟たちの主となり、
あなたの母の子らは、
あなたに身をかがめるであろう。
あなたをのろう者はのろわれ、
あなたを祝福する者は祝福される」。

三〇イサクがヤコブを祝福し終って、ヤコブが父イサクの前から出て行
くとすぐ、兄エサウが狩から帰ってきた。三一彼もまたおいしい食べ物を
作って、父の所に持ってきて、言った、「父よ、起きてあなたの子のしか
の肉を食べ、あなたみずから、わたしを祝福してください」。三二父イサ
クは彼に言った、「あなたは、だれか」。彼は言った、「わたしはあなたの子、
長子エサウです」。三三イサクは激しくふるえて言った、「それでは、あの
しかの肉を取って、わたしに持ってきた者はだれか。わたしはあなたが来
る前に、みんな食べて彼を祝福した。ゆえに彼が祝福を得るであろう」。
三四エサウは父の言葉を聞いた時、大声をあげ、激しく叫んで、父に言っ
た、「父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。三五イサクは言っ
た、「あなたの弟が偽ってやってきて、あなたの祝福を奪ってしまっ
た」。三六エサウは言った、「よくもヤコブと名づけたものだ。彼は二度まで

もわたしをおしのけた。さきには、わたしの長子の特権を奪い、こんどは
わたしの祝福を奪った」。また言った、「あなたはわたしのために祝福を
残しておかれませんでしたか」。
三七イサクは答えてエサウに言った、「わた
しは彼をあなたの主人とし、兄弟たちを皆しもべとして彼に与え、また
穀物とぶどう酒を彼に授けた。わが子よ、今となっては、あなたのために
何ができようか」。
三八エサウは父に言った、「父よ、あなたの祝福はただ
一つだけですか。父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。エサ
ウは声をあげて泣いた。
三九父イサクは答えて彼に言った、

「あなたのすみかは地の肥えた所から離れ、
また上なる天の露から離れるであろう。
四〇あなたはつるぎをもって世を渡り、

あなたの弟に仕えるであろう。
しかし、あなたが勇み立つ時、
首から、そのくびきを振り落すであろう」。
四一こうしてエサウは父がヤコブに与えた祝福のゆえにヤコブを憎ん
だ。エサウは心の内で言った、「父の喪の日も遠くはないであろう。その
時、弟ヤコブを殺そう」。四二しかしリベカは長子エサウのこの言葉を人
づてに聞いたので、人をやり、弟ヤコブを呼んで言った、「兄エサウは
あなたを殺そうと考えて、みずから慰めています。四三子よ、今わたし
の言葉に従って、すぐハランにいるわたしの兄ラバンのもとにのがれ、四
四あなたの兄の怒りが解けるまで、しばらく彼の所にいなさい。四五兄の
憤りが解けて、あなたのした事を兄が忘れるようになったならば、わた
しは人をやって、あなたをそこから迎えましょう。どうして、わたしは一

日のうちにあなたがたふたりを失ってよいでしょうか」。
四六リベカはイサクに言った、「わたしはヘテびとの娘どものことで、生
きているのがいやになりました。もしヤコブがこの地の、あの娘どものよ
うなヘテびとの娘を妻にめとるなら、わたしは生きていて、何になりま
しょう」。
第二八章一イサクはヤコブを呼んで、これを祝福し、命じて言った、「あ
なたはカナンの娘を妻にめとってはならない。二立ってパダンアラムへ行
き、あなたの母の父ベトエルの家に行って、そこであなたの母の兄ラバン
の娘を妻にめとりなさい。三全能の神が、あなたを祝福し、多くの子を
得させ、かつふえさせて、多くの国民とし、四またアブラハムの祝福をあ
なたと子孫とに与えて、神がアブラハムに授けられたあなたの寄留の地を
継がせてくださるように」。五こうしてイサクはヤコブを送り出した。ヤコ

ブはパダンアラムに向かい、アラムびとベトエルの子で、ヤコブとエサウ
との母リベカの兄ラバンのもとへ行った。
六さてエサウは、イサクがヤコブを祝福して、パダンアラムにつかわし、
そこから妻をめとらせようとしたこと、彼を祝福し、命じて「あなたは
カナンの娘を妻にめとってはならない」と言ったこと、七そしてヤコブが
父母の言葉に従って、パダンアラムへ行ったことを知ったとき、八彼はカ
ナンの娘が父イサクの心にかなわないのを見た。九そこでエサウはイシ
マエルの所に行き、すでにある妻たちのほかにアブラハムの子イシマエル
の娘で、ネバヨテの妹マハラテを妻にめとった。
一〇さてヤコブはベエルシバを立って、ハランへ向かったが、一一一つの
所に着いた時、日が暮れたので、そこに一夜を過ごし、その所の石を取っ
てまくらとし、そこに伏して寝た。一二時に彼は夢をみた。一つのはしご

が地の上に立っていて、その頂は天に達し、神の使たちがそれを上り
下りしているのを見た。一三そして主は彼のそばに立って言われた、「わた
しはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが伏して
いる地を、あなたと子孫とに与えよう。一四あなたの子孫は地のちりのよう
に多くなって、西、東、北、南にひろがり、地の諸族はあなたと子孫と
によって祝福をうけるであろう。一五わたしはあなたと共にいて、あなた
がどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わ
たしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を行うであろう」。一六
ヤコブは眠りからさめて言った、「まことに主がこの所におられるのに、
わたしは知らなかった」。一七そして彼は恐れて言った、「これはなんという
恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」。
一八ヤコブは朝はやく起きて、まくらとしていた石を取り、それを立てて

柱とし、その頂に油を注いで、一九その所の名をベテルと名づけた。
その町の名は初めはルズといった。二〇ヤコブは誓いを立てて言った、「神
がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパン
と着る着物を賜い、二一安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわ
たしの神といたしましょう。二二またわたしが柱に立てたこの石を神の家
といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わ
たしは必ずあなたにささげます」。

第二九章一ヤコブはその旅を続けて東の民の地へ行った。二見ると野に
一つの井戸があって、そのかたわらに羊の三つの群れが伏していた。人々
はその井戸から群れに水を飲ませるのであったが、井戸の口には大きな石
があった。三群れが皆そこに集まると、人々は井戸の口から石をころがし
て羊に水を飲ませ、その石をまた井戸の口の元のところに返しておくの

である。
四ヤコブは人々に言った、「兄弟たちよ、あなたがたはどこからこられ
たのですか」。彼らは言った、「わたしたちはハランからです」。五ヤコブは
彼らに言った、「あなたがたはナホルの子ラバンを知っていますか」。彼ら
は言った、「知っています」。六ヤコブはまた彼らに言った、「彼は無事です
か」。彼らは言った、「無事です。御覧なさい。彼の娘ラケルはいま羊と
一緒にここへきます」。七ヤコブは言った、「日はまだ高いし、家畜を集め
る時でもない。あなたがたは羊に水を飲ませてから、また行って飼いなさ
い」。八彼らは言った、「わたしたちはそれはできないのです。群れがみな
集まった上で、井戸の口から石をころがし、それから羊に水を飲ませる
のです」。
九ヤコブがなお彼らと語っている時に、ラケルは父の羊と一緒にきた。
彼女は羊を飼っていたからである。一〇ヤコブは母の兄ラバンの娘ラケ

ルと母の兄ラバンの羊とを見た。そしてヤコブは進み寄って井戸の口か
ら石をころがし、母の兄ラバンの羊に水を飲ませた。一一ヤコブはラケル
に口づけし、声をあげて泣いた。一二ヤコブはラケルに、自分がラケルの父
のおいであり、リベカの子であることを告げたので、彼女は走って行って
父に話した。

一三ラバンは妹の子ヤコブがきたという知らせを聞くとすぐ、走って
行ってヤコブを迎え、これを抱いて口づけし、家に連れてきた。そこでヤ
コブはすべての事をラバンに話した。一四ラバンは彼に言った、「あなたは
ほんとうにわたしの骨肉です」。ヤコブは一か月の間彼と共にいた。

一五時にラバンはヤコブに言った、「あなたはわたしのおいだからといっ
て、ただでわたしのために働くこともないでしょう。どんな報酬を望み
ますか、わたしに言ってください」。一六さてラバンにはふたりの娘があっ

た。姉の名はレアといい、妹の名はラケルといった。一七レアは目が弱
かったが、ラケルは美しくて愛らしかった。一八ヤコブはラケルを愛した
ので、「わたしは、あなたの妹娘ラケルのために七年あなたに仕えましょ
う」と言った。一九ラバンは言った、「彼女を他人にやるよりもあなたにやる
方がよい。わたしと一緒にいなさい」。二〇こうして、ヤコブは七年の間ラ
ケルのために働いたが、彼女を愛したので、ただ数日のように思われた。
二一ヤコブはラバンに言った、「期日が満ちたから、わたしの妻を与えて、
妻の所にはいらせてください」。二二そこでラバンはその所の人々をみな
集めて、ふるまいを設けた。二三夕暮となったとき、娘レアをヤコブのもと
に連れてきたので、ヤコブは彼女の所にはいった。二四ラバンはまた自分
のつかえめジルパを娘レアにつかえめとして与えた。二五朝になって、見
ると、それはレアであったので、ヤコブはラバンに言った、「あなたはどう

してこんな事をわたしにされたのですか。わたしはラケルのために働いた
のではありませんか。どうしてあなたはわたしを欺いたのですか」。二六
ラバンは言った、「妹を姉より先にとつがせる事はわれわれの国ではし
ません。二七まずこの娘のために一週間を過ごしなさい。そうすればあ
の娘もあなたにあげよう。あなたは、そのため更に七年わたしに仕えな
ければならない」。二八ヤコブはそのとおりにして、その一週間が終った
ので、ラバンは娘ラケルをも妻として彼に与えた。二九ラバンはまた自分
のつかえめビルハを娘ラケルにつかえめとして与えた。三〇ヤコブはまた
ラケルの所にはいった。彼はレアよりもラケルを愛して、更に七年ラバ
ンに仕えた。

三一主はレアがきらわれるのを見て、その胎を開かれたが、ラケルは、み
ごもらなかった。三二レアは、みごもって子を産み、名をルベンと名づけて、

言った、「主がわたしの悩みを顧みられたから、今は夫もわたしを愛す
るだろう」。三三彼女はまた、みごもって子を産み、「主はわたしが嫌われ
るのをお聞きになって、わたしにこの子をも賜わった」と言って、名をシ
メオンと名づけた。三四彼女はまた、みごもって子を産み、「わたしは彼に
三人の子を産んだから、こんどこそは夫もわたしに親しむだろう」と言っ
て、名をレビと名づけた。三五彼女はまた、みごもって子を産み、「わたしは
今、主をほめたたえる」と言って名をユダと名づけた。そこで彼女の、子
を産むことはやんだ。

第三〇章一ラケルは自分がヤコブに子を産まないのを知った時、姉をね
たんでヤコブに言った、「わたしに子どもをください。さもないと、わたし
は死にます」。二ヤコブはラケルに向かい怒って言った、「あなたの胎に子
どもをやどらせないのは神です。わたしが神に代ることができようか」。三

ラケルは言った、「わたしのつかえめビルハがいます。彼女の所におはい
りなさい。彼女が子を産んで、わたしのひざに置きます。そうすれば、わた
しもまた彼女によって子を持つでしょう」。四ラケルはつかえめビルハを彼
に与えて、妻とさせたので、ヤコブは彼女の所にはいった。五ビルハは、
みごもってヤコブに子を産んだ。六そこでラケルは、「神はわたしの訴え
に答え、またわたしの声を聞いて、わたしに子を賜わった」と言って、名
をダンと名づけた。七ラケルのつかえめビルハはまた、みごもって第二の
子をヤコブに産んだ。八そこでラケルは、「わたしは激しい争いで、姉と
争って勝った」と言って、名をナフタリと名づけた。

九さてレアは自分が子を産むことのやんだのを見たとき、つかえめジルパ
を取り、妻としてヤコブに与えた。一〇レアのつかえめジルパはヤコブに子
を産んだ。一一そこでレアは、「幸運がきた」と言って、名をガドと名づけ

た。一二レアのつかえめジルパは第二の子をヤコブに産んだ。一三そこでレ
アは、「わたしは、しあわせです。娘たちはわたしをしあわせな者と言う
でしょう」と言って、名をアセルと名づけた。
一四さてルベンは麦刈りの日に野に出て、野で恋なすびを見つけ、それを
母レアのもとに持ってきた。ラケルはレアに言った、「あなたの子の恋なす
びをどうぞわたしにください」。一五レアはラケルに言った、「あなたがわた
しの夫を取ったのは小さな事でしょうか。その上、あなたはまたわたし
の子の恋なすびをも取ろうとするのですか」。ラケルは言った、「それでは
あなたの子の恋なすびに換えて、今夜彼をあなたと共に寝させましょう」。
一六夕方になって、ヤコブが野から帰ってきたので、レアは彼を出迎えて
言った、「わたしの子の恋なすびをもって、わたしがあなたを雇ったのです
から、あなたはわたしの所に、はいらなければなりません」。ヤコブはその

夜レアと共に寝た。一七神はレアの願いを聞かれたので、彼女はみごもっ
て五番目の子をヤコブに産んだ。一八そこでレアは、「わたしがつかえめを
夫に与えたから、神がわたしにその価を賜わったのです」と言って、名
をイッサカルと名づけた。一九レアはまた、みごもって六番目の子をヤコブ
に産んだ。二〇そこでレアは、「神はわたしに良い賜物をたまわった。わた
しは六人の子を夫に産んだから、今こそ彼はわたしと一緒に住むでしょ
う」と言って、その名をゼブルンと名づけた。二一その後、彼女はひとり
の娘を産んで、名をデナと名づけた。二二次に神はラケルを心にとめら
れ、彼女の願いを聞き、その胎を開かれたので、二三彼女は、みごもって
男の子を産み、「神はわたしの恥をすすいでくださった」と言って、二四名
をヨセフと名づけ、「主がわたしに、なおひとりの子を加えられるように」
と言った。

二五ラケルがヨセフを産んだ時、ヤコブはラバンに言った、「わたしを去
らせて、わたしの故郷、わたしの国へ行かせてください。二六あなたに仕
えて得たわたしの妻子を、わたしに与えて行かせてください。わたしがあ
なたのために働いた骨折りは、あなたがごぞんじです」。二七ラバンは彼
に言った、「もし、あなたの心にかなうなら、とどまってください。わた
しは主があなたのゆえに、わたしを恵まれるしるしを見ました」。二八また
言った、「あなたの報酬を申し出てください。わたしはそれを払います」。
二九ヤコブは彼に言った、「わたしがどのようにあなたに仕えたか、またど
のようにあなたの家畜を飼ったかは、あなたがごぞんじです。三〇わたしが
来る前には、あなたの持っておられたものはわずかでしたが、ふえて多く
なりました。主はわたしの行く所どこでも、あなたを恵まれました。しか
し、いつになったらわたしも自分の家を成すようになるでしょうか」。三一

彼は言った、「何をあなたにあげようか」。ヤコブは言った、「なにもわたし
にくださるに及びません。もしあなたが、わたしのためにこの一つの事を
してくださるなら、わたしは今一度あなたの群れを飼い、守りましょう。
三二わたしはきょう、あなたの群れをみな回ってみて、その中からすべてぶ
ちとまだらの羊、およびすべて黒い小羊と、やぎの中のまだらのものと、
ぶちのものとを移しますが、これをわたしの報酬としましょう。三三あと
で、あなたがきて、あなたの前でわたしの報酬をしらべる時、わたしの正
しい事が証明されるでしょう。もしも、やぎの中にぶちのないもの、ま
だらでないものがあったり、小羊の中に黒くないものがあれば、それはみ
なわたしが盗んだものとなるでしょう」。三四ラバンは言った、「よろしい。
あなたの言われるとおりにしましょう」。三五そこでラバンはその日、雄や
ぎのしまのあるもの、まだらのもの、すべて雌やぎのぶちのもの、まだら

のもの、すべて白みをおびているもの、またすべて小羊の中の黒いものを
移して子らの手にわたし、三六ヤコブとの間に三日路の隔たりを設けた。
ヤコブはラバンの残りの群れを飼った。
三七ヤコブは、はこやなぎと、あめんどうと、すずかけの木のなまの枝を
取り、皮をはいでそれに白い筋をつくり、枝の白い所を表わし、三八皮を
はいだ枝を、群れがきて水を飲む鉢、すなわち水ぶねの中に、群れに向か
わせて置いた。群れは水を飲みにきた時に、はらんだ。三九すなわち群れは
枝の前で、はらんで、しまのあるもの、ぶちのもの、まだらのものを産ん
だ。四〇ヤコブはその小羊を別において、彼はまた群れの顔をラバンの群
れのしまのあるものと、すべて黒いものとに向かわせた。そして自分の群
れを別にまとめておいて、ラバンの群れには、入れなかった。四一また群れ
の強いものが発情した時には、ヤコブは水ぶねの中に、その群れの目の

前に、かの枝を置いて、枝の間で、はらませた。四二けれども群れの弱い
ものの時には、それを置かなかった。こうして弱いものはラバンのものと
なり、強いものはヤコブのものとなったので、四三この人は大いに富み、多
くの群れと、男女の奴隷、およびらくだ、ろばを持つようになった。
第三一章一さてヤコブはラバンの子らが、「ヤコブはわれわれの父の物を
ことごとく奪い、父の物によってあのすべての富を獲たのだ」と言ってい
るのを聞いた。二またヤコブがラバンの顔を見るのに、それは自分に対し
て以前のようではなかった。三主はヤコブに言われた、「あなたの先祖の国
へ帰り、親族のもとに行きなさい。わたしはあなたと共にいるであろう」。
四そこでヤコブは人をやって、ラケルとレアとを、野にいる自分の群れの
ところに招き、五彼女らに言った、「わたしがあなたがたの父の顔を見るの
に、わたしに対して以前のようではない。しかし、わたしの父の神はわた

しと共におられる。六あなたがたが知っているように、わたしは力のかぎ
り、あなたがたの父に仕えてきた。七しかし、あなたがたの父はわたしを
欺いて、十度もわたしの報酬を変えた。けれども神は彼がわたしに害を
加えることをお許しにならなかった。八もし彼が、『ぶちのものはあなたの
報酬だ』と言えば、群れは皆ぶちのものを産んだ。もし彼が、『しまのあ
るものはあなたの報酬だ』と言えば、群れは皆しまのあるものを産んだ。
九こうして神はあなたがたの父の家畜をとってわたしに与えられた。一〇ま
た群れが発情した時、わたしが夢に目をあげて見ると、群れの上に乗っ
ている雄やぎは皆しまのあるもの、ぶちのもの、霜ふりのものであった。一
一その時、神の使が夢の中でわたしに言った、『ヤコブよ』。わたしは答
えた、『ここにおります』。一二神の使は言った、『目を上げて見てごらん。
群れの上に乗っている雄やぎは皆しまのあるもの、ぶちのもの、霜ふりの

ものです。わたしはラバンがあなたにしたことをみな見ています。一三わた
しはベテルの神です。かつてあなたはあそこで柱に油を注いで、わたし
に誓いを立てましたが、いま立ってこの地を出て、あなたの生れた国へ帰
りなさい』」。一四ラケルとレアは答えて言った、「わたしたちの父の家に、
なおわたしたちの受くべき分、また嗣業がありましょうか。一五わたした
ちは父に他人のように思われているではありませんか。彼はわたしたちを
売ったばかりでなく、わたしたちのその金をさえ使い果たしたのです。一
六神がわたしたちの父から取りあげられた富は、みなわたしたちとわたし
たちの子どものものです。だから何事でも神があなたにお告げになった事
をしてください」。

一七そこでヤコブは立って、子らと妻たちをらくだに乗せ、一八またすべ
ての家畜、すなわち彼がパダンアラムで獲た家畜と、すべての財産を携え

て、カナンの地におる父イサクのもとへ赴いた。一九その時ラバンは羊
の毛を切るために出ていたので、ラケルは父の所有のテラピムを盗み出し
た。二〇またヤコブはアラムびとラバンを欺き、自分の逃げ去るのを彼に
告げなかった。二一こうして彼はすべての持ち物を携えて逃げ、立って川
を渡り、ギレアデの山地へ向かった。
二二三日目になって、ヤコブの逃げ去ったことが、ラバンに聞えたので、
二三彼は一族を率いて、七日の間そのあとを追い、ギレアデの山地で追い
ついた。二四しかし、神は夜の夢にアラムびとラバンに現れて言われた、
「あなたは心してヤコブに、よしあしを言ってはなりません」。
二五ラバンはついにヤコブに追いついたが、ヤコブが山に天幕を張って
いたので、ラバンも一族と共にギレアデの山に天幕を張った。二六ラバン
はヤコブに言った、「あなたはなんという事をしたのですか。あなたはわた

しを欺いてわたしの娘たちをいくさのとりこのように引いて行きました。
二七なぜあなたはわたしに告げずに、ひそかに逃げ去ってわたしを欺いた
のですか。わたしは手鼓や琴で喜び歌ってあなたを送りだそうとしてい
たのに。二八なぜわたしの孫や娘にわたしが口づけするのを許さなかった
のですか。あなたは愚かな事をしました。二九わたしはあなたがたに害を
加える力をもっているが、あなたがたの父の神が昨夜わたしに告げて、『お
まえは心して、ヤコブによしあしを言うな』と言われました。三〇今あな
たが逃げ出したのは父の家が非常に恋しくなったからでしょうが、なぜあ
なたはわたしの神を盗んだのですか」。三一ヤコブはラバンに答えた、「た
ぶんあなたが娘たちをわたしから奪いとるだろうと思ってわたしは恐れ
たからです。三二だれの所にでもあなたの神が見つかったら、その者を生
かしてはおきません。何かあなたの物がわたしのところにあるか、われわ

れの一族の前で、調べてみて、それをお取りください」。ラケルが神を盗
んだことをヤコブは知らなかったからである。
三三そこでラバンはヤコブの天幕にはいり、またレアの天幕にはいり、更
にふたりのはしための天幕にはいってみたが、見つからなかったので、レ
アの天幕を出てラケルの天幕にはいった。三四しかし、ラケルはすでにテ
ラピムを取って、らくだのくらの下に入れ、その上にすわっていたので、ラ
バンは、くまなく天幕の中を捜したが、見つからなかった。三五その時ラ
ケルは父に言った、「わたしは女の常のことがあって、あなたの前に立ち
上がることができません。わが主よ、どうかお怒りにならぬよう」。彼は捜
したがテラピムは見つからなかった。
三六そこでヤコブは怒ってラバンを責めた。そしてヤコブはラバンに言っ
た、「わたしにどんなあやまちがあり、どんな罪があって、あなたはわたし

のあとを激しく追ったのですか。三七あなたはわたしの物をことごとく探
られたが、何かあなたの家の物が見つかりましたか。それを、ここに、わ
たしの一族と、あなたの一族の前に置いて、われわれふたりの間をさば
かせましょう。三八わたしはこの二十年、あなたと一緒にいましたが、その
間あなたの雌羊も雌やぎも子を産みそこねたことはなく、またわたしはあ
なたの群れの雄羊を食べたこともありませんでした。三九また野獣が、か
み裂いたものは、あなたのもとに持ってこないで、自分でそれを償いまし
た。また昼盗まれたものも、夜盗まれたものも、あなたはわたしにその償
いを求められました。四〇わたしのことを言えば、昼は暑さに、夜は寒さ
に悩まされて、眠ることもできませんでした。四一わたしはこの二十年あな
たの家族のひとりでありました。わたしはあなたのふたりの娘のために十
四年、またあなたの群れのために六年、あなたに仕えましたが、あなたは

十度もわたしの報酬を変えられました。四二もし、わたしの父の神、ア
ブラハムの神、イサクのかしこむ者がわたしと共におられなかったなら、
あなたはきっとわたしを、から手で去らせたでしょう。神はわたしの悩み
と、わたしの労苦とを顧みられて昨夜あなたを戒められたのです」。
四三ラバンは答えてヤコブに言った、「娘たちはわたしの娘、子どもた
ちはわたしの孫です。また群れはわたしの群れ、あなたの見るものはみな
わたしのものです。これらのわたしの娘たちのため、また彼らが産んだ子
どもたちのため、きょうわたしは何をすることができましょうか。四四さ
あ、それではわたしとあなたと契約を結んで、これをわたしとあなたとの
間の証拠としましょう」。四五そこでヤコブは石を取り、それを立てて柱
とした。四六ヤコブはまた一族の者に言った、「石を集めてください」。彼
らは石を取って、一つの石塚を造った。こうして彼らはその石塚のかたわ

らで食事をした。四七ラバンはこれをエガル・サハドタと名づけ、ヤコブは
これをガルエドと名づけた。四八そしてラバンは言った、「この石塚はきょ
うわたしとあなたとの間の証拠となります」。それでその名はガルエドと
呼ばれた。四九またミズパとも呼ばれた。彼がこう言ったからである、「わ
れわれが互に別れたのちも、どうか主がわたしとあなたとの間を見守ら
れるように。五〇もしあなたがわたしの娘を虐待したり、わたしの娘の
ほかに妻をめとることがあれば、たといそこにだれひとりいなくても、神
はわたしとあなたとの間の証人でいらせられる」。

五一更にラバンはヤコブに言った、「あなたとわたしとの間にわたしが
建てたこの石塚をごらんなさい、この柱をごらんなさい。五二この石塚を
越えてわたしがあなたに害を加えず、またこの石塚とこの柱を越えてあ
なたがわたしに害を加えないように、どうかこの石塚があかしとなり、こ

の柱があかしとなるように。五三どうかアブラハムの神、ナホルの神、彼
らの父の神がわれわれの間をさばかれるように」。ヤコブは父イサクのか
しこむ者によって誓った。五四そしてヤコブは山で犠牲をささげ、一族を
招いて、食事をした。彼らは食事をして山に宿った。
五五あくる朝ラバンは早く起き、孫と娘たちに口づけして彼らを祝福
し、去って家に帰った。

第三二章一さて、ヤコブが旅路に進んだとき、神の使たちが彼に会った。
二ヤコブは彼らを見て、「これは神の陣営です」と言って、その所の名を
マハナイムと名づけた。
三ヤコブはセイルの地、エドムの野に住む兄エサウのもとに、さきだっ
て使者をつかわした。四すなわちそれに命じて言った、「あなたがたはわた
しの主人エサウにこう言いなさい、『あなたのしもべヤコブはこう言いまし

た。わたしはラバンのもとに寄留して今までとどまりました。五わたしは
牛、ろば、羊、男女の奴隷を持っています。それでわが主に申し上げて、
あなたの前に恵みを得ようと人をつかわしたのです』。
六使者はヤコブのもとに帰って言った、「わたしたちはあなたの兄エサウの
もとへ行きました。彼もまたあなたを迎えようと四百人を率いてきます」。
七そこでヤコブは大いに恐れ、苦しみ、共にいる民および羊、牛、らくだ
を二つの組に分けて、八言った、「たとい、エサウがきて、一つの組を撃っ
ても、残りの組はのがれるであろう」。
九ヤコブはまた言った、「父アブラハムの神、父イサクの神よ、かつてわ
たしに『おまえの国へ帰り、おまえの親族に行け。わたしはおまえを恵も
う』と言われた主よ、一〇あなたがしもべに施されたすべての恵みとまこ
とをわたしは受けるに足りない者です。わたしは、つえのほか何も持たな

いでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました。一一ど
うぞ、兄エサウの手からわたしをお救いください。わたしは彼がきて、わ
たしを撃ち、母や子供たちにまで及ぶのを恐れます。一二あなたは、かつ
て、『わたしは必ずおまえを恵み、おまえの子孫を海の砂の数えがたいほ
ど多くしよう』と言われました」。
一三彼はその夜そこに宿り、持ち物のうちから兄エサウへの贈り物を選
んだ。一四すなわち雌やぎ二百、雄やぎ二十、雌羊二百、雄羊二十、一五乳
らくだ三十とその子、雌牛四十、雄牛十、雌ろば二十、雄ろば十。一六彼は
これらをそれぞれの群れに分けて、しもべたちの手にわたし、しもべたち
に言った、「あなたがたはわたしの先に進みなさい、そして群れと群れとの
間には隔たりをおきなさい」。一七また先頭の者に命じて言った、「もし、
兄エサウがあなたに会って『だれのしもべで、どこへ行くのか。あなたの

前にあるこれらのものはだれの物か』と尋ねたら、一八『あなたのしもべヤ
コブの物で、わが主エサウにおくる贈り物です。彼もわたしたちのうしろ
におります』と言いなさい」。一九彼は第二の者にも、第三の者にも、また
群れ群れについて行くすべての者にも命じて言った、「あなたがたがエサウ
に会うときは、同じように彼に告げて、二〇『あなたのしもべヤコブもわれ
われのうしろにおります』と言いなさい」。ヤコブは、「わたしがさきに送
る贈り物をもってまず彼をなだめ、それから、彼の顔を見よう。そうすれ
ば、彼はわたしを迎えてくれるであろう」と思ったからである。二一こうし
て贈り物は彼に先立って渡り、彼はその夜、宿営にやどった。
二二彼はその夜起きて、ふたりの妻とふたりのつかえめと十一人の子ども
とを連れてヤボクの渡しをわたった。二三すなわち彼らを導いて川を渡ら
せ、また彼の持ち物を渡らせた。二四ヤコブはひとりあとに残ったが、ひと

りの人が、夜明けまで彼と組打ちした。二五ところでその人はヤコブに勝て
ないのを見て、ヤコブのもものつがいにさわったので、ヤコブのもものつが
いが、その人と組打ちするあいだにはずれた。二六その人は言った、「夜が
明けるからわたしを去らせてください」。ヤコブは答えた、「わたしを祝福
してくださらないなら、あなたを去らせません」。二七その人は彼に言った、
「あなたの名はなんと言いますか」。彼は答えた、「ヤコブです」。二八その
人は言った、「あなたはもはや名をヤコブと言わず、イスラエルと言いなさ
い。あなたが神と人とに、力を争って勝ったからです」。二九ヤコブは尋
ねて言った、「どうかわたしにあなたの名を知らせてください」。するとそ
の人は、「なぜあなたはわたしの名をきくのですか」と言ったが、その所
で彼を祝福した。三〇そこでヤコブはその所の名をペニエルと名づけて
言った、「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」。三一

こうして彼(かれ)がペニエルを過(す)ぎる時(とき)、日(ひ)は彼(かれ)の上(うえ)にのぼったが、彼(かれ)はそのも
ものゆえにびっこを引(ひ)いていた。
三二そのため、イスラエルの子(こ)らは今日(こんにち)ま
で、もものつがいの上(うえ)にある腰(こし)の筋(すじ)を食(た)べない。かの人(ひと)がヤコブのももの
つがい、すなわち腰(こし)の筋(すじ)にさわったからである。

第三三章
一さてヤコブは目(め)をあげ、エサウが四百人(にん)を率(ひき)いて来(く)るのを見(み)
た。そこで彼(かれ)は子供(こども)たちを分(わ)けてレアとラケルとふたりのつかえめとにわ
たし、
二つかえめとその子供(こども)たちをまっ先(さき)に置(お)き、レアとその子供(こども)たちを
次(つぎ)に置(お)き、ラケルとヨセフを最後(さいご)に置(お)いて、
三みずから彼(かれ)らの前(まえ)に進(すす)み、七
たび身(み)を地(ち)にかがめて、兄(あに)に近(ちか)づいた。
四するとエサウは走(はし)ってきて迎(むか)え、彼(かれ)を抱(だ)き、そのくびをかかえて口(くち)づけ
し、共(とも)に泣(な)いた。
五エサウは目(め)をあげて女(おんな)と子供(こども)たちを見(み)て言(い)った、「あな
たと一緒(いっしょ)にいるこれらの者(もの)はだれですか」。ヤコブは言(い)った、「神(かみ)がしもべ

に授けられた子供たちです」。六そこでつかえめたちはその子供たちと共に
近寄ってお辞儀した。七レアもまたその子供たちと共に近寄ってお辞儀し、
それからヨセフとラケルが近寄ってお辞儀した。八するとエサウは言った、
「わたしが出会ったあのすべての群れはどうしたのですか」。ヤコブは言っ
た、「わが主の前に恵みを得るためです」。九エサウは言った、「弟よ、わ
たしはじゅうぶんもっている。あなたの物はあなたのものにしなさい」。一
〇ヤコブは言った、「いいえ、もしわたしがあなたの前に恵みを得るなら、
どうか、わたしの手から贈り物を受けてください。あなたが喜んでわたし
を迎えてくださるので、あなたの顔を見て、神の顔を見るように思います。
一一どうかわたしが持ってきた贈り物を受けてください。神がわたしを恵
まれたので、わたしはじゅうぶんもっていますから」。こうして彼がしいた
ので、彼は受け取った。

一二そしてエサウは言(い)った、「さあ、立(た)って行(い)こう。わたしが先(さき)に行(い)く」。
一三ヤコブは彼(かれ)に言(い)った、「ごぞんじのように、子供(こども)たちは、かよわく、また
乳(ちち)を飲(の)ませている羊(ひつじ)や牛(うし)をわたしが世話(せわ)をしています。もし一日(にち)でも歩(ある)
かせ過(す)ぎたら群(む)れはみな死(し)んでしまいます。一四わが主(しゅ)よ、どうか、しもべ
の先(さき)においでください。わたしはわたしの前(まえ)にいる家畜(かちく)と子供(こども)たちの歩(あゆ)み
に合(あ)わせて、ゆっくり歩(ある)いて行(い)き、セイルでわが主(しゅ)と一緒(いっしょ)になりましょう」。
一五エサウは言(い)った、「それならわたしが連(つ)れている者(もの)どものうち幾人(いくひと)か
をあなたのもとに残(のこ)しましょう」。ヤコブは言(い)った、「いいえ、それには及(およ)
びません。わが主(しゅ)の前(まえ)に恵(めぐ)みを得(え)させてください」。一六その日(ひ)エサウはセ
イルへの帰途(きと)についた。一七ヤコブは立(た)ってスコテに行(い)き、自分(じぶん)のために家(いえ)
を建(た)て、また家畜(かちく)のために小屋(こや)を造(つく)った。これによってその所(ところ)の名(な)はスコ
テと呼(よ)ばれている。

一八こうしてヤコブはパダンアラムからきて、無事カナンの地のシケムの
町に着き、町の前に宿営した。一九彼は天幕を張った野の一部をシケムの
父ハモルの子らの手から百ケシタで買い取り、二〇そこに祭壇を建てて、こ
れをエル・エロヘ・イスラエルと名づけた。
第三四章一レアがヤコブに産んだ娘デナはその地の女たちに会おうと
出かけて行ったが、二その地のつかさ、ヒビびとハモルの子シケムが彼女
を見て、引き入れ、これと寝てはずかしめた。三彼は深くヤコブの娘デナ
を慕い、この娘を愛して、ねんごろに娘に語った。四シケムは父ハモル
に言った、「この娘をわたしの妻にめとってください」。五さてヤコブはシ
ケムが、娘デナを汚したことを聞いたけれども、その子らが家畜を連れて
野にいたので、彼らの帰るまで黙っていた。六シケムの父ハモルはヤコブ
と話し合おうと、ヤコブの所に出てきた。七ヤコブの子らは野から帰り、

この事を聞いて、悲しみ、かつ非常に怒った。シケムがヤコブの娘と寝
て、イスラエルに愚かなことをしたためで、こんなことは、してはならぬ
事だからである。
八ハモルは彼らと語って言った、「わたしの子シケムはあなたがたの娘
を心に慕っています。どうか彼女を彼の妻にください。九あなたがたは
わたしたちと婚姻し、あなたがたの娘をわたしたちに与え、わたしたち
の娘をあなたがたにめとってください。一〇こうしてあなたがたとわたし
たちとは一緒に住みましょう。地はあなたがたの前にあります。ここに住
んで取引し、ここで財産を獲なさい」。一一シケムはまたデナの父と兄弟
たちとに言った、「あなたがたの前に恵みを得させてください。あなたがた
がわたしに言われるものは、なんでもさしあげましょう。一二たくさんの
結納金と贈り物とをお求めになっても、あなたがたの言われるとおりさし

あげます。ただこの娘はわたしの妻にください」。
一三しかし、ヤコブの子らはシケムが彼らの妹デナを汚したので、シケ
ムとその父ハモルに偽って答え、一四彼らに言った、「われわれは割礼を
受けない者に妹をやる事はできません。それはわれわれの恥とするとこ
ろですから。一五ただ、こうなされればわれわれはあなたがたに同意します。
もしあなたがたのうち男子がみな割礼を受けて、われわれのようになるな
ら、一六われわれの娘をあなたがたに与え、あなたがたの娘をわれわれ
にめとりましょう。そしてわれわれはあなたがたと一緒に住んで一つの民
となりましょう。一七けれども、もしあなたがたがわれわれに聞かず、割礼
を受けないなら、われわれは娘を連れて行きます」。
一八彼らの言葉がハモルとハモルの子シケムとの心にかなったので、一
九若者は、ためらわずにこの事をした。彼がヤコブの娘を愛したからで

ある。また彼は父の家のうちで一番重んじられた者であった。二〇そこで
ハモルとその子シケムとは町の門に行き、町の人々に語って言った、二一
「この人々はわれわれと親しいから、この地に住まわせて、ここで取引を
させよう。地は広く、彼らをいれるにじゅうぶんである。そしてわれわれ
は彼らの娘を妻にめとり、われわれの娘を彼らに与えよう。二二彼らが
割礼を受けているように、もしわれわれのうちの男子が皆、割礼を受ける
なら、ただこの事だけで、この人々はわれわれに同意し、われわれと一緒
に住んで一つの民となるのだ。二三そうすれば彼らの家畜と財産とすべて
の獣とは、われわれのものとなるではないか。ただわれわれが彼らに同意
すれば、彼らはわれわれと一緒に住むであろう」。二四そこで町の門に出入
りする者はみなハモルとその子シケムとに聞き従って、町の門に出入り
するすべての男子は割礼を受けた。

二五三日目になって彼らが痛みを覚えている時、ヤコブのふたりの子、す
なわちデナの兄弟シメオンとレビとは、おのおのつるぎを取って、不意に
町を襲い、男子をことごとく殺し、二六またつるぎの刃にかけてハモルとそ
の子シケムとを殺し、シケムの家からデナを連れ出した。二七そしてヤコブ
の子らは殺された人々をはぎ、町をかすめた。彼らが妹を汚したからで
ある。二八すなわち羊、牛、ろば及び町にあるものと、野にあるもの、二
九並びにすべての貨財を奪い、その子女と妻たちを皆とりこにし、家の
中にある物をことごとくかすめた。三〇そこでヤコブはシメオンとレビと
に言った、「あなたがたはわたしをこの地の住民、カナンびととペリジび
とに忌みきらわせ、わたしに迷惑をかけた。わたしは、人数が少ないから、
彼らが集まってわたしを攻め撃つならば、わたしも家族も滅ぼされるであ
ろう」。三一彼らは言った、「わたしたちの妹を遊女のように彼が扱って

よいのですか」。
第三五章一ときに神はヤコブに言われた、「あなたは立ってベテルに上り、
そこに住んで、あなたがさきに兄エサウの顔を避けてのがれる時、あなた
に現れた神に祭壇を造りなさい」。二ヤコブは、その家族および共にいる
すべての者に言った、「あなたがたのうちにある異なる神々を捨て、身を清
めて着物を着替えなさい。三われわれは立ってベテルに上り、その所でわ
たしの苦難の日にわたしにこたえ、かつわたしの行く道で共におられた神
に祭壇を造ろう」。四そこで彼らは持っている異なる神々と、耳につけて
いる耳輪をことごとくヤコブに与えたので、ヤコブはこれをシケムのほと
りにあるテレビンの木の下に埋めた。
五そして彼らは、いで立ったが、大いなる恐れが周囲の町々に起ったの
で、ヤコブの子らのあとを追う者はなかった。六こうしてヤコブは共にい
たすべての人々と一緒にカナンの地にあるルズ、すなわちベテルにきた。

七彼はそこに祭壇を築き、その所をエル・ベテルと名づけた。彼が兄の
顔を避けてのがれる時、神がそこで彼に現れたからである。八時にリベ
カのうばデボラが死んで、ベテルのしもの、かしの木の下に葬られた。こ
れによってその木の名をアロン・バクテと呼ばれた。
九さてヤコブがパダンアラムから帰ってきた時、神は再び彼に現れて
彼を祝福された。一〇神は彼に言われた、「あなたの名はヤコブである。し
かしあなたの名をもはやヤコブと呼んではならない。あなたの名をイスラ
エルとしなさい」。こうして彼をイスラエルと名づけられた。一一神はまた
彼に言われた、

「わたしは全能の神である。
あなたは生めよ、またふえよ。
一つの国民、また多くの国民があなたから出て、

王たちがあなたの身から出るであろう。
一二わたしはアブラハムとイサクとに与えた地を、
あなたに与えよう。
またあなたの後の子孫にその地を与えよう」。
一三神は彼と語っておられたその場所から彼を離れてのぼられた。一四そこ
でヤコブは神が自分と語られたその場所に、一本の石の柱を立て、その
上に灌祭をささげ、また油を注いだ。一五そしてヤコブは神が自分と語ら
れたその場所をベテルと名づけた。

一六こうして彼らはベテルを立ったが、エフラタに行き着くまでに、なお
隔たりのある所でラケルは産気づき、その産は重かった。一七その難産に
当って、産婆は彼女に言った、「心配することはありません。今度も男の
子です」。一八彼女は死にのぞみ、魂の去ろうとする時、子の名をベノニ

と呼んだ。しかし、父はこれをベニヤミンと名づけた。
一九ラケルは死んでエフラタ、すなわちベツレヘムの道に葬られた。
二〇ヤコブはその墓に柱を立てた。これはラケルの墓の柱であって、今日に至っている。
二一イスラエルはまた、いで立ってミグダル・エダルの向こうに天幕を張った。
二二イスラエルがその地に住んでいた時、ルベンは父のそばめビルハのところへ行って、これと寝た。イスラエルはこれを聞いた。

さてヤコブの子らは十二人であった。
二三すなわちレアの子らはヤコブの長子ルベンとシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン。
二四ラケルの子らはヨセフとベニヤミン。
二五ラケルのつかえめビルハの子らはダンとナフタリ。
二六レアのつかえめジルパの子らはガドとアセル。これらはヤコブの子らであって、パダンアラムで彼に生れた者である。

二七ヤコブはキリアテ・アルバ、すなわちヘブロンのマムレにいる父イサ

クのもとへ行った。ここはアブラハムとイサクとが寄留した所である。二
八イサクの年は百八十歳であった。二九イサクは年老い、日満ちて息絶え、
死んで、その民に加えられた。その子エサウとヤコブとは、これを葬った。
第三六章一エサウ、すなわちエドムの系図は次のとおりである。二エサウ
はカナンの娘たちのうちから妻をめとった。すなわちヘテびとエロンの
娘アダと、ヒビびとヂベオンの子アナの娘アホリバマとである。三また、
イシマエルの娘ネバヨテの妹バスマテをめとった。四アダはエリパズを
エサウに産み、バスマテはリウエルを産み、五アホリバマはエウシ、ヤラム、
コラを産んだ。これらはエサウの子であって、カナンの地で彼に生れた者
である。
六エサウは妻と子と娘と家のすべての人、家畜とすべての獣、またカナ
ンの地で獲たすべての財産を携え、兄弟ヤコブを離れてほかの地へ行っ

た。七彼らの財産が多くて、一緒にいることができなかったからである。
すなわち彼らが寄留した地は彼らの家畜のゆえに、彼らをささえることが
できなかったのである。八こうしてエサウはセイルの山地に住んだ。エサ
ウはすなわちエドムである。
九セイルの山地におったエドムびとの先祖エサウの系図は次のとおりで
ある。一〇エサウの子らの名は次のとおりである。すなわちエサウの妻ア
ダの子はエリパズ。エサウの妻バスマテの子はリウエル。一一エリパズの子
らはテマン、オマル、ゼポ、ガタム、ケナズである。一二テムナはエサウの
子エリパズのそばめで、アマレクをエリパズに産んだ。これらはエサウの
妻アダの子らである。一三リウエルの子らは次のとおりである。すなわち
ナハテ、ゼラ、シャンマ、ミザであって、これらはエサウの妻バスマテの
子らである。一四チベオンの子アナの娘で、エサウの妻アホリバマの子ら
は次のとおりである。すなわち彼女はエウシ、ヤラム、コラをエサウに産

んだ。
一五エサウの子らの中で、族長たる者は次のとおりである。すなわちエ
サウの長子エリパズの子らはテマンの族長、オマルの族長、ゼポの族長、
ケナズの族長、一六コラの族長、ガタムの族長、アマレクの族長であ
る。これらはエリパズから出た族長で、エドムの地におった。これらはア
ダの子らである。一七エサウの子リウエルの子らは次のとおりである。すな
わちナハテの族長、ゼラの族長、シャンマの族長、ミザの族長。これ
らはリウエルから出た族長で、エドムの地におった。これらはエサウの妻
バスマテの子らである。一八エサウの妻アホリバマの子らは次のとおりで
ある。すなわちエウシの族長、ヤラムの族長、コラの族長。これらは
アナの娘で、エサウの妻アホリバマから出た族長である。一九これらは
エサウすなわちエドムの子らで、族長たる者である。
二〇この地の住民ホリびとセイルの子らは次のとおりである。すなわち

ロタン、ショバル、ヂベオン、アナ、二一デション、エゼル、デシャン。こ
れらはセイルの子ホリびとから出た族長で、エドムの地におった。二二ロ
タンの子らはホリ、ヘマムであり、ロタンの妹はテムナであった。二三
ショバルの子らは次のとおりである。すなわちアルワン、マナハテ、エバ
ル、シポ、オナム。二四ヂベオンの子らは次のとおりである。すなわちアヤ
とアナ。このアナは父ヂベオンのろばを飼っていた時、荒野で温泉を発見
した者である。二五アナの子らは次のとおりである。すなわちデションとア
ホリバマ。アホリバマはアナの娘である。二六デションの子らは次のとお
りである。すなわちヘムダン、エシバン、イテラン、ケラン。二七エゼルの
子らは次のとおりである。すなわちビルハン、ザワン、アカン。二八デシャ
ンの子らは次のとおりである。すなわちウズとアラン。二九ホリびとから出
た族長は次のとおりである。すなわちロタンの族長、ショバルの族長、
ヂベオンの族長、アナの族長、三〇デションの族長、エゼルの族長、

デシャンの族長。これらはホリびとから出た族長であって、その氏族に
従ってセイルの地におった者である。
三一イスラエルの人々を治める王がまだなかった時、エドムの地を治め
た王たちは次のとおりである。三二ベオルの子ベラはエドムを治め、その
都の名はデナバであった。三三ベラが死んで、ボズラのゼラの子ヨバブが
これに代って王となった。三四ヨバブが死んで、テマンびとの地のホシャム
がこれに代って王となった。三五ホシャムが死んで、ベダデの子ハダデがこ
れに代って王となった。彼はモアブの野でミデアンを撃った者である。そ
の都の名はアビテであった。三六ハダデが死んで、マスレカのサムラがこ
れに代って王となった。三七サムラが死んでユフラテ川のほとりにあるレ
ホボテのサウルがこれに代って王となった。三八サウルが死んでアクボル
の子バアル・ハナンがこれに代って王となった。三九アクボルの子バアル・

ハナンが死んで、ハダルがこれに代って王となった。その都の名はパウで
あった。その妻の名はメヘタベルといって、メザハブの娘マテレデの娘
であった。
四〇エサウから出た族長の名は、その氏族と住所と名に従って言えば
次のとおりである。すなわちテムナの族長、アルワの族長、エテテの
族長、四一アホリバマの族長、エラの族長、ピノンの族長、四二ケナズ
の族長、テマンの族長、ミブザルの族長、四三マグデエルの族長、イ
ラムの族長。これらはエドムの族長たちであって、その領地内の住所
に従っていったものである。エドムびとの先祖はエサウである。

第三七章一ヤコブは父の寄留の地、すなわちカナンの地に住んだ。二ヤ
コブの子孫は次のとおりである。
ヨセフは十七歳の時、兄弟たちと共に羊の群れを飼っていた。彼はま

だ子供で、父の妻たちビルハとジルパとの子らと共にいたが、ヨセフは彼
らの悪いうわさを父に告げた。三ヨセフは年寄り子であったから、イスラ
エルは他のどの子よりも彼を愛して、彼のために長そでの着物をつくった。
四兄弟たちは父がどの兄弟よりも彼を愛するのを見て、彼を憎み、穏や
かに彼に語ることができなかった。

五ある時、ヨセフは夢を見て、それを兄弟たちに話したので、彼らは、
ますます彼を憎んだ。六ヨセフは彼らに言った、「どうぞわたしが見た夢を
聞いてください。七わたしたちが畑の中で束を結わえていたとき、わたし
の束が起きて立つと、あなたがたの束がまわりにきて、わたしの束を拝み
ました」。八すると兄弟たちは彼に向かって、「あなたはほんとうにわたし
たちの王になるのか。あなたは実際わたしたちを治めるのか」と言って、
彼の夢とその言葉のゆえにますます彼を憎んだ。九ヨセフはまた一つの夢

を見て、それを兄弟たちに語って言った、「わたしはまた夢を見ました。
日と月と十一の星とがわたしを拝みました」。一〇彼はこれを父と兄弟た
ちに語ったので、父は彼をとがめて言った、「あなたが見たその夢はどうい
うのか。ほんとうにわたしとあなたの母と、兄弟たちとが行って地に伏
し、あなたを拝むのか」。一一兄弟たちは彼をねたんだ。しかし父はこの
言葉を心にとめた。
一二さて兄弟たちがシケムに行って、父の羊の群れを飼っていたとき、
一三イスラエルはヨセフに言った、「あなたの兄弟たちはシケムで羊を
飼っているではないか。さあ、あなたを彼らの所へつかわそう」。ヨセフ
は父に言った、「はい、行きます」。一四父は彼に言った、「どうか、行って、
あなたの兄弟たちは無事であるか、また群れは無事であるか見てきて、わ
たしに知らせてください」。父が彼をヘブロンの谷からつかわしたので、彼

はシケムに行った。一五ひとりの人が彼に会い、彼が野をさまよっていたの
で、その人は彼に尋ねて言った、「あなたは何を捜しているのですか」。一
六彼は言った、「兄弟たちを捜しているのです。彼らが、どこで羊を飼っ
ているのか、どうぞわたしに知らせてください」。一七その人は言った、「彼
らはここを去りました。彼らが『ドタンへ行こう』と言うのをわたしは聞
きました」。そこでヨセフは兄弟たちのあとを追って行って、ドタンで彼
らに会った。一八ヨセフが彼らに近づかないうちに、彼らははるかにヨセフ
を見て、これを殺そうと計り、一九互に言った、「あの夢見る者がやって来
る。二〇さあ、彼を殺して穴に投げ入れ、悪い獣が彼を食ったと言おう。
そして彼の夢がどうなるか見よう」。二一ルベンはこれを聞いて、ヨセフを
彼らの手から救い出そうとして言った、「われわれは彼の命を取ってはな
らない」。二二ルベンはまた彼らに言った、「血を流してはいけない。彼を

荒野のこの穴に投げ入れよう。彼に手をくだしてはならない」。これはヨセ
フを彼らの手から救いだして父に返すためであった。二三さて、ヨセフが
兄弟たちのもとへ行くと、彼らはヨセフの着物、彼が着ていた長そでの
着物をはぎとり、二四彼を捕えて穴に投げ入れた。その穴はからで、その
中に水はなかった。
二五こうして彼らはすわってパンを食べた。時に彼らが目をあげて見る
と、イシマエルびとの隊商が、らくだに香料と、乳香と、もつやくと
を負わせてエジプトへ下り行こうとギレアデからやってきた。二六そこ
でユダは兄弟たちに言った、「われわれが弟を殺し、その血を隠して何
の益があろう。二七さあ、われわれは彼をイシマエルびとに売ろう。彼は
われわれの兄弟、われわれの肉身だから、彼に手を下してはならない」。
兄弟たちはこれを聞き入れた。二八時にミデアンびとの商人たちが通り

かかったので、彼らはヨセフを穴から引き上げ、銀二十シケルでヨセフを
イシマエルびとに売った。彼らはヨセフをエジプトへ連れて行った。
二九さてルベンは穴に帰って見たが、ヨセフが穴の中にいなかったので、
彼は衣服を裂き、三〇兄弟たちのもとに帰って言った、「あの子はいない。
ああ、わたしはどこへ行くことができよう」。三一彼らはヨセフの着物を取
り、雄やぎを殺して、着物をその血に浸し、三二その長そでの着物を父に持
ち帰って言った、「わたしたちはこれを見つけましたが、これはあなたの子
の着物か、どうか見さだめてください」。三三父はこれを見さだめて言った、
「わが子の着物だ。悪い獣が彼を食ったのだ。確かにヨセフはかみ裂かれ
たのだ」。三四そこでヤコブは衣服を裂き、荒布を腰にまとって、長い間
その子のために嘆いた。三五子らと娘らとは皆立って彼を慰めようとし
たが、彼は慰められるのを拒んで言った、「いや、わたしは嘆きながら陰府

に下って、わが子のもとへ行こう」。こうして父は彼のために泣いた。三六
さて、かのミデアンびとらはエジプトでパロの役人、侍衛長ポテパルにヨ
セフを売った。
第三八章一そのころユダは兄弟たちを離れて下り、アドラムびとで、名
をヒラという者の所へ行った。二ユダはその所で、名をシュアというカ
ナンびとの娘を見て、これをめとり、その所にはいった。三彼女はみご
もって男の子を産んだので、ユダは名をエルと名づけた。四彼女は再び
みごもって男の子を産み、名をオナンと名づけた。五また重ねて、男の
子を産み、名をシラと名づけた。彼女はこの男の子を産んだとき、クジブ
におった。六ユダは長子エルのために、名をタマルという妻を迎えた。七し
かしユダの長子エルは主の前に悪い者であったので、主は彼を殺された。
八そこでユダはオナンに言った、「兄の妻の所にはいって、彼女をめとり、

兄に子供を得させなさい」。九しかしオナンはその子が自分のものとならな
いのを知っていたので、兄の妻の所にはいった時、兄に子を得させない
ために地に洩らした。一〇彼のした事は主の前に悪かったので、主は彼を
も殺された。一一そこでユダはその子の妻タマルに言った、「わたしの子シ
ラが成人するまで、寡婦のままで、あなたの父の家にいなさい」。彼は、シ
ラもまた兄弟たちのように死ぬかもしれないと、思ったからである。それ
でタマルは行って父の家におった。
一二日がたってシュアの娘ユダの妻は死んだ。その後、ユダは喪を終っ
てその友アドラムびとヒラと共にテムナに上り、自分の羊の毛を切る者
のところへ行った。一三時に、ひとりの人がタマルに告げて、「あなたのしゅ
うとが羊の毛を切るためにテムナに上って来る」と言ったので、一四彼女
は寡婦の衣服を脱ぎすて、被衣で身をおおい隠して、テムナへ行く道のかた

わらにあるエナイムの入口にすわっていた。彼女はシラが成人したのに、
自分がその妻にされないのを知ったからである。一五ユダは彼女を見たと
き、彼女が顔をおおっていたため、遊女だと思い、一六道のかたわらで彼女
に向かって言った、「さあ、あなたの所にはいらせておくれ」。彼はこの女
がわが子の妻であることを知らなかったからである。彼女は言った、「わた
しの所にはいるため、何をくださいますか」。一七ユダは言った、「群れの
うちのやぎの子をあなたにあげよう」。彼女は言った、「それをくださるま
で、しるしをわたしにくださいますか」。一八ユダは言った、「どんなしるし
をあげようか」。彼女は言った、「あなたの印と紐と、あなたの手にあるつ
えとを」。彼はこれらを与えて彼女の所にはいった。彼女はユダによって
みごもった。一九彼女は起きて去り、被衣を脱いで寡婦の衣服を着た。
二〇やがてユダはその女からしるしを取りもどそうと、その友アドラム

びとに託してやぎの子を送ったけれども、その女を見いだせなかった。二
一そこで彼はその所の人々に尋ねて言った、「エナイムで道のかたわらに
いた遊女はどこにいますか」。彼らは言った、「ここには遊女はいません」。
二二彼はユダのもとに帰って言った、「わたしは彼女を見いだせませんでし
た。またその所の人々は、『ここには遊女はいない』と言いました」。二三
そこでユダは言った、「女に持たせておこう。わたしたちは恥をかくとい
けないから。とにかく、わたしはこのやぎの子を送ったが、あなたは彼女
を見いだせなかったのだ」。
二四ところが三月ほどたって、ひとりの人がユダに言った、「あなたの嫁
タマルは姦淫しました。そのうえ、彼女は姦淫によってみごもりました」。
ユダは言った、「彼女を引き出して焼いてしまえ」。二五彼女は引き出され
た時、そのしゅうとに人をつかわして言った、「わたしはこれをもっている

人によって、みごもりました」。彼女はまた言った、「どうか、この印と、紐
と、つえとはだれのものか、見定めてください」。二六ユダはこれを見定め
て言った、「彼女はわたしよりも正しい。わたしが彼女をわが子シラに与
えなかったためである」。彼は再び彼女を知らなかった。
二七さて彼女の出産の時がきたが、胎内には、ふたごがあった。二八
出産の時に、ひとりの子が手を出したので、産婆は、「これがさきに出た」
と言い、緋の糸を取って、その手に結んだ。二九そして、その子が手をひっ
こめると、その弟が出たので、「どうしてあなたは自分で破って出るのか」
と言った。これによって名はペレヅと呼ばれた。三〇その後、手に緋の糸の
ある兄が出たので、名はゼラと呼ばれた。

第三九章一さてヨセフは連れられてエジプトに下ったが、パロの役人で
侍衛長であったエジプトびとポテパルは、彼をそこに連れ下ったイシマ

エルびとらの手から買い取った。二主がヨセフと共におられたので、彼は
幸運な者となり、その主人エジプトびとの家におった。三その主人は主が
彼とともにおられることと、主が彼の手のすることをすべて栄えさせられ
るのを見た。四そこで、ヨセフは彼の前に恵みを得、そのそば近く仕えた。
彼はヨセフに家をつかさどらせ、持ち物をみな彼の手にゆだねた。五彼が
ヨセフに家とすべての持ち物をつかさどらせた時から、主はヨセフのゆえ
にそのエジプトびとの家を恵まれたので、主の恵みは彼の家と畑とにあ
るすべての持ち物に及んだ。六そこで彼は持ち物をみなヨセフの手にゆだ
ねて、自分が食べる物のほかは、何をも顧みなかった。

さてヨセフは姿がよく、顔が美しかった。七これらの事の後、主人の
妻はヨセフに目をつけて言った、「わたしと寝なさい」。八ヨセフは拒んで、
主人の妻に言った、「御主人はわたしがいるので家の中の何をも顧みず、

その持ち物をみなわたしの手にゆだねられました。九この家にはわたしよ
りも大いなる者はありません。また御主人はあなたを除いては、何をもわ
たしに禁じられませんでした。あなたが御主人の妻であるからです。どう
してわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができましょ
う」。一〇彼女は毎日ヨセフに言い寄ったけれども、ヨセフは聞きいれず、
彼女と寝なかった。また共にいなかった。一一ある日ヨセフが務をするた
めに家にはいった時、家の者がひとりもそこにいなかったので、一二彼女
はヨセフの着物を捕えて、「わたしと寝なさい」と言った。ヨセフは着物を
彼女の手に残して外にのがれ出た。一三彼女はヨセフが着物を自分の手に
残して外にのがれたのを見て、一四その家の者どもを呼び、彼らに告げて
言った、「主人がわたしたちの所に連れてきたヘブルびとは、わたしたち
に戯れます。彼はわたしと寝ようとして、わたしの所にはいったので、

わたしは大声で叫びました。一五彼はわたしが声をあげて叫ぶのを聞くと、
着物をわたしの所に残して外にのがれ出ました」。一六彼女はその着物を
かたわらに置いて、主人の帰って来るのを待った。一七そして彼女は次の
ように主人に告げた、「あなたがわたしたちに連れてこられたヘブルのしも
べはわたしに戯れようとして、わたしの所にはいってきました。一八わ
たしが声をあげて叫んだので、彼は着物をわたしの所に残して外にのが
れました」。

一九主人はその妻が「あなたのしもべは、わたしにこんな事をした」と告
げる言葉を聞いて、激しく怒った。二〇そしてヨセフの主人は彼を捕えて、
王の囚人をつなぐ獄屋に投げ入れた。こうしてヨセフは獄屋の中におっ
たが、二一主はヨセフと共におられて彼にいつくしみを垂れ、獄屋番の恵
みをうけさせられた。二二獄屋番は獄屋におるすべての囚人をヨセフの手

にゆだねたので、彼はそこでするすべての事をおこなった。二三獄屋番は
彼の手にゆだねた事はいっさい顧みなかった。主がヨセフと共におられ
たからである。主は彼のなす事を栄えさせられた。
第四〇章一これらの事の後、エジプト王の給仕役と料理役とがその主君
エジプト王に罪を犯した。二パロはふたりの役人、すなわち給仕役の長
と料理役の長に向かって憤り、三侍衛長の家の監禁所、すなわちヨセ
フがつながれている獄屋に入れた。四侍衛長はヨセフに命じて彼らと共に
おらせたので、ヨセフは彼らに仕えた。こうして彼らは監禁所で幾日かを
過ごした。五さて獄屋につながれたエジプト王の給仕役と料理役のふたり
は一夜のうちにそれぞれ意味のある夢を見た。六ヨセフが朝、彼らのとこ
ろへ行って見ると、彼らは悲しみに沈んでいた。七そこでヨセフは自分と
一緒に主人の家の監禁所にいるパロの役人たちに尋ねて言った、「どうし

て、きょう、あなたがたの顔色が悪いのですか」。八彼らは言った、「わたし
たちは夢を見ましたが、解いてくれる者がいません」。ヨセフは彼らに言っ
た、「解くことは神によるのではありませんか。どうぞ、わたしに話してく
ださい」。
九給仕役の長はその夢をヨセフに話して言った、「わたしが見た夢で、
わたしの前に一本のぶどうの木がありました。一〇そのぶどうの木に三つ
の枝があって、芽を出し、花が咲き、ぶどうのふさが熟しました。一一時
にわたしの手に、パロの杯があって、わたしはそのぶどうを取り、それ
をパロの杯にしぼり、その杯をパロの手にささげました」。一二ヨセフ
は言った、「その解き明かしはこうです。三つの枝は三日です。一三今から
三日のうちにパロはあなたの頭を上げて、あなたを元の役目に返すでしょ
う。あなたはさきに給仕役だった時にされたように、パロの手に杯をさ
さげられるでしょう。一四それで、あなたがしあわせになられたら、わたし

を覚えていて、どうかわたしに恵みを施し、わたしの事をパロに話して、
この家からわたしを出してください。一五わたしは、実はヘブルびとの地か
らさらわれてきた者です。またここでもわたしは地下の獄屋に入れられる
ような事はしなかったのです」。
一六料理役の長はその解き明かしの良かったのを見て、ヨセフに言った、
「わたしも夢を見たが、白いパンのかごが三つ、わたしの頭の上にあった。
一七一番上のかごには料理役がパロのために作ったさまざまの食物があっ
たが、鳥がわたしの頭の上のかごからそれを食べていた」。一八ヨセフは
答えて言った、「その解き明かしはこうです。三つのかごは三日です。一九
今から三日のうちにパロはあなたの頭を上げ離して、あなたを木に掛ける
でしょう。そして鳥があなたの肉を食い取るでしょう」。
二〇さて三日目はパロの誕生日であったので、パロはすべての家来のた

めにふるまいを設け、家来のうちの給仕役の長の頭と、料理役の長の
頭を上げた。二一すなわちパロは給仕役の長を給仕役の職に返したの
で、彼はパロの手に杯をささげた。二二しかしパロは料理役の長を木に
掛けた。ヨセフが彼らに解き明かしたとおりである。二三ところが、給仕役
の長はヨセフを思い出さず、忘れてしまった。

第四一章 一二年の後パロは夢を見た。夢に、彼はナイル川のほとりに立っ
ていた。二すると、その川から美しい、肥え太った七頭の雌牛が上がって
きて葦を食っていた。三その後、また醜い、やせ細った他の七頭の雌牛が
川から上がってきて、川の岸にいた雌牛のそばに立ち、四その醜い、やせ
細った雌牛が、あの美しい、肥えた七頭の雌牛を食いつくした。ここでパ
ロは目が覚めた。五彼はまた眠って、再び夢を見た。夢に、一本の茎に
太った良い七つの穂が出てきた。六その後また、やせて、東風に焼けた七

つの穂が出てきて、七そのやせた穂が、あの太って実った七つの穂をのみ
つくした。ここでパロは目が覚めたが、それは夢であった。八朝になって、
パロは心が騒ぎ、人をつかわして、エジプトのすべての魔術師とすべて
の知者とを呼び寄せ、彼らに夢を告げたが、これをパロに解き明かしうる
者がなかった。

九そのとき給仕役の長はパロに告げて言った、「わたしはきょう、自分
のあやまちを思い出しました。一〇かってパロがしもべらに向かって憤
り、わたしと料理役の長とを侍衛長の家の監禁所にお入れになった時、
一一わたしも彼も一夜のうちに夢を見、それぞれ意味のある夢を見ました
が、一二そこに侍衛長のしもべで、ひとりの若いヘブルびとがわれわれと
共にいたので、彼に話したところ、彼はわれわれの夢を解き明かし、その
夢によって、それぞれ解き明かしをしました。一三そして彼が解き明かした

とおりになって、パロはわたしを職に返し、彼を木に掛けられました」。
一四そこでパロは人をつかわしてヨセフを呼んだ。人々は急いで彼を地下
の獄屋から出した。ヨセフは、ひげをそり、着物を着替えてパロのもとに
行った。一五パロはヨセフに言った、「わたしは夢を見たが、これを解き明か
す者がない。聞くところによると、あなたは夢を聞いて、解き明かしができ
るそうだ」。一六ヨセフはパロに答えて言った、「いいえ、わたしではありま
せん。神がパロに平安をお告げになりましょう」。一七パロはヨセフに言っ
た、「夢にわたしは川の岸に立っていた。一八その川から肥え太った、美
しい七頭の雌牛が上がってきて葦を食っていた。一九その後、弱く、非常
に醜い、やせ細った他の七頭の雌牛がまた上がってきた。わたしはエジプ
ト全国で、このような醜いものをまだ見たことがない。二〇ところがその
やせた醜い雌牛が、初めの七頭の肥えた雌牛を食いつくしたが、二一腹に

はいっても、腹にはいった事が知れず、やはり初めのように醜かった。こ
こでわたしは目が覚めた。二二わたしはまた夢をみた。一本の茎に七つの
実った良い穂が出てきた。二三その後、やせ衰えて、東風に焼けた七つ
の穂が出てきたが、二四そのやせた穂が、あの七つの良い穂をのみつくした。
わたしは魔術師に話したが、わたしにそのわけを示しうる者はなかった」。
二五ヨセフはパロに言った、「パロの夢は一つです。神がこれからしよう
とすることをパロに示されたのです。二六七頭の良い雌牛は七年です。七
つの良い穂も七年で、夢は一つです。二七あとに続いて、上がってきた七頭
のやせた醜い雌牛は七年で、東風に焼けた実の入らない七つの穂は七年
のききんです。二八わたしがパロに申し上げたように、神がこれからしよう
とすることをパロに示されたのです。二九エジプト全国に七年の大豊作が
あり、三〇その後七年のききんが起り、その豊作はみなエジプトの国で忘

れられて、そのききんは国を滅ぼすでしょう。三一後に来るそのききんが、
非常に激しいから、その豊作は国のうちで記憶されなくなるでしょう。三
二パロが二度重ねて夢を見られたのは、この事が神によって定められ、神
がすみやかにこれをされるからです。三三それゆえパロは今、さとく、か
つ賢い人を尋ね出してエジプトの国を治めさせなさい。三四パロはこうし
て国中に監督を置き、その七年の豊作のうちに、エジプトの国の産物の
五分の一を取り、三五続いて来る良い年々のすべての食糧を彼らに集め
させ、穀物を食糧として、パロの手で町々にたくわえ守らせなさい。三
六こうすれば食糧は、エジプトの国に臨む七年のききんに備えて、この
国のためにたくわえとなり、この国はききんによって滅びることがないで
しょう」。
三七この事はパロとそのすべての家来たちの目にかなった。三八そこでパ

ロは家来たちに言った、「われわれは神の霊をもつこのような人を、ほか
に見いだし得ようか」。三九またパロはヨセフに言った、「神がこれを皆あ
なたに示された。あなたのようにさとく賢い者はない。四〇あなたはわた
しの家を治めてください。わたしの民はみなあなたの言葉に従うでしょ
う。わたしはただ王の位でだけあなたにまさる」。四一パロは更にヨセフ
に言った、「わたしはあなたをエジプト全国のつかさとする」。四二そしてパ
ロは指輪を手からはずして、ヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、金
の鎖をくびにかけ、四三自分の第二の車に彼を乗せ、「ひざまずけ」とそ
の前に呼ばわらせ、こうして彼をエジプト全国のつかさとした。四四つい
でパロはヨセフに言った、「わたしはパロである。あなたの許しがなければ
エジプト全国で、だれも手足を上げることはできない」。四五パロはヨセフ
の名をザフナテ・パネアと呼び、オンの祭司ポテペラの娘アセナテを妻と

して彼に与えた。ヨセフはエジプトの国を巡った。
四六ヨセフがエジプトの王パロの前に立った時は三十歳であった。ヨセフ
はパロの前を出て、エジプト全国をあまねく巡った。四七さて七年の豊作
のうちに地は豊かに物を産した。四八そこでヨセフはエジプトの国にでき
たその七年間の食糧をことごとく集め、その食糧を町々に納めさせ
た。すなわち町の周囲にある畑の食糧をその町の中に納めさせた。四
九ヨセフは穀物を海の砂のように、非常に多くたくわえ、量りきれなくなっ
たので、ついに量ることをやめた。

五〇ききんの年の来る前にヨセフにふたりの子が生れた。これらはオン
の祭司ポテペラの娘アセナテが産んだのである。五一ヨセフは長子の名を
マナセと名づけて言った、「神がわたしにすべての苦難と父の家のすべて
の事を忘れさせられた」。五二また次の子の名をエフライムと名づけて言っ

た、「神がわたしを悩みの地で豊かにせられた」。
五三エジプトの国にあった七年の豊作が終り、五四ヨセフの言ったように
七年のききんが始まった。そのききんはすべての国にあったが、エジプト
全国には食物があった。五五やがてエジプト全国が飢えた時、民はパロ
に食物を叫び求めた。そこでパロはすべてのエジプトびとに言った、「ヨ
セフのもとに行き、彼の言うようにせよ」。五六ききんが地の全面にあった
ので、ヨセフはすべての穀倉を開いて、エジプトびとに売った。ききんは
ますますエジプトの国に激しくなった。五七ききんが全地に激しくなった
ので、諸国の人々がエジプトのヨセフのもとに穀物を買うためにきた。

第四二章
一ヤコブはエジプトに穀物があると知って、むすこたちに言っ
た、「あなたがたはなぜ顔を見合わせているのですか」。二また言った、「エ
ジプトに穀物があるということだが、あなたがたはそこへ下って行って、そ

こから、われわれのため穀物を買ってきなさい。そうすれば、われわれは
生きながらえて、死を免れるであろう」。三そこでヨセフの十人の兄弟は
穀物を買うためにエジプトへ下った。四しかし、ヤコブはヨセフの弟べ
ニヤミンを兄弟たちと一緒にやらなかった。彼が災に会うのを恐れた
からである。五こうしてイスラエルの子らは穀物を買おうと人々に交じっ
てやってきた。カナンの地にききんがあったからである。
六ときにヨセフは国のつかさであって、国のすべての民に穀物を売るこ
とをしていた。ヨセフの兄弟たちはきて、地にひれ伏し、彼を拝した。七
ヨセフは兄弟たちを見て、それと知ったが、彼らに向かっては知らぬ者
のようにし、荒々しく語った。すなわち彼らに言った、「あなたがたはどこ
からきたのか」。彼らは答えた、「食糧を買うためにカナンの地からきま
した」。八ヨセフは、兄弟たちであるのを知っていたが、彼らはヨセフと

は知らなかった。九ヨセフはかつて彼らについて見た夢を思い出して、彼
らに言った、「あなたがたは回し者で、この国のすきをうかがうためにき
たのです」。一〇彼らはヨセフに答えた、「いいえ、わが主よ、しもべらは
ただ食糧を買うためにきたのです。一一われわれは皆、ひとりの人の子
で、真実な者です。しもべらは回し者ではありません」。一二ヨセフは彼ら
に言った、「いや、あなたがたはこの国のすきをうかがうためにきたのです」。
一三彼らは言った、「しもべらは十二人兄弟で、カナンの地にいるひとり
の人の子です。末の弟は今、父と一緒にいますが、他のひとりはいなく
なりました」。一四ヨセフは彼らに言った、「わたしが言ったとおり、あなた
がたは回し者です。一五あなたがたをこうしてためしてみよう。パロのい
のちにかけて誓います。末の弟がここにこなければ、あなたがたはここ
を出ることはできません。一六あなたがたのひとりをやって弟を連れて

こさせなさい。それまであなたがたをつないでおいて、あなたがたに誠実
があるかどうか、あなたがたの言葉をためしてみよう。パロのいのちにか
けて誓います。あなたがたは確かに回し者です」。一七ヨセフは彼らをみな
一緒に三日の間、監禁所に入れた。
一八三日目にヨセフは彼らに言った、「こうすればあなたがたは助かるでし
ょう。わたしは神を恐れます。一九もしあなたがたが真実な者なら、兄弟
のひとりをあなたがたのいる監禁所に残し、あなたがたは穀物を携えて
行って、家族の飢えを救いなさい。二〇そして末の弟をわたしのもとに
連れてきなさい。そうすればあなたがたの言葉のほんとうであることがわ
かって、死を免れるでしょう」。彼らはそのようにした。二一彼らは互に
言った、「確かにわれわれは弟の事で罪がある。彼がしきりに願った時、
その心の苦しみを見ながら、われわれは聞き入れなかった。それでこの苦

しみに会うのだ」。二二ルベンが彼らに答えて言った、「わたしはあなたがた
に、この子供に罪を犯すなと言ったではないか。それにもかかわらず、あ
なたがたは聞き入れなかった。それで彼の血の報いを受けるのです」。二三
彼らはヨセフが聞きわけているのを知らなかった。相互の間に通訳者が
いたからである。二四ヨセフは彼らを離れて行って泣き、また帰ってきて
彼らと語り、そのひとりシメオンを捕えて、彼らの目の前で縛った。二五
そしてヨセフは人々に命じて、彼らの袋に穀物を満たし、めいめいの銀
を袋に返し、道中の食料を与えさせた。ヨセフはこのように彼らに
した。

二六彼らは穀物をろばに負わせてそこを去った。二七そのひとりが宿で、
ろばに飼葉をやるため袋をあけて見ると、袋の口に自分の銀があった。
二八彼は兄弟たちに言った、「わたしの銀は返してある。しかも見よ、それ

は袋の中にある」。そこで彼らは非常に驚き、互に震えながら言った、
「神がわれわれにされたこのことは何事だろう」。
二九こうして彼らはカナンの地にいる父ヤコブのもとに帰り、その身に
起った事をことごとく告げて言った、三〇「あの国の君は、われわれに荒々
しく語り、国をうかがう回し者だと言いました。三一われわれは彼に答えま
した、『われわれは真実な者であって回し者ではない。三二われわれは十二
人兄弟で、同じ父の子である。ひとりはいなくなり、末の弟は今父と
共にカナンの地にいる』。三三その国の君であるその人はわれわれに言いま
した、『わたしはこうしてあなたがたの真実な者であるのを知ろう。あなた
がたは兄弟のひとりをわたしのもとに残し、穀物を携えて行って、家族
の飢えを救いなさい。三四そして末の弟をわたしのもとに連れてきなさ
い。そうすればあなたがたが回し者ではなく、真実な者であるのを知って、

あなたがたの兄弟を返し、この国であなたがたに取引させましょう』」。
三五彼らが袋のものを出して見ると、めいめいの金包みが袋の中にあっ
たので、彼らも父も金包みを見て恐れた。三六父ヤコブは彼らに言った、「あ
なたがたはわたしに子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいな
くなった。今度はベニヤミンをも取り去る。これらはみなわたしの身にふ
りかかって来るのだ」。三七ルベンは父に言った、「もしわたしが彼をあな
たのもとに連れて帰らなかったら、わたしのふたりの子を殺してください。
ただ彼をわたしの手にまかせてください。わたしはきっと、あなたのもと
に彼を連れて帰ります」。三八ヤコブは言った、「わたしの子はあなたがたと
共に下って行ってはならない。彼の兄は死に、ただひとり彼が残っている
のだから。もしあなたがたの行く道で彼が災に会えば、あなたがたは、
しらがのわたしを悲しんで陰府に下らせるであろう」。

第四三章一ききんはその地に激しかった。二彼らがエジプトから携えて
きた穀物を食い尽した時、父は彼らに言った、「また行って、われわれの
ために少しの食糧を買ってきなさい」。三ユダは父に答えて言った、「あ
の人はわれわれをきびしく戒めて、弟が一緒でなければ、わたしの顔
を見てはならないと言いました。四もしあなたが弟をわれわれと一緒に
やってくださるなら、われわれは下って行って、あなたのために食糧を
買ってきましょう。五しかし、もし彼をやられないなら、われわれは下っ
て行きません。あの人がわれわれに、弟が一緒でなければわたしの顔を
見てはならないと言ったのですから」。六イスラエルは言った、「なぜ、もう
ひとりの弟があるとあの人に言って、わたしを苦しめるのか」。七彼らは
言った、「あの人がわれわれと一族のことを問いただして、父はまだ生き
ているか、もうひとりの弟があるかと言ったので、問われるままに答え

ましたが、その人が、弟を連れてこいと言おうとは、どうして知ること
ができたでしょう」。八ユダは父イスラエルに言った、「あの子をわたしと
一緒にやってくだされば、われわれは立って行きましょう。そしてわれわ
れもあなたも、われわれの子供らも生きながらえ、死を免れましょう。九
わたしが彼の身を請け合います。わたしの手から彼を求めなさい。もしわ
たしが彼をあなたのもとに連れ帰って、あなたの前に置かなかったら、わ
たしはあなたに対して永久に罪を負いましょう。一〇もしわれわれがこん
なにためらわなかったら、今ごろは二度も行ってきたでしょう」。
一一父イスラエルは彼らに言った、「それではこうしなさい。この国の
名産を器に入れ、携え下ってその人に贈り物にしなさい。すなわち少
しの乳香、少しの蜜、香料、もつやく、ふすだしう、あめんどう。一二
そしてその上に、倍額の銀を手に持って行きなさい。また袋の口に返し

てあった銀は持って行って返しなさい。たぶんそれは誤りであったので
しょう。一三弟も連れ、立って、またその人の所へ行きなさい。一四ど
うか全能の神がその人の前であなたがたをあわれみ、もうひとりの兄弟
とベニヤミンとを、返させてくださるように。もしわたしが子を失わなけ
ればならないのなら、失ってもよい」。一五そこでその人々は贈り物を取
り、また倍額の銀を携え、ベニヤミンを連れ、立ってエジプトへ下り、ヨ
セフの前に立った。

一六ヨセフはベニヤミンが彼らと共にいるのを見て、家づかさに言った、
「この人々を家に連れて行き、獣をほふって、したくするように。この人々
は昼、わたしと一緒に食事をします」。一七その人はヨセフの言ったように
して、この人々をヨセフの家へ連れて行った。一八ところがこの人々はヨセ
フの家へ連れて行かれたので恐れて言った、「初めの時に袋に返してあっ

たあの銀のゆえに、われわれを引き入れたのです。そしてわれわれを襲い、
攻め、捕えて奴隷とし、われわれのろばをも奪うのです」。一九彼らはヨセ
フの家づかさに近づいて、家の入口で、言った、二〇「ああ、わが主よ、わ
れわれは最初、食糧を買うために下ってきたのです。二一ところが宿に
行って袋をあけて見ると、めいめいの銀は袋の口にあって、銀の重さは
元のままでした。それでわれわれはそれを持って参りました。二二そして
食糧を買うために、ほかの銀をも持って下ってきました。われわれの銀
を袋に入れた者が、だれであるかは分りません」。二三彼は言った、「安心
しなさい。恐れてはいけません。その宝はあなたがたの神、あなたがたの
父の神が、あなたがたの袋に入れてあなたがたに賜わったのです。あな
たがたの銀はわたしが受け取りました」。そして彼はシメオンを彼らの所
へ連れてきた。二四こうしてその人はこの人々をヨセフの家へ導き、水を

与えて足を洗わせ、また、ろばに飼葉を与えた。二五彼らはその所で食事
をするのだと聞き、贈り物を整えて、昼にヨセフの来るのを待った。
二六さてヨセフが家に帰ってきたので、彼らはその家に携えてきた贈り
物をヨセフにささげ、地に伏して、彼を拝した。二七ヨセフは彼らの安否を
問うて言った、「あなたがたの父、あなたがたがさきに話していたその老人
は無事ですか。なお生きながらえておられますか」。二八彼らは答えた、「あ
なたのしもべ、われわれの父は無事で、なお生きながらえています」。そし
て彼らは、頭をさげて拝した。二九ヨセフは目をあげて同じ母の子である
弟ベニヤミンを見て言った、「これはあなたがたが前にわたしに話した
末の弟ですか」。また言った、「わが子よ、どうか神があなたを恵まれる
ように」。三〇ヨセフは弟なつかしさに心がせまり、急いで泣く場所を
たずね、へやにはいって泣いた。三一やがて彼は顔を洗って出てきた。そし

て自分を制して言った、「食事にしよう」。三二そこでヨセフ、彼ら
は彼ら、陪食のエジプトびとはエジプトびと、と別々に席に着いた。エ
ジプトびとはヘブルびとと共に食事することができなかった。それはエジ
プトびとの忌むところであったからである。三三こうして彼らはヨセフの
前に、長子は長子として、弟は弟としてすわらせられたので、その
人々は互に驚いた。三四またヨセフの前から、めいめいの分が運ばれた
が、ベニヤミンの分は他のいずれの者の分よりも五倍多かった。こうして
彼らは飲み、ヨセフと共に楽しんだ。

第四四章一さてヨセフは家づかさに命じて言った、「この人々の袋に、運
べるだけ多くの食糧を満たし、めいめいの銀を袋の口に入れておきな
さい。二またわたしの杯、銀の杯をあの年下の者の袋の口に、穀物
の代金と共に入れておきなさい」。家づかさはヨセフの言葉のとおりにし

た。三夜が明けると、その人々と、ろばとは送り出されたが、四町を出て、
まだ遠くへ行かないうちに、ヨセフは家づかさに言った、「立って、あの
人々のあとを追いなさい。追いついて、彼らに言いなさい、『あなたがたは
なぜ悪をもって善に報いるのですか。なぜわたしの銀の杯を盗んだので
すか。五これはわたしの主人が飲む時に使い、またいつも占いに用いる
ものではありませんか。あなたがたのした事は悪いことです』」。
六家づかさが彼らに追いついて、これらの言葉を彼らに告げたとき、七
彼らは言った、「わが主は、どうしてそのようなことを言われるのですか。
しもべらは決してそのようなことはいたしません。八袋の口で見つけた銀
でさえ、カナンの地からあなたの所に持ち帰ったほどです。どうして、わ
れわれは御主人の家から銀や金を盗みましょう。九しもべらのうちのだれ
の所でそれが見つかっても、その者は死に、またわれわれはわが主の奴隷

となりましょう」。一〇家づかさは言った、「それではあなたがたの言葉の
ようにしよう。杯の見つかった者はわたしの奴隷とならなければならな
い。ほかの者は無罪です」。一一そこで彼らは、めいめい急いで袋を地に
おろし、ひとりひとりその袋を開いた。一二家づかさは年上から捜し始め
て年下に終ったが、杯はベニヤミンの袋の中にあった。一三そこで彼
らは衣服を裂き、おのおの、ろばに荷を負わせて町に引き返した。
一四ユダと兄弟たちとは、ヨセフの家にはいったが、ヨセフがなおそこ
にいたので、彼らはその前で地にひれ伏した。一五ヨセフは彼らに言った、
「あなたがたのこのしわざは何事ですか。わたしのような人は、必ず占
い当てることを知らないのですか」。一六ユダは言った、「われわれはわが
主に何を言い、何を述べ得ましょう。どうしてわれわれは身の潔白をあら
わし得ましょう。神がしもべらの罪をあばかれました。われわれと、杯

を持っていた者とは共にわが主の奴隷となりましょう」。一七ヨセフは言っ
た、「わたしは決してそのようなことはしない。杯を持っている者だけが
わたしの奴隷とならなければならない。ほかの者は安全に父のもとへ上っ
て行きなさい」。
一八この時ユダは彼に近づいて言った、「ああ、わが主よ、どうぞわが主
の耳にひとこと言わせてください。しもべをおこらないでください。あな
たはパロのようなかたです。一九わが主はしもべらに尋ねて、『父があるか、
また弟があるか』と言われたので、二〇われわれはわが主に言いました、
『われわれには老齢の父があり、また年寄り子の弟があります。その兄
は死んで、同じ母の子で残っているのは、ただこれだけですから父はこれ
を愛しています』。二一その時あなたはしもべらに言われました、『その者
をわたしの所へ連れてきなさい。わたしはこの目で彼を見よう』。二二わ

れわれはわが主に言いました。『その子供は父を離れることができません。
もし父を離れたら父は死ぬでしょう』。二三しかし、あなたはしもべらに言
われました、『末の弟が一緒に下ってこなければ、おまえたちは再びわ
たしの顔を見ることはできない』。二四それであなたのしもべである父のも
とに上って、わが主の言葉を彼に告げました。二五ところで、父が『おまえ
たちは再び行って、われわれのために少しの食糧を買ってくるように』
と言ったので、二六われわれは言いました、『われわれは下って行けません。
もし末の弟が一緒であれば行きましょう。末の弟が一緒でなければ、
あの人の顔を見ることができません』。二七あなたのしもべである父は言い
ました、『おまえたちの知っているとおり、妻はわたしにふたりの子を産ん
だ。二八ひとりは外へ出たが、きっと裂き殺されたのだと思う。わたしは
今になっても彼を見ない。二九もしおまえたちがこの子をもわたしから取っ

て行って、彼が災に会えば、おまえたちは、しらがのわたしを悲しんで
陰府に下らせるであろう』。三〇わたしがあなたのしもべである父のもとに
帰って行くとき、もしこの子供が一緒にいなかったら、どうなるでしょう。
父の魂は子供の魂に結ばれているのです。三一この子供がわれわれと
一緒にいないのを見たら、父は死ぬでしょう。そうすればしもべらは、あな
たのしもべであるしらがの父を悲しんで陰府に下らせることになるでしょ
う。三二しもべは父にこの子供の身を請け合って『もしわたしがこの子をあ
なたのもとに連れ帰らなかったら、わたしは父に対して永久に罪を負い
ましょう』と言ったのです。三三どうか、しもべをこの子供の代りに、わが
主の奴隷としてとどまらせ、この子供を兄弟たちと一緒に上り行かせて
ください、三四この子供を連れずに、どうしてわたしは父のもとに上り行く
ことができましょう。父が災に会うのを見るに忍びません」。

第四五章一そこでヨセフはそばに立っているすべての人の前で、自分を
制しきれなくなったので、「人は皆ここから出てください」と呼ばわった。
それゆえヨセフが兄弟たちに自分のことを明かした時、ひとりも彼のそば
に立っている者はなかった。二ヨセフは声をあげて泣いた。エジプトびと
はこれを聞き、パロの家もこれを聞いた。三ヨセフは兄弟たちに言った、
「わたしはヨセフです。父はまだ生きながらえていますか」。兄弟たちは
答えることができなかった。彼らは驚き恐れたからである。
四ヨセフは兄弟たちに言った、「わたしに近寄ってください」。彼らが
近寄ったので彼は言った、「わたしはあなたがたの弟ヨセフです。あなた
がたがエジプトに売った者です。五しかしわたしをここに売ったのを嘆く
ことも、悔むこともいりません。神は命を救うために、あなたがたより
さきにわたしをつかわされたのです。六この二年の間、国中にききんが

あったが、なお五年の間は耕すことも刈り入れることもないでしょう。
七神は、あなたがたのすえを地に残すため、また大いなる救をもってあな
たがたの命を助けるために、わたしをあなたがたよりさきにつかわされた
のです。八それゆえわたしをここにつかわしたのはあなたがたではなく、神
です。神はわたしをパロの父とし、その全家の主とし、またエジプト全国
のつかさとされました。九あなたがたは父のもとに急ぎ上って言いなさい、
『あなたの子ヨセフが、こう言いました。神がわたしをエジプト全国の主
とされたから、ためらわずにわたしの所へ下ってきなさい。一〇あなたは
ゴセンの地に住み、あなたも、あなたの子らも、孫たちも、羊も牛も、そ
の他のものもみな、わたしの近くにおらせます。一一ききんはなお五年つ
づきますから、あなたも、家族も、その他のものも、みな困らないように、
わたしはそこで養いましょう』。一二あなたがたと弟ベニヤミンが目に

見るとおり、あなたがたに口ら語っているのはこのわたしです。一三あ
なたがたはエジプトでの、わたしのいっさいの栄えと、あなたがたが見る
いっさいの事をわたしの父に告げ、急いでわたしの父をここへ連れ下りな
さい」。一四そしてヨセフは弟ベニヤミンのくびを抱いて泣き、ベニヤミ
ンも彼のくびを抱いて泣いた。一五またヨセフはすべての兄弟たちに口づ
けし、彼らを抱いて泣いた。そして後、兄弟たちは彼と語った。
一六時に、「ヨセフの兄弟たちがきた」と言ううわさがパロの家に聞えた
ので、パロとその家来たちとは喜んだ。一七パロはヨセフに言った、「兄弟
たちに言いなさい、『あなたがたは、こうしなさい。獣に荷を負わせてカ
ナンの地へ行き、一八父と家族とを連れてわたしのもとへきなさい。わたし
はあなたがたに、エジプトの地の良い物を与えます。あなたがたは、この
国の最も良いものを食べるでしょう』。一九また彼らに命じなさい、『あな

たがたは、こうしなさい。幼な子たちと妻たちのためにエジプトの地から
車をもって行き、父を連れてきなさい。二〇家財に心を引かれてはなり
ません。エジプト全国の良い物は、あなたがたのものだからです』」。
二一イスラエルの子らはそのようにした。ヨセフはパロの命に従って彼
らに車を与え、また途中の食料をも与えた。二二またspringめいめいに晴着を
与えたが、ベニヤミンには銀三百シケルと晴着五着とを与えた。二三また
彼は父に次のようなものを贈った。すなわちエジプトの良い物を負わせた
ろば十頭と、穀物、パン及び父の道中の食料を負わせた雌ろば十頭。二
四こうしてヨセフは兄弟たちを送り去らせ、彼らに言った、「途中で争っ
てはなりません」。二五彼らはエジプトから上ってカナンの地に入り、父ヤ
コブのもとへ行って、二六彼に言った、「ヨセフはなお生きていてエジプト
全国のつかさです」。ヤコブは気が遠くなった。彼らの言うことが信じら

れなかったからである。二七そこで彼らはヨセフが語った言葉を残らず彼
に告げた。父ヤコブはヨセフが自分を乗せるために送った車を見て元気
づいた。二八そしてイスラエルは言った、「満足だ。わが子ヨセフがまだ生
きている。わたしは死ぬ前に行って彼を見よう」。
第四六章一イスラエルはその持ち物をことごとく携えて旅立ち、ベエル
シバに行って、父イサクの神に犠牲をささげた。二この時、神は夜の幻
のうちにイスラエルに語って言われた、「ヤコブよ、ヤコブよ」。彼は言っ
た、「ここにいます」。三神は言われた、「わたしは神、あなたの父の神であ
る。エジプトに下るのを恐れてはならない。わたしはあそこであなたを大
いなる国民にする。四わたしはあなたと一緒にエジプトに下り、また必
ずあなたを導き上るであろう。ヨセフが手ずからあなたの目を閉じるであ
ろう」。五そしてヤコブはベエルシバを立った。イスラエルの子らはヤコブ

を乗せるためにパロの送った車に、父ヤコブと幼な子たちと妻たちを乗
せ、六またその家畜とカナンの地で得た財産を携え、ヤコブとその子孫は
皆ともにエジプトへ行った。七こうしてヤコブはその子と、孫および娘と
孫娘などその子孫をみな連れて、エジプトへ行った。
八イスラエルの子らでエジプトへ行った者の名は次のとおりである。す
なわちヤコブとその子らであるが、ヤコブの長子はルベン。九ルベンの子
らはハノク、パル、ヘヅロン、カルミ。一〇シメオンの子らはエムエル、ヤ
ミン、オハデ、ヤキン、ゾハル及びカナンの女の産んだ子シャウル。一一
レビの子らはゲルション、コハテ、メラリ。一二ユダの子らはエル、オナン、
シラ、ペレヅ、ゼラ。エルとオナンはカナンの地で死んだ。ペレヅの子ら
はヘヅロンとハムル。一三イッサカルの子らはトラ、プワ、ヨブ、シムロン。
一四ゼブルンの子らはセレデ、エロン、ヤリエル。一五これらと娘デナとは

レアがパダンアラムでヤコブに産んだ子らである。その子らと娘らは合わ
せて三十三人。一六ガドの子らはゼポン、ハギ、シュニ、エヅボン、エリ、ア
ロデ、アレリ。一七アセルの子らはエムナ、イシワ、イスイ、ベリアおよび
妹サラ。ベリアの子らはヘベルとマルキエル。一八これらはラバンが娘
レアに与えたジルパの子らである。彼女はこれらをヤコブに産んだ。合わ
せて十六人。一九ヤコブの妻ラケルの子らはヨセフとベニヤミンとである。
二〇エジプトの国でヨセフにマナセとエフライムとが生れた。これはオン
の祭司ポテペラの娘アセナテが彼に産んだ者である。二一ベニヤミンの子
らはベラ、ベケル、アシベル、ゲラ、ナアマン、エヒ、ロシ、ムッピム、ホ
パム、アルデ。二二これらはラケルがヤコブに産んだ子らである。合わせて
十四人。二三ダンの子はホシム。二四ナフタリの子らはヤジエル、グニ、エ
ゼル、シレム。二五これらはラバンが娘ラケルに与えたビルハの子らであ

る。彼女はこれらをヤコブに産んだ。合わせて七人。二六ヤコブと共にエ
ジプトへ行ったすべての者、すなわち彼の身から出た者はヤコブの子らの
妻をのぞいて、合わせて六十六人であった。二七エジプトでヨセフに生れ
た子がふたりあった。エジプトへ行ったヤコブの家の者は合わせて七十人
であった。

二八さてヤコブはユダをさきにヨセフにつかわして、ゴセンで会おうと
言わせた。そして彼らはゴセンの地へ行った。二九ヨセフは車を整えて、
父イスラエルを迎えるためにゴセンに上り、父に会い、そのくびを抱き、く
びをかかえて久しく泣いた。三〇時に、イスラエルはヨセフに言った、「あな
たがなお生きていて、わたしはあなたの顔を見たので今は死んでもよい」。
三一ヨセフは兄弟たちと父の家族とに言った、「わたしは上ってパロに言
おう、『カナンの地にいたわたしの兄弟たちと父の家族とがわたしの所

へきました。三二この者らは羊を飼う者、家畜の牧者で、その羊、牛お
よび持ち物をみな携えてきました』。三三もしパロがあなたがたを召して、
『あなたがたの職業は何か』と言われたら、三四『しもべらは幼い時か
ら、ずっと家畜の牧者です。われわれも、われわれの先祖もそうです』と
言いなさい。そうすればあなたがたはゴセンの地に住むことができましょ
う。羊飼はすべて、エジプトびとの忌む者だからです」。
第四七章一ヨセフは行って、パロに言った、「わたしの父と兄弟たち、そ
の羊、牛およびすべての持ち物がカナンの地からきて、今ゴセンの地にお
ります」。二そしてその兄弟のうちの五人を連れて行って、パロに会わせ
た。三パロはヨセフの兄弟たちに言った、「あなたがたの職業は何か」。
彼らはパロに言った、「しもべらは羊を飼う者です。われわれも、われわ
れの先祖もそうです」。四彼らはまたパロに言った、「この国に寄留しよう

としてきました。カナンの地はききんが激しく、しもべらの群れのための
牧草がないのです。どうかしもべらをゴセンの地に住ませてください」。
五
パロはヨセフに言った、「あなたの父と兄弟たちとがあなたのところにき
た。
六
エジプトの地はあなたの前にある。地の最も良い所にあなたの父
と兄弟たちとを住ませなさい。ゴセンの地に彼らを住ませなさい。もし
あなたが彼らのうちに有能な者があるのを知っているなら、その者にわた
しの家畜をつかさどらせなさい」。
七
そこでヨセフは父ヤコブを導いてパロの前に立たせた。ヤコブはパロ
を祝福した。
八
パロはヤコブに言った、「あなたの年はいくつか」。
九
ヤコ
ブはパロに言った、「わたしの旅路のとしつきは、百三十年です。わたしのよ
わいの日はわずかで、ふしあわせで、わたしの先祖たちのよわいの日と旅路
の日には及びません」。
一〇
ヤコブはパロを祝福し、パロの前を去った。
一

一ヨセフはパロの命じたように、父と兄弟たちとのすまいを定め、彼ら
にエジプトの国で最も良い地、ラメセスの地を所有として与えた。一二ま
たヨセフは父と兄弟たちと父の全家とに、家族の数にしたがい、食物を
与えて養った。
一三さて、ききんが非常に激しかったので、全地に食物がなく、エジプ
トの国もカナンの国も、ききんのために衰えた。一四それでヨセフは人々
が買った穀物の代金としてエジプトの国とカナンの国にあった銀をみな集
め、その銀をパロの家に納めた。一五こうしてエジプトの国とカナンの国
に銀が尽きたとき、エジプトびとはみなヨセフのもとにきて言った、「食物
をください。銀が尽きたからとて、どうしてあなたの前で死んでよいでしょ
う」。一六ヨセフは言った、「あなたがたの家畜を出しなさい。銀が尽きたの
なら、あなたがたの家畜と引き替えで食物をわたそう」。一七彼らはヨセ

フの所へ家畜をひいてきたので、ヨセフは馬と羊の群れと牛の群れ及び
ろばと引き替えで、食物を彼らにわたした。こうして彼はその年、すべて
の家畜と引き替えた食物で彼らを養った。一八やがてその年は暮れ、次
の年、人々はまたヨセフの所へきて言った、「わが主には何事も隠しませ
ん。われわれの銀は尽き、獣の群れもわが主のものになって、われわれの
からだと田地のほかはわが主の前に何も残っていません。一九われわれは
どうして田地と一緒に、あなたの目の前で滅んでよいでしょう。われわれ
と田地とを食物と引き替えで買ってください。われわれは田地と一緒に
パロの奴隷となりましょう。また種をください。そうすればわれわれは生
きながらえ、死を免れて、田地も荒れないでしょう」。
二〇そこでヨセフはエジプトの田地をみなパロのために買い取った。きき
んがエジプトびとに、きびしかったので、めいめいその田畑を売ったから

である。こうして地はパロのものとなった。二一そしてヨセフはエジプトの
国境のこの端からかの端まで民を奴隷とした。二二ただ祭司の田地は買い
取らなかった。祭司にはパロの給与があって、パロが与える給与で生活し
ていたので、その田地を売らなかったからである。二三ヨセフは民に言った、
「わたしはきょう、あなたがたとその田地とを買い取って、パロのものとし
た。あなたがたに種をあげるから地にまきなさい。二四収穫の時は、その
五分の一をパロに納め、五分の四を自分のものとして田畑の種とし、自分
と家族の食糧とし、また子供の食糧としなさい」。二五彼らは言った、
「あなたはわれわれの命をお救いくださった。どうかわが主の前に恵みを
得させてください。われわれはパロの奴隷になりましょう」。二六ヨセフは
エジプトの田地について、収穫の五分の一をパロに納めることをおきて
としたが、それは今日に及んでいる。ただし祭司の田地だけはパロのもの

とならなかった。
二七さてイスラエルはエジプトの国でゴセンの地に住み、そこで財産を
得、子を生み、大いにふえた。二八ヤコブはエジプトの国で十七年生きなが
らえた。ヤコブのよわいの日は百四十七年であった。
二九イスラエルは死ぬ時が近づいたので、その子ヨセフを呼んで言った、
「もしわたしがあなたの前に恵みを得るなら、どうか手をわたしのももの下
に入れて誓い、親切と誠実とをもってわたしを取り扱ってください。ど
うかわたしをエジプトには葬らないでください。三〇わたしが先祖たちと
共に眠るときには、わたしをエジプトから運び出して先祖たちの墓に葬っ
てください」。ヨセフは言った、「あなたの言われたようにいたします」。三
一ヤコブがまた、「わたしに誓ってください」と言ったので、彼は誓った。
イスラエルは床のかしらで拝んだ。
第四八章一これらの事の後に、「あなたの父は、いま病気です」とヨセフ

に告げる者があったので、彼はふたりの子、マナセとエフライムとを連れ
て行った。二時に人がヤコブに告げて、「あなたの子ヨセフがあなたのもと
にきました」と言ったので、イスラエルは努めて床の上にすわった。三そ
してヤコブはヨセフに言った、「先に全能の神がカナンの地ルズでわたし
に現れ、わたしを祝福して、四言われた、『わたしはおまえに多くの子を
得させ、おまえをふやし、おまえを多くの国民としよう。また、この地を
おまえの後の子孫に与えて永久の所有とさせる』。五エジプトにいるあな
たの所にわたしが来る前に、エジプトの国で生れたあなたのふたりの子
はいまわたしの子とします。すなわちエフライムとマナセとはルベンとシ
メオンと同じようにわたしの子とします。六ただし彼らの後にあなたに生
れた子らはあなたのものとなります。しかし、その嗣業はその兄弟の名
で呼ばれるでしょう。七わたしがパダンから帰って来る途中ラケルはカナ

ンの地で死に、わたしは悲しんだ。そこはエフラタに行くまでには、なお
隔たりがあった。わたしはエフラタ、すなわちベツレヘムへ行く道のかた
わらに彼女を葬った」。
八ところで、イスラエルはヨセフの子らを見て言った、「これはだれです
か」。九ヨセフは父に言った、「神がここでわたしにくださった子どもです」。
父は言った、「彼らをわたしの所に連れてきて、わたしに祝福させてくだ
さい」。一〇イスラエルの目は老齢のゆえに、かすんで見えなかったが、ヨ
セフが彼らを父の所に近寄らせたので、父は彼らに口づけし、彼らを抱
いた。一一そしてイスラエルはヨセフに言った、「あなたの顔が見られよう
とは思わなかったのに、神はあなたの子らをもわたしに見させてくださっ
た」。一二そこでヨセフは彼らをヤコブのひざの間から取り出し、地に伏
して拝した。一三ヨセフはエフライムを右の手に取ってイスラエルの左の

手に向かわせ、マナセを左の手に取ってイスラエルの右の手に向かわせ、
ふたりを近寄らせた。一四すると、イスラエルは右の手を伸べて弟エフ
ライムの頭に置き、左の手をマナセの頭に置いた。マナセは長子であ
るが、ことさらそのように手を置いたのである。一五そしてヨセフを祝福
して言った、

「わが先祖アブラハムとイサクの仕えた神、
生れてからきょうまでわたしを養われた神、
一六すべての災からわたしをあがなわれたみ使よ、
この子供たちを祝福してください。
またわが名と先祖アブラハムとイサクの名とが、
彼らによって唱えられますように、
また彼らが地の上にふえひろがりますように」。

一七ヨセフは父が右の手をエフライムの頭に置いているのを見て不満に
思い、父の手を取ってエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。一
八そしてヨセフは父に言った、「父よ、そうではありません。こちらが長子で
す。その頭に右の手を置いてください」。一九父は拒んで言った、「わかっ
ている。子よ、わたしにはわかっている。彼もまた一つの民となり、また大
いなる者となるであろう。しかし弟は彼よりも大いなる者となり、その
子孫は多くの国民となるであろう」。二〇こうして彼はこの日、彼らを祝福
して言った、

「あなたを指して、イスラエルは、
人を祝福して言うであろう、
『神があなたをエフライムのごとく、
またマナセのごとくにせられるように』」。

このように、彼はエフライムをマナセの先に立てた。
二〇イスラエルはまたヨセフに言った、「わたしはやがて死にます。しかし、神はあなたがたと共におられて、あなたがたを先祖の国に導き返されるであろう。
二二なおわたしは一つの分を兄弟よりも多くあなたに与える。これはわたしがつるぎと弓とを持ってアモリびとの手から取ったものである」。

第四九章一ヤコブはその子らを呼んで言った、「集まりなさい。後の日に、あなたがたの上に起ることを、告げましょう、
二ヤコブの子らよ、集まって聞け。
父イスラエルのことばを聞け。
三ルベンよ、あなたはわが長子、
わが勢い、わが力のはじめ、
威光のすぐれた者、権力のすぐれた者。

四しかし、沸き立つ水のようだから、
もはや、すぐれた者ではあり得ない。
あなたは父の床に上って汚した。
ああ、あなたはわが寝床に上った。
五シメオンとレビとは兄弟。
彼らのつるぎは暴虐の武器。
六わが魂よ、彼らの会議に臨むな。
わが栄えよ、彼らのつどいに連なるな。
彼らは怒りに任せて人を殺し、
ほしいままに雄牛の足の筋を切った。
七彼らの怒りは、激しいゆえにのろわれ、
彼らの憤りは、はなはだしいゆえにのろわれる。

わたしは彼らをヤコブのうちに分け、
イスラエルのうちに散らそう。
八ユダよ、兄弟たちはあなたをほめる。
あなたの手は敵のくびを押え、
父の子らはあなたの前に身をかがめるであろう。
九ユダは、ししの子。
わが子よ、あなたは獲物をもって上って来る。
彼は雄じしのようにうずくまり、
雌じしのように身を伏せる。
だれがこれを起すことができよう。
一〇つえはユダを離れず、
立法者のつえはその足の間を離れることなく、

シロの来る時までに及ぶであろう。
もろもろの民は彼に従う。
一一彼はそのろばの子をぶどうの木につなぎ、
その雌ろばの子を良きぶどうの木につなぐ。
彼はその衣服をぶどう酒で洗い、
その着物をぶどうの汁で洗うであろう。
一二その目はぶどう酒によって赤く、
その歯は乳によって白い。
一三ゼブルンは海べに住み、
舟の泊まる港となって、
その境はシドンに及ぶであろう。
一四イッサカルはたくましいろば、

彼は羊のおりの間に伏している。
一五 彼は定住の地を見て良しとし、
その国を見て楽しとした。
彼はその肩を下げてにない、
奴隷となって追い使われる。
一六 ダンはおのれの民をさばくであろう、
イスラエルのほかの部族のように。
一七 ダンは道のかたわらのへび、
道のほとりのまむし。
馬のかかとをかんで、
乗る者をうしろに落すであろう。
一八 主よ、わたしはあなたの救を待ち望む。

一九ガドには略奪者(りゃくだつしゃ)が迫(せま)る。
しかし彼(かれ)はかえって敵(てき)のかかとに迫(せま)るであろう。
二〇アセルはその食物(しょくもつ)がゆたかで、
王(おう)の美味(びみ)をいだすであろう。
二一ナフタリは放(はな)たれた雌(め)じか、
彼(かれ)は美(うつく)しい子(こ)じかを生(う)むであろう。
二二ヨセフは実(み)を結(むす)ぶ若木(わかぎ)、
泉(いずみ)のほとりの実(み)を結(むす)ぶ若木(わかぎ)。
その枝(えだ)は、かきねを越(こ)えるであろう。
二三射(い)る者(もの)は彼(かれ)を激(はげ)しく攻(せ)め、
彼(かれ)を射(い)、彼(かれ)をいたく悩(なや)ました。
二四しかし彼(かれ)の弓(ゆみ)はなお強(つよ)く、

彼の腕は素早い。
これはヤコブの全能者の手により、
イスラエルの岩なる牧者の名により、
二五あなたを助ける父の神により、
また上なる天の祝福、
下に横たわる淵の祝福、
乳ぶさと胎の祝福をもって、
あなたを恵まれる全能者による。
二六あなたの父の祝福は永遠の山の祝福にまさり、
永久の丘の賜物にまさる。
これらの祝福はヨセフのかしらに帰し、
その兄弟たちの君たる者の頭の頂に帰する。

二七ベニヤミンはかき裂くおおかみ、
朝にその獲物を食らい、
夕にその分捕物を分けるであろう」。
二八すべてこれらはイスラエルの十二の部族である。そしてこれは彼ら
の父が彼らに語り、彼らを祝福したもので、彼は祝福すべきところに
従って、彼らおのおのを祝福した。二九彼はまた彼らに命じて言った、
「わたしはわが民に加えられようとしている。あなたがたはヘテびとエフロ
ンの畑にあるほら穴に、わたしの先祖たちと共にわたしを葬ってくださ
い。三〇そのほら穴はカナンの地のマムレの東にあるマクペラの畑にあ
り、アブラハムがヘテびとエフロンから畑と共に買い取り、所有の墓地と
したもので、三一そこにアブラハムと妻サラとが葬られ、イサクと妻リベ
カもそこに葬られたが、わたしはまたそこにレアを葬った。三二あの畑

とその中にあるほら穴とはヘテの人々から買ったものです」。三三こうして
ヤコブは子らに命じ終って、足を床におさめ、息絶えて、その民に加えら
れた。
第五〇章一ヨセフは父の顔に伏して泣き、口づけした。二そしてヨセフ
は彼のしもべである医者たちに、父に薬を塗ることを命じたので、医者
たちはイスラエルに薬を塗った。三このために四十日を費した。薬を
塗るにはこれほどの日数を要するのである。エジプトびとは七十日の間、
彼のために泣いた。
四彼のために泣く日が過ぎて、ヨセフはパロの家の者に言った、「今もし
わたしがあなたがたの前に恵みを得るなら、どうかパロに伝えてください。
五『わたしの父はわたしに誓わせて言いました「わたしはやがて死にます。
カナンの地に、わたしが掘って置いた墓に葬ってください」。それで、ど

うかわたしを上って行かせ、父を葬らせてください。そうすれば、わたし
はまた帰ってきます』」。六パロは言った、「あなたの父があなたに誓わせた
ように上って行って彼を葬りなさい」。七そこでヨセフは父を葬るため
に上って行った。彼と共に上った者はパロのもろもろの家来たち、パロの
家の長老たち、エジプトの国のもろもろの長老たち、八ヨセフの全家と
その兄弟たち及びその父の家族であった。ただ子供と羊と牛はゴセンの
地に残した。九また戦車と騎兵も彼と共に上ったので、その行列はたい
そう盛んであった。一〇彼らはヨルダンの向こうのアタデの打ち場に行き着
いて、そこで大いに嘆き、非常に悲しんだ。そしてヨセフは七日の間、父
のために嘆いた。一一その地の住民、カナンびとがアタデの打ち場の嘆き
を見て、「これはエジプトびとの大いなる嘆きだ」と言ったので、その所の
名はアベル・ミツライムと呼ばれた。これはヨルダンの向こうにある。一二

ヤコブの子らは命じられたようにヤコブにおこなった。一三すなわちその子
らは彼をカナンの地へ運んで行って、マクペラの畑のほら穴に葬った。
このほら穴はマムレの東にあって、アブラハムがヘテびとエフロンから
畑と共に買って、所有の墓地としたものである。一四ヨセフは父を葬っ
た後、その兄弟たち及びすべて父を葬るために一緒に上った者と共に
エジプトに帰った。

一五ヨセフの兄弟たちは父の死んだのを見て言った、「ヨセフはことに
よるとわれわれを憎んで、われわれが彼にしたすべての悪に、仕返しする
に違いない」。一六そこで彼らはことづけしてヨセフに言った、「あなたの父
は死ぬ前に命じて言われました、一七『おまえたちはヨセフに言いなさい、
「あなたの兄弟たちはあなたに悪をおこなったが、どうかそのとがと罪を
ゆるしてやってください」』。今どうかあなたの父の神に仕えるしもべらの

とがをゆるしてください」。ヨセフはこの言葉を聞いて泣いた。一八やがて
兄弟たちもきて、彼の前に伏して言った、「このとおり、わたしたちはあな
たのしもべです」。一九ヨセフは彼らに言った、「恐れることはいりません。
わたしが神に代ることができましょうか。二〇あなたがたはわたしに対し
て悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて、今日のように多くの民
の命を救おうと計らわれました。二一それゆえ恐れることはいりません。
わたしはあなたがたとあなたがたの子供たちを養いましょう」。彼は彼ら
を慰めて、親切に語った。

二二このようにしてヨセフは父の家族と共にエジプトに住んだ。そして
ヨセフは百十年生きながらえた。二三ヨセフはエフライムの三代の子孫を
見た。マナセの子マキルの子らも生れてヨセフのひざの上に置かれた。二
四ヨセフは兄弟たちに言った、「わたしはやがて死にます。神は必ずあな

たがたを顧みて、この国から連れ出し、アブラハム、イサク、ヤコブに誓
われた地に導き上られるでしょう」。二五さらにヨセフは、「神は必ずあ
なたがたを顧みられる。その時、あなたがたはわたしの骨をここから携
え上りなさい」と言ってイスラエルの子らに誓わせた。二六こうしてヨセフ
は百十歳で死んだ。彼らはこれに薬を塗り、棺に納めて、エジプトに置
いた。

出エジプト記

第一章 一さて、ヤコブと共に、おのおのその家族を伴って、エジプトへ
行ったイスラエルの子らの名は次のとおりである。二すなわちルベン、シ
メオン、レビ、ユダ、三イッサカル、ゼブルン、ベニヤミン、四ダン、ナフ
タリ、ガド、アセルであった。五ヤコブの腰から出たものは、合わせて七十
人。ヨセフはすでにエジプトにいた。六そして、ヨセフは死に、兄弟たち
も、その時代の人々もみな死んだ。七けれどもイスラエルの子孫は多くの
子を生み、ますますふえ、はなはだ強くなって、国に満ちるようになった。
八ここに、ヨセフのことを知らない新しい王が、エジプトに起った。九
彼はその民に言った、「見よ、イスラエルびとなるこの民は、われわれにとっ
て、あまりにも多く、また強すぎる。一〇さあ、われわれは、抜かりなく彼

らを取り扱おう。彼らが多くなり、戦いの起るとき、敵に味方して、わ
れわれと戦い、ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう」。一
一そこでエジプトびとは彼らの上に監督をおき、重い労役をもって彼らを
苦しめた。彼らはパロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。一二
しかしイスラエルの人々が苦しめられるにしたがって、いよいよふえひろ
がるので、彼らはイスラエルの人々のゆえに恐れをなした。一三エジプト
びとはイスラエルの人々をきびしく使い、一四つらい務をもってその生活
を苦しめた。すなわち、しっくいこね、れんが作り、および田畑のあらゆ
る務に当らせたが、そのすべての労役はきびしかった。
一五またエジプトの王は、ヘブルの女のために取上げをする助産婦でひ
とりは名をシフラといい、他のひとりは名をプアという者にさとして、一六
言った、「ヘブルの女のために助産をするとき、産み台の上を見て、もし

男の子ならばそれを殺し、女の子ならば生かしておきなさい」。一七しか
し助産婦たちは神をおそれ、エジプトの王が彼らに命じたようにはせず、
男の子を生かしておいた。一八エジプトの王は助産婦たちを召して言った、
「あなたがたはなぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか」。
一九助産婦たちはパロに言った、「ヘブルの女はエジプトの女とは違い、
彼女たちは健やかで助産婦が行く前に産んでしまいます」。二〇それで神は
助産婦たちに恵みをほどこされた。そして民はふえ、非常に強くなった。
二一助産婦たちは神をおそれたので、神は彼女たちの家を栄えさせられた。
二二そこでパロはそのすべての民に命じて言った、「ヘブルびとに男の子
が生れたならば、みなナイル川に投げこめ。しかし女の子はみな生かして
おけ」。

第二章一さて、レビの家のひとりの人が行ってレビの娘をめとった。二

女はみごもって、男の子を産んだが、その麗しいのを見て、三月のあい
だ隠していた。三しかし、もう隠しきれなくなったので、パピルスで編んだ
かごを取り、それにアスファルトと樹脂とを塗って、子をその中に入れ、こ
れをナイル川の岸の葦の中においた。四その姉は、彼がどうされるかを知
ろうと、遠く離れて立っていた。五ときにパロの娘が身を洗おうと、川に
降りてきた。侍女たちは川べを歩いていたが、彼女は、葦の中にかごのあ
るのを見て、つかえめをやり、それを取ってこさせ、六あけて見ると子供が
いた。見よ、幼な子は泣いていた。彼女はかわいそうに思って言った、「こ
れはヘブルびとの子供です」。七そのとき幼な子の姉はパロの娘に言った、
「わたしが行ってヘブルの女のうちから、あなたのために、この子に乳を
飲ませるうばを呼んでまいりましょうか」。八パロの娘が「行ってきてくだ
さい」と言うと、少女は行ってその子の母を呼んできた。九パロの娘は

彼女に言った、「この子を連れて行って、わたしに代り、乳を飲ませてくだ
さい。わたしはその報酬をさしあげます」。女はその子を引き取って、こ
れに乳を与えた。一〇その子が成長したので、彼女はこれをパロの娘の
ところに連れて行った。そして彼はその子となった。彼女はその名をモー
セと名づけて言った、「水の中からわたしが引き出したからです」。
一一モーセが成長して後、ある日のこと、同胞の所に出て行って、そ
のはげしい労役を見た。彼はひとりのエジプトびとが、同胞のひとりであ
るヘブルびとを打つのを見たので、一二左右を見まわし、人のいないのを見
て、そのエジプトびとを打ち殺し、これを砂の中に隠した。一三次の日ま
た出て行って、ふたりのヘブルびとが互に争っているのを見、悪い方の
男に言った、「あなたはなぜ、あなたの友を打つのですか」。一四彼は言っ
た、「だれがあなたを立てて、われわれのつかさ、また裁判人としたのです

か。エジプトびとを殺したように、あなたはわたしを殺そうと思うのです
か」。モーセは恐れた。そしてあの事がきっと知れたのだと思った。一五パ
ロはこの事を聞いて、モーセを殺そうとした。
しかしモーセはパロの前をのがれて、ミデヤンの地に行き、井戸のかたわ
らに座していた。一六さて、ミデヤンの祭司に七人の娘があった。彼女た
ちはきて水をくみ、水槽にみたして父の羊の群れに飲ませようとしたが、
一七羊飼たちがきて彼女らを追い払ったので、モーセは立ち上がって彼女
たちを助け、その羊の群れに水を飲ませた。一八彼女たちが父リウエルの
ところに帰った時、父は言った、「きょうは、どうして、こんなに早く帰っ
てきたのか」。一九彼女たちは言った、「ひとりのエジプトびとが、わたした
ちを羊飼たちの手から助け出し、そのうえ、水をたくさんくんで、羊の
群れに飲ませてくれたのです」。二〇彼は娘たちに言った、「そのかたはど

こにおられるか。なぜ、そのかたをおいてきたのか。呼んできて、食事を
さしあげなさい」。二一モーセがこの人と共におることを好んだので、彼は
娘のチッポラを妻としてモーセに与えた。二二彼女が男の子を産んだの
で、モーセはその名をゲルショムと名づけた。「わたしは外国に寄留者と
なっている」と言ったからである。
二三多くの日を経て、エジプトの王は死んだ。イスラエルの人々は、そ
の苦役の務のゆえにうめき、また叫んだが、その苦役のゆえの叫びは神に
届いた。二四神は彼らのうめきを聞き、神はアブラハム、イサク、ヤコブ
との契約を覚え、二五神はイスラエルの人々を顧み、神は彼らをしろし
めされた。
第三章一モーセは妻の父、ミデヤンの祭司エテロの羊の群れを飼ってい
たが、その群れを荒野の奥に導いて、神の山ホレブにきた。二ときに主の

使は、しばの中の炎のうちに彼に現れた。彼が見ると、しばは火に燃
えているのに、そのしばはなくならなかった。三モーセは言った、「行って
この大きな見ものを見、なぜしばが燃えてしまわないかを知ろう」。四主は
彼がきて見定ようとするのを見、神はしばの中から彼を呼んで、「モーセ
よ、モーセよ」と言われた。彼は「ここにいます」と言った。五神は言われ
た、「ここに近づいてはいけない。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っ
ているその場所は聖なる地だからである」。六また言われた、「わたしは、あ
なたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モー
セは神を見ることを恐れたので顔を隠した。

七主はまた言われた、「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを、
つぶさに見、また追い使う者のゆえに彼らの叫ぶのを聞いた。わたしは彼
らの苦しみを知っている。八わたしは下って、彼らをエジプトびとの手か

ら救い出し、これをかの地から導き上って、良い広い地、乳と蜜の流れ
る地、すなわちカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、
エブスびとのおる所に至らせようとしている。九いまイスラエルの人々の
叫びがわたしに届いた。わたしはまたエジプトびとが彼らをしえたげる、
そのしえたげを見た。一〇さあ、わたしは、あなたをパロにつかわして、わ
たしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう」。一一モー
セは神に言った、「わたしは、いったい何者でしょう。わたしがパロのとこ
ろへ行って、イスラエルの人々をエジプトから導き出すのでしょうか」。
一二神は言われた、「わたしは必ずあなたと共にいる。これが、わたしの
あなたをつかわしたしるしである。あなたが民をエジプトから導き出した
とき、あなたがたはこの山で神に仕えるであろう」。
一三モーセは神に言った、「わたしがイスラエルの人々のところへ行って、

彼らに『あなたがたの先祖の神が、わたしをあなたがたのところへつかわ
されました』と言うとき、彼らが『その名はなんというのですか』とわた
しに聞くならば、なんと答えましょうか」。一四 神はモーセに言われた、「わ
たしは、有って有る者」。また言われた、「イスラエルの人々にこう言いな
さい、『「わたしは有る」というかたが、わたしをあなたがたのところへつ
かわされました』と」。一五 神はまたモーセに言われた、「イスラエルの人々
にこう言いなさい『あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、
ヤコブの神である主が、わたしをあなたがたのところへつかわされました』
と。これは永遠にわたしの名、これは世々のわたしの呼び名である。一六 あ
なたは行って、イスラエルの長老たちを集めて言いなさい、『あなたがた
の先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である主は、わたしに現れ
て言われました、「わたしはあなたがたを顧み、あなたがたがエジプトで

されている事を確かに見た。
一七それでわたしはあなたがたを、エジプトの悩みから導き出して、カナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの地、乳と蜜の流れる地へ携え上ろうと決心した」と』。
一八彼らはあなたの声に聞き従うであろう。あなたはイスラエルの長老たちと一緒にエジプトの王のところへ行って言いなさい、『ヘブルびとの神、主がわたしたちに現れられました。それで、わたしたちを、三日の道のりほど荒野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげることを許してください』と。
一九しかし、エジプトの王は強い手をもって迫らなければ、あなたがたを行かせないのをわたしは知っている。
二〇それで、わたしは手を伸べて、エジプトのうちに行おうとする、さまざまの不思議をもってエジプトを打とう。その後に彼はあなたがたを去らせるであろう。
二一わたしはこの民にエジプトびとの好意を得させる。あなたがたは去ると

きに、むなし手で去ってはならない。二二女はみな、その隣の女と、家
に宿っている女に、銀の飾り、金の飾り、また衣服を求めなさい。そし
てこれらを、あなたがたのむすこ、娘に着けさせなさい。このようにエジ
プトびとのものを奪い取りなさい」。
第四章一モーセは言った、「しかし、彼らはわたしを信ぜず、またわたし
の声に聞き従わないで言うでしょう、『主はあなたに現れなかった』と」。
二主は彼に言われた、「あなたの手にあるそれは何か」。彼は言った、「つえ
です」。三また言われた、「それを地に投げなさい」。彼がそれを地に投げる
と、へびになったので、モーセはその前から身を避けた。四主はモーセに
言われた、「あなたの手を伸ばして、その尾を取りなさい。――そこで手を
伸ばしてそれを取ると、手のなかでつえとなった。――五これは、彼らの
先祖たちの神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が、あ

なたに現れたのを、彼らに信じさせるためである」。六主はまた彼に言わ
れた、「あなたの手をふところに入れなさい」。彼が手をふところに入れ、そ
れを出すと、手は、らい病にかかって、雪のように白くなっていた。七主
は言われた、「手をふところにもどしなさい」。彼は手をふところにもどし、
それをふところから出して見ると、回復して、もとの肉のようになってい
た。八主は言われた、「彼らがもしあなたを信ぜず、また初めのしるしを認
めないならば、後のしるしは信じるであろう。九彼らがもしこの二つのし
るしをも信ぜず、あなたの声に聞き従わないならば、あなたはナイル川
の水を取って、かわいた地に注ぎなさい。あなたがナイル川から取った水
は、かわいた地で血となるであろう」。

一〇モーセは主に言った、「ああ主よ、わたしは以前にも、またあなたが、し
もべに語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、

舌も重いのです」。一一主は彼に言われた、「だれが人に口を授けたのか。
おし、耳しい、目あき、目しいにだれがするのか。主なるわたしではない
か。一二それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあって、あなた
の言うべきことを教えるであろう」。一三モーセは言った、「ああ、主よ、ど
うか、ほかの適当な人をおつかわしください」。一四そこで、主はモーセに
むかって怒りを発して言われた、「あなたの兄弟レビびとアロンがいるで
はないか。わたしは彼が言葉にすぐれているのを知っている。見よ、彼は
あなたに会おうとして出てきている。彼はあなたを見て心に喜ぶであろ
う。一五あなたは彼に語って言葉をその口に授けなさい。わたしはあなた
の口と共にあり、彼の口と共にあって、あなたがたのなすべきことを教え、
一六彼はあなたに代って民に語るであろう。彼はあなたの口となり、あな
たは彼のために、神に代るであろう。一七あなたはそのつえを手に執り、そ

れをもって、しるしを行いなさい」。
一八モーセは妻の父エテロのところに帰って彼に言った、「どうかわたし
を、エジプトにいる身うちの者のところに帰らせ、彼らがまだ生きながら
えているか、どうかを見させてください」。エテロはモーセに言った、「安ん
じて行きなさい」。一九主はミデヤンでモーセに言われた、「エジプトに帰っ
て行きなさい。あなたの命を求めた人々はみな死んだ」。二〇そこでモー
セは妻と子供たちをとり、ろばに乗せて、エジプトの地に帰った。モーセ
は手に神のつえを執った。
二一主はモーセに言われた、「あなたがエジプトに帰ったとき、わたしがあ
なたの手に授けた不思議を、みなパロの前で行いなさい。しかし、わたし
が彼の心をかたくなにするので、彼は民を去らせないであろう。二二あな
たはパロに言いなさい、『主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、

わたしの長子である。二三わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、
わたしに仕えさせなさい。もし彼を去らせるのを拒むならば、わたしはあ
なたの子、あなたの長子を殺すであろう』」と。
二四さてモーセが途中で宿っている時、主は彼に会って彼を殺そうとさ
れた。二五その時チッポラは火打ち石の小刀を取って、その男の子の前の
皮を切り、それをモーセの足につけて言った、「あなたはまことに、わたしに
とって血の花婿です」。二六そこで、主はモーセをゆるされた。この時「血
の花婿です」とチッポラが言ったのは割礼のゆえである。
二七主はアロンに言われた、「荒野に行ってモーセに会いなさい」。彼は
行って神の山でモーセに会い、これに口づけした。二八モーセは自分をつ
かわされた主のすべての言葉と、命じられたすべてのしるしをアロンに告
げた。二九そこでモーセとアロンは行ってイスラエルの人々の長老たちを

みな集めた。三〇そしてアロンは主がモーセに語られた言葉を、ことごと
く告げた。また彼は民の前でしるしを行ったので、三一民は信じた。彼ら
は主がイスラエルの人々を顧み、その苦しみを見られたのを聞き、伏し
て礼拝した。
第五章一その後、モーセとアロンは行ってパロに言った、「イスラエルの
神、主はこう言われる、『わたしの民を去らせ、荒野で、わたしのために祭
をさせなさい』と」。二パロは言った、「主とはいったい何者か。わたしが
その声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは
主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」。三彼らは言った、「へ
ブルびとの神がわたしたちに現れました。どうか、わたしたちを三日の道
のりほど荒野に行かせ、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてくださ
い。そうしなければ主は疫病か、つるぎをもって、わたしたちを悩まされ

るからです」。四エジプトの王は彼らに言った、「モーセとアロンよ、あな
たがたは、なぜ民に働きをやめさせようとするのか。自分の労役につく
がよい」。五パロはまた言った、「見よ、今や土民の数は多い。しかも、あ
なたがたは彼らに労役を休ませようとするのか」。六その日、パロは民を追
い使う者と、民のかしらたちに命じて言った、七「あなたがたは、れんが
を作るためのわらを、もはや、今までのように、この民に与えてはならな
い。彼らに自分で行って、わらを集めさせなさい。八また前に作っていた、
れんがの数どおりに彼らに作らせ、それを減らしてはならない。彼らはな
まけ者だ。それだから、彼らは叫んで、『行ってわたしたちの神に犠牲をさ
さげさせよ』と言うのだ。九この人々の労役を重くして、働かせ、偽り
の言葉に心を寄せさせぬようにしなさい」。
一〇そこで民を追い使う者たちと、民のかしらたちは出て行って、民に

言った、「パロはこう仰せられる、『あなたがたに、わらは与えない。一一
自分で行って、見つかる所から、わらを取って来るがよい。しかし働き
は少しも減らしてはならない』と」。一二そこで民はエジプトの全地に散っ
て、わらのかわりに、刈り株を集めた。一三追い使う者たちは、彼らをせき
立てて言った、「わらがあった時と同じように、あなたがたの働きの、日
ごとの分を仕上げなければならない」。一四パロの追い使う者たちがイスラ
エルの人々の上に立てたかしらたちは、打たれて、「なぜ、あなたがたは、
れんが作りの仕事を、きょうも、前のように仕上げないのか」と言われた。
一五そこで、イスラエルの人々のかしらたちはパロのところに行き、叫ん
で言った、「あなたはなぜ、しもべどもにこんなことをなさるのですか。一
六しもべどもは、わらを与えられず、しかも彼らはわたしたちに、『れんが
は作れ』と言うのです。その上、しもべどもは打たれています。罪はあな

たの民にあるのです」。一七パロは言った、「あなたがたは、なまけ者だ、な
まけ者だ。それだから、『行って、主に犠牲をささげさせよ』と言うのだ。
一八さあ、行って働きなさい。わらは与えないが、なおあなたがたは定め
た数のれんがを納めなければならない」。一九イスラエルの人々のかしらた
ちは、「れんがの日ごとの分を減らしてはならない」と言われたので、悪い
事態になったことを知った。二〇彼らがパロを離れて出てきた時、彼らに
会おうとして立っていたモーセとアロンに会ったので、二一彼らに言った、
「主があなたがたをごらんになって、さばかれますように。あなたがたは、
わたしたちをパロとその家来たちにきらわせ、つるぎを彼らの手に渡して、
殺させようとしておられるのです」。

二二モーセは主のもとに帰って言った、「主よ、あなたは、なぜこの民を
ひどい目にあわされるのですか。なんのためにわたしをつかわされたので

すか。二三わたしがパロのもとに行って、あなたの名によって語ってからこ
のかた、彼はこの民をひどい目にあわせるばかりです。また、あなたは、す
こしもあなたの民を救おうとなさいません」。
第六章一主はモーセに言われた、「今、あなたは、わたしがパロに何をしよ
うとしているかを見るであろう。すなわちパロは強い手にしいられて、彼
らを去らせるであろう。否、彼は強い手にしいられて、彼らを国から追い
出すであろう」。
二神はモーセに言われた、「わたしは主である。三わたしはアブラハム、
イサク、ヤコブには全能の神として 現れたが、主という名では、自分を
彼らに知らせなかった。四わたしはまたカナンの地、すなわち彼らが寄留
したその寄留の地を、彼らに与えるという契約を彼らと立てた。五わたし
はまた、エジプトびとが奴隷としているイスラエルの人々のうめきを聞い

て、わたしの契約を思い出した。六それゆえ、イスラエルの人々に言いな
さい、『わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトびとの労役の
下から導き出し、奴隷の務から救い、また伸べた腕と大いなるさばきを
もって、あなたがたをあがなうであろう。七わたしはあなたがたを取って
わたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。わたしがエジプトびと
の労役の下からあなたがたを導き出すあなたがたの神、主であることを、
あなたがたは知るであろう。八わたしはアブラハム、イサク、ヤコブに与
えると手を挙げて誓ったその地にあなたがたをはいらせ、それを所有とし
て、与えるであろう。わたしは主である』と」。九モーセはこのようにイス
ラエルの人々に語ったが、彼らは心の痛みと、きびしい奴隷の務のゆえ
に、モーセに聞き従わなかった。
一〇さて主はモーセに言われた、一一「エジプトの王パロのところに行っ

て、彼がイスラエルの人々をその国から去らせるように話しなさい」。一二
モーセは主にむかって言った、「イスラエルの人々でさえ、わたしの言うこ
とを聞かなかったのに、どうして、くちびるに割礼のないわたしの言うこと
を、パロが聞き入れましょうか」。一三しかし、主はモーセとアロンに語っ
て、イスラエルの人々と、エジプトの王パロのもとに行かせ、イスラエル
の人々をエジプトの地から導き出せと命じられた。
一四彼らの先祖の家の首長たちは次のとおりである。すなわちイスラエ
ルの長子ルベンの子らはハノク、パル、ヘヅロン、カルミで、これらはル
ベンの一族である。一五シメオンの子らはエムエル、ヤミン、オハデ、ヤキ
ン、ゾハル、およびカナンの女から生れたシャウルで、これらはシメオン
の一族である。一六レビの子らの名は、その世代に従えば、ゲルション、
コハテ、メラリで、レビの一生は百三十七年であった。一七ゲルションの

子らの一族はリブニとシメイである。一八コハテの子らはアムラム、イヅハ
ル、ヘブロン、ウジエルで、コハテの一生は百三十三年であった。一九メラ
リの子らはマヘリとムシである。これらはその世代によるレビの一族であ
る。二〇アムラムは父の妹ヨケベデを妻としたが、彼女はアロンとモー
セを彼に産んだ。アムラムの一生は百三十七年であった。二一イヅハルの
子らはコラ、ネペグ、ジクリである。二二ウジエルの子らはミサエル、エル
ザパン、シテリである。二三アロンはナションの姉妹、アミナダブの娘エ
リセバを妻とした。エリセバは彼にナダブ、アビウ、エレアザル、イタマ
ルを産んだ。二四コラの子らはアッシル、エルカナ、アビアサフで、これら
はコラびとの一族である。二五アロンの子エレアザルはプテエルの娘のひ
とりを妻とした。彼女はピネハスを彼に産んだ。これらは、その一族によ
るレビびとの先祖の家の首長たちである。

二六主が、「イスラエルの人々をその軍団に従って、エジプトの地から
導き出しなさい」と言われたのは、このアロンとモーセである。二七彼ら
はイスラエルの人々をエジプトから導き出すことについて、エジプトの
王パロに語ったもので、すなわちこのモーセとアロンである。
二八主がエジプトの地でモーセに語られた日に、二九主はモーセに言われ
た、「わたしは主である。わたしがあなたに語ることは、みなエジプトの王
パロに語りなさい」。三〇しかしモーセは主にむかって言った、「ごらんのと
おり、わたしは、くちびるに割礼のない者です。パロがどうしてわたしの
言うことを聞きいれましょうか」。

第七章一主はモーセに言われた、「見よ、わたしはあなたをパロに対して
神のごときものとする。あなたの兄弟アロンはあなたの預言者となるで
あろう。二あなたはわたしが命じることを、ことごとく彼に告げなければ

ならない。そしてあなたの兄弟アロンはパロに告げて、イスラエルの人々
をその国から去らせるようにさせなければならない。三しかし、わたしはパ
ロの心をかたくなにするので、わたしのしるしと不思議をエジプトの国に
多く行っても、四パロはあなたがたの言うことを聞かないであろう。それ
でわたしは手をエジプトの上に加え、大いなるさばきをくだして、わたし
の軍団、わたしの民イスラエルの人々を、エジプトの国から導き出すで
あろう。五わたしが手をエジプトの上にさし伸べて、イスラエルの人々を
彼らのうちから導き出す時、エジプトびとはわたしが主であることを知
るようになるであろう」。六モーセとアロンはそのように行った。すなわ
ち主が彼らに命じられたように行った。七彼らがパロと語った時、モー
セは八十歳、アロンは八十三歳であった。

八主はモーセとアロンに言われた、九「パロがあなたがたに、『不思議をお

こなって証拠を示せ』と言う時、あなたはアロンに言いなさい、『あなたの
つえを取って、パロの前に投げなさい』と。するとそれはへびになるであろ
う」。
一〇それで、モーセとアロンはパロのところに行き、主の命じられた
とおりにおこなった。すなわちアロンはそのつえを、パロとその家来たちの
前に投げると、それはへびになった。
一一そこでパロもまた知者と魔法使
を召し寄せた。これらのエジプトの魔術師らもまた、その秘術をもって同
じように行った。
一二すなわち彼らは、おのおのそのつえを投げたが、そ
れらはへびになった。しかし、アロンのつえは彼らのつえを、のみつくし
た。
一三けれども、パロの心はかたくなになって、主の言われたように、
彼らの言うことを聞かなかった。
一四主はモーセに言われた、「パロの心はかたくなで、彼は民を去らせる
ことを拒んでいる。
一五あなたは、あすの朝、パロのところに行きなさい。

見よ、彼は水のところに出ている。あなたは、へびに変ったあのつえを手
に執り、ナイル川の岸に立って彼に会い、一六そして彼に言いなさい、『へ
ブルびとの神、主がわたしをあなたにつかわして言われます、「わたしの民
を去らせ、荒野で、わたしに仕えるようにさせよ」と。しかし今もなお、あ
なたが聞きいれようとされないので、一七主はこう仰せられます、「これに
よってわたしが主であることを、あなたは知るでしょう。見よ、わたしが
手にあるつえでナイル川の水を打つと、それは血に変るであろう。一八そ
して川の魚は死に、川は臭くなり、エジプトびとは川の水を飲むことをい
とうであろう」』と」。一九主はまたモーセに言われた、「あなたはアロンに
言いなさい、『あなたのつえを執って、手をエジプトの水の上、川の上、流
れの上、池の上、またそのすべての水たまりの上にさし伸べて、それを血
にならせなさい。エジプト全国にわたって、木の器、石の器にも、血が

あるようになるでしょう』と」。
二〇モーセとアロンは主の命じられたようにおこなった。すなわち、彼は
パロとその家来たちの目の前で、つえをあげてナイル川の水を打つと、川
の水は、ことごとく血に変った。二一それで川の魚は死に、川は臭くなり、
エジプトびとは川の水を飲むことができなくなった。そしてエジプト全国
にわたって血があった。二二エジプトの魔術師らも秘術をもって同じよう
におこなった。しかし、主の言われたように、パロの心はかたくなになり、
彼らの言うことを聞かなかった。二三パロは身をめぐらして家に入り、また
このことをも心に留めなかった。二四すべてのエジプトびとはナイル川の
水が飲めなかったので、飲む水を得ようと、川のまわりを掘った。二五主
がナイル川を打たれてのち七日を経た。

第八章一主はモーセに言われた、「あなたはパロのところに行って言いな
さい、『主はこう仰せられます、「わたしの民を去らせて、わたしに仕えさ

せなさい。二しかし、去らせることを拒むならば、見よ、わたしは、かえる
をもって、あなたの領土を、ことごとく撃つであろう。三ナイル川にかえ
るが群がり、のぼって、あなたの家、あなたの寝室にはいり、寝台にのぼ
り、あなたの家来と民の家にはいり、またあなたのかまどや、こね鉢には
いり、四あなたと、あなたの民と、すべての家来のからだに、はい上がるで
あろう」と』」。五主はモーセに言われた、「あなたはアロンに言いなさい、
『つえを持って、手を川の上、流れの上、池の上にさし伸べ、かえるをエ
ジプトの地にのぼらせなさい』と」。六アロンが手をエジプトの水の上にさ
し伸べたので、かえるはのぼってエジプトの地をおおった。七魔術師らも
秘術をもって同じように行い、かえるをエジプトの地にのぼらせた。
八パロはモーセとアロンを召して言った、「かえるをわたしと、わたしの
民から取り去るように主に願ってください。そのときわたしはこの民を去

らせて、主に犠牲をささげさせるでしょう」。九モーセはパロに言った、「あ
なたと、あなたの家来と、あなたの民のために、わたしがいつ願って、この
かえるを、あなたとあなたの家から断って、ナイル川だけにとどまらせる
べきか、きめてください」。一〇パロは言った、「明日」。モーセは言った、
「仰せのとおりになって、わたしたちの神、主に並ぶもののないことを、あ
なたが知られますように。一一そして、かえるはあなたと、あなたの家と、
あなたの家来と、あなたの民を離れてナイル川にだけとどまるでしょう」。
一二こうしてモーセとアロンはパロを離れて出た。モーセは主がパロにつ
かわされたかえるの事について、主に呼び求めたので、一三主はモーセの
ことばのようにされ、かえるは家から、庭から、また畑から死に絶えた。
一四これをひと山ひと山に積んだので、地は臭くなった。一五ところがパロ
は息つくひまのできたのを見て、主が言われたように、その心をかたくな

にして彼らの言うことを聞かなかった。
一六主はモーセに言われた、「あなたはアロンに言いなさい、『あなたのつ
えをさし伸べて地のちりを打ち、それをエジプトの全国にわたって、ぶよ
とならせなさい』と」。一七彼らはそのように行った。すなわちアロンは
そのつえをとって手をさし伸べ、地のちりを打ったので、ぶよは人と家畜
についた。すなわち、地のちりはみなエジプトの全国にわたって、ぶよと
なった。一八魔術師らも秘術をもって同じように行い、ぶよを出そうとし
たが、彼らにはできなかった。ぶよが人と家畜についたので、一九魔術師
らはパロに言った、「これは神の指です」。しかし主の言われたように、パ
ロの心はかたくなになって、彼らのいうことを聞かなかった。
二〇主はモーセに言われた、「あなたは朝早く起きてパロの前に立ちなさ
い。ちょうど彼は水のところに出ているから彼に言いなさい、『主はこう

仰せられる、「わたしの民を去らせて、わたしに仕えさせなさい。二一あな
たがわたしの民を去らせないならば、わたしは、あなたとあなたの家来と、
あなたの民とあなたの家とに、あぶの群れをつかわすであろう。エジプト
びとの家々は、あぶの群れで満ち、彼らの踏む地もまた、そうなるであろ
う。二二その日わたしは、わたしの民の住むゴセンの地を区別して、そこに
あぶの群れを入れないであろう。国の中でわたしが主であることをあなた
が知るためである。二三わたしはわたしの民とあなたの民の間に区別をお
く。このしるしは、あす起るであろう」と』。二四主はそのようにされたの
で、おびただしいあぶが、パロの家と、その家来の家と、エジプトの全国
にはいってきて、地はあぶの群れのために害をうけた。
二五そこで、パロはモーセとアロンを召して言った、「あなたがたは行って
この国の内で、あなたがたの神に犠牲をささげなさい」。二六モーセは言っ

た、「そうすることはできません。わたしたちはエジプトびとの忌むものを
犠牲として、わたしたちの神、主にささげるからです。もし、エジプトびと
の目の前で、彼らの忌むものを犠牲にささげるならば、彼らはわたしたち
を石で打たないでしょうか。二七わたしたちは三日の道のりほど、荒野には
いって、わたしたちの神、主に犠牲をささげ、主がわたしたちに命じられ
るようにしなければなりません」。二八パロは言った、「わたしはあなたがた
を去らせ、荒野で、あなたがたの神、主に犠牲をささげさせよう。ただあ
まり遠くへ行ってはならない。わたしのために祈願しなさい」。二九モーセ
は言った、「わたしはあなたのもとから出て行って主に祈願しましょう。あ
すあぶの群れがパロと、その家来と、その民から離れるでしょう。ただパ
ロはまた欺いて、民が主に犠牲をささげに行くのをとめないようにしてく
ださい」。三〇こうしてモーセはパロのもとを出て、主に祈願したので、三一

主はモーセの言葉のようにされた。すなわち、あぶの群れをパロと、その
家来と、その民から取り去られたので、一つも残らなかった。三二しかしパ
ロはこんどもまた、その心をかたくなにして民を去らせなかった。
第九章一主はモーセに言われた、「パロのもとに行って、彼に言いなさい、
『ヘブルびとの神、主はこう仰せられる、「わたしの民を去らせて、わたし
に仕えさせなさい。二あなたがもし彼らを去らせることを拒んで、なお彼
らを留めおくならば、三主の手は最も激しい疫病をもって、野にいるあ
なたの家畜、すなわち馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に臨むであろう。四
しかし、主はイスラエルの家畜と、エジプトの家畜を区別され、すべてイ
スラエルの人々に属するものには一頭も死ぬものがないであろう」と』」。
五主は、また、時を定めて仰せられた、「あす、主はこのことを国に行う
であろう」。六あくる日、主はこのことを行われたので、エジプトびとの

家畜はみな死んだ。しかし、イスラエルの人々の家畜は一頭も死ななかっ
た。七パロは人をつかわして見させたが、イスラエルの家畜は一頭も死ん
でいなかった。それでもパロの心はかたくなで、民を去らせなかった。
八主はモーセとアロンに言われた、「あなたがたは、かまどのすすを両手
いっぱい取り、それをモーセはパロの目の前で天にむかって、まき散らし
なさい。九それはエジプトの全国にわたって、細かいちりとなり、エジプ
ト全国で人と獣に付いて、うみの出るはれものとなるであろう」。一〇そ
こで彼らは、かまどのすすを取ってパロの前に立ち、モーセは天にむかっ
てこれをまき散らしたので、人と獣に付いて、うみの出るはれものとなっ
た。一一魔術師らは、はれもののためにモーセの前に立つことができなかっ
た。はれものが魔術師らと、すべてのエジプトびとに生じたからである。
一二しかし、主はパロの心をかたくなにされたので、彼は主がモーセに語

られたように、彼らの言うことを聞かなかった。
一三主はまたモーセに言われた、「朝早く起き、パロの前に立って、彼に
言いなさい、『ヘブルびとの神、主はこう仰せられる、「わたしの民を去ら
せて、わたしに仕えさせなさい。一四わたしは、こんどは、もろもろの災
を、あなたと、あなたの家来と、あなたの民にくだし、わたしに並ぶもの
が全地にないことを知らせるであろう。一五わたしがもし、手をさし伸べ、
疫病をもって、あなたと、あなたの民を打っていたならば、あなたは地か
ら断ち滅ぼされていたであろう。一六しかし、わたしがあなたをながらえ
させたのは、あなたにわたしの力を見させるため、そして、わたしの名が
全地に宣べ伝えられるためにほかならない。一七それに、あなたはなお、わ
たしの民にむかって、おのれを高くし、彼らを去らせようとしない。一八
ゆえに、あすの今ごろ、わたしは恐ろしく大きな雹を降らせるであろう。

それはエジプトの国が始まった日から今まで、かってなかったほどのもの
である。一九それゆえ、いま、人をやって、あなたの家畜と、あなたが野に
もっているすべてのものを、のがれさせなさい。人も獣も、すべて野に
あって家に帰らないものは降る雹に打たれて死ぬであろう』と」。二〇パ
ロの家来のうち、主の言葉をおそれる者は、そのしもべと家畜を家にのが
れさせたが、二一主の言葉を意にとめないものは、そのしもべと家畜を野に
残しておいた。

二二主はモーセに言われた、「あなたの手を天にむかってさし伸べ、エジプ
トの全国にわたって、エジプトの地にいる人と獣と畑のすべての青物の
上に雹を降らせなさい」。二三モーセが天にむかってつえをさし伸べると、
主は雷と雹をおくられ、火は地にむかって、はせ下った。こうして主
は、雹をエジプトの地に降らされた。二四そして雹が降り、雹の間に

火がひらめき渡った。雹は恐ろしく大きく、エジプト全国には、国をな
してこのかた、かつてないものであった。二五雹はエジプト全国にわたっ
て、すべて畑にいる人と獣を打った。雹はまた畑のすべての青物を打
ち、野のもろもろの木を折り砕いた。二六ただイスラエルの人々のいたゴ
センの地には、雹が降らなかった。

二七そこで、パロは人をつかわし、モーセとアロンを召して言った、「わ
たしはこんどは罪を犯した。主は正しく、わたしと、わたしの民は悪い。
二八主に祈願してください。この雷と雹はもうじゅうぶんです。わたし
はあなたがたを去らせます。もはやとどまらなくてもよろしい」。二九モー
セは彼に言った、「わたしは町を出ると、すぐ、主にむかってわたしの手を
伸べひろげます。すると雷はやみ、雹はもはや降らなくなり、あなたは、
地が主のものであることを知られましょう。三〇しかし、あなたとあなたの

家来たちは、なお、神なる主を恐れないことを、わたしは知っています」。
三一――亜麻と大麦は打ち倒された。大麦は穂を出し、亜麻は花が咲いて
いたからである。三二小麦とスペルタ麦はおくてであるため打ち倒されな
かった。――三三モーセはパロのもとを去り、町を出て、主にむかって手を
伸べひろげたので、雷と雹はやみ、雨は地に降らなくなった。三四とこ
ろがパロは雨と雹と雷がやんだのを見て、またも罪を犯し、心をかた
くなにした。彼も家来も、そうであった。三五すなわちパロは心をかたく
なにし、主がモーセによって語られたように、イスラエルの人々を去らせ
なかった。

第一〇章一そこで、主はモーセに言われた、「パロのもとに行きなさい。
わたしは彼の心とその家来たちの心をかたくなにした。これは、わたし
がこれらのしるしを、彼らの中に行うためである。二また、わたしがエジ

プトびとをあしらったこと、また彼らの中にわたしが行ったしるしを、あ
なたがたが、子や孫の耳に語り伝えるためである。そしてあなたがたは、
わたしが主であることを知るであろう」。
三モーセとアロンはパロのもとに行って彼に言った、「ヘブルびとの神、
主はこう仰せられる、『いつまで、あなたは、わたしに屈伏することを拒
むのですか。民を去らせて、わたしに仕えさせなさい。四もし、わたしの
民を去らせることを拒むならば、見よ、あす、わたしはいなごを、あなた
の領土にはいらせるであろう。五それは地のおもてをおおい、人が地を見
ることもできないほどになるであろう。そして雹を免れて、残されてい
るものを食い尽し、野にはえているあなたがたの木をみな食い尽すであろ
う。六またそれはあなたの家とあなたのすべての家来の家、および、すべ
てのエジプトびとの家に満ちるであろう。このようなことは、あなたの父

たちも、また、祖父たちも、彼らが地上にあった日から今日に至るまで、
かつて見たことのないものである』と」。そして彼は身をめぐらして、パロ
のもとを出て行った。
七パロの家来たちは王に言った、「いつまで、この人はわれわれのわなと
なるのでしょう。この人々を去らせ、彼らの神なる主に仕えさせては、ど
うでしょう。エジプトが滅びてしまうことに、まだ気づかれないのですか」。
八そこで、モーセとアロンは、また、パロのもとに召し出された。パロは彼
らに言った、「行って、あなたがたの神、主に仕えなさい。しかし、行くも
のはだれだれか」。九モーセは言った、「わたしたちは幼い者も、老いた者
も行きます。むすこも娘も携え、羊も牛も連れて行きます。わたしした
ちは主の祭を執り行わなければならないのですから」。一〇パロは彼らに
言った、「万一、わたしが、あなたがたに子供を連れてまで去らせるような

ことがあれば、主があなたがたと共にいますがよい。あなたがたは悪いた
くらみをしている。一一それはいけない。あなたがたは男だけ行って主に
仕えるがよい。それが、あなたがたの要求であった」。彼らは、ついにパ
ロの前から追い出された。

一二主はモーセに言われた、「あなたの手をエジプトの地の上にさし伸べ
て、エジプトの地にいなごをのぼらせ、地のすべての青物、すなわち、雹
が打ち残したものを、ことごとく食べさせなさい」。一三そこでモーセはエ
ジプトの地の上に、つえをさし伸べたので、主は終日、終夜、東風を地
に吹かせられた。朝となって、東風は、いなごを運んできた。一四いなご
はエジプト全国にのぞみ、エジプトの全領土にとどまり、その数がはなは
だ多く、このようないなごは前にもなく、また後にもないであろう。一五
いなごは地の全面をおおったので、地は暗くなった。そして地のすべての

青物と、雹の打ち残した木の実を、ことごとく食べたので、エジプト全国
にわたって、木にも畑の青物にも、緑の物とては何も残らなかった。一
六そこで、パロは、急いでモーセとアロンを召して言った、「わたしは、あ
なたがたの神、主に対し、また、あなたがたに対して罪を犯しました。一
七それで、どうか、もう一度だけ、わたしの罪をゆるしてください。そし
てあなたがたの神、主に祈願して、ただ、この死をわたしから離れさせて
ください」。一八そこで彼はパロのところから出て、主に祈願したので、一
九主は、はなはだ強い西風に変らせ、いなごを吹き上げて、これを紅海に
追いやられたので、エジプト全土には一つのいなごも残らなかった。二〇し
かし、主がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエルの人々を
去らせなかった。

二一主はまたモーセに言われた、「天にむかってあなたの手をさし伸べ、

エジプトの国に、くらやみをこさせなさい。そのくらやみは、さわれるほど
である」。二二モーセが天にむかって手をさし伸べたので、濃いくらやみは、
エジプト全国に臨み三日に及んだ。二三三日の間、人々は互に見ること
もできず、まただれもその所から立つ者もなかった。しかし、イスラエル
の人々には、みな、その住む所に光があった。二四そこでパロはモーセ
を召して言った、「あなたがたは行って主に仕えなさい。あなたがたの子供
も連れて行ってもよろしい。ただ、あなたがたの羊と牛は残して置きなさ
い」。二五しかし、モーセは言った、「あなたは、また、わたしたちの神、主
にささげる犠牲と燔祭の物をも、わたしたちにくださらなければなりませ
ん。二六わたしたちは家畜も連れて行きます。ひずめ一つも残しません。わ
たしたちは、そのうちから取って、わたしたちの神、主に仕えねばなりま
せん。またわたしたちは、その場所に行くまでは、何をもって、主に仕え

るべきかを知らないからです」。二七けれども、主がパロの心をかたくなに
されたので、パロは彼らを去らせようとしなかった。二八それでパロはモー
セに言った、「わたしの所から去りなさい。心して、わたしの顔は二度と
見てはならない。わたしの顔を見る日には、あなたの命はないであろう」。
二九モーセは言った、「よくぞ仰せられました。わたしは、二度と、あなた
の顔を見ないでしょう」。

第一一章 一主はモーセに言われた、「わたしは、なお一つの災を、パロ
とエジプトの上にくだし、その後、彼はあなたがたをここから去らせるであ
ろう。彼が去らせるとき、彼はあなたがたを、ことごとくここから追い出す
であろう。二あなたは民の耳に語って、男は隣の男から、女は隣の
女から、それぞれ銀の飾り、金の飾りを請い求めさせなさい」。三主は民
にエジプトびとの好意を得させられた。またモーセその人は、エジプトの

国で、パロの家来たちの目と民の目とに、はなはだ大いなるものと見えた。
四モーセは言った、「主はこう仰せられる、『真夜中ごろ、わたしはエジ
プトの中へ出て行くであろう。五エジプトの国のうちのういごは、位に座
するパロのういごをはじめ、ひきうすの後にいる、はしためのういごに至
るまで、みな死に、また家畜のういごもみな死ぬであろう。六そしてエジプ
ト全国に大いなる叫びが起るであろう。このようなことはかつてなく、ま
た、ふたたびないであろう』と。七しかし、すべて、イスラエルの人々にむ
かっては、人にむかっても、獣にむかっても、犬さえその舌を鳴らさない
であろう。これによって主がエジプトびととイスラエルびととの間の区別
をされるのを、あなたがたは知るであろう。八これらのあなたの家来たち
は、みな、わたしのもとに下ってきて、ひれ伏して言うであろう、『あなた
もあなたに従う民もみな出て行ってください』と。その後、わたしは出て

行きます」。彼は激しく怒ってパロのもとから出て行った。九主はモーセに
言われた、「パロはあなたがたの言うことを聞かないであろう。それゆえ、
わたしはエジプトの国に不思議を増し加えるであろう」。
一〇モーセとアロンは、すべてこれらの不思議をパロの前に行ったが、主
がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエルの人々をその国か
ら去らせなかった。

第一二章一主はエジプトの国で、モーセとアロンに告げて言われた、二
「この月をあなたがたの初めの月とし、これを年の正月としなさい。三あ
なたがたはイスラエルの全会衆に言いなさい、『この月の十日におのおの、
その父の家ごとに小羊を取らなければならない。すなわち、一家族に小羊
一頭を取らなければならない。四もし家族が少なくて一頭の小羊を食べき
れないときは、家のすぐ隣の人と共に、人数に従って一頭を取り、おの

おの食べるところに応じて、小羊を見計らわなければならない。五小羊は
傷のないもので、一歳の雄でなければならない。羊またはやぎのうちか
ら、これを取らなければならない。六そしてこの月の十四日まで、これを
守って置き、イスラエルの会衆はみな、夕暮にこれをほふり、七その血
を取り、小羊を食する家の入口の二つの柱と、かもいにそれを塗らなけ
ればならない。八そしてその夜、その肉を火に焼いて食べ、種入れぬパン
と苦菜を添えて食べなければならない。九生でも、水で煮ても、食べては
ならない。火に焼いて、その頭を足と内臓と共に食べなければならない。
一〇朝までそれを残しておいてはならない。朝まで残るものは火で焼きつ
くさなければならない。一一あなたがたは、こうして、それを食べなければ
ならない。すなわち腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、
急いでそれを食べなければならない。これは主の過越である。一二その夜

わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国におる人と獣との、すべ
てのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであろう。
わたしは主である。一三その血はあなたがたのおる家々で、あなたがたの
ために、しるしとなり、わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越
すであろう。わたしがエジプトの国を撃つ時、災が臨んで、あなたがた
を滅ぼすことはないであろう。
一四この日はあなたがたに記念となり、あなたがたは主の祭としてこれ
を守り、代々、永久の定めとしてこれを守らなければならない。一五七日
の間あなたがたは種入れぬパンを食べなければならない。その初めの日
に家からパン種を取り除かなければならない。第一日から第七日までに、
種を入れたパンを食べる人はみなイスラエルから断たれるであろう。一六か
つ、あなたがたは第一日に聖会を、また第七日に聖会を開かなければなら

ない。これらの日には、なんの仕事もしてはならない。ただ、おのおのの食
べものだけは作ることができる。一七あなたがたは、種入れぬパンの祭を
守らなければならない。ちょうど、この日、わたしがあなたがたの軍勢を
エジプトの国から導き出したからである。それゆえ、あなたがたは代々、
永久の定めとして、その日を守らなければならない。一八正月に、その
月の十四日の夕方に、あなたがたは種入れぬパンを食べ、その月の二十一
日の夕方まで続けなければならない。一九七日の間、家にパン種を置いて
はならない。種を入れたものを食べる者は、寄留の他国人であれ、国に生
れた者であれ、すべて、イスラエルの会衆から断たれるであろう。二〇あ
なたがたは種を入れたものは何も食べてはならない。すべてあなたがたの
すまいにおいて種入れぬパンを食べなければならない』」。

二一そこでモーセはイスラエルの長老をみな呼び寄せて言った、「あな

たがたは急いで家族ごとに一つの小羊を取り、その過越の獣をほふらな
ければならない。二二また一束のヒソプを取って鉢の血に浸し、鉢の血を、
かもいと入口の二つの柱につけなければならない。朝まであなたがたは、
ひとりも家の戸の外に出てはならない。二三主が行き巡ってエジプトびと
を撃たれるとき、かもいと入口の二つの柱にある血を見て、主はその入口
を過ぎ越し、滅ぼす者が、あなたがたの家にはいって、撃つのを許されな
いであろう。二四あなたがたはこの事を、あなたと子孫のための定めとし
て、永久に守らなければならない。二五あなたがたは、主が約束されたよ
うに、あなたがたに賜る地に至るとき、この儀式を守らなければならない。
二六もし、あなたがたの子供たちが『この儀式はどんな意味ですか』と問う
ならば、二七あなたがたは言いなさい、『これは主の過越の犠牲である。エ
ジプトびとを撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ

越して、われわれの家を救われたのである』。民はこのとき、伏して礼拝
した。
二八イスラエルの人々は行ってそのようにした。すなわち主がモーセと
アロンに命じられたようにした。
二九夜中になって主はエジプトの国の、すべてのういご、すなわち位に
座するパロのういごから、地下のひとやにおる捕虜のういごにいたるまで、
また、すべての家畜のういごを撃たれた。三〇それでパロとその家来およ
びエジプトびとはみな夜のうちに起きあがり、エジプトに大いなる叫びが
あった。死人のない家がなかったからである。三一そこでパロは夜のうち
にモーセとアロンを呼び寄せて言った、「あなたがたとイスラエルの人々
は立って、わたしの民の中から出て行くがよい。そしてあなたがたの言う
ように、行って主に仕えなさい。三二あなたがたの言うように羊と牛とを

取って行きなさい。また、わたしを祝福しなさい」。
三三こうしてエジプトびとは民をせき立てて、すみやかに国を去らせよう
とした。彼らは「われわれはみな死ぬ」と思ったからである。三四民はま
だパン種を入れない練り粉を、こばちのまま着物に包んで肩に負った。三
五そしてイスラエルの人々はモーセの言葉のようにして、エジプトびとか
ら銀の飾り、金の飾り、また衣服を請い求めた。三六主は民にエジプトび
との情を得させ、彼らの請い求めたものを与えさせられた。こうして彼
らはエジプトびとのものを奪い取った。

三七さて、イスラエルの人々はラメセスを出立してスコテに向かった。
女と子供を除いて徒歩の男子は約六十万人であった。三八また多くの入り
混じった群衆および羊、牛など非常に多くの家畜も彼らと共に上った。
三九そして彼らはエジプトから携えて出た練り粉をもって、種入れぬパン

の菓子を焼いた。まだパン種を入れていなかったからである。それは彼らがエジプトから追い出されて滞ることができず、また、何の食料をも整えていなかったからである。

四〇イスラエルの人々がエジプトに住んでいた間は、四百三十年であった。四一四百三十年の終りとなって、ちょうどその日に、主の全軍はエジプトの国を出た。四二これは彼らをエジプトの国から導き出すために主が寝ずの番をされた夜であった。ゆえにこの夜、すべてのイスラエルの人々は代々、主のために寝ずの番をしなければならない。

四三主はモーセとアロンとに言われた、「過越の祭の定めは次のとおりである。すなわち、異邦人はだれもこれを食べてはならない。四四しかし、おのおのが金で買ったしもべは、これに割礼を行ってのち、これを食べさせることができる。四五仮ずまいの者と、雇人とは、これを食べてはなら

ない。四六ひとつの家でこれを食べなければならない。その肉を少しも家
の外に持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない。四七イス
ラエルの全会衆はこれを守らなければならない。四八寄留の外国人があ
なたのもとにとどまっていて、主に過越の祭を守ろうとするときは、そ
の男子はみな割礼を受けてのち、近づいてこれを守ることができる。そう
すれば彼は国に生れた者のようになるであろう。しかし、無割礼の者はだ
れもこれを食べてはならない。四九この律法は国に生れたものにも、あな
たがたのうちに寄留している外国人にも同一である」。
五〇イスラエルの人々は、みなこのようにし、主がモーセとアロンに命
じられたようにした。五一ちょうどその日に、主はイスラエルの人々を、そ
の軍団に従ってエジプトの国から導き出された。

第一三章一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々のうちで、すべ

てのういご、すなわちすべて初めに胎を開いたものを、人であれ、獣で
あれ、みな、わたしのために聖別しなければならない。それはわたしのも
のである」。
三モーセは民に言った、「あなたがたは、エジプトから、奴隷の家から出
るこの日を覚えなさい。主が強い手をもって、あなたがたをここから導
き出されるからである。種を入れたパンを食べてはならない。四あなたが
たはアビブの月のこの日に出るのである。五主があなたに与えると、あな
たの先祖たちに誓われたカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ヒビびと、エ
ブスびとの地、乳と蜜との流れる地に、導き入れられる時、あなたはこ
の月にこの儀式を守らなければならない。六七日のあいだ種入れぬパンを
食べ、七日目には主に祭をしなければならない。七種入れぬパンを七日の
あいだ食べなければならない。種を入れたパンをあなたの所に置いては

ならない。また、あなたの地区のどこでも、あなたの所にパン種を置いて
はならない。八その日、あなたの子に告げて言いなさい、『これはわたしが
エジプトから出るときに、主がわたしになされたことのためである』。九そ
して、これを、手につけて、しるしとし、目の間に置いて記念とし、主の
律法をあなたの口に置かなければならない。主が強い手をもって、あなた
をエジプトから導き出されるからである。一〇それゆえ、あなたはこの定
めを年々その期節に守らなければならない。

一一主があなたとあなたの先祖たちに誓われたように、あなたをカナンび
との地に導いて、それをあなたに賜わる時、一二あなたは、すべて初めに
胎を開いた者、およびあなたの家畜の産むういごは、ことごとく主にささ
げなければならない。すなわち、それらの男性のものは主に帰せしめなけ
ればならない。一三また、すべて、ろばの、初めて胎を開いたものは、小羊

をもって、あがなわなければならない。もし、あがなわないならば、その首
を折らなければならない。あなたの子らのうち、すべて、男のういごは、
あがなわなければならない。一四後になって、あなたの子が『これはどんな
意味ですか』と問うならば、これに言わなければならない、『主が強い手を
もって、われわれをエジプトから、奴隷の家から導き出された。一五その
ときパロが、かたくなで、われわれを去らせなかったため、主はエジプトの
国のういごを、人のういごも家畜のういごも、ことごとく殺された。それ
ゆえ、初めて胎を開く男性のものはみな、主に犠牲としてささげるが、わ
たしの子供のうちのういごは、すべてあがなうのである』。一六そして、これ
を手につけて、しるしとし、目の間に置いて覚えとしなければならない。
主が強い手をもって、われわれをエジプトから導き出されたからである」。
一七さて、パロが民を去らせた時、ペリシテびとの国の道は近かったが、

神は彼らをそれに導かれなかった。民が戦いを見れば悔いてエジプトに
帰るであろうと、神は思われたからである。一八神は紅海に沿う荒野の道
に、民を回らされた。イスラエルの人々は武装してエジプトの国を出て、
上った。一九そのときモーセはヨセフの遺骸を携えていた。ヨセフが、「神
は必ずあなたがたを顧みられるであろう。そのとき、あなたがたは、わ
たしの遺骸を携えて、ここから上って行かなければならない」と言って、
イスラエルの人々に固く誓わせたからである。二〇こうして彼らは更にス
コテから進んで、荒野の端にあるエタムに宿営した。二一主は彼らの前に
行かれ、昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らを
照し、昼も夜も彼らを進み行かせられた。二二昼は雲の柱、夜は火の柱
が、民の前から離れなかった。

第一四章 一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に告げ、引き返

して、ミグドルと海との間にあるピハヒロテの前、バアルゼポンの前に
宿営させなさい。あなたがたはそれにむかって、海のかたわらに宿営し
なければならない。三パロはイスラエルの人々について、『彼らはその地で
迷っている。荒野は彼らを閉じ込めてしまった』と言うであろう。四わた
しがパロの心をかたくなにするから、パロは彼らのあとを追うであろう。
わたしはパロとそのすべての軍勢を破って誉を得、エジプトびとにわた
しが主であることを知らせるであろう」。彼らはそのようにした。
五民の逃げ去ったことが、エジプトの王に伝えられたので、パロとその
家来たちとは、民に対する考えを変えて言った、「われわれはなぜこのよ
うにイスラエルを去らせて、われわれに仕えさせないようにしたのであろ
う」。六それでパロは戦車を整え、みずからその民を率い、七また、えり
抜きの戦車六百と、エジプトのすべての戦車およびすべての指揮者たちを

率いた。八主がエジプトの王パロの心をかたくなにされたので、彼はイス
ラエルの人々のあとを追った。イスラエルの人々は意気揚々と出たのであ
る。九エジプトびとは彼らのあとを追い、パロのすべての馬と戦車および
その騎兵と軍勢とは、バアルゼポンの前にあるピハヒロテのあたりで、海
のかたわらに宿営している彼らに追いついた。

一〇パロが近寄った時、イスラエルの人々は目を上げてエジプトびとが
彼らのあとに進んできているのを見て、非常に恐れた。そしてイスラエル
の人々は主にむかって叫び、一一かつモーセに言った、「エジプトに墓がな
いので、荒野で死なせるために、わたしたちを携え出したのですか。なぜ
わたしたちをエジプトから導き出して、こんなにするのですか。一二わた
したちがエジプトであなたに告げて、『わたしたちを捨てておいて、エジプ
トびとに仕えさせてください』と言ったのは、このことではありませんか。

荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかったの
です」。一三モーセは民に言った、「あなたがたは恐れてはならない。かた
く立って、主がきょう、あなたがたのためになされる救を見なさい。きょ
う、あなたがたはエジプトびとを見るが、もはや永久に、二度と彼らを見
ないであろう。一四主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは
黙していなさい」。一五主はモーセに言われた、「あなたは、なぜわたしにむ
かって叫ぶのか。イスラエルの人々に語って彼らを進み行かせなさい。一
六あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエル
の人々に海の中のかわいた地を行かせなさい。一七わたしがエジプトびと
の心をかたくなにするから、彼らはそのあとを追ってはいるであろう。こ
うしてわたしはパロとそのすべての軍勢および戦車と騎兵とを打ち破って
誉を得よう。一八わたしがパロとその戦車とその騎兵とを打ち破って誉

を得るとき、エジプトびとはわたしが主であることを知るであろう」。
一九このとき、イスラエルの部隊の前に行く神の使は移って彼らのうし
ろに行った。雲の柱も彼らの前から移って彼らのうしろに立ち、二〇エジ
プトびとの部隊とイスラエルびとの部隊との間にきたので、そこに雲とや
みがあり夜もすがら、かれとこれと近づくことなく、夜がすぎた。
二一モーセが手を海の上にさし伸べたので、主は夜もすがら強い東風
をもって海を退かせ、海を陸地とされ、水は分かれた。二二イスラエルの
人々は海の中のかわいた地を行ったが、水は彼らの右と左に、かきと
なった。二三エジプトびとは追ってきて、パロのすべての馬と戦車と騎兵と
は、彼らのあとについて海の中にはいった。二四暁の更に、主は火と雲
の柱のうちからエジプトびとの軍勢を見おろして、エジプトびとの軍勢
を乱し、二五その戦車の輪をきしらせて、進むのに重くされたので、エジ

プトびとは言った、「われわれはイスラエルを離れて逃げよう。主が彼らの
ためにエジプトびとと戦う」。
二六そのとき主はモーセに言われた、「あなたの手を海の上にさし伸べて、
水をエジプトびとと、その戦車と騎兵との上に流れ返らせなさい」。二七
モーセが手を海の上にさし伸べると、夜明けになって海はいつもの流れに
返り、エジプトびとはこれにむかって逃げたが、主はエジプトびとを海の中
に投げ込まれた。二八水は流れ返り、イスラエルのあとを追って海にはいっ
た戦車と騎兵およびパロのすべての軍勢をおおい、ひとりも残らなかった。
二九しかし、イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行ったが、水は彼
らの右と左に、かきとなった。
三〇このように、主はこの日イスラエルをエジプトびとの手から救われ
た。イスラエルはエジプトびとが海べに死んでいるのを見た。三一イスラエ

ルはまた、主がエジプトびとに行われた大いなるみわざを見た。それで
民は主を恐れ、主とそのしもべモーセとを信じた。

第一五章

一そこでモーセとイスラエルの人々は、この歌を主にむかって
歌った。彼らは歌って言った、
「主にむかってわたしは歌おう、
彼は輝かしくも勝ちを得られた、
彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。
二主はわたしの力また歌、わたしの救となられた、
彼こそわたしの神、わたしは彼をたたえる、
彼はわたしの父の神、わたしは彼をあがめる。
三主はいくさびと、その名は主。
四彼はパロの戦車とその軍勢とを海に投げ込まれた、

そのすぐれた指揮者たちは紅海に沈んだ。
五大水は彼らをおおい、彼らは石のように淵に下った。
六主よ、あなたの右の手は 力 をもって栄光にかがやく、
主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕く。
七あなたは大いなる威光をもって、
あなたに立ちむかう者を打ち破られた。
あなたが怒りを発せられると、
彼らは、わらのように焼きつくされた。
八あなたの鼻の息によって水は積みかさなり、
流れは 堤 となって立ち、
大水は海のもなかに凝り固まった。
九敵は言った、『わたしは追い行き、追い着いて、

分捕物を分かち取ろう、
わたしの欲望を彼らによって満たそう、
つるぎを抜こう、わたしの手は彼らを滅ぼそう』。
一〇あなたが息を吹かれると、海は彼らをおおい、
彼らは鉛のように、大水の中に沈んだ。
一一主よ、神々のうち、だれがあなたに比べられようか、
だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの、
ほむべくして恐るべきもの、
くすしきわざを行うものであろうか。
一二あなたが右の手を伸べられると、
地は彼らをのんだ。
一三あなたは、あがなわれた民を恵みをもって導き、

み力(ちから)をもって、あなたの聖(せい)なるすまいに伴(ともな)われた。
一四もろもろの民(たみ)は聞(き)いて震(ふる)え、
ペリシテの住民(じゅうみん)は苦(くる)しみに襲(おそ)われた。
一五エドムの族長(ぞくちょう)らは、おどろき、
モアブの首長(しゅちょう)らは、わななき、
カナンの住民(じゅうみん)は、みな溶(と)け去(さ)った。
一六恐(おそ)れと、おののきとは彼(かれ)らに臨(のぞ)み、
み腕(うで)の大(おお)いなるゆえに、彼(かれ)らは石(いし)のように黙(もく)した、
主(しゅ)よ、あなたの民(たみ)の通(とお)りすぎるまで、
あなたが買(か)いとられた民(たみ)の通(とお)りすぎるまで。
一七あなたは彼(かれ)らを導(みちび)いて、
あなたの嗣業(しぎょう)の山(やま)に植(う)えられる。

主よ、これこそあなたのすまいとして、
みずから造られた所、
主よ、み手によって建てられた聖所。
一八主は永遠に統べ治められる」。
一九パロの馬が、その戦車および騎兵と共に海にはいると、主は海の水を
彼らの上に流れ返らされたが、イスラエルの人々は海の中のかわいた地を
行った。二〇そのとき、アロンの姉、女預言者ミリアムはタンバリンを手
に取り、女たちも皆タンバリンを取って、踊りながら、そのあとに従っ
て出てきた。二一そこでミリアムは彼らに和して歌った、
「主にむかって歌え、
彼は輝かしくも勝ちを得られた、
彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた」。

二二さて、モーセはイスラエルを紅海から旅立たせた。彼らはシュルの
荒野に入り、三日のあいだ荒野を歩いたが、水を得なかった。二三彼らはメ
ラに着いたが、メラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、その
所の名はメラと呼ばれた。二四ときに、民はモーセにつぶやいて言った、
「わたしたちは何を飲むのですか」。二五モーセは主に叫んだ。主は彼に一
本の木を示されたので、それを水に投げ入れると、水は甘くなった。
その所で主は民のために定めと、おきてを立てられ、彼らを試みて、
二六言われた、「あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、そ
の目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての
定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトびとに下した病を一つも
あなたに下さないであろう。わたしは主であって、あなたをいやすもので
ある」。

二七こうして彼らはエリムに着いた。そこには水の泉十二と、なつめや
しの木七十本があった。その所で彼らは水のほとりに宿営した。
第一六章一イスラエルの人々の全会衆はエリムを出発し、エジプトの
地を出て二か月目の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野に
きたが、二その荒野でイスラエルの人々の全会衆は、モーセとアロンにつ
ぶやいた。三イスラエルの人々は彼らに言った、「われわれはエジプトの地
で、肉のなべのかたわらに座し、飽きるほどパンを食べていた時に、主の
手にかかって死んでいたら良かった。あなたがたは、われわれをこの荒野
に導き出して、全会衆を餓死させようとしている」。
四そのとき主はモーセに言われた、「見よ、わたしはあなたがたのために、天
からパンを降らせよう。民は出て日々の分を日ごとに集めなければならな
い。こうして彼らがわたしの律法に従うかどうかを試みよう。五六日目

には、彼らが取り入れたものを調理すると、それは日ごとに集めるものの二
倍あるであろう」。六モーセとアロンは、イスラエルのすべての人々に言っ
た、「夕暮には、あなたがたは、エジプトの地からあなたがたを導き出さ
れたのが、主であることを知るであろう。七また、朝には、あなたがたは主
の栄光を見るであろう。主はあなたがたが主にむかってつぶやくのを聞か
れたからである。あなたがたは、いったいわれわれを何者として、われわ
れにむかってつぶやくのか」。八モーセはまた言った、「主は夕暮にはあな
たがたに肉を与えて食べさせ、朝にはパンを与えて飽き足らせられるであ
ろう。主はあなたがたが、主にむかってつぶやくつぶやきを聞かれたから
である。いったいわれわれは何者なのか。あなたがたのつぶやくのは、わ
れわれにむかってでなく、主にむかってである」。
九モーセはアロンに言った、「イスラエルの人々の全会衆に言いなさい、

『あなたがたは主の前に近づきなさい。主があなたがたのつぶやきを聞か
れたからである』と」。一〇それでアロンがイスラエルの人々の全会衆に
語ったとき、彼らが荒野の方を望むと、見よ、主の栄光が雲のうちに現
れていた。一一主はモーセに言われた、一二「わたしはイスラエルの人々の
つぶやきを聞いた。彼らに言いなさい、『あなたがたは夕には肉を食べ、朝
にはパンに飽き足りるであろう。そうしてわたしがあなたがたの神、主で
あることを知るであろう』と」。

一三夕べになると、うずらが飛んできて宿営をおおった。また、朝にな
ると、宿営の周囲に露が降りた。一四その降りた露がかわくと、荒野の面
には、薄いうろこのようなものがあり、ちょうど地に結ぶ薄い霜のようで
あった。一五イスラエルの人々はそれを見て互に言った、「これはなんであ
ろう」。彼らはそれがなんであるのか知らなかったからである。モーセは彼

らに言った、「これは主があなたがたの食物として賜わるパンである。一
六主が命じられるのはこうである、『あなたがたは、おのおのその食べると
ころに従ってそれを集め、あなたがたの人数に従って、ひとり一オメル
ずつ、おのおのその天幕におるもののためにそれを取りなさい』と」。一七
イスラエルの人々はそのようにして、ある者は多く、ある者は少なく集め
た。一八しかし、オメルでそれを計ってみると、多く集めた者にも余らず、
少なく集めた者にも不足しなかった。おのおのその食べるところに従っ
て集めていた。一九モーセは彼らに言った、「だれも朝までそれを残してお
いてはならない」。二〇しかし彼らはモーセに聞き従わないで、ある者は
朝までそれを残しておいたが、虫がついて臭くなった。モーセは彼らにむ
かって怒った。二一彼らは、おのおのその食べるところに従って、朝ごと
にそれを集めたが、日が熱くなるとそれは溶けた。

二二六日目には、彼らは二倍のパン、すなわちひとりに二オメルを集めた。
そこで、会衆の長たちは皆きて、モーセに告げたが、二三モーセは彼らに
言った、「主の語られたのはこうである、『あすは主の聖安息日で休みであ
る。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残っ
たものはみな朝までたくわえて保存しなさい』と」。二四彼らはモーセの命
じたように、それを朝まで保存したが、臭くならず、また虫もつかなかっ
た。二五モーセは言った、「きょう、それを食べなさい。きょうは主の安息日
であるから、きょうは野でそれを獲られないであろう。二六六日の間はそ
れを集めなければならない。七日目は安息日であるから、その日には無い
であろう」。二七ところが民のうちには、七日目に出て集めようとした者が
あったが、獲られなかった。二八そこで主はモーセに言われた、「あなたがた
は、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか。二九見よ、

主(しゅ)はあなたがたに安息日(あんそくにち)を与(あた)えられた。ゆえに六日目(かめ)には、ふつか分(ぶん)のパ
ンをあなたがたに賜(たま)わるのである。おのおのその所(ところ)にとどまり、七日目(なぬかめ)に
はその所(ところ)から出(で)てはならない」。三〇こうして民(たみ)は七日目(なぬかめ)に休(やす)んだ。
三一イスラエルの家(いえ)はその物(もの)の名(な)をマナと呼(よ)んだ。それはコエンドロの
実(み)のようで白(しろ)く、その味(あじ)は蜜(みつ)を入(い)れたせんべいのようであった。三二モー
セは言(い)った、「主(しゅ)の命(めい)じられることはこうである、『それを一オメルあなた
がたの子孫(しそん)のためにたくわえておきなさい。それはわたしが、あなたがたを
エジプトの地(ち)から導(みちび)き出(だ)した時(とき)、荒野(あらの)であなたがたに食(た)べさせたパンを彼(かれ)
らに見(み)させるためである』と」。三三そしてモーセはアロンに言(い)った「一つの
つぼを取(と)り、マナ一オメルをその中(なか)に入(い)れ、それを主(しゅ)の前(まえ)に置(お)いて、子孫(しそん)
のためにたくわえなさい」。三四そこで主(しゅ)がモーセに命(めい)じられたように、ア
ロンはそれをあかしの箱(はこ)の前(まえ)に置(お)いてたくわえた。三五イスラエルの人々(ひとびと)

は人の住む地に着くまで四十年の間マナを食べた。すなわち、彼らはカ
ナンの地の境に至るまでマナを食べた。三六 一オメルは一エパの十分の一
である。

第一七章 一 イスラエルの人々の全会衆は、主の命に従って、シンの
荒野を出発し、旅路を重ねて、レピデムに宿営したが、そこには民の飲
む水がなかった。二 それで、民はモーセと争って言った、「わたしたちに
飲む水をください」。モーセは彼らに言った、「あなたがたはなぜわたしと
争うのか、なぜ主を試みるのか」。三 民はその所で水にかわき、モーセ
につぶやいて言った、「あなたはなぜわたしたちをエジプトから導き出し
て、わたしたちを、子供や家畜と一緒に、かわきによって死なせようとする
のですか」。四 このときモーセは主に叫んで言った、「わたしはこの民をど
うすればよいのでしょう。彼らは、今にも、わたしを石で打ち殺そうとし

ています」。五主はモーセに言われた、「あなたは民の前に進み行き、イス
ラエルの長老たちを伴い、あなたがナイル川を打った、つえを手に取っ
て行きなさい。六見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つであ
ろう。あなたは岩を打ちなさい。水がそれから出て、民はそれを飲むこと
ができる」。モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのように行っ
た。七そして彼はその所の名をマッサ、またメリバと呼んだ。これはイス
ラエルの人々が争ったゆえ、また彼らが「主はわたしたちのうちにおら
れるかどうか」と言って主を試みたからである。

八ときにアマレクがきて、イスラエルとレピデムで戦った。九モーセは
ヨシュアに言った、「われわれのために人を選び、出てアマレクと戦いな
さい。わたしはあす神のつえを手に取って、丘の頂に立つであろう」。一
〇ヨシュアはモーセが彼に言ったようにし、アマレクと戦った。モーセと

アロンおよびホルは丘の頂に登った。一一モーセが手を上げているとイ
スラエルは勝ち、手を下げるとアマレクが勝った。一二しかしモーセの手が
重くなったので、アロンとホルが石を取って、モーセの足もとに置くと、彼
はその上に座した。そしてひとりはこちらに、ひとりはあちらにいて、モー
セの手をささえたので、彼の手は日没までさがらなかった。一三ヨシュア
は、つるぎにかけてアマレクとその民を打ち敗った。
一四主はモーセに言われた、「これを書物にしるして記念とし、それをヨ
シュアの耳に入れなさい。わたしは天が下からアマレクの記憶を完全に消
し去るであろう」。一五モーセは一つの祭壇を築いてその名を「主はわが旗」
と呼んだ。一六そしてモーセは言った、

「主の旗にむかって手を上げる、
主は世々アマレクと戦われる」。

第一八章
一さて、モーセのしゅうと、ミデアンの祭司エテロは、神がモー
セと、み民イスラエルとにされたすべての事、主がイスラエルをエジプトか
ら導き出されたことを聞いた。
二それでモーセのしゅうと、エテロは、さ
きに送り返されていたモーセの妻チッポラと、
三そのふたりの子とを連れ
てきた。そのひとりの名はゲルショムといった。モーセが、「わたしは外国
で寄留者となっている」と言ったからである。
四ほかのひとりの名はエリ
エゼルといった。「わたしの父の神はわたしの助けであって、パロのつるぎ
からわたしを救われた」と言ったからである。
五こうしてモーセのしゅう
と、エテロは、モーセの妻子を伴って、荒野に行き、神の山に宿営して
いるモーセの所にきた。
六その時、ある人がモーセに言った、「ごらんな
さい。あなたのしゅうと、エテロは、あなたの妻とそのふたりの子を連れ
て、あなたの所にこられます」。
七そこでモーセはしゅうとを出迎えて、身

をかがめ、彼に口づけして、互に安否を問い、共に天幕にはいった。八そ
してモーセは、主がイスラエルのために、パロとエジプトびとになされた
すべての事、道で出会ったすべての苦しみ、また主が彼らを救われたこと
を、しゅうとに物語ったので、九エテロは主がイスラエルをエジプトびと
の手から救い出して、もろもろの恵みを賜わったことを喜んだ。
一〇そしてエテロは言った、「主はほむべきかな。主はあなたがたをエジ
プトびとの手と、パロの手から救い出し、民をエジプトびとの手の下から
救い出された。一一今こそわたしは知った。実に彼らはイスラエルびとに
むかって高慢にふるまったが、主はあらゆる神々にまさって大いにいます
ことを」。一二そしてモーセのしゅうとエテロは燔祭と犠牲を神に供え、ア
ロンとイスラエルの長老たちもみなきて、モーセのしゅうとと共に神の
前で食事をした。

一三あくる日モーセは座して民をさばいたが、民は朝から晩まで、モー
セのまわりに立っていた。一四モーセのしゅうとは、彼がすべて民にしてい
ることを見て、言った、「あなたが民にしているこのことはなんですか。あ
なたひとりが座し、民はみな朝から晩まで、あなたのまわりに立っている
のはなぜですか」。一五モーセはしゅうとに言った、「民が神に伺おうとし
て、わたしの所に来るからです。一六彼らは事があれば、わたしの所に
きます。わたしは相互の間をさばいて、神の定めと判決を知らせるので
す」。一七モーセのしゅうとは彼に言った、「あなたのしていることは良くな
い。一八あなたも、あなたと一緒にいるこの民も、必ず疲れ果てるであろ
う。このことはあなたに重過ぎるから、ひとりですることができない。一
九今わたしの言うことを聞きなさい。わたしはあなたに助言する。どうか
神があなたと共にいますように。あなたは民のために神の前にいて、事件

を神に述べなさい。二〇あなたは彼らに定めと判決を教え、彼らの歩むべ
き道と、なすべき事を彼らに知らせなさい。二一また、すべての民のうち
から、有能な人で、神を恐れ、誠実で不義の利を憎む人を選び、それを民
の上に立てて、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長としなさ
い。二二平素は彼らに民をさばかせ、大事件はすべてあなたの所に持って
こさせ、小事件はすべて彼らにさばかせなさい。こうしてあなたを身軽に
し、あなたと共に彼らに、荷を負わせなさい。二三あなたが、もしこの事を
行い、神もまたあなたに命じられるならば、あなたは耐えることができ、
この民もまた、みな安んじてその所に帰ることができよう」。
二四モーセはしゅうとの言葉に従い、すべて言われたようにした。二五
すなわち、モーセはすべてのイスラエルのうちから有能な人を選んで、民
の上に長として立て、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長

とした。二六平素は彼らが民をさばき、むずかしい事件はモーセに持ってき
たが、小さい事件はすべて彼らみずからさばいた。二七こうしてモーセは
しゅうとを送り返したので、その国に帰って行った。

第一九章一イスラエルの人々は、エジプトの地を出て後三月目のその日
に、シナイの荒野にはいった。二すなわち彼らはレピデムを出立してシナイ
の荒野に入り、荒野に宿営した。イスラエルはその所で山の前に宿営
した。三さて、モーセが神のもとに登ると、主は山から彼を呼んで言われ
た、「このように、ヤコブの家に言い、イスラエルの人々に告げなさい、四
『あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼
に載せてわたしの所にこさせたことを見た。五それで、もしあなたがたが、
まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたが
たはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの

所有だからである。六あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また
聖なる民となるであろう』。これがあなたのイスラエルの人々に語るべき
言葉である」。
七それでモーセは行って民の長老たちを呼び、主が命じられたこれらの
言葉を、すべてその前に述べたので、八民はみな共に答えて言った、「われ
われは主が言われたことを、みな行います」。モーセは民の言葉を主に告
げた。九主はモーセに言われた、「見よ、わたしは濃い雲のうちにあって、
あなたに臨むであろう。それはわたしがあなたと語るのを民に聞かせて、
彼らに長くあなたを信じさせるためである」。
モーセは民の言葉を主に告げた。一〇主はモーセに言われた、「あなたは
民のところに行って、きょうとあす、彼らをきよめ、彼らにその衣服を洗わ
せ、一一三日目までに備えさせなさい。三日目に主が、すべての民の目の前

で、シナイ山に下るからである。一二あなたは民のために、周囲に境を設
けて言いなさい、『あなたがたは注意して、山に上らず、また、その境界に
触れないようにしなさい。山に触れる者は必ず殺されるであろう。一三手
をそれに触れてはならない。触れる者は必ず石で打ち殺されるか、射殺
されるであろう。獣でも人でも生きることはできない』。ラッパが長く響
いた時、彼らは山に登ることができる」と。一四そこでモーセは山から民
のところに下り、民をきよめた。彼らはその衣服を洗った。一五モーセは
民に言った、「三日目までに備えをしなさい。女に近づいてはならない」。
一六三日目の朝となって、かみなりと、いなずまと厚い雲とが、山の上に
あり、ラッパの音が、はなはだ高く響いたので、宿営におる民はみな震
えた。一七モーセが民を神に会わせるために、宿営から導き出したので、
彼らは山のふもとに立った。一八シナイ山は全山煙った。主が火のなかに

あって、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように
立ち上り、全山はげしく震えた。一九ラッパの音が、いよいよ高くなったと
き、モーセは語り、神は、かみなりをもって、彼に答えられた。二〇主はシ
ナイ山の頂に下られた。そして主がモーセを山の頂に召されたので、
モーセは登った。二一主はモーセに言われた、「下って行って民を戒めな
さい。民が押し破って、主のところにきて、見ようとし、多くのものが死
ぬことのないようにするためである。二二主に近づく祭司たちにもまた、そ
の身をきよめさせなさい。主が彼らを打つことのないようにするためであ
る」。二三モーセは主に言った、「民はシナイ山に登ることはできないでしょ
う。あなたがわたしたちを戒めて『山のまわりに境を設け、それをきよ
めよ』と言われたからです」。二四主は彼に言われた、「行け、下れ。そして
あなたはアロンと共に登ってきなさい。ただし、祭司たちと民とが、押し

破って主のところに登ることのないようにしなさい。主が彼らを打つこと
のないようにするためである」。二五モーセは民の所に下って行って彼ら
に告げた。

第二〇章

一神はこのすべての言葉を語って言われた。
二「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の
家から導き出した者である。
三あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。
四あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にある
もの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形
をも造ってはならない。五それにひれ伏してはならない。それに仕えては
ならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを
憎むものは、父の罪を子に報いて、三四代に及ぼし、六わたしを愛し、わ

たしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。
七あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、
み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。
八安息日を覚えて、これを聖とせよ。九六日のあいだ働いてあなたのす
べてのわざをせよ。一〇七日目はあなたの神、主の安息であるから、なん
のわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はし
ため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。一一主は
六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に
休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。
一二あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あ
なたが長く生きるためである。
一三あなたは殺してはならない。

一四あなたは姦淫してはならない。
一五あなたは盗んではならない。
一六あなたは隣人について、偽証してはならない。
一七あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、は
しため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」。
一八民は皆、かみなりと、いなずまと、ラッパの音と、山の煙っている
のとを見た。民は恐れおののき、遠く離れて立った。
一九彼らはモーセに
言った、「あなたがわたしたちに語ってください。わたしたちは聞き従い
ます。神がわたしたちに語られぬようにしてください。それでなければ、わ
たしたちは死ぬでしょう」。
二〇モーセは民に言った、「恐れてはならない。
神はあなたがたを試みるため、またその恐れをあなたがたの目の前にお
いて、あなたがたが罪を犯さないようにするために臨まれたのである」。

二一そこで、民は遠く離れて立ったが、モーセは神のおられる濃い雲に
近づいて行った。二二主はモーセに言われた、「あなたはイスラエルの人々
にこう言いなさい、『あなたがたは、わたしが天からあなたがたと語るのを
見た。二三あなたがたはわたしと並べて、何をも造ってはならない。銀の
神々も、金の神々も、あなたがたのために、造ってはならない。二四あな
たはわたしのために土の祭壇を築き、その上にあなたの燔祭、酬恩祭、
羊、牛をささげなければならない。わたしの名を覚えさせるすべての所
で、わたしはあなたに臨んで、あなたを祝福するであろう。二五あなたが
もしわたしに石の祭壇を造るならば、切り石で築いてはならない。あなた
がもし、のみをそれに当てるならば、それをけがすからである。二六あなた
は階段によって、わたしの祭壇に登ってはならない。あなたの隠し所が、
その上にあらわれることのないようにするためである』。

第二一章一これはあなたが彼らの前に示すべきおきてである。二あなた
がヘブルびとである奴隷を買う時は、六年のあいだ仕えさせ、七年目には
無償で自由の身として去らせなければならない。三彼がもし独身できたな
らば、独身で去らなければならない。もし妻を持っていたならば、その妻は
彼と共に去らなければならない。四もしその主人が彼に妻を与えて、彼に
男の子また女の子を産んだならば、妻とその子供は主人のものとなり、
彼は独身で去らなければならない。五奴隷がもし『わたしは、わたしの主人
と、わたしの妻と子供を愛します。わたしは自由の身となって去ることを
好みません』と明言するならば、六その主人は彼を神のもとに連れて行き、
戸あるいは柱のところに連れて行って、主人は、きりで彼の耳を刺し通
さなければならない。そうすれば彼はいつまでもこれに仕えるであろう。
七もし人がその娘を女奴隷として売るならば、その娘は男奴隷が去

るように去ってはならない。八彼女がもし彼女を自分のものと定めた主人
の気にいらない時は、その主人は彼女が、あがなわれることを、これに許
さなければならない。彼はこれを欺いたのであるから、これを他国の民に
売る権利はない。九彼がもし彼女を自分の子のものと定めるならば、これ
を娘のように扱わなければならない。一〇彼が、たとい、ほかに女をめ
とることがあっても、前の女に食物と衣服を与えることと、その夫婦の
道とを絶えさせてはならない。一一彼がもしこの三つを行わないならば、
彼女は金を償わずに去ることができる。

一二人を撃って死なせた者は、必ず殺されなければならない。一三しか
し、人がたくむことをしないのに、神が彼の手に人をわたされることのあ
る時は、わたしはあなたのために一つの所を定めよう。彼はその所への
がれることができる。一四しかし人がもし、ことさらにその隣人を欺いて

殺す時は、その者をわたしの祭壇からでも、捕えて行って殺さなければな
らない。
一五自分の父または母を撃つ者は、必ず殺されなければならない。
一六人をかどわかした者は、これを売っていても、なお彼の手にあって
も、必ず殺されなければならない。
一七自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない。
一八人が互に争い、そのひとりが石またはこぶしで相手を撃った時、
これが死なないで床につき、一九再び起きあがって、つえにすがり、外を
歩くようになるならば、これを撃った者は、ゆるされるであろう。ただそ
の仕事を休んだ損失を償い、かつこれにじゅうぶん治療させなければな
らない。
二〇もし人がつえをもって、自分の男奴隷または女奴隷を撃ち、その
手の下に死ぬならば、必ず罰せられなければならない。二一しかし、彼が

もし一日か、ふつか生き延びるならば、その人は罰せられない。奴隷は彼
の財産だからである。
二二もし人が互に争って、身ごもった女を撃ち、これに流産させる
ならば、ほかの害がなくとも、彼は必ずその女の夫の求める罰金を課
せられ、裁判人の定めるとおりに支払わなければならない。二三しかし、ほ
かの害がある時は、命には命、二四目には目、歯には歯、手には手、足
には足、二五焼き傷には焼き傷、傷には傷、打ち傷には打ち傷をもって償
わなければならない。
二六もし人が自分の男奴隷の片目、または女奴隷の片目を撃ち、これを
つぶすならば、その目のためにこれを自由の身として去らせなければなら
ない。二七また、もしその男奴隷の一本の歯、またはその女奴隷の一本
の歯を撃ち落すならば、その歯のためにこれを自由の身として去らせなけ
ればならない。

二八もし牛が男または女を突いて殺すならば、その牛は必ず石で撃
ち殺されなければならない。その肉は食べてはならない。しかし、その牛
の持ち主は罪がない。二九牛がもし以前から突く癖があって、その持ち主
が注意されても、これを守りおかなかったために、男または女を殺した
ならば、その牛は石で撃ち殺され、その持ち主もまた殺されなければなら
ない。三〇彼がもし、あがないの金を課せられたならば、すべて課せられた
ほどのものを、命の償いに支払わなければならない。三一男の子を突い
ても、女の子を突いても、この定めに従って処置されなければならない。
三二牛がもし男奴隷または女奴隷を突くならば、その主人に銀三十シケ
ルを支払わなければならない。またその牛は石で撃ち殺されなければなら
ない。

三三もし人が穴をあけたままに置き、あるいは穴を掘ってこれにおおいを

しないために、牛または、ろばがこれに落ち込むことがあれば、三四穴の持
ち主はこれを償い、金をその持ち主に支払わなければならない。しかし、
その死んだ獣は彼のものとなるであろう。
三五ある人の牛が、もし他人の牛を突いて殺すならば、彼らはその生き
ている牛を売って、その価を分け、またその死んだものをも分けなければ
ならない。三六あるいはその牛が以前から突く癖のあることが知られてい
るのに、その持ち主がこれを守りおかなかったならば、その人は必ずその
牛のために牛をもって償わなければならない。しかし、その死んだ獣は
彼のものとなるであろう。
第二二章一もし人が牛または羊を盗んで、これを殺し、あるいはこれを
売るならば、彼は一頭の牛のために五頭の牛をもって、一頭の羊のため
に四頭の羊をもって償わなければならない。三b彼は必ず償わなけれ

ばならない。もし彼に何もない時は、彼はその盗んだ物のために身を売られるであろう。四もしその盗んだ物がなお生きて、彼の手もとにあれば、それは牛、ろば、羊のいずれにせよ、これを二倍にして償わなければならない。

二もし盗びとが穴をあけてはいるのを見て、これを撃って殺したときは、その人には血を流した罪はない。三:a しかし日がのぼって後ならば、その人に血を流した罪がある。

五もし人が畑またはぶどう畑のものを食わせ、その家畜を放って他人の畑のものを食わせた時は、自分の畑の最も良い物と、ぶどう畑の最も良い物をもって、これを償わなければならない。

六もし火が出て、いばらに移り、積みあげた麦束、または立穂、または畑を焼いたならば、その火を燃やした者は、必ずこれを償わなければならない。

七もし人が金銭または物品の保管を隣人に託し、それが隣人の家から盗
まれた時、その盗びとが見つけられたならば、これを二倍にして償わせな
ければならない。
八もし盗びとが見つけられなければ、家の主人を神の前
に連れてきて、彼が隣人の持ち物に手をかけたかどうかを、確かめなけれ
ばならない。

九牛であれ、ろばであれ、羊であれ、衣服であれ、あるいはどんな失っ
た物であれ、それについて言い争いが起り『これがそれです』と言う者が
あれば、その双方の言い分を、神の前に持ち出さなければならない。そし
て神が有罪と定められる者は、それを二倍にしてその相手に償わなけれ
ばならない。

一〇もし人が、ろば、または牛、羊、またはどんな家畜でも、それ
を隣人に預けて、それが死ぬか、傷つくか、あるいは奪い去られても、そ
れを見た者がなければ、
一一双方の間に、隣人の持ち物に手をかけなかっ

たという誓いが、主の前になされなければならない。そうすれば、持ち主
はこれを受け入れ、隣人は償うに及ばない。一二けれども、それがまさし
く自分の所から盗まれた時は、その持ち主に償わなければならない。一
三もしそれが裂き殺された時は、それを証拠として持って来るならば、そ
の裂き殺されたものは償うに及ばない。
一四もし人が隣人から家畜を借りて、それが傷つき、または死ぬ場合、そ
の持ち主がそれと共にいない時は、必ずこれを償わなければならない。
一五もしその持ち主がそれと共におれば、それを償うに及ばない。もしそ
れが賃借りしたものならば、その借賃をそれに当てなければならない。
一六もし人がまだ婚約しない処女を誘って、これと寝たならば、彼は必
ずこれに花嫁料を払って、妻としなければならない。一七もしその父がこ
れをその人に与えることをかたく拒むならば、彼は処女の花嫁料に当る

ほどの金を払わなければならない。
一八魔法使の女は、これを生かしておいてはならない。
一九すべて獣を犯す者は、必ず殺されなければならない。
二〇主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は、断ち滅ぼされなければ
ならない。
二一あなたは寄留の他国人を苦しめてはならない。また、これをしえた
げてはならない。あなたがたも、かつてエジプトの国で、寄留の他国人で
あったからである。
二二あなたがたはすべて寡婦、または孤児を悩ましては
ならない。
二三もしあなたが彼らを悩まして、彼らがわたしにむかって叫
ぶならば、わたしは必ずその叫びを聞くであろう。
二四そしてわたしの怒
りは燃えたち、つるぎをもってあなたがたを殺すであろう。あなたがたの
妻は寡婦となり、あなたがたの子供たちは孤児となるであろう。

二五あなたが、共におるわたしの民の貧しい者に金を貸す時は、これに
対して金貸しのようになってはならない。これから利子を取ってはならな
い。二六もし隣人の上着を質に取るならば、日の入るまでにそれを返さな
ければならない。二七これは彼の身をおおう、ただ一つの物、彼の膚のた
めの着物だからである。彼は何を着て寝ることができよう。彼がわたしに
むかって叫ぶならば、わたしはこれに聞くであろう。わたしはあわれみ深
いからである。
二八あなたは神をののしってはならない。また民の司をのろってはなら
ない。
二九あなたの豊かな穀物と、あふれる酒とをささげるに、ためらっては
ならない。
あなたのういごを、わたしにささげなければならない。三〇あなたはま
た、あなたの牛と羊をも同様にしなければならない。七日の間その母と

共に置いて、八日目にそれをわたしに、ささげなければならない。
三一あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない。あ
なたがたは、野で裂き殺されたものの肉を食べてはならない。それは犬に
投げ与えなければならない。

第二三章一あなたは偽りのうわさを言いふらしてはならない。あなた
は悪人と手を携えて、悪意のある証人になってはならない。二あなたは
多数に従って悪をおこなってはならない。あなたは訴訟において、多数
に従って片寄り、正義を曲げるような証言をしてはならない。三また貧
しい人をその訴訟において、曲げてかばってはならない。

四もし、あなたが敵の牛または、ろばの迷っているのに会う時は、必ず
これを彼の所に連れて行って、帰さなければならない。五もしあなたを憎
む者のろばが、その荷物の下に倒れ伏しているのを見る時は、これを見捨

てて置かないように気をつけ、必ずその人に手を貸して、これを起さなけ
ればならない。
六あなたは貧しい者の訴訟において、裁判を曲げてはならない。七あな
たは偽り事に遠ざからなければならない。あなたは罪のない者と正しい
者とを殺してはならない。わたしは悪人を義とすることはないからである。
八あなたは賄賂を取ってはならない。賄賂は人の目をくらまし、正しい者
の事件をも曲げさせるからである。
九あなたは寄留の他国人をしえたげてはならない。あなたがたはエジプ
トの国で寄留の他国人であったので、寄留の他国人の心を知っているか
らである。
一〇あなたは六年のあいだ、地に種をまき、その産物を取り入れること
ができる。一一しかし、七年目には、これを休ませて、耕さずに置かなけ
ればならない。そうすれば、あなたの民の貧しい者がこれを食べ、その残

りは野の獣が食べることができる。あなたのぶどう畑も、オリブ畑も
同様にしなければならない。
一二あなたは六日のあいだ、仕事をし、七日目には休まなければならない。
これはあなたの牛およびろばが休みを得、またあなたのはしための子およ
び寄留の他国人を休ませるためである。一三わたしが、あなたがたに言っ
たすべての事に心を留めなさい。他の神々の名を唱えてはならない。ま
た、これをあなたのくちびるから聞えさせてはならない。
一四あなたは年に三度、わたしのために祭を行わなければならない。一
五あなたは種入れぬパンの祭を守らなければならない。わたしが、あなた
に命じたように、アビブの月の定めの時に七日のあいだ、種入れぬパンを
食べなければならない。それはその月にあなたがエジプトから出たからであ
る。だれも、むなし手でわたしの前に出てはならない。一六また、あなたが

畑にまいて獲た物の勤労の初穂をささげる刈入れの祭と、あなたの勤労
の実を畑から取り入れる年の終りに、取入れの祭を行わなければなら
ない。一七男子はみな、年に三度、主なる神の前に出なければならない。
一八あなたはわたしの犠牲の血を、種を入れたパンと共にささげてはなら
ない。また、わたしの祭の脂肪を翌朝まで残して置いてはならない。
一九あなたの土地の初穂の最も良い物を、あなたの神、主の家に携え
てこなければならない。あなたは子やぎを、その母の乳で煮てはならない。
二〇見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、
わたしが備えた所に導かせるであろう。二一あなたはその前に慎み、そ
の言葉に聞き従い、彼にそむいてはならない。わたしの名が彼のうちにあ
るゆえに、彼はあなたがたのとがをゆるさないであろう。
二二しかし、もしあなたが彼の声によく聞き従い、すべてわたしが語る

ことを行うならば、わたしはあなたの敵を敵とし、あなたのあだをあだと
するであろう。
二三わたしの使はあなたの前に行って、あなたをアモリびと、ヘテびと、
ペリジびと、カナンびと、ヒビびと、およびエブスびとの所に導き、わた
しは彼らを滅ぼすであろう。二四あなたは彼らの神々を拝んではならない。
これに仕えてはならない。また彼らのおこないにならってはならない。あ
なたは彼らを全く打ち倒し、その石の柱を打ち砕かなければならない。
二五あなたがたの神、主に仕えなければならない。そうすれば、わたしはあ
なたがたのパンと水を祝し、あなたがたのうちから病を除き去るであろ
う。二六あなたの国のうちには流産する女もなく、不妊の女もなく、わ
たしはあなたの日の数を満ち足らせるであろう。二七わたしはあなたの先
に、わたしの恐れをつかわし、あなたが行く所の民を、ことごとく打ち敗

り、すべての敵に、その背をあなたの方へ向けさせるであろう。二八わたし
はまた、くまばちをあなたの先につかわすであろう。これはヒビびと、カ
ナンびと、およびヘテびとをあなたの前から追い払うであろう。二九しか
し、わたしは彼らを一年のうちには、あなたの前から追い払わないであろ
う。土地が荒れすたれ、野の獣が増して、あなたを害することのないため
である。三〇わたしは徐々に彼らをあなたの前から追い払うであろう。あ
なたは、ついにふえひろがって、この地を継ぐようになるであろう。三
一わたしは紅海からペリシテびとの海に至るまでと、荒野からユフラテ川
に至るまでを、あなたの領域とし、この地に住んでいる者をあなたの手
にわたすであろう。あなたは彼らをあなたの前から追い払うであろう。三
二あなたは彼ら、および彼らの神々と契約を結んではならない。三三彼ら
はあなたの国に住んではならない。彼らがあなたをいざなって、わたしに

対して罪を犯させることのないためである。もし、あなたが彼らの神に仕
えるならば、それは必ずあなたのわなとなるであろう」。
第二四章 一また、モーセに言われた、「あなたはアロン、ナダブ、アビウ
およびイスラエルの七十人の長老たちと共に、主のもとにのぼってきな
さい。そしてあなたがたは遠く離れて礼拝しなさい。二ただモーセひとり
が主に近づき、他の者は近づいてはならない。また、民も彼と共にのぼっ
てはならない」。
三モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民
はみな同音に答えて言った、「わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行
います」。四そしてモーセは主の言葉を、ことごとく書きしるし、朝はやく
起きて山のふもとに祭壇を築き、イスラエルの十二部族に従って十二の
柱を建て、五イスラエルの人々のうちの若者たちをつかわして、主に燔祭

をささげさせ、また酬恩祭として雄牛をささげさせた。六その時モーセは
その血の半ばを取って、鉢に入れ、また、その血の半ばを祭壇に注ぎかけ
た。七そして契約の書を取って、これを民に読み聞かせた。すると、彼ら
は答えて言った、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行い
ます」。八そこでモーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った、
「見よ、これは主がこれらのすべての言葉に基いて、あなたがたと結ばれ
る契約の血である」。

九こうしてモーセはアロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの七十人
の長老たちと共にのぼって行った。一〇そして、彼らがイスラエルの神を
見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごとき物があり、澄み渡るお
おぞらのようであった。一一神はイスラエルの人々の指導者たちを手にか
けられなかったので、彼らは神を見て、飲み食いした。

一二ときに主はモーセに言われた、「山に登り、わたしの所にきて、そこ
にいなさい。彼らを教えるために、わたしが律法と戒めとを書きしるした
石の板をあなたに授けるであろう」。一三そこでモーセは従者ヨシュアと
共に立ちあがり、モーセは神の山に登った。一四彼は長老たちに言った、
「わたしたちがあなたがたの所に帰って来るまで、ここで待っていなさい。
見よ、アロンとホルとが、あなたがたと共にいるから、事ある者は、だれ
でも彼らの所へ行きなさい」。

一五こうしてモーセは山に登ったが、雲は山をおおっていた。一六主の
栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日のあいだ、山をおおっていたが、
七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。一七主の栄光は山の頂で、
燃える火のようにイスラエルの人々の目に見えたが、一八モーセは雲の中
にはいって、山に登った。そしてモーセは四十日四十夜、山にいた。

第二五章 一 主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に告げて、わた
しのためにささげ物を携えてこさせなさい。すべて、心から喜んです
る者から、わたしにささげる物を受け取りなさい。三あなたがたが彼らか
ら受け取るべきささげ物はこれである。すなわち金、銀、青銅、四青糸、
紫糸、緋糸、亜麻の撚糸、やぎの毛糸、五あかね染の雄羊の皮、じゅごん
の皮、アカシヤ材、六ともし油、注ぎ油と香ばしい薫香のための香料、
七縞めのう、エポデと胸当にはめる宝石。八また、彼らにわたしのために
聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである。九すべてあ
なたに示す幕屋の型および、そのもろもろの器の型に従って、これを造
らなければならない。
一〇彼らはアカシヤ材で箱を造らなければならない。長さは二キュビト
半、幅は一キュビト半、高さは一キュビト半。一一あなたは純金でこれ

をおおわなければならない。すなわち内外ともにこれをおおい、その上の
周囲に金の飾り縁を造らなければならない。
一二また金の環四つを鋳て、
その四すみに取り付けなければならない。すなわち二つの環をこちら側に、
二つの環をあちら側に付けなければならない。
一三またアカシヤ材のさお
を造り、金でこれをおおわなければならない。
一四そしてそのさおを箱の
側面の環に通し、それで箱をかつがなければならない。
一五さおは箱の環
に差して置き、それを抜き放してはならない。
一六そしてその箱に、わた
しがあなたに与えるあかしの板を納めなければならない。
一七また純金の
贖罪所を造らなければならない。長さは二キュビト半、幅は一キュビト
半。
一八また二つの金のケルビムを造らなければならない。これを打物造
りとし、贖罪所の両端に置かなければならない。
一九一つのケルブをこの
端に、一つのケルブをかの端に造り、ケルビムを贖罪所の一部としてその

両端に造らなければならない。二〇ケルビムは翼を高く伸べ、その翼を
もって贖罪所をおおい、顔は互にむかい合い、ケルビムの顔は贖罪所
にむかわなければならない。二一あなたは贖罪所を箱の上に置き、箱の中
にはわたしが授けるあかしの板を納めなければならない。二二その所でわ
たしはあなたに会い、贖罪所の上から、あかしの箱の上にある二つのケ
ルビムの間から、イスラエルの人々のために、わたしが命じようとするも
ろもろの事を、あなたに語るであろう。

二三あなたはまたアカシヤ材の机を造らなければならない。長さは二
キュビト、幅は一キュビト、高さは一キュビト半。二四純金でこれをおお
い、周囲に金の飾り縁を造り、二五またその周囲に手幅の桟を造り、その
桟の周囲に金の飾り縁を造らなければならない。二六また、そのために金
の環四つを造り、その四つの足のすみ四か所にその環を取り付ければ

ならない。二七環は棧のわきに付けて、机をかつぐさおを入れる所とし
なければならない。二八またアカシヤ材のさおを造り、金でこれをおおい、
それをもって、机をかつがなければならない。二九また、その皿、乳香
を盛る杯および灌祭を注ぐための瓶と鉢を造り、これらは純金で造らな
ければならない。三〇そして机の上には供えのパンを置いて、常にわたし
の前にあるようにしなければならない。

三一また純金の燭台を造らなければならない。燭台は打物造りとし、
その台、幹、萼、節、花を一つに連ならせなければならない。三二また六
つの枝をそのわきから出させ、燭台の三つの枝をこの側から、燭台の三
つの枝をかの側から出させなければならない。三三あめんどうの花の形を
した三つの萼が、それぞれ節と花をもって一つの枝にあり、また、あめん
どうの花の形をした三つの萼が、それぞれ節と花をもってほかの枝にあ

るようにし、燭台から出る六つの枝を、みなそのようにしなければなら
ない。三四また、燭台の幹には、あめんどうの花の形をした四つの萼を
付け、その萼にはそれぞれ節と花をもたせなさい。三五すなわち二つの枝
の下に一つの節を取り付け、次の二つの枝の下に一つの節を取り付け、更
に次の二つの枝の下に一つの節を取り付け、燭台の幹から出る六つの枝
に、みなそのようにしなければならない。三六それらの節と枝を一つに連
ね、ことごとく純金の打物造りにしなければならない。三七また、それの
ともしび皿を七つ造り、そのともしび皿に火をともして、その前方を照さ
せなければならない。三八その芯切りばさみと、芯取り皿は純金で造らな
ければならない。三九すなわち純金一タラントで燭台と、これらのもろ
もろの器とが造られなければならない。四〇そしてあなたが山で示された
型に従い、注意してこれを造らなければならない。

第二六章一あなたはまた十枚の幕をもって幕屋を造らなければならない。
すなわち亜麻の撚糸、青糸、紫糸、緋糸で幕を作り、巧みなわざをもっ
て、それにケルビムを織り出さなければならない。二幕の長さは、おのお
の二十八キュビト、幕の幅は、おのおの四キュビトで、幕は皆同じ寸法で
なければならない。三その幕五枚を互に連ね合わせ、また他の五枚の幕
をも互に連ね合わせなければならない。四その一連の端にある幕の縁に
青色の乳をつけ、また他の一連の端にある幕の縁にもそのようにしなけれ
ばならない。五あなたは、その一枚の幕に乳五十をつけ、また他の一連の
幕の端にも乳五十をつけ、その乳を互に相向かわせなければならない。六
あなたはまた金の輪五十を作り、その輪で幕を互に連ね合わせて一つの
幕屋にしなければならない。
七また幕屋をおおう天幕のためにやぎの毛糸で幕を作らなければならな

い。すなわち幕十一枚を作り、八その一枚の幕の長さは三十キュビト、そ
の一枚の幕の幅は四キュビトで、その十一枚の幕は同じ寸法でなければな
らない。九そして、その幕五枚を一つに連ね合わせ、またその幕六枚を一
つに連ね合わせて、その六枚目の幕を天幕の前で折り重ねなければならな
い。一〇またその一連の端にある幕の縁に乳五十をつけ、他の一連の幕の
縁にも乳五十をつけなさい。

一一そして青銅の輪五十を作り、その輪を乳に掛け、その天幕を連ね合
わせて一つにし、一二その天幕の幕の残りの垂れる部分、すなわちその残
りの半幕を幕屋のうしろに垂れさせなければならない。一三そして天幕の
幕のたけで余るものの、こちらのキュビトと、あちらのキュビトとは、幕屋
をおおうように、その両側のこちらとあちらとに垂れさせなければならな
い。一四また、あかね染めの雄羊の皮で天幕のおおいと、じゅごんの皮で

その上にかけるおおいとを造らなければならない。
一五あなたは幕屋のために、アカシヤ材で立枠を造らなければならない。
一六枠の長さを十キュビト、枠の幅を一キュビト半とし、一七枠ごとに二つ
の柄を造って、かれとこれとを食い合わさせ、幕屋のすべての枠にこのよう
にしなければならない。一八あなたは幕屋のために枠を造り、南側のため
に枠二十とし、一九その二十の枠の下に銀の座四十を造って、この枠の下
に、その二つの柄のために二つの座を置き、かの枠の下にもその二つの柄
のために二つの座を置かなければならない。二〇また幕屋の他の側、すなわ
ち北側のためにも枠二十を造り、二一その銀の座四十を造って、この枠の
下に、二つの座を置き、かの枠の下にも二つの座を置かなければならない。
二二また幕屋のうしろ、すなわち西側のために枠六つを造り、二三幕屋のう
しろの二つのすみのために枠二つを造らなければならない。二四これらは

下で重なり合い、同じくその頂でも第一の環まで重なり合うようにし、
その二つともそのようにしなければならない。それらは二つのすみのため
に設けるものである。二五こうしてその枠は八つ、その銀の座は十六、この
枠の下に二つの座、かの枠の下にも二つの座を置かなければならない。二
六またアカシヤ材で横木を造らなければならない。すなわち幕屋のこの側
の枠のために五つ、二七また幕屋のかの側の枠のために横木五つ、幕屋のう
しろの西側の枠のために横木五つを造り、二八枠のまん中にある中央の
横木は端から端まで通るようにしなければならない。二九そしてその枠を
金でおおい、また横木を通すその環を金で造り、また、その横木を金でお
おわなければならない。三〇こうしてあなたは山で示された様式に従って
幕屋を建てなければならない。

三一また青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で垂幕を作り、巧みなわざを

もって、それにケルビムを織り出さなければならない。三二そして金でおおっ
た四つのアカシヤ材の柱の金の鉤にこれを掛け、その柱は四つの銀の座
の上にすえなければならない。三三その垂幕の輪を鉤に掛け、その垂幕
の内にあかしの箱を納めなさい。その垂幕はあなたがたのために聖所と
至聖所とを隔て分けるであろう。三四また至聖所にあるあかしの箱の上に
贖罪所を置かなければならない。三五そしてその垂幕の外に机を置き、
幕屋の南側に、机に向かい合わせて燭台を置かなければならない。た
だし机は北側に置かなければならない。

三六あなたはまた天幕の入口のために青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸
で、色とりどりに織ったとばりを作らなければならない。三七あなたはその
とばりのためにアカシヤ材の柱五つを造り、これを金でおおい、その鉤
を金で造り、またその柱のために青銅の座五つを鋳て造らなければなら

ない。
第二七章一あなたはまたアカシヤ材で祭壇を造らなければならない。長
さ五キュビト、幅五キュビトの四角で、高さは三キュビトである。二その四
すみの上にその一部としてそれの角を造り、青銅で祭壇をおおわなければ
ならない。三また灰を取るつぼ、十能、鉢、肉叉、火皿を造り、その器
はみな青銅で造らなければならない。四また祭壇のために青銅の網細工の
格子を造り、その四すみで、網の上に青銅の環を四つ取り付けなければな
らない。五その網を祭壇の出張りの下に取り付け、これを祭壇の高さの半
ばに達するようにしなければならない。六また祭壇のために、さおを造ら
なければならない。すなわちアカシヤ材で、さおを造り、青銅で、これを
おおわなければならない。七そのさおを環に通し、さおを祭壇の両側に
して、これをかつがなければならない。八祭壇は板で空洞に造り、山で示
されたように、これを造らなければならない。

九あなたはまた幕屋の庭を造り、両側では庭のために長さ百キュビト
の亜麻の撚糸のあげばりを設け、その一方に当てなければならない。一〇
その柱は二十、その柱の二十の座は青銅にし、その柱の鉤と桁とは銀
にしなければならない。一一また同じく北側のために、長さ百キュビトの
あげばりを設けなければならない。その柱は二十、その柱の二十の座は
青銅にし、その柱の鉤と桁とは銀にしなければならない。一二また庭の
西側の幅のために五十キュビトのあげばりを設けなければならない。その
柱は十、その座も十。一三また東側でも庭の幅を五十キュビトにしなけ
ればならない。一四そしてその一方に十五キュビトのあげばりを設けなけ
ればならない。その柱は三つ、その座も三つ。一五また他の一方にも十五
キュビトのあげばりを設けなければならない。その柱は三つ、その座も三
つ。一六庭の門のために青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、色とりどり

に織った長さ二十キュビトのとばりを設けなければならない。その柱は
四つ、その座も四つ。一七庭の周囲の柱はみな銀の桁でつなぎ、その鉤は
銀、その座は青銅にしなければならない。一八庭の長さは百キュビト、そ
の幅は五十キュビト、その高さは五キュビトで、亜麻の撚糸の布を掛けめ
ぐらし、その座を青銅にしなければならない。一九すべて幕屋に用いるも
ろもろの器、およびそのすべての釘、また庭のすべての釘は青銅で造ら
なければならない。

二〇あなたはまたイスラエルの人々に命じて、オリブをつぶして採った
純粋の油を、ともし火のために持ってこさせ、絶えずともし火をともさ
なければならない。二一アロンとその子たちとは、会見の幕屋の中のあかし
の箱の前にある垂幕の外で、夕から朝まで主の前に、そのともし火を整
えなければならない。これはイスラエルの人々の守るべき世々変らざる定
めでなければならない。

第二八章一またイスラエルの人々のうちから、あなたの兄弟アロンとそ
の子たち、すなわちアロンとアロンの子ナダブ、アビウ、エレアザル、イタ
マルとをあなたのもとにこさせ、祭司としてわたしに仕えさせ、二またあ
なたの兄弟アロンのために聖なる衣服を作って、彼に栄えと麗しきをも
たせなければならない。三あなたはすべて心に知恵ある者、すなわち、わ
たしが知恵の霊を満たした者たちに語って、アロンの衣服を作らせ、アロ
ンを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせなければならない。四彼らの作
るべき衣服は次のとおりである。すなわち胸当、エポデ、衣、市松模様
の服、帽子、帯である。彼らはあなたの兄弟アロンとその子たちとのた
めに聖なる衣服を作り、祭司としてわたしに仕えさせなければならない。
五彼らは金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸を受け取らなければなら
ない。六そして彼らは金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸を用い、巧み

なわざをもってエポデを作らなければならない。七これに二つの肩ひもを付
け、その両端を、これに付けなければならない。八エポデの上で、これをつ
かねる帯は、同じきれでエポデの作りのように、金糸、青糸、紫糸、緋糸、
亜麻の撚糸で作らなければならない。九あなたは二つの縞めのうを取って、
その上にイスラエルの子たちの名を刻まなければならない。一〇すなわち、
その名六つを一つの石に、残りの名六つを他の石に、彼らの生れた順に
刻まなければならない。一一宝石に彫刻する人が印を彫刻するように、
イスラエルの子たちの名をその二つの石に刻み、それを金の編細工にはめ、
一二この二つの石をエポデの肩ひもにつけて、イスラエルの子たちの記念の
石としなければならない。こうしてアロンは主の前でその両肩に彼らの
名を負うて記念としなければならない。一三あなたはまた金の編細工を作
らなければならない。一四そして二つの純金の鎖を、ひも細工にねじて

作り、そのひもの鎖をかの編細工につけなければならない。
一五あなたはまたさばきの胸当を巧みなわざをもって作り、これをエポデ
の作りのように作らなければならない。すなわち金糸、青糸、紫糸、緋糸、
亜麻の撚糸で、これを作らなければならない。一六これは二つに折って四角
にし、長さは一指当り、幅も一指当りとしなければならない。一七またその
中に宝石を四列にはめ込まなければならない。すなわち紅玉髄、貴かん
らん石、水晶の列を第一列とし、一八第二列は、ざくろ石、るり、赤縞め
のう。一九第三列は黄水晶、めのう、紫水晶。二〇第四列は黄碧玉、
縞めのう、碧玉であって、これらを金の編細工の中にはめ込まなければ
ならない。二一その宝石はイスラエルの子らの名に従い、その名とひとし
く十二とし、おのおの印の彫刻のように十二の部族のためにその名を刻ま
なければならない。二二またひも細工にねじた純金の鎖を胸当につけな

ければならない。二三また、胸当のために金の環二つを作り、胸当の両端
にその二つの環をつけ、二四かの二筋の金のひもを胸当の端の二つの環に
つけなければならない。二五ただし、その二筋のひもの他の両端をかの二
つの編細工につけ、エポデの肩ひもにつけて、前にくるようにしなければ
ならない。二六あなたはまた二つの金の環を作って、これを胸当の両端に
つけなければならない。すなわちエポデに接する内側の縁にこれをつけな
ければならない。二七また二つの金の環を作って、これをエポデの二つの
肩ひもの下の部分につけ、前の方で、そのつなぎ目に近く、エポデの帯の
上の方にあるようにしなければならない。二八胸当は青ひもをもって、そ
の環をエポデの環に結びつけ、エポデの帯の上の方にあるようにしなけれ
ばならない。こうして胸当がエポデから離れないようにしなければならな
い。二九アロンが聖所にはいる時は、さばきの胸当にあるイスラエルの子

たちの名をその胸に置き、主の前に常に覚えとしなければならない。三〇
あなたはさばきの胸当にウリムとトンミムを入れて、アロンが主の前にい
たる時、その胸の上にあるようにしなければならない。こうしてアロンは
主の前に常にイスラエルの子たちのさばきを、その胸に置かなければなら
ない。
三一あなたはまた、エポデに属する上服をすべて青地で作らなければな
らない。三二頭を通す口を、そのまん中に設け、その口の周囲には、よろ
いのえりのように織物の縁をつけて、ほころびないようにし、三三そのすそ
には青糸、紫糸、緋糸で、ざくろを作り、そのすその周囲につけ、また
周囲に金の鈴をざくろの間々につけなければならない。三四すなわち金
の鈴にざくろ、また金の鈴にざくろと、上服のすその周囲につけなければ
ならない。三五アロンは務の時、これを着なければならない。彼が聖所に

はいって主の前にいたる時、また出る時、その音が聞えて、彼は死を免
れるであろう。
三六あなたはまた純金の板を造り、印の彫刻のように、その上に『主
に聖なる者』と刻み、三七これを青ひもで帽子に付け、それが帽子の前の
方に来るようにしなければならない。三八これはアロンの額にあり、そし
てアロンはイスラエルの人々がささげる聖なる物、すなわち彼らのもろも
ろの聖なる供え物についての罪の責めを負うであろう。これは主の前にそ
れらの受けいれられるため、常にアロンの額になければならない。
三九あなたは亜麻糸で市松模様に下服を織り、亜麻布で、ずきんを作り、
また、帯を色とりどりに織って作らなければならない。
四〇あなたはまたアロンの子たちのために下服を作り、彼らのために帯
を作り、彼らのために、ずきんを作って、彼らに栄えと麗しきをもたせな

ければならない。**四一**そしてあなたはこれをあなたの兄弟アロンおよび彼と共にいるその子たちに着せ、彼らに油を注ぎ、彼らを職に任じ、彼らを聖別し、祭司として、わたしに仕えさせなければならない。**四二**また、彼らのために、その隠し所をおおう亜麻布のしたばきを作り、腰からももに届くようにしなければならない。**四三**アロンとその子たちは会見の幕屋にはいる時、あるいは聖所で務をするために祭壇に近づく時に、これを着なければならない。そうすれば、彼らは罪を得て死ぬことはないであろう。これは彼と彼の後の子孫とのための永久の定めでなければならない。

第二九章一あなたは彼らを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせるために、次の事を彼らにしなければならない。すなわち若い雄牛一頭と、きずのない雄羊二頭とを取り、**二**また種入れぬパンと、油を混ぜた種入れぬ菓子と、油を塗った種入れぬせんべいとを取りなさい。これらは小麦粉で

作らなければならない。三そしてこれを一つのかごに入れ、そのかごに入れ
たまま、かの一頭の雄牛および二頭の雄羊と共に携えてこなければなら
ない。四あなたはまたアロンとその子たちを会見の幕屋の入口に連れてき
て、水で彼らを洗い清め、五また衣服を取り、下服とエポデに属する上服
と、エポデと胸当とをアロンに着せ、エポデの帯を締めさせなければなら
ない。六そして彼の頭に帽子をかぶらせ、その帽子の上にかの聖なる冠
をいただかせ、七注ぎ油を取って彼の頭にかけ、彼に油注ぎをしなけ
ればならない。八あなたはまた彼の子たちを連れてきて下服を着せ、九彼
らすなわちアロンとその子たちに帯を締めさせ、ずきんをかぶらせなけ
ればならない。祭司の職は永久の定めによって彼らに帰するであろう。
あなたはこうして、アロンとその子たちを職に任じなければならない。
一〇あなたは会見の幕屋の前に雄牛を引いてきて、アロンとその子たち

は、その雄羊の頭に手を置かなければならない。一一そして会見の幕屋の
入口で、主の前にその雄牛をほふり、一二その雄牛の血を取り、指をもっ
て、これを祭壇の角につけ、その残りの血を祭壇の基に注ぎかけなさい。
一三また、その内臓をおおうすべての脂肪と肝臓の小葉と、二つの腎臓
と、その上の脂肪とを取って、これを祭壇の上で焼かなければならない。
一四ただし、その雄牛の肉と皮と汚物とは、宿営の外で火で焼き捨てなけ
ればならない。これは罪祭である。

一五あなたはまた、かの雄羊の一頭を取り、そしてアロンとその子たち
は、その雄羊の頭に手を置かなければならない。一六あなたはその雄羊を
ほふり、その血を取って、祭壇の四つの側面に注ぎかけなければならない。
一七またその雄羊を切り裂き、その内臓と、その足とを洗って、これをそ
の肉の切れ、および頭と共に置き、一八その雄羊をみな祭壇の上で焼かな

ければならない。これは主にささげる燔祭である。すなわち、これは香ば
しいかおりであって、主にささげる火祭である。
一九あなたはまた雄羊の他の一頭を取り、アロンとその子たちは、その
雄羊の頭に手を置かなければならない。二〇そしてあなたはその雄羊をほ
ふり、その血を取って、アロンの右の耳たぶと、その子たちの右の耳たぶ
とにつけ、また彼らの右の手の親指と、右の足の親指とにつけ、その残り
の血を祭壇の四つの側面に注ぎかけなければならない。二一また祭壇の上
の血および注ぎ油を取って、アロンとその衣服、およびその子たちと、そ
の子たちの衣服とに注がなければならない。彼とその衣服、およびその子
らと、その衣服とは聖別されるであろう。
二二あなたはまた、その雄羊の脂肪、脂尾、内臓をおおう脂肪、肝臓の
小葉、二つの腎臓、その上の脂肪、および右のももを取らなければなら

ない。これは任職の雄羊である。二三また主の前にある種入れぬパンの
かごの中からパン一個と、油菓子一個と、せんべい一個とを取り、二四こ
れをみなアロンの手と、その子たちの手に置き、これを主の前に揺り動か
して、揺祭としなければならない。二五そしてあなたはこれを彼らの手か
ら受け取り、燔祭に加えて祭壇の上で焼き、主の前に香ばしいかおりとし
なければならない。これは主にささげる火祭である。

二六あなたはまた、アロンの任職の雄羊の胸を取り、これを主の前に揺
り動かして、揺祭としなければならない。これはあなたの受ける分となる
であろう。二七あなたはアロンとその子たちの任職の雄羊の胸ともも、す
なわち揺り動かした揺祭の胸と、ささげたももとを聖別しなければならな
い。二八これはイスラエルの人々から永久に、アロンとその子たちの受く
べきささげ物であって、イスラエルの人々の酬恩祭の犠牲の中から受く

べきもの、すなわち主にささげるささげ物である。
二九アロンの聖なる衣服は彼の後の子孫に帰すべきである。彼らはこれ
を着て、油注がれ、職に任ぜられなければならない。三〇その子たちの
うち、彼に代って祭司となり、聖所で仕えるために会見の幕屋にはいる者
は、七日の間これを着なければならない。

三一あなたは任職の雄羊を取り、聖なる場所でその肉を煮なければなら
ない。三二アロンとその子たちは会見の幕屋の入口で、その雄羊の肉と、か
ごの中のパンとを食べなければならない。三三彼らを職に任じ、聖別する
ため、あがないに用いたこれらのものを、彼らは食べなければならない。他
の人はこれを食べてはならない。これは聖なる物だからである。三四もし
任職の肉、あるいはパンのうち、朝まで残るものがあれば、その残りは
火で焼かなければならない。これは聖なる物だから食べてはならない。

三五あなたはわたしがすべて命じるように、アロンとその子たちにしなけ
ればならない。すなわち彼らのために七日のあいだ、任職の式を行わな
ければならない。三六あなたは毎日、あがないのために、罪祭の雄牛一頭
をささげなければならない。また祭壇のために、あがないをなす時、その
ために罪祭をささげ、また、これに油を注いで聖別しなさい。三七あなた
は七日の間、祭壇のために、あがないをして、これを聖別しなければな
らない。こうして祭壇は、いと聖なる物となり、すべて祭壇に触れる者は
聖となるであろう。

三八あなたが祭壇の上にささぐべき物は次のとおりである。すなわち当歳
の小羊二頭を毎日絶やすことなくささげなければならない。三九その一頭
の小羊は朝にこれをささげ、他の一頭の小羊は夕にこれをささげなければ
ならない。四〇一頭の小羊には、つぶして取った油一ヒンの四分の一をま

ぜた麦粉十分の一エパを添え、また灌祭として、ぶどう酒一ヒンの四分の
一を添えなければならない。四一他の一頭の小羊は夕にこれをささげ、朝の
素祭および灌祭と同じものをこれに添えてささげ、香ばしいかおりのために
主にささげる火祭としなければならない。四二これはあなたがたが代々会見
の幕屋の入口で、主の前に絶やすことなく、ささぐべき燔祭である。わた
しはその所であなたに会い、あなたと語るであろう。四三また、その所
でわたしはイスラエルの人々に会うであろう。幕屋はわたしの栄光によっ
て聖別されるであろう。四四わたしは会見の幕屋と祭壇とを聖別するであ
ろう。またアロンとその子たちを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせる
であろう。四五わたしはイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神とな
るであろう。四六わたしが彼らのうちに住むために、彼らをエジプトの国
から導き出した彼らの神、主であることを彼らは知るであろう。わたし

は彼らの神、主である。
第三〇章一あなたはまた香をたく祭壇を造らなければならない。アカシ
ヤ材でこれを造り、二長さ一キュビト、幅一キュビトの四角にし、高さ二
キュビトで、これにその一部として角をつけなければならない。三その頂、
その四つの側面、およびその角を純金でおおい、その周囲に金の飾り縁
を造り、四また、その両側に、飾り縁の下に金の環二つをこれのために
造らなければならない。すなわち、その二つの側にこれを造らなければな
らない。これはそれをかつぐさおを通すところである。五そのさおはアカ
シヤ材で造り、金でおおわなければならない。六あなたはそれを、あかしの
箱の前にある垂幕の前に置いて、わたしがあなたと会うあかしの箱の上に
ある贖罪所に向かわせなければならない。七アロンはその上で香ばしい
薫香をたかなければならない。朝ごとに、ともしびを整える時、これをた

かなければならない。八アロンはまた夕べにともしびをともす時にも、これ
をたかなければならない。これは主の前にあなたがたが代々に絶やすこと
なく、ささぐべき薫香である。九あなたがたはその上で異なる香をささげ
てはならない。燔祭をも素祭をもその上でささげてはならない。また、そ
の上に灌祭を注いではならない。一〇アロンは年に一度その角に血をつけ
てあがないをしなければならない。すなわち、あがないの罪祭の血をもっ
て代々にわたり、年に一度これがために、あがないをしなければならない。
これは主に最も聖なるものである」。

一一主はモーセに言われた、一二「あなたがたがイスラエルの人々の数の総計
をとるに当り、おのおのその数えられる時、その命のあがないを主にさ
さげなければならない。これは数えられる時、彼らのうちに災の起らな
いためである。一三すべて数に入る者は聖所のシケルで、半シケルを払わ

なければならない。一シケルは二十ゲラであって、おのおの半シケルを主
にささげ物としなければならない。一四すべて数に入る二十歳以上の者は、
主にささげ物をしなければならない。一五あなたがたの命をあがなうため
に、主にささげ物をする時、富める者も半シケルより多く出してはならず、
貧しい者もそれより少なく出してはならない。一六あなたはイスラエルの
人々から、あがないの銀を取って、これを会見の幕屋の用に当てなければ
ならない。これは主の前にイスラエルの人々のための記念となって、あなた
がたの命をあがなうであろう」。

一七主はモーセに言われた、一八「あなたはまた洗うために洗盤と、その
台を青銅で造り、それを会見の幕屋と祭壇との間に置いて、その中に水
を入れ、一九アロンとその子たちは、それで手と足とを洗わなければならな
い。二〇彼らは会見の幕屋にはいる時、水で洗って、死なないようにしな

ければならない。また祭壇に近づいて、その務をなし、火祭を主にささげ
る時にも、そうしなければならない。二一すなわち、その手、その足を洗っ
て、死なないようにしなければならない。これは彼とその子孫の代々にわ
たる永久の定めでなければならない」。
二二主はまたモーセに言われた、二三「あなたはまた最も良い香料を取
りなさい。すなわち液体の没薬五百シケル、香ばしい肉桂をその半ば、す
なわち二百五十シケル、におい菖蒲二百五十シケル、二四桂枝五百シケルを
聖所のシケルで取り、また、オリブの油一ヒンを取りなさい。二五あなた
はこれを聖なる注ぎ油、すなわち香油を造るわざにしたがい、まぜ合わせ
て、におい油に造らなければならない。これは聖なる注ぎ油である。二
六あなたはこの油を会見の幕屋と、あかしの箱とに注ぎ、二七机と、そ
のもろもろの器、燭台と、そのもろもろの器、香の祭壇、二八燔祭の

祭壇と、そのもろもろの器、洗盤と、その台とに油を注ぎ、二九これら
をきよめて最も聖なる物としなければならない。すべてこれに触れる者
は聖となるであろう。三〇あなたはアロンとその子たちに油を注いで、彼
らを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせなければならない。三一そして
あなたはイスラエルの人々に言わなければならない、『これはあなたがたの
代々にわたる、わたしの聖なる注ぎ油であって、三二常の人の身にこれを
注いではならない。またこの割合をもって、これと等しいものを造っては
ならない。これは聖なるものであるから、あなたがたにとっても聖なる物
でなければならない。三三すべてこれと等しい物を造る者、あるいはこれ
を祭司以外の人につける者は、民のうちから断たれるであろう』」。
三四主はまた、モーセに言われた、「あなたは香料、すなわち蘇合香、シケ
レテ香、楓子香、純粋の乳香の香料を取りなさい。おのおの同じ量

でなければならない。三五あなたはこれをもって香、すなわち香料をつく
るわざにしたがって薫香を造り、塩を加え、純にして聖なる物としなさ
い。三六また、その幾ぶんを細かに砕き、わたしがあなたと会う会見の幕屋
にある、あかしの箱の前にこれを供えなければならない。これはあなたが
たに最も聖なるものである。三七あなたが造る香の同じ割合をもって、そ
れを自分のために造ってはならない。これはあなたにとって主に聖なるも
のでなければならない。三八すべてこれと等しいものを造って、これをかぐ
者は民のうちから断たれるであろう」。

第三一章一主はモーセに言われた、二「見よ、わたしはユダの部族に属す
るホルの子なるウリの子ベザレルを名ざして召し、三これに神の霊を満た
して、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、四工夫を凝らして金、
銀、青銅の細工をさせ、五また宝石を切りはめ、木を彫刻するなど、諸種

の工作をさせるであろう。六見よ、わたしはまたダンの部族に属するアヒ
サマクの子アホリアブを彼と共ならせ、そしてすべて賢い者の心に知恵
を授け、わたしがあなたに命じたものを、ことごとく彼らに造らせるであ
ろう。七すなわち会見の幕屋、あかしの箱、その上にある贖罪所、幕屋の
もろもろの器、八机とその器、純金の燭台と、そのもろもろの器、
香の祭壇、九燔祭の祭壇とそのもろもろの器、洗盤とその台、一〇編物
の服、すなわち祭司の務をするための祭司アロンの聖なる服、およびその
子たちの服、一一注ぎ油、聖所のための香ばしい香などを、すべてわたし
があなたに命じたように造らせるであろう」。
一二主はまたモーセに言われた、一三「あなたはイスラエルの人々に言い
なさい、『あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。こ
れはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであって、わたし

があなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである。一
四それゆえ、あなたがたは安息日を守らなければならない。これはあなた
がたに聖なる日である。すべてこれを汚す者は必ず殺され、すべてこの
日に仕事をする者は、民のうちから断たれるであろう。一五六日のあいだ
は仕事をしなさい。七日目は全き休みの安息日で、主のために聖である。
すべて安息日に仕事をする者は必ず殺されるであろう。一六ゆえに、イス
ラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らな
ければならない。一七これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のし
るしである。それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、
いこわれたからである』。
一八主はシナイ山でモーセに語り終えられたとき、あかしの板二枚、す
なわち神が指をもって書かれた石の板をモーセに授けられた。

第三二章一民はモーセが山を下ることのおそいのを見て、アロンのもと
に集まって彼に言った、「さあ、わたしたちに先立って行く神を、わたした
ちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼっ
た人、あのモーセはどうなったのかわからないからです」。二アロンは彼ら
に言った、「あなたがたの妻、むすこ、娘らの金の耳輪をはずしてわたし
に持ってきなさい」。三そこで民は皆その金の耳輪をはずしてアロンのもと
に持ってきた。四アロンがこれを彼らの手から受け取り、工具で型を造り、
鋳て子牛としたので、彼らは言った、「イスラエルよ、これはあなたをエジプ
トの国から導きのぼったあなたの神である」。五アロンはこれを見て、そ
の前に祭壇を築いた。そしてアロンは布告して言った、「あすは主の祭で
ある」。六そこで人々はあくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供え
た。民は座して食い飲みし、立って戯れた。

七主はモーセに言われた、「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国
から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。八彼らは早くもわたし
が命じた道を離れ、自分のために鋳物の子牛を造り、これを拝み、これに
犠牲をささげて、『イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きの
ぼったあなたの神である』と言っている」。九主はまたモーセに言われた、
「わたしはこの民を見た。これはかたくなな民である。一〇それで、わたし
をとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすで
あろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」。
一一モーセはその神、主をなだめて言った、「主よ、大いなる力と強き手
をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかって、なぜあ
なたの怒りが燃えるのでしょうか。一二どうしてエジプトびとに『彼は悪意
をもって彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすの

だ』と言わせてよいでしょうか。どうかあなたの激しい怒りをやめ、あな
たの民に下そうとされるこの災を思い直し、一三あなたのしもべアブラ
ハム、イサク、イスラエルに、あなたが御自身をさして誓い、『わたしは天
の星のように、あなたがたの子孫を増し、わたしが約束したこの地を皆あ
なたがたの子孫に与えて、長くこれを所有させるであろう』と彼らに仰せ
られたことを覚えてください」。一四それで、主はその民に下すと言われた
災について思い直された。
一五モーセは身を転じて山を下った。彼の手には、かの二枚のあかしの
板があった。板はその両面に文字があった。すなわち、この面にも、かの
面にも文字があった。一六その板は神の作、その文字は神の文字であって、
板に彫ったものである。一七ヨシュアは民の呼ばわる声を聞いて、モーセ
に言った、「宿営の中に戦いの声がします」。一八しかし、モーセは言っ

た、「勝どきの声でなく、敗北の叫び声でもない。わたしの聞くのは歌の
声である」。一九モーセが宿営に近づくと、子牛と踊りとを見たので、彼
は怒りに燃え、手からかの板を投げうち、これを山のふもとで砕いた。二
〇また彼らが造った子牛を取って火に焼き、こなごなに砕き、これを水の
上にまいて、イスラエルの人々に飲ませた。
二一モーセはアロンに言った、「この民があなたに何をしたので、あなた
は彼らに大いなる罪を犯させたのですか」。二二アロンは言った、「わが主
よ、激しく怒らないでください。この民の悪いのは、あなたがごぞんじで
す。二三彼らはわたしに言いました、『わたしたちに先立って行く神を、わ
たしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導き
のぼった人、あのモーセは、どうなったのかわからないからです』。二四そ
こでわたしは『だれでも、金を持っている者は、それを取りはずしなさい』

と彼らに言いました。彼らがそれをわたしに渡したので、わたしがこれを
火に投げ入れると、この子牛が出てきたのです」。
二五モーセは民がほしいままにふるまったのを見た。アロンは彼らがほし
いままにふるまうに任せ、敵の中に物笑いとなったからである。二六モー
セは宿営の門に立って言った、「すべて主につく者はわたしのもとにきな
さい」。レビの子たちはみな彼のもとに集まった。二七そこでモーセは彼ら
に言った、「イスラエルの神、主はこう言われる、『あなたがたは、おのお
の腰につるぎを帯び、宿営の中を門から門へ行き巡って、おのおのその
兄弟、その友、その隣人を殺せ』」。二八レビの子たちはモーセの言葉どお
りにしたので、その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。二九そこで、
モーセは言った、「あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆らって、
きょう、主に身をささげた。それで主は、きょう、あなたがたに祝福を与

えられるであろう」。
三〇あくる日、モーセは民に言った、「あなたがたは大いなる罪を犯した。
それで今、わたしは主のもとに上って行く。あなたがたの罪を償うこと
が、できるかも知れない」。三一モーセは主のもとに帰って、そして言った、
「ああ、この民は大いなる罪を犯し、自分のために金の神を造りました。三
二今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば――。しかし、もしか
なわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消
し去ってください」。三三主はモーセに言われた、「すべてわたしに罪を犯
した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。三四しかし、今あな
たは行って、わたしがあなたに告げたところに民を導きなさい。見よ、わ
たしの使はあなたに先立って行くであろう。ただし刑罰の日に、わたしは
彼らの罪を罰するであろう」。
三五そして主は民を撃たれた。彼らが子牛を造ったからである。それは

アロンが造ったのである。
第三三章 一 さて、主はモーセに言われた、「あなたと、あなたがエジプトの
国から導きのぼった民とは、ここを立ってわたしがアブラハム、イサク、
ヤコブに誓って、『これをあなたの子孫に与える』と言った地にのぼりなさ
い。二 わたしはひとりの使をつかわしてあなたに先立たせ、カナンびと、
アモリびと、ヘテびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとを追い払うであ
ろう。三 あなたがたは乳と蜜の流れる地にのぼりなさい。しかし、あなた
がたは、かたくなな民であるから、わたしが道であなたがたを滅ぼすこと
のないように、あなたがたのうちにあって一緒にはのぼらないであろう」。
四 民はこの悪い知らせを聞いて憂い、ひとりもその飾りを身に着ける者
はなかった。五 主はモーセに言われた、「イスラエルの人々に言いなさい、
『あなたがたは、かたくなな民である。もしわたしが一刻でも、あなたがた

のうちにあって、一緒にのぼって行くならば、あなたがたを滅ぼすであろ
う。ゆえに、今、あなたがたの飾りを身から取り去りなさい。そうすれば
わたしはあなたがたになすべきことを知るであろう』」。六それで、イスラエ
ルの人々はホレブ山以来その飾りを取り除いていた。
七モーセは幕屋を取って、これを宿営の外に、宿営を離れて張り、こ
れを会見の幕屋と名づけた。すべて主に伺い事のある者は出て、宿営の
外にある会見の幕屋に行った。八モーセが出て、幕屋に行く時には、民は
みな立ちあがり、モーセが幕屋にはいるまで、おのおのその天幕の入口に
立って彼を見送った。九モーセが幕屋にはいると、雲の柱が下って幕屋の
入口に立った。そして主はモーセと語られた。一〇民はみな幕屋の入口に
雲の柱が立つのを見ると、立っておのおの自分の天幕の入口で礼拝した。
一一人がその友と語るように、主はモーセと顔を合わせて語られた。こう

してモーセは宿営に帰ったが、その従者なる若者、ヌンの子ヨシュアは
幕屋を離れなかった。
一二モーセは主に言った、「ごらんください。あなたは『この民を導きの
ぼれ』とわたしに言いながら、わたしと一緒につかわされる者を知らせて
くださいません。しかも、あなたはかつて『わたしはお前を選んだ。お前
はまたわたしの前に恵みを得た』と仰せになりました。一三それで今、わ
たしがもし、あなたの前に恵みを得ますならば、どうか、あなたの道を示
し、あなたをわたしに知らせ、あなたの前に恵みを得させてください。ま
た、この国民があなたの民であることを覚えてください」。一四主は言われ
た「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであ
ろう」。一五モーセは主に言った「もしあなた自身が一緒に行かれないなら
ば、わたしたちをここからのぼらせないでください。一六わたしとあなたの

民とが、あなたの前に恵みを得ることは、何によって知られましょうか。
それはあなたがわたしたちと一緒に行かれて、わたしとあなたの民とが、
地の面にある諸民と異なるものになるからではありませんか」。
一七主はモーセに言われた、「あなたはわたしの前に恵みを得、またわた
しは名をもってあなたを知るから、あなたの言ったこの事をもするであろ
う」。一八モーセは言った、「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しくださ
い」。一九主は言われた、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に
通らせ、主の名をあなたの前にのべるであろう。わたしは恵もうとする者
を恵み、あわれもうとする者をあわれむ」。二〇また言われた、「しかし、あ
なたはわたしの顔を見ることはできない。わたしを見て、なお生きている
人はないからである」。二一そして主は言われた、「見よ、わたしのかたわら
に一つの所がある。あなたは岩の上に立ちなさい。二二わたしの栄光がそ

こを通り過ぎるとき、わたしはあなたを岩の裂け目に入れて、わたしが通
り過ぎるまで、手であなたをおおうであろう。二三そしてわたしが手をのけ
るとき、あなたはわたしのうしろを見るが、わたしの顔は見ないであろう」。
第三四章一主はモーセに言われた、「あなたは前のような石の板二枚を、
切って造りなさい。わたしはあなたが砕いた初めの板にあった言葉を、そ
の板に書くであろう。二あなたは朝までに備えをし、朝のうちにシナイ山に
登って、山の頂でわたしの前に立ちなさい。三だれもあなたと共に登っ
てはならない。また、だれも山の中にいてはならない。また山の前で羊や
牛を飼っていてはならない」。四そこでモーセは前のような石の板二枚を、
切って造り、朝早く起きて、主が彼に命じられたようにシナイ山に登った。
彼はその手に石の板二枚をとった。五ときに主は雲の中にあって下り、彼
と共にそこに立って主の名を宣べられた。六主は彼の前を過ぎて宣べられ

た。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、
まこととの豊かなる神、七いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、
罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず、父の罪を子に
報い、子の子に報いて、三、四代におよぼす者」。八モーセは急ぎ地に伏し
て拝し、九そして言った、「ああ主よ、わたしがもし、あなたの前に恵みを
得ますならば、かたくなな民ですけれども、どうか主がわたしたちのうち
にあって一緒に行ってください。そしてわたしたちの悪と罪とをゆるし、
わたしたちをあなたのものとしてください」。
一〇主は言われた、「見よ、わたしは契約を結ぶ。わたしは地のいずこに
も、いかなる民のうちにも、いまだ行われたことのない不思議を、あなた
のすべての民の前に行うであろう。あなたが共に住む民はみな、主のわ
ざを見るであろう。わたしがあなたのためになそうとすることは、恐るべ
きものだからである。

一一わたしが、きょう、あなたに命じることを守りなさい。見よ、わた
しはアモリびと、カナンびと、ヘテびと、ペリジびと、ヒビびと、エブス
びとを、あなたの前から追い払うであろう。一二あなたが行く国に住んで
いる者と、契約を結ばないように、気をつけなければならない。おそらく
彼らはあなたのうちにあって、わなとなるであろう。一三むしろあなたがた
は、彼らの祭壇を倒し、石の柱を砕き、アシラ像を切り倒さなければな
らない。一四あなたは他の神を拝んではならない。主はその名を『ねたみ』
と言って、ねたむ神だからである。一五おそらくあなたはその国に住む者
と契約を結び、彼らの神々を慕って姦淫を行い、その神々に犠牲をささ
げ、招かれて彼らの犠牲を食べ、一六またその娘たちを、あなたのむすこた
ちにめとり、その娘たちが自分たちの神々を慕って姦淫を行い、また、
あなたのむすこたちをして、彼らの神々を慕わせ、姦淫を行わせるに至
るであろう。

一七あなたは自分のために鋳物の神々を造ってはならない。
一八あなたは種入れぬパンの祭を守らなければならない。すなわち、わ
たしがあなたに命じたように、アビブの月の定めの時に、七日のあいだ、
種入れぬパンを食べなければならない。あなたがアビブの月にエジプトを
出たからである。一九すべて初めに生れる者は、わたしのものである。す
べてあなたの家畜のういごの雄は、牛も羊もそうである。二〇ただし、ろ
ばのういごは小羊であがなわなければならない。もしあがなわないならば、
その首を折らなければならない。あなたのむすこのうちのういごは、みな
あがなわなければならない。むなし手でわたしの前に出てはならない。
二一あなたは六日のあいだ働き、七日目には休まなければならない。耕
し時にも、刈入れ時にも休まなければならない。二二あなたは七週の祭、
すなわち小麦刈りの初穂の祭を行わなければならない。また年の終りに

取り入れの祭を行わなければならない。二三年に三度、男子はみな主な
る神、イスラエルの神の前に出なければならない。二四わたしは国々の民
をあなたの前から追い払って、あなたの境を広くするであろう。あなた
が年に三度のぼって、あなたの神、主の前に出る時には、だれもあなたの
国を侵すことはないであろう。
二五あなたは犠牲の血を、種を入れたパンと共に供えてはならない。また
過越の祭の犠牲を、翌朝まで残して置いてはならない。二六あなたの土地
の初穂の最も良いものを、あなたの神、主の家に携えてこなければなら
ない。あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない」。二七また主はモー
セに言われた、「これらの言葉を書きしるしなさい。わたしはこれらの言葉
に基いて、あなたおよびイスラエルと契約を結んだからである」。二八モー
セは主と共に、四十日四十夜、そこにいたが、パンも食べず、水も飲まな

かった。そして彼は契約の言葉、十誡を板の上に書いた。
二九モーセはそのあかしの板二枚を手にして、シナイ山から下ったが、そ
の山を下ったとき、モーセは、さきに主と語ったゆえに、顔の皮が光を
放っているのを知らなかった。三〇アロンとイスラエルの人々とがみな、
モーセを見ると、彼の顔の皮が光を放っていたので、彼らは恐れてこれ
に近づかなかった。三一モーセは彼らを呼んだ。アロンと会衆のかしらた
ちとがみな、モーセのもとに帰ってきたので、モーセは彼らと語った。三二
その後、イスラエルの人々がみな近よったので、モーセは主がシナイ山で
彼に語られたことを、ことごとく彼らにさとした。三三モーセは彼らと語
り終えた時、顔おおいを顔に当てた。三四しかしモーセは主の前に行って
主と語る時は、出るまで顔おおいを取り除いていた。そして出て来ると、
その命じられた事をイスラエルの人人に告げた。三五イスラエルの人々は

モーセの顔を見ると、モーセの顔の皮が光を放っていた。モーセは行っ
て主と語るまで、また顔おおいを顔に当てた。
第三五章一モーセはイスラエルの人々の全会衆を集めて言った、「こ
れは主が行えと命じられた言葉である。二六日の間は仕事をしなさい。
七日目はあなたがたの聖日で、主の全き休みの安息日であるから、この
日に仕事をする者はだれでも殺されなければならない。三安息日にはあな
たがたのすまいのどこでも火をたいてはならない」。
四モーセはイスラエルの人々の全会衆に言った、「これは主が命じられ
たことである。五あなたがたの持ち物のうちから、主にささげる物を取りな
さい。すべて、心から喜んでする者は、主にささげる物を持ってきなさ
い。すなわち金、銀、青銅。六青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸、やぎの毛糸。
七あかね染めの雄羊の皮、じゅごんの皮、アカシヤ材、八ともし油、注ぎ

油と香ばしい薫香とのための香料、九縞めのう、エポデと胸当とにはめ
る宝石。
一〇すべてあなたがたのうち、心に知恵ある者はきて、主の命じられた
ものをみな造りなさい。一一すなわち幕屋、その天幕と、そのおおい、その
鉤と、その枠、その横木、その柱と、その座、一二箱と、そのさお、贖罪所、
隔ての垂幕、一三机と、そのさお、およびそのもろもろの器、供えのパ
ン、一四また、ともしびのための燭台と、その器、ともしび皿と、とも
し油、一五香の祭壇と、そのさお、注ぎ油、香ばしい薫香、幕屋の入口
のとばり、一六燔祭の祭壇およびその青銅の網、そのさおと、そのもろも
ろの器、洗盤と、その台、一七庭のあげばり、その柱とその座、庭の門
のとばり、一八幕屋の釘、庭の釘およびそのひも、一九聖所における務の
ための編物の服、すなわち祭司の務をなすための祭司アロンの聖なる服

およびその子たちの服」。
二〇イスラエルの人々の全会衆はモーセの前を去り、二一すべて心に
感じた者、すべて心から喜んでする者は、会見の幕屋の作業と、そのも
ろもろの奉仕と、聖なる服とのために、主にささげる物を携えてきた。二
二すなわち、すべて心から喜んでする男女は、鼻輪、耳輪、指輪、首飾
り、およびすべての金の飾りを携えてきた。すべて金のささげ物を主に
ささげる者はそのようにした。二三すべて青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸、
やぎの毛糸、あかね染めの雄羊の皮、じゅごんの皮を持っている者は、そ
れを携えてきた。二四すべて銀、青銅のささげ物をささげることのできる
者は、それを主にささげる物として携えてきた。また、すべて組立ての
工事に用いるアカシヤ材を持っている者は、それを携えてきた。二五また、
すべて心に知恵ある女たちは、その手をもって紡ぎ、その紡いだ青糸、

紫糸、緋糸、亜麻糸を携えてきた。二六すべて知恵があって、心に感
じた女たちは、やぎの毛を紡いだ。二七また、かしらたちは縞めのう、お
よびエポデと胸当にはめる宝石を携えてきた。二八また、ともしびと、注
ぎ油と、香ばしい薫香のための香料と、油とを携えてきた。二九この
ようにイスラエルの人々は自発のささげ物を主に携えてきた。すなわち
主がモーセによって、なせと命じられたすべての工作のために、物を携
えてこようと、心から喜んでする男女はみな、そのようにした。
三〇モーセはイスラエルの人々に言った、「見よ、主はユダの部族に属す
るホルの子なるウリの子ベザレルを名ざして召し、三一彼に神の霊を満たし
て、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、三二工夫を凝らして金、
銀、青銅の細工をさせ、三三また宝石を切りはめ、木を彫刻するなど、諸種
の工作をさせ、三四また人を教えうる力を、彼の心に授けられた。彼と

ダンの部族に属するアヒサマクの子アホリアブとが、それである。三五主は
彼らに知恵の心を満たして、諸種の工作をさせられた。すなわち彫刻、
浮き織および青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸の縫取り、また機織など諸種
の工作をさせ、工夫を凝らして巧みなわざをさせられた。

第三六章一ベザレルとアホリアブおよびすべて心に知恵ある者、すなわ
ち主が知恵と悟りとを授けて、聖所の組立ての諸種の工事を、いかになす
かを知らせられた者は、すべて主が命じられたようにしなければならない」。
二そこで、モーセはベザレルとアホリアブおよびすべて心に知恵ある
者、すなわち、その心に主が知恵を授けられた者、またきて、その工事
をなそうと心に望むすべての者を召し寄せた。三彼らは聖所の組立ての
工事をするために、イスラエルの人々が携えてきたもろもろのささげ物
を、モーセから受け取ったが、民はなおも朝ごとに、自発のささげ物を彼

のもとに携えてきた。四そこで聖所のもろもろの工事をする賢い人々は
みな、おのおのしていた工事をやめて、五モーセに言った「民があまりに多
く携えて来るので、主がせよと命じられた組立ての工事には余ります」。
六モーセは命令を発し、宿営中にふれさせて言った、「男も女も、も
はや聖所のためにささげ物をするに及ばない」。それで民は携えて来る
ことをやめた。七材料はすべての工事をするのにじゅうぶんで、かつ余る
からである。

八すべて工作をする者のうちの心に知恵ある者は、十枚の幕で幕屋を
造った。すなわち亜麻の撚糸、青糸、紫糸、緋糸で造り、巧みなわざを
もって、それにケルビムを織り出した。九幕の長さは、おのおの二十八キュ
ビト、幕の幅は、おのおの四キュビトで、幕はみな同じ寸法である。
一〇その幕五枚を互に連ね合わせ、また他の五枚の幕をも互に連ね合

わせ、一一その一連の端にある幕の縁に青色の乳をつけ、他の一連の端に
ある幕の縁にも、そのようにした。一二その一枚の幕に乳五十をつけ、他
の一連の幕の端にも、乳五十をつけた。その乳を互に相向かわせた。一三
そして金の輪五十を作り、その輪で、幕を互に連ね合わせたので、一つの
幕屋になった。

一四また、やぎの毛糸で幕を作り、幕屋をおおう天幕にした。すなわち幕
十一枚を作った。一五おのおのの幕の長さは三十キュビト、おのおのの幕
の幅は四キュビトで、その十一枚の幕は同じ寸法である。一六そして、そ
の幕五枚を一つに連ね合わせ、また、その幕六枚を一つに連ね合わせ、一七
その一連の端にある幕の縁に、乳五十をつけ、他の一連の幕の縁にも、乳
五十をつけた。一八そして、青銅の輪五十を作り、その天幕を連ね合わせ
て一つにした。一九また、あかね染めの雄羊の皮で、天幕のおおいと、じゅ

ごんの皮で、その上にかけるおおいとを作った。
二〇また幕屋のためにアカシヤ材をもって、立枠を造った。二一枠の長
さは十キュビト、枠の幅は、おのおの一キュビト半とし、二二枠ごとに二
つの柄を造って、かれとこれとをくい合わせ、幕屋のすべての枠にこのよ
うにした。二三幕屋のために枠を造った。すなわち南側のために枠二十を
造った。二四その二十の枠の下に銀の座四十を造って、この枠の下に、そ
の二つの柄のために二つの座を置き、かの枠の下にも、その二つの柄のた
めに二つの座を置いた。二五また幕屋の他の側、すなわち北側のためにも
枠二十を造った。二六その銀の座四十を造って、この枠の下にも二つの座
を置き、かの枠の下にも二つの座を置いた。二七また幕屋のうしろ、西側
のために枠六つを造り、二八幕屋のうしろの二つのすみのために枠二つを
造った。二九これらは、下で重なり合い、同じくその頂でも第一の環ま

で重なり合うようにし、その二つとも二つのすみのために、そのように造っ
た。三〇こうして、その枠は八つ、その銀の座は十六、おのおのの枠の下
に、二つずつ座があった。

三一またアカシヤ材の横木を造った。すなわち幕屋のこの側の枠のため
に五つ、三二また幕屋のかの側の枠のために横木五つ、幕屋のうしろの西側
の枠のために横木五つを造った。三三枠のまん中にある中央の横木は、端
から端まで通るようにした。三四そして、その枠を金でおおい、また横木
を通すその環を金で造り、またその横木を金でおおった。

三五また青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、垂幕を作り、巧みなわざ
をもって、それにケルビムを織り出した。三六また、これがためにアカシヤ
材の柱四本を作り、金でこれをおおい、その鉤を金にし、その柱のため
に銀の座四つを鋳た。三七また幕屋の入口のために青糸、紫糸、緋糸、

亜麻の撚糸で、色とりどりに織ったとばりを作った。三八その柱五本と、
その鉤とを造り、その柱の頭と桁とを金でおおった。ただし、その五つ
の座は青銅であった。

第三七章一ベザレルはアカシヤ材の箱を造った。長さは二キュビト半、
幅は一キュビト半、高さは一キュビト半である。二純金で、内そとをお
おい、その周囲に金の飾り縁を造った。三また金の環四つを鋳て、その四
すみに取りつけた。すなわち二つの環をこちら側に、二つの環をあちら側
に取りつけた。四またアカシヤ材のさおを造り、金でこれをおおい、五そ
のさおを箱の側面の環に通して、箱をかつぐようにした。六また純金で
贖罪所を造った。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半である。七また
金で、二つのケルビムを造った。すなわち、これを打物造りとし、贖罪所
の両端に置いた。八一つのケルブをこの端に、一つのケルブをかの端に置

いた。すなわちケルビムを贖罪所の一部として、その両端に造った。九
ケルビムは翼を高く伸べ、その翼で贖罪所をおおい、顔は互に向かい
合った。すなわちケルビムの顔は贖罪所に向かっていた。
一〇またアカシヤ材で、机を造った。長さは二キュビト、幅は一キュビ
ト、高さは一キュビト半である。一一純金でこれをおおい、その周囲に金
の飾り縁を造った。一二またその周囲に手幅の棧を造り、その周囲の棧に
金の飾り縁を造った。一三またこれがために金の環四つを鋳て、その四つ
の足のすみ四か所にその環を取りつけた。一四その環は棧のわきにあって、
机をかつぐさおを入れる所とした。一五またアカシヤ材で、机をかつぐ
さおを造り、金でこれをおおった。一六また机の上の器、すなわちその
皿、乳香を盛る杯および灌祭を注ぐための鉢と瓶とを純金で造った。
一七また純金の燭台を造った。すなわち打物造りで燭台を造り、そ

の台、幹、萼、節、花を一つに連ねた。一八また六つの枝をそのわきから出
させた。すなわち燭台の三つの枝をこの側から、燭台の三つの枝をかの
側から出させた。一九あめんどうの花の形をした三つの萼が、節と花とを
もって、この枝にあり、また、あめんどうの花の形をした三つの萼が、節
と花とをもって、かの枝にあり、燭台から出る六つの枝をみなそのよう
にした。二〇また燭台の幹には、あめんどうの花の形をした四つの萼を、
その節と花とをもたせて取りつけた。二一また二つの枝の下に一つの節を
取りつけ、次の二つの枝の下に一つの節を取りつけ、さらに次の二つの枝
の下に一つの節を取りつけ、燭台の幹から出る六つの枝に、みなそのよ
うにした。二二それらの節と枝を一つに連ね、ことごとく純金の打物造
りとした。二三また、それのともしび皿七つと、その芯切りばさみと、芯取
り皿とを純金で造った。二四すなわち純金一タラントをもって、燭台

とそのすべての器とを造った。
二五またアカシヤ材で香の祭壇を造った。長さ一キュビト、幅一キュビ
トの四角にし、高さ二キュビトで、これにその一部として角をつけた。
二六そして、その頂、その周囲の側面、その角を純金でおおい、そ
の周囲に金の飾り縁を造った。二七また、その両側に、飾り縁の下に金
の環二つを、そのために造った。すなわちその二つの側にこれを造った。
これはそれをかつぐさおを通す所である。二八そのさおはアカシヤ材で造
り、金でこれをおおった。
二九また香料を造るわざにしたがって、聖なる注ぎ油と純粋の香料
の薫香とを造った。

第三八章一またアカシヤ材で燔祭の祭壇を造った。長さ五キュビト、幅
五キュビトの四角で、高さは三キュビトである。二その四すみの上に、そ

の一部(いちぶ)とし、それの角(つの)を造(つく)り、青銅(せいどう)で祭壇(さいだん)をおおった。三また祭壇(さいだん)のもろ
もろの器(うつわ)、すなわち、つぼ、十能(じゅうのう)、鉢(はち)、肉叉(にくまた)、火皿(ひざら)を造(つく)った。そのすべ
ての器(うつわ)を青銅(せいどう)で造(つく)った。四また祭壇(さいだん)のために、青銅(せいどう)の網細工(あみざいく)の格子(こうし)を造(つく)
り、これを祭壇(さいだん)の出張(でば)りの下(した)に取(と)りつけて、祭壇(さいだん)の高(たか)さの半(なか)ばに達(たっ)するよ
うにした。五また青銅(せいどう)の格子(こうし)の四すみのために、環(かん)四つを鋳(い)て、さおを通(とお)す
所(ところ)とした。六アカシヤ材(ざい)で、そのさおを造(つく)り、青銅(せいどう)でこれをおおい、七そ
のさおを祭壇(さいだん)の両側(りょうがわ)にある環(かん)に通(とお)して、それをかつぐようにした。祭壇(さいだん)
は板(いた)をもって、空洞(くうどう)に造(つく)った。

八また洗盤(せんばん)と、その台(だい)を青銅(せいどう)で造(つく)った。すなわち会見(かいけん)の幕屋(まくや)の入口(いりぐち)で務(つとめ)
をなす女(おんな)たちの鏡(かがみ)をもって造(つく)った。

九また庭(にわ)を造(つく)った。その南側(みなみがわ)のために百キュビトの亜麻(あま)の撚糸(ねんし)の庭(にわ)の
あげばりを設(もう)けた。一〇その柱(はしら)は二十、その柱(はしら)の二十の座(ざ)は青銅(せいどう)で、そ

の柱の鉤と桁は銀とした。一一また北側のためにも百キュビトのあげばり
を設けた。その柱二十、その柱の二十の座は青銅で、その柱の鉤と桁
は銀とした。一二また西側のために、五十キュビトのあげばりを設けた。そ
の柱は十、その座も十で、その柱の鉤と桁は銀とした。一三また東側の
ためにも、五十キュビトのあげばりを設けた。一四その一方に十五キュビ
トのあげばりを設けた。その柱は三つ、その座も三つ。一五また他の一方
にも、同じようにした。すなわち庭の門のこなたかなたともに、十五キュ
ビトのあげばりを設けた。その柱は三つ、その座も三つ。一六庭の周囲の
あげばりはみな亜麻の撚糸である。一七柱の座は青銅、柱の鉤と桁とは
銀、柱の頭のおおいも銀である。庭の柱はみな銀の桁で連ねた。一八
庭の門のとばりは青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、色とりどりに織っ
たものであった。長さは二十キュビト、幅なる高さは五キュビトで、庭の

あげばりと等しかった。一九その柱は四つ、その座も四つで、ともに青銅。
その鉤は銀、柱の頭のおおいと桁は銀である。二〇ただし、幕屋および、
その周囲の庭の釘はみな青銅であった。
二一幕屋、すなわちあかしの幕屋に用いた物の総計は次のとおりである。
すなわちモーセの命に従い、祭司アロンの子イタマルがレビびとを用い
て量ったものである。二二ユダの部族に属するホルの子なるウリの子ベザ
レルは、主がモーセに命じられた事をことごとくした。二三ダンの部族に
属するアヒサマクの子アホリアブは彼と共にあって彫刻、浮き織をなし、
また青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸で、縫取りをする者であった。
二四聖所のもろもろの工作に用いたすべての金、すなわち、ささげ物なる
金は聖所のシケルで、二十九タラント七百三十シケルであった。二五会衆
のうちの数えられた者のささげた銀は聖所のシケルで、百タラント千七百

七十五シケルであった。二六これはひとり当り一ベカ、すなわち聖所のシケ
ルの半シケルであって、すべて二十歳以上で数えられた者が六十万三千五
百五十人であったからである。二七聖所の座と垂幕の座とを鋳るために用
いた銀は百タラントであった。すなわち百座につき百タラント、一座につ
き一タラントである。二八また千七百七十五シケルで柱の鉤を造り、また
柱の頭をおおい、柱のために桁を造った。二九ささげ物なる青銅は七
十タラント二千四百シケルであった。三〇これを用いて会見の幕屋の入口
の座、青銅の祭壇と、それにつく青銅の格子、および祭壇のもろもろの器
を造った。三一また庭の周囲の座、庭の門の座、および幕屋のもろもろの
釘と、庭の周囲のもろもろの釘を造った。

第三九章一彼らは青糸、紫糸、緋糸で、聖所の務のための編物の服
を作った。またアロンのために聖なる服を作った。主がモーセに命じられ

たとおりである。
二また金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸でエポデを作った。三また
金を打ち延べて板とし、これを切って糸とし、青糸、紫糸、緋糸、亜麻
の撚糸に交えて、巧みな細工とした。四また、これがために肩ひもを作っ
てこれにつけ、その両端でこれにつけた。五エポデの上で、これをつかね
る帯は、同じきれで、同じように、金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸
で作った。主がモーセに命じられたとおりである。

六また、縞めのうを細工して、金糸の編細工にはめ、これに印を彫刻す
るように、イスラエルの子たちの名を刻み、七これをエポデの肩ひもにつ
けて、イスラエルの子たちの記念の石とした。主がモーセに命じられたと
おりである。

八また胸当を巧みなわざをもって、エポデの作りのように作った。すな
わち金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で作った。九胸当は二つに折っ

て四角にした。すなわち二つに折って、長さを一指当りとし、幅も一指当
りとした。一〇その中に宝石四列をはめた。すなわち、紅玉髄、貴かんら
ん石、水晶の列を第一列とし、一一第二列は、ざくろ石、るり、赤縞めの
う、一二第三列は黄水晶、めのう、紫水晶、一三第四列は黄碧玉、縞
めのう、碧玉であって、これらを金の編細工の中にはめ込んだ。一四その
宝石はイスラエルの子たちの名にしたがい、その名と等しく十二とし、お
のおの印の彫刻のように、十二部族のためにその名を刻んだ。一五またひ
も細工にねじた純金のくさりを胸当につけた。一六また金の二つの編細工
と、二つの金の環とを作り、その二つの環を胸当の両端につけた。一七
かの二筋の金のひもを胸当の端の二つの環につけた。一八ただし、その二
筋のひもの他の両端を、かの二つの編細工につけ、エポデの肩ひもにつ
けて前にくるようにした。一九また二つの金の環を作って、これを胸当の

両端につけた。すなわちエポデに接する内側の縁にこれをつけた。二〇ま
た金の環二つを作って、これをエポデの二つの肩ひもの下の部分につけ、
前の方で、そのつなぎ目に近く、エポデの帯の上の方にくるようにした。
二一胸当は青ひもをもって、その環をエポデの環に結びつけ、エポデの帯
の上の方にくるようにした。こうして、胸当がエポデから離れないように
した。主がモーセに命じられたとおりである。
二二またエポデに属する上服は、すべて青地の織物で作った。二三上服
の口はそのまん中にあって、その口の周囲には、よろいのえりのように縁
をつけて、ほころびないようにした。二四上服のすそには青糸、紫糸、
緋糸、亜麻の撚糸で、ざくろを作りつけ、二五また純金で鈴を作り、その
鈴を上服のすその周囲の、ざくろとざくろとの間につけた。二六すなわち
鈴にざくろ、鈴にざくろと、務の上服のすその周囲につけた。主がモー

セに命じられたとおりである。
二七またアロンとその子たちのために、亜麻糸で織った下服を作り、二
八亜麻布で帽子を作り、亜麻布で麗しい頭布を作り、亜麻の撚糸の布で、
下ばきを作り、二九亜麻の撚糸および青糸、紫糸、緋糸で、色とりどり
に織った帯を作った。主がモーセに命じられたとおりである。
三〇また純金をもって、聖なる冠の前板を作り、印の彫刻のように、
その上に「主に聖なる者」という文字を書き、三一これに青ひもをつけて、
それを帽子の上に結びつけた。主がモーセに命じられたとおりである。
三二こうして会見の天幕なる幕屋の、もろもろの工事が終った。イスラ
エルの人々はすべて主がモーセに命じられたようにおこなった。三三彼ら
は幕屋と天幕およびそのもろもろの器をモーセのもとに携えてきた。す
なわち、その鉤、その枠、その横木、その柱、その座、三四あかね染めの

雄羊の皮のおおい、じゅごんの皮のおおい、隔ての垂幕、三五あかしの箱
と、そのさお、贖罪所、三六机と、そのもろもろの器、供えのパン、三
七純金の燭台と、そのともしび皿、すなわち列に並べるともしび皿と、
そのもろもろの器、およびそのともし油、三八金の祭壇、注ぎ油、香
ばしい薫香、幕屋の入口のとばり、三九青銅の祭壇、その青銅の格子と、
そのさお、およびそのもろもろの器、洗盤とその台、四〇庭のあげばり、
その柱とその座、庭の門のとばり、そのひもとその釘、また会見の天幕
の幕屋に用いるもろもろの器、四一聖所で務をなす編物の服、すなわち
祭司の務をなすための祭司アロンの聖なる服およびその子たちの服。四二
イスラエルの人々は、すべて主がモーセに命じられたように、そのすべて
の工事をした。四三モーセがそのすべての工事を見ると、彼らは主が命じ
られたとおりに、それをなしとげていたので、モーセは彼らを祝福した。

第四〇章一主はモーセに言われた。二「正月の元日にあなたは会見の
天幕なる幕屋を建てなければならない。三そして、その中にあかしの箱を
置き、垂幕で、箱を隔て隠し、四また、机を携え入れ、それに並べるも
のを並べ、燭台を携え入れて、そのともしびをともさなければならない。
五あなたはまた金の香の祭壇を、あかしの箱の前にすえ、とばりを幕屋の
入口にかけなければならない。六また燔祭の祭壇を会見の天幕なる幕屋
の入口の前にすえ、七洗盤を会見の天幕と祭壇との間にすえて、これに
水を入れなければならない。八また周囲に庭を設け、庭の門にとばりをか
けなければならない。九そして注ぎ油をとって、幕屋とその中のすべての
ものに注ぎ、それとそのもろもろの器とを聖別しなければならない、こう
して、それは聖となるであろう。一〇あなたはまた燔祭の祭壇と、そのす
べての器に油を注いで、その祭壇を聖別しなければならない。こうして

祭壇は、いと聖なるものとなるであろう。一一また洗盤と、その台とに油
を注いで、これを聖別し、一二アロンとその子たちを会見の幕屋の入口に
連れてきて、水で彼らを洗い、一三アロンに聖なる服を着せ、これに油を
注いで聖別し、祭司の務をさせなければならない。一四また彼の子たちを
連れてきて、これに服を着せ、一五その父に油を注いだように、彼らにも
油を注いで、祭司の務をさせなければならない。彼らが油そそがれる
ことは、代々ながく祭司職のためになすべきことである」。
一六モーセはそのように行った。すなわち主が彼に命じられたように
行った。一七第二年の正月になって、その月の元日に幕屋は建った。一
八すなわちモーセは幕屋を建て、その座をすえ、その枠を立て、その横木を
さし込み、その柱を立て、一九幕屋の上に天幕をひろげ、その上に天幕の
おおいをかけた。主がモーセに命じられたとおりである。二〇彼はまたあ

かしの板をとって箱に納め、さおを箱につけ、贖罪所を箱の上に置き、二
一箱を幕屋に携え入れ、隔ての垂幕をかけて、あかしの箱を隠した。主
がモーセに命じられたとおりである。二二彼はまた会見の天幕なる幕屋の
内部の北側、垂幕の外に机をすえ、二三その上にパンを列に並べて、主
の前に供えた。主がモーセに命じられたとおりである。二四彼はまた会見
の天幕なる幕屋の内部の南側に、机にむかい合わせて燭台をすえ、二
五主の前にともしびをともした。主がモーセに命じられたとおりである。
二六彼は会見の幕屋の中、垂幕の前に金の祭壇をすえ、二七その上に香ば
しい薫香をたいた。主がモーセに命じられたとおりである。二八彼はまた
幕屋の入口にとばりをかけ、二九燔祭の祭壇を会見の天幕なる幕屋の入口
にすえ、その上に燔祭と素祭をささげた。主がモーセに命じられたとおり
である。三〇彼はまた会見の天幕と祭壇との間に洗盤を置き、洗うため

にそれに水を入れた。三一モーセとアロンおよびその子たちは、それで手と
足を洗った。三二すなわち会見の天幕にはいるとき、また祭壇に近づくと
き、そこで洗った。主がモーセに命じられたとおりである。三三また幕屋
と祭壇の周囲に庭を設け、庭の門にとばりをかけた。このようにしてモー
セはその工事を終えた。
三四そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。三
五モーセは会見の幕屋に、はいることができなかった。雲がその上にとど
まり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。三六雲が幕屋の上からの
ぼる時、イスラエルの人々は道に進んだ。彼らはその旅路において常にそ
うした。三七しかし、雲がのぼらない時は、そののぼる日まで道に進まな
かった。三八すなわちイスラエルの家のすべての者の前に、昼は幕屋の上
に主の雲があり、夜は雲の中に火があった。彼らの旅路において常にそう

であった。

レビ記

第一章 一主はモーセを呼び、会見の幕屋からこれに告げて言われた、二
「イスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたのうちだれでも家畜の供え
物を主にささげるときは、牛または羊を供え物としてささげなければな
らない。
三もしその供え物が牛の燔祭であるならば、雄牛の全きものをささげな
ければならない。会見の幕屋の入口で、主の前に受け入れられるように、
これをささげなければならない。四彼はその燔祭の獣の頭に手を置かな
ければならない。そうすれば受け入れられて、彼のためにあがないとなる
であろう。五彼は主の前でその子牛をほふり、アロンの子なる祭司たちは、
その血を携えてきて、会見の幕屋の入口にある祭壇の周囲に、その血を

注ぎかけなければならない。六彼はまたその燔祭の獣の皮をはぎ、節々
に切り分かたなければならない。七祭司アロンの子たちは祭壇の上に火を
置き、その火の上にたきぎを並べ、八アロンの子なる祭司たちはその切り
分けたものを、頭および脂肪と共に、祭壇の上にある火の上のたきぎの
上に並べなければならない。九その内臓と足とは水で洗わなければならな
い。こうして祭司はそのすべてを祭壇の上で焼いて燔祭としなければなら
ない。これは火祭であって、主にささげる香ばしいかおりである。
一〇もしその燔祭の供え物が群れの羊またはやぎであるならば、雄の
全きものをささげなければならない。一一彼は祭壇の北側で、主の前に
これをほふり、アロンの子なる祭司たちは、その血を祭壇の周囲に注ぎか
けなければならない。一二彼はまたこれを節々に切り分かち、祭司はこれ
を頭および脂肪と共に、祭壇の上にある火の上のたきぎの上に並べなけ

ればならない。一三その内臓と足とは水で洗わなければならない。こうし
て祭司はそのすべてを祭壇の上で焼いて燔祭としなければならない。これ
は火祭であって、主にささげる香ばしいかおりである。
一四もし主にささげる供え物が、鳥の燔祭であるならば、山ばと、また
は家ばとのひなを、その供え物としてささげなければならない。一五祭司は
これを祭壇に携えて行き、その首を摘み破り、祭壇の上で焼かなければ
ならない。その血は絞り出して祭壇の側面に塗らなければならない。一六
またその餌袋は羽と共に除いて、祭壇の東の方にある灰捨場に捨てな
ければならない。一七これは、その翼を握って裂かなければならない。た
だし引き離してはならない。祭司はこれを祭壇の上で、火の上のたきぎの
上で燔祭として焼かなければならない。これは火祭であって、主にささげ
る香ばしいかおりである。

第二章一人が素祭の供え物を主にささげるときは、その供え物は麦粉で
なければならない。その上に油を注ぎ、またその上に乳香を添え、二こ
れをアロンの子なる祭司たちのもとに携えて行かなければならない。祭司
はその麦粉とその油の一握りを乳香の全部と共に取り、これを記念の分
として、祭壇の上で焼かなければならない。これは火祭であって、主にさ
さげる香ばしいかおりである。三素祭の残りはアロンとその子らのものに
なる。これは主の火祭のいと聖なる物である。
四あなたが、もし天火で焼いたものを素祭としてささげるならば、それは
麦粉に油を混ぜて作った種入れぬ菓子、または油を塗った種入れぬ煎餅
でなければならない。五あなたの供え物が、もし、平鍋で焼いた素祭であ
るならば、それは麦粉に油を混ぜて作った種入れぬものでなければなら
ない。六あなたはそれを細かく砕き、その上に油を注がなければならな

い。これは素祭である。七あなたの供え物が、もし深鍋で煮た素祭である
ならば、麦粉に油を混ぜて作らなければならない。八あなたはこれらの物
で作った素祭を、主に携えて行かなければならない。それを祭司に渡す
ならば、祭司はそれを祭壇に携えて行き、九その素祭のうちから記念の分
を取って、祭壇の上で焼かなければならない。これは火祭であって、主に
ささげる香ばしいかおりである。一〇素祭の残りはアロンとその子らのも
のになる。これは、主の火祭のいと聖なる物である。

一一あなたがたが主にささげる素祭は、すべて種を入れて作ってはなら
ない。パン種も蜜も、すべて主にささげる火祭として焼いてはならないか
らである。一二ただし、初穂の供え物としては、これらを主にささげるこ
とができる。しかし香ばしいかおりとして祭壇にささげてはならない。一
三あなたの素祭の供え物は、すべて塩をもって味をつけなければならない。

あなたの素祭に、あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。すべて、あ
なたの供え物は、塩を添えてささげなければならない。
一四もしあなたが初穂の素祭を主にささげるならば、火で穂を焼いたも
の、新穀の砕いたものを、あなたの初穂の素祭としてささげなければなら
ない。一五あなたはそれに油を加え、その上に乳香を置かなければなら
ない。これは素祭である。一六祭司は、その砕いた物およびその油のうち
から記念の分を取って、乳香の全部と共に焼かなければならない。これ
は主にささげる火祭である。
第三章一もし彼の供え物が酬恩祭の犠牲であって、牛をささげるので
あれば、雌雄いずれであっても、全きものを主の前にささげなければなら
ない。二彼はその供え物の頭に手を置き、会見の幕屋の入口で、これを
ほふらなければならない。そしてアロンの子なる祭司たちは、その血を祭壇

の周囲に注ぎかけなければならない。三彼はまたその酬恩祭の犠牲のう
ちから火祭を主にささげなければならない。すなわち内臓をおおう脂肪と、
内臓の上のすべての脂肪、四二つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、
ならびに腎臓と共にとられる肝臓の上の小葉である。五そしてアロンの
子たちは祭壇の上で、火の上のたきぎの上に置いた燔祭の上で、これを焼
かなければならない。これは火祭であって、主にささげる香ばしいかおり
である。

六もし彼の供え物が主にささげる酬恩祭の犠牲で、それが羊であるな
らば、雌雄いずれであっても、全きものをささげなければならない。七も
し小羊を供え物としてささげるならば、それを主の前に連れてきて、八そ
の供え物の頭に手を置き、それを会見の幕屋の前で、ほふらなければな
らない。そしてアロンの子たちはその血を祭壇の周囲に注ぎかけなければ

ならない。九彼はその酬恩祭の犠牲のうちから、火祭を主にささげなけれ
ばならない。すなわちその脂肪、背骨に接して切り取る脂尾の全部、内臓
をおおう脂肪と内臓の上のすべての脂肪、一〇二つの腎臓とその上の腰の
あたりにある脂肪、ならびに腎臓と共に取られる肝臓の上の小葉である。
一一祭司はこれを祭壇の上で焼かなければならない。これは火祭であって、
主にささげる食物である。
一二もし彼の供え物が、やぎであるならば、それを主の前に連れてきて、
一三その頭に手を置き、それを会見の幕屋の前で、ほふらなければならな
い。そしてアロンの子たちは、その血を祭壇の周囲に注ぎかけなければな
らない。一四彼はまたそのうちから供え物を取り、火祭として主にささげな
ければならない。すなわち内臓をおおう脂肪と内臓の上のすべての脂肪、
一五二つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、ならびに腎臓と共に取

られる肝臓の上の小葉である。一六祭司はこれを祭壇の上で焼かなけれ
ばならない。これは火祭としてささげる食物であって、香ばしいかおりで
ある。脂肪はみな主に帰すべきものである。一七あなたがたは脂肪と血とを
いっさい食べてはならない。これはあなたがたが、すべてその住む所で、
代々守るべき永久の定めである』」。

第四章 一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさい、
『もし人があやまって罪を犯し、主のいましめにそむいて、してはならないこ
との一つをした時は次のようにしなければならない。三すなわち、油注が
れた祭司が罪を犯して、とがを民に及ぼすならば、彼はその犯した罪のため
に雄の全き子牛を罪祭として主にささげなければならない。四その子牛
を会見の幕屋の入口に連れてきて主の前に至り、その子牛の頭に手を置
き、その子牛を主の前で、ほふらなければならない。五油注がれた祭司は、

その子牛の血を取って、それを会見の幕屋に携え入り、六そして祭司は指
をその血に浸して、聖所の垂幕の前で主の前にその血を七たび注がなけれ
ばならない。七祭司はまたその血を取り、主の前で会見の幕屋の中にある
香ばしい薫香の祭壇の角に、それを塗らなければならない。その子牛の血
の残りはことごとく会見の幕屋の入口にある燔祭の祭壇のもとに注がな
ければならない。八またその罪祭の子牛から、すべての脂肪を取らなけれ
ばならない。すなわち内臓をおおう脂肪と内臓の上のすべての脂肪、九二
つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、ならびに腎臓と共に取られる
肝臓の上の小葉である。一〇これを取るには酬恩祭の犠牲の雄牛から取
るのと同じようにしなければならない。そして祭司はそれを燔祭の祭壇の
上で焼かなければならない。一一その子牛の皮とそのすべての肉、およびそ
の頭と足と内臓と汚物など、一二すべてその子牛の残りは、これを宿営

の外の、清い場所なる灰捨場に携え出し、火をもってこれをたきぎの上で
焼き捨てなければならない。すなわちこれは灰捨場で焼き捨てらるべきで
ある。一三もしイスラエルの全会衆があやまちを犯し、そのことが会衆
の目に隠れていても、主のいましめにそむいて、してはならないことの一つ
をなして、とがを得たならば、一四その犯した罪が現れた時、会衆は雄の
子牛を罪祭としてささげなければならない。すなわちそれを会見の幕屋の
前に連れてきて、一五会衆の長老たちは、主の前でその子牛の頭に手を
置き、その子牛を主の前で、ほふらなければならない。一六そして、油注が
れた祭司は、その子牛の血を会見の幕屋に携え入り、一七祭司は指をその
血に浸し、垂幕の前で主の前に七たび注がなければならない。一八またそ
の血を取って、会見の幕屋の中の主の前にある祭壇の角に、それを塗らな
ければならない。その血の残りはことごとく会見の幕屋の入口にある燔祭

の祭壇のもとに注がなければならない。一九またそのすべての脂肪を取っ
て祭壇の上で焼かなければならない。二〇すなわち祭司は罪祭の雄牛にし
たように、この雄牛にも、しなければならない。こうして、祭司が彼らのた
めにあがないをするならば、彼らはゆるされるであろう。二一そして、彼は
その雄牛を宿営の外に携え出し、はじめの雄牛を焼き捨てたように、こ
れを焼き捨てなければならない。これは会衆の罪祭である。

二二またつかさたる者が罪を犯し、あやまって、その神、主のいましめ
にそむき、してはならないことの一つをして、とがを得、二三もしその犯
した罪を知るようになったときは、供え物として雄やぎの全きものを連
れてきて、二四そのやぎの頭に手を置き、燔祭をほふる場所で、主の前に
これをほふらなければならない。これは罪祭である。二五祭司は指でその
罪祭の血を取り、燔祭の祭壇の角にそれを塗り、残りの血は燔祭の祭壇

のもとに注がなければならない。二六また、そのすべての脂肪は、酬恩祭
の犠牲の脂肪と同じように、祭壇の上で焼かなければならない。こうして、
祭司が彼のためにその罪のあがないをするならば、彼はゆるされるであろ
う。二七また一般の人がもしあやまって罪を犯し、主のいましめにそむい
て、してはならないことの一つをして、とがを得、二八その犯した罪を知る
ようになったときは、その犯した罪のために供え物として雌やぎの全き
ものを連れてきて、二九その罪祭の頭に手を置き、燔祭をほふる場所で、
その罪祭をほふらなければならない。三〇そして祭司は指でその血を取り、
燔祭の祭壇の角にこれを塗り、残りの血をことごとく祭壇のもとに注がな
ければならない。三一またそのすべての脂肪は酬恩祭の犠牲から脂肪を取
るのと同じように取り、これを祭壇の上で焼いて主にささげる香ばしいか
おりとしなければならない。こうして祭司が彼のためにあがないをするな

らば、彼はゆるされるであろう。
三二もし小羊を罪祭のために供え物として連れてくるならば、雌の全
きものを連れてこなければならない。三三その罪祭の頭に手を置き、燔祭
をほふる場所で、これをほふり、罪祭としなければならない。三四そして
祭司は指でその罪祭の血を取り、燔祭の祭壇の角にそれを塗り、残りの血
はことごとく祭壇のもとに注がなければならない。三五またそのすべての
脂肪は酬恩祭の犠牲から小羊の脂肪を取るのと同じように取り、祭司は
これを主にささげる火祭のように祭壇の上で焼かなければならない。こう
して祭司が彼の犯した罪のためにあがないをするならば、彼はゆるされる
であろう。

第五章一もし人が証人に立ち、誓いの声を聞きながら、その見たこと、
知っていることを言わないで、罪を犯すならば、彼はそのとがを負わなけれ

ばならない。二また、もし人が汚れた野獣の死体、汚れた家畜の死体、汚
れた這うものの死体など、すべて汚れたものに触れるならば、そのことに
気づかなくても、彼は汚れたものとなって、とがを得る。三また、もし彼
が人の汚れに触れるならば、その人の汚れが、どのような汚れであれ、そ
れに気づかなくても、彼がこれを知るようになった時は、とがを得る。四
また、もし人がみだりにくちびるで誓い、悪をなそう、または善をなそう
と言うならば、その人が誓ってみだりに言ったことは、それがどんなこと
であれ、それに気づかなくても、彼がこれを知るようになった時は、これ
らの一つについて、とがを得る。五もしこれらの一つについて、とがを得
たときは、その罪を犯したことを告白し、六その犯した罪のために償い
として、雌の家畜、すなわち雌の小羊または雌やぎを主のもとに連れてき
て、罪祭としなければならない。こうして祭司は彼のために罪のあがない

をするであろう。
七もし小羊に手のとどかない時は、山ばと二羽か、家ばとのひな二羽か
を、彼が犯した罪のために償いとして主に携えてきて、一羽を罪祭に、
一羽を燔祭にしなければならない。八すなわち、これらを祭司に携えてき
て、祭司はその罪祭のものを先にささげなければならない。すなわち、そ
の頭を首の根のところで、摘み破らなければならない。ただし、切り離
してはならない。九そしてその罪祭の血を祭壇の側面に注ぎ、残りの血は
祭壇のもとに絞り出さなければならない。これは罪祭である。一〇また第
二のものは、定めにしたがって燔祭としなければならない。こうして、祭司
が彼のためにその犯した罪のあがないをするならば、彼はゆるされるであ
ろう。
一一もし二羽の山ばとにも、二羽の家ばとのひなにも、手の届かないとき
は、彼の犯した罪のために、供え物として麦粉十分の一エパを携えてき

て、これを罪祭としなければならない。ただし、その上に油をかけては
ならない。またその上に乳香を添えてはならない。これは罪祭だからで
ある。一二彼はこれを祭司のもとに携えて行き、祭司は一握りを取って、
記念の分とし、これを主にささげる火祭のように、祭壇の上で焼かなけれ
ばならない。これは罪祭である。一三こうして、祭司が彼のため、すなわ
ち、彼がこれらの一つを犯した罪のために、あがないをするならば、彼は
ゆるされるであろう。そしてその残りは素祭と同じく、祭司に帰するであ
ろう』」。

一四主はまたモーセに言われた、一五「もし人が不正をなし、あやまって
主の聖なる物について罪を犯したときは、その償いとして、あなたの値積
りにしたがい、聖所のシケルで、銀数シケルに当る雄羊の全きものを、群
れのうちから取り、それを主に携えてきて、愆祭としなければならない。

一六そしてその聖なる物について犯した罪のために償いをし、またその五
分の一をこれに加えて、祭司に渡さなければならない。こうして祭司がそ
の愆祭の雄羊をもって、彼のためにあがないをするならば、彼はゆるされ
るであろう。
一七また人がもし罪を犯し、主のいましめにそむいて、してはならない
ことの一つをしたときは、たといそれを知らなくても、彼は罪を得、そのと
がを負わなければならない。一八彼はあなたの値積りにしたがって、雄羊
の全きものを群れのうちから取り、愆祭としてこれを祭司のもとに携え
てこなければならない。こうして、祭司が彼のために、すなわち彼が知ら
ないで、しかもあやまって犯した過失のために、あがないをするならば、彼
はゆるされるであろう。一九これは愆祭である。彼は確かに主の前にとが
を得たからである」。

第六章一主はまたモーセに言われた、二「もし人が罪を犯し、主に対し
て不正をなしたとき、すなわち預かり物、手にした質草、またはかすめた
物について、その隣人を欺き、あるいはその隣人をしえたげ、三あるいは
落し物を拾い、それについて欺き、偽って誓うなど、すべて人がそれを
なして罪となることの一つについて、四罪を犯し、とがを得たならば、彼
はそのかすめた物、しえたげて取った物、預かった物、拾った落し物、五
または偽り誓ったすべての物を返さなければならない。すなわち残りな
く償い、更にその五分の一をこれに加え、彼が愆祭をささげる日に、こ
れをその元の持ち主に渡さなければならない。六彼はその償いとして、あ
なたの値積りにしたがい、雄羊の全きものを、群れの中から取り、これを
祭司のもとに携えてきて、愆祭として主にささげなければならない。七こ
うして、祭司が主の前で彼のためにあがないをするならば、彼はそのいず

れを行ってとがを得てもゆるされるであろう」。
八主はまたモーセに言われた、九「アロンとその子たちに命じて言いな
さい、『燔祭のおきては次のとおりである。燔祭は祭壇の炉の上に、朝ま
で夜もすがらあるようにし、そこに祭壇の火を燃え続かせなければならな
い。一〇祭司は亜麻布の服を着、亜麻布のももひきを身につけ、祭壇の上
で火に焼けた燔祭の灰を取って、これを祭壇のそばに置き、一一その衣服
を脱ぎ、ほかの衣服を着て、その灰を宿営の外の清い場所に携え出さな
ければならない。一二祭壇の上の火は、そこに燃え続かせ、それを消して
はならない。祭司は朝ごとに、たきぎをその上に燃やし、燔祭をその上に
並べ、また酬恩祭の脂肪をその上で焼かなければならない。一三火は絶え
ず祭壇の上に燃え続かせ、これを消してはならない。
一四素祭のおきては次のとおりである。アロンの子たちはそれを祭壇の

前で主の前にささげなければならない。一五すなわち素祭の麦粉一握りと
その油を、素祭の上にある全部の乳香と共に取って、祭壇の上で焼き、
香ばしいかおりとし、記念の分として主にささげなければならない。一六
その残りはアロンとその子たちが食べなければならない。すなわち、種を
入れずに聖なる所で食べなければならない。会見の幕屋の庭でこれを食
べなければならない。一七これは種を入れて焼いてはならない。わたしは
これをわたしの火祭のうちから彼らの分として与える。これは罪祭および
愆祭と同様に、いと聖なるものである。一八アロンの子たちのうち、すべ
ての男子はこれを食べることができる。これは主にささげる火祭のうちか
ら、あなたがたが代々永久に受けるように定められた分である。すべて
これに触れるものは聖となるであろう』」。
一九主はまたモーセに言われた、二〇「アロンとその子たちが、アロンの

油注がれる日に、主にささぐべき供え物は次のとおりである。すなわち
麦粉十分の一エパを、絶えずささげる素祭とし、半ばは朝に、半ばは夕に
ささげなければならない。二一それは油をよく混ぜて平鍋で焼き、それを
携えてきて、細かく砕いた素祭とし、香ばしいかおりとして、主にささ
げなければならない。二二彼の子たちのうち、油注がれて彼についで祭司
となる者は、これをささげなければならない。これは永久に主に帰する
分として、全く焼きつくすべきものである。二三すべて祭司の素祭は全
く焼きつくすべきものであって、これを食べてはならない」。
二四主はまたモーセに言われた、二五「アロンとその子たちに言いなさい、
『罪祭のおきては次のとおりである。罪祭は燔祭をほふる場所で、主の前
にほふらなければならない。これはいと聖なる物である。二六罪のためにこ
れをささげる祭司が、これを食べなければならない。すなわち会見の幕屋

の庭の聖なる所で、これを食べなければならない。二七すべてその肉に触
れる者は聖となるであろう。もしその血が衣服にかかったならば、そのか
かったものは聖なる所で洗わなければならない。二八またそれを煮た土の
器は砕かなければならない。もし青銅の器で煮たのであれば、それはみ
がいて、水で洗わなければならない。二九祭司たちのうちのすべての男子
は、これを食べることができる。これはいと聖なるものである。三〇しか
し、その血を会見の幕屋に携えていって、聖所であがないに用いた罪祭
は食べてはならない。これは火で焼き捨てなければならない。

第七章

一愆祭のおきては次のとおりである。それはいと聖なる物である。
二愆祭は燔祭をほふる場所でほふらなければならない。そして祭司はその
血を祭壇の周囲に注ぎかけ、三そのすべての脂肪をささげなければならな
い。すなわち脂尾、内臓をおおう脂肪、四二つの腎臓とその上の腰のあ

たりにある脂肪、腎臓と共に取られる肝臓の上の小葉である。五祭司は
これを祭壇の上で焼いて、主に火祭としなければならない。これは愆祭で
ある。六祭司たちのうちのすべての男子は、これを食べることができる。こ
れは聖なる所で食べなければならない。これはいと聖なる物である。七
罪祭も愆祭も、そのおきては一つであって、異なるところはない。これは、
あがないをなす祭司に帰する。八人が携えてくる燔祭をささげる祭司、そ
の祭司に、そのささげる燔祭のものの皮は帰する。九すべて天火で焼いた
素祭、またすべて深鍋または平鍋で作ったものは、これをささげる祭司に
帰する。一〇すべて素祭は、油を混ぜたものも、かわいたものも、アロン
のすべての子たちにひとしく帰する。

一一主にささぐべき酬恩祭の犠牲のおきては次のとおりである。一二も
しこれを感謝のためにささげるのであれば、油を混ぜた種入れぬ菓子と、

油を塗った種入れぬ煎餅と、よく混ぜた麦粉に油を混ぜて作った菓子と
を、感謝の犠牲に合わせてささげなければならない。一三また種を入れた
パンの菓子をその感謝のための酬恩祭の犠牲に合わせ、供え物としてさ
さげなければならない。一四すなわちこのすべての供え物のうちから、菓子
一つずつを取って主にささげなければならない。これは酬恩祭の血を注
ぎかける祭司に帰する。一五その感謝のための酬恩祭の犠牲の肉は、その
供え物をささげた日のうちに食べなければならない。少しでも明くる朝ま
で残して置いてはならない。一六しかし、その供え物の犠牲がもし誓願の
供え物、または自発の供え物であるならば、その犠牲をささげた日のうち
にそれを食べ、その残りはまた明くる日に食べることができる。一七ただ
し、その犠牲の肉の残りは三日目には火で焼き捨てなければならない。一
八もしその酬恩祭の犠牲の肉を三日目に少しでも食べるならば、それは受

け入れられず、また供え物と見なされず、かえって忌むべき物となるであ
ろう。そしてそれを食べる者はとがを負わなければならない。
一九その肉がもし汚れた物に触れるならば、それを食べることなく、火で
焼き捨てなければならない。犠牲の肉はすべて清い者がこれを食べること
ができる。二〇もし人がその身に汚れがあるのに、主にささげた酬恩祭の
犠牲の肉を食べるならば、その人は民のうちから断たれるであろう。二一
また人がもしすべて汚れたもの、すなわち人の汚れ、あるいは汚れた獣、
あるいは汚れた這うものに触れながら、主にささげた酬恩祭の犠牲の肉
を食べるならば、その人は民のうちから断たれるであろう』」。
二二主はまたモーセに言われた、二三「イスラエルの人々に言いなさい、
『あなたがたは、すべて牛、羊、やぎの脂肪を食べてはならない。二四自然に
死んだ獣の脂肪および裂き殺された獣の脂肪は、さまざまのことに使っ

てもよい。しかし、それは決して食べてはならない。二五だれでも火祭とし
て主にささげる獣の脂肪を食べるならば、これを食べる人は民のうちか
ら断たれるであろう。二六またあなたがたはすべてその住む所で、鳥にせ
よ、獣にせよ、すべてその血を食べてはならない。二七だれでもすべて血
を食べるならば、その人は民のうちから断たれるであろう』」。
二八主はまたモーセに言われた、二九「イスラエルの人々に言いなさい、
『酬恩祭の犠牲を主にささげる者は、その酬恩祭の犠牲のうちから、そ
の供え物を主に携えてこなければならない。三〇主の火祭は手ずからこれ
を携えてこなければならない。すなわちその脂肪と胸とを携えてきて、
その胸を主の前に揺り動かして、揺祭としなければならない。三一そして
祭司はその脂肪を祭壇の上で焼かなければならない。その胸はアロンとそ
の子たちに帰する。三二あなたがたの酬恩祭の犠牲のうちから、その右の

ももを挙祭として、祭司に与えなければならない。三三アロンの子たちの
うち、酬恩祭の血と脂肪とをささげる者は、その右のももを自分の分と
して、獲るであろう。三四わたしはイスラエルの人々の酬恩祭の犠牲のう
ちから、その揺祭の胸と挙祭のももを取って、祭司アロンとその子たちに
与え、これをイスラエルの人々から永久に彼らの受くべき分とする。三
五これは主の火祭のうちから、アロンの受ける分と、その子たちの受ける
分とであって、祭司の職をなすため、彼らが主にささげられた日に定め
られたのである。三六すなわち、これは彼らに油を注ぐ日に、イスラエル
の人々が彼らに与えるように、主が命じられたものであって、代々永久
に受くべき分である』」。

三七これは燔祭、素祭、罪祭、愆祭、任職祭、酬恩祭の犠牲のおきて
である。三八すなわち、主がシナイの荒野においてイスラエルの人々にそ

の供え物を主にささげることを命じられた日に、シナイ山でモーセに命じ
られたものである。

第八章一主はまたモーセに言われた、二「あなたはアロンとその子たち、
およびその衣服、注ぎ油、罪祭の雄牛、雄羊二頭、種入れぬパン一かご
を取り、三また全会衆を会見の幕屋の入口に集めなさい」。四モーセは主
が命じられたようにした。そして会衆は会見の幕屋の入口に集まった。
五そこでモーセは会衆にむかって言った、「これは主があなたがたにせ
よと命じられたことである」。六そしてモーセはアロンとその子たちを連れ
てきて、水で彼らを洗い清め、七アロンに服を着させ、帯をしめさせ、衣
をまとわせ、エポデを着けさせ、エポデの帯をしめさせ、それをもってエ
ポデを身に結いつけ、八また胸当を着けさせ、その胸当にウリムとトンミ
ムを入れ、九その頭に帽子をかぶらせ、その帽子の前に金の板、すなわち

聖なる冠をつけさせた。主がモーセに命じられたとおりである。
一〇モーセはまた注ぎ油を取り、幕屋とそのうちのすべての物に油を
注いでこれを聖別し、一一かつ、それを七たび祭壇に注ぎ、祭壇とそのもろ
もろの器、洗盤とその台に油を注いでこれを聖別し、一二また注ぎ油
をアロンの頭に注ぎ、彼に油を注いでこれを聖別した。一三モーセはま
たアロンの子たちを連れてきて、服を彼らに着させ、帯を彼らにしめさせ、
頭巾を頭に巻かせた。主がモーセに命じられたとおりである。
一四彼はまた罪祭の雄牛を連れてこさせ、アロンとその子たちは、その
罪祭の雄牛の頭に手を置いた。一五モーセはこれをほふり、その血を取り、
指をもってその血を祭壇の四すみの角につけて祭壇を清め、また残りの血
を祭壇のもとに注いで、これを聖別し、これがためにあがないをした。一
六モーセはまたその内臓の上のすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓

とその脂肪とを取り、これを祭壇の上で焼いた。一七ただし、その雄牛の皮
と肉と汚物は宿営の外で、火をもって焼き捨てた。主がモーセに命じら
れたとおりである。
一八彼はまた燔祭の雄羊を連れてこさせ、アロンとその子たちは、その
雄羊の頭に手を置いた。一九モーセはこれをほふって、その血を祭壇の
周囲に注ぎかけた。二〇そして、モーセはその雄羊を節々に切り分かち、そ
の頭と切り分けたものと脂肪とを焼いた。二一またモーセは水でその内臓
と足とを洗い、その雄羊をことごとく祭壇の上で焼いた。これは香ばしい
かおりのための燔祭であって、主にささげる火祭である。主がモーセに命
じられたとおりである。
二二彼はまたほかの雄羊、すなわち任職の雄羊を連れてこさせ、アロ
ンとその子たちは、その雄羊の頭に手を置いた。二三モーセはこれをほふ
り、その血を取って、アロンの右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指

とにつけた。二四またモーセはアロンの子たちを連れてきて、その血を彼ら
の右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指とにつけた。そしてモーセは
その残りの血を、祭壇の周囲に注ぎかけた。二五彼はまたその脂肪、すな
わち脂尾、内臓の上のすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓とその
脂肪、ならびにその右のももを取り、二六また主の前にある種入れぬパン
のかごから種入れぬ菓子一つと、油を入れたパンの菓子一つと、煎餅一つ
とを取って、かの脂肪と右のももとの上に載せ、二七これをすべてアロンの
手と、その子たちの手に渡し、主の前に揺り動かさせて揺祭とした。二八
そしてモーセはこれを彼らの手から取り、祭壇の上で燔祭と共に焼いた。
これは香ばしいかおりとする任職の供え物であって、主にささげる火祭
である。二九そしてモーセはその胸を取り、主の前にこれを揺り動かして
揺祭とした。これは任職の雄羊のうちモーセに帰すべき分であった。主

がモーセに命じられたとおりである。
三〇モーセはまた注ぎ油と祭壇の上の血とを取り、これをアロンとその
服、またその子たちとその服とに注いで、アロンとその服、およびその子
たちと、その服とを聖別した。
三一モーセはまたアロンとその子たちに言った、「会見の幕屋の入口でそ
の肉を煮なさい。そして任職祭のかごの中のパンと共に、それをその所
で食べなさい。これは『アロンとその子たちが食べなければならない、と
言え』とわたしが命じられたとおりである。三二あなたがたはその肉とパ
ンとの残ったものを火で焼き捨てなければならない。三三あなたがたはその
任職祭の終る日まで七日の間、会見の幕屋の入口から出てはならない。
あなたがたの任職は七日を要するからである。三四きょう行ったように、
あなたがたのために、あがないをせよ、と主はお命じになった。三五あな

たがたは会見の幕屋の入口に七日の間、日夜とどまり、主の仰せを守っ
て、死ぬことのないようにしなければならない。わたしはそのように命じ
られたからである」。三六アロンとその子たちは主がモーセによってお命じ
になったことを、ことごとく行った。
第九章一八日目になって、モーセはアロンとその子たち、およびイスラエ
ルの長老たちを呼び寄せ、二アロンに言った、「あなたは雄の子牛の全き
ものを罪祭のために取り、また雄羊の全きものを燔祭のために取って、主
の前にささげなさい。三あなたはまたイスラエルの人々に言いなさい、『あ
なたがたは雄やぎを罪祭のために取り、また一歳の全き子牛と小羊とを
燔祭のために取りなさい、四また主の前にささげる酬恩祭のために雄牛
と雄羊とを取り、また油を混ぜた素祭を取りなさい。主がきょうあなたが
たに現れたもうからである』」。五彼らはモーセが命じたものを会見の幕屋

の前に携えてきた。会衆がみな近づいて主の前に立ったので、六モーセ
は言った、「これは主があなたがたに、せよと命じられたことである。こう
して主の栄光はあなたがたに現れるであろう」。七モーセはまたアロンに
言った、「あなたは祭壇に近づき、あなたの罪祭と燔祭をささげて、あな
たのため、また民のためにあがないをし、また民の供え物をささげて、彼
らのためにあがないをし、すべて主がお命じになったようにしなさい」。
八そこでアロンは祭壇に近づき、自分のための罪祭の子牛をほふった。
九そしてアロンの子たちは、その血を彼のもとに携えてきたので、彼は
指をその血に浸し、それを祭壇の角につけ、残りの血を祭壇のもとに注
ぎ、一〇また罪祭の脂肪と腎臓と肝臓の小葉とを祭壇の上で焼いた。主
がモーセに命じられたとおりである。一一またその肉と皮とは宿営の外で
火をもって焼き捨てた。

一二彼はまた燔祭の獣をほふり、アロンの子たちがその血を彼に渡した
ので、これを祭壇の周囲に注ぎかけた。一三彼らがまた燔祭のもの、すな
わち、その切り分けたものと頭とを彼に渡したので、彼はこれを祭壇の
上で焼いた。一四またその内臓と足とを洗い、祭壇の上で燔祭と共にこれ
を焼いた。

一五彼はまた民の供え物をささげた。すなわち、民のための罪祭のやぎ
を取ってこれをほふり、前のようにこれを罪のためにささげた。一六また
燔祭をささげた。すなわち、これを定めのようにささげた。一七また素祭
をささげ、そのうちから一握りを取り、朝の燔祭に加えて、これを祭壇の
上で焼いた。

一八彼はまた民のためにささげる酬恩祭の犠牲の雄牛と雄羊とをほふ
り、アロンの子たちが、その血を彼に渡したので、彼はこれを祭壇の周囲

に注ぎかけた。一九またその雄牛と雄羊との脂肪、すなわち、脂尾、内臓
をおおうもの、腎臓、肝臓の小葉。二〇これらの脂肪を彼らはその胸の
上に載せて携えてきたので、彼はその脂肪を祭壇の上で焼いた。二一その
胸と右のももとは、アロンが主の前に揺り動かして揺祭とした。モーセが
命じたとおりである。
二二アロンは民にむかって手をあげて、彼らを祝福し、罪祭、燔祭、酬恩祭
をささげ終って降りた。二三モーセとアロンは会見の幕屋に入り、また出
てきて民を祝福した。そして主の栄光はすべての民に現れ、二四主の前
から火が出て、祭壇の上の燔祭と脂肪とを焼きつくした。民はみな、これ
を見て喜びよばわり、そしてひれ伏した。

第一〇章一さてアロンの子ナダブとアビフとは、おのおのその香炉を取っ
て火をこれに入れ、薫香をその上に盛って、異火を主の前にささげた。こ

れは主の命令に反することであったので、二主の前から火が出て彼らを焼
き滅ぼし、彼らは主の前に死んだ。三その時モーセはアロンに言った、「主
は、こう仰せられた。すなわち『わたしは、わたしに近づく者のうちに、わ
たしの聖なることを示し、すべての民の前に栄光を現すであろう』」。ア
ロンは黙していた。
四モーセはアロンの叔父ウジエルの子ミシヤエルとエルザパンとを呼び
寄せて彼らに言った、「近寄って、あなたがたの兄弟たちを聖所の前か
ら、宿営の外に運び出しなさい」。五彼らは近寄って、彼らをその服のま
ま宿営の外に運び出し、モーセの言ったようにした。六モーセはまたアロ
ンおよびその子エレアザルとイタマルとに言った、「あなたがたは髪の毛を
乱し、また衣服を裂いてはならない。あなたがたが死ぬことのないため、ま
た主の怒りが、すべての会衆に及ぶことのないためである。ただし、あな

たがたの兄弟イスラエルの全家は、主が火をもって焼き滅ぼしたもうた
ことを嘆いてもよい。七また、あなたがたは死ぬことのないように、会見
の幕屋の入口から外へ出てはならない。あなたがたの上に主の注ぎ油が
あるからである」。彼らはモーセの言葉のとおりにした。
八主はアロンに言われた、九「あなたも、あなたの子たちも会見の幕屋に
はいる時には、死ぬことのないように、ぶどう酒と濃い酒を飲んではなら
ない。これはあなたがたが代々永く守るべき定めとしなければならない。
一〇これはあなたがたが聖なるものと俗なるもの、汚れたものと清いもの
との区別をすることができるため、一一また主がモーセによって語られたす
べての定めを、イスラエルの人々に教えることができるためである」。
一二モーセはまたアロンおよびその残っている子エレアザルとイタマルと
に言った、「あなたがたは主の火祭のうちから素祭の残りを取り、パン種を

入れずに、これを祭壇のかたわらで食べなさい。これはいと聖なる物であ
る。一三これは主の火祭のうちからあなたの受ける分、またあなたの子たち
の受ける分であるから、あなたがたはこれを聖なる所で食べなければなら
ない。わたしはこのように命じられたのである。一四また揺り動かした胸
とささげたももとは、あなたとあなたのむすこ、娘たちがこれを清い所
で食べなければならない。これはイスラエルの人々の酬恩祭の犠牲の中
からあなたの分、あなたの子たちの分として与えられるものだからである。
一五彼らはそのささげたももと揺り動かした胸とを、火祭の脂肪と共に携
えてきて、これを主の前に揺り動かして揺祭としなければならない。これ
は主がお命じになったように、長く受くべき分としてあなたと、あなたの
子たちとに帰するであろう」。
一六さてモーセは罪祭のやぎを、ていねいに捜したが、見よ、それがすで

に焼かれていたので、彼は残っているアロンの子エレアザルとイタマルと
にむかい、怒って言った、一七「あなたがたは、なぜ罪祭のものを聖なる所
で食べなかったのか。これはいと聖なる物であって、あなたがたが会衆
の罪を負って、彼らのために主の前にあがないをするため、あなたがたに
賜わった物である。一八見よ、その血は聖所の中に携え入れなかった。そ
の肉はわたしが命じたように、あなたがたは必ずそれを聖なる所で食べ
るべきであった」。一九アロンはモーセに言った、「見よ、きょう、彼らはそ
の罪祭と燔祭とを主の前にささげたが、このような事がわたしに臨んだ。
もしわたしが、きょう罪祭のものを食べたとしたら、主はこれを良しとせ
られたであろうか」。二〇モーセはこれを聞いて良しとした。

第一一章一主はまたモーセとアロンに言われた、二「イスラエルの人々
に言いなさい、『地にあるすべての獣のうち、あなたがたの食べることが

できる動物は次のとおりである。三獣のうち、すべてひずめの分かれたも
の、すなわち、ひずめの全く切れたもの、反芻するものは、これを食べる
ことができる。四ただし、反芻するもの、またはひずめの分かれたものの
うち、次のものは食べてはならない。すなわち、らくだ、これは、反芻す
るけれども、ひずめが分かれていないから、あなたがたには汚れたもので
ある。五岩たぬき、これは、反芻するけれども、ひずめが分かれていない
から、あなたがたには汚れたものである。六野うさぎ、これは、反芻する
けれども、ひずめが分かれていないから、あなたがたには汚れたものであ
る。七豚、これは、ひずめが分かれており、ひずめが全く切れているけれ
ども、反芻することをしないから、あなたがたには汚れたものである。八
あなたがたは、これらのものの肉を食べてはならない。またその死体に触
れてはならない。これらは、あなたがたには汚れたものである。

九水の中にいるすべてのもののうち、あなたがたの食べることができる
ものは次のとおりである。すなわち、海でも、川でも、すべて水の中にい
るもので、ひれと、うろこのあるものは、これを食べることができる。
一〇すべて水に群がるもの、またすべての水の中にいる生き物のうち、すなわ
ち、すべて海、また川にいて、ひれとうろこのないものは、あなたがたに
忌むべきものである。
一一これらはあなたがたに忌むべきものであるから、
あなたがたはその肉を食べてはならない。またその死体は忌むべきものと
しなければならない。
一二すべて水の中にいて、ひれも、うろこもないもの
は、あなたがたに忌むべきものである。

一三鳥のうち、次のものは、あなたがたに忌むべきものとして、食べては
ならない。それらは忌むべきものである。すなわち、はげわし、ひげはげ
わし、みさご、
一四とび、はやぶさの類、
一五もろもろのからすの類、
一六

だちょう、よたか、かもめ、たかの類、一七ふくろう、う、みみずく、一八
むらさきばん、ペリカン、はげたか、一九こうのとり、さぎの類、やつがし
ら、こうもり。
二〇また羽があって四つの足で歩くすべての這うものは、あなたがたに
忌むべきものである。二一ただし、羽があって四つの足で歩くすべての這
うもののうち、その足のうえに、跳ね足があり、それで地の上をはねるも
のは食べることができる。二二すなわち、そのうち次のものは食べることが
できる。移住いなごの類、遍歴いなごの類、大いなごの類、小いなごの
類である。二三しかし、羽があって四つの足で歩く、そのほかのすべての
這うものは、あなたがたに忌むべきものである。
二四あなたがたは次の場合に汚れたものとなる。すなわち、すべてこれら
のものの死体に触れる者は夕まで汚れる。二五すべてこれらのものの死体

を運ぶ者は、その衣服を洗わなければならない。彼は夕まで汚れる。二六
すべて、ひずめの分かれた獣で、その切れ目の切れていないもの、また、
反芻することをしないものは、あなたがたに汚れたものである。すべて、
これに触れる者は汚れる。二七すべて四つの足で歩く獣のうち、その足の
裏のふくらみで歩くものは皆あなたがたに汚れたものである。すべてその
死体に触れる者は夕まで汚れる。二八その死体を運ぶ者は、その衣服を洗
わなければならない。彼は夕まで汚れる。これは、あなたがたに汚れたも
のである。

二九地にはう這うもののうち、次のものはあなたがたに汚れたものであ
る。すなわち、もぐらねずみ、とびねずみ、とげ尾とかげの類、三〇やもり、
大とかげ、とかげ、すなとかげ、カメレオン。三一もろもろの這うもののう
ち、これらはあなたがたに汚れたものである。すべてそれらのものが死ん

で、それに触れる者は夕まで汚れる。三二またそれらのものが死んで、そ
れが落ちかかった物はすべて汚れる。木の器であれ、衣服であれ、皮であ
れ、袋であれ、およそ仕事に使う器はそれを水に入れなければならない。
それは夕まで汚れているが、そののち清くなる。三三またそれらのものが、
土の器の中に落ちたならば、その中にあるものは皆汚れる。あなたがた
はその器をこわさなければならない。三四またすべてその中にある食物
で、水分のあるものは汚れる。またすべてそのような器の中にある飲み
物も皆汚れる。三五またそれらのものの死体が落ちかかったならば、その
物はすべて汚れる。天火であれ、かまどであれ、それをこわさなければな
らない。これらは汚れたもので、あなたがたに汚れたものとなる。三六ただ
し、泉、あるいは水の集まった水たまりは汚れない。しかし、その死体
に触れる者は汚れる。三七それらのものの死体が、まく種の上に落ちても、

それは汚れない。三八ただし、種の上に水がかかっていて、その上にそれ
らのものの死体が、落ちるならば、それはあなたがたに汚れたものとなる。
三九あなたがたの食べる獣が死んだ時、その死体に触れる者は夕まで汚
れる。四〇その死体を食べる者は、その衣服を洗わなければならない。夕
まで汚れる。その死体を運ぶ者も、その衣服を洗わなければならない。夕
まで汚れる。

四一すべて地にはう這うものは忌むべきものである。これを食べてはなら
ない。四二すべて腹ばい行くもの、四つ足で歩くもの、あるいは多くの足
をもつもの、すなわち、すべて地にはう這うものは、あなたがたはこれを食
べてはならない。それらは忌むべきものだからである。四三あなたがたはす
べて這うものによって、あなたがたの身を忌むべきものとしてはならない。
また、これをもって身を汚し、あるいはこれによって汚されてはならない。

四四わたしはあなたがたの神、主であるから、あなたがたはおのれを聖別
し、聖なる者とならなければならない。わたしは聖なる者である。地には
う這うものによって、あなたがたの身を汚してはならない。四五わたしはあ
なたがたの神となるため、あなたがたをエジプトの国から導き上った主
である。わたしは聖なる者であるから、あなたがたは聖なる者とならなけ
ればならない』」。
四六これは獣と鳥と、水の中に動くすべての生き物と、地に這うすべて
のものに関するおきてであって、四七汚れたものと清いもの、食べられる
生き物と、食べられない生き物とを区別するものである。
第一二章一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いな
さい、『女がもし身ごもって男の子を産めば、七日のあいだ汚れる。すな
わち、月のさわりの日かずほど汚れるであろう。三八日目にはその子の前

の皮に割礼を施さなければならない。四その女はなお、血の清めに三十
三日を経なければならない。その清めの日の満ちるまでは、聖なる物に触
れてはならない。また聖なる所にはいってはならない。五もし女の子を
産めば、二週間、月のさわりと同じように汚れる。その女はなお、血の
清めに六十六日を経なければならない。
六男の子または女の子についての清めの日が満ちるとき、女は燔祭
のために一歳の小羊、罪祭のために家ばとのひな、あるいは山ばとを、会見
の幕屋の入口の、祭司のもとに、携えてこなければならない。七祭司はこ
れを主の前にささげて、その女のために、あがないをしなければならな
い。こうして女はその出血の汚れが清まるであろう。これは男の子ま
たは女の子を産んだ女のためのおきてである。八もしその女が小羊に
手の届かないときは、山ばと二羽か、家ばとのひな二羽かを取って、一つ

を燔祭、一つを罪祭とし、祭司はその女のために、あがないをしなければ
ばならない。こうして女は清まるであろう』。
第一三章 一主はまたモーセとアロンに言われた、二「人がその身の皮に
腫、あるいは吹出物、あるいは光る所ができ、これがその身の皮にらい病
の患部のようになるならば、その人を祭司アロンまたは、祭司なるアロン
の子たちのひとりのもとに、連れて行かなければならない。三祭司はその身
の皮の患部を見、その患部の毛がもし白く変り、かつ患部が、その身の皮
よりも深く見えるならば、それはらい病の患部である。祭司は彼を見て、
これを汚れた者としなければならない。四もしまたその身の皮の光る所
が白くて、皮よりも深く見えず、また毛も白く変っていないならば、祭司
はその患者を七日のあいだ留め置かなければならない。五七日目に祭司は
これを見て、もし患部の様子に変りがなく、また患部が皮に広がっていな

いならば、祭司はその人をさらに七日のあいだ留め置かなければならない。
六七日目に祭司は再びその人を見て、患部がもし薄らぎ、また患部が皮に
広がっていないならば、祭司はこれを清い者としなければならない。これは
吹出物である。その人は衣服を洗わなければならない。そして清くなるで
あろう。七しかし、その人が祭司に見せて清い者とされた後に、その吹出物
が皮に広くひろがるならば、再び祭司にその身を見せなければならない。
八祭司はこれを見て、その吹出物が皮に広がっているならば、祭司はその
人を汚れた者としなければならない。これはらい病である。
九もし人にらい病の患部があるならば、その人を祭司のもとに連れて行
かなければならない。一〇祭司がこれを見て、その皮に白い腫があり、その
毛も白く変り、かつその腫に生きた生肉が見えるならば、一一これは古い
らい病がその身の皮にあるのであるから、祭司はその人を汚れた者とし

なければならない。その人は汚れた者であるから、これを留め置くに及ば
ない。一二もしらい病が広く皮に出て、そのらい病が、その患者の皮を
頭から足まで、ことごとくおおい、祭司の見るところすべてに及んでおれ
ば、一三祭司はこれを見、もしらい病がその身をことごとくおおっておれ
ば、その患者を清い者としなければならない。それはことごとく白く変っ
たから、彼は清い者である。一四しかし、もし生肉がその人に現れておれ
ば、汚れた者である。一五祭司はその生肉を見て、その人を汚れた者とし
なければならない。生肉は汚れたものであって、それはらい病である。一
六もしまたその生肉が再び白く変るならば、その人は祭司のもとに行か
なければならない。一七祭司はその人を見て、もしその患部が白く変って
おれば、祭司はその患者を清い者としなければならない。その人は清い者
である。

一八また身の皮に腫物があったが、直って、一九その腫物の場所に白い
腫、または赤みをおびた白い光る所があれば、これを祭司に見せなけれ
ばならない。二〇祭司はこれを見て、もし皮よりも低く見え、その毛が白
く変っていれば、祭司はその人を汚れた者としなければならない。それは
腫物に起ったらい病の患部だからである。二一しかし、祭司がこれを見て、
もしその所に白い毛がなく、また皮よりも低い所がなく、かえって薄ら
いでいるならば、祭司はその人を七日のあいだ留め置かなければならない。
二二そしてもし皮に広くひろがっているならば、祭司はその人を汚れた者
としなければならない。それは患部だからである。二三しかし、その光る
所がもしその所にとどまって広がらなければ、それは腫物の跡である。
祭司はその人を清い者としなければならない。
二四また身の皮にやけどがあって、そのやけどの生きた肉がもし赤みをお

びた白、または、ただ白くて光る所となるならば、二五祭司はこれを見な
ければならない。そしてもし、その光る所にある毛が白く変って、そこが
皮よりも深く見えるならば、これはやけどに生じたらい病である。祭司
はその人を汚れた者としなければならない。これはらい病の患部だから
である。二六けれども祭司がこれを見て、その光る所に白い毛がなく、ま
た皮よりも低い所がなく、かえって薄らいでいるならば、祭司はその人を
七日のあいだ留め置き、二七七日目に祭司は彼を見なければならない。もし
皮に広くひろがっているならば、祭司はその人を汚れた者としなければな
らない。これはらい病の患部だからである。二八もしその光る所が、そ
の所にとどまって、皮に広がらずに、かえって薄らいでいるならば、これ
はやけどの腫である。祭司はその人を清い者としなければならない。これ
はやけどの跡だからである。

二九 男あるいは女がもし、頭またはあごに患部が生じたならば、三〇
祭司はその患部を見なければならない。もしそれが皮よりも深く見え、ま
たそこに黄色の細い毛があるならば、祭司はその人を汚れた者としなけれ
ばならない。それはかいせんであって、頭またはあごのらい病だからで
ある。三一また祭司がそのかいせんの患部を見て、もしそれが皮よりも深く
見えず、またそこに黒い毛がないならば、祭司はそのかいせんの患者を七日
のあいだ留め置き、三二七日目に祭司はその患部を見なければならない。そ
のかいせんがもし広がらず、またそこに黄色の毛がなく、そのかいせんが
皮よりも深く見えないならば、三三その人は身をそらなければならない。た
だし、そのかいせんをそってはならない。祭司はそのかいせんのある者を
さらに七日のあいだ留め置き、三四七日目に祭司はそのかいせんを見なけれ
ばならない。もしそのかいせんが皮に広がらず、またそれが皮よりも深く

見えないならば、祭司はその人を清い者としなければならない。その人は
またその衣服を洗わなければならない。そして清くなるであろう。三五し
かし、もし彼が清い者とされた後に、そのかいせんが、皮に広くひろがる
ならば、三六祭司はその人を見なければならない。もしそのかいせんが皮に
広がっているならば、祭司は黄色の毛を捜すまでもなく、その人は汚れた
者である。三七しかし、もしそのかいせんの様子に変りなく、そこに黒い
毛が生じているならば、そのかいせんは直ったので、その人は清い。祭司
はその人を清い者としなければならない。

三八また男あるいは女がもし、その身の皮に光る所、すなわち白い光
る所があるならば、三九祭司はこれを見なければならない。もしその身の
皮の光る所が、鈍い白であるならば、これはただ白せんがその皮に生じ
たのであって、その人は清い。

四〇人がもしその頭から毛が抜け落ちても、それがはげならば清い。四
一もしその額の毛が抜け落ちても、それが額のはげならば清い。四二けれ
ども、もしそのはげ頭または、はげ額に赤みをおびた白い患部があるな
らば、それはそのはげ頭または、はげ額にらい病が発したのである。四
三祭司はこれを見なければならない。もしそのはげ頭または、はげ額の
患部の腫が白く赤みをおびて、身の皮にらい病があらわれているならば、
四四その人はらい病に冒された者であって、汚れた者である。祭司はその
人を確かに汚れた者としなければならない。患部が頭にあるからである。
四五患部のあるらい病人は、その衣服を裂き、その頭を現し、その口
ひげをおおって『汚れた者、汚れた者』と呼ばわらなければならない。四六
その患部が身にある日の間は汚れた者としなければならない。その人は
汚れた者であるから、離れて住まなければならない。すなわち、そのすま

いは宿営の外でなければならない。
四七また衣服にらい病の患部が生じた時は、それが羊毛の衣服であれ、
亜麻の衣服であれ、四八あるいは亜麻または羊毛の縦糸であれ、横糸であ
れ、あるいは皮であれ、皮で作ったどのような物であれ、四九もしその衣服
あるいは皮、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいは皮で作ったどのよう
な物であれ、その患部が青みをおびているか、あるいは赤みをおびているな
らば、これはらい病の患部である。これを祭司に見せなければならない。
五〇祭司はその患部を見て、その患部のある物を七日のあいだ留め置き、五
一七日目に患部を見て、もしその衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、ある
いは皮、またどのように用いられている皮であれ、患部が広がっているな
らば、その患部は悪性のらい病であって、それは汚れた物である。五二彼
はその患部のある衣服、あるいは羊毛、または亜麻の縦糸、または横糸、

あるいはすべて皮で作った物を焼かなければならない。これは悪性のらい
病であるから、その物を火で焼かなければならない。
五三しかし、祭司がこれを見て、もし患部がその衣服、あるいは縦糸、あ
るいは横糸、あるいはすべて皮で作った物に広がっていないならば、五四
祭司は命じて、その患部のある物を洗わせ、さらに七日の間これを留め置
かなければならない。五五そしてその患部を洗った後、祭司はそれを見て、
もし患部の色が変らなければ、患部が広がらなくても、それは汚れた物で
ある。それが表にあっても裏にあっても腐れであるから、それを火で焼か
なければならない。
五六しかし、祭司がこれを見て、それを洗った後に、その患部が薄らいだ
ならば、その衣服、あるいは皮、あるいは縦糸、あるいは横糸から、それ
を切り取らなければならない。五七しかし、なおその衣服、あるいは縦糸、

あるいは横糸、あるいはすべて皮で作った物にそれが現れれば、それは
再発したのである。その患部のある物を火で焼かなければならない。五八
また洗った衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいはすべて皮で作っ
た物から、患部が消え去るならば、再びそれを洗わなければならない。そ
うすれば清くなるであろう」。
五九これは羊毛または亜麻の衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、ある
いはすべて皮で作った物に生じるらい病の患部について、それを清い物
とし、または汚れた物とするためのおきてである。

第一四章

一主はまたモーセに言われた、二「らい病人が清い者とされる
時のおきては次のとおりである。すなわち、その人を祭司のもとに連れて
行き、三祭司は宿営の外に出て行って、その人を見、もしらい病の患部が
いえているならば、四祭司は命じてその清められる者のために、生きている

清い小鳥二羽と、香柏の木と、緋の糸と、ヒソプとを取ってこさせ、五祭司
はまた命じて、その小鳥の一羽を、流れ水を盛った土の器の上で殺させ、
六そして生きている小鳥を、香柏の木と、緋の糸と、ヒソプと共に取って、
これをかの流れ水を盛った土の器の上で殺した小鳥の血に、その生きて
いる小鳥と共に浸し、七これをらい病から清められる者に七たび注いで、
その人を清い者とし、その生きている小鳥は野に放たなければならない。
八清められる者はその衣服を洗い、毛をことごとくそり落し、水に身をす
すいで清くなり、その後、宿営にはいることができる。ただし七日の間
はその天幕の外にいなければならない。九そして七日目に毛をことごとく
そらなければならい。頭の毛も、ひげも、まゆも、ことごとくそらなけれ
ばならない。彼はその衣服を洗い、水に身をすすいで清くなるであろう。
一〇八日目にその人は雄の小羊の全きもの二頭と、一歳の雌の小羊の

全きもの一頭とを取り、また麦粉十分の三エパに油を混ぜた素祭と、油
一ログとを取らなければならない。一一清めをなす祭司は、清められる人
とこれらの物とを、会見の幕屋の入口で主の前に置き、一二祭司は、かの
雄の小羊一頭を取って、これを一ログの油と共に愆祭としてささげ、ま
たこれを主の前に揺り動かして揺祭としなければならない。一三この雄の
小羊は罪祭および燔祭をほふる場所、すなわち聖なる所で、これをほふ
らなければならない。愆祭は罪祭と同じく、祭司に帰するものであって、
いと聖なる物である。一四そして祭司はその愆祭の血を取り、これを清め
られる者の右の耳たぶと、右の手の親指と、右の足の親指とにつけなけ
ればならない。一五祭司はまた一ログの油を取って、これを自分の左の
手のひらに注ぎ、一六そして祭司は右の指を左の手のひらにある油に浸
し、その指をもって、その油を七たび主の前に注がなければならない。一

七祭司は手のひらにある油の残りを、清められる者の右の耳たぶと、右
の手の親指と、右の足の親指とに、さきにつけた愆祭の血の上につけなけ
ればならない。一八そして祭司は手のひらになお残っている油を、清めら
れる者の頭につけ、主の前で、その人のためにあがないをしなければな
らない。一九また祭司は罪祭をささげて、汚れのゆえに、清められねばな
らぬ者のためにあがないをし、その後、燔祭のものをほふらなければなら
ない。二〇そして祭司は燔祭と素祭とを祭壇の上にささげ、その人のため
に、あがないをしなければならない。こうしてその人は清くなるであろう。
二一その人がもし貧しくて、それに手の届かない時は、自分のあがないの
ために揺り動かす愆祭として、雄の小羊一頭を取り、また素祭として油
を混ぜた麦粉十分の一エパと、油一ログとを取り、二二さらにその手の届
く山ばと二羽、または家ばとのひな二羽を取らなければならない。その一

つは罪祭のため、他の一つは燔祭のためである。
二三そして八日目に、その清めのために会見の幕屋の入口におる祭司のもと、主の前にこれを携えて行かなければならない。
二四祭司はその愆祭の雄の小羊と、一ログの油とを取り、これを主の前に揺り動かして揺祭としなければならない。
二五そして祭司は愆祭の雄の小羊をほふり、その愆祭の血を取って、これを清められる者の右の耳たぶと、右の手の親指と、右の足の親指とにつけなければならない。
二六また祭司はその油を自分の左の手のひらに注ぎ、
二七祭司はその右の指をもって、左の手のひらにある油を、七たび主の前に注がなければならない。
二八また祭司はその手のひらにある油を、清められる者の右の耳たぶと、右の手の親指と、右の足の親指とに、すなわち、愆祭の血をつけたところにつけなければならない。
二九また祭司は手のひらに残っている油を、清められる者の頭につけ、主の前で、その人のた

めに、あがないをしなければならない。三〇その人はその手の届く山ばと
一羽、または家ばとのひな一羽をささげなければならない。三一すなわち、
その手の届くものの一つを罪祭とし、他の一つを燔祭として素祭と共にさ
さげなければならない。こうして祭司は清められる者のために、主の前に
あがないをするであろう。三二これはらい病の患者で、その清めに必要な
ものに、手の届かない者のためのおきてである」。
三三主はまたモーセとアロンに言われた、三四「あなたがたに所有として
与えるカナンの地に、あなたがたがはいる時、その所有の地において、家
にわたしがらい病の患部を生じさせることがあれば、三五その家の持ち
主はきて、祭司に告げ、『患部のようなものが、わたしの家にあります』と
言わなければならない。三六祭司は命じて、祭司がその患部を見に行く前
に、その家をあけさせ、その家にあるすべての物が汚されないようにし、

その後、祭司は、はいってその家を見なければならない。
三七その患部を見て、もしその患部が家の壁にあって、青または赤のくぼみをもち、それが壁よりも低く見えるならば、
三八祭司はその家を出て、家の入口にいたり、七日の間その家を閉鎖しなければならない。
三九祭司は七日目に、またきてそれを見、その患部がもし家の壁に広がっているならば、
四〇祭司は命じて、その患部のある石を取り出し、町の外の汚れた物を捨てる場所に捨てさせ、
四一またその家の内側のまわりを削らせ、その削ったしっくいを町の外の汚れた物を捨てる場所に捨てさせ、
四二ほかの石を取って、元の石のところに入れさせ、またほかのしっくいを取って、家を塗らせなければならない。

四三このように石を取り出し、家を削り、塗りかえた後に、その患部がもし再び家に出るならば、
四四祭司はまたきて見なければならない。患部

がもし家に広がっているならば、これは家にある悪性のらい病であって、
これは汚れた物である。四五その家は、こぼち、その石、その木、その家
のしっくいは、ことごとく町の外の汚れた物を捨てる場所に運び出さなけ
ればならない。四六その家が閉鎖されている日の間に、これにはいる者は
夕まで汚れるであろう。四七その家に寝る者はその衣服を洗わなければな
らない。その家で食する者も、その衣服を洗わなければならない。
四八しかし、祭司がはいって見て、もし家を塗りかえた後に、その患部が
家に広がっていなければ、これはその患部がいえたのであるから、祭司は
その家を清いものとしなければならない。四九また彼はその家を清めるた
めに、小鳥二羽と、香柏の木と、緋の糸と、ヒソプとを取り、五〇その小鳥
の一羽を流れ水を盛った土の器の上で殺し、五一香柏の木と、ヒソプと、
緋の糸と、生きている小鳥とを取って、その殺した小鳥の血と流れ水に浸

し、これを七たび家に注がなければならない。五二こうして祭司は小鳥の血
と流れ水と、生きている小鳥と、香柏の木と、ヒソプと、緋の糸とをもって
家を清め、五三その生きている小鳥は町の外の野に放して、その家のため
に、あがないをしなければならない。こうして、それは清くなるであろう」。
五四これはらい病のすべての患部、かいせん、五五および衣服と家のら
い病、五六ならびに腫と、吹出物と、光る所とに関するおきてであって、
五七いつそれが汚れているか、いつそれが清いかを教えるものである。こ
れがらい病に関するおきてである。

第一五章
一主はまた、モーセとアロンに言われた、二「イスラエルの人々に
言いなさい、『だれでもその肉に流出があれば、その流出は汚れである。
三その流出による汚れは次のとおりである。すなわち、その肉の流出
が続いていても、あるいは、その肉の流出が止まっていても、共に汚れ

である。四流出ある者の寝た床はすべて汚れる。またその人のすわった
物はすべて汚れるであろう。五その床に触れる者は、その衣服を洗い、水
に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。六流出あ
る者のすわった物の上にすわる者は、その衣服を洗い、水に身をすすがな
ければならない。彼は夕まで汚れるであろう。七流出ある者の肉に触れ
る者は衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れる
であろう。八流出ある者のつばきが、清い者にかかったならば、その人
は衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであ
ろう。九流出ある者の乗った鞍はすべて汚れる。一〇また彼の下になっ
た物に触れる者は、すべて夕まで汚れるであろう。またそれらの物を運ぶ
者は、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚
れるであろう。一一流出ある者が、水で手を洗わずに人に触れるならば、

その人は衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れ
るであろう。一二流出ある者が触れた土の器は砕かなければならない。
木の器はすべて水で洗わなければならない。
一三流出ある者のその流出がやんで清くなるならば、清めのために七日
を数え、その衣服を洗い、流れ水に身をすすがなければならない。そうし
て清くなるであろう。一四八日目に、山ばと二羽、または家ばとのひな二羽
を取って、会見の幕屋の入口に行き、主の前に出て、それを祭司に渡さな
ければならない。一五祭司はその一つを罪祭とし、他の一つを燔祭として
ささげなければならない。こうして祭司はその人のため、その流出のた
めに主の前に、あがないをするであろう。
一六人がもし精を漏らすことがあれば、その全身を水にすすがなければな
らない。彼は夕まで汚れるであろう。一七すべて精のついた衣服および皮

で作った物は水で洗わなければならない。これは夕まで汚れるであろう。
一八男がもし女と寝て精を漏らすことがあれば、彼らは共に水に身をす
すがなければならない。彼らは夕まで汚れるであろう。
一九また女に流出があって、その身の流出がもし血であるならば、
その女は七日のあいだ不浄である。すべてその女に触れる者は夕まで汚
れるであろう。二〇その不浄の間に、その女の寝た物はすべて汚れる。ま
たその女のすわった物も、すべて汚れるであろう。二一すべてその女の
床に触れる者は、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼
は夕まで汚れるであろう。二二すべてその女のすわった物に触れる者は皆
その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるで
あろう。二三またその女が床の上、またはすわる物の上におる時、それに
触れるならば、その人は夕まで汚れるであろう。二四男がもし、その女

と寝て、その不浄を身にうけるならば、彼は七日のあいだ汚れるであろう。
また彼の寝た床はすべて汚れるであろう。
二五女にもし、その不浄の時のほかに、多くの日にわたって血の流出
があるか、あるいはその不浄の時を越して流出があれば、その汚れの
流出の日の間は、すべてその不浄の時と同じように、その女は汚れ
た者である。二六その流出の日の間に、その女の寝た床は、すべてそ
の女の不浄の時の床と同じようになる。すべてその女のすわった物は、
不浄の汚れのように汚れるであろう。二七すべてこれらの物に触れる人は
汚れる。その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで
汚れるであろう。二八しかし、その女の流出がやんで、清くなるなら
ば、自分のために、なお七日を数えなければならない。そして後、清くなる
であろう。二九その女は八日目に山ばと二羽、または家ばとのひな二羽を

自分のために取り、それを会見の幕屋の入口におる祭司のもとに携えて
行かなければならない。三〇祭司はその一つを罪祭とし、他の一つを燔祭
としてささげなければならない。こうして祭司はその女のため、その汚れ
の流出のために主の前に、あがないをするであろう。
三一このようにしてあなたがたは、イスラエルの人々を汚れから離さな
ければならない。これは彼らのうちにあるわたしの幕屋を彼らが汚し、そ
の汚れのために死ぬことのないためである』」。
三二これは流出ある者、精を漏らして汚れる者、三三不浄をわずらう
女、ならびに男あるいは女の流出ある者、および不浄の女と寝る
者に関するおきてである。

第一六章一アロンのふたりの子が、主の前に近づいて死んだ後、二主は
モーセに言われた、「あなたの兄弟アロンに告げて、彼が時をわかたず、

垂幕の内なる聖所に入り、箱の上なる贖罪所の前に行かぬようにさせな
さい。彼が死を免れるためである。なぜなら、わたしは雲の中にあって
贖罪所の上に現れるからである。三アロンが聖所に、はいるには、次の
ようにしなければならない。すなわち雄の子牛を罪祭のために取り、雄羊
を燔祭のために取り、四聖なる亜麻布の服を着、亜麻布のももひきをその
身にまとい、亜麻布の帯をしめ、亜麻布の帽子をかぶらなければならない。
これらは聖なる衣服である。彼は水に身をすすいで、これを着なければな
らない。五またイスラエルの人々の会衆から雄やぎ二頭を罪祭のために
取り、雄羊一頭を燔祭のために取らなければならない。
六そしてアロンは自分のための罪祭の雄牛をささげて、自分と自分の家族
のために、あがないをしなければならない。七アロンはまた二頭のやぎを取
り、それを会見の幕屋の入口で主の前に立たせ、八その二頭のやぎのため

に、くじを引かなければならない。すなわち一つのくじは主のため、一つの
くじはアザゼルのためである。九そしてアロンは主のためのくじに当った
やぎをささげて、これを罪祭としなければならない。一〇しかし、アザゼル
のためのくじに当ったやぎは、主の前に生かしておき、これをもって、あ
がないをなし、これをアザゼルのために、荒野に送らなければならない。
一一すなわち、アロンは自分のための罪祭の雄牛をささげて、自分と自分
の家族のために、あがないをしなければならない。彼は自分のための罪祭の
雄牛をほふり、一二主の前の祭壇から炭火を満たした香炉と、細かくひいた
香ばしい薫香を両手いっぱい取って、これを垂幕の内に携え入り、一三
主の前で薫香をその火にくべ、薫香の雲に、あかしの箱の上なる贖罪所
をおおわせなければならない。こうして、彼は死を免れるであろう。一四彼
はまたその雄牛の血を取り、指をもってこれを贖罪所の東の面に注ぎ、

また指をもってその血を贖罪所の前に、七たび注がなければならない。
一五また民のための罪祭のやぎをほふり、その血を垂幕の内に携え入
り、その血をかの雄牛の血のように、贖罪所の上と、贖罪所の前に注
ぎ、一六イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろ
の罪のゆえに、聖所のためにあがないをしなければならない。また彼らの
汚れのうちに、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのようにしなけ
ればならない。一七彼が聖所であがないをするために、はいった時は、自分
と自分の家族と、イスラエルの全会衆とのために、あがないをなし終えて
出るまで、だれも会見の幕屋の内にいてはならない。一八そして彼は主の
前の祭壇のもとに出てきて、これがために、あがないをしなければならな
い、すなわち、かの雄牛の血と、やぎの血とを取って祭壇の四すみの角に
つけ、一九また指をもって七たびその血をその上に注ぎ、イスラエルの人々

の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない。
二〇こうして聖所と会見の幕屋と祭壇とのために、あがないをなし終え
たとき、かの生きているやぎを引いてこなければならない。二一そしてアロ
ンは、その生きているやぎの頭に両手をおき、イスラエルの人々のもろ
もろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に
告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これ
を荒野に送らなければならない。二二こうしてやぎは彼らのもろもろの悪
をになって、人里離れた地に行くであろう。すなわち、そのやぎを荒野に
送らなければならない。
二三そして、アロンは会見の幕屋に入り、聖所に入る時に着た亜麻布の
衣服を脱いで、そこに置き、二四聖なる所で水に身をすすぎ、他の衣服を
着、出てきて、自分の燔祭と民の燔祭とをささげて、自分のため、また民

のために、あがないをしなければならない。二五また罪祭の脂肪を祭壇の
上で焼かなければならない。二六かのやぎをアザゼルに送った者は衣服を
洗い、水に身をすすがなければならない。その後、宿営に入ることがで
きる。二七聖所で、あがないをするために、その血を携え入れられた罪祭
の雄牛と、罪祭のやぎとは、宿営の外に携え出し、その皮と肉と汚物と
は、火で焼き捨てなければならない。二八これを焼く者は衣服を洗い、水に
身をすすがなければならない。その後、宿営に入ることができる。
二九これはあなたがたが永久に守るべき定めである。すなわち、七月に
なって、その月の十日に、あなたがたは身を悩まし、何の仕事もしてはな
らない。この国に生れた者も、あなたがたのうちに宿っている寄留者も、
そうしなければならない。三〇この日にあなたがたのため、あなたがたを
清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪

が清められるからである。三一これはあなたがたの全き休みの安息日で
あって、あなたがたは身を悩まさなければならない。これは永久に守るべ
き定めである。三二油を注がれ、父に代って祭司の職に任じられる祭司
は、亜麻布の衣服、すなわち、聖なる衣服を着て、あがないをしなければな
らない。三三彼は至聖所のために、あがないをなし、また会見の幕屋のため
と、祭壇のために、あがないをなし、また祭司たちのためと、民の全会衆
のために、あがないをしなければならない。三四これはあなたがたの永久
に守るべき定めであって、イスラエルの人々のもろもろの罪のために、年
に一度あがないをするものである」。
彼は主がモーセに命じられたとおりにおこなった。

第一七章一主はまたモーセに言われた、二「アロンとその子たち、および
イスラエルのすべての人々に言いなさい、『主が命じられることはこれであ

る。すなわち三イスラエルの家のだれでも、牛、羊あるいは、やぎを宿営
の内でほふり、または宿営の外でほふり、四それを会見の幕屋の入口に
携えてきて主の幕屋の前で、供え物として主にささげないならば、その
人は血を流した者とみなされる。彼は血を流したゆえ、その民のうちから
断たれるであろう。五これはイスラエルの人々に、彼らが野のおもてでほ
ふるのを常としていた犠牲を主のもとにひいてこさせ、会見の幕屋の入口
におる祭司のもとにきて、これを主にささげる酬恩祭の犠牲としてほふ
らせるためである。六祭司はその血を会見の幕屋の入口にある主の祭壇に
注ぎかけ、またその脂肪を焼いて香ばしいかおりとし、主にささげなけれ
ばならない。七彼らが慕って姦淫をおこなったみだらな神に、再び犠牲
をささげてはならない。これは彼らが代々ながく守るべき定めである』。
八あなたはまた彼らに言いなさい、『イスラエルの家の者、またはあなた

がたのうちに宿る寄留者のだれでも、燔祭あるいは犠牲をささげるのに、
九これを会見の幕屋の入口に携えてきて、主にささげないならば、その
人は、その民のうちから断たれるであろう。
一〇イスラエルの家の者、またはあなたがたのうちに宿る寄留者のだれ
でも、血を食べるならば、わたしはその血を食べる人に敵して、わたしの顔
を向け、これをその民のうちから断つであろう。一一肉の命は血にあるか
らである。あなたがたの魂のために祭壇の上で、あがないをするため、
わたしはこれをあなたがたに与えた。血は命であるゆえに、あがなうこと
ができるからである。一二このゆえに、わたしはイスラエルの人々に言っ
た。あなたがたのうち、だれも血を食べてはならない。またあなたがたの
うちに宿る寄留者も血を食べてはならない。一三イスラエルの人々のうち、
またあなたがたのうちに宿る寄留者のうち、だれでも、食べてもよい獣

あるいは鳥を狩り獲た者は、その血を注ぎ出し、土でこれをおおわなけれ
ばならない。
一四すべて肉の命は、その血と一つだからである。それで、わたしはイス
ラエルの人々に言った。あなたがたは、どんな肉の血も食べてはならない。
すべて肉の命はその血だからである。すべて血を食べる者は断たれるで
あろう。一五自然に死んだもの、または裂き殺されたものを食べる人は、国
に生れた者であれ、寄留者であれ、その衣服を洗い、水に身をすすがなけ
ればならない。彼は夕まで汚れているが、その後、清くなるであろう。一
六もし、洗わず、また身をすすがないならば、彼はその罪を負わなければ
ならない』」。

第一八章一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさ
い、『わたしはあなたがたの神、主である。三あなたがたの住んでいたエジ
プトの国の習慣を見習ってはならない。またわたしがあなたがたを導き

入れるカナンの国の習慣を見習ってはならない。また彼らの定めに歩ん
ではならない。
四わたしのおきてを行い、わたしの定めを守り、それに歩
まなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。
五あなたがた
はわたしの定めとわたしのおきてを守らなければならない。もし人が、こ
れを行うならば、これによって生きるであろう。わたしは主である。
六あなたがたは、だれも、その肉親の者に近づいて、これを犯してはなら
ない。わたしは主である。
七あなたの母を犯してはならない。それはあな
たの父をはずかしめることだからである。彼女はあなたの母であるから、
これを犯してはならない。
八あなたの父の妻を犯してはならない。それは
あなたの父をはずかしめることだからである。
九あなたの姉妹、すなわちあ
なたの父の娘にせよ、母の娘にせよ、家に生れたのと、よそに生れたの
とを問わず、これを犯してはならない。
一〇あなたのむすこの娘、あるい

は、あなたの娘の娘を犯してはならない。それはあなた自身をはずかし
めることだからである。一一あなたの父の妻があなたの父によって産んだ
娘は、あなたの姉妹であるから、これを犯してはならない。一二あなたの父
の姉妹を犯してはならない。彼女はあなたの父の肉親だからである。一三
またあなたの母の姉妹を犯してはならない。彼女はあなたの母の肉親だか
らである。一四あなたの父の兄弟の妻を犯し、父の兄弟をはずかしめて
はならない。彼女はあなたのおばだからである。一五あなたの嫁を犯しては
ならない。彼女はあなたのむすこの妻であるから、これを犯してはならな
い。一六あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟を
はずかしめることだからである。一七あなたは女とその娘とを一緒に犯
してはならない。またその女のむすこの娘、またはその娘の娘を取っ
て、これを犯してはならない。彼らはあなたの肉親であるから、これは悪事

である。一八あなたは妻のなお生きているうちにその姉妹を取って、同じく
妻となし、これを犯してはならない。
一九あなたは月のさわりの不浄にある女に近づいて、これを犯してはな
らない。二〇隣の妻と交わり、彼女によって身を汚してはならない。二一
あなたの子どもをモレクにささげてはならない。またあなたの神の名を汚
してはならない。わたしは主である。二二あなたは女と寝るように男と
寝てはならない。これは憎むべきことである。二三あなたは獣と交わり、
これによって身を汚してはならない。また女も獣の前に立って、これと
交わってはならない。これは道にはずれたことである。
二四あなたがたはこれらのもろもろの事によって身を汚してはならない。
わたしがあなたがたの前から追い払う国々の人は、これらのもろもろの事
によって汚れ、二五その地もまた汚れている。ゆえに、わたしはその悪の

ためにこれを罰し、その地もまたその住民を吐き出すのである。二六ゆえ
に、あなたがたはわたしの定めとわたしのおきてを守り、これらのもろも
ろの憎むべき事の一つでも行ってはならない。国に生れた者も、あなた
がたのうちに宿っている寄留者もそうである。二七あなたがたの先にいた
この地の人々は、これらのもろもろの憎むべき事を行ったので、その地
も汚れたからである。二八これは、あなたがたがこの地を汚して、この地が
あなたがたの先にいた民を吐き出したように、あなたがたをも吐き出すこ
とのないためである。二九これらのもろもろの憎むべき事の一つでも行う
者があれば、これを行う人は、だれでもその民のうちから断たれるであろ
う。三〇それゆえに、あなたがたはわたしの言いつけを守り、先に行われ
たこれらの憎むべき風習の一つをも行ってはならない。またこれによっ
て身を汚してはならない。わたしはあなたがたの神、主である』」。

第一九章 一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々の全会衆に言
いなさい、『あなたがたの神、主なるわたしは、聖であるから、あなたがた
も聖でなければならない。三あなたがたは、おのおのその母とその父とを
おそれなければならない。またわたしの安息日を守らなければならない。
わたしはあなたがたの神、主である。四むなしい神々に心を寄せてはなら
ない。また自分のために神々を鋳て造ってはならない。わたしはあなたが
たの神、主である。
五酬恩祭の犠牲を主にささげるときは、あなたがたが受け入れられるよ
うに、それをささげなければならない。六それは、ささげた日と、その翌日
とに食べ、三日目まで残ったものは、それを火で焼かなければならない。七
もし三日目に、少しでも食べるならば、それは忌むべきものとなって、あ
なたは受け入れられないであろう。八それを食べる者は、主の聖なる物を

汚(けが)すので、そのとがを負(お)わなければならない。その人(ひと)は民(たみ)のうちから断(た)た
れるであろう。
九あなたがたの地(ち)の実(み)のりを刈(か)り入(い)れるときは、畑(はたけ)のすみずみまで刈(か)り
つくしてはならない。またあなたの刈入(かりい)れの落(お)ち穂(ぼ)を拾(ひろ)ってはならない。一
〇あなたのぶどう畑(はたけ)の実(み)を取(と)りつくしてはならない。またあなたのぶどう
畑(はたけ)に落(お)ちた実(み)を拾(ひろ)ってはならない。貧(まず)しい者(もの)と寄留者(きりゅうしゃ)とのために、これ
を残(のこ)しておかなければならない。わたしはあなたがたの神(かみ)、主(しゅ)である。
一一あなたがたは盗(ぬす)んではならない。欺(あざむ)いてはならない。互(たがい)に偽(いつわ)って
はならない。一二わたしの名(な)により偽(いつわ)り誓(ちか)って、あなたがたの神(かみ)の名(な)を汚(けが)
してはならない。わたしは主(しゅ)である。
一三あなたの隣人(りんじん)をしえたげてはならない。また、かすめてはならない。
日雇人(ひやといにん)の賃銀(ちんぎん)を明(あ)くる朝(あさ)まで、あなたのもとにとどめておいてはならな

い。一四耳しいを、のろってはならない。目しいの前につまずく物を置い
てはならない。あなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。
一五さばきをするとき、不正を行ってはならない。貧しい者を片よって
かばい、力ある者を曲げて助けてはならない。ただ正義をもって隣人を
さばかなければならない。一六民のうちを行き巡って、人の悪口を言いふ
らしてはならない。あなたの隣人の血にかかわる偽証をしてはならない。
わたしは主である。
一七あなたは心に兄弟を憎んではならない。あなたの隣人をねんごろ
にいさめて、彼のゆえに罪を身に負ってはならない。一八あなたはあだを返
してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた
自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である。
一九あなたがたはわたしの定めを守らなければならない。あなたの家畜

に異なった種をかけてはならない。あなたの畑に二種の種をまいてはな
らない。二種の糸の混ぜ織りの衣服を身につけてはならない。
二〇だれでも、人と婚約のある女奴隷で、まだあがなわれず、自由を与
えられていない者と寝て交わったならば、彼らふたりは罰を受ける。しか
し、殺されることはない。彼女は自由の女ではないからである。二一しか
し、その男は愆祭を主に携えてこなければならない。すなわち、愆祭の
雄羊を、会見の幕屋の入口に連れてこなければならない。二二そして、祭司
は彼の犯した罪のためにその愆祭の雄羊をもって、主の前に彼のために、
あがないをするであろう。こうして彼の犯した罪はゆるされるであろう。
二三あなたがたが、かの地にはいって、もろもろのくだものの木を植える
ときは、その実はまだ割礼をうけないものと、見なさなければならない。す
なわち、それは三年の間あなたがたには、割礼のないものであって、食べ

てはならない。二四四年目には、そのすべての実を聖なる物とし、それを
さんびの供え物として主にささげなければならない。二五しかし五年目に
は、あなたがたはその実を食べることができるであろう。こうするならば、
それはあなたがたのために、多くの実を結ぶであろう。わたしはあなたが
たの神、主である。

二六あなたがたは何をも血のままで食べてはならない。また占いをして
はならない。魔法を行ってはならない。二七あなたがたのびんの毛を切っ
てはならない。ひげの両端をそこなってはならない。二八死人のために
身を傷つけてはならない。また身に入墨をしてはならない。わたしは主で
ある。

二九あなたの娘に遊女のわざをさせて、これを汚してはならない。これ
はみだらな事が国に行われ、悪事が地に満ちないためである。三〇あなた

がたはわたしの安息日を守り、わたしの聖所を敬わなければならない。
わたしは主である。
三一あなたがたは口寄せ、または占い師のもとにおもむいてはならない。
彼らに問うて汚されてはならない。わたしはあなたがたの神、主である。
三二あなたは白髪の人の前では、起立しなければならない。また老人を
敬い、あなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。
三三もし他国人があなたがたの国に寄留して共にいるならば、これをし
えたげてはならない。三四あなたがたと共にいる寄留の他国人を、あなた
がたと同じ国に生れた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなけ
ればならない。あなたがたもかつてエジプトの国で他国人であったからで
ある。わたしはあなたがたの神、主である。
三五あなたがたは、さばきにおいても、物差しにおいても、はかりにおい

ても、ますにおいても、不正を行ってはならない。三六あなたがたは正し
いてんびん、正しいおもり石、正しいエパ、正しいヒンを使わなければなら
ない。わたしは、あなたがたをエジプトの国から導き出したあなたがたの
神、主である。三七あなたがたはわたしのすべての定めと、わたしのすべて
のおきてを守って、これを行わなければならない。わたしは主である』」。
第二〇章一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさ
い、『イスラエルの人々のうち、またイスラエルのうちに寄留する他国人
のうち、だれでもその子供をモレクにささげる者は、必ず殺されなければ
ならない。すなわち、国の民は彼を石で撃たなければならない。三わたし
は顔をその人に向け、彼を民のうちから断つであろう。彼がその子供をモ
レクにささげてわたしの聖所を汚し、またわたしの聖なる名を汚したから
である。四その人が子供をモレクにささげるとき、国の民がもしことさら

に、この事に目をおおい、これを殺さないならば、五わたし自身、顔をそ
の人とその家族とに向け、彼および彼に見ならってモレクを慕い、これと
姦淫する者を、すべて民のうちから断つであろう。
六もし口寄せ、または占い師のもとにおもむき、彼らを慕って姦淫する
者があれば、わたしは顔をその人に向け、これを民のうちから断つであろ
う。七ゆえにあなたがたは、みずからを聖別し、聖なる者とならなければな
らない。わたしはあなたがたの神、主である。八あなたがたはわたしの定
めを守って、これを行わなければならない。わたしはあなたがたを聖別す
る主である。九だれでも父または母をのろう者は、必ず殺されなければ
ならない。彼が父または母をのろったので、その血は彼に帰するであろう。
一〇人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者があれば、そ
の姦夫、姦婦は共に必ず殺されなければならない。一一その父の妻と寝る

者は、その父をはずかしめる者である。彼らはふたりとも必ず殺されな
ければならない。その血は彼らに帰するであろう。一二子の妻と寝る者は、
ふたり共に必ず殺されなければならない。彼らは道ならぬことをしたの
で、その血は彼らに帰するであろう。一三女と寝るように男と寝る者は、
ふたりとも憎むべき事をしたので、必ず殺されなければならない。その血
は彼らに帰するであろう。一四女をその母と一緒にめとるならば、これは
悪事であって、彼も、女たちも火に焼かれなければならない。このような
悪事をあなたがたのうちになくするためである。一五男がもし、獣と寝
るならば彼は必ず殺されなければならない。あなたがたはまた、その獣
を殺さなければならない。一六女がもし、獣に近づいて、これと寝るな
らば、あなたは、その女と獣とを殺さなければならない。彼らは必ず
殺さるべきである。その血は彼らに帰するであろう。

一七人がもし、その姉妹、すなわち父の娘、あるいは母の娘に近づい
て、その姉妹のはだを見、女はその兄弟のはだを見るならば、これは恥
ずべき事である。彼らは、その民の人々の目の前で、断たれなければなら
ない。彼は、その姉妹を犯したのであるから、その罪を負わなければなら
ない。一八人がもし、月のさわりのある女と寝て、そのはだを現すなら
ば、男は女の源を現し、女は自分の血の源を現したのであるか
ら、ふたり共にその民のうちから断たれなければならない。一九あなたの
母の姉妹、またはあなたの父の姉妹を犯してはならない。これは、自分の
肉親の者を犯すことであるから、彼らはその罪を負わなければならない。
二〇人がもし、そのおばと寝るならば、これはおじをはずかしめることであ
るから、彼らはその罪を負い、子なくして死ぬであろう。二一人がもし、そ
の兄弟の妻を取るならば、これは汚らわしいことである。彼はその兄弟

をはずかしめたのであるから、彼らは子なき者となるであろう。
二二あなたがたはわたしの定めとおきてとをことごとく守って、これを
行わなければならない。そうすれば、わたしがあなたがたを住まわせよう
と導いて行く地は、あなたがたを吐き出さぬであろう。二三あなたがたの
前からわたしが追い払う国びとの風習に、あなたがたは歩んではならな
い。彼らは、このもろもろのことをしたから、わたしは彼らを憎むのである。
二四わたしはあなたがたに言った、「あなたがたは、彼らの地を獲るであろ
う。わたしはこれをあなたがたに与えて、これを獲させるであろう。これ
は乳と蜜との流れる地である」。わたしはあなたがたを他の民から区別し
たあなたがたの神、主である。二五あなたがたは清い獣と汚れた獣、汚
れた鳥と清い鳥を区別しなければならない。わたしがあなたがたのために
汚れたものとして区別した獣、または鳥またはすべて地を這うものによっ

て、あなたがたの身を忌むべきものとしてはならない。二六あなたがたはわ
たしに対して聖なる者でなければならない。主なるわたしは聖なる者で、
あなたがたをわたしのものにしようと、他の民から区別したからである。
二七男または女で、口寄せ、または占いをする者は、必ず殺されな
ければならない。すなわち、石で撃ち殺さなければならない。その血は彼
らに帰するであろう』。

第二一章一主はまたモーセに言われた、「アロンの子なる祭司たちに告げ
て言いなさい、『民のうちの死人のために、身を汚す者があってはならない。
二ただし、近親の者、すなわち、父、母、むすこ、娘、兄弟のため、三
また彼の近親で、まだ夫のない処女なる姉妹のためには、その身を汚し
てもよい。四しかし、夫にとついだ姉妹のためには、身を汚してはならな
い。五彼らは頭の頂をそってはならない。ひげの両端をそり落しては

ならない。また身に傷をつけてはならない。六彼らは神に対して聖でなけ
ればならない。また神の名を汚してはならない。彼らは主の火祭、すなわ
ち、神の食物をささげる者であるから、聖でなければならない。七彼らは
遊女や汚れた女をめとってはならない。また夫に出された女をめとっ
てはならない。祭司は神に対して聖なる者だからである。八あなたは彼を
聖としなければならない。彼はあなたの神の食物をささげる者だからで
ある。彼はあなたにとって聖なる者でなければならない。あなたがたを聖
とする主、すなわち、わたしは聖なる者だからである。九祭司の娘である
者が、淫行をなして、その身を汚すならば、その父を汚すのであるから、
彼女を火で焼かなければならない。

一〇その兄弟のうち、頭に注ぎ油を注がれ、職に任ぜられて、その
衣服をつけ、大祭司となった者は、その髪の毛を乱してはならない。また

その衣服を裂いてはならない。一一死人のところに、はいってはならない。
また父のためにも母のためにも身を汚してはならない。一二また聖所から
出てはならない。神の聖所を汚してはならない。その神の注ぎ油による
聖別が、彼の上にあるからである。わたしは主である。一三彼は処女を妻
にめとらなければならない。一四寡婦、出された女、汚れた女、遊女な
どをめとってはならない。ただ、自分の民のうちの処女を、妻にめとらな
ければならない。一五そうすれば、彼は民のうちに、自分の子孫を汚すこと
はない。わたしは彼を聖別する主だからである』」。
一六主はまたモーセに言われた、一七「アロンに告げて言いなさい、『あな
たの代々の子孫で、だれでも身にきずのある者は近寄って、神の食物をさ
さげてはならない。一八すべて、その身にきずのある者は近寄ってはならな
い。すなわち、目しい、足なえ、鼻のかけた者、手足の不つりあいの者、一

九足の折れた者、手の折れた者、二〇せむし、こびと、目にきずのある者、
かいせんの者、かさぶたのある者、こうがんのつぶれた者などである。二一
すべて祭司アロンの子孫のうち、身にきずのある者は近寄って、主の火祭
をささげてはならない。彼は身にきずがあるから、神の食物をささげるた
めに、近寄ってはならない。二二彼は神の食物の聖なる物も、最も聖な
る物も食べることができる。二三ただし、垂幕に近づいてはならない。ま
た祭壇に近寄ってはならない。身にきずがあるからである。彼はわたしの
聖所を汚してはならない。わたしはそれを聖別する主である』」。二四モー
セはこれをアロンとその子ら及びイスラエルのすべての人々に告げた。

第二二章一主はまたモーセに言われた、二「アロンとその子たちに告げて、
イスラエルの人々の聖なる物、すなわち、彼らがわたしにささげる物をみ
だりに用いて、わたしの聖なる名を汚させないようにさせなさい。わたしは

主である。三彼らに言いなさい、『あなたがたの代々の子孫のうち、だれで
も、イスラエルの人々が主にささげる聖なる物に、汚れた身をもって近づ
く者があれば、その人はわたしの前から断たれるであろう。わたしは主で
ある。四アロンの子孫のうち、だれでも、らい病の者、また流出ある者
は清くなるまで、聖なる物を食べてはならない。また、すべて死体によっ
て汚れた物に触れた者、精を漏らした者、五または、すべて人を汚す這う
ものに触れた者、または、どのような汚れにせよ、人を汚れさせる人に触
れた者、六このようなものに触れた人は夕まで汚れるであろう。彼はその
身を水にすすがないならば、聖なる物を食べてはならない。七日が入れば、
彼は清くなるであろう。そののち、聖なる物を食べることができる。それ
は彼の食物だからである。八自然に死んだもの、または裂き殺されたもの
を食べ、それによって身を汚してはならない。わたしは主である。九それ

ゆえに、彼らはわたしの言いつけを守らなければならない。彼らがこれを
汚し、これがために、罪を獲て死ぬことのないためである。わたしは彼ら
を聖別する主である。
一〇すべて一般の人は聖なる物を食べてはならない。祭司の同居人や雇人
も聖なる物を食べてはならない。一一しかし、祭司が金をもって人を買った
時は、その者はこれを食べることができる。またその家に生れた者も祭司
の食物を食べることができる。一二もし祭司の娘が一般の人にとついだ
ならば、彼女は聖なる供え物を食べてはならない。一三もし祭司の娘が、
寡婦となり、または出されて、子供もなく、その父の家に帰り、娘の時
のようであれば、その父の食物を食べることができる。ただし、一般の
人は、すべてこれを食べてはならない。一四もし人があやまって聖なる物
を食べるならば、それにその五分の一を加え、聖なる物としてこれを祭司

に渡さなければならない。一五祭司はイスラエルの人々が、主にささげる
聖なる物を汚してはならない。一六人々が聖なる物を食べて、その罪のと
がを負わないようにさせなければならない。わたしは彼らを聖別する主で
ある』」。
一七主はまたモーセに言われた、一八「アロンとその子たち、およびイス
ラエルのすべての人々に言いなさい、『イスラエルの家の者、またはイス
ラエルにおる他国人のうちのだれでも、誓願の供え物、または自発の供え
物を燔祭として主にささげようとするならば、一九あなたがたの受け入れ
られるように牛、羊、あるいはやぎの雄の全きものをささげなければな
らない。二〇すべてきずのあるものはささげてはならない。それはあなたが
たのために、受け入れられないからである。二一もし人が特別の誓願をな
すため、または自発の供え物のために、牛または羊を酬恩祭の犠牲とし
て、主にささげようとするならば、その受け入れられるために、それは全

きものでなければならない。それには、どんなきずもあってはならない。二
二すなわち獣のうちで、めくらのもの、折れた所のあるもの、切り取っ
た所のあるもの、うみの出る者、かいせんの者、かさぶたのある者など、
あなたがたは、このようなものを主にささげてはならない。また祭壇の上
に、これらを火祭として、主にささげてはならない。二三牛あるいは羊で、
足の長すぎる者、または短すぎる者は、あなたがたが自発の供え物とす
ることはできるが、誓願の供え物としては受け入れられないであろう。二
四あなたがたは、こうがんの破れたもの、つぶれたもの、裂けたもの、また
は切り取られたものを、主にささげてはならない。またあなたがたの国の
うちで、このようなことを、行ってはならない。二五また、あなたがたは
異邦人の手からこれらのものを受けて、あなたがたの神の食物としてささ
げてはならない。これらのものには欠点があり、きずがあって、あなたが
たのために受け入れられないからである』」。

二六主はまたモーセに言われた、二七「牛、または羊、またはやぎが生
れたならば、これを七日の間その母親のもとに置かなければならない。八
日目からは主にささげる火祭として受け入れられるであろう。二八あなたが
たは雌牛または雌羊をその子と同じ日にほふってはならない。二九あなた
がたが感謝の犠牲を主にささげるときは、あなたがたの受け入れられるよ
うにささげなければならない。三〇これはその日のうちに食べなければなら
ない。明くる日まで残しておいてはならない。わたしは主である。
三一あなたがたはわたしの戒めを守り、これを行わなければならない。
わたしは主である。三二あなたがたはわたしの聖なる名を汚してはならな
い。かえって、わたしはイスラエルの人々のうちに聖とされなければなら
ない。わたしはあなたがたを聖別する主である。三三あなたがたの神とな
るために、あなたがたをエジプトの国から導き出した者である。わたしは

主である」。
第二三章一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさ
い、『あなたがたが、ふれ示して聖会とすべき主の定めの祭は次のとおり
である。これらはわたしの定めの祭である。三六日の間は仕事をしなけ
ればならない。第七日は全き休みの安息日であり、聖会である。どのよ
うな仕事もしてはならない。これはあなたがたのすまいにおいて
守るべき主の安息日である。
四その時々に、あなたがたが、ふれ示すべき主の定めの祭なる聖会は次
のとおりである。五正月の十四日の夕は主の過越の祭である。六またそ
の月の十五日は主の種入れぬパンの祭である。あなたがたは七日の間は
種入れぬパンを食べなければならない。七その初めの日に聖会を開かなけ
ればならない。どんな労働もしてはならない。八あなたがたは七日の間、

主に火祭をささげなければならない。第七日には、また聖会を開き、どの
ような労働もしてはならない』」。
九主はまたモーセに言われた、一〇「イスラエルの人々に言いなさい、『わた
しが与える地にはいって穀物を刈り入れるとき、あなたがたは穀物の初穂
の束を、祭司のところへ携えてこなければならない。一一彼はあなたがた
の受け入れられるように、その束を主の前に揺り動かすであろう。すなわ
ち、祭司は安息日の翌日に、これを揺り動かすであろう。一二またその束を
揺り動かす日に、一歳の雄の小羊の全きものを燔祭として主にささげな
ければならない。一三その素祭には油を混ぜた麦粉十分の二エパを用い、
これを主にささげて火祭とし、香ばしいかおりとしなければならない。ま
たその灌祭には、ぶどう酒一ヒンの四分の一を用いなければならない。一
四あなたがたの神にこの供え物をささげるその日まで、あなたがたはパン

も、焼麦も、新穀も食べてはならない。これはあなたがたのすべてのすま
いにおいて、代々ながく守るべき定めである。
一五また安息日の翌日、すなわち、揺祭の束をささげた日から満七週
を数えなければならない。一六すなわち、第七の安息日の翌日までに、五十
日を数えて、新穀の素祭を主にささげなければならない。一七またあなた
がたのすまいから、十分の二エパの麦粉に種を入れて焼いたパン二個を携
えてきて揺祭としなければならない。これは初穂として主にささげるもの
である。一八あなたがたはまたパンのほかに、一歳の全き小羊七頭と、若
き雄牛一頭と、雄羊二頭をささげなければならない。すなわち、これらを
その素祭および灌祭とともに主にささげて燔祭としなければならない。こ
れは火祭であって、主に香ばしいかおりとなるであろう。一九また雄やぎ一
頭を罪祭としてささげ、一歳の小羊二頭を酬恩祭の犠牲としてささげな

ければならない。二〇そして祭司はその初穂のパンと共に、この二頭の小羊
を主の前に揺祭として揺り動かさなければならない。これらは主にささげ
る聖なる物であって、祭司に帰するであろう。二一あなたがたは、その日に
ふれ示して、聖会を開かなければならない。どのような労働もしてはなら
ない。これはあなたがたのすべてのすまいにおいて、代々ながく守るべき
定めである。

二二あなたがたの地の穀物を刈り入れるときは、その刈入れにあたって、
畑のすみずみまで刈りつくしてはならない。またあなたの穀物の落ち穂
を拾ってはならない。貧しい者と寄留者のために、それを残しておかなけ
ればならない。わたしはあなたがたの神、主である』」。

二三主はまたモーセに言われた、二四「イスラエルの人々に言いなさい、
『七月一日をあなたがたの安息の日とし、ラッパを吹き鳴らして記念する

聖会としなければならない。二五どのような労働もしてはならない。しか
し、主に火祭をささげなければならない』」。
二六主はまたモーセに言われた、二七「特にその七月の十日は贖罪の日
である。あなたがたは聖会を開き、身を悩まし、主に火祭をささげなけれ
ばならない。二八その日には、どのような仕事もしてはならない。これはあ
なたがたのために、あなたがたの神、主の前にあがないをなすべき贖罪
の日だからである。二九すべてその日に身を悩まさない者は、民のうちか
ら断たれるであろう。三〇またすべてその日にどのような仕事をしても、そ
の人をわたしは民のうちから滅ぼし去るであろう。三一あなたがたはどの
ような仕事もしてはならない。これはあなたがたのすべてのすまいにおい
て、代々ながく守るべき定めである。三二これはあなたがたの全き休みの
安息日である。あなたがたは身を悩まさなければならない。またその月の

九日の夕には、その夕から次の夕まで安息を守らなければならない」。
三三主はまたモーセに言われた、三四「イスラエルの人々に言いなさい、
『その七月の十五日は仮庵の祭である。七日の間、主の前にそれを守ら
なければならない。三五初めの日に聖会を開かなければならない。どのよ
うな労働もしてはならない。三六また七日の間、主に火祭をささげなけれ
ばならない。八日目には聖会を開き、主に火祭をささげなければならない。
これは聖会の日であるから、どのような労働もしてはならない。
三七これらは主の定めの祭であって、あなたがたがふれ示して聖会と
し、主に火祭すなわち、燔祭、素祭、犠牲および灌祭を、そのささぐべき
日にささげなければならない。三八このほかに主の安息日があり、またほ
かに、あなたがたのささげ物があり、またほかに、あなたがたのもろもろ
の誓願の供え物があり、またそのほかに、あなたがたのもろもろの自発の

供え物がある。これらは皆あなたがたが主にささげるものである。
三九あなたがたが、地の産物を集め終ったときは、七月の十五日から七日
のあいだ、主の祭を守らなければならない。すなわち、初めの日にも安息
をし、八日目にも安息をしなければならない。四〇初めの日に、美しい木
の実と、なつめやしの枝と、茂った木の枝と、谷のはこやなぎの枝を取っ
て、七日の間あなたがたの神、主の前に楽しまなければならない。四一あ
なたがたは年に七日の間、主にこの祭を守らなければならない。これは
あなたがたの代々ながく守るべき定めであって、七月にこれを守らなけれ
ばならない。四二あなたがたは七日の間、仮庵に住み、イスラエルで生れ
た者はみな仮庵に住まなければならない。四三これはわたしがイスラエル
の人々をエジプトの国から導き出したとき、彼らを仮庵に住まわせた事
を、あなたがたの代々の子孫に知らせるためである。わたしはあなたがた

の神、主である』」。
四四モーセは主の定めの祭をイスラエルの人々に告げた。
第二四章一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に命じて、
オリブを砕いて採った純粋の油を、ともしびのためにあなたの所へ持っ
てこさせ、絶えずともしびをともさせなさい。三すなわち、アロンは会見
の幕屋のうちのあかしの垂幕の外で、夕から朝まで絶えず、そのともしび
を主の前に整えなければならない。これはあなたがたが代々ながく守る
べき定めである。四彼は純金の燭台の上に、そのともしびを絶えず主の
前に整えなければならない。
五あなたは麦粉を取り、それで十二個の菓子を焼かなければならない。菓子
一個に麦粉十分の二エパを用いなければならない。六そしてそれを主の前
の純金の机の上に、ひと重ね六個ずつ、ふた重ねにして置かなければなら

ない。七あなたはまた、おのおのの重ねの上に、純粋の乳香を置いて、そ
のパンの記念の分とし、主にささげて火祭としなければならない。八安息日
ごとに絶えず、これを主の前に整えなければならない。これはイスラエ
ルの人々のささぐべきものであって、永遠の契約である。九これはアロン
とその子たちに帰する。彼らはこれを聖なる所で食べなければならない。
これはいと聖なる物であって、主の火祭のうち彼に帰すべき永久の分で
ある」。

一〇イスラエルの女を母とし、エジプトびとを父とするひとりの者が、
イスラエルの人々のうちに出てきて、そのイスラエルの女の産んだ子と、
ひとりのイスラエルびとが宿営の中で争いをし、一一そのイスラエルの
女の産んだ子が主の名を汚して、のろったので、人々は彼をモーセのもと
に連れてきた。その母はダンの部族のデブリの娘で、名をシロミテといっ

た。一二人々は彼を閉じ込めて置いて、主の示しを受けるのを待っていた。
一三時に主はモーセに言われた、一四「あの、のろいごとを言った者を宿営
の外に引き出し、それを聞いた者に、みな手を彼の頭に置かせ、全会衆
に彼を石で撃たせなさい。一五あなたはまたイスラエルの人々に言いなさ
い、『だれでも、その神をのろう者は、その罪を負わなければならない。一
六主の名を汚す者は必ず殺されるであろう。全会衆は必ず彼を石で撃
たなければならない。他国の者でも、この国に生れた者でも、主の名を汚
すときは殺されなければならない。一七だれでも、人を撃ち殺した者は、必
ず殺されなければならない。一八獣を撃ち殺した者は、獣をもってその
獣を償わなければならない。一九もし人が隣人に傷を負わせるなら、そ
の人は自分がしたように自分にされなければならない。二〇すなわち、骨折
には骨折、目には目、歯には歯をもって、人に傷を負わせたように、自分

にもされなければならない。二一 獣を撃ち殺した者はそれを償い、人を
撃ち殺した者は殺されなければならない。二二他国の者にも、この国に生
れた者にも、あなたがたは同一のおきてを用いなければならない。わたし
はあなたがたの神、主だからである』」。二三モーセがイスラエルの人々に
向かい、「あの、のろいごとを言った者を宿営の外に引き出し、石で撃て」
と命じたので、イスラエルの人々は、主がモーセに命じられたようにした。
第二五章一主はシナイ山で、モーセに言われた、二「イスラエルの人々に
言いなさい、『わたしが与える地に、あなたがたがはいったときは、その地
にも、主に向かって安息を守らせなければならない。三六年の間あなた
は畑に種をまき、また六年の間ぶどう畑の枝を刈り込み、その実を集
めることができる。四しかし、七年目には、地に全き休みの安息を与えな
ければならない。これは、主に向かって守る安息である。あなたは畑に

種をまいてはならない。また、ぶどう畑の枝を刈り込んではならない。五
あなたの穀物の自然に生えたものは刈り取ってはならない。また、あなた
のぶどうの枝の手入れをしないで結んだ実は摘んではならない。これは地
のために全き休みの年だからである。六安息の年の地の産物は、あなた
がたの食物となるであろう。すなわち、あなたと、男女の奴隷と、雇人
と、あなたの所に宿っている他国人と、七あなたの家畜と、あなたの国の
うちの獣とのために、その産物はみな、食物となるであろう。
八あなたは安息の年を七たび、すなわち、七年を七回数えなければなら
ない。安息の年七たびの年数は四十九年である。九七月の十日にあなたは
ラッパの音を響き渡らせなければならない。すなわち、贖罪の日にあな
たがたは全国にラッパを響き渡らせなければならない。一〇その五十年目
を聖別して、国中のすべての住民に自由をふれ示さなければならない。

この年はあなたがたにはヨベルの年であって、あなたがたは、おのおのそ
の所有の地に帰り、おのおのその家族に帰らなければならない。
一一その
五十年目はあなたがたにはヨベルの年である。種をまいてはならない。ま
た自然に生えたものは刈り取ってはならない。手入れをしないで結んだぶ
どうの実は摘んではならない。
一二この年はヨベルの年であって、あなたが
たに聖であるからである。あなたがたは畑に自然にできた物を食べなけ
ればならない。

一三このヨベルの年には、おのおのその所有の地に帰らなければならな
い。
一四あなたの隣人に物を売り、また隣人から物を買うときは、互に
欺いてはならない。
一五ヨベルの後の年の数にしたがって、あなたは隣人
から買い、彼もまた畑の産物の年数にしたがって、あなたに売らなけれ
ばならない。
一六年の数の多い時は、その値を増し、年の数の少ない時

は、値を減らさなければならない。彼があなたに売るのは産物の数だか
らである。一七あなたがたは互に欺いてはならない。あなたの神を恐れ
なければならない。わたしはあなたがたの神、主である。
一八あなたがたはわたしの定めを行い、またわたしのおきてを守って、
これを行わなければならない。そうすれば、あなたがたは安らかにその地
に住むことができるであろう。一九地はその実を結び、あなたがたは飽きる
までそれを食べ、安らかにそこに住むことができるであろう。二〇「七年目
に種をまくことができず、また産物を集めることができないならば、わた
したちは何を食べようか」とあなたがたは言うのか。二一わたしは命じて六
年目に、あなたがたに祝福をくだし、三か年分の産物を実らせるであろ
う。二二あなたがたは八年目に種をまく時には、なお古い産物を食べてい
るであろう。九年目にその産物のできるまで、あなたがたは古いものを食

べることができるであろう。二三地は永代には売ってはならない。地はわたしのものだからである。あなたがたはわたしと共にいる寄留者、また旅びとである。二四あなたがたの所有としたどのような土地でも、その土地の買いもどしに応じなければならない。

二五あなたの兄弟が落ちぶれてその所有の地を売った時は、彼の近親者がきて、兄弟の売ったものを買いもどさなければならない。二六たといその人に、それを買いもどしてくれる人がいなくても、その人が富み、自分でそれを買いもどすことができるようになったならば、二七それを売ってからの年を数えて残りの分を買い手に返さなければならない。そうすればその人はその所有の地に帰ることができる。二八しかし、もしそれを買いもどすことができないならば、その売った物はヨベルの年まで買い主の手にあり、ヨベルにはもどされて、その人はその所有の地に帰ることができる

であろう。
二九人が城壁のある町の住宅を売った時は、売ってから満一年の間
は、それを買いもどすことができる。その間は彼に買いもどすことを許さな
ければならない。三〇満一年のうちに、それを買いもどさない時は、城壁
のある町の内のその家は永代にそれを買った人のものと定まって、代々の
所有となり、ヨベルの年にももどされないであろう。三一しかし、周囲に
城壁のない村々の家は、その地方の畑に附属するものとみなされ、買い
もどすことができ、またヨベルの年には、もどされるであろう。三二レビび
との町々、すなわち、彼らの所有の町々の家は、レビびとはいつでも買い
もどすことができる。三三レビびとのひとりが、それを買いもどさない時
は、その所有の町にある売った家はヨベルの年にはもどされるであろう。
レビびとの町々の家はイスラエルの人々のうちに彼らがもっている所有
だからである。三四ただし、彼らの町々の周囲の放牧地は売ってはならな

い。それは彼らの永久の所有だからである。
三五あなたの兄弟が落ちぶれ、暮して行けない時は、彼を助け、寄留者
または旅びとのようにして、あなたと共に生きながらえさせなければなら
ない。三六彼から利子も利息も取ってはならない。あなたの神を恐れ、あな
たの兄弟をあなたと共に生きながらえさせなければならない。三七あなた
は利子を取って彼に金を貸してはならない。また利益をえるために食物
を貸してはならない。三八わたしはあなたがたの神、主であって、カナンの
地をあなたがたに与え、かつあなたがたの神となるためにあなたがたをエ
ジプトの国から導き出した者である。
三九あなたの兄弟が落ちぶれて、あなたに身を売るときは、奴隷のように
働かせてはならない。四〇彼を雇人のように、また旅びとのようにして
あなたの所におらせ、ヨベルの年まであなたの所で勤めさせなさい。四一

その時には、彼は子供たちと共にあなたの所から出て、その一族のもとに
帰り、先祖の所有の地にもどるであろう。四二彼らはエジプトの国からわ
たしが導き出したわたしのしもべであるから、身を売って奴隷となっては
ならない。四三あなたは彼をきびしく使ってはならない。あなたの神を恐
れなければならない。四四あなたがもつ奴隷は男女ともにあなたの周囲の
異邦人のうちから買わなければならない。すなわち、彼らのうちから男女
の奴隷を買うべきである。四五また、あなたがたのうちに宿っている旅びと
の子供のうちからも買うことができる。また彼らのうちあなたがたの国で
生れて、あなたがたと共におる人々の家族からも買うことができる。そし
て彼らはあなたがたの所有となるであろう。四六あなたがたは彼らを獲て、
あなたがたの後の子孫に所有として継がせることができる。すなわち、彼
らは長くあなたがたの奴隷となるであろう。しかし、あなたがたの兄弟で

あるイスラエルの人々をあなたがたは互にきびしく使ってはならない。
四七あなたと共にいる寄留者または旅びとが富み、そのかたわらにいる
あなたの兄弟が落ちぶれて、あなたと共にいるその寄留者、旅びと、ま
たは寄留者の一族のひとりに身を売った場合、四八身を売った後でも彼を
買いもどすことができる。その兄弟のひとりが彼を買いもどさなければ
ならない。四九あるいは、おじ、または、おじの子が彼を買いもどさなけれ
ばならない。あるいは一族の近親の者が、彼を買いもどさなければならな
い。あるいは自分に富ができたならば、自分で買いもどさなければならな
い。五〇その時、彼は自分の身を売った年からヨベルの年までを、その買い
主と共に数え、その年数によって、身の代金を決めなければならない。そ
の年数は雇われた年数として数えなければならない。五一なお残りの年が
多い時は、その年数にしたがい、買われた金額に照して、あがないの金を

払わなければならない。五二またヨベルの年までに残りの年が少なければ、
その人と共に計算し、その年数にしたがって、あがないの金を払わなけれ
ばならない。五三彼は年々雇われる人のように扱われなければならない。
あなたの目の前で彼をきびしく使わせてはならない。五四もし彼がこのよ
うにしてあがなわれないならば、ヨベルの年に彼は子供と共に出て行くこ
とができる。五五イスラエルの人々は、わたしのしもべだからである。彼
らはわたしがエジプトの国から導き出したわたしのしもべである。わたし
はあなたがたの神、主である。

第二六章一あなたがたは自分のために、偶像を造ってはならない。また
刻んだ像も石の柱も立ててはならない。またあなたがたの地に石像を立
てて、それを拝んではならない。わたしはあなたがたの神、主だからであ
る。二あなたがたはわたしの安息日を守り、またわたしの聖所を敬わな

ければならない。わたしは主である。
三もしあなたがたがわたしの定めに歩み、わたしの戒めを守って、こ
れを行うならば、四わたしはその季節季節に、雨をあなたがたに与えるで
あろう。地は産物を出し、畑の木々は実を結ぶであろう。五あなたがたの
麦打ちは、ぶどうの取入れの時まで続き、ぶどうの取入れは、種まきの時
まで続くであろう。あなたがたは飽きるほどパンを食べ、またあなたがた
の地に安らかに住むであろう。六わたしが国に平和を与えるから、あなた
がたは安らかに寝ることができ、あなたがたを恐れさすものはないであろ
う。わたしはまた国のうちから悪い獣を絶やすであろう。つるぎがあな
たがたの国を行き巡ることはないであろう。七あなたがたは敵を追うであ
ろう。彼らは、あなたがたのつるぎに倒れるであろう。八あなたがたの五
人は百人を追い、百人は万人を追い、あなたがたの敵はつるぎに倒れるで

あろう。九わたしはあなたがたを顧み、多くの子を獲させ、あなたがたを
増し、あなたがたと結んだ契約を固めるであろう。一〇あなたがたは古い
穀物を食べている間に、また新しいものを獲て、その古いものを捨てる
ようになるであろう。一一わたしは幕屋をあなたがたのうちに建て、心に
あなたがたを忌みきらわないであろう。一二わたしはあなたがたのうちに歩
み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となるであろう。一三
わたしはあなたがたの神、主であって、あなたがたをエジプトの国から導
き出して、奴隷の身分から解き放った者である。わたしはあなたがたのく
びきの横木を砕いて、まっすぐに立って歩けるようにしたのである。
一四しかし、あなたがたがもしわたしに聞き従わず、またこのすべての
戒めを守らず、一五わたしの定めを軽んじ、心にわたしのおきてを忌み
きらって、わたしのすべての戒めを守らず、わたしの契約を破るならば、

一六わたしはあなたがたにこのようにするであろう。すなわち、あなたがた
の上に恐怖を臨ませ、肺病と熱病をもって、あなたがたの目を見えなく
し、命をやせ衰えさせるであろう。あなたがたが種をまいてもむだであ
る。敵がそれを食べるであろう。一七わたしは顔をあなたがたにむけて攻
め、あなたがたは敵の前に撃ちひしがれるであろう。またあなたがたの憎
む者があなたがたを治めるであろう。あなたがたは追う者もないのに逃げ
るであろう。一八それでもなお、あなたがたがわたしに聞き従わないなら
ば、わたしはあなたがたの罪を七倍重く罰するであろう。一九わたしはあな
たがたの誇とする力を砕き、あなたがたの天を鉄のようにし、あなたが
たの地を青銅のようにするであろう。二〇あなたがたの力は、むだに費
されるであろう。すなわち、地は産物をいださず、国のうちの木々は実を
結ばないであろう。
二一もしあなたがたがわたしに逆らって歩み、わたしに聞き従わないな

らば、わたしはあなたがたの罪に従って七倍の災をあなたがたに下す
であろう。二二わたしはまた野獣をあなたがたのうちに送るであろう。そ
れはあなたがたの子供を奪い、また家畜を滅ぼし、あなたがたの数を少な
くするであろう。あなたがたの大路は荒れ果てるであろう。
二三もしあなたがたがこれらの懲しめを受けてもなお改めず、わたしに
逆らって歩むならば、二四わたしもまたあなたがたに逆らって歩み、あな
たがたの罪を七倍重く罰するであろう。二五わたしはあなたがたの上につ
るぎを臨ませ、違約の恨みを報いるであろう。あなたがたが町々に集まる
時は、あなたがたのうちに疫病を送り、あなたがたは敵の手にわたされ
るであろう。二六わたしがあなたがたのつえとするパンを砕くとき、十人の
女が一つのかまどでパンを焼き、それをはかりにかけてあなたがたに渡す
であろう。あなたがたは食べても満たされないであろう。

二七それでもなお、あなたがたがわたしに聞(き)き従(したが)わず、わたしに逆(さか)らっ
て歩(あゆ)むならば、二八わたしもあなたがたに逆(さか)らい、怒(いか)りをもって歩(あゆ)み、あ
なたがたの罪(つみ)を七倍(ばい)重(おも)く罰(ばっ)するであろう。二九あなたがたは自分(じぶん)のむすこ
の肉(にく)を食(た)べ、また自分(じぶん)の娘(むすめ)の肉(にく)を食(た)べるであろう。三〇わたしはあなたが
たの高(たか)き所(ところ)をこぼち、香(こう)の祭壇(さいだん)を倒(たお)し、偶像(ぐうぞう)の死体(したい)の上(うえ)に、あなたがた
の死体(したい)を投(な)げ捨(す)てて、わたしは心(こころ)にあなたがたを忌(い)みきらうであろう。三
一わたしはまたあなたがたの町々(まちまち)を荒(あ)れ地(ち)とし、あなたがたの聖所(せいじょ)を荒(あ)ら
すであろう。またわたしはあなたがたのささげる香(こう)ばしいかおりをかがな
いであろう。三二わたしがその地(ち)を荒(あ)らすゆえ、そこに住(す)むあなたがたの敵(てき)
はそれを見(み)て驚(おどろ)くであろう。三三わたしはあなたがたを国々(くにぐに)の間(あいだ)に散(ち)ら
し、つるぎを抜(ぬ)いて、あなたがたの後(うしろ)を追(お)うであろう。あなたがたの地(ち)は
荒(あ)れ果(は)て、あなたがたの町々(まちまち)は荒(あ)れ地(ち)となるであろう。

三四こうしてその地が荒れ果てて、あなたがたは敵の国にある間、地は
安息を楽しむであろう。すなわち、その時、地は休みを得て、安息を楽し
むであろう。三五それは荒れ果てている日の間、休むであろう。あなたが
たがそこに住んでいる間、あなたがたの安息のときに休みを得なかった
ものである。三六またあなたがたのうちの残っている者の心に、敵の国で
わたしは恐れをいだかせるであろう。彼らは木の葉の動く音にも驚いて
逃げ、つるぎを避けて逃げる者のように逃げて、追う者もないのにころび
倒れるであろう。三七彼らは追う者もないのに、つるぎをのがれる者のよ
うに折り重なって、つまずき倒れるであろう。あなたがたは敵の前に立つ
ことができないであろう。三八あなたがたは国々のうちにあって滅びうせ、
あなたがたの敵の地はあなたがたをのみつくすであろう。三九あなたがたの
うちの残っている者は、あなたがたの敵の地で自分の罪のゆえにやせ衰

え、また先祖たちの罪のゆえに彼らと同じようにやせ衰えるであろう。
四〇しかし、彼らがもし、自分の罪と、先祖たちの罪、すなわち、わたし
に反逆し、またわたしに逆らって歩んだことを告白するならば、四一たと
いわたしが彼らに逆らって歩み、彼らを敵の国に引いて行っても、もし彼
らの無割礼の心が砕かれ、あまんじて罪の罰を受けるならば、四二そのと
きわたしはヤコブと結んだ契約を思い起し、またイサクと結んだ契約およ
びアブラハムと結んだ契約を思い起し、またその地を思い起すであろう。
四三しかし、彼らが地を離れて地が荒れ果てている間、地はその安息を楽
しむであろう。彼らはまた、あまんじて罪の罰を受けるであろう。彼らが
わたしのおきてを軽んじ、心にわたしの定めを忌みきらったからである。
四四それにもかかわらず、なおわたしは彼らが敵の国におるとき、彼らを
捨てず、また忌みきらわず、彼らを滅ぼし尽さず、彼らと結んだわたしの

契約を破ることをしないであろう。わたしは彼らの神、主だからである。
四五わたしは彼らの先祖たちと結んだ契約を彼らのために思い起すであろ
う。彼らはわたしがその神となるために国々の人の目の前で、エジプトの
地から導き出した者である。わたしは主である』」。
四六これらは主が、シナイ山で、自分とイスラエルの人々との間に、モー
セによって立てられた定めと、おきてと、律法である。
第二七章一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさい、
『人があなたの値積りに従って主に身をささげる誓願をする時は、三あな
たの値積りは、二十歳から六十歳までの男には、その値積りを聖所のシ
ケルに従って銀五十シケルとし、四女には、その値積りは三十シケルと
しなければならない。五また五歳から二十歳までは、男にはその値積りを
二十シケルとし、女には十シケルとしなければならない。六一か月から五

歳までは、男にはその値積りを銀五シケルとし、女にはその値積りを銀
三シケルとしなければならない。七また六十歳以上は、男にはその値積り
を十五シケルとし、女には十シケルとしなければならない。八もしその人
が貧しくて、あなたの値積りに応じることができないならば、祭司の前に
立ち、祭司の値積りを受けなければならない。祭司はその誓願者の力に
従って値積らなければならない。

九主に供え物とすることができる家畜で、人が主にささげるものはすべ
て聖なる物となる。一〇ほかのものをそれに代用してはならない。良い物
を悪い物に、悪い物を良い物に取り換えてはならない。もし家畜と家畜と
を取り換えるならば、その物も、それと取り換えた物も共に聖なる物とな
るであろう。一一もしそれが汚れた家畜で、主に供え物としてささげられ
ないものであるならば、その人はその家畜を祭司の前に引いてこなければ

ならない。一二祭司はその良い悪いに従って、それを値積らなければなら
ない。それは祭司が値積るとおりになるであろう。一三もしその人が、それ
をあがなおうとするならば、その値積りにその五分の一を加えなければな
らない。
一四もし人が自分の家を主に聖なる物としてささげるときは、祭司はその
良い悪いに従って、それを値積らなければならない。それは祭司が値積っ
たとおりになるであろう。一五もしその家をささげる人が、それをあがなお
うとするならば、その値積りの金に、その五分の一を加えなければならな
い。そうすれば、それは彼のものとなるであろう。
一六もし人が相続した畑の一部を主にささげるときは、あなたはそこに
まく種の多少に応じて、値積らなければならない。すなわち、大麦一ホメ
ルの種を銀五十シケルに値積らなければならない。一七もしその畑をヨベ

ルの年からささげるのであれば、その価はあなたの値積りのとおりになる
であろう。一八もしその畑をヨベルの年の後にささげるのであれば、祭司
はヨベルの年までに残っている年の数に従ってその金を数え、それをあ
なたの値積りからさし引かなければならない。一九もしまた、その畑をさ
さげる人が、それをあがなおうとするならば、あなたの値積りの金にその
五分の一を加えなければならない。そうすれば、それは彼のものと決まる
であろう。二〇しかし、もしその畑をあがなわず、またそれを他の人に売
るならば、それはもはやあがなうことができないであろう。二一その畑は、
ヨベルの年になって期限が切れるならば、奉納の畑と同じく、主の聖な
る物となり、祭司の所有となるであろう。二二もしまた相続した畑の一部
でなく、買った畑を主にささげる時は、二三祭司は値積りしてヨベルの年
までの金を数えなければならない。その人はその値積りの金をその日に主

にささげて、聖なる物としなければならない。二四ヨベルの年にその畑は
売り主であるその地の相続者に返るであろう。二五すべてあなたの値積り
は聖所のシケルによってしなければならない。二十ゲラを一シケルとする。
二六しかし、家畜のういごは、ういごとしてすでに主のものだから、だれ
もこれをささげてはならない。牛でも羊でも、それは主のものである。二
七もし汚れた家畜であるならば、あなたの値積りにその五分の一を加えて、
その人はこれをあがなわなければならない。もしあがなわないならば、そ
れを値積りに従って売らなければならない。
二八ただし、人が自分の持っているもののうちから奉納物として主にさ
さげたものは、人であっても、家畜であっても、また相続の畑であっても、
いっさいこれを売ってはならない。またあがなってはならない。奉納物はす
べて主に属するいと聖なる物である。二九またすべて人のうちから奉納物

としてささげられた人（ひと）は、あがなってはならない。彼（かれ）は必（かなら）ず殺（ころ）されなけ
ればならない。
三〇地（ち）の十分（ぶん）の一は地（ち）の産物（さんぶつ）であれ、木（き）の実（み）であれ、すべて主（しゅ）のもので
あって、主（しゅ）に聖（せい）なる物（もの）である。三一もし人（ひと）がその十分（ぶん）の一をあがなおうと
する時（とき）は、それにその五分（ぶん）の一を加（くわ）えなければならない。三二牛（うし）または羊（ひつじ）
の十分（ぶん）の一については、すべて牧者（ぼくしゃ）のつえの下（した）を十番目（ばんめ）に通（とお）るものは、主（しゅ）
に聖（せい）なる物（もの）である。三三その良（よ）い悪（わる）いを問（と）うてはならない。またそれを取（と）
り換（か）えてはならない。もし取（と）り換（か）えたならば、それと、その取（と）り換（か）えたも
のとは、共（とも）に聖（せい）なる物（もの）となるであろう。それをあがなうことはできない』」。
三四これらは主（しゅ）が、シナイ山（さん）で、イスラエルの人々（ひとびと）のために、モーセに
命（めい）じられた戒（いましめ）である。

民数記

第一章一エジプトの国を出た次の年の二月一日に、主はシナイの荒野に
おいて、会見の幕屋で、モーセに言われた、二「あなたがたは、イスラエルの
人々の全会衆を、その氏族により、その父祖の家によって調査し、その
すべての男子の名の数を、ひとりびとり数えて、その総数を得なさい。三
イスラエルのうちで、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者を、
あなたとアロンとは、その部隊にしたがって数えなければならない。四ま
た、すべての部族は、おのおの父祖の家の長たるものを、ひとりずつ出し
て、あなたがたと協力させなければならない。五すなわち、あなたがた
に協力すべき人々の名は、次のとおりである。ルベンからはシデウルの
子エリヅル。六シメオンからはツリシャダイの子シルミエル。七ユダからは

アミナダブの子ナション。八イッサカルからはツアルの子ネタニエル。九ゼ
ブルンからはヘロンの子エリアブ。一〇ヨセフの子たちのうち、エフライム
からはアミホデの子エリシャマ、マナセからはパダヅルの子ガマリエル。一一
ベニヤミンからはギデオニの子アビダン。一二ダンからはアミシャダイの
子アヒエゼル。一三アセルからはオクランの子パギエル。一四ガドからはデ
ウエルの子エリアサフ。一五ナフタリからはエナンの子アヒラ」。一六これ
らは会衆のうちから選び出された人々で、その父祖の部族のつかさたち、
またイスラエルの氏族のかしらたちである。
一七こうして、モーセとアロンが、ここに名を掲げた人々を引き連れて、
一八二月一日に会衆をことごとく集めたので、彼らはその氏族により、そ
の父祖の家により、その名の数にしたがって二十歳以上のものが、ひとり
びとり登録した。一九主が命じられたように、モーセはシナイの荒野で彼

らを数(かぞ)えた。
二〇すなわち、イスラエルの長子(ちょうし)ルベンの子(こ)たちから生(うま)れたものを、その
氏族(しぞく)により、その父祖(ふそ)の家(いえ)によって調(しら)べ、すべて戦争(せんそう)に出(で)ることのできる
二十歳以上(さいいじょう)の男子(だんし)の名(な)の数(かず)を、ひとりびとり得(え)たが、二一ルベンの部族(ぶぞく)の
うちで、数(かぞ)えられたものは四万六千五百人(にん)であった。
二二またシメオンの子(こ)たちから生(うま)れたものを、その氏族(しぞく)により、その父祖(ふそ)
の家(いえ)によって調(しら)べ、すべて戦争(せんそう)に出(で)ることのできる二十歳以上(さいいじょう)の男子(だんし)の名(な)
の数(かず)を、ひとりびとり得(え)たが、二三シメオンの部族(ぶぞく)のうちで、数(かぞ)えられたも
のは五万九千三百人(にん)であった。
二四またガドの子(こ)たちから生(うま)れたものを、その氏族(しぞく)により、その父祖(ふそ)の家(いえ)
によって調(しら)べ、すべて戦争(せんそう)に出(で)ることのできる二十歳以上(さいいじょう)の者(もの)の名(な)の数(かず)を
得(え)たが、二五ガドの部族(ぶぞく)のうちで、数(かぞ)えられたものは四万五千六百五十人(にん)で

あった。
二六ユダの子たちから生まれたものを、その氏族により、その父祖の家に
よって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得
たが、二七ユダの部族のうちで、数えられたものは七万四千六百人であった。
二八イッサカルの子たちから生まれたものを、その氏族により、その父祖の
家によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数
を得たが、二九イッサカルの部族のうちで、数えられたものは五万四千四百
人であった。
三〇ゼブルンの子たちから生まれたものを、その氏族により、その父祖の家
によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を
得たが、三一ゼブルンの部族のうちで、数えられたものは五万七千四百人で
あった。
三二ヨセフの子たちのうち、エフライムの子たちから生まれたものを、その

氏族により、その父祖の家によって調べ、すべて戦争に出ることのできる
二十歳以上の者の名の数を得たが、
三三 エフライムの部族のうちで、数えられたものは四万五百人であった。
三四 マナセの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、
三五 マナセの部族のうちで、数えられたものは三万二千二百人であった。
三六 ベニヤミンの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、
三七 ベニヤミンの部族のうちで、数えられたものは三万五千四百人であった。
三八 ダンの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家に

よって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得
たが、三九ダンの部族のうちで、数えられたものは六万二千七百人であった。
四〇アセルの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家
によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を
得たが、四一アセルの部族のうちで、数えられたものは四万一千五百人で
あった。
四二ナフタリの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家
によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を
得たが、四三ナフタリの部族のうちで、数えられたものは、五万三千四百人
であった。
四四これらが数えられた人々であって、モーセとアロンとイスラエルのつ
かさたちとが数えた人々である。そのつかさたちは十二人であって、おの
おのその父祖の家のために出たものである。四五そしてイスラエルの人々

のうち、その父祖の家にしたがって数えられた者は、すべてイスラエルの
うち、戦争に出ることのできる二十歳以上の者であって、四六その数えら
れた者は合わせて六十万三千五百五十人であった。
四七しかし、レビびとは、その父祖の部族にしたがって、そのうちに数え
られなかった。四八すなわち、主はモーセに言われた、四九「あなたはレビ
の部族だけは数えてはならない。またその総数をイスラエルの人々のうち
に数えあげてはならない。五〇あなたはレビびとに、あかしの幕屋と、その
もろもろの器と、それに附属するもろもろの物を管理させなさい。彼ら
は幕屋と、そのもろもろの器とを持ち運び、またそこで務をし、幕屋の
まわりに宿営しなければならない。五一幕屋が進む時は、レビびとがこれ
を取りくずし、幕屋を張る時は、レビびとがこれを組み立てなければなら
ない。ほかの人がこれに近づく時は殺されるであろう。五二イスラエルの

人々はその部隊にしたがって、おのおのその宿営に、おのおのその旗の
もとにその天幕を張らなければならない。五三しかし、レビびとは、あかし
の幕屋のまわりに宿営しなければならない。そうすれば、主の怒りはイ
スラエルの人々の会衆の上に臨むことがないであろう。レビびとは、あ
かしの幕屋の務を守らなければならない」。五四イスラエルの人々はこの
ようにして、すべて主がモーセに命じられたように行った。

第二章一主はモーセとアロンに言われた、二「イスラエルの人々は、おの
おのその部隊の旗のもとに、その父祖の家の旗印にしたがって宿営しな
ければならない。また会見の幕屋のまわりに、それに向かって宿営しな
ければならない。三すなわち、日の出る方、東に宿営するものは、ユダ
の宿営の旗につく者であって、その部隊にしたがって宿営し、アミナダ
ブの子ナションが、ユダの子たちのつかさとなるであろう。四その部隊、す

なわち、数えられた者は七万四千六百人である。五そのかたわらに宿営す
る者はイッサカルの部族で、ツアルの子ネタニエルが、イッサカルの子た
ちのつかさとなるであろう。六その部隊、すなわち、数えられた者は五万
四千四百人である。七次はゼブルンの部族で、ヘロンの子エリアブが、ゼ
ブルンの子たちのつかさとなるであろう。八その部隊、すなわち、数えら
れた者は五万七千四百人である。九ユダの宿営の、その部隊にしたがって
数えられた者は、合わせて十八万六千四百人である。これらの者は、まっ
先に進まなければならない。

一〇南の方では、ルベンの宿営の旗につく者が、その部隊にしたがっ
ており、シデウルの子エリヅルが、ルベンの子たちのつかさとなるであろ
う。一一その部隊、すなわち、数えられた者は四万六千五百人である。一二
そのかたわらに宿営する者はシメオンの部族で、ツリシャダイの子シル

ミエルが、シメオンの子たちのつかさとなるであろう。一三その部隊、すな
わち、数えられた者は五万九千三百人である。一四次はガドの部族で、デ
ウエルの子エリアサフが、ガドの子たちのつかさとなるであろう。一五その
部隊、すなわち、数えられた者は四万五千六百五十人である。一六ルベンの
宿営の、その部隊にしたがって数えられた者は、合わせて十五万一千四百
五十人である。これらの者は二番目に進まなければならない。
一七その次に会見の幕屋を、レビびとの宿営とともに、もろもろの宿営
の中央にして進まなければならない。彼らは宿営するのと同じように、
おのおのその位置で、その旗にしたがって進まなければならない。
一八西の方では、エフライムの宿営の旗につく者が、その部隊にした
がっており、アミホデの子エリシャマが、エフライムの子たちのつかさとな
るであろう。一九その部隊、すなわち、数えられた者は四万五百人である。

二〇そのかたわらにマナセの部族がおって、パダヅルの子ガマリエルが、マ
ナセの子たちのつかさとなるであろう。二一その部隊、すなわち、数えられ
た者は三万二千二百人である。二二次にベニヤミンの部族がおって、ギデ
オニの子アビダンが、ベニヤミンの子たちのつかさとなるであろう。二三そ
の部隊、すなわち、数えられた者は三万五千四百人である。二四エフライ
ムの宿営の、その部隊にしたがって数えられた者は、合わせて十万八千百
人である。これらの者は三番目に進まなければならない。

二五北の方では、ダンの宿営の旗につく者が、その部隊にしたがってお
り、アミシャダイの子アヒエゼルが、ダンの子たちのつかさとなるであろ
う。二六その部隊、すなわち、数えられた者は六万二千七百人である。二七
そのかたわらに宿営する者は、アセルの部族であって、オクランの子パギ
エルが、アセルの子たちのつかさとなるであろう。二八その部隊、すなわち、

数えられた者は四万一千五百人である。二九次にナフタリの部族がおって、
エナンの子アヒラが、ナフタリの子たちのつかさとなるであろう。三〇その
部隊、すなわち、数えられた者は五万三千四百人である。三一ダンの宿営
の、数えられた者は合わせて十五万七千六百人である。これらの者はその
旗にしたがって、最後に進まなければならない」。

三二これがイスラエルの人々の、その父祖の家にしたがって数えられた
人々である。もろもろの宿営の、その部隊にしたがって数えられた者は
合わせて六十万三千五百五十人であった。三三しかし、レビびとはイスラ
エルの人々のうちに数えられなかった。主がモーセに命じられたとおりで
ある。

三四イスラエルの人々は、すべて主がモーセに命じられたとおりに行い、
その旗にしたがって宿営し、おのおのその氏族に従い、その父祖の家に

従って進んだ。

第三章一主がシナイ山で、モーセと語られた時の、アロンとモーセの一族
は、次のとおりであった。二アロンの子たちの名は、次のとおりである。長子
はナダブ、次はアビウ、エレアザル、イタマル。三これがアロンの子たちの
名であって、彼らはみな油を注がれ、祭司の職に任じられて祭司となっ
た。四ナダブとアビウとは、シナイの荒野において、異火を主の前にささ
げたので、主の前で死んだ。彼らには子供がなかった。そしてエレアザル
とイタマルとが、父アロンの前で祭司の務をした。
五主はまたモーセに言われた、六「レビの部族を召し寄せ、祭司アロンの
前に立って仕えさせなさい。七彼らは会見の幕屋の前にあって、アロンと
全会衆のために、その務をし、幕屋の働きをしなければならない。八す
なわち、彼らは会見の幕屋の、すべての器をまもり、イスラエルの人々

のために務(つとめ)をし、幕屋(まくや)の働(はたら)きをしなければならない。九あなたはレビび
とを、アロンとその子(こ)たちとに、与(あた)えなければならない。彼(かれ)らはイスラエ
ルの人々(ひとびと)のうちから、全(まった)くアロンに与(あた)えられたものである。一〇あなたは
アロンとその子(こ)たちとを立(た)てて、祭司(さいし)の職(しょく)を守(まも)らせなければならない。ほ
かの人(ひと)で近(ちか)づくものは殺(ころ)されるであろう」。
一一主(しゅ)はまたモーセに言(い)われた、一二「わたしは、イスラエルの人々(ひとびと)のう
ちの初(はじ)めに生(う)まれたすべてのういごの代(か)わりに、レビびとをイスラエルの人々(ひとびと)
のうちから取(と)るであろう。レビびとは、わたしのものとなるであろう。一三
ういごはすべてわたしのものだからである。わたしは、エジプトの国(くに)にお
いて、すべてのういごを撃(う)ち殺(ころ)した日(ひ)に、イスラエルのういごを、人(ひと)も獣(けもの)
も、ことごとく聖別(せいべつ)して、わたしに帰(き)せしめた。彼(かれ)らはわたしのものとな
るであろう。わたしは主(しゅ)である」。

一四主はまたシナイの荒野でモーセに言われた、一五「あなたはレビの子
たちを、その父祖の家により、その氏族によって数えなさい。すなわち、一
か月以上の男子を数えなければならない」。一六それでモーセは主の言葉に
したがって、命じられたとおりに、それを数えた。一七レビの子たちの名は
次のとおりである。すなわち、ゲルション、コハテ、メラリ。一八ゲルショ
ンの子たちの名は、その氏族によれば次のとおりである。すなわち、リブ
ニ、シメイ。一九コハテの子たちは、その氏族によれば、アムラム、イヅハ
ル、ヘブロン、ウジエル。二〇メラリの子たちは、その氏族によれば、マヘ
リ、ムシ。これらはその父祖の家によるレビの氏族である。
二一ゲルションからリブニびとの氏族と、シメイびとの氏族とが出た。こ
れらはゲルションびとの氏族である。二二その数えられた者、すなわち、一
か月以上の男子の数は合わせて七千五百人であった。二三ゲルションびと

の氏族は幕屋の後方、すなわち、西の方に宿営し、二四ラエルの子エリア
サフが、ゲルションびとの父祖の家のつかさとなるであろう。二五会見の
幕屋の、ゲルションの子たちの務は、幕屋、天幕とそのおおい、会見の
幕屋の入口のとばり、二六庭のあげばり、幕屋と祭壇のまわりの庭の入口
のとばり、そのひも、およびすべてそれに用いる物を守ることである。
二七また、コハテからアムラムびとの氏族、イヅハルびとの氏族、ヘブロ
ンびとの氏族、ウジエルびとの氏族が出た。これらはコハテびとの氏族で
ある。二八一か月以上の男子の数は、合わせて八千六百人であって、聖所
の務を守る者たちである。二九コハテの子たちの氏族は、幕屋の南の方
に宿営し、三〇ウジエルの子エリザパンが、コハテびとの氏族の父祖の家
のつかさとなるであろう。三一彼らの務は、契約の箱、机、燭台、二つ
の祭壇、聖所の務に用いる器、とばり、およびすべてそれに用いる物を

守ることである。三二祭司アロンの子エレアザルが、レビびとのつかさたち
の長となり、聖所の務を守るものたちを監督するであろう。
三三メラリからマヘリびとの氏族と、ムシびとの氏族とが出た。これら
はメラリの氏族である。三四その数えられた者、すなわち、一か月以上の
男子の数は、合わせて六千二百人であった。三五アビハイルの子ツリエル
が、メラリの氏族の父祖の家のつかさとなるであろう。彼らは幕屋の北の
方に宿営しなければならない。三六メラリの子たちが、その務として管理
すべきものは、幕屋の枠、その横木、その柱、その座、そのすべての器、
およびそれに用いるすべての物、三七ならびに庭のまわりの柱とその座、
その釘、およびそのひもである。

三八また幕屋の前、その東の方、すなわち、会見の幕屋の東の方に宿営
する者は、モーセとアロン、およびアロンの子たちであって、イスラエルの

人々の務に代って、聖所の務を守るものである。ほかの人で近づく者
は殺されるであろう。三九モーセとアロンとが、主の言葉にしたがって数
えたレビびとで、その氏族によって数えられた者、一か月以上の男子は、
合わせて二万二千人であった。
四〇主はまたモーセに言われた、「あなたは、イスラエルの人々のうち、
すべてういごである男子の一か月以上のものを数えて、その名の数を調べ
なさい。四一また主なるわたしのために、イスラエルの人々のうちの、すべ
てのういごの代りにレビびとを取り、またイスラエルの人々の家畜のうち
の、すべてのういごの代りに、レビびとの家畜を取りなさい」。四二そこで
モーセは主の命じられたように、イスラエルの人々のうちの、すべてのう
いごを数えた。四三その数えられたういごの男子、すべて一か月以上の者
は、その名の数によると二万二千二百七十三人であった。

四四主はモーセに言われた、四五「あなたはイスラエルの人々のうちの、
すべてのういごの代りに、レビびとを取り、また彼らの家畜の代りに、レ
ビびとの家畜を取りなさい。レビびとはわたしのものとなる。わたしは主
である。四六またイスラエルの人々のういごは、レビびとの数を二百七十
三人超過しているから、そのあがないのために、四七そのあたまかずによっ
て、ひとりごとに銀五シケルを取らなければならない。すなわち、聖所の
シケルにしたがって、それを取らなければならない。一シケルは二十ゲラ
である。四八あなたは、その超過した者をあがなう金を、アロンと、その
子たちに渡さなければならない」。四九そこでモーセは、レビびとによって
あがなわれた者を超過した人々から、あがないの金を取った。五〇すなわ
ち、モーセは、イスラエルの人々のういごから、聖所のシケルにしたがっ
て千三百六十五シケルの銀を取り、五一そのあがないの金を、主の言葉にし

たがって、アロンとその子たちに渡した。主がモーセに命じられたとおり
である。
第四章一主はまたモーセとアロンに言われた、二「レビの子たちのうちか
ら、コハテの子たちの総数を、その氏族により、その父祖の家にしたがっ
て調べ、三三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くこと
のできる者を、ことごとく数えなさい。四コハテの子たちの、会見の幕屋
の務は、いと聖なる物にかかわるものであって、次のとおりである。五す
なわち、宿営の進む時に、アロンとその子たちとは、はいって、隔
ての垂幕を取りおろし、それをもって、あかしの箱をおおい、六その上に、
じゅごんの皮のおおいを施し、またその上に総青色の布をうちかけ、環
にさおをさし入れる。七また供えのパンの机の上には、青色の布をうち
かけ、その上に、さら、乳香を盛る杯、鉢、および灌祭の瓶を並べ、ま

た絶やさず供えるパンを置き、八緋色の布をその上にうちかけ、じゅごん
の皮のおおいをもって、これをおおい、さおをさし入れる。九また青色の
布を取って、燭台とそのともし火ざら、芯切りばさみ、芯取りざら、お
よびそれに用いるもろもろの油の器をおおい、一〇じゅごんの皮のおお
いのうちに、燭台とそのもろもろの器をいれて、担架に載せる。一一ま
た、金の祭壇の上に青色の布をうちかけ、じゅごんの皮のおおいで、これ
をおおい、そのさおをさし入れる。一二また聖所の務に用いる務の器を
みな取り、青色の布に包み、じゅごんの皮のおおいで、これをおおって、
担架に載せる。一三また祭壇の灰を取り去って、紫の布をその祭壇の上
にうちかけ、一四その上に、務をするのに用いるもろもろの器、すなわ
ち、火ざら、肉さし、十能、鉢、および祭壇のすべての器を載せ、また
その上に、じゅごんの皮のおおいをうちかけ、そしてさおをさし入れる。一

五宿営の進むとき、アロンとその子たちとが、聖所と聖所のすべての器
をおおうことを終ったならば、その後コハテの子たちは、それを運ぶため
に、はいってこなければならない。しかし、彼らは聖なる物に触れてはな
らない。触れると死ぬであろう。会見の幕屋のうちの、これらの物は、コ
ハテの子たちが運ぶものである。
一六祭司アロンの子エレアザルは、ともし油、香ばしい薫香、絶やさず
供える素祭および注ぎ油をつかさどり、また幕屋の全体と、そのうちに
あるすべての聖なる物、およびその所のもろもろの器をつかさどらなけ
ればならない」。
一七主はまた、モーセとアロンに言われた、一八「あなたがたはコハテび
との一族を、レビびとのうちから絶えさせてはならない。一九彼らがいと
聖なる物に近づく時、死なないで、命を保つために、このようにしなさ

い、すなわち、アロンとその子たちが、まず、はいり、彼らをおのおのそ
の働きにつかせ、そのになうべきものを取らせなさい。二〇しかし、彼ら
は、はいって、ひと目でも聖なる物を見てはならない。見るならば死ぬで
あろう」。
二一主はまたモーセに言われた、二二「あなたはまたゲルションの子たちの
総数を、その父祖の家により、その氏族にしたがって調べ、二三三十歳以上
五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くことのできる者を、ことご
とく数えなさい。二四ゲルションびとの氏族の務として働くことと、運
ぶ物とは次のとおりである。二五すなわち、彼らは幕屋の幕、会見の幕屋
およびそのおおいと、その上のじゅごんの皮のおおい、ならびに会見の幕屋
の入口のとばりを運び、二六また庭のあげばり、および幕屋と祭壇のまわ
りの庭の門の入口のとばりと、そのひも、ならびにそれに用いるすべての

器を運ばなければならない。そして彼らはすべてこれらのものについての
働きをしなければならない。
二七ゲルションびとの子たちのすべての務、
すなわち、その運ぶことと、働くこととは、すべてアロンとその子たちの
命に従わなければならない。あなたがたは彼らにすべてその運ぶべき物
を定めて、これを守らせなければならない。
二八これはすなわちゲルショ
ンびとの子たちの氏族が、会見の幕屋でする働きであって、彼らの務は
祭司アロンの子イタマルの指揮のもとにおかなければならない。
二九メラリの子たちをもまたあなたはその氏族により、その祖父の家にし
たがって調べ、
三〇三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋の
働きをすることのできる者を、ことごとく数えなさい。
三一彼らが会見の
幕屋でするすべての務にしたがって、その運ぶ責任のある物は次のとお
りである。すなわち、幕屋の枠、その横木、その柱、その座、
三二庭のま

わりの柱、その座、その釘、そのひも、またそのすべての器、およびそ
れに用いるすべてのものである。あなたがたは彼らが運ぶ責任のある器
を、その名によって割り当てなければならない。三三これはすなわちメラリ
の子たちの氏族の働きであって、彼らは祭司アロンの子イタマルの指揮の
もとに、会見の幕屋で、このすべての働きをしなければならない」。
三四そこでモーセとアロン、および会衆のつかさたちは、コハテの子た
ちをその氏族により、その父祖の家にしたがって調べ、三五三十歳以上五
十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くことのできる者を、ことごと
く数えたが、三六その氏族にしたがって数えられた者は二千七百五十人で
あった。三七これはすなわち、コハテびとの氏族の数えられた者で、すべ
て会見の幕屋で働くことのできる者であった。モーセとアロンが、主の
モーセによって命じられたところにしたがって数えたのである。

三八またゲルションの子たちを、その氏族により、その父祖の家にした
がって調べ、三九三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働
くことのできる者を、ことごとく数えたが、四〇その氏族により、その父祖
の家にしたがって数えられた者は二千六百三十人であった。四一これはす
なわち、ゲルションの子たちの氏族の数えられた者で、すべて会見の幕屋
で働くことのできる者であった。モーセとアロンが、主の命にしたがっ
て数えたのである。

四二またメラリの子たちの氏族を、その氏族により、その父祖の家にした
がって調べ、四三三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働
くことのできる者を、ことごとく数えたが、四四その氏族にしたがって数
えられた者は三千二百人であった。四五これはすなわち、メラリの子たちの
氏族の数えられた者で、モーセとアロンが、主のモーセによって命じられ

たところにしたがって数えたのである。
四六モーセとアロン、およびイスラエルのつかさたちは、レビびとを、その
氏族により、その父祖の家にしたがって調べ、**四七**三十歳以上五十歳以下
で、会見の幕屋にはいって務の働きをし、また、運ぶ働きをする者を、
ことごとく数えたが、**四八**その数えられた者は八千五百八十人であった。**四**
九彼らは主の命により、モーセによって任じられ、おのおのその働きにつ
き、かつその運ぶところを受け持った。こうして彼らは主のモーセに命じ
られたように数えられたのである。

第五章一主はまたモーセに言われた、**二**「イスラエルの人々に命じて、ら
い病人、流出のある者、死体にふれて汚れた者を、ことごとく宿営
の外に出させなさい。**三**男でも女でも、あなたがたは彼らを宿営の外
に出してそこにおらせ、彼らに宿営を汚させてはならない。わたしがそ

の中に住んでいるからである」。四イスラエルの人々はそのようにして、彼
らを宿営の外に出した。すなわち、主がモーセに言われたようにイスラ
エルの人々は行った。
五主はまたモーセに言われた、六「イスラエルの人々に告げなさい、『男
または女が、もし人の犯す罪をおかして、主に罪を得、その人がとがあ
る者となる時は、七その犯した罪を告白し、その物の価にその五分の一
を加えて、彼がとがを犯した相手方に渡し、そのとがをことごとく償わ
なければならない。八しかし、もし、そのとがの償いを受け取るべき親族
も、その人にない時は、主にそのとがの償いをして、これを祭司に帰せし
めなければならない。なお、このほか、そのあがないをするために用いた
贖罪の雄羊も、祭司に帰せしめなければならない。九イスラエルの人々
が、祭司のもとに携えて来るすべての聖なるささげ物は、みな祭司に帰せ

しめなければならない。一〇すべて人の聖なるささげ物は祭司に帰し、す
べて人が祭司に与える物は祭司に帰するであろう』。
一一主はまたモーセに言われた、一二「イスラエルの人々に告げなさい、
『もし人の妻たる者が、道ならぬ事をして、その夫に罪を犯し、一三人が
彼女と寝たのに、その事が夫の目に隠れて現れず、彼女はその身を汚し
たけれども、それに対する証人もなく、彼女もまたその時に捕えられな
かった場合、一四すなわち、妻が身を汚したために、夫が疑いの心を起
して妻を疑うことがあり、または妻が身を汚した事がないのに、夫が疑
いの心を起して妻を疑うことがあれば、一五夫は妻を祭司のもとに伴
い、彼女のために大麦の粉一エパの十分の一を供え物として携えてこな
ければならない。ただし、その上に油を注いではならない。また乳香を
加えてはならない。これは疑いの供え物、覚えの供え物であって罪を覚

えさせるものだからである。
一六祭司はその女を近く進ませ、主の前に立たせなければならない。一
七祭司はまた土の器に聖なる水を入れ、幕屋のゆかのちりを取ってその水
に入れ、一八その女を主の前に立たせ、女にその髪の毛をほどかせ、覚
えの供え物すなわち、疑いの供え物を、その手に持たせなければならな
い。そして祭司は、のろいの苦い水を手に取り、一九女に誓わせて、これ
に言わなければならない、「もし人があなたと寝たことがなく、またあなた
が、夫のもとにあって、道ならぬ事をして汚れたことがなければ、のろい
の苦い水も、あなたに害を与えないであろう。二〇しかし、あなたが、もし
夫のもとにあって、道ならぬことをして身を汚し、あなたの夫でない人
が、あなたと寝たことがあるならば、――二一祭司はその女に、のろいの
誓いをもって誓わせ、その女に言わなければならない。――主はあなた
のももをやせさせ、あなたの腹をふくれさせて、あなたを民のうちの、の

ろいとし、また、ののしりとされるように。二二また、のろいの水が、あな
たの腹にはいってあなたの腹をふくれさせ、あなたのももをやせさせるよ
うに」。その時、女は「アァメン、アァメン」と言わなければならない。
二三祭司は、こののろいを書き物に書きしるし、それを苦い水に洗い落
し、二四女にそののろいの水を飲ませなければならない。そののろいの水
は彼女のうちにはいって苦くなるであろう。二五そして祭司はその女の手
から疑いの供え物を取り、その供え物を主の前に揺り動かして、それを
祭壇に持ってこなければならない。二六祭司はその供え物のうちから、覚
えの分、一握りを取って、それを祭壇で焼き、その後、女にその水を飲ま
せなければならない。二七その水を女に飲ませる時、もしその女が身を
汚し、夫に罪を犯した事があれば、そののろいの水は女のうちにはいっ
て苦くなり、その腹はふくれ、ももはやせて、その女は民のうちののろ

いとなるであろう。二八しかし、もし女が身を汚した事がなく、清いなら
ば、害を受けないで、子を産むことができるであろう。
二九これは疑いのある時のおきてである。妻たる者が夫のもとにあっ
て、道ならぬ事をして身を汚した時、三〇または夫たる者が疑いの心
を起して、妻を疑う時、彼はその女を主の前に立たせ、祭司はこのおき
てを、ことごとく彼女に行わなければならない。三一こうするならば、夫
は罪がなく、妻は罪を負うであろう』。
第六章一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさ
い、『男または女が、特に誓いを立て、ナジルびととなる誓願をして、身
を主に聖別する時は、三ぶどう酒と濃い酒を断ち、ぶどう酒の酢となった
もの、濃い酒の酢となったものを飲まず、また、ぶどうの汁を飲まず、また
生でも干したものでも、ぶどうを食べてはならない。四ナジルびとである

間は、すべて、ぶどうの木からできるものは、種も皮も食べてはならない。
五また、ナジルびとたる誓願を立てている間は、すべて、かみそりを頭
に当ててはならない。身を主に聖別した日数の満ちるまで、彼は聖なるも
のであるから、髪の毛をのばしておかなければならない。
六身を主に聖別している間は、すべて死体に近づいてはならない。七
父母、兄弟、姉妹が死んだ時でも、そのために身を汚してはならない。神
に聖別したしるしが、頭にあるからである。八彼はナジルびとである間
は、すべて主の聖なる者である。
九もし人がはからずも彼のかたわらに死んで、彼の聖別した頭を汚し
たならば、彼は身を清める日に、頭をそらなければならない。すなわち、
七日目にそれをそらなければならない。一〇そして八日目に山ばと二
羽、または家ばとのひな二羽を携えて、会見の幕屋の入口におる祭司の

所に行かなければならない。一一祭司はその一羽を罪祭に、一羽を燔祭
にささげて、彼が死体によって得た罪を彼のためにあがない、その日に彼
の頭を聖別しなければならない。一二彼はまたナジルびとたる日の数を、
改めて主に聖別し、一歳の雄の小羊を携えてきて、愆祭としなければ
ならない。それ以前の日は、彼がその聖別を汚したので、無効になるであ
ろう。

一三これがナジルびとの律法である。聖別の日数が満ちた時は、その人
を会見の幕屋の入口に連れてこなければならない。一四そしてその人は供
え物を主にささげなければならない。すなわち、一歳の雄の小羊の全きも
の一頭を燔祭とし、一歳の雌の小羊の全きもの一頭を罪祭とし、雄羊の
全きもの一頭を酬恩祭とし、一五また種入れぬパンの一かご、油を混ぜて
作った麦粉の菓子、油を塗った種入れぬ煎餅、および素祭と灌祭を携え

てこなければならない。一六祭司はこれを主の前に携えてきて、その罪祭
と燔祭とをささげ、一七また雄羊を種入れぬパンの一かごと共に、酬恩祭
の犠牲として、主にささげなければならない。祭司はまたその素祭と灌祭
をもささげなければならない。一八そのナジルびとは会見の幕屋の入口で、
聖別した頭をそり、その聖別した頭の髪を取って、これを酬恩祭の犠牲
の下にある火の上に置かなければならない。一九祭司はその雄羊の肩の煮
えたものと、かごから取った種入れぬ菓子一つと、種入れぬ煎餅一つを取っ
て、これをナジルびとが、その聖別した頭をそった後、その手に授け、二
〇祭司は主の前でこれを揺り動かして揺祭としなければならない。これは
聖なる物であって、その揺り動かした胸と、ささげたももと共に、祭司に
帰するであろう。こうして後、そのナジルびとは、ぶどう酒を飲むことが
できる。

二一これは誓願をするナジルびとと、そのナジルびとたる事のために、主
にささげる彼の供え物についての律法である。このほかにその力の及ぶ
物をささげることができる。すなわち、彼はその誓う誓願のように、ナジ
ルびとの律法にしたがって行わなければならない』。
二二主はまたモーセに言われた、
二三「アロンとその子たちに言いなさい、
『あなたがたはイスラエルの人々を祝福してこのように言わなければなら
ない。

二四「願わくは主があなたを祝福し、
あなたを守られるように。
二五願わくは主がみ顔をもってあなたを照し、
あなたを恵まれるように。
二六願わくは主がみ顔をあなたに向け、

あなたに平安を賜わるように」』。
二七こうして彼らがイスラエルの人々のために、わたしの名を唱えるな
らば、わたしは彼らを祝福するであろう」。
第七章一モーセが幕屋を建て終り、これに油を注いで聖別し、またその
すべての器、およびその祭壇と、そのすべての器に油を注いで、これ
を聖別した日に、二イスラエルのつかさたち、すなわち、その父祖の家の
長たちは、ささげ物をした。彼らは各部族のつかさたちであって、その数
えられた人々をつかさどる者どもであった。三彼らはその供え物を、主の
前に携えてきたが、おおいのある車六両と雄牛十二頭であった。つか
さふたりに車一両、ひとりに雄牛一頭である。彼らはこれを幕屋の前に
引いてきた。四その時、主はモーセに言われた、五「あなたはこれを会見の
幕屋の務に用いるために、彼らから受け取って、レビびとに、おのおのそ

の務にしたがって、渡さなければならない」。六そこでモーセはその車と
雄牛を受け取って、これをレビびとに渡した。七すなわち、ゲルションの子
たちには、その務にしたがって、車二両と雄牛四頭を渡し、八メラリの
子たちには、その務にしたがって車四両と雄牛八頭を渡し、祭司アロン
の子イタマルに、これを監督させた。九しかし、コハテの子たちには、何を
も渡さなかった。彼らの務は聖なる物を、肩になって運ぶことであっ
たからである。一〇つかさたちは、また祭壇に油を注ぐ日に、祭壇奉納の
供え物を携えてきて、その供え物を祭壇の前にささげた。一一主はモー
セに言われた、「つかさたちは一日にひとりずつ、祭壇奉納の供え物をさ
さげなければならない」。

一二第一日に供え物をささげた者は、ユダの部族のアミナダブの子ナショ
ンであった。一三その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の

鉢一つ、これは七十シケルによる。この二つには素祭に
使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。一四また十シケルの金の杯一つ。
これには薫香を満たしていた。一五また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一
頭、一歳の雄の小羊一頭。一六罪祭に使う雄やぎ一頭。一七酬恩祭の犠牲
に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、
これはアミナダブの子ナションの供え物であった。
一八第二日にはイッサカルのつかさ、ツアルの子ネタニエルがささげ物
をした。一九そのささげた供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケ
ル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二
つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。二〇また十シケルの金
の杯一つ、これには薫香を満たしていた。二一また燔祭に使う若い雄牛
一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。二二罪祭に使う雄やぎ一頭。二三

酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊
五頭であって、これはツアルの子ネタニエルの供え物であった。
二四第三日にはゼブルンの子たちのつかさ、ヘロンの子エリアブ。二五
その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ
れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。二六また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。二七また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。二八罪祭に使う雄やぎ一頭。二九酬恩祭の犠牲に使
う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はヘロンの子エリアブの供え物であった。
三〇第四日にはルベンの子たちのつかさ、シデウルの子エリヅル。三一
その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ

れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。三二また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。三三また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。三四罪祭に使う雄やぎ一頭。三五酬恩祭の犠牲に使
う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はシデウルの子エリヅルの供え物であった。

三六第五日にはシメオンの子たちのつかさ、ツリシャダイの子シルミエル。
三七その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ
れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。三八また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。三九また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。四〇罪祭に使う雄やぎ一頭。四一酬恩祭の犠牲に使

う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はツリシャダイの子シルミエルの供え物であった。
四二第六日にはガドの子たちのつかさ、デウエルの子エリアサフ。四三
その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ
れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。四四また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。四五また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。四六罪祭に使う雄やぎ一頭。四七酬恩祭の犠牲に使
う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はデウエルの子エリアサフの供え物であった。
四八第七日にはエフライムの子たちのつかさ、アミホデの子エリシャマ。
四九その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ

れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。五〇また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。五一また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。五二罪祭に使う雄やぎ一頭。五三酬恩祭の犠牲に使
う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はアミホデの子エリシャマの供え物であった。
五四第八日にはマナセの子たちのつかさ、パダヅルの子ガマリエル。五
五その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ
れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。五六また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。五七また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。五八罪祭に使う雄やぎ一頭。五九酬恩祭の犠牲に使

う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はパダヅルの子ガマリエルの供え物であった。
六〇第九日にはベニヤミンの子らのつかさ、ギデオニの子アビダン。六
一その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ
れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。六二また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。六三また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。六四罪祭に使う雄やぎ一頭。六五酬恩祭の犠牲に使
う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はギデオニの子アビダンの供え物であった。
六六第十日にはダンの子たちのつかさ、アミシャダイの子アヒエゼル。六
七その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ

れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。六八また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。六九また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。七〇罪祭に使う雄やぎ一頭。七一酬恩祭の犠牲に使
う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はアミシャダイの子アヒエゼルの供え物であった。
七二第十一日にはアセルの子たちのつかさ、オクランの子パギエル。七
三その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ
れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。七四また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。七五また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。七六罪祭に使う雄やぎ一頭。七七酬恩祭の犠牲に使

う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はオクランの子パギエルの供え物であった。
七八第十二日にはナフタリの子たちのつかさ、エナンの子アヒラ。七九
その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、こ
れは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油
を混ぜた麦粉を満たしていた。八〇また十シケルの金の杯一つ、これに
は薫香を満たしていた。八一また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一
歳の雄の小羊一頭。八二罪祭に使う雄やぎ一頭。八三酬恩祭の犠牲に使
う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であって、これ
はエナンの子アヒラの供え物であった。
八四以上は祭壇に油を注ぐ日に、イスラエルのつかさたちが、祭壇を
奉納する供え物として、ささげたものである。すなわち、銀のさら十二、

銀の鉢十二、金の杯十二。八五銀のさらはそれぞれ百三十シケル、鉢は
それぞれ七十シケル、聖所のシケルによれば、この銀の器は合わせて二
千四百シケル。八六また十二の金の杯は、聖所のシケ
ルによれば、それぞれ十シケル、その杯の金は合わせて百二十シケルで
あった。八七また燔祭に使う雄牛は合わせて十二、雄羊は十二、一歳の雄
の小羊は十二、このほかにその素祭のものがあった。また罪祭に使う雄や
ぎは十二。八八酬恩祭の犠牲に使う雄牛は合わせて二十四、雄羊は六十、
雄やぎは六十、一歳の雄の小羊は六十であって、これは祭壇に油を注い
だ後に、祭壇奉納の供え物としてささげたものである。
八九さてモーセは主と語るために、会見の幕屋にはいって、あかしの箱
の上の、贖罪所の上、二つのケルビムの間から自分に語られる声を聞い
た。すなわち、主は彼に語られた。

第八章一主はモーセに言われた、二「アロンに言いなさい、『あなたがと
もし火をともす時は、七つのともし火で燭台の前方を照すようにしなさ
い』」。三アロンはそのようにした。すなわち、主がモーセに命じられたよう
に、燭台の前方を照すように、ともし火をともした。四燭台の造りは次
のとおりである。それは金の打ち物で、その台もその花も共に打物造りで
あった。モーセは主に示された型にしたがって、そのように燭台を
造った。
五主はまたモーセに言われた、六「レビびとをイスラエルの人々のうち
から取って、彼らを清めなさい。七あなたはこのようにして彼らを清めな
ければならない。すなわち、罪を清める水を彼らに注ぎかけ、彼らに全身
をそらせ、衣服を洗わせて、身を清めさせ、八そして彼らに若い雄牛一頭
と、油を混ぜた麦粉の素祭とを取らせなさい。あなたはまた、ほかに若い

雄牛を罪祭のために取らなければならない。九そして、あなたはレビびと
を会見の幕屋の前に連れてきて、イスラエルの人々の全会衆を集め、一
〇レビびとを主の前に進ませ、イスラエルの人々をして、手をレビびとの
上に置かせなければならない。一一そしてアロンは、レビびとをイスラエ
ルの人々のささげる揺祭として、主の前にささげなければならない。これ
は彼らに主の務をさせるためである。一二それからあなたはレビびとをし
て、手をかの雄牛の頭の上に置かせ、その一つを罪祭とし、一つを燔祭
として主にささげ、レビびとのために罪のあがないをしなければならない。
一三あなたはレビびとを、アロンとその子たちの前に立たせ、これを揺祭と
して主にささげなければならない。

一四こうして、あなたはレビびとをイスラエルの人々のうちから分かち、
レビびとをわたしのものとしなければならない。一五こうして後レビびとは

会見の幕屋にはいって務につくことができる。あなたは彼らを清め、彼
らをささげて揺祭としなければならない。一六彼らはイスラエルの人々の
うちから、全くわたしにささげられたものだからである。イスラエルの
人々のうちの初めに生れた者、すなわち、すべてのういごの代りに、わた
しは彼らを取ってわたしのものとした。一七イスラエルの人々のうちのう
いごは、人も獣も、みなわたしのものだからである。わたしはエジプトの
地で、すべてのういごを撃ち殺した日に、彼らを聖別してわたしのものと
した。一八それでわたしはイスラエルの人々のうちの、すべてのういごの
代りにレビびとを取った。一九わたしはイスラエルの人々のうちからレビ
びとを取って、アロンとその子たちに与え、彼らに会見の幕屋で、イスラ
エルの人々に代って務をさせ、またイスラエルの人々のために罪のあが
ないをさせるであろう。これはイスラエルの人々が、聖所に近づいて、イ

スラエルの人々のうちに災の起ることのないようにするためである」。
二〇モーセとアロン、およびイスラエルの人々の全会衆は、すべて主が
レビびとの事につき、モーセに命じられた所にしたがって、レビびとに
行った、すなわち、イスラエルの人々は、そのように彼らに行った。二一そ
こでレビびとは身を清め、その衣服を洗った。アロンは彼らを主の前にさ
さげて揺祭とした。アロンはまた彼らのために、罪のあがないをして彼ら
を清めた。二二こうして後、レビびとは会見の幕屋にはいって、アロンと
その子たちに仕えて務をした。すなわち、彼らはレビびとの事について、
主がモーセに命じられた所にしたがって、そのように彼らに行った。
二三主はまたモーセに言われた、二四「レビびとは次のようにしなければ
ならない。すなわち、二十五歳以上の者は務につき、会見の幕屋の働き
をしなければならない。二五しかし、五十歳からは務の働きを退き、重

ねて務をしてはならない。二六ただ、会見の幕屋でその兄弟たちの務の
助けをすることができる。しかし、務をしてはならない。あなたがレビび
とにその務をさせるには、このようにしなければならない」。

第九章一エジプトの国を出た次の年の正月、主はシナイの荒野でモー
セに言われた、二「イスラエルの人々に、過越の祭を定めの時に行わせ
なさい。三この月の十四日の夕暮、定めの時に、それを行わなければなら
ない。あなたがたは、そのすべての定めと、そのすべてのおきてにしたがっ
て、それを行わなければならない」。四そこでモーセがイスラエルの人々
に、過越の祭を行わなければならないと言ったので、五彼らは正月の
十四日の夕暮、シナイの荒野で過越の祭を行った。すなわち、イスラエ
ルの人々は、すべて主がモーセに命じられたようにおこなった。六ところ
が人の死体に触れて身を汚したために、その日に過越の祭を行うことの

できない人々があって、その日モーセとアロンの前にきて、七その人々は
彼に言った、「わたしたちは人の死体に触れて身を汚しましたが、なぜその
定めの時に、イスラエルの人々と共に、主に供え物をささげることができ
ないのですか」。八モーセは彼らに言った、「しばらく待て。主があなたが
たについて、どう仰せになるかを聞こう」。
九主はモーセに言われた、一〇「イスラエルの人々に言いなさい、『あなた
がたのうち、また、あなたがたの子孫のうち、死体に触れて身を汚した人
も、遠い旅路にある人も、なお、過越の祭を主に対して行うことができ
るであろう。一一すなわち、二月の十四日の夕暮、それを行い、種入れぬ
パンと苦菜を添えて、それを食べなければならない。一二これを少しでも朝
まで残しておいてはならない。またその骨は一本でも折ってはならない。
過越の祭のすべての定めにしたがってこれを行わなければならない。一

一三しかし、その身は清く、旅に出てもいないのに、過越の祭を行わない
ときは、その人は民のうちから断たれるであろう。このような人は、定め
の時に主の供え物をささげないゆえ、その罪を負わなければならない。一
四もし他国の人が、あなたがたのうちに寄留していて、主に対して過越の
祭を行おうとするならば、過越の祭の定めにより、そのおきてにした
がって、これを行わなければならない。あなたがたは他国の人にも、自国
の人にも、同一の定めを用いなければならない』。
一五幕屋を建てた日に、雲は幕屋をおおった。すれはすなわち、あかしの
幕屋であって、夕には、幕屋の上に、雲は火のように見えて、朝にまで及
んだ。一六常にそうであって、昼は雲がそれをおおい、夜は火のように見え
た。一七雲が幕屋を離れてのぼる時は、イスラエルの人々は、ただちに道
に進んだ。また雲がとどまる所に、イスラエルの人々は宿営した。一八

すなわち、イスラエルの人々は、主の命によって道に進み、主の命によっ
て宿営し、幕屋の上に雲がとどまっている間は、宿営していた。
一九
幕屋の上に、日久しく雲のとどまる時は、イスラエルの人々は主の言いつ
けを守って、道に進まなかった。
二〇また幕屋の上に、雲のとどまる日の
少ない時もあったが、彼らは、ただ主の命にしたがって宿営し、主の命
にしたがって、道に進んだ。
二一また雲は夕から朝まで、とどまることも
あったが、朝になって、雲がのぼる時は、彼らは道に進んだ。また昼でも
夜でも、雲がのぼる時は、彼らは道に進んだ。
二二ふつかでも、一か月で
も、あるいはそれ以上でも、幕屋の上に、雲がとどまっている間は、イ
スラエルの人々は宿営していて、道に進まなかったが、それがのぼると
道に進んだ。
二三すなわち、彼らは主の命にしたがって宿営し、主の命
にしたがって道に進み、モーセによって、主が命じられたとおりに、主の

言いつけを守った。
第一〇章一主はモーセに言われた、二「銀のラッパを二本つくりなさい。
すなわち、打物造りとし、それで会衆を呼び集め、また宿営を進ませな
さい。三この二つを吹くときは、全会衆が会見の幕屋の入口に、あなたの
所に集まってこなければならない。四もしその一つだけを吹くときは、イ
スラエルの氏族の長であるつかさたちが、あなたの所に集まってこなけれ
ばならない。五またあなたがたが警報を吹き鳴らす時は、東の方の宿営
が、道に進まなければならない。六二度目の警報を吹き鳴らす時は、南の
方の宿営が、道に進まなければならない。すべて道に進む時は、警報を
吹き鳴らさなければならない。七また会衆を集める時にも、ラッパを吹き
鳴らすが、警報は吹き鳴らしてはならない。八アロンの子である祭司たち
が、ラッパを吹かなければならない。これはあなたがたが、代々ながく守

るべき定めとしなければならない。九また、あなたがたの国で、あなたが
たをしえたげるあだとの戦いに出る時は、ラッパをもって、警報を吹き鳴
らさなければならない。そうするならば、あなたがたは、あなたがたの神、
主に覚えられて、あなたがたの敵から救われるであろう。一〇また、あなた
がたの喜びの日、あなたがたの祝いの時、および月々の第一日には、あ
なたがたの燔祭と酬恩祭の犠牲をささげるに当って、ラッパを吹き鳴ら
さなければならない。そうするならば、あなたがたの神は、それによって、
あなたがたを覚えられるであろう。わたしはあなたがたの神、主である」。
一一第二年の二月二十日に、雲があかしの幕屋を離れてのぼったので、
一二イスラエルの人々は、シナイの荒野を出て、その旅路に進んだが、パ
ランの荒野に至って、雲はとどまった。一三こうして彼らは、主がモーセ
によって、命じられたところにしたがって、道に進むことを始めた。一四

先頭には、ユダの子たちの宿営の旗が、その部隊を従えて進んだ。ユダ
の部隊の長はアミナダブの子ナション、一五イッサカルの子たちの部族の
部隊の長はツアルの子ネタニエル、一六ゼブルンの子たちの部族の部隊の
長はヘロンの子エリアブであった。
一七そして幕屋は取りくずされ、ゲルションの子たち、およびメラリの子
たちは幕屋を運び進んだ。一八次にルベンの宿営の旗が、その部隊を従
えて進んだ。ルベンの部隊の長はシデウルの子エリヅル、一九シメオンの
子たちの部族の部隊の長はツリシャダイの子シルミエル、二〇ガドの子た
ちの部族の部隊の長はデウエルの子エリアサフであった。
二一そしてコハテびとは聖なる物を運び進んだ。これが着くまでに、人々
は幕屋を建て終るのである。二二次にエフライムの子たちの宿営の旗が、
その部隊を従えて進んだ。エフライムの部隊の長はアミホデの子エリシ

ヤマ、二三マナセの子たちの部族の部隊の長はパダヅルの子ガマリエル、二
四ベニヤミンの子たちの部族の部隊の長はギデオニの子アビダンであった。
二五次にダンの子たちの宿営の旗が、その部隊を従えて進んだ。この
部隊はすべての宿営のしんがりであった。ダンの部隊の長はアミシャダ
イの子アヒエゼル、二六アセルの子たちの部族の部隊の長はオクランの子
パギエル、二七ナフタリの子たちの部族の部隊の長はエナンの子アヒラで
あった。二八イスラエルの人々が、その道に進む時は、このように、その
部隊に従って進んだ。

二九さて、モーセは、妻の父、ミデヤンびとリウエルの子ホバブに言っ
た、「わたしたちは、かつて主がおまえたちに与えると約束された所に向
かって進んでいます。あなたも一緒においでください。あなたが幸福にな
られるようにいたしましょう。主がイスラエルに幸福を約束されたのです

から」。三〇彼はモーセに言った、「わたしは行きません。わたしは国に帰っ
て、親族のもとに行きます」。三一モーセはまた言った、「どうかわたしたち
を見捨てないでください。あなたは、わたしたちが荒野のどこに宿営すべ
きかを御存じですから、わたしたちの目となってください。三二もしあなた
が一緒においでくださるなら、主がわたしたちに賜わる幸福をあなたにも
及ぼしましょう」。

三三こうして彼らは主の山を去って、三日の行程を進んだ。主の契約の
箱は、その三日の行程の間、彼らに先立って行き、彼らのために休む所
を尋ねもとめた。三四彼らが宿営を出て、道に進むとき、昼は主の雲が
彼らの上にあった。

三五契約の箱の進むときモーセは言った、

「主よ、立ちあがってください。

あなたの敵は打ち散らされ、
あなたを憎む者どもは、
あなたの前から逃げ去りますように」。
三六またそのとどまるとき、彼は言った、
「主よ、帰ってきてください、
イスラエルのちよろずの人に」。

第一一章 一さて、民は災難に会っている人のように、主の耳につぶやい
た。主はこれを聞いて怒りを発せられ、主の火が彼らのうちに燃えあがっ
て、宿営の端を焼いた。二そこで民はモーセにむかって叫んだ。モーセ
が主に祈ったので、その火はしずまった。三主の火が彼らのうちに燃えあ
がったことによって、その所の名はタベラと呼ばれた。
四また彼らのうちにいた多くの寄り集まりびとは欲心を起し、イスラエ

ルの人々もまた再び泣いて言った、「ああ、肉が食べたい。五われわれは
思い起すが、エジプトでは、ただで、魚を食べた。きゅうりも、すいかも、
にらも、たまねぎも、そして、にんにくも。六しかし、いま、われわれの
精根は尽きた。われわれの目の前には、このマナのほか何もない」。
七マナは、こえんどろの実のようで、色はブドラクの色のようであった。
八民は歩きまわって、これを集め、ひきうすでひき、または、うすでつき、
かまで煮て、これをもちとした。その味は油菓子の味のようであった。九
夜、宿営の露がおりるとき、マナはそれと共に降った。
一〇モーセは、民が家ごとに、おのおのその天幕の入口で泣くのを聞いた。
そこで主は激しく怒られ、またモーセは不快に思った。一一そして、モー
セは主に言った、「あなたはなぜ、しもべに悪い仕打ちをされるのですか。
どうしてわたしはあなたの前に恵みを得ないで、このすべての民の重荷を

負わされるのですか。一二わたしがこのすべての民を、はらんだのですか。
わたしがこれを生んだのですか。そうではないのに、あなたはなぜわたし
に『養い親が乳児を抱くように、彼らをふところに抱いて、あなたが彼
らの先祖たちに誓われた地に行け』と言われるのですか。一三わたしはどこ
から肉を獲て、このすべての民に与えることができましょうか。彼らは泣
いて、『肉を食べさせよ』とわたしに言っているのです。一四わたしひとり
では、このすべての民を負うことができません。それはわたしには重過ぎ
ます。一五もしわたしがあなたの前に恵みを得ますならば、わたしにこのよ
うな仕打ちをされるよりは、むしろ、ひと思いに殺し、このうえ苦しみに
会わせないでください」。
一六主はモーセに言われた、「イスラエルの長老たちのうち、民の長老
となり、つかさとなるべきことを、あなたが知っている者七十人をわたし

のもとに集め、会見の幕屋に連れてきて、そこにあなたと共に立たせなさ
い。一七わたしは下って、その所で、あなたと語り、またわたしはあなた
の上にある霊を、彼らにも分け与えるであろう。彼らはあなたと共に、民
の重荷を負い、あなたが、ただひとりで、それを負うことのないようにす
るであろう。一八あなたはまた民に言いなさい、『あなたがたは身を清めて、
あすを待ちなさい。あなたがたは肉を食べることができるであろう。あな
たがたが泣いて主の耳に、わたしたちは肉が食べたい。エジプトにいた時
は良かったと言ったからである。それゆえ、主はあなたがたに肉を与えて
食べさせられるであろう。一九あなたがたがそれを食べるのは、一日や二日
や五日や十日や二十日ではなく、二〇一か月に及び、ついにあなたがたの鼻
から出るようになり、あなたがたは、それに飽き果てるであろう。それは
あなたがたのうちにおられる主を軽んじて、その前に泣き、なぜ、わたし

たちはエジプトから出てきたのだろうと言ったからである』」。二一モーセは
言った、「わたしと共におる民は徒歩の男子だけでも六十万です。ところが
あなたは、『わたしは彼らに肉を与えて一か月のあいだ食べさせよう』と言
われます。二二羊と牛の群れを彼らのためにほふって、彼らを飽きさせる
というのですか。海のすべての魚を彼らのために集めて、彼らを飽きさせ
るというのですか」。二三主はモーセに言われた、「主の手は短かろうか。
あなたは、いま、わたしの言葉の成るかどうかを見るであろう」。
二四この時モーセは出て、主の言葉を民に告げ、民の長老たち七十人を
集めて、幕屋の周囲に立たせた。二五主は雲のうちにあって下り、モーセ
と語られ、モーセの上にある霊を、その七十人の長老たちにも分け与え
られた。その霊が彼らの上にとどまった時、彼らは預言した。ただし、そ
の後は重ねて預言しなかった。

二六その時ふたりの者が、宿営にとどまっていたが、ひとりの名はエル
ダデと言い、ひとりの名はメダデといった。彼らの上にも霊がとどまった。
彼らは名をしるされた者であったが、幕屋に行かなかったので、宿営のう
ちで預言した。二七時にひとりの若者が走ってきて、モーセに告げて言っ
た、「エルダデとメダデとが宿営のうちで預言しています」。二八若い時か
らモーセの従者であったヌンの子ヨシュアは答えて言った、「わが主、モー
セよ、彼らをさし止めてください」。二九モーセは彼に言った、「あなたは、
わたしのために思って、ねたみを起しているのか。主の民がみな預言者と
なり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ」。三〇こう
してモーセはイスラエルの長老たちと共に、宿営に引きあげた。
　三一さて、主のもとから風が起り、海の向こうから、うずらを運んでき
て、これを宿営の近くに落した。その落ちた範囲は、宿営の周囲で、こ

ちら側も、おおよそ一日の行程、あちら側も、おおよそ一日の行程、地面
から高さおおよそ二キュビトであった。三二そこで民は立ち上がってその
日は終日、その夜は終夜、またその次の日も終日、うずらを集めたが、
集める事の最も少ない者も、十ホメルほど集めた。彼らはみな、それを
宿営の周囲に広げておいた。三三その肉がなお、彼らの歯の間にあって
食べつくさないうちに、主は民にむかって怒りを発し、主は非常に激しい
疫病をもって民を撃たれた。三四これによって、その所の名はキブロテ・
ハッタワと呼ばれた。欲心を起した民を、そこに埋めたからである。三五
キブロテ・ハッタワから、民はハゼロテに進み、ハゼロテにとどまった。

第一二章

一モーセはクシの女をめとっていたが、そのクシの女をめとっ
たゆえをもって、ミリアムとアロンはモーセを非難した。二彼らは言った、
「主はただモーセによって語られるのか。われわれによっても語られるので

はないのか」。主はこれを聞かれた。三モーセはその人となり柔和なこと、
地上のすべての人にまさっていた。四そこで、主は突然モーセとアロン、
およびミリアムにむかって「あなたがた三人、会見の幕屋に出てきなさい」
と言われたので、彼ら三人は出てきたが、五主は雲の柱のうちにあって下
り、幕屋の入口に立って、アロンとミリアムを呼ばれた。彼らふたりが進
み出ると、六彼らに言われた、「あなたがたは、いま、わたしの言葉を聞き
なさい。あなたがたのうちに、もし、預言者があるならば、主なるわたし
は幻をもって、これにわたしを知らせ、また夢をもって、これと語るで
あろう。七しかし、わたしのしもべモーセとは、そうではない。彼はわた
しの全家に忠信なる者である。八彼とは、わたしは口ずから語り、明ら
かに言って、なぞを使わない。彼はまた主の形を見るのである。なぜ、あ
なたがたはわたしのしもべモーセを恐れず非難するのか」。

九主は彼らにむかい怒りを発して去られた。一〇雲が幕屋の上を離れ去
った時、ミリアムは、らい病となり、その身は雪のように白くなった。ア
ロンがふり返ってミリアムを見ると、彼女はらい病になっていた。一一そ
こで、アロンはモーセに言った、「ああ、わが主よ、わたしたちは愚かなこと
をして罪を犯しました。どうぞ、その罰をわたしたちに受けさせないでく
ださい。一二どうぞ彼女を母の胎から肉が半ば滅びうせて出る死人のよう
にしないでください」。一三その時モーセは主に呼ばわって言った、「ああ、
神よ、どうぞ彼女をいやしてください」。一四主はモーセに言われた、「彼女
の父が彼女の顔につばきしてさえ、彼女は七日のあいだ、恥じて身を隠す
ではないか。彼女を七日のあいだ、宿営の外で閉じこめておかなければ
ならない。その後、連れもどしてもよい」。一五そこでミリアムは七日のあ
いだ、宿営の外で閉じこめられた。民はミリアムが連れもどされるまで

は、道に進まなかった。一六その後、民はハゼロテを立って進み、パラン
の荒野に宿営した。

第一三章一主はモーセに言われた、二「人をつかわして、わたしがイスラエ
ルの人々に与えるカナンの地を探らせなさい。すなわち、その父祖の部族
ごとに、すべて彼らのうちのつかさたる者ひとりずつをつかわしなさい」。
三モーセは主の命にしたがって、パランの荒野から彼らをつかわした。そ
の人々はみなイスラエルの人々のかしらたちであった。四彼らの名は次の
とおりである。ルベンの部族ではザックルの子シャンマ、五シメオンの部族
ではホリの子シャパテ、六ユダの部族ではエフンネの子カレブ、七イッサカ
ルの部族ではヨセフの子イガル、八エフライムの部族ではヌンの子ホセア、
九ベニヤミンの部族ではラフの子パルテ、一〇ゼブルンの部族ではソデの子
ガデエル、一一ヨセフの部族すなわち、マナセの部族ではスシの子ガデ、一

ニダンの部族ではゲマリの子アンミエル、一三アセルの部族ではミカエルの
子セトル、一四ナフタリの部族ではワフシの子ナヘビ、一五ガドの部族では
マキの子ギウエル。一六以上はモーセがその地を探らせるためにつかわし
た人々の名である。そしてモーセはヌンの子ホセアをヨシュアと名づけた。
一七モーセは彼らをつかわし、カナンの地を探らせようとして、これに
言った、「あなたがたはネゲブに行って、山に登り、一八その地の様子を見、
そこに住む民は、強いか弱いか、少ないか多いか、一九また彼らの住んで
いる地は、良いか悪いか。人々の住んでいる町々は、天幕か、城壁のあ
る町か、二〇その地は、肥えているか、やせているか、そこには、木がある
かないかを見なさい。あなたがたは、勇んで行って、その地のくだものを
取ってきなさい」。時は、ぶどうの熟し始める季節であった。
二一そこで、彼らはのぼっていって、その地をチンの荒野からハマテの

入口に近いレホブまで探った。二二彼らはネゲブにのぼって、ヘブロンま
で行った。そこにはアナクの子孫であるアヒマン、セシャイ、およびタル
マイがいた。ヘブロンはエジプトのゾアンよりも七年前に建てられたもの
である。二三ついに彼らはエシコルの谷に行って、そこで一ふさのぶどうの
枝を切り取り、これを棒をもって、ふたりでかつぎ、また、ざくろといち
じくをも取った。二四イスラエルの人々が、そこで切り取ったぶどうの一ふ
さにちなんで、その所はエシコルの谷と呼ばれた。

二五四十日の後、彼らはその地を探り終って帰ってきた。二六そして、パ
ランの荒野にあるカデシにいたモーセとアロン、およびイスラエルの人々
の全会衆のもとに行って、彼らと全会衆とに復命し、その地のくだもの
を彼らに見せた。二七彼らはモーセに言った、「わたしたちはあなたが、つ
かわした地へ行きました。そこはまことに乳と蜜の流れている地です。こ

れはそのくだものです。二八しかし、その地に住む民は強く、その町々は
堅固で非常に大きく、わたしたちはそこにアナクの子孫がいるのを見まし
た。二九またネゲブの地には、アマレクびとが住み、山地にはヘテびと、エ
ブスびと、アモリびとが住み、海べとヨルダンの岸べには、カナンびとが
住んでいます」。

三〇そのとき、カレブはモーセの前で、民をしずめて言った、「わたした
ちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことがで
きます」。三一しかし、彼とともにのぼって行った人々は言った、「わたした
ちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよ
りも強いからです」。三二そして彼らはその探った地のことを、イスラエル
の人々に悪く言いふらして言った、「わたしたちが行き巡って探った地は、
そこに住む者を滅ぼす地です。またその所でわたしたちが見た民はみな

背の高い人々です。三三わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナ
クの子孫ネピリムを見ました。わたしたちには自分が、いなごのように思
われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」。
第一四章一そこで、会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明か
した。二またイスラエルの人々はみなモーセとアロンにむかってつぶやき、
全会衆は彼らに言った、「ああ、わたしたちはエジプトの国で死んでいた
らよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。三なにゆえ、主
はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたち
の妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良い
ではないか」。
四彼らは互に言った、「わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプト
に帰ろう」。五そこで、モーセとアロンはイスラエルの人々の全会衆の前

でひれふした。六このとき、その地を探った者のうちのヌンの子ヨシュアと
エフンネの子カレブは、その衣服を裂き、七イスラエルの人々の全会衆に
言った、「わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。八もし、
主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわ
たしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。九ただ、
主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼ら
はわたしたちの食い物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主
がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」。一〇と
ころが会衆はみな石で彼らを撃ち殺そうとした。
　そのとき、主の栄光が、会見の幕屋からイスラエルのすべての人に現
れた。一一主はモーセに言われた、「この民はいつまでわたしを侮るのか。
わたしがもろもろのしるしを彼らのうちに行ったのに、彼らはいつまでわ

たしを信じないのか。一二わたしは疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし、あな
たを彼らよりも大いなる強い国民としよう」。
一三モーセは主に言った、「エジプトびとは、あなたが力をもって、この
民を彼らのうちから導き出されたことを聞いて、一四この地の住民に告
げるでしょう。彼らは、主なるあなたが、この民のうちにおられ、主なる
あなたが、まのあたり現れ、あなたの雲が、彼らの上にとどまり、昼は雲
の柱のうちに、夜は火の柱のうちにあって、彼らの前に行かれるのを聞
いたのです。一五いま、もし、あなたがこの民をひとり残らず殺されるなら
ば、あなたのことを聞いた国民は語って、一六『主は与えると誓った地に、
この民を導き入れることができなかったため、彼らを荒野で殺したのだ』
と言うでしょう。一七どうぞ、あなたが約束されたように、いま主の大い
なる力を現してください。一八あなたはかつて、『主は怒ることおそく、

いつくしみに富み、罪ととがをゆるす者、しかし、罰すべき者は、決して
ゆるさず、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼす者である』と言われま
した。一九どうぞ、あなたの大いなるいつくしみによって、エジプトからこ
のかた、今にいたるまで、この民をゆるされたように、この民の罪をおゆ
るしください」。
二〇主は言われた、「わたしはあなたの言葉のとおりにゆるそう。二一しか
し、わたしは生きている。また主の栄光が、全世界に満ちている。二二わ
たしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行ったしるしを見ながら、この
ように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞きしたがわなかった人々
はひとりも、二三わたしがかつて彼らの先祖たちに与えると誓った地を見
ないであろう。またわたしを侮った人々も、それを見ないであろう。二四
ただし、わたしのしもべカレブは違った心をもっていて、わたしに完全に

従ったので、わたしは彼が行ってきた地に彼を導き入れるであろう。彼
の子孫はそれを所有するにいたるであろう。
二五谷にはアマレクびととカ
ナンびとが住んでいるから、あなたがたは、あす、身をめぐらして紅海の
道を荒野へ進みなさい」。
二六主はモーセとアロンに言われた、
二七「わたしにむかってつぶやくこの
悪い会衆をいつまで忍ぶことができようか。わたしはイスラエルの人々
が、わたしにむかってつぶやくのを聞いた。
二八あなたは彼らに言いなさ
い、『主は言われる、「わたしは生きている。あなたがたが、わたしの耳に
語ったように、わたしはあなたがたにするであろう。
二九あなたがたは死体
となって、この荒野に倒れるであろう。あなたがたのうち、わたしにむかっ
てつぶやいた者、すなわち、すべて数えられた二十歳以上の者はみな倒れ
るであろう。
三〇エフンネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアのほかは、わた

しがかつて、あなたがたを住まわせようと、手をあげて誓った地に、はい
ることができないであろう。三一しかし、あなたがたが、えじきになるであ
ろうと言ったあなたがたの子供は、わたしが導いて、はいるであろう。彼
らはあなたがたが、いやしめた地を知るようになるであろう。三二しかしあ
なたがたは死体となってこの荒野に倒れるであろう。三三あなたがたの子た
ちは、あなたがたの死体が荒野に朽ち果てるまで四十年のあいだ、荒野で
羊飼となり、あなたがたの不信の罪を負うであろう。三四あなたがたは、
かの地を探った四十日の日数にしたがい、その一日を一年として、四十年
のあいだ、自分の罪を負い、わたしがあなたがたを遠ざかったことを知るで
あろう」。三五主なるわたしがこれを言う。わたしは必ずわたしに逆らっ
て集まったこの悪い会衆に、これをことごとく行うであろう。彼らはこ
の荒野に朽ち、ここで死ぬであろう』」。

三六こうして、モーセにつかわされ、かの地を探りに行き、帰ってきて、
その地を悪く言い、全会衆を、モーセにむかって、つぶやかせた人々、三
七すなわち、その地を悪く言いふらした人々は、疫病にかかって主の前
に死んだが、三八その地を探りに行った人々のうち、ヌンの子ヨシュアと、
エフンネの子カレブとは生き残った。
三九モーセが、これらのことを、イスラエルのすべての人々に告げたと
き、民は非常に悲しみ、四〇朝早く起きて山の頂きに登って言った、「わ
たしたちはここにいる。さあ、主が約束された所へ上って行こう。わた
したちは罪を犯したのだから」。四一モーセは言った、「あなたがたは、それ
をなし遂げることもできないのに、どうして、そのように主の命にそむく
のか。四二あなたがたは上って行ってはならない。主があなたがたのうち
におられないから、あなたがたは敵の前に、撃ち破られるであろう。四三

そこには、アマレクびととカナンびとがあなたがたの前にいるから、あ
なたがたは、つるぎに倒れるであろう。あなたがたがそむいて、主に従
わなかったゆえ、主はあなたがたと共におられないからである」。四四しか
し、彼らは、ほしいままに山の頂に登った。ただし、主の契約の箱と、
モーセとは、宿営の中から出なかった。四五そこで、その山に住んでいた
アマレクびとと、カナンびとが下ってきて、彼らを撃ち破り、ホルマまで
追ってきた。

第一五章 一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさい、
『あなたがたが、わたしの与えて住ませる地に行って、三主に火祭をささげ
る時、すなわち特別の誓願の供え物、あるいは自発の供え物、あるいは祝
のときの供え物として、牛または羊を燔祭または犠牲としてささげ、主
に香ばしいかおりとするとき、四 五その供え物を主にささげる者は、燔祭

または犠牲と共に、小羊一頭ごとに、麦粉一エパの十分の一に、油一ヒ
ンの四分の一を混ぜたものを、素祭としてささげ、ぶどう酒一ヒンの四分
の一を、灌祭としてささげなければならない。六もし、また雄羊を用いる
ときは、麦粉一エパの十分の二に、油一ヒンの三分の一を混ぜたものを、
素祭としてささげ、七また、ぶどう酒一ヒンの三分の一を、灌祭としてささ
げて、主に香ばしいかおりとしなければならない。八またあなたが特別の
誓願の供え物、あるいは酬恩祭を、主にささげる時、若い雄牛を、燔祭
または犠牲とするならば、九麦粉一エパの十分の三に、油一ヒンの二分の
一を混ぜたものを、素祭として、若い雄牛と共にささげ、一〇また、ぶどう
酒一ヒンの二分の一を、灌祭としてささげなければならない。これは火祭
であって、主に香ばしいかおりとするものである。
一一雄牛、あるいは雄羊、あるいは小羊、あるいは子やぎは、一頭ごと

に、このようにしなければならない。一二すなわち、あなたがたのささげる
数にてらし、その数にしたがって、一頭ごとに、このようにしなければな
らない。一三すべて国に生れた者が、火祭をささげて、主に香ばしいかお
りとするときは、このように、これらのことを行わなければならない。一
四またあなたがたのうちに寄留している他国人、またはあなたがたのうち
に、代々ながく住む者が、火祭をささげて、主に香ばしいかおりとしよう
とする時は、あなたがたがするように、その人もしなければならない。一五
会衆たる者は、あなたがたも、あなたがたのうちに寄留している他国人
も、同一の定めに従わなければならない。これは、あなたがたが代々なが
く守るべき定めである。他国の人も、主の前には、あなたがたと等しくな
ければならない。一六すなわち、あなたがたも、あなたがたのうちに寄留し
ている他国人も、同一の律法、同一のおきてに従わなければならない』」。
一七主はまたモーセに言われた、一八「イスラエルの人々に言いなさい、

『わたしが導いて行く地に、あなたがたがはいって、一九その地の食物を
食べるとき、あなたがたは、ささげ物を主にささげなければならない。二
〇すなわち、麦粉の初物で作った菓子を、ささげ物としなければならない。
これを、打ち場からのささげ物のように、ささげなければならない。二一あ
なたがたは代々その麦粉の初物で、主にささげ物をしなければならない。
二二あなたがたが、もしあやまって、主がモーセに告げられたこのすべて
の戒めを行わず、二三主がモーセによって戒めを与えられた日からこの
かた、代々にわたり、あなたがたに命じられたすべての事を行わないとき、
二四すなわち、会衆が知らずに、あやまって犯した時は、全会衆は若い
雄牛一頭を、燔祭としてささげ、主に香ばしいかおりとし、これに素祭と
灌祭とを定めのように加え、また雄やぎ一頭を、罪祭としてささげなけれ
ばならない。二五そして祭司は、イスラエルの人々の全会衆のために、罪

のあがないをしなければならない。そうすれば、彼らはゆるされるであろ
う。それは過失だからである。彼らはその過失のために、その供え物とし
て、火祭を主にささげ、また罪祭を主の前にささげなければならない。二
六そうすれば、イスラエルの人々の全会衆はゆるされ、また彼らのうち
に寄留している他国人も、ゆるされるであろう。民はみな過失を犯したか
らである。
二七もし人があやまって罪を犯す時は、一歳の雌やぎ一頭を罪祭として
ささげなければならない。二八そして祭司は、人があやまって罪を犯した
時、そのあやまって罪を犯した人のために、主の前に罪のあがないをして、
その罪をあがなわなければならない。そうすれば、彼はゆるされるであろ
う。二九イスラエルの人々のうちの、国に生れた者でも、そのうちに寄留し
ている他国人でも、あやまって罪を犯す者には、あなたがたは同一の律法

を用いなければならない。三〇しかし、国に生れた者でも、他国の人でも、
故意に罪を犯す者は主を汚すもので、その人は民のうちから断たれなけれ
ばならない。三一彼は主の言葉を侮り、その戒めを破ったのであるから、
必ず断たれ、その罪を負わなければならない』」。
三二イスラエルの人々が荒野におるとき、安息日にひとりの人が、たき
ぎを集めるのを見た。三三そのたきぎを集めるのを見た人々は、その人を
モーセとアロン、および全会衆のもとに連れてきたが、三四どう取り扱
うべきか、まだ示しを受けていなかったので、彼を閉じ込めておいた。三五
そのとき、主はモーセに言われた、「その人は必ず殺されなければならな
い。全会衆は宿営の外で、彼を石で撃ち殺さなければならない」。三六
そこで、全会衆は彼を宿営の外に連れ出し、彼を石で撃ち殺し、主が
モーセに命じられたようにした。

三七主はまたモーセに言われた、三八「イスラエルの人々に命じて、代々
その衣服のすその四すみにふさをつけ、そのふさを青ひもで、すその四す
みにつけさせなさい。三九あなたがたが、そのふさを見て、主のもろもろの
戒めを思い起して、それを行い、あなたがたが自分の心と、目の欲に
従って、みだらな行いをしないためである。四〇こうして、あなたがた
は、わたしのもろもろの戒めを思い起して、それを行い、あなたがたの
神に聖なる者とならなければならない。四一わたしはあなたがたの神、主
であって、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの国から
導き出した者である。わたしはあなたがたの神、主である」。

第一六章一ここに、レビの子コハテの子なるイヅハルの子コラと、ルベ
ンの子なるエリアブの子ダタンおよびアビラムと、ルベンの子なるペレテ
の子オンとが相結び、二イスラエルの人々のうち、会衆のうちから選ば

れて、つかさとなった名のある人々二百五十人と共に立って、モーセに逆
らった。三彼らは集まって、モーセとアロンとに逆らって言った、「あなた
がたは、分を越えています。全会衆は、ことごとく聖なるものであって、
主がそのうちにおられるのに、どうしてあなたがたは、主の会衆の上に
立つのですか」。四モーセはこれを聞いてひれ伏した。五やがて彼はコラと、
そのすべての仲間とに言った、「あす、主は、主につくものはだれ、聖なる
者はだれであるかを示して、その人をみもとに近づけられるであろう。す
なわち、その選んだ人を、みもとに近づけられるであろう。六それで、次の
ようにしなさい。コラとそのすべての仲間とは、火ざらを取り、七その中に
火を入れ、それに薫香を盛って、あす、主の前に出なさい。その時、主が
選ばれる人は聖なる者である。レビの子たちよ、あなたがたこそ、分を越
えている」。八モーセはまたコラに言った、「レビの子たちよ、聞きなさい。

九イスラエルの神はあなたがたをイスラエルの会衆のうちから分かち、主
に近づかせて、主の幕屋の務をさせ、かつ会衆の前に立って仕えさせら
れる。これはあなたがたにとって、小さいことであろうか。一〇神はあな
たとあなたの兄弟なるレビの子たちをみな近づけられた。あなたがたは
なお、その上に祭司となることを求めるのか。一一あなたとあなたの仲間
は、みなそのために集まって主に敵している。あなたがたはアロンをなん
と思って、彼に対してつぶやくのか」。
一二モーセは人をやって、エリアブの子ダタンとアビラムとを呼ばせた
が、彼らは言った、「わたしたちは参りません。一三あなたは乳と蜜の流れ
る地から、わたしたちを導き出して、荒野でわたしたちを殺そうとしてい
る。これは小さいことでしょうか。その上、あなたはわたしたちに君臨し
ようとしている。一四かつまた、あなたはわたしたちを、乳と蜜の流れる

地に導いて行かず、畑と、ぶどう畑とを嗣業として与えもしない。こ
れらの人々の目をくらまそうとするのですか。わたしたちは参りません」。
一五モーセは大いに怒って、主に言った、「彼らの供え物を顧みないで
ください。わたしは彼らから、ろば一頭をも取ったことなく、また彼らのひ
とりをも害したことはありません」。一六そしてモーセはコラに言った、「あ
なたとあなたの仲間はみなアロンと一緒に、あす、主の前に出なさい。一
七あなたがたは、おのおの火ざらを取って、それに薫香を盛り、おのおのそ
の火ざらを主の前に携えて行きなさい。その火ざらは会わせて二百五十。
あなたとアロンも、おのおの火ざらを携えて行きなさい」。一八彼らは、お
のおの火ざらを取り、火をその中に入れ、それに薫香を盛り、モーセとア
ロンも共に、会見の幕屋の入口に立った。一九そのとき、コラは会衆を、
ことごとく会見の幕屋の入口に集めて、彼らふたりに逆らわせようとした

が、主の栄光は全会衆に現れた。
二〇主はモーセとアロンに言われた、二一「あなたがたはこの会衆を離
れなさい。わたしはただちに彼らを滅ぼすであろう」。二二彼らふたりは、
ひれ伏して言った、「神よ、すべての肉なる者の命の神よ、このひとりの
人が、罪を犯したからといって、あなたは全会衆に対して怒られるので
すか」。二三主はモーセに言われた、二四「あなたは会衆に告げて、コラと
ダタンとアビラムのすまいの周囲を去れと言いなさい」。
二五モーセは立ってダタンとアビラムのもとに行ったが、イスラエルの
長老たちも、彼に従って行った。二六モーセは会衆に言った、「どうぞ、
あなたがたはこれらの悪い人々の天幕を離れてください。彼らのものには
何にも触れてはならない。彼らのもろもろの罪によって、あなたがたも滅
ぼされてはいけないから」。二七そこで人々はコラとダタンとアビラムのす

まいの周囲を離れ去った。そして、ダタンとアビラムとは、妻、子、およ
び幼児と一緒に出て、天幕の入口に立った。二八モーセは言った、「あなた
がたは主がこれらのすべての事をさせるために、わたしをつかわされたこ
と、またわたしが、これを自分の心にしたがって行うものでないことを、
次のことによって知るであろう。二九すなわち、もしこれらの人々が、普通
の死に方で死に、普通の運命に会うのであれば、主がわたしをつかわされ
たのではない。三〇しかし、主が新しい事をされ、地が口を開いて、これ
らの人々と、それに属する者とを、ことごとくのみつくして、生きながら
陰府に下らせられるならば、あなたがたはこれらの人々が、主を侮った
のであることを知らなければならない」。
三一モーセが、これらのすべての言葉を述べ終ったとき、彼らの下の土地
が裂け、三二地は口を開いて、彼らとその家族、ならびにコラに属するすべ

ての人々と、すべての所有物をのみつくした。
三三すなわち、彼らと、彼らに属するものは、皆生きながら陰府に下り、地はその上を閉じふさいで、彼らは会衆のうちから、断ち滅ぼされた。
三四この時、その周囲にいたイスラエルの人々は、みな彼らの叫びを聞いて逃げ去り、「恐らく地はわたしたちをも、のみつくすであろう」と言った。
三五また主のもとから火が出て、薫香を供える二百五十人をも焼きつくした。

三六主はモーセに言われた、
三七「あなたは祭司アロンの子エレアザルに告げて、その燃える火の中から、かの火ざらを取り出させ、その中の火を遠く広くまき散らさせなさい。それらの火ざらは聖となったから、
三八罪を犯して命を失った人々の、これらの火ざらを、広い延べ板として、祭壇のおおいとしなさい。これは主の前にささげられて、聖となったからである。こうして、これはイスラエルの人々に、しるしとなるであろう」。
三九

そこで祭司エレアザルは、かの焼き殺された人々が供えた青銅の火ざらを
取り、これを広く打ち延ばして、祭壇のおおいとし、四〇これをイスラエル
の人々の記念の物とした。これはアロンの子孫でないほかの人が、主の前
に近づいて、薫香をたくことのないようにするため、またその人がコラ、お
よびその仲間のようにならないためである。すなわち、主がモーセによっ
てエレアザルに言われたとおりである。
四一その翌日、イスラエルの人々の会衆は、みなモーセとアロンとにつ
ぶやいて言った、「あなたがたは主の民を殺しました」。四二会衆が集まっ
て、モーセとアロンとに逆らったとき、会見の幕屋を望み見ると、雲がこれ
をおおい、主の栄光が現れていた。四三モーセとアロンとが、会見の幕屋
の前に行くと、四四主はモーセに言われた、四五「あなたがたはこの会衆
を離れなさい。わたしはただちに彼らを滅ぼそう」。そこで彼らふたりは、

ひれ伏した。四六モーセはアロンに言った、「あなたは火ざらを取って、それ
に祭壇から取った火を入れ、その上に薫香を盛り、急いでそれを会衆の
もとに持って行って、彼らのために罪のあがないをしなさい。主が怒りを
発せられ、疫病がすでに始まったからです」。四七そこで、アロンはモーセ
の言ったように、それを取って会衆の中に走って行ったが、疫病はすで
に民のうちに始まっていたので、薫香をたいて、民のために罪のあがない
をし、四八すでに死んだ者と、なお生きている者との間に立つと、疫病
はやんだ。四九コラの事によって死んだ者のほかに、この疫病によって死
んだ者は一万四千七百人であった。五〇アロンは会見の幕屋の入口にいる
モーセのもとに帰った。こうして疫病はやんだ。

第一七章一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に告げて、彼ら
のうちから、おのおのの父祖の家にしたがって、つえ一本ずつを取りなさ

い。すなわち、そのすべてのつかさたちから、父祖の家にしたがって、つえ
十二本を取り、その人々の名を、おのおのそのつえに書きしるし、三レビ
のつえにはアロンの名を書きしるしなさい。父祖の家のかしらは、おのお
ののつえ一本を出すのだからである。四そして、これらのつえを、わたしが
あなたがたに会う会見の幕屋の中の、あかしの箱の前に置きなさい。五わ
たしの選んだ人のつえには、芽が出るであろう。こうして、わたしはイス
ラエルの人々が、あなたがたにむかって、つぶやくのをやめさせるであろ
う」。六モーセが、このようにイスラエルの人々に語ったので、つかさたち
はみな、その父祖の家にしたがって、おのおの、つえ一本ずつを彼に渡し
た。そのつえは合わせて十二本。アロンのつえも、そのつえのうちにあっ
た。七モーセは、それらのつえを、あかしの幕屋の中の、主の前に置いた。
八その翌日、モーセが、あかしの幕屋にはいって見ると、レビの家のた

めに出したアロンのつえは芽をふき、つぼみを出し、花が咲いて、あめん
どうの実を結んでいた。九モーセがそれらのつえを、ことごとく主の前か
ら、イスラエルのすべての人の所に持ち出したので、彼らは見て、おのお
の自分のつえを取った。一〇主はモーセに言われた、「アロンのつえを、あ
かしの箱の前に持ち帰り、そこに保存して、そむく者どものために、しる
しとしなさい。こうして、彼らのわたしに対するつぶやきをやめさせ、彼
らの死ぬのをまぬかれさせなければならない」。一一モーセはそのようにし
て、主が彼に命じられたとおりに行った。
一二イスラエルの人々は、モーセに言った、「ああ、わたしたちは死ぬ。
破滅です、全滅です。一三主の幕屋に近づく者が、みな死ぬのであれば、わ
たしたちは死に絶えるではありませんか」。
第一八章一そこで、主はアロンに言われた、「あなたとあなたの子たち、お

よびあなたの父祖の家の者は、聖所に関する罪を負わなければならない。
また、あなたとあなたの子たちとは、祭司職に関する罪を負わなければな
らない。二あなたはまた、あなたの兄弟なるレビの部族の者、すなわち、
あなたの父祖の部族の者どもを、あなたに近づかせ、あなたに連なり、あ
なたに仕えさせなければならない。ただし、あなたとあなたの子たちとは、
共にあかしの幕屋の前で仕えなければならない。三彼らは、あなたの務
と、すべての幕屋の務とを守らなければならない。ただし、聖所の器と、
祭壇とに近づいてはならない。彼らもあなたがたも、死ぬことのないため
である。四彼らはあなたに連なって、会見の幕屋の務を守り、幕屋のも
ろもろの働きをしなければならない。ほかの者は、あなたがたに近づい
てはならない。五このように、あなたがたは、聖所の務と、祭壇の務と
を守らなければならない。そうすれば、主の激しい怒りは、かさねてイス

ラエルの人々に臨まないであろう。六わたしはあなたがたの兄弟たるレ
ビびとを、イスラエルの人々のうちから取り、主のために、これを賜物と
して、あなたがたに与え、会見の幕屋の働きをさせる。七あなたとあなた
の子たちは共に祭司職を守って、祭壇と、垂幕のうちのすべての事を執
り行い、共に勤めなければならない。わたしは祭司の職務を賜物として、
あなたがたに与える。ほかの人で近づく者は殺されるであろう」。
八主はまたアロンに言われた、「わたしはイスラエルの人々の、すべての
聖なる供え物で、わたしにささげる物の一部をあなたに与える。すなわち、
わたしはこれをあなたと、あなたの子たちに、その分け前として与え、永久
に受くべき分とする。九いと聖なる供え物のうち、火で焼かずに、あなた
に帰すべきものは次のとおりである。すなわち、わたしにささげるすべて
の供え物、素祭、罪祭、愆祭はみな、いと聖なる物であって、あなたとあ

なたの子たちに帰するであろう。一〇いと聖なる所で、それを食べなけれ
ばならない。男子はみな、それを食べることができる。それはあなたに帰
すべき聖なる物である。一一またあなたに帰すべきものはこれである。す
なわち、イスラエルの人々のささげる供え物のうち、すべて揺祭とするも
のであって、これをあなたとあなたのむすこ娘に与えて、永久に受くべ
き分とする。あなたの家の者のうち、清い者はみな、これを食べることが
できる。一二すべて油の最もよい物、およびすべて新しいぶどう酒と、
穀物の最も良い物など、人々が主にささげる初穂をあなたに与える。一
三国のすべての産物の初物で、人々が主のもとに携えてきたものは、あ
なたに帰するであろう。あなたの家の者のうち、清い者はみな、これを食
べることができる。一四イスラエルのうちの奉納物はみな、あなたに帰す
る。一五すべて肉なる者のういごであって、主にささげられる者はみな、人

でも獣でも、あなたに帰する。ただし、人のういごは必ずあがなわなけ
ればならない。また汚れた獣のういごも、あがなわなければならない。一
六人のういごは生後一か月で、あがなわなければならない。そのあがない
金はあなたの値積りにより、聖所のシケルにしたがって、銀五シケルでな
ければならない。一シケルは二十ゲラである。一七しかし、牛のういご、羊
のういご、やぎのういごは、あがなってはならない。これらは聖なるもので
ある。その血を祭壇に注ぎかけ、その脂肪を焼いて火祭とし、香ばしいか
おりとして、主にささげなければならない。一八その肉はあなたに帰する。
それは揺祭の胸や右のももと同じく、あなたに帰する。一九イスラエルの
人々が、主にささげる聖なる供え物はみな、あなたとあなたのむすこ娘
とに与えて、永久に受ける分とする。これは主の前にあって、あなたと
あなたの子孫とに対し、永遠に変らぬ塩の契約である」。二〇主はまたアロ

ンに言われた、「あなたはイスラエルの人々の地のうちに、嗣業をもって
はならない。また彼らのうちに、何の分をも持ってはならない。彼らのう
ちにあって、わたしがあなたの分であり、あなたの嗣業である。
二一わたしはレビの子孫にはイスラエルにおいて、すべて十分の一を嗣業
として与え、その働き、すなわち、会見の幕屋の働きに報いる。二二イ
スラエルの人々は、かさねて会見の幕屋に近づいてはならない。罪を得て
死なないためである。二三レビびとだけが会見の幕屋の働きをしなければ
ならない。彼らがその罪を負うであろう。彼らがイスラエルの人々のうち
に、嗣業の地を持たないことをもって、あなたがたの代々ながく守るべき
定めとしなければならない。二四わたしはイスラエルの人々が供え物とし
て主にささげる十分の一を、レビびとに嗣業として与えた。それで『彼
らはイスラエルの人々のうちに、嗣業の地を持ってはならない』と、わた

しは彼らに言ったのである」。
二五主はモーセに言われた、二六「レビびとに言いなさい、『わたしがイス
ラエルの人々から取って、嗣業として与える十分の一を受ける時、あな
たがたはその十分の一の十分の一を、主にささげなければならない。二七あ
なたがたのささげ物は、打ち場からの穀物や、酒ぶねからのぶどう酒と同
じように見なされるであろう。二八そのようにあなたがたもまた、イスラエ
ルの人々から受けるすべての十分の一の物のうちから、主に供え物をささ
げ、主にささげたその供え物を、祭司アロンに与えなければならない。二九
あなたがたの受けるすべての贈物のうちから、その良いところ、すなわち、
聖なる部分を取って、ことごとく供え物として、主にささげなければなら
ない』。三〇あなたはまた彼らに言いなさい、『あなたがたが、そのうちから
良いところを取ってささげる時、その残りの部分はレビびとには、打ち場

の産物や、酒ぶねの産物と同じように見なされるであろう。三一あなたが
たと、あなたがたの家族とは、どこでそれを食べてもよい。これは会見の
幕屋であなたがたがする働きの報酬である。三二あなたがたが、その良
いところをささげるときは、それによって、あなたがたは罪を負わないで
あろう。あなたがたはイスラエルの人々の聖なる供え物を汚してはなら
ない。死をまぬかれるためである』」。

第一九章一主はモーセとアロンに言われた、二「主の命じられた律法の定
めは次のとおりである。すなわち『イスラエルの人々に告げて、完全で、傷
がなく、まだくびきを負ったことのない赤い雌牛を、あなたのもとに引いて
こさせ、三これを祭司エレアザルにわたして、宿営の外にひき出させ、彼
の前でこれをほふらせなければならない。四そして祭司エレアザルは、指を
もってその血を取り、会見の幕屋の表に向かって、その血を七たびふりか

けなければならない。五ついでその雌牛を自分の目の前で焼かせ、その皮と
肉と血とは、その汚物と共に焼かなければならない。六そして祭司は香柏
の木と、ヒソプと、緋の糸とを取って雌牛の燃えているなかに投げ入れな
ければならない。七そして祭司は衣服を洗い、水に身をすすいで後、宿営
に、はいることができる。ただし祭司は夕まで汚れる。八またその雌牛を
焼いた者も水で衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼も夕ま
で汚れる。九それから身の清い者がひとり、その雌牛の灰を集め、宿営
の外の清い所にたくわえておかなければならない。これはイスラエルの
人々の会衆のため、汚れを清める水をつくるために備えるものであって、
罪を清めるものである。一〇その雌牛の灰を集めた者は衣服を洗わなけれ
ばならない。その人は夕まで汚れる。これはイスラエルの人々と、そのう
ちに宿っている他国人との、永久に守るべき定めとしなければならない。

一一すべて人の死体に触れる者は、七日のあいだ汚れる。一二その人は三
日目と七日目とに、この灰の水をもって身を清めなければならない。そう
すれば清くなるであろう。しかし、もし三日目と七日目とに、身を清めな
いならば、清くならないであろう。一三すべて死人の死体に触れて、身を清
めない者は主の幕屋を汚す者で、その人はイスラエルから断たれなければ
ならない。汚れを清める水がその身に注ぎかけられないゆえ、その人は清
くならず、その汚れは、なお、その身にあるからである。
一四人が天幕の中で死んだ時に用いる律法は次のとおりである。すなわ
ち、すべてその天幕にはいった者、およびすべてその天幕にいた者は七日
のあいだ汚れる。一五ふたで上をおおわない器はみな汚れる。一六つるぎ
で殺された者、または死んだ者、または人の骨、または墓などに、野外で
触れる者は皆、七日のあいだ汚れる。一七汚れた者があった時には、罪を

清める焼いた雌牛の灰を取って器に入れ、流れの水をこれに加え、一八身
の清い者がひとりヒソプを取って、その水に浸し、これをその天幕と、す
べての器と、そこにいた人々と、骨、あるいは殺された者、あるいは死
んだ者、あるいは墓などに触れた者とにふりかけなければならない。一九
すなわちその身の清い人は三日目と七日目とにその汚れたものに、それを
ふりかけなければならない。そして七日目にその人は身を清め、衣服を洗
い、水に身をすすがなければならない。そうすれば夕になって清くなるで
あろう。
二〇しかし、汚れて身を清めない人は主の聖所を汚す者で、その人は会衆
のうちから断たれなければならない。汚れを清める水がその身に注ぎかけ
られないゆえ、その人は汚れているからである。二一これは彼らの永久
に守るべき定めとしなければならない。すなわち汚れを清める水をふりか

けた者は衣服を洗わなければならない。また汚れを清める水に触れた者も
夕まで汚れるであろう。二二すべて汚れた人の触れる物は汚れる。またそ
れに触れる人も夕まで汚れるであろう』。
第二〇章一イスラエルの人々の全会衆は正月になってチンの荒野には
いった。そして民はカデシにとどまったが、ミリアムがそこで死んだので、
彼女をそこに葬った。
二そのころ会衆は水が得られなかったため、相集まってモーセとアロ
ンに迫った。三すなわち民はモーセと争って言った、「さきにわれわれの
兄弟たちが主の前に死んだ時、われわれも死んでいたらよかったものを。
四なぜ、あなたがたは主の会衆をこの荒野に導いて、われわれと、われわ
れの家畜とを、ここで死なせようとするのですか。五どうしてあなたがたは
われわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。

ここには種をまく所もなく、いちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもな
く、また飲む水もありません」。六そこでモーセとアロンは会衆の前を去
り、会見の幕屋の入口へ行ってひれ伏した。すると主の栄光が彼らに現
れ、七主はモーセに言われた、八「あなたは、つえをとり、あなたの兄弟ア
ロンと共に会衆を集め、その目の前で岩に命じて水を出させなさい。こ
うしてあなたは彼らのために岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ま
せなさい」。九モーセは命じられたように主の前にあるつえを取った。一〇
モーセはアロンと共に会衆を岩の前に集めて彼らに言った、「そむく人た
ちよ、聞きなさい。われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さな
ければならないのであろうか」。一一モーセは手をあげ、つえで岩を二度打
つと、水がたくさんわき出たので、会衆とその家畜はともに飲んだ。一二
そのとき主はモーセとアロンに言われた、「あなたがたはわたしを信じな

いで、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを現さなかったから、
この会衆をわたしが彼らに与えた地に導き入れることができないであろ
う」。一三これがメリバの水であって、イスラエルの人々はここで主と争っ
たが、主は自分の聖なることを彼らのうちに現された。
一四さて、モーセはカデシからエドムの王に使者をつかわして言った、「あ
なたの兄弟、イスラエルはこう申します、『あなたはわたしたちが遭遇し
たすべての患難をご存じです。一五わたしたちの先祖はエジプトに下って
行って、わたしたちは年久しくエジプトに住んでいましたが、エジプトびと
がわたしたちと、わたしたちの先祖を悩ましたので、一六わたしたちが主に
呼ばわったとき、主はわたしたちの声を聞き、ひとりの天の使をつかわし
て、わたしたちをエジプトから導き出されました。わたしたちは今あなた
の領地の端にあるカデシの町におります。一七どうぞ、わたしたちにあな

たの国を通らせてください。わたしたちは畑もぶどう畑も通りません。
また井戸の水も飲みません。ただ王の大路を通り、あなたの領地を過ぎる
までは右にも左にも曲りません』」。
一八しかし、エドムはモーセに言った、
「あなたはわたしの領地をとおってはなりません。さもないと、わたしはつ
るぎをもって出て、あなたに立ちむかうでしょう」。
一九イスラエルの人々
はエドムに言った、「わたしたちは大路を通ります。もしわたしたちとわた
したちの家畜とが、あなたの水を飲むことがあれば、その価を払います。
わたしは徒歩で通るだけですから何事もないでしょう」。
二〇しかし、エド
ムは「あなたは通ることはなりません」と言って、多くの民と強い軍勢と
を率い、出て、これに立ちむかってきた。
二一このようにエドムはイスラエ
ルに、その領地を通ることを拒んだので、イスラエルはエドムからほかに
向かった。

二二こうしてイスラエルの人々の全会衆はカデシから進んでホル山に
着いた。二三主はエドムの国境に近いホル山で、モーセとアロンに言われ
た、二四「アロンはその民に連ならなければならない。彼はわたしがイスラ
エルの人々に与えた地に、はいることができない。これはメリバの水で、
あなたがたがわたしの言葉にそむいたからである。二五あなたはアロンとそ
の子エレアザルを連れてホル山に登り、二六アロンに衣服を脱がせて、それ
をその子エレアザルに着せなさい。アロンはそのところで死んで、その民
に連なるであろう」。二七モーセは主が命じられたとおりにし、連れだって
全会衆の目の前でホル山に登った。二八そしてモーセはアロンに衣服を脱
がせ、それをその子エレアザルに着せた。アロンはその山の頂で死んだ。
そしてモーセとエレアザルは山から下ったが、二九全会衆がアロンの死ん
だのを見たとき、イスラエルの全家は三十日の間アロンのために泣いた。

第二一章一時にネゲブに住んでいたカナンびとアラデの王は、イスラエル
がアタリムの道をとおって来ると聞いて、イスラエルを攻撃し、そのうち
の数人を捕虜にした。二そこでイスラエルは主に誓いを立てて言った、「も
し、あなたがこの民をわたしの手にわたしてくださるならば、わたしはその
町々をことごとく滅ぼしましょう」。三主はイスラエルの言葉を聞きいれ、
カナンびとをわたされたので、イスラエルはそのカナンびとと、その町々
とをことごとく滅ぼした。それでその所の名はホルマと呼ばれた。
四民はホル山から進み、紅海の道をとおって、エドムの地を回ろうとし
たが、民はその道に堪えがたくなった。五民は神とモーセとにむかい、つ
ぶやいて言った、「あなたがたはなぜわたしたちをエジプトから導き上っ
て、荒野で死なせようとするのですか。ここには食物もなく、水もありま
せん。わたしたちはこの粗悪な食物はいやになりました」。六そこで主は、

火のへびを民のうちに送られた。へびは民をかんだので、イスラエルの民
のうち、多くのものが死んだ。七民はモーセのもとに行って言った、「わた
したちは主にむかい、またあなたにむかい、つぶやいて罪を犯しました。ど
うぞへびをわたしたちから取り去られるように主に祈ってください」。モー
セは民のために祈った。八そこで主はモーセに言われた、「火のへびを造っ
て、それをさおの上に掛けなさい。すべてのかまれた者が仰いで、それを
見るならば生きるであろう」。九モーセは青銅で一つのへびを造り、それを
さおの上に掛けて置いた。すべてへびにかまれた者はその青銅のへびを仰
いで見て生きた。一〇イスラエルの人々は道を進んでオボテに宿営した。
一一またオボテから進んで東の方、モアブの前にある荒野において、イエ
アバリムに宿営した。一二またそこから進んでゼレデの谷に宿営し、一
三さらにそこから進んでアルノン川のかなたに宿営した。アルノン川は

アモリびとの境から延び広がる荒野を流れるもので、モアブとアモリびと
との間にあって、モアブの境をなしていた。
一四それゆえに、「主の戦
いの書」にこう言われている。

「スパのワヘブ、
アルノンの谷々、
一五谷々の斜面、
アルの町まで傾き、
モアブの境に寄りかかる」。

一六彼らはそこからベエルへ進んで行った。これは主がモーセにむかっ
て、「民を集めよ。わたしはかれらに水を与えるであろう」と言われた井戸
である。
一七その時イスラエルはこの歌をうたった。

「井戸の水よ、わきあがれ、

人々よ、この井戸のために歌え、
一八笏とつえとをもって
つかさたちがこの井戸を掘り、
民のおさたちがこれを掘った」。
そして彼らは荒野からマッタナに進み、
一九マッタナからナハリエルに、ナハリエルからバモテに、
二〇バモテからモアブの野にある谷に行き、荒野を見おろすピスガの頂に着いた。
二一ここでイスラエルはアモリびとの王シホンに使者をつかわして言わせた、
二二「わたしにあなたの国を通らせてください。わたしたちは畑にもぶどう畑にも、はいりません。また井戸の水も飲みません。わたしたちはあなたの領地を通り過ぎるまで、ただ王の大路を通ります」。
二三しかし、シホンはイスラエルに自分の領地を通ることを許さなかった。そしてシホ

ンは民をことごとく集め、荒野に出て、イスラエルを攻めようとし、ヤハ
ズにきてイスラエルと戦った。二四イスラエルは、やいばで彼を撃ちやぶ
り、アルノンからヤボクまで彼の地を占領し、アンモンびとの境に及ん
だ。ヤゼルはアンモンびとの境だからである。二五こうしてイスラエルは
これらの町々をことごとく取った。そしてイスラエルはアモリびとのすべ
ての町々に住み、ヘシボンとそれに附属するすべての村々にいた。二六ヘ
シボンはアモリびとの王シホンの都であって、シホンはモアブの以前の王
と戦って、彼の地をアルノンまで、ことごとくその手から奪い取ったので
ある。二七それゆえに歌にうたわれている。

「人々よ、ヘシボンにきたれ、
シホンの町を築き建てよ。
二八ヘシボンから火が燃え出し、

シホンの都から炎が出て、
モアブのアルを焼き尽くし、
アルノンの高地の君たちを滅ぼしたからだ。
二九モアブよ、お前はわざわいなるかな、
ケモシの民よ、お前は滅ぼされるであろう。
彼は、むすこらを逃げ去らせ、
娘らをアモリびとの王シホンの捕虜とならせた。
三〇彼らの子らは滅び去った、
ヘシボンからデボンまで。
われわれは荒した、火はついてメデバに及んだ」。
三一こうしてイスラエルはアモリびとの地に住んだが、三二モーセはまた
人をつかわしてヤゼルを探らせ、ついにその村々を取って、そこにいたア

モリびとを追い出し、三三転じてバシャンの道に上って行ったが、バシャン
の王オグは、その民をことごとく率い、エデレイで戦おうとして出迎え
た。三四主はモーセに言われた、「彼を恐れてはならない。わたしは彼とそ
の民とその地とを、ことごとくあなたの手にわたす。あなたはヘシボンに
住んでいたアモリびとの王シホンにしたように彼にもするであろう」。三五
そこで彼とその子とすべての民とを、ひとり残らず撃ち殺して、その地を
占領した。

第二二章一さて、イスラエルの人々はまた道を進んで、エリコに近いヨ
ルダンのかなたのモアブの平野に宿営した。二チッポルの子バラクはイス
ラエルがアモリびとにしたすべての事を見たので、三モアブは大いにイス
ラエルの民を恐れた。その数が多かったためである。モアブはイスラエル
の人々をひじょうに恐れたので、四ミデアンの長老たちに言った、「この

群衆は牛が野の草をなめつくすように、われわれの周囲の物をみな、な
めつくそうとしている」。チッポルの子バラクはこの時モアブの王であっ
た。五彼はアンモンびとの国のユフラテ川のほとりにあるペトルに使者を
つかわし、ベオルの子バラムを招こうとして言わせた、「エジプトから出て
きた民があり、地のおもてをおおってわたしの前にいます。六どうぞ今き
てわたしのためにこの民をのろってください。彼らはわたしよりも強いの
です。そうしてくだされば、われわれは彼らを撃って、この国から追い払
うことができるかもしれません。あなたが祝福する者は祝福され、あな
たがのろう者はのろわれることをわたしは知っています」。
七モアブの長老たちとミデアンの長老たちは占いの礼物を手にして
出発し、バラムのもとへ行って、バラクの言葉を告げた。八バラムは彼ら
に言った、「今夜ここに泊まりなさい。主がわたしに告げられるとおりに、

あなたがたに返答しましょう」。それでモアブのつかさたちはバラムのもと
にとどまった。九ときに神はバラムに臨んで言われた、「あなたのところに
いるこの人々はだれですか」。一〇バラムは神に言った、「モアブの王チッ
ポルの子バラクが、わたしに人をよこして言いました。一一『エジプトから
出てきた民があり、地のおもてをおおっています。どうぞ今きてわたしの
ために彼らをのろってください。そうすればわたしは戦って、彼らを追い
払うことができるかもしれません』」。一二神はバラムに言われた、「あなた
は彼らと一緒に行ってはならない。またその民をのろってはならない。彼
らは祝福された者だからである」。一三明くる朝起きて、バラムはバラク
のつかさたちに言った、「あなたがたは国にお帰りなさい。主はわたしがあ
なたがたと一緒に行くことを、お許しになりません」。一四モアブのつかさ
たちは立ってバラクのもとに行って言った、「バラムはわたしたちと一緒に

来ることを承知しません」。
一五バラクはまた前の者よりも身分の高いつかさたちを前よりも多くつ
かわした。一六彼らはバラムのところへ行って言った、「チッポルの子バラ
クはこう申します、『どんな妨げをも顧みず、どうぞわたしのところへお
いでください。一七わたしはあなたを大いに優遇します。そしてあなたが
わたしに言われる事はなんでもいたします。どうぞきてわたしのためにこ
の民をのろってください』」。一八しかし、バラムはバラクの家来たちに答え
た、「たといバラクがその家に満ちるほどの金銀をわたしに与えようとも、
事の大小を問わず、わたしの神、主の言葉を越えては何もすることがで
きません。一九それで、どうぞ、あなたがたも今夜ここにとどまって、主が
この上、わたしになんと仰せられるかを確かめさせてください」。二〇夜に
なり、神はバラムに臨んで言われた、「この人々はあなたを招きにきたの

だから、立ってこの人々と一緒に行きなさい。ただしわたしが告げること
だけを行わなければならない」。
二一明くる朝起きてバラムは、ろばにくらをおき、モアブのつかさたちと
一緒に行った。二二しかるに神は彼が行ったために怒りを発せられ、主の
使は彼を妨げようとして、道に立ちふさがっていた。バラムは、ろばに
乗り、そのしもべふたりも彼と共にいたが、二三ろばは主の使が、手に抜き
身のつるぎをもって、道に立ちふさがっているのを見、道をそれて畑には
いったので、バラムは、ろばを打って道に返そうとした。二四しかるに主の
使はまたぶどう畑の間の狭い道に立ちふさがっていた。道の両側に
は石がきがあった。二五ろばは主の使を見て、石がきにすり寄り、バラム
の足を石がきに押しつけたので、バラムは、また、ろばを打った。二六主の
使はまた先に進んで、狭い所に立ちふさがっていた。そこは右にも左

にも、曲る道がなかったので、二七ろばは主の使を見てバラムの下に伏し
た。そこでバラムは怒りを発し、つえでろばを打った。二八すると、主が、
ろばの口を開かれたので、ろばはバラムにむかって言った、「わたしがあな
たに何をしたというのですか。あなたは三度もわたしを打ったのです」。二
九バラムは、ろばに言った、「お前がわたしを侮ったからだ。わたしの手
につるぎがあれば、いま、お前を殺してしまうのだが」。三〇ろばはまたバ
ラムに言った、「わたしはあなたが、きょうまで長いあいだ乗られたろばで
はありませんか。わたしはいつでも、あなたにこのようにしたでしょうか」。
バラムは言った、「いや、しなかった」。

三一このとき主がバラムの目を開かれたので、彼は主の使が手に抜き身
のつるぎをもって、道に立ちふさがっているのを見て、頭を垂れてひれ伏し
た。三二主の使は彼に言った、「なぜあなたは三度もろばを打ったのか。あ

なたが誤って道を行くので、わたしはあなたを妨げようとして出てきた
のだ。三三ろばはわたしを見て三度も身を巡らしてわたしを避けた。もし、
ろばが身を巡らしてわたしを避けなかったなら、わたしはきっと今あなた
を殺して、ろばを生かしておいたであろう」。三四バラムは主の使に言っ
た、「わたしは罪を犯しました。あなたがわたしをとどめようとして、道に
立ちふさがっておられるのを、わたしは知りませんでした。それで今、も
し、お気に召さないのであれば、わたしは帰りましょう」。三五主の使は
バラムに言った、「この人々と一緒に行きなさい。ただし、わたしが告げる
ことのみを述べなければならない」。こうしてバラムはバラクのつかさたち
と一緒に行った。

三六さて、バラクはバラムがきたと聞いて、国境のアルノン川のほとり、
国境の一端にあるモアブの町まで出て行って迎えた。三七そしてバラク

はバラムに言った、「わたしは人をつかわしてあなたを招いたではありま
せんか。あなたはなぜわたしのところへきませんでしたか。わたしは実際
あなたを優遇することができないでしょうか」。三八バラムはバラクに言っ
た、「ごらんなさい。わたしはあなたのところにきています。しかし、今、
何事かをみずから言うことができましょうか。わたしはただ神がわたしの
口に授けられることを述べなければなりません」。三九こうしてバラムはバ
ラクと一緒に行き、キリアテ・ホゾテにきたとき、四〇バラクは牛と羊と
をほふって、バラムおよび彼と共にいたバラムを連れてきたつかさたちに
贈った。

四一明くる朝バラクはバラムを伴ってバモテバアルにのぼり、そこから
イスラエルの民の宿営の一端をながめさせた。

第二三章一バラムはバラクに言った、「わたしのために、ここに七つの祭壇

を築き、七頭の雄牛と七頭の雄羊とを整えなさい」。二バラクはバラムの
言ったとおりにした。そしてバラクとバラムとは、その祭壇ごとに雄牛一
頭と雄羊一頭とをささげた。三バラムはバラクに言った、「あなたは燔祭の
かたわらに立っていてください。その間にわたしは行ってきます。主はた
ぶんわたしに会ってくださるでしょう。そして、主がわたしに示される事
はなんでもあなたに告げましょう」。こうして彼は一つのはげ山に登った。
四神がバラムに会われたので、バラムは神に言った、「わたしは七つの祭壇
を設け、祭壇ごとに雄牛一頭と雄羊一頭とをささげました」。五主はバラ
ムの口に言葉を授けて言われた、「バラクのもとに帰ってこう言いなさい」。
六彼がバラクのもとに帰ってみると、バラクはモアブのすべてのつかさた
ちと共に燔祭のかたわらに立っていた。七バラムはこの託宣を述べた。
「バラクはわたしをアラムから招き寄せ、

モアブの王はわたしを東の山から招き寄せて言う、
『きてわたしのためにヤコブをのろえ、
きてイスラエルをのろえ』と。
八神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。
主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。
九岩の頂からながめ、
丘の上から見たが、
これはひとり離れて住む民、
もろもろの国民のうちに並ぶものはない。
一〇だれがヤコブの群衆を数え、
イスラエルの無数の民を数え得よう。
わたしは義人のように死に、
わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」。

一一そこでバラクはバラムに言った、「あなたはわたしに何をするのです
か。わたしは敵をのろうために、あなたを招いたのに、あなたはかえって
敵を祝福するばかりです」。一二バラムは答えた、「わたしは、主がわたし
の口に授けられる事だけを語るように注意すべきではないでしょうか」。
一三バラクは彼に言った、「わたしと一緒にほかのところへ行って、そこ
から彼らをごらんください。あなたはただ彼らの一端を見るだけで、全体
を見ることはできないでしょうが、そこからわたしのために彼らをのろっ
てください」。一四そして彼はバラムを連れてゾピムの野に行き、ピスガの
頂に登って、そこに七つの祭壇を築き、祭壇ごとに雄牛一頭と雄羊一
頭とをささげた。一五ときにはバラムはバラクに言った、「あなたはここで、
燔祭のかたわらに立っていてください。わたしは向こうへ行って、主に伺
いますから」。一六主はバラムに臨み、言葉を口に授けて言われた、「バラ

クのもとに帰ってこう言いなさい」。一七彼がバラクのところへ行って見る
と、バラクは燔祭のかたわらに立ち、モアブのつかさたちも共にいた。バ
ラクはバラムに言った、「主はなんと言われましたか」。一八そこでバラムは
またこの託宣を述べた。

「バラクよ、立って聞け、
チッポルの子よ、わたしに耳を傾けよ。
一九神は人のように偽ることはなく、
また人の子のように悔いることもない。
言ったことで、行わないことがあろうか、
語ったことで、しとげないことがあろうか。
二〇祝福せよとの命をわたしはうけた、
すでに神が祝福されたものを、

わたしは変えることができない。
二一だれもヤコブのうちに災のあるのを見ない、
またイスラエルのうちに悩みのあるのを見ない。
彼らの神、主が共にいまし、
王をたたえる声がその中に聞える。
二二神は彼らをエジプトから導き出された、
彼らは野牛の角のようだ。
二三ヤコブには魔術がなく、
イスラエルには占いがない。
神がそのなすところを時に応じてヤコブに告げ、
イスラエルに示されるからだ。
二四見よ、この民は雌じしのように立ち上がり、

雄じしのように身を起す。
これはその獲物を食らい、
その殺した者の血を飲むまでは身を横たえない」。
二五バラクはバラムに言った、「あなたは彼らをのろうことも祝福する
ことも、やめてください」。二六バラムは答えてバラクに言った、「主の言わ
れることは、なんでもしなければならないと、わたしはあなたに告げませ
んでしたか」。二七バラクはバラムに言った、「どうぞ、おいでください。わ
たしはあなたをほかの所へお連れしましょう。神はあなたがそこからわた
しのために彼らをのろうことを許されるかもしれません」。二八そしてバラ
クはバラムを連れて、荒野を見おろすペオルの頂に行った。二九バラムは
バラクに言った、「わたしのためにここに七つの祭壇を築き、雄牛七頭と、
雄羊七頭とを整えなさい」。三〇バラクはバラムの言ったとおりにし、そ

の祭壇ごとに雄牛一頭と雄羊一頭とをささげた。

第二四章一バラムはイスラエルを祝福することが主の心にかなうのを
見たので、今度はいつものように行って魔術を求めることをせず、顔を荒野
にむけ、二目を上げて、イスラエルがそれぞれ部族にしたがって宿営して
いるのを見た。その時、神の霊が臨んだので、三彼はこの託宣を述べた。

「ベオルの子バラムの言葉、
目を閉じた人の言葉、
四神の言葉を聞く者、
全能者の幻を見る者、
倒れ伏して、目の開かれた者の言葉。
五ヤコブよ、あなたの天幕は麗しい、
イスラエルよ、あなたのすまいは、麗しい。

六それは遠くひろがる谷々のよう、
川べの園のよう、
主が植えられた沈香樹のよう、
流れのほとりの香柏のようだ。
七水は彼らのかめからあふれ、
彼らの種は水の潤いに育つであろう。
彼らの王はアガグよりも高くなり、
彼らの国はあがめられるであろう。
八神は彼らをエジプトから導き出された、
彼らは野牛の角のようだ。
彼らは敵なる国々の民を滅ぼし、
その骨を砕き、

矢をもって突き通すであろう。
九彼らは雄じしのように身をかがめ、
雌じしのように伏している。
だれが彼らを起しえよう。
あなたを祝福する者は祝福され、
あなたをのろう者はのろわれるであろう」。
一〇そこでバラクはバラムにむかって怒りを発し、手を打ち鳴らした。そ
してバラクはバラムに言った、「敵をのろうために招いたのに、あなたはか
えって三度までも彼らを祝福した。一一それで今あなたは急いで自分のと
ころへ帰ってください。わたしはあなたを大いに優遇しようと思った。し
かし、主はその優遇をあなたに得させないようにされました」。一二バラム
はバラクに言った、「わたしはあなたがつかわされた使者たちに言ったでは

ありませんか、一三『たといバラクがその家に満ちるほどの金銀をわたしに
与えようとも、主の言葉を越えて心のままに善も悪も行うことはできま
せん。わたしは主の言われることを述べるだけです』。一四わたしは今わた
しの民のところへ帰って行きます。それでわたしはこの民が後の日にあな
たの民にどんなことをするかをお知らせしましょう」。一五そしてこの託宣
を述べた。

「ベオルの子バラムの言葉、
目を閉じた人の言葉。
一六神の言葉を聞く者、
いと高き者の知識をもつ者、
全能者の幻を見、
倒れ伏して、目の開かれた者の言葉。

一七わたしは彼を見る、しかし今ではない。
わたしは彼を望み見る、しかし近くではない。
ヤコブから一つの星が出、
イスラエルから一本のつえが起り、
モアブのこめかみと、
セツのすべての子らの脳天を撃つであろう。
一八敵のエドムは領地となり、
セイルもまた領地となるであろう。
そしてイスラエルは勝利を得るであろう。
一九権を執る者がヤコブから出、
生き残った者を町から断ち滅ぼすであろう」。
二〇バラムはまたアマレクを望み見て、この託宣を述べた。

「アマレクは諸国民(しょこくみん)のうちの最初(さいしょ)のもの、
しかし、ついに滅(ほろ)び去(さ)るであろう」。
二一またケニびとを望(のぞ)み見(み)てこの託宣(たくせん)を述(の)べた。
「お前(まえ)のすみかは堅固(けんご)だ、
岩(いわ)に、お前(まえ)は巣(す)をつくっている。
二二しかし、カインは滅(ほろ)ぼされるであろう。
アシュルはいつまでお前(まえ)を捕虜(ほりょ)とするであろうか」。
二三彼(かれ)はまたこの託宣(たくせん)を述(の)べた。
「ああ、神(かみ)が定(さだ)められた以上(いじょう)、
だれが生(い)き延(の)びることができよう。
二四キッテムの海岸(かいがん)から舟(ふね)がきて、
アシュルを攻(せ)めなやまし、

エベルを攻めなやますであろう。
そして彼もまたついに滅び去るであろう」。
二五こうしてバラムは立ち上がって、自分のところへ帰っていった。バラク
もまた立ち去った。
第二五章一イスラエルはシッテムにとどまっていたが、民はモアブの娘
たちと、みだらな事をし始めた。二その娘たちが神々に犠牲をささげる時
に民を招くと、民は一緒にそれを食べ、娘たちの神々を拝んだ。三イス
ラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがったので、主はイスラエルに
むかって怒りを発せられた。四そして主はモーセに言われた、「民の首領
をことごとく捕え、日のあるうちにその人々を主の前で処刑しなさい。そ
うすれば主の怒りはイスラエルを離れるであろう」。五モーセはイスラエル
のさばきびとたちにむかって言った、「あなたがたはおのおの、配下の者ど

もでペオルのバアルにつきしたがったものを殺しなさい」。
六モーセとイスラエルの人々の全会衆とが会見の幕屋の入口で泣いて
いた時、彼らの目の前で、ひとりのイスラエルびとが、その兄弟たちの
中に、ひとりのミデアンの女を連れてきた。七祭司アロンの子なるエレア
ザルの子ピネハスはこれを見て、会衆のうちから立ち上がり、やりを手に
執り、八そのイスラエルの人の後を追って、奥の間に入り、そのイスラエ
ルの人を突き、またその女の腹を突き通して、ふたりを殺した。こうし
て疫病がイスラエルの人々に及ぶのがやんだ。九しかし、その疫病で死
んだ者は二万四千人であった。
一〇主はモーセに言われた、一一「祭司アロンの子なるエレアザルの子ピ
ネハスは自分のことのように、わたしの憤激をイスラエルの人々のうちに
表わし、わたしの怒りをそのうちから取り去ったので、わたしは憤激して、

イスラエルの人々を滅ぼすことをしなかった。一二このゆえにあなたは言い
なさい、『わたしは平和の契約を彼に授ける。一三これは彼とその後の子孫
に永遠の祭司職の契約となるであろう。彼はその神のために熱心であっ
て、イスラエルの人々のために罪のあがないをしたからである』と」。
一四ミデアンの女と共に殺されたイスラエルの人の名はジムリといい、
サルの子で、シメオンびとのうちの一族のつかさであった。一五またその
殺されたミデアンの女の名はコズビといい、ツルの娘であった。ツルは
ミデアンの民の一族のかしらであった。一六主はまたモーセに言われた、一
七「ミデアンびとを打ち悩ましなさい。一八彼らはたくらみをもって、あな
たがたを悩まし、ペオルの事と、彼らの姉妹、ミデアンのつかさの娘コズ
ビ、すなわちペオルの事により、疫病の起った日に殺された女の事とに
よって、あなたがたを惑わしたからである」。

第二六章一 疫病の後、主はモーセと祭司アロンの子エレアザルとに言わ
れた、二「イスラエルの人々の全会衆の総数をその父祖の家にしたがっ
て調べ、イスラエルにおいて、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上
の者を数えなさい」。三そこでモーセと祭司エレアザルとは、エリコに近い
ヨルダンのほとりにあるモアブの平野で彼らに言った、四「主がモーセに命
じられたように、あなたがたのうちの二十歳以上の者を数えなさい」。エ
ジプトの地から出てきたイスラエルの人々は次のとおりである。
五ルベンはイスラエルの長子である。ルベンの子孫は、ヘノクからヘノ
クびとの氏族が出、パルからパルびとの氏族が出、六ヘヅロンからヘヅロン
びとの氏族が出、カルミからカルミびとの氏族が出た。七これらはルベンび
との氏族であって、数えられた者は四万三千七百三十人であった。八また
パルの子はエリアブ。九エリアブの子はネムエル、ダタン、アビラムであ

る。このダタンとアビラムとは会衆のうちから選び出された者で、コラ
のともがらと共にモーセとアロンとに逆らって主と争った時、一〇地は口
を開いて彼らとコラとをのみ、その仲間は死んだ。その時二百五十人が火
に焼き滅ぼされて、戒めの鏡となった。一一ただし、コラの子たちは死
ななかった。
一二シメオンの子孫は、その氏族によれば、ネムエルからネムエルびとの
氏族が出、ヤミンからヤミンびとの氏族が出、ヤキンからヤキンびとの氏族
が出、一三ゼラからゼラびとの氏族が出、シャウルからシャウルびとの氏族
が出た。一四これらはシメオンびとの氏族であって、数えられた者は二万二
千二百人であった。
一五ガドの子孫は、その氏族によれば、ゼポンからゼポンびとの氏族が出、
ハギからハギびとの氏族が出、シュニからシュニびとの氏族が出、一六オズ

ニからオズニびとの氏族が出、エリからエリびとの氏族が出、一七アロドか
らアロドびとの氏族が出、アレリからアレリびとの氏族が出た。一八これら
はガドの子孫の氏族であって、数えられた者は四万五百人であった。
一九ユダの子らはエルとオナンとであって、エルとオナンとはカナンの地
で死んだ。二〇ユダの子孫は、その氏族によれば、シラからシラびとの氏族
が出、ペレヅからペレヅびとの氏族が出、ゼラからゼラびとの氏族が出た。
二一ペレヅの子孫は、ヘヅロンからヘヅロンびとの氏族が出、ハムルからハ
ムルびとの氏族が出た。二二これらはユダの氏族であって、数えられた者は
七万六千五百人であった。
二三イッサカルの子孫は、その氏族によれば、トラからトラびとの氏族が
出、プワからプワびとの氏族が出、二四ヤシュブからヤシュブびとの氏族が
出、シムロンからシムロンびとの氏族が出た。二五これらはイッサカルの

氏族であって、数えられた者は六万四千三百人であった。
二六ゼブルンの
子孫は、その氏族によれば、セレデからセレデびとの氏族が出、エロンから
エロンびとの氏族が出、ヤリエルからヤリエルびとの氏族が出た。
二七これ
らはゼブルンびとの氏族であって、数えられた者は六万五百人であった。
二八ヨセフの子らは、その氏族によれば、マナセとエフライムとであって、
二九マナセの子孫は、マキルからマキルびとの氏族が出た。マキルからギレ
アデが生れ、ギレアデからギレアデびとの氏族が出た。
三〇ギレアデの子孫
は次のとおりである。イエゼルからイエゼルびとの氏族が出、ヘレクから
ヘレクびとの氏族が出、
三一アスリエルからアスリエルびとの氏族が出、シ
ケムからシケムびとの氏族が出、
三二セミダからセミダびとの氏族が出、ヘ
ペルからヘペルびとの氏族が出た。
三三ヘペルの子ゼロペハデには男の子
がなく、ただ女の子のみで、ゼロペハデの女の子の名はマアラ、ノア、ホ

グラ、ミルカ、テルザといった。三四これらはマナセの氏族であって、数え
られた者は五万二千七百人であった。
三五エフライムの子孫は、その氏族によれば、次のとおりである。シュテ
ラからはシュテラびとの氏族が出、ベケルからベケルびとの氏族が出、タ
ハンからタハンびとの氏族が出た。三六またシュテラの子孫は次のとおりで
ある。すなわちエランからエランびとの氏族が出た。三七これらはエフライ
ムの子孫の氏族であって、数えられた者は三万二千五百人であった。以上
はヨセフの子孫で、その氏族によるものである。
三八ベニヤミンの子孫は、その氏族によれば、ベラからベラびとの氏族が
出、アシベルからアシベルびとの氏族が出、アヒラムからアヒラムびとの
氏族が出、三九シュパムからシュパムびとの氏族が出、ホパムからホパムび
との氏族が出た。四〇ベラの子はアルデとナアマンとであって、アルデから

アルデびとの氏族が出、ナアマンからナアマンびとの氏族が出た。四一これ
らはベニヤミンの子孫であって、その氏族によれば数えられた者は四万五
千六百人であった。
四二ダンの子孫は、その氏族によれば、次のとおりである。シュハムから
シュハムびとの氏族が出た。これらはダンの氏族であって、その氏族によ
るものである。四三シュハムびとのすべての氏族のうち、数えられた者は六
万四千四百人であった。
四四アセルの子孫は、その氏族によれば、エムナからエムナびとの氏族が
出、エスイからエスイびとの氏族が出、ベリアからベリアびとの氏族が出
た。四五ベリアの子孫のうちヘベルからヘベルびとの氏族が出、マルキエル
からマルキエルびとの氏族が出た。四六アセルの娘の名はサラといった。
四七これらはアセルの子孫の氏族であって、数えられた者は五万三千四百

人であった。
四八ナフタリの子孫は、その氏族によれば、ヤジエルからヤジエルびとの氏族が出、グニからグニびとの氏族が出、四九エゼルからエゼルびとの氏族が出、シレムからシレムびとの氏族が出た。五〇これらはナフタリの氏族であって、その氏族により、数えられた者は四万五千四百人であった。
五一これらはイスラエルの子孫の数えられた者であって、六十万一千百三十人であった。
五二主はモーセに言われた、五三「これらの人々に、その名の数にしたがって地を分け与え、嗣業とさせなさい。五四大きい部族には多くの嗣業を与え、小さい部族には少しの嗣業を与えなさい。すなわち数えられた数にしたがって、おのおのの部族にその嗣業を与えなければならない。五五ただし地は、くじをもって分け、その父祖の部族の名にしたがって、それを

継がなければならない。五六すなわち、くじをもってその嗣業を大きいも
のと、小さいものとに分けなければならない」。
五七レビびとのその氏族にしたがって数えられた者は次のとおりである。
ゲルションからゲルションびとの氏族が出、コハテからコハテびとの氏族が
出、メラリからメラリびとの氏族が出た。五八レビの氏族は次のとおりであ
る。すなわちリブニびとの氏族、ヘブロンびとの氏族、マヘリびとの氏族、
ムシびとの氏族、コラびとの氏族であって、コハテからアムラムが生れた。
五九アムラムの妻の名はヨケベデといって、レビの娘である。彼女はエジ
プトでレビに生れた者であるが、アムラムにとついで、アロンとモーセお
よびその姉妹ミリアムを産んだ。六〇アロンにはナダブ、アビウ、エレアザ
ルおよびイタマルが生れた。六一ナダブとアビウは異火を主の前にささげ
た時に死んだ。六二その数えられた一か月以上のすべての男子は二万三千

人であった。彼らはイスラエルの人々のうちに嗣業を与えられなかった
ため、イスラエルの人々のうちに数えられなかった者である。
六三これらはモーセと祭司エレアザルが、エリコに近いヨルダンのほとり
にあるモアブの平野で数えたイスラエルの人々の数である。六四ただしそ
のうちには、モーセと祭司アロンがシナイの荒野でイスラエルの人々を数
えた時に数えられた者はひとりもなかった。六五それは主がかつて彼らに
ついて「彼らは必ず荒野で死ぬであろう」と言われたからである。それで
彼らのうちエフンネの子カレブとヌンの子ヨシュアのほか、ひとりも残っ
た者はなかった。
第二七章一さて、ヨセフの子マナセの氏族のうちのヘペルの子、ゼロペハ
デの娘たちが訴えてきた。ヘペルはギレアデの子、ギレアデはマキルの
子、マキルはマナセの子である。その娘たちは名をマアラ、ノア、ホグラ、

ミルカ、テルザといったが、二彼らは会見の幕屋の入口でモーセと、祭司エ
レアザルと、つかさたちと全会衆との前に立って言った、三「わたしたち
の父は荒野で死にました。彼は、コラの仲間となって主に逆らった者ども
の仲間のうちには加わりませんでした。彼は自分の罪によって死んだので
すが、男の子がありませんでした。四男の子がないからといって、どうし
てわたしたちの父の名がその氏族のうちから削られなければならないので
しょうか。わたしたちの父の兄弟と同じように、わたしたちにも所有地
を与えてください」。

五モーセがその事を主の前に述べると、六主はモーセに言われた、七「ゼ
ロペハデの娘たちの言うことは正しい。あなたは必ず彼らの父の兄弟
たちと同じように、彼らにも嗣業の所有地を与えなければならない。すな
わち、その父の嗣業を彼らに渡さなければならない。八あなたはイスラエ

ルの人々に言いなさい、『もし人が死んで、男の子がない時は、その嗣業
を娘に渡さなければならない。九もしまた娘もない時は、その嗣業を
兄弟に与えなければならない。一〇もし兄弟もない時は、その嗣業を
父の兄弟に与えなければならない。一一もしまた父に兄弟がない時は、
その氏族のうちで彼に最も近い親族にその嗣業を与えて所有させなけ
ればならない』。主がモーセに命じられたようにイスラエルの人々は、こ
れをおきての定めとしなければならない」。
一二主はモーセに言われた、「このアバリムの山に登って、わたしがイスラ
エルの人々に与える地を見なさい。一三あなたはそれを見てから、兄弟ア
ロンのようにその民に加えられるであろう。一四これは会衆がチンの荒野
で逆らい争った時、あなたがたはわたしの命にそむき、あの水のかたわら
で彼らの目の前にわたしの聖なることを現さなかったからである」。これ

はチンの荒野にあるカデシのメリバの水である。一五モーセは主に言った、
一六「すべての肉なるものの命の神、主よ、どうぞ、この会衆の上にひ
とりの人を立て、一七彼らの前に出入りし、彼らを導き出し、彼らを導
き入れる者とし、主の会衆を牧者のない羊のようにしないでください」。
一八主はモーセに言われた、「神の霊のやどっているヌンの子ヨシュアを選
び、あなたの手をその上におき、一九彼を祭司エレアザルと全会衆の前に
立たせて、彼らの前で職に任じなさい。二〇そして彼にあなたの権威を分
け与え、イスラエルの人々の全会衆を彼に従わせなさい。二一彼は祭司
エレアザルの前に立ち、エレアザルは彼のためにウリムをもって、主の前
に判断を求めなければならない。ヨシュアとイスラエルの人々の全会衆
とはエレアザルの言葉に従っていで、エレアザルの言葉に従ってはいら
なければならない」。二二そこでモーセは主が命じられたようにし、ヨシュ

アを選んで、祭司エレアザルと全会衆の前に立たせ、二三彼の上に手をお
き、主がモーセによって語られたとおりに彼を任命した。
第二八章一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に命じて言いな
さい、『あなたがたは香ばしいかおりとしてわたしにささげる火祭、すなわ
ち、わたしの供え物、わたしの食物を定めの時にわたしにささげること
を怠ってはならない』。三また彼らに言いなさい、『あなたがたが主にささ
ぐべき火祭はこれである。すなわち一歳の雄の全き小羊二頭を毎日ささ
げて常燔祭としなければならない。四すなわち一頭の小羊を朝にささげ、
一頭の小羊を夕にささげなければならない。五また麦粉一エパの十分の一
に、砕いて取った油一ヒンの四分の一を混ぜて素祭としなければならな
い。六これはシナイ山で定められた常燔祭であって、主に香ばしいかお
りとしてささげる火祭である。七またその灌祭は小羊一頭について一ヒン

の四分の一をささげなければならない。すなわち聖所において主のために
濃い酒をそそいで灌祭としなければならない。八夕には他の一頭の小羊を
ささげなければならない。その素祭と灌祭とは朝のものと同じようにし、
その小羊を火祭としてささげ、主に香ばしいかおりとしなければならない。
九また安息日には一歳の雄の全き小羊二頭と、麦粉一エパの十分の二
に油を混ぜた素祭と、その灌祭とをささげなければならない。一〇これは
安息日ごとの燔祭であって、常燔祭とその灌祭とに加えらるべきもので
ある。
一一またあなたがたは月々の第一日に燔祭を主にささげなければならな
い。すなわち若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の雄の全き小羊七頭をささ
げ、一二雄牛一頭には麦粉一エパの十分の三に油を混ぜたものを素祭とし、
雄羊一頭には麦粉一エパの十分の二に油を混ぜたものを素祭とし、一三

小羊一頭には麦粉十分の一に油を混ぜたものを素祭とし、これを香ばし
いかおりの燔祭として主のために火祭としなければならない。一四またそ
の灌祭は雄牛一頭についてぶどう酒一ヒンの二分の一、雄羊一頭について
一ヒンの三分の一、小羊一頭について一ヒンの四分の一をささげなければ
ならない。これは年の月々を通じて、新月ごとにささぐべき燔祭である。
一五また常燔祭とその灌祭とのほかに、雄やぎ一頭を罪祭として主にさ
さげなければならない。

一六正月の十四日は主の過越の祭である。一七またその月の十五日は
祭日としなければならない。七日のあいだ種入れぬパンを食べなければな
らない。一八その初めの日には聖会を開かなければならない。なんの労役
をもしてはならない。一九あなたがたは火祭として主に燔祭をささげなけ
ればならない。すなわち若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊七頭を

ささげなければならない。これらはみな全きものでなければならない。二
〇その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなければならない。すなわち雄牛
一頭につき麦粉一エパの十分の三、雄羊一頭につき十分の二をささげ、二
一また七頭の小羊にはその一頭ごとに十分の一をささげなければならない。
二二また雄やぎ一頭を罪祭としてささげ、あなたがたのために罪のあがない
をしなければならない。二三あなたがたは朝にささげる常燔祭のほ
かに、これらをささげなければならない。二四このようにあなたがたは七日
のあいだ毎日、火祭の食物をささげて、主に香ばしいかおりとしなけれ
ばならない。これは常燔祭とその灌祭とのほかにささぐべきものである。
二五そして第七日に、あなたがたは聖会を開かなければならない。なんの
労役をもしてはならない。
二六あなたがたは七週の祭、すなわち新しい素祭を主にささげる初穂

の日にも聖会を開かなければならない。なんの労役をもしてはならない。
二七あなたがたは燔祭をささげて、主に香ばしいかおりとしなければなら
ない。すなわち若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊七頭をささげな
ければならない。二八その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなければなら
ない。すなわち雄牛一頭につき一エパの十分の三、雄羊一頭につき十分の
二をささげ、二九また七頭の小羊には一頭ごとに十分の一をささげなけれ
ばならない。三〇また雄やぎ一頭をささげてあなたがたのために罪のあがな
いをしなければならない。三一あなたがたは常燔祭とその素祭とその灌祭
とのほかに、これらをささげなければならない。これらはみな、全きもの
でなければならない。

第二九章一七月には、その月の第一日に聖会を開かなければならない。
なんの労役をもしてはならない。これはあなたがたがラッパを吹く日であ

る。二あなたがたは燔祭をささげて、主に香ばしいかおりとしなければな
らない。すなわち若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の全き小羊七頭を
ささげなければならない。三その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなけれ
ばならない。すなわち雄牛一頭について一エパの十分の三、雄羊一頭につ
いて十分の二をささげ、四また七頭の小羊には一頭ごとに十分の一をささ
げなければならない。五また雄やぎ一頭を罪祭としてささげ、あなたがた
のために罪のあがないをしなければならない。六これは新月の燔祭とその
素祭、常燔祭とその素祭、および灌祭のほかのものであって、これらの
ものの定めにしたがい、香ばしいかおりとして、主に火祭としなければな
らない。

七またその七月の十日に聖会を開き、かつあなたがたの身を悩まさなけ
ればならない。なんの仕事もしてはならない。八あなたがたは主に燔祭を

ささげて、香ばしいかおりとしなければならない。すなわち若い雄牛一頭、
雄羊一頭、一歳の雄の小羊七頭をささげなければならない。これらはみな
全きものでなければならない。九その素祭には油を混ぜた麦粉をささげ
なければならない。すなわち雄牛一頭につき一エパの十分の三、雄羊一頭
につき十分の二をささげ、一〇また七頭の小羊には一頭ごとに十分の一を
ささげなければならない。一一また雄やぎ一頭を罪祭としてささげなけれ
ばならない。これらは贖罪の罪祭と常燔祭とその素祭、および灌祭の
ほかのものである。

一二七月の十五日に聖会を開かなければならない。なんの労役もしては
ならない。七日のあいだ主のために祭をしなければならない。一三あなた
がたは燔祭をささげて、主に香ばしいかおりの火祭としなければならない。
すなわち若い雄牛十三頭、雄羊二頭、一歳の雄の小羊十四頭をささげなけ

ればならない。これらはみな全きものでなければならない。一四その素祭
には油を混ぜた麦粉をささげなければならない。すなわち十三頭の雄牛
には一頭ごとに十分の三、その二頭の雄羊には一頭ごとに十分の二をささ
げ、一五その十四頭の小羊には一頭ごとに十分の一をささげなければなら
ない。一六また雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これら
は常燔祭とその素祭および灌祭のほかのものである。
一七第二日には若い雄牛十二頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四
頭をささげなければならない。一八その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭
と灌祭とはその数にしたがって、定めのようにささげなければならない。一
九また雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは常燔祭
とその素祭および灌祭のほかのものである。二〇第三日には雄牛十一頭、
雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭をささげなければならない。二一

その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭とは、その数にしたがって定
めのようにささげなければならない。二二また雄やぎ一頭を罪祭としてさ
さげなければならない。これらは常燔祭とその素祭および灌祭のほかの
ものである。
二三第四日には雄牛十頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭をさ
さげなければならない。二四その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭
とは、その数にしたがって定めのようにささげなければならない。二五また
雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは常燔祭とそ
の素祭および灌祭のほかのものである。
二六第五日には雄牛九頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭をさ
さげなければならない。二七その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭
とは、その数にしたがって定めのようにささげなければならない。二八また

雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは常燔祭とそ
の素祭および灌祭のほかのものである。
二九第六日には雄牛八頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭をさ
さげなければならない。三〇その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭
とは、その数にしたがって定めのようにささげなければならない。三一また
雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは常燔祭とそ
の素祭および灌祭のほかのものである。
三二第七日には雄牛七頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭をさ
さげなければならない。三三その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭
とは、その数にしたがって定めのようにささげなければならない。三四また
雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは常燔祭とそ
の素祭および灌祭のほかのものである。

三五第八日にはまた集会を開かなければならない。なんの労役をもして
はならない。三六あなたがたは燔祭をささげて主に香ばしいかおりの火祭
としなければならない。すなわち雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の全き
小羊七頭をささげなければならない。三七その雄牛と雄羊と小羊とのため
の素祭と灌祭とは、その数にしたがって定めのようにささげなければなら
ない。三八また雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これら
は常燔祭とその素祭および灌祭のほかのものである。
三九あなたがたは定めの祭の時に、これらのものを主にささげなければ
ならない。これらはあなたがたの誓願、または自発の供え物としてささげ
る燔祭、素祭、灌祭および酬恩祭のほかのものである』」。
四〇モーセは主が命じられた事をことごとくイスラエルの人々に告げた。
第三〇章一モーセはイスラエルの人々の部族のかしらたちに言った、「こ

れは主が命じられた事である。二もし人が主に誓願をかけ、またはその身
に物断ちをしようと誓いをするならば、その言葉を破ってはならない。口
で言ったとおりにすべて行わなければならない。三またもし女がまだ若
く、父の家にいて、主に誓願をかけ、またはその身に物断ちをしようとする
時、四父が彼女の誓願、または彼女の身に断った物断ちのことを聞いて、
彼女に何も言わないならば、彼女はすべて誓願を行い、またその身に断っ
た物断ちをすべて守らなければならない。五しかし、彼女の父がそれを聞
いた日に、それを承認しない時は、彼女はその誓願、またはその身に断っ
た物断ちをすべてやめることができる。父が承認しないのであるから、主
は彼女をゆるされるであろう。六またもし夫のある身で、みずから誓願
をかけ、またはその身に物断ちをしようと、軽々しく口で言った場合、七
夫がそれを聞き、それを聞いた日に彼女に何も言わないならば、彼女は

その誓願を行い、その身に断った物断ちを守らなければならない。八しか
し、もし夫がそれを聞いた日に、それを承認しないならば、夫はその
女がかけた誓願、またはその身に物断ちをしようと、軽々しく口に言っ
たことをやめさせることができる。主はその女をゆるされるであろう。九
しかし、寡婦あるいは離縁された女の誓願、すべてその身に断った物断
ちは、それを守らなければならない。一〇もし女が夫の家で誓願をかけ、
またはその身に物断ちをしようと誓った時、一一夫がそれを聞いて、彼女
に何も言わず、またそれに反対しないならば、その誓願はすべて行わな
ければならない。またその身に断った物断ちはすべて守らなければならな
い。一二しかし、もし夫がそれを聞いた日にそれを認めないならば、彼女
の誓願、または身の物断ちについて、彼女が口で言った事は、すべてやめ
ることができる。夫がそれを認めなかったのだから、主はその女をゆる

されるであろう。一三すべての誓願およびすべてその身を悩ます物断ちの
誓約は、夫がそれを守らせることができ、または夫がそれをやめさせる
ことができる。一四もし夫が彼女に何も言わずに日を送るならば、彼は妻
がした誓願、または物断ちをすべて認めたのである。彼はそれを聞いた日
に妻に何も言わなかったのだから、それを認めたのである。一五しかし、も
し夫がそれを聞き、あとになって、それを認めないならば、彼は妻の罪
を負わなければならない」。
一六これらは主がモーセに命じられた定めであって、夫と妻との間、
および父とまだ若くて父の家にいる娘との間に関するものである。
第三一章一さて主はモーセに言われた、二「ミデアンびとにイスラエルの
人々のあだを報いなさい。その後、あなたはあなたの民に加えられるであ
ろう」。三モーセは民に言った、「あなたがたのうちから人を選んで戦いの

ために武装させ、ミデアンびとを攻めて、主のためにミデアンびとに復讐し
なさい。四すなわちイスラエルのすべての部族から、部族ごとに千人ずつを
戦いに送り出さなければならない」。五そこでイスラエルの部族のうちか
ら部族ごとに千人ずつを選び、一万二千人を得て、戦いのために武装させ
た。六モーセは各部族から千人ずつを戦いにつかわし、また祭司エレアザ
ルの子ピネハスに、聖なる器と吹き鳴らすラッパとを執らせて、共に戦
いにつかわした。七彼らは主がモーセに命じられたようにミデアンびとと
戦って、その男子をみな殺した。八その殺した者のほかにまたミデアンの
王五人を殺した。その名はエビ、レケム、ツル、フル、レバである。また
ベオルの子バラムをも、つるぎにかけて殺した。九またイスラエルの人々
はミデアンの女たちとその子供たちを捕虜にし、その家畜と、羊の群れ
と、貨財とをことごとく奪い取り、一〇そのすまいのある町々と、その部落

とを、ことごとく火で焼いた。一一こうして彼らはすべて奪ったものと、か
すめたものとは人をも家畜をも取り、一二その生けどった者と、かすめたも
のと、奪ったものとを携えて、エリコに近いヨルダンのほとりのモアブの
平野の宿営におるモーセと祭司エレアザルとイスラエルの人々の会衆の
もとへもどってきた。
一三ときにモーセと祭司エレアザルと会衆のつかさたちはみな宿営の
外に出て迎えたが、一四モーセは軍勢の将たち、すなわち戦場から帰っ
てきた千人の長たちと、百人の長たちに対して怒った。一五モーセは彼
らに言った、「あなたがたは女たちをみな生かしておいたのか。一六彼ら
はバラムのはかりごとによって、イスラエルの人々に、ペオルのことで主
に罪を犯させ、ついに主の会衆のうちに疫病を起すに至った。一七それ
で今、この子供たちのうちの男の子をみな殺し、また男と寝て、男を

知った女をみな殺しなさい。一八ただし、まだ男と寝ず、男を知らない
娘はすべてあなたがたのために生かしておきなさい。一九そしてあなたが
たは七日のあいだ宿営の外にとどまりなさい。あなたがたのうちすべて
人を殺した者、およびすべて殺された者に触れた者は、あなたがた自身も、
あなたがたの捕虜も共に、三日目と七日目とに身を清めなければならない。
二〇またすべての衣服と、すべての皮の器と、すべてやぎの毛で作ったも
のと、すべての木の器とを清めなければならない」。
二一祭司エレアザルは戦いに出たいくさびとたちに言った、「これは主
がモーセに命じられた律法の定めである。二二金、銀、青銅、鉄、すず、
鉛など、二三すべて火に耐える物は火の中を通さなければならない。そう
すれば清くなるであろう。なおその上、汚れを清める水で、清めなければ
ならない。しかし、すべて火に耐えないものは水の中を通さなければなら

ない。二四あなたがたは七日目に衣服を洗わなければならない。そして清
くなり、その後宿営にはいることができる」。
二五主はモーセに言われた、二六「あなたと祭司エレアザルおよび会衆
の氏族のかしらたちは、その生けどった人と家畜の獲物の総数を調べ、二
七その獲物を戦いに出た勇士と、全会衆とに折半しなさい。二八そして
戦いに出たいくさびとに、人または牛、またはろば、または羊を、おのお
の五百ごとに一つを取り、みつぎとして主にささげさせなさい。二九すなわ
ち彼らが受ける半分のなかから、それを取り、主にささげる物として祭司
エレアザルに渡しなさい。三〇またイスラエルの人々が受ける半分のなか
から、その獲た人または牛、またはろば、または羊などの家畜を、おのお
の五十ごとに一つを取り、主の幕屋の務をするレビびとに与えなさい」。
三一モーセと祭司エレアザルとは主がモーセに命じられたとおりに行った。

三二そこでその獲物、すなわち、いくさびとたちが奪い取ったものの残り
は羊六十七万五千、三三牛七万二千、三四ろば六万一千、三五人三万二千、
これはみな男と寝ず、男を知らない女であった。三六そしてその半分、
すなわち戦いに出た者の分は羊三十三万七千五百、三七主にみつぎとし
た羊は六百七十五。三八牛は三万六千、そのうちから主にみつぎとしたも
のは七十二。三九ろばは三万五百、そのうちから主にみつぎとしたものは六
十一。四〇人は一万六千、そのうちから主にみつぎとしたものは三十二人
であった。四一モーセはそのみつぎを主にささげる物として祭司エレアザ
ルに渡した。主がモーセに命じられたとおりである。
四二モーセが戦いに出た人々とは別にイスラエルの人々に与えた半分、
四三すなわち会衆の受けた半分は羊三十三万七千五百、四四牛三万六千、
四五ろば三万五百、四六人一万六千であって、四七モーセはイスラエルの人々

の受けた半分のなかから、人および獣をおのおの五十ごとに一つを取っ
て、主の幕屋の務をするレビびとに与えた。主がモーセに命じられたと
おりである。
四八時に軍勢の将であったものども、すなわち千人の長たちと百人の
長たちとがモーセのところにきて、四九モーセに言った、「しもべらは、
指揮下のいくさびとを数えましたが、われわれのうち、ひとりも欠けた者
はありませんでした。五〇それで、われわれは、おのおの手に入れた金の飾
り物、すなわち腕飾り、腕輪、指輪、耳輪、首飾りなどを主に携えてき
て供え物とし、主の前にわれわれの命のあがないをしようと思います」。
五一モーセと祭司エレアザルとは、彼らから細工を施した金の飾り物を受
け取った。五二千人の長たちと百人の長たちとが、主にささげものとし
た金は合わせて一万六千七百五十シケル。五三いくさびとは、おのおの自分

のぶんどり物を獲た。五四モーセと祭司エレアザルとは、千人の長たちと
百人の長たちとから、その金を受け取り、それを携えて会見の幕屋に入
り、主の前に置いてイスラエルの人々のために記念とした。

第三二章一ルベンの子孫とガドの子孫とは非常に多くの家畜の群れを持
っていた。彼らがヤゼルの地と、ギレアデの地とを見ると、そこは家畜を
飼うのに適していたので、二ガドの子孫とルベンの子孫とがきて、モーセ
と、祭司エレアザルと、会衆のつかさたちとに言った、三「アタロテ、デ
ボン、ヤゼル、ニムラ、ヘシボン、エレアレ、シバム、ネボ、ベオン、四すな
わち主がイスラエルの会衆の前に撃ち滅ぼされた国は、家畜を飼うのに
適した地ですが、しもべらは家畜を持っています」。五彼らはまた言った、
「それでもし、あなたの恵みを得られますなら、どうぞこの地をしもべらの
領地にして、われわれにヨルダンを渡らせないでください」。

六モーセはガドの子孫とルベンの子孫とに言った、「あなたがたは兄弟
が戦いに行くのに、ここにすわっていようというのか。七どうしてあなた
がたはイスラエルの人々の心をくじいて、主が彼らに与えられる地に渡
ることができないようにするのか。八あなたがたの先祖も、わたしがカデ
シ・バルネアから、その地を見るためにつかわした時に、同じようなこと
をした。九すなわち彼らはエシコルの谷に行って、その地を見たとき、イ
スラエルの人々の心をくじいて、主が与えられる地に行くことができな
いようにした。一〇そこでその時、主は怒りを発し、誓って言われた、一
一『エジプトから出てきた人々で二十歳以上の者はひとりもわたしがアブ
ラハム、イサク、ヤコブに誓った地を見ることはできない。彼らはわたし
に従わなかったからである。一二ただケニズびとエフンネの子カレブとヌ
ンの子ヨシュアとはそうではない。このふたりは全く主に従ったからで

ある』。一三主はこのようにイスラエルにむかって怒りを発し、彼らを四十
年のあいだ荒野にさまよわされたので、主の前に悪を行ったその世代の
人々は、ついにみな滅びた。一四あなたがたはその父に代って立った罪び
とのやからであって、主のイスラエルに対する激しい怒りをさらに増そう
としている。一五あなたがたがもしそむいて主に従わないならば、主はま
たこの民を荒野にすておかれるであろう。そうすればあなたがたはこの民
をことごとく滅ぼすに至るであろう」。

一六彼らはモーセのところへ進み寄って言った、「われわれはこの所に、
群れのために羊のおりを建て、また子供たちのために町々を建てようと思
います。一七しかし、われわれは武装してイスラエルの人々の前に進み、彼
らをその所へ導いて行きましょう。ただわれわれの子供たちは、この地
の住民の害をのがれるため、堅固な町々に住ませておかなければなりま

せん。一八われわれはイスラエルの人々が、おのおのその嗣業を受けるま
では、家に帰りません。一九またわれわれはヨルダンのかなたで彼らとと
もには嗣業を受けません。われわれはヨルダンのこなた、すなわち東の
方で嗣業を受けるからです」。二〇モーセは彼らに言った、「もし、あなた
がたがそのようにし、みな武装して主の前に行って戦い、二一みな武装し
て主の前に行ってヨルダン川を渡り、主がその敵を自分の前から追い払わ
れて、二二この国が主の前に征服されて後、帰ってくるならば、あなたが
たは主の前にも、イスラエルの前にも、とがめはないであろう。そしてこ
の地は主の前にあなたがたの所有となるであろう。二三しかし、そうしな
いならば、あなたがたは主にむかって罪を犯した者となり、その罪は必
ず身に及ぶことを知らなければならない。二四あなたがたは子供たちのた
めに町々を建て、羊のために、おりを建てなさい。しかし、あなたがたは

約束したことは行わなければならない」。二五ガドの子孫とルベンの子孫
とは、モーセに言った、「しもべらはあなたの命じられたとおりにいたしま
す。二六われわれの子供たちと妻と羊と、すべての家畜とは、このギレア
デの町々に残します。二七しかし、しもべらはみな武装して、あなたの言わ
れるとおり、主の前に渡って行って戦います」。
二八モーセは彼らのことについて、祭司エレアザルと、ヌンの子ヨシュ
アと、イスラエルの人々の部族のうちの氏族のかしらたちとに命じた。二
九そしてモーセは彼らに言った、「ガドの子孫と、ルベンの子孫とが、おの
おの武装してあなたがたと一緒にヨルダンを渡り、主の前に戦って、そ
の地をあなたがたが征服するならば、あなたがたは彼らにギレアデの地を
領地として与えなければならない。三〇しかし、もし彼らが武装してあな
たがたと一緒に渡って行かないならば、彼らはカナンの地であなたがたの

うちに領地を獲なければならない」。三一ガドの子孫と、ルベンの子孫とは
答えて言った、「しもべらは主が言われたとおりにいたします。三二われわ
れは武装して、主の前にカナンの地へ渡って行きますが、ヨルダンのこな
たで、われわれの嗣業をもつことにします」。
三三そこでモーセはガドの子孫と、ルベンの子孫と、ヨセフの子マナセの
部族の半ばとに、アモリびとの王シホンの国と、バシャンの王オグの国と
を与えた。すなわち、その国およびその領内の町々とその町々の周囲の
地とを与えた。三四こうしてガドの子孫は、デボン、アタロテ、アロエル、
三五アテロテ・ショパン、ヤゼル、ヨグベハ、三六ベテニムラ、ベテハラン
などの堅固な町々を建て、羊のおりを建てた。三七またルベンの子孫は、
ヘシボン、エレアレ、キリヤタイム、三八および後に名を改めたネボと、
バアル・メオンの町を建て、またシブマの町を建てた。彼らは建てた町々

に新しい名を与えた。三九またマナセの子マキルの子孫はギレアデに行っ
て、そこを取り、その住民アモリびとを追い払ったので、四〇モーセはギ
レアデをマナセの子マキルに与えてそこに住まわせた。四一またマナセの子
ヤイルは行って村々を取り、それをハオテヤイルと名づけた。四二またノバ
は行ってケナテとその村々を取り、自分の名にしたがって、それをノバと
名づけた。

第三三章一イスラエルの人々が、モーセとアロンとに導かれ、その部隊
に従って、エジプトの国を出てから経た旅路は次のとおりである。二モー
セは主の命により、その旅路にしたがって宿駅を書きとめた。その宿駅
にしたがえば旅路は次のとおりである。三彼らは正月の十五日にラメセ
スを出立した。すなわち過越の翌日イスラエルの人々は、すべてのエジ
プトびとの目の前を意気揚々と出立した。四その時エジプトびとは、主に

撃ち殺されたすべてのういごを葬っていた。主はまた彼らの神々にも罰
を加えられた。
五こうしてイスラエルの人々はラメセスを出立してスコテに宿営し、
六スコテを出立して荒野の端にあるエタムに宿営し、七エタムを出立し
てバアル・ゼポンの前にあるピハヒロテに引き返してミグドルの前に宿営
し、八ピハヒロテを出立して、海のなかをとおって荒野に入り、エタムの
荒野を三日路ほど行って、メラに宿営し、九メラを出立し、エリムに行っ
て宿営した。エリムには水の泉十二と、なつめやし七十本とがあった。
一〇エリムを出立して紅海のほとりに宿営し、一一紅海を出立してシン
の荒野に宿営し、一二シンの荒野を出立してドフカに宿営し、一三ドフ
カを出立してアルシに宿営し、一四アルシを出立してレピデムに宿営
した。そこには民の飲む水がなかった。一五レピデムを出立してシナイの

荒野に宿営し、一六シナイの荒野を出立してキブロテ・ハッタワに宿営
し、一七キブロテ・ハッタワを出立してハゼロテに宿営し、一八ハゼロテ
を出立してリテマに宿営し、一九リテマを出立してリンモン・パレツに
宿営し、二〇リンモン・パレツを出立してリブナに宿営し、二一リブナを
出立してリッサに宿営し、二二リッサを出立してケヘラタに宿営し、
二三ケヘラタを出立してシャペル山に宿営し、二四シャペル山を出立し
てハラダに宿営し、二五ハラダを出立してマケロテに宿営し、二六マケロ
テを出立してタハテに宿営し、二七タハテを出立してテラに宿営し、
二八テラを出立してミテカに宿営し、二九ミテカを出立してハシモナに
宿営し、三〇ハシモナを出立してモセラに宿営し、三一モセラを出立
してベネヤカンに宿営し、三二ベネヤカンを出立してホル・ハギデガデに
宿営し、三三ホル・ハギデガデを出立してヨテバタに宿営し、三四ヨテ

バタを出立してアブロナに宿営し、三五アブロナを出立してエジオン・
ゲベルに宿営し、三六エジオン・ゲベルを出立してチンの荒野すなわち
カデシに宿営し、三七カデシを出立してエドムの国の端にあるホル山に
宿営した。

三八イスラエルの人々がエジプトの国を出て四十年目の五月一日に、祭司
アロンは主の命によりホル山に登って、その所で死んだ。三九アロンはホ
ル山で死んだとき百二十三歳であった。

四〇カナンの地のネゲブに住んでいたカナンびとアラデの王は、イスラエ
ルの人々の来るのを聞いた。

四一ついで、ホル山を出立してザルモナに宿営し、四二ザルモナを出立
してプノンに宿営し、四三プノンを出立してオボテに宿営し、四四オボ
テを出立してモアブの境にあるイエ・アバリムに宿営し、四五イエ・ア

バリムを出立してデボン・ガドに宿営し、四六デボン・ガドを出立して
アルモン・デブラタイムに宿営し、四七アルモン・デブラタイムを出立
してネボの前にあるアバリムの山に宿営し、四八アバリムの山を出立し
てエリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野に宿営した。四九すなわ
ちヨルダンのほとりのモアブの平野で、ベテエシモテとアベル・シッテム
との間に宿営した。
五〇エリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野で、主はモーセに言わ
れた、五一「イスラエルの人々に言いなさい。あなたがたがヨルダンを渡っ
てカナンの地にはいるときは、五二その地の住民をことごとくあなたがた
の前から追い払い、すべての石像をこぼち、すべての鋳像をこぼち、すべ
ての高き所を破壊しなければならない。五三またあなたがたはその地の民
を追い払って、そこに住まなければならない。わたしがその地をあなたが

たの所有として与えたからである。五四あなたがたは、おのおの氏族ごと
にくじを引き、その地を分けて嗣業としなければならない。大きい部族に
は多くの嗣業を与え、小さい部族には少しの嗣業を与えなければならな
い。そのくじの当った所がその所有となるであろう。あなたがたは父祖
の部族にしたがって、それを継がなければならない。五五しかし、その地の
住民をあなたがたの前から追い払わないならば、その残して置いた者は
あなたがたの目にとげとなり、あなたがたの脇にいばらとなり、あなたが
たの住む国において、あなたがたを悩ますであろう。五六また、わたしは彼
らにしようと思ったとおりに、あなたがたにするであろう」。

第三四章一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に命じて言いな
さい。あなたがたがカナンの地にはいるとき、あなたがたの嗣業となるべ
き地はカナンの地で、その全域は次のとおりである。三南の方はエドムに

接するチンの荒野に始まり、南の境は、東は塩の海の端に始まる。四
その境はアクラビムの坂の南を巡ってチンに向かい、カデシ・バルネア
の南に至り、ハザル・アダルに進み、アズモンに及ぶ。五その境はまた
アズモンから転じてエジプトの川に至り、海に及んで尽きる。
六西の境はおおうみとその沿岸で、これがあなたがたの西の境である。
七あなたがたの北の境は次のとおりである。すなわちおおうみからホル
山まで線を引き、八ホル山からハマテの入口まで線を引き、その境をゼ
ダデに至らせ、九またその境はジフロンに進み、ハザル・エノンに至って
尽きる。これがあなたがたの北の境である。
一〇あなたがたの東の境は、ハザル・エノンからシパムまで線を引き、
一一またその境はアインの東の方で、シパムからリブラに下り、またその
境は下ってキンネレテの海の東の斜面に至り、一二またその境はヨル

ダンに下り、塩の海に至って尽きる。あなたがたの国の周囲の境は以上
のとおりである」。
一三モーセはイスラエルの人々に命じて言った、「これはあなたがたが、く
じによって継ぐべき地である。主はこれを九つの部族と半部族とに与えよ
と命じられた。一四それはルベンの子孫の部族とガドの子孫の部族とが共
に父祖の家にしたがって、すでにその嗣業を受け、またマナセの半部族も
その嗣業を受けていたからである。一五この二つの部族と半部族とはエリ
コに近いヨルダンのかなた、すなわち東の方、日の出る方で、その嗣業
を受けた」。
一六主はまたモーセに言われた、一七「あなたがたに、嗣業として地を分
け与える人々の名は次のとおりである。すなわち祭司エレアザルと、ヌン
の子ヨシュアとである。一八あなたがたはまた、おのおの部族から、つかさ

ひとりずつを選んで、地を分け与えさせなければならない。一九その人々の
名は次のとおりである。すなわちユダの部族ではエフンネの子カレブ、二〇
シメオンの子孫の部族ではアミホデの子サムエル、二一ベニヤミンの部族で
はキスロンの子エリダデ、二二ダンの子孫の部族ではヨグリの子つかさブッ
キ、二三ヨセフの子孫、すなわちマナセの部族ではエポデの子つかさハニエ
ル、二四エフライムの子孫の部族ではシフタンの子つかさケムエル、二五ゼ
ブルンの子孫の部族ではパルナクの子つかさエリザパン、二六イッサカルの
子孫の部族ではアザンの子つかさパルテエル、二七アセルの子孫の部族では
シロミの子つかさアヒウデ、二八ナフタリの子孫の部族では、アミホデの子
つかさパダヘル。二九カナンの地でイスラエルの人々に嗣業を分け与える
ことを主が命じられた人々は以上のとおりである」。

第三五章一エリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野で、主はモー

セに言われた、二「イスラエルの人々に命じて、その獲た嗣業のうちか
ら、レビびとに住むべき町々を与えさせなさい。また、あなたがたは、そ
の町々の周囲の放牧地をレビびとに与えなければならない。三その町々は
彼らの住む所、その放牧地は彼らの家畜と群れ、およびすべての獣のた
めである。四あなたがたがレビびとに与える町々の放牧地は、町の石がき
から一千キュビトの周囲としなければならない。五あなたがたは町の外で
東側に二千キュビト、南側に二千キュビト、西側に二千キュビト、北側
に二千キュビトを計り、町はその中央にしなければならない。彼らの町
の放牧地はこのようにしなければならない。六あなたがたがレビびとに与
える町々は六つで、のがれの町とし、人を殺した者がのがれる所としな
ければならない。なおこのほかに四十二の町を与えなければならない。七
すなわちあなたがたがレビびとに与える町は合わせて四十八で、これをそ

の放牧地と共に与えなければならない。八あなたがたがイスラエルの人々
の所有のうちからレビびとに町々を与えるには、大きい部族からは多く取
り、小さい部族からは少なく取り、おのおの受ける嗣業にしたがって、そ
の町々をレビびとに与えなければならない」。
九主はモーセに言われた、一〇「イスラエルの人々に言いなさい。あなた
がたがヨルダンを渡ってカナンの地にはいるときは、一一あなたがたのため
に町を選んで、のがれの町とし、あやまって人を殺した者を、そこにのが
れさせなければならない。一二これはあなたがたが復讐する者を避けての
がれる町であって、人を殺した者が会衆の前に立って、さばきを受けな
いうちに、殺されることのないためである。一三あなたがたが与える町々
のうち、六つをのがれの町としなければならない。一四すなわちヨルダンの
かなたで三つの町を与え、カナンの地で三つの町を与えて、のがれの町と

しなければならない。一五これらの六つの町は、イスラエルの人々と、他国
の人および寄留者のために、のがれの場所としなければならない。すべて
あやまって人を殺した者が、そこにのがれるためである。
一六もし人が鉄の器で、人を打って死なせたならば、その人は故殺人で
ある。故殺人は必ず殺されなければならない。一七またもし人を殺せる
ほどの石を取って、人を打って死なせたならば、その人は故殺人である。
故殺人は必ず殺されなければならない。一八あるいは人を殺せるほどの木
の器を取って、人を打って死なせたならば、その人は故殺人である。故殺人
は必ず殺されなければならない。一九血の復讐をする者は、自分でその
故殺人を殺すことができる。すなわち彼に出会うとき、彼を殺すことがで
きる。二〇またもし恨みのために人を突き、あるいは故意に人に物を投げ
つけて死なせ、二一あるいは恨みによって手で人を打って死なせたならば、

その打った者は必ず殺されなければならない。彼は故殺人だからである。
血の復讐をする者は、その故殺人に出会うとき殺すことができる。
二二しかし、もし恨みもないのに思わず人を突き、または、なにごころ
なく人に物を投げつけ、二三あるいは人のいるのも見ずに、人を殺せるほ
どの石を投げつけて死なせた場合、その人がその敵でもなく、また害を加
えようとしたのでもない時は、二四会衆はこれらのおきてによって、その
人を殺した者と、血の復讐をする者との間をさばかなければならない。
二五すなわち会衆はその人を殺した者を血の復讐をする者の手から救い
出して、逃げて行ったのがれの町に返さなければならない。その者は聖な
る油を注がれた大祭司の死ぬまで、そこにいなければならない。二六しか
し、もし人を殺した者が、その逃げて行ったのがれの町の境を出た場合、
二七血の復讐をする者は、のがれの町の境の外で、これに出会い、血の

復讐をする者が、その人を殺した者を殺しても、彼には血を流した罪は
ない。二八彼は大祭司の死ぬまで、そののがれの町におるべきものだから
である。大祭司の死んだ後は、人を殺した者は自分の所有の地にかえるこ
とができる。
二九これらのことはすべてあなたがたの住む所で、代々あなたがたのため
のおきての定めとしなければならない。三〇人を殺した者、すなわち故殺人
はすべて証人の証言にしたがって殺されなければならない。しかし、だ
れもただひとりの証言によって殺されることはない。三一あなたがたは死
に当る罪を犯した故殺人の命のあがないしろを取ってはならない。彼は
必ず殺されなければならない。三二また、のがれの町にのがれた者のた
めに、あがないしろを取って大祭司の死ぬ前に彼を自分の地に帰り住まわ
せてはならない。三三あなたがたはそのおる所の地を汚してはならない。

流血は地を汚すからである。地の上に流された血は、それを流した者の
血によらなければあがなうことができない。三四あなたがたは、その住む
所の地、すなわちわたしのおる地を汚してはならない。主なるわたしがイ
スラエルの人々のうちに住んでいるからである」。

第三六章一ヨセフの子孫の氏族のうち、マナセの子マキルの子であるギレ
アデの子らの氏族のかしらたちがきて、モーセとイスラエルの人々のかし
らであるつかさたちとの前で語って、二言った、「イスラエルの人々に、そ
の嗣業の地をくじによって与えることを主はあなたに命じられ、あなた
もまた、われわれの兄弟ゼロペハデの嗣業を、その娘たちに与えるよ
う、主によって命じられました。三その娘たちがもし、イスラエルの人々
のうちの他の部族のむすこたちにとつぐならば、彼女たちの嗣業は、わ
れわれの父祖の嗣業のうちから取り除かれて、そのとつぐ部族の嗣業に

加えられるでしょう。こうしてそれはわれわれの嗣業の分から取り除か
れるでしょう。四そしてイスラエルの人々のヨベルの年がきた時、彼女た
ちの嗣業は、そのとついだ部族の嗣業に加えられるでしょう。こうして
彼女たちの嗣業は、われわれの父祖の部族の嗣業のうちから取り除かれ
るでしょう」。
五モーセは主の言葉にしたがって、イスラエルの人々に命じて言った、
「ヨセフの子孫の部族の言うところは正しい。六ゼロペハデの娘たちにつ
いて、主が命じられたことはこうである。すなわち『彼女たちはその心に
かなう者にとついでもよいが、ただその父祖の部族の一族にのみ、とつがな
ければならない。七そうすればイスラエルの人々の嗣業は、部族から部族
に移るようなことはないであろう。イスラエルの人々は、おのおのその父祖
の部族の嗣業をかたく保つべきだからである。八イスラエルの人々の部族

のうち、嗣業(しぎょう)をもっている娘(むすめ)はみな、その父(ちち)の部族(ぶぞく)に属(ぞく)する一族(いちぞく)にとつ
がなければならない。そうすればイスラエルの人々(ひとびと)は、おのおのその父祖(ふそ)
の嗣業(しぎょう)を保(たも)つことができる。九こうして嗣業(しぎょう)は一つの部族(ぶぞく)から他(た)の部族(ぶぞく)
に移(うつ)ることはなかろう。イスラエルの人々(ひとびと)の部族(ぶぞく)はおのおのその嗣業(しぎょう)を
かたく保(たも)つべきだからである』。

一〇そこでゼロペハデの娘(むすめ)たちは、主(しゅ)がモーセに命(めい)じられたようにした。
一一すなわちゼロペハデの娘(むすめ)たち、マアラ、テルザ、ホグラ、ミルカおよび
ノアは、その父(ちち)の兄弟(きょうだい)のむすこたちにとついだ。一二彼女(かのじょ)たちはヨセフの
子(こ)マナセのむすこたちの一族(いちぞく)にとついだので、その嗣業(しぎょう)はその父(ちち)の一族(いちぞく)
の属(ぞく)する部族(ぶぞく)にとどまった。

一三これらはエリコに近(ちか)いヨルダンのほとりのモアブの平野(へいや)で、主(しゅ)がモー
セによってイスラエルの人々(ひとびと)に命(めい)じられた命令(めいれい)とおきてである。

申命記

第一章
一これはヨルダンの向こうの荒野、パランと、トペル、ラバン、ハ
ゼロテ、デザハブとの間の、スフの前にあるアラバにおいて、モーセがイ
スラエルのすべての人に告げた言葉である。
二ホレブからセイル山の道を
経て、カデシ・バルネアに達するには、十一日の道のりである。
三第四十
年の十一月となり、その月の一日に、モーセはイスラエルの人々にむかっ
て、主が彼らのため彼に授けられた命令を、ことごとく告げた。
四これは
モーセがヘシボンに住んでいたアモリびとの王シホン、およびアシタロテと
エデレイとに住んでいたバシャンの王オグを殺した後であった。
五すなわ
ちモーセはヨルダンの向こうのモアブの地で、みずから、この律法の説明
に当った、そして言った、
六「われわれの神、主はホレブにおいて、われわ

れに言われた、『あなたがたはすでに久しく、この山にとどまっていたが、
七身をめぐらして道に進み、アモリびとの山地に行き、その近隣のすべて
の所、アラバ、山地、低地、ネゲブ、海べ、カナンびとの地、またレバノ
ンに行き、大川ユフラテにまで行きなさい。八見よ、わたしはこの地をあ
なたがたの前に置いた。この地にはいって、それを自分のものとしなさい。
これは主が、あなたがたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓って、彼
らとその後の子孫に与えると言われた所である』。
九あの時、わたしはあなたがたに言った、『わたしはひとりであなたがた
を負うことができない。一〇あなたがたの神、主はあなたがたを多くされた
ので、あなたがたは、きょう、空の星のように多い。一一――どうぞ、あな
たがたの先祖の神、主があなたがたを、今あるより千倍も多くし、またあ
なたがたに約束されたように、あなたがたを恵んでくださるように。――

一二わたしひとりで、どうして、あなたがたを負い、あなたがたの重荷と、あ
なたがたの争いを処理することができようか。一三あなたがたは、おのお
の部族ごとに、知恵があり、知識があって、人に知られている人々を選び
出しなさい。わたしはその人々を、あなたがたのかしらとするであろう』。
一四その時、あなたがたはわたしに答えた、『あなたがしようと言われるこ
とは良いことです』。一五そこで、わたしは、あなたがたのうちから、知恵
があり、人に知られている人々を取って、あなたがたのかしらとした。す
なわち千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長とし、また、あな
たがたの部族のつかさびととした。一六また、あのとき、わたしはあなたが
たのさばきびとたちに命じて言った、『あなたがたは、兄弟たちの間の
訴えを聞き、人とその兄弟、または寄留の他国人との間を、正しくさ
ばかなければならない。一七あなたがたは、さばきをする時、人を片寄り見

てはならない。小さい者にも大いなる者にも聞かなければならない。人の
顔を恐れてはならない。さばきは神の事だからである。あなたがたで決め
るのにむずかしい事は、わたしのところに持ってこなければならない。わ
たしはそれを聞くであろう』。一八わたしはまた、あの時、あなたがたがし
なければならないことを、ことごとく命じた。
一九われわれの神、主が命じられたように、われわれは、ホレブを出立
して、あなたがたが見た、あの大きな恐ろしい荒野を通り、アモリびとの
山地へ行く道によって、カデシ・バルネアにきた。二〇その時わたしはあな
たがたに言った、『あなたがたは、われわれの神、主がお与えになるアモリ
びとの山地に着いた。二一見よ、あなたの神、主はこの地をあなたの前に置
かれた。あなたの先祖の神、主が告げられたように、上って行って、これ
を自分のものとしなさい。恐れてはならない。おののいてはならない』。二二

二二あなたがたは皆わたしに近寄って言った、『われわれは人をさきにつかわ
して、その地を探らせ、どの道から上るべきか、どの町々に入るべきかを、
復命させましょう』。二三このことは良いと思ったので、わたしはあなたが
たのうち、おのおのの部族から、ひとりずつ十二人の者を選んだ。二四彼
らは身をめぐらして、山地に上って行き、エシコルの谷へ行ってそれを探
り、二五その地のくだものを手に取って、われわれのところに持って下り、
復命して言った、『われわれの神、主が賜わる地は良い地です』。
二六しかし、あなたがたは上って行くことを好まないで、あなたがたの神、
主の命令にそむいた。二七そして天幕でつぶやいて言った。『主はわれわれ
を憎んでアモリびとの手に渡し、滅ぼそうとしてエジプトの国から導き
出されたのだ。二八われわれはどこへ上って行くのか。兄弟たちは、「そ
の民はわれわれよりも大きくて、背も高い。町々は大きく、その石がきは

天に届いている。われわれは、またアナクびとの子孫をその所で見た」と
言って、われわれの心をくじいた』。二九その時、わたしはあなたがたに
言った、『彼らをこわがってはならない。また恐れてはならない。三〇先に
立って行かれるあなたがたの神、主はエジプトにおいて、あなたがたの目
の前で、すべてのことを行われたように、あなたがたのために戦われる
であろう。三一あなたがたはまた荒野で、あなたの神、主が、人のその子を
抱くように、あなたを抱かれるのを見た。あなたがたが、この所に来るま
で、その道すがら、いつもそうであった』。三二このように言っても、あな
たがたはなお、あなたがたの神、主を信じなかった。三三主は道々あなた
がたの先に立って行き、あなたがたが宿営する場所を捜し、夜は火のう
ちにあり、昼は雲のうちにあって、あなたがたに行くべき道を示された。
三四主は、あなたがたの言葉を聞いて怒り、誓って言われた、三五『この

悪い世代の人々のうちには、わたしが、あなたがたの先祖たちに与えると
誓ったあの良い地を見る者は、ひとりもないであろう。三六ただエフンネの
子カレブだけはそれを見ることができるであろう。彼が踏んだ地を、わた
しは彼とその子孫に与えるであろう。彼が全く主に従ったからである』。
三七主はまた、あなたがたのゆえに、わたしをも怒って言われた、『おまえ
もまた、そこにはいることができないであろう。三八おまえに仕えているヌ
ンの子ヨシュアが、そこにはいるであろう。彼を力づけよ。彼はイスラエ
ルにそれを獲させるであろう。三九またあなたがたが、かすめられるであろ
うと言ったあなたがたのおさなごたち、およびその日にまだ善悪をわきま
えないあなたがたの子供たちが、そこにはいるであろう。わたしはそれを
彼らに与える。彼らはそれを所有とするであろう。四〇あなたがたは身を
めぐらし、紅海の道によって、荒野に進んで行きなさい』。

四一しかし、あなたがたはわたしに答えて言った、『われわれは主にむかっ
て罪を犯しました。われわれの神、主が命じられたように、われわれは上っ
て行って戦いましょう』。そして、おのおの武器を身に帯びて、かるがる
しく山地へ上って行こうとした。四二その時、主はわたしに言われた、『彼
らに言いなさい、「あなたがたは上って行ってはならない。また戦っては
ならない。わたしはあなたがたのうちにいない。おそらく、あなたがたは
敵に撃ち敗られるであろう」』。四三このようにわたしが告げたのに、あな
たがたは聞かないで主の命令にそむき、ほしいままに山地へ上って行った
が、四四その山地に住んでいるアモリびとが、あなたがたに向かって出てき
て、はちが追うように、あなたがたを追いかけ、セイルで撃ち敗って、ホ
ルマにまで及んだ。四五あなたがたは帰ってきて、主の前で泣いたが、主
はあなたがたの声を聞かず、あなたがたに耳を傾けられなかった。四六こ

うしてあなたがたは、日久しくカデシにとどまった。あなたがたのそこに
とどまった日数のとおりである。

第二章一それから、われわれは身をめぐらし、主がわたしに告げられた
ように、紅海の方に向かって荒野に進み入り、日久しくセイル山を行きめ
ぐっていたが、二主はわたしに言われた、三『あなたがたは既に久しくこの
山を行きめぐっているが、身をめぐらして北に進みなさい。四おまえはま
た民に命じて言え、「あなたがたは、エサウの子孫、すなわちセイルに住ん
でいるあなたがたの兄弟の領内を通ろうとしている。彼らはあなたがた
を恐れるであろう。それゆえ、あなたがたはみずから深く慎み、五彼らと
争ってはならない。彼らの地は、足の裏で踏むほどでも、あなたがたに与
えないであろう。わたしがセイル山をエサウに与えて、領地とさせたから
である。六あなたがたは彼らから金で食物を買って食べ、また金で水を

買って飲まなければならない。七あなたの神、主が、あなたのするすべての
事において、あなたを恵み、あなたがこの大いなる荒野を通るのを、見守
られたからである。あなたの神、主がこの四十年の間、あなたと共にお
られたので、あなたは何も乏しいことがなかった』。八こうしてわれわれ
は、エサウの子孫でセイルに住んでいる兄弟を離れ、アラバの道を避け、
エラテとエジオン・ゲベルを離れて進んだ。
　われわれは転じて、モアブの荒野の方に向かって進んだ。九その時、主は
わたしに言われた、『モアブを敵視してはならない。またそれと争い戦っ
てはならない。彼らの地は、領地としてあなたに与えない。ロトの子孫に
アルを与えて、領地とさせたからである。一〇（むかし、エミびとがこの
所に住んでいた。この民は大いなる民であって、数も多く、アナクびと
のように背も高く、一一またアナクびとと同じくレパイムであると、みな

されていたが、モアブびとは、これをエミびとと呼んでいた。一二ホリびと
も、むかしはセイルに住んでいたが、エサウの子孫がこれを追い払い、これ
を滅ぼし、彼らに代ってそこに住んだ。主が賜わった所有の地に、イスラ
エルがおこなったのと同じである。）一三あなたがたは、いま、立ちあがっ
てゼレデ川を渡りなさい』。そこでわれわれはゼレデ川を渡った。一四カデ
シ・バルネアを出てこのかた、ゼレデ川を渡るまでの間の日は三十八年
であって、その世代のいくさびとはみな死に絶えて、宿営のうちにいなく
なった。主が彼らに誓われたとおりである。一五まことに主の手が彼らを
攻め、宿営のうちから滅ぼし去られたので、彼らはついに死に絶えた。
一六いくさびとがみな民のうちから死に絶えたとき、一七主はわたしに言
われた、一八『おまえは、きょう、モアブの領地アルを通ろうとしている。
一九アンモンの子孫に近づく時、おまえは彼らを敵視してはならない。ま

た争ってはならない。わたしはアンモンの子孫の地を領地として、おまえ
に与えない。それをロトの子孫に領地として与えたからである。二〇（こ
れもまたレパイムの国とみなされた。むかし、レパイムがここに住んでい
たからである。しかし、アンモンびとは彼らをザムズミびとと呼んだ。二一
この民は大いなる民であって数も多く、アナクびとのように背も高かった
が、主はアンモンびとの前から、これを滅ぼされ、アンモンびとがこれを
追い払って、彼らに代ってそこに住んだ。二二この事は、セイルに住んで
いるエサウの子孫のためにその前から、ホリびとを滅ぼされたのと同じで
ある。彼らはホリびとを追い払い、これに代って今日までそこに住んでい
る。二三またカフトルから出たカフトルびとは、ガザにまで及ぶ村々に住ん
でいたアビびとを滅ぼして、これに代ってそこに住んでいる。）二四あなた
がたは立ちあがり、進んでアルノン川を渡りなさい。わたしはヘシボンの

王アモリびとシホンとその国とを、おまえの手に渡した。それを征服し始
めよ。彼と争って戦え。二五きょうから、わたしは全天下の民に、おま
えをおびえ恐れさせるであろう。彼らはおまえのうわさを聞いて震え、お
まえのために苦しむであろう』。二六そこでわたしは、ケデモテの荒野から、
ヘシボンの王シホンに使者をつかわし、平和の言葉を述べさせた。二七『あ
なたの国を通らせてください。わたしは大路をとおっていきます、右にも
左にも曲りません。二八金で食物を売ってわたしに食べさせ、金をとっ
て水を与えてわたしに飲ませてください。徒歩で通らせてくださるだけで
よいのです。二九セイルに住むエサウの子孫と、アルに住むモアブびとが、
わたしにしたようにしてください。そうすれば、わたしはヨルダンを渡っ
て、われわれの神、主が賜わる地に行きます』。三〇しかし、ヘシボンの王
シホンは、われわれを通らせるのを好まなかった。あなたの神、主が彼を

あなたの手に渡すため、その気を強くし、その心をかたくなにされたから
である。今日見るとおりである。三一時に主はわたしに言われた、『わたし
はシホンと、その地とを、おまえに渡し始めた。おまえはそれを征服しは
じめ、その地を自分のものとせよ』。三二そこでシホンは、われわれを攻め
ようとして、その民をことごとく率い、出てきてヤハズで戦ったが、三三
われわれの神、主が彼を渡されたので、われわれは彼とその子らと、その
すべての民とを撃ち殺した。三四その時、われわれは彼のすべての町を取
り、そのすべての町の男、女および子供を全く滅ぼして、ひとりをも
残さなかった。三五ただその家畜は、われわれが取った町々のぶんどり物
と共に、われわれが獲て自分の物とした。三六アルノンの谷のほとりにあ
るアロエルおよび谷の中にある町からギレアデに至るまで、われわれが攻
めて取れなかった町は一つもなかった。われわれの神、主がことごとくわ

れわれに渡されたのである。三七ただアンモンの子孫の地、すなわちヤボク
川の全岸、および山地の町々、またすべてわれわれの神、主が禁じられた
所には近寄らなかった。

第三章一そしてわれわれは身をめぐらして、バシャンの道を上って行った
が、バシャンの王オグは、われわれを迎え撃とうとして、その民をことごと
く率い、出てきてエデレイで戦った。二時に主はわたしに言われた、『彼
を恐れてはならない。わたしは彼と、そのすべての民と、その地をおまえ
の手に渡している。おまえはヘシボンに住んでいたアモリびとの王シホン
にしたように、彼にするであろう』。三こうしてわれわれの神、主はバシャ
ンの王オグと、そのすべての民を、われわれの手に渡されたので、われわれ
はこれを撃ち殺して、ひとりをも残さなかった。四その時、われわれは彼
の町々を、ことごとく取った。われわれが取らなかった町は一つもなかっ

た。取った町は六十。アルゴブの全地方であって、バシャンにおけるオグ
の国である。五これらは皆、高い石がきがあり、門があり、貫の木のある
堅固な町であった。このほかに石がきのない町は、非常に多かった。六わ
れわれはヘシボンの王シホンにしたように、これらを全く滅ぼし、そのす
べての町の男、女および子供をことごとく滅ぼした。七ただし、そのす
べての家畜と、その町々からのぶんどり物とは、われわれが獲て自分の物
とした。八その時われわれはヨルダンの向こう側にいるアモリびとのふた
りの王の手から、アルノン川からヘルモン山までの地を取った。九（シド
ンびとはヘルモンをシリオンと呼び、アモリびとはこれをセニルと呼んで
いる。）一〇すなわち高原のすべての町、ギレアデの全地、バシャンの全地、
サルカおよびエデレイまで、バシャンにあるオグの国の町々をことごとく
取った。一一（バシャンの王オグはレパイムのただひとりの生存者であっ

た。彼の寝台は鉄の寝台であった。これは今なおアンモンびとのラバにあ
るではないか。これは普通のキュビト尺で、長さ九キュビト、幅四キュ
ビトである。）
一二その時われわれは、この地を獲た。そしてわたしはアルノン川のほ
とりのアロエルから始まる地と、ギレアデの山地の半ばと、その町々とは、
ルベンびとと、ガドびととに与えた。一三わたしはまたギレアデの残りの地
と、オグの国であったバシャンの全地とは、マナセの半部族に与えた。す
なわちアルゴブの全地方である。（そのバシャンの全地はレパイムの国と
唱えられる。一四マナセの子ヤイルは、アルゴブの全地方を取って、ゲシュ
ルびとと、マアカびとの境にまで達し、自分の名にしたがって、バシャン
をハボテ・ヤイルと名づけた。この名は今日にまでおよんでいる。）一五ま
たわたしはマキルにはギレアデを与えた。一六ルベンびとと、ガドびととに

は、ギレアデからアルノン川までを与え、その川のまん中をもって境と
し、またアンモンびとの境であるヤボク川にまで達せしめた。一七またヨ
ルダンを境として、キンネレテからアラバの海すなわち塩の海まで、アラ
バをこれに与えて、東の方ピスガのふもとに達せしめた。
一八その時わたしはあなたがたに命じて言った、『あなたがたの神、主は
この地をあなたがたに与えて、これを獲させられるから、あなたがた勇士
はみな武装して、兄弟であるイスラエルの人々に先立って、渡って行か
なければならない。一九ただし、あなたがたの妻と、子供と、家畜とは、わ
たしが与えた町々にとどまらなければならない。（わたしはあなたがたが
多くの家畜を持っているのを知っている。）二〇主がすでにあなたがたに与
えられたように、あなたがたの兄弟にも安息を与えられて、彼らもまた
ヨルダンの向こう側で、あなたがたの神、主が与えられる地を獲るように

なったならば、あなたがたはおのおのわたしがあなたがたに与えた領地に
帰ることができる』。二一その時わたしはヨシュアに命じて言った、『あな
たの目はあなたがたの神、主がこのふたりの王に行われたすべてのこと
を見た。主はまたあなたがたが渡って行くもろもろの国にも、同じように行
われるであろう。二二彼らを恐れてはならない。あなたがたの神、主があ
なたがたのために戦われるからである』。
二三その時わたしは主に願って言った、二四『主なる神よ、あなたの大い
なる事と、あなたの強い手とを、たった今、しもべに示し始められました。
天にも地にも、あなたのようなわざをなし、あなたのような力あるわざの
できる神が、ほかにありましょうか。二五どうぞ、わたしにヨルダンを渡っ
て行かせ、その向こう側の良い地、あの良い山地、およびレバノンを見る
ことのできるようにしてください』。二六しかし主はあなたがたのゆえにわ

たしを怒り、わたしに聞かれなかった。そして主はわたしに言われた、『お
まえはもはや足りている。この事については、重ねてわたしに言ってはな
らない。二七おまえはピスガの頂に登り、目をあげて西、北、南、東
を望み見よ。おまえはこのヨルダンを渡ることができないからである。二
八しかし、おまえはヨシュアに命じ、彼を励まし、彼を強くせよ。彼はこ
の民に先立って渡って行き、彼らにおまえの見る地を継がせるであろう』。
二九こうしてわれわれはベテペオルに対する谷にとどまっていた。

第四章一イスラエルよ、いま、わたしがあなたがたに教える定めと、お
きてとを聞いて、これを行いなさい。そうすれば、あなたがたは生きるこ
とができ、あなたがたの先祖の神、主が賜わる地にはいって、それを自分
のものとすることができよう。二わたしがあなたがたに命じる言葉に付け
加えてはならない。また減らしてはならない。わたしが命じるあなたがた

の神、主の命令を守ることのできるためである。三あなたがたの目は、主
がバアル・ペオルで行われたことを見た。ペオルのバアルに従った人々
は、あなたの神、主がことごとく、あなたのうちから滅ぼしつくされたので
ある。四しかし、あなたがたの神、主につき従ったあなたがたは皆、きょ
う、生きながらえている。五わたしはわたしの神、主が命じられたとおり
に、定めと、おきてとを、あなたがたに教える。あなたがたはいって、
自分のものとする地において、そのように行うためである。六あなたがた
は、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなた
がたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞
いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言
うであろう。
七われわれの神、主は、われわれが呼び求める時、つねにわれわれに近

くおられる。いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであ
ろうか。八また、いずれの大いなる国民に、きょう、わたしがあなたがた
の前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるで
あろうか。
九ただあなたはみずから慎み、またあなた自身をよく守りなさい。そし
て目に見たことを忘れず、生きながらえている間、それらの事をあなたの
心から離してはならない。またそれらのことを、あなたの子孫に知らせな
ければならない。一〇あなたがホレブにおいて、あなたの神、主の前に立っ
た日に、主はわたしに言われた、『民をわたしのもとに集めよ。わたしは
彼らにわたしの言葉を聞かせ、地上に生きながらえる間、彼らにわたし
を恐れることを学ばせ、またその子供を教えることのできるようにさせよ
う』。一一そこであなたがたは近づいて、山のふもとに立ったが、山は火で

焼けて、その炎は中天に達し、暗黒と雲と濃い雲とがあった。一二時に
主は火の中から、あなたがたに語られたが、あなたがたは言葉の声を聞い
たけれども、声ばかりで、なんの形も見なかった。一三主はその契約を述
べて、それを行うように、あなたがたに命じられた。それはすなわち十誡
であって、主はそれを二枚の石の板に書きしるされた。一四その時、主は
わたしに命じて、あなたがたに定めと、おきてとを教えさせられた。あな
たがたが渡って行って自分のものとする地で、行わせるためであった。
一五それゆえ、あなたがたはみずから深く慎まなければならない。ホレ
ブで主が火の中からあなたがたに語られた日に、あなたがたはなんの形も
見なかった。一六それであなたがたは道を誤って、自分のために、どんな
形の刻んだ像をも造ってはならない。男または女の像を造ってはなら
ない。一七すなわち地の上におるもろもろの獣の像、空を飛ぶもろもろの

鳥の像、一八地に這うもろもろの物の像、地の下の水の中におるもろもろ
の魚の像を造ってはならない。一九あなたはまた目を上げて天を望み、日、
月、星すなわちすべて天の万象を見、誘惑されてそれを拝み、それに仕
えてはならない。それらのものは、あなたの神、主が全天下の万民に分け
られたものである。二〇しかし、主はあなたがたを取って、鉄の炉すなわち
エジプトから導き出し、自分の所有の民とされた。きょう、見るとおり
である。二一ところで主はあなたがたのゆえに、わたしを怒り、わたしが
ヨルダンを渡って行くことができないことと、あなたの神、主が嗣業と
してあなたに賜わる良い地にはいることができないこととを誓われた。二
二わたしはこの地で死ぬ。ヨルダンを渡って行くことはできない。しかし
あなたがたは渡って行って、あの良い地を獲るであろう。二三あなたがたは
慎み、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れて、あな

たの神、主が禁じられたどんな形の刻んだ像をも造ってはならない。二
四あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である。
二五あなたがたが子を生み、孫を得、長くその地におるうちに、道を誤っ
て、すべて何かの形に刻んだ像を造り、あなたの神、主の目の前に悪を
なして、その憤りを引き起すことがあれば、二六わたしは、きょう、天
と地を呼んであなたがたに対してあかしとする。あなたがたはヨルダンを
渡って行って獲る地から、たちまち全滅するであろう。あなたがたはその
所で長く命を保つことができず、全く滅ぼされるであろう。二七主は
あなたがたを国々に散らされるであろう。そして主があなたがたを追いや
られる国民のうちに、あなたがたの残る者の数は少ないであろう。二八そ
の所であなたがたは人が手で作った、見ることも、聞くことも、食べるこ
とも、かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう。二九しかし、その

所からあなたの神、主を求め、もし心をつくし、精神をつくして、主を
求めるならば、あなたは主に会うであろう。三〇後の日になって、あなたが
なやみにあい、これらのすべての事が、あなたに臨むとき、もしあなたの
神、主に立ち帰ってその声に聞きしたがうならば、三一あなたの神、主は
いつくしみの深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、ま
たあなたの先祖に誓った契約を忘れられないであろう。
三二試みにあなたの前に過ぎ去った日について問え。神が地上に人を
造られた日からこのかた、天のこの端から、かの端までに、かつてこのよう
に大いなる事があったであろうか。このようなことを聞いたことがあった
であろうか。三三火の中から語られる神の声をあなたが聞いたように、聞
いてなお生きていた民がかつてあったであろうか。三四あるいはまた、あな
たがたの神、主がエジプトにおいて、あなたがたの目の前に、あなたがたの

ためにもろもろの事をなされたように、試みと、しるしと、不思議と、戦
いと、強い手と、伸ばした腕と、大いなる恐るべき事とをもって臨み、一
つの国民を他の国民のうちから引き出して、自分の民とされた神が、かつ
てあったであろうか。三五あなたにこの事を示したのは、主こそ神であっ
て、ほかに神のないことを知らせるためであった。三六あなたを訓練する
ために、主は天からその声を聞かせ、地上では、またその大いなる火を示
された。あなたはその言葉が火の中から出るのを聞いた。三七主はあなた
の先祖たちを愛されたので、その後の子孫を選び、大いなる力をもって、
みずからあなたをエジプトから導き出し、三八あなたよりも大きく、かつ
強いもろもろの国民を、あなたの前から追い払い、あなたをその地に導
き入れて、これを嗣業としてあなたに与えようとされること、今日見ると
おりである。三九それゆえ、あなたは、きょう知って、心にとめなければ

ならない。上は天、下は地において、主こそ神にいまし、ほかに神のない
ことを。四〇あなたは、きょう、わたしが命じる主の定めと命令とを守ら
なければならない。そうすれば、あなたとあなたの後の子孫はさいわいを
得、あなたの神、主が永久にあなたに賜わる地において、長く命を保つ
ことができるであろう」。

四一それからモーセはヨルダンの向こう側、東の方に三つの町々を指定
した。四二過去の恨みによるのではなく、あやまって隣人を殺した者をそ
こにのがれさせ、その町の一つにのがれて、命を全うさせるためであっ
た。四三すなわちルベンびとのためには荒野の中の高地にあるベゼルを、ガ
ドびとのためにはギレアデのラモテを、マナセびとのためにはバシャンの
ゴランを定めた。

四四モーセがイスラエルの人々の前に示した律法はこれである。四五イ
スラエルの人々がエジプトから出たとき、モーセが彼らに述べたあかしと、

定めと、おきてとはこれである。四六すなわちヨルダンの向こう側、アモ
リびとの王シホンの国のベテペオルに対する谷においてこれを述べた。シ
ホンはヘシボンに住んでいたが、モーセとイスラエルの人々が、エジプト
を出てきた時、これを撃ち敗って、四七その国を獲、またバシャンの王オ
グの国を獲た。このふたりはアモリびとの王であって、ヨルダンの向こう
側、東の方におった。四八彼らの獲た地はアルノン川のほとりにあるアロ
エルからシリオン山すなわちヘルモンに及び、四九ヨルダンの東側のアラ
バの全部をかねて、アラバの海に達し、ピスガのふもとに及んだ。

第五章一さてモーセはイスラエルのすべての人を召し寄せて言った、「イ
スラエルよ、きょう、わたしがあなたがたの耳に語る定めと、おきてを聞き、
これを学び、これを守って行え。二われわれの神、主はホレブで、われわ
れと契約を結ばれた。三主はこの契約をわれわれの先祖たちとは結ばず、

きょう、ここに生きながらえているわれわれすべての者と結ばれた。四主
は山で火の中から、あなたがたと顔を合わせて語られた。五その時、わた
しは主とあなたがたとの間に立って主の言葉をあなたがたに伝えた。あ
なたがたは火のゆえに恐れて山に登ることができなかったからである。主
は言われた、

六『わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の
家から導き出した者である。

七あなたはわたしのほかに何ものをも神としてはならない。

八あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるも
の、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの、どのような形
をも造ってはならない。九それを拝んではならない。またそれに仕えては
ならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたし

を憎むものには、父の罪を子に報いて三、四代に及ぼし、一〇わたしを愛
し、わたしの戒めを守る者には恵みを施して千代に至るであろう。
一一あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。主はその名をみ
だりに唱える者を罰しないではおかないであろう。
一二安息日を守ってこれを聖とし、あなたの神、主があなたに命じられ
たようにせよ。一三六日のあいだ働いて、あなたのすべてのわざをしなけ
ればならない。一四七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざ
をもしてはならない。あなたも、あなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、
牛、ろば、もろもろの家畜も、あなたの門のうちにおる他国の人も同じで
ある。こうしてあなたのしもべ、はしためを、あなたと同じように休ませな
ければならない。一五あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あな
たの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出

されたことを覚(おぼ)えなければならない。それゆえ、あなたの神(かみ)、主(しゅ)は安息日(あんそくにち)を守(まも)ることを命(めい)じられるのである。

一六あなたの神(かみ)、主(しゅ)が命(めい)じられたように、あなたの父(ちち)と母(はは)とを敬(うやま)え。あなたの神(かみ)、主(しゅ)が賜(たま)わる地(ち)で、あなたが長(なが)く命(いのち)を保(たも)ち、さいわいを得(え)ることのできるためである。

一七あなたは殺(ころ)してはならない。

一八あなたは姦淫(かんいん)してはならない。

一九あなたは盗(ぬす)んではならない。

二〇あなたは隣人(りんじん)について偽証(ぎしょう)してはならない。

二一あなたは隣人(りんじん)の妻(つま)をむさぼってはならない。また隣人(りんじん)の家(いえ)、畑(はたけ)、しもべ、はしため、牛(うし)、ろば、またすべて隣人(りんじん)のものをほしがってはならない』。

二二主(しゅ)はこれらの言葉(ことば)を山(やま)で火(ひ)の中(なか)、雲(くも)の中(なか)、濃(こ)い雲(くも)の中(なか)から、大(おお)いな

る声をもって、あなたがたの全会衆にお告げになったが、このほかのこ
とは言われず、二枚の石の板にこれを書きしるして、わたしに授けられた。
二三時に山は火で燃えていたが、あなたがたが暗黒のうちから聞える声を
聞くに及んで、あなたがたの部族のすべてのかしらと長老たちは、わたし
に近寄って、二四言った、『われわれの神、主がその栄光と、その大いなるこ
とを、われわれに示されて、われわれは火の中から出るその声を聞きま
した。きょう、われわれは神が人と語られ、しかもなおその人が生きてい
るのを見ました。二五われわれはなぜ死ななければならないでしょうか。こ
の大いなる火はわれわれを焼き滅ぼそうとしています。もしこの上なおわ
れわれの神、主の声を聞くならば、われわれは死んでしまうでしょう。二六
およそ肉なる者のうち、だれが、火の中から語られる生ける神の声を、わ
れわれのように聞いてなお生きている者がありましょうか。二七あなたはど

うぞ近く進んで行って、われわれの神、主が言われることをみな聞き、わ
れわれの神、主があなたにお告げになることをすべてわれわれに告げてく
ださい。われわれは聞いて行います』。
二八あなたがたがわたしに語っている時、主はあなたがたの言葉を聞い
て、わたしに言われた、『わたしはこの民がおまえに語っている言葉を聞い
た。彼らの言ったことはみな良い。二九ただ願わしいことは、彼らがつね
にこのような心をもってわたしを恐れ、わたしのすべての命令を守って、
彼らもその子孫も永久にさいわいを得るにいたることである。三〇おまえ
は行って彼らに、「あなたがたはおのおのその天幕に帰れ」と言え。三一し
かし、おまえはこの所でわたしのそばに立て。わたしはすべての命令と、
定めと、おきてとをおまえに告げ示すであろう。おまえはこれを彼らに教
え、わたしが彼らに与えて獲させる地において、これを行わせなければな

らない』。三二それゆえ、あなたがたの神、主が命じられたとおりに、慎
んで行わなければならない。そして左にも右にも曲ってはならない。三
三あなたがたの神、主が命じられた道に歩まなければならない。そうすれ
ばあなたがたは生きることができ、かつさいわいを得て、あなたがたの獲
る地において、長く命を保つことができるであろう。

第六章一これはあなたがたの神、主があなたがたに教えよと命じられた
命令と、定めと、おきてであって、あなたがたは渡って行って獲る地で、こ
れを行わなければならない。二これはあなたが子や孫と共に、あなたの生
きながらえる日の間、つねにあなたの神、主を恐れて、わたしが命じる
もろもろの定めと、命令とを守らせるため、またあなたが長く命を保つ
ことのできるためである。三それゆえ、イスラエルよ、聞いて、それを守り
行え。そうすれば、あなたはさいわいを得、あなたの先祖の神、主があな

たに言われたように、乳と蜜の流れる国で、あなたの数は大いに増すであ
ろう。
四イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。五あなたは
心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなけ
ればならない。六きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなた
の心に留め、七努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座してい
る時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなけれ
ばならない。八またあなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなた
の目の間に置いて覚えとし、九またあなたの家の入口の柱と、あなたの
門とに書きしるさなければならない。
一〇あなたの神、主は、あなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに向かっ
て、あなたに与えると誓われた地に、あなたをはいらせられる時、あなたが

建てたものでない大きな美しい町々を得させ、一一あなたが満たしたもの
でないもろもろの良い物を満たした家を得させ、あなたが掘ったものでな
い掘り井戸を得させ、あなたが植えたものでないぶどう畑とオリブの畑
とを得させられるであろう。あなたは食べて飽きるであろう。一二その時、
あなたはみずから慎み、エジプトの地、奴隷の家から導き出された主を
忘れてはならない。一三あなたの神、主を恐れてこれに仕え、その名をさ
して誓わなければならない。一四あなたがたは他の神々すなわち周囲の民
の神々に従ってはならない。一五あなたのうちにおられるあなたの神、主
はねたむ神であるから、おそらく、あなたに向かって怒りを発し、地のお
もてからあなたを滅ぼし去られるであろう。

一六あなたがたがマッサでしたように、あなたがたの神、主を試みては
ならない。一七あなたがたの神、主があなたがたに命じられた命令と、あ

かしと、定めとを、努めて守らなければならない。一八あなたは主が見て
正しいとし、良いとされることを行わなければならない。そうすれば、あ
なたはさいわいを得、かつ主があなたの先祖に誓われた、あの良い地には
いって、自分のものとすることができるであろう。一九また主が仰せられた
ように、あなたの敵を皆あなたの前から追い払われるであろう。
二〇後の日となって、あなたの子があなたに問うて言うであろう、『われ
われの神、主があなたがたに命じられたこのあかしと、定めと、おきてと
は、なんのためですか』。二一その時あなたはその子に言わなければならな
い。『われわれはエジプトでパロの奴隷であったが、主は強い手をもって、
われわれをエジプトから導き出された。二二主はわれわれの目の前で、大
きな恐ろしいしるしと不思議とをエジプトと、パロとその全家とに示され、
二三われわれをそこから導き出し、かつてわれわれの先祖に誓われた地に

はいらせ、それをわれわれに賜わった。二四そして主はこのすべての定めを
行えと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われ
われが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわれを守っ
て命を保たせるためである。二五もしわれわれが、命じられたとおりに、
このすべての命令をわれわれの神、主の前に守って行うならば、それは
われわれの義となるであろう』。

第七章一あなたの神、主が、あなたの行って取る地にあなたを導き入れ、
多くの国々の民、ヘテびと、ギルガシびと、アモリびと、カナンびと、ペリ
ジびと、ヒビびと、およびエブスびと、すなわちあなたよりも数多く、また
力のある七つの民を、あなたの前から追いはらわれる時、二すなわちあな
たの神、主が彼らをあなたに渡して、これを撃たせられる時は、あなたは
彼らを全く滅ぼさなければならない。彼らとなんの契約をもしてはなら

ない。彼らに何のあわれみをも示してはならない。三また彼らと婚姻をし
てはならない。あなたの娘を彼のむすこに与えてはならない。かれの娘
をあなたのむすこにめとってはならない。四それは彼らがあなたのむすこ
を惑わしてわたしに従わせず、ほかの神々に仕えさせ、そのため主はあ
なたがたにむかって怒りを発し、すみやかにあなたがたを滅ぼされること
となるからである。五むしろ、あなたがたはこのように彼らに行わなけれ
ばならない。すなわち彼らの祭壇をこぼち、その石の柱を撃ち砕き、そ
のアシラ像を切り倒し、その刻んだ像を火で焼かなければならない。
六あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のお
もてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。七
主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民
よりも数が多かったからではない。あなたがたはよろずの民のうち、もっ

とも数の少ないものであった。八ただ主があなたがたを愛し、またあなた
がたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもってあなたが
たを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手から、あがない出さ
れたのである。九それゆえあなたは知らなければならない。あなたの神、主
は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者に
は、契約を守り、恵みを施して千代に及び、一〇また彼を憎む者には、め
いめいに報いて滅ぼされることを。主は自分を憎む者には猶予することな
く、めいめいに報いられる。一一それゆえ、きょうわたしがあなたに命じる
命令と、定めと、おきてとを守って、これを行わなければならない。
一二あなたがたがこれらのおきてを聞いて守り行うならば、あなたの神、
主はあなたの先祖たちに誓われた契約を守り、いつくしみを施されるで
あろう。一三あなたを愛し、あなたを祝福し、あなたの数を増し、あなた

に与えると先祖たちに誓われた地で、あなたの子女を祝福し、あなたの地
の産物、穀物、酒、油、また牛の子、羊の子を増されるであろう。一四あ
なたは万民にまさって祝福されるであろう。あなたのうち、男も女も
子のないものはなく、またあなたの家畜にも子のないものはないであろう。
一五主はまたすべての病をあなたから取り去り、あなたの知っている、あ
のエジプトの悪疫にかからせず、ただあなたを憎むすべての者にそれを臨
ませられるであろう。一六あなたの神、主があなたに渡される国民を滅ぼ
しつくし、彼らを見てあわれんではならない。また彼らの神々に仕えては
ならない。それがあなたのわなとなるからである。
一七あなたは心のうちで『これらの国民はわたしよりも多いから、どう
してこれを追い払うことができようか』と言うのか。一八彼らを恐れては
ならない。あなたの神、主がパロと、すべてのエジプトびとになされたこ

とを、よく覚えなさい。一九すなわち、あなたが目で見た大いなる試みと、
しるしと、不思議と、強い手と、伸ばした腕とを覚えなさい。あなたの神、
主はこれらをもって、あなたを導き出されたのである。またそのように、
あなたの神、主はあなたが恐れているすべての民にされるであろう。二〇
あなたの神、主はまた、くまばちを彼らのうちに送って、なお残っている
者と逃げ隠れている者を滅ぼしつくされるであろう。二一あなたは彼らを
恐れてはならない。あなたの神、主である大いなる恐るべき神があなたの
うちにおられるからである。二二あなたの神、主はこれらの国民を徐々に
あなたの前から追い払われるであろう。あなたはすみやかに彼らを滅ぼし
つくしてはならない。そうでなければ、野の獣が増してあなたを害するで
あろう。二三しかし、あなたの神、主は彼らをあなたに渡し、大いなる混乱
におとしいれて、ついに滅ぼされるであろう。二四また彼らの王たちをあな

たの手に渡されるであろう。あなたは彼らの名を天の下から消し去るであ
ろう。あなたに立ちむかうものはなく、あなたはついに彼らを滅ぼすにい
たるであろう。二五あなたは彼らの神々の彫像を火に焼かなければならな
い。それに着せた銀または金をむさぼってはならない。これを取って自分
のものにしてはならない。そうでなければ、あなたはこれによって、わな
にかかるであろう。これはあなたの神が忌みきらわれるものだからである。
二六あなたは忌むべきものを家に持ちこんで、それと同じようにあなた自身
も、のろわれたものとなってはならない。あなたはそれを全く忌みきらわ
なければならない。それはのろわれたものだからである。

第八章一わたしが、きょう、命じるこのすべての命令を、あなたがたは
守って行わなければならない。そうすればあなたがたは生きることがで
き、かつふえ増し、主があなたがたの先祖に誓われた地にはいって、それ
を自分のものとすることができるであろう。二あなたの神、主がこの四十

年の間、荒野であなたを導かれたそのすべての道を覚えなければならな
い。それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、
あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。三それで主はあ
なたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも
知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生き
ず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることをあなたに知
らせるためであった。四この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あ
なたの足は、はれなかった。五あなたはまた人がその子を訓練するように、
あなたの神、主もあなたを訓練されることを心にとめなければならない。
六あなたの神、主の命令を守り、その道に歩んで、彼を恐れなければなら
ない。七それはあなたの神、主があなたを良い地に導き入れられるからで
ある。そこは谷にも山にもわき出る水の流れ、泉、および淵のある地、八

小麦、大麦、ぶどう、いちじく及びざくろのある地、油のオリブの木、お
よび蜜のある地、九あなたが食べる食物に欠けることなく、なんの乏しい
こともない地である。その地の石は鉄であって、その山からは銅を掘り取
ることができる。一〇あなたは食べて飽き、あなたの神、主がその良い地を
賜わったことを感謝するであろう。

一一あなたは、きょう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを
守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならな
い。一二あなたは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、一三また牛や羊が
ふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、一四おそらく心にたか
ぶり、あなたの神、主を忘れるであろう。主はあなたをエジプトの地、奴隷
の家から導き出し、一五あなたを導いて、あの大きな恐ろしい荒野、すな
わち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地を通り、あなたのた

めに堅い岩から水を出し、一六先祖たちも知らなかったマナを荒野であなた
に食べさせられた。それはあなたを苦しめ、あなたを試みて、ついにはあ
なたをさいわいにするためであった。一七あなたは心のうちに『自分の力
と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言ってはならない。一八
あなたはあなたの神、主を覚えなければならない。主はあなたの先祖たち
に誓われた契約を今日のように行うために、あなたに富を得る力を与
えられるからである。一九もしあなたの神、主を忘れて他の神々に従い、
これに仕え、これを拝むならば、――わたしは、きょう、あなたがたに警告
する。――あなたがたはきっと滅びるであろう。二〇主があなたがたの前
から滅ぼし去られる国々の民のように、あなたがたも滅びるであろう。あ
なたがたの神、主の声に従わないからである。

第九章一イスラエルよ、聞きなさい。あなたは、きょう、ヨルダンを渡っ

て行って、あなたよりも大きく、かつ強い国々を取ろうとしている。その
町々は大きく、石がきは天に達している。二その民は、あなたの知ってい
るアナクびとの子孫であって、大きく、また背が高い。あなたはまた『ア
ナクの子孫の前に、だれが立つことができようか』と人の言うのを聞いた。
三それゆえ、あなたは、きょう、あなたの神、主は焼きつくす火であって、
あなたの前に進まれることを知らなければならない。主は彼らを滅ぼし、
彼らをあなたの前に屈伏させられるであろう。主があなたに言われたよう
に、彼らを追い払い、すみやかに滅ぼさなければならない。
四あなたの神、主があなたの前から彼らを追い払われた後に、あなたは
心のなかで『わたしが正しいから主はわたしをこの地に導き入れてこれ
を獲させられた』と言ってはならない。この国々の民が悪いから、主はこ
れをあなたの前から追い払われるのである。五あなたが行ってその地を獲

るのは、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだから
でもない。この国々の民が悪いから、あなたの神、主は彼らをあなたの前
から追い払われるのである。これは主があなたの先祖アブラハム、イサク、
ヤコブに誓われた言葉を行われるためである。
六それであなたは、あなたの神、主があなたにこの良い地を与えてこれを
得させられるのは、あなたが正しいからではないことを知らなければなら
ない。あなたは強情な民である。七あなたは荒野であなたの神、主を怒
らせたことを覚え、それを忘れてはならない。あなたがたはエジプトの地
を出た日からこの所に来るまで、いつも主にそむいた。八またホレブにお
いてさえ、あなたがたが主を怒らせたので、主は怒ってあなたがたを滅ぼ
そうとされた。九わたしが石の板すなわち主があなたがたと結ばれた契約
の板を受けるために山に登った時、わたしは四十日四十夜、山にいて、パ

ンも食べず水も飲まなかった。一〇主は神の指をもって書きしるした石の
板二枚をわたしに授けられた。その上には、集会の日に主が山で火の中
から、あなたがたに告げられた言葉が、ことごとく書いてあった。一一すな
わち四十日四十夜が終った時、主はわたしにその契約の板である石の板
二枚を授け、一二そして主はわたしに言われた、『おまえは立って、すみや
かにこの所から降りなさい。おまえがエジプトから導き出した民は悪を
行ったからである。彼らはわたしが命じた道を早くも離れて、鋳た像を
自分たちのために造った』。
一三主はまたわたしに言われた、『この民を見るのに、これは強情な民で
ある。一四わたしを止めるな。わたしは彼らを滅ぼし、彼らの名を天の下か
ら消し去り、おまえを彼らよりも強く、かつ大いなる国民としよう』。一五
そこでわたしは身をめぐらして山を降りたが、山は火で焼けていた。契約

の板二枚はわたしの両手にあった。一六そしてわたしが見ると、あなたが
たは、あなたがたの神、主にむかって罪を犯し、自分たちのために鋳物の
子牛を造って、主が命じられた道を早くも離れたので、一七わたしはその
二枚の板をつかんで、両手から投げ出し、あなたがたの目の前でこれを砕
いた。一八そしてわたしは前のように四十日四十夜、主の前にひれ伏し、パ
ンも食べず、水も飲まなかった。これはあなたがたが主の目の前に悪をお
こない、罪を犯して主を怒らせたすべての罪によるのである。一九主は怒
りを発し、憤りを起し、あなたがたを怒って滅ぼそうとされたので、わ
たしは恐れたが、その時もまた主はわたしの願いを聞かれた。二〇主はま
た、はなはだしくアロンを怒って、彼を滅ぼそうとされたが、わたしはそ
の時もまたアロンのために祈った。二一わたしはあなたがたが造って罪を
得た子牛を取り、それを火で焼き、それを撃ち砕き、よくひいて細かいち

りとし、そのちりを山から流れ下る谷川に投げ捨てた。
二二あなたがたはタベラ、マッサおよびキブロテ・ハッタワにおいてもま
た主を怒らせた。二三また主はカデシ・バルネアから、あなたがたをつかわ
そうとされた時、『上って行って、わたしが与える地を占領せよ』と言わ
れた。ところが、あなたがたはあなたがたの神、主の命令にそむき、彼を
信ぜず、また彼の声に聞き従わなかった。二四わたしがあなたがたを知っ
たその日からこのかた、あなたがたはいつも主にそむいた。
二五そしてわたしは、さきにひれ伏したように、四十日四十夜、主の前
にひれ伏した。主があなたがたを滅ぼすと言われたからである。二六わた
しは主に祈って言った、『主なる神よ、あなたが大いなる力をもってあが
ない、強い手をもってエジプトから導き出されたあなたの民、あなたの
嗣業を滅ぼさないでください。二七あなたのしもべアブラハム、イサク、

ヤコブを覚えてください。この民の強情と悪と罪とに目をとめないでく
ださい。二八あなたがわれわれを導き出された国の人はおそらく、「主は、
約束した地に彼らを導き入れることができず、また彼らを憎んだので、彼
らを導き出して荒野で殺したのだ」と言うでしょう。二九しかし彼らは、
あなたの民、あなたの嗣業であって、あなたが大いなる力と伸ばした腕
とをもって導き出されたのです』。
第一〇章一その時、主はわたしに言われた、『おまえは、前のような石の
板二枚を切って作り、山に登って、わたしのもとにきなさい。また木の箱
一つを作りなさい。二さきにおまえが砕いた二枚の板に書いてあった言葉
を、わたしはその板に書きしるそう。おまえはそれをその箱におさめなけれ
ばならない』。三そこでわたしはアカシヤ材の箱一つを作り、また前のよう
な石の板二枚を切って作り、その二枚の板を手に持って山に登った。四主

はかつて、かの集会の日に山で火の中からあなたがたに告げられた十誡
を書きしるされたように、その板に書きしるし、それを主はわたしに授け
られた。五それでわたしは身をめぐらして山から降り、その板を、わたし
が作った箱におさめた。今なおその中にある。主がわたしに命じられたと
おりである。
六（こうしてイスラエルの人々はベエロテ・ベネ・ヤカンを出立してモ
セラに着いた。アロンはその所で死んでそこに葬られ、その子エレアザ
ルが彼に代って祭司となった。七またそこを出立してグデゴダに至り、グ
デゴダを出立してヨテバタに着いた。この地には多くの水の流れがあっ
た。八その時、主はレビの部族を選んで、主の契約の箱をかつぎ、主の前
に立って仕え、また主の名をもって祝福することをさせられた。この事
は今日に及んでいる。九そのためレビは兄弟たちと一緒には分け前がな

く、嗣業もない。あなたの神、主が彼に言われたとおり、主みずからが
彼の嗣業であった。）
一〇わたしは前の時のように四十日四十夜、山におったが、主はその時に
もわたしの願いを聞かれた。主はあなたを滅ぼすことを望まれなかった。
一一そして主はわたしに『おまえは立ちあがり、民に先立って進み行き、わ
たしが彼らに与えると、その先祖に誓った地に彼らをはいらせ、それを取
らせよ』と言われた。
一二イスラエルよ、今、あなたの神、主があなたに求められる事はなんで
あるか。ただこれだけである。すなわちあなたの神、主を恐れ、そのすべて
の道に歩んで、彼を愛し、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主に
仕え、一三また、わたしがきょうあなたに命じる主の命令と定めとを守っ
て、さいわいを得ることである。一四見よ、天と、もろもろの天の天、およ

び地と、地にあるものとはみな、あなたの神、主のものである。一五そうで
あるのに、主はただあなたの先祖たちを喜び愛し、その後の子孫であるあ
なたがたを万民のうちから選ばれた。今日見るとおりである。一六それゆ
え、あなたがたは心に割礼をおこない、もはや強情であってはならない。
一七あなたがたの神である主は、神の神、主の主、大いにして力ある恐る
べき神にましまし、人をかたより見ず、まいないを取らず、一八みな
し子とやもめのために正しいさばきを行い、また寄留の他国人を愛して、
食物と着物を与えられるからである。一九それゆえ、あなたがたは寄留
の他国人を愛しなさい。あなたがたもエジプトの国で寄留の他国人であっ
た。二〇あなたの神、主を恐れ、彼に仕え、彼に従い、その名をさして誓
わなければならない。二一彼はあなたのさんびすべきもの、またあなたの神
であって、あなたが目に見たこれらの大いなる恐るべき事を、あなたのた

めに行われた。二二あなたの先祖たちは、わずか七十人でエジプトに下っ
たが、いま、あなたの神、主はあなたを天の星のように多くされた。

第一一章 一それゆえ、あなたの神、主を愛し、常にそのさとしと、定め
と、おきてと、戒めとを守らなければならない。二あなたがたは、きょう、
次のことを知らなければならない。わたしが語るのは、あなたがたの子供
たちに対してではない。彼らはあなたがたの神、主の訓練と、主の大いな
る事と、その強い手と、伸べた腕とを知らず、また見なかった。三また彼
らは主がエジプトで、エジプト王パロとその全国に対して行われたしる
しと、わざ、四また主がエジプトの軍勢とその馬と戦車とに行われた事、
すなわち彼らがあなたがたのあとを追ってきた時に、紅海の水を彼らの上
にあふれさせ、彼らを滅ぼされて、今日に至った事、五またあなたがたが
この所に来るまで、主が荒野で、あなたがたに行われた事、六およびル

ベンの子のエリアブの子、ダタンとアビラムとにされた事、すなわちイス
ラエルのすべての人々の中で、地が口を開き、彼らと、その家族と、天幕
と、彼らに従うすべてのものを、のみつくした事などを彼らは知らず、ま
た見なかった。七しかし、あなたがたは主が行われたこれらの大いなる事
を、ことごとく目に見たのである。
八ゆえに、わたしが、きょう、あなたがたに命じる戒めを、ことごとく
守らなければならない。そうすればあなたがたは強くなり、渡って行って
取ろうとする地にはいって、それを取ることができ、九かつ、主が先祖た
ちに誓って彼らとその子孫とに与えようと言われた地、乳と蜜の流れる国
において、長く生きることができるであろう。一〇あなたがたが行って取ろ
うとする地は、あなたがたが出てきたエジプトの地のようではない。あそ
こでは、青物畑でするように、あなたがたは種をまき、足でそれに水を

注いだ。一一しかし、あなたがたが渡って行って取る地は、山と谷の多い
地で、天から降る雨で潤っている。一二その地は、あなたの神、主が顧
みられる所で、年の始めから年の終りまで、あなたの神、主の目が常に
その上にある。

一三もし、きょう、あなたがたに命じるわたしの命令によく聞き従って、
あなたがたの神、主を愛し、心をつくし、精神をつくして仕えるならば、
一四主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨ともに、時にしたがって
降らせ、穀物と、ぶどう酒と、油を取り入れさせ、一五また家畜のために
野に草を生えさせられるであろう。あなたは飽きるほど食べることができ
るであろう。一六あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、
それを拝むことのないよう、慎まなければならない。一七おそらく主はあ
なたがたにむかい怒りを発して、天を閉ざされるであろう。そのため雨は

降らず、地は産物を出さず、あなたがたは主が賜わる良い地から、すみや
かに滅びうせるであろう。
一八それゆえ、これらのわたしの言葉を心と魂におさめ、またそれを
手につけて、しるしとし、目の間に置いて覚えとし、一九これを子供たち
に教え、家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、そ
れについて語り、二〇また家の入口の柱と、門にそれを書きしるさなけれ
ばならない。二一そうすれば、主が先祖たちに与えようと誓われた地に、あ
なたがたの住む日数およびあなたがたの子供たちの住む日数は、天が地を
おおう日数のように多いであろう。二二もしわたしがあなたがたに命じる
このすべての命令をよく守って行い、あなたがたの神、主を愛し、そのす
べての道に歩み、主につき従うならば、二三主はこの国々の民を皆、あな
たがたの前から追い払われ、あなたがたはあなたがたよりも大きく、かつ

強い国々を取るに至るであろう。二四あなたがたが足の裏で踏む所は皆、
あなたがたのものとなり、あなたがたの領域は荒野からレバノンに及び、
また大川ユフラテから西の海に及ぶであろう。二五だれもあなたがたに立
ち向かうことのできる者はないであろう。あなたがたの神、主は、かつて
言われたように、あなたがたの踏み入る地の人々が、あなたがたを恐れお
ののくようにされるであろう。

二六見よ、わたしは、きょう、あなたがたの前に祝福と、のろいとを置
く。二七もし、きょう、わたしがあなたがたに命じるあなたがたの神、主
の命令に聞き従うならば、祝福を受けるであろう。二八もしあなたがたが
あなたがたの神、主の命令に聞き従わず、わたしが、きょう、あなたがたに命じる
道を離れ、あなたがたの知らなかった他の神々に従うならば、のろいを
受けるであろう。二九あなたがたの神、主が、あなたがたの行って占領する地にあ

なたを導き入れられる時、あなたはゲリジム山に祝福を置き、エバル山
にのろいを置かなければならない。三〇これらの山はヨルダンの向こう側、
アラバに住んでいるカナンびとの地で、日の入る方の道の西側にあり、ギ
ルガルに向かいあって、モレのテレビンの木の近くにあるではないか。三
一あなたがたはヨルダンを渡り、あなたがたの神、主が賜わる地にはいっ
て、それを占領しようとしている。あなたがたはそれを占領して、そこ
に住むであろう。三二それゆえ、わたしが、きょう、あなたがたに授ける定
めと、おきてをことごとく守って行わなければならない。

第一二章一これはあなたの先祖たちの神、主が所有として賜わる地で、あ
なたがたが世に生きながらえている間、守り行わなければならない定め
と、おきてである。二あなたがたの追い払う国々の民が、その神々に仕え
た所は、高い山にあるものも、丘にあるものも、青木の下にあるものも、

ことごとくこわし、三その祭壇をこぼち、柱を砕き、アシラ像を火で焼き、
また刻んだ神々の像を切り倒して、その名をその所から消し去らなけれ
ばならない。四ただし、あなたがたの神、主にはそのようにしてはならな
い。五あなたがたの神、主がその名を置くために、あなたがたの全部族の
うちから選ばれる場所、すなわち主のすまいを尋ね求めて、そこに行き、
六あなたがたの燔祭と、犠牲と、十分の一と、ささげ物と、誓願の供え物
と、自発の供え物および牛、羊のういごをそこに携えて行って、七そこ
であなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して
獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主
の恵みによって獲るものだからである。八そこでは、われわれがきょうこ
こでしているように、めいめいで正しいと思うようにふるまってはならな
い。九あなたがたはまだ、あなたがたの神、主から賜わる安息と嗣業の地

に、はいっていないのである。一〇しかし、あなたがたがヨルダンを渡り、
あなたがたの神、主が嗣業として賜わる地に住むようになり、さらに主
があなたがたの周囲の敵をことごとく除いて、安息を与え、あなたがたが
安らかに住むようになる時、一一あなたがたの神、主はその名を置くため
に、一つの場所を選ばれるであろう。あなたがたはそこにわたしの命じる
物をすべて携えて行かなければならない。すなわち、あなたがたの燔祭
と、犠牲と、十分の一と、ささげ物およびあなたがたが主に誓ったすべて
の誓願の供え物とを携えて行かなければならない。一二そしてあなたがた
のむすこ、娘、しもべ、はしためと共にあなたがたの神、主の前に喜び
楽しまなければならない。また町の内におるレビびととも、そうしなけれ
ばならない。彼はあなたがたのうちに分け前がなく、嗣業を持たないから
である。一三慎んで、すべてあなたがたがよいと思う場所で、みだりに燔祭を

ささげないようにしなければならない。一四ただあなたの部族の一つのうち
に、主が選ばれるその場所で、燔祭をささげ、またわたしが命じるすべて
の事をしなければならない。
一五しかし、あなたの神、主が賜わる恵みにしたがって、すべて心に好
む獣を、どの町ででも殺して、その肉を食べることができる。すなわち、
かもしかや雄じかの肉と同様にそれを、汚れた人も、清い人も、食べるこ
とができる。一六ただし、その血は食べてはならない。水のようにそれを
地に注がなければならない。一七あなたの穀物と、ぶどう酒と、油との十
分の一および牛、羊のういご、ならびにあなたが立てる誓願の供え物と、
自発の供え物およびささげ物は、町の内で食べることはできない。一八あ
なたの神、主が選ばれる場所で、あなたの神、主の前でそれを食べなけれ
ばならない。すなわちあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、および町

の内におるレビびとと共にそれを食べ、手を労して獲るすべての物を、あ
なたの神、主の前に喜び楽しまなければならない。一九慎んで、あなた
が世に生きながらえている間、レビびとを捨てないようにしなければなら
ない。
二〇あなたの神、主が約束されたように、あなたの領域を広くされると
き、あなたは肉を食べたいと願って、『わたしは肉を食べよう』と言うであ
ろう。その時、あなたはほしいだけ肉を食べることができる。二一もしあ
なたの神、主がその名を置くために選ばれる場所が、遠く離れているなら
ば、わたしが命じるように、主が賜わる牛、羊をほふり、門の内で、ほし
いだけ食べることができる。二二かもしかや、雄じかを食べるように、それ
を食べることができる。すなわち汚れた人も、清い人も一様にそれを食べ
ることができる。二三ただ堅く慎んで、その血を食べないようにしなけれ

ばならない。血は命だからである。その命を肉と一緒に食べてはならな
い。二四あなたはそれを食べてはならない。水のようにそれを地に注がな
ければならない。二五あなたはそれを食べてはならない。こうして、主が正
しいと見られる事を行うならば、あなたにも後の子孫にも、さいわいがあ
るであろう。二六ただあなたのささげる聖なる物と、誓願の物とは、主が
選ばれる場所へ携えて行かなければならない。二七そして燔祭をささげる
時は、肉と血とをあなたの神、主の祭壇の上にささげなければならない。
犠牲をささげる時は、血をあなたの神、主の祭壇にそそぎかけ、肉はみず
から食べることができる。二八あなたはわたしが命じるこれらの事を、こと
ごとく聞いて守らなければならない。こうしてあなたの神、主が見て良い
とし、正しいとされる事を行うならば、あなたにも後の子孫にも、長く
さいわいがあるであろう。

二九あなたの神、主が、あなたの行って追い払おうとする国々の民を、あ
なたの前から断ち滅ぼされ、あなたがついにその国々を獲て、その地に住
むようになる時、三〇あなたはみずから慎み、彼らがあなたの前から滅ぼ
された後、彼らにならって、わなにかかってはならない。また彼らの神々
を尋ね求めて、『これらの国々の民はどのようにその神々に仕えたのか、わ
たしもそのようにしよう』と言ってはならない。三一あなたの神、主に対し
ては、そのようにしてはならない。彼らは主の憎まれるもろもろの忌むべ
き事を、その神々にむかって行い、むすこ、娘をさえ火に焼いて、神々
にささげたからである。

三二あなたがたはわたしが命じるこのすべての事を守って行わなければ
ならない。これにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。

第一三章一あなたがたのうちに預言者または夢みる者が起って、しるし

や奇跡を示し、二あなたに告げるそのしるしや奇跡が実現して、あなたが
これまで知らなかった『ほかの神々に、われわれは従い仕えよう』と言っ
ても、三あなたはその預言者または夢みる者の言葉に聞き従ってはならな
い。あなたがたの神、主はあなたがたが心をつくし、精神をつくして、あ
なたがたの神、主を愛するか、どうかを知ろうと、このようにあなたがた
を試みられるからである。四あなたがたの神、主に従って歩み、彼を恐
れ、その戒めを守り、その言葉に聞き従い、彼に仕え、彼につき従わ
なければならない。五その預言者または夢みる者を殺さなければならない。
あなたがたをエジプトの国から導き出し、奴隷の家からあがなわれたあな
たがたの神、主にあなたがたをそむかせ、あなたがたの神、主が歩めと命じら
れた道を離れさせようとして語るゆえである。こうしてあなたがたのうち
から悪を除き去らなければならない。

六同じ母に生れたあなたの兄弟、またはあなたのむすこ、娘、またはあ
なたのふところの妻、またはあなたと身命を共にする友が、ひそかに誘っ
て『われわれは行って他の神々に仕えよう』と言うかも知れない。これは
あなたも先祖たちも知らなかった神々、七すなわち地のこのはてから、地
のかのはてまで、あるいは近く、あるいは遠く、あなたの周囲にある民の
神々である。八しかし、あなたはその人に従ってはならない。その人の言
うことを聞いてはならない。その人をあわれんではならない。その人を惜
しんではならない。その人をかばってはならない。九必ず彼を殺さなけれ
ばならない。彼を殺すには、あなたがまず彼に手を下し、その後、民がみ
な手を下さなければならない。一〇彼はエジプトの国、奴隷の家からあな
たを導き出されたあなたの神、主からあなたを離れさせようとしたので
あるから、あなたは石をもって彼を撃ち殺さなければならない。一一そう

すればイスラエルは皆聞いて恐れ、重ねてこのような悪い事を、あなたが
たのうちに行わないであろう。
一二あなたの神、主があなたに与えて住まわせられる町の一つで、一三よ
こしまな人々があなたがたのうちに起って、あなたがたの知らなかった『ほ
かの神々に、われわれは行って仕えよう』と言って、その町に住む人々を
誘惑したことを聞くならば、一四あなたはそれを尋ね、探り、よく問いた
ださなければならない。そして、そのような憎むべき事があなたがたのう
ちに行われた事が、真実で、確かならば、一五あなたは必ず、その町に
住む者をつるぎの刃にかけて撃ち殺し、その町と、そのうちにおるすべて
の者、およびその家畜をつるぎの刃にかけて、ことごとく滅ぼさなければ
ならない。一六またそのすべてのぶんどり物は、町の広場の中央に集め、
火をもってその町と、すべてのぶんどり物とを、ことごとく焼いて、あな

たの神、主にささげなければならない。これはながく荒塚となって、再
び建て直されないであろう。一七そののろわれた物は一つもあなたの手に
留めおいてはならない。主が激しい怒りをやめ、あなたに慈悲を施して、
あなたをあわれみ、先祖たちに誓われたように、あなたの数を多くされる
ためである。一八あなたの神、主の言葉に聞き従い、わたしが、きょう、
命じるすべての戒めを守り、あなたの神、主が正しいと見られる事を行
うならば、このようになるであろう。

第一四章
一あなたがたはあなたがたの神、主の子供である。死んだ人の
ために自分の身に傷をつけてはならない。また額の髪をそってはならな
い。二あなたはあなたの神、主の聖なる民だからである。主は地のおもて
のすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。
三忌むべき物は、どんなものでも食べてはならない。四あなたがたの食べ

ることができる獣は次のとおりである。すなわち牛、羊、やぎ、五雄じか、かもしか、こじか、野やぎ、くじか、おおじか、野羊など、六獣のうち、すべて、ひずめの分れたもの、ひずめが二つに切れたもので、反芻するものは食べることができる。七ただし、反芻するものと、ひずめの分れたもののうち、次のものは食べてはならない。すなわち、らくだ、野うさぎ、および岩だぬき、これらは反芻するけれども、ひずめが分れていないから汚れたものである。八また豚、これは、ひずめが分れているけれども、反芻しないから、汚れたものである。その肉を食べてはならない。またその死体に触れてはならない。

九水の中にいるすべての物のうち、次のものは食べることができる。すなわち、すべて、ひれと、うろこのあるものは、食べることができる。一〇すべて、ひれと、うろこのないものは、食べてはならない。これは汚れた

ものである。
一一すべて清い鳥は食べることができる。一二ただし、次のものは食べて
はならない。すなわち、はげわし、ひげはげわし、みさご、一三黒とび、はや
ぶさ、とびの類。一四各種のからすの類。一五だちょう、夜たか、かもめ、
たかの類。一六ふくろう、みみずく、むらさきばん、一七ペリカン、はげた
か、う、一八こうのとり、さぎの類。やつがしら、こうもり。一九またすべ
て羽があって這うものは汚れたものである。それを食べてはならない。二
〇すべて翼のある清いものは食べることができる。
二一すべて自然に死んだものは食べてはならない。町の内におる寄留の
他国人に、それを与えて食べさせることができる。またそれを外国人に売っ
てもよい。あなたはあなたの神、主の聖なる民だからである。
子やぎをその母の乳で煮てはならない。
二二あなたは毎年、畑に種をまいて獲るすべての産物の十分の一を必

ず取り分けなければならない。
二三そしてあなたの神、主の前、すなわち主がその名を置くために選ばれる場所で、穀物と、ぶどう酒と、油との十分の一と、牛、羊のういごを食べ、こうして常にあなたの神、主を恐れることを学ばなければならない。
二四ただし、その道があまりに遠く、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所が、非常に遠く離れていて、あなたの神、主があなたを恵まれるとき、それを携えて行くことができないならば、
二五あなたはその物を金に換え、その金を包んで手に取り、あなたの神、主が選ばれる場所に行き、
二六その金をすべてあなたの好む物に換えなければならない。すなわち牛、羊、ぶどう酒、濃い酒など、すべてあなたの欲する物に換え、その所であなたの神、主の前でそれを食べ、家族と共に楽しまなければならない。
二七町の内におるレビびとを捨ててはならない。彼はあなたがたのうちに分がなく、嗣業を持たない者

だからである。
二八三年の終りごとに、その年の産物の十分の一を、ことごとく持ち出
して、町の内にたくわえ、二九あなたがたのうちに分け前がなく、嗣業を持
たないレビびと、および町の内におる寄留の他国人と、孤児と、寡婦を呼
んで、それを食べさせ、満足させなければならない。そうすれば、あなたの
神、主はあなたが手で行うすべての事にあなたを祝福されるであろう。

第一五章

一あなたは七年の終りごとに、ゆるしを行わなければならない。
二そのゆるしのしかたは次のとおりである。すべてその隣人に貸した貸主
はそれをゆるさなければならない。その隣人または兄弟にそれを督促し
てはならない。主のゆるしが、ふれ示されたからである。三外国人にはそ
れを督促することができるが、あなたの兄弟に貸した物はゆるさなければ
ならない。四しかしあなたがたのうちに貧しい者はなくなるであろう。（あ
なたの神、主が嗣業として与えられる地で、あなたを祝福されるからで

ある。）五ただ、あなたの神、主の言葉に聞き従って、わたしが、きょう、
あなたに命じることの戒めを、ことごとく守り行うとき、そのようにな
るであろう。六あなたの神、主が約束されたようにあなたを祝福される
から、あなたは多くの国びとに貸すようになり、借りることはないであろ
う。またあなたは多くの国びとを治めるようになり、彼らがあなたを治め
ることはないであろう。

七あなたの神、主が賜わる地で、もしあなたの兄弟で貧しい者がひとり
でも、町の内におるならば、その貧しい兄弟にむかって、心をかたくな
にしてはならない。また手を閉じてはならない。八必ず彼に手を開いて、
その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない。九あ
なたは心に邪念を起し、『第七年のゆるしの年が近づいた』と言って、貧
しい兄弟に対し、物を惜しんで、何も与えないことのないように慎まな

ければならない。その人があなたを主に訴えるならば、あなたは罪を得
るであろう。一〇あなたは心から彼に与えなければならない。彼に与える
時は惜しんではならない。あなたの神、主はこの事のために、あなたをす
べての事業と、手のすべての働きにおいて祝福されるからである。一一
貧しい者はいつまでも国のうちに絶えることがないから、わたしは命じて
言う、『あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と、貧し
い者とに、手を開かなければならない』。

一二もしあなたの兄弟であるヘブルの男、またはヘブルの女が、あな
たのところに売られてきて、六年仕えたならば、第七年には彼に自由を与
えて去らせなければならない。一三彼に自由を与えて去らせる時は、から手
で去らせてはならない。一四群れと、打ち場と、酒ぶねのうちから取って、
惜しみなく彼に与えなければならない。すなわちあなたの神、主があなた

を恵まれたように、彼に与えなければならない。一五あなたはかつてエジ
プトの国で奴隷であったが、あなたの神、主があなたをあがない出された
事を記憶しなければならない。このゆえにわたしは、きょう、この事を命
じる。一六しかしその人があなたと、あなたの家族を愛し、あなたと一緒
にいることを望み、『わたしはあなたを離れて去りたくありません』と言う
ならば、一七あなたは、きりを取って彼の耳を戸に刺さなければならない。
そうすれば、彼はいつまでもあなたの奴隷となるであろう。女奴隷にもそ
うしなければならない。一八彼に自由を与えて去らせる時には、快く去
らせなければならない。彼が六年間、賃銀を取る雇人の二倍あなたに仕
えて働いたからである。あなたがそうするならば、あなたの神、主はあな
たが行うすべての事にあなたを祝福されるであろう。
一九牛、羊の産む雄のういごは皆あなたの神、主に聖別しなければなら

ない。牛のういごを用いてなんの仕事をもしてはならない。また羊のう
いごの毛を切ってはならない。二〇あなたの神、主が選ばれる所で、主の
前にあなたは家族と共に年ごとにそれを食べなければならない。二一しか
し、その獣がもし傷のあるもの、すなわち足なえまたは、めくらなど、す
べて悪い傷のあるものである時は、あなたの神、主にそれを犠牲としてさ
さげてはならない。二二町の内でそれを食べなければならない。汚れた人
も、清い人も、かもしかや、雄じかと同様にそれを食べることができる。二
三ただし、その血は食べてはならない。水のようにそれを地にそそがなけ
ればならない。

第一六章一あなたはアビブの月を守って、あなたの神、主のために過越の
祭を行わなければならない。アビブの月に、あなたの神、主が夜の間
にあなたをエジプトから導き出されたからである。二主がその名を置くた

めに選ばれる場所で、羊または牛をあなたの神、主に過越の犠牲として
ほふらなければならない。三種を入れたパンをそれと共に食べてはならな
い。七日のあいだ、種入れぬパンすなわち悩みのパンを、それと共に食べ
なければならない。あなたがエジプトの国から出るとき、急いで出たから
である。こうして世に生きながらえる日の間、エジプトの国から出てきた
日を常に覚えなければならない。四その七日の間は、国の内どこにもパ
ン種があってはならない。また初めの日の夕暮にほふるものの肉を、翌朝
まで残しておいてはならない。五あなたの神、主が賜わる町の内で、過越
の犠牲をほふってはならない。六ただあなたの神、主がその名を置くため
に選ばれる場所で、夕暮の日の入るころ、あなたがエジプトから出た時刻
に、過越の犠牲をほふらなければならない。七そしてあなたの神、主が選
ばれる場所で、それを焼いて食べ、朝になって天幕に帰らなければならな

い。八六日のあいだ種入れぬパンを食べ、七日目にあなたの神、主のため
に聖会を開かなければならない。なんの仕事もしてはならない。
九また七週間を数えなければならない。すなわち穀物に、かまを入れ始
める時から七週間を数え始めなければならない。一〇そしてあなたの神、
主のために七週の祭を行い、あなたの神、主が賜わる祝福にしたがっ
て、力に応じ、自発の供え物をささげなければならない。一一こうしてあ
なたはむすこ、娘、しもべ、はしためおよび町の内におるレビびと、なら
びにあなたがたのうちにおる寄留の他国人と孤児と寡婦と共に、あなたの
神、主がその名を置くために選ばれる場所で、あなたの神、主の前に喜
び楽しまなければならない。一二あなたはかつてエジプトで奴隷であったこ
とを覚え、これらの定めを守り行わなければならない。
一三打ち場と、酒ぶねから取入れをしたとき、七日のあいだ仮庵の祭を

行わなければならない。一四その祭の時には、あなたはむすこ、娘、しも
べ、はしためおよび町の内におるレビびと、寄留の他国人、孤児、寡婦と共
に喜び楽しまなければならない。一五主が選ばれる場所で七日の間、あ
なたの神、主のために祭を行わなければならない。あなたの神、主はす
べての産物と、手のすべてのわざとにおいて、あなたを祝福されるから、
あなたは大いに喜び楽しまなければならない。
一六あなたのうちの男子は皆あなたの神、主が選ばれる場所で、年に三
度、すなわち種入れぬパンの祭と、七週の祭と、仮庵の祭に、主の前
に出なければならない。ただし、から手で主の前に出てはならない。一七あ
なたの神、主が賜わる祝福にしたがい、おのおの力に応じて、ささげ物
をしなければならない。
一八あなたの神、主が賜わるすべての町々の内に、部族にしたがって、さ

ばきびとと、つかさびととを、立てなければならない。そして彼らは正し
いさばきをもって民をさばかなければならない。一九あなたはさばきを曲げ
てはならない。人をかたより見てはならない。また賄賂を取ってはならな
い。賄賂は賢い者の目をくらまし、正しい者の事件を曲げるからである。
二〇ただ公義をのみ求めなければならない。そうすればあなたは生きながら
えて、あなたの神、主が賜わる地を所有するにいたるであろう。
二一あなたの神、主のために築く祭壇のかたわらに、アシラの木像をも
立ててはならない。二二またあなたの神、主が憎まれる柱を立ててはなら
ない。

第一七章一すべて傷があり、欠けた所のある牛または羊はあなたの神、
主にささげてはならない。そのようなものはあなたの神、主の忌みきらわ
れるものだからである。
二あなたの神、主が賜わる町で、あなたがたのうちに、もし男子または

女子があなたの神、主の前に悪事をおこなって、契約にそむき、三行って他
の神々に仕え、それを拝み、わたしの禁じる、日や月やその他の天の万象
を拝むことがあり、四その事を知らせる者があって、あなたがそれを聞く
ならば、あなたはそれをよく調べなければならない。そしてその事が真実
であり、そのような憎むべき事が確かにイスラエルのうちに行われていた
ならば、五あなたはその悪事をおこなった男子または女子を町の門にひき
出し、その男子または女子を石で撃ち殺さなければならない。六ふたりの
証人または三人の証人の証言によって殺すべき者を殺さなければなら
ない。ただひとりの証人の証言によって殺してはならない。七そのよう
な者を殺すには、証人がまず手を下し、それから民が皆、手を下さなけ
ればならない。こうしてあなたのうちから悪を除き去らなければならない。
八町の内に訴え事が起り、その事件がもし血を流す事、または権利を

争う事、または人を撃った事などであって、あなたが、さばきかねるもの
である時は、立ってあなたの神、主が選ばれる場所にのぼり、九レビびと
である祭司と、その時の裁判人とに行って尋ねなければならない。彼らは
あなたに判決の言葉を告げるであろう。一〇あなたは、主が選ばれるその
場所で、彼らが告げる言葉に従っておこない、すべて彼らが教えるように
守り行わなければならない。一一すなわち彼らが教える律法と、彼らが告
げる判決とに従って行わなければならない。彼らが告げる言葉にそむい
て、右にも左にもかたよってはならない。一二もし人がほしいままにふる
まい、あなたの神、主の前に立って仕える祭司または裁判人に聞き従わ
ないならば、その人を殺して、イスラエルのうちから悪を除かなければな
らない。一三そうすれば民は皆、聞いて恐れ、重ねてほしいままにふるま
うことをしないであろう。

一四あなたの神、主が賜わる地に行き、それを獲てそこに住むようにな
る時、もしあなたが『わたしも周囲のすべての国びとのように、わたしの
上に王を立てよう』と言うならば、一五必ずあなたの神、主が選ばれる者
を、あなたの上に立てて王としなければならない。同胞のひとりを、あな
たの上に立てて王としなければならない。同胞でない外国人をあなたの上
に立ててはならない。一六王となる人は自分のために馬を多く獲ようとし
てはならない。また馬を多く獲るために民をエジプトに帰らせてはならな
い。主はあなたがたにむかって、『この後かさねてこの道に帰ってはなら
ない』と仰せられたからである。一七また妻を多く持って心を、迷わして
はならない。また自分のために金銀を多くたくわえてはならない。
一八彼が国の王位につくようになったら、レビびとである祭司の保管する
書物から、この律法の写しを一つの書物に書きしるさせ、一九世になが

らえる日の間、常にそれを自分のもとに置いて読み、こうしてその神、主
を恐れることを学び、この律法のすべての言葉と、これらの定めとを守っ
て行わなければならない。
二〇そうすれば彼の心が同胞を見くだして、
高ぶることなく、また戒めを離れて、右にも左にも曲ることなく、その
子孫と共にイスラエルにおいて、長くその位にとどまることができるであ
ろう。

第一八章
一レビびとである祭司すなわちレビの全部族はイスラエルのう
ちに、分も嗣業も持たない。彼らは主にささげられる火祭の物と、その他
のささげ物とを食べなければならない。
二彼らはその兄弟のうちに嗣業
を持たない。かつて彼らに約束されたとおり主が彼らの嗣業である。
三祭司が民から受ける分は次のとおりである。すなわち犠牲をささげる者は、
牛でも、羊でも、その肩と、両方のほおと、胃とを祭司に与えなければ

ならない。四また穀物と、ぶどう酒と、油の初物および羊の毛の初物を
も彼に与えなければならない。五あなたの神、主がすべての部族のうちか
ら彼を選び出して、彼とその子孫を長く主の名によって立って仕えさせら
れるからである。

六レビびとはイスラエルの全地のうち、どこにいる者でも、彼が宿って
いる町を出て、主が選ばれる場所に行くならば、七彼は主の前に立ってい
るすべての兄弟レビびとと同じように、その神、主の名によって仕える
ことができる。八彼が食べる分は彼らと同じである。ただし彼はこのほか
に父の遺産を売って獲た物を持つことができる。

九あなたの神、主が賜わる地にはいったならば、その国々の民の憎むべ
き事を習いおこなってはならない。一〇あなたがたのうちに、自分のむす
こ、娘を火に焼いてささげる者があってはならない。また占いをする者、

卜者、易者、魔法使、一一呪文を唱える者、口寄せ、かんなぎ、死人に問う
ことをする者があってはならない。一二主はすべてこれらの事をする者を
憎まれるからである。そしてこれらの憎むべき事のゆえにあなたの神、主
は彼らをあなたの前から追い払われるのである。一三あなたの神、主の前
にあなたは全き者でなければならない。一四あなたが追い払うかの国々の
民は卜者、占いをする者に聞き従うからである。しかし、あなたには、
あなたの神、主はそうする事を許されない。

一五あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わ
たしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなた
がたは彼に聞き従わなければならない。一六これはあなたが集会の日に
ホレブであなたの神、主に求めたことである。すなわちあなたは『わたし
が死ぬことのないようにわたしの神、主の声を二度とわたしに聞かせない

でください。またこの大いなる火を二度と見させないでください』と言っ
た。一七主はわたしに言われた、『彼らが言ったことは正しい。一八わたし
は彼らの同胞のうちから、おまえのようなひとりの預言者を彼らのために
起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、
ことごとく彼らに告げるであろう。一九彼がわたしの名によって、わたしの
言葉を語るのに、もしこれに聞き従わない者があるならば、わたしはそれ
を罰するであろう。二〇ただし預言者が、わたしが語れと命じないことを、
わたしの名によってほしいままに語り、あるいは他の神々の名によって語
るならば、その預言者は殺さなければならない』。二一あなたは心のうちに
『われわれは、その言葉が主の言われたものでないと、どうして知り得よう
か』と言うであろう。二二もし預言者があって、主の名によって語っても、
その言葉が成就せず、またその事が起らない時は、それは主が語られた

言葉ではなく、その預言者がほしいままに語ったのである。その預言者を恐れるに及ばない。

第一九章 一あなたの神、主が国々の民を滅ぼしつくして、あなたの神、主がその地を賜わり、あなたがそれを獲て、その町々と、その家々に住むようになる時は、二あなたの神、主が与えて獲させられる地のうちに、三つの町をあなたのために指定しなければならない。三そしてそこに行く道を備え、またあなたの神、主があなたに継がせられる地の領域を三区に分け、すべて人を殺した者をそこにのがれさせなければならない。

四人を殺した者がそこにのがれて、命を全うすべき場合は次のとおりである。すなわち以前から憎むこともないのに、知らないでその隣人を殺した場合、五たとえば人が木を切ろうとして、隣人と一緒に林に入り、手におのを取って、木を切り倒そうと撃ちおろすとき、その頭が柄から抜け、

隣人にあたって、死なせたような場合がそれである。そういう人はこれら
の町の一つにのがれて、命を全うすることができる。六そうしなければ、
復讐する者が怒って、その殺した者を追いかけ、道が長いために、つい
に追いついて殺すであろう。しかし、その人は以前から彼を憎んでいた者
でないから、殺される理由はない。七それでわたしはあなたに命じて『三つ
の町をあなたのために指定しなければならない』と言ったのである。八あ
なたの神、主が先祖たちに誓われたように、あなたの領域を広め、先祖
たちに与えると言われた地を、ことごとく賜わる時、――九わたしが、きょ
う、命じるこのすべての戒めを守って、それをおこない、あなたの神、主
を愛して、常にその道に歩む時――あなたはこれら三つの町のほかに、ま
た三つの町をあなたのために増し加えなければならない。一〇これはあな
たの神、主が与えて嗣業とされる地のうちで、罪のない者の血が流され

ないようにするためである。そうしなければ、その血を流したとがは、あ
なたに帰するであろう。
一一しかし、もし人が隣人を憎んでそれをつけねらい、立ちかかってそ
の人を撃ち殺し、そしてこれらの町の一つにのがれるならば、一二その町
の長老たちは人をつかわして彼をそこから引いてこさせ、復讐する者に
わたして殺させなければならない。一三彼をあわれんではならない。罪の
ない者の血を流したとがを、イスラエルから除かなければならない。そう
すればあなたにさいわいがあるであろう。
一四あなたの神、主が与えて獲させられる地で、あなたが継ぐ嗣業にお
いて、先祖の定めたあなたの隣人の土地の境を移してはならない。
一五どんな不正であれ、どんなとがであれ、すべて人の犯す罪は、ただひ
とりの証人によって定めてはならない。ふたりの証人の証言により、

または三人の証人の証言によって、その事を定めなければならない。一
六もし悪意のある証人が起って、人に対して悪い証言をすることがあれ
ば、一七その相争うふたりの者は主の前に行って、その時の祭司と裁判人
の前に立たなければならない。一八その時、裁判人は詳細にそれを調べな
ければならない。そしてその証人がもし偽りの証人であって、兄弟に
むかって偽りの証言をした者であるならば、一九あなたがたは彼が兄弟
にしようとしたことを彼に行い、こうしてあなたがたのうちから悪を除き
去らなければならない。二〇そうすれば他の人たちは聞いて恐れ、その後
ふたたびそのような悪をあなたがたのうちに行わないであろう。二一あわ
れんではならない。命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には
足をもって償わせなければならない。

第二〇章一あなたが敵と戦うために出る時、馬と戦車と、あなたよりも

大ぜいの軍隊を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジプトの国
から導きのぼられたあなたの神、主が共におられるからである。二あなた
がたが戦いに臨むとき、祭司は進み出て民に告げて、三彼らに言わなけれ
ばならない、『イスラエルよ聞け。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとし
ている。気おくれしてはならない。恐れてはならない。あわててはならな
い。彼らに驚いてはならない。四あなたがたの神、主が共に行かれ、あな
たがたのために敵と戦って、あなたがたを救われるからである』。五次に
つかさたちは民に告げて言わなければならない。『新しい家を建てて、ま
だそれをささげていない者があれば、その人を家に帰らせなければならな
い。そうしなければ、彼が戦いに死んだとき、ほかの人がそれをささげ
るようになるであろう。六ぶどう畑を作って、まだその実を食べていない
者があれば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ彼が

戦いに死んだとき、ほかの人がそれを食べるようになるであろう。七女
と婚約して、まだその女をめとっていない者があれば、その人を家に帰
らせなければならない。そうしなければ彼が戦いに死んだとき、ほかの人
が彼女をめとるようになるであろう』。八つかさたちは、また民に告げて言
わなければならない。『恐れて気おくれする者があるならば、その人を家
に帰らせなければならない。そうしなければ、兄弟たちの心が彼の心
のようにくじけるであろう』。九つかさたちがこのように民に告げ終ったな
らば、軍勢のかしらたちを立てて民を率いさせなければならない。
一〇一つの町へ進んで行って、それを攻めようとする時は、まず穏やか
に降服することを勧めなければならない。一一もしその町が穏やかに降服
しようと答えて、門を開くならば、そこにいるすべての民に、みつぎを納
めさせ、あなたに仕えさせなければならない。一二もし穏やかに降服せず、

戦おうとするならば、あなたはそれを攻めなければならない。一三そして
あなたの神、主がそれをあなたの手にわたされる時、つるぎをもってその
うちの男をみな撃ち殺さなければならない。一四ただし女、子供、家畜
およびすべて町のうちにあるもの、すなわちぶんどり物は皆、戦利品とし
て取ることができる。また敵からぶんどった物はあなたの神、主が賜わっ
たものだから、あなたはそれを用いることができる。一五遠く離れている
町々、すなわちこれらの国々に属さない町々には、すべてこのようにしな
ければならない。一六ただし、あなたの神、主が嗣業として与えられるこ
れらの民の町々では、息のある者をひとりも生かしておいてはならない。
一七すなわちヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、
エブスびとはみな滅ぼして、あなたの神、主が命じられたとおりにしなけ
ればならない。一八これは彼らがその神々を拝んでおこなったすべての憎

むべき事を、あなたがたに教えて、それを行わせ、あなたがたの神、主に
罪を犯させることのないためである。
一九長く町を攻め囲んで、それを取ろうとする時でも、おのをふるって、
その木を切り枯らしてはならない。それはあなたの食となるものだか
ら、切り倒してはならない。あなたは田野の木までも、人のように攻めな
ければならないであろうか。二〇ただし実を結ばない木とわかっている木は
切り倒して、あなたと戦っている町にむかい、それをもってとりでを築
き、陥落するまで、それを攻めることができる。

第二一章一あなたの神、主が与えて獲させられる地で、殺されて野に倒
れている人があって、だれが殺したのかわからない時は、二長老たちと、
さばきびとたちが出てきて、その殺された者のある所から、周囲の町々
までの距離をはからなければならない。三そしてその殺された者のある所

に最も近い町の長老たちは、まだ使わない、まだくびきを負わせて引い
たことのない若い雌牛をとり、四その町の長老たちはその雌牛を、耕す
ことも、種まくこともしない、絶えず水の流れている谷へ引いていって、
その谷で雌牛のくびを折らなければならない。五その時レビの子孫である
祭司たちは、そこに進み出なければならない。彼らはあなたの神、主が自分
に仕えさせ、また主の名によって祝福させるために選ばれた者で、すべ
ての論争と、すべての暴行は彼らの言葉によって解決されるからである。
六そしてその殺された者のある所に最も近い町の長老たちは皆、彼ら
が谷でくびを折った雌牛の上で手を洗い、七証言して言わなければならな
い、『われわれの手はこの血を流さず、われわれの目もそれを見なかった。
八主よ、あなたがあがなわれた民イスラエルをおゆるしください。罪のな
い者の血を流したとがを、あなたの民イスラエルのうちにとどめないでく

ださい。そして血を流したとがをおゆるしください』。九このようにして、
あなたは主が正しいと見られる事をおこない、罪のない者の血を流したと
がを、あなたがたのうちから除き去らなければならない。
一〇あなたが出て敵と戦う際、あなたの神、主がそれをあなたの手にわ
たされ、あなたがそれを捕虜とした時、一一もし捕虜のうちに美しい女
のあるのを見て、それを好み、妻にめとろうとするならば、一二その女を
あなたの家に連れて帰らなければならない。女は髪をそり、つめを切り、
一三また捕虜の着物を脱ぎすてて、あなたの家におり、自分の父母のために
一か月のあいだ嘆かなければならない。そして後、あなたは彼女の所に
はいって、その夫となり、彼女を妻とすることができる。一四その後あな
たがもし彼女を好まなくなったならば、彼女を自由に去らせなければなら
ない。決して金で売ってはならない。あなたはすでに彼女をはずかしめた

のだから、彼女を奴隷のようにあしらってはならない。
一五人がふたりの妻をもち、そのひとりは愛する者、ひとりは気にいらな
い者であって、その愛する者と気にいらない者のふたりが、ともに男の
子を産み、もしその長子が、気にいらない女の産んだ者である時は、一六
その子たちに自分の財産を継がせる時、気にいらない女の産んだ長子を
さしおいて、愛する女の産んだ子を長子とすることはできない。一七必
ずその気にいらない者の産んだ子が長子であることを認め、自分の財産を
分ける時には、これに二倍の分け前を与えなければならない。これは自分
の力の初めであって、長子の特権を持っているからである。
一八もし、わがままで、手に負えない子があって、父の言葉にも、母の言葉
にも従わず、父母がこれを懲らしてもきかない時は、一九その父母はこれ
を捕えて、その町の門に行き、町の長老たちの前に出し、二〇町の長老

たちに言わなければならない、『わたしたちのこの子はわがままで、手に負
えません。わたしたちの言葉に従わず、身持ちが悪く、大酒飲みです』。二
一そのとき、町の人は皆、彼を石で撃ち殺し、あなたがたのうちから悪を
除き去らなければならない。そうすれば、イスラエルは皆聞いて恐れるで
あろう。

二二もし人が死にあたる罪を犯して殺され、あなたがそれを木の上にか
ける時は、二三翌朝までその死体を木の上に留めておいてはならない。必
ずそれをその日のうちに埋めなければならない。木にかけられた者は神に
のろわれた者だからである。あなたの神、主が嗣業として賜わる地を汚
してはならない。

第二二章一あなたの兄弟の牛、または羊の迷っているのを見て、それ
を見捨てておいてはならない。必ずそれを兄弟のところへ連れて帰らな
ければならない。二もしその兄弟が近くの者でなく、知らない人である

ならば、それを自分の家にひいてきて、あなたのところにおき、その兄弟
が尋ねてきた時に、それを彼に返さなければならない。三あなたの兄弟
のろばの場合も、そうしなければならない。着物の場合も、そうしなけれ
ばならない。またすべてあなたの兄弟の失った物を見つけた場合も、そ
うしなければならない。それを見捨てておくことはできない。四あなたの
兄弟のろばまたは牛が道に倒れているのを見て、見捨てておいてはなら
ない。必ずそれを助け起さなければならない。

五女は男の着物を着てはならない。また男は女の着物を着てはなら
ない。あなたの神、主はそのような事をする者を忌みきらわれるからであ
る。

六もしあなたが道で、木の上、または地面に鳥の巣のあるのを見つけ、そ
の中に雛または卵があって、母鳥がその雛または卵を抱いているな

らば、母鳥を雛と一緒に取ってはならない。七必ず母鳥を去らせ、ただ雛だけを取らなければならない。そうすればあなたはさいわいを得、長く生きながらえることができるであろう。

八新しい家を建てる時は、屋根に欄干を設けなければならない。それは人が屋根から落ちて、血のとがをあなたの家に帰することのないようにするためである。

九ぶどう畑に二種の種を混ぜてまいてはならない。そうすればあなたがまいた種から産する物も、ぶどう畑から出る物も、みな忌むべき物となるであろう。一〇牛と、ろばとを組み合わせて耕してはならない。一一羊毛と亜麻糸を混ぜて織った着物を着てはならない。

一二身にまとう上着の四すみに、ふさをつけなければならない。

一三もし人が妻をめとり、妻のところにはいって後、その女をきらい、一

四『わたしはこの女をめとって近づいた時、彼女に処女の証拠を見なかっ
た』と言って虚偽の非難をもって、その女に悪名を負わせるならば、一五
その女の父と母は、彼女の処女の証拠を取って、門におる町の長老た
ちに差し出し、一六そして彼女の父は長老たちに言わなければならない。
『わたしはこの人に娘を与えて妻にさせましたが、この人は娘をきらい、
一七虚偽の非難をもって、「わたしはあなたの娘に処女の証拠を見なかっ
た」と言います。しかし、これがわたしの娘の処女の証拠です』と言って、
その父母はかの布を町の長老たちの前にひろげなければならない。一八そ
の時、町の長老たちは、その人を捕えて撃ち懲らし、一九また銀百シケル
の罰金を課し、それを女の父に与えなければならない。彼はイスラエル
の処女に悪名を負わせたからである。彼はその女を妻とし、一生その
女を出すことはできない。二〇しかし、この非難が真実であって、その女

に処女の証拠が見られない時は、二一その女を父の家の入口にひき出し、町の人々は彼女を石で撃ち殺さなければならない。彼女は父の家で、みだらな事をおこない、イスラエルのうちに愚かな事をしたからである。あなたはこうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなければならない。

二二もし夫のある女と寝ている男を見つけたならば、その女と寝た男およびその女を一緒に殺し、こうしてイスラエルのうちから悪を除き去らなければならない。

二三もし処女である女が、人と婚約した後、他の男が町の内でその女に会い、これを犯したならば、二四あなたがたはそのふたりを町の門にひき出して、石で撃ち殺さなければならない。これはその女が町の内におりながら叫ばなかったからであり、またその男は隣人の妻をはずかしめたからである。あなたはこうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなけれ

ばならない。
二五しかし、男が、人と婚約した女に野で会い、その女を捕えてこれ
を犯したならば、その男だけを殺さなければならない。二六その女には
何もしてはならない。女には死にあたる罪がない。人がその隣人に立ち
むかって、それを殺したと同じ事件だからである。二七これは男が野で女
に会ったので、人と婚約したその女が叫んだけれども、救う者がなかっ
たのである。
二八まだ人と婚約しない処女である女に、男が会い、これを捕えて犯
し、ふたりが見つけられたならば、二九女を犯した男は女の父に銀五十
シケルを与えて、女を自分の妻としなければならない。彼はその女をは
ずかしめたゆえに、一生その女を出すことはできない。
三〇だれも父の妻をめとってはならない。父の妻と寝てはならない。
第二三章一すべて去勢した男子は主の会衆に加わってはならない。

二私生児は主の会衆に加わってはならない。その子孫は十代までも主
の会衆に加わってはならない。
三アンモンびととモアブびとは主の会衆に加わってはならない。彼ら
の子孫は十代までも、いつまでも主の会衆に加わってはならない。四これ
はあなたがたがエジプトから出てきた時に、彼らがパンと水を携えてあ
なたがたを道に迎えず、アラム・ナハライムのペトルからベオルの子バラ
ムを雇って、あなたをのろわせようとしたからである。五しかし、あなたの
神、主はバラムの言うことを聞こうともせず、あなたの神、主はあなたの
ために、そののろいを変えて、祝福とされた。あなたの神、主があなたを
愛されたからである。六あなたは一生いつまでも彼らのために平安をも、
幸福をも求めてはならない。
七あなたはエドムびとを憎んではならない。彼はあなたの兄弟だから

である。またエジプトびとを憎んではならない。あなたはかつてその国の
寄留者であったからである。八そして彼らが産んだ子どもは三代目には、
主の会衆に加わることができる。
九敵を攻めるために出て陣営におる時は、すべての汚れた物を避けなけ
ればならない。
一〇あなたがたのうちに、夜の思いがけない事によって身の汚れた人が
あるならば、陣営の外に出なければならない。陣営の内に、はいってはな
らない。一一しかし、夕方になって、水で身を洗い、日が没して後、陣営
の内に、はいることができる。
一二あなたはまた陣営の外に一つの所を設けておいて、用をたす時、そ
こに出て行かなければならない。一三また武器と共に、くわを備え、外に出
て、かがむ時、それをもって土を掘り、向きをかえて、出た物をおおわな

ければならない。一四あなたの神、主があなたを救い、敵をあなたにわたそ
うと、陣営の中を歩まれるからである。ゆえに陣営は聖なる所として保
たなければならない。主があなたのうちにきたない物のあるのを見て、離
れ去られることのないためである。
一五主人を避けて、あなたのところに逃げてきた奴隷を、その主人にわ
たしてはならない。一六その者をあなたがたのうちに、あなたと共におら
せ、町の一つのうち、彼が好んで選ぶ場所に住ませなければならない。彼
を虐待してはならない。
一七イスラエルの女子は神殿娼婦となってはならない。またイスラエル
の男子は神殿男娼となってはならない。一八娼婦の得た価または男娼
の価をあなたの神、主の家に携えて行って、どんな誓願にも用いてはな
らない。これはともにあなたの神、主の憎まれるものだからである。

一九兄弟に利息を取って貸してはならない。金銭の利息、食物の利息
などすべて貸して利息のつく物の利息を取ってはならない。
二〇外国人に
は利息を取って貸してもよい。ただ兄弟には利息を取って貸してはならな
い。これはあなたが、はいって取る地で、あなたの神、主がすべてあなた
のする事に祝福を与えられるためである。

二一あなたの神、主に誓願をかける時、それを果すことを怠ってはなら
ない。あなたの神、主は必ずそれをあなたに求められるからである。そ
れを怠るときは罪を得るであろう。
二二しかし、あなたが誓願をかけない
ならば、罪を得ることはない。
二三あなたが口で言った事は守って行わな
ければならない。あなたが口で約束した事は、あなたの神、主にあなたが
自発的に誓願したのだからである。

二四あなたが隣人のぶどう畑にはいる時、そのぶどうを心にまかせて

飽きるほど食べてもよい。しかし、あなたの器の中に取り入れてはならな
い。二五あなたが隣人の麦畑にはいる時、手でその穂を摘んで食べてもよ
い。しかし、あなたの隣人の麦畑にかまを入れてはならない。
第二四章一人が妻をめとって、結婚したのちに、その女に恥ずべきこ
とのあるのを見て、好まなくなったならば、離縁状を書いて彼女の手に
渡し、家を去らせなければならない。二女がその家を出てのち、行って、
ほかの人にとつぎ、三後の夫も彼女をきらって、離縁状を書き、その手
に渡して家を去らせるか、または妻にめとった後の夫が死んだときは、四
彼女はすでに身を汚したのちであるから、彼女を去らせた先の夫は、ふ
たたび彼女を妻にめとることはできない。これは主の前に憎むべき事だか
らである。あなたの神、主が嗣業としてあなたに与えられる地に罪を負
わせてはならない。

五人が新たに妻をめとった時は、戦争に出してはならない。また何の務
もこれに負わせてはならない。その人は一年の間、束縛なく家にいて、そ
のめとった妻を慰めなければならない。
六ひきうす、またはその上石を質にとってはならない。これは命をつな
ぐものを質にとることだからである。
七イスラエルの人々のうちの同胞のひとりをかどわかして、これを奴隷
のようにあしらい、またはこれを売る者を見つけたならば、そのかどわか
した者を殺して、あなたがたのうちから悪を除き去らなければならない。
八らい病の起った時は気をつけて、すべてレビびとたる祭司が教えるこ
とを、よく守って行わなければならない。すなわちわたしが彼らに命じ
たように、あなたがたはそれを守って行わなければならない。九あなたが
たがエジプトから出てきたとき、道であなたの神、主がミリアムにされた

ことを記憶しなければならない。

一〇あなたが隣人に物を貸すときは、自分でその家にはいって、質物を取ってはならない。一一あなたは外に立っていて、借りた人が質物を外にいるあなたのところへ持ち出さなければならない。一二もしその人が貧しい人である時は、あなたはその質物を留めおいて寝てはならない。一三その質物は日の入るまでに、必ず返さなければならない。そうすれば彼は自分の上着をかけて寝ることができて、あなたを祝福するであろう。それはあなたの神、主の前にあなたの義となるであろう。

一四貧しく乏しい雇人は、同胞であれ、またはあなたの国で、町のうちに寄留している他国人であれ、それを虐待してはならない。一五賃銀はその日のうちに払い、それを日の入るまで延ばしてはならない。彼は貧しい者で、その心をこれにかけているからである。そうしなければ彼はあなた

を主に訴えて、あなたは罪を得るであろう。
一六父は子のゆえに殺さるべきではない。子は父のゆえに殺さるべきで
はない。おのおの自分の罪のゆえに殺さるべきである。
一七寄留の他国人または孤児のさばきを曲げてはならない。寡婦の着物
を質に取ってはならない。一八あなたはかつてエジプトで奴隷であったが、
あなたの神、主がそこからあなたを救い出されたことを記憶しなければな
らない。それでわたしはあなたにこの事をせよと命じるのである。
一九あなたが畑で穀物を刈る時、もしその一束を畑におき忘れたなら
ば、それを取りに引き返してはならない。それは寄留の他国人と孤児と寡婦
に取らせなければならない。そうすればあなたの神、主はすべてあなたが
する事において、あなたを祝福されるであろう。二〇あなたがオリブの
実をうち落すときは、ふたたびその枝を捜してはならない。それを寄留の

他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない。二一またぶどう畑のぶど
うを摘み取るときは、その残ったものを、ふたたび捜してはならない。そ
れを寄留の他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない。二二あなたは
かつてエジプトの国で奴隷であったことを記憶しなければならない。それ
でわたしはあなたにこの事をせよと命じるのである。

第二五章一人と人との間に争い事があって、さばきを求めてきたなら
ば、さばきびとはこれをさばいて、正しい者を正しいとし、悪い者を悪い
としなければならない。二その悪い者が、むち打つべき者であるならば、さ
ばきびとは彼を伏させ、自分の前で、その罪にしたがい、数えて彼をむち打
たせなければならない。三彼をむち打つには四十を越えてはならない。も
しそれを越えて、それよりも多くむちを打つときは、あなたの兄弟はあな
たの目の前で、はずかしめられることになるであろう。

四脱穀をする牛にくつこを掛けてはならない。

五兄弟が一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死んで子のない時は、
その死んだ者の妻は出て、他人にとついではならない。その夫の兄弟が
彼女の所にはいり、めとって妻とし、夫の兄弟としての道を彼女につ
くさなければならない。六そしてその女が初めに産む男の子に、死んだ
兄弟の名を継がせ、その名をイスラエルのうちに絶やさないようにしなけ
ればならない。七しかしその人が兄弟の妻をめとるのを好まないならば、
その兄弟の妻は町の門へ行って、長老たちに言わなければならない、『わ
たしの夫の兄弟はその兄弟の名をイスラエルのうちに残すのを拒んで、
夫の兄弟としての道をつくすことを好みません』。八そのとき町の長老
たちは彼を呼び寄せて、さとさなければならない。もし彼が固執して、『わ
たしは彼女をめとることを好みません』と言うならば、九その兄弟の妻は

長老たちの目の前で、彼のそばに行き、その足のくつを脱がせ、その顔
につばきして、答えて言わなければならない。『兄弟の家をたてない者に
は、このようにすべきです』。一〇そして彼の家の名は、くつを脱がされた
者の家と、イスラエルのうちで呼ばれるであろう。
一一ふたりの人が互に争うときに、そのひとりの人の妻が、打つ者の
手から夫を救おうとして近づき、手を伸べて、その人の隠し所をつかま
えるならば、一二その女の手を切り落さなければならない。あわれみをか
けてはならない。
一三あなたの袋に大小二種の重り石を入れておいてはならない。一四
あなたの家に大小二種のますをおいてはならない。一五不足のない正しい
重り石を持ち、また不足のない正しいますを持たなければならない。そう
すればあなたの神、主が賜わる地で、あなたは長く命を保つことができ

るであろう。一六すべてこのような不正をする者を、あなたの神、主が憎
まれるからである。
一七あなたがエジプトから出てきた時、道でアマレクびとがあなたにした
ことを記憶しなければならない。一八すなわち彼らは道であなたに出会い、
あなたがうみ疲れている時、うしろについてきていたすべての弱っている
者を攻め撃った。このように彼らは神を恐れなかった。一九それで、あな
たの神、主が嗣業として賜わる地で、あなたの神、主があなたの周囲のす
べての敵を征服して、あなたに安息を与えられる時、あなたはアマレクの
名を天の下から消し去らなければならない。この事を忘れてはならない。

第二六章一あなたの神、主が嗣業として賜わる国にはいって、それを
所有し、そこに住む時は、二あなたの神、主が賜わる国にできる、地のす
べての実の初物を取ってかごに入れ、あなたの神、主がその名を置くため

に選ばれる所へ携えて行かなければならない。三そしてその時の祭司の
所へ行って彼に言わなければならない、『きょう、あなたの神、主にわた
しは申します。主がわれわれに与えると先祖たちに誓われた国に、わたし
はいることができました』。四そのとき祭司はあなたの手からそのかごを
受け取ってあなたの神、主の祭壇の前に置かなければならない。
五そして、あなたはあなたの神、主の前に述べて言わなければならない、
『わたしの先祖は、さすらいの一アラムびとでありましたが、わずかの人を
連れてエジプトへ下って行って、その所に寄留し、ついにそこで大きく、
強い、人数の多い国民になりました。六ところがエジプトびとはわれわれ
をしえたげ、また悩まして、つらい労役を負わせましたが、七われわれが
先祖たちの神、主に叫んだので、主はわれわれの声を聞き、われわれの悩
みと、骨折りと、しえたげとを顧み、八主は強い手と、伸べた腕と、大い

なる恐るべき事と、しるしと、不思議とをもって、われわれをエジプトか
ら導き出し、
九われわれをこの所へ連れてきて、乳と蜜の流れるこの地をわれわれに賜わりました。
一〇主よ、ごらんください。あなたがわたしに賜わった地の実の初物を、いま携えてきました』。そしてあなたはそれをあなたの神、主の前に置いて、あなたの神、主の前に礼拝し、
一一あなたの神、主があなたとあなたの家とに賜わったすべての良い物をもって、レビびとおよびあなたのなかにいる寄留の他国人と共に喜び楽しまなければならない。

一二第三年すなわち十分の一を納める年に、あなたがすべての産物の十分の一を納め終って、それをレビびとと寄留の他国人と孤児と寡婦とに与え、町のうちで彼らに飽きるほど食べさせた時、
一三あなたの神、主の前で言わなければならない、『わたしはその聖なる物を家から取り出し、またレ

ビびとと寄留の他国人と孤児と寡婦とにそれを与え、すべてあなたが命じ
られた命令のとおりにいたしました。わたしはあなたの命令にそむかず、
またそれを忘れませんでした。一四わたしはその聖なる物を喪のうちで食
べたことがなく、また汚れた身でそれを取り出したことがなく、また死人
にそれを供えたことがありませんでした。わたしはわたしの神、主の声に
聞き従い、すべてあなたがわたしに命じられたとおりにいたしました。一
五あなたの聖なるすみかである天からみそなわして、あなたの民イスラエ
ルと、あなたがわれわれに与えられた地とを祝福してください。これはあ
なたがわれわれの先祖に誓われた乳と蜜の流れる地です』。

一六きょう、あなたの神、主はこれらの定めと、おきてとを行うことを
あなたに命じられる。それゆえ、あなたは心をつくし、精神をつくしてそ
れを守り行わなければならない。一七きょう、あなたは主をあなたの神と

し、かつその道に歩み、定めと、戒めと、おきてとを守り、その声に聞き
従うことを明言した。一八そして、主は先に約束されたように、きょう、
あなたを自分の宝の民とされること、また、あなたがそのすべての命令を
守るべきことを明言された。一九主は誉と良き名と栄えとをあなたに与
えて、主の造られたすべての国民にまさるものとされるであろう。あなた
は主が言われたように、あなたの神、主の聖なる民となるであろう」。
第二七章一モーセとイスラエルの長老たちとは民に命じて言った、「わ
たしが、きょう、あなたがたに命じるすべての戒めを守りなさい。二あな
たがたがヨルダンを渡ってあなたの神、主が賜わる国にはいる時、あなた
は大きな石数個を立てて、それにしっくいを塗り、三そしてあなたが渡っ
て、あなたの先祖たちの神、主が約束されたようにあなたの神、主が賜わ
る地、すなわち乳と蜜の流れる地にはいる時、この律法のすべての言葉を

その上に書きしるさなければならない。四すなわち、あなたがたが、ヨルダ
ンを渡ったならば、わたしが、きょう、あなたがたに命じるそれらの石をエ
バル山に立て、それにしっくいを塗らなければならない。五またそこにあな
たの神、主のために、祭壇、すなわち石の祭壇を築かなければならない。
鉄の器を石に当てず、六自然のままの石であなたの神、主のために祭壇
を築き、その上であなたの神、主に燔祭をささげなければならない。七ま
た酬恩祭の犠牲をささげて、その所で食べ、あなたの神、主の前で喜
び楽しまなければならない。八あなたはこの律法のすべての言葉をその石
の上に明らかに書きしるさなければならない」。

九またモーセとレビびとたる祭司たちとは、イスラエルのすべての人々
に言った、「イスラエルよ、静かに聞きなさい。あなたは、きょう、あなた
の神、主の民となった。一〇それゆえ、あなたの神、主の声に聞き従い、

わたしが、きょう、命じる戒めと定めとを行わなければならない」。
一一その日またモーセは民に命じて言った、一二「あなたがたがヨルダン
を渡った時、次の人たちはゲリジム山に立って民を祝福しなければなら
ない。すなわちシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ヨセフおよびベニヤミ
ン。一三また次の人たちはエバル山に立ってのろわなければならない。す
なわちルベン、ガド、アセル、ゼブルン、ダンおよびナフタリ。一四そし
てレビびとは大声でイスラエルのすべての人々に告げて言わなければなら
ない。

一五『工人の手の作である刻んだ像、または鋳た像は、主が憎まれるも
のであるから、それを造って、ひそかに安置する者はのろわれる』。民は、
みな答えてアァメンと言わなければならない。

一六『父や母を軽んずる者はのろわれる』。民はみなアァメンと言わなけ
ればならない。

一七『隣人との土地の境を移す者はのろわれる』。民はみなアァメンと言わなければならない。

一八『盲人を道に迷わす者はのろわれる』。民はみなアァメンと言わなければならない。

一九『寄留の他国人や孤児、寡婦のさばきを曲げる者はのろわれる』。民はみなアァメンと言わなければならない。

二〇『父の妻を犯す者は、父を恥ずかしめるのであるからのろわれる』。民はみなアァメンと言わなければならない。

二一『すべて獣を犯す者はのろわれる』。民はみなアァメンと言わなければならない。

二二『父の娘、または母の娘である自分の姉妹を犯す者はのろわれる』。民はみなアァメンと言わなければならない。

二三『妻の母を犯す者はのろわれる』。民はみなアァメンと言わなければ

ならない。
二四『ひそかに隣人を撃ち殺す者はのろわれる』。民はみなアァメンと言
わなければならない。
二五『まいないを取って罪なき者を殺す者はのろわれる』。民はみなアァ
メンと言わなければならない。
二六『この律法の言葉を守り行わない者はのろわれる』。民はみなアァ
メンと言わなければならない。

第二八章一もしあなたが、あなたの神、主の声によく聞き従い、わたし
が、きょう、命じるすべての戒めを守り行うならば、あなたの神、主は
あなたを地のもろもろの国民の上に立たせられるであろう。二もし、あな
たがあなたの神、主の声に聞き従うならば、このもろもろの祝福はあな
たに臨み、あなたに及ぶであろう。三あなたは町の内でも祝福され、畑
でも祝福されるであろう。四またあなたの身から生れるもの、地に産する

物、家畜の産むもの、すなわち牛の子、羊の子は祝福されるであろう。
五またあなたのかごと、こねばちは祝福されるであろう。六あなたは、は
いるにも祝福され、出るにも祝福されるであろう。
七敵が起ってあなたを攻める時は、主はあなたにそれを撃ち敗らせられ
るであろう。彼らは一つの道から攻めて来るが、あなたの前で七つの道か
ら逃げ去るであろう。八主は命じて祝福をあなたの倉と、あなたの手のす
べてのわざにくだし、あなたの神、主が賜わる地であなたを祝福される
であろう。九もし、あなたの神、主の戒めを守り、その道を歩むならば、
主は誓われたようにあなたを立てて、その聖なる民とされるであろう。一
〇そうすれば地のすべての民は皆あなたが主の名をもって唱えられるのを
見てあなたを恐れるであろう。一一主があなたに与えると先祖に誓われた
地で、主は良い物、すなわちあなたの身から生れる者、家畜の産むもの、地

に産する物を豊かにされるであろう。一二主はその宝の蔵である天をあ
なたのために開いて、雨を季節にしたがってあなたの地に降らせ、あなた
の手のすべてのわざを祝福されるであろう。あなたは多くの国民に貸す
ようになり、借りることはないであろう。一三主はあなたをかしらとなら
せ、尾とはならせられないであろう。あなたはただ栄えて衰えることはな
いであろう。きょう、わたしが命じるあなたの神、主の戒めに聞き従っ
て、これを守り行うならば、あなたは必ずこのようになるであろう。一
四きょう、わたしが命じるこのすべての言葉を離れて右または左に曲り、
他の神々に従い、それに仕えてはならない。

一五しかし、あなたの神、主の声に聞き従わず、きょう、わたしが命じ
るすべての戒めと定めとを守り行わないならば、このもろもろののろい
があなたに臨み、あなたに及ぶであろう。一六あなたは町のうちでものろわ

れ、畑(はたけ)でものろわれ、一七あなたのかごも、こねばちものろわれ、一八あな
たの身(み)から生(うま)れるもの、地(ち)に産(さん)する物(もの)、牛(うし)の子(こ)、羊(ひつじ)の子(こ)ものろわれるであ
ろう。一九あなたは、はいるにものろわれ、出(で)るにものろわれるであろう。
二〇主(しゅ)はあなたが手(て)をくだすすべての働(はたら)きにのろいと、混乱(こんらん)と、懲(こら)しめ
とを送(おく)られ、あなたはついに滅(ほろ)び、すみやかにうせ果(は)てるであろう。これ
はあなたが悪(あく)をおこなってわたしを捨(す)てたからである。二一主(しゅ)は疫病(えきびょう)をあ
なたの身(み)につかせ、あなたが行(い)って取(と)る地(ち)から、ついにあなたを断(た)ち滅(ほろ)ぼ
されるであろう。二二主(しゅ)はまた肺病(はいびょう)と熱病(ねつびょう)と炎症(えんしょう)と間(あいだ)けつ熱(ねつ)と、かん
ばつと、立(た)ち枯(が)れと、腐(くさ)り穂(ほ)とをもってあなたを撃(う)たれるであろう。これら
のものはあなたを追(お)い、ついにあなたを滅(ほろ)ぼすであろう。二三あなたの頭(あたま)
の上(うえ)の天(てん)は青銅(せいどう)となり、あなたの下(した)の地(ち)は鉄(てつ)となるであろう。二四主(しゅ)はあ
なたの地(ち)の雨(あめ)を、ちりと、ほこりに変(かわ)らせ、それが天(てん)からあなたの上(うえ)にく

だって、ついにあなたを滅ぼすであろう。
二五主はあなたを敵の前で敗れさせられるであろう。あなたは一つの道
から彼らを攻めて行くが、彼らの前で七つの道から逃げ去るであろう。そ
してあなたは地のもろもろの国に恐るべき見せしめとなるであろう。二六
またあなたの死体は空のもろもろの鳥と、地の獣とのえじきとなり、し
かもそれを追い払う者はないであろう。二七主はエジプトの腫物と潰瘍と
壊血病とひぜんとをもってあなたを撃たれ、あなたはいやされることは
ないであろう。二八また主はあなたを撃って気を狂わせ、目を見えなくし、
心を混乱させられるであろう。二九あなたは盲人が暗やみに手探りする
ように、真昼にも手探りするであろう。あなたは行く道で栄えることがな
く、ただ常にしえたげられ、かすめられるだけで、あなたを救う者はない
であろう。三〇あなたは妻をめとっても、ほかの人が彼女と寝るであろう。

家を建てても、その中に住まないであろう。ぶどう畑を作っても、その実
を摘み取ることがないであろう。三一あなたの牛が目の前でほふられても、
あなたはそれを食べることができず、あなたのろばが目の前で奪われても、
返されないであろう。あなたの羊が敵のものになっても、それを救って
あなたに返す者はないであろう。三二あなたのむすこや娘は他国民にわた
される。あなたの目はそれを見、終日、彼らを慕って衰えるが、あなた
は手を施すすべもないであろう。三三あなたの地の産物およびあなたの労
して獲た物はみなあなたの知らない民が食べるであろう。あなたは、ただ
常にしえたげられ、苦しめられるのみであろう。三四こうしてあなたは目に
見る事柄によって、気が狂うにいたるであろう。三五主はあなたのひざと、
はぎとに悪い、いやし得ない腫物を生じさせて、足の裏から頭の頂に
まで及ぼされるであろう。

三六主はあなたとあなたが立てた王とを携えて、あなたもあなたの先祖
も知らない国に移されるであろう。あなたはそこで木や石で造ったほかの
神々に仕えるであろう。三七あなたは主があなたを追いやられるもろもろ
の民のなかで驚きとなり、ことわざとなり、笑い草となるであろう。三
八あなたが多くの種を畑に携えて出ても、その収穫は少ないであろう。
いなごがそれを食いつくすからである。三九あなたがぶどう畑を作り、そ
れにつちかっても、そのぶどう酒を飲むことができず、その実を集めるこ
ともないであろう。虫がそれを食べるからである。四〇あなたの国にはあ
まねくオリブの木があるであろう。しかし、あなたはその油を身に塗るこ
とができないであろう。その実がみな落ちてしまうからである。四一むすこ
や、娘があなたに生れても、あなたのものにならないであろう。彼らは
捕えられて行くからである。四二あなたのもろもろの木、および地の産物

は、いなごが取って食べるであろう。四三あなたのうちに寄留する他国人
は、ますます高くなり、あなたの上に出て、あなたはますます低くなるで
あろう。四四彼はあなたに貸し、あなたは彼に貸すことができない。彼は
かしらとなり、あなたは尾となるであろう。四五このもろもろののろいが、
あなたに臨み、あなたを追い、ついに追いついて、あなたを滅ぼすであろ
う。これはあなたの神、主の声に聞き従わず、あなたに命じられた戒め
と定めとを、あなたが守らなかったからである。四六これらの事は長くあ
なたとあなたの子孫のうえにあって、しるしとなり、また不思議となるで
あろう。

四七あなたがすべての物に豊かになり、あなたの神、主に心から喜び
楽しんで仕えないので、四八あなたは飢え、かわき、裸になり、すべての物
に乏しくなって、主があなたにつかわされる敵に仕えるであろう。敵は鉄

のくびきをあなたのくびにかけ、ついにあなたを滅ぼすであろう。四九すな
わち主は遠い所から、地のはてから一つの民を、はげたかが飛びかけるよ
うに、あなたに攻めきたらせられるであろう。これはあなたがその言葉を知
らない民、五〇顔の恐ろしい民であって、彼らは老人の身を顧みず、幼
い者をあわれまず、五一あなたの家畜が産むものや、地の産物を食って、あ
なたを滅ぼし、穀物をも、酒をも、油をも、牛の子をも、羊の子をも、あ
なたの所に残さず、ついにあなたを全く滅ぼすであろう。五二その民は
全国ですべての町を攻め囲み、ついにあなたが頼みとする、堅固な高い石
がきをことごとく撃ちくずし、あなたの神、主が賜わった国のうちのすべ
ての町々を攻め囲むであろう。五三あなたは敵に囲まれ、激しく攻めなや
まされて、ついにあなたの神、主が賜わったあなたの身から生れた者、む
すこ、娘の肉を食べるに至るであろう。五四あなたがたのうちのやさしい、

温和な男でさえも、自分の兄弟、自分のふところの妻、最後に残ってい
る子供にも食物を惜しんで与えず、五五自分が自分の子供を食べ、その肉
を少しでも、この人々のだれにも与えようとはしないであろう。これは敵
があなたのすべての町々を囲み、激しく攻め悩まして、何をもその人に残
さないからである。五六またあなたがたのうちのやさしい、柔和な女、す
なわち柔和で、やさしく、足の裏を土に付けようともしない者でも、自分
のふところの夫や、むすこ、娘にもかくして、五七自分の足の間からで
る後産や、自分の産む子をひそかに食べるであろう。敵があなたの町々を
囲み、激しく攻めなやまして、すべての物が欠乏するからである。

五八もしあなたが、この書物にしるされているこの律法のすべての言葉
を守り行わず、あなたの神、主という栄えある恐るべき名を恐れな
いならば、五九主はあなたとその子孫の上に激しい災を下されるであろ

う。その災はきびしく、かつ久しく、その病気は重く、かつ久しいであ
ろう。六〇主はまた、あなたが恐れた病気、すなわちエジプトのもろもろ
の病気を再び臨ませて、あなたの身につかせられるであろう。六一またこ
の律法の書にのせてないもろもろの病気と、もろもろの災とを、主はあ
なたが滅びるまで、あなたの上に下されるであろう。六二あなたがたは天
の星のように多かったが、あなたの神、主の声に聞き従わなかったから、
残る者が少なくなるであろう。六三さきに主があなたがたを良くあしらい、
あなたがたを多くするのを喜ばれたように、主は今あなたがたを滅ぼし
絶やすのを喜ばれるであろう。あなたがたは、はいって取る地から抜き去
られるであろう。六四主は地のこのはてから、かのはてまでのもろもろの民
のうちにあなたがたを散らされるであろう。その所で、あなたもあなたの
先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々にあなたは仕えるであ

ろう。六五その国々の民のうちであなたは安きを得ず、また足の裏を休め
る所も得られないであろう。主はその所で、あなたの心をおののかせ、
目を衰えさせ、精神を打ちしおれさせられるであろう。六六あなたの命
は細い糸にかかっているようになり、夜昼恐れおののいて、その命もお
ぼつかなく思うであろう。六七あなたが心にいだく恐れと、目に見るもの
によって、朝には『ああ夕であればよいのに』と言い、夕には『ああ朝で
あればよいのに』と言うであろう。六八主はあなたを舟に乗せ、かつてわた
しがあなたに告げて、『あなたは再びこれを見ることはない』と言った道
によって、あなたをエジプトへ連れもどされるであろう。あなたがたはそ
こで男女の奴隷として敵に売られるが、だれも買う者はないであろう」。
第二九章一これは主がモーセに命じて、モアブの地でイスラエルの人々
と結ばせられた契約の言葉であって、ホレブで彼らと結ばれた契約のほか

のものである。
二モーセはイスラエルのすべての人を呼び集めて言った、「あなたがたは
主がエジプトの地で、パロと、そのすべての家来と、その全地とにせられた
すべての事をまのあたり見た。三すなわちその大きな試みと、しるしと、
大きな不思議とをまのあたり見たのである。四しかし、今日まで主はあな
たがたの心に悟らせず、目に見させず、耳に聞かせられなかった。五わた
しは四十年の間、あなたがたを導いて荒野を通らせたが、あなたがたの
身につけた着物は古びず、足のくつは古びなかった。六あなたがたはまた
パンも食べず、ぶどう酒も濃い酒も飲まなかった。こうしてあなたがたは、
わたしがあなたがたの神、主であることを知るに至った。七あなたがたが
この所にきたとき、ヘシボンの王シホンと、バシャンの王オグがわれわれ
を迎えて戦ったが、われわれは彼らを撃ち敗って、八その地を取り、これ
をルベンびとと、ガドびとと、マナセびとの半ばとに、嗣業として与えた。

九それゆえ、あなたがたはこの契約の言葉を守って、それを行わなければ
ならない。そうすればあなたがたのするすべての事は栄えるであろう。
一〇あなたがたは皆、きょう、あなたがたの神、主の前に立っている。す
なわちあなたがたの部族のかしらたち、長老たち、つかさたちなど、イスラ
エルのすべての人々、一一あなたがたの小さい者たちも、妻たちも、宿営
のうちに寄留している他国人も、あなたのために、たきぎを割る者も、水
をくむ者も、みな主の前に立って、一二あなたの神、主が、きょう、あなた
と結ばれるあなたの神、主の契約と誓いとに、はいろうとしている。一三
これは主がさきにあなたに約束されたように、またあなたの先祖アブラハ
ム、イサク、ヤコブに誓われたように、きょう、あなたを立てて自分の民
とし、またみずからあなたの神となられるためである。一四わたしはただあ
なたがたとだけ、この契約と誓いとを結ぶのではない。一五きょう、ここ

で、われわれの神、主の前にわれわれと共に立っている者ならびに、きよ
う、ここにわれわれと共にいない者とも結ぶのである。
一六われわれがどのようにエジプトの国に住んでいたか、どのように国々
の民の中を通ってきたか、それはあなたがたが知っている。一七またあな
たがたは木や石や銀や金で造った憎むべき物と偶像とが、彼らのうちにあ
るのを見た。一八それゆえ、あなたがたのうちに、きょう、その心にわれわ
れの神、主を離れてそれらの国民の神々に行って仕える男や女、氏族
や部族があってはならない。またあなたがたのうちに、毒草や、にがよも
ぎを生ずる根があってはならない。一九そのような人はこの誓いの言葉を
聞いても、心に自分を祝福して『心をかたくなにして歩んでもわたし
には平安がある』と言うであろう。そうすれば潤った者も、かわいた者も
ひとしく滅びるであろう。二〇主はそのような人をゆるすことを好まれな

い。かえって主はその人に怒りとねたみを発し、この書物にしるされたす
べてののろいを彼の上に加え、主はついにその人の名を天の下から消し去
られるであろう。二一主はイスラエルのすべての部族のうちからその人を
区別して災をくだし、この律法の書にしるされた契約の中のもろもろの
のろいのようにされるであろう。二二後の代の人、すなわちあなたがたの
ちに起るあなたがたの子孫および遠い国から来る外国人は、この地の災
を見、主がこの地にくだされた病気を見て言うであろう。二三――全地は
硫黄となり、塩となり、焼け土となって、種もまかれず、実も結ばず、なん
の草も生じなくなって、むかし主が怒りと憤りをもって滅ぼされたソ
ドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムの破滅のようである。――二四すなわち、
もろもろの国民は言うであろう、『なぜ、主はこの地にこのようなことをさ
れたのか。この激しい大いなる怒りは何ゆえか』。二五そのとき人々は言う

であろう、『彼らはその先祖の神、主がエジプトの国から彼らを導き出し
て彼らと結ばれた契約をすて、二六行って彼らの知らない、また授からな
い、ほかの神々に仕えて、それを拝んだからである。二七それゆえ主はこ
の地にむかって怒りを発し、この書物にしるされたもろもろののろいをこ
れにくだし、二八そして主は怒りと、はげしい怒りと大いなる憤りとを
もって彼らをこの地から抜き取って、ほかの国に投げやられた。今日見る
とおりである』。

二九隠れた事はわれわれの神、主に属するものである。しかし表わされ
たことは長くわれわれとわれわれの子孫に属し、われわれにこの律法のす
べての言葉を行わせるのである。

第三〇章一わたしがあなたがたの前に述べたこのもろもろの祝福と、の
ろいの事があなたに臨み、あなたがあなたの神、主に追いやられたもろも

ろの国民のなかでこの事を心に考えて、二あなたもあなたの子供も共に
あなたの神、主に立ち帰り、わたしが、きょう、命じるすべてのことにおい
て、心をつくし、精神をつくして、主の声に聞き従うならば、三あなた
の神、主はあなたを再び栄えさせ、あなたをあわれみ、あなたの神、主は
あなたを散らされた国々から再び集められるであろう。四たといあなたが
天のはてに追いやられても、あなたの神、主はそこからあなたを集め、そこ
からあなたを連れ帰られるであろう。五あなたの神、主はあなたの先祖が
所有した地にあなたを帰らせ、あなたはそれを所有するに至るであろう。
主はまたあなたを栄えさせ、数を増して先祖たちよりも多くされるであろ
う。六そしてあなたの神、主はあなたの心とあなたの子孫の心に割礼を
施し、あなたをして、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主を愛
させ、こうしてあなたに命を得させられるであろう。七あなたの神、主は

また、あなたを迫害する敵と、あなたを憎む者とに、このもろもろののろい
をこうむらせられるであろう。八しかし、あなたは再び主の声に聞き従
い、わたしが、きょう、あなたに命じるすべての戒めを守るであろう。九
そうすればあなたの神、主はあなたのするすべてのことと、あなたの身か
ら生れる者と、家畜の産むものと、地に産する物を豊かに与えて、あなた
を栄えさせられるであろう。すなわち主はあなたの先祖たちを喜ばれた
ように再びあなたを喜んで、あなたを栄えさせられるであろう。一〇こ
れはあなたが、あなたの神、主の声に聞きしたがい、この律法の書にしる
された戒めと定めとを守り、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、
主に帰するからである。

一一わたしが、きょう、あなたに命じるこの戒めは、むずかしいものでは
なく、また遠いものでもない。一二これは天にあるのではないから、『だれ

がわれわれのために天に上り、それをわれわれのところへ持ってきて、わ
れわれに聞かせ、行わせるであろうか』と言うに及ばない。一三またこれ
は海のかなたにあるのではないから、『だれがわれわれのために海を渡って
行き、それをわれわれのところへ携えてきて、われわれに聞かせ、行わ
せるであろうか』と言うに及ばない。一四この言葉はあなたに、はなはだ近
くあってあなたの口にあり、またあなたの心にあるから、あなたはこれを
行うことができる。

一五見よ、わたしは、きょう、命とさいわい、および死と災をあなた
の前に置いた。一六すなわちわたしは、きょう、あなたにあなたの神、主を
愛し、その道に歩み、その戒めと定めと、おきてとを守ることを命じる。
それに従うならば、あなたは生きながらえ、その数は多くなるであろう。
またあなたの神、主はあなたが行って取る地であなたを祝福されるであ

ろう。一七しかし、もしあなたが心をそむけて聞き従わず、誘われて他の
神々を拝み、それに仕えるならば、一八わたしは、きょう、あなたがたに告
げる。あなたがたは必ず滅びるであろう。あなたがたはヨルダンを渡り、
はいって行って取る地でながく命を保つことができないであろう。一九わ
たしは、きょう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたし
は命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選
ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえる
ことができるであろう。二〇すなわちあなたの神、主を愛して、その声を
聞き、主につき従わなければならない。そうすればあなたは命を得、か
つ長く命を保つことができ、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与
えると誓われた地に住むことができるであろう」。

第三一章一そこでモーセは続いてこの言葉をイスラエルのすべての人に

告げて、二彼らに言った、「わたしは、きょう、すでに百二十歳になり、もは
や出入りすることはできない。また主はわたしに『おまえはこのヨルダン
を渡ることはできない』と言われた。三あなたの神、主はみずからあなた
に先立って渡り、あなたの前から、これらの国々の民を滅ぼし去って、あ
なたにこれを獲させられるであろう。また主がかつて言われたように、ヨ
シュアはあなたを率いて渡るであろう。四主がさきにアモリびとの王シホ
ンとオグおよびその地にされたように、彼らにもおこなって彼らを滅ぼさ
れるであろう。五主は彼らをあなたがたに渡されるから、あなたがたはわ
たしが命じたすべての命令のとおりに彼らに行わなければならない。六
あなたがたは強く、かつ勇ましくなければならない。彼らを恐れ、おのの
いてはならない。あなたの神、主があなたと共に行かれるからである。主
は決してあなたを見放さず、またあなたを見捨てられないであろう」。

七モーセはヨシュアを呼び、イスラエルのすべての人の目の前で彼に言っ
た、「あなたはこの民と共に行き、主が彼らの先祖たちに与えると誓われ
た地に入るのであるから、あなたは強く、かつ勇ましくなければならない。
あなたは彼らにそれを獲させるであろう。八主はみずからあなたに先立っ
て行き、またあなたと共におり、あなたを見放さず、見捨てられないであ
ろう。恐れてはならない、おののいてはならない」。
九モーセはこの律法を書いて、主の契約の箱をかつぐレビの子孫である
祭司およびイスラエルのすべての長老たちに授けた。一〇そしてモーセは
彼らに命じて言った、「七年の終りごとに、すなわち、ゆるしの年の定めの
時になり、かりいおの祭に、一一イスラエルのすべての人があなたの神、
主の前に出るため、主の選ばれる場所に来るとき、あなたはイスラエルの
すべての人の前でこの律法を読んで聞かせなければならない。一二すなわ

ち男、女、子供およびあなたの町のうちに寄留している他国人など民を
集め、彼らにこれを聞かせ、かつ学ばせなければならない。そうすれば彼
らはあなたがたの神、主を恐れてこの律法の言葉を、ことごとく守り行
うであろう。一三また彼らの子供たちでこれを知らない者も聞いて、あなた
がたの神、主を恐れることを学ぶであろう。あなたがたがヨルダンを渡っ
て行って取る地にながらえる日のあいだ常にそうしなければならない」。
一四主はまたモーセに言われた、「あなたの死ぬ日が近づいている。ヨシュ
アを召して共に会見の幕屋に立ちなさい。わたしは彼に務を命じるであ
ろう」。モーセとヨシュアが行って会見の幕屋に立つと、一五主は幕屋で雲
の柱のうちに現れられた。その雲の柱は幕屋の入口のかたわらにとど
まった。
一六主はモーセに言われた、「あなたはまもなく眠って先祖たちと一緒に

なるであろう。そのときこの民はたちあがり、はいって行く地の異なる神々
を慕って姦淫を行い、わたしを捨て、わたしが彼らと結んだ契約を破る
であろう。
一七その日には、わたしは彼らにむかって怒りを発し、彼らを捨
て、わたしの顔を彼らに隠すゆえに、彼らは滅ぼしつくされ、多くの災
と悩みが彼らに臨むであろう。そこでその日、彼らは言うであろう、『これ
らの災がわれわれに臨むのは、われわれの神がわれわれのうちにおられ
ないからではないか』。
一八しかも彼らがほかの神々に帰して、もろもろの
悪を行うゆえに、わたしはその日には必ずわたしの顔を隠すであろう。
一九それであなたがたは今、この歌を書きしるし、イスラエルの人々に教
えてその口に唱えさせ、この歌をイスラエルの人々に対するわたしのあか
しとならせなさい。
二〇わたしが彼らの先祖たちに誓った、乳と蜜の流れ
る地に彼らを導き入れる時、彼らは食べて飽き、肥え太るに及んで、ほ

かの神々に帰し、それに仕えて、わたしを軽んじ、わたしの契約を破るで
あろう。二一こうして多くの災と悩みとが彼らに臨む時、この歌は彼ら
に対して、あかしとなるであろう。（それはこの歌が彼らの子孫の口にあっ
て、彼らはそれを忘れないからである。）わたしが誓った地に彼らを導き
入れる前、すでに彼らが思いはかっている事をわたしは知っているからで
ある」。二二モーセはその日、この歌を書いてイスラエルの人々に教えた。
二三主はヌンの子ヨシュアに命じて言われた、「あなたはイスラエルの人々
をわたしが彼らに誓った地に導き入れなければならない。それゆえ強く
かつ勇ましくあれ。わたしはあなたと共にいるであろう」。
二四モーセがこの律法の言葉を、ことごとく書物に書き終った時、二五
モーセは主の契約の箱をかつぐレビびとに命じて言った、二六「この律法
の書をとって、あなたがたの神、主の契約の箱のかたわらに置き、その所

であなたにむかってあかしをするものとしなさい。二七わたしはあなたのそ
むくことと、かたくななことを知っている。きょう、わたしが生きなが
らえて、あなたがたと一緒にいる間ですら、あなたがたは主にそむいた。
ましてわたしが死んだあとはどんなであろう。二八あなたがたの部族のすべ
ての長老たちと、つかさたちをわたしのもとに集めなさい。わたしはこれ
らの言葉を彼らに語り聞かせ、天と地とを呼んで彼らにむかってあかしさ
せよう。二九わたしは知っている。わたしが死んだのち、あなたがたは必
ず悪い事をして、わたしが命じた道を離れる。そして後の日に災があな
たがたに臨むであろう。これは主の悪と見られることを行い、あなたが
たのすることをもって主を怒らせるからである」。
三〇そしてモーセはイスラエルの全会衆に次の歌の言葉を、ことごとく
語り聞かせた。

第三二章

一「天よ、耳を傾けよ、わたしは語る、
地よ、わたしの口の言葉を聞け。
二わたしの教は雨のように降りそそぎ、
わたしの言葉は露のようにしたたるであろう。
若草の上に降る小雨のように、
青草の上にくだる夕立ちのように。
三わたしは主の名をのべよう、
われわれの神に栄光を帰せよ。
四主は岩であって、そのみわざは全く、
その道はみな正しい。
主は真実なる神であって、偽りなく、
義であって、正である。

五彼らは主にむかって悪を行い、
そのきずのゆえに、もはや主の子らではなく、
よこしまで、曲ったやからである。
六愚かな知恵のない民よ、
あなたがたはこのようにして主に報いるのか。
主はあなたを生み、あなたを造り、
あなたを堅く立てられたあなたの父ではないか。
七いにしえの日を覚え、
代々の年を思え。
あなたの父に問え、
彼はあなたに告げるであろう。
長老たちに問え、

彼らはあなたに語るであろう。
八いと高き者は人の子らを分け、
諸国民にその嗣業を与えられたとき、
イスラエルの子らの数に照して、
もろもろの民の境を定められた。
九主の分はその民であって、
ヤコブはその定められた嗣業である。
一〇主はこれを荒野の地で見いだし、
獣のほえる荒れ地で会い、
これを巡り囲んでいたわり、
目のひとみのように守られた。
一一わしがその巣のひなを呼び起し、

その子(こ)の上(うえ)に舞(ま)いかけり、
その羽(はね)をひろげて彼(かれ)らをのせ、
そのつばさの上(うえ)にこれを負(お)うように、
一二主(しゅ)はただひとりで彼(かれ)を導(みちび)かれて、
ほかの神々(かみがみ)はあずからなかった。
一三主(しゅ)は彼(かれ)に地(ち)の高(たか)き所(ところ)を乗(の)り通(とお)らせ、
田畑(たはた)の産物(さんぶつ)を食(く)わせ、
岩(いわ)の中(なか)から蜜(みつ)を吸(す)わせ、
堅(かた)い岩(いわ)から油(あぶら)を吸(す)わせ、
一四牛(うし)の凝乳(ぎょうにゅう)、羊(ひつじ)の乳(ちち)、
小羊(こひつじ)と雄羊(おひつじ)の脂肪(しぼう)、
バシャンの牛(うし)と雄(お)やぎ、

小麦の良い物を食わせられた。
またあなたはぶどうのしるのあわ立つ酒を飲んだ。
一五しかるにエシュルンは肥え太って、足でけった。
あなたは肥え太って、つややかになり、
自分を造った神を捨て、
救の岩を侮った。
一六彼らはほかの神々に仕えて、主のねたみを起し、
憎むべきおこないをもって主の怒りをひき起した。
一七彼らは神でもない悪霊に犠牲をささげた。
それは彼らがかつて知らなかった神々、
近ごろ出た新しい神々、
先祖たちの恐れることもしなかった者である。

一八あなたは自分を生んだ岩を軽んじ、
自分を造った神を忘れた。
一九主はこれを見、
そのむすこ、娘を怒ってそれを捨てられた。
二〇そして言われた、
『わたしはわたしの顔を彼らに隠そう。
わたしは彼らの終りがどうなるかを見よう。
彼らはそむき、もとるやから、
真実のない子らである。
二一彼らは神でもない者をもって、
わたしにねたみを起させ、
偶像をもって、わたしを怒らせた。

それゆえ、わたしは民ともいえない者をもって、
彼らにねたみを起させ、
愚かな民をもって、彼らを怒らせるであろう。
二二わたしの怒りによって、火は燃えいで、
陰府の深みにまで燃え行き、
地とその産物とを焼きつくし、
山々の基を燃やすであろう。
二三わたしは彼らの上に災を積みかさね、
わたしの矢を彼らにむかって射つくすであろう。
二四彼らは飢えて、やせ衰え、
熱病と悪い疫病によって滅びるであろう。
わたしは彼らを獣の歯にかからせ、

地に這うものの毒にあたらせるであろう。
二五外にはつるぎ、内には恐れがあって、
若き男も若き女も、
乳のみ子も、しらがの人も滅びるであろう。
二六わたしはまさに言おうとした、「彼らを遠く散らし、
彼らの事を人々が記憶しないようにしよう」。
二七しかし、わたしは敵が誇るのを恐れる。
あだびとはまちがえて言うであろう、
「われわれの手が勝ちをえたのだ。
これはみな主がされたことではない」』。
二八彼らは思慮の欠けた民、
そのうちには知識がない。

二九もし、彼らに知恵があれば、これをさとり、
その身の終りをわきまえたであろうに。
三〇彼らの岩が彼らを売らず、
主が彼らをわたされなかったならば、
どうして、ひとりで千人を追い、
ふたりで万人を敗ることができたであろう。
三一彼らの岩はわれらの岩に及ばない。
われらの敵もこれを認めている。
三二彼らのぶどうの木は、
ソドムのぶどうの木から出たもの、
またゴモラの野から出たもの、
そのぶどうは毒ぶどう、そのふさは苦い。

三三そのぶどう酒はへびの毒のよう、
まむしの恐ろしい毒のようである。
三四これはわたしのもとにたくわえられ、
わたしの倉に封じ込められているではないか。
三五彼らの足がすべるとき、
わたしはあだを返し、報いをするであろう。
彼らの災の日は近く、
彼らの破滅は、
すみやかに来るであろう。
三六主はついにその民をさばき、
そのしもべらにあわれみを加えられるであろう。
これは彼らの力がうせ去り、

つながれた者もつながれない者も、
もはやいなくなったのを、主が見られるからである。
三七そのとき主は言われるであろう、
『彼らの神々はどこにいるか、
彼らの頼みとした岩はどこにあるか。
三八彼らの犠牲のあぶらを食い、
灌祭の酒を飲んだ者はどこにいるか。
立ちあがってあなたがたを助けさせよ、
あなたがたを守らせよ。
三九今見よ、わたしこそは彼である。
わたしのほかに神はない。
わたしは殺し、また生かし、

傷つけ、またいやす。
わたしの手から救い出しうるものはない。
四〇わたしは天にむかい手をあげて誓う、
「わたしは永遠に生きる。
四一わたしがきらめくつるぎをとぎ、
手にさばきを握るとき、
わたしは敵にあだを返し、
わたしを憎む者に報復するであろう。
四二わたしの矢を血に酔わせ、
わたしのつるぎに肉を食わせるであろう。
殺された者と捕えられた者の血を飲ませ、
敵の長髪の頭の肉を食わせるであろう」』。

四三国々の民よ、主の民のために喜び歌え。
主はそのしもべの血のために報復し、
その敵にあだを返し、
その民の地の汚れを清められるからである」。
四四モーセとヌンの子ヨシュアは共に行って、この歌の言葉を、ことごと
く民に読み聞かせた。四五モーセはこの言葉を、ことごとくイスラエルのす
べての人に告げ終って、四六彼らに言った、「あなたがたはわたしが、きょ
う、あなたがたに命じるこのすべての言葉を心におさめ、子供たちにもこ
の律法のすべての言葉を守り行うことを命じなければならない。四七この
言葉はあなたがたにとって、むなしい言葉ではない。これはあなたがたの
いのちである。この言葉により、あなたがたはヨルダンを渡って行って取
る地で、長く命を保つことができるであろう」。

四八この日、主はモーセに言われた、四九「あなたはエリコに対するモアブ
の地にあるアバリム山すなわちネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々
に与えて獲させるカナンの地を見渡たせ。五〇あなたは登って行くその山
で死に、あなたの民に連なるであろう。あなたの兄弟アロンがホル山で
死んでその民に連なったようになるであろう。五一これはあなたがたがチン
の荒野にあるメリバテ・カデシの水のほとりで、イスラエルの人々のうち
でわたしにそむき、イスラエルの人々のうちでわたしを聖なるものとして
敬わなかったからである。五二それであなたはわたしがイスラエルの人々
に与える地を、目の前に見るであろう。しかし、その地に、はいることは
できない」。

第三三章一神の人モーセは死ぬ前にイスラエルの人々を祝福した。祝福
の言葉は次のとおりである。

二「主(しゅ)はシナイからこられ、
セイルからわれわれにむかってのぼられ、
パランの山(やま)から光(ひかり)を放(はな)たれ、
ちよろずの聖者(せいじゃ)の中(なか)からこられた。
その右(みぎ)の手(て)には燃(も)える火(ひ)があった。
三まことに主(しゅ)はその民(たみ)を愛(あい)される。
すべて主(しゅ)に聖別(せいべつ)されたものは、み手(て)のうちにある。
彼(かれ)らはあなたの足(あし)もとに座(ざ)して、
教(おしえ)をうける。
四モーセはわれわれに律法(りっぽう)を授(さず)けて、
ヤコブの会衆(かいしゅう)の所有(しょゆう)とさせた。
五民(たみ)のかしらたちが集(あつ)まり、

イスラエルの部族がみな集まった時、
主はエシュルンのうちに王となられた」。
六「ルベンは生きる、死にはしない。
しかし、その人数は少なくなるであろう」。
七ユダについては、こう言った、
「主よ、ユダの声を聞いて、
彼をその民に導きかえしてください。
み手をもって、彼のために戦ってください。
彼を助けて、敵に当らせてください」。
八レビについては言った、
「あなたのトンミムをレビに与えてください。
ウリムをあなたに仕える人に与えてください。

かつてあなたはマッサで彼を試み、
メリバの水のほとりで彼と争われた。
九彼はその父、その母について言った、
『わたしは彼らを顧みない』。
彼は自分の兄弟をも認めず、
自分の子供をも顧みなかった。
彼らはあなたの言葉にしたがい、
あなたの契約を守ったからである。
一〇彼らはあなたのおきてをヤコブに教え、
あなたの律法をイスラエルに教え、
薫香をあなたの前に供え、
燔祭を祭壇の上にささげる。

一一主よ、彼の力を祝福し、
彼の手のわざを喜び受けてください。
彼に逆らう者と、
彼を憎む者との腰を打ち砕いて、
立ち上がることのできないようにしてください」。
一二ベニヤミンについては言った、
「主に愛される者、
彼は安らかに主のそばにおり、
主は終日、彼を守り、
その肩の間にすまいを営まれるであろう」。
一三ヨセフについては言った、
「どうぞ主が彼の地を祝福されるように。

上なる天の賜物と露、
下に横たわる淵の賜物、
一四日によって産する尊い賜物、
月によって生ずる尊い賜物、
一五いにしえの山々の産する賜物、
とこしえの丘の尊い賜物、
一六地とそれに満ちる尊い賜物、
しばの中におられた者の恵みが、
ヨセフの頭に臨み、
その兄弟たちの君たる者の頭の頂にくだるように。
一七彼の牛のういごは威厳があり、
その角は野牛の角のよう、

これをもって国々の民をことごとく突き倒し、
地のはてにまで及ぶ。
このような者はエフライムに幾万とあり、
またこのような者はマナセに幾千とある」。
一八ゼブルンについては言った、
「ゼブルンよ、あなたは外に出て楽しみを得よ。
イッサカルよ、あなたは天幕にいて楽しみを得よ。
一九彼らは国々の民を山に招き、
その所で正しい犠牲をささげるであろう。
彼らは海の富を吸い、
砂に隠れた宝を取るからである」。
二〇ガドについては言った、

「ガドを大きくする者は、ほむべきかな。
ガドは、ししのように伏し、
腕や頭の頂をかき裂くであろう。
二一彼は初穂の地を自分のために選んだ。
そこには将軍の分も取り置かれていた。
彼は民のかしらたちと共にきて、
イスラエルと共に主の正義と審判とを行った」。
二二ダンについては言った、
「ダンはししの子であって、
バシャンからおどりでる」。
二三ナフタリについては言った、
「ナフタリよ、あなたは恵みに満たされ、

主の祝福に満ちて、
湖とその南の地を所有する」。
二四アセルについては言った、
「アセルは他の子らにまさって祝福される。
彼はその兄弟たちに愛せられ、
その足を油にひたすことができるように。
二五あなたの貫の木は鉄と青銅、
あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」。
二六「エシュルンよ、神に並ぶ者はほかにない。
あなたを助けるために天に乗り、
威光をもって空を通られる。
二七とこしえにいます神はあなたのすみかであり、

下には永遠の腕がある。
敵をあなたの前から追い払って、
『滅ぼせ』と言われた。
二八イスラエルは安らかに住み、
ヤコブの泉は穀物とぶどう酒の地に、
ひとりいるであろう。
また天は露をくだすであろう。
二九イスラエルよ、あなたはしあわせである。
だれがあなたのように、
主に救われた民があるであろうか。
主はあなたを助ける盾、
あなたの威光のつるぎ、
あなたの敵はあなたにへつらい服し、

あなたは彼らの高き所を踏み進むであろう」。
第三四章一モーセはモアブの平野からネボ山に登り、エリコの向かいの
ピスガの頂へ行った。そこで主は彼にギレアデの全地をダンまで示し、
二ナフタリの全部、エフライムとマナセの地およびユダの全地を西の海ま
で示し、三ネゲブと低地、すなわち、しゅろの町エリコの谷をゾアルまで示
された。四そして主は彼に言われた、「わたしがアブラハム、イサク、ヤコブ
に、これをあなたの子孫に与えると言って誓った地はこれである。わたし
はこれをあなたの目に見せるが、あなたはそこへ渡って行くことはできな
い」。五こうして主のしもべモーセは主の言葉のとおりにモアブの地で死ん
だ。六主は彼をベテペオルに対するモアブの地の谷に葬られたが、今日
までその墓を知る人はない。七モーセは死んだ時、百二十歳であったが、目
はかすまず、気力は衰えていなかった。八イスラエルの人々はモアブの

平野で三十日の間モーセのために泣いた。そしてモーセのために泣き悲
しむ日はついに終った。
九ヌンの子ヨシュアは知恵の霊に満ちた人であった。モーセが彼の上に
手を置いたからである。イスラエルの人々は彼に聞き従い、主がモーセ
に命じられたとおりにおこなった。一〇イスラエルには、こののちモーセ
のような預言者は起らなかった。モーセは主が顔を合わせて知られた者で
あった。一一主はエジプトの地で彼をパロとそのすべての家来およびその
全地につかわして、もろもろのしるしと不思議を行わせられた。一二モー
セはイスラエルのすべての人の前で大いなる力をあらわし、大いなる恐
るべき事をおこなった。

ヨシュア記

第一章 一主のしもべモーセが死んだ後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨ
シュアに言われた、
二「わたしのしもべモーセは死んだ。それゆえ、今あな
たと、このすべての民とは、共に立って、このヨルダンを渡り、わたしが
イスラエルの人々に与える地に行きなさい。
三あなたがたが、足の裏で踏
む所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるで
あろう。
四あなたがたの領域は、荒野からレバノンに及び、また大川ユフ
ラテからヘテびとの全地にわたり、日の入る方の大海に達するであろう。
五あなたが生きながらえる日の間、あなたに当ることのできる者は、ひと
りもないであろう。わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共にお
るであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。
六強

く、また雄々しくあれ。あなたはこの民に、わたしが彼らに与えると、その
先祖たちに誓った地を獲させなければならない。七ただ強く、また雄々し
くあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法をことごとく守っ
て行い、これを離れて右にも左にも曲ってはならない。それはすべてあ
なたが行くところで、勝利を得るためである。八この律法の書をあなたの
口から離すことなく、昼も夜もそれを思い、そのうちにしるされているこ
とを、ことごとく守って行わなければならない。そうするならば、あなた
の道は栄え、あなたは勝利を得るであろう。九わたしはあなたに命じたで
はないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの
神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」。
一〇そこでヨシュアは民のつかさたちに命じて言った、一一「宿営のな
かを巡って民に命じて言いなさい、『糧食の備えをしなさい。三日のう

ちに、あなたがたはこのヨルダンを渡って、あなたがたの神、主があなた
がたに与えて獲させようとされる地を獲るために、進み行かなければなら
ないからである』」。
一二ヨシュアはまたルベンびと、ガドびと、およびマナセの半部族に言っ
た、一三「主のしもべモーセがあなたがたに命じて、『あなたがたの神、主
はあなたがたのために安息の場所を備え、この地をあなたがたに賜わるで
あろう』と言った言葉を記憶しなさい。一四あなたがたの妻子と家畜とは、
モーセがあなたがたに与えたヨルダンのこちら側の地にとどまらなければ
ならない。しかし、あなたがたのうちの勇士はみな武装して、兄弟たちの
先に立って渡り、これを助けなければならない。一五そして主があなたが
たに賜わったように、あなたがたの兄弟たちにも安息を賜わり、彼らも
あなたがたの神、主が賜わる地を獲るようになるならば、あなたがたは、主

のしもべモーセから与えられた、ヨルダンのこちら側、日の出の方にある、
あなたがたの所有の地に帰って、それを保つことができるであろう」。一六
彼らはヨシュアに答えた、「あなたがわれわれに命じられたことをみな行
います。あなたがつかわされる所へは、どこへでも行きます。一七われわ
れはすべてのことをモーセに聞き従ったように、あなたに聞き従います。
ただ、どうぞ、あなたの神、主がモーセと共におられたように、あなたと
共におられますように。一八だれであっても、あなたの命令にそむき、あ
なたの命じられる言葉に聞き従わないものがあれば、生かしてはおきませ
ん。ただ、強く、また雄々しくあってください」。

第二章一ヌンの子ヨシュアは、シッテムから、ひそかにふたりの斥候をつ
かわして彼らに言った、「行って、その地、特にエリコを探りなさい」。彼
らは行って、名をラハブという遊女の家にはいり、そこに泊まったが、二

エリコの王に、「イスラエルの人々のうちの数名の者が今夜この地を探る
ために、はいってきました」と言う者があったので、三エリコの王は人を
やってラハブに言った、「あなたの所にきて、あなたの家にはいった人々
をここへ出しなさい。彼らはこの国のすべてを探るためにきたのです」。四
しかし、女はすでにそのふたりの人を入れて彼らを隠していた。そして
彼女は言った、「確かにその人々はわたしの所にきました。しかし、わた
しはその人々がどこからきたのか知りませんでしたが、五たそがれ時、門
の閉じるころに、その人々は出て行きました。どこへ行ったのかわたしは
知りません。急いであとを追いなさい。追いつけるでしょう」。六その実、
彼女はすでに彼らを連れて屋根にのぼり、屋上に並べてあった亜麻の茎
の中に彼らを隠していたのである。七そこでその人々は彼らのあとを追っ
てヨルダンの道を進み、渡し場へ向かった。あとを追う者が出て行くとす

ぐ門は閉ざされた。
八ふたりの人がまだ寝ないうち、ラハブは屋上にのぼって彼らの所に
きた。九そして彼らに言った、「主がこの地をあなたがたに賜わったこと、
わたしたちがあなたがたをひじょうに恐れていること、そしてこの地の民
がみなあなたがたの前に震えおののいていることをわたしは知っています。
一〇あなたがたがエジプトから出てこられた時、主があなたがたの前で紅海
の水を干されたこと、およびあなたがたが、ヨルダンの向こう側にいたアモ
リびとのふたりの王シホンとオグにされたこと、すなわちふたりを、全滅
されたことを、わたしたちは聞いたからです。一一わたしたちはそれを聞く
と、心は消え、あなたがたのゆえに人々は全く勇気を失ってしまいま
した。あなたがたの神、主は上の天にも、下の地にも、神でいらせられる
からです。一二それで、どうか、わたしがあなたがたを親切に扱ったよう

に、あなたがたも、わたしの父の家を親切に扱われることをいま主をさし
て誓い、確かなしるしをください。一三そしてわたしの父母、兄弟、姉妹
およびすべて彼らに属するものを生きながらえさせ、わたしたちの命を
救って、死を免れさせてください」。一四ふたりの人は彼女に言った、「も
しあなたがたが、われわれのことを他に漏らさないならば、われわれ
は命にかけて、あなたがたを救います。また主がわれわれにこの地を賜
わる時、あなたがたを親切に扱い、真実をつくしましょう」。
一五そこでラハブは綱をもって彼らを窓からつりおろした。その家が町
の城壁の上に建っていて、彼女はその城壁の上に住んでいたからであ
る。一六ラハブは彼らに言った、「追手に会わないように、あなたがたは山
へ行って、三日の間そこに身を隠し、追手の帰って行くのを待って、それ
から去って行きなさい」。一七ふたりの人は彼女に言った、「あなたがわれ

われに誓わせたこの誓いについて、われわれは罪を犯しません。一八われ
われがこの地に討ち入る時、わたしたちをつりおろした窓に、この赤い糸
のひもを結びつけ、またあなたの父母、兄弟、およびあなたの父の家族を
みなあなたの家に集めなさい。一九ひとりでも家の戸口から外へ出て、血
を流されることがあれば、その責めはその人自身のこうべに帰すでしょう。
われわれに罪はありません。しかしあなたの家の中にいる人に手をかけて
血を流すことがあれば、その責めはわれわれのこうべに帰すでしょう。二〇
またあなたが、われわれのこのことを他に漏らすならば、あなたがわれわ
れに誓わせた誓いについては、われわれに罪はありません」。二一ラハブは
言った、「あなたがたの仰せのとおりにいたしましょう」。こうして彼らを
送り出したので、彼らは去った。そして彼女は赤いひもを窓に結んだ。
二二彼らは立ち去って山にはいり、追手が帰るのを待って、三日の間そ

ここにとどまった。追手は彼らをあまねく道に捜したが、ついに見つけるこ
とができなかった。二三こうしてふたりの人はまた山を下り、川を渡って、
ヌンの子ヨシュアのもとにきて、その身に起ったことをつぶさに述べた。二
四そしてヨシュアに言った、「ほんとうに主はこの国をことごとくわれわれ
の手にお与えになりました。この国の住民はみなわれわれの前に震えお
ののいています」。

第三章 一ヨシュアは朝早く起き、イスラエルの人々すべてとともにシッ
テムを出立して、ヨルダンに行き、それを渡らずに、そこに宿った。二三
日の後、つかさたちは宿営の中を行き巡り、三民に命じて言った、「レビ
びとである祭司たちが、あなたがたの神、主の契約の箱をかきあげるのを
見るならば、あなたがたはその所を出立して、そのあとに従わなければ
ならない。四そうすれば、あなたがたは行くべき道を知ることができるであ

ろう。あなたがたは前にこの道をとおったことがないからである。しかし、
あなたがたと箱との間には、おおよそ二千キュビトの距離をおかなければ
ならない。それに近づいてはならない」。五ヨシュアはまた民に言った、「あ
なたがたは身を清めなさい。あす、主があなたがたのうちに不思議を行わ
れるからである」。六ヨシュアは祭司たちに言った、「契約の箱をかき、民
に先立って渡りなさい」。そこで彼らは契約の箱をかき、民に先立って進
んだ。
七主はヨシュアに言われた、「きょうからわたしはすべてのイスラエルの
前にあなたを尊い者とするであろう。こうしてわたしがモーセと共にい
たように、あなたとともにおることを彼らに知らせるであろう。八あなたは
契約の箱をかく祭司たちに命じて言わなければならない、『あなたがたは、
ヨルダンの水ぎわへ行くと、すぐ、ヨルダンの中に立ちとどまらなければ

ならない』」。九ヨシュアはイスラエルの人々に言った、「あなたがたはここ
に近づいて、あなたがたの神、主の言葉を聞きなさい」。一〇そしてヨシュ
アは言った、「生ける神があなたがたのうちにおいでになり、あなたがたの
前から、カナンびと、ヘテびと、ヒビびと、ペリジびと、ギルガシびと、アモ
リびと、エブスびとを、必ず追い払われることを、次のことによって、あ
なたがたは知るであろう。一一ごらんなさい。全地の主の契約の箱は、あ
なたがたに先立ってヨルダンを渡ろうとしている。一二それゆえ、今、イス
ラエルの部族のうちから、部族ごとにひとりずつ、合わせて十二人を選び
なさい。一三全地の主なる神の箱をかく祭司たちの足の裏が、ヨルダンの
水の中に踏みとどまる時、ヨルダンの水は流れをせきとめられ、上から流
れくだる水はとどまって、うず高くなるであろう」。
一四こうして民はヨルダンを渡ろうとして天幕をいで立ち、祭司たちは

契約の箱をかき、民に先立って行ったが、一五箱をかく者がヨルダンにき
て、箱をかく祭司たちの足が水ぎわにひたると同時に、――ヨルダンは刈入
れの間中、岸一面にあふれるのであるが、――一六上から流れくだる水
はとどまって、はるか遠くのザレタンのかたわらにある町アダムのあたり
で、うず高く立ち、アラバの海すなわち塩の海の方に流れくだる水は全
くせきとめられたので、民はエリコに向かって渡った。一七すべてのイス
ラエルが、かわいた地を渡って行く間、主の契約の箱をかく祭司たちは、
ヨルダンの中のかわいた地に立っていた。そしてついに民はみなヨルダン
を渡り終った。

第四章一民が皆、ヨルダンを渡り終った時、主はヨシュアに言われた、二
「民のうちから、部族ごとにひとりずつ、合わせて十二人を選び、三彼らに
命じて言いなさい、『ヨルダンの中で祭司たちが足を踏みとどめたその所

から、石十二を取り、それを携えて渡り、今夜あなたがたが宿る場所にす
えなさい』」。四そこでヨシュアはイスラエルの人々のうちから、部族ごと
に、ひとりずつ、かねて定めておいた十二人の者を召し寄せ、五ヨシュア
は彼らに言った、「あなたがたの神、主の契約の箱の前に立って行き、ヨ
ルダンの中に進み入り、イスラエルの人々の部族の数にしたがって、おの
おの石一つを取り上げ、肩にのせて運びなさい。六これはあなたがたのう
ちに、しるしとなるであろう。後の日になって、あなたがたの子どもたち
が、『これらの石は、どうしたわけですか』と問うならば、七その時あなた
がたは彼らに、むかしヨルダンの水が、主の契約の箱の前で、せきとめら
れたこと、すなわちその箱がヨルダンを渡った時、ヨルダンの水が、せき
とめられたことを告げなければならない。こうして、それらの石は永久に
イスラエルの人々の記念となるであろう」。

八イスラエルの人々はヨシュアが命じたようにし、主がヨシュアに言わ
れたように、イスラエルの人々の部族の数にしたがって、ヨルダンの中か
ら十二の石を取り、それを携えて渡り、彼らの宿る場所へ行って、そこ
にすえた。九ヨシュアはまたヨルダンの中で、契約の箱をかく祭司たちが、
足を踏みとどめた所に、十二の石を立てたが、今日まで、そこに残ってい
る。一〇箱をかく祭司たちは、主がヨシュアに命じて、民に告げさせられ
た事が、すべて行われてしまうまで、ヨルダンの中に立っていた。すべて
モーセがヨシュアに命じたとおりである。民は急いで渡った。一一民がみ
な渡り終った時、主の箱と祭司たちとは、民の見る前で渡った。一二ルベ
ンの子孫とガドの子孫、およびマナセの部族の半ばは、モーセが彼らに命
じていたように武装して、イスラエルの人々に先立って渡り、一三戦いの
ために武装したおよそ四万の者が戦うため、主の前に渡って、エリコ

の平野に着いた。一四この日、主はイスラエルのすべての人の前にヨシュ
アを尊い者とされたので、彼らはみなモーセを敬ったように、ヨシュア
を一生のあいだ敬った。
一五主はヨシュアに言われた、一六「あかしの箱をかく祭司たちに命じて、
ヨルダンから上がってこさせなさい」。一七ヨシュアは祭司たちに命じて言っ
た、「ヨルダンから上がってきなさい」。一八主の契約の箱をかく祭司たち
はヨルダンの中から上がってきたが、祭司たちの足の裏がかわいた地にあ
がると同時に、ヨルダンの水はもとの所に流れかえって、以前のように、
その岸にことごとくあふれた。
一九民は正月の十日に、ヨルダンから上がってきて、エリコの東の境
にあるギルガルに宿営した。二〇そしてヨシュアは、人々がヨルダンから
取ってきた十二の石をギルガルに立て、二一イスラエルの人々に言った、「後

の日にあなたがたの子どもたちが、その父に『これらの石は、どうしたわけ
ですか』とたずねたならば、二二『むかしイスラエルがこのヨルダンを、か
わいた地にされて渡ったのだ』と言って、その子どもたちに知らせなけれ
ばならない。二三すなわちあなたがたの神、主はヨルダンの水を、あなたが
たのために干しからして、あなたがたを渡らせてくださった。それはあた
かも、あなたがたの神、主が、われわれのために紅海を干しからして、わ
れわれを渡らせてくださったのと同じである。二四このようにされたのは、
地のすべての民に、主の手に力のあることを知らせ、あなたがたの神、主
をつねに恐れさせるためである」。

第五章一ヨルダンの向こう側、すなわち西の方におるアモリびとの王た
ちと、海べにおるカナンびとの王たちとは皆、主がイスラエルの人々の前
で、ヨルダンの水を干しからして、彼らを渡らせられたと聞いて、イスラエ

ルの人々のゆえに、心は消え、彼らのうちに、もはや元気もなくなった。
二その時、主はヨシュアに言われた、「火打石の小刀を造り、重ねてま
たイスラエルの人々に割礼を行いなさい」。三そこでヨシュアは火打石の
小刀を造り、陽皮の丘で、イスラエルの人々に割礼を行った。四ヨシュ
アが人々に割礼を行った理由はこうである。エジプトから出てきた民の
うちの、すべての男子、すなわち、いくさびとたちは皆、エジプトを出た
後、途中、荒野で死んだが、五その出てきた民は皆、割礼を受けた者であっ
た。しかし、エジプトを出た後に、途中、荒野で生まれた民は、みな割礼
を受けていなかった。六イスラエルの人々は四十年の間、荒野を歩いて
いて、そのエジプトから出てきた民、すなわち、いくさびとたちは、みな
死に絶えた。これは彼らが主の声に聞き従わなかったので、主は彼らの
先祖たちに誓って、われわれに与えると仰せられた地、乳と蜜の流れる地

を、彼らに見させないと誓われたからである。七ヨシュアが割礼を行った
のは、この人々について起されたその子どもたちであった。彼らは途中で
割礼を受けていなかったので、無割礼の者であったからである。
八すべての民に割礼を行うことが終ったので、民は宿営のうちの自分
の所にとどまって傷の直るのを待った。九その時、主はヨシュアに言われ
た、「きょう、わたしはエジプトのはずかしめを、あなたがたからころがし
去った」。それでその所の名は、今日までギルガルと呼ばれている。
一〇イスラエルの人々はギルガルに宿営していたが、その月の十四日の
夕暮、エリコの平野で過越の祭を行った。一一そして過越の祭の翌日、
その地の穀物、すなわち種入れぬパンおよびいり麦を、その日に食べたが、
一二その地の穀物を食べた翌日から、マナの降ることはやみ、イスラエルの
人々は、もはやマナを獲なかった。その年はカナンの地の産物を食べた。

一三ヨシュアがエリコの近くにいたとき、目を上げて見ると、ひとりの人
が抜き身のつるぎを手に持ち、こちらに向かって立っていたので、ヨシュア
はその人のところへ行って言った、「あなたはわれわれを助けるのですか。
それともわれわれの敵を助けるのですか」。一四彼は言った、「いや、わたし
は主の軍勢の将として今きたのだ」。ヨシュアは地にひれ伏し拝して言っ
た、「わが主は何をしもべに告げようとされるのですか」。一五すると主の
軍勢の将はヨシュアに言った、「あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなた
が立っている所は聖なる所である」。ヨシュアはそのようにした。
第六章一さてエリコは、イスラエルの人々のゆえに、かたく閉ざして、
出入りするものがなかった。二主はヨシュアに言われた、「見よ、わたしは
エリコと、その王および大勇士を、あなたの手にわたしている。三あなた
がた、いくさびとはみな、町を巡って、町の周囲を一度回らなければなら

ない。六日の間そのようにしなければならない。四七人の祭司たちは、お
のおの雄羊の角のラッパを携えて、箱に先立たなければならない。そし
て七日目には七度町を巡り、祭司たちはラッパを吹き鳴らさなければなら
ない。五そして祭司たちが雄羊の角を長く吹き鳴らし、そのラッパの音が、
あなたがたに聞える時、民はみな大声に呼ばわり、叫ばなければならない。
そうすれば、町の周囲の石がきは、くずれ落ち、民はみなただちに進んで、
攻め上ることができる」。六ヌンの子ヨシュアは祭司たちを召して言った、
「あなたがたは契約の箱をかき、七人の祭司たちは雄羊の角のラッパ七本
を携えて、主の箱に先立たなければならない」。七そして民に言った、「あ
なたがたは進んで行って町を巡りなさい。武装した者は主の箱に先立って
進まなければならない」。
八ヨシュアが民に命じたように、七人の祭司たちは、雄羊の角のラッパ七

本を携えて、主に先立って進み、ラッパを吹き鳴らした。主の契約の箱は
そのあとに従った。九武装した者はラッパを吹き鳴らす祭司たちに先立っ
て行き、しんがりは箱に従った。ラッパは絶え間なく鳴り響いた。一〇し
かし、ヨシュアは民に命じて言った、「あなたがたは呼ばわってはならない。
あなたがたの声を聞えさせてはならない。また口から言葉を出してはなら
ない。ただ、わたしが呼ばわれと命じる日に、あなたがたは呼ばわらなけ
ればならない」。一一こうして主の箱を持って、町を巡らせ、その周囲を一
度回らせた。人々は宿営に帰り、夜を宿営で過ごした。
一二翌朝ヨシュアは早く起き、祭司たちは主の箱をかき、一三七人の祭司
たちは、雄羊の角のラッパ七本を携えて、主の箱に先立ち、絶えず、ラッ
パを吹き鳴らして進み、武装した者はこれに先立って行き、しんがりは主
の箱に従った。ラッパは絶え間なく鳴り響いた。一四その次の日にも、町

の周囲を一度巡って宿営に帰った。六日の間そのようにした。
一五七日目には、夜明けに、早く起き、同じようにして、町を七度めぐっ
た。町を七度めぐったのはこの日だけであった。一六七度目に、祭司たちが
ラッパを吹いた時、ヨシュアは民に言った、「呼ばわりなさい。主はこの町
をあなたがたに賜わった。一七この町と、その中のすべてのものは、主への
奉納物として滅ぼされなければならない。ただし遊女ラハブと、その家に
共におる者はみな生かしておかなければならない。われわれが送った使者
たちをかくまったからである。一八また、あなたがたは、奉納物に手を触れ
てはならない。奉納に当り、その奉納物をみずから取って、イスラエルの
宿営を、滅ぼさるべきものとし、それを悩ますことのないためである。一
九ただし、銀と金、青銅と鉄の器は、みな主に聖なる物であるから、主の
倉に携え入れなければならない」。二〇そこで民は呼ばわり、祭司たちは

ラッパを吹き鳴らした。民はラッパの音を聞くと同時に、みな大声をあげ
て呼ばわったので、石がきはくずれ落ちた。そこで民はみな、すぐに上っ
て町にはいり、町を攻め取った。二一そして町にあるものは、男も、女
も、若い者も、老いた者も、また牛、羊、ろばをも、ことごとくつるぎに
かけて滅ぼした。
二二その時ヨシュアは、この地を探ったふたりの人に言った、「あの遊女
の家にはいって、その女と彼女に属するすべてのものを連れ出し、彼女に
誓ったようにしなさい」。二三斥候となったその若い人たちははいって、ラ
ハブとその父母、兄弟、そのほか彼女に属するすべてのものを連れ出し、
その親族をみな連れ出して、イスラエルの宿営の外に置いた。二四そして
火で町とその中のすべてのものを焼いた。ただ、銀と金、青銅と鉄の器
は、主の家の倉に納めた。二五しかし、遊女ラハブとその父の家の一族と

彼女に属するすべてのものとは、ヨシュアが生かしておいたので、ラハブ
は今日までイスラエルのうちに住んでいる。これはヨシュアがエリコを探
らせるためにつかわした使者たちをかくまったためである。
二六ヨシュアは、その時、人々に誓いを立てて言った、「おおよそ立って、
このエリコの町を再建する人は、主の前にのろわれるであろう。
その礎をすえる人は長子を失い、
その門を建てる人は末の子を失うであろう」。
二七主はヨシュアと共におられ、ヨシュアの名声は、あまねくその地に
広がった。
第七章一しかし、イスラエルの人々は奉納物について罪を犯した。すな
わちユダの部族のうちの、ゼラの子ザブデの子であるカルミの子アカンが
奉納物を取ったのである。それで主はイスラエルの人々にむかって怒りを

発せられた。
二ヨシュアはエリコから人々をつかわし、ベテルの東、ベテアベンの近
くにあるアイに行かせようとして、その人々に言った、「上って行って、か
の地を探ってきなさい」。人々は上って行って、アイを探ったが、三ヨシュ
アのもとに帰ってきて言った、「民をことごとく行かせるには及びません。
ただ二、三千人を上らせて、アイを撃たせなさい。彼らは少ないのですか
ら、民をことごとくあそこへやってほねおりをさせるには及びません」。四
そこで民のうち、およそ三千人がそこに上ったが、ついにアイの人々の
前から逃げ出した。五アイの人々は彼らのうち、およそ三十六人を殺し、
更に彼らを門の前からシバリムまで追って、下り坂で彼らを殺したので、
民の心は消えて水のようになった。
六そのためヨシュアは衣服を裂き、イスラエルの長老たちと共に、主の

箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、ちりをかぶった。七ヨシュアは言った、
「ああ、主なる神よ、あなたはなにゆえ、この民にヨルダンを渡らせ、われ
われをアモリびとの手に渡して滅ぼさせられるのですか。われわれはヨル
ダンの向こうに、安んじてとどまればよかったのです。八ああ、主よ。イ
スラエルがすでに敵に背をむけた今となって、わたしはまた何を言い得ま
しょう。九カナンびと、およびこの地に住むすべてのものは、これを聞い
て、われわれを攻めかこみ、われわれの名を地から断ち去ってしまうでしょ
う。それであなたは、あなたの大いなる名のために、何をしようとされる
のですか」。
一〇主はヨシュアに言われた、「立ちなさい。あなたはどうして、そのよ
うにひれ伏しているのか。一一イスラエルは罪を犯し、わたしが彼らに命
じておいた契約を破った。彼らは奉納物を取り、盗み、かつ偽って、そ

れを自分の所有物のうちに入れた。一二それでイスラエルの人々は敵に当
ることができず、敵に背をむけた。彼らも滅ぼされるべきものとなったか
らである。あなたがたが、その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうち
から滅ぼし去るのでなければ、わたしはもはやあなたがたとは共にいない
であろう。一三立って、民を清めて言いなさい、『あなたがたは身を清めて、
あすのために備えなさい。イスラエルの神、主はこう仰せられる、「イスラ
エルよ、あなたがたのうちに、滅ぼされるべきものがある。その滅ぼされ
るべきものを、あなたがたのうちから除き去るまでは、敵に当ることはで
きないであろう」。一四それゆえ、あすの朝、あなたがたは部族ごとに進み
出なければならない。そして主がくじを当てられる部族は、氏族ごとに進
みいで、主がくじを当てられる氏族は、家族ごとに進みいで、主がくじを
当てられる家族は、男ひとりびとり進み出なければならない。一五そして

その滅ぼされるべきものを持っていて、くじを当てられた者は、その持ち
物全部と共に、火で焼かれなければならない。主の契約を破りイスラエル
のうちに愚かなことを行ったからである』」。
一六こうしてヨシュアは朝早く起き、イスラエルを部族ごとに進み出さ
せたところ、ユダの部族がくじに当り、一七ユダのもろもろの氏族を進み出
させたところ、ゼラびとの氏族が、くじに当った。ゼラびとの氏族を家族
ごとに進み出させたところ、ザブデの家族が、くじに当った。一八ザブデの
家族を男ひとりびとり進み出させたところ、アカンがくじに当った。ア
カンはユダの部族のうちの、ゼラの子、ザブデの子なるカルミの子である。
一九その時ヨシュアはアカンに言った、「わが子よ、イスラエルの神、主に
栄光を帰し、また主をさんびし、あなたのしたことを今わたしに告げなさ
い。わたしに隠してはならない」。二〇アカンはヨシュアに答えた、「ほんと

うにわたしはイスラエルの神、主に対して罪を犯しました。わたしがした
のはこうです。二一わたしはぶんどり物のうちに、シナルの美しい外套一
枚と銀二百シケルと、目方五十シケルの金の延べ棒一本のあるのを見て、
ほしくなり、それを取りました。わたしの天幕の中に、地に隠してありま
す。銀はその下にあります」。
二二そこでヨシュアは使者たちをつかわした。使者たちが天幕に走って
いって見ると、それは彼の天幕に隠してあって、銀もその下にあった。二
三彼らはそれを天幕の中から取り出して、ヨシュアとイスラエルのすべて
の人々の所に携えてきたので、それを主の前に置いた。二四ヨシュアは
すべてのイスラエルびとと共に、ゼラの子アカンを捕え、かの銀と外套と
金の延べ棒、および彼のむすこ、娘、牛、ろば、羊、天幕など、彼の持ち
物をことごとく取って、アコルの谷へ引いていった。二五そしてヨシュアは

言った、「なぜあなたはわれわれを悩ましたのか。主は、きょう、あなたを
悩まされるであろう」。やがてすべてのイスラエルびとは石で彼を撃ち殺
し、また彼の家族をも石で撃ち殺し、火をもって焼いた。二六そしてアカ
ンの上に石塚を大きく積み上げたが、それは今日まで残っている。そして
主は激しい怒りをやめられたが、このことによって、その所の名は今日
までアコルの谷と呼ばれている。
第八章一主はヨシュアに言われた、「恐れてはならない、おののいてはな
らない。いくさびとを皆、率い、立って、アイに攻め上りなさい。わたし
はアイの王とその民、その町、その地をあなたの手に授ける。二あなたは、
さきにエリコとその王にしたとおり、アイとその王とにしなければならな
い。ただし、ぶんどり物と家畜とは戦利品としてあなたがたのものとする
ことができるであろう。あなたはまず、町のうしろに伏兵を置きなさい」。

三ヨシュアは立って、すべてのいくさびとと共に、アイに攻め上ろうと
して、まず大勇士三万人を選び、それを夜のうちにつかわした。四ヨシュ
アは彼らに命じて言った、「あなたがたは町に向かって、町のうしろに伏
せていなければならない。町を遠く離れないで、みな備えをしていなけれ
ばならない。五わたしとわたしに従う民とは皆共に、町に攻め寄せよう。
そして彼らが前のようにわれわれにむかって出てくるとき、われわれは彼
らの前から逃げるであろう。六そうすれば彼らはわれわれを追って出てく
るであろうから、われわれはついに彼らを町からおびき出すことができる。
彼らは言うであろう、『この人々はまた前のように、われわれの前から逃げ
ていく』。こうしてわれわれは彼らの前から逃げるであろう。七その時、あ
なたがたは伏せている所から立ち上がって、町を取らなければならない。
あなたがたの神、主がそれをあなたがたの手に与えられるからである。八

あなたがたが、町を取ったならば、町に火を放ち、主が命じられたように
しなければならない。わたしはこう、あなたがたに命じるのである」。九そ
うしてヨシュアが彼らをつかわしたので、彼らはアイの西方、ベテルとア
イの間の待ち伏せする場所に行って身を伏せた。ヨシュアはその夜、民の
中に宿った。
一〇ヨシュアは明くる朝、早く起きて、民を集め、イスラエルの長老た
ちと共に、民に先立って、アイに上っていった。一一彼と共にいたいくさ
びとたちもみな上っていって、町の前に近づき、アイの北に陣を取った。
彼らとアイの間には、一つの谷があった。一二ヨシュアはおよそ五千人
をとって、町の西方、ベテルとアイの間に、伏せておいた。一三こうして
民の主力を町の北におき、しんがりを町の西においた。ヨシュアはその
夜、谷の中で宿った。一四アイの王はこれを見て、すべての民と共に、急

いで、早く起き、アラバに行く下り坂に進み出て、イスラエルと戦った。
しかし、王は町のうしろに、すきをうかがう伏兵のおることを知らなかっ
た。一五ヨシュアはイスラエルのすべての人々と共に、彼らに打ち破られ
たふりをして、荒野の方向へ逃げだしたので、一六その町の民はみな呼ば
わり集まって彼らのあとを追い、ヨシュアのあとを追って町からおびき出
され、一七アイにもベテルにも残っているものはひとりもなく、みな出てイ
スラエルのあとを追い、町を開け放して、イスラエルのあとを追った。
一八その時、主はヨシュアに言われた、「あなたの手にあるなげやりを、
アイの方にさし伸べなさい。わたしはその町をあなたの手に与えるであろ
う」。そこでヨシュアが手にしていたなげやりを、アイの方にさし伸べると、
一九伏兵はたちまちその場所から立ち上がり、ヨシュアが手をのべると同時
に、走って町に入り、それを取って、ただちに町に火をかけた。二〇それで

アイの人々が、うしろをふり返って見ると、町の焼ける煙が天に立ちの
ぼっていたので、こちらへもあちらへも逃げるすべがなかった。荒野へ逃
げていった民も身をかえして、追ってきた者に迫った。二一ヨシュアとす
べてのイスラエルびとは、伏兵が町を取り、町の焼ける煙が立ち上るの
を見て、身をかえしてアイの人々を撃った。二二また町を取ったものは町
を出て彼らに向かったので、彼らは、こちらとあちらからイスラエルの
中にはさまれた。こうしてイスラエルびとが彼らを撃ったので、生き残っ
たもの、逃げおおせたものは、ひとりもなかった。二三そしてアイの王を生
けどりにして、ヨシュアのもとへ連れてきた。

二四イスラエルびとは、荒野に追撃してきたアイの住民をことごとく野
で殺し、つるぎをもってひとりも残さず撃ち倒してのち、皆アイに帰り、
つるぎをもってその町を撃ち滅ぼした。二五その日アイの人々はことごと

く倒れた。その数は男女あわせて一万二千人であった。二六ヨシュアはア
イの住民をことごとく滅ぼしつくすまでは、なげやりをさし伸べた手を
引っこめなかった。二七ただし、その町の家畜およびぶんどり品はイス
ラエルびとが自分たちの戦利品として取った。主がヨシュアに命じられた
言葉にしたがったのである。二八こうしてヨシュアはアイを焼いて、永久
に荒塚としたが、それは今日まで荒れ地となっている。二九ヨシュアはま
た、アイの王を夕方まで木に掛けてさらし、日の入るころ、命じて、その
死体を木から取りおろし、町の門の入口に投げすて、その上に石の大塚を
積み上げさせたが、それは今日まで残っている。
三〇そしてヨシュアはエバル山にイスラエルの神、主のために一つの祭壇
を築いた。三一これは主のしもべモーセがイスラエルの人々に命じたこと
にもとづき、モーセの律法の書にしるされているように、鉄の道具を当てな

い自然のままの石の祭壇であって、人々はその上で、主に燔祭をささげ、
酬恩祭を供えた。
三二その所で、ヨシュアはまたモーセの書きしるした律法を、イスラエルの人々の前で、石に書き写した。
三三こうしてすべてのイスラエルびとは、本国人も、寄留の他国人も、長老、つかさびと、さばきびとと共に、主の契約の箱をかくレビびとである祭司たちの前で、箱のこなたとかなたに分れて、半ばはゲリジム山の前に、半ばはエバル山の前に立った。これは主のしもべモーセがさきに命じたように、イスラエルの民を祝福するためであった。
三四そして後、ヨシュアはすべての律法の書にしるされている所にしたがって、祝福と、のろいとに関する律法の言葉をことごとく読んだ。
三五モーセが命じたすべての言葉のうち、ヨシュアがイスラエルの全会衆および女と子どもたち、ならびにイスラエルのうちに住む寄留の他国人の前で、読まなかったものは一つもなかった。

第九章一さて、ヨルダンの西側の、山地、平地、およびレバノンまでの
大海の沿岸に住むもろもろの王たち、すなわちヘテびと、アモリびと、カ
ナンびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびととの王たちは、これを聞いて、
二心を合わせ、相集まって、ヨシュアおよびイスラエルと戦おうとした。
三しかし、ギベオンの住民たちは、ヨシュアがエリコとアイにおこなっ
たことを聞いて、四自分たちも策略をめぐらし、行って食料品を準備
し、古びた袋と、古びて破れたのを繕ったぶどう酒の皮袋とを、ろば
に負わせ、五繕った古ぐつを足にはき、古びた着物を身につけた。彼らの
食料のパンは、みなかわいて、砕けていた。六彼らはギルガルの陣営の
ヨシュアの所にきて、彼とイスラエルの人々に言った、「われわれは遠い
国からまいりました。それで今われわれと契約を結んでください」。七し
かし、イスラエルの人々はそのヒビびとたちに言った、「あなたがたはわれ

われのうちに住んでいるのかも知れないから、われわれはどうしてあなた
がたと契約が結べましょう」。八彼らはヨシュアに言った、「われわれはあ
なたのしもべです」。ヨシュアは彼らに言った、「あなたがたはだれですか。
どこからきたのですか」。九彼らはヨシュアに言った、「しもべどもはあなた
の神、主の名のゆえに、ひじょうに遠い国からまいりました。われわれは
主の名声、および主がエジプトで行われたすべての事を聞き、一〇また主
がヨルダンの向こう側にいたアモリびとのふたりの王、すなわちヘシボン
の王シホン、およびアシタロテにおったバシャンの王オグに行われたすべ
てのことを聞いたからです。一一それで、われわれの長老たち、および国
の住民はみなわれわれに言いました、『おまえたちは旅路の食料を手に
携えていって、彼らに会って言いなさい、「われわれはあなたがたのしも
べです。それで今われわれと契約を結んでください」』。一二ここにあるこ

のパンは、あなたがたの所に来るため、われわれが出立する日に、おの
おの家から、まだあたたかなのを旅の食料として準備したのですが、今
はもうかわいて砕けています。一三またぶどう酒を満たしたこれらの皮袋
も、新しかったのですが、破れました。われわれのこの着物も、くつも、
旅路がひじょうに長かったので、古びてしまいました」。一四そこでイスラ
エルの人々は彼らの食料品を共に食べ、主のさしずを求めようとはし
なかった。一五そしてヨシュアは彼らと和を講じ、契約を結んで、彼らを
生かしておいた。会衆の長たちは彼らに誓いを立てた。
一六契約を結んで三日の後に、彼らはその人々が近くの人々で、自分た
ちのうちに住んでいるということを聞いた。一七イスラエルの人々は進ん
で、三日目にその町々に着いた。その町々とは、ギベオン、ケピラ、ベエ
ロテおよびキリアテ・ヤリムであった。一八ところで会衆の長たちが、す

でにイスラエルの神、主をさして彼らに誓いを立てていたので、イスラエ
ルの人々は彼らを殺さなかった。そこで会衆はみな、長たちにむかって
つぶやいた。一九しかし、長たちは皆、全会衆に言った、「われわれはイ
スラエルの神、主をさして彼らに誓った。それゆえ今、彼らに触れてはな
らない。二〇われわれは、こうして彼らを生かしておこう。そうすれば、わ
れわれが彼らに立てた誓いのゆえに、怒りがわれわれに臨むことはないで
あろう」。二一長たちはまた人々に「彼らを生かしておこう」と言ったの
で、彼らはついに、全会衆のために、たきぎを切り、水をくむものとなっ
た。長たちが彼らに言ったとおりである。
二二ヨシュアは彼らを呼び寄せて言った、「あなたがたは、われわれのうち
に住みながら、なぜ『われわれはあなたがたからは遠く離れている』と言っ
て、われわれをだましたのか。二三それであなたがたは今のろわれ、奴隷と

なってわたしの神の家のために、たきぎを切り、水をくむものが、絶えずあ
なたがたのうちから出るであろう」。二四彼らはヨシュアに答えて言った、
「あなたの神、主がそのしもべモーセに、この地をことごとくあなたがたに
与え、この地に住む民をことごとくあなたがたの前から滅ぼし去るように
と、お命じになったことを、しもべどもは明らかに伝え聞きましたので、
あなたがたのゆえに、命が危いと、われわれは非常に恐れて、このこと
をしたのです。二五われわれは、今、あなたの手のうちにあります。われわ
れにあなたがして良いと思い、正しいと思うことをしてください」。二六そ
こでヨシュアは、彼らにそのようにし、彼らをイスラエルの人々の手から
救って殺させなかった。二七しかし、ヨシュアは、その日、彼らを、会衆
のため、また主の祭壇のため、主が選ばれる場所で、たきぎを切り、水を
くむ者とした。これは今日までつづいている。

第一〇章 一 エルサレムの王アドニゼデクは、ヨシュアがアイを攻め取っ
て、それを全く滅ぼし、さきにエリコとその王とにしたように、アイとそ
の王にもしたこと、またギベオンの住民が、イスラエルと和を講じて、そ
のうちにおることを聞き、二 大いに恐れた。それは、ギベオンが大きな町
であって、王の都にもひとしいものであり、またアイより大きくて、そ
のうちの人々が、すべて強かったからである。三 それでエルサレムの王ア
ドニゼデクは、ヘブロンの王ホハム、ヤルムテの王ピラム、ラキシの王ヤ
ピア、およびエグロンの王デビルに人をつかわして言った、四 「わたしの
所に上ってきて、わたしを助けてください。われわれはギベオンを撃ちま
しょう。ギベオンはヨシュアおよびイスラエルの人々と和を講じたからで
す」。五 アモリびとの五人の王、すなわちエルサレムの王、ヘブロンの王、
ヤルムテの王、ラキシの王、およびエグロンの王は兵を集め、そのすべて

の軍勢を率いて上ってきて、ギベオンに向かって陣を取り、それを攻めて
戦った。
六ギベオンの人々は、ギルガルの陣営に人をつかわし、ヨシュアに言っ
た、「あなたの手を引かないで、しもべどもを助けてください。早く、われ
われの所に上ってきて、われわれを救い、助けてください。山地に住むア
モリびとの王たちがみな集まって、われわれを攻めるからです」。七そこで
ヨシュアはすべてのいくさびとと、すべての大勇士を率いて、ギルガルか
ら上って行った。八その時、主はヨシュアに言われた、「彼らを恐れてはな
らない。わたしが彼らをあなたの手にわたしたからである。彼らのうちに
は、あなたに当ることのできるものは、ひとりもないであろう」。九ヨシュ
アは、ギルガルから、よもすがら進みのぼって、にわかに彼らに攻めよせ
たところ、一〇主は彼らを、イスラエルの前に、恐れあわてさせられたの

で、イスラエルはギベオンで彼らをおびただしく撃ち殺し、ベテホロンの上
り坂をとおって逃げる彼らを、アゼカとマッケダまで追撃した。一一彼ら
がイスラエルの前から逃げ走って、ベテホロンの下り坂をおりていた時、
主は天から彼らの上に大石を降らし、アゼカにいたるまでもそうされたの
で、多くの人々が死んだ。イスラエルの人々がつるぎをもって殺したもの
よりも、雹に打たれて死んだもののほうが多かった。
一二主がアモリびとをイスラエルの人々にわたされた日に、ヨシュアは
イスラエルの人々の前で主にむかって言った、

「日よ、ギベオンの上にとどまれ、
月よ、アヤロンの谷にやすらえ」。
一三民がその敵を撃ち破るまで、
日はとどまり、

月は動かなかった。
これはヤシャルの書にしるされているではないか。日が天の中空にとど
まって、急いで没しなかったこと、およそ一日であった。一四これより
先にも、あとにも、主がこのように人の言葉を聞きいれられた日は一日も
なかった。主がイスラエルのために戦われたからである。
一五こうしてヨシュアはイスラエルのすべての人と共にギルガルの陣営
に帰った。
一六かの五人の王たちは逃げて行って、マッケダのほら穴に隠れたが、一
七五人の王たちがマッケダのほら穴にかくれているのが見つかったと、ヨ
シュアに告げる者があったので、一八ヨシュアは言った、「ほら穴の口に大石
をころがし、そのそばに人を置いて、守らせなさい。一九ただし、あなたが
たは、そこにとどまらないで、敵のあとを追い、そのしんがりを撃ち、彼

らをその町にはいらせてはならない。あなたがたの神、主が彼らをあなた
がたの手に渡されたからである」。二〇ヨシュアとイスラエルの人々は、大
いに彼らを撃ち殺し、ついに彼らを滅ぼしつくしたが、彼らのうちのがれ
て生き残った者どもは、堅固な町々に逃げこんだので、二一民はみな安ら
かにマッケダの陣営のヨシュアのもとに帰ってきたが、イスラエルの人々
にむかって舌を鳴らす者はひとりもなかった。
二二その時ヨシュアは言った、「ほら穴の口を開いて、ほら穴から、かの
五人の王たちを、わたしのもとにひき出しなさい」。二三やがて、そのよう
にして、かの五人の王たち、すなわち、エルサレムの王、ヘブロンの王、ヤ
ルムテの王、ラキシの王、およびエグロンの王を、ほら穴から彼のもとに
ひき出した。二四この王たちをヨシュアのもとにひき出した時、ヨシュア
はイスラエルのすべての人々を呼び寄せ、自分と共に行ったいくさびとの

長たちに言った、「近寄って、この王たちのくびに足をかけなさい」。そこ
で近寄って、その王たちのくびに足をかけたので、二五ヨシュアは彼らに
言った、「恐れおののいてはならない。強くまた雄々しくあれ。あなたがた
が攻めて戦うすべての敵には、主がこのようにされるのである」。二六そ
して後ヨシュアは彼らを撃って死なせ、五本の木にかけて、夕暮れまで木
の上にさらして置いたが、二七日の入るころになって、ヨシュアが命じたの
で、これを木からおろし、彼らが隠れていたほら穴に投げ入れ、ほら穴の
口に大石を置いた。これは今日まで残っている。
二八その日ヨシュアはマッケダを取り、つるぎをもって、それと、その王
とを撃ち、その中のすべての人を、ことごとく滅ぼして、ひとりも残さず、
エリコの王にしたように、マッケダの王にもした。
二九こうしてヨシュアはイスラエルのすべての人を率いて、マッケダから

リブナに進み、リブナを攻めて戦った。三〇主が、それと、その王をも、
イスラエルの手に渡されたので、つるぎをもって、それと、その中のすべ
ての人を撃ち滅ぼして、ひとりもその中に残さず、エリコの王にしたよう
に、その王にもした。
三一ヨシュアはまたイスラエルのすべての人を率いて、リブナからラキ
シに進み、これに向かって陣をしき、攻め戦った。三二主がラキシをイス
ラエルの手に渡されたので、ふつか目にこれを取り、つるぎをもって、そ
れと、その中のすべての人を撃ち滅ぼした。すべてリブナにしたとおりで
あった。
三三その時、ゲゼルの王ホラムが、ラキシを助けるために上ってきたので、
ヨシュアは彼と、その民とを撃ち滅ぼして、ついにひとりも残さなかった。
三四ヨシュアはまたイスラエルのすべての人を率いて、ラキシからエグ

ロンに進み、これに向かって陣をしき、攻め戦った。三五その日これを取
り、つるぎをもって、これを撃ち、その中のすべての人を、ことごとくそ
の日に滅ぼした。すべてラキシにしたとおりであった。
三六ヨシュアはまたイスラエルのすべての人を率いて、エグロンからヘ
ブロンに進み上り、これを攻めて戦い、三七それを取って、それと、その
王、およびそのすべての町々と、その中のすべての人を、つるぎをもって
撃ち滅ぼし、ひとりも残さなかった。すべてエグロンにしたとおりであっ
た。すなわち、それとその中のすべての人を、ことごとく滅ぼした。
三八またヨシュアはイスラエルのすべての人を率いて、デビルへひきかえ
し、これを攻めて戦い、三九それと、その王、およびそのすべての町々を
取り、つるぎをもってそれを撃ち、その中のすべての人を、ことごとく滅
ぼし、ひとりも残さなかった。彼がデビルと、その王にしたことは、ヘブ

ロンにしたとおりであり、またリブナと、その王にしたとおりであった。
四〇こうしてヨシュアはその地の全部、すなわち、山地、ネゲブ、平地、
および山腹の地と、そのすべての王たちを撃ち滅ぼして、ひとりも残さず、
すべて息のあるものは、ことごとく滅ぼした。イスラエルの神、主が命じ
られたとおりであった。四一ヨシュアはカデシ・バルネアからガザまでの
国々、およびゴセンの全地を撃ち滅ぼして、ギベオンにまで及んだ。四二
イスラエルの神、主がイスラエルのために戦われたので、ヨシュアはこれ
らすべての王たちと、その地をいちどきに取った。四三そしてヨシュアはイ
スラエルのすべての人を率いて、ギルガルの陣営に帰った。

第一一章一ハゾルの王ヤビンは、これを聞いて、マドンの王ヨバブ、シ
ムロンの王、およびアクサフの王、二また北の山地、キンネロテの南のア
ラバ、平地、西の方のドルの高地における王たち、三すなわち、東西のカナ

ンびと、アモリびと、ヘテびと、ペリジびと、山地のエブスびと、ミヅパ
の地にあるヘルモンのふもとのヒビびとに使者をつかわした。
四そして彼
らは、そのすべての軍勢を率いて出てきた。その大軍は浜べの砂のように
数多く、馬と戦車も、ひじょうに多かった。
五これらの王たちはみな軍を
集め、進んできて、共にメロムの水のほとりに陣をしき、イスラエルと戦
おうとした。
六その時、主はヨシュアに言われた、「彼らのゆえに恐れては
ならない。あすの今ごろ、わたしは彼らを皆イスラエルに渡して、ことご
とく殺させるであろう。あなたは彼らの馬の足の筋を切り、戦車を火で焼
かなければならない」。
七そこでヨシュアは、すべてのいくさびとを率いて、
にわかにメロムの水のほとりにおし寄せ、彼らを襲った。
八主は彼らをイ
スラエルの手に渡されたので、これを撃ち破り、大シドンおよびミスレポ
テ・マイムまで、これを追撃し、東の方では、ミヅパの谷まで彼らを追

い、ついにひとりも残さず撃ちとった。九ヨシュアは主が命じられたとお
りに彼らに行い、彼らの馬の足の筋を切り、戦車を火で焼いた。
一〇その時、ヨシュアはひきかえして、ハゾルを取り、つるぎをもって、
その王を撃った。ハゾルは昔、これらすべての国々の盟主であったから
である。一一彼らはつるぎをもって、その中のすべての人を撃ち、ことご
とくそれを滅ぼし、息のあるものは、ひとりも残さなかった。そして火を
もってハゾルを焼いた。一二ヨシュアはこれらの王たちのすべての町々、お
よびその諸王を取り、つるぎをもって、これを撃ち、ことごとく滅ぼした。
主のしもべモーセが命じたとおりであった。一三ただし、丘の上に立って
いる町々をイスラエルは焼かなかった。ヨシュアはただハゾルだけを焼い
た。一四これらの町のすべてのぶんどり物と家畜とは、イスラエルの人々
が戦利品として取ったが、人はみなつるぎをもって、滅ぼし尽し、息のあ

るものは、ひとりも残さなかった。一五主がそのしもべモーセに命じられ
たように、モーセはヨシュアに命じたが、ヨシュアはそのとおりにおこなっ
た。すべて主がモーセに命じられたことで、ヨシュアが行わなかったこと
は一つもなかった。

一六こうしてヨシュアはその全地、すなわち、山地、ネゲブの全地、ゴセ
ンの全地、平地、アラバならびにイスラエルの山地と平地を取り、一七セイ
ルへ上って行く道のハラク山から、ヘルモン山のふもとのレバノンの谷に
あるバアルガデまでを獲た。そしてそれらの王たちを、ことごとく捕えて、
撃ち殺した。一八ヨシュアはこれらすべての王たちと、長いあいだ戦った。
一九ギベオンの住民ヒビびとのほかには、イスラエルの人々と和を講じた
町は一つもなかった。町々はみな戦争をして、攻め取ったものであった。
二〇彼らが心をかたくなにして、イスラエルに攻めよせたのは、もともと主

がそうさせられたので、彼らがのろわれた者となり、あわれみを受けず、こ
とごとく滅ぼされるためであった。主がモーセに命じられたとおりである。
二一その時、ヨシュアはまた行って、山地、ヘブロン、デビル、アナブ、
ユダのすべての山地、イスラエルのすべての山地から、アナクびとを断ち、
彼らの町々をも共に滅ぼした。二二それでイスラエルの人々の地に、アナ
クびとは、ひとりもいなくなった。ただガサ、ガテ、アシドドには、少し
残っているだけであった。二三こうしてヨシュアはその地を、ことごとく
取った。すべて主がモーセに告げられたとおりである。そしてヨシュアは
イスラエルの部族にそれぞれの分を与えて、嗣業とさせた。こうしてその
地に戦争はやんだ。

第一二章一さてヨルダンの向こう側、日の出の方で、アルノンの谷から
ヘルモン山まで、および東アラバの全土のうちで、イスラエルの人々が撃

ち滅ぼして地を取った国の王たちは、次のとおりである。二まず、アモリ
びとの王シホン。彼はヘシボンに住み、その領地は、アルノンの谷のほと
りにあるアロエル、および谷の中の町から、ギレアデの半ばを占めて、ア
ンモンびととの境であるヤボク川に達し、三東の方ではアラバをキンネ
レテの湖まで占め、またアラバの海すなわち塩の海の東におよび、ベ
テエシモテの道を経て、南はピスガの山のふもとに達した。四次にレパイ
ムの生き残りのひとりであったバシャンの王オグ。彼はアシタロテとエデ
レイとに住み、五ヘルモン山、サレカ、およびバシャンの全土を領したの
で、ゲシュルびと、およびマアカびとと境を接し、またギレアデの半ばを
領したので、ヘシボンの王シホンと境を接していた。六主のしもべモー
セと、イスラエルの人々とが、彼らを撃ち滅ぼし、そして主のしもべモー
セは、これらの地を、ルベンびと、ガドびと、およびマナセの半部族に与

えて所有とさせた。
七ヨルダンのこちら側、西の方にあって、レバノンの谷にあるバアルガ
デから、セイルへ上って行く道のハラク山までの間で、ヨシュアと、イ
スラエルの人々とが、撃ち滅ぼした国の王たちは、次のとおりである。ヨ
シュアは彼らの地をイスラエルの部族に、それぞれの分を与えて嗣業と
させた。八これは、山地、平地、アラバ、山腹、荒野、およびネゲブであっ
て、ヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、エブス
びとの所領であった。九エリコの王ひとり。ベテルのほとりのアイの王ひ
とり。一〇エルサレムの王ひとり。ヘブロンの王ひとり。一一ヤルムテの王
ひとり。ラキシの王ひとり。一二エグロンの王ひとり。ゲゼルの王ひとり。
一三デビルの王ひとり。ゲデルの王ひとり。一四ホルマの王ひとり。アラデ
の王ひとり。一五リブナの王ひとり。アドラムの王ひとり。一六マッケダの

王ひとり。ベテルの王ひとり。一七タップアの王ひとり。ヘペルの王ひと
り。一八アペクの王ひとり。シャロンの王ひとり。一九マドンの王ひとり。
ハゾルの王ひとり。二〇シムロン・メロンの王ひとり。アクサフの王ひと
り。二一タアナクの王ひとり。メギドの王ひとり。二二ケデシの王ひとり。
カルメルのヨクネアムの王ひとり。二三ドルの高地におるドルの王ひとり。
ガリラヤのゴイイムの王ひとり。二四テルザの王ひとり。合わせて三十一
王である。

第一三章一さてヨシュアは年が進んで老いたが、主は彼に言われた、「あ
なたは年が進んで老いたが、取るべき地は、なお多く残っている。二その
残っている地は、次のとおりである。ペリシテびとの全地域、ゲシュルび
との全土、三エジプトの東のシホルから北にのびて、カナンびとに属する
といわれるエクロンの境までの地、ペリシテびとの五人の君たちの地、す

なわち、ガザ、アシドド、アシケロン、ガテ、およびエクロン。四南のア
ビびとの地、カナンびとの全地、シドンびとに属するメアラからアモリび
との境にあるアペクまでの部分。五またヘルモン山のふもとのバアルガデ
からハマテの入口に至るゲバルびとの地、およびレバノンの東の全土。六
レバノンからミスレポテ・マイムまでの山地のすべての民、すなわちシド
ンびとの全土。わたしはみずから彼らをイスラエルの人々の前から追い払
うであろう。わたしが命じたように、あなたはその地をイスラエルに分け
与えて、嗣業とさせなければならない。七すなわち、その地を九つの部族
と、マナセの半部族とに分け与えて、嗣業とさせなければならない」。
八マナセの他の半部族と共に、ルベンびとと、ガドびととは、ヨルダンの
向こう側、東の方で、その嗣業をモーセから受けた。主のしもべモーセ
が、彼らに与えたのは、九アルノンの谷のほとりにあるアロエル、および

谷の中にある町から、デボンとメデバの間にある高原のすべての地。一〇
ヘシボンで世を治めた、アモリびとの王シホンのすべての町々を含めて、
アンモンの人々の境までの地。一一ギレアデと、ゲシュルびと、ならびに
マアカびとの領地、ヘルモン山の全土、サルカまでのバシャン全体。一二
アシタロテとエデレイで世を治めたバシャンの王オグの全国。オグはレパ
イムの生き残りであった。モーセはこれらを撃って、追い払った。一三ただ
し、イスラエルの人々は、ゲシュルびとと、マアカびとを追い払わなかっ
た。ゲシュルびとと、マアカびとは、今日までイスラエルのうちに住んで
いる。

一四ただレビの部族には、ヨシュアはなんの嗣業をも与えなかった。イ
スラエルの神、主の火祭が彼らの嗣業であるからである。主がヨシュア
に言われたとおりである。

一五モーセはルベンびとの部族に、その家族にしたがって嗣業を与えた
が、一六その領域はアルノンの谷のほとりにあるアロエル、および谷の中
にある町からメデバのほとりのすべての高原、一七ヘシボンおよびその高原
のすべての町々、デボン、バモテ・バアル、ベテ・バアル・メオン、一八ヤ
ハヅ、ケデモテ、メパアテ、一九キリアタイム、シブマ、谷の中の山にある
ゼレテ・シャハル、二〇ベテペオル、ピスガの山腹、ベテエシモテ、二一す
なわち高原のすべての町々と、ヘシボンで世を治めたアモリびとの王シホ
ンの全国に及んだ。モーセはシホンを、ミデアンのつかさたちエビ、レケ
ム、ツル、ホルおよびレバと共に撃ち殺した。これらはみなシホンの諸侯
であって、その地に住んでいた者である。二二イスラエルの人々はまたベ
オルの子、占い師バラムをもつるぎにかけて、そのほかに殺した者どもと
共に殺した。二三ルベンびとの領域はヨルダンを境とした。これはルベ

ンびとが、その家族にしたがって獲た嗣業であって、その町々と村々と
を含む。
二四モーセはまたガドの部族、ガドの子孫にも、その家族にしたがって、
嗣業を与えたが、二五その領域はヤゼル、ギレアデのすべての町々、ア
ンモンびとの地の半ばで、ラバの東のアロエルまでの地。二六ヘシボンか
らラマテ・ミゾパまでの地、およびベトニム、マハナイムからデビルの境
までの地。二七谷の中ではベテハラム、ベテニムラ、スコテ、およびザポン
など、ヘシボンの王シホンの国の残りの部分。ヨルダンを境として、ヨル
ダンの東側、キンネレテの湖の南の端までの地。二八これはガドびと
が、その家族にしたがって獲た嗣業であって、その町々と村々とを含む。
二九モーセはまたマナセの半部族にも、嗣業を与えたが、それはマナセ
の半部族が、その家族にしたがって与えられたものである。三〇その領域

はマハナイムからバシャンの全土に及び、バシャンの王オグの全国、バシャ
ンにあるヤイルのすべての町々、すなわちその六十の町。三一またギレア
デの半ば、バシャンのオグの国の町であるアシタロテとエデレイ。これら
はマナセの子マキルの子孫に与えられた。すなわちマキルの子孫の半ばが、
その家族にしたがって、それを獲た。
三二これらはヨルダンの向こう側、エリコの東のモアブの平野で、モーセ
が分け与えた嗣業である。三三ただし、レビの部族には、モーセはなんの
嗣業をも与えなかった。イスラエルの神、主がその嗣業だからである。
主がモーセに言われたとおりである。

第一四章一イスラエルの人々が、カナンの地で受けた嗣業の地は、次の
とおりである。すなわち、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシュア、およびイス
ラエルの人々の部族の首長たちが、これを彼らに分かち、二主がモーセに

よって命じられたように、くじによって、これを九つの部族と、半ばの部族
とに、嗣業として与えた。三これはヨルダンの向こう側で、モーセがすで
に他の二つの部族と、半ばの部族とに、嗣業を与えていたからである。た
だしレビびとには、彼らの中で嗣業を与えず、四ヨセフの子孫が、マナセ
と、エフライムの二つの部族となったからである。レビびとには土地の分
け前を与えず、ただ、その住むべき町々および、家畜と持ち物とを置くた
めの放牧地を与えたばかりであった。五イスラエルの人々は、主がモーセ
に命じられたようにおこなって、その地を分けた。

六時に、ユダの人々がギルガルのヨシュアの所にきて、ケニズびとエフ
ンネの子カレブが、ヨシュアに言った、「主がカデシ・バルネアで、あなた
とわたしとについて、神の人モーセに言われたことを、あなたはごぞんじ
です。七主のしもべモーセが、この地を探るために、わたしをカデシ・バ

ルネアからつかわした時、わたしは四十歳でした。そしてわたしは、自分
の信ずるところを復命しました。八しかし、共に上って行った兄弟たち
は、民の心をくじいてしまいましたが、わたしは全くわが神、主に従
いました。九その日モーセは誓って、言いました、『おまえの足で踏んだ地
は、かならず長くおまえと子孫との嗣業となるであろう。おまえが全く
わが神、主に従ったからである』。一〇主がこの言葉をモーセに語られた
時からこのかた、イスラエルが荒野に歩んだ四十五年の間、主は言われ
たように、わたしを生きながらえさせてくださいました。わたしは今日す
でに八十五歳ですが、一一今もなお、モーセがわたしをつかわした日のよう
に、健やかです。わたしの今の力は、あの時の力に劣らず、どんな働
きにも、戦いにも堪えることができます。一二それで主があの日語られた
この山地を、どうか今、わたしにください。あの日あなたも聞いたように、

そこにはアナキびとがいて、その町々は大きく堅固です。しかし、主がわ
たしと共におられて、わたしはついには、主が言われたように、彼らを追
い払うことができるでしょう」。
一三そこでヨシュアはエフンネの子カレブを祝福し、ヘブロンを彼に与
えて嗣業とさせた。一四こうしてヘブロンは、ケニズびとエフンネの子カ
レブの嗣業となって、今日に至っている。彼が全くイスラエルの神、主
に従ったからである。一五ヘブロンの名は、もとはキリアテ・アルバといっ
た。アルバは、アナキびとのうちの、最も大いなる人であった。こうして
この地に戦争はやんだ。
第一五章一ユダの人々の部族が、その家族にしたがって、くじで獲た地
は、南の方では、エドムの境に達し、南のはてにあるチンの荒野に及ん
でいた。二その南の境は、塩の海の南の端の、入海から起り、三アクラ

ビムの坂の南に出てチンに進み、カデシ・バルネアの南から上って、ヘヅ
ロンに進み、アダルに上っていって、カルカに回り、四アヅモンに進んで、エ
ジプトの川に達し、その境は海に至って尽きる。これが彼らの南の境
である。五東の境は塩の海であって、ヨルダンの川口に達する。北の方
の境は、ヨルダンの川口の、入海から起り、六上ってベテホグラに行き、
ベテアラバの北を過ぎ、上ってルベンびとボハンの石に達し、七またアコ
ルの谷からデビルに上って、北におもむき、川の南にあるアドミムの坂
に対するギルガルに向かって進み、エンシメシの水に達し、エンロゲルに
至って尽きる。八またその境はベンヒンノムの谷に沿って、エブスびとの
地、すなわちエルサレムの南のわきに上り、ヒンノムの谷の西にある山の
頂に上る。これはレパイムの谷の北の果にあるものである。九その境
は、この山の頂からネフトアの水の源に至り、その所からエフロン

山の町々に及び、その境は曲ってバアラに達する。これは、すなわちキ
リアテ・ヤリムである。一〇その境は、バアラから西に回って、セイル山
に及び、ヤリム山、すなわちケサロンの北のわきを経て、ベテシメシに下
り、テムナに進み、一一エクロンの北の丘のわきに出て、シッケロンに曲
り、バアラ山に進み、ヤブネルに達し、海に至って尽きる。一二また西の
境は大海であって、海岸を境とした。これがユダの人々の、その家族に
したがって獲た地の四方の境である。

一三ヨシュアは、主に命じられたように、エフンネの子カレブに、ユダ
の人々のうちで、キリアテ・アルバ、すなわちヘブロンを与えて、その分
とさせた。アルバはアナクの父であった。一四カレブはその所から、アナ
クの子三人を追い払った。すなわち、セシャイ、アヒマン、およびタルマ
イであって、アナクから出たものである。一五そして彼はこの所からデビ

ルに住む民の所に攻め上った。デビルの名は、もとはキリアテ・セペルと
いった。一六カレブは言った、「キリアテ・セペルを撃って、これを取る者
には、わたしの娘アクサを妻として与えるであろう」。一七ケナズの子で、
カレブの弟オテニエルがそれを取ったので、カレブは娘アクサを、妻
として彼に与えた。一八彼女がとつぐ時、畑を父に求めるようにと、オテ
ニエルに勧められた。そして彼女が、ろばから降りたので、カレブは彼女
に、何を望むのかとたずねた。一九彼女は答えて言った、「わたしに贈り物
をください。あなたはネゲブの地に、わたしをやられるのですから、泉を
もください」。カレブは彼女に上の泉と下の泉とを与えた。

二〇ユダの人々の部族が、その家族にしたがって獲た嗣業は、次のとお
りである。二一ユダの人々の部族が、南でエドムの境の方にもっていた
遠くの町々は、カブジエル、エデル、ヤグル、二二キナ、デモナ、アダダ、

二三ケデシ、ハゾル、イテナン、二四ジフ、テレム、ベアロテ、二五ハゾル・
ハダッタ、ケリオテ・ヘヅロンすなわちハゾル、二六アマム、シマ、モラダ、
二七ハザルガダ、ヘシモン、ベテペレテ、二八ハザル・シュアル、ベエルシ
バ、ビジョテヤ、二九バアラ、イイム、エゼム、三〇エルトラデ、ケシル、ホ
ルマ、三一チクラグ、マデマンナ、サンサンナ、三二レバオテ、シルヒム、
アイン、リンモン。これらの町は合わせて二十九、ならびにそれに属する
村々。

三三平地では、エシタオル、ゾラ、アシナ、三四ザノア、エンガンニム、
タップア、エナム、三五ヤルムテ、アドラム、ソコ、アゼカ、三六シャアラ
イム、アデタイム、ゲデラ、ゲデロタイム。すなわち十四の町々と、それ
に属する村々。

三七ゼナン、ハダシャ、ミグダルガデ、三八デラン、ミヅパ、ヨクテル、三
九ラキシ、ボヅカテ、エグロン、四〇カボン、ラマム、キテリシ、四一ゲデ
ロテ、ベテダゴン、ナアマ、マッケダ。すなわち十六の町々と、それに属

する村々。
四二またリブナ、エテル、アシャン、四三イフタ、アシナ、ネジブ、四四ケ
イラ、アクジブ、マレシャ。すなわち九つの町々と、それに属する村々。
四五エクロンと、その町々、および村々。四六エクロンから海まで、すべ
てアシドドのほとりにある町々、およびそれに属する村々。
四七アシドドとその町々および村々。ガザとその町々および村々。エジ
プトの川と大海の海岸までが、その境であった。
四八山地では、シャミル、ヤッテル、ソコ、四九ダンナ、キリアテ・サン
ナすなわちデビル、五〇アナブ、エシテモ、アニム、五一ゴセン、ホロン、ギ
ロ。すなわち十一の町々と、それに属する村々。
五二アラブ、ドマ、エシャン、五三ヤニム、ベテタップア、アペカ、五四ホ
ムタ、キリアテ・アルバすなわちヘブロン、ギオル。すなわち九つの町々
と、それに属する村々。

五五マオン、カルメル、ジフ、ユッタ、五六エズレル、ヨクデアム、ザノア、
五七カイン、ギベア、テムナ。すなわち十の町々と、それに属する村々。
五八ハルホル、ベテズル、ゲドル、五九マアラテ、ベテアノテ、エルテコ
ン。すなわち六つの町々と、それに属する村々。
六〇キリアテ・バアルすなわちキリアテ・ヤリム、ラバ。これらの二つの
町とそれに属する村々。
六一荒野では、ベテアラバ、ミデン、セカカ、六二ニブシャン、塩の町、エ
ンゲデ。すなわち六つの町々と、それに属する村々。
六三しかし、ユダの人々は、エルサレムの住民エブスびとを追い払うこ
とができなかった。それでエブスびとは今日まで、ユダの人々と共にエル
サレムに住んでいる。

第一六章一ヨセフの子孫が、くじによって獲た地の境は、エリコのほと
りのヨルダン、すなわちエリコの水の東から起って、荒野に延び、エリコ

から山地に上っている荒野を経て、ベテルに至り、
二ベテルからルズにおもむき、アルキびとの領地であるアタロテに進み、
三西に下ってヤフレテびとの領地に達し、下ベテホロンの地域に及び、ゲゼルに達し、海に至って尽きる。
四こうしてヨセフの子孫のマナセと、エフライムとは、その嗣業を受けた。
五エフライムの子孫が、その家族にしたがって獲た地の境は、次のとおりである。彼らの嗣業の東の境は、アタロテ・アダルであって、上ベテホロンに達し、
六その境は、その所から海に及ぶ。北にはミクメタテがあり、東ではその境はタアナテシロで曲り、進んでヤノアの東に至り、
七ヤノアからアタロテとナアラに下り、エリコに達し、ヨルダンに至って尽きる。
八タップアからその境は西に進んで、カナの川に達し、海に至って尽きる。これはエフライムの子孫の部族が、その家族にしたがって獲た

嗣業である。九このほかにマナセの子孫の嗣業のうちにも、エフライム
の子孫のために分け与えられた町々があって、そのすべての町々と、それ
に属する村々を獲た。一〇ただし、ゲゼルに住むカナンびとを、追い払わ
なかったので、カナンびとは今日までエフライムの中に住み、奴隷となっ
て追い使われている。

第一七章一マナセの部族が、くじによって獲た地は、次のとおりである。
マナセはヨセフの長子であった。マナセの長子で、ギレアデの父であるマ
キルは、軍人であったので、ギレアデとバシャンを獲た。二マナセの部族
の他のものにも、その家族にしたがって、地を与えたが、それは、アビエゼ
ル、ヘレク、アスリエル、シケム、ヘペル、セミダで、これらはヨセフの子
マナセの男の子孫であって、その家族にしたがって、あげたものである。
三しかし、マナセの子マキル、その子ギレアデ、その子ヘペル、その子で

あったゼロペハデには、女の子だけで、男の子がなかった。女の子た
ちの名は、マヘラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザといった。四彼女たち
は、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシュアおよび、つかさたちの前に進み出
て、「わたしたちの兄弟と同じように、わたしたちにも、嗣業を与えよと、
主はモーセに命じおきになりました」と言ったので、ヨシュアは主の命
にしたがって、彼らの父の兄弟たちと同じように、彼女たちにも嗣業を
与えた。五こうしてマナセはヨルダンの向こう側で、ギレアデとバシャン
の地のほかに、なお十の部分を獲た。六マナセの娘たちが、男の子らと
共に、嗣業を獲たからである。ギレアデの地は、そのほかのマナセの子孫
に分け与えられた。
七マナセの獲た地の境は、アセルからシケムの東のミクメタテに及び、
その境は南に延びて、エンタップアの住民に達する。八タップアの地

はマナセに属していたが、マナセの境にあるタップアの町は、エフライ
ムの子孫に属していた。九またその境はカナの川に下って、川の南に至
る。そこの町々はマナセの町々の中にあって、エフライムに属した。マナ
セの境は、川の北に沿って進み、海に達して尽きる。一〇その川の南の
地は、エフライムに属し、北はマナセに属する。海がその境となる。マナ
セは北はアセルに接し、東はイッサカルに接する。一一マナセはまたイッ
サカルとアセルの中に、ベテシャンとその村々、イブレアムとその村々、ド
ルの住民とその村々、エンドルの住民とその村々、タアナクの住民と
その村々、メギドの住民とその村々を獲た。このうち第三のものは高地
である。一二しかし、マナセの子孫は、これらの町々を取ることができな
かったので、カナンびとは長くこの地に住み続けようとした。一三しかし、
イスラエルの人々が強くなるにしたがって、カナンびとを使役するように

なり、ことごとく追い払うことはしなかった。
一四ヨセフの子孫はヨシュアに言った、「主が今まで、わたしを祝福され
たので、わたしは数の多い民となったのに、あなたはなぜ、わたしの嗣業と
して、ただ一つのくじ、一つの分だけを、くださったのですか」。一五ヨシュ
アは彼らに言った、「もしあなたが数の多い民ならば、林に上っていって、
そこで、ペリジびとやレパイムびとの地を自分で切り開くがよい。エフラ
イムの山地が、あなたがたには狭いのだから」。一六ヨセフの子孫は答えた、
「山地はわたしどもに十分ではありません。かつまた平地におるカナンび
とは、ベテシャンとその村々におるものも、エズレルの谷におるものも、み
な鉄の戦車を持っています」。一七ヨシュアはまたヨセフの家、すなわちエ
フライムとマナセに言った、「あなたは数の多い民で、大きな力をもって
います。それでただ一つのくじでは足りません。一八山地をもあなたのもの

としなければなりません。それは林ではあるが、切り開いて、向こうの端
まで、自分のものとしなければなりません。カナンびとは鉄の戦車があっ
て、強くはあるが、あなたはそれを追い払うことができます」。

第一八章 一そこでイスラエルの人々の全会衆は、その地を征服したの
で、シロに集まり、そこに会見の幕屋を立てた。
二その時、イスラエルの人々のうちに、まだ嗣業を分かち取らない部族
が、七つ残っていたので、三ヨシュアはイスラエルの人々に言った、「あな
たがたは、先祖の神、主が、あなたがたに与えられた地を取りに行くのを、
いつまで怠っているのですか。四部族ごとに三人ずつを出しなさい。わた
しはその人々をつかわしましょう。彼らは立っていって、その地を行き巡
り、おのおの嗣業のために、それを図面にして、わたしのところへ持っ
てこなければならない。五彼らはその地を七つの部分に分けなければなら

ない。ユダは南のその領地にとどまり、ヨセフの家は北のその領地にと
どまらなければならない。六あなたがたは、その地を七つに分けて、図面に
し、それをここに、わたしのところへ持ってこなければならない。わたしは
ここで、われわれの神、主の前に、あなたがたのために、くじを引くであろ
う。七レビびとは、あなたがたのうちに何の分をも持たない。主の祭司た
ることが、彼らの嗣業だからである。またガドとルベンとマナセの半部族
とは、ヨルダンの向こう側、東の方で、すでにその嗣業を受けた。それ
は主のしもべモーセが、彼らに与えたものである」。
八そこでその人々は立って行った。その地の図面を作るために出て行く
人々に、ヨシュアは命じて言った、「あなたがたは行って、その地を行き巡
り、それを図面にして、わたしのところに持って帰りなさい。わたしはシ
ロで、主の前に、あなたがたのために、ここでくじを引きましょう」。九こ

うしてその人々は行って、その地を経めぐり、町々にしたがって、それを
七つの部分とし、図面にして、書物に書きしるし、シロの宿営におるヨ
シュアのもとへ持ってきた。一〇ヨシュアはシロで、彼らのために主の前
に、くじを引いた。そしてヨシュアはその所で、イスラエルの人々に、そ
れぞれの分として、地を分け与えた。
一一まずベニヤミンの子孫の部族のために、その家族にしたがって、くじ
を引いた。そしてそのくじによって獲た領地は、ユダの子孫と、ヨセフの
子孫との間にあった。一二すなわち、その北の方の境は、ヨルダンに始
まり、エリコの北のわきに上り、また西の方の山地をとおって上り、ベテ
アベンの荒野に達して尽きる。一三そこから、その境はルズに進み、ルズ
の南のわきに至る。ルズはベテルである。ついでその境は下ベテホロン
の南の山にあるアタロテ・アダルに下り、一四西の方では、ベテホロンの

南にある山から南に曲り、ユダの子孫の町キリアテ・バアルに至って尽
きる。キリアテ・バアルはキリアテ・ヤリムである。これが西の方の境で
あった。一五また南の方は、キリアテ・ヤリムの端に始まり、その境は
そこからエフロンにおもむき、ネフトアの水の源に至り、一六ついでその
境は、レパイムの谷の北の端にあるベンヒンノムの谷を見おろす山の端
に下り、進んでエブスびとのわきの南、ヒンノムの谷に下り、また下っ
てエンロゲルに至り、一七北に曲ってエンシメシにおもむき、アドミムの坂
に対するゲリロテにおもむき、ルベンびとボハンの石に下り、一八ベテアラ
バのわきを北に進んで、アラバに下り、一九その境は、ベテホグラの北の
わきに進み、ヨルダンの南端で、塩の海の北の入海に至って尽きる。これ
が南の境である。二〇ヨルダンは東の方の境となっていた。これがベ
ニヤミンの子孫の、その家族にしたがって獲た嗣業の四方の境である。

二一ベニヤミンの子孫の部族が、その家族にしたがって獲た町々は、エリ
コ、ベテホグラ、エメクケジツ、二二ベテアラバ、ゼマライム、ベテル、二
三アビム、パラ、オフラ、二四ケパル・アンモニ、オフニ、ゲバ。すなわち
十二の町々と、それに属する村々。二五またギベオン、ラマ、ベエロテ、二
六ミヅパ、ケピラ、モザ、二七レケム、イルピエル、タララ、二八ゼラ、エ
レフ、エブスすなわちエルサレム、ギベア、キリアテ・ヤリム。すなわち十
四の町々と、それに属する村々。これがベニヤミンの子孫の、その家族に
したがって獲た嗣業である。

第一九章
一次にシメオンのため、すなわちシメオンの子孫の部族のため
に、その家族にしたがって、くじを引いた。その嗣業はユダの子孫の嗣業
のうちにあった。二その嗣業として獲たものは、ベエルシバ、すなわちシ
バ、モラダ、三ハザル・シュアル、バラ、エゼム、四エルトラデ、ベトル、ホ
ルマ、五チクラグ、ベテ・マルカボテ、ハザルスサ、六ベテレバオテ、シャル

ヘン。すなわち十三の町々と、それに属する村々。七またアイン、リンモ
ン、エテル、アシャン。すなわち四つの町々と、それに属する村々。八お
よびこれらの町の周囲にあって、バアラテ・ベエル、すなわちネゲブのラ
マに至るまでのすべての村々。これがシメオンの子孫の部族の、その家族
にしたがって獲た嗣業である。九シメオンの子孫の嗣業は、ユダの子孫
の領域のうちにあった。これはユダの子孫の分が大きかったので、シメ
オンの子孫が、その嗣業を彼らの嗣業の中に獲たからである。
一〇第三にゼブルンの子孫のために、その家族にしたがって、くじを引い
た。その嗣業の領域はサリデに及び、一一その境は西に上って、マララ
に至り、ダバセテに達し、ヨクネアムの東にある川に達し、一二サリデか
ら、東の方、日の出の方に曲り、キスロテ・タボルの境に至り、ダベラ
テに出て、ヤピアに上り、一三そこから東の方、日の出の方に進んで、ガ

テヘペルとイッタ・カジンに至り、リンモンに進んで、ネアの方に曲る。
一四北ではその境はハンナトンに回り、イフタエルの谷に至って尽きる。
一五そしてカッタテ、ナハラル、シムロン、イダラ、ベツレヘムなど十二の
町々と、それに属する村々があった。一六これがゼブルンの子孫の、その
家族にしたがって獲た嗣業であって、その町々と、それに属する村々と
である。

一七第四にイッサカル、すなわちイッサカルの子孫のために、その家族に
したがって、くじを引いた。一八その領域には、エズレル、ケスロテ、シュ
ネム、一九ハパライム、シオン、アナハラテ、二〇ラビテ、キション、エベ
ツ、二一レメテ、エンガンニム、エンハダ、ベテパッゼズがあり、二二その
境はタボル、シャハヂマ、ベテシメシに達し、その境はヨルダンに至っ
て尽きる。十六の町々と、それに属する村々があった。二三これがイッサ
カルの子孫の部族の、その家族にしたがって獲た嗣業であって、その町々

と、それに属する村々とである。
二四第五に、アセルの子孫の部族のために、その家族にしたがって、くじ
を引いた。二五その領域には、ヘルカテ、ハリ、ベテン、アクサフ、二六
アランメレク、アマデ、ミシャルがあり、その境は西では、カルメルとシ
ホル・リブナテに達し、二七それから東に折れて、ベテダゴンに至り、北
の方ゼブルンと、イプタエルの谷に達し、ベテエメクおよびネイエルに至
り、北はカブルにいで、二八更にエブロン、レホブ、ハンモン、カナを経て、
大シドンに及び、二九それから、その境はラマに曲り、堅固な町ツロに至
る。またその境はホサに曲り、海に至って尽きる。そして、マハラブ、ア
クジブ、三〇ウンマ、アペク、レホブなど、二十二の町々と、それに属する
村々があった。三一これがアセルの子孫の部族の、その家族にしたがって獲
た嗣業であって、その町々と、それに属する村々とである。

三二第六に、ナフタリの子孫のために、その家族にしたがって、くじを引
いた。三三その境はヘレフから、すなわちザアナニイムのかしの木から起
り、アダミ・ネケブおよび、ヤブネルを経て、ラクムに至り、ヨルダンに
至って尽きる。三四そしてその境は西に向かって、アズノテ・タボルに至
り、そこからホッコクに出る。南はゼブルンに接し、西はアセルに接し、
東はヨルダンのユダに達する。三五その堅固な町々は、ヂデム、ゼル、ハ
ンマテ、ラッカテ、キンネレテ、三六アダマ、ラマ、ハゾル、三七ケデシ、エ
デレイ、エンハゾル、三八イロン、ミグダルエル、ホレム、ベテアナテ、ベ
テシメシなどで、十九の町々と、それに属する村々があった。三九これが
ナフタリの子孫の部族が、その家族にしたがって獲た嗣業であって、その
町々と、それに属する村々とである。

四〇第七に、ダンの子孫の部族のために、その家族にしたがって、くじを
引いた。四一その嗣業の領域には、ゾラ、エシタオル、イルシメシ、四二

シャラビム、アヤロン、イテラ、四三エロン、テムナ、エクロン、四四エルテ
ケ、ギベトン、バアラテ、四五エホデ、ベネベラク、ガテリンモン、四六メヤ
ルコン、ラッコン、およびヨッパと相対する地域があった。四七ただし、ダ
ンの子孫の領域は、彼らのために小さかったので、ダンの子孫は、上って
行き、レセムを攻めてそれを取り、つるぎにかけて撃ち滅ぼし、それを獲
てそこに住み、先祖ダンの名にしたがって、レセムをダンと名づけた。四八
これがダンの子孫の部族の、その家族にしたがって獲た嗣業であって、そ
の町々と、それに属する村々とである。

四九こうして国の各地域を嗣業として分け与えることを終ったとき、イ
スラエルの人々は、自分たちのうちに、一つの嗣業を、ヌンの子ヨシュア
に与えた。五〇すなわち、主の命に従って、彼が求めた町を与えたが、
それはエフライムの山地にあるテムナテ・セラであって、彼はその町を建
てなおして、そこに住んだ。

五一これらは、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシュア、およびイスラエルの
子孫の部族の族長たちが、シロにおいて会見の幕屋の入口で、主の前に、
くじを引いて分け与えた嗣業である。こうして地を分けることを終った。
第二〇章一そこで主はヨシュアに言われた、二「イスラエルの人々に言
いなさい、『先にわたしがモーセによって言っておいた、のがれの町を選び
定め、三あやまって、知らずに人を殺した者を、そこへのがれさせなさい。
これはあなたがたが、あだを討つ者をさけて、のがれる場所となるでしょ
う。四その人は、これらの町の一つにのがれて行って、町の門の入口に立
ち、その町の長老たちに、そのわけを述べなければならない。そうすれば、
彼らはその人を町に受け入れて、場所を与え、共に住ませるであろう。五
たとい、あだを討つ者が追ってきても、人を殺したその者を、その手に渡
してはならない。彼はあやまって隣人を殺したのであって、もとからそれ

を憎んでいたのではないからである。六その人は、会衆の前に立って、さ
ばきを受けるまで、あるいはその時の大祭司が死ぬまで、その町に住まな
ければならない。そして後、彼は自分の町、自分の家に帰って行って、逃
げ出してきたその町に住むことができる』」。
七そこで、ナフタリの山地にあるガリラヤのケデシ、エフライムの山地に
あるシケム、およびユダの山地にあるキリアテ・アルバすなわちヘブロン
を、これがために選び分かち、八またヨルダンの向こう側、エリコの東の
方では、ルベンの部族のうちから、高原の荒野にあるベゼル、ガドの部族
のうちから、ギレアデのラモテ、マナセの部族のうちから、バシャンのゴラ
ンを選び定めた。九これらは、イスラエルのすべての人々、およびそのう
ちに寄留する他国人のために設けられた町々であって、すべて、あやまっ
て人を殺した者を、そこにのがれさせ、会衆の前に立たないうちに、あ

だを討(う)つ者(もの)の手(て)にかかって死(し)ぬことのないようにするためである。
第二一章 一 時(とき)にレビの族長(ぞくちょう)たちは、祭司(さいし)エレアザル、ヌンの子(こ)ヨシュア
およびイスラエルの部族(ぶぞく)の族長(ぞくちょう)たちのもとにきて、カナンの地(ち)のシロで
彼(かれ)らに言(い)った、「主(しゅ)はかつて、われわれに住(す)むべき町々(まちまち)を与(あた)えることと、そ
れに属(ぞく)する放牧地(ほうぼくち)を、家畜(かちく)のために与(あた)えることを、モーセによって命(めい)じら
れました」。三 それでイスラエルの人々(ひとびと)は、主(しゅ)の命(いのち)にしたがって、自分(じぶん)た
ちの嗣業(しぎょう)のうちから、次(つぎ)の町々(まちまち)と、その放牧地(ほうぼくち)とを、レビびとに与(あた)えた。
四 まずコハテびとの氏族(しぞく)のために、くじを引(ひ)いた。祭司(さいし)アロンの子孫(しそん)であ
るこれらのレビびとは、くじによって、ユダの部族(ぶぞく)、シメオンの部族(ぶぞく)、およ
びベニヤミンの部族(ぶぞく)のうちから、十三の町(まち)を獲(え)た。
五 その他(た)のコハテびとは、くじによって、エフライムの部族(ぶぞく)の氏族(しぞく)、ダン
の部族(ぶぞく)、およびマナセの半部族(はんぶぞく)のうちから、十の町(まち)を獲(え)た。

六またゲルションびとは、くじによって、イッサカルの部族の氏族、アセ
ルの部族、ナフタリの部族、およびバシャンにあるマナセの半部族のうち
から、十三の町を獲た。
七またメラリびとは、その氏族にしたがって、ルベンの部族、ガドの部族、
およびゼブルンの部族のうちから、十二の町を獲た。
八イスラエルの人々は、主がモーセによって命じられたとおりに、これ
らの町と、その放牧地とを、くじによって、レビびとに与えた。
九まずユダの部族と、シメオンの部族のうちから、次に名をあげる町々
を与えた。一〇これらはレビびとに属するコハテびとの氏族の一つである、
アロンの子孫に与えられた。最初のくじが彼らに当ったからである。一一
すなわちユダの山地にあるキリアテ・アルバすなわちヘブロンおよびその
周囲の放牧地を彼らに与えた。このアルバはアナクの父であった。一二た

だし、この町の畑と、それに属する村々とは、すでにエフンネの子カレ
ブが、それを受けて所有していた。
一三祭司アロンの子孫に与えたのは、人を殺した者の、のがれる町である
ヘブロンとその放牧地、リブナとその放牧地、一四ヤッテルとその放牧地、
エシテモアとその放牧地、一五ホロンとその放牧地、デビルとその放牧地、
一六アインとその放牧地、ユッタとその放牧地、ベテシメシとその放牧地
など、九つの町であって、この二つの部族のうちから分け与えたものであ
る。一七またベニヤミンの部族のうちから、ギベオンとその放牧地、ゲバと
その放牧地、一八アナトテとその放牧地、アルモンとその放牧地など、四
つの町を与えた。一九アロンの子孫である祭司たちの町は、合わせて十三
であって、それに属する放牧地があった。
二〇その他のコハテびとであるレビびとの氏族は、くじによって、エフラ

イムの部族のうちから町を獲た。二一すなわち、その町は、人を殺したも
のの、のがれる町であるエフライムの山地のシケムとその放牧地、ゲゼル
とその放牧地、二二キブザイムとその放牧地、ベテホロンとその放牧地な
ど、四つの町である。二三またダンの部族のうちから分け与えた町は、エル
テケとその放牧地、ギベトンとその放牧地、二四アヤロンとその放牧地、ガ
テリンモンとその放牧地など、四つの町である。二五またマナセの半部族
のうちから分け与えた町は、タアナクとその放牧地、およびガテリンモン
とその放牧地など、二つの町である。二六その他のコハテびとの氏族の町
は、合わせて十であって、それに属する放牧地があった。

二七ゲルションびとであるレビびとの氏族の一つに与えられた町は、マ
ナセの半部族のうちからは、人を殺した者の、のがれる町であるバシャン
のゴランとその放牧地、およびベエシテラとその放牧地など、二つの町で

ある。二八イッサカルの部族のうちからは、キションとその放牧地、ダベラ
テとその放牧地、二九ヤルムテとその放牧地、エンガンニムとその放牧地
など、四つの町である。三〇アセルの部族のうちからは、ミシャルとその
放牧地、アブドンとその放牧地、三一ヘルカテとその放牧地、レホブとその
放牧地など、四つの町である。三二ナフタリの部族のうちからは、人を殺
した者の、のがれる町であるガリラヤのケデシとその放牧地、ハンモテ・ド
ルとその放牧地、カルタンとその放牧地など、三つの町である。三三ゲル
ションびとが、その氏族にしたがって獲た町は、合わせて十三の町であっ
て、それに属する放牧地があった。

三四その他のレビびとである、メラリびととの氏族に与えられた町は、ゼブ
ルンの部族のうちからは、ヨクネアムとその放牧地、カルタとその放牧地、
三五デムナとその放牧地、ナハラルとその放牧地など、四つの町である。三

六ルベンの部族のうちからは、ベゼルとその放牧地、ヤハヅとその放牧地、
三七ケデモテとその放牧地、メパアテとその放牧地など、四つの町である。
三八ガドの部族のうちからは、人を殺した者の、のがれる町であるギレア
デのラモテとその放牧地、マハナイムとその放牧地、三九ヘシボンとその
放牧地、ヤゼルとその放牧地など、合わせて四つの町である。四〇これら
はみな、ほかのレビびとであるメラリびとが、その氏族にしたがって、く
じをもって獲た町であって、合わせて十二であった。
四一イスラエルの人々の所有のうちに、レビびとが持った町々は、合わ
せて四十八であって、それに属する放牧地があった。四二これらの町々は、
それぞれその周囲に放牧地があった。これらの町々はみなそうであった。
四三このように、主が、イスラエルに与えると、その先祖たちに誓われた
地を、ことごとく与えられたので、彼らはそれを獲て、そこに住んだ。四四

主は彼らの先祖たちに誓われたように、四方に安息を賜わったので、すべ
ての敵のうち、ひとりも彼らに手向かう者はなかった。主が敵をことごと
く彼らの手に渡されたからである。四五主がイスラエルの家に約束された
すべての良いことは、一つとしてたがわず、みな実現した。

第二二章 一時にヨシュアは、ルベンびと、ガドびと、およびマナセの部族の
半ばを呼び集めて、二言った、「あなたがたは主のしもべモーセが命じたこ
とを、ことごとく守り、またわたしの命じたすべての事にも、わたしの言葉
に聞きしたがいました。三今日まで長い年月の間、あなたがたの兄弟た
ちを捨てず、あなたがたの神、主の命令を、よく守ってきました。四今は
すでに、あなたがたの神、主が、あなたがたの兄弟たちに、先に約束さ
れたとおり、安息を賜わるようになりました。それで、あなたがたは身を
返して、主のしもべモーセが、あなたがたに与えたヨルダンの向こう側の

所有の地に行き、自分たちの天幕に帰りなさい。五ただ主のしもべモーセ
が、あなたがたに命じた戒めと、律法とを慎んで行い、あなたがたの
神、主を愛し、そのすべての道に歩み、その命令を守って、主につき従
い、心をつくし、精神をつくして、主に仕えなさい」。六そしてヨシュア
が彼らを祝福して去らせたので、彼らはその天幕に帰った。
七マナセの部族の半ばには、すでにモーセがバシャンで所有地を与えた
が、他の半ばには、ヨシュアがヨルダンのこちら側、西の方で、その兄弟
たちのうちに、所有地を与えた。ヨシュアは、彼らをその天幕に送りかえ
す時、彼らを祝福して、八言った、「あなたがたは多くの貨財と、おびた
だしい数の家畜と、金、銀、青銅、鉄、および多くの衣服を持って天幕に
帰り、敵から獲たぶんどり物を兄弟たちに分けなさい」。九こうしてルベ
ンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの部族の半ばは、主がモーセによっ

て命じられたように、すでに自分の所有地となっているギレアデの地に行
こうと、カナンの地のシロで、イスラエルの人々と別れて帰って行った。
一〇ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの部族の半ばが、カナンの
地のヨルダンのほとりにきた時、その所で、ヨルダンの岸べに一つの祭壇
を築いた。それは大きくて遠くから見える祭壇であった。一一イスラエル
の人々は、「ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの部族の半ばが、カ
ナンの地の国境、ヨルダンのほとりのイスラエルの人々に属する方で、一
つの祭壇を築いた」といううわさを聞いた。一二イスラエルの人々が、そ
れを聞くとひとしく、イスラエルの人々の全会衆はシロに集まって、彼
らの所に攻め上ろうとした。
一三そしてイスラエルの人々は、祭司エレアザルの子ピネハスをギレアデ
の地のルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの半部族の所につかわし、

一四イスラエルの各部族のうちから、父祖の家のつかさ、ひとりずつをあげ
て、合わせて十人のつかさたちを、彼と共に行かせた。これらはみなイス
ラエルの氏族のうちで、父祖の家のかしらたる人々であった。一五彼らは
ギレアデの地に行き、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの半部族
に語って言った、一六「主の全会衆はこう言います、『あなたがたがイス
ラエルの神にむかって、とがを犯し、今日、ひるがえって主に従うこと
をやめ、自分のために一つの祭壇を築いて、今日、主にそむこうとするの
は何事か。一七ペオルで犯した罪で、なお足りないとするのか。それがた
めに主の会衆に災が下ったが、われわれは今日もなお、その罪から清
められていない。一八しかもあなたがたは、今日、ひるがえって主に従う
ことをやめようとするのか。あなたがたが、きょう、主にそむくならば、あ
す、主はイスラエルの全会衆にむかって怒られるであろう。一九もしあな

たがたの所有の地が清くないのであれば、主の幕屋の立っている主の所有
の地に渡ってきて、われわれのうちに、所有の地を獲なさい。ただ、われ
われの神、主の祭壇のほかに、自分のために祭壇を築いて、主にそむき、
またわれわれをそむく者とならせないでください。二〇ゼラの子アカンは、
のろわれた物について、とがを犯し、それがためイスラエルの全会衆に、
怒りが臨んだではないか。またその罪によって滅びた者は、彼ひとりでは
なかった』」。
二一その時、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの半部族は、イス
ラエルの氏族のかしらたちに答えて言った、二二「力ある者、神、主。力
ある者、神、主。主は知ろしめす。イスラエルもまた知らなければならな
い。もしそれがそむくことであり、あるいは主に罪を犯すことであるなら
ば、きょう、われわれをゆるさないでください。二三われわれが祭壇を築い

たことが、もし主に従うことをやめるためであり、またその上に、燔祭、
素祭をささげるためであり、あるいはまたその上に、酬恩祭の犠牲をささ
げるためであったならば、主みずから、その罪を問いただしてください。二
四しかし、われわれは次のことを考えてしたのです。すなわち、のちの日
になって、あなたがたの子孫が、われわれの子孫にむかって言うことがあ
るかも知れません、『あなたがたは、イスラエルの神、主と、なんの関係が
あるのですか。二五ルベンの子孫と、ガドの子孫よ、主は、あなたがたと、
われわれとの間に、ヨルダンを境とされました。あなたがたは主の民の
特権がありません』。こう言って、あなたがたの子孫が、われわれの子孫に、
主を拝むことをやめさせるかも知れないので、二六われわれは言いました、
『さあ、われわれは一つの祭壇を築こう。燔祭のためではなく、また犠牲
のためでもなく、二七ただあなたがたと、われわれとの間、およびわれわ

れの後の子孫の間に、証拠とならせて、われわれが、燔祭と犠牲、およ
び酬恩祭をもって、主の前で、主につとめをするためである。こうすれ
ば、のちの日になって、あなたがたの子孫が、われわれの子孫に、「あなたが
たは主の民の特権がありません」とは言わないであろう』。二八またわれわ
れは言いました、『のちの日に、われわれ、またわれわれの子孫が、もしそ
のようなことを言われるならば、その時、われわれは言おう、「われわれの
先祖が造った主の祭壇の型をごらんなさい。これは燔祭のためではなく、
また犠牲のためでもなく、あなたがたと、われわれとの間の証拠である」。
二九主にそむき、ひるがえって今日、主に従うことをやめて、われわれの
神、主の幕屋の前にある祭壇のほかに、燔祭、素祭、または犠牲をささげ
るための祭壇を築くようなことは、決していたしません』」。
三〇祭司ピネハス、および会衆のつかさたち、すなわち彼と共に行った

イスラエルの氏族のかしらたちは、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマ
ナセの子孫が語った言葉を聞いて、それを良しとした。三一そして祭司エレ
アザルの子ピネハスは、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの子孫に
言った、「今日、われわれは、主がわれわれのうちにいますことを知った。
あなたがたが、主にむかって、このとがを犯さなかったからである。あな
たがたは今、イスラエルの人々を、主の手から救い出したのです」。
三二こうして祭司エレアザルの子ピネハスと、つかさたちは、ルベンの
子孫、およびガドの子孫に別れて、ギレアデの地からカナンの地に帰り、イ
スラエルの人々のところに行って復命したので、三三イスラエルの人々は
それを良しとした。そしてイスラエルの人々は神をほめたたえ、ルベンの
子孫、およびガドの子孫の住んでいる国を滅ぼすために攻め上ろうとは、も
はや言わなかった。三四ルベンの子孫とガドの子孫は、その祭壇を「あかし」

と名づけて言った、「これは、われわれの間にあって、主が神にいますと
いうあかしをするものである」。
第二三章一主がイスラエルの周囲の敵を、ことごとく除いて、イスラエ
ルに安息を賜わってのち、久しくたち、ヨシュアも年が進んで老いた。二
ヨシュアはイスラエルのすべての人、その長老、かしらたち、さばきびと、
つかさびとたちを呼び集めて言った、「わたしは年も進んで老人となった。
三あなたがたは、すでにあなたがたの神、主が、このもろもろの国びとに行
われたすべてのことを見た。あなたがたのために戦われたのは、あなたが
たの神、主である。四見よ、わたしはヨルダンから、日の入る方、大海まで
の、このもろもろの残っている国々と、すでにわたしが滅ぼし去ったすべ
ての国々を、くじをもって、あなたがたに分け与え、あなたがたの各部族
の嗣業とさせた。五あなたがたの前から、その国民を打ち払い、あなたが

たの目の前から追い払われるのは、あなたがたの神、主である。そしてあ
なたがたの神、主が約束されたように、あなたがたは彼らの地を獲るであ
ろう。六それゆえ、あなたがたは堅く立って、モーセの律法の書にしるさ
れていることを、ことごとく守って行わなければならない。それを離れ
て右にも左にも曲ってはならない。七あなたがたのうちに残っている、こ
れらの国民と交じってはならない。彼らの神々の名を唱えてはならない。
それをさして誓ってはならない。またそれに仕え、それを拝んではならな
い。八ただ、今日までしてきたように、あなたがたの神、主につき従わな
ければならない。九主が大いなる強き国民を、あなたがたの前から追い払
われた。あなたがたには今日まで、立ち向かうことのできる者は、ひとり
もなかった。一〇あなたがたのひとりは、千人を追い払うことができるであ
ろう。あなたがたの神、主が約束されたように、みずからあなたがたのた

めに戦われるからである。一一それゆえ、あなたがたは深く慎んで、あ
なたがたの神、主を愛さなければならない。一二しかし、あなたがたがも
しひるがえって、これらの国民の、生き残って、あなたがたの中にとどま
る者どもと親しくなり、これと婚姻し、ゆききするならば、一三あなたが
たは、しかと知らなければならない。あなたがたの神、主は、もはや、こ
れらの国民をあなたがたの前から、追い払うことをされないであろう。彼
らは、かえって、あなたがたのわなとなり、網となり、あなたがたのわき
に、むちとなり、あなたがたの目に、とげとなって、あなたがたはついに、
あなたがたの神、主が賜わったこの良い地から、滅びうせるであろう。
一四見よ、今日、わたしは世の人のみな行く道を行こうとする。あなた
がたがみな、心のうちにまた、肝に銘じて知っているように、あなたがた
の神、主が、あなたがたについて約束されたもろもろの良いことで、一つ

も欠けたものはなかった。みなあなたがたに臨んで、一つも欠けたものは
なかった。
一五しかし、あなたがたの神、主があなたがたについて約束され
た、もろもろの良いことが、あなたがたに臨んだように、主はまた、もろも
ろの悪いことをあなたがたに下して、あなたがたの神、主が賜わったこの
良い地から、ついに、あなたがたを滅ぼし断たれるであろう。
一六もし、あ
なたがたの神、主が命じられたその契約を犯し、行って他の神々に仕え、
それを拝むならば、主はあなたがたにむかって怒りを発し、あなたがたは、
主が賜わった良い地から、すみやかに滅びうせるであろう」。

第二四章
一ヨシュアは、イスラエルのすべての部族をシケムに集め、イ
スラエルの長老、かしら、さばきびと、つかさたちを召し寄せて、共に神
の前に進み出た。
二そしてヨシュアはすべての民に言った、「イスラエルの
神、主は、こう仰せられる、『あなたがたの先祖たち、すなわちアブラハム

の父、ナホルの父テラは、昔、ユフラテ川の向こうに住み、みな、ほか
の神々に仕えていたが、三わたしは、あなたがたの先祖アブラハムを、川
の向こうから連れ出して、カナンの全地を導き通り、その子孫を増した。
わたしは彼にイサクを与え、四イサクにヤコブとエサウを与え、エサウに
はセイルの山地を与えて、所有とさせたが、ヤコブとその子供たちはエジ
プトに下った。五わたしはモーセとアロンをつかわし、またエジプトのう
ちに不思議をおこなって、これに災を下し、その後あなたがたを導き
出した。六わたしはあなたがたの父たちを、エジプトから導き出し、あな
たがたが海にきたとき、エジプトびとは、戦車と騎兵とをもって、あなた
がたの父たちを紅海に追ってきた。七そのとき、あなたがたの父たちが主
に呼ばわったので、主は暗やみをあなたがたとエジプトびととの間に置
き、海を彼らの上に傾けて彼らをおおわれた。あなたがたは、わたしが

エジプトでしたことを目で見た。そして長い間、荒野に住んでいた。八わ
たしはまたヨルダンの向こう側に住んでいたアモリびとの地に、あなたが
たを導き入れた。彼らはあなたがたと戦ったので、わたしは彼らをあな
たがたの手に渡して、彼らの地を獲させ、彼らをあなたがたの前から滅ぼ
し去った。九ついで、モアブの王チッポルの子バラクが立って、イスラエ
ルに敵し、人をつかわし、ベオルの子バラムを招き、あなたがたをのろわ
せようとしたが、一〇わたしがバラムに聞こうとしなかったので、彼は、か
えって、あなたがたを祝福した。こうしてわたしは彼の手からあなたが
たを救い出した。一一そしてあなたがたは、ヨルダンを渡って、エリコにき
たが、エリコの人々はあなたがたと戦い、アモリびと、ペリジびと、カナ
ンびと、ヘテびと、ギルガシびと、ヒビびと、およびエブスびとも、あな
たがたと戦ったが、わたしは彼らをあなたがたの手に渡した。一二わたし

は、あなたがたの前に、くまばちを送って、あのアモリびとのふたりの王
を、あなたがたの前から追い払った。これはあなたがたのつるぎ、または、
あなたがたの弓によってではなかった。
一三そしてわたしは、あなたがたが
自分で労しなかった地を、あなたがたに与え、あなたがたが建てなかった
町を、あなたがたに与えた。そしてあなたがたはいまその所に住んでい
る。あなたがたはまた自分で作らなかったぶどう畑と、オリブ畑の実を
食べている』。

一四それゆえ、いま、あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実
とをもって、主に仕え、あなたがたの先祖が、川の向こう、およびエジプ
トで仕えた他の神々を除き去って、主に仕えなさい。
一五もしあなたがた
が主に仕えることを、こころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、
川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリ

びとの神々でも、あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、
わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」。
一六その時、民は答えて言った、「主を捨てて、他の神々に仕えるなど、
われわれは決していたしません。一七われわれの神、主がみずからわれわ
れと、われわれの先祖とを、エジプトの地、奴隷の家から導き上り、また
われわれの目の前で、あの大いなるしるしを行い、われわれの行くすべて
の道で守り、われわれが通ったすべての国民の中でわれわれを守られたか
らです。一八主はまた、この地に住んでいたアモリびとなど、すべての民
を、われわれの前から追い払われました。それゆえ、われわれも主に仕え
ます。主はわれわれの神だからです」。
一九しかし、ヨシュアは民に言った、「あなたがたは主に仕えることはで
きないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神であって、あなたがたの

罪、あなたがたのとがを、ゆるされないからである。二〇もしあなたがた
が主を捨てて、異なる神々に仕えるならば、あなたがたにさいわいを下さ
れたのちにも、ひるがえってあなたがたに災をくだし、あなたがたを滅
ぼしつくされるであろう」。二一民はヨシュアに言った、「いいえ、われわれ
は主に仕えます」。二二そこでヨシュアは民に言った、「あなたがたは主を
選んで、主に仕えると言った。あなたがたみずからその証人である」。彼
らは言った、「われわれは証人です」。二三ヨシュアはまた言った、「それ
ならば、あなたがたのうちにある、異なる神々を除き去り、イスラエルの
神、主に、心を傾けなさい」。二四民はヨシュアに言った、「われわれの
神、主に、われわれは仕え、その声に聞きしたがいます」。二五こうしてヨ
シュアは、その日、民と契約をむすび、シケムにおいて、定めと、おきてを、
彼らのために設けた。二六ヨシュアはこれらの言葉を神の律法の書にしる

し、大きな石を取って、その所で、主の聖所にあるかしの木の下にそれ
を立て、二七ヨシュアは、すべての民に言った、「見よ、この石はわれわれ
のあかしとなるであろう。主がわれわれに語られたすべての言葉を、聞い
たからである。それゆえ、あなたがたが自分の神を捨てることのないため
に、この石が、あなたがたのあかしとなるであろう」。二八こうしてヨシュ
アは民を、おのおのその嗣業の地に帰し去らせた。
二九これらの事の後、主のしもべ、ヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ、
三〇人々は彼をその嗣業の地のうちのテムナテ・セラに葬った。テムナ
テ・セラは、エフライムの山地で、ガアシ山の北にある。
三一イスラエルはヨシュアの世にある日の間、また主がイスラエルのた
めに行われたもろもろのことを知っていて、ヨシュアのあとに生き残った
長老たちが世にある日の間、つねに主に仕えた。

三二イスラエルの人々が、エジプトから携え上ったヨセフの骨は、むかしヤコブが銀百枚で、シケムの父ハモルの子らから買い取ったシケムのうちの地所の一部に葬られた。これはヨセフの子孫の嗣業となった。
三三アロンの子エレアザルも死んだ。人々は彼を、その子ピネハスに与えられた町で、エフライムの山地にあるギベアに葬った。

士師記

第一章一ヨシュアが死んだ後、イスラエルの人々は主に問うて言った、「わ
たしたちのうち、だれが先に攻め上って、カナンびとと戦いましょうか」。
二主は言われた、「ユダが上るべきである。わたしはこの国を彼の手にわた
した」。三ユダはその兄弟シメオンに言った、「わたしと一緒に、わたしに
割り当てられた領地へ上って行って、カナンびとと戦ってください。そ
うすればわたしもあなたと一緒に、あなたに割り当てられた領地へ行きま
しょう」。そこでシメオンは彼と一緒に行った。四ユダが上って行くと、主
は彼らの手にカナンびととペリジびととをわたされたので、彼らはベゼク
で一万人を撃ち破り、五またベゼクでアドニベゼクに会い、彼と戦ってカ
ナンびととペリジびととを撃ち破った。六アドニベゼクは逃げたが、彼ら

はそのあとを追って彼を捕え、その手足の親指を切り放った。七アドニベ
ゼクは言った、「かつて七十人の王たちが手足の親指を切られて、わたしの
食卓の下で、くずを拾ったことがあったが、神はわたしがしたように、わ
たしに報いられたのだ」。人々は彼をエルサレムへ連れて行ったが、彼は
そこで死んだ。

八ユダの人々はエルサレムを攻めて、これを取り、つるぎをもってこれを
撃ち、町に火を放った。九その後、ユダの人々は山地とネゲブと平地に住
んでいるカナンびとと戦うために下ったが、一〇ユダはまずヘブロンに住
んでいるカナンびとを攻めて、セシャイとアヒマンとタルマイを撃ち破っ
た。ヘブロンのもとの名はキリアテ・アルバであった。

一一またそこから進んでデビルの住民を攻めた。(デビルのもとの名は
キリアテ・セペルであった。)一二時にカレブは言った、「キリアテ・セペル

を撃って、これを取る者には、わたしの娘アクサを妻として与えるであろ
う」。一三カレブの弟ケナズの子オテニエルがそれを取ったので、カレブ
は娘アクサを妻として彼に与えた。一四アクサは行くとき彼女の父に畑
を求めることを夫にすすめられたので、アクサがろばから降りると、カ
レブは彼女に言った、「あなたは何を望むのか」。一五アクサは彼に言った、
「わたしに贈り物をください。あなたはわたしをネゲブの地へやられるので
すから、泉をもください」。それでカレブは上の泉と下の泉とを彼女に
与えた。

一六モーセのしゅうとであるケニびとの子孫はユダの人々と共に、しゅろ
の町からアラドに近いネゲブにあるユダの野に上ってきて、アマレクびと
と共に住んだ。一七そしてユダはその兄弟シメオンと共に行って、ゼパテ
に住んでいたカナンびとを撃ち、それをことごとく滅ぼした。これによっ

てその町の名はホルマと呼ばれた。一八ユダはまたガザとその地域、アシケ
ロンとその地域、エクロンとその地域を取った。一九主がユダと共におら
れたので、ユダはついに山地を手に入れたが、平地に住んでいた民は鉄の
戦車をもっていたので、これを追い出すことができなかった。二〇人々は
モーセがかつて言ったように、ヘブロンをカレブに与えたので、カレブはそ
の所からアナクの三人の子を追い出した。二一ベニヤミンの人々はエルサ
レムに住んでいたエブスびとを追い出さなかったので、エブスびとは今日
までベニヤミンの人々と共にエルサレムに住んでいる。

二二ヨセフの一族はまたベテルに攻め上ったが、主は彼らと共におられ
た。二三すなわちヨセフの一族は人をやってベテルを探らせた。この町のも
との名はルズであった。二四その斥候たちは町から出てきた人を見て、言っ
た、「どうぞこの町にはいる道を教えてください。そうすればわたしたちは

あなたに恵みを施しましょう」。二五彼が町にはいる道を教えたので、彼
らはつるぎをもって町を撃った。しかし、かの人とその家族は自由に去ら
せた。二六その人はヘテびとの地に行って町を建て、それをルズと名づけ
た。これは今日までその名である。
二七マナセはベテシャンとその村里の住民、タアナクとその村里の住民、
ドルとその村里の住民、イブレアムとその村里の住民、メギドとその
村里の住民を追い出さなかったので、カナンびとは引き続いてその地に
住んでいたが、二八イスラエルは強くなったとき、カナンびとを強制労働
に服させ、彼らをことごとくは追い出さなかった。
二九またエフライムはゲゼルに住んでいたカナンびとを追い出さなかった
ので、カナンびとはゲゼルにおいて彼らのうちに住んでいた。
三〇ゼブルンはキテロンの住民およびナハラルの住民を追い出さなかっ

たので、カナンびとは彼らのうちに住んで強制労働に服した。
三一アセルはアッコの住民およびシドン、アヘラブ、アクジブ、ヘルバ、
アピク、レホブの住民を追い出さなかったので、三二アセルびとは、その
地の住民であるカナンびとのうちに住んでいた。彼らが追い出さなかっ
たからである。
三三ナフタリはベテシメシの住民およびベテアナテの住民を追い出さ
ずに、その地の住民であるカナンびとのうちに住んでいた。しかしベテシ
メシとベテアナテの住民は、ついに彼らの強制労働に服した。
三四アモリびとはダンの人々を山地に追い込んで平地に下ることを許さ
なかった。三五アモリびとは引き続いてハルヘレス、アヤロン、シャラビム
に住んでいたが、ヨセフの一族の手が強くなったので、彼らは強制労働
に服した。三六アモリびとの境はアクラビムの坂からセラを経て上の方に

及んだ。
第二章一主の使がギルガルからボキムに上って言った、「わたしはあな
たがたをエジプトから上らせて、あなたがたの先祖に誓った地に連れてき
て、言った、『わたしはあなたと結んだ契約を決して破ることはない。二あ
なたがたはこの国の住民と契約を結んではならない。彼らの祭壇をこぼ
たなければならない』と。しかし、あなたがたはわたしの命令に従わな
かった。あなたがたは、なんということをしたのか。三それでわたしは言
う、『わたしはあなたがたの前から彼らを追い払わないであろう。彼らはか
えってあなたがたの敵となり、彼らの神々はあなたがたのわなとなるであ
ろう』と」。四主の使がこれらの言葉をイスラエルのすべての人々に告げ
たので、民は声をあげて泣いた。五それでその所の名をボキムと呼んだ。
そして彼らはその所で主に犠牲をささげた。

六ヨシュアが民を去らせたので、イスラエルの人々はおのおのその領地
へ行って土地を獲た。七民はヨシュアの在世中も、またヨシュアのあとに
生き残った長老たち、すなわち主がかつてイスラエルのために行われた
すべての大いなるわざを見た人々の在世中も主に仕えた。八こうして主
のしもべヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ。九人々は彼をエフライムの
山地のガアシ山の北のテムナテ・ヘレスにある彼の領地内に葬った。一
〇そしてその時代の者もまたことごとくその先祖たちのもとにあつめられ
た。その後ほかの時代が起ったが、これは主を知らず、また主がイスラエ
ルのために行われたわざをも知らなかった。

一一イスラエルの人々は主の前に悪を行い、もろもろのバアルに仕え、
一二かつてエジプトの地から彼らを導き出された先祖たちの神、主を捨て
て、ほかの神々すなわち周囲にある国民の神々に従い、それにひざまず

いて、主の怒りをひき起した。一三すなわち彼らは主を捨てて、バアルと
アシタロテに仕えたので、一四主の怒りがイスラエルに対して燃え、かす
め奪う者の手にわたして、かすめ奪わせ、かつ周囲のもろもろの敵の手に
売られたので、彼らは再びその敵に立ち向かうことができなかった。一五
彼らがどこへ行っても、主の手は彼らに災をした。これは主がかつて言
われ、また主が彼らに誓われたとおりで、彼らはひどく悩んだ。
一六その時、主はさばきづかさを起して、彼らをかすめ奪う者の手から
救い出された。一七しかし彼らはそのさばきづかさにも従わず、かえって
ほかの神々を慕ってそれと姦淫を行い、それにひざまずき、先祖たちが
主の命令に従って歩んだ道を、いちはやく離れ去って、そのようには行
わなかった。一八主が彼らのためにさばきづかさを起されたとき、そのさ
ばきづかさの在世中、主はさばきづかさと共におられて、彼らを敵の手

から救い出された。これは彼らが自分をしえたげ悩ました者のゆえに、う
めき悲しんだので、主が彼らをあわれまれたからである。一九しかしさばき
づかさが死ぬと、彼らはそむいて、先祖たちにまさって悪を行い、ほかの
神々に従ってそれに仕え、それにひざまずいてそのおこないをやめず、か
たくなな道を離れなかった。二〇それで主はイスラエルに対し激しく怒っ
て言われた、「この民はわたしがかつて先祖たちに命じた契約を犯し、わ
たしの命令に従わないゆえ、二一わたしもまたヨシュアが死んだときに残
しておいた国民を、この後、彼らの前から追い払わないであろう。二二こ
れはイスラエルが、先祖たちの守ったように主の道を守ってそれに歩むか
どうかをわたしが試みるためである」。二三それゆえ主はこれらの国民を
急いで追い払わずに残しておいて、ヨシュアの手にわたされなかったので
ある。

第三章一すべてカナンのもろもろの戦争を知らないイスラエルの人々を
試みるために、主が残しておかれた国民は次のとおりである。二これは
ただイスラエルの代々の子孫、特にまだ戦争を知らないものに、それを教
え知らせるためである。三すなわちペリシテびとの五人の君たちと、すべ
てのカナンびとと、シドンびとおよびレバノン山に住んで、バアル・ヘル
モン山からハマテの入口までを占めていたヒビびとなどであって、四これ
らをもってイスラエルを試み、主がモーセによって先祖たちに命じられた
命令に、彼らが従うかどうかを知ろうとされたのである。五しかるにイス
ラエルの人々はカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビび
と、エブスびとのうちに住んで、六彼らの娘を妻にめとり、また自分たち
の娘を彼らのむすこに与えて、彼らの神々に仕えた。
七こうしてイスラエルの人々は主の前に悪を行い、自分たちの神、主

を忘れて、バアルおよびアシラに仕えた。八そこで主はイスラエルに対し
て激しく怒り、彼らをメソポタミヤの王クシャン・リシャタイムの手に売
りわたされたので、イスラエルの人々は八年の間、クシャン・リシャタイ
ムに仕えた。九しかし、イスラエルの人々が主に呼ばわったとき、主はイ
スラエルの人々のために、ひとりの救助者を起して彼らを救われた。す
なわちカレブの弟、ケナズの子オテニエルである。一〇主の霊がオテニ
エルに臨んだので、彼はイスラエルをさばいた。彼が戦いに出ると、主
はメソポタミヤの王クシャン・リシャタイムをその手にわたされたので、オ
テニエルの手はクシャン・リシャタイムに勝ち、一一国は四十年のあいだ
太平であった。ケナズの子オテニエルはついに死んだ。
一二イスラエルの人々はまた主の前に悪をおこなった。すなわち彼らが
主の前に悪をおこなったので、主はモアブの王エグロンを強めて、イスラ

エルに敵対させられた。一三エグロンはアンモンおよびアマレクの人々を
集め、きてイスラエルを撃ち、しゅろの町を占領した。一四こうしてイス
ラエルの人々は十八年の間モアブの王エグロンに仕えた。
一五しかしイスラエルの人々が主に呼ばわったとき、主は彼らのために、
ひとりの救助者を起された。すなわちベニヤミンびと、ゲラの子、左き
きのエホデである。イスラエルの人々は彼によってモアブの王エグロンに、
みつぎ物を送った。一六エホデは長さ一キュビトのもろ刃のつるぎを作ら
せ、それを衣の下、右のももの上に帯びて、一七モアブの王エグロンにみつ
ぎ物をもってきた。エグロンは非常に肥えた人であった。一八エホデがみ
つぎ物をささげ終ったとき、彼はみつぎ物をになってきた民を帰らせ、一九
かれ自身はギルガルに近い石像のある所から引きかえして言った、「王よ、
わたしはあなたに申しあげる機密をもっています」。そこで王は「さがって

おれ」と言ったので、かたわらに立っている者は皆出て行った。二〇エホデ
が王のところにはいって来ると、王はひとりで涼みの高殿に座していたの
で、エホデが「わたしは神の命によってあなたに申しあげることがありま
す」と言うと、王は座から立ちあがった。二一そのときエホデは左の手を
伸ばし、右のももからつるぎをとって王の腹を刺した。二二つるぎのつか
も刃と共にはいったが、つるぎを腹から抜き出さなかったので、脂肪が刃
をふさいだ。そして汚物が出た。二三エホデは廊下に出て、王のおる高殿
の戸を閉じ、錠をおろした。

二四彼が出た後、王のしもべどもがきて、高殿の戸に錠のおろされてあ
るのを見て、「王はきっと涼み殿のへやで足をおおっておられるのだ」と
思った。二五しもべどもは長いあいだ待っていたが、王がなお高殿の戸を
開かないので、心配してかぎをとって開いて見ると、王は床にたおれて死

んでいた。
二六エホデは彼らのためらうまに、のがれて石像のある所を過ぎ、セイ
ラに逃げていった。二七彼が行ってエフライムの山地にラッパを吹き鳴ら
したので、イスラエルの人々は彼と共に山地から下ってエホデに従った。
二八エホデは彼らに言った、「わたしについてきなさい。主はあなたがたの
敵モアブびとをあなたがたの手にわたされます」。そこで彼らはエホデに
従って下り、ヨルダンの渡し場をおさえ、モアブびとをひとりも渡らせな
かった。二九そのとき彼らはモアブびとおおよそ一万人を殺した。これは
いずれも肥え太った勇士であって、ひとりも、のがれた者がなかった。三〇
こうしてモアブはその日イスラエルの手に服し、国は八十年のあいだ太平
であった。

三一エホデの後、アナテの子シャムガルが起り、牛のむちをもってペリシ
テびと六百人を殺した。この人もまたイスラエルを救った。

第四章一エホデが死んだ後、イスラエルの人々がまた主の前に悪をおこ
なったので、二主は、ハゾルで世を治めていたカナンの王ヤビンの手に彼
らを売りわたされた。ヤビンの軍勢の長はハロセテ・ゴイムに住んでい
たシセラであった。三彼は鉄の戦車九百両をもち、二十年の間イスラエ
ルの人々を激しくしえたげたので、イスラエルの人々は主に向かって呼ば
わった。

四そのころラピドテの妻、女預言者デボラがイスラエルをさばいていた。
五彼女はエフライムの山地のラマとベテルの間にあるデボラのしゅろの木
の下に座し、イスラエルの人々は彼女のもとに上ってきて、さばきをうけ
た。六デボラは人をつかわして、ナフタリのケデシからアビノアムの子バ
ラクを招いて言った、「イスラエルの神、主はあなたに、こう命じられる
ではありませんか、『ナフタリの部族とゼブルンの部族から一万人を率い、

行って、タボル山に陣をしけ。七わたしはヤビンの軍勢の長シセラとその
戦車と軍隊とをキション川に引き寄せて、あなたに出あわせ、彼をあなた
の手にわたすであろう』」。八バラクは彼女に言った、「あなたがもし一緒に
行ってくだされば、わたしは行きます。しかし、一緒に行ってくださらな
いならば、行きません」。九デボラは言った、「必ずあなたと一緒に行きま
す。しかしあなたは今行く道では誉を得ないでしょう。主はシセラを女
の手にわたされるからです」。デボラは立ってバラクと一緒にケデシに行っ
た。一〇バラクはゼブルンとナフタリをケデシに呼び集め、一万人を従え
て上った。デボラも彼と共に上った。
一一時にケニびとヘベルはモーセのしゅうとホバブの子孫であるケニびと
から分れて、ケデシに近いザアナイムのかしの木までも遠く行って天幕を
張っていた。

一二アビノアムの子バラクがタボル山に上ったと、人々がシセラに告げた
ので、一三シセラは自分の戦車の全部すなわち鉄の戦車九百両と、自分と
共におるすべての民をハロセテ・ゴイムからキション川に呼び集めた。一
四デボラはバラクに言った、「さあ、立ちあがりなさい。きょうは主がシセラ
をあなたの手にわたされる日です。主はあなたに先立って出られるではあ
りませんか」。そこでバラクは一万人を従えてタボル山から下った。一五
主はつるぎをもってシセラとすべての戦車および軍勢をことごとくバラク
の前に撃ち敗られたので、シセラは戦車から飛びおり、徒歩で逃げ去った。
一六バラクは戦車と軍勢とを追撃してハロセテ・ゴイムまで行った。シセ
ラの軍勢はことごとくつるぎにたおれて、残ったものはひとりもなかった。
一七しかしシセラは徒歩で逃げ去って、ケニびとヘベルの妻ヤエルの天幕
に行った。ハゾルの王ヤビンとケニびとヘベルの家とは互にむつまじかっ

たからである。一八ヤエルは出てきてシセラを迎え、彼に言った、「おはい
りください。主よ、どうぞうちへおはいりください。恐れるにはおよびま
せん」。シセラが天幕にはいったので、ヤエルは毛布をもって彼をおおっ
た。一九シセラはヤエルに言った、「どうぞ、わたしに水を少し飲ませてく
ださい。のどがかわきましたから」。ヤエルは乳の皮袋を開いて彼に飲ま
せ、また彼をおおった。二〇シセラはまたヤエルに言った、「天幕の入口に
立っていてください。もし人がきて、あなたに『だれか、ここにおります
か』と問うならば『おりません』と答えてください」。二一しかし彼が疲れ
て熟睡したとき、ヘベルの妻ヤエルは天幕のくぎを取り、手に槌を携え
て彼に忍び寄り、こめかみにくぎを打ち込んで地に刺し通したので、彼は
息絶えて死んだ。二二バラクがシセラを追ってきたとき、ヤエルは彼を出迎
えて言った、「おいでなさい。あなたが求めている人をお見せしましょう」。

彼がヤエルの天幕にはいって見ると、シセラはこめかみにくぎを打たれて
倒れて死んでいた。
二三こうしてその日、神はカナンの王ヤビンをイスラエルの人々の前に
撃ち敗られた。二四そしてイスラエルの人々の手はますますカナンびとの
王ヤビンの上に重くなって、ついにカナンの王ヤビンを滅ぼすに至った。

第五章一その日デボラとアビノアムの子バラクは歌って言った。

二「イスラエルの指導者たちは先に立ち、
民は喜び勇んで進み出た。
主をさんびせよ。
三もろもろの王よ聞け、
もろもろの君よ、耳を傾けよ。
わたしは主に向かって歌おう、

わたしはイスラエルの神、主をほめたたえよう。
四主よ、あなたがセイルを出、
エドムの地から進まれたとき、
地は震い、天はしたたり、
雲は水をしたたらせた。
五もろもろの山は主の前に揺り動き、
シナイの主、すなわちイスラエルの神、主の前に揺り動いた。
六アナテの子シャムガルのとき、
ヤエルの時には隊商は絶え、
旅人はわき道をとおった。
七イスラエルには農民が絶え、
かれらは絶え果てたが、

デボラよ、ついにあなたは立ちあがり、
立ってイスラエルの母となった。
八 人々が新しい神々を選んだとき、
戦いは門に及んだ。
イスラエルの四万人のうちに、
盾あるいは槍の見られたことがあったか。
九 わたしの心は民のうちの喜び勇んで
進み出たイスラエルのつかさたちと共にある。
主をさんびせよ。
一〇 茶色のろばに乗るもの、
毛氈の上にすわるもの、
および道を歩むものよ、共に歌え。

一一楽人の調べは水くむ所に聞こえる。
かれらはそこで主の救を唱え、
イスラエルの農民の救を唱えている。
その時、主の民は門に下って行った。
一二起きよ、起きよ、デボラ。
起きよ、起きよ、歌をうたえ。
立てよ、バラク、とりこを捕えよ、
アビノアムの子よ。
一三その時、残った者は尊い者のように下って行き、
主の民は勇士のように下って行った。
一四彼らはエフライムから出て谷に進み、
兄弟ベニヤミンはあなたの民のうちにある。

マキルからはつかさたちが下(くだ)って行(い)き、
ゼブルンからは指揮(しき)を執(と)るものが下(くだ)って行(い)った。
一五イッサカルの君(きみ)たちはデボラと共(とも)におり、
イッサカルはバラクと同(おな)じく、
直(ただ)ちにそのあとについて谷(たに)に突進(とっしん)した。
しかしルベンの氏族(しぞく)は大(おお)いに思案(しあん)した。
一六なぜ、あなたは、おりの間(あいだ)にとどまって、
羊(ひつじ)の群(む)れに笛吹(ふえふ)くのを聞(き)いているのか。
ルベンの氏族(しぞく)は大(おお)いに思案(しあん)した。
一七ギレアデはヨルダンの向(む)こうにとどまっていた。
なぜ、ダンは舟(ふね)のかたわらにとどまったか。
アセルは浜(はま)べに座(ざ)し、

その波止場（はとば）のかたわらにとどまっていた。
一八ゼブルンは命（いのち）をすてて、死（し）を恐（おそ）れぬ民（たみ）である。
野（の）の高（たか）い所（ところ）におるナフタリもまたそうであった。
一九もろもろの王（おう）たちはきて戦（たたか）った。
その時（とき）カナンの王（おう）たちは、
メギドの水（みず）のほとりのタアナクで戦（たたか）った。
彼（かれ）らは一片（いっぺん）の銀（ぎん）をも獲（え）なかった。
二〇もろもろの星（ほし）は天（てん）より戦（たたか）い、
その軌道（きどう）をはなれてシセラと戦（たたか）った。
二一キションの川（かわ）は彼（かれ）らを押（お）し流（なが）した、
激（はげ）しく流（なが）れる川（かわ）、キションの川（かわ）。
わが魂（たましい）よ、勇（いさ）ましく進（すす）め。

二二その時、軍馬ははせ駆けり、
馬のひずめは地を踏みならした。
二三主の使は言った、『メロズをのろえ、
激しくその民をのろえ、
彼らはきて主を助けず、
主を助けて勇士を攻めなかったからである』。
二四ケニびとヘベルの妻ヤエルは、
女のうちの最も恵まれた者、
天幕に住む女のうち最も恵まれた者である。
二五シセラが水を求めると、ヤエルは乳を与えた。
すなわち貴重な鉢に凝乳を盛ってささげた。
二六ヤエルはくぎに手をかけ、

右手に重い槌をとって、
シセラを打ち、その頭を砕き、
粉々にして、そのこめかみを打ち貫いた。
二七シセラはヤエルの足もとにかがんで倒れ伏し、
その足もとにかがんで倒れ、
そのかがんだ所に倒れて死んだ。
二八シセラの母は窓からながめ、
格子窓から叫んで言った、
『どうして彼の車の来るのがおそいのか、
どうして彼の車の歩みがはかどらないのか』。
二九その侍女たちの賢い者は答え、
母またみずからおのれに答えて言った、

三〇『彼らは獲物を得て、
それを分けているのではないか、
人ごとにひとり、ふたりのおなごを取り、
シセラの獲物は色染めの衣、
縫い取りした色染めの衣の獲物であろう。
すなわち縫い取りした色染めの衣二つを、
獲物としてそのくびにまとうであろう』。
三一主よ、あなたの敵はみなこのように滅び、
あなたを愛する者を
太陽の勢いよく上るようにしてください」。
こうして後、国は四十年のあいだ太平であった。

第六章一イスラエルの人々はまた主の前に悪をおこなったので、主は彼

らを七年の間ミデアンびとの手にわたされた。二ミデアンびとの手はイス
ラエルに勝った。イスラエルの人々はミデアンびとのゆえに、山にある岩屋
と、ほら穴と要害とを自分たちのために造った。三イスラエルびとが種を
まいた時には、いつもミデアンびと、アマレクびとおよび東方の民が上っ
てきてイスラエルびとを襲い、四イスラエルびとに向かって陣を取り、地
の産物を荒してガザの附近にまで及び、イスラエルのうちに命をつなぐ
べき物を残さず、羊も牛もろばも残さなかった。五彼らが家畜と天幕を
携えて、いなごのように多く上ってきたからである。すなわち彼らとそ
のらくだは無数であって、彼らは国を荒すためにはいってきたのであった。
六こうしてイスラエルはミデアンびとのために非常に衰え、イスラエルの
人々は主に呼ばわった。
七イスラエルの人々がミデアンびとのゆえに、主に呼ばわったとき、八主

はひとりの預言者をイスラエルの人々につかわして彼らに言われた、「イス
ラエルの神、主はこう言われる、『わたしはかつてあなたがたをエジプトか
ら導き上り、あなたがたを奴隷の家から携え出し、九エジプトびとの手
およびすべてあなたがたをしえたげる者の手から救い出し、あなたがたの
前から彼らを追い払って、その国をあなたがたに与えた。一〇そしてあな
たがたに言った、「わたしはあなたがたの神、主である。あなたがたが住ん
でいる国のアモリびとの神々を恐れてはならない」と。しかし、あなたが
たはわたしの言葉に従わなかった』」。

一一さて主の使がきて、アビエゼルびとヨアシに属するオフラにあるテ
レビンの木の下に座した。時にヨアシの子ギデオンはミデアンびとの目を
避けるために酒ぶねの中で麦を打っていたが、一二主の使は彼に現れて
言った、「大勇士よ、主はあなたと共におられます」。一三ギデオンは言っ

た、「ああ、君よ、主がわたしたちと共におられるならば、どうしてこれら
の事がわたしたちに臨んだのでしょう。わたしたちの先祖が『主はわれわ
れをエジプトから導き上られたではないか』といって、わたしたちに告げ
たそのすべての不思議なみわざはどこにありますか。今、主はわたしたち
を捨てて、ミデアンびとの手にわたされました」。
一四主はふり向いて彼に
言われた、「あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手
からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではあり
ませんか」。
一五ギデオンは主に言った、「ああ主よ、わたしはどうしてイス
ラエルを救うことができましょうか。わたしの氏族はマナセのうちで最も
弱いものです。わたしはまたわたしの父の家族のうちで最も小さいもの
です」。
一六主は言われた、「しかし、わたしがあなたと共におるから、ひと
りを撃つようにミデアンびとを撃つことができるでしょう」。
一七ギデオン

はまた主に言った、「わたしがもしあなたの前に恵みを得ていますならば、
どうぞ、わたしと語るのがあなたであるというしるしを見せてください。一
八どうぞ、わたしが供え物を携えてあなたのもとにもどってきて、あなた
の前に供えるまで、ここを去らないでください」。主は言われた、「わたし
はあなたがもどって来るまで待ちましょう」。
一九そこでギデオンは自分の家に行って、やぎの子を整え、一エパの粉
で種入れぬパンをつくり、肉をかごに入れ、あつものをつぼに盛り、テレ
ビンの木の下におる彼のもとに持ってきて、それを供えた。二〇神の使は
彼に言った、「肉と種入れぬパンをとって、この岩の上に置き、それにあつ
ものを注ぎなさい」。彼はそのようにした。二一すると主の使が手にもっ
ていたつえの先を出して、肉と種入れぬパンに触れると、岩から火が燃え
あがって、肉と種入れぬパンとを焼きつくした。そして主の使は去って

見えなくなった。二二ギデオンはその人が主の使であったことをさとって
言った、「ああ主なる神よ、どうなることでしょう。わたしは顔をあわせ
て主の使を見たのですから」。二三主は彼に言われた、「安心せよ、恐れる
な。あなたは死ぬことはない」。二四そこでギデオンは主のために祭壇をそ
こに築いて、それを「主は平安」と名づけた。これは今日までアビエゼル
びとのオフラにある。
二五その夜、主はギデオンに言われた、「あなたの父の雄牛と七歳の第二
の雄牛とを取り、あなたの父のもっているバアルの祭壇を打ちこわし、そ
のかたわらにあるアシラ像を切り倒し、二六あなたの神、主のために、こ
のとりでの頂に、石を並べて祭壇を築き、第二の雄牛を取り、あなたが
切り倒したアシラの木をもって燔祭をささげなさい」。二七ギデオンはしも
べ十人を連れて、主が言われたとおりにおこなった。ただし彼は父の家族

のもの、および町の人々を恐れたので、昼それを行うことができず、夜
それを行った。
二八町の人々が朝早く起きて見ると、バアルの祭壇は打ちこわされ、その
かたわらのアシラ像は切り倒され、新たに築いた祭壇の上に、第二の雄牛
がささげられてあった。二九そこで彼らは互に「これはだれのしわざか」
と言って問い尋ねたすえ、「これはヨアシの子ギデオンのしわざだ」と言っ
た。三〇町の人々はヨアシに言った、「あなたのむすこを引き出して殺しな
さい。彼はバアルの祭壇を打ちこわし、そのかたわらにあったアシラ像を切
り倒したのです」。三一しかしヨアシは自分に向かって立っているすべての
者に言った、「あなたがたはバアルのために言い争うのですか。あるいは
彼を弁護しようとなさるのですか。バアルのために言い争う者は、あすの
朝までに殺されるでしょう。バアルがもし神であるならば、自分の祭壇が

打ちこわされたのだから、彼みずから言い争うべきです」。三二そこでその
日、「自分の祭壇が打ちこわされたのだから、バアルみずからその人と言い
争うべきです」と言ったので、ギデオンはエルバアルと呼ばれた。三三時
にミデアンびと、アマレクびとおよび東方の民がみな集まってヨルダン川
を渡り、エズレルの谷に陣を取ったが、三四主の霊がギデオンに臨み、ギ
デオンがラッパを吹いたので、アビエゼルびとは集まって彼に従った。三
五次に彼があまねくマナセに使者をつかわしたので、マナセびともまた集
まって彼に従った。彼がまたアセル、ゼブルンおよびナフタリに使者をつ
かわすと、その人々も上って彼を迎えた。
三六ギデオンは神に言った、「あなたがかつて言われたように、わたしの手
によってイスラエルを救おうとされるならば、三七わたしは羊の毛一頭分
を打ち場に置きますから、露がその羊の毛の上にだけあって、地がすべて

かわいているようにしてください。これによってわたしは、あなたがかつて
言われたように、わたしの手によってイスラエルをお救いになることを知
るでしょう」。三八すなわちそのようになった。彼が翌朝早く起きて、羊
の毛をかき寄せ、その毛から露を絞ると、鉢に満ちるほどの水が出た。三九
ギデオンは神に言った、「わたしをお怒りにならないように願います。わた
しにもう一度だけ言わせてください。どうぞ、もう一度だけ羊の毛をもっ
てためさせてください。どうぞ、羊の毛だけをかわかして、地にはことご
とく露があるようにしてください」。四〇神はその夜、そうされた。すなわ
ち羊の毛だけかわいて、地にはすべて露があった。

第七章一さてエルバアルと呼ばれるギデオンおよび彼と共にいたすべて
の民は朝早く起き、ハロデの泉のほとりに陣を取った。ミデアンびとの
陣は彼らの北の方にあり、モレの丘に沿って谷の中にあった。
二主はギデオンに言われた、「あなたと共におる民はあまりに多い。ゆえ

にわたしは彼らの手にミデアンびとをわたさない。おそらくイスラエルは
わたしに向かってみずから誇り、『わたしは自身の手で自分を救ったのだ』
と言うであろう。
三それゆえ、民の耳に触れ示して、『だれでも恐れおのの
く者は帰れ』と言いなさい」。こうしてギデオンは彼らを試みたので、民
のうち帰った者は二万二千人あり、残った者は一万人であった。
四主はまたギデオンに言われた、「民はまだ多い。彼らを導いて水ぎわ
に下りなさい。わたしはそこで、あなたのために彼らを試みよう。わたし
があなたに告げて『この人はあなたと共に行くべきだ』と言う者は、あな
たと共に行くべきである。またわたしがあなたに告げて『この人はあなた
と共に行ってはならない』と言う者は、だれも行ってはならない」。
五そこ
でギデオンが民を導いて水ぎわに下ると、主は彼に言われた、「すべて犬
のなめるように舌をもって水をなめる者はそれを別にしておきなさい。ま

たすべてひざを折り、かがんで水を飲む者もそうしなさい」。六そして手を
口にあてて水をなめた者の数は三百人であった。残りの民はみなひざを折
り、かがんで水を飲んだ。七主はギデオンに言われた、「わたしは水をなめ
た三百人の者をもって、あなたがたを救い、ミデアンびとをあなたの手に
わたそう。残りの民はおのおのその家に帰らせなさい」。八そこで彼はか
の三百人を留めおき、残りのイスラエルびとの手から、つぼとラッパを取
り、民をおのおのその天幕に帰らせた。時にミデアンびとの陣は下の谷の
中にあった。
九その夜、主はギデオンに言われた、「立てよ、下っていって敵陣に攻
め入れ。わたしはそれをあなたの手にわたす。一〇もしあなたが下って行
くことを恐れるならば、あなたのしもべプラと共に敵陣に下っていって、
一一彼らの言うところを聞け。そうすればあなたの手が強くなって、敵陣

に攻め下ることができるであろう」。ギデオンがしもべプラと共に下って、
敵陣にある兵隊たちの前哨地点に行ってみると、一二ミデアンびと、アマ
レクびとおよびすべての東方の民はいなごのように数多く谷に沿って伏し
ていた。そのらくだは海べの砂のように多くて数えきれなかった。一三ギ
デオンがそこへ行ったとき、ある人がその仲間に夢を語っていた。その人
は言った、「わたしは夢を見た。大麦のパン一つがミデアンの陣中にころ
がってきて、天幕に達し、それを打ち倒し、くつがえしたので、天幕は倒
れ伏した」。一四仲間は答えて言った、「それはイスラエルの人、ヨアシの子
ギデオンのつるぎにちがいない。神はミデアンとすべての軍勢を彼の手に
わたされるのだ」。

一五ギデオンは夢の物語とその解き明かしとを聞いたので、礼拝し、イ
スラエルの陣営に帰り、そして言った、「立てよ、主はミデアンの軍勢をあ

なたがたの手にわたされる」。一六そして彼は三百人を三組に分け、手に手
にラッパと、からつぼとを取らせ、つぼの中にたいまつをともさせ、一七彼
らに言った、「わたしを見て、わたしのするようにしなさい。わたしが敵陣
のはずれに達したとき、あなたがたもわたしのするようにしなさい。一八わ
たしと共におる者がみなラッパを吹くと、あなたがたもまたすべての陣営
の四方でラッパを吹き、『主のためだ、ギデオンのためだ』と言いなさい」。
一九こうしてギデオンと、彼と共にいた百人の者が、中更の初めに敵陣
のはずれに行ってみると、ちょうど番兵を交代した時であったので、彼ら
はラッパを吹き、手に携えていたつぼを打ち砕いた。二〇すなわち三組の
者がラッパを吹き、つぼを打ち砕き、左の手にはたいまつをとり、右の手
にはラッパを持ってそれを吹き、「主のためのつるぎ、ギデオンのためのつ
るぎ」と叫んだ。二一そしておのおのその持ち場に立ち、敵陣を取り囲ん

だので、敵軍はみな走り、大声をあげて逃げ去った。二二三百人のものが
ラッパを吹くと、主は敵軍をしてみな互に同志打ちさせられたので、敵軍
はゼレラの方、ベテシッタおよびアベルメホラの境、タバテの近くまで逃
げ去った。二三イスラエルの人々はナフタリ、アセルおよび全マナセから
集まってきて、ミデアンびとを追撃した。
二四ギデオンは使者をあまねくエフライムの山地につかわし、「下ってき
て、ミデアンびとを攻め、ベタバラに至るまでの流れを取り、またヨルダン
をも取れ」と言わせた。そこでエフライムの人々はみな集まってきて、ベ
タバラに至るまでの流れを取り、またヨルダンをも取った。二五彼らはま
たミデアンびとのふたりの君オレブとゼエブを捕え、オレブをオレブ岩の
ほとりで殺し、ゼエブをゼエブの酒ぶねのほとりで殺した。またミデアン
びとを追撃し、オレブとゼエブの首を携えてヨルダンの向こうのギデオ

ンのもとへ行った。
第八章一エフライムの人々はギデオンに向かい「あなたが、ミデアンび
と戦うために行かれたとき、われわれを呼ばれなかったが、どうしてそ
ういうことをされたのですか」と言って激しく彼を責めた。二ギデオンは
彼らに言った、「今わたしのした事は、あなたがたのした事と比べものにな
りましょうか。エフライムの拾い集めた取り残りのぶどうはアビエゼルの
収穫したぶどうにもまさるではありませんか。三神はミデアンの君オレブ
とゼエブをあなたがたの手にわたされました。わたしのなし得た事は、あ
なたがたのした事と比べものになりましょうか」。ギデオンがこの言葉を述
べると、彼らの憤りは解けた。
四ギデオンは自分に従っていた三百人と共にヨルダンに行ってこれを渡
り、疲れながらもなお追撃したが、五彼はスコテの人々に言った、「どうぞ

わたしに従っている民にパンを与えてください。彼らが疲れているのに、
わたしはミデアンの王ゼバとザルムンナを追撃しているのですから」。六ス
コテのつかさたちは言った、「ゼバとザルムンナは、すでにあなたの手のう
ちにあるのですか。われわれはどうしてあなたの軍勢にパンを与えねばな
らないのですか」。七ギデオンは言った、「それならば主がわたしの手にゼ
バとザルムンナをわたされるとき、わたしは野のいばらと、おどろをもっ
て、あなたがたの肉を打つであろう」。八そしてギデオンはそこからペヌエ
ルに上り、同じことをペヌエルの人々に述べると、彼らもスコテの人々が
答えたように答えたので、九ペヌエルの人々に言った、「わたしが安らかに
帰ってきたとき、このやぐらを打ちこわすであろう」。

一〇さてゼバとザルムンナは軍勢およそ一万五千人を率いて、カルコ
ルにいた。これは皆、東方の民の全軍のうち生き残ったもので、戦死した

者は、つるぎを帯びているものが十二万人あった。
一一ギデオンはノバとヨグベハの東の隊商の道を上って、敵軍の油断しているところを撃った。
一二ゼバとザルムンナは逃げたが、ギデオンは追撃して、ミデアンのふたりの王ゼバとザルムンナを捕え、その軍勢をことごとく撃ち敗った。
一三こうしてヨアシの子ギデオンはヘレスの坂をとおって戦いから帰り、
一四スコテの若者ひとりを捕えて、尋ねたところ、彼はスコテのつかさたち及び長老たち七十七人の名をギデオンのために書きしるした。
一五ギデオンはスコテの人々のところへ行って言った、「あなたがたがかつて『ゼバとザルムンナはすでにあなたの手のうちにあるのか。われわれはどうしてあなたの疲れた人々にパンを与えねばならないのか』と言って、わたしをののしったそのゼバとザルムンナを見なさい」。
一六そして彼は、その町の長老たちを捕え、野のいばらと、おどろとを取り、それをもってスコテ

の人々を懲らし、一七またペヌエルのやぐらを打ちこわして町の人々を殺
した。
一八そしてギデオンはゼバとザルムンナに言った、「あなたがたがタボル
で殺したのは、どんな人々であったか」。彼らは答えた、「彼らはあなたに
似てみな王子のように見えました」。一九ギデオンは言った、「彼らはわたし
の兄弟、わたしの母の子たちだ。主は生きておられる。もしあなたがた
が彼らを生かしておいたならば、わたしはあなたがたを殺さないのだが」。
二〇そして長子エテルに言った、「立って、彼らを殺しなさい」。しかしその
若者はなお年が若かったので、恐れてつるぎを抜かなかった。二一そこで
ゼバとザルムンナは言った、「あなた自身が立って、わたしたちを撃ってく
ださい。人によってそれぞれ力も違いますから」。ギデオンは立ちあがっ
てゼバとザルムンナを殺し、彼らのらくだの首に掛けてあった月形の飾り

を取った。
二二イスラエルの人々はギデオンに言った、「あなたはミデアンの手からわ
れわれを救われたのですから、あなたも、あなたの子も孫もわれわれを治め
てください」。二三ギデオンは彼らに言った、「わたしはあなたがたを治める
ことはいたしません。またわたしの子もあなたがたを治めてはなりません。
主があなたがたを治められます」。二四ギデオンはまた彼らに言った、「わた
しはあなたがたに一つの願いがあります。あなたがたのぶんどった耳輪をめ
いめいわたしにください」。ミデアンびとはイシマエルびとであったゆえに、
金の耳輪を持っていたからである。二五彼らは答えた、「わたしどもは喜
んでそれをさしあげます」。そして衣をひろげ、めいめいぶんどった耳輪
をその中に投げ入れた。二六こうしてギデオンが求めて得た金の耳輪の重
さは一千七百金シケルであった。ほかに月形の飾りと耳飾りと、ミデアン

の王たちの着た紫の衣およびらくだの首に掛けた首飾りなどもあった。
二七ギデオンはそれをもって一つのエポデを作り、それを自分の町オフラに
置いた。イスラエルは皆それを慕って姦淫をおこなった。それはギデオン
とその家にとって、わなとなった。二八このようにしてミデアンはイスラエ
ルの人々に征服されて、再びその頭をあげることができなかった。そし
て国はギデオンの世にあるうち、四十年のあいだ太平であった。
二九ヨアシの子エルバアルは行って自分の家に住んだ。三〇ギデオンは多
くの妻をもっていたので、自分の子供だけで七十人あった。三一シケムにい
た彼のめかけがまたひとりの子を産んだので、アビメレクと名づけた。三二
ヨアシの子ギデオンは高齢に達して死に、アビエゼルびとのオフラにある
父ヨアシの墓に葬られた。
三三ギデオンが死ぬと、イスラエルの人々はまたバアルを慕って、これと

姦淫を行い、バアル・ベリテを自分たちの神とした。三四すなわちイスラ
エルの人々は周囲のもろもろの敵の手から自分たちを救われた彼らの神、
主を覚えず、三五またエルバアルすなわちギデオンがイスラエルのためにし
たもろもろの善行に応じて彼の家族に親切をつくすこともしなかった。

第九章一さてエルバアルの子アビメレクはシケムに行き、母の身内の人
たちのもとに行って、彼らと母の父の家の一族とに言った、二「どうぞ、シ
ケムのすべての人々の耳に告げてください、『エルバアルのすべての子七十
人であなたがたを治めるのと、ただひとりであなたがたを治めるのと、ど
ちらがよいか。わたしがあなたがたの骨肉であることを覚えてください』
と」。三そこで母の身内の人たちがアビメレクに代ってこれらの言葉をこと
ごとくシケムのすべての人々の耳に告げると、彼らは心をアビメレクに
傾け、「彼はわれわれの兄弟だ」と言って、四バアル・ベリテの宮から銀

七十シケルを取って彼に与えた。アビメレクはそれをもって、やくざのな
らず者を雇って自分に従わせ、五オフラにある父の家に行って、エルバア
ルの子で、自分の兄弟である七十人を、一つの石の上で殺した。ただしエ
ルバアルの末の子ヨタムは身を隠したので生き残った。六そこでシケムの
すべての人々とベテミロのすべての人々は集まり、行ってシケムにある石
の柱のかたわらのテレビンの木のもとで、アビメレクを立てて王とした。
七このことをヨタムに告げる者があったので、ヨタムは行ってゲリジム山
の頂に立ち、大声に叫んで彼らに言った、「シケムの人々よ、わたしに
聞きなさい。そうすれば神はあなたがたに聞かれるでしょう。八ある時、も
ろもろの木が自分たちの上に王を立てようと出て行ってオリブの木に言っ
た、『わたしたちの王になってください』。九しかしオリブの木は彼らに言っ
た、『わたしはどうして神と人とをあがめるために用いられるわたしの油

を捨てて行って、もろもろの木を治めることができましょう』。一〇もろも
ろの木はまたいちじくの木に言った、『きてわたしたちの王になってくださ
い』。一一しかしいちじくの木は彼らに言った、『わたしはどうしてわたしの
甘味と、わたしの良い果実とを捨てて行って、もろもろの木を治めることが
できましょう』。一二もろもろの木はまたぶどうの木に言った、『きてわたし
たちの王になってください』。一三しかし、ぶどうの木は彼らに言った、『わ
たしはどうして神と人とを喜ばせるわたしのぶどう酒を捨てて行って、も
ろもろの木を治めることができましょう』。一四そこですべての木はいばら
に言った、『きてわたしたちの王になってください』。一五いばらはもろもろ
の木に言った、『あなたがたが真実にわたしを立てて王にするならば、きて
わたしの陰に難を避けなさい。そうしなければ、いばらから火が出てレバ
ノンの香柏を焼きつくすでしょう』。

一六あなたがたがアビメレクを立てて王にしたことは、真実と敬意とを
もってしたものですか。あなたがたはエルバアルとその家をよく扱い、彼
のおこないに応じてしたのですか。一七わたしの父はあなたがたのために
戦い、自分の命を投げ出して、あなたがたをミデアンの手から救い出し
たのに、一八あなたがたは、きょう、わたしの父の家に反抗して起り、その
子七十人を一つの石の上で殺し、その腰元の子アビメレクをあなたがたの
身内の者であるゆえに立てて、シケムの人々の王にしました。一九あなた
がたが、きょう、エルバアルとその家になされたことが真実と敬意をもっ
てしたものであるならば、アビメレクのために喜びなさい。彼もまたあ
なたがたのために喜ぶでしょう。二〇しかし、そうでなければ、アビメレ
クから火が出て、シケムの人々とベテミロとを焼きつくし、またシケムの
人々とベテミロからも火が出てアビメレクを焼きつくすでしょう」。二一こ

うしてヨタムは走って逃げ去り、ベエルに行き、兄弟アビメレクの顔をさ
けてそこに住んだ。
二二アビメレクは三年の間イスラエルを治めたが、二三神はアビメレクと
シケムの人々の間に悪霊をおくられたので、シケムの人々はアビメレク
を欺くようになった。二四これはエルバアルの七十人の子が受けた暴虐
と彼らの血が、彼らを殺した兄弟アビメレクの上と、彼の手を強めてそ
の兄弟を殺させたシケムの人々の上とに報いとなってきたのである。二
五シケムの人々は彼に敵して待ち伏せする者を山々の頂におき、すべて
その道を通り過ぎる者を略奪させた。このことがアビメレクに告げ知ら
された。
二六さてエベデの子ガアルはその身内の人々と一緒にシケムに移住した
が、シケムの人々は彼を信用した。二七人々は畑に出てぶどうを取り入

れ、それを踏み絞って祭をし、神の宮に行って飲み食いしてアビメレクを
のろった。二八そしてエベデの子ガアルは言った、「アビメレクは何ものか。
シケムのわれわれは何ものなれば彼に仕えなければならないのか。エルバ
アルの子とその役人ゼブルはシケムの先祖ハモルの一族に仕えたではない
か。われわれはどうして彼に仕えなければならないのか。二九ああ、この民
がわたしの手の下にあったらよいのだが。そうすればわたしはアビメレク
をやめさせ、アビメレクに向かって『おまえの軍勢を増して出てこい』と
言うであろう」。
三〇町のつかさゼブルはエベデの子ガアルの言葉を聞いて怒りを発し、三
一使者をアルマにおるアビメレクにつかわして言わせた、「エベデの子ガア
ルとその身内の人々がシケムにきて、町を騒がせ、あなたにそむかせよう
としています。三二それであなたと、あなたと共におる人々が夜のうちに

行って、野に身を伏せ、三三朝になって、日ののぼるとき、早く起き出て町
を襲うならば、ガアルと、彼と共におる民は出てきて、あなたに抵抗する
でしょう。その時あなたは機を得て、彼らを撃つことができるでしょう」。
三四アビメレクと、彼と共にいたすべての民は夜のうちに起き出て、四組
に分れ、身を伏せてシケムをうかがった。三五エベデの子ガアルが出て、町
の門の入口に立ったとき、アビメレクと、彼と共にいた民が身を伏せていた
ところから立ちあがったので、三六ガアルは民を見てゼブルに言った、「ごら
んなさい。民が山々の頂からおりてきます」。ゼブルは彼に言った、「あ
なたは山々の影を人のように見るのです」。三七ガアルは再び言った、「ご
らんなさい。民が国の中央部からおりてきます。一組は占い師のテレビ
ンの木の方からきます」。三八ゼブルは彼に言った、「あなたがかつて『アビ
メレクは何ものか。われわれは何ものなれば彼に仕えなければならないの

か』と言ったあなたの口は今どこにありますか。これはあなたが侮った民
ではありませんか。今、出て彼らと戦いなさい」。
三九そこでガアルはシケ
ムの人々を率い、出てアビメレクと戦ったが、
四〇アビメレクは彼を追っ
たので、ガアルは彼の前から逃げた。そして傷つき倒れる者が多く、門の
入口にまで及んだ。
四一こうしてアビメレクは引き続いてアルマにいたが、
ゼブルはガアルとその身内の人々を追い出してシケムにおらせなかった。
四二翌日、民が畑に出ると、そのことがアビメレクに聞えた。
四三アビ
メレクは自分の民を率い、それを三組に分け、野に身を伏せて、うかがっ
ていると、民が町から出てきたので、たちあがってこれを撃った。
四四アビ
メレクと、彼と共にいた組の者は襲って行って、町の門の入口に立ち、他
の二組は野にいたすべてのものを襲って、それを殺した。
四五アビメレク
はその日、終日、町を攻め、ついに町を取って、そのうちの民を殺し、町

を破壊して、塩をまいた。
四六シケムのやぐらの人々は皆これを聞いて、エルベリテの宮の塔には
いった。四七シケムのやぐらの人々が皆集まったことがアビメレクに聞え
たので、四八アビメレクは自分と一緒にいた民をことごとく率いてザルモ
ン山にのぼり、アビメレクは手におのを取って、木の枝を切り落し、それ
を取りあげて自分の肩にのせ、一緒にいた民にむかって言った、「あなたが
たはわたしがしたことを見たとおりに急いでしなさい」。四九そこで民もま
た皆おのおのその枝を切り落し、アビメレクに従って行って、枝を塔に
よせかけ、塔に火をつけて彼らを攻めた。こうしてシケムのやぐらの人々
もまたことごとく死んだ。男女おおよそ一千人であった。
五〇ついでアビメレクはテベツに行き、テベツに向かって陣を張り、これ
を攻め取ったが、五一町の中に一つの堅固なやぐらがあって、すべての男女

すなわち町の人々が皆そこに逃げ込み、あとを閉ざして、やぐらの屋根に
上ったので、五二アビメレクはやぐらのもとに押し寄せてこれを攻め、やぐ
らの入口に近づいて、火をつけて焼こうとしたとき、五三ひとりの女がア
ビメレクの頭に、うすの上石を投げて、その頭骸骨を砕いた。五四アビメ
レクは自分の武器を持つ若者を急ぎ呼んで言った、「つるぎを抜いてわたし
を殺せ。さもないと人々はわたしを、女に殺されたのだと言うであろう」。
その若者が彼を刺し通したので彼は死んだ。五五イスラエルの人々はアビ
メレクの死んだのを見て、おのおの去って家に帰った。五六このように神
はアビメレクがその兄弟七十人を殺して、自分の父に対して犯した悪に
報いられた。五七また神はシケムの人々のすべての悪を彼らのこうべに報
いられた。こうしてエルバアルの子ヨタムののろいが、彼らに臨んだので
ある。

第一〇章一アビメレクの後、イッサカルの人で、ドドの子であるプワの
子トラが起ってイスラエルを救った。彼はエフライムの山地のシャミルに
住み、二二十三年の間イスラエルをさばいたが、ついに死んでシャミルに
葬られた。
三彼の後にギレアデびとヤイルが起って二十二年の間イスラエルをさば
いた。四彼に三十人の子があった。彼らは三十頭のろばに乗り、また三十
の町をもっていた。ギレアデの地で今日まで、ハボテ・ヤイルと呼ばれて
いるものがそれである。五ヤイルは死んで、カモンに葬られた。
六イスラエルの人々は再び主の前に悪を行い、バアルとアシタロテお
よびスリヤの神々、シドンの神々、モアブの神々、アンモンびとの神々、
ペリシテびとの神々に仕え、主を捨ててこれに仕えなかった。七主はイス
ラエルに対して怒りを発し、彼らをペリシテびとの手およびアンモンびと

の手に売りわたされたので、八彼らはその年イスラエルの人々をしえたげ
悩ました。すなわち彼らはヨルダンの向こうのギレアデにあるアモリびと
の地にいたすべてのイスラエルびとを十八年のあいだ悩ました。九またア
ンモンの人々がユダとベニヤミンとエフライムの氏族を攻めるためにヨル
ダンを渡ってきたので、イスラエルは非常に悩まされた。
一〇そこでイスラエルの人々は主に呼ばわって言った、「わたしたちはわ
たしたちの神を捨ててバアルに仕え、あなたに罪を犯しました」。一一主は
イスラエルの人々に言われた、「わたしはかつてエジプトびと、アモリびと、
アンモンびと、ペリシテびとからあなたがたを救い出したではないか。一
二またシドンびと、アマレクびとおよびマオンびとがあなたがたをしえた
げた時、わたしに呼ばわったので、あなたがたを彼らの手から救い出した。
一三しかしあなたがたはわたしを捨てて、ほかの神々に仕えた。それゆえ、

わたしはかさねてあなたがたを救わないであろう。一四あなたがたが選ん
だ神々に行って呼ばわり、あなたがたの悩みの時、彼らにあなたがたを救
わせるがよい」。一五イスラエルの人々は主に言った、「わたしたちは罪を
犯しました。なんでもあなたが良いと思われることをしてください。ただ
どうぞ、きょう、わたしたちを救ってください」。一六そうして彼らは自分
たちのうちから異なる神々を取り除いて、主に仕えた。それで主の心は
イスラエルの悩みを見るに忍びなくなった。
一七時にアンモンの人々は召集されてギレアデに陣を取ったが、イス
ラエルの人々は集まってミツパに陣を取った。一八その時、民とギレアデ
の君たちとは互に言った、「だれがアンモンの人々に向かって戦いを始
めるか。その人はギレアデのすべての民のかしらとなるであろう」。

第一一章一さてギレアデびととエフタは強い勇士であったが遊女の子で、エ

フタの父はギレアデであった。二ギレアデの妻も子供を産んだが、その妻
の子供たちが成長したとき、彼らはエフタを追い出して彼に言った、「あ
なたはほかの女の産んだ子だから、わたしたちの父の家を継ぐことはでき
ません」。三それでエフタはその兄弟たちのもとから逃げ去って、トブの
地に住んでいると、やくざ者がエフタのもとに集まってきて、彼と一緒に
出かけて略奪を事としていた。
四日がたって後、アンモンの人々はイスラエルと戦うことになり、五ア
ンモンの人々がイスラエルと戦ったとき、ギレアデの長老たちは行って
エフタをトブの地から連れてこようとして、六エフタに言った、「きて、わ
たしたちの大将になってください。そうすればわたしたちはアンモンの
人々と戦うことができます」。七エフタはギレアデの長老たちに言った、
「あなたがたはわたしを憎んで、わたしの父の家から追い出したではありま

せんか。しかるに今あなたがたが困っている時とはいえ、わたしのところ
に来るとはどういうわけですか」。
八ギレアデの長老たちはエフタに言った、「それでわたしたちは今、あなたに帰ったのです。どうぞ、わたしたちと一緒に行って、アンモンの人々と戦ってください。そしてわたしたちとギレアデに住んでいるすべてのものとのかしらになってください」。
九エフタはギレアデの長老たちに言った、「もしあなたがたが、わたしをつれて帰って、アンモンの人々と戦わせるとき、主が彼らをわたしにわたされるならば、わたしはあなたがたのかしらとなりましょう」。
一〇ギレアデの長老たちはエフタに言った、「主はあなたとわたしたちの間の証人です。わたしたちは必ずあなたの言われるとおりにしましょう」。
一一そこでエフタはギレアデの長老たちと一緒に行った。民は彼を立てて自分たちのかしらとし、大将とした。それでエフタはミヅパで、自分の言葉をこ

とごとく主の前に述べた。
一二かくてエフタはアンモンの人々の王に使者をつかわして言った、「あ
なたはわたしとなんのかかわりがあって、わたしのところへ攻めてきて、わ
たしの国と戦おうとするのですか」。一三アンモンの人々の王はエフタの
使者に答えた、「昔、イスラエルがエジプトから上ってきたとき、アルノン
からヤボクに及び、またヨルダンに及ぶわたしの国を奪い取ったからです。
それゆえ今、穏やかにそれを返しなさい」。一四エフタはまた使者をアンモ
ンの人々の王につかわして、一五言わせた、「エフタはこう申します、『イス
ラエルはモアブの地も、またアンモンの人々の地も取りませんでした。一
六イスラエルはエジプトから上ってきたとき、荒野をとおって紅海にいた
り、カデシにきました。一七そしてイスラエルは使者をエドムの王につかわ
して「どうぞ、われわれにあなたの国を通らせてください」と言わせまし

たが、エドムの王は聞きいれませんでした。また同じように人をモアブの
王につかわしたが、彼も承諾しなかったので、イスラエルはカデシにと
どまりました。一八それから荒野をとおって、エドムの地とモアブの地を回
り、モアブの地の東部に達し、アルノンの向こうに宿営しましたがモアブ
の領域には、はいりませんでした。アルノンはモアブの境だからです。
一九次にイスラエルはヘシボンの王すなわちアモリびとの王シホンに使者
をつかわし、シホンに向かって「どうぞ、われわれにあなたの国をとおっ
て、われわれの目的地へ行かせてください」と言わせました。二〇ところが
シホンはイスラエルを信ぜず、その領域を通らせないばかりか、かえっ
てすべての民を集めてヤハヅに陣を取り、イスラエルと戦いましたが、二
一イスラエルの神、主はシホンとそのすべての民をイスラエルの手にわた
されたので、イスラエルは彼らを撃ち破って、その土地に住んでいたアモ

リびとの地をことごとく占領し、二二アルノンからヤボクまでと、荒野か
らヨルダンまで、アモリびとの領域をことごとく占領しました。二三こ
のようにイスラエルの神、主はその民イスラエルの前からアモリびとを追
い払われたのに、あなたはそれを取ろうとするのですか。二四あなたは、あ
なたの神ケモシがあなたに取らせるものを取らないのですか。われわれは
われわれの神、主がわれわれの前から追い払われたものの土地を取るので
す。二五あなたはモアブの王チッポルの子バラクにまさる者ですか。バラ
クはかつてイスラエルと争ったことがありますか。かつて彼らと戦った
ことがありますか。二六イスラエルはヘシボンとその村里に住み、またア
ロエルとその村里およびアルノンの岸に沿うすべての町々に住むこと三百
年になりますが、あなたがたはどうしてその間にそれを取りもどさなかっ
たのですか。二七わたしはあなたに何も悪い事をしたこともないのに、あ

なたはわたしと戦って、わたしに害を加えようとします。審判者であら
れる主よ、どうぞ、きょう、イスラエルの人々とアンモンの人々との間
をおさばきください』」。二八しかしアンモンの人々の王はエフタが言いつ
かわした言葉をききいれなかった。
二九時に主の霊がエフタに臨み、エフタはギレアデおよびマナセをとおっ
て、ギレアデのミヅパに行き、ギレアデのミヅパから進んでアンモンの人々
のところに行った。三〇エフタは主に誓願を立てて言った、「もしあなたが
アンモンの人々をわたしの手にわたされるならば、三一わたしがアンモンの
人々に勝って帰るときに、わたしの家の戸口から出てきて、わたしを迎え
るものはだれでも主のものとし、その者を燔祭としてささげましょう」。三
二エフタはアンモンの人々のところに進んで行って、彼らと戦ったが、主
は彼らをエフタの手にわたされたので、三三アロエルからミンニテの附近ま

で、二十の町を撃ち敗り、アベル・ケラミムに至るまで、非常に多くの人
を殺した。こうしてアンモンの人々はイスラエルの人々の前に攻め伏せら
れた。
三四やがてエフタはミツパに帰り、自分の家に来ると、彼の娘が鼓を
もち、舞い踊って彼を出迎えた。彼女はエフタのひとり子で、ほかに男子
も女子もなかった。三五エフタは彼女を見ると、衣を裂いて言った、「あ
あ、娘よ、あなたは全くわたしを打ちのめした。わたしを悩ますものと
なった。わたしが主に誓ったのだから改めることはできないのだ」。三六
娘は言った、「父よ、あなたは主に誓われたのですから、主があなたのた
めに、あなたの敵アンモンの人々に報復された今、あなたが言われたとお
りにわたしにしてください」。三七娘はまた父に言った、「どうぞ、この事
をわたしにさせてください。すなわち二か月の間わたしをゆるし、友だち

と一緒に行って、山々をゆきめぐり、わたしの処女であることを嘆かせて
ください」。三八エフタは「行きなさい」と言って、彼女を二か月の間、出
してやった。彼女は友だちと一緒に行って、山の上で自分の処女であるこ
とを嘆いたが、三九二か月の後、父のもとに帰ってきたので、父は誓った
誓願のとおりに彼女におこなった。彼女はついに男を知らなかった。四
〇これによって年々イスラエルの娘たちは行って、年に四日ほどギレアデ
びとエフタの娘のために嘆くことがイスラエルのならわしとなった。

第一二章一エフライムの人々は集まってザポンに行き、エフタに言った、
「なぜあなたは進んで行ってアンモンの人々と戦いながら、われわれを招
いて一緒に行かせませんでしたか。われわれはあなたの家に火をつけてあ
なたを一緒に焼いてしまいます」。二エフタは彼らに言った、「かつてわた
しとわたしの民がアンモンの人々と大いに争ったとき、あなたがたを呼

んだが、あなたがたはわたしを彼らの手から救ってくれませんでした。三
あなたがたが救ってくれないのを見たから、わたしは命がけでアンモンの
人々のところへ攻めて行きますと、主は彼らをわたしの手にわたされたの
です。どうしてあなたがたは、きょう、わたしのところに上ってきて、わた
しと戦おうとするのですか」。四そこでエフタはギレアデの人々をことご
とく集めてエフライムと戦い、ギレアデの人々はエフライムを撃ち破っ
た。これはエフライムが「ギレアデびとよ、あなたがたはエフライムとマ
ナセのうちにいるエフライムの落人だ」と言ったからである。五そしてギ
レアデびとはエフライムに渡るヨルダンの渡し場を押えたので、エフライ
ムの落人が「渡らせてください」と言うとき、ギレアデの人々は「あなた
はエフライムびとですか」と問い、その人がもし「そうではありません」と
言うならば、六またその人に「では『シボレテ』と言ってごらんなさい」と

言い、その人がそれを正しく発音することができないで「セボレテ」と言
うときは、その人を捕えて、ヨルダンの渡し場で殺した。その時エフライ
ムびとの倒れたものは四万二千人であった。
七エフタは六年の間イスラエルをさばいた。ギレアデびとエフタはつい
に死んで、ギレアデの自分の町に葬られた。
八彼の後にベツレヘムのイブザンがイスラエルをさばいた。九彼に三十
人のむすこがあった。また三十人の娘があったが、それを自分の氏族以外
の者にとつがせ、むすこたちのためには三十人の娘をほかからめとった。
彼は七年の間イスラエルをさばいた。一〇イブザンはついに死んで、ベツ
レヘムに葬られた。
一一彼の後にゼブルンびとエロンがイスラエルをさばいた。彼は十年の
間イスラエルをさばいた。一二ゼブルンびとエロンはついに死んで、ゼブ

ルンの地のアヤロンに葬られた。
一三彼の後にピラトンびとヒレルの子アブドンがイスラエルをさばいた。
一四彼に四十人のむすこ及び三十人の孫があり、七十頭のろばに乗った。
彼は八年の間イスラエルをさばいた。一五ピラトンびとヒレルの子アブド
ンはついに死んで、エフライムの地のアマレクびとの山地にあるピラトン
に葬られた。

第一三章一イスラエルの人々がまた主の前に悪を行ったので、主は彼
らを四十年の間ペリシテびとの手にわたされた。
二ここにダンびとの氏族の者で、名をマノアというゾラの人があった。
その妻はうまずめで、子を産んだことがなかった。三主の使がその女に
現れて言った、「あなたはうまずめで、子を産んだことがありません。しか
し、あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。四それであなたは気をつ

けて、ぶどう酒または濃い酒を飲んではなりません。またすべて汚れたも
のを食べてはなりません。
五あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。
その頭にかみそりをあててはなりません。その子は生れた時から神にさ
さげられたナジルびとです。彼はペリシテびとの手からイスラエルを救い
始めるでしょう」。
六そこでその女はきて夫に言った、「神の人がわたし
のところにきました。その顔かたちは神の使の顔かたちのようで、たい
そう恐ろしゅうございました。わたしはその人が、どこからきたのか尋ね
ませんでしたが、その人もわたしに名を告げませんでした。
七しかしその
人はわたしに『あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。それであなた
はぶどう酒または濃い酒を飲んではなりません。またすべて汚れたものを
食べてはなりません。その子は生れた時から死ぬ日まで神にささげられた
ナジルびとです』と申しました」。

八そこでマノアは主に願い求めて言った、「ああ、主よ、どうぞ、あなたが
さきにつかわされた神の人をもう一度わたしたちに臨ませて、わたしたち
がその生れる子になすべきことを教えさせてください」。九神がマノアの願
いを聞かれたので、神の使は女が畑に座していた時、ふたたび彼女に
臨んだ。しかし夫マノアは一緒にいなかった。一〇女は急ぎ走って行っ
て夫に言った、「さきごろ、わたしに臨まれた人がまたわたしに現れま
した」。一一マノアは立って妻のあとについて行き、その人のもとに行って
言った、「あなたはかつてこの女にお告げになったおかたですか」。その
人は言った、「そうです」。一二マノアは言った、「あなたの言われたことが
事実となったとき、その子の育て方およびこれになすべき事はなんでしょ
うか」。一三主の使はマノアに言った、「わたしがさきに女に言ったこと
は皆、守らせなければなりません。一四すなわちぶどうの木から産するも

のはすべて食べてはなりません。またぶどう酒と濃い酒を飲んではなりま
せん。またすべて汚れたものを食べてはなりません。わたしが彼女に命じ
たことは皆、守らせなければなりません」。
一五マノアは主の使に言った、「どうぞ、わたしたちに、あなたを引き留
めさせ、あなたのために子やぎを備えさせてください」。一六主の使はマ
ノアに言った、「あなたがわたしを引き留めても、わたしはあなたの食物
をたべません。しかしあなたが燔祭を備えようとなさるのであれば、主に
それをささげなさい」。マノアは彼が主の使であるのを知らなかったから
である。一七マノアは主の使に言った、「あなたの名はなんといいますか。
あなたの言われたことが事実となったとき、わたしたちはあなたをあがめ
ましょう」。一八主の使は彼に言った、「わたしの名は不思議です。どうし
てあなたはそれをたずねるのですか」。一九そこでマノアは子やぎと素祭と

をとり、岩の上でそれを主にささげた。主は不思議なことをされ、マノア
とその妻はそれを見た。二〇すなわち炎が祭壇から天にあがったとき、主
の使は祭壇の炎のうちにあってのぼった。マノアとその妻は見て、地に
ひれ伏した。
二一主の使はふたたびマノアとその妻に現れなかった。その時マノア
は彼が主の使であることを知った。二二マノアは妻に向かって言った、「わ
たしたちは神を見たから、きっと死ぬであろう」。二三妻は彼に言った、「主
がもし、わたしたちを殺そうと思われたのならば、わたしたちの手から燔祭
と素祭をおうけにならなかったでしょう。またこれらのすべての事をわた
したちにお示しになるはずはなく、また今わたしたちにこのような事をお
告げにならなかったでしょう」。二四やがて女は男の子を産んで、その名
をサムソンと呼んだ。その子は成長し、主は彼を恵まれた。二五主の霊は

ゾラとエシタオルの間(あいだ)のマハネダンにおいて初(はじ)めて彼(かれ)を感動(かんどう)させた。

第一四章一サムソンはテムナに下(くだ)って行(い)き、ペリシテびとの娘(むすめ)で、テムナ
に住(す)むひとりの女(おんな)を見(み)た。二彼(かれ)は帰(かえ)ってきて父母(ふぼ)に言(い)った、「わたしはペ
リシテびとの娘(むすめ)で、テムナに住(す)むひとりの女(おんな)を見(み)ました。彼女(かのじょ)をめとっ
てわたしの妻(つま)にしてください」。三父母(ふぼ)は言(い)った、「あなたが行(い)って、割礼(かつれい)
をうけないペリシテびとのうちから妻(つま)を迎(むか)えようとするのは、身内(みうち)の娘(むすめ)た
ちのうちに、あるいはわたしたちのすべての民(たみ)のうちに女(おんな)がいないためなの
ですか」。しかしサムソンは父(ちち)に言(い)った、「彼女(かのじょ)をわたしにめとってくださ
い。彼女(かのじょ)はわたしの心(こころ)にかないますから」。
四父母(ふぼ)はこの事(こと)が主(しゅ)から出(で)たものであることを知(し)らなかった。サムソン
はペリシテびとを攻(せ)めようと、おりをうかがっていたからである。そのこ
ろペリシテびとはイスラエルを治(おさ)めていた。

五かくてサムソンは父母と共にテムナに下って行った。彼がテムナのぶ
どう畑に着くと、一頭の若いししがほえたけって彼に向かってきた。六時
に主の霊が激しく彼に臨んだので、彼はあたかも子やぎを裂くようにその
ししを裂いたが、手にはなんの武器も持っていなかった。しかしサムソン
はそのしたことを父にも母にも告げなかった。七サムソンは下って行って
女と話し合ったが、女はサムソンの心にかなった。八日がたって後、サ
ムソンは彼女をめとろうとして帰ったが、道を転じて、かのししのしかば
ねを見ると、ししのからだに、はちの群れと、蜜があった。九彼はそれを
かきあつめ、手にとって歩きながら食べ、父母のもとに帰って、彼らに与
えたので、彼らもそれを食べた。しかし、ししのからだからその蜜をかき
あつめたことは彼らに告げなかった。
一〇そこで父が下って、女のもとに行ったので、サムソンはそこにふる

まいを設けた。そうすることは花婿のならわしであったからである。一一
人々はサムソンを見ると、三十人の客を連れてきて、同席させた。一二サ
ムソンは彼らに言った、「わたしはあなたがたに一つのなぞを出しましょう。
あなたがたがもし七日のふるまいのうちにそれを解いて、わたしに告げる
ことができたなら、わたしはあなたがたに亜麻の着物三十と、晴れ着三十
をさしあげましょう。一三しかしあなたがたが、それをわたしに告げること
ができなければ、亜麻の着物三十と晴れ着三十をわたしにくれなければな
りません」。彼らはサムソンに言った、「なぞを出しなさい。わたしたちは
それを聞きましょう」。一四サムソンは彼らに言った、

「食らう者から食い物が出、
強い者から甘い物が出た」。

彼らは三日のあいだなぞを解くことができなかった。

一五四日目になって、彼らはサムソンの妻に言った、「あなたの夫を説き
すすめて、なぞをわたしたちに明かすようにしてください。そうしなけれ
ば、わたしたちは火をつけてあなたとあなたの父の家を焼いてしまいます。
あなたはわたしたちの物を取るために、わたしたちを招いたのですか」。一
六そこでサムソンの妻はサムソンの前に泣いて言った、「あなたはただわた
しを憎むだけで、愛してくれません。あなたはわたしの国の人々になぞを
出して、それをわたしに解き明かしませんでした」。サムソンは彼女に言っ
た、「わたしは自分の父にも母にも解き明かさなかった。どうしてあなたに
解き明かせよう」。一七彼女は七日のふるまいの間、彼の前に泣いていた
が、七日目になって、サムソンはついに彼女に解き明かした。ひどく彼に
迫ったからである。そこで彼女はなぞを自分の国の人々にあかした。一八
七日目になって、日の没する前に町の人々はサムソンに言った、

「蜜より甘いものに何があろう。
ししより強いものに何があろう」。
サムソンは彼らに言った、
「わたしの若い雌牛で耕さなかったなら、
わたしのなぞは解けなかった」。
一九この時、主の霊が激しくサムソンに臨んだので、サムソンはアシケロ
ンに下って行って、その町の者三十人を殺し、彼らからはぎ取って、かの
なぞを解いた人々に、その晴れ着を与え、激しく怒って父の家に帰った。
二〇サムソンの妻は花婿付添人であった客の妻となった。

第一五章

一日がたって後、麦刈の時にサムソンは子やぎを携えて妻を
おとずれ、「へやにはいって、妻に会いましょう」と言ったが、妻の父は
はいることを許さなかった。二そして父は言った、「あなたが確かに彼女

をきらったに相違ないと思ったので、わたしは彼女をあなたの客であっ
た者にやりました。彼女の妹は彼女よりもきれいではありませんか。ど
うぞ、彼女の代りに妹をめとってください」。三サムソンは彼らに言っ
た、「今度はわたしがペリシテびとに害を加えても、彼らのことでは、わた
しに罪がない」。四そこでサムソンは行って、きつね三百匹を捕え、たいま
つをとり、尾と尾をあわせて、その二つの尾の間に一つのたいまつを結び
つけ、五たいまつに火をつけて、そのきつねをペリシテびとのまだ刈らな
い麦の中に放し入れ、そのたばね積んだものと、まだ刈らないものとを焼
き、オリブ畑をも焼いた。六ペリシテびとは言った、「これはだれのしわざ
か」。人々は言った、「テムナびとの婿サムソンだ。そのしゅうとがサムソ
ンの妻を取り返して、その客であった者に与えたからだ」。そこでペリシ
テびとは上ってきて彼女とその父の家を火で焼き払った。七サムソンは彼

らに言った、「あなたがたがそんなことをするならば、わたしはあなたがた
に仕返しせずにはおかない」。八そしてサムソンは彼らを、さんざんに撃っ
て大ぜい殺した。こうしてサムソンは下って行って、エタムの岩の裂け目
に住んでいた。
九そこでペリシテびとは上ってきて、ユダに陣を取り、レヒを攻めたの
で、一〇ユダの人々は言った、「あなたがたはどうしてわれわれのところに攻
めのぼってきたのですか」。彼らは言った、「われわれはサムソンを縛り、彼
がわれわれにしたように、彼にするために上ってきたのです」。一一そこで
ユダの人々三千人がエタムの岩の裂け目に下って行って、サムソンに言っ
た、「ペリシテびとはわれわれの支配者であることをあなたは知らないので
すか。あなたはどうしてわれわれにこんな事をしたのですか」。サムソンは
彼らに言った、「彼らがわたしにしたように、わたしは彼らにしたのです」。

一二彼らはまたサムソンに言った、「われわれはあなたを縛って、ペリシテび
との手にわたすために下ってきたのです」。サムソンは彼らに言った、「あ
なたがた自身はわたしを撃たないということを誓いなさい」。一三彼らはサ
ムソンに言った、「いや、われわれはただ、あなたを縛って、ペリシテびと
の手にわたすだけです。決してあなたを殺しません」。彼らは二本の新し
い綱をもって彼を縛って、岩からひきあげた。
一四サムソンがレヒにきたとき、ペリシテびとは声をあげて、彼に近づい
た。その時、主の霊が激しく彼に臨んだので、彼の腕にかかっていた綱は
火に焼けた亜麻のようになって、そのなわめが手から解けて落ちた。一五彼
はろばの新しいあご骨一つを見つけたので、手を伸べて取り、それをもっ
て一千人を打ち殺した。一六そしてサムソンは言った、
「ろばのあご骨をもって山また山を築き、

ろばのあご骨をもって一千人を打ち殺した」。
一七彼は言い終ると、その手からあご骨を投げすてた。これがためにその
所は「あご骨の丘」と呼ばれた。
一八時に彼はひどくかわきを覚えたので、主に呼ばわって言った、「あな
たはしもべの手をもって、この大きな救を施されたのに、わたしは今、
かわいて死に、割礼をうけないものの手に陥ろうとしています」。一九そ
こで神はレヒにあるくぼんだ所を裂かれたので、そこから水が流れ出た。
サムソンがそれを飲むと彼の霊はもとにかえって元気づいた。それでその
名を「呼ばわった者の泉」と呼んだ。これは今日までレヒにある。二〇サ
ムソンはペリシテびとの時代に二十年の間イスラエルをさばいた。

第一六章一サムソンはガザへ行って、そこでひとりの遊女を見、その女
のところにはいった。二「サムソンがここにきた」と、ガザの人々に告げ

るものがあったので、ガザの人々はその所を取り囲み、夜通し町の門で
待ち伏せし、「われわれは朝まで待って彼を殺そう」と言って、夜通し静か
にしていた。三サムソンは夜中まで寝たが、夜中に起きて、町の門のとび
らと二つの門柱に手をかけて、貫の木もろともに引き抜き、肩に載せて、
ヘブロンの向かいにある山の頂に運んで行った。
四この後、サムソンはソレクの谷にいるデリラという女を愛した。五ペ
リシテびとの君たちはその女のところにきて言った、「あなたはサムソン
を説きすすめて、彼の大力はどこにあるのか、またわれわれはどうすれば
彼に勝って、彼を縛り苦しめることができるかを見つけなさい。そうすれ
ばわれわれはおのおの銀千百枚ずつをあなたにさしあげましょう」。六そこ
でデリラはサムソンに言った、「あなたの大力はどこにあるのか、またどう
すればあなたを縛って苦しめることができるか、どうぞわたしに聞かせて

ください」。七サムソンは女に言った、「人々がもし、かわいたことのない
七本の新しい弓弦をもってわたしを縛るなら、わたしは弱くなってほか
の人のようになるでしょう」。八そこでペリシテびとの君たちが、かわいた
ことのない七本の新しい弓弦を女に持ってきたので、女はそれをもっ
てサムソンを縛った。九女はかねて奥のへやに人を忍ばせておいて、サム
ソンに言った、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」。し
かしサムソンはその弓弦を、あたかも亜麻糸が火にあって断たれるように
断ち切った。こうして彼の力の秘密は知れなかった。
一〇デリラはサムソンに言った、「あなたはわたしを欺いて、うそを言い
ました。どうしたらあなたを縛ることができるか、どうぞ今わたしに聞か
せてください」。一一サムソンは女に言った、「もし人々がまだ用いたこと
のない新しい綱をもって、わたしを縛るなら、弱くなってほかの人のよ

うになるでしょう」。一二そこでデリラは新しい綱をとり、それをもって
彼を縛り、そして彼に言った、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っ
ています」。時に人々は奥のへやに忍んでいたが、サムソンはその綱を糸
のように腕から断ち落した。
一三そこでデリラはサムソンに言った、「あなたは今まで、わたしを欺い
て、うそを言いましたが、どうしたらあなたを縛ることができるか、わた
しに聞かせてください」。彼は女に言った、「あなたがもし、わたしの髪の
毛七ふさを機の縦糸と一緒に織って、くぎでそれを留めておくならば、わ
たしは弱くなってほかの人のようになるでしょう」。そこで彼が眠ったと
き、デリラはサムソンの髪の毛、七ふさをとって、それを機の縦糸に織り
込み、一四くぎでそれを留めておいて、彼に言った、「サムソンよ、ペリシ
テびとがあなたに迫っています」。しかしサムソンは目をさまして、くぎと

機と縦糸とを引き抜いた。
一五そこで女はサムソンに言った、「あなたの心がわたしを離れている
のに、どうして『おまえを愛する』と言うことができますか。あなたはす
でに三度もわたしを欺き、あなたの大力がどこにあるかをわたしに告げま
せんでした」。一六女は毎日その言葉をもって彼に迫り促したので、彼の
魂は死ぬばかりに苦しんだ。一七彼はついにその心をことごとく打ち明
けて女に言った、「わたしの頭にはかみそりを当てたことがありません。
わたしは生れた時から神にささげられたナジルびとだからです。もし髪を
そり落されたなら、わたしの力は去って弱くなり、ほかの人のようになる
でしょう」。
一八デリラはサムソンがその心をことごとく打ち明けたのを見、人をつ
かわしてペリシテびとの君たちを呼んで言った、「サムソンはその心をこ

とごとくわたしに打ち明けましたから、今度こそ上っておいでなさい」。そ
こでペリシテびとの君たちは、銀を携えて女のもとに上ってきた。一九
女は自分のひざの上にサムソンを眠らせ、人を呼んで髪の毛、七ふさを
そり落させ、彼を苦しめ始めたが、その力は彼を去っていた。二〇そして
女が「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」と言ったので、
彼は目をさまして言った、「わたしはいつものように出て行って、からだを
ゆすろう」。彼は主が自分を去られたことを知らなかった。二一そこでペリ
シテびとは彼を捕えて、両眼をえぐり、ガザに引いて行って、青銅の足
かせをかけて彼をつないだ。こうしてサムソンは獄屋の中で、うすをひい
ていたが、二二その髪の毛はそり落された後、ふたたび伸び始めた。
二三さてペリシテびとの君たちは、彼らの神ダゴンに大いなる犠牲をさ
さげて祝をしようと、共に集まって言った、「われわれの神は、敵サムソ

ンをわれわれの手にわたされた」。
二四民はサムソンを見て、自分たちの神
をほめたたえて言った、「われわれの神は、われわれの国を荒し、われわれ
を多く殺した敵をわれわれの手にわたされた」。
二五彼らはまた心に喜
んで言った、「サムソンを呼んで、われわれのために戯れ事をさせよう」。彼
らは獄屋からサムソンを呼び出して、彼らの前に戯れ事をさせた。彼らが
サムソンを柱のあいだに立たせると、
二六サムソンは自分の手をひいてい
る若者に言った、「わたしの手を放して、この家をささえている柱をさぐ
らせ、それに寄りかからせてください」。
二七その家には男女が満ち、ペリ
シテびとの君たちも皆そこにいた。また屋根の上には三千人ばかりの男女
がいて、サムソンの戯れ事をするのを見ていた。
二八サムソンは主に呼ばわって言った、「ああ、主なる神よ、どうぞ、わ
たしを覚えてください。ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、

わたしの二つの目の一つのためにでもペリシテびとにあだを報いさせてく
ださい」。二九そしてサムソンは、その家をささえている二つの中柱の一
つを右の手に、一つを左の手にかかえて、身をそれに寄せ、三〇「わたしは
ペリシテびとと共に死のう」と言って、力をこめて身をかがめると、家は
その中にいた君たちと、すべての民の上に倒れた。こうしてサムソンが死
ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった。三一
やがて彼の身内の人たちおよび父の家族の者がみな下ってきて、彼を引き
取り、携え上って、ゾラとエシタオルの間にある父マノアの墓に葬っ
た。サムソンがイスラエルをさばいたのは二十年であった。

第一七章 一ここにエフライムの山地の人で、名をミカと呼ぶものがあっ
た。二彼は母に言った、「あなたはかつて銀千百枚を取られたので、それを
のろい、わたしにも話されましたが、その銀はわたしが持っています。わ

たしがそれを取ったのです」。母は言った、「どうぞ主がわが子を祝福され
ますように」。三そして彼が銀千百枚を母に返したので、母は言った、「わ
たしはわたしの子のために一つの刻んだ像と、一つの鋳た像を造るために
その銀をわたしの手から主に献納します。それで今それをあなたに返しま
しょう」。四ミカがその銀を母に返したので、母はその銀二百枚をとって、
それを銀細工人に与え、一つの刻んだ像と、一つの鋳た像を造らせた。そ
の像はミカの家にあった。五このミカという人は神の宮をもち、エポデと
テラピムを造り、その子のひとりを立てて、自分の祭司とした。六そのころ
イスラエルには王がなかったので、人々はおのおの自分たちの目に正しい
と思うことを行った。

七さてここにユダの氏族のもので、ユダのベツレヘムからきたひとりの
若者があった。彼はレビびとであって、そこに寄留していたのである。八

この人は自分の住むべきところを尋ねて、ユダのベツレヘムの町を去り、旅
してエフライムの山地のミカの家にきた。
九ミカは彼に言った、「あなたは
どこからおいでになりましたか」。彼は言った、「わたしはユダのベツレヘ
ムのレビびとですが、住むべきところを尋ねて旅をしているのです」。
一〇
ミカは言った、「わたしと一緒にいて、わたしのために父とも祭司ともなっ
てください。そうすれば年に銀十枚と衣服ひとそろいと食物とをさしあ
げましょう」。
一一レビびとはついにその人と一緒に住むことを承諾した。
そしてその若者は彼の子のひとりのようになった。
一二ミカはレビびとで
あるこの若者を立てて自分の祭司としたので、彼はミカの家にいた。
一三
それでミカは言った、「今わたしはレビびとを祭司に持つようになったので、
主がわたしをお恵みくださることがわかりました」。

第一八章

一そのころイスラエルには王がなかった。そのころダンびとの

部族はイスラエルの部族のうちにあって、その日までまだ嗣業の地を得
なかったので自分たちの住むべき嗣業の地を求めていた。二それでダンの
人々は自分の部族の総勢のうちから、勇者五人をゾラとエシタオルからつ
かわして土地をうかがい探らせた。すなわち彼らに言った、「行って土地
を探ってきなさい」。彼らはエフライムの山地に行き、ミカの家に着いて、
そこに宿ろうとした。三彼らがミカの家に近づいたとき、レビびとである
若者の声を聞きわけたので、身をめぐらしてそこにはいって彼に言った、
「だれがあなたをここに連れてきたのですか。あなたはここで何をしている
のですか。ここになんの用があるのですか」。四若者は彼らに言った、「ミ
カが、かようかようにしてわたしを雇ったので、わたしはその祭司となった
のです」。五彼らは言った、「どうぞ、神に伺って、われわれが行く道にし
あわせがあるかどうかを知らせてください」。六その祭司は彼らに言った、

「安心して行きなさい。あなたがたが行く道は主が見守っておられます」。
七そこで五人の者は去ってライシに行き、そこにいる民を見ると、彼ら
は安らかに住まい、その穏やかで安らかなことシドンびとのようであって、
この国には一つとして欠けたものがなく、富を持ち、またシドンびとと遠く
離れており、ほかの民と交わることがなかった。八かくて彼らがゾラとエ
シタオルにおる兄弟たちのもとに帰ってくると、兄弟たちは彼らに言っ
た、「いかがでしたか」。九彼らは言った、「立って彼らのところに攻め上り
ましょう。われわれはかの地を見たが、非常に豊かです。あなたがたはな
ぜじっとしているのですか。ためらわずに進んで行って、かの地を取りな
さい。一〇あなたがたが行けば、安らかにおる民の所に行くでしょう。そ
の地は広く、神はそれをあなたがたの手に賜わるのです。そこには地にあ
るもの一つとして欠けているものはありません」。

一一そこでダンの氏族のもの六百人が武器を帯びて、ゾラとエシタオルを
出発し、一二上って行ってユダのキリアテ・ヤリムに陣を張った。このゆ
えに、その所は今日までマハネダンと呼ばれる。それはキリアテ・ヤリム
の西にある。一三彼らはそこからエフライムの山地に進み、ミカの家に着
いた。
一四かのライシの国をうかがいに行った五人の者はその兄弟たちに言っ
た、「あなたがたはこれらの家にエポデとテラピムと刻んだ像と鋳た像の
あるのを知っていますか。それであなたがたは今、なすべきことを決めな
さい」。一五そこで彼らはその方へ身をめぐらして、かのレビびとの若者の
家すなわちミカの家に行って、彼に安否を問うた。一六しかし武器を帯び
た六百人のダンの人々は門の入口に立っていた。一七かの土地をうかがい
に行った五人の者は上って行って、そこにはいり、刻んだ像とエポデとテ

ラピムと鋳た像とを取ったが、祭司は武器を帯びた六百人の者と共に門の
入口に立っていた。一八彼らがミカの家にはいって刻んだ像とエポデとテ
ラピムと鋳た像とを取った時、祭司は彼らに言った、「あなたがたは何をな
さいますか」。一九彼らは言った、「黙りなさい。あなたの手を口にあてて、
われわれと一緒にきて、われわれのために父とも祭司ともなりなさい。ひ
とりの家の祭司であるのと、イスラエルの一部族、一氏族の祭司であるの
と、どちらがよいですか」。二〇祭司は喜んで、エポデとテラピムと刻んだ
像とを取り、民のなかに加わった。

二一かくて彼らは身をめぐらして去り、その子供たちと家畜と貨財をさ
きにたてて進んだが、二二ミカの家をはるかに離れたとき、ミカは家に近
い家の人々を集め、ダンの人々に追いつき、二三ダンの人々を呼んだので、
彼らはふり向いてミカに言った、「あなたがそのように仲間を連れてきたの

は、どうしたのですか」。二四彼は言った、「あなたがたが、わたしの造った
神々および祭司を奪い去ったので、わたしに何が残っていますか。しかる
にあなたがたがわたしに向かって『どうしたのですか』と言われるとは何事
ですか」。二五ダンの人々は彼に言った、「あなたは大きな声を出さないが
よい。気の荒い連中があなたに撃ちかかって、あなたは自分の命と家族
の命を失うようになるでしょう」。二六こうしてダンの人々は去って行っ
たが、ミカは彼らの強いのを見て、くびすをかえして自分の家に帰った。
二七さて彼らはミカが造った物と、ミカと共にいた祭司とを奪ってライ
シにおもむき、穏やかで、安らかな民のところへ行って、つるぎをもって彼
らを撃ち、火をつけてその町を焼いたが、二八シドンを遠く離れており、ほ
かの民との交わりがなかったので、それを救うものがなかった。その町は
ベテレホブに属する谷にあった。彼らは町を建てなおしてそこに住み、二

九イスラエルに生れた先祖ダンの名にしたがって、その町の名をダンと名
づけた。その町の名はもとはライシであった。三〇そしてダンの人々は刻
んだ像を自分たちのために安置し、モーセの孫すなわちゲルショムの子ヨ
ナタンとその子孫がダンびとの部族の祭司となって、国が捕囚となる日に
まで及んだ。三一神の家がシロにあったあいだ、常に彼らはミカが造った
その刻んだ像を飾って置いた。

第一九章一そのころ、イスラエルに王がなかった時、エフライムの山地
の奥にひとりのレビびとが寄留していた。彼はユダのベツレヘムからひと
りの女を迎えて、めかけとしていたが、二そのめかけは怒って、彼のとこ
ろを去り、ユダのベツレヘムの父の家に帰って、そこに四か月ばかり過ご
した。三そこで夫は彼女をなだめて連れ帰ろうと、しもべと二頭のろばを
従え、立って彼女のあとを追って行った。彼が女の父の家に着いた時、

娘の父は彼を見て、喜んで迎えた。四娘の父であるしゅうとが引き留
めたので、彼は三日共におり、みな飲み食いしてそこに宿った。五四日目に
彼らは朝はやく起き、彼が立ち去ろうとしたので、娘の父は婿に言った、
「少し食事をして元気をつけ、それから出かけなさい」。六そこでふたりは座
して共に飲み食いしたが、娘の父はその人に言った、「どうぞもう一晩泊
まって楽しく過ごしなさい」。七その人は立って去ろうとしたが、しゅうと
がしいたので、ついにまたそこに宿った。八五日目になって、朝はやく起
きて去ろうとしたが、娘の父は言った、「どうぞ、元気をつけて、日が傾
くまでとどまりなさい」。そこで彼らふたりは食事をした。九その人がつい
にめかけおよびしもべと共に去ろうとして立ちあがったとき、娘の父であ
るしゅうとは彼に言った、「日も暮れようとしている。どうぞもう一晩泊ま
りなさい。日は傾いた。ここに宿って楽しく過ごしなさい。そしてあし

たの朝はやく起きて出立し、家に帰りなさい」。
一〇しかし、その人は泊まることを好まないので、立って去り、エブスす
なわちエルサレムの向かいに着いた。くらをおいた二頭のろばと彼のめか
けも一緒であった。一一彼らがエブスに近づいたとき、日はすでに没した
ので、しもべは主人に言った、「さあ、われわれは道を転じてエブスびとの
この町にはいって、そこに宿りましょう」。一二主人は彼に言った、「われ
われは道を転じて、イスラエルの人々の町でない外国人の町に、はいって
はならない。ギベアまで行こう」。一三彼はまたしもべに言った、「さあ、わ
れわれはギベアかラマか、そのうちの一つに着いてそこに宿ろう」。一四彼
らは進んで行ったが、ベニヤミンに属するギベアの近くで日が暮れたので、
一五ギベアへ行って宿ろうと、そこに道を転じ、町にはいって、その広場に
座した。だれも彼らを家に迎えて泊めてくれる者がなかったからである。

一六時にひとりの老人が夕暮に畑の仕事から帰ってきた。この人はエ
フライムの山地の者で、ギベアに寄留していたのである。ただしこの所
の人々はベニヤミンびとであった。一七彼は目をあげて、町の広場に旅人
のおるのを見た。老人は言った、「あなたはどこへ行かれるのですか。どこ
からおいでになりましたか」。一八その人は言った、「われわれはユダのベツ
レヘムから、エフライムの山地の奥へ行くものです。わたしはあそこの者
で、ユダのベツレヘムへ行き、今わたしの家に帰るところですが、だれも
わたしを家に泊めてくれる者がありません。一九われわれには、ろばのわ
らも飼葉もあり、またわたしと、はしためと、しもべと共にいる若者との
食物も酒もあって、何も欠けているものはありません」。二〇老人は言っ
た、「安心しなさい。あなたの必要なものはなんでも備えましょう。ただ
広場で夜を過ごしてはなりません」。二一そして彼を家に連れていって、ろ

ばに飼葉を与えた。彼らは足を洗って飲み食いした。
二二彼らが楽しく過ごしていた時、町の人々の悪い者どもがその家を取
り囲み、戸を打ちたたいて、家のあるじである老人に言った、「あなたの家
にきた人を出しなさい。われわれはその者を知るであろう」。二三しかし家
のあるじは彼らのところに出ていって言った、「いいえ、兄弟たちよ、ど
うぞ、そんな悪いことをしないでください。この人はすでにわたしの家に
はいったのだから、そんなつまらない事をしないでください。二四ここに
処女であるわたしの娘と、この人のめかけがいます。今それを出します
から、それをはずかしめ、あなたがたの好きなようにしなさい。しかしこ
の人にはそのようなつまらない事をしないでください」。二五しかし人々が
聞きいれなかったので、その人は自分のめかけをとって彼らのところに出
した。彼らはその女を犯して朝まで終夜はずかしめ、日ののぼるころに

なって放し帰らせた。二六朝になって女は自分の主人を宿してくれた人
の家の戸口にきて倒れ伏し、夜のあけるまでに及んだ。
二七彼女の主人は朝起きて家の戸を開き、出て旅立とうとすると、そのめ
かけである女が家の戸口に、手を敷居にかけて倒れていた。二八彼は女
に向かって、「起きよ、行こう」と言ったけれども、なんの答もなかった。
そこでその人は女をろばに乗せ、立って自分の家におもむいたが、二九そ
の家に着いたとき、刀を執り、めかけを捕えて、そのからだを十二切れに
断ち切り、それをイスラエルの全領域にあまねく送った。三〇それを見た
ものはみな言った、「イスラエルの人々がエジプトの地から上ってきた日か
ら今日まで、このような事は起ったこともなく、また見たこともない。こ
の事をよく考え、協議して言うことを決めよ」。
第二〇章一そこでイスラエルの人々は、ダンからベエルシバまで、また

ギレアデの地からもみな出てきて、その会衆はひとりのようにミヅパで主
のもとに集まった。二民の首領たち、すなわちイスラエルのすべての部族
の首領たちは、みずから神の民の集合に出た。つるぎを帯びている歩兵
が四十万人あった。三ベニヤミンの人々は、イスラエルの人々がミヅパに
上ったことを聞いた。イスラエルの人々は言った、「どうして、この悪事が
起ったのか、われわれに話してください」。四殺された女の夫であるレビ
びとは答えて言った、「わたしは、めかけと一緒にベニヤミンに属するギベ
アへ行って宿りましたが、五ギベアの人々は立ってわたしを攻め、夜の間
に、わたしのおる家を取り囲んで、わたしを殺そうと企て、ついにわたし
のめかけをはずかしめて、死なせました。六それでわたしはめかけを捕え
て断ち切り、それをイスラエルの嗣業のすべての地方にあまねく送りまし
た。彼らがイスラエルにおいて憎むべきみだらなことを行ったからです。

七イスラエルの人々よ、あなたがたは皆自分の意見と考えをここに述べて
ください」。
八民は皆ひとりのように立って言った、「われわれはだれも自分の天幕に
行きません。まただれも自分の家に帰りません。九われわれが今ギベアに
対してしようとする事はこれです。われわれはくじを引いて、ギベアに攻
めのぼりましょう。一〇すなわちイスラエルのすべての部族から百人につい
て十人、千人について百人、万人について千人を選んで、民の糧食をと
らせ、民はベニヤミンのギベアに行って、ベニヤミンびとがイスラエルに
おいておこなったすべてのみだらな事に対して、報復しましょう」。一一こ
うしてイスラエルの人々は皆集まり、一致結束して町を攻めようとした。
一二イスラエルのもろもろの部族は人々をあまねくベニヤミンの部族の
うちにつかわして言わせた、「あなたがたのうちに起ったこの事は、なんた

る悪事でしょうか。一三それで今ギベアにいるあの悪い人々をわたしなさ
い。われわれは彼らを殺して、イスラエルから悪を除き去りましょう」。し
かしベニヤミンの人々はその兄弟であるイスラエルの人々の言葉を聞き
いれなかった。一四かえってベニヤミンの人々は町々からギベアに集まり、
出てイスラエルの人々と戦おうとした。一五その日、町々から集まったベ
ニヤミンの人々はつるぎを帯びている者二万六千人あり、ほかにギベアの
住民で集まった精兵が七百人あった。一六このすべての民のうちに左き
きの精兵が七百人あって、いずれも一本の毛すじをねらって石を投げても、
はずれることがなかった。一七イスラエルの人々の集まった者はベニヤミ
ンを除いて、つるぎを帯びている者四十万人あり、いずれも軍人であった。
一八イスラエルの人々は立ちあがってベテルにのぼり、神に尋ねた、「わ
れわれのうち、いずれがさきにのぼって、ベニヤミンの人々と戦いましょ

うか」。主は言われた、「ユダがさきに」。
一九そこでイスラエルの人々は、朝起きて、ギベアに対し陣を取った。二
〇すなわちイスラエルの人々はベニヤミンと戦うために出て行って、ギベ
アで彼らに対して戦いの備えをしたが、二一ベニヤミンの人々はギベア
から出てきて、その日イスラエルの人々のうち二万二千人を地に撃ち倒し
た。二二しかしイスラエルの民の人々は奮いたって初めの日に備えをした
所にふたたび戦いの備えをした。二三そしてイスラエルの人々は上って
行って主の前に夕暮まで泣き、主に尋ねた、「われわれは再びわれわれの
兄弟であるベニヤミンの人々と戦いを交えるべきでしょうか」。主は言
われた、「攻めのぼれ」。
二四そこでイスラエルの人々は、次の日またベニヤミンの人々の所に
攻めよせたが、二五ベニヤミンは次の日またギベアから出て、これを迎え、

ふたたびイスラエルの人々のうち一万八千人を地に撃ち倒した。これらは
皆つるぎを帯びている者であった。
二六これがためにイスラエルのすべて
の人々すなわち全軍はベテルに上って行って泣き、その所で主の前に座
して、その日夕暮まで断食し、燔祭と酬恩祭を主の前にささげた。
二七
そしてイスラエルの人々は主に尋ね、――そのころ神の契約の箱はそこに
あって、
二八アロンの子エレアザルの子であるピネハスが、それに仕えてい
た――そして言った、「われわれはなおふたたび出て、われわれの兄弟で
あるベニヤミンの人々と戦うべきでしょうか。あるいはやめるべきでしょ
うか」。主は言われた、「のぼれ。わたしはあす彼らをあなたがたの手にわ
たすであろう」。
二九そこでイスラエルはギベアの周囲に伏兵を置き、
三〇そしてイスラエ
ルの人々は三日目にまたベニヤミンの人々のところに攻めのぼり、前のよ

うにギベアに対して備えをした。三一ベニヤミンの人々は出て、民を迎え
たが、ついに町からおびき出されたので、彼らは前のように大路で民を撃ち
はじめ、また野でイスラエルの人を三十人ばかり殺した。その大路は、一つ
はベテルに至り、一つはギベアに至るものであった。三二ベニヤミンの人々
は言った、「彼らは初めのように、われわれの前に撃ち破られる」。しかし
イスラエルの人々は言った、「われわれは逃げて、彼らを町から大路におび
き出そう」。三三そしてイスラエルの人々は皆その所から立ってバアル・タ
マルに備えをした。その間に待ち伏せていたイスラエルの人々がその所
から、すなわちゲバの西から現れ出た。三四すなわちイスラエルの全軍の
うちから精兵一万人がきて、ギベアを襲い、その戦いは激しかった。し
かしベニヤミンの人々は災の自分たちに迫っているのを知らなかった。
三五主がイスラエルの前にベニヤミンを撃ち敗られたので、イスラエルの

人々は、その日ベニヤミンびと二万五千一百人を殺した。これらは皆つる
ぎを帯びている者であった。三六こうしてベニヤミンの人々は自分たちの
撃ち敗られたのを見た。
　そこでイスラエルの人々はギベアに対して設けた伏兵をたのんで、ベニ
ヤミンびとを避けて退いた。三七伏兵は急いでギベアに突き入り、進んで
つるぎをもって町をことごとく撃った。三八イスラエルの人々と伏兵の間
に定めた合図は、町から大いなるのろしがあがるとき、三九イスラエルの
人々が戦いに転じることであった。さてベニヤミンは初めイスラエルの
人々を撃って三十人ばかりを殺したので言った、「まことに彼らは最初の
戦いのようにわれわれの前に撃ち敗られる」。四〇しかし、のろしが煙の
柱となって町からのぼりはじめたので、ベニヤミンの人々がうしろを見る
と、町はみな煙となって天にのぼっていた。四一その時イスラエルの人々

が向きを変えたので、ベニヤミンの人々は災が自分たちに迫ったのを見
て、うろたえ、
四二イスラエルの人々の前から身をめぐらして荒野の方に
向かったが、戦いが彼らに追い迫り、町から出てきた者どもは、彼らを
中にはさんで殺した。
四三すなわちイスラエルの人々はベニヤミンの人々
を切り倒し、追い撃ち、踏みにじって、ノハから東の方ギベアの向かいに
まで及んだ。
四四ベニヤミンの倒れた者は一万八千人で、みな勇士であっ
た。
四五彼らは身をめぐらして荒野の方、リンモンの岩まで逃げたが、イス
ラエルの人々は大路でそのうち五千人を切り倒し、なおも追撃してギドム
に至り、そのうちの二千人を殺した。
四六こうしてその日ベニヤミンの倒
れた者はつるぎを帯びている者合わせて二万五千人で、みな勇士であった。
四七しかし六百人の者は身をめぐらして荒野の方、リンモンの岩まで逃げ
て、四か月の間リンモンの岩に住んだ。
四八そこでイスラエルの人々はま

た身をかえしてベニヤミンの人々を攻め、つるぎをもって人も獣もすべ
て見つけたものを撃ち殺し、また見つけたすべての町に火をかけた。

第二一章 一かつてイスラエルの人々はミツパで、「われわれのうちひとり
もその娘をベニヤミンびとの妻として与える者があってはならない」と
言って誓ったので、二民はベテルに行って、そこで夕暮まで神の前に座し、
声をあげて激しく泣いて、三言った、「イスラエルの神、主よ、どうしてイス
ラエルにこのような事が起って、今日イスラエルに一つの部族が欠けるよ
うになったのですか」。四翌日、民は早く起きて、そこに祭壇を築き、燔祭
と酬恩祭をささげた。五そしてイスラエルの人々は言った、「イスラエル
のすべての部族のうちで集会に上って、主のもとに行かなかった者はだ
れか」。これは彼らがミツパにのぼって、主のもとに行かない者のことにつ
いて大いなる誓いを立てて、「その人は必ず殺されなければならない」と

言ったからである。六しかしイスラエルの人々は兄弟ベニヤミンをあわれ
んで言った、「今日イスラエルに一つの部族が絶えた。七われわれは主をさ
して、われわれの娘を彼らに妻として与えないと誓ったので、かの残っ
た者どもに妻をめとらせるにはどうしたらよいであろうか」。
八彼らはまた言った、「イスラエルの部族のうちで、ミヅパにのぼって主
のもとに行かなかったのはどの部族か」。ところがヤベシ・ギレアデからは
ひとりも陣営にきて集会に臨んだ者がなかった。九すなわち民を集めて
見ると、ヤベシ・ギレアデの住民はひとりもそこにいなかった。一〇そこ
で会衆は勇士一万二千人をかしこにつかわし、これに命じて言った、「ヤ
ベシ・ギレアデに行って、その住民を、女、子供もろともつるぎをもって
撃て。一一そしてこのようにしなければならない。すなわち男および男
と寝た女はことごとく滅ぼさなければならない」。一二こうして彼らはヤ

ベシ・ギレアデの住民のうちで四百人の若い処女を獲た。これはまだ男
と寝たことがなく、男を知らない者である。彼らはこれをカナンの地にあ
るシロの陣営に連れてきた。
一三そこで全会衆は人をつかわして、リンモンの岩におるベニヤミンの
人々に平和を告げた。一四ベニヤミンの人々がその時、帰ってきたので、彼
らはヤベシ・ギレアデの女のうちから生かしておいた女をこれに与えた
が、なお足りなかった。一五こうして民は、主がイスラエルの部族のうちに
欠陥をつくられたことのために、ベニヤミンをあわれんだ。
一六会衆の長老たちは言った、「ベニヤミンの女が絶えたので、かの残
りの者どもに妻をめとらせるにはどうしたらよいでしょうか」。一七彼らは
また言った、「イスラエルから一つの部族が消えうせないためにベニヤミン
のうちの残りの者どもに、あとつぎがなければならない。一八しかし、われ

われの娘を彼らの妻に与えることはできない。イスラエルの人々が『べ
ニヤミンに妻を与える者はのろわれる』と言って誓ったからである」。一九
それで彼らは言った、「年々シロに主の祭がある」。シロはベテルの北に
あって、ベテルからシケムにのぼる大路の東、レバナの南にある。二〇
そして彼らはベニヤミンの人々に命じて言った、「あなたがたは行って、ぶ
どう畑に待ち伏せして、二一うかがいなさい。もしシロの娘たちが踊り
を踊りに出てきたならば、ぶどう畑から出て、シロの娘たちのうちから、
めいめい自分の妻をとって、ベニヤミンの地に連れて行きなさい。二二もし
その父あるいは兄弟がきて、われわれに訴えるならば、われわれは彼ら
に、『われわれのために彼らをゆるしてください。戦争のときにわれわれ
は、彼らおのおのに妻をとってやらなかったし、またあなたがたも彼らに
与えなかったからです。もし与えたならば、あなたがたは罪を犯したこと

になるからでした』と言いましょう」。二三ベニヤミンの人々はそのように
行い、踊っている者どものうちから自分たちの数にしたがって妻を取り、
それを連れて領地に帰り、町々を建てなおして、そこに住んだ。二四こう
してイスラエルの人々は、その時そこを去って、おのおのその部族および
氏族に帰った。すなわちそこを立って、おのおのその嗣業の地に帰った。
二五そのころ、イスラエルには王がなかったので、おのおの自分の目に正
しいと見るところをおこなった。

ルツ記

第一章

一さばきづかさが世を治めているころ、国に飢きんがあったので、
ひとりの人がその妻とふたりの男の子を連れてユダのベツレヘムを去り、
モアブの地へ行ってそこに滞在した。二その人の名はエリメレク、妻の名
はナオミ、ふたりの男の子の名はマロンとキリオンといい、ユダのベツレ
ヘムのエフラタびとであった。彼らはモアブの地へ行って、そこにおった
が、三ナオミの夫エリメレクは死んで、ナオミとふたりの男の子が残さ
れた。四ふたりの男の子はそれぞれモアブの女を妻に迎えた。そのひと
りの名はオルパといい、ひとりの名はルツといった。彼らはそこに十年ほ
ど住んでいたが、五マロンとキリオンのふたりもまた死んだ。こうしてナオ
ミはふたりの子と夫とに先だたれた。

六その時、ナオミはモアブの地で、主がその民を顧みて、すでに食物
をお与えになっていることを聞いたので、その嫁と共に立って、モアブの
地からふるさとへ帰ろうとした。七そこで彼女は今いる所を出立し、ユ
ダの地へ帰ろうと、ふたりの嫁を連れて道に進んだ。八しかしナオミはふ
たりの嫁に言った、「あなたがたは、それぞれ自分の母の家に帰って行きな
さい。あなたがたが、死んだふたりの子とわたしに親切をつくしたように、
どうぞ、主があなたがたに、いつくしみを賜わりますよう。九どうぞ、主
があなたがたに夫を与え、夫の家で、それぞれ身の落ち着き所を得さ
せられるように」。こう言って、ふたりの嫁に口づけしたので、彼らは声を
あげて泣き、一〇ナオミに言った、「いいえ、わたしたちは一緒にあなたの
民のところへ帰ります」。一一しかしナオミは言った、「娘たちよ、帰って
行きなさい。どうして、わたしと一緒に行こうというのですか。あなたが

たの夫となる子がまだわたしの胎内にいると思うのですか。一二娘たち
よ、帰って行きなさい。わたしは年をとっているので、夫をもつことはで
きません。たとい、わたしが今夜、夫をもち、また子を産む望みがあると
しても、一三そのためにあなたがたは、子どもの成長するまで待っている
つもりなのですか。あなたがたは、そのために夫をもたずにいるつもりな
のですか。娘たちよ、それはいけません。主の手がわたしに臨み、わたし
を責められたことで、あなたがたのために、わたしは非常に心を痛めてい
るのです」。一四彼らはまた声をあげて泣いた。そしてオルパはそのしゅう
とめに口づけしたが、ルツはしゅうとめを離れなかった。
一五そこでナオミは言った、「ごらんなさい。あなたの相嫁は自分の民と
自分の神々のもとへ帰って行きました。あなたも相嫁のあとについて帰り
なさい」。一六しかしルツは言った、「あなたを捨て、あなたを離れて帰るこ

とをわたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き、
またあなたの宿られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民、あなた
の神はわたしの神です。一七あなたの死なれる所でわたしも死んで、その
かたわらに葬られます。もし死に別れでなく、わたしがあなたと別れるな
らば、主よ、どうぞわたしをいくえにも罰してください」。一八ナオミはル
ツが自分と一緒に行こうと、固く決心しているのを見たので、そのうえ言
うことをやめた。
一九そしてふたりは旅をつづけて、ついにベツレヘムに着いた。彼らが
ベツレヘムに着いたとき、町はこぞって彼らのために騒ぎたち、女たち
は言った、「これはナオミですか」。二〇ナオミは彼らに言った、「わたしを
ナオミ（楽しみ）と呼ばずに、マラ（苦しみ）と呼んでください。なぜな
ら全能者がわたしをひどく苦しめられたからです。二一わたしは出て行く

ときは豊(ゆた)かでありましたが、主(しゅ)はわたしをから手(て)で帰(かえ)されました。主(しゅ)がわ
たしを悩(なや)まし、全能者(ぜんのうしゃ)がわたしに災(わざわい)をくだされたのに、どうしてわたし
をナオミと呼(よ)ぶのですか」。
二二こうしてナオミは、モアブの地(ち)から帰(かえ)った
嫁(よめ)、モアブの女(おんな)ルツと一緒(いっしょ)に帰(かえ)ってきて、大麦刈(おおむぎかり)の初(はじ)めにベツレヘムに
着(つ)いた。

第二章
一さてナオミには、夫(おっと)エリメレクの一族(いちぞく)で、非常(ひじょう)に裕福(ゆうふく)なひと
りの親戚(しんせき)があって、その名(な)をボアズといった。
二モアブの女(おんな)ルツはナオミ
に言(い)った、「どうぞ、わたしを畑(はたけ)に行(い)かせてください。だれか親切(しんせつ)な人(ひと)が
見当(みあた)るならば、わたしはその方(かた)のあとについて落(お)ち穂(ぼ)を拾(ひろ)います」。ナオミ
が彼女(かのじょ)に「娘(むすめ)よ、行(い)きなさい」と言(い)ったので、
三ルツは行(い)って、刈(か)る人(ひと)た
ちのあとに従(したが)い、畑(はたけ)で落(お)ち穂(ぼ)を拾(ひろ)ったが、彼女(かのじょ)ははからずもエリメレク
の一族(いちぞく)であるボアズの畑(はたけ)の部分(ぶぶん)にきた。
四その時(とき)ボアズは、ベツレヘムか

らきて、刈る者どもに言った、「主があなたがたと共におられますように」。
彼らは答えた、「主があなたを祝福されますように」。五ボアズは刈る人
たちを監督しているしもべに言った、「これはだれの娘ですか」。六刈る人
たちを監督しているしもべは答えた、「あれはモアブの女で、モアブの地
からナオミと一緒に帰ってきたのですが、七彼女は『どうぞ、わたしに、刈
る人たちのあとについて、束のあいだで、落ち穂を拾い集めさせてくださ
い』と言いました。そして彼女は朝早くきて、今まで働いて、少しのあ
いだも休みませんでした」。
八ボアズはルツに言った、「娘よ、お聞きなさい。ほかの畑に穂を拾い
に行ってはいけません。またここを去ってはなりません。わたしのところ
で働く女たちを離れないで、ここにいなさい。九人々が刈りとっている
畑に目をとめて、そのあとについて行きなさい。わたしは若者たちに命じ

て、あなたのじゃまをしないようにと、言っておいたではありませんか。あ
なたがかわく時には水がめのところへ行って、若者たちのくんだのを飲み
なさい」。
一〇彼女は地に伏して拝し、彼に言った、「どうしてあなたは、わ
たしのような外国人を顧みて、親切にしてくださるのですか」。
一一ボア
ズは答えて彼女に言った、「あなたの夫が死んでこのかた、あなたがしゅ
うとめにつくしたこと、また自分の父母と生れた国を離れて、かつて知ら
なかった民のところにきたことは皆わたしに聞えました。
一二どうぞ、主
があなたのしたことに報いられるように。どうぞ、イスラエルの神、主、す
なわちあなたがその翼の下に身を寄せようとしてきた主からじゅうぶん
の報いを得られるように」。
一三彼女は言った、「わが主よ、まことにあり
がとうございます。わたしはあなたのはしためのひとりにも及ばないのに、
あなたはこんなにわたしを慰め、はしためにねんごろに語られました」。

一四食事の時、ボアズは彼女に言った、「ここへきて、パンを食べ、あな
たの食べる物を酢に浸しなさい」。彼女が刈る人々のかたわらにすわった
ので、ボアズは焼麦を彼女に与えた。彼女は飽きるほど食べて残した。一
五そして彼女がまた穂を拾おうと立ちあがったとき、ボアズは若者たちに
命じて言った、「彼女には束の間でも穂を拾わせなさい。とがめてはなら
ない。一六また彼女のために束からわざと抜き落しておいて拾わせなさい。
しかってはならない」。一七こうして彼女は夕暮まで畑で落ち穂を拾った。
そして拾った穂を打つと、大麦は一エパほどあった。一八彼女はそれを携
えて町にはいり、しゅうとめにその拾ったものを見せ、かつ食べ飽きて、残
して持ちかえったものを取り出して与えた。一九しゅうとめは彼女に言っ
た、「あなたは、きょう、どこで穂を拾いましたか。どこで働きましたか。
あなたをそのように顧みてくださったかたに、どうか祝福があるように」。

そこで彼女は自分がだれの所で働いたかを、しゅうとめに告げて、「わた
しが、きょう働いたのはボアズという名の人の所です」と言った。二〇
ナオミは嫁に言った、「生きている者をも、死んだ者をも、顧みて、いつ
くしみを賜わる主が、どうぞその人を祝福されますように」。ナオミはま
た彼女に言った、「その人はわたしたちの縁者で、最も近い親戚のひとり
です」。二一モアブの女ルツは言った、「その人はまたわたしに『あなたは
わたしのところの刈入れが全部終るまで、わたしのしもべたちのそばにつ
いていなさい』と言いました」。二二ナオミは嫁ルツに言った、「娘よ、そ
の人のところで働く女たちと一緒に出かけるのはけっこうです。そうす
ればほかの畑で人にいじめられるのを免れるでしょう」。二三それで彼女
はボアズのところで働く女たちのそばについていて穂を拾い、大麦刈と
小麦刈の終るまでそうした。こうして彼女はしゅうとめと一緒に暮した。

第三章 一時にしゅうとめナオミは彼女に言った、「娘よ、わたしはあなた
の落ち着き所を求めて、あなたをしあわせにすべきではないでしょうか。
二あなたが一緒に働いた女たちの主人ボアズはわたしたちの親戚ではあ
りませんか。彼は今夜、打ち場で大麦をあおぎ分けます。三それであなた
は身を洗って油をぬり、晴れ着をまとって打ち場に下って行きなさい。た
だ、あなたはその人が飲み食いを終るまで、その人に知られてはなりませ
ん。四そしてその人が寝る時、その寝る場所を見定め、はいって行って、そ
の足の所をまくって、そこに寝なさい。彼はあなたのすべきことを知らせ
るでしょう」。五ルツはしゅうとめに言った、「あなたのおっしゃることを皆
いたしましょう」。

六こうして彼女は打ち場に下り、すべてしゅうとめが命じたとおりにし
た。七ボアズは飲み食いして、心をたのしませたあとで、麦を積んである

場所のかたわらへ行って寝た。そこで彼女はひそかに行き、ボアズの足の
所をまくって、そこに寝た。八夜中になって、その人は驚き、起きかえっ
て見ると、ひとりの女が足のところに寝ていたので、九「あなたはだれで
すか」と言うと、彼女は答えた、「わたしはあなたのはしためルツです。あ
なたのすそで、はしためをおおってください。あなたは最も近い親戚で
す」。一〇ボアズは言った、「娘よ、どうぞ、主があなたを祝福されるよ
うに。あなたは貧富にかかわらず若い人に従い行くことはせず、あなたが
最後に示したこの親切は、さきに示した親切にまさっています。一一それ
で、娘よ、あなたは恐れるにおよびません。あなたが求めることは皆、あ
なたのためにいたしましょう。わたしの町の人々は皆、あなたがりっぱな
女であることを知っているからです。一二たしかにわたしは近い親戚では
ありますが、わたしよりも、もっと近い親戚があります。一三今夜はここに

とどまりなさい。朝になって、もしその人が、あなたのために親戚の義務
をつくすならば、よろしい、その人にさせなさい。しかし主は生きておら
れます。その人が、あなたのために親戚の義務をつくすことを好まないな
らば、わたしはあなたのために親戚の義務をつくしましょう。朝までこ
こにおやすみなさい」。
一四ルツは朝まで彼の足のところに寝たが、だれかれの見分け難いころ
に起きあがった。それはボアズが「この女の打ち場にきたことが人に知ら
れてはならない」と言ったからである。一五そしてボアズは言った、「あな
たの着る外套を持ってきて、それを広げなさい」。彼女がそれを広げると、
ボアズは大麦六オメルをはかって彼女に負わせた。彼女は町に帰り、一六
しゅうとめのところへ行くと、しゅうとめは言った、「娘よ、どうでした
か」。そこでルツはその人が彼女にしたことをことごとく告げて、一七言っ

た、「あのかたはわたしに向かって、から手で、しゅうとめのところへ帰っ
てはならないと言って、この大麦六オメルをわたしにくださいました」。一
八しゅうとめは言った、「娘よ、この事がどうなるかわかるまでお待ちなさ
い。あの人は、きょう、その事を決定しなければ落ち着かないでしょう」。
第四章 一ボアズは町の門のところへ上っていって、そこにすわった。す
ると、さきにボアズが言った親戚の人が通り過ぎようとしたので、ボアズ
はその人に言った、「友よ、こちらへきて、ここにおすわりください」。彼は
きてすわった。二ボアズはまた町の長老十人を招いて言った、「ここにお
すわりください」。彼らがすわった時、三ボアズは親戚の人に言った、「モ
アブの地から帰ってきたナオミは、われわれの親族エリメレクの地所を売
ろうとしています。四それでわたしはそのことをあなたに知らせて、ここに
すわっている人々と、民の長老たちの前で、それを買いなさいと、あな

たに言おうと思いました。もし、あなたが、それをあがなおうと思われる
ならば、あがなってください。しかし、あなたがそれをあがなわないなら
ば、わたしにそう言って知らせてください。それをあがなう人は、あなた
のほかにはなく、わたしはあなたの次ですから」。彼は言った、「わたしが
あがないましょう」。五そこでボアズは言った、「あなたがナオミの手からそ
の地所を買う時には、死んだ者の妻であったモアブの女ルツをも買って、
死んだ者の名を起してその嗣業を伝えなければなりません」。六その親戚
の人は言った、「それでは、わたしにはあがなうことができません。そんな
ことをすれば自分の嗣業をそこないます。あなたがわたしに代って、自分
であがなってください。わたしはあがなうことができませんから」。七むか
しイスラエルでは、物をあがなう事と、権利の譲渡について、万事を決定
する時のならわしはこうであった。すなわち、その人は、自分のくつを脱い
で、相手の人に渡した。これがイスラエルでの証明の方法であった。八そ

こで親戚の人がボアズにむかい「あなたが自分であがないなさい」と言っ
て、そのくつを脱いだので、九ボアズは長老たちとすべての民に言った、
「あなたがたは、きょう、わたしがエリメレクのすべての物およびキリオン
とマロンのすべての物をナオミの手から買いとった事の証人です。一〇ま
たわたしはマロンの妻であったモアブの女ルツをも買って、わたしの妻と
しました。これはあの死んだ者の名を起してその嗣業を伝え、死んだ者
の名がその一族から、またその郷里の門から断絶しないようにするためで
す。きょうあなたがたは、その証人です」。一一すると門にいたすべての
民と長老たちは言った、「わたしたちは証人です。どうぞ、主があなた
の家にはいる女を、イスラエルの家をたてたラケルとレアのふたりのよう
にされますよう。どうぞ、あなたがエフラタで富を得、ベツレヘムで名を
揚げられますように。一二どうぞ、主がこの若い女によってあなたに賜わ

る子供により、あなたの家が、かのタマルがユダに産んだペレツの家のよ
うになりますように」。
一三こうしてボアズはルツをめとって妻とし、彼女のところにはいった。
主は彼女をみごもらせられたので、彼女はひとりの男の子を産んだ。一
四そのとき、女たちはナオミに言った、「主はほむべきかな、主はあなた
を見捨てずに、きょう、あなたにひとりの近親をお授けになりました。ど
うぞ、その子の名がイスラエルのうちに高く揚げられますように。一五彼は
あなたのいのちを新たにし、あなたの老年を養う者となるでしょう。あ
なたを愛するあなたの嫁、七人のむすこにもまさる彼女が彼を産んだので
すから」。一六そこでナオミはその子をとり、ふところに置いて、養い育て
た。一七近所の女たちは「ナオミに男の子が生れた」と言って、彼に名
をつけ、その名をオベデと呼んだ。彼はダビデの父であるエッサイの父と

なった。一八さてペレヅの子孫は次のとおりである。ペレヅからヘヅロンが
生れ、一九ヘヅロンからラムが生れ、ラムからアミナダブが生れ、二〇アミ
ナダブからナションが生れ、ナションからサルモンが生れ、二一サルモンか
らボアズが生れ、ボアズからオベデが生れ、二二オベデからエッサイが生
れ、エッサイからダビデが生れた。

サムエル記上

第一章 一エフライムの山地(さんち)のラマタイム・ゾピムに、エルカナという名(な)の
人(ひと)があった。エフライムびとで、エロハムの子(こ)であった。エロハムはエリ
ウの子(こ)、エリウはトフの子(こ)、トフはツフの子(こ)である。二エルカナには、ふた
りの妻(つま)があって、ひとりの名(な)はハンナといい、ひとりの名(な)はペニンナといっ
た。ペニンナには子(こ)どもがあったが、ハンナには子(こ)どもがなかった。
三この人(ひと)は年(とし)ごとに、その町(まち)からシロに上(のぼ)っていって、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)を拝(はい)し、
主(しゅ)に犠牲(ぎせい)をささげるのを常(つね)とした。シロには、エリのふたりの子(こ)、ホフニ
とピネハスとがいて、主(しゅ)に仕(つか)える祭司(さいし)であった。四エルカナは、犠牲(ぎせい)をさ
さげる日(ひ)、妻(つま)ペニンナとそのむすこ娘(むすめ)にはみな、その分(わ)け前(まえ)を与(あた)えた。五
エルカナはハンナを愛(あい)していたが、彼女(かのじょ)には、ただ一つの分(わ)け前(まえ)を与(あた)える

だけであった。主がその胎を閉ざされたからである。六また彼女を憎んで
いる他の妻は、ひどく彼女を悩まして、主がその胎を閉ざされたことを恨
ませようとした。七こうして年は暮れ、年は明けたが、ハンナが主の宮に
上るごとに、ペニンナは彼女を悩ましたので、ハンナは泣いて食べること
もしなかった。八夫エルカナは彼女に言った、「ハンナよ、なぜ泣くのか。
なぜ食べないのか。どうして心に悲しむのか。わたしはあなたにとって十
人の子どもよりもまさっているではないか」。
九シロで彼らが飲み食いしたのち、ハンナは立ちあがった。その時、祭司
エリは主の神殿の柱のかたわらの座にすわっていた。一〇ハンナは心に
深く悲しみ、主に祈って、はげしく泣いた。一一そして誓いを立てて言っ
た、「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、
はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその

子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」。
一二彼女が主の前で長く祈っていたので、エリは彼女の口に目をとめた。
一三ハンナは心のうちで物を言っていたので、くちびるが動くだけで、声
は聞えなかった。それゆえエリは、酔っているのだと思って、一四彼女に
言った、「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい」。一五しかしハン
ナは答えた、「いいえ、わが主よ。わたしは不幸な女です。ぶどう酒も濃
い酒も飲んだのではありません。ただ主の前に心を注ぎ出していたので
す。一六はしためを、悪い女と思わないでください。積る憂いと悩みのゆ
えに、わたしは今まで物を言っていたのです」。一七そこでエリは答えた、
「安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞
きとどけられるように」。一八彼女は言った、「どうぞ、はしためにも、あな
たの前に恵みを得させてください」。こうして、その女は去って食事し、

その顔は、もはや悲しげではなくなった。
一九彼らは朝早く起きて、主の前に礼拝し、そして、ラマにある家に帰っ
て行った。エルカナは妻ハンナを知り、主が彼女を顧みられたので、二〇
彼女はみごもり、その時が巡ってきて、男の子を産み、「わたしがこの子
を主に求めたからだ」といって、その名をサムエルと名づけた。
二一エルカナその人とその家族とはみな上っていって、年ごとの犠牲と、
誓いの供え物とをささげた。二二しかしハンナは上って行かず、夫に言っ
た、「わたしはこの子が乳離れしてから、主の前に連れていって、いつまで
も、そこにおらせましょう」。二三夫エルカナは彼女に言った、「あなたが
良いと思うようにして、この子の乳離れするまで待ちなさい。ただどうか
主がその言われたことを実現してくださるように」。こうしてその女はと
どまって、その子に乳をのませ、乳離れするのを待っていたが、二四乳離れ

した時、三歳の雄牛一頭、麦粉一エパ、ぶどう酒のはいった皮袋一つを
取り、その子を連れて、シロにある主の宮に行った。その子はなお幼かっ
た。二五そして彼らはその牛を殺し、子供をエリのもとへ連れて行った。二
六ハンナは言った、「わが君よ、あなたは生きておられます。わたしは、か
つてここに立って、あなたの前で、主に祈った女です。二七この子を与え
てくださいと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きと
どけられました。二八それゆえ、わたしもこの子を主にささげます。この子
は一生のあいだ主にささげたものです」。
そして彼らはそこで主を礼拝した。

第二章一ハンナは祈って言った、
「わたしの心は主によって喜び、
わたしの力は主によって強められた、

わたしの口は敵をあざ笑う、
あなたの 救 によってわたしは楽しむからである。
二 主のように聖なるものはない、
あなたのほかには、だれもない、
われわれの神のような岩はない。
三 あなたがたは重ねて高慢に語ってはならない、
たかぶりの言葉を口にすることをやめよ。
主はすべてを知る神であって、
もろもろのおこないは主によって量られる。
四 勇士の弓は折れ、
弱き者は 力 を帯びる。
五 飽き足りた者は 食 のために雇われ、

飢えたものは、もはや飢えることがない。
うまずめは七人の子を産み、
多くの子をもつ女は孤独となる。
六 主は殺し、また生かし、
陰府にくだし、また上げられる。
七 主は貧しくし、また富ませ、
低くし、また高くされる。
八 貧しい者を、ちりのなかから立ちあがらせ、
乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、
王侯と共にすわらせ、
栄誉の位を継がせられる。
地の柱は主のものであって、

その柱の上に、世界をすえられたからである。
九主はその聖徒たちの足を守られる、
しかし悪いものどもは暗黒のうちに滅びる。
人は力をもって勝つことができないからである。
一〇主と争うものは粉々に砕かれるであろう、
主は彼らにむかって天から雷をとどろかし、
地のはてまでもさばき、王に力を与え、
油そそがれた者の力を強くされるであろう」。
一一エルカナはラマにある家に帰ったが、幼な子は祭司エリの前にいて
主に仕えた。
一二さて、エリの子らは、よこしまな人々で、主を恐れなかった。一三民
のささげ物についての祭司のならわしはこうである。人が犠牲をささげる

時、その肉を煮る間に、祭司のしもべは、みつまたの肉刺しを手に持って
きて、一四それをかま、またはなべ、またはおおがま、または鉢に突きい
れ、肉刺しの引き上げるものは祭司がみな自分のものとした。彼らはシロ
で、そこに来るすべてのイスラエルの人に、このようにした。一五人々が
脂肪を焼く前にもまた、祭司のしもべがきて、犠牲をささげる人に言うの
であった、「祭司のために焼く肉を与えよ。祭司はあなたから煮た肉を受け
ない。生の肉がよい」。一六その人が、「まず脂肪を焼かせましょう。その
後ほしいだけ取ってください」と言うと、しもべは、「いや、今もらいたい。
くれないなら、わたしは力づくで、それを取ろう」と言う。一七このよう
に、その若者たちの罪は、主の前に非常に大きかった。この人々が主の
供え物を軽んじたからである。

一八サムエルはまだ幼く、身に亜麻布のエポデを着けて、主の前に仕え

ていた。一九母は彼のために小さい上着を作り、年ごとに、夫と共にその
年の犠牲をささげるために上る時、それを持ってきた。二〇エリはいつも
エルカナとその妻を祝福して言った、「この女が主にささげた者のかわ
りに、主がこの女によってあなたに子を与えられるように」。そして彼ら
はその家に帰るのを常とした。
二一こうして主がハンナを顧みられたので、ハンナはみごもって、三人の
男の子とふたりの女の子を産んだ。わらべサムエルは主の前で育った。
二二エリはひじょうに年をとった。そしてその子らがイスラエルの人々
にしたいろいろのことを聞き、また会見の幕屋の入口で勤めていた女た
ちと寝たことを聞いて、二三彼らに言った、「なにゆえ、そのようなことをす
るのか。わたしはこのすべての民から、あなたがたの悪いおこないのこと
を聞く。二四わが子らよ、それはいけない。わたしの聞く、主の民の言いふ

らしている風説は良くない。二五もし人が人に対して罪を犯すならば、神
が仲裁されるであろう。しかし人が主に対して罪を犯すならば、だれが、
そのとりなしをすることができようか」。しかし彼らは父の言うことに耳
を傾けようともしなかった。主が彼らを殺そうとされたからである。
二六わらべサムエルは育っていき、主にも、人々にも、ますます愛せら
れた。
二七このとき、ひとりの神の人が、エリのもとにきて言った、「主はかく仰
せられる、『あなたの先祖の家がエジプトでパロの家の奴隷であったとき、
わたしはその先祖の家に自らを現した。二八そしてイスラエルのすべて
の部族のうちからそれを選び出して、わたしの祭司とし、わたしの祭壇に
上って、香をたかせ、わたしの前でエポデを着けさせ、また、イスラエルの
人々の火祭をことごとくあなたの先祖の家に与えた。二九それにどうして

あなたがたは、わたしが命じた犠牲と供え物をむさぼりの目をもって見る
のか。またなにゆえ、わたしよりも自分の子らを尊び、わたしの民イスラ
エルのささげるもろもろの供え物の、最も良き部分をもって自分を肥やす
のか』。三〇それゆえイスラエルの神、主は仰せられる、『わたしはかつて、
「あなたの家とあなたの父の家とは、永久にわたしの前に歩むであろう」
と言った』。しかし今、主は仰せられる、『決してそうはしない。わたしを
尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろ
う。三一見よ、日が来るであろう。その日、わたしはあなたの力と、あなた
の父の家の力を断ち、あなたの家に年老いた者をなくするであろう。三二
そのとき、あなたは災のうちにあって、イスラエルに与えられるもろも
ろの繁栄を、ねたみ見るであろう。あなたの家には永久に年老いた者が
いなくなるであろう。三三しかしあなたの一族のひとりを、わたしの祭壇

から断たないであろう。彼は残されてその目を泣きはらし、心を痛める
であろう。またあなたの家に生れ出るものは、みなつるぎに死ぬであろう。
三四あなたのふたりの子ホフニとピネハスの身に起ることが、あなたのため
にそのしるしとなるであろう。すなわちそのふたりは共に同じ日に死ぬで
あろう。三五わたしは自分のために、ひとりの忠実な祭司を起す。その人
はわたしの心と思いとに従って行うであろう。わたしはその家を確立
しよう。その人はわたしが油そそいだ者の前につねに歩むであろう。三
六そしてあなたの家で生き残っている人々はみなきて、彼に一枚の銀と一
個のパンを請い求め、「どうぞ、わたしを祭司の職の一つに任じ、一口の
パンでも食べることができるようにしてください」と言うであろう』」。
第三章一わらべサムエルは、エリの前で、主に仕えていた。そのころ、主
の言葉はまれで、黙示も常ではなかった。

二さてエリは、しだいに目がかすんで、見ることができなくなり、そのと
き自分のへやで寝ていた。三神のともしびはまだ消えず、サムエルが神の
箱のある主の神殿に寝ていた時、四主は「サムエルよ、サムエルよ」と呼ば
れた。彼は「はい、ここにおります」と言って、五エリの所へ走っていっ
て言った、「あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります」。し
かしエリは言った、「わたしは呼ばない。帰って寝なさい」。彼は行って寝
た。六主はまたかさねて「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた。サムエ
ルは起きてエリのもとへ行って言った、「あなたがお呼びになりました。わ
たしは、ここにおります」。エリは言った、「子よ、わたしは呼ばない。も
う一度寝なさい」。七サムエルはまだ主を知らず、主の言葉がまだ彼に現
されなかった。八主はまた三度目にサムエルを呼ばれたので、サムエルは
起きてエリのもとへ行って言った、「あなたがお呼びになりました。わたし

は、ここにおります」。その時、エリは主がわらべを呼ばれたのであること
を悟った。九そしてエリはサムエルに言った、「行って寝なさい。もしあな
たを呼ばれたら、『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言いなさ
い」。サムエルは行って自分の所で寝た。
一〇主はきて立ち、前のように、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた
ので、サムエルは言った、「しもべは聞きます。お話しください」。一一その
時、主はサムエルに言われた、「見よ、わたしはイスラエルのうちに一つの
事をする。それを聞く者はみな、耳が二つとも鳴るであろう。一二その日
には、わたしが、かつてエリの家について話したことを、はじめから終りま
でことごとく、エリに行うであろう。一三わたしはエリに、彼が知ってい
る悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神を
けがしているのに、彼がそれをとめなかったからである。一四それゆえ、わ

たしはエリの家に誓う。エリの家の悪は、犠牲や供え物をもってしても、
永久にあがなわれないであろう」。
一五サムエルは朝まで寝て、主の宮の戸をあけたが、サムエルはその幻
のことをエリに語るのを恐れた。一六しかしエリはサムエルを呼んで言っ
た、「わが子サムエルよ」。サムエルは言った、「はい、ここにおります」。一
七エリは言った、「何事をお告げになったのか。隠さず話してください。も
しお告げになったことを一つでも隠して、わたしに言わないならば、どう
ぞ神があなたを罰し、さらに重く罰せられるように」。一八そこでサムエル
は、その事をことごとく話して、何も彼に隠さなかった。エリは言った、
「それは主である。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」。
一九サムエルは育っていった。主が彼と共におられて、その言葉を一つ
も地に落ちないようにされたので、二〇ダンからベエルシバまで、イスラエ

ルのすべての人は、サムエルが主の預言者と定められたことを知った。二
一主はふたたびシロで現れられた。すなわち主はシロで、主の言葉によっ
て、サムエルに自らを現された。こうしてサムエルの言葉は、あまねく
イスラエルの人々に及んだ。

第四章一イスラエルびとは出てペリシテびとと戦おうとして、エベネゼ
ルのほとりに陣をしき、ペリシテびとはアペクに陣をしいた。二ペリシテ
びとはイスラエルびとにむかって陣備えをしたが、戦うに及んで、イスラ
エルびとはペリシテびとの前に敗れ、ペリシテびとは戦場において、おお
よそ四千人を殺した。三民が陣営に退いた時、イスラエルの長老たちは
言った、「なにゆえ、主はきょう、ペリシテびとの前にわれわれを敗られたの
か。シロへ行って主の契約の箱をここへ携えてくることにしよう。そし
て主をわれわれのうちに迎えて、敵の手から救っていただこう」。四そこで

民は人をシロにつかわし、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の契約
の箱を、そこから携えてこさせた。その時エリのふたりの子、ホフニとピ
ネハスは神の契約の箱と共に、その所にいた。
五主の契約の箱が陣営についた時、イスラエルびとはみな大声で叫んだ
ので、地は鳴り響いた。六ペリシテびとは、その叫び声を聞いて言った、「へ
ブルびとの陣営の、この大きな叫び声は何事か」。そして主の箱が、陣営
に着いたことを知った時、七ペリシテびとは恐れて言った、「神々が陣営に
きたのだ」。彼らはまた言った、「ああ、われわれはわざわいである。この
ようなことは今までなかった。八ああ、われわれはわざわいである。だれが
われわれをこれらの強い神々の手から救い出すことができようか。これら
の神々は、もろもろの災をもってエジプトびとを荒野で撃ったのだ。九
ペリシテびとよ、勇気を出して男らしくせよ。ヘブルびとがあなたがたに

仕えたように、あなたがたが彼らに仕えることのないために、男らしく
戦え」。
一〇こうしてペリシテびとが戦ったので、イスラエルびとは敗れて、おの
おのその家に逃げて帰った。戦死者はひじょうに多く、イスラエルの歩兵
で倒れたものは三万であった。一一また神の箱は奪われ、エリのふたりの
子、ホフニとピネハスは殺された。
一二その日ひとりのベニヤミンびとが、衣服を裂き、頭に土をかぶって、
戦場から走ってシロにきた。一三彼が着いたとき、エリは道のかたわらに
ある自分の座にすわって待ちかまえていた。その心に神の箱の事を気づ
かっていたからである。その人が町にはいって、情報をつたえたので、町
はこぞって叫んだ。一四エリはその叫び声を聞いて言った、「この騒ぎ声は
何か」。その人は急いでエリの所へきてエリに告げた。一五その時エリは

九十八歳で、その目は固まって見ることができなかった。一六その人はエ
リに言った、「わたしは戦場からきたものです。きょう戦場からのがれ
たのです」。エリは言った、「わが子よ、様子はどうであったか」。一七しら
せをもたらしたその人は答えて言った、「イスラエルびとは、ペリシテびと
の前から逃げ、民のうちにはまた多くの戦死者があり、あなたのふたりの
子、ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました」。一八彼が神の箱の
ことを言ったとき、エリはその座から、あおむけに門のかたわらに落ち、首
を折って死んだ。老いて身が重かったからである。彼のイスラエルをさば
いたのは四十年であった。

一九彼の嫁、ピネハスの妻はみごもって出産の時が近づいていたが、神
の箱が奪われたこと、しゅうとと夫が死んだというしらせを聞いたとき、
陣痛が起り身をかがめて子を産んだ。二〇彼女が死にかかっている時、世話

をしていた女が彼女に言った、「恐れることはありません。男の子が生
れました」。しかし彼女は答えもせず、また顧みもしなかった。二一ただ
彼女は「栄光はイスラエルを去った」と言って、その子をイカボデと名づ
けた。これは神の箱の奪われたこと、また彼女のしゅうとと夫のことに
よるのである。二二彼女はまた、「栄光はイスラエルを去った。神の箱が奪
われたからです」と言った。

第五章一ペリシテびとは神の箱をぶんどって、エベネゼルからアシドド
に運んできた。二そしてペリシテびとはその神の箱を取ってダゴンの宮に
運びこみ、ダゴンのかたわらに置いた。三アシドドの人々が、次の日、早
く起きて見ると、ダゴンが主の箱の前に、うつむきに地に倒れていたので、
彼らはダゴンを起して、それをもとの所に置いた。四その次の朝また早
く起きて見ると、ダゴンはまた、主の箱の前に、うつむきに地に倒れてい

た。そしてダゴンの頭と両手とは切れて離れ、しきいの上にあり、ダゴ
ンはただ胴体だけとなっていた。五それゆえダゴンの祭司たちやダゴンの
宮にはいる人々は、だれも今日にいたるまで、アシドドのダゴンのしきい
を踏まない。
六そして主の手はアシドドびとの上にきびしく臨み、主は腫物をもって
アシドドとその領域の人々を恐れさせ、また悩まされた。七アシドドの
人々は、このありさまを見て言った、「イスラエルの神の箱を、われわれの
所に、とどめ置いてはならない。その神の手が、われわれと、われわれの
神ダゴンの上にきびしく臨むからである」。八そこで彼らは人をつかわし
て、ペリシテびとの君たちを集めて言った、「イスラエルの神の箱をどうし
ましょう」。彼らは言った、「イスラエルの神の箱はガテに移そう」。人々は
イスラエルの神の箱をそこに移した。九彼らがそれを移すと、主の手がそ

の町に臨み、非常な騒ぎが起った。そして老若を問わず町の人々を撃た
れたので、彼らの身に腫物ができた。一〇そこで人々は神の箱をエクロン
に送ったが、神の箱がエクロンに着いた時、エクロンの人々は叫んで言っ
た、「彼らがイスラエルの神の箱をわれわれの所に移したのは、われわれ
と民を滅ぼすためである」。一一そこで彼らは人をつかわして、ペリシテび
との君たちをみな集めて言った、「イスラエルの神の箱を送り出して、も
との所に返し、われわれと民を滅ぼすことのないようにしよう」。恐ろし
い騒ぎが町中に起っていたからである。そこには神の手が非常にきびし
く臨んでいたので、一二死なない人は腫物をもって撃たれ、町の叫びは天
に達した。

第六章一主の箱は七か月の間ペリシテびとの地にあった。二ペリシテび
とは、祭司や占い師を呼んで言った、「イスラエルの神の箱をどうしましょ

うか。どのようにして、それをもとの所へ送り返せばよいか告げてくださ
い」。三彼らは言った、「イスラエルの神の箱を送り返す時には、それをむ
なしく返してはならない。必ず彼にとがの供え物をもって償いをしなけ
ればならない。そうすれば、あなたがたはいやされ、また彼の手がなぜあな
たがたを離れないかを知ることができるであろう」。四人々は言った、「わ
れわれが償うとがの供え物には何をしましょうか」。彼らは答えた、「ペ
リシテびとの君たちの数にしたがって、金の腫物五つと金のねずみ五つで
ある。あなたがたすべてと、君たちに臨んだ災は一つだからである。五
それゆえ、あなたがたの腫物の像と、地を荒すねずみの像を造り、イスラ
エルの神に栄光を帰するならば、たぶん彼は、あなたがた、およびあなたが
たの神々と、あなたがたの地に、その手を加えることを軽くされるであろ
う。六なにゆえ、あなたがたはエジプトびととパロがその心をかたくなに

したように、自分の心をかたくなにするのか。神が彼らを悩ましたので、
彼らは民を行かせ、民は去ったではないか。七それゆえ今、新しい車一
両を造り、まだくびきを付けたことのない乳牛二頭をとり、その牛を
車につなぎ、そのおのおのの子牛を乳牛から離して家に連れ帰り、八
主の箱をとって、それをその車に載せ、あなたがたがとがの供え物とし
て彼に償う金の作り物を一つの箱におさめてそのかたわらに置き、それ
を送って去らせなさい。九そして見ていて、それが自分の領地へ行く道を、
ベテシメシへ上るならば、この大いなる災を、われわれに下したのは彼
である。しかし、そうしない時は、われわれを撃ったのは彼の手ではなく、
その事の偶然であったことを知るであろう」。
一〇人々はそのようにした。すなわち、彼らは二頭の乳牛をとって、
これを車につなぎ、そのおのおのの子牛を家に閉じこめ、一一主の箱、お

よび金のねずみと、腫物の像をおさめた箱とを車に載せた。一二すると
雌牛はまっすぐにベテシメシの方向へ、ひとすじに大路を歩み、鳴きなが
ら進んでいって、右にも左にも曲らなかった。ペリシテびとの君たちは、
ベテシメシの境までそのあとについていった。一三時にベテシメシの人々
は谷で小麦を刈り入れていたが、目をあげて、その箱を見、それを迎えて
喜んだ。一四車はベテシメシびとヨシュアの畑にはいって、そこにとど
まった。その所に大きな石があった。人々は車の木を割り、その雌牛を
燔祭として主にささげた。一五レビびとは主の箱と、そのかたわらの、金
の作り物をおさめた箱を取りおろし、それを大石の上に置いた。そしてベ
テシメシの人々は、その日、主に燔祭を供え、犠牲をささげた。一六ペリ
シテびとの五人の君たちはこれを見て、その日、エクロンに帰った。
一七ペリシテびとが、とがの供え物として、主に償いをした金の腫物は、

次のとおりである。すなわちアシドドのために一つ、ガザのために一つ、ア
シケロンのために一つ、ガテのために一つ、エクロンのために一つであった。
一八また金のねずみは、城壁をめぐらした町から城壁のない村里にいた
るまで、すべて五人の君たちに属するペリシテびとの町の数にしたがって
造った。主の箱をおろした所のかたわらにあった大石は、今日にいたる
まで、ベテシメシびとヨシュアの畑にあって、あかしとなっている。
一九ベテシメシの人々で主の箱の中を見たものがあったので、主はこれ
を撃たれた。すなわち民のうち七十人を撃たれた。主が民を撃って多くの
者を殺されたので、民はなげき悲しんだ。二〇ベテシメシの人々は言った、
「だれが、この聖なる神、主の前に立つことができようか。主はわれわれを
離れてだれの所へ上って行かれたらよいのか」。二一そして彼らは、使者を
キリアテ・ヤリムの人々につかわして言った、「ペリシテびとが主の箱を返

したから、下ってきて、それをあなたがたの所へ携え上ってください」。
第七章一キリアテ・ヤリムの人々は、きて、主の箱を携え上り、丘の
上のアビナダブの家に持ってきて、その子エレアザルを聖別して、主の箱
を守らせた。二その箱は久しくキリアテ・ヤリムにとどまって、二十年を
経た。イスラエルの全家は主を慕って嘆いた。
三その時サムエルはイスラエルの全家に告げていった、「もし、あなたが
たが一心に主に立ち返るのであれば、ほかの神々とアシタロテを、あなた
がたのうちから捨て去り、心を主に向け、主にのみ仕えなければならな
い。そうすれば、主はあなたがたをペリシテびとの手から救い出されるで
あろう」。四そこでイスラエルの人々はバアルとアシタロテを捨て去り、た
だ主にのみ仕えた。
五サムエルはまた言った、「イスラエルびとを、ことごとくミヅパに集め

なさい。わたしはあなたがたのために主に祈りましょう」。六人々はミヅパ
に集まり、水をくんでそれを主の前に注ぎ、その日、断食してその所で
言った、「われわれは主に対して罪を犯した」。サムエルはミヅパでイスラ
エルの人々をさばいた。七イスラエルの人々のミヅパに集まったことがペ
リシテびとに聞えたので、ペリシテびとの君たちは、イスラエルに攻め上っ
てきた。イスラエルの人々はそれを聞いて、ペリシテびとを恐れた。八そ
してイスラエルの人々はサムエルに言った、「われわれのため、われわれの
神、主に叫ぶことを、やめないでください。そうすれば主がペリシテびと
の手からわれわれを救い出されるでしょう」。九そこでサムエルは乳を飲む
小羊一頭をとり、これを全き燔祭として主にささげた。そしてサムエル
はイスラエルのために主に叫んだので、主はこれに答えられた。一〇サム
エルが燔祭をささげていた時、ペリシテびとはイスラエルと戦おうとし

て近づいてきた。しかし主はその日、大いなる雷をペリシテびとの上に
とどろかせて、彼らを乱されたので、彼らはイスラエルびとの前に敗れて
逃げた。一一イスラエルの人々はミヅパを出てペリシテびとを追い、これを
撃って、ベテカルの下まで行った。
一二その時サムエルは一つの石をとってミヅパとエシャナの間にすえ、
「主は今に至るまでわれわれを助けられた」と言って、その名をエベネゼル
と名づけた。一三こうしてペリシテびとは征服され、ふたたびイスラエルの
領地に、はいらなかった。サムエルの一生の間、主の手が、ペリシテび
とを防いだ。一四ペリシテびとがイスラエルから取った町々は、エクロン
からガテまで、イスラエルにかえり、イスラエルはその周囲の地をもペリ
シテびとの手から取りかえした。またイスラエルとアモリびととの間には
平和があった。

一五サムエルは一生の間イスラエルをさばいた。一六年ごとにサムエル
はベテルとギルガル、およびミヅパを巡って、その所々でイスラエルを
さばき、一七ラマに帰った。そこに彼の家があったからである。その所で
も彼はイスラエルをさばき、またそこで主に祭壇を築いた。
第八章一サムエルは年老いて、その子らをイスラエルのさばきづかさとし
た。二長子の名はヨエルといい、次の子の名はアビヤと言った。彼らはベ
エルシバでさばきづかさであった。三しかしその子らは父の道を歩まない
で、利にむかい、まいないを取って、さばきを曲げた。
四この時、イスラエルの長老たちはみな集まってラマにおるサムエルの
もとにきて、五言った、「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を
歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのた
めに立ててください」。六しかし彼らが、「われわれをさばく王を、われわ

れに与えよ」と言うのを聞いて、サムエルは喜ばなかった。そしてサムエ
ルが主に祈ると、七主はサムエルに言われた、「民が、すべてあなたに言う
所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを
捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである。八彼らは、
わたしがエジプトから連れ上った日から、きょうまで、わたしを捨ててほか
の神々に仕え、さまざまの事をわたしにしたように、あなたにもしている
のである。九今その声に聞き従いなさい。ただし、深く彼らを戒めて、
彼らを治める王のならわしを彼らに示さなければならない」。
一〇サムエルは王を立てることを求める民に主の言葉をことごとく告げ
て、一一言った、「あなたがたを治める王のならわしは次のとおりである。
彼はあなたがたのむすこを取って、戦車隊に入れ、騎兵とし、自分の戦車
の前に走らせるであろう。一二彼はまたそれを千人の長、五十人の長に

任じ、またその地を耕させ、その作物を刈らせ、またその武器と戦車の
装備を造らせるであろう。一三また、あなたがたの娘を取って、香をつく
る者とし、料理をする者とし、パンを焼く者とするであろう。一四また、あ
なたがたの畑とぶどう畑とオリブ畑の最も良い物を取って、その家来
に与え、一五あなたがたの穀物と、ぶどう畑の、十分の一を取って、その
役人と家来に与え、一六また、あなたがたの男女の奴隷および、あなたが
たの最も良い牛とろばを取って、自分のために働かせ、一七また、あなた
がたの羊の十分の一を取り、あなたがたは、その奴隷となるであろう。一
八そしてその日あなたがたは自分のために選んだ王のゆえに呼ばわるであ
ろう。しかし主はその日にあなたがたに答えられないであろう」。
一九ところが民はサムエルの声に聞き従うことを拒んで言った、「いい
え、われわれを治める王がなければならない。二〇われわれも他の国々の

ようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦い
にたたかうのである」。二一サムエルは民の言葉をことごとく聞いて、それ
を主の耳に告げた。二二主はサムエルに言われた、「彼らの声に聞き従い、
彼らのために王を立てよ」。サムエルはイスラエルの人々に言った、「あな
たがたは、めいめいその町に帰りなさい」。

第九章一さて、ベニヤミンの人で、キシという名の裕福な人があった。キ
シはアビエルの子、アビエルはゼロルの子、ゼロルはベコラテの子、ベコ
ラテはアピヤの子、アピヤはベニヤミンびとである。二キシにはサウルとい
う名の子があった。若くて麗しく、イスラエルの人々のうちに彼よりも
麗しい人はなく、民のだれよりも肩から上、背が高かった。
三サウルの父キシの数頭のろばがいなくなった。そこでキシは、その子
サウルに言った、「しもべをひとり連れて、立って行き、ろばを捜してきな

さい」。四そこでふたりはエフライムの山地を通りすぎ、シャリシャの地を
通り過ぎたけれども見当らず、シャリムの地を通り過ぎたけれどもおらず、
ベニヤミンの地を通り過ぎたけれども見当らなかった。
五彼らがツフの地にきた時、サウルは連れてきたしもべに言った、「さあ、
帰ろう。父は、ろばのことよりも、われわれのことを心配するだろう」。六
ところが、しもべは言った、「この町には神の人がおられます。尊い人で、
その言われることはみなそのとおりになります。その所へ行きましょう。
われわれの出てきた旅のことについて何か示されるでしょう」。七サウルは
しもべに言った、「しかし行くのであれば、その人に何を贈ろうか。袋の
パンはもはや、なくなり、神の人に持っていく贈り物がない。何かありま
すか」。八しもべは、またサウルに答えた、「わたしの手に四分の一シケルの
銀があります。わたしはこれを、神の人に与えて、われわれの道を示して

もらいましょう」。九――昔イスラエルでは、神に問うために行く時には、
こう言った、「さあ、われわれは先見者のところへ行こう」。今の預言者は、
昔は先見者といわれていたのである。――一〇サウルはそのしもべに言っ
た、「それは良い。さあ、行こう」。こうして彼らは、神の人のいるその町
へ行った。

一一彼らは町へ行く坂を上っている時、水をくむために出てくるおとめ
たちに出会ったので、彼らに言った、「先見者はここにおられますか」。一二
おとめたちは答えた、「おられます。ごらんなさい、この先です。急いで行
きなさい。民がきょう高き所で犠牲をささげるので、たった今、町にこ
られたところです。一三あなたがたは、町にはいるとすぐ、あのかたが高き
所に上って食事される前に会えるでしょう。民はそのかたがこられるま
では食事をしません。あのかたが犠牲を祝福されてから、招かれた人々

が食事をするのです。さあ、上っていきなさい。すぐに会えるでしょう」。
一四こうして彼らは町に上っていった。そして町の中に、はいろうとした
時、サムエルは高き所に上るため彼らのほうに向かって出てきた。
一五さてサウルが来る一日前に、主はサムエルの耳に告げて言われた、一
六「あすの今ごろ、あなたの所に、ベニヤミンの地から、ひとりの人をつ
かわすであろう。あなたはその人に油を注いで、わたしの民イスラエル
の君としなさい。彼はわたしの民をペリシテびとの手から救い出すであろ
う。わたしの民の叫びがわたしに届き、わたしがその悩みを顧みるから
である」。一七サムエルがサウルを見た時、主は言われた、「見よ、わたしの
言ったのはこの人である。この人がわたしの民を治めるであろう」。一八そ
のときサウルは、門の中でサムエルに近づいて言った、「先見者の家はど
こですか。どうか教えてください」。一九サムエルはサウルに答えた、「わた

しがその先見者です。わたしの前に行って、高き所に上りなさい。あな
たがたは、きょう、わたしと一緒に食事しなさい。わたしはあすの朝あな
たを帰らせ、あなたの心にあることをみな示しましょう。二〇三日前に、
いなくなったあなたのろばは、もはや見つかったので心にかけなくてもよ
ろしい。しかしイスラエルのすべての望ましきものはだれのものですか。
それはあなたのもの、あなたの父の家のすべての人のものではありません
か」。二一サウルは答えた、「わたしはイスラエルのうちの最も小さい部族
のベニヤミンびとであって、わたしの一族はまたベニヤミンのどの一族よ
りも卑しいものではありませんか。どうしてあなたは、そのようなことを
わたしに言われるのですか」。
二二サムエルはサウルとそのしもべを導いて、へやにはいり、招かれた三
十人ほどのうちの上座にすわらせた。二三そしてサムエルは料理人に言っ

た、「あなたに渡して、取りのけておくようにと言っておいた分を持ってき
なさい」。二四料理人は、ももとその上の部分を取り上げて、それをサウル
の前に置いた。そしてサムエルは言った、「ごらんなさい。取っておいた物
が、あなたの前に置かれています。召しあがってください。あなたが客人
たちと一緒に食事ができるように、この時まで、あなたのために取ってお
いたものです」。
　こうしてサウルはその日サムエルと一緒に食事をした。二五そして彼ら
が高き所を下って町にはいった時、サウルのために屋上に床が設けら
れ、彼はその上に身を横たえて寝た。二六そして夜明けになって、サムエル
は屋上のサウルに呼ばわって言った、「起きなさい。あなたをお送りしま
す」。サウルは起き上がった。そしてサウルとサムエルのふたりは、共に外
に出た。

二七彼らが町はずれに下った時、サムエルはサウルに言った、「あなたの
しもべに先に行くように言いなさい。しもべが先に行ったら、あなたは、し
ばらくここに立ちとどまってください。神の言葉を知らせましょう」。
第一〇章一その時サムエルは油のびんを取って、サウルの頭に注ぎ、
彼に口づけして言った、「主はあなたに油を注いで、その民イスラエルの
君とされたではありませんか。あなたは主の民を治め、周囲の敵の手から
彼らを救わなければならない。主があなたに油を注いで、その嗣業の君
とされたことの、しるしは次のとおりです。
二あなたがきょう、わたしを
離れて、去って行くとき、ベニヤミンの領地のゼルザにあるラケルの墓の
かたわらで、ふたりの人に会うでしょう。そして彼らはあなたに言います、
『あなたが捜しに行かれたろばは見つかりました。いま父上は、ろばより
もあなたがたの事を心配して、「わが子のことは、どうしよう」と言って

おられます』。三あなたが、そこからなお進んで、タボルのかしの木の所
へ行くと、そこでベテルに上って神を拝もうとする三人の者に会うでしょ
う。ひとりは三頭の子やぎを連れ、ひとりは三つのパンを携え、ひとりは、
ぶどう酒のはいった皮袋一つを携えている。四彼らはあなたにあいさつ
し、二つのパンをくれるでしょう。あなたはそれを、その手から受けなけ
ればならない。五その後、あなたは神のギベアへ行く。そこはペリシテび
との守備兵のいる所である。あなたはその所へ行って、町にはいる時、
立琴、手鼓、笛、琴を執る人々を先に行かせて、預言しながら高き所か
ら降りてくる一群の預言者に会うでしょう。六その時、主の霊があなたの
上にもはげしく下って、あなたは彼らと一緒に預言し、変って新しい人
となるでしょう。七これらのしるしが、あなたの身に起ったならば、あなた
は手当たりしだいになんでもしなさい。神があなたと一緒におられるから

です。八あなたはわたしに先立ってギルガルに下らなければならない。わ
たしはあなたのもとに下っていって、燔祭を供え、酬恩祭をささげるで
しょう。わたしがあなたのもとに行って、あなたのしなければならない事
をあなたに示すまで、七日のあいだ待たなければならない」。
九サウルが背をかえしてサムエルを離れたとき、神は彼に新しい心を
与えられた。これらのしるしは皆その日に起った。一〇彼らはギベアにき
た時、預言者の一群に出会った。そして神の霊が、はげしくサウルの上に
下り、彼は彼らのうちにいて預言した。一一もとからサウルを知っていた
人々はみな、サウルが預言者たちと共に預言するのを見て互に言った、「キ
シの子に何事が起ったのか。サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」。
一二その所のひとりの者が答えた、「彼らの父はだれなのか」。それで「サ
ウルもまた預言者たちのうちにいるのか」ということわざとなった。

一三サウルは預言することを終えて、高き所へ行った。
一四サウルのおじが、サウルとそのしもべとに言った、「あなたがたは、ど
こへ行ったのか」。サウルは言った、「ろばを捜しにいったのですが、どこ
にもいないので、サムエルのもとに行きました」。一五サウルのおじは言っ
た、「サムエルが、どんなことを言ったか、どうぞ話してください」。一六サ
ウルはおじに言った、「ろばが見つかったと、はっきり、わたしたちに言い
ました」。しかしサムエルが言った王国のことについて、おじには何も告げ
なかった。
一七さて、サムエルは民をミヅパで主の前に集め、一八イスラエルの人々
に言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『わたしはイスラエル
をエジプトから導き出し、あなたがたをエジプトびとの手、およびすべて
あなたがたをしえたげる王国の手から救い出した』。一九しかしあなたがた

は、きよう、あなたがたをその悩みと苦しみの中から救われるあなたがた
の神を捨て、その上、『いいえ、われわれの上に王を立てよ』と言う。それ
ゆえ今、あなたがたは、部族にしたがい、また氏族にしたがって、主の前
に出なさい」。
二〇こうしてサムエルがイスラエルのすべての部族を呼び寄せた時、ベニ
ヤミンの部族が、くじに当った。二一またベニヤミンの部族をその氏族にし
たがって呼び寄せた時、マテリの氏族が、くじに当り、マテリの氏族を人
ごとに呼び寄せた時、キシの子サウルが、くじに当った。しかし人々が彼
を捜した時、見つからなかった。二二そこでまた主に「その人はここにきて
いるのですか」と問うと、主は言われた、「彼は荷物の間に隠れている」。
二三人々は走って行って、彼をそこから連れてきた。彼は民の中に立った
が、肩から上は、民のどの人よりも高かった。二四サムエルはすべての民

に言った、「主が選ばれた人をごらんなさい。民のうちに彼のような人は
ないではありませんか」。民はみな「王万歳」と叫んだ。
二五その時サムエルは王国のならわしを民に語り、それを書にしるして、
主の前におさめた。こうしてサムエルはすべての民をそれぞれ家に帰らせ
た。二六サウルもまたギベアにある彼の家に帰った。そして神にその心を
動かされた勇士たちも彼と共に行った。二七しかし、よこしまな人々は「こ
の男がどうしてわれわれを救うことができよう」と言って、彼を軽んじ、
贈り物をしなかった。しかしサウルは黙っていた。

第一一章一アンモンびとナハシは上ってきて、ヤベシ・ギレアデを攻め
囲んだ。ヤベシの人々はナハシに言った、「われわれと契約を結びなさい。
そうすればわれわれはあなたに仕えます」。二しかしアンモンびとナハシは
彼らに言った、「次の条件であなたがたと契約を結ぼう。すなわち、わた

しが、あなたがたすべての右の目をえぐり取って、全イスラエルをはずかし
めるということだ」。三ヤベシの長老たちは彼に言った、「われわれに七日
の猶予を与え、イスラエルの全領土に使者を送ることを許してください。
そしてもしわれわれを救う者がない時は降伏します」。四こうして使者が、
サウルのギベアにきて、この事を民の耳に告げたので、民はみな声をあげ
て泣いた。
五その時サウルは畑から牛のあとについてきた。そしてサウルは言っ
た、「民が泣いているのは、どうしたのか」。人々は彼にヤベシの人々の事
を告げた。六サウルがこの言葉を聞いた時、神の霊が激しく彼の上に臨ん
だので、彼の怒りははなはだしく燃えた。七彼は一くびきの牛をとり、それ
を切り裂き、使者の手によってイスラエルの全領土に送って言わせた、「だ
れであってもサウルとサムエルとに従って出ない者は、その牛がこのよう

にされるであろう」。民は主を恐れて、ひとりのように出てきた。八サウル
はベゼクでそれを数えたが、イスラエルの人々は三十万、ユダの人々は三
万であった。九そして人々は、きた使者たちに言った、「ヤベシ・ギレアデ
の人にこう言いなさい、『あす、日の暑くなるころ、あなたがたは救を得
るであろう』と」。使者が帰って、ヤベシの人々に告げたので、彼らは喜
んだ。一〇そこでヤベシの人々は言った、「あす、われわれは降伏します。
なんでも、あなたがたが良いと思うことを、われわれにしてください」。一
一明くる日、サウルは民を三つの部隊に分け、あかつきに敵の陣営に攻め
入り、日の暑くなるころまで、アンモンびとを殺した。生き残った者はち
りぢりになって、ふたり一緒にいるものはなかった。

一二その時、民はサムエルに言った、「さきに、『サウルがどうしてわれわ
れを治めることができようか』と言ったものはだれでしょうか。その人々

を引き出してください。われわれはその人々を殺します」。一三しかしサウ
ルは言った、「主はきょう、イスラエルに救を施されたのですから、きょ
うは人を殺してはなりません」。一四そこでサムエルは民に言った、「さあ、
ギルガルへ行って、あそこで王国を一新しよう」。一五こうして民はみなギ
ルガルへ行って、その所で主の前にサウルを王とし、酬恩祭を主の前に
ささげ、サウルとイスラエルの人々は皆、その所で大いに祝った。
第一二章一サムエルはイスラエルの人々に言った、「見よ、わたしは、あ
なたがたの言葉に聞き従って、あなたがたの上に王を立てた。二見よ王は
今、あなたがたの前に歩む。わたしは年老いて髪は白くなった。わたしの
子らもあなたがたと共にいる。わたしは若い時から、きょうまで、あなた
がたの前に歩んだ。三わたしはここにいる。主の前と、その油そそがれた
者の前に、わたしを訴えよ。わたしが、だれの牛を取ったか。だれのろば

を取ったか。だれを欺いたか。だれをしえたげたか。だれの手から、まい
ないを取って、自分の目をくらましたか。もしそのようなことがあれば、わ
たしはそれを、あなたがたに償おう」。四彼らは言った、「あなたは、われ
われを欺いたことも、しえたげたこともありません。また人の手から何も
取ったことはありません」。五サムエルは彼らに言った、「あなたがたが、わ
たしの手のうちに、なんの不正をも見いださないことを、主はあなたがた
にあかしされる。その油そそがれた者も、きょうそれをあかしする」。彼
らは言った、「あかしされます」。

六サムエルは民に言った、「モーセとアロンを立てて、あなたがたの先祖
をエジプトの地から導き出された主が証人です。七それゆえ、あなたが
たは今、立ちなさい。わたしは主が、あなたがたとあなたがたの先祖のた
めに行われたすべての救のわざについて、主の前に、あなたがたと論じ

よう。八ヤコブがエジプトに行って、エジプトびとが、彼らを、しえたげた
時、あなたがたの先祖は主に呼ばわったので、主はモーセとアロンをつか
わされた。そこで彼らは、あなたがたの先祖をエジプトから導き出して、
この所に住まわせた。九しかし、彼らがその神、主を忘れたので、主は
彼らをハゾルの王ヤビンの軍の長シセラの手に渡し、またペリシテびと
の手とモアブの王の手にわたされた。そこで彼らがイスラエルを攻めたの
で、一〇民は主に呼ばわって言った、『われわれは主を捨て、バアルとアシ
タロテに仕えて、罪を犯しました。今、われわれを敵の手から救い出して
ください。われわれはあなたに仕えます』。一一主はエルバアルとバラクと
エフタとサムエルをつかわして、あなたがたを周囲の敵の手から救い出さ
れたので、あなたがたは安らかに住むことができた。一二ところが、アンモ
ンびとの王ナハシが攻めてくるのを見たとき、あなたがたの神、主があな

たがたの王であるのに、あなたがたはわたしに、『いいえ、われわれを治め
る王がなければならない』と言った。一三それゆえ、今あなたがたの選ん
だ王、あなたがたが求めた王を見なさい。主はあなたがたの上に王を立て
られた。一四もし、あなたがたが主を恐れ、主に仕えて、その声に聞き従
い、主の戒めにそむかず、あなたがたも、あなたがたを治める王も共に、
あなたがたの神、主に従うならば、それで良い。一五しかし、もしあなた
がたが主の声に聞き従わず、主の戒めにそむくならば、主の手は、あな
たがたとあなたがたの王を攻めるであろう。一六それゆえ、今、あなたがた
は立って、主が、あなたがたの目の前で行われる、この大いなる事を見
なさい。一七きょうは小麦刈の時ではないか。わたしは主に呼ばわるであ
ろう。そのとき主は雷と雨を下して、あなたがたが王を求めて、主の前
に犯した罪の大いなることを見させ、また知らせられるであろう」。一八そ

してサムエルが主に呼ばわったので、主はその日、雷と雨を下された。
民は皆ひじょうに主とサムエルとを恐れた。
一九民はみなサムエルに言った、「しもべらのために、あなたの神、主に
祈って、われわれの死なないようにしてください。われわれは、もろもろ
の罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」。二〇サムエルは民
に言った、「恐れることはない。あなたがたは、このすべての悪をおこなっ
た。しかし主に従うことをやめず、心をつくして主に仕えなさい。二一
むなしい物に迷って行ってはならない。それは、あなたがたを助けること
も救うこともできないむなしいものだからである。二二主は、その大いな
る名のゆえに、その民を捨てられないであろう。主が、あなたがたを自分
の民とすることを良しとされるからである。二三また、わたしは、あなたが
たのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けっしてしないであろ

う。わたしはまた良い、正しい道を、あなたがたに教えるであろう。二四あ
なたがたは、ただ主を恐れ、心をつくして、誠実に主に仕えなければな
らない。そして主がどんなに大きいことをあなたがたのためにされたかを
考えなければならない。二五しかし、あなたがたが、なおも悪を行うな
らば、あなたがたも、あなたがたの王も、共に滅ぼされるであろう」。

第一三章一サウルは三十歳で王の位につき、二年イスラエルを治めた。
二さてサウルはイスラエルびと三千を選んだ。二千はサウルと共にミク
マシ、およびベテルの山地におり、一千はヨナタンと共にベニヤミンのギ
ベアにいた。サウルはその他の民を、おのおの、その天幕に帰らせた。三
ヨナタンは、ゲバにあるペリシテびとの守備兵を敗った。ペリシテびとは
そのことを聞いた。そこで、サウルは国中に、あまねく角笛を吹きならし
て言わせた、「ヘブルびとよ、聞け」。四イスラエルの人は皆、サウルがペ

リシテびととの守備兵を敗ったこと、そしてイスラエルがペリシテびとに憎
まれるようになったことを聞いた。こうして民は召されて、ギルガルのサ
ウルのもとに集まった。
五ペリシテびとはイスラエルと戦うために集まった。戦車三千、騎兵六
千、民は浜べの砂のように多かった。彼らは上ってきて、ベテアベンの東
のミクマシに陣を張った。六イスラエルびとは、ひどく圧迫され、味方が
危くなったのを見て、ほら穴に、縦穴に、岩に、墓に、ため池に身を隠
した。七また、あるヘブルびとはヨルダンを渡って、ガドとギレアデの地へ
行った。しかしサウルはなおギルガルにいて、民はみな、ふるえながら彼
に従った。
八サウルは、サムエルが定めたように、七日のあいだ待ったが、サムエ
ルがギルガルにこなかったので、民は彼を離れて散って行った。九そこで

サウルは言った、「燔祭と酬恩祭をわたしの所に持ってきなさい」。こう
して彼は燔祭をささげた。
一〇その燔祭をささげ終ると、サムエルがきた。
サウルはあいさつをしようと、彼を迎えに出た。
一一その時サムエルは言っ
た、「あなたは何をしたのですか」。サウルは言った、「民はわたしを離れて
散って行き、あなたは定まった日のうちにこられないのに、ペリシテびとが
ミクマシに集まったのを見たので、
一二わたしは、ペリシテびとが今にも、
ギルガルに下ってきて、わたしを襲うかも知れないのに、わたしはまだ主の
恵みを求めることをしていないと思い、やむを得ず燔祭をささげました」。
一三サムエルはサウルに言った、「あなたは愚かなことをした。あなたは、あ
なたの神、主の命じられた命令を守らなかった。もし守ったならば、主は
今あなたの王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう。
一四しかし
今は、あなたの王国は続かないであろう。主は自分の心にかなう人を求

めて、その人に民の君となることを命じられた。あなたが主の命じられた
事を守らなかったからである」。一五こうしてサムエルは立って、ギルガル
からベニヤミンのギベアに上っていった。
サウルは共にいる民を数えてみたが、おおよそ六百人あった。一六サウ
ルとその子ヨナタン、ならびに、共にいる民は、ベニヤミンのゲバにおり、
ペリシテびとはミクマシに陣を張っていた。一七そしてペリシテびとの陣
から三つの部隊にわかれた略奪隊が出てきて、一部隊はオフラの方に向
かって、シュアルの地に行き、一八一部隊はベテホロンの方に向かい、一
部隊は荒野の方のゼボイムの谷を見おろす境の方に向かった。
一九そのころ、イスラエルの地にはどこにも鉄工がいなかった。ペリシテ
びとが「ヘブルびとはつるぎも、やりも造ってはならない」と言ったから
である。二〇ただしイスラエルの人は皆、そのすきざき、くわ、おの、かま

に刃をつけるときは、ペリシテびとの所へ下って行った。二一すきざきと、
くわのための料金は一ピムであり、おのに刃をつけるのと、とげのあるむ
ちを直すのは三分の一シケルであった。二二それでこの戦いの日には、サ
ウルおよびヨナタンと共にいた民の手には、つるぎもやりもなく、ただサ
ウルとその子ヨナタンとがそれを持っていた。二三ペリシテびとの先陣は
ミクマシの渡りに進み出た。

第一四章一ある日、サウルの子ヨナタンは、その武器を執る若者に「さ
あ、われわれは向こう側の、ペリシテびとの先陣へ渡って行こう」と言っ
た。しかしヨナタンは父には告げなかった。二サウルはギベアのはずれで、
ミグロンにある、ざくろの木の下にとどまっていたが、共にいた民はおお
よそ六百人であった。三またアヒヤはエポデを身に着けて共にいた。アヒ
ヤはアヒトブの子、アヒトブはイカボデの兄弟、イカボデはピネハスの子、

ピネハスはシロにおいて主の祭司であったエリの子である。民はヨナタン
が出かけることを知らなかった。四ヨナタンがペリシテびとの先陣に渡っ
て行こうとする渡りには、一方に険しい岩があり、他方にも険しい岩があ
り、一方の名をボゼツといい、他方の名をセネといった。五岩の一つはミ
クマシの前にあって北にあり、一つはゲバの前にあって南にあった。
六ヨナタンはその武器を執る若者に言った、「さあ、われわれは、この割礼
なき者どもの先陣へ渡って行こう。主がわれわれのために何か行われる
であろう。多くの人をもって救うのも、少ない人をもって救うのも、主に
とっては、なんの妨げもないからである」。七武器を執る者は彼に言った、
「あなたの望みどおりにしなさい。わたしは一緒にいます。わたしはあなた
と同じ心です」。八ヨナタンはまた言った、「われわれは、あの人々の所
に渡っていって、彼らに身を現そう。九そして、もし彼らがわれわれに、

『こちらから行くまで待て』と言うならば、われわれはその場にとどまり、彼
らの所に上っていかないであろう。一〇しかし、もし彼らが『われわれの
ところへ上ってこい』と言うならば、われわれは上って行こう。主が彼ら
をわれわれの手に渡されるからである。これをもってしるしとしよう」。一
一こうしてふたりはペリシテびとの先陣に、その身を現したので、ペリシ
テびとは言った、「見よ、ヘブルびとが、隠れていた穴から出てくる」。一二
先陣の人々はヨナタンと、その武器を執る者に叫んで言った、「われわれの
ところに上ってこい。目に、もの見せてくれよう」。ヨナタンは、その武器
を執る者に言った、「わたしのあとについて上ってきなさい。主は彼らをイ
スラエルの手に渡されたのだ」。一三そしてヨナタンはよじ登り、武器を執
る者もそのあとについて登った。ペリシテびとはヨナタンの前に倒れた。
武器を執る者も、あとについていってペリシテびとを殺した。一四ヨナタン

とその武器を執る者とが、手始めに殺したものは、おおよそ二十人であっ
て、このことは一くびきの牛の耕す畑のおおよそ半分の内で行われた。
一五そして陣営にいる者、野にいるもの、およびすべての民は恐怖に襲わ
れ、先陣のもの、および略奪隊までも、恐れおののいた。また地は震い
動き、非常に大きな恐怖となった。

一六ベニヤミンのギベアにいたサウルの番兵たちが見ると、ペリシテび
との群衆はくずれて右往左往していた。一七その時サウルは、共にいる民
に言った、「人数を調べて、われわれのうちのだれが出て行ったかを見よ」。
人数を調べたところ、ヨナタンとその武器を執る者とがそこにいなかった。
一八サウルはアヒヤに言った、「エポデをここに持ってきなさい」。その時、
アヒヤはイスラエルの人々の前でエポデを身に着けていたからである。一
九サウルが祭司に語っている間にも、ペリシテびとの陣営の騒ぎはますま

す大きくなったので、サウルは祭司に言った、「手を引きなさい」。二〇こう
してサウルおよび共にいる民は皆、集まって戦いに出た。ペリシテびと
はつるぎをもって同志打ちしたので、非常に大きな混乱となった。二一ま
た先にペリシテびとと共にいて、彼らと共に陣営にきていたヘブルびとた
ちも、翻ってサウルおよびヨナタンと共にいるイスラエルびとにつくよ
うになった。二二またエフライムの山地に身を隠していたイスラエルびとた
ちも皆、ペリシテびとが逃げると聞いて、彼らもまた戦いに出て、それを
追撃した。二三こうして主はその日イスラエルを救われた。そして戦いは
ベテアベンに移った。

二四しかしその日イスラエルの人々は苦しんだ。これはサウルが民に誓
わせて「夕方まで、わたしが敵にあだを返すまで、食物を食べる者は、の
ろわれる」と言ったからである。それゆえ民のうちには、ひとりも食物を

口にしたものはなかった。二五ところで、民がみな森の中にはいると、地
のおもてに蜜があった。二六民は森にはいった時、蜜のしたたっているの
を見た。しかしだれもそれを手に取って口につけるものがなかった。民が
誓いを恐れたからである。二七しかしヨナタンは、父が民に誓わせたこと
を聞かなかったので、手を伸べてつえの先を蜜ばちの巣に浸し、手に取っ
て口につけた。すると彼は目がはっきりした。二八その時、民のひとりが
言った、「あなたの父は、かたく民に誓わせて『きょう、食物を食べる者
は、のろわれる』と言われました。それで民は疲れているのです」。二九ヨ
ナタンは言った、「父は国を悩ませました。ごらんなさい。この蜜をすこし
なめたばかりで、わたしの目がこんなに、はっきりしたではありませんか。
三〇まして、民がきょう敵からぶんどった物を、じゅうぶん食べていたな
らば、さらに多くのペリシテびとを殺していたでしょうに」。

三一その日イスラエルびとは、ペリシテびとを撃って、ミクマシからアヤ
ロンに及んだ。そして民は、ひじょうに疲れたので、三二ぶんどり物に、は
せかかって、羊、牛、子牛を取って、それを地の上に殺し、血のままで
それを食べた。三三人々はサウルに言った、「民は血のままで食べて、主に
罪を犯しています」。サウルは言った、「あなたがたはそむいている。この
所へ、わたしのもとに大きな石をころがしてきなさい」。三四サウルはま
た言った、「あなたがたは分れて、民の中にはいって、彼らに言いなさい、
『おのおの牛または、羊を引いてきてここでほふって食べなさい。血のま
まで食べて、主に罪を犯してはならない』」。そこで民は皆、その夜、おの
おの牛を引いてきて、それを、その所でほふった。三五こうしてサウルは
主に一つの祭壇を築いた。これはサウルが主のために築いた最初の祭壇
である。

三六サウルは言った、「われわれは夜のうちにペリシテびとを追って下り、
夜明けまで彼らをかすめて、ひとりも残らぬようにしよう」。人々は言っ
た、「良いと思われることを、なんでもしてください」。しかし祭司は言っ
た、「われわれは、ここで、神に尋ねましょう」。三七そこでサウルは神に
伺った、「わたしはペリシテびとを追って下るべきでしょうか。あなたは
彼らをイスラエルの手に渡されるでしょうか」。しかし神はその日は答え
られなかった。三八そこでサウルは言った、「民の長たちよ、みなこの所
に近よりなさい。あなたがたは、よく見きわめて、きょうのこの罪が起き
たわけを知らなければならない。三九イスラエルを救う主は生きておられ
る。たとい、それがわたしの子ヨナタンであっても、必ず死ななければな
らない」。しかし民のうちにはひとりも、これに答えるものがいなかった。
四〇サウルはイスラエルのすべての人に言った、「あなたがたは向こう側に

いなさい。わたしとわたしの子ヨナタンはこちら側にいましょう」。民はサ
ウルに言った、「良いと思われることをしてください」。四一そこでサウルは
言った、「イスラエルの神、主よ、あなたはきょう、なにゆえしもべに答え
られなかったのですか。もしこの罪がわたしにあるか、またはわたしの子
ヨナタンにあるのでしたら、イスラエルの神、主よ、ウリムをお与えくだ
さい。しかし、もしこの罪が、あなたの民イスラエルにあるのでしたらト
ンミムをお与えください」。こうしてヨナタンとサウルとが、くじに当り、
民はのがれた。四二サウルは言った、「わたしか、わたしの子ヨナタンかを
決めるために、くじを引きなさい」。くじはヨナタンに当った。
四三サウルはヨナタンに言った、「あなたがしたことを、わたしに言いな
さい」。ヨナタンは言った、「わたしは確かに手にあったつえの先に少しば
かりの蜜をつけて、なめました。わたしはここにいます。死は覚悟してい

ます」。四四サウルは言った、「神がわたしをいくえにも罰してくださるよう
に。ヨナタンよ、あなたは必ず死ななければならない」。四五その時、民
はサウルに言った、「イスラエルのうちにこの大いなる勝利をもたらした
ヨナタンが死ななければならないのですか。決してそうではありません。
主は生きておられます。ヨナタンの髪の毛一すじも地に落してはなりませ
ん。彼は神と共にきょう働いたのです」。こうして民はヨナタンを救った
ので彼は死を免れた。四六サウルはペリシテびとを追うことをやめて引き
あげ、ペリシテびとはその国へ帰った。
四七サウルはイスラエルの王となって、周囲のもろもろの敵、すなわち
モアブ、アンモンの人々、エドム、ゾバの王たちおよびペリシテびとと戦
い、すべて向かう所で勝利を得た。四八サウルは勇ましく働き、アマレ
クびとを撃って、イスラエルびとを略奪者の手から救い出した。

四九さて、サウルのむすこたちはヨナタン、エスイ、およびマルキシュア
である。ふたりの娘の名は次のとおりである。すなわち姉の名はメラブ、
妹の名はミカルである。五〇サウルの妻の名はアヒノアムといい、アヒ
マアズの娘である。また軍の長の名はアブネルといい、サウルのおじネ
ルの子である。五一サウルの父キシとアブネルの父ネルとは、アビエルの子
である。
五二サウルの一生の間、ペリシテびとと激しい戦いがあった。サウル
は力の強い人や勇気のある人を見るごとに、それを召しかかえた。
第一五章一さて、サムエルはサウルに言った、「主は、わたしをつかわし、
あなたに油をそそいで、その民イスラエルの王とされました。それゆえ、
今、主の言葉を聞きなさい。二万軍の主は、こう仰せられる、『わたしは、
アマレクがイスラエルにした事、すなわちイスラエルがエジプトから上って
きた時、その途中で敵対したことについて彼らを罰するであろう。三今、

行ってアマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼしつくせ。彼らをゆる
すな。男も女も、幼な子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだも、ろばも
皆、殺せ』」。
四サウルは民を呼び集め、テライムで人数を調べたところ、歩兵は二十
万、ユダの人は一万であった。
五そしてサウルはアマレクの町へ行って、谷
に兵を伏せた。
六サウルはケニびとに言った、「さあ、あなたがたはアマレ
クびとを離れて、下っていってください。彼らと一緒にあなたがたを滅ぼ
すようなことがあってはならない。あなたがたは、イスラエルの人々がエ
ジプトから上ってきた時、親切にしてくれたのですから」。そこでケニび
とはアマレクびとを離れて行った。
七サウルはアマレクびとを撃って、ハ
ビラからエジプトの東にあるシュルにまで及んだ。
八そしてアマレクびと
の王アガグをいけどり、つるぎをもってその民をことごとく滅ぼした。
九

しかしサウルと民はアガグをゆるし、また羊と牛の最も良いもの、肥え
たものならびに小羊と、すべての良いものを残し、それらを滅ぼし尽すこ
とを好まず、ただ値うちのない、つまらない物を滅ぼし尽した。
一〇その時、主の言葉がサムエルに臨んだ、一一「わたしはサウルを王と
したことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行
わなかったからである」。サムエルは怒って、夜通し、主に呼ばわった。一
二そして朝サウルに会うため、早く起きたが、サムエルに告げる人があっ
た、「サウルはカルメルにきて、自分のために戦勝記念碑を建て、身をか
えして進み、ギルガルへ下って行きました」。一三サムエルがサウルのもと
へ来ると、サウルは彼に言った、「どうぞ、主があなたを祝福されますよ
うに。わたしは主の言葉を実行しました」。一四サムエルは言った、「それな
らば、わたしの耳にはいる、この羊の声と、わたしの聞く牛の声は、いっ

たい、なんですか」。一五サウルは言った、「人々がアマレクびとの所から
引いてきたのです。民は、あなたの神、主にささげるために、羊と牛の
最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが滅ぼし尽しまし
た」。一六サムエルはサウルに言った、「おやめなさい。昨夜、主がわたしに
言われたことを、あなたに告げましょう」。サウルは彼に言った、「言って
ください」。
一七サムエルは言った、「たとい、自分では小さいと思っても、あなたは
イスラエルの諸部族の長ではありませんか。主はあなたに油を注いでイ
スラエルの王とされた。一八そして主はあなたに使命を授け、つかわして言
われた、『行って、罪びとなるアマレクびとを滅ぼし尽せ。彼らを皆殺し
にするまで戦え』。一九それであるのに、どうしてあなたは主の声に聞き
従わないで、ぶんどり物にとびかかり、主の目の前に悪をおこなったので

すか」。二〇サウルはサムエルに言った、「わたしは主の声に聞き従い、主
がつかわされた使命を帯びて行き、アマレクの王アガグを連れてきて、ア
マレクびとを滅ぼし尽しました。二一しかし民は滅ぼし尽すべきもののう
ち最も良いものを、ギルガルで、あなたの神、主にささげるため、ぶんど
り物のうちから羊と牛を取りました」。二二サムエルは言った、

「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、
燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。
見よ、従うことは犠牲にまさり、
聞くことは雄羊の脂肪にまさる。
二三そむくことは占いの罪に等しく、
強情は偶像礼拝の罪に等しいからである。
あなたが主のことばを捨てたので、

主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた」。
二四サウルはサムエルに言った、「わたしは主の命令とあなたの言葉にそ
むいて罪を犯しました。民を恐れて、その声に聞き従ったからです。二
五どうぞ、今わたしの罪をゆるし、わたしと一緒に帰って、主を拝ませて
ください」。二六サムエルはサウルに言った、「あなたと一緒に帰りません。
あなたが主の言葉を捨てたので、主もあなたを捨てて、イスラエルの王位
から退けられたからです」。二七こうしてサムエルが去ろうとして身をかえ
した時、サウルがサムエルの上着のすそを捕えたので、それは裂けた。二
八サムエルは彼に言った、「主はきょう、あなたからイスラエルの王国を裂
き、もっと良いあなたの隣人に与えられた。二九またイスラエルの栄光は
偽ることもなく、悔いることもない。彼は人ではないから悔いることはな
い」。三〇サウルは言った、「わたしは罪を犯しましたが、どうぞ、民の長老

たち、およびイスラエルの前で、わたしを尊び、わたしと一緒に帰って、
あなたの神、主を拝ませてください」。三一そこでサムエルはサウルのあと
について帰った。そしてサウルは主を拝んだ。
三二時にサムエルは言った、「わたしの所にアマレクびとの王アガグを
引いてきなさい」。アガグはうれしそうにサムエルの所にきた。アガグは
「死の苦しみはきっと過ぎ去ったのだ」と思った。三三サムエルは言った、
「あなたのつるぎは多くの女に子供を失わせた。そのようにあなたの母
も女のうちで最も無惨に子供を失う者となるであろう」。サムエルはギ
ルガルで主の前に、アガグを寸断した。
三四そしてサムエルはラマに行き、サウルは故郷のギベアに上って、その
家に帰った。三五サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルを見なかった。しか
しサムエルはサウルのために悲しんだ。また主はサウルをイスラエルの王

としたことを悔いられた。
第一六章 一さて主はサムエルに言われた、「わたしがすでにサウルを捨て
て、イスラエルの王位から退けたのに、あなたはいつまで彼のために悲し
むのか。角に油を満たし、それをもって行きなさい。あなたをベツレヘム
びとエッサイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとり
の王を捜し得たからである」。二サムエルは言った、「どうしてわたしは行
くことができましょう。サウルがそれを聞けば、わたしを殺すでしょう」。
主は言われた、「一頭の子牛を引いていって、『主に犠牲をささげるために
きました』と言いなさい。三そしてエッサイを犠牲の場所に呼びなさい。そ
の時わたしはあなたのすることを示します。わたしがあなたに告げる人に
油を注がなければならない」。四サムエルは主が命じられたようにして、ベ
ツレヘムへ行った。町の長老たちは、恐れながら出て、彼を迎え、「穏や

かな事のためにこられたのですか」と言った。五サムエルは言った、「穏や
かな事のためです。わたしは主に犠牲をささげるためにきました。身をき
よめて、犠牲の場所にわたしと共にきてください」。そしてサムエルはエッ
サイとその子たちをきよめて犠牲の場に招いた。
六彼らがきた時、サムエルはエリアブを見て、「自分の前にいるこの人こ
そ、主が油をそそがれる人だ」と思った。七しかし主はサムエルに言わ
れた、「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨
てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は
心を見る」。八そこでエッサイはアビナダブを呼んでサムエルの前を通ら
せた。サムエルは言った、「主が選ばれたのはこの人でもない」。九エッサ
イはシャンマを通らせたが、サムエルは言った、「主が選ばれたのはこの
人でもない」。一〇エッサイは七人の子にサムエルの前を通らせたが、サム

エルはエッサイに言った、「主が選ばれたのはこの人たちではない」。一一
サムエルはエッサイに言った、「あなたのむすこたちは皆ここにいますか」。
彼は言った、「まだ末の子が残っています。羊を飼っています」。サムエ
ルはエッサイに言った、「人をやって彼を連れてきなさい。彼がここに来る
まで、われわれは食卓につきません」。一二そこで人をやって彼をつれて
きた。彼は血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人であった。主は
言われた、「立ってこれに油をそそげ。これがその人である」。一三サムエ
ルは油の角をとって、その兄弟たちの中で、彼に油をそそいだ。この
日からのち、主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ。そしてサムエルは
立ってラマへ行った。
一四さて主の霊はサウルを離れ、主から来る悪霊が彼を悩ました。一五
サウルの家来たちは彼に言った、「ごらんなさい。神から来る悪霊があなた

を悩ましているのです。一六どうぞ、われわれの主君が、あなたの前に仕え
ている家来たちに命じて、じょうずに琴をひく者ひとりを捜させてくださ
い。神から来る悪霊があなたに臨む時、彼が手で琴をひくならば、あなた
は良くなられるでしょう」。一七そこでサウルは家来たちに言った、「じょう
ずに琴をひく者を捜して、わたしのもとに連れてきなさい」。一八その時、
ひとりの若者がこたえた、「わたしはベツレヘムびとエッサイの子を見まし
たが、琴がじょうずで、勇気もあり、いくさびとで、弁舌にひいで、姿の
美しい人です。また主が彼と共におられます」。一九そこでサウルはエッ
サイのもとに使者をつかわして言った、「羊を飼っているあなたの子ダビ
デをわたしのもとによこしなさい」。二〇エッサイは、ろばにパンを負わせ、
皮袋にいれたぶどう酒一袋と、やぎの子とを取って、その子ダビデの手
によってサウルに送った。二一ダビデはサウルのもとにきて、彼に仕えた。

サウルはひじょうにこれを愛して、その武器を執る者とした。二二またサウ
ルは人をつかわしてエッサイに言った、「ダビデをわたしに仕えさせてくだ
さい。彼はわたしの心にかないました」。二三神から出る悪霊がサウルに
臨む時、ダビデは琴をとり、手でそれをひくと、サウルは気が静まり、良
くなって、悪霊は彼を離れた。

第一七章一さてペリシテびとは、軍を集めて戦おうとし、ユダに属する
ソコに集まって、ソコとアゼカの間にあるエペス・ダミムに陣取った。二
サウルとイスラエルの人々は集まってエラの谷に陣取り、ペリシテびとに
対して戦列をしいた。三ペリシテびとは向こうの山の上に立ち、イスラエ
ルはこちらの山の上に立った。その間に谷があった。四時に、ペリシテび
との陣から、ガテのゴリアテという名の、戦いをいどむ者が出てきた。身
のたけは六キュビト半。五頭には青銅のかぶとを頂き、身には、うろこ

とじのよろいを着ていた。そのよろいは青銅で重さ五千シケル。六また足
には青銅のすね当を着け、肩には青銅の投げやりを背負っていた。七手に
持っているやりの柄は、機の巻棒のようであり、やりの穂の鉄は六百シケ
ルであった。彼の前には、盾を執る者が進んだ。八ゴリアテは立ってイス
ラエルの戦列に向かって叫んだ、「なにゆえ戦列をつくって出てきたのか。
わたしはペリシテびと、おまえたちはサウルの家来ではないか。おまえた
ちから、ひとりを選んで、わたしのところへ下ってこさせよ。九もしその
人が戦ってわたしを殺すことができたら、われわれはおまえたちの家来と
なる。しかしわたしが勝ってその人を殺したら、おまえたちは、われわれ
の家来になって仕えなければならない」。一〇またこのペリシテびとは言っ
た、「わたしは、きょうイスラエルの戦列にいどむ。ひとりを出して、わた
しと戦わせよ」。一一サウルとイスラエルのすべての人は、ペリシテびと

のこの言葉を聞いて驚き、ひじょうに恐れた。
一二さて、ダビデはユダのベツレヘムにいたエフラタびとエッサイとい
う名の人の子で、この人に八人の子があったが、サウルの世には年が進ん
で、すでに年老いていた。一三エッサイの子らのうち、上の三人はサウルに
従って戦争に出た。その戦いに出た三人の子の名は、長子をエリアブと
いい、次をアビナダブといい、第三をシャンマと言った。一四ダビデは末
の子であって、兄三人はサウルにしたがった。一五ダビデはサウルの所か
ら行ったりきたりして、ベツレヘムで父の羊を飼っていた。一六あのペリ
シテびとは四十日の間、朝夕出てきて、彼らの前に立った。
一七時に、エッサイはその子ダビデに言った、「兄たちのため、このいり
麦一エパと、この十個のパンをとって、急いで陣営にいる兄の所へ持っ
ていきなさい。一八またこの十の乾酪を取って、千人の長にもって行き、

兄たちの安否を見とどけて、そのしるしをもらってきなさい」。
一九さてサウルと彼らおよびイスラエルのすべての人は、エラの谷でペ
リシテびとと戦っていた。二〇ダビデは朝はやく起きて、羊を番人に託
し、エッサイが命じたように食料品を携えて行った。彼が陣営に着い
た時、軍勢は、ときの声をあげて戦線に出ようとしていた。二一そしてイ
スラエルとペリシテびととは戦列を敷いて、軍と軍と向き合った。二二ダ
ビデは荷物をおろして、荷物を守る者にあずけ、戦列の方へ走って、兄た
ちの所へ行き、彼らの安否を尋ねた。二三兄たちと語っている時、ペリシ
テびとの戦列から、ガテのペリシテびとで、名をゴリアテという、あの戦
いをいどむ者が上ってきて、前と同じ言葉を言ったので、ダビデはそれを
聞いた。
二四イスラエルのすべての人は、その人を見て、避けて逃げ、ひじょうに

恐れた。二五イスラエルの人々はまた言った、「あなたがたは、あの上って
きた人を見たか。確かにイスラエルにいどむために上ってきたのだ。彼を
殺す人は、王が大いなる富を与えて富ませ、その娘を与え、その父の家
にはイスラエルのうちで税を免れさせるであろう」。二六ダビデはかたわ
らに立っている人々に言った、「このペリシテびとを殺し、イスラエルの恥
をすすぐ人には、どうされるのですか。この割礼なきペリシテびとは何者
なので、生ける神の軍をいどむのか」。二七民は前と同じように、「彼を殺
す人にはこうされるであろう」と答えた。
二八上の兄エリアブはダビデが人々と語るのを聞いて、ダビデに向かい怒
りを発して言った、「なんのために下ってきたのか。野にいるわずかの羊
はだれに託したのか。あなたのわがままと悪い心はわかっている。戦い
を見るために下ってきたのだ」。二九ダビデは言った、「わたしが今、何を

したというのですか。ただひと言いっただけではありませんか」。三〇また
ふり向いて、ほかの人に前のように語ったところ、民はまた同じように答
えた。
三一人々はダビデの語った言葉を聞いて、それをサウルに告げたので、サ
ウルは彼を呼び寄せた。三二ダビデはサウルに言った、「だれも彼のゆえに
気を落してはなりません。しもべが行ってあのペリシテびとと戦いましょ
う」。三三サウルはダビデに言った、「行って、あのペリシテびとと戦うこ
とはできない。あなたは年少だが、彼は若い時からの軍人だからです」。
三四しかしダビデはサウルに言った、「しもべは父の羊を飼っていたのです
が、しし、あるいはくまがきて、群れの小羊を取った時、三五わたしはその
あとを追って、これを撃ち、小羊をその口から救いだしました。その獣
がわたしにとびかかってきた時は、ひげをつかまえて、それを撃ち殺しま

した。三六しもべはすでに、ししと、くまを殺しました。この割礼なきペリ
シテびとも、生ける神の軍をいどんだのですから、あの獣の一頭のように
なるでしょう」。三七ダビデはまた言った、「ししのつめ、くまのつめからわ
たしを救い出された主は、またわたしを、このペリシテびとの手から救い
出されるでしょう」。サウルはダビデに言った、「行きなさい。どうぞ主が
あなたと共におられるように」。三八そしてサウルは自分のいくさ衣をダ
ビデに着せ、青銅のかぶとを、その頭にかぶらせ、また、うろことじのよ
ろいを身にまとわせた。三九ダビデは、いくさ衣の上に、つるぎを帯びて
行こうとしたが、できなかった。それに慣れていなかったからである。そ
こでダビデはサウルに言った、「わたしはこれらのものを着けていくことは
できません。慣れていないからです」。四〇ダビデはそれらを脱ぎすて、手
につえをとり、谷間からなめらかな石五個を選びとって自分の持っている

羊飼の袋に入れ、手に石投げを執って、あのペリシテびとに近づいた。
四一そのペリシテびとは進んできてダビデに近づいた。そのたてを執る者
が彼の前にいた。
四二ペリシテびとは見まわしてダビデを見、これを侮っ
た。まだ若くて血色がよく、姿が美しかったからである。
四三ペリシテ
びとはダビデに言った、「つえを持って、向かってくるが、わたしは犬なの
か」。ペリシテびとは、また神々の名によってダビデをのろった。
四四ペリ
シテびとはダビデに言った、「さあ、向かってこい。おまえの肉を、空の鳥、
野の獣のえじきにしてくれよう」。
四五ダビデはペリシテびとに言った、「お
まえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わ
たしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神
の名によって、おまえに立ち向かう。
四六きょう、主は、おまえをわたしの
手にわたされるであろう。わたしは、おまえを撃って、首をはね、ペリシ

テびとの軍勢の死かばねを、きょう、空の鳥、地の野獣のえじきにし、イ
スラエルに、神がおられることを全地に知らせよう。四七またこの全会衆
も、主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであろ
う。この戦いは主の戦いであって、主がわれわれの手におまえたちを渡
されるからである」。

四八そのペリシテびとが立ち上がり、近づいてきてダビデに立ち向かった
ので、ダビデは急ぎ戦線に走り出て、ペリシテびとに立ち向かった。四九
ダビデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げで投げて、
ペリシテびとの額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつむきに地
に倒れた。

五〇こうしてダビデは石投げと石をもってペリシテびとに勝ち、ペリシ
テびとを撃って、これを殺した。ダビデの手につるぎがなかったので、五

ーダビデは走りよってペリシテびとの上に乗り、そのつるぎを取って、さ
やから抜きはなし、それをもって彼を殺し、その首をはねた。ペリシテの
人々は、その勇士が死んだのを見て逃げた。五二イスラエルとユダの人々
は立ちあがり、ときをあげて、ペリシテびとを追撃し、ガテおよびエクロ
ンの門にまで及んだ。そのためペリシテびとの負傷者は、シャライムから
ガテおよびエクロンに行く道の上に倒れた。五三イスラエルの人々はペリ
シテびとの追撃を終えて帰り、その陣営を略奪した。五四ダビデは、あの
ペリシテびとの首を取ってエルサレムへ持って行ったが、その武器は自分
の天幕に置いた。

五五サウルはダビデがあのペリシテびとに向かって出ていくのを見て、軍
の長アブネルに言った、「アブネルよ、この若者はだれの子か」。アブネル
は言った、「王よ、あなたのいのちにかけて誓います。わたしは知らないの

です」。五六王は言った、「この若者がだれの子か、尋ねてみよ」。五七ダビ
デが、あのペリシテびとを殺して帰ってきた時、アブネルは、ペリシテびと
の首を手に持っている彼を、サウルの前に連れて行った。五八サウルは彼
に言った、「若者よ、あなたはだれの子か」。ダビデは答えた、「あなたのし
もべ、ベツレヘムびとエッサイの子です」。

第一八章 一ダビデがサウルに語り終えた時、ヨナタンの心はダビデの心
に結びつき、ヨナタンは自分の命のようにダビデを愛した。二この日、サ
ウルはダビデを召しかかえて、父の家に帰らせなかった。三ヨナタンとダ
ビデとは契約を結んだ。ヨナタンが自分の命のようにダビデを愛したか
らである。四ヨナタンは自分が着ていた上着を脱いでダビデに与えた。ま
た、そのいくさ衣、およびつるぎも弓も帯も、そのようにした。五ダビデ
はどこでもサウルがつかわす所に出て行って、てがらを立てたので、サウ

ルは彼を兵の隊長とした。それはすべての民の心にかない、またサウル
の家来たちの心にもかなった。
六人々が引き揚げてきた時、すなわちダビデが、かのペリシテびとを殺
して帰った時、女たちはイスラエルの町々から出てきて、手鼓と祝い歌
と三糸の琴をもって、歌いつ舞いつ、サウル王を迎えた。七女たちは踊
りながら互に歌いかわした、

「サウルは千を撃ち殺し、
ダビデは万を撃ち殺した」。

八サウルは、ひじょうに怒り、この言葉に気を悪くして言った、「ダビデに
は万と言い、わたしには千と言う。この上、彼に与えるものは、国のほか
ないではないか」。九サウルは、この日からのちダビデをうかがった。
一〇次の日、神から来る悪霊がサウルにはげしく臨んで、サウルが家の

中で狂いわめいたので、ダビデは、いつものように、手で琴をひいた。そ
の時、サウルの手にやりがあったので、一一サウルは「ダビデを壁に刺し通
そう」と思って、そのやりをふり上げた。しかしダビデは二度身をかわし
てサウルを避けた。

一二主がサウルを離れて、ダビデと共におられたので、サウルはダビデ
を恐れた。一三それゆえサウルは、ダビデを遠ざけて、千人の長としたの
で、ダビデは民の先に立って出入りした。一四またダビデは、すべてのす
ることに、てがらを立てた。主が共におられたからである。一五サウルはダ
ビデが大きなてがらを立てるのを見て彼を恐れたが、一六イスラエルとユ
ダのすべての人はダビデを愛した。彼が民の先に立って出入りしたからで
ある。

一七その時サウルはダビデに言った、「わたしの長女メラブを、あなた

に妻として与えよう。ただ、あなたはわたしのために勇ましく、主の戦
いを戦いなさい」。サウルは「自分の手で彼を殺さないで、ペリシテびと
の手で殺そう」と思ったからである。一八ダビデはサウルに言った、「わた
しは何者なのでしょう。わたしの親族、わたしの父の一族はイスラエルの
うちで何者なのでしょう。そのわたしが、どうして王のむこになることが
できましょう」。一九しかしサウルの娘メラブは、ダビデにとつぐべき時
になって、メホラびとアデリエルに妻として与えられた。
二〇サウルの娘ミカルはダビデを愛した。人々がそれをサウルに告げた
とき、サウルはその事を喜んだ。二一サウルは「ミカルを彼に与えて、彼
を欺く手だてとし、ペリシテびとの手で彼を殺そう」と思ったので、サウ
ルはふたたびダビデに言った、「あなたを、きょう、わたしのむこにします」。
二二そしてサウルは家来たちに命じた、「ひそかにダビデに言いなさい、『王

はあなたが気に入り、王の家来たちも皆あなたを愛しています。それゆえ
王のむこになりなさい』」。二三そこでサウルの家来たちはこの言葉をダビデ
の耳に語ったので、ダビデは言った、「わたしのような貧しく、卑しい者
が、王のむこになることは、あなたがたには、たやすいことと思われます
か」。二四サウルの家来たちはサウルに、「ダビデはこう言った」と告げた。
二五サウルは言った、「あなたがたはダビデにこう言いなさい、『王はなにも
結納を望まれない。ただペリシテびとの陽の皮一百を獲て、王のあだを討
つことを望まれる』」。これはサウルが、ダビデをペリシテびとの手によっ
て倒そうと思ったからである。二六サウルの家来たちが、この言葉をダビ
デに告げた時、ダビデは王のむこになることを良しとした。そして定めた
日がまだこないうちに、二七ダビデは従者をつれて、立って行き、ペリシ
テびと二百人を殺して、その陽の皮を携え帰り、王のむこになるために、

それをことごとく王にささげた。そこでサウルは娘ミカルを彼に妻とし
て与えた。二八しかしサウルは見て、主がダビデと共におられること、ま
たイスラエルのすべての人がダビデを愛するのを知った時、二九サウルは、
ますますダビデを恐れた。こうしてサウルは絶えずダビデに敵した。
三〇さてペリシテびとの君たちが攻めてきたが、ダビデは、彼らが攻めて
くるごとに、サウルのどの家来よりも多くのてがらを立てたので、その名
はひじょうに尊敬された。

第一九章
一サウルはその子ヨナタンおよびすべての家来たちにダビデを
殺すようにと言った。しかしサウルの子ヨナタンは深くダビデを愛してい
た。二ヨナタンはダビデに言った、「父サウルはあなたを殺そうとしていま
す。それゆえあすの朝、気をつけて、わからない場所に身を隠していてく
ださい。三わたしは出て行って、あなたがいる野原で父のかたわらに立ち、

父にあなたのことを話しましょう。そして、何かわたしにわかれば、あなた
に告げましょう」。四ヨナタンは父サウルにダビデのことをほめて言った、
「王よ、どうか家来ダビデに対して罪を犯さないでください。彼は、あなた
に罪を犯さず、また彼のしたことは、あなたのためになることでした。五
彼は命をかけて、あのペリシテびとを殺し、主はイスラエルの人々に大
いなる勝利を与えられたのです。あなたはそれを見て喜ばれました。そ
れであるのに、どうしてゆえなくダビデを殺し、罪なき者の血を流して罪
を犯そうとされるのですか」。六サウルはヨナタンの言葉を聞きいれた。そ
してサウルは誓った、「主は生きておられる。わたしは決して彼を殺さな
い」。七ヨナタンはダビデを呼んでこれらのことをみなダビデに告げた。そ
してヨナタンがダビデをサウルのもとに連れてきたので、ダビデは、もと
のようにサウルの前にいた。

八ところがまた戦争がおこって、ダビデは出てペリシテびとと戦い、大
いに彼らを殺したので、彼らはその前から逃げ去った。九さてサウルが家
にいて手にやりを持ってすわっていた時、主から来る悪霊がサウルに臨ん
だので、ダビデは琴をひいていたが、一〇サウルはそのやりをもってダビデ
を壁に刺し通そうとした。しかし彼はサウルの前に身をかわしたので、や
りは壁につきささった。そしてダビデは逃げ去った。
一一その夜、サウルはダビデの家に使者たちをつかわして見張りをさせ、朝
になって彼を殺させようとした。しかしダビデの妻ミカルはダビデに言っ
た、「もし今夜のうちに、あなたが自分の命を救わないならば、あすは殺
されるでしょう」。一二そしてミカルがダビデを窓からつりおろしたので、
彼は逃げ去った。一三ミカルは一つの像をとって、寝床の上に横たえ、その
頭にやぎの毛の網をかけ、着物をもってそれをおおった。一四サウルはダ

ビデを捕えるため使者たちをつかわしたが、彼女は言った、「あの人は病気
です」。一五そこでサウルは、ダビデを見させようと使者たちをつかわして
言った、「彼を寝床のまま、わたしの所に連れてきなさい。わたしが彼を
殺そう」。一六使者たちがはいって見ると、寝床には像が横たえてあって、
その頭には、やぎの毛の網がかけてあった。一七サウルはミカルに言った、
「あなたはどうして、このようにわたしを欺いて、わたしの敵を逃がした
のか」。ミカルはサウルに答えた、「あの人はわたしに『逃がしてくれ。さ
もないと、おまえを殺す』と言いました」。

一八ダビデは逃げ去り、ラマにいるサムエルのもとへ行って、サウルが
自分にしたすべてのことを彼に告げた。そしてダビデとサムエルは行って
ナヨテに住んだ。一九ある人がサウルに「ダビデはラマのナヨテにいます」
と告げたので、二〇サウルは、ダビデを捕えるために、使者たちをつかわし

た。彼らは預言者の一群が預言していて、サムエルが、そのうちの、かし
らとなって立っているのを見たが、その時、神の霊はサウルの使者たちに
も臨んで、彼らもまた預言した。二一サウルは、このことを聞いて、他の
使者たちをつかわしたが、彼らもまた預言した。サウルは三たび使者たち
をつかわしたが、彼らもまた預言した。二二そこでサウルはみずからラマに
行き、セクの大井戸に着いた時、問うて言った、「サムエルとダビデは、ど
こにおるか」。ひとりの人が答えた、「彼らはラマのナヨテにいます」。二三
そこでサウルはそこからラマのナヨテに行ったが、神の霊はまた彼にも臨
んで、彼はラマのナヨテに着くまで歩きながら預言した。二四そして彼も
また着物を脱いで、同じようにサムエルの前で預言し、一日一夜、裸で倒
れ伏していた。人々が「サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」とい
うのはこのためである。

第二〇章一ダビデはラマのナヨテから逃げてきて、ヨナタンに言った、「わ
たしが何をし、どのような悪いことがあり、あなたの父の前にどんな罪を犯
したので、わたしを殺そうとされるのでしょうか」。二ヨナタンは彼に言っ
た、「決して殺されることはありません。父は事の大小を問わず、わたし
に告げないですることはありません。どうして父がわたしにその事を隠し
ましょう。そのようなことはありません」。三しかしダビデは答えた、「あな
たの父は、わたしがあなたの好意をえていることをよく知っておられます。
それで『ヨナタンが悲しむことのないように、これを知らせないでおこう』
と思っておられるのです。しかし、主は生きておられ、あなたの魂は生
きています。わたしと死との間は、ただ一歩です」。四ヨナタンはダビデ
に言った、「あなたが言われることはなんでもします」。五ダビデはヨナタン
に言った、「あすは、ついたちですから、わたしは王と一緒に食事をしなけ

ればなりません。しかしわたしを行かせて三日目の夕方まで、野原に隠れ
ることを許してください。六もしあなたの父がわたしのことを尋ねられる
ならば、その時、言ってください、『ダビデはふるさとの町ベツレヘムへ急
いで行くことを許してくださいと、しきりにわたしに求めました。そこで
全家の年祭があるからです』。七もし彼が「良し」と言われるなら、しも
べは安全ですが、怒られるなら、わたしに害を加える決心でおられるのを
知ってください。八あなたは、主の前で、しもべと契約を結んでください
ました。それでどうぞしもべにいつくしみを施してください。しかし、も
しわたしに悪いことがあるならば、あなた自らわたしを殺してください。
どうしてあなたの父のもとへわたしを引いていかなければならないでしょ
う」。九ヨナタンは言った、「そのようなことは決してありません。父があ
なたに害を加える決心をしていることがわたしにわかっているならば、わ

たしはそれをあなたに告げないでおきましょうか」。一〇ダビデはヨナタン
に言った、「あなたの父が荒々しくあなたに答えられる時、だれがわたし
に告げるでしょうか」。一一ヨナタンはダビデに言った、「さあ、野原へ出て
いこう」。こうしてふたりは野原へ出て行った。
一二そしてヨナタンはダビデに言った、「イスラエルの神、主が、証人
です。明日か明後日の今ごろ、わたしが父の心を探って、父がダビデ
に対して良いのを見ながら、人をつかわしてあなたに知らせないようなこ
とをするでしょうか。一三しかし、もし父があなたに害を加えようと思っ
ているのに、それをあなたに知らせず、あなたを逃がして、安全に去らせ
ないならば、主よ、どうぞ幾重にも、このヨナタンを罰してください。ど
うぞ主が父と共におられたように、あなたと共におられますように。一四
もしわたしがなお生きながらえているならば、主のいつくしみをわたしに

施し、死を免れさせてください。一五またわたしの家をも、長くあなた
のいつくしみにあずからせてください。主がダビデの敵をことごとく地の
おもてから断ち滅ぼされる時、一六ヨナタンの名をダビデの家から絶やさ
ないでください。どうぞ主がダビデの敵に、あだを返されるように」。一七
そしてヨナタンは重ねてダビデに誓わせた。彼を愛したからである。ヨナ
タンは自分の命のように彼を愛していた。
一八ヨナタンはダビデに言った、「あすはついたちです。あなたの席があ
いているので、どうしたのかと尋ねられるでしょう。一九三日目には、きび
しく尋ねられるでしょうから、先にあなたが隠れた場所へ行って、向こう
の石塚のかたわらにいてください。二〇わたしは的を射るようにして、矢
を三本、そのそばに放ちます。二一そして、『行って矢を捜してきなさい』
と言って子供をつかわしましょう。わたしが子供に、『矢は手前にある。そ

れを取ってきなさい』と言うならば、その時あなたはきてください。主が
生きておられるように、あなたは安全で、何も危険がないからです。二二し
かしわたしがその子供に、『矢は向こうにある』と言うならば、その時、あ
なたは去って行きなさい。主があなたを去らせられるのです。二三あなたと
わたしとで話しあった事については、主が常にあなたとわたしとの間に
おられます」。
二四そこでダビデは野原に身を隠した。さて、ついたちになったので、王
は食事をするため席に着いた。二五王はいつものように壁寄りに席に着き、
ヨナタンはその向かい側の席に着き、アブネルはサウルの横の席に着いた
が、ダビデの場所にはだれもいなかった。
二六ところがその日サウルは何も言わなかった、「彼に何か起って汚れた
のだろう。きっと汚れたのにちがいない」と思ったからである。二七しか

し、ふつか目すなわち、ついたちの明くる日も、ダビデの場所はあいていた
ので、サウルは、その子ヨナタンに言った、「どうしてエッサイの子は、き
のうもきょうも食事にこないのか」。二八ヨナタンはサウルに答えた、「ダ
ビデは、ベツレヘムへ行くことを許してくださいと、しきりにわたしに求
めました。二九彼は言いました、『わたしに行かせてください。われわれの
一族が町で祭をするので、兄がわたしに来るようにと命じました。それ
でもし、あなたの前に恵みを得ますならば、どうぞ、わたしに行くことを
許し、兄弟たちに会わせてください』。それで彼は王の食卓にこなかっ
たのです」。

三〇その時サウルはヨナタンにむかって怒りを発し、彼に言った、「あな
たは心の曲った、そむく女の産んだ子だ。あなたがエッサイの子を選ん
で、自分の身をはずかしめ、また母の身をはずかしめていることをわたしが

知らないと思うのか。三一エッサイの子がこの世に生きながらえている間
は、あなたも、あなたの王国も堅く立っていくことはできない。それゆえ
今、人をつかわして、彼をわたしのもとに連れてこさせなさい。彼は必
ず死ななければならない」。三二ヨナタンは父サウルに答えた、「どうして彼
は殺されなければならないのですか。彼は何をしたのですか」。三三ところ
がサウルはヨナタンを撃とうとして、やりを彼に向かって振り上げたので、
ヨナタンは父がダビデを殺そうと、心に決めているのを知った。三四ヨナ
タンは激しく怒って席を立ち、その月のふつかには食事をしなかった。父
がダビデをはずかしめたので、ダビデのために憂えたからである。
三五あくる朝、ヨナタンは、ひとりの小さい子供を連れて、ダビデと打ち
合わせたように野原に出て行った。三六そしてその子供に言った、「走って
行って、わたしの射る矢を捜しなさい」。子供が走って行く間に、ヨナタ

ンは矢を彼の前の方に放った。三七そして子供が、ヨナタンの放った矢の
ところへ行った時、ヨナタンは子供のうしろから呼ばわって、「矢は向こう
にあるではないか」と言った。三八ヨナタンはまた、その子供のうしろから
呼ばわって言った、「早くせよ、急げ。とどまるな」。その子供は矢を拾い
集めて主人ヨナタンのもとにきた。三九しかし子供は何も知らず、ヨナタ
ンとダビデだけがそのことを知っていた。四〇ヨナタンは自分の武器をその
子供に渡して言った、「あなたはこれを町へ運んで行きなさい」。四一子供
が行ってしまうとダビデは石塚のかたわらをはなれて立ちいで、地にひれ伏
して三度敬礼した。そして、ふたりは互に口づけし、互に泣いた。やが
てダビデは心が落ち着いた。四二その時ヨナタンはダビデに言った、「無事
に行きなさい。われわれふたりは、『主が常にわたしとあなたの間におら
れ、また、わたしの子孫とあなたの子孫の間におられる』と言って、主の

名をさして誓ったのです」。こうしてダビデは立ち去り、ヨナタンは町には
いった。

第二一章
一ダビデはノブに行き、祭司アヒメレクのところへ行った。ア
ヒメレクはおののきながらダビデを迎えて言った、「どうしてあなたはひと
りですか。だれも供がいないのですか」。二ダビデは祭司アヒメレクに言っ
た、「王がわたしに一つの事を命じて、『わたしがおまえをつかわしてさせ
る事、またわたしが命じたことについては、何をも人に知らせてはならな
い』と言われました。そこでわたしは、ある場所に若者たちを待たせてあ
ります。三ところで今あなたの手もとにパン五個でもあれば、それをわたし
にください。なければなんでも、あるものをください」。四祭司はダビデに
答えて言った、「常のパンはわたしの手もとにありません。ただその若者た
ちが女を慎んでさえいたのでしたら、聖別したパンがあります」。五ダビ

デは祭司に答えた、「わたしが戦いに出るいつもの時のように、われわれ
はたしかに女たちを近づけていません。若者たちの器は、常の旅であっ
たとしても、清いのです。まして、きょう、彼らの器は清くないでしょう
か」。六そこで祭司は彼に聖別したパンを与えた。その所に、供えのパン
のほかにパンがなく、このパンは、これを取り下げる日に、あたたかいパ
ンと置きかえるため、主の前から取り下げたものである。
七その日、その所に、サウルのしもべのひとりが、主の前に留め置かれ
ていた。その名はドエグといい、エドムびとであって、サウルの牧者の長
であった。
八ダビデはまたアヒメレクに言った、「ここに、あなたの手もとに、やり
かつるぎがありませんか。王の事が急を要したので、わたしはつるぎも
武器も持ってこなかったのです」。九祭司は言った、「あなたがエラの谷で

殺したペリシテびとゴリアテのつるぎが、布に包んでエポデのうしろにあ
ります。もしあなたがこれを取ろうとおもわれるなら、お取りください。こ
こにはそのほかにはありません」。ダビデは言った、「それにまさるものは
ありません。それをわたしにください」。一〇ダビデはその日サウルを恐れ
て、立ってガテの王アキシのところへ逃げて行った。一一アキシの家来たち
はアキシに言った、「これはあの国の王ダビデではありませんか。人々が
踊りながら、互に歌いかわして、

『サウルは千を撃ち殺し、
ダビデは万を撃ち殺した』

と言ったのは、この人のことではありませんか」。一二ダビデは、これらの
言葉を心におき、ガテの王アキシを、ひじょうに恐れたので、一三人々の
前で、わざと挙動を変え、捕えられて気違いのふりをし、門のとびらを打

ちたたき、よだれを流して、ひげに伝わらせた。一四アキシは家来たちに
言った、「あなたがたの見るように、この人は気違いだ。どうしてわた
しの所へ連れてきたのか。一五わたしに気違いが必要なのか。この者を連
れてきて、わたしの前で狂わせようというのか。この者をわたしの家へ入
れようとするのか」。

第二二章一こうしてダビデはその所を去り、アドラムのほら穴へのがれ
た。彼の兄弟たちと父の家の者は皆、これを聞き、その所に下って彼
のもとにきた。二また、しえたげられている人々、負債のある人々、心
に不満のある人々も皆、彼のもとに集まってきて、彼はその長となった。
およそ四百人の人々が彼と共にあった。
三ダビデはそこからモアブのミヅパへ行き、モアブの王に言った、「神が
わたしのためにどんなことをされるかわかるまで、どうぞわたしの父母をあ

なたの所におらせてください」。四そして彼はモアブの王に彼らを託した
ので、彼らはダビデが要害におる間、王の所におった。五さて、預言者
ガドはダビデに言った、「要害にとどまっていないで、去ってユダの地へ行
きなさい」。そこでダビデは去って、ハレテの森へ行った。
六サウルは、ダビデおよび彼と共にいる人々が見つかったということを
聞いた。サウルはギベアで、やりを手にもって、丘のぎょりゅうの木の下に
すわっており、家来たちはみなそのまわりに立っていた。七サウルはまわり
に立っている家来たちに言った、「あなたがたベニヤミンびとは聞きなさい。
エッサイの子もまた、あなたがたおのおのに畑やぶどう畑を与え、おの
おのを千人の長、百人の長にするであろうか。八あなたがたは皆共には
かってわたしに敵した。わたしの子がエッサイの子と契約を結んでも、そ
れをわたしに告げるものはなく、またあなたがたのうち、ひとりもわたし

のために憂えず、きょうのように、わたしの子がわたしのしもべをそその
かしてわたしに逆らわせ、道で彼がわたしを待ち伏せするようになっても、
わたしに告げる者はない」。九その時エドムびとドエグは、サウルの家来た
ちのそばに立っていたが、答えて言った、「わたしはエッサイの子がノブに
いるアヒトブの子アヒメレクの所にきたのを見ました。一〇アヒメレクは
彼のために主に問い、また彼に食物を与え、ペリシテびとゴリアテのつ
るぎを与えました」。

一一そこで王は人をつかわして、アヒトブの子祭司アヒメレクとその父
の家のすべての者、すなわちノブの祭司たちを召したので、みな王の所に
きた。一二サウルは言った、「アヒトブの子よ、聞きなさい」。彼は答えた、
「わが主よ、わたしはここにおります」。一三サウルは彼に言った、「どうし
てあなたはエッサイの子と共にはかってわたしに敵し、彼にパンとつるぎ

を与え、彼のために神に問い、きょうのように彼をわたしに逆らって立た
せ、道で待ち伏せさせるのか」。一四アヒメレクは王に答えて言った、「あな
たの家来のうち、ダビデのように忠義な者がほかにありますか。彼は王の
娘婿であり、近衛兵の長であって、あなたの家で尊ばれる人ではあり
ませんか。一五彼のために神に問うたのは、きょう初めてでしょうか。いい
え、決してそうではありません。王よ、どうぞ、しもべと父の全家に罪を負
わせないでください。しもべは、これについては、事の大小を問わず、何
をも知らなかったのです」。一六王は言った、「アヒメレクよ、あなたは必
ず殺されなければならない。あなたの父の全家も同じである」。一七そして
王はまわりに立っている近衛の兵に言った、「身をひるがえして、主の祭司
たちを殺しなさい。彼らもダビデと協力していて、ダビデの逃げたのを
知りながら、それをわたしに告げなかったからです」。ところが王の家来た

ちは主の祭司たちを殺すために手を下そうとはしなかった。一八そこで王
はドエグに言った、「あなたが身をひるがえして、祭司たちを殺しなさい」。
エドムびとドエグは身をひるがえして祭司たちを撃ち、その日亜麻布のエ
ポデを身につけている者八十五人を殺した。一九彼はまた、つるぎをもっ
て祭司の町ノブを撃ち、つるぎをもって男、女、幼な子、乳飲み子、牛、
ろば、羊を殺した。

二〇しかしアヒトブの子アヒメレクの子たちのひとりで、名をアビヤタル
という人は、のがれてダビデの所に走った。二一そしてアビヤタルは、サ
ウルが主の祭司たちを殺したことをダビデに告げたので、二二ダビデはアビ
ヤタルに言った、「あの日、エドムびとドエグがあそこにいたので、わたしは
彼がきっとサウルに告げるであろうと思った。わたしがあなたの父の家の
人々の命を失わせるもととなったのです。二三あなたはわたしの所にと

どまってください。恐れることはありません。あなたの命を求める者は、
わたしの命をも求めているのです。わたしの所におられるならば、あな
たは安全でしょう」。
第二三章 さて人々はダビデに告げて言った、「ペリシテびとがケイラを攻
めて、打ち場の穀物をかすめています」。二そこでダビデは主に問うて言っ
た、「わたしが行って、このペリシテびとを撃ちましょうか」。主はダビデ
に言われた、「行ってペリシテびとを撃ち、ケイラを救いなさい」。三しか
しダビデの従者たちは彼に言った、「われわれは、ユダのここにおってさ
え、恐れているのに、ましてケイラへ行って、ペリシテびとの軍に当るこ
とができましょうか」。四ダビデが重ねて主に問うたところ、主は彼に答え
て言われた、「立って、ケイラへ下りなさい。わたしはペリシテびとをあな
たの手に渡します」。五ダビデとその従者たちはケイラへ行って、ペリシ

テびとと戦い、彼らの家畜を奪いとり、彼らを多く撃ち殺した。こうし
てダビデはケイラの住民を救った。
六アヒメレクの子アビヤタルは、ケイラにいるダビデのもとにのがれてき
た時、手にエポデをもって下ってきた。七さてダビデのケイラにきたことが
サウルに聞えたので、サウルは言った、「神はわたしの手に彼をわたされた。
彼は門と貫の木のある町にはいって、自分で身を閉じこめたからである」。
八そこでサウルはすべての民を戦いに呼び集めて、ケイラに下り、ダビデ
とその従者を攻め囲もうとした。九ダビデはサウルが自分に害を加えよ
うとしているのを知って、祭司アビヤタルに言った、「エポデを持ってきて
ください」。一〇そしてダビデは言った、「イスラエルの神、主よ、しもべは
サウルがケイラにきて、わたしのために、この町を滅ぼそうとしていること
を確かに聞きました。一一ケイラの人々はわたしを彼の手に渡すでしょう

か。しもべの聞いたように、サウルは下ってくるでしょうか。イスラエル
の神、主よ、どうぞ、しもべに告げてください」。主は言われた、「彼は下っ
て来る」。一二ダビデは言った、「ケイラの人々はわたしと従者たちをサウ
ルの手にわたすでしょうか」。主は言われた、「彼らはあなたがたを渡すで
あろう」。一三そこでダビデとその六百人ほどの従者たちは立って、ケイ
ラを去り、いずこともなくさまよった。ダビデのケイラから逃げ去ったこ
とがサウルに聞えたので、サウルは戦いに出ることをやめた。一四ダビデ
は荒野にある要害におり、またジフの荒野の山地におった。サウルは日々
に彼を尋ね求めたが、神は彼をその手に渡されなかった。

一五さてダビデはサウルが自分の命を求めて出てきたので恐れた。その
時ダビデはジフの荒野のホレシにいたが、一六サウルの子ヨナタンは立っ
て、ホレシにいるダビデのもとに行き、神によって彼を力づけた。一七そ

してヨナタンは彼に言った、「恐れるにはおよびません。父サウルの手はあ
なたに届かないでしょう。あなたはイスラエルの王となり、わたしはあな
たの次となるでしょう。このことは父サウルも知っています」。一八こうし
て彼らふたりは主の前で契約を結び、ダビデはホレシにとどまり、ヨナタ
ンは家に帰った。

一九その時ジフびとはギベアにいるサウルのもとに上って行き、そして
言った、「ダビデは、荒野の南にあるハキラの丘の上のホレシの要害に隠
れて、われわれと共にいるではありませんか。二〇それゆえ王よ、あなたが
下って行こうという望みのとおり、いま下ってきてください。われわれは彼
を王の手に渡します」。二一サウルは言った、「あなたがたはわたしに同情
を寄せてくれたのです。どうぞ主があなたがたを祝福されるように。二二
あなたがたは行って、なお確かめてください。彼のよく行く所とだれが

そこで彼を見たかを見きわめてください。人の語るところによると、彼は
ひじょうに悪賢いそうだ。
二三それで、あなたがたは彼が隠れる隠れ場所をみな見きわめ、確かな知らせをもってわたしの所に帰ってきなさい。その時わたしはあなたがたと共に行きます。もし彼がこの地にいるならば、わたしはユダの氏族をあまねく尋ねて彼を捜しだします」。
二四彼らは立って、サウルに先立ってジフへ行った。

さてダビデとその従者たちは荒野の南のアラバにあるマオンの荒野にいた。
二五そしてサウルとその従者たちはきて彼を捜した。人々がこれをダビデに告げたので、ダビデはマオンの荒野にある岩の所へ下って行った。サウルはこれを聞いて、マオンの荒野にきてダビデを追った。
二六サウルは山のこちら側を行き、ダビデとその従者たちとは山のむこう側を行った。そしてダビデは急いでサウルからのがれようとした。サウルとそ

の従者たちが、ダビデとその従者たちを囲んで捕えようとしたからであ
る。二七その時、サウルの所に、ひとりの使者がきて言った、「ペリシテび
とが国を侵しています。急いできてください」。二八そこでサウルはダビデ
を追うことをやめて帰り、行ってペリシテびとに当った。それで人々は、
その所を「のがれの岩」と名づけた。二九ダビデはそこから上ってエンゲ
デの要害にいた。

第二四章一サウルがペリシテびとを追うことをやめて帰ってきたとき、
人々は彼に告げて言った、「ダビデはエンゲデの野にいます」。二そこでサ
ウルは、全イスラエルから選んだ三千の人を率い、ダビデとその従者た
ちとを捜すため、「やぎの岩」の前へ出かけた。三途中、羊のおりの所
にきたが、そこに、ほら穴があり、サウルは足をおおうために、その中には
いった。その時、ダビデとその従者たちは、ほら穴の奥にいた。四ダビデ

の従者たちは彼に言った、「主があなたに告げて、『わたしはあなたの敵
をあなたの手に渡す。あなたは自分の良いと思うことを彼にすることがで
きる』と言われた日がきたのです」。そこでダビデは立って、ひそかに、サ
ウルの上着のすそを切った。五しかし後になって、ダビデはサウルの上着
のすそを切ったことに、心の責めを感じた。六ダビデは従者たちに言っ
た、「主が油を注がれたわが君に、わたしがこの事をするのを主は禁じら
れる。彼は主が油を注がれた者であるから、彼に敵して、わたしの手を
のべるのは良くない」。七ダビデはこれらの言葉をもって従者たちを差し
止め、サウルを撃つことを許さなかった。サウルは立って、ほら穴を去り、
道を進んだ。

八ダビデもまた、そのあとから立ち、ほら穴を出て、サウルのうしろから
呼ばわって、「わが君、王よ」と言った。サウルがうしろをふり向いた時、ダ

ビデは地にひれ伏して拝した。九そしてダビデはサウルに言った、「どうし
て、あなたは『ダビデがあなたを害しようとしている』という人々の言葉を
聞かれるのですか。一〇あなたは、この日、自分の目で、主があなたをきよ
う、ほら穴の中でわたしの手に渡されたのをごらんになりました。人々は
わたしにあなたを殺すことを勧めたのですが、わたしは殺しませんでした。
『わが君は主が油を注がれた方であるから、これに敵して手をのべること
はしない』とわたしは言いました。一一わが父よ、ごらんなさい。あなたの
上着のすそは、わたしの手にあります。わたしがあなたの上着のすそを切
り、しかも、あなたを殺さなかったことによって、あなたは、わたしの手に
悪も、とがもないことを見て知られるでしょう。あなたはわたしの命を取
ろうと、ねらっておられますが、わたしはあなたに対して罪をおかしたこ
とはないのです。一二どうぞ主がわたしとあなたの間をさばかれますよう

に。また主がわたしのために、あなたに報いられますように。しかし、わ
たしはあなたに手をくだすことをしないでしょう。一三昔から、ことわざ
に言っているように、『悪は悪人から出る』。しかし、わたしはあなたに手
をくだすことをしないでしょう。一四イスラエルの王は、だれを追って出て
こられたのですか。あなたは、だれを追っておられるのですか。死んだ犬
を追っておられるのです。一匹の蚤を追っておられるのです。一五どうぞ
主がさばきびととなって、わたしとあなたの間をさばき、かつ見て、わた
しの訴えを聞き、わたしをあなたの手から救い出してくださるように」。
一六ダビデがこれらの言葉をサウルに語り終ったとき、サウルは言った、
「わが子ダビデよ、これは、あなたの声であるか」。そしてサウルは声をあげ
て泣いた。一七サウルはまたダビデに言った、「あなたはわたしよりも正し
い。わたしがあなたに悪を報いたのに、あなたはわたしに善を報いる。一

八きょう、あなたはいかに良くわたしをあつかったかを明らかにしました。
すなわち主がわたしをあなたの手にわたされたのに、あなたはわたしを殺
さなかったのです。一九人は敵に会ったとき、敵を無事に去らせるでしょ
うか。あなたが、きょう、わたしにした事のゆえに、どうぞ主があなたに
良い報いを与えられるように。二〇今わたしは、あなたがかならず王とな
ることを知りました。またイスラエルの王国が、あなたの手によって堅く
立つことを知りました。二一それゆえ、あなたはわたしのあとに、わたしの
子孫を断たず、またわたしの父の家から、わたしの名を滅ぼし去らないと、
いま主をさして、わたしに誓ってください」。二二そこでダビデはサウルに、
そのように誓った。そしてサウルは家に帰り、ダビデとその従者たちは
要害にのぼって行った。

第二五章一さてサムエルが死んだので、イスラエルの人々はみな集まっ

て、彼のためにひじょうに悲しみ、ラマにあるその家に彼を葬った。
そしてダビデは立ってパランの荒野に下って行った。二マオンに、ひと
りの人があって、カルメルにその所有があり、ひじょうに裕福で、羊三
千頭、やぎ一千頭を持っていた。彼はカルメルで羊の毛を切っていた。三
その人の名はナバルといい、妻の名はアビガイルといった。アビガイルは
賢くて美しかったが、その夫は剛情で、粗暴であった。彼はカレブび
とであった。四ダビデは荒野にいて、ナバルがその羊の毛を切っているこ
とを聞いたので、五十人の若者をつかわし、その若者たちに言った、「カル
メルに上って行ってナバルの所へ行き、わたしの名をもって彼にあいさ
つし、六彼にこう言いなさい、『どうぞあなたに平安があるように。あなた
の家に平安があるように。またあなたのすべての持ち物に平安があるよう
に。七わたしはあなたが羊の毛を切っておられることを聞きました。あな

たの羊飼(ひつじかい)たちはわれわれと一緒(いっしょ)にいたのですが、われわれは彼(かれ)らを少(すこ)し
も害(がい)しませんでした。また彼(かれ)らはカルメルにいる間(あいだ)に、何(なに)ひとつ失(うしな)った
ことはありません。八あなたの若者(わかもの)たちに聞(き)いてみられるならば、わかりま
す。それゆえ、わたしの若者(わかもの)たちに、あなたの好意(こうい)を示(しめ)してください。わ
れわれは祝(しゅく)の日(ひ)にきたのです。どうぞ、あなたの手(て)もとにあるものを、贈(おく)
り物(もの)として、しもべどもとあなたの子(こ)ダビデにください』」。
九ダビデの若者(わかもの)たちは行(い)って、ダビデの名(な)をもって、これらの言葉(ことば)をナ
バルに語(かた)り、そして待(ま)っていた。一〇ナバルはダビデの若者(わかもの)たちに答(こた)えて
言(い)った、「ダビデとはだれか。エッサイの子(こ)とはだれか。このごろは、主人(しゅじん)
を捨(す)てて逃(に)げるしもべが多(おお)い。一一どうしてわたしのパンと水(みず)、またわたし
の羊(ひつじ)の毛(け)を切(き)る人々(ひとびと)のためにほふった肉(にく)をとって、どこからきたのかわ
からない人々(ひとびと)に与(あた)えることができようか」。一二ダビデの若者(わかもの)たちは、そこ

を去り、帰ってきて、彼にこのすべての事を告げた。一三そこでダビデは
従者たちに言った、「おのおの、つるぎを帯びなさい」。彼らはおのおのつ
るぎを帯び、ダビデもまたつるぎを帯びた。そしておおよそ四百人がダビ
デに従って上っていき、二百人は荷物のところにとどまった。
一四ところで、ひとりの若者がナバルの妻アビガイルに言った、「ダビデが
荒野から使者をつかわして、主人にあいさつをしたのに、主人はその使者
たちをののしられました。一五しかし、あの人々はわれわれに大へんよくし
てくれて、われわれは少しも害を受けず、またわれわれが野にいた時、彼
らと共にいた間は、何ひとつ失ったことはありませんでした。一六われ
われが羊を飼って彼らと共にいる間、彼らは夜も昼もわれわれのかきと
なってくれました。一七それで、あなたは今それを知って、自分のするこ
とを考えてください。主人とその一家に災が起きるからです。しかも

主人はよこしまな人で、話しかけることもできません」。
一八その時、アビガイルは急いでパン二百、ぶどう酒の皮袋二つ、調理
した羊五頭、いり麦五セア、ほしぶどう百ふさ、ほしいちじくのかたまり
二百を取って、ろばにのせ、一九若者たちに言った、「わたしのさきに進み
なさい。わたしはあなたがたのうしろに、ついて行きます」。しかし彼女は
夫ナバルには告げなかった。二〇アビガイルが、ろばに乗って山陰を下っ
てきた時、ダビデと従者たちは彼女の方に向かって降りてきたので、彼女
はその人々に出会った。二一さて、ダビデはさきにこう言った、「わたしは
この人が荒野で持っている物をみな守って、その人に属する物を何ひとつ
なくならないようにしたが、それは全くむだであった。彼はわたしのした
親切に悪をもって報いた。二二もしわたしがあすの朝まで、ナバルに属す
るすべての者のうち、ひとりの男でも残しておくならば、神が幾重にもダ

ビデを罰してくださるように」。
二三アビガイルはダビデを見て、急いで、ろばを降り、ダビデの前で地に
ひれ伏し、二四その足もとに伏して言った、「わが君よ、このとがをわたしだ
けに負わせてください。しかしどうぞ、はしために、あなたの耳に語るこ
とを許し、はしための言葉をお聞きください。二五わが君よ、どうぞ、この
よこしまな人ナバルのことを気にかけないでください。あの人はその名の
とおりです。名はナバルで、愚かな者です。あなたのはしためであるわた
しは、わが君なるあなたがつかわされた若者たちを見なかったのです。二
六それゆえ今、わが君よ、主は生きておられます。またあなたは生きてお
られます。主は、あなたがきて血を流し、また手ずから、あだを報いるの
をとどめられました。どうぞ今、あなたの敵、およびわが君に害を加えよ
うとする者は、ナバルのごとくになりますように。二七今、あなたのつかえ

めが、わが君に携えてきた贈り物を、わが君に従う若者たちに与えてく
ださい。二八どうぞ、はしためのとがを許してください。主は必ずわが君
のために確かな家を造られるでしょう。わが君が主のいくさを戦い、ま
たこの世に生きながらえられる間、あなたのうちに悪いことが見いだされ
ないからです。二九たとい人が立ってあなたを追い、あなたの命を求めて
も、わが君の命は、生きている者の束にたばねられて、あなたの神、主
のもとに守られるでしょう。しかし主はあなたの敵の命を、石投げの中
から投げるように、投げ捨てられるでしょう。三〇そして主があなたについ
て語られたすべての良いことをわが君に行い、あなたをイスラエルのつか
さに任じられる時、三一あなたが、ゆえなく血を流し、またわが君がみず
からあだを報いたと言うことで、それがあなたのつまずきとなり、またわ
が君の心の責めとなることのないようにしてください。主がわが君を良

くせられる時、このはしためを思いだしてください」。
三二ダビデはアビガイルに言った、「きょう、あなたをつかわして、わたし
を迎えさせられたイスラエルの神、主はほむべきかな。三三あなたの知恵
はほむべきかな。またあなたはほむべきかな。あなたは、きょう、わたし
がきて血を流し、手ずからあだを報いることをとどめられたのです。三四
わたしがあなたを害することをとどめられたイスラエルの神、主はまこと
に生きておられる。もしあなたが急いでわたしに会いにこなかったならば、
あすの朝までには、ナバルのところに、ひとりの男も残らなかったでしょ
う」。三五ダビデはアビガイルが携えてきた物をその手から受けて、彼女
に言った、「あなたは無事にのぼって、家に帰りなさい。わたしはあなたの
声を聞きいれ、あなたの願いを許します」。
三六こうしてアビガイルはナバルのもとにきたが、見よ、彼はその家で、

王の酒宴のような酒宴を開いていた。ナバルは心に楽しみ、ひじょうに
酔っていたので、アビガイルは明くる朝まで事の大小を問わず何をも彼
に告げなかった。三七朝になってナバルの酔いがさめたとき、その妻が彼
にこれらの事を告げると、彼の心はそのうちに死んで、彼は石のように
なった。三八十日ばかりして主がナバルを撃たれたので彼は死んだ。
三九ダビデはナバルが死んだと聞いて言った、「主はほむべきかな。主は
わたしがナバルの手から受けた侮辱に報いて、しもべが悪をおこなわない
ようにされた。主はナバルの悪行をそのこうべに報いられたのだ」。ダビ
デはアビガイルを妻にめとろうと、人をつかわして彼女に申し込んだ。四
〇ダビデのしもべたちはカルメルにいるアビガイルの所にきて、彼女に
言った、「ダビデはあなたを妻にめとろうと、われわれをあなたの所へつ
かわしたのです」。四一アビガイルは立ち、地にひれ伏し拝して言った、「は

したためは、わが君のしもべたちの足を洗うつかえめです」。四二アビガイル
は急いで立ち、ろばに乗って、五人の侍女たちを連れ、ダビデの使者たち
に従って行き、ダビデの妻となった。
四三ダビデはまたエズレルのアヒノアムをめとった。彼女たちはふたり
ともダビデの妻となった。四四ところでサウルはその娘、ダビデの妻ミカ
ルを、ガリムの人であるライシの子パルテに与えた。

第二六章一そのころジフびとがギベアにおるサウルのもとにきて言った、
「ダビデは荒野の前にあるハキラの山に隠れているではありませんか」。二
サウルは立って、ジフの荒野でダビデを捜すために、イスラエルのうちから
選んだ三千人をひき連れて、ジフの荒野に下った。三サウルは荒野の前の
道のかたわらにあるハキラの山に陣を取った。ダビデは荒野にとどまって
いたが、サウルが自分のあとを追って荒野にきたのを見て、四斥候を出し、

サウルが確かにきたのを知った。五そしてダビデは立って、サウルが陣を
取っている所へ行って、サウルとその軍の長、ネルの子アブネルの寝て
いる場所を見た。サウルは陣所のうちに寝ていて、民はその周囲に宿営
していた。
六ダビデは、ヘテびとアヒメレク、およびゼルヤの子で、ヨアブの兄弟
であるアビシャイに言った、「だれがわたしと共にサウルの陣に下って行
くか」。アビシャイは言った、「わたしが一緒に下って行きます」。七こうし
てダビデとアビシャイとが夜、民のところへ行ってみると、サウルは陣所
のうちに身を横たえて寝ており、そのやりは枕もとに地に突きさしてあっ
た。そしてアブネルと民らとはその周囲に寝ていた。八アビシャイはダビ
デに言った、「神はきょう敵をあなたの手に渡されました。どうぞわたし
に、彼のやりをもってひと突きで彼を地に刺しとおさせてください。ふた

たび突くには及びません」。九しかしダビデはアビシャイに言った、「彼を
殺してはならない。主が油を注がれた者に向かって、手をのべ、罪を得
ない者があろうか」。一〇ダビデはまた言った、「主は生きておられる。主
が彼を撃たれるであろう。あるいは彼の死ぬ日が来るであろう。あるいは
戦いに下って行って滅びるであろう。一一主が油を注がれた者に向かっ
て、わたしが手をのべることを主は禁じられる。しかし今、そのまくらも
とにあるやりと水のびんを取りなさい。そしてわれわれは去ろう」。一二こ
うしてダビデはサウルの枕もとから、やりと水のびんを取って彼らは去っ
たが、だれもそれを見ず、だれも知らず、また、だれも目をさまさず、みな
眠っていた。主が彼らを深く眠らされたからである。
一三ダビデは向こう側に渡って行って、遠く離れて山の頂に立った。
彼らの間の隔たりは大きかった。一四ダビデは民とネルの子アブネルに

呼ばわって言った、「アブネルよ、あなたは答えないのか」。アブネルは答え
て言った、「王を呼んでいるあなたはだれか」。一五ダビデはアブネルに言っ
た、「あなたは男ではないか。イスラエルのうちに、あなたに及ぶ人があ
ろうか。それであるのに、どうしてあなたは主君である王を守らなかった
のか。民のひとりが、あなたの主君である王を殺そうとして、はいりこん
だではないか。一六あなたがしたこの事は良くない。主は生きておられる。
あなたがたは、まさに死に値する。主が油をそそがれた、あなたの主君
を守らなかったからだ。いま王のやりがどこにあるか。その枕もとにあっ
た水のびんがどこにあるかを見なさい」。
一七サウルはダビデの声を聞きわけて言った、「わが子ダビデよ、これはあ
なたの声か」。ダビデは言った、「王、わが君よ、わたしの声です」。一八ダ
ビデはまた言った、「わが君はどうしてしもべのあとを追われるのですか。

わたしが何をしたのですか。わたしの手になんのわるいことがあるのです
か。一九王、わが君よ、どうぞ、今しもべの言葉を聞いてください。もし主
があなたを動かして、わたしの敵とされたのであれば、どうぞ主が供え物
を受けて和らいでくださるように。もし、それが人であるならば、どうぞ
その人々が主の前にのろいを受けるように。彼らが『おまえは行って他の
神々に仕えなさい』と言って、きょう、わたしを追い出し、主の嗣業にあ
ずかることができないようにしたからです。二〇それゆえ今、主の前を離
れて、わたしの血が地に落ちることのないようにしてください。イスラエ
ルの王は、人が山で、しゃこを追うように、わたしの命を取ろうとして出
てこられたのです」。
二一その時、サウルは言った、「わたしは罪を犯した。わが子ダビデよ、
帰ってきてください。きょう、わたしの命があなたの目に尊く見られた

ゆえ、わたしは、もはやあなたに害を加えないであろう。わたしは愚かなこ
とをして、非常なまちがいをした」。二二ダビデは答えた、「王のやりは、こ
こにあります。ひとりの若者に渡ってこさせ、これを持ちかえらせてくだ
さい。二三主は人おのおのにその義と真実とに従って報いられます。主
がきょう、あなたをわたしの手に渡されたのに、わたしは主が油を注がれ
た者に向かって、手をのべることをしなかったのです。二四きょう、わたし
があなたの命を重んじたように、どうぞ主がわたしの命を重んじて、も
ろもろの苦難から救い出してくださるように」。二五サウルはダビデに言っ
た、「わが子ダビデよ、あなたはほむべきかな。あなたは多くの事をおこ
なって、それをなし遂げるであろう」。こうしてダビデはその道を行き、サ
ウルは自分の所へ帰った。

第二七章一ダビデは心のうちに言った、「わたしは、いつかはサウルの

手にかかって滅ぼされるであろう。早くペリシテびとの地へのがれるほか
はない。そうすればサウルはこの上イスラエルの地にわたしをくまなく捜
すことはやめ、わたしは彼の手からのがれることができるであろう」。二こ
うしてダビデは、共にいた六百人と一緒に、立ってガテの王マオクの子ア
キシの所へ行った。三ダビデと従者たちは、おのおのその家族とともに、
ガテでアキシと共に住んだ。ダビデはそのふたりの妻、すなわちエズレル
の女アヒノアムと、カルメルの女でナバルの妻であったアビガイルと共
におった。四ダビデがガテにのがれたことがサウルに聞えたので、サウル
はもはや彼を捜さなかった。

五さてダビデはアキシに言った、「もしわたしがあなたの前に恵みを得る
ならば、どうぞ、いなかにある町のうちで一つの場所をわたしに与えてそ
こに住まわせてください。どうしてしもべがあなたと共に王の町に住むこ

とができましょうか」。六アキシはその日チクラグを彼に与えた。こうして
チクラグは今日にいたるまでユダの王に属している。七ダビデがペリシテ
びとの国に住んだ日の数は一年と四か月であった。
八さてダビデは従者と共にのぼって、ゲシュルびと、ゲゼルびとおよび
アマレクびとを襲った。これらは昔からシュルに至るまでの地の住民で
あって、エジプトに至るまでの地に住んでいた。九ダビデはその地を撃っ
て、男も女も生かしおかず、羊と牛とろばとらくだと衣服とを取って、
アキシのもとに帰ってきた。一〇アキシが「あなたはきょうどこを襲いまし
たか」と尋ねると、ダビデは、その時々、「ユダのネゲブです」、「エラメル
びとのネゲブです」「ケニびとのネゲブです」と言った。一一ダビデは男も
女も生かしおかず、ひとりをもガテに引いて行かなかった。それはダビデ
が、「恐らくは、彼らが、『ダビデはこうした』と言って、われわれのこと

を告げるであろう」と思ったからである。ダビデはペリシテびとのいなか
に住んでいる間はこうするのが常であった。
一二アキシはダビデを信じて
言った、「彼は自分を全くその民イスラエルに憎まれるようにした。それ
ゆえ彼は永久にわたしのしもべとなるであろう」。

第二八章
一そのころ、ペリシテびとがイスラエルと戦おうとして、いく
さのために軍勢を集めたので、アキシはダビデに言った、「あなたは、しか
と承知してください。あなたとあなたの従者たちとは、わたしと共に出
て、軍勢に加わらなければなりません」。
二ダビデはアキシに言った、「よ
ろしい、あなたはしもべが何をするかを知られるでしょう」。アキシはダビ
デに言った、「よろしい、あなたを終身わたしの護衛の長としよう」。
三さてサムエルはすでに死んで、イスラエルのすべての人は彼のために
悲しみ、その町ラマに葬った。また先にサウルは口寄せや占い師をその

地から追放した。四ペリシテびとが集まってきてシュネムに陣を取ったの
で、サウルはイスラエルのすべての人を集めて、ギルボアに陣を取った。五
サウルはペリシテびとの軍勢を見て恐れ、その心はいたくおののいた。六
そこでサウルは主に伺いをたてたが、主は夢によっても、ウリムによっ
ても、預言者によっても彼に答えられなかった。七サウルはしもべたちに
言った、「わたしのために、口寄せの女を捜し出しなさい。わたしは行っ
てその女に尋ねよう」。しもべたちは彼に言った、「見よ、エンドルにひと
りの口寄せがいます」。

八サウルは姿を変えてほかの着物をまとい、ふたりの従者を伴って行
き、夜の間に、その女の所にきた。そしてサウルは言った、「わたしのた
めに口寄せの術を行って、わたしがあなたに告げる人を呼び起してくださ
い」。九女は彼に言った、「あなたはサウルがしたことをごぞんじでしょう。

彼は口寄せや占い師をその国から断ち滅ぼしました。どうしてあなたは、
わたしの命にわなをかけて、わたしを死なせようとするのですか」。一〇
サウルは主をさして彼女に誓って言った、「主は生きておられる。この事
のためにあなたが罰を受けることはないでしょう」。一一女は言った、「あ
なたのためにだれを呼び起しましょうか」。サウルは言った、「サムエルを
呼び起してください」。一二女はサムエルを見た時、大声で叫んだ。そし
てその女はサウルに言った、「どうしてあなたはわたしを欺かれたので
すか。あなたはサウルです」。一三王は彼女に言った、「恐れることはない。
あなたには何が見えるのですか」。女はサウルに言った、「神のようなかた
が地からのぼられるのが見えます」。一四サウルは彼女に言った、「その人
はどんな様子をしていますか」。彼女は言った、「ひとりの老人がのぼって
こられます。その人は上着をまとっておられます」。サウルはその人がサム

エルであるのを知り、地にひれ伏して拝した。
一五サムエルはサウルに言った、「なぜ、わたしを呼び起して、わたしを
煩わすのか」。サウルは言った、「わたしは、ひじょうに悩んでいます。ペ
リシテびとがわたしに向かっていくさを起し、神はわたしを離れて、預言者
によっても、夢によっても、もはやわたしに答えられないのです。それで、
わたしのすべきことを知るために、あなたを呼びました」。一六サムエルは
言った、「主があなたを離れて、あなたの敵となられたのに、どうしてあな
たはわたしに問うのですか。一七主は、わたしによって語られたとおりにあ
なたに行われた。主は王国を、あなたの手から裂きはなして、あなたの
隣人であるダビデに与えられた。一八あなたは主の声に聞き従わず、主の
激しい怒りに従って、アマレクびとを撃ち滅ぼさなかったゆえに、主は
この事を、この日、あなたに行われたのである。一九主はまたイスラエル

をも、あなたと共に、ペリシテびとの手に渡されるであろう。あすは、あ
なたもあなたの子らもわたしと一緒になるであろう。また主はイスラエル
の軍勢をもペリシテびとの手に渡される」。
二〇そのときサウルは、ただちに、地に伸び、倒れ、サムエルの言葉の
ために、ひじょうに恐れ、またその力はうせてしまった。その一日一夜、
食物をとっていなかったからである。二一女はサウルのもとにきて、彼
のおののいているのを見て言った、「あなたのつかえめは、あなたの声に聞
き従い、わたしの命をかけて、あなたの言われた言葉に従いました。二
二それゆえ今あなたも、つかえめの声に聞き従い、一口のパンをあなたの
前にそなえさせてください。あなたはそれをめしあがって力をつけ、道
を行ってください」。二三ところがサウルは断って言った、「わたしは食べ
ません」。しかし彼のしもべたちも、その女もしいてすすめたので、サウ

ルはその言葉を聞きいれ、地から起きあがり、床の上にすわった。二四その
女は家に肥えた子牛があったので、急いでそれをほふり、また麦粉をと
り、こねて、種入れぬパンを焼き、二五サウルとそのしもべたちの前に持っ
てきたので、彼らは食べた。そして彼らは立ち上がって、その夜のうちに
去った。

第二九章一さてペリシテびとは、その軍勢をことごとくアペクに集めた。
イスラエルびとはエズレルにある泉のかたわらに陣を取った。二ペリシテ
びとの君たちは、あるいは百人、あるいは千人を率いて進み、ダビデとそ
の従者たちはアキシと共に、しんがりになって進んだ。三その時、ペリ
シテびとの君たちは言った、「これらのヘブルびとはここで何をしているの
か」。アキシはペリシテびとたちに言った、「これはイスラエルの王サウル
のしもべダビデではないか。彼はこの日ごろ、この年ごろ、わたしと共に

いたが、逃げ落ちてきた日からきょうまで、わたしは彼にあやまちがあった
のを見たことがない」。四しかしペリシテびとの君たちは彼に向かって怒っ
た。そしてペリシテびとの君たちは彼に言った、「この人を帰らせて、あな
たが彼を置いたもとの所へ行かせなさい。われわれと一緒に彼を戦いに
下らせてはならない。戦いの時、彼がわれわれの敵となるかも知れない
からである。この者は何をもってその主君とやわらぐことができようか。
ここにいる人々の首をもってするほかはあるまい。五これは、かつて人々
が踊りのうちに歌いかわして、

『サウルは千を撃ち殺し、
ダビデは万を撃ち殺した』

と言った、あのダビデではないか」。
六そこでアキシはダビデを呼んで言った、「主は生きておられる。あなた

は正しい人である。あなたがわたしと一緒に戦いに出入りすることをわ
たしは良いと思っている。それはあなたがわたしの所にきた日からこの日
まで、わたしは、あなたに悪い事があったのを見たことがないからである。
しかしペリシテびとの君たちはあなたを良く言わない。七それゆえ今安ら
かに帰って行きなさい。彼らが悪いと思うことはしないがよかろう」。八ダ
ビデはアキシに言った、「しかしわたしが何をしたというのですか。わたし
があなたに仕えはじめた日からこの日までに、あなたはしもべの身に何を
見られたので、わたしは行って、わたしの主君である王の敵と戦うこと
ができないのですか」。九アキシはダビデに答えた、「わたしは見て、あな
たが神の使のようにりっぱな人であることを知っている。しかし、ペリシ
テびとの君たちは、『われわれと一緒に彼を戦いに上らせてはならない』
と言っている。一〇それで、あなたは、一緒にきたあなたの主君のしもべ

たちと共に朝早く起きなさい。そして朝早く起き、夜が明けてから去りな
さい」。一一こうしてダビデとその従者たちとは共にペリシテびとの地へ
帰ろうと、朝早く起きて出立したが、ペリシテびとはエズレルへ上って
行った。

第三〇章一さてダビデとその従者たちが三日目にチクラグにきた時、ア
マレクびとはすでにネゲブとチクラグを襲っていた。彼らはチクラグを撃
ち、火をはなってこれを焼き、二その中にいた女たちおよびすべての者を
捕虜にし、小さい者をも大きい者をも、ひとりも殺さずに、引いて、その
道に行った。三ダビデと従者たちはその町にきて、町が火で焼かれ、その
妻とむすこ娘らは捕虜となったのを見た。四ダビデおよび彼と共にいた
民は声をあげて泣き、ついに泣く力もなくなった。五ダビデのふたりの妻
すなわちエズレルの女アヒノアムと、カルメルびとナバルの妻であったア

ビガイルも捕虜になった。六その時、ダビデはひじょうに悩んだ。それは
民がみなおのおのそのむすこ娘のために心を痛めたため、ダビデを石で
撃とうと言ったからである。しかしダビデはその神、主によって自分を力
づけた。
七ダビデはアビメレクの子、祭司アビヤタルに、「エポデをわたしのとこ
ろに持ってきなさい」と言ったので、アビヤタルは、エポデをダビデのと
ころに持ってきた。八ダビデは主に伺いをたてて言った、「わたしはこの
軍隊のあとを追うべきですか。わたしはそれに追いつくことができましょ
うか」。主は彼に言われた、「追いなさい。あなたは必ず追いついて、確
かに救い出すことができるであろう」。九そこでダビデは、一緒にいた六百
人の者と共に出立してベソル川へ行ったが、あとに残る者はそこにとど
まった。一〇すなわちダビデは四百人と共に追撃をつづけたが、疲れてべ

ソル川を渡れない者二百人はとどまった。
一一彼らは野で、ひとりのエジプトびとを見て、それをダビデのもとに引
いてきて、パンを食べさせ、水を飲ませた。一二また彼らはほしいちじくの
かたまり一つと、ほしぶどう二ふさを彼に与えた。彼は食べて元気を回復
した。彼は三日三夜、パンを食べず、水を飲んでいなかったからである。一
三ダビデは彼に言った、「あなたはだれのものか。どこからきたのか」。彼
は言った、「わたしはエジプトの若者で、アマレクびとの奴隷です。三日前
にわたしが病気になったので、主人はわたしを捨てて行きました。一四わ
たしどもは、ケレテびとのネゲブと、ユダに属する地と、カレブのネゲブ
を襲い、また火でチクラグを焼きはらいました」。一五ダビデは彼に言った、
「あなたはその軍隊のところへわたしを導き下ってくれるか」。彼は言っ
た、「あなたはわたしを殺さないこと、またわたしを主人の手に渡さないこ

とを、神をさしてわたしに誓ってください。そうすればあなたをその軍隊
のところへ導き下りましょう」。
一六彼はダビデを導き下ったが、見よ、彼らはペリシテびとの地とユダ
の地から奪い取ったさまざまの多くのぶんどり物のゆえに、食い飲み、か
つ踊りながら、地のおもてにあまねく散りひろがっていた。一七ダビデは夕
ぐれから翌日の夕方まで、彼らを撃ったので、らくだに乗って逃げた四百
人の若者たちのほかには、ひとりものがれた者はなかった。一八こうして
ダビデはアマレクびとが奪い取ったものをみな取りもどした。またダビデ
はそのふたりの妻を救い出した。一九そして彼らに属するものは、小さい
ものも大きいものも、むすこも娘もぶんどり物も、アマレクびとが奪い
去った物は何をも失わないで、ダビデがみな取りもどした。二〇ダビデは
またすべての羊と牛を取った。人々はこれらの家畜を彼の前に追って行

きながら、「これはダビデのぶんどり物だ」と言った。
二一そしてダビデが、あの疲れてダビデについて行くことができずに、べ
ソル川のほとりにとどまっていた二百人の者のところへきた時、彼らは出
てきてダビデを迎え、またダビデと共にいる民を迎えた。ダビデは民に近
づいてその安否を問うた。二二そのときダビデと共に行った人々のうちで、
悪く、かつよこしまな者どもはみな言った、「彼らはわれわれと共に行か
なかったのだから、われわれはその人々にわれわれの取りもどしたぶんど
り物を分け与えることはできない。ただおのおのにその妻子を与えて、連
れて行かせましょう」。二三しかしダビデは言った、「兄弟たちよ、主はわ
れわれを守って、攻めてきた軍隊をわれわれの手に渡された。その主が賜
わったものを、あなたがたはそのようにしてはならない。二四だれがこの事
について、あなたがたに聞き従いますか。戦いに下って行った者の分け

前と、荷物のかたわらにとどまっていた者の分け前を同様にしなければな
らない。彼らはひとしく分け前を受けるべきである」。二五この日以来、ダ
ビデはこれをイスラエルの定めとし、おきてとして今日に及んでいる。
二六ダビデはチクラグにきて、そのぶんどり物の一部をユダの長老であ
る友人たちにおくって言った、「これは主の敵から取ったぶんどり物のう
ちからあなたがたにおくる贈り物である」。二七そのおくり先は、ベテルに
いる人々、ネゲブのラモテにいる人々、ヤッテルにいる人々、二八アロエル
にいる人々、シフモテにいる人々、エシテモアにいる人々、ラカルにいる
人々、二九エラメルびとの町々にいる人々、ケニびとの町々にいる人々、
三〇ホルマにいる人々、ボラシャンにいる人々、アタクにいる人々、三一ヘ
ブロンにいる人々、およびダビデとその従者たちが、さまよい歩いたす
べての所にいる人々であった。

第三一章一さてペリシテびとはイスラエルと戦った。イスラエルの人々
はペリシテびとの前から逃げ、多くの者は傷ついてギルボア山にたおれた。
二ペリシテびとはサウルとその子らに攻め寄り、そしてペリシテびとはサ
ウルの子ヨナタン、アビナダブ、およびマルキシュアを殺した。三戦いは
激しくサウルに迫り、弓を射る者どもがサウルを見つけて、彼を射たので、
サウルは射る者たちにひどい傷を負わされた。四そこでサウルはその武器
を執る者に言った、「つるぎを抜き、それをもってわたしを刺せ。さもない
と、これらの無割礼の者どもがきて、わたしを刺し、わたしをなぶり殺しに
するであろう」。しかしその武器を執る者は、ひじょうに恐れて、それに応
じなかったので、サウルは、つるぎを執って、その上に伏した。五武器を執
る者はサウルが死んだのを見て、自分もまたつるぎの上に伏して、彼と共
に死んだ。六こうしてサウルとその三人の子たち、およびサウルの武器を

執る者、ならびにその従者たちは皆、この日共に死んだ。七イスラエルの
人々で、谷の向こう側、およびヨルダンの向こう側にいる者が、イスラエ
ルの人々の逃げるのを見、またサウルとその子たちの死んだのを見て町々
を捨てて逃げたので、ペリシテびとはきてその中に住んだ。
八あくる日、ペリシテびとは殺された者から、はぎ取るためにきたが、サ
ウルとその三人の子たちがギルボア山にたおれているのを見つけた。九彼
らはサウルの首を切り、そのよろいをはぎ取り、ペリシテびとの全地に人
をつかわして、この良い知らせを、その偶像と民とに伝えさせた。一〇ま
た彼らは、そのよろいをアシタロテの神殿に置き、彼のからだをベテシャ
ンの城壁にくぎづけにした。一一ヤベシ・ギレアデの住民たちは、ペリ
シテびとがサウルにした事を聞いて、一二勇士たちはみな立ち、夜もすがら
行って、サウルのからだと、その子たちのからだをベテシャンの城壁から

取りおろし、ヤベシにきて、これをそこで焼き、
一三その骨を取って、ヤベシのぎょりゅうの木の下に葬り、七日の間、断食した。

サムエル記下

第一章
一サウルが死んだ後、ダビデはアマレクびとを撃って帰り、ふつ
かの間チクラグにとどまっていたが、
二三日目となって、ひとりの人が、その着物を裂き、頭に土をかぶって、サウルの陣営からきた。そしてダビデのもとにきて、地に伏して拝した。
三ダビデは彼に言った、「あなたはどこからきたのか」。彼はダビデに言った、「わたしはイスラエルの陣営から、のがれてきたのです」。
四ダビデは彼に言った、「様子はどうであったか話しなさい」。彼は答えた、「民は戦いから逃げ、民の多くは倒れて死に、サウルとその子ヨナタンもまた死にました」。
五ダビデは自分と話している若者に言った、「あなたはサウルとその子ヨナタンが死んだのを、どうして知ったのか」。
六彼に話している若者は言った、「わたしは、はからず

も、ギルボア山にいましたが、サウルはそのやりによりかかっており、戦車
と騎兵とが彼に攻め寄ろうとしていました。七その時、彼はうしろを振り
向いてわたしを見、わたしを呼びましたので、『ここにいます』とわたしは
答えました。八彼は『おまえはだれか』と言いましたので、『アマレクびと
です』と答えました。九彼はまたわたしに言いました、『そばにきて殺して
ください。わたしは苦しみに耐えない。まだ命があるからです』。一〇そ
こで、わたしはそのそばにいって彼を殺しました。彼がすでに倒れて、生
きることのできないのを知ったからです。そしてわたしは彼の頭にあった
冠と、腕につけていた腕輪とを取って、それをわが主のもとに携えて
きたのです」。
一一そのときダビデは自分の着物をつかんでそれを裂き、彼と共にいた
人々も皆同じようにした。一二彼らはサウルのため、またその子ヨナタン

のため、また主の民のため、またイスラエルの家のために悲しみ泣いて、
夕暮まで食を断った。それは彼らがつるぎに倒れたからである。一三ダ
ビデは自分と話していた若者に言った、「あなたはどこの人ですか」。彼は
言った、「アマレクびとで、寄留の他国人の子です」。一四ダビデはまた彼に
言った、「どうしてあなたは手を伸べて主の油を注がれた者を殺すことを
恐れなかったのですか」。一五ダビデはひとりの若者を呼び、「近寄って彼を
撃て」と言った。そこで彼を撃ったので死んだ。一六ダビデは彼に言った、
「あなたの流した血の責めはあなたに帰する。あなたが自分の口から、『わ
たしは主の油を注がれた者を殺した』と言って、自身にむかって証拠を
立てたからである」。

一七ダビデはこの悲しみの歌をもって、サウルとその子ヨナタンのために
哀悼した。――一八これは、ユダの人々に教えるための弓の歌で、ヤシャ

ルの書(しょ)にしるされている。――彼(かれ)は言(い)った、
一九「イスラエルよ、あなたの栄光(えいこう)は、
あなたの高(たか)き所(ところ)で殺(ころ)された。
ああ、勇士(ゆうし)たちは、ついに倒(たお)れた。
二〇ガテにこの事(こと)を告(つ)げてはいけない。
アシケロンのちまたに伝(つた)えてはならない。
おそらくはペリシテびとの娘(むすめ)たちが喜(よろこ)び、
割礼(かつれい)なき者(もの)の娘(むすめ)たちが勝(か)ちほこるであろう。
二一ギルボアの山(やま)よ、
露(つゆ)はおまえの上(うえ)におりるな。
死(し)の野(の)よ、
雨(あめ)もおまえの上(うえ)に降(ふ)るな。

その所に勇士たちの盾は捨てられ、
サウルの盾は油を塗らずに捨てられた。
二二殺した者の血を飲まずには、
ヨナタンの弓は退かず、
勇士の脂肪を食べないでは、
サウルのつるぎは、むなしくは帰らなかった。
二三サウルとヨナタンとは、愛され、かつ喜ばれた。
彼らは生きるにも、死ぬにも離れず、
わしよりも早く、
ししよりも強かった。
二四イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。
彼は緋色の着物をもって、

はなやかにあなたがたを装い、
あなたがたの着物に金の飾りをつけた。
二五ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。
ヨナタンは、あなたの高き所で殺された。
二六わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためわたしは悲しむ。
あなたはわたしにとって、いとも楽しい者であった。
あなたがわたしを愛するのは世の常のようでなく、
女の愛にもまさっていた。
二七ああ、勇士たちは倒れた。
戦いの器はうせた」。

第二章一この後、ダビデは主に問うて言った、「わたしはユダの一つの町に上るべきでしょうか」。主は彼に言われた、「上りなさい」。ダビデは言っ

た、「どこへ上るべきでしょうか」。主は言われた、「ヘブロンへ」。二そこ
でダビデはその所へ上った。彼のふたりの妻、エズレルの女アヒノアム
と、カルメルびとナバルの妻であったアビガイルも上った。三ダビデはま
た自分と共にいた人々を、皆その家族と共に連れて上った。そして彼らは
ヘブロンの町々に住んだ。四時にユダの人々がきて、その所でダビデに
油を注ぎ、ユダの家の王とした。

人々がダビデに告げて、「サウルを葬ったのはヤベシ・ギレアデの人々
である」と言ったので、五ダビデは使者をヤベシ・ギレアデの人々につか
わして彼らに言った、「あなたがたは、主君サウルにこの忠誠をあらわし
て彼を葬った。どうぞ主があなたがたを祝福されるように。六どうぞ主
がいまあなたがたに、いつくしみと真実を示されるように。あなたがたが、
この事をしたので、わたしもまたあなたがたに好意を示すであろう。七今

あなたがたは手を強くし、雄々しくあれ。あなたがたの主君サウルは死に、
ユダの家がわたしに油を注いで、彼らの王としたからである」。
八さてサウルの軍の長、ネルの子アブネルは、さきにサウルの子イシボ
セテを取り、マハナイムに連れて渡り、
九彼をギレアデ、アシュルびと、エズレル、エフライム、ベニヤミンおよび全イスラエルの王とした。
一〇サウルの子イシボセテはイスラエルの王となった時、四十歳であって、二年の間、世を治めたが、ユダの家はダビデに従った。
一一ダビデがヘブロンにいてユダの家の王であった日数は七年と六か月であった。
一二ネルの子アブネル、およびサウルの子イシボセテの家来たちはマハナイムを出てギベオンへ行った。
一三ゼルヤの子ヨアブとダビデの家来たちも出ていって、ギベオンの池のそばで彼らと出会い、一方は池のこちら側に、一方は池のあちら側にすわった。
一四アブネルはヨアブに言った、「さあ、

若者たちを立たせて、われわれの前で勝負をさせよう」。ヨアブは言った、
「彼らを立たせよう」。
一五こうしてサウルの子イシボセテとベニヤミンびと
とのために十二人、およびダビデの家来たち十二人を数えて出した。彼ら
は立って進み、
一六おのおの相手の頭を捕え、つるぎを相手のわき腹に刺
し、こうして彼らは共に倒れた。それゆえ、その所はヘルカテ・ハヅリム
と呼ばれた。それはギベオンにある。
一七その日、戦いはひじょうに激し
く、アブネルとイスラエルの人々はダビデの家来たちの前に敗れた。
一八その所にゼルヤの三人の子、ヨアブ、アビシャイ、およびアサヘル
がいたが、アサヘルは足の早いこと、野のかもしかのようであった。
一九ア
サヘルはアブネルのあとを追っていったが、行くのに右にも左にも曲るこ
となく、アブネルのあとに走った。
二〇アブネルは後をふりむいて言った、
「あなたはアサヘルであったか」。アサヘルは答えた、「わたしです」。
二一ア

ブネルは彼に言った、「右か左に曲って、若者のひとりを捕え、そのよろ
いを奪いなさい」。しかしアサヘルはアブネルを追うことをやめず、ほかに
向かおうともしなかった。
二二アブネルはふたたびアサヘルに言った、「わ
たしを追うことをやめて、ほかに向かいなさい。あなたを地に撃ち倒すこ
となど、どうしてわたしにできようか。それをすれば、わたしは、どうして
あなたの兄ヨアブに顔を合わせることができようか」。
二三それでもなお彼
は、ほかに向かうことを拒んだので、アブネルは、やりの石突きで彼の腹を
突いたので、やりはその背中に出た。彼はそこに倒れて、その場で死んだ。
そしてアサヘルが倒れて死んでいる場所に来る者は皆立ちとどまった。
二四しかしヨアブとアビシャイとは、なおアブネルのあとを追ったが、彼
らがギベオンの荒野の道のほとり、ギアの前にあるアンマの山にきた時、
日は暮れた。
二五ベニヤミンの人々はアブネルのあとについてきて、集ま

り、一隊となって、一つの山の頂に立った。二六その時アブネルはヨア
ブに呼ばわって言った、「いつまでもつるぎをもって滅ぼそうとするのか。
あなたはその結果の悲惨なのを知らないのか。いつまで民にその兄弟を
追うことをやめよと命じないのか」。二七ヨアブは言った、「神は生きておら
れる。もしあなたが言いださなかったならば、民はおのおのその兄弟を追
わずに、朝のうちに去っていたであろう」。二八こうしてヨアブは角笛を吹
いたので、民はみな立ちとどまって、もはやイスラエルのあとを追わず、ま
た重ねて戦わなかった。

二九アブネルとその従者たちは、夜もすがら、アラバを通って行き、ヨル
ダンを渡り、昼まで行進を続けてマハナイムに着いた。三〇ヨアブはアブ
ネルを追うことをやめて帰り、民をみな集めたが、ダビデの家来たち十九
人とアサヘルとが見当らなかった。三一しかし、ダビデの家来たちは、アブ

ネルの従者であるベニヤミンの人々三百六十人を撃ち殺した。三二人々
はアサヘルを取り上げてベツレヘムにあるその父の墓に葬った。ヨアブ
とその従者たちは、夜もすがら行って、夜明けにヘブロンに着いた。

第三章 一サウルの家とダビデの家との間の戦争は久しく続き、ダビデ
はますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。
二ヘブロンでダビデに男の子が生れた。彼の長子はエズレルの女アヒ
ノアムの産んだアムノン、三その次はカルメルびとナバルの妻であったア
ビガイルの産んだキレアブ、第三はゲシュルの王タルマイの娘マアカの子
アブサロム、四第四はハギテの子アドニヤ、第五はアビタルの子シパテヤ、
五第六はダビデの妻エグラの産んだイテレアム。これらの子がヘブロンで
ダビデに生れた。
六サウルの家とダビデの家とが戦いを続けている間に、アブネルはサ

ウルの家で、強くなってきた。七さてサウルには、ひとりのそばめがあっ
た。その名をリヅパといい、アヤの娘であったが、イシボセテはアブネル
に言った、「あなたはなぜわたしの父のそばめのところにはいったのです
か」。八アブネルはイシボセテの言葉を聞き、非常に怒って言った、「わた
しはユダの犬のかしらですか。わたしはきょう、あなたの父サウルの家と、
その兄弟と、その友人とに忠誠をあらわして、あなたをダビデの手に渡
すことをしなかったのに、あなたはきょう、女の事のあやまちを挙げてわ
たしを責められる。九主がダビデに誓われたことを、わたしが彼のために
なし遂げないならば、神がアブネルをいくえにも罰しられるように。一〇す
なわち王国をサウルの家から移し、ダビデの位をダンからベエルシバに
至るまで、イスラエルとユダの上に立たせられるであろう」。一一イシボセ
テはアブネルを恐れたので、ひと言も彼に答えることができなかった。

一二アブネルはヘブロンにいるダビデのもとに使者をつかわして言った、
「国はだれのものですか。わたしと契約を結びなさい。わたしはあなたに
力添えして、イスラエルをことごとくあなたのものにしましょう」。一三ダ
ビデは言った、「よろしい。わたしは、あなたと契約を結びましょう。た
だし一つの事をあなたに求めます。あなたがきてわたしの顔を見るとき、
まずサウルの娘ミカルを連れて来るのでなければ、わたしの顔を見ること
はできません」。一四それからダビデは使者をサウルの子イシボセテにつか
わして言った、「ペリシテびとの陽の皮一百をもってめとったわたしの妻
ミカルを引き渡しなさい」。一五そこでイシボセテは人をやって彼女をその
夫、ライシの子パルテエルから取ったので、一六その夫は彼女と共に行
き、泣きながら彼女のあとについて、バホリムまで行ったが、アブネルが
彼に「帰って行け」と言ったので彼は帰った。

一七アブネルはイスラエルの長老たちと協議して言った、「あなたがた
は以前からダビデをあなたがたの王とすることを求めていましたが、一八今
それをしなさい。主がダビデについて、『わたしのしもべダビデの手によっ
て、わたしの民イスラエルをペリシテびとの手、およびもろもろの敵の手
から救い出すであろう』と言われたからです」。一九アブネルはまたベニヤ
ミンにも語った。そしてアブネルは、イスラエルとベニヤミンの全家が良
いと思うことをみな、ヘブロンでダビデに告げようとして出発した。
二〇アブネルが二十人を従えてヘブロンにいるダビデのもとに行った時、
ダビデはアブネルと彼に従っている従者たちのために酒宴を設けた。二
一アブネルはダビデに言った、「わたしは立って行き、イスラエルをことご
とく、わが主、王のもとに集めて、あなたと契約を結ばせ、あなたの望む
ものをことごとく治められるようにいたしましょう」。こうしてダビデはア

ブネルを送り帰らせたので彼は安全に去って行った。
二二ちょうどその時、ダビデの家来たちはヨアブと共に多くのぶんどり物
を携えて略奪から帰ってきた。しかしアブネルはヘブロンのダビデのも
とにはいなかった。ダビデが彼を帰らせて彼が安全に去ったからである。
二三ヨアブおよび彼と共にいた軍勢がみな帰ってきたとき、人々はヨアブ
に言った、「ネルの子アブネルが王のもとにきたが、王が彼を帰らせたの
で彼は安全に去った」。二四そこでヨアブは王のもとに行って言った、「あ
なたは何をなさったのですか。アブネルがあなたの所にきたのに、あなた
はどうして、彼を返し去らせられたのですか。二五ネルの子アブネルがあ
なたを欺くためにきたこと、そしてあなたの出入りを知り、またあなたの
なさっていることを、ことごとく知るためにきたことをあなたはごぞんじ
です」。

二六ヨアブはダビデの所から出てきて、使者をつかわし、アブネルを追
わせたので、彼らはシラの井戸から彼を連れて帰った。しかしダビデはそ
の事を知らなかった。二七アブネルがヘブロンに帰ってきたとき、ヨアブは
ひそかに語ろうといって彼を門のうちに連れて行き、その所で彼の腹を
刺して死なせ、自分の兄弟アサヘルの血を報いた。二八その後ダビデはこ
の事を聞いて言った、「わたしとわたしの王国とは、ネルの子アブネルの血
に関して、主の前に永久に罪はない。二九どうぞ、その罪がヨアブの頭
と、その父の全家に帰するように。またヨアブの家には流出を病む者、
らい病人、つえにたよる者、つるぎに倒れる者、または食物の乏しい者
が絶えないように」。三〇こうしてヨアブとその弟アビシャイとはアブネ
ルを殺したが、それは彼がギベオンの戦いで彼らの兄弟アサヘルを殺し
たためであった。

三一ダビデはヨアブおよび自分と共にいるすべての民に言った、「あなた
がたは着物を裂き、荒布をまとい、アブネルの前に嘆きながら行きなさい」。
そしてダビデ王はその棺のあとに従った。三二人々はアブネルをヘブロン
に葬った。王はアブネルの墓で声をあげて泣き、民もみな泣いた。三三王
はアブネルのために悲しみの歌を作って言った、

「愚かな人の死ぬように、
アブネルがどうして死んだのか。
三四あなたの手は縛られず、
足には足かせもかけられないのに、
悪人の前に倒れる人のように、
あなたは倒れた」。

そして民は皆、ふたたび彼のために泣いた。三五民はみなきて、日のあるう

ちに、ダビデにパンを食べさせようとしたが、ダビデは誓って言った、「も
しわたしが日の入る前に、パンでも、ほかのものでも味わうならば、神がわ
たしをいくえにも罰しられるように」。三六民はみなそれを見て満足した。
すべて王のすることは民を満足させた。三七その日すべての民およびイス
ラエルは皆、ネルの子アブネルを殺したのは、王の意思によるものでない
ことを知った。三八王はその家来たちに言った、「この日イスラエルで、ひ
とりの偉大なる将軍が倒れたのをあなたがたは知らないのか。三九わたし
は油を注がれた王であるけれども、今日なお弱い。ゼルヤの子であるこ
れらの人々はわたしの手におえない。どうぞ主が悪を行う者に、その悪
にしたがって報いられるように」。

第四章一サウルの子イシボセテは、アブネルがヘブロンで死んだことを聞
いて、その力を失い、イスラエルは皆あわてた。二サウルの子イシボセ

テにはふたりの略奪隊の隊長があった。ひとりの名はバアナ、他のひと
りの名はレカブといって、ベニヤミンの子孫であるベロテびとリンモンの
子たちであった。（それはベロテもまたベニヤミンのうちに数えられている
からである。三ベロテびとはギッタイムに逃げていって、今日までその所
に寄留している）。
四さてサウルの子ヨナタンに足のなえた子がひとりあった。エズレルか
らサウルとヨナタンの事の知らせがきた時、彼は五歳であった。うばが彼
を抱いて逃げたが、急いで逃げる時、その子は落ちて足なえとなった。そ
の名はメピボセテといった。
五ベロテびとリンモンの子たち、レカブとバアナとは出立して、日の暑
いころイシボセテの家にきたが、イシボセテは昼寝をしていた。六家の門
を守る女は麦をあおぎ分けていたが、眠くなって寝てしまった。そこでレ

カブとその兄弟バアナは、ひそかに中にはいった。七彼らが家にはいった
時、イシボセテは寝室で床の上に寝ていたので、彼らはそれを撃って殺し、
その首をはね、その首を取って、よもすがらアラバの道を行き、八イシボ
セテの首をヘブロンにいるダビデのもとに携えて行って王に言った、「あ
なたの命を求めたあなたの敵サウルの子イシボセテの首です。主はきょ
う、わが君、王のためにサウルとそのすえとに報復されました」。九ダビ
デはベロテびとリンモンの子レカブとその兄弟バアナに答えた、「わたし
の命を、もろもろの苦難から救われた主は生きておられる。一〇わたしは
かつて、人がわたしに告げて、『見よ、サウルは死んだ』と言って、みずか
ら良いおとずれを伝える者と思っていた者を捕えてチクラグで殺し、その
おとずれに報いたのだ。一一悪人が正しい人をその家の床の上で殺したと
きは、なおさらのことだ。今わたしが、彼の血を流した罪を報い、あなた

がたを、この地から絶ち滅ぼさないでおくであろうか」。一二そしてダビデ
は若者たちに命じたので、若者たちは彼らを殺し、その手足を切り離し、
ヘブロンの池のほとりで木に掛けた。人々はイシボセテの首を持って行っ
て、ヘブロンにあるアブネルの墓に葬った。

第五章一イスラエルのすべての部族はヘブロンにいるダビデのもとにきて
言った、「われわれは、あなたの骨肉です。二先にサウルがわれわれの王で
あった時にも、あなたはイスラエルを率いて出入りされました。そして主
はあなたに、『あなたはわたしの民イスラエルを牧するであろう。またあな
たはイスラエルの君となるであろう』と言われました」。三このようにイス
ラエルの長老たちが皆、ヘブロンにいる王のもとにきたので、ダビデ王
はヘブロンで主の前に彼らと契約を結んだ。そして彼らはダビデに油を
注いでイスラエルの王とした。四ダビデは王となったとき三十歳で、四十

年の間、世を治めた。五すなわちヘブロンで七年六か月ユダを治め、また
エルサレムで三十三年、全イスラエルとユダを治めた。
六王とその従者たちとはエルサレムへ行って、その地の住民エブスび
とを攻めた。エブスびとはダビデに言った、「あなたはけっして、ここに攻
め入ることはできない。かえって、めしいや足なえでも、あなたを追い払
うであろう」。彼らが「ダビデはここに攻め入ることはできない」と思った
からである。七ところがダビデはシオンの要害を取った。これがダビデの
町である。八その日ダビデは、「だれでもエブスびとを撃とうとする人は、
水をくみ上げる縦穴を上って行って、ダビデが心に憎んでいる足なえや
めしいを撃て」と言った。それゆえに人々は、「めしいや足なえは、宮には
いってはならない」と言いならわしている。九ダビデはその要害に住んで、
これをダビデの町と名づけた。またダビデはミロから内の周囲に城壁を

築いた。一〇こうしてダビデはますます大いなる者となり、かつ万軍の神、
主が彼と共におられた。
一一ツロの王ヒラムはダビデに使者をつかわして、香柏および大工と石工
を送った。彼らはダビデのために家を建てた。一二そしてダビデは主が自分
を堅く立ててイスラエルの王とされたこと、主がその民イスラエルのため
にその王国を興されたことを悟った。
一三ダビデはヘブロンからきて後、さらにエルサレムで妻とそばめを入れ
たので、むすこと娘がまたダビデに生れた。一四エルサレムで彼に生れた
者の名は次のとおりである。シャンムア、ショバブ、ナタン、ソロモン、一
五イブハル、エリシュア、ネペグ、ヤピア、一六エリシャマ、エリアダ、お
よびエリペレテ。
一七さてペリシテびとは、ダビデが油を注がれてイスラエルの王になっ
たことを聞き、みな上ってきてダビデを捜したが、ダビデはそれを聞いて

要害に下って行った。一八ペリシテびとはきて、レパイムの谷に広がって
いた。一九ダビデは主に問うて言った、「ペリシテびとに向かって上るべき
でしょうか。あなたは彼らをわたしの手に渡されるでしょうか」。主はダビ
デに言われた、「上るがよい。わたしはかならずペリシテびとをあなたの手
に渡すであろう」。二〇そこでダビデはバアル・ペラジムへ行って、彼らを
その所で撃ち破り、そして言った、「主は、破り出る水のように、敵をわ
たしの前に破られた」。それゆえにその所の名はバアル・ペラジムと呼ば
れている。二一ペリシテびとはその所に彼らの偶像を捨てて行ったので、
ダビデとその従者たちはそれを運び去った。

二二ペリシテびとが、ふたたび上ってきて、レパイムの谷に広がったの
で、二三ダビデは主に問うたが、主は言われた、「上ってはならない。彼らの
うしろに回り、バルサムの木の前から彼らを襲いなさい。二四バルサムの

木の上に行進の音が聞えたならば、あなたは奮い立たなければならない。
その時、主があなたの前に出て、ペリシテびとの軍勢を撃たれるからであ
る」。二五ダビデは、主が命じられたようにして、ペリシテびとを撃ち、ゲ
バからゲゼルに及んだ。
第六章一ダビデは再びイスラエルのえり抜きの者三万人をことごとく集
めた。二そしてダビデは立って、自分と共にいるすべての民と共にバアレ・
ユダへ行って、神の箱をそこからかき上ろうとした。この箱はケルビムの
上に座しておられる万軍の主の名をもって呼ばれている。三彼らは神の箱
を新しい車に載せて、山の上にあるアビナダブの家から運び出した。四
アビナダブの子たち、ウザとアヒオとが神の箱を載せた新しい車を指揮
し、ウザは神の箱のかたわらに沿い、アヒオは箱の前に進んだ。五ダビデ
とイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもって歌をう

たい、力をきわめて、主の前に踊った。
六彼らがナコンの打ち場にきた時、ウザは神の箱に手を伸べて、それを
押えた。牛がつまずいたからである。七すると主はウザに向かって怒りを
発し、彼が手を箱に伸べたので、彼をその場で撃たれた。彼は神の箱のか
たわらで死んだ。八主がウザを撃たれたので、ダビデは怒った。その所は
今日までペレヅ・ウザと呼ばれている。九その日ダビデは主を恐れて言っ
た、「どうして主の箱がわたしの所に来ることができようか」。一〇ダビデ
は主の箱をダビデの町に入れることを好まず、これを移してガテびとオベ
デエドムの家に運ばせた。一一神の箱はガテびとオベデエドムの家に三か
月とどまった。主はオベデエドムとその全家を祝福された。
一二しかしダビデ王は、「主が神の箱のゆえに、オベデエドムの家とその
すべての所有を祝福されている」と聞き、ダビデは行って、喜びをもっ

て、神の箱をオベデエドムの家からダビデの町にかき上った。一三主の箱
をかく者が六歩進んだ時、ダビデは牛と肥えた物を犠牲としてささげた。
一四そしてダビデは力をきわめて、主の箱の前で踊った。その時ダビデは
亜麻布のエポデをつけていた。一五こうしてダビデとイスラエルの全家と
は、喜びの叫びと角笛の音をもって、神の箱をかき上った。
一六主の箱がダビデの町にはいった時、サウルの娘ミカルは窓からなが
め、ダビデ王が主の前に舞い踊るのを見て、心のうちにダビデをさげす
んだ。一七人々は主の箱をかき入れて、ダビデがそのために張った天幕の
中のその場所に置いた。そしてダビデは燔祭と酬恩祭を主の前にささげ
た。一八ダビデは燔祭と酬恩祭をささげ終った時、万軍の主の名によっ
て民を祝福した。一九そしてすべての民、イスラエルの全民衆に、男
にも女にも、おのおのパンの菓子一個、肉一きれ、ほしぶどう一かたまり

を分け与えた。こうして民はみなおのおのその家に帰った。
二〇ダビデが家族を祝福しようとして帰ってきた時、サウルの娘ミカ
ルはダビデを出迎えて言った、「きょうイスラエルの王はなんと威厳のあっ
たことでしょう。いたずら者が、恥も知らず、その身を現すように、きょ
う家来たちのはしためらの前に自分の身を現されました」。二一ダビデは
ミカルに言った、「あなたの父よりも、またその全家よりも、むしろわたし
を選んで、主の民イスラエルの君とせられた主の前に踊ったのだ。わたし
はまた主の前に踊るであろう。二二わたしはこれよりももっと軽んじられ
るようにしよう。そしてあなたの目には卑しめられるであろう。しかしわ
たしは、あなたがさきに言った、はしためたちに誉を得るであろう」。二三
こうしてサウルの娘ミカルは死ぬ日まで子供がなかった。

第七章一さて、王が自分の家に住み、また主が周囲の敵をことごとく打

ち退けて彼に安息を賜わった時、二王は預言者ナタンに言った、「見よ、
今わたしは、香柏の家に住んでいるが、神の箱はなお幕屋のうちにある」。
三ナタンは王に言った、「主があなたと共におられますから、行って、すべ
てあなたの心にあるところを行いなさい」。
四その夜、主の言葉がナタンに臨んで言った、五「行って、わたしのしも
べダビデに言いなさい、『主はこう仰せられる。あなたはわたしの住む家を
建てようとするのか。六わたしはイスラエルの人々をエジプトから導き出
した日から今日まで、家に住まわず、天幕をすまいとして歩んできた。七
わたしがイスラエルのすべての人々と共に歩んだすべての所で、わたし
がわたしの民イスラエルを牧することを命じたイスラエルのさばきづかさ
のひとりに、ひと言でも「どうしてあなたがたはわたしのために香柏の家
を建てないのか」と、言ったことがあるであろうか』。八それゆえ、今あな

たは、わたしのしもべダビデにこう言いなさい、『万軍の主はこう仰せられ
る。わたしはあなたを牧場から、羊に従っている所から取って、わた
しの民イスラエルの君とし、九あなたがどこへ行くにも、あなたと共にお
り、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去った。わたしはまた地上
の大いなる者の名のような大いなる名をあなたに得させよう。一〇そして
わたしの民イスラエルのために一つの所を定めて、彼らを植えつけ、彼ら
を自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにするであろう。一一ま
た前のように、わたしがわたしの民イスラエルの上にさばきづかさを立て
た日からこのかたのように、悪人が重ねてこれを悩ますことはない。わた
しはあなたのもろもろの敵を打ち退けて、あなたに安息を与えるであろ
う。主はまた「あなたのために家を造る」と仰せられる。一二あなたが日
が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あ

なたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。一三彼はわたしの名
のために家を建てる。わたしは長くその国の位を堅くしよう。一四わたし
は彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう。もし彼が罪を犯すなら
ば、わたしは人のつえと人の子のむちをもって彼を懲らす。一五しかしわ
たしはわたしのいつくしみを、わたしがあなたの前から除いたサウルから
取り去ったように、彼からは取り去らない。一六あなたの家と王国はわた
しの前に長く保つであろう。あなたの位は長く堅うせられる』。一七ナタ
ンはすべてこれらの言葉のように、またすべてこの幻のようにダビデに
語った。

一八その時ダビデ王は、はいって主の前に座して言った、「主なる神よ、
わたしがだれ、わたしの家が何であるので、あなたはこれまでわたしを導
かれたのですか。一九主なる神よ、これはなおあなたの目には小さい事で

す。主なる神よ、あなたはまたしもべの家の、はるか後の事を語って、き
たるべき代々のことを示されました。二〇ダビデはこの上なにをあなたに
申しあげることができましょう。主なる神よ、あなたはしもべを知ってお
られるのです。二一あなたの約束のゆえに、またあなたの心に従って、あ
なたはこのもろもろの大いなる事を行い、しもべにそれを知らせられまし
た。二二主なる神よ、あなたは偉大です。それは、われわれがすべて耳に聞
いたところによれば、あなたのような者はなく、またあなたのほかに神は
ないからです。二三地のどの国民が、あなたの民イスラエルのようでありま
しょうか。これは神が行って、自分のためにあがなって民とし、自らの名
をあげられたもの、また彼らのために大いなる恐るべきことをなし、その
民の前から国びととその神々とを追い出されたものです。二四そしてあな
たの民イスラエルを永遠にあなたの民として、自分のために、定められま

した。主よ、あなたは彼らの神となられたのです。二五主なる神よ、今あ
なたが、しもべとしもべの家とについて語られた言葉を長く堅うして、あ
なたの言われたとおりにしてください。二六そうすれば、あなたの名はとこ
しえにあがめられて、『万軍の主はイスラエルの神である』と言われ、あな
たのしもべダビデの家は、あなたの前に堅く立つことができましょう。二
七万軍の主、イスラエルの神よ、あなたはしもべに示して、『おまえのため
に家を建てよう』と言われました。それゆえ、しもべはこの祈をあなたに
ささげる勇気を得たのです。二八主なる神よ、あなたは神にましまし、あな
たの言葉は真実です。あなたはこの良き事をしもべに約束されました。二
九どうぞ今、しもべの家を祝福し、あなたの前に長くつづかせてくださ
るように。主なる神よ、あなたがそれを言われたのです。どうぞあなたの
祝福によって、しもべの家がながく祝福されますように」。

第八章一この後ダビデはペリシテびとを撃って、これを征服した。ダビ
デはまたペリシテびとの手からメテグ・アンマを取った。
二彼はまたモアブを撃ち、彼らを地に伏させ、なわをもって彼らを測っ
た。すなわち二筋のなわをもって殺すべき者を測り、一筋のなわをもって
生かしておく者を測った。そしてモアブびとは、ダビデのしもべとなって、
みつぎを納めた。
三ダビデはまたレホブの子であるゾバの王ハダデゼルが、ユフラテ川の
ほとりにその勢力を回復しようとして行くところを撃った。四そしてダビ
デは彼から騎兵千七百人、歩兵二万人を取った。ダビデはまた一百の戦車
の馬を残して、そのほかの戦車の馬はみなその足の筋を切った。五ダマス
コのスリヤびとが、ゾバの王ハダデゼルを助けるためにきたので、ダビデ
はスリヤびと二万二千人を殺した。六そしてダビデはダマスコのスリヤに

守備隊を置いた。スリヤびとは、ダビデのしもべとなって、みつぎを納め
た。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。七ダビデはハ
ダデゼルのしもべらが持っていた金の盾を奪って、エルサレムに持ってき
た。八ダビデ王はまたハダデゼルの町、ベタとベロタイから、ひじょうに
多くの青銅を取った。
九時にハマテの王トイは、ダビデがハダデゼルのすべての軍勢を撃ち破っ
たことを聞き、一〇その子ヨラムをダビデ王のもとにつかわして、彼にあい
さつし、かつ祝を述べさせた。ハダデゼルはかつてしばしばトイと戦い
を交えたが、ダビデがハダデゼルと戦ってこれを撃ち破ったからである。
ヨラムが銀の器と金の器と青銅の器を携えてきたので、一一ダビデ王
は征服したすべての国民から取ってささげた金銀と共にこれらをも主にさ
さげた。一二すなわちエドム、モアブ、アンモンの人々、ペリシテびと、ア

マレクから獲た物、およびゾバの王レホブの子ハダデゼルから獲たぶんど
り物と共にこれをささげた。
一三こうしてダビデは名声を得た。彼は帰ってきてから塩の谷でエドム
びと一万八千人を撃ち殺した。一四そしてエドムに守備隊を置いた。すな
わちエドムの全地に守備隊を置き、エドムびとは皆ダビデのしもべとなっ
た。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。
一五こうしてダビデはイスラエルの全地を治め、そのすべての民に正義
と公平を行った。一六ゼルヤの子ヨアブは軍の長、アヒルデの子ヨシャ
パテは史官、一七アヒトブの子ザドクとアビヤタルの子アヒメレクは祭司、
セラヤは書記官、一八エホヤダの子ベナヤはケレテびととペレテびととの長、
ダビデの子たちは祭司であった。

第九章一時にダビデは言った、「サウルの家の人で、なお残っている者が

あるか。わたしはヨナタンのために、その人に恵みを施そう」。二さて、サ
ウルの家にヂバという名のしもべがあったが、人々が彼をダビデのもとに
呼び寄せたので、王は彼に言った、「あなたがヂバか」。彼は言った、「しも
べがそうです」。三王は言った、「サウルの家の人がまだ残っていませんか。
わたしはその人に神の恵みを施そうと思う」。ヂバは王に言った、「ヨナ
タンの子がまだおります。あしなえです」。四王は彼に言った、「その人は
どこにいるのか」。ヂバは王に言った、「彼はロ・デバルのアンミエルの子
マキルの家におります」。五ダビデ王は人をつかわして、ロ・デバルのアン
ミエルの子マキルの家から、彼を連れてこさせた。六サウルの子ヨナタン
の子であるメピボセテはダビデのもとにきて、ひれ伏して拝した。ダビデ
が、「メピボセテよ」と言ったので、彼は、「しもべは、ここにおります」と答
えた。七ダビデは彼に言った、「恐れることはない。わたしはかならずあな

たの父ヨナタンのためにあなたに恵みを施しましょう。あなたの父サウ
ルの地をみなあなたに返します。またあなたは常にわたしの食卓で食事
をしなさい」。八彼は拝して言った、「あなたは、しもべを何とおぼしめし
て、死んだ犬のようなわたしを顧みられるのですか」。
九王はサウルのしもべヂバを呼んで言った、「すべてサウルとその家に属
する物を皆、わたしはあなたの主人の子に与えた。一〇あなたと、あなた
の子たちと、しもべたちとは、彼のために地を耕して、あなたの主人の
子が食べる食物を取り入れなければならない。しかしあなたの主人の子
メピボセテはいつもわたしの食卓で食事をするであろう」。ヂバには十五
人の男の子と二十人のしもべがあった。一一ヂバは王に言った、「すべて
王わが主君がしもべに命じられるとおりに、しもべはいたしましょう」。こ
うしてメピボセテは王の子のひとりのようにダビデの食卓で食事をした。

一二メピボセテには小さい子があって、名をミカといった。そしてチバの家
に住んでいる者はみなメピボセテのしもべとなった。一三メピボセテはエ
ルサレムに住んだ。彼がいつも王の食卓で食事をしたからである。彼は
両足ともに、なえていた。

第一〇章一この後アンモンの人々の王が死んで、その子ハヌンがこれに
代って王となった。二そのときダビデは言った、「わたしはナハシの子ハヌ
ンに、その父がわたしに恵みを施したように、恵みを施そう」。そして
ダビデは彼を、その父のゆえに慰めようと、しもべをつかわした。ダビデ
のしもべたちはアンモンの人々の地に行ったが、三アンモンの人々のつか
さたちはその主君ハヌンに言った、「ダビデが慰める者をあなたのもとに
つかわしたのは彼があなたの父を尊ぶためだと思われますか。ダビデが
あなたのもとに、しもべたちをつかわしたのは、この町をうかがい、それを

探って、滅ぼすためではありませんか」。四そこでハヌンはダビデのしもべ
たちを捕え、おのおの、ひげの半ばをそり落し、その着物を中ほどから断
ち切り腰の所までにして、彼らを帰らせた。五人々がこれをダビデに告
げたので、ダビデは人をつかわして彼らを迎えさせた。その人々はひじょ
うに恥じたからである。そこで王は言った、「ひげがのびるまでエリコにと
どまって、その後、帰りなさい」。

六アンモンの人々は自分たちがダビデに憎まれていることがわかったの
で、人をつかわして、ベテ・レホブのスリヤびととゾバのスリヤびととの
歩兵二万人およびマアカの王とその一千人、トブの人一万二千人を雇い入
れた。七ダビデはそれを聞いて、ヨアブと勇士の全軍をつかわしたので、八
アンモンの人々は出て、門の入口に戦いの備えをした。ゾバとレホブと
のスリヤびと、およびトブとマアカの人々は別に野にいた。

九ヨアブは戦いが前後から自分に迫ってくるのを見て、イスラエルのえ
り抜きの兵士のうちから選んで、これをスリヤびとに対して備え、一〇その
ほかの民を自分の兄弟アビシャイの手にわたして、アンモンの人々に対
して備えさせ、一一そして言った、「もしスリヤびとがわたしに手ごわいと
きは、わたしを助けてください。もしアンモンの人々があなたに手ごわい
ときは、行ってあなたを助けましょう。一二勇ましくしてください。われわ
れの民のため、われわれの神の町々のため、勇ましくしましょう。どうぞ
主が良いと思われることをされるように」。一三ヨアブが自分と一緒にいる
民と共に、スリヤびとに向かって戦おうとして近づいたとき、スリヤび
とは彼の前から逃げた。一四アンモンの人々はスリヤびとが逃げるのを見
て、彼らもまたアビシャイの前から逃げて町にはいった。そこでヨアブは
アンモンの人々を撃つことをやめてエルサレムに帰った。

一五しかしスリヤびとは自分たちのイスラエルに打ち敗られたのを見て、
共に集まった。一六そしてハダデゼルは人をつかわし、ユフラテ川の向こ
う側にいるスリヤびとを率いてヘラムにこさせた。ハダデゼルの軍の長
ショバクがこれを率いた。一七この事がダビデに聞えたので、彼はイスラ
エルをことごとく集め、ヨルダンを渡ってヘラムにきた。スリヤびとはダ
ビデに向かって備えをして彼と戦った。一八しかしスリヤびとがイスラエ
ルの前から逃げたので、ダビデはスリヤびとの戦車の兵七百、騎兵四万を
殺し、またその軍の長ショバクを撃ったので、彼はその所で死んだ。一
九ハダデゼルの家来であった王たちはみな、自分たちがイスラエルに打ち
敗られたのを見て、イスラエルと和を講じ、これに仕えた。こうしてスリ
ヤびとは恐れて再びアンモンの人々を助けることをしなかった。
第一一章一春になって、王たちが戦いに出るに及んで、ダビデはヨアブ

および自分と共にいる家来たち、並びにイスラエルの全軍をつかわした。
彼らはアンモンの人々を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサ
レムにとどまっていた。
二さて、ある日の夕暮、ダビデは床から起き出て、王の家の屋上を歩い
ていたが、屋上から、ひとりの女がからだを洗っているのを見た。その
女は非常に美しかった。三ダビデは人をつかわしてその女のことを探
らせたが、ある人は言った、「これはエリアムの娘で、ヘテびとウリヤの妻
バテシバではありませんか」。四そこでダビデは使者をつかわして、その女
を連れてきた。女は彼の所にきて、彼はその女と寝た。（女は身の汚
れを清めていたのである。）こうして女はその家に帰った。五女は妊娠
したので、人をつかわしてダビデに告げて言った、「わたしは子をはらみま
した」。
六そこでダビデはヨアブに、「ヘテびとウリヤをわたしの所につかわせ」

と言ってやったので、ヨアブはウリヤをダビデの所につかわした。七ウリ
ヤがダビデの所にきたので、ダビデは、ヨアブはどうしているか、民はど
うしているか、戦いはうまくいっているかとたずねた。八そしてダビデは
ウリヤに言った、「あなたの家に行って、足を洗いなさい」。ウリヤは王の
家を出ていったが、王の贈り物が彼の後に従った。九しかしウリヤは王
の家の入口で主君の家来たちと共に寝て、自分の家に帰らなかった。一〇
人々がダビデに、「ウリヤは自分の家に帰りませんでした」と告げたので、
ダビデはウリヤに言った、「旅から帰ってきたのではないか。どうして家に
帰らなかったのか」。一一ウリヤはダビデに言った、「神の箱も、イスラエ
ルも、ユダも、小屋の中に住み、わたしの主人ヨアブと、わが主君の家来
たちが野のおもてに陣を取っているのに、わたしはどうして家に帰って食
い飲みし、妻と寝ることができましょう。あなたは生きておられます。あ

なたの魂は生きています。わたしはこの事をいたしません」。一二ダビデ
はウリヤに言った、「きょうも、ここにとどまりなさい。わたしはあす、あ
なたを去らせましょう」。そこでウリヤはその日と次の日エルサレムにとど
まった。一三ダビデは彼を招いて自分の前で食い飲みさせ、彼を酔わせた。
夕暮になって彼は出ていって、その床に、主君の家来たちと共に寝た。そ
して自分の家には下って行かなかった。
一四朝になってダビデはヨアブにあてた手紙を書き、ウリヤの手に託して
それを送った。一五彼はその手紙に、「あなたがたはウリヤを激しい戦い
の最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ」と書いた。一六
ヨアブは町を囲んでいたので、勇士たちがいると知っていた場所にウリヤ
を置いた。一七町の人々が出てきてヨアブと戦ったので、民のうち、ダビ
デの家来たちにも、倒れるものがあり、ヘテびとウリヤも死んだ。一八ヨア

ブは人をつかわして戦いのことをつぶさにダビデに告げた。一九ヨアブは
その使者に命じて言った、「あなたが戦いのことをつぶさに王に語り終っ
たとき、二〇もし王が怒りを起して、『あなたがたはなぜ戦おうとしてそん
なに町に近づいたのか。彼らが城壁の上から射るのを知らなかったのか。
二一エルベセテの子アビメレクを撃ったのはだれか。ひとりの女が城壁
の上から石うすの上石を投げて彼をテベツで殺したのではなかったか。あ
なたがたはなぜそんなに城壁に近づいたのか』と言われたならば、その時
あなたは、『あなたのしもべ、ヘテびとウリヤもまた死にました』と言いな
さい」。

二二こうして使者は行き、ダビデのもとにきて、ヨアブが言いつかわした
ことをことごとく告げた。二三使者はダビデに言った、「敵はわれわれより
も有利な位置を占め、出てきてわれわれを野で攻めましたが、われわれは

町の入口まで彼らを追い返しました。二四その時、射手どもは城壁から
あなたの家来たちを射ましたので、王の家来のある者は死に、また、あな
たの家来ヘテびとウリヤも死にました」。二五ダビデは使者に言った、「あな
たはヨアブにこう言いなさい、『この事で心配することはない。つるぎはこ
れをも彼をも同じく滅ぼすからである。強く町を攻めて戦い、それを攻
め落しなさい』と。そしてヨアブを励ましなさい」。
二六ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだことを聞いて、夫のために悲しん
だ。二七その喪が過ぎた時、ダビデは人をつかわして彼女を自分の家に召
し入れた。彼女は彼の妻となって男の子を産んだ。しかしダビデがした
この事は主を怒らせた。

第一二章一主はナタンをダビデにつかわされたので、彼はダビデの所に
きて言った、「ある町にふたりの人があって、ひとりは富み、ひとりは貧し

かった。二富んでいる人は非常に多くの羊と牛を持っていたが、三貧しい
人は自分が買った一頭の小さい雌の小羊のほかは何も持っていなかった。
彼がそれを育てたので、その小羊は彼および彼の子供たちと共に成長し、
彼の食物を食べ、彼のわんから飲み、彼のふところで寝て、彼にとっては
娘のようであった。四時に、ひとりの旅びとが、その富んでいる人のもと
にきたが、自分の羊または牛のうちから一頭を取って、自分の所にき
た旅びとのために調理することを惜しみ、その貧しい人の小羊を取って、
これを自分の所にきた人のために調理した」。五ダビデはその人の事をひ
じように怒ってナタンに言った、「主は生きておられる。この事をしたその
人は死ぬべきである。六かつその人はこの事をしたため、またあわれまな
かったため、その小羊を四倍にして償わなければならない」。
七ナタンはダビデに言った、「あなたがその人です。イスラエルの神、主は

こう仰せられる、『わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とし、あな
たをサウルの手から救いだし、八あなたに主人の家を与え、主人の妻たち
をあなたのふところに与え、またイスラエルとユダの家をあなたに与えた。
もし少なかったならば、わたしはもっと多くのものをあなたに増し加えた
であろう。九どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をお
こなったのですか。あなたはつるぎをもってヘテびとウリヤを殺し、その
妻をとって自分の妻とした。すなわちアンモンの人々のつるぎをもって彼
を殺した。一〇あなたがわたしを軽んじてヘテびとウリヤの妻をとり、自分
の妻としたので、つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであろう』。一
一主はこう仰せられる、『見よ、わたしはあなたの家からあなたの上に災
を起すであろう。わたしはあなたの目の前であなたの妻たちを取って、隣
びとに与えるであろう。その人はこの太陽の前で妻たちと一緒に寝るであ

ろう。一二あなたはひそかにそれをしたが、わたしは全イスラエルの前と、
太陽の前にこの事をするのである』」。一三ダビデはナタンに言った、「わた
しは主に罪をおかしました」。ナタンはダビデに言った、「主もまたあなた
の罪を除かれました。あなたは死ぬことはないでしょう。一四しかしあな
たはこの行いによって大いに主を侮ったので、あなたに生れる子供はか
ならず死ぬでしょう」。一五こうしてナタンは家に帰った。
　さて主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を撃たれたので、病気になっ
た。一六ダビデはその子のために神に嘆願した。すなわちダビデは断食し
て、へやにはいり終夜地に伏した。一七ダビデの家の長老たちは、彼のか
たわらに立って彼を地から起そうとしたが、彼は起きようとはせず、また
彼らと一緒に食事をしなかった。一八七日目にその子は死んだ。ダビデの
家来たちはその子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。それは彼ら

が、「見よ、子のなお生きている間に、われわれが彼に語ったのに彼はそ
の言葉を聞きいれなかった。どうして彼にその子の死んだことを告げるこ
とができようか。彼は自らを害するかも知れない」と思ったからである。
一九しかしダビデは、家来たちが互にささやき合うのを見て、その子の死
んだのを悟り、家来たちに言った、「子は死んだのか」。彼らは言った、「死
なれました」。二〇そこで、ダビデは地から起き上がり、身を洗い、油を
ぬり、その着物を替えて、主の家にはいって拝した。そののち自分の家に
行き、求めて自分のために食物を備えさせて食べた。二一家来たちは彼に
言った、「あなたのなさったこの事はなんでしょうか。あなたは子の生きて
いる間はその子のために断食して泣かれました。しかし子が死ぬと、あな
たは起きて食事をなさいました」。二二ダビデは言った、「子の生きている
間に、わたしが断食して泣いたのは、『主がわたしをあわれんで、この子

を生かしてくださるかも知れない』と思ったからです。二三しかし今は死ん
だので、わたしはどうして断食しなければならないでしょうか。わたしは
再び彼をかえらせることができますか。わたしは彼の所に行くでしょう
が、彼はわたしの所に帰ってこないでしょう」。

二四ダビデは妻バテシバを慰め、彼女の所にはいって、彼女と共に寝
たので、彼女は男の子を産んだ。ダビデはその名をソロモンと名づけた。
主はこれを愛された。二五そして預言者ナタンをつかわし、命じてその名
をエデデアと呼ばせられた。

二六さてヨアブはアンモンの人々のラバを攻めて王の町を取った。二七ヨ
アブは使者をダビデにつかわして言った、「わたしはラバを攻めて水の町を
取りました。二八あなたは今、残りの民を集め、この町に向かって陣をし
き、これを取りなさい。わたしがこの町を取って、人がわたしの名をもっ

て、これを呼ぶようにならないためです」。二九そこでダビデは民をことご
とく集めてラバへ行き、攻めてこれを取った。三〇そしてダビデは彼らの王
の冠をその頭から取りはなした。それは金で重さは一タラントであっ
た。宝石がはめてあり、それをダビデの頭に置いた。ダビデはその町か
らぶんどり物を非常に多く持ち出した。三一またダビデはそのうちの民を
引き出して、彼らをのこぎりや、鉄のつるはし、鉄のおのを使う仕事につ
かせ、また、れんが造りの労役につかせた。彼はアンモンの人々のすべて
の町にこのようにした。そしてダビデと民とは皆エルサレムに帰った。

第一三章 一さてダビデの子アブサロムには名をタマルという美しい妹
があったが、その後ダビデの子アムノンはこれを恋した。二アムノンは妹
タマルのために悩んでついにわずらった。それはタマルが処女であって、
アムノンは彼女に何事もすることができないと思ったからである。三とこ

ろがアムノンにはひとりの友だちがあった。名をヨナダブといい、ダビデ
の兄弟シメアの子である。ヨナダブはひじょうに賢い人であった。四彼
はアムノンに言った、「王子よ、あなたは、どうして朝ごとに、そんなにやせ
衰えるのですか。わたしに話さないのですか」。アムノンは彼に言った、
「わたしは兄弟アブサロムの妹タマルを恋しているのです」。五ヨナダ
ブは彼に言った、「あなたは病と偽り、寝床に横たわって、あなたの父が
きてあなたを見るとき彼に言いなさい、『どうぞ、わたしの妹タマルをこ
させ、わたしの所に食物を運ばせてください。そして彼女がわたしの目
の前で食物をととのえ、彼女の手からわたしが食べることのできるよう
にさせてください』」。六そこでアムノンは横になって病と偽ったが、王
がきて彼を見た時、アムノンは王に言った、「どうぞわたしの妹タマル
をこさせ、わたしの目の前で二つの菓子を作らせて、彼女の手からわたし

が食べることのできるようにしてください」。
七ダビデはタマルの家に人をつかわして言わせた、「あなたの兄アムノン
の家へ行って、彼のために食物をととのえなさい」。八そこでタマルはその
兄アムノンの家へ行ったところ、アムノンは寝ていた。タマルは粉を取っ
て、これをこね、彼の目の前で、菓子を作り、その菓子を焼き、九なべを
取って彼の前にそれをあけた。しかし彼は食べることを拒んだ。そしてア
ムノンは、「みな、わたしを離れて出てください」と言ったので、皆、彼を
離れて出た。一〇アムノンはタマルに言った、「食物を寝室に持ってきて
ください。わたしはあなたの手から食べます」。そこでタマルは自分の作っ
た菓子をとって、寝室にはいり兄アムノンの所へ持っていった。一一タマ
ルが彼に食べさせようとして近くに持って行った時、彼はタマルを捕えて
彼女に言った、「妹よ、来て、わたしと寝なさい」。一二タマルは言った、

「いいえ、兄上よ、わたしをはずかしめてはなりません。このようなことは
イスラエルでは行われません。この愚かなことをしてはなりません。一三
わたしの恥をわたしはどこへ持って行くことができましょう。あなたはイ
スラエルの愚か者のひとりとなるでしょう。それゆえ、どうぞ王に話して
ください。王がわたしをあなたに与えないことはないでしょう」。一四しか
しアムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、タマルよりも強かったの
で、タマルをはずかしめてこれと共に寝た。
一五それからアムノンは、ひじょうに深くタマルを憎むようになった。
彼女を憎む憎しみは、彼女を恋した恋よりも大きかった。アムノンは彼女
に言った、「立って、行きなさい」。一六タマルはアムノンに言った、「いい
え、兄上よ、わたしを返すことは、あなたがさきにわたしになさった事より
も大きい悪です」。しかしアムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、一

一七彼に仕えている若者を呼んで言った、「この女をわたしの所から外に
おくり出し、そのあとに戸を閉ざすがよい」。一八この時、タマルは長そで
の着物を着ていた。昔、王の姫たちの処女である者はこのような着物を
着たからである。アムノンのしもべは彼女を外に出して、そのあとに戸を
閉ざした。一九タマルは灰を頭にかぶり、着ていた長そでの着物を裂き、
手を頭にのせて、叫びながら去って行った。
二〇兄アブサロムは彼女に言った、「兄アムノンがあなたと一緒にいたの
か。しかし妹よ、今は黙っていなさい。彼はあなたの兄です。この事を
心にとめなくてよろしい」。こうしてタマルは兄アブサロムの家に寂しく
住んでいた。二一ダビデ王はこれらの事をことごとく聞いて、ひじょうに
怒った。二二アブサロムはアムノンに良いことも悪いことも語ることをし
なかった。それはアムノンがアブサロムの妹タマルをはずかしめたので、

アブサロムが彼を憎んでいたからである。
二三満二年の後、アブサロムはエフライムの近くにあるバアル・ハゾルで
羊の毛を切らせていた時、王の子たちをことごとく招いた。二四そしてア
ブサロムは王のもとにきて言った、「見よ、しもべは羊の毛を切らせており
ます。どうぞ王も王の家来たちも、しもべと共にきてください」。二五王は
アブサロムに言った、「いいえ、わが子よ、われわれが皆行ってはならない。
あなたの重荷になるといけないから」。アブサロムはダビデにしいて願った。
しかしダビデは行くことを承知せず彼に祝福を与えた。二六そこでアブサ
ロムは言った、「それでは、どうぞわたしの兄アムノンをわれわれと共に行
かせてください」。王は彼に言った、「どうして彼があなたと共に行かなけ
ればならないのか」。二七しかしアブサロムは彼にしいて願ったので、つい
にアムノンと王の子たちを皆、アブサロムと共に行かせた。二八そこでア

ブサロムは若者たちに命じて言った、「アムノンが酒を飲んで、心楽しく
なった時を見すまし、わたしがあなたがたに、『アムノンを撃て』と言う時、
彼を殺しなさい。恐れることはない。わたしが命じるのではないか。雄々
しくしなさい。勇ましくしなさい」。
二九アブサロムの若者たちはアブサロ
ムの命じたようにアムノンにおこなったので、王の子たちは皆立って、お
のおのその騾馬に乗って逃げた。
三〇彼らがまだ着かないうちに、「アブサロムは王の子たちをことごとく
殺して、ひとりも残っている者がない」という知らせがダビデに達したの
で、
三一王は立ち、その着物を裂いて、地に伏した。そのかたわらに立って
いた家来たちも皆その着物を裂いた。
三二しかしダビデの兄弟シメアの子
ヨナダブは言った、「わが主よ、王の子たちである若者たちがみな殺され
たと、お考えになってはなりません。アムノンだけが死んだのです。これ

は彼がアブサロムの妹タマルをはずかしめた日から、アブサロムの命
によって定められていたことなのです。三三それゆえ、わが主、王よ、王の
子たちが皆死んだと思って、この事を心にとめられてはなりません。ア
ムノンだけが死んだのです」。
三四アブサロムはのがれた。時に見張りをしていた若者が目をあげて見
ると、山のかたわらのホロナイムの道から多くの民の来るのが見えた。三
五ヨナダブは王に言った、「見よ、王の子たちがきました。しもべの言った
とおりです」。三六彼が語ることを終った時、王の子たちはきて声をあげて
泣いた。王もその家来たちも皆、非常にはげしく泣いた。
三七しかしアブサロムはのがれて、ゲシュルの王アミホデの子タルマイの
もとに行った。ダビデは日々その子のために悲しんだ。三八アブサロムはの
がれてゲシュルに行き、三年の間そこにいた。三九王は心に、アブサロ

ムに会うことを、せつに望んだ。アムノンは死んでしまい、ダビデが彼の
ことはあきらめていたからである。
第一四章 一ゼルヤの子ヨアブは王の心がアブサロムに向かっているのを
知った。二そこでヨアブはテコアに人をつかわして、そこからひとりの賢
い女を連れてこさせ、その女に言った、「あなたは悲しみのうちにある人
をよそおって、喪服を着、油を身に塗らず、死んだ人のために長いあいだ
悲しんでいる女のように、よそおって、三王のもとに行き、しかじかと彼
に語りなさい」。こうしてヨアブはその言葉を彼女の口に授けた。
四テコアの女は王のもとに行き、地に伏して拝し、「王よ、お助けくだ
さい」と言った。五王は女に言った、「どうしたのか」。女は言った、「ま
ことにわたしは寡婦でありまして、夫は死にました。六つかえめにはふた
りの子どもがあり、ふたりは野で争いましたが、だれも彼らを引き分け

る者がなかったので、ひとりはついに他の者を撃って殺しました。七する
と全家族がつかえめに逆らい立って、『兄弟を撃ち殺した者を引き渡たす
がよい。われわれは彼が殺したその兄弟の命のために彼を殺そう』と言
い、彼らは世継をも殺そうとしました。こうして彼らは残っているわたし
の炭火を消して、わたしの夫の名をも、跡継をも、地のおもてにとどめな
いようにしようとしています」。
八王は女に言った、「家に帰りなさい。わたしはあなたのことについて
命令を下します」。九テコアの女は王に言った、「わが主、王よ、わたしと
わたしの父の家にその罪を帰してください。どうぞ王と王の位には罪が
ありませんように」。一〇王は言った、「もしあなたに何か言う者があれば、
わたしの所に連れてきなさい。そうすれば、その人は重ねてあなたに触れ
ることはないでしょう」。一一女は言った、「どうぞ王が、あなたの神、主

をおぼえて、血の報復をする者に重ねて滅ぼすことをさせず、わたしの子
の殺されることのないようにしてください」。王は言った、「主は生きてお
られる。あなたの子の髪の毛一筋も地に落ちることはないでしょう」。
一二女は言った、「どうぞ、つかえめにひと言、わが主、王に言わせて
ください」。ダビデは言った、「言いなさい」。一三女は言った、「あなたは、
それならばどうして、神の民に向かってこのような事を図られたのですか。
王は今この事を言われたことによって自分を罪ある者とされています。そ
れは王が追放された者を帰らせられないからです。一四わたしたちはみな
死ななければなりません。地にこぼれた水の再び集めることのできない
のと同じです。しかし神は、追放された者が捨てられないように、てだて
を設ける人の命を取ることはなさいません。一五わたしがこの事を王、わ
が主に言おうとして来たのは、わたしが民を恐れたからです。つかえめは、

こう思ったのです、『王に申し上げよう。王は、はしためのように
してくださるかもしれない。一六王は聞いてくださる。わたしとわたしの
子を共に滅ぼして神の嗣業から離れさせようとする人の手から、はした
めを救い出してくださるのだから』。一七つかえめはまた、こう思ったので
す、『王、わが主の言葉はわたしを安心させるであろう』と。それは王、わ
が主は神の使のように善と悪を聞きわけられるからです。どうぞあなた
の神、主があなたと共におられますように」。
一八王は女に答えて言った、「わたしが問うことに隠さず答えてくださ
い」。女は言った、「王、わが主よ、どうぞ言ってください」。一九王は言っ
た、「このすべての事において、ヨアブの手があなたと共にありますか」。
女は答えた、「あなたはたしかに生きておられます。王、わが主よ、すべ
て王、わが主の言われた事から人は右にも左にも曲ることはできません。

わたしに命じたのは、あなたのしもべヨアブです。彼がつかえめの口に、
これらの言葉をことごとく授けたのです。二〇事のなりゆきを変えるため、
あなたのしもべヨアブがこの事をしたのです。わが君には神の使の知恵
のような知恵があって、地の上のすべてのことを知っておられます」。
二一そこで王はヨアブに言った、「この事を許す。行って、若者アブサロ
ムを連れ帰るがよい」。二二ヨアブは地にひれ伏して拝し、王を祝福した。
そしてヨアブは言った、「わが主、王よ、王がしもべの願いを許されたの
で、きょうしもべは、あなたの前に恵みを得たことを知りました」。二三そ
こでヨアブは立ってゲシュルに行き、アブサロムをエルサレムに連れてき
た。二四王は言った、「彼を自分の家に引きこもらせるがよい。わたしの顔
を見てはならない」。こうしてアブサロムは自分の家に引きこもり、王の顔
を見なかった。

二五さて全イスラエルのうちにアブサロムのように、美しさのためほめ
られた人はなかった。その足の裏から頭の頂まで彼には傷がなかった。
二六アブサロムがその頭を刈る時、その髪の毛をはかったが、王のはかり
で二百シケルあった。毎年の終りにそれを刈るのを常とした。それが重く
なると、彼はそれを刈ったのである。二七アブサロムに三人のむすこと、タ
マルという名のひとりの娘が生れた。タマルは美しい女であった。
二八こうしてアブサロムは満二年の間エルサレムに住んだが、王の顔を
見なかった。二九そこでアブサロムはヨアブを王のもとにつかわそうとし
て、ヨアブの所に人をつかわしたが、ヨアブは彼の所にこようとはしな
かった。彼は再び人をつかわしたがヨアブはこようとはしなかった。三〇
そこでアブサロムはその家来に言った、「ヨアブの畑はわたしの畑の隣
にあって、そこに大麦がある。行ってそれに火を放ちなさい」。アブサロム

の家来たちはその畑に火を放った。三一ヨアブは立ってアブサロムの家に
きて彼に言った、「どうしてあなたの家来たちはわたしの畑に火を放った
のですか」。三二アブサロムはヨアブに言った、「わたしはあなたに人をつか
わして、ここへ来るようにと言ったのです。あなたを王のもとにつかわし、
『なんのためにわたしはゲシュルからきたのですか。なおあそこにいたなら
ば良かったでしょうに』と言わせようとしたのです。それゆえ今わたしに
王の顔を見させてください。もしわたしに罪があるなら王にわたしを殺さ
せてください」。三三そこでヨアブは王のもとへ行って告げたので、王はア
ブサロムを召しよせた。彼は王のもとにきて、王の前に地にひれ伏して拝
した。王はアブサロムに口づけした。

第一五章一この後、アブサロムは自分のために戦車と馬、および自分の
前に駆ける者五十人を備えた。二アブサロムは早く起きて門の道のかたわ

らに立つのを常とした。人が訴えがあって王に裁判を求めに来ると、ア
ブサロムはその人を呼んで言った、「あなたはどの町の者ですか」。その人
が「しもべはイスラエルのこれこれの部族のものです」と言うと、
三アブサロムはその人に言った、「見よ、あなたの要求は良く、また正しい。しか
しあなたのことを聞くべき人は王がまだ立てていない」。
四アブサロムはまた言った、「ああ、わたしがこの地のさばきびとであったならばよいのに。
そうすれば訴え、または申立てのあるものは、皆わたしの所にきて、わ
たしはこれに公平なさばきを行うことができるのだが」。
五そして人が彼に敬礼しようとして近づくと、彼は手を伸べ、その人を抱きかかえて口づ
けした。
六アブサロムは王にさばきを求めて来るすべてのイスラエルびと
にこのようにした。こうしてアブサロムはイスラエルの人々の心を自分
のものとした。

七そして四年の終りに、アブサロムは王に言った、「どうぞわたしを行か
せ、ヘブロンで、かつて主に立てた誓いを果させてください。八それは、し
もべがスリヤのゲシュルにいた時、誓いを立てて、『もし主がほんとうにわ
たしをエルサレムに連れ帰ってくださるならば、わたしは主に礼拝をささ
げます』と言ったからです」。九王が彼に、「安らかに行きなさい」と言っ
たので、彼は立ってヘブロンへ行った。一〇そしてアブサロムは密使をイス
ラエルのすべての部族のうちにつかわして言った、「ラッパの響きを聞くな
らば、『アブサロムがヘブロンで王となった』と言いなさい」。一一二百人の
招かれた者がエルサレムからアブサロムと共に行った。彼らは何心なく
行き、何事をも知らなかった。一二アブサロムは犠牲をささげている間に
人をつかわして、ダビデの議官ギロびとアヒトペルを、その町ギロから呼
び寄せた。徒党は強く、民はしだいにアブサロムに加わった。

一三ひとりの使者がダビデのところにきて、「イスラエルの人々の心は
アブサロムに従いました」と言った。一四ダビデは、自分と一緒にエルサ
レムにいるすべての家来に言った、「立て、われわれは逃げよう。そうしな
ければアブサロムの前からのがれることはできなくなるであろう。急いで
行くがよい。さもないと、彼らが急ぎ追いついて、われわれに害をこうむ
らせ、つるぎをもって町を撃つであろう」。一五王のしもべたちは王に言っ
た、「しもべたちは、わが主君、王の選ばれる所をすべて行います」。一六
こうして王は出て行き、その全家は彼に従った。王は十人のめかけを残
して家を守らせた。一七王は出て行き、民はみな彼に従った。彼らは町
はずれの家にとどまった。一八彼のしもべたちは皆、彼のかたわらを進み、
すべてのケレテびとと、すべてのペレテびと、および彼に従ってガテから
きた六百人のガテびとは皆、王の前に進んだ。

一九時に王はガテびとイッタイに言った、「どうしてあなたもまた、われわれ
と共に行くのですか。あなたは帰って王と共にいなさい。あなたは外国人
で、また自分の国から追放された者だからです。二〇あなたは、きのう来
たばかりです。わたしは自分の行く所を知らずに行くのに、どうしてきょ
う、あなたを、われわれと共にさまよわせてよいでしょう。あなたは帰りな
さい。あなたの兄弟たちも連れて帰りなさい。どうぞ主が恵みと真実を
あなたに示してくださるように」。二一しかしイッタイは王に答えた、「主
は生きておられる。わが君、王は生きておられる。わが君、王のおられる
所に、死ぬも生きるも、しもべもまたそこにおります」。二二ダビデはイッ
タイに言った、「では進んで行きなさい」。そこでガテびとイッタイは進み、
また彼のすべての従者および彼と共にいた子どもたちも皆、進んだ。二三
国中みな大声で泣いた。民はみな進んだ。王もまたキデロンの谷を渡っ

て進み、民は皆進んで荒野の方に向かった。
二四そしてアビヤタルも上ってきた。見よ、ザドクおよび彼と共にいるす
べてのレビびともまた、神の契約の箱をかいてきた。彼らは神の箱をおろ
して、民がことごとく町を出てしまうのを待った。二五そこで王はザドク
に言った、「神の箱を町にかきもどすがよい。もしわたしが主の前に恵み
を得るならば、主はわたしを連れ帰って、わたしにその箱とそのすまいと
を見させてくださるであろう。二六しかしもし主が、『わたしはおまえを喜
ばない』とそう言われるのであれば、どうぞ主が良しと思われることをわ
たしにしてくださるように。わたしはここにおります」。二七王はまた祭司
ザドクに言った、「見よ、あなたもアビヤタルも、ふたりの子たち、すなわ
ちあなたの子アヒマアズとアビヤタルの子ヨナタンを連れて、安らかに町
に帰りなさい。二八わたしはあなたがたから言葉があって知らせをうけるま

で、荒野の渡し場にとどまります」。二九そこでザドクとアビヤタルは神の
箱をエルサレムにかきもどり、そこにとどまった。
三〇ダビデはオリブ山の坂道を登ったが、登る時に泣き、その頭をおお
い、はだしで行った。彼と共にいる民もみな頭をおおって登り、泣きな
がら登った。三一時に、「アヒトペルがアブサロムと共謀した者のうちに
いる」とダビデに告げる人があったので、ダビデは言った、「主よ、どうぞア
ヒトペルの計略を愚かなものにしてください」。
三二ダビデが山の頂にある神を礼拝する場所にきた時、見よ、アルキ
びとホシャイはその上着を裂き、頭に土をかぶり、来てダビデを迎えた。
三三ダビデは彼に言った、「もしあなたがわたしと共に進むならば、わたし
の重荷となるであろう。三四しかしもしあなたが町に帰ってアブサロムに
向かい、『王よ、わたしはあなたのしもべとなります。わたしがこれまで、

あなたの父のしもべであったように、わたしは今あなたのしもべとなりま
す』と言うならば、あなたはわたしのためにアヒトペルの計略を破るこ
とができるであろう。
三五祭司たち、ザドクとアビヤタルとは、あなたと共
にあそこにいるではないか。それゆえ、あなたは王の家から聞くことをこ
とごとく祭司たち、ザドクとアビヤタルとに告げなさい。
三六あそこには彼
らと共にそのふたりの子たち、すなわちザドクの子アヒマアズとアビヤタ
ルの子ヨナタンとがいる。あなたがたは聞いたことをことごとく彼らの手
によってわたしに通報しなさい」。
三七そこでダビデの友ホシャイは町には
いった。その時アブサロムはすでにエルサレムにはいっていた。

第一六章

一ダビデが山の頂を過ぎて、すこし行った時、メピボセテの
しもべチバは、くらを置いた二頭のろばを引き、その上にパン二百個、干
ぶどう百ふさ、夏のくだもの一百、ぶどう酒一袋を載せてきてダビデを

迎えた。二王はヂバに言った、「あなたはどうしてこれらのものを持ってき
たのですか」。ヂバは答えた、「ろばは王の家族が乗るため、パンと夏のく
だものは若者たちが食べるため、ぶどう酒は荒野で弱った者が飲むためで
す」。三王は言った、「あなたの主人の子はどこにおるのですか」。ヂバは王
に言った、「エルサレムにとどまっています。彼は、『イスラエルの家はきょ
う、わたしの父の国をわたしに返すであろう』と思ったのです」。四王はヂ
バに言った、「見よ、メピボセテのものはことごとくあなたのものです」。ヂ
バは言った、「わたしは敬意を表します。わが主、王よ、あなたの前にい
つまでも恵みを得させてください」。

五ダビデ王がバホリムにきた時、サウルの家の一族の者がひとりそこか
ら出てきた。その名をシメイといい、ゲラの子である。彼は出てきながら絶
えずのろった。六そして彼はダビデとダビデ王のもろもろの家来に向かっ

て石を投げた。その時、民と勇士たちはみな王の左右にいた。七シメイは
のろう時にこう言った、「血を流す人よ、よこしまな人よ、立ち去れ、立ち去
れ。八あなたが代って王となったサウルの家の血をすべて主があなたに報
いられたのだ。主は王国をあなたの子アブサロムの手に渡された。見よ、
あなたは血を流す人だから、災に会うのだ」。
九時にゼルヤの子アビシャイは王に言った、「この死んだ犬がどうしてわ
が主、王をのろってよかろうか。わたしに、行って彼の首を取らせてくだ
さい」。一〇しかし王は言った、「ゼルヤの子たちよ、あなたがたと、なんの
かかわりがあるのか。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ』と
言われたからであるならば、だれが、『あなたはどうしてこういうことをす
るのか』と言ってよいであろうか」。一一ダビデはまたアビシャイと自分の
すべての家来とに言った、「わたしの身から出たわが子がわたしの命を求

めている。今、このベニヤミンびととしてはなおさらだ。彼を許してのろ
わせておきなさい。主が彼に命じられたのだ。一二主はわたしの悩みを顧
みてくださるかもしれない。また主はきょう彼ののろいにかえて、わたし
に善を報いてくださるかも知れない」。一三こうしてダビデとその従者た
ちとは道を行ったが、シメイはダビデに並んで向かいの山の中腹を行き、
行きながらのろい、また彼に向かって石や、ちりを投げつけた。一四王およ
び共にいる民はみな疲れてヨルダンに着き、彼はその所で息をついだ。
一五さてアブサロムとすべての民、イスラエルの人々はエルサレムにき
た。アヒトペルもアブサロムと共にいた。一六ダビデの友であるアルキびと
ホシャイがアブサロムのもとにきた時、ホシャイはアブサロムに「王万歳、
王万歳」と言った。一七アブサロムはホシャイに言った、「これはあなたがそ
の友に示す真実なのか。あなたはどうしてあなたの友と一緒に行かなかっ

たのか」。一八ホシャイはアブサロムに言った、「いいえ、主とこの民とイス
ラエルのすべての人々が選んだ者にわたしは属し、かつその人と一緒にお
ります。一九かつまたわたしはだれに仕えるべきですか。その子の前に仕
えるべきではありませんか。あなたの父の前に仕えたように、わたしはあ
なたの前に仕えます」。
二〇そこでアブサロムはアヒトペルに言った、「あなたがたは、われわれ
がどうしたらよいのか、計りごとを述べなさい」。二一アヒトペルはアブサ
ロムに言った、「あなたの父が家を守るために残された、めかけたちの所
にはいりなさい。そうすればイスラエルは皆あなたが父上に憎まれること
を聞くでしょう。そしてあなたと一緒にいる者の手は強くなるでしょう」。
二二こうして彼らがアブサロムのために屋上に天幕を張ったので、アブサ
ロムは全イスラエルの目の前で父のめかけたちの所にはいった。二三その

ころアヒトペルが授ける計りごとは人が神のみ告げを伺うようであった。
アヒトペルの計りごとは皆ダビデにもアブサロムにも共にそのように思わ
れた。

第一七章 一時にアヒトペルはアブサロムに言った、「わたしに一万二千の
人を選び出させてください。わたしは立って、今夜ダビデのあとを追い、二
彼が疲れて手が弱くなっているところを襲って、彼をあわてさせましょう。
そして彼と共にいる民がみな逃げるとき、わたしは王ひとりを撃ち取り、
三すべての民を花嫁がその夫のもとに帰るようにあなたに帰らせましょ
う。あなたが求めておられるのはただひとりの命だけですから、民はみな
穏やかになるでしょう」。四この言葉はアブサロムとイスラエルのすべての
長老の心にかなった。
五そこでアブサロムは言った、「アルキびとホシャイをも呼びよせなさい。

われわれは彼の言うことを聞きましょう」。六ホシャイがアブサロムのもと
にきた時、アブサロムは彼に言った、「アヒトペルはこのように言った。わ
れわれは彼の言葉のように行うべきか。いけないのであれば、言いなさ
い」。七ホシャイはアブサロムに言った、「このたびアヒトペルが授けた計
りごとは良くありません」。八ホシャイはまた言った、「ごぞんじのように、
あなたの父とその従者たちとは勇士です。その上彼らは、野で子を奪わ
れた熊のように、ひどく怒っています。また、あなたの父はいくさびとで
すから、民と共に宿らないでしょう。九彼は今でも穴の中か、どこかほか
の所にかくれています。もし民のうちの幾人かが手始めに倒れるならば、
それを聞く者はだれでも、『アブサロムに従う民のうちに戦死者があった』
と言うでしょう。一〇そうすれば、ししの心のような心のある勇ましい
人であっても、恐れて消え去ってしまうでしょう。それはイスラエルのす

べての人が、あなたの父の勇士であること、また彼と共にいる者が、勇ま
しい人々であることを知っているからです。一一ところでわたしの計りご
とは、イスラエルをダンからベエルシバまで、海べの砂のように多くあな
たのもとに集めて、あなたみずから戦いに臨むことです。一二こうしてわ
れわれは彼の見つかる場所で彼を襲い、つゆが地におりるように彼の上に
下る。そして彼および彼と共にいるすべての人をひとりも残さないでしょ
う。一三もし彼がいずれかの町に退くならば、全イスラエルはその町にな
わをかけ、われわれはそれを谷に引き倒して、そこに一つの小石も見られ
ないようにするでしょう」。一四アブサロムとイスラエルの人々はみな、「ア
ルキびとホシャイの計りごとは、アヒトペルの計りごとよりもよい」と言っ
た。それは主がアブサロムに災を下そうとして、アヒトペルの良い計り
ごとを破ることを定められたからである。

一五そこでホシャイは祭司たち、ザドクとアビヤタルとに言った、「アヒ
トペルはアブサロムとイスラエルの長老たちのためにこういう計りごと
をした。またわたしはこういう計りごとをした。
一六それゆえ、あなたが
たはすみやかに人をつかわしてダビデに告げ、『今夜、荒野の渡し場に宿ら
ないで、必ず渡って行きなさい。さもないと王および共にいる民はみな、
滅ぼされるでしょう』と言いなさい」。
一七時に、ヨナタンとアヒマアズは
エンロゲルで待っていた。ひとりのつかえめが行って彼らに告げ、彼らは
行ってダビデ王に告げるのが常であった。それは彼らが町にはいるのを見
られないようにするためである。
一八ところがひとりの若者が彼らを見て
アブサロムに告げたので、彼らふたりは急いで去り、バホリムの、あるひ
とりの人の家にきた。その人の庭に井戸があって、彼らはその中に下った
ので、
一九女はおおいを取ってきて井戸の口の上にひろげ、麦をその上に

まき散らした。それゆえその事は何も知れなかった。二〇アブサロムのし
もべたちはその女の家にきて言った、「アヒマアズとヨナタンはどこにい
ますか」。女は彼らに言った、「あの人々は小川を渡って行きました」。彼
らは尋ねたが見当らなかったのでエルサレムに帰った。
二一彼らが去った後、人々は井戸から上り、行ってダビデ王に告げた。す
なわち彼らはダビデに言った、「立って、すみやかに川を渡りなさい。アヒ
トペルがあなたがたに対してこういう計りごとをしたからです」。二二そこ
でダビデは立って、共にいるすべての民と一緒にヨルダンを渡った。夜明
けには、ヨルダンを渡らない者はひとりもなかった。
二三アヒトペルは、自分の計りごとが行われないのを見て、ろばにくら
を置き、立って自分の町に行き、その家に帰った。そして家の人に遺言し
てみずからくびれて死に、その父の墓に葬られた。

二四ダビデはマハナイムにきた。またアブサロムは自分と共にいるイス
ラエルのすべての人々と一緒にヨルダンを渡った。二五アブサロムはアマ
サをヨアブの代りに軍の長とした。アマサはかのナハシの娘でヨアブの
母ゼルヤの妹であるアビガルをめとったイシマエルびと、名はイトラと
いう人の子である。二六そしてイスラエルとアブサロムはギレアデの地に
陣取った。

二七ダビデがマハナイムにきた時、アンモンの人々のうちのラバのナハ
シの子ショビと、ロ・デバルのアンミエルの子マキル、およびロゲリムのギ
レアデびとバルジライは、二八寝床と鉢、土器、小麦、大麦、粉、いり麦、
豆、レンズ豆、二九蜜、凝乳、羊、乾酪をダビデおよび共にいる民が
食べるために持ってきた。それは彼らが、「民は荒野で飢え疲れかわいてい
る」と思ったからである。

第一八章一さてダビデは自分と共にいる民を調べて、その上に千人の長、
百人の長を立てた。二そしてダビデは民をつかわし、三分の一をヨアブの
手に、三分の一をゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシャイの手に、三分の一を
ガテびとイッタイの手にあずけた。こうして王は民に言った、「わたしもま
た必ずあなたがたと一緒に出ます」。三しかし民は言った、「あなたは出て
はなりません。それはわれわれがどんなに逃げても、彼らはわれわれに心
をとめず、われわれの半ばが死んでも、われわれに心をとめないからです。
しかしあなたはわれわれの一万に等しいのです。それゆえあなたは町の中
からわれわれを助けてくださる方がよろしい」。四王は彼らに言った、「あ
なたがたの最も良いと思うことをわたしはしましょう」。こうして王は門
のかたわらに立ち、民は皆あるいは百人、あるいは千人となって出て行っ
た。五王はヨアブ、アビシャイおよびイッタイに命じて、「わたしのため、

若者アブサロムをおだやかに扱うように」と言った。王がアブサロムの
事についてすべての長たちに命じている時、民は皆聞いていた。
六こうして民はイスラエルに向かって野に出て行き、エフライムの森で
戦ったが、七イスラエルの民はその所でダビデの家来たちの前に敗れた。
その日その所に戦死者が多く、二万に及んだ。八そして戦いはあまねく
その地のおもてに広がった。この日、森の滅ぼした者は、つるぎの滅ぼし
た者よりも多かった。
九さてアブサロムはダビデの家来たちに行き会った。その時アブサロム
は騾馬に乗っていたが、騾馬は大きいかしの木の、茂った枝の下を通った
ので、アブサロムの頭がそのかしの木にかかって、彼は天地の間につり
さがった。騾馬は彼を捨てて過ぎて行った。一〇ひとりの人がそれを見て
ヨアブに告げて言った、「わたしはアブサロムが、かしの木にかかっている

のを見ました」。一一ヨアブはそれを告げた人に言った、「あなたはそれを見
たというのか。それなら、どうしてあなたは彼をその所で、地に撃ち落
さなかったのか。わたしはあなたに銀十シケルと帯一筋を与えたであろう
に」。一二その人はヨアブに言った、「たといわたしの手に銀千シケルを受け
ても、手を出して王の子に敵することはしません。王はわれわれが聞いて
いるところで、あなたとアビシャイとイッタイに、『わたしのため若者アブ
サロムを保護せよ』と命じられたからです。一三もしわたしがそむいて彼
の命をそこなったのであれば、何事も王に隠れることはありませんから、
あなたはみずから立ってわたしを責められたでしょう」。一四そこで、ヨア
ブは「こうしてあなたと共にとどまってはおられない」と言って、手に三
筋の投げやりを取り、あのかしの木にかかって、なお生きているアブサロ
ムの心臓にこれを突き通した。一五ヨアブの武器を執る十人の若者たちは

取り巻いて、アブサロムを撃ち殺した。
一六こうしてヨアブがラッパを吹いたので、民はイスラエルのあとを追う
ことをやめて帰った。ヨアブが民を引きとめたからである。
一七人々はアブサロムを取って、森の中の大きな穴に投げいれ、その上にひじょうに大
きい石塚を積み上げた。そしてイスラエルはみなおのおのその天幕に逃げ
帰った。
一八さてアブサロムは生きている間に、王の谷に自分のために一
つの柱を建てた。それは彼が、「わたしは自分の名を伝える子がない」と
思ったからである。彼はその柱に自分の名をつけた。その柱は今日まで
アブサロムの碑ととなえられている。
一九さてザドクの子アヒマアズは言った、「わたしは走って行って、主が
王を敵の手から救い出されたおとずれを王に伝えましょう」。
二〇ヨアブは彼に言った、「きょうは、おとずれを伝えてはならない。おとずれを伝える

のは、ほかの日にしなさい。きょうは王の子が死んだので、おとずれを伝
えてはならない」。二一ヨアブはクシびとに言った、「行って、あなたの見た
事を王に告げなさい」。クシびとはヨアブに礼をして走って行った。二二ザ
ドクの子アヒマアズは重ねてヨアブに言った、「何事があろうとも、わたし
にもクシびとのあとから走って行かせてください」。ヨアブは言った、「子
よ、おとずれの報いを得られないのに、どうしてあなたは走って行こうと
するのか」。二三彼は言った、「何事があろうとも、わたしは走って行きま
す」。ヨアブは彼に言った、「走って行きなさい」。そこでアヒマアズは低地
の道を走って行き、クシびとを追い越した。
二四時にダビデは二つの門の間にすわっていた。そして見張りの者が
城壁の門の屋根にのぼり、目をあげて見ていると、ただひとりで走って
くる者があった。二五見張りの者が呼ばわって王に告げたので、王は言っ

た、「もしひとりならば、その口におとずれがあるであろう」。その人は急
いできて近づいた。二六見張りの者は、ほかにまたひとり走ってくるのを
見たので、門の方に呼ばわって言った、「見よ、ほかにただひとりで走って
来る者があります」。王は言った、「彼もまたおとずれを持ってくるのだ」。
二七見張りの者は言った、「まっ先に走って来る人はザドクの子アヒマアズ
のようです」。王は言った、「彼は良い人だ。良いおとずれを持ってくるで
あろう」。
二八時にアヒマアズは呼ばわって王に言った、「平安でいらせられますよ
うに」。そして王の前に地にひれ伏して言った、「あなたの神、主はほむべき
かな。主は王、わが君に敵して手をあげた人々を引き渡されました」。二九
王は言った、「若者アブサロムは平安ですか」。アヒマアズは答えた、「ヨア
ブがしもべをつかわす時、わたしは大きな騒ぎを見ましたが、何事であっ

たか知りません」。三〇王は言った、「わきへ行って、そこに立っていなさ
い」。彼はわきへ行って立った。
三一その時クシびとがきた。そしてそのクシびとは言った、「わが君、王
が良いおとずれをお受けくださるよう。主はきょう、すべてあなたに敵し
て立った者どもの手から、あなたを救い出されたのです」。三二王はクシび
とに言った、「若者アブサロムは平安ですか」。クシびとは答えた、「王、わ
が君の敵、およびすべてあなたに敵して立ち、害をしようとする者は、あ
の若者のようになりますように」。三三王はひじょうに悲しみ、門の上のへ
やに上って泣いた。彼は行きながらこのように言った、「わが子アブサロム
よ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかった
のに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」。

第一九章一時にヨアブに告げる者があって、「見よ、王はアブサロムのた

めに泣き悲しんでいる」と言った。
二こうしてその日の勝利はすべての民
の悲しみとなった。それはその日、民が、「王はその子のために悲しんでい
る」と人の言うのを聞いたからである。
三そして民はその日、戦いに逃げ
て恥じている民がひそかに、はいるように、ひそかに町にはいった。
四王
は顔をおおった。そして王は大声に叫んで、「わが子アブサロムよ。アブ
サロム、わが子よ、わが子よ」と言った。
五時にヨアブは家にはいり、王
のもとにきて言った、「あなたは、きょう、あなたの命と、あなたのむすこ
娘たちの命、およびあなたの妻たちの命と、めかけたちの命を救った
すべての家来の顔をはずかしめられました。
六それはあなたが自分を憎む
者を愛し、自分を愛する者を憎まれるからです。あなたは、きょう、軍の
長たちをも、しもべたちをも顧みないことを示されました。きょう、わ
たしは知りました。もし、アブサロムが生きていて、われわれが皆きょう死

んでいたら、あなたの目にかなったでしょう。七今立って出て行って、しも
べたちにねんごろに語ってください。わたしは主をさして誓います。もし
あなたが出られないならば、今夜あなたと共にとどまる者はひとりもない
でしょう。これはあなたが若い時から今までにこうむられたすべての災
よりも、あなたにとって悪いでしょう」。八そこで王は立って門のうちの座
についた。人々はすべての民に、「見よ、王は門に座している」と告げたの
で、民はみな王の前にきた。

さてイスラエルはおのおのその天幕に逃げ帰った。九そしてイスラエル
のもろもろの部族の中で民はみな争って言った、「王はわれわれを敵の手
から救い出し、またわれわれをペリシテびとの手から助け出された。しか
し今はアブサロムのために国のそとに逃げておられる。一〇またわれわれ
が油を注いで、われわれの上に立てたアブサロムは戦いで死んだ。それ

であるのに、どうしてあなたがたは王を導きかえることについて、何をも
言わないのか」。
一一ダビデ王は祭司たちザドクとアビヤタルとに人をつかわして言った、
「ユダの長老たちに言いなさい、『全イスラエルの言葉が王に達したのに、
どうしてあなたがたは王をその家に導きかえる最後の者となるのですか。
一二あなたがたはわたしの兄弟、わたしの骨肉です。それにどうして王を
導きかえる最後の者となるのですか』。一三またアマサに言いなさい、『あ
なたはわたしの骨肉ではありませんか。これから後あなたをヨアブに代え
て、わたしの軍の長とします。もしそうしないときは、神が幾重にもわた
しを罰してくださるように』」。一四こうしてダビデはユダのすべての人の
心を、ひとりのように自分に傾けさせたので、彼らは王に、「どうぞあな
たも、すべての家来たちも帰ってきてください」と言いおくった。一五そこ

で王は帰ってきてヨルダンまで来ると、ユダの人人は王を迎えるためギル
ガルにきて、王にヨルダンを渡らせた。
一六バホリムのベニヤミンびと、ゲラの子シメイは、急いでユダの人々と
共に下ってきて、ダビデ王を迎えた。一七一千人のベニヤミンびとが彼と
共にいた。またサウルの家のしもべチバもその十五人のむすこと、二十人
のしもべを従えて、王の前にヨルダンに駆け下った。一八そして王の家族
を渡し、王の心にかなうことをしようと渡し場を渡った。ゲラの子シメ
イはヨルダンを渡ろうとする時、王の前にひれ伏し、一九王に言った、「ど
うぞわが君が、罪をわたしに帰しられないように。またわが君、王のエル
サレムを出られた日に、しもべがおこなった悪い事を思い出されないよう
に。どうぞ王がそれを心に留められないように。二〇しもべは自分が罪を
犯したことを知っています。それゆえ、見よ、わたしはきょう、ヨセフの

全家のまっ先に下ってきて、わが主、王を迎えるのです」。二一ゼルヤの子
アビシャイは答えて言った、「シメイは主が油を注がれた者をのろったの
で、そのために殺されるべきではありませんか」。二二ダビデは言った、「あ
なたがたゼルヤの子たちよ、あなたがたとなにのかかわりがあって、あな
たがたはきょうわたしに敵対するのか。きょう、イスラエルのうちで人を
殺して良かろうか。わたしが、きょうイスラエルの王となったことを、ど
うして自分で知らないことがあろうか」。二三こうして王はシメイに、「あな
たを殺さない」と言って、王は彼に誓った。

二四サウルの子メピボセテは下ってきて王を迎えた。彼は王が去った日
から安らかに帰る日まで、その足を飾らず、そのひげを整えず、またその
着物を洗わなかった。二五彼がエルサレムからきて王を迎えた時、王は彼
に言った、「メピボセテよ、あなたはどうしてわたしと共に行かなかったの

か」。二六彼は答えた、「わが主、王よ、わたしの家来がわたしを欺いたの
です。しもべは彼に、『わたしのために、ろばにくらを置け。わたしはそれ
に乗って王と共に行く』と言ったのです。しもべは足なえだからです。二七
ところが彼はしもべのことをわが主、王の前に、あしざまに言ったのです。
しかし、わが主、王は神の使のようでいらせられます。それで、あなたの
良いと思われることをしてください。二八わたしの父の全家はわが主、王
の前にはみな死んだ人にすぎないのに、あなたはしもべを、あなたの食卓
で食事をする人々のうちに置かれました。わたしになんの権利があって、
重ねて王に訴えることができましょう」。二九王は彼に言った、「あなたは
どうしてなおも自分のことを言うのですか。わたしは決めました。あなた
とヂバとはその土地を分けなさい」。三〇メピボセテは王に言った、「わが
主、王が安らかに家に帰られたのですから、彼にそれをみな取らせてくだ

さい」。
三一さてギレアデびとバルジライはロゲリムから下ってきて、ヨルダンで
王を見送るため、王と共にヨルダンに進んだ。三二バルジライは、ひじょ
うに年老いた人で八十歳であった。彼はまた、ひじょうに裕福な人であっ
たので、王がマハナイムにとどまっている間、王を養った。三三王はバ
ルジライに言った、「わたしと一緒に渡って行きなさい。わたしはエルサレ
ムであなたをわたしと共におらせて養いましょう」。三四バルジライは王
に言った、「わたしは、なお何年いきながらえるので、王と共にエルサレム
に上るのですか。三五わたしは今日八十歳です。わたしに、良いこと悪い
ことがわきまえられるでしょうか。しもべは食べるもの、飲むものを味わ
うことができましょうか。わたしは歌う男や歌う女の声をまだ聞くこと
ができましょうか。それであるのに、しもべはどうしてなおわが主、王の
重荷となってよろしいでしょうか。三六しもべは王と共にヨルダンを渡っ

て、ただ少し行きましょう。どうして王はこのような報いをわたしに報い
られなければならないのでしょうか。
三七どうぞしもべを帰らせてください。わたしは自分の町で、父母の墓の近くで死にます。ただし、あなたのしもべキムハムがここにおります。わが主、王と共に彼を渡って行かせてください。またあなたが良いと思われる事を彼にしてください」。
三八王は答えた、「キムハムはわたしと共に渡って行かせます。わたしは、あなたが良いと思われる事を彼にしましょう。またあなたが望まれることはみな、あなたのためにいたします」。
三九こうして民はみなヨルダンを渡った。王は渡った時、バルジライに口づけして、祝福したので、彼は自分の家に帰っていった。
四〇王はギルガルに進んだ。キムハムも彼と共に進んだ。ユダの民はみな王を送り、イスラエルの民の半ばもまたそうした。

四一さてイスラエルの人々はみな王の所にきて、王に言った、「われわ

れの兄弟であるユダの人々は、何ゆえにあなたを盗み去って、王とその
家族、およびダビデに伴っているすべての従者にヨルダンを渡らせたの
ですか」。四二ユダの人々はみなイスラエルの人々に答えた、「王はわれわ
れの近親だからです。あなたがたはどうしてこの事で怒られるのですか。
われわれが少しでも王の物を食べたことがありますか。王が何か賜物をわ
れわれに与えたことがありますか」。四三イスラエルの人々はユダの人々に
答えた、「われわれは王のうちに十の分を持っています。またダビデのうち
にもわれわれはあなたがたよりも多くを持っています。それであるのに、ど
うしてあなたがたはわれわれを軽んじたのですか。われらの王を導き帰
ろうと最初に言ったのはわれわれではないのですか」。しかしユダの人々
の言葉はイスラエルの人々の言葉よりも激しかった。

第二〇章一さて、その所にひとりのよこしまな人があって、名をシバ

といった。ビクリの子で、ベニヤミンびとであった。彼はラッパを吹いて
言った、「われわれはダビデのうちに分がない。またエッサイの子のうちに
嗣業を持たない。イスラエルよ、おのおのその天幕に帰りなさい」。**二**そ
こでイスラエルの人々は皆ダビデに従う事をやめて、ビクリの子シバに
従った。しかしユダの人々はその王につき従って、ヨルダンからエルサ
レムへ行った。

三ダビデはエルサレムの自分の家にきた。そして王は家を守るために残
しておいた十人のめかけたちを取って、一つの家に入れて守り、また養っ
たが、彼女たちの所には、はいらなかった。彼女たちは死ぬ日まで閉じ
こめられ一生、寡婦としてすごした。

四王はアマサに言った、「わたしのため三日のうちにユダの人々を呼び集
めて、ここにきなさい」。**五**アマサはユダを呼び集めるために行ったが、彼は

定められた時よりもおくれた。六ダビデはアビシャイに言った、「ビクリの
子シバは今われわれにアブサロムよりも多くの害をするであろう。あなた
の主君の家来たちを率いて、彼のあとを追いなさい。さもないと彼は堅固
な町々を獲て、われわれを悩ますであろう」。七こうしてヨアブとケレテび
とペレテびと、およびすべての勇士はアビシャイに従って出た。すなわ
ち彼らはエルサレムを出て、ビクリの子シバのあとを追った。八彼らがギ
ベオンにある大石のところにいた時、アマサがきて彼らに会った。時にヨ
アブは軍服を着て、帯をしめ、その上にさやに納めたつるぎを腰に結んで
帯びていたが、彼が進み出た時つるぎは抜け落ちた。九ヨアブはアマサに、
「兄弟よ、あなたは安らかですか」と言って、ヨアブは右の手をもってア
マサのひげを捕えて彼に口づけしようとしたが、一〇アマサはヨアブの手
につるぎがあることに気づかなかったので、ヨアブはそれをもってアマサ

の腹部を刺して、そのはらわたを地に流し出し、重ねて撃つこともなく彼
を殺した。
こうしてヨアブとその兄弟アビシャイはビクリの子シバのあとを追った。
一一時にヨアブの若者のひとりがアマサのかたわらに立って言った、「ヨア
ブに味方する者、ダビデにつく者はヨアブのあとに従いなさい」。一二ア
マサは血に染んで大路の中にころがっていたので、そのそばに来る者はみ
な彼を見て立ちどまった。この人は民がみな立ちどまるのを見て、アマサ
を大路から畑に移し、衣服をその上にかけた。一三アマサが大路から移さ
れたので、民は皆ヨアブに従って進み、ビクリの子シバのあとを追った。
一四シバはイスラエルのすべての部族のうちを通ってベテマアカのアベ
ルにきた。ビクリびとは皆、集まってきて彼に従った。一五そこでヨアブ
と共にいたすべての人々がきて、彼をベテマアカのアベルに囲み、町に向

かって土塁を築いた。それはとりでに向かって立てられた。こうして彼ら
は城壁をくずそうとしてこれを撃った。
一六その時、ひとりの賢い女が
町から呼ばわった、「あなたがたは聞きなさい。あなたがたは聞きなさい。
ヨアブに、『ここにきてください。わたしはあなたに言うことがあります』
と言ってください」。
一七彼がその女に近寄ると、女は「あなたがヨアブ
ですか」と言った。彼は「そうです」と答えた。すると女は彼に「はした
めの言葉をお聞きください」と言ったので、「聞きましょう」と彼は言った。
一八そこで女は言った、「昔、人々はいつも、『アベルで尋ねなさい』と
言って、事を定めました。
一九わたしはイスラエルのうちの平和な、忠誠
な者です。そうであるのに、あなたはイスラエルのうちで母ともいうべき
町を滅ぼそうとしておられます。どうして主の嗣業を、のみ尽そうとさ
れるのですか」。
二〇ヨアブは答えた、「いいえ、決してそうではなく、わ

たしが、のみ尽したり、滅ぼしたりすることはありません。二一事実はそう
ではなく、エフライムの山地の人ビクリの子、名をシバという者が手をあ
げて王ダビデにそむいたのです。あなたがたが彼ひとりを渡すならば、わ
たしはこの町を去ります」。女はヨアブに言った、「彼の首は城壁の上か
らあなたの所へ投げられるでしょう」。二二こうしてこの女が知恵をもっ
て、すべての民の所に行ったので、彼らはビクリの子シバの首をはねてヨ
アブの所へ投げ出した。そこでヨアブはラッパを吹きならしたので、人々
は散って町を去り、おのおの家に帰った。ヨアブはエルサレムにいる王の
もとに帰った。

二三ヨアブはイスラエルの全軍の長であった。エホヤダの子ベナヤはケ
レテびと、およびペレテびとの長、二四アドラムは徴募人の長、アヒルデ
の子ヨシャパテは史官、二五シワは書記官、ザドクとアビヤタルとは祭司。

二六またヤイルびとイラはダビデの祭司であった。
第二一章一ダビデの世に、年また年と三年、ききんがあったので、ダビ
デが主に尋ねたところ、主は言われた、「サウルとその家とに、血を流し
た罪がある。それはかつて彼がギベオンびとを殺したためである」。二そこ
で王はギベオンびとを召しよせた。ギベオンびとはイスラエルの子孫では
なく、アモリびとの残りであって、イスラエルの人々は彼らと誓いを立て
て、その命を助けた。ところがサウルはイスラエルとユダの人々のため
に熱心であったので、彼らを殺そうとしたのである。三それでダビデはギ
ベオンびとに言った、「わたしはあなたがたのために、何をすればよいので
すか。どんな償いをすれば、あなたがたは主の嗣業を祝福するのです
か」。四ギベオンびとは彼に言った、「これはわれわれと、サウルまたはその
家との間の金銀の問題ではありません。またイスラエルのうちのひとり

でも、われわれが殺そうというのでもありません」。ダビデは言った、「わた
しがあなたがたのために何をすればよいと言うのですか」。五かれらは王に
言った、「われわれを滅ぼした人、われわれを滅ぼしてイスラエルの領域
のどこにもおらせないようにと、たくらんだ人、六その人の子孫七人を引
き渡してください。われわれは主の山にあるギベオンで、彼らを主の前に
木にかけましょう」。王は言った、「引き渡しましょう」。
七しかし王はサウルの子ヨナタンの子であるメピボセテを惜しんだ。彼
らの間、すなわちダビデとサウルの子ヨナタンとの間に、主をさして立
てた誓いがあったからである。八王はアヤの娘リツパがサウルに産んだふ
たりの子アルモニとメピボセテ、およびサウルの娘メラブがメホラびと
バルジライの子アデリエルに産んだ五人の子を取って、九彼らをギベオン
びとの手に引き渡したので、ギベオンびとは彼らを山で主の前に木にかけ

た。彼ら七人は共に倒れた。彼らは刈入れの初めの日、すなわち大麦刈り
の初めに殺された。
一〇アヤの娘リヅパは荒布をとって、それを自分のために岩の上に敷き、
刈入れの初めから、その人々の死体の上に天から雨が降るまで、昼は空の
鳥が死体の上にこないようにし、夜は野の獣を近寄らせなかった。一一ア
ヤの娘でサウルのめかけであったリヅパのしたことがダビデに聞えたの
で、一二ダビデは行ってサウルの骨とその子ヨナタンの骨を、ヤベシギレア
デの人々の所から取ってきた。これはペリシテびとがサウルをギルボア
で殺した日に、木にかけたベテシャンの広場から、彼らが盗んでいたもの
である。一三ダビデはそこからサウルの骨と、その子ヨナタンの骨を携え
て上った。また人々はそのかけられた者どもの骨を集めた。一四こうして
彼らはサウルとその子ヨナタンの骨を、ベニヤミンの地のゼラにあるその

父キシの墓に葬り、すべて王の命じたようにした。この後、神はその地
のために、祈を聞かれた。
一五ペリシテびとはまたイスラエルと戦争をした。ダビデはその家来た
ちと共に下ってペリシテびとと戦ったが、ダビデは疲れていた。一六時に
イシビベノブはダビデを殺そうと思った。イシビベノブは巨人の子孫で、
そのやりは青銅で重さ三百シケルあり、彼は新しいつるぎを帯びていた。
一七しかしゼルヤの子アビシャイはダビデを助けて、そのペリシテびとを撃
ち殺した。そこでダビデの従者たちは彼に誓って言った、「あなたはわれ
われと共に、重ねて戦争に出てはなりません。さもないと、あなたはイス
ラエルのともし火を消すでしょう」。
一八この後、再びゴブでペリシテびととの戦いがあった。時にホシャ
びとシベカイは巨人の子孫のひとりサフを殺した。一九ここにまたゴブで、

ペリシテびととの戦いがあったが、そこではベツレヘムびとヤレオレギム
の子エルハナンは、ガテびとゴリアテを殺した。そのやりの柄は機の巻棒
のようであった。二〇またガテで再び戦いがあったが、そこにひとりの
背の高い人があり、その手の指と足の指は六本ずつで、その数は合わせて
二十四本であった。彼もまた巨人から生れた者であった。二一彼はイスラ
エルをののしったので、ダビデの兄弟シメアの子ヨナタンが彼を殺した。
二二これらの四人はガテで巨人から生れた者であったが、ダビデの手とそ
の家来たちの手に倒れた。

第二二章一ダビデは主がもろもろの敵の手とサウルの手から、自分を救
い出された日に、この歌の言葉を主に向かって述べ、二彼は言った、
「主はわが岩、わが城、わたしを救う者、
三わが神、わが岩。わたしは彼に寄り頼む。

わが盾（たて）、わが救（すくい）の角（つの）、
わが高（たか）きやぐら、わが避（さ）け所（どころ）、
わが救主（すくいぬし）。あなたはわたしを暴虐（ぼうぎゃく）から救（すく）われる。
四わたしは、ほめまつるべき主（しゅ）に呼（よ）ばわって、
わたしの敵（てき）から救（すく）われる。
五死（し）の波（なみ）はわたしをとりまき、
滅（ほろ）びの大水（おおみず）はわたしを襲（おそ）った。
六陰府（よみ）の綱（つな）はわたしをとりかこみ、
死（し）のわなはわたしに、たち向（む）かった。
七苦難（くなん）のうちにわたしは主（しゅ）を呼（よ）び、
またわが神（かみ）に呼（よ）ばわった。
主（しゅ）がその宮（みや）からわたしの声（こえ）を聞（き）かれて、

わたしの叫びはその耳にとどいた。
八その時地は震いうごき、
天の基はゆるぎふるえた。
彼が怒られたからである。
九煙はその鼻からたち上り、
火はその口から出て焼きつくし、
白熱の炭は彼から燃え出た。
一〇彼は天を低くして下られ、
暗やみが彼の足の下にあった。
一一彼はケルブに乗って飛び、
風の翼に乗ってあらわれた。
一二彼はその周囲に幕屋として、

やみと濃き雲と水の集まりとを置かれた。
一三そのみ前の輝きから
炭火が燃え出た。
一四主は天から雷をとどろかせ、
いと高き者は声を出された。
一五彼はまた矢を放って彼らを散らし、
いなずまを放って彼らを撃ち破られた。
一六主のとがめと、その鼻のいぶきとによって、
海の底はあらわれ、
世界の基が、あらわになった。
一七彼は高き所から手を伸べてわたしを捕え、
大水の中からわたしを引き上げ、

一八わたしの強い敵と、わたしを憎む者とから
わたしを救われた。
彼らはわたしにとって、あまりにも強かったからだ。
一九彼らはわたしの災の日にわたしに、たち向かった。
しかし主はわたしの支柱となられた。
二〇彼はまたわたしを広い所へ引きだされ、
わたしを喜ばれて、救ってくださった。
二一主はわたしの義にしたがってわたしに報い、
わたしの手の清きにしたがって
わたしに報いかえされた。
二二それは、わたしが主の道を守り、悪を行わず、
わが神から離れたことがないからである。

二三 そのすべてのおきてはわたしの前にあって、
わたしはその、み定めを離れたことがない。
二四 わたしは主の前に欠けた所なく、
自らを守って罪を犯さなかった。
二五 それゆえ、主はわたしの義にしたがい、
その目のまえにわたしの清きにしたがって、
わたしに報いられた。
二六 忠実な者には、あなたは忠実な者となり、
欠けた所のない人には、
あなたは欠けた所のない者となり、
二七 清い者には、あなたは清い者となり、
まがった者には、かたいぢな者となられる。

二八あなたはへりくだる民を救われる、
しかしあなたの目は高ぶる者を見て
これをひくくせられる。
二九まことに、主よ、あなたはわたしのともし火、
わが神はわたしのやみを照される。
三〇まことに、あなたによって
わたしは敵軍をふみ滅ぼし、
わが神によって石がきをとび越えることができる。
三一この神こそ、その道は非のうちどころなく、
主の約束は真実である。
彼はすべて彼に寄り頼む者の盾である。
三二主のほかに、だれが神か、
われらの神のほか、だれが岩であるか。

三三この神こそわたしの堅固な避け所であり、
わたしの道を安全にされた。
三四わたしの足をめじかの足のようにして、
わたしを高い所に安全に立たせ、
三五わたしの手を戦いに慣らされたので、
わたしの腕は青銅の弓を引くことができる。
三六あなたはその救の盾をわたしに与え、
あなたの助けは、わたしを大いなる者とされた。
三七あなたはわたしが歩く広い場所を与えられたので、
わたしの足はすべらなかった。
三八わたしは敵を追って、これを滅ぼし、
これを絶やすまでは帰らなかった。

三九わたしは彼らを絶やし、彼らを砕いたので
彼らは立つことができず、わたしの足もとに倒れた。
四〇あなたは戦いのために、わたしに力を帯びさせ
わたしを攻める者をわたしの下にかがませられた。
四一あなたによって、敵は
そのうしろをわたしに向けたので、
わたしを憎む者をわたしは滅ぼした。
四二彼らは見まわしたが、救う者はいなかった。
彼らは主に叫んだが、彼らには答えられなかった。
四三わたしは彼らを地のちりのように
細かに打ちくだき、
ちまたのどろのように、踏みにじった。

四四あなたはわたしを国々の民との争いから救い出し、
わたしをもろもろの国民のかしらとされた。
わたしの知らなかった民がわたしに仕えた。
四五異国の人たちはきてわたしにこび、
わたしの事を聞くとすぐわたしに従った。
四六異国の人たちは、うちしおれて
その城からふるえながら出てきた。
四七主は生きておられる。わが岩はほむべきかな。
わが神、わが救の岩はあがむべきかな。
四八この神はわたしのために、あだを報い、
もろもろの民をわたしの下に置かれた。
四九またわたしを敵から救い出し、

あだの上にわたしをあげ、
暴虐の人々からわたしを救い出された。
五〇それゆえ、主よ、わたしはもろもろの国民の中で、
あなたをたたえ、
あなたの、み名をほめ歌うであろう。
五一主はその王に大いなる勝利を与え、
油を注がれた者に、ダビデとその子孫とに、
とこしえに、いつくしみを施される」。

第二三章

一これはダビデの最後の言葉である。
エッサイの子ダビデの託宣、
すなわち高く挙げられた人、

ヤコブの神に油を注がれた人、
イスラエルの良き歌びとの託宣。
二「主の霊はわたしによって語る、
その言葉はわたしの舌の上にある。
三イスラエルの神は語られた、
イスラエルの岩はわたしに言われた、
『人を正しく治める者、
神を恐れて、治める者は、
四朝の光のように、
雲のない朝に、輝きでる太陽のように、
地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む』。
五まことに、わが家はそのように、

神と共にあるではないか。
それは、神が、よろず備わって確かな
とこしえの契約をわたしと結ばれたからだ。
どうして彼はわたしの救と願いを、
皆なしとげられぬことがあろうか。
六しかし、よこしまな人は、いばらのようで、
手をもって取ることができないゆえ、
みな共に捨てられるであろう。
七これに触れようとする人は
鉄や、やりの柄をもって武装する、
彼らはことごとく火で焼かれるであろう」。
八ダビデの勇士たちの名は次のとおりである。タクモンびとヨセブ・バッ

セベテはかの三人のうちの長であったが、彼はいちじに八百人に向かっ
て、やりをふるい、それを殺した。
九彼の次はアホアびとドドの子エレアザルであって、三勇士のひとりで
ある。彼は、戦おうとしてそこに集まったペリシテびとに向かって戦い
をいどみ、イスラエルの人々が退いた時、ダビデと共にいたが、一〇立っ
てペリシテびとを撃ち、ついに手が疲れ、手がつるぎに着いて離れないほど
になった。その日、主は大いなる勝利を与えられた。民は彼のあとに帰っ
てきて、ただ殺された者をはぎ取るばかりであった。
一一彼の次はハラルびとアゲの子シャンマであった。ある時、ペリシテ
びとはレヒに集まった。そこに一面にレンズ豆を作った地所があった。民
はペリシテびとの前から逃げたが、一二彼はその地所の中に立って、これを
防ぎ、ペリシテびとを殺した。そして主は大いなる救を与えられた。

一三三十人の長たちのうちの三人は下って行って刈入れのころに、アド
ラムのほら穴にいるダビデのもとにきた。時にペリシテびとの一隊はレパ
イムの谷に陣を取っていた。
一四その時ダビデは要害におり、ペリシテび
との先陣はベツレヘムにあったが、
一五ダビデは、せつに望んで、「だれか
ベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をわたしに飲ませてくれるとよ
いのだが」と言った。
一六そこでその三人の勇士たちはペリシテびとの陣を
突き通って、ベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水を汲み取って、ダ
ビデのもとに携えてきた。しかしダビデはそれを飲もうとはせず、主の前
にそれを注いで、
一七言った、「主よ、わたしは断じて飲むことをいたしま
せん。いのちをかけて行った人々の血を、どうしてわたしは飲むことがで
きましょう」。こうして彼はそれを飲もうとはしなかった。三勇士はこれら
のことを行った。

一八ゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシャイは三十人の長であった。彼は
三百人に向かって、やりをふるい、それを殺した。そして、彼は三人と共
に名を得た。一九彼は三十人のうち最も尊ばれた者で、彼らの長となっ
た。しかし、かの三人には及ばなかった。
二〇エホヤダの子ベナヤはカブジエル出身の勇士であって、多くのてが
らを立てた。彼はモアブのアリエルのふたりの子を撃ち殺した。彼はまた
雪の日に下っていって、穴の中でししを撃ち殺した。二一彼はまた姿のう
るわしいエジプトびとを撃ち殺した。そのエジプトびとは手にやりを持っ
ていたが、ベナヤはつえをとってその所に下っていき、エジプトびとの手
からやりをもぎとって、そのやりをもって殺した。二二エホヤダの子ベナヤ
はこれらの事をして三勇士と共に名を得た。二三彼は三十人のうちに有名
であったが、かの三人には及ばなかった。ダビデは彼を侍衛の長とした。

二四三十人のうちにあったのは、ヨアブの兄弟アサヘル。ベツレヘム
出身のドドの子エルハナン。二五ハロデ出身のシャンマ。ハロデ出身
のエリカ。二六パルテびとヘレヅ。テコア出身のイッケシの子イラ。二七
アナトテ出身のアビエゼル。ホシャびとメブンナイ。二八アホアびとザル
モン。ネトパ出身のマハライ。二九ネトパ出身のバアナの子ヘレブ。ベ
ニヤミンびとのギベアから出たリバイの子イッタイ。三〇ピラトンのベナ
ヤ。ガアシの谷出身のヒダイ。三一アルバテびとアビアルボン。バホリム
出身のアズマウテ。三二シャルボン出身のエリヤバ。ヤセンの子たち。ヨ
ナタン。三三ハラルびとシャンマ。ハラルびとシャラルの子アヒアム。三四
マアカ出身のアハスバイの子エリペレテ。ギロ出身のアヒトペルの子エ
リアム。三五カルメル出身のヘヅロ。アルバびとパアライ。三六ゾバ出身
のナタンの子イガル。ガドびとバニ。三七アンモンびとゼレク。ゼルヤの子

ヨアブの武器を執る者、ベエロテ出身のナハライ。三八イテルびとイラ。
イテルびとガレブ。三九ヘテびとウリヤ。合わせて三十七人である。
第二四章一主は再びイスラエルに向かって怒りを発し、ダビデを感動
して彼らに逆らわせ、「行ってイスラエルとユダとを数えよ」と言われた。
二そこで王はヨアブおよびヨアブと共にいる軍の長たちに言った、「イス
ラエルのすべての部族のうちを、ダンからベエルシバまで行き巡って民を
数え、わたしに民の数を知らせなさい」。三ヨアブは王に言った、「どうぞ
あなたの神、主が、民を今よりも百倍に増してくださいますように。そし
て王、わが主がまのあたり、それを見られますように。しかし王、わが主
は何ゆえにこの事を喜ばれるのですか」。四しかし王の言葉がヨアブと軍
の長たちとに勝ったので、ヨアブと軍の長たちとは王の前を退き、イ
スラエルの民を数えるために出て行った。五彼らはヨルダンを渡り、アロ

エルから、すなわち谷の中にある町から始めて、ガドに向かい、ヤゼルに
進んだ。六それからギレアデに行き、またヘテびとの地にあるカデシに行
き、それからダンに至り、ダンからシドンにまわり、七またツロの要害に
行き、ヒビびと、およびカナンびとのすべての町に行き、ユダのネゲブに
出てベエルシバへ行った。八こうして彼らは国をあまねく行き巡って、九
か月と二十日を経てエルサレムにきた。九そしてヨアブは民の総数を王に
告げた。すなわちイスラエルには、つるぎを抜く勇士たちが八十万あった。
ただしユダの人々は五十万であった。
一〇しかしダビデは民を数えた後、心に責められた。そこでダビデは主
に言った、「わたしはこれをおこなって大きな罪を犯しました。しかし主
よ、今どうぞしもべの罪を取り去ってください。わたしはひじょうに愚か
なことをいたしました」。一一ダビデが朝起きたとき、主の言葉はダビデの

先見者である預言者ガデに臨んで言った、一二「行ってダビデに言いなさ
い、『主はこう仰せられる、「わたしは三つのことを示す。あなたはその一
つを選ぶがよい。わたしはそれをあなたに行うであろう」と』。一三ガデ
はダビデのもとにきて、彼に言った、「あなたの国に三年のききんをこさせ
ようか。あなたが敵に追われて三か月敵の前に逃げるようにしようか。そ
れとも、あなたの国に三日の疫病をおくろうか。あなたは考えて、わた
しがどの答を、わたしをつかわされた方になすべきかを決めなさい」。一
四ダビデはガデに言った、「わたしはひじょうに悩んでいますが、主のあわ
れみは大きいゆえ、われわれを主の手に陥らせてください。わたしを人
の手には陥らせないでください」。
一五そこで主は朝から定めの時まで疫病をイスラエルに下された。ダン
からベエルシバまでに民の死んだ者は七万人あった。一六天の使が手をエ

ルサレムに伸べてこれを滅ぼそうとしたが、主はこの害悪を悔い、民を滅ぼしている天の使に言われた、「もはや、じゅうぶんである。今あなたの手をとどめるがよい」。その時、主の使はエブスびとアラウナの打ち場のかたわらにいた。一七ダビデは民を撃っている天の使を見た時、主に言った、「わたしは罪を犯しました。わたしは悪を行いました。しかしこれらの羊たちは何をしたのですか。どうぞあなたの手をわたしとわたしの父の家に向けてください」。

一八その日ガデはダビデのところにきて彼に言った、「上って行ってエブスびとアラウナの打ち場で主に祭壇を建てなさい」。一九ダビデはガデの言葉に従い、主の命じられたように上って行った。二〇アラウナは見おろして、王とそのしもべたちが自分の方に進んでくるのを見たので、アラウナは出てきて王の前に地にひれ伏して拝した。二一そしてアラウナは言った、「ど

うして王わが主は、しもべの所にこられましたか」。ダビデは言った、「あ
なたから打ち場を買い取り、主に祭壇を築いて民に下る災をとどめるた
めです」。二二アラウナはダビデに言った、「どうぞ王、わが主のよいと思わ
れる物を取ってささげてください。燔祭にする牛もあります。たきぎにす
る打穀機も牛のくびきもあります。二三王よ、アラウナはこれをことごと
く王にささげます」。アラウナはまた王に、「あなたの神、主があなたを受
けいれられますように」と言った。二四しかし王はアラウナに言った、「い
いえ、代価を支払ってそれをあなたから買い取ります。わたしは費用をか
けずに燔祭をわたしの神、主にささげることはしません」。こうしてダビデ
は銀五十シケルで打ち場と牛とを買い取った。二五ダビデはその所で主に
祭壇を築き、燔祭と酬恩祭をささげた。そこで主はその地のために祈
を聞かれたので、災がイスラエルに下ることはとどまった。

列王紀上

第一章一ダビデ王は年がすすんで老い、夜着を着せても暖まらなかった
ので、二その家来たちは彼に言った、「王わが主のために、ひとりの若いお
とめを捜し求めて王にはべらせ、王の付添いとし、あなたのふところに寝
て、王わが主を暖めさせましょう」。三そして彼らはあまねくイスラエル
の領土に美しいおとめを捜し求めて、シュナミびとアビシャグを得、王
のもとに連れてきた。四おとめは非常に美しく、王の付添いとなって王に
仕えたが、王は彼女を知ることがなかった。

五さてハギテの子アドニヤは高ぶって、「わたしは王となろう」と言い、
自分のために戦車と騎兵および自分の前に駆ける者五十人を備えた。六彼
の父は彼が生れてこのかた一度も「なぜ、そのような事をするのか」と言っ

て彼をたしなめたことがなかった。アドニヤもまた非常に姿の良い人で
あって、アブサロムの次に生れた者である。七彼がゼルヤの子ヨアブと祭司
アビヤタルとに相談したので、彼らはアドニヤに従って彼を助けた。八
しかし祭司ザドクと、エホヤダの子ベナヤと、預言者ナタンおよびシメイ
とレイ、ならびにダビデの勇士たちはアドニヤに従わなかった。
九アドニヤはエンロゲルのほとりにある「へびの石」のかたわらで、羊
と牛と肥えた家畜をほふって、王の子である自分の兄弟たち、および王
の家来であるユダの人々をことごとく招いた。一〇しかし預言者ナタンと、
ベナヤと、勇士たちと、自分の兄弟ソロモンとは招かなかった。
一一時にナタンはソロモンの母バテシバに言った、「ハギテの子アドニヤ
が王となったのをお聞きになりませんでしたか。われわれの主ダビデはそ
れをごぞんじないのです。一二それでいま、あなたに計りごとを授けて、あ

なたの命と、あなたの子ソロモンの命を救うようにいたしましょう。一
三あなたはすぐダビデ王のところへ行って、『王わが主よ、あなたは、はし
ために誓って、おまえの子ソロモンが、わたしに次いで王となり、わたし
の位に座するであろうと言われたではありませんか。そうであるのに、ど
うしてアドニヤが王となったのですか』と言いなさい。一四あなたがなお王
と話しておられる間に、わたしもまた、あなたのあとから、はいって行っ
て、あなたの言葉を確認しましょう」。
一五そこでバテシバは寝室にはいって王の所へ行った。(王は非常に老
いて、シュナミびとアビシャグが王に仕えていた)。一六バテシバは身をか
がめて王を拝した。王は言った、「何の用か」。一七彼女は王に言った、「わ
が主よ、あなたは、あなたの神、主をさして、はしために誓い、『おまえの
子ソロモンがわたしに次いで王となり、わたしの位に座するであろう』と

言われました。一八そうであるのに、ごらんなさい、今アドニヤが王とな
りました。王わが主よ、あなたはそれをごぞんじないのです。一九彼は牛
と肥えた家畜と羊をたくさんほふって、王の子たち、および祭司アビヤタ
ルと、軍の長ヨアブを招きましたが、あなたのしもべソロモンは招きま
せんでした。二〇王わが主よ、イスラエルのすべての目はあなたに注がれ、
だれがあなたに次いで、王わが主の位に座すべきかを告げられるのを望
んでいます。二一王わが主が先祖と共に眠られるとき、わたしと、わたし
の子ソロモンは謀叛人とみなされるでしょう」。
二二バテシバがなお王と話しているうちに、預言者ナタンがはいってき
た。二三人々は王に告げて、「預言者ナタンがここにおります」と言った。
彼は王の前にはいり、地に伏して王を拝した。二四そしてナタンは言った、
「王わが主よ、あなたは、『アドニヤがわたしに次いで王となり、わたしの

位に座するであろう』と仰せられましたか。二五彼はきょう下っていって、
牛と、肥えた家畜と羊をたくさんほふって、王の子たちと、軍の長ヨア
ブと、祭司アビヤタルを招きました。彼らはアドニヤの前で食い飲みして、
『アドニヤ万歳』と言いました。二六しかし、あなたのしもべであるわたし
と、祭司ザドクと、エホヤダの子ベナヤと、あなたのしもべソロモンを招
きませんでした。二七この事は王わが主がさせられた事ですか。あなたは
しもべたちに、だれがあなたに次いで王わが主の位に座すべきかを告げら
れませんでした」。
二八ダビデ王は答えて言った、「バテシバをわたしのところに呼びなさい」。
彼女は王の前にはいってきて、王の前に立った。二九すると王は誓って言
った、「わたしの命をすべての苦難から救われた主は生きておられる。三
〇わたしがイスラエルの神、主をさしてあなたに誓い、『あなたの子ソロモ

ンがわたしに次いで王となり、わたしに代って、わたしの位に座するであ
ろう』と言ったように、わたしはきょう、そのようにしよう」。三一そこで
バテシバは身をかがめ、地に伏して王を拝し、「わが主ダビデ王が、とこし
えに生きながらえられますように」と言った。
三二ダビデは言った、「祭司ザドクと、預言者ナタンおよびエホヤダの子
ベナヤをわたしの所に呼びなさい」。やがて彼らは王の前にきた。三三王
は彼らに言った、「あなたがたの主君の家来たちを連れ、わが子ソロモンを
わたしの騾馬に乗せ、彼を導いてギホンに下り、三四その所で祭司ザド
クと預言者ナタンは彼に油を注いでイスラエルの王としなさい。そして
ラッパを吹いて、『ソロモン王万歳』と言いなさい。三五それから、あなた
がたは彼に従って上ってきなさい。彼はきて、わたしの位に座し、わた
しに代って王となるであろう。わたしは彼を立ててイスラエルとユダの上

に主君とする」。三六エホヤダの子ベナヤは王に答えて言った、「アアメン、
願わくは、王わが主君の神、主もまたそう仰せられますように。三七願わ
くは、主が王わが主君と共におられたように、ソロモンと共におられて、
その位をわが主君ダビデ王の位よりも大きくせられますように」。
三八そこで祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤ、ならび
にケレテびとと、ペレテびととは下って行って、ソロモンをダビデ王の騾馬
に乗せ、彼をギホンに導いて行った。三九祭司ザドクは幕屋から油の角
を取ってきて、ソロモンに油を注いだ。そしてラッパを吹き鳴らし、民は
皆「ソロモン王万歳」と言った。四〇民はみな彼に従って上り、笛を吹
いて大いに喜び祝った。地は彼らの声で裂けるばかりであった。
四一アドニヤおよび彼と共にいた客たちは皆食事を終ったとき、これ
を聞いた。ヨアブはラッパの音を聞いて言った、「町の中のあの騒ぎは何

か」。四二彼の言葉のなお終らないうちに、そこへ祭司アビヤタルの子ヨナ
タンがきたので、アドニヤは彼に言った、「はいりなさい。あなたは勇敢
な人で、よい知らせを持ってきたのでしょう」。四三ヨナタンは答えてアド
ニヤに言った、「いいえ、主君ダビデ王はソロモンを王とせられました。四
四王は祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤ、ならびにケ
レテびとと、ペレテびとをソロモンと共につかわされたので、彼らはソロ
モンを王の騾馬に乗せて行き、四五祭司ザドクと預言者ナタンはギホンで彼
に油を注いで王としました。そして彼らがそこから喜んで上って来るの
で、町が騒がしいのです。あなたが聞いた声はそれなのです。四六こうし
てソロモンは王の位に座し、四七かつ王の家来たちがきて、主君ダビデ王
に祝いを述べて、『願わくは、あなたの神がソロモンの名をあなたの名より
も高くし、彼の位をあなたの位よりも大きくされますように』と言いま

した。そして王は床の上で拝されました。四八王はまたこう言われました、
『イスラエルの神、主はほむべきかな。主はきょう、わたしの位に座する
ひとりの子を与えて、これをわたしに見せてくださった』と」。
四九その時アドニヤと共にいた客はみな驚き、立っておのおの自分の
道に去って行った。五〇そしてアドニヤはソロモンを恐れ、立って行って
祭壇の角をつかんだ。五一ある人がこれをソロモンに告げて言った、「アド
ニヤはソロモンを恐れ、今彼は祭壇の角をつかんで、『どうぞ、ソロモン
王がきょう、つるぎをもってしもべを殺さないとわたしに誓ってくださる
ように』と言っています」。五二ソロモンは言った、「もし彼がよい人となる
ならば、その髪の毛ひとすじも地に落ちることはなかろう。しかし彼のう
ちに悪のあることがわかるならば、彼は死ななければならない」。五三ソロ
モンは人をつかわして彼を祭壇からつれて下らせた。彼がきてソロモンを

拝したので、ソロモンは彼に「家に帰りなさい」と言った。

第二章

一ダビデの死ぬ日が近づいたので、彼はその子ソロモンに命じて
言った、二「わたしは世のすべての人の行く道を行こうとしている。あなた
は強く、男らしくなければならない。三あなたの神、主のさとしを守り、
その道に歩み、その定めと戒めと、おきてとあかしとを、モーセの律法
にしるされているとおりに守らなければならない。そうすれば、あなたが
するすべての事と、あなたの向かうすべての所で、あなたは栄えるであろ
う。四また主がさきにわたしについて語って『もしおまえの子たちが、そ
の道を慎み、心をつくし、精神をつくして真実をもって、わたしの前に
歩むならば、おまえに次いでイスラエルの位にのぼる人が、欠けることは
なかろう』と言われた言葉を確実にされるであろう。
五またあなたはゼルヤの子ヨアブがわたしにした事、すなわち彼がイス

ラエルのふたりの軍の長ネルの子アブネルと、エテルの子アマサにした事
を知っている。彼はこのふたりを殺して、戦争で流した地を太平の時に報
い、罪のない者の血をわたしの腰のまわりの帯と、わたしの足のくつにつ
けた。
六それゆえ、あなたの知恵にしたがって事を行い、彼のしらがを安
らかに陰府に下らせてはならない。
七ただしギレアデびとバルジライの子
らには恵みを施し、彼らをあなたの食卓で食事する人々のうちに加え
なさい。彼らはわたしがあなたの兄弟アブサロムを避けて逃げた時、わ
たしを迎えてくれたからである。
八またバホリムのベニヤミンびとゲラの
子シメイがあなたと共にいる。彼はわたしがマハナイムへ行った時、激し
いのろいの言葉をもってわたしをのろった。しかし彼がヨルダンへ下って
きて、わたしを迎えたので、わたしは主をさして彼に誓い、『わたしはつる
ぎをもってあなたを殺さない』と言った。
九しかし彼を罪のない者として

はならない。あなたは知恵のある人であるから、彼になすべき事を知って
いる。あなたは彼のしらがを血に染めて陰府に下らせなければならない」。
一〇ダビデはその先祖と共に眠って、ダビデの町に葬られた。一一ダビ
デがイスラエルを治めた日数は四十年であった。すなわちヘブロンで七年、
エルサレムで三十三年、王であった。一二このようにしてソロモンは父ダ
ビデの位に座し、国は堅く定まった。
一三さて、ハギテの子アドニヤがソロモンの母バテシバのところへきたの
で、バテシバは言った、「あなたは穏やかな事のためにきたのですか」。彼
は言った、「穏やかな事のためです」。一四彼はまた言った、「あなたに申し
あげる事があります」。バテシバは言った、「言いなさい」。一五彼は言った、
「ごぞんじのように、国はわたしのもので、イスラエルの人は皆わたしが
王になるものと期待していました。しかし国は転じて、わたしの兄弟の

ものとなりました。彼のものとなったのは、主から出たことです。一六今
わたしはあなたに一つのお願いがあります。断らないでください」。バテ
シバは彼に言った、「言いなさい」。一七彼は言った、「どうかソロモン王に
請うて、――王はあなたに断るようなことはないでしょうから――シュナ
ミびとアビシャグをわたしに与えて妻にさせてください」。一八バテシバは
言った、「よろしい。わたしはあなたのために王に話しましょう」。
一九バテシバはアドニヤのためにソロモン王に話すため、王のもとへ行っ
た。王は立って迎え、彼女を拝して王座に着き、王母のために座を設けさ
せたので、彼女は王の右に座した。二〇そこでバテシバは言った、「あなた
に一つの小さいお願いがあります。お断りにならないでください」。王は
彼女に言った、「母上よ、あなたの願いを言ってください。わたしは断ら
ないでしょう」。二一彼女は言った、「どうぞ、シュナミびとアビシャグをあ

なたの兄弟アドニヤに与えて、妻にさせてください」。二二ソロモン王は答
えて母に言った、「どうしてアドニヤのためにシュナミびとアビシャグを求
められるのですか。彼のためには国をも求めなさい。彼はわたしの兄で、
彼の味方には祭司アビヤタルとゼルヤの子ヨアブがいるのですから」。二三
そしてソロモン王は主をさして誓って言った、「もしアドニヤがこの言葉に
よって自分の命を失うのでなければ、どんなにでもわたしを罰してくだ
さい。二四わたしを立てて、父ダビデの位にのぼらせ、主が約束されたよ
うに、わたしに一家を与えてくださった主は生きておられる。アドニヤは
きょう殺されなければならない」。二五ソロモン王はエホヤダの子ベナヤを
つかわしたので、彼はアドニヤを撃って殺した。
二六王はまた祭司アビヤタルに言った、「あなたの領地アナトテへ行きな
さい。あなたは死に当る者ですが、さきにわたしの父ダビデの前に神、主

の箱をかつぎ、またすべてわたしの父が受けた苦しみを、あなたも共に苦
しんだので、わたしは、きょうは、あなたを殺しません」。二七そしてソロ
モンはアビヤタルを主の祭司職から追放した。こうして主がシロでエリ
の家について言われた主の言葉が成就した。
二八さてこの知らせがヨアブに達したので、ヨアブは主の幕屋にのがれ
て、祭壇の角をつかんだ。ヨアブはアブサロムを支持しなかったけれども、
アドニヤを支持したからである。二九ヨアブが主の幕屋にのがれて、祭壇の
かたわらにいることを、ソロモン王に告げる者があったので、ソロモン王
はエホヤダの子ベナヤをつかわし、「行って彼を撃て」と言った。三〇ベナヤ
は主の幕屋へ行って彼に言った、「王はあなたに、出て来るようにと申され
ます」。しかし彼は言った、「いや、わたしはここで死にます」。ベナヤは王
に復命して言った、「ヨアブはこう申しました。またわたしにこう答えまし

た」。三一そこで王はベナヤに言った、「彼が言うようにし、彼を撃ち殺して
葬り、ヨアブがゆえなく流した血のとがをわたしと、わたしの父の家から
除き去りなさい。三二主はまたヨアブが血を流した行為を、彼自身のこう
べに報いられるであろう。これは彼が自分よりも正しいすぐれたふたりの
人、すなわちイスラエルの軍の長ネルの子アブネルと、ユダの軍の長エ
テルの子アマサを、つるぎをもって撃ち殺し、わたしの父ダビデのあずか
り知らない事をしたからである。三三それゆえ、彼らの血は永遠にヨアブ
のこうべと、その子孫のこうべに帰すであろう。しかしダビデと、その子孫
と、その家と、その位とには、主から賜わる平安が永久にあるであろ
う」。三四そこでエホヤダの子ベナヤは上っていって、彼を撃ち殺した。彼
は荒野にある自分の家に葬られた。三五王はエホヤダの子ベナヤを、ヨア
ブに代って軍の長とした。王はまた祭司ザドクをアビヤタルに代らせた。

三六また王は人をつかわし、シメイを召して言った、「あなたはエルサレ
ムのうちに、自分のために家を建てて、そこに住み、そこからどこへも出
てはならない。三七あなたが出て、キデロン川を渡る日には必ず殺される
ことを、しかと知らなければならない。あなたの血はあなたのこうべに帰
すであろう」。三八シメイは王に言った、「お言葉は結構です。王、わが主
の仰せられるとおりに、しもべはいたしましょう」。こうしてシメイは久し
くエルサレムに住んだ。
三九ところが三年の後、シメイのふたりの奴隷が、ガテの王マアカの子ア
キシのところへ逃げ去った。人々がシメイに告げて、「ごらんなさい、あな
たの奴隷はガテにいます」と言ったので、四〇シメイは立って、ろばにくら
を置き、ガテのアキシのところへ行って、その奴隷を尋ねた。すなわちシ
メイは行ってその奴隷をガテから連れてきたが、四一シメイがエルサレムか

らガテへ行って帰ったことがソロモン王に聞えたので、四二王は人をつか
わし、シメイを召して言った、「わたしはあなたに主をさして誓わせ、かつ
おごそかにあなたを戒めて、『あなたが出て、どこかへ行く日には、必ず
殺されることを、しかと知らなければならない』と言ったではないか。そ
してあなたは、わたしに『お言葉は結構です。従います』と言った。四三
ところで、あなたはなぜ主に対する誓いと、わたしが命じた命令を守らな
かったのか」。四四王はまたシメイに言った、「あなたは自分の心に、あな
たがわたしの父ダビデにしたもろもろの悪を知っている。主はあなたの悪
をあなたのこうべに報いられるであろう。四五しかしソロモン王は祝福を
うけ、ダビデの位は永久に主の前に堅く立つであろう」。四六王がエホヤ
ダの子ベナヤに命じたので、彼は出ていってシメイを撃ち殺した。こうし
て国はソロモンの手に堅く立った。

第三章一ソロモン王はエジプトの王パロと縁を結び、パロの娘をめとっ
てダビデの町に連れてきて、自分の家と、主の宮と、エルサレムの周囲の
城壁を建て終るまでそこにおらせた。二そのころまで主の名のために建て
た宮がなかったので、民は高き所で犠牲をささげていた。
三ソロモンは主を愛し、父ダビデの定めに歩んだが、ただ彼は高き所
で犠牲をささげ、香をたいた。四ある日、王はギベオンへ行って、そこで
犠牲をささげようとした。それが主要な高き所であったからである。ソ
ロモンは一千の燔祭をその祭壇にささげた。五ギベオンで主は夜の夢にソ
ロモンに現れて言われた、「あなたに何を与えようか、求めなさい」。六ソ
ロモンは言った、「あなたのしもべであるわたしの父ダビデがあなたに対し
て誠実と公義と真心とをもって、あなたの前に歩んだので、あなたは大い
なるいつくしみを彼に示されました。またあなたは彼のために、この大い

なるいつくしみをたくわえて、今日、彼の位に座する子を授けられまし
た。七わが神、主よ、あなたはこのしもべを、わたしの父ダビデに代って王
とならせられました。しかし、わたしは小さい子供であって、出入りする
ことを知りません。八かつ、しもべはあなたが選ばれた、あなたの民、すな
わちその数が多くて、数えることも、調べることもできないほどのおびた
だしい民の中におります。九それゆえ、聞きわける心をしもべに与えて、
あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてくださ
い。だれが、あなたのこの大いなる民をさばくことができましょう」。
一〇ソロモンはこの事を求めたので、そのことが主のみこころにかなっ
た。一一そこで神は彼に言われた、「あなたはこの事を求めて、自分のため
に長命を求めず、また自分のために富を求めず、また自分の敵の命をも
求めず、ただ訴えをききわける知恵を求めたゆえに、一二見よ、わたしは

あなたの言葉にしたがって、賢い、英明な心を与える。あなたの先には
あなたに並ぶ者がなく、あなたの後にもあなたに並ぶ者は起らないであろ
う。一三わたしはまたあなたの求めないもの、すなわち富と誉をもあなた
に与える。あなたの生きているかぎり、王たちのうちにあなたに並ぶ者は
ないであろう。一四もしあなたが、あなたの父ダビデの歩んだように、わた
しの道に歩んで、わたしの定めと命令とを守るならば、わたしはあなたの
日を長くするであろう」。

一五ソロモンが目をさましてみると、それは夢であった。そこで彼はエル
サレムへ行き、主の契約の箱の前に立って燔祭と酬恩祭をささげ、すべ
ての家来のために祝宴を設けた。

一六さて、ふたりの遊女が王のところにきて、王の前に立った。一七ひと
りの女は言った、「ああ、わが主よ、この女とわたしとはひとつの家に住

んでいますが、わたしはこの女と一緒に家にいる時、子を産みました。一
八ところがわたしの産んだ後、三日目にこの女もまた子を産みました。そ
してわたしたちは一緒にいましたが、家にはほかにだれもわたしたちと共
にいた者はなく、ただわたしたちふたりだけでした。一九ところがこの女
は自分の子の上に伏したので、夜のうちにその子は死にました。二〇彼女
は夜中に起きて、はしためが眠っている間に、わたしの子をわたしのかた
わらから取って、自分のふところに寝かせ、自分の死んだ子をわたしのふ
ところに寝かせました。二一わたしは朝、子に乳を飲ませようとして起きて
見ると死んでいました。しかし朝になってよく見ると、それはわたしが産
んだ子ではありませんでした」。二二ほかの女は言った、「いいえ、生きて
いるのがわたしの子です。死んだのはあなたの子です」。初めの女は言っ
た、「いいえ、死んだのがあなたの子です。生きているのはわたしの子です」。

彼らはこのように王の前に言い合った。
二三この時、王は言った、「ひとりは『この生きているのがわたしの子で、
死んだのがあなたの子だ』と言い、またひとりは『いいえ、死んだのがあな
たの子で、生きているのはわたしの子だ』と言う」。二四そこで王は「刀を
持ってきなさい」と言ったので、刀を王の前に持ってきた。二五王は言っ
た、「生きている子を二つに分けて、半分をこちらに、半分をあちらに与
えよ」。二六すると生きている子の母である女は、その子のために心がや
けるようになって、王に言った、「ああ、わが主よ、生きている子を彼女に
与えてください。決してそれを殺さないでください」。しかしほかのひと
りは言った、「それをわたしのものにも、あなたのものにもしないで、分け
てください」。二七すると王は答えて言った、「生きている子を初めの女に
与えよ。決して殺してはならない。彼女はその母なのだ」。二八イスラエル

は皆王が与えた判決を聞いて王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあって、
さばきをするのを見たからである。

第四章一ソロモン王はイスラエルの全地の王であった。二彼の高官たち
は次のとおりである。ザドクの子アザリヤは祭司。三シシャの子エリホレ
フとアヒヤは書記官。アヒルデの子ヨシャバテは史官。四エホヤダの子ベナ
ヤは軍の長。ザドクとアビヤタルは祭司。五ナタンの子アザリヤは代官の
長。ナタンの子ザブデは祭司で、王の友であった。六アヒシャルは宮内卿。
アブダの子アドニラムは徴募の長であった。
七ソロモンはまたイスラエルの全地に十二人の代官を置いた。その人々
は王とその家のために食物を備えた。すなわちおのおの一年に一月ずつ
食物を備えるのであった。八その名は次のとおりである。エフライムの
山地にはベンホル。九マカヅと、シャラビムと、ベテシメシと、エロン・ベ

テハナンにはベンデケル。一〇アルボテにはベンヘセデ、(彼はソコとヘペ
ルの全地を担当した)。一一ドルの高地の全部にはベン・アビナダブ、(彼
はソロモンの娘タパテを妻とした)。一二アヒルデの子バアナはタアナク
とメギドと、エズレルの下、ザレタンのかたわらにあるベテシャンの全地
を担当して、ベテシャンからアベル・メホラに至り、ヨクメアムの向こう
にまで及んだ。一三ラモテ・ギレアデにはベンゲベル、(彼はギレアデにあ
るマナセの子ヤイルの村々を担当し、またバシャンにあるアルゴブの地方
の城壁と青銅の貫の木のある大きな町六十を担当した)。一四マハナイム
にはイドの子アヒナダブ。一五ナフタリにはアヒマアズ、(彼もソロモンの
娘バスマテを妻にめとった)。一六アセルとベアロテにはホシャイの子バ
アナ。一七イッサカルにはパルアの子ヨシャパテ。一八ベニヤミンにはエラ
の子シメイ。一九アモリびとの王シホンの地およびバシャンの王オグの地

なるギレアデの地にはウリの子ゲベル。彼はその地のただひとりの代官で
あった。
二〇ユダとイスラエルの人々は多くて、海べの砂のようであったが、彼
らは飲み食いして楽しんだ。二一ソロモンはユフラテ川からペリシテびと
の地と、エジプトの境に至るまでの諸国を治めたので、皆みつぎ物を携
えてきて、ソロモンの一生のあいだ仕えた。
二二さてソロモンの一日の食物は細かい麦粉三十コル、荒い麦粉六十コ
ル、二三肥えた牛十頭、牧場の牛二十頭、羊百頭で、そのほかに雄じか、
かもしか、こじか、および肥えた鳥があった。二四これはソロモンがユフラ
テ川の西の地方をテフサからガザまで、ことごとく治めたからである。す
なわち彼はユフラテ川の西の諸王をことごとく治め、周囲至る所に平安
を得た。二五ソロモンの一生の間、ユダとイスラエルはダンからベエル

シバに至るまで、安らかにおのおの自分たちのぶどうの木の下と、いちじ
くの木の下に住んだ。二六ソロモンはまた戦車の馬の、うまや四千と、騎兵
一万二千を持っていた。二七そしてそれらの代官たちはおのおの当番の月
にソロモン王のため、およびすべてソロモン王の食卓に連なる者のため
に、食物を備えて欠けることのないようにした。二八また彼らはおのおの
その割当にしたがって馬および早馬に食わせる大麦とわらを、その馬のい
る所に持ってきた。

二九神はソロモンに非常に多くの知恵と悟りを授け、また海べの砂原の
ように広い心を授けられた。三〇ソロモンの知恵は東の人々の知恵とエ
ジプトのすべての知恵にまさった。三一彼はすべての人よりも賢く、エズ
ラびとエタンよりも、またマホルの子ヘマン、カルコル、ダルダよりも賢
く、その名声は周囲のすべての国々に聞えた。三二彼はまた箴言三千を説

いた。またその歌は一千五首あった。三三彼はまた草木のことを論じてレ
バノンの香柏から石がきにはえるヒソプにまで及んだ。彼はまた獣と鳥
と這うものと魚のことを論じた。三四諸国の人々はソロモンの知恵を聞く
ためにきた。地の諸王はソロモンの知恵を聞いて人をつかわした。

第五章一さてツロの王ヒラムは、ソロモンが油を注がれ、その父に代っ
て、王となったのを聞いて、家来をソロモンにつかわした。ヒラムは常に
ダビデを愛したからである。二そこでソロモンはヒラムに人をつかわして
言った、三「あなたの知られるとおり、父ダビデはその周囲にあった敵との
戦いのゆえに、彼の神、主の名のために宮を建てることができず、主が彼
らをその足の裏の下に置かれるのを待ちました。四ところが今わが神、主
はわたしに四方の太平を賜わって、敵もなく、災もなくなったので、五
主が父ダビデに『おまえに代って、おまえの位に、わたしがつかせるお

まえの子、その人がわが名のために宮を建てるであろう』と言われたよう
に、わが神、主の名のために宮を建てようと思います。六それゆえ、あな
たは命令を下して、レバノンの香柏をわたしのために切り出させてくださ
い。わたしのしもべたちをあなたのしもべたちと一緒に働かせます。ま
たわたしはすべてあなたのおっしゃるとおり、あなたのしもべたちの賃銀
をあなたに払います。あなたの知られるとおり、わたしたちのうちにはシ
ドンびとのように木を切るに巧みな人がないからです」。
七ヒラムはソロモンの言葉を聞いて大いに喜び、「きょう、主はあがむべ
きかな。主はこのおびただしい民を治める賢い子をダビデに賜わった」と
言った。八そしてヒラムはソロモンに人をつかわして言った、「わたしはあ
なたが申しおくられたことを聞きました。香柏の材木と、いとすぎの材木
については、すべてお望みのようにいたします。九わたしのしもべどもにそ

れをレバノンから海に運びおろさせましょう。わたしはそれをいかだに組
んで、海路、あなたの指示される場所まで送り、そこでそれをくずしましょ
う。あなたはそれを受け取ってください。また、あなたはわたしの家のた
めに食物を供給して、わたしの望みをかなえてください」。一〇こうし
てヒラムはソロモンにすべて望みのように香柏の材木と、いとすぎの材木
を与えた。一一またソロモンはヒラムにその家の食物として小麦二万コル
を与え、またオリブをつぶして取った油二万コルを与えた。このようにソ
ロモンは年々ヒラムに与えた。一二主は約束されたようにソロモンに知恵
を賜わった。またヒラムとソロモンの間は平和であって、彼らふたりは
条約を結んだ。

一三ソロモン王はイスラエルの全地から強制的に労働者を徴募した。
その徴募人員は三万人であった。一四ソロモンは彼らを一か月交代に一万

人ずつレバノンにつかわした。すなわち一か月レバノンに、二か月家にあ
り、アドニラムは徴募の監督であった。一五ソロモンにはまた荷を負う者が
七万人、山で石を切る者が八万人あった。一六ほかにソロモンには工事を
監督する上役の官吏が三千三百人あって、工事に働く民を監督した。一
七王は命じて大きい高価な石を切り出させ、切り石をもって宮の基をす
えさせた。一八こうしてソロモンの建築者と、ヒラムの建築者およびゲバ
ルびとは石を切り、材木と石とを宮を建てるために備えた。

第六章一イスラエルの人々がエジプトの地を出て後四百八十年、ソロモ
ンがイスラエルの王となって第四年のジフの月すなわち二月に、ソロモン
は主のために宮を建てることを始めた。二ソロモン王が主のために建てた
宮は長さ六十キュビト、幅二十キュビト、高さ三十キュビトであった。三
宮の拝殿の前の廊は宮の幅にしたがって長さ二十キュビト、その幅は宮の

前で十キュビトであった。四彼は宮に、内側の広い枠の窓を造った。五ま
た宮の壁につけて周囲に脇屋を設け、宮の壁すなわち拝殿と本殿の壁の
周囲に建てめぐらし、宮の周囲に脇間があるようにした。六下の脇間は広
さ五キュビト、中の広さ六キュビト、第三のは広さ七キュビトであった。宮
の外側には壁に段を造って、梁を宮の壁の中に差し込まないようにした。
七宮は建てる時に、石切り場で切り整えた石をもって造ったので、建て
ている間は宮のうちには、つちも、おのも、その他の鉄器もその音が聞え
なかった。
八下の脇間の入口は宮の右側にあり、回り階段によって中の脇間に、中
の脇間から第三の脇間にのぼった。九こうして彼は宮を建て終り、香柏の
たるきと板をもって宮の天井を造った。一〇また宮につけて、おのおの高
さ五キュビトの脇間のある脇屋を建てめぐらし、香柏の材木をもって宮に

接続させた。
一一そこで主の言葉がソロモンに臨んだ、一二「あなたが建てるこの宮に
ついては、もしあなたがわたしの定めに歩み、おきてを行い、すべての戒
めを守り、それに従って歩むならば、わたしはあなたの父ダビデに約束し
たことを成就する。一三そしてわたしはイスラエルの人々のうちに住み、
わたしの民イスラエルを捨てることはない」。
一四こうしてソロモンは宮を建て終った。一五彼は香柏の板をもって宮
の壁の内側を張った。すなわち宮の床から天井のたるきまで香柏の板で
張った。また、いとすぎの板をもって宮の床を張った。一六また宮の奥に二
十キュビトの室を床から天井のたるきまで香柏の板をもって造った。す
なわち宮の内に至聖所としての本堂を造った。一七宮すなわち本殿の前に
ある拝殿は長さ四十キュビトであった。一八宮の内側の香柏の板は、ひさ

ごの形と、咲いた花を浮彫りにしたもので、みな香柏の板で、石は見え
なかった。一九そして主の契約の箱を置くために、宮の内の奥に本殿を設
けた。二〇本殿は長さ二十キュビト、幅二十キュビト、高さ二十キュビト
であって、純金でこれをおおった。また香柏の祭壇を造った。二一ソロモ
ンは純金をもって宮の内側をおおい、本殿の前に金の鎖をもって隔て
を造り、金をもってこれをおおった。二二また金をもって残らず宮をおお
い、ついに宮を飾ることをことごとく終えた。また本殿に属する祭壇をこ
とごとく金でおおった。

二三本殿のうちにオリブの木をもって二つのケルビムを造った。その高さ
はおのおの十キュビト。二四そのケルブの一つの翼の長さは五キュビト、ま
たそのケルブの他の翼の長さも五キュビトであった。一つの翼の端から
他の翼の端までは十キュビトあった。二五他のケルブも十キュビトであっ

て、二つのケルビムは同じ寸法、同じ形であった。二六このケルブの高さ
は十キュビト、かのケルブの高さも同じであった。二七ソロモンは宮のうち
の奥にケルビムをすえた。ケルビムの翼を伸ばしたところ、このケルブの
翼はこの壁に達し、かのケルブの翼はかの壁に達し、他の二つの翼は
宮の中で互に触れ合った。二八彼は金をもってそのケルビムをおおった。
二九彼は宮の周囲の壁に、内外の室とも皆ケルビムと、しゅろの木と、咲
いた花の形の彫り物を刻み、三〇宮の床は、内外の室とも金でおおった。
三一本殿の入口にはオリブの木のとびらを造った。そのとびらの上のか
まちと脇柱とで五辺形をなしていた。三二その二つのとびらもオリブの木
であって、ソロモンはその上にケルビムと、しゅろの木と、咲いた花の形
を刻み、金をもっておおった。すなわちケルビムと、しゅろの木の上に金
を着せた。

三三こうしてソロモンは拝殿の入口のためにオリブの木で四角の形
に脇柱を造った。
三四その二つのとびらはいとすぎであって、一つのとびら
は二つにたたむ折り戸であり、他のとびらも二つにたたむ折り戸であった。
三五ソロモンはその上にケルビムと、しゅろの木と、咲いた花を刻み、金
をもって彫り物の上を形どおりにおおった。
三六また切り石三かさねと、
香柏の角材ひとかさねとをもって内庭を造った。
三七第四年のジフの月に主の宮の基をすえ、
三八第十一年のブルの月す
なわち八月に、宮のすべての部分が設計どおりに完成した。ソロモンはこ
れを建てるのに七年を要した。

第七章
一またソロモンは自分の家を建てたが、十三年かかってその家を
全部建て終った。
二彼はレバノンの森の家を建てた。長さ百キュビト、幅五十キュビト、高

さ三十キュビトで、三列の香柏の柱があり、その柱の上に香柏の梁があ
った。**三**四十五本の柱の上にある室は香柏の板でおおった。柱は各列
十五本あった。**四**また窓わくが三列あって、窓と窓と三段に向かい合って
いた。**五**戸口と窓はみな四角の枠をもち、窓と窓と三段に向かい合った。
六また柱の広間を造った。長さ五十キュビト、幅三十キュビトであっ
た。柱の前に一つの広間があり、その玄関に柱とひさしがあった。
七またソロモンはみずから審判をするために玉座の広間、すなわち審判
の広間を造った。床からたるきまで香柏をもっておおった。
八ソロモンが住んだ宮殿はその広間のうしろの他の庭にあって、その
造作は同じであった。ソロモンはまた彼がめとったパロの娘のために家
を建てたが、その広間と同じであった。
九これらはみな内外とも、土台から軒まで、また主の宮の庭から大庭ま

で、寸法に合わせて切った石、すなわち、のこぎりでひいた高価な石で造ら
れた。一〇また土台は高価な石、大きな石、すなわち八キュビトの石、十キュ
ビトの石であった。一一その上には寸法に合わせて切った高価な石と香柏
とがあった。一二また大庭の周囲には三かさねの切り石と、一かさねの香柏
の角材があった。主の宮の内庭と宮殿の広間の庭の場合と同じである。
一三ソロモン王は人をつかわしてツロからヒラムを呼んできた。一四彼は
ナフタリの部族の寡婦の子であって、その父はツロの人で、青銅の細工人
であった。ヒラムは青銅のいろいろな細工をする知恵と悟りと知識に満ち
た者であったが、ソロモン王のところにきて、そのすべての細工をした。
一五彼は青銅の柱二本を鋳た。一本の柱の高さは十八キュビト、その
まわりは綱をもって測ると十二キュビトあり、指四本の厚さで空洞であっ
た。他の柱も同じである。一六また青銅を溶かして柱頭二つを造り、柱

の頂にすえた。その一つの柱頭の高さは五キュビト、他の柱頭の高さ
も五キュビトであった。一七柱の頂にある柱頭のために鎖に編んだ飾
りひもで市松模様の網細工二つを造った。すなわちこの柱頭のために一
つ、かの柱頭のために一つを造った。一八またざくろを造った。すなわち
二並びのざくろを一つの網細工の上のまわりに造って、柱の頂にある
柱頭を巻いた。他の柱頭にも同じようにした。一九この廊の柱の頂
にある柱頭の上に四キュビトのゆりの花の細工があった。二〇二つの柱
の上端の丸い突出部の上にある網細工の柱頭の周囲には、おのおの二
百のざくろが二並びになっていた。二一この柱を神殿の廊に立てた。すな
わち南に柱を立てて、その名をヤキンと名づけ、北に柱を立てて、その
名をボアズと名づけた。二二その柱の頂にはゆりの花の細工があった。
こうしてその柱の造作ができあがった。

二三また海を鋳て造った。縁から縁まで十キュビトであって、周囲は円形
をなし、高さ五キュビトで、その周囲は綱をもって測ると三十キュビトで
あった。二四その縁の下には三十キュビトの周囲をめぐるひさごがあって、
海の周囲を囲んでいた。そのひさごは二並びで、海を鋳る時に鋳たもので
ある。二五その海は十二の牛の上に置かれ、その三つは北に向かい、三つ
は西に向かい、三つは南に向かい、三つは東に向かっていた。海はその
上に置かれ、牛のうしろは皆内に向かっていた。二六海の厚さは手の幅で、
その縁は杯の縁のように、ゆりの花に似せて造られた。海には水が二千バ
テはいった。

二七また青銅の台を十個造った。台は長さ四キュビト、幅四キュビト、
高さ三キュビトであった。二八その台の構造は次のとおりである。台には
鏡板があり、鏡板は枠の中にあった。二九枠の中にある鏡板には、し

しと牛とケルビムとがあり、また、ししと牛の上と下にある枠の斜面には
花飾りが細工してあった。三〇また台にはおのおの四つの青銅の車輪と、
青銅の車軸があり、その四すみには洗盤のささえがあった。そのささえ
は、おのおの花飾りのかたわらに鋳て造りつけてあった。三一その口は一
キュビト上に突き出て、台の頂の内にあり、その口は丸く、台座のよう
に造られ、深さ一キュビト半であった。またその口には彫り物があった。
その鏡板は四角で、丸くなかった。三二四つの車輪は鏡板の下にあり、
車軸は台に取り付けてあり、車輪の高さはおのおの一キュビト半であった。
三三車輪の構造は戦車の車輪の構造と同じで、その車軸と縁と輻と轂と
はみな鋳物であった。三四おのおのの台の四すみに四つのささえがあり、そ
のささえは台の一部をなしていた。三五台の上には高さ半キュビトの丸い
帯輪があった。そして台の上にあるその支柱と鏡板とはその一部をなし

ていた。三六その支柱の表面と鏡板にはそれぞれの場所に、ケルビムと、
ししと、しゅろを刻み、またその周囲に花飾りを施した。三七このようにし
て十個の台を造った。それはみな同じ鋳方、同じ寸法、同じ形であった。
三八また青銅の洗盤を十個造った。洗盤はおのおの四十バテの水がはい
り、洗盤はおのおの四キュビトであった。十個の台の上にはおのおの一つ
ずつの洗盤があった。三九その台の五個を宮の南の方に、五個を宮の北
の方に置き、宮の東南の方に海をすえた。
四〇ヒラムはまたつぼと十能と鉢を造った。こうしてヒラムはソロモン
王のために主の宮のすべての細工をなし終えた。四一すなわち二本の柱
と、その柱の頂にある柱頭の二つの玉と、柱の頂にある柱頭の
二つの玉をおおう二つの網細工と、四二その二つの網細工のためのざくろ
四百。このざくろは一つの網細工に、二並びにつけて、柱の頂にある

柱頭の二つの玉を巻いた。四三また十個の台と、その台の上の十個の洗盤
と、四四一つの海と、その海の下の十二の牛とであった。
四五さてつぼと十能と鉢、すなわちヒラムがソロモン王のために造った
主の宮のこれらの器はみな光のある青銅であった。四六王はヨルダンの
低地で、スコテとザレタンの間の粘土の地でこれらを鋳た。四七ソロモン
はその器が非常に多かったので、皆それをはからずにおいた。その青銅
の重さは、はかり得なかった。
四八またソロモンは主の宮にあるもろもろの器を造った。すなわち金
の祭壇と、供えのパンを載せる金の机、四九および純金の燭台。この
燭台は本殿の前に、五つは南に、五つは北にあった。また金の花と、と
もしび皿と、心かきと、五〇純金の皿と、心切りばさみと、鉢と、香の
杯と、心取り皿と、至聖所である宮の奥のとびらのためおよび、宮の拝殿

のとびらのために、金のひじつぼを造った。
五一こうしてソロモン王が主の宮のために造るすべての細工は終った。
そしてソロモンは父ダビデがささげた物、すなわち金銀および器物を携
え入り、主の宮の宝蔵の中にたくわえた。
第八章一ソロモンは主の契約の箱をダビデの町、すなわちシオンからか
つぎ上ろうとして、イスラエルの長老たちと、すべての部族のかしらたち
と、イスラエルの人々の氏族の長たちをエルサレムでソロモン王のもとに
召し集めた。二イスラエルの人は皆エタニムの月すなわち七月の祭にソ
ロモン王のもとに集まった。三イスラエルの長老たちが皆来たので、祭司
たちは箱を取りあげた。四そして彼らは主の箱と、会見の幕屋と、幕屋に
あるすべての聖なる器をかつぎ上った。すなわち祭司とレビびとがこれ
らの物をかつぎ上った。五ソロモン王および彼のもとに集まったイスラエ

ルの会衆は皆彼と共に箱の前で、羊と牛をささげたが、その数が多く
て調べることも数えることもできなかった。六祭司たちは主の契約の箱を
その場所にかつぎ入れた。すなわち宮の本殿である至聖所のうちのケルビ
ムの翼の下に置いた。七ケルビムは翼を箱の所に伸べていたので、ケ
ルビムは上から箱とそのさおをおおった。八さおは長かったので、さおの
端が本殿の前の聖所から見えた。しかし外には見えなかった。そのさおは
今日までそこにある。九箱の内には二つの石の板のほか何もなかった。こ
れはイスラエルの人々がエジプトの地から出たとき、主が彼らと契約を結
ばれたときに、モーセがホレブで、それに納めたものである。一〇そして
祭司たちが聖所から出たとき、雲が主の宮に満ちたので、一一祭司たちは
雲のために立って仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちた
からである。

一二そこでソロモンは言った、
「主は日を天に置かれた。
しかも主は自ら濃き雲の中に住まおうと言われた。
一三わたしはあなたのために高き家、
とこしえのみすまいを建てた」。
一四王は身をめぐらして、イスラエルのすべての会衆を祝福した。その
時イスラエルのすべての会衆は立っていた。一五彼は言った、「イスラエ
ルの神、主はほむべきかな。主はその口をもってわたしの父ダビデに約束
されたことを、その手をもってなし遂げられた。主は言われた、一六『わが
民イスラエルをエジプトから導き出した日から、わたしはわたしの名を置
くべき宮を建てるために、イスラエルのもろもろの部族のうちから、どの
町をも選んだことがなかった。ただダビデを選んで、わが民イスラエルの

上に立たせた』と。一七イスラエルの神、主の名のために宮を建てること
は、わたしの父ダビデの心にあった。一八しかし主はわたしの父ダビデに
言われた、『わたしの名のために宮を建てることはあなたの心にあった。
あなたの心にこの事のあったのは結構である。一九けれどもあなたはその
宮を建ててはならない。あなたの身から出るあなたの子がわたしの名のた
めに宮を建てるであろう』と。二〇そして主はその言われた言葉を行われ
た。すなわちわたしは父ダビデに代って立ち、主が言われたように、イス
ラエルの位に座し、イスラエルの神、主の名のために宮を建てた。二一わ
たしはまたそこに主の契約を納めた箱のために一つの場所を設けた。その
契約は主がわれわれの先祖をエジプトの地から導き出された時に、彼ら
と結ばれたものである」。
二二ソロモンはイスラエルの全会衆の前で、主の祭壇の前に立ち、手

を天に伸べて、二三言った、「イスラエルの神、主よ、上の天にも、下の地
にも、あなたのような神はありません。あなたは契約を守られ、心をつ
くしてあなたの前に歩むあなたのしもべらに、いつくしみを施し、二四あ
なたのしもべであるわたしの父ダビデに約束されたことを守られました。
あなたが口をもって約束されたことを、手をもってなし遂げられたことは、
今日見るとおりであります。二五それゆえ、イスラエルの神、主よ、あな
たのしもべであるわたしの父ダビデに、あなたが約束して『おまえがわた
しの前に歩んだように、おまえの子孫が、その道を慎んで、わたしの前
に歩むならば、おまえにはイスラエルの位に座する人が、わたしの前に欠
けることはないであろう』と言われたことを、ダビデのために守ってくだ
さい。二六イスラエルの神よ、どうぞ、あなたのしもべであるわたしの父ダ
ビデに言われた言葉を確認してください。

二七しかし神は、はたして地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、い
と高き天もあなたをいれることはできません。ましてわたしの建てたこの
宮はなおさらです。二八しかしわが神、主よ、しもべの祈と願いを顧み
て、しもべがきょう、あなたの前にささげる叫びと祈をお聞きください。
二九あなたが『わたしの名をそこに置く』と言われた所、すなわち、この宮
に向かって夜昼あなたの目をお開きください。しもべがこの所に向かっ
て祈る祈をお聞きください。三〇しもべと、あなたの民イスラエルがこの
所に向かって祈る時に、その願いをお聞きください。あなたのすみかで
ある天で聞き、聞いておゆるしください。

三一もし人がその隣り人に対して罪を犯し、誓いをすることを求められ
る時、来てこの宮であなたの祭壇の前に誓うならば、三二あなたは天で聞
いて行い、あなたのしもべらをさばき、悪人を罰して、そのおこないの報

いをそのこうべに帰し、義人を義として、その義にしたがって、その人に
報いてください。
三三もしあなたの民イスラエルが、あなたに対して罪を犯したために敵
の前に敗れた時、あなたに立ち返って、あなたの名をあがめ、この宮であ
なたに祈り願うならば、三四あなたは天にあって聞き、あなたの民イスラ
エルの罪をゆるして、あなたが彼らの先祖に賜わった地に彼らを帰らせて
ください。
三五もし彼らがあなたに罪を犯したために、天が閉ざされて雨がなく、あ
なたが彼らを苦しめられる時、彼らがこの所に向かって祈り、あなたの
名をあがめ、その罪を離れるならば、三六あなたは天で聞き、あなたのし
もべ、あなたの民イスラエルの罪をゆるし、彼らに歩むべき良い道を教え
て、あなたが、あなたの民に嗣業として与えられた地に雨を降らせてくだ
さい。

三七もし国にききんがあるか、もしくは疫病、立ち枯れ、腐り穂、いな
ご、青虫があるか、もしくは敵のために町の中に攻め囲まれることがある
か、どんな災害、どんな病気があっても、三八もし、だれでも、あなたの
民イスラエルがみな、おのおのその心の悩みを知って、この宮に向かい、
手を伸べるならば、どんな祈、どんな願いでも、三九あなたは、あなたの
すみかである天で聞いてゆるし、かつ行い、おのおのの人に、その心を
知っておられるゆえ、そのすべての道にしたがって報いてください。ただ、
あなただけ、すべての人の心を知っておられるからです。四〇あなたが、
われわれの先祖に賜わった地に、彼らの生きながらえる日の間、常にあな
たを恐れさせてください。

四一またあなたの民イスラエルの者でなく、あなたの名のために遠い国か
ら来る異邦人が、四二――それは彼らがあなたの大いなる名と、強い手と、

伸べた腕とについて聞き及ぶからです、――もしきて、この宮に向かって
祈るならば、四三あなたは、あなたのすみかである天で聞き、すべて異邦人
があなたに呼び求めることをかなえさせてください。そうすれば、地のす
べての民は、あなたの民イスラエルのように、あなたの名を知り、あなた
を恐れ、またわたしが建てたこの宮があなたの名によって呼ばれることを
知るにいたるでしょう。
四四あなたの民が敵と戦うために、あなたがつかわされる道を通って出
て行くとき、もし彼らがあなたの選ばれた町、わたしがあなたの名のため
に建てた宮の方に向かって、主に祈るならば、四五あなたは天で、彼らの
祈と願いを聞いて彼らをお助けください。
四六彼らがあなたに対して罪を犯すことがあって、――人は罪を犯さな
い者はないのです、――あなたが彼らを怒り、彼らを敵にわたし、敵が彼

らを捕虜として遠近にかかわらず、敵の地に引いて行く時、四七もし彼ら
が捕われていった地で、みずから省みて悔い、自分を捕えていった者の
地で、あなたに願い、『われわれは罪を犯しました、そむいて悪を行いま
した』と言い、四八自分を捕えていった敵の地で、心をつくし、精神をつ
くしてあなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖に与えられた地、あなたが
選ばれた町、わたしがあなたの名のために建てた宮の方に向かって、あな
たに祈るならば、四九あなたのすみかである天で、彼らの祈と願いを聞い
て、彼らを助け、五〇あなたの民が、あなたに対して犯した罪と、あなたに
対して行ったすべてのあやまちをゆるし、彼らを捕えていった者の前で、
彼らにあわれみを得させ、その人々が彼らをあわれむようにしてください。
五一（彼らはあなたがエジプトから、鉄のかまどの中から導き出されたあ
なたの民、あなたの嗣業であるからです）。五二どうぞ、しもべの願いと、

あなたの民イスラエルの願いに、あなたの目を開き、すべてあなたに呼び
求める時、彼らの願いをお聞きください。
五三あなたは彼らを地のすべて
の民のうちから区別して、あなたの嗣業とされたからです。主なる神よ、
あなたがわれわれの先祖をエジプトから導き出された時、モーセによって
言われたとおりです」。
五四ソロモンはこの祈と願いをことごとく主にささげ終ると、それまで
天に向かって手を伸べ、ひざまずいていた主の祭壇の前から立ちあがり、
五五立って大声でイスラエルの全会衆を祝福して言った、
五六「主はほ
むべきかな。主はすべて約束されたように、その民イスラエルに太平を賜
わった。そのしもべモーセによって仰せられたその良き約束は皆一つもた
がわなかった。
五七われわれの神がわれわれの先祖と共におられたように、
われわれと共におられるように。われわれを離れず、またわれわれを見捨

てられないように。五八われわれの心を主に傾けて、主のすべての道に
歩ませ、われわれの先祖に命じられた戒めと定めと、おきてとを守らせら
れるように。五九主の前にわたしが述べたこれらの願いの言葉が、日夜わ
れわれの神、主に覚えられるように。そして主は日々の事に、しもべを助
け、主の民イスラエルを助けられるように。六〇そうすれば、地のすべての
民は主が神であることと、他に神のないことを知るに至るであろう。六一
それゆえ、あなたがたは、今日のようにわれわれの神、主に対して、心は
全く真実であり、主の定めに歩み、主の戒めを守らなければならない」。
六二そして王および王と共にいるすべてのイスラエルびとは主の前に犠牲
をささげた。六三ソロモンは酬恩祭として牛二万二千頭、羊十二万頭を
主にささげた。こうして王とイスラエルの人々は皆主の宮を奉献した。六
四その日、王は主の宮の前にある庭の中を聖別し、その所で燔祭と素祭と

酬恩祭の脂肪をささげた。これは主の前にある青銅の祭壇が素祭と酬恩祭
の脂肪とを受けるに足りなかったからである。
六五その時ソロモンは七日の間われわれの神、主の前に祭を行った。
ハマテの入口からエジプトの川に至るまでのすべてのイスラエルびとの大
いなる会衆が彼と共にいた。六六八日目にソロモンは民を帰らせた。民
は王を祝福し、主がそのしもべダビデと、その民イスラエルとに施され
たもろもろの恵みを喜び、心に楽しんでその天幕に帰って行った。

第九章一ソロモンが主の宮と王の宮殿およびソロモンが建てようと望
んだすべてのものを建て終った時、二主はかつてギベオンでソロモンに現
れられたように再び現れて、三彼に言われた、「あなたが、わたしの前に
願った祈と願いとを聞いた。わたしはあなたが建てたこの宮を聖別して、
わたしの名を永久にそこに置く。わたしの目と、わたしの心は常にそこ

にあるであろう。四あなたがもし、あなたの父ダビデが歩んだように全き
心をもって正しくわたしの前に歩み、すべてわたしが命じたようにおこ
なって、わたしの定めと、おきてとを守るならば、五わたしは、あなたの
父ダビデに約束して『イスラエルの王位にのぼる人があなたに欠けること
はないであろう』と言ったように、あなたのイスラエルに王たる位をなが
く確保するであろう。六しかし、あなたがた、またはあなたがたの子孫がそ
むいてわたしに従わず、わたしがあなたがたの前に置いた戒めと定めと
を守らず、他の神々に行って、それに仕え、それを拝むならば、七わたし
はイスラエルを、わたしが与えた地のおもてから断つであろう。またわた
しの名のために聖別した宮をわたしの前から投げすてるであろう。そして
イスラエルはもろもろの民のうちにことわざとなり、笑い草となるであろ
う。八かつ、この宮は荒塚となり、そのかたわらを過ぎる者は皆驚き、う

そぶいて『なにゆえ、主はこの地と、この宮とにこのようにされたのか』と
言うであろう。
九その時人々は答えて『彼らは自分の先祖をエジプトの地
から導き出した彼らの神、主を捨てて、他の神々につき従い、それを拝
み、それに仕えたために、主はこのすべての災を彼らの上に下したので
ある』と言うであろう」。
一〇ソロモンは二十年を経て二つの家すなわち主の宮と王の宮殿とを
建て終った時、
一一ツロの王ヒラムがソロモンの望みに任せて香柏と、い
とすぎと、金とを供給したので、ソロモン王はガリラヤの地の町二十を
ヒラムに与えた。
一二しかしヒラムがツロから来て、ソロモンが彼に与えた
町々を見たとき、それらは彼の気にいらなかったので、
一三彼は、「兄弟
よ、あなたがくださったこれらの町々は、いったいなんですか」と言った。
それで、そこは今日までカブルの地と呼ばれている。
一四ヒラムはかつて

金百二十タラントを王に贈った。
一五ソロモン王が強制的に労働者を徴募したのはこうである。すなわ
ち主の宮と自分の宮殿と、ミロとエルサレムの城壁と、ハゾルとメギド
とゲゼルを建てるためであった。一六（エジプトの王パロはかつて上ってき
て、ゲゼルを取り、火でこれを焼き、その町に住んでいたカナンびとを殺
し、これをソロモンの妻である自分の娘に与えて婚姻の贈り物としたの
で、一七ソロモンはそのゲゼルを建て直した）。また下ベテホロンと、一八
バアラテとユダの国の荒野にあるタマル、一九およびソロモンが持っていた
倉庫の町々、戦車の町々、騎兵の町々ならびにソロモンがエルサレム、レ
バノンおよびそのすべての領地において建てようと望んだものをことごと
く建てるためであった。二〇すべてイスラエルの子孫でないアモリびと、へ
テびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの残った者、二一その地にあって

彼らのあとに残った子孫すなわちイスラエルの人々の滅ぼしつくすことの
できなかった者を、ソロモンは強制的に奴隷として徴募をおこない、今日
に至っている。二二しかしイスラエルの人々をソロモンはひとりも奴隷と
しなかった。彼らは軍人、また彼の役人、司令官、指揮官、戦車隊長、
騎兵隊長であったからである。
二三ソロモンの工事を監督する上役の官吏は五百五十人であって、工事
に働く民を治めた。
二四パロの娘はダビデの町から上って、ソロモンが彼女のために建てた
家に住んだ。その時ソロモンはミロを建てた。
二五ソロモンは主のために築いた祭壇の上に年に三度燔祭と酬恩祭を
ささげ、また主の前に香をたいた。こうしてソロモンは宮を完成した。
二六ソロモン王はエドムの地、紅海の岸のエラテに近いエジオン・ゲベ

ルで数隻の船を造った。二七ヒラムは海の事を知っている船員であるその
しもべをソロモンのしもべと共にその船でつかわした。二八彼らはオフル
へ行って、そこから金四百二十タラントを取って、ソロモン王の所にもっ
てきた。

第一〇章一シバの女王は主の名にかかわるソロモンの名声を聞いたので、
難問をもってソロモンを試みようとたずねてきた。二彼女は多くの従者
を連れ、香料と、たくさんの金と宝石とをらくだに負わせてエルサレム
にきた。彼女はソロモンのもとにきて、その心にあることをことごとく彼
に告げたが、三ソロモンはそのすべての問に答えた。王が知らないで彼女
に説明のできないことは一つもなかった。四シバの女王はソロモンのもろ
もろの知恵と、ソロモンが建てた宮殿、五その食卓の食物と、列座の
家来たちと、その侍臣たちの伺候ぶり、彼らの服装と、彼の給仕たち、お

よび彼が主の宮でささげる燔祭を見て、全く気を奪われてしまった。
六彼女は王に言った、「わたしが国であなたの事と、あなたの知恵につ
いて聞いたことは真実でありました。七しかしわたしがきて、目に見るま
では、その言葉を信じませんでしたが、今見るとその半分もわたしは知ら
されていなかったのです。あなたの知恵と繁栄はわたしが聞いたうわさに
まさっています。八あなたの奥方たちはさいわいです。常にあなたの前に
立って、あなたの知恵を聞く家来たちはさいわいです。九あなたの神、主
はほむべきかな。主はあなたを喜び、あなたをイスラエルの位にのぼら
せられました。主は永久にイスラエルを愛せられるゆえ、あなたを王と
して公道と正義とを行わせられるのです」。一〇そして彼女は金百二十タ
ラントおよび多くの香料と宝石とを王に贈った。シバの女王がソロモン
王に贈ったような多くの香料は再びこなかった。

一一オフルから金を載せてきたヒラムの船は、またオフルからたくさん
のびゃくだんの木と宝石とを運んできたので、一二王はびゃくだんの木を
もって主の宮と王の宮殿のために壁柱を造り、また歌う人々のために
琴と立琴とを造った。このようなびゃくだんの木は、かってきたこともな
く、また今日まで見たこともなかった。
一三ソロモン王はその豊かなのにしたがってシバの女王に贈り物をした
ほかに、彼女の望みにまかせて、すべてその求める物を贈った。そして彼女
はその家来たちと共に自分の国へ帰っていった。
一四さて一年の間にソロモンのところに、はいってきた金の目方は六百
六十六タラントであった。一五そのほかに貿易商および商人の取引、な
らびにアラビヤの諸王と国の代官たちからも、はいってきた。一六ソロモ
ン王は延金の大盾二百を造った。その大盾にはおのおの六百シケルの金

を用いた。一七また延金の小盾三百を造った。その小盾にはおのおの三ミナの金を用いた。王はこれらをレバノンの森の家に置いた。一八王はまた大きな象牙の玉座を造り、純金をもってこれをおおった。一九その玉座に六つの段があり、玉座の後に子牛の頭があり、座席の両側にひじ掛けがあって、ひじ掛けのわきに二つのししが立っていた。二〇また六つの段のおのおのの両側に十二のししが立っていた。このような物はどこの国でも造られたことがなかった。二一ソロモン王が飲むときに用いた器は皆金であった。またレバノンの森の家の器も皆純金であって、銀のものはなかった。銀はソロモンの世には顧みられなかった。二二これは王が海にタルシシの船隊を所有して、ヒラムの船隊と一緒に航海させ、タルシシの船隊に三年に一度、金、銀、象牙、さる、くじゃくを載せてこさせたからである。

二三このようにソロモン王は富も知恵も、地のすべての王にまさってい
たので、二四全地の人々は神がソロモンの心に授けられた知恵を聞こうと
してソロモンに謁見を求めた。二五人々はおのおの贈り物を携えてきた。
すなわち銀の器、金の器、衣服、没薬、香料、馬、騾馬など年々定まっ
ていた。

二六ソロモンは戦車と騎兵とを集めたが、戦車一千四百両、騎兵一万二
千あった。ソロモンはこれを戦車の町とエルサレムの王のもとに置いた。
二七王はエルサレムで、銀を石のように用い、香柏を平地にあるいちじく
桑のように多く用いた。二八ソロモンが馬を輸入したのはエジプトとクエ
からであった。すなわち王の貿易商はクエから代価を払って受け取って
きた。二九エジプトから輸入される戦車一両は銀六百シケル、馬は百五十
シケルであった。このようにして、これらのものが王の貿易商によって、

ヘテびとのすべての王たちおよびスリヤの王たちに輸出された。
第一一章 一ソロモン王は多くの外国の女を愛した。すなわちパロの娘、
モアブびと、アンモンびと、エドムびと、シドンびと、ヘテびとの女を愛
した。二主はかつてこれらの国民について、イスラエルの人々に言われた、
「あなたがたは彼らと交わってはならない。彼らもまたあなたがたと交わっ
てはならない。彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わ
せるからである」。しかしソロモンは彼らを愛して離れなかった。三彼には
王妃としての妻七百人、そばめ三百人があった。その妻たちが彼の心を
転じたのである。四ソロモンが年老いた時、その妻たちが彼の心を転じ
て他の神々に従わせたので、彼の心は父ダビデの心のようには、その
神、主に真実でなかった。五これはソロモンがシドンびとの女神アシタロ
テに従い、アンモンびとの神である憎むべき者ミルコムに従ったからで

ある。六このようにソロモンは主の目の前に悪を行い、父ダビデのように
全く主に従わなかった。七そしてソロモンはモアブの神である憎むべ
き者ケモシのために、またアンモンの人々の神である憎むべき者モレクの
ためにエルサレムの東の山に高き所を築いた。八彼はまた外国のすべて
の妻たちのためにもそうしたので、彼女たちはその神々に香をたき、犠牲
をささげた。

九このようにソロモンの心が転じて、イスラエルの神、主を離れたた
め、主は彼を怒られた。すなわち主がかつて二度彼に現れ、一〇この事に
ついて彼に、他の神々に従ってはならないと命じられたのに、彼は主の
命じられたことを守らなかったからである。一一それゆえ、主はソロモン
に言われた、「これがあなたの本心であり、わたしが命じた契約と定めと
を守らなかったので、わたしは必ずあなたから国を裂き離して、それをあ

なたの家来に与える。一二しかしあなたの父ダビデのために、あなたの世に
はそれをしないが、あなたの子の手からそれを裂き離す。一三ただし、わた
しは国をことごとくは裂き離さず、わたしのしもべダビデのために、また
わたしが選んだエルサレムのために一つの部族をあなたの子に与えるであ
ろう」。
一四こうして主はエドムびとハダデを起して、ソロモンの敵とされた。彼
はエドムの王家の者であった。一五さきにダビデはエドムにいたが、軍の
長ヨアブが上っていって、戦死した者を葬り、エドムの男子をことごと
く打ち殺した時、一六(ヨアブはイスラエルの人々と共に六か月そこにとど
まって、エドムの男子をことごとく断った)。一七ハダデはその父のしもべ
である数人のエドムびとと共に逃げてエジプトへ行こうとした。その時ハ
ダデはまだ少年であった。一八彼らがミデアンを立ってパランへ行き、パ

ランから人々を伴ってエジプトへ行き、エジプトの王パロのところへ行く
と、パロは彼に家を与え、食糧を定め、かつ土地を与えた。
一九ハダデ
は大いにパロの心にかなったので、パロは自分の妻の妹すなわち王妃
タペネスの妹を妻として彼に与えた。
二〇タペネスの妹は彼に男の
子ゲヌバテを産んだので、タペネスはその子をパロの家のうちで乳離れさ
せた。ゲヌバテはパロの家で、パロの子どもたちと一緒にいた。
二一さて
ハダデはエジプトで、ダビデがその先祖と共に眠ったことと、軍の長ヨア
ブが死んだことを聞いたので、ハダデはパロに言った、「わたしを去らせて、
国へ帰らせてください」。
二二パロは彼に言った、「わたしと共にいて、なん
の不足があって国へ帰ることを求めるのですか」。彼は言った、「ただ、わ
たしを帰らせてください」。
二三神はまたエリアダの子レゾンを起してソロモンの敵とされた。彼はそ

の主人ゾバの王ハダデゼルのもとを逃げ去った者であった。二四ダビデがゾ
バの人々を殺した後、彼は人々を自分のまわりに集めて略奪隊の首領
となった。彼らはダマスコへ行って、そこに住み、ダマスコで彼を王とし
た。二五彼はソロモンの一生の間、イスラエルの敵となって、ハダデが
したように害をなし、イスラエルを憎んでスリヤを治めた。
二六ゼレダのエフライムびとネバテの子ヤラベアムはソロモンの家来で
あったが、その母の名はゼルヤといって寡婦であった。彼もまたその手を
あげて王に敵した。二七彼が手をあげて、王に敵した事情はこうである。
ソロモンはミロを築き、父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。二八ヤラ
ベアムは非常に手腕のある人であったが、ソロモンはこの若者がよく働
くのを見て、彼にヨセフの家のすべての強制労働の監督をさせた。二九
そのころ、ヤラベアムがエルサレムを出たとき、シロびとである預言者アヒ

ヤが道で彼に会った。アヒヤは新しい着物を着ていた。そして彼らふた
りだけが野にいた。三〇アヒヤは着ている着物をつかんで、それを十二切れ
に裂き、三一ヤラベアムに言った、「あなたは十切れを取りなさい。イスラ
エルの神、主はこう言われる、『見よ、わたしは国をソロモンの手から裂き
離して、あなたに十部族を与えよう。三二（ただし彼はわたしのしもべダビ
デのために、またわたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだ町
エルサレムのために、一つの部族をもつであろう）。三三それは彼がわたし
を捨てて、シドンびとの女神アシタロテと、モアブの神ケモシと、アンモ
ンの人々の神ミルコムを拝み、父ダビデのように、わたしの道に歩んで、
わたしの目にかなう事を行い、わたしの定めと、おきてを守ることをしな
かったからである。三四しかし、わたしは国をことごとくは彼の手から取ら
ない。わたしが選んだ、わたしのしもべダビデが、わたしの命令と定めと

を守ったので、わたしは彼のためにソロモンを一生の間、君としよう。
三五そして、わたしはその子の手から国を取って、その十部族をあなたに与
える。三六その子には一つの部族を与えて、わたしの名を置くために選んだ
町エルサレムで、わたしのしもべダビデに、わたしの前に常に一つのとも
しびを保たせるであろう。三七わたしがあなたを選び、あなたはすべて心
の望むところを治めて、イスラエルの上に王となるであろう。三八もし、あ
なたが、わたしの命じるすべての事を聞いて、わたしの道に歩み、わたし
の目にかなう事を行い、わたしのしもべダビデがしたように、わたしの定
めと戒めとを守るならば、わたしはあなたと共にいて、わたしがダビデの
ために建てたように、あなたのために堅固な家を建てて、イスラエルをあ
なたに与えよう。三九わたしはこのためにダビデの子孫を苦しめる。しか
し永久にではない』」。四〇ソロモンはヤラベアムを殺そうとしたが、ヤラ

ベアムは立ってエジプトにのがれ、エジプト王シシャクのところへ行って、
ソロモンの死ぬまでエジプトにいた。
四一ソロモンのそのほかの事績と、彼がしたすべての事およびその知恵
は、ソロモンの事績の書にしるされているではないか。四二ソロモンがエ
ルサレムでイスラエルの全地を治めた日は四十年であった。四三ソロモン
はその先祖と共に眠って、父ダビデの町に葬られ、その子レハベアムが
代って王となった。

第一二章
一レハベアムはシケムへ行った。すべてのイスラエルびとが彼
を王にしようとシケムへ行ったからである。二ネバテの子ヤラベアムはソ
ロモンを避けてエジプトにのがれ、なおそこにいたが、これを聞いてエジ
プトから帰ったので、三人々は人をつかわして彼を招いた。そしてヤラベ
アムとイスラエルの会衆は皆レハベアムの所にきて言った、四「父上は

われわれのくびきを重くされましたが、今父上のきびしい使役と、父上が
われわれに負わせられた重いくびきとを軽くしてください。そうすればわ
れわれはあなたに仕えます」。五レハベアムは彼らに言った、「去って、三
日過ぎてから、またわたしのところにきなさい」。それで民は立ち去った。
六レハベアム王は父ソロモンの存命中ソロモンに仕えた老人たちに相談
して言った、「この民にどう返答すればよいと思いますか」。七彼らはレハ
ベアムに言った、「もし、あなたが、きょう、この民のしもべとなって彼ら
に仕え、彼らに答えるとき、ねんごろに語られるならば、彼らは永久に
あなたのしもべとなるでしょう」。八しかし彼は老人たちが与えた勧めを捨
てて、自分と一緒に大きくなって自分に仕えている若者たちに相談して、
九彼らに言った、「この民がわたしにむかって『あなたの父がわれわれに負
わせたくびきを軽くしてください』というのに、われわれはなんと返答すれ

ばよいと思いますか」。一〇彼と一緒に大きくなった若者たちは彼に言っ
た、「あなたにむかって『父上はわれわれのくびきを重くされましたが、あ
なたは、それをわれわれのために軽くしてください』と言うこの民に、こ
う言いなさい、『わたしの小指は父の腰よりも太い。一一父はあなたがたに
重いくびきを負わせたが、わたしはさらに、あなたがたのくびきを重くし
よう。父はむちであなたがたを懲らしたが、わたしはさそりをもってあな
たがたを懲らそう』と」。

一二さてヤラベアムと民は皆、王が「三日目に再びわたしのところに来
るように」と言ったとおりに、三日目にレハベアムのところにきた。一三王
は荒々しく民に答え、老人たちが与えた勧めを捨てて、一四若者たちの勧
めに従い、彼らに告げて言った、「父はあなたがたのくびきを重くしたが、
わたしはあなたがたのくびきを、さらに重くしよう。父はむちであなたが

たを懲らしたが、わたしはさそりをもってあなたがたを懲らそう」。一五こ
のように王は民の言うことを聞きいれなかった。これはかつて主がシロび
とアヒヤによって、ネバテの子ヤラベアムに言われた言葉を成就するため
に、主が仕向けられた事であった。
一六イスラエルの人々は皆、王が自分たちの言うことを聞きいれないの
を見たので、民は王に答えて言った、

「われわれはダビデのうちに何の分があろうか、
エッサイの子のうちに嗣業がない。
イスラエルよ、あなたがたの天幕へ帰れ。
ダビデよ、今自分の家の事を見よ」。

そしてイスラエルはその天幕へ去っていった。一七しかしレハベアムはユダ
の町々に住んでいるイスラエルの人々を治めた。一八レハベアム王は徴募

の監督であったアドラムをつかわしたが、イスラエルが皆、彼を石で撃ち
殺したので、レハベアム王は急いで車に乗り、エルサレムへ逃げた。一九
こうしてイスラエルはダビデの家にそむいて今日に至った。二〇イスラエ
ルは皆ヤラベアムの帰ってきたのを聞き、人をつかわして彼を集会に招
き、イスラエルの全家の上に王とした。ユダの部族のほかはダビデの家に
従う者がなかった。

二一ソロモンの子レハベアムはエルサレムに来て、ユダの全家とベニヤミ
ンの部族の者、すなわちえり抜きの軍人十八万を集め、国を取りもどすた
めに、イスラエルの家と戦おうとしたが、二二神の言葉が神の人シマヤに
臨んだ、二三「ソロモンの子であるユダの王レハベアム、およびユダとベニ
ヤミンの全家、ならびにそのほかの民に言いなさい、二四『主はこう仰せら
れる。あなたがたは上っていってはならない。あなたがたの兄弟である

イスラエルの人々と戦ってはならない。おのおの家に帰りなさい。この
事はわたしから出たのである』」。それで彼らは主の言葉をきき、主の言葉
に従って帰っていった。
二五ヤラベアムはエフライムの山地にシケムを建てて、そこに住んだ。彼
はまたそこから出てペヌエルを建てた。二六しかしヤラベアムはその心の
うちに言った、「国は今ダビデの家にもどるであろう。二七もしこの民がエ
ルサレムにある主の宮に犠牲をささげるために上るならば、この民の心
はユダの王である彼らの主君レハベアムに帰り、わたしを殺して、ユダの
王レハベアムに帰るであろう」。二八そこで王は相談して、二つの金の子牛
を造り、民に言った、「あなたがたはもはやエルサレムに上るには、およ
ばない。イスラエルよ、あなたがたをエジプトの国から導き上ったあな
たがたの神を見よ」。二九そして彼は一つをベテルにすえ、一つをダンに置

いた。三〇この事は罪となった。民がベテルへ行って一つを礼拝し、ダン
へ行って一つを礼拝したからである。三一彼はまた高き所に家を造り、レ
ビの子孫でない一般の民を祭司に任命した。三二またヤラベアムはユダで
行う祭と同じ祭を八月の十五日に定め、そして祭壇に上った。彼はベ
テルでそのように行い、彼が造った子牛に犠牲をささげた。また自分の
造った高き所の祭司をベテルに立てた。三三こうして彼はベテルに造った
祭壇に八月の十五日に上った。これは彼が自分で勝手に考えついた月で
あった。そして彼はイスラエルの人々のために祭を定め、祭壇に上って
香をたいた。

第一三章一見よ、神の人が主の命によってユダからベテルにきた。その
時ヤラベアムは祭壇の上に立って香をたいていた。二神の人は祭壇にむか
い主の命によって呼ばわって言った、「祭壇よ、祭壇よ、主はこう仰せら

れる、『見よ、ダビデの家にひとりの子が生れる。その名をヨシヤという。
彼はおまえの上で香をたく高き所の祭司らを、おまえの上にささげる。ま
た人の骨がおまえの上で焼かれる』」。三その日、彼はまた一つのしるしを
示して言った、「主の言われたしるしはこれである、『見よ、祭壇は裂け、
その上にある灰はこぼれ出るであろう』」。四ヤラベアム王は、神の人がベ
テルにある祭壇にむかって呼ばわる言葉を聞いた時、祭壇から手を伸ばし
て、「彼を捕えよ」と言ったが、彼にむかって伸ばした手が枯れて、ひっ込め
ることができなかった。五そして神の人が主の言葉をもって示したしるし
のように祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た。六王は神の人に言った、
「あなたの神、主に願い、わたしのために祈って、わたしの手をもとに返
らせてください」。神の人が主に願ったので、王の手はもとに返って、前
のようになった。七そこで王は神の人に言った、「わたしと一緒に家にき

て、身を休めなさい。あなたに謝礼をさしあげましょう」。八神の人は王
に言った、「たとい、あなたの家の半ばをくださっても、わたしはあなたと
一緒にまいりません。またこの所では、パンも食べず水も飲みません。九
主の言葉によってわたしは、『パンを食べてはならない、水を飲んではなら
ない。また来た道から帰ってはならない』と命じられているからです」。一
〇こうして彼はほかの道を行き、ベテルに来た道からは帰らなかった。
一一さてベテルにひとりの年老いた預言者が住んでいたが、そのむすこた
ちがきて、その日神の人がベテルでした事どもを彼に話した。また神の人
が王に言った言葉をもその父に話した。一二父が彼らに「その人はどの道
を行ったか」と聞いたので、むすこたちはユダからきた神の人の行った道を
父に示した。一三父はむすこたちに言った、「わたしのためにろばにくらを
置きなさい」。彼らがろばにくらを置いたので、彼はそれに乗り、一四神の

人のあとを追って行き、かしの木の下にすわっているのを見て、その人に
言った、「あなたはユダからこられた神の人ですか」。その人は言った、「そ
うです」。一五そこで彼はその人に言った、「わたしと一緒に家にきてパン
を食べてください」。一六その人は言った、「わたしはあなたと一緒に引き
返すことはできません。あなたと一緒に行くことはできません。またわた
しはこの所であなたと一緒にパンも食べず水も飲みません。一七主の言葉
によってわたしは、『その所でパンを食べてはならない、水を飲んではなら
ない。また来た道から帰ってはならない』と言われているからです」。一八
彼はその人に言った、「わたしもあなたと同じ預言者ですが、天の使が主
の命によってわたしに告げて、『その人を一緒に家につれ帰り、パンを食
べさせ、水を飲ませよ』と言いました」。これは彼がその人を欺いたので
ある。一九そこでその人は彼と一緒に引き返し、その家でパンを食べ、水

を飲んだ。
二〇彼らが食卓についていたとき、主の言葉が、その人をつれて帰った
預言者に臨んだので、二一彼はユダからきた神の人にむかい呼ばわって言っ
た、「主はこう仰せられます、『あなたが主の言葉にそむき、あなたの神、
主がお命じになった命令を守らず、二二引き返して、主があなたに、パン
を食べてはならない、水を飲んではならない、と言われた場所でパンを食
べ、水を飲んだゆえ、あなたの死体はあなたの先祖の墓に行かないであろ
う』」。二三そしてその人がパンを食べ、水を飲んだ後、彼はその人のため、
すなわちつれ帰った預言者のためにろばにくらを置いた。二四こうしてその
人は立ち去ったが、道でししが彼に会って彼を殺した。そしてその死体は
道に捨てられ、ろばはそのかたわらに立ち、ししもまた死体のかたわらに
立っていた。二五人々はそこをとおって、道に捨てられている死体と、死体

のかたわらに立っているししを見て、かの老預言者の住んでいる町にきて
それを話した。
二六その人を道からつれて帰った預言者はそれを聞いて言った、「それは
主の言葉にそむいた神の人だ。主が彼に言われた言葉のように、主は彼を
ししにわたされ、ししが彼を裂き殺したのだ」。二七そしてむすこたちに言っ
た、「わたしのためにろばにくらを置きなさい」。彼らがくらを置いたので、
二八彼は行って、死体が道に捨てられ、ろばとししが死体のかたわらに立っ
ているのを見た。ししはその死体を食べず、ろばも裂いていなかった。二
九そこで預言者は神の人の死体を取りあげ、それをろばに載せて町に持ち
帰り、悲しんでそれを葬った。三〇すなわちその死体を自分の墓に納め、
皆これがために「ああ、わが兄弟よ」と言って悲しんだ。三一彼はそれを
葬って後、むすこたちに言った、「わたしが死んだ時は、神の人を葬った

墓に葬り、わたしの骨を彼の骨のかたわらに納めなさい。三二彼が主の
命によって、ベテルにある祭壇にむかい、またサマリヤの町々にある高
き所のすべての家にむかって呼ばわった言葉は必ず成就するのです」。
三三この事の後も、ヤラベアムはその悪い道を離れて立ち返ることをせ
ず、また一般の民を、高き所の祭司に任命した。すなわち、だれでも好
む者は、それを立てて高き所の祭司とした。三四この事はヤラベアムの家
の罪となって、ついにこれを地のおもてから断ち滅ぼすようになった。

第一四章一そのころヤラベアムの子アビヤが病気になったので、二ヤラベ
アムは妻に言った、「立って姿を変え、ヤラベアムの妻であることの知ら
れないようにしてシロへ行きなさい。わたしがこの民の王となることを、わ
たしに告げた預言者アヒヤがそこにいます。三パン十個と菓子数個および、
みつ一びんを携えて彼のところへ行きなさい。彼はこの子がどうなるか

をあなたに告げるでしょう」。
四ヤラベアムの妻はそのようにして、立ってシロへ行き、アヒヤの家に
着いたが、アヒヤは年老いたため、目がかすんで見ることができなかった。
五しかし主はアヒヤに言われた、「ヤラベアムの妻が子供の事をあなたに尋
ねるために来る。子供は病気だ。あなたは彼女にこうこう言わなければな
らない」。
彼女は来るとき、他人を装っていた。六しかし彼女が戸口にはいってき
たとき、アヒヤはその足音を聞いて言った、「ヤラベアムの妻よ、はいりな
さい。なぜ、他人を装うのですか。わたしはあなたにきびしい事を告げる
よう、命じられています。七行ってヤラベアムに言いなさい、『イスラエル
の神、主はこう仰せられる、「わたしはあなたを民のうちからあげ、わたし
の民イスラエルの上に立てて君とし、八国をダビデの家から裂き離して、

それをあなたに与えたのに、あなたはわたしのしもべダビデが、わたしの
命令を守って一心にわたしに従い、ただわたしの目にかなった事のみを
行ったようにではなく、九あなたよりも先にいたすべての者にまさって悪
をなし、行って自分のために他の神々と鋳た像を造り、わたしを怒らせ、
わたしをうしろに捨て去った。一〇それゆえ、見よ、わたしはヤラベアムの
家に災を下し、ヤラベアムに属する男は、イスラエルについて、つな
がれた者も、自由な者もことごとく断ち、人があくたを残りなく焼きつく
すように、ヤラベアムの家を全く断ち滅ぼすであろう。一一ヤラベアムに
属する者は、町で死ぬ者を犬が食べ、野で死ぬ者を空の鳥が食べるであろ
う。主がこれを言われるのである」』。一二あなたは立って、家へ帰りなさ
い。あなたの足が町にはいる時に、子どもは死にます。一三そしてイスラ
エルは皆、彼のために悲しんで彼を葬るでしょう。ヤラベアムに属する

者は、ただ彼だけ墓に葬られるでしょう。ヤラベアムの家のうちで、彼
はイスラエルの神、主にむかって良い思いをいだいていたからです。一四
主はイスラエルの上にひとりの王を起されます。彼はその日ヤラベアムの
家を断つでしょう。一五その後主はイスラエルを撃って、水に揺らぐ葦の
ようにし、イスラエルを、その先祖に賜わったこの良い地から抜き去って、
ユフラテ川の向こうに散らされるでしょう。彼らがアシラ像を造って主を
怒らせたからです。一六主はヤラベアムの罪のゆえに、すなわち彼がみず
から犯し、またイスラエルに犯させたその罪のゆえにイスラエルを捨てら
れるでしょう」。

一七ヤラベアムの妻は立って去り、テルザへ行って、家の敷居をまたいだ
時、子どもは死んだ。一八イスラエルは皆彼を葬り、彼のために悲しんだ。
主がそのしもべ預言者アヒヤによって言われた言葉のとおりである。一九ヤ

ラベアムのその他の事績、彼がどのように戦い、どのように世を治めたか
は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされている。二〇ヤラベアムが世を
治めた日は二十二年であった。彼はその先祖と共に眠って、その子ナダブ
が代って王となった。
二一ソロモンの子レハベアムはユダで世を治めた。レハベアムは王となっ
たとき四十一歳であったが、主がその名を置くために、イスラエルのすべ
ての部族のうちから選ばれた町エルサレムで、十七年世を治めた。その母
の名はナアマといってアンモンびとであった。二二ユダの人々はその先祖
の行ったすべての事にまさって、主の目の前に悪を行い、その犯した罪
によって主の怒りを引き起した。二三彼らもすべての高い丘の上と、すべ
ての青木の下に、高き所と石の柱とアシラ像とを建てたからである。二
四その国にはまた神殿男娼たちがいた。彼らは主がイスラエルの人々の

前から追い払われた国民のすべての憎むべき事をならい行った。
二五レハベアムの王の第五年にエジプトの王シシャクがエルサレムに攻め
上ってきて、二六主の宮の宝物と、王の宮殿の宝物を奪い去った。彼は
それをことごとく奪い去り、またソロモンの造った金の盾をみな奪い去っ
た。二七レハベアムはその代りに青銅の盾を造って、王の宮殿の門を守
る侍衛長の手にわたした。二八王が主の宮にはいるごとに、侍衛はそれを
携え、また、それを侍衛のへやへ持ち帰った。

二九レハベアムのその他の事績と、彼がしたすべての事は、ユダの王の
歴代志の書にしるされているではないか。三〇レハベアムとヤラベアムの
間には絶えず戦争があった。三一レハベアムはその先祖と共に眠って先祖
と共にダビデの町に葬られた。その母の名はナアマといってアンモンび
とであった。その子アビヤムが代って王となった。

第一五章

一ネバテの子ヤラベアム王の第十八年にアビヤムがユダの王と
なり、二エルサレムで三年世を治めた。その母の名はマアカといって、アブ
サロムの娘であった。三彼はその父が先に行ったもろもろの罪をおこな
い、その心は父ダビデの心のようにその神、主に対して全く真実では
なかった。四それにもかかわらず、その神、主はダビデのために、エルサレ
ムにおいて彼に一つのともしびを与え、その子を彼のあとに立てて、エルサ
レムを固められた。五それはダビデがヘテびとウリヤの事のほか、一生の
間、主の目にかなう事を行い、主が命じられたすべての事に、そむかな
かったからである。六レハベアムとヤラベアムの間には一生の間、戦争
があった。七アビヤムのその他の行為と、彼がしたすべての事は、ユダの王
の歴代志の書にしるされているではないか。アビヤムとヤラベアムの間に
も戦争があった。八アビヤムはその先祖と共に眠って、ダビデの町に葬

られ、その子アサが代って王となった。
九イスラエルの王ヤラベアムの第二十年にアサはユダの王となり、一〇エ
ルサレムで四十一年世を治めた。その母の名はマアカといってアブサロム
の娘であった。一一アサはその父ダビデがしたように主の目にかなう事を
し、一二神殿男娼を国から追い出し、先祖たちの造ったもろもろの偶像を
除いた。一三彼はまたその母マアカが、アシラのために憎むべき像を造らせ
たので、彼女を太后の位から退けた。そしてアサはその憎むべき像を切
り倒してキデロンの谷で焼き捨てた。一四ただし高き所は除かなかった。
けれどもアサの心は一生の間、主に対して全く真実であった。一五彼
は父の献納した物と自分の献納した物、金銀および器物を主の宮に携
え入れた。
一六アサとイスラエルの王バアシャの間には一生の間、戦争があっ

た。一七イスラエルの王バアシャはユダに攻め上り、ユダの王アサの所に、
だれをも出入りさせないためにラマを築いた。一八そこでアサは主の宮の
宝蔵と、王の宮殿の宝蔵に残っている金銀をことごとく取って、これを
家来たちの手にわたし、そしてアサ王は彼らをダマスコに住んでいるスリ
ヤの王、ヘジョンの子タブリモンの子であるベネハダデにつかわして言わ
せた、一九「わたしの父とあなたの父との間に結ばれていたように、わたし
とあなたの間に同盟を結びましょう。わたしはあなたに金銀の贈り物を
さしあげます。行って、あなたとイスラエルの王バアシャとの同盟を破棄
し、彼をわたしの所から撤退させてください」。二〇ベネハダデはアサ王
の言うことを聞き、自分の軍勢の長たちをつかわしてイスラエルの町々
を攻め、イヨンとダンとアベル・ベテ・マアカおよびキンネレテの全地と、
ナフタリの全地を撃った。二一バアシャはこれを聞き、ラマを築くことをや

めて、テルザにとどまった。
二二そこでアサ王はユダ全国に布告を発した。
ひとりも免れる者はなかった。すなわちバアシャがラマを築くために用
いた石と材木を運びこさせ、アサ王はそれを用いて、ベニヤミンのゲバと
ミヅパを築いた。
二三アサのその他の事績とそのすべての勲功と、彼がした
すべての事および彼が建てた町々は、ユダの王の歴代志の書にしるされて
いるではないか。彼は老年になって足を病んだ。
二四アサはその先祖と共
に眠って、父ダビデの町に先祖と共に葬られ、その子ヨシャパテが代っ
て王となった。

二五ユダの王アサの第二年にヤラベアムの子ナダブがイスラエルの王と
なって、二年イスラエルを治めた。
二六彼は主の目の前に悪を行い、その
父の道に歩み、父がイスラエルに犯させた罪をおこなった。

二七イッサカルの家のアヒヤの子バアシャは彼に対してむほんを企て、

ペリシテびとに属するギベトンで彼を撃った。これはナダブとイスラエル
が皆ギベトンを囲んでいたからである。二八こうしてユダの王アサの第三
年にバアシャは彼を殺し、彼に代って王となった。二九彼は王となるとす
ぐヤラベアムの全家を撃ち、息のある者をひとりもヤラベアムの家に残さ
ず、ことごとく滅ぼした。主がそのしもべシロびとアヒヤによって言われ
た言葉のとおりであって、三〇これはヤラベアムがみずから犯し、またイス
ラエルに犯させた罪のため、また彼がイスラエルの神、主を怒らせたその
怒りによるのであった。

三一ナダブのその他の事績と、彼がしたすべての事は、イスラエルの王の
歴代志の書にしるされているではないか。三二アサとイスラエルの王バア
シャの間には一生の間戦争があった。

三三ユダの王アサの第三年にアヒヤの子バアシャはテルザでイスラエルの

全地の王となって、二十四年世を治めた。三四彼は主の目の前に悪を行
い、ヤラベアムの道に歩み、ヤラベアムがイスラエルに犯させた罪をおこ
なった。

第一六章一そこで主の言葉がハナニの子エヒウに臨み、バアシャを責め
て言った、二「わたしはあなたをちりの中からあげて、わたしの民イスラ
エルの上に君としたが、あなたはヤラベアムの道に歩み、わたしの民イス
ラエルに罪を犯させ、その罪をもってわたしを怒らせた。三それでわたし
は、バアシャとその家を全く滅ぼし去り、あなたの家をネバテの子ヤラ
ベアムの家のようにする。四バアシャに属する者で、町で死ぬ者は犬が食
べ、彼に属する者で、野で死ぬ者は空の鳥が食べるであろう」。
五バアシャのその他の事績と、彼がした事と、その勲功とは、イスラエ
ルの王の歴代志の書にしるされているではないか。六バアシャはその先祖

と共に眠って、テルザに葬られ、その子エラが代って王となった。七主の
言葉はまたハナニの子預言者エヒウによって臨み、バアシャとその家を責
めた。これは彼が主の目の前に、もろもろの悪を行い、その手のわざを
もって主を怒らせ、ヤラベアムの家にならったためであり、また彼がヤラ
ベアムの家を滅ぼしたためであった。

八ユダの王アサの第二十六年にバアシャの子エラはテルザでイスラエル
の王となり、二年世を治めた。九彼がテルザにいて、テルザの宮殿のつか
さアルザの家で酒を飲んで酔った時、その家来で戦車隊の半ばを指揮して
いたジムリが、彼にそむいた。一〇そしてユダの王アサの第二十七年にジ
ムリは、はいってきて彼を撃ち殺し、彼に代って王となった。

一一ジムリは王となって、位についた時、バアシャの全家を殺し、その
親族または友だちの男子は、ひとりも残さなかった。一二こうしてジムリ

はバアシャの全家を滅ぼした。主が預言者エヒウによってバアシャを責め
て言われた言葉のとおりである。一三これはバアシャのもろもろの罪と、そ
の子エラの罪のためであって、彼らが罪を犯し、またイスラエルに罪を犯
させ、彼らの偶像をもってイスラエルの神、主を怒らせたからである。一
四エラのその他の事績と、彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志
の書にしるされているではないか。

一五ユダの王アサの第二十七年にジムリはテルザで七日の間、世を治め
た。民はペリシテびとに属するギベトンにむかって陣取っていたが、一六そ
の陣取っていた民が「ジムリはむほんを起して王を殺した」と人のいうの
を聞いたので、イスラエルは皆その日陣営で、軍の長オムリをイスラエ
ルの王とした。一七そこでオムリはイスラエルの人々と共にギベトンから
上ってテルザを囲んだ。一八ジムリはその町の陥るのを見て、王の宮殿

の天守にはいり、王の宮殿に火をかけてその中で死んだ。**一九**これは彼
が犯した罪のためであって、彼が主の目の前に悪を行い、ヤラベアムの
道に歩み、ヤラベアムがイスラエルに犯させたその罪を行ったからであ
る。**二〇**ジムリのその他の事績と、彼が企てた陰謀は、イスラエルの王の
歴代志の書にしるされているではないか。
二一その時イスラエルの民は二つに分れ、民の半ばはギナテの子テブニ
に従って、これを王としようとし、半ばはオムリに従った。**二二**しかし
オムリに従った民はギナテの子テブニに従った民に勝って、テブニは死
に、オムリが王となった。**二三**ユダの王アサの第三十一年にオムリはイス
ラエルの王となって十二年世を治めた。彼はテルザで六年王であった。**二**
四彼は銀二タラントでセメルからサマリヤの山を買い、その上に町を建て、
その建てた町の名をその山の持ち主であったセメルの名に従ってサマリ

ヤと呼んだ。
二五オムリは主の目の前に悪を行い、彼よりも先にいたすべての者にま
さって悪い事をした。二六彼はネバテの子ヤラベアムのすべての道に歩み、
ヤラベアムがイスラエルに罪を犯させ、彼らの偶像をもってイスラエルの
神、主を怒らせたその罪を行った。二七オムリが行ったその他の事績と、
彼があらわした勲功とは、イスラエルの王の歴代志の書にしるされている
ではないか。二八オムリはその先祖と共に眠って、サマリヤに葬られ、そ
の子アハブが代って王となった。
二九ユダの王アサの第三十八年にオムリの子アハブがイスラエルの王と
なった。オムリの子アハブはサマリヤで二十二年イスラエルを治めた。三〇
オムリの子アハブは彼よりも先にいたすべての者にまさって、主の目の前
に悪を行った。三一彼はネバテの子ヤラベアムの罪を行うことを、軽い

事とし、シドンびとの王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとり、行ってバ
アルに仕え、これを拝んだ。三二彼はサマリヤに建てたバアルの宮に、バア
ルのために祭壇を築いた。三三アハブはまたアシラ像を造った。アハブは
彼よりも先にいたイスラエルのすべての王にまさってイスラエルの神、主
を怒らせることを行った。三四彼の代にベテルびとヒエルはエリコを建て
た。彼はその基をすえる時に長子アビラムを失い、その門を立てる時
に末の子セグブを失った。主がヌンの子ヨシュアによって言われた言葉
のとおりである。

第一七章

一ギレアデのテシベに住むテシベびとエリヤはアハブに言った、
「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。わたしの
言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」。二主の言葉がエリヤに臨
んだ、三「ここを去って東におもむき、ヨルダンの東にあるケリテ川のほ

とりに身を隠しなさい。四そしてその川の水を飲みなさい。わたしはから
すに命じて、そこであなたを養わせよう」。五エリヤは行って、主の言葉
のとおりにした。すなわち行って、ヨルダンの東にあるケリテ川のほとり
に住んだ。六すると、からすが朝ごとに彼の所にパンと肉を運び、また夕
ごとにパンと肉を運んできた。そして彼はその川の水を飲んだ。七しかし
国に雨がなかったので、しばらくしてその川はかれた。
八その時、主の言葉が彼に臨んで言った、九「立ってシドンに属するザレ
パテへ行って、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じ
てあなたを養わせよう」。一〇そこで彼は立ってザレパテへ行ったが、町
の門に着いたとき、ひとりのやもめ女が、その所でたきぎを拾っていた。
彼はその女に声をかけて言った、「器に水を少し持ってきて、わたしに飲
ませてください」。一一彼女が行って、それを持ってこようとした時、彼は

彼女を呼んで言った、「手に一口のパンを持ってきてください」。一二彼女
は言った、「あなたの神、主は生きておられます。わたしにはパンはありま
せん。ただ、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今
わたしはたきぎ二、三本を拾い、うちへ帰って、わたしと子供のためにそ
れを調理し、それを食べて死のうとしているのです」。一三エリヤは彼女に
言った、「恐れるにはおよばない。行って、あなたが言ったとおりにしなさ
い。しかしまず、それでわたしのために小さいパンを、一つ作って持って
きなさい。その後、あなたと、あなたの子供のために作りなさい。一四『主
が雨を地のおもてに降らす日まで、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えな
い』とイスラエルの神、主が言われるからです」。一五彼女は行って、エリ
ヤが言ったとおりにした。彼女と彼および彼女の家族は久しく食べた。一
六主がエリヤによって言われた言葉のように、かめの粉は尽きず、びんの

油は絶えなかった。
一七これらの事の後、その家の主婦であるこの女の男の子が病気にな
った。その病気はたいそう重く、息が絶えたので、一八彼女はエリヤに言っ
た、「神の人よ、あなたはわたしに、何の恨みがあるのですか。あなたはわ
たしの罪を思い出させるため、またわたしの子を死なせるためにおいでに
なったのですか」。一九エリヤは彼女に言った、「子をわたしによこしなさ
い」。そして彼女のふところから子供を取り、自分のいる屋上のへやへか
かえて上り、自分の寝台に寝かせ、二〇主に呼ばわって言った、「わが神、主
よ、あなたはわたしが宿っているやもめにさえ災をくだして、子供
を殺されるのですか」。二一そして三度その子供の上に身を伸ばし、主に呼
ばわって言った、「わが神、主よ、この子供の魂をもとに帰らせてくださ
い」。二二主はエリヤの声を聞きいれられたので、その子供の魂はもとに

帰って、彼は生きかえった。二三エリヤはその子供を取って屋上のへやか
ら家の中につれて降り、その母にわたして言った、「ごらんなさい。あなた
の子は生きかえりました」。二四女はエリヤに言った、「今わたしはあなた
が神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知
りました」。

第一八章 一多くの日を経て、三年目に主の言葉がエリヤに臨んだ、「行っ
て、あなたの身をアハブに示しなさい。わたしは雨を地に降らせる」。二エ
リヤはその身をアハブに示そうとして行った。その時、サマリヤにききん
が激しかった。三アハブは家づかさオバデヤを召した。(オバデヤは深く主
を恐れる人で、四イゼベルが主の預言者を断ち滅ぼした時、オバデヤは百
人の預言者を救い出して五十人ずつほら穴に隠し、パンと水をもって彼ら
を養った)。五アハブはオバデヤに言った、「国中のすべての水の源と、

すべての川に行ってみるがよい。馬と騾馬を生かしておくための草がある
かもしれない。そうすれば、われわれは家畜をいくぶんでも失わずにすむ
であろう」。六彼らは行き巡る地をふたりで分け、アハブはひとりでこの道
を行き、オバデヤはひとりで他の道を行った。
七オバデヤが道を進んでいた時、エリヤが彼に会った。彼はエリヤを認
めて伏して言った、「わが主エリヤよ、あなたはここにおられるのですか」。
八エリヤは彼に言った、「そうです。行って、あなたの主人に、エリヤはこ
こにいると告げなさい」。九彼は言った、「わたしにどんな罪があって、あ
なたはしもべをアハブの手にわたして殺そうとされるのですか。一〇あなた
の神、主は生きておられます。わたしの主人があなたを尋ねるために、人
をつかわさない民はなく、国もありません。そしてエリヤはいないと言う
時は、その国、その民に、あなたが見つからないという誓いをさせるので

す。一一あなたは今『行って、エリヤはここにいると主人に告げよ』と言わ
れます。一二しかしわたしがあなたを離れて行くと、主の霊はあなたを、わ
たしの知らない所へ連れて行くでしょう。わたしが行ってアハブに告げ、
彼があなたを見つけることができなければ、彼はわたしを殺すでしょう。
しかし、しもべは幼い時から主を恐れている者です。一三イゼベルが主の
預言者を殺した時に、わたしがした事、すなわち、わたしが主の預言者のう
ち百人を五十人ずつほら穴に隠して、パンと水をもって養った事を、わ
が主は聞かれませんでしたか。一四ところが今あなたは『行って、エリヤは
ここにいると主人に告げよ』と言われます。そのようなことをすれば彼は
わたしを殺すでしょう」。一五エリヤは言った、「わたしの仕える万軍の主
は生きておられる。わたしは必ず、きょう、わたしの身を彼に示すであろ
う」。一六オバデヤは行ってアハブに会い、彼に告げたので、アハブはエリ

ヤに会おうとして行った。
一七アハブはエリヤを見たとき、彼に言った、「イスラエルを悩ます者よ、
あなたはここにいるのですか」。一八彼は答えた、「わたしがイスラエルを
悩ますのではありません。あなたと、あなたの父の家が悩ましたのです。
あなたがたが主の命令を捨て、バアルに従ったためです。一九それで今、
人をつかわしてイスラエルのすべての人およびバアルの預言者四百五十人、
ならびにアシラの預言者四百人、イゼベルの食卓で食事する者たちをカ
ルメル山に集めて、わたしの所にこさせなさい」。
二〇そこでアハブはイスラエルのすべての人に人をつかわして、預言者
たちをカルメル山に集めた。二一そのときエリヤはすべての民に近づいて
言った、「あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのですか。
主が神ならばそれに従いなさい。しかしバアルが神ならば、それに従い

なさい」。民はひと言も彼に答えなかった。二二エリヤは民に言った、「わ
たしはただひとり残った主の預言者です。しかしバアルの預言者は四百五
十人あります。二三われわれに二頭の牛をください。そして一頭の牛を彼
らに選ばせ、それを切り裂いて、たきぎの上に載せ、それに火をつけずに
おかせなさい。わたしも一頭の牛を整え、それをたきぎの上に載せて火
をつけずにおきましょう。二四こうしてあなたがたはあなたがたの神の名
を呼びなさい。わたしは主の名を呼びましょう。そして火をもって答える
神を神としましょう」。民は皆答えて「それがよかろう」と言った。二五そ
こでエリヤはバアルの預言者たちに言った、「あなたがたは大ぜいだから初
めに一頭の牛を選んで、それを整え、あなたがたの神の名を呼びなさい。
ただし火をつけてはなりません」。二六彼らは与えられた牛を取って整え、
朝から昼までバアルの名を呼んで「バアルよ、答えてください」と言った。

しかしなんの声もなく、また答える者もなかったので、彼らは自分たちの
造った祭壇のまわりに踊った。二七昼になってエリヤは彼らをあざけって
言った、「彼は神だから、大声をあげて呼びなさい。彼は考えにふけって
いるのか、よそへ行ったのか、旅に出たのか、または眠っていて起されな
ければならないのか」。二八そこで彼らは大声に呼ばわり、彼らのならわし
に従って、刀とやりで身を傷つけ、血をその身に流すに至った。二九こ
うして昼が過ぎても彼らはなお叫び続けて、夕の供え物をささげる時にま
で及んだ。しかしなんの声もなく、答える者もなく、また顧みる者もな
かった。

三〇その時エリヤはすべての民にむかって「わたしに近寄りなさい」と
言ったので、民は皆彼に近寄った。彼はこわれている主の祭壇を繕った。
三一そしてエリヤは昔、主の言葉がヤコブに臨んで、「イスラエルをあな

たの名とせよ」と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石
を取り、三二その石で主の名によって祭壇を築き、祭壇の周囲に種二セヤ
をいれるほどの大きさの、みぞを作った。三三また、たきぎを並べ、牛を
切り裂いてたきぎの上に載せて言った、「四つのかめに水を満たし、それを
燔祭とたきぎの上に注げ」。三四また言った、「それを二度せよ」。二度それ
をすると、また言った、「三度それをせよ」。三度それをした。三五水は祭壇
の周囲に流れた。またみぞにも水を満たした。
三六夕の供え物をささげる時になって、預言者エリヤは近寄って言った、
「アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ、イスラエルでは、あなたが神で
あること、わたしがあなたのしもべであって、あなたの言葉に従ってこの
すべての事を行ったことを、今日知らせてください。三七主よ、わたしに
答えてください、わたしに答えてください。主よ、この民にあなたが神で

あること、またあなたが彼らの心を翻されたのであることを知らせて
ください」。三八そのとき主の火が下って燔祭と、たきぎと、石と、ちりと
を焼きつくし、またみぞの水をなめつくした。三九民は皆見て、ひれ伏して
言った、「主が神である。主が神である」。四〇エリヤは彼らに言った、「バ
アルの預言者を捕えよ。そのひとりも逃がしてはならない」。そこで彼らを
捕えたので、エリヤは彼らをキション川に連れくだって、そこで彼らを殺
した。

四一エリヤはアハブに言った、「大雨の音がするから、上って行って、食い
飲みしなさい」。四二アハブは食い飲みするために上っていった。しかしエ
リヤはカルメルの頂に登り、地に伏して顔をひざの間に入れていたが、
四三彼はしもべに言った、「上っていって海の方を見なさい」。彼は上って
いって、見て、「何もありません」と言ったので、エリヤは「もう一度行きな

さい」と言って七度に及んだ。四四七度目にしもべは言った、「海から人の
手ほどの小さな雲が起っています」。エリヤは言った、「上っていって、『雨
にとどめられないように車を整えて下れ』とアハブに言いなさい」。四
五すると間もなく、雲と風が起り、空が黒くなって大雨が降ってきた。ア
ハブは車に乗ってエズレルへ行った。四六また主の手がエリヤに臨んだの
で、彼は腰をからげ、エズレルの入口までアハブの前に走っていった。

第一九章一アハブはエリヤのしたすべての事、また彼がすべての預言者
を刀で殺したことをイゼベルに告げたので、二イゼベルは使者をエリヤに
つかわして言った、「もしわたしが、あすの今ごろ、あなたの命をあの人々
のひとりの命のようにしていないならば、神々がどんなにでも、わたし
を罰してくださるように」。三そこでエリヤは恐れて、自分の命を救うた
めに立って逃げ、ユダに属するベエルシバへ行って、しもべをそこに残し、

四自分は一日の道のりほど荒野にはいって行って、れだまの木の下に座し、
自分の死を求めて言った、「主よ、もはや、じゅうぶんです。今わたしの命
を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」。五彼はれだ
まの木の下に伏して眠ったが、天の使が彼にさわり、「起きて食べなさい」
と言ったので、六起きて見ると、頭のそばに、焼け石の上で焼いたパン一
個と、一びんの水があった。彼は食べ、かつ飲んでまた寝た。七主の使は
再びきて、彼にさわって言った、「起きて食べなさい。道が遠くて耐えら
れないでしょうから」。八彼は起きて食べ、かつ飲み、その食物で力づい
て四十日四十夜行って、神の山ホレブに着いた。
九その所で彼はほら穴にはいって、そこに宿ったが、主の言葉が彼に
臨んで、彼に言われた、「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか」。
一〇彼は言った、「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありまし

た。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀
をもってあなたの預言者たちを殺したのです。ただわたしだけ残りました
が、彼らはわたしの命を取ろうとしています」。一一主は言われた、「出て、
山の上で主の前に、立ちなさい」。その時主は通り過ぎられ、主の前に大
きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられな
かった。風の後に地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。一
二地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静
かな細い声が聞えた。一三エリヤはそれを聞いて顔を外套に包み、出てほ
ら穴の口に立つと、彼に語る声が聞えた、「エリヤよ、あなたはここで何
をしているのか」。一四彼は言った、「わたしは万軍の神、主のために非常
に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの
祭壇をこわし、刀であなたの預言者たちを殺したからです。ただわたし

だけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」。一五主は
彼に言われた、「あなたの道を帰って行って、ダマスコの荒野におもむき、
ダマスコに着いて、ハザエルに油を注ぎ、スリヤの王としなさい。一六ま
たニムシの子エヒウに油を注いでイスラエルの王としなさい。またアベ
ルメホラのシャパテの子エリシャに油を注いで、あなたに代って預言者と
しなさい。一七ハザエルのつるぎをのがれる者をエヒウが殺し、エヒウのつ
るぎをのがれる者をエリシャが殺すであろう。一八また、わたしはイスラエ
ルのうちに七千人を残すであろう。皆バアルにひざをかがめず、それに口
づけしない者である」。
一九さてエリヤはそこを去って行って、シャパテの子エリシャに会った。
彼は十二くびきの牛を前に行かせ、自分は十二番目のくびきと共にいて耕
していた。エリヤは彼のかたわらを通り過ぎて外套を彼の上にかけた。二

○エリシャは牛を捨て、エリヤのあとに走ってきて言った、「わたしの父母
に口づけさせてください。そして後あなたに従いましょう」。エリヤは彼
に言った、「行ってきなさい。わたしはあなたに何をしましたか」。二一エリ
シャは彼を離れて帰り、ひとくびきの牛を取って殺し、牛のくびきを燃や
してその肉を煮、それを民に与えて食べさせ、立って行ってエリヤに従
い、彼に仕えた。

第二〇章一スリヤの王ベネハダデはその軍勢をことごとく集めた。三十
二人の王が彼と共におり、また馬と戦車もあった。彼は上ってサマリヤを
囲み、これを攻めた。二また彼は町に使者をつかわし、イスラエルの王ア
ハブに言った、「ベネハダデはこう申します、三『あなたの金銀はわたしの
もの、またあなたの妻たちと子供たちの最も美しい者もわたしのもので
す』」。四イスラエルの王は答えた、「王、わが主よ、仰せのとおり、わた

しと、わたしの持ち物は皆あなたのものです」。五使者は再びきて言った、
「ベネハダデはこう申します、『わたしはさきに人をつかわして、あなたの
金銀、妻子を引きわたせと言いました。六しかし、あすの今ごろ、しもべ
たちをあなたにつかわします。彼らはあなたの家と、あなたの家来の家を
探って、すべて彼らの気にいる物を手に入れて奪い去るでしょう』」。
七そこでイスラエルの王は国の長老をことごとく召して言った、「よく
注意して、この人が無理な事を求めているのを知りなさい。彼は人をつか
わして、わたしの妻子と金銀を求めたが、わたしはそれを拒まなかった」。
八すべての長老および民は皆彼に言った、「聞いてはなりません。承諾
してはなりません」。九それで彼はベネハダデの使者に言った、「王、わが主
に告げなさい。『あなたが初めに要求されたことは皆いたしましょう。し
かし今度の事はできません』」。使者は去って復命した。一〇ベネハダデは

彼に人をつかわして言った、「もしサマリヤのちりが、わたしに従うすべて
の民の手を満たすに足りるならば、神々がどんなにでも、わたしを罰して
くださるように」。一一イスラエルの王は答えた、「『武具を帯びる者は、そ
れを脱ぐ者のように誇ってはならない』と告げなさい」。一二ベネハダデは
仮小屋で、王たちと酒を飲んでいたが、この事を聞いて、その家来たちに
言った、「戦いの備えをせよ」。彼らは町にむかって戦いの備えをした。
一三この時ひとりの預言者がイスラエルの王アハブのもとにきて言った、
「主はこう仰せられる、『あなたはこの大軍を見たか。わたしはきょう、こ
れをあなたの手にわたす。あなたは、わたしが主であることを、知るように
なるであろう』」。一四アハブは言った、「だれにさせましょうか」。彼は言っ
た、「主はこう仰せられる、『地方の代官の家来たちにさせよ』」。アハブは
言った、「だれが戦いを始めましょうか」。彼は答えた、「あなたです」。一

五そこでアハブは地方の代官の家来たちを調べたところ二百三十二人あっ
た。次にすべての民、すなわちイスラエルのすべての人を調べたところ七
千人あった。
一六彼らは昼ごろ出ていったが、ベネハダデは仮小屋で、味方の三十二
人の王たちと共に酒を飲んで酔っていた。一七地方の代官の家来たちが先
に出ていった。ベネハダデは斥候をつかわしたが、彼らは「サマリヤから
人々が出てきた」と報告したので、一八彼は言った、「和解のために出てき
たのであっても、生どりにせよ。また戦いのために出てきたのであって
も、生どりにせよ」。
一九地方の代官の家来たちと、それに従う軍勢が町から出ていって、二
〇おのおのその相手を撃ち殺したので、スリヤびとは逃げた。イスラエル
はこれを追ったが、スリヤの王ベネハダデは馬に乗り、騎兵を従えてのが

れた。二一イスラエルの王は出ていって、馬と戦車をぶんどり、また大い
にスリヤびとを撃ち殺した。
二二時に、かの預言者がイスラエルの王のもとにきて言った、「行って、力
を養い、なすべき事をよく考えなさい。来年の春にはスリヤの王が、あ
なたのところに攻め上ってくるからです」。
二三スリヤの王の家来たちは王に言った、「彼らの神々は山の神ですから
彼らがわれわれよりも強かったのです。もしわれわれが平地で戦うなら
ば、必ず彼らよりも強いでしょう。二四それでこうしなさい。王たちをお
のおのその地位から退かせ、総督を置いてそれに代らせなさい。二五また
あなたが失った軍勢に等しい軍勢を集め、馬は馬、戦車は戦車をもって
補いなさい。こうしてわれわれが平地で戦うならば必ず彼らよりも強
いでしょう」。彼はその言葉を聞きいれて、そのようにした。

二六春になって、ベネハダデはスリヤびとを集めて、イスラエルと戦うた
めに、アペクに上ってきた。二七イスラエルの人々は召集され、糧食
を受けて彼らを迎え撃つために出かけた。イスラエルの人々はやぎの二つ
の小さい群れのように彼らの前に陣取ったが、スリヤびとはその地に満ち
ていた。二八その時神の人がきて、イスラエルの王に言った、「主はこう仰
せられる、『スリヤびとが、主は山の神であって、谷の神ではないと言って
いるから、わたしはこのすべての大軍をあなたの手にわたす。あなたは、わ
たしが主であることを知るようになるであろう』」。二九彼らは七日の間、
互にむかいあって陣取り、七日目になって戦いを交えたが、イスラエル
の人々は一日にスリヤびとの歩兵十万人を殺した。三〇そのほかの者はア
ペクの町に逃げこんだが、城壁がくずれて、その残った二万七千人の上
に倒れた。

ベネハダデは逃げて町に入り、奥の間にはいった。三一家来たちは彼に
言った、「イスラエルの家の王たちはあわれみ深い王であると聞いていま
す。それでわれわれの腰に荒布をつけ、くびになわをかけて、イスラエルの
王の所へ行かせてください。たぶん彼はあなたの命を助けるでしょう」。
三二そこで彼らは荒布を腰にまき、なわをくびにかけてイスラエルの王の
所へ行って言った、「あなたのしもべベネハダデが『どうぞ、わたしの命
を助けてください』と申しています」。アハブは言った、「彼はまだ生きて
いるのですか。彼はわたしの兄弟です」。三三その人々はこれを吉兆と
してすみやかに彼の言葉をうけ、「そうです。ベネハダデはあなたの兄弟
です」と言ったので、彼は言った、「行って彼をつれてきなさい」。それで
ベネハダデは彼の所に出てきたので、彼はこれを自分の車に乗せた。三
四ベネハダデは彼に言った、「わたしの父が、あなたの父上から取った町々

は返します。またわたしの父がサマリヤに造ったように、あなたはダマス
コに、あなたのために市場を設けなさい」。アハブは言った、「わたしはこ
の契約をもってあなたを帰らせましょう」。こうしてアハブは彼と契約を
結び、彼を帰らせた。
三五さて預言者のともがらのひとりが主の言葉に従ってその仲間に言っ
た、「どうぞ、わたしを撃ってください」。しかしその人は撃つことを拒んだ
ので、三六彼はその人に言った、「あなたは主の言葉に聞き従わないゆえ、
わたしを離れて行くとすぐ、ししがあなたを殺すでしょう」。その人が彼の
そばを離れて行くとすぐ、ししが彼に会って彼を殺した。三七彼はまたほ
かの人に会って言った、「どうぞ、わたしを撃ってください」。するとその
人は彼を撃ち、撃って傷つけた。三八こうしてその預言者は行って、道のか
たわらで王を待ち、目にほうたいを当てて姿を変えていた。三九王が通り

過ぎる時、王に呼ばわって言った、「しもべはいくさの中に出て行きました
が、ある軍人が、ひとりの人をわたしの所につれてきて言いました、『この
人を守っていなさい。もし彼がいなくなれば、あなたの命を彼の命に代
えるか、または銀一タラントを払わなければならない』。四〇ところが、しも
べはあちらこちらと忙しくしていたので、ついに彼はいなくなりました」。
イスラエルの王は彼に言った、「あなたはそのとおりにさばかれなければな
らない。あなたが自分でそれを定めたのです」。四一そこで彼が急いで目の
ほうたいを取り除いたので、イスラエルの王はそれが預言者のひとりであ
ることを知った。四二彼は王に言った、「主はこう仰せられる、『わたしが
滅ぼそうと定めた人を、あなたは自分の手から放して行かせたので、あな
たの命は彼の命に代り、あなたの民は彼の民に代るであろう』と」。四
三イスラエルの王は悲しみ、かつ怒って自分の家におもむき、サマリヤに

帰った。
第二一章 一 さてエズレルびとナボテはエズレルにぶどう畑をもっていた
が、サマリヤの王アハブの宮殿のかたわらにあったので、二 アハブはナボ
テに言った、「あなたのぶどう畑はわたしの家の近くにあるので、わたし
に譲って青物畑にさせてください。その代り、わたしはそれよりも良い
ぶどう畑をあなたにあげましょう。もしお望みならば、その価を金でさ
しあげましょう」。三 ナボテはアハブに言った、「わたしは先祖の嗣業をあ
なたに譲ることを断じていたしません」。四 アハブはエズレルびとナボテが
言った言葉を聞いて、悲しみ、かつ怒って家にはいった。ナボテが「わた
しは先祖の嗣業をあなたに譲りません」と言ったからである。アハブは床
に伏し、顔をそむけて食事をしなかった。
五 妻イゼベルは彼の所にきて、言った、「あなたは何をそんなに悲しん

で、食事をなさらないのですか」。六彼は彼女に言った、「わたしはエズレ
ルびとナボテに『あなたのぶどう畑を金で譲ってください。もし望むな
らば、その代りに、ほかのぶどう畑をあげよう』と言ったが、彼は答えて
『わたしはぶどう畑を譲りません』と言ったからだ」。七妻イゼベルは彼に
言った、「あなたが今イスラエルを治めているのですか。起きて食事をし、
元気を出してください。わたしがエズレルびとナボテのぶどう畑をあなた
にあげます」。

八彼女はアハブの名で手紙を書き、彼の印をおして、ナボテと同じよう
に、その町に住んでいる長老たちと身分の尊い人々に、その手紙を送っ
た。九彼女はその手紙に書きしるした、「断食を布告して、ナボテを民のう
ちの高い所にすわらせ、一〇またふたりのよこしまな者を彼の前にすわら
せ、そして彼を訴えて、『あなたは神と王とをのろった』と言わせなさい。

こうして彼を引き出し、石で撃ち殺しなさい」。一一その町の人々、すなわ
ち、その町に住んでいる長老たちおよび身分の尊い人々は、イゼベルが
言いつかわしたようにした。彼女が彼らに送った手紙に書きしるされてい
たように、一二彼らは断食を布告して、ナボテを民のうちの高い所にすわ
らせた。一三そしてふたりのよこしまな者がはいってきて、その前にすわ
り、そのよこしまな者たちが民の前でナボテを訴えて、「ナボテは神と王
とをのろった」と言った。そこで人々は彼を町の外に引き出し、石で撃ち
殺した。一四そして人々はイゼベルに「ナボテは石で撃ち殺された」と言
い送った。

一五イゼベルはナボテが石で撃ち殺されたのを聞くとすぐ、アハブに言っ
た、「立って、あのエズレルびとナボテが、あなたに金で譲ることを拒んだ
ぶどう畑を取りなさい。ナボテは生きていません。死んだのです」。一六

アハブはナボテの死んだのを聞くとすぐ、立って、エズレルびとナボテの
ぶどう畑を取るために、そこへ下っていった。
一七そのとき、主の言葉がテシベびとエリヤに臨んだ、一八「立って、下っ
て行き、サマリヤにいるイスラエルの王アハブに会いなさい。彼はナボテ
のぶどう畑を取ろうとしてそこへ下っている。一九あなたは彼に言わなけ
ればならない、『主はこう仰せられる、あなたは殺したのか、また取ったの
か』と。また彼に言いなさい、『主はこう仰せられる、犬がナボテの血をな
めた場所で、犬があなたの血をなめるであろう』」。
二〇アハブはエリヤに言った、「わが敵よ、ついに、わたしを見つけたの
か」。彼は言った、「見つけました。あなたが主の目の前に悪を行うこと
に身をゆだねたゆえ、二一わたしはあなたに災を下し、あなたを全く滅
ぼし、アハブに属する男は、イスラエルにいてつながれた者も、自由な者

もことごとく断ち、二二またあなたの家をネバテの子ヤラベアムの家のよう
にし、アヒヤの子バアシャの家のようにするでしょう。これはあなたがわ
たしを怒らせた怒りのゆえ、またイスラエルに罪を犯させたゆえです。二
三イゼベルについて、主はまた言われました、『犬がエズレルの地域でイゼ
ベルを食うであろう』と。二四アハブに属する者は、町で死ぬ者を犬が食
い、野で死ぬ者を空の鳥が食うでしょう」。
二五アハブのように主の目の前に悪を行うことに身をゆだねた者はな
かった。その妻イゼベルが彼をそそのかしたのである。二六彼は主がイス
ラエルの人々の前から追い払われたアモリびとがしたように偶像に従っ
て、はなはだ憎むべき事を行った。
二七アハブはこれらの言葉を聞いた時、衣を裂き、荒布を身にまとい、
食を断ち、荒布に伏し、打ちしおれて歩いた。二八この時、主の言葉がテ

シベびとエリヤに臨(のぞ)んだ、二九「アハブがわたしの前(まえ)にへりくだっているの
を見(み)たか。彼(かれ)がわたしの前(まえ)にへりくだっているゆえ、わたしは彼(あ)の世(よ)には
災(わざわい)を下(くだ)さない。その子(こ)の世(よ)に災(わざわい)をその家(いえ)に下(くだ)すであろう」。

第二二章
一スリヤとイスラエルの間(あいだ)に戦争(せんそう)がなくて三年(ねん)を経(へ)た。二しか
し三年目(ねんめ)にユダの王(おう)ヨシャパテがイスラエルの王(おう)の所(ところ)へ下(くだ)っていったの
で、三イスラエルの王(おう)はその家来(けらい)たちに言(い)った、「あなたがたは、ラモテ・ギ
レアデがわれわれの所有(しょゆう)であることを知(し)っていますか。しかもなおわれわ
れはスリヤの王(おう)の手(て)からそれを取(と)らずに黙(だま)っているのです」。四彼(かれ)はヨシャ
パテに言(い)った、「ラモテ・ギレアデで戦(たたか)うためにわたしと一緒(いっしょ)に行(い)かれま
せんか」。ヨシャパテはイスラエルの王(おう)に言(い)った、「わたしはあなたと一つ
です。わたしの民(たみ)はあなたの民(たみ)と一つです。わたしの馬(うま)はあなたの馬(うま)と一
つです」。

五ヨシャパテはまたイスラエルの王に言った、「まず、主の言葉を伺い
なさい」。六そこでイスラエルの王は預言者四百人ばかりを集めて、彼らに
言った、「わたしはラモテ・ギレアデに戦いに行くべきでしょうか、ある
いは控えるべきでしょうか」。彼らは言った、「上っていきなさい。主はそ
れを王の手にわたされるでしょう」。七ヨシャパテは言った、「ここには、わ
れわれの問うべき主の預言者がほかにいませんか」。八イスラエルの王はヨ
シャパテに言った、「われわれが主に問うことのできる人が、まだひとりい
ます。イムラの子ミカヤです。彼はわたしについて良い事を預言せず、た
だ悪い事だけを預言するので、わたしは彼を憎んでいます」。ヨシャパテは
言った、「王よ、そう言わないでください」。九そこでイスラエルの王は役人
を呼んで、「急いでイムラの子ミカヤを連れてきなさい」と言った。一〇さ
てイスラエルの王およびユダの王ヨシャパテは王の服を着て、サマリヤの

門の入口の広場に、おのおのその王座にすわり、預言者たちは皆その前で
預言していた。一一ケナアナの子ゼデキヤは鉄の角を造って言った、「主は
こう仰せられます、『あなたはこれらの角をもってスリヤびとを突いて彼ら
を滅ぼしなさい』」。一二預言者たちは皆そのように預言して言った、「ラモ
テ・ギレアデに上っていって勝利を得なさい。主はそれを王の手にわたさ
れるでしょう」。
一三さてミカヤを呼びにいった使者は彼に言った、「預言者たちは一致し
て王に良い事を言いました。どうぞ、あなたも、彼らのひとりの言葉のよ
うにして、良い事を言ってください」。一四ミカヤは言った、「主は生きてお
られます。主がわたしに言われる事を申しましょう」。一五彼が王の所へ
行くと、王は彼に言った、「ミカヤよ、われわれはラモテ・ギレアデに戦
いに行くべきでしょうか、あるいは控えるべきでしょうか」。彼は王に言っ

た、「上っていって勝利を得なさい。主はそれを王の手にわたされるでしょ
う」。一六しかし王は彼に言った、「幾たびあなたを誓わせたら、あなたは主
の名をもって、ただ真実のみをわたしに告げるでしょうか」。一七彼は言っ
た、「わたしはイスラエルが皆、牧者のない羊のように、山に散っている
のを見ました。すると主は『これらの者は飼主がいない。彼らをそれぞれ
安らかに、その家に帰らせよ』と言われました」。一八イスラエルの王はヨ
シャパテに言った、「彼がわたしについて良い事を預言せず、ただ悪い事
だけを預言すると、あなたに告げたではありませんか」。一九ミカヤは言っ
た、「それゆえ主の言葉を聞きなさい。わたしは主がその玉座にすわり、天
の万軍がそのかたわらに、右左に立っているのを見たが、二〇主は『だれ
がアハブをいざなってラモテ・ギレアデに上らせ、彼を倒れさせるであろ
うか』と言われました。するとひとりはこの事を言い、ひとりはほかの事

を言いました。二一その時一つの霊が進み出て、主の前に立ち、『わたしが
彼をいざないましょう』と言いました。二二主は『どのような方法でする
のか』と言われたので、彼は『わたしが出て行って、偽りを言う霊となっ
て、すべての預言者の口に宿りましょう』と言いました。そこで主は『お
まえは彼をいざなって、それを成し遂げるであろう。出て行って、そうしな
さい』と言われました。二三それで主は偽りを言う霊をあなたのすべての
預言者の口に入れ、また主はあなたの身に起る災を告げられたのです」。
二四するとケナアナの子ゼデキヤは近寄って、ミカヤのほおを打って言った、
「どのようにして主の霊がわたしを離れて、あなたに語りましたか」。二五
ミカヤは言った、「あなたが奥の間にはいって身を隠すその日に、わかる
でしょう」。二六イスラエルの王は言った、「ミカヤを捕え、町のつかさア
モンと、王の子ヨアシの所へ引いて帰って、二七言いなさい、『王がこう

言います、この者を獄屋に入れ、わずかのパンと水をもって彼を養い、わ
たしが勝利を得て帰ってくるのを待て』」。二八ミカヤは言った、「もしあな
たが勝利を得て帰ってこられるならば、主がわたしによって語られなかっ
たのです」。また彼は言った、「あなたがた、すべての民よ、聞きなさい」。
二九こうしてイスラエルの王とユダの王ヨシャパテはラモテ・ギレアデに
上っていった。三〇イスラエルの王はヨシャパテに言った、「わたしは姿を
変えて、戦いに行きます。あなたは王の服を着けなさい」。イスラエルの
王は姿を変えて戦いに行った。三一さて、スリヤの王は、その戦車長三
十二人に命じて言った、「あなたがたは、小さい者とも大きい者とも戦わ
ないで、ただイスラエルの王とだけ戦いなさい」。三二戦車長らはヨシャ
パテを見たとき、これはきっとイスラエルの王だと思ったので、身をめぐ
らして、これと戦おうとすると、ヨシャパテは呼ばわった。三三戦車長

らは彼がイスラエルの王でないのを見たので、彼を追うことをやめて引き
返した。三四しかし、ひとりの人が何心なく弓をひいて、イスラエルの王
の胸当と草摺の間を射たので、彼はその戦車の御者に言った、「わたしは
傷を受けた。戦車をめぐらして、わたしを戦場から運び出せ」。三五その
日戦いは激しくなった。王は戦車の中にささえられて立ち、スリヤびと
にむかっていたが、ついに、夕暮になって死んだ。傷の血は戦車の底に流
れた。三六日の没するころ、軍勢の中に呼ばわる声がした、「めいめいその
町へ、めいめいその国へ帰れ」。
三七王は死んで、サマリヤへ携え行かれた。人々は王をサマリヤに葬っ
た。三八またその戦車をサマリヤの池で洗ったが、犬がその血をなめた。ま
た遊女がそこで身を洗った。主が言われた言葉のとおりである。三九アハ
ブのそのほかの事績と、彼がしたすべての事と、その建てた象牙の家と、そ

の建てたすべての町は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされているで
はないか。
四〇こうしてアハブはその先祖と共に眠って、その子アハジヤが
代って王となった。
四一アサの子ヨシャパテはイスラエルの王アハブの第四年にユダの王と
なった。
四二ヨシャパテは王となった時、三十五歳であったが、エルサレム
で二十五年世を治めた。その母の名はアズバといい、シルヒの娘であっ
た。
四三ヨシャパテは父アサのすべての道に歩み、それを離れることなく、
主の目にかなう事をした。ただし高き所は除かなかったので、民はなお
高き所で犠牲をささげ、香をたいた。
四四ヨシャパテはまたイスラエルの
王と、よしみを結んだ。
四五ヨシャパテのその他の事績と、彼があらわした勲功およびその戦争
については、ユダの王の歴代志の書にしるされているではないか。
四六彼は

父アサの世になお残っていた神殿男娼たちを国のうちから追い払った。
四七そのころエドムには王がなく、代官が王であった。四八ヨシャパテは
タルシシの船を造って、金を獲るためにオフルに行かせようとしたが、その
船はエジオン・ゲベルで難破したため、ついに行かなかった。四九そこでア
ハブの子アハジヤはヨシャパテに「わたしの家来をあなたの家来と一緒に
船で行かせなさい」と言ったが、ヨシャパテは承知しなかった。五〇ヨシャ
パテはその先祖と共に眠って、父ダビデの町に先祖と共に葬られ、その
子ヨラムが代って王となった。

五一アハブの子アハジヤはユダの王ヨシャパテの第十七年にサマリヤで
イスラエルの王となり、二年イスラエルを治めた。五二彼は主の目の前に
悪を行い、その父の道と、その母の道、およびかのイスラエルに罪を犯
させたネバテの子ヤラベアムの道に歩み、五三バアルに仕えて、それを拝

み、イスラエルの神、主を怒らせた。すべて彼の父がしたとおりであった。

列王紀下

第一章

一アハブが死んだ後、モアブはイスラエルにそむいた。
二さてアハジヤはサマリヤにある高殿のらんかんから落ちて病気になっ
たので、使者をつかわし、「行ってエクロンの神バアル・ゼブブに、この病気
がなおるかどうかを尋ねよ」と命じた。三時に、主の使はテシベびとエリ
ヤに言った、「立って、上って行き、サマリヤの王の使者に会って言いなさ
い、『あなたがたがエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようとして行くのは、
イスラエルに神がないためか』。四それゆえ主はこう仰せられる、『あなた
は、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』」。そこでエリヤ
は上って行った。
五使者たちがアハジヤのもとに帰ってきたので、アハジヤは彼らに言っ

た、「なぜ帰ってきたのか」。六彼らは言った、「ひとりの人が上ってきて、
われわれに会って言いました、『おまえたちをつかわした王の所へ帰って
言いなさい。主はこう仰せられる、あなたがエクロンの神バアル・ゼブブに
尋ねようとして人をつかわすのは、イスラエルに神がないためなのか。そ
れゆえあなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』」。
七アハジヤは彼らに言った、「上ってきて、あなたがたに会って、これらの
事を告げた人はどんな人であったか」。八彼らは答えた、「その人は毛ごろ
もを着て、腰に皮の帯を締めていました」。彼は言った、「その人はテシベ
びとエリヤだ」。

九そこで王は五十人の長を、部下の五十人と共にエリヤの所へつかわ
した。彼がエリヤの所へ上っていくと、エリヤは山の頂にすわってい
たので、エリヤに言った、「神の人よ、王があなたに、下って来るように

と言われます」。一〇しかしエリヤは五十人の長に答えた、「わたしがもし
神の人であるならば、火が天から下って、あなたと部下の五十人とを焼き
尽すでしょう」。そのように火が天から下って、彼と部下の五十人とを焼
き尽した。
一一王はまた他の五十人の長を、部下の五十人と共にエリヤにつかわし
た。彼は上っていってエリヤに言った、「神の人よ、王がこう命じられま
す、『すみやかに下ってきなさい』」。一二しかしエリヤは彼らに答えた、「わ
たしがもし神の人であるならば、火が天から下って、あなたと部下の五十
人とを焼き尽すでしょう」。そのように神の火が天から下って、彼と部下
の五十人とを焼き尽した。
一三王はまた第三の五十人の長を部下の五十人と共につかわした。第
三の五十人の長は上っていって、エリヤの前にひざまずき、彼に願って

言った、「神の人よ、どうぞ、わたしの命と、あなたのしもべであるこの五
十人の命をあなたの目に尊いものとみなしてください。一四ごらんなさ
い、火が天からくだって、さきの五十人の長ふたりと、その部下の五十人
ずつとを焼き尽しました。しかし今わたしの命をあなたの目に尊いもの
とみなしてください」。一五その時、主の使はエリヤに言った、「彼と共に
下りなさい。彼を恐れてはならない」。そこでエリヤは立って、彼と共に
下り、王のもとへ行って、一六王に言った、「主はこう仰せられます、『あ
なたはエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようと使者をつかわしたが、そ
れはイスラエルに、その言葉を求むべき神がないためであるか。それゆえ
あなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』」。
一七彼はエリヤが言った主の言葉のとおりに死んだが、彼に子がなかった
ので、その兄弟ヨラムが彼に代って王となった。これはユダの王ヨシャ

パテの子ヨラムの第二年である。一八アハジヤのその他の事績は、イスラエ
ルの王の歴代志の書にしるされているではないか。

第二章 一主がつむじ風をもってエリヤを天に上らせようとされた時、エ
リヤはエリシャと共にギルガルを出て行った。二エリヤはエリシャに言っ
た、「どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをベテルにつかわさ
れるのですから」。しかしエリシャは言った、「主は生きておられます。ま
たあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そして彼ら
はベテルへ下った。三ベテルにいる預言者のともがらが、エリシャのもと
に出てきて彼に言った、「主がきょう、あなたの師事する主人をあなたから
取られるのを知っていますか」。彼は言った、「はい、知っています。あな
たがたは黙っていてください」。
四エリヤは彼に言った、「エリシャよ、どうぞ、ここにとどまってください。

主はわたしをエリコにつかわされるのですから」。しかしエリシャは言った、
「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなた
を離れません」。そして彼らはエリコへ行った。五エリコにいた預言者のと
もがらが、エリシャのもとにきて彼に言った、「主がきょう、あなたの師事
する主人をあなたから取られるのを知っていますか」。彼は言った、「はい、
知っています。あなたがたは黙っていてください」。
六エリヤはまた彼に言った、「どうぞ、ここにとどまってください。主は
わたしをヨルダンにつかわされるのですから」。しかし彼は言った、「主は生
きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れ
ません」。そしてふたりは進んで行った。七預言者のともがら五十人も行っ
て、彼らにむかって、はるかに離れて立っていた。彼らふたりは、ヨルダ
ンのほとりに立ったが、八エリヤは外套を取り、それを巻いて水を打つと、

水が左右に分かれたので、ふたりはかわいた土の上を渡ることができた。
九彼らが渡ったとき、エリヤはエリシャに言った、「わたしが取られて、
あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい」。エリシャは
言った、「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」。一
〇エリヤは言った、「あなたはむずかしい事を求める。あなたがもし、わた
しが取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであろう。
しかし見ないならば、そのようにはならない」。一一彼らが進みながら語っ
ていた時、火の車と火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤ
はつむじ風に乗って天にのぼった。一二エリシャはこれを見て「わが父よ、
わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、再び彼を見
なかった。
そこでエリシャは自分の着物をつかんで、それを二つに裂き、一三またエリ

ヤの身から落ちた外套を取り上げ、帰ってきてヨルダンの岸に立った。一
四そしてエリヤの身から落ちたその外套を取って水を打ち、「エリヤの神、
主はどこにおられますか」と言い、彼が水を打つと、水は左右に分れたの
で、エリシャは渡った。
一五エリコにいる預言者のともがらは彼の近づいて来るのを見て、「エリ
ヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言った。そして彼らは来て彼
を迎え、その前に地に伏して、一六彼に言った、「しもべらの所に力の強
い者が五十人います。どうぞ彼らをつかわして、あなたの主人を尋ねさせ
てください。主の霊が彼を引きあげて、彼を山か谷に投げたのかも知れま
せん」。エリシャは「つかわしてはならない」と言ったが、一七彼の恥じる
まで、しいたので、彼は「つかわしなさい」と言った。それで彼らは五十
人の者をつかわし、三日の間尋ねたが、彼を見いださなかった。一八エリ

シャのなおエリコにとどまっている時、彼らが帰ってきたので、エリシャ
は彼らに言った、「わたしは、あなたがたに、行ってはならないと告げたで
はないか」。
一九町の人々はエリシャに言った、「見られるとおり、この町の場所は良
いが水が悪いので、この地は流産を起すのです」。二〇エリシャは言った、
「新しい皿に塩を盛って、わたしに持ってきなさい」。彼らは持ってきた。
二一エリシャは水の源へ出て行って、塩をそこに投げ入れて言った、「主
はこう仰せられる、『わたしはこの水を良い水にした。もはやここには死も
流産も起らないであろう』」。二二こうしてその水はエリシャの言ったとお
りに良い水になって今日に至っている。
二三彼はそこからベテルへ上ったが、上って行く途中、小さい子供らが
町から出てきて彼をあざけり、彼にむかって「はげ頭よ、のぼれ。はげ頭

よ、のぼれ」と言ったので、二四彼はふり返って彼らを見、主の名をもって
彼らをのろった。すると林の中から二頭の雌ぐまが出てきて、その子供
らのうち四十二人を裂いた。二五彼はそこからカルメル山へ行き、そこか
らサマリヤに帰った。

第三章一ユダの王ヨシャパテの第十八年にアハブの子ヨラムはサマリヤ
でイスラエルの王となり、十二年世を治めた。二彼は主の目の前に悪をお
こなったが、その父母のようではなかった。彼がその父の造ったバアルの
石柱を除いたからである。三しかし彼はイスラエルに罪を犯させたネバ
テの子ヤラベアムの罪につき従って、それを離れなかった。

四モアブの王メシャは羊の飼育者で、十万の小羊と、十万の雄羊の毛
とを年々イスラエルの王に納めていたが、五アハブが死んだ後、モアブの
王はイスラエルの王にそむいた。六そこでヨラム王はその時サマリヤを出

て、イスラエルびとをことごとく集め、七また、人をユダの王ヨシャパテ
につかわし、「モアブの王はわたしにそむきました。あなたはモアブと戦
うために、わたしと一緒に行かれませんか」と言わせた。彼は言った、「行
きましょう。わたしはあなたと一つです。わたしの民はあなたの民と一つ
です。わたしの馬はあなたの馬と一つです」。八彼はまた言った、「われわ
れはどの道を上るのですか」。ヨラムは答えた、「エドムの荒野の道を上り
ましょう」。
九こうしてイスラエルの王はユダの王およびエドムの王と共に出て行っ
た。しかし彼らは回り道をして、七日の間進んだが、軍勢とそれに従
う家畜の飲む水がなかったので、一〇イスラエルの王は言った、「ああ、主
は、この三人の王をモアブの手に渡そうとして召し集められたのだ」。一一
ヨシャパテは言った、「われわれが主に問うことのできる主の預言者はここ

にいませんか」。イスラエルの王のひとりの家来が答えた、「エリヤの手に
水を注いだシャパテの子エリシャがここにいます」。一二ヨシャパテは言っ
た、「主の言葉が彼にあります」。そこでイスラエルの王とヨシャパテとエ
ドムの王とは彼のもとへ下っていった。
一三エリシャはイスラエルの王に言った、「わたしはあなたとなんのかかわ
りがありますか。あなたの父上の預言者たちと母上の預言者たちの所へ
行きなさい」。イスラエルの王は彼に言った、「いいえ、主がこの三人の王
をモアブの手に渡そうとして召し集められたのです」。一四エリシャは言っ
た、「わたしの仕える万軍の主は生きておられます。わたしはユダの王ヨ
シャパテのためにするのでなければ、あなたを顧み、あなたに会うこと
はしないのだが、一五いま楽人をわたしの所に連れてきなさい」。そこで
楽人が楽を奏すると、主の手が彼に臨んで、一六彼は言った、「主はこう仰

せられる、『わたしはこの谷を水たまりで満たそう』。一七これは主がこう
仰せられるからである、『あなたがたは風も雨も見ないのに、この谷に水が
満ちて、あなたがたと、その家畜および獣が飲むであろう』。一八これは主
の目には小さい事である。主はモアブびとをも、あなたがたの手に渡され
る。一九そしてあなたがたはすべての堅固な町と、すべての良い町を撃ち、
すべての良い木を切り倒し、すべての水の井戸をふさぎ、石をもって地の
すべての良い所を荒すであろう」。二〇あくる朝になって、供え物をささ
げる時に、水がエドムの方から流れてきて、水は国に満ちた。
二一さてモアブびとは皆、王たちが自分たちを攻めるために上ってきた
のを聞いたので、よろいを着ることのできる者を、老いも若きもことごと
く召集して、国境に配置したが、二二朝はやく起きて、太陽がのぼって
水を照したとき、モアブびとは目の前に血のように赤い水を見たので、二

三彼らは言った、「これは血だ、きっと王たちが互に戦って殺し合ったの
だ。だから、モアブよ、ぶんどりに行きなさい」。二四しかしモアブびとが
イスラエルの陣営に行くと、イスラエルびとは立ちあがってモアブびとを
撃ったので、彼らはイスラエルの前から逃げ去った。イスラエルびとは進
んで、モアブびとを撃ち、その国にはいって、二五町々を滅ぼし、おのお
の石を一つずつ、地のすべての良い所に投げて、これに満たし、水の井戸
をことごとくふさぎ、良い木をことごとく切り倒して、ただキル・ハラセ
テはその名を残すのみとなったが、石を投げる者がこれを囲んで撃ち滅ぼ
した。二六モアブの王は戦いがあまりに激しく、当りがたいのを見て、つ
るぎを抜く者七百人を率い、エドムの王の所に突き入ろうとしたが、果
さなかったので、二七自分の位を継ぐべきその長子をとって城壁の上で
燔祭としてささげた。その時イスラエルに大いなる憤りが臨んだので、

彼らは彼をすてて自分の国に帰った。

第四章 一預言者のともがらの、ひとりの妻がエリシャに呼ばわって言っ
た、「あなたのしもべであるわたしの夫が死にました。ごぞんじのように、
あなたのしもべは主を恐れる者でありましたが、今、債主がきて、わたしの
ふたりの子供を取って奴隷にしようとしているのです」。
二エリシャは彼女
に言った、「あなたのために何をしましょうか。あなたの家にどんな物が
あるか、言いなさい」。彼女は言った、「一びんの油のほかは、はしための
家に何もありません」。
三彼は言った、「ほかへ行って、隣の人々から器
を借りなさい。あいた器を借りなさい。少しばかりではいけません。
四そ
して内にはいって、あなたの子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり、その
すべての器に油をついで、いっぱいになったとき、一つずつそれを取り
のけておきなさい」。
五彼女は彼を離れて去り、子供たちと一緒に戸の内

に閉じこもり、子供たちの持って来る器に油をついだ。六油が満ちたと
き、彼女は子供に「もっと器を持ってきなさい」と言ったが、子供が「器
はもうありません」と言ったので、油はとまった。七そこで彼女は神の人
のところにきて告げたので、彼は言った、「行って、その油を売って負債
を払いなさい。あなたと、あなたの子供たちはその残りで暮すことができ
ます」。

八ある日エリシャはシュネムへ行ったが、そこにひとりの裕福な婦人が
いて、しきりに彼に食事をすすめたので、彼はそこを通るごとに、そこに
寄って食事をした。九その女は夫に言った、「いつもわたしたちの所を
通るあの人は確かに神の聖なる人です。一〇わたしたちは屋上に壁のあ
る一つの小さいへやを造り、そこに寝台と机といすと燭台とを彼のため
に備えましょう。そうすれば彼がわたしたちの所に来るとき、そこに、は
いることができます」。

一一さて、ある日エリシャはそこにきて、そのへやにはいり、そこに休ん
だが、一二彼はそのしもべゲハジに「このシュネムの女を呼んできなさい」
と言った。彼がその女を呼ぶと、彼女はきてエリシャの前に立ったので、
一三エリシャはゲハジに言った、「彼女に言いなさい、『あなたはこんなにね
んごろに、わたしたちのために心を用いられたが、あなたのためには何
をしたらよいでしょうか。王または軍勢の長にあなたの事をよろしく頼
むことをお望みですか』」。彼女は答えて言った、「わたしは自分の民のう
ちに住んでいます」。一四エリシャは言った、「それでは彼女のために何を
しようか」。ゲハジは言った、「彼女には子供がなく、その夫は老いていま
す」。一五するとエリシャが「彼女を呼びなさい」と言ったので、彼女を呼
ぶと、来て戸口に立った。一六エリシャは言った、「来年の今ごろ、あなた
はひとりの子を抱くでしょう」。彼女は言った、「いいえ、わが主よ、神の

人よ、はしためを欺かないでください」。一七しかし女はついに身ごもっ
て、エリシャが彼女に言ったように、次の年のそのころに子を産んだ。
一八その子が成長して、ある日、刈入れびとの所へ出ていって、父の
もとへ行ったが、一九父にむかって「頭が、頭が」と言ったので、父はし
もべに「彼を母のもとへ背負っていきなさい」と言った。二〇彼を背負って
母のもとへ行くと、昼まで母のひざの上にすわっていたが、ついに死んだ。
二一母は上がっていって、これを神の人の寝台の上に置き、戸を閉じて出
てきた。二二そして夫を呼んで言った、「どうぞ、しもべひとりと、ろば一
頭をわたしにかしてください。急いで神の人の所へ行って、また帰って
きます」。二三夫は言った、「どうしてきょう彼の所へ行こうとするのか。
きょうは、ついたちでもなく、安息日でもない」。彼女は言った、「よろし
いのです」。二四そして彼女はろばにくらを置いて、しもべに言った、「速

く駆けさせなさい。わたしが命じる時でなければ、歩調をゆるめてはなり
ません」。二五こうして彼女は出発してカルメル山へ行き、神の人の所
へ行った。
神の人は彼女の近づいてくるのを見て、しもべゲハジに言った、「向こう
から、あのシュネムの女が来る。二六すぐ走って行って、彼女を迎えて言
いなさい、『あなたは無事ですか。あなたの夫は無事ですか。あなたの子供
は無事ですか』」。彼女は答えた、「無事です」。二七ところが彼女は山にき
て、神の人の所へくるとエリシャの足にすがりついた。ゲハジが彼女を追
いのけようと近よった時、神の人は言った、「かまわずにおきなさい。彼女
は心に苦しみがあるのだから。主はそれを隠して、まだわたしにお告げ
にならないのだ」。二八そこで彼女は言った、「わたしがあなたに子を求めま
したか。わたしを欺かないでくださいと言ったではありませんか」。二九エ

リシャはゲハジに言った、「腰をひきからげ、わたしのつえを手に持って行
きなさい。だれに会っても、あいさつしてはならない。またあなたにあいさ
つする者があっても、それに答えてはならない。わたしのつえを子供の顔
の上に置きなさい」。三〇子供の母は言った、「主は生きておられます。あ
なたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そこでエリシャ
はついに立ちあがって彼女のあとについて行った。三一ゲハジは彼らの先
に行って、つえを子供の顔の上に置いたが、なんの声もなく、生きかえっ
たしるしもなかったので、帰ってきてエリシャに会い、彼に告げて「子供
はまだ目をさましません」と言った。

三二エリシャが家にはいって見ると、子供は死んで、寝台の上に横たわっ
ていたので、三三彼ははいって戸を閉じ、彼らふたりだけ内にいて主に祈っ
た。三四そしてエリシャが上がって子供の上に伏し、自分の口を子供の口の

上に、自分の目を子供の目の上に、自分の両手を子供の両手の上にあて、
その身を子供の上に伸ばしたとき、子供のからだは暖かになった。
三五こうしてエリシャは再び起きあがって、家の中をあちらこちらと歩み、また
上がって、その身を子供の上に伸ばすと、子供は七たびくしゃみをして目
を開いた。
三六エリシャはただちにゲハジを呼んで、「あのシュネムの女
を呼べ」と言ったので、彼女を呼んだ。彼女がはいってくるとエリシャは
言った、「あなたの子供をつれて行きなさい」。
三七彼女ははいってきて、エ
リシャの足もとに伏し、地に身をかがめた。そしてその子供を取りあげて
出ていった。

三八エリシャはギルガルに帰ったが、その地にききんがあった。預言者の
ともがらが彼の前に座していたので、エリシャはそのしもべに言った、「大
きなかまをすえて、預言者のともがらのために野菜の煮物をつくりなさい」。

三九彼らのうちのひとりが畑に出ていって青物をつんだが、つる草のある
のを見て、その野うりを一包つんできて、煮物のかまの中に切り込んだ。
彼らはそれが何であるかを知らなかったからである。四〇やがてこれを盛っ
て人々に食べさせようとしたが、彼らがその煮物を食べようとした時、叫
んで、「ああ神の人よ、かまの中に、たべると死ぬものがはいっています」
と言って、食べることができなかったので、四一エリシャは「それでは粉を
持って来なさい」と言って、それをかまに投げ入れ、「盛って人々に食べさ
せなさい」と言った。かまの中には、なんの毒物もなくなった。
四二その時、バアル・シャリシャから人がきて、初穂のパンと、大麦の
パン二十個と、新穀一袋とを神の人のもとに持ってきたので、エリシャ
は「人々に与えて食べさせなさい」と言ったが、四三その召使は言った、
「どうしてこれを百人の前に供えるのですか」。しかし彼は言った、「人々

に与えて食べさせなさい。主はこう言われる、『彼らは食べてなお余すであ
ろう』」。四四そこで彼はそれを彼らの前に供えたので、彼らは食べてなお
余した。主の言葉のとおりであった。
第五章一スリヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力
な人であった。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられたからで
ある。彼は大勇士であったが、らい病をわずらっていた。二さきにスリヤ
びとが略奪隊を組んで出てきたとき、イスラエルの地からひとりの少女
を捕えて行った。彼女はナアマンの妻に仕えたが、三その女主人にむかっ
て、「ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかったでしょ
うに。彼はそのらい病をいやしたことでしょう」と言ったので、四ナアマ
ンは行って、その主君に、「イスラエルの地からきた娘がこういう事を言
いました」と告げると、五スリヤ王は言った、「それでは行きなさい。わた

しはイスラエルの王に手紙を書きましょう」。
そこで彼は銀十タラントと、金六千シケルと、晴れ着十着を携えて行っ
た。六彼がイスラエルの王に持って行った手紙には、「この手紙があなたに
とどいたならば、わたしの家来ナアマンを、あなたにつかわしたことと御承知
ください。あなたに彼のらい病をいやしていただくためです」とあった。
七イスラエルの王はその手紙を読んだ時、衣を裂いて言った、「わたしは
殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。どうしてこの人は、
らい病人をわたしにつかわして、それをいやせと言うのか。あなたがた
は、彼がわたしに争いをしかけているのを知って警戒するがよい」。
八神の人エリシャは、イスラエルの王がその衣を裂いたことを聞き、王
に人をつかわして言った、「どうしてあなたは衣を裂いたのですか。彼を
わたしのもとにこさせなさい。そうすれば彼はイスラエルに預言者のある

ことを知るようになるでしょう」。九そこでナアマンは馬と車とを従えて
きて、エリシャの家の入口に立った。一〇するとエリシャは彼に使者をつ
かわして言った、「あなたはヨルダンへ行って七たび身を洗いなさい。そう
すれば、あなたの肉はもとにかえって清くなるでしょう」。一一しかしナア
マンは怒って去り、そして言った、「わたしは、彼がきっとわたしのもとに
出てきて立ち、その神、主の名を呼んで、その箇所の上に手を動かして、ら
い病をいやすのだろうと思った。一二ダマスコの川アバナとパルパルはイ
スラエルのすべての川水にまさるではないか。わたしはこれらの川に身を
洗って清まることができないのであろうか」。こうして彼は身をめぐらし、
怒って去った。一三その時、しもべたちは彼に近よって言った、「わが父よ、
預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさ
らなかったでしょうか。まして彼はあなたに『身を洗って清くなれ』と言

うだけではありませんか」。一四そこでナアマンは下って行って、神の人の
言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、その肉がもとにかえって幼な
子の肉のようになり、清くなった。
一五彼はすべての従者を連れて神の人のもとに帰ってきて、その前に
立って言った、「わたしは今、イスラエルのほか、全地のどこにも神のおら
れないことを知りました。それゆえ、どうぞ、しもべの贈り物を受けてく
ださい」。一六エリシャは言った、「わたしの仕える主は生きておられる。わ
たしは何も受けません」。彼はしいて受けさせようとしたが、それを拒ん
だ。一七そこでナアマンは言った、「もしお受けにならないのであれば、どう
ぞ騾馬に二駄の土をしもべにください。これから後しもべは、他の神には
燔祭も犠牲もささげず、ただ主にのみささげます。一八どうぞ主がこの事
を、しもべにおゆるしくださるように。すなわち、わたしの主君がリンモン

の宮にはいって、そこで礼拝するとき、わたしの手によりかかることがあ
り、またわたしもリンモンの宮で身をかがめることがありましょう。わた
しがリンモンの宮で身をかがめる時、どうぞ主がその事を、しもべにおゆ
るしくださるように」。一九エリシャは彼に言った、「安んじて行きなさい」。
ナアマンがエリシャを離れて少し行ったとき、二〇神の人エリシャのし
もべゲハジは言った、「主人はこのスリヤびとナアマンをいたわって、彼
が携えてきた物を受けなかった。主は生きておられる。わたしは彼のあ
とを追いかけて、彼から少し、物を受けよう」。二一そしてゲハジはナアマ
ンのあとを追ったが、ナアマンは自分のあとから彼が走ってくるのを見て、
車から降り、彼を迎えて、「変った事があるのですか」と言うと、二二彼は
言った、「無事です。主人がわたしをつかわして言わせます、『ただいまエ
フライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若者が、わたしのもと

に来ましたので、どうぞ彼らに銀一タラントと晴れ着二着を与えてくだ
さい』」。二三ナアマンは、「どうぞ二タラントを受けてください」と言って
彼にしい、銀二タラントを二つの袋に入れ、晴れ着二着を添えて、自分
のふたりのしもべに渡したので、彼らはそれを負ってゲハジの先に立って
進んだが、二四彼は丘にきたとき、それを彼らの手から受け取って家のう
ちにおさめ、人々を送りかえしたので、彼らは去った。二五彼がはいって
主人の前に立つと、エリシャは彼に言った、「ゲハジよ、どこへ行ってきた
のか」。彼は言った、「しもべはどこへも行きません」。二六エリシャは言っ
た、「あの人が車をはなれて、あなたを迎えたとき、わたしの心はあなた
と一緒にそこにいたではないか。今は金を受け、着物を受け、オリブ畑、
ぶどう畑、羊、牛、しもべ、はしためを受ける時であろうか。二七それ
ゆえ、ナアマンのらい病はあなたに着き、ながくあなたの子孫に及ぶであ

ろう」。彼がエリシャの前を出ていくとき、らい病が発して雪のように白
くなっていた。

第六章 一 さて預言者のともがらはエリシャに言った、「わたしたちがあな
たと共に住んでいる所は狭くなりましたので、
二 わたしたちをヨルダンに
行かせ、そこからめいめい一本ずつ材木を取ってきて、わたしたちの住む
場所を造らせてください」。エリシャは言った、「行きなさい」。
三 時にその
ひとりが、「どうぞあなたも、しもべらと一緒に行ってください」と言ったの
で、エリシャは「行きましょう」と答えた。
四 そしてエリシャは彼らと一緒
に行った。彼らはヨルダンへ行って木を切り倒したが、
五 ひとりが材木を
切り倒しているとき、おのの頭が水の中に落ちたので、彼は叫んで言っ
た。「ああ、わが主よ。これは借りたものです」。
六 神の人は言った、「それ
はどこに落ちたのか」。彼がその場所を知らせると、エリシャは一本の枝を

切り落し、そこに投げ入れて、そのおのの頭を浮ばせ、七「それを取りあ
げよ」と言ったので、その人は手を伸べてそれを取った。
八かってスリヤの王がイスラエルと戦っていたとき、家来たちと評議し
て「しかじかの所にわたしの陣を張ろう」と言うと、九神の人はイスラエ
ルの王に「あなたは用心して、この所をとおってはなりません。スリヤび
とがそこに下ってきますから」と言い送った。一〇それでイスラエルの王
は神の人が自分に告げてくれた所に人をつかわし、警戒したので、その
所でみずからを防ぎえたことは一、二回にとどまらなかった。
一一スリヤの王はこの事のために心を悩まし、家来たちを召して言った、
「われわれのうち、だれがイスラエルの王と通じているのか、わたしに告げ
る者はないか」。一二ひとりの家来が言った、「王、わが主よ、だれも通じて
いる者はいません。ただイスラエルの預言者エリシャが、あなたが寝室で

語られる言葉でもイスラエルの王に告げるのです」。一三王は言った、「彼が
どこにいるか行って捜しなさい。わたしは人をやって彼を捕えよう」。時
に「彼はドタンにいる」と王に告げる者があったので、一四王はそこに馬と
戦車および大軍をつかわした。彼らは夜のうちに来て、その町を囲んだ。
一五神の人の召使が朝早く起きて出て見ると、軍勢が馬と戦車をもっ
て町を囲んでいたので、その若者はエリシャに言った、「ああ、わが主よ、
わたしたちはどうしましょうか」。一六エリシャは言った、「恐れることはな
い。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから」。一
七そしてエリシャが祈って「主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてくだ
さい」と言うと、主はその若者の目を開かれたので、彼が見ると、火の馬
と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあった。一八スリヤびとがエ
リシャの所に下ってきた時、エリシャは主に祈って言った、「どうぞ、こ

の人々の目をくらましてください」。するとエリシャの言葉のとおりに彼
らの目をくらまされた。一九そこでエリシャは彼らに「これはその道ではな
い。これはその町でもない。わたしについてきなさい。わたしはあなたが
たを、あなたがたの尋ねる人の所へ連れて行きましょう」と言って、彼ら
をサマリヤへ連れて行った。
二〇彼らがサマリヤにはいったとき、エリシャは言った、「主よ、この人々
の目を開いて見させてください」。主は彼らの目を開かれたので、彼らが
見ると、見よ、彼らはサマリヤのうちに来ていた。二一イスラエルの王は彼
らを見て、エリシャに言った、「わが父よ、彼らを撃ち殺しましょうか。彼
らを撃ち殺しましょうか」。二二エリシャは答えた、「撃ち殺してはならな
い。あなたはつるぎと弓をもって、捕虜にした者どもを撃ち殺すでしょう
か。パンと水を彼らの前に供えて食い飲みさせ、その主君のもとへ行かせ

なさい」。二三そこで王は彼らのために盛んなふるまいを設けた。彼らが食
い飲みを終ると彼らを去らせたので、その主君の所へ帰った。スリヤの
略奪隊は再びイスラエルの地にこなかった。
二四この後スリヤの王ベネハダデはその全軍を集め、上ってきてサマリ
ヤを攻め囲んだので、二五サマリヤに激しいききんが起った。すなわち彼
らがこれを攻め囲んだので、ついに、ろばの頭一つが銀八十シケルで売ら
れ、はとのふん一カブの四分の一が銀五シケルで売られるようになった。二
六イスラエルの王が城壁の上をとおっていた時、ひとりの女が彼に呼ば
わって、「わが主、王よ、助けてください」と言ったので、二七彼は言った、
「もし主があなたを助けられないならば、何をもってわたしがあなたを助
けることができよう。打ち場の物をもってか、酒ぶねの物をもってか」。二
八そして王は女に尋ねた、「何事なのですか」。彼女は答えた、「この女

はわたしにむかって『あなたの子をください。わたしたちは、きょうそれ
を食べ、あす、わたしの子を食べましょう』と言いました。
二九それでわた
したちは、まずわたしの子を煮て食べましたが、次の日わたしが彼女にむ
かって『あなたの子をください。わたしたちはそれを食べましょう』と言
いますと、彼女はその子を隠しました」。
三〇王はその女の言葉を聞いて、
衣を裂き、――王は城壁の上をとおっていたが、民が見ると、その身に
荒布を着けていた――
三一そして王は言った「きょう、シャパテの子エリ
シャの首がその肩の上にすわっているならば、神がどんなにでもわたしを
罰してくださるように」。

三二さてエリシャはその家に座していたが、長老たちもきて彼と共に座
した。王は自分の所から人をつかわしたが、エリシャはその使者がまだ着
かないうちに長老たちに言った、「あなたがたは、この人を殺す者がわた

しの首を取るために、人をつかわすのを見ますか。その使者がきたならば、
戸を閉じて、内に入れてはなりません。彼のうしろに、その主君の足音が
するではありませんか」。三三彼がなお彼らと語っているうちに、王は彼の
もとに下ってきて言った、「この災は主から出たのです。わたしはどうし
てこの上、主を待たなければならないでしょうか」。

第七章一エリシャは言った、「主の言葉を聞きなさい。主はこう仰せられ
る、『あすの今ごろサマリヤの門で、麦粉一セアを一シケルで売り、大麦二
セアを一シケルで売るようになるであろう』」。二時にひとりの副官すなわ
ち王がその人の手によりかかっていた者が神の人に答えて言った、「たと
い主が天に窓を開かれても、そんな事がありえましょうか」。エリシャは
言った、「あなたは自分の目をもってそれを見るであろう。しかしそれを食
べることはなかろう」。

三さて町の門の入口に四人のらい病人がいたが、彼らは互に言った、
「われわれはどうしてここに座して死を待たねばならないのか。四われわれ
がもし町にはいろうといえば、町には食物が尽きているから、われわれ
はそこで死ぬであろう。しかしここに座していても死ぬのだ。いっその事、
われわれはスリヤびとの陣営へ逃げて行こう。もし彼らがわれわれを生か
しておいてくれるならば、助かるが、たといわれわれを殺しても死ぬばかり
だ」。五そこで彼らはスリヤびとの陣営へ行こうと、たそがれに立ちあがっ
たが、スリヤびとの陣営のほとりに行って見ると、そこにはだれもいなかっ
た。六これは主がスリヤびとの軍勢に戦車の音、馬の音、大軍の音を聞か
せられたので、彼らは互に「見よ、イスラエルの王がわれわれを攻めるた
めに、ヘテびとの王たちおよびエジプトの王たちを雇ってきて、われわれ
を襲うのだ」と言って、七たそがれに立って逃げ、その天幕と、馬と、ろ

ばを捨て、陣営をそのままにしておいて、命を全うしようと逃げたから
である。八そこでらい病人たちは陣営のほとりに行き、一つの天幕には
いって食い飲みし、そこから金銀、衣服を持ち出してそれを隠し、また来
て、他の天幕に入り、そこからも持ち出してそれを隠した。
九そして彼らは互に言った、「われわれのしている事はよくない。きょ
うは良いおとずれのある日であるのに、黙っていて、夜明けまで待つなら
ば、われわれは罰をこうむるであろう。さあ、われわれは行って王の家族に
告げよう」。一〇そこで彼らは来て、町の門を守る者を呼んで言った、「わ
たしたちがスリヤびとの陣営に行って見ると、そこにはだれの姿も見え
ず、また人声もなく、ただ、馬とろばがつないであり、天幕はそのままで
した」。一一そこで門を守る者は呼ばわって、それを王の家族のうちに知ら
せた。一二王は夜のうちに起きて、家来たちに言った、「スリヤびとがわれ

われに対して図っている事をあなたがたに告げよう。彼らは、われわれの
飢えているのを知って、陣営を出て野に隠れ、『イスラエルびとが町を出た
ら、いけどりにして、町に押し入ろう』と考えているのだ」。一三家来の
ひとりが答えて言った、「人々に、ここに残っている馬のうち五頭を連れ
てこさせてください。ここに残っている人々は、すでに滅びうせ
たイスラエルの全群衆と同じ運命にあうのですから。わたしたちは人を
やってうかがわせましょう」。一四そこで彼らはふたりの騎兵を選んだ。王
はそれをつかわし、「行って見よ」と言って、スリヤびとの軍勢のあとをつ
けさせたので、一五彼らはそのあとを追ってヨルダンまで行ったが、道には
すべて、スリヤびとがあわてて逃げる時に捨てていった衣服と武器が散ら
ばっていた。その使者は帰ってきて、これを王に告げた。
一六そこで民が出ていって、スリヤびとの陣営をかすめたので、麦粉一

セアは一シケルで売られ、大麦二セアは一シケルで売られ、主の言葉のと
おりになった。一七王は自分がその人の手によりかかっていた、あの副官
を立てて門を管理させたが、民は門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。
すなわち、王が神の人のところに下ってきた時、神の人が言ったとおりで
あった。一八これは神の人が王にむかって、「あすの今ごろ、サマリヤの門
で大麦二セアを一シケルで売り、麦粉一セアを一シケルで売るようになる
であろう」と言ったときに、一九その副官が神の人に答えて、「たとい主が
天に窓を開かれても、そんな事がありえようか」と言ったからである。そ
のとき神の人は「あなたは自分の目をもってそれを見るであろう。しかし
それを食べることはなかろう」と言ったが、二〇これはそのとおり彼に臨ん
だ。すなわち民が門で彼を踏みつけたので彼は死んだ。

第八章一エリシャはかつて、その子を生きかえらせてやった女に言った

ことがある。「あなたは、ここを立って、あなたの家族と共に行き、寄留
しようと思う所に寄留しなさい。主がききんを呼び下されたので、七年
の間それがこの地に臨むから」。二そこで女は立って神の人の言葉のよ
うにし、その家族と共に行ってペリシテびとの地に七年寄留した。三七年
たって後、女はペリシテびとの地から帰ってきて、自分の家と畑のために
王に訴えようと出ていった。四時に王は神の人のしもべゲハジにむかっ
て「エリシャがしたもろもろの大きな事をわたしに話してください」と言っ
て、彼と物語っていた。五すなわちエリシャが死人を生きかえらせた事を、
ゲハジが王と物語っていたとき、その子を生きかえらせてもらった女が、
自分の家と畑のために王に訴えてきたので、ゲハジは言った、「わが主、
王よ、これがその女です。またこれがその子で、エリシャが生きかえらせ
たのです」。六王がその女に尋ねると、彼女は王に話したので、王は彼女

のためにひとりの役人に命じて言った、「すべて彼女に属する物、ならび
に彼女がこの地を去った日から今までのその畑の産物をことごとく彼女
に返しなさい」。
七さてエリシャはダマスコに来た。時にスリヤの王ベネハダデは病気で
あったが、「神の人がここに来た」と告げる者があったので、八王はハザエル
に言った、「贈り物を携えて行って神の人を迎え、彼によって主に『わた
しのこの病気はなおりましょうか』と言って尋ねなさい」。九そこでハザエ
ルは彼を迎えようと、ダマスコのもろもろの良い物をらくだ四十頭に載せ、
贈り物として携え行き、エリシャの前に立って言った、「あなたの子、ス
リヤの王ベネハダデがわたしをあなたにつかわして、『わたしのこの病気は
なおりましょうか』と言わせています」。一〇エリシャは彼に言った、「行っ
て彼に『あなたは必ずなおります』と告げなさい。ただし主はわたしに、

彼が必ず死ぬことを示されました」。一一そして神の人がひとみを定めて
彼の恥じるまでに見つめ、やがて泣き出したので、一二ハザエルは言った、
「わが主よ、どうして泣かれるのですか」。エリシャは答えた、「わたしはあ
なたがイスラエルの人々にしようとする害悪を知っているからです。すな
わち、あなたは彼らの城に火をかけ、つるぎをもって若者を殺し、幼な子
を投げうち、妊娠の女を引き裂くでしょう」。一三ハザエルは言った、「し
もべは一匹の犬にすぎないのに、どうしてそんな大きな事をすることがで
きましょう」。エリシャは言った、「主がわたしに示されました。あなたは
スリヤの王となるでしょう」。一四彼がエリシャのもとを去って、主君のと
ころへ行くと、「エリシャはあなたになんと言ったか」と尋ねられたので、
「あなたが必ずなおるでしょうと、彼はわたしに告げました」と答えた。
一五しかし翌日になってハザエルは布を取って水に浸し、それをもって王

の顔をおおったので、王は死んだ。ハザエルは彼に代って王となった。
一六イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年に、ユダの王ヨシャパテの
子ヨラムが位についた。一七彼は王となったとき三十二歳で、八年の間
エルサレムで世を治めた。一八彼はアハブの家がしたようにイスラエルの
王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻であったからである。彼は主
の目の前に悪をおこなったが、一九主はしもべダビデのためにユダを滅ぼ
すことを好まれなかった。すなわち主は彼とその子孫に常にともしびを与
えると、彼に約束されたからである。
二〇ヨラムの世にエドムがそむいてユダの支配を脱し、みずから王を立て
たので、二一ヨラムはすべての戦車を従えてザイルにわたって行き、その
戦車の指揮官たちと共に、夜のうちに立ちあがって、彼を包囲しているエ
ドムびとを撃った。しかしヨラムの軍隊は天幕に逃げ帰った。二二エドム

はこのようにそむいてユダの支配を脱し、今日に至っている。リブナもま
た同時にそむいた。
二三ヨラムのその他の事績および彼がしたすべての事
は、ユダの歴代志の書にしるされているではないか。
二四ヨラムはその先祖
たちと共に眠って、ダビデの町にその先祖たちと共に葬られ、その子ア
ハジヤが代って王となった。

二五イスラエルの王アハブの子ヨラムの第十二年にユダの王ヨラムの子
アハジヤが位についた。
二六アハジヤは王となったとき二十二歳で、エル
サレムで一年世を治めた。その母は名をアタリヤと言って、イスラエルの
王オムリの孫娘であった。
二七アハジヤはまたアハブの家の道に歩み、ア
ハブの家がしたように主の目の前に悪をおこなった。彼はアハブの家の婿
であったからである。

二八彼はアハブの子ヨラムと共に行って、スリヤの王ハザエルとラモテ・

ギレアデで戦ったが、スリヤびとらはヨラムに傷を負わせた。二九ヨラム
王はそのスリヤの王ハザエルと戦うときにラマでスリヤびとに負わされ
た傷をいやすため、エズレルに帰ったが、ユダの王ヨラムの子アハジヤは
アハブの子ヨラムが病んでいたので、エズレルに下って彼をおとずれた。
第九章一時に預言者エリシャは預言者のともがらのひとりを呼んで言っ
た、「腰をひきからげ、この油のびんを携えて、ラモテ・ギレアデへ行き
なさい。二そこに着いたならば、ニムシの子ヨシャパテの子であるエヒウ
を尋ね出し、内にはいって彼をその同僚たちのうちから立たせて、奥の
間に連れて行き、三油のびんを取って、その頭に注ぎ、『主はこう仰せ
られる、わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とする』と言い、そ
して戸をあけて逃げ去りなさい。とどまってはならない」。
四そこで預言者であるその若者はラモテ・ギレアデへ行ったが、五来て見

ると、軍勢の長たちが会議中であったので、彼は「将軍よ、わたしはあ
なたに申しあげる事があります」と言うと、エヒウが答えて、「われわれす
べてのうちの、だれにですか」と言ったので、彼は「将軍よ、あなたにで
す」と言った。六するとエヒウが立ちあがって家にはいったので、若者は
その頭に油を注いで彼に言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられ
ます、『わたしはあなたに油を注いで、主の民イスラエルの王とする。七
あなたは主君アハブの家を撃ち滅ぼさなければならない。それによってわ
たしは、わたしのしもべである預言者たちの血と、主のすべてのしもべたち
の血をイゼベルに報いる。八アハブの全家は滅びるであろう。アハブに属
する男は、イスラエルにいて、つながれた者も、自由な者も、ことごとく
わたしは断ち、九アハブの家をネバテの子ヤラベアムのようにし、アヒヤの
子バアシャの家のようにする。一〇犬がイズレルの地域でイゼベルを食い、

彼女を葬る者はないであろう』」。そして彼は戸をあけて逃げ去った。
一一やがてエヒウが主君の家来たちの所へ出て来ると、彼らはエヒウに
言った、「変った事はありませんか。あの気違いは、なんのためにあなたの
所にきたのですか」。エヒウは彼らに言った、「あなたがたは、あの人を
知っています。またその言う事も知っています」。一二彼らは言った、「それ
は違います。どうぞわれわれに話してください」。そこでエヒウは言った、
「彼はこうこう、わたしに告げて言いました、『主はこう仰せられる、わた
しはあなたに油を注いで、イスラエルの王とする』」。一三すると彼らは急
いで、おのおの衣服をとり、それを階段の上のエヒウの下に敷き、ラッパ
を吹いて「エヒウは王である」と言った。
一四こうしてニムシの子であるヨシャパテの子エヒウはヨラムにそむい
た。（ヨラムはイスラエルをことごとく率いて、ラモテ・ギレアデでスリヤ

の王ハザエルを防いだが、一五ヨラム王はスリヤの王ハザエルと戦った時
に、スリヤびとに負わされた傷をいやすため、エズレルに帰っていた。）エ
ヒウは言った、「もしこれがあなたがたの本心であるならば、ひとりもこの
町から忍び出て、これをエズレルに告げてはならない」。一六そしてエヒウ
は車に乗ってエズレルへ行った。ヨラムがそこに伏していたからである。
またユダの王アハジヤはヨラムを見舞うために下っていた。
一七さてエズレルのやぐらに、ひとりの物見が立っていたが、エヒウの
群衆が来るのを見て、「群衆が見える」と言ったので、ヨラムは言った、
「ひとりを馬に乗せてつかわし、それに会わせて『平安ですか』と言わせな
さい」。一八そこでひとりが馬に乗って行き、彼に会って言った、「王はこ
う仰せられます、『平安ですか』」。エヒウ言った、「あなたは平安となんの
関係がありますか。わたしのあとについてきなさい」。物見はまた告げて

言った、「使者は彼らの所へ行きましたが、帰ってきません」。一九そこで
再び人を馬でつかわしたので、彼らの所へ行って言った、「王はこう仰
せられます、『平安ですか』」。エヒウは答えて言った、「あなたは平安とな
んの関係がありますか。わたしのあとについてきなさい」。二〇物見はまた
告げて言った、「彼も、彼らの所へ行きましたが帰ってきません。あの車
の操縦はニムシの子エヒウの操縦するのに似て、猛烈な勢いで操縦
して来ます」。

二一そこでヨラムが「車を用意せよ」と言ったので、車を用意すると、
イスラエルの王ヨラムと、ユダの王アハジヤは、おのおのその車で出て
行った。すなわちエヒウに会うために出ていって、エズレルびとナボテの
地所で彼に会った。二二ヨラムはエヒウを見て言った、「エヒウよ、平安で
すか」。エヒウは答えた、「あなたの母イゼベルの姦淫と魔術とが、こんな

に多いのに、どうして平安でありえましょうか」。二三その時ヨラムは車
をめぐらして逃げ、アハジヤにむかって、「アハジヤよ、反逆です」と言
うと、二四エヒウは手に弓をひきしぼって、ヨラムの両肩の間を射たの
で、矢は彼の心臓を貫き、彼は車の中に倒れた。二五エヒウはその副官
ビデカルに言った、「彼を取りあげて、エズレルびとナボテの畑に投げ捨
てなさい。かつて、わたしとあなたと、ふたり共に乗って、彼の父アハブ
に従ったとき、主が彼について、この預言をされたことを記憶しなさい。
二六すなわち主は言われた、『まことに、わたしはきのうナボテの血と、その
子らの血を見た』。また主は言われた、『わたしはこの地所であなたに報復
する』と。それゆえ彼を取りあげて、その地所に投げすて、主の言葉のよ
うにしなさい」。
二七ユダの王アハジヤはこれを見てベテハガンの方へ逃げたが、エヒウは

そのあとを追い、「彼をも撃て」と言ったので、イブレアムのほとりのグル
の坂で車の中の彼を撃った。彼はメギドまで逃げていって、そこで死ん
だ。二八その家来たちは彼を車に載せてエルサレムに運び、ダビデの町で
彼の墓にその先祖たちと共に葬った。

二九アハブの子ヨラムの第十一年にアハジヤはユダの王となったのであ
る。

三〇エヒウがエズレルにきた時、イゼベルはそれを聞いて、その目を塗り、
髪を飾って窓から望み見たが、三一エヒウが門にはいってきたので、「主君
を殺したジムリよ、無事ですか」と言った。三二するとエヒウは顔をあげて
窓にむかい、「だれか、わたしに味方する者があるか。だれかあるか」と言
うと、二、三人の宦官がエヒウを望み見たので、三三エヒウは「彼女を投
げ落せ」と言った。彼らは彼女を投げ落したので、その血が壁と馬とには

ねかかった。そして馬は彼女を踏みつけた。三四エヒウは内にはいって食
い飲みし、そして言った、「あののろわれた女を見、彼女を葬りなさい。
彼女は王の娘なのだ」。三五しかし彼らが彼女を葬ろうとして行って見
ると、頭蓋骨と、足と、たなごころのほか何もなかったので、三六帰って、
彼に告げると、彼は言った、「これは主が、そのしもべ、テシベびとエリヤ
によってお告げになった言葉である。すなわち『エズレルの地で犬がイゼ
ベルの肉を食うであろう。三七イゼベルの死体はエズレルの地で、糞土のよ
うに野のおもてに捨てられて、だれも、これはイゼベルだ、と言うことが
できないであろう』」。

第一〇章一アハブはサマリヤに七十人の子供があった。エヒウは手紙を
したためてサマリヤに送り、町のつかさたちと、長老たちと、アハブの
子供の守役たちとに伝えて言った、二「あなたがたの主君の子供たちがあ

なたがたと共におり、また戦車も馬も、堅固な町も武器もあるのだから、
この手紙があなたがたのもとに届いたならば、すぐ、
三あなたがたは主君
の子供たちのうち最もすぐれた、最も適当な者を選んで、その父の位
にすえ、主君の家のために戦いなさい」。
四彼らは大いに恐れて言った、
「ふたりの王たちがすでに彼に当ることができなかったのに、われわれがど
うして当ることができよう」。
五そこで宮廷のつかさ、町のつかさ、長老
たちと守役たちはエヒウに人をつかわして言った、「わたしたちは、あな
たのしもべです。すべてあなたが命じられる事をいたします。わたしたち
は王を立てることを好みません。あなたがよいと思われることをしてくだ
さい」。
六そこでエヒウは再び彼らに手紙を書き送って言った、「もしあな
たがたが、わたしに味方し、わたしに従おうとするならば、あなたがたの
主君の子供たちの首を取って、あすの今ごろエズレルにいるわたしのもと

に持ってきなさい」。そのころ、王の子供たち七十人は彼らを育てていた町
のおもだった人々と共にいた。七彼らはその手紙を受け取ると、王の子供
たちを捕えて、その七十人をことごとく殺し、その首をかごにつめて、エ
ズレルにいるエヒウのもとに送った。八使者が来て、エヒウに告げ、「人々
が王の子供たちの首を持ってきました」と言うと、「あくる朝までそれを門
の入口に、ふた山に積んでおけ」と言った。九朝になると、彼は出て行っ
て立ち、すべての民に言った、「あなたがたは正しい。主君にそむいて彼を
殺したのはわたしです。しかしこのすべての者どもを殺したのはだれです
か。一〇これであなたがたは、主がアハブの家について告げられた主の言葉
は一つも地に落ちないことを知りなさい。主は、そのしもべエリヤによっ
てお告げになった事をなし遂げられたのです」。一一こうしてエヒウは、ア
ハブの家に属する者でエズレルに残っている者をことごとく殺し、またそ

のすべてのおもだった者、その親しい者およびその祭司たちを殺して、彼
に属する者はひとりも残さなかった。
一二さてエヒウは立ってサマリヤへ行ったが、途中、牧者の集まり場で、
一三ユダの王アハジヤの身内の人々に会い、「あなたがたはどなたですか」と
言うと、「わたしたちはアハジヤの身内の者ですが、王の子供たちと、王母
の子供たちの安否を問うために下ってきたのです」と答えたので、一四エヒ
ウは「彼らをいけどれ」と命じた。そこで彼らをいけどって、集まり場の
穴のかたわらで彼ら四十二人をことごとく殺し、ひとりをも残さなかった。
一五エヒウはそこを立って行ったが、自分を迎えにきたレカブの子ヨナダ
ブに会ったので、彼にあいさつして、「あなたの心は、わたしがあなたに
対するように真実ですか」と言うと、ヨナダブは「真実です」と答えた。
するとエヒウは「それならば、あなたの手をわたしに伸べなさい」と言っ

たので、その手を伸べると、彼を引いて自分の車に上らせ、一六「わたし
と一緒にきて、わたしが主に熱心なのを見なさい」と言った。そして彼を
自分の車に乗せ、一七サマリヤへ行って、アハブに属する者で、サマリヤ
に残っている者をことごとく殺して、その一族を滅ぼした。主がエリヤに
お告げになった言葉のとおりである。
一八次いでエヒウは民をことごとく集めて彼らに言った、「アハブは少し
ばかりバアルに仕えたが、エヒウは大いにこれに仕えるであろう。一九それ
ゆえ、今バアルのすべての預言者、すべての礼拝者、すべての祭司をわたし
のもとに召しなさい。ひとりもこない者のないようにしなさい。わたしは
大いなる犠牲をバアルにささげようとしている。すべてこない者は生かし
ておかない」。しかしエヒウはバアルの礼拝者たちを滅ぼすために偽って
こうしたのである。二〇そしてエヒウは「バアルのために聖会を催しなさ

い」と命じたので、彼らはこれを布告した。二一エヒウはあまねくイスラエ
ルに人をつかわしたので、バアルの礼拝者たちはことごとく来た。こない
で残った者はひとりもなかった。彼らはバアルの宮にはいったので、バア
ルの宮は端から端までいっぱいになった。二二その時エヒウは衣装をつか
さどる者に「祭服を取り出してバアルのすべての礼拝者に与えよ」と言っ
たので、彼らのために祭服を取り出した。二三そしてエヒウはレカブの子
ヨナダブと共にバアルの宮に入り、バアルの礼拝者たちに言った、「調べ
てみて、ここにはただバアルの礼拝者のみで、主のしもべはひとりも、あ
なたがたのうちにいないようにしなさい」。二四こうして彼は犠牲と燔祭と
をささげるためにはいった。

さてエヒウは八十人の者を外に置いて言った、「わたしがあなたがたの手
に渡す者をひとりでも逃す者は、自分の命をもってその人の命に換えな

ければならない」。二五こうして燔祭をささげることが終ったとき、エヒウ
はその侍衛と将校たちに言った、「はいって彼らを殺せ。ひとりも逃がし
てはならない」。侍衛と将校たちはつるぎをもって彼らを撃ち殺し、それ
を投げ出して、バアルの宮の本殿に入り、二六バアルの宮にある柱の像を
取り出して、それを焼いた。二七また彼らはバアルの石柱をこわし、バア
ルの宮をこわして、かわやとしたが今日まで残っている。
二八このようにエヒウはイスラエルのうちからバアルを一掃した。二九し
かしエヒウはイスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪、すな
わちベテルとダンにある金の子牛に仕えることをやめなかった。三〇主は
エヒウに言われた、「あなたはわたしの目にかなう事を行うにあたって、よ
くそれを行い、またわたしの心にあるすべての事をアハブの家にしたの
で、あなたの子孫は四代までイスラエルの位に座するであろう」。三一し

かしエヒウはイスラエルの神、主の律法を心をつくして守り行おうとは
せず、イスラエルに罪を犯させたヤラベアムの罪を離れなかった。
三二この時にあたって、主はイスラエルの領地を切り取ることを始めら
れた。すなわちハザエルはイスラエルのすべての領域を侵し、三三ヨルダ
ンの東で、ギレアデの全地、カドびと、ルベンびと、マナセびとの地を侵
し、アルノン川のほとりにあるアロエルからギレアデとバシャンに及んだ。
三四エヒウのその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇は、こと
ごとくイスラエルの王の歴代志の書にしるされているではないか。三五エ
ヒウはその先祖たちと共に眠ったので、彼をサマリヤに葬った。その子
エホアハズが代って王となった。三六エヒウがサマリヤでイスラエルを治
めたのは二十八年であった。

第一一章
一さてアハジヤの母アタリヤはその子の死んだのを見て、立っ

て王の一族をことごとく滅ぼしたが、二ヨラム王の娘で、アハジヤの姉妹
であるエホシバはアハジヤの子ヨアシを、殺されようとしている王の子た
ちのうちから盗み取り、彼とそのうばとを寝室に入れて、アタリヤに隠し
たので、彼はついに殺されなかった。三ヨアシはうばと共に六年の間、主
の宮に隠れていたが、その間アタリヤが国を治めた。

四第七年になってエホヤダは人をつかわして、カリびとと近衛兵との大将
たちを招きよせ、主の宮にいる自分のもとにこさせ、彼らと契約を結び、
主の宮で彼らに誓いをさせて王の子を見せ、五命じて言った、「あなたがた
のする事はこれです、すなわち、安息日に非番となって王の家を守るあな
たがたの三分の一は、六宮殿を守らなければならない。(他の三分の一は
スルの門におり、三分の一は近衛兵のうしろの門におる)。七すべて安息日
に当番で主の宮を守るあなたがたの二つの部隊は、八おのおの武器を手

に取って王のまわりに立たなければならない。すべて列に近よる者は殺さ
れなければならない。あなたがたは王が出る時にも、はいる時にも王と共
にいなければならない」。
九そこでその大将たちは祭司エホヤダがすべて命じたとおりにおこなっ
た。すなわち彼らはおのおの安息日に非番となる者と、安息日に当番とな
る者とを率いて祭司エホヤダのもとにきたので、一〇祭司は主の宮にある
ダビデ王のやりと盾を大将たちに渡した。一一近衛兵はおのおの手に武器
をとって主の宮の南側から北側まで、祭壇と宮を取り巻いて立った。一
二そこでエホヤダは王の子をつれ出して冠をいただかせ、律法の書を渡
し、彼を王と宣言して油を注いだので、人々は手を打って「王万歳」と
言った。
一三アタリヤは近衛兵と民の声を聞いて、主の宮に入り、民のところへ

行って、一四見ると、王は慣例にしたがって柱のかたわらに立ち、王のか
たわらには大将たちとラッパ手たちが立ち、また国の民は皆喜んでラッ
パを吹いていたので、アタリヤはその衣を裂いて、「反逆です、反逆で
す」と叫んだ。一五その時祭司エホヤダは軍勢を指揮していた大将たちに
命じて、「彼女を列の間をとおって出て行かせ、彼女に従う者をつるぎ
をもって殺しなさい」と言った。これは祭司がさきに「彼女を主の宮で殺
してはならない」と言ったからである。一六そこで彼らは彼女を捕え、王
の家の馬道へ連れて行ったが、彼女はついにそこで殺された。
一七かくてエホヤダは主と王および民との間に、皆主の民となるとい
う契約を立てさせ、また王と民との間にもそれを立てさせた。一八そこ
で国の民は皆バアルの宮に行って、これをこわし、その祭壇とその像を打
ち砕き、バアルの祭司マッタンをその祭壇の前で殺した。そして祭司は主

の宮に管理人を置いた。一九次いでエホヤダは大将たちと、カリびとと、
近衛兵と国のすべての民を率いて、主の宮から王を導き下り、近衛兵の
門の道から王の家に入り、王の位に座せしめた。二〇こうして国の民は
皆喜び、町はアタリヤが王の家でつるぎをもって殺されてのち、おだや
かになった。二一ヨアシは位についた時七歳であった。

第一二章一ヨアシはエヒウの第七年に位につき、エルサレムで四十年の
間、世を治めた。その母はベエルシバの出身で、名をチビアといった。
二ヨアシは一生の間、主の目にかなう事をおこなった。祭司エホヤダが
彼を教えたからである。三しかし高き所は除かなかったので、民はなお
その高き所で犠牲をささげ、香をたいた。
四ヨアシは祭司たちに言った、「すべて主の宮に聖別してささげる銀、す
なわちおのおのが課せられて、割当にしたがって人々の出す銀、および人々

が心から願って主の宮の持ってくる銀は、五これを祭司たちがおのおのそ
の知る人から受け取り、どこでも主の宮に破れの見える時は、それをもっ
てその破れを繕わなければならない」。六ところがヨアシ王の二十三年に
至るまで、祭司たちは主の宮の破れを繕わなかった。七それで、ヨアシ王
は祭司エホヤダおよび他の祭司たちを召して言った、「なぜ、あなたがたは
主の宮の破れを繕わないのか。あなたがたはもはや知人から銀を受けて
はならない。主の宮の破れを繕うためにそれを渡しなさい」。八祭司たち
は重ねて民から銀を受けない事と、主の宮の破れを繕わない事とに同意
した。

九そこで祭司エホヤダは一つの箱を取り、そのふたに穴をあけて、それ
を主の宮の入口の右側、祭壇のかたわらに置いた。そして門を守る祭司
たちは主の宮にはいってくる銀をことごとくその中に入れた。一〇こうし

てその箱の中に銀が多くなったのを見ると、王の書記官と大祭司が上って
きて、主の宮にある銀を数えて袋に詰めた。一一そしてその数えた銀を、
工事をつかさどる主の宮の監督者の手にわたしたので、彼らはそれを主の
宮に働く木工と建築師に払い、一二石工および石切りに払い、またそれ
をもって主の宮の破れを繕う材木と切り石を買い、主の宮を繕うため
に用いるすべての物のために費した。一三ただし、主の宮にはいってくる
その銀をもって主の宮のために銀のたらい、心切りばさみ、鉢、ラッパ、
金の器、銀の器などを造ることはしなかった。一四ただこれを工事をす
る者に渡して、それで主の宮を繕わせた。一五またその銀を渡して工事を
する者に払わせた人々と計算することはしなかった。彼らは正直に事を
おこなったからである。一六愆祭の銀と罪祭の銀は主の宮に、はいらない
で、祭司に帰した。

一七そのころ、スリヤの王ハザエルが上ってきて、ガテを攻めてこれを
取った。そしてハザエルがエルサレムに攻め上ろうとして、その顔を向け
たとき、一八ユダの王ヨアシはその先祖、ユダの王ヨシャパテ、ヨラム、ア
ハジヤが聖別してささげたすべての物、およびヨアシ自身が聖別してささ
げた物、ならびに主の宮の倉と、主の宮にある金をことごとく取って、ス
リヤ王のハザエルに贈ったので、ハザエルはエルサレムを離れ去った。
一九ヨアシのその他の事績および彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志
の書にしるされているではないか。二〇ヨアシの家来たちは立って徒党を結
び、シラに下る道にあるミロの家でヨアシを殺した。二一すなわちその家来
シメアテの子ヨザカルと、ショメルの子ヨザバデが彼を撃って殺し、彼を
その先祖と同じく、ダビデの町に葬った。その子アマジヤが代って王と
なった。

第一三章

一ユダの王アハジヤの子ヨアシの第二十三年にエヒウの子エホ
アハズはサマリヤでイスラエルの王となり、十七年世を治めた。二彼は主
の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアム
の罪を行いつづけて、それを離れなかった。三そこで主はイスラエルに対
して怒りを発し、エホアハズの治世の間、絶えずイスラエルをスリヤの王
ハザエルの手にわたし、またハザエルの子ベネハダデの手にわたされた。四
しかしエホアハズが主に願い求めたので、主はついにこれを聞きいれられ
た。スリヤの王によって悩まされたイスラエルの悩みを見られたからであ
る。五それで主がひとりの救助者をイスラエルに賜わったので、イスラ
エルの人々はスリヤびとの手をのがれ、前のように自分たちの天幕に住む
ようになった。六それにもかかわらず、彼らはイスラエルに罪を犯させた
ヤラベアムの家の罪を離れず、それを行いつづけた。またアシラの像も

サマリヤに立ったままであった。七さきにスリヤの王が彼らを滅ぼし、踏
み砕くちりのようにしたのでエホアハズの軍勢で残ったものは、ただ騎兵
五十人、戦車十両、歩兵一万人のみであった。八エホアハズその他の事績
と、彼がしたすべての事およびその武勇は、イスラエルの王の歴代志の書
にしるされているではないか。九エホアハズは先祖たちと共に眠ったので、
彼をサマリヤに葬った。その子ヨアシが代って王となった。

一〇ユダの王ヨアシの第三十七年に、エホアハズの子ヨアシはサマリヤ
でイスラエルの王となり、十六年世を治めた。一一彼は主の目の前に悪を
行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムのもろもろの罪を
離れず、それに歩んだ。一二ヨアシのその他の事績と、彼がしたすべての事
およびユダの王アマジヤと戦ったその武勇は、イスラエルの王の歴代志の
書にしるされているではないか。一三ヨアシは先祖たちと共に眠って、ヤ

ラベアムがその位に座した。そしてヨアシはイスラエルの王たちと同じ
くサマリヤに葬られた。
一四さてエリシャは死ぬ病気にかかっていたが、イスラエルの王ヨアシ
は下ってきて彼の顔の上に涙を流し、「わが父よ、わが父よ、イスラエル
の戦車よ、その騎兵よ」と言った。一五エリシャは彼に「弓と矢を取りな
さい」と言ったので、弓と矢を取った。一六エリシャはまたイスラエルの王
に「弓に手をかけなさい」と言ったので、手をかけた。するとエリシャは
自分の手を王の手の上におき、一七「東向きの窓をあけなさい」と言った
ので、それをあけると、エリシャはまた「射なさい」と言った。彼が射る
と、エリシャは言った、「主の救の矢、スリヤに対する救の矢。あなたは
アペクでスリヤびとを撃ち破り、彼らを滅ぼしつくすであろう」。一八エリ
シャはまた「矢を取りなさい」と言ったので、それを取った。エリシャはま

たイスラエルの王に「それをもって地を射なさい」と言ったので、三度射て
やめた。一九すると神の人は怒って言った、「あなたは五度も六度も射るべ
きであった。そうしたならば、あなたはスリヤを撃ち破り、それを滅ぼし
つくすことができたであろう。しかし今あなたはそうしなかったので、ス
リヤを撃ち破ることはただ三度だけであろう」。

二〇こうしてエリシャは死んで葬られた。さてモアブの略奪隊は年が
改まるごとに、国にはいって来るのを常とした。二一時に、ひとりの人を
葬ろうとする者があったが、略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓
に投げ入れて去った。その人はエリシャの骨に触れるとすぐ生きかえって
立ちあがった。

二二スリヤの王ハザエルはエホアハズの一生の間、イスラエルを悩ま
したが、二三主はアブラハム、イサク、ヤコブと結ばれた契約のゆえにイ

スラエルを恵み、これをあわれみ、これを顧みて滅ぼすことを好まず、な
おこれをみ前から捨てられなかった。
二四スリヤの王ハザエルはついに死んで、その子ベネハダデが代って王
となった。二五そこでエホアハズの子ヨアシは、父エホアハズがハザエルに
攻め取られた町々を、ハザエルの子ベネハダデの手から取り返した。すな
わちヨアシは三度彼を撃ち破って、イスラエルの町々を取り返した。
第一四章一イスラエルの王エホアハズの子ヨアシの第二年に、ユダの王
ヨアシの子アマジヤが王となった。二彼は王となった時二十五歳で、二十
九年の間エルサレムで世を治めた。その母はエルサレムの出身で、名を
エホアダンといった。三アマジヤは主の目にかなう事をおこなったが、先祖
ダビデのようではなかった。彼はすべての事を父ヨアシがおこなったよう
におこなった。四ただし高き所は除かなかったので、民はなおその高き

所で犠牲をささげ、香をたいた。五彼は国が彼の手のうちに強くなった
時、父ヨアシ王を殺害した家来たちを殺したが、六その殺害者の子供たち
は殺さなかった。これはモーセの律法の書にしるされている所に従った
のであって、そこに主は命じて「父は子のゆえに殺さるべきではない。子
は父のゆえに殺さるべきではない。おのおの自分の罪のゆえに殺さるべき
である」と言われている。
七アマジヤはまた塩の谷でエドムびと一万人を殺した。またセラを攻め
取って、その名をヨクテルと名づけたが、今日までそのとおりである。
八そこでアマジヤがエヒウの子エホアハズの子であるイスラエルの王ヨ
アシに使者をつかわして、「さあ、われわれは互に顔を合わせよう」と言
わせたので、九イスラエルの王ヨアシはユダの王アマジヤに言い送った、
「かつてレバノンのいばらがレバノンの香柏に、『あなたの娘をわたしの

むすこの妻にください』と言い送ったことがあったが、レバノンの野獣が
とおって、そのいばらを踏み倒した。一〇あなたは大いにエドムを撃って、
心にたかぶっているが、その栄誉に満足して家にとどまりなさい。何ゆ
え、あなたは災をひき起して、自分もユダも共に滅びるような事をする
のですか」。
一一しかしアマジヤが聞きいれなかったので、イスラエルの王ヨアシは
上ってきた。そこで彼とユダの王アマジヤはユダのベテシメシで互に顔
をあわせたが、一二ユダはイスラエルに敗られて、おのおのその天幕に逃げ
帰った。一三イスラエルの王ヨアシはアハジヤの子ヨアシの子であるユダ
の王アマジヤをベテシメシで捕え、エルサレムにきて、エルサレムの城壁
をエフライムの門から隅の門まで、おおよそ四百キュビトにわたってこわ
し、一四また主の宮と王の家の倉にある金銀およびもろもろの器をこと

ごとく取り、かつ人質をとってサマリヤに帰った。
一五ヨアシのその他の事績と、その武勇および彼がユダの王アマジヤと
戦った事は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされているではないか。
一六ヨアシはその先祖たちと共に眠って、イスラエルの王たちと共にサマ
リヤに葬られ、その子ヤラベアムが代って王となった。
一七ヨアシの子であるユダの王アマジヤは、エホアハズの子であるイスラ
エルの王ヨアシが死んで後、なお十五年生きながらえた。一八アマジヤの
その他の事績は、ユダの王の歴代志の書にしるされているではないか。一九
時に人々がエルサレムで徒党を結び、彼に敵対したので、彼はラキシに逃
げていったが、その人々はラキシに人をつかわして彼をそこで殺させた。
二〇人々は彼を馬に載せて運んできて、エルサレムで彼を先祖たちと共に
ダビデの町に葬った。二一そしてユダの民は皆アザリヤを父アマジヤの

代りに王とした。時に年十六歳であった。二二彼はエラテの町を建てて、
これをユダに復帰させた。これはかの王がその先祖たちと共に眠った後で
あった。
二三ユダの王ヨアシの子アマジヤの第十五年に、イスラエルの王ヨアシの
子ヤラベアムがサマリヤで王となって四十一年の間、世を治めた。二四彼
は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベ
アムの罪を離れなかった。二五彼はハマテの入口からアラバの海まで、イ
スラエルの領域を回復した。イスラエルの神、主がガテヘペルのアミッ
タイの子である、そのしもべ預言者ヨナによって言われた言葉のとおりで
ある。二六主はイスラエルの悩みの非常に激しいのを見られた。そこには
つながれた者も、自由な者もいなくなり、またイスラエルを助ける者もい
なかった。二七しかし主はイスラエルの名を天が下から消し去ろうとは言

われなかった。そして彼らをヨアシの子ヤラベアムの手によって救われた。
二八ヤラベアムのその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇、
すなわち彼が戦争をした事および、かつてユダに属していたダマスコとハ
マテを、イスラエルに復帰させた事は、イスラエルの王の歴代志の書にし
るされているではないか。二九ヤラベアムはその先祖であるイスラエルの王
たちと共に眠って、その子ゼカリヤが代って王となった。

第一五章
一イスラエルの王ヤラベアムの第二十七年に、ユダの王アマジ
ヤの子アザリヤが王となった。二彼が王となった時は十六歳で、五十二年
の間エルサレムで世を治めた。その母はエルサレムの出身で、名をエコ
リアといった。三彼は主の目にかなう事を行い、すべての事を父アマジ
ヤが行ったようにおこなった。四ただし高き所は除かなかったので、民は
なおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。五主が王を撃たれたので、

その死ぬ日まで、らい病人となって、離れ家に住んだ。王の子ヨタムが家
の事を管理し、国の民をさばいた。六アザリヤのその他の事績と、彼がし
たすべての事は、ユダの王の歴代志の書にしるされているではないか。七
アザリヤはその先祖たちと共に眠ったので、彼をダビデの町にその先祖た
ちと共に葬った。その子ヨタムが代って王となった。

八ユダの王アザリヤの第三十八年にヤラベアムの子ゼカリヤがサマリヤ
でイスラエルの王となり、六か月世を治めた。九彼はその先祖たちがおこ
なったように主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテ
の子ヤラベアムの罪を離れなかった。一〇ヤベシの子シャルムが徒党を結
んで彼に敵し、イブレアムで彼を撃ち殺し、彼に代って王となった。一一
ゼカリヤのその他の事績は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされてい
る。一二主はかつてエヒウに、「あなたの子孫は四代までイスラエルの位

に座するであろう」と告げられたが、はたしてそのとおりになった。
一三ヤベシの子シャルムはユダの王ウジヤの第三十九年に王となり、サ
マリヤで一か月世を治めた。一四時にガデの子メナヘムがテルザからサマ
リヤに上ってきて、ヤベシの子シャルムをサマリヤで撃ち殺し、彼に代っ
て王となった。一五シャルムのその他の事績と、彼が徒党を結んだ事は、イ
スラエルの王の歴代志の書にしるされている。一六その時メナヘムはテル
ザから進んでいって、タップアと、そのうちにいるすべての者、およびそ
の領域を撃った。すなわち彼らが彼のために開かなかったので、これを
撃って、そのうちの妊娠の女をことごとく引き裂いた。

一七ユダの王アザリヤの第三十九年に、ガデの子メナヘムはイスラエル
の王となり、サマリヤで十年の間、世を治めた。一八彼は主の目の前に悪
を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を一生の

間、離れなかった。一九時にアッスリヤの王プルが国に攻めてきたので、
メナヘムは銀一千タラントをプルに与えた。これは彼がプルの助けを得て、
国を自分の手のうちに強くするためであった。二〇すなわちメナヘムはそ
の銀をイスラエルのすべての富める者に課し、その人々におのおの銀五十
シケルを出させてアッスリヤの王に与えた。こうしてアッスリヤの王は国
にとどまらないで帰っていった。二一メナヘムのその他の事績と彼がした
すべての事は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされているではないか。
二二メナヘムは先祖たちと共に眠り、その子ペカヒヤが代って王となった。
二三メナヘムの子ペカヒヤはユダの王アザリヤの第五十年に、サマリヤ
でイスラエルの王となり、二年の間、世を治めた。二四彼は主の目の前に
悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を離れな
かった。二五時に彼の副官であったレマリヤのペカが、ギレアデびと五十

人と共に徒党を結んで彼に敵し、サマリヤの、王の宮殿の天守で彼を撃
ち殺した。すなわちペカは彼を殺し、彼に代って王となった。二六ペカヒ
ヤのその他の事績と彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書
にしるされている。

二七レマリヤの子ペカはユダの王アザリヤの第五十二年に、サマリヤで
イスラエルの王となり、二十年の間、世を治めた。二八彼は主の目の前に
悪をおこない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を離
れなかった。

二九イスラエルの王ペカの世に、アッスリヤの王テグラテピレセルが来
て、イヨン、アベル・ベテマアカ、ヤノア、ケデシ、ハゾル、ギレアデ、ガリ
ラヤ、ナフタリの全地を取り、人々をアッスリヤへ捕え移した。三〇時に
エラの子ホセアは徒党を結んで、レマリヤの子ペカに敵し、彼を撃ち殺し、
彼に代って王となった。これはウジヤの子ヨタムの第二十年であった。三

一ペカのその他の事績と彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志
の書にしるされている。
三二レマリヤの子イスラエルの王ペカの第二年に、ユダの王ウジヤの子ヨ
タムが王となった。三三彼は王となった時二十五歳であったが、エルサレ
ムで十六年の間、世を治めた。母はザドクの娘で、名をエルシャといっ
た。三四彼は主の目にかなう事を行い、すべて父ウジヤの行ったようにお
こなった。三五ただし高き所は除かなかったので、民はなおその高き所
で犠牲をささげ、香をたいた。彼は主の宮の上の門を建てた。三六ヨタム
のその他の事績と彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書にしるさ
れているではないか。三七そのころ、主はスリヤの王レヂンとレマリヤの
子ペカをユダに攻めこさせられた。三八ヨタムは先祖たちと共に眠って、そ
の先祖ダビデの町に先祖たちと共に葬られ、その子アハズが代って王と

なった。

第一六章一レマリヤの子ペカの第十七年にユダの王ヨタムの子アハズが
王となった。二アハズは王となった時二十歳で、エルサレムで十六年の間、
世を治めたが、その神、主の目にかなう事を先祖ダビデのようには行わ
なかった。三彼はイスラエルの王たちの道に歩み、また主がイスラエルの
人々の前から追い払われた異邦人の憎むべきおこないにしたがって、自分
の子を火に焼いてささげ物とした。四かつ彼は高き所、また丘の上、すべ
ての青木の下で犠牲をささげ、香をたいた。

五そのころ、スリヤの王レヂンおよびレマリヤの子であるイスラエルの
王ペカがエルサレムに攻め上って、アハズを囲んだが、勝つことができな
かった。六その時エドムの王はエラテを回復してエドムの所領とし、ユダ
の人々をエラテから追い出した。そしてエドムびとがエラテにきて、そこ
に住み、今日に至っている。七そこでアハズは使者をアッスリヤの王テグ

ラテピレセルにつかわして言わせた、「わたしはあなたのしもべ、あなたの
子です。スリヤの王とイスラエルの王がわたしを攻め囲んでいます。どう
ぞ上ってきて、彼らの手からわたしを救い出してください」。八そしてアハ
ズは主の宮と王の家の倉にある金と銀をとり、これを贈り物としてアッス
リヤの王におくったので、九アッスリヤの王は彼の願いを聞きいれた。す
なわちアッスリヤの王はダマスコに攻め上って、これを取り、その民をキ
ルに捕え移し、またレヂンを殺した。
一〇アハズ王はアッスリヤの王テグラテピレセルに会おうとダマスコへ
行ったが、ダマスコにある祭壇を見たので、アハズ王はその祭壇の作りにし
たがって、その詳しい図面と、ひな型とを作って、祭司ウリヤに送った。一一
そこで祭司ウリヤはアハズ王がダマスコから送ったものにしたがって祭壇
を建てた。すなわち祭司ウリヤはアハズ王がダマスコから帰るまでにそのと

おりに作った。一二王はダマスコから帰ってきて、その祭壇を見、祭壇に近
づいてその上に登り、一三燔祭と素祭を焼き、灌祭を注ぎ、酬恩祭の血を
祭壇にそそぎかけた。一四彼はまた主の前にあった青銅の祭壇を宮の前か
ら移した。すなわちそれを新しい祭壇と主の宮の間から移して、新し
い祭壇の北の方にすえた。一五そしてアハズ王は祭司ウリヤに命じて言っ
た、「朝の燔祭と夕の素祭および王の燔祭とその素祭、ならびに国中の民
の燔祭とその素祭および灌祭は、この大きな祭壇の上で焼きなさい。また
燔祭の血と犠牲の血はすべてこれにそそぎかけなさい。あの青銅の祭壇を
わたしは伺いを立てるのに用いよう」。一六祭司ウリヤはアハズ王がすべ
て命じたとおりにおこなった。

一七またアハズ王は台の鏡板を切り取って、洗盤をその上から移し、ま
た海をその下にある青銅の牛の上からおろして、石の座の上にすえ、一八

また宮のうちに造られていた安息日用のおおいのある道、および王の用い
る外の入口をアッスリヤの王のために主の宮から除いた。一九アハズのそ
の他の事績は、ユダの王の歴代志の書にしるされているではないか。二〇ア
ハズは先祖たちと共に眠って、ダビデの町にその先祖たちと共に葬られ、
その子ヒゼキヤが代って王となった。

第一七章一ユダの王アハズの第十二年にエラの子ホセアが王となり、サ
マリヤで九年の間、イスラエルを治めた。二彼は主の目の前に悪を行っ
たが、彼以前のイスラエルの王たちのようではなかった。三アッスリヤの王
シャルマネセルが攻め上ったので、ホセアは彼に隷属して、みつぎを納め
たが、四アッスリヤの王はホセアがついに自分にそむいたのを知った。それ
はホセアが使者をエジプトの王ソにつかわし、また年々納めていたみつぎ
を、アッスリヤの王に納めなかったからである。そこでアッスリヤの王は

彼を監禁し、獄屋につないだ。五そしてアッスリヤの王は攻め上って国中
を侵し、サマリヤに上ってきて三年の間、これを攻め囲んだ。六ホセアの
第九年になって、アッスリヤの王はついにサマリヤを取り、イスラエルの
人々をアッスリヤに捕えていって、ハラと、ゴザンの川ハボルのほとりと、
メデアの町々においた。
七この事が起ったのは、イスラエルの人々が、自分たちをエジプトの地
から導き上って、エジプトの王パロの手をのがれさせられたその神、主に
むかって罪を犯し、他の神々を敬い、八主がイスラエルの人々の前から
追い払われた異邦人のならわしに従って歩み、またイスラエルの王たち
が定めたならわしに従って歩んだからである。九イスラエルの人々はそ
の神、主にむかって正しからぬ事をひそかに行い、見張台から堅固な町に
至るまで、すべての町々に高き所を建て、一〇またすべての高い丘の上、

すべての青木の下に石の柱とアシラ像を立て、一一主が彼らの前から捕
え移された異邦人がしたように、すべての高き所で香をたき、悪事を行っ
て、主を怒らせた。一二また主が彼らに「あなたがたはこの事をしてはな
らない」と言われたのに偶像に仕えた。一三主はすべての預言者、すべての
先見者によってイスラエルとユダを戒め、「翻って、あなたがたの悪い
道を離れ、わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、またわたしのしもべで
ある預言者たちによってあなたがたに伝えたすべての律法のとおりに、わ
たしの戒めと定めとを守れ」と仰せられたが、一四彼らは聞きいれず、彼
らの先祖たちがその神、主を信じないで、強情であったように、彼らは
強情であった。一五そして彼らは主の定めを捨て、主が彼らの先祖たちと
結ばれた契約を破り、また彼らに与えられた警告を軽んじ、かつむなしい
偶像に従ってむなしくなり、また周囲の異邦人に従った。これは主が、

彼らのようにおこなってはならないと彼らに命じられたものである。一六
彼らはその神、主のすべての戒めを捨て、自分のために二つの子牛の像
を鋳て造り、またアシラ像を造り、天の万象を拝み、かつバアルに仕え、
一七またそのむすこ、娘を火に焼いてささげ物とし、占いおよびまじな
いをなし、主の目の前に悪をおこなうことに身をゆだねて、主を怒らせた。
一八それゆえ、主は大いにイスラエルを怒り、彼らをみ前から除かれたの
で、ユダの部族のほか残った者はなかった。
一九ところがユダもまたその神、主の戒めを守らず、イスラエルが定め
たならわしに歩んだので、二〇主はイスラエルの子孫をことごとく捨て、彼
らを苦しめ、彼らを略奪者の手にわたして、ついに彼らをみ前から打ち
すてられた。
二一主はイスラエルをダビデの家から裂き離されたので、イスラエルは

ネバテの子ヤラベアムを王としたが、ヤラベアムはイスラエルに、主に従
うことをやめさせ、大きな罪を犯させた。二二イスラエルの人々がヤラベ
アムのおこなったすべての罪をおこない続けて、それを離れなかったので、
二三ついに主はそのしもべである預言者たちによって言われたように、イス
ラエルをみ前から除き去られた。こうしてイスラエルは自分の国からアッ
スリヤに移されて今日に至っている。
二四かくてアッスリヤの王はバビロン、クタ、アワ、ハマテおよびセパルワ
イムから人々をつれてきて、これをイスラエルの人々の代りにサマリヤの
町々におらせたので、その人々はサマリヤを領有して、その町々に住ん
だ。二五彼らがそこに住み始めた時、主を敬うことをしなかったので、主
は彼らのうちにししを送り、ししは彼らのうちの数人を殺した。二六そこ
で人々はアッスリヤの王に告げて言った、「あなたが移してサマリヤの町々

におらせられたあの国々の民は、その地の神のおきてを知らないゆえに、そ
の神は彼らのうちにししを送り、ししは彼らを殺した。これは彼らが、そ
の地の神のおきてを知らないためです」。二七アッスリヤの王は命じて言っ
た、「あなたがたがあそこから移した祭司のひとりをあそこへ連れて行きな
さい。彼をあそこへやって住まわせ、その国の神のおきてをその人々に教
えさせなさい」。

二八そこでサマリヤから移された祭司のひとりが来てベテルに住み、ど
のように主を敬うべきかを彼らに教えた。二九しかしその民はおのおの
自分の神々を造って、それをサマリヤびとが造った高き所の家に安置し
た。民は皆住んでいる町々でそのようにおこなった。三〇すなわちバビロ
ンの人々はスコテ・ベノテを造り、クタの人々はネルガルを造り、ハマテ
の人々はアシマを造り、三一アワの人々はニブハズとタルタクを造り、セパ

ルワイムびとはその子を火に焼いて、セパルワイムの神アデランメレクお
よびアナンメレクにささげた。三二彼はまた主を敬い、自分たちのうちか
ら一般の民を立てて高き所の祭司としたので、その人々は高き所の家
で勤めをした。三三このように彼らは主を敬ったが、また彼らが出てきた
国々のならわしにしたがって、自分たちの神々にも仕えた。三四今日に至
るまで彼らは先のならわしにしたがっておこなっている。
彼らは主を敬わず、また主がイスラエルと名づけられたヤコブの子孫
に命じられた定めにも、おきてにも、律法にも、戒めにも従わない。三五
主はかつて彼らと契約を結び、彼らに命じて言われた、「あなたがたは他
の神々を敬ってはならない。また彼らを拝み、彼らに仕え、彼らに犠牲
をささげてはならない。三六ただ大きな力と伸べた腕とをもって、あなた
がたをエジプトの地から導き上った主をのみ敬い、これを拝み、これに

犠牲をささげなければならない。三七またあなたがたのために書きしるされ
た定めと、おきてと、律法と、戒めとを、慎んで常に守らなければならな
い。他の神々を敬ってはならない。三八わたしがあなたがたと結んだ契約
を忘れてはならない。また他の神々を敬ってはならない。三九ただあなた
がたの神、主を敬わなければならない。主はあなたがたをそのすべての
敵の手から救い出されるであろう」。四〇しかし彼らは聞きいれず、かえっ
て先のならわしにしたがっておこなった。

四一このように、これらの民は主を敬い、またその刻んだ像にも仕えた
が、その子たちも、孫たちも同様であって、彼らはその先祖がおこなった
ように今日までおこなっている。

第一八章一イスラエルの王エラの子ホセアの第三年にユダの王アハズの
子ヒゼキヤが王となった。二彼は王となった時二十五歳で、エルサレムで

二十九年の間、世を治めた。その母はゼカリヤの娘で、名をアビといっ
た。三ヒゼキヤはすべて先祖ダビデがおこなったように主の目にかなう事
を行い、四高き所を除き、石柱をこわし、アシラ像を切り倒し、モーセ
の造った青銅のへびを打ち砕いた。イスラエルの人々はこの時までそのへ
びに向かって香をたいていたからである。人々はこれをネホシタンと呼ん
だ。五ヒゼキヤはイスラエルの神、主に信頼した。そのために彼のあとに
も彼の先にも、ユダのすべての王のうちに彼に及ぶ者はなかった。六すな
わち彼は固く主に従って離れることなく、主がモーセに命じられた命令
を守った。七主が彼と共におられたので、すべて彼が出て戦うところで
功をあらわした。彼はアッスリヤの王にそむいて、彼に仕えなかった。八
彼はペリシテびとを撃ち敗って、ガザとその領域にまで達し、見張台か
ら堅固な町にまで及んだ。

九ヒゼキヤ王の第四年すなわちイスラエルの王エラの子ホセアの第七年
に、アッスリヤの王シャルマネセルはサマリヤに攻め上って、これを囲ん
だが、一〇三年の後ついにこれを取った。サマリヤが取られたのはヒゼキヤ
の第六年で、それはイスラエルの王ホセアの第九年であった。一一アッス
リヤの王はイスラエルの人々をアッスリヤに捕えていって、ハラと、ゴザ
ンの川ハボルのほとりと、メデアの町々に置いた。一二これは彼らがその
神、主の言葉にしたがわず、その契約を破り、主のしもべモーセの命じた
すべての事に耳を傾けず、また行わなかったからである。

一三ヒゼキヤ王の第十四年にアッスリヤの王セナケリブが攻め上ってユ
ダのすべての堅固な町々を取ったので、一四ユダの王ヒゼキヤは人をラキ
シにつかわしてアッスリヤの王に言った、「わたしは罪を犯しました。どう
ぞ引き上げてください。わたしに課せられることはなんでもいたします」。

アッスリヤの王は銀三百タラントと金三十タラントをユダの王ヒゼキヤに
課した。一五ヒゼキヤは主の宮と王の家の倉とにある銀をことごとく彼に
与えた。一六この時ユダの王ヒゼキヤはまた主の神殿の戸および柱から
自分が着せた金をはぎ取って、アッスリヤの王に与えた。一七アッスリヤ
の王はまたタルタン、ラブサリスおよびラブシャケを、ラキシから大軍を率
いてエルサレムにいるヒゼキヤ王のもとにつかわした。彼らは上ってエル
サレムに来た。彼らはエルサレムに着くと、布さらし場に行く大路に沿っ
ている上の池の水道のかたわらへ行って、そこに立った。一八そして彼ら
が王を呼んだので、ヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナ、
およびアサフの子である史官ヨアが彼らのところに出てきた。
一九ラブシャケは彼らに言った、「ヒゼキヤに言いなさい、『大王、アッ
スリヤの王はこう仰せられる。あなたが頼みとする者は何か。二〇口先だ

けの言葉が戦争をする計略と力だと考えるのか。あなたは今だれにた
よって、わたしにそむいたのか。二一今あなたは、あの折れかけている葦の
つえ、エジプトを頼みとしているが、それは人がよりかかる時、その人の
手を刺し通すであろう。エジプトの王パロはすべて寄り頼む者にそのよう
にする。二二しかしあなたがもし「われわれは、われわれの神、主を頼む」
とわたしに言うのであれば、その神はヒゼキヤがユダとエルサレムに告げ
て、「あなたがたはエルサレムで、この祭壇の前に礼拝しなければならな
い」と言って、その高き所と祭壇とを除いた者ではないか。二三さあ、わ
たしの主君アッスリヤの王とかけをせよ。もしあなたの方に乗る人がある
ならば、わたしは馬二千頭を与えよう。二四あなたはエジプトを頼み、戦車
と騎兵を請い求めているが、わたしの主君の家来のうちの最も小さい一
隊長でさえ、どうして撃退することができようか。二五わたしがこの所

を滅ぼすために上ってきたのは、主の許しなしにしたことであろうか。主
がわたしにこの地に攻め上ってこれを滅ぼせと言われたのだ』。
二六その時ヒルキヤの子エリアキムおよびセブナとヨアはラブシャケに
言った、「どうぞ、アラム語でしもべどもに話してください。わたしたちは、
それがわかるからです。城壁の上にいる民の聞いているところで、わたし
たちにユダヤの言葉で話さないでください」。二七しかしラブシャケは彼ら
に言った、「わたしの主君は、あなたの主君とあなたにだけでなく、城壁
の上に座している人々にも、この言葉を告げるためにわたしをつかわした
のではないか。彼らも、あなたがたと共に自分の糞尿を食い飲みするに
至るであろう」。
二八そしてラブシャケは立ちあがり、ユダヤの言葉で大声に呼ばわって
言った。「大王、アッスリヤの王の言葉を聞け。二九王はこう仰せられる、

『あなたがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。彼はあなたがたをわたし
の手から救いだすことはできない。三〇ヒゼキヤが「主は必ずわれわれを
救い出される。この町はアッスリヤ王の手に陥ることはない」と言って
も、あなたがたは主を頼みとしてはならない』。三一あなたがたはヒゼキヤ
の言葉を聞いてはならない。アッスリヤの王はこう仰せられる、『あなたが
たはわたしと和解して、わたしに降服せよ。そうすればあなたがたはおの
おの自分のぶどうの実を食べ、おのおの自分のいちじくの実を食べ、おのお
の自分の井戸の水を飲むことができるであろう。三二やがてわたしが来て、
あなたがたを一つの国へ連れて行く。それはあなたがたの国のように穀物
とぶどう酒のある地、パンとぶどう畑のある地、オリブの木と蜜のある地
である。あなたがたは生きながらえることができ、死ぬことはない。ヒゼ
キヤが「主はわれわれを救われる」と言って、あなたがたを惑わしても彼

に聞いてはならない。三三諸国民の神々のうち、どの神がその国をアッス
リヤの王の手から救ったか。三四ハマテやアルパデの神々はどこにいるの
か。セパルワイム、ヘナおよびイワの神々はどこにいるのか。彼らはサマ
リヤをわたしの手から救い出したか。三五国々のすべての神々のうち、そ
の国をわたしの手から救い出した者があったか。主がどうしてエルサレム
をわたしの手から救い出すことができよう』」。
三六しかし民は黙して、ひと言も彼に答えなかった。王が命じて「彼に
答えてはならない」と言っておいたからである。三七こうしてヒルキヤの子
である宮内卿エリアキム、書記官セブナ、およびアサフの子である史官ヨ
アは衣を裂き、ヒゼキヤのもとに来て、ラブシャケの言葉を彼に告げた。
第一九章一ヒゼキヤ王はこれを聞いて、衣を裂き、荒布を身にまとっ
て主に宮に入り、二宮内卿エリアキムと書記官セブナおよび祭司のうちの

年長者たちに荒布をまとわせて、アモツの子預言者イザヤのもとにつか
わした。三彼らはイザヤに言った、「ヒゼキヤはこう申されます、『きょうは
悩みと、懲しめと、はずかしめの日です。胎児がまさに生れようとして、こ
れを産み出す力がないのです。四あなたの神、主はラブシャケがその主君
アッスリヤの王につかわされて、生ける神をそしったもろもろの言葉を聞
かれたかもしれません。そしてあなたの神、主はその聞いた言葉をとがめ
られるかもしれません。それゆえ、この残っている者のために祈をささげ
てください』」。五ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに来たとき、六イザ
ヤは彼らに言った、「あなたがたの主君にこう言いなさい、『主はこう仰せ
られる、アッスリヤの王の家来たちが、わたしをそしった言葉を聞いて恐
れるには及ばない。七見よ、わたしは一つの霊を彼らのうちに送って、一
つのうわさを聞かせ、彼を自分の国へ帰らせて、自分の国でつるぎに倒れ

させるであろう』。
八ラブシャケは引き返して、アッスリヤの王がリブナを攻めているとこ
ろへ行った。彼が王のラキシを去ったことを聞いたからである。九この時
アッスリヤの王はエチオピヤの王テルハカについて、「彼はあなたと戦う
ために出てきた」と人々がいうのを聞いたので、再び使者をヒゼキヤにつ
かわして言った、一〇「ユダの王ヒゼキヤにこう言いなさい、『あなたは、エ
ルサレムはアッスリヤの王の手に陥ることはない、と言うあなたの信頼
する神に欺かれてはならない。一一あなたはアッスリヤの王たちがもろも
ろの国々にした事、彼らを全く滅ぼした事を聞いている。どうしてあな
たが救われることができようか。一二わたしの父たちはゴザン、ハラン、レ
ゼフ、およびテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々
は彼らを救ったか。一三ハマテの王、アルパデの王、セパルワイムの町の
王、ヘナの王およびイワの王はどこにいるのか』」。

一四ヒゼキヤは使者の手から手紙を受け取ってそれを読み、主の宮にの
ぼっていって、主の前にそれをひろげ、一五そしてヒゼキヤは主の前に祈っ
て言った、「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、主よ、地の
すべての国のうちで、ただあなただけが神でいらせられます。あなたは天
と地を造られました。一六主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を
開いてごらんください。セナケリブが生ける神をそしるために書き送った
言葉をお聞きください。一七主よ、まことにアッスリヤの王たちはもろもろ
の民とその国々を滅ぼし、一八またその神々を火に投げ入れました。それ
らは神ではなく、人の手の作ったもので、木や石だから滅ぼされたのです。
一九われわれの神、主よ、どうぞ、今われわれを彼の手から救い出してくだ
さい。そうすれば地の国々は皆、主であるあなただけが神でいらせられる
ことを知るようになるでしょう」。二〇その時アモツの子イザヤは人をつか

わしてヒゼキヤに言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『アッ
スリヤの王セナケリブについてあなたがわたしに祈ったことは聞いた』。二
一主が彼について語られた言葉はこうである、
『処女であるシオンの娘は
あなたを侮り、あなたをあざける。
エルサレムの娘は
あなたのうしろで頭を振る。
二二あなたはだれをそしり、だれをののしったのか。
あなたはだれにむかって声をあげ、
目を高くあげたのか。
イスラエルの聖者にむかってしたのだ。
二三あなたは使者をもって主をそしって言った、

「わたしは多くの戦車をひきいて山々の頂にのぼり、
レバノンの奥に行き、
たけの高い香柏と最も良いいとすぎを切り倒し、
またその果の野営地に行き、
その密林にはいった。
二四わたしは井戸を掘って外国の水を飲んだ。
わたしは足の裏で、
エジプトのすべての川を踏みからした」。
二五あなたは聞かなかったか、
昔わたしがこれを定めたことを。
堅固な町々をあなたが荒塚とすることも、
いにしえの日からわたしが計画して

今これをおこなうのだ。
二六そのうちに住む民は力弱くおののき、恥をいだいて、
野の草のように、青菜のようになり、
育たないで枯れる屋根の草のようになった。
二七わたしはあなたのすわること、出入りすること、
わたしにむかって怒り叫んだことをも知っている。
二八あなたがわたしにむかって怒り叫んだことと、
あなたの高慢がわたしの耳にはいったため、
わたしはあなたの鼻に輪をつけ、
あなたの口にくつわをはめて、
あなたをもときた道へ引きもどすであろう』。
二九『あなたに与えるしるしはこれである。すなわち、ことしは落ち穂

からはえたものを食(た)べ、二年目(ねんめ)にはまたその落(お)ち穂(ぼ)からはえたものを食(た)べ、
三年目(ねんめ)には種(たね)をまき、刈(か)り入(い)れ、ぶどう畑(はたけ)を作(つく)ってその実(み)を食(た)べるであろ
う。三〇ユダの家(いえ)ののがれて残(のこ)る者(もの)は再(ふたた)び下(した)に根(ね)を張(は)り、上(うえ)に実(み)を結(むす)ぶで
あろう。三一すなわち残(のこ)る者(もの)がエルサレムから出(で)てき、のがれた者(もの)がシオ
ンの山(やま)から出(で)て来(く)るであろう。主(しゅ)の熱心(ねっしん)がこれをされるであろう』。
三二それゆえ、主(しゅ)はアッスリヤの王(おう)について、こう仰(おお)せられる、『彼(かれ)はこの
町(まち)にこない、またここに矢(や)を放(はな)たない、盾(たて)をもってその前(まえ)に来(く)ることなく、
また塁(るい)を築(きず)いてこれを攻(せ)めることはない。三三彼(かれ)は来(き)た道(みち)を帰(かえ)って、この
町(まち)に、はいることはない。主(しゅ)がこれを言(い)う。三四わたしは自分(じぶん)のため、また
わたしのしもべダビデのためにこの町(まち)を守(まも)って、これを救(すく)うであろう』。
三五その夜(よる)、主(しゅ)の使(つかい)が出(で)て、アッスリヤの陣営(じんえい)で十八万五千人(にん)を撃(う)ち殺(ころ)
した。人々(ひとびと)が朝早(あさはや)く起(お)きて見(み)ると、彼(かれ)らは皆(みな)、死体(したい)となっていた。三六アッ

スリヤの王セナケリブは立ち去り、帰って行ってニネベにいたが、三七その
神ニスロクの神殿で礼拝していた時、その子アデランメレクとシャレゼル
が、つるぎをもって彼を殺し、ともにアララテの地へ逃げて行った。そこ
でその子エサルハドンが代って王となった。

第二〇章一そのころ、ヒゼキヤは病気になって死にかかっていた。アモ
ツの子預言者イザヤは彼のところにきて言った、「主はこう仰せられます、
『家の人に遺言をなさい。あなたは死にます。生きながらえることはでき
ません』」。二そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて主に祈って言った、三「あ
あ主よ、わたしが真実を真心をもってあなたの前に歩み、あなたの目にか
なうことをおこなったのをどうぞ思い起してください」。そしてヒゼキヤ
は激しく泣いた。四イザヤがまだ中庭を出ないうちに主の言葉が彼に臨ん
だ、五「引き返して、わたしの民の君ヒゼキヤに言いなさい、『あなたの父

ダビデの神、主はこう仰せられる、わたしはあなたの祈を聞き、あなた
の涙を見た。見よ、わたしはあなたをいやす。三日目にはあなたは主の宮
に上るであろう。六かつ、わたしはあなたのよわいを十五年増す。わたし
はあなたと、この町とをアッスリヤの王の手から救い、わたしの名のため、
またわたしのしもべダビデのためにこの町を守るであろう』」。七そしてイ
ザヤは言った、「干しいちじくのひとかたまりを持ってきて、それを腫物に
つけさせなさい。そうすれば直るでしょう」。
八ヒゼキヤはイザヤに言った、「主がわたしをいやされる事と、三日目に
わたしが主の家に上ることについて、どんなしるしがありましょうか」。九
イザヤは言った、「主が約束されたことを行われることについては、主か
らこのしるしを得られるでしょう。すなわち日影が十度進むか、あるいは
十度退くかです」。一〇ヒゼキヤは答えた、「日影が十度進むことはたやす

い事です。むしろ日影を十度退かせてください」。一一そこで預言者イザ
ヤが主に呼ばわると、アハズの日時計の上に進んだ日影を、十度退かせ
られた。
一二そのころ、バラダンの子であるバビロンの王メロダクバラダンは、手紙
と贈り物を持たせて使節をヒゼキヤにつかわした。これはヒゼキヤが病ん
でいることを聞いたからである。一三ヒゼキヤは彼らを喜び迎えて、宝物
の蔵、金銀、香料、貴重な油および武器倉、ならびにその倉庫にあるす
べての物を彼らに見せた。家にある物も、国にある物も、ヒゼキヤが彼ら
に見せない物は一つもなかった。一四その時、預言者イザヤはヒゼキヤ王
のもとにきて言った、「あの人々は何を言いましたか。どこからきたのです
か」。ヒゼキヤは言った、「彼らは遠い国から、バビロンからきたのです」。
一五イザヤは言った、「彼らはあなたの家で何を見ましたか」。ヒゼキヤは

答えて言った、「わたしの家にある物を皆見ました。わたしの倉庫のうちに
は、わたしが彼らに見せない物は一つもありません」。
一六そこでイザヤはヒゼキヤに言った、「主の言葉を聞きなさい、一七『主
は言われる、見よ、すべてあなたの家にある物、および、あなたの先祖たち
が今日までに積みたくわえた物の、バビロンに運び去られる日が来る。何
も残るものはないであろう。一八また、あなたの身から出るあなたの子たち
も連れ去られ、バビロンの王の宮殿で宦官となるであろう』」。一九ヒゼキ
ヤはイザヤに言った、「あなたが言われた主の言葉は結構です」。彼は「せ
めて自分が世にあるあいだ、平和と安全があれば良いことではなかろうか」
と思ったからである。
二〇ヒゼキヤのその他の事績とその武勇、および、彼が貯水池と水道を作っ
て、町に水を引いた事は、ユダの王の歴代志の書にしるされているではな

いか。二一ヒゼキヤはその先祖たちと共に眠って、その子マナセが代って
王となった。

第二一章
一マナセは十二歳で王となり、五十五年の間、エルサレムで世
を治めた。母の名はヘフジバといった。二マナセは主がイスラエルの人々
の前から追い払われた国々の民の憎むべきおこないにならって、主の目の
前に悪をおこなった。三彼は父ヒゼキヤがこわした高き所を建て直し、ま
たイスラエルの王アハブがしたようにバアルのために祭壇を築き、アシラ
像を造り、かつ天の万象を拝んで、これに仕えた。四また主の宮のうち
に数個の祭壇を築いた。これは主が「わたしの名をエルサレムに置こう」
と言われたその宮である。五彼はまた主の宮の二つの庭に天の万象のた
めに祭壇を築いた。六またその子を火に焼いてささげ物とし、占いをし、
魔術を行い、口寄せと魔法使を用い、主の目の前に多くの悪を行って、

主の怒りを引き起した。七彼はまたアシラの彫像を作って主の宮に置い
た。主はこの宮についてダビデとその子ソロモンに言われたことがある、
「わたしはこの宮と、わたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだ
エルサレムとに、わたしの名を永遠に置く。八もし、彼らがわたしが命じ
たすべての事、およびわたしのしもべモーセが命じたすべての律法を守り
行うならば、イスラエルの足を、わたしが彼らの先祖たちに与えた地か
ら、重ねて迷い出させないであろう」。九しかし彼らは聞きいれなかった。
マナセが人々をいざなって悪を行ったことは、主がイスラエルの人々の
前に滅ぼされた国々の民よりもはなはだしかった。

一〇そこで主はそのしもべである預言者たちによって言われた、一一「ユ
ダの王マナセがこれらの憎むべき事を行い、彼の先にあったアモリびと
の行ったすべての事よりも悪い事を行い、またその偶像をもってユダに

罪を犯させたので、一二イスラエルの神、主はこう仰せられる、見よ、わた
しはエルサレムとユダに災をくだそうとしている。これを聞く者は、そ
の耳が二つながら鳴るであろう。一三わたしはサマリヤをはかった測りな
わと、アハブの家に用いた下げ振りをエルサレムにほどこし、人が皿をぬ
ぐい、これをぬぐって伏せるように、エルサレムをぬぐい去る。一四わたし
は、わたしの嗣業の民の残りを捨て、彼らを敵の手に渡す。彼らはもろ
もろの敵のえじきとなり、略奪にあうであろう。一五これは彼らの先祖た
ちがエジプトを出た日から今日に至るまで、彼らがわたしの目の前に悪を
行って、わたしを怒らせたためである」。
一六マナセはまた主の目の前に悪を行って、ユダに罪を犯させたその罪
のほかに、罪なき者の血を多く流して、エルサレムのこの果から、かの果
にまで満たした。

一七マナセのその他の事績と、彼がおこなったすべての事およびその犯
した罪は、ユダの王の歴代志の書にしるされているではないか。一八マナ
セは先祖たちと共に眠って、その家の園すなわちウザの園に葬られ、そ
の子アモンが代って王となった。

一九アモンは王となった時二十二歳であって、エルサレムで二年の間、
世を治めた。母はヨテバのハルツの娘で、名をメシュレメテといった。二
〇アモンはその父マナセのおこなったように、主の目の前に悪を行った。
二一すなわち彼はすべてその父の歩んだ道に歩み、父の仕えた偶像に仕え
て、これを拝み、二二先祖たちの神、主を捨てて、主の道に歩まなかった。
二三アモンの家来たちはついに彼に敵して徒党を結び、王をその家で殺し
たが、二四国の民は、アモン王に敵して徒党を結んだ者をことごとく撃ち
殺した。そして国の民はアモンの子ヨシヤを王としてアモンに代らせた。

二五アモンのその他の事績は、ユダの王の歴代志の書にしるされているでは
ないか。二六アモンはウザの園にある墓に葬られ、その子ヨシヤが代って
王となった。

第二二章一ヨシヤは八歳で王となり、エルサレムで三十一年の間、世を
治めた。母はボヅカテのアダヤの娘で、名をエデダといった。二ヨシヤは
主の目にかなう事を行い、先祖ダビデの道に歩んで右にも左にも曲らな
かった。

三ヨシヤ王の第十八年に王はメシュラムの子アザリヤの子である書記官
シャパンを主の宮につかわして言った、四「大祭司ヒルキヤのもとへのぼっ
て行って、主に宮にはいってきた銀、すなわち門を守る者が民から集めた
ものの総額を彼に数えさせ、五それを工事をつかさどる主の宮の監督者の
手に渡させ、彼らから主の宮で工事をする者にそれを渡して、宮の破れを

繕わせなさい。六すなわち木工と建築師と石工にそれを渡し、また宮を
繕う材木と切り石を買わせなさい。七ただし彼らは正直に事を行うか
ら、彼らに渡した銀については彼らと計算するに及ばない」。
八その時大祭司ヒルキヤは書記官シャパンに言った、「わたしは主の宮で
律法の書を見つけました」。そしてヒルキヤがその書物をシャパンに渡し
たので、彼はそれを読んだ。九書記官シャパンは王のもとへ行き、王に報告
して言った、「しもべどもは宮にあった銀を皆出して、それを工事をつかさ
どる主の宮の監督者の手に渡しました」。一〇書記官シャパンはまた王に
告げて「祭司ヒルキヤはわたしに一つの書物を渡しました」と言い、それ
を王の前で読んだ。
一一王はその律法の書の言葉を聞くと、その衣を裂いた。一二そして王
は祭司ヒルキヤと、シャパンの子アヒカムと、ミカヤの子アクボルと、書記官

シャパンと、王の大臣アサヤとに命じて言った、一三「あなたがたは行っ
て、この見つかった書物の言葉について、わたしのため、民のため、また
ユダ全国のために主に尋ねなさい。われわれの先祖たちがこの書物の言葉
に聞き従わず、すべてわれわれについてしるされている事を行わなかっ
たために、主はわれわれにむかって、大いなる怒りを発しておられるから
です」。
一四そこで祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、シャパンおよびアサヤは
シャルムの妻である女預言者ホルダのもとへ行った。シャルムはハルハス
の子であるテクワの子で、衣装べやを守る者であった。その時ホルダはエ
ルサレムの下町に住んでいた。彼らがホルダに告げたので、一五ホルダは
彼らに言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられます、『あなたがたを
わたしにつかわした人に言いなさい。一六主はこう言われます、見よ、わた

しはユダの王が読んだあの書物のすべての言葉にしたがって、災をこの
所と、ここに住んでいる民に下そうとしている。
一七彼らがわたしを捨て
て他の神々に香をたき、自分たちの手で作ったもろもろの物をもって、わ
たしを怒らせたからである。それゆえ、わたしはこの所にむかって怒り
の火を発する。これは消えることがないであろう』。
一八ただし主に尋ねる
ために、あなたがたをつかわしたユダの王にはこう言いなさい、『あなたが
聞いた言葉についてイスラエルの神、主はこう仰せられます、
一九あなた
は、わたしがこの所と、ここに住んでいる民にむかって、これは荒れ地と
なり、のろいとなるであろうと言うのを聞いた時、心に悔い、主の前にへ
りくだり、衣を裂いてわたしの前に泣いたゆえ、わたしもまたあなたの言
うことを聞いたのであると主は言われる。
二〇それゆえ、見よ、わたしはあ
なたを先祖たちのもとに集める。あなたは安らかに墓に集められ、わたし

がこの所に下すもろもろの災を目に見ることはないであろう』」。彼ら
はこの言葉を王に持ち帰った。

第二三章 一そこで王は人をつかわしてユダとエルサレムの長老たちをこ
とごとく集めた。二そして王はユダのもろもろの人々と、エルサレムのす
べての住民および祭司、預言者ならびに大小のすべての民を従えて主
の宮にのぼり、主の宮で見つかった契約の書の言葉をことごとく彼らに読
み聞かせた。三次いで王は柱のかたわらに立って、主の前に契約を立て、
主に従って歩み、心をつくし精神をつくして、主の戒めと、あかしと、
定めとを守り、この書物にしるされているこの契約の言葉を行うことを
誓った。民は皆その契約に加わった。
四こうして王は大祭司ヒルキヤと、それに次ぐ祭司たちおよび門を守る者
どもに命じて、主の神殿からバアルとアシラと天の万象とのために作っ

たもろもろの器を取り出させ、エルサレムの外のキデロンの野でそれを焼
き、その灰をベテルに持って行かせた。
五また、ユダの町々とエルサレムの
周囲にある高き所で香をたくためにユダの王たちが任命した祭司たちを
廃し、またバアルと日と月と星宿と天の万象とに香をたく者どもをも
廃した。
六彼はまた主の宮からアシラ像を取り出し、エルサレムの外のキ
デロン川に持って行って、キデロン川でそれを焼き、それを打ち砕いて粉
とし、その粉を民の墓に投げすてた。
七また主の宮にあった神殿男娼の
家をこわした。そこは女たちがアシラ像のために掛け幕を織る所であっ
た。
八彼はまたユダの町々から祭司をことごとく召しよせ、また祭司が香
をたいたゲバからベエルシバまでの高き所を汚し、また門にある高き所
をこわした。これらの高き所は町のつかさヨシュアの門の入口にあり、町
の門にはいる人の左にあった。
九高き所の祭司たちはエルサレムで主の

祭壇にのぼることをしなかったが、その兄弟たちのうちにあって種入れぬ
パンを食べた。一〇王はまた、だれもそのむすこ娘を火に焼いて、モレク
にささげ物とすることのないように、ベンヒンノムの谷にあるトペテを汚
した。一一またユダの王たちが太陽にささげて主の宮の門に置いた馬を、
境内にある侍従ナタンメレクのへやのかたわらに移し、太陽の車を火で
焼いた。一二また王はユダの王たちがアハズの高殿の屋上に造った祭壇
と、マナセが主の宮の二つの庭に造った祭壇とをこわして、それを打ち砕
き、砕けたものをキデロン川に投げすてた。一三また王はイスラエルの王ソ
ロモンが昔シドンびとの憎むべき者アシタロテと、モアブびとの憎むべき
者ケモシと、アンモンの人々の憎むべき者ミルコムのためにエルサレムの
東、滅亡の山の南に築いた高き所を汚した。一四またもろもろの石柱
を打ち砕き、アシラ像を切り倒し、人の骨をもってその所を満たした。

一五また、ベテルにある祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネバテの子
ヤラベアムが造った高き所、すなわちその祭壇と高き所とを彼はこわ
し、その石を打ち砕いて粉とし、かつアシラ像を焼いた。一六そしてヨシ
ヤは身をめぐらして山に墓のあるのを見、人をつかわしてその墓から骨を
取らせ、それをその祭壇の上で焼いて、それを汚した。昔、神の人が主
の言葉としてこの事を呼ばわり告げたが、そのとおりになった。一七その時
ヨシヤは「あそこに見える石碑は何か」と尋ねた。町の人々が彼に「あれ
はあなたがベテルの祭壇に対して行われたこれらの事を、ユダからきて
預言した神の人の墓です」と言ったので、一八彼は言った、「そのままにし
て置きなさい。だれもその骨を移してはならない」。それでその骨と、サマ
リヤからきた預言者の骨には手をつけなかった。一九またイスラエルの王
たちがサマリヤの町々に造って、主を怒らせた高き所の家も皆ヨシヤは

取り除いて、彼がすべてベテルに行ったようにこれに行った。二〇彼はま
た、そこにあった高き所の祭司たちを皆祭壇の上で殺し、人の骨を祭壇
の上で焼いた。こうして彼はエルサレムに帰った。
二一そして王はすべての民に命じて、「あなたがたはこの契約の書にしる
されているように、あなたがたの神、主に過越の祭を執り行いなさい」
と言った。二二さばきづかさがイスラエルをさばいた日からこのかた、また
イスラエルの王たちとユダの王たちの世にも、このような過越の祭を執
り行ったことはなかったが、二三ヨシヤ王の第十八年に、エルサレムでこ
の過越の祭を主に執り行ったのである。
二四ヨシヤはまた祭司ヒルキヤが主の宮で見つけた書物にしるされてい
る律法の言葉を確実に行うために、口寄せと占い師と、テラピムと偶像
およびユダの地とエルサレムに見られるもろもろの憎むべき者を取り除い

た。二五ヨシヤのように心をつくし、精神をつくし、力をつくしてモー
セのすべての律法にしたがい、主に寄り頼んだ王はヨシヤの先にはなく、
またその後にも彼のような者は起らなかった。
二六けれども主はなおユダにむかって発せられた激しい大いなる怒りを
やめられなかった。これはマナセがもろもろの腹だたしい行いをもって
主を怒らせたためである。二七それゆえ主は言われた、「わたしはイスラエ
ルを移したように、ユダをもわたしの目の前から移し、わたしが選んだこ
のエルサレムの町と、わたしの名をそこに置こうと言ったこの宮とを捨て
るであろう」。
二八ヨシヤのその他の事績と、彼が行ったすべての事は、ユダの王の歴代志
の書にしるされているではないか。二九ヨシヤの世にエジプトの王パロ・ネ
コが、アッスリヤの王のところへ行こうと、ユフラテ川をさして上ってき

たので、ヨシヤ王は彼を迎え撃とうと出て行ったが、パロ・ネコは彼を見
るや、メギドにおいて彼を殺した。三〇その家来たちは彼の死体を車に載
せ、メギドからエルサレムに運んで彼の墓に葬った。国の民はヨシヤの
子エホアハズを立て、彼に油を注ぎ、王として父に代らせた。
三一エホアハズは王となった時二十三歳で、エルサレムで三か月の間、
世を治めた。母はリブナのエレミヤの娘で、名をハムタルといった。三二
エホアハズは先祖たちがすべて行ったように主の目の前に悪を行ったが、
三三パロ・ネコは彼をハマテの地のリブラにつないで置いて、エルサレムで
世を治めることができないようにした。また銀百タラントと金一タラント
のみつぎを国に課した。三四そしてパロ・ネコはヨシヤの子エリアキムを
父ヨシヤに代って王とならせ、名をエホヤキムと改め、エホアハズをエ
ジプトへ引いて行った。エホアハズはエジプトへ行ってそこで死んだ。三

五 エホヤキムは金銀をパロに送った。しかし彼はパロの命に従って金を
送るために国に税を課し、国の民おのおのからその課税にしたがって金銀
をきびしく取り立てて、それをパロ・ネコに送った。
三六 エホヤキムは二十五歳で王となり、エルサレムで十一年の間、世を
治めた。母はルマのペダヤの娘で、名をゼビダといった。
三七 エホヤキム
は先祖たちがすべて行ったように主の目の前に悪を行った。

第二四章
一 エホヤキムの世にバビロンの王ネブカデネザルが上ってきた
ので、エホヤキムは彼に隷属して三年を経たが、ついに翻って彼にそむ
いた。
二 主はカルデヤびとの略奪隊、スリヤびとの略奪隊、モアブびと
の略奪隊、アンモンびとの略奪隊をつかわしてエホヤキムを攻められた。
すなわちユダを攻め、これを滅ぼすために彼らをつかわされた。主がその
しもべである預言者たちによって語られた言葉のとおりである。
三 これは

全く主の命によってユダに臨んだもので、ユダを主の目の前から払い除
くためであった。すなわちマナセがすべておこなったその罪のため、四ま
た彼が罪なき人の血を流し、罪なき人の血をエルサレムに満たしたためで
あって、主はその罪をゆるそうとはされなかった。五エホヤキムのその他
の事績と、彼がおこなったすべての事は、ユダの王の歴代志の書にしるさ
れているではないか。六エホヤキムは先祖たちとともに眠り、その子エホ
ヤキンが代って王となった。七エジプトの王は再びその国から出てこな
かった。バビロンの王がエジプトの川からユフラテ川まで、すべてエジプ
トの王に属するものを取ったからである。
八エホヤキンは王となった時十八歳で、エルサレムで三か月の間、世を
治めた。母はエルサレムのエルナタンの娘で、名をネホシタといった。九
エホヤキンはすべてその父がおこなったように主の目の前に悪を行った。

一〇そのころ、バビロンの王ネブカデネザルの家来たちはエルサレムに攻
め上って、町を囲んだ。
一一その家来たちが町を囲んでいたとき、バビロン
の王ネブカデネザルもまた町に攻めてきた。
一二ユダの王エホヤキンはそ
の母、その家来、そのつかさたち、および侍従たちと共に出て、バビロンの
王に降服したので、バビロンの王は彼を捕虜とした。これはネブカデネザ
ルの治世の第八年であった。
一三彼はまた主の宮のもろもろの宝物および
王の家の宝物をことごとく持ち出し、イスラエルの王ソロモンが造って主
の神殿に置いたもろもろの金の器を切りこわした。主が言われたとおり
である。
一四彼はまたエルサレムのすべての市民、およびすべてのつかさと
すべての勇士、ならびにすべての木工と鍛冶一万人を捕えて行った。残っ
た者は国の民の貧しい者のみであった。
一五さらに彼はエホヤキンをバビ
ロンに捕えて行き、また王の母、王の妻たち、および侍従と国のうちのお

もな人々をも、エルサレムからバビロンへ捕えて行った。一六またバビロン
の王はすべて勇敢な者七千人、木工と鍛冶一千人ならびに強くて良く戦
う者をみな捕えてバビロンへ連れて行った。一七そしてバビロンの王はエ
ホヤキンの父の兄弟マッタニヤを王としてエホヤキンに代え、名をゼデ
キヤと改めた。
一八ゼデキヤは二十一歳で王となり、エルサレムで十一年の間、世を治
めた。母はリブナのエレミヤの娘で、名をハムタルといった。一九ゼデキ
ヤはすべてエホヤキムがおこなったように主の目の前に悪を行った。二〇
エルサレムとユダにこのような事の起ったのは主の怒りによるので、主は
ついに彼らをみ前から払いすてられた。
さてゼデキヤはバビロンの王にそむいた。
第二五章一そこでゼデキヤの治世の第九年の十月十日に、バビロンの王

ネブカデネザルはもろもろの軍勢を率い、エルサレムにきて、これにむかっ
て陣を張り、周囲にとりでを築いてこれを攻めた。二こうして町は囲まれ
て、ゼデキヤ王の第十一年にまで及んだが、三その四月九日になって、町
のうちにききんが激しくなり、その地の民に食物がなくなった。四町の
一角がついに破れたので、王はすべての兵士とともに、王の園のかたわら
にある二つの城壁のあいだの門の道から夜のうちに逃げ出して、カルデ
ヤびとが町を囲んでいる間に、アラバの方へ落ち延びた。五しかしカルデ
ヤびとの軍勢は王を追い、エリコの平地で彼に追いついた。彼の軍勢はみ
な彼を離れて散り去ったので、六カルデヤびとは王を捕え、彼をリブラに
いるバビロンの王のもとへ引いていって彼の罪を定め、七ゼデキヤの子た
ちをゼデキヤの目の前で殺し、ゼデキヤの目をえぐり、足かせをかけてバ
ビロンへ連れて行った。

八バビロンの王ネブカデネザルの第十九年の五月七日に、バビロンの
王の臣、侍衛の長ネブザラダンがエルサレムにきて、九主の宮と王の家
とエルサレムのすべての家を焼いた。すなわち火をもってすべての大きな
家を焼いた。一〇また侍衛の長と共にいたカルデヤびとのすべての軍勢は
エルサレムの周囲の城壁を破壊した。一一そして侍衛の長ネブザラダン
は、町に残された民およびバビロン王に降服した者と残りの群衆を捕え
移した。一二ただし侍衛の長はその地の貧しい者を残して、ぶどうを作る
者とし、農夫とした。

一三カルデヤびとはまた主の宮の青銅の柱と、主の宮の洗盤の台と、
青銅の海を砕いて、その青銅をバビロンに運び、一四またつぼと、十能
と、心切りばさみと、香を盛る皿およびすべて神殿の務に用いる青銅の
器、一五また心取り皿と鉢を取り去った。侍衛の長はまた金で作った物

と銀で作った物を取り去った。一六ソロモンが主の宮のために造った二つ
の柱と、一つの海と洗盤の台など、これらのもろもろの器の青銅の重
さは量ることができなかった。一七一つの柱の高さは十八キュビトで、そ
の上に青銅の柱頭があり、柱頭の高さは三キュビトで、柱頭の周囲に
網細工とざくろがあって、みな青銅であった。他の柱もその網細工もこ
れと同じであった。

一八侍衛の長は祭司長セラヤと次席の祭司ゼパニヤと三人の門を守る
者を捕え、一九また兵士をつかさどるひとりの役人と、王の前にはべる者の
うち、町で見つかった者五人と、その地の民を募った軍勢の長の書記官
と、町で見つかったその地の民六十人を町から捕え去った。二〇侍衛の長
ネブザラダンは彼らを捕えて、リブラにいるバビロンの王のもとへ連れて
行ったので、二一バビロンの王はハマテの地のリブラで彼らを撃ち殺した。

このようにしてユダはその地から捕え移された。
二二さてバビロンの王ネブカデネザルはユダの地に残してとどまらせた
民の上に、シャパンの子アヒカムの子であるゲダリヤを立てて総督とした。
二三時に軍勢の長たちおよびその部下の人々は、バビロンの王がゲダリヤ
を総督としたことを聞いて、ミヅパにいるゲダリヤのもとにきた。すなわ
ちネタニヤの子イシマエル、カレヤの子ヨハナン、ネトパびとタンホメテ
の子セラヤ、マアカびとの子ヤザニヤおよびその部下の人々がゲダリヤの
もとにきた。二四ゲダリヤは彼らとその部下の人々に誓って言った、「あな
たがたはカルデヤびとのしもべとなることを恐れてはならない。この地に
住んで、バビロンの王に仕えなさい。そうすればあなたがたは幸福を得る
でしょう」。二五ところが七月になって、王の血統のエリシャマの子である
ネタニヤの子イシマエルは十人の者と共にきて、ゲダリヤを撃ち殺し、ま

た彼と共にミヅパにいたユダヤ人と、カルデヤびとを殺した。二六そのた
め、大小の民および軍勢の長たちは、みな立ってエジプトへ行った。彼
らはカルデヤびとを恐れたからである。
二七ユダの王エホヤキンが捕え移されて後三十七年の十二月二十七日、
すなわちバビロンの王エビルメロダクの治世の第一年に、王はユダの王エ
ホヤキンを獄屋から出して二八ねんごろに彼を慰め、その位を彼と共に
バビロンにいる王たちの位よりも高くした。二九こうしてエホヤキンはそ
の獄屋の衣を脱ぎ、一生の間、常に王の前で食事した。三〇彼は一生
の間、たえず日々の分を王から賜わって、その食物とした。

歴代志上

第一章
一アダム、セツ、エノス、二ケナン、マハラレル、ヤレド、三エノ
ク、メトセラ、ラメク、四ノア、セム、ハム、ヤペテ。
五ヤペテの子らはゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メセク、テ
ラス。六ゴメルの子らはアシケナズ、デパテ、トガルマ。七ヤワンの子らは
エリシャ、タルシシ、キッテム、ロダニム。
八ハムの子らはクシ、エジプト、プテ、カナン。九クシの子らはセバ、ハ
ビラ、サブタ、ラアマ、サブテカ。ラアマの子らはシバとデダン。一〇クシ
はニムロデを生んだ。ニムロデは初めて世の権力ある者となった。
一一エジプトはルデびと、アナムびと、レハブびと、ナフトびと、一二パ
テロスびと、カスルびと、カフトルびとを生んだ。カフトルびとからペリ

シテびとが出（で）た。
一三カナンは長子（ちょうし）シドンとヘテを生（う）んだ。一四またエブスびと、アモリび
と、ギルガシびと、一五ヒビびと、アルキびと、セニびと、一六アルワデび
と、ゼマリびと、ハマテびとを生（う）んだ。
一七セムの子（こ）らはエラム、アシュル、アルパクサデ、ルデ、アラム、ウズ、
ホル、ゲテル、メセクである。一八アルパクサデはシラを生（う）み、シラはエベル
を生（う）んだ。一九エベルにふたりの子（こ）が生（うま）れた。ひとりの名（な）はペレグ――彼（かれ）
の代（よ）に地（ち）の民（たみ）が散（ち）り分（わか）れたからである――その弟（おとうと）の名（な）はヨクタンといっ
た。二〇ヨクタンはアルモダデ、シャレフ、ハザル・マウテ、エラ、二一ハ
ドラム、ウザル、デクラ、二二エバル、アビマエル、シバ、二三オフル、ハ
ビラ、ヨバブを生（う）んだ。これらはみなヨクタンの子（こ）である。
二四セム、アルパクサデ、シラ、二五エベル、ペレグ、リウ、二六セルグ、
ナホル、テラ、二七アブラムすなわちアブラハムである。

二八アブラハムの子らはイサクとイシマエルである。二九彼らの子孫は次
のとおりである。イシマエルの長子はネバヨテ、次はケダル、アデビエル、
ミブサム、三〇ミシマ、ドマ、マッサ、ハダデ、テマ、三一エトル、ネフシ、
ケデマ。これらはイシマエルの子孫である。三二アブラハムのそばめケトラ
の子孫は次のとおりである。彼女はジムラン、ヨクシャン、メダン、ミデ
アン、イシバク、シュワを産んだ。ヨクシャンの子らはシバとデダンであ
る。三三ミデアンの子らはエパ、エペル、ヘノク、アビダ、エルダア。これ
らはみなケトラの子孫である。

三四アブラハムはイサクを生んだ。イサクの子らはエサウとイスラエル。
三五エサウの子らはエリパズ、リウエル、エウシ、ヤラム、コラ。三六エリ
パズの子らはテマン、オマル、ゼピ、ガタム、ケナズ、テムナ、アマレク。
三七リウエルの子らはナハテ、ゼラ、シャンマ、ミッザ。

三八セイルの子らはロタン、ショバル、ヂベオン、アナ、デション、エゼ
ル、デシャン。三九ロタンの子らはホリとホマム。ロタンの妹はテムナ。
四〇ショバルの子らはアルヤン、マナハテ、エバル、シピ、オナム。ヂベオ
ンの子らはアヤとアナ。四一アナの子はデション。デションの子らはハムラ
ン、エシバン、イテラン、ケラン。四二エゼルの子らはビルハン、ザワン、
ヤカン。デシャンの子らはウズとアラン。

四三イスラエルの人々を治める王がまだなかった時、エドムの地を治め
た王たちは次のとおりである。ベオルの子ベラ。その都の名はデナバと
いった。四四ベラが死んで、ボズラのゼラの子ヨバブが代って王となった。
四五ヨバブが死んで、テマンびとの地のホシャムが代って王となった。四六
ホシャムが死んで、ベダテの子ハダデが代って王となった。彼はモアブの
野でミデアンを撃った。彼の都の名はアビテといった。四七ハダデが死ん

で、マスレカのサムラが代って王となった。四八サムラが死んで、ユフラテ
川のほとりのレホボテのサウルが代って王となった。四九サウルが死んで、
アクボルの子バアル・ハナンが代って王となった。五〇バアル・ハナンが死
んで、ハダデが代って王となった。彼の都の名はパイといった。彼の妻
はマテレデの娘であって、名をメヘタベルといった。マテレデはメザハブ
の娘である。五一ハダデも死んだ。

エドムの族長は、テムナ侯、アルヤ侯、エテテ侯、五二アホリバマ侯、
エラ侯、ピノン侯、五三ケナズ侯、テマン侯、ミブザル侯、五四マグデエル
侯、イラム侯。これらはエドムの族長である。

第二章 一イスラエルの子らは次のとおりである。ルベン、シメオン、レ
ビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、二ダン、ヨセフ、ベニヤミン、ナフタリ、
ガド、アセル。三ユダの子らはエル、オナン、シラである。この三人はカナ

ンの女バテシュアがユダによって産んだ者である。ユダの長子エルは主
の前に悪を行ったので、主は彼を殺された。四ユダの嫁タマルはユダに
よってペレヅとゼラを産んだ。ユダの子らは合わせて五人である。
五ペレヅの子らはヘヅロンとハムル。六ゼラの子らはジムリ、エタン、ヘ
マン、カルコル、ダラで、合わせて五人である。七カルミの子はアカル。ア
カルは奉納物について罪を犯し、イスラエルを悩ました者である。八エタ
ンの子はアザリヤである。
九ヘヅロンに生れた子らはエラメル、ラム、ケルバイである。一〇ラムは
アミナダブを生み、アミナダブはユダの子孫のつかさナションを生んだ。一
一ナションはサルマを生み、サルマはボアズを生み、一二ボアズはオベデを
生み、オベデはエッサイを生んだ。一三エッサイは長子エリアブ、次にアビ
ナダブ、第三にシメア、一四第四にネタンエル、第五にラダイ、一五第六に

オゼム、第七にダビデを生んだ。一六彼らの姉妹はゼルヤとアビガイルであ
る。ゼルヤの産んだ子はアビシャイ、ヨアブ、アサヘルの三人である。一七
アビガイルはアマサを産んだ。アマサの父はイシマエルびとエテルである。
一八ヘヅロンの子カレブはその妻アズバおよびエリオテによって子をもう
けた。その子らはエシル、ショバブ、アルドンである。一九カレブはアズバ
が死んだのでエフラタをめとった。エフラタはカレブによってホルを産ん
だ。二〇ホルはウリを生み、ウリはベザレルを生んだ。
二一そののちヘヅロンはギレアデの父マキルの娘の所にはいった。彼
が彼女をめとったときは六十歳であった。彼女はヘヅロンによってセグブ
を産んだ。二二セグブはヤイルを生んだ。ヤイルはギレアデの地に二十三の
町をもっていた。二三しかしゲシュルとアラムは彼らからハボテ・ヤイルお
よびケナテとその村里など合わせて六十の町を取った。これらはみなギレ

アデの父マキルの子孫であった。二四ヘヅロンが死んだのち、カレブは父ヘ
ヅロンの妻エフラタの所にはいった。彼女は彼にテコアの父アシュルを
産んだ。
二五ヘヅロンの長子エラメルの子らは長子ラム、次はブナ、オレン、オ
ゼム、アヒヤである。二六エラメルはまたほかの妻をもっていた。名をアタ
ラといって、オナムの母である。二七エラメルの長子ラムの子らはマアツ、
ヤミン、エケルである。二八オナムの子らはシャンマイとヤダである。シャ
ンマイの子らはナダブとアビシュルである。二九アビシュルの妻の名はア
ビハイルといって、アバンとモリデを産んだ。三〇ナダブの子らはセレデと
アッパイムである。セレデは子をもたずに死んだ。三一アッパイムの子はイ
シ、イシの子はセシャン、セシャンの子はアヘライである。三二シャンマイ
の兄弟ヤダの子らはエテルとヨナタンである。エテルは子をもたずに死ん

だ。三三ヨナタンの子らはペレテとザザである。以上はエラメルの子孫で
ある。三四セシャンには男の子はなく、ただ女の子のみであったが、彼
はヤルハと呼ぶエジプトびとの奴隷をもっていたので、三五セシャンは娘
を奴隷ヤルハに与えてその妻とさせた。彼女はヤルハによってアッタイを
産んだ。三六アッタイはナタンを生み、ナタンはザバデを生み、三七ザバデ
はエフラルを生み、エフラルはオベデを生み、三八オベデはエヒウを生み、
エヒウはアザリヤを生み、三九アザリヤはヘレヅを生み、ヘレヅはエレアサ
を生み、四〇エレアサはシスマイを生み、シスマイはシャルムを生み、四一
シャルムはエカミヤを生み、エカミヤはエリシャマを生んだ。

四二エラメルの兄弟であるカレブの子らは長子をマレシャといってジフ
の父である。マレシャの子はヘブロン。四三ヘブロンの子らはコラ、タップ
ア、レケム、シマである。四四シマはラハムを生んだ。ラハムはヨルカムの

父である。またレケムはシャンマイを生んだ。四五シャンマイの子はマオ
ン。マオンはベテヅルの父である。四六カレブのそばめエパはハラン、モザ、
ガゼズを産んだ。ハランはガゼズを生んだ。四七エダイの子らはレゲム、ヨ
タム、ゲシャン、ペレテ、エパ、シャフである。四八カレブのそばめマアカ
はシベルとテルハナを産み、四九またマデマンナの父シャフおよびマクベナ
とギベアの父シワを産んだ。カレブの娘はアクサである。五〇これらはカ
レブの子孫であった。
エフラタの長子ホルの子らはキリアテ・ヤリムの父ショバル、五一ベツ
レヘムの父サルマおよびベテガデルの父ハレフである。五二キリアテ・ヤリ
ムの父ショバル子らはハロエとメヌコテびとの半ばである。五三キリアテ・
ヤリムの氏族はイテルびと、プテびと、シュマびと、ミシラびとであって、
これらからザレアびとおよびエシタオルびとが出た。五四サルマの子らはベ

ツレヘム、ネトパびと、アタロテ・ベテ・ヨアブ、マナハテびとの半ばお
よびゾリびとである。五五またヤベツに住んでいた書記の氏族テラテびと、
シメアテびと、スカテびとである。これらはケニびとであってレカブの家
の先祖ハマテから出た者である。
第三章一ヘブロンで生れたダビデの子らは次のとおりである。長子はア
ムノンでエズレルびとアヒノアムから生れ、次はダニエルでカルメルびと
アビガイルから生れ、二第三はアブサロムでゲシュルの王タルマイの娘マ
アカの産んだ子、第四はアドニヤでハギテの産んだ子、三第五はシパテヤ
でアビタルから生れ、第六はイテレアムで、彼の妻エグラから生れた。四
この六人はヘブロンで彼に生れた。ダビデがそこで王となっていたのは七
年六か月、エルサレムで王となっていたのは三十三年であった。五エルサ
レムで生れたものは次のとおりである。すなわちシメア、ショバブ、ナタ

ン、ソロモン。この四人はアンミエルの娘バテシュアから生れた。六また
イブハル、エリシャマ、エリペレテ、七ノガ、ネペグ、ヤピア、八エリシャ
マ、エリアダ、エリペレテの九人、九これらはみなダビデの子である。この
ほかに、そばめどもの産んだ子らがあり、タマルは彼らの姉妹であった。
一〇ソロモンの子はレハベアム、その子はアビヤ、その子はアサ、その子
はヨシャパテ、一一その子はヨラム、その子はアハジヤ、その子はヨアシ、
一二その子はアマジヤ、その子はアザリヤ、その子はヨタム、一三その子は
アハズ、その子はヒゼキヤ、その子はマナセ、一四その子はアモン、その子
はヨシヤ、一五ヨシヤの子らは長子ヨハナン、次はエホヤキム、第三はゼデ
キヤ、第四はシャルムである。一六エホヤキムの子孫はその子はエコニア、
その子はゼデキヤである。一七捕虜となったエコニヤの子らはその子シャル
テル、一八マルキラム、ペダヤ、セナザル、エカミア、ホシャマ、ネダビヤで
ある。一九ペダヤの子らはゼルバベルとシメイである。ゼルバベルの子らは

メシュラムとハナニヤ。シロミテは彼らの姉妹である。二〇またハシュバ、
オヘル、ベレキヤ、ハサデヤ、ユサブ・ヘセデの五人がある。二一ハナニヤ
の子らはペラテヤとエシャヤ、その子レパヤ、その子アルナン、その子オ
バデヤ、その子シカニヤである。二二シカニヤの子らはシマヤ。シマヤの子
らはハットシ、イガル、バリア、ネアリヤ、シャパテの六人である。二三ネ
アリヤの子らはエリオエナイ、ヒゼキヤ、アズリカムの三人である。二四エ
リオエナイの子らはホダヤ、エリアシブ、ペラヤ、アックブ、ヨハナン、デ
ラヤ、アナニの七人である。

第四章一ユダの子らはペレヅ、ヘヅロン、カルミ、ホル、ショバルであ
る。二ショバルの子レアヤはヤハテを生み、ヤハテはアホマイとラハデを生
んだ。これらはザレアびとの一族である。三エタムの子らはエズレル、イ
シマおよびイデバシ、彼らの姉妹の名はハゼレルポニである。四ゲドルの

父はペヌエル、ホシャの父はエゼルである。これらはベツレヘムの父エフ
ラタの長子ホルの子らである。五テコアの父アシュルにはふたりの妻ヘラ
とナアラとがあった。六ナアラはアシュルによってアホザム、ヘペル、テ
メニおよびアハシタリを産んだ。これらはナアラの子である。七ヘラの子
らはゼレテ、エゾアル、エテナンである。八コヅはアヌブとゾベバを生ん
だ。またハルムの子アハルヘルの氏族も彼から出た。九ヤベヅはその兄弟
のうちで最も尊ばれた者であった。その母が「わたしは苦しんでこの子
を産んだから」と言ってその名をヤベヅと名づけたのである。一〇ヤベヅは
イスラエルの神に呼ばわって言った、「どうか、あなたが豊かにわたしを恵
み、わたしの国境を広げ、あなたの手がわたしとともにあって、わたしを
災から免れさせ、苦しみをうけさせられないように」。神は彼の求める
ところをゆるされた。一一シュワの兄弟ケルブはメヒルを生んだ。メヒル

はエシトンの父、一二エシトンはベテラパ、パセアおよびイルナハシの父
テヒンナを生んだ。これらはレカの人々である。一三ケナズの子らはオテ
ニエルとセラヤ。オテニエルの子らはハタテとメオノタイ。一四メオノタイ
はオフラを生み、セラヤはゲハラシムの父ヨアブを生んだ。彼らは工人で
あったのでゲハラシムと呼ばれたのである。一五エフンネの子カレブの子ら
はイル、エラおよびナアム。エラの子はケナズ。一六エハレレルの子らはジ
フ、ジバ、テリア、アサレルである。一七エズラの子らはエテル、メレデ、
エペル、ヤロン。次のものはメレデがめとったパロの娘ビテヤの子らで
ある。すなわち彼女はみごもってミリアム、シャンマイおよびイシバを産
んだ。イシバはエシテモアの父である。一八彼の妻はユダヤ人で、ゲドル
の父エレデとソコの父ヘベルとザノアの父エクテエルを産んだ。一九ナハ
ムの姉妹であるホデヤの妻の子らはガルムびとケイラの父およびマアカび

とエシテモアである。二〇シモンの子らはアムノン、リンナ、ベネハナン、
テロンである。イシの子らはゾヘテとベネゾヘテである。二一ユダの子シラ
の子らはレカの父エル、マレシャの父ラダおよびベテアシベアの亜麻布織
の家の一族、二二ならびにモアブを治めてレヘムに帰ったヨキム、コゼバ
の人々、ヨアシおよびサラフである。その記録は古い。二三これらの者は
陶器を造る人で、ネタイムおよびゲデラに住み、王の用をするため、王と
ともに、そこに住んだ。

二四シメオンの子らはネムエル、ヤミン、ヤリブ、ゼラ、シャウル。二五
シャウルの子はシャルム、その子はミブサム、その子はミシマ。二六ミシマ
の子孫は、その子はハムエル、その子はザックル、その子はシメイ。二七シメ
イには男の子十六人、女の子六人あったが、その兄弟たちには多くの
子はなかった。またその氏族の者はすべてユダの子孫ほどにはふえなかっ

た。二八彼らの住んだ所はベエルシバ、モラダ、ハザル・シュアル、二九
ビルハ、エゼム、トラデ、三〇ベトエル、ホルマ、チクラグ、三一ベテ・マル
カボテ、ハザル・スシム、ベテ・ビリ、およびシャライムである。これらは
ダビデの世に至るまで彼らの町であった。三二その村里はエタム、アイン、
リンモン、トケン、アシャンの五つの町である。三三またこれらの町々の
周囲に多くの村があって、バアルまでおよんだ。彼らのすみかは以上のと
おりで、彼らはおのおの系図をもっていた。三四メショバブ、ヤムレク、ア
マジヤの子ヨシャ、三五ヨエル、アシエルのひこ、セラヤの孫、ヨシビアの
子エヒウ。三六エリオエナイ、ヤコバ、エショハヤ、アサヤ、アデエル、エシ
ミエル、ベナヤ、三七およびシピの子ジザ。シピはアロンの子、アロンはエ
ダヤの子、エダヤはシムリの子、シムリはシマヤの子である。三八ここに名
をあげた者どもはその氏族の長であって、それらの氏族は大いにふえ広
がった。三九彼らは群れのために牧場を求めてゲドルの入口に行き、谷の

東の方まで進み、四〇ついに豊かな良い牧場を見いだした。その地は広く
穏やかで、安らかであった。その地の前の住民はハムびとであったから
である。四一これらの名をしるした者どもはユダの王ヒゼキヤの世に行っ
て、彼らの天幕と、そこにいたメウニびとを撃ち破り、彼らをことごとく
滅ぼして今日に至っている。そこには、群れのための牧場があったので、
彼らはそこに住んだ。四二またシメオンびとのうちの五百人はイシの子ら
ペラテヤ、ネアリヤ、レパヤ、ウジエルをかしらとしてセイル山に行き、四
三アマレクびとで、のがれて残っていた者を撃ち滅ぼして、今日までそこ
に住んでいる。

第五章一イスラエルの長子ルベンの子らは次のとおりである。――ルベ
ンは長子であったが父の床を汚したので、長子の権はイスラエルの子ヨセ
フの子らに与えられた。それで長子の権による系図にしるされていない。

二またユダは兄弟たちにまさる者となり、その中から君たる者がでたが
長子の権はヨセフのものとなったのである。――三すなわちイスラエルの
長子ルベンの子らはハノク、パル、ヘヅロン、カルミ。四ヨエルの子らは
その子はシマヤ、その子はゴグ、その子はシメイ、五その子はミカ、その子
はレアヤ、その子はバアル、六その子はベエラである。このベエラはアッ
スリヤの王テルガテ・ピルネセルが捕え移した者である。彼はルベンびと
のつかさであった。七彼の兄弟たちは、その氏族により、その歴代の系図
によれば、かしらエイエルおよびゼカリヤ、八ベラなどである。ベラはア
ザズの子、シマの孫、ヨエルのひこである。彼はアロエルに住み、ネボお
よびバアル・メオンまで及んでいたが、九ギレアデの地で彼の家畜がふえ
増したので、彼は東の方ユフラテ川のこなたの荒野の入口にまで住んだ。
一〇またサウルの時、彼らはハガルびとと戦って、これを撃ち倒し、ギレ

アデの東の全部にわたって彼らの天幕に住んだ。
一一ガドの子孫はこれと相対してバシャンの地に住み、サルカまで及ん
でいた。一二そのかしらはヨエル、次はシャパム、ヤアナイ、シャパテで、
ともにバシャンに住んだ。一三彼らの兄弟たちは、その氏族によればミカ
エル、メシュラム、シバ、ヨライ、ヤカン、ジア、エベルの七人である。一
四これらはホリの子アビハイルの子らである。ホリはヤロアの子、ヤロアは
ギレアデの子、ギレアデはミカエルの子、ミカエルはエシサイの子、エシ
サイはヤドの子、ヤドはブズの子である。一五アヒはアブデルの子、アブデ
ルはグニの子、グニはその氏族の長である。一六彼らはギレアデとバシャ
ンとその村里とシャロンのすべての放牧地に住んで、その四方の境にま
で及んでいた。一七これらはみなユダの王ヨタムの世とイスラエルの王ヤ
ラベアムの世に系図にのせられた。

一八ルベンびとと、ガドびとと、マナセの半部族には出て戦いうる者四万四千七百六十人あり、皆勇士で、盾とつるぎをとり、弓をひき、戦いに巧みな人々であった。一九彼らはハガルびとおよびエトル、ネフシ、ノダブなどと戦ったが、二〇助けを得てこれを攻めたので、ハガルびとおよびこれとともにいた者は皆、彼らの手にわたされた。これは彼らが戦いにあたって神に呼ばわり、神に寄り頼んだので神はその願いを聞かれたからである。二一彼らはその家畜を奪い取ったが、らくだ五万、羊二十五万、ろば二千あり、また人は十万人あった。二二これはその戦いが神によったので、多くの者が殺されて倒れたからである。そして彼らは捕え移される時まで、これに代ってその所に住んだ。

二三マナセの半部族の人々はこの地に住み、ふえ広がって、ついにバシャンからバアル・ヘルモン、セニルおよびヘルモン山にまで及んだ。二四その

氏族の長たちは次のとおりである。すなわち、エペル、イシ、エリエル、
アズリエル、エレミヤ、ホダヤ、ヤデエル。これらは皆その氏族の長で
名高い大勇士であった。二五彼らは先祖たちの神にむかって罪を犯し、神
が、かつて彼らの前から滅ぼされた国の民の神々を慕って、これと姦淫し
たので、二六イスラエルの神は、アッスリヤの王プルの心を奮い起し、ま
たアッスリヤの王テルガテ・ピルネセルの心を奮い起されたので、彼は
ついにルベンびとと、ガドびとと、マナセの半部族を捕えて行き、ハウラ
とハボルとハラとゴザン川のほとりに移して今日に至っている。

第六章一レビの子らはゲルション、コハテ、メラリ。二コハテの子らはア
ムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエル。三アムラムの子らはアロン、モー
セ、ミリアム。アロンの子らはナダブ、アビウ、エレアザル、イタマル。四
エレアザルはピネハスを生み、ピネハスはアビシュアを生み、五アビシュ

アはブッキを生み、ブッキはウジを生み、六ウジはゼラヒヤを生み、ゼラ
ヒヤはメラヨテを生み、七メラヨテはアマリヤを生み、アマリヤはアヒト
ブを生み、八アヒトブはザドクを生み、ザドクはアヒマアズを生み、九アヒ
マアズはアザリヤを生み、アザリヤはヨナハンを生み、一〇ヨナハンはアザ
リヤを生んだ。このアザリヤはソロモンがエルサレムに建てた宮で祭司の
務をした者である。一一アザリヤはアマリヤを生み、アマリヤはアヒトブ
を生み、一二アヒトブはザトクを生み、ザトクはシャルムを生み、一三シャ
ルムはヒルキヤを生み、ヒルキヤはアザリヤを生み、一四アザリヤはセラヤ
を生み、セラヤはヨザダクを生んだ。一五ヨザダクは主がネブカデネザルの
手によってユダとエルサレムの人を捕え移された時に捕えられて行った。
一六レビの子らはゲルション、コハテおよびメラリ。一七ゲルションの子
らの名はリブニとシメイ。一八コハテの子らはアムラム、イヅハル、ヘブロ

ン、ウジエルである。一九メラリの子らはマヘリとムシ。これらはレビびと
のその家筋による氏族である。二〇ゲルションの子はリブニ、その子はヤハ
テ、その子はジンマ、二一その子はヨア、その子はイド、その子はゼラ、そ
の子はヤテライ。二二コハテの子はアミナダブ、その子はコラ、その子はア
シル、二三その子はエルカナ、その子はエビアサフ、その子はアシル、二四
その子はタハテ、その子はウリエル、その子はウジヤ、その子はシャウル。
二五エルカナの子らはアマサイとアヒモテ、二六その子はエルカナ、その子
はゾパイ、その子はナハテ、二七その子はエリアブ、その子はエロハム、そ
の子はエルカナ。二八サムエルの子らは、長子はヨエル、次はアビヤ。二九
メラリの子はマヘリ、その子はリブニ、その子はシメイ、その子はウザ、三
〇その子はシメア、その子はハギヤ、その子はアサヤである。

三一契約の箱を安置したのち、ダビデが主の宮で歌をうたう事をつかさ

どらせた人々は次のとおりである。三二彼らは会見の幕屋の前で歌をもっ
て仕えたが、ソロモンがエルサレムに主の宮を建ててからは、一定の秩序
に従って務を行った。三三その務をしたもの、およびその子らは次の
とおりである。コハテびとの子らのうちへマンは歌をうたう者、ヘマンは
ヨエルの子、ヨエルはサムエルの子、三四サムエルはエルカナの子、エルカ
ナはエロハムの子、エロハムはエリエルの子、エリエルはトアの子、三五ト
アはヅフの子、ヅフはエルカナの子、エルカナはマハテの子、マハテはアマ
サイの子、三六アマサイはエルカナの子、エルカナはヨエルの子、ヨエルは
アザリヤの子、アザリヤはゼパニヤの子、三七ゼパニヤはタハテの子、タハ
テはアシルの子、アシルはエビアサフの子、エビアサフはコラの子、三八コ
ラはイヅハルの子、イヅハルはコハテの子、コハテはレビの子、レビはイ
スラエルの子である。三九ヘマンの兄弟アサフはヘマンの右に立った。ア

サフはベレキヤの子、ベレキヤはシメアの子、四〇シメアはミカエルの子、
ミカエルはバアセヤの子、バアセヤはマルキヤの子、四一マルキヤはエテニ
の子、エテニはゼラの子、ゼラはアダヤの子、四二アダヤはエタンの子、エ
タンはジンマの子、ジンマはシメイの子、四三シメイはヤハテの子、ヤハテ
はゲルションの子、ゲルションはレビの子である。四四また彼らの兄弟で
あるメラリの子らが左に立った。そのうちのエタンはキシの子、キシはア
ブデの子、アブデはマルクの子、四五マルクはハシャビヤの子、ハシャビヤ
はアマジヤの子、アマジヤはヒルキヤの子、四六ヒルキヤはアムジの子、ア
ムジはバニの子、バニはセメルの子、四七セメルはマヘリの子、マヘリはム
シの子、ムシはメラリの子、メラリはレビの子である。四八彼らの兄弟で
あるレビびとたちは、神の宮の幕屋のもろもろの務に任じられた。
四九アロンとその子らは燔祭の壇と香の祭壇の上にささげることをなし、

また至聖所のすべてのわざをなし、かつイスラエルのためにあがないをな
した。すべて神のしもべモーセの命じたとおりである。五〇アロンの子孫
は次のとおりである。アロンの子はエレアザル、その子はピネハス、その
子はアビシュア、五一その子はブッキ、その子はウジ、その子はゼラヒヤ、
五二その子はメラヨテ、その子はアマリヤ、その子はアヒトブ、五三その子
はザドク、その子はアヒマアズである。

五四アロンの子孫の住む所はその境のうちにある宿営によっていえば
次のとおりである。まずコハテびとの氏族がくじによって得たところ、五五
すなわち彼らが与えられたところは、ユダの地にあるヘブロンとその周囲
の放牧地である。五六ただし、その町の田畑とその村々は、エフンネの子
カレブに与えられた。五七そしてアロンの子孫に与えられたものは、のが
れの町であるヘブロンおよびリブナとその放牧地、ヤッテルおよびエシテ

モアとその放牧地、五八ヒレンとその放牧地、デビルとその放牧地、五九ア
シャンとその放牧地、ベテシメシとその放牧地である。六〇またベニヤミ
ンの部族のうちからはゲバとその放牧地、アレメテとその放牧地、アナト
テとその放牧地を与えられた。彼らの町は、すべてその氏族のうちに十三
あった。

六一またコハテの子孫の残りの者は部族の氏族のうちからと、半部族す
なわちマナセの半部族のうちからくじによって十の町を与えられた。六
二またゲルションの子孫はその氏族によってイッサカルの部族、アセルの
部族、ナフタリの部族、およびバシャンのマナセの部族のうちから十三の
町が与えられた。六三メラリの子孫はその氏族によってルベンの部族、ガド
の部族、およびゼブルンの部族のうちからくじによって十二の町が与えら
れた。六四このようにイスラエルの人々はレビびとに町々とその放牧地と

を与えた。六五すなわちユダの子孫の部族とシメオンの部族の子孫と、ベニ
ヤミンの子孫の部族のうちからここに名をあげたこれらの町をくじによっ
て与えた。

六六コハテの子孫の氏族はまたエフライムの部族のうちからも町々を獲
てその領地とした。六七すなわち彼らが与えられた、のがれの町はエフラ
イムの山地にあるシケムとその放牧地、ゲゼルとその放牧地、六八ヨクメ
アムとその放牧地、ベテホロンとその放牧地、六九アヤロンとその放牧地、
ガテリンモンとその放牧地である。七〇またマナセの半部族のうちからは、
アネルとその放牧地およびビレアムとその放牧地を、コハテの子孫の氏族
の残りのものに与えた。

七一ゲルションの子孫に与えられたものはマナセの半部族のうちからは
バシャンのゴランとその放牧地、アシタロテとその放牧地。七二イッサカ

ルの部族のうちからはケデシとその放牧地、ダベラテとその放牧地、七三ラ
モテとその放牧地、アネムとその放牧地。七四アセルの部族のうちからは
マシャルとその放牧地、アブドンとその放牧地、七五ホコクとその放牧地、
レホブとその放牧地。七六ナフタリの部族のうちからはガリラヤのケデシ
とその放牧地、ハンモンとその放牧地、キリアタイムとその放牧地である。
七七このほかのもの、すなわちメラリの子孫に与えられたものはゼブルン
の部族のうちからリンモンとその放牧地、タボルとその放牧地、七八エリ
コに近いヨルダンのかなた、すなわちヨルダンの東ではルベンの部族のう
ちからは荒野のベゼルとその放牧地、ヤザとその放牧地、七九ケデモテと
その放牧地、メパアテとその放牧地。八〇ガドの部族のうちからはギレア
デのラモテとその放牧地、マハナイムとその放牧地、八一ヘシボンとその
放牧地、ヤゼルとその放牧地である。

第七章一イッサカルの子らはトラ、プワ、ヤシュブ、シムロムの四人。二
トラの子らはウジ、レパヤ、エリエル、ヤマイ、エブサム、サムエル。これは
皆トラの子で、その氏族の長である。その子孫の大勇士たる者はダビデ
の世にはその数二万二千六百人であった。三ウジの子はイズラヒヤ、イズ
ラヒヤの子らはミカエル、オバデヤ、ヨエル、イシアの五人で、みな長た
る者であった。四その子孫のうちに、その氏族に従えば軍勢の士卒三万六
千人あった。これは彼らが妻子を多くもっていたからである。五イッサカ
ルのすべての氏族のうちの兄弟たちで系図によって数えられた大勇士は
合わせて八万七千人あった。

六ベニヤミンの子らはベラ、ベケル、エデアエルの三人。七ベラの子らは
エヅボン、ウジ、ウジエル、エレモテ、イリの五人で、皆その氏族の長で
ある。その系図によって数えられた大勇士は二万二千三十四人あった。八

ベケルの子らはゼミラ、ヨアシ、エリエゼル、エリオエナイ、オムリ、エレ
モテ、アビヤ、アナトテ、アラメテで皆ベケルの子らである。九その子孫の
うち、その氏族の長として系図によって数えられた大勇士は二万二百人
あった。一〇エデアエルの子はビルハン。ビルハンの子らはエウシ、ベニヤ
ミン、エホデ、ケナアナ、ゼタン、タルシシ、アヒシャハル。一一皆エデア
エルの子らで氏族の長であった。その子孫のうちには、いくさに出てよく
戦う大勇士が一万七千二百人あった。一二またイルの子らはシュパムとホ
パム。アヘルの子はホシムである。

一三ナフタリの子らはヤハジエル、グニ、エゼル、シャルムで皆ビルハ
の産んだ子である。一四マナセの子らはそのそばめであるスリヤの女の産
んだアスリエル。彼女はまたギレアデの父マキルを産んだ。一五マキルは
ホパムとシュパムの妹マアカという者を妻にめとった。二番目の子はゼ

ロペハデという。ゼロペハデには女の子だけがあった。一六マキルの妻マ
アカは男の子を産んで名をペレシと名づけた。その弟の名はシャレシ。
シャレシの子らはウラムとラケムである。一七ウラムの子はベダン。これら
はマナセの子マキルの子であるギレアデの子らである。一八その妹ハン
モレケテはイシホデ、アビエゼル、マヘラを産んだ。一九セミダの子らはア
ヒアン、シケム、リキ、アニアムである。
二〇エフライムの子はシュテラ、その子はベレデ、その子はタハテ、その子
はエラダ、その子はタハテ、二一その子はザバデ、その子はシュテラである。
エゼルとエレアデはガテの土人らに殺された。これは彼らが下って行って
その家畜を奪おうとしたからである。二二父エフライムが日久しくこのた
めに悲しんだので、その兄弟たちが来て彼を慰めた。二三そののち、エ
フライムは妻のところにはいった。妻ははらんで男の子を産み、その名を

ベリアと名づけた。その家に災があったからである。二四エフライムの
娘セラは上と下のベテホロンおよびウゼン・セラを建てた。二五ベリアの
子はレパ、その子はレセフ、その子はテラ、その子はタハン、二六その子は
ラダン、その子はアミホデ、その子はエリシャマ、二七その子はヌン、その
子はヨシュア。二八エフライムの子孫の領地と住所はベテルとその村々、
また東の方ではナアラン、西の方ではゲゼルとその村々、またシケムと
その村々、アワとその村々。二九またマナセの子孫の国境に沿って、ベテ
シャンとその村々、タアナクとその村々、メギドンとその村々、ドルとそ
の村々で、イスラエルの子ヨセフの子孫はこれらの所に住んだ。
三〇アセルの子らはイムナ、イシワ、エスイ、ベリアおよびその姉妹セラ。
三一ベリアの子らはヘベルとマルキエル。マルキエルはビルザヒテの父であ
る。三二ヘベルはヤフレテ、ショメル、ホタムおよびその姉妹シュアを生ん

だ。三三ヤフレテの子らはパサク、ビムハル、アシワテ。これらはヤレフテ
の子らである。三四彼の兄弟ショメルの子らはロガ、ホバおよびアラム。
三五ショメルの兄弟ヘレムの子らはゾパ、イムナ、シレシ、アマル。三六
ゾパの子らはスア、ハルネペル、シュアル、ベリ、イムラ、三七ベゼル、ホ
ド、シャンマ、シルシャ、イテラン、ベエラ。三八エテルの子らはエフンネ、
ピスパおよびアラ。三九ウラの子らはアラ、ハニエル、およびリヂア。四〇
これらは皆アセルの子孫であって、その氏族の長、えりぬきの大勇士、つ
かさたちのかしらであった。その系図によって数えられた者で、いくさに
出てよく戦う者の数は二万六千人であった。

第八章一ベニヤミンの生んだ者は長子はベラ、その次はアシベル、第三
はアハラ、二第四はノハ、第五はラパ。三ベラの子らはアダル、ゲラ、アビ
ウデ、四アビシュア、ナアマン、アホア、五ゲラ、シフパム、ヒラム。六エホ

デの子らは次のとおりである。（これらはゲバの住民の氏族の長であっ
て、マナハテに捕え移されたものである。）七すなわちナアマン、アヒヤ、ゲ
ラすなわちヘグラム。ゲラはウザとアヒフデの父であった。八シャハライ
ムは妻ホシムとバアラを離別してのち、モアブの国で子らをもうけた。九
彼が妻ホデシによってもうけた子らはヨバブ、ヂビア、メシャ、マルカム、
一〇エウヅ、シャキヤ、ミルマ。これらはその子らであって氏族の長であ
る。一一彼はまたホシムによってアビトブとエルパアルをもうけた。一二エ
ルパアルの子らはエベル、ミシャムおよびセメド。彼はオノとロドとその
村々を建てた者である。一三またベリアとシマがあった。（これはアヤロン
の住民の氏族の長であって、ガテの住民を追い払ったものである。）一
四またアヒオ、シャシャク、エレモテ。一五ゼバデヤ、アラデ、アデル、一
六ミカエル、イシパおよびヨハはベリアの子らであった。一七ゼバデヤ、メ
シュラム、ヘゼキ、ヘベル、一八イシメライ、エズリアおよびヨバブはエル

パアルの子らであった。一九ヤキン、ジクリ、ザベデ、二〇エリエナイ、チル
タイ、エリエル、二一アダヤ、ベラヤおよびシムラテはシマの子らであった。
二二イシパン、ヘベル、エリエル、二三アブドン、ジクリ、ハナン、二四ハナ
ニヤ、エラム、アントテヤ、二五イペデヤおよびペヌエルはシャシャクの子
らであった。二六シャムセライ、シハリア、アタリヤ、二七ヤレシャ、エリ
ヤおよびジクリはエロハムの子らであった。二八これらは歴代の氏族の長
であり、またかしらであって、エルサレムに住んだ。
二九ギベオンの父エイエルはギベオンに住み、その妻の名はマアカといっ
た。三〇その長子はアブドンで、次はツル、キシ、バアル、ナダブ、三一ゲ
ドル、アヒオ、ザケル、三二およびミクロテ。ミクロテはシメアを生んだ。
これらもまた兄弟たちと向かいあってエルサレムに住んだ。三三ネルはキ
シを生み、キシはサウルを生み、サウルはヨナタン、マルキシュア、アビ
ナダブ、エシバアルを生んだ。三四ヨナタンの子はメリバアルで、メリバア

ルはミカエルを生んだ。三五ミカの子らはピトン、メレク、タレア、アハズ
である。三六アハズはエホアダを生み、エホアダはアレメテ、アズマウテ、
ジムリを生み、ジムリはモザを生み、三七モザはビネアを生んだ。ビネアの
子はラパ、ラパの子はエレアサ、エレアサの子はアゼルである。三八アゼル
には六人の子があり、その名はアズリカム、ボケル、イシマエル、シャリ
ヤ、オバデヤ、ハナンで、皆アゼルの子である。三九その兄弟エセクの子
らは、長子はウラム、次はエウシ、第三はエリペレテである。四〇ウラムの
子らは大勇士で、よく弓を射る者であった。彼は多くの子と孫をもち、百
五十人もあった。これらは皆ベニヤミンの子孫である。

第九章一このようにすべてのイスラエルびとは系図によって数えられた。
これらはイスラエルの列王紀にしるされている。ユダはその不信のゆえに
バビロンに捕囚となった。二その領地の町々に最初に住んだものはイスラ

エルびと、祭司、レビびとおよび宮に仕えるしもべたちであった。三またエ
ルサレムにはユダの子孫、ベニヤミンの子孫およびエフライムとマナセの
子孫が住んでいた。四すなわちユダの子ペレヅの子孫のうちではアミホデ
の子ウタイ。アミホデはオムリの子、オムリはイムリの子、イムリはバニ
の子である。五シロびとのうちでは長子アサヤとそのほかの子たち。六ゼ
ラの子孫のうちではユエルとその兄弟六百九十人。七ベニヤミンの子孫の
うちではハセヌアの子ホダビヤの子であるメシュラムの子サル、八エロハム
の子イブニヤ、ミクリの子であるウジの子エラおよびイブニヤの子リウエ
ルの子であるシパテヤの子メシュラム、九ならびに彼らの兄弟たちで、そ
の系図によれば合わせて九百五十六人。これらの人々は皆その氏族の長
であった。
一〇祭司のうちではエダヤ、ヨアリブ、ヤキン、一一およびヒルキヤの子

アザリヤ、ヒルキヤはメシュラムの子、メシュラムはザドクの子、ザドクは
メラヨテの子、メラヨテはアヒトブの子である。アザリヤは神の宮のつか
さである。
一二またエロハムの子アダヤ、エロハムはパシュルの子、パシュ
ルはマルキヤの子である。またアデエルの子はマアセヤ、アデエルはヤゼ
ラの子、ヤゼラはメシュラムの子、メシュラムはメシレモテの子、メシレ
モテはインメルの子である。
一三そのほかに彼らの兄弟たちもあった。こ
れらはその氏族の長で、合わせて一千七百六十人、みな神の宮の務をす
るのに、はなはだ力のある人々であった。

一四レビびとのうちではハシュブの子シマヤ、ハシュブはアズリカムの子、
アズリカムはハシャビヤの子で、これらはメラリの子孫である。
一五またバ
クバッカル、ヘレシ、ガラル、およびアサフの子ジクリの子であるミカの子
マッタニヤ、
一六ならびにエドトンの子ガラルの子であるシマヤの子オバデ

ヤおよびエルカナの子であるアサの子ベレキヤ、エルカナはネトパびとの
村里に住んだ者である。
一七門を守るものはシャルム、アックブ、タルモン、アヒマンおよびその
兄弟たちで、シャルムはその長であった。一八彼は今日まで東の方にあ
る王の門を守っている。これらはレビの子孫で営の門を守る者である。一
九コラの子エビヤサフの子であるコレの子シャルムおよびその氏族の兄弟
たちなどのコラびとは幕屋のもろもろの門を守る務をつかさどった。その
先祖たちは主の営をつかさどり、その入口を守る者であった。二〇エレア
ザルの子ピネハスが、むかし彼らのつかさであった。主は彼とともにおられ
た。二一メシレミヤの子ゼカリヤは会見の幕屋の門を守る者であった。二二
これらは皆選ばれて門を守る者で、合わせて二百十二人あった。彼らはそ
の村々で系図によって数えられた者で、ダビデと先見者サムエルが彼らを

職に任じたのである。二三こうして彼らとその子孫は監守人として、主の
家である幕屋の家の門をつかさどった。二四門を守る者は東西南北の四方
にいた。二五またその村々にいる兄弟たちは七日ごとに代り、来て彼らを
助けた。二六門を守る者の長である四人のレビびとは神の家のもろもろ
の室と宝とをつかさどった。二七彼らは神の家を守る身であるから、その
まわりに宿った。そして朝ごとにこれを開くことをした。
二八そのうちに務の器をつかさどる者があった。彼らはその数を調べ
て携え入り、またその数を調べて携え出した。二九またそのほかの品、す
べての聖なる器および麦粉、ぶどう酒、油、乳香、香料をつかさどる
者があった。三〇また祭司のともがらのうちに香料を混ぜる者があった。
三一コラびとシャルムの長子でレビびとのひとりであるマタテヤはせんべ
いを造る勤めをつかさどった。三二またコハテびとの子孫であるその兄弟

たちのうちに供えのパンをつかさどって、安息日ごとにこれを整える者
どもがあった。
三三レビびとの氏族の長であるこれらの者は歌うたう者であって、宮
のもろもろの室に住み、ほかの務はしなかった。彼らは日夜自分の務に
従ったからである。三四これらはレビびとの歴代の氏族の長であって、か
しらたる人々であった。彼らはエルサレムに住んだ。
三五ギベオンの父エヒエルはギベオンに住んでいた。その妻の名はマア
カといった。三六彼の長子はアブドン、次はツル、キシ、バアル、ネル、ナ
ダブ、三七ゲドル、アヒオ、ゼカリヤ、ミクロテである。三八ミクロテはシ
メアムを生んだ。彼らもその兄弟たちとともにエルサレムに住んで、その
兄弟たちと向かいあっていた。三九ネルはキシを生み、キシはサウルを生
み、サウルはヨナタン、マルキシュア、アビナダブ、エシバアルを生んだ。
四〇ヨナタンの子はメリバアルで、メリバアルはミカを生んだ。四一ミカの

子らはピトン、メレク、タレアおよびアハズである。四二アハズはヤラを生
み、ヤラはアレメテ、アズマウテおよびジムリを生み、ジムリはモザを生
み、四三モザはビネアを生んだ。ビネアの子はレパヤ、その子はエレアサ、
その子はアゼルである。四四アゼルに六人の男の子があった。その名はア
ズリカム、ボケル、イシマエル、シャリヤ、オバデヤ、ハナン。これらはみ
なアゼルの子らであった。

第一〇章一さてペリシテびとはイスラエルと戦ったが、イスラエルの
人々がペリシテびとの前から逃げ、ギルボア山で殺されて倒れたので、二
ペリシテびとはサウルとその子たちのあとを追い、サウルの子ヨナタン、ア
ビナダブおよびマルキシュアを殺した。三戦いは激しくサウルにおし迫
り、射手の者どもがついにサウルを見つけたので、彼は射手の者どもに傷
を負わされた。四そこでサウルはその武器を執る者に言った、「つるぎを抜

き、それをもってわたしを刺せ。さもないと、これらの割礼なき者が来て、
わたしをはずかしめるであろう」。しかしその武器を執る者がいたく恐れて
聞きいれなかったので、サウルはつるぎをとってその上に伏した。五武器を
執る者はサウルの死んだのを見て、自分もまたつるぎの上に伏して死んだ。
六こうしてサウルと三人の子らおよびその家族は皆ともに死んだ。七谷に
いたイスラエルの人々は皆彼らの逃げるのを見、またサウルとその子らの
死んだのを見て、町々をすてて逃げたので、ペリシテびとが来てそのうち
に住んだ。

八あくる日ペリシテびとは殺された者から、はぎ取るために来て、サウ
ルとその子らのギルボア山に倒れているのを見、九サウルをはいでその首
と、よろいかぶとを取り、ペリシテびとの国の四方に人をつかわして、こ
の良き知らせをその偶像と民に告げさせた。一〇そしてサウルのよろいか

ぶとを彼らの神の家に置き、首をダゴンの神殿にくぎづけにした。一一し
かしヤベシ・ギレアデの人々は皆ペリシテびとがサウルにしたことを聞い
たので、一二勇士たちが皆立ち上がり、サウルのからだとその子らのからだ
をとって、これをヤベシに持って来て、ヤベシのかしの木の下にその骨を
葬り、七日の間、断食した。

一三こうしてサウルは主にむかって犯した罪のために死んだ。すなわち
彼は主の言葉を守らず、また口寄せに問うことをして、一四主に問うこと
をしなかった。それで主は彼を殺し、その国を移してエッサイの子ダビデ
に与えられた。

第一一章一ここにイスラエルの人は皆ヘブロンにいるダビデのもとに集
まって来て言った、「われわれは、あなたの骨肉です。二先にサウルが王で
あった時にも、あなたはイスラエルを率いて出入りされました。そしてあ

なたの神、主はあなたに『あなたはわが民イスラエルを牧する者となり、
わが民イスラエルの君となるであろう』と言われました」。三このようにイ
スラエルの長老が皆ヘブロンにいる王のもとに来たので、ダビデはヘブ
ロンで主の前に彼らと契約を結んだ。そして彼らは、サムエルによって語
られた主の言葉に従ってダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。
四ダビデとすべてのイスラエルはエルサレムへ行った。エルサレムはすな
わちエブスであって、そこにはその地の住民であるエブスびとがいた。五
エブスの住民はダビデに言った、「あなたはここにはいってはならない」。
しかし、ダビデはシオンの要害を取った。これがすなわちダビデの町であ
る。六この時ダビデは言った、「だれでも第一にエブスびとを撃つ者を、か
しらとし、将とする」。ゼルヤの子ヨアブが第一にのぼっていったので、か
しらとなった。七そしてダビデがその要害に住んだので人々はこれをダビ

デの町と名づけた。八ダビデはまたその町の周囲すなわちミロから四方に
石がきを築き、ヨアブは町のほかの部分を繕った。九こうしてダビデはま
すます大いなる者となった。万軍の主が彼とともにおられたからである。
一〇ダビデの勇士のおもなものは次のとおりである。彼らはイスラエル
のすべての人とともにダビデに力をそえて国を得させ、主がイスラエル
について言われた言葉にしたがって、彼を王とした人々である。一一ダビ
デの勇士の数は次のとおりである。すなわち三人の長であるハクモニび
との子ヤショベアム、彼はやりをふるって三百人に向かい、一度にこれを
殺した者である。

一二彼の次はアホアびとドドの子エレアザルで、三勇士のひとりである。
一三彼はダビデとともにパスダミムにいたが、ペリシテびとがそこに集まっ
て来て戦った。そこに一面に大麦のはえた地所があった。民はペリシテ

びとの前から逃げた。一四しかし彼は地所の中に立ってこれを防ぎ、ペリ
シテびとを殺した。そして主は大いなる勝利を与えて彼らを救われた。
一五三十人の長たちのうちの三人は下っていってアドラムのほらあなの
岩の所にいるダビデのもとへ行った。時にペリシテびとの軍勢はレパイ
ムの谷に陣を取っていた。一六その時ダビデは要害におり、ペリシテびと
の先陣はベツレヘムにあったが、一七ダビデはせつに望んで、「だれかベツ
レヘムの門のかたわらにある井戸の水をわたしに飲ませてくれるとよいの
だが」と言った。一八そこでその三人はペリシテびとの陣を突き通って、ベ
ツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をくみ取って、ダビデのもとに携
えて来た。しかしダビデはそれを飲もうとはせず、それを主の前に注いで、
一九言った、「わが神よ、わたしは断じてこれをいたしません。命をかけ
て行ったこの人たちの血をどうしてわたしは飲むことができましょう。彼

らは命をかけてこの水をとって来たのです」。それゆえ、ダビデはこの水
を飲もうとはしなかった。三勇士はこのことをおこなった。
二〇ヨアブの兄弟アビシャイは三十人の長であった。彼はやりをふるっ
て三百人に立ち向かい、これを殺して三人のほかに名を得た。二一彼は三
十人のうち、最も尊ばれた者で、彼らのかしらとなった。しかし、かの
三人には及ばなかった。
二二エホヤダの子ベナヤは、カブジエル出身の勇士であって、多くのて
がらを立てた。彼はモアブのアリエルのふたりの子を撃ち殺した。彼はま
た雪の日に下っていって、穴の中でししを撃ち殺した。二三彼はまた身の
たけ五キュビトばかりのエジプトびとを撃ち殺した。そのエジプトびとは
手に機の巻棒ほどのやりを持っていたが、ベナヤはつえをとって彼の所
へ下って行き、エジプトびとの手から、そのやりをもぎとり、そのやりをもっ

て彼を殺した。二四エホヤダの子ベナヤは、これらの事を行って三勇士の
ほかに名を得た。二五彼は三十人のうちに有名であったが、かの三人には
及ばなかった。ダビデは彼を侍衛の長とした。
二六軍団のうちの勇士はヨアブの兄弟アサヘル。ベツレヘム出身のド
ドの子エルハナン。二七ハロデ出身のシャンマ。ペロンびとヘレヅ。二八テ
コア出身のイッケシの子イラ。アナトテ出身のアビエゼル。二九ホシャ
テびとシベカイ。アホアびとイライ。三〇ネトパ出身のマハライ。ネトパ
出身のバアナの子ヘレデ。三一ベニヤミンびとのギベアから出たリバイの
子イタイ。ピラトンのベナヤ。三二ガアシの谷のホライ。アルバテびとアビ
エル。三三バハルム出身のアズマウテ。シャルボン出身のエリヤバ。三
四ギゾンびとハセム。ハラルびとシャゲの子ヨナタン。三五ハラルびとサカ
ルの子アヒアム。ウルの子エリパル。三六メケラテびとヘペル。ペロンびと

アヒヤ。三七カルメル出身のヘズロ。エズバイの子ナアライ。三八ナタン
の兄弟ヨエル。ハグリの子ミブハル。三九アンモンびとゼレク。ゼルヤの
子ヨアブの武器を執るもの、ベエロテ出身のナハライ。四〇イテルびとイ
ラ。イテルびとガレブ。四一ヘテびとウリヤ。アハライの子ザバデ。四二ル
ベンびとシザの子アデナ。彼はルベンびとの長であって、三十人を率い
た。四三またマアカの子ハナン。ミテニびとヨシャパテ。四四アシテラテび
とウジヤ。アロエルびとホタムの子らシャマとエイエル。四五テジびとシム
リの子エデアエルおよびその兄弟ヨハ。四六マハブびとエリエル。エルナ
アムの子らエリバイおよびヨシャビヤ。モアブびとイテマ。四七エリエル、
オベデおよびメゾバびとヤシエルである。

第一二章 一ダビデがキシの子サウルにしりぞけられて、なおチクラグにい
た時、次の人々が彼のもとに来た。彼らはダビデを助けて戦った勇士た

ちのうちにあり、二弓をよくする者、左右いずれの手をもってもよく矢を
射、石を投げる者で、ともにベニヤミンびとで、サウルの同族である。三
そのかしらはアヒエゼル、次はヨアシで、ともにギベア出身のシマアの子
たちである。またエジエルとペレテで、ともにアズマウテの子たちである。
またベラカおよびアナトテ出身のエヒウ。四またギベオン出身のイシマ
ヤ、彼は三十人のうちの勇士で、その三十人の長である。またエレミヤ、
ヤハジエル、ヨハナン、ゲデラ出身のヨザバデ、五エルザイ、エリモテ、
ベアリヤ、シマリヤ、ハリフびとシパテヤ、六エルカナ、イシア、アザリエ
ル、ヨエゼル、ヤショベアムで、これらはコラびとである。七またゲドルの
エロハムの子たちであるヨエラおよびゼバデヤである。

八ガドびとのうちから荒野の要害に来て、ダビデについた者は皆勇士で、
よく戦う軍人、よく盾とやりをつかう者、その顔はししの顔のようで、そ
の速いことは山にいるしかのようであった。九彼らのかしらはエゼル、次

はオバデヤ、第三はエリアブ、一〇第四はミシマンナ、第五はエレミヤ、一
一第六はアッタイ、第七はエリエル、一二第八はヨナハン、第九はエルザバ
デ、一三第十はエレミヤ、第十一はマクバナイである。一四これらはガドの
子孫で軍勢の長たる者、その最も小さい者でも百人に当り、その最も
大いなる者は千人に当った。一五正月、ヨルダンがその全岸にあふれた
とき、彼らはこれを渡って、谷々にいる者をことごとく東に西に逃げ走
らせた。
一六ベニヤミンとユダの子孫のうちの人々が要害に来て、ダビデについ
た。一七ダビデは出て彼らを迎えて言った、「あなたがたが好意をもって、
わたしを助けるために来たのならば、わたしの心もあなたがたと、ひとつ
になりましょう。しかし、わたしの手になんの悪事もないのに、もしあな
たがたが、わたしを欺いて、敵に渡すためであるならば、われわれの先祖

の神がどうぞみそなわして、あなたがたを責められますように」。一八時に
霊が三十人の長アマサイに臨み、アマサイは言った、
「ダビデよ、われわれはあなたのもの。
エッサイの子よ、われわれはあなたと共にある。
平安あれ、あなたに平安あれ。
あなたを助ける者に平安あれ。
あなたの神があなたを助けられる」。
そこでダビデは彼らを受けいれて部隊の長とした。
一九さきにダビデがペリシテびとと共にサウルと戦おうと攻めて来たと
き、マナセびと数人がダビデについた。(ただしダビデはついにペリシテび
とを助けなかった。それはペリシテびとの君たちが相はかって、「彼はわれ
われの首をとって、その主君サウルのもとに帰るであろう」と言って、彼

を去らせたからである。）二〇ダビデがチクラグへ行ったとき、マナセびとア
デナ、ヨザバデ、エデアエル、ミカエル、ヨザバデ、エリウ、チルタイが彼
についた。皆マナセびとの千人の長であった。二一彼らはダビデを助けて
敵軍に当った。彼らは皆大勇士で軍勢の長であった。二二ダビデを助け
る者が日に日に加わって、ついに大軍となり、神の軍勢のようになった。
二三主の言葉に従い、サウルの国をダビデに与えようとして、ヘブロン
にいるダビデのもとに来た武装した軍隊の数は、次のとおりである。二四ユ
ダの子孫で盾とやりをとり、武装した者六千八百人、二五シメオンの子孫で、
よく戦う勇士七千百人、二六レビの子孫からは四千六百人。二七エホヤダ
はアロンの家のつかさで、彼に属する者は三千七百人。二八ザドクは年若
い勇士で、彼の氏族から出た将軍は二十二人。二九サウルの同族、ベニヤ
ミンの子孫からは三千人、ベニヤミンびとの多くはなおサウルの家に忠義

をつくしていた。三〇エフライムの子孫からは二万八百人、皆勇士で、その
氏族の名ある人々であった。三一マナセの半部族からは一万八千人、皆ダ
ビデを王に立てようとして上って来て、名をつらねた者である。三二イッ
サカルの子孫からはよく時勢に通じ、イスラエルのなすべきことをわきま
えた人々が来た。その長たる者が二百人あって、その兄弟たちは皆その
指揮に従った。三三ゼブルンからは五万人、皆訓練を経た軍隊で、もろも
ろの武具で身をよろい、一心にダビデを助けた者である。三四ナフタリか
らは将たる者一千人および盾とやりをとってこれに従う者三万七千人。
三五ダンびとからは武装した者二万八千六百人。三六アセルからは戦いの
備えをした熟練の者四万人。三七またヨルダンのかなたルベンびと、ガド
びと、マナセの半部族からはもろもろの武具で身をよろった者十二万人で
あった。

三八すべてこれらの戦いの備えをしたいくさびとらは真心をもってヘブ
ロンに来て、ダビデを全イスラエルの王にしようとした。このほかのイス
ラエルびともまた、心をひとつにしてダビデを王にしようとした。三九彼
らはヘブロンにダビデとともに三日いて、食い飲みした。その兄弟たちは
彼らのために備えをしたからである。四〇また彼らに近い人々はイッサカ
ル、ゼブルン、ナフタリなどの遠い所の者まで、ろば、らくだ、騾馬、牛
などに食物を負わせて来た。すなわち麦粉の食物、干いちじく、干ぶど
う、ぶどう酒、油、牛、羊などを多く携えて来た。これはイスラエル
に喜びがあったからである。

第一三章一ここにダビデは千人の長、百人の長などの諸将と相はか
り、二そしてダビデはイスラエルの全会衆に言った、「もし、このことをあ
なたがたがよしとし、われわれの神、主がこれを許されるならば、われわれ

は、イスラエルの各地に残っているわれわれの兄弟ならびに、放牧地の
付いている町々にいる祭司とレビびとに、使をつかわし、われわれの所
に呼び集めましょう。三また神の箱をわれわれの所に移しましょう。わ
れわれはサウルの世にはこれをおろそかにしたからです」。四会衆は一同
「そうしましょう」と言った。このことがすべての民の目に正しかったから
である。

五そこでダビデはキリアテ・ヤリムから神の箱を運んでくるため、エジ
プトのシホルからハマテの入口までのイスラエルをことごとく呼び集めた。
六そしてダビデとすべてのイスラエルはバアラすなわちユダのキリアテ・ヤ
リムに上り、ケルビムの上に座しておられる主の名をもって呼ばれている
神の箱をそこからかき上ろうと、七神の箱を新しい車にのせて、アビナ
ダブの家からひきだし、ウザとアヒヨがその車を御した。八ダビデおよび
すべてのイスラエルは歌と琴と立琴と、手鼓と、シンバルと、ラッパを

もって、力をきわめて神の前に踊った。
九彼らがキドンの打ち場に来た時、ウザは手を伸べて箱を押えた。牛が
つまずいたからである。一〇ウザが手を箱につけたことによって、主は彼
に向かって怒りを発し、彼を撃たれたので、彼はその所で神の前に死ん
だ。一一主がウザを撃たれたので、ダビデは怒った。その所は今日までペ
レヅ・ウザと呼ばれている。一二その日ダビデは神を恐れて言った、「どう
して神の箱を、わたしの所へかいて行けようか」。一三それでダビデはそ
の箱を自分の所ダビデの町へは移さず、これを転じてガテびとオベデ・エ
ドムの家に運ばせた。一四神の箱は三か月の間、オベデ・エドムの家に、
その家族とともにとどまった。主はオベデ・エドムの家族とそのすべての
持ち物を祝福された。

第一四章一ツロの王ヒラムはダビデに使者をつかわし、彼のために家を

建てさせようと香柏および石工と木工を送った。二ダビデは主が自分を堅
く立ててイスラエルの王とされたことと、その民イスラエルのために彼の
国を大いに興されたことを悟った。

三ダビデはエルサレムでまた妻たちをめとった。そしてダビデにまたむ
すこ、娘が生れた。四彼がエルサレムで得た子たちの名は次のとおりであ
る。すなわちシャンマ、ショバブ、ナタン、ソロモン、五イブハル、エリ
シュア、エルペレテ、六ノガ、ネペグ、ヤピア、七エリシャマ、ベエリアダ、
エリペレテである。

八さてペリシテびとはダビデが油を注がれて全イスラエルの王になった
ことを聞いたので、ペリシテびとはみな上ってきてダビデを捜した。ダビ
デはこれを聞いてこれに当ろうと出ていったが、九ペリシテびとはすでに
来て、レパイムの谷を侵した。一〇ダビデは神に問うて言った、「ペリシテ
びとに向かって上るべきでしょうか。あなたは彼らをわたしの手にわたさ

れるでしょうか」。主はダビデに言われた、「上りなさい。わたしは彼らを
あなたの手にわたそう」。一一そこで彼はバアル・ペラジムへ上っていった。
その所でダビデは彼らを打ち敗り、そして言った、「神は破り出る水のよ
うに、わたしの手で敵を破られた」。それゆえ、その所の名はバアル・ペ
ラジムと呼ばれている。一二彼らが自分たちの神をそこに残して退いたの
で、ダビデは命じてこれを火で焼かせた。
一三ペリシテびとは再び谷を侵した。一四ダビデが再び神に問うたの
で神は言われた、「あなたは彼らを追って上ってはならない。遠回りして
バルサムの木の前から彼らを襲いなさい。一五バルサムの木の上に行進の
音が聞えたならば、あなたは行って戦いなさい。神があなたの前に出て
ペリシテびとの軍勢を撃たれるからです」。一六ダビデは神が命じられたよ
うにして、ペリシテびとの軍勢を撃ち破り、ギベオンからゲゼルに及んだ。

一七そこでダビデの名はすべての国々に聞えわたり、主はすべての国びと
に彼を恐れさせられた。
第一五章 一ダビデはダビデの町のうちに自分のために家を建て、また神
の箱のために所を備え、これがために幕屋を張った。二ダビデは言った、
「神の箱をかくべき者はただレビびとのみである。主が主の箱をかかせ、ま
た主に長く仕えさせるために彼らを選ばれたからである」。三ダビデは主
の箱をこれがために備えた所にかき上るため、イスラエルをことごとくエ
ルサレムに集めた。四ダビデはまたアロンの子孫とレビびとを集めた。五
すなわち、コハテの子孫のうちからはウリエルを長としてその兄弟百二
十人、六メラリの子孫のうちからはアサヤを長としてその兄弟二百二十
人、七ゲルションの子孫のうちからはヨエルを長としてその兄弟百三十
人、八エリザパンの子孫のうちからはシマヤを長としてその兄弟二百人、

九ヘブロンの子孫のうちからはエリエルを長としてその兄弟八十人、一〇
ウジエルの子孫のうちからはアミナダブを長としてその兄弟百十二人で
ある。一一ダビデは祭司ザドクとアビヤタル、およびレビびとウリエル、ア
サヤ、ヨエル、シマヤ、エリエル、アミナダブを召し、一二彼らに言った、「あ
なたがたはレビびとの氏族の長である。あなたがたとあなたがたの兄弟
はともに身を清め、イスラエルの神、主の箱をわたしがそのために備えた
所にかき上りなさい。一三さきにこれをかいた者があなたがたでなかった
ので、われわれの神、主はわれわれを撃たれました。これはわれわれがそ
の定めにしたがってそれを扱わなかったからです」。一四そこで祭司たち
とレビびとたちはイスラエルの神、主の箱をかき上るために身を清め、一
五レビびとたちはモーセが主の言葉にしたがって命じたように、神の箱を
さおをもって肩ににになった。

一六ダビデはまたレビびとの長たちに、その兄弟たちを選んで歌うた
う者となし、立琴と琴とシンバルなどの楽器を打ちはやし、喜びの声をあ
げることを命じた。一七そこでレビびとはヨエルの子ヘマンと、その兄弟
ベレキヤの子アサフおよびメラリの子孫である彼らの兄弟クシャヤの子
エタンを選んだ。一八またこれに次ぐその兄弟たちがこれと共にいた。す
なわちゼカリヤ、ヤジエル、セミラモテ、エイエル、ウンニ、エリアブ、ベ
ナヤ、マアセヤ、マッタテヤ、エリペレホ、ミクネヤおよび門を守る者オ
ベデ・エドムとエイエル。一九歌うたう者ヘマン、アサフおよびエタンは
青銅のシンバルを打ちはやす者であった。二〇ゼカリヤ、アジエル、セミ
ラモテ、エイエル、ウンニ、エリアブ、マアセヤ、ベナヤはアラモテにした
がって立琴を奏する者であった。二一しかしマッタテヤ、エリペレホ、ミ
クネヤ、オベデ・エドム、エイエル、アザジヤはセミニテにしたがって琴
をもって指揮する者であった。二二ケナニヤはレビびとの楽長で、音楽に

通じていたので、これを指揮した。二三ベレキヤとエルカナは箱のために門
を守る者であった。二四祭司シバニヤ、ヨシャパテ、ネタネル、アマサイ、
ゼカリヤ、ベナヤ、エリエゼルらは神の箱の前でラッパを吹き、オベデ・
エドムとエヒアは箱のために門を守る者であった。
二五ダビデとイスラエルの長老たちおよび千人の長たちは行って、オ
ベデ・エドムの家から主の契約の箱を喜び勇んでかき上った。二六神が
主の契約の箱をかくレビびとを助けられたので、彼らは雄牛七頭、雄羊七
頭をささげた。二七ダビデは亜麻布の衣服を着ていた。箱をかくすべての
レビびとは、歌うたう者、音楽をつかさどるケナニヤも同様である。ダビ
デはまた亜麻布のエポデを着ていた。二八こうしてイスラエルは皆、声を
あげ、角笛を吹きならし、ラッパと、シンバルと、立琴と琴をもって打ち
はやして主の契約の箱をかき上った。

二九主の契約の箱がダビデの町にはいったとき、サウルの娘ミカルが窓
からながめ、ダビデ王の舞い踊るのを見て、心のうちに彼をいやしめた。
第一六章一人々は神の箱をかき入れて、ダビデがそのために張った幕屋の
うちに置き、そして燔祭と酬恩祭を神の前にささげた。二ダビデは燔祭
と酬恩祭をささげ終えたとき、主の名をもって民を祝福し、三イスラエ
ルの人々に男にも女にもおのおのパン一つ、肉一切れ、干ぶどう一かた
まりを分け与えた。
四ダビデはまたレビびとのうちから主の箱の前に仕える者を立てて、イ
スラエルの神、主をあがめ、感謝し、ほめたたえさせた。五楽長はアサ
フ、その次はゼカリヤ、エイエル、セミラモテ、エヒエル、マッタテヤ、エ
リアブ、ベナヤ、オベデ・エドム、エイエルで、彼らは立琴と琴を弾じ、ア
サフはシンバルを打ち鳴らし、六祭司ベナヤとヤハジエルは神の契約の箱

の前でつねにラッパを吹いた。
七その日ダビデは初めてアサフと彼の兄弟たちを立てて、主に感謝を
ささげさせた。
八主に感謝し、そのみ名を呼び、
そのみわざをもろもろの民の中に知らせよ。
九主にむかって歌え、主をほめ歌え。
そのもろもろのくすしきみわざを語れ。
一〇その聖なるみ名を誇れ。
どうか主を求める者の心が喜ぶように。
一一主とそのみ力とを求めよ。
つねにそのみ顔をたずねよ。
一二 一三そのしもべアブラハムのすえよ、
その選ばれたヤコブの子らよ。

主のなされたくすしきみわざと、その奇跡と、
そのみ口のさばきとを心にとめよ。
一四彼はわれわれの神、主にいます。
そのさばきは全地にある。
一五主はとこしえにその契約をみこころにとめられる。
これはよろずよに命じられたみ言葉であって、
一六アブラハムと結ばれた契約、
イサクに誓われた約束である。
一七主はこれを堅く立ててヤコブのために定めとし、
イスラエルのためにとこしえの契約として、
一八言われた、「あなたにカナンの地を与えて、
あなたがたの受ける嗣業の分け前とする」と。

一九その時、彼らの数は少なくて、
数えるに足らず、かの国で旅びととなり、
二〇国から国へ行き、
この国からほかの民へ行った。
二一主は人の彼らをしえたげるのをゆるされず、
彼らのために王たちを懲しめて、
二二言われた、「わが油そそがれた者たちに
さわってはならない。
わが預言者たちに害を加えてはならない」と。
二三全地よ、主に向かって歌え。
日ごとにその救を宣べ伝えよ。
二四もろもろの国の中にその栄光をあらわし、

もろもろの民の中にくすしきみわざをあらわせ。
二五主は大いなるかたにいまして、
いとほめたたうべき者、
もろもろの神にまさって、恐るべき者だからである。
二六もろもろの民のすべての神はむなしい。
しかし主は天を造られた。
二七誉と威厳とはそのみ前にあり、
力と喜びとはその聖所にある。
二八もろもろの民のやからよ、主に帰せよ、
栄光と力とを主に帰せよ。
二九そのみ名にふさわしい栄光を主に帰せよ。
供え物を携えて主のみ前にきたれ。

聖なる装いをして主を拝め。
三〇全地よ、そのみ前におののけ。
世界は堅く立って、動かされることはない。
三一天は喜び、地はたのしみ、
もろもろの国民の中に言え、「主は王であられる」と。
三二海とその中に満つるものとは鳴りどよめき、
田畑とその中のすべての物は喜べ。
三三そのとき林のもろもろの木も主のみ前に喜び歌う。
主は地をさばくためにこられるからである。
三四主に感謝せよ、主は恵みふかく、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
三五また言え、「われわれの救の神よ、われわれを救い、

もろもろの国民の中から
われわれを集めてお救いください。
そうすればあなたの聖なるみ名に感謝し、
あなたの誉を誇るでしょう。
三六イスラエルの神、主は、
とこしえからとこしえまでほむべきかな」と。
その時すべての民は「アァメン」と言って主をほめたたえた。
三七ダビデはアサフとその兄弟たちを主の契約の箱の前にとめおいて、
常に箱の前に仕え、日々のわざを行わせた。三八オベデ・エドムとその
兄弟たちは合わせて六十八人である。またエドトンの子オベデ・エドムお
よびホサは門守であった。三九祭司ザドクとその兄弟である祭司たちはギ
ベオンにある高き所で主の幕屋の前に仕え、四〇主がイスラエルに命じら

れた律法にしるされたすべてのことにしたがって燔祭の壇の上に朝夕たえ
ず燔祭を主にささげた。四一また彼らとともにヘマン、エドトンおよびほ
かの選ばれて名をしるされた者どもがいて、主のいつくしみの世々限りな
きことについて主に感謝した。四二すなわちヘマンおよびエドトンは彼ら
とともにいて、ラッパ、シンバルおよびその他の聖歌のための楽器をとっ
て音楽を奏し、エドトンの子らは門を守った。
四三こうして民は皆おのおの家に帰り、ダビデはその家族を祝福するた
めに帰って行った。

第一七章一さてダビデは自分の家に住むようになったとき、預言者ナタ
ンに言った、「見よ、わたしは香柏の家に住んでいるが、主の契約の箱は
天幕のうちにある」。二ナタンはダビデに言った、「神があなたとともにお
られるから、すべてあなたの心にあるところを行いなさい」。

三その夜、神の言葉がナタンに臨んで言った、四「行ってわたしのしも
べダビデに告げよ、『主はこう言われる、わたしの住む家を建ててはならな
い。五わたしはイスラエルを導き上った日から今日まで、家に住まわず、
天幕から天幕に、幕屋から幕屋に移ったのである。六わたしがすべてのイ
スラエルと共に歩んだすべての所で、わたしの民を牧することを命じた
イスラエルのさばきづかさのひとりに、ひと言でも、「どうしてあなたがた
は、わたしのために香柏の家を建てないのか」と言ったことがあるだろう
か』と。七それゆえ今あなたは、わたしのしもべダビデにこう言いなさい、
『万軍の主はこう仰せられる、「わたしはあなたを牧場から、羊に従って
いる所から取って、わたしの民イスラエルの君とし、八あなたがどこへ行
くにもあなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去っ
た。わたしはまた地の上の大いなる者の名のような名をあなたに得させよ

う。九そしてわたしはわが民イスラエルのために一つの所を定めて、彼ら
を植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにしよ
う。一〇また前のように、すなわちわたしがわが民イスラエルの上にさば
きづかさを立てた時からこのかたのように、悪い人が重ねてこれを荒すこ
とはないであろう。わたしはまたあなたのもろもろの敵を征服する。かつ
わたしは主があなたのために家を建てられることを告げる。一一あなたの
日が満ち、あなたの先祖たちの所へ行かねばならぬとき、わたしはあなた
の子、すなわちあなたの子らのひとりを、あなたのあとに立てて、その王国
を堅くする。一二彼はわたしのために家を建てるであろう。わたしは長く
彼の位を堅くする。一三わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。
わたしは、わたしのいつくしみを、あなたのさきにあった者から取り去っ
たように、彼からは取り去らない。一四かえって、わたしは彼を長くわたし

の家に、わたしの王国にすえおく。彼の位はとこしえに堅く立つであろ
う』」。一五ナタンはすべてこれらの言葉のように、またすべてこの幻のよ
うにダビデに語った。
一六そこで、ダビデ王は、はいって主の前に座して言った、「主なる神よ、
わたしがだれ、わたしの家がなんであるので、あなたはこれまでわたしを
導かれたのですか。一七神よ、これはあなたの目には小さな事です。主な
る神よ、あなたはしもべの家について、はるか後の事を語って、きたるべ
き代々のことを示されました。一八しもべの名誉については、ダビデはこの
上あなたに何を申しあげることができましょう。あなたはしもべを知って
おられるからです。一九主よ、あなたはしもべのために、またあなたの心
にしたがって、このもろもろの大いなる事をなし、すべての大いなる事を
知らされました。二〇主よ、われわれがすべて耳に聞いた所によれば、あ

なたのようなものはなく、またあなたのほかに神はありません。二一また
地上のどの国民が、あなたの民イスラエルのようでありましょうか。これ
は神が行って、自分のためにあがなって民とし、エジプトからあなたがあ
がない出されたあなたの民の前から国々の民を追い払い、大いなる恐るべ
き事を行って、名を得られたものではありませんか。二二あなたはあなたの
民イスラエルを長くあなたの民とされました。主よ、あなたは彼らの神と
なられたのです。二三それゆえ主よ、あなたがしもべと、しもべの家につ
いて語られた言葉を長く堅くして、あなたの言われたとおりにしてくださ
い。二四そうすればあなたの名はとこしえに堅くされ、あがめられて、『イ
スラエルの神、万軍の主はイスラエルの神である』と言われ、またあなた
のしもべダビデの家はあなたの前に堅く立つことができるでしょう。二五
わが神よ、あなたは彼のために家を建てると、しもべに示されました。そ

れゆえ、しもべはあなたの前に祈る勇気を得ました。二六主よ、あなたは
神にいまし、この良き事をしもべに約束されました。二七それゆえどうぞ
いま、しもべの家を祝福し、あなたの前に長く続かせてくださるように。
主よ、あなたの祝福されるものは長く祝福を受けるからです」。

第一八章一この後ダビデはペリシテびとを撃ってこれを征服し、ペリシ
テびとの手からガテとその村々を取った。
二彼はまたモアブを撃った。モアブびとはダビデのしもべとなって、み
つぎを納めた。
三ダビデはまた、ハマテのゾバの王ハダデゼルがユフラテ川のほとりに、
その記念碑を建てようとして行ったとき彼を撃った。四そしてダビデは彼
から戦車一千、騎兵七千人、歩兵二万人を取った。ダビデは一百の戦車の
馬を残して、そのほかの戦車の馬はみなその足の筋を切った。五その時ダ

マスコのスリヤびとがゾバの王ハダデゼルを助けるために来たので、ダビデ
はそのスリヤびと二万二千人を殺した。
六そしてダビデはダマスコのスリヤ
に守備隊を置いた。スリヤびとはみつぎを納めてダビデのしもべとなった。
主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。
七ダビデはハダデゼ
ルのしもべらが持っていた金の盾を奪って、エルサレムに持ってきた。
八
またハダデゼルの町テブハテとクンからダビデは非常に多くの青銅を取っ
た。ソロモンはそれを用いて青銅の海、柱および青銅の器を造った。
九時にハマテの王トイはダビデがゾバの王ハダデゼルのすべての軍勢を
撃ち破ったことを聞き、
一〇その子ハドラムをダビデ王につかわして、彼に
あいさつさせ、かつ祝を述べさせた。ハダデゼルはかつてしばしばトイと
戦いを交えたが、ダビデはハダデゼルと戦って、これを撃ち破ったから
である。ハドラムは金、銀および青銅のさまざまの器を贈ったので、
一一

ダビデ王はこれをエドム、モアブ、アンモンの人々、ペリシテびと、アマ
クレなどの諸国民のうちから取ってきた金銀とともに、主にささげた。
一二ゼルヤの子アビシャイは塩の谷で、エドムびと一万八千を撃ち殺し
た。一三ダビデはエドムに守備隊を置き、エドムびとは皆ダビデのしもべと
なった。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。一四こうし
てダビデはイスラエルの全地を治め、そのすべての民に公道と正義を行っ
た。一五ゼルヤの子ヨアブは軍の長、アヒルデの子ヨシャパテは史官、一
六アヒトブの子ザドクとアビヤタルの子アビメレクは祭司、シャウシャは
書記官、一七エホヤダの子ベナヤはケレテびととペレテびとの長、ダビデ
の子たちは王のかたわらにはべる大臣であった。

第一九章一この後アンモンの人々の王ナハシが死んで、その子がこれに
代って王となった。二そのときダビデは言った、「わたしはナハシの子ハヌ

ンに、彼の父がわたしに恵みを施したように、恵みを施そう」。そして
ダビデは彼をその父のゆえに慰めようとして使者をつかわした。ダビデ
のしもべたちはハヌンを慰めるためアンモンの人々の地に来たが、三アン
モンの人々のつかさたちはハヌンに言った、「ダビデが慰める者をあなた
のもとにつかわしたことによって、あなたは彼があなたの父を尊ぶのだと
思われますか。彼のしもべたちが来たのは、この国をうかがい、探って滅
ぼすためではありませんか」。四そこでハヌンはダビデのしもべたちを捕え
て、そのひげをそり落し、その着物を中ほどから断ち切って腰の所までに
して彼らを帰してやった。五ある人々が来て、この人たちのされたことを
ダビデに告げたので、彼は人をつかわして、彼らを迎えさせた。その人々
が非常に恥じたからである。そこで王は言った、「ひげがのびるまでエリコ
にとどまって、その後帰りなさい」。

六アンモンの人々は自分たちがダビデに憎まれることをしたとわかったの
で、ハヌンおよびアンモンの人々は銀千タラントを送ってメソポタミヤとア
ラム・マアカ、およびゾバから戦車と騎兵を雇い入れた。七すなわち戦車三
万二千およびマアカの王とその軍隊を雇い入れたので、彼らは来てメデバ
の前に陣を張った。そこでアンモンの人々は町々から寄り集まって、戦
いに出動した。八ダビデはこれを聞いてヨアブと勇士の全軍をつかわした
ので、九アンモンの人々は出て来て町の入口に戦いの備えをした。また
助けに来た王たちは別に野にいた。

一〇時にヨアブは戦いが前後から自分に向かっているのを見て、イスラエ
ルのえり抜きの兵士のうちから選んで、これをスリヤびとに対して備え、一
一そのほかの民を自分の兄弟アビシャイの手にわたして、アンモンの人々
に対して備えさせ、一二そして言った、「もしスリヤびとがわたしに手ごわ

いときは、わたしを助けてください。もしアンモンの人々があなたに手ご
わいときは、あなたを助けましょう。一三勇ましくしてください。われわれ
の民のためと、われわれの神の町々のために、勇ましくしましょう。どう
か、主が良いと思われることをされるように」。一四こうしてヨアブが自分
と一緒にいる民と共にスリヤびとに向かって戦おうとして近づいたとき、
スリヤびとは彼の前から逃げた。一五アンモンの人々はスリヤびとの逃げ
るのを見て、彼らもまたヨアブの兄弟アビシャイの前から逃げて町には
いった。そこでヨアブはエルサレムに帰った。

一六しかしスリヤびとは自分たちがイスラエルの前に打ち敗られたのを
見て、使者をつかわし、ハダデゼルの軍の長ショパクの率いるユフラテ川
の向こう側にいるスリヤびとを引き出した。一七この事がダビデに聞えた
ので、彼はイスラエルをことごとく集め、ヨルダンを渡り、彼らの所に

来て、これに向かって戦いの備えをした。ダビデがこのようにスリヤびと
に対して戦いの備えをしたとき、彼はダビデと戦った。一八しかしスリ
ヤびとがイスラエルの前から逃げたので、ダビデはスリヤびとの戦車の兵
七千、歩兵四万を殺し、また軍の長ショパクをも殺した。一九ハダデゼル
のしもべたちは味方の者がイスラエルに打ち敗られたのを見て、ダビデと
和を講じ、彼に仕えた。スリヤびとは再びアンモンびとを助けることを
しなかった。

第二〇章一春になって、王たちが戦いに出るに及んで、ヨアブは軍勢
を率いてアンモンびとの地を荒し、行ってラバを包囲した。しかしダビデ
はエルサレムにとどまった。ヨアブはラバを撃って、これを滅ぼした。二
そしてダビデは彼らの王の冠をその頭から取りはなした。その金の重
さを量ってみると一タラント、またその中に宝石があった。これをダビデ

の頭に置いた。ダビデはまたその町のぶんどり物を非常に多く持ち出し
た。三また彼はそのうちの民を引き出して、これをのこぎりと、鉄のつるは
しと、おのを使う仕事につかせた。ダビデはアンモンびとのすべての町々
にこのように行った。そしてダビデと民とは皆エルサレムに帰った。
四この後ゲゼルでペリシテびとと戦いが起った。その時ホシャびとシベ
カイが巨人の子孫のひとりシパイを殺した。かれらはついに征服された。
五ここにまたペリシテびとと戦いがあったが、ヤイルの子エルハナンはガ
テびとゴリアテの兄弟ラミを殺した。そのやりの柄は機の巻棒のようで
あった。六またガテに戦いがあったが、そこにひとりの背の高い人がい
た。その手の指と足の指は六本ずつで、合わせて二十四本あった。彼もま
た巨人から生れた者であった。七彼はイスラエルをののしったので、ダビ
デの兄弟シメアの子ヨナタンがこれを殺した。八これらはガテで巨人か

ら生れた者であったが、ダビデの手とその家来たちの手に倒れた。

第二一章 一 時にサタンが起ってイスラエルに敵し、ダビデを動かしてイ
スラエルを数えさせようとした。二 ダビデはヨアブと軍の将校たちに言っ
た、「あなたがたは行って、ベエルシバからダンまでのイスラエルを数え、
その数を調べてわたしに知らせなさい」。三 ヨアブは言った、「それがどの
くらいあっても、どうか主がその民を百倍に増されるように。しかし王わ
が主よ、彼らは皆あなたのしもべではありませんか。どうしてわが主はこ
の事を求められるのですか。どうしてイスラエルに罪を得させられるので
すか」。四 しかし王の言葉がヨアブに勝ったので、ヨアブは出て行って、イ
スラエルをあまねく行き巡り、エルサレムに帰って来た。五 そしてヨアブ
は民の総数をダビデに告げた。すなわちイスラエルにはつるぎを抜く者が
百十万人、ユダにはつるぎを抜く者が四十七万人あった。六 しかしヨアブ

は王の命令を快しとしなかったので、レビとベニヤミンとはその中に数
えなかった。
七この事が神の目に悪かったので、神はイスラエルを撃たれた。八そこで
ダビデは神に言った、「わたしはこの事を行って大いに罪を犯しました。し
かし今どうか、しもべの罪を除いてください。わたしは非常に愚かなこと
をいたしました」。九主はダビデの先見者ガデに告げて言われた、一〇「行っ
てダビデに言いなさい、『主はこう仰せられる、わたしは三つの事を示す。
あなたはその一つを選びなさい。わたしはそれをあなたに行おう』と」。一
一ガデはダビデのもとに来て言った、「主はこう仰せられます、『あなたは選
びなさい。一二すなわち三年のききんか、あるいは三月の間、あなたのあ
だの前に敗れて、敵のつるぎに追いつかれるか、あるいは三日の間、主の
つるぎすなわち疫病がこの国にあって、主の使がイスラエルの全領域

にわたって滅ぼすことをするか』。いま、わたしがどういう答をわたしを
つかわしたものになすべきか決めなさい」。一三ダビデはガデに言った、「わ
たしは非常に悩んでいるが、主のあわれみは大きいゆえ、わたしを主の手
に陥らせてください。しかしわたしを人の手に陥らせないでください」。
一四そこで主はイスラエルに疫病を下されたので、イスラエルびとのう
ち七万人が倒れた。一五神はまたみ使をエルサレムにつかわして、これを
滅ぼそうとされたが、み使がまさに滅ぼそうとしたとき、主は見られて、
この災を悔い、その滅ぼすみ使に言われた、「もうじゅうぶんだ。今あ
なたの手をとどめよ」。そのとき主の使はエブスびとオルナンの打ち場の
かたわらに立っていた。一六ダビデが目をあげて見ると、主の使が地と天
の間に立って、手に抜いたつるぎをもち、エルサレムの上にさし伸べてい
たので、ダビデと長老たちは荒布を着て、ひれ伏した。一七そしてダビデ

は神に言った、「民を数えよと命じたのはわたしではありませんか。罪を
犯し、悪い事をしたのはわたしです。しかしこれらの羊は何をしました
か。わが神、主よ、どうぞあなたの手をわたしと、わたしの父の家にむけ
てください。しかし災をあなたの民に下さないでください」。
一八時に主の使はガデに命じ、ダビデが上って行って、エブスびとオル
ナンの打ち場で主のために一つの祭壇を築くように告げさせた。一九そこ
でダビデはガデが主の名をもって告げた言葉に従って上って行った。二〇
そのときオルナンは麦を打っていたが、ふりかえってみ使を見たので、と
もにいた彼の四人の子は身をかくした。二一ダビデがオルナンに近づくと、
オルナンは目を上げてダビデを見、打ち場から出て来て地にひれ伏してダ
ビデを拝した。二二ダビデはオルナンに言った、「この打ち場の所をわた
しに与えなさい。わたしは災が民に下るのをとどめるため、そこに主の

ために一つの祭壇を築きます。あなたは、そのじゅうぶんな価をとって
これをわたしに与えなさい」。二三オルナンはダビデに言った、「どうぞこ
れをお取りなさい。そして王わが主の良しと見られるところを行いなさ
い。わたしは牛を燔祭のために、打穀機をたきぎのために、麦を素祭のた
めにささげます。わたしは皆これをささげます」。二四ダビデ王はオルナン
に言った、「いいえ、わたしはじゅうぶんな代価を払ってこれを買います。
わたしは主のためにあなたのものを取ることをしません。また、費えなし
に燔祭をささげることをいたしません」。二五それでダビデはその所のた
めに金六百シケルをはかって、オルナンに払った。二六こうしてダビデは主
のために、その所に一つの祭壇を築き、燔祭と酬恩祭をささげて、主
を呼んだ。主は燔祭の祭壇の上に天から火を下して答えられた。二七また
主がみ使に命じられたので、彼はつるぎをさやにおさめた。

二八その時ダビデは主がエブスびとオルナンの打ち場で自分に答えられ
たのを見たので、その所で犠牲をささげた。二九モーセが荒野で造った主
の幕屋と燔祭の祭壇とは、その時ギベオンの高き所にあったからである。
三〇しかしダビデはその前へ行って神に求めることができなかった。彼が
主の使のつるぎを恐れたからである。

第二二章一それでダビデは言った、「主なる神の家はこれである、イスラ
エルのための燔祭の祭壇はこれである」と。
二ダビデは命じてイスラエルの地にいる他国人を集めさせ、また神の家
を建てるのに用いる石を切るために石工を定めた。三ダビデはまた門のと
びらのくぎ、およびかすがいに用いる鉄をおびただしく備えた。また青銅
を量ることもできないほどおびただしく備えた。四また香柏を数えきれぬ
ほど備えた。これはシドンびととツロの人々がおびただしく香柏をダビデ

の所に持って来たからである。五ダビデは言った、「わが子ソロモンは若
く、かつ経験がない。また主のために建てる家はきわめて壮大で、万国に
名を得、栄えを得るものでなければならない。それゆえ、わたしはその準備
をしておこう」と。こうしてダビデは死ぬ前に多くの物資を準備した。
六そして彼はその子ソロモンを召して、イスラエルの神、主のために家
を建てることを命じた。七すなわちダビデはソロモンに言った、「わが子よ、
わたしはわが神、主の名のために家を建てようと志していた。八ところ
が主の言葉がわたしに臨んで言われた、『おまえは多くの血を流し、大いな
る戦争をした。おまえはわたしの前で多くの血を地に流したから、わが名
のために家を建ててはならない。九見よ、男の子がおまえに生れる。彼は
平和の人である。わたしは彼に平安を与えて、周囲のもろもろの敵に煩
わされないようにしよう。彼の名はソロモンと呼ばれ、彼の世にわたしは

イスラエルに平安と静穏とを与える。一〇彼はわが名のために家を建てる
であろう。彼はわが子となり、わたしは彼の父となる。わたしは彼の王位
をながくイスラエルの上に堅くするであろう』。一一それでわが子よ、どう
か主があなたと共にいまし、あなたを栄えさせて、主があなたについて言
われたように、あなたの神、主の家を建てさせてくださるように。一二た
だ、どうか主があなたに分別と知恵を賜い、あなたをイスラエルの上に立
たせられるとき、あなたの神、主の律法を、あなたに守らせてくださるよ
うに。一三あなたがもし、主がイスラエルについてモーセに命じられた定
めとおきてとを慎んで守るならば、あなたは栄えるであろう。心を強く
し、勇め。恐れてはならない、おののいてはならない。一四見よ、わたし
は苦難のうちにあって主の家のために金十万タラント、銀百万タラントを
備え、また青銅と鉄を量ることもできないほどおびただしく備えた。また

材木と石をも備えた。あなたはまたこれに加えなければならない。一五あ
なたにはまた多数の職人、すなわち石や木を切り刻む者、工作に巧みな
各種の者がある。一六金、銀、青銅、鉄もおびただしくある。たって行
いなさい。どうか主があなたと共におられるように」。

一七ダビデはまたイスラエルのすべてのつかさたちにその子ソロモンを助
けるように命じて言った、一八「あなたがたの神、主はあなたがたとともに
おられるではないか。四方に泰平を賜わったではないか。主はこの地の民
をわたしの手にわたされたので、この地は主の前とその民の前に服してい
る。一九それであなたがたは心をつくし、精神をつくしてあなたがたの神、
主を求めなさい。たって主なる神の聖所を建て、主の名のために建てるそ
の家に、主の契約の箱と神の聖なるもろもろの器を携え入れなさい」。

第二三章一ダビデは老い、その日が満ちたので、その子ソロモンをイスラ

エルの王とした。
二ダビデはイスラエルのすべてのつかさおよび祭司とレビびとを集めた。
三レビびとの三十歳以上のものを数えると、その男の数が三万八千人あっ
た。四ダビデは言った、「そのうち二万四千人は主の家の仕事をつかさどり、
六千人はつかさびと、およびさばきびととなり、五四千人は門を守る者と
なり、また四千人はさんびのためにわたしの造った楽器で主をたたえよ」。
六そしてダビデは彼らをレビの子らにしたがってゲルション、コハテ、メラ
リの組に分けた。

七ゲルションの子らはラダンとシメイ。八ラダンの子らは、かしらのエヒ
エルとゼタムとヨエルの三人。九シメイの子らはシロミテ、ハジエル、ハラ
ンの三人。これらはラダンの氏族の長であった。一〇シメイの子らはヤハ
テ、ジナ、エウシ、ベリアの四人。皆シメイの子で、一一ヤハテはかしら、

ジザはその次、エウシとベリアは子が多くなかったので、ともに数えられ
て一つの氏族となった。
一二コハテの子らはアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエルの四人。一
三アムラムの子らはアロンとモーセである。アロンはその子らとともに、な
がくいと聖なるものを聖別するために分かたれて、主の前に香をたき、主
に仕え、常に主の名をもって祝福することをなした。一四神の人モーセの
子らはレビの部族のうちに数えられた。一五モーセの子らはゲルションとエ
リエゼル。一六ゲルションの子らは、かしらはシブエル。一七エリエゼルの
子らは、かしらはレハビヤ。エリエゼルにはこのほかに子がなかった。し
かしレハビヤの子らは非常に多かった。一八イヅハルの子らは、かしらは
シロミテ。一九ヘブロンの子らは長子はエリヤ、次はアマリヤ、第三はヤ
ハジエル、第四はエカメアム。二〇ウジエルの子らは、かしらはミカ、次は

イシアである。
二一メラリの子らはマヘリとムシ。マヘリの子らはエレアザルとキシ。二
二エレアザルは男の子がなくて死に、ただ娘たちだけであったが、キシ
の子であるその身内の男たちが彼女たちをめとった。二三ムシの子らはマ
ヘリ、エデル、エレモテの三人である。
二四これらはその氏族によるレビの子孫であって、その人数が数えられ、
その名がしるされて、主の家の務をなした二十歳以上の者で、氏族の長
であった。二五ダビデは言った、「イスラエルの神、主はその民に平安を与
え、ながくエルサレムに住まわれる。二六レビびとは重ねて幕屋およびその
勤めの器物をかつぐことはない。二七――ダビデの最後の言葉によって、
レビびとは二十歳以上の者が数えられた――二八彼らの務はアロンの子孫
を助けて主の家の働きをし、庭とへやの仕事およびすべての聖なるもの
を清めること、そのほか、すべて神の家の働きをすることである。二九ま

た供えのパン、素祭の麦粉、種入れぬ菓子、焼いた供え物、油をまぜた供
え物をつかさどり、またすべて分量および大きさを量ることをつかさど
り、三〇また朝ごとに立って主に感謝し、さんびし、夕にもまたそのよう
にし、三一また安息日と新月と祭日に、主にもろもろの燔祭をささげると
きは、絶えず主の前にその命じられた数にしたがってささげなければなら
ない。三二このようにして彼らは会見の幕屋と聖所の務を守り、主の家
の働きのためにその兄弟であるアロンの子らに仕えなければならない」。
第二四章一アロンの子孫の組は次のとおりである。すなわちアロンの子
らはナダブ、アビウ、エレアザル、イタマル。二ナダブとアビウはその父に
先だって死に、子がなかったので、エレアザルとイタマルが祭司となった。
三ダビデはエレアザルの子孫ザドクとイタマルの子孫アヒメレクの助けに
よって彼らを分けて、それぞれの勤めにつけた。四エレアザルの子孫のう

ちにはイタマルの子孫のうちよりも長たる人々が多かった。それでエレ
アザルの子孫で氏族の長である十六人と、イタマルの子孫で氏族の長で
ある者八人にこれを分けた。五このように彼らは皆ひとしく、くじによっ
て分けられた。聖所のつかさ、および神のつかさは、ともにエレアザルの
子孫とイタマルの子孫から出たからである。六レビびとネタネルの子であ
る書記シマヤは、王とつかさたちと祭司ザドクとアビヤタルの子アヒメレ
クと祭司およびレビびとの氏族の長たちの前で、これを書きしるした。す
なわちエレアザルのために氏族一つを取れば、イタマルのためにも一つを
取った。

七第一のくじはヨアリブに当り、第二はエダヤに当り、八第三はハリム
に、第四はセオリムに、九第五はマルキヤに、第六はミヤミンに、一〇第七
はハッコヅに、第八はアビヤに、一一第九はエシュアに、第十はシカニヤ

に、一二第十一はエリアシブに、第十二はヤキムに、一三第十三はホッパに、
第十四はエシバブに、一四第十五はビルガに、第十六はインメルに、一五第
十七はヘジルに、第十八はハピセツに、一六第十九はペタヒヤに、第二十
はエゼキエルに、一七第二十一はヤキンに、第二十二はガムルに、一八第二
十三はデラヤに、第二十四はマアジヤに当った。一九これは、彼らの先祖
アロンによって設けられた定めにしたがい、主の家にはいって務をなす
順序であって、イスラエルの神、主の彼に命じられたとおりである。
二〇このほかのレビの子孫は次のとおりである。すなわちアムラムの子ら
のうちではシュバエル。シュバエルの子らのうちではエデヤ。二一レハビヤ
については、レハビヤの子らのうちでは長子イシア。二二イヅハリびとの
うちではシロミテ。シロミテの子らのうちではヤハテ。二三ヘブロンの子ら
は長子はエリヤ、次はアマリヤ、第三はヤハジエル、第四はエカメアム。

二四ウジエルの子らのうちではミカ。ミカの子らのうちではシャミル。二五
ミカの兄弟はイシア。イシアの子らのうちではゼカリヤ。二六メラリの子
らはマヘリとムシ。ヤジアの子らはベノ。二七メラリの子孫のヤジアから出
た者はベノ、ショハム、ザックル、イブリ。二八マヘリからエレアザルが出
た。彼には子がなかった。二九キシについては、キシの子はエラメル。三〇
ムシの子らはマヘリ、エデル、エリモテ。これらはレビびとの子孫で、その
氏族によっていった者である。三一これらの者もまた氏族の兄もその弟
も同様に、ダビデ王と、ザドクと、アヒメレクと、祭司およびレビびとの
氏族の長たちの前で、アロンの子孫であるその兄弟たちのようにくじを
引いた。

第二五章一ダビデと軍の長たちはまたアサフ、ヘマンおよびエドトンの
子らを勤めのために分かち、琴と、立琴と、シンバルをもって預言する者

にした。その勤めをなした人々の数は次のとおりである。二アサフの子た
ちはザックル、ヨセフ、ネタニヤ、アサレラであって、アサフの指揮のもと
に王の命によって預言した者である。三エドトンについては、エドトンの
子たちはゲダリヤ、ゼリ、エサヤ、ハシャビヤ、マッタテヤの六人で、琴
をもって主に感謝し、かつほめたたえて預言したその父エドトンの指揮の
下にあった。四ヘマンについては、ヘマンの子たちはブッキヤ、マッタニ
ヤ、ウジエル、シブエル、エレモテ、ハナニヤ、ハナニ、エリアタ、ギダル
テ、ロマムテ・エゼル、ヨシベカシャ、マロテ、ホテル、マハジオテであ
る。五これらは皆、神がご自身の約束にしたがって高くされた王の先見者
ヘマンの子たちであった。神はヘマンに男の子十四人、女の子三人を与
えられた。六これらの者は皆その父の指揮の下にあって、主の宮で歌をう
たい、シンバルと立琴と琴をもって神の宮の務をした。アサフ、エドト
ンおよびヘマンは王の命の下にあった。七彼らおよび主に歌をうたうこ

とのために訓練され、すべて熟練した兄弟たちの数は二百八十八人で
あった。八彼らは小なる者も、大なる者も、教師も生徒も皆ひとしくそ
の務のためにくじを引いた。
九第一のくじはアサフのためにヨセフに当り、第二はゲダリヤに当った。
彼とその兄弟たちおよびその子たち、合わせて十二人。一〇第三はザック
ルに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一一第四
はイヅリに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一
二第五はネタニヤに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十
二人。一三第六はブッキヤに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合
わせて十二人。一四第七はアサレラに当った。その子たちおよびその兄弟
たち、合わせて十二人。一五第八はエサヤに当った。その子たちおよびそ
の兄弟たち、合わせて十二人。一六第九はマッタニヤに当った。その子た

ちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一七第十はシメイに当った。そ
の子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一八第十一はアザリエル
に当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一九第十二
はハシャビヤに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二
人。二〇第十三はシュバエルに当った。その子たちおよびその兄弟たち、
合わせて十二人。二一第十四はマッタテヤに当った。その子たちおよびそ
の兄弟たち、合わせて十二人。二二第十五はエレモテに当った。その子た
ちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。二三第十六はハナニヤに当った。
その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。二四第十七はヨシベカ
シャに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。二五第
十八はハナニに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二
人。二六第十九はマロテに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わ

せて十二人。二七第二十はエリアタに当った。その子たちおよびその兄弟
たち、合わせて十二人。二八第二十一はホテルに当った。その子たちおよ
びその兄弟たち、合わせて十二人。二九第二十二はギダルテに当った。そ
の子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。三〇第二十三はマハジオ
テに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。三一第二
十四はロマムテ・エゼルに当った。その子たちおよびその兄弟たち、合わ
せて十二人であった。

第二六章一門を守る者の組は次のとおりである。すなわちコラびとのう
ちでは、アサフの子孫のうちのコレの子メシレミヤ。二メシレミヤの子たち
は、長子はゼカリヤ、次はエデアエル、第三はゼバデヤ、第四はヤテニエ
ル、三第五はエラム、第六はヨハナン、第七はエリヨエナイである。四オベ
デ・エドムの子たちは、長子はシマヤ、次はヨザバデ、第三はヨア、第四

はサカル、第五はネタネル、五第六はアンミエル、第七はイッサカル、第八
はピウレタイである。神が彼を祝福されたからである。六彼の子シマヤ
にも数人の子が生れ、有能な人々であったので、その父の家を治める者
となった。七すなわちシマヤの子たちはオテニ、レパエル、オベデ、エル
ザバデで、エルザバデの兄弟エリウとセマキヤは力ある人々であった。
八これらは皆オベデ・エドムの子孫である。彼らはその子たちおよびその
兄弟たちと共にその勤めに適した力ある人々で、合わせて六十二人、み
なオベデ・エドムに属する者である。九メシレミヤにも子たちと兄弟たち
合わせて十八人あって、皆力ある人々であった。一〇メラリの子孫ホサに
も子たちがあった。そのかしらはシムリ、これは長子ではなかったが、父
はこれをかしらにしたのであった。一一次はヒルキヤ、第三はテバリヤ、第
四はゼカリヤである。ホサの子たちと兄弟たちは合わせて十三人である。

一二これらは門を守る者の組の長たる人々であって、その兄弟たちと
同様に務をなして、主の宮に仕えた。一三彼らはそれぞれ門のために小
なる者も、大なる者も等しく、その氏族にしたがってくじを引いた。一四
東の門のくじはシレミヤに当った。また彼の子で思慮深い議士ゼカリヤ
のためにくじを引いたが、北の門のくじがこれに当った。一五オベデ・エ
ドムには南の門のくじ、その子たちには倉のくじ、一六シュパムとホサに
は西の門のくじが当った。これは坂の大路にあるシャレケテの門のかたわ
らにあった。守る者と守る者とが相対していた。一七東の方には毎日六
人、北の方には毎日四人、南の方には毎日四人、倉には二人と二人、一
八西の方パルバルには大路に四人、パルバルに二人。一九門を守る者の組
は以上のとおりで、コラの子孫とメラリの子孫であった。
二〇レビびとのうちアヒヤは神の宮の倉および聖なる物の倉をつかさど

った。二一ラダンの子孫すなわちラダンから出たゲルションびとの子孫で、
ゲルションびとの氏族の長はエヒエリである。
二二エヒエリ、ゼタムおよびその兄弟ヨエルの子たちは主の宮の倉をつ
かさどった。二三アムラムびと、イヅハルびと、ヘブロンびと、ウジエルび
とのうちでは次のとおりであった。二四すなわちモーセの子ゲルショムの
子シブエルは倉のつかさであった。二五その兄弟でエリエゼルから出た者
は、その子はレハビヤ、その子はエサヤ、その子はヨラム、その子はジクリ、
その子はシロミテである。二六このシロミテとその兄弟たちはすべての聖
なる物の倉をつかさどった。これはダビデ王と、氏族の長と、千人の長
と、百人の長と、軍の長たちのささげたものである。二七すなわち彼ら
が戦いで獲たぶんどり物のうちから主の宮の修繕のためにささげたもの
である。二八またすべて先見者サムエル、キシの子サウル、ネルの子アブネ

ル、ゼルヤの子ヨアブなどがささげた物。すべてこれらのささげ物はシロ
ミテとその兄弟たちが管理した。
二九イヅハルびとのうちでは、ケナニヤとその子たちが、つかさおよびさ
ばきびととしてイスラエルの外事のために選ばれた。三〇ヘブロンびとのう
ちでは、ハシャビヤおよびその兄弟など勇士千七百人があって、ヨルダン
のこなた、すなわち西の方でイスラエルの監督となり、主のすべての事を
行い、王に奉仕した。三一ヘブロンびとのうちでは、系図と氏族によって
エリヤがヘブロンびとの長であったが、ダビデの治世の第四十年に彼ら
を尋ね求め、ギレアデのヤゼルで彼らのうちから大勇士を得た。三二ダビ
デ王は彼とその兄弟など氏族の長たち二千七百人の勇士をルベンびと、
ガドびと、マナセびとの半部族の監督となし、すべて神につける事と王の
事とをつかさどらせた。

第二七章一イスラエルの子孫のうちで氏族の長、千人の長、百人の長、
およびつかさたちは年のすべての月の間、月ごとに交替して組のすべて
の事をなして王に仕えたが、その数にしたがえば各組二万四千人あった。
二まず第一の組すなわち正月の分はザブデエルの子ヤショベアムがこれ
を率いた。その組には二万四千人あった。三彼はペレヅの子孫で、正月
の軍団のすべての将たちのかしらであった。四二月の組はアホアびとド
ダイがこれを率いた。その組には二万四千人あった。五三月の第三の将
は祭司エホヤダの子ベナヤが長であって、その組には二万四千人あった。
六このベナヤはかの三十人のうちの勇士であって三十人を率い、その子ア
ミザバデがその組にあった。七四月の第四の将はヨアブの兄弟アサヘル
であって、その子ゼバデヤがこれに次いだ。その組には二万四千人あった。
八五月の第五の将はイズラヒびとシャンモテであって、その組には二万四

千人あった。九六月の第六の将はテコアびとイッケシの子イラであって、
その組には二万四千人あった。一〇七月の第七の将はエフライムの子孫で
あるペロンびとヘレヅであって、その組には二万四千人あった。一一八月
の第八の将はゼラびとの子孫であるホシャびとシベカイであって、その組
には二万四千人あった。一二九月の第九の将はベニヤミンの子孫であるア
ナトテびとアビエゼルであって、その組には二万四千人あった。一三十月
の第十の将はゼラびとの子孫であるネトパびとマハライであって、その組
には二万四千人あった。一四十一月の第十一の将はエフライムの子孫であ
るピラトンびとベナヤであって、その組には二万四千人あった。一五十二
月の第十二の将はオテニエルの子孫であるネトパびとヘルダイであって、
その組には二万四千人あった。

一六なおイスラエルの部族を治める者たちは次のとおりである。ルベン

びとのつかさはヂクリの子エリエゼル。シメオンびとのつかさはマアカの
子シパテヤ。一七レビびとのつかさはケムエルの子ハシャビヤ。アロンび
とのつかさはザドク。一八ユダのつかさはダビデの兄弟のひとりエリウ。
イッサカルのつかさはミカエルの子オムリ。一九ゼブルンのつかさはオバデ
ヤの子イシマヤ。ナフタリのつかさはアズリエルの子エレモテ。二〇エフラ
イムの子孫のつかさはアザジヤの子ホセア。マナセの半部族のつかさはペ
ダヤの子ヨエル。二一ギレアデにあるマナセの半部族のつかさはゼカリヤの
子イド。ベニヤミンのつかさはアブネルの子ヤシエル。二二ダンのつかさは
エロハムの子アザリエル。これらはイスラエルの部族のつかさたちであっ
た。二三しかしダビデは二十歳以下の者は数えなかった。主がかつてイス
ラエルを天の星のように多くすると言われたからである。二四ゼルヤの子
ヨアブは数え始めたが、これをなし終えなかった。その数えることによっ

て怒(いか)りがイスラエルの上(うえ)に臨(のぞ)んだ。またその数(かず)はダビデ王(おう)の歴代志(れきだいし)に載(の)せ
なかった。

二五アデエルの子(こ)アズマウテは王(おう)の倉(くら)をつかさどり、ウジヤの子(こ)ヨナタ
ンは田野(でんや)、町々(まちまち)、村々(むらむら)、もろもろの塔(とう)にある倉(くら)をつかさどり、二六ケルブ
の子(こ)エズリは地(ち)を耕(たがや)す農夫(のうふ)をつかさどり、二七ラマテびとシメイはぶどう
畑(はたけ)をつかさどり、シプミびとザブデはぶどう畑(はたけ)から取(と)ったぶどう酒(しゅ)の倉(くら)
をつかさどり、二八ゲデルびとバアル・ハナンは平野(へいや)のオリブの木(き)といちじ
く桑(くわ)の木(き)をつかさどり、ヨアシは油(あぶら)の倉(くら)をつかさどり、二九シャロンびと
シテライはシャロンで飼(か)う牛(うし)の群(む)れをつかさどり、アデライの子(こ)シャパテ
はもろもろの谷(たに)におる牛(うし)の群(む)れをつかさどり、三〇イシマエルびとオビルは
らくだをつかさどり、メロノテびとエデヤはろばをつかさどり、三一ハガル
びとヤジズは羊(ひつじ)の群(む)れをつかさどった。彼(かれ)らは皆(みな)ダビデ王(おう)の財産(ざいさん)のつか
さであった。

三二またダビデのおじヨナタンは議官で、知恵ある人であり、学者であっ
た。また彼とハクモニの子エヒエルは王の子たちの補佐であった。三三ア
ヒトペルは王の議官。アルキびとホシャイは王の友であった。三四アヒト
ペルに次ぐ者はベナヤの子エホヤダおよびアビヤタル。王の軍の長はヨ
アブであった。

第二八章一ダビデはイスラエルのすべての長官、すなわち部族の長、
王に仕えた組の長、千人の長、百人の長、王とその子たちのすべての
財産および家畜のつかさ、宦官、有力者、勇士などをことごとくエルサレ
ムに召し集めた。二そしてダビデ王はその足で立ち上がって言った、「わが
兄弟たち、わが民よ、わたしに聞きなさい。わたしは主の契約の箱のた
め、われわれの神の足台のために安住の家を建てようとの志をもち、
すでにこれを建てる準備をした。三しかし神はわたしに言われた、『おまえ

はわが名のために家を建ててはならない。おまえは軍人であって、多くの
血を流したからである』と。四それにもかかわらず、イスラエルの神、主
はわたしの父の全家のうちからわたしを選んで長くイスラエルの王とせら
れた。すなわちユダを選んでかしらとし、ユダの家のうちで、わたしの父
の家を選び、わたしの父の子らのうちで、わたしを喜び、全イスラエル
の王とせられた。五そして主はわたしに多くの子を賜わり、そのすべての
子らのうちからわが子ソロモンを選び、これを主の国の位にすわらせて、
イスラエルを治めさせようとせられた。六主はまたわたしに言われた、『お
まえの子ソロモンがわが家およびわが庭を造るであろう。わたしは彼を選
んでわが子となしたからである。わたしは彼の父となる。七彼がもし今日
のように、わが戒めとわがおきてを固く守って行うならば、わたしはそ
の国をいつまでも堅くするであろう』と。八それゆえいま、主の会衆なる

全イスラエルの目の前およびわれわれの神の聞かれる所であなたがたに
勧める。あなたがたはその神、主のすべての戒めを守り、これを求めな
さい。そうすればあなたがたはこの良き地を所有し、これをあなたがたの
後の子孫に長く嗣業として伝えることができる。
九わが子ソロモンよ、あなたの父の神を知り、全き心をもって喜び勇
んで彼に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いを悟られる
からである。あなたがもし彼を求めるならば会うことができる。しかしあ
なたがもしかれを捨てるならば彼は長くあなたを捨てられるであろう。一
〇それであなたは慎みなさい。主はあなたを選んで聖所とすべき家を建
てさせようとされるのだから心を強くしてこれを行いなさい」。
一一こうしてダビデは神殿の廊およびその家、その倉、その上の室、その
内の室、贖罪所の室などの計画をその子ソロモンに授け、一二またその

心にあったすべてのもの、すなわち主の宮の庭、周囲のすべての室、神の家の倉、ささげ物の倉などの計画を授け、一三また祭司およびレビびとの組と、主の宮のもろもろの務の仕事と、主の宮のもろもろの務めの器物について授け、一四またもろもろの勤めに用いるすべての金の器を造る金の目方、およびもろもろの勤めに用いる銀の器の目方を定めた。一五すなわち金の燭台と、そのともしび皿の目方、おのおの燭台と、そのともしび皿の金の目方を定め、また銀の燭台についてもおのおのの燭台の用法にしたがって燭台と、そのともしび皿の銀の目方を定めた。一六また供えのパンの机については、そのおのおのの机のために金の目方を定め、また銀の机のためにも銀を定め、一七また肉さし、鉢、かめに用いる純金の目方を定め、金の大杯についてもおのおのの目方を定め、銀の大杯についてもおのおのの目方を定め、一八また香の祭壇のために精金の目方を定

め、また翼を伸べて主の契約の箱をおおっているケルビムの金の車のひ
な型の金を定めた。一九ダビデはすべての工作が計画にしたがってなされ
るため、これについて主の手によって書かれたものにより、これをことご
とく明らかにした。
二〇ダビデはその子ソロモンに言った、「あなたは心を強くし、勇んで
これを行いなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。主なる
神、わたしの神があなたとともにおられるからである。主はあなたを離れ
ず、あなたを捨てず、ついに主の宮の務のすべての工事をなし終えさせら
れるでしょう。二一見よ、神の宮のすべての務のためには祭司とレビびと
の組がある。またもろもろの勤めのためにすべての仕事を喜んでする巧
みな者が皆あなたと共にある。またつかさたちおよびすべての民もあなた
の命じるところをことごとく行うでしょう」。

第二九章一ダビデ王はまた全会衆に言った、「わが子ソロモンは神がた
だひとりを選ばれた者であるが、まだ若くて経験がなく、この事業は大き
い。この宮は人のためではなく、主なる神のためだからである。**二**そこで
わたしは力をつくして神の宮のために備えた。すなわち金の物を造るた
めに金、銀の物のために銀、青銅の物のために青銅、鉄の物のために鉄、
木の物のために木を備えた。その他縞めのう、はめ石、アンチモニイ、色
のついた石、さまざまの宝石、大理石などおびただしい。**三**なおわたしは
わが神の宮に熱心なるがゆえに、聖なる家のために備えたすべての物に加
えて、わたしの持っている金銀の財宝をわが神の宮にささげる。**四**すなわ
ちオフルの金三千タラント、精銀七千タラントをそのもろもろの建物の壁
をおおうためにささげる。**五**金は金の物のために、銀は銀の物のために、
すべて工人によって造られるもののために用いる。だれかきょう、主にそ

の身をささげる者のように喜んでささげ物をするだろうか」。
六そこで氏族の長たち、イスラエルの部族のつかさたち、千人の長、百
人の長および王の工事をつかさどる者たちは喜んでささげ物をした。七
こうして彼らは神の宮の務のために金五千タラント一万ダリク、銀一万
タラント、青銅一万八千タラント、鉄十万タラントをささげた。八宝石を
持っている者はそれをゲルションびとエヒエルの手によって神の宮の倉に
納めた。九彼らがこのように真心からみずから進んで主にささげたので、
民はそのみずから進んでささげたのを喜んだ。ダビデ王もまた大いに喜
んだ。

一〇そこでダビデは全会衆の前で主をほめたたえた。ダビデは言った、
「われわれの先祖イスラエルの神、主よ、あなたはとこしえにほむべきか
たです。一一主よ、大いなることと、力と、栄光と、勝利と、威光とはあ

なたのものです。天にあるもの、地にあるものも皆あなたのものです。主
よ、国もまたあなたのものです。あなたは万有のかしらとして、あがめら
れます。一二富と誉とはあなたから出ます。あなたは万有をつかさどられ
ます。あなたの手には勢いと力があります。あなたの手はすべてのもの
を大いならしめ、強くされます。一三われわれの神よ、われわれは、いま、
あなたに感謝し、あなたの光栄ある名をたたえます。
一四しかしわれわれがこのように喜んでささげることができても、わた
しは何者でしょう。わたしの民は何でしょう。すべての物はあなたから出
ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです。一五われわ
れはあなたの前ではすべての先祖たちのように、旅びとです、寄留者です。
われわれの世にある日は影のようで、長くとどまることはできません。一
六われわれの神、主よ、あなたの聖なる名のために、あなたに家を建てよ

うとしてわれわれが備えたこの多くの物は皆あなたの手から出たもの、ま
た皆あなたのものです。
一七わが神よ、あなたは心をためし、また正直
を喜ばれることを、わたしは知っています。わたしは正しい心で、この
すべての物を喜んでささげました。今わたしはまた、ここにおるあなたの
民が喜んで、みずから進んであなたにささげ物をするのを見ました。
一八
われわれの先祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたの民
の心にこの意志と精神とをいつまでも保たせ、その心をあなたに向けさ
せてください。
一九またわが子ソロモンに心をつくしてあなたの命令と、
あなたのあかしと、あなたのさだめとを守らせて、これをことごとく行わ
せ、わたしが備えをした宮を建てさせてください」。

二〇そしてダビデが全会衆にむかって、「あなたがたの神、主をほめた
たえよ」と言ったので、全会衆は先祖たちの神、主をほめたたえ、伏して

主を拝し、王に敬礼した。二一そしてその翌日彼らは全イスラエルのため
に主に犠牲をささげた。すなわち燔祭として雄牛一千、雄羊一千、小羊一
千をその灌祭と共に主にささげ、おびただしい犠牲をささげた。二二そし
てその日、彼らは大いなる喜びをもって主の前に食い飲みした。

彼らはさらに改めてダビデの子ソロモンを王となし、これに油を注い
で主の君となし、またザドクを祭司とした。二三こうしてソロモンはその父
ダビデに代り、王として主の位に座した。彼は栄え、イスラエルは皆彼に
従った。二四またすべてのつかさたち、勇士たち、およびダビデ王の王子
たちも皆ソロモン王に忠誠を誓った。二五主は全イスラエルの目の前で
ソロモンを非常に大いならしめ、彼より前のイスラエルのどの王も得たこ
とのない王威を彼に与えられた。

二六このようにエッサイの子ダビデは全イスラエルを治めた。二七彼がイ

スラエルを治めた期間は四十年であった。すなわちヘブロンで七年世を治
め、エルサレムで三十三年世を治めた。
二八彼は高齢に達し、年も富も誉
も満ち足りて死んだ。その子ソロモンが彼に代って王となった。
二九ダビデ
王の始終の行為は、先見者サムエルの書、預言者ナタンの書および先見者
ガドの書にしるされている。
三〇そのうちには彼のすべての政と、その力
および彼とイスラエルと他のすべての国々に臨んだ事どもをしるしている。

歴代志下

第一章 一ダビデの子ソロモンはその国に自分の地位を確立した。その神、
主が共にいまして彼を非常に大いなる者にされた。
二ソロモンはすべてのイスラエルびと、すなわち千人の長、百人の長、
さばきびとおよびイスラエルの全地のすべてのつかさ、氏族のかしらたちに
告げた。三そしてソロモンとイスラエルの全会衆はともにギベオンにある
高き所へ行った。主のしもべモーセが荒野で造った神の会見の幕屋がそ
こにあったからである。四（しかし神の箱はダビデがすでにキリアテ・ヤリ
ムから、これのために備えた所に運び上らせてあった。ダビデはさきに、
エルサレムでこれのために天幕を張って置いたからである。）五またホルの
子であるウリの子ベザレルが造った青銅の祭壇がその所の主の幕屋の前

にあり、ソロモンおよび会衆は主に求めた。六ソロモンはそこに上って
行って、会見の幕屋のうちにある主の前の青銅の祭壇に燔祭一千をささ
げた。
七その夜、神はソロモンに現れて言われた、「あなたに何を与えようか、
求めなさい」。八ソロモンは神に言った、「あなたはわたしの父ダビデに大
いなるいつくしみを示し、またわたしを彼に代って王とされました。九主
なる神よ、どうぞわが父ダビデに約束された事を果してください。あなた
は地のちりのような多くの民の上にわたしを立てて王とされたからです。
一〇この民の前に出入りすることのできるように今わたしに知恵と知識と
を与えてください。だれがこのような大いなるあなたの民をさばくことが
できましょうか」。一一神はソロモンに言われた、「この事があなたの心に
あって、富をも、宝をも、誉をも、またあなたを憎む者の命をも求め

ず、また長命をも求めず、ただわたしがあなたを立てて王としたわたしの
民をさばくために知恵と知識とを自分のために求めたので、一二知恵と知識
とはあなたに与えられている。わたしはまたあなたの前の王たちの、まだ
得たことのないほどの富と宝と誉とをあなたに与えよう。あなたの後の
者も、このようなものを得ないでしょう」。一三それからソロモンはギベオ
ンの高き所を去り、会見の幕屋の前を去って、エルサレムに帰り、イス
ラエルを治めた。

一四ソロモンは戦車と騎兵とを集めたが、戦車一千四百両、騎兵一万二
千人あった。ソロモンはこれを戦車の町々と、エルサレムの王のもとに
置いた。一五王は銀と金を石のようにエルサレムに多くし、香柏を平野の
いちじく桑のように多くした。一六ソロモンが馬を輸入したのはエジプト
とクエからであった。すなわち王の貿易商人がクエから代価を払って受

け取って来た。一七彼らはエジプトから戦車一両を銀六百シケルで輸入
し、馬一頭を銀百五十で輸入した。同じようにこれらのものが彼らによっ
てヘテびとのすべての王たち、およびスリヤの王たちにも輸出された。
第二章一さてソロモンは主の名のために一つの宮を建て、また自分のた
めに一つの王宮を建てようと思った。二そしてソロモンは荷を負う者七万
人、山で石を切り出す者八万人、これらを監督する者三千六百人を数え出
した。三ソロモンはまずツロのヒラムに人をつかわして言わせた、「あなた
はわたしの父ダビデに、その住むべき家を建てるために香柏を送られまし
た。どうぞ彼にされたように、わたしにもして下さい。四見よ、わたしはわ
が神、主の名のために一つの家を建て、これを聖別して彼にささげ、彼の
前にこうばしい香をたき、常供のパンを供え、また燔祭を安息日、新月、
およびわれらの神、主の定めの祭に朝夕ささげ、これをイスラエルのな

がく守るべき定めにしようとしています。五またわたしの建てる家は大き
な家です。われらの神はすべての神よりも大いなる神だからです。六しか
し、天も、諸天の天も彼を入れることができないのに、だれが彼のために
家を建てることができましょうか。わたしは何者ですか、彼のために家を
建てるというのも、ただ彼の前に香をたく所に、ほかならないのです。七
それで、どうぞ金、銀、青銅、鉄の細工および紫糸、緋糸、青糸の織物
にくわしく、また彫刻の術に巧みな工人ひとりをわたしに送って、父ダ
ビデが備えておいたユダとエルサレムのわたしの工人たちと一緒に働か
せてください。八またどうぞレバノンから香柏、いとすぎ、びゃくだんを
送ってください。わたしはあなたのしもべたちがレバノンで木を切ること
をよくわきまえているのを知っています。わたしのしもべたちも、あなた
のしもべたちと一緒に働かせ、九わたしのためにたくさんの材木を備え

させてください。わたしの建てる家は非常に広大なものですから。一〇わ
たしは木を切るあなたのしもべたちに砕いた小麦二万コル、大麦二万コル、
ぶどう酒二万バテ、油二万バテを与えます」。
一一そこでツロの王ヒラムは手紙をソロモンに送って答えた、「主はその
民を愛するゆえに、あなたを彼らの王とされました」。一二ヒラムはまた
言った、「天地を造られたイスラエルの神、主はほむべきかな。彼はダビ
デ王に賢い子を与え、これに分別と知恵を授けて、主のために宮を建て、
また自分のために、王宮を建てることをさせられた。
一三いまわたしは達人ヒラムという知恵のある工人をつかわします。一四
彼はダンの子孫である女を母とし、ツロの人を父とし、金銀、青銅、鉄、
石、木の細工および紫糸、青糸、亜麻糸、緋糸の織物にくわしく、またよ
くもろもろの彫刻をし、意匠を凝らしてもろもろの工作をします。彼を

用いてあなたの工人およびあなたの父、わが主ダビデの工人と一緒に働
かせなさい。一五それでいまわが主の言われた小麦、大麦、油およびぶど
う酒をそのしもべどもに送ってください。一六あなたの求められる材木は
レバノンから切りだし、いかだに組んで、海からヨッパに送ります。あな
たはそれをエルサレムに運び上げなさい」。
一七そこでソロモンはその父ダビデが数えたようにイスラエルの国にい
るすべての他国人を数えたが、合わせて十五万三千六百人あった。一八彼
はその七万人を荷を負う者とし、八万人を山で木や石を切る者とし、三千
六百人を民を働かせる監督者とした。

第三章一ソロモンはエルサレムのモリアの山に主の宮を建てることを始
めた。そこは父ダビデに主が現れられた所、すなわちエブスびとオルナン
の打ち場にダビデが備えた所である。二ソロモンが宮を建て始めたのは、

その治世の四年の二月であった。三ソロモンの建てた神の宮の基の寸法
は次のとおりである。すなわち昔の尺度によれば長さ六十キュビト、幅
二十キュビト、四宮の前の廊は宮の幅に従って長さ二十キュビト高さ百
二十キュビトで、その内部は純金でおおった。五またその拝殿はいとす
ぎの板で張り、精金をもってこれをおおい、その上にしゅろと鎖の形を
施した。六また宝石をはめ込んで宮を飾った。その金はパルワイムの金
であった。七彼はまた金をもってその宮、すなわち、梁、敷居、壁および
戸をおおい、壁の上にケルビムを彫りつけた。八彼はまた至聖所を造った。
その長さは宮の長さにしたがって二十キュビト、幅も二十キュビトである。
彼は精金六百タラントをもってこれをおおった。九その釘の金の重さは五
十シケルであった。彼はまた階上の室も金でおおった。
一〇彼は至聖所に木を刻んだケルビムの像を二つ造り、これを金でおおっ

た。一一ケルビムの翼の長さは合わせて二十キュビトあった。すなわち一
つのケルブの一つの翼は五キュビトで、宮の壁に届き、ほかの翼も五キュ
ビトで、他のケルブの翼に届き、一二他のケルブの一つの翼も五キュビト
で、宮の壁に届き、ほかの翼も五キュビトで、先のケルブの翼に接して
いた。一三これらのケルビムの翼は広げると二十キュビトあった。かれら
は共に足で立ち、その顔は拝殿に向かっていた。一四ソロモンはまた青糸、
紫糸、緋糸および亜麻糸で垂幕を造り、その上にケルビムの縫い取りを
施した。

一五彼は宮の前に柱を二本造った。その高さは三十五キュビト、おの
おのの柱の頂に五キュビトの柱頭を造った。一六彼は首飾のような
鎖を造って、柱の頂につけ、ざくろ百を造ってその鎖の上につけた。
一七彼はこの柱を神殿の前に、一本を南の方に、一本を北の方に立て、

南の方のをヤキンと名づけ、北の方のをボアズと名づけた。

第四章 一ソロモンはまた青銅の祭壇を造った。その長さ二十キュビト、
幅二十キュビト、高さ十キュビトである。二彼はまた海を鋳て造った。縁
から縁まで十キュビトであって、周囲は円形をなし、高さ五キュビトで、
その周囲は綱をもって測ると三十キュビトあった。三海の下には三十キュ
ビトの周囲をめぐるひさごの形があって、海の周囲を囲んでいた。その
ひさごは二並びで、海を鋳る時に鋳たものである。四その海は十二の牛の
上に置かれ、その三つは北に向かい、三つは西に向かい、三つは南に向か
い、三つは東に向かっていた。海はその上に置かれ、牛のうしろはみな
内に向かっていた。五海の厚さは手の幅で、その縁は杯の縁のように、ゆ
りの花に似せて造られた。海には水を三千バテ入れることができた。六彼
はまた物を洗うために洗盤十個を造って、五個を南側に、五個を北側に

置いた。その中で燔祭に用いるものを洗った。しかし海は祭司がその中で身を洗うためであった。

七彼はまた金の燭台十個をその定めに従って造り、拝殿の中の南側に五個、北側に五個を置き、八また机十個を造り、神殿の中の南側に五個、北側に五個を置き、また金の鉢百を造った。九彼はまた祭司の庭と大庭および庭の戸を造り、その戸を青銅でおおった。一〇彼は海を宮の東南のすみにすえた。

一一ヒラムはまたつぼと十能と鉢とを造った。こうしてヒラムはソロモン王のため、神の宮の工事を終えた。一二すなわち二本の柱と玉と、柱の頂にある二つの柱頭と、柱の頂にある柱頭の二つの玉をおおう二つの網細工と、一三その二つの網細工のためのざくろ四百、このざくろはおのおの網細工に二並びにつけて、柱の頂にある柱頭の二つの玉

を巻いていた。一四彼はまた台と台の上の洗盤と、一五一つの海とその下
の十二の牛を造った。一六つぼ、十能、肉さしなどすべてこれらの器物
を、達人ヒラムはソロモン王のため、主の宮のために、光のある青銅で
造った。一七王はヨルダンの低地で、スコテとゼレダの間の粘土の地でこ
れを鋳た。一八このようにソロモンはこれらのすべての器物を非常に多く
造ったので、その青銅の重量は、量ることができなかった。
一九こうしてソロモンは神の宮のすべての器物を造った。すなわち金
の祭壇と、供えのパンを載せる机、二〇また定めのように本殿の前で火を
ともす純金の燭台と、そのともしび皿を造った。二一その花、ともしび
皿、心かきは精金であった。二二また心切りばさみ、鉢、香の杯、心取り
皿は純金であった。また宮の戸、すなわち至聖所の内部の戸および拝殿
の戸のひじつぼは金であった。

第五章一こうしてソロモンは主の宮のためにしたすべての工事を終った。
そしてソロモンは父ダビデがささげた物、すなわち金銀およびもろもろの
器物を携えて行って神の宮の宝蔵に納めた。
二ソロモンは主の契約の箱をダビデの町シオンからかつぎ上ろうとして、
イスラエルの長老たちと、すべての部族のかしらたちと、イスラエルの
人々の氏族の長たちをエルサレムに召し集めた。三イスラエルの人々は
皆七月の祭に王のもとに集まった。四イスラエルの長老たちが皆きたの
で、レビびとたちは箱を取り上げた。五彼らは箱と、会見の幕屋と、幕屋
にあるすべて聖なる器をかつぎ上った。すなわち祭司とレビびとがこれ
らの物をかつぎ上った。六ソロモン王および彼のもとに集まったイスラエ
ルの会衆は皆箱の前で羊と牛をささげたが、その数が多くて、調べるこ
とも数えることもできなかった。七こうして祭司たちは主の契約の箱をそ

の場所にかつぎ入れ、宮の本殿である至聖所のうちのケルビムの翼の下
に置いた。八ケルビムは翼を箱の所の上に伸べていたので、ケルビムは
上から箱とそのさおをおおった。九さおは長かったので、さおの端が本殿
の前の聖所から見えた。しかし外部には見えなかった。さおは今日までそ
こにある。一〇箱の内には二枚の板のほか何もなかった。これはイスラエ
ルの人々がエジプトから出て来たとき、主が彼らと契約を結ばれ、モーセ
がホレブでそれを納めたものである。一一そして祭司たちが聖所から出た
とき（ここにいた祭司たちは皆、その組の順にかかわらず身を清めた。一
二またレビびとの歌うたう者、すなわちアサフ、ヘマン、エドトンおよび
彼らの子たちと兄弟たちはみな亜麻布を着、シンバルと、立琴と、琴を
とって祭壇の東に立ち、百二十人の祭司は彼らと一緒に立ってラッパを
吹いた。一三ラッパ吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせ

て主をほめ、感謝した)、そして彼らがラッパと、シンバルとその他の楽器
をもって声をふりあげ、主をほめて
「主は恵みあり、
そのあわれみはとこしえに絶えることがない」
と言ったとき、雲はその宮すなわち主の宮に満ちた。一四祭司たちは雲の
ゆえに立って勤めをすることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちた
からである。

第六章一そこでソロモンは言った、
「主はみずから濃き雲の中に住まおうと言われた。
二しかしわたしはあなたのために高き家、
とこしえのみすまいを建てた」。
三そして王は顔をふり向けてイスラエルの全会衆を祝福した。その時イ

スラエルの全会衆は立っていた。四彼は言った、「イスラエルの神、主は
ほむべきかな。主は口をもってわが父ダビデに約束されたことを、その手
をもってなし遂げられた。すなわち主は言われた、五『わが民をエジプトの
地から導き出した日から、わたしはわが名を置くべき家を建てるために、
イスラエルのもろもろの部族のうちから、どの町をも選んだことがなく、
また他のだれをもわが民イスラエルの君として選んだことがない。六わが
名を置くために、ただエルサレムだけを選び、またわが民イスラエルを治
めさせるために、ただダビデだけを選んだ』。七イスラエルの神、主の名の
ために家を建てることは、父ダビデの心にあった。八しかし主は父ダビ
デに言われた、『わたしの名のために家を建てることはあなたの心にあっ
た。あなたの心にこの事のあったのは結構である。九しかしあなたはそ
の家を建ててはならない。あなたの腰から出るあなたの子がわたしの名の

ために家を建てるであろう』。一〇そして主はそう言われた言葉を行われ
た。すなわちわたしは父ダビデに代って立ち、主が言われたように、イス
ラエルの位に座し、イスラエルの神、主の名のために家を建てた。一一わ
たしはまた、主がイスラエルの人々と結ばれた主の契約を入れた箱をそこ
に納めた」。

一二ソロモンはイスラエルの全会衆の前、主の祭壇の前に立って、手を
伸べた。一三ソロモンはさきに長さ五キュビト、幅五キュビト、高さ三キュ
ビトの青銅の台を造って、庭のまん中にすえて置いたので、彼はその上に
立ち、イスラエルの全会衆の前でひざをかがめ、その手を天に伸べて、一
四言った、「イスラエルの神、主よ、天にも地にも、あなたのような神はあ
りません。あなたは契約を守られ、心をつくしてあなたの前に歩むあな
たのしもべらに、いつくしみを施し、一五あなたのしもべ、わたしの父ダ

ビデに約束されたことを守られました。あなたが口をもって約束されたこ
とを、手をもってなし遂げられたことは、今日見るとおりであります。一六
それゆえ、イスラエルの神、主よ、あなたのしもべ、わたしの父ダビデに、
あなたが約束して、『おまえがわたしの前に歩んだように、おまえの子孫が
その道を慎んで、わたしのおきてに歩むならば、おまえにはイスラエルの
位に座する人がわたしの前に欠けることはない』と言われたことを、ダビ
デのためにお守りください。一七それゆえ、イスラエルの神、主よ、どう
ぞ、あなたのしもべダビデに言われた言葉を確認してください。
一八しかし神は、はたして人と共に地上に住まわれるでしょうか。見よ、
天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。わたしの建てたこ
の家などなおさらです。一九しかしわが神、主よ、しもべの祈と願いを顧
みて、しもべがあなたの前にささげる叫びと祈をお聞きください。二〇ど

うぞ、あなたの目を昼も夜もこの家に、すなわち、あなたの名をそこに置
くと言われた所に向かってお開きください。どうぞ、しもべがこの所に
向かってささげる祈をお聞きください。二一どうぞ、しもべと、あなたの
民イスラエルがこの所に向かって祈る時に、その願いをお聞きください。
あなたのすみかである天から聞き、聞いておゆるしください。
二二もし人がその隣り人に対して罪を犯し、誓いをすることを求められ
るとき、来てこの宮で、あなたの祭壇の前に誓うならば、二三あなたは天
から聞いて、行い、あなたのしもべらをさばき、悪人に報いをなして、そ
の行いの報いをそのこうべに帰し、義人を義として、その義にしたがって
その人に報いてください。
二四もしあなたの民イスラエルが、あなたに対して罪を犯したために、敵
の前に敗れた時、あなたに立ち返って、あなたの名をあがめ、この宮であ

なたの前に祈り願うならば、二五あなたは天から聞き、あなたの民イスラ
エルの罪をゆるして、あなたが彼らとその先祖に与えられた地に彼らを帰
らせてください。
二六もし彼らがあなたに罪を犯したために、天が閉ざされて、雨がなく、
あなたが彼らを苦しめられるとき、彼らがこの所に向かって祈り、あなた
の名をあがめ、その罪を離れるならば、二七あなたは天にあって聞き、あな
たのしもべ、あなたの民イスラエルの罪をゆるして、彼らに歩むべき良い
道を教え、あなたの民に嗣業として賜わった地に雨を降らせてください。
二八もし国にききんがあるか、もしくは疫病、立ち枯れ、腐り穂、いな
ご、青虫があるか、または敵のために町の門の中に攻め囲まれることがあ
るか、どんな災害、どんな病気があっても、二九もし、ひとりか、あるいは
あなたの民イスラエルが皆おのおのその心の悩みを知って、この宮に向

かい、手を伸べるならば、どんな祈、どんな願いでも、
三〇あなたはそのすみかである天から聞いてゆるし、おのおのの人に、その心を知っておられるゆえ、そのすべての道にしたがって報いてください。ただあなただけがすべての人の心を知っておられるからです。
三一あなたがわれわれの先祖たちに賜わった地に、彼らの生きながらえる日の間、常にあなたを恐れさせ、あなたの道に歩ませてください。

三二またあなたの民イスラエルの者でなく、他国人で、あなたの大いなる名と、強い手と、伸べた腕のために遠い国から来て、この宮に向かって祈るならば、
三三あなたは、あなたのすみかである天から聞き、すべて他国人があなたに呼び求めるようにしてください。そうすれば地のすべての民はあなたの民イスラエルのように、あなたの名を知り、あなたを恐れ、またわたしが建てたこの宮が、あなたの名によって呼ばれることを知るにいた

るでしょう。
三四あなたの民が敵と戦うために、あなたがつかわされる道によって出
るとき、もし彼らがあなたの選ばれたこの町と、わたしがあなたの名のた
めに建てたこの宮に向かってあなたに祈るならば、三五あなたは天から彼
らの祈と願いとを聞いて彼らをお助けください。三六彼らがあなたに対
して罪を犯すことがあって、――罪を犯さない人はないゆえ、――あなた
が彼らを怒って、敵にわたし、敵が彼らを捕虜として遠い地あるいは近い
地に引いて行くとき、三七もし、彼らが捕われて行った地で、みずから省
みて悔い、その捕われの地であなたに願い、『われわれは罪を犯し、よこし
まな事をし、悪を行いました』と言い、三八その捕われの地で心をつく
し、精神をつくしてあなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖に与えられた
地、あなたが選ばれた町、わたしがあなたの名のために建てたこの宮に向
かって祈るならば、三九あなたのすみかである天から、彼らの祈と願いと

を聞いて彼らを助け、あなたに向かって罪を犯したあなたの民をおゆるしください。四〇わが神よ、どうぞ、この所でささげる祈にあなたの目を開き、あなたの耳を傾けてください。

四一主なる神よ、今あなたと、あなたの力の箱が
立って、あなたの安息所におはいりください。
主なる神よ、どうぞあなたの祭司たちに
救の衣を着せ、
あなたの聖徒たちに恵みを喜ばせてください。
四二主なる神よ、どうぞあなたの油そそがれた者の顔を
退けないでください。
あなたのしもべダビデに示されたいつくしみを
覚えて下さい」。

第七章一ソロモンが祈り終ったとき、天から火が下って燔祭と犠牲を焼
き、主の栄光が宮に満ちた。二主の栄光が主の宮に満ちたので、祭司たち
は主の宮に、はいることができなかった。三イスラエルの人々はみな火が
下ったのを見、また主の栄光が宮に臨んだのを見て、敷石の上で地にひれ
伏して拝し、主に感謝して言った、

「主は恵みふかく、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」。

四そして王と民は皆主の前に犠牲をささげた。五ソロモン王のささげた
犠牲は、牛二万二千頭、羊十二万頭であった。こうして王と民は皆神の
宮をささげた。六祭司はその持ち場に立ち、レビびとも主の楽器をとって
立った。その楽器はダビデ王が主に感謝するために造ったもので、ダビデ
が彼らの手によってさんびをささげるとき、「そのいつくしみは、とこしえ

に絶えることがない」ととなえさせたものである。祭司は彼らの前でラッ
パを吹き、すべてのイスラエルびとは立っていた。
七ソロモンはまた主の宮の前にある庭の中を聖別し、その所で、燔祭
と酬恩祭のあぶらをささげた。これはソロモンが造った青銅の祭壇が、
その燔祭と素祭とあぶらとを載せるに足りなかったからである。
八その時ソロモンは七日の間祭を行った。ハマテの入口からエジプ
トの川に至るまでのすべてのイスラエルびとが彼と共にあり、非常に大
きな会衆であった。九そして八日目に聖会を開いた。彼らは七日の間、
祭壇奉献の礼を行い、七日の間祭を行ったが、一〇七月二十三日に至
ってソロモンは民をその天幕に帰らせた。皆主がダビデ、ソロモンおよ
びその民イスラエルに施された恵みのために喜び、かつ心に楽しんで
去った。

一一こうしてソロモンは主の家と王の家とを造り終えた。すなわち彼は
主の家と自分の家について、しようと計画したすべての事を首尾よくなし
遂げた。一二時に主は夜ソロモンに現れて言われた、「わたしはあなたの
祈を聞き、この所をわたしのために選んで、犠牲をささげる家とした。
一三わたしが天を閉じて雨をなくし、またはわたしがいなごに命じて地の
物を食わせ、または疫病を民の中に送るとき、一四わたしの名をもってと
なえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、わたしの顔を求め、
その悪い道を離れるならば、わたしは天から聞いて、その罪をゆるし、そ
の地をいやす。一五今この所にささげられる祈にわたしの目を開き、耳
を傾ける。一六今わたしはわたしの名をながくここにとどめるために、こ
の宮を選び、かつ聖別した。わたしの目とわたしの心は常にここにある。
一七あなたがもし父ダビデの歩んだようにわたしの前に歩み、わたしが命

じたとおりにすべて行って、わたしの定めとおきてとを守るならば、一八わ
たしはあなたの父ダビデに契約して『イスラエルを治める人はあなたに欠
けることがない』と言ったとおりに、あなたの王の位を堅くする。
一九しかし、あなたがたがもし翻って、わたしがあなたがたの前に置い
た定めと戒めとを捨て、行って他の神々に仕え、それを拝むならば、二〇
わたしはあなたがたをわたしの与えた地から抜き去り、またわたしの名の
ために聖別したこの宮をわたしの前から投げ捨てて、もろもろの民のうち
にことわざとし、笑い草とする。二一またこの宮は高いけれども、ついに
は、そのかたわらを過ぎる者は皆驚いて、『何ゆえ主はこの地と、この宮
とにこのようにされたのか』と言うであろう。二二その時、人々は答えて
『彼らはその先祖たちをエジプトの地から導き出した彼らの神、主を捨て
て、他の神々につき従い、それを拝み、それに仕えたために、主はこの

すべての災を彼らの上に下したのである』と言うであろう」。
第八章一ソロモンは二十年を経て、主の家と自分の家とを建て終った。二
またソロモンはヒラムから送られた町々を建て直して、そこにイスラエル
の人々を住ませた。
三ソロモンはまたハマテ・ゾバを攻めて、これを取った。四彼はまた荒野
にタデモルを建て、もろもろの倉の町をハマテに建てた。五また城壁、門、
貫の木のある堅固な町、上ベテホロンと下ベテホロンを建てた。六ソロモ
ンはまたバアラテと自分のもっていたすべての倉の町と、すべての戦車の
町と、騎兵の町、ならびにエルサレム、レバノンおよび自分の治める全地方
に建てようと望んだものを、ことごとく建てた。七すべてイスラエルの子孫
でないヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびととの残っ
た民、八その地にあって彼らのあとに残ったその子孫、すなわちイスラエ

ルの子孫が滅ぼし尽さなかった民に、ソロモンは強制徴募をおこなって
今日に及んでいる。九しかし、イスラエルの人々をソロモンはその工事の
ためには、ひとりも奴隷としなかった。彼らは兵士となり、将校となり、
戦車と、騎兵の長となった。一〇これらはソロモン王のおもな官吏で、二
百五十人あり、民を治めた。

一一ソロモンはパロの娘をダビデの町から連れ上って、彼女のために建
てた家に入れて言った、「主の箱を迎えた所は神聖であるから、わたしの
妻はイスラエルの王ダビデの家に住んではならない」。

一二ソロモンは廊の前に築いておいた主の祭壇の上で主に燔祭をささげ
た。一三すなわちモーセの命令に従って、毎日定めのようにささげ、安息日、
新月および年に三度の祭、すなわち種入れぬパンの祭、七週の祭、仮庵
の祭にこれをささげた。一四ソロモンは、その父ダビデのおきてに従っ

て、祭司の組を定めてその職に任じ、またレビびとをその勤めに任じて、
毎日定めのように祭司の前でさんびと奉仕をさせ、また門を守る者に、そ
の組にしたがって、もろもろの門を守らせた。これは神の人ダビデがこの
ように命じたからである。
一五祭司とレビびとはすべての事につき、また
倉の事について、王の命令にそむかなかった。

一六このようにソロモンは、主の宮の基をすえた日からこれをなし終え
たときまで、その工事の準備をことごとくなしたので、主の宮は完成した。

一七それからソロモンはエドムの地の海べにあるエジオン・ゲベルおよび
エロテへ行った。
一八時にヒラムはそのしもべどもの手によって船団を彼
に送り、また海の事になれたしもべどもをつかわしたので、彼らはソロモ
ンのしもべらと共にオフルへ行き、そこから金四百五十タラントを取って、
これをソロモン王のもとに携えてきた。

第九章
一シバの女王はソロモンの名声を聞いたので、難問をもってソロ
モンを試みようと、非常に多くの従者を連れ、香料と非常にたくさん
の金と宝石とをらくだに負わせて、エルサレムのソロモンのもとに来て、
その心にあることをことごとく彼に告げた。
二ソロモンは彼女のすべて
の問に答えた。ソロモンが知らないで彼女に説明のできないことは一つも
なかった。
三シバの女王はソロモンの知恵と、彼が建てた家を見、
四また
その食卓の食物と、列座の家来たちと、その侍臣たちの伺候振りと彼ら
の服装、および彼の給仕たちとその服装、ならびに彼が主の宮でささげる
燔祭を見て、全く気を奪われてしまった。
五彼女は王に言った、「わたしが国であなたの事と、あなたの知恵につい
て聞いたうわさは真実でした。
六しかしわたしは来て目に見るまでは、その
うわさを信じませんでしたが、今見ると、あなたの知恵の大いなることはそ

の半分もわたしに知らされませんでした。あなたはわたしの聞いたうわさ
にまさっています。七あなたの奥方たちはさいわいです。常にあなたの前
に立って、あなたの知恵を聞くこのあなたの家来たちはさいわいです。八あ
なたの神、主はほむべきかな。主はあなたを喜び、あなたをその位につ
かせ、あなたの神、主のために王とされました。あなたの神はイスラエルを
愛して、とこしえにこれを堅くするために、あなたをその王とされ、公道と
正義を行われるのです」。九そして彼女は金百二十タラント、および非常
に多くの香料と宝石とを王に贈った。シバの女王がソロモンに贈ったよ
うな香料は、いまだかってなかった。

一〇オフルから金を携えて来たヒラムのしもべたちとソロモンのしもべ
たちはまた、びゃくだんの木と宝石をも携えて来た。一一王はそのびゃく
だんの木で、主の宮と王の家とに階段を造り、また歌うたう者のために琴

と立琴を造った。このようなものはかつてユダの地で見たことがなかった。
一二ソロモン王は、シバの女王が贈った物に報いたほかに、彼女の望み
にまかせて、すべてその求めるものを贈った。そして彼女はその家来たち
と共に自分の国へ帰って行った。
一三さて一年の間にソロモンの所にはいって来た金の目方は六百六十
六タラントであった。一四このほかに貿易商および商人の携えて来たも
のがあった。またアラビヤのすべての王たちおよび国の代官たちも金銀を
ソロモンに携えてきた。一五ソロモン王は延金の大盾二百を造った。そ
の大盾にはおのおの六百シケルの延金を用いた。一六また延金の小盾三百
を造った。小盾にはおのおの三百シケルの金を用いた。王はこれらをレバ
ノンの森の家に置いた。一七王はまた大きな象牙の玉座を造り、純金で
これをおおった。一八その玉座には六つの段があり、また金の足台があっ

て共に玉座につらなり、その座する所の両方に、ひじかけがあって、ひじかけのわきに二つのししが立っていた。一九また十二のししが六つの段のおのおのの両側に立っていた。このような物はどこの国でも造られたことがなかった。二〇ソロモン王が飲むときに用いた器はみな金であった。またレバノンの森の家の器もみな純金であって、銀はソロモンの世には尊ばれなかった。二一これは王の船がヒラムのしもべたちを乗せてタルシシへ行き、三年ごとに一度、そのタルシシの船が金、銀、象牙、さる、くじゃくを載せて来たからである。

二二このようにソロモン王は富と知恵において、地のすべての王にまさっていたので、二三地のすべての王は神がソロモンの心に授けられた知恵を聞こうとしてソロモンに謁見を求めた。二四人々はおのおの贈り物を携えてきた。すなわち銀の器、金の器、衣服、没薬、香料、馬、騾馬な

ど年々定まっていた。二五ソロモンは馬と戦車のために馬屋四千と騎兵一
万二千を持ち、これを戦車の町に置き、またエルサレムの王のもとに置い
た。二六彼はユフラテ川からペリシテびとの地と、エジプトの境に至るま
でのすべての王を治めた。二七王はまた銀を石のようにエルサレムに多く
し、香柏を平野のいちじく桑のように多くした。二八また人々はエジプト
および諸国から馬をソロモンのために輸入した。
二九ソロモンのそのほかの始終の行為は、預言者ナタンの書と、シロびと
アヒヤの預言と、先見者イドがネバテの子ヤラベアムについて述べた黙示
のなかに、しるされているではないか。三〇ソロモンはエルサレムで四十年
の間イスラエルの全地を治めた。三一ソロモンはその先祖たちと共に眠っ
て、父ダビデの町に葬られ、その子レハベアムが代って王となった。

第一〇章一レハベアムはシケムへ行った。すべてのイスラエルびとが彼

を王にしようとシケムへ行ったからである。二ネバテの子ヤラベアムは、ソ
ロモンを避けてエジプトにのがれていたが、これを聞いてエジプトから帰っ
たので、三人々は人をつかわして彼を招いた。そこでヤラベアムとすべて
のイスラエルは来て、レハベアムに言った、四「あなたの父は、われわれ
のくびきを重くしましたが、今あなたの父のきびしい使役と、あなたの父
が、われわれに負わせた重いくびきを軽くしてください。そうすればわた
したちはあなたに仕えましょう」。五レハベアムは彼らに答えた、「三日の
後、またわたしの所に来なさい」。それで民は去った。

六レハベアム王は父ソロモンの存命中ソロモンに仕えた長老たちに
相談して言った、「あなたがたはこの民にどう返答すればよいと思います
か」。七彼らはレハベアムに言った、「あなたがたがもしこの民を親切にあつか
い、彼らを喜ばせ、ねんごろに語られるならば彼らは長くあなたのしもべ

となるでしょう」。八しかし彼は長老たちが与えた勧めをすてて、自分と
一緒に大きくなって自分に仕えている若者たちに相談して、九彼らに言っ
た、「あなたがたは、この民がわたしに向かって、『あなたの父上が、われわ
れに負わせたくびきを軽くしてください』と言うのに、われわれはなんと
返答すればよいと思いますか」。一〇彼と一緒に大きくなった若者たちは
彼に言った、「あなたに向かって、『あなたの父は、われわれのくびきを重
くしたが、あなたは、それをわれわれのために軽くしてください』と言っ
たこの民に、こう言いなさい、『わたしの小指は父の腰よりも太い、一一父
はあなたがたに重いくびきを負わせたが、わたしはさらに、あなたがたの
くびきを重くしよう。父はむちであなたがたを懲らしたが、わたしはさそ
りであなたがたを懲らそう』」。
一二さてヤラベアムと民は皆、王が「三日目にわたしのところに来なさい」

と言ったとおりに、三日目にレハベアムのところへ行った。一三王は荒々
しく彼らに答えた。すなわちレハベアム王は長老たちの勧めをすて、一
四若者たちの勧めに従い、彼らに告げて言った、「父はあなたがたのくび
きを重くしたが、わたしは更にこれを重くしよう。父はむちであなたがた
を懲らしたが、わたしはさそりであなたがたを懲らそう」。一五このように
王は民の言うことを聞きいれなかった。これは主が、かつてシロびとアヒ
ヤによって、ネバテの子ヤラベアムに言われた言葉を成就するために、神
がなされたのであった。

一六イスラエルの人々は皆、王が自分たちの言うことを聞きいれないの
を見たので、民は王に答えて言った、

「われわれはダビデのうちに何の分があろうか。
われわれはエッサイの子のうちに嗣業がない。

イスラエルよ、めいめいの天幕に帰れ。
ダビデよ、今あなたの家を見よ」。

そしてイスラエルは皆彼らの天幕へ去って行った。一七しかしレハベアム
はユダの町々に住んでいるイスラエルの人々を治めた。一八レハベアム王
は徴募人の監督であったアドラムをつかわしたが、イスラエルの人々が石
で彼を撃ち殺したので、レハベアム王は急いで車に乗り、エルサレムに
逃げた。一九こうしてイスラエルはダビデの家にそむいて今日に至った。

第一一章一レハベアムはエルサレムに来て、ユダとベニヤミンの家の者、
すなわち、えり抜きの軍人十八万人を集め、国を取りもどすためにイスラ
エルと戦おうとしたが、二主の言葉が神の人シマヤに臨んで言った、三「ソ
ロモンの子、ユダの王レハベアムおよびユダとベニヤミンにいるすべてのイ
スラエルの人々に言いなさい、四『主はこう仰せられる、あなたがたは上っ

てはならない。あなたがたの兄弟と戦ってはならない。おのおの自分の
家に帰りなさい。この事はわたしから出たのである』。それで人々は主の
言葉を聞き、ヤラベアムを攻めに行くのをやめて帰った。
五レハベアムはエルサレムに住んで、ユダに防衛の町々を建てた。六す
なわちベツレヘム、エタム、テコア、七ベテズル、ソコ、アドラム、八ガテ、
マレシャ、ジフ、九アドライム、ラキシ、アゼカ、一〇ゾラ、アヤロン、およ
びヘブロン。これらはユダとベニヤミンにあって要害の町々である。一一
彼はその要害を堅固にし、これに軍長を置き、糧食と油とぶどう酒
をたくわえ、一二またそのすべての町に盾とやりを備えて、これを非常に
強化し、そしてユダとベニヤミンを確保した。
一三イスラエルの全地の祭司とレビびとは四方の境から来てレハベアム
に身を寄せた。一四すなわちレビびとは自分の放牧地と領地を離れてユダ
とエルサレムに来た。これはヤラベアムとその子らが彼らを排斥して、主

の前に祭司の務をさせなかったためである。一五ヤラベアムは高き所と、
みだらな神と、自分で造った子牛のために自分の祭司を立てた。一六また
イスラエルのすべての部族のうちで、すべてその心を傾けて、イスラエ
ルの神、主を求める者は先祖の神、主に犠牲をささげるために、レビびと
に従ってエルサレムに来た。一七このように彼らはユダの国を堅くし、ソ
ロモンの子レハベアムを三年の間強くした。彼らは三年の間ダビデとソ
ロモンの道に歩んだからである。

一八レハベアムはダビデの子エレモテの娘マハラテを妻にめとった。マハ
ラテはエッサイの子エリアブの娘アビハイルが産んだ者である。一九彼女
はエウシ、シマリヤおよびザハムの三子を産んだ。二〇彼はまた彼女の後に
アブサロムの娘マアカをめとった。マアカはアビヤ、アッタイ、ジザおよ
びシロミテを産んだ。二一レハベアムはアブサロムの娘マアカをすべての

妻とそばめにまさって愛した。彼は妻十八人、そばめ六十人をめとって、
男の子二十八人と女の子六十人をもうけた。二二レハベアムはマアカの
子アビヤを立ててかしらとし、その兄弟の長とした。彼はアビヤを王に
しようと思ったからである。二三それで王は賢くとり行い、そのむすこ
たちをことごとく、ユダとベニヤミンの全地方にあるすべての要害の町に
散在させ、彼らに糧食を多く与え、また多くの妻を得させた。

第一二章 一レハベアムはその国が堅く立ち、強くなるに及んで、主のお
きてを捨てた。イスラエルも皆彼にならった。二彼らがこのように主に向
かって罪を犯したので、レハベアム王の五年にエジプトの王シシャクがエ
ルサレムに攻め上ってきた。三その戦車は一千二百、騎兵は六万、また彼
に従ってエジプトから来た民、すなわちリビアびと、スキびと、エチオピ
ヤびとは無数であった。四シシャクはユダの要害の町々を取り、エルサレ

ムに迫って来た。五そこで預言者シマヤは、レハベアムおよびシシャクの
ゆえに、エルサレムに集まったユダのつかさたちのもとにきて言った、「主
はこう仰せられる、『あなたがたはわたしを捨てたので、わたしもあなたが
たを捨ててシシャクにわたした』と」。六そこでイスラエルのつかさたち、
および王はへりくだって、「主は正しい」と言った。七主は彼らのへりくだ
るのを見られたので、主の言葉がシマヤにのぞんで言った、「彼らがへりく
だったから、わたしは彼らを滅ぼさないで、間もなく救を施す。わたし
はシシャクの手によって、怒りをエルサレムに注ぐことをしない。八しか
し彼らはシシャクのしもべになる。これは彼らがわたしに仕えることと、
国々の王たちに仕えることとの相違を知るためである」。
九エジプトの王シシャクはエルサレムに攻めのぼって、主の宮の宝物と、
王の家の宝物とを奪い去った。すなわちそれらをことごとく奪い去り、ま

たソロモンの造った金の盾をも奪い去った。一〇それでレハベアム王は、
その代りに青銅の盾を造って、王の家の門を守る侍衛長たちの手に渡し
た。一一王が主の宮にはいるごとに侍衛は来て、これを負い、またこれを
侍衛のへやへ持って帰った。一二レハベアムがへりくだったので主の怒り
は彼を離れ、彼をことごとく滅ぼそうとはされなかった。またユダの事情
もよくなった。

一三レハベアム王はエルサレムで自分の地位を確立し、世を治めた。す
なわちレハベアムは四十一歳のとき位につき、十七年の間エルサレムで
世を治めた。エルサレムは主がその名を置くためにイスラエルのすべての
部族のうちから選ばれた町である。彼の母はアンモンの女で、名をナア
マといった。一四レハベアムは主を求めることに心を傾けないで、悪い
事を行った。

一五レハベアムの始終の行為は、預言者シマヤおよび先見者イドの書に
しるされているではないか。レハベアムとヤラベアムとの間には絶えず
戦争があった。一六レハベアムはその先祖たちと共に眠って、ダビデの町
に葬られ、その子アビヤが彼に代って王となった。

第一三章
一ヤラベアム王の第十八年にアビヤがユダの王となった。二彼
は三年の間エルサレムで世を治めた。彼の母はギベアのウリエルの娘
で、名をミカヤといった。

三ここにアビヤとヤラベアムとの間に戦争が起り、アビヤは四十万の
精兵から成る勇敢な軍勢をもって戦いにいで、ヤラベアムも大勇士から
成る八十万の精兵をもって、これに向かって戦いの備えをした。四時に
アビヤはエフライムの山地にあるゼマライム山の上に立って言った、「ヤラ
ベアムおよびイスラエルの人々よ皆聞け。五あなたがたはイスラエルの神、

主が塩の契約をもってイスラエルの国をながくダビデとその子孫に賜わっ
たことを知らないのか。六ところがダビデの子ソロモンの家来であるネバ
テの子ヤラベアムが起って、その主君にそむき、七また卑しい無頼のとも
がらが集まって彼にくみし、ソロモンの子レハベアムに敵したが、レハベ
アムは若く、かつ意志が弱くてこれに当ることができなかった。
八今また、あなたがたは大軍をたのみ、またヤラベアムが造って、あな
たがたの神とした金の子牛をたのんで、ダビデの子孫の手にある主の国に
敵対しようとしている。九またあなたがたはアロンの子孫である主の祭司
とレビびととを追いだして、他の国々の民がするように祭司を立てたでは
ないか。すなわちだれでも若い雄牛一頭、雄羊七頭を携えてきて、自分
を聖別する者は皆あの神でない者の祭司とすることができた。一〇しかし
われわれにおいては、主がわれわれの神であって、われわれは彼を捨てな

い。また主に仕える祭司はアロンの子孫であり、働きをなす者はレビび
とである。一一彼らは朝ごと夕ごとに主に燔祭と、こうばしい香をささげ、
供えのパンを純金の机の上に供え、また金の燭台とそのともしび皿を
整えて、夕ごとにともすのである。このようにわれわれはわれわれの神、
主の務を守っているが、あなたがたは彼を捨てた。一二見よ、神はみずか
らわれわれと共におられて、われわれのかしらとなられ、また、その祭司た
ちはラッパを吹きならして、あなたがたを攻める。イスラエルの人々よ、あ
なたがたの先祖の神、主に敵して戦ってはならない。あなたがたは成功
しない」。

一三ヤラベアムは伏兵を彼らのうしろに回らせたので、彼の軍隊はユダ
の前にあり、伏兵は彼らのうしろにあった。一四ユダはうしろを見ると、敵
が前とうしろとにあったので、主に向かって呼ばわり、祭司たちはラッパを

吹いた。一五そこでユダの人々はときの声をあげた。ユダの人々がときの
声をあげると、神はヤラベアムとイスラエルの人々をアビヤとユダの前に
打ち敗られたので、一六イスラエルの人々はユダの前から逃げた。神が彼ら
をユダの手に渡されたので、一七アビヤとその民は、彼らをおびただしく撃
ち殺した。イスラエルの殺されて倒れた者は五十万人、皆精兵であった。
一八このように、この時イスラエルの人々は打ち負かされ、ユダの人々は勝
を得た。彼らがその先祖の神、主を頼んだからである。一九アビヤはヤラ
ベアムを追撃して数個の町を彼から取った。すなわちベテルとその村里、
エシャナとその村里、エフロンとその村里である。二〇ヤラベアムは、アビ
ヤの世には再び力を得ることができず、主に撃たれて死んだ。二一しか
しアビヤは強くなり、妻十四人をめとり、むすこ二十二人、むすめ十六人
をもうけた。二二アビヤのその他の行為すなわちその行動と言葉は、預言者

イドの注釈にしるされている。

第一四章 一アビヤはその先祖たちと共に眠って、ダビデの町に葬られ、
その子アサが代って王となった。アサの治世に国は十年の間、穏やかで
あった。二アサはその神、主の目に良しと見え、また正しと見えることを
行った。三彼は異なる祭壇と、もろもろの高き所を取り除き、石柱を
こわし、アシラ像を切り倒し、四ユダに命じてその先祖たちの神、主を求
めさせ、おきてと戒めとを行わせ、五ユダのすべての町々から、高き所
と香の祭壇とを取り除いた。そして国は彼のもとに穏やかであった。六彼
は国が穏やかであったので、要害の町数個をユダに建てた。また主が彼に
平安を賜わったので、この年ごろ戦争がなかった。七彼はユダに言った、
「われわれはこれらの町を建て、その周囲に石がきを築き、やぐらを建て、
門と貫の木を設けよう。われわれがわれわれの神、主を求めたので、この

国(くに)はなおわれわれのものであり、われわれが彼(かれ)を求(もと)めたので、四方(しほう)において、われわれに平安(へいあん)を賜(たま)わった」。こうして彼(かれ)らは滞(とどこお)りなく建(た)て終(お)わった。八アサの軍隊(ぐんたい)はユダから出(で)た者(もの)三十万人(にん)あって、盾(たて)とやりをとり、ベニヤミンから出(で)た者(もの)二十八万人(にん)あって、小盾(こだて)をとり、弓(ゆみ)を引(ひ)いた。これはみな大勇士(だいゆうし)であった。

九エチオピヤびとゼラが、百万の軍隊(ぐんたい)と三百の戦車(せんしゃ)を率(ひき)いて、マレシャまで攻(せ)めてきた。一〇アサは出(で)て、これを迎(むか)え、マレシャのゼパタの谷(たに)に戦(たたか)いの備(そな)えをした。一一時(とき)にアサはその神(かみ)、主(しゅ)に向(む)かって呼(よ)ばわって言(い)った、「主(しゅ)よ、力(ちから)のある者(もの)を助(たす)けることも、力(ちから)のない者(もの)を助(たす)けることも、あなたにおいては異(こと)なることはありません。われわれの神(かみ)、主(しゅ)よ、われわれをお助(たす)けください。われわれはあなたに寄(よ)り頼(たの)み、あなたの名(な)によってこの大軍(たいぐん)に当(あた)ります。主(しゅ)よ、あなたはわれわれの神(かみ)です。どうぞ人(ひと)をあなたに勝(か)た

せないでください」。一二そこで主はアサの前とユダの前でエチオピヤびと
を撃ち敗られたので、エチオピヤびとは逃げ去った。一三アサと彼に従う
民は彼らをゲラルまで追撃したので、エチオピヤびとは倒れて、生き残っ
た者はひとりもなかった。主と主の軍勢の前に撃ち破られたからである。
ユダの人々の得たぶんどり物は非常に多かった。一四彼らはまた、ゲラル
の周囲の町々をことごとく撃ち破った。主の恐れが彼らの上に臨んだか
らである。そして彼らはそのすべての町をかすめ奪った。その内に多くの
物があったからである。一五また家畜をもっている者の天幕を襲い、多く
の羊とらくだを奪い取って、エルサレムに帰った。

第一五章一時に神の霊がオデデの子アザリヤに臨んだので、二彼は出て
いってアサを迎え、これに言った、「アサおよびユダとベニヤミンの人々よ、
わたしに聞きなさい。あなたがたが主と共におる間は、主もあなたがたと

共におられます。あなたがたが、もし彼を求めるならば、彼に会うでしょ
う。しかし、彼を捨てるならば、彼もあなたがたを捨てられるでしょう。三
そもそも、イスラエルには長い間、まことの神がなく、教をなす祭司も
なく、律法もなかった。四しかし、悩みの時、彼らがイスラエルの神、主
に立ち返り、彼を求めたので彼に会った。五そのころは、出る者にも入る
者にも、平安がなく、大いなる騒乱が国々のすべての住民を悩ました。
六国は国に、町は町に撃ち砕かれた。神がもろもろの悩みをもって彼らを
苦しめられたからです。七しかしあなたがたは勇気を出しなさい。手を弱
くしてはならない。あなたがたのわざには報いがあるからです」。
八アサはこれらの言葉すなわちオデデの子アザリヤの預言を聞いて勇気を
得、憎むべき偶像をユダとベニヤミンの全地から除き、また彼がエフライ
ムの山地で得た町々から除き、主の宮の廊の前にあった主の祭壇を再興

した。九彼はまたユダとベニヤミンの人々およびエフライム、マナセ、シ
メオンから来て、彼らの間に寄留していた者を集めた。その神、主がア
サと共におられるのを見て、イスラエルからアサのもとに下った者が多く
あったからである。一〇彼らはアサの治世の十五年の三月にエルサレムに
集まり、一一携えてきたぶんどり物のうちから牛七百頭、羊七千頭をそ
の日主にささげた。一二そして彼らは契約を結び、心をつくし、精神をつ
くして先祖の神、主を求めることと、一三すべてイスラエルの神、主を求
めない者は老幼男女の別なく殺さるべきことを約した。一四そして彼らは
大声をあげて叫び、ラッパを吹き、角笛を鳴らして、主に誓いを立てた。一
五ユダは皆その誓いを喜んだ。彼らは心をつくして誓いを立て、精神を
つくして主を求めたので、主は彼らに会い、四方で彼らに安息を賜わった。
一六アサ王の母マアカがアシラのために憎むべき像を造ったので、アサは

彼女をおとして太后とせず、その憎むべき像を切り倒して粉々に砕き、キデロン川でそれを焼いた。一七ただし高き所はイスラエルから除かなかったが、アサの心は一生の間、正しかった。一八彼はまた、その父のささげた物および自分のささげた物、すなわち銀、金並びに器物などを主の宮に携え入れた。一九そしてアサの治世の三十五年までは再び戦争がなかった。

第一六章一アサの治世の三十六年にイスラエルの王バアシャはユダに攻め上り、ユダの王アサの所にだれをも出入りさせないためにラマを築いた。二そこでアサは主の宮と王の家の宝蔵から金銀を取り出し、ダマスコに住んでいるスリヤの王ベネハダデに贈って言った、三「わたしの父とあなたの父の間のように、わたしとあなたの間に同盟を結びましょう。わたしはあなたに金銀を贈ります。行って、あなたとイスラエルの王バアシャ

との同盟を破り、彼をわたしから撤退させてください」。
四ベネハダデはアサ王の言うことを聞き、自分の軍勢の長たちをつかわしてイスラエルの町々を攻め、イヨンとダンとアベル・マイムおよびナフタリのすべての倉の町を撃った。
五バアシャはこれを聞いて、ラマを築くことをやめ、その工事を廃した。
六そこでアサ王はユダの全国の人々を引き連れ、バアシャがラマを建てるために用いた石と木材を運んでこさせ、それをもってゲバとミヅパを建てた。

七そのころ先見者ハナニがユダの王アサのもとに来て言った、「あなたがスリヤの王に寄り頼んで、あなたの神、主に寄り頼まなかったので、スリヤ王の軍勢はあなたの手からのがれてしまった。
八かのエチオピヤびとと、リビアびとは大軍で、その戦車と騎兵は、はなはだ多かったではないか。しかしあなたが主に寄り頼んだので、主は彼らをあなたの手に渡された。

九主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者
のために力をあらわされる。今度の事では、あなたは愚かな事をした。ゆ
えにこの後、あなたに戦争が臨むであろう」。一〇するとアサはその先見者
を怒って、獄屋に入れた。この事のために激しく彼を怒ったからである。
アサはまたそのころ民のある者をしえたげた。
一一見よ、アサの始終の行為は、ユダとイスラエルの列王の書にしるされ
ている。一二アサはその治世の三十九年に足を病み、その病は激しくなっ
たが、その病の時にも、主を求めないで医者を求めた。一三アサは先祖た
ちと共に眠り、その治世の四十一年に死んだ。一四人々は彼が自分のため
にダビデの町に掘っておいた墓に葬り、製香の術をもって造った様々
の香料を満たした床に横たえ、彼のためにおびただしく香をたいた。
第一七章一アサの子ヨシャパテがアサに代って王となり、イスラエルに向

かって自分を強くし、二ユダのすべての堅固な町々に軍隊を置き、またユ
ダの地およびその父アサが取ったエフライムの町々に守備隊を置いた。三
主はヨシャパテと共におられた。彼がその父ダビデの最初の道に歩んで、
バアルに求めず、四その父の神に求めて、その戒めに歩み、イスラエルの
行いにならわなかったからである。五それゆえ、主は国を彼の手に堅く
立てられ、またユダの人々は皆ヨシャパテに贈り物を持ってきた。彼は大
いなる富と誉とを得た。六そこで彼は主の道に心を励まし、さらに高き
所とアシラ像とをユダから除いた。

七彼はまたその治世の三年に、つかさたちベネハイル、オバデヤ、ゼカ
リヤ、ネタンエルおよびミカヤをつかわしてユダの町々で教えさせ、八ま
た彼らと共にレビびとのうちからシマヤ、ネタニヤ、ゼバデヤ、アサヘル、
セミラモテ、ヨナタン、アドニヤ、トビヤ、トバドニヤをつかわし、またこ

れらのレビびとと共に祭司エリシャマとヨラムをもつかわした。九彼らは
主の律法の書を携えて、ユダで教をなし、またユダの町々をことごとく
巡回して、民の間に教をなした。
一〇そこでユダの周囲の国々は皆主を恐れ、ヨシャパテと戦うことを
しなかった。一一また、ペリシテびとのうちで贈り物や、みつぎの銀をヨ
シャパテの所に持ってくる者があり、またアラビヤびとは雄羊七千七百
頭、雄やぎ七千七百頭を彼に持ってきた。一二こうしてヨシャパテはますま
す大いになり、ユダに要害および倉の町を建て、一三ユダの町々に多くの
軍需品を持ち、またエルサレムに大勇士である軍人たちを持っていた。一
四彼らをその氏族によって数えれば次のとおりである。すなわちユダから
出た千人の長のうちでは、アデナという軍長と彼に従う大勇士三十万
人、一五その次は軍長ヨハナンと彼に従う者二十八万人、一六その次は

喜んでその身を主にささげた者ジクリの子アマジヤと彼に従う大勇士二十万人。一七ベニヤミンから出た者のうちでは、エリアダという大勇士と彼に従う弓および盾を持つ者二十万人、一八その次はヨザバデと彼に従う戦いの備えある者十八万人である。一九これらは皆王に仕える者たちで、このほかにまたユダ全国の堅固な町々に、王が駐在させた者があった。

第一八章一ヨシャパテは大いなる富と誉とをもち、アハブと縁を結んだ。二彼は数年の後、サマリヤに下って、アハブをおとずれた。アハブは彼と彼に従ってきた民のために羊と牛を多くほふり、ラモテ・ギレアデに一緒に攻め上ることを彼にすすめた。三イスラエルの王アハブはユダの王ヨシャパテに言った、「あなたはわたしと一緒にラモテ・ギレアデに攻めて行きますか」。ヨシャパテは答えた、「わたしはあなたと一つです、わたしの民はあなたの民と一つです。わたしはあなたと一緒に戦いに臨みま

しょう」。
四ヨシャパテはまたイスラエルの王に言った、「まず主の言葉を求めなさ
い」。五そこでイスラエルの王は預言者四百人を集めて彼らに言った、「わ
れわれはラモテ・ギレアデに、戦いに行くべきか、あるいは控えるべきか」。
彼らは言った、「上って行きなさい。神はそれを王の手にわたされるでしょ
う」。六ヨシャパテは言った、「ほかにわれわれが問うべき主の預言者はこ
こにいませんか」。七イスラエルの王はヨシャパテに言った、「ほかになおひ
とりいます。われわれはこの人によって主に問うことができますが、彼は
わたしについて良い事を預言したことがなく、常に悪いことだけを預言す
るので、わたしは彼を憎みます。その者はイムラの子ミカヤです」。ヨシャ
パテは言った、「王よ、そうは言わないでください」。八そこでイスラエル
の王はひとりの役人を呼んで、「イムラの子ミカヤを急いで連れてきなさ
い」と言った。九さてイスラエルの王およびユダの王ヨシャパテは王の衣

を着て、サマリヤの門の入口の広場におのおのその玉座に座し、預言者た
ちは皆その前で預言していた。一〇ケナアナの子ゼデキヤは鉄の角を造っ
て言った、「主はこう仰せられます、『あなたはこれらの角をもってスリヤ
びとを突いて滅ぼし尽しなさい』」。一一預言者たちは皆そのように預言し
て言った、「ラモテ・ギレアデに上っていって勝利を得なさい。主はそれを
王の手にわたされるでしょう」。
一二さてミカヤを呼びに行った使者は彼に言った、「預言者たちは一致し
て王に良い事を言いました。どうぞ、あなたの言葉も、彼らのひとりの言葉
のようにし、良い事を言ってください」。一三ミカヤは言った、「主は生きて
おられる。わが神の言われることをわたしは申します」。一四彼が王の所
へ行くと、王は彼に言った、「ミカヤよ、われわれはラモテ・ギレアデに
戦いに行くべきか、あるいは控えるべきか」。彼は言った、「上って行って

勝利を得なさい。彼らはあなたの手にわたされるでしょう」。一五しかし王
は彼に言った、「幾たびあなたを誓わせたら、あなたは主の名をもって、た
だ真実のみをわたしに告げるだろうか」。一六彼は言った、「わたしはイス
ラエルが皆牧者のない羊のように山に散っているのを見ました。すると
主は『これらの者は主人をもっていない。彼らをそれぞれ安らかに、その
家に帰らせよ』と言われました」。一七イスラエルの王はヨシャパテに言っ
た、「わたしはあなたに、彼はわたしについて良い事を預言せず、ただ悪い
事だけを預言すると告げたではありませんか」。一八ミカヤは言った、「それ
だから主の言葉を聞きなさい。わたしは主がその玉座に座し、天の万軍が
その右左に立っているのを見たが、一九主は、『だれがイスラエルの王ア
ハブをいざなって、ラモテ・ギレアデに上らせ、彼を倒れさせるであろう
か』と言われた。するとひとりは、こうしようと言い、ひとりは、ああし

ようと言った。二〇その時一つの霊が進み出て、主の前に立ち、『わたしが
彼をいざないましょう』と言ったので、主は彼に『何をもってするか』と
言われた。二一彼は『わたしが出て行って、偽りを言う霊となって、すべ
ての預言者の口に宿りましょう』と言った。そこで主は『おまえは彼をい
ざなって、それをなし遂げるであろう。出て行って、そうしなさい』と言
われた。二二それゆえ、主は偽りを言う霊をこの預言者たちの口に入れ、
また主はあなたについて災を告げられたのです」。

二三するとケナアナの子ゼデキヤが近寄ってミカヤのほおを打って言っ
た、「主の霊がどの道からわたしを離れて行って、あなたに語りましたか」。
二四ミカヤは言った、「あなたが奥の間にはいって身を隠す日に見るでしょ
う」。二五イスラエルの王は言った、「ミカヤを捕え、町のつかさアモンと王
の子ヨアシの所へ引いて行って、二六言いなさい、『王はこう言う、この者

を獄屋に入れ、少しばかりのパンと水をもって彼を養い、わたしが勝利
を得て帰ってくるのを待て』と」。二七ミカヤは言った、「あなたがもし勝利
を得て帰るならば、主はわたしによって語られなかったのです」。また彼
は言った、「あなたがたすべての民よ、聞きなさい」。
二八こうしてイスラエルの王とユダの王ヨシャパテは、ラモテ・ギレア
デに上った。二九イスラエルの王はヨシャパテに言った、「わたしは姿を
変えて戦いに行きましょう。しかしあなたは王の衣を着けなさい」。イ
スラエルの王は姿を変えて戦いに行った。三〇さて、スリヤの王は、そ
の戦車隊長たちに命じて言った、「あなたがたは小さい者とも、大きい
者とも戦ってはならない。ただイスラエルの王とのみ戦いなさい」。三一
戦車隊長らはヨシャパテを見たとき、これはきっとイスラエルの王だと
思ったので、身を巡らしてこれと戦おうとした。しかしヨシャパテが呼ば

わったので、主はこれを助けられた。すなわち神は敵を彼から離れさせら
れた。三二戦車隊長らは彼がイスラエルの王でないのを見たので、彼を追
うことをやめて引き返した。三三しかし、ひとりの人が、なにごころなく弓
を引いて、イスラエルの王の胸当と、くさずりの間を射たので、彼はその
車の御者に言った、「わたしは傷を受けたから、車をめぐらして、わた
しを軍中から運び出せ」。三四その日戦いは激しくなった。イスラエルの
王は車の中に自分をささえて立ち、夕暮までスリヤびとに向かっていた
が、日の入るころになって死んだ。

第一九章一ユダの王ヨシャパテは、つつがなくエルサレムの自分の家に
帰った。二そのとき、先見者ハナニの子エヒウが出てヨシャパテを迎えて
言った、「あなたは悪人を助け、主を憎む者を愛してよいのですか。それ
ゆえ怒りが主の前から出て、あなたの上に臨みます。三しかしあなたには、

なお良い事もあります。あなたはアシラ像を国の中から除き、心を傾け
て神を求められました」。
四ヨシャパテはエルサレムに住んでいたが、また出て、ベエルシバから
エフライムの山地まで民の中を巡り、先祖たちの神、主に彼らを導き返
した。五彼はまたユダの国中、すべての堅固な町ごとに裁判人を置いた。
六そして裁判人たちに言った、「あなたがたは自分のする事に気をつけなさ
い。あなたがたは人のために裁判するのではなく、主のためにするのです。
あなたがたが裁判する時には、主はあなたがたと共におられます。七だから
あなたがたは主を恐れ、慎んで行いなさい。われわれの神、主には不義
がなく、人をかたより見ることなく、まいないを取ることもないからです」。
八ヨシャパテはまたレビびと、祭司、およびイスラエルの氏族の長たち
を選んでエルサレムに置き、主のために裁判を行い、争議の解決に当ら

せた。彼らはエルサレムに居住した。九ヨシャパテは彼らに命じて言っ
た、「あなたがたは主を恐れ、真実と真心とをもって行わなければならな
い。一〇すべてその町々に住んでいるあなたがたの兄弟たちから、血を流
した事または律法と戒め、定めとおきてなどの事について訴えてきたな
らば、彼らをさとして、主の前に罪を犯させず、怒りがあなたがたと、あ
なたがたの兄弟たちに臨まないようにしなさい。そのようにすれば、あな
たがたは罪を犯すことがないでしょう。一一見よ、祭司長アマリヤは、あ
なたがたの上にいて、主の事をすべてつかさどり、イシマエルの子、ユダ
の家のつかさゼバデヤは王の事をすべてつかさどり、またレビびとはあな
たがたの前にあって役人となります。雄々しく行動しなさい。主は正直
な人と共におられます」。

第二〇章一この後モアブびと、アンモンびとおよびメウニびとらがヨシャ

パテと戦おうと攻めてきた。二その時ある人がきて、ヨシャパテに告げて
言った、「海のかなたのエドムから大軍があなたに攻めて来ます。見よ、彼
らはハザゾン・タマル（すなわちエンゲデ）にいます」。三そこでヨシャパ
テは恐れ、主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に断食をふれさせた。四
それでユダはこぞって集まり、主の助けを求めた。すなわちユダのすべて
の町から人々が来て主を求めた。
五そこでヨシャパテは主の宮の新しい庭の前で、ユダとエルサレムの
会衆の中に立って、六言った、「われわれの先祖の神、主よ、あなたは天
にいます神ではありませんか。異邦人のすべての国を治められるではあり
ませんか。あなたの手には力があり、勢いがあって、あなたに逆らいう
る者はありません。七われわれの神よ、あなたはこの国の民をあなたの民
イスラエルの前から追い払って、あなたの友アブラハムの子孫に、これを

永遠に与えられたではありませんか。八彼らはここに住み、あなたの名の
ためにここに聖所を建てて言いました、九『つるぎ、審判、疫病、ききん
などの災がわれわれに臨む時、われわれはこの宮の前に立って、あなた
の前におり、その悩みの中であなたに呼ばわります。すると、あなたは聞
いて助けられます。あなたの名はこの宮にあるからです』と。一〇今アン
モン、モアブ、およびセイル山の人々をごらんなさい。昔イスラエルがエ
ジプトの国から出てきた時、あなたはイスラエルに彼らを侵すことをゆる
されなかったので、イスラエルは彼らを離れて、滅ぼしませんでした。一
一彼らがわれわれに報いるところをごらんください。彼らは来て、あなた
がわれわれに賜わったあなたの領地からわれわれを追い払おうとしていま
す。一二われわれの神よ、あなたは彼らをさばかれないのですか。われわれ
はこのように攻めて来る大軍に当る力がなく、またいかになすべきかを

知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです」。
一三ユダの人々はその幼な子、その妻、および子供たちと共に皆主の前
に立っていた。一四その時主の霊が会衆の中でアサフの子孫であるレビび
とヤハジエルに臨んだ。ヤハジエルはゼカリヤの子、ゼカリヤはベナヤの
子、ベナヤはエイエルの子、エイエルはマッタニヤの子である。一五ヤハジ
エルは言った、「ユダの人々、エルサレムの住民、およびヨシャパテ王よ、
聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられる、『この大軍のために恐れ
てはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではな
く、主の戦いだからである。一六あす、彼らの所へ攻め下りなさい。見
よ、彼らはチヅの坂から上って来る。あなたがたはエルサレムの野の東、谷
の端でこれに会うであろう。一七この戦いには、あなたがたは戦うに及
ばない。ユダおよびエルサレムよ、あなたがたは進み出て立ち、あなたが

たと共におられる主の勝利を見なさい。恐れてはならない。おののいては
ならない。あす、彼らの所に攻めて行きなさい。主はあなたがたと共に
おられるからである』」。
一八ヨシャパテは地にひれ伏した。ユダの人々およびエルサレムの民も
主の前に伏して、主を拝した。一九その時コハテびとの子孫、およびコラび
との子孫であるレビびとが立ち上がり、大声をあげてイスラエルの神、主
をさんびした。
二〇彼らは朝早く起きてテコアの野に出て行った。その出て行くとき、ヨ
シャパテは立って言った、「ユダの人々およびエルサレムの民よ、わたしに
聞きなさい。あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅
く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは
成功するでしょう」。二一彼はまた民と相談して人々を任命し、聖なる飾
りを着けて軍勢の前に進ませ、主に向かって歌をうたい、かつさんびさせ、

「主に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」

と言わせた。二二そして彼らが歌をうたい、さんびし始めた時、主は伏兵を設け、かのユダに攻めてきたアンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられたので、彼らは打ち敗られた。二三すなわちアンモンとモアブの人々は立ち上がって、セイル山の民に敵し、彼らを殺して全く滅ぼしたが、セイルの民を殺し尽すに及んで、彼らもおのおの互に助けて滅ぼしあった。

二四ユダの人々は野の物見やぐらへ行って、かの群衆を見たが、地に倒れた死体だけであって、ひとりものがれた者はなかった。二五それでヨシャパテとその民は彼らの物を奪うために来て見ると、多数の家畜、財宝、衣服および宝石などおびただしくあったので、おのおのそれをはぎ取ったが、運

びきれないほどたくさんで、かすめ取るに三日もかかった。それほど物が
多かったのである。二六四日目に彼らはベラカの谷に集まり、その所で主
を祝福した。それでその所の名を今日までベラカの谷と呼んでいる。二
七そしてユダとエルサレムの人々は皆ヨシャパテを先に立て、喜んでエル
サレムに帰ってきた。主が彼らにその敵のことによって喜びを与えられ
たからである。二八すなわち彼らは立琴、琴およびラッパをもってエルサ
レムの主の宮に来た。二九そしてもろもろの国の民は主がイスラエルの敵
と戦われたことを聞いて神を恐れた。三〇こうして神が四方に安息を賜
わったので、ヨシャパテの国は穏やかであった。

三一このようにヨシャパテはユダを治めた。彼は三十五歳の時、王とな
り、二十五年の間エルサレムで世を治めた。彼の母の名はアズバといっ
てシルヒの娘である。三二ヨシャパテは父アサの道を歩んでそれを離れ

ず、主の目に正しいと見られることを行った。三三しかし高き所は除か
ず、また民はその先祖の神に心を傾けなかった。
三四ヨシャパテのその他の始終の行為は、ハナニの子エヒウの書にしる
され、イスラエルの列王の書に載せられてある。
三五この後ユダの王ヨシャパテはイスラエルの王アハジヤと相結んだ。
アハジヤは悪を行った。三六ヨシャパテはタルシシへ行く船を造るために
アハジヤと相結び、エジオン・ゲベルで一緒に船数隻を造った。三七その
時マレシャのドダワの子エリエゼルはヨシャパテに向かって預言し、「あな
たはアハジヤと相結んだので、主はあなたの造った物をこわされます」と
言ったが、その船は難破して、タルシシへ行くことができなかった。

第二一章一ヨシャパテは先祖たちと共に眠り、先祖たちと共にダビデの
町に葬られ、その子ヨラムが代って王となった。二ヨシャパテの子である

その兄弟たちはアザリヤ、エヒエル、ゼカリヤ、アザリヤ、ミカエルおよ
びシパテヤで、皆ユダの王ヨシャパテの子たちであった。三その父は彼ら
に金、銀、宝物の賜物を多く与え、またユダの要害の町々を与えたが、ヨ
ラムは長子なので、国はヨラムに与えた。四ヨラムはその父の位に登っ
て強くなった時、その兄弟たちをことごとくつるぎにかけて殺し、またユ
ダのつかさたち数人を殺した。五ヨラムは位についた時三十二歳で、エ
ルサレムで八年の間世を治めた。六彼はアハブの家がしたようにイスラ
エルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘を妻としたからである。このよ
うに彼は主の目の前に悪をおこなったが、七主はさきにダビデと結ばれた
契約のゆえに、また彼とその子孫とにながく、ともしびを与えると約束さ
れたことによって、ダビデの家を滅ぼすことを好まれなかった。

八ヨラムの世にエドムがそむいて、ユダの支配を脱し、みずから王を立

てたので、九ヨラムはその将校たち、およびすべての戦車を従えて渡っ
て行き、夜のうちに立ち上がって、自分を包囲しているエドムびととその
戦車の隊長たちを撃った。一〇エドムはこのようにそむいてユダの支配を
脱し、今日に至っている。そのころリブナもまたそむいてユダの支配を脱
した。ヨラムが先祖たちの神、主を捨てたからである。
一一彼はまたユダの山地に高き所を造って、エルサレムの民に姦淫を
行わせ、ユダを惑わした。一二その時預言者エリヤから次のような一通の
手紙がヨラムのもとに来た、「あなたの先祖ダビデの神、主はこう仰せられ
る、『あなたは父ヨシャパテの道に歩まず、またユダの王アサの道に歩まな
いで、一三イスラエルの王たちの道に歩み、ユダとエルサレムの民に、かの
アハブの家がイスラエルに姦淫を行わせたように、姦淫を行わせ、また
あなたの父の家の者で、あなたにまさっているあなたの兄弟たちを殺し

たゆえ、一四主は大いなる災をもってあなたの民と子供と妻たちと、す
べての所有を撃たれる。一五あなたはまた内臓の病気にかかって大病に
なり、それが日に日に重くなって、ついに内臓が出るようになる』。
一六その時、主はヨラムに対してエチオピヤびとの近くに住んでいるペ
リシテびととアラビヤびとの霊を振り起されたので、一七彼らはユダに攻め
上って、これを侵し、王の家にある貨財をことごとく奪い去り、またヨラ
ムの子供と妻たちをも奪い去ったので、末の子エホアハズのほかには、ひ
とりも残った者がなかった。
一八このもろもろの事の後、主は彼を撃って内臓にいえがたい病気を起
させられた。一九時がたって、二年の終りになり、その内臓が病気のため
に出て、重い病苦によって死んだ。民は彼の先祖のために香をたいたよう
に、彼のために香をたかなかった。二〇ヨラムはその位についた時三十二

歳で、八年の間エルサレムで世を治め、ついに死んだ。ひとりも彼を惜
しむ者がなかった。人々は彼をダビデの町に葬ったが、王たちの墓にで
はなかった。

第二二章 一エルサレムの民はヨラムの末の子アハジヤを彼の代りに王と
した。かつてアラビヤびとと一緒に陣営に攻めてきた一隊の者が上の子た
ちをことごとく殺したので、ユダの王ヨラムの子アハジヤが王となったので
ある。二アハジヤは王となった時四十二歳で、エルサレムで一年の間世を
治めた。その母はオムリの娘で名をアタリヤといった。三アハジヤもまた
アハブの家の道に歩んだ。その母が彼の相談相手となって悪を行わせた
からである。四彼はまたアハブの家がしたように主の目の前に悪を行っ
た。すなわちその父が死んだ後、アハブの家の者がその相談役となった
ので、彼はついに自分を滅ぼすに至った。五アハジヤはまた彼らの勧めに

従って、イスラエルの王アハブの子ヨラムと共にラモテ・ギレアデへ行
き、スリヤの王ハザエルと戦ったが、スリヤびとはヨラムに傷を負わせ
た。六そこでヨラムはスリヤの王ハザエルと戦った時、ラマで負ったその
傷をいやすためにエズレルに帰った。ユダの王ヨラムの子アハジヤはアハ
ブの子ヨラムが病気なのでエズレルに下ってこれを見舞った。

七アハジヤがヨラムを見舞に行ったことによって滅びに至ったのは神に
よって定められたことである。すなわち彼がそこに着いた時、ヨラムと一緒
に出て、ニムシの子エヒウを迎えた。エヒウは主がアハブの家を断ち滅ぼ
すために油を注がれた者である。八エヒウはアハブの家を罰するにあたっ
て、ユダのつかさたち、およびアハジヤの兄弟たちの子らがアハジヤに仕
えているのを見たので、彼らをも殺した。九アハジヤはサマリヤに隠れて
いたが、エヒウが彼を捜し求めたので、人々は彼を捕え、エヒウのもとに

引いてきて、彼を殺した。ただし「彼は心をつくして主を求めたヨシャ
パテの子である」と人々は言ったのでこれを葬った。こうしてアハジヤの
家には国を統べ治めうる者がなくなった。
一〇アハジヤの母アタリヤは自分の子の死んだのを見て、立ってユダの家
の王子をことごとく滅ぼしたが、**一一**王の娘エホシバはアハジヤの子ヨア
シを王の子たちの殺される者のうちから盗み取り、彼とそのうばを寝室に
おいた。こうしてエホシバがヨアシをアタリヤから隠したので、アタリヤは
ヨアシを殺さなかった。エホシバはヨラム王の娘、またアハジヤの妹
で、祭司エホヤダの妻である。**一二**こうしてヨアシは神の宮に隠れて彼ら
と共におること六年、その間アタリヤが国を治めた。
第二三章一第七年になって、エホヤダは勇気をだしてエロハムの子アザ
リヤ、ヨハナンの子イシマエル、オベデの子アザリヤ、アダヤの子マアセ

ヤ、ジクリの子エリシャパテなどの百人の長たちを招いて契約を結ばせ
た。二そこで彼らはユダを行きめぐって、ユダのすべての町からレビびとを
集め、またイスラエルの氏族の長たちを集めて、エルサレムに来た。三そ
してその会衆は皆神の宮で王と契約を結んだ。その時エホヤダは彼らに
言った、「主がダビデの子孫のことについて言われたように、王の子が位
につくべきです。四あなたがたのなすべき事はこれです。すなわちあなた
がた祭司およびレビびとの安息日にはいって来る者の、三分の一は門を守
る者となり、五三分の一は王の家におり、三分の一は礎の門におり、民
は皆、主の宮の庭にいなさい。六祭司と、勤めをするレビびとのほかは、だ
れも主の宮に、はいってはならない。彼らは聖なる者であるから、はいる
ことができる。民は皆、主の命令を守らなければならない。七レビびとは
めいめい手に武器をとって王のまわりに立たなければならない。宮にはい

る者をすべて殺しなさい。あなたがたは王がはいる時にも出る時にも、王
と共にいなさい」。
八そこでレビびとおよびユダの人々は、祭司エホヤダがすべて命じたよう
に行い、めいめいその組の者で、安息日にはいって来るべき者と、安息日
に出て行くべき者を率いていた。祭司エホヤダが組の者を去らせなかった
からである。九また祭司エホヤダは、神の宮にあるダビデ王のやりおよび
大盾、小盾を百人の長たちに渡し、一〇また王を守るために、すべての民
にめいめい手に武器をとらせ、宮の南側から北側にわたって、祭壇と宮
に沿って立たせた。一一こうして王の子を連れ出して、これに冠をいた
だかせ、あかしの書を渡して王となし、エホヤダおよびその子たちが彼に
油を注いだ。そして「王万歳」と言った。
一二アタリヤは民の走りながら王をほめる声を聞いたので、主の宮に入

り、民の所へ行って、一三見ると、王は入口で柱のかたわらに立ち、王
のかたわらには将軍たちとラッパ手が立っており、また国の民は皆喜ん
でラッパを吹き、歌をうたう者は楽器をもってさんびしていたので、アタ
リヤは衣を裂いて「反逆だ、反逆だ」と叫んだ。一四その時エホヤダ
は軍勢を統率する百人の長たちを呼び出し、「列の間から彼女を連れ出
せ、彼女に従う者をつるぎで殺せ」と言った。祭司が彼女を主の宮で殺
してはならないと言ったからである。一五そこで人々は彼女に手をかけ、王
の家の馬の門の入口まで連れて行き、その所で彼女を殺した。

一六エホヤダは自分とすべての民と王との間に、彼らは皆、主の民とな
るとの契約を結んだ。一七そこですべての民はバアルの家に行って、それを
こわし、その祭壇とその像とを打ち砕き、バアルの祭司マッタンを祭壇の
前で殺した。一八エホヤダはまた主の宮の守衛を、祭司とレビびとの指揮

のもとに置いた。このレビびとは昔ダビデがモーセの律法にしるされて
いるように、喜びと歌とをもって主に燔祭をささげるために、主の宮に
配置したものであって、今そのダビデの例にならったものである。一九彼
はまた主の宮のもろもろの門に門衛を置き、汚れた者は何によって汚れた
者でも、はいらせないようにした。二〇こうしてエホヤダは百人の長たち、
貴族たち、民のつかさたちおよび国のすべての民を率いて、主の宮から王
を連れ下り、上の門から王の家に進み、王を国の位につかせた。二一国
の民は皆喜んだ。町はアタリヤがつるぎで殺された後、穏やかであった。

第二四章一ヨアシは位についた時七歳で、エルサレムで四十年の間、
世を治めた。彼の母はベエルシバから出た者で名をチビアといった。二ヨ
アシは祭司エホヤダの世にある日の間は常に主の良しと見られることを
行った。三エホヤダは彼のためにふたりの妻をめとり、彼に男子と女子が

生れた。
四この後ヨアシは主の宮を修繕しようと志して、五祭司とレビびとを
集めて言った、「ユダの町々へ行って、あなたがたの神の宮を年々修繕す
る資金をすべてのイスラエルびとから集めなさい。その事を急いでしなさ
い」。ところがレビびとはこれを急いでしなかった。六それで王はかしらで
あるエホヤダを召して言った、「あなたはなぜレビびとに求めて、主のしも
べモーセがあかしの幕屋のためにイスラエルの会衆に課した税金をユダ
とエルサレムから取り立てさせないのか」。七かの悪い女アタリヤの子ら
が神の宮に侵入して主の宮のもろもろの奉納物をとり、バアルのために
用いたからである。
八そこで王は命じて一個の箱を造らせ、これを主の宮の門の外に置き、
九ユダとエルサレムにふれて、神のしもべモーセが荒野でイスラエルに課し

た税金を主のために持ってこさせた。一〇すべてのつかさたちおよびすべ
ての民は皆喜んでその税金を持って来て、その箱に投げ入れたので、つ
いに箱はいっぱいになった。一一レビびとはその箱に金が多くあるのを見
て、王の役人の所へ持って行くと、王の書記と祭司長の下役とが来て、
その箱を傾け、これを取ってもとの所に返した。彼らは日々このように
して金をおびただしく集めた。一二王とエホヤダはこれを主の宮の工事を
なす者に渡し、石工および木工を雇って、主の宮を修繕させ、また鉄工
および青銅工を雇って、主の宮を修復させた。一三工人たちは働いたの
で、修復の工事は彼らの手によってはかどり、神の宮を、もとの状態に
復し、これを堅固にした。一四それをなし終ったとき、余った金を王とエ
ホヤダの前に持って来たので、それをもって主の宮のために器物を造っ
た。すなわち勤めの器、燔祭の器、香の皿、および金銀の器を造った。

エホヤダの世にある日の間は、絶えず主の宮で燔祭をささげた。
一五しかしエホヤダは年老い、日が満ちて死んだ。その死んだ時は百三十
歳であった。一六人々は彼をダビデの町で王たちの中に葬った。彼はイ
スラエルにおいて神とその宮とに良い事を行ったからである。
一七エホヤダの死んだ後、ユダのつかさたちが来て、うやうやしく王に
敬意を表した。王は彼らに聞き従った。一八彼らはその先祖の神、主の
宮を捨てて、アシラ像および偶像に仕えたので、そのとがのために、怒り
がユダとエルサレムに臨んだ。一九主は彼らをご自分に引き返そうとして、
預言者たちをつかわし、彼らにむかってあかしをさせられたが、耳を傾け
なかった。
二〇そこで神の霊が祭司エホヤダの子ゼカリヤに臨んだので、彼は民の
前に立ち上がって言った、「神はこう仰せられる、『あなたがたが主の戒

めを犯して、災を招くのはどういうわけであるか。あなたがたが主を捨
てたために、主もあなたがたを捨てられたのである』」。二一しかし人々は
彼を害しようと計り、王の命によって、石をもって彼を主の宮の庭で撃
ち殺した。二二このようにヨアシ王はゼカリヤの父エホヤダが自分に施し
た恵みを思わず、その子を殺した。ゼカリヤは死ぬ時、「どうぞ主がこれ
をみそなわして罰せられるように」と言った。
二三年の終りになって、スリヤの軍勢はヨアシにむかって攻め上り、ユダと
エルサレムに来て、民のつかさたちをことごとく民のうちから滅ぼし、そのぶ
んどり物を皆ダマスコの王に送った。二四この時スリヤの軍勢は少数で
来たのであるが、主は大軍を彼らの手に渡された。これは彼らがその先祖
の神、主を捨てたためである。このように彼らはヨアシを罰した。
二五スリヤ軍はヨアシに大傷を負わせて捨て去ったが、ヨアシの家来た

ちは祭司エホヤダの子の血のために、党を結んで彼にそむき、彼を床の上
に殺して、死なせた。人々は彼をダビデの町に葬ったが、王の墓には葬
らなかった。二六党を結んで彼にそむいた者は、アンモンの女シメアテの
子ザバデおよびモアブの女シムリテの子ヨザバデであった。二七ヨアシの
子らのこと、ヨアシに対する多くの預言および神の宮の修理の事などは、
列王の書の注釈にしるされている。ヨアシの子アマジヤが彼に代って
王となった。

第二五章一アマジヤは王となった時二十五歳で、二十九年の間エルサ
レムで世を治めた。その母はエルサレムの者で、名をエホアダンといった。
二アマジヤは主の良しと見られることを行ったが、全き心をもってで
はなかった。三彼は、国が彼の手のうちに強くなったとき、父ヨアシ王を
殺害した家来たちを殺した。四しかしその子供たちは殺さなかった。これ

はモーセの律法の書にしるされている所に従ったのであって、そこに主
は命じて、「父は子のゆえに殺されるべきではない。子は父のゆえに殺さ
れるべきではない。おのおの自分の罪のゆえに殺されるべきである」と言
われている。
五アマジヤはユダの人々を集め、その氏族に従って、千人の長に付属
させ、または百人の長に付属させた。ユダとベニヤミンのすべてに行った。
そして二十歳以上の者を数えたところ、やりと盾をとって戦いに臨みう
る精兵三十万人を得た。
六彼はまた銀百タラントをもってイスラエルから
大勇士十万人を雇った。
七その時、神の人が彼の所に来て言った、「王よ、
イスラエルの軍勢をあなたと共に行かせてはいけません。主はイスラエル
びと、すなわちエフライムのすべての人々とは共におられないからです。
八もしあなたがこのような方法で戦いに強くなろうと思うならば、神は

あなたを敵の前に倒されるでしょう。神には助ける力があり、また倒す
力があるからです」。九アマジヤは神の人に言った、「それではわたしがイ
スラエルの軍隊に与えた百タラントをどうしましょうか」。神の人は答え
た、「主はそれよりも多いものをあなたにお与えになることができます」。
一〇そこでアマジヤはエフライムから来て自分に加わった軍隊を分離して
帰らせたので、彼らはユダに対して激しい怒りを発し、火のように怒って
自分の所に帰った。一一しかしアマジヤは勇気を出し、その民を率いて塩
の谷へ行き、セイルびと一万人を撃ち殺した。一二またユダの人々はこの
ほかに一万人をいけどり、岩の頂に引いて行って岩の頂から彼らを投
げ落したので、皆こなごなに砕けた。一三ところがアマジヤが自分と共に
戦いに行かせないで帰してやった兵卒らが、サマリヤからベテホロンまで
の、ユダの町々を襲って三千人を殺し、多くの物を奪い取った。

一四アマジヤはエドムびとを殺して帰った時、セイルびとの神々を携え
てきて、これを安置して自分の神とし、これを礼拝し、これにささげ物を
なした。
一五それゆえ、主はアマジヤに向かって怒りを発し、預言者を彼に
つかわして言わせられた、「かの民の神々は自分の民をあなたの手から救
うことができなかったのに、あなたはどうしてそれを求めたのか」。
一六彼
がこう王に語ると、王は彼に、「われわれはあなたを王の顧問にしたので
すか。やめなさい。あなたはどうして殺されようとするのですか」と言っ
たので、預言者はやめて言った、「あなたはこの事を行って、わたしのいさ
めを聞きいれないゆえ、神はあなたを滅ぼそうと定められたことをわたし
は知っています」。
一七そこでユダの王アマジヤは協議の結果、人をエヒウの子エホアハズ
の子であるイスラエルの王ヨアシにつかわし、「さあ、われわれは互に顔

をあわせよう」と言わせたところ、一八イスラエルの王ヨアシはユダの王
アマジヤに言い送った、「レバノンのいばらが、かつてレバノンの香柏に、
『あなたの娘をわたしのむすこの妻に与えよ』と言い送ったところが、レ
バノンの野獣が通りかかって、そのいばらを踏み倒した。一九あなたは『見
よ、わたしはエドムを撃ち破った』と言って心に誇り高ぶっている。しか
しあなたは自分の家にとどまっていなさい。どうしてあなたは災を引き
起して、自分もユダも共に滅びようとするのか」。
二〇しかしアマジヤは聞きいれなかった。これは神から出たのであって、
彼らがエドムの神々を求めたので神は彼らを敵の手に渡されるためであ
る。二一そこでイスラエルの王ヨアシは上って来て、ユダのベテシメシで
ユダの王アマジヤと顔を合わせたが、二二ユダはイスラエルに撃ち破られ、
おのおのその天幕に逃げ帰った。二三その時イスラエルの王ヨアシはエホ

アハズの子ヨアシの子であるユダの王アマジヤをベテシメシで捕えて、エ
ルサレムに引いて行き、エルサレムの城壁をエフライム門から、隅の門
まで四百キュビトほどをこわし、二四また神の宮のうちで、オベデエドムが
守っていたすべての金銀およびもろもろの器物ならびに王の家の財宝を
奪い、また人質をとって、サマリヤに帰った。
二五ユダの王ヨアシの子アマジヤはイスラエルの王エホアハズの子ヨア
シが死んで後なお十五年生きながらえた。二六アマジヤのその他の始終の
行為は、ユダとイスラエルの列王の書にしるされているではないか。二七
アマジヤがそむいて、主に従わなくなった時から、人々はエルサレムにお
いて党を結び、彼に敵したので、彼はラキシに逃げて行ったが、その人々
はラキシに人をやって、彼をその所で殺させた。二八人々はこれを馬に負
わせて持ってきて、ユダの町でその先祖たちと共にこれを葬った。

第二六章一そこでユダの民は皆ウジヤをとって王となし、その父アマジヤ
に代らせた。時に十六歳であった。二彼はエラテを建てて、これをふたた
びユダのものにした。これはかの王がその先祖たちと共に眠った後であっ
た。三ウジヤは王となった時十六歳で、エルサレムで五十二年の間世を
治めた。その母はエルサレムの者で名をエコリヤといった。四ウジヤは父
アマジヤがしたように、すべて主の良しと見られることを行った。五彼は
神を恐れることを自分に教えたゼカリヤの世にある日の間、神を求める
ことに努めた。彼が主を求めた間、神は彼を栄えさせられた。
六彼は出てペリシテびとと戦い、ガテの城壁、ヤブネの城壁および
アシドドの城壁をくずし、アシドドの地とペリシテびとのなかに町を建て
た。七神は彼を助けてペリシテびとと、グルバアルに住むアラビヤびととお
よびメウニびとを攻め撃たせられた。八アンモンびとはウジヤにみつぎを納

めた。ウジヤは非常に強くなったので、その名はエジプトの入口までも広
まった。九ウジヤはまたエルサレムの隅の門、谷の門および城壁の曲りか
どにやぐらを建てて、これを堅固にした。一〇彼はまた荒野にやぐらを建て、
また多くの水ためを掘った。彼は平野にも平地にもたくさんの家畜をもっ
ていたからである。彼はまた農事を好んだので、山々および肥えた畑には
農夫とぶどうをつくる者をもっていた。一一ウジヤはまたよく戦う一軍団
を持っていた。彼らは書記エイエルと、つかさマアセヤによって調べた数
に従って組々に分れ、皆王の軍長のひとりハナニヤの指揮下にあった。
一二その氏族の長である大勇士の数は合わせて二千六百人であった。一三
その指揮下にある軍勢は三十万七千五百人で、皆大いなる力をもって戦
い、王を助けて敵に当った。一四ウジヤはその全軍のために盾、やり、か
ぶと、よろい、弓および石投げの石を備えた。一五彼はまたエルサレムで

技術者の考案した機械を造って、これをやぐらおよび城壁のすみずみにすえ、これをもって矢および大石を射出した。こうして彼の名声は遠くまで広まった。彼が驚くほど神の助けを得て強くなったからである。
一六ところが彼は強くなるに及んで、その心に高ぶり、ついに自分を滅ぼすに至った。すなわち彼はその神、主にむかって罪を犯し、主の宮にはいって香の祭壇の上に香をたこうとした。一七その時、祭司アザリヤは主の祭司である勇士八十人を率いて、彼のあとに従ってはいり、一八ウジヤ王を引き止めて言った、「ウジヤよ、主に香をたくことはあなたのなすべきことではなく、ただアロンの子孫で、香をたくために清められた祭司たちのすることです。すぐ聖所から出なさい。あなたは罪を犯しました。あなたは主なる神から栄えを得ることはできません」。一九するとウジヤは怒りを発し、香炉を手にとって香をたこうとしたが、彼が祭司に向かって怒り

を発している間に、らい病がその額に起った。時に彼は主の宮で祭司
たちの前、香の祭壇のかたわらにいた。二〇祭司の長アザリヤおよびすべ
ての祭司たちが彼を見ると、彼の額にらい病が生じていたので、急い
で彼をそこから追い出した。彼自身もまた主に撃たれたことを知って、急
いで出て行った。二一ウジヤ王は、死ぬ日までらい病人であった。彼はら
い病人であったので、離れ殿に住んだ。主の宮から断たれたからである。
その子ヨタムが王の家をつかさどり、国の民を治めた。二二ウジヤのその
他の始終の行為は、アモツの子預言者イザヤがこれを書きしるした。二三ウ
ジヤは先祖たちと共に眠ったので、人々は「彼はらい病人である」と言っ
て、王たちの墓に連なる墓地に、その先祖たちと共に葬った。その子ヨ
タムが彼に代って王となった。

第二七章一ヨタムは王となった時二十五歳で、十六年の間エルサレムで

世を治めた。その母はザドクの娘で名をエルシャといった。二ヨタムはそ
の父ウジヤがしたように主の良しと見られることをした。しかし主の宮に
は、はいらなかった。民はなお悪を行った。三彼は主の宮の上の門を建
て、オペルの石がきを多く築き増し、四またユダの山地に数個の町を建て、
林の間に城とやぐらを築いた。五彼はアンモンびとの王と戦ってこれ
に勝った。その年アンモンの人々は銀百タラント、小麦一万コル、大麦一
万コルを彼に贈った。アンモンの人々は第二年にも第三年にも同じよう
に彼に納めた。六ヨタムはその神、主の前にその行いを堅くしたので力
ある者となった。七ヨタムのその他の行為、そのすべての戦いおよびその
行いなどは、イスラエルとユダの列王の書にしるされている。八彼は王
となった時、二十五歳で、十六年の間エルサレムで世を治めた。九ヨタム
はその先祖と共に眠ったので、ダビデの町に葬られ、その子アハズが彼

に代って王となった。

第二八章
一アハズは王となった時二十歳で、十六年の間エルサレムで世
を治めたが、その父ダビデとは違って、主の良しと見られることを行わ
ず、二イスラエルの王たちの道に歩み、またもろもろのバアルのために鋳た
像を造り、三ベンヒンノムの谷で香をたき、その子らを火に焼いて供え物
とするなど、主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の憎むべ
き行いにならい、四また高き所の上、丘の上、すべての青木の下で犠牲
をささげ、香をたいた。
五それゆえ、その神、主は彼をスリヤの王の手に渡されたので、スリヤ
びとは彼を撃ち破り、その民を多く捕虜として、ダマスコに引いて行った。
彼はまたイスラエルの王の手にも渡されたので、イスラエルの王も彼を撃
ち破って大いに殺した。六すなわちレマリヤの子ペカはユダで一日のうち

に十二万人を殺した。皆勇士であった。これは彼らがその先祖の神、主を
捨てたためである。七その時、エフライムの勇士ジクリという者が王の子
マアセヤ、宮内大臣アズリカムおよび王に次ぐ人エルカナを殺した。
八イスラエルの人々はついにその兄弟のうちから婦人ならびに男子、女子
など二十万人を捕虜にし、また多くのぶんどり物をとり、そのぶんどり物
をサマリヤに持って行った。九その時そこに名をオデデという主の預言者
があって、サマリヤに帰って来た軍勢の前に進み出て言った、「見よ、あな
たがたの先祖の神、主はユダを怒って、これをあなたがたの手に渡された
が、あなたがたは天に達するほどの怒りをもってこれを殺した。一〇それば
かりでなく、あなたがたは今、ユダとエルサレムの人々を従わせて、自分
の男女の奴隷にしようと思っている。しかしあなたがた自身もまた、あな
たがたの神、主に罪を犯しているではないか。一一いまわたしに聞き、あ

なたがたがその兄弟のうちから捕えて来た捕虜を放ち帰らせなさい。主
の激しい怒りがあなたがたの上に臨んでいるからです」。一二そこでエフラ
イムびとのおもなる人々、すなわちヨハナンの子アザリヤ、メシレモテの
子ベレキヤ、シャルムの子ヒゼキヤ、ハデライの子アマサらもまた、戦争
から帰った者どもに向かって立ちあがり、一三彼らに言った、「捕虜をここ
に引き入れてはならない。あなたがたはわたしどもに主に対するとがを得
させて、さらにわれわれの罪とがを増し加えようとしている。われわれの
とがは大きく、激しい怒りがイスラエルの上に臨んでいるからです」。一四
そこで兵卒どもがその捕虜とぶんどり物をつかさたちと全会衆の前に捨
てておいたので、一五前に名をあげた人々が立って捕虜を受け取り、ぶんど
り物のうちから衣服をとって、裸の者に着せ、また、くつをはかせ、食い
飲みさせ、油を注ぎなどし、その弱い者を皆ろばに乗せ、こうして彼ら

をしゅろの町エリコに連れて行って、その兄弟たちに渡し、そしてサマリ
ヤに帰って来た。
一六その時アハズ王は人をアッスリヤの王につかわして助けを求めさせ
た。一七エドムびとが再び侵入してユダを撃ち、民を捕え去ったからで
ある。一八ペリシテびともまた平野の町々およびユダのネゲブの町々を侵
して、ベテシメシ、アヤロン、ゲデロテおよびソコとその村里、テムナと
その村里、ギムゾとその村里を取って、そこに住んだ。一九これはイスラ
エルの王アハズのゆえに、主がユダを低くされたのであって、彼がユダの
うちにみだらなことを行い、主に向かって大いに罪を犯したからである。
二〇アッスリヤの王テルガデ・ピルネセルは彼の所に来たが、彼に力を
添えないで、かえって彼を悩ました。二一アハズは主の宮と王の家、およ
びつかさたちの家の物を取ってアッスリヤの王に与えたが、それはアハズ

の助けにはならなかった。
二二このアハズ王はその悩みの時にあたって、ますます主に罪を犯した。
二三すなわち、彼は自分を撃ったダマスコの神々に、犠牲をささげて言っ
た、「スリヤの王たちの神々はその王たちを助けるから、わたしもそれに
犠牲をささげよう。そうすれば彼らはわたしを助けるであろう」と。しか
し、彼らはかえってアハズとイスラエル全国とを倒す者となった。二四ア
ハズは神の宮の器物を集めて、神の宮の器物を切り破り、主の宮の戸
を閉じ、エルサレムのすみずみに祭壇を造り、二五ユダのすべての
町々に高き所を造って、他の神々に香をたきなどして、先祖の神、主の
怒りを引き起した。二六アハズのその他の始終の行為およびそのすべての
行動は、ユダとイスラエルの列王の書にしるされている。二七アハズはそ
の先祖たちと共に眠ったので、エルサレムの町にこれを葬った。しかし、

イスラエルの王たちの墓には持って行かなかった。その子ヒゼキヤが彼に
代って王となった。
第二九章一ヒゼキヤは王となった時二十五歳で、二十九年の間エルサレ
ムで世を治めた。その母はアビヤと言って、ゼカリヤの娘である。二ヒゼ
キヤは父ダビデがすべてなしたように主の良しと見られることをした。
三彼はその治世の第一年の一月に主の宮の戸を開き、かつこれを繕っ
た。四彼は祭司とレビびとを連れていって、東の広場に集め、五彼らに言っ
た、「レビびとよ、聞きなさい。あなたがたは今、身を清めて、あなたがた
の先祖の神、主の宮を清め、聖所から汚れを除き去りなさい。六われわれ
の先祖は罪を犯し、われわれの神、主の悪と見られることを行って、主を
捨て、主のすまいに顔をそむけ、うしろを向けた。七また廊の戸を閉じ、と
もしびを消し、聖所でイスラエルの神に香をたかず、燔祭をささげなかっ

た。八それゆえ、主の怒りはユダとエルサレムに臨み、あなたがたが目に
見るように、主は彼らを恐れと驚きと物笑いにされた。九見よ、われわ
れの父たちはつるぎにたおれ、われわれのむすこたち、むすめたち、妻た
ちはこれがために捕虜となった。一〇今わたしは、イスラエルの神、主と
契約を結ぶ志をもっている。そうすればその激しい怒りは、われわれ
を離れるであろう。一一わが子らよ、今は怠ってはならない。主はあなた
がたを選んで、主の前に立って仕えさせ、ご自分に仕える者となし、また
香をたく者とされたからである」。一二そこでレビびとは立ち上がった。す
なわちコハテびとの子孫のうちでは、アマサイの子マハテおよびアザリヤ
の子ヨエル。メラリの子孫では、アブデの子キシおよびエハレレルの子ア
ザリヤ。ゲルションびとのうちでは、ジンマの子ヨアおよびヨアの子エデ
ン。一三エリザパンの子孫のうちでは、シムリとエイエル。アサフの子孫の

うちでは、ゼカリヤとマッタニヤ。一四ヘマンの子孫のうちでは、エヒエル
とシメイ。エドトンの子孫のうちでは、シマヤとウジエルである。一五彼ら
はその兄弟たちを集めて身を清め、主の言葉による王の命令に従って、
主の宮を清めるためにはいって来た。一六祭司たちが主の宮の奥にはいっ
てこれを清め、主の宮にあった汚れた物をことごとく主の宮の庭に運び出
すと、レビびとはそれを受けて外に出し、キデロン川に持って行った。一
七彼らは正月の元日に清めることを始めて、その月の八日に主の宮の廊
に達した。それから主の宮を清めるのに八日を費し、正月の十六日にこ
れを終った。一八そこで彼らはヒゼキヤ王の所へ行って言った、「われわ
れは主の宮をことごとく清め、また燔祭の壇とそのすべての器物、およ
び供えのパンの机とそのすべての器物とを清めました。一九またアハズ
王がその治世に罪を犯して捨てたすべての器物をも整えて清めました。

それらは主の祭壇の前にあります」。
二〇そこでヒゼキヤ王は朝早く起きいで、町のつかさたちを集めて、主の
宮に上って行き、二一雄牛七頭、雄羊七頭、小羊七頭、雄やぎ七頭を引い
てこさせ、国と聖所とユダのためにこれを罪祭とし、アロンの子孫である
祭司たちに命じてこれを主の祭壇の上にささげさせた。二二すなわち、雄牛
をほふると、祭司たちはその血を受けて祭壇にふりかけ、また雄羊をほふ
ると、その血を祭壇にふりかけ、また小羊をほふると、その血を祭壇にふり
かけた。二三そして罪祭の雄やぎを王と会衆の前に引いて来たので、彼ら
はその上に手を置いた。二四そして祭司たちはこれをほふり、その血を罪祭
として祭壇の上にささげてイスラエル全国のためにあがないをした。これ
は王がイスラエル全国のために燔祭および罪祭をささげることを命じたた
めである。

二五王はまたレビびとを主の宮に置き、ダビデおよび王の先見者ガドと
預言者ナタンの命令に従って、これにシンバル、立琴および琴をとらせ
た。これは主がその預言者によって命じられたところである。二六こうし
てレビびとはダビデの楽器をとり、祭司はラッパをとって立った。二七そこ
でヒゼキヤは燔祭を祭壇の上にささげることを命じた。燔祭をささげ始
めた時、主の歌をうたい、ラッパを吹き、イスラエルの王ダビデの楽器をな
らし始めた。二八そして会衆は皆礼拝し、歌うたう者は歌をうたい、ラッ
パ手はラッパを吹き鳴らし、燔祭が終るまですべてこのようであったが、二
九ささげる事が終ると、王および彼と共にいた者はみな身をかがめて礼拝
した。三〇またヒゼキヤ王およびつかさたちはレビびとに命じて、ダビデ
と先見者アサフの言葉をもって主をさんびさせた。彼らは喜んでさんび
し、頭をさげて礼拝した。

三一その時、ヒゼキヤは言った、「あなたがたはすでに主に仕えるために身
を清めたのであるから、進みよって、主の宮に犠牲と感謝の供え物を携え
て来なさい」と。そこで会衆は犠牲と感謝の供え物を携えて来た。また
志ある者は皆燔祭を携えて来た。三二会衆の携えて来た燔祭の数
は雄牛七十頭、雄羊百頭、小羊二百頭、これらは皆主に燔祭としてささ
げるものであった。三三また奉納物は牛六百頭、小羊三千頭であった。三
四ところが祭司が少なくてその燔祭の物の皮を、はぎつくすことができな
かったので、その兄弟であるレビびとがこれを助けて、そのわざをなし
終え、その間に他の祭司たちは身を清めた。これはレビびとが祭司たちよ
りも、身を清めることに、きちょうめんであったからである。三五このほか
おびただしい燔祭があり、また、酬恩祭の脂肪および燔祭の灌祭もあっ
た。こうして、主の宮の勤めは回復された。三六この事は、にわかになさ

れたけれども、神がこのように民のために備えをされたので、ヒゼキヤお
よびすべての民は喜んだ。
第三〇章一ヒゼキヤはイスラエルとユダにあまねく人をつかわし、また
手紙をエフライムとマナセに書き送り、エルサレムにある主の宮に来て、イ
スラエルの神、主に過越の祭を行うように勧めた。二王はすでにつかさ
たちおよびエルサレムにおる全会衆に計って、二月に過越の祭を行う
ことを定めた。三――これは身を清めた祭司の数が足らず、民もまた、エ
ルサレムに集まらなかったので、正月にこれを行うことができなかった
からである――四この事が、王にも全会衆にも良かったので、五この事を
定めて、ベエルシバからダンまでイスラエルにあまねくふれ示し、エルサレ
ムに来て、イスラエルの神、主に過越の祭を行うことを勧めた。これは
しるされているように、これを行う者が多くなかったゆえである。六そこ

で飛脚たちは、王とそのつかさたちから受けた手紙をもって、イスラエル
とユダをあまねく行き巡り、王の命を伝えて言った、「イスラエルの人々
よ、あなたがたはアブラハム、イサク、イスラエルの神、主に立ち返りな
さい。そうすれば主は、アッスリヤの王たちの手からのがれた残りのあな
たがたに、帰られるでしょう。七あなたがたの父たちおよび兄弟たちのよ
うになってはならない。彼らはその先祖たちの神、主にむかって罪を犯し
たので、あなたがたの見るように主は彼らを滅びに渡されたのです。八あ
なたがたの父たちのように強情にならないで、主に帰服し、主がとこし
えに聖別された聖所に入り、あなたがたの神、主に仕えなさい。そうすれ
ば、その激しい怒りがあなたがたを離れるでしょう。九もしあなたがたが
主に立ち返るならば、あなたがたの兄弟および子供は、これを捕えていっ
た者の前にあわれみを得て、この国に帰ることができるでしょう。あなた

がたの神、主は恵みあり、あわれみある方であられるゆえ、あなたがたが
彼に立ち返るならば、顔をあなたがたにそむけられることはありません」。
一〇このように飛脚たちは、エフライムとマナセの国にはいって、町から
町に行き巡り、ついに、ゼブルンまで行ったが、人々はこれをあざけり笑っ
た。一一ただしアセル、マナセ、ゼブルンのうちには身を低くして、エルサ
レムにきた人々もあった。一二またユダにおいては神の手が人々に一つ心
を与えて、王とつかさたちが主の言葉によって命じたことを行わせた。
一三こうして二月になって、多くの民は、種入れぬパンの祭を行うため
エルサレムに集まったが、非常に大きな会衆であった。一四彼らは立って
エルサレムにあるもろもろの祭壇を取り除き、またすべての香をたく祭壇
を取り除いてキデロン川に投げすて、一五二月の十四日に過越の小羊をほ
ふった。そこで祭司たちおよびレビびとはみずから恥じ、身を清めて主の

宮に燔祭を携えて来た。一六彼らは神の人モーセの律法に従い、いつも
のようにその所に立ち、祭司たちは、レビびとの手から血を受けて注いだ。
一七時に、会衆のうちにまだ身を清めていない者が多かったので、レビび
とはその清くないすべての人々に代って過越の小羊をほふり、主に清めて
ささげた。一八多くの民すなわちエフライム、マナセ、イッサカル、ゼブルン
からきた多くの者はまだ身を清めていないのに、書きしるされたとおりに
しないで過越の物を食べた。それでヒゼキヤは、彼らのために祈って言っ
た、「恵みふかき主よ、彼らをゆるしてください。一九彼らは聖所の清めの
規定どおりにしなかったけれども、その心を傾けて神を求め、その先祖
の神、主を求めたのです」。二〇主はヒゼキヤに聞いて、民をいやされた。
二一そこでエルサレムに来ていたイスラエルの人々は大いなる喜びをいだ
いて、七日のあいだ種入れぬパンの祭を行った。またレビびとと祭司た

ちは日々に主をさんびし、力をつくして主をたたえた。二二そしてヒゼキ
ヤは主の勤めによく通じているすべてのレビびとを深くねぎらった。こう
して人々は酬恩祭の犠牲をささげ、その先祖の神、主に感謝して、七日
のあいだ祭の供え物を食べた。
二三なお全会衆は相はかって、さらに七日のあいだ祭を守ることを定
め、喜びをもってまた七日のあいだ守った。二四時にユダの王ヒゼキヤは
雄牛一千頭、羊七千頭を会衆に贈り、また、つかさたちは雄牛一千頭、
羊一万頭を会衆に贈った。祭司もまた多く身を清めた。二五ユダの全会衆
および祭司、レビびと、ならびにイスラエルからきた全会衆、およびイス
ラエルの地からきた他国人と、ユダに住む他国人は皆喜んだ。二六このよ
うにエルサレムに大いなる喜びがあった。イスラエルの王ダビデの子ソ
ロモンの時からこのかた、このような事はエルサレムになかった。二七こ

のとき祭司たちとレビびとは立って、民を祝福したが、その声は聞かれ、
その祈は主の聖なるすみかである天に達した。

第三一章 一この事がすべて終った時、そこにいたイスラエルびとは皆、ユ
ダの町々に出て行って、石柱を砕き、アシラ像を切り倒し、ユダとベニ
ヤミンの全地、およびエフライムとマナセにある高き所と祭壇とを取り
こわし、ついにこれをことごとく破壊した。そしてイスラエルの人々はお
のおのその町々、その所領に帰った。
二ヒゼキヤは祭司およびレビびとの班を定め、班ごとにおのおのその勤
めに従って、祭司とレビびとに燔祭と酬恩祭をささげさせ、主の営の門
で勤めをし、感謝をし、さんびをさせた。三また燔祭のために自分の財産
のうちから王の分を出した。すなわち朝夕の燔祭および安息日、新月、定
めの祭などの燔祭のために出して、主の律法にしるされているとおりに

した。四またエルサレムに住む民に、祭司とレビびとにその分を与えるこ
とを命じた。これは彼らをして主の律法に身をゆだねさせるためである。
五その命令が伝わるやいなや、イスラエルの人々は穀物、酒、油、蜜な
らびに畑のもろもろの産物の初物を多くささげ、またすべての物の十分
の一をおびただしく携えて来た。六ユダの町々に住んでいたイスラエルと
ユダの人々もまた牛、羊の十分の一ならびにその神、主にささげられた
奉納物を携えて来て、これを積み重ねた。七三月にこれを積み重ねるこ
とを始め、七月にこれを終った。八ヒゼキヤおよびつかさたちは来て、そ
の積み重ねた物を見、主とその民イスラエルを祝福した。九そしてヒゼ
キヤがその積み重ねた物について祭司およびレビびとに問い尋ねた時、一
〇ザドクの家から出た祭司の長アザリヤは彼に答えて言った、「民が主の
宮に供え物を携えて来ることを始めてからこのかた、われわれは飽きる

ほど食べたが、たくさん残りました。主がその民を恵まれたからです。そ
れでわれわれは、このように多くの残った物をもっているのです」。
一一そこでヒゼキヤは主の宮のうちに室を設けることを命じたので、彼
らはこれを設け、一二その供え物の十分の一および奉納物を忠実に携え
入れた。これをつかさどる者のかしらはレビびとコナニヤで、その兄弟シ
メイは彼に次ぐ者となり、一三エヒエル、アザジヤ、ナハテ、アサヘル、エレ
モテ、ヨザバデ、エリエル、イスマキヤ、マハテ、ベナヤらは、ヒゼキヤ王お
よび神の宮のつかさアザリヤの任命によって、コナニヤおよびその兄弟
シメイを助けて、その監督者となった。一四東の門を守る者レビびとイ
ムナの子コレは、神にささげる自発のささげ物をつかさどり、主の供え物
および最も聖なる物を分配した。一五彼を助ける者はエデン、ミニヤミ
ン、エシュア、シマヤ、アマリヤおよびシカニヤで、皆祭司の町々でその

兄弟たちに、班によって、老若ひとしく忠実に分配した。一六ただしす
べて登録された三歳以上の男子で主の宮に入り、その班に従って日々の
職分をつくし、その受持の勤めをなす者は除かれた。一七祭司の登録は
その氏族によってなされ、二十歳以上のレビびとの登録はその班により、
その受持にしたがってなされた。一八また祭司はその幼な子、その妻、そ
のむすこ、その娘、全会衆と共に登録した。彼らは忠実に身を聖なる
事にささげたからである。一九また町々の放牧地におるアロンの子孫であ
る祭司たちのためには、町ごとに人を名ざし選んで、祭司のうちのすべて
の男およびレビびとのうちの登録されたすべての者に、その分を与えさ
せた。

二〇ヒゼキヤはユダ全国にこのようにし、良い事、正しい事、忠実な事
をその神、主の前に行った。二一彼がその神を求めるために神の宮の務

につき、律法につき、戒めについて始めたわざは、ことごとく心をつくして行い、これをなし遂げた。

第三二章一ヒゼキヤがこれらの事を忠実に行った後、アッスリヤの王セナケリブが来てユダに侵入し、堅固な町々に向かって陣を張り、これを攻め取ろうとした。二ヒゼキヤはセナケリブが来て、エルサレムを攻めようとするのを見たので、三そのつかさたちおよび勇士たちと相談して、町の外にある泉の水を、ふさごうとした。彼らはこれを助けた。四多くの民は集まって、すべての泉および国の中を流れる谷川をふさいで言った、「アッスリヤの王たちがきて、多くの水を得られるようなことをしておいていいだろうか」。五ヒゼキヤはまた勇気を出して、破れた城壁をことごとく築き直して、その上にやぐらを建て、その外にまた城壁を巡らし、ダビデの町のミロを堅固にし、武器および盾を多く造り、六軍長を民の上

に置き、町の門の広場に民を集めて、これを励まして言った、七「心を強
くし、勇みたちなさい。アッスリヤの王をも、彼と共にいるすべての群衆
をも恐れてはならない。おののいてはならない。われわれと共におる者は
彼らと共におる者よりも大いなる者だからである。八彼と共におる者は肉
の腕である。しかしわれわれと共におる者はわれわれの神、主であって、
われわれを助け、われわれに代って戦われる」。民はユダの王ヒゼキヤの
言葉に安心した。

九この後アッスリヤの王セナケリブはその全軍をもってラキシを囲んで
いたが、その家来をエルサレムにつかわして、ユダの王ヒゼキヤおよびエ
ルサレムにいるすべてのユダの人に告げさせて言った、一〇「アッスリヤの
王セナケリブはこう言います、『あなたがたは何を頼んでエルサレムにこ
もっているのか。一一ヒゼキヤは「われわれの神、主がアッスリヤの王の

手から、われわれを救ってくださる」と言って、あなたがたをそそのかし、
飢えと、かわきをもって、あなたがたを死なせようとしているのではない
か。一二このヒゼキヤは主のもろもろの高き所と祭壇を取り除き、ユダと
エルサレムに命じて、「あなたがたはただ一つの祭壇の前で礼拝し、その
上に犠牲をささげなければならない」と言った者ではないか。一三あなたが
たは、わたしおよびわたしの先祖たちが、他の国々のすべての民にしたこ
とを知らないのか。それらの国々の民の神々は、少しでもその国を、わた
しの手から救い出すことができたか。一四わたしの先祖たちが滅ぼし尽し
たそれらの国民のもろもろの神のうち、だれか自分の民をわたしの手から
救い出すことのできたものがあるか。それで、どうしてあなたがたの神が、
あなたがたをわたしの手から救い出すことができよう。一五それゆえ、あな
たがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。そそのかされてはならない。ま

た彼を信じてはならない。いずれの民、いずれの国の神もその民をわたし
の手、またはわたしの先祖の手から救いだすことができなかったのだか
ら、ましてあなたがたの神が、どうしてわたしの手からあなたがたを救い
だすことができようか』」。
一六セナケリブの家来は、このほかにも多く主なる神、およびそのしも
べヒゼキヤをそしった。一七セナケリブはまた手紙を書き送って、イスラエ
ルの神、主をあざけり、かつそしって言った、「諸国の民の神々が、その
民をわたしの手から救い出さなかったように、ヒゼキヤの神も、その民を
わたしの手から救い出さないであろう」と。一八そして彼らは大声をあげ、
ユダヤの言葉をもって、城壁の上にいるエルサレムの民に向かって叫び、
これをおどし、かつおびやかした。彼らは町を取るためである。一九このよ
うに彼らがエルサレムの神について語ること、人の手のわざである地上の

民の神々について語るようであった。
二〇そこでヒゼキヤ王およびアモツの子預言者イザヤは共に祈って、天
に呼ばわったので、二一主はひとりのみ使をつかわして、アッスリヤ王の
陣営にいるすべての大勇士と将官、軍長らを滅ぼされた。それで王は
赤面して自分の国に帰ったが、その神の家にはいった時、その子のひとり
が、つるぎをもって彼をその所で殺した。二二このように主は、ヒゼキヤ
とエルサレムの住民をアッスリヤの王セナケリブの手およびすべての敵
の手から救い出し、いたる所で彼らを守られた。二三そこで多くの人々は
ささげ物をエルサレムに携えてきて主にささげ、また宝物をユダの王ヒ
ゼキヤに贈った。この後ヒゼキヤは万国の民に尊ばれた。
二四そのころ、ヒゼキヤは病んで死ぬばかりであったが、主に祈ったの
で、主はこれに答えて、しるしを賜わった。二五しかしヒゼキヤはその受

けた恵みに報いることをせず、その心が高ぶったので、怒りが彼とユダ
およびエルサレムに臨もうとしたが、二六ヒゼキヤはその心の高ぶりを悔
いてへりくだり、またエルサレムの住民も同様にしたので、主の怒りは、
ヒゼキヤの世には彼らに臨まなかった。
二七ヒゼキヤは富と栄誉をきわめ、宝蔵を造って、金、銀、宝石、香料、
盾および各種の尊い器物をおさめ、二八また倉庫を造って穀物、酒、油
などの産物をおさめ、小屋を造って種々の家畜を置き、おりを造って羊
の群れを置き、二九また多数の町を設け、かつ羊と牛をおびただしく所有
した。神が非常に多くの貨財を彼に賜わったからである。三〇このヒゼキ
ヤはまたギホンの水の上の源をふさいで、これをダビデの町の西の方に
まっすぐに引き下した。このようにヒゼキヤはそのすべてのわざをなし遂
げた。三一しかしバビロンの君たちが使者をつかわして、この国にあった、

しるしについて尋ねさせた時には、神は彼を試みて、彼の心にあること
を、ことごとく知るために彼を捨て置かれた。
三二ヒゼキヤのその他の行為およびその徳行は、アモツの子預言者イザヤ
の黙示とユダとイスラエルの列王の書にしるされている。三三ヒゼキヤはそ
の先祖たちと共に眠ったので、ダビデの子孫の墓のうちの高い所に葬ら
れた。ユダの人々およびエルサレムの住民は皆その死に当って彼に敬意
を表した。その子マナセが彼に代って王となった。
第三三章一マナセは十二歳で王となり、五十五年の間エルサレムで世
を治めた。二彼は主がイスラエルの人々の前から追い払われた国々の民
の憎むべき行いに見ならって、主の目の前に悪を行った。三すなわち、
その父ヒゼキヤがこわした高き所を再び築き、またもろもろのバアルの
ために祭壇を設け、アシラ像を造り、天の万象を拝んで、これに仕え、四

また主が「わが名は永遠にエルサレムにある」と言われた主の宮のうちに
数個の祭壇を築き、五主の宮の二つの庭に天の万象のために祭壇を築い
た。六彼はまたベンヒンノムの谷でその子供を火に焼いて供え物とし、占
いをし、魔法をつかい、まじないを行い、口寄せと、占い師を任用する
など、主の前に多くの悪を行って、その怒りをひき起した。七彼はまた刻
んだ偶像を造って神の宮に安置した。神はこの宮についてダビデとその子
ソロモンに言われたことがある、「わたしはこの宮と、わたしがイスラエル
のすべての部族のうちから選んだエルサレムとに、わたしの名を永遠に置
く。八彼らがもし、わたしがすべて命じた事、すなわち、モーセが伝えた
すべての律法と定めとおきてとを慎んで行うならば、わたしがあなたが
たの先祖のために定めた地から、重ねてイスラエルの足を移すことをしな
い」と。九マナセはこのようにユダとエルサレムの住民を迷わせ、主がイ

スラエルの人々の前に滅ぼされた国々の民にもまさって悪を行わせた。
一〇主はマナセおよびその民に告げられたが、彼らは心に留めなかった。
一一それゆえ、主はアッスリヤの王の軍勢の諸将をこれに攻めこさせられ
たので、彼らはマナセをかぎで捕え、青銅のかせにつないで、バビロンに
引いて行った。一二彼は悩みにあうに及んで、その神、主に願い求め、そ
の先祖の神の前に大いに身を低くして、一三神に祈ったので、神はその祈
を受けいれ、その願いを聞き、彼をエルサレムに連れ帰って、再び国に
臨ませられた。これによってマナセは主こそ、まことに神にいますことを
知った。

一四この後、彼はダビデの町の外の石がきをギホンの西の方の谷のうち
に築き、魚の門の入口にまで及ぼし、またオペルに石がきをめぐらして、
非常に高くこれを築き上げ、ユダのすべての堅固な町に軍長を置き、一

五また主の宮から、異邦の神々および偶像を取り除き、主の宮の山とエル
サレムに自分で築いたすべての祭壇を取り除いて、町の外に投げ捨て、一
六主の祭壇を築き直して、酬恩祭および感謝の犠牲を、その上にささげ、
ユダに命じてイスラエルの神、主に仕えさせた。一七しかし民は、なお高
き所で犠牲をささげた。ただしその神、主にのみささげた。

一八マナセのそのほかの行為、その神にささげた祈、およびイスラエル
の神、主の名をもって彼に告げた先見者たちの言葉は、イスラエルの列王
の記録のうちにしるされている。一九またその祈と、祈の聞かれた事、そ
のもろもろの罪と、とが、その身を低くする前に高き所を築いて、アシラ
像および刻んだ像を立てた場所などは、先見者の記録のうちにしるされて
いる。二〇マナセはその先祖たちと共に眠ったので、その家に葬られた。
その子アモンが彼に代って王となった。

二一アモンは王となった時二十二歳で、二年の間エルサレムで世を治め
た。二二彼はその父マナセのしたように主の前に悪を行った。すなわち
アモンはその父マナセが造ったもろもろの刻んだ像に犠牲をささげて、こ
れに仕え、二三その父マナセが身を低くしたように主の前に身を低くしな
かった。かえってこのアモンは、いよいよそのとがを増した。二四その家来
たちは党を結んで彼にそむき、彼をその家で殺した。二五しかし国の民は、
党を結んでアモン王にそむいた者どもをことごとく撃ち殺した。そして国
の民はその子ヨシヤを王となして、そのあとを継がせた。

第三四章一ヨシヤは八歳のとき王となり、エルサレムで三十一年の間世
を治めた。二彼は主の良しと見られることをなし、その父ダビデの道を歩
んで、右にも左にも曲らなかった。三彼はまだ若かったが、その治世の第
八年に父ダビデの神を求めることを始め、その十二年には高き所、アシ

ラ像、刻んだ像、鋳た像などを除いて、ユダとエルサレムを清めることを
始め、四もろもろのバアルの祭壇を、自分の前で打ちこわさせ、その上に
立っていた香の祭壇を切り倒し、アシラ像、刻んだ像、鋳た像を打ち砕い
て粉々にし、これらの像に犠牲をささげた者どもの墓の上にそれをまき散
らし、五祭司らの骨をそのもろもろの祭壇の上で焼き、こうしてユダとエ
ルサレムを清めた。六またマナセ、エフライム、シメオンおよびナフタリ
の荒れた町々にもこのようにし、七もろもろの祭壇をこわし、アシラ像お
よびもろもろの刻んだ像を粉々に打ち砕き、イスラエル全国の香の祭壇
をことごとく切り倒して、エルサレムに帰った。

八ヨシヤはその治世の十八年に、国と宮とを清めた時、その神、主の宮
を繕わせようと、アザリヤの子シャパン、町のつかさマアセヤおよびヨ
アハズの子史官ヨアをつかわした。九彼らは大祭司ヒルキヤのもとへ行っ

て、神の宮にはいった金を渡した。これは門を守るレビびとがマナセ、エ
フライムおよびその他のすべてのイスラエル、ならびにユダとベニヤミンの
すべての人、およびエルサレムの住民の手から集めたものである。一〇彼
らはこれを主の宮を監督する職工らの手に渡したので、主の宮で働く
職工らは、これを宮を繕い直すために支払った。一一すなわち、大工お
よび建築者にこれを渡して、ユダの王たちが破った建物のために、切り石
および骨組の材木を買わせ、梁材を整えさせた。一二その人々は忠実に
仕事をした。その監督者はメラリの子孫であるレビびとヤハテとオバデヤ、
およびコハテびとの子孫であるゼカリヤとメシュラムであって、工事をつ
かさどった。また楽器に巧みなレビびとがこれに伴った。一三彼らはまた
荷を負う者を監督し、様々の仕事に働くすべての者をつかさどった。ま
た他のレビびとは書記となり、役人となり、また門衛となった。

一四さて彼らが主の宮にはいった金を取りだした時、祭司ヒルキヤはモー
セの伝えた主の律法の書を発見した。一五そこでヒルキヤは書記官シャパ
ンに言った、「わたしは主の宮で律法の書を発見しました」と。そしてヒ
ルキヤはその書をシャパンに渡した。一六シャパンはその書を王のもとに
持って行き、さらに王に復命して言った、「しもべらはゆだねられた事をこ
とごとくなし、一七主の宮にあった金をあけて、監督者の手および職工の
手に渡しました」。一八書記官シャパンはまた王に告げて、「祭司ヒルキヤは
わたしに一つの書物を渡しました」と言い、シャパンはそれを王の前で読
んだ。一九王はその律法の言葉を聞いて衣を裂いた。二〇そして王はヒル
キヤおよびシャパンの子アヒカムとミカの子アブドンと書記官シャパンと
王の家来アサヤとに命じて言った、二一「あなたがたは行って、この発見さ
れた書物の言葉についてわたしのために、またイスラエルとユダの残りの

者のために主に問いなさい。われわれの先祖たちが主の言葉を守らず、す
べてこの書物にしるされていることを行わなかったので、主はわれわれ
に大いなる怒りを注がれるからです」。
二二そこでヒルキヤおよび王のつかわした人々は、シャルムの妻である
女預言者ホルダのもとへ行った。シャルムはハスラの子であるトクハテの
子で、衣装を守る者である。時にホルダは、エルサレムの第二区に住んで
いた。彼らはホルダにその趣意を語ったので、二三ホルダは彼らに言った、
「イスラエルの神、主はこう仰せられます、『あなたがたをわたしにつかわ
した人に告げなさい。二四主はこう仰せられます。見よ、わたしはユダの
王の前で読んだ書物にしるされているもろもろののろい、すなわち災を
この所と、ここに住む者に下す。二五彼らはわたしを捨てて、他の神々に
香をたき、自分の手で造ったもろもろの物をもって、わたしの怒りを引き

起そうとしたからである。それゆえ、わたしの怒りは、この所に注がれ
て消えない。二六しかしあなたがたをつかわして、主に問わせるユダの王に
はこう言いなさい。イスラエルの神、主はこう仰せられる。あなたが聞い
た言葉については、二七この所と、ここに住む者を責める神の言葉を、あ
なたが聞いた時、心に悔い、神の前に身をひくくし、わたしの前にへり
くだり、衣を裂いて、わたしの前に泣いたので、わたしもまた、あなたに
聞いた、と主は言われる。二八見よ、わたしはあなたを先祖たちのもとに集
める。あなたは安らかにあなたの墓に集められる。あなたはわたしがこの
所と、ここに住む者に下すもろもろの災を目に見ることがない』と」。
彼らは王に復命した。

二九そこで王は人をつかわしてユダとエルサレムの長老をことごとく集
め、三〇そして王は主の宮に上って行った。ユダのすべての人々、エルサ

レムの住民、祭司、レビびと、およびすべての民は、老いた者も若い者
もことごとく彼に従った。そこで王は主の宮で発見した契約の書の言葉
を、ことごとく彼らの耳に読み聞かせ、三一そして王は自分の所に立って、
主の前に契約を立て、主に従って歩み、心をつくし、精神をつくして、
その戒めと、あかしと定めとをまもり、この書にしるされた契約の言葉
を行おうと言い、三二エルサレムおよびベニヤミンの人々を皆これに加わ
らせた。エルサレムの住民は先祖の神であるその神の契約にしたがって
行った。三三ヨシヤはイスラエルの人々に属するすべての地から、憎むべ
きものをことごとく取り除き、イスラエルにいるすべての人をその神、主
に仕えさせた。ヨシヤが世にある日の間は、彼らは先祖の神、主に従っ
て離れなかった。

第三五章一ヨシヤはエルサレムで主に過越の祭を行った。すなわち

正月の十四日に過越の小羊をほふらせ、二祭司にその職務をとり行わせ、
彼らを励まして主の宮の務をさせ、三また主の聖なる者となってすべて
のイスラエルびとを教えるレビびとに言った、「あなたがたはイスラエルの
王ダビデの子ソロモンの建てた宮に、聖なる箱を置きなさい。再びこれ
を肩ににになうに及ばない。あなたがたの神、主およびその民イスラエルに
仕えなさい。四あなたがたはイスラエルの王ダビデの書、およびその子ソ
ロモンの書に基いて氏族にしたがい、その班によって、みずから備えをな
し、五あなたがたの兄弟である民の人々の氏族の区分にしたがって聖所
に立ち、このためにレビびとの氏族の分が欠けることのないようにしなさ
い。六あなたがたは過越の小羊をほふり、身を清め、あなたがたの兄弟
のために備えをし、モーセが伝えた主の言葉にしたがって行いなさい」。
七ヨシヤは、小羊および子やぎを民の人々に贈った。これは皆その所

にいるすべての人のための過越の供え物であって、その数三万、また雄牛
三千を贈った。それらは王の所有から出したのである。八そのつかさたち
も民と祭司とレビびとに真心から贈った。また神の宮のつかさたちヒル
キヤ、ゼカリヤ、エヒエルも小羊と子やぎ二千六百頭、牛三百頭を祭司に
与えて過越の供え物とした。九またレビびとの長である人々すなわちコ
ナニヤおよびその兄弟シマヤ、ネタンエルならびにハシャビヤ、エイエル、
ヨザバデなども小羊と子やぎ五千頭、牛五百頭をレビびとに贈って過越の
供え物とした。

一〇このように勤めのことが備わったので、王の命に従って祭司たち
はその持ち場に立ち、レビびとはその班に従って仕え、一一やがて過越の
小羊がほふられたので、祭司はその血を受け取って注いだ。レビびとはそ
の皮をはいだ。一二それから燔祭の物をとり分け、それを民の人々の氏族

の区分に従って渡し、主にささげさせた。これはモーセの書にしるされた
とおりである。また牛をもこのようにした。一三そして定めに従って過越
の小羊を火であぶり、その他の聖なる供え物を深なべ、かま、浅なべなど
に煮て、急いですべての民の人々にくばった。一四その後、彼らは自分のた
めと、祭司たちのために備えをした。アロンの子孫である祭司たちは、燔祭
と脂肪をささげるのに忙しくて、夜になったからである。それでレビびと
は自分たちのためと、アロンの子孫である祭司たちのために備えたのであ
る。一五アサフの子孫である歌うたう者たちは、ダビデ、アサフ、ヘマンお
よび王の先見者エドトンの命に従ってその持ち場におり、門衛たちはお
のおの門にいて、その職務を離れるに及ばなかった。兄弟であるレビび
とが彼らのために備えたからである。

一六このようにその日、主の勤めの事がことごとく備わったので、ヨシ

ヤ王の命に従って過越の祭を行い、主の祭壇に燔祭をささげた。一
七ここに来ていたイスラエルの人々は、そのとき過越の祭を行い、また
七日の間、種入れぬパンの祭を行った。一八預言者サムエルの日からこ
のかた、イスラエルでこのような過越の祭を行ったことはなかった。ま
たイスラエルの諸王のうちには、ヨシヤが、祭司、レビびと、ならびにそこ
に来たユダとイスラエルのすべての人々、およびエルサレムの住民と共
に行ったような過越の祭を行った者はひとりもなかった。一九この過越
の祭はヨシヤの治世の第十八年に行われた。
二〇このようにヨシヤが宮を整えた後、エジプトの王ネコはユフラテ川
のほとりにあるカルケミシで戦うために上ってきたので、ヨシヤはこれを
防ごうと出て行った。二一しかしネコは彼に使者をつかわして言った、「ユ
ダの王よ、われわれはお互に何のあずかるところがありますか。わたし

はきよう、あなたを攻めようとして来たのではありません。わたしの敵の
家を攻めようとして来たのです。神がわたしに命じて急がせています。わ
たしと共におられる神に逆らうことをやめなさい。そうしないと、神はあ
なたを滅ぼされるでしょう」。二二しかしヨシヤは引き返すことを好まず、
かえって彼と戦うために、姿を変え、神の口から出たネコの言葉を聞き
いれず、行ってメギドの谷で戦ったが、二三射手の者どもがヨシヤを射あ
てたので、王はその家来たちに、「わたしを助け出せ。わたしはひどく傷つ
いた」と言った。二四そこで家来たちは彼を車から助け出し、王のもって
いた第二の車に乗せてエルサレムにつれて行ったが、ついに死んだので、
その先祖の墓にこれを葬った。そしてユダとエルサレムは皆ヨシヤのた
めに悲しんだ。二五時にエレミヤはヨシヤのために哀歌を作った。歌うた
う男、歌うたう女は今日に至るまで、その哀歌のうちにヨシヤのことを

述べ、イスラエルのうちにこれを例とした。これは哀歌のうちにしるされ
ている。二六ヨシヤのその他の行為、主の律法にしるされた所に従って
行った徳行、二七およびその始終の行いなどは、イスラエルとユダの列王
の書にしるされている。

第三六章一国の民はヨシヤの子エホアハズを立て、エルサレムでその父
に代って王とならせた。二エホアハズは王となった時二十三歳で、エルサ
レムで三月の間、世を治めたが、三エジプトの王はエルサレムで彼を廃
し、かつ銀百タラント、金一タラントの罰金を国に課した。四そしてエジ
プト王は彼の兄弟エリアキムをユダとエルサレムの王とし、その名をエ
ホヤキムと改め、その兄弟エホアハズを捕えてエジプトへ引いて行った。
五エホヤキムは王となった時二十五歳で、十一年の間エルサレムで世
を治めた。彼はその神、主の前に悪を行った。六時に、バビロンの王ネ

ブカデネザルが彼の所に攻め上り、彼をバビロンに引いて行こうとして、
かせにつないだ。七ネブカデネザルはまた主の宮の器物をバビロンに運
んで行って、バビロンにあるその宮殿にそれをおさめた。八エホヤキムの
その他の行為、その行った憎むべき事および彼がひそかに行った事などは、
イスラエルとユダの列王の書にしるされている。その子エホヤキンが彼に
代って王となった。
九エホヤキンは王となった時八歳で、エルサレムで三月と十日の間、世
を治め、主の前に悪を行った。一〇年が改まり春になって、ネブカデネ
ザル王は人をつかわして、彼を主の宮の尊い器物と共にバビロンに連
れて行かせ、その兄弟ゼデキヤをユダとエルサレムの王とした。
一一ゼデキヤは王となった時二十一歳で、十一年の間エルサレムで世を
治めた。一二彼はその神、主の前に悪を行い、主の言葉を伝える預言者エ

レミヤの前に、身をひくくしなかった。一三彼はまた、彼に神をさして誓わ
せたネブカデネザル王にもそむいた。彼は強情で、その心をかたくなに
して、イスラエルの神、主に立ち返らなかった。一四祭司のかしらたちおよ
び民らもまた、すべて異邦人のもろもろの憎むべき行為にならって、はな
はだしく罪を犯し、主がエルサレムに聖別しておかれた主の宮を汚した。
一五その先祖の神、主はその民と、すみかをあわれむがゆえに、しきり
に、その使者を彼らにつかわされたが、一六彼らが神の使者たちをあざけ
り、その言葉を軽んじ、その預言者たちをののしったので、主の怒りがそ
の民に向かって起り、ついに救うことができないようになった。
一七そこで主はカルデヤびとの王を彼らに攻めこさせられたので、彼はそ
の聖所の家でつるぎをもって若者たちを殺し、若者をも、処女をも、老人
をも、しらがの者をもあわれまなかった。主は彼らをことごとく彼の手に

渡された。一八彼は神の宮のもろもろの大小の器物、主の宮の貨財、王
とそのつかさたちの貨財など、すべてこれをバビロンに携えて行き、一九
神の宮を焼き、エルサレムの城壁をくずし、そのうちの宮殿をことごと
く火で焼き、そのうちの尊い器物をことごとくこわした。二〇彼はまた
つるぎをのがれた者どもを、バビロンに捕えて行って、彼とその子らの家来
となし、ペルシャの国の興るまで、そうして置いた。二一これはエレミヤの
口によって伝えられた主の言葉の成就するためであった。こうして国は
ついにその安息をうけた。すなわちこれはその荒れている間、安息して、
ついに七十年が満ちた。

二二ペルシャ王クロスの元年に当り、主はエレミヤの口によって伝えた
主の言葉を成就するため、ペルシャ王クロスの霊を感動されたので、王
はあまねく国中にふれ示し、またそれを書き示して言った、二三「ペルシャ

の王クロスはこう言う、『天の神、主は地上の国々をことごとくわたしに賜わって、主の宮をユダにあるエルサレムに建てることをわたしに命じられた。あなたがたのうち、その民である者は皆、その神、主の助けを得て上って行きなさい』」。

エズラ記

第一章

一ペルシャ王クロスの元年に、主はさきにエレミヤの口によって
伝えられた主の言葉を成就するため、ペルシャ王クロスの心を感動され
たので、王は全国に布告を発し、また詔書をもって告げて言った、
二「ペルシャ王クロスはこのように言う、天の神、主は地上の国々をこ
とごとくわたしに下さって、主の宮をユダにあるエルサレムに建てること
をわたしに命じられた。三あなたがたのうち、その民である者は皆その神
の助けを得て、ユダにあるエルサレムに上って行き、イスラエルの神、主の
宮を復興せよ。彼はエルサレムにいます神である。四すべて生き残って、
どこに宿っている者でも、その所の人々は金、銀、貨財、家畜をもって
助け、そのほかにまたエルサレムにある神の宮のために真心よりの供え物

をささげよ」。
五そこでユダとベニヤミンの氏族の長、祭司およびレビびとなど、すべて
神にその心を感動された者は、エルサレムにある主の宮を復興するために
上って行こうと立ち上がった。六その周囲の人々は皆、銀の器、金、貨財、
家畜および宝物を与えて彼らを力づけ、そのほかにまた、もろもろの物
を惜しげなくささげた。七クロス王はまたネブカデネザルが、さきにエル
サレムから携え出して自分の神の宮に納めた主の宮の器を取り出した。
八すなわちペルシャ王クロスは倉づかさミテレダテの手によってこれを取
り出して、ユダのつかさセシバザルに数え渡した。九その数は次のとおり
である。金のたらい一千、銀のたらい一千、香炉二十九、一〇金の鉢三十、
銀の鉢二千四百十、その他の器一千、一一金銀の器は合わせて五千四百六
十九あったが、セシバザルは捕囚を連れてバビロンからエルサレムに上っ
た時、これらのものをことごとく携えて上った。

第二章一バビロンの王ネブカデネザルに捕えられて、バビロンに移され
た者のうち、捕囚をゆるされてエルサレムおよびユダに上って、おのおの
自分の町に帰ったこの州の人々は次のとおりである。二彼らはゼルバベ
ル、エシュア、ネヘミヤ、セラヤ、レエラヤ、モルデカイ、ビルシャン、ミ
スパル、ビグワイ、レホム、バアナと共に帰ってきた。
そのイスラエルの民の人数は次のとおりである。三パロシの子孫は二千
百七十二人、四シパテヤの子孫は三百七十二人、五アラの子孫は七百七十五
人、六パハテ・モアブの子孫すなわちエシュアとヨアブの子孫は二千八百
十二人、七エラムの子孫は一千二百五十四人、八ザットの子孫は九百四十五
人、九ザッカイの子孫は七百六十人、一〇バニの子孫は六百四十二人、一一ベ
バイの子孫は六百二十三人、一二アズガデの子孫は一千二百二十二人、一三
アドニカムの子孫は六百六十六人、一四ビグワイの子孫は二千五十六人、一

一五アデンの子孫は四百五十四人、一六アテルの子孫すなわちヒゼキヤの子孫
は九十八人、一七ベザイの子孫は三百二十三人、一八ヨラの子孫は百十二人、
一九ハシュムの子孫は二百二十三人、二〇ギバルの子孫は九十五人、二一ベ
ツレヘムの子孫は百二十三人、二二ネトパの人々は五十六人、二三アナトテ
の人々は百二十八人、二四アズマウテの子孫は四十二人、二五キリアテ・ヤ
リム、ケピラおよびベエロテの子孫は七百四十三人、二六ラマおよびゲバ
の子孫は六百二十一人、二七ミクマシの人々は百二十二人、二八ベテルおよ
びアイの人々は二百二十三人、二九ネボの子孫は五十二人、三〇マグビシの
子孫は百五十六人、三一他のエラムの子孫は一千二百五十四人、三二ハリム
の子孫は三百二十人、三三ロド、ハデデおよびオノの子孫は七百二十五人、
三四エリコの子孫は三百四十五人、三五セナアの子孫は三千六百三十人。
三六祭司は、エシュアの家のエダヤの子孫九百七十三人、三七インメルの

子孫一千五十二人、三八パシュルの子孫一千二百四十七人、三九ハリムの子孫
一千十七人。
四〇レビびとは、ホダヤの子孫すなわちエシュアとカデミエルの子孫七
十四人。四一歌うたう者は、アサフの子孫百二十八人。四二門衛の子孫は、
シャルムの子孫、アテルの子孫、タルモンの子孫、アックブの子孫、ハテタ
の子孫、ショバイの子孫合わせて百三十九人。
四三宮に仕えるしもべたちは、ヂハの子孫、ハスパの子孫、タバオテの
子孫、四四ケロスの子孫、シアハの子孫、パドンの子孫、四五レバナの子孫、
ハガバの子孫、アックブの子孫、四六ハガブの子孫、シャルマイの子孫、ハ
ナンの子孫、四七ギデルの子孫、ガハルの子孫、レアヤの子孫、四八レヂンの
子孫、ネコダの子孫、ガザムの子孫、四九ウザの子孫、パセアの子孫、ベサ
イの子孫、五〇アスナの子孫、メウニムの子孫、ネフシムの子孫、五一バク

ブクの子孫、ハクパの子孫、ハルホルの子孫、五二バヅリテの子孫、メヒダ
の子孫、ハルシャの子孫、五三バルコスの子孫、シセラの子孫、テマの子孫、
五四ネヂアの子孫、ハテパの子孫である。
五五ソロモンのしもべたちの子孫は、ソタイの子孫、ハッソペレテの子孫、
ペリダの子孫、五六ヤアラの子孫、ダルコンの子孫、ギデルの子孫、五七シ
パテヤの子孫、ハッテルの子孫、ポケレテ・ハッゼバイムの子孫、アミの
子孫。
五八宮に仕えるしもべたちとソロモンのしもべたちの子孫とは合わせて
三百九十二人。
五九次にあげる人々はテル・メラ、テル・ハレサ、ケルブ、アダンおよび
インメルから上って来た者であったが、彼らはその氏族とその血統とを示
して、そのイスラエルの者であることを明らかにすることができなかった。

六〇すなわちデラヤの子孫、トビヤの子孫、ネコダの子孫で合わせて六百五
十二人。六一祭司の子孫のうちにはハバヤの子孫、ハッコヅの子孫、バルジ
ライの子孫があった。バルジライはギレアデびとバルジライの娘たちのう
ちから妻をめとったので、その名で呼ばれることになった。六二これらの者
は系譜に載った者たちのうちに自分の名を尋ねたが見いだされなかったの
で、汚れた者として、祭司の職から除かれた。六三総督は彼らに告げて、
ウリムとトンミムを身につける祭司の興るまでは、いと聖なる物を食べて
はならないと言った。

六四会衆は合わせて四万二千三百六十人であった。六五このほかに、し
もべおよびはしため合わせて七千三百三十七人、また歌うたう男女二百人
あった。六六その馬は七百三十六頭、その騾馬は二百四十五頭、六七そのら
くだは四百三十五頭、そのろばは六千七百二十頭あった。

六八氏族の長数人はエルサレムにある主の宮の所にきた時、神の宮を
もとの所に建てるために真心よりの供え物をささげた。六九すなわち、そ
の力に従って工事のために倉に納めたものは、金六万一千ダリク、銀五
千ミナ、祭司の衣服百かさねであった。
七〇祭司、レビびと、および民のある者はエルサレムおよびその近郊に
住み、歌うたう者、門衛および宮に仕えるしもべたちはその町々に住み、
一般のイスラエルびとは自分たちの町々に住んだ。

第三章一こうしてイスラエルの人々はその町々に住んでいたが、七月に
なって、民はひとりのようにエルサレムに集まった。二そこでヨザダクの子
エシュアとその仲間の祭司たち、およびシャルテルの子ゼルバベルとその
兄弟たちは立って、イスラエルの神の祭壇を築いた。これは神の人モー
セの律法にしるされたところに従って、その上に燔祭をささげるためで

あった。三彼らは国々の民を恐れていたので、祭壇をもとの所に設けた。
そしてその上で燔祭を主にささげ、朝夕それをささげた。四また、しるされ
たところに従って仮庵の祭を行い、おきてに従って、毎日ささぐべき
数のとおりに、日々の燔祭をささげた。五そしてその後は常燔祭、新月と
主のすべて定められた祭とにささげる供え物および各自が主にささげる
真心よりの供え物をささげた。六すなわち七月一日から燔祭を主にささげ
ることを始めたが、主の宮の基礎はまだすえられてなかった。七そこで石工
と木工に金を渡し、またシドンとツロの人々に食い物、飲み物および油
を与えて、ペルシャ王クロスから得た許可に従って、レバノンからヨッパ
の海に香柏を運ばせた。

八さてエルサレムの神の宮に帰った次の年の二月に、シャルテルの子ゼ
ルバベルとヨザダクの子エシュアはその兄弟である他の祭司、レビびとお

よび捕囚からエルサレムに帰って来たすべての人々と共に工事を始め、二
十歳以上のレビびとを立てて、主の宮の工事を監督させた。九そこでユダ
の子孫であるエシュアとその子らおよびその兄弟、カデミエルとその子ら
は共に立って、神の宮で工事をなす者を監督した。ヘナダデの子らおよび
レビびとの子らと、その兄弟たちもまた一緒であった。
一〇こうして建築者が主の宮の基礎をすえた時、祭司たちは礼服をつけ
てラッパをとり、アサフの子らであるレビびとはシンバルをとり、イスラエ
ルの王ダビデの指令に従って主をさんびした。一一彼らは互に歌いあっ
て主をほめ、かつ感謝し、

「主はめぐみ深く、
そのいつくしみは
とこしえにイスラエルに絶えることがない」

と言った。そして民はみな主をさんびするとき、大声をあげて叫んだ。主
の宮の基礎がすえられたからである。
一二しかし祭司、レビびと、氏族の長
である多くの人々のうちに、もとの宮を見た老人たちがあったが、今この
宮の基礎のすえられるのを見た時、大声をあげて泣いた。また喜びのた
めに声をあげて叫ぶ者も多かった。
一三それで、人々は民の喜び叫ぶ声
と、民の泣く声とを聞きわけることができなかった。民が大声に叫んだの
で、その声が遠くまで聞えたからである。

第四章
一ユダとベニヤミンの敵である者たちは捕囚から帰ってきた人々
が、イスラエルの神、主のために神殿を建てていることを聞き、
二ゼルバべ
ルと氏族の長たちのもとに来て言った、「われわれも、あなたがたと一緒
にこれを建てさせてください。われわれはあなたがたと同じく、あなたがた
の神を礼拝します。アッスリヤの王エサル・ハドンがわれわれをここにつ

れて来た日からこのかた、われわれは彼に犠牲をささげてきました」。三し
かしゼルバベル、エシュアおよびその他のイスラエルの氏族の長たちは、
彼らに言った、「あなたがたは、われわれの神に宮を建てることにあずかっ
てはなりません。ペルシャの王クロス王がわれわれに命じたように、われ
われだけで、イスラエルの神、主のために建てるのです」。
四そこでその地の民はユダの民の手を弱らせて、その建築を妨げ、五
その企てを破るために役人を買収して彼らに敵せしめ、ペルシャ王ク
ロスの代からペルシャ王ダリヨスの治世にまで及んだ。六アハスエロスの
治世、すなわちその治世の初めに、彼らはユダとエルサレムの住民を訴
える告訴状を書いた。
七またアルタシャスタの世にビシラム、ミテレダテ、タビエルおよびそ
の他の同僚も、ペルシャ王アルタシャスタに手紙を書いた。その手紙の文

はアラム語で書かれて訳されていた。八長官レホムと書記官シムシャイは
アルタシャスタ王にエルサレムを訴えて次のような手紙をしたためた。九
すなわち長官レホムと書記官シムシャイおよびその他の同僚、すなわち
裁判官、知事、役人、ペルシャ人、エレクの人々、バビロン人、スサの人々
すなわちエラムびと、一〇およびその他の民すなわち大いなる尊いオスナ
パルが、移してサマリヤの町々および川向こうのその他の地に住ませた者
どもが、一一送った手紙の写しはこれである。――「アルタシャスタ王へ、
川向こうのあなたのしもべどもも、あいさつを申し上げます。一二王よ、ご
承知ください。あなたのもとから、わたしたちの所に上って来たユダヤ
人らはエルサレムに来て、かのそむいた悪い町を建て直し、その城壁を
築きあげ、その基礎をつくろっています。一三王よ、いまご承知ください。
もしこの町を建て、城壁を築きあげるならば、彼らはみつぎ、関税、税金

を納めなくなります。そうすれば王の収入が減るでしょう。一四われわ
れは王宮の塩をはむ者ですから、王の不名誉を見るに忍びないので、人
をつかわして王にお聞かせするのです。一五歴代の記録をお調べください。
その記録の書において、この町はそむいた町で、諸王と諸州に害を及ぼ
したものであることを見、その中に古来、むほんの行われたことを知られ
るでしょう。この町が滅ぼされたのはこれがためなのです。一六われわれ
は王にお知らせいたします。もしこの町が建てられ、城壁が築きあげら
れたなら、王は川向こうの領地を失うに至るでしょう」。
一七王は返書を送って言った、「長官レホム、書記官シムシャイ、その
他サマリヤおよび川向こうのほかの所に住んでいる同僚に、あいさつを
する。いま、一八あなたがたがわれわれに送った手紙を、わたしの前に明
らかに読ませた。一九わたしは命令を下して調査させたところ、この町は

古来、諸王にそむいた事、その中に反乱、むほんのあったことを見いだし
た。二〇またエルサレムには大いなる王たちがあって、川向こうの地をこ
とごとく治め、みつぎ、関税、税金を納めさせたこともあった。二一それ
であなたがたは命令を伝えて、その人々をとどめ、わたしの命令の下るま
で、この町を建てさせてはならない。二二あなたがたは慎んでこのことに
ついて怠ることのないようにしなさい。どうして損害を増して、王に害
を及ぼしてよかろうか」。

二三アルタシャスタ王の手紙の写しがレホムおよび書記官シムシャイと
その同僚の前に読み上げられたので、彼らは急いでエルサレムのユダヤ
人のもとにおもむき、腕力と権力とをもって彼らをやめさせた。二四そ
れでエルサレムにある神の宮の工事は中止された。すなわちペルシャ王ダ
リヨスの治世の二年まで中止された。

第五章一さて預言者ハガイおよびイドの子ゼカリヤのふたりの預言者は、
ユダとエルサレムにいるユダヤ人に向かって、彼らの上にいますイスラエ
ルの神の名によって預言した。二そこでシャルテルの子ゼルバベルおよび
ヨザダクの子エシュアは立ちあがって、エルサレムにある神の宮を建て始
めた。神の預言者たちも、彼らと共にいて彼らを助けた。
三その時、川向こうの州の知事タテナイおよびセタル・ボズナイとその
同僚は彼らの所に来てこう言った、「だれがあなたがたにこの宮を建て、
この城壁を築きあげることを命じたのか」。四また「この建物を建ててい
る人々の名はなんというのか」と尋ねた。五しかしユダヤ人の長老たち
の上には、神の目が注がれていたので、彼らはこれをやめさせることがで
きず、その事をダリヨスに奏して、その返答の来るのを待った。
六川向こうの州の知事タテナイおよびセタル・ボズナイとその同僚で

ある川向こうの州の知事たちが、ダリヨス王に送った手紙の写しは次の
とおりである。七すなわち、彼らが王に送った手紙には、次のようにしるさ
れてあった。「願わくはダリヨス王に全き平安があるように。八王に次の
ことをお知らせいたします。すなわち、われわれがユダヤ州へ行き、かの
大いなる神の宮へ行って見たところ、それは大きな石をもって建てられ、
材木を組んで壁をつくり、その工事は勤勉に行われ、彼らの手によって
大いにはかどっています。九そこでわれわれはその長老たちに尋ねてこ
う言いました、『だれがあなたがたにこの宮を建て、この城壁を築きあげ
ることを命じたのか』と。一〇われわれはまた彼らのかしらたる人々の名
を書きしるして、あなたにお知らせするために、その名を尋ねました。一
一すると、彼らはわれわれに答えてこう言いました、『われわれは天地の神
のしもべであって、年久しい昔に建てられた宮を、再び建てるのです。

これはもと、イスラエルの大いなる王の建てあげたものですが、一二われわ
れの先祖たちが、天の神の怒りを引き起したため、神は彼らを、カルデヤ
びとバビロンの王ネブカデネザルの手に渡されたので、彼はこの宮をこわ
し、民をバビロンに捕えて行きました。一三ところがバビロンの王クロス
の元年に、クロス王は神のこの宮を再び建てることの命令を下されまし
た。一四またクロス王は先にネブカデネザルが、エルサレムの宮からバビ
ロンの神殿に移した神の宮の金銀の器を、バビロンの神殿から取り出し
て、彼が総督に任じたセシバザルという名の者に渡して、一五彼に言われ
ました、「これらの器を携えて行って、エルサレムにある宮に納め、神
の宮をもとの所に建てよ」と。一六そこでこのセシバザルは来てエルサレ
ムにある神の宮の基礎をすえました。その時から今に至るまで、建築を続
けていますが、まだ完成しないのです』と。一七それで今、もし王がよし

と見られるならば、バビロンにある王の宝庫を調べて、エルサレムの神の
この宮を建てることの命令が、はたしてクロス王から出ているかどうかを
確かめ、この事についての王のお考えをわれわれに伝えてください」。
第六章一そこでダリヨス王は命を下して、バビロンのうちで、古文書をお
さめてある書庫を調べさせたところ、二メデヤ州の都エクバタナで、一
つの巻物を見いだした。そのうちにこうしるされてある。
「記録。三クロス王の元年にクロス王は命を下した、『エルサレムにある
神の宮については、犠牲をささげ、燔祭を供える所の宮を建て、その宮の
高さを六十キュビトにし、その幅を六十キュビトにせよ。四大いなる石の
層を三段にし、木の層を一段にせよ。その費用は王の家から与えられる。
五またネブカデネザルが、エルサレムの宮からバビロンに移した神の宮の
金銀の器物は、これをかえして、エルサレムにある宮のもとの所に持っ

て行き、これを神の宮に納めよ』」。
六「それで川向こうの州の知事タテナイおよびセタル・ボズナイとその
同僚である川向こうの州の知事たちよ、あなたがたはこれに遠ざかり、
七神のこの宮の工事を彼らに任せ、ユダヤ人の知事とユダヤ人の長老た
ちに、神のこの宮をもとの所に建てさせよ。八わたしはまた命を下し、神
のこの宮を建てることについて、あなたがたがこれらのユダヤ人の長老た
ちになすべき事を示す。王の財産、すなわち川向こうの州から納めるみ
つぎの中から、その費用をじゅうぶんそれらの人々に与えて、その工事を
滞らないようにせよ。九またその必要とするもの、すなわち天の神にさ
さげる燔祭の子牛、雄羊および小羊ならびに麦、塩、酒、油などエルサ
レムにいる祭司たちの求めにしたがって、日々怠りなく彼らに与え、一〇
彼らにこうばしい犠牲を天の神にささげさせ、王と王子たちの長寿を祈

らせよ。一一わたしはまた命を下す。だれでもこの命ずる所を改める者
があるならば、その家の梁は抜き取られ、彼はその上にくぎづけにされ、
その家はまた、これがために汚物の山とされるであろう。一二これを改め
ようとする者、あるいはエルサレムにある神のこの宮を滅ぼそうとして手
を出す王あるいは民は、かしこにその名をとどめられる神よ、願わくはこ
れを倒されるように。われダリヨスは命を下す。心してこれを行え」。
一三ダリヨス王がこう言い送ったので、川向こうの州の知事タテナイお
よびセタル・ボズナイとその同僚たちは心してこれを行った。一四そし
てユダヤ人の長老たちは、預言者ハガイおよびイドの子ゼカリヤの預言に
よって建て、これをなし遂げた。彼らはイスラエルの神の命令により、ま
たクロス、ダリヨスおよびペルシャ王アルタシャスタの命によって、これ
を建て終った。一五この宮はダリヨス王の治世の六年アダルの月の三日に

完成した。
一六そこでイスラエルの人々、祭司たち、レビびとおよびその他の捕囚
から帰った人々は、喜んで神のこの宮の奉献式を行った。一七すなわち
神のこの宮の奉献式において、雄牛一百頭、雄羊二百頭、小羊四百頭を
ささげ、またイスラエルの部族の数にしたがって、雄やぎ十二頭をささげ
て、すべてのイスラエルびとのための罪祭とした。一八またモーセの書にし
るされてあるように祭司を組別により、レビびとを班別によって立て、エ
ルサレムで神に仕えさせた。
一九こうして捕囚から帰って来た人々は、正月の十四日に過越の祭を
行った。二〇すなわち祭司、レビびとたちは共に身を清めて皆清くなり、
すべて捕囚から帰って来た人々のため、その兄弟である祭司たちのため、
また彼ら自身のために過越の小羊をほふった。二一そして捕囚から帰って

来たイスラエルの人々、およびその地の異邦人の汚れを捨てて彼らに連な
り、イスラエルの神、主を拝しようとする者はすべてこれを食べ、二二喜ん
で七日の間、種入れぬパンの祭を行った。これは主が彼らを喜ばせ、
またアッスリヤの王の心を彼らに向かわせ、彼にイスラエルの神にいま
す神の宮の工事を助けさせられたからである。

第七章一これらの事の後ペルシャ王アルタシャスタの治世にエズラとい
う者があった。エズラはセラヤの子、セラヤはアザリヤの子、アザリヤは
ヒルキヤの子、二ヒルキヤはシャルムの子、シャルムはザドクの子、ザドク
はアヒトブの子、三アヒトブはアマリヤの子、アマリヤはアザリヤの子、ア
ザリヤはメラヨテの子、四メラヨテはゼラヒヤの子、ゼラヒヤはウジの子、
ウジはブッキの子、五ブッキはアビシュアの子、アビシュアはピネハスの
子、ピネハスはエレアザルの子、エレアザルは祭司長アロンの子である。

六このエズラはバビロンから上って来た。彼はイスラエルの神、主がお授
けになったモーセの律法に精通した学者であった。その神、主の手が彼の
上にあったので、その求めることを王はことごとく許した。
七アルタシャスタ王の七年にまたイスラエルの人々および祭司、レビび
と、歌うたう者、門衛、宮に仕えるしもべなどエルサレムに上った。八そ
して王の七年の五月にエズラはエルサレムに来た。九すなわち正月の一
日にバビロンを出立して、五月一日にエルサレムに着いた。その神の恵
みの手が彼の上にあったからである。一〇エズラは心をこめて主の律法を
調べ、これを行い、かつイスラエルのうちに定めとおきてとを教えた。
一一主の戒めの言葉、およびイスラエルに賜わった定めに通じた学者
で、祭司であるエズラにアルタシャスタ王の与えた手紙の写しは、次のと
おりである。一二「諸王の王アルタシャスタ、天の神の律法の学者である

祭司エズラに送る。今、一三わたしは命を下す。わが国のうちにいるイスラ
エルの民およびその祭司、レビびとのうち、すべてエルサレムへ行こうと望
む者は皆、あなたと共に行くことができる。一四あなたは、自分の手にある
あなたの神の律法に照して、ユダとエルサレムの事情を調べるために、王
および七人の議官によってつかわされるのである。一五かつあなたは王およ
びその議官らが、エルサレムにいますイスラエルの神に真心からささげる
銀と金を携え、一六またバビロン全州であなたが獲るすべての金銀、お
よび民と祭司とが、エルサレムにあるその神の宮のために、真心からささげ
た供え物を携えて行く。一七それであなたはその金をもって雄牛、雄羊、
小羊およびその素祭と灌祭の品々を気をつけて買い、エルサレムにあるあ
なたがたの神の宮の祭壇の上に、これをささげなければならない。一八ま
た、あなたとあなたの兄弟たちが、その余った金銀でしようと思うよい

事があるならば、あなたがたの神のみ旨に従ってそれを行え。一九また
あなたの神の宮の勤め事のためにあなたがたが与えられた器は、エルサレム
の神の前に納めよ。二〇そのほかあなたの神の宮のために用うべき必要な
ものがあれば、それを王の倉から出して用いよ。
二一われ、アルタシャスタ王は川向こうの州のすべての倉づかさに命を
下して言う、『天の神の律法の学者である祭司エズラがあなたがたに求め
る事は、すべてこれを心して行え。二二すなわち銀は百タラントまで、
小麦は百コルまで、ぶどう酒は百バテまで、油は百バテまで、塩は制限
なく与えよ。二三天の神の宮のために、天の神の命じるところは、すべて
正しくこれを行え。そうしないと神の怒りが、王と王の子らの国に臨む
であろう』。二四われわれは、またあなたがたに告げる、『祭司、レビびと、
歌うたう者、門衛、宮に仕えるしもべ、および神のこの宮の仕えびとたち

には、みつぎ、租税、税金を課してはならぬ』。
二五エズラよ、あなたはあなたの手にある神の知恵によって、つかさお
よび裁判人を立て、川向こうの州のすべての民、すなわちあなたの神の
律法を知っている者たちを、ことごとくさばかせよ。あなたがたはまたこ
れを知らない者を教えよ。二六あなたの神の律法および王の律法を守らな
い者を、きびしくその罪に定めて、あるいは死刑に、あるいは追放に、あ
るいは財産没収に、あるいは投獄に処せよ」。
二七われわれの先祖の神、主はほむべきかな。主はこのように、王の心
に、エルサレムにある主の宮を飾る心を起させ、二八また王の前と、その
議官の前と王の大臣の前で、わたしに恵みを得させられた。わたしはわが
神、主の手がわたしの上にあるので力を得、イスラエルのうちから首領
たる人々を集めて、わたしと共に上らせた。

第八章一アルタシャスタ王の治世に、バビロンからわたしと一緒に上っ
て来た者の氏族の長、およびその系譜は次のとおりである。二ピネハスの
子孫のうちではゲルショム。イタマルの子孫のうちではダニエル。ダビデの
子孫のうちではシカニヤの子ハットシ。三パロシの子孫のうちではゼカリヤ
および彼と共に系譜に載せられた男百五十人。四パハテ・モアブの子孫の
うちではゼラヒヤの子エリヨエナイおよび彼と共にある男二百人。五ザッ
ツの子孫のうちではヤハジエルの子シカニヤおよび彼と共にある男三百
人。六アデンの子孫のうちではヨナタンの子エベデおよび彼と共にある男
五十人。七エラムの子孫のうちではアタリヤの子エサヤおよび彼と共にあ
る男七十人。八シパテヤの子孫のうちではミカエルの子ゼバデヤおよび彼
と共にある男八十人。九ヨアブの子孫のうちではエヒエルの子オバデヤお
よび彼と共にある男二百十八人。一〇バニの子孫のうちではヨシピアの子

シロミテおよび彼と共にある男百六十人。一一ベバイの子孫のうちではベ
バイの子ゼカリヤおよび彼と共にある男二十八人。一二アズガデの子孫の
うちではハッカタンの子ヨハナンおよび彼と共にある男百十人。一三アド
ニカムの子孫のうちでは後に来た者どもで、その名はエリペレテ、ユエル、
シマヤおよび彼らと共にある男六十人。一四ビグワイの子孫のうちではウ
タイとザックルおよび彼らと共にある男七十人である。
一五わたしは彼らをアハワに流れる川のほとりに集めて、そこに三日の
あいだ露営した。わたしは民と祭司とを調べたが、そこにはレビの子孫は
ひとりもいなかったので、一六人をつかわしてエリエゼル、アリエル、シマ
ヤ、エルナタン、ヤリブ、エルナタン、ナタン、ゼカリヤ、メシュラムという
首長たる人々を招き、またヨヤリブ、およびエルナタンのような見識の
ある人々を招いた。一七そしてわたしはカシピアという所の首長イドの

もとに彼らをつかわし、カシピアという所にいるイドと、その兄弟であ
る宮に仕えるしもべたちに告ぐべき言葉を、彼らに授け、われわれの神の
宮のために、仕え人をわれわれに連れて来いと言った。一八われわれの神
がよくわれわれを助けられたので、彼らはイスラエルの子、レビの子、マ
ヘリの子孫のうちの思慮深い人、すなわちセレビヤおよびその子らとその
兄弟たち十八人を、われわれに連れて来、一九またハシャビヤおよび彼と
共に、メラリの子孫のエサヤとその兄弟およびその子ら二十人、二〇およ
び宮に仕えるしもべ、すなわちダビデとそのつかさたちが、レビびとに仕
えさせるために選んだ宮に仕えるしもべ二百二十人を連れてきた。これら
の者は皆その名を言って記録された。
二一そこでわたしは、かしこのアハワ川のほとりで断食を布告し、われ
われの神の前で身をひくくし、われわれと、われわれの幼き者と、われ

われのすべての貨財のために、正しい道を示されるように神に求めた。二
二これは、われわれがさきに王に告げて、「われわれの神の手は、神を求め
るすべての者の上にやさしく下り、その威力と怒りとはすべて神を捨てる
者の上に下る」と言ったので、わたしは道中の敵に対して、われわれを
守るべき歩兵と騎兵とを、王に頼むことを恥じたからである。二三そこで
われわれは断食して、このことをわれわれの神に求めたところ、神はその
願いを聞きいれられた。

二四わたしはおもだった祭司十二人すなわちセレビヤ、ハシャビヤおよび
その兄弟十人を選び、二五金銀および器物、すなわち王と、その議官と、
その諸侯およびすべて在留のイスラエルびとが、われわれの神の宮のた
めにささげた奉納物を量って彼らに渡した。二六わたしが量って彼らの手
に渡したものは、銀六百五十タラント、銀の器百タラント、金百タラン

トであった。二七また金の大杯が二十あって、一千ダリクに当る。また
光り輝く青銅の器二個あって、その尊いこと金のようである。二八そ
してわたしは彼らに言った、「あなたがたは主に聖別された者である。こ
の器物も聖である。またこの金銀は、あなたがたの先祖の神、主にささ
げた真心よりの供え物である。二九あなたがたはエルサレムで、主の宮の
へやの中で、祭司長、レビびとおよびイスラエルの氏族のかしらたちの前
で、これを量るまで、見張り、かつ守りなさい」。三〇そこで祭司およびレ
ビびとたちは、その金銀および器物を、エルサレムにあるわれわれの神
の宮に携えて行くため、その重さのものを受け取った。

三一われわれは正月の十二日に、アハワ川を出立してエルサレムに向
かったが、われわれの神の手は、われわれの上にあって、敵の手および道
に待ち伏せする者の手から、われわれを救われた。三二われわれはエルサレ

ムに着いて、三日そこにいたが、三三四日目にわれわれの神の宮の内で、そ
の金銀および器物を、ウリヤの子祭司メレモテの手に量って渡した。ピ
ネハスの子エレアザルが彼と共にいた。またエシュアの子ヨザバデ、およ
びビンヌイの子ノアデヤのふたりのレビびとも、彼らと共にいた。三四すな
わちそのすべての数と重さとを調べ、その重さは皆書きとめられた。
三五そのとき捕囚の人々で捕囚から帰って来た者は、イスラエルの神に
燔祭をささげた。すなわちイスラエル全体のために雄牛十二頭、雄羊九十
六頭、小羊七十七頭をささげ、また罪祭として雄やぎ十二頭をささげた。
これらはみな、主にささげた燔祭である。三六彼らはまた王の命令書を、
王の総督たち、および川向こうの州の知事たちに渡したので、彼らは民
と神の宮とを援助した。

第九章 一これらの事がなされた後、つかさたちは、わたしのもとに来て

言った、「イスラエルの民、祭司およびレビびとは諸国の民と離れないで、
カナンびと、ヘテびと、ペリジびと、エブスびと、アンモンびと、モアブ
びと、エジプトびと、アモリびとなどの憎むべき事を行いました。二すな
わち、彼らの娘たちをみずからめとり、またそのむすこたちにめとった
ので、聖なる種が諸国の民とまじりました。そしてつかさたる者、長た
る者が先だって、このとがを犯しました」。三わたしはこの事を聞いた時、
着物と上着とを裂き、髪の毛とひげを抜き、驚きあきれてすわった。四イ
スラエルの神の言葉におののく者は皆、捕囚から帰って来た人々のとがの
ゆえに、わたしのもとに集まったが、わたしは夕の供え物の時まで、驚
きあきれてすわった。五夕の供え物の時になって、わたしは断食から立ち
あがり、着物と上着を裂いたまま、ひざをかがめて、わが神、主にむかっ
て手をさし伸べて、六言った、

「わが神よ、わたしはあなたにむかって顔を上げるのを恥じて、赤面しま
す。われわれの不義は積って頭よりも高くなり、われわれのとがは重なっ
て天に達したからです。七われわれの先祖の日から今日まで、われわれは
大いなるとがを負い、われわれの不義によって、われわれとわれわれの王
たち、および祭司たちは国々の王たちの手にわたされ、つるぎにかけられ、
捕え行かれ、かすめられ、恥をこうむりました。今日のとおりです。八と
ころがいま、われわれの神、主は、しばし恵みを施して、のがれ残るべき
者をわれわれのうちにおき、その聖所のうちに確かなよりどころを与え、
こうしてわれわれの神はわれわれの目を明らかにし、われわれをその奴隷
のうちにあって、少しく生き返らせられました。九われわれは奴隷の身で
ありますが、その奴隷たる時にも神はわれわれを見捨てられず、かえって
ペルシャ王たちの目の前でいつくしみを施して、われわれを生き返らせ、

われわれの神の宮を建てさせ、その破壊をつくろわせ、ユダとエルサレム
でわれわれに保護を与えられました。
一〇われわれの神よ、この後、何を言うことができましょう。われわれ
は、あなたの戒めを捨てたからです。一一あなたはかつて、あなたのしも
べである預言者たちによって命じて仰せられました、『おまえたちが行って
獲ようとする地は、各地の民の汚れにより、その憎むべきわざによって汚
れた地で、この果から、かの果まで、その汚れに満ちている。一二それでお
まえたちの娘を、彼らのむすこに与えてはならない。彼らの娘を、おま
えたちのむすこにめとってはならない。また永久に彼らの平安をも福祉
をも求めてはならない。そうすればおまえたちは強くなり、その地の良き
物を食べ、これを永久におまえたちの子孫に伝えて嗣業とさせることが
できる』と。一三われわれの悪い行いにより、大いなるとがによって、こ

れらすべてのことが、すでにわれわれに臨みましたが、われわれの神なるあ
なたは、われわれの不義よりも軽い罰をくだして、このように残りの者を
与えてくださったのを見ながら、一四われわれは再びあなたの命令を破っ
て、これらの憎むべきわざを行う民と縁を結んでよいでしょうか。あな
たはわれわれを怒って、ついに滅ぼし尽し、残る者も、のがれる者もない
ようにされるのではないでしょうか。一五ああ、イスラエルの神、主よ、あ
なたは正しくいらせられます。われわれはのがれて残ること今日のとおり
です。われわれは、とがをもってあなたの前にあります。それゆえだれも
あなたの前に立つことはできません」。

第一〇章一エズラが神の宮の前に泣き伏して祈り、かつざんげしていた
時、男、女および子供の大いなる群集がイスラエルのうちから彼のもと
に集まってきた。民はいたく泣き悲しんだ。二時にエラムの子孫のうちの

エヒエルの子シカニヤが、エズラに告げて言った、「われわれは神にむかっ
て罪を犯し、この地の民から異邦の女をめとりました。しかし、このこと
についてはイスラエルに、今なお望みがあります。
三それでわれわれはわ
が主の教と、われわれの神の命令におののく人々の教とに従って、こ
れらの妻ならびにその子供たちを、ことごとく追い出すという契約を、わ
れわれの神に立てましょう。そして律法に従ってこれを行いましょう。
四立ちあがってください、この事はあなたの仕事です。われわれはあなた
を助けます。心を強くしてこれを行いなさい」。
五エズラは立って、おも
だった祭司、レビびとおよびすべてのイスラエルびとに、この言葉のよう
に行うことを誓わせたので、彼らは誓った。
六エズラは神の宮の前から出て、エリアシブの子ヨハナンのへやにはいっ
たが、そこへ行っても彼はパンも食べず、水も飲まずに夜を過ごした。こ

れは彼が、捕囚から帰った人々のとがを嘆いたからである。七そしてユダ
およびエルサレムにあまねく布告を出し、捕囚から帰ったすべての者に告
げて、エルサレムに集まるべき事と、八つかさおよび長老たちのさとしに
従って、三日のうちにこない者はだれでもその財産はことごとく没収さ
れ、その人自身は捕われ人の会から破門されると言った。
九そこでユダとベニヤミンの人々は皆三日のうちにエルサレムに集まっ
た。これは九月の二十日であった。すべての民は神の宮の前の広場に座し
て、このことのため、また大雨のために震えおののいていた。一〇時に祭司
エズラは立って彼らに言った、「あなたがたは罪を犯し、異邦の女をめとっ
て、イスラエルのとがを増した。一一それで今、あなたがたの先祖の神、主
にざんげして、そのみ旨を行いなさい。あなたがたはこの地の民および
異邦の女と離れなさい」。一二すると会衆は皆大声をあげて答えた、「あ

なたの言われたとおり、われわれは必ず行います。一三しかし民は多く、
また大雨の季節ですから、外に立っていることはできません。またこれは
一日やふつかの仕事ではありません。われわれはこの事について大いに罪
を犯したからです。一四それでどうぞ、われわれのつかさたちは全会衆の
ために立ってください。われわれの町の内に、もし異邦の女をめとった者
があるならば、みな定めの時にこさせなさい。またおのおのの町の長老お
よび裁判人も、それと一緒にこさせなさい。そうすればこの事によるわれ
われの神の激しい怒りは、ついにわれわれを離れるでしょう」。一五ところ
がアサヘルの子ヨナタンおよびテクワの子ヤハジアはこれに反対した。そ
してメシュラムおよびレビびとシャベタイは彼らを支持した。
一六そこで捕囚から帰って来た人々はこのように行った。すなわち祭司
エズラは、氏族の長たちをその氏族にしたがい、おのおのその名をさして

選んだ。彼らは十月の一日から座してこの事を調べ、一七正月の一日に
なって、異邦の女をめとった人々をことごとく調べ終った。
一八祭司の子孫のうちで異邦の女をめとった事のあらわれた者は、ヨザ
ダクの子エシュアの子ら、およびその兄弟たちのうちではマアセヤ、エリ
エゼル、ヤリブ、ゲダリヤであった。一九彼らはその妻を離縁しようという
誓いをなし、すでに罪を犯したというので、そのとがのために雄羊一頭を
ささげた。二〇インメルの子らのうちではハナニおよびゼバデヤ。二一ハリ
ムの子らのうちではマアセヤ、エリヤ、シマヤ、エヒエル、ウジヤ。二二パ
シュルの子らのうちではエリオエナイ、マアセヤ、イシマエル、ネタンエ
ル、ヨザバデ、エラサ。
二三レビびとのうちではヨザバテ、シメイ、ケラヤ（すなわちケリタ）、ペ
タヒヤ、ユダ、エリエゼル。二四歌うたう者のうちではエリアシブ。門衛
のうちではシャルム、テレム、ウリ。

二五イスラエルのうち、パロシの子らのうちではラミヤ、エジア、マルキ
ヤ、ミヤミン、エレアザル、ハシャビヤ、ベナヤ。二六エラムの子らのうち
ではマッタニヤ、ゼカリヤ、エヒエル、アブデ、エレモテ、エリヤ。二七ザッ
トの子らのうちではエリオエナイ、エリアシブ、マッタニヤ、エレモテ、ザ
バデ、アジザ。二八ベバイの子らのうちではヨハナン、ハナニヤ、ザバイ、
アテライ。二九バニの子らのうちではメシュラム、マルク、アダヤ、ヤシュ
ブ、シャル、エレモテ。三〇パハテ・モアブの子らのうちではアデナ、ケラ
ル、ベナヤ、マアセヤ、マッタニヤ、ベザレル、ビンヌイ、マナセ。三一ハリ
ムの子らのうちではエリエゼル、イシヤ、マルキヤ、シマヤ、シメオン、三二
ベニヤミン、マルク、シマリヤ。三三ハシュムの子らのうちではマッテナイ、
マッタタ、ザバデ、エリパレテ、エレマイ、マナセ、シメイ。三四バニの子
らのうちではマアダイ、アムラム、ウエル、三五ベナヤ、ベデヤ、ケルヒ、三
六ワニア、メレモテ、エリアシブ、三七マッタニヤ、マッテナイ、ヤアス。三

八ビンヌイの子らのうちではシメイ、三九シレミヤ、ナタン、アダヤ、四〇マ
クナデバイ、シャシャイ、シャライ、四一アザリエル、シレミヤ、シマリヤ、
四二シャルム、アマリヤ、ヨセフ。四三ネボの子らではエイエル、マッタテ
ヤ、ザバデ、ゼビナ、ヤッダイ、ヨエル、ベナヤ。四四これらの者は皆異邦の
女をめとった者である。彼らはその女たちをその子供と共に離縁した。

ネヘミヤ書

第一章

一ハカリヤの子ネヘミヤの言葉。
第二十年のキスレウの月に、わたしが首都スサにいた時、二わたしの兄弟
のひとりハナニが数人の者と共にユダから来たので、わたしは捕囚を免
れて生き残ったユダヤ人の事およびエルサレムの事を尋ねた。三彼らはわ
たしに言った、「かの州で捕囚を免れて生き残った者は大いなる悩みと、
はずかしめのうちにあり、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼
かれたままであります」と。
四わたしはこれらの言葉を聞いた時、すわって泣き、数日のあいだ嘆き
悲しみ、断食して天の神の前に祈って、五言った、「天の神、主、おのれを
愛し、その戒めを守る者には契約を守り、いつくしみを施される大いな

る恐るべき神よ、
六どうぞ耳を傾け、目を開いてしもべの祈を聞いてください。わたしは今、あなたのしもべであるイスラエルの子孫のために、昼も夜もみ前に祈り、われわれイスラエルの子孫が、あなたに対して犯した罪をざんげいたします。まことにわたしも、わたしの父の家も罪を犯しました。
七われわれはあなたに対して大いに悪い事を行い、あなたのしもべモーセに命じられた戒めをも、定めをも、おきてをも守りませんでした。
八どうぞ、あなたのしもべモーセに命じられた言葉を、思い起してください。すなわちあなたは言われました、『もしあなたがたが罪を犯すならば、わたしはあなたがたを、もろもろの民の間に散らす。
九しかし、あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの戒めを守って、これを行うならば、たといあなたがたのうちの散らされた者が、天の果にいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住まわせるために選んだ所に連れて来る』

と。一〇彼らは、あなたが大いなる力と強い手をもって、あがなわれたあ
なたのしもべ、あなたの民です。一一主よ、どうぞしもべの祈と、あなた
の名を恐れることを喜ぶあなたのしもべらの祈に耳を傾けてください。
どうぞ、きょう、しもべを恵み、この人の目の前であわれみを得させてく
ださい」。この時、わたしは王の給仕役であった。
第二章一アルタシャスタ王の第二十年、ニサンの月に、王の前に酒が出
た時、わたしは酒をついで王にささげた。これまでわたしは王の前で悲し
げな顔をしていたことはなかった。二王はわたしに言われた、「あなたは
病気でもないのにどうして悲しげな顔をしているのか。何か心に悲しみ
をもっているにちがいない」。そこでわたしは大いに恐れて、三王に申しあ
げた、「どうぞ王よ、長生きされますように。わたしの先祖の墳墓の地であ
るあの町は荒廃し、その門が火で焼かれたままであるのに、どうしてわた

しは悲しげな顔をしないでいられましょうか」。四王はわたしにむかって、
「それでは、あなたは何を願うのか」と言われたので、わたしは天の神に
祈って、五王に申しあげた、「もし王がよしとされ、しもべがあなたの前に
恵みを得ますならば、どうかわたしを、ユダにあるわたしの先祖の墳墓の
町につかわして、それを再建させてください」。六時に王妃もかたわらに座
していたが、王はわたしに言われた、「あなたの旅の期間はどれほどですか。
いつごろ帰ってきますか」。こうして王がわたしをつかわすことをよしとさ
れたので、わたしは期間を定めて王に申しあげた。七わたしはまた王に申
しあげた、「もし王がよしとされるならば、川向こうの州の知事たちに与
える手紙をわたしに賜わり、わたしがユダに行きつくまで、彼らがわたしを
通過させるようにしてください。八また王の山林を管理するアサフに与え
る手紙をも賜わり、神殿に属する城の門を建てるため、また町の石がき、

およびわたしの住むべき家を建てるために用いる材木をわたしに与えるよ
うにしてください」。わたしの神がよくわたしを助けられたので、王はわた
しの願いを許された。
九そこでわたしは川向こうの州の知事たちの所へ行って、王の手紙を
渡した。なお王は軍の長および騎兵をわたしと共につかわした。一〇と
ころがホロニびとサンバラテおよびアンモンびと奴隷トビヤはこれを聞き、
イスラエルの子孫の福祉を求める人が来たというので、大いに感情を害
した。
一一わたしはエルサレムに着いて、そこに三日滞在した後、一二夜中に起
き出た。数人の者がわたしに伴ったが、わたしは、神がエルサレムのた
めになそうとして、わたしの心に入れられたことを、だれにも告げ知らせ
ず、またわたしが乗った獣のほかには、獣をつれて行かなかった。一三

わたしは夜中に出て谷の門を通り、龍の井戸および糞の門に行って、エ
ルサレムのくずれた城壁や、火に焼かれた門を調査し、
一四また泉の門
および王の池に行ったが、わたしの乗っている獣の通るべき所もなかっ
た。
一五わたしはまたその夜のうちに谷に沿って上り、城壁を調査したう
え、身をめぐらして、谷の門を通って帰った。
一六つかさたちは、わたし
がどこへ行ったか、何をしたかを知らなかった。わたしはまたユダヤ人に
も、祭司たちにも、尊い人たちにも、つかさたちにも、その他工事をする
人々にもまだ知らせなかった。

一七しかしわたしはついに彼らに言った、「あなたがたの見るとおり、わ
れわれは難局にある。エルサレムは荒廃し、その門は火に焼かれた。さ
あ、われわれは再び世のはずかしめをうけることのないように、エルサレ
ムの城壁を築こう」。
一八そして、わたしの神がよくわたしを助けられた

ことを彼らに告げ、また王がわたしに語られた言葉をも告げたので、彼ら
は「さあ、立ち上がって築こう」と言い、奮い立って、この良きわざに着手
しようとした。一九ところがホロニびとサンバラテ、アンモンびと奴隷トビ
ヤおよびアラビヤびとガシムがこれを聞いて、われわれをあざけり、われ
われを侮って言った、「あなたがたは何をするのか、王に反逆しようと
するのか」。二〇わたしは彼らに答えて言った、「天の神がわれわれを恵ま
れるので、そのしもべであるわれわれは奮い立って築くのである。しかし
あなたがたはエルサレムに何の分もなく、権利もなく、記念もない」。
第三章一かくて大祭司エリアシブは、その兄弟である祭司たちと共に
立って羊の門を建て、これを聖別してそのとびらを設け、さらにこれを
聖別して、ハンメアの望楼に及ぼし、またハナネルの望楼にまで及ぼした。
二彼の次にはエリコの人々が建て、その次にはイムリの子ザックルが建て

た。三魚の門はハッセナアの子らが建て、その梁を置き、そのとびらと横木
と貫の木とを設けた。四その次にハッコヅの子ウリヤの子メレモテが修理
し、その次にメシザベルの子ベレキヤの子メシュラムが修理し、その次に
バアナの子ザドクが修理した。五その次にテコアびとらが修理したが、そ
の貴人たちはその主の工事に服さなかった。

六古い門はパセアの子ヨイアダおよびベソデヤの子メシュラムがこれを
修理し、その梁を置き、そのとびらと横木と貫の木とを設けた。七その次
にギベオンびとメラテヤ、メロノテびとヤドン、および川向こうの州の
知事の行政下にあるギベオンとミヅパの人々が修理した。八その次にハル
ハヤの子ウジエルなどの金細工人が修理し、その次に製香者のひとりハナ
ニヤが修理した。こうして彼らはエルサレムを城壁の広い所まで復旧
した。九その次にエルサレムの半区域の知事ホルの子レパヤが修理し、一〇

その次にハルマフの子エダヤが自分の家と向かい合っている所を修理し、
その次にはハシャブニヤの子ハットシが修理した。一一ハリムの子マルキ
ヤおよびバハテ・モアブの子ハシュブも他の部分および炉の望楼を修理し
た。一二その次にエルサレムの他の半区域の知事ハロヘシの子シャルムが
その娘たちと共に修理した。
一三谷の門はハヌンがザノアの民と共にこれを修理し、これを建て直し
て、そのとびらと横木と貫の木とを設け、また糞の門まで城壁一千キュ
ビトを修理した。
一四糞の門はベテ・ハケレムの区域の知事レカブの子マルキヤがこれを
修理し、これを建て直して、そのとびらと横木と貫の木とを設けた。
一五泉の門はミヅパの区域の知事コロホゼの子シャルンがこれを修理
し、これを建て直して、おおいを施し、そのとびらと横木と貫の木とを

設けた。彼はまた王の園のほとりのシラの池に沿った石がきを修理して、
ダビデの町から下る階段にまで及んだ。一六その後にベテズルの半区域の
知事アズブクの子ネヘミヤが修理して、ダビデの墓と向かい合った所に
及び、掘池と勇士の宅にまで及んだ。一七その後にバニの子レホムなどの
レビびとが修理し、その次にケイラの半区域の知事ハシャビヤがその区域
のために修理した。一八その後にケイラの半区域の知事ヘナダデの子バワ
イなどその兄弟たちが修理し、一九その次にエシュアの子でミヅパの知事
であるエゼルが、城壁の曲りかどにある武器倉に上る所と向かい合った
他の部分を修理し、二〇その後にザバイの子バルクが、力をつくして城壁
の曲りかどから大祭司エリアシブの家の門までの他の部分を修理し、二一
その後にハッコヅの子ウリヤの子メレモテが、エリアシブの家の門からエ
リアシブの家の端までの他の部分を修理し、二二彼の後に低地の人々であ

る祭司たちが修理し、二三その後にベニヤミンおよびハシュブが、自分た
ちの家と向かい合っている所を修理し、その後にアナニヤの子マアセヤ
の子アザリヤが、自分の家の附近を修理し、二四その後にヘナダデの子ビ
ンヌイが、アザリヤの家から城壁の曲りかど、およびすみまでの他の部分
を修理した。二五ウザイの子パラルは、城壁の曲りかどと向かい合ってい
る所、および監視の庭に近い王の上の家から突き出ている望楼と向かい
合っている所を修理した。その後にパロシの子ペダヤ、二六およびオペル
に住んでいる宮に仕えるしもべたちが、東の方の水の門と向かい合って
いる所、および突き出ている望楼と向かい合っている所まで修理した。
二七その後にテコアびとが、突き出ている大望楼と向かい合っている他の
部分を修理し、オペルの城壁にまで及んだ。
二八馬の門から上の方は祭司たちが、おのおの自分の家と向かい合って

いる所を修理した。二九その後にインメルの子ザドクが、自分の家と向か
い合っている所を修理し、その後にシカニヤの子シマヤという東の門を
守る者が修理し、三〇その後にシレミヤの子ハナニヤおよびザラフの第六
の子ハヌンが他の部分を修理し、その後にベレキヤの子メシュラムが、自分
のへやと向かい合っている所を修理した。三一その後に金細工人のひとり
マルキヤという者が、召集の門と向かい合っている所を修理して、す
みの二階のへやに至り、宮に仕えるしもべたちおよび商人の家にまで及
んだ。三二またすみの二階のへやと羊の門の間は金細工人と商人たち
がこれを修理した。

第四章一サンバラテはわれわれが城壁を築くのを聞いて怒り、大いに
憤ってユダヤ人をあざけった。二彼はその兄弟たちおよびサマリヤの
兵隊の前で語って言った、「この弱々しいユダヤ人は何をしているのか。

自分で再興しようとするのか。犠牲をささげようとするのか。一日で事を
終えようとするのか。塵塚の中の石はすでに焼けているのに、これを取り
だして生かそうとするのか」。三またアンモンびとトビヤは、彼のかたわら
にいて言った、「そうだ、彼らの築いている城壁は、きつね一匹が上って
もくずれるであろう」と。四「われわれの神よ、聞いてください。われわ
れは侮られています。彼らのはずかしめを彼らのこうべに返し、彼らを
捕囚の地でぶんどり物にしてください。五彼らのとがをおおわず、彼らの
罪をみ前から消し去らないでください。彼らは築き建てる者の前であなた
を怒らせたからです」。
六こうしてわれわれは城壁を築いたが、石がきはみな相連なって、その
高さの半ばにまで達した。民が心をこめて働いたからである。
七ところがサンバラテ、トビヤ、アラビヤびと、アンモンびと、アシドド

びとらは、エルサレムの城壁の修理が進展し、その破れ目もふさがり始
めたと聞いて大いに怒り、八皆共に相はかり、エルサレムを攻めて、その
中に混乱を起そうとした。九そこでわれわれは神に祈り、また日夜見張り
を置いて彼らに備えた。
一〇その時、ユダびとは言った、「荷を負う者の力は衰え、そのうえ、
灰土がおびただしいので、われわれは城壁を築くことができない」。一一
またわれわれの敵は言った、「彼らの知らないうちに、また見ないうちに、
彼らの中にはいりこんで彼らを殺し、その工事をやめさせよう」。一二また
彼らの近くに住んでいるユダヤ人たちはきて、十度もわれわれに言った、
「彼らはその住んでいるすべての所からわれわれに攻め上るでしょう」と。
一三そこでわたしは民につるぎ、やりおよび弓を持たせ、城壁の後の低い
所、すなわち空地にその家族にしたがって立たせた。一四わたしは見めぐ

り、立って尊い人々、つかさたち、およびその他の民らに言った、「あな
たがたは彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え、あなたが
たの兄弟、むすこ、娘、妻および家のために戦いなさい」。
一五われわれの敵は自分たちの事が、われわれに悟られたことを聞き、ま
た神が彼らの計りごとを破られたことを聞いたので、われわれはみな城壁
に帰り、おのおのその工事を続けた。一六その日から後は、わたしのしもべ
の半数は工事に働き、半数はやり、盾、弓、よろいをもって武装した。そ
してつかさたちは城壁を築いているユダの全家の後に立った。一七荷を
負い運ぶ者はおのおの片手で工事をなし、片手に武器を執った。一八築き建
てる者はおのおのその腰につるぎを帯びて築き建て、ラッパを吹く者はわ
たしのかたわらにいた。一九わたしは尊い人々、つかさたち、およびその
他の民に言った、「工事は大きくかつ広がっているので、われわれは城壁

の上で互に遠く離れている。二〇どこででもラッパの音を聞いたなら、そ
こにいるわれわれの所に集まってほしい。われわれの神はわれわれのた
めに戦われます」。
二一このようにして、われわれは工事を進めたが、半数の者は夜明けから
星の出る時まで、やりを執っていた。二二その時わたしはまた民に告げて、
「おのおのそのしもべと共にエルサレムの内に宿り、夜はわれわれの護衛者
となり、昼は工事をするように」と言った。二三そして、わたしも、わたし
の兄弟たちも、わたしのしもべたちも、わたしを護衛する人々も、われわ
れのうちひとりも、その衣を脱がず、おのおの手に武器を執っていた。

第五章一さて、ここに民がその妻と共に、その兄弟であるユダヤ人に向
かって大いに叫び訴えることがあった。二すなわち、ある人々は言った、
「われわれはむすこ娘と共に大ぜいです。われわれは穀物を得て、食べて

生きていかなければなりません」。三またある人々は言った、「われわれは
飢えのために、穀物を得ようと田畑も、ぶどう畑も、家も抵当に入れて
います」。四ある人々は言った、「われわれは王の税金のために、われわれ
の田畑およびぶどう畑をもって金を借りました。五現にわれわれの肉はわ
れわれの兄弟の肉に等しく、われわれの子供も彼らの子供に等しいのに、
見よ、われわれはむすこ娘を人の奴隷とするようにしいられています。わ
れわれの娘のうちには、すでに人の奴隷になった者もありますが、われわ
れの田畑も、ぶどう畑も他人のものになっているので、われわれにはどう
する力もありません」。

六わたしは彼らの叫びと、これらの言葉を聞いて大いに怒った。七わた
しはみずから考えたすえ、尊い人々およびつかさたちを責めて言った、
「あなたがたはめいめいその兄弟から利息をとっている」。そしてわたしは

彼らの事について大会を開き、八彼らに言った、「われわれは異邦人に売ら
れたわれわれの兄弟ユダヤ人を、われわれの力にしたがってあがなった。
しかるにあなたがたは自分の兄弟を売ろうとするのか。彼らはわれわれに
売られるのか」。彼らは黙してひと言もいわなかった。九わたしはまた言っ
た、「あなたがたのする事はよくない。あなたがたは、われわれの敵である
異邦人のそしりをやめさせるために、われわれの神を恐れつつ事をなすべ
きではないか。一〇わたしもわたしの兄弟たちも、わたしのしもべたちも
同じく金と穀物とを貸しているが、われわれはこの利息をやめよう。一一
どうぞ、あなたがたは、きょうにも彼らの田畑、ぶどう畑、オリブ畑およ
び家屋を彼らに返し、またあなたがたが彼らから取っていた金銭、穀物、
ぶどう酒、油などの百分の一を返しなさい」。一二すると彼らは「われわ
れはそれを返します。彼らから何をも要求しません。あなたの言うよう

にします」と言った。そこでわたしは祭司たちを呼び、彼らにこの言葉の
とおりに行うという誓いを立てさせた。一三わたしはまたわたしのふとこ
ろを打ち払って言った、「この約束を実行しない者を、どうぞ神がこのよ
うに打ち払って、その家およびその仕事を離れさせられるように。その人
はこのように打ち払われてむなしくなるように」。会衆はみな「アァメン」
と言って、主をさんびした。そして民はこの約束のとおりに行った。
一四またわたしは、ユダの地の総督に任ぜられた時から、すなわちアルタ
シャスタ王の第二十年から第三十二年まで、十二年の間、わたしもわたし
の兄弟たちも、総督としての手当てを受けなかった。一五わたしより以前
の総督らは民に重荷を負わせ、彼らから銀四十シケルのほかにパンとぶど
う酒を取り、また彼らのしもべたちも民を圧迫した。しかしわたしは神を
恐れるので、そのようなことはしなかった。一六わたしはかえって、この

城壁の工事に身をゆだね、どんな土地をも買ったことはない。わたしのし
もべたちは皆そこに集まって工事をした。一七またわたしの食卓にはユダ
ヤ人と、つかさたち百五十人もあり、そのほかに、われわれの周囲の異邦人
のうちからきた人々もあった。一八これがために一日に牛一頭、肥えた羊
六頭を備え、また鶏をもわたしのために備え、十日ごとにたくさんのぶ
どう酒を備えたが、わたしはこの民の労役が重かったので、総督としての
手当てを求めなかった。一九わが神よ、わたしがこの民のためにしたすべ
ての事を覚えて、わたしをお恵みください。

第六章一サンバラテ、トビヤ、アラビヤびとガシムおよびその他のわれ
われの敵は、わたしが城壁を築き終って、一つの破れも残らないと聞い
た。（しかしその時にはまだ門のとびらをつけていなかったのである。）二そ
こでサンバラテとガシムはわたしに使者をつかわして言った、「さあ、われ

われはオノの平野にある一つの村で会見しよう」と。彼らはわたしに危害
を加えようと考えていたのである。三それでわたしは彼らに使者をつかわ
して言わせた、「わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはで
きない。どうしてこの工事をさしおいて、あなたがたの所へ下って行き、
その間、工事をやめることができようか」。四彼らは四度までこのようにわ
たしに人をつかわしたが、わたしは同じように彼らに答えた。五ところが、
サンバラテは五度目にそのしもべを前のようにわたしにつかわした。その
手には開封の手紙を携えていた。六その中に次のようにしるしてあった、
「諸国民の間に言い伝えられ、またガシムも言っているが、あなたはユダ
ヤ人と共に反乱を企て、これがために城壁を築いている。またその言う
ところによれば、あなたは彼らの王になろうとしている。七またあなたは
預言者を立てて、あなたのことをエルサレムにのべ伝えさせ、『ユダに王が

ある』と言わせているが、そのことはこの言葉のとおり王に聞えるでしょ
う。それゆえ、今おいでなさい。われわれは共に相談しましょう」。八そこ
でわたしは彼に人をつかわして言わせた、「あなたの言うようなことはして
いません。あなたはそれを自分の心から造り出したのです」と。九彼らは
みな「彼らの手が弱って工事をやめるようになれば、工事は成就しないだ
ろう」と考えて、われわれをおどそうとしたのである。しかし神よ、どう
ぞいまわたしの手を強めてください。
一〇さてわたしはメヘタベルの子デラヤの子シマヤの家に行ったところ、
彼は閉じこもっていて言った、「われわれは神の宮すなわち神殿の中で会合
し、神殿の戸を閉じておきましょう。彼らはあなたを殺そうとして来るか
らです。きっと夜のうちにあなたを殺そうとして来るでしょう」。一一わた
しは言った、「わたしのような者がどうして逃げられよう。わたしのような

者でだれが神殿にはいって命を全うすることができよう。わたしははい
らない」。一二わたしは悟った。神が彼をつかわされたのではない。彼がわ
たしにむかってこの預言を伝えたのは、トビヤとサンバラテが彼を買収し
たためである。一三彼が買収されたのはこの事のためである。すなわちわ
たしを恐れさせ、わたしにこのようにさせて、罪を犯させ、わたしに悪名
をきせて侮辱するためであった。一四わが神よ、トビヤ、サンバラテおよ
び女預言者ノアデヤならびにその他の預言者など、すべてわたしを恐れさ
せようとする者たちをおぼえて、彼らが行ったこれらのわざに報いてくだ
さい。

一五こうして城壁は五十二日を経て、エルルの月の二十五日に完成し
た。一六われわれの敵が皆これを聞いた時、われわれの周囲の異邦人はみ
な恐れ、大いに面目を失った。彼らはこの工事が、われわれの神の助け

によって成就したことを悟ったからである。一七またそのころ、ユダの尊
い人々は多くの手紙をトビヤに送った。トビヤの手紙もまた彼らにきた。
一八トビヤはアラの子シカニヤの婿であったので、ユダのうちの多くの者
が彼と誓いを立てていたからである。トビヤの子ヨハナンもベレキヤの子
メシュラムの娘を妻にめとった。一九彼らはまたトビヤの善行をわたしの
前に語り、またわたしの言葉を彼に伝えた。トビヤはたびたび手紙を送っ
て、わたしを恐れさせようとした。

第七章 一城壁が築かれて、とびらを設け、さらに門衛、歌うたう者お
よびレビびとを任命したので、二わたしは、わたしの兄弟ハナニと、城
のつかさハナニヤに命じて、エルサレムを治めさせた。彼は多くの者にま
さって忠信な、神を恐れる者であったからである。三わたしは彼らに言っ
た、「日の暑くなるまではエルサレムのもろもろの門を開いてはならない。

人々が立って守っている間に門を閉じさせ、貫の木を差せ。またエルサ
レムの住民の中から番兵を立てて、おのおのにその所を守らせ、またお
のおのの家と向かい合う所を守らせよ」。四町は広くて大きかったが、そ
の内の民は少なく、家々はまだ建てられていなかった。

五時に神はわたしの心に、尊い人々、つかさおよび民を集めて、家系
によってその名簿をしらべようとの思いを起された。わたしは最初に上っ
て来た人々の系図を発見し、その中にこのようにしるしてあるのを見いだ
した。

六バビロンの王ネブカデネザルが捕え移した捕囚のうち、ゆるされてエ
ルサレムおよびユダに上り、おのおの自分の町に帰ったこの州の人々は
次のとおりである。七彼らはゼルバベル、エシュア、ネヘミヤ、アザリヤ、
ラアミヤ、ナハマニ、モルデカイ、ビルシャン、ミスペレテ、ビグワイ、ネ
ホム、バアナと一緒に帰ってきた者たちである。

そのイスラエルの民の人数は次のとおりである。八パロシの子孫は二千
百七十二人。九シパテヤの子孫は三百七十二人。一〇アラの子孫は六百五十
二人。一一パハテ・モアブの子孫すなわちエシュアとヨアブの子孫は二千八
百十八人。一二エラムの子孫は一千二百五十四人。一三ザットの子孫は八百
四十五人。一四ザッカイの子孫は七百六十人。一五ビンヌイの子孫は六百四
十八人。一六ベバイの子孫は六百二十八人。一七アズガデの子孫は二千三百
二十二人。一八アドニカムの子孫は六百六十七人。一九ビグワイの子孫は二
千六十七人。二〇アデンの子孫は六百五十五人。二一ヒゼキヤの家のアテル
の子孫は九十八人。二二ハシュムの子孫は三百二十八人。二三ベザイの子孫
は三百二十四人。二四ハリフの子孫は百十二人。二五ギベオンの子孫は九十
五人。二六ベツレヘムおよびネトパの人々は百八十八人。二七アナトテの
人々は百二十八人。二八ベテ・アズマウテの人々は四十二人。二九キリア

テ・ヤリム、ケピラおよびベエロテの人々は七百四十三人。三〇ラマおよび
ゲバの人々は六百二十一人。三一ミクマシの人々は百二十二人。三二ベテ
ルおよびアイの人々は百二十三人。三三ほかのネボの人々は五十二人。三四
ほかのエラムの子孫は一千二百五十四人。三五ハリムの子孫は三百二十人。
三六エリコの人々は三百四十五人。三七ロド、ハデデおよびオノの人々は七
百二十一人。三八セナアの子孫は三千九百三十人。三九祭司では、エシュア
の家のエダヤの子孫が九百七十三人。四〇インメルの子孫が一千五十二人。
四一パシュルの子孫が一千二百四十七人。四二ハリムの子孫が一千十七人。
四三レビびとでは、エシュアの子孫すなわちホデワの子孫のうちのカデミ
エルの子孫が七十四人。
四四歌うたう者では、アサフの子孫が百四十八人。
四五門衛では、シャルムの子孫、アテルの子孫、タルモンの子孫、アック

ブの子孫、ハテタの子孫およびショバイの子孫合わせて百三十八人。
四六宮に仕えるしもべでは、ジハの子孫、ハスパの子孫、タバオテの子孫、
四七ケロスの子孫、シアの子孫、パドンの子孫、四八レバナの子孫、ハガバ
の子孫、サルマイの子孫、四九ハナンの子孫、ギデルの子孫、ガハルの子孫、
五〇レアヤの子孫、レヂンの子孫、ネコダの子孫、五一ガザムの子孫、ウザ
の子孫、パセアの子孫、五二ベサイの子孫、メウニムの子孫、ネフセシムの
子孫、五三バクブクの子孫、ハクパの子孫、ハルホルの子孫、五四バヅリテの
子孫、メヒダの子孫、ハルシャの子孫、五五バルコスの子孫、シセラの子孫、
テマの子孫、五六ネヂアの子孫およびハテパの子孫。

五七ソロモンのしもべであった者たちの子孫では、ソタイの子孫、ソペレ
テの子孫、ペリダの子孫、五八ヤアラの子孫、ダルコンの子孫、ギデルの子孫、
五九シパテヤの子孫、ハッテルの子孫、ポケレテ・ハッゼバイムの子孫、ア

モンの子孫。
六〇宮に仕えるしもべたちとソロモンのしもべであった者たちの子孫と
は合わせて三百九十二人。
六一テルメラ、テルハレサ、ケルブ、アドンおよびインメルから上って来
た者があったが、その氏族と、血統とを示して、イスラエルの者であるこ
とを明らかにすることができなかった。その人々は次のとおりである。六
二すなわちデラヤの子孫、トビヤの子孫、ネコダの子孫であって、合わせて
六百四十二人。六三また祭司のうちにホバヤの子孫、ハッコヅの子孫、バル
ジライの子孫がある。バルジライはギレアデびとバルジライの娘たちのう
ちから妻をめとったので、その名で呼ばれた。六四これらの者はこの系図に
載った者のうちに、自分の籍をたずねたが、なかったので、汚れた者とし
て祭司の職から除かれた。六五総督は彼らに告げて、ウリムとトンミムを

帯びる祭司の起るまでは、いと聖なる物を食べてはならぬと言った。
六六会衆は合わせて四万二千三百六十人であった。六七このほかに男女
の奴隷が七千三百三十七人、歌うたう者が男女合わせて二百四十五人あっ
た。六八その馬は七百三十六頭、その騾馬は二百四十五頭、六九そのらくだ
は四百三十五頭、そのろばは六千七百二十頭であった。
七〇氏族の長のうち工事のためにささげ物をした人々があった。総督は
金一千ダリク、鉢五十、祭司の衣服五百三十かさねを倉に納めた。七一ま
た氏族の長のうちのある人々は金二万ダリク、銀二千二百ミナを工事の
ために倉に納めた。七二その他の民の納めたものは金二万ダリク、銀二千
ミナ、祭司の衣服六十七かさねであった。
七三こうして祭司、レビびと、門衛、歌うたう者、民のうちのある人々、
宮に仕えるしもべたち、およびイスラエルびとは皆その町々に住んだ。

イスラエルの人々はその町々に住んで七月になった。
第八章一その時民は皆ひとりのようになって水の門の前の広場に集まり、
主がイスラエルに与えられたモーセの律法の書を持って来るように、学者
エズラに求めた。二祭司エズラは七月の一日に律法を携えて来て、男女
の会衆およびすべて聞いて悟ることのできる人々の前にあらわれ、三水
の門の前にある広場で、あけぼのから正午まで、男女および悟ることので
きる人々の前でこれを読んだ。民はみな律法の書に耳を傾けた。四学者
エズラはこの事のために、かねて設けた木の台の上に立ったが、彼のかた
わらには右の方にマッタテヤ、シマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤおよびマア
セヤが立ち、左の方にはペダヤ、ミサエル、マルキヤ、ハシュム、ハシバダ
ナ、ゼカリヤおよびメシュラムが立った。五エズラはすべての民の前にそ
の書を開いた。彼はすべての民よりも高い所にいたからである。彼が書

を開くと、すべての民は起立した。六エズラは大いなる神、主をほめ、民
は皆その手をあげて、「アアメン、アアメン」と言って答え、こうべをたれ、
地にひれ伏して主を拝した。七エシュア、バニ、セレビヤ、ヤミン、アッ
クブ、シャベタイ、ホデヤ、マアセヤ、ケリタ、アザリヤ、ヨザバデ、ハ
ナン、ペラヤおよびレビびとたちは民に律法を悟らせた。民はその所に
立っていた。八彼らはその書、すなわち神の律法をめいりょうに読み、そ
の意味を解き明かしてその読むところを悟らせた。

九総督であるネヘミヤと、祭司であり、学者であるエズラと、民を教え
るレビびとたちはすべての民に向かって「この日はあなたがたの神、主の
聖なる日です。嘆いたり、泣いたりしてはならない」と言った。すべての
民が律法の言葉を聞いて泣いたからである。一〇そして彼らに言った、「あ
なたがたは去って、肥えたものを食べ、甘いものを飲みなさい。その備え

のないものには分けてやりなさい。この日はわれわれの主の聖なる日です。
憂えてはならない。主を喜ぶことはあなたがたの力です」。一一レビびと
もまたすべての民を静めて、「泣くことをやめなさい。この日は聖なる日で
す。憂えてはならない」と言った。一二すべての民は去って食い飲みし、ま
た分け与えて、大いに喜んだ。これは彼らが読み聞かされた言葉を悟っ
たからである。

一三次の日、すべての民の氏族の長たち、祭司、レビびとらは律法の言葉
を学ぶために学者エズラのもとに集まってきて、一四律法のうちに主がモー
セに命じられたこと、すなわちイスラエルの人々は七月の祭の間、仮庵
の中に住むべきことがしるされているのを見いだした。一五またすべての
町々およびエルサレムにのべ伝えて、「あなたがたは山に出て行って、オ
リブと野生のオリブ、ミルトス、なつめやし、および茂った木の枝を取っ

てきて、しるされてあるとおり、仮庵を造れ」と言ってあるのを見いだし
た。一六それで民は出て行って、それを持って帰り、おのおのその家の屋根
の上、その庭、神の宮の庭、水の門の広場、エフライムの門の広場などに
仮庵を造った。一七捕囚から帰って来た会衆は皆仮庵を造って、仮庵に
住んだ。ヌンの子ヨシュアの日からこの日まで、イスラエルの人々はこの
ように行ったことがなかった。それでその喜びは非常に大きかった。一八
エズラは初めの日から終りの日まで、毎日神の律法の書を読んだ。人々
は七日の間、祭を行い、八日目になって、おきてにしたがって聖会を
開いた。

第九章一その月の二十四日にイスラエルの人々は集まって断食し、荒布
をまとい、土をかぶった。二そしてイスラエルの子孫は、すべての異邦人
を離れ、立って自分の罪と先祖の不義とをざんげした。三彼らはその所に

立って、その日の四分の一をもってその神、主の律法の書を読み、他の四
分の一をもってざんげをなし、その神、主を拝した。四その時エシュア、バ
ニ、カデミエル、シバニヤ、ブンニ、セレビヤ、バニ、ケナニらはレビびと
の台の上に立ち、大声をあげて、その神、主に呼ばわった。五それからま
たエシュア、カデミエル、バニ、ハシャブニヤ、セレビヤ、ホデヤ、セバニ
ヤ、ペタヒヤなどのレビびとは言った、「立ちあがって永遠から永遠にいま
すあなたがたの神、主をほめなさい。あなたの尊いみ名はほむべきかな。
これはすべての祝福とさんびを越えるものです」。

六またエズラは言った、「あなたは、ただあなたのみ、主でいらせられま
す。あなたは天と諸天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海
とその中のすべてのものを造り、これをことごとく保たれます。天の万軍
はあなたを拝します。七あなたは主、神でいらせられます。あなたは昔ア
ブラムを選んでカルデヤのウルから導き出し、彼にアブラハムという名を

与え、八彼の心があなたの前に忠信なのを見られて、彼と契約を結び、
その子孫にカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、エブスびとお
よびギルガシびととの地を与えると言われたが、ついにあなたはその約束を
成就されました。あなたは正しくいらせられるからです。
九あなたはわれわれの先祖がエジプトで苦難を受けるのを顧みられ、ま
た紅海のほとりで呼ばわり叫ぶのを聞きいれられ、一〇しるしと不思議とを
あらわしてパロと、そのすべての家来と、その国のすべての民を攻められ
ました。彼らがわれわれの先祖に対して、ごうまんにふるまったことを知
られたからです。そしてあなたが名をあげられたこと今日のようです。一一
あなたはまた彼らの前で海を分け、彼らに、かわいた地を踏んで海の中を
通らせ、彼らを追う者を、石を大水に投げ入れるように淵に投げ入れ、一
二昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもってその行くべき

道を照されました。一三あなたはまたシナイ山の上に下り、天から彼らと
語り、正しいおきてと、まことの律法および良きさだめと戒めとを授け、
一四あなたの聖なる安息日を彼らに示し、あなたのしもべモーセによって
戒めと、さだめと、律法とを彼らに命じ、一五天から食物を与えてその
飢えをとどめ、岩から水を出してそのかわきを潤し、また、彼らに与える
と誓われたその国にはいって、これを獲るように彼らに命じられました。
一六しかし彼ら、すなわちわれわれの先祖はごうまんにふるまい、かたく
なで、あなたの戒めに従わず、一七従うことを拒み、あなたが彼らの中
で行われた奇跡を心にとめず、かえってかたくなになり、みずからひと
りのかしらを立てて、エジプトの奴隷の生活に帰ろうとしました。しかし
あなたは罪をゆるす神、恵みあり、あわれみあり、怒ることおそく、いつく
しみ豊かにましまして、彼らを捨てられませんでした。一八また彼らがみず

から一つの鋳物の子牛を造って、『これはあなたがたをエジプトから導き
上ったあなたがたの神である』と言って、大いに汚し事を行った時にも、
一九あなたは大いなるあわれみをもって彼らを荒野に見捨てられず、昼は雲
の柱を彼らの上から離さないで道々彼らを導き、夜は火の柱をもって
彼らの行くべき道を照されました。二〇またあなたは良きみたまを賜わっ
て彼らを教え、あなたのマナを常に彼らの口に与え、また水を彼らに与え
て、かわきをとどめ、二一四十年の間彼らを荒野で養われたので、彼ら
はなんの欠けるところもなく、その衣服も古びず、その足もはれませんで
した。二二そしてあなたは彼らに諸国、諸民を与えて、これをすべて分か
ち取らせられました。彼らはヘシボンの王シホンの領地、およびバシャン
の王オグの領地を獲ました。二三また彼らの子孫を増して空の星のように
し、彼らの先祖たちに、はいって獲よと言われた地に彼らを導き入れられ

たので、二四その子孫は、はいってこの地を獲ました。あなたはまた、この
地に住むカナンびとを彼らの前に征服し、その王たちおよびその地の民を
彼らの手に渡して、意のままに扱わせられました。二五それで彼らは堅固
な町々および肥えた地を取り、もろもろの良い物の満ちた家、掘池、ぶど
う畑、オリブ畑および多くの果樹を獲、食べて飽き、肥え太り、あなた
の大いなる恵みによって楽しみました。
二六それにもかかわらず彼らは不従順で、あなたにそむき、あなたの律法
を後に投げ捨て、彼らを戒めて、あなたに立ち返らせようとした預言者た
ちを殺し、大いに汚し事を行いました。二七そこであなたは彼らを敵の手
に渡して苦しめられましたが、彼らがその苦難の時にあなたに呼ばわった
ので、あなたは天からこれを聞かれ、大いなるあわれみをもって彼らに救
う者を与え、敵の手から救わせられました。二八ところが彼らは安息を得

るやいなや、またあなたの前に悪事を行ったので、あなたは彼らを敵の
手に捨て置いて、これに治めさせられましたが、彼らがまた立ち返ってあ
なたに呼ばわったので、あなたは天からこれを聞き、あわれみをもってし
ばしば彼らを救い出し、二九彼らを戒めて、あなたの律法に引きもどそう
とされました。けれども彼らはごうまんにふるまい、あなたの戒めに従
わず、人がこれを行うならば、これによって生きるというあなたのおき
てを破って罪を犯し、肩をそびやかし、かたくなになって、聞き従おう
とはしませんでした。三〇それでもあなたは年久しく彼らを忍び、あなた
の預言者たちにより、あなたのみたまをもって彼らを戒められましたが、
彼らは耳を傾けなかったので、彼らを国々の民の手に渡されました。三
一しかしあなたは大いなるあわれみによって彼らを絶やさず、また彼らを
捨てられませんでした。あなたは恵みあり、あわれみある神でいらせられ

るからです。
三二それゆえ、われわれの神、契約を保ち、いつくしみを施される大い
にして力強く、恐るべき神よ、アッスリヤの王たちの時から今日まで、わ
れわれとわれわれの王たち、つかさたち、祭司たち、預言者たち、先祖た
ち、およびあなたのすべての民に臨んだもろもろの苦難を小さい事と見な
いでください。三三われわれに臨んだすべての事について、あなたは正しい
のです。あなたは誠実をもって行われたのに、われわれは悪を行ったの
です。三四われわれの王たち、つかさたち、祭司たち、先祖たちはあなたの
律法を行わず、あなたがお与えになった命令と戒めとに聞き従いませ
んでした。三五すなわち彼らはおのれの国におり、あなたが下さった大き
な恵みのうちにおり、またあなたがお与えになった広い肥えた地におりな
がら、あなたに仕えず、また自分の悪いわざをやめることをしませんでし
た。三六われわれは今日奴隷です。あなたがわれわれの先祖に与えて、そ

の実とその良き物とを食べさせようとされた地で、われわれは奴隷となっ
ているのです。三七そしてこの地はわれわれの罪のゆえに、あなたがわれわ
れの上に立てられた王たちのために多くの産物を出しています。かつ彼ら
はわれわれの身をも、われわれの家畜をも意のままに左右することができ
るので、われわれは大いなる苦難のうちにあるのです」。
三八このもろもろの事のためにわれわれは堅い契約を結んで、これを記録
し、われわれのつかさたち、レビびとたち祭司たちはこれに印を押した。
第一〇章一印を押した者はハカリヤの子である総督ネヘミヤ、およびゼ
デキヤ、二セラヤ、アザリヤ、エレミヤ、三パシュル、アマリヤ、マルキヤ、
四ハットシ、シバニヤ、マルク、五ハリム、メレモテ、オバデヤ、六ダニエ
ル、ギンネトン、バルク、七メシュラム、アビヤ、ミヤミン、八マアジヤ、
ビルガイ、シマヤで、これらは祭司である。
九レビびとではアザニヤの子エシュア、ヘナダデの子らのうちのビンヌ

イ、カデミエル、一〇およびその兄弟シバニヤ、ホデヤ、ケリタ、ペラヤ、
ハナン、一一ミカ、レホブ、ハシャビヤ、一二ザックル、セレビヤ、シバニ
ヤ、一三ホデヤ、バニ、ベニヌである。一四民のかしらではパロシ、パハテ・
モアブ、エラム、ザット、バニ、一五ブンニ、アズガデ、ベバイ、一六アド
ニヤ、ビグワイ、アデン、一七アテル、ヒゼキヤ、アズル、一八ホデヤ、ハ
シュム、ベザイ、一九ハリフ、アナトテ、ノバイ、二〇マグピアシ、メシュラ
ム、ヘジル、二一メシザベル、ザドク、ヤドア、二二ペラテヤ、ハナン、ア
ナニヤ、二三ホセア、ハナニヤ、ハシュブ、二四ハロヘシ、ピルハ、ショベ
ク、二五レホム、ハシャブナ、マアセヤ、二六アヒヤ、ハナン、アナン、二七
マルク、ハリム、バアナである。

二八その他の民、祭司、レビびと、門を守る者、歌うたう者、宮に仕える
しもべ、ならびにすべて国々の民と離れて神の律法に従った者およびそ
の妻、むすこ、娘などすべて知識と悟りのある者は、二九その兄弟である
尊い人々につき従い、神のしもべモーセによって授けられた神の律法

に歩み、われわれの主、主のすべての戒めと、おきてと、定めとを守り
行うために、のろいと誓いとに加わった。三〇われわれはこの地の民らに
われわれの娘を与えず、われわれのむすこに彼らの娘をめとらない。三
一またこの地の民らがたとい品物または穀物を安息日に携えて来て売ろ
うとしても、われわれは安息日または聖日にはそれを買わない。また七年
ごとに耕作をやめ、すべての負債をゆるす。

三二われわれはまたみずから規定を設けて、われわれの神の宮の用のた
めに年々シケルの三分の一を出し、三三供えのパン、常素祭、常燔祭のた
め、安息日、新月および定めの祭の供え物のため、聖なる物のため、イス
ラエルのあがないをなす罪祭、およびわれわれの神の宮のもろもろのわざ
のために用いることにした。三四またわれわれ祭司、レビびとおよび民はく
じを引いて、律法にしるされてあるようにわれわれの神、主の祭壇の上に

たくべきたきぎの供え物を、年々定められた時に氏族にしたがって、われ
われの神の宮に納める者を定めた。三五またわれわれの土地の初なり、お
よび各種の木の実の初なりを、年々主の宮に携えてくることを誓い、三
六また律法にしるしてあるように、われわれの子どもおよび家畜のういご、
およびわれわれの牛や羊のういごを、われわれの神の宮に携えてきて、
われわれの神の宮に仕える祭司に渡し、三七われわれの麦粉の初物、われ
われの供え物、各種の木の実、ぶどう酒および油を祭司のもとに携えて
行って、われわれの神の宮のへやに納め、またわれわれの土地の産物の十分
の一をレビびとに与えることにした。レビびとはわれわれのすべての農作
をなす町において、その十分の一を受くべき者だからである。三八レビび
とが十分の一を受ける時には、アロンの子孫である祭司が、そのレビびと
と共にいなければならない。そしてまたレビびとはその十分の一の十分の

一を、われわれの神の宮に携え上って、へやまたは倉に納めなければな
らない。三九すなわちイスラエルの人々およびレビの子孫は穀物、ぶどう
酒、および油の供え物を携えて行って、聖所の器物および勤めをする
祭司、門衛、歌うたう者たちのいるへやにこれを納めなければならない。
こうしてわれわれは、われわれの神の宮をなおざりにしない。

第一一章
一民のつかさたちはエルサレムに住み、その他の民はくじを引
いて、十人のうちからひとりずつを、聖都エルサレムに来て住ませ、九人
を他の町々に住ませた。二またすべてみずから進みでてエルサレムに住む
ことを申し出た人々は、民はこれを祝福した。
三さてエルサレムに住んだこの州の長たちは次のとおりである。ただ
しユダの町々ではおのおのその町々にある自分の所有地に住んだ。すなわ
ちイスラエルびと、祭司、レビびと、宮に仕えるしもべ、およびソロモンの

しもべであった者たちの子孫である。四そしてエルサレムにはユダの子孫お
よびベニヤミンの子孫のうちのある者たちが住んだ。すなわちユダの子孫
ではウジヤの子アタヤで、ウジヤはゼカリヤの子、ゼカリヤはアマリヤの
子、アマリヤはシパテヤの子、シパテヤはマハラレルの子、マハラレルは
ペレヅの子孫である。五またバルクの子マアセヤで、バルクはコロホゼの
子、コロホゼはハザヤの子、ハザヤはアダヤの子、アダヤはヨヤリブの子、
ヨヤリブはゼカリヤの子、ゼカリヤはシロニびとの子である。六ペレヅの
子孫でエルサレムに住んだ者は合わせて四百六十八人で、みな勇敢な人々
である。

七ベニヤミンの子孫では次のとおりである。すなわちメシュラムの子サ
ルで、メシュラムはヨエデの子、ヨエデはペダヤの子、ペダヤはコラヤの
子、コラヤはマアセヤの子、マアセヤはイテエルの子、イテエルはエサヤ

の子である。八その次はガバイおよびサライなどで合わせて九百二十八人。
九ジクリの子ヨエルが彼らの監督である。ハッセヌアの子ユダがその副官
として町を治めた。
一〇祭司ではヨヤリブの子エダヤ、ヤキン、一一および神の宮のつかさセ
ラヤで、セラヤはヒルキヤの子、ヒルキヤはメシュラムの子、メシュラム
はザドクの子、ザドクはメラヨテの子、メラヨテはアヒトブの子である。一
二宮の務をするその兄弟は八百二十二人あり、また、エロハムの子アダ
ヤがある。エロハムはペラリヤの子、ペラリヤはアムジの子、アムジはゼ
カリヤの子、ゼカリヤはパシホルの子、パシホルはマルキヤの子である。一
三アダヤの兄弟で、氏族の長たる者は二百四十二人あり、またアザリエ
ルの子アマシサイがある。アザリエルはアハザイの子、アハザイはメシレ
モテの子、メシレモテはインメルの子である。一四その兄弟である勇士は

百二十八人あり、その監督はハッゲドリムの子ザブデエルである。
一五レビびとではハシュブの子シマヤで、ハシュブはアズリカムの子、ア
ズリカムはハシャビヤの子、ハシャビヤはブンニの子である。一六またシャ
ベタイおよびヨザバデがある。これらはレビびとのかしらであって、神の
宮の外のわざをつかさどった。一七またミカの子マッタニヤがある。ミカ
はザブデの子、ザブデはアサフの子である。マッタニヤは祈の時に感謝
の言葉を唱え始める者である。その兄弟のうちのバクブキヤは彼に次ぐ
者であった。またシャンマの子アブダがある。シャンマはガラルの子、ガ
ラルはエドトンの子である。一八聖都におるレビびとは合わせて二百八十四
人であった。
一九門衛では門を守るアックブ、タルモンおよびその兄弟たち合わせて
百七十二人である。二〇その他のイスラエルびと、祭司、レビびとたちは皆

ユダのすべての町々にあって、おのおの自分の嗣業にとどまった。二一ただ
し宮に仕えるしもべたちはオペルに住み、ヂハおよびギシパが宮に仕え
るしもべたちを監督していた。
二二エルサレムにおるレビびとの監督はウジである。ウジはバニの子、バ
ニはハシャビヤの子、ハシャビヤはマッタニヤの子、マッタニヤはミカの子で
ある。ミカは歌うたう者なるアサフの子孫である。ウジは神の宮のわざを
監督した。二三彼らについては王からの命令があって、歌うたう者に日々
の定まった分を与えさせた。二四またユダの子ゼラの子孫であるメシザベ
ルの子ペタヒヤは王の手に属して民に関するすべての事を取り扱った。
二五また村々とその田畑については、ユダの子孫の者はキリアテ・アルバ
とその村々、デボンとその村々、エカブジエルとその村々に住み、二六エ
シュア、モラダおよびベテペレテに住み、二七ハザル・シュアルおよびベエ

ルシバとその村々に住み、二八チクラグおよびメコナとその村々に住み、二
九エンリンモン、ザレア、ヤルムテに住み、三〇ザノア、アドラムおよびそ
れらの村々、ラキシとその田野、アゼカとその村々に住んだ。こうして彼
らはベエルシバからヒンノムの谷にまで宿営した。三一ベニヤミンの子孫
はまたゲバからミクマシ、アヤおよびベテルとその村々に住み、三二アナト
テ、ノブ、アナニヤ、三三ハゾル、ラマ、ギッタイム、三四ハデデ、ゼボイ
ム、ネバラテ、三五ロド、オノ、工人の谷に住んだ。三六レビびとの組のユ
ダにあるもののうちベニヤミンに合したものもあった。

第一二章一シャルテルの子ゼルバベルおよびエシュアと一緒に上ってき
た祭司とレビびとは次のとおりである。すなわちセラヤ、エレミヤ、エズ
ラ、二アマリヤ、マルク、ハットシ、三シカニヤ、レホム、メレモテ、四イ
ド、ギンネトイ、アビヤ、五ミヤミン、マアデヤ、ビルガ、六シマヤ、ヨヤリ
ブ、エダヤ、七サライ、アモク、ヒルキヤ、エダヤで、これらの者はエシュ

アの時代に祭司およびその兄弟らのかしらであった。
八レビびとではエシュア、ビンヌイ、カデミエル、セレビヤ、ユダ、マッ
タニヤで、マッタニヤはその兄弟らと共に感謝のことをつかさどった。九
また彼らの兄弟であるバグブキヤおよびウンノは彼らの向かいに立って
勤めをした。一〇エシュアの子はヨアキム、ヨアキムの子はエリアシブ、エ
リアシブの子はヨイアダ、一一ヨイアダの子はヨナタン、ヨナタンの子はヤ
ドアである。

一二ヨアキムの時代に祭司で氏族の長であった者はセラヤの氏族ではメ
ラヤ、エレミヤの氏族ではハナニヤ、一三エズラの氏族ではメシュラム、ア
マリヤの氏族ではヨハナン、一四マルキの氏族ではヨナタン、シバニヤの
氏族ではヨセフ、一五ハリムの氏族ではアデナ、メラヨテの氏族ではヘルカ
イ、一六イドの氏族ではゼカリヤ、ギンネトンの氏族ではメシュラム、一七
アビヤの氏族ではジクリ、ミニヤミンの氏族、モアデヤの氏族ではピルタ

イ、一八ビルガの氏族ではシャンマ、シマヤの氏族ではヨナタン、一九ヨヤ
リブの氏族ではマッテナイ、エダヤの氏族ではウジ、二〇サライの氏族では
カライ、アモクの氏族ではエベル、二一ヒルキヤの氏族ではハシャビヤ、エ
ダヤの氏族ではネタンエルである。
二二レビびとについては、エリアシブ、ヨイアダ、ヨハナンおよびヤドアの
時代に、その氏族の長たちが登録された。また祭司たちもペルシャ王ダリ
ヨスの治世まで登録された。二三レビの子孫で氏族の長たる者は、エリア
シブの子ヨハナンの世まで歴代志の書にしるされている。二四レビびとのか
しらはハシャビヤ、セレビヤおよびカデミエルの子エシュアであって、その
兄弟たち相向かい合い、組と組と対応して神の人ダビデの命令に従い、
さんびと感謝をささげた。二五マツタニヤ、バクブキヤ、オバデヤ、メシュ
ラム、タルモンおよびアックブは門を守る者で門の内の倉を監督した。二

六これらはヨザダクの子エシュアの子ヨアキムの時代、また総督ネヘミヤ
および学者である祭司エズラの時代にいた人々である。
二七さてエルサレムの城壁の落成式に当って、レビびとを、そのすべて
の所から招いてエルサレムにこさせ、感謝と、歌と、シンバルと、立琴
と、琴とをもって喜んで落成式を行おうとした。二八そこで、歌うたう
人々はエルサレムの周囲の地方、ネトパびとの村々から集まってきた。二
九またベテギルガルおよびゲバとアズマウテの地方からも集まってきた。こ
の歌うたう者たちはエルサレムの周囲に自分の村々を建てていたからであ
る。三〇そして祭司とレビびとたちは身を清め、また民およびもろもろの門
と城壁とを清めた。
三一そこでわたしはユダのつかさたちを城壁の上にのぼらせ、また感謝
する者の二つの大きな組を作って、行進させた。その一つは城壁の上を

右に糞の門をさして進んだ。三二そのあとに従って進んだ者はホシャヤ、
およびユダのつかさたちの半ば、三三ならびにアザリヤ、エズラ、メシュラ
ム、三四ユダ、ベニヤミン、シマヤ、エレミヤであった。三五また数人の祭司
がラッパをもって従った。すなわちヨナタンの子ゼカリヤ。ヨナタンはシ
マヤの子、シマヤはマッタニヤの子、マッタニヤはミカヤの子、ミカヤは
ザックルの子、ザックルはアサフの子である。三六またゼカリヤの兄弟た
ちシマヤ、アザリエル、ミラライ、ギラライ、マアイ、ネタンエル、ユダ、
ハナニなどであって、神の人ダビデの楽器を持って従った。そして学者
エズラは彼らの先に進んだ。三七彼らは泉の門を経て、まっすぐに進み、
城壁の上り口で、ダビデの町の階段から上り、ダビデの家の上を過ぎて
東の方、水の門に至った。
三八他の一組の感謝する者は左に進んだ。わたしは民の半ばと共に彼

らのあとに従った。そして城壁の上を行き、炉の望楼の上を過ぎて、城壁
の広い所に至り、三九エフライムの門の上を通り、古い門を過ぎ、魚の門
およびハナネルの望楼とハンメアの望楼を過ぎて、羊の門に至り、近衛
の門に立ち止まった。四〇こうして二組の感謝する者は神の宮にはいって
立った。わたしもそこに立ち、つかさたちの半ばもわたしと共に立った。四
一また祭司エリアキム、マアセヤ、ミニヤミン、ミカヤ、エリオエナイ、ゼ
カリヤ、ハナニヤらはラッパを持ち、四二マアセヤ、シマヤ、エレアザル、
ウジ、ヨハナン、マルキヤ、エラムおよびエゼルも共にいた。そして歌う
たう者たちは声高く歌った。エズラヒヤはその監督であった。四三こうし
て彼らはその日、大いなる犠牲をささげて喜んだ。神が彼らを大いに喜
び楽しませられたからである。女子供までも喜んだ。それでエルサレム
の喜びの声は遠くまで聞こえた。

四四その日、倉のもろもろのへやをつかさどる人々を選び、ささげ物、
初物、十分の一など律法の定めるところの祭司およびレビびとの分を町々
の田畑にしたがって取り集めて、へやに入れることをつかさどらせた。これ
は祭司およびレビびとの仕えるのを、ユダびとが喜んだからである。四五
彼らはダビデおよびその子ソロモンの命令に従って、神の勤めおよび清
め事の勤めをした。歌うたう者および門を守る者もそのように行った。四
六昔ダビデおよびアサフの日には、歌うたう者のかしらがひとりいて、神
にさんびと感謝をささげる事があった。四七またゼルバベルの日およびネ
ヘミヤの日には、イスラエルびとはみな歌うたう者と門を守る者に日々の
分を与え、またレビびとに物を聖別して与え、レビびとはまたこれを聖別
してアロンの子孫に与えた。

第一三章一その日モーセの書を読んで民に聞かせたが、その中にアンモ

ンびと、およびモアブびとは、いつまでも神の会に、はいってはならないと
しるされているのを見いだした。二これは彼らがかつて、パンと水をもっ
てイスラエルの人々を迎えず、かえってこれをのろわせるためにバラムを
雇ったからである。しかしわれわれの神はそののろいを変えて祝福とさ
れた。三人々はこの律法を聞いた時、混血の民をことごとくイスラエルか
ら分け離した。

四これより先、われわれの神の宮のへやをつかさどっていた祭司エリア
シブは、トビヤと縁組したので、五トビヤのために大きなへやを備えた。そ
のへやはもと、素祭の物、乳香、器物および規定によってレビびと、歌
うたう者および門を守る者たちに与える穀物、ぶどう酒、油の十分の一、
ならびに祭司のためのささげ物を置いた所である。六その当時、わたしは
エルサレムにいなかった。わたしはバビロンの王アルタシャスタの三十二

年に王の所へ行ったが、しばらくたって王にいとまを請い、七エルサレム
に来て、エリアシブがトビヤのためにした悪事、すなわち彼のために神の
宮の庭に一つのへやを備えたことを発見した。八わたしは非常に怒り、ト
ビヤの家の器物をことごとくそのへやから投げだし、九命じて、すべての
へやを清めさせ、そして神の宮の器物および素祭、乳香などを再びそ
こに携え入れた。
一〇わたしはまたレビびとがその受くべき分を与えられていなかったこ
とを知った。これがためにその務をなすレビびとおよび歌うたう者たち
は、おのおの自分の畑に逃げ帰った。一一それでわたしはつかさたちを責
めて言った、「なぜ神の宮を捨てさせたのか」。そしてレビびとを招き集め
て、その持ち場に復帰させた。一二そこでユダの人々は皆、穀物、ぶどう
酒、油の十分の一を倉に携えてきた。一三わたしは祭司シレミヤ、学者

ザドクおよびレビびとペダヤを倉のつかさとし、またマッタニヤの子ザック
ルの子ハナンをその助手として倉をつかさどらせた。彼らは忠実な者と
思われたからである。彼らの任務は兄弟たちに分配する事であった。一
四わが神よ、この事のためにわたしを覚えてください。わが神の宮とその
勤めのためにわたしが行った良きわざをぬぐい去らないでください。
一五そのころわたしはユダのうちで安息日に酒ぶねを踏む者、麦束を持っ
てきて、ろばに負わす者、またぶどう酒、ぶどう、いちじくおよびさまざ
まの荷を安息日にエルサレムに運び入れる者を見たので、わたしは彼らが
食物を売っていたその日に彼らを戒めた。一六そこに住んでいたツロの
人々もまた魚およびさまざまの品物を持ってきて、安息日にユダの人々
に売り、エルサレムで商売した。一七そこでわたしはユダの尊い人々を
責めて言った、「あなたがたはなぜこの悪事を行って、安息日を汚すのか。

一八あなたがたの先祖も、このように行ったので、われわれの神はこのす
べての災を、われわれとこの町に下されたではないか。ところがあなた
がたは安息日を汚して、さらに大いなる怒りをイスラエルの上に招くので
ある」。
一九そこで安息日の前に、エルサレムのもろもろの門が暗くなり始めた
時、わたしは命じてそのとびらを閉じさせ、安息日が終るまでこれを開
いてはならないと命じ、わたしのしもべ数人を門に置いて、安息日に荷を
携え入れさせないようにした。二〇これがために、商人およびさまざま
の品物を売る者どもは一、二回エルサレムの外に宿った。二一わたしは彼
らを戒めて言った、「あなたがたはなぜ城壁の前に宿るのか。もしあな
たがたが重ねてそのようなことをするならば、わたしはあなたがたを処罰
する」と。そのとき以来、彼らは安息日にはこなかった。二二わたしはまた

レビびとに命じて、その身を清めさせ、来て門を守らせて、安息日を聖別
した。わが神よ、わたしのためにまた、このことを覚え、あなたの大いな
るいつくしみをもって、わたしをあわれんでください。
二三そのころまた、わたしはアシドド、アンモン、モアブの女をめとっ
たユダヤ人を見た。二四彼らの子供の半分はアシドドの言葉を語って、ユ
ダヤの言葉を語ることができず、おのおのその母親の出た民の言葉を語っ
た。二五わたしは彼らを責め、またののしり、そのうちの数人を撃って、そ
の毛を抜き、神の名をさして誓わせて言った、「あなたがたは彼らのむすこ
に自分の娘を与えてはならない。またあなたがたのむすこ、またはあなた
がた自身のために彼らの娘をめとってはならない。二六イスラエルの王ソ
ロモンはこれらのことによって罪を犯したではないか。彼のような王は多
くの国民のうちにもなく、神に愛せられた者である。神は彼をイスラエル

全国の王とせられた。ところが異邦の女たちは彼に罪を犯させた。二七
それゆえあなたがたが異邦の女をめとり、このすべての大いなる悪を行っ
て、われわれの神に罪を犯すのを、われわれは聞き流しにしておけようか」。
二八大祭司エリアシブの子ヨイアダのひとりの子はホロニびとサンバラテ
の婿であったので、わたしは彼をわたしのところから追い出した。二九わが
神よ、彼らのことを覚えてください。彼らは祭司の職を汚し、また祭司
およびレビびとの契約を汚しました。
三〇このように、わたしは彼らを清めて、異邦のものをことごとく捨てさ
せ、祭司およびレビびとの務を定めて、おのおのそのわざにつかせた。三
一また定められた時に、たきぎの供え物をささげさせ、また初物をささげ
させた。わが神よ、わたしを覚え、わたしをお恵みください。

エステル記

第一章一アハシュエロスすなわちインドからエチオピヤまで百二十七州
を治めたアハシュエロスの世、二アハシュエロス王が首都スサで、その国
の位に座していたころ、三その治世の第三年に、彼はその大臣および侍臣
たちのために酒宴を設けた。ペルシャとメデアの将軍および貴族ならび
に諸州の大臣たちがその前にいた。四その時、王はその盛んな国の富と、
その王威の輝きと、はなやかさを示して多くの日を重ね、百八十日に及
んだ。五これらの日が終った時、王は王の宮殿の園の庭で、首都スサに
いる大小のすべての民のために七日の間、酒宴を設けた。六そこには
白綿布の垂幕と青色のとばりとがあって、紫色の細布のひもで銀の輪お
よび大理石の柱につながれていた。また長いすは金銀で作られ、石膏と

大理石と真珠貝および宝石の切りはめ細工の床の上に置かれていた。七酒
は金の杯で賜わり、その杯はそれぞれ違ったもので、王の大きな度量
にふさわしく、王の用いる酒を惜しみなく賜わった。八その飲むことは法
にかない、だれもしいられることはなかった。これは王が人々におのおの
自分の好むようにさせよと宮廷のすべての役人に命じておいたからであ
る。九王妃ワシテもまたアハシュエロス王に属する王宮の内で女たちの
ために酒宴を設けた。

一〇七日目にアハシュエロス王は酒のために心が楽しくなり、王の前に
仕える七人の侍従メホマン、ビズタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタル
およびカルカスに命じて、一一王妃ワシテに王妃の冠をかぶらせて王の
前にこさせよと言った。これは彼女が美しかったので、その美しさを民
らと大臣たちに見せるためであった。一二ところが、王妃ワシテは侍従が

伝えた王の命令に従って来ることを拒んだので、王は大いに憤り、そ
の怒りが彼の内に燃えた。
一三そこで王は時を知っている知者に言った、――王はすべて法律と審判
に通じている者に相談するのを常とした。一四時に王の次にいた人々はペ
ルシャおよびメデアの七人の大臣カルシナ、セタル、アデマタ、タルシシ、
メレス、マルセナ、メムカンであった。彼らは皆王の顔を見る者で、国の
首位に座する人々であった――一五「王妃ワシテは、アハシュエロス王が
侍従をもって伝えた命令を行わないゆえ、法律に従って彼女にどうし
たらよかろうか」。一六メムカンは王と大臣たちの前で言った、「王妃ワシテ
はただ王にむかって悪い事をしたばかりでなく、すべての大臣およびアハ
シュエロス王の各州のすべての民にむかってもしたのです。一七王妃のこ
の行いはあまねくすべての女たちに聞えて、彼らはついにその目に夫

を卑しめ、『アハシュエロス王は王妃ワシテに、彼の前に来るように命じた
がこなかった』と言うでしょう。一八王妃のこの行いを聞いたペルシャと
メデアの大臣の夫人たちもまた、今日、王のすべての大臣たちにこのよう
に言うでしょう。そうすれば必ず卑しめと怒りが多く起ります。一九もし
王がよしとされるならば、ワシテはこの後、再びアハシュエロス王の前
にきてはならないという王の命令を下し、これをペルシャとメデアの法律
の中に書きいれて変ることのないようにし、そして王妃の位を彼女にま
さる他の者に与えなさい。二〇王の下される詔がこの大きな国にあま
ねく告げ示されるとき、妻たる者はことごとく、その夫を高下の別なく
共に敬うようになるでしょう」。二一王と大臣たちはこの言葉をよしとし
たので、王はメムカンの言葉のとおりに行った。二二王は王の諸州にあ
まねく書を送り、各州にはその文字にしたがい、各民族にはその言語に

したがって書き送り、すべて男子たる者はその家の主となるべきこと、ま
た自分の民の言語を用いて語るべきことをさとした。

第二章
一これらのことの後、アハシュエロス王の怒りがとけ、王はワシテ
および彼女のしたこと、また彼女に対して定めたことを思い起した。二時
に王に仕える侍臣たちは言った、「美しい若い処女たちを王のために尋ね
求めましょう。三どうぞ王はこの国の各州において役人を選び、美しい
若い処女をことごとく首都スサにある婦人の居室に集めさせ、婦人をつか
さどる王の侍従ヘガイの管理のもとにおいて、化粧のための品々を彼らに
与えてください。四こうして御意にかなうおとめをとって、ワシテの代り
に王妃としてください」。王はこの事をよしとし、そのように行った。
五さて首都スサにひとりのユダヤ人がいた。名をモルデカイといい、キ
シのひこ、シメイの孫、ヤイルの子で、ベニヤミンびとであった。六彼はバ

ビロンの王ネブカデネザルが捕えていったユダの王エコニヤと共に捕えら
れていった捕虜のひとりで、エルサレムから捕え移された者である。
七彼はそのおじの娘ハダッサすなわちエステルを養い育てた。彼女には父も母もなかったからである。このおとめは美しく、かわいらしかったが、その父母の死後、モルデカイは彼女を引きとって自分の娘としたのである。
八王の命令と詔が伝えられ、多くのおとめが首都スサに集められて、ヘガイの管理のもとにおかれたとき、エステルもまた王宮に携え行かれ、婦人をつかさどるヘガイの管理のもとにおかれた。
九このおとめはヘガイの心にかなって、そのいつくしみを得た。すなわちヘガイはすみやかに彼女に化粧の品々および食物の分け前を与え、また宮中から七人のすぐれた侍女を選んで彼女に付き添わせ、彼女とその侍女たちを婦人の居室のうちの最も良い所に移した。
一〇エステルは自分の民のことをも、自分の

同族のことをも人に知らせなかった。モルデカイがこれを知らすなと彼女に命じたからである。一一モルデカイはエステルの様子および彼女がどうしているかを知ろうと、毎日婦人の居室の庭の前を歩いた。

一二おとめたちはおのおの婦人のための規定にしたがって十二か月を経て後、順番にアハシュエロス王の所へ行くのであった。これは彼らの化粧の期間として、没薬の油を用いること六か月、香料および婦人の化粧に使う品々を用いること六か月が定められていたからである。一三こうしておとめは王の所へ行くのであった。そしておとめが婦人の居室を出て王宮へ行く時には、すべてその望む物が与えられた。一四そして夕方行って、あくる朝第二の婦人の居室に帰り、そばめたちをつかさどる王の侍従シャシガズの管理に移された。王がその女を喜び、名ざして召すのでなければ、再び王の所へ行くことはなかった。

一五さてモルデカイのおじアビハイルの娘、すなわちモルデカイが引き
とって自分の娘としたエステルが王の所へ行く順番となったが、彼女
は婦人をつかさどる王の侍従ヘガイが勧めた物のほか何をも求めなかっ
た。エステルはすべて彼女を見る者に喜ばれた。一六エステルがアハシュ
エロス王に召されて王宮へ行ったのは、その治世の第七年の十月、すな
わちテベテの月であった。一七王はすべての婦人にまさってエステルを愛
したので、彼女はすべての処女にまさって王の前に恵みといつくしみとを
得た。王はついに王妃の冠を彼女の頭にいただかせ、ワシテに代って
王妃とした。一八そして王は大いなる酒宴を催して、すべての大臣と侍臣
をもてなした。エステルの酒宴がこれである。また諸州に免税を行い、
王の大きな度量にしたがって贈り物を与えた。
一九二度目に処女たちが集められたとき、モルデカイは王の門にすわっ

ていた。二〇エステルはモルデカイが命じたように、まだ自分の同族のことをも自分の民のことをも人に知らせなかった。エステルはモルデカイの言葉に従うこと、彼に養い育てられた時と少しも変らなかった。二一そのころ、モルデカイが王の門にすわっていた時、王の侍従で、王のへやの戸を守る者のうちのビグタンとテレシのふたりが怒りのあまりアハシュエロス王を殺そうとねらっていたが、二二その事がモルデカイに知れたので、彼はこれを王妃エステルに告げ、エステルはこれをモルデカイの名をもって王に告げた。二三その事が調べられて、それに相違ないことがあらわれたので、彼らふたりは木にかけられた。この事は王の前で日誌の書にかきしるされた。

第三章一これらの事の後、アハシュエロス王はアガグびとハンメダタの子ハマンを重んじ、これを昇進させて、自分と共にいるすべての大臣た

ちの上にその席を定めさせた。二王の門の内にいる王の侍臣たちは皆ひざ
まずいてハマンに敬礼した。これは王が彼についてこうすることを命じた
からである。しかしモルデカイはひざまずかず、また敬礼しなかった。三そ
こで王の門にいる王の侍臣たちはモルデカイにむかって、「あなたはどうし
て王の命令にそむくのか」と言った。四彼らは毎日モルデカイにこう言う
けれども聞きいれなかったので、その事がゆるされるかどうかを見ようと、
これをハマンに告げた。なぜならモルデカイはすでに自分のユダヤ人であ
ることを彼らに語ったからである。五ハマンはモルデカイのひざまずかず、
また自分に敬礼しないのを見て怒りに満たされたが、六ただモルデカイだ
けを殺すことを潔しとしなかった。彼らがモルデカイの属する民をハマ
ンに知らせたので、ハマンはアハシュエロスの国のうちにいるすべてのユ
ダヤ人、すなわちモルデカイの属する民をことごとく滅ぼそうと図った。

七アハシュエロス王の第十二年の正月すなわちニサンの月に、ハマンの
前で、十二月すなわちアダルの月まで、一日一日のため、一月一月のため
に、プルすなわちくじを投げさせた。
八そしてハマンはアハシュエロス王に
言った、「お国の各州にいる諸民のうちに、散らされて、別れ別れになっ
ている一つの民がいます。その法律は他のすべての民のものと異なり、ま
た彼らは王の法律を守りません。それゆえ彼らを許しておくことは王のた
めになりません。
九もし王がよしとされるならば、彼らを滅ぼせと詔を
お書きください。そうすればわたしは王の事をつかさどる者たちの手に銀
一万タラントを量りわたして、王の金庫に入れさせましょう」。
一〇そこで
王は手から指輪をはずし、アガグびとハンメダタの子で、ユダヤ人の敵であ
るハマンにわたした。
一一そして王はハマンに言った、「その銀はあなたに
与える。その民もまたあなたに与えるから、よいと思うようにしなさい」。

一二そこで正月の十三日に王の書記官が召し集められ、王の総督、各州
の知事および諸民のつかさたちにハマンが命じたことをことごとく書きし
るした。すなわち各州に送るものにはその文字を用い、諸民に送るもの
にはその言語を用い、おのおのアハシュエロス王の名をもってそれを書き、
王の指輪をもってそれに印を押した。一三そして急使をもってその書を王
の諸州に送り、十二月すなわちアダルの月の十三日に、一日のうちにす
べてのユダヤ人を、若い者、老いた者、子供、女の別なく、ことごとく
滅ぼし、殺し、絶やし、かつその貨財を奪い取れと命じた。一四この文書
の写しを詔として各州に伝え、すべての民に公示して、その日のため
に備えさせようとした。一五急使は王の命令により急いで出ていった。こ
の詔は首都スサで発布された。時に王とハマンは座して酒を飲んでい
たが、スサの都はあわてて惑った。

第四章一モルデカイはすべてこのなされたことを知ったとき、その衣を
裂き、荒布をまとい、灰をかぶり、町の中へ行って大声をあげ、激しく叫
んで、二王の門の入口まで行った。荒布をまとっては王の門の内にはいる
ことができないからである。三すべて王の命令と詔をうけ取った各州
ではユダヤ人のうちに大いなる悲しみがあり、断食、嘆き、叫びが起り、
また荒布をまとい、灰の上に座する者が多かった。
四エステルの侍女たちおよび侍従たちがきて、この事を告げたので、王妃
は非常に悲しみ、モルデカイに着物を贈り、それを着せて、荒布を脱がせ
ようとしたが受けなかった。五そこでエステルは王の侍従のひとりで、王が
自分にはべらせたハタクを召し、モルデカイのもとへ行って、それは何事で
あるか、何ゆえであるかを尋ねて来るようにと命じた。六ハタクは出て、王
の門の前にある町の広場にいるモルデカイのもとへ行くと、七モルデカイ

は自分の身に起ったすべての事を彼に告げ、かつハマンがユダヤ人を滅ぼ
すことのために王の金庫に量り入れると約束した銀の正確な額を告げた。
八また彼らを滅ぼさせるために、スサで発布された詔書の写しを彼にわ
たし、それをエステルに見せ、かつ説きあかし、彼女が王のもとへ行って
その民のために王のあわれみを請い、王の前に願い求めるように彼女に言
い伝えよと言った。九ハタクが帰ってきてモルデカイの言葉をエステルに
告げたので、一〇エステルはハタクに命じ、モルデカイに言葉を伝えさせて
言った、一一「王の侍臣および王の諸州の民は皆、男でも女でも、すべ
て召されないのに内庭にはいって王のもとへ行く者は、必ず殺されなけ
ればならないという一つの法律のあることを知っています。ただし王がそ
の者に金の笏を伸べれば生きることができるのです。しかしわたしはこ
の三十日の間、王のもとへ行くべき召をこうむらないのです」。一二エス

テルの言葉をモルデカイに告げたので、一三モルデカイは命じてエステルに
答えさせて言った、「あなたは王宮にいるゆえ、すべてのユダヤ人と異な
り、難を免れるだろうと思ってはならない。一四あなたがもし、このよう
な時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救がユダヤ人のために
起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう。あ
なたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが
知りましょう」。一五そこでエステルは命じてモルデカイに答えさせた、一
六「あなたは行ってスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために
断食してください。三日のあいだ夜も昼も食い飲みしてはなりません。わ
たしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律に
そむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないの
なら、死にます」。一七モルデカイは行って、エステルがすべて自分に命じ

たとおりに行った。
第五章 一 三日目にエステルは王妃の服を着、王宮の内庭に入り、王の
広間にむかって立った。王は王宮の玉座に座して王宮の入口にむかっ
ていたが、
二 王妃エステルが庭に立っているのを見て彼女に恵みを示し、そ
の手にある金の笏をエステルの方に伸ばしたので、エステルは進みよっ
てその笏の頭にさわった。
三 王は彼女に言った、「王妃エステルよ、何を
求めるのか。あなたの願いは何か。国の半ばでもあなたに与えよう」。
四
エステルは言った、「もし王がよしとされるならば、きょうわたしが王の
ために設けた酒宴に、ハマンとご一緒にお臨みください」。
五 そこで王は
「ハマンを速く連れてきて、エステルの言うようにせよ」と言い、やがて王
とハマンはエステルの設けた酒宴に臨んだ。
六 酒宴の時、王はエステルに
言った、「あなたの求めることは何か。必ず聞かれる。あなたの願いは何

か。国の半ばでも聞きとどけられる」。七エステルは答えて言った、「わた
しの求め、わたしの願いはこれです。八もしわたしが王の目の前に恵みを
得、また王がもしわたしの求めを許し、わたしの願いを聞きとどけるのを
よしとされるならば、ハマンとご一緒に、あすまた、わたしが設けようと
する酒宴に、お臨みください。わたしはあす王のお言葉どおりにいたしま
しょう」。

九こうしてハマンはその日、心に喜び楽しんで出てきたが、ハマンは
モルデカイが王の門にいて、自分にむかって立ちあがりもせず、また身動
きもしないのを見たので、モルデカイに対し怒りに満たされた。一〇しかし
ハマンは耐え忍んで家に帰り、人をやってその友だちおよび妻ゼレシを呼
んでこさせ、一一そしてハマンはその富の栄華と、そのむすこたちの多いこ
とと、すべて王が自分を重んじられたこと、また王の大臣および侍臣たち

にまさって自分を昇進させられたことを彼らに語った。一二ハマンはまた
言った、「王妃エステルは酒宴を設けたが、わたしのほかはだれも王と共
にこれに臨ませなかった。あすもまたわたしは王と共に王妃に招かれてい
る。一三しかしユダヤ人モルデカイが王の門に座しているのを見る間は、
これらの事もわたしには楽しくない」。一四その時、妻ゼレシとすべての友
は彼に言った、「高さ五十キュビトの木を立てさせ、あすの朝、モルデカイ
をその上に掛けるように王に申し上げなさい。そして王と一緒に楽しんで
その酒宴においでなさい」。ハマンはこの事をよしとして、その木を立てさ
せた。

第六章一その夜、王は眠ることができなかったので、命じて日々の事を
しるした記録の書を持ってこさせ、王の前で読ませたが、二その中に、モル
デカイがかつて王の侍従で、王のへやの戸を守る者のうちのビグタナとテ

レシのふたりが、アハシュエロス王を殺そうとねらっていることを告げた、
としるされているのを見いだした。三そこで王は言った、「この事のために、
どんな栄誉と爵位をモルデカイに与えたか」。王に仕える侍臣たちは言っ
た、「何も彼に与えていません」。四王は言った、「庭にいるのはだれか」。こ
の時ハマンはモルデカイのために設けた木にモルデカイを掛けることを王
に申し上げようと王宮の外庭にはいってきていた。五王の侍臣たちが「ハ
マンが庭に立っています」と王に言ったので、王は「ここへ、はいらせよ」
と言った。六やがてハマンがはいって来ると王は言った、「王が栄誉を与え
ようと思う人にはどうしたらよかろうか」。ハマンは心のうちに言った、
「王はわたし以外にだれに栄誉を与えようと思われるだろうか」。七ハマン
は王に言った、「王が栄誉を与えようと思われる人のためには、八王の着ら
れた衣服を持ってこさせ、また王の乗られた馬、すなわちその頭に王冠を

いただいた馬をひいてこさせ、九その衣服と馬とを王の最も尊い大臣の
ひとりの手にわたして、王が栄誉を与えようと思われる人にその衣服を着
させ、またその人を馬に乗せ、町の広場を導いて通らせ、『王が栄誉を与
えようと思う人にはこうするのだ』とその前に呼ばわらせなさい」。一〇そ
れで王はハマンに言った、「急いであなたが言ったように、その衣服と馬と
を取り寄せ、王の門に座しているユダヤ人モルデカイにそうしなさい。あ
なたが言ったことを一つも欠いてはならない」。一一そこでハマンは衣服と
馬とを取り寄せ、モルデカイにその衣服を着せ、彼を馬に乗せて町の広場
を通らせ、その前に呼ばわって、「王が栄誉を与えようと思う人にはこう
するのだ」と言った。

一二こうしてモルデカイは王の門に帰ってきたが、ハマンは憂え悩み、頭
をおおって急いで家に帰った。一三そしてハマンは自分の身に起った事を

ことごとくその妻ゼレシと友だちに告げた。するとその知者たちおよび妻
ゼレシは彼に言った、「あのモルデカイ、すなわちあなたがその人の前に敗
れ始めた者が、もしユダヤ人の子孫であるならば、あなたは彼に勝つこと
はできない。必ず彼の前に敗れるでしょう」。
一四彼らがなおハマンと話している時、王の侍従たちがきてハマンを促
し、エステルが設けた酒宴に臨ませた。

第七章
一王とハマンは王妃エステルの酒宴に臨んだ。二このふつか目の
酒宴に王はまたエステルに言った、「王妃エステルよ、あなたの求めるこ
とは何か。必ず聞かれる。あなたの願いは何か。国の半ばでも聞きとど
けられる」。三王妃エステルは答えて言った、「王よ、もしわたしが王の目
の前に恵みを得、また王がもしよしとされるならば、わたしの求めにした
がってわたしの命をわたしに与え、またわたしの願いにしたがってわたし

の民をわたしに与えてください。四わたしとわたしの民は売られて滅ぼさ
れ、殺され、絶やされようとしています。もしわたしたちが男女の奴隷と
して売られただけなら、わたしは黙っていたでしょう。わたしたちの難儀
は王の損失とは比較にならないからです」。五アハシュエロス王は王妃エス
テルに言った、「そんな事をしようと心にたくらんでいる者はだれか。ま
たどこにいるのか」。六エステルは言った、「そのあだ、その敵はこの悪いハ
マンです」。そこでハマンは王と王妃の前に恐れおののいた。七王は怒っ
て酒宴の席を立ち、宮殿の園へ行ったが、ハマンは残って王妃エステル
に命ごいをした。彼は王が自分に害を加えようと定めたのを見たからで
ある。八王が宮殿の園から酒宴の場所に帰ってみると、エステルのいた
長いすの上にハマンが伏していたので、王は言った、「彼はまたわたしの
家で、しかもわたしの前で王妃をはずかしめようとするのか」。この言葉が

王の口から出たとき、人々は、ハマンの顔をおおった。九その時、王に付
き添っていたひとりの侍従ハルボナが「王のためによい事を告げたあのモ
ルデカイのためにハマンが用意した高さ五十キュビトの木がハマンの家に
立っています」と言ったので、王は「彼をそれに掛けよ」と言った。一〇そ
こで人々はハマンをモルデカイのために備えてあったその木に掛けた。こ
うして王の怒りは和らいだ。

第八章一その日アハシュエロス王は、ユダヤ人の敵ハマンの家を王妃エ
ステルに与えた。モルデカイは王の前にきた。これはエステルが自分とモ
ルデカイがどんな関係の者であるかを告げたからである。二王はハマンか
ら取り返した自分の指輪をはずして、モルデカイに与えた。エステルはモ
ルデカイにハマンの家を管理させた。

三エステルは再び王の前に奏し、その足もとにひれ伏して、アガグび

とハマンの陰謀すなわち彼がユダヤ人に対して企てたその計画を除くこ
とを涙ながらに請い求めた。
四王はエステルにむかって金の笏を伸べた
ので、エステルは身を起して王の前に立ち、
五そして言った、「もし王がよ
しとされ、わたしが王の前に恵みを得、またこの事が王の前に正しいと見
え、かつわたしが王の目にかなうならば、アガグびとハンメダタの子ハマ
ンが王の諸州にいるユダヤ人を滅ぼそうとはかって書き送った書を取り
消す旨を書かせてください。
六どうしてわたしは、わたしの民に臨もうと
する災を、だまって見ていることができましょうか。どうしてわたしの
同族の滅びるのを、だまって見ていることができましょうか」。
七アハシュ
エロス王は王妃エステルとユダヤ人モルデカイに言った、「ハマンがユダヤ
人を殺そうとしたので、わたしはハマンの家をエステルに与え、またハマ
ンを木に掛けさせた。
八あなたがたは自分たちの思うままに王の名をもっ

てユダヤ人についての書をつくり、王の指輪をもってそれに印を押すがよ
い。王の名をもって書き、王の指輪をもって印を押した書はだれも取り消
すことができない」。
九その時王の書記官が召し集められた。それは三月すなわちシワンの月
の二十三日であった。そしてインドからエチオピヤまでの百二十七州にい
る総督、諸州の知事および大臣たちに、モルデカイがユダヤ人について命
じたとおりに書き送った。すなわち各州にはその文字を用い、各民族に
はその言語を用いて書き送り、ユダヤ人に送るものにはその文字と言語と
を用いた。一〇その書はアハシュエロス王の名をもって書かれ、王の指輪を
もって印を押し、王の御用馬として、そのうまやに育った早馬に乗る急使
によって送られた。一一その中で、王はすべての町にいるユダヤ人に、彼
らが相集まって自分たちの生命を保護し、自分たちを襲おうとする諸国、

諸州のすべての武装した民を、その妻子もろともに滅ぼし、殺し、絶やし、
かつその貨財を奪い取ることを許した。一二ただしこの事をアハシュエロ
ス王の諸州において、十二月すなわちアダルの月の十三日に、一日のう
ちに行うことを命じた。一三この書いた物の写しを詔として各州に
伝え、すべての民に公示して、ユダヤ人に、その日のために備えして、その
敵にあだをかえさせようとした。一四王の御用馬である早馬に乗った急使
は、王の命によって急がされ、せきたてられて出て行った。この詔は
首都スサで出された。
一五モルデカイは青と白の朝服を着、大きな金の冠をいただき、紫色
の細布の上着をまとって王の前から出て行った。スサの町中、声をあげ
て喜んだ。一六ユダヤ人には光と喜びと楽しみと誉があった。一七い
ずれの州でも、いずれの町でも、すべて王の命令と詔の伝達された

所では、ユダヤ人は喜び楽しみ、酒宴を開いてこの日を祝日とした。
そしてこの国の民のうち多くの者がユダヤ人となった。これはユダヤ人を
恐れる心が彼らのうちに起ったからである。

第九章一十二月すなわちアダルの月の十三日、王の命令と詔の行
われる時が近づいたとき、すなわちユダヤ人の敵が、ユダヤ人を打ち伏せ
ようと望んでいたのに、かえってユダヤ人が自分たちを憎む者を打ち伏せ
ることとなったその日に、二ユダヤ人はアハシュエロス王の各州にある
自分たちの町々に集まり、自分たちに害を加えようとする者を殺そうとし
たが、だれもユダヤ人に逆らうことのできるものはなかった。すべての民
がユダヤ人を恐れたからである。三諸州の大臣、総督、知事および王の
事をつかさどる者は皆ユダヤ人を助けた。彼らはモルデカイを恐れたから
である。四モルデカイは王の家で大いなる者となり、その名声は各州に

聞えわたった。この人モルデカイがますます勢力ある者となったからで
ある。五そこでユダヤ人はつるぎをもってすべての敵を撃って殺し、滅ぼ
し、自分たちを憎む者に対し心のままに行った。六ユダヤ人はまた首都ス
サにおいても五百人を殺し、滅ぼした。七またパルシャンダタ、ダルポン、
アスパタ、八ポラタ、アダリヤ、アリダタ、九パルマシタ、アリサイ、アリダ
イ、ワエザタ、一〇すなわちハンメダタの子で、ユダヤ人の敵であるハマン
の十人の子をも殺した。しかし、そのぶんどり物には手をかけなかった。
一一その日、首都スサで殺された者の数が王に報告されると、一二王は
王妃エステルに言った、「ユダヤ人は首都スサで五百人を殺し、またハマン
の十人の子を殺した。王のその他の諸州ではどんなに彼らは殺したこと
であろう。さてあなたの求めることは何か。必ず聞かれる。更にあなた
の願いは何か。必ず聞きとどけられる」。一三エステルは言った、「もし王

がよしとされるならば、どうぞスサにいるユダヤ人にあすも、きょうの詔
のように行うことをゆるしてください。かつハマンの十人の子を木に掛け
させてください」。一四王はそうせよと命じたので、スサにおいて詔が
出て、ハマンの十人の子は木に掛けられた。一五アダルの月の十四日にまた
スサにいるユダヤ人が集まり、スサで三百人を殺した。しかし、そのぶん
どり物には手をかけなかった。
一六王の諸州にいる他のユダヤ人もまた集まって、自分たちの生命を
保護し、その敵に勝って平安を得、自分たちを憎む者七万五千人を殺した。
しかし、そのぶんどり物には手をかけなかった。一七これはアダルの月の十
三日であって、その十四日に休んで、その日を酒宴と喜びの日とした。一
八しかしスサにいるユダヤ人は十三日と十四日に集まり、十五日に休んで、
その日を酒宴と喜びの日とした。一九それゆえ村々のユダヤ人すなわち

城壁のない町々に住む者はアダルの月の十四日を喜びの日、酒宴の日、
祝日とし、互に食べ物を贈る日とした。
二〇モルデカイはこれらのことを書きしるしてアハシュエロス王の諸州
にいるすべてのユダヤ人に、近い者にも遠い者にも書を送り、二一アダルの
月の十四日と十五日とを年々祝うことを命じた。二二すなわちこの両日
にユダヤ人がその敵に勝って平安を得、またこの月は彼らのために憂いか
ら喜びに変り、悲しみから祝日に変ったので、これらを酒宴と喜びの日
として、互に食べ物を贈り、貧しい者に施しをする日とせよとさとした。
二三そこでユダヤ人は彼らがすでに始めたように、またモルデカイが彼
らに書き送ったように、行うことを約束した。二四これはアガグびとハン
メダタの子ハマン、すなわちすべてのユダヤ人の敵がユダヤ人を滅ぼそう
とはかり、プルすなわちくじを投げて彼らを絶やし、滅ぼそうとしたが、二

五エステルが王の前にきたとき、王は書を送って命じ、ハマンがユダヤ人
に対して企てたその悪い計画をハマンの頭上に臨ませ、彼とその子らを
木に掛けさせたからである。
二六このゆえに、この両日をプルの名にした
がってプリムと名づけた。そしてこの書のすべての言葉により、またこの
事について見たところ、自分たちの会ったところによって、
二七ユダヤ人
は相定め、年々その書かれているところにしたがい、その定められた時に
したがって、この両日を守り、自分たちと、その子孫およびすべて自分た
ちにつらなる者はこれを行い続けて廃することなく、
二八この両日を、
代々、家々、州々、町々において必ず覚えて守るべきものとし、これ
らのプリムの日がユダヤ人のうちに廃せられることのないようにし、また
この記念がその子孫の中に絶えることのないようにした。
二九さらにアビハイルの娘である王妃エステルとユダヤ人モルデカイは、

権威をもってこのプリムの第二の書を書き、それを確かめた。三〇そしてアハシュエロスの国の百二十七州にいるすべてのユダヤ人に、平和と真実の言葉をもって書を送り、三一断食と悲しみのことについて、ユダヤ人モルデカイと王妃エステルが、かつてユダヤ人に命じたように、またユダヤ人たちが、かつて自分たちとその子孫のために定めたように、プリムのこれらの日をその定めた時に守らせた。三二エステルの命令はプリムに関するこれらの事を確定した。またこれは書にしるされた。

第一〇章

一アハシュエロス王はその国および海に沿った国々にみつぎを課した。二彼の権力と勢力によるすべての事業、および王がモルデカイを高い地位にのぼらせた事の詳しい話はメデアとペルシャの王たちの日誌の書にしるされているではないか。三ユダヤ人モルデカイはアハシュエロス王に次ぐ者となり、ユダヤ人の中にあって大いなる者となり、その多

くの兄弟(きょうだい)に喜(よろこ)ばれた。彼(かれ)はその民(たみ)の幸福(こうふく)を求(もと)め、すべての国民(こくみん)に平和(へいわ)を述(の)べたからである。

ヨブ記

第一章一ウヅの地にヨブという名の人があった。そのひととなりは全く、
かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった。
二彼に男の子七人と女の子三人があり、
三その家畜は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭で、しもべも非常に多く、この人は東の人々のうちで最も大いなる者であった。
四そのむすこたちは、めいめい自分の日に、自分の家でふるまいを設け、その三人の姉妹をも招いて一緒に食い飲みするのを常とした。
五そのふるまいの日がひとめぐり終るごとに、ヨブは彼らを呼び寄せて聖別し、朝早く起きて、彼らすべての数にしたがって燔祭をささげた。これはヨブが「わたしのむすこたちは、ことによったら罪を犯し、その心に神をのろったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつも、この

ように行った。
六ある日、神の子たちが来て、主の前に立った。サタンも来てその中に
いた。七主は言われた、「あなたはどこから来たか」。サタンは主に答えて
言った、「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。八主はサタン
に言われた、「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、
神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。九サタンは主
に答えて言った、「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。一〇あなたは彼
とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられた
ではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地
にふえたのです。一一しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物
を撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろう
でしょう」。一二主はサタンに言われた、「見よ、彼のすべての所有物をあ

なたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」。サタンは主の
前から出て行った。
一三ある日ヨブのむすこ、娘たちが第一の兄の家で食事をし、酒を飲ん
でいたとき、一四使者がヨブのもとに来て言った、「牛が耕し、ろばがその
かたわらで草を食っていると、一五シバびとが襲ってきて、これを奪い、つ
るぎをもってしもべたちを打ち殺しました。わたしはただひとりのがれて、
あなたに告げるために来ました」。一六彼がなお語っているうちに、またひ
とりが来て言った、「神の火が天から下って、羊およびしもべたちを焼き
滅ぼしました。わたしはただひとりのがれて、あなたに告げるために来ま
した」。一七彼がなお語っているうちに、またひとりが来て言った、「カルデ
ヤびとが三組に分れて来て、らくだを襲ってこれを奪い、つるぎをもって
しもべたちを打ち殺しました。わたしはただひとりのがれて、あなたに告

げるために来ました」。一八彼がなお語っているうちに、またひとりが来て
言った、「あなたのむすこ、娘たちが第一の兄の家で食事をし、酒を飲ん
でいると、一九荒野の方から大風が吹いてきて、家の四すみを撃ったので、
あの若い人たちの上につぶれ落ちて、皆死にました。わたしはただひとり
のがれて、あなたに告げるために来ました」。
二〇このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝
し、二一そして言った、

「わたしは裸で母の胎を出た。
また裸でかしこに帰ろう。
主が与え、主が取られたのだ。
主のみ名はほむべきかな」。

二二すべてこの事においてヨブは罪を犯さず、また神に向かって愚かな

ことを言わなかった。
第二章一ある日、また神の子たちが来て、主の前に立った。サタンもま
たその中に来て、主の前に立った。二主はサタンに言われた、「あなたはど
こから来たか」。サタンは主に答えて言った、「地を行きめぐり、あちらこ
ちら歩いてきました」。三主はサタンに言われた、「あなたは、わたしのしも
べヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にない
ことを気づいたか。あなたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうと
したが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした」。四サタンは主に答え
て言った、「皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っ
ているすべての物をも与えます。五しかしいま、あなたの手を伸べて、彼
の骨と肉とを撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あ
なたをのろうでしょう」。六主はサタンに言われた、「見よ、彼はあなたの

手にある。ただ彼の命を助けよ」。
七サタンは主の前から出て行って、ヨブを撃ち、その足の裏から頭の
頂まで、いやな腫物をもって彼を悩ました。八ヨブは陶器の破片を取り、
それで自分の身をかき、灰の中にすわった。九時にその妻は彼に言った、「あ
なたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死に
なさい」。一〇しかしヨブは彼女に言った、「あなたの語ることは愚かな女
の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、
うけるべきではないか」。すべてこの事においてヨブはそのくちびるをもっ
て罪を犯さなかった。
一一時に、ヨブの三人の友がこのすべての災のヨブに臨んだのを聞い
て、めいめい自分の所から尋ねて来た。すなわちテマンびとエリパズ、シュ
ヒびとビルダデ、ナアマびとゾパルである。彼らはヨブをいたわり、慰め

ようとして、たがいに約束してきたのである。一二彼らは目をあげて遠方
から見たが、彼のヨブであることを認めがたいほどであったので、声をあげ
て泣き、めいめい自分の上着を裂き、天に向かって、ちりをうちあげ、自分
たちの頭の上にまき散らした。一三こうして七日七夜、彼と共に地に座し
ていて、ひと言も彼に話しかける者がなかった。彼の苦しみの非常に大き
いのを見たからである。

第三章一この後、ヨブは口を開いて、自分の生れた日をのろった。二す
なわちヨブは言った、

三「わたしの生れた日は滅びうせよ。
『男の子が、胎にやどった』と言った夜も
そのようになれ。
四その日は暗くなるように。

神が上からこれを顧みられないように。
光がこれを照さないように。
五やみと暗黒がこれを取りもどすように。
雲が、その上にとどまるように。
日を暗くする者が、これを脅かすように。
六その夜は、暗やみが、これを捕えるように。
年の日のうちに加わらないように。
月の数にもはいらないように。
七また、その夜は、はらむことのないように。
喜びの声がそのうちに聞かれないように。
八日をのろう者が、これをのろうように。
レビヤタンを奮い起すに巧みな者が、

これをのろうように。
九その明けの星は暗くなるように。
光を望んでも、得られないように。
また、あけぼののまぶたを見ることのないように。
一〇これは、わたしの母の胎の戸を閉じず、
また悩みをわたしの目に隠さなかったからである。
一一なにゆえ、わたしは胎から出て、死ななかったのか。
腹から出たとき息が絶えなかったのか。
一二なにゆえ、ひざが、わたしを受けたのか。
なにゆえ、乳ぶさがあって、
わたしはそれを吸ったのか。
一三そうしなかったならば、
わたしは伏して休み、眠ったであろう。

そうすればわたしは安んじており、
一四自分のために荒れ跡を築き直した
地の王たち、参議たち、
一五あるいは、こがねを持ち、
しろがねを家に満たした
君たちと一緒にいたであろう。
一六なにゆえ、わたしは人知れずおりる胎児のごとく、
光を見ないみどりごのようでなかったのか。
一七かしこでは悪人も、あばれることをやめ、
うみ疲れた者も、休みを得、
一八捕われ人も共に安らかにおり、
追い使う者の声を聞かない。

一九小さい者も大きい者もそこにおり、
奴隷も、その主人から解き放される。
二〇なにゆえ、悩む者に光を賜い、
心の苦しむ者に命を賜わったのか。
二一このような人は死を望んでも来ない、
これを求めることは隠れた宝を
掘るよりも、はなはだしい。
二二彼らは墓を見いだすとき、非常に喜び楽しむのだ。
二三なにゆえ、その道の隠された人に、
神が、まがきをめぐらされた人に、光を賜わるのか。
二四わたしの嘆きはわが食物に代って来り、
わたしのうめきは水のように流れ出る。

二五 わたしの恐れるものが、わたしに臨み、
わたしの恐れおののくものが、わが身に及ぶ。
二六 わたしは安らかでなく、またおだやかでない。
わたしは休みを得ない、ただ悩みのみが来る」。
第四章 一 その時、テマンびとエリパズが答えて言った、
二 「もし人があなたにむかって意見を述べるならば、
あなたは腹を立てるでしょうか。
しかしだれが黙っておれましょう。
三 見よ、あなたは多くの人を教えさとし、
衰えた手を強くした。
四 あなたの言葉はつまずく者をたすけ起し、
かよわいひざを強くした。

五ところが今、この事があなたに臨むと、
あなたは耐え得ない。
この事があなたに触れると、あなたはおじ惑う。
六あなたが神を恐れていることは、
あなたのよりどころではないか。
あなたの道の全きことは、あなたの望みではないか。
七考えてみよ、だれが罪のないのに、
滅ぼされた者があるか。
どこに正しい者で、断ち滅ぼされた者があるか。
八わたしの見た所によれば、不義を耕し、
害悪をまく者は、それを刈り取っている。
九彼らは神のいぶきによって滅び、

その怒りの息によって消えうせる。
一〇ししのほえる声、たけきししの声はともにやみ、
若きししのきばは折られ、
一一雄じしは獲物を得ずに滅び、
雌じしの子は散らされる。
一二さて、わたしに、言葉がひそかに臨んだ、
わたしの耳はそのささやきを聞いた。
一三すなわち人の熟睡するころ、
夜の幻によって思い乱れている時、
一四恐れがわたしに臨んだので、おののき、
わたしの骨はことごとく震えた。
一五時に、霊があって、わたしの顔の前を過ぎたので、

わたしの身の毛はよだった。
一六そのものは立ちどまったが、
わたしはその姿を見わけることができなかった。
一つのかたちが、わたしの目の前にあった。
わたしは静かな声を聞いた、
一七『人は神の前に正しくありえようか。
人はその造り主の前に清くありえようか。
一八見よ、彼はそのしもべをさえ頼みとせず、
その天使をも誤れる者とみなされる。
一九まして、泥の家に住む者、
ちりをその基とする者、
しみのようにつぶされる者。

二〇彼(かれ)らは朝(あさ)から夕(ゆう)までの間(あいだ)に打(う)ち砕(くだ)かれ、
顧(かえり)みる者(もの)もなく、永遠(えいえん)に滅(ほろ)びる。
二一もしその天幕(てんまく)の綱(つな)が
彼(かれ)らのうちに取(と)り去(さ)られるなら、
ついに悟(さと)ることもなく、死(し)にうせるではないか』。

第五章

一試(こころ)みに呼(よ)んでみよ、
だれかあなたに答(こた)える者(もの)があるか。
どの聖者(せいじゃ)にあなたは頼(たの)もうとするのか。
二確(たし)かに、憤(いきどお)りは愚(おろ)かな者(もの)を殺(ころ)し、
ねたみはあさはかな者(もの)を死(し)なせる。
三わたしは愚(おろ)かな者(もの)の根(ね)を張(は)るのを見(み)た、

しかしわたしは、にわかにそのすみかをのろった。
四その子らは安きを得ず、
町の門でしえたげられても、これを救う者がない。
五その収穫は飢えた人が食べ、
いばらの中からさえ、これを奪う。
また、かわいた者はその財産をあえぎ求める。
六苦しみは、ちりから起るものでなく、
悩みは土から生じるものでない。
七人が生れて悩みを受けるのは、
火の子が上に飛ぶにひとしい。
八しかし、わたしであるならば、神に求め、
神に、わたしの事をまかせる。
九彼は大いなる事をされるかたで、測り知れない、

その不思議なみわざは数えがたい。
一〇彼は地に雨を降らせ、野に水を送られる。
一一彼は低い者を高くあげ、
悲しむ者を引き上げて、安全にされる。
一二彼は悪賢い者の計りごとを敗られる。
それで何事もその手になし遂げることはできない。
一三彼は賢い者を、彼ら自身の悪巧みによって捕え、
曲った者の計りごとをくつがえされる。
一四彼らは昼も、やみに会い、
真昼にも、夜のように手探りする。
一五彼は貧しい者を彼らの口のつるぎから救い、
また強い者の手から救われる。

一六それゆえ乏しい者に望みがあり、
不義はその口を閉じる。
一七見よ、神に戒められる人はさいわいだ。
それゆえ全能者の懲しめを軽んじてはならない。
一八彼は傷つけ、また包み、
撃ち、またその手をもっていやされる。
一九彼はあなたを六つの悩みから救い、
七つのうちでも、災はあなたに触れることがない。
二〇ききんの時には、あなたをあがなって、
死を免れさせ、
いくさの時には、つるぎの力を免れさせられる。
二一あなたは舌をもってむち打たれる時にも、

おおい隠され、
滅びが来る時でも、恐れることはない。
二二あなたは滅びと、ききんとを笑い、
地の獣をも恐れることはない。
二三あなたは野の石と契約を結び、
野の獣はあなたと和らぐからである。
二四あなたは自分の天幕の安全なことを知り、
自分の家畜のおりを見回っても、欠けた物がなく、
二五また、あなたの子孫の多くなり、
そのすえが地の草のようになるのを知るであろう。
二六あなたは高齢に達して墓に入る、
あたかも麦束をその季節になって

打ち場に運びあげるようになるであろう。
二七 見よ、われわれの尋ねきわめた所はこのとおりだ。
あなたはこれを聞いて、みずから知るがよい」。

第六章

一 ヨブは答えて言った、
二 「どうかわたしの憤りが正しく量られ、
同時にわたしの災も、はかりにかけられるように。
三 そうすれば、これは海の砂よりも重いに相違ない。
それゆえ、わたしの言葉が軽率であったのだ。
四 全能者の矢が、わたしのうちにあり、
わたしの霊はその毒を飲み、
神の恐るべき軍勢が、わたしを襲い攻めている。
五 野ろばは、青草のあるのに鳴くであろうか。

牛は飼葉の上でうなるであろうか。
六味のない物は塩がなくて食べられようか。
すべりひゆのしるは味があろうか。
七わたしの食欲はこれに触れることを拒む。
これは、わたしのきらう食物のようだ。
八どうかわたしの求めるものが獲られるように。
どうか神がわたしの望むものをくださるように。
九どうか神がわたしを打ち滅ぼすことをよしとし、
み手を伸べてわたしを断たれるように。
一〇そうすれば、わたしはなお慰めを得、
激しい苦しみの中にあっても喜ぶであろう。
わたしは聖なる者の言葉を

否んだことがないからだ。
一一わたしにどんな力があって、
なお待たねばならないのか。
わたしにどんな終りがあるので、
なお耐え忍ばねばならないのか。
一二わたしの力は石の力のようであるのか。
わたしの肉は青銅のようであるのか。
一三まことに、わたしのうちに助けはなく、
救われる望みは、わたしから追いやられた。
一四その友に対するいつくしみをさし控える者は、
全能者を恐れることをすてる。
一五わが兄弟たちは谷川のように、

過(す)ぎ去(さ)る出水(でみず)のように欺(あざむ)く。
一六これは氷(こおり)のために黒(くろ)くなり、
そのうちに雪(ゆき)が隠(かく)れる。
一七これは暖(あたた)かになると消(き)え去(さ)り、
暑(あつ)くなるとその所(ところ)からなくなる。
一八隊商(たいしょう)はその道(みち)を転(てん)じ、
むなしい所(ところ)へ行(い)って滅(ほろ)びる。
一九テマの隊商(たいしょう)はこれを望(のぞ)み、
シバの旅(たび)びとはこれを慕(した)う。
二〇彼(かれ)らはこれにたよったために失望(しつぼう)し、
そこに来(き)てみて、あわてる。
二一あなたがたは今(いま)わたしにはこのような者(もの)となった。

あなたがたはわたしの災難を見て恐れた。
二二わたしは言ったことがあるか、『わたしに与えよ』と、
あるいは『あなたがたの財産のうちから
わたしのために、まいないを贈れ』と、
二三あるいは『あだの手からわたしを救い出せ』と、
あるいは『しえたげる者の手から
わたしをあがなえ』と。
二四わたしに教えよ、そうすればわたしは黙るであろう。
わたしの誤っている所をわたしに悟らせよ。
二五正しい言葉はいかに力のあるものか。
しかしあなたがたの戒めは何を戒めるのか。
二六あなたがたは言葉を戒めうると思うのか。

望みの絶えた者の語ることは風のようなものだ。
二七あなたがたは、みなしごのためにくじをひき、
あなたがたの友をさえ売り買いするであろう。
二八今、どうぞわたしを見られよ、
わたしはあなたがたの顔に向かって偽らない。
二九どうぞ、思いなおせ、まちがってはならない。
さらに思いなおせ、
わたしの義は、なおわたしのうちにある。
三〇わたしの舌に不義があるか。
わたしの口は災を
わきまえることができぬであろうか。

第七章

一 地上の人には、
激しい労務があるではないか。
またその日は雇人の日のようではないか。
二 奴隷が夕暮を慕うように、
雇人がその賃銀を望むように、
三 わたしは、むなしい月を持たせられ、
悩みの夜を与えられる。
四 わたしは寝るときに言う、『いつ起きるだろうか』と。
しかし夜は長く、暁までころびまわる。
五 わたしの肉はうじと土くれとをまとい、
わたしの皮は固まっては、またくずれる。
六 わたしの日は機のひよりも速く、

望(のぞ)みをもたずに消(き)え去(さ)る。
七記憶(きおく)せよ、わたしの命(いのち)は息(いき)にすぎないことを。
わたしの目(め)は再(ふたた)び幸(さいわい)を見(み)ることがない。
八わたしを見(み)る者(もの)の目(め)は、
かさねてわたしを見(み)ることがなく、
あなたがわたしに目(め)を向(む)けられても、
わたしはいない。
九雲(くも)が消(き)えて、なくなるように、
陰府(よみ)に下(くだ)る者(もの)は上(あ)がって来(く)ることがない。
一〇彼(かれ)は再(ふたた)びその家(いえ)に帰(かえ)らず、
彼(かれ)の所(ところ)も、もはや彼(かれ)を認(みと)めない。
一一それゆえ、わたしはわが口(くち)をおさえず、

わたしの霊のもだえによって語り、
わたしの魂の苦しさによって嘆く。
一二わたしは海であるのか、龍であるのか、
あなたはわたしの上に見張りを置かれる。
一三『わたしの床はわたしを慰め、
わたしの寝床はわが嘆きを軽くする』と
わたしが言うとき、
一四あなたは夢をもってわたしを驚かし、
幻をもってわたしを恐れさせられる。
一五それゆえ、わたしは息の止まることを願い、
わが骨よりもむしろ死を選ぶ。
一六わたしは命をいとう。

わたしは長く生きることを望まない。
わたしに構わないでください。
わたしの日は息にすぎないのだから。
一七 人は何者なので、あなたはこれを大きなものとし、
これにみ心をとめ、
一八 朝ごとに、これを尋ね、
絶え間なく、これを試みられるのか。
一九 いつまで、あなたはわたしに目を離さず、
つばをのむまも、わたしを捨てておかれないのか。
二〇 人を監視される者よ、わたしが罪を犯したとて、
あなたに何をなしえようか。
なにゆえ、わたしをあなたの的とし、

わたしをあなたの重荷とされるのか。
二一なにゆえ、わたしのとがをゆるさず、
わたしの不義を除かれないのか。
わたしはいま土の中に横たわる。
あなたがわたしを尋ねられても、
わたしはいないでしょう」。

第八章

一 時にシュヒびとビルダデが答えて言った、
二「いつまであなたは、そのような事を言うのか。
あなたの口の言葉は荒い風ではないか。
三 神は公義を曲げられるであろうか。
全能者は正義を曲げられるであろうか。
四 あなたの子たちが彼に罪を犯したので、

彼らをそのとがの手に渡されたのだ。
五あなたがもし神に求め、全能者に祈るならば、
六あなたがもし清く、正しくあるならば、
彼は必ずあなたのために立って、
あなたの正しいすみかを栄えさせられる。
七あなたの初めは小さくあっても、
あなたの終りは非常に大きくなるであろう。
八先の代の人に問うてみよ、
先祖たちの尋ねきわめた事を学べ。
九われわれはただ、きのうからあった者で、
何も知らない、
われわれの世にある日は、影のようなものである。

一〇彼(かれ)らはあなたに教(おし)え、あなたに語(かた)り、
その悟(さと)りから言葉(ことば)を出(だ)さないであろうか。
一一紙草(かみぐさ)は泥(どろ)のない所(ところ)に生長(せいちょう)することができようか。
葦(あし)は水(みず)のない所(ところ)におい茂(しげ)ることができようか。
一二これはなお青(あお)くて、まだ刈(か)られないのに、
すべての草(くさ)に先(さき)だって枯(か)れる。
一三すべて神(かみ)を忘(わす)れる者(もの)の道(みち)はこのとおりだ。
神(かみ)を信(しん)じない者(もの)の望(のぞ)みは滅(ほろ)びる。
一四その頼(たの)むところは断(た)たれ、
その寄(よ)るところは、くもの巣(す)のようだ。
一五その家(いえ)によりかかろうとすれば、家(いえ)は立(た)たず、
それにすがろうとしても、それは耐(た)えない。

一六彼は日の前に青々と茂り、
その若枝を園にはびこらせ、
一七その根を石塚にからませ、
岩の間に生きていても、
一八もしその所から取り除かれれば、
その所は彼を拒んで言うであろう、
『わたしはあなたを見たことがない』と。
一九見よ、これこそ彼の道の喜びである、
そしてほかの者が地から生じるであろう。
二〇見よ、神は全き人を捨てられない。
また悪を行う者の手を支持されない。
二一彼は笑いをもってあなたの口を満たし、

喜びの声をもってあなたのくちびるを満たされる。
二二あなたを憎む者は恥を着せられ、
悪しき者の天幕はなくなる」。

第九章

一ヨブは答えて言った、
二「まことにわたしは、その事の
そのとおりであることを知っている。
しかし人はどうして神の前に正しくありえようか。
三よし彼と争おうとしても、
千に一つも答えることができない。
四彼は心賢く、力強くあられる。
だれが彼にむかい、おのれをかたくなにして、
栄えた者があるか。

五彼は、山を移されるが、山は知らない。
彼は怒りをもって、これらをくつがえされる。
六彼が、地を震い動かしてその所を離れさせられると、
その柱はゆらぐ。
七彼が日に命じられると、日は出ない。
彼はまた星を閉じこめられる。
八彼はただひとり天を張り、
海の波を踏まれた。
九彼は北斗、オリオン、
プレアデスおよび南の密室を造られた。
一〇彼が大いなる事をされることは測りがたく、
不思議な事をされることは数知れない。

一一見(み)よ、彼(かれ)がわたしのかたわらを通(とお)られても、
わたしは彼(かれ)を見(み)ない。
彼(かれ)は進(すす)み行(い)かれるが、わたしは彼(かれ)を認(みと)めない。
一二見(み)よ、彼(かれ)が奪(うば)い去(さ)られるのに、
だれが彼(かれ)をはばむことができるか。
だれが彼(かれ)にむかって『あなたは何(なに)をするのか』と
言(い)うことができるか。
一三神(かみ)はその怒(いか)りをやめられない。
ラハブを助(たす)ける者(もの)どもは彼(かれ)のもとにかがんだ。
一四どうしてわたしは彼(かれ)に答(こた)え、
言葉(ことば)を選(えら)んで、彼(かれ)と議論(ぎろん)することができよう。
一五たといわたしは正(ただ)しくても答(こた)えることができない。

わたしを責められる者に
あわれみを請わなければならない。
一六たといわたしが呼ばわり、
彼がわたしに答えられても、
わたしの声に耳を傾けられたとは信じない。
一七彼は大風をもってわたしを撃ち砕き、
ゆえなく、わたしに多くの傷を負わせ、
一八わたしに息をつかせず、
苦い物をもってわたしを満たされる。
一九力の争いであるならば、彼を見よ、
さばきの事であるならば、
だれが彼を呼び出すことができよう。

二〇たといわたしは正(ただ)しくても、
わたしの口(くち)はわたしを罪(つみ)ある者(もの)とする。
たといわたしは罪(つみ)がなくても、
彼(かれ)はわたしを曲(まが)った者(もの)とする。
二一わたしは罪(つみ)がない、しかしわたしは自分(じぶん)を知(し)らない。
わたしは自分(じぶん)の命(いのち)をいとう。
二二皆同一(みなどういつ)である。それゆえ、わたしは言(い)う、
『彼(かれ)は罪(つみ)のない者(もの)と、悪(あ)しき者(もの)とを
共(とも)に滅(ほろ)ぼされるのだ』と。
二三災(わざわい)がにわかに人(ひと)を殺(ころ)すような事(こと)があると、
彼(かれ)は罪(つみ)のない者(もの)の苦難(くなん)をあざ笑(わら)われる。
二四世(よ)は悪人(あくにん)の手(て)に渡(わた)されてある。

彼はその裁判人の顔をおおわれる。
もし彼でなければ、これはだれのしわざか。
二五わたしの日は飛脚よりも速く、
飛び去って幸を見ない。
二六これは走ること葦舟のごとく、
えじきに襲いかかる、わしのようだ。
二七たといわたしは『わが嘆きを忘れ、
憂い顔をかえて元気よくなろう』と言っても、
二八わたしはわがもろもろの苦しみを恐れる。
あなたがわたしを罪なき者とされないことを
わたしは知っているからだ。
二九わたしは罪ある者とされている。

どうして、いたずらに労(ろう)する必要(ひつよう)があるか。
三〇たといわたしは雪(ゆき)で身(み)を洗(あら)い、
灰汁(あく)で手(て)を清(きよ)めても、
三一あなたはわたしを、みぞの中(なか)に投(な)げ込(こ)まれるので、
わたしの着物(きもの)も、わたしをいとうようになる。
三二神(かみ)はわたしのように人(ひと)ではないゆえ、
わたしは彼(かれ)に答(こた)えることができない。
われわれは共(とも)にさばきに臨(のぞ)むことができない。
三三われわれの間(あいだ)には、
われわれふたりの上(うえ)に手(て)を置(お)くべき仲裁者(ちゅうさいしゃ)がない。
三四どうか彼(かれ)がそのつえをわたしから取(と)り離(はな)し、
その怒(いか)りをもって、

わたしを恐(おそ)れさせられないように。
三五そうすれば、わたしは語(かた)って、
彼(かれ)を恐(おそ)れることはない。
わたしはみずからそのような者(もの)ではないからだ。

第一〇章

一わたしは自分(じぶん)の命(いのち)をいとう。
わたしは自分(じぶん)の嘆(なげ)きを包(つつ)まず言(い)いあらわし、
わが魂(たましい)の苦(くる)しみによって語(かた)ろう。
二わたしは神(かみ)に申(もう)そう、
わたしを罪(つみ)ある者(もの)とされないように。
なぜわたしと争(あらそ)われるかを知(し)らせてほしい。
三あなたはしえたげをなし、み手(て)のわざを捨(す)て、

悪人の計画を照すことを良しとされるのか。
四あなたの持っておられるのは肉の目か、
あなたは人が見るように見られるのか。
五あなたの日は人の日のごとく、
あなたの年は人の年のようであるのか。
六あなたはなにゆえわたしのとがを尋ね、
わたしの罪を調べられるのか。
七あなたはわたしの罪のないことを知っておられる。
またあなたの手から救い出しうる者はない。
八あなたの手はわたしをかたどり、わたしを作った。
ところが今あなたはかえって、わたしを滅ぼされる。
九どうぞ覚えてください、

あなたは土くれをもってわたしを作られた事を。
ところが、わたしをちりに返そうとされるのか。
一〇あなたはわたしを乳のように注ぎ、
乾酪のように凝り固まらせたではないか。
一一あなたは肉と皮とをわたしに着せ、
骨と筋とをもってわたしを編み、
一二命といつくしみとをわたしに授け、
わたしを顧みてわが霊を守られた。
一三しかしあなたはこれらの事をみ心に秘めおかれた。
この事があなたの心のうちにあった事を
わたしは知っている。
一四わたしがもし罪を犯せば、

あなたはわたしに目をつけて、
わたしを罪から解き放されない。
一五わたしがもし悪ければわたしはわざわいだ。
たといわたしが正しくても、
わたしは頭を上げることができない。
わたしは恥に満ち、悩みを見ているからだ。
一六もし頭をあげれば、
あなたは、ししのようにわたしを追い、
わたしにむかって再びくすしき力をあらわされる。
一七あなたは証人を入れ替えてわたしを攻め、
わたしにむかってあなたの怒りを増し、
新たに軍勢を出してわたしを攻められる。

一八なにゆえあなたはわたしを胎から出されたか、
わたしは息絶えて目に見られることなく、
一九胎から墓に運ばれて、
初めからなかった者のようであったなら、
よかったのに。
二〇わたしの命の日はいくばくもないではないか。
どうぞ、しばしわたしを離れて、
少しく慰めを得させられるように。
二一わたしが行って、帰ることのないその前に、
これを得させられるように。
わたしは暗き地、暗黒の地へ行く。
二二これは暗き地で、やみにひとしく、

暗黒で秩序なく、光もやみのようだ」。

第一一章

一そこでナアマびとゾパルは答えて言った、
二「言葉が多ければ、答なしにすまされるだろうか。
口の達者な人は義とされるだろうか。
三あなたのむなしい言葉は人を沈黙させるだろうか。
あなたがあざけるとき、
人はあなたを恥じさせないだろうか。
四あなたは言う、『わたしの教は正しい、
わたしは神の目に潔い』と。
五どうぞ神が言葉を出し、
あなたにむかってくちびるを開き、
六知恵の秘密をあなたに示されるように。

神はさまざまの知識をもたれるからである。
それであなたは知るがよい、神はあなたの罪よりも
軽くあなたを罰せられることを。
七あなたは神の深い事を窮めることができるか。
全能者の限界を窮めることができるか。
八それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。
それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか。
九その量は地よりも長く、海よりも広い。
一〇彼がもし行きめぐって人を捕え、
さばきに召し集められるとき、
だれが彼をはばむことができよう。
一一彼は卑しい人間を知っておられるからだ。

彼は不義を見る時、
これに心をとめられぬであろうか。
一二しかし野ろばの子が人として生れるとき、
愚かな者も悟りを得るであろう。
一三もしあなたが心を正しくするならば、
神に向かって手を伸べるであろう。
一四もしあなたの手に不義があるなら、それを遠く去れ、
あなたの天幕に悪を住まわせてはならない。
一五そうすれば、あなたは恥じることなく
顔をあげることができ、
堅く立って、恐れることはない。
一六あなたは苦しみを忘れ、

あなたのこれを覚えることは、
流れ去った水のようになる。
一七そしてあなたの命は真昼よりも光り輝き、
たとい暗くても朝のようになる。
一八あなたは望みがあるゆえに安んじ、
保護されて安らかにいこうことができる。
一九あなたは伏してやすみ、
あなたを恐れさせるものはない。
多くの者はあなたの好意を求めるであろう。
二〇しかし悪しき者の目は衰える。
彼らは逃げ場を失い、
その望みは息の絶えるにひとしい」。

第一二章

一そこでヨブは答えて言った、
二「まことに、あなたがたのみ、人である、
知恵はあなたがたと共に死ぬであろう。
三しかしわたしも、あなたがたと同様に悟りをもつ。
わたしはあなたがたに劣らない。
だれがこのような事を知らないだろうか。
四わたしは神に呼ばわって、聞かれた者であるのに、
その友の物笑いとなっている。
正しく全き人は物笑いとなる。
五安らかな者の思いには、
不幸な者に対する侮りがあって、
足のすべる者を待っている。

六かすめ奪う者の天幕は栄え、
神を怒らす者は安らかである。
自分の手に神を携えている者も同様だ。
七しかし獣に問うてみよ、
それはあなたに教える。
空の鳥に問うてみよ、
それはあなたに告げる。
八あるいは地の草や木に問うてみよ、
彼らはあなたに教える。
海の魚もまたあなたに示す。
九これらすべてのもののうち、いずれか
主の手がこれをなしたことを知らぬ者があろうか。

一〇すべての生き物の命、
およびすべての人の息は彼の手のうちにある。
一一口が食物を味わうように、
耳は言葉をわきまえないであろうか。
一二老いた者には知恵があり、
命の長い者には悟りがある。
一三知恵と力は神と共にあり、
深慮と悟りも彼のものである。
一四彼が破壊すれば、再び建てることができない。
彼が人を閉じ込めれば、開き出すことができない。
一五彼が水を止めれば、それはかれ、
彼が水を出せば、地をくつがえす。

一六 力と深き知恵は彼と共にあり、
惑わされる者も惑わす者も彼のものである。
一七 彼は議士たちを裸にして連れ行き、
さばきびとらを愚かにし、
一八 王たちのきずなを解き、
彼らの腰に腰帯を巻き、
一九 祭司たちを裸にして連れ行き、
力ある者を滅ぼし、
二〇 みずから頼む者たちの言葉を奪い、
長老たちの分別を取り去り、
二一 君たちの上に侮りを注ぎ、
強い者たちの帯を解き、

二二暗やみの中から隠れた事どもをあらわし、
暗黒を光に引き出し、
二三国々を大きくし、またこれを滅ぼし、
国々を広くし、また捕え行き、
二四地の民の長たちの悟りを奪い、
彼らを道なき荒野にさまよわせ、
二五光なき暗やみに手探りさせ、
酔うた者のようによろめかせる。

第一三章

一見よ、わたしの目は、
これをことごとく見た。
わたしの耳はこれを聞いて悟った。

二あなたがたの知っている事は、わたしも知っている。
わたしはあなたがたに劣らない。
三しかしわたしは全能者に物を言おう、
わたしは神と論ずることを望む。
四あなたがたは偽りをもってうわべを繕う者、
皆、無用の医師だ。
五どうか、あなたがたは全く沈黙するように。
これがあなたがたの知恵であろう。
六今、わたしの論ずることを聞くがよい。
わたしの口で言い争うことに耳を傾けるがよい。
七あなたがたは神のために不義を言おうとするのか。
また彼のために偽りを述べるのか。

八あなたがたは彼にひいきしようとするのか。
神のために争おうとするのか。
九神があなたがたを調べられるとき、
あなたがたは無事だろうか。
あなたがたは人を欺くように
彼を欺くことができるか。
一〇あなたがたがもし、ひそかにひいきするならば、
彼は必ずあなたがたを責められる。
一一その威厳はあなたがたを恐れさせないであろうか。
彼をおそれる恐れが
あなたがたに臨まないであろうか。
一二あなたがたの格言は灰のことわざだ。

あなたがたの盾は土の盾だ。
一三黙して、わたしにかかわるな、わたしは話そう。
何事でもわたしに来るなら、来るがよい。
一四わたしはわが肉をわが歯に取り、
わが命をわが手のうちに置く。
一五見よ、彼はわたしを殺すであろう。
わたしは絶望だ。
しかしなおわたしはわたしの道を
彼の前に守り抜こう。
一六これこそわたしの救となる。神を信じない者は、
神の前に出ることができないからだ。
一七あなたがたはよくわたしの言葉を聞き、

わたしの述べる所を耳に入れよ。
一八見よ、わたしはすでにわたしの立ち場を言い並べた。
わたしは義とされることをみずから知っている。
一九だれかわたしと言い争う事のできる者があろうか。
もしあるならば、わたしは黙して死ぬであろう。
二〇ただわたしに二つの事を許してください。
そうすれば、わたしはあなたの顔をさけて
隠れることはないでしょう。
二一あなたの手をわたしから離してください。
あなたの恐るべき事をもって
わたしを恐れさせないでください。
二二そしてお呼びください、わたしは答えます。

わたしに物(もの)を言(い)わせて、
あなたご自身(じしん)、わたしにお答(こた)えください。
二三わたしのよこしまと、わたしの罪(つみ)がどれほどあるか。
わたしのとがと罪(つみ)とをわたしに知(し)らせてください。
二四なにゆえ、あなたはみ顔(かお)をかくし、
わたしをあなたの敵(てき)とされるのか。
二五あなたは吹(ふ)き回(まわ)される木(こ)の葉(は)をおどし、
干(ひ)あがったもみがらを追(お)われるのか。
二六あなたはわたしについて苦(にが)き事(こと)どもを書(か)きしるし、
わたしに若(わか)い時(とき)の罪(つみ)を継(つ)がせ、
二七わたしの足(あし)を足(あし)かせにはめ、
わたしのすべての道(みち)をうかがい、

わたしの足の周囲に限りをつけられる。
二八このような人は腐れた物のように朽ち果て、
虫に食われた衣服のようにすたれる。

第一四章

一女から生れる人は
日が短く、悩みに満ちている。
二彼は花のように咲き出て枯れ、
影のように飛び去って、とどまらない。
三あなたはこのような者にさえ目を開き、
あなたの前に引き出して、さばかれるであろうか。
四だれが汚れたもののうちから清いものを
出すことができようか、ひとりもない。

五その日は定められ、
その月の数もあなたと共にあり、
あなたがその限りを定めて、
越えることのできないようにされたのだから、
六彼から目をはなし、手をひいてください。
そうすれば彼は雇人のように、
その日を楽しむことができるでしょう。
七木には望みがある。
たとい切られてもまた芽をだし、
その若枝は絶えることがない。
八たといその根が地の中に老い、
その幹が土の中に枯れても、

九なお水(みず)の潤(うるお)いにあえば芽(め)をふき、
若木(わかぎ)のように枝(えだ)を出(だ)す。
一〇しかし人(ひと)は死(し)ねば消(き)えうせる。
息(いき)が絶(た)えれば、どこにおるか。
一一水(みず)が湖(みずうみ)から消(き)え、
川(かわ)がかれて、かわくように、
一二人(ひと)は伏(ふ)して寝(ね)、また起(お)きず、
天(てん)のつきるまで、目(め)ざめず、
その眠(ねむ)りからさまされない。
一三どうぞ、わたしを陰府(よみ)にかくし、
あなたの怒(いか)りのやむまで、潜(ひそ)ませ、
わたしのために時(とき)を定(さだ)めて、

わたしを覚(おぼ)えてください。
一四人(ひと)がもし死(し)ねば、また生(い)きるでしょうか。
わたしはわが服役(ふくえき)の諸日(しょにち)の間(あいだ)、
わが解放(かいほう)の来(く)るまで待(ま)つでしょう。
一五あなたがお呼(およ)びになるとき、
わたしは答(こた)えるでしょう。
あなたはみ手(て)のわざを顧(かえり)みられるでしょう。
一六その時(とき)あなたはわたしの歩(あゆ)みを数(かぞ)え、
わたしの罪(つみ)を見(み)のがされるでしょう。
一七わたしのとがは袋(ふくろ)の中(なか)に封(ふう)じられ、
あなたはわたしの罪(つみ)を塗(ぬ)りかくされるでしょう。
一八しかし山(やま)は倒(たお)れてくずれ、

岩もその所から移される。
一九水は石をうがち、
大水は地のちりを洗い去る。
このようにあなたは人の望みを断たれる。
二〇あなたはながく彼に勝って、彼を去り行かせ、
彼の顔かたちを変らせて追いやられる。
二一彼の子らは尊くなっても、彼はそれを知らない、
卑しくなっても、それを悟らない。
二二ただおのが身に痛みを覚え、
おのれのために嘆くのみである」。

第一五章

一そこでテマンびとエリパズは答えて言った、
二「知者はむなしき知識をもって答えるであろうか。

東風をもってその腹を満たすであろうか。
三役に立たない談話をもって論じるであろうか。
無益な言葉をもって争うであろうか。
四ところがあなたは神を恐れることを捨て、
神の前に祈る事をやめている。
五あなたの罪はあなたの口を教え、
あなたは悪賢い人の舌を選び用いる。
六あなたの口みずからあなたの罪を定める、
わたしではない。
あなたのくちびるがあなたに逆らって証明する。
七あなたは最初に生れた人であるのか。
山よりも先に生れたのか。

八あなたは神の会議にあずかったのか。
あなたは知恵を独占しているのか。
九あなたが知るものは
われわれも知るではないか。
あなたが悟るものは
われわれも悟るではないか。
一〇われわれの中にはしらがの人も、
年老いた人もあって、
あなたの父よりも年上だ。
一一神の慰めおよびあなたに対するやさしい言葉も、
あなたにとって、あまりに小さいというのか。
一二どうしてあなたの心は狂うのか。

どうしてあなたの目はしばたたくのか。
一三あなたが神にむかって気をいらだて、
このような言葉をあなたの口から出すのはなぜか。
一四人はいかなる者か、どうしてこれは清くありえよう。
女から生れた者は、どうして正しくありえよう。
一五見よ、神はその聖なる者にすら信を置かれない、
もろもろの天も彼の目には清くない。
一六まして憎むべき汚れた者、
また不義を水のように飲む人においては。
一七わたしはあなたに語ろう、聞くがよい。
わたしは自分の見た事を述べよう。
一八これは知者たちがその先祖からうけて、

隠す所なく語り伝えたものである。
一九彼らにのみこの地は授けられて、
他国人はその中に行き来したことがなかった。
二〇悪しき人は一生の間、もだえ苦しむ。
残酷な人には年の数が定められている。
二一その耳には恐ろしい音が聞え、
繁栄の時にも滅ぼす者が彼に臨む。
二二彼は、暗やみから帰りうるとは信ぜず、
つるぎにねらわれる。
二三彼は食物はどこにあるかと言いつつさまよい、
暗き日が手近に備えられてあるのを知る。
二四悩みと苦しみとが彼を恐れさせ、

戦いの備えをした王のように彼に打ち勝つ。
二五これは彼が神に逆らってその手を伸べ、
全能者に逆らって高慢にふるまい、
二六盾の厚い面をもって強情に、
彼にはせ向かうからだ。
二七また彼は脂肪をもってその顔をおおい、
その腰には脂肪の肉を集め、
二八滅ぼされた町々に住み、
人の住まない家、荒塚となる所におるからだ。
二九彼は富める者とならず、その富はながく続かない、
また地に根を張ることはない。
三〇彼は暗やみからのがれることができない。

炎はその若枝を枯らし、
その花は風に吹き去られる。
三一 彼をしてみずから欺いて、
むなしい事にたよらせてはならない。
その報いはむなしいからだ。
三二 彼の時のこない前にその事がなし遂げられ、
彼の枝は緑とならないであろう。
三三 彼はぶどうの木のように、
その熟さない実をふり落すであろう。
またオリブの木のように、その花を落すであろう。
三四 神を信じない者のやからは子なく、
まいないによる天幕は火で焼き滅ぼされるからだ。

三五彼らは害悪をはらみ、不義を生み、
その腹は偽りをつくる」。

第一六章

一そこでヨブは答えて言った、
二「わたしはこのような事を数多く聞いた。
あなたがたは皆人を慰めようとして、
かえって人を煩わす者だ。
三むなしき言葉に、はてしがあろうか。
あなたは何に激して答をするのか。
四わたしもあなたがたのように語ることができる。
もしあなたがたがわたしと代ったならば、
わたしは言葉を練って、あなたがたを攻め、
あなたがたに向かって頭を振ることができる。

五また口をもって、あなたがたを強くし、
くちびるの慰めをもって、あなたがたの苦しみを和らげることができる。
六たといわたしは語っても、
わたしの苦しみは和らげられない。
たといわたしは忍んでも、
どれほどそれがわたしを去るであろうか。
七まことに神は今わたしを疲れさせた。
彼はわたしのやからをことごとく荒した。
八彼はわたしを、しわ寄らせた。
これがわたしに対する証拠である。
またわたしのやせ衰えた姿が立って、わたしを攻め、

わたしの顔にむかって証明する。
九彼は怒ってわたしをかき裂き、わたしを憎み、
わたしに向かって歯をかみ鳴らした。
わたしの敵は目を鋭くして、わたしを攻める。
一〇人々はわたしに向かって口を張り、
侮ってわたしのほおを打ち、
ともに集まってわたしを攻める。
一一神はわたしをよこしまな者に渡し、
悪人の手に投げいれられる。
一二わたしは安らかであったのに、
彼はわたしを切り裂き、
首を捕えて、わたしを打ち砕き、

わたしを立(た)てて的(まと)とされた。
一三その射手(しゃしゅ)はわたしを囲(かこ)む。
彼(かれ)は無慈悲(むじひ)にもわたしの腰(こし)を射通(いとお)し、
わたしの肝(きも)を地(ち)に流(なが)れ出(だ)させられる。
一四彼(かれ)はわたしを打(う)ち破(やぶ)って、破(やぶ)れに破(やぶ)れを加(くわ)え、
勇士(ゆうし)のようにわたしに、はせかかられる。
一五わたしは荒布(あらぬの)を膚(はだ)に縫(ぬ)いつけ、
わたしの角(つの)をちりに伏(ふ)せた。
一六わたしの顔(かお)は泣(な)いて赤(あか)くなり、
わたしのまぶたには深(ふか)いやみがある。
一七しかし、わたしの手(て)には暴虐(ぼうぎゃく)がなく、
わたしの祈(いのり)は清(きよ)い。

一八地よ、わたしの血をおおってくれるな。
わたしの叫びに、休む所を得させるな。
一九見よ、今でもわたしの証人は天にある。
わたしのために保証してくれる者は高い所にある。
二〇わたしの友はわたしをあざける、
しかしわたしの目は神に向かって涙を注ぐ。
二一どうか彼が人のために神と弁論し、
人とその友との間をさばいてくれるように。
二二数年過ぎ去れば、
わたしは帰らぬ旅路に行くであろう。

第一七章

一わが霊は破れ、わが日は尽き、

墓はわたしを待っている。
二まことにあざける者どもはわたしのまわりにあり、
わが目は常に彼らの侮りを見る。
三どうか、あなた自ら保証となられるように。
ほかにだれがわたしのために
保証となってくれる者があろうか。
四あなたは彼らの心を閉じて、
悟ることのないようにされた。
それゆえ、彼らに勝利を得させられるはずはない。
五分け前を得るために友を訴えるものは、
その子らの目がつぶれるであろう。
六彼はわたしを民の笑い草とされた。

わたしは顔(かお)につばきされる者(もの)となる。
七わが目(め)は憂(うれ)いによってかすみ、
わがからだはすべて影(かげ)のようだ。
八正(ただ)しい者(もの)はこれに驚(おどろ)き、
罪(つみ)なき者(もの)は神(かみ)を信(しん)ぜぬ者(もの)に対(たい)して憤(いきどお)る。
九それでもなお正(ただ)しい者(もの)はその道(みち)を堅(かた)く保(たも)ち、
潔(いさぎよ)い手(て)をもつ者(もの)はますます力(ちから)を得(え)る。
一〇しかし、あなたがたは皆(みな)再(ふたた)び来(く)るがよい、
わたしはあなたがたのうちに賢(かしこ)い者(もの)を見(み)ないのだ。
一一わが日(ひ)は過(す)ぎ去(さ)り、わが計(はか)りごとは敗(やぶ)れ、
わが心(こころ)の願(ねが)いも敗(やぶ)れた。
一二彼(かれ)らは夜(よる)を昼(ひる)に変(か)える。

彼らは言う、『光が暗やみに近づいている』と。
一三わたしがもし陰府をわたしの家として望み、
暗やみに寝床をのべ、
一四穴に向かって『あなたはわたしの父である』と言い、
うじに向かって『あなたはわたしの母、
わたしの姉妹である』と言うならば、
一五わたしの望みはどこにあるか、
だれがわたしの望みを見ることができようか。
一六これは下って陰府の関門にいたり、
われわれは共にちりに下るであろうか」。
第一八章一そこでシュヒびとビルダデは答えて言った、
二「あなたはいつまで言葉にわなを設けるのか。

あなたはまず悟るがよい、
それからわれわれは論じよう。
三なぜ、われわれは獣のように思われるのか。
なぜ、あなたの目に愚かな者と見えるのか。
四怒っておのが身を裂く者よ、
あなたのために地は捨てられるだろうか。
岩はその所から移されるだろうか。
五悪しき者の光は消え、
その火の炎は光を放たず、
六その天幕のうちの光は暗く、
彼の上のともしびは消える。
七その力ある歩みはせばめられ、

その計(はか)りごとは彼(かれ)を倒(たお)す。
八彼(かれ)は自分(じぶん)の足(あし)で網(あみ)にかかり、
また落(おと)し穴(あな)の上(うえ)を歩(あゆ)む。
九わなは彼(かれ)のかかとを捕(とら)え、
網(あみ)わなは彼(かれ)を捕(とら)える。
一〇輪(わ)なわは彼(かれ)を捕(とら)えるために地(ち)に隠(かく)され、
張(は)り網(あみ)は彼(かれ)を捕(とら)えるために道(みち)に設(もう)けられる。
一一恐(おそ)ろしい事(こと)が四方(しほう)にあって彼(かれ)を恐(おそ)れさせ、
その歩(あゆ)みにしたがって彼(かれ)を追(お)う。
一二その力(ちから)は飢(う)え、
災(わざわい)は彼(かれ)をつまずかすために備(そな)わっている。
一三その皮膚(ひふ)は病(やまい)によって食(く)いつくされ、

死のういごは彼の手足を食いつくす。
一四彼はその頼む 所 の天幕から引き離されて、
恐れの王のもとに追いやられる。
一五彼に属さない者が彼の天幕に住み、
硫黄が彼のすまいの上にまき散らされる。
一六下ではその根が枯れ、
上ではその枝が切られる。
一七彼の形見は地から滅び、
彼の名はちまたに消える。
一八彼は 光 からやみに追いやられ、
世の中から追い出される。
一九彼はその民の中に子もなく、 孫もなく、

彼のすみかには、ひとりも生き残る者はない。
二〇西の者は彼の日について驚き、
東の者はおじ恐れる。
二一まことに、悪しき者のすまいはこのようであり、
神を知らない者の所はこのようである」。

第一九章

一そこでヨブは答えて言った、
二「あなたがたはいつまでわたしを悩まし、
言葉をもってわたしを打ち砕くのか。
三あなたがたはすでに十度もわたしをはずかしめ、
わたしを悪くあしらってもなお恥じないのか。
四たといわたしが、まことにあやまったとしても、
そのあやまちは、わたし自身にとどまる。

五もしあなたがたが、
まことにわたしに向かって高ぶり、
わたしの恥を論じるならば、
六『神がわたしをしえたげ、
その網でわたしを囲まれたのだ』と知るべきだ。
七見よ、わたしが『暴虐』と叫んでも答えられず、
助けを呼び求めても、さばきはない。
八彼はわたしの道にかきをめぐらして、
越えることのできないようにし、
わたしの行く道に暗やみを置かれた。
九彼はわたしの栄えをわたしからはぎ取り、
わたしのこうべから冠を奪い、
一〇四方からわたしを取りこわして、うせさせ、

わたしの望みを木のように抜き去り、
一一わたしに向かって怒りを燃やし、
わたしを敵のひとりのように思われた。
一二その軍勢がいっせいに来て、
塁を築いて攻め寄せ、
わたしの天幕のまわりに陣を張った。
一三彼はわたしの兄弟たちを
わたしから遠く離れさせられた。
わたしを知る人々は全くわたしに疎遠になった。
一四わたしの親類および親しい友はわたしを見捨て、
一五わたしの家に宿る者はわたしを忘れ、
わたしのはしためらはわたしを他人のように思い、

わたしは彼(かれ)らの目(め)に他国人(たこくじん)となった。
一六わたしがしもべを呼(よ)んでも、彼(かれ)は答(こた)えず、
わたしは口(くち)をもって彼(かれ)に請(こ)わなければならない。
一七わたしの息(いき)はわが妻(つま)にいとわれ、
わたしは同(おな)じ腹(はら)の子(こ)たちにきらわれる。
一八わらべたちさえもわたしを侮(あなど)り、
わたしが起(お)き上(あ)がれば、わたしをあざける。
一九親(した)しい人々(ひとびと)は皆(みな)わたしをいみきらい、
わたしの愛(あい)した人々(ひとびと)はわたしにそむいた。
二〇わたしの骨(ほね)は皮(かわ)と肉(にく)につき、
わたしはわずかに歯(は)の皮(かわ)をもってのがれた。
二一わが友(とも)よ、わたしをあわれめ、わたしをあわれめ、

神のみ手がわたしを打ったからである。
二二あなたがたは、なにゆえ神のようにわたしを責め、
わたしの肉をもって満足しないのか。
二三どうか、わたしの言葉が、書きとめられるように。
どうか、わたしの言葉が、書物にしるされるように。
二四鉄の筆と鉛とをもって、
ながく岩に刻みつけられるように。
二五わたしは知る、
わたしをあがなう者は生きておられる、
後の日に彼は必ず地の上に立たれる。
二六わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、
わたしは肉を離れて神を見るであろう。

二七しかもわたしの味方として見るであろう。
わたしの見る者はこれ以外のものではない。
わたしの心はこれを望んでこがれる。
二八あなたがたがもし『われわれはどうして
彼を責めようか』と言い、
また『事の根源は彼のうちに見いだされる』
と言うならば、
二九つるぎを恐れよ、
怒りはつるぎの罰をきたらすからだ。
これによって、あなたがたは、
さばきのあることを知るであろう」。

第二〇章一そこでナアマびとゾパルは答えて言った、
二「これによって、わたしは答えようとの思いを起し、

これがために心中しきりに騒ぎ立つ。
三わたしはわたしをはずかしめる非難を聞く、
しかし、わたしの悟りの霊がわたしに答えさせる。
四あなたはこの事を知らないのか、
昔から地の上に人の置かれてよりこのかた、
五悪しき人の勝ち誇はしばらくであって、
神を信じない者の楽しみは
ただつかのまであることを。
六たといその高さが天に達し、
その頭が雲におよんでも、
七彼はおのれの糞のように、とこしえに滅び、
彼を見た者は言うであろう、『彼はどこにおるか』と。

八 彼は夢のように飛び去って、再び見ることはない。
彼は夜の幻のように追い払われるであろう。
九 彼を見た目はかさねて彼を見ることがなく、
彼のいた所も再び彼を見ることがなかろう。
一〇 その子らは貧しい者に恵みを求め、
その手は彼の貨財を償うであろう。
一一 その骨には若い力が満ちている、
しかしそれは彼と共にちりに伏すであろう。
一二 たとい悪は彼の口に甘く、
これを舌の裏にかくし、
一三 これを惜しんで捨てることなく、
口の中に含んでいても、

一四その食物は彼の腹の中で変り、
彼の内で毒蛇の毒となる。
一五彼は貨財をのんでも、またそれを吐き出す、
神がそれを彼の腹から押し出されるからだ。
一六彼は毒蛇の毒を吸い、
まむしの舌は彼を殺すであろう。
一七彼は蜜と凝乳の流れる川々を見ることができない。
一八彼はほねおって獲たものを返して、
それを食うことができない。
その商いによって得た利益をもって
楽しむことができない。
一九彼が貧しい者をしえたげ、これを捨てたからだ。

彼(かれ)は家(いえ)を奪(うば)い取(と)っても、
それを建(た)てることができない。
二〇彼(かれ)の欲張(よくば)りは足(た)ることを知(し)らぬゆえ、
その楽(たの)しむ何物(なにもの)をも救(すく)うことができないであろう。
二一彼(かれ)が残(のこ)して食(た)べなかった物(もの)とては一つもない。
それゆえ、その繁栄(はんえい)はながく続(つづ)かないであろう。
二二その力(ちから)の満(み)ちている時(とき)、彼(かれ)は窮境(きゅうきょう)に陥(おちい)り、
悩(なや)みの手(て)がことごとく彼(かれ)の上(うえ)に臨(のぞ)むであろう。
二三彼(かれ)がその腹(はら)を満(み)たそうとすれば、
神(かみ)はその激(はげ)しい怒(いか)りを送(おく)って、
それを彼(かれ)の上(うえ)に降(ふ)り注(そそ)ぎ、彼(かれ)の食物(しょくもつ)とされる。
二四彼(かれ)は鉄(てつ)の武器(ぶき)を免(まぬか)れても、

青銅の矢は彼を射通すであろう。
二五彼がこれをその身から引き抜けば、
きらめく矢じりがその肝から出てきて、
恐れが彼の上に臨む。
二六もろもろの暗黒が彼の宝物のためにたくわえられ、
人が吹き起したものでない火が彼を焼きつくし、
その天幕に残っている者を滅ぼすであろう。
二七天は彼の罪をあらわし、
地は起って彼を攻めるであろう。
二八その家の財産は奪い去られ、
神の怒りの日に消えうせるであろう。
二九これが悪しき人の神から受ける分、

神によって定められた嗣業である」。

第二一章
一そこでヨブは答えて言った、
二「あなたがたはとくと、わたしの言葉を聞き、
これをもって、あなたがたの慰めとするがよい。
三まずわたしをゆるして語らせなさい。
わたしが語ったのち、あざけるのもよかろう。
四わたしのつぶやきは人に対してであろうか。
わたしはどうして、いらだたないでいられようか。
五あなたがたはわたしを見て、驚き、
手を口にあてるがよい。
六わたしはこれを思うと恐ろしくなって、
からだがしきりに震えわななく。

七なにゆえ悪しき人が生きながらえ、
老齢に達し、かつ力強くなるのか。
八その子らは彼らの前に堅く立ち、
その子孫もその目の前に堅く立つ。
九その家は安らかで、恐れがなく、
神のつえは彼らの上に臨むことがない。
一〇その雄牛は種を与えて、誤ることなく、
その雌牛は子を産んで、そこなうことがない。
一一彼らはその小さい者どもを群れのように連れ出し、
その子らは舞い踊る。
一二彼らは手鼓と琴に合わせて歌い、
笛の音によって楽しみ、

一三その日をさいわいに過ごし、
安らかに陰府にくだる。
一四彼らは神に言う、『われわれを離れよ、
われわれはあなたの道を知ることを好まない。
一五全能者は何者なので、
われわれはこれに仕えねばならないのか。
われわれはこれに祈っても、なんの益があるか』と。
一六見よ、彼らの繁栄は彼らの手にあるではないか。
悪人の計りごとは、わたしの遠く及ぶ所でない。
一七悪人のともしびの消されること、
幾たびあるか。
その災の彼らの上に臨むこと、

神がその怒りをもって苦しみを与えられること、
幾たびあるか。
一八彼らが風の前のわらのようになること、
あらしに吹き去られるもみがらのようになること、
幾たびあるか。
一九あなたがたは言う、
『神は彼らの罪を積みたくわえて、
その子らに報いられるのだ』と。
どうかそれを彼ら自身に報いて、
彼らにその罪を知らせられるように。
二〇すなわち彼ら自身の目にその滅びを見させ、
全能者の怒りを彼らに飲ませられるように。

二一その月の数のつきるとき、
彼らはその後の家になんのかかわる所があろうか。
二二神は天にある者たちをさえ、さばかれるのに、
だれが神に知識を教えることができようか。
二三ある者は繁栄をきわめ、
全く安らかに、かつおだやかに死に、
二四そのからだには脂肪が満ち、
その骨の髄は潤っている。
二五ある者は心を苦しめて死に、
なんの幸をも味わうことがない。
二六彼らはひとしくちりに伏し、
うじにおおわれる。

二七見よ、わたしはあなたがたの思いを知り、
わたしを害しようとするたくらみを知る。
二八あなたがたは言う、『王侯の家はどこにあるか、
悪人の住む天幕はどこにあるか』と。
二九あなたがたは道行く人々に問わなかったか、
彼らの証言を受け入れないのか。
三〇すなわち、災の日に悪人は免れ、
激しい怒りの日に彼は救い出される。
三一だれが彼に向かって、
その道を告げ知らせる者があるか、
だれが彼のした事を彼に報いる者があるか。
三二彼はかかれて墓に行き、

塚の上で見張りされ、
三三谷の土くれも彼には快く、
すべての人はそのあとに従う。
彼の前に行った者も数えきれない。
三四それで、あなたがたはどうしてむなしい事をもって、
わたしを慰めようとするのか。
あなたがたの答は偽り以外の何ものでもない」。
第二二章一そこでテマンびとエリパズは答えて言った、
二「人は神を益することができるであろうか。
賢い人も、ただ自身を益するのみである。
三あなたが正しくても、全能者になんの喜びがあろう。
あなたが自分の道を全うしても、

彼になんの利益があろう。
四 神はあなたが神を恐れることのゆえに、
あなたを責め、あなたをさばかれるであろうか。
五 あなたの悪は大きいではないか。
あなたの罪は、はてしがない。
六 あなたはゆえなく兄弟のものを質にとり、
裸な者の着物をはぎ取り、
七 疲れた者に水を飲ませず、
飢えた者に食物を与えなかった。
八 力ある人は土地を得、
名ある人はそのうちに住んだ。
九 あなたは、やもめをむなしく去らせた。

みなしごの腕は折られた。
一〇それゆえ、わなはあなたをめぐり、
恐怖は、にわかにあなたを驚かす。
一一あなたの光は暗くされ、
あなたは見ることができない。
大水はあなたをおおうであろう。
一二神は天に高くおられるではないか。
見よ、いと高き星を。いかに高いことよ。
一三それであなたは言う、『神は何を知っておられるか。
彼は黒雲を通して、さばくことができるのか。
一四濃い雲が彼をおおい隠すと、
彼は見ることができない。

彼は天の大空を歩まれるのだ』と。
一五あなたは悪しき人々が踏んだ
いにしえの道を守ろうとするのか。
一六彼らは時がこないうちに取り去られ、
その基は川のように押し流された。
一七彼らは神に言った、『われわれを離れてください』と、
また『全能者はわれわれに何をなしえようか』と。
一八しかし神は彼らの家を良い物で満たされた。
ただし悪人の計りごとは
わたしのくみする所ではない。
一九正しい者はこれを見て喜び、
罪なき者は彼らをあざ笑って言う、

二〇『まことにわれわれのあだは滅ぼされ、
その残した物は火で焼き滅ぼされた』と。
二一あなたは神と和らいで、平安を得るがよい。
そうすれば幸福があなたに来るでしょう。
二二どうか、彼の口から教を受け、
その言葉をあなたの心におさめるように。
二三あなたがもし全能者に立ち返って、おのれを低くし、
あなたの天幕から不義を除き去り、
二四こがねをちりの中に置き、
オフルのこがねを谷川の石の中に置き、
二五全能者があなたのこがねとなり、
あなたの貴重なしろがねとなるならば、

二六その時、あなたは全能者を喜び、
神に向かって顔をあげることができる。
二七あなたが彼に祈るならば、彼はあなたに聞かれる。
そしてあなたは自分の誓いを果す。
二八あなたが事をなそうと定めるならば、
あなたはその事を成就し、
あなたの道には光が輝く。
二九彼は高ぶる者を低くされるが、
へりくだる者を救われるからだ。
三〇彼は罪のない者を救われる。
あなたはその手の潔いことによって、
救われるであろう」。

第二三章

一そこでヨブは答えて言った、
二「きょうもまた、わたしのつぶやきは激しく、
彼の手はわたしの嘆きにかかわらず、重い。
三どうか、彼を尋ねてどこで会えるかを知り、
そのみ座に至ることができるように。
四わたしは彼の前にわたしの訴えをならべ、
口をきわめて論議するであろう。
五わたしは、わたしに答えられるみ言葉を知り、
わたしに言われる所を悟ろう。
六彼は大いなる力をもって、
わたしと争われるであろうか、
いな、かえってわたしを顧みられるであろう。

七かしこでは正(ただ)しい人(ひと)は彼(かれ)と言(い)い争(あらそ)うことができる。
そうすれば、わたしはわたしをさばく者(もの)から
永久(えいきゅう)に救(すく)われるであろう。
八見(み)よ、わたしが進(すす)んでも、彼(かれ)を見(み)ない。
退(しりぞ)いても、彼(かれ)を認(みと)めることができない。
九左(ひだり)の方(ほう)に尋(たず)ねても、会(あ)うことができない。
右(みぎ)の方(ほう)に向(む)かっても、見(み)ることができない。
一〇しかし彼(かれ)はわたしの歩(あゆ)む道(みち)を知(し)っておられる。
彼(かれ)がわたしを試(こころ)みられるとき、
わたしは金(きん)のように出(で)て来(く)るであろう。
一一わたしの足(あし)は彼(かれ)の歩(あゆ)みに堅(かた)く従(したが)った。
わたしは彼(かれ)の道(みち)を守(まも)って離(はな)れなかった。

一二わたしは彼のくちびるの命令にそむかず、
その口の言葉をわたしの胸にたくわえた。
一三しかし彼は変ることはない。
だれが彼をひるがえすことができようか。
彼はその心の欲するところを行われるのだ。
一四彼はわたしのために定めた事をなし遂げられる。
そしてこのような事が多く彼の心にある。
一五それゆえ、わたしは彼の前におののく。
わたしは考えるとき、彼を恐れる。
一六神はわたしの心を弱くされた。
全能者はわたしを恐れさせられた。
一七わたしは、やみによって閉じこめられ、

暗黒がわたしの顔をおおっている。

第二四章

一なにゆえ、全能者はさばきの時を
定めておかれないのか。
なにゆえ、彼を知る者がその日を見ないのか。
二世には地境を移す者、
群れを奪ってそれを飼う者、
三みなしごのろばを追いやる者、
やもめの牛を質に取る者、
四貧しい者を道から押しのける者がある。
世の弱い者は皆彼らをさけて身をかくす。
五見よ、彼らは荒野におる野ろばのように出て働き、

野で獲物を求めて、その子らの食物とする。
六彼らは畑でそのまぐさを刈り、
また悪人のぶどう畑で拾い集める。
七彼らは着る物がなく、裸で夜を過ごし、
寒さに身をおおうべき物もない。
八彼らは山の雨にぬれ、しのぎ場もなく岩にすがる。
九（みなしごをその母のふところから奪い、
貧しい者の幼な子を質にとる者がある。）
一〇彼らは着る物がなく、裸で歩き、
飢えつつ麦束を運び、
一一悪人のオリブ並み木の中で油をしぼり、
酒ぶねを踏んでも、かわきを覚える。

一二 町の中から死のうめきが起り、
傷ついた者の魂が助けを呼び求める。
しかし神は彼らの祈を顧みられない。
一三 光にそむく者たちがある。
彼らは光の道を知らず、光の道にとどまらない。
一四 人を殺す者は暗いうちに起き出て
弱い者と貧しい者を殺し、
夜は盗びととなる。
一五 姦淫する者の目はたそがれを待って、
『だれもわたしを見ていないだろう』と言い、
顔におおう物を当てる。
一六 彼らは暗やみで家をうがち、

昼は閉じこもって光を知らない。
一七彼らには暗黒は朝である。
彼らは暗黒の恐れを友とするからだ。
一八あなたがたは言う、
『彼らは水のおもてにすみやかに流れ去り、
その受ける分は地でのろわれ、
酒ぶねを踏む者はだれも
彼らのぶどう畑の道に行かない。
一九ひでりと熱さは雪水を奪い去る、
陰府が罪を犯した者に対するも、これと同様だ。
二〇町の広場は彼らを忘れ、
彼らの名は覚えられることなく、

不義は木の折られるように折られる』と。
二一彼らは子を産まぬうまずめをくらい、
やもめをあわれむことをしない。
二二しかし神はその力をもって、
強い人々を生きながらえさせられる。
彼らは生きる望みのない時にも起きあがる。
二三神が彼らに安全を与えられるので、
彼らは安らかである。
神の目は彼らの道の上にある。
二四彼らはしばし高められて、いなくなり、
ぜにあおいのように枯れて消えうせ、
麦の穂先のように切り取られる。

二五もし、そうでないなら、
だれがわたしにその偽りを証明し、
わが言葉のむなしいことを示しうるだろうか」。

第二五章

一そこでシュヒびとビルダデは答えて言った、
二「大権と恐れとは神と共にある。
彼は高き所で平和を施される。
三その軍勢は数えることができるか。
何物かその光に浴さないものがあるか。
四それで人はどうして神の前に正しくありえようか。
女から生れた者がどうして清くありえようか。
五見よ、月さえも輝かず、
星も彼の目には清くない。
六うじのような人、

虫のような人の子はなおさらである」。

第二六章

一 そこでヨブは答えて言った、
二 「あなたは 力 のない者をどれほど助けたかしれない。
気力のない腕をどれほど救ったかしれない。
三 知恵のない者をどれほど教えたかしれない。
悟りをどれほど多く示したかしれない。
四 あなたはだれの助けによって言葉をだしたのか。
あなたから出たのはだれの霊なのか。
五 亡霊は水およびその中に住むものの下に震う。
六 神の前では陰府も 裸 である。
滅びの穴もおおい隠すものはない。
七 彼は北の天を空間に張り、

地(ち)を何(なに)もない所(ところ)に掛(か)けられる。
八彼(かれ)は水(みず)を濃(こ)い雲(くも)の中(なか)に包(つつ)まれるが、
その下(した)の雲(くも)は裂(さ)けない。
九彼(かれ)は月(つき)のおもてをおおい隠(かく)して、
雲(くも)をその上(うえ)にのべ、
一〇水(みず)のおもてに円(えん)を描(えが)いて、
光(ひかり)とやみとの境(さかい)とされた。
一一彼(かれ)が戒(いまし)めると、天(てん)の柱(はしら)は震(ふる)い、かつ驚(おどろ)く。
一二彼(かれ)はその力(ちから)をもって海(うみ)を静(しず)め、
その知恵(ちえ)をもってラハブを打(う)ち砕(くだ)き、
一三その息(いき)をもって天(てん)を晴(は)れわたらせ、
その手(て)をもって逃(に)げるへびを突(つ)き通(とお)される。

一四見よ、これらはただ彼の道の端にすぎない。
われわれが彼について聞く所は
いかにかすかなささやきであろう。
しかし、その力のとどろきに至っては、
だれが悟ることができるか」。

第二七章

一ヨブはまた言葉をついで言った、
二「神は生きておられる。
彼はわたしの義を奪い去られた。
全能者はわたしの魂を悩まされた。
三わたしの息がわたしのうちにあり、
神の息がわたしの鼻にある間、
四わたしのくちびるは不義を言わない、

わたしの舌は偽りを語らない。
五わたしは断じて、あなたがたを正しいとは認めない。
わたしは死ぬまで、潔白を主張してやめない。
六わたしは堅くわが義を保って捨てない。
わたしは今まで一日も心に責められた事がない。
七どうか、わたしの敵は悪人のようになり、
わたしに逆らう者は
不義なる者のようになるように。
八神が彼を断ち、その魂を抜きとられるとき、
神を信じない者になんの望みがあろう。
九災が彼に臨むとき、
神はその叫びを聞かれるであろうか。

一〇彼は全能者を喜ぶであろうか、
常に神を呼ぶであろうか。
一一わたしは神のみ手についてあなたがたに教え、
全能者と共にあるものを隠すことをしない。
一二見よ、あなたがたは皆みずからこれを見た、
それなのに、どうしてむなしい者となったのか。
一三これは悪人の神から受ける分、
圧制者の全能者から受ける嗣業である。
一四その子らがふえればつるぎに渡され、
その子孫は食物に飽きることがない。
一五その生き残った者は疫病で死んで埋められ、
そのやもめらは泣き悲しむことをしない。

一六たとい彼は銀をちりのように積み、
衣服を土のように備えても、
一七その備えるものは正しい人がこれを着、
その銀は罪なき者が分かち取るであろう。
一八彼の建てる家は、くもの巣のようであり、
番人の造る小屋のようである。
一九彼は富める身で寝ても、再び富むことがなく、
目を開けばその富はない。
二〇恐ろしい事が大水のように彼を襲い、
夜はつむじ風が彼を奪い去る。
二一東風が彼を揚げると、彼は去り、
彼をその所から吹き払う。

二二 それは彼(かれ)を投(な)げつけて、あわれむことなく、
彼(かれ)はその力(ちから)からのがれようと、もがく。
二三 それは彼(かれ)に向(む)かって手(て)を鳴(な)らし、
あざけり笑(わら)って、その所(ところ)から出(で)て行(い)かせる。

第二八章

一 しろがねには掘(ほ)り出(だ)す穴(あな)があり、
精錬(せいれん)するこがねには出(で)どころがある。
二 くろがねは土(つち)から取(と)り、
あかがねは石(いし)から溶(と)かして取(と)る。
三 人(ひと)は暗(くら)やみを破(やぶ)り、
いやはてまでも尋(たず)ねきわめて、
暗(くら)やみおよび暗黒(あんこく)の中(なか)から鉱石(こうせき)を取(と)る。

四彼らは人の住む所を離れて縦穴をうがち、
道行く人に忘れられ、
人を離れて身をつりさげ、揺れ動く。
五地はそこから食物を出す。
その下は火でくつがえされるようにくつがえる。
六その石はサファイヤのある所、
そこにはまた金塊がある。
七その道は猛禽も知らず、たかの目もこれを見ず、
八猛獣もこれを踏まず、ししもこれを通らなかった。
九人は堅い岩に手をくだして、
山を根元からくつがえす。
一〇彼は岩に坑道を掘り、

その目はもろもろの尊い物を見る。
一一 彼は水路をふさいで、漏れないようにし、
隠れた物を光に取り出す。
一二 しかし知恵はどこに見いだされるか。
悟りのある所はどこか。
一三 人はそこに至る道を知らない、
また生ける者の地でそれを獲ることができない。
一四 淵は言う、『それはわたしのうちにない』と。
また海は言う、『わたしのもとにない』と。
一五 精金もこれと換えることはできない。
銀も量ってその価とすることはできない。
一六 オフルの金をもってしても、

その価を量ることはできない。
尊い縞めのうも、サファイヤも同様である。
一七こがねも、玻璃もこれに並ぶことができない。
また精金の器物もこれと換えることができない。
一八さんごも水晶も言うに足りない。
知恵を得るのは真珠を得るのにまさる。
一九エチオピヤのトパズもこれに並ぶことができない。
純金をもってしても、その価を量ることはできない。
二〇それでは知恵はどこから来るか。
悟りのある所はどこか。
二一これはすべての生き物の目に隠され、
空の鳥にも隠されている。

二二滅びも死も言う、
『われわれはそのうわさを耳に聞いただけだ』。
二三神はこれに至る道を悟っておられる、
彼はそのある所を知っておられる。
二四彼は地の果までもみそなわし、
天が下を見きわめられるからだ。
二五彼が風に重さを与え、
水をますで量られたとき、
二六彼が雨のために規定を設け、
雷のひらめきのために道を設けられたとき、
二七彼は知恵を見て、これをあらわし、
これを確かめ、これをきわめられた。

二八そして人に言われた、
『見よ、主を恐れることは知恵である、
悪を離れることは悟りである』と」。

第二九章
一ヨブはまた言葉をついで言った、
二「ああ過ぎた年月のようであったらよいのだが、
神がわたしを守ってくださった日のようで
あったらよいのだが。
三あの時には、彼のともしびがわたしの頭の上に輝き、
彼の光によってわたしは暗やみを歩んだ。
四わたしの盛んな時のようであったならよいのだが。
あの時には、神の親しみが
わたしの天幕の上にあった。

五あの時には、全能者がなおわたしと共にいまし、
わたしの子供たちもわたしの周囲にいた。
六あの時、わたしの足跡は乳で洗われ、
岩もわたしのために油の流れを注ぎだした。
七あの時には、わたしは町の門に出て行き、
わたしの座を広場に設けた。
八若い者はわたしを見てしりぞき、
老いた者は身をおこして立ち、
九君たる者も物言うことをやめて、
その口に手を当て、
一〇尊い者も声をおさめて、
その舌を上あごにつけた。

一一耳に聞いた者はわたしを祝福された者となし、
目に見た者はこれをあかしした。
一二これは助けを求める貧しい者を救い、
また、みなしごおよび助ける人のない者を
救ったからである。
一三今にも滅びようとした者の祝福がわたしに来た。
わたしはまたやもめの心をして喜び歌わせた。
一四わたしは正義を着、正義はわたしをおおった。
わたしの公義は上着のごとく、
また冠のようであった。
一五わたしは目しいの目となり、
足なえの足となり、

一六貧しい者の父となり、
知らない人の訴えの理由を調べてやった。
一七わたしは悪しき者のきばを折り、
その歯の間から獲物を引き出した。
一八その時、わたしは言った、
『わたしは自分の巣の中で死に、
わたしの日は砂のように多くなるであろう。
一九わたしの根は水のほとりにはびこり、
露は夜もすがらわたしの枝におくであろう。
二〇わたしの栄えはわたしと共に新しく、
わたしの弓はわたしの手にいつも強い』と。
二一人々はわたしに聞いて待ち、

黙して、わたしの教に従った。
二二わたしが言った後は彼らは再び言わなかった。
わたしの言葉は彼らの上に
雨のように降りそそいだ。
二三彼らは雨を待つように、わたしを待ち望み、
春の雨を仰ぐように口を開いて仰いだ。
二四彼らが希望を失った時にも、
わたしは彼らにむかってほほえんだ。
彼らはわたしの顔の光を除くことができなかった。
二五わたしは彼らのために道を選び、
そのかしらとして座し、
軍中の王のようにしており、

嘆く者を慰める人のようであった。

第三〇章

一しかし今はわたしよりも年若い者が、
かえってわたしをあざ笑う。
彼らの父はわたしが卑しめて、
群れの犬と一緒にさえしなかった者だ。
二彼らの手の力からわたしは何を得るであろうか、
彼らはその気力がすでに衰えた人々だ。
三彼らは乏しさと激しい飢えとによって、
かわいた荒れ地をかむ。
四彼らは、ぜにあおいおよび灌木の葉を摘み、
れだまの根をもって身を暖める。

五彼らは人々の中から追いだされ、
盗びとを追うように、人々は彼らを追い呼ばわる。
六彼らは急流の谷間に住み、
土の穴または岩の穴におり、
七灌木の中にいななき、いらくさの下に押し合う。
八彼らは愚かな者の子、また卑しい者の子であって、
国から追いだされた者だ。
九それなのに、わたしは今彼らの歌となり、
彼らの笑い草となった。
一〇彼らはわたしをいとい、遠くわたしをはなれ、
わたしの顔につばきすることも、ためらわない。
一一神がわたしの綱を解いて、

わたしを卑しめられたので、
彼らもわたしの前に慎みを捨てた。
一二このともがらはわたしの右に立ち上がり、
わたしを追いのけ、
わたしにむかって滅びの道を築く。
一三彼らはわたしの道をこわし、わたしの災を促す。
これをさし止める者はない。
一四彼らは広い破れ口からはいるように進みきたり、
破壊の中をおし寄せる。
一五恐ろしい事はわたしに臨み、
わたしの誉は風のように吹き払われ、
わたしの繁栄は雲のように消えうせた。

一六今は、わたしの魂はわたしの内にとけて流れ、
悩みの日はわたしを捕えた。
一七夜はわたしの骨を激しく悩まし、
わたしをかむ苦しみは、やむことがない。
一八それは暴力をもって、わたしの着物を捕え、
はだ着のえりのように、わたしをしめつける。
一九神がわたしを泥の中に投げ入れられたので、
わたしはちり灰のようになった。
二〇わたしがあなたにむかって呼ばわっても、
あなたは答えられない。
わたしが立っていても、あなたは顧みられない。
二一あなたは変って、わたしに無情な者となり、

み手の力をもってわたしを攻め悩まされる。
二二あなたはわたしを揚げて風の上に乗せ、
大風のうなり声の中に、もませられる。
二三わたしは知っている、あなたはわたしを死に帰らせ、
すべての生き物の集まる家に帰らせられることを。
二四さりながら荒塚の中にある者は、
手を伸べないであろうか、
災の中にある者は助けを呼び求めないであろうか。
二五わたしは苦しい日を送る者のために
泣かなかったか。
わたしの魂は貧しい人のために
悲しまなかったか。

二六しかしわたしが幸(さいわい)を望(のぞ)んだのに災(わざわい)が来(き)た。
光(ひかり)を待(ま)ち望(のぞ)んだのにやみが来(き)た。
二七わたしのはらわたは沸(わ)きかえって、静(しず)まらない。
悩(なや)みの日(ひ)がわたしに近(ちか)づいた。
二八わたしは日(ひ)の光(ひかり)によらずに黒(くろ)くなって歩(ある)き、
公会(こうかい)の中(なか)に立(た)って助(たす)けを呼(よ)び求(もと)める。
二九わたしは山犬(やまいぬ)の兄弟(きょうだい)となり、
だちょうの友(とも)となった。
三〇わたしの皮膚(ひふ)は黒(くろ)くなって、はげ落(お)ち、
わたしの骨(ほね)は熱(あつ)さによって燃(も)え、
三一わたしの琴(こと)は悲(かな)しみの音(ね)となり、
わたしの笛(ふえ)は泣(な)く者(もの)の声(こえ)となった。

第三一章

一わたしは、わたしの目（め）と
契約（けいやく）を結（むす）んだ、
どうして、おとめを慕（した）うことができようか。
二もしそうすれば上（うえ）から神（かみ）の下（くだ）される分（ぶん）は
どんなであろうか。
高（たか）き所（ところ）から全能者（ぜんのうしゃ）の与（あた）えられる嗣業（しぎょう）は
どんなであろうか。
三不義（ふぎ）なる者（もの）には災（わざわい）が下（くだ）らないであろうか。
悪（あく）をなす者（もの）には災難（さいなん）が臨（のぞ）まないであろうか。
四彼（かれ）はわたしの道（みち）をみそなわし、
わたしの歩（あゆ）みをことごとく数（かぞ）えられぬであろうか。
五もし、わたしがうそと共（とも）に歩（あゆ）み、

わたしの足が偽りにむかって
急いだことがあるなら、
六（正しいはかりをもってわたしを量れ、
そうすれば神はわたしの潔白を知られるであろう。）
七もしわたしの歩みが、道をはなれ、
わたしの心がわたしの目にしたがって歩み、
わたしの手に汚れがついていたなら、
八わたしのまいたのを他の人が食べ、
わたしのために成長するものが、
抜き取られてもかまわない。
九もし、わたしの心が、女に迷ったことがあるか、
またわたしが隣り人の門で

待ち伏せしたことがあるなら、
一〇わたしの妻が他の人のためにうすをひき、
他の人が彼女の上に寝てもかまわない。
一一これは重い罪であって、
さばきびとに罰せられるべき悪事だからである。
一二これは滅びに至るまでも焼きつくす火であって、
わたしのすべての産業を根こそぎ焼くであろう。
一三わたしのしもべ、また、はしためが
わたしと言い争ったときに、
わたしがもしその言い分を退けたことがあるなら、
一四神が立ち上がられるとき、わたしはどうしようか、
神が尋ねられるとき、なんとお答えしようか。

一五わたしを胎内《たいない》に造《つく》られた者《もの》は、
彼《かれ》をも造《つく》られたのではないか。
われわれを腹《はら》の内《うち》に形造《かたちつく》られた者《もの》は、
ただひとりではないか。
一六わたしがもし貧《まず》しい者《もの》の願《ねが》いを退《しりぞ》け、
やもめの目《め》を衰《おとろ》えさせ、
一七あるいはわたしひとりで食物《しょくもつ》を食《た》べて、
みなしごに食《た》べさせなかったことがあるなら、
一八（わたしは彼《かれ》の幼《おさな》い時《とき》から父《ちち》のように彼《かれ》を育《そだ》て、
またその母《はは》の胎《たい》を出《で》たときから彼《かれ》を導《みちび》いた。）
一九もし着物《きもの》がないために死《し》のうとする者《もの》や、
身《み》をおおう物《もの》のない貧《まず》しい人《ひと》をわたしが見《み》た時《とき》に、

二〇その腰がわたしを祝福せず、
また彼がわたしの羊の毛で
　暖まらなかったことがあるなら、
二一もしわたしを助ける者が門におるのを見て、
みなしごにむかってわたしの手を
振り上げたことがあるなら、
二二わたしの肩骨が、肩から落ち、
わたしの腕が、つけ根から折れてもかまわない。
二三わたしは神から出る災を恐れる、
その威光の前には何事もなすことはできない。
二四わたしがもし金をわが望みとし、
精金をわが頼みと言ったことがあるなら、

二五わたしがもしわが富の大いなる事と、
わたしの手に多くの物を獲た事とを
喜んだことがあるなら、
二六わたしがもし日の輝くのを見、
または月の照りわたって動くのを見た時、
二七心ひそかに迷って、手に口づけしたことがあるなら、
二八これもまたさばきびとに罰せらるべき悪事だ。
わたしは上なる神を欺いたからである。
二九わたしがもしわたしを憎む者の滅びるのを喜び、
または災が彼に臨んだとき、
勝ち誇ったことがあるなら、
三〇（わたしはわが口に罪を犯させず、

のろいをもって彼の命を求めたことはなかった。）
三一もし、わたしの天幕の人々で、
『だれか彼の肉に飽きなかった者があるか』と、
言わなかったことがあるなら、
三二（他国人はちまたに宿らず、
わたしはわが門を旅びとに開いた。）
三三わたしがもし人々の前にわたしのとがをおおい、
わたしの悪事を胸の中に隠したことがあるなら、
三四わたしが大衆を恐れ、宗族の侮りにおぢて、
口を閉じ、門を出なかったことがあるなら、
三五ああ、わたしに聞いてくれる者があればよいのだが、
（わたしのかきはんがここにある。

どうか、全能者がわたしに答えられるように。）
ああ、わたしの敵の書いた
告訴状があればよいのだが。
三六わたしは必ずこれを肩に負い、
冠のようにこれをわが身に結び、
三七わが歩みの数を彼に述べ、
君たる者のようにして、彼に近づくであろう。
三八もしわが田畑がわたしに向かって呼ばわり、
そのうねみぞが共に泣き叫んだことがあるなら、
三九もしわたしが金を払わないでその産物を食べ、
その持ち主を死なせたことがあるなら、
四〇小麦の代りに、いばらがはえ、

大麦の代りに雑草がはえてもかまわない」。
ヨブの言葉は終った。

第三二章
一このようにヨブが自分の正しいことを主張したので、これら
三人の者はヨブに答えるのをやめた。
二その時ラム族のブズびとバラケル
の子エリフは怒りを起した。すなわちヨブが神よりも自分の正しいことを
主張するので、彼はヨブに向かって怒りを起した。
三またヨブの三人の
友がヨブを罪ありとしながら、答える言葉がなかったので、エリフは彼ら
にむかっても怒りを起した。
四エリフは彼らが皆、自分よりも年長者で
あったので、ヨブに物言うことをひかえて待っていたが、
五ここにエリフは
三人の口に答える言葉のないのを見て怒りを起した。
六ブズびとバラケルの子エリフは答えて言った、
「わたしは年若く、あなたがたは年老いている。

それゆえ、わたしははばかって、
わたしの意見を述べることをあえてしなかった。
七わたしは思った、『日を重ねた者が語るべきだ、
年を積んだ者が知恵を教えるべきだ』と。
八しかし人のうちには霊があり、
全能者の息が人に悟りを与える。
九老いた者、必ずしも知恵があるのではなく、
年とった者、必ずしも道理をわきまえるのではない。
一〇ゆえにわたしは言う、『わたしに聞け、
わたしもまたわが意見を述べよう』。
一一見よ、わたしはあなたがたの言葉に期待し、
その知恵ある言葉に耳を傾け、
あなたがたが言うべき言葉を捜し出すのを

待っていた。
一二わたしはあなたがたに心をとめたが、
あなたがたのうちにヨブを言いふせる者は
ひとりもなく、
また彼の言葉に答える者はひとりもなかった。
一三おそらくあなたがたは言うだろう、
『われわれは知恵を見いだした、
彼に勝つことのできるのは神だけで、
人にはできない』と。
一四彼はその言葉をわたしに向けて言わなかった。
わたしはあなたがたの言葉をもって
彼に答えることはしない。

一五彼らは驚いて、もはや答えることをせず、
彼らには、もはや言うべき言葉がない。
一六彼らは物言わず、
立ちとどまって、もはや答えるところがないので、
わたしはこれ以上待つ必要があろうか。
一七わたしもまたわたしの分を答え、
わたしの意見を述べよう。
一八わたしには言葉が満ち、
わたしのうちの霊がわたしに迫るからだ。
一九見よ、わたしの心は口を開かないぶどう酒のように、
新しいぶどう酒の皮袋のように、
今にも張りさけようとしている。

二〇わたしは語って、気を晴らし、
くちびるを開いて答えよう。
二一わたしはだれをもかたより見ることなく、
また何人とにもへつらうことをしない。
二二わたしはへつらうことを知らないからだ。
もしへつらうならば、わたしの造り主は直ちに
わたしを滅ぼされるであろう。

第三三章

一だから、ヨブよ、今わたしの言うことを聞け、
わたしのすべての言葉に耳を傾けよ。
二見よ、わたしは口を開き、口の中の舌は物言う。
三わたしの言葉はわが心の正しきを語り、

わたしのくちびるは真実(しんじつ)をもってその知識(ちしき)を語(かた)る。
四 神(かみ)の霊(れい)はわたしを造(つく)り、
全能者(ぜんのうしゃ)の息(いき)はわたしを生(い)かす。
五 あなたがもしできるなら、わたしに答(こた)えよ、
わたしの前(まえ)に言葉(ことば)を整(ととの)えて、立(た)て。
六 見(み)よ、神(かみ)に対(たい)しては、わたしもあなたと同様(どうよう)であり、
わたしもまた土(つち)から取(と)って造(つく)られた者(もの)だ。
七 見(み)よ、わたしの威厳(いげん)はあなたを恐(おそ)れさせない、
わたしの勢(いきお)いはあなたを圧(あっ)しない。
八 確(たし)かに、あなたはわたしの聞(き)くところで言(い)った、
わたしはあなたの言葉(ことば)の声(こえ)を聞(き)いた。
九 あなたは言(い)う、『わたしはいさぎよく、とがはない。

わたしは清く、不義はない。
一〇見よ、彼はわたしを攻める口実を見つけ、
わたしを自分の敵とみなし、
一一わたしの足をかせにはめ、
わたしのすべての行いに目をとめられる』と。
一二見よ、わたしはあなたに答える、
あなたはこの事において正しくない。
神は人よりも大いなる者だ。
一三あなたが『彼はわたしの言葉に
少しも答えられない』といって、
彼に向かって言い争うのは、どういうわけであるか。
一四神は一つの方法によって語られ、

また二つの方法によって語られるのだが、
人はそれを悟らないのだ。
一五人々が熟睡するとき、または床にまどろむとき、
夢あるいは夜の幻のうちで、
一六彼は人々の耳を開き、
警告をもって彼らを恐れさせ、
一七こうして人にその悪しきわざを離れさせ、
高ぶりを人から除き、
一八その魂を守って、墓に至らせず、
その命を守って、つるぎに滅びないようにされる。
一九人はまたその床の上で痛みによって懲らされ、
その骨に戦いが絶えることなく、

二〇その命は、食物をいとい、
その食欲は、おいしい食物をきらう。
二一その肉はやせ落ちて見えず、
その骨は見えなかったものまでもあらわになり、
二二その魂は墓に近づき、その命は滅ぼす者に近づく。
二三もしそこに彼のためにひとりの天使があり、
千のうちのひとりであって、仲保となり、
人にその正しい道を示すならば、
二四神は彼をあわれんで言われる、
『彼を救って、墓に下ることを免れさせよ、
わたしはすでにあがないしろを得た。
二五彼の肉を幼な子の肉よりもみずみずしくならせ、

彼を若い時の元気に帰らせよ』と。
二六その時、彼が神に祈るならば、神は彼を顧み、
喜びをもって、み前にいたらせ、
その救を人に告げ知らせられる。
二七彼は人々の前に歌って言う、
『わたしは罪を犯し、正しい事を曲げた。
しかしわたしに報復がなかった。
二八彼はわたしの魂をあがなって、
墓に下らせられなかった。
わたしの命は光を見ることができる』と。
二九見よ、神はこれらすべての事を
ふたたび、みたび人に行い、

三〇その魂を墓から引き返し、
彼に命の光を見させられる。
三一ヨブよ、耳を傾けてわたしに聞け、
黙せよ、わたしは語ろう。
三二あなたがもし言うべきことがあるなら、
わたしに答えよ、
語れ、わたしはあなたを正しい者にしようと
望むからだ。
三三もし語ることがないなら、わたしに聞け、
黙せよ、わたしはあなたに知恵を教えよう」。

第三四章一エリフはまた答えて言った、
二「あなたがた知恵ある人々よ、わたしの言葉を聞け、

あなたがた知識ある人々よ、わたしに耳を傾けよ。
三口が食物を味わうように、
耳は言葉をわきまえるからだ。
四われわれは正しい事を選び、
われわれの間に良い事の
何であるかを明らかにしよう。
五ヨブは言った、『わたしは正しい、
神はわたしの公義を奪われた。
六わたしは正しいにもかかわらず、偽る者とされた。
わたしにはとががないけれども、
わたしの矢傷はいえない』と。
七だれかヨブのような人があろう。

彼はあざけりを水のように飲み、
八悪をなす者どもと交わり、悪人と共に歩む。
九彼は言った、『人は神と親しんでも、
なんの益もない』と。

一〇それであなたがた理解ある人々よ、わたしに聞け、
神は断じて悪を行うことなく、
全能者は断じて不義を行うことはない。
一一神は人のわざにしたがってその身に報い、
おのおのの道にしたがって、
その身に振りかからせられる。
一二まことに神は悪しき事を行われない。
全能者はさばきをまげられない。

一三だれかこの地を彼にゆだねた者があるか。
だれか全世界を彼に負わせた者があるか。
一四神がもしその霊をご自分に取りもどし、
その息をご自分に取りあつめられるならば、
一五すべての肉は共に滅び、
人はちりに帰るであろう。
一六もし、あなたに悟りがあるならば、これを聞け、
わたしの言うところに耳を傾けよ。
一七公義を憎む者は世を治めることができようか。
正しく力ある者を、あなたは非難するであろうか。
一八王たる者に向かって『よこしまな者』と言い、
つかさたる者に向かって、『悪しき者』と

言うことができるであろうか。
一九神は君たる者をもかたより見られることなく、
富める者を貧しき者にまさって
顧みられることはない。
彼らは皆み手のわざだからである。
二〇彼らはまたたく間に死に、
民は夜の間に振われて、消えうせ、
力ある者も人手によらずに除かれる。
二一神の目が人の道の上にあって、
そのすべての歩みを見られるからだ。
二二悪を行う者には身を隠すべき暗やみもなく、
暗黒もない。

二三人がさばきのために神の前に出るとき、
神は人のために時を定めておかれない。
二四彼は力ある者をも調べることなく打ち滅ぼし、
他の人々を立てて、これに替えられる。
二五このように、神は彼らのわざを知り、
夜の間に彼らをくつがえされるので、
彼らはやがて滅びる。
二六彼は人々の見る所で、
彼らをその悪のために撃たれる。
二七これは彼らがそむいて彼に従わず、
その道を全く顧みないからだ。
二八こうして彼らは貧しき者の叫びを

彼のもとにいたらせ、
悩める者の叫びを彼に聞かせる。
二九彼が黙っておられるとき、
だれが非難することができようか。
彼が顔を隠されるとき、
だれが彼を見ることができようか。
一国の上にも、一人の上にも同様だ。
三〇これは神を信じない者が世を治めることがなく、
民をわなにかける事のないようにするためである。
三一だれが神に向かって言ったか、
『わたしは罪を犯さないのに、懲しめられた。
三二わたしの見ないものをわたしに教えられたい。

もしわたしが悪い事をしたなら、
重ねてこれをしない』と。
三三あなたが拒むゆえに、
彼はあなたの好むように報いをされるであろうか。
あなたみずから選ぶがよい、わたしはしない。
あなたの知るところを言いなさい。
三四悟りある人々はわたしに言うだろう、
わたしに聞くところの知恵ある人は言うだろう、
三五『ヨブの言うところは知識がなく、
その言葉は悟りがない』と。
三六どうかヨブが終りまで試みられるように、
彼は悪人のように答えるからである。

三七彼は自分の罪に、とがを加え、
われわれの中にあって手をうち、
神に逆らって、その言葉をしげくする」。

第三五章一エリフはまた答えて言った、
二「あなたはこれを正しいと思うのか、
あなたは『神の前に自分は正しい』と言うのか。
三あなたは言う、『これはわたしになんの益があるか、
罪を犯したのとくらべて
なんのまさるところがあるか』と。
四わたしはあなたおよび、
あなたと共にいるあなたの友人たちに答えよう。
五天を仰ぎ見よ、

あなたの上なる高き空を望み見よ。
六あなたが罪を犯しても、
彼になんのさしさわりがあるか。
あなたのとがが多くても、彼に何をなし得ようか。
七またあなたは正しくても、彼に何を与え得ようか。
彼はあなたの手から何を受けられるであろうか。
八あなたの悪はただあなたのような人にかかわり、
あなたの義はただ人の子にかかわるのみだ。
九しえたげの多いために叫び、
力ある者の腕のゆえに呼ばわる人々がある。
一〇しかし、ひとりとして言う者はない、
『わが造り主なる神はどこにおられるか、

彼は夜の間に歌を与え、
一一地の獣よりも多く、われわれを教え、
空の鳥よりも、われわれを賢くされる方である』と。
一二彼らが叫んでも答えられないのは、
悪しき者の高ぶりによる。
一三まことに神はむなしい叫びを聞かれない。
また全能者はこれを顧みられない。
一四あなたが彼を見ないと言う時はなおさらだ。
さばきは神の前にある。
あなたは彼を待つべきである。
一五今彼が怒りをもって罰せず、
罪とがを深く心にとめられないゆえに

一六ヨブは口を開いてむなしい事を述べ、
無知の言葉をしげくする」。

第三六章

一エリフは重ねて言った、
二「しばらく待て、わたしはあなたに示すことがある。
なお神のために言うべき事がある。
三わたしは遠くからわが知識を取り、
わが造り主に正義を帰する。
四まことにわたしの言葉は偽らない。
知識の全き者があなたと共にいる。
五見よ、神は力ある者であるが、
何をも卑しめられない、
その悟りの力は大きい。

六彼は悪しき者を生かしておかれない、
苦しむ者のためにさばきを行われる。
七彼は正しい者から目を離さず、
位にある王たちと共に、とこしえに、
彼らをすわらせて、尊くされる。
八もし彼らが足かせにつながれ、
悩みのなわに捕えられる時は、
九彼らの行いと、とがと、
その高ぶったふるまいを彼らに示し、
一〇彼らの耳を開いて、教を聞かせ、
悪を離れて帰ることを命じられる。
一一もし彼らが聞いて彼に仕えるならば、

彼らはその日を幸福に過ごし、
その年を楽しく送るであろう。
一二しかし彼らが聞かないならば、つるぎによって滅び、
知識を得ないで死ぬであろう。
一三心に神を信じない者どもは怒りをたくわえ、
神に縛られる時も、助けを呼び求めることをしない。
一四彼らは年若くして死に、
その命は恥のうちに終る。
一五神は苦しむ者をその苦しみによって救い、
彼らの耳を逆境によって開かれる。
一六神はまたあなたを悩みから、
束縛のない広い所に誘い出された。

そしてあなたの食卓に置かれた物は
すべて肥えた物であった。
一七しかしあなたは悪人のうくべき
さばきをおのれに満たし、
さばきと公義はあなたを捕えている。
一八あなたは怒りに誘われて、
あざけりに陥らぬように心せよ。
あがないしろの大いなるがために、おのれを誤るな。
一九あなたの叫びはあなたを守って、
悩みを免れさせるであろうか、
いかに力をつくしても役に立たない。
二〇人々がその所から断たれる

その夜を慕ってはならない。
二一 慎んで悪に傾いてはならない。
あなたは悩みよりもむしろこれを選んだからだ。
二二見よ、神はその力をもってあがめられる。
だれか彼のように教える者があるか。
二三だれか彼のためにその道を定めた者があるか。
だれか『あなたは悪い事をした』と
言いうる者があるか。
二四神のみわざをほめたたえる事を忘れてはならない。
これは人々の歌いあがめるところである。
二五すべての人はこれを仰ぎ見る。
人は遠くからこれを見るにすぎない。

二六見よ、神は大いなる者にいまして、
われわれは彼を知らない。
その年の数も計り知ることができない。
二七彼は水のしたたりを引きあげ、
その霧をしたたらせて雨とされる。
二八空はこれを降らせて、人の上に豊かに注ぐ。
二九だれか雲の広がるわけと、
その幕屋のとどろくわけとを
悟ることができようか。
三〇見よ、彼はその光をおのれのまわりにひろげ、
また海の底をおおわれる。
三一彼はこれらをもって民をさばき、

食物を豊かに賜い、
三二いなずまをもってもろ手を包み、
これに命じて敵を打たせられる。
三三そのとどろきは、
悪にむかって怒りに燃える彼を現す。

第三七章

一これがためにわが心もまたわななき、
その所からとび離れる。
二聞け、神の声のとどろきを、
またその口から出るささやきを。
三彼はこれを天が下に放ち、
その光を地のすみずみまで至らせられる。

四その後、声とどろき、
彼はそのいかめしい声をもって鳴り渡られる。
その声の聞える時、
彼はいなずまを引きとめられない。
五神はその驚くべき声をもって鳴り渡り、
われわれの悟りえない大いなる事を行われる。
六彼は雪に向かって『地に降れ』と命じ、
夕立および雨に向かって『強く降れ』と命じられる。
七彼はすべての人の手を封じられる。
これはすべての人にみわざを知らせるためである。
八その時、獣は穴に入り、そのほらにとどまる。
九つむじ風はそのへやから、

寒さは北風から来る。
一〇神のいぶきによって氷が張り、
広々とした水は凍る。
一一彼は濃い雲に水気を負わせ、
雲はそのいなずまを散らす。
一二これは彼の導きによってめぐる。
彼の命じるところをことごとく
世界のおもてに行うためである。
一三神がこれらをこさせるのは、懲しめのため、
あるいはその地のため、
あるいはいつくしみのためである。
一四ヨブよ、これを聞け、

立って神のくすしきみわざを考えよ。
一五あなたは知っているか、
神がいかにこれらに命じて、
その雲の光を輝かされるかを。
一六あなたは知っているか、雲のつりあいと、
知識の全き者のくすしきみわざを。
一七南風によって地が穏やかになる時、
あなたの着物が熱くなることを。
一八あなたは鋳た鏡のように堅い大空を、
彼のように張ることができるか。
一九われわれが彼に言うべき事をわれわれに教えよ、
われわれは暗くて、言葉をつらねることはできない。

二〇わたしは語ることがあると
彼に告げることができようか、
人は滅ぼされることを望むであろうか。
二一光が空に輝いているとき、風過ぎて空を清めると、
人々はその光を見ることができない。
二二北から黄金のような輝きがでてくる。
神には恐るべき威光がある。
二三全能者は――
われわれはこれを見いだすことができない。
彼は力と公義とにすぐれ、
正義に満ちて、これを曲げることはない。
二四それゆえ、人々は彼を恐れる。

彼はみずから賢いと思う者を顧みられない」。

第三八章 一この時、主はつむじ風の中からヨブに答えられた、
二「無知の言葉をもって、
神の計りごとを暗くするこの者はだれか。
三あなたは腰に帯して、男らしくせよ。
わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ。
四わたしが地の基をすえた時、どこにいたか。
もしあなたが知っているなら言え。
五あなたがもし知っているなら、
だれがその度量を定めたか。
だれが測りなわを地の上に張ったか。
六その土台は何の上に置かれたか。

その隅の石はだれがすえたか。
七かの時には明けの星は相共に歌い、
神の子たちはみな喜び呼ばわった。
八海の水が流れいで、胎内からわき出たとき、
だれが戸をもって、これを閉じこめたか。
九あの時、わたしは雲をもって衣とし、
黒雲をもってむつきとし、
一〇これがために境を定め、
関および戸を設けて、
一一言った、『ここまで来てもよい、越えてはならぬ、
おまえの高波はここにとどまるのだ』と。
一二あなたは生れた日からこのかた朝に命じ、

夜明けにその所を知らせ、
一三これに地の縁をとらえさせ、
悪人をその上から振り落させたことがあるか。
一四地は印せられた土のように変り、
衣のようにいろどられる。
一五悪人はその光を奪われ、
その高くあげた腕は折られる。
一六あなたは海の源に行ったことがあるか。
淵の底を歩いたことがあるか。
一七死の門はあなたのために開かれたか。
あなたは暗黒の門を見たことがあるか。
一八あなたは地の広さを見きわめたか。

もしことごとく知っているならば言え。
一九光のある所に至る道はいずれか。
暗やみのある所はどこか。
二〇あなたはこれをその境に導くことができるか。
その家路を知っているか。
二一あなたは知っているだろう、
あなたはかの時すでに生れており、
またあなたの日数も多いのだから。
二二あなたは雪の倉にはいったことがあるか。
ひょうの倉を見たことがあるか。
二三これらは悩みの時のため、いくさと戦いの日のため、
わたしがたくわえて置いたものだ。

二四 光の広がる道はどこか。
東風の地に吹き渡る道はどこか。
二五 だれが大雨のために水路を切り開き、
いかずちの光のために道を開き、
二六 人なき地にも、人なき荒野にも雨を降らせ、
二七 荒れすたれた地をあき足らせ、
これに若草をはえさせるか。
二八 雨に父があるか。
露の玉はだれが生んだか。
二九 氷はだれの胎から出たか。
空の霜はだれが生んだか。
三〇 水は固まって石のようになり、淵のおもては凍る。

三一あなたはプレアデスの鎖を結ぶことができるか。
オリオンの綱を解くことができるか。
三二あなたは十二宮をその時にしたがって
引き出すことができるか。
北斗とその子星を導くことができるか。
三三あなたは天の法則を知っているか、
そのおきてを地に施すことができるか。
三四あなたは声を雲にあげ、
多くの水にあなたをおおわせることができるか。
三五あなたはいなずまをつかわして行かせ、
『われわれはここにいる』と、
あなたに言わせることができるか。

三六雲に知恵を置き、
霧に悟りを与えたのはだれか。
三七だれが知恵をもって雲を数えることができるか。
だれが天の皮袋を傾けて、
三八ちりを一つに流れ合わさせ、
土くれを固まらせることができるか。
三九あなたはししのために食物を狩り、
子じしの食欲を満たすことができるか。
四〇彼らがほら穴に伏し、
林のなかに待ち伏せする時、
あなたはこの事をなすことができるか。
四一からすの子が神に向かって呼ばわり、

食物がなくて、さまようとき、
からすにえさを与える者はだれか。

第三九章

一 あなたは岩間のやぎが
子を産むときを知っているか。
あなたは雌じかが子を産むのを見たことがあるか。
二 これらの妊娠の月を数えることができるか。
これらが産む時を知っているか。
三 これらは身をかがめて子を産み、
そのはらみ子を産みいだす。
四 その子は強くなって、野に育ち、
出て行って、その親のもとに帰らない。

五だれが野ろばを放って、自由にしたか。
だれが野ろばのつなぎを解いたか。
六わたしは荒野をその家として与え、
荒れ地をそのすみかとして与えた。
七これは町の騒ぎをいやしめ、
御者の呼ぶ声を聞きいれず、
八山を牧場としてはせまわり、
もろもろの青物を尋ね求める。
九野牛は快くあなたに仕え、
あなたの飼葉おけのかたわらにとどまるだろうか。
一〇あなたは野牛に手綱をつけて
うねを歩かせることができるか、

これはあなたに従って谷を耕すであろうか。
一一その力が強いからとて、
あなたはこれに頼むであろうか。
またあなたの仕事をこれに任せるであろうか。
一二あなたはこれにたよって、あなたの穀物を
打ち場に運び帰らせるであろうか。
一三だちょうは威勢よくその翼をふるう。
しかしこれにはきれいな羽と羽毛があるか。
一四これはその卵を土の中に捨て置き、
これを砂のなかで暖め、
一五足でつぶされることも、
野の獣に踏まれることも忘れている。

一六これはその子(こ)に無情(むじょう)であって、
あたかも自分(じぶん)の子(こ)でないようにし、
その苦労(くろう)のむなしくなるをも恐(おそ)れない。
一七これは神(かみ)がこれに知恵(ちえ)を授(さず)けず、
悟(さと)りを与(あた)えなかったゆえである。
一八これがその身(み)を起(おこ)して走(はし)る時(とき)には、
馬(うま)をも、その乗(の)り手(て)をもあざける。
一九あなたは馬(うま)にその力(ちから)を与(あた)えることができるか。
力(ちから)をもってその首(くび)を装(よそお)うことができるか。
二〇あなたはこれをいなごのように、
とばせることができるか。
その鼻(はな)あらしの威力(いりょく)は恐(おそ)ろしい。

二一これは谷であがき、その力に誇り、
みずから出ていって武器に向かう。
二二これは恐れをあざ笑って、驚くことなく、
つるぎをさけて退くことがない。
二三矢筒はその上に鳴り、
やりと投げやりと、あいきらめく。
二四これはたけりつ、狂いつ、地をひとのみにし、
ラッパの音が鳴り渡っても、立ちどまることがない。
二五これはラッパの鳴るごとにハアハアと言い、
遠くから戦いをかぎつけ、
隊長の大声およびときの声を聞き知る。
二六たかが舞いあがり、その翼をのべて南に向かうのは、

あなたの知恵によるのか、
二七わしがかけのぼり、その巣を高い所につくるのは、
あなたの命令によるのか。
二八これは岩の上にすみかを構え、
岩のとがり、または険しい所におり、
二九そこから獲物をうかがう。
その目の及ぶところは遠い。
三〇そのひなもまた血を吸う。
おおよそ殺された者のある所には、これもそこにいる」。

第四〇章
一主はまたヨブに答えて言われた、
二「非難する者が全能者と争おうとするのか、
神と論ずる者はこれに答えよ」。

三そこで、ヨブは主に答えて言った、
四「見よ、わたしはまことに卑しい者です、
なんとあなたに答えましょうか。
ただ手を口に当てるのみです。
五わたしはすでに一度言いました、また言いません、
すでに二度言いました、重ねて申しません」。
六主はまたつむじ風の中からヨブに答えられた、
七「あなたは腰に帯して、男らしくせよ。
わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ。
八あなたはなお、わたしに責任を負わそうとするのか。
あなたはわたしを非とし、
自分を是としようとするのか。

九あなたは神のような腕を持っているのか、
神のような声でとどろきわたることができるか。
一〇あなたは威光と尊厳とをもってその身を飾り、
栄光と華麗とをもってその身を装ってみよ。
一一あなたのあふるる怒りを漏らし、
すべての高ぶる者を見て、これを低くせよ。
一二すべての高ぶる者を見て、これをかがませ、
また悪人をその所で踏みつけ、
一三彼らをともにちりの中にうずめ、
その顔を隠れた所に閉じこめよ。
一四そうすれば、わたしもまた、あなたをほめて、
あなたの右の手は

あなたを救うことができるとしよう。
一五河馬を見よ、
これはあなたと同様にわたしが造ったもので、
牛のように草を食う。
一六見よ、その力は腰にあり、
その勢いは腹の筋にある。
一七これはその尾を香柏のように動かし、
そのももの筋は互にからみ合う。
一八その骨は青銅の管のようで、
その肋骨は鉄の棒のようだ。
一九これは神のわざの第一のものであって、
これを造った者がこれにつるぎを授けた。

二〇山(やま)もこれがために食物(しょくもつ)をいだし、
もろもろの野(の)の獣(けもの)もそこに遊(あそ)ぶ。
二一これは酸棗(さんそう)の木(き)の下(した)に伏(ふ)し、
葦(あし)の茂(しげ)み、または沼(ぬま)に隠(かく)れている。
二二酸棗(さんそう)の木(き)はその陰(かげ)でこれをおおい、
川(かわ)の柳(やなぎ)はこれをめぐり囲(かこ)む。
二三見(み)よ、たとい川(かわ)が荒(あ)れても、これは驚(おどろ)かない。
ヨルダンがその口(くち)に注(そそ)ぎかかっても、
これはあわてない。
二四だれが、かぎでこれを捕(とら)えることができるか。
だれが、わなでその鼻(はな)を貫(つらぬ)くことができるか。

第四一章

一あなたはつり針(ばり)で
わにをつり出(だ)すことができるか。
糸(いと)でその舌(した)を押(おさ)えることができるか。
二あなたは葦(あし)のなわをその鼻(はな)に通(とお)すことができるか。
つり針(ばり)でそのあごを突(つ)き通(とお)すことができるか。
三これはしきりに、あなたに願(ねが)い求(もと)めるであろうか。
柔(やわ)らかな言葉(ことば)をあなたに語(かた)るであろうか。
四これはあなたと契約(けいやく)を結(むす)ぶであろうか。
あなたはこれを取(と)って、ながくあなたのしもべと
することができるであろうか。
五あなたは鳥(とり)と戯(たわむ)れるようにこれと戯(たわむ)れ、
またあなたのおとめたちのために、
これをつないでおくことができるであろうか。

六商人の仲間はこれを商品として、
小売商人の間に分けるであろうか。
七あなたは、もりでその皮を満たし、
やすでその頭を突き通すことができるか。
八あなたの手をこれの上に置け、
あなたは戦いを思い出して、
再びこれをしないであろう。
九見よ、その望みはむなしくなり、
これを見てすら倒れる。
一〇あえてこれを激する勇気のある者はひとりもない。
それで、だれがわたしの前に立つことができるか。
一一だれが先にわたしに与えたので、

わたしはこれに報(むく)いるのか。
天(あめ)が下(した)にあるものは、ことごとくわたしのものだ。
一二わたしはこれが全身(ぜんしん)と、その著(いちじる)しい力(ちから)と、
その美(うつく)しい構造(こうぞう)について
黙(だま)っていることはできない。
一三だれがその上着(うわぎ)をはぐことができるか。
だれがその二重(ふたえ)のよろいの間(あいだ)に
はいることができるか。
一四だれがその顔(かお)の戸(と)を開(ひら)くことができるか。
そのまわりの歯(は)は恐(おそ)ろしい。
一五その背(せ)は盾(たて)の列(れつ)でできていて、
その堅(かた)く閉(と)じたさまは密封(みっぷう)したように、

一六相互に密接して、
風もその間に、はいることができず、
一七互に相連なり、
固く着いて離すことができない。
一八これが、くしゃみすれば光を発し、
その目はあけぼののまぶたに似ている。
一九その口からは、たいまつが燃えいで、
火花をいだす。
二〇その鼻の穴からは煙が出てきて、
さながら煮え立つなべの水煙のごとく、
燃える葦の煙のようだ。
二一その息は炭火をおこし、

その口からは炎が出る。
二二その首には力が宿っていて、
恐ろしさが、その前に踊っている。
二三その肉片は密接に相連なり、
固く身に着いて動かすことができない。
二四その心臓は石のように堅く、
うすの下石のように堅い。
二五その身を起すときは勇士も恐れ、
その衝撃によってあわて惑う。
二六つるぎがこれを撃っても、きかない、
やりも、矢も、もりも用をなさない。
二七これは鉄を見ること、わらのように、

青銅を見ること朽ち木のようである。
二八弓矢もこれを逃がすことができない。
石投げの石もこれには、わらくずとなる。
二九こん棒もわらくずのようにみなされ、
投げやりの響きを、これはあざ笑う。
三〇その下腹は鋭いかわらのかけらのようで、
麦こき板のようにその身を泥の上に伸ばす。
三一これは淵をかなえのように沸きかえらせ、
海を香油のなべのようにする。
三二これは自分のあとに光る道を残し、
淵をしらがのように思わせる。
三三地の上にはこれと並ぶものなく、

これは恐れのない者に造られた。
三四これはすべての高き者をさげすみ、
すべての誇り高ぶる者の王である」。

第四二章一そこでヨブは主に答えて言った、
二「わたしは知ります、
あなたはすべての事をなすことができ、
またいかなるおぼしめしでも、
あなたにできないことはないことを。
三『無知をもって神の計りごとをおおう
この者はだれか』。
それゆえ、わたしはみずから悟らない事を言い、
みずから知らない、測り難い事を述べました。

四『聞け、わたしは語ろう、
わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ』。
五わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、
今はわたしの目であなたを拝見いたします。
六それでわたしはみずから恨み、
ちり灰の中で悔います」。
七主はこれらの言葉をヨブに語られて後、テマンびとエリパズに言われた、
「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。あな
たがたが、わたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについて述べな
かったからである。八それで今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取っ
て、わたしのしもべヨブの所へ行き、あなたがたのために燔祭をささげ
よ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈るであろう。わたしは彼

の祈を受けいれるによって、あなたがたの愚かを罰することをしない。あ
なたがたはわたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについて述べな
かったからである」。
九そこでテマンびとエリパズ、シュヒびとビルダデ、ナアマびとゾパルは
行って、主が彼らに命じられたようにしたので、主はヨブの祈を受けい
れられた。
一〇ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブの繁栄をもとに
かえし、そして主はヨブのすべての財産を二倍に増された。一一そこで彼
のすべての兄弟、すべての姉妹、および彼の旧知の者どもことごとく彼
のもとに来て、彼と共にその家で飲み食いし、かつ主が彼にくだされたす
べての災について彼をいたわり、慰め、おのおの銀一ケシタと金の輪
一つを彼に贈った。一二主はヨブの終りを初めよりも多く恵まれた。彼は
羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭をもった。一三

また彼は男の子七人、女の子三人をもった。一四彼はその第一の娘を
エミマと名づけ、第二をケジアと名づけ、第三をケレン・ハップクと名づけ
た。一五全国のうちでヨブの娘たちほど美しい女はなかった。父はそ
の兄弟たちと同様に嗣業を彼らにも与えた。一六この後、ヨブは百四十
年生きながらえて、その子とその孫と四代までを見た。一七ヨブは年老い、
日満ちて死んだ。

詩篇

第一篇

一悪(あ)しき者(もの)のはかりごとに歩(あゆ)まず、
罪(つみ)びとの道(みち)に立(た)たず、
あざける者(もの)の座(ざ)にすわらぬ人(ひと)はさいわいである。
二このような人(ひと)は主(しゅ)のおきてをよろこび、
昼(ひる)も夜(よる)もそのおきてを思(おも)う。
三このような人(ひと)は流(なが)れのほとりに植(う)えられた木(き)の
時(とき)が来(く)ると実(み)を結(むす)び、
その葉(は)もしぼまないように、
そのなすところは皆栄(みなさか)える。

四悪(あ)しき者(もの)はそうでない、
風(かぜ)の吹(ふ)き去(さ)るもみがらのようだ。
五それゆえ、悪(あ)しき者(もの)はさばきに耐(た)えない。
罪(つみ)びとは正(ただ)しい者(もの)のつどいに立(た)つことができない。
六主(しゅ)は正(ただ)しい者(もの)の道(みち)を知(し)られる。
しかし、悪(あ)しき者(もの)の道(みち)は滅(ほろ)びる。

第二篇

一なにゆえ、もろもろの国(くに)びとは騒(さわ)ぎたち、
もろもろの民(たみ)はむなしい事(こと)をたくらむのか。
二地(ち)のもろもろの王(おう)は立(た)ち構(かま)え、
もろもろのつかさはともに、はかり、
主(しゅ)とその油(あぶら)そそがれた者(もの)とに逆(さか)らって言(い)う、

三「われらは彼らのかせをこわし、
彼らのきずなを解き捨てるであろう」と。
四天に座する者は笑い、
主は彼らをあざけられるであろう。
五そして主は憤りをもって彼らに語り、
激しい怒りをもって彼らを恐れ惑わせて言われる、
六「わたしはわが王を聖なる山シオンに立てた」と。
七わたしは主の詔をのべよう。
主はわたしに言われた、「おまえはわたしの子だ。
きょう、わたしはおまえを生んだ。
八わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を
嗣業としておまえに与え、

地のはてまでもおまえの所有として与える。
九おまえは鉄のつえをもって彼らを打ち破り、
陶工の作る器物のように彼らを
打ち砕くであろう」と。
一〇それゆえ、もろもろの王よ、賢くあれ、
地のつかさらよ、戒めをうけよ。
一一恐れをもって主に仕え、おののきをもって
一二その足に口づけせよ。
さもないと主は怒って、
あなたがたを道で滅ぼされるであろう、
その憤りがすみやかに燃えるからである。
すべて主に寄り頼む者はさいわいである。

第三篇ダビデがその子アブサロムを避けてのがれたときの歌

一主よ、わたしに敵する者のいかに多いことでしょう。
わたしに逆らって立つ者が多く、
二「彼には神の助けがない」と、
わたしについて言う者が多いのです。〔セラ
三しかし主よ、あなたはわたしを囲む盾、わが栄え、
わたしの頭を、もたげてくださるかたです。
四わたしが声をあげて主を呼ばわると、
主は聖なる山からわたしに答えられる。〔セラ
五わたしはふして眠り、また目をさます。
主がわたしをささえられるからだ。
六わたしを囲んで立ち構える
ちよろずの民をもわたしは恐れない。

七 主よ、お立ちください。
わが神よ、わたしをお救いください。
あなたはわたしのすべての敵のほおを打ち、
悪しき者の歯を折られるのです。
八 救は主のものです。
どうかあなたの祝福が
あなたの民の上にありますように。〔セラ

第四篇 聖歌隊の指揮者によって琴にあわせてうたわせたダビデの歌

一 わたしの義を助け守られる神よ、
わたしが呼ばわる時、お答えください。
あなたはわたしが悩んでいた時、
わたしをくつろがせてくださいました。
わたしをあわれみ、わたしの祈をお聞きください。

二人の子らよ、いつまでわたしの誉をはずかしめるのか。
いつまでむなしい言葉を愛し、
偽りを慕い求めるのか。〔セラ
三しかしあなたがたは知るがよい、
主は神を敬う人をご自分のために聖別されたことを。
主はわたしが呼ばわる時におききくださる。
四あなたがたは怒っても、罪を犯してはならない。
床の上で静かに自分の心に語りなさい。〔セラ
五義のいけにえをささげて主に寄り頼みなさい。
六多くの人は言う、
「どうか、わたしたちに良い事が見られるように。
主よ、どうか、み顔の光を

わたしたちの上に照されるように」と。
七あなたがわたしの心にお与えになった喜びは、
穀物と、ぶどう酒の豊かな時の喜びに
まさるものでした。
八わたしは安らかに伏し、また眠ります。
主よ、わたしを安らかにおらせてくださるのは、
ただあなただけです。

第五篇

聖歌隊の指揮者によって笛にあわせてうたわせたダビデの歌

一主よ、わたしの言葉に耳を傾け、
わたしの嘆きに、み心をとめてください。
二わが王、わが神よ、
わたしの叫びの声をお聞きください。
わたしはあなたに祈っています。

三主よ、朝ごとにあなたはわたしの声を聞かれます。
わたしは朝ごとにあなたのために
いけにえを備えて待ち望みます。
四あなたは悪しき事を喜ばれる神ではない。
悪人はあなたのもとに身を寄せることはできない。
五高ぶる者はあなたの目の前に立つことはできない。
あなたはすべて悪を行う者を憎まれる。
六あなたは偽りを言う者を滅ぼされる。
主は血を流す者と、人をだます者を忌みきらわれる。
七しかし、わたしはあなたの豊かないつくしみによって、
あなたの家に入り、
聖なる宮にむかって、かしこみ伏し拝みます。

八主よ、わたしのあだのゆえに、
あなたの義をもってわたしを導き、
わたしの前にあなたの道をまっすぐにしてください。
九彼らの口には真実がなく、彼らの心には滅びがあり、
そののどは開いた墓、
その舌はへつらいを言うのです。
一〇神よ、どうか彼らにその罪を負わせ、
そのはかりごとによって、みずから倒れさせ、
その多くのとがのゆえに彼らを追いだしてください。
彼らはあなたにそむいたからです。
一一しかし、すべてあなたに寄り頼む者を喜ばせ、
とこしえに喜び呼ばわらせてください。

また、み名を愛する者があなたによって
喜びを得るように、彼らをお守りください。
一二 主よ、あなたは正しい者を祝福し、
盾をもってするように、
恵みをもってこれをおおい守られます。

第六篇

聖歌隊の指揮者によってシェミニテにあわせ琴をもってうたわせたダビデの歌

一 主よ、あなたの怒りをもって、わたしを責めず、
あなたの激しい怒りをもって、
わたしを懲しめないでください。
二 主よ、わたしをあわれんでください。
わたしは弱り衰えています。
主よ、わたしをいやしてください。

わたしの骨（ほね）は悩（なや）み苦（くる）しんでいます。
三わたしの魂（たましい）もまたいたく悩（なや）み苦（くる）しんでいます。
主（しゅ）よ、あなたはいつまでお怒（いか）りになるのですか。
四主（しゅ）よ、かえりみて、わたしの命（いのち）をお救（すく）いください。
あなたのいつくしみにより、わたしをお助（たす）けください。
五死（し）においては、あなたを覚（おぼ）えるものはなく、
陰府（よみ）においては、だれがあなたを
ほめたたえることができましょうか。
六わたしは嘆（なげ）きによって疲（つか）れ、
夜（よ）ごとに涙（なみだ）をもって、わたしのふしどをただよわせ、
わたしのしとねをぬらした。
七わたしの目（め）は憂（うれ）いによって衰（おとろ）え、
もろもろのあだのゆえに弱（よわ）くなった。

八すべて悪を行う者よ、わたしを離れ去れ。
主はわたしの泣く声を聞かれた。
九主はわたしの願いを聞かれた。
主はわたしの祈をうけられる。
一〇わたしの敵は恥じて、いたく悩み苦しみ、
彼らは退いて、たちどころに恥をうけるであろう。

第七篇

ベニヤミンびとクシのことについてダビデが主にむかってうたったシガヨンの歌

一わが神、主よ、わたしはあなたに寄り頼みます。
どうかすべての追い迫る者からわたしを救い、
わたしをお助けください。
二さもないと彼らは、ししのように、わたしをかき裂き、
助ける者の来ないうちに、引いて行くでしょう。

三 わが神、主よ、もしわたしがこの事を行ったならば、
もしわたしの手によこしまな事があるならば、
四 もしわたしの友に悪をもって報いたことがあり、
ゆえなく、敵のものを略奪したことがあるならば、
五 敵にわたしを追い捕えさせ、
わたしの命を地に踏みにじらせ、
わたしの魂をちりにゆだねさせてください。〔セラ
六 主よ、怒りをもって立ち、
わたしの敵の憤りにむかって立ちあがり、
わたしのために目をさましてください。
あなたはさばきを命じられました。
七 もろもろの民をあなたのまわりにつどわせ、

その上なる高みくらにおすわりください。
八主はもろもろの民をさばかれます。
主よ、わたしの義と、わたしにある誠実とに従って、
わたしをさばいてください。
九どうか悪しき者の悪を断ち、
正しき者を堅く立たせてください。
義なる神よ、あなたは人の心と思いとを調べられます。
一〇わたしを守る盾は神である。
神は心の直き者を救われる。
一一神は義なるさばきびと、
日ごとに憤りを起される神である。
一二もし人が悔い改めないならば、神はそのつるぎをとぎ、

その弓を張って構え、
一三また死に至らせる武器を備え、
その矢を火矢とされる。
一四見よ、悪しき者は邪悪をはらみ、
害毒をやどし、偽りを生む。
一五彼は穴を掘って、それを深くし、
みずから作った穴に陥る。
一六その害毒は自分のかしらに帰り、
その強暴は自分のこうべに下る。
一七わたしは主にむかって、
その義にふさわしい感謝をささげ、
いと高き者なる主の名をほめ歌うであろう。

第八篇
聖歌隊の指揮者によってギテトにあわせてうたわせたダビデの歌

一主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、
いかに尊いことでしょう。
あなたの栄光は天の上にあり、
二みどりごと、ちのみごとの口によって、
ほめたたえられています。
あなたは敵と恨みを晴らす者とを静めるため、
あだに備えて、とりでを設けられました。
三わたしは、あなたの指のわざなる天を見、
あなたが設けられた月と星とを見て思います。
四人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、
人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。
五ただ少しく人を神よりも低く造って、

栄えと誉とをこうむらせ、
六これにみ手のわざを治めさせ、
よろずの物をその足の下におかれました。
七すべての羊と牛、また野の獣、
八空の鳥と海の魚、海路を通うものまでも。
九主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、
いかに尊いことでしょう。

第九篇

聖歌隊の指揮者によってムツラベンのしらべにあわせてうたわせたダビデの歌

一わたしは心をつくして主に感謝し、
あなたのくすしきみわざを
ことごとく宣べ伝えます。
二いと高き者よ、あなたによって

わたしは喜(よろこ)びかつ楽(たの)しみ、
あなたの名(な)をほめ歌(うた)います。
三 わたしの敵(てき)は退(しりぞ)くとき、
つまずき倒(たお)れてあなたの前(まえ)に滅(ほろ)びました。
四 あなたがわたしの正(ただ)しい訴(うった)えを
助(たす)け守(まも)られたからです。
あなたはみくらに座(ざ)して、
正(ただ)しいさばきをされました。
五 あなたはもろもろの国民(くにたみ)を責(せ)め、
悪(あ)しき者(もの)を滅(ほろ)ぼし、
永久(えいきゅう)に彼(かれ)らの名(な)を消(け)し去(さ)られました。
六 敵(てき)は絶(た)えはてて、とこしえに滅(ほろ)び、

あなたが滅ぼされたもろもろの町は
その記憶さえ消えうせました。
七しかし主はとこしえに、み位に座し、
さばきのために、みくらを設けられました。
八主は正義をもって世界をさばき、
公平をもってもろもろの民をさばかれます。
九主はしえたげられる者のとりで、
なやみの時のとりでです。
一〇み名を知る者はあなたに寄り頼みます。
主よ、あなたを尋ね求める者を
あなたは捨てられたことがないからです。
一一シオンに住まわれる主にむかってほめうたい、

そのみわざをもろもろの民のなかに宣べ伝えよ。
一二血を流す者にあだを報いられる主は彼らを心にとめ、
苦しむ者の叫びをお忘れにならないからです。
一三主よ、わたしをあわれんでください。
死の門からわたしを引きあげられる主よ、
あだする者のわたしを悩ますのを
みそなわしてください。
一四そうすれば、わたしはあなたのすべての誉を述べ、
シオンの娘の門で、
あなたの救を喜ぶことができましょう。
一五もろもろの国民は自分の作った穴に陥り、
隠し設けた網に自分の足を捕えられる。

一六主はみずからを知らせ、さばきを行われた。
悪しき者は自分の手で作ったわなに捕えられる。〔ヒガヨン、セラ
一七悪しき者、また神を忘れるもろもろの国民は
陰府へ去って行く。
一八貧しい者は常に忘れられるのではない。
苦しむ者の望みはとこしえに滅びるのではない。
一九主よ、立ちあがってください。
人に勝利を得させず、もろもろの国民に、
み前でさばきを受けさせてください。
二〇主よ、彼らに恐れを起させ、もろもろの国民に
自分がただ、人であることを知らせてください。〔セラ

第一〇篇

一主よ、なにゆえ遠く離れて
立たれるのですか。
なにゆえ悩みの時に身を隠されるのですか。
二悪しき者は高ぶって貧しい者を激しく責めます。
どうぞ彼らがその企てたはかりごとに
みずから捕えられますように。
三悪しき者は自分の心の願いを誇り、
むさぼる者は主をのろい、かつ捨てる。
四悪しき者は誇り顔をして、神を求めない。
その思いに、すべて「神はない」という。
五彼の道は常に栄え、
あなたのさばきは彼を離れて高く、

彼はそのすべてのあだを口先で吹く。
六彼は心の内に言う、「わたしは動かされることはなく、
世々わざわいにあうことがない」と。
七その口はのろいと、欺きと、しえたげとに満ち、
その舌の下には害毒と不正とがある。
八彼は村里の隠れ場におり、
忍びやかな所で罪のない者を殺す。
その目は寄るべなき者をうかがい、
九隠れ場にひそむししのように、ひそかに待ち伏せする。
彼は貧しい者を捕えようと待ち伏せし、
貧しい者を網にひきいれて捕える。
一〇寄るべなき者は彼の力によって

打ちくじかれ、衰え、倒れる。
一一彼は心のうちに言う、「神は忘れた、
神はその顔を隠した、
神は絶えて見ることはなかろう」と。
一二主よ、立ちあがってください。
神よ、み手をあげてください。
苦しむ者を忘れないでください。
一三なにゆえ、悪しき者は神を侮り、心のうちに
「あなたはとがめることをしない」と言うのですか。
一四あなたはみそなわし、悩みと苦しみとを見て、
それをみ手に取られます。
寄るべなき者はあなたに身をゆだねるのです。

あなたはいつもみなしごを助けられました。
一五悪しき者と悪を行う者の腕を折り、
その悪を一つも残さないまでに探り出してください。
一六主はとこしえに王でいらせられる。
もろもろの国民は滅びて
主の国から跡を断つでしょう。
一七主よ、あなたは柔和な者の願いを聞き、
その心を強くし、耳を傾けて、
一八みなしごと、しえたげられる者とのために
さばきを行われます。
地に属する人は再び人を脅かすことはないでしょう。

第一一篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一わたしは主に寄り頼む。
なにゆえ、あなたがたはわたしにむかって言うのか、
「鳥のように山にのがれよ。
二見よ、悪しき者は、暗やみで、
心の直き者を射ようと弓を張り、
弦に矢をつがえている。
三基が取りこわされるならば、
正しい者は何をなし得ようか」と。
四主はその聖なる宮にいまし、主のみくらは天にあり、
その目は人の子らをみそなわし、
そのまぶたは人の子らを調べられる。
五主は正しき者をも、悪しき者をも調べ、

そのみ心は乱暴を好む者を憎まれる。
六主は悪しき者の上に炭火と硫黄とを降らせられる。
燃える風は彼らがその杯にうくべきものである。
七主は正しくいまして、
正しい事を愛されるからである。
直き者は主のみ顔を仰ぎ見るであろう。

第一二篇聖歌隊の指揮者によってシェミニテにあわせてうたわせたダビデの歌

一主よ、お助けください。神を敬う人は絶え、
忠信な者は人の子らのなかから消えうせました。
二人はみなその隣り人に偽りを語り、
へつらいのくちびると、ふたごころとをもって語る。
三主はすべてのへつらいのくちびると、

大きな事を語る舌とを断たれるように。
四彼らは言う、「わたしたちは舌をもって勝を得よう、
わたしたちのくちびるはわたしたちのものだ、
だれがわたしたちの主人であるか」と。
五主は言われる、「貧しい者がかすめられ、
乏しい者が嘆くゆえに、わたしはいま立ちあがって、
彼らをその慕い求める安全な所に置こう」と。
六主のことばは清き言葉である。
地に設けた炉で練り、七たびきよめた銀のようである。
七主よ、われらを保ち、
とこしえにこの人々から免れさせてください。
八卑しい事が人の子のなかにあがめられている時、

悪しき者はいたる所でほしいままに歩いています。

第一三篇 聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一主よ、いつまでなのですか。
とこしえにわたしをお忘れになるのですか。
いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか。
二いつまで、わたしは魂に痛みを負い、ひねもす心に
悲しみをいだかなければならないのですか。
いつまで敵はわたしの上にあがめられるのですか。
三わが神、主よ、みそなわして、わたしに答え、
わたしの目を明らかにしてください。
さもないと、わたしは死の眠りに陥り、
四わたしの敵は「わたしは敵に勝った」と言い、

わたしのあだは、わたしの動かされることによって喜ぶでしょう。
五 しかしわたしはあなたのいつくしみに信頼し、
わたしの心はあなたの救を喜びます。
六 主は豊かにわたしをあしらわれたゆえ、
わたしは主にむかって歌います。

第一四篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一 愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。
彼らは腐れはて、憎むべき事をなし、
善を行う者はない。
二 主は天から人の子らを見おろして、
賢い者、神をたずね求める者が
あるかないかを見られた。

三彼らはみな迷い、みなひとしく腐れた。
善を行う者はない、ひとりもない。
四すべて悪を行う者は悟りがないのか。
彼らは物食うようにわが民をくらい、
また主を呼ぶことをしない。
五その時、彼らは大いに恐れた。
神は正しい者のやからと共におられるからである。
六あなたがたは貧しい者の計画を
はずかしめようとする。
しかし主は彼の避け所である。
七どうか、シオンからイスラエルの救が出るように。
主がその民の繁栄を回復されるとき、

ヤコブは喜び、イスラエルは楽しむであろう。

第一五篇ダビデの歌

一主よ、あなたの幕屋にやどるべき者はだれですか、
あなたの聖なる山に住むべき者はだれですか。
二直く歩み、義を行い、心から真実を語る者、
三その舌をもってそしらず、その友に悪をなさず、
隣り人に対するそしりを取りあげず、
四その目は神に捨てられた者を卑しめ、
主を恐れる者を尊び、
誓った事は自分の損害になっても変えることなく、
五利息をとって金銭を貸すことなく、まいないを取って
罪のない者の不利をはかることをしない人である。

これらの事を行う者は
とこしえに動かされることはない。

第一六篇ダビデのミクタムの歌

一神よ、わたしをお守りください。
わたしはあなたに寄り頼みます。
二わたしは主に言う、「あなたはわたしの主、
あなたのほかにわたしの幸はない」と。
三地にある聖徒は、
すべてわたしの喜ぶすぐれた人々である。
四おおよそ、ほかの神を選ぶ者は悲しみを増す。
わたしは彼らのささげる血の灌祭を注がず、
その名を口にとなえることをしない。

五主はわたしの嗣業、またわたしの杯にうくべきもの。
あなたはわたしの分け前を守られる。
六測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。
まことにわたしは良い嗣業を得た。
七わたしにさとしをさずけられる主をほめまつる。
夜はまた、わたしの心がわたしを教える。
八わたしは常に主をわたしの前に置く。
主がわたしの右にいますゆえ、
わたしは動かされることはない。
九このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。
わたしの身もまた安らかである。
一〇あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、

あなたの聖者に墓を見させられないからである。
一一あなたはいのちの道をわたしに示される。
あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、
あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある。

第一七篇ダビデの祈

一主よ、正しい訴えを聞き、わたしの叫びにみ心をとめ、
偽りのないくちびるから出るわたしの祈に
耳を傾けてください。
二どうかわたしについての宣告がみ前から出て、
あなたの目が公平をみられるように。
三あなたがわたしの心をためし、夜、わたしに臨み、
わたしを試みられても、わたしのうちに

なんの悪(わる)い思(おも)いをも見(み)いだされないでしょう。
わたしの口(くち)も罪(つみ)を犯(おか)しません。
四 人(ひと)のおこないの事(こと)をいえば、
あなたのくちびるの言葉(ことば)によって、
わたしは不法(ふほう)な者(もの)の道(みち)を避(さ)けました。
五 わたしの歩(あゆ)みはあなたの道(みち)に堅(かた)く立(た)ち、
わたしの足(あし)はすべることがなかったのです。
六 神(かみ)よ、わたしはあなたに呼(よ)ばわります。
あなたはわたしに答(こた)えられます。
どうか耳(みみ)を傾(かたむ)けて、
わたしの述(の)べることをお聞(き)きください。
七 寄(よ)り頼(たの)む者(もの)をそのあだから右(みぎ)の手(て)で救(すく)われる者(もの)よ、

あなたのいつくしみを驚くばかりにあらわし、
八ひとみのようにわたしを守り、
みつばさの陰にわたしを隠し、
九わたしをしえたげる悪しき者から、
わたしを囲む恐ろしい敵から、のがれさせてください。
一〇彼らはその心を閉じて、あわれむことなく、
その口をもって高ぶって語るのです。
一一彼らはわたしを追いつめ、わたしを囲み、
わたしを地に投げ倒さんと、その目をそそぎます。
一二彼らはかき裂かんと、いらだつししのごとく、
隠れた所にひそみ待つ子じしのようです。
一三主よ、立ちあがって、彼らに立ちむかい、

彼らを倒してください。
つるぎをもって悪しき者から
わたしのいのちをお救いください。
一四主よ、み手をもって人々からわたしをお救いください。
すなわち自分の分け前をこの世で受け、
あなたの宝をもってその腹を満たされる
世の人々からわたしをお救いください。
彼らは多くの子に飽き足り、
その富を幼な子に残すのです。
一五しかしわたしは義にあって、み顔を見、
目ざめる時、みかたちを見て、満ち足りるでしょう。

第一八篇聖歌隊の指揮者によってうたわせた主のしもべダビデの歌、すなわち主がもろもろのあだの手とサウルの手から救い出された日にダビデはこの歌の言

葉を主にむかって述べて言った
一わが力なる主よ、わたしはあなたを愛します。
二主はわが岩、わが城、わたしを救う者、
わが神、わが寄り頼む岩、
わが盾、わが救の角、わが高きやぐらです。
三わたしはほめまつるべき主に呼ばわって、
わたしの敵から救われるのです。
四死の綱は、わたしを取り巻き、
滅びの大水は、わたしを襲いました。
五陰府の綱は、わたしを囲み、
死のわなは、わたしに立ちむかいました。
六わたしは悩みのうちに主に呼ばわり、
わが神に叫び求めました。

主はその宮からわたしの声を聞かれ、
主にさけぶわたしの叫びがその耳に達しました。
七そのとき地は揺れ動き、山々の基は震い動きました。
主がお怒りになったからです。
八煙はその鼻から立ちのぼり、
火はその口から出て焼きつくし、
炭はそれによって燃えあがりました。
九主は天をたれて下られ、
暗やみがその足の下にありました。
一〇主はケルブに乗って飛び、風の翼をもってかけり、
一一やみをおおいとして、自分のまわりに置き、
水を含んだ暗い濃き雲をその幕屋とされました。

一二そのみ前の輝きから濃き雲を破って、
ひょうと燃える炭とが降ってきました。
一三主はまた天に雷をとどろかせ、
いと高き者がみ声を出されると、
ひょうと燃える炭とが降ってきました。
一四主は矢を放って彼らを散らし、
いなずまをひらめかして彼らを打ち敗られました。
一五主よ、そのとき、あなたのとがめと、
あなたの鼻のいぶきとによって、海の底はあらわれ、
地の基があらわになったのです。
一六主は高い所からみ手を伸べて、わたしを捕え、
大水からわたしを引きあげ、

一七わたしの強（つよ）い敵（てき）と、わたしを憎（にく）む者（もの）とから
わたしを助（たす）け出（だ）されました。
彼（かれ）らはわたしにまさって強（つよ）かったからです。
一八彼（かれ）らはわたしの災（わざわい）の日（ひ）にわたしを襲（おそ）いました。
しかし主（しゅ）はわたしのささえとなられました。
一九主（しゅ）はわたしを広（ひろ）い所（ところ）につれ出（だ）し、
わたしを喜（よろこ）ばれるがゆえに、わたしを助（たす）けられました。
二〇主（しゅ）はわたしの義（ぎ）にしたがってわたしに報（むく）い、
わたしの手（て）の清（きよ）きにしたがって
わたしに報（むく）いかえされました。
二一わたしは主（しゅ）の道（みち）を守（まも）り、
悪意（あくい）をもって、わが神（かみ）を離（はな）れたことがなかったのです、

二二そのすべてのおきてはわたしの前にあって、
わたしはその定めを捨てたことがなかったのです。
二三わたしは主の前に欠けたところがなく、
自分を守って罪を犯しませんでした。
二四このゆえに主はわたしの義にしたがい、
その目の前にわたしの手の清きにしたがって
わたしに報いられました。
二五あなたはいつくしみある者には、
いつくしみある者となり、
欠けたところのない者には、
欠けたところのない者となり、
二六清い者には、清い者となり、

ひがんだ者には、ひがんだ者となられます。
二七あなたは苦しんでいる民を救われますが、
高ぶる目をひくくされるのです。
二八あなたはわたしのともしびをともし、
わが神、主はわたしのやみを照されます。
二九まことに、わたしはあなたによって敵軍を打ち破り、
わが神によって城壁をとび越えることができます。
三〇この神こそ、その道は完全であり、
主の言葉は真実です。
主はすべて寄り頼む者の盾です。
三一主のほかに、だれが神でしょうか。
われらの神のほかに、だれが岩でしょうか。

三二神はわたしに力を帯びさせ、
わたしの道を安全にされました。
三三神はわたしの足をめじかの足のようにされ、
わたしを高い所に安全に立たせ、
三四わたしの手を戦いに慣らされたので、
わたしの腕は青銅の弓をもひくことができます。
三五あなたはその救の盾をわたしに与え、
あなたの右の手はわたしをささえ、
あなたの助けはわたしを大いなる者とされました。
三六あなたがわたしの歩む所を広くされたので、
わたしの足はすべらなかったのです。
三七わたしは敵を追って、これに追いつき、

これを滅ぼしつくすまでは帰らなかったのです。
三八わたしが彼らを突き通したので、
彼らは立ちあがることができず、
わたしの足もとに倒れました。
三九あなたは戦いのためにわたしに力を帯びさせ、
わたしに立ち向かう者らをわたしのもとに、
かがませられました。
四〇あなたは敵にその後をわたしに向けさせられたので、
わたしは自分を憎む者を滅ぼしました。
四一彼らは助けを叫び求めたが、救う者はなく、
主にむかって叫んだけれども、
彼らに答えられなかったのです。

四二わたしは彼らを風の前のちりのように細かに砕き、
ちまたの泥のように打ち捨てました。
四三あなたは民の争いからわたしを救い、
わたしをもろもろの国民のかしらとされました。
わたしの知らなかった民がわたしに仕えました。
四四彼らはわたしの事を聞くと、ただちにわたしに従い、
異邦の人々はきて、わたしにへつらいました。
四五異邦の人々は打ちしおれて、
その城から震えながら出てきました。
四六主は生きておられます。わが岩はほむべきかな。
わが救の神はあがむべきかな。
四七神はわたしにあだを報いさせ、

もろもろの民をわたしのもとに従わせ、
四八わたしの敵からわたしを救い出されました。
まことに、あなたはわたしに逆らって
起りたつ者の上にわたしをあげ、
不法の人からわたしを救い出されました。
四九このゆえに主よ、
わたしはもろもろの国民のなかであなたをたたえ、
あなたのみ名をほめ歌います。
五〇主はその王に大いなる勝利を与え、
その油そそがれた者に、ダビデとその子孫とに、
とこしえにいつくしみを加えられるでしょう。

第一九篇 聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一もろもろの天は神の栄光をあらわし、
大空はみ手のわざをしめす。
二この日は言葉をかの日につたえ、
この夜は知識をかの夜につげる。
三話すことなく、語ることなく、
その声も聞えないのに、
四その響きは全地にあまねく、
その言葉は世界のはてにまで及ぶ。
神は日のために幕屋を天に設けられた。
五日は花婿がその祝のへやから出てくるように、
また勇士が競い走るように、その道を喜び走る。
六それは天のはてからのぼって、

天のはてにまで、めぐって行く。
その暖まりをこうむらないものはない。
七主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ、
主のあかしは確かであって、無学な者を賢くする。
八主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、
主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする。
九主を恐れる道は清らかで、
とこしえに絶えることがなく、
主のさばきは真実であって、ことごとく正しい。
一〇これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、
また蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも甘い。
一一あなたのしもべは、これらによって戒めをうける。

これらを守(まも)れば、大(おお)いなる報(むく)いがある。
一二だれが自分(じぶん)のあやまちを知(し)ることができましょうか。
どうか、わたしを隠(かく)れたとがから解(と)き放(はな)ってください。
一三また、あなたのしもべを引(ひ)きとめて、
故意(こい)の罪(つみ)を犯(おか)させず、
これに支配(しはい)されることのないようにしてください。
そうすれば、わたしはあやまちのない者(もの)となって、
大(おお)いなるとがを免(まぬか)れることができるでしょう。
一四わが岩(いわ)、わがあがないぬしなる主(しゅ)よ、
どうか、わたしの口(くち)の言葉(ことば)と、心(こころ)の思(おも)いが
あなたの前(まえ)に喜(よろこ)ばれますように。

第二〇篇聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一主が悩みの日にあなたに答え、
ヤコブの神のみ名があなたを守られるように。
二主が聖所から助けをあなたにおくり、
シオンからあなたをささえ、
三あなたのもろもろの供え物をみ心にとめ、
あなたの燔祭をうけられるように。〔セラ
四主があなたの心の願いをゆるし、
あなたのはかりごとを
ことごとく遂げさせられるように。
五われらがあなたの勝利を喜びうたい、
われらの神のみ名によって旗を揚げるように。
主があなたの求めをすべて遂げさせられるように。
六今わたしは知る、

主はその油そそがれた者を助けられることを。
主はその右の手による大いなる勝利をもって
その聖なる天から彼に答えられるであろう。
七ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。
しかしわれらは、われらの神、
主のみ名を誇る。
八彼らはかがみ、また倒れる。
しかしわれらは起きて、まっすぐに立つ。
九主よ、王に勝利をおさずけください。
われらが呼ばわる時、われらにお答えください。

第二一篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一主よ、王はあなたの力によって喜び、

あなたの助けによって、
いかに大きな喜びをもつことでしょう。
二あなたは彼の心の願いをゆるし、
そのくちびるの求めをいなまれなかった。〔セラ
三あなたは大いなる恵みをもって彼を迎え、
そのかしらに純金の冠をいただかせられる。
四彼がいのちを求めると、あなたはそれを彼にさずけ、
世々限りなくそのよわいを長くされた。
五あなたの助けによって彼の栄光は大きい。
あなたは誉と威厳とを彼に与えられる。
六まことに、あなたは彼をとこしえに恵まれた者とし、
み前に喜びをもって楽しませられる。

七王は主に信頼するゆえ、
いと高き者のいつくしみをこうむって、
動かされることはない。
八あなたの手はもろもろの敵を尋ね出し、
あなたの右の手はあなたを憎む者を
尋ね出すであろう。
九あなたが怒る時、
彼らを燃える炉のようにするであろう。
主はみ怒りによって彼らをのみつくされる。
火は彼らを食いつくすであろう。
一〇あなたは彼らのすえを地から断ち、
彼らの種を人の子らの中から滅ぼすであろう。

一一たとい彼らがあなたにむかって悪い事を企て、
悪いはかりごとを思いめぐらしても、
なし遂げることはできない。
一二あなたは彼らを逃げ走らせ、
あなたの弓弦を張って、彼らの顔をねらうであろう。
一三主よ、力をあらわして、みずからを高くしてください。
われらはあなたの大能をうたい、
かつほめたたえるでしょう。

第二二篇

聖歌隊の指揮者によってあけぼののめじかのしらべにあわせてうたわせたダビデの歌

一わが神、わが神、
なにゆえわたしを捨てられるのですか。
なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、

わたしの嘆きの言葉を聞かれないのですか。
二わが神よ、わたしが昼よばわっても、
あなたは答えられず、
夜よばわっても平安を得ません。
三しかしイスラエルのさんびの上に座しておられる
あなたは聖なるおかたです。
四われらの先祖たちはあなたに信頼しました。
彼らが信頼したので、あなたは彼らを助けられました。
五彼らはあなたに呼ばわって救われ、
あなたに信頼して恥をうけなかったのです。
六しかし、わたしは虫であって、人ではない。
人にそしられ、民に侮られる。

七すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、
くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、
八「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。
主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。
九しかし、あなたはわたしを生れさせ、
母のふところにわたしを安らかに守られた方です。
一〇わたしは生れた時から、あなたにゆだねられました。
母の胎を出てからこのかた、
あなたはわたしの神でいらせられました。
一一わたしを遠く離れないでください。
悩みが近づき、助ける者がないのです。
一二多くの雄牛はわたしを取り巻き、

バシャンの強い雄牛はわたしを囲み、
一三かき裂き、ほえたけるししのように、
わたしにむかって口を開く。
一四わたしは水のように注ぎ出され、
わたしの骨はことごとくはずれ、
わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。
一五わたしの力は陶器の破片のようにかわき、
わたしの舌はあごにつく。
あなたはわたしを死のちりに伏させられる。
一六まことに、犬はわたしをめぐり、
悪を行う者の群れがわたしを囲んで、
わたしの手と足を刺し貫いた。

一七わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。
彼らは目をとめて、わたしを見る。
一八彼らは互にわたしの衣服を分け、
わたしの着物をくじ引にする。
一九しかし主よ、遠く離れないでください。
わが力よ、速く来てわたしをお助けください。
二〇わたしの魂をつるぎから、
わたしのいのちを犬の力から助け出してください。
二一わたしをししの口から、
苦しむわが魂を野牛の角から救い出してください。
二二わたしはあなたのみ名を兄弟たちに告げ、
会衆の中であなたをほめたたえるでしょう。

二三主を恐れる者よ、主をほめたたえよ。
ヤコブのもろもろのすえよ、主をあがめよ。
イスラエルのもろもろのすえよ、主をおじおそれよ。
二四主が苦しむ者の苦しみをかろんじ、いとわれず、
またこれにみ顔を隠すことなく、
その叫ぶときに聞かれたからである。
二五大いなる会衆の中で、
わたしのさんびはあなたから出るのです。
わたしは主を恐れる者の前で、
わたしの誓いを果します。
二六貧しい者は食べて飽くことができ、
主を尋ね求める者は主をほめたたえるでしょう。

どうか、あなたがたの心がとこしえに生きるように。
二七地のはての者はみな思い出して、主に帰り、
もろもろの国のやからはみな、
み前に伏し拝むでしょう。
二八国は主のものであって、
主はもろもろの国民を統べ治められます。
二九地の誇り高ぶる者はみな主を拝み、
ちりに下る者も、
おのれを生きながらえさせえない者も、
みなそのみ前にひざまずくでしょう。
三〇子々孫々、主に仕え、
人々は主のことをきたるべき代まで語り伝え、

三一 主がなされたその救を
後に生れる民にのべ伝えるでしょう。

第二三篇ダビデの歌

一 主はわたしの牧者であって、
わたしには乏しいことがない。
二 主はわたしを緑の牧場に伏させ、
いこいのみぎわに伴われる。
三 主はわたしの魂をいきかえらせ、
み名のためにわたしを正しい道に導かれる。
四 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、
わざわいを恐れません。
あなたがわたしと共におられるからです。

あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰(なぐさ)めます。
五あなたはわたしの敵(てき)の前(まえ)で、わたしの前(まえ)に宴(えん)を設(もう)け、
わたしのこうべに油(あぶら)をそそがれる。
わたしの杯(さかずき)はあふれます。
六わたしの生(い)きているかぎりは
必(かなら)ず恵(めぐ)みといつくしみとが伴(ともな)うでしょう。
わたしはとこしえに主(しゅ)の宮(みや)に住(す)むでしょう。

第二四篇ダビデの歌

一地(ち)と、それに満(み)ちるもの、
世界(せかい)と、そのなかに住(す)む者(もの)とは主(しゅ)のものである。
二主(しゅ)はその基(もとい)を大海(たいかい)のうえにすえ、
大川(おおかわ)のうえに定(さだ)められた。

三 主の山に登るべき者はだれか。
その聖所に立つべき者はだれか。
四 手が清く、心のいさぎよい者、
その魂がむなしい事に望みをかけない者、
偽って誓わない者こそ、その人である。
五 このような人は主から祝福をうけ、
その救の神から義をうける。
六 これこそ主を慕う者のやから、
ヤコブの神の、み顔を求める者のやからである。〔セラ
七 門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。
栄光の王がはいられる。
八 栄光の王とはだれか。

強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である。
九門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。
栄光の王がはいられる。
一〇この栄光の王とはだれか。万軍の主、これこそ栄光の王である。
〔セラ

第二五篇ダビデの歌

一主よ、わが魂はあなたを仰ぎ望みます。
二わが神よ、わたしはあなたに信頼します。
どうか、わたしをはずかしめず、
わたしの敵を勝ち誇らせないでください。
三すべてあなたを待ち望む者をはずかしめず、
みだりに信義にそむく者をはずかしめてください。
四主よ、あなたの大路をわたしに知らせ、

あなたの道(みち)をわたしに教(おし)えてください。
五あなたのまことをもって、わたしを導(みちび)き、
わたしを教(おし)えてください。
あなたはわが救(すくい)の神(かみ)です。
わたしはひねもすあなたを待(ま)ち望(のぞ)みます。
六主(しゅ)よ、あなたのあわれみと、いつくしみとを
思(おも)い出(だ)してください。
これはいにしえから絶(た)えることがなかったのです。
七わたしの若(わか)き時(とき)の罪(つみ)と、とがとを
思(おも)い出(だ)さないでください。
主(しゅ)よ、あなたの恵(めぐ)みのゆえに、
あなたのいつくしみにしたがって、

わたしを思い出してください。
八主は恵みふかく、かつ正しくいらせられる。
それゆえ、主は道を罪びとに教え、
九へりくだる者を公義に導き、
へりくだる者にその道を教えられる。
一〇主のすべての道はその契約とあかしとを守る者には
いつくしみであり、まことである。
一一主よ、み名のために、わたしの罪をおゆるしください。
わたしの罪は大きいのです。
一二主を恐れる人はだれか。
主はその選ぶべき道をその人に教えられる。
一三彼はみずからさいわいに住まい、

そのすえは地を継ぐであろう。
一四主の親しみは主をおそれる者のためにあり、
主はその契約を彼らに知らせられる。
一五わたしの目は常に主に向かっている。
主はわたしの足を網から取り出されるからである。
一六わたしをかえりみ、わたしをあわれんでください。
わたしはひとりわびしく苦しんでいるのです。
一七わたしの心の悩みをゆるめ、
わたしを苦しみから引き出してください。
一八わたしの苦しみ悩みをかえりみ、
わたしのすべての罪をおゆるしください。
一九わたしの敵がいかに多く、

かつ激（はげ）しい憎（にく）しみをもって
わたしを憎（にく）んでいるかをごらんください。
二〇わたしの魂（たましい）を守（まも）り、わたしをお助（たす）けください。
わたしをはずかしめないでください。
わたしはあなたに寄（よ）り頼（たよ）んでいます。
二一どうか、誠実（せいじつ）と潔白（けっぱく）とが、
わたしを守（まも）ってくれるように。
わたしはあなたを待（ま）ち望（のぞ）んでいます。
二二神（かみ）よ、イスラエルをあがない、
すべての悩（なや）みから救（すく）いだしてください。

第二六篇ダビデの歌

一主（しゅ）よ、わたしをさばいてください。
わたしは誠実（せいじつ）に歩（あゆ）み、

迷(まよ)うことなく主(しゅ)に信頼(しんらい)しています。
二 主(しゅ)よ、わたしをためし、わたしを試(こころ)み、
わたしの心(こころ)と思(おも)いとを練(ね)りきよめてください。
三 あなたのいつくしみはわたしの目(め)の前(まえ)にあり、
わたしはあなたのまことによって歩(あゆ)みました。
四 わたしは偽(いつわ)る人々(ひとびと)と共(とも)にすわらず、
偽善者(ぎぜんしゃ)と交(まじ)わらず、
五 悪(あく)を行(おこな)う者(もの)のつどいを憎(にく)み、
悪(あ)しき者(もの)と共(とも)にすわることをしません。
六 主(しゅ)よ、わたしは手(て)を洗(あら)って、罪(つみ)のないことを示(しめ)し、
あなたの祭壇(さいだん)をめぐって、
七 感謝(かんしゃ)の歌(うた)を声高(こえたか)くうたい、

あなたのくすしきみわざをことごとくのべ伝えます。
八主よ、わたしはあなたの住まわれる家と、
あなたの栄光のとどまる所とを愛します。
九どうか、わたしを罪びとと共に、
わたしのいのちを、血を流す人々と共に、
取り去らないでください。
一〇彼らの手には悪い企てがあり、
彼らの右の手は、まいないで満ちています。
一一しかしわたしは誠実に歩みます。
わたしをあがない、わたしをあわれんでください。
一二わたしの足は平らかな所に立っています。
わたしは会衆のなかで主をたたえましょう。

第二七篇ダビデの歌

一主はわたしの光、わたしの救だ、
わたしはだれを恐れよう。
主はわたしの命のとりでだ。
わたしはだれをおじ恐れよう。
二わたしのあだ、わたしの敵である悪を行う者どもが、
襲ってきて、わたしをそしり、わたしを攻めるとき、
彼らはつまずき倒れるであろう。
三たとい軍勢が陣営を張って、わたしを攻めても、
わたしの心は恐れない。
たといいくさが起って、わたしを攻めても、
なおわたしはみずから頼むところがある。
四わたしは一つの事を主に願った、

わたしはそれを求める。
わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、
主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめることを。
五それは主が悩みの日に、
その仮屋のうちにわたしを潜ませ、
その幕屋の奥にわたしを隠し、
岩の上にわたしを高く置かれるからである。
六今わたしのこうべはわたしをめぐる敵の上に
高くあげられる。
それゆえ、わたしは主の幕屋で
喜びの声をあげて、いけにえをささげ、
歌って、主をほめたたえるであろう。

七主よ、わたしが声をあげて呼ばわるとき、
聞いて、わたしをあわれみ、わたしに答えてください。
八あなたは仰せられました、
「わが顔をたずね求めよ」と。
あなたにむかって、わたしの心は言います、
「主よ、わたしはみ顔をたずね求めます」と。
九み顔をわたしに隠さないでください。
怒ってあなたのしもべを退けないでください。
あなたはわたしの助けです。
わが救の神よ、わたしを追い出し、
わたしを捨てないでください。
一〇たとい父母がわたしを捨てても、

主がわたしを迎えられるでしょう。
一一主よ、あなたの道をわたしに教え、
わたしのあだのゆえに、
わたしを平らかな道に導いてください。
一二わたしのあだの望むがままに、
わたしを引き渡さないでください。
偽りのあかしをする者がわたしに逆らって起り、
暴言を吐くからです。
一三わたしは信じます、
生ける者の地でわたしは主の恵みを見ることを。
一四主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。
主を待ち望め。

第二八篇ダビデの歌

一主よ、わたしはあなたにむかって呼ばわります。
わが岩よ、わたしにむかって
耳しいとならないでください。
もしあなたが黙っておられるならば、おそらく、
わたしは墓に下る者と等しくなるでしょう。
二わたしがあなたにむかって助けを求め、
あなたの至聖所にむかって手をあげるとき、
わたしの願いの声を聞いてください。
三悪しき者および悪を行う者らと共に
わたしを引き行かないでください。
彼らはその隣り人とむつまじく語るけれども、
その心には害悪をいだく者です。

四どうぞ、そのわざにしたがい、
その悪しき行いにしたがって彼らに報い、
その手のわざにしたがって彼らに報い、
その受くべき罰を彼らに与えてください。
五彼らは主のもろもろのみわざと、
み手のわざとを顧みないゆえに、
主は彼らを倒して、再び建てられることはない。
六主はほむべきかな。
主はわたしの願いの声を聞かれた。
七主はわが力、わが盾。
わたしの心は主に寄り頼む。
わたしは助けを得たので、わたしの心は大いに喜び、
歌をもって主をほめたたえる。

八 主はその民の力、
その油そそがれた者の救のとりでである。
九 どうぞ、あなたの民を救い、あなたの嗣業を恵み、
彼らの牧者となって、とこしえに彼らをいだき導いてください。

第二九篇ダビデの歌

一 神の子らよ、主に帰せよ、
栄光と力とを主に帰せよ。
二 み名の栄光を主に帰せよ、
聖なる装いをもって主を拝め。
三 主のみ声は水の上にあり、
栄光の神は雷をとどろかせ、
主は大水の上におられる。

四 主のみ声は力があり、
主のみ声は威厳がある。
五 主のみ声は香柏を折り砕き、
主はレバノンの香柏を折り砕かれる。
六 主はレバノンを子牛のように踊らせ、
シリオンを若い野牛のように踊らされる。
七 主のみ声は炎をひらめかす。
八 主のみ声は荒野を震わせ、
主はカデシの荒野を震わされる。
九 主のみ声はかしの木を巻きあげ、また林を裸にする。
その宮で、すべてのものは呼ばわって言う、
「栄光」と。

一〇主は洪水の上に座し、
主はみくらに座して、とこしえに王であらせられる。
一一主はその民に力を与え、
平安をもってその民を祝福されるであろう。

第三〇篇 宮をささげるときにうたったダビデの歌

一主よ、わたしはあなたをあがめます。
あなたはわたしを引きあげ、
敵がわたしの事によって喜ぶのを、
ゆるされなかったからです。
二わが神、主よ、
わたしがあなたにむかって助けを叫び求めると、
あなたはわたしをいやしてくださいました。
三主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、

墓に下る者のうちから、
わたしを生き返らせてくださいました。
四主の聖徒よ、主をほめうたい、
その聖なるみ名に感謝せよ。
五その怒りはただつかのまで、
その恵みはいのちのかぎり長いからである。
夜はよもすがら泣きかなしんでも、
朝と共に喜びが来る。
六わたしは安らかな時に言った、
「わたしは決して動かされることはない」と。
七主よ、あなたは恵みをもって、
わたしをゆるがない山のように堅くされました。

あなたがみ顔(かお)をかくされたので、
わたしはおじ惑(まど)いました。
八主(しゅ)よ、わたしはあなたに呼(よ)ばわりました。
ひたすら主(しゅ)に請(こ)い願(ねが)いました、
九「わたしが墓(はか)に下(くだ)るならば、
わたしの死(し)になんの益(えき)があるでしょうか。
ちりはあなたをほめたたえるでしょうか。
あなたのまことをのべ伝(つた)えるでしょうか。
一〇主(しゅ)よ、聞(き)いてください、わたしをあわれんでください。
主(しゅ)よ、わたしの助(たす)けとなってください」と。
一一あなたはわたしのために、嘆(なげ)きを踊(おど)りにかえ、
荒布(あらぬの)を解(と)き、喜(よろこ)びをわたしの帯(おび)とされました。

一二これはわたしの魂があなたをほめたたえて、
口をつぐむことのないためです。
わが神、主よ、
わたしはとこしえにあなたに感謝します。

第三一篇 聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一主よ、わたしはあなたに寄り頼みます。
とこしえにわたしをはずかしめず、
あなたの義をもってわたしをお助けください。
二あなたの耳をわたしに傾けて、
すみやかにわたしをお救いください。
わたしのためにのがれの岩となり、
わたしを救う堅固な城となってください。
三まことに、あなたはわたしの岩、わたしの城です。

み名（な）のためにわたしを引（ひ）き、わたしを導（みちび）き、
四わたしのためにひそかに設（もう）けた網（あみ）から
わたしを取（と）り出（だ）してください。
あなたはわたしの避（さ）け所（どころ）です。
五わたしは、わが魂（たましい）をみ手（て）にゆだねます。
主（しゅ）、まことの神（かみ）よ、
あなたはわたしをあがなわれました。
六あなたはむなしい偶像（ぐうぞう）に心（こころ）を寄（よ）せる者（もの）を憎（にく）まれます。
しかしわたしは主（しゅ）に信頼（しんらい）し、
七あなたのいつくしみを喜（よろこ）び楽（たの）しみます。
あなたがわたしの苦（くる）しみをかえりみ、
わたしの悩（なや）みにみこころをとめ、

八わたしを敵の手にわたさず、
わたしの足を広い所に立たせられたからです。
九主よ、わたしをあわれんでください。
わたしは悩み苦しんでいます。
わたしの目は憂いによって衰え、
わたしの魂も、からだもまた衰えました。
一〇わたしのいのちは悲しみによって消えゆき、
わたしの年は嘆きによって消えさり、
わたしの力は苦しみによって尽き、
わたしの骨は枯れはてました。
一一わたしはすべてのあだにそしられる者となり、
隣り人には恐れられ、

知り人には恐るべき者となり、
ちまたでわたしを見る者は避けて逃げます。
一二わたしは死んだ者のように人の心に忘れられ、
破れた器のようになりました。
一三まことに、わたしは多くの人のささやくのを聞きます、
「至る所に恐るべきことがある」と。
彼らはわたしに逆らってともに計り、
わたしのいのちを取ろうと、たくらむのです。
一四しかし、主よ、わたしはあなたに信頼して、言います、
「あなたはわたしの神である」と。
一五わたしの時はあなたのみ手にあります。
わたしをわたしの敵の手と、

わたしを責め立てる者から救い出してください。
一六 み顔をしもべの上に輝かせ、
いつくしみをもってわたしをお救いください。
一七 主よ、わたしはあなたに呼ばわります、
わたしをはずかしめないでください。
悪しき者に恥をうけさせ、
彼らに声をあげさせずに陰府に行かせてください。
一八 高ぶりと侮りとをもって正しい者をみだりにそしる
偽りのくちびるをつぐませてください。
一九 あなたを恐れる者のためにたくわえ、
あなたに寄り頼む者のために
人の子らの前に施されたあなたの恵みは

いかに大いなるものでしょう。
二〇あなたは彼らをみ前のひそかな所に隠して
人々のはかりごとを免れさせ、
また仮屋のうちに潜ませて
舌の争いを避けさせられます。
二一主はほむべきかな、
包囲された町のようにわたしが囲まれたとき、
主は驚くばかりに、いつくしみをわたしに示された。
二二わたしは驚きあわてて言った、
「わたしはあなたの目の前から断たれた」と。
しかしわたしがあなたに助けを呼び求めたとき、
わたしの願いを聞きいれられた。

二三すべての聖徒よ、主を愛せよ。
主は真実な者を守られるが、
おごりふるまう者にはしたたかに報いられる。
二四すべて主を待ち望む者よ、
強くあれ、心を雄々しくせよ。

第三二篇ダビデのマスキールの歌

一そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
二主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。
三わたしが自分の罪を言いあらわさなかった時は、
ひねもす苦しみうめいたので、
わたしの骨はふるび衰えた。

四あなたのみ手が昼も夜も、
わたしの上に重かったからである。
わたしの力は、夏のひでりによってかれるように、
かれ果てた。〔セラ
五わたしは自分の罪をあなたに知らせ、
自分の不義を隠さなかった。
わたしは言った、
「わたしのとがを主に告白しよう」と。
その時あなたはわたしの犯した罪をゆるされた。〔セラ
六このゆえに、すべて神を敬う者はあなたに祈る。
大水の押し寄せる悩みの時にも
その身に及ぶことはない。

七あなたはわたしの隠れ場(かくれば)であって、
わたしを守(まも)って悩(なや)みを免(まぬか)れさせ、
救(すくい)をもってわたしを囲(かこ)まれる。〔セラ
八わたしはあなたを教(おし)え、あなたの行(い)くべき道(みち)を示(しめ)し、
わたしの目(め)をあなたにとめて、さとすであろう。
九あなたはさとりのない馬(うま)のようであってはならない。
また騾馬(らば)のようであってはならない。
彼(かれ)らはくつわ、たづなをもっておさえられなければ、
あなたに従(したが)わないであろう。
一〇悪(あ)しき者(もの)は悲(かな)しみが多(おお)い。
しかし主(しゅ)に信頼(しんらい)する者(もの)はいつくしみで囲(かこ)まれる。
一一正(ただ)しき者(もの)よ、主(しゅ)によって喜(よろこ)び楽(たの)しめ、

すべて心(こころ)の直(なお)き者(もの)よ、喜(よろこ)びの声(こえ)を高(たか)くあげよ。

第三三篇

一 正(ただ)しき者(もの)よ、主(しゅ)によって喜(よろこ)べ、
さんびは直(なお)き者(もの)にふさわしい。
二 琴(こと)をもって主(しゅ)をさんびせよ、
十弦(じゅうげん)の立琴(たてごと)をもって主(しゅ)をほめたたえよ。
三 新(あたら)しい歌(うた)を主(しゅ)にむかって歌(うた)い、
喜(よろこ)びの声(こえ)をあげて巧(たく)みに琴(こと)をかきならせ。
四 主(しゅ)のみことばは直(なお)く、
そのすべてのみわざは真実(しんじつ)だからである。
五 主(しゅ)は正義(せいぎ)と公平(こうへい)とを愛(あい)される。
地(ち)は主(しゅ)のいつくしみで満(み)ちている。

六もろもろの天(てん)は主(しゅ)のみことばによって造(つく)られ、
天(てん)の万軍(ばんぐん)は主(しゅ)の口(くち)の息(いき)によって造(つく)られた。
七主(しゅ)は海(うみ)の水(みず)を水(みず)がめの中(なか)に集(あつ)めるように集(あつ)め、
深(ふか)い淵(ふち)を倉(くら)におさめられた。
八全地(ぜんち)は主(しゅ)を恐(おそ)れ、
世(よ)に住(す)むすべての者(もの)は主(しゅ)を恐(おそ)れかしこめ。
九主(しゅ)が仰(おお)せられると、そのようになり、
命(めい)じられると、堅(かた)く立(た)ったからである。
一〇主(しゅ)はもろもろの国(くに)のはかりごとをむなしくし、
もろもろの民(たみ)の企(くわだ)てをくじかれる。
一一主(しゅ)のはかりごとはとこしえに立(た)ち、
そのみこころの思(おも)いは世々(よよ)に立(た)つ。

一二主をおのが神とする国はさいわいである。
主がその嗣業として選ばれた民はさいわいである。
一三主は天から見おろされ、
すべての人の子らを見、
一四そのおられる所から
地に住むすべての人をながめられる。
一五主はすべて彼らの心を造り、
そのすべてのわざに心をとめられる。
一六王はその軍勢の多きによって救を得ない。
勇士はその力の大いなるによって助けを得ない。
一七馬は勝利に頼みとならない。
その大いなる力も人を助けることはできない。

一八見よ、主の目は主を恐れる者の上にあり、
そのいつくしみを望む者の上にある。
一九これは主が彼らの魂を死から救い、
ききんの時にも生きながらえさせるためである。
二〇われらの魂は主を待ち望む。
主はわれらの助け、われらの盾である。
二一われらは主の聖なるみ名に信頼するがゆえに、
われらの心は主にあって喜ぶ。
二二主よ、われらが待ち望むように、
あなたのいつくしみをわれらの上にたれてください。

第三四篇ダビデがアビメレクの前で狂ったさまをよそおい、追われて出ていったときの歌

一わたしは常に主をほめまつる。
そのさんびはわたしの口に絶えない。
二わが魂は主によって誇る。
苦しむ者はこれを聞いて喜ぶであろう。
三わたしと共に主をあがめよ、
われらは共にみ名をほめたたえよう。
四わたしが主に求めたとき、主はわたしに答え、
すべての恐れからわたしを助け出された。
五主を仰ぎ見て、光を得よ、
そうすれば、あなたがたは、
恥じて顔を赤くすることはない。
六この苦しむ者が呼ばわったとき、主は聞いて、

すべての悩みから救い出された。
七主の使は主を恐れる者のまわりに
陣をしいて彼らを助けられる。
八主の恵みふかきことを味わい知れ、
主に寄り頼む人はさいわいである。
九主の聖徒よ、主を恐れよ、
主を恐れる者には乏しいことがないからである。
一〇若きししは乏しくなって飢えることがある。
しかし主を求める者は良き物に欠けることはない。
一一子らよ、来てわたしに聞け、
わたしは主を恐るべきことをあなたがたに教えよう。
一二さいわいを見ようとして、いのちを慕い、

ながらえることを好む人はだれか。
一三あなたの舌をおさえて悪を言わせず、
あなたのくちびるをおさえて偽りを言わすな。
一四悪を離れて善をおこない、
やわらぎを求めて、これを努めよ。
一五主の目は正しい人をかえりみ、
その耳は彼らの叫びに傾く。
一六主のみ顔は悪を行う者にむかい、
その記憶を地から断ち滅ぼされる。
一七正しい者が助けを叫び求めるとき、主は聞いて、
彼らをそのすべての悩みから助け出される。
一八主は心の砕けた者に近く、

たましいの悔いくずおれた者を救われる。
一九正しい者には災が多い。
しかし、主はすべてその中から彼を助け出される。
二〇主は彼の骨をことごとく守られる。
その一つだに折られることはない。
二一悪は悪しき者を殺す。
正しい者を憎む者は罪に定められる。
二二主はそのしもべらの命をあがなわれる。
主に寄り頼む者はひとりだに
罪に定められることはない。

第三五篇ダビデの歌

一主よ、わたしと争う者とあらそい、

わたしと戦(たたか)う者(もの)と戦(たたか)ってください。
二 盾(たて)と大盾(おおだて)とを執(と)って、
わたしを助(たす)けるために立(た)ちあがってください。
三 やりと投(な)げやりとを抜(ぬ)いて、
わたしに追(お)い迫(せま)る者(もの)に立(た)ちむかい、
「わたしはおまえの救(すくい)である」と、
わたしに言(い)ってください。
四 どうか、わたしの命(いのち)を求(もと)める者(もの)を
はずかしめ、いやしめ、
わたしにむかって悪(あく)をたくらむ者(もの)を退(しりぞ)け、
あわてふためかせてください。
五 彼(かれ)らを風(かぜ)の前(まえ)のもみがらのようにし、
主(しゅ)の使(つかい)に彼(かれ)らを追(お)いやらせてください。

六彼らの道を暗く、なめらかにし、
主の使に彼らを追い行かせてください。
七彼らはゆえなくわたしのために網を隠し、
ゆえなくわたしのために穴を掘ったからです。
八不意に滅びを彼らに臨ませ、
みずから隠した網にとらえられ、
彼らを滅びに陥らせてください。
九そのときわが魂は主によって喜び、
その救をもって楽しむでしょう。
一〇わたしの骨はことごとく言うでしょう、
「主よ、だれかあなたにたぐうべき者がありましょう。
あなたは弱い者を強い者から助け出し、

弱い者と貧しい者を、
かすめ奪う者から助け出される方です」と。
一一悪意のある証人が起って、
わたしの知らない事をわたしに尋ねる。
一二彼らは悪をもってわたしの善に報い、
わが魂を寄るべなき者とした。
一三しかし、わたしは彼らが病んだとき、
荒布をまとい、断食してわが身を苦しめた。
わたしは胸にこうべをたれて祈った、
一四ちょうど、わが友、わが兄弟のために
悲しんだかのように。
わたしは母をいたむ者のように

悲しみうなだれて歩きまわった。
一五しかし彼らはわたしのつまずくとき、喜びつどい、
ともに集まってわたしを責めた。
わたしの知らない他国の者は
わたしをののしってやめなかった。
一六彼らはますます、けがす言葉をもってあざけり、
わたしにむかって歯をかみならした。
一七主よ、いつまであなたはながめておられますか、
わたしを彼らの破壊から、
わたしのいのちを若きししから救い出してください。
一八わたしは大いなるつどいの中で、あなたに感謝し、
多くの民の中で、あなたをほめたたえるでしょう。

一九偽(いつわ)ってわたしの敵(てき)となった者(もの)どもの
わたしについて喜(よろこ)ぶことを許(ゆる)さないでください。
ゆえなく、わたしを憎(にく)む者(もの)どもの
たがいに目(め)くばせすることを許(ゆる)さないでください。
二〇彼(かれ)らは平和(へいわ)を語(かた)らず、
国(くに)のうちに穏(おだ)やかに住(す)む者(もの)にむかって
欺(あざむ)きの言葉(ことば)をたくらむからです。
二一彼(かれ)らはわたしにむかって口(くち)をあけひろげ、
「あはぁ、あはぁ、われらの目(め)はそれを見(み)た」と
言(い)います。
二二主(しゅ)よ、あなたはこれを見(み)られました。
もださないでください。

主よ、わたしに遠ざからないでください。
二三わが神、わが主よ、
わがさばきのため、わが訴えのために奮いたち、
目をさましてください。
二四わが神、主よ、
あなたの義にしたがってわたしをさばき、
わたしの事について彼らを喜ばせないでください。
二五彼らにその心のうちで、
「あはぁ、われらの願ったことが達せられた」と
言わせないでください。
また彼らに「われらは彼を滅ぼしつくした」と
言わせないでください。

二六わたしの災(わざわい)を喜(よろこ)ぶ者(もの)どもを
ともに恥(は)じ、あわてふためかせてください。
わたしにむかって誇(ほこ)りたかぶる者(もの)どもに
恥(はじ)と、はずかしめとを着(き)せてください。
二七わたしの義(ぎ)を喜(よろこ)ぶ者(もの)をば
喜(よろこ)びの声(こえ)をあげて喜(よろこ)ばせ、
「そのしもべの幸福(こうふく)を喜(よろこ)ばれる主(しゅ)は大(おお)いなるかな」と
つねに言(い)わせてください。
二八わたしの舌(した)はひねもすあなたの義(ぎ)と、
あなたの誉(ほまれ)とを語(かた)るでしょう。

第三六篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせた主のしもべダビデの歌

一とがは悪(あ)しき者(もの)にむかい、その心(こころ)のうちに言(い)う。

その目の前に神を恐れる恐れはない。
二彼は自分の不義があらわされないため、
また憎まれないために、みずからその目でおもねる。
三その口の言葉はよこしまと欺きである。
彼は知恵を得ることと、善を行う事とをやめた。
四彼はその床の上でよこしまな事をたくらみ、
よからぬ道に身をおいて、悪をきらわない。
五主よ、あなたのいつくしみは天にまで及び、
あなたのまことは雲にまで及ぶ。
六あなたの義は神の山のごとく、
あなたのさばきは大きな淵のようだ。
主よ、あなたは人と獣とを救われる。

七神よ、あなたのいつくしみはいかに尊いことでしょう。
人の子らはあなたの翼のかげに避け所を得、
八あなたの家の豊かなのによって飽き足りる。
あなたはその楽しみの川の水を彼らに飲ませられる。
九いのちの泉はあなたのもとにあり、
われらはあなたの光によって光を見る。
一〇どうか、あなたを知る者に絶えずいつくしみを施し、
心の直き者に絶えず救を施してください。
一一高ぶる者の足がわたしを踏み、
悪しき者の手がわたしを追い出すことを
ゆるさないでください。
一二悪を行う者はそこに倒れ、

彼らは打ち伏せられて、起きあがることはできない。

第三七篇ダビデの歌

一 悪をなす者のゆえに、心を悩ますな。
不義を行う者のゆえに、ねたみを起すな。
二 彼らはやがて草のように衰え、
青菜のようにしおれるからである。
三 主に信頼して善を行え。
そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る。
四 主によって喜びをなせ。
主はあなたの心の願いをかなえられる。
五 あなたの道を主にゆだねよ。
主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、

六あなたの義(ぎ)を光(ひかり)のように明(あき)らかにし、
あなたの正(ただ)しいことを真昼(まひる)のように明(あき)らかにされる。
七主(しゅ)の前(まえ)にもだし、耐(た)え忍(しの)びて主(しゅ)を待(ま)ち望(のぞ)め。
おのが道(みち)を歩(あゆ)んで栄(さか)える者(もの)のゆえに、
悪(わる)いはかりごとを遂(と)げる人(ひと)のゆえに、心(こころ)を悩(なや)ますな。
八怒(いか)りをやめ、憤(いきどお)りを捨(す)てよ。
心(こころ)を悩(なや)ますな、これはただ悪(あく)を行(おこな)うに至(いた)るのみだ。
九悪(あく)を行(おこな)う者(もの)は断(た)ち滅(ほろ)ぼされ、
主(しゅ)を待(ま)ち望(のぞ)む者(もの)は国(くに)を継(つ)ぐからである。
一〇悪(あ)しき者(もの)はただしばらくで、うせ去(さ)る。
あなたは彼(かれ)の所(ところ)をつぶさに尋(たず)ねても彼(かれ)はいない。
一一しかし柔和(にゅうわ)な者(もの)は国(くに)を継(つ)ぎ、

豊かな繁栄をたのしむことができる。
一二悪しき者は正しい者にむかって
はかりごとをめぐらし、これにむかって歯がみする。
一三しかし主は悪しき者を笑われる、
彼の日の来るのを見られるからである。
一四悪しき者はつるぎを抜き、弓を張って、
貧しい者と乏しい者とを倒し、
直く歩む者を殺そうとする。
一五しかしそのつるぎはおのが胸を刺し、
その弓は折られる。
一六正しい人の持ち物の少ないのは、
多くの悪しき者の豊かなのにまさる。

一七悪しき者の腕は折られるが、
主は正しい者を助けささえられるからである。
一八主は全き者のもろもろの日を知られる。
彼らの嗣業はとこしえに続く。
一九彼らは災の時にも恥をこうむらず、
ききんの日にも飽き足りる。
二〇しかし、悪しき者は滅び、
主の敵は牧場の栄えの枯れるように消え、
煙のように消えうせる。
二一悪しき者は物を借りて返すことをしない。
しかし正しい人は寛大で、施し与える。
二二主に祝福された者は国を継ぎ、

主にのろわれた者は断ち滅ぼされる。
二三人の歩みは主によって定められる。
主はその行く道を喜ばれる。
二四たといその人が倒れても、
全く打ち伏せられることはない、
主がその手を助けささえられるからである。
二五わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、
正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が
食物を請いあるくのを見たことがない。
二六正しい人は常に寛大で、物を貸し与え、
その子孫は祝福を得る。
二七悪をさけて、善を行え。

そうすれば、あなたはとこしえに住むことができる。
二八主は公義を愛し、
その聖徒を見捨てられないからである。
正しい者はとこしえに助け守られる。
しかし、悪しき者の子孫は断ち滅ぼされる。
二九正しい者は国を継ぎ、
とこしえにその中に住むことができる。
三〇正しい者の口は知恵を語り、
その舌は公義を述べる。
三一その心には神のおきてがあり、
その歩みはすべることがない。
三二悪しき者は正しい人をうかがい、

これを殺そうとはかる。
三三主は正しい人を悪しき者の手にゆだねられない、
またさばかれる時、これを罪に定められることはない。
三四主を待ち望め、その道を守れ。
そうすれば、主はあなたを上げて、国を継がせられる。
あなたは悪しき者の
断ち滅ぼされるのを見るであろう。
三五わたしは悪しき者が勝ち誇って、
レバノンの香柏のようにそびえたつのを見た。
三六しかし、わたしが通り過ぎると、
見よ、彼はいなかった。
わたしは彼を尋ねたけれども見つからなかった。

三七 全き人に目をそそぎ、直き人を見よ。
おだやかな人には子孫がある。
三八しかし罪を犯す者どもは共に滅ぼされ、
悪しき者の子孫は断たれる。
三九正しい人の救は主から出る。
主は彼らの悩みの時の避け所である。
四〇主は彼らを助け、彼らを解き放ち、
彼らを悪しき者どもから解き放って救われる。
彼らは主に寄り頼むからである。

第三八篇記念のためにうたったダビデの歌

一主よ、あなたの憤りをもってわたしを責めず、
激しい怒りをもってわたしを懲らさないでください。

二あなたの矢(や)がわたしに突(つ)き刺(さ)さり、
あなたの手(て)がわたしの上(うえ)にくだりました。
三あなたの怒(いか)りによって、
わたしの肉(にく)には全(まった)きところなく、
わたしの罪(つみ)によって、
わたしの骨(ほね)には健(すこ)やかなところはありません。
四わたしの不義(ふぎ)はわたしの頭(あたま)を越(こ)え、
重荷(おもに)のように重(おも)くて負(お)うことができません。
五わたしの愚(おろ)かによって、
わたしの傷(きず)は悪臭(あくしゅう)を放(はな)ち、腐(くさ)れただれました。
六わたしは折(お)れかがんで、いたくうなだれ、
ひねもす悲(かな)しんで歩(ある)くのです。

七わたしの腰はことごとく焼け、
わたしの肉には全きところがありません。
八わたしは衰えはて、いたく打ちひしがれ、
わたしの心の激しい騒ぎによってうめき叫びます。
九主よ、わたしのすべての願いはあなたに知られ、
わたしの嘆きはあなたに隠れることはありません。
一〇わたしの胸は激しく打ち、わたしの力は衰え、
わたしの目の光もまた、わたしを離れ去りました。
一一わが友、わがともがらは
わたしの災を見て離れて立ち、
わが親族もまた遠く離れて立っています。
一二わたしのいのちを求める者はわなを設け、

わたしをそこなおうとする者は滅ぼすことを語り、
ひねもす欺くことをはかるのです。
一三しかしわたしは耳しいのように聞かず、
おしのように口を開きません。
一四まことに、わたしは聞かない人のごとく、
議論を口にしない人のようです。
一五しかし、主よ、わたしはあなたを待ち望みます。
わが神、主よ、
あなたこそわたしに答えられるのです。
一六わたしは祈ります、「わが足のすべるとき、
わたしにむかって高ぶる彼らに
わたしのことによって喜ぶことを

ゆるさないでください」と。
一七わたしは倒れるばかりになり、
わたしの苦しみは常にわたしと共にあります。
一八わたしは、みずから不義を言いあらわし、
わが罪のために悲しみます。
一九ゆえなく、わたしに敵する者は強く、
偽ってわたしを憎む者は多いのです。
二〇悪をもって善に報いる者は、
わたしがよい事に従うがゆえに、わがあだとなります。
二一主よ、わたしを捨てないでください。
わが神よ、わたしに遠ざからないでください。
二二主、わが救よ、
すみやかにわたしをお助けください。

第三九篇

聖歌隊の指揮者エドトンによってうたわせたダビデの歌

一わたしは言った、「舌をもって罪を犯さないために、
わたしの道を慎み、
悪しき者のわたしの前にある間は
わたしの口にくつわをかけよう」と。
二わたしは黙して物言わず、むなしく沈黙を守った。
しかし、わたしの悩みはさらにひどくなり、
三わたしの心はわたしのうちに熱し、
思いつづけるほどに火が燃えたので、
わたしは舌をもって語った。
四「主よ、わが終りと、
わが日の数のどれほどであるかをわたしに知らせ、
わが命のいかにはかないかを知らせてください。

五見(み)よ、あなたはわたしの日(ひ)をつかのまとされました。
わたしの一生(いっしょう)はあなたの前(まえ)では無(む)にひとしいのです。
まことに、すべての人(ひと)はその盛(さか)んな時(とき)でも
息(いき)にすぎません。〔セラ
六まことに人(ひと)は影(かげ)のように、さまよいます。
まことに彼(かれ)らはむなしい事(こと)のために
騒(さわ)ぎまわるのです。
彼(かれ)は積(つ)みたくわえるけれども、
だれがそれを収(おさ)めるかを知(し)りません。
七主(しゅ)よ、今(いま)わたしは何(なに)を待(ま)ち望(のぞ)みましょう。
わたしの望(のぞ)みはあなたにあります。
八わたしをすべてのとがから助(たす)け出(だ)し、

愚かな者にわたしをあざけらせないでください。
九わたしは黙して口を開きません。
あなたがそれをなされたからです。
一〇あなたが下された災を
わたしから取り去ってください。
わたしはあなたのみ手に打ち懲らされることにより
滅びるばかりです。
一一あなたは罪を責めて人を懲らされるとき、
その慕い喜ぶものを、しみが食うように、
消し滅ぼされるのです。
まことにすべての人は息にすぎません。〔セラ
一二主よ、わたしの祈を聞き、

わたしの叫びに耳を傾け、
わたしの涙を見て、もださないでください。
わたしはあなたに身を寄せる旅びと、
わがすべての先祖たちのように寄留者です。
一三わたしが去って、うせない前に、
み顔をそむけて、わたしを喜ばせてください」。

第四〇篇聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一わたしは耐え忍んで主を待ち望んだ。
主は耳を傾けて、わたしの叫びを聞かれた。
二主はわたしを滅びの穴から、泥の沼から引きあげて、
わたしの足を岩の上におき、
わたしの歩みをたしかにされた。

三主は新しい歌をわたしの口に授け、
われらの神にささげるさんびの歌を
わたしの口に授けられた。
多くの人はこれを見て恐れ、
かつ主に信頼するであろう。
四主をおのが頼みとする人、
高ぶる者にたよらず、
偽りの神に迷う者にたよらない人はさいわいである。
五わが神、主よ、あなたのくすしきみわざと、
われらを思うおもいとは多くて、
くらべうるものはない。
わたしはこれを語り述べようとしても

多くて数えることはできない。
六あなたはいけにえと供え物とを喜ばれない。
あなたはわたしの耳を開かれた。
あなたは燔祭と罪祭とを求められない。
七その時わたしは言った、「見よ、わたしはまいります。
書の巻に、わたしのためにしるされています。
八わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。
あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と。
九わたしは大いなる集会で、
救についての喜びのおとずれを告げ示しました。
見よ、わたしはくちびるを閉じませんでした。
主よ、あなたはこれをご存じです。

一〇わたしはあなたの救(すくい)を心(こころ)のうちに隠(かく)しおかず、
あなたのまことと救(すくい)とを告(つ)げ示(しめ)しました。
わたしはあなたのいつくしみとまこととを
大(おお)いなる集会(しゅうかい)に隠(かく)しませんでした。
一一主(しゅ)よ、あなたのあわれみをわたしに惜(お)しまず、
あなたのいつくしみとまこととをもって
常(つね)にわたしをお守(まも)りください。
一二数(かぞ)えがたい災(わざわい)がわたしを囲(かこ)み、
わたしの不義(ふぎ)がわたしに追(お)い迫(せま)って、
物見(ものみ)ることができないまでになりました。
それはわたしの頭(あたま)の毛(け)よりも多(おお)く、
わたしの心(こころ)は消(き)えうせるばかりになりました。
一三主(しゅ)よ、みこころならばわたしをお救(すく)いください。

主よ、すみやかにわたしをお助けください。
一四わたしのいのちを奪おうと尋ね求める者どもを
ことごとく恥じあわてさせてください。
わたしのそこなわれることを願う者どもを
うしろに退かせ、恥を負わせてください。
一五わたしにむかって「あはぁ、あはぁ」と言う者どもを
自分の恥によって恐れおののかせてください。
一六しかし、すべてあなたを尋ね求める者は
あなたによって喜び楽しむように。
あなたの救を愛する者は
常に「主は大いなるかな」ととなえるように。
一七わたしは貧しく、かつ乏しい。

しかし主はわたしをかえりみられます。
あなたはわが助け、わが救主です。
わが神よ、ためらわないでください。

第四一篇 聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一 貧しい者をかえりみる人はさいわいである。
主はそのような人を悩みの日に救い出される。
二 主は彼を守って、生きながらえさせられる。
彼はこの地にあって、さいわいな者と呼ばれる。
あなたは彼をその敵の欲望にわたされない。
三 主は彼をその病の床でささえられる。
あなたは彼の病む時、その病をことごとくいやされる。
四 わたしは言った、「主よ、わたしをあわれみ、
わたしをいやしてください。

わたしはあなたにむかって罪を犯しました」と。
五わたしの敵はわたしをそしって言う、
「いつ彼は死に、その名がほろびるであろうか」と。
六そのひとりがわたしを見ようとして来るとき、
彼は偽りを語り、その心によこしまを集め、
外に出てはそれを言いふらす。
七すべてわたしを憎む者は
わたしについて共にささやき、
わたしのために災を思いめぐらす。
八彼らは言う、「彼に一つのたたりがつきまとったから、
倒れ伏して再び起きあがらないであろう」と。
九わたしの信頼した親しい友、

わたしのパンを食べた親しい友さえも
わたしにそむいてくびすをあげた。
一〇しかし主よ、わたしをあわれみ、
わたしを助け起してください。
そうすればわたしは彼らに報い返すことができます。
一一わたしの敵がわたしに打ち勝てないことによって、
あなたがわたしを喜ばれることを
わたしは知ります。
一二あなたはわたしの全きによって、
わたしをささえ、とこしえにみ前に置かれます。
一三イスラエルの神、主は
とこしえからとこしえまでほむべきかな。
アアメン、アアメン。

第四二篇　聖歌隊の指揮者によってうたわせたコラの子のマスキールの歌

一 神(かみ)よ、しかが谷川(たにがわ)を慕(した)いあえぐように、
わが魂(たましい)もあなたを慕(した)いあえぐ。
二 わが魂(たましい)はかわいているように神(かみ)を慕(した)い、
いける神(かみ)を慕(した)う。
いつ、わたしは行(い)って神(かみ)のみ顔(かお)を
見(み)ることができるだろうか。
三 人々(ひとびと)がひねもすわたしにむかって
「おまえの神(かみ)はどこにいるのか」と言(い)いつづける間(あいだ)は
わたしの涙(なみだ)は昼(ひる)も夜(よる)もわたしの食物(しょくもつ)であった。
四 わたしはかつて祭(まつり)を守(まも)る多(おお)くの人(ひと)と共(とも)に
群(む)れをなして行(い)き、
喜(よろこ)びと感謝(かんしゃ)の歌(うた)をもって彼(かれ)らを神(かみ)の家(いえ)に導(みちび)いた。

今(いま)これらの事(こと)を思(おも)い起(おこ)して、
わが魂(たましい)をそそぎ出(だ)すのである。
五わが魂(たましい)よ、何(なに)ゆえうなだれるのか。
何(なに)ゆえわたしのうちに思(おも)いみだれるのか。
神(かみ)を待(ま)ち望(のぞ)め。
わたしはなおわが助(たす)け、
わが神(かみ)なる主(しゅ)をほめたたえるであろう。
六わが魂(たましい)はわたしのうちにうなだれる。
それで、わたしはヨルダンの地(ち)から、またヘルモンから、
ミザルの山(やま)からあなたを思(おも)い起(おこ)す。
七あなたの大滝(おおたき)の響(ひび)きによって淵々(ふちぶち)呼(よ)びこたえ、
あなたの波(なみ)、あなたの大波(おおなみ)は

ことごとくわたしの上（うえ）を越（こ）えていった。
八昼（ひる）には、主（しゅ）はそのいつくしみをほどこし、
夜（よる）には、その歌（うた）すなわちわがいのちの神（かみ）にささげる
祈（いのり）がわたしと共（とも）にある。
九わたしはわが岩（いわ）なる神（かみ）に言（い）う、
「何（なに）ゆえわたしをお忘（わす）れになりましたか。
何（なに）ゆえわたしは敵（てき）のしえたげによって
悲（かな）しみ歩（ある）くのですか」と。
一〇わたしのあだは骨（ほね）も砕（くだ）けるばかりに
わたしをののしり、
ひねもすわたしにむかって
「おまえの神（かみ）はどこにいるのか」と言（い）う。
一一わが魂（たましい）よ、何（なに）ゆえうなだれるのか。

何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。
神を待ち望め。
わたしはなおわが助け、
わが神なる主をほめたたえるであろう。

第四三篇

一神よ、わたしをさばき、
神を恐れない民にむかって、
わたしの訴えをあげつらい、
たばかりをなすよこしまな人から
わたしを助け出してください。
二あなたはわたしの寄り頼む神です。
なぜわたしを捨てられたのですか。

なぜわたしは敵のしえたげによって
悲しみ歩くのですか。
三あなたの光とまことを送ってわたしを導き、
あなたの聖なる山と、あなたの住まわれる所に
わたしをいたらせてください。
四その時わたしは神の祭壇へ行き、
わたしの大きな喜びである神へ行きます。
神よ、わが神よ、
わたしは琴をもってあなたをほめたたえます。
五わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。
何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。
神を待ち望め。

わたしはなおわが助け、
わが神なる主をほめたたえるであろう。

第四四篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたコラの子のマスキールの歌

一 神よ、いにしえ、われらの先祖たちの日に、
あなたがなされたみわざを
彼らがわれらに語ったのを耳で聞きました。
二 すなわちあなたはみ手をもって、もろもろの国民を
追い払ってわれらの先祖たちを植え、
またもろもろの民を悩まして、
われらの先祖たちをふえ広がらせられました。
三 彼らは自分のつるぎによって国を獲たのでなく、
また自分の腕によって勝利を得たのでもありません。

ただあなたの右(みぎ)の手(て)、あなたの腕(うで)、
あなたのみ顔(かお)の光(ひかり)によるのでした。
あなたが彼(かれ)らを恵(めぐ)まれたからです。
四あなたはわが王(おう)、わが神(かみ)、
ヤコブのために勝利(しょうり)を定(さだ)められる方(かた)です。
五われらはあなたによって、あだを押(お)し倒(たお)し、
われらに立(た)ちむかう者(もの)を、
み名(な)によって踏(ふ)みにじるのです。
六わたしは自分(じぶん)の弓(ゆみ)を頼(たの)まず、わたしのつるぎもまた、
わたしを救(すく)うことができないからです。
七しかしあなたはわれらをあだから救(すく)い、
われらを憎(にく)む者(もの)をはずかしめられました。

八われらは常(つね)に神(かみ)によって誇(ほこ)り、
とこしえにあなたのみ名(な)に感謝(かんしゃ)するでしょう。〔セラ
九ところがあなたはわれらを捨(す)てて恥(はじ)を負(お)わせ、
われらの軍勢(ぐんぜい)と共(とも)に出(で)て行(い)かれませんでした。
一〇あなたがわれらをあだの前(まえ)から退(しりぞ)かせられたので、
われらの敵(てき)は心(こころ)のままにかすめ奪(うば)いました。
一一あなたはわれらをほふられる羊(ひつじ)のようにし、
またもろもろの国民(くにたみ)のなかに散(ち)らされました。
一二あなたはわずかの金(きん)であなたの民(たみ)を売(う)り、
彼(かれ)らのために高(たか)い価(あたい)を求(もと)められませんでした。
一三あなたはわれらを隣(とな)り人(びと)にそしらせ、
われらをめぐる者(もの)どもに侮(あなど)らせ、

あざけらせられました。
一四またもろもろの国民(くにたみ)のなかにわれらを笑(わら)い草(ぐさ)とし、
もろもろの民(たみ)のなかに笑(わら)い者(もの)とされました。
一五わがはずかしめはひねもすわたしの前(まえ)にあり、
恥(はじ)はわたしの顔(かお)をおおいました。
一六これはそしる者(もの)と、ののしる者(もの)の言葉(ことば)により、
敵(てき)と、恨(うら)みを報(むく)いる者(もの)のゆえによるのです。
一七これらの事(こと)が皆(みな)われらに臨(のぞ)みましたが、
われらはあなたを忘(わす)れず、
あなたの契約(けいやく)にそむくことがありませんでした。
一八われらの心(こころ)はたじろがず、
またわれらの歩(あゆ)みはあなたの道(みち)を離(はな)れませんでした。
一九それでもあなたは山犬(やまいぬ)の住(す)む所(ところ)でわれらを砕(くだ)き、

暗やみをもってわれらをおおわれました。
二〇われらがもしわれらの神の名を忘れ、
ほかの神に手を伸べたことがあったならば、
二一神はこれを見あらわされないでしょうか。
神は心の秘密をも知っておられるからです。
二二ところがわれらはあなたのためにひねもす殺されて、
ほふられる羊のようにみなされました。
二三主よ、起きてください。なぜ眠っておられるのですか。
目をさましてください。
われらをとこしえに捨てないでください。
二四なぜあなたはみ顔を隠されるのですか。
なぜわれらの悩みと、しえたげを

お忘(わす)れになるのですか。
二五まことにわれらの魂(たましい)はかがんで、ちりに伏(ふ)し、
われらのからだは土(つち)につきました。
二六起(お)きて、われらをお助(たす)けください。
あなたのいつくしみのゆえに、
われらをあがなってください。

第四五篇聖歌隊の指揮者によってゆりの花のしらべにあわせてうたわせたコラの子のマスキールの歌、愛の歌

一わたしの心(こころ)はうるわしい言葉(ことば)であふれる。
わたしは王(おう)についてよんだわたしの詩(し)を語(かた)る。
わたしの舌(した)はすみやかに物書(ものか)く人(ひと)の筆(ふで)のようだ。
二あなたは人(ひと)の子(こ)らにまさって麗(うるわ)しく、
気品(きひん)がそのくちびるに注(そそ)がれている。

このゆえに神はとこしえにあなたを祝福された。
三ますらおよ、光栄と威厳とをもって、
つるぎを腰に帯びよ。
四真理のため、また正義を守るために
威厳をもって、勝利を得て乗り進め。
あなたの右の手はあなたに恐るべきわざを
教えるであろう。
五あなたの矢は鋭くて、王の敵の胸をつらぬき、
もろもろの民はあなたのもとに倒れる。
六神から賜わったあなたの位は永遠にかぎりなく続き、
あなたの王のつえは公平のつえである。
七あなたは義を愛し、悪を憎む。

このゆえに神、あなたの神は喜びの油を
あなたのともがらにまさって、あなたに注がれた。
八あなたの衣はみな没薬、芦薈、肉桂で、
よいかおりを放っている。
琴の音は象牙の殿から出て、あなたを喜ばせる。
九あなたの愛する女たちのうちには王の娘たちがあり、
王妃はオフルの金を飾って、あなたの右に立つ。
一〇娘よ、聞け、かえりみて耳を傾けよ。
あなたの民と、あなたの父の家とを忘れよ。
一一王はあなたのうるわしさを慕うであろう。
彼はあなたの主であるから、彼を伏しおがめ。
一二ツロの民は贈り物をもちきたり、

民(たみ)のうちの富(と)める者(もの)もあなたの好意(こうい)を請(こ)い求(もと)める。
一三王(おう)の娘(むすめ)は殿(との)のうちで栄(さか)えをきわめ、
こがねを織(お)り込(こ)んだ衣(ころも)を着飾(きかざ)っている。
一四彼女(かのじょ)は縫(ぬ)い取(と)りした衣(ころも)を着(き)て王(おう)のもとに導(みちび)かれ、
その供(とも)びとなるおとめらは
彼女(かのじょ)に従(したが)ってその行列(ぎょうれつ)にある。
一五彼(かれ)らは喜(よろこ)びと楽(たの)しみとをもって導(みちび)かれ行(い)き、
王(おう)の宮殿(きゅうでん)にはいる。
一六あなたの子(こ)らは父祖(ふそ)に代(かわ)って立(た)ち、
あなたは彼(かれ)らを全地(ぜんち)に君(きみ)とするであろう。
一七わたしはあなたの名(な)をよろず代(よ)におぼえさせる。
このゆえにもろもろの民(たみ)は世々(よよ)かぎりなく

あなたをほめたたえるであろう。

第四六篇 聖歌隊の指揮者によって女の声のしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌

一 神はわれらの避け所また力である。
悩める時のいと近き助けである。
二 このゆえに、たとい地は変り、
山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。
三 たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、
そのさわぎによって山は震え動くとも、
われらは恐れない。〔セラ
四 一つの川がある。
その流れは神の都を喜ばせ、
いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。

五神がその中におられるので、都はゆるがない。
神は朝はやく、これを助けられる。
六もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く、
神がその声を出されると地は溶ける。
七万軍の主はわれらと共におられる、
ヤコブの神はわれらの避け所である。〔セラ
八来て、主のみわざを見よ、
主は驚くべきことを地に行われた。
九主は地のはてまでも戦いをやめさせ、
弓を折り、やりを断ち、戦車を火で焼かれる。
一〇「静まって、わたしこそ神であることを知れ。
わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、

全地にあがめられる」。
一一万軍の主はわれらと共におられる、
ヤコブの神はわれらの避け所である。〔セラ

第四七篇 聖歌隊の指揮者によってうたわせたコラの子の歌

一もろもろの民よ、手をうち、
喜びの声をあげ、神にむかって叫べ。
二いと高き主は恐るべく、
全地をしろしめす大いなる王だからである。
三主はもろもろの民をわれらに従わせ、
もろもろの国をわれらの足の下に従わせられた。
四主はその愛されたヤコブの誇を
われらの嗣業として、われらのために選ばれた。〔セラ

五神は喜び叫ぶ声と共にのぼり、
主はラッパの声と共にのぼられた。
六神をほめうたえよ、ほめうたえよ、
われらの王をほめうたえよ、ほめうたえよ。
七神は全地の王である。
巧みな歌をもってほめうたえよ。
八神はもろもろの国民を統べ治められる。
神はその聖なるみくらに座せられる。
九もろもろの民の君たちはつどい来て、
アブラハムの神の民となる。
一〇地のもろもろの盾は神のものである。
神は大いにあがめられる。

第四八篇コラの子の歌、さんび

一主(しゅ)は大(おお)いなる神(かみ)であって、
われらの神(かみ)の都(みやこ)、その聖(せい)なる山(やま)で、
大(おお)いにほめたたえらるべき方(かた)である。
二シオンの山(やま)は北(きた)の端(はし)が高(たか)くて、うるわしく、
全地(ぜんち)の喜(よろこ)びであり、大(おお)いなる王(おう)の都(みやこ)である。
三そのもろもろの殿(との)のうちに神(かみ)はみずからを
高(たか)きやぐらとして現(あらわ)された。
四見(み)よ、王(おう)らは相会(あいかい)して共(とも)に進(すす)んできたが、
五彼(かれ)らは都(みやこ)を見(み)るや驚(おどろ)き、
あわてふためき、急(いそ)ぎ逃(に)げ去(さ)った。
六おののきは彼(かれ)らに臨(のぞ)み、
その苦(くる)しみは産(う)みの苦(くる)しみをする女(おんな)のようであった。

七あなたは東風を起してタルシシの舟を破られた。
八さきにわれらが聞いたように、
今われらは万軍の主の都、
われらの神の都でこれを見ることができた。
神はとこしえにこの都を堅くされる。〔セラ
九神よ、われらはあなたの宮のうちで
あなたのいつくしみを思いました。
一〇神よ、あなたの誉は、あなたのみ名のように、
地のはてにまで及びます。
あなたの右の手は勝利で満ちています。
一一あなたのさばきのゆえに、
シオンの山を喜ばせ、ユダの娘を楽しませてください。

一二シオンのまわりを歩(ある)き、あまねくめぐって、
そのやぐらを数(かぞ)え、
一三その城壁(じょうへき)に心(こころ)をとめ、そのもろもろの殿(との)をしらべよ。
これはあなたがたが後(のち)の代(よ)に語(かた)り伝(つた)えるためである。
一四これこそ神(かみ)であり、
世々(よよ)かぎりなくわれらの神(かみ)であって、
とこしえにわれらを導(みちび)かれるであろう。

第四九篇聖歌隊の指揮者によってうたわせたコラの子の歌

一もろもろの民(たみ)よ、これを聞(き)け、
すべて世(よ)に住(す)む者(もの)よ、耳(みみ)を傾(かたむ)けよ。
二低(てい)きも高(たか)きも、富(と)めるも貧(まず)しきも、共(とも)に耳(みみ)を傾(かたむ)けよ。
三わが口(くち)は知恵(ちえ)を語(かた)り、わが心(こころ)は知識(ちしき)を思(おも)う。

四わたしは耳をたとえに傾け、
琴を鳴らして、わたしのなぞを解き明かそう。
五わたしをしえたげる者の不義が
わたしを取り囲む悩みの日に、
どうして恐れなければならないのか。
六彼らはおのが富をたのみ、
そのたからの多いのを誇る人々である。
七まことに人はだれも自分をあがなうことはできない。
そのいのちの価を神に払うことはできない。
八 九とこしえに生きながらえて、墓を見ないために
そのいのちをあがなうには、あまりに価高くて、
それを満足に払うことができないからである。

一〇まことに賢い人も死に、
愚かな者も、獣のような者も、ひとしく滅んで、
その富を他人に残すことは人の見るところである。
一一たとい彼らはその地を自分の名をもって呼んでも、
墓こそ彼らのとこしえのすまい、
世々彼らのすみかである。
一二人は栄華のうちに長くとどまることはできない、
滅びうせる獣にひとしい。
一三これぞ自分をたのむ愚かな者どもの成りゆき、
自分の分け前を喜ぶ者どもの果である。〔セラ
一四彼らは陰府に定められた羊のように
死が彼らを牧するであろう。

彼らはまっすぐに墓に下り、そのかたちは消えうせ、
陰府が彼らのすまいとなるであろう。
一五しかし神はわたしを受けられるゆえ、
わたしの魂を陰府の力からあがなわれる。〔セラ
一六人が富を得るときも、
その家の栄えが増し加わるときも、恐れてはならない。
一七彼が死ぬときは何ひとつ携え行くことができず、
その栄えも彼に従って下って行くことは
ないからである。
一八たとえ彼が生きながらえる間、自分を幸福と思っても、
またみずから幸な時に、人々から称賛されても、
一九彼はついにおのれの先祖の仲間に連なる。

彼らは絶えて光を見ることがない。
二〇人は栄華のうちに長くとどまることはできない。
滅びうせる獣にひとしい。

第五〇篇アサフの歌

一全能者なる神、主は詔して、
日の出るところから日の入るところまで
あまねく地に住む者を召し集められる。
二神は麗しさのきわみであるシオンから光を放たれる。
三われらの神は来て、もだされない。
み前には焼きつくす火があり、
そのまわりには、はげしい暴風がある。
四神はその民をさばくために、

上なる天および地に呼ばわれる、
五「いけにえをもってわたしと契約を結んだ
わが聖徒をわたしのもとに集めよ」と。
六天は神の義をあらわす、
神はみずから、さばきぬしだからである。〔セラ
七「わが民よ、聞け、わたしは言う。
イスラエルよ、わたしはあなたにむかって
あかしをなす。
わたしは神、あなたの神である。
八わたしがあなたを責めるのは、
あなたのいけにえのゆえではない。
あなたの燔祭はいつもわたしの前にある。
九わたしはあなたの家から雄牛を取らない。

またあなたのおりから雄やぎを取らない。
一〇林のすべての獣はわたしのもの、
丘の上の千々の家畜もわたしのものである。
一一わたしは空の鳥をことごとく知っている。
野に動くすべてのものはわたしのものである。
一二たといわたしは飢えても、あなたに告げない、
世界とその中に満ちるものとは
わたしのものだからである。
一三わたしは雄牛の肉を食べ、
雄やぎの血を飲むだろうか。
一四感謝のいけにえを神にささげよ。
あなたの誓いをいと高き者に果せ。

一五悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、
あなたはわたしをあがめるであろう」。
一六しかし神は悪しき者に言われる、
「あなたはなんの権利があってわたしの定めを述べ、
わたしの契約を口にするのか。
一七あなたは教を憎み、わたしの言葉を捨て去った。
一八あなたは盗びとを見ればこれとむつみ、
姦淫を行う者と交わる。
一九あなたはその口を悪にわたし、
あなたの舌はたばかりを仕組む。
二〇あなたは座してその兄弟をそしり、
自分の母の子をののしる。

二一あなたがこれらの事をしたのを、わたしが黙っていたので、
あなたはわたしを全く自分とひとしい者と思った。
しかしわたしはあなたを責め、
あなたの目の前にその罪をならべる。
二二神を忘れる者よ、このことを思え。
さもないとわたしはあなたをかき裂く。
そのときだれも助ける者はないであろう。
二三感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる。
自分のおこないを慎む者にはわたしは神の救を示す」。

第五一篇 聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌、これはダビデがバテセバに通った後預言者ナタンがきたときによんだもの

一神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、

あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。
二わたしの不義をことごとく洗い去り、
わたしの罪からわたしを清めてください。
三わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。
四わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、
あなたの前に悪い事を行いました。
それゆえ、あなたが宣告をお与えになるときは正しく、
あなたが人をさばかれるときは誤りがありません。
五見よ、わたしは不義のなかに生れました。
わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました。

六見よ、あなたは真実を心のうちに求められます。
それゆえ、わたしの隠れた心に知恵を教えてください。
七ヒソプをもって、わたしを清めてください、
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。
八わたしに喜びと楽しみとを満たし、
あなたが砕いた骨を喜ばせてください。
九み顔をわたしの罪から隠し、
わたしの不義をことごとくぬぐい去ってください。
一〇神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。

一一わたしをみ前(まえ)から捨(す)てないでください。
あなたの聖(せい)なる霊(れい)をわたしから取(と)らないでください。
一二あなたの救(すくい)の喜(よろこ)びをわたしに返(かえ)し、
自由(じゆう)の霊(れい)をもって、わたしをささえてください。
一三そうすればわたしは、とがを犯(おか)した者(もの)に
あなたの道(みち)を教(おし)え、
罪(つみ)びとはあなたに帰(かえ)ってくるでしょう。
一四神(かみ)よ、わが救(すくい)の神(かみ)よ、
血(ち)を流(なが)した罪(つみ)からわたしを助(たす)け出(だ)してください。
わたしの舌(した)は声高(こえたか)らかにあなたの義(ぎ)を歌(うた)うでしょう。
一五主(しゅ)よ、わたしのくちびるを開(ひら)いてください。
わたしの口(くち)はあなたの誉(ほまれ)をあらわすでしょう。

一六あなたはいけにえを好(この)まれません。
たといわたしが燔祭(はんさい)をささげても
あなたは喜(よろこ)ばれないでしょう。
一七神(かみ)の受(う)けられるいけにえは砕(くだ)けた魂(たましい)です。
神(かみ)よ、あなたは砕(くだ)けた悔(く)いた心(こころ)を
かろしめられません。
一八あなたのみこころにしたがってシオンに恵(めぐ)みを施(ほどこ)し、
エルサレムの城壁(じょうへき)を築(きず)きなおしてください。
一九その時(とき)あなたは義(ぎ)のいけにえと燔祭(はんさい)と、
全(まった)き燔祭(はんさい)とを喜(よろこ)ばれるでしょう。
その時(とき)あなたの祭壇(さいだん)に雄牛(おうし)がささげられるでしょう。

第五二篇聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデのマスキールの歌。これはエドムびとドエグがサウルにきて、「ダビデはアヒメレクの家にきた」と告げたと

きにダビデがよんだもの
一 力ある者よ、何ゆえあなたは
神を敬う人に与えた災について誇るのか。
あなたはひねもす人を滅ぼすことをたくらむ。
二 虚偽を行う者よ、あなたの舌は鋭いかみそりのようだ。
三 あなたは善よりも悪を好み、
まことを語るよりも偽りを語ることを好む。〔セラ
四 欺きの舌よ、あなたはすべての滅ぼす言葉を好む。
五 しかし神はとこしえにあなたを砕き、
あなたを捕えて、その天幕から引き離し、
生ける者の地から、あなたの根を絶やされる。〔セラ
六 正しい者はこれを見て恐れ、彼を笑って言うであろう、
七 「神をおのが避け所とせず、その富の豊かなるを頼み、

その宝に寄り頼む人を見よ」と。
八しかし、わたしは神の家にある
緑のオリブの木のようだ。
わたしは世々かぎりなく神のいつくしみを頼む。
九あなたがこの事をなされたので、
わたしはとこしえに、あなたに感謝し、
聖徒の前であなたのみ名をふれ示そう。
これはよいことだからである。

第五三篇

聖歌隊の指揮者によってマハラテのしらべにあわせてうたわせたダビデのマスキールの歌

一愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。
彼らは腐れはて、憎むべき不義をおこなった。
善を行う者はない。

二神は天から人の子を見おろして、
賢い者、神を尋ね求める者があるかないかを見られた。
三彼らは皆そむき、みなひとしく堕落した。
善を行う者はない、ひとりもない。
四悪を行う者は悟りがないのか。
彼らは物食うようにわが民を食らい、
また神を呼ぶことをしない。
五彼らは恐るべきことのない時に大いに恐れた。
神はよこしまな者の骨を散らされるからである。
神が彼らを捨てられるので、
彼らは恥をこうむるであろう。
六どうか、シオンからイスラエルの救が出るように。

神がその民の繁栄を回復される時、
ヤコブは喜び、イスラエルは楽しむであろう。

第五四篇聖歌隊の指揮者によって琴をもってうたわせたダビデのマスキールの歌。これはジフびとがサウルにきて、「ダビデはわれらのうちに隠れている」と言った時によんだもの

一神よ、み名によってわたしを救い、
み力によってわたしをさばいてください。
二神よ、わたしの祈をきき、
わが口の言葉に耳を傾けてください。
三高ぶる者がわたしに逆らって起り、
あらぶる者がわたしのいのちを求めています。
彼らは神をおのが前に置くことをしません。〔セラ
四見よ、神はわが助けぬし、

主はわがいのちを守られるかたです。
五神はわたしのあだに災をもって報いられるでしょう。
あなたのまことをもって彼らを滅ぼしてください。
六わたしは喜んであなたにいけにえをささげます。
主よ、わたしはみ名に感謝します。
これはよい事だからです。
七あなたはすべての悩みからわたしを救い、
わたしの目に敵の敗北を見させられたからです。

第五五篇

聖歌隊の指揮者によって琴をもってうたわせたダビデのマスキールの歌

一神よ、わたしの祈に耳を傾けてください。
わたしの願いを避けて身を隠さないでください。
二わたしにみこころをとめ、わたしに答えてください。

わたしは悩(なや)みによって弱(よわ)りはて、
三敵(てき)の声(こえ)と、悪(あ)しき者(もの)のしえたげとによって
気(き)が狂(くる)いそうです。
彼(かれ)らはわたしに悩(なや)みを臨(のぞ)ませ、
怒(いか)ってわたしを苦(くる)しめるからです。
四わたしの心(こころ)はわがうちにもだえ苦(くる)しみ、
死(し)の恐(おそ)れがわたしの上(うえ)に落(お)ちました。
五恐(おそ)れとおののきがわたしに臨(のぞ)み、
はなはだしい恐(おそ)れがわたしをおおいました。
六わたしは言(い)います、
「どうか、はとのように翼(つばさ)をもちたいものだ。
そうすればわたしは飛(と)び去(さ)って安(やす)きを得(え)るであろう。

七わたしは遠くのがれ去って、野に宿ろう。〔セラ
八わたしは急ぎ避難して、
はやてとあらしをのがれよう」と。
九主よ、彼らのはかりごとを打ち破ってください。
彼らの舌を混乱させてください。
わたしは町のうちに暴力と争いとを見るからです。
一〇彼らは昼も夜も町の城壁の上を歩きめぐり、
町のうちには害悪と悩みとがあります。
一一また滅ぼす事が町のうちにあり、
しえたげと欺きとはその市場を
離れることがありません。
一二わたしをののしる者は敵ではありません。

もしそうであるならば忍ぶことができます。
わたしにむかって高ぶる者はあだではありません。
もしそうであるならば身を隠して
彼を避けることができます。
一三しかしそれはあなたです、わたしと同じ者、
わたしの同僚、わたしの親しい友です。
一四われらはたがいに楽しく語らい、
つれだって神の宮に上りました。
一五どうぞ、死を彼らに臨ませ、
生きたままで陰府に下らせ、
恐れをもって彼らを墓に去らせてください。
一六しかしわたしが神に呼ばわれば、

主はわたしを救われます。
一七夕べに、あしたに、真昼にわたしが嘆きうめけば、
主はわたしの声を聞かれます。
一八たといわたしを攻める者が多くとも、
主はわたしがたたかう戦いから
わたしを安らかに救い出されます。
一九昔からみくらに座しておられる神は
聞いて彼らを悩まされるでしょう。〔セラ
彼らはおきてを守らず、神を恐れないからです。
二〇わたしの友はその親しき者に手を伸ばして、
その契約を破った。
二一その口は牛酪よりもなめらかだが、

その心には戦いがある。
その言葉は油よりもやわらかだが、
それは抜いたつるぎである。
二二あなたの荷を主にゆだねよ。
主はあなたをささえられる。
主は正しい人の動かされるのを決してゆるされない。
二三しかし主よ、あなたは彼らを
滅びの穴に投げ入れられます。
血を流す者と欺く者とは
おのが日の半ばも生きながらえることはできません。
しかしわたしはあなたに寄り頼みます。

第五六篇聖歌隊の指揮者によって、「遠き所におる音をたてぬはと」のしらべにあわせてうたわせたダビデのミクタムの歌。これはダビデがガテでペリシテびと

に捕えられたときによんだもの
一神(かみ)よ、どうかわたしをあわれんでください。
人々(ひとびと)がわたしを踏(ふ)みつけ、
あだする人々(ひとびと)がひねもすわたしをしえたげます。
二わたしの敵(てき)はひねもすわたしを踏(ふ)みつけ、
誇(ほこ)りたかぶって、わたしと戦(たたか)う者(もの)が多(おお)いのです。
三わたしが恐(おそ)れるときは、あなたに寄(よ)り頼(たの)みます。
四わたしは神(かみ)によって、そのみ言葉(ことば)をほめたたえます。
わたしは神(かみ)に信頼(しんらい)するゆえ、恐(おそ)れることはありません。
肉(にく)なる者(もの)はわたしに何(なに)をなし得(え)ましょうか。
五彼(かれ)らはひねもすわたしの事(こと)を妨害(ぼうがい)し、
その思(おも)いはことごとくわたしにわざわいします。
六彼(かれ)らは共(とも)に集(あつ)まって身(み)をひそめ、

わたしの歩みに目をとめ、
わたしのいのちをうかがい求めます。
七神よ、彼らにその罪を報い、
憤りをもってもろもろの民を倒してください。
八あなたはわたしのさすらいを数えられました。
わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえてください。
これは皆あなたの書に
しるされているではありませんか。
九わたしが呼び求める日に、わたしの敵は退きます。
これによって神がわたしを守られることを知ります。
一〇わたしは神によってそのみ言葉をほめたたえ、
主によってそのみ言葉をほめたたえます。

一一わたしは神(かみ)に信頼(しんらい)するゆえ、恐(おそ)れることはありません。
人(ひと)はわたしに何(なに)をなし得(え)ましょうか。
一二神(かみ)よ、わたしがあなたに立(た)てた誓(ちか)いは
果(はた)さなければなりません。
わたしは感謝(かんしゃ)の供(そな)え物(もの)をあなたにささげます。
一三あなたはわたしの魂(たましい)を死(し)から救(すく)い、
わたしの足(あし)を守(まも)って倒(たお)れることなく、
いのちの光(ひかり)のうちで神(かみ)の前(まえ)に
わたしを歩(あゆ)ませられたからです。

第五七篇聖歌隊の指揮者によって、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたダビデのミクタムの歌。これはダビデが洞にはいってサウルの手をのがれたときによんだもの

一神(かみ)よ、わたしをあわれんでください。

わたしをあわれんでください。
わたしの魂はあなたに寄り頼みます。
滅びのあらしの過ぎ去るまでは
あなたの翼の陰をわたしの避け所とします。
二わたしはいと高き神に呼ばわります。
わたしのためにすべての事をなしとげられる神に
呼ばわります。
三神は天から送ってわたしを救い、
わたしを踏みつける者をはずかしめられます。〔セラ
すなわち神はそのいつくしみとまこととを
送られるのです。
四わたしは人の子らをむさぼり食らうししの中に
横たわっています。

彼らの歯はほこ、また矢、彼らの舌は鋭いつるぎです。
五神よ、みずからを天よりも高くし、
みさかえを全地の上にあげてください。
六彼らはわたしの足を捕えようと網を設けました。
わたしの魂はうなだれました。
彼らはわたしの前に穴を掘りました。
しかし彼らはみずからその中に陥ったのです。〔セラ
七神よ、わたしの心は定まりました。
わたしの心は定まりました。
わたしは歌い、かつほめたたえます。
八わが魂よ、さめよ。立琴よ、琴よ、さめよ。
わたしはしののめを呼びさまします。

九主よ、わたしはもろもろの民の中であなたに感謝し、
もろもろの国の中であなたをほめたたえます。
一〇あなたのいつくしみは大きく、天にまで及び、
あなたのまことは雲にまで及びます。
一一神よ、みずからを天よりも高くし、
みさかえを全地の上にあげてください。

第五八篇聖歌隊の指揮者によって、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたダビデのミクタムの歌

一あなたがた力ある者よ、
まことにあなたがたは正しい事を語り、
公平をもって人の子らをさばくのか。
二否、あなたがたは心のうちに悪い事をたくらみ、
その手は地に暴虐を行う。

三悪しき者は胎を出た時から、そむき去り、
生れ出た時から、あやまちを犯し、偽りを語る。
四 五彼らはへびの毒のような毒をもち、
魔法使または巧みに呪文を唱える者の声を聞かない
耳をふさぐ耳しいのまむしのようである。
六神よ、彼らの口の歯を折ってください。
主よ、若いししのきばを抜き砕いてください。
七彼らを流れゆく水のように消え去らせ、
踏み倒される若草のように衰えさせてください。
八また溶けてどろどろになるかたつむりのように、
時ならず生れた日を見ぬ子のようにしてください。
九あなたがたの釜がまだいばらの熱を感じない前に

青いのも、燃えているのも共につむじ風に
吹き払われるように彼らを吹き払ってください。
一〇正しい者は復讐を見て喜び、
その足を悪しき者の血で洗うであろう。
一一そして人々は言うであろう、
「まことに正しい者には報いがある。
まことに地にさばきを行われる神がある」と。

第五九篇聖歌隊の指揮者によって、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたダビデのミクタムの歌。これはサウルがダビデを殺そうとして人をつかわし、その家をうかがわせたときダビデのよんだもの

一わが神よ、どうかわたしをわが敵から助け出し、
わたしに逆らって起りたつ者からお守りください。
二悪を行う者からわたしを助け出し、

血を流す人からわたしをお救いください。
三見よ、彼らはひそみかくれて、わたしの命をうかがい、
力ある人々が共に集まってわたしを攻めます。
主よ、わたしにとがも罪もなく、
四わたしにあやまちもないのに、
彼らは走りまわって備えをします。
わたしを助けるために目をさまして、ごらんください。
五万軍の神、主よ、あなたはイスラエルの神です。
目をさまして、もろもろの国民を罰し、
悪をたくらむ者どもに、
あわれみを施さないでください。〔セラ
六彼らは夕ごとに帰ってきて、

犬のようにほえて町をあさりまわる。
七見よ、彼らはその口をもってほえ叫び、
そのくちびるをもってうなり、
「だれが聞くものか」と言う。
八しかし、主よ、あなたは彼らを笑い、
もろもろの国民をあざけり笑われる。
九わが力よ、わたしはあなたにむかってほめ歌います。
神よ、あなたはわたしの高きやぐらです。
一〇わが神はそのいつくしみをもって
わたしを迎えられる。
わが神はわたしに敵の敗北を見させられる。
一一どうぞ、わが民の忘れることのないために、

彼らを殺さないでください。
主、われらの盾よ、み力をもって彼らをよろめかせ、
彼らを倒れさせないでください。
一二彼らの口の罪、そのくちびるの言葉のために
彼らをその高ぶりに捕われさせてください。
彼らが語るのろいと偽りのために
一三憤りをもって彼らを滅ぼし、
もはやながらえることのないまでに、
彼らを滅ぼしてください。
そうすれば地のはてまで、
人々は神がヤコブを治められることを
知るに至るでしょう。〔セラ

一四彼らは夕ごとに帰ってきて、
犬のようにほえて町をあさりまわる。
一五彼らは食い物のためにあるきまわり、
飽くことを得なければ怒りうなる。
一六しかし、わたしはあなたのみ力をうたい、
朝には声をあげてみいつくしみを歌います。
あなたはわたしの悩みの日にわが高きやぐらとなり、
わたしの避け所となられたからです。
一七わが力よ、わたしはあなたにむかってほめうたいます。
神よ、あなたはわが高きやぐら、
わたしにいつくしみを賜わる神であられるからです。

第六〇篇聖歌隊の指揮者によって、「あかしのゆり」というしらべにあわせて教
のためにうたわせたダビデのミクタムの歌。これはダビデが、アラムナハライムお

よびアラムゾバと戦ったとき、ヨアブがその帰りに、塩の谷でエドムびと一万二千
人を殺したときによんだもの

一 神よ、あなたはわれらを捨て、
われらを打ち破られました。
あなたは憤られました。
再びわれらをかえしてください。
二 あなたは国を震わせ、これを裂かれました。
その破れをいやしてください。
国が揺れ動くのです。
三 あなたはその民に耐えがたい事をさせ、
人をよろめかす酒をわれらに飲ませられました。
四 あなたは弓の前からのがれた者を再び集めようと
あなたを恐れる者のために

一つの旗を立てられました。〔セラ
五あなたの愛される者が助けを得るために、
右の手をもって勝利を与え、
われらに答えてください。
六神はその聖所で言われた、
「わたしは大いなる喜びをもってシケムを分かち、
スコテの谷を分かち与えよう。
七ギレアデはわたしのもの、
マナセもわたしのものである。
エフライムはわたしのかぶと、
ユダはわたしのつえである。
八モアブはわたしの足だらい、
エドムにはわたしのくつを投げる。

ペリシテについては、かちどきをあげる」と。
九 だれがわたしを堅固な町に至らせるでしょうか。
だれがわたしをエドムに導くでしょうか。
一〇 神よ、あなたはわれらを捨てられたではありませんか。
神よ、あなたはわれらの軍勢と共に出て行かれません。
一一 われらに助けを与えて、あだにむかわせてください。
人の助けはむなしいのです。
一二 われらは神によって勇ましく働きます。
われらのあだを踏みにじる者は神だからです。

第六一篇

聖歌隊の指揮者によって琴にあわせてうたわせたダビデの歌

一 神よ、わたしの叫びを聞いてください。
わたしの祈に耳を傾けてください。
二 わが心のくずおれるとき、

わたしは地のはてからあなたに呼ばわります。
わたしを導いて
わたしの及びがたいほどの高い岩に
のぼらせてください。
三あなたはわたしの避け所、
敵に対する堅固なやぐらです。
四わたしをとこしえにあなたの幕屋に住まわせ、
あなたの翼の陰にのがれさせてください。〔セラ
五神よ、あなたはわたしのもろもろの誓いを聞き、
み名を恐れる者に賜わる嗣業を
わたしに与えられました。
六どうか王のいのちを延ばし、

そのよわいをよろずよに至らせてください。
七彼をとこしえに神の前に王たらしめ、
いつくしみとまこととに命じて
彼を守らせてください。
八そうすればわたしはとこしえにみ名をほめうたい、
日ごとにわたしのもろもろの誓いを果すでしょう。

第六二篇聖歌隊の指揮者によってエドトンのしらべにしたがってうたわせたダビデの歌

一わが魂はもだしてただ神をまつ。
わが救は神から来る。
二神こそわが岩、わが救、
わが高きやぐらである。
わたしはいたく動かされることはない。

三あなたがたは、いつまで人に押し迫るのか。
あなたがたは皆、傾いた石がきのように、
揺り動くまがきのように人を倒そうとするのか。
四彼らは人を尊い地位から落そうとのみはかり、
偽りを喜び、その口では祝福し、
心のうちではのろうのである。〔セラ
五わが魂はもだしてただ神をまつ。
わが望みは神から来るからである。
六神こそわが岩、わが救、
わが高きやぐらである。
わたしは動かされることはない。
七わが救とわが誉とは神にある。

神はわが力の岩、わが避け所である。
八民よ、いかなる時にも神に信頼せよ。
そのみ前にあなたがたの心を注ぎ出せ。
神はわれらの避け所である。〔セラ
九低い人はむなしく、高い人は偽りである。
彼らをはかりにおけば、彼らは共に息よりも軽い。
一〇あなたがたは、しえたげにたよってはならない。
かすめ奪うことに、むなしい望みをおいてはならない。
富の増し加わるとき、これに心をかけてはならない。
一一神はひとたび言われた、
わたしはふたたびこれを聞いた、
力は神に属することを。

一一主(しゅ)よ、いつくしみもまたあなたに属(ぞく)することを。
あなたは人(ひと)おのおののわざにしたがって
報(むく)いられるからである。

第六三篇 ユダの野にあったときによんだダビデの歌

一神(かみ)よ、あなたはわたしの神(かみ)、
わたしは切(せつ)にあなたをたずね求(もと)め、
わが魂(たましい)はあなたをかわき望(のぞ)む。
水(みず)なき、かわき衰(おとろ)えた地(ち)にあるように、
わが肉体(にくたい)はあなたを慕(した)いこがれる。
二それでわたしはあなたの力(ちから)と栄(さか)えとを見(み)ようと、
聖所(せいじょ)にあって目(め)をあなたに注(そそ)いだ。
三あなたのいつくしみは、いのちにもまさるゆえ、
わがくちびるはあなたをほめたたえる。

四わたしは生きながらえる間、あなたをほめ、
手をあげて、み名を呼びまつる。
五 六わたしが床の上であなたを思いだし、
夜のふけるままにあなたを深く思うとき、
わたしの魂は髄とあぶらとをもって
もてなされるように飽き足り、
わたしの口は喜びのくちびるをもって
あなたをほめたたえる。
七あなたはわたしの助けとなられたゆえ、
わたしはあなたの翼の陰で喜び歌う。
八わたしの魂はあなたにすがりつき、
あなたの右の手はわたしをささえられる。

九 しかしわたしの魂（たましい）を滅（ほろ）ぼそうとたずね求（もと）める者（もの）は
地（ち）の深（ふか）き所（ところ）に行（い）き、
一〇 つるぎの力（ちから）にわたされ、山犬（やまいぬ）のえじきとなる。
一一 しかし王（おう）は神（かみ）にあって喜（よろこ）び、
神（かみ）によって誓（ちか）う者（もの）はみな誇（ほこ）ることができる。
偽（いつわ）りを言（い）う者（もの）の口（くち）はふさがれるからである。

第六四篇 聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一 神（かみ）よ、わたしが嘆（なげ）き訴（うった）えるとき、
わたしの声（こえ）をお聞（き）きください。
敵（てき）の恐（おそ）れからわたしの命（いのち）をお守（まも）りください。
二 わたしを隠（かく）して、悪（あく）を行（おこな）う者（もの）の
ひそかなはかりごとから免（まぬか）れさせ、

不義を行う者のはかりごとから免れさせてください。
三 彼らはその舌をつるぎのようにとぎ、
苦い言葉を矢のように放ち、
四 隠れた所から罪なき者を射ようとする。
にわかに彼を射て恐れることがない。
五 彼らは悪い企てを固くたもち、
共にはかり、ひそかにわなをかけて言う、
「だれがわれらを見破ることができるか。
六 だれがわれらの罪をたずね出すことができるか。
われらは巧みに、
はかりごとを考えめぐらしたのだ」と。
人の内なる思いと心とは深い。

七しかし神は矢をもって彼らを射られる。
彼らはにわかに傷をうけるであろう。
八神は彼らの舌のゆえに彼らを滅ぼされる。
彼らを見る者は皆そのこうべを振るであろう。
九その時すべての人は恐れ、神のみわざを宣べ伝え、
そのなされた事を考えるであろう。
一〇正しい人は主にあって喜び、かつ主に寄り頼む。
すべて心の直き者は誇ることができる。

第六五篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌、さんび

一神よ、シオンにて、あなたをほめたたえることは
ふさわしいことである。
人はあなたに誓いを果すであろう。
二三祈を聞かれる方よ、

すべての肉(にく)なる者(もの)は罪(つみ)のゆえにあなたに来(く)る。
われらのとががわれらに打(う)ち勝(か)つとき、
あなたはこれをゆるされる。
四あなたに選(えら)ばれ、あなたに近(ちか)づけられて、
あなたの大庭(おおにわ)に住(す)む人(ひと)はさいわいである。
われらはあなたの家(いえ)、あなたの聖(せい)なる宮(みや)の
恵(めぐ)みによって飽(あ)くことができる。
五われらの救(すくい)の神(かみ)よ、
地(ち)のもろもろのはてと、遠(とお)き海(うみ)の望(のぞ)みであるあなたは
恐(おそ)るべきわざにより、
救(すくい)をもってわれらに答(こた)えられる。
六あなたは大能(たいのう)を帯(お)び、

そのみ力によって、もろもろの山を堅く立たせられる。
七あなたは海の響き、大波の響き、
もろもろの民の騒ぎを静められる。
八それゆえ、地のはてに住む人々も、
あなたのもろもろのしるしを見て恐れる。
あなたは朝と夕の出る所をして
喜び歌わせられる。
九あなたは地に臨んで、これに水をそそぎ、
これを大いに豊かにされる。
神の川は水で満ちている。
あなたはそのように備えして
彼らに穀物を与えられる。

一〇あなたはその田みぞを豊かにうるおし、
そのうねを整え、夕立ちをもってそれを柔らかにし、
そのもえ出るのを祝福し、
一一またその恵みをもって年の冠とされる。
あなたの道にはあぶらがしたたる。
一二野の牧場はしたたり、小山は喜びをまとい、
一三牧場は羊の群れを着、
もろもろの谷は穀物をもっておおわれ、
彼らは喜び呼ばわって共に歌う。

第六六篇聖歌隊の指揮者によってうたわせた歌、さんび

一全地よ、神にむかって喜び呼ばわれ。
二そのみ名の栄光を歌え。

栄えあるさんびをささげよ。
三神に告げよ。
「あなたのもろもろのみわざは恐るべきかな。
大いなるみ力によって、あなたの敵はみ前に屈服し、
四全地はあなたを拝み、あなたをほめうたい、
み名をほめうたうであろう」と。〔セラ
五来て、神のみわざを見よ。
人の子らにむかってなされることは恐るべきかな。
六神は海を変えて、かわいた地とされた。
人々は徒歩で川を渡った。
その所でわれらは神を喜んだ。
七神は大能をもって、とこしえに統べ治め、

その目はもろもろの国民を監視される。
そむく者はみずからを高くしてはならない。〔セラ
八もろもろの民よ、われらの神をほめよ。
神をほめたたえる声を聞えさせよ。
九神はわれらを生きながらえさせ、
われらの足のすべるのをゆるされない。
一〇神よ、あなたはわれらを試み、
しろがねを練るように、われらを練られた。
一一あなたはわれらを網にひきいれ、
われらの腰に重き荷を置き、
一二人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。
われらは火の中、水の中を通った。

しかしあなたはわれらを広い所に導き出された。
一三わたしは燔祭をもってあなたの家に行き、
わたしの誓いをあなたに果します。
一四これはわたしが悩みにあったとき、
わたしのくちびるの言い出したもの、
わたしの口が約束したものです。
一五わたしは肥えたものの燔祭を
雄羊のいけにえの煙と共にあなたにささげ、
雄牛と雄やぎとをささげます。〔セラ
一六すべて神を恐れる者よ、来て聞け。
神がわたしのためになされたことを告げよう。
一七わたしは声をあげて神に呼ばわり、

わが舌をもって神をあがめた。
一八もしわたしが心に不義をいだいていたならば、
主はお聞きにならないであろう。
一九しかし、まことに神はお聞きになり、
わが祈の声にみこころをとめられた。
二〇神はほむべきかな。
神はわが祈をしりぞけず、
そのいつくしみをわたしから取り去られなかった。

第六七篇

聖歌隊の指揮者によって琴にあわせてうたわせた歌、さんび

一どうか、神がわれらをあわれみ、われらを祝福し、
そのみ顔をわれらの上に照されるように。〔セラ
二これはあなたの道があまねく地に知られ、

あなたの救の力がもろもろの国民のうちに
知られるためです。
三神よ、民らにあなたをほめたたえさせ、
もろもろの民にあなたをほめたたえさせてください。
四もろもろの国民を楽しませ、
また喜び歌わせてください。
あなたは公平をもってもろもろの民をさばき、
地の上なるもろもろの国民を導かれるからです。〔セラ
五神よ、民らにあなたをほめたたえさせ、
もろもろの民にあなたをほめたたえさせてください。
六地はその産物を出しました。
神、われらの神はわれらを祝福されました。

七神はわれらを祝福されました。
地のもろもろのはてにことごとく
神を恐れさせてください。

第六八篇聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌、さんび

一神よ、立ちあがって、その敵を散らし、
神を憎む者をみ前から逃げ去らせてください。
二煙の追いやられるように彼らを追いやり、
ろうの火の前に溶けるように
悪しき者を神の前に滅ぼしてください。
三しかし正しい者を喜ばせ、
神の前に喜び踊らせ、喜び楽しませてください。
四神にむかって歌え、そのみ名をほめうたえ。

雲に乗られる者にむかって歌声をあげよ。
その名は主、そのみ前に喜び踊れ。
五 その聖なるすまいにおられる神は
みなしごの父、やもめの保護者である。
六 神は寄るべなき者に住むべき家を与え、
めしゅうどを解いて幸福に導かれる。
しかしそむく者はかわいた地に住む。
七 神よ、あなたが民に先だち出て、
荒野を進み行かれたとき、〔セラ
八 シナイの主なる神の前に、
イスラエルの神なる神の前に、
地は震い、天は雨を降らせました。

九神よ、あなたは豊かな雨を降らせて、
疲れ衰えたあなたの嗣業の地を回復され、
一〇あなたの群れは、そのうちにすまいを得ました。
神よ、あなたは恵みをもって
貧しい者のために備えられました。
一一主は命令を下される。
おとずれを携えた女たちの大いなる群れは言う、
一二「もろもろの軍勢の王たちは
逃げ去り、逃げ去った」と。
家にとどまる女たちは獲物を分ける、
一三たとい彼らは羊のおりの中にとどまるとも、
はとの翼は、しろがねをもっておおわれ、

その羽はきらめくこがねをもっておおわれる。
一四全能者がかしこで王たちを散らされたとき、
ザルモンに雪が降った。
一五神の山、バシャンの山、
峰かさなる山、バシャンの山よ。
一六峰かさなるもろもろの山よ、
何ゆえ神がすまいにと望まれた山をねたみ見るのか。
まことに主はとこしえにそこに住まわれる。
一七主は神のいくさ車幾千万をもって、
シナイから聖所に来られた。
一八あなたはとりこを率い、
人々のうちから、またそむく者のうちから

贈り物をうけて、高い山に登られた。
主なる神がそこに住まわれるためである。
一九日々にわれらの荷を負われる主はほむべきかな。
神はわれらの救である。〔セラ
二〇われらの神は救の神である。
死からのがれ得るのは主なる神による。
二一神はその敵のこうべを打ち砕き、
おのがとがの中に歩む者の
毛深い頭のいただきを打ち砕かれる。
二二主は言われた、
「わたしはバシャンから彼らを携え帰り、
海の深い所から彼らを携え帰る。

二三あなたはその足を彼らの血に浸し、
あなたの犬の舌はその分け前を
敵から得るであろう」と。
二四神よ、人々はあなたのこうごうしい行列を見た。
わが神、わが王の、聖所に進み行かれるのを見た。
二五歌う者は前に行き、琴をひく者はあとになり、
おとめらはその間にあって手鼓を打って言う、
二六「大いなる集会で神をほめよ。
イスラエルの源から出た者よ、主をほめまつれ」と。
二七そこに彼らを導く年若いベニヤミンがおり、
その群れの中にユダの君たちがおり、
ゼブルンの君たち、ナフタリの君たちがいる。

二八神よ、あなたの大能を奮い起してください。
われらのために事をなされた神よ、
あなたの力をお示しください。
二九エルサレムにあるあなたの宮のために、
王たちはあなたに贈り物をささげるでしょう。
三〇葦の中に住む獣、
もろもろの民の子牛を率いる雄牛の群れを
いましめてください。
みつぎ物をむさぼる者たちを足の下に踏みつけ、
戦いを好むもろもろの民を散らしてください。
三一青銅をエジプトから持ちきたらせ、
エチオピヤには急いでその手を

神に伸べさせてください。
三二 地のもろもろの国よ、神にむかって歌え、
主をほめうたえ。〔セラ
三三 いにしえからの天の天に乗られる
主にむかってほめうたえ。
見よ、主はみ声を出し、力あるみ声を出される。
三四 力を神に帰せよ。その威光はイスラエルの上にあり、
その力は雲の中にある。
三五 神はその聖所で恐るべく、
イスラエルの神はその民に力と勢いとを与えられる。
神はほむべきかな。

第六九篇

聖歌隊の指揮者によってゆりの花のしらべにあわせてうたわせたダビデの歌

一神よ、わたしをお救いください。
大水が流れ来て、わたしの首にまで達しました。
二わたしは足がかりもない深い泥の中に沈みました。
わたしは深い水に陥り、
大水がわたしの上を流れ過ぎました。
三わたしは叫びによって疲れ、わたしののどはかわき、
わたしの目は神を待ちわびて衰えました。
四ゆえなく、わたしを憎む者は
わたしの頭の毛よりも多く、
偽ってわたしの敵となり、
わたしを滅ぼそうとする者は強いのです。
わたしは盗まなかった物をも

償(つぐな)わなければならないのですか。
五神(かみ)よ、あなたはわたしの愚(おろ)かなことを
知(し)っておられます。
わたしのもろもろのとがは
あなたに隠(かく)れることはありません。
六万軍(ばんぐん)の神(かみ)、主(しゅ)よ、あなたを待(ま)ち望(のぞ)む者(もの)が
わたしの事(こと)によって、
はずかしめられることのないようにしてください。
イスラエルの神(かみ)よ、あなたを求(もと)める者(もの)が
わたしの事(こと)によって、
恥(はじ)を負(お)わせられることのないようにしてください。
七わたしはあなたのためにそしりを負(お)い、
恥(はじ)がわたしの顔(かお)をおおったのです。

八わたしはわが兄弟には、知らぬ者となり、
わが母の子らには、のけ者となりました。
九あなたの家を思う熱心がわたしを食いつくし、
あなたをそしる者のそしりが
わたしに及んだからです。
一〇わたしが断食をもってわたしの魂を悩ませば、
かえってそれによってそしりをうけました。
一一わたしが荒布を衣とすれば、
かえって彼らのことわざとなりました。
一二わたしは門に座する者の話題となり、
酔いどれの歌となりました。
一三しかし主よ、わたしはあなたに祈ります。

神よ、恵みの時に、
あなたのいつくしみの豊かなるにより、
わたしにお答えください。
一四あなたのまことの救により、
わたしを泥の中に沈まぬよう助け出してください。
わたしを憎む者から、
また深い水からわたしを助け出してください。
一五大水がわたしの上を流れ過ぎることなく、
淵がわたしをのむことなく、
穴がその口をわたしの上に閉じることのないように
してください。
一六主よ、あなたのいつくしみの深きにより、

わたしにお答えください。
あなたのあわれみの豊かなるにより、
わたしを顧みてください。
一七あなたの顔をしもべに隠さないでください。
わたしは悩んでいるのです。
すみやかにわたしにお答えください。
一八わたしに近く寄って、わたしをあがない、
わが敵のゆえにわたしをお救いください。
一九あなたはわたしの受けるそしりと、
恥と、はずかしめとを知っておられます。
わたしのあだは皆あなたの前にあります。
二〇そしりがわたしの心を砕いたので、

わたしは望(のぞ)みを失(うしな)いました。
わたしは同情(どうじょう)する者(もの)を求(もと)めたけれども、ひとりもなく、
慰(なぐさ)める者(もの)を求(もと)めたけれども、ひとりも見(み)ませんでした。
二一彼(かれ)らはわたしの食物(しょくもつ)に毒(どく)を入(い)れ、
わたしのかわいた時(とき)に酢(す)を飲(の)ませました。
二二彼(かれ)らの前(まえ)の食卓(しょくたく)を網(あみ)とし、
彼(かれ)らが犠牲(ぎせい)をささげる祭(まつり)を、わなとしてください。
二三彼(かれ)らの目(め)を暗(くら)くして見(み)えなくし、
彼(かれ)らの腰(こし)を常(つね)に震(ふる)わせ、
二四あなたの憤(いきどお)りを彼(かれ)らの上(うえ)にそそぎ、
あなたの激(はげ)しい怒(いか)りを彼(かれ)らに追(お)いつかせてください。
二五彼(かれ)らの宿営(しゅくえい)を荒(あら)し、

ひとりもその天幕（てんまく）に住（す）まわせないでください。
二六彼（かれ）らはあなたが撃（う）たれた者（もの）を迫害（はくがい）し、
あなたが傷（きず）つけられた者（もの）をさらに苦（くる）しめるからです。
二七彼（かれ）らに、罰（ばつ）に罰（ばつ）を加（くわ）え、
あなたの赦免（しゃめん）にあずからせないでください。
二八彼（かれ）らをいのちの書（か）から消（け）し去（さ）って、
義人（ぎじん）のうちに記録（きろく）されることのないように
してください。
二九しかしわたしは悩（なや）み苦（くる）しんでいます。
神（かみ）よ、あなたの救（すくい）が
わたしを高（たか）い所（ところ）に置（お）かれますように。
三〇わたしは歌（うた）をもって神（かみ）の名（な）をほめたたえ、

感謝をもって神をあがめます。
三一これは雄牛または角とひずめのある雄牛にまさって
主を喜ばせるでしょう。
三二へりくだる者は、これを見て喜べ。
神を求める者よ、あなたがたの心を生きかえらせよ。
三三主は乏しい者に聞き、
その捕われ人をかろしめられないからである。
三四天と地は主をほめたたえ、
海とその中に動くあらゆるものは主をほめたたえよ。
三五神はシオンを救い、
ユダの町々を建て直されるからである。
そのしもべらはそこに住んでこれを所有し、

三六そのしもべらの子孫(しそん)はこれを継(つ)ぎ、
み名(な)を愛(あい)する者(もの)はその中(なか)に住(す)むであろう。

第七〇篇聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの記念の歌

一神(かみ)よ、みこころならばわたしをお救(すく)いください。
主(しゅ)よ、すみやかにわたしをお助(たす)けください。
二わたしのいのちをたずね求(もと)める者(もの)どもを
恥(は)じあわてさせてください。
わたしのそこなわれることを願(ねが)う者(もの)どもを
うしろに退(しりぞ)かせ、恥(はじ)を負(お)わせてください。
三「あはぁ、あはぁ」と言(い)う者(もの)どもを
自分(じぶん)の恥(はじ)によって恐(おそ)れおののかせてください。
四すべてあなたを尋(たず)ね求(もと)める者(もの)は

あなたによって喜び楽しむように。
あなたの救を愛する者は
つねに「神は大いなるかな」ととなえるように。
五しかし、わたしは貧しく、かつ乏しい。
神よ、急いでわたしに来てください。
あなたはわが助け、わが救主です。
主よ、ためらわないでください。

第七一篇

一主よ、わたしはあなたに寄り頼む。
とこしえにわたしをはずかしめないでください。
二あなたの義をもってわたしを助け、
わたしを救い出してください。

あなたの耳を傾けて、わたしをお救いください。
三 わたしのためにのがれの岩となり、
わたしを救う堅固な城となってください。
あなたはわが岩、わが城だからです。
四 わが神よ、悪しき者の手からわたしを救い、
不義、残忍な人の支配から、
わたしを救い出してください。
五 主なる神よ、あなたはわたしの若い時からの
わたしの望み、わたしの頼みです。
六 わたしは生れるときからあなたに寄り頼みました。
あなたはわたしを母の胎から取り出されたかたです。
わたしは常にあなたをほめたたえます。

七わたしは多くの人に
怪しまれるような者となりました。
しかしあなたはわたしの堅固な避け所です。
八わたしの口はひねもす、あなたをたたえるさんびと、
頌栄とをもって満たされています。
九わたしが年老いた時、わたしを見離さないでください。
わたしが力衰えた時、わたしを見捨てないでください。
一〇わたしの敵はわたしについて語り、
わたしのいのちをうかがう者は共にはかって、
一一「神は彼を見捨てた。彼を助ける者がないから
彼を追って捕えよ」と言います。
一二神よ、わたしに遠ざからないでください。

わが神よ、すみやかに来てわたしを助けてください。
一三わたしにあだする者を恥じさせ、滅ぼしてください。
わたしをそこなわんとする者を、
そしりと、はずかしめとをもっておおってください。
一四しかしわたしは絶えず望みをいだいて、
いよいよあなたをほめたたえるでしょう。
一五わたしの口はひねもすあなたの義と、
あなたの救とを語るでしょう。
わたしはその数を知らないからです。
一六わたしは主なる神の大能のみわざを携えゆき、
ただあなたの義のみを、ほめたたえるでしょう。
一七神よ、あなたはわたしを若い時から教えられました。
わたしはなお、

あなたのくすしきみわざを宣(の)べ伝(つた)えます。
一八神(かみ)よ、わたしが年老(としお)いて、しらがとなるとも、
あなたの力(ちから)をきたらんとするすべての代(よ)に
宣(の)べ伝(つた)えるまで、わたしを見捨(みす)てないでください。
一九神(かみ)よ、あなたの大能(たいのう)と義(ぎ)とは高(たか)い天(てん)にまで及(およ)ぶ。
あなたは大(おお)いなる事(こと)をなされました。
神(かみ)よ、だれかあなたに等(ひと)しい者(もの)があるでしょうか。
二〇あなたはわたしを多(おお)くの重(おも)い悩(なや)みに
あわされましたが、再(ふたた)びわたしを生(い)かし、
地(ち)の深(ふか)い所(ところ)から引(ひ)きあげられるでしょう。
二一あなたはわたしの誉(ほまれ)を増(ま)し、
再(ふたた)びわたしを慰(なぐさ)められるでしょう。

二二わが神よ、わたしはまた立琴をもって
あなたと、あなたのまことをほめたたえます。
イスラエルの聖者よ、
わたしは琴をもってあなたをほめ歌います。
二三わたしがあなたにむかってほめ歌うとき、
わがくちびるは喜び呼ばわり、
あなたがあがなわれたわが魂もまた
喜び呼ばわるでしょう。
二四わたしの舌もまたひねもす
あなたの義を語るでしょう。
わたしをそこなわんとした者が
恥じあわてたからです。

第七二篇ソロモンの歌

一神（かみ）よ、あなたの公平（こうへい）を王（おう）に与（あた）え、
あなたの義（ぎ）を王（おう）の子（こ）に与（あた）えてください。
二彼（かれ）は義（ぎ）をもってあなたの民（たみ）をさばき、
公平（こうへい）をもってあなたの貧（まず）しい者（もの）をさばくように。
三もろもろの山（やま）と丘（おか）とは義（ぎ）によって
民（たみ）に平和（へいわ）を与（あた）えるように。
四彼（かれ）は民（たみ）の貧（まず）しい者（もの）の訴（うった）えを弁護（べんご）し、
乏（とぼ）しい者（もの）に救（すくい）を与（あた）え、
しえたげる者（もの）を打（う）ち砕（くだ）くように。
五彼（かれ）は日（ひ）と月（つき）とのあらんかぎり、
世々（よよ）生（い）きながらえるように。
六彼（かれ）は刈（か）り取（と）った牧草（まきぐさ）の上（うえ）に降（ふ）る雨（あめ）のごとく、

地を潤す夕立ちのごとく臨むように。
七彼の世に義は栄え、
平和は月のなくなるまで豊かであるように。
八彼は海から海まで治め、
川から地のはてまで治めるように。
九彼のあだは彼の前にかがみ、
彼の敵はちりをなめるように。
一〇タルシシおよび島々の王たちはみつぎを納め、
シバとセバの王たちは贈り物を携えて来るように。
一一もろもろの王は彼の前にひれ伏し、
もろもろの国民は彼に仕えるように。
一二彼は乏しい者をその呼ばわる時に救い、

貧しい者と、助けなき者とを救う。
一三彼は弱い者と乏しい者とをあわれみ、
乏しい者のいのちを救い、
一四彼らのいのちを、しえたげと暴力とからあがなう。
彼らの血は彼の目に尊い。
一五彼は生きながらえ、
シバの黄金が彼にささげられ、
彼のために絶えず祈がささげられ、
ひねもす彼のために祝福が求められるように。
一六国のうちには穀物が豊かにみのり、
その実はレバノンのように山々の頂に波打ち、
人々は野の草のごとく町々に栄えるように。

一七彼の名はとこしえに続き、
その名声は日のあらん限り、絶えることのないように。
人々は彼によって祝福を得、
もろもろの国民は彼をさいわいなる者と
となえるように。
一八イスラエルの神、主はほむべきかな。
ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。
一九その光栄ある名はとこしえにほむべきかな。
全地はその栄光をもって満たされるように。
アアメン、アアメン。
二〇エッサイの子ダビデの祈は終った。

第七三篇アサフの歌

一神は正しい者にむかい、

心(こころ)の清(きよ)い者(もの)にむかって、まことに恵(めぐ)みふかい。
二しかし、わたしは、わたしの足(あし)がつまずくばかり、
わたしの歩(あゆ)みがすべるばかりであった。
三これはわたしが、悪(あ)しき者(もの)の栄(さか)えるのを見(み)て、
その高(たか)ぶる者(もの)をねたんだからである。
四彼(かれ)らには苦(くる)しみがなく、
その身(み)はすこやかで、つやがあり、
五ほかの人々(ひとびと)のように悩(なや)むことがなく、
ほかの人々(ひとびと)のように打(う)たれることはない。
六それゆえ高慢(こうまん)は彼(かれ)らの首飾(くびかざり)となり、
暴力(ぼうりょく)は衣(ころも)のように彼(かれ)らをおおっている。
七彼(かれ)らは肥(こ)え太(ふと)って、その目(め)はとびいで、

その心は愚かな思いに満ちあふれている。
八彼らはあざけり、悪意をもって語り、
高ぶって、しえたげを語る。
九彼らはその口を天にさからって置き、
その舌は地をあるきまわる。
一〇それゆえ民は心を変えて彼らをほめたたえ、
彼らのうちにあやまちを認めない。
一一彼らは言う、「神はどうして知り得ようか、
いと高き者に知識があろうか」と。
一二見よ、これらは悪しき者であるのに、
常に安らかで、その富が増し加わる。
一三まことに、わたしはいたずらに心をきよめ、

罪を犯すことなく手を洗った。
一四わたしはひねもす打たれ、
朝ごとに懲しめをうけた。
一五もしわたしが「このような事を語ろう」と言ったなら、
わたしはあなたの子らの代を誤らせたであろう。
一六しかし、わたしがこれを知ろうと思いめぐらしたとき、
これはわたしにめんどうな仕事のように思われた。
一七わたしが神の聖所に行って、
彼らの最後を悟り得たまではそうであった。
一八まことにあなたは彼らをなめらかな所に置き、
彼らを滅びに陥らせられる。
一九なんと彼らはまたたくまに滅ぼされ、

恐れをもって全く一掃されたことであろう。
二〇あなたが目をさまして
彼らの影をかろしめられるとき、
彼らは夢みた人の目をさました時のようである。
二一わたしの魂が痛み、わたしの心が刺されたとき、
二二わたしは愚かで悟りがなく、
あなたに対しては獣のようであった。
二三けれどもわたしは常にあなたと共にあり、
あなたはわたしの右の手を保たれる。
二四あなたはさとしをもってわたしを導き、
その後わたしを受けて栄光にあずからせられる。
二五わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。

地にはあなたのほかに慕うものはない。
二六わが身とわが心とは衰える。
しかし神はとこしえにわが心の力、わが嗣業である。
二七見よ、あなたに遠い者は滅びる。
あなたは、あなたにそむく者を滅ぼされる。
二八しかし神に近くあることはわたしに良いことである。
わたしは主なる神をわが避け所として、
あなたのもろもろのみわざを宣べ伝えるであろう。

第七四篇アサフのマスキールの歌

一神よ、なぜ、われらをとこしえに捨てられるのですか。
なぜ、あなたの牧の羊に怒りを燃やされるのですか。
二昔あなたが手に入れられたあなたの公会、

すなわち、あなたの嗣業の部族となすために
あがなわれたものを思い出してください。
あなたが住まわれたシオンの山を
思い出してください。
三とこしえの滅びの跡に、あなたの足を向けてください。
敵は聖所で、すべての物を破壊しました。
四あなたのあだは聖所の中でほえさけび、
彼らのしるしを立てて、しるしとしました。
五彼らは上の入口では、おのをもって
木の格子垣を切り倒しました。
六また彼らは手おのと鎚とをもって
聖所の彫り物をことごとく打ち落しました。

七彼らはあなたの聖所に火をかけ、
み名のすみかをけがして、地に倒しました。
八彼らは心のうちに言いました、
「われらはことごとくこれを滅ぼそう」と。
彼らは国のうちの神の会堂をことごとく焼きました。
九われらは自分たちのしるしを見ません。
預言者も今はいません。
そしていつまで続くのか、われらのうちには、
知る者がありません。
一〇神よ、あだはいつまであざけるでしょうか。
敵はとこしえにあなたの名をののしるでしょうか。
一一なぜあなたは手を引かれるのですか。

なぜあなたは右の手を
ふところに入れておかれるのですか。
一二神はいにしえからわたしの王であって、
救を世の中に行われた。
一三あなたはみ力をもって海をわかち、
水の上の龍の頭を砕かれた。
一四あなたはレビヤタンの頭をくだき、
これを野の獣に与えてえじきとされた。
一五あなたは泉と流れとを開き、
絶えず流れるもろもろの川をからされた。
一六昼はあなたのもの、夜もまたあなたのもの。
あなたは光と太陽とを設けられた。

一七あなたは地のもろもろの境を定め、
夏と冬とを造られた。
一八主よ、敵はあなたをあざけり、
愚かな民はあなたのみ名をののしります。
この事を思い出してください。
一九どうかあなたのはとの魂を
野の獣にわたさないでください。
貧しい者のいのちをとこしえに忘れないでください。
二〇あなたの契約をかえりみてください。
地の暗い所は暴力のすまいで満ちています。
二一しえたげられる者を恥じさせないでください。
貧しい者と乏しい者とに

み名(な)をほめたたえさせてください。
二二神(かみ)よ、起(お)きてあなたの訴(うった)えをあげつらい、
愚(おろ)かな者(もの)のひねもすあなたをあざけるのを
みこころにとめてください。
二三あなたのあだの叫(さけ)びを忘(わす)れないでください。
あなたの敵(てき)の絶(た)えずあげる騒(さわ)ぎを
忘(わす)れないでください。

第七五篇聖歌隊の指揮者によって、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたアサフの歌、さんび

一神(かみ)よ、われらはあなたに感謝(かんしゃ)します。
われらは感謝(かんしゃ)します。
われらはあなたのみ名(な)を呼(よ)び、
あなたのくすしきみわざを語(かた)ります。

二定まった時が来れば、
わたしは公平をもってさばく。
三地とすべてこれに住むものがよろめくとき、
わたしはその柱を堅くする。〔セラ
四わたしは、誇る者には「誇るな」と言い、
悪しき者には「角をあげるな、
五角を高くあげるな、
高慢な態度をもって語るな」と言う。
六上げることは東からでなく、西からでなく、
また荒野からでもない。
七それはさばきを行われる神であって、
神はこれを下げ、かれを上げられる。

八主の手には杯があって、
よく混ぜた酒があわだっている。
主がこれを注ぎ出されると、
地のすべての悪しき者は
これを一滴も残さずに飲みつくすであろう。
九しかしわたしはとこしえに喜び、
ヤコブの神をほめうたいます。
一〇悪しき者の角はことごとく切り離されるが
正しい者の角はあげられるであろう。

第七六篇聖歌隊の指揮者によって琴にあわせてうたわせたアサフの歌、さんび

一神はユダに知られ、
そのみ名はイスラエルにおいて偉大である。

二その幕屋（まくや）はサレムにあり、
そのすまいはシオンにある。
三かしこで神（かみ）は弓（ゆみ）の火矢（ひや）を折（お）り、
盾（たて）とつるぎと戦（たたか）いの武器（ぶき）をこわされた。〔セラ
四あなたは永久（えいきゅう）の山々（やまやま）にまさって
光栄（こうえい）あり、威厳（いげん）がある。
五雄々（おお）しい者（もの）はかすめられ、彼（かれ）らは眠（ねむ）りに沈（しず）み、
いくさびとは皆（みな）その手（て）を施（ほどこ）すことができなかった。
六ヤコブの神（かみ）よ、あなたのとがめによって、
乗（の）り手（て）と馬（うま）とは深（ふか）い眠（ねむ）りに陥（おちい）った。
七しかし、あなたこそは恐（おそ）るべき方（かた）である。
あなたが怒（いか）りを発（はっ）せられるとき、

だれがみ前に立つことができよう。
八 九あなたは天からさばきを仰せられた。
神が地のしえたげられた者を救うために、
さばきに立たれたとき、地は恐れて、沈黙した。〔セラ
一〇まことに人の怒りはあなたをほめたたえる。
怒りの余りをあなたは帯とされる。
一一あなたがたの神、主に誓いを立てて、それを償え。
その周囲のすべての者は
恐るべき主に贈り物をささげよ。
一二主はもろもろの君たちのいのちを断たれる。
主は地の王たちの恐るべき者である。

第七七篇聖歌隊の指揮者によってエドトンのしらべにしたがってうたわせたアサフの歌

一 わたしは神にむかい声をあげて叫ぶ。
わたしが神にむかって声をあげれば、
神はわたしに聞かれる。
二 わたしは悩みの日に主をたずね求め、
夜はわが手を伸べてたゆむことなく、
わが魂は慰められるのを拒む。
三 わたしは神を思うとき、嘆き悲しみ、
深く思うとき、わが魂は衰える。〔セラ
四 あなたはわたしのまぶたをささえて閉じさせず、
わたしは物言うこともできないほどに悩む。
五 わたしは昔の日を思い、
いにしえの年を思う。

六わたしは夜、わが心と親しく語り、
深く思うてわが魂を探り、言う、
七「主はとこしえにわれらを捨てられるであろうか。
ふたたび、めぐみを施されないであろうか。
八そのいつくしみはとこしえに絶え、
その約束は世々ながくすたれるであろうか。
九神は恵みを施すことを忘れ、怒りをもって
そのあわれみを閉じられたであろうか」と。〔セラ
一〇その時わたしは言う、「わたしの悲しみは
いと高き者の右の手が変ったことである」と。
一一わたしは主のみわざを思い起す。
わたしは、いにしえからの

あなたのくすしきみわざを思いいだす。
一二わたしは、あなたのすべてのみわざを思い、
あなたの力あるみわざを深く思う。
一三神よ、あなたの道は聖である。
われらの神のように大いなる神はだれか。
一四あなたは、くすしきみわざを行われる神である。
あなたは、もろもろの民の間に、その大能をあらわし、
一五その腕をもっておのれの民をあがない、
ヤコブとヨセフの子らをあがなわれた。〔セラ
一六神よ、大水はあなたを見た。
大水はあなたを見ておののき、淵もまた震えた。
一七雲は水を注ぎいだし、空は雷をとどろかし、

あなたの矢は四方にきらめいた。
一八あなたの雷のとどろきは、つむじ風の中にあり、
あなたのいなずまは世を照し、地は震い動いた。
一九あなたの大路は海の中にあり、
あなたの道は大水の中にあり、
あなたの足跡はたずねえなかった。
二〇あなたは、その民をモーセとアロンの手によって
羊の群れのように導かれた。

第七八篇アサフのマスキールの歌

一わが民よ、わが教を聞き、
わが口の言葉に耳を傾けよ。
二わたしは口を開いて、たとえを語り、

いにしえからの、なぞを語ろう。
三これはわれらがさきに聞いて知ったこと、
またわれらの先祖たちが
われらに語り伝えたことである。
四われらはこれを子孫に隠さず、主の光栄あるみわざと、
その力と、主のなされたくすしきみわざとを
きたるべき代に告げるであろう。
五主はあかしをヤコブのうちにたて、
おきてをイスラエルのうちに定めて、
その子孫に教うべきことを
われらの先祖たちに命じられた。
六これは次の代に生れる子孫がこれを知り、

みずから起(おこ)って、そのまた子孫(しそん)にこれを伝(つた)え、
七彼(かれ)らをして神(かみ)に望(のぞ)みをおき、
神(かみ)のみわざを忘(わす)れず、その戒(いまし)めを守(まも)らせるためである。
八またその先祖(せんぞ)たちのようにかたくなで、
そむく者(もの)のやからとなり、その心(こころ)が定(さだ)まりなく、
その魂(たましい)が神(かみ)に忠実(ちゅうじつ)でないやからと
ならないためである。
九エフライムの人々(ひとびと)は武装(ぶそう)し、弓(ゆみ)を携(たずさ)えたが、
戦(たたか)いの日(ひ)に引(ひ)き返(かえ)した。
一〇彼(かれ)らは神(かみ)の契約(けいやく)を守(まも)らず、
そのおきてにしたがって歩(あゆ)むことを拒(こば)み、
一一神(かみ)がなされた事(こと)と、

彼らに示されたくすしきみわざとを忘れた。
一二神はエジプトの地と、ゾアンの野で
くすしきみわざを彼らの先祖たちの前に行われた。
一三神は海を分けて彼らを通らせ、
水を立たせて山のようにされた。
一四昼は雲をもって彼らを導き、
夜は、よもすがら火の光をもって彼らを導かれた。
一五神は荒野で岩を裂き、
淵から飲むように豊かに彼らに飲ませ、
一六また岩から流れを引いて、
川のように水を流れさせられた。
一七ところが彼らはなお神にむかって罪をかさね、

荒野でいと高き者にそむき、
一八おのが欲のために食物を求めて、
その心のうちに神を試みた。
一九また彼らは神に逆らって言った、
「神は荒野に宴を設けることができるだろうか。
二〇見よ、神が岩を打たれると、
水はほとばしりいで、流れがあふれた。
神はまたパンを与えることができるだろうか。
民のために肉を備えることができるだろうか」と。
二一それゆえ、主は聞いて憤られた。
火はヤコブにむかって燃えあがり、
怒りはイスラエルにむかって立ちのぼった。

二二これは彼らが神を信ぜず、
その救の力を信用しなかったからである。
二三しかし神は上なる大空に命じて天の戸を開き、
二四彼らの上にマナを降らせて食べさせ、
天の穀物を彼らに与えられた。
二五人は天使のパンを食べた。
神は彼らに食物をおくって飽き足らせられた。
二六神は天に東風を吹かせ、
み力をもって南風を導かれた。
二七神は彼らの上に肉をちりのように降らせ、
翼ある鳥を海の砂のように降らせて、
二八その宿営のなか、そのすまいのまわりに落された。

二九こうして彼らは食べて、飽き足ることができた。
神が彼らにその望んだものを与えられたからである。
三〇ところが彼らがまだその欲を離れず、
食物がなお口の中にあるうちに、
三一神の怒りが彼らにむかって立ちのぼり、
彼らのうちの最も強い者を殺し、
イスラエルのうちのえり抜きの者を打ち倒された。
三二すべてこれらの事があったにもかかわらず、
彼らはなお罪を犯し、
そのくすしきみわざを信じなかった。
三三それゆえ神は彼らの日を息のように消えさせ、
彼らの年を恐れをもって過ごさせられた。

三四神が彼らを殺されたとき、彼らは神をたずね、
悔いて神を熱心に求めた。
三五こうして彼らは、神は彼らの岩、いと高き神は
彼らのあがないぬしであることを思い出した。
三六しかし彼らはその口をもって神にへつらい、
その舌をもって神に偽りを言った。
三七彼らの心は神にむかって堅実でなく、
神の契約に真実でなかった。
三八しかし神はあわれみに富まれるので、
彼らの不義をゆるして滅ぼさず、
しばしばその怒りをおさえて、
その憤りをことごとくふり起されなかった。

三九また神は、彼らがただ肉であって、
過ぎ去れば再び帰りこぬ風であることを
思い出された。
四〇幾たび彼らは野で神にそむき、
荒野で神を悲しませたことであろうか。
四一彼らはかさねがさね神を試み、
イスラエルの聖者を怒らせた。
四二彼らは神の力をも、
神が彼らをあだからあがなわれた日をも
思い出さなかった。
四三神はエジプトでもろもろのしるしをおこない、
ゾアンの野でもろもろの奇跡をおこない、

四四彼らの川を血に変らせて、
その流れを飲むことができないようにされた。
四五神はえの群れを彼らのうちに送って彼らを食わせ、
かえるを送って彼らを滅ぼされた。
四六また神は彼らの作物を青虫にわたし、
彼らの勤労の実をいなごにわたされた。
四七神はひょうをもって彼らのぶどうの木を枯らし、
霜をもって彼らのいちじく桑の木を枯らされた。
四八神は彼らの家畜をひょうにわたし、
彼らの群れを燃えるいなずまにわたされた。
四九神は彼らの上に激しい怒りと、憤りと、
恨みと、悩みと、滅ぼす天使の群れとを放たれた。

五〇神はその怒りのために道を設け、
彼らの魂を死から免れさせず、
そのいのちを疫病にわたされた。
五一神はエジプトですべてのういごを撃ち、
ハムの天幕で彼らの力の初めの子を撃たれた。
五二こうして神はおのれの民を羊のように引き出し、
彼らを荒野で羊の群れのように導き、
五三彼らを安らかに導かれたので
彼らは恐れることがなかった。
しかし海は彼らの敵をのみつくした。
五四神は彼らをその聖地に伴い、
その右の手をもって獲たこの山に伴いこられた。

五五神は彼らの前からもろもろの国民を追い出し、
その地を分けて嗣業とし、
イスラエルの諸族を彼らの天幕に住まわせられた。
五六しかし彼らはいと高き神を試み、これにそむいて、
そのもろもろのあかしを守らず、
五七そむき去って、先祖たちのように真実を失い、
狂った弓のようにねじれた。
五八彼らは高き所を設けて神を怒らせ、
刻んだ像をもって神のねたみを起した。
五九神は聞いて大いに怒り、
イスラエルを全くしりぞけられた。
六〇神は人々のなかに設けた幕屋なる

シロのすまいを捨て、
六一その力をとりことならせ、
その栄光をあだの手にわたされた。
六二神はその民をつるぎにわたし、
その嗣業にむかって大いなる怒りをもらされた。
六三火は彼らの若者たちを焼きつくし、
彼らのおとめたちは婚姻の歌を失い、
六四彼らの祭司たちはつるぎによって倒れ、
彼らのやもめたちは嘆き悲しむことさえしなかった。
六五そのとき主は眠った者のさめたように、
勇士が酒によって叫ぶように目をさまして、
六六そのあだを撃ち退け、

とこしえの恥を彼らに負わせられた。
六七神はヨセフの天幕をしりぞけ、
エフライムの部族を選ばず、
六八ユダの部族を選び、
神の愛するシオンの山を選ばれた。
六九神はその聖所を高い天のように建て、
とこしえに基を定められた地のように建てられた。
七〇神はそのしもべダビデを選んで、
羊のおりから取り、
七一乳を与える雌羊の番をするところからつれて来て、
その民ヤコブ、その嗣業イスラエルの牧者とされた。
七二こうして彼は直き心をもって彼らを牧し、

巧みな手をもって彼らを導いた。

第七九篇アサフの歌

一神よ、もろもろの異邦人はあなたの嗣業の地を侵し、
あなたの聖なる宮をけがし、
エルサレムを荒塚としました。
二彼らはあなたのしもべのしかばねを
空の鳥に与えてえさとし、
あなたの聖徒の肉を地の獣に与え、
三その血をエルサレムのまわりに水のように流し、
これを葬る人がありませんでした。
四われらは隣り人にそしられ、
まわりの人々に侮られ、あざけられる者となりました。

五主よ、いつまでなのですか。
とこしえにお怒りになられるのですか。
あなたのねたみは火のように燃えるのですか。
六どうか、あなたを知らない異邦人と、
あなたの名を呼ばない国々の上に
あなたの怒りを注いでください。
七彼らはヤコブを滅ぼし、
そのすみかを荒したからです。
八われらの先祖たちの不義をみこころにとめられず、
あわれみをもって、すみやかにわれらを
迎えてください。
われらは、はなはだしく低くされたからです。

九われらの救の神よ、
み名の栄光のためにわれらを助け、
み名のためにわれらを救い、
われらの罪をおゆるしください。
一〇どうして異邦人は言うのでしょう、
「彼らの神はどこにいるのか」と。
あなたのしもべらの流された血の報いを
われらのまのあたりになして、
異邦人に知らせてください。
一一捕われ人の嘆きを
あなたのみ前にいたらせ、
あなたの大いなる力により、

死（し）に定（さだ）められた者（もの）を守（まも）りながらえさせてください。
一二主（しゅ）よ、われらの隣（とな）り人（びと）があなたをそしったそしりを
七倍（ばい）にして彼（かれ）らのふところに報（むく）い返（かえ）してください。
一三そうすれば、あなたの民（たみ）、あなたの牧（まき）の羊（ひつじ）は、
とこしえにあなたに感謝（かんしゃ）し、
世々（よよ）あなたをほめたたえるでしょう。

第八〇篇

聖歌隊の指揮者によってゆりの花のしらべにあわせてうたわせたアサフのあかしの歌

一イスラエルの牧者（ぼくしゃ）よ、
羊（ひつじ）の群（む）れのようにヨセフを導（みちび）かれる者（もの）よ、
耳（みみ）を傾（かたむ）けてください。
ケルビムの上（うえ）に座（ざ）せられる者（もの）よ、
光（ひかり）を放（はな）ってください。

二エフライム、ベニヤミン、マナセの前に
あなたの力を振り起し、
来て、われらをお救いください。
三神よ、われらをもとに返し、
み顔の光を照してください。
そうすればわれらは救をえるでしょう。
四万軍の神、主よ、
いつまで、その民の祈にむかって
お怒りになるのですか。
五あなたは涙のパンを彼らに食わせ、
多くの涙を彼らに飲ませられました。
六あなたはわれらを隣り人のあざけりとし、

われらの敵はたがいにあざわらいました。
七万軍の神よ、われらをもとに返し、
われらの救われるため、み顔の光を照してください。
八あなたは、ぶどうの木をエジプトから携え出し、
もろもろの国民を追い出して、これを植えられました。
九あなたはこれがために地を開かれたので、
深く根ざして、国にはびこりました。
一〇山々はその影でおおわれ、
神の香柏はその枝でおおわれました。
一一これはその枝を海にまでのべ、
その若枝を大川にまでのべました。
一二あなたは何ゆえ、そのかきをくずして

道ゆくすべての人にその実を
摘み取らせられるのですか。
一三林のいのししはこれを荒し、
野のすべての獣はこれを食べます。
一四万軍の神よ、再び天から見おろして、
このぶどうの木をかえりみてください。
一五あなたの右の手の植えられた幹と、
みずからのために強くされた枝とを
かえりみてください。
一六彼らは火をもってこれを焼き、
これを切り倒しました。
彼らをみ顔のとがめによって滅ぼしてください。

一七しかしあなたの手(て)をその右(みぎ)の手(て)の人(ひと)の上(うえ)におき、
みずからのために強(つよ)くされた人(ひと)の子(こ)の上(うえ)に
おいてください。
一八そうすれば、われらはあなたを
離(はな)れ退(しりぞ)くことはありません。
われらを生(い)かしてください。
われらはあなたのみ名(な)を呼(よ)びます。
一九万軍(ばんぐん)の神(かみ)、主(しゅ)よ、われらをもとに返(かえ)し、
み顔(かお)の光(ひかり)を照(て)らしてください。
そうすればわれらは救(すくい)をえるでしょう。

第八一篇

聖歌隊の指揮者によってギテトのしらべにあわせてうたわせたアサフの歌

一われらの力(ちから)なる神(かみ)にむかって高(たか)らかに歌(うた)え。

ヤコブの神にむかって喜びの声をあげよ。
二 歌をうたい、鼓を打て。
良い音の琴と立琴とをかきならせ。
三 新月と満月とわれらの祭の日とに
ラッパを吹きならせ。
四 これはイスラエルの定め、
ヤコブの神のおきてである。
五 神が出てエジプトの国を攻められたとき、
ヨセフのなかにこれを立てて、あかしとされた。
わたしはかしこでまだ知らなかった言葉を聞いた、
六 「わたしはあなたの肩から重荷をのぞき、
あなたの手をかごから免れさせた。

七あなたが悩んだとき、呼ばわったので
わたしはあなたを救った。
わたしは雷の隠れた所で、あなたに答え、
メリバの水のほとりで、あなたを試みた。〔セラ
八わが民よ、聞け、わたしはあなたに勧告する。
イスラエルよ、あなたがわたしに聞き従うことを望む。
九あなたのうちに他の神があってはならない。
あなたは外国の神を拝んではならない。
一〇わたしはエジプトの国から、
あなたをつれ出したあなたの神、主である。
あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう。
一一しかしわが民はわたしの声に聞き従わず、

イスラエルはわたしを好まなかった。
一二それゆえ、わたしは彼らを
そのかたくなな心にまかせ、
その思いのままに行くにまかせた。
一三わたしはわが民のわたしに聞き従い、
イスラエルのわが道に歩むことを欲する。
一四わたしはすみやかに彼らの敵を従え、
わが手を彼らのあだに向けよう。
一五主を憎む者も彼らに恐れ従い、
彼らの時はとこしえに続くであろう。
一六わたしは麦の最も良いものをもってあなたを養い、
岩から出た蜜をもってあなたを飽かせるであろう」。

第八二篇　アサフの歌

一 神は神の会議のなかに立たれる。
神は神々のなかで、さばきを行われる。
二 「あなたがたはいつまで不正なさばきをなし、
悪しき者に好意を示すのか。〔セラ
三 弱い者と、みなしごとを公平に扱い、
苦しむ者と乏しい者の権利を擁護せよ。
四 弱い者と貧しい者を救い、
彼らを悪しき者の手から助け出せ」。
五 彼らは知ることなく、悟ることもなくて、
暗き中をさまよう。
地のもろもろの基はゆり動いた。
六 わたしは言う、「あなたがたは神だ、

あなたがたは皆いと高き者の子だ。
七しかし、あなたがたは人のように死に、
もろもろの君のひとりのように倒れるであろう」。
八神よ、起きて、地をさばいてください。
すべての国民はあなたのものだからです。

第八三篇アサフの歌、さんび

一神よ、沈黙を守らないでください。
神よ、何も言わずに、黙っていないでください。
二見よ、あなたの敵は騒ぎたち、
あなたを憎む者は頭をあげました。
三彼らはあなたの民にむかって
巧みなはかりごとをめぐらし、

あなたの保護される者にむかって相ともに計ります。
四彼らは言います、
「さあ、彼らを断ち滅ぼして国を立てさせず、
イスラエルの名を
ふたたび思い出させないようにしよう」。
五彼らは心をひとつにして共にはかり、
あなたに逆らって契約を結びます。
六すなわちエドムの天幕に住む者とイシマエルびと、
モアブとハガルびと、
七ゲバルとアンモンとアマレク、
ペリシテとツロの住民などです。
八アッスリヤもまた彼らにくみしました。
彼らはロトの子孫を助けました。〔セラ

九あなたがミデアンにされたように、
キション川でシセラとヤビンにされたように、
彼らにしてください。
一〇彼らはエンドルで滅ぼされ、
地のために肥料となりました。
一一彼らの貴人をオレブとゼエブのように、
そのすべての君たちを
ゼバとザルムンナのようにしてください。
一二彼らは言いました、「われらは神の牧場を獲て、
われらの所有にしよう」と。
一三わが神よ、彼らを巻きあげられるちりのように、
風の前のもみがらのようにしてください。
一四林を焼く火のように、

山を燃やす炎のように、
一五あなたのはやてをもって彼らを追い、
つむじかぜをもって彼らを恐れさせてください。
一六彼らの顔に恥を満たしてください。
主よ、そうすれば彼らはあなたの名を求めるでしょう。
一七彼らをとこしえに恥じ恐れさせ、
あわて惑って滅びうせさせてください。
一八主という名をおもちになるあなたのみ、
全地をしろしめすいと高き者であることを
彼らに知らせてください。

第八四篇聖歌隊の指揮者によってギテトのしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌

一万軍の主よ、

あなたのすまいはいかに麗しいことでしょう。
二わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、
わが心とわが身は生ける神にむかって喜び歌います。
三すずめがすみかを得、
つばめがそのひなをいれる巣を得るように、
万軍の主、わが王、わが神よ、
あなたの祭壇のかたわらに
わがすまいを得させてください。
四あなたの家に住み、
常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。〔セラ
五その力があなたにあり、
その心がシオンの大路にある人はさいわいです。

六彼(かれ)らはバカの谷(たに)を通(とお)っても、
そこを泉(いずみ)のある所(ところ)とします。
また前(まえ)の雨(あめ)は池(いけ)をもってそこをおおいます。
七彼(かれ)らは力(ちから)から力(ちから)に進(すす)み、
シオンにおいて神々(かみがみ)の神(かみ)にまみえるでしょう。
八万軍(ばんぐん)の神(かみ)、主(しゅ)よ、わが祈(いのり)をおききください。
ヤコブの神(かみ)よ、耳(みみ)を傾(かたむ)けてください。〔セラ
九神(かみ)よ、われらの盾(たて)をみそなわし、
あなたの油(あぶら)そそがれた者(もの)の顔(かお)をかえりみてください。
一〇あなたの大庭(おおにわ)にいる一日(にち)は、
よそにいる千日(にち)にもまさるのです。
わたしは悪(あく)の天幕(てんまく)にいるよりは、

むしろ、わが神の家の門守となることを願います。
一一主なる神は日です、盾です。
主は恵みと誉とを与え、
直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。
一二万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。

第八五篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたコラの子の歌

一主よ、あなたはみ国にめぐみを示し、
ヤコブの繁栄を回復されました。
二あなたはその民の不義をゆるし、
彼らの罪をことごとくおおわれました。〔セラ
三あなたはすべての怒りを捨て、
激しい憤りを遠ざけられました。

四われらの救の神よ、われらを回復し、
われらに対するあなたの憤りをおやめください。
五あなたはとこしえにわれらを怒り、
よろずよまで、あなたの怒りを延ばされるのですか。
六あなたの民が、あなたによって喜びを得るため、
われらを再び生かされないのですか。
七主よ、あなたのいつくしみをわれらに示し、
あなたの救をわれらに与えてください。
八わたしは主なる神の語られることを聞きましょう。
主はその民、その聖徒、
ならびにその心を主に向ける者に、
平和を語られるからです。

九まことに、その救は神を恐れる者に近く、
その栄光はわれらの国にとどまるでしょう。
一〇いつくしみと、まこととは共に会い、
義と平和とは互に口づけし、
一一まことは地からはえ、
義は天から見おろすでしょう。
一二主が良い物を与えられるので、
われらの国はその産物を出し、
一三義は主のみ前に行き、
その足跡を道とするでしょう。

第八六篇ダビデの祈

一主よ、あなたの耳を傾けて、わたしにお答えください。

わたしは苦しみかつ乏しいからです。
二わたしのいのちをお守りください。
わたしは神を敬う者だからです。
あなたに信頼するあなたのしもべをお救いください。
あなたはわたしの神です。
三主よ、わたしをあわれんでください。
わたしはひねもすあなたに呼ばわります。
四あなたのしもべの魂を喜ばせてください。
主よ、わが魂はあなたを仰ぎ望みます。
五主よ、あなたは恵みふかく、寛容であって、
あなたに呼ばわるすべての者に
いつくしみを豊かに施されます。

六主よ、わたしの祈に耳を傾け、
わたしの願いの声をお聞きください。
七わたしの悩みの日にわたしはあなたに呼ばわります。
あなたはわたしに答えられるからです。
八主よ、もろもろの神のうちにあなたに等しい者はなく、
また、あなたのみわざに等しいものはありません。
九主よ、あなたが造られたすべての国民は
あなたの前に来て、伏し拝み、
み名をあがめるでしょう。
一〇あなたは大いなる神で、くすしきみわざをなされます。
ただあなたのみ、神でいらせられます。
一一主よ、あなたの道をわたしに教えてください。

わたしはあなたの真理に歩みます。
心をひとつにしてみ名を恐れさせてください。
一二わが神、主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、
とこしえに、み名をあがめるでしょう。
一三わたしに示されたあなたのいつくしみは大きく、
わが魂を陰府の深い所から助け出されたからです。
一四神よ、高ぶる者はわたしに逆らって起り、
荒ぶる者の群れはわたしのいのちを求め、
彼らは自分の前にあなたを置くことをしません。
一五しかし主よ、あなたはあわれみと恵みに富み、
怒りをおそくし、いつくしみと、まこととに
豊かな神でいらせられます。

一六わたしをかえりみ、わたしをあわれみ、
あなたのしもべにみ力を与え、
あなたのはしための子をお救いください。
一七わたしに、あなたの恵みのしるしを
あらわしてください。
そうすれば、わたしを憎む者どもは
わたしを見て恥じるでしょう。
主よ、あなたはわたしを助け、
わたしを慰められたからです。

第八七篇

コラの子の歌、さんび
一主が基をすえられた都は聖なる山の上に立つ。
二主はヤコブのすべてのすまいにまさって、
シオンのもろもろの門を愛される。

三神の都よ、あなたについて、
もろもろの栄光ある事が語られる。〔セラ
四わたしはラハブとバビロンを
わたしを知る者のうちに挙げる。
ペリシテ、ツロ、またエチオピヤを見よ。
「この者はかしこに生れた」と言われる。
五しかしシオンについては
「この者も、かの者もその中に生れた」と言われる。
いと高き者みずからシオンを
堅く立てられるからである。
六主がもろもろの民を登録されるとき、
「この者はかしこに生れた」としるされる。〔セラ
七歌う者と踊る者はみな言う、

「わがもろもろの泉はあなたのうちにある」と。

第八八篇聖歌隊の指揮者によってマハラテ・レアノテのしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌、さんび。エズラびとヘマンのマスキールの歌

一 わが神、主よ、わたしは昼、助けを呼び求め、
夜、み前に叫び求めます。
二 わたしの祈をみ前にいたらせ、
わたしの叫びに耳を傾けてください。
三 わたしの魂は悩みに満ち、
わたしのいのちは陰府に近づきます。
四 わたしは穴に下る者のうちに数えられ、
力のない人のようになりました。
五 すなわち死人のうちに捨てられた者のように、
墓に横たわる殺された者のように、

あなたが再び心にとめられない者のように
なりました。
彼らはあなたのみ手から断ち滅ぼされた者です。
六あなたはわたしを深い穴、
暗い所、深い淵に置かれました。
七あなたの怒りはわたしの上に重く、
あなたはもろもろの波をもって
わたしを苦しめられました。〔セラ
八あなたはわが知り人をわたしから遠ざけ、
わたしを彼らの忌みきらう者とされました。
わたしは閉じこめられて、のがれることはできません。
九わたしの目は悲しみによって衰えました。

主よ、わたしは日ごとにあなたを呼び、
あなたにむかってわが両手を伸べました。
一〇あなたは死んだ者のために
奇跡を行われるでしょうか。
なき人のたましいは起きあがって
あなたをほめたたえるでしょうか。〔セラ
一一あなたのいつくしみは墓のなかに、
あなたのまことは滅びのなかに、
宣べ伝えられるでしょうか。
一二あなたの奇跡は暗やみに、
あなたの義は忘れの国に知られるでしょうか。
一三しかし主よ、わたしはあなたに呼ばわります。

あしたに、わが祈をあなたのみ前にささげます。
一四主よ、なぜ、あなたはわたしを捨てられるのですか。
なぜ、わたしにみ顔を隠されるのですか。
一五わたしは若い時から苦しんで死ぬばかりです。
あなたの脅しにあって衰えはてました。
一六あなたの激しい怒りがわたしを襲い、
あなたの恐ろしい脅しがわたしを滅ぼしました。
一七これらの事がひねもす大水のようにわたしをめぐり、
わたしを全く取り巻きました。
一八あなたは愛する者と友とをわたしから遠ざけ、
わたしの知り人を暗やみにおかれました。

第八九篇エズラびとエタンのマスキールの歌

一 主よ、わたしはとこしえにあなたのいつくしみを歌い、
わたしの口をもってあなたのまことを
よろずよに告げ知らせます。
二 あなたのいつくしみはとこしえに堅く立ち、
あなたのまことは天のように
ゆるぐことはありません。
三 あなたは言われました、
「わたしはわたしの選んだ者と契約を結び、
わたしのしもべダビデに誓った、
四 『わたしはあなたの子孫をとこしえに堅くし、
あなたの王座を建てて、よろずよに至らせる』」。〔セラ
五 主よ、もろもろの天に
あなたのくすしきみわざをほめたたえさせ、

聖なる者のつどいで、
あなたのまことをほめたたえさせてください。
六大空のうちに、
だれか主と並ぶものがあるでしょうか。
神の子らのうちに、
だれか主のような者があるでしょうか。
七主は聖なる者の会議において恐るべき神、
そのまわりにあるすべての者にまさって
大いなる恐るべき者です。
八万軍の神、主よ、
主よ、だれかあなたのように
大能のある者があるでしょうか。
あなたのまことは、あなたをめぐっています。

九あなたは海の荒れるのを治め、
その波の起るとき、これを静められます。
一〇あなたはラハブを、殺された者のように打ち砕き、
あなたの敵を力ある腕をもって散らされました。
一一もろもろの天はあなたのもの、
地もまたあなたのもの、
世界とその中にあるものとは
あなたがその基をおかれたものです。
一二北と南はあなたがこれを造られました。
タボルとヘルモンは、み名を喜び歌います。
一三あなたは大能の腕をもたれます。
あなたの手は強く、あなたの右の手は高く、

一四義と公平はあなたのみくらの基、
いつくしみと、まことはあなたの前に行きます。
一五祭の日の喜びの声を知る民はさいわいです。
主よ、彼らはみ顔の光のなかを歩み、
一六ひねもす、み名によって喜び、
あなたの義をほめたたえます。
一七あなたは彼らの力の栄光だからです。
われらの角はあなたの恵みによって
高くあげられるでしょう。
一八われらの盾は主に属し、
われらの王はイスラエルの聖者に属します。
一九昔あなたは幻をもってあなたの聖徒に告げて

言われました、
「わたしは勇士に栄冠を授け、
民の中から選ばれた者を高くあげた。
二〇わたしはわがしもべダビデを得て、
これにわが聖なる油をそそいだ。
二一わが手は常に彼と共にあり、
わが腕はまた彼を強くする。
二二敵は彼をだますことなく、
悪しき者は彼を卑しめることはない。
二三わたしは彼の前にもろもろのあだを打ち滅ぼし、
彼を憎む者どもを打ち倒す。
二四わがまことと、わがいつくしみは彼と共にあり、

わが名（な）によって彼（かれ）の角（つの）は高（たか）くあげられる。
二五わたしは彼（かれ）の手（て）を海（うみ）の上（うえ）におき、
彼（かれ）の右（みぎ）の手（て）を川（かわ）の上（うえ）におく。
二六彼（かれ）はわたしにむかい『あなたはわが父（ちち）、
わが神（かみ）、わが救（すくい）の岩（いわ）』と呼（よ）ぶであろう。
二七わたしはまた彼（かれ）をわがういごとし、
地（ち）の王（おう）たちのうちの最（もっと）も高（たか）い者（もの）とする。
二八わたしはとこしえに、
わがいつくしみを彼（かれ）のために保（たも）ち、
わが契約（けいやく）は彼（かれ）のために堅（かた）く立（た）つ。
二九わたしは彼（かれ）の家系（かけい）をとこしえに堅（かた）く定（さだ）め、
その位（くらい）を天（てん）の日数（ひかず）のようにながらえさせる。

三〇もしその子孫がわがおきてを捨て、
わがさばきに従って歩まないならば、
三一もし彼らがわが定めを犯し、
わが戒めを守らないならば、
三二わたしはつえをもって彼らのとがを罰し、
むちをもって彼らの不義を罰する。
三三しかし、わたしはわがいつくしみを
彼から取り去ることなく、
わがまことにそむくことはない。
三四わたしはわが契約を破ることなく、
わがくちびるから出た言葉を変えることはない。
三五わたしはひとたびわが聖によって誓った。
わたしはダビデに偽りを言わない。

三六彼の家系はとこしえに続き、
彼の位は太陽のように常にわたしの前にある。
三七また月のようにとこしえに堅く定められ、
大空の続くかぎり堅く立つ」。〔セラ
三八しかしあなたは、あなたの油そそがれた者を
捨ててしりぞけ、
彼に対して激しく怒られました。
三九あなたはそのしもべとの契約を廃棄し、
彼の冠を地になげうって、けがされました。
四〇あなたはその城壁をことごとくこわし、
そのとりでを荒れすたれさせられました。
四一そこを通り過ぎる者は皆彼をかすめ、

彼はその隣り人のあざけりとなりました。
四二あなたは彼のあだの右の手を高くあげ、
そのもろもろの敵を喜ばせられました。
四三まことに、あなたは彼のつるぎの刃をかえして、
彼を戦いに立たせられなかったのです。
四四あなたは彼の手から王のつえを取り去り、
その王座を地に投げすてられました。
四五あなたは彼の若き日をちぢめ、
恥をもって彼をおおわれました。〔セラ
四六主よ、いつまでなのですか。
とこしえにお隠れになるのですか。
あなたの怒りはいつまで火のように燃えるのですか。

四七主よ、人のいのちの、いかに短く、
すべての人の子を、いかにはかなく造られたかを、
みこころにとめてください。
四八だれか生きて死を見ず、
その魂を陰府の力から
救いうるものがあるでしょうか。〔セラ
四九主よ、あなたがまことをもってダビデに誓われた
昔のいつくしみはどこにありますか。
五〇 五一主よ、あなたのしもべがうけるはずかしめを
みこころにとめてください。
主よ、あなたのもろもろの敵はわたしをそしり、
あなたの油そそがれた者の足跡をそしります。
わたしはもろもろの民のそしりを

わたしのふところにいだいているのです。
五二主(しゅ)はとこしえにほむべきかな。
アァメン、アァメン。

第九〇篇神の人モーセの祈

一主(しゅ)よ、あなたは世々(よよ)われらのすみかで
いらせられる。
二山(やま)がまだ生(うま)れず、
あなたがまだ地(ち)と世界(せかい)とを造(つく)られなかったとき、
とこしえからとこしえまで、
あなたは神(かみ)でいらせられる。
三あなたは人(ひと)をちりに帰(かえ)らせて言(い)われます、
「人(ひと)の子(こ)よ、帰(かえ)れ」と。
四あなたの目(め)の前(まえ)には千年(ねん)も

過ぎ去ればきのうのごとく、
夜の間のひと時のようです。
五あなたは人を大水のように流れ去らせられます。
彼らはひと夜の夢のごとく、
あしたにもえでる青草のようです。
六あしたにもえでて、栄えるが、
夕べには、しおれて枯れるのです。
七われらはあなたの怒りによって消えうせ、
あなたの憤りによって滅び去るのです。
八あなたはわれらの不義をみ前におき、
われらの隠れた罪をみ顔の光のなかにおかれました。
九われらのすべての日は、

あなたの怒りによって過ぎ去り、
われらの年の尽きるのは、ひと息のようです。
一〇われらのよわいは七十年にすぎません。
あるいは健やかであっても八十年でしょう。
しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであって、
その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。
一一だれがあなたの怒りの力を知るでしょうか。
だれがあなたをおそれる恐れにしたがって
あなたの憤りを知るでしょうか。
一二われらにおのが日を数えることを教えて、
知恵の心を得させてください。
一三主よ、み心を変えてください。

いつまでお怒(いか)りになるのですか。
あなたのしもべをあわれんでください。
一四あしたに、あなたのいつくしみをもって
われらを飽(あ)き足(た)らせ、
世(よ)を終(おわ)るまで喜(よろこ)び楽(たの)しませてください。
一五あなたがわれらを苦(くる)しめられた多(おお)くの日(ひ)と、
われらが災(わざわい)にあった多(おお)くの年(とし)とに比(くら)べて、
われらを楽(たの)しませてください。
一六あなたのみわざを、あなたのしもべらに、
あなたの栄光(えいこう)を、その子(こ)らにあらわしてください。
一七われらの神(かみ)、主(しゅ)の恵(めぐ)みを、われらの上(うえ)にくだし、
われらの手(て)のわざを、われらの上(うえ)に
栄(さか)えさせてください。

われらの手のわざを栄えさせてください。

第九一篇

一いと高き者のもとにある
隠れ場に住む人、全能者の陰にやどる人は
二主に言うであろう、「わが避け所、わが城、
わが信頼しまつるわが神」と。
三主はあなたをかりゅうどのわなと、
恐ろしい疫病から助け出されるからである。
四主はその羽をもって、あなたをおおわれる。
あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。
そのまことは大盾、また小盾である。
五あなたは夜の恐ろしい物をも、

昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。
六また暗やみに歩きまわる疫病をも、
真昼に荒す滅びをも恐れることはない。
七たとい千人はあなたのかたわらに倒れ、
万人はあなたの右に倒れても、
その災はあなたに近づくことはない。
八あなたはただ、その目をもって見、
悪しき者の報いを見るだけである。
九あなたは主を避け所とし、
いと高き者をすまいとしたので、
一〇災はあなたに臨まず、
悩みはあなたの天幕に近づくことはない。

一一これは主があなたのために天使たちに命じて、
あなたの歩むすべての道で
あなたを守らせられるからである。
一二彼らはその手で、あなたをささえ、
石に足を打ちつけることのないようにする。
一三あなたはししと、まむしとを踏み、
若いししと、へびとを足の下に踏みにじるであろう。
一四彼はわたしを愛して離れないゆえに、
わたしは彼を助けよう。
彼はわが名を知るゆえに、わたしは彼を守る。
一五彼がわたしを呼ぶとき、わたしは彼に答える。
わたしは彼の悩みのときに、共にいて、

彼を救い、彼に光栄を与えよう。
一六わたしは長寿をもって彼を満ち足らせ、
わが救を彼に示すであろう。

第九二篇安息日の歌、さんび

一いと高き者よ、主に感謝し、
み名をほめたたえるのは、よいことです。
二あしたに、あなたのいつくしみをあらわし、
夜な夜な、あなたのまことをあらわすために、
三十弦の楽器と立琴を用い、
琴のたえなる調べを用いるのは、よいことです。
四主よ、あなたはみわざをもって
わたしを楽しませられました。

わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。
五 主よ、あなたのみわざは
いかに大いなることでしょう。
あなたのもろもろの思いは、いとも深く、
六 鈍い者は知ることができず、
愚かな者はこれを悟ることができません。
七 たとい、悪しき者は草のようにもえいで、
不義を行う者はことごとく栄えても、
彼らはとこしえに滅びに定められているのです。
八 しかし、主よ、あなたはとこしえに
高き所にいらせられます。
九 主よ、あなたの敵、あなたの敵は滅び、

不義を行う者はことごとく散らされるでしょう。
一〇しかし、あなたはわたしの角を
野牛の角のように高くあげ、
新しい油をわたしに注がれました。
一一わたしの目はわが敵の没落を見、
わたしの耳はわたしを攻める悪者どもの
破滅を聞きました。
一二正しい者はなつめやしの木のように栄え、
レバノンの香柏のように育ちます。
一三彼らは主の家に植えられ、
われらの神の大庭に栄えます。
一四彼らは年老いてなお実を結び、

いつも生気に満ち、青々として、
一五主の正しいことを示すでしょう。
主はわが岩です。
主には少しの不義もありません。

第九三篇

一主は王となり、
威光の衣をまとわれます。
主は衣をまとい、力をもって帯とされます。
まことに、世界は堅く立って、
動かされることはありません。
二あなたの位はいにしえより堅く立ち、
あなたはとこしえよりいらせられます。

三主よ、大水は声をあげました。
大水はその声をあげました。
大水はそのとどろく声をあげます。
四主は高き所にいらせられて、
その勢いは多くの水のとどろきにまさり、
海の大波にまさって盛んです。
五あなたのあかしはいとも確かです。
主よ、聖なることはとこしえまでも
あなたの家にふさわしいのです。

第九四篇

一あだを報いられる神、主よ、
あだを報いられる神よ、光を放ってください。

二地をさばかれる者よ、
立って高ぶる者にその受くべき罰をお与えください。
三主よ、悪しき者はいつまで、
悪しき者はいつまで勝ち誇るでしょうか。
四彼らは高慢な言葉を吐き散らし、
すべて不義を行う者はみずから高ぶります。
五主よ、彼らはあなたの民を打ち砕き、
あなたの嗣業を苦しめます。
六彼らはやもめと旅びとのいのちをうばい、
みなしごを殺します。
七彼らは言います、「主は見ない、
ヤコブの神は悟らない」と。

八民のうちの鈍き者よ、悟れ。
愚かな者よ、いつ賢くなるだろうか。
九耳を植えた者は聞くことをしないだろうか、
目を造った者は見ることをしないだろうか。
一〇もろもろの国民を懲らす者は
罰することをしないだろうか、
人を教える者は知識をもたないだろうか。
一一主は人の思いの、むなしいことを知られる。
一二主よ、あなたによって懲らされる人、
あなたのおきてを教えられる人はさいわいです。
一三あなたはその人を災の日からのがれさせ、
悪しき者のために穴が掘られるまで

その人に平安を与えられます。
一四主はその民を捨てず、
その嗣業を見捨てられないからです。
一五さばきは正義に帰り、
すべて心の正しい者はそれに従うでしょう。
一六だれがわたしのために立ちあがって、
悪しき者を責めるだろうか。
だれがわたしのために立って、
不義を行う者を責めるだろうか。
一七もしも主がわたしを助けられなかったならば、
わが魂はとくに音なき所に住んだであろう。
一八しかし「わたしの足がすべる」と思ったとき、

主(しゅ)よ、あなたのいつくしみは
わたしをささえられました。
一九わたしのうちに思(おも)い煩(わずら)いの満(み)ちるとき、
あなたの慰(なぐさ)めはわが魂(たましい)を喜(よろこ)ばせます。
二〇定(さだ)めをもって危害(きがい)をたくらむ悪(あ)しき支配者(しはいしゃ)は
あなたと親(した)しむことができるでしょうか。
二一彼(かれ)らは相結(あいむす)んで正(ただ)しい人(ひと)の魂(たましい)を責(せ)め、
罪(つみ)のない者(もの)に死(し)を宣告(せんこく)します。
二二しかし主(しゅ)はわが高(たか)きやぐらとなり、
わが神(かみ)はわが避(さ)け所(どころ)の岩(いわ)となられました。
二三主(しゅ)は彼(かれ)らの不義(ふぎ)を彼(かれ)らに報(むく)い、
彼(かれ)らをその悪(あく)のゆえに滅(ほろ)ぼされます。

われらの神(かみ)、主(しゅ)は彼(かれ)らを滅(ほろ)ぼされます。

第九五篇

一 さあ、われらは主(しゅ)にむかって歌(うた)い、
われらの救(すくい)の岩(いわ)にむかって喜(よろこ)ばしい声(こえ)をあげよう。
二 われらは感謝(かんしゃ)をもって、み前(まえ)に行(い)き、
主(しゅ)にむかい、さんびの歌(うた)をもって、
喜(よろこ)ばしい声(こえ)をあげよう。
三 主(しゅ)は大(おお)いなる神(かみ)、
すべての神(かみ)にまさって大(おお)いなる王(おう)だからである。
四 地(ち)の深(ふか)い所(ところ)は主(しゅ)のみ手(て)にあり、
山々(やまやま)の頂(いただき)もまた主(しゅ)のものである。
五 海(うみ)は主(しゅ)のもの、主(しゅ)はこれを造(つく)られた。

またそのみ手はかわいた地を造られた。
六さあ、われらは拝み、ひれ伏し、
われらの造り主、主のみ前にひざまずこう。
七主はわれらの神であり、
われらはその牧の民、そのみ手の羊である。
どうか、あなたがたは、
きょう、そのみ声を聞くように。
八あなたがたは、メリバにいた時のように、
また荒野のマッサにいた日のように、
心をかたくなにしてはならない。
九あの時、あなたがたの先祖たちは
わたしのわざを見たにもかかわらず、

わたしを試み、わたしをためした。
一〇わたしは四十年の間、その代をきらって言った、
「彼らは心の誤っている民であって、
わたしの道を知らない」と。
一一それゆえ、わたしは憤って、
彼らはわが安息に入ることができないと誓った。

第九六篇

一新しい歌を主にむかってうたえ。
全地よ、主にむかってうたえ。
二主にむかって歌い、そのみ名をほめよ。
日ごとにその救を宣べ伝えよ。
三もろもろの国の中にその栄光をあらわし、

もろもろの民（たみ）の中（なか）にそのくすしきみわざをあらわせ。
四主（しゅ）は大（おお）いなる神（かみ）であって、いともほめたたうべきもの、
もろもろの神（かみ）にまさって恐（おそ）るべき者（もの）である。
五もろもろの民（たみ）のすべての神（かみ）はむなしい。
しかし主（しゅ）はもろもろの天（てん）を造（つく）られた。
六誉（ほまれ）と、威厳（いげん）とはそのみ前（まえ）にあり、
力（ちから）と、うるわしさとはその聖所（せいじょ）にある。
七もろもろの民（たみ）のやからよ、主（しゅ）に帰（き）せよ、
栄光（えいこう）と力（ちから）とを主（しゅ）に帰（き）せよ。
八そのみ名（な）にふさわしい栄光（えいこう）を主（しゅ）に帰（き）せよ。
供（そな）え物（もの）を携（たずさ）えてその大庭（おおにわ）にきたれ。
九聖（せい）なる装（よそお）いをして主（しゅ）を拝（おが）め、

全地よ、そのみ前におののけ。
一〇もろもろの国民の中に言え、
「主は王となられた。
世界は堅く立って、動かされることはない。
主は公平をもってもろもろの民をさばかれる」と。
一一天は喜び、地は楽しみ、
海とその中に満ちるものとは鳴りどよめき、
一二田畑とその中のすべての物は大いに喜べ。
そのとき、林のもろもろの木も
主のみ前に喜び歌うであろう。
一三主は来られる、地をさばくために来られる。
主は義をもって世界をさばき、

まことをもってもろもろの民をさばかれる。

第九七篇

一主は王となられた。地は楽しみ、
海に沿った多くの国々は喜べ。
二雲と暗やみとはそのまわりにあり、
義と正とはそのみくらの基である。
三火はそのみ前に行き、
そのまわりのあだを焼きつくす。
四主のいなずまは世界を照し、
地は見ておののく。
五もろもろの山は主のみ前に、
全地の主のみ前に、ろうのように溶けた。

六もろもろの天はその義をあらわし、
よろずの民はその栄光を見た。
七すべて刻んだ像を拝む者、
むなしい偶像をもってみずから誇る者は
はずかしめをうける。
もろもろの神は主のみ前にひれ伏す。
八主よ、あなたのさばきのゆえに、
シオンは聞いて喜び、ユダの娘たちは楽しむ。
九主よ、あなたは全地の上にいまして、いと高く、
もろもろの神にまさって大いにあがめられます。
一〇主は悪を憎む者を愛し、その聖徒のいのちを守り、
これを悪しき者の手から助け出される。

一一 光は正しい人のために現れ、
喜びは心の正しい者のためにあらわれる。
一二 正しき人よ、主によって喜べ、
その聖なるみ名に感謝せよ。

第九八篇 歌

一 新しき歌を主にむかってうたえ。
主はくすしきみわざをなされたからである。
その右の手と聖なる腕とは、
おのれのために勝利を得られた。
二 主はその勝利を知らせ、
その義をもろもろの国民の前にあらわされた。
三 主はそのいつくしみと、まこととを

イスラエルの家にむかって覚えられた。
地のもろもろのはては、われらの神の勝利を見た。
四全地よ、主にむかって喜ばしき声をあげよ。
声を放って喜び歌え、ほめうたえ。
五琴をもって主をほめうたえ。
琴と歌の声をもってほめうたえ。
六ラッパと角笛の音をもって
王なる主の前に喜ばしき声をあげよ。
七海とその中に満ちるもの、
世界とそのうちに住む者とは鳴りどよめけ。
八大水はその手を打ち、
もろもろの山は共に主のみ前に喜び歌え。

九主は地をさばくために来られるからである。
主は義をもって世界をさばき、
公平をもってもろもろの民をさばかれる。

第九九篇

一主は王となられた。
もろもろの民はおののけ。
主はケルビムの上に座せられる。
地は震えよ。
二主はシオンにおられて大いなる神、
主はもろもろの民の上に高くいらせられる。
三彼らはあなたの大いなる恐るべきみ名を
ほめたたえるであろう。

主は聖でいらせられる。
四大能の王であり、公義を愛する者であるあなたは
堅く公平を立て、ヤコブの中に正と義とを行われた。
五われらの神、主をあがめ、
その足台のもとで拝みまつれ。
主は聖でいらせられる。
六その祭司の中にモーセとアロンとがあった。
そのみ名を呼ぶ者の中にサムエルもあった。
彼らが主に呼ばわると、主は答えられた。
七主は雲の柱のうちで彼らに語られた。
彼らはそのあかしと、
彼らに賜わった定めとを守った。

八 われらの神、主よ、あなたは彼らに答えられた。
あなたは彼らにゆるしを与えられた神であったが、
悪を行う者には報復された。
九 われらの神、主をあがめ、その聖なる山で拝みまつれ。
われらの神、主は聖でいらせられるからである。

第一〇〇篇 感謝の供え物のための歌

一 全地よ、主にむかって喜ばしき声をあげよ。
二 喜びをもって主に仕えよ。
歌いつつ、そのみ前にきたれ。
三 主こそ神であることを知れ。
われらを造られたものは主であって、
われらは主のものである。

われらはその民、その牧の羊である。
四感謝しつつ、その門に入り、
ほめたたえつつ、その大庭に入れ。
主に感謝し、そのみ名をほめまつれ。
五主は恵みふかく、そのいつくしみはかぎりなく、
そのまことはよろず代に及ぶからである。

第一〇一篇ダビデの歌

一わたしはいつくしみと公義について歌います。
主よ、わたしはあなたにむかって歌います。
二わたしは全き道に心をとめます。
あなたはいつ、わたしに来られるでしょうか。
わたしは直き心をもって、わが家のうちを歩みます。

三わたしは目(め)の前(まえ)に卑(いや)しい事(こと)を置(お)きません。
わたしはそむく者(もの)の行(おこな)いを憎(にく)みます。
それはわたしに付(つ)きまといません。
四ひがんだ心(こころ)はわたしを離(はな)れるでしょう。
わたしは悪(わる)い事(こと)を知(し)りません。
五ひそかに、その隣(とな)り人(びと)をそしる者(もの)を
わたしは滅(ほろ)ぼします。
高(たか)ぶる目(め)と高慢(こうまん)な心(こころ)の人(ひと)を耐(た)え忍(しの)ぶ事(こと)はできません。
六わたしは国(くに)のうちの忠信(ちゅうしん)な者(もの)に好意(こうい)を寄(よ)せ、
わたしと共(とも)に住(す)まわせます。
全(まった)き道(みち)を歩(あゆ)む者(もの)はわたしに仕(つか)えるでしょう。
七欺(あざむ)くことをする者(もの)は

わが家のうちに住むことができません。
偽りを言う者はわが目の前に立つことができません。
八わたしは朝ごとに国の悪しき者を
ことごとく滅ぼし、
不義を行う者をことごとく主の都から断ち除きます。

第一〇二篇

苦しむ者が思いくずおれてその嘆きを主のみ前に注ぎ出すときの祈

一主よ、わたしの祈をお聞きください。
わたしの叫びをみ前に至らせてください。
二わたしの悩みの日にみ顔を隠すことなく、
あなたの耳をわたしに傾け、
わが呼ばわる日に、すみやかにお答えください。
三わたしの日は煙のように消え、

わたしの骨(ほね)は炉(ろ)のように燃(も)えるからです。
四わたしの心(こころ)は草(くさ)のように撃(う)たれて、しおれました。
わたしはパンを食(た)べることを忘(わす)れました。
五わが嘆(なげ)きの声(こえ)によって
わたしの骨(ほね)はわたしの肉(にく)に着(つ)きます。
六わたしは荒野(あらの)のはげたかのごとく、
荒(あ)れた跡(あと)のふくろうのようです。
七わたしは眠(ねむ)らずに
屋根(やね)にひとりいるすずめのようです。
八わたしの敵(てき)はひねもす、わたしをそしり、
わたしをあざける者(もの)はわが名(な)によってのろいます。
九わたしは灰(はい)をパンのように食(た)べ、

わたしの飲み物に涙を交えました。
一〇これはあなたの憤りと怒りのゆえです。
あなたはわたしをもたげて投げすてられました。
一一わたしのよわいは夕暮の日影のようです。
わたしは草のようにしおれました。
一二しかし主よ、あなたはとこしえにみくらに座し、
そのみ名はよろず代に及びます。
一三あなたは立ってシオンをあわれまれるでしょう。
これはシオンを恵まれる時であり、
定まった時が来たからです。
一四あなたのしもべはシオンの石をも喜び、
そのちりをさえあわれむのです。

一五もろもろの国民は主のみ名を恐れ、
地のもろもろの王はあなたの栄光を恐れるでしょう。
一六主はシオンを築き、
その栄光をもって現れ、
一七乏しい者の祈をかえりみ、
彼らの願いをかろしめられないからです。
一八きたるべき代のために、この事を書きしるしましょう。
そうすれば新しく造られる民は、
主をほめたたえるでしょう。
一九主はその聖なる高き所から見おろし、
天から地を見られた。
二〇これは捕われ人の嘆きを聞き、

死に定められた者を解き放ち、
二一人々がシオンで主のみ名をあらわし、
エルサレムでその誉をあらわすためです。
二二その時もろもろの民、もろもろの国は
ともに集まって、主に仕えるでしょう。
二三主はわたしの力を中途でくじき、
わたしのよわいを短くされました。
二四わたしは言いました、「わが神よ、
どうか、わたしのよわいの半ばで
わたしを取り去らないでください。
あなたのよわいはよろず代に及びます」と。
二五あなたはいにしえ、地の基をすえられました。

天(てん)もまたあなたのみ手(て)のわざです。
二六これらは滅(ほろ)びるでしょう。
しかしあなたは長(なが)らえられます。
これらはみな衣(ころも)のように古(ふる)びるでしょう。
あなたがこれらを上着(うわぎ)のように替(か)えられると、
これらは過(す)ぎ去(さ)ります。
二七しかしあなたは変(かわ)ることなく、
あなたのよわいは終(おわ)ることがありません。
二八あなたのしもべの子(こ)らは安(やす)らかに住(す)み、
その子孫(しそん)はあなたの前(まえ)に堅(かた)く立(た)てられるでしょう。

第一〇三篇ダビデの歌

一わがたましいよ、主(しゅ)をほめよ。
わがうちなるすべてのものよ、

その聖なるみ名をほめよ。
二わがたましいよ、主をほめよ。
そのすべてのめぐみを心にとめよ。
三主はあなたのすべての不義をゆるし、
あなたのすべての病をいやし、
四あなたのいのちを墓からあがないいだし、
いつくしみと、あわれみとをあなたにこうむらせ、
五あなたの生きながらえるかぎり、
良き物をもってあなたを飽き足らせられる。
こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる。
六主はすべてしえたげられる者のために
正義と公正とを行われる。

七主はおのれの道をモーセに知らせ、
おのれのしわざをイスラエルの人々に知らせられた。
八主はあわれみに富み、めぐみふかく、
怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる。
九主は常に責めることをせず、
また、とこしえに怒りをいだかれない。
一〇主はわれらの罪にしたがってわれらをあしらわず、
われらの不義にしたがって報いられない。
一一天が地よりも高いように、
主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい、
一二東が西から遠いように、
主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。

一三父がその子供をあわれむように、
主はおのれを恐れる者をあわれまれる。
一四主はわれらの造られたさまを知り、
われらのちりであることを
覚えていられるからである。
一五人は、そのよわいは草のごとく、
その栄えは野の花にひとしい。
一六風がその上を過ぎると、うせて跡なく、
その場所にきいても、もはやそれを知らない。
一七しかし主のいつくしみは、とこしえからとこしえまで、
主を恐れる者の上にあり、その義は子らの子に及び、
一八その契約を守り、

その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ。
一九主はその玉座を天に堅くすえられ、
そのまつりごとはすべての物を統べ治める。
二〇主の使たちよ、
そのみ言葉の声を聞いて、これを行う勇士たちよ、
主をほめまつれ。
二一そのすべての万軍よ、
そのみこころを行うしもべたちよ、主をほめよ。
二二主が造られたすべての物よ、
そのまつりごとの下にあるすべての所で、
主をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。

第一〇四篇

一わがたましいよ、主をほめよ。
わが神、主よ、あなたはいとも大いにして
誉と威厳とを着、
二光を衣のようにまとい、天を幕のように張り、
三水の上におのが高殿のうつばりをおき、
雲をおのれのいくさ車とし、風の翼に乗りあるき、
四風をおのれの使者とし、
火と炎をおのれのしもべとされる。
五あなたは地をその基の上にすえて、
とこしえに動くことのないようにされた。
六あなたはこれを衣でおおうように大水でおおわれた。
水はたたえて山々の上を越えた。

七あなたのとがめによって水は退き、
あなたの雷の声によって水は逃げ去った。
八山は立ちあがり、
谷はあなたが定められた所に沈んだ。
九あなたは水に境を定めて、これを越えさせず、
再び地をおおうことのないようにされた。
一〇あなたは泉を谷にわき出させ、
それを山々の間に流れさせ、
一一野のもろもろの獣に飲ませられる。
野のろばもそのかわきをいやす。
一二空の鳥もそのほとりに住み、
こずえの間にさえずり歌う。

一三あなたはその高殿(たかどの)からもろもろの山(やま)に水(みず)を注(そそ)がれる。
地(ち)はあなたのみわざの実(み)をもって満(み)たされる。
一四あなたは家畜(かちく)のために草(くさ)をはえさせ、
また人(ひと)のためにその栽培(さいばい)する植物(しょくぶつ)を与(あた)えて、
地(ち)から食物(しょくもつ)を出(だ)させられる。
一五すなわち人(ひと)の心(こころ)を喜(よろこ)ばすぶどう酒(しゅ)、
その顔(かお)をつややかにする油(あぶら)、
人(ひと)の心(こころ)を強(つよ)くするパンなどである。
一六主(しゅ)の木(き)と、主(しゅ)がお植(う)えになったレバノンの香柏(こうはく)とは
豊(ゆた)かに潤(うるお)され、
一七鳥(とり)はその中(なか)に巣(す)をつくり、
こうのとりはもみの木(き)をそのすまいとする。

一八高き山はやぎのすまい、
岩は岩だぬきの隠れる所である。
一九あなたは月を造って季節を定められた。
日はその入る時を知っている。
二〇あなたは暗やみを造って夜とされた。
その時、林の獣は皆忍び出る。
二一若きししはほえてえさを求め、神に食物を求める。
二二日が出ると退いて、その穴に寝る。
二三人は出てわざにつき、その勤労は夕べに及ぶ。
二四主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。
あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。
地はあなたの造られたもので満ちている。

二五かしこに大いなる広い海がある。
その中に無数のもの、大小の生き物が満ちている。
二六そこに舟が走り、
あなたが造られたレビヤタンはその中に戯れる。
二七彼らは皆あなたが時にしたがって
食物をお与えになるのを期待している。
二八あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。
あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる。
二九あなたがみ顔を隠されると、彼らはあわてふためく。
あなたが彼らの息を取り去られると、
彼らは死んでちりに帰る。
三〇あなたが霊を送られると、彼らは造られる。

あなたは地のおもてを新たにされる。
三一どうか、主の栄光がとこしえにあるように。
主がそのみわざを喜ばれるように。
三二主が地を見られると、地は震い、
山に触れられると、煙をいだす。
三三わたしは生きるかぎり、主にむかって歌い、
ながらえる間はわが神をほめ歌おう。
三四どうか、わたしの思いが主に喜ばれるように。
わたしは主によって喜ぶ。
三五どうか、罪びとが地から断ち滅ぼされ、
悪しき者が、もはや、いなくなるように。
わがたましいよ、主をほめよ。

主をほめたたえよ。

第一〇五篇

一主に感謝し、そのみ名を呼び、
そのみわざをもろもろの民のなかに知らせよ。
二主にむかって歌え、主をほめうたえ、
そのすべてのくすしきみわざを語れ。
三その聖なるみ名を誇れ。
主を尋ね求める者の心を喜ばせよ。
四主とそのみ力とを求めよ、
つねにそのみ顔を尋ねよ。
五 六そのしもべアブラハムの子孫よ、
その選ばれた者であるヤコブの子らよ、

主のなされたくすしきみわざと、
その奇跡と、そのみ口のさばきとを心にとめよ。
七彼はわれらの神、主でいらせられる。
そのさばきは全地にある。
八主はとこしえに、その契約をみこころにとめられる。
これはよろず代に命じられたみ言葉であって、
九アブラハムと結ばれた契約、
イサクに誓われた約束である。
一〇主はこれを堅く立てて、ヤコブのために定めとし、
イスラエルのために、とこしえの契約として
一一言われた、「わたしはあなたにカナンの地を与えて、
あなたがたの受ける嗣業の分け前とする」と。

一二このとき彼らの数は少なくて、数えるに足らず、
その所で旅びととなり、
一三この国からかの国へ行き、
この国から他の民へ行った。
一四主は人の彼らをしえたげるのをゆるさず、
彼らのために王たちを懲しめて、
一五言われた、「わが油そそがれた者たちに
さわってはならない、
わが預言者たちに害を加えてはならない」と。
一六主はききんを地に招き、
人のつえとするパンをことごとく砕かれた。
一七また彼らの前にひとりをつかわされた。

すなわち売られて奴隷となったヨセフである。
一八彼の足は足かせをもって痛められ、
彼の首は鉄の首輪にはめられ、
一九彼の言葉の成る時まで、
主のみ言葉が彼を試みた。
二〇王は人をつかわして彼を解き放ち、
民のつかさは彼に自由を与えた。
二一王はその家のつかさとして
その所有をことごとくつかさどらせ、
二二その心のままに君たちを教えさせ、
長老たちに知恵を授けさせた。
二三その時イスラエルはエジプトにきたり、

ヤコブはハムの地に寄留した。
二四主はその民を大いに増し加え、
これをそのあだよりも強くされた。
二五主は人々の心をかえて、その民を憎ませ、
そのしもべたちを悪賢く扱わせられた。
二六主はそのしもべモーセと、
そのお選びになったアロンとをつかわされた。
二七彼らはハムの地で主のしるしと、
奇跡とを彼らのうちにおこなった。
二八主は暗やみをつかわして地を暗くされた。
しかし彼らはその言葉に従わなかった。
二九主は彼らの水を血に変らせて、その魚を殺された。

三〇彼らの国には、かえるが群がり、
王の寝間にまではいった。
三一主が言われると、はえの群れがきたり、
ぶよが国じゅうにあった。
三二主は雨にかえて、ひょうを彼らに与え、
きらめくいなずまを彼らの国に放たれた。
三三主は彼らのぶどうの木と、いちじくの木とを撃ち、
彼らの国のもろもろの木を折り砕かれた。
三四主が言われると、いなごがきたり、
無数の若いいなごが来て、
三五彼らの国のすべての青物を食いつくし、
その地の実を食いつくした。

三六主は彼らの国のすべてのういごを撃ち、
彼らのすべての力の初めを撃たれた。
三七そして金銀を携えてイスラエルを出て行かせられた。
その部族のうちに、ひとりの倒れる者もなかった。
三八エジプトは彼らの去るのを喜んだ。
彼らに対する恐れが彼らに臨んだからである。
三九主は雲をひろげておおいとし、
夜は火をもって照された。
四〇また彼らの求めによって、うずらを飛びきたらせ、
天から、かてを豊かに彼らに与えられた。
四一主が岩を開かれると、水がほとばしり出て、
かわいた地に川のように流れた。

四二これは主がその聖なる約束と、
そのしもべアブラハムを覚えられたからである。
四三こうして主はその民を導いて喜びつつ出て行かせ、
その選ばれた民を導いて歌いつつ出て行かせられた。
四四主はもろもろの国びとの地を彼らに与えられたので、
彼らはもろもろの民の勤労の実を自分のものとした。
四五これは彼らが主の定めを守り、
そのおきてを行うためである。
主をほめたたえよ。

第一〇六篇

一主をほめたたえよ。
主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二 だれが主の大能のみわざを語り、
その誉をことごとく言いあらわすことができようか。
三 公正を守る人々、常に正義を行う人はさいわいである。
四 主よ、あなたがその民を恵まれるとき、
わたしを覚えてください。
あなたが彼らを救われるとき、
わたしを助けてください。
五 そうすれば、わたしはあなたの選ばれた者の繁栄を見、
あなたの国民の喜びをよろこび、
あなたの嗣業と共に誇ることができるでしょう。
六 われらは先祖たちと同じく罪を犯した。

われらは不義をなし、悪しきことを行った。
七われらの先祖たちはエジプトにいたとき、
あなたのくすしきみわざに心を留めず、
あなたのいつくしみの豊かなのを思わず、
紅海で、いと高き神にそむいた。
八けれども主はその大能を知らせようと、
み名のために彼らを救われた。
九主は紅海をしかって、それをかわかし、
彼らを導いて荒野を行くように、淵を通らせられた。
一〇こうして主は彼らをあだの手から救い、
敵の力からあがなわれた。
一一水が彼らのあだをおおったので、

そのうち、ひとりも生き残った者はなかった。
一二このとき彼らはその言葉を信じ、
その誉を歌った。
一三しかし彼らはまもなくそのみわざを忘れ、
その勧めを待たず、
一四野でわがままな欲望を起し、
荒野で神を試みた。
一五主は彼らにその求めるものを与えられたが、
彼らのうちに病気を送って、やせ衰えさせられた。
一六人々が宿営のうちでモーセをねたみ、
主の聖者アロンをねたんだとき、
一七地が開けてダタンを飲み、

アビラムの仲間(なかま)をおおった。
一八火(ひ)はまたこの仲間(なかま)のうちに燃(も)え起(おこ)り、
炎(ほのお)は悪(あ)しき者(もの)を焼(や)きつくした。
一九彼(かれ)らはホレブで子牛(こうし)を造(つく)り、
鋳物(いもの)の像(ぞう)を拝(おが)んだ。
二〇彼(かれ)らは神(かみ)の栄光(えいこう)を
草(くさ)を食(く)う牛(うし)の像(ぞう)と取(と)り替(か)えた。
二一 二二彼(かれ)らは、エジプトで大(おお)いなる事(こと)をなし、
ハムの地(ち)でくすしきみわざをなし、
紅海(こうかい)のほとりで恐(おそ)るべき事(こと)をなされた
救主(すくいぬし)なる神(かみ)を忘(わす)れた。
二三それゆえ、主(しゅ)は彼(かれ)らを滅(ほろ)ぼそうと言(い)われた。

しかし主のお選びになったモーセは
破れ口で主のみ前に立ち、
み怒りを引きかえして、滅びを免れさせた。
二四彼らは麗しい地を侮り、主の約束を信ぜず、
二五またその天幕でつぶやき、
主のみ声に聞き従わなかった。
二六それゆえ、主はみ手をあげて、彼らに誓い、
彼らを荒野で倒れさせ、
二七またその子孫を、もろもろの国民のうちに追い散らし、
もろもろの地に彼らをまき散らそうとされた。
二八また彼らはペオルのバアルを慕って、
死んだ者にささげた、いけにえを食べた。

二九彼らはそのおこないをもって主を怒らせたので、
彼らのうちに疫病が起った。
三〇その時ピネハスが立って仲裁にはいったので、
疫病はやんだ。
三一これによってピネハスはよろず代まで、
とこしえに義とされた。
三二彼らはまたメリバの水のほとりで主を怒らせたので、
モーセは彼らのために災にあった。
三三これは彼らが神の霊にそむいたとき、
彼がそのくちびるで軽率なことを言ったからである。
三四彼らは主が命じられたもろもろの民を滅ぼさず、
三五かえってもろもろの国民とまじって

そのわざにならい、
三六自分(じぶん)たちのわなとなった偶像(ぐうぞう)に仕(つか)えた。
三七彼(かれ)らはそのむすこ、娘(むすめ)たちを悪霊(あくれい)にささげ、
三八罪(つみ)のない血(ち)、すなわちカナンの偶像(ぐうぞう)にささげた
そのむすこ、娘(むすめ)たちの血(ち)を流(なが)した。
こうして国(くに)は血(ち)で汚(けが)された。
三九このように彼(かれ)らはそのわざによっておのれを汚(けが)し、
そのおこないによって姦淫(かんいん)をなした。
四〇それゆえ、主(しゅ)の怒(いか)りがその民(たみ)にむかって燃(も)え、
その嗣業(しぎょう)を憎(にく)んで、
四一彼(かれ)らをもろもろの国民(くにたみ)の手(て)にわたされた。
彼(かれ)らはおのれを憎(にく)む者(もの)に治(おさ)められ、
四二その敵(てき)にしえたげられ、

その力の下に征服された。
四三主はしばしば彼らを助けられたが、
彼らははかりごとを設けてそむき、
その不義によって低くされた。
四四それにもかかわらず、主は彼らの叫びを聞かれたとき、
その悩みをかえりみ、
四五その契約を彼らのために思い出し、
そのいつくしみの豊かなるにより、
みこころを変えられ、
四六彼らをとりこにした者どもによって、
あわれまれるようにされた。
四七われらの神、主よ、われらを救って、

もろもろの国民のなかから集めてください。
われらはあなたの聖なるみ名に感謝し、
あなたの誉を誇るでしょう。
四八イスラエルの神、主は
とこしえからとこしえまでほむべきかな。
すべての民は「アァメン」ととなえよ。
主をほめたたえよ。

第一〇七篇

一「主に感謝せよ、主は恵みふかく、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と、
二主にあがなわれた者は言え。
主は彼らを悩みからあがない、

三もろもろの国(くに)から、
東(ひがし)、西(にし)、北(きた)、南(みなみ)から彼(かれ)らを集(あつ)められた。
四彼(かれ)らは人(ひと)なき荒野(あらの)にさまよい、
住(す)むべき町(まち)にいたる道(みち)を見(み)いださなかった。
五彼(かれ)らは飢(う)え、またかわき、
その魂(たましい)は彼(かれ)らのうちに衰(おとろ)えた。
六彼(かれ)らはその悩(なや)みのうちに主(しゅ)に呼(よ)ばわったので、
主(しゅ)は彼(かれ)らをその悩(なや)みから助(たす)け出(だ)し、
七住(す)むべき町(まち)に行(い)き着(つ)くまで、まっすぐな道(みち)に導(みちび)かれた。
八どうか、彼(かれ)らが主(しゅ)のいつくしみと、
人(ひと)の子(こ)らになされたくすしきみわざとのために、
主(しゅ)に感謝(かんしゃ)するように。

九主はかわいた魂を満ち足らせ、
飢えた魂を良き物で満たされるからである。
一〇暗黒と深いやみの中にいる者、
苦しみと、くろがねに縛られた者、
一一彼らは神の言葉にそむき、
いと高き者の勧めを軽んじたので、
一二主は重い労働をもって彼らの心を低くされた。
彼らはつまずき倒れても、助ける者がなかった。
一三彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、
主は彼らをその悩みから救い、
一四暗黒と深いやみから彼らを導き出して、
そのかせをこわされた。

一五どうか、彼らが主のいつくしみと、
人の子らになされたくすしきみわざとのために、
主に感謝するように。
一六主は青銅のとびらをこわし、
鉄の貫の木を断ち切られたからである。
一七ある者はその罪に汚れた行いによって病み、
その不義のゆえに悩んだ。
一八彼らはすべての食物をきらって、
死の門に近づいた。
一九彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、
主は彼らをその悩みから救い、
二〇そのみ言葉をつかわして、彼らをいやし、

彼らを滅びから助け出された。
二一どうか、彼らが主のいつくしみと、
人の子らになされたくすしきみわざとのために、
主に感謝するように。
二二彼らが感謝のいけにえをささげ、
喜びの歌をもって、そのみわざを言いあらわすように。
二三舟で海にくだり、大海で商売をする者は、
二四主のみわざを見、
また深い所でそのくすしきみわざを見た。
二五主が命じられると暴風が起って、海の波をあげた。
二六彼らは天にのぼり、淵にくだり、
悩みによってその勇気は溶け去り、

二七酔った人のようによろめき、
よろめいて途方にくれる。
二八彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、
主は彼らをその悩みから救い出された。
二九主があらしを静められると、
海の波は穏やかになった。
三〇こうして彼らは波の静まったのを喜び、
主は彼らをその望む港へ導かれた。
三一どうか、彼らが主のいつくしみと、
人の子らになされたくすしきみわざとのために、
主に感謝するように。
三二彼らが民の集会で主をあがめ、

長老(ちょうろう)の会合(かいごう)で主(しゅ)をほめたたえるように。
三三 主(しゅ)は川(かわ)を野(の)に変(かわ)らせ、
泉(いずみ)をかわいた地(ち)に変(かわ)らせ、
三四 肥(こ)えた地(ち)をそれに住(す)む者(もの)の悪(あく)のゆえに
塩地(しおち)に変(かわ)らせられる。
三五 主(しゅ)は野(の)を池(いけ)に変(かわ)らせ、かわいた地(ち)を泉(いずみ)に変(かわ)らせ、
三六 飢(う)えた者(もの)をそこに住(す)まわせられる。
こうして彼(かれ)らはその住(す)むべき町(まち)を建(た)て、
三七 畑(はたけ)に種(たね)をまき、ぶどう畑(はたけ)を設(もう)けて
多(おお)くの収穫(しゅうかく)を得(え)た。
三八 主(しゅ)が彼(かれ)らを祝福(しゅくふく)されたので彼(かれ)らは大(おお)いにふえ、
その家畜(かちく)の減(へ)るのをゆるされなかった。

三九彼らがしえたげと、悩みと、悲しみとによって
減り、かつ卑しめられたとき、
四〇主はもろもろの君に侮りをそそぎ、
道なき荒れ地にさまよわせられた。
四一しかし主は貧しい者を悩みのうちからあげて、
その家族を羊の群れのようにされた。
四二正しい者はこれを見て喜び、
もろもろの不義はその口を閉じた。
四三すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、
主のいつくしみをさとるようにせよ。

第一〇八篇ダビデの歌、さんび

一神よ、わが心は定まりました。

わが心は定まりました。
わたしは歌い、かつほめたたえます。
わが魂よ、さめよ。
二 立琴よ、琴よ、さめよ。
わたしはしののめを呼びさまします。
三 主よ、わたしはもろもろの民の中であなたに感謝し、
もろもろの国の中であなたをほめたたえます。
四 あなたのいつくしみは大きく、天にまでおよび
あなたのまことは雲にまで及ぶ。
五 神よ、みずからを天よりも高くし、
みさかえを全地の上にあげてください。
六 あなたの愛される者が助けを得るために、

右のみ手をもって救をほどこし、
わたしに答えてください。
七神はその聖所で言われた、
「わたしは大いなる喜びをもってシケムを分かち、
スコテの谷を分かち与えよう。
八ギレアデはわたしのもの、
マナセもわたしのものである。
エフライムはわたしのかぶと、
ユダはわたしのつえである。
九モアブはわたしの足だらい、
エドムにはわたしのくつを投げる。
ペリシテについては、かちどきをあげる」。
一〇だれがわたしを堅固な町に至らせるであろうか。

だれがわたしをエドムに導くであろうか。
一一神よ、あなたはわれらを捨てられたではありませんか。
神よ、あなたはわれらの軍勢と共に出て行かれません。
一二われらに助けを与えて、あだにむかわせてください。
人の助けはむなしいからです。
一三われらは神によって勇ましく働きます。
われらのあだを踏みにじる者は神だからです。

第一〇九篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一わたしのほめたたえる神よ、もださないでください。
二彼らは悪しき口と欺きの口をあけて、わたしにむかい、
偽りの舌をもってわたしに語り、
三恨みの言葉をもってわたしを囲み、

ゆえなくわたしを攻めるのです。
四彼らはわが愛にむくいて、わたしを非難します。
しかしわたしは彼らのために祈ります。
五彼らは悪をもってわが善に報い、
恨みをもってわが愛に報いるのです。
六彼の上に悪しき人を立て、
訴える者に彼を訴えさせてください。
七彼がさばかれるとき、彼を罪ある者とし、
その祈を罪に変えてください。
八その日を少なくし、
その財産をほかの人にとらせ、
九その子らをみなしごにし、

その妻をやもめにしてください。
一〇その子らを放浪者として 施しをこわせ、
その荒れたすまいから追い出させてください。
一一彼が持っているすべての物を債主に奪わせ、
その勤労の実をほかの人にかすめさせてください。
一二彼にいつくしみを 施す者はひとりもなく、
またそのみなしごをあわれむ者もなく、
一三その子孫を絶えさせ、
その名を次の代に消し去ってください。
一四その父たちの不義は主のみ前に覚えられ、
その母の罪を消し去らないでください。
一五それらを常に主のみ前に置き、

彼の記憶を地から断ってください。
一六これは彼がいつくしみを施すことを思わず、
かえって貧しい者、乏しい者を責め、
心の痛める者を殺そうとしたからです。
一七彼はのろうことを好んだ。
のろいを彼に臨ませてください。
彼は恵むことを喜ばなかった。
恵みを彼から遠ざけてください。
一八彼はのろいを衣のように着た。
のろいを水のようにその身にしみこませ、
油のようにその骨にしみこませてください。
一九またそれを自分の着る着物のようにならせ、

常に締める帯のようにならせてください。
二〇これがわたしを非難する者と、
わたしに逆らって悪いことを言う者の
主からうける報いとしてください。
二一しかし、わが主なる神よ、
あなたはみ名のために、わたしを顧みてください。
あなたのいつくしみの深きにより、
わたしをお助けください。
二二わたしは貧しく、かつ乏しいのです。
わたしの心はわがうちに傷ついています。
二三わたしは夕日の影のように去りゆき、
いなごのように追い払われます。

二四わたしのひざは断食によってよろめき、
わたしの肉はやせ衰え、
二五わたしは彼らにそしられる者となりました。
彼らはわたしを見ると、頭を振ります。
二六わが神、主よ、わたしをお助けください。
あなたのいつくしみにしたがって、
わたしをお救いください。
二七主よ、これがあなたのみ手のわざであること、
あなたがそれをなされたことを、
彼らに知らせてください。
二八彼らはのろうけれども、あなたは祝福されます。
わたしを攻める者をはずかしめ、
あなたのしもべを喜ばせてください。

二九わたしを非難する者にはずかしめを着せ、
おのが恥を上着のようにまとわせてください。
三〇わたしはわが口をもって大いに主に感謝し、
多くの人のなかで主をほめたたえます。
三一主は貧しい者の右に立って、
死罪にさだめようとする者から
彼を救われるからです。

第一一〇篇ダビデの歌

一主はわが主に言われる、
「わたしがあなたのもろもろの敵を
あなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。
二主はあなたの力あるつえをシオンから出される。

あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。
三あなたの民は、あなたがその軍勢を
聖なる山々に導く日に
心から喜んでおのれをささげるであろう。
あなたの若者は朝の胎から出る露のように
あなたに来るであろう。
四主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、
「あなたはメルキゼデクの位にしたがって
とこしえに祭司である」。
五主はあなたの右におられて、
その怒りの日に王たちを打ち破られる。
六主はもろもろの国のなかでさばきを行い、

しかばねをもって満(み)たし、
広(ひろ)い地(ち)を治(おさ)める首領(しゅりょう)たちを打(う)ち破(やぶ)られる。
七彼(かれ)は道(みち)のほとりの川(かわ)からくんで飲(の)み、
それによって、そのこうべをあげるであろう。

第一一一篇

一主(しゅ)をほめたたえよ。
わたしは正(ただ)しい者(もの)のつどい、および公会(こうかい)で、
心(こころ)をつくして主(しゅ)に感謝(かんしゃ)する。
二主(しゅ)のみわざは偉大(いだい)である。
すべてそのみわざを喜(よろこ)ぶ者(もの)によって尋(たず)ね窮(きわ)められる。
三そのみわざは栄光(えいこう)と威厳(いげん)とに満(み)ち、
その義(ぎ)はとこしえに、うせることがない。

四主はそのくすしきみわざを記念させられた。
主は恵みふかく、あわれみに満ちていられる。
五主はおのれを恐れる者に食物を与え、
その契約をとこしえに心にとめられる。
六主はもろもろの国民の所領をその民に与えて、
みわざの力をこれにあらわされた。
七そのみ手のわざは真実かつ公正であり、
すべてのさとしは確かである。
八これらは世々かぎりなく堅く立ち、
真実と正直とをもってなされた。
九主はその民にあがないを施し、
その契約をとこしえに立てられた。

そのみ名は聖にして、おそれおおい。
一〇主を恐れることは知恵のはじめである。
これを行う者はみな良き悟りを得る。
主の誉は、とこしえに、うせることはない。

第一一二篇

一主をほめたたえよ。
主をおそれて、そのもろもろの戒めを
大いに喜ぶ人はさいわいである。
二その子孫は地において強くなり、
正しい者のやからは祝福を得る。
三繁栄と富とはその家にあり、
その義はとこしえに、うせることはない。

四 光(ひかり)は正(ただ)しい者(もの)のために暗黒(あんこく)の中(なか)にもあらわれる。
主(しゅ)は恵(めぐ)み深(ふか)く、あわれみに満(み)ち、正(ただ)しくいらせられる。
五 恵(めぐ)みを施(ほどこ)し、貸(か)すことをなし、
その事(こと)を正(ただ)しく行(おこな)う人(ひと)はさいわいである。
六 正(ただ)しい人(ひと)は決(けっ)して動(うご)かされることなく、
とこしえに覚(おぼ)えられる。
七 彼(かれ)は悪(わる)いおとずれを恐(おそ)れず、
その心(こころ)は主(しゅ)に信頼(しんらい)してゆるがない。
八 その心(こころ)は落(お)ち着(つ)いて恐(おそ)れることなく、
ついにそのあだについての願(ねが)いを見(み)る。
九 彼(かれ)は惜(お)しげなく施(ほどこ)し、貧(まず)しい者(もの)に与(あた)えた。
その義(ぎ)はとこしえにうせることはない。

その角（つの）は誉（ほまれ）を得（え）てあげられる。
一〇悪（あ）しき者（もの）はこれを見（み）て怒（いか）り、
歯（は）をかみならして溶（と）け去（さ）る。
悪（あ）しき者（もの）の願（ねが）いは滅（ほろ）びる。

第一一三篇

一主（しゅ）をほめたたえよ。
主（しゅ）のしもべたちよ、ほめたたえよ。
主（しゅ）のみ名（な）をほめたたえよ。
二今（いま）より、とこしえに至（いた）るまで主（しゅ）のみ名（な）はほむべきかな。
三日（ひ）のいずるところから日（ひ）の入（い）るところまで、
主（しゅ）のみ名（な）はほめたたえられる。
四主（しゅ）はもろもろの国民（くにたみ）の上（うえ）に高（たか）くいらせられ、

その栄光は天よりも高い。
五われらの神、主にくらぶべき者はだれか。
主は高き所に座し、
六遠く天と地とを見おろされる。
七主は貧しい者をちりからあげ、
乏しい者をあくたからあげて、
八もろもろの君たちと共にすわらせ、
その民の君たちと共にすわらせられる。
九また子を産まぬ女に家庭を与え、
多くの子供たちの喜ばしい母とされる。
主をほめたたえよ。

第一一四篇

一 イスラエルがエジプトをいで、
ヤコブの家(いえ)が異言(いげん)の民(たみ)を離(はな)れたとき、
二 ユダは主(しゅ)の聖所(せいじょ)となり、
イスラエルは主(しゅ)の所領(しょりょう)となった。
三 海(うみ)はこれを見(み)て逃(に)げ、
ヨルダンはうしろに退(しりぞ)き、
四 山(やま)は雄羊(おひつじ)のように踊(おど)り、
小山(こやま)は小羊(こひつじ)のように踊(おど)った。
五 海(うみ)よ、おまえはどうして逃(に)げるのか、
ヨルダンよ、おまえはどうしてうしろに退(しりぞ)くのか。
六 山(やま)よ、おまえたちはどうして雄羊(おひつじ)のように踊(おど)るのか、
小山(こやま)よ、おまえたちはどうして小羊(こひつじ)のように踊(おど)るのか。
七 地(ち)よ、主(しゅ)のみ前(まえ)におののけ、

ヤコブの神(かみ)のみ前(まえ)におののけ。
八 主(しゅ)は岩(いわ)を池(いけ)に変(かわ)らせ、
石(いし)を泉(いずみ)に変(かわ)らせられた。

第一一五篇

一 主(しゅ)よ、栄光(えいこう)を
われらにではなく、われらにではなく、
あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、
ただ、み名(な)にのみ帰(き)してください。
二 なにゆえ、もろもろの国民(くにたみ)は言(い)うのでしょう、
「彼(かれ)らの神(かみ)はどこにいるのか」と。
三 われらの神(かみ)は天(てん)にいらせられる。
神(かみ)はみこころにかなうすべての事(こと)を行(おこな)われる。
四 彼(かれ)らの偶像(ぐうぞう)はしろがねと、こがねで、

人の手のわざである。
五それは口があっても語ることができない。
目があっても見ることができない。
六耳があっても聞くことができない。
鼻があってもかぐことができない。
七手があっても取ることができない。
足があっても歩くことができない。
また、のどから声を出すこともできない。
八これを造る者と、これに信頼する者とはみな、
これと等しい者になる。
九イスラエルよ、主に信頼せよ。
主は彼らの助け、また彼らの盾である。

一〇アロンの家よ、主に信頼せよ。
主は彼らの助け、また彼らの盾である。
一一主を恐れる者よ、主に信頼せよ。
主は彼らの助け、また彼らの盾である。
一二主はわれらをみこころにとめられた。
主はわれらを恵み、イスラエルの家を恵み、
アロンの家を恵み、
一三また、小さい者も、大いなる者も、
主を恐れる者を恵まれる。
一四どうか、主があなたがたを増し加え、
あなたがたと、あなたがたの子孫とを
増し加えられるように。

一五天地を造られた主によって
あなたがたが恵まれるように。
一六天は主の天である。
しかし地は人の子らに与えられた。
一七死んだ者も、音なき所に下る者も、
主をほめたたえることはない。
一八しかし、われらは今より、とこしえに至るまで、
主をほめまつるであろう。
主をほめたたえよ。

第一一六篇

一わたしは主を愛する。
主はわが声と、わが願いとを聞かれたからである。

二主はわたしに耳を傾けられたので、
わたしは生きるかぎり主を呼びまつるであろう。
三死の綱がわたしを取り巻き、
陰府の苦しみがわたしを捕えた。
わたしは悩みと悲しみにあった。
四その時わたしは主のみ名を呼んだ。
「主よ、どうぞわたしをお救いください」と。
五主は恵みふかく、正しくいらせられ、
われらの神はあわれみに富まれる。
六主は無学な者を守られる。
わたしが低くされたとき、主はわたしを救われた。
七わが魂よ、おまえの平安に帰るがよい。

主は豊かにおまえをあしらわれたからである。
八あなたはわたしの魂を死から、わたしの目を涙から、
わたしの足をつまずきから助け出されました。
九わたしは生ける者の地で、主のみ前に歩みます。
一〇「わたしは大いに悩んだ」と言った時にもなお信じた。
一一わたしは驚きあわてたときに言った、
「すべての人は当にならぬ者である」と。
一二わたしに賜わったもろもろの恵みについて、
どうして主に報いることができようか。
一三わたしは救の杯をあげて、
主のみ名を呼ぶ。
一四わたしはすべての民の前で、

主にわが誓いをつぐなおう。
一五主の聖徒の死はそのみ前において尊い。
一六主よ、わたしはあなたのしもべです。
わたしはあなたのしもべ、あなたのはしための子です。
あなたはわたしのなわめを解かれました。
一七わたしは感謝のいけにえをあなたにささげて、
主のみ名を呼びます。
一八わたしはすべての民の前で
主にわが誓いをつぐないます。
一九エルサレムよ、あなたの中で、
主の家の大庭の中で、これをつぐないます。
主をほめたたえよ。

第一一七篇

一もろもろの国よ、主をほめたたえよ。
もろもろの民よ、主をたたえまつれ。
二われらに賜わるそのいつくしみは大きいからである。
主のまことはとこしえに絶えることがない。
主をほめたたえよ。

第一一八篇

一主に感謝せよ、主は恵みふかく、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二イスラエルは言え、
「そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と。
三アロンの家は言え、
「そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と。

四主をおそれる者は言え、
「そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と。
五わたしが悩みのなかから主を呼ぶと、
主は答えて、わたしを広い所に置かれた。
六主がわたしに味方されるので、
恐れることはない。
人はわたしに何をなし得ようか。
七主はわたしに味方し、わたしを助けられるので、
わたしを憎む者についての願いを見るであろう。
八主に寄り頼むは人にたよるよりも良い。
九主に寄り頼むはもろもろの君にたよるよりも良い。
一〇もろもろの国民はわたしを囲んだ。

わたしは主のみ名によって彼らを滅ぼす。
一一彼らはわたしを囲んだ、わたしを囲んだ。
わたしは主のみ名によって彼らを滅ぼす。
一二彼らは蜂のようにわたしを囲み、
いばらの火のように燃えたった。
わたしは主のみ名によって彼らを滅ぼす。
一三わたしはひどく押されて倒れようとしたが、
主はわたしを助けられた。
一四主はわが力、わが歌であって、
わが救となられた。
一五聞け、勝利の喜ばしい歌が正しい者の天幕にある。
「主の右の手は勇ましいはたらきをなし、

一六主の右の手は高くあがり、
主の右の手は勇ましいはたらきをなす」。
一七わたしは死ぬことなく、生きながらえて、
主のみわざを物語るであろう。
一八主はいたくわたしを懲らされたが、
死にはわたされなかった。
一九わたしのために義の門を開け、
わたしはその内にはいって、主に感謝しよう。
二〇これは主の門である。
正しい者はその内にはいるであろう。
二一わたしはあなたに感謝します。
あなたがわたしに答えて、わが救となられたことを。

二二家造りらの捨てた石は
隅のかしら石となった。
二三これは主のなされた事で
われらの目には驚くべき事である。
二四これは主が設けられた日であって、
われらはこの日に喜び楽しむであろう。
二五主よ、どうぞわれらをお救いください。
主よ、どうぞわれらを栄えさせてください。
二六主のみ名によってはいる者はさいわいである。
われらは主の家からあなたをたたえます。
二七主は神であって、われらを照らされた。
枝を携えて祭の行列を祭壇の角にまで進ませよ。

二八あなたはわが神、わたしはあなたに感謝します。
あなたはわが神、わたしはあなたをあがめます。
二九主に感謝せよ、主は恵みふかく、
そのいつくしみはとこしえに
絶えることがない。

第一一九篇アレフ

一おのが道を全くして、
主のおきてに歩む者はさいわいです。
二主のもろもろのあかしを守り
心をつくして主を尋ね求め、
三また悪を行わず、主の道に歩む者はさいわいです。
四あなたはさとしを命じて、ねんごろに守らせられます。

五どうかわたしの道(みち)を堅(かた)くして、
あなたの定(さだ)めを守(まも)らせてください。
六わたしは、あなたのもろもろの戒(いまし)めに目(め)をとめる時(とき)、
恥(は)じることはありません。
七わたしは、あなたの正(ただ)しいおきてを学(まな)ぶとき、
正(ただ)しい心(こころ)をもってあなたに感謝(かんしゃ)します。
八わたしはあなたの定(さだ)めを守(まも)ります。
わたしを全(まった)くお捨(す)てにならないでください。

ベス

九若(わか)い人(ひと)はどうしておのが道(みち)を
清(きよ)く保(たも)つことができるでしょうか。
み言葉(ことば)にしたがって、

それを守るよりほかにありません。
一〇わたしは心をつくしてあなたを尋ね求めます。
わたしをあなたの戒めから
迷い出させないでください。
一一わたしはあなたにむかって
罪を犯すことのないように、
心のうちにみ言葉をたくわえました。
一二あなたはほむべきかな、主よ、
あなたの定めをわたしに教えてください。
一三わたしはくちびるをもって、
あなたの口から出る
もろもろのおきてを言いあらわします。
一四わたしは、もろもろのたからを喜ぶように、

あなたのあかしの道(みち)を喜(よろこ)びます。
一五わたしは、あなたのさとしを思(おも)い、
あなたの道(みち)に目(め)をとめます。
一六わたしはあなたの定(さだ)めを喜(よろこ)び、
あなたのみ言葉(ことば)を忘(わす)れません。

ギメル

一七あなたのしもべを豊(ゆた)かにあしらって、
生(い)きながらえさせ、
み言葉(ことば)を守(まも)らせてください。
一八わたしの目(め)を開(ひら)いて、あなたのおきてのうちの
くすしき事(こと)を見(み)させてください。
一九わたしはこの地(ち)にあっては寄留者(きりゅうしゃ)です。

あなたの戒（いまし）めをわたしに隠（かく）さないでください。
二〇わが魂（たましい）はつねにあなたのおきてを慕（した）って、
絶（た）えいるばかりです。
二一あなたは、あなたの戒（いまし）めから迷（まよ）い出（で）る
高（たか）ぶる者（もの）、のろわれた者（もの）を責（せ）められます。
二二わたしはあなたのあかしを守（まも）りました。
彼（かれ）らのそしりと侮（あなど）りとを
わたしから取（と）り去（さ）ってください。
二三たといもろもろの君（きみ）が座（ざ）して、
わたしをそこなおうと図（はか）っても、
あなたのしもべは、あなたの定（さだ）めを深（ふか）く思（おも）います。
二四あなたのあかしは、わたしを喜（よろこ）ばせ、

わたしを教えさとすものです。

ダレス

二五わが魂はちりについています。
み言葉に従って、わたしを生き返らせてください。
二六わたしが自分の歩んだ道を語ったとき、
あなたはわたしに答えられました。
あなたの定めをわたしに教えてください。
二七あなたのさとしの道を
わたしにわきまえさせてください。
わたしはあなたのくすしきみわざを深く思います。
二八わが魂は悲しみによって溶け去ります。
み言葉に従って、わたしを強くしてください。
二九偽りの道をわたしから遠ざけ、

あなたのおきてをねんごろに教えてください。
三〇わたしは真実の道を選び、
あなたのおきてをわたしの前に置きました。
三一主よ、わたしはあなたのあかしに堅く従っています。
願わくは、わたしをはずかしめないでください。
三二あなたがわたしの心を広くされるとき、
わたしはあなたの戒めの道を走ります。

へ

三三主よ、あなたの定めの道をわたしに教えてください。
わたしは終りまでこれを守ります。
三四わたしに知恵を与えてください。
わたしはあなたのおきてを守り、

心をつくしてこれに従います。
三五わたしをあなたの戒めの道に導いてください。
わたしはそれを喜ぶからです。
三六わたしの心をあなたのあかしに傾けさせ、
不正な利得に傾けさせないでください。
三七わたしの目をほかにむけて、むなしいものを見させず、
あなたの道をもって、わたしを生かしてください。
三八あなたを恐れる者にかかわる約束を
あなたのしもべに堅くしてください。
三九わたしの恐れるそしりを除いてください。
あなたのおきては正しいからです。
四〇見よ、わたしはあなたのさとしを慕います。

あなたの義をもって、
わたしを生かしてください。

ワウ

四一主よ、あなたの約束にしたがって、
あなたのいつくしみと、
あなたの救をわたしに臨ませてください。
四二そうすれば、わたしをそしる者に、
答えることができます。
わたしはあなたのみ言葉に信頼するからです。
四三またわたしの口から真理の言葉を
ことごとく除かないでください。
わたしの望みはあなたのおきてにあるからです。
四四わたしは絶えず、とこしえに、

あなたのおきてを守ります。
四五わたしはあなたのさとしを求めたので、
自由に歩むことができます。
四六わたしはまた王たちの前に
あなたのあかしを語って恥じることはありません。
四七わたしは、わたしの愛するあなたの戒めに
自分の喜びを見いだすからです。
四八わたしは、わたしの愛するあなたの戒めを尊び、
あなたの定めを深く思います。

ザイン

四九どうか、あなたのしもべに言われた
み言葉を思い出してください。

あなたはわたしにそれを望ませられました。
五〇あなたの約束はわたしを生かすので、
わが悩みの時の慰めです。
五一高ぶる者は大いにわたしをあざ笑います。
しかしわたしはあなたのおきてを離れません。
五二主よ、わたしはあなたの昔からのおきてを思い出して、
みずから慰めます。
五三あなたのおきてを捨てる悪しき者のゆえに、
わたしは激しい憤りを起します。
五四あなたの定めはわが旅の家で、
わたしの歌となりました。
五五主よ、わたしは夜の間にあなたのみ名を思い出して、

あなたのおきてを守ります。
五六わたしはあなたのさとしを守ったことによって、
この祝福がわたしに臨みました。

ヘス

五七主はわたしの受くべき分です。
わたしはあなたのみ言葉を守ることを約束します。
五八わたしは心をつくして、あなたの恵みを請い求めます。
あなたの約束にしたがって、
わたしをお恵みください。
五九わたしは、あなたの道を思うとき、
足をかえして、あなたのあかしに向かいます。
六〇わたしはあなたの戒めを守るのに、
すみやかで、ためらいません。

六一たとい、悪しき者のなわがわたしを捕えても、
わたしはあなたのおきてを忘れません。
六二わたしはあなたの正しいおきてのゆえに
夜半に起きて、あなたに感謝します。
六三わたしは、すべてあなたを恐れる者、
またあなたのさとしを守る者の仲間です。
六四主よ、地はあなたのいつくしみで満ちています。
あなたの定めをわたしに教えてください。

テス

六五主よ、あなたはみ言葉にしたがって
しもべをよくあしらわれました。
六六わたしに良い判断と知識とを教えてください。
わたしはあなたの戒めを信じるからです。

六七わたしは苦しまない前には迷いました。
しかし今はみ言葉を守ります。
六八あなたは善にして善を行われます。
あなたの定めをわたしに教えてください。
六九高ぶる者は偽りをもって
わたしをことごとくおおいます。
しかしわたしは心をつくして
あなたのさとしを守ります。
七〇彼らの心は肥え太って脂肪のようです。
しかしわたしはあなたのおきてを喜びます。
七一苦しみにあったことは、わたしに良い事です。
これによってわたしはあなたのおきてを
学ぶことができました。

七二あなたの口(くち)のおきては、わたしのためには
幾(いく)千の金銀貨幣(きんぎんかへい)にもまさるのです。

ヨード

七三あなたのみ手(て)はわたしを造(つく)り、
わたしを形造(かたちつく)りました。
わたしに知恵(ちえ)を与(あた)えて、
あなたの戒(いまし)めを学(まな)ばせてください。
七四あなたを恐(おそ)れる者(もの)はわたしを見(み)て喜(よろこ)ぶでしょう。
わたしはみ言葉(ことば)によって望(のぞ)みをいだいたからです。
七五主(しゅ)よ、わたしはあなたのさばきの正(ただ)しく、
また、あなたが真実(しんじつ)をもって
わたしを苦(くる)しめられたことを知(し)っています。

七六あなたがしもべに告げられた約束にしたがって、
あなたのいつくしみをわが慰めとしてください。
七七あなたのあわれみをわたしに臨ませ、
わたしを生かしてください。
あなたのおきてはわが喜びだからです。
七八高ぶる者に恥をこうむらせてください。
彼らは偽りをもって、わたしをくつがえしたからです。
しかしわたしはあなたのさとしを深く思います。
七九あなたをおそれる者と、
あなたのあかしを知る者とを
わたしに帰らせてください。
八〇わたしの心を全くして、

あなたの定めを守らせてください。
そうすればわたしは恥をこうむることがありません。

カフ

八一わが魂はあなたの救を慕って絶えいるばかりです。
わたしはみ言葉によって望みをいだきます。
八二わたしの目はあなたの約束を待つによって衰え、
「いつ、あなたはわたしを慰められるのですか」と
尋ねます。
八三わたしは煙の中の皮袋のようになりましたが、
なお、あなたの定めを忘れませんでした。
八四あなたのしもべの日はどれほど続くでしょうか。
いつあなたは、わたしを迫害する者を
さばかれるでしょうか。

八五高ぶる者はわたしをおとしいれようと
穴を掘りました。
彼らはあなたのおきてに従わない人々です。
八六あなたの戒めはみな真実です。
彼らは偽りをもってわたしを迫害します。
わたしをお助けください。
八七彼らはこの地において、
ほとんどわたしを滅ぼしました。
しかし、わたしはあなたのさとしを捨てませんでした。
八八あなたのいつくしみにしたがって
わたしを生かしてください。
そうすればわたしはあなたの口から出る

あかしを守ります。

ラメド

八九主よ、あなたのみ言葉は
天においてとこしえに堅く定まり、
九〇あなたのまことはよろずよに及びます。
あなたが地を定められたので、地は堅く立っています。
九一これらのものはあなたの仰せにより、
堅く立って今日に至っています。
よろずのものは皆あなたのしもべだからです。
九二あなたのおきてがわが喜びとならなかったならば、
わたしはついに悩みのうちに滅びたでしょう。
九三わたしは常にあなたのさとしを忘れません。

あなたはこれをもって、わたしを生かされたからです。
九四わたしはあなたのものです。
わたしをお救いください。
わたしはあなたのさとしを求めました。
九五悪しき者はわたしを滅ぼそうと
待ち伏せています。
しかし、わたしはあなたのあかしを思います。
九六わたしはすべての全きことに
限りあることを見ました。
しかしあなたの戒めは限りなく広いのです。

メム

九七いかにわたしはあなたのおきてを
愛することでしょう。

わたしはひねもすこれを深く思います。
九八あなたの戒めは常にわたしと共にあるので、
わたしをわが敵にまさって賢くします。
九九わたしはあなたのあかしを深く思うので、
わがすべての師にまさって知恵があります。
一〇〇わたしはあなたのさとしを守るので、
老いた者にまさって事をわきまえます。
一〇一わたしはみ言葉を守るために、
わが足をとどめて、すべての悪い道に行かせません。
一〇二あなたがわたしを教えられたので、
わたしはあなたのおきてを離れません。
一〇三あなたのみ言葉はいかにわがあごに

甘いことでしょう。
蜜にまさってわが口に甘いのです。
一〇四わたしはあなたのさとしによって知恵を得ました。
それゆえ、わたしは偽りのすべての道を憎みます。

ヌン

一〇五あなたのみ言葉はわが足のともしび、
わが道の光です。
一〇六わたしはあなたの正しいおきてを守ることを誓い、
かつこれを実行しました。
一〇七わたしはいたく苦しみました。
主よ、み言葉に従って、わたしを生かしてください。
一〇八主よ、わがさんびの供え物をうけて、

あなたのおきてを教えてください。
一〇九わたしのいのちは常に危険にさらされています。
しかし、わたしはあなたのおきてを忘れません。
一一〇悪しき者はわたしのためにわなを設けました。
しかし、わたしはあなたのさとしから迷い出ません。
一一一あなたのあかしはとこしえにわが嗣業です。
まことに、そのあかしはわが心の喜びです。
一一二わたしはあなたの定めを終りまで、
とこしえに守ろうと心を傾けます。

サメク

一一三わたしは二心の者を憎みます。
しかしあなたのおきてを愛します。

一一四あなたはわが隠れ場、わが盾です。
わたしはみ言葉によって望みをいだきます。
一一五悪をなす者よ、わたしを離れ去れ、
わたしはわが神の戒めを守るのです。
一一六あなたの約束にしたがって、
わたしをささえて、ながらえさせ、
わが望みについて恥じることの
ないようにしてください。
一一七わたしをささえてください。
そうすれば、わたしは安らかで、
常にあなたの定めに心をそそぎます。
一一八すべてあなたの定めから迷い出る者を
あなたは、かろしめられます。

まことに、彼らの欺きはむなしいのです。
一一九あなたは地のすべての悪しき者を、
金かすのようにみなされます。
それゆえ、わたしはあなたのあかしを愛します。
一二〇わが肉はあなたを恐れるので震えます。
わたしはあなたのさばきを恐れます。

アイン

一二一わたしは正しく義にかなったことを行いました。
わたしを捨てて、しえたげる者に
ゆだねないでください。
一二二しもべのために保証人となって、
高ぶる者にわたしを、しえたげさせないでください。
一二三わが目はあなたの救と、

あなたの正しい約束とを待ち望んで衰えます。
一二四あなたのいつくしみにしたがって、しもべをあしらい、
あなたの定めを教えてください。
一二五わたしはあなたのしもべです。
わたしに知恵を与えて、
あなたのあかしを知らせてください。
一二六彼らはあなたのおきてを破りました。
今は主のはたらかれる時です。
一二七それゆえ、わたしは金よりも、
純金よりもまさってあなたの戒めを愛します。
一二八それゆえ、わたしは、あなたのもろもろの
さとしにしたがって、正しき道に歩み、
すべての偽りの道を憎みます。

ペ

一二九あなたのあかしは驚(おどろ)くべきものです。
それゆえ、わが魂(たましい)はこれを守(まも)ります。
一三〇み言葉(ことば)が開(あ)けると光(ひかり)を放(はな)って、
無学(むがく)な者(もの)に知恵(ちえ)を与(あた)えます。
一三一わたしはあなたの戒(いまし)めを慕(した)うゆえに、
口(くち)を広(ひろ)くあけてあえぎ求(もと)めました。
一三二み名(な)を愛(あい)する者(もの)に常(つね)にされるように、
わたしをかえりみ、わたしをあわれんでください。
一三三あなたの約束(やくそく)にしたがって、わが歩(あゆ)みを確(たし)かにし、
すべての不義(ふぎ)に支配(しはい)されないようにしてください。
一三四わたしを人(ひと)のしえたげからあがなってください。
そうすればわたしは、あなたのさとしを守(まも)ります。

一三五み顔をしもべの上に照し、
あなたの定めを教えてください。
一三六人々があなたのおきてを守らないので、
わが目の 涙 は川のように流れます。

ツアデー

一三七主よ、あなたは正しく、
あなたのさばきは正しいのです。
一三八あなたの正義と、この上ない真実とをもって
あなたのあかしを命じられました。
一三九わたしのあだが、あなたのみ言葉を忘れるので、
わが熱心はわたしを滅ぼすのです。
一四〇あなたの約束はまことに確かです。

あなたのしもべはこれを愛します。
一四一わたしは取るにたらない者で、人に侮られるけれども、
なお、あなたのさとしを忘れません。
一四二あなたの義はとこしえに正しく、
あなたのおきてはまことです。
一四三悩みと苦しみがわたしに臨みました。
しかしあなたの戒めはわたしの喜びです。
一四四あなたのあかしはとこしえに正しいのです。
わたしに知恵を与えて、生きながらえさせてください。

コフ

一四五わたしは心をつくして呼ばわります。
主よ、お答えください。
わたしはあなたの定めを守ります。

一四六わたしはあなたに呼ばわります。
わたしをお救いください。
わたしはあなたのあかしを守ります。
一四七わたしは朝早く起き出て呼ばわります。
わたしはみ言葉によって望みをいだくのです。
一四八わが目は夜警の交代する時に先だってさめ、
あなたの約束を深く思います。
一四九あなたのいつくしみにしたがって、
わが声を聞いてください。
主よ、あなたの公義にしたがって、
わたしを生かしてください。
一五〇わたしをしえたげる者が

悪いたくらみをもって近づいています。
彼らはあなたのおきてを遠くはなれているのです。
一五一しかし主よ、あなたは近くいらせられます。
あなたのもろもろの戒めはまことです。
一五二わたしは早くからあなたのあかしによって、
あなたがこれをとこしえに
立てられたことを知りました。

レシ

一五三わが悩みを見て、わたしをお救いください。
わたしはあなたのおきてを忘れないからです。
一五四わが訴えを弁護して、わたしをあがない、
あなたの約束にしたがって、
わたしを生かしてください。

一五五 救(すくい)は悪(あ)しき者(もの)を遠(とお)く離(はな)れている。
彼(かれ)らはあなたの定(さだ)めを求(もと)めないからです。
一五六主(しゅ)よ、あなたのあわれみは大(おお)きい。
あなたの公義(こうぎ)に従(したが)って、わたしを生(い)かしてください。
一五七わたしをしえたげる者(もの)、
わたしをあだする者(もの)は多(おお)い。
しかしわたしは、あなたのあかしを離(はな)れません。
一五八不信仰(ふしんこう)な者(もの)があなたのみ言葉(ことば)を守(まも)らないので、
わたしは彼(かれ)らを見(み)て、いとわしく思(おも)います。
一五九わたしがいかにあなたのさとしを
愛(あい)するかをお察(さっ)しください。
主(しゅ)よ、あなたのいつくしみにしたがって、

わたしを生(い)かしてください。
一六〇あなたのみ言葉(ことば)の全体(ぜんたい)は真理(しんり)です。
あなたの正(ただ)しいおきてのすべては
とこしえに絶(た)えることはありません。

シン

一六一もろもろの君(きみ)はゆえなくわたしをしえたげます。
しかしわが心(こころ)はみ言葉(ことば)をおそれます。
一六二わたしは大(おお)いなる獲物(えもの)を得(え)た者(もの)のように
あなたのみ言葉(ことば)を喜(よろこ)びます。
一六三わたしは偽(いつわ)りを憎(にく)み、忌(い)みきらいます。
しかしあなたのおきてを愛(あい)します。
一六四わたしはあなたの正(ただ)しいおきてのゆえに、

一日(にち)に七たびあなたをほめたたえます。
一六五あなたのおきてを愛(あい)する者(もの)には大(おお)いなる平安(へいあん)があり、
何(なに)ものも彼(かれ)らをつまずかすことはできません。
一六六主(しゅ)よ、わたしはあなたの救(すくい)を望(のぞ)み、
あなたの戒(いましめ)をおこないます。
一六七わが魂(たましい)は、あなたのあかしを守(まも)ります。
わたしはいたくこれを愛(あい)します。
一六八わがすべての道(みち)があなたのみ前(まえ)にあるので、
わたしはあなたのさとしと、あかしとを守(まも)ります。

タウ

一六九主(しゅ)よ、どうか、わが叫(さけ)びをみ前(まえ)にいたらせ、
み言葉(ことば)に従(したが)って、わたしに知恵(ちえ)をお与(あた)えください。

一七〇わが願いをみ前にいたらせ、
み言葉にしたがって、わたしをお助けください。
一七一あなたの定めをわたしに教えられるので、
わがくちびるはさんびを唱えます。
一七二あなたのすべての戒めは正しいので、
わが舌はみ言葉を歌います。
一七三わたしはあなたのさとしを選びました。
あなたのみ手を、常にわが助けとしてください。
一七四主よ、わたしはあなたの救を慕います。
あなたのおきてはわたしの喜びです。
一七五わたしを生かして、
あなたをほめたたえさせ、

あなたのおきてを、わが助(たす)けとしてください。
一七六わたしは失(うしな)われた羊(ひつじ)のように迷(まよ)い出(で)ました。
あなたのしもべを捜(さが)し出(だ)してください。
わたしはあなたの戒(いまし)めを忘(わす)れないからです。

第一二〇篇都もうでの歌

一わたしが悩(なや)みのうちに、主(しゅ)に呼(よ)ばわると、
主(しゅ)はわたしに答(こた)えられる。
二「主(しゅ)よ、偽(いつわ)りのくちびるから、
欺(あざむ)きの舌(した)から、わたしを助(たす)け出(だ)してください」。
三欺(あざむ)きの舌(した)よ、おまえに何(なに)が与(あた)えられ、
何(なに)が加(くわ)えられるであろうか。
四ますらおの鋭(するど)い矢(や)と、

えにしだの熱い炭とである。
五わざわいなるかな、わたしはメセクにやどり、
ケダルの天幕のなかに住んでいる。
六わたしは久しく平安を憎む者のなかに住んでいた。
七わたしは平安を願う、
しかし、わたしが物言うとき、彼らは戦いを好む。

第一二一篇　都もうでの歌

一わたしは山にむかって目をあげる。
わが助けは、どこから来るであろうか。
二わが助けは、天と地を造られた主から来る。
三主はあなたの足の動かされるのをゆるされない。
あなたを守る者はまどろむことがない。
四見よ、イスラエルを守る者は

まどろむこともなく、眠(ねむ)ることもない。
五主(しゅ)はあなたを守(まも)る者(もの)、
主(しゅ)はあなたの右(みぎ)の手(て)をおおう陰(かげ)である。
六昼(ひる)は太陽(たいよう)があなたを撃(う)つことなく、
夜(よる)は月(つき)があなたを撃(う)つことはない。
七主(しゅ)はあなたを守(まも)って、すべての災(わざわい)を免(まぬか)れさせ、
またあなたの命(いのち)を守(まも)られる。
八主(しゅ)は今(いま)からとこしえに至(いた)るまで、
あなたの出(で)ると入(い)るとを守(まも)られるであろう。

第一二二篇ダビデがよんだ都もうでの歌

一人々(ひとびと)がわたしにむかって「われらは主(しゅ)の家(いえ)に行(い)こう」
と言(い)ったとき、わたしは喜(よろこ)んだ。

二エルサレムよ、われらの足（あし）は
あなたの門（もん）のうちに立（た）っている。
三しげくつらなった町（まち）のように
建（た）てられているエルサレムよ、
四もろもろの部族（ぶぞく）すなわち主（しゅ）の部族（ぶぞく）が、
そこに上（のぼ）って来（き）て主（しゅ）のみ名（な）に感謝（かんしゃ）することは、
イスラエルのおきてである。
五そこにさばきの座（ざ）、
ダビデの家（いえ）の王座（おうざ）が設（もう）けられてあった。
六エルサレムのために平安（へいあん）を祈（いの）れ、
「エルサレムを愛（あい）する者（もの）は栄（さか）え、
七その城壁（じょうへき）のうちに平安（へいあん）があり、

もろもろの殿のうちに安全があるように」と。
八わが兄弟および友のために、わたしは
「エルサレムのうちに平安があるように」と言い、
九われらの神、主の家のために、わたしは
エルサレムのさいわいを求めるであろう。

第一二三篇都もうでの歌

一天に座しておられる者よ、
わたしはあなたにむかって目をあげます。
二見よ、しもべがその主人の手に目をそそぎ、
はしためがその主婦の手に目をそそぐように、
われらはわれらの神、主に目をそそいで、
われらをあわれまれるのを待ちます。

三主(しゅ)よ、われらをあわれんでください。
われらをあわれんでください。
われらに侮(あなど)りが満(み)ちあふれています。
四思(おも)い煩(わずら)いのない者(もの)のあざけりと、高(たか)ぶる者(もの)の侮(あなど)りとは、
われらの魂(たましい)に満(み)ちあふれています。

第一二四篇ダビデがよんだ都もうでの歌

一今(いま)、イスラエルは言(い)え、
主(しゅ)がもしわれらの方(ほう)におられなかったならば、
二人々(ひとびと)がわれらに逆(さか)らって立(た)ちあがったとき、
主(しゅ)がもしわれらの方(ほう)におられなかったならば、
三彼(かれ)らの怒(いか)りがわれらにむかって燃(も)えたったとき、
彼(かれ)らはわれらを生(い)きているままで、のんだであろう。
四また大水(おおみず)はわれらを押(お)し流(なが)し、

激流(げきりゅう)はわれらの上(うえ)を越(こ)え、
五さか巻(ま)く水(みず)はわれらの上(うえ)を越(こ)えたであろう。
六主(しゅ)はほむべきかな。
主(しゅ)はわれらをえじきとして
彼(かれ)らの歯(は)にわたされなかった。
七われらは野鳥(やちょう)を捕(とら)えるわなをのがれる
鳥(とり)のようにのがれた。
わなは破(やぶ)れてわれらはのがれた。
八われらの助(たす)けは天地(てんち)を造(つく)られた主(しゅ)のみ名(な)にある。

第一二五篇 都もうでの歌

一主(しゅ)に信頼(しんらい)する者(もの)は、動(うご)かされることなくて、
とこしえにあるシオンの山(やま)のようである。

二山々がエルサレムを囲んでいるように、
主は今からとこしえにその民を囲まれる。
三これは悪しき者のつえが
正しい者の所領にとどまることなく、
正しい者がその手を
不義に伸べることのないためである。
四主よ、善良な人と、
心の正しい人とに、さいわいを施してください。
五しかし転じて自分の曲った道に入る者を
主は、悪を行う者と共に去らせられる。
イスラエルの上に平安があるように。

第一二六篇 都もうでの歌

一 主がシオンの繁栄を回復されたとき、
われらは夢みる者のようであった。
二 その時われらの口は笑いで満たされ、
われらの舌は喜びの声で満たされた。
その時「主は彼らのために大いなる事をなされた」と
言った者が、もろもろの国民の中にあった。
三 主はわれらのために大いなる事をなされたので、
われらは喜んだ。
四 主よ、どうか、われらの繁栄を、
ネゲブの川のように回復してください。
五 涙をもって種まく者は、
喜びの声をもって刈り取る。

六種を携え、涙を流して出て行く者は、
束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。

第一二七篇ソロモンがよんだ都もうでの歌

一主が家を建てられるのでなければ、
建てる者の勤労はむなしい。
主が町を守られるのでなければ、
守る者のさめているのはむなしい。
二あなたがたが早く起き、おそく休み、
辛苦のかてを食べることは、むなしいことである。
主はその愛する者に、眠っている時にも、
なくてならぬものを与えられるからである。
三見よ、子供たちは神から賜わった嗣業であり、

胎の実は報いの賜物である。
四壮年の時の子供は勇士の手にある矢のようだ。
五矢の満ちた矢筒を持つ人はさいわいである。
彼は門で敵と物言うとき恥じることはない。

第一二八篇 都もうでの歌

一すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。
二あなたは自分の手の勤労の実を食べ、
幸福で、かつ安らかであろう。
三あなたの妻は家の奥にいて
多くの実を結ぶぶどうの木のようであり、
あなたの子供たちは食卓を囲んで
オリブの若木のようである。

四 見よ、主をおそれる人は、このように祝福を得る。
五 主はシオンからあなたを祝福されるように。
あなたは世にあるかぎりエルサレムの繁栄を見、
六 またあなたの子らの子を見るであろう。
どうぞ、イスラエルの上に平安があるように。

第一二九篇 都もうでの歌

一 今イスラエルは言え、
「彼らはわたしの若い時から、ひどくわたしを悩ました。
二 彼らはわたしの若い時から、ひどくわたしを悩ました。
しかしわたしに勝つことができなかった。
三 耕す者はわたしの背の上をたがやして、
そのうねみぞを長くした」と。

四主は正しくいらせられ、
悪しき者のなわを断ち切られた。
五シオンを憎む者はみな、
恥を得て、退くように。
六彼らを、育たないさきに枯れる
屋根の草のようにしてください。
七これを刈る者はその手に満たず、
これをたばねる者はそのふところに満たない。
八かたわらを過ぎる者は、
「主の恵みがあなたの上にあるように。
われらは主のみ名によって
あなたがたを祝福する」と言わない。

第一三〇篇　都もうでの歌

一 主よ、わたしは深い淵からあなたに呼ばわる。
二 主よ、どうか、わが声を聞き、
あなたの耳をわが願いの声に傾けてください。
三 主よ、あなたがもし、もろもろの不義に
目をとめられるならば、
主よ、だれが立つことができましょうか。
四 しかしあなたには、ゆるしがあるので、
人に恐れかしこまれるでしょう。
五 わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。
そのみ言葉によって、わたしは望みをいだきます。
六 わが魂は夜回りが暁を待つにまさり、
夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます。

七イスラエルよ、主によって望みをいだけ。
主には、いつくしみがあり、
また豊かなあがないがあるからです。
八主はイスラエルを
そのもろもろの不義からあがなわれます。

第一三一篇ダビデがよんだ都もうでの歌

一主よ、わが心はおごらず、わが目は高ぶらず、
わたしはわが力の及ばない大いなる事と
くすしきわざとに関係いたしません。
二かえって、乳離れしたみどりごが、
その母のふところに安らかにあるように、
わたしはわが魂を静め、かつ安らかにしました。

わが魂は乳離れしたみどりごのように、安らかです。
三イスラエルよ、今からとこしえに
主によって望みをいだけ。

第一三二篇　都もうでの歌

一主よ、ダビデのために、
そのもろもろの辛苦をみこころにとめてください。
二ダビデは主に誓い、
ヤコブの全能者に誓いを立てて言いました、
三四五「わたしは主のために所を捜し出し、
ヤコブの全能者のためにすまいを求め得るまでは、
わが家に入らず、わが寝台に上らず、
わが目に眠りを与えず、

わがまぶたにまどろみを与えません」。
六見よ、われらはエフラタでそれを聞き、
ヤアルの野でそれを見とめた。
七「われらはそのすまいへ行って、
その足台のもとにひれ伏そう」。
八主よ、起きて、あなたの力のはこと共に、
あなたの安息所におはいりください。
九あなたの祭司たちに義をまとわせ、
あなたの聖徒たちに喜び呼ばわらせてください。
一〇あなたのしもべダビデのために、
あなたの油そそがれた者の顔を、
しりぞけないでください。
一一主はまことをもってダビデに誓われたので、

それにそむくことはない。すなわち言(い)われた、
「わたしはあなたの身(み)から出(で)た子(こ)のひとりを、
あなたの位(くらい)につかせる。
一二もしあなたの子(こ)らがわたしの教(おし)える
契約(けいやく)と、あかしとを守(まも)るならば、
その子(こ)らもまた、とこしえに
あなたの位(くらい)に座(ざ)するであろう」。
一三主(しゅ)はシオンを選(えら)び、
それをご自分(じぶん)のすみかにしようと望(のぞ)んで言(い)われた、
一四「これはとこしえにわが安息所(あんそくじょ)である。
わたしはこれを望(のぞ)んだゆえ、ここに住(す)む。
一五わたしはシオンの糧食(りょうしょく)を豊(ゆた)かに祝福(しゅくふく)し、

食物をもってその貧しい者を飽かせる。
一六またわたしはその祭司たちに救を着せる。
その聖徒たちは声高らかに喜び呼ばわるであろう。
一七わたしはダビデのために
そこに一つの角をはえさせる。
わたしはわが油そそがれた者のために
一つのともしびを備えた。
一八わたしは彼の敵に恥を着せる。
しかし彼の上にはその冠が輝くであろう」。

第一三三篇ダビデがよんだ都もうでの歌

一見よ、兄弟が和合して共におるのは
いかに麗しく楽しいことであろう。
二それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、

アロンのひげに流れ、
その衣のえりにまで流れくだるようだ。
三またヘルモンの露がシオンの山に下るようだ。
これは主がかしこに祝福を命じ、
とこしえに命を与えられたからである。

第一三四篇 都もうでの歌

一見よ、夜、主の家に立って
主に仕えるすべてのしもべよ、
主をほめよ。
二聖所にむかってあなたがたの手をあげ、
主をほめよ。
三どうぞ主、天と地を造られた者、

シオンからあなたを祝福されるように。

第一三五篇

一主をほめたたえよ、
主のみ名をほめたたえよ。
主のしもべたちよ、ほめたたえよ。
二主の家に立つ者、
われらの神の家の大庭に立つ者よ、ほめたたえよ。
三主は恵みふかい、主をほめたたえよ。
主は情ぶかい、そのみ名をほめ歌え。
四主はおのがためにヤコブを選び、
イスラエルを選んで、おのれの所有とされた。
五わたしは主の大いなることと、

われらの主のすべての神に
まさることとを知っている。
六主はそのみこころにかなう事を、
天にも地にも、海にもすべての淵にも行われる。
七主は地のはてから雲をのぼらせ、
雨のためにいなずまを造り、その倉から風を出される。
八主は人から獣にいたるまで、
エジプトのういごを撃たれた。
九エジプトよ、主はおまえの中に、
しるしと不思議とを送って、
パロとそのすべてのしもべとに臨まれた。
一〇主は多くの国民を撃ち、

力ある王たちを殺された。
一一すなわちアモリびとの王シホン、バシャンの王オグ、
ならびにカナンのすべての国々である。
一二主は彼らの地を嗣業とし、
その民イスラエルに嗣業として与えられた。
一三主よ、あなたのみ名はとこしえに絶えることがない。
主よ、あなたの名声はよろずよに及ぶ。
一四主はその民をさばき、
そのしもべらにあわれみをかけられるからである。
一五もろもろの国民の偶像はしろがねと、こがねで、
人の手のわざである。
一六それは口があっても語ることができない。

目があっても見ることができない。
一七耳があっても聞くことができない。
またその口には息がない。
一八これを造る者と、これに信頼する者とはみな、
これと等しい者になる。
一九イスラエルの家よ、主をほめよ。
アロンの家よ、主をほめよ。
二〇レビの家よ、主をほめよ。
主を恐れる者よ、主をほめまつれ。
二一エルサレムに住まわれる主は、
シオンからほめたたえらるべきである。
主をほめたたえよ。

第一三六篇

一 主に感謝せよ、主は恵みふかく、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二 もろもろの神の神に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
三 もろもろの主の主に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
四 ただひとり大いなるくすしきみわざを
なされる者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
五 知恵をもって天を造られた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
六 地を水の上に敷かれた者に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
七大いなる光を造られた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
八昼をつかさどらすために日を造られた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
九夜をつかさどらすために月と、
もろもろの星とを造られた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一〇エジプトのういごを撃たれた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一一イスラエルをエジプトびとの中から
導き出された者に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一二強い手と伸ばした腕とをもって、
これを救い出された者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一三紅海を二つに分けられた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一四イスラエルにその中を通らせられた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一五パロとその軍勢とを紅海で
打ち敗られた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一六その民を導いて荒野を通らせられた者に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一七大いなる王たちを撃たれた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一八名ある王たちを殺された者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
一九アモリびとの王シホンを殺された者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二〇バシャンの王オグを殺された者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二一彼らの地を嗣業として与えられた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二二そのしもべイスラエルに嗣業として

これを与えられた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二三われらが卑しかった時に
われらをみこころにとめられた者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二四われらのあだからわれらを
助け出された者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二五すべての肉なる者に食物を与えられる者に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
二六天の神に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

第一三七篇

一われらは
バビロンの川のほとりにすわり、
シオンを思い出して涙を流した。
二われらはその中のやなぎにわれらの琴をかけた。
三われらをとりこにした者が、
われらに歌を求めたからである。
われらを苦しめる者が楽しみにしようと、
「われらにシオンの歌を一つうたえ」と言った。
四われらは外国にあって、
どうして主の歌をうたえようか。
五エルサレムよ、もしわたしがあなたを忘れるならば、
わが右の手を衰えさせてください。

六もしわたしがあなたを思い出さないならば、
もしわたしがエルサレムを
わが最高の喜びとしないならば、
わが舌をあごにつかせてください。
七主よ、エドムの人々がエルサレムの日に、
「これを破壊せよ、これを破壊せよ、
その基までも破壊せよ」と
言ったことを覚えてください。
八破壊者であるバビロンの娘よ、
あなたがわれらにしたことを、
あなたに仕返しする人はさいわいである。
九あなたのみどりごを取って
岩になげうつ者はさいわいである。

第一三八篇ダビデの歌

一主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、
もろもろの神の前であなたをほめ歌います。
二わたしはあなたの聖なる宮にむかって伏し拝み、
あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、
み名に感謝します。
あなたはそのみ名と、み言葉を
すべてのものにまさって高くされたからです。
三あなたはわたしが呼ばわった日にわたしに答え、
わが魂の力を増し加えられました。
四主よ、地のすべての王はあなたに感謝するでしょう。
彼らはあなたの口のもろもろの言葉を
聞いたからです。

五彼らは主のもろもろの道について歌うでしょう。
主の栄光は大きいからです。
六主は高くいらせられるが低い者をかえりみられる。
しかし高ぶる者を遠くから知られる。
七たといわたしが悩みのなかを歩いても、
あなたはわたしを生かし、
み手を伸ばしてわが敵の怒りを防ぎ、
あなたの右の手はわたしを救われます。
八主はわたしのために、みこころをなしとげられる。
主よ、あなたのいつくしみは
とこしえに絶えることはありません。
あなたのみ手のわざを捨てないでください。

第一三九篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一主よ、あなたはわたしを探り、
わたしを知りつくされました。
二あなたはわがすわるをも、立つをも知り、
遠くからわが思いをわきまえられます。
三あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、
わがもろもろの道をことごとく知っておられます。
四わたしの舌に一言もないのに、
主よ、あなたはことごとくそれを知られます。
五あなたは後から、前からわたしを囲み、
わたしの上にみ手をおかれます。
六このような知識はあまりに不思議で、
わたしには思いも及びません。

これは高くて達することはできません。
七わたしはどこへ行って、
あなたのみたまを離れましょうか。
わたしはどこへ行って、
あなたのみ前をのがれましょうか。
八わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。
わたしが陰府に床を設けても、
あなたはそこにおられます。
九わたしがあけぼのの翼をかって海のはてに住んでも、
一〇あなたのみ手はその所でわたしを導き、
あなたの右のみ手はわたしをささえられます。
一一「やみはわたしをおおい、
わたしを囲む光は夜となれ」とわたしが言っても、

一二あなたには、やみも暗(くら)くはなく、
夜(よる)も昼(ひる)のように輝(かがや)きます。
あなたには、やみも光(ひかり)も異(こと)なることはありません。
一三あなたはわが内臓(ないぞう)をつくり、
わが母(はは)の胎内(たいない)でわたしを組(く)み立(た)てられました。
一四わたしはあなたをほめたたえます。
あなたは恐(おそ)るべく、くすしき方(かた)だからです。
あなたのみわざはくすしく、
あなたは最(もっと)もよくわたしを知(し)っておられます。
一五わたしが隠(かく)れた所(ところ)で造(つく)られ、
地(ち)の深(ふか)い所(ところ)でつづり合(あわ)されたとき、
わたしの骨(ほね)はあなたに隠(かく)れることがなかった。
一六あなたの目(め)は、

まだできあがらないわたしのからだを見られた。
わたしのためにつくられたわがよわいの日の
まだ一日もなかったとき、
その日はことごとくあなたの書にしるされた。
一七神よ、あなたのもろもろのみ思いは、
なんとわたしに尊いことでしょう。
その全体はなんと広大なことでしょう。
一八わたしがこれを数えようとすれば、
その数は砂よりも多い。
わたしが目ざめるとき、
わたしはなおあなたと共にいます。
一九神よ、どうか悪しき者を殺してください。

血を流す者をわたしから離れ去らせてください。
二〇彼らは敵意をもってあなたをあなどり、
あなたに逆らって高ぶり、悪を行う人々です。
二一主よ、わたしはあなたを憎む者を憎み、
あなたに逆らって起り立つ者を
いとうではありませんか。
二二わたしは全く彼らを憎み、
彼らをわたしの敵と思います。
二三神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、
わたしを試みて、わがもろもろの思いを
知ってください。
二四わたしに悪しき道のあるかないかを見て、

わたしをとこしえの道に導いてください。

第一四〇篇聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一主よ、悪しき人々からわたしを助け出し、
わたしを守って、
乱暴な人々からのがれさせてください。
二彼らは心のうちに悪い事をはかり、
絶えず戦いを起します。
三彼らはへびのようにおのが舌を鋭くし、
そのくちびるの下にはまむしの毒があります。〔セラ
四主よ、わたしを保って、
悪しき人の手からのがれさせ、
わたしを守って、わが足をつまずかせようとする

乱暴な人々からのがれさせてください。
五高ぶる者はわたしのためにわなを伏せ、
綱をもって網を張り、
道のほとりにわなを設けました。〔セラ
六わたしは主に言います、「あなたはわが神です。
主よ、わが願いの声に耳を傾けてください。
七わが救の力、主なる神よ、
あなたは戦いの日に、わがこうべをおおわれました。
八主よ、悪しき人の願いをゆるさないでください。
その悪しき計画をとげさせないでください。〔セラ
九わたしを囲む者がそのこうべをあげるとき、
そのくちびるの害悪で彼らをおおってください。

一〇燃える炭を彼らの上に落してください。
彼らを穴に投げ入れ、
再び上がることのできないようにしてください。
一一悪口を言う者を世に立たせないでください。
乱暴な人をすみやかに災に追い捕えさせてください」。
一二わたしは主が苦しむ者の訴えをたすけ、
貧しい者のために正しいさばきを
行われることを知っています。
一三正しい人は必ずみ名に感謝し、
直き人はみ前に住むでしょう。

第一四一篇ダビデの歌

一主よ、わたしはあなたに呼ばわります。

すみやかにわたしをお助けください。
わたしがあなたに呼ばわるとき、
わが声に耳を傾けてください。
二わたしの祈を、み前にささげる薫香のようにみなし、
わたしのあげる手を、
夕べの供え物のようにみなしてください。
三主よ、わが口に門守を置いて、
わがくちびるの戸を守ってください。
四悪しき事にわが心を傾けさせず、
不義を行う人々と共に
悪しきわざにあずからせないでください。
また彼らのうまき物を食べさせないでください。

五正しい者にいつくしみをもってわたしを打たせ、
わたしを責めさせてください。
しかし悪しき者の 油 をわがこうべに
そそがせないでください。
わが 祈 は絶えず彼らの悪しきわざに
敵しているからです。
六彼らはおのれを罪に定める者にわたされるとき、
主のみ言葉のまことなることを学ぶでしょう。
七人が岩を裂いて地の上に打ち砕くように、
彼らの骨は陰府の口にまき散らされるでしょう。
八しかし主なる神よ、わが目はあなたに向かっています。
わたしはあなたに寄り頼みます。

わたしを助けるものもないままに
捨ておかないでください。
九わたしを守って、
彼らがわたしのために設けたわなと、
悪を行う者のわなとをのがれさせてください。
一〇わたしがのがれると同時に、
悪しき者をおのれの網に陥らせてください。

第一四二篇ダビデがほら穴にいた時によんだマスキールの歌、祈

一わたしは声を出して主に呼ばわり、
声を出して主に願い求めます。
二わたしはみ前にわが嘆きを注ぎ出し、
み前にわが悩みをあらわします。

三わが霊のわがうちに消えうせようとする時も、
あなたはわが道を知られます。
彼らはわたしを捕えようと
わたしの行く道にわなを隠しました。
四わたしは右の方に目を注いで見回したが、
わたしに心をとめる者はひとりもありません。
わたしには避け所がなく、
わたしをかえりみる人はありません。
五主よ、わたしはあなたに呼ばわります。
わたしは言います、「あなたはわが避け所、
生ける者の地でわたしの受くべき分です。
六どうか、わが叫びにみこころをとめてください。

わたしは、はなはだしく低くされています。
わたしを責める者から助け出してください。
彼らはわたしにまさって強いのです。
七 わたしをひとやから出し、
み名に感謝させてください。
あなたが豊かにわたしをあしらわれるので、
正しい人々はわたしのまわりに集まるでしょう」。

第一四三篇 ダビデの歌

一 主よ、わが祈を聞き、
わが願いに耳を傾けてください。
あなたの真実と、あなたの正義とをもって、
わたしにお答えください。
二 あなたのしもべのさばきに

たずさわらないでください。
生ける者はひとりもみ前に義とされないからです。
三敵はわたしをせめ、
わがいのちを地に踏みにじり、
死んで久しく時を経た者のように
わたしを暗い所に住まわせました。
四それゆえ、わが霊はわがうちに消えうせようとし、
わが心はわがうちに荒れさびれています。
五わたしはいにしえの日を思い出し、
あなたが行われたすべての事を考え、
あなたのみ手のわざを思います。
六わたしはあなたにむかって手を伸べ、
わが魂は、かわききった地のように

あなたを慕います。〔セラ
七主よ、すみやかにわたしにお答えください。
わが霊は衰えます。
わたしにみ顔を隠さないでください。
さもないと、わたしは穴にくだる者のように
なるでしょう。
八あしたに、あなたのいつくしみを聞かせてください。
わたしはあなたに信頼します。
わが歩むべき道を教えてください。
わが魂はあなたを仰ぎ望みます。
九主よ、わたしをわが敵から助け出してください。
わたしは避け所を得るために
あなたのもとにのがれました。

一〇あなたのみむねを行うことを教えてください。
あなたはわが神です。
恵みふかい、みたまをもって
わたしを平らかな道に導いてください。
一一主よ、み名のために、わたしを生かし、
あなたの義によって、
わたしを悩みから救い出してください。
一二また、あなたのいつくしみによって、わが敵を断ち、
わがあだをことごとく滅ぼしてください。
わたしはあなたのしもべです。

第一四四篇ダビデの歌

一わが岩なる主はほむべきかな。
主は、いくさすることをわが手に教え、

戦うことをわが指に教えられます。
二 主はわが岩、わが城、
わが高きやぐら、わが救主、
わが盾、わが寄り頼む者です。
主はもろもろの民をおのれに従わせられます。
三 主よ、人は何ものなので、あなたはこれをかえりみ、
人の子は何ものなので、
これをみこころに、とめられるのですか。
四 人は息にひとしく、
その日は過ぎゆく影にひとしいのです。
五 主よ、あなたの天を垂れてくだり、
山に触れて煙を出させてください。

六いなずまを放って彼らを散らし、
矢を放って彼らを打ち敗ってください。
七高い所からみ手を伸べて、わたしを救い、
大水から、異邦人の手から
わたしを助け出してください。
八彼らの口は偽りを言い、
その右の手は偽りの右の手です。
九神よ、わたしは新しい歌をあなたにむかって歌い、
十弦の立琴にあわせてあなたをほめ歌います。
一〇あなたは王たちに勝利を与え、
そのしもべダビデを救われます。
一一わたしを残忍なつるぎから救い、

異邦人の手から助け出してください。
彼らの口は偽りを言い、
その右の手は偽りの右の手です。
一二われらのむすこたちはその若い時、
よく育った草木のようです。
われらの娘たちは宮の建物のために刻まれた
すみの柱のようです。
一三われらの倉は満ちて様々の物を備え、
われらの羊は野でちよろずの子を産み、
一四われらの家畜はみごもって子を産むに誤ることなく、
われらのちまたには悩みの叫びがありません。
一五このような祝福をもつ民はさいわいです。

主をおのが神とする民はさいわいです。

第一四五篇　ダビデのさんびの歌

一 わが神、王よ、わたしはあなたをあがめ、
世々かぎりなくみ名をほめまつります。
二 わたしは日ごとにあなたをほめ、
世々かぎりなくみ名をほめたたえます。
三 主は大いなる神で、
大いにほめたたえらるべきです。
その大いなることは測り知ることができません。
四 この代はかの代にむかって
あなたのみわざをほめたたえ、
あなたの大能のはたらきを宣べ伝えるでしょう。
五 わたしはあなたの威厳の光栄ある輝きと、

あなたのくすしきみわざを深く思います。
六 人々はあなたの恐るべきはたらきの勢いを語り、
わたしはあなたの大いなることを宣べ伝えます。
七 彼らはあなたの豊かな恵みの思い出を言いあらわし、
あなたの義を喜び歌うでしょう。
八 主は恵みふかく、あわれみに満ち、
怒ることおそく、いつくしみ豊かです。
九 主はすべてのものに恵みがあり、
そのあわれみはすべてのみわざの上にあります。
一〇 主よ、あなたのすべてのみわざはあなたに感謝し、
あなたの聖徒はあなたをほめまつるでしょう。
一一 彼らはみ国の栄光を語り、あなたのみ力を宣べ、

一二あなたの大能のはたらきと、
み国の光栄ある輝きとを人の子に知らせるでしょう。
一三あなたの国はとこしえの国です。
あなたのまつりごとはよろずよに
絶えることはありません。
一四主はすべて倒れんとする者をささえ、
すべてかがむ者を立たせられます。
一五よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
一六あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽かせられます。
一七主はそのすべての道に正しく、

そのすべてのみわざに恵みふかく、
一八すべて主を呼ぶ者、 誠をもって主を呼ぶ者に
主は近いのです。
一九主はおのれを恐れる者の願いを満たし、
またその叫びを聞いてこれを救われます。
二〇主はおのれを愛する者をすべて守られるが、
悪しき者をことごとく滅ぼされます。
二一わが口は主の誉を語り、
すべての肉なる者は世々かぎりなく
その聖なるみ名をほめまつるでしょう。

第一四六篇

一主をほめたたえよ。

わが魂よ、主をほめたたえよ。
二わたしは生けるかぎりは主をほめたたえ、
ながらえる間は、わが神をほめうたおう。
三もろもろの君に信頼してはならない。
人の子に信頼してはならない。
彼らには助けがない。
四その息が出ていけば彼は土に帰る。
その日には彼のもろもろの計画は滅びる。
五ヤコブの神をおのが助けとし、
その望みをおのが神、主におく人はさいわいである。
六主は天と地と、海と、
その中にあるあらゆるものを造り、

とこしえに真実を守り、
七しえたげられる者のためにさばきをおこない、
飢えた者に食物を与えられる。
主は捕われ人を解き放たれる。
八主は盲人の目を開かれる。
主はかがむ者を立たせられる。
主は正しい者を愛される。
九主は寄留の他国人を守り、
みなしごと、やもめとをささえられる。
しかし、悪しき者の道を滅びに至らせられる。
一〇主はとこしえに統べ治められる。
シオンよ、あなたの神はよろず代まで統べ治められる。

主をほめたたえよ。

第一四七篇

一 主をほめたたえよ。
われらの神をほめうたうことはよいことである。
主は恵みふかい。
さんびはふさわしいことである。
二 主はエルサレムを築き、
イスラエルの追いやられた者を集められる。
三 主は心の打ち砕かれた者をいやし、
その傷を包まれる。
四 主はもろもろの星の数を定め、
すべてそれに名を与えられる。

五われらの主は大いなる神、
力も豊かであって、その知恵ははかりがたい。
六主はしえたげられた者をささえ、
悪しき者を地に投げ捨てられる。
七主に感謝して歌え、
琴にあわせてわれらの神をほめうたえ。
八主は雲をもって天をおおい、地のために雨を備え、
もろもろの山に草をはえさせ、
九食物を獣に与え、
また鳴く小がらすに与えられる。
一〇主は馬の力を喜ばれず、
人の足をよみせられない。

一一主はおのれを恐れる者と
そのいつくしみを望む者とをよみせられる。
一二エルサレムよ、主をほめたたえよ。
シオンよ、あなたの神をほめたたえよ。
一三主はあなたの門の貫の木を堅くし、
あなたのうちにいる子らを祝福されるからである。
一四主はあなたの国境を安らかにし、
最も良い麦をもってあなたを飽かせられる。
一五主はその戒めを地に下される。
そのみ言葉はすみやかに走る。
一六主は雪を羊の毛のように降らせ、
霜を灰のようにまかれる。

一七主は氷をパンくずのように投げうたれる。
だれがその寒さに耐えることができましょうか。
一八主はみ言葉を下してこれを溶かし、
その風を吹かせられると、もろもろの水は流れる。
一九主はそのみ言葉をヤコブに示し、
そのもろもろの定めと、おきてとを
イスラエルに示される。
二〇主はいずれの国民をも、
このようにはあしらわれなかった。
彼らは主のもろもろのおきてを知らない。
主をほめたたえよ。

第一四八篇

一主をほめたたえよ。
もろもろの天から主をほめたたえよ。
もろもろの高き所で主をほめたたえよ。
二その天使よ、みな主をほめたたえよ。
その万軍よ、みな主をほめたたえよ。
三日よ、月よ、主をほめたたえよ。
輝く星よ、みな主をほめたたえよ。
四いと高き天よ、天の上にある水よ、
主をほめたたえよ。
五これらのものに主のみ名をほめたたえさせよ、
これらは主が命じられると造られたからである。
六主はこれらをとこしえに堅く定め、

越えることのできないその境を定められた。
七 海の獣よ、すべての淵よ、地から主をほめたたえよ。
八 火よ、あられよ、雪よ、霜よ、み言葉を行うあらしよ、
九 もろもろの山、すべての丘、
実を結ぶ木、すべての香柏よ、
一〇 野の獣、すべての家畜、這うもの、翼ある鳥よ、
一一 地の王たち、すべての民、
君たち、地のすべてのつかさよ、
一二 若い男子、若い女子、老いた人と幼い者よ、
一三 彼らをして主のみ名をほめたたえさせよ。
そのみ名は高く、たぐいなく、
その栄光は地と天の上にあるからである。

一四 主はその民のために一つの角をあげられた。
これはすべての聖徒のほめたたえるもの、
主に近いイスラエルの人々の
ほめたたえるものである。
主をほめたたえよ。

第一四九篇

一 主をほめたたえよ。
主にむかって新しい歌をうたえ。
聖徒のつどいで、主の誉を歌え。
二 イスラエルにその造り主を喜ばせ、
シオンの子らにその王を喜ばせよ。
三 彼らに踊りをもって主のみ名をほめたたえさせ、

鼓と琴とをもって主をほめ歌わせよ。
四主はおのが民を喜び、
へりくだる者を勝利をもって飾られるからである。
五聖徒を栄光によって喜ばせ、
その床の上で喜び歌わせよ。
六そののどには神をあがめる歌があり、
その手にはもろ刃のつるぎがある。
七これはもろもろの国にあだを返し、
もろもろの民を懲らし、
八彼らの王たちを鎖で縛り、
彼らの貴人たちを鉄のかせで縛りつけ、
九しるされたさばきを彼らに行うためである。

これはそのすべての聖徒に与えられる誉である。
主をほめたたえよ。

第一五〇篇

一 主をほめたたえよ。
その聖所で神をほめたたえよ。
その力のあらわれる大空で主をほめたたえよ。
二 その大能のはたらきのゆえに主をほめたたえよ。
そのすぐれて大いなることのゆえに
主をほめたたえよ。
三 ラッパの声をもって主をほめたたえよ。
立琴と琴とをもって主をほめたたえよ。
四 鼓と踊りとをもって主をほめたたえよ。

緒琴(おごと)と笛(ふえ)とをもって主(しゅ)をほめたたえよ。
五 音(ね)の高(たか)いシンバルをもって主(しゅ)をほめたたえよ。
鳴(な)りひびくシンバルをもって主(しゅ)をほめたたえよ。
六 息(いき)のあるすべてのものに主(しゅ)をほめたたえさせよ。
主(しゅ)をほめたたえよ。

箴言

第一章

一ダビデの子、イスラエルの王ソロモンの箴言。
二これは人に知恵と教訓とを知らせ、
悟りの言葉をさとらせ、
三賢い行いと、正義と公正と
公平の教訓をうけさせ、
四思慮のない者に悟りを与え、
若い者に知識と慎みを得させるためである。
五賢い者はこれを聞いて学に進み、
さとい者は指導を得る。

六人(ひと)はこれによって箴言(しんげん)と、たとえと、
賢(かしこ)い者(もの)の言葉(ことば)と、そのなぞとを悟(さと)る。
七主(しゅ)を恐(おそ)れることは知識(ちしき)のはじめである、
愚(おろ)かな者(もの)は知恵(ちえ)と教訓(きょうくん)を軽(かろ)んじる。
八わが子(こ)よ、あなたは父(ちち)の教訓(きょうくん)を聞(き)き、
母(はは)の教(おしえ)を捨(す)ててはならない。
九それらは、あなたの頭(あたま)の麗(うるわ)しい冠(かんむり)となり、
あなたの首(くび)の飾(かざ)りとなるからである。
一〇わが子(こ)よ、悪者(わるもの)があなたを誘(さそ)っても、
それに従(したが)ってはならない。
一一彼(かれ)らがあなたに向(む)かって、「一緒(いっしょ)に来(き)なさい。
われわれは待(ま)ち伏(ぶ)せして、人(ひと)の血(ち)を流(なが)し、

罪のない者を、ゆえなく伏してねらい、
一二陰府のように、彼らを生きたままで、のみ尽し、
健やかな者を、墓に下る者のようにしよう。
一三われわれは、さまざまの尊い貨財を得、
奪い取った物で、われわれの家を満たそう。
一四あなたもわれわれの仲間に加わりなさい、
われわれは共に一つの金袋を持とう」と言っても、
一五わが子よ、彼らの仲間になってはならない、
あなたの足をとどめて、彼らの道に行ってはならない。
一六彼らの足は悪に走り、
血を流すことに速いからだ。
一七すべて鳥の目の前で

網(あみ)を張(は)るのは、むだである。
一八彼(かれ)らは自分(じぶん)の血(ち)を待(ま)ち伏(ぶ)せし、
自分(じぶん)の命(いのち)を伏(ふ)してねらうのだ。
一九すべて利(り)をむさぼる者(もの)の道(みち)はこのようなものである。
これはその持(も)ち主(ぬし)の命(いのち)を取(と)り去(さ)るのだ。
二〇知恵(ちえ)は、ちまたに呼(よ)ばわり、
市場(しじょう)にその声(こえ)をあげ、
二一城壁(じょうへき)の頂(いただき)で叫(さけ)び、町(まち)の門(もん)の入口(いりぐち)で語(かた)る。
二二「思慮(しりょ)のない者(もの)たちよ、あなたがたは、いつまで思慮(しりょ)のないことを
好(この)むのか。
あざける者(もの)は、いつまで、あざけり楽(たの)しみ、
愚(おろ)かな者(もの)は、いつまで、知識(ちしき)を憎(にく)むのか。

二三わたしの戒めに心をとめよ、
見よ、わたしは自分の思いを、あなたがたに告げ、
わたしの言葉を、あなたがたに知らせる。
二四わたしは呼んだが、あなたがたは聞くことを拒み、
手を伸べたが、顧みる者はなく、
二五かえって、あなたがたはわたしのすべての勧めを捨て、
わたしの戒めを受けなかったので、
二六わたしもまた、あなたがたが災にあう時に、笑い、
あなたがたが恐慌にあう時、あざけるであろう。
二七これは恐慌が、あらしのようにあなたがたに臨み、
災が、つむじ風のように臨み、
悩みと悲しみとが、あなたがたに臨む時である。

二八その時(とき)、彼(かれ)らはわたしを呼(よ)ぶであろう、
しかし、わたしは答(こた)えない。
ひたすら、わたしを求(もと)めるであろう、
しかし、わたしに会(あ)えない。
二九彼(かれ)らは知識(ちしき)を憎(にく)み、主(しゅ)を恐(おそ)れることを選(えら)ばず、
三〇わたしの勧(すす)めに従(したが)わず、
すべての戒(いまし)めを軽(かろ)んじたゆえ、
三一自分(じぶん)の行(おこな)いの実(み)を食(く)らい、
自分(じぶん)の計(はか)りごとに飽(あ)きる。
三二思慮(しりょ)のない者(もの)の不従順(ふじゅうじゅん)はおのれを殺(ころ)し、
愚(おろ)かな者(もの)の安楽(あんらく)はおのれを滅(ほろ)ぼす。
三三しかし、わたしに聞(き)き従(したが)う者(もの)は安(やす)らかに住(す)まい、

災に会う恐れもなく、安全である」。

第二章

一わが子よ、もしあなたが
わたしの言葉を受け、
わたしの戒めを、あなたの心におさめ、
二あなたの耳を知恵に傾け、
あなたの心を悟りに向け、
三しかも、もし知識を呼び求め、
悟りを得ようと、あなたの声をあげ、
四銀を求めるように、これを求め、
かくれた宝を尋ねるように、これを尋ねるならば、
五あなたは、主を恐れることを悟り、

神を知ることができるようになる。
六これは、主が知恵を与え、
知識と悟りとは、み口から出るからである。
七彼は正しい人のために、確かな知恵をたくわえ、
誠実に歩む者の盾となって、
八公正の道を保ち、その聖徒たちの道筋を守られる。
九そのとき、あなたは、ついに正義と公正、
公平とすべての良い道を悟る。
一〇これは知恵が、あなたの心にはいり、
知識があなたの魂に楽しみとなるからである。
一一慎みはあなたを守り、
悟りはあなたを保って、

一二悪の道からあなたを救い、
偽りをいう者から救う。
一三彼らは正しい道を離れて、暗い道に歩み、
一四悪を行うことを楽しみ、悪人の偽りを喜び、
一五その道は曲り、その行いは、よこしまである。
一六慎みと悟りはまたあなたを遊女から救い、
言葉の巧みな、みだらな女から救う。
一七彼女は若い時の友を捨て、
その神に契約したことを忘れている。
一八その家は死に下り、その道は陰府におもむく。
一九すべて彼女のもとへ行く者は、帰らない、
また命の道にいたらない。

二〇こうして、あなたは善良な人々の道に歩み、
正しい人々の道を守ることができる。
二一正しい人は地にながらえ、
誠実な人は地にとどまる。
二二しかし悪しき者は地から断ち滅ぼされ、
不信実な者は地から抜き捨てられる。

第三章

一わが子よ、わたしの教を忘れず、
わたしの戒めを心にとめよ。
二そうすれば、これはあなたの日を長くし、
命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。
三いつくしみと、まこととを捨ててはならない、

それをあなたの首(くび)に結(むす)び、心(こころ)の碑(ひ)にしるせ。
四そうすれば、あなたは神(かみ)と人(ひと)との前(まえ)に
恵(めぐ)みと、誉(ほまれ)とを得(え)る。
五心(こころ)をつくして主(しゅ)に信頼(しんらい)せよ、
自分(じぶん)の知識(ちしき)にたよってはならない。
六すべての道(みち)で主(しゅ)を認(みと)めよ、
そうすれば、主(しゅ)はあなたの道(みち)をまっすぐにされる。
七自分(じぶん)を見(み)て賢(かしこ)いと思(おも)ってはならない、
主(しゅ)を恐(おそ)れて、悪(あく)を離(はな)れよ。
八そうすれば、あなたの身(み)を健(すこ)やかにし、
あなたの骨(ほね)に元気(げんき)を与(あた)える。
九あなたの財産(ざいさん)と、

すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。
一〇そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、
あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。
一一わが子よ、主の懲しめを軽んじてはならない、
その戒めをきらってはならない。
一二主は、愛する者を、戒められるからである、
あたかも父がその愛する子を戒めるように。
一三知恵を求めて得る人、
悟りを得る人はさいわいである。
一四知恵によって得るものは、
銀によって得るものにまさり、
その利益は精金よりも良いからである。

一五知恵（ちえ）は宝石（ほうせき）よりも尊（たっと）く、
あなたの望（のぞ）む何物（なにもの）も、これと比（くら）べるに足（た）りない。
一六その右（みぎ）の手（て）には長寿（ちょうじゅ）があり、
左（ひだり）の手（て）には富（とみ）と、誉（ほまれ）がある。
一七その道（みち）は楽（たの）しい道（みち）であり、
その道筋（みちすじ）はみな平安（へいあん）である。
一八知恵（ちえ）は、これを捕（とら）える者（もの）には命（いのち）の木（き）である、
これをしっかり捕（とら）える人（ひと）はさいわいである。
一九主（しゅ）は知恵（ちえ）をもって地（ち）の基（もとい）をすえ、
悟（さと）りをもって天（てん）を定（さだ）められた。
二〇その知識（ちしき）によって海（うみ）はわきいで、雲（くも）は露（つゆ）をそそぐ。
二一わが子（こ）よ、確（たし）かな知恵（ちえ）と、慎（つつし）みとを守（まも）って、

それをあなたの目から離してはならない。
二二それはあなたの魂の命となり
あなたの首の飾りとなる。
二三こうして、あなたは安らかに自分の道を行き、
あなたの足はつまずくことがない。
二四あなたは座しているとき、恐れることはなく、
伏すとき、あなたの眠りはここちよい。
二五あなたはにわかに起る恐怖を恐れることなく、
悪しき者の滅びが来ても、それを恐れることはない。
二六これは、主があなたの信頼する者であり、
あなたの足を守って、
わなに捕われさせられないからである。

二七あなたの手に善をなす力があるならば、
これをなすべき人になすことを
さし控えてはならない。
二八あなたが物を持っている時、その隣り人に向かい、
「去って、また来なさい。
あす、それをあげよう」と言ってはならない。
二九あなたの隣り人がかたわらに安らかに住んでいる時、
これに向かって、悪を計ってはならない。
三〇もし人があなたに悪を行ったのでなければ、
ゆえなく、これと争ってはならない。
三一暴虐な人を、うらやんではならない、
そのすべての道を選んではならない。

三二よこしまな者は主に憎まれるからである、
しかし、正しい者は主に信任される。
三三主の、のろいは悪しき者の家にある、
しかし、正しい人のすまいは主に恵まれる。
三四彼はあざける者をあざけり、
へりくだる者に恵みを与えられる。
三五知恵ある者は、誉を得る、
しかし、愚かな者ははずかしめを得る。

第四章

一子供らよ、父の教を聞き、
悟りを得るために耳を傾けよ。
二わたしは、良い教訓を、あなたがたにさずける。

わたしの教を捨ててはならない。
三わたしもわが父には子であり、
わが母の目には、ひとりのいとし子であった。
四父はわたしを教えて言った、
「わたしの言葉を、心に留め、
わたしの戒めを守って、命を得よ。
五それを忘れることなく、
またわが口の言葉にそむいてはならない、
知恵を得よ、悟りを得よ。
六知恵を捨てるな、それはあなたを守る。
それを愛せよ、それはあなたを保つ。
七知恵の初めはこれである、知恵を得よ、

あなたが何を得るにしても、悟りを得よ。
八それを尊べ、そうすれば、それはあなたを高くあげる、
もしそれをいだくならば、それはあなたを尊くする。
九それはあなたの頭に麗しい飾りを置き、
栄えの冠をあなたに与える」。
一〇わが子よ、聞け、わたしの言葉をうけいれよ、
そうすれば、あなたの命の年は多くなる。
一一わたしは知恵の道をあなたに教え、
正しい道筋にあなたを導いた。
一二あなたが歩くとき、その歩みは妨げられず、
走る時にも、つまずくことはない。
一三教訓をかたくとらえて、離してはならない、

それを守れ、それはあなたの命である。
一四よこしまな者の道に、はいってはならない、
悪しき者の道を歩んではならない。
一五それを避けよ、通ってはならない、
それを離れて進め。
一六彼らは悪を行わなければ眠ることができず、
人をつまずかせなければ、寝ることができず、
一七不正のパンを食らい、暴虐の酒を飲むからである。
一八正しい者の道は、夜明けの光のようだ、
いよいよ輝きを増して真昼となる。
一九悪しき人の道は暗やみのようだ、
彼らは何につまずくかを知らない。

二〇わが子よ、わたしの言葉に心をとめ、
わたしの語ることに耳を傾けよ。
二一それを、あなたの目から離さず、
あなたの心のうちに守れ。
二二それは、これを得る者の命であり、
またその全身を健やかにするからである。
二三油断することなく、あなたの心を守れ、
命の泉は、これから流れ出るからである。
二四曲った言葉をあなたから捨てさり、
よこしまな談話をあなたから遠ざけよ。
二五あなたの目は、まっすぐに正面を見、
あなたのまぶたはあなたの前を、まっすぐに見よ。

二六あなたの足の道に気をつけよ、
そうすれば、あなたのすべての道は安全である。
二七右にも左にも迷い出てはならない、
あなたの足を悪から離れさせよ。

第五章

一わが子よ、わたしの知恵に心をとめ、
わたしの悟りに耳をかたむけよ。
二これは、あなたが慎みを守り、
あなたのくちびるに知識を保つためである。
三遊女のくちびるは蜜をしたたらせ、
その言葉は油よりもなめらかである。
四しかしついには、彼女はにがよもぎのように苦く、

もろ刃のつるぎのように鋭くなる。
五その足は死に下り、
その歩みは陰府の道におもむく。
六彼女はいのちの道に心をとめず、
その道は人を迷わすが、彼女はそれを知らない。
七子供らよ、今わたしの言うことを聞け、
わたしの口の言葉から、離れ去ってはならない。
八あなたの道を彼女から遠く離し、
その家の門に近づいてはならない。
九おそらくはあなたの誉を他人にわたし、
あなたの年を無慈悲な者にわたすに至る。
一〇おそらくは他人があなたの資産によって満たされ、

あなたの労苦は他人の家に行く。
一一そしてあなたの終りが来て、
あなたの身と、からだが滅びるとき、泣き悲しんで、
一二言うであろう、「わたしは教訓をいとい、
心に戒めを軽んじ、
一三教師の声に聞き従わず、
わたしを教える者に耳を傾けず、
一四集まりの中、会衆のうちにあって、
わたしは、破滅に陥りかけた」と。
一五あなたは自分の水ためから水を飲み、
自分の井戸から、わき出す水を飲むがよい。
一六あなたの泉を、外にまきちらし、

水の流れを、ちまたに流してよかろうか。
一七それを自分だけのものとし、
他人を共にあずからせてはならない。
一八あなたの泉に祝福を受けさせ、
あなたの若い時の妻を楽しめ。
一九彼女は愛らしい雌じか、美しいしかのようだ。
いつも、その乳ぶさをもって満足し、
その愛をもって常に喜べ。
二〇わが子よ、どうして遊女に迷い、
みだらな女の胸をいだくのか。
二一人の道は主の目の前にあり、
主はすべて、その行いを見守られる。

二二悪しき者は自分のとがに捕えられ、
自分の罪のなわにつながれる。
二三彼は、教訓がないために死に、
その愚かさの大きいことによって滅びる。

第六章

一わが子よ、あなたがもし
隣り人のために保証人となり、
他人のために手をうって誓ったならば、
二もしあなたのくちびるの言葉によって、わなにかかり、
あなたの口の言葉によって捕えられたならば、
三わが子よ、その時はこうして、おのれを救え、
あなたは隣り人の手に陥ったのだから。

急いで行って、隣り人にひたすら求めよ。
四あなたの目を眠らせず、
あなたのまぶたを、まどろませず、
五かもしかが、かりゅうどの手からのがれるように、
鳥が鳥を取る者の手からのがれるように、
おのれを救え。
六なまけ者よ、ありのところへ行き、
そのすることを見て、知恵を得よ。
七ありは、かしらなく、つかさなく、王もないが、
八夏のうちに食物をそなえ、
刈入れの時に、かてを集める。
九なまけ者よ、いつまで寝ているのか、

いつ目をさまして起きるのか。
一〇しばらく眠り、しばらくまどろみ、
手をこまぬいて、またしばらく休む。
一一それゆえ、貧しさは盗びとのようにあなたに来り、
乏しさは、つわもののようにあなたに来る。
一二よこしまな人、悪しき人は
偽りの言葉をもって行きめぐり、
一三目でめくばせし、足で踏み鳴らし、指で示し、
一四よこしまな心をもって悪を計り、
絶えず争いをおこす。
一五それゆえ、災は、にわかに彼に臨み、
たちまちにして打ち敗られ、助かることはない。

一六主の憎まれるものが六つある、
否、その心に、忌みきらわれるものが七つある。
一七すなわち、高ぶる目、偽りを言う舌、
罪なき人の血を流す手、
一八悪しき計りごとをめぐらす心、
すみやかに悪に走る足、
一九偽りをのべる証人、
また兄弟のうちに争いをおこす人がこれである。
二〇わが子よ、あなたの父の戒めを守り、
あなたの母の教を捨てるな。
二一つねに、これをあなたの心に結び、
あなたの首のまわりにつけよ。

二二これは、あなたが歩（ある）くとき、あなたを導（みちび）き、
あなたが寝（ね）るとき、あなたを守（まも）り、
あなたが目（め）ざめるとき、あなたと語（かた）る。
二三戒（いまし）めはともしびである、教（おしえ）は光（ひかり）である、
教訓（きょうくん）の懲（こら）しめは命（いのち）の道（みち）である。
二四これは、あなたを守（まも）って、悪（わる）い女（おんな）に近（ちか）づかせず、
みだらな女（おんな）の、巧（たく）みな舌（した）に惑（まど）わされぬようにする。
二五彼女（かのじょ）の麗（うるわ）しさを心（こころ）に慕（した）ってはならない、
そのまぶたに捕（とら）えられてはならない。
二六遊女（ゆうじょ）は一塊（いっかい）のパンのために雇（やと）われる、
しかし、みだらな女（おんな）は人（ひと）の尊（たっと）い命（いのち）を求（もと）める。
二七人（ひと）は火（ひ）を、そのふところにいだいて

その着物が焼かれないであろうか。
二八また人は、熱い火を踏んで、
その足が、焼かれないであろうか。
二九その隣の妻と不義を行う者も、それと同じだ。
すべて彼女に触れる者は罰を免れることはできない。
三〇盗びとが飢えたとき、
その飢えを満たすために盗むならば、
人は彼を軽んじないであろうか。
三一もし捕えられたなら、その七倍を償い、
その家の貨財を、ことごとく出さなければならない。
三二女と姦淫を行う者は思慮がない。
これを行う者はおのれを滅ぼし、

三三傷と、はずかしめとを受けて、
その恥をすすぐことができない。
三四ねたみは、その夫を激しく怒らせるゆえ、
恨みを報いるとき、容赦することはない。
三五どのようなあがない物をも顧みず、
多くの贈り物をしても、和らがない。

第七章

一わが子よ、わたしの言葉を守り、
わたしの戒めをあなたの心にたくわえよ。
二わたしの戒めを守って命を得よ、
わたしの教を守ること、ひとみを守るようにせよ。
三これをあなたの指にむすび、

これをあなたの心の碑にしるせ。
四知恵に向かって、「あなたはわが姉妹だ」と言い、
悟りに向かっては、あなたの友と呼べ。
五そうすれば、これはあなたを守って遊女に迷わせず、
言葉巧みな、みだらな女に近づかせない。
六わたしはわが家の窓により、
格子窓から外をのぞいて、
七思慮のない者のうちに、若い者のうちに、
ひとりの知恵のない若者のいるのを見た。
八彼はちまたを過ぎ、女の家に行く曲りかどに近づき、
その家に行く道を、
九たそがれに、よいに、

また夜中に、また暗やみに歩いていった。
一〇見よ、遊女の装いをした陰険な女が彼に会う。
一一この女は、騒がしくて、慎みなく、
その足は自分の家にとどまらず、
一二ある時はちまたにあり、ある時は市場にあり、
すみずみに立って人をうかがう。
一三この女は彼を捕えて口づけし、
恥しらぬ顔で彼に言う、
一四「わたしは酬恩祭をささげなければならなかったが、
きょう、その誓いを果しました。
一五それでわたしはあなたを迎えようと出て、
あなたを尋ね、あなたに会いました。

一六わたしは床（とこ）に美（うつく）しい、しとねと、
エジプトのあや布（ぬの）を敷（し）き、
一七没薬（もつやく）、ろかい、桂皮（けいひ）をもって
わたしの床（とこ）をにおわせました。
一八さあ、わたしたちは夜（よる）が明（あ）けるまで、
情（じょう）をつくし、愛（あい）をかわして楽（たの）しみましょう。
一九夫（おっと）は家（いえ）にいません、
遠（とお）くへ旅立（たびだ）ち、
二〇手（て）に金袋（かねぶくろ）を持（も）って出（で）ました。
満月（まんげつ）になるまでは帰（かえ）りません」と。
二一女（おんな）が多（おお）くの、なまめかしい言葉（ことば）をもって彼（かれ）を惑（まど）わし、
巧（たく）みなくちびるをもって、いざなうと、

二二若(わか)い人(ひと)は直(ただ)ちに女(おんな)に従(したが)った、
あたかも牛(うし)が、ほふり場(ば)に行(い)くように、
雄(お)じかが、すみやかに捕(とら)えられ、
二三ついに、矢(や)がその内臓(ないぞう)を突(つ)き刺(さ)すように、
鳥(とり)がすみやかに網(あみ)にかかるように、
彼(かれ)は自分(じぶん)が命(いのち)を失(うしな)うようになることを知(し)らない。
二四子供(こども)らよ、今(いま)わたしの言(い)うことを聞(き)き、
わが口(くち)の言葉(ことば)に耳(みみ)を傾(かたむ)けよ。
二五あなたの心(こころ)を彼女(かのじょ)の道(みち)に傾(かたむ)けてはならない、
またその道(みち)に迷(まよ)ってはならない。
二六彼女(かのじょ)は多(おお)くの人(ひと)を傷(きず)つけて倒(たお)した、
まことに、彼女(かのじょ)に殺(ころ)された者(もの)は多(おお)い。

二七その家は陰府へ行く道であって、
死のへやへ下って行く。

第八章

一知恵は呼ばわらないのか、
悟りは声をあげないのか。
二これは道のほとりの高い所の頂、
また、ちまたの中に立ち、
三町の入口にあるもろもろの門のかたわら、
正門の入口で呼ばわって言う、
四「人々よ、わたしはあなたがたに呼ばわり、
声をあげて人の子らを呼ぶ。
五思慮のない者よ、悟りを得よ、

愚かな者よ、知恵を得よ。
六聞け、わたしは高貴な事を語り、
わがくちびるは正しい事を語り出す。
七わが口は真実を述べ、
わがくちびるは悪しき事を憎む。
八わが口の言葉はみな正しい、
そのうちに偽りと、よこしまはない。
九これはみな、さとき者の明らかにするところ、
知識を得る者の正しとするところである。
一〇あなたがたは銀を受けるよりも、わたしの教を受けよ、
精金よりも、むしろ知識を得よ。
一一知恵は宝石にまさり、

あなたがたの望むすべての物は、
これと比べるにたりない。
一二知恵であるわたしは悟りをすみかとし、
知識と慎みとをもつ。
一三主を恐れるとは悪を憎むことである。
わたしは高ぶりと、おごりと、悪しき道と、
偽りの言葉とを憎む。
一四計りごとと、確かな知恵とは、わたしにある、
わたしには悟りがあり、わたしには力がある。
一五わたしによって、王たる者は世を治め、
君たる者は正しい定めを立てる。
一六わたしによって、主たる者は支配し、

つかさたる者は地を治める。
一七わたしは、わたしを愛する者を愛する、
わたしをせつに求める者は、わたしに出会う。
一八富と誉とはわたしにあり、
すぐれた宝と繁栄もまたそうである。
一九わたしの実は金よりも精金よりも良く、
わたしの産物は精銀にまさる。
二〇わたしは正義の道、公正な道筋の中を歩み、
二一わたしを愛する者に宝を得させ、
またその倉を満ちさせる。
二二主が昔そのわざをなし始められるとき、
そのわざの初めとして、わたしを造られた。

二三いにしえ、地（ち）のなかった時（とき）、
初（はじ）めに、わたしは立（た）てられた。
二四まだ海（うみ）もなく、また大（おお）いなる水（みず）の泉（いずみ）もなかった時（とき）、
わたしはすでに生（うま）れ、
二五山（やま）もまだ定（さだ）められず、丘（おか）もまだなかった時（とき）、
わたしはすでに生（うま）れた。
二六すなわち神（かみ）がまだ地（ち）をも野（の）をも、
地（ち）のちりのもとをも造（つく）られなかった時（とき）である。
二七彼（かれ）が天（てん）を造（つく）り、海（うみ）のおもてに、大空（おおぞら）を張（は）られたとき、
わたしはそこにあった。
二八彼（かれ）が上（うえ）に空（そら）を堅（かた）く立（た）たせ、
淵（ふち）の泉（いずみ）をつよく定（さだ）め、

二九海(うみ)にその限界(げんかい)をたて、
水(みず)にその岸(きし)を越(こ)えないようにし、
また地(ち)の基(もとい)を定(さだ)められたとき、
三〇わたしは、そのかたわらにあって、名匠(めいしょう)となり、
日々(ひび)に喜(よろこ)び、常(つね)にその前(まえ)に楽(たの)しみ、
三一その地(ち)で楽(たの)しみ、
また世(よ)の人(ひと)を喜(よろこ)んだ。
三二それゆえ、子供(こども)らよ、今(いま)わたしの言(い)うことを聞(き)け、
わたしの道(みち)を守(まも)る者(もの)はさいわいである。
三三教訓(きょうくん)を聞(き)いて、知恵(ちえ)を得(え)よ、
これを捨(す)ててはならない。
三四わたしの言(い)うことを聞(き)き、

日々わたしの門のかたわらでうかがい、
わたしの戸口の柱のわきで待つ人はさいわいである。
三五それは、わたしを得る者は命を得、
主から恵みを得るからである。
三六わたしを失う者は自分の命をそこなう、
すべてわたしを憎む者は死を愛する者である」。

第九章

一知恵は自分の家を建て、
その七つの柱を立て、
二獣をほふり、酒を混ぜ合わせて、
ふるまいを備え、
三はしためをつかわして、

町の高い所で呼ばわり言わせた、
四「思慮のない者よ、ここに来れ」と。
また、知恵のない者に言う、
五「来て、わたしのパンを食べ、
わたしの混ぜ合わせた酒をのみ、
六思慮のないわざを捨てて命を得、
悟りの道を歩め」と。
七あざける者を戒める者は、自ら恥を得、
悪しき者を責める者は自ら傷を受ける。
八あざける者を責めるな、
おそらく彼はあなたを憎むであろう。
知恵ある者を責めよ、彼はあなたを愛する。

九 知恵ある者に教訓を授けよ、
彼はますます知恵を得る。
正しい者を教えよ、彼は学に進む。
一〇 主を恐れることは知恵のもとである、
聖なる者を知ることは、悟りである。
一一 わたしによって、あなたの日は多くなり、
あなたの命の年は増す。
一二 もしあなたに知恵があるならば、
あなた自身のために知恵があるのである。
もしあなたがあざけるならば、
あなたひとりがその責めを負うことになる。
一三 愚かな女は、騒がしく、みだらで、恥を知らない。

一四彼女はその家の戸口に座し、
町の高い所にある座にすわり、
一五道を急ぎ行き来の人を招いて言う、
一六「思慮のない者よ、ここに来れ」と。
また知恵のない人に向かってこれに言う、
一七「盗んだ水は甘く、
ひそかに食べるパンはうまい」と。
一八しかしその人は、死の影がそこにあることを知らず、
彼女の客は陰府の深みにおることを知らない。

第一〇章

一ソロモンの箴言。
知恵ある子は父を喜ばせ、

愚かな子は母の悲しみとなる。
二 不義の宝は益なく、
正義は人を救い出して、死を免れさせる。
三 主は正しい人を飢えさせず、
悪しき者の欲望をくじかれる。
四 手を動かすことを怠る者は貧しくなり、
勤め働く者の手は富を得る。
五 夏のうちに集める者は賢い子であり、
刈入れの時に眠る者は恥をきたらせる子である。
六 正しい者のこうべには祝福があり、
悪しき者の口は暴虐を隠す。
七 正しい者の名はほめられ、

悪しき者の名は朽ちる。
八 心のさとき者は戒めを受ける、
むだ口をたたく愚かな者は滅ぼされる。
九 まっすぐに歩む者の歩みは安全である、
しかし、その道を曲げる者は災にあう。
一〇 目で、めくばせする者は憂いをおこし、
あからさまに、戒める者は平和をきたらせる。
一一 正しい者の口は命の泉である、
悪しき者の口は暴虐を隠す。
一二 憎しみは、争いを起し、
愛はすべてのとがをおおう。
一三 さとき者のくちびるには知恵があり、

知恵のない者の背にはむちがある。
一四知恵ある者は知識をたくわえる、
愚かな者のむだ口は、今にも滅びをきたらせる。
一五富める者の宝は、その堅き城であり、
貧しい者の乏しきは、その滅びである。
一六正しい者の受ける賃銀は命に導き、
悪しき者の利得は罪に至る。
一七教訓を守る者は命の道にあり、
懲しめを捨てる者は道をふみ迷う。
一八憎しみを隠す者には偽りのくちびるがあり、
そしりを口に出す者は愚かな者である。
一九言葉が多ければ、とがを免れない、

自分のくちびるを制する者は知恵がある。
二〇正しい者の舌は精銀である、
悪しき者の心は価値が少ない。
二一正しい者のくちびるは多くの人を養い、
愚かな者は知恵がなくて死ぬ。
二二主の祝福は人を富ませる、
主はこれになんの悲しみをも加えない。
二三愚かな者は、戯れ事のように悪を行う、
さとき人には賢い行いが楽しみである。
二四悪しき者の恐れることは自分に来り、
正しい者の願うことは与えられる。
二五あらしが通りすぎる時、

悪(あ)しき者(もの)は、もはや、いなくなり、
正(ただ)しい者(もの)は永久(えいきゅう)に堅(かた)く立(た)てられる。
二六なまけ者(もの)は、これをつかわす者(もの)にとっては、
酢(す)が歯(は)をいため、煙(けむり)が目(め)を悩(なや)ますようなものだ。
二七主(しゅ)を恐(おそ)れることは人(ひと)の命(いのち)の日(ひ)を多(おお)くする、
悪(あ)しき者(もの)の年(とし)は縮(ちぢ)められる。
二八正(ただ)しい者(もの)の望(のぞ)みは喜(よろこ)びに終(お)わり、
悪(あ)しき者(もの)の望(のぞ)みは絶(た)える。
二九主(しゅ)は、まっすぐに歩(あゆ)む者(もの)には城(しろ)であり、
悪(あく)を行(おこな)う者(もの)には滅(ほろ)びである。
三〇正(ただ)しい者(もの)はいつまでも動(うご)かされることはない、
悪(あ)しき者(もの)は、地(ち)に住(す)むことができない。

三一 正しい者の口は知恵をいだし、
偽りの舌は抜かれる。
三二 正しい者のくちびるは喜ばるべきことをわきまえ、
悪しき者の口は偽りを語る。

第一一章

一 偽りのはかりは主に憎まれ、
正しいふんどうは彼に喜ばれる。
二 高ぶりが来れば、恥もまた来る、
へりくだる者には知恵がある。
三 正しい者の誠実はその人を導き、
不信実な者のよこしまはその人を滅ぼす。
四 宝は怒りの日に益なく、

正義は人を救い出して、死を免れさせる。
五誠実な者は、その正義によって、
その道をまっすぐにせられ、
悪しき者は、その悪によって倒れる。
六正しい者はその正義によって救われ、
不信実な者は自分の欲によって捕えられる。
七悪しき者は死ぬとき、その望みは絶え、
不信心な者の望みもまた絶える。
八正しい者は、悩みから救われ、
悪しき者は代ってそれに陥る。
九不信心な者はその口をもって隣り人を滅ぼす、
正しい者は知識によって救われる。

一〇正しい者が、しあわせになれば、その町は喜び、
悪しき者が滅びると、喜びの声がおこる。
一一町は正しい者の祝福によって、高くあげられ、
悪しき者の口によって、滅ぼされる。
一二隣り人を侮る者は知恵がない、
さとき人は口をつぐむ。
一三人のよしあしを言いあるく者は秘密をもらす、
心の忠信なる者は事を隠す。
一四指導者がなければ民は倒れ、
助言者が多ければ安全である。
一五他人のために保証をする者は苦しみをうけ、
保証をきらう者は安全である。

一六しとやかな女（おんな）は、誉（ほまれ）を得（え）、
強暴（きょうぼう）な男（おとこ）は富（とみ）を得（え）る。
一七いつくしみある者（もの）はおのれ自身（じしん）に益（えき）を得（え）、
残忍（ざんにん）な者（もの）はおのれの身（み）をそこなう。
一八悪（あ）しき者（もの）の得（え）る報（むく）いはむなしく、
正義（せいぎ）を播（ま）く者（もの）は確（たし）かな報（むく）いを得（え）る。
一九正義（せいぎ）を堅（かた）く保（たも）つ者（もの）は命（いのち）に至（いた）り、
悪（あく）を追（お）い求（もと）める者（もの）は死（し）を招（まね）く。
二〇心（こころ）のねじけた者（もの）は主（しゅ）に憎（にく）まれ、
まっすぐに道（みち）を歩（あゆ）む者（もの）は彼（かれ）に喜（よろこ）ばれる。
二一確（たし）かに、悪人（あくにん）は罰（ばつ）を免（まぬか）れない、
しかし正（ただ）しい人（ひと）は救（すくい）を得（え）る。

二二美しい女の慎みがないのは、
金の輪の、ぶたの鼻にあるようだ。
二三正しい者の願いは、すべて良い結果を得、
悪しき者の望みは怒りに至る。
二四施し散らして、なお富を増す人があり、
与えるべきものを惜しんで、
かえって貧しくなる者がある。
二五物惜しみしない者は富み、
人を潤す者は自分も潤される。
二六穀物を、しまい込んで売らない者は民にのろわれる、
それを売る者のこうべには祝福がある。
二七善を求める者は恵みを得る、

悪を求める者には悪が来る。
二八自分の富を頼む者は衰える、
正しい者は木の青葉のように栄える。
二九自分の家族を苦しめる者は風を所有とする、
愚かな者は心のさとき者のしもべとなる。
三〇正しい者の結ぶ実は命の木である、
不法な者は人の命をとる。
三一もし正しい者がこの世で罰せられるならば、
悪しき者と罪びととは、なおさらである。

第一二章

一戒めを愛する人は知識を愛する、
懲しめを憎む者は愚かである。

二善人は主の恵みをうけ、
悪い計りごとを設ける人は主に罰せられる。
三人は悪をもって堅く立つことはできない、
正しい人の根は動くことはない。
四賢い妻はその夫の冠である、
恥をこうむらせる妻は
夫の骨に生じた腐れのようなものである。
五正しい人の考えは公正である、
悪しき者の計ることは偽りである。
六悪しき者の言葉は、人の血を流そうとうかがう、
正しい人の口は人を救う。
七悪しき者は倒されて、うせ去る、

正しい人の家は堅く立つ。
八人はその悟りにしたがって、ほめられ、
心のねじけた者は、卑しめられる。
九身分の低い人でも自分で働く者は、
みずから高ぶって食に乏しい者にまさる。
一〇正しい人はその家畜の命を顧みる、
悪しき者は残忍をもって、あわれみとする。
一一自分の田地を耕す者は食糧に飽きる、
無益な事に従う者は知恵がない。
一二悪しき者の堅固なやぐらは崩壊する、
正しい人の根は堅く立つ。
一三悪人はくちびるのとがによって、わなに陥る、

しかし正しい人は悩みをのがれる。
一四人はその口の実によって、幸福に満ち足り、
人の手のわざは、その人の身に帰る。
一五愚かな人の道は、自分の目に正しく見える、
しかし知恵ある者は勧めをいれる。
一六愚かな人は、すぐに怒りをあらわす、
しかし賢い人は、はずかしめをも気にとめない。
一七真実を語る人は正しい証言をなし、
偽りの証人は偽りを言う。
一八つるぎをもって刺すように、
みだりに言葉を出す者がある、
しかし知恵ある人の舌は人をいやす。

一九真実を言うくちびるは、いつまでも保つ、
偽りを言う舌は、ただ、まばたきの間だけである。
二〇悪をたくらむ者の心には欺きがあり、
善をはかる人には喜びがある。
二一正しい人にはなんの害悪も生じない、
しかし悪しき者は災をもって満たされる。
二二偽りを言うくちびるは主に憎まれ、
真実を行う者は彼に喜ばれる。
二三さとき人は知識をかくす、
しかし愚かな者は自分の愚かなことをあらわす。
二四勤め働く者の手はついに人を治める、
怠る者は人に仕えるようになる。

二五心に憂いがあればその人をかがませる、
しかし親切な言葉はその人を喜ばせる。
二六正しい人は悪を離れ去る、
しかし悪しき者は自ら道に迷う。
二七怠る者は自分の獲物を捕えない、
しかし勤め働く人は尊い宝を獲る。
二八正義の道には命がある、
しかし誤りの道は死に至る。

第一三章

一知恵ある子は父の教訓をきく、
あざける者は、懲しめをきかない。
二善良な人はその口の実によって、幸福を得る、

不信実(ふしんじつ)な者(もの)の願(ねが)いは、暴虐(ぼうぎゃく)である。
三口(くち)を守(まも)る者(もの)はその命(いのち)を守(まも)る、
くちびるを大(おお)きく開(ひら)く者(もの)には滅(ほろ)びが来(く)る。
四なまけ者(もの)の心(こころ)は、願(ねが)い求(もと)めても、何(なに)も得(え)ない、
しかし勤(つと)め働(はたら)く者(もの)の心(こころ)は豊(ゆた)かに満(み)たされる。
五正(ただ)しい人(ひと)は偽(いつわ)りを憎(にく)む、
しかし悪(あ)しき人(ひと)は恥(は)ずべく、忌(い)まわしくふるまう。
六正義(せいぎ)は道(みち)をまっすぐ歩(あゆ)む者(もの)を守(まも)り、
罪(つみ)は悪(あ)しき者(もの)を倒(たお)す。
七富(と)んでいると偽(いつわ)って、何(なに)も持(も)たない者(もの)がいる、
貧(まず)しいと偽(いつわ)って、多(おお)くの富(とみ)を持(も)つ者(もの)がいる。
八人(ひと)の富(とみ)はその命(いのち)をあがなう、

しかし貧(まず)しい者(もの)にはあがなうべき富(とみ)がない。
九正(ただ)しい者(もの)の光(ひかり)は輝(かがや)き、
悪(あ)しき者(もの)のともしびは消(け)される。
一〇高(たか)ぶりはただ争(あらそ)いを生(しょう)じる、
勧告(かんこく)をきく者(もの)は知恵(ちえ)がある。
一一急(いそ)いで得(え)た富(とみ)は減(へ)る、
少(すこ)しずつたくわえる者(もの)はそれを増(ま)すことができる。
一二望(のぞ)みを得(え)ることが長(なが)びくときは、心(こころ)を悩(なや)ます、
願(ねが)いがかなうときは、命(いのち)の木(き)を得(え)たようだ。
一三み言葉(ことば)を軽(かろ)んじる者(もの)は滅(ほろ)ぼされ、
戒(いまし)めを重(おも)んじる者(もの)は報(むく)いを得(え)る。
一四知恵(ちえ)ある人(ひと)の教(おしえ)は命(いのち)の泉(いずみ)である、

これによって死のわなをのがれることができる。
一五善良な賢い者は恵みを得る、
しかし、不信実な者の道は滅びである。
一六おおよそ、さとき者は知識によって事をおこない、
愚かな者は自分の愚を見せびらかす。
一七悪しき使者は人を災におとしいれる、
しかし忠実な使者は人を救う。
一八貧乏と、はずかしめとは教訓を捨てる者に来る、
しかし戒めを守る者は尊ばれる。
一九願いがかなえば、心は楽しい、
愚かな者は悪を捨てることをきらう。
二〇知恵ある者とともに歩む者は知恵を得る。

愚かな者の友となる者は害をうける。
二一 災は罪びとを追い、
正しい者は良い報いを受ける。
二二 善良な人はその嗣業を子孫にのこす、
しかし罪びとの富は正しい人のためにたくわえられる。
二三 貧しい人の新田は多くの食糧を産する、
しかし不正によれば押し流される。
二四 むちを加えない者はその子を憎むのである、
子を愛する者は、つとめてこれを懲らしめる。
二五 正しい者は食べてその食欲を満たす、
しかし悪しき者の腹は満たされない。

第一四章

一知恵(ちえ)はその家(いえ)を建(た)て、
愚(おろ)かさは自分(じぶん)の手(て)でそれをこわす。
二まっすぐに歩(あゆ)む者(もの)は主(しゅ)を恐(おそ)れる、
曲(まが)って歩(あゆ)む者(もの)は主(しゅ)を侮(あなど)る。
三愚(おろ)かな者(もの)の言葉(ことば)は自分(じぶん)の背(せ)にむちを当(あ)てる、
知恵(ちえ)ある者(もの)のくちびるはその身(み)を守(まも)る。
四牛(うし)がなければ穀物(こくもつ)はない、
牛(うし)の力(ちから)によって農作物(のうさくもつ)は多(おお)くなる。
五真実(しんじつ)な証人(しょうにん)はうそをいわない、
偽(いつわ)りの証人(しょうにん)はうそをつく。
六あざける者(もの)は知恵(ちえ)を求(もと)めても得(え)られない、
さとき者(もの)は知識(ちしき)を得(え)ることがたやすい。

七愚かな者の前を離れ去れ、
そこには知識の言葉がないからである。
八さとき者の知恵は自分の道をわきまえることにあり、
愚かな者の愚かは、欺くことにある。
九神は悪しき者をあざけられる、
正しい者は、その恵みを受ける。
一〇心の苦しみは心みずからが知る、
その喜びには他人はあずからない。
一一悪しき者の家は滅ぼされ、
正しい者の幕屋は栄える。
一二人が見て自ら正しいとする道でも、
その終りはついに死に至る道となるものがある。

一三笑う時にも心に悲しみがあり、
喜びのはてに憂いがある。
一四心のもとれる者はそのしわざの実を刈り取り、
善良な人もまたその行いの実を刈り取る。
一五思慮のない者はすべてのことを信じる、
さとき者は自分の歩みを慎む。
一六知恵ある者は用心ぶかく、悪を離れる、
愚かな者は高ぶって用心しない。
一七怒りやすい者は愚かなことを行い、
賢い者は忍耐強い。
一八思慮のない者は愚かなことを自分のものとする、
さとき者は知識をもって冠とする。

一九悪人は善人の前にひれ伏し、
悪しき者は正しい者の門にひれ伏す。
二〇貧しい者はその隣にさえも憎まれる、
しかし富める者は多くの友をもつ。
二一隣り人を卑しめる者は罪びとである、
貧しい人をあわれむ者はさいわいである。
二二悪を計る者はおのれを誤るではないか、
善を計る者にはいつくしみと、まこととがある。
二三すべての勤労には利益がある、
しかし口先だけの言葉は貧乏をきたらせるだけだ。
二四知恵ある者の冠はその知恵である、
愚かな者の花の冠はただ愚かさである。

二五まことの証人は人の命を救う、
偽りを吐く者は裏切者である。
二六主を恐れることによって人は安心を得、
その子らはのがれ場を得る。
二七主を恐れることは命の泉である、
人を死のわなからのがれさせる。
二八王の栄えは民の多いことにあり、
君の滅びは民を失うことにある。
二九怒りをおそくする者は大いなる悟りがあり、
気の短い者は愚かさをあらわす。
三〇穏やかな心は身の命である、
しかし興奮は骨を腐らせる。

三一 貧（まず）しい者（もの）をしえたげる者（もの）はその造（つく）り主（ぬし）を侮（あなど）る、
乏（とぼ）しい者（もの）をあわれむ者（もの）は、主（しゅ）をうやまう。
三二 悪（あ）しき者（もの）はその悪（あ）しき行（おこな）いによって滅（ほろ）ぼされ、
正（ただ）しい者（もの）はその正（ただ）しきによって、のがれ場（ば）を得（え）る。
三三 知恵（ちえ）はさとき者（もの）の心（こころ）にとどまり、
愚（おろ）かな者（もの）の心（こころ）に知（し）られない。
三四 正義（せいぎ）は国（くに）を高（たか）くし、
罪（つみ）は民（たみ）をはずかしめる。
三五 賢（かしこ）いしもべは王（おう）の恵（めぐ）みをうけ、
恥（はじ）をきたらす者（もの）はその怒（いか）りにあう。

第一五章

一 柔（やわら）かい答（こたえ）は憤（いきどお）りをとどめ、

激しい言葉は怒りをひきおこす。
二知恵ある者の舌は知識をわかち与え、
愚かな者の口は愚かを吐き出す。
三主の目はどこにでもあって、
悪人と善人とを見張っている。
四優しい舌は命の木である、
乱暴な言葉は魂を傷つける。
五愚かな者は父の教訓を軽んじる、
戒めを守る者は賢い者である。
六正しい者の家には多くの宝がある、
悪しき者の所得には煩いがある。
七知恵ある者のくちびるは知識をひろめる、

愚かな者の心はそうでない。
八悪しき者の供え物は主に憎まれ、
正しい者の祈は彼に喜ばれる。
九悪しき者の道は主に憎まれ、
正義を求める者は彼に愛せられる。
一〇道を捨てる者には、きびしい懲しめがあり、
戒めを憎む者は死に至る。
一一陰府と滅びとは主の目の前にあり、
人の心はなおさらである。
一二あざける者は戒められることを好まない、
また知恵ある者に近づかない。
一三心に楽しみがあれば顔色も喜ばしい、

心に憂いがあれば気はふさぐ。
一四さとき者の心は知識をたずね、
愚かな者の口は愚かさを食物とする。
一五悩んでいる者の日々はことごとくつらく、
心の楽しい人は常に宴会をもつ。
一六少しの物を所有して主を恐れるのは、
多くの宝をもって苦労するのにまさる。
一七野菜を食べて互に愛するのは、
肥えた牛を食べて互に憎むのにまさる。
一八憤りやすい者は争いをおこし、
怒りをおそくする者は争いをとどめる。
一九なまけ者の道には、いばらがはえしげり、

正(ただ)しい者(もの)の道(みち)は平(たい)らかである。
二〇知恵(ちえ)ある子(こ)は父(ちち)を喜(よろこ)ばせる、
愚(おろ)かな人(ひと)はその母(はは)を軽(かろ)んじる。
二一無知(むち)な者(もの)は愚(おろ)かなことを喜(よろこ)び、
さとき者(もの)はまっすぐに歩(あゆ)む。
二二相(あい)はかることがなければ、計画(けいかく)は破(やぶ)れる、
はかる者(もの)が多(おお)ければ、それは必(かなら)ず成(な)る。
二三人(ひと)は口(くち)から出(で)る好(この)ましい答(こたえ)によって喜(よろこ)びを得(え)る、
時(とき)にかなった言葉(ことば)は、いかにも良(よ)いものだ。
二四知恵(ちえ)ある人(ひと)の道(みち)は上(のぼ)って命(いのち)に至(いた)る、
こうしてその人(ひと)は下(した)にある陰府(よみ)を離(はな)れる。
二五主(しゅ)は高(たか)ぶる者(もの)の家(いえ)を滅(ほろ)ぼし、

やもめの地境(じざかい)を定(さだ)められる。
二六悪人(あくにん)の計(はか)りごとは主(しゅ)に憎(にく)まれ、
潔白(けっぱく)な人(ひと)の言葉(ことば)は彼(かれ)に喜(よろこ)ばれる。
二七不正(ふせい)な利(り)をむさぼる者(もの)はその家(いえ)を煩(わず)らわせる、
まいないを憎(にく)む者(もの)は生(い)きながらえる。
二八正(ただ)しい者(もの)の心(こころ)は答(こた)えるべきことを考(かんが)える、
悪(あ)しき者(もの)の口(くち)は悪(あく)を吐(は)き出(だ)す。
二九主(しゅ)は悪(あ)しき者(もの)に遠(とお)ざかり、正(ただ)しい者(もの)の祈(いの)りを聞(き)かれる。
三〇目(め)の光(ひかり)は心(こころ)を喜(よろこ)ばせ、
よい知(し)らせは骨(ほね)を潤(うるお)す。
三一ためになる戒(いまし)めを聞(き)く耳(みみ)をもつ者(もの)は、
知恵(ちえ)ある者(もの)の中(なか)にとどまる。

三二 教訓を捨てる者はおのれの命を軽んじ、
戒めを重んじる者は悟りを得る。
三三 主を恐れることは知恵の教訓である、
謙遜は、栄誉に先だつ。

第一六章

一 心にはかることは人に属し、
舌の答は主から出る。
二 人の道は自分の目にことごとく潔しと見える、
しかし主は人の魂をはかられる。
三 あなたのなすべき事を主にゆだねよ、
そうすれば、あなたの計るところは必ず成る。
四 主はすべての物をおのおのその用のために造り、

悪しき人をも災の日のために造られた。
五すべて心に高ぶる者は主に憎まれる、
確かに、彼は罰を免れない。
六いつくしみとまことによって、とがはあがなわれる、
主を恐れることによって、人は悪を免れる。
七人の道が主を喜ばせる時、
主はその人の敵をもその人と和らがせられる。
八正義によって得たわずかなものは、
不義によって得た多くの宝にまさる。
九人は心に自分の道を考え計る、
しかし、その歩みを導く者は主である。
一〇王のくちびるには神の決定がある、

さばきをするとき、その口に誤りがない。
一一 正しいはかりと天びんとは主のものである、
袋にあるふんどうもすべて彼の造られたものである。
一二 悪を行うことは王の憎むところである、
その位が正義によって堅く立っているからである。
一三 正しいくちびるは王に喜ばれる、
彼は正しい事を言う者を愛する。
一四 王の怒りは死の使者である、
知恵ある人はこれをなだめる。
一五 王の顔の光には命がある、
彼の恵みは春雨をもたらす雲のようだ。
一六 知恵を得るのは金を得るのにまさる、

悟りを得るのは銀を得るよりも望ましい。
一七悪を離れることは正しい人の道である、
自分の道を守る者はその魂を守る。
一八高ぶりは滅びにさきだち、
誇る心は倒れにさきだつ。
一九へりくだって貧しい人々と共におるのは、
高ぶる者と共にいて、獲物を分けるにまさる。
二〇慎んで、み言葉をおこなう者は栄える、
主に寄り頼む者はさいわいである。
二一心に知恵ある者はさとき者ととなえられる、
くちびるが甘ければ、
その教に人を説きつける力を増す。

二二知恵(ちえ)はこれを持つ者(もの)に命(いのち)の泉(いずみ)となる、
しかし、愚(おろ)かさは愚(おろ)かな者(もの)の受ける懲(こら)しめである。
二三知恵(ちえ)ある者(もの)の心(こころ)はその言(い)うところを賢(かしこ)くし、
またそのくちびるに人(ひと)を説(と)きつける力(ちから)を増(ま)す。
二四ここちよい言葉(ことば)は蜂蜜(はちみつ)のように、
魂(たましい)に甘(あま)く、からだを健(すこ)やかにする。
二五人(ひと)が見(み)て自分(じぶん)で正(ただ)しいとする道(みち)があり、
その終(おわ)りはついに死(し)にいたる道(みち)となるものがある。
二六ほねおる者(もの)は飲食(いんしょく)のためにほねおる、
その口(くち)が自分(じぶん)に迫(せま)るからである。
二七よこしまな人(ひと)は悪(あく)を企(くわだ)てる、
そのくちびるには激(はげ)しい火(ひ)のようなものがある。

二八 偽(いつわ)る者(もの)は争(あらそ)いを起(おこ)し、
つげ口(ぐち)する者(もの)は親(した)しい友(とも)を離(はな)れさせる。
二九 しえたげる者(もの)はその隣(となり)人(びと)をいざない、
これを良(よ)くない道(みち)に導(みちび)く。
三〇 めくばせする者(もの)は悪(あく)を計(はか)り、
くちびるを縮(ちぢ)める者(もの)は悪事(あくじ)をなし遂(と)げる。
三一 しらがは栄(さか)えの冠(かんむり)である、
正(ただ)しく生(い)きることによってそれが得(え)られる。
三二 怒(いか)りをおそくする者(もの)は勇士(ゆうし)にまさり、
自分(じぶん)の心(こころ)を治(おさ)める者(もの)は城(しろ)を攻(せ)め取(と)る者(もの)にまさる。
三三 人(ひと)はくじをひく、
しかし事(こと)を定(さだ)めるのは全(まった)く主(しゅ)のことである。

第一七章

一平穏であって、
ひとかたまりのかわいたパンのあるのは、
争いがあって、食物の豊かな家にまさる。
二賢いしもべは身持の悪いむすこを治め、
かつ、その兄弟たちの中にあって、
資産の分け前を獲る。
三銀を試みるものはるつぼ、金を試みるものは炉、
人の心を試みるものは主である。
四悪を行う者は偽りのくちびるに聞き、
偽りをいう者は悪しき舌に耳を傾ける。
五貧しい者をあざける者はその造り主を侮る、
人の災を喜ぶ者は罰を免れない。

六孫(まご)は老人(ろうじん)の冠(かんむり)である、
父(ちち)は子(こ)の栄(さか)えである。
七すぐれた言葉(ことば)は愚(おろ)かな者(もの)には似合(にあ)わない、
まして偽(いつわ)りを言(い)うくちびるは
君(きみ)たる者(もの)には似合(にあ)わない。
八まいないはこれを贈(おく)る人(ひと)の目(め)には幸運(こううん)の玉(たま)のようだ、
その向(む)かう所(ところ)、どこでも彼(かれ)は栄(さか)える。
九愛(あい)を追(お)い求(もと)める人(ひと)は人(ひと)のあやまちをゆるす、
人(ひと)のことを言(い)いふらす者(もの)は友(とも)を離(はな)れさせる。
一〇一度(ど)の戒(いまし)めがさとき人(ひと)に徹(てっ)するのは、
百度(ど)の懲(こら)しめが愚(おろ)かな人(ひと)に徹(てっ)するよりも深(ふか)い。
一一悪(あ)しき者(もの)はただ、そむく事(こと)のみを求(もと)める、

それゆえ、彼に向かっては残忍な使者がつかわされる。
一二 愚かな者が愚かな事をするのに会うよりは、
子をとられた雌ぐまに会うほうがよい。
一三 悪をもて善に報いる者は、
悪がその家を離れることがない。
一四 争いの初めは水がもれるのに似ている、
それゆえ、けんかの起らないうちにそれをやめよ。
一五 悪しき者を正しいとする者、正しい者を悪いとする者、
この二つの者はともに主に憎まれる。
一六 愚かな者はすでに心がないのに、
どうして知恵を買おうとして
手にその代金を持っているのか。

一七友はいずれの時にも愛する、
兄弟はなやみの時のために生れる。
一八知恵のない人は手をうって、
その隣り人の前で保証をする。
一九争いを好む者は罪を好む、
その門を高くする者は滅びを求める。
二〇曲った心の者はさいわいを得ない、
みだりに舌をもって語る者は災に陥る。
二一愚かな子を生む者は嘆きを得る、
愚か者の父は喜びを得ない。
二二心の楽しみは良い薬である、
たましいの憂いは骨を枯らす。

二三悪しき者は人のふところからまいないを受けて、
さばきの道をまげる。
二四さとき者はその顔を知恵にむける、
しかし、愚かな者は目を地の果にそそぐ。
二五愚かな子はその父の憂いである、
またこれを産んだ母の痛みである。
二六正しい人を罰するのはよくない、
尊い人を打つのは悪い。
二七言葉を少なくする者は知識のある者、
心の冷静な人はさとき人である。
二八愚かな者も黙っているときは、知恵ある者と思われ、
そのくちびるを閉じている時は、さとき者と思われる。

第一八章

一 人(ひと)と交(まじ)わりをしない者(もの)は口実(こうじつ)を捜(さが)し、
すべてのよい考(かんが)えに激(はげ)しく反対(はんたい)する。
二 愚(おろ)かな者(もの)は悟(さと)ることを喜(よろこ)ばず、
ただ自分(じぶん)の意見(いけん)を言(い)い表(あら)わすことを喜(よろこ)ぶ。
三 悪(あ)しき者(もの)が来(く)ると、卑(いや)しめもまた来(く)る、
不名誉(ふめいよ)が来(く)ると、はずかしめも共(とも)にくる。
四 人(ひと)の口(くち)の言葉(ことば)は深(ふか)い水(みず)のようだ、
知恵(ちえ)の泉(いずみ)は、わいて流(なが)れる川(かわ)である。
五 悪(あ)しき者(もの)をえこひいきすることは良(よ)くない、
正(ただ)しい者(もの)をさばいて、悪(あ)しき者(もの)とすることも良(よ)くない。
六 愚(おろ)かな者(もの)のくちびるは争(あらそ)いを起(おこ)し、
その口(くち)はむち打(う)たれることを招(まね)く。

七愚かな者の口は自分の滅びとなり、
そのくちびるは自分を捕えるわなとなる。
八人のよしあしをいう者の言葉は
おいしい食物のようで、腹の奥にしみこむ。
九その仕事を怠る者は、滅ぼす者の兄弟である。
一〇主の名は堅固なやぐらのようだ、
正しい者はその中に走りこんで救を得る。
一一富める者の富はその堅き城である、
それは高き城壁のように彼を守る。
一二人の心の高ぶりは滅びにさきだち、
謙遜は栄誉にさきだつ。
一三事をよく聞かないで答える者は、

愚かであって恥をこうむる。
一四人の心は病苦をも忍ぶ、
しかし心の痛むときは、だれがそれに耐えようか。
一五さとき者の心は知識を得、
知恵ある者の耳は知識を求める。
一六人の贈り物は、その人のために道をひらき、
また尊い人の前に彼を導く。
一七先に訴え出る者は正しいように見える、
しかしその訴えられた人が来て、それを調べて、事は明らかになる。
一八くじは争いをとどめ、
かつ強い争い相手の間を決定する。
一九助けあう兄弟は堅固な城のようだ、

しかし争(あらそ)いは、やぐらの貫(かん)の木(き)のようだ。
二〇人(ひと)は自分(じぶん)の言葉(ことば)の結(むす)ぶ実(み)によって、
満(み)ち足(た)り、そのくちびるの産物(さんぶつ)によって自(みずか)ら飽(あ)きる。
二一死(し)と生(せい)とは舌(した)に支配(しはい)される、
これを愛(あい)する者(もの)はその実(み)を食(た)べる。
二二妻(つま)を得(え)る者(もの)は、良(よ)き物(もの)を得(え)る、
かつ主(しゅ)から恵(めぐ)みを与(あた)えられる。
二三貧(まず)しい者(もの)は、あわれみを請(こ)い、
富(と)める者(もの)は、はげしい答(こたえ)をする。
二四世(よ)には友(とも)らしい見(み)せかけの友(とも)がある、
しかし兄弟(きょうだい)よりもたのもしい友(とも)もある。

第一九章

一正しく歩む貧しい者は、
曲ったことを言う愚かな者にまさる。
二人が知識のないのは良くない、
足で急ぐ者は道に迷う。
三人は自分の愚かさによって道につまずき、
かえって心のうちに主をうらむ。
四富は多くの新しい友を作る、
しかし貧しい人はその友に捨てられる。
五偽りの証人は罰を免れない、
偽りをいう者はのがれることができない。
六気前のよい人にこびる者は多い、
人はみな贈り物をする人の友となる。

七貧(まず)しい者(もの)はその兄弟(きょうだい)すらもみなこれを憎(にく)む、
ましてその友(とも)はこれに遠(とお)ざからないであろうか。
言葉(ことば)をかけてこれを呼(よ)んでも、
去(さ)って帰(かえ)らないのである。
八知恵(ちえ)を得(え)る者(もの)は自分(じぶん)の魂(たましい)を愛(あい)し、
悟(さと)りを保(たも)つ者(もの)は幸(さいわい)を得(え)る。
九偽(いつわ)りの証人(しょうにん)は罰(ばつ)を免(まぬか)れない、
偽(いつわ)りをいう者(もの)は滅(ほろ)びる。
一〇愚(おろ)かな者(もの)が、ぜいたくな暮(くら)しをするのは、
ふさわしいことではない、
しもべたる者(もの)が、君(きみ)たる者(もの)を治(おさ)めるなどは、
なおさらである。
一一悟(さと)りは人(ひと)に怒(いか)りを忍(しの)ばせる、

あやまちをゆるすのは人の誉である。
一二王の怒りは、ししのほえるようであり、
その恵みは草の上におく露のようである。
一三愚かな子はその父の災である、
妻の争うのは、雨漏りの絶えないのとひとしい。
一四家と富とは先祖からうけつぐもの、
賢い妻は主から賜わるものである。
一五怠りは人を熟睡させる、
なまけ者は飢える。
一六戒めを守る者は自分の魂を守る、
み言葉を軽んじる者は死ぬ。
一七貧しい者をあわれむ者は主に貸すのだ、

その施しは主が償われる。
一八 望みのあるうちに、自分の子を懲らせ、
これを滅ぼす心を起してはならない。
一九 怒ることの激しい者は罰をうける、
たとい彼を救ってやっても、
さらにくり返さねばならない。
二〇 勧めを聞き、教訓をうけよ、
そうすれば、ついには知恵ある者となる。
二一 人の心には多くの計画がある、
しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ。
二二 人に望ましいのは、いつくしみ深いことである、
貧しい人は偽りをいう人にまさる。

二三主を恐れることは人を命に至らせ、
常に飽き足りて、災にあうことはない。
二四なまけ者は、手を皿に入れても、
それを口に持ってゆくことをしない。
二五あざける者を打て、そうすれば思慮のない者も慎む。
さとき者を戒めよ、そうすれば彼は知識を得る。
二六父に乱暴をはたらき、母を追い出す者は、
恥をきたらし、はずかしめをまねく子である。
二七わが子よ、知識の言葉をはなれて人を迷わせる
教訓を聞くことをやめよ。
二八悪い証人はさばきをあざけり、
悪しき者の口は悪をむさぼり食う。

二九さばきはあざける者のために備えられ、
むちは愚かな者の背のために備えられる。

第二〇章

一酒は人をあざける者とし、
濃い酒は人をあばれ者とする、
これに迷わされる者は無知である。
二王の怒りは、ししがほえるようだ、
彼を怒らせる者は自分の命をそこなう。
三争いに関係しないことは人の誉である、
すべて愚かな者は怒り争う。
四なまけ者は寒いときに耕さない、
それゆえ刈入れのときになって、求めても何もない。

五人の心にある計りごとは深い井戸の水のようだ、
しかし、さとき人はこれをくみ出す。
六自分は真実だという人が多い、
しかし、だれが忠信な人に会うであろうか。
七欠けた所なく、正しく歩む人――
その後の子孫はさいわいである。
八さばきの座にすわる王は
その目をもって、すべての悪をふるいわける。
九だれが「わたしは自分の心を清めた、
わたしの罪は清められた」ということができようか。
一〇互に違った二種のはかり、二種のますは、
ひとしく主に憎まれる。

一一幼(おさ)な子(ご)でさえも、その行(おこな)いによって自(みずか)らを示(しめ)し、
そのすることの清(きよ)いか正(ただ)しいかを現(あらわ)す。
一二聞(き)く耳(みみ)と、見(み)る目(め)とは、
ともに主(しゅ)が造(つく)られたものである。
一三眠(ねむ)りを愛(あい)してはならない、そうすれば貧(まず)しくなる、
目(め)を開(ひら)け、そうすればパンに飽(あ)くことができる。
一四買(か)う者(もの)は、「悪(わる)い、悪(わる)い」という、
しかし去(さ)って後(のち)、彼(かれ)は自(みずか)ら誇(ほこ)る。
一五金(きん)もあり、価(あたい)の高(たか)い宝石(ほうせき)も多(おお)くあるが、
尊(たっと)い器(うつわ)は知識(ちしき)のくちびるである。
一六人(ひと)のために保証(ほしょう)する者(もの)からは、まずその着物(きもの)を取(と)れ、
他人(たにん)のために保証(ほしょう)する者(もの)をば抵当(ていとう)に取(と)れ。

一七 欺き取ったパンはおいしい、
しかし後にはその口は砂利で満たされる。
一八 計りごとは共に議することによって成る、
戦おうとするならば、まずよく議しなければならない。
一九 歩きまわって人のよしあしをいう者は秘密をもらす、
くちびるを開いて歩く者と交わってはならない。
二〇 自分の父母をののしる者は、
そのともしびは暗やみの中に消える。
二一 初めに急いで得た資産は、
その終りがさいわいでない。
二二 「わたしが悪に報いる」と言ってはならない、
主を待ち望め、主はあなたを助けられる。

二三 互に違った二種のふんどうは主に憎まれる、
偽りのはかりは良くない。
二四 人の歩みは主によって定められる、
人はどうして自らその道を、
明らかにすることができようか。
二五 軽々しく「これは聖なるささげ物だ」と言い、
また誓いを立てて後に考えることは、
その人のわなとなる。
二六 知恵ある王は、
箕をもってあおぎ分けるように悪人を散らし、
車をもって脱穀するように、これを罰する。
二七 人の魂は主のともしびであり、人の心の奥を探る。

二八いつくしみと、まこととは王(おう)を守(まも)る、
その位(くらい)もまた正義(せいぎ)によって保(たも)たれる。
二九若(わか)い人(ひと)の栄(さか)えはその力(ちから)、
老人(ろうじん)の美(うつく)しさはそのしらがである。
三〇傷(きず)つくまでに打(う)てば悪(わる)い所(ところ)は清(きよ)くなり、
むちで打(う)てば心(こころ)の底(そこ)までも清(きよ)まる。

第二一章

一王(おう)の心(こころ)は、主(しゅ)の手(て)のうちにあって、
水(みず)の流(なが)れのようだ、
主(しゅ)はみこころのままにこれを導(みちび)かれる。
二人(ひと)の道(みち)は自分(じぶん)の目(め)には正(ただ)しく見(み)える、
しかし主(しゅ)は人(ひと)の心(こころ)をはかられる。

三正義と公平を行うことは、
犠牲にもまさって主に喜ばれる。
四高ぶる目とおごる心とは、
悪しき人のともしびであって、罪である。
五勤勉な人の計画は、ついにその人を豊かにする、
すべて怠るものは貧しくなる。
六偽りの舌をもって宝を得るのは、
吹きはらわれる煙、死のわなである。
七悪しき者の暴虐はその身を滅ぼす、
彼らは公平を行うことを好まないからである。
八罪びとの道は曲っている、
潔白な人の行いはまっすぐである。

九争いを好む女と一緒に家におるよりは
屋根のすみにおるほうがよい。
一〇悪しき者の魂は悪を行うことを願う、
その隣り人にも好意をもって見られない。
一一あざけるものが罰をうけるならば、
思慮のない者は知恵を得る。
知恵ある者が教をうけるならば知識を得る。
一二正しい神は、悪しき者の家をみとめて、
悪しき者を滅びに投げいれられる。
一三耳を閉じて貧しい者の呼ぶ声を聞かない者は、
自分が呼ぶときに、聞かれない。
一四ひそかな贈り物は憤りをなだめる、

ふところのまいないは激しい怒りを和らげる。
一五 公義を行うことは、正しい者には喜びであるが、
悪を行う者には滅びである。
一六 悟りの道を離れる人は、
死人の集会の中におる。
一七 快楽を好む者は貧しい人となり、
酒と油とを好む者は富むことがない。
一八 悪しき者は正しい者のあがないとなり、
不信実な者は正しい人に代る。
一九 争い怒る女と共におるよりは、
荒野に住むほうがましだ。
二〇 知恵ある者の家には尊い宝があり、

愚かな人はこれを、のみ尽す。

二一正義といつくしみとを追い求める者は、
命と誉とを得る。

二二知恵ある者は強い者の城にのぼって、
その頼みとするとりでをくずす。

二三口と舌とを守る者は
その魂を守って、悩みにあわせない。

二四高ぶりおごる者を「あざける者」となづける、
彼は高慢無礼な行いをするものである。

二五なまけ者の欲望は自分の身を殺す、
これはその手を働かせないからである。

二六悪しき者はひねもす人の物をむさぼる、

正しい者は与えて惜しまない。
二七悪しき者の供え物は憎まれる、
悪意をもってささげる時はなおさらである。
二八偽りの証人は滅ぼされる、
よく聞く人の言葉はすたることがない。
二九悪しき者はあつかましくし、
正しい人はその道をつつしむ。
三〇主に向かっては知恵も悟りも、
計りごとも、なんの役にも立たない。
三一戦いの日のために馬を備える、
しかし勝利は主による。

第二二章

一 令名(れいめい)は大(おお)いなる富(とみ)にまさり、
恩恵(おんけい)は銀(ぎん)や金(きん)よりも良(よ)い。
二 富(と)める者(もの)と貧(まず)しい者(もの)とは共(とも)に世(よ)におる、
すべてこれを造(つく)られたのは主(しゅ)である。
三 賢(かしこ)い者(もの)は災(わざわい)を見(み)て自(みずか)ら避(さ)け、
思慮(しりょ)のない者(もの)は進(すす)んでいって、罰(ばつ)をうける。
四 謙遜(けんそん)と主(しゅ)を恐(おそ)れることとの報(むく)いは、
富(とみ)と誉(ほまれ)と命(いのち)とである。
五 よこしまな者(もの)の道(みち)にはいばらとわながあり、
たましいを守(まも)る者(もの)は遠(とお)くこれを離(はな)れる。
六 子(こ)をその行(い)くべき道(みち)に従(したが)って教(おし)えよ、
そうすれば年老(としお)いても、それを離(はな)れることがない。

七富める者は貧しき者を治め、
借りる者は貸す人の奴隷となる。
八悪をまく者は災を刈り、
その怒りのつえはすたれる。
九人を見て恵む者はめぐまれる、
自分のパンを貧しい人に与えるからである。
一〇あざける者を追放すれば争いもまた去り、
かつ、いさかいも、はずかしめもなくなる。
一一心の潔白を愛する者、その言葉の上品な者は、
王がその友となる。
一二主の目は知識ある者を守る、
しかし主は不信実な者の言葉を敗られる。

一三なまけ者(もの)は言(い)う、「ししがそとにいる、
わたしは、ちまたで殺(ころ)される」と。
一四遊女(ゆうじょ)の口(くち)は深(ふか)い落(おと)し穴(あな)である、
主(しゅ)に憎(にく)まれる者(もの)はその中(なか)に陥(おちい)る。
一五愚(おろ)かなことが子供(こども)の心(こころ)の中(なか)につながれている、
懲(こら)しめのむちは、これを遠(とお)く追(お)いだす。
一六貧(まず)しい者(もの)をしえたげて自分(じぶん)の富(とみ)を増(ま)そうとする者(もの)と、
富(と)める者(もの)に与(あた)える者(もの)とは、ついに必(かなら)ず貧(まず)しくなる。
一七あなたの耳(みみ)を傾(かたむ)けて知恵(ちえ)ある者(もの)の言葉(ことば)を聞(き)き、
かつ、わたしの知識(ちしき)にあなたの心(こころ)を用(もち)いよ。
一八これをあなたのうちに保(たも)ち、
ことごとく、あなたのくちびるに備(そな)えておくなら、

楽(たの)しいことである。
一九あなたが主(しゅ)に、寄(よ)り頼(たの)むことのできるように、
わたしはきょう、これをあなたにも教(おし)える。
二〇わたしは、勧(すす)めと知識(ちしき)との三十の言葉(ことば)を
あなたのためにしるしたではないか。
二一それは正(ただ)しいこと、真実(しんじつ)なことをあなたに示(しめ)し、
あなたをつかわした者(もの)に
真実(しんじつ)の答(こたえ)をさせるためであった。
二二貧(まず)しい者(もの)を、貧(まず)しいゆえに、かすめてはならない、
悩(なや)む者(もの)を、町(まち)の門(もん)でおさえつけてはならない。
二三それは主(しゅ)が彼(かれ)らの訴(うった)えをただし、
かつ彼(かれ)らをそこなう者(もの)の命(いのち)を、

そこなわれるからである。
二四怒る者と交わるな、憤る人と共に行くな。
二五それはあなたがその道にならって、
みずから、わなに陥ることのないためである。
二六あなたは人と手を打つ者となってはならない、
人の負債の保証をしてはならない。
二七あなたが償うものがないとき、
あなたの寝ている寝床までも、
人が奪い取ってよかろうか。
二八あなたの先祖が立てた古い地境を移してはならない。
二九あなたはそのわざに巧みな人を見るか、
そのような人は王の前に立つが、
卑しい人々の前には立たない。

第二三章

一治(おさ)める人(ひと)と共(とも)に座(ざ)して食事(しょくじ)するとき、
あなたの前(まえ)にあるものを、よくわきまえ、
二あなたがもし食(しょく)をたしなむ者(もの)であるならば、
あなたののどに刀(かたな)をあてよ。
三そのごちそうをむさぼり食(た)べてはならない、
これは人(ひと)を欺(あざむ)く食物(しょくもつ)だからである。
四富(とみ)を得(え)ようと苦労(くろう)してはならない、
かしこく思(おも)いとどまるがよい。
五あなたの目(め)をそれにとめると、それはない、
富(とみ)はたちまち自(みずか)ら翼(つばさ)を生(しょう)じて、
わしのように天(てん)に飛(と)び去(さ)るからだ。
六物惜(ものお)しみする人(ひと)のパンを食(た)べてはならない、

そのごちそうをむさぼり願ってはならない。
七彼は心のうちで勘定する人のように、
「食え、飲め」とあなたに言うけれども、
その心はあなたに真実ではない。
八あなたはついにその食べた物を吐き出すようになり、
あなたのねんごろな言葉もむだになる。
九愚かな者の耳に語ってはならない、
彼はあなたの言葉が示す知恵をいやしめるからだ。
一〇古い地境を移してはならない、
みなしごの畑を侵してはならない。
一一彼らのあがない主は強くいらせられ、
あなたに逆らって彼らの訴えを弁護されるからだ。

12あなたの心（こころ）を教訓（きょうくん）に用（もち）い、
あなたの耳（みみ）を知識（ちしき）の言葉（ことば）に傾（かたむ）けよ。
13子（こ）を懲（こ）らすことを、さし控（ひか）えてはならない、
むちで彼（かれ）を打（う）っても死（し）ぬことはない。
14もし、むちで彼（かれ）を打（う）つならば、
その命（いのち）を陰府（よみ）から救（すく）うことができる。
15わが子（こ）よ、もしあなたの心（こころ）が賢（かしこ）くあれば、
わたしの心（こころ）もまた喜（よろこ）び、
16もしあなたのくちびるが正（ただ）しい事（こと）を言（い）うならば、
わたしの心（こころ）も喜（よろこ）ぶ。
17心（こころ）に罪（つみ）びとをうらやんではならない、
ただ、ひねもす主（しゅ）を恐（おそ）れよ。

一八かならず後(のち)のよい報(むく)いがあって、
あなたの望(のぞ)みは、すたらない。
一九わが子(こ)よ、よく聞(き)いて、知恵(ちえ)を得(え)よ、
かつ、あなたの心(こころ)を道(みち)に向(む)けよ。
二〇酒(さけ)にふけり、
肉(にく)をたしなむ者(もの)と交(まじ)わってはならない。
二一酒(さけ)にふける者(もの)と、肉(にく)をたしなむ者(もの)とは貧(まず)しくなり、
眠(ねむ)りをむさぼる者(もの)は、ぼろを身(み)にまとうようになる。
二二あなたを生(う)んだ父(ちち)のいうことを聞(き)き、
年老(としお)いた母(はは)を軽(かろ)んじてはならない。
二三真理(しんり)を買(か)え、これを売(う)ってはならない、
知恵(ちえ)と教訓(きょうくん)と悟(さと)りをも買(か)え。

二四 正しい人の父は大いによろこび、
知恵ある子を生む者は子のために楽しむ。
二五 あなたの父母を楽しませ、
あなたを産んだ母を喜ばせよ。
二六 わが子よ、あなたの心をわたしに与え、
あなたの目をわたしの道に注げ。
二七 遊女は深い穴のごとく、
みだらな女は狭い井戸のようだ。
二八 彼女は盗びとのように人をうかがい、
かつ世の人のうちに、不信実な者を多くする。
二九 災ある者はだれか、憂いある者はだれか、
争いをする者はだれか、煩いある者はだれか、

ゆえなく傷をうける者はだれか、
赤い目をしている者はだれか。
三〇酒に夜をふかす者、
行って、混ぜ合わせた酒を味わう者である。
三一酒はあかく、杯の中にあわだち、なめらかにくだる、
あなたはこれを見てはならない。
三二これはついに、へびのようにかみ、
まむしのように刺す。
三三あなたの目は怪しいものを見、
あなたの心は偽りを言う。
三四あなたは海の中に寝ている人のように、
帆柱の上に寝ている人のようになる。

三五あなたは言う、
「人がわたしを撃ったが、わたしは痛くはなかった。
わたしを、たたいたが、わたしは何も覚えはない。
いつわたしはさめるのか、
また酒を求めよう」と。

第二四章

一悪を行う人をうらやんではならない、
また彼らと共におることを願ってはならない。
二彼らはその心に強奪を計り、
そのくちびるに人をそこなうことを語るからである。
三家は知恵によって建てられ、悟りによって堅くせられ、
四また、へやは知識によってさまざまの尊く、

麗しい宝で満たされる。
五知恵ある者は強い人よりも強く、
知識ある人は力ある人よりも強い。
六良い指揮によって戦いをすることができ、
勝利は多くの議する者がいるからである。
七知恵は高くて愚かな者の及ぶところではない、
愚かな者は門で口を開くことができない。
八悪を行うことを計る者を
人はいたずら者ととなえる。
九愚かな者の計るところは罪であり、
あざける者は人に憎まれる。
一〇もしあなたが悩みの日に気をくじくならば、

あなたの力は弱い。
一一死地にひかれゆく者を助け出せ、
滅びによろめきゆく者を救え。
一二あなたが、われわれはこれを知らなかったといっても、
心をはかる者はそれを悟らないであろうか。
あなたの魂を守る者はそれを知らないであろうか。
彼はおのおのの行いにより、人に報いないであろうか。
一三わが子よ、蜜を食べよ、これは良いものである、
また、蜂の巣のしたたりはあなたの口に甘い。
一四知恵もあなたの魂にはそのようであることを知れ。
それを得るならば、かならず報いがあって、あなたの望みは、すたらない。

一五悪しき者がするように、
正しい者の家をうかがってはならない、
その住む所に乱暴をしてはならない。
一六正しい者は七たび倒れても、また起きあがる、
しかし、悪しき者は災によって滅びる。
一七あなたのあだが倒れるとき楽しんではならない、
彼のつまずくとき心に喜んではならない。
一八主はそれを見て悪いこととし、
その怒りを彼から転じられる。
一九悪を行う者のゆえに心を悩ましてはならない、
よこしまな者をうらやんではならない。
二〇悪しき者には後の良い報いはない、

よこしまな者のともしびは消される。
二一わが子よ、主と王とを恐れよ、
そのいずれにも不従順であってはならない。
二二その災はたちまち起るからである。
この二つの者からくる滅びをだれが知り得ようか。
二三これらもまた知恵ある者の箴言である。
片寄ったさばきをするのは、よくない。
二四悪しき者に向かって、「あなたは正しい」という者を、
人々はのろい、諸民は憎む。
二五悪しき者をせめる者は恵みを得る、
また幸福が与えられる。
二六正しい答をする者は、

くちびるに、口づけするのである。
二七外で、あなたの仕事を整え、
畑で、すべての物をおのれのために備え、
その後あなたの家を建てるがよい。
二八ゆえなく隣り人に敵して、証言をしてはならない、
くちびるをもって欺いてはならない。
二九「彼がわたしにしたように、わたしも彼にしよう、
わたしは人がしたところにしたがって、
その人に報いよう」と言ってはならない。
三〇わたしはなまけ者の畑のそばと、
知恵のない人のぶどう畑のそばを通ってみたが、
三一いばらが一面に生え、あざみがその地面をおおい、

その石がきはくずれていた。
三二わたしはこれをみて心をとどめ、
これを見て教訓を得た。
三三「しばらく眠り、しばらくまどろみ、
手をこまぬいて、またしばらく休む」。
三四それゆえ、貧しさは盗びとのように、あなたに来、
乏しさは、つわもののように、あなたに来る。

第二五章

一これらもまたソロモンの箴言であり、
ユダの王ヒゼキヤに属する人々がこれを書き写した。
二事を隠すのは神の誉であり、
事を窮めるのは王の誉である。

三 天の高さと地の深さと、
王たる者の心とは測ることができない。
四 銀から、かなくそを除け、
そうすれば、銀細工人が器を造る材料となる。
五 王の前から悪しき者を除け、
そうすれば、その位は正義によって堅く立つ。
六 王の前で自ら高ぶってはならない、
偉い人の場に立ってはならない。
七 尊い人の前で下にさげられるよりは、
「ここに上がれ」といわれるほうがましだ。
八 あなたが目に見たことを、
軽々しく法廷に出してはならない。

あとになり、あなたが隣(とな)り人(びと)にはずかしめられるとき、
あなたはどうしようとするのか。
九隣(とな)り人(びと)と争(あらそ)うことがあるならば、ただその人(ひと)と争(あらそ)え、
他人(たにん)の秘密(ひみつ)をもらしてはならない。
一〇そうでないと、聞(き)く者(もの)があなたをいやしめ、
あなたは、いつまでもそしられる。
一一おりにかなって語(かた)る言葉(ことば)は、
銀(ぎん)の彫(ほ)り物(もの)に金(きん)のりんごをはめたようだ。
一二知恵(ちえ)をもって戒(いまし)める者(もの)は、これをきく者(もの)の耳(みみ)にとって、
金(きん)の耳輪(みみわ)、精金(せいきん)の飾(かざ)りのようだ。
一三忠実(ちゅうじつ)な使者(ししゃ)はこれをつかわす者(もの)にとって、
刈入(かりい)れの日(ひ)に冷(ひや)やかな雪(ゆき)があるようだ、

よくその主人の心を喜ばせる。
一四贈り物をすると偽って誇る人は、
雨のない雲と風のようだ。
一五忍耐をもって説けば君も言葉をいれる、
柔らかな舌は骨を砕く。
一六蜜を得たならば、ただ足るほどにこれを食べよ、
おそらくは食べすごして、それを吐き出すであろう。
一七隣り人の家に足をしげくしてはならない、
おそらくは彼は煩わしくなって、
あなたを憎むようになろう。
一八隣り人に敵して偽りのあかしを立てる人は、
こん棒、つるぎ、または鋭い矢のようだ。

一九悩みに会うとき不信実な者を頼みにするのは、
悪い歯、またはなえた足を頼みとするようなものだ。
二〇心の痛める人の前で歌をうたうのは、
寒い日に着物を脱ぐようであり、
また傷の上に酢をそそぐようだ。
二一もしあなたのあだが飢えているならば、
パンを与えて食べさせ、
もしかわいているならば水を与えて飲ませよ。
二二こうするのは、火を彼のこうべに積むのである、
主はあなたに報いられる。
二三北風は雨を起し、
陰言をいう舌は人の顔を怒らす。

二四 争いを好む女と一緒に家におるよりは、
屋根のすみにおるほうがよい。
二五 遠い国から来るよい消息は、
かわいている人が飲む冷ややかな水のようだ。
二六 正しい者が悪い者の前に屈服するのは、
井戸が濁ったよう、また泉がよごれたようなものだ。
二七 蜜を多く食べるのはよくない、
ほめる言葉は控え目にするがよい。
二八 自分の心を制しない人は、
城壁のない破れた城のようだ。

第二六章

一 誉が愚かな者にふさわしくないのは、

夏に雪が降り、刈入れの時に雨が降るようなものだ。
二いわれのないのろいは、飛びまわるすずめや、
飛びかけるつばめのようなもので、止まらない。
三馬のためにはむちがあり、
ろばのためにはくつわがあり、
愚かな者の背のためにはつえがある。
四愚かな者にその愚かさにしたがって答をするな、
自分も彼と同じようにならないためだ。
五愚かな者にその愚かさにしたがって答をせよ、
彼が自分の目に自らを知恵ある者と見ないためだ。
六愚かな者に託して事を言い送る者は、
自分の足を切り去り、身に害をうける。

七あしなえの足は用がない、
愚かな者の口には箴言もそれにひとしい。
八 誉を愚かな者に与えるのは、
石を石投げにつなぐようだ。
九愚かな者の口に箴言があるのは、
酔った者が、とげのあるつえを手で振り上げるようだ。
一〇通りがかりの愚か者や、酔った者を雇う者は、
すべての人を傷つける射手のようだ。
一一犬が帰って来てその吐いた物を食べるように、
愚かな者はその愚かさをくり返す。
一二自分の目に自らを知恵ある者とする人を、
あなたは見るか、

彼(かれ)よりもかえって愚(おろ)かな人(ひと)に望(のぞ)みがある。
一三なまけ者(もの)は、「道(みち)にししがいる、
ちまたにししがいる」という。
一四戸(と)がちょうつがいによって回(まわ)るように、
なまけ者(もの)はその寝床(ねどこ)で寝返(ねがえ)りをする。
一五なまけ者(もの)は手(て)を皿(さら)に入(い)れても、
それを口(くち)に持(も)ってゆくことをいとう。
一六なまけ者(もの)は自分(じぶん)の目(め)に、
良(よ)く答(こた)えることのできる七人(にん)の者(もの)よりも、
自(みずか)らを知恵(ちえ)ありとする。
一七自分(じぶん)に関係(かんけい)のない争(あらそ)いにたずさわる者(もの)は、
通(とお)りすぎる犬(いぬ)の耳(みみ)をとらえる者(もの)のようだ。

一八 一九隣(とな)り人(びと)を欺(あざむ)いて、
「わたしはただ戯(たわむ)れにした」という者(もの)は、
燃(も)え木(ぎ)または矢(や)、または死(し)を、
投(な)げつける気違(きちが)いのようだ。
二〇たきぎがなければ火(ひ)は消(き)え、
人(ひと)のよしあしを言(い)う者(もの)がなければ争(あらそ)いはやむ。
二一おき火(ひ)に炭(すみ)をつぎ、火(ひ)にたきぎをくべるように、
争(あらそ)いを好(この)む人(ひと)は争(あらそ)いの火(ひ)をおこす。
二二人(ひと)のよしあしをいう者(もの)の言葉(ことば)は
おいしい食物(しょくもつ)のようで、腹(はら)の奥(おく)にしみこむ。
二三くちびるはなめらかであっても、心(こころ)の悪(わる)いのは
上(うえ)ぐすりをかけた土(つち)の器(うつわ)のようだ。

二四 憎む者はくちびるをもって自ら飾るけれども、
心のうちには偽りをいだく。
二五 彼が声をやわらげて語っても、信じてはならない。
その心に七つの憎むべきものがあるからだ。
二六 たとい偽りをもってその憎しみをかくしても、
彼の悪は会衆の中に現れる。
二七 穴を掘る者は自らその中に陥る、
石をまろばしあげる者の上に、その石はまろびかえる。
二八 偽りの舌は自分が傷つけた者を憎み、
へつらう口は滅びをきたらせる。

第二七章

一 あすのことを誇ってはならない、

一日のうちに何がおこるかを
知ることができないからだ。
二 自分の口をもって自らをほめることなく、
他人にほめさせよ。
自分のくちびるをもってせず、
ほかの人にあなたをほめさせよ。
三 石は重く、砂も軽くはない、
しかし愚かな者の怒りはこの二つよりも重い。
四 憤りはむごく、怒りははげしい、
しかしねたみの前には、だれが立ちえよう。
五 あからさまに戒めるのは、
ひそかに愛するのにまさる。

六愛する者が傷つけるのは、まことからであり、
あだの口づけするのは偽りからである。
七飽いている者は蜂蜜をも踏みつける、
しかし飢えた者には苦い物でさえ、みな甘い。
八その家を離れてさまよう人は、
巣を離れてさまよう鳥のようだ。
九油と香とは人の心を喜ばせる、
しかし魂は悩みによって裂かれる。
一〇あなたの友、あなたの父の友を捨てるな、
あなたが悩みにあう日には兄弟の家に行くな、
近い隣り人は遠くにいる兄弟にまさる。
一一わが子よ、知恵を得て、わたしの心を喜ばせよ、

そうすればわたしをそしる者に答えることができる。
一一 賢い者は災を見て自ら避け、
思慮のない者は進んでいって、罰をうける。
一三 人のために保証する者からは、まずその着物をとれ、
他人のために保証をする者をば抵当に取れ。
一四 朝はやく起きて大声にその隣り人を祝すれば、
かえってのろいと見なされよう。
一五 雨の降る日に雨漏りの絶えないのと、
争い好きな女とは同じだ。
一六 この女を制するのは風を制するのとおなじく、
右の手に油をつかむのとおなじだ。
一七 鉄は鉄をとぐ、

そのように人はその友の顔をとぐ。
一八いちじくの木を守る者はその実を食べる、
主人を尊ぶ者は誉を得る。
一九水にうつせば顔と顔とが応じるように、
人の心はその人をうつす。
二〇陰府と滅びとは飽くことなく、
人の目もまた飽くことがない。
二一るつぼによって銀をためし、
炉によって金をためす、
人はその称賛によってためされる。
二二愚かな者をうすに入れ、
きねをもって、麦と共にこれをついても、

その愚かさは去ることがない。
二三あなたの羊の状態をよく知り、
あなたの群れに心をとめよ。
二四富はいつまでも続くものではない、
どうして位が末代までも保つであろうか。
二五草が刈り取られ、新しい芽がのび、
山の牧草も集められると、
二六小羊はあなたの衣料を出し、
やぎは畑を買う価となり、
二七やぎの乳は多くて、
あなたと、あなたの家のものの食物となり、
おとめらを養うのにじゅうぶんである。

第二八章

一悪しき者は追う人もないのに逃げる、
正しい人はししのように勇ましい。
二国の罪によって、治める者は多くなり、
さとく、また知識ある人によって、国はながく保つ。
三貧しい者をしえたげる貧しい人は、
糧食を残さない激しい雨のようだ。
四律法を捨てる者は悪しき者をほめる、
律法を守る者はこれに敵対する。
五悪人は正しいことを悟らない、
主を求める者はこれをことごとく悟る。
六正しく歩む貧しい者は、
曲った道を歩む富める者にまさる。

七律法を守る者は賢い子である、
不品行な者と交わるものは、父をはずかしめる。
八利息と高利とによってその富をます者は、
貧しい者を恵む者のために、それをたくわえる。
九耳をそむけて律法を聞かない者は、
その祈でさえも憎まれる。
一〇正しい者を悪い道に惑わす者は、
みずから自分の穴に陥る、
しかし誠実な人は幸福を継ぐ。
一一富める人は自分の目に自らを知恵ある者と見る、
しかし悟りのある貧しい者は彼を見やぶる。
一二正しい者が勝つときは、大いなる栄えがある、

悪しき者が起るときは、民は身をかくす。
一三その罪を隠す者は栄えることがない、
言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける。
一四常に主を恐れる人はさいわいである、
心をかたくなにする者は災に陥る。
一五貧しい民を治める悪いつかさは、
ほえるしし、または飢えたくまのようだ。
一六悟りのないつかさは残忍な圧制者である、
不正の利を憎む者は長命を得る。
一七人を殺してその血を身に負う者は
死ぬまで、のがれびとである、
だれもこれを助けてはならない。

一八正しく歩む者は救を得、
曲った道に歩む者は穴に陥る。
一九自分の田地を耕す者は食糧に飽き、
無益な事に従う者は貧乏に飽きる。
二〇忠実な人は多くの祝福を得る、
急いで富を得ようとする者は罰を免れない。
二一人を片寄り見ることは良くない、
人は一切れのパンのために、とがを犯すことがある。
二二欲の深い人は急いで富を得ようとする、
かえって欠乏が自分の所に来ることを知らない。
二三人を戒める者は舌をもってへつらう者よりも、
大いなる感謝をうける。

二四父や母の物を盗んで「これは罪ではない」と言う者は、
滅ぼす者の友である。
二五むさぼる者は争いを起し、
主に信頼する者は豊かになる。
二六自分の心を頼む者は愚かである、
知恵をもって歩む者は救を得る。
二七貧しい者に施す者は物に不足しない、
目をおおって見ない人は多くののろいをうける。
二八悪しき者が起るときは、民は身をかくす、
その滅びるときは、正しい人が増す。

第二九章

一しばしばしかられても、

なおかたくなな者(もの)は、
たちまち打(う)ち敗(やぶ)られて助(たす)かることはない。
二正(ただ)しい者(もの)が権力(けんりょく)を得(え)れば民(たみ)は喜(よろこ)び、
悪(あ)しき者(もの)が治(おさ)めるとき、民(たみ)はうめき苦(くる)しむ。
三知恵(ちえ)を愛(あい)する人(ひと)はその父(ちち)を喜(よろこ)ばせ、
遊女(ゆうじょ)に交(まじ)わる者(もの)はその資産(しさん)を浪費(ろうひ)する。
四王(おう)は公儀(こうぎ)をもって国(くに)を堅(かた)くする、
しかし、重税(じゅうぜい)を取(と)り立(た)てる者(もの)はこれを滅(ほろ)ぼす。
五その隣(とな)り人(びと)にへつらう者(もの)は、
彼(かれ)の足(あし)の前(まえ)に網(あみ)を張(は)る。
六悪人(あくにん)は自分(じぶん)の罪(つみ)のわなに陥(おちい)る、
しかし正(ただ)しい人(ひと)は喜(よろこ)び楽(たの)しむ。

七正しい人は貧しい者の訴えをかえりみる、
悪しき人はそれを知ろうとはしない。
八あざける人は町を乱し、
知恵ある者は怒りを静める。
九知恵ある人が愚かな人と争うと、
愚かな者はただ怒り、
あるいは笑って、休むことがない。
一〇血に飢えている人は罪のない者を憎む、
悪しき者は彼の命を求める。
一一愚かな者は怒りをことごとく表わし、
知恵ある者は静かにこれをおさえる。
一二もし治める者が偽りの言葉に聞くならば、

その役人(やくにん)らはみな悪(わる)くなる。
一三貧(まず)しい者(もの)と、しえたげる者(もの)とは共(とも)に世(よ)におる、
主(しゅ)は彼(かれ)ら両者(りょうしゃ)の目(め)に光(ひかり)を与(あた)えられる。
一四もし王(おう)が貧(まず)しい者(もの)を公平(こうへい)にさばくならば、
その位(くらい)はいつまでも堅(かた)く立(た)つ。
一五むちと戒(いまし)めとは知恵(ちえ)を与(あた)える、
わがままにさせた子(こ)はその母(はは)に恥(はじ)をもたらす。
一六悪(あ)しき者(もの)が権力(けんりょく)を得(え)ると罪(つみ)も増(ま)す、
正(ただ)しい者(もの)は彼(かれ)らの倒(たお)れるのを見(み)る。
一七あなたの子(こ)を懲(こら)しめよ、
そうすれば彼(かれ)はあなたを安(やす)らかにし、
またあなたの心(こころ)に喜(よろこ)びを与(あた)える。

一八預言がなければ民はわがままにふるまう、
しかし律法を守る者はさいわいである。
一九しもべは言葉だけで訓練することはできない、
彼は聞いて知っても、心にとめないからである。
二〇言葉の軽率な人を見るか、
彼よりもかえって愚かな者のほうに望みがある。
二一しもべをその幼い時からわがままに育てる人は、
ついにはそれを自分のあとつぎにする。
二二怒る人は争いを起し、
憤る人は多くの罪を犯す。
二三人の高ぶりはその人を低くし、
心にへりくだる者は誉を得る。

二四盗びとにくみする者は自分の魂を憎む、
彼はのろいを聞いても何事をも口外しない。
二五人を恐れると、わなに陥る、
主に信頼する者は安らかである。
二六治める者の歓心を得ようとする人は多い、
しかし人の事を定めるのは主による。
二七正しい人は不正を行う人を憎み、
悪しき者は正しく歩む人を憎む。

第三〇章

一マッサの人ヤケの子アグルの言葉。
その人はイテエルに向かって言った、
すなわちイテエルと、ウカルとに向かって言った、

二わたしは確かに人よりも愚かであり、
わたしには人の悟りがない。
三わたしはまだ知恵をならうことができず、
また、聖なる者を悟ることもできない。
四天にのぼったり、下ったりしたのはだれか、
風をこぶしの中に集めたのはだれか、
水を着物に包んだのはだれか、
地のすべての限界を定めた者はだれか、
その名は何か、その子の名は何か、
あなたは確かにそれを知っている。
五神の言葉はみな真実である、
神は彼に寄り頼む者の盾である。

六その言葉に付け加えてはならない、
彼があなたを責め、あなたを偽り者とされないためだ。
七わたしは二つのことをあなたに求めます、
わたしの死なないうちに、これをかなえてください。
八うそ、偽りをわたしから遠ざけ、
貧しくもなく、また富みもせず、
ただなくてならぬ食物でわたしを養ってください。
九飽き足りて、あなたを知らないといい、
「主とはだれか」と言うことのないため、
また貧しくて盗みをし、
わたしの神の名を汚すことのないためです。
一〇あなたは、しもべのことをその主人に、

あしざまにいってはならない、
そうでないと彼(かれ)はあなたをのろい、
あなたは罪(つみ)をきせられる。
11 世(よ)には父(ちち)をのろったり、母(はは)を祝福(しゅくふく)しない者(もの)がある。
12 世(よ)には自分(じぶん)の目(め)にみずからを清(きよ)い者(もの)として、
なおその汚(けが)れを洗(あら)われないものがある。
13 世(よ)にはまた、このような人(ひと)がある――
ああ、その目(め)のいかに高(たか)きことよ、
またそのまぶたのいかにつりあがっていることよ。
14 世(よ)にはまたつるぎのような歯(は)をもち、
刀(かたな)のようなきばをもって、
貧(まず)しい者(もの)を地(ち)の上(うえ)から、
乏(とぼ)しい者(もの)を人(ひと)の中(なか)から食(く)い滅(ほろ)ぼすものがある。

一五蛭(ひる)にふたりの娘(むすめ)があって、
「与(あた)えよ、与(あた)えよ」という。
飽(あ)くことを知(し)らないものが三つある、
いや、四つあって、
皆(みな)「もう、たくさんです」と言(い)わない。
一六すなわち陰府(よみ)、不妊(ふにん)の胎(たい)、水(みず)にかわく地(ち)、
「もう、たくさんだ」といわない火(ひ)がそれである。
一七自分(じぶん)の父(ちち)をあざけり、
母(はは)に従(したが)うのを卑(いや)しいこととする目(め)は、
谷(たに)のからすがこれをつつき出(だ)し、
はげたかがこれを食(た)べる。
一八わたしにとって不思議(ふしぎ)にたえないことが三つある、

いや、四つあって、わたしには悟(さと)ることができない。
一九すなわち空(そら)を飛(と)ぶはげたかの道(みち)、
岩(いわ)の上(うえ)を這(は)うへびの道(みち)、
海(うみ)をはしる舟(ふね)の道(みち)、
男(おとこ)の女(おんな)にあう道(みち)がそれである。
二〇遊女(ゆうじょ)の道(みち)もまたそうだ、
彼女(かのじょ)は食(た)べて、その口(くち)をぬぐって、
「わたしは何(なに)もわるいことはしない」と言(い)う。
二一地(ち)は三つのことによって震(ふる)う、
いや、四つのことによって、耐(た)えることができない。
二二すなわち奴隷(どれい)たる者(もの)が王(おう)となり、
愚(おろ)かな者(もの)が食物(しょくもつ)に飽(あ)き、

二三忌(い)みきらわれた女(おんな)が嫁(よめ)に行(い)き、
はしためが女主人(おんなしゅじん)のあとにすわることである。
二四この地上(ちじょう)に、小(ちい)さいけれども、
非常(ひじょう)に賢(かしこ)いものが四つある。
二五ありは力(ちから)のない種類(しゅるい)だが、
その食糧(しょくりょう)を夏(なつ)のうちに備(そな)える。
二六岩(いわ)だぬきは強(つよ)くない種類(しゅるい)だが、
その家(いえ)を岩(いわ)につくる。
二七いなごは王(おう)がないけれども、
みな隊(たい)を組(く)んでいで立(た)つ。
二八やもりは手(て)でつかまえられるが、
王(おう)の宮殿(きゅうでん)におる。

二九歩(ある)きぶりの堂々(どうどう)たる者(もの)が三つある、
いや、四つあって、みな堂々(どうどう)と歩(ある)く。
三〇すなわち獣(けもの)のうちでもっとも強(つよ)く、
何(なに)ものの前(まえ)にも退(しりぞ)かない、しし、
三一尾(お)を立(た)てて歩(ある)くおんどり、雄(お)やぎ、
その民(たみ)の前(まえ)をいばって歩(ある)く王(おう)がそれである。
三二あなたがもし愚(おろ)かであって自(みずか)ら高(たか)ぶり、
あるいは悪事(あくじ)を計(はか)ったならば、
あなたの手(て)を口(くち)に当(あ)てるがよい。
三三乳(ちち)をしめれば凝乳(ぎょうにゅう)が出(で)る、
鼻(はな)をしめれば血(ち)がでる、
怒(いか)りをしめれば争(あらそ)いが起(おこ)る。

第三一章

一マッサの王レムエルの言葉、すなわちその母が彼に教えたものであ
る。
二わが子よ、何を言おうか。
わが胎の子よ、何を言おうか。
わたしが願をかけて得た子よ、
何をいおうか。
三あなたの力を女についやすな、
王をも滅ぼすものに、あなたの道を任せるな。
四レムエルよ、酒を飲むのは、王のすることではない、
王のすることではない、
濃い酒を求めるのは君たる者のすることではない。
五彼らは酒を飲んで、おきてを忘れ、

すべて悩む者のさばきを曲げる。
六濃い酒を滅びようとしている者に与え、
酒を心の苦しむ人に与えよ。
七彼らは飲んで自分の貧乏を忘れ、
その悩みをもはや思い出さない。
八あなたは黙っている人のために、
すべてのみなしごの訴えのために、口を開くがよい。
九口を開いて、正しいさばきを行い、
貧しい者と乏しい者の訴えをただせ。
一〇だれが賢い妻を見つけることができるか、
彼女は宝石よりもすぐれて尊い。
一一その夫の心は彼女を信頼して、

収益(しゅうえき)に欠(か)けることはない。
一二彼女(かのじょ)は生(い)きながらえている間(あいだ)、
その夫(おっと)のために良(よ)いことをして、悪(わる)いことをしない。
一三彼女(かのじょ)は羊(ひつじ)の毛(け)や亜麻(あま)を求(もと)めて、
手(て)ずから望(のぞ)みのように、それを仕上(しあ)げる。
一四また商人(しょうにん)の舟(ふね)のように、
遠(とお)い国(くに)から食糧(しょくりょう)を運(はこ)んでくる。
一五彼女(かのじょ)はまだ夜(よる)のあけぬうちに起(お)きて、
その家(いえ)の者(もの)の食(た)べ物(もの)を備(そな)え、
その女(おんな)たちに日用(にちよう)の分(ぶん)を与(あた)える。
一六彼女(かのじょ)は畑(はたけ)をよく考(かんが)えてそれを買(か)い、
その手(て)の働(はたら)きの実(み)をもって、ぶどう畑(ばたけ)をつくり、

一七力をもって腰に帯し、その腕を強くする。
一八彼女はその商品のもうけのあるのを知っている、
そのともしびは終夜消えることがない。
一九彼女は手を糸取り棒にのべ、
その手に、つむを持ち、
二〇手を貧しい者に開き、
乏しい人に手をさしのべる。
二一彼女はその家の者のために雪を恐れない、
その家の者はみな紅の着物を着ているからである。
二二彼女は自分のために美しいしとねを作り、
亜麻布と紫布とをもってその着物とする。
二三その夫はその地の長老たちと共に、

町の門に座するので、人に知られている。
二四彼女は亜麻布の着物をつくって、それを売り、
帯をつくって商人に渡す。
二五力と気品とは彼女の着物である、
そして後の日を笑っている。
二六彼女は口を開いて知恵を語る、
その舌にはいつくしみの教がある。
二七彼女は家の事をよくかえりみ、
怠りのかてを食べることをしない。
二八その子らは立ち上がって彼女を祝し、
その夫もまた彼女をほめたたえて言う、
二九「りっぱに事をなし遂げる女は多いけれども、

あなたはそのすべてにまさっている」と。
三〇あでやかさは偽(いつわ)りであり、美(うつく)しさはつかのまである、
しかし主(しゅ)を恐(おそ)れる女(おんな)はほめたたえられる。
三一その手(て)の働(はたら)きの実(み)を彼女(かのじょ)に与(あた)え、
その行(おこな)いのために彼女(かのじょ)を町(まち)の門(もん)でほめたたえよ。

伝道の書

第一章

一ダビデの子、エルサレムの王である伝道者の言葉。
二伝道者は言う、
空の空、空の空、いっさいは空である。
三日の下で人が労するすべての労苦は、
その身になんの益があるか。
四世は去り、世はきたる。
しかし地は永遠に変らない。
五日はいで、日は没し、
その出た所に急ぎ行く。
六風は南に吹き、また転じて、北に向かい、

めぐりにめぐって、またそのめぐる所に帰る。
七 川はみな、海に流れ入る、
しかし海は満ちることがない。
川はその出てきた所にまた帰って行く。
八 すべての事は人をうみ疲れさせる、
人はこれを言いつくすことができない。
目は見ることに飽きることがなく、
耳は聞くことに満足することがない。
九 先にあったことは、また後にもある、
先になされた事は、また後にもなされる。
日の下には新しいものはない。
一〇 「見よ、これは新しいものだ」と

言われるものがあるか、
それはわれわれの前にあった世々に、
すでにあったものである。
一一前の者のことは覚えられることがない、
また、きたるべき後の者のことも、
後に起る者はこれを覚えることがない。
一二伝道者であるわたしはエルサレムで、イスラエルの王であった。一三
わたしは心をつくし、知恵を用いて、天が下に行われるすべてのことを
尋ね、また調べた。これは神が、人の子らに与えて、ほねおらせられる苦
しい仕事である。一四わたしは日の下で人が行うすべてのわざを見たが、
みな空であって風を捕えるようである。
一五曲ったものは、まっすぐにすることができない、

欠(か)けたものは数(かぞ)えることができない。
一六わたしは心(こころ)の中(なか)に語(かた)って言(い)った、「わたしは、わたしより先(さき)にエル
サレムを治(おさ)めたすべての者(もの)にまさって、多(おお)くの知恵(ちえ)を得(え)た。わたしの心(こころ)
は知恵(ちえ)と知識(ちしき)を多(おお)く得(え)た」。一七わたしは心(こころ)をつくして知恵(ちえ)を知(し)り、また
狂気(きょうき)と愚痴(ぐち)とを知(し)ろうとしたが、これもまた風(かぜ)を捕(とら)えるようなものである
と悟(さと)った。
一八それは知恵(ちえ)が多(おお)ければ悩(なや)みが多(おお)く、
知識(ちしき)を増(ま)す者(もの)は憂(うれ)いを増(ま)すからである。
第二章一わたしは自分(じぶん)の心(こころ)に言(い)った、「さあ、快楽(かいらく)をもって、おまえを試(こころ)
みよう。おまえは愉快(ゆかい)に過(す)ごすがよい」と。しかし、これもまた空(くう)であっ
た。二わたしは笑(わら)いについて言(い)った、「これは狂気(きょうき)である」と。また快楽(かいらく)に
ついて言(い)った、「これは何(なに)をするのか」と。三わたしの心(こころ)は知恵(ちえ)をもって

わたしを導いているが、わたしは酒をもって自分の肉体を元気づけよう
と試みた。また、人の子は天が下でその短い一生の間、どんな事を
したら良いかを、見きわめるまでは、愚かな事をしようと試みた。四わた
しは大きな事業をした。わたしは自分のために家を建て、ぶどう畑を設
け、五園と庭をつくり、またすべて実のなる木をそこに植え、六池をつくっ
て、木のおい茂る林に、そこから水を注がせた。七わたしは男女の奴隷を
買った。またわたしの家で生れた奴隷を持っていた。わたしはまた、わた
しより先にエルサレムにいただれよりも多くの牛や羊の財産を持ってい
た。八わたしはまた銀と金を集め、王たちと国々の財宝を集めた。またわ
たしは歌うたう男、歌うたう女を得た。また人の子の楽しみとするそば
めを多く得た。

九こうして、わたしは大いなる者となり、わたしより先にエルサレムにい

たすべての者よりも、大いなる者となった。わたしの知恵もまた、わたし
を離れなかった。一〇なんでもわたしの目の好むものは遠慮せず、わたし
の心の喜ぶものは拒まなかった。わたしの心がわたしのすべての労苦
によって、快楽を得たからである。そしてこれはわたしのすべての労苦に
よって得た報いであった。一一そこで、わたしはわが手のなしたすべての
事、およびそれをなすに要した労苦を顧みたとき、見よ、皆、空であっ
て、風を捕えるようなものであった。日の下には益となるものはないので
ある。

一二わたしはまた、身をめぐらして、知恵と、狂気と、愚痴とを見た。そも
そも、王の後に来る人は何をなし得ようか。すでに彼がなした事にすぎな
いのだ。一三光が暗きにまさるように、知恵が愚痴にまさるのを、わたし
は見た。一四知者の目は、その頭にある。しかし愚者は暗やみを歩む。け

れどもわたしはなお同一の運命が彼らのすべてに臨むことを知っている。
一五わたしは心に言った、「愚者に臨む事はわたしにも臨むのだ。それで
どうしてわたしは賢いことがあろう」。わたしはまた心に言った、「これ
もまた空である」と。一六そもそも、知者も愚者も同様に長く覚えられるも
のではない。きたるべき日には皆忘れられてしまうのである。知者が愚者
と同じように死ぬのは、どうしたことであろう。一七そこで、わたしは生き
ることをいとった。日の下に行われるわざは、わたしに悪しく見えたから
である。皆空であって、風を捕えるようである。
一八わたしは日の下で労したすべての労苦を憎んだ。わたしの後に来る
人にこれを残さなければならないからである。一九そして、その人が知者
であるか、または愚者であるかは、だれが知り得よう。そうであるのに、そ
の人が、日の下でわたしが労し、かつ知恵を働かしてなしたすべての労苦

をつかさどることになるのだ。これもまた空である。二〇それでわたしは
ふり返ってみて、日の下でわたしが労したすべての労苦について、望みを
失った。二一今ここに人があって、知恵と知識と才能をもって労しても、
これがために労しない人に、すべてを残して、その所有とさせなければな
らないのだ。これもまた空であって、大いに悪い。二二そもそも、人は日
の下で労するすべての労苦と、その心づかいによってなんの得るところが
あるか。二三そのすべての日はただ憂いのみであって、そのわざは苦しく、
その心は夜の間も休まることがない。これもまた空である。
二四人は食い飲みし、その労苦によって得たもので心を楽しませるより
良い事はない。これもまた神の手から出ることを、わたしは見た。二五だれ
が神を離れて、食い、かつ楽しむことのできる者があろう。二六神は、そ
の心にかなう人に、知恵と知識と喜びとをくださる。しかし罪びとには

仕事を与えて集めることと、積むことをさせられる。これは神の心にかなう者にそれを賜わるためである。これもまた空であって、風を捕えるようである。

第三章

一 天が下のすべての事には季節があり、
すべてのわざには時がある。
二 生るるに時があり、死ぬるに時があり、
植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、
三 殺すに時があり、いやすに時があり、
こわすに時があり、建てるに時があり、
四 泣くに時があり、笑うに時があり、
悲しむに時があり、踊るに時があり、

五石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、
抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、
六捜すに時があり、失うに時があり、
保つに時があり、捨てるに時があり、
七裂くに時があり、縫うに時があり、
黙るに時があり、語るに時があり、
八愛するに時があり、憎むに時があり、
戦うに時があり、和らぐに時がある。
九働く者はその労することにより、なんの益を得るか。
一〇わたしは神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事を見た。一一
神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠
を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めか

ら終りまで見きわめることはできない。一二わたしは知っている。人にはそ
の生きながらえている間、楽しく愉快に過ごすよりほかに良い事はない。
一三またすべての人が食い飲みし、そのすべての労苦によって楽しみを得る
ことは神の賜物である。一四わたしは知っている。すべて神がなさる事は
永遠に変ることがなく、これに加えることも、これから取ることもできな
い。神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れをもつようになるた
めである。一五今あるものは、すでにあったものである。後にあるものも、
すでにあったものである。神は追いやられたものを尋ね求められる。
一六わたしはまた、日の下を見たが、さばきを行う所にも不正があり、
公義を行う所にも不正がある。一七わたしは心に言った、「神は正しい
者と悪い者とをさばかれる。神はすべての事と、すべてのわざに、時を定
められたからである」と。一八わたしはまた、人の子らについて心に言っ

た、「神は彼らをためして、彼らに自分たちが獣にすぎないことを悟らせ
られるのである」と。一九人の子らに臨むところは獣にも臨むからである。
すなわち一様に彼らに臨み、これの死ぬように、彼も死ぬのである。彼ら
はみな同様の息をもっている。人は獣にまさるところがない。すべての
ものは空だからである。二〇みな一つ所に行く。皆ちりから出て、皆ちり
に帰る。二一だれが知るか、人の子らの霊は上にのぼり、獣の霊は地にく
だるかを。二二それで、わたしは見た、人はその働きによって楽しむにこ
した事はない。これが彼の分だからである。だれが彼をつれていって、そ
の後の、どうなるかを見させることができようか。
第四章一わたしはまた、日の下に行われるすべてのしえたげを見た。見
よ、しえたげられる者の涙を。彼らを慰める者はない。しえたげる者の
手には権力がある。しかし彼らを慰める者はいない。二それで、わたし

はなお生きている生存者よりも、すでに死んだ死者を、さいわいな者と思っ
た。三しかし、この両者よりもさいわいなのは、まだ生れない者で、日の
下に行われる悪しきわざを見ない者である。
四また、わたしはすべての労苦と、すべての巧みなわざを見たが、これは
人が互にねたみあってなすものである。これもまた空であって、風を捕
えるようである。
五愚かなる者は手をつかねて、自分の肉を食う。
六片手に物を満たして平穏であるのは、両手に物を満たして労苦し、風
を捕えるのにまさる。
七わたしはまた、日の下に空なる事のあるのを見た。八ここに人がある。
ひとりであって、仲間もなく、子もなく、兄弟もない。それでも彼の労苦
は窮まりなく、その目は富に飽くことがない。また彼は言わない、「わたし

はだれのために労するのか、どうして自分を楽しませないのか」と。これ
もまた空であって、苦しいわざである。
九ふたりはひとりにまさる。彼らはその労苦によって良い報いを得るか
らである。一〇すなわち彼らが倒れる時には、そのひとりがその友を助け
起す。しかしひとりであって、その倒れる時、これを助け起す者のない者
はわざわいである。一一またふたりが一緒に寝れば暖かである。ひとりだ
けで、どうして暖かになり得ようか。一二人がもし、そのひとりを攻め撃っ
たなら、ふたりで、それに当るであろう。三つよりの綱はたやすくは切れ
ない。

一三貧しくて賢いわらべは、老いて愚かで、もはや、いさめをいれること
を知らない王にまさる。一四たとい、その王が獄屋から出て、王位についた
者であっても、また自分の国に貧しく生れて王位についた者であっても、

そうである。一五わたしは日の下に歩むすべての民が、かのわらべのよう
に王に代って立つのを見た。一六すべての民は果てしがない。彼はそのす
べての民を導いた。しかし後に来る者は彼を喜ばない。たしかに、これ
もまた空であって、風を捕えるようである。

第五章一神の宮に行く時には、その足を慎むがよい。近よって聞くの
は愚かな者の犠牲をささげるのにまさる。彼らは悪を行っていることを
知らないからである。二神の前で軽々しく口をひらき、また言葉を出そう
と、心にあせってはならない。神は天にいまし、あなたは地におるからで
ある。それゆえ、あなたは言葉を少なくせよ。

三夢は仕事の多いことによってきたり、愚かなる者の声は言葉の多いこ
とによって知られる。

四あなたは神に誓いをなすとき、それを果すことを延ばしてはならない。

神は愚かな者を喜ばれないからである。あなたの誓ったことを必ず果
せ。五あなたが誓いをして、それを果さないよりは、むしろ誓いをしない
ほうがよい。六あなたの口が、あなたに罪を犯させないようにせよ。また
使者の前にそれは誤りであったと言ってはならない。どうして、神があな
たの言葉を怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてよかろうか。
七夢が多ければ空なる言葉も多い。しかし、あなたは神を恐れよ。
八あなたは国のうちに貧しい者をしえたげ、公道と正義を曲げることの
あるのを見ても、その事を怪しんではならない。それは位の高い人より
も、さらに高い者があって、その人をうかがうからである。そしてそれら
よりもなお高い者がある。九しかし、要するに耕作した田畑をもつ国には
王は利益である。
一〇金銭を好む者は金銭をもって満足しない。富を好む者は富を得て満足

しない。これもまた空である。
一一財産が増せば、これを食う者も増す。その持ち主は目にそれを見る
だけで、なんの益があるか。
一二働く者は食べることが少なくても多くても、快く眠る。しかし飽
き足りるほどの富は、彼に眠ることをゆるさない。
一三わたしは日の下に悲しむべき悪のあるのを見た。すなわち、富はこれ
をたくわえるその持ち主に害を及ぼすことである。一四またその富は不幸
な出来事によってうせ行くことである。それで、その人が子をもうけても、
彼の手には何も残らない。一五彼は母の胎から出てきたように、すなわち
裸で出てきたように帰って行く。彼はその労苦によって得た何物をもそ
の手に携え行くことができない。一六人は全くその来たように、また去っ
て行かなければならない。これもまた悲しむべき悪である。風のために労

する者になんの益があるか。一七人は一生、暗やみと、悲しみと、多くの
悩みと、病と、憤りの中にある。
一八見よ、わたしが見たところの善かつ美なる事は、神から賜わった短
い一生の間、食い、飲み、かつ日の下で労するすべての労苦によって、楽
しみを得る事である。これがその分だからである。一九また神はすべての
人に富と宝と、それを楽しむ力を与え、またその分を取らせ、その労苦に
よって楽しみを得させられる。これが神の賜物である。二〇このような人
は自分の生きる日のことを多く思わない。神は喜びをもって彼の心を満
たされるからである。

第六章一わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。これは人々の上に
重い。二すなわち神は富と、財産と、誉とを人に与えて、その心に慕う
ものを、一つも欠けることのないようにされる。しかし神は、その人にこ

れを持つことを許されないで、他人がこれを持つようになる。これは空で
ある。悪しき病である。
三たとい人は百人の子をもうけ、また命長く、そのよわいの日が多くても、その心が幸福に満足せず、また葬られることがなければ、わたしは言う、流産の子はその人にまさると。
四これはむなしく来て、暗やみの中に去って行き、その名は暗やみにおおわれる。
五またこれは日を見ず、物を知らない。けれどもこれは彼よりも安らかである。
六たとい彼は千年に倍するほど生きても幸福を見ない。みな一つ所に行くのではないか。

七人の労苦は皆、その口のためである。しかしその食欲は満たされない。
八賢い者は愚かな者になんのまさるところがあるか。また生ける者の前に歩むことを知る貧しい者もなんのまさるところがあるか。
九目に見る事は欲望のさまよい歩くにまさる。これもまた空であって、風を捕える

ようなものである。
一〇今あるものは、すでにその名がつけられた。そして人はいかなる者
であるかは知られた。それで人は自分よりも力強い者と争うことはでき
ない。一一言葉が多ければむなしい事も多い。人になんの益があるか。一
二人はその短く、むなしい命の日を影のように送るのに、何が人のため
に善であるかを知ることができよう。だれがその身の後に、日の下に何が
あるであろうかを人に告げることができるか。

第七章

一良き名は良き油にまさり、
死ぬる日は生るる日にまさる。
二悲しみの家にはいるのは、
宴会の家にはいるのにまさる。
死はすべての人の終りだからである。

生きている者は、これを心にとめる。
三 悲しみは笑いにまさる。
顔に憂いをもつことによって、
心は良くなるからである。
四 賢い者の心は悲しみの家にあり、
愚かな者の心は楽しみの家にある。
五 賢い者の戒めを聞くのは、
愚かな者の歌を聞くのにまさる。
六 愚かな者の笑いは
かまの下に燃えるいばらの音のようである。
これもまた空である。
七 たしかに、しえたげは賢い人を愚かにし、

まいないは人(ひと)の心(こころ)をそこなう。
八事(こと)の終(おわ)りはその初(はじ)めよりも良(よ)い。
耐(た)え忍(しの)ぶ心(こころ)は、おごり高(たか)ぶる心(こころ)にまさる。
九気(き)をせきたてて怒(いか)るな。
怒(いか)りは愚(おろ)かな者(もの)の胸(むね)に宿(やど)るからである。
一〇「昔(むかし)が今(いま)よりもよかったのはなぜか」と言(い)うな。
あなたがこれを問(と)うのは知恵(ちえ)から出(で)るのではない。
一一知恵(ちえ)に財産(ざいさん)が伴(ともな)うのは良(よ)い。
それは日(ひ)を見(み)る者(もの)どもに益(えき)がある。
一二知恵(ちえ)が身(み)を守(まも)るのは、金銭(きんせん)が身(み)を守(まも)るようである。
しかし、知恵(ちえ)はこれを持(も)つ者(もの)に生命(せいめい)を保(たも)たせる。
これが知識(ちしき)のすぐれた所(ところ)である。

一三神のみわざを考えみよ。
神の曲げられたものを、
だれがまっすぐにすることができるか。
一四順境の日には楽しめ、逆境の日には考えよ。神は人に将来ど
ういう事があるかを、知らせないために、彼とこれとを等しく造られたの
である。
一五わたしはこのむなしい人生において、もろもろの事を見た。そこに
は義人がその義によって滅びることがあり、悪人がその悪によって長生き
することがある。一六あなたは義に過ぎてはならない。また賢きに過ぎて
はならない。あなたはどうして自分を滅ぼしてよかろうか。一七悪に過ぎ
てはならない。また愚かであってはならない。あなたはどうして、自分の
時のこないのに、死んでよかろうか。一八あなたがこれを執るのはよい、ま

た彼から手を引いてはならない。神をかしこむ者は、このすべてからのが
れ出るのである。
一九知恵が知者を強くするのは、十人のつかさが町におるのにまさる。
二〇善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない。
二一人の語るすべての事に心をとめてはならない。これはあなたが、自分
のしもべのあなたをのろう言葉を聞かないためである。二二あなたもまた、
しばしば他人をのろったのを自分の心に知っているからである。
二三わたしは知恵をもってこのすべての事を試みて、「わたしは知者とな
ろう」と言ったが、遠く及ばなかった。二四物事の理は遠く、また、はな
はだ深い。だれがこれを見いだすことができよう。二五わたしは、心を転
じて、物を知り、事を探り、知恵と道理を求めようとし、また悪の愚かな
こと、愚痴の狂気であることを知ろうとした。二六わたしは、その心が、

わなと網のような女、その手が、かせのような女は、死よりも苦い者で
あることを見いだした。神を喜ばす者は彼女からのがれる。しかし罪び
とは彼女に捕えられる。二七伝道者は言う、見よ、その数を知ろうとして、
いちいち数えて、わたしが得たものはこれである。二八わたしはなおこれを
求めたけれども、得なかった。わたしは千人のうちにひとりの男子を得た
けれども、そのすべてのうちに、ひとりの女子をも得なかった。二九見よ、
わたしが得た事は、ただこれだけである。すなわち、神は人を正しい者に
造られたけれども、人は多くの計略を考え出した事である。

第八章

一だれが知者のようになり得よう。
だれが事の意義を知り得よう。
人の知恵はその人の顔を輝かせ、

またその粗暴な顔を変える。
二王の命を守れ。すでに神をさして誓ったことゆえ、驚くな。三事が
悪い時は、王の前を去れ、ためらうな。彼はすべてその好むところをなす
からである。四王の言葉は決定的である。だれが彼に「あなたは何をする
のか」と言うことができようか。五命令を守る者は災にあわない。知者
の心は時と方法をわきまえている。六人の悪が彼の上に重くても、すべ
てのわざには時と方法がある。七後に起る事を知る者はない。どんな事が
起るかをだれが彼に告げ得よう。八風をとどめる力をもつ人はない。また
死の日をつかさどるものはない。戦いには免除はない。また悪はこれを
行う者を救うことができない。九わたしはこのすべての事を見た。また日
の下に行われるもろもろのわざに心を用いた。時としてはこの人が、か
の人を治めて、これに害をこうむらせることがある。

一〇またわたしは悪人の葬られるのを見た。彼らはいつも聖所に出入り
し、それを行ったその町でほめられた。これもまた空である。一一悪しき
わざに対する判決がすみやかに行われないために、人の子らの心はもっ
ぱら悪を行うことに傾いている。一二罪びとで百度悪をなして、なお長生
きするものがあるけれども、神をかしこみ、み前に恐れをいだく者には幸福
があることを、わたしは知っている。一三しかし悪人には幸福がない。ま
たその命は影のようであって長くは続かない。彼は神の前に恐れをいだ
かないからである。

一四地の上に空な事が行われている。すなわち、義人であって、悪人に
臨むべき事が、その身に臨む者がある。また、悪人であって、義人に臨む
べき事が、その身に臨む者がある。わたしは言った、これもまた空である
と。一五そこで、わたしは歓楽をたたえる。それは日の下では、人にとっ

て、食い、飲み、楽しむよりほかに良い事はないからである。これこそは
日の下で、神が賜わった命の日の間、その勤労によってその身に伴う
ものである。
一六わたしは心をつくして知恵を知ろうとし、また地上に行われるわ
ざを昼も夜も眠らずに窮めようとしたとき、一七わたしは神のもろもろの
わざを見たが、人は日の下に行われるわざを窮めることはできない。人
はこれを尋ねようと労しても、これを窮めることはできない。また、たと
い知者があって、これを知ろうと思っても、これを窮めることはできない
のである。

第九章一わたしはこのすべての事に心を用いて、このすべての事を明ら
かにしようとした。すなわち正しい者と賢い者、および彼らのわざが、神
の手にあることを明らかにしようとした。愛するか憎むかは人にはわから
ない。彼らの前にあるすべてのことは空である。二すべての人に臨むとこ

ろは、みな同様である。正しい者にも、善良な者にも
悪い者にも、清い者にも汚れた者にも、犠牲をささげる者にも、犠牲をさ
さげない者にも、その臨むところは同様である。善良な人も罪びとも異
なることはない。誓いをなす者も、誓いをなすことを恐れる者も異なるこ
とはない。三すべての人に同一に臨むのは、日の下に行われるすべての
事のうちの悪事である。また人の心は悪に満ち、その生きている間は、
狂気がその心のうちにあり、その後は死者のもとに行くのである。四す
べて生ける者に連なる者には望みがある。生ける犬は、死せるししにまさ
るからである。五生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は
何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残
る事がらさえも、ついに忘れられる。六その愛も、憎しみも、ねたみも、す
でに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久に

かかわることがない。
七あなたは行って、喜びをもってあなたのパンを食べ、楽しい心をもってあなたの酒を飲むがよい。神はすでに、あなたのわざをよみせられたからである。
八あなたの衣を常に白くせよ。あなたの頭に油を絶やすな。
九日の下で神から賜わったあなたの空なる命の日の間、あなたはその愛する妻と共に楽しく暮すがよい。これはあなたが世にあってうける分、あなたが日の下で労する労苦によって得るものだからである。
一〇すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。
一一わたしはまた日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのでもない。また賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るの

でもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。一二人はその時を知らな
い。魚がわざわいの網にかかり、鳥がわなにかかるように、人の子らもわ
ざわいの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである。
一三またわたしは日の下にこのような知恵の例を見た。これはわたしに
とって大きな事である。一四ここに一つの小さい町があって、そこに住む
人は少なかったが、大いなる王が攻めて来て、これを囲み、これに向かって
大きな雲梯を建てた。一五しかし、町のうちにひとりの貧しい知恵のある人
がいて、その知恵をもって町を救った。ところがだれひとり、その貧しい人
を記憶する者がなかった。一六そこでわたしは言う、「知恵は力にまさる。
しかしかの貧しい人の知恵は軽んぜられ、その言葉は聞かれなかった」。
一七静かに聞かれる知者の言葉は、愚かな者の中のつかさたる者の叫び
にまさる。一八知恵は戦いの武器にまさる。しかし、ひとりの罪びとは多

くの良きわざを滅ぼす。

第一〇章

一死んだはえは、香料を造る者の
あぶらを臭くし、
少しの愚痴は知恵と誉よりも重い。
二知者の心は彼を右に向けさせ、
愚者の心は左に向けさせる。
三愚者は道を行く時、思慮が足りない、
自分の愚かなことをすべての人に告げる。
四つかさたる者があなたに向かって立腹しても、
あなたの所を離れてはならない。
温順は大いなるとがを和らげるからである。

五わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。それはつかさたる者から
出るあやまちに似ている。六すなわち愚かなる者が高い地位に置かれ、富
める者が卑しい所に座している。七わたしはしもべたる者が馬に乗り、君
たる者が奴隷のように徒歩であるくのを見た。

八穴を掘る者はみずからこれに陥り、
石がきをこわす者は、へびにかまれる。
九石を切り出す者はそれがために傷をうけ、
木を割る者はそれがために危険にさらされる。
一〇鉄が鈍くなったとき、人がその刃をみがかなければ、
力を多くこれに用いねばならない。
しかし、知恵は人を助けてなし遂げさせる。
一一へびがもし呪文をかけられる前に、かみつけば、

へび使は益がない。
一二知者の口の言葉は恵みがある、
しかし愚者のくちびるはその身を滅ぼす。
一三愚者の口の言葉の初めは愚痴である、
またその言葉の終りは悪い狂気である。
一四愚者は言葉を多くする、
しかし人はだれも後に起ることを知らない。
だれがその身の後に起る事を
告げることができようか。
一五愚者の労苦はその身を疲れさせる、
彼は町にはいる道をさえ知らない。
一六あなたの王はわらべであって、

その君たちが朝から、ごちそうを食べる国よ、
あなたはわざわいだ。
一七あなたの王は自主の子であって、
その君たちが酔うためでなく、力を得るために、
適当な時にごちそうを食べる国よ、
あなたはさいわいだ。
一八怠惰によって屋根は落ち、
無精によって家は漏る。
一九食事は笑いのためになされ、
酒は命を楽しませる。
金銭はすべての事に応じる。
二〇あなたは心のうちでも王をのろってはならない、
また寝室でも富める者をのろってはならない。

空の鳥はあなたの声を伝え、
翼のあるものは事を告げるからである。

第一一章

一あなたのパンを水の上に投げよ、
多くの日の後、あなたはそれを得るからである。
二あなたは一つの分を七つまた八つに分けよ、
あなたは、どんな災が地に起るかを知らないからだ。
三雲がもし雨で満ちるならば、地にそれを注ぐ、
また木がもし南か北に倒れるならば、
その木は倒れた所に横たわる。
四風を警戒する者は種をまかない、
雲を観測する者は刈ることをしない。

五あなたは、身ごもった女の胎の中で、どうして霊が骨にはいるかを知らない。そのようにあなたは、すべての事をなされる神のわざを知らない。

六朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。実るのは、これであるか、あれであるか、あるいは二つともに良いのであるか、あなたは知らないからである。

七光は快いものである。目に太陽を見るのは楽しいことである。

八人が多くの年、生きながらえ、そのすべてにおいて自分を楽しませても、暗い日の多くあるべきことを忘れてはならない。すべて、きたらんとする事は皆空である。

九若い者よ、あなたの若い時に楽しめ。あなたの若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心の道に歩み、あなたの目の見るところに歩め。ただし、そのすべての事のために、神はあなたをさばかれることを知れ。

一〇あなたの心から悩みを去り、あなたのからだから痛みを除け。若い
時と盛んな時はともに空だからである。

第一二章 一あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がき
たり、年が寄って、「わたしにはなんの楽しみもない」と言うようにならな
い前に、二また日や光や、月や星の暗くならない前に、雨の後にまた雲
が帰らないうちに、そのようにせよ。三その日になると、家を守る者は震
え、力ある人はかがみ、ひきこなす女は少ないために休み、窓からのぞ
く者の目はかすみ、四町の門は閉ざされる。その時ひきこなす音は低くな
り、人は鳥の声によって起きあがり、歌の娘たちは皆、低くされる。五彼
らはまた高いものを恐れる。恐ろしいものが道にあり、あめんどうは花咲
き、いなごはその身をひきずり歩き、その欲望は衰え、人が永遠の家に
行こうとするので、泣く人が、ちまたを歩きまわる。六その後、銀のひも

は切れ、金の皿は砕け、水がめは泉のかたわらで破れ、車は井戸のかた
わらで砕ける。七ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に
帰る。八伝道者は言う、「空の空、いっさいは空である」と。
九さらに伝道者は知恵があるゆえに、知識を民に教えた。彼はよく考
え、尋ねきわめ、あまたの箴言をまとめた。一〇伝道者は麗しい言葉を得
ようとつとめた。また彼は真実の言葉を正しく書きしるした。
一一知者の言葉は突き棒のようであり、またよく打った釘のようなもので
あって、ひとりの牧者から出た言葉が集められたものである。一二わが子
よ、これら以外の事にも心を用いよ。多くの書を作れば際限がない。多
く学べばからだが疲れる。
一三事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令
を守れ。これはすべての人の本分である。一四神はすべてのわざ、ならび

にすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである。

雅歌

第一章

一ソロモンの雅歌(がか)
二どうか、あなたの口(くち)の口(くち)づけをもって、
わたしに口(くち)づけしてください。
あなたの愛(あい)はぶどう酒(しゅ)にまさり、
三あなたのにおい油(あぶら)はかんばしく、
あなたの名(な)は注(そそ)がれたにおい油(あぶら)のようです。
それゆえ、おとめたちはあなたを愛(あい)するのです。
四あなたのあとについて、行(い)かせてください。
わたしたちは急(いそ)いでまいりましょう。

王はわたしをそのへやに連れて行かれた。
わたしたちは、あなたによって喜び楽しみ、
ぶどう酒にまさって、あなたの愛をほめたたえます。
おとめたちは真心をもってあなたを愛します。
五エルサレムの娘たちよ、
わたしは黒いけれども美しい。
ケダルの天幕のように、ソロモンのとばりのように。
六わたしが日に焼けているがために、
日がわたしを焼いたがために、
わたしを見つめてはならない。
わが母の子らは怒って、わたしにぶどう園を守らせた。
しかし、わたしは自分のぶどう園を守らなかった。

七わが魂の愛する者よ、
あなたはどこで、あなたの群れを養い、
昼の時にどこで、それを休ませるのか、
わたしに告げてください。
どうして、わたしはさまよう者のように、
あなたの仲間の群れのかたわらに、
いなければならないのですか。
八女のうちの最も美しい者よ、
あなたが知らないなら、群れの足跡に従っていって、
羊飼たちの天幕のかたわらで、
あなたの子やぎを飼いなさい。
九わが愛する者よ、

わたしはあなたをパロの車の雌馬になぞらえる。
一〇あなたのほおは美しく飾られ、
あなたの首は宝石をつらねた首飾で美しい。
一一われわれは銀を散らした金の飾り物を、
あなたのために造ろう。
一二王がその席に着かれたとき、
わたしのナルドはそのかおりを放った。
一三わが愛する者は、わたしにとっては、
わたしの乳ぶさの間にある没薬の袋のようです。
一四わが愛する者は、わたしにとっては、
エンゲデのぶどう園にある
ヘンナ樹の花ぶさのようです。

一五わが愛する者よ、見よ、あなたは美しい、
見よ、あなたは美しい、あなたの目ははとのようだ。
一六わが愛する者よ、見よ、あなたは美しく、
まことにりっぱです。
わたしたちの床は緑、
一七わたしたちの家の梁は香柏、
そのたるきはいとすぎです。

第二章

一わたしはシャロンのばら、
谷のゆりです。
二おとめたちのうちにわが愛する者のあるのは、
いばらの中にゆりの花があるようだ。
三わが愛する者の若人たちの中にあるのは、

林の木の中にりんごの木があるようです。
わたしは大きな喜びをもって、彼の陰にすわった。
彼の与える実はわたしの口に甘かった。
四彼はわたしを酒宴の家に連れて行った。
わたしの上にひるがえる彼の旗は愛であった。
五干ぶどうをもって、わたしに力をつけ、
りんごをもって、わたしに元気をつけてください。
わたしは愛のために病みわずらっているのです。
六どうか、彼の左の手がわたしの頭の下にあり、
右の手がわたしを抱いてくれるように。
七エルサレムの娘たちよ、
わたしは、かもしかと野の雌じかをさして、

あなたがたに誓い、お願いする、
愛のおのずから起るときまでは、
ことさらに呼び起すことも、
さますこともしないように。
八わが愛する者の声が聞える。
見よ、彼は山をとび、丘をおどり越えて来る。
九わが愛する者はかもしかのごとく、
若い雄じかのようです。
見よ、彼はわたしたちの壁のうしろに立ち、
窓からのぞき、格子からうかがっている。
一〇わが愛する者はわたしに語って言う、
「わが愛する者よ、わが麗しき者よ、

立って、出てきなさい。
一一 見よ、冬は過ぎ、
雨もやんで、すでに去り、
一二 もろもろの花は地にあらわれ、
鳥のさえずる時がきた。
山ばとの声がわれわれの地に聞える。
一三 いちじくの木はその実を結び、
ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ。
わが愛する者よ、わが麗しき者よ、
立って、出てきなさい。
一四 岩の裂け目、がけの隠れ場におるわがはとよ、
あなたの顔を見せなさい。

あなたの声を聞かせなさい。
あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい。
一五われわれのためにきつねを捕えよ、
ぶどう園を荒す小ぎつねを捕えよ、
われわれのぶどう園は花盛りだから」と。
一六わが愛する者はわたしのもの、わたしは彼のもの。
彼はゆりの花の中で、その群れを養っている。
一七わが愛する者よ、
日の涼しくなるまで、
影の消えるまで、身をかえして出ていって、
険しい山々の上で、かもしかのように、
若い雄じかのようになってください。

第三章

一わたしは夜（よる）、床（とこ）の上（うえ）で、
わが魂（たましい）の愛（あい）する者（もの）をたずねた。
わたしは彼（かれ）をたずねたが、見（み）つからなかった。
わたしは彼（かれ）を呼（よ）んだが、答（こたえ）がなかった。
二「わたしは今起（いまお）きて、町（まち）をまわり歩（ある）き、
街路（がいろ）や広場（ひろば）で、わが魂（たましい）の愛（あい）する者（もの）をたずねよう」と、
彼（かれ）をたずねたが、見（み）つからなかった。
三町（まち）をまわり歩（ある）く夜回（よまわ）りたちに出会（であ）ったので、
「あなたがたは、
わが魂（たましい）の愛（あい）する者（もの）を見（み）ましたか」と尋（たず）ねた。
四わたしが彼（かれ）らと別（わか）れて行（い）くとすぐ、
わが魂（たましい）の愛（あい）する者（もの）に出会（であ）った。

わたしは彼(かれ)を引(ひ)き留(と)めて行(い)かせず、
ついにわが母(はは)の家(いえ)につれて行(い)き、
わたしを産(う)んだ者(もの)のへやにはいった。
五エルサレムの娘(むすめ)たちよ、
わたしは、かもしかと野(の)の雌(め)じかをさして、
あなたがたに誓(ちか)い、お願(ねが)いする、
愛(あい)のおのずから起(おこ)るときまでは、
ことさらに呼(よ)び起(おこ)すことも、
さますこともしないように。
六没薬(もつやく)、乳香(にゅうこう)など、商人(しょうにん)のもろもろの香料(こうりょう)をもって、
かおりを放(はな)ち、
煙(けむり)の柱(はしら)のように、荒野(あらの)から上(のぼ)って来(く)るものは何(なに)か。

七 見よ、あれはソロモンの乗物で、
六十人の勇士がそのまわりにいる。
イスラエルの勇士で、
八 皆、つるぎをとり、戦いをよくし、
おのおの腰に剣を帯びて、
夜の危険に備えている。
九 ソロモン王はレバノンの木をもって、
自分のために輿をつくった。
一〇 その柱は銀、そのうしろは金、
その座は紫の布でつくった。
その内部にはエルサレムの娘たちが、
愛情をこめてつくった物を張りつけた。

一一シオンの娘たちよ、出てきてソロモン王を見よ。
彼は婚姻の日、心の喜びの日に、
その母の彼にかぶらせた冠をいただいている。

第四章

一わが愛する者よ、
見よ、あなたは美しい、見よ、あなたは美しい。
あなたの目は、顔おおいのうしろにあって、
はとのようだ。
あなたの髪はギレアデの山を下る
やぎの群れのようだ。
二あなたの歯は洗い場から上ってきた
毛を切られた雌羊の群れのようだ。

みな二子(ふたご)を産(う)んで、一匹(ぴき)も子(こ)のないものはない。
三あなたのくちびるは紅(くれない)の糸(いと)のようで、
その口(くち)は愛(あい)らしい。
あなたのほおは顔(かお)おおいのうしろにあって、
ざくろの片(かた)われのようだ。
四あなたの首(くび)は武器倉(ぶきぐら)のために建(た)てた
ダビデのやぐらのようだ。
その上(うえ)には一千の盾(たて)を掛(か)けつらね、
みな勇士(ゆうし)の大盾(おおだて)である。
五あなたの両乳(りょうち)ぶさは、
かもしかの二子(ふたご)である二匹(ひき)の子(こ)じかが、
ゆりの花(はな)の中(なか)に草(くさ)を食(た)べているようだ。

六日の涼しくなるまで、影の消えるまで、
わたしは没薬の山および乳香の丘へ急ぎ行こう。
七わが愛する者よ、
あなたはことごとく美しく、少しのきずもない。
八わが花嫁よ、レバノンからわたしと一緒にきなさい、
レバノンからわたしと一緒にきなさい。
アマナの頂を去り、セニルおよびヘルモンの頂を去り、
ししの穴、ひょうの山を去りなさい。
九わが妹、わが花嫁よ、あなたはわたしの心を奪った。
あなたはただひと目で、
あなたの首飾のひと玉で、わたしの心を奪った。
一〇わが妹、わが花嫁よ、

あなたの愛（あい）は、なんと麗（うるわ）しいことであろう。
あなたの愛（あい）はぶどう酒（しゅ）よりも、
あなたの香油（こうゆ）のかおりはすべての香料（こうりょう）よりも、
いかにすぐれていることであろう。
一一わが花嫁（はなよめ）よ、あなたのくちびるは甘露（かんろ）をしたたらせ、
あなたの舌（した）の下（した）には、蜜（みつ）と乳（ちち）とがある。
あなたの衣（ころも）のかおりはレバノンのかおりのようだ。
一二わが妹（いもうと）、わが花嫁（はなよめ）は閉（と）じた園（その）、
閉（と）じた園（その）、封（ふう）じた泉（いずみ）のようだ。
一三あなたの産（う）み出（だ）す物（もの）は、
もろもろの良（よ）き実（み）をもつざくろの園（その）、
ヘンナおよびナルド、
一四ナルド、さふらん、しょうぶ、肉桂（にっけい）、

さまざまの乳香の木、
没薬、ろかい、およびすべての尊い香料である。
一五あなたは園の泉、生ける水の井、
またレバノンから流れ出る川である。
一六北風よ、起れ、南風よ、きたれ。
わが園を吹いて、そのかおりを広く散らせ。
わが愛する者がその園にはいってきて、
その良い実を食べるように。

第五章

一わが妹、わが花嫁よ、
わたしはわが園にはいって、わが没薬と香料とを集め、
わが蜜蜂の巣と、蜜とを食べ、

わがぶどう酒と乳とを飲む。
友らよ、食らえ、飲め、
愛する人々よ、大いに飲め。
二わたしは眠っていたが、心はさめていた。
聞きなさい、わが愛する者が戸をたたいている。
「わが妹、わが愛する者、
わがはと、わが全き者よ、あけてください。
わたしの頭は露でぬれ、
わたしの髪の毛は夜露でぬれている」と言う。
三わたしはすでに着物を脱いだ、
どうしてまた着られようか。
すでに足を洗った、

どうしてまた、よごせようか。
四わが愛する者が掛けがねに手をかけたので、
わが心は内におどった。
五わたしが起きて、
わが愛する者のためにあけようとしたとき、
わたしの手から没薬がしたたり、
わたしの指から没薬の液が流れて、
貫の木の取手の上に落ちた。
六わたしはわが愛する者のために開いたが、
わが愛する者はすでに帰り去った。
彼が帰り去ったとき、わが心は力を失った。
わたしは尋ねたけれども見つからず、
呼んだけれども答がなかった。

七町をまわり歩く夜回りらは
わたしを見ると、撃って傷つけ、
城壁を守る者らは、わたしの上着をはぎ取った。
八エルサレムの娘たちよ、
わたしはあなたがたに誓って、お願いする。
もしわが愛する者を見たなら、
わたしが愛のために病みわずらっていると、
彼に告げてください。
九女のうちの最も美しい者よ、
あなたの愛する者は、ほかの人の愛する者に、
なんのまさるところがあるか。
あなたの愛する者は、ほかの人の愛する者に、

なんのまさるところがあって、
そのように、わたしたちに誓い、願うのか。
一〇わが愛する者は白く輝き、かつ赤く、
万人にぬきんで、
一一その頭は純金のように、
その髪の毛はうねっていて、からすのように黒い。
一二その目は泉のほとりのはとのように、
乳で洗われて、良く落ち着いている。
一三そのほおは、かんばしい花の床のように、
かおりを放ち、
そのくちびるは、ゆりの花のようで、没薬の液をしたたらす。
一四その手は宝石をはめた金の円筒のごとく、
そのからだはサファイヤをもっておおった

象牙の細工のごとく、
一五その足のすねは金の台の上にすえた
大理石の柱のごとく、
その姿はレバノンのごとく、香柏のようで、美しい。
一六その言葉は、はなはだ美しく、
彼はことごとく麗しい。
エルサレムの娘たちよ、
これがわが愛する者、これがわが友なのです。

第六章

一女のうちの最も美しい者よ、
あなたの愛する者はどこへ行ったか。
あなたの愛する者はどこへおもむいたか。

わたしたちはあなたと一緒にたずねよう。
二わが愛する者は園の中で、群れを飼い、
またゆりの花を取るために自分の園に下り、
かんばしい花の床へ行きました。
三わたしはわが愛する人のもの、
わが愛する者はわたしのものです。
彼はゆりの花の中で、その群れを飼っています。
四わが愛する者よ、あなたは美しいことテルザのごとく、
麗しいことエルサレムのごとく、
恐るべきこと旗を立てた軍勢のようだ。
五あなたの目はわたしを恐れさせるゆえ、
わたしからそむけてください。

あなたの髪(かみ)はギレアデの山(やま)を下(くだ)る
やぎの群(む)れのようだ。
六あなたの歯(は)は洗(あら)い場(ば)から上(のぼ)ってきた
雌羊(めひつじ)の群(む)れのようだ。
みな二子(ふたご)を産(う)んで、一匹(いっぴき)も子(こ)のないものはない。
七あなたのほおは顔(かお)おおいのうしろにあって、
ざくろの片(かた)われのようだ。
八王妃(おうひ)は六十人(にん)、そばめは八十人(にん)、
また数(かず)しれぬおとめがいる。
九わがはと、わが全(まった)き者(もの)はただひとり、
彼女(かのじょ)は母(はは)のひとり子(ご)、彼女(かのじょ)を産(う)んだ者(もの)の最愛(さいあい)の者(もの)だ。
おとめたちは彼女(かのじょ)を見(み)て、さいわいな者(もの)ととなえ、

王妃たち、そばめたちもまた、彼女を見て、ほめた。
一〇「このしののめのように見え、
月のように美しく、太陽のように輝き、
恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者はだれか」。
一一わたしは谷の花を見、ぶどうが芽ざしたか、
ざくろの花が咲いたかを見ようと、
くるみの園へ下っていった。
一二わたしの知らないうちに、わたしの思いは、
わたしを車の中のわが君のかたわらにおらせた。
一三帰れ、帰れ、シュラムの女よ、
帰れ、帰れ、わたしたちはあなたを見たいものだ。
あなたがたはどうしてマハナイムの踊りを見るように

シュラムの女(おんな)を見(み)たいのか。

第七章

一女王(じょおう)のような娘(むすめ)よ、
あなたの足(あし)は、くつの中(なか)にあって、
なんと麗(うるわ)しいことであろう。
あなたのももは、まろやかで、玉(たま)のごとく、
名人(めいじん)の手(て)のわざのようだ。
二あなたのほぞは、
混(ま)ぜたぶどう酒(しゅ)を欠(か)くことのない丸(まる)い杯(さかずき)のごとく、
あなたの腹(はら)は、
ゆりの花(はな)で囲(かこ)まれた山盛(やまも)りの麦(むぎ)のようだ。
三あなたの両乳(りょうち)ぶさは、

かもしかの二子である二匹の子じかのようだ。
四あなたの首は象牙のやぐらのごとく、
あなたの目は、バテラビムの門のほとりにある
ヘシボンの池のごとく、
あなたの鼻は、ダマスコを見おろす
レバノンのやぐらのようだ。
五あなたの頭は、カルメルのようにあなたを飾り、
髪の毛は紫色のようで、王はそのたれ髪に捕われた。
六愛する者よ、快活なおとめよ、
あなたはなんと美しく愛すべき者であろう。
七あなたはなつめやしの木のように威厳があり、
あなたの乳ぶさはそのふさのようだ。

八わたしは言(い)う、「このなつめやしの木(き)にのぼり、
その枝(えだ)に取(と)りつこう。
どうか、あなたの乳(ち)ぶさが、ぶどうのふさのごとく、
あなたの息(いき)のにおいがりんごのごとく、
九あなたの口(くち)づけが、
なめらかに流(なが)れ下(くだ)る良(よ)きぶどう酒(しゅ)のごとく、
くちびると歯(は)の上(うえ)をすべるように」と。
一〇わたしはわが愛(あい)する人(ひと)のもの、彼(かれ)はわたしを恋(こい)い慕(した)う。
一一わが愛(あい)する者(もの)よ、
さあ、わたしたちはいなかへ出(で)ていって、
村里(むらざと)に宿(やど)りましょう。
一二わたしたちは早(はや)く起(お)き、ぶどう園(えん)へ行(い)って、

ぶどうの木が芽ざしたか、ぶどうの花が咲いたか、
ざくろが花咲いたかを見ましょう。
その所で、わたしはわが愛をあなたに与えます。
一三 恋なすは、かおりを放ち、
もろもろの良きくだものは、
新しいのも古いのも
共にわたしたちの戸の上にある。
わが愛する者よ、
わたしはこれをあなたのためにたくわえました。

第八章

一 どうか、あなたは、
わが母の乳ぶさを吸った
わが兄弟のようになってください。

わたしがそとであなたに会(あ)うとき、
あなたに口(くち)づけしても、
だれもわたしをいやしめないでしょう。
二わたしはあなたを導(みちび)いて、わが母(はは)の家(いえ)に行(い)き、
わたしを産(う)んだ者(もの)のへやにはいり、
香料(こうりょう)のはいったぶどう酒(しゅ)、ざくろの液(えき)を、
あなたに飲(の)ませましょう。
三どうか、彼(かれ)の左(ひだり)の手(て)がわたしの頭(あたま)の下(した)にあり、
右(みぎ)の手(て)がわたしを抱(だ)いてくれるように。
四エルサレムの娘(むすめ)たちよ、
わたしはあなたがたに誓(ちか)い、お願(ねが)いする、
愛(あい)のおのずから起(おこ)るときまでは、

ことさらに呼び起すことも、
さますこともしないように。
五 自分の愛する者によりかかって、
荒野から上って来る者はだれですか。
りんごの木の下で、わたしはあなたを呼びさました。
あなたの母上は、かしこで、
あなたのために産みの苦しみをなし、
あなたの産んだ者が、かしこで産みの苦しみをした。
六 わたしをあなたの心に置いて印のようにし、
あなたの腕に置いて印のようにしてください。
愛は死のように強く、
ねたみは墓のように残酷だからです。

そのきらめきは火のきらめき、最もはげしい炎です。
七愛は大水も消すことができない、
洪水もおぼれさせることができない。
もし人がその家の財産をことごとく与えて、
愛に換えようとするならば、
いたくいやしめられるでしょう。
八わたしたちに小さい妹がある、まだ乳ぶさがない。
わたしたちの妹に縁談のある日には、
彼女のために何をしてやろうか。
九彼女が城壁であるなら、その上に銀の塔を建てよう。
彼女が戸であるなら、香柏の板でそれを囲もう。
一〇わたしは城壁、わたしの乳ぶさは、

やぐらのようでありました。
それでわたしは彼の目には、
平和をもたらす者のようでありました。
一一ソロモンはバアルハモンにぶどう園をもっていた。
彼はぶどう園を、守る者どもにあずけて、
おのおのその実のために銀一千を納めさせた。
一二わたしのものであるぶどう園は、わたしの前にある。
ソロモンよ、あなたは一千を獲るでしょう、
その実を守る者どもは二百を獲るでしょう。
一三園の中に住む者よ、
わたしの友だちはあなたの声に耳を傾けます、
どうぞ、それをわたしに聞かせてください。

一四わが愛(あい)する者(もの)よ、急(いそ)いでください。
かんばしい山々(やまやま)の上(うえ)で、かもしかのように、
また若(わか)い雄(お)じかのようになってください。

イザヤ書

第一章

一アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ
の世にユダとエルサレムについて見た幻。
二天よ、聞け、地よ、耳を傾けよ、
主が次のように語られたから、
「わたしは子を養い育てた、
しかし彼らはわたしにそむいた。
三牛はその飼主を知り、
ろばはその主人のまぐさおけを知る。
しかしイスラエルは知らず、
わが民は悟らない」。

四ああ、罪深い国びと、不義を負う民、
悪をなす者のすえ、堕落せる子らよ。
彼らは主を捨て、
イスラエルの聖者をあなどり、
これをうとんじ遠ざかった。
五あなたがたは、どうして重ね重ねそむいて、
なおも打たれようとするのか。
その頭はことごとく病み、
その心は全く弱りはてている。
六足のうらから頭まで、
完全なところがなく、
傷と打ち傷と生傷ばかりだ。

これを絞り出すものなく、包むものなく、
油をもってやわらげるものもない。
七あなたがたの国は荒れすたれ、
町々は火で焼かれ、
田畑のものはあなたがたの前で外国人に食われ、
滅ぼされたソドムのように荒れすたれた。
八シオンの娘はぶどう畑の仮小屋のように、
きゅうり畑の番小屋のように、
包囲された町のように、ただひとり残った。
九もし万軍の主が、
われわれに少しの生存者を残されなかったなら、
われわれはソドムのようになり、

またゴモラと同(おな)じようになったであろう。
一〇あなたがたソドムのつかさたちよ、
主(しゅ)の言葉(ことば)を聞(き)け。
あなたがたゴモラの民(たみ)よ、
われわれの神(かみ)の教(おしえ)に耳(みみ)を傾(かたむ)けよ。
一一主(しゅ)は言(い)われる、
「あなたがたがささげる多(おお)くの犠牲(ぎせい)は、
わたしになんの益(えき)があるか。
わたしは雄羊(おひつじ)の燔祭(はんさい)と、
肥(こ)えた獣(けもの)の脂肪(しぼう)とに飽(あ)いている。
わたしは雄牛(おうし)あるいは小羊(こひつじ)、
あるいは雄(お)やぎの血(ち)を喜(よろこ)ばない。

一二あなたがたは、わたしにまみえようとして来（く）るが、
だれが、わたしの庭（にわ）を踏（ふ）み荒（あら）すことを求（もと）めたか。
一三あなたがたは、もはや、
むなしい供（そな）え物（もの）を携（たずさ）えてきてはならない。
薫香（くんこう）は、わたしの忌（い）みきらうものだ。
新月（しんげつ）、安息日（あんそくにち）、また会衆（かいしゅう）を呼（よ）び集（あつ）めること――
わたしは不義（ふぎ）と聖会（せいかい）とに耐（た）えられない。
一四あなたがたの新月（しんげつ）と定（さだ）めの祭（まつり）とは、
わが魂（たましい）の憎（にく）むもの、
それはわたしの重荷（おもに）となり、
わたしは、それを負（お）うのに疲（つか）れた。
一五あなたがたが手（て）を伸（の）べるとき、

わたしは目をおおって、あなたがたを見ない。
たとい多くの祈をささげても、わたしは聞かない。
あなたがたの手は血まみれである。
一六あなたがたは身を洗って、清くなり、
わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、
悪を行うことをやめ、
一七善を行うことをならい、公平を求め、
しえたげる者を戒め、
みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ。
一八主は言われる、
さあ、われわれは互に論じよう。
たといあなたがたの罪は緋のようであっても、

雪のように白くなるのだ。
紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。
一九もし、あなたがたが快く従うなら、
地の良き物を食べることができる。
二〇しかし、あなたがたが拒みそむくならば、
つるぎで滅ぼされる」。
これは主がその口で語られたことである。
二一かつては忠信であった町、
どうして遊女となったのか。
昔は公平で満ち、
正義がそのうちにやどっていたのに、
今は人を殺す者ばかりとなってしまった。

二二あなたの銀はかすとなり、
あなたのぶどう酒は水をまじえ、
二三あなたのつかさたちはそむいて、
盗びとの仲間となり、
みな、まいないを好み、贈り物を追い求め、
みなしごを正しく守らず、
寡婦の訴えは彼らに届かない。
二四このゆえに、主、万軍の主、
イスラエルの全能者は言われる、
「ああ、わたしはわが敵にむかって憤りをもらし、
わがあだにむかって恨みをはらす。
二五わたしはまた、わが手をあなたに向け、

あなたのかすを灰汁で溶かすように溶かし去り、
あなたの混ざり物をすべて取り除く。
二六こうして、あなたのさばきびとをもとのとおりに、
あなたの議官を初めのとおりに回復する。
その後あなたは正義の都、
忠信の町ととなえられる」。
二七シオンは公平をもってあがなわれ、
そのうちの悔い改める者は、
正義をもってあがなわれる。
二八しかし、そむく者と罪びととは共に滅ぼされ、
主を捨てる者は滅びうせる。
二九あなたがたは、みずから喜んだかしの木によって、

はずかしめを受け、
みずから選んだ園によって、恥じ赤らむ。
三〇あなたがたは葉の枯れるかしの木のように、
水のない園のようになり、
三一強い者も麻くずのように、
そのわざは火花のようになり、
その二つのものは共に燃えて、それを消す者はない。

第二章一アモツの子イザヤがユダとエルサレムについて示された言葉。
二終りの日に次のことが起る。
主の家の山は、
もろもろの山のかしらとして堅く立ち、
もろもろの峰よりも高くそびえ、

すべて国はこれに流れてき、
三多くの民は来て言う、
「さあ、われわれは主の山に登り、
ヤコブの神の家へ行こう。
彼はその道をわれわれに教えられる、
われわれはその道に歩もう」と。
律法はシオンから出、
主の言葉はエルサレムから出るからである。
四彼はもろもろの国のあいだにさばきを行い、
多くの民のために仲裁に立たれる。
こうして彼らはそのつるぎを打ちかえて、すきとし、
そのやりを打ちかえて、かまとし、

国は国にむかって、つるぎをあげず、
彼らはもはや戦いのことを学ばない。
五ヤコブの家よ、
さあ、われわれは主の光に歩もう。
六あなたはあなたの民ヤコブの家を捨てられた。
これは彼らが東の国からの占い師をもって満たし、
ペリシテびとのように占い者となり、
外国人と同盟を結んだからである。
七彼らの国には金銀が満ち、その財宝は限りない。
また彼らの国には馬が満ち、その戦車も限りない。
八また彼らの国には偶像が満ち、
彼らはその手のわざを拝み、

その指で作ったものを拝む。
九こうして人はかがめられ、人々は低くされる。
どうか彼らをおゆるしにならぬように。
一〇あなたは岩の間にはいり、ちりの中にかくれて、
主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避けよ。
一一その日には目をあげて高ぶる者は低くせられ、
おごる人はかがめられ、
主のみ高くあげられる。
一二これは、万軍の主の一日があって、
すべて誇る者と高ぶる者、
すべておのれを高くする者と得意な者とに
臨むからである。

一三またレバノンの高(たか)くそびえるすべての香柏(こうはく)、
バシャンのすべてのかしの木(き)、
一四またすべての高(たか)い山々(やまやま)、
すべてのそびえ立(た)つ峰々(みねみね)、
一五すべての高(たか)きやぐら、
すべての堅固(けんご)な城壁(じょうへき)、
一六タルシシのすべての船(ふね)、
すべての麗(うるわ)しい船舶(せんぱく)に臨(のぞ)む。
一七その日(ひ)には高(たか)ぶる者(もの)はかがめられ、
おごる人(ひと)は低(ひく)くせられ、
主(しゅ)のみ高(たか)くあげられる。
一八こうして偶像(ぐうぞう)はことごとく滅(ほろ)びうせる。

一九主が立って地を脅かされるとき、
人々は岩のほら穴にはいり、また地の穴にはいって、
主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。
二〇その日、人々は拝むためにみずから造った
しろがねの偶像と、こがねの偶像とを、
もぐらもちと、こうもりに投げ与え、
二一岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、
主が立って地を脅かされるとき、
主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。
二二あなたがたは鼻から息の出入りする人に、
たよることをやめよ、
このような者はなんの価値があろうか。

第三章

一見(み)よ、主(しゅ)、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)は
エルサレムとユダから
ささえとなり、頼(たの)みとなるもの——
すべてささえとなるパン、
すべてささえとなる水(みず)——を取(と)り去(さ)られる。
二すなわち勇士(ゆうし)と軍人(ぐんじん)、
裁判官(さいばんかん)と預言者(よげんしゃ)、
占(うらな)い師(し)と長老(ちょうろう)、
三五十人(にん)の長(ちょう)と身分(みぶん)の高(たか)い人(ひと)、
議官(ぎかん)と巧(たく)みな魔術師(まじゅつし)、
老練(ろうれん)なまじない師(し)を取(と)り去(さ)られる。
四わたしはわらべを立(た)てて彼(かれ)らの君(きみ)とし、

みどりごに彼らを治めさせる。
五民は互に相しえたげ、
人はおのおのその隣をしえたげ、
若い者は老いたる者にむかって高ぶり、
卑しい者は尊い者にむかって高ぶる。
六その時、人はその父の家で、兄弟をつかまえて言う、
「あなたは外套を持っている、
わたしたちのつかさびとになって、
この荒れ跡をあなたの手で治めてください」と。
七その日、彼は声をあげて言う、
「わたしはいやす者となることはできません、
わたしの家にはパンもなく、外套もありません、

わたしを立てて、
民のつかさびとにしないでください」。
八これは彼らの言葉と行いとが主にそむき、
その栄光の目をおかしたので、
エルサレムはつまずき、ユダは倒れたからである。
九彼らの不公平は彼らにむかって不利なあかしをし、
ソドムのようにその罪をあらわして隠さない。
わざわいなるかな、
彼らはみずから悪の報いをうけた。
一〇正しい人に言え、彼らはさいわいであると。
彼らはその行いの実を食べるからである。
一一悪しき者はわざわいだ、彼は災をうける。

その手のなした事が彼に報いられるからである。
一二 わが民は幼な子にしえたげられ、
女たちに治められる。
ああ、わが民よ、あなたを導く者は
かえって、あなたを迷わせ、
あなたの行くべき道を混乱させる。
一三 主は言い争うために立ちあがり、
その民をさばくために立たれる。
一四 主はその民の長老と君たちとをさばいて、
「あなたがたは、ぶどう畑を食い荒した。
貧しい者からかすめとった物は、
あなたがたの家にある。

一五なぜ、あなたがたはわが民を踏みにじり、
貧しい者の顔をすり砕くのか」と
万軍の神、主は言われる。
一六主は言われた、
シオンの娘らは高ぶり、
首をのばしてあるき、目でこびをおくり、
その行くとき気どって歩き、
その足でりんりんと鳴り響かす。
一七それゆえ、主はシオンの娘らの頭を
撃って、かさぶたでおおい、
彼らの隠れた所をあらわされる。
一八その日、主は彼らの美しい装身具と服装すなわち、くるぶし輪、髪

ひも、月形（つきがた）の飾（かざ）り、一九耳輪（みみわ）、腕輪（うでわ）、顔（かお）おおい、二〇頭飾（あたまかざ）り、すね飾（かざ）り、飾（かざ）り帯（おび）、香箱（こうばこ）、守（まも）り袋（ふくろ）、二一指輪（ゆびわ）、鼻輪（はなわ）、二二礼服（れいふく）、外套（がいとう）、肩掛（かたかけ）、手（て）さげ袋（ふくろ）、
二三薄織（うすおり）の上着（うわぎ）、亜麻布（あまぬの）の着物（きもの）、帽子（ぼうし）、被衣（かずき）などを取（と）り除（のぞ）かれる。
二四芳香（ほうこう）はかわって、悪臭（あくしゅう）となり、
帯（おび）はかわって、なわとなり、
よく編（あ）んだ髪（かみ）はかわって、かぶろとなり、
はなやかな衣（ころも）はかわって、荒布（あらぬの）の衣（ころも）となり、
美（うつく）しい顔（かお）はかわって、焼（や）き印（いん）された顔（かお）となる。
二五あなたの男（おとこ）たちはつるぎに倒（たお）れ、
あなたの勇士（ゆうし）たちは戦（たたか）いに倒（たお）れる。
二六シオンの門（もん）は嘆（なげ）き悲（かな）しみ、
シオンは荒（あ）れすたれて、地（ち）に座（ざ）する。

第四章一その日、七人の女がひとりの男にすがって、「わたしたちは
自分のパンをたべ、自分の着物を着ます。ただ、あなたの名によって呼ば
れることを許して、わたしたちの恥を取り除いてください」と言う。
二その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った
者の誇、また光栄となる。三四そして主が審判の霊と滅亡の霊とをもっ
て、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去ら
れるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムに
あって、生命の書にしるされた者は聖なる者ととなえられる。五その時、
主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は
雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての
栄光の上にある天蓋であり、あずまやであって、六昼は暑さをふせぐ陰と
なり、また暴風と雨を避けて隠れる所となる。

第五章

一わたしはわが愛(あい)する者(もの)のために、
そのぶどう畑(はたけ)についてのわが愛(あい)の歌(うた)をうたおう。
わが愛(あい)する者(もの)は土肥(つちこ)えた小山(こやま)の上(うえ)に、
一つのぶどう畑(はたけ)をもっていた。
二彼(かれ)はそれを掘(ほ)りおこし、石(いし)を除(のぞ)き、
それに良(よ)いぶどうを植(う)え、
その中(なか)に物見(ものみ)やぐらを建(た)て、
またその中(なか)に酒(さか)ぶねを掘(ほ)り、
良(よ)いぶどうの結(むす)ぶのを待(ま)ち望(のぞ)んだ。
ところが結(むす)んだものは野(の)ぶどうであった。
三それで、エルサレムに住(す)む者(もの)とユダの人々(ひとびと)よ、

どうか、わたしとぶどう畑(はたけ)との間(あいだ)をさばけ。
四わたしが、ぶどう畑(はたけ)になした事(こと)のほかに、
何(なに)かなすべきことがあるか。
わたしは良(よ)いぶどうの結(むす)ぶのを待(ま)ち望(のぞ)んだのに、
どうして野(の)ぶどうを結(むす)んだのか。
五それで、わたしが、ぶどう畑(はたけ)になそうとすることを、
あなたがたに告(つ)げる。
わたしはそのまがきを取(と)り去(さ)って、
食(く)い荒(あら)されるにまかせ、そのかきをとりこわして、
踏(ふ)み荒(あら)されるにまかせる。
六わたしはこれを荒(あら)して、
刈(か)り込(こ)むことも、耕(たがや)すこともせず、

おどろと、いばらとを生えさせ、
また雲に命じて、その上に雨を降らさない。
七万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、
主が喜んでそこに植えられた物は、
ユダの人々である。
主はこれに公平を望まれたのに、
見よ、流血。
正義を望まれたのに、
見よ、叫び。

八わざわいなるかな、彼らは家に家を建て連ね、
田畑に田畑をまし加えて、余地をあまさず、
自分ひとり、国のうちに住まおうとする。

九万軍の主はわたしの耳に誓って言われた、
「必ずや多くの家は荒れすたれ、
大きな麗しい家も住む者がないようになる。
一〇十反のぶどう畑もわずかに一バテの実を結び、
一ホメルの種もわずかに一エパの実を結ぶ」。
一一わざわいなるかな、彼らは朝早く起きて、
濃き酒をおい求め、
夜のふけるまで飲みつづけて、
酒にその身を焼かれている。
一二彼らの酒宴には琴あり、立琴あり、
鼓あり笛あり、ぶどう酒がある。
しかし彼らは主のみわざを顧みず、

み手のなされる事に目をとめない。
一三それゆえ、わが民は無知のために、とりこにせられ、
その尊き者は飢えて死に、
そのもろもろの民は、かわきによって衰えはてる。
一四また陰府はその欲望を大きくし、
その口を限りなく開き、
エルサレムの貴族、そのもろもろの民、
その群集およびそのうちの喜びたのしめる者はみな
その中に落ちこむ。
一五人はかがめられ、人々は低くせられ、
高ぶる者の目は低くされる。
一六しかし万軍の主は公平によってあがめられ、

聖なる神は正義によって、
おのれを聖なる者として示される。
一七こうして小羊は自分の牧場におるように草をはみ、
肥えた家畜および子やぎは荒れ跡の中で食を得る。
一八わざわいなるかな、
彼らは偽りのなわをもって悪を引きよせ、
車の綱をもってするように罪を引きよせる。
一九彼らは言う、「彼を急がせ、
そのわざをすみやかにさせよ、
それを見せてもらおう。
イスラエルの聖者の定める事を近づききたらせよ、
それを見せてもらおう」と。

二〇わざわいなるかな、　彼らは悪を呼んで善といい、
善を呼んで悪といい、
暗きを光とし、　光を暗しとし、
苦きを甘しとし、　甘きを苦しとする。
二一わざわいなるかな、　彼らはおのれを見て、　賢しとし、
みずから顧みて、　さとしとする。
二二わざわいなるかな、
彼らはぶどう酒を飲むことの英雄であり、
濃き酒をまぜ合わせることの勇士である。
二三彼らはまいないによって悪しき者を義とし、
義人からその義を奪う。
二四それゆえ、　火の舌が刈り株を食い尽すように、

枯れ草が炎の中に消えうせるように、
彼らの根は朽ちたものとなり、
彼らの花はちりのように飛び去る。
彼らは万軍の主の律法を捨て、
イスラエルの聖者の言葉を侮ったからである。
二五それゆえ、主はその民にむかって怒りを発し、
み手を伸べて彼らを撃たれた。
山は震い動き、
彼らのしかばねは、ちまたの中で、
あくたのようになった。
それにもかかわらず、み怒りはやまず、
なお、み手を伸ばされる。

二六主は旗をあげて遠くから一つの国民を招き、
地の果から彼らを呼ばれる。
見よ、彼らは走って、すみやかに来る。
二七その中には疲れる者も、つまずく者もなく、
まどろむ者も、眠る者もない。
その腰の帯はとけず、
そのくつのひもは切れていない。
二八その矢は鋭く、その弓はことごとく張り、
その馬のひずめは火打石のように、
その車の輪はつむじ風のように思われる。
二九そのほえることは、ししのように、
若いししのようにほえ、

うなって獲物を捕え、
かすめ去っても救う者がない。
三〇その日、その鳴りどよめくことは、
海の鳴りどよめくようだ。
もし地をのぞむならば、見よ、暗きと悩みとがあり、
光は雲によって暗くなる。

第六章一ウジヤ王の死んだ年、わたしは主が高くあげられたみくらに座
し、その衣のすそが神殿に満ちているのを見た。二その上にセラピムが立
ち、おのおの六つの翼をもっていた。その二つをもって顔をおおい、二つを
もって足をおおい、二つをもって飛びかけり、三互に呼びかわして言った。
「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地
に満つ」。

四その呼ばわっている者の声によって敷居の基が震い動き、神殿の中に
煙が満ちた。五その時わたしは言った、「わざわいなるかな、わたしは滅
びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中
に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」。
六この時セラピムのひとりが火ばしをもって、祭壇の上から取った燃え
ている炭を手に携え、わたしのところに飛んできて、七わたしの口に触れ
て言った、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除
かれ、あなたの罪はゆるされた」。八わたしはまた主の言われる声を聞いた、
「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」。そ
の時わたしは言った、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしくだ
さい」。九主は言われた、「あなたは行って、この民にこう言いなさい、
『あなたがたはくりかえし聞くがよい、

しかし悟ってはならない。
あなたがたはくりかえし見るがよい、
しかしわかってはならない』と。
一〇あなたはこの民の心を鈍くし、
その耳を聞えにくくし、その目を閉ざしなさい。
これは彼らがその目で見、その耳で聞き、
その心で悟り、
悔い改めていやされることのないためである」。
一一そこで、わたしは言った、「主よ、いつまでですか」。
主は言われた、
「町々は荒れすたれて、住む者もなく、
家には人かげもなく、国は全く荒れ地となり、

一二人々は主によって遠くへ移され、
荒れはてた所が国の中に多くなる時まで、
こうなっている。
一三その中に十分の一の残る者があっても、
これもまた焼き滅ぼされる。
テレビンの木またはかしの木が切り倒されるとき、
その切り株が残るように」。
聖なる種族はその切り株である。

第七章一ユダの王、ウジヤの子ヨタム、その子アハズの時、スリヤの王
レヂンとレマリヤの子であるイスラエルの王ペカとが上ってきて、エルサ
レムを攻めたが勝つことができなかった。二時に「スリヤがエフライムと
同盟している」とダビデの家に告げる者があったので、王の心と民の心

とは風に動かされる林の木のように動揺した。
三その時、主はイザヤに言われた、「今、あなたとあなたの子シャル・ヤ
シュブと共に出て行って、布さらしの野へ行く大路に沿う上の池の水道の
端でアハズに会い、四彼に言いなさい、『気をつけて、静かにし、恐れては
ならない。レヂンとスリヤおよびレマリヤの子が激しく怒っても、これら
二つの燃え残りのくすぶっている切り株のゆえに心を弱くしてはならな
い。五スリヤはエフライムおよびレマリヤの子と共にあなたにむかって悪
い事を企てて言う、六「われわれはユダに攻め上って、これを脅し、わ
れわれのためにこれを破り取り、タビエルの子をそこの王にしよう」と。
七主なる神はこう言われる、
この事は決して行われない、また起ることはない。
八スリヤのかしらはダマスコ、
ダマスコのかしらはレヂンである。

（六十五年のうちにエフライムは敗れて、国をなさないようになる。）
九エフライムのかしらはサマリヤ、
サマリヤのかしらはレマリヤの子である。
もしあなたがたが信じないならば、立つことはできない』」。
一〇主は再びアハズに告げて言われた、一一「あなたの神、主に一つのし
るしを求めよ、陰府のように深い所に、あるいは天のように高い所に求
めよ」。一二しかしアハズは言った、「わたしはそれを求めて、主を試みる
ことをいたしません」。一三そこでイザヤは言った、「ダビデの家よ、聞け。
あなたがたは人を煩わすことを小さい事とし、またわが神をも煩わそう
とするのか。一四それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与え
られる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエル
ととなえられる。一五その子が悪を捨て、善を選ぶことを知るころになっ

て、凝乳と、蜂蜜とを食べる。一六それはこの子が悪を捨て、善を選ぶ
ことを知る前に、あなたが恐れているふたりの王の地は捨てられるからで
ある。一七主はエフライムがユダから分れた時からこのかた、臨んだこと
のないような日をあなたと、あなたの民と、あなたの父の家とに臨ませら
れる。それはアッスリヤの王である」。

一八その日、主はエジプトの川々の源にいる、はえを招き、アッスリ
ヤの地にいる蜂を呼ばれる。一九彼らはみな来て、険しい谷、岩の裂け目、
すべてのいばら、すべての牧場の上にとどまる。

二〇その日、主は大川の向こうから雇ったかみそり、すなわちアッスリ
ヤの王をもって、頭と足の毛とをそり、また、ひげをも除き去られる。二
一その日、人は若い雌牛一頭と羊二頭を飼い、
二二それから出る乳が多いので、凝乳を食べることができ、すべて国

のうちに残された者は凝乳と、蜂蜜とを食べることができる。
二三その日、銀一千シケルの価ある千株のぶどうの木のあった所も、こ
とごとくいばらと、おどろの生える所となり、二四いばらと、おどろとが
地にはびこるために、人々は弓と矢をもってそこへ行く。二五くわをもっ
て掘り耕したすべての山々にも、あなたは、いばらと、おどろとを恐れ
て、そこへ行くことができない。その地はただ牛を放ち、羊の踏むところ
となる。

第八章一主はわたしに言われた、「一枚の大きな札を取って、その上に
普通の文字で、『マヘル・シャラル・ハシ・バズ』と書きなさい」。二そこで、
わたしは確かな証人として、祭司ウリヤおよびエベレキヤの子ゼカリヤ
を立てた。三わたしが預言者の妻に近づくと、彼女はみごもって男の子を
産んだ。その時、主はわたしに言われた、「その名をマヘル・シャラル・ハ

シ・バズと呼びなさい。四それはこの子がまだ『おとうさん、おかあさん』
と呼ぶことを知らないうちに、ダマスコの富と、サマリヤのぶんどり品と
が、アッスリヤ王の前に奪い去られるからである」。
五主はまた重ねてわたしに言われた、六「この民はゆるやかに流れるシ
ロアの水を捨てて、レヂンとレマリヤの子の前に恐れくじける。七それゆ
え見よ、主は勢いたけく、みなぎりわたる大川の水を彼らにむかってせ
き入れられる。これはアッスリヤの王と、そのもろもろの威勢とであって、
そのすべての支流にはびこり、すべての岸を越え、八ユダに流れ入り、あ
ふれみなぎって、首にまで及ぶ。インマヌエルよ、その広げた翼はあまね
く、あなたの国に満ちわたる」。

九もろもろの民よ、打ち破られて、驚きあわてよ。
遠き国々のものよ、耳を傾けよ。

腰に帯して、驚きあわてよ。
腰に帯して、驚きあわてよ。
一〇ともに計れ、しかし、成らない。
言葉を出せ、しかし、行われない。
神がわれわれと共におられるからである。
一一主は強いみ手をもって、わたしを捕え、わたしに語り、この民の道
に歩まないように、さとして言われた、一二「この民がすべて陰謀ととな
えるものを陰謀ととなえてはならない。彼らの恐れるものを恐れてはなら
ない。またおののいてはならない。一三あなたがたは、ただ万軍の主を聖
として、彼をかしこみ、彼を恐れなければならない。一四主はイスラエル
の二つの家には聖所となり、またさまたげの石、つまずきの岩となり、エ
ルサレムの住民には網となり、わなとなる。一五多くの者はこれにつまず

き、かつ倒れ、破られ、わなにかけられ、捕えられる」。
一六わたしは、あかしを一つにまとめ、教をわが弟子たちのうちに封じ
ておこう。一七主はいま、ヤコブの家に、み顔をかくしておられるとはい
え、わたしはその主を待ち、主を望みまつる。一八見よ、わたしと、主の
わたしに賜わった子たちとは、シオンの山にいます万軍の主から与えられ
たイスラエルのしるしであり、前ぶれである。一九人々があなたがたにむ
かって「さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ」
という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死
んだ者に求めるであろうか。二〇ただ教とあかしとに求めよ。まことに彼
らはこの言葉によって語るが、そこには夜明けがない。二一彼らはしえたげ
られ、飢えて国の中を経あるく。その飢えるとき怒りを放ち、自分たちの
王、自分たちの神をのろい、かつその顔を天に向ける。二二また地を見る

と、見よ、悩みと暗きと、苦しみのやみとがあり、彼らは暗黒に追いやら
れる。

第九章一しかし、苦しみにあった地にも、やみがなくなる。さきにはゼ
ブルンの地、ナフタリの地にはずかしめを与えられたが、後には海に至る
道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに光栄を与えられる。
二暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。
暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。
三あなたが国民を増し、その喜びを大きくされたので、
彼らは刈入れ時に喜ぶように、
獲物を分かつ時に楽しむように、
あなたの前に喜んだ。
四これはあなたが彼らの負っているくびきと、

その肩のつえと、しえたげる者のむちとを、
ミデアンの日になされたように折られたからだ。
五すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、
血にまみれた衣とは、
火の燃えくさとなって焼かれる。
六ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、
ひとりの男の子がわれわれに与えられた。
まつりごとはその肩にあり、
その名は、「霊妙なる議士、大能の神、
とこしえの父、平和の君」ととなえられる。
七そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、
ダビデの位に座して、その国を治め、

今より後、とこしえに公平と正義とをもって
これを立て、これを保たれる。
万軍の主の熱心がこれをなされるのである。
八主はひと言をヤコブにおくり、
これをイスラエルの上にくだされる。
九すべてこの民、
エフライムとサマリヤに住む者とは知るであろう。
彼らは高ぶり、心おごって言う、
一〇「かわらがくずれても、
われわれは切り石をもって建てよう。
くわの木が切り倒されても、
われわれは香柏をもってこれにかえよう」と。

一一それゆえ、主は敵を起して彼らを攻めさせ、
そのあだを奮い立たせられる。
一二東にスリヤびとあり、西にペリシテびとあり、
彼らは大口をあけてイスラエルを食い尽す。
それでも主の怒りはやまず、
なおも、そのみ手を伸ばされる。
一三しかもなお、この民は自分たちを撃った者に帰らず、
万軍の主を求めない。
一四それゆえ、主はイスラエルから頭と尾と、
しゅろの枝と葦とを一日のうちに断ち切られる。
一五その頭とは、長老と尊き人、
その尾とは、偽りを教える預言者である。

一六この民を導く者は、これを迷わせ、
彼らに導かれる者は、のみ尽される。
一七それゆえ、主はその若き人々を喜ばれず、
そのみなしごと寡婦とをあわれまれない。
彼らはみな、不信仰であって、悪を行う者、
すべての口は愚かな事を語るからである。
それでも主の怒りはやまず、
なおも、そのみ手を伸ばされる。
一八悪は火のように燃え、
いばらと、おどろとを食い尽し、
茂りあう林を焼き、煙の柱となって巻きあがる。
一九万軍の主の怒りによって地は焼け、

その民(たみ)は火(ひ)の燃(も)えくさのようになり、
だれもその兄弟(きょうだい)をあわれむ者(もの)がない。
二〇彼(かれ)らは右手(みぎて)につかんでも、なお飢(う)え、
左手(ひだりて)で食(た)べても飽(あ)くことがない。
おのおのその隣(とな)り人(びと)の肉(にく)を食(く)う。
二一マナセはエフライムを、
エフライムはマナセを食(く)い、
彼(かれ)らは共(とも)にユダを攻(せ)める。
それでも主(しゅ)の怒(いか)りはやまず、
なおも、そのみ手(て)を伸(の)ばされる。

第一〇章

一わざわいなるかな、
不義(ふぎ)の判決(はんけつ)を下(くだ)す者(もの)、暴虐(ぼうぎゃく)の宣告(せんこく)を書(か)きしるす者(もの)。

二彼らは乏しい者の訴えを引き受けず、
わが民のうちの貧しい者の権利をはぎ、
寡婦の資産を奪い、みなしごのものをかすめる。
三あなたがたは刑罰の日がきたなら、
何をしようとするのか。
大風が遠くから来るとき、
何をしようとするのか。
あなたがたはのがれていって、
だれに助けを求めようとするのか。
また、どこにあなたがたの富を残そうとするのか。
四ただ捕われた者の中にかがみ、
殺された者の中に伏し倒れるのみだ。

それでも主の怒りはやまず、
なおも、そのみ手を伸ばされる。
五ああ、アッスリヤはわが怒りのつえ、
わが憤りのむちだ。
六わたしは彼をつかわして不信の国を攻め、
彼に命じてわが怒りの民を攻め、かすめ奪わせ、
彼らをちまたの泥のように踏みにじらせる。
七しかし彼はそのようには思わず、
その心もそのようには考えず、
かえってその心は滅ぼすことを思い、
あまたの国々を倒そうとする。
八彼は言う、「わが諸侯はみな王ではないか。

九カルノはカルケミシのようではないか。
ハマテはアルパデのようではないか。
サマリヤはダマスコのようではないか。
一〇わが手は偶像に仕える国々に伸びた。
その彫った像はエルサレムおよび
サマリヤのものにまさっていた。
一一わたしはサマリヤとその偶像に行ったように、
エルサレムとその偶像に行わぬであろうか」。
一二主がシオンの山とエルサレムとになそうとすることを、ことごとくな
し遂げられた時、主はアッスリヤ王の無礼な言葉と、その高ぶりとを罰せ
られる。一三彼は言う、
「わが手の力により、またわが知恵によって、
わたしはこれをなした。わたしは賢いからである。

わたしはもろもろの民（たみ）の境（さかい）を除（のぞ）き、
その財宝（ざいほう）を奪（うば）った。
またわたしは雄牛（おうし）のように、
位（くらい）に座（ざ）する者（もの）を引（ひ）きおろした。
一四わが手（て）は巣（す）を取（と）るように、
もろもろの民（たみ）の富（とみ）を得（え）た。
またわたしは人々（ひとびと）が捨（す）てられた卵（たまご）を集（あつ）めるように、
全地（ぜんち）を取（と）り集（あつ）めた。
あるいは翼（つばさ）を動（うご）かし、あるいは口（くち）を開（ひら）き、
あるいはぺちゃくちゃ言（い）う者（もの）もなかった」。
一五おのは、それを用（もち）いて切（き）る者（もの）にむかって、
自分（じぶん）を誇（ほこ）ることができようか。

のこぎりは、それを動かす者にむかって、
みずから高ぶることができようか。
これはあたかも、むちが自分をあげる者を動かし、
つえが木でない者をあげようとするのに等しい。
一六それゆえ、主、万軍の主は、
その肥えた勇士の中に病気を送って衰えさせ、
その栄光の下に火の燃えるような炎を燃やされる。
一七イスラエルの光は火となり、
その聖者は炎となり、
そのいばらと、おどろとを一日のうちに焼き滅ぼす。
一八また、その林と土肥えた田畑の栄えを、
魂も、からだも二つながら滅ぼし、

病める者のやせ衰える時のようにされる。
一九その林の木の残りのものはわずかであって、
わらべもそれを書きとめることができる。
二〇その日にはイスラエルの残りの者と、ヤコブの家の生き残った者と
は、もはや自分たちを撃った者にたよらず、真心をもってイスラエルの聖者、
主にたより、二一残りの者、すなわちヤコブの残りの者は大能の神に帰る。
二二あなたの民イスラエルは海の砂のようであっても、そのうちの残りの者
だけが帰って来る。滅びはすでに定まり、義であふれている。二三主、万軍
の主は定められた滅びを全地に行われる。
二四それゆえ、主、万軍の主はこう言われる、「シオンに住むわが民よ、
アッスリヤびとが、エジプトびとがしたように、むちをもってあなたを打
ち、つえをあげてあなたをせめても、彼らを恐れてはならない。二五ただ

しばらくして、わが憤りはやみ、わが怒りは彼らを滅ぼすからである。
二六万軍の主は、むかしミデアンびとをオレブの岩で撃たれた時のように、
彼らにむかって、むちをふるわれる。またそのつえを海の上にのばし、エ
ジプトでなされたように、それをあげられる。二七その日には、彼の重荷は
あなたの肩からおり、彼のくびきはあなたの首から離れる」。

彼はリンモンから上り、
二八アイアテにきたり、ミグロンを過ぎ、
ミクマシでその行李をとどめ、
二九渡しを過ぎて、ゲバに宿る。
ラマはおののき、サウルのギベアは逃げ去った。
三〇ガリムの娘よ、声をあげて叫べ。
ライシよ、耳を傾けよ。

アナトテよ、彼(かれ)に答(こた)えよ。
三一マデメナは逃(に)げ去(さ)り、ゲビムの民(たみ)は隠(かく)れ場(ば)を求(もと)めた。
三二この日(ひ)彼(かれ)はノブに立(た)ちとどまり、
シオンの娘(むすめ)の山(やま)、エルサレムの丘(おか)にむかって、
その手(て)を振(ふ)る。
三三見(み)よ、主(しゅ)、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)は、
恐(おそ)ろしい力(ちから)をもって枝(えだ)を切(き)りおろされる。
たけの高(たか)いものも切(き)り落(おと)され、
そびえ立(た)つものは低(ひく)くされる。
三四主(しゅ)はおのをもって茂(しげ)りあう林(はやし)を切(き)られる。
みごとな木(き)の茂(しげ)るレバノンも倒(たお)される。

第一一章

一エッサイの株から一つの芽が出、
その根から一つの若枝が生えて実を結び、
二その上に主の霊がとどまる。
これは知恵と悟りの霊、 深慮と才能の霊、
主を知る知識と主を恐れる霊である。
三彼は主を恐れることを楽しみとし、
その目の見るところによって、 さばきをなさず、
その耳の聞くところによって、 定めをなさず、
四正義をもって貧しい者をさばき、
公平をもって国のうちの
柔和な者のために定めをなし、
その口のむちをもって国を撃ち、

そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。
五正義はその腰の帯となり、
忠信はその身の帯となる。
六おおかみは小羊と共にやどり、
ひょうは子やぎと共に伏し、
子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、
小さいわらべに導かれ、
七雌牛と熊とは食い物を共にし、
牛の子と熊の子と共に伏し、
ししは牛のようにわらを食い、
八乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、
乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。

九彼らはわが聖なる山のどこにおいても、
そこなうことなく、やぶることがない。
水が海をおおっているように、
主を知る知識が地に満ちるからである。
一〇その日、エッサイの根が立って、もろもろの民の旗となり、もろもろ
の国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光がある。
一一その日、主は再び手を伸べて、その民の残れる者をアッスリヤ、エ
ジプト、パテロス、エチオピヤ、エラム、シナル、ハマテおよび海沿いの
国々からあがなわれる。
一二主は国々のために旗をあげて、
イスラエルの追いやられた者を集め、
ユダの散らされた者を地の四方から集められる。

一三エフライムのねたみはうせ、
ユダを悩ます者は断たれ、
エフライムはユダをねたまず、
ユダはエフライムを悩ますことはない。
一四しかし彼らは西の方ペリシテびとの肩に
襲いかかり、
相共に東の民をかすめ、
その手をエドムおよびモアブに伸べ、
アンモンの人々をおのれに従わせる。
一五主はエジプトの海の舌をからし、
川の上に手を振って熱い風を吹かせ、
その川を打って七つの川となし、
くつをぬらさないで渡らせられる。

一六その民の残れる者のために
アッスリヤからの大路があり、
昔イスラエルがエジプトの国から
上ってきた時にあったようになる。

第一二章

一その日あなたは言う、
「主よ、わたしはあなたに感謝します。
あなたは、さきにわたしにむかって怒られたが、
その怒りはやんで、わたしを慰められたからです。
二見よ、神はわが救である。
わたしは信頼して恐れることはない。
主なる神はわが力、わが歌であり、
わが救となられたからである」。

三あなたがたは喜びをもって、救の井戸から水をくむ。四その日、あ
なたがたは言う、
「主に感謝せよ。
そのみ名を呼べ。
そのみわざをもろもろの民の中につたえよ。
そのみ名のあがむべきことを語りつげよ。
五主をほめうたえ。
主はそのみわざを、みごとになし遂げられたから。
これを全地に宣べ伝えよ。
六シオンに住む者よ、声をあげて、喜びうたえ。
イスラエルの聖者はあなたがたのうちで
大いなる者だから」。

第一三章一アモツの子イザヤに示されたバビロンについての託宣。
二あなたがたは木のない山に旗を立て、
声をあげて彼らを招き、
手を振って彼らを貴族の門に、はいらせよ。
三わたしはわが怒りのさばきを行うために
聖別した者どもに命じ、
わが勇士、わが勝ち誇る者どもを招いた。
四聞け、多くの民のような騒ぎ声が山々に聞える。
聞け、もろもろの国々、寄りつどえる
もろもろの国民のざわめく声が聞える。
これは万軍の主が
戦いのために軍勢を集められるのだ。

五彼らは遠い国から、天の果から来る。
これは、主とその憤りの器で、
全地を滅ぼすために来るのだ。
六あなたがたは泣き叫べ。主の日が近づき、
滅びが全能者から来るからだ。
七それゆえ、すべての手は弱り、
すべての人の心は溶け去る。
八彼らは恐れおののき、苦しみと悩みに捕えられ、
子を産まんとする女のようにもだえ苦しみ、
互に驚き、顔を見あわせ、
その顔は炎のようになる。
九見よ、主の日が来る。

残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、
その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る。
一〇天の星とその星座とはその光を放たず、
太陽は出ても暗く、
月はその光を輝かさない。
一一わたしはその悪のために世を罰し、
その不義のために悪い者を罰し、
高ぶる者の誇をとどめ、
あらぶる者の高慢を低くする。
一二わたしは人を精金よりも、
オフルのこがねよりも少なくする。
一三それゆえ、万軍の主の憤りにより、

その激しい怒りの日に、
天は震い、地は揺り動いて、その所をはなれる。
一四彼らは追われた、かもしかのように、
あるいは集める者のない羊のようになって、
おのおの自分の民に帰り、
自分の国に逃げて行く。
一五すべて見いだされる者は刺され、
すべて捕えられる者はつるぎによって倒され、
一六彼らのみどりごはその目の前で投げ砕かれ、
その家はかすめ奪われ、その妻は汚される。
一七見よ、わたしは、しろがねをも顧みず、
こがねをも喜ばないメデアびとを起して、

彼らにむかわせる。
一八彼らの弓は若い者を射殺し、
腹の実をあわれむことなく、
幼な子を見て、惜しむことがない。
一九国々の誉であり、
カルデヤびとの誇である麗しいバビロンは、
神に滅ぼされたソドム、ゴモラのようになる。
二〇ここにはながく住む者が絶え、
世々にいたるまで住みつく者がなく、
アラビヤびともそこに天幕を張らず、
羊飼もそこに群れを伏させることがない。
二一ただ、野の獣がそこに伏し、

ほえる獣がその家に満ち、
だちょうがそこに住み、
鬼神がそこに踊る。
二二ハイエナはその城の中で鳴き、
山犬は楽しい宮殿でほえる。
その時の来るのは近い、
その日は延びることがない。

第一四章一主はヤコブをあわれみ、イスラエルを再び選んで、これをおのれの地に置かれる。異邦人はこれに加わって、ヤコブの家に結びつらなり、
二もろもろの民は彼らを連れてその所に導いて来る。そしてイスラエルの家は、主の地で彼らを男女の奴隷とし、さきに自分たちを捕虜にした者を捕虜にし、自分たちをしえたげた者を治める。

三主(しゅ)があなたの苦労(くろう)と不安(ふあん)とを除(のぞ)き、またあなたが服(ふく)した苦役(くえき)を除(のぞ)いて、
安息(あんそく)をお与(あた)えになるとき、四あなたはこのあざけりの歌(うた)をとなえ、バビロ
ンの王(おう)をののしって言(い)う、

「あの、しえたげる者(もの)は全(まった)く絶(た)えてしまった。
あの、おごる者(もの)は全(まった)く絶(た)えてしまった。
五主(しゅ)は悪(わる)い者(もの)のつえと、
つかさびとの笏(しゃく)を折(お)られた。
六彼(かれ)らは憤(いきどお)りをもってもろもろの民(たみ)を
絶(た)えず撃(う)っては打(う)ち、
怒(いか)りをもってもろもろの国(くに)を治(おさ)めても、
そのしえたげをとどめる者(もの)がなかった。
七全地(ぜんち)はやすみを得(え)、穏(おだ)やかになり、

ことごとく声をあげて歌う。
八いとすぎおよびレバノンの香柏でさえも
あなたのゆえに喜んで言う、
『あなたはすでに倒れたので、
もはや、きこりが上ってきて、
われわれを攻めることはない』。
九下の陰府はあなたのために動いて、
あなたの来るのを迎え、
地のもろもろの指導者たちの亡霊を
あなたのために起し、
国々のもろもろの王を
その王座から立ちあがらせる。

一〇彼らは皆あなたに告げて言う、
『あなたもまたわれわれのように弱くなった、
あなたもわれわれと同じようになった』。
一一あなたの栄華とあなたの琴の音は
陰府に落ちてしまった。
うじはあなたの下に敷かれ、
みみずはあなたをおおっている。
一二黎明の子、明けの明星よ、
あなたは天から落ちてしまった。
もろもろの国を倒した者よ、
あなたは切られて地に倒れてしまった。
一三あなたはさきに心のうちに言った、

『わたしは天(てん)にのぼり、
わたしの王座(おうざ)を高(たか)く神(かみ)の星(ほし)の上(うえ)におき、
北(きた)の果(はて)なる集会(しゅうかい)の山(やま)に座(ざ)し、
一四雲(くも)のいただきにのぼり、
いと高(たか)き者(もの)のようになろう』。
一五しかしあなたは陰府(よみ)に落(おと)され、
穴(あな)の奥底(おくそこ)に入(い)れられる。
一六あなたを見(み)る者(もの)はつくづくあなたを見(み)、
あなたに目(め)をとめて言(い)う、
『この人(ひと)は地(ち)を震(ふる)わせ、国々(くにぐに)を動(うご)かし、
一七世界(せかい)を荒野(あらの)のようにし、その都市(とし)をこわし、
捕(とら)えた者(もの)をその家(いえ)に

解き帰さなかった者であるのか』。
一八もろもろの国の王たちは皆
尊いさまで、自分の墓に眠る。
一九しかしあなたは忌みきらわれる月足らぬ子のように
墓のそとに捨てられ、
つるぎで刺し殺された者でおおわれ、
踏みつけられる死体のように穴の石に下る。
二〇あなたは自分の国を滅ぼし、
自分の民を殺したために、
彼らと共に葬られることはない。
どうか、悪を行う者の子孫は
とこしえに名を呼ばれることのないように。

二一先祖のよこしまのゆえに、
その子孫のためにほふり場を備えよ。
これは彼らが起って地を取り、
世界のおもてに町々を
満たすことのないためである」。
二二万軍の主は言われる、「わたしは立って彼らを攻め、バビロンからその名と、残れる者、その子と孫とを断ち滅ぼす、と主は言う。
二三わたしはこれをはりねずみのすみかとし、水の池とし、滅びのほうきをもって、これを払い除く、と万軍の主は言う」。
二四万軍の主は誓って言われる、
「わたしが思ったように必ず成り、
わたしが定めたように必ず立つ。

二五わたしはアッスリヤびとをわが地で打ち破り、
わが山々で彼を踏みにじる。
こうして彼が置いたくびきは
イスラエルびとから離れ、
彼が負わせた重荷は
イスラエルびとの肩から離れる」。
二六これは全地について定められた計画である。
これは国々の上に伸ばされた手である。
二七万軍の主が定められるとき、
だれがそれを取り消すことができるのか。
その手を伸ばされるとき、
だれがそれを引きもどすことができるのか。

二八アハズ王（おう）の死（し）んだ年（ねん）にこの託宣（たくせん）があった、
二九「ペリシテの全地（ぜんち）よ、あなたを打（う）ったむちが
折（お）られたことを喜（よろこ）んではならない。
へびの根（ね）からまむしが出（で）、
その実（み）は飛（と）びかけるへびとなるからだ。
三〇いと貧（まず）しい者（もの）は食（しょく）を得（え）、
乏（とぼ）しい者（もの）は安（やす）らかに伏（ふ）す。
しかし、わたしはききんをもって
あなたの子孫（しそん）を殺（ころ）し、
あなたの残（のこ）れる者（もの）を滅（ほろ）ぼす。
三一門（もん）よ、泣（な）きわめけ。町（まち）よ、叫（さけ）べ。
ペリシテの全地（ぜんち）よ、恐（おそ）れのあまり消（き）えうせよ、

北から煙が来るからだ。
その隊列からは、ひとりも脱落する者はない」。
三二その国の使者たちになんと答えようか。
「主はシオンの基をおかれた、
その民の苦しむ者は
この中に避け所を得る」と答えよ。

第一五章 モアブについての託宣。

アルは一夜のうちに荒されて、モアブは滅びうせ、
キルは一夜のうちに荒されて、モアブは滅びうせた。
二デボンの娘は高き所にのぼって泣き、
モアブはネボとメデバの上で嘆き叫ぶ。
おのおのその頭をかぶろにし、

そのひげをことごとくそった。
三彼(かれ)らはそのちまたで荒布(あらぬの)をまとい、
その屋根(やね)または広場(ひろば)で、みな泣(な)き叫(さけ)び、涙(なみだ)に浸(ひた)る。
四ヘシボンとエレアレとは叫(さけ)び、
その声(こえ)はヤハズまで聞(きこ)える。
それゆえ、モアブの兵士(へいし)は声(こえ)をあげ、
その魂(たましい)はおののく。
五わが心(こころ)はモアブのために叫(さけ)び呼(よ)ばわる。
その落人(おちうど)はゾアルおよび
エグラテ・シリシヤにのがれ、
泣(な)きながらルヒテの坂(さか)をのぼり、
ホロナイムの道(みち)で滅(ほろ)びの叫(さけ)びをあげる。
六ニムリムの水(みず)はかわき、

草(くさ)は枯(か)れ、苗(なえ)は消(き)えて、青(あお)い物(もの)はない。
七それゆえ、彼(かれ)らはその得(え)た富(とみ)と、
そのたくわえた物(もの)とを携(たずさ)えて、柳(やなぎ)の川(かわ)をわたる。
八その叫(さけ)びの声(こえ)はモアブの境(さかい)をめぐり、
その嘆(なげ)きの声(こえ)はエグライムにいたり、
またその嘆(なげ)きの声(こえ)はベエル・エリムにいたる。
九デボンの水(みず)は血(ち)で満(み)ちる。
わたしはデボンの上(うえ)にさらに災(わざわい)を加(くわ)え、
モアブののがれた者(もの)と
この地(ち)の残(のこ)った者(もの)とに、ししを送(おく)る。

第一六章

一彼(かれ)らはセラから荒野(あらの)の道(みち)によって

小羊をシオンの娘の山に送り、
国のつかさに納めた。
二モアブの娘らはアルノンの渡しで、
さまよう鳥のように、
巣を追われたひなのようである。
三「相はかって、事を定めよ。
真昼の中でも、あなたの陰を夜のようにし、
さすらい人を隠し、
のがれて来た者をわたさず、
四モアブのさすらい人を、あなたのうちにやどらせ、
彼らの避け所となって、滅ぼす者からのがれさせよ。
しえたげる者がなくなり、滅ぼす者が絶え、

踏みにじる者が地から断たれたとき、
五一つの玉座がいつくしみによって堅く立てられ、
ダビデの幕屋にあって、
さばきをなし、公平を求め、
正義を行うに、すみやかなる者が
真実をもってその上に座する」。
六われわれはモアブの高ぶりのことを聞いた、
その高ぶることは、はなはだしい。
われわれはその誇と、高ぶりと、
そのおごりとのことを聞いた、
その自慢は偽りである。
七それゆえ、モアブは泣き叫べ、

民はみなモアブのために泣き叫べ。
全く撃ちのめされて、
キルハレセテの干ぶどうのために嘆け。
八ヘシボンの畑と、
シブマのぶどうの木とは、しぼみ衰えた。
国々のもろもろの主が、
その枝を打ち落したからである。
その枝はさきにはヤゼルまでいたり、
荒野にまではびこり、
そのつるは広がって海を越えた。
九それゆえ、わたしはヤゼルと共に、
シブマのぶどうの木のために泣く。

ヘシボンよ、エレアレよ、
わたしは涙(なみだ)をもってあなたを浸(ひた)す。
ときの声(こえ)が、あなたの果実(かじつ)と、
あなたの収穫(しゅうかく)の上(うえ)にふりかかってきたからである。
一〇 喜(よろこ)びと楽(たの)しみとは土肥(つちこ)えた畑(はたけ)から取(と)り去(さ)られ、
ぶどう畑(はたけ)には歌(うた)うことなく、
喜(よろこ)び呼(よ)ばわることなく、
酒(さか)ぶねを踏(ふ)んで酒(さけ)を絞(しぼ)る者(もの)なく、
ぶどうの収穫(しゅうかく)を喜(よろこ)ぶ声(こえ)はやんだ。
一一 それゆえ、わが魂(たましい)はモアブのために、
わが心(こころ)はキルハレスのために、
琴(こと)のように鳴(な)りひびく。
一二 モアブが高(たか)き所(ところ)に出(で)て、おのれを疲(つか)れさせ、またその聖所(せいじょ)にきて

祈っても、効果はない。
一三これは主がさきにモアブについて語られたみ言葉である。一四しかし
今、主は語って言われる、「モアブの栄えはその大いなる群衆にもかかわ
らず、雇人の年期とひとしく三年のうちに、はずかしめを受け、残れる者
はまことに少なく、力がない」。

第一七章

一ダマスコについての託宣。
見よ、ダマスコは町の姿を失って、荒塚となる。
二その町々はとこしえに捨てられ、
家畜の群れの住む所となって、伏しやすむが、
これを脅かす者はない。
三エフライムのとりではすたり、
ダマスコの主権はやみ、

スリヤの残(のこ)れる者(もの)は、イスラエルの子(こ)らの
栄光(えいこう)のように消(き)えうせると
万軍(ばんぐん)の主(しゅ)は言(い)われる。
四その日(ひ)、ヤコブの栄(さか)えは衰(おとろ)え、
その肥(こ)えたる肉(にく)はやせ、
五あたかも刈入(かりい)れ人(ひと)がまだ刈(か)らない麦(むぎ)を集(あつ)め、
かいなをもって穂(ほ)を刈(か)り取(と)ったあとのように、
レパイムの谷(たに)で穂(ほ)を拾(ひろ)い集(あつ)めたあとのようになる。
六オリブの木(き)を打(う)つとき、
二つ三つの実(み)をこずえに残(のこ)し、
あるいは四つ五つを
みのり多(おお)き木(き)の枝(えだ)に残(のこ)すように、

とり残されるものがあると
イスラエルの神、主は言われる。
七その日、人々はその造り主を仰ぎのぞみ、イスラエルの聖者に目をと
め、八おのれの手のわざである祭壇を仰ぎのぞまず、おのれの指が造った
アシラ像と香の祭壇とに目をとめない。
九その日、彼らの堅固な町々は昔イスラエルの子らのゆえに捨て去られ
たヒビびとおよびアモリびとの荒れ跡のように荒れ地になる。
一〇これはあなたがたが自分の救の神を忘れ、
自分の避け所なる岩を心にとめなかったからだ。
それゆえ、あなたがたは美しい植物を植え、
異なる神の切り枝をさし、
一一その植えた日にこれを成長させ、

そのまいた朝にこれを花咲かせても、
その収穫は悲しみと、いやしがたい苦しみの日にとび去る。
一二ああ、多くの民はなりどよめく、
海のなりどよめくように、彼らはなりどよめく。
ああ、もろもろの国はなりとどろく、
大水のなりとどろくように、彼らはなりとどろく。
一三もろもろの国は多くの水の
なりとどろくように、なりとどろく。
しかし、神は彼らを懲しめられる。
彼らは遠くのがれて、
風に吹き去られる山の上のもみがらのように、
また暴風にうず巻くちりのように追いやられる。

一四夕暮(ゆうぐれ)には、見(み)よ、恐(おそ)れがある。
まだ夜(よ)の明(あ)けないうちに彼(かれ)らはうせた。
これはわれわれをかすめる者(もの)の受(う)くべき分(ぶん)、
われわれを奪(うば)う者(もの)の引(ひ)くべきくじである。

第一八章

一ああ、エチオピヤの川々(かわがわ)のかなたなる
ぶんぶんと羽音(はおと)のする国(くに)、
二この国(くに)は葦(あし)の船(ふね)を水(みず)にうかべ、
ナイル川(かわ)によって使者(ししゃ)をつかわす。
とく走(はし)る使者(ししゃ)よ、行(い)け。
川々(かわがわ)の分(わか)れる国(くに)の、たけ高(たか)く、膚(はだ)のなめらかな民(たみ)、
遠近(えんきん)に恐(おそ)れられる民(たみ)、

力強く、戦いに勝つ民へ行け。
三すべて世におるもの、地に住むものよ、
山の上に旗の立つときは見よ、
ラッパの鳴りひびくときは聞け。
四主はわたしにこう言われた、
「晴れわたった日光の熱のように、
刈入れの熱むして露の多い雲のように、
わたしは静かにわたしのすまいから、ながめよう」。
五刈入れの前、花は過ぎて
その花がぶどうとなって熟すとき、
彼はかまをもって、つるを刈り、枝を切り去る。
六彼らはみな山の猛禽と、

地の獣とに捨て置かれる。
猛禽はその上で夏を過ごし、
地の獣はみなその上で冬を過ごす。
七その時、川々の分れる国の
たけ高く、膚のなめらかな民、
遠くの者にも近くの者にも恐れられる民、
力強く、戦いに勝つ民から
万軍の主にささげる贈り物を携えて、
万軍の主のみ名のある所、シオンの山に来る。

第一九章ーエジプトについての託宣。

見よ、主は速い雲に乗って、エジプトに来られる。
エジプトのもろもろの偶像は、み前に震えおののき、

エジプトびとの心（こころ）は彼（かれ）らのうちに溶（と）け去（さ）る。
二わたしはエジプトびとを奮（ふる）いたたせて、
エジプトびとに逆（さか）らわせる。
彼（かれ）らはおのおのその兄弟（きょうだい）に敵（てき）して戦（たたか）い、
おのおのその隣（となり）に敵（てき）し、
町（まち）は町（まち）を攻（せ）め、国（くに）は国（くに）を攻（せ）める。
三エジプトびとの魂（たましい）は、
彼（かれ）らのうちにうせて、むなしくなる。
わたしはその計（はか）りごとを破（やぶ）る。
彼（かれ）らは偶像（ぐうぞう）および魔術師（まじゅつし）、
巫子（みこ）および魔法使（まほうつかい）に尋（たず）ね求（もと）める。
四わたしはエジプトびとをきびしい主人（しゅじん）の手（て）に渡（わた）す、

荒々しい王が彼らを治めると、
主、万軍の主は言われる。
五ナイルの水はつき、川はかれてかわく。
六またその運河は臭いにおいを放ち、
エジプトのナイルの支流はややに減ってかわき、
葦とよしとは枯れはてる。
七ナイルのほとり、ナイルの岸には裸の所があり、
ナイルのほとりにまいた物はことごとく枯れ、
散らされて、うせ去る。
八漁夫は嘆き、
すべてナイルにつりをたれる者は悲しみ、
網を水のおもてにうつ者は衰える。

九練った麻で物を造る者と、
白布を織る者は恥じる。
一〇国の柱たる者は砕かれ、
すべて雇われて働く者は嘆き悲しむ。
一一ゾアンの君たちは全く愚かであり、
パロの賢い議官らは愚かな計りごとをなす。
あなたがたはどうしてパロにむかって
「わたしは賢い者の子、いにしえの王の子です」と
言うことができようか。
一二あなたの賢い者はどこにおるか。
彼らをして、
万軍の主がエジプトについて定められたことを

あなたに告(つ)げ知(し)らしめよ。
一三ゾアンの君(きみ)たちは愚(おろ)かとなり、
メンピスの君(きみ)たちは欺(あざむ)かれ、
エジプトのもろもろの部族(ぶぞく)の隅(すみ)の石(いし)たる彼(かれ)らは、
かえってエジプトを迷(まよ)わせた。
一四主(しゅ)は曲(まが)った心(こころ)を彼(かれ)らのうちに混(ま)ぜられた。
彼(かれ)らはエジプトをして、
すべてその行(おこな)うことに迷(まよ)わせ、
あたかも酔(よ)った人(ひと)の物吐(ものは)くときに
よろめくようにさせた。
一五エジプトに対(たい)しては、頭(あたま)あるいは尾(お)、
しゅろの枝(えだ)あるいは葦(あし)が

共になしうるわざはない。
一六その日、エジプトびとは女のようになり、万軍の主の彼らの上に振
り動かされるみ手の前に恐れおののく。一七ユダの地は、エジプトびとに
恐れられ、ユダについて語り告げることを聞くエジプトびとはみな、万軍
の主がエジプトびとにむかって定められた計りごとのゆえに恐れる。
一八その日、エジプトの地にカナンの国ことばを語り、また万軍の主に
誓いを立てる五つの町があり、その中の一つは太陽の町ととなえられる。
一九その日、エジプトの国の中に主をまつる一つの祭壇があり、その境
に主をまつる一つの柱がある。二〇これはエジプトの国で万軍の主に、し
るしとなり、あかしとなる。彼らがしえたげる者のゆえに、主に叫び求める
とき、主は救う者をつかわして、彼らを守り助けられる。二一主はご自分
をエジプトびとに知らせられる。その日、エジプトびとは主を知り、犠牲

と供え物とをもって主に仕え、主に誓願をたててこれを果す。二二主はエ
ジプトを撃たれる。主はこれを撃たれるが、またいやされる。それゆえ彼
らは主に帰る。主は彼らの願いをいれて、彼らをいやされる。
二三その日、エジプトからアッスリヤに通う大路があって、アッスリヤび
とはエジプトに、エジプトびとはアッスリヤに行き、エジプトびとはアッ
スリヤびとと共に主に仕える。
二四その日、イスラエルはエジプトとアッスリヤと共に三つ相並び、全地
のうちで祝福をうけるものとなる。二五万軍の主は、これを祝福して言
われる、「さいわいなるかな、わが民なるエジプト、わが手のわざなるアッ
スリヤ、わが嗣業なるイスラエル」と。

第二〇章一アッスリヤの王サルゴンからつかわされた最高司令官がアシ
ドドに来て、これを攻め、これを取った年、――二その時に主はアモツの子

イザヤによって語って言われた、「さあ、あなたの腰から荒布を解き、足か
らくつを脱ぎなさい」。そこでイザヤはそのようにし、裸、はだしで歩い
た。――
三主は言われた、「わがしもべイザヤは三年の間、裸、はだしで
歩き、エジプトとエチオピヤに対するしるしとなり、前ぶれとなったが、
四
このようにエジプトびとのとりことエチオピヤびとの捕われ人とは、アッ
スリヤの王に引き行かれて、その若い者も老いた者もみな裸、はだしで、
しりをあらわし、エジプトの恥を示す。
五彼らはその頼みとしたエチオピ
ヤのゆえに、その誇としたエジプトのゆえに恐れ、かつ恥じる。
六その日
には、この海べに住む民は言う、『見よ、われわれが頼みとした国、すなわ
ちわれわれがのがれて行って助けを求め、アッスリヤ王から救い出されよ
うとした国はすでにこのとおりである。われわれはどうしてのがれること
ができようか』と。」

第二一章一海の荒野についての託宣。
つむじ風がネゲブを吹き過ぎるように、
荒野から、恐るべき地から、来るものがある。
二わたしは一つのきびしい幻を示された。
かすめ奪う者はかすめ奪い、
滅ぼす者は滅ぼす。
エラムよ、のぼれ、メデアよ、囲め。
わたしはすべての嘆きをやめさせる。
三それゆえ、わが腰は激しい痛みに満たされ、
出産に臨む女の苦しみのような苦しみが
わたしを捕えた。
わたしは、かがんで聞くことができず、

恐れおののいて見ることができない。
四わが心はみだれ惑い、
わななき恐れること、はなはだしく、
わたしのあこがれたたそがれは
変っておののきとなった。
五彼らは食卓を設け、
じゅうたんを敷いて食い飲みする。
もろもろの君よ、立って、盾に油をぬれ。
六主はわたしにこう言われた、
「行って、見張びとをおき、
その見るところを告げさせよ。
七馬に乗って二列に並んだ者と、ろばに乗った者と、

らくだに乗った者とを彼が見るならば、
耳を傾けてつまびらかに聞かせよ」。
八その時、見張びとは呼ばわって言った、
「主よ、わたしがひねもすやぐらに立ち、
夜もすがらわが見張所に立っていると、
九見よ、馬に乗って二列に並んだ者がここに来ます」。
彼は答えて言った、
「倒れた、バビロンは倒れた、
その神々の像はことごとく打ち砕かれて
地に伏した」。
一〇ああ、踏みにじられたわが民、わが打ち場の子よ、
イスラエルの神、万軍の主から

わたしが聞いたところのものを
あなたがたに告げる。
一一ドマについての託宣。
セイルからわたしに呼ばわる者がある、
「夜回りよ、今は夜のなんどきですか、
夜回りよ、今は夜のなんどきですか」。
一二夜回りは言う、
「朝がきます、 夜もまたきます。
もしあなたがたが聞こうと思うならば聞きなさい、
また来なさい」。
一三アラビヤについての託宣。
デダンびとの隊商よ、

あなたがたはアラビヤの林にやどる。
一四テマの地に住む民よ、
水を携えて、かわいた者を迎え、
パンをもって、逃げのがれた者を迎えよ。
一五彼らはつるぎを避け、抜いたつるぎを避け、
張った弓を避け、また激しい戦いを避けて、
逃げてきたからである。
一六主はわたしにこう言われた、「雇人の年期のように一年以内にケダ
ルのすべての栄華はつきはてる。一七ケダルの子らの勇士で、射手の残る
者は少ない」。これはイスラエルの神、主が語られたのである。

第二二章 幻の谷についての託宣。

あなたがたはなぜ、みな屋根にのぼったのか。

二叫び声で満ちている者、
騒がしい都、喜びに酔っている町よ。
あなたのうちの殺された者は
つるぎで殺されたのではなく、
また戦いに倒れたのでもない。
三あなたのつかさたちは皆共にのがれて行ったが、
弓を捨てて捕えられた。
彼らは遠く逃げて行ったが、
あなたのうちの見つかった者はみな捕えられた。
四それゆえ、わたしは言った、
「わたしを顧みてくれるな、
わたしはいたく泣き悲しむ。

わが民の娘の滅びのために、
わたしを慰めようと努めてはならない」。
五万軍の神、主は幻の谷に
騒ぎと、踏みにじりと、混乱の日をこさせられる。
城壁はくずれ落ち、叫び声は山に聞える。
六エラムは箙を負い、
戦車と騎兵とをもってきたり、
キルは盾をあらわした。
七あなたの最も美しい谷は戦車で満ち、
騎兵はもろもろの門にむかって立った。
八ユダを守るおおいは取り除かれた。
その日あなたは林の家の武具を仰ぎ望んだ。
九またあなたがたはダビ

デの町の破れの多いのを見、下の池の水を集め、一〇エルサレムの家を数え、またその家をこわして城壁を築き、一一一つの貯水池を二つの城壁の間に造って古池の水をひいた。しかしあなたがたはこの事をなされた者を仰ぎ望まず、この事を昔から計画された者を顧みなかった。

一二その日、万軍の神、主は
泣き悲しみ、頭をかぶろにし、
荒布をまとうことを命じられたが、
一三見よ、あなたがたは喜び楽しみ、
牛をほふり、羊を殺し、
肉を食い、酒を飲んで言う、
「われわれは食い、かつ飲もう、
明日は死ぬのだから」。

一四万軍の主はみずからわたしの耳に示された、
「まことに、この不義はあなたがたが死ぬまで、
ゆるされることはない」と
万軍の神、主は言われる。
一五万軍の神、主はこう言われる、「さあ、王の家をつかさどるこの執事
セブナに行って言いなさい、一六『あなたはここになんの係わりがありま
すか。あなたはだれの縁故でここに自分のために墓を掘ったのですか。あ
なたは高い所に墓を掘り、岩をうがって自分のためにすみかを造った。一
七強い人よ、見よ、主はあなたを激しくなげ倒される。主はあなたを堅く
つかまえ、一八ぐるぐるまわして、まりのように広々した地に投げられる。
主人の家の恥となる者よ、あなたはそこで死に、あなたの華麗な車はそこ
に残る。一九わたしは、あなたをその職から追い、その地位から引きおろ

す。二〇その日、わたしは、わがしもべヒルキヤの子エリアキムを呼んで、二
一あなたの衣を着せ、あなたの帯をしめさせ、あなたの権力を彼の手に
ゆだねる。彼はエルサレムの民とユダの家との父となる。二二わたしはま
たダビデの家のかぎを彼の肩に置く。彼が開けば閉じる者なく、彼が閉じ
れば開く者はない。二三わたしは彼を堅い所に打ったくぎのようにする。
そして彼はその父の家の誉の座となり、二四その父の家のすべての重さは
彼の上にかかる。すなわちその子、その孫およびすべての小さい器、鉢
からすべてのびんにいたるまでみな、彼の上にかかる』。二五万軍の主は
言われる、「その日、堅い所に打ったくぎは抜け、切られて落ちる。その
上にかかっている荷もまた取り去られる」と主は語られた。

第二三章

一ツロについての託宣。
タルシシのもろもろの船よ、泣き叫べ、

ツロは荒れすたれて、家なく、
船泊まりする港もないからだ。
この事はクプロの地から彼らに告げ知らせられる。
二 海べに住む民よ、
シドンの商人よ、もだせ、
あなたがたの使者は海を渡り、
大いなる水の上にあった。
三 ツロの収入はシホルの穀物、
ナイル川の収穫であった。
ツロはもろもろの国びとの商人であった。
四 シドンよ、恥じよ、
海は言った、海の城は言う、

「わたしは苦しまず、また産まなかった。
わたしは若い男子を養わず、
また処女を育てなかった」。
五この報道がエジプトに達するとき、
彼らはツロについての報道によって、いたく苦しむ。
六タルシシに渡れ、
海べに住む民よ、泣き叫べ。
七これがその起源も古い町、
自分の足で移り、遠くにまで移住した町、
あなたがたの喜び誇る町なのか。
八ツロにむかってこれを定めたのはだれか。
ツロは冠を授けた町、

その商人(しょうにん)は君(きみ)たち、
その貿易業者(ぼうえきぎょうしゃ)は地(ち)の尊(たっと)い人々(ひとびと)であった。
九万軍(ばんぐん)の主(しゅ)はすべての栄光(えいこう)の誇(ほこり)を汚(けが)し、
地(ち)のすべての尊(たっと)い者(もの)をはずかしめるために
これを定(さだ)められたのだ。
一〇タルシシの娘(むすめ)よ、
ナイル川(かわ)のようにおのが地(ち)にあふれよ。
もはや束縛(そくばく)するものはない。
一一主(しゅ)はその手(て)を海(うみ)の上(うえ)に伸(の)べて
国々(くにぐに)を震(ふる)い動(うご)かされた。
主(しゅ)はカナンについて詔(みことのり)を出(だ)し、
そのとりでをこわされた。

一二主(しゅ)は言(い)われた、
「しえたげられた処女(しょじょ)シドンの娘(むすめ)よ、
あなたはもはや喜(よろこ)ぶことはない。
立(た)って、クプロに渡(わた)れ、
そこでもあなたは安息(あんそく)を得(え)ることはない」。
一三カルデヤびとの国(くに)を見(み)よ、アッスリヤではなく、この民(たみ)がツロを野(の)の獣(けもの)のすみかに定(さだ)めた。彼(かれ)らはやぐらを建(た)て、もろもろの宮殿(きゅうでん)をこわして荒塚(あらつか)とした。
一四タルシシのもろもろの船(ふね)よ、泣(な)き叫(さけ)べ、
あなたがたのとりでは荒(あ)れすたれたから。
一五その日(ひ)、ツロはひとりの王(おう)のながらえる日(ひ)と同(おな)じく七十年(ねん)の間(あいだ)忘(わす)れられ、七十年(ねんおわ)終わって後(のち)、ツロは遊女(ゆうじょ)の歌(うた)のようになる、

一六「忘れられた遊女よ、
琴を執って町を経めぐり、
巧みに弾じ、多くの歌をうたって、
人に思い出されよ」。
一七七十年終って後、主はツロを顧みられる。ツロは再び淫行の価
を得て、地のおもてにある世のすべての国々と姦淫を行い、一八その商品
とその価とは主にささげられる。これはたくわえられることなく、積まれ
ることなく、その商品は主の前に住む者のために豊かな食物となり、み
ごとな衣服となる。

第二四章

一見よ、主はこの地をむなしくし、
これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、

その民を散らされる。
二そして、その民も祭司もひとしく、
しもべも主人もひとしく、
はしためも主婦もひとしく、
買う者も売る者もひとしく、
貸す者も借りる者もひとしく、
債権者も債務者もひとしく、
この事にあう。
三地は全くむなしくされ、全くかすめられる。
主がこの言葉を告げられたからである。
四地は悲しみ、衰え、
世はしおれ、衰え、

天も地と共にしおれはてる。
五地はその住む民の下に汚された。
これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、
とこしえの契約を破ったからだ。
六それゆえ、のろいは地をのみつくし、
そこに住む者はその罪に苦しみ、
また地の民は焼かれて、わずかの者が残される。
七新しいぶどう酒は悲しみ、ぶどうはしおれ、
心の楽しい者もみな嘆く。
八鼓の音は静まり、
喜ぶ者の騒ぎはやみ、
琴の音もまた静まった。

九彼らはもはや歌をうたって酒を飲まず、
濃き酒はこれを飲む者に苦くなる。
一〇混乱せる町は破られ、
すべての家は閉ざされて、はいることができない。
一一ちまたには酒の不足のために叫ぶ声があり、
すべての喜びは暗くなり、
地の楽しみは追いやられた。
一二町には荒れすたれた所のみ残り、
その門もこわされて破れた。
一三地のうちで、もろもろの民のなかで残るものは、
オリブの木の打たれた後の実のように、
ぶどうの収穫の終った後にその採り残りを

集めるときのようになる。
一四彼らは声をあげて喜び歌う。
主の威光のゆえに、西から喜び呼ばわる。
一五それゆえ、東で主をあがめ、
海沿いの国々でイスラエルの神、主の名をあがめよ。
一六われわれは地の果から、さんびの歌を聞いた、
「栄光は正しい者にある」と。
しかし、わたしは言う、「わたしはやせ衰える、
わたしはやせ衰える、わたしはわざわいだ。
欺く者はあざむき、
欺く者は、はなはだしくあざむく」。
一七地に住む者よ、

恐れと、落し穴と、わなとはあなたの上にある。
一八恐れの声をのがれる者は落し穴に陥り、
落し穴から出る者はわなに捕えられる。
天の窓は開け、地の基が震い動くからである。
一九地は全く砕け、
地は裂け、
地は激しく震い、
二〇地は酔いどれのようによろめき、
仮小屋のようにゆり動く。
そのとがはその上に重く、
ついに倒れて再び起きあがることはない。
二一その日、主は天において、天の軍勢を罰し、

地(ち)の上(うえ)で、地(ち)のもろもろの王(おう)を罰(ばっ)せられる。
二二彼(かれ)らは囚人(しゅうじん)が土(つち)ろうの中(なか)に
集(あつ)められるように集(あつ)められて、
獄屋(ごくや)の中(なか)に閉(と)ざされ、
多(おお)くの日(ひ)を経(へ)て後(のち)、罰(ばっ)せられる。
二三こうして万軍(ばんぐん)の主(しゅ)がシオンの山(やま)
およびエルサレムで統(す)べ治(おさ)め、
かつその長老(ちょうろう)たちの前(まえ)に
その栄光(えいこう)をあらわされるので、
月(つき)はあわて、日(ひ)は恥(は)じる。

第二五章

一主(しゅ)よ、あなたはわが神(かみ)、

わたしはあなたをあがめ、み名(な)をほめたたえる。
あなたはさきに驚(おどろ)くべきみわざを行(おこな)い、
いにしえから定(さだ)めた計画(けいかく)を
真実(しんじつ)をもって行(おこな)われたから。
二あなたは町(まち)を石塚(いしづか)とし、堅固(けんご)な町(まち)を荒塚(あらつか)とされた。
外国人(がいこくじん)のやかたは、もはや町(まち)ではなく、
とこしえに建(た)てられることはない。
三それゆえ、強(つよ)い民(たみ)はあなたを尊(たっと)び、
あらぶる国々(くにぐに)の町(まち)はあなたを恐(おそ)れる。
四あなたは貧(まず)しい者(もの)のとりでとなり、
乏(とぼ)しい者(もの)の悩(なや)みのときのとりでとなり、
あらしをさける避(さ)け所(どころ)となり、

熱さをさける陰となられた。
あらぶる者の及ぼす害は、
石がきを打つあらしのごとく、
五かわいた地の熱さのようだからである。
あなたは外国人の騒ぎをおさえ、
雲が陰をもって熱をとどめるように
あらぶる者の歌をとどめられる。
六万軍の主はこの山で、すべての民のために肥えたものをもって祝宴
を設け、久しくたくわえたぶどう酒をもって祝宴を設けられる。すなわち
髄の多い肥えたものと、よく澄んだ長くたくわえたぶどう酒をもって祝宴
を設けられる。七また主はこの山で、すべての民のかぶっている顔おおい
と、すべての国のおおっているおおい物とを破られる。八主はとこしえに

死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかし
めを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである。
九その日、人は言う、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは
彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたした
ちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう」と。
一〇主の手はこの山にとどまり、モアブは肥だめの中に踏まれるわらの
ように、おのれの所で踏みにじられる。一一彼はその中で泳ぐ物が泳ごう
として手を伸ばすように、その手を伸ばす。しかし主はその高ぶりを、そ
の手の巧みなわざと共に低くされる。一二その石がきの高い城郭を主は
傾け倒し、地に投げうって、ちりにかえされる。

第二六章

一その日ユダの国で、この歌をうたう、

「われわれは堅固な町をもつ。
主は救をその石がきとし、
またとりでとされる。
二 門を開いて、信仰を守る正しい国民を入れよ。
三 あなたは全き平安をもって
こころざしの堅固なものを守られる。
彼はあなたに信頼しているからである。
四 とこしえに主に信頼せよ、
主なる神はとこしえの岩だからである。
五 主は高き所、そびえたつ町に住む者をひきおろし、
これを伏させ、これを地に伏させて、
ちりにかえされる。
六 こうして足で踏まれ、

貧しい者の足で踏まれ、
乏しい者はその上を歩む」。
七正しい者の道は平らである。
あなたは正しい者の道をなめらかにされる。
八主よ、あなたがさばきをなさる道で、
われわれはあなたを待ち望む。
われわれの魂の慕うものは、
あなたの記念の名である。
九わが魂は夜あなたを慕い、
わがうちなる霊は、せつにあなたを求める。
あなたのさばきが地に行われるとき、
世に住む者は正義を学ぶからである。

一〇悪(あ)しき者(もの)は恵(めぐ)まれても、なお正義(せいぎ)を学(まな)ばず、
正(ただ)しい地(ち)にあっても不義(ふぎ)を行(おこな)い、
主(しゅ)の威光(いこう)を仰(あお)ぐことをしない。
一一主(しゅ)よ、あなたのみ手(て)が高(たか)くあがるけれども、
彼(かれ)らはそれを顧(かえり)みない。
どうか、あなたの、おのが民(たみ)を救(すく)われる熱心(ねっしん)を
彼(かれ)らに見(み)させて、大(おお)いに恥(は)じさせ、
火(ひ)をもってあなたの敵(てき)を焼(や)き滅(ほろ)ぼしてください。
一二主(しゅ)よ、あなたはわれわれのために
平和(へいわ)を設(もう)けられる。
あなたはわれわれのために
われわれのすべてのわざをなし遂(と)げられた。

一三われわれの神、主よ、
あなた以外のもろもろの主がわれわれを治めた。
しかし、われわれはただ、
あなたの名のみをあがめる。
一四死んだ者はまた生きない。
亡霊は生き返らない。
それで、あなたは彼らを罰して滅ぼし、
彼らの思い出をことごとく消し去られた。
一五主よ、あなたはこの国民を増し加えられた。
あなたはこの国民を増し加えられた。
あなたは栄光をあらわされた。
あなたは地の境を四方に広げられた。

一六主（しゅ）よ、彼（かれ）らは悩（なや）みのとき、あなたに求（もと）めた。
彼（かれ）らがあなたの懲（こら）しめにあったとき、
祈（いのり）をささげた。
一七主（しゅ）よ、はらめる女（おんな）の産（う）むときが近（ちか）づいて苦（くる）しみ、
その痛（いた）みによって叫（さけ）ぶように、
われわれはあなたのゆえに、そのようであった。
一八われわれは、はらみ、苦（くる）しんだ。
しかしわれわれの産（う）んだものは風（かぜ）にすぎなかった。
われわれは救（すくい）を地（ち）に施（ほどこ）すこともせず、
また世（よ）に住（す）む者（もの）を滅（ほろ）ぼすこともしなかった。
一九あなたの死者（ししゃ）は生（い）き、彼（かれ）らのなきがらは起（お）きる。
ちりに伏（ふ）す者（もの）よ、さめて喜（よろこ）びうたえ。

あなたの露(つゆ)は光(ひかり)の露(つゆ)であって、
それを亡霊(ぼうれい)の国(くに)の上(うえ)に降(ふ)らされるからである。
二〇さあ、わが民(たみ)よ、あなたのへやにはいり、
あなたのうしろの戸(と)を閉(と)じて、
憤(いきどお)りの過(す)ぎ去(さ)るまで、しばらく隠(かく)れよ。
二一見(み)よ、主(しゅ)はそのおられる所(ところ)を出(で)て、
地(ち)に住(す)む者(もの)の不義(ふぎ)を罰(ばっ)せられる。
地(ち)はその上(うえ)に流(なが)された血(ち)をあらわして、
殺(ころ)された者(もの)を、もはやおおうことがない。

第二七章一その日(ひ)、主(しゅ)は堅(かた)く大(おお)いなる強(つよ)いつるぎで逃(に)げるへびレビヤタン、曲(まが)りくねるへびレビヤタンを罰(ばっ)し、また海(うみ)におる龍(りゅう)を殺(ころ)される。
二その日(ひ)

「麗しきぶどう畑よ、このことを歌え。
三主なるわたしはこれを守り、
常に水をそそぎ、
夜も昼も守って、そこなう者のないようにする。
四わたしは憤らない。
いばら、おどろがわたしと戦うなら、
わたしは進んでこれを攻め、
皆もろともに焼きつくす。
五それを望まないなら、わたしの保護にたよって、
わたしと和らぎをなせ、
わたしと和らぎをなせ」。
六後になれば、ヤコブは根をはり、

イスラエルは芽を出して花咲き、
その実を全世界に満たす。
七主は彼らを撃った者を撃たれたように
彼らを撃たれたか。
あるいは彼らを殺した者が殺されたように
彼らは殺されたか。
八あなたは彼らと争って、彼らを追放された。
主は東風の日に、その激しい風をもって
彼らを移しやられた。
九それゆえ、ヤコブの不義は
これによって、あがなわれる。
これによって結ぶ実は彼の罪を除く。

すなわち彼が祭壇のすべての石を
砕けた白堊のようにし、
アシラ像と香の祭壇とを再び建てないことである。
一〇堅固な町は荒れてさびしく、
捨て去られたすまいは荒野のようだ。
子牛はそこに草を食い、
そこに伏して、その木の枝を裸にする。
一一その枝が枯れると、折り取られ、
女が来てそれを燃やす。
これは無知の民だからである。
それゆえ、彼らを造られた主は
彼らをあわれまれない。

彼らを形造られた主は、彼らを恵まれない。
一二イスラエルの人々よ、その日、主はユフラテ川からエジプトの川に
いたるまで穀物の穂を打ち落される。そしてあなたがたは、ひとりびとり
集められる。一三その日大いなるラッパが鳴りひびき、アッスリヤの地にあ
る失われた者と、エジプトの地に追いやられた者とがきて、エルサレムの
聖山で主を拝む。

第二八章

一エフライムの酔いどれの誇る冠と、
酒におぼれた者の肥えた谷のかしらにある
しぼみゆく花の美しい飾りは、わざわいだ。
二見よ、主はひとりの力ある強い者を持っておられる。
これはひょうをまじえた暴風のように、

破(やぶ)り、そこなう暴風雨(ぼうふうう)のように、
大水(おおみず)のあふれみなぎる暴風(ぼうふう)のように、
それを激(はげ)しく地(ち)に投(な)げうつ。
三エフライムの酔(よ)いどれの誇(ほこ)る冠(かんむり)は
足(あし)で踏(ふ)みにじられる。
四肥(こ)えた谷(たに)のかしらにある
しぼみゆく花(はな)の美(うつく)しい飾(かざ)りは、
夏前(なつまえ)に熟(じゅく)した初(はつ)なりのいちじくのようだ。
人(ひと)がこれを見(み)ると、取(と)るやいなや、食(た)べてしまう。
五その日(ひ)、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)はその民(たみ)の残(のこ)った者(もの)のために、
栄(さか)えの冠(かんむり)となり、麗(うるわ)しい冠(かんむり)となられる。
六また、さばきの席(せき)に座(ざ)する者(もの)にはさばきの霊(れい)となり、

戦いを門まで追い返す者には力となられる。
七しかし、これらもまた酒のゆえによろめき、
濃き酒のゆえによろける。
祭司と預言者とは濃き酒のゆえによろめき、
酒のゆえに心みだれ、
濃き酒のゆえによろける。
彼らは幻を見るときに誤り、
さばきを行うときにつまづく。
八すべての食卓は吐いた物で満ち、清い所はない。
九「彼はだれに知識を教えようとするのか。
だれにおとずれを説きあかそうとするのか。
乳をやめ、乳ぶさを離れた者にするのだろうか。

一〇それは教訓に教訓、教訓に教訓、
規則に規則、規則に規則。
ここにも少し、そこにも少し教えるのだ」。
一一否、むしろ主は異国のくちびると、
異国の舌とをもってこの民に語られる。
一二主はさきに彼らに言われた、
「これが安息だ、
疲れた者に安息を与えよ。
これが休息だ」と。
しかし彼らは聞こうとはしなかった。
一三それゆえ、主の言葉は彼らに、
教訓に教訓、教訓に教訓、

規則に規則、規則に規則、
ここにも少し、そこにも少しとなる。
これは彼らが行って、うしろに倒れ、
破られ、わなにかけられ、捕えられるためである。
一四それゆえ、エルサレムにあるこの民を治める
あざける人々よ、主の言葉を聞け。
一五あなたがたは言った、
「われわれは死と契約をなし、
陰府と協定を結んだ。
みなぎりあふれる災の過ぎる時にも、
それはわれわれに来ない。
われわれはうそを避け所となし、

偽りをもって身をかくしたからである」。
一六それゆえ、主なる神はこう言われる、
「見よ、わたしはシオンに
一つの石をすえて基とした。
これは試みを経た石、
堅くすえた尊い隅の石である。
『信ずる者はあわてることはない』。
一七わたしは公平を、測りなわとし、
正義を、下げ振りとする。
ひょうは偽りの避け所を滅ぼし、
水は隠れ場を押し倒す」。
一八その時あなたがたが死とたてた契約は取り消され、

陰府(よみ)と結(むす)んだ協定(きょうてい)は行(おこな)われない。
みなぎりあふれる災(わざわい)の過(す)ぎるとき、
あなたがたはこれによって打(う)ち倒(たお)される。
一九それが過(す)ぎるごとに、あなたがたを捕(とら)える。
それは朝(あさ)な朝(あさ)な過(す)ぎ、
昼(ひる)も夜(よる)も過(す)ぎるからだ。
このおとずれを聞(き)きわきまえることは、
全(まった)くの恐(おそ)れである。
二〇床(とこ)が短(みじか)くて身(み)を伸(の)べることができず、
かける夜具(やぐ)が狭(せま)くて
身(み)をおおうことができないからだ。
二一主(しゅ)はペラジム山(やま)で立(た)たれたように立(た)ちあがり、

ギベオンの谷で憤られたように憤られて、
その行いをなされる。
その行いは類のないものである。
またそのわざをなされる。
そのわざは異なったものである。
二二それゆえ、あなたがたはあざけってはならない。
さもないと、あなたがたのなわめは、きびしくなる。
わたしは主なる万軍の神から
全地の上に臨む滅びの宣言を聞いたからである。
二三あなたがたは耳を傾けて、わが声を聞くがよい。
心してわが言葉を聞くがよい。
二四種をまくために耕す者は絶えず耕すだろうか。
彼は絶えずその地をひらき、

まぐわをもって土をならすだろうか。
二五地のおもてを平らにしたならば、
いのんどをまき、クミンをまき、
小麦をうねに植え、大麦を定めた所に植え、
スペルト麦をその境に植えないだろうか。
二六これは彼の神が正しく、
彼を導き教えられるからである。
二七いのんどは麦こき板でこかない、
クミンはその上に車輪をころがさない。
いのんどを打つには棒を用い、
クミンを打つにはさおを用いる。
二八人はパン用の麦を打つとき砕くだろうか、

否、それが砕けるまでいつまでも打つことをしない。
馬をもってその上に車輪を引かせるとき、
それを砕くことをしない。
二九これもまた万軍の主から出ることである。
その計りごとは驚くべく、
その知恵はすぐれている。

第二九章

一ああ、アリエルよ、アリエルよ、
ダビデが営をかまえた町よ、
年に年を加え、祭をめぐりこさせよ。
二その時わたしはアリエルを悩ます。
そこには悲しみと嘆きとがあって、
アリエルのようなものとなる。

三わたしはあなたのまわりに営を構え、
やぐらをもってあなたを囲み、
塁を築いてあなたを攻める。
四その時あなたは深い地の中から物言い、
低いちりの中から言葉を出す。
あなたの声は亡霊の声のように地から出、
あなたの言葉はちりの中から、さえずるようである。
五しかしあなたのあだの群れは
細かなちりのようになり、
あらぶる者の群れは
吹き去られるもみがらのようになる。
また、にわかに、この事がある。

六すなわち万軍の主は雷、地震、大いなる叫び、
つむじ風、暴風および焼きつくす火の炎をもって
臨まれる。
七そしてアリエルを攻めて戦う国々の群れ、
すなわちアリエルとその城を攻めて戦い、
これを悩ます者はみな
夢のように、夜の幻のようになる。
八飢えた者が食べることを夢みても、
さめると、その飢えがいえないように、
あるいは、かわいた者が飲むことを夢みても、
さめると、疲れてそのかわきがとまらないように、
シオンの山を攻めて戦う国々の群れも

そのようになる。
九あなたがたは知覚を失って気が遠くなれ、
目がくらんで盲となれ。
あなたがたは酔っていよ、しかし酒のゆえではない、
よろめけ、しかし濃き酒のゆえではない。
一〇主が深い眠りの霊をあなたがたの上にそそぎ、
あなたがたの目である預言者を閉じこめ、
あなたがたの頭である先見者を
おおわれたからである。
一一それゆえ、このすべての幻は、あなたがたには封じた書物の言葉
のようになり、人々はこれを読むことのできる者にわたして、「これを読ん
でください」と言えば、「これは封じてあるから読むことができない」と彼
は言う。一二またその書物を読むことのできない者にわたして、「これを読

んでください」と言えば、「読むことはできない」と彼は言う。

一三主は言われた、
「この民は口をもってわたしに近づき、
くちびるをもってわたしを敬うけれども、
その心はわたしから遠く離れ、
彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、
そらで覚えた人の戒めによるのである。
一四それゆえ、見よ、わたしはこの民に、
再び驚くべきわざを行う、
それは不思議な驚くべきわざである。
彼らのうちの賢い人の知恵は滅び、
さとい人の知識は隠される」。

一五わざわいなるかな、
おのが計りごとを主に深く隠す者。
彼らは暗い中でわざを行い、
「だれがわれわれを見るか、
だれがわれわれのことを知るか」と言う。
一六あなたがたは転倒して考えている。
陶器師は粘土と同じものに思われるだろうか。
造られた物はそれを造った者について、
「彼はわたしを造らなかった」と言い、
形造られた物は形造った者について、
「彼は知恵がない」と言うことができようか。
一七しばらくしてレバノンは変って肥えた畑となり、
肥えた畑は林のように

思われる時が来るではないか。
一八 その日、耳しいは書物の言葉を聞き、
目しいの目はその暗やみから、見ることができる。
一九 柔和な者は主によって新たなる喜びを得、
人のなかの貧しい者は
イスラエルの聖者によって楽しみを得る。
二〇 あらぶる者は絶え、
あざける者はうせ、
悪を行おうと、おりをうかがう者は、
ことごとく断ち滅ぼされるからである。
二一 彼らは言葉によって人を罪に定め、
町の門でいさめる者をわなにおとしいれ、

むなしい言葉をかまえて正しい者をしりぞける。
二二それゆえ、昔アブラハムをあがなわれた主は、ヤコブの家について
こう言われる、
「ヤコブは、もはやはずかしめを受けず、
その顔は、もはや色を失うことはない。
二三彼の子孫が、その中にわが手のわざを見るとき、
彼らはわが名を聖とし、
ヤコブの聖者を聖として、
イスラエルの神を恐れる。
二四心のあやまれる者も、悟りを得、
つぶやく者も教をうける」。

第三〇章

一主は言われる、
「そむける子らはわざわいだ、
彼らは計りごとを行うけれども、
わたしによってではない。
彼らは同盟を結ぶけれども、
わが霊によってではない、
罪に罪を加えるためだ。
二彼らはわが言葉を求めず、
エジプトへ下っていって、パロの保護にたより、
エジプトの陰に隠れようとする。
三それゆえ、パロの保護は
かえってあなたがたの恥となり、

エジプトの陰に隠れることは
あなたがたのはずかしめとなる。
四たとい、彼の君たちがゾアンにあり、
彼の使者たちがハネスに来ても、
五彼らは皆おのれを益することのできない民により、
すなわち助けとならず、益とならず、
かえって恥となり、はずかしめとなる民によって、
恥をかくからである」。
六ネゲブの獣についての託宣。
彼らはその富を若いろばの背に負わせ、
その宝をらくだの背に負わせて、
雌じし、雄じし、まむしおよび飛びかけるへびの出る

悩みと苦しみの国を通って、
おのれを益することのできない民に行く。
七そのエジプトの助けは無益であって、むなしい。
それゆえ、わたしはこれを
「休んでいるラハブ」と呼んだ。
八いま行って、これを彼らの前で札にしるし、
書物に載せ、
後の世に伝えて、とこしえにあかしとせよ。
九彼らはそむける民、偽りを言う子ら、
主の教を聞こうとしない子らだ。
一〇彼らは先見者にむかって「見るな」と言い、
預言者にむかっては

「正しい事をわれわれに預言するな、
耳に聞きよいことを語れ、迷わしごとを預言せよ。
一一大路を去り、小路をはなれ、
イスラエルの聖者について語り聞かすな」と言う。
一二それゆえ、イスラエルの聖者はこう言われる、
「あなたがたはこの言葉を侮り、
しえたげと、よこしまとを頼み、
これにたよるがゆえに、
一三この不義はあなたがたには
突き出て、くずれ落ちようとする高い石がきの
破れのようであって、
その倒壊はにわかに、またたくまに来る。

一四その破れることは陶器師の器を破るように
惜しむことなく打ち砕き、
その砕けのなかには、炉から火を取り、
池から水をくめるほどの、ひとかけらさえ
見いだされない」。
一五主なる神、イスラエルの聖者はこう言われた、
「あなたがたは立ち返って、
落ち着いているならば救われ、
穏やかにして信頼しているならば力を得る」。
しかし、あなたがたはこの事を好まなかった。
一六かえって、あなたがたは言った、
「否、われわれは馬に乗って、とんで行こう」と。

それゆえ、あなたがたはとんで帰(かえ)る。また言(い)った、
「われらは速(はや)い馬(うま)に乗(の)ろう」と。
それゆえ、あなたがたを追(お)う者(もの)は速(はや)い。
一七ひとりの威嚇(いかく)によって千人(にん)は逃(に)げ、
五人(にん)の威嚇(いかく)によってあなたがたは逃(に)げて、
その残(のこ)る者(もの)はわずかに
山(やま)の頂(いただき)にある旗(はた)ざおのように、
丘(おか)の上(うえ)にある旗(はた)のようになる。
一八それゆえ、主(しゅ)は待(ま)っていて、
あなたがたに恵(めぐみ)を施(ほどこ)される。
それゆえ、主(しゅ)は立(た)ちあがって、
あなたがたをあわれまれる。

主は公平の神でいらせられる。
すべて主を待ち望む者はさいわいである。
一九シオンにおり、エルサレムに住む民よ、あなたはもはや泣くことはな
い。主はあなたの呼ばわる声に応じて、必ずあなたに恵みを施される。
主がそれを聞かれるとき、直ちに答えられる。二〇たとい主はあなたがた
に悩みのパンと苦しみの水を与えられても、あなたの師は再び隠れるこ
とはなく、あなたの目はあなたの師を見る。二一また、あなたが右に行き、
あるいは左に行く時、そのうしろで「これは道だ、これに歩め」と言う
言葉を耳に聞く。二二その時、あなたがたはしろがねをおおった刻んだ像
と、こがねを張った鋳た像とを汚し、これをきたない物のようにまき散ら
して、これに「去れ」と言う。
二三主はあなたが地にまく種に雨を与え、地の産物なる穀物をくださる。

それはおびただしく、かつ豊かである。その日あなたの家畜は広い牧場で
草を食べ、二四地を耕す牛と、ろばは、シャベルと、くまでより分けて
塩を加えた飼料を食べる。二五大いなる虐殺の日、やぐらの倒れる時、す
べてのそびえたつ山と、すべての高い丘に水の流れる川がある。二六さら
に主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日には、月の光
は日の光のようになり、日の光は七倍となり、七つの日の光のように
になる。

二七見よ、主の名は遠い所から
燃える怒りと、立ちあがる濃い煙をもって来る。
そのくちびるは憤りで満ち、
その舌は焼きつくす火のごとく、
二八その息はあふれて首にまで達する

流れのようであって、
滅びのふるいをもってもろもろの国をふるい、
また惑わす手綱を
もろもろの民のあごにつけるために来る。

二九あなたがたは、聖なる祭を守る夜のように歌をうたう。また笛をな
らして主の山にきたり、イスラエルの岩なる主にまみえる時のように心
に喜ぶ。三〇主はその威厳ある声を聞かせ、激しい怒りと、焼きつくす火
の炎と、豪雨と、暴風と、ひょうとをもってその腕の下ることを示され
る。三一主がそのむちをもって打たれる時、アッスリヤの人々は主の声に
よって恐れおののく。三二主が懲しめのつえを彼らの上に加えられるごと
に鼓を鳴らし、琴をひく。主は腕を振りかざして、彼らと戦われる。三三
焼き場はすでに設けられた。しかも王のために深く広く備えられ、火と多

くのたきぎが積まれてある。主の息はこれを硫黄の流れのように燃やす。

第三一章

一 助けを得るためにエジプトに下り、
馬にたよる者はわざわいだ。
彼らは戦車が多いので、これに信頼し、
騎兵がはなはだ強いので、これに信頼する。
しかしイスラエルの聖者を仰がず、
また主にはかることをしない。
二 それにもかかわらず、主もまた賢くいらせられ、
必ず災をくだし、その言葉を取り消すことなく、
立って悪をなす者の家を攻め、
また不義を行う者を助ける者を攻められる。

三 かのエジプトびとは人（ひと）であって、神（かみ）ではない。
その馬（うま）は肉（にく）であって、霊（れい）ではない。
主（しゅ）がみ手（て）を伸（の）ばされるとき、
助（たす）ける者（もの）はつまずき、
助（たす）けられる者（もの）も倒（たお）れて、皆（みな）ともに滅（ほろ）びる。
四 主（しゅ）はわたしにこう言（い）われた、
「ししまたは若（わか）いししが獲物（えもの）をつかんで、
ほえたけるとき、
あまたの羊飼（ひつじかい）が呼（よ）び出（だ）されて、これにむかっても、
その声（こえ）によって驚（おどろ）かず、
その叫（さけ）びによって恐（おそ）れないように、
万軍（ばんぐん）の主（しゅ）は下（くだ）ってきて、

シオンの山およびその丘で戦われる。
五鳥がひなを守るように、
万軍の主はエルサレムを守り、
これを守って救い、これを惜しんで助けられる」。
六イスラエルの人々よ、主に帰れ。あなたがたは、はなはだしく主にそ
むいた。七その日、あなたがたは自分の手で造って罪を犯したしろがねの
偶像と、こがねの偶像をめいめい投げすてる。
八「アッスリヤびとはつるぎによって倒れる、
人のつるぎではない。
つるぎが彼らを滅ぼす、
人のつるぎではない。
彼らはつるぎの前から逃げ去り、

その若い者は奴隷の働きをしいられる。
九彼らの岩は恐れによって過ぎ去り、
その君たちはあわて、旗をすてて逃げ去る」。
これは主の言葉である。
主の火はシオンにあり、その炉はエルサレムにある。

第三二章

一見よ、ひとりの王が
正義をもって統べ治め、
君たちは公平をもってつかさどり、
二おのおの風をさける所、
暴風雨をのがれる所のようになり、
かわいた所にある水の流れのように、

疲れた地にある大きな岩の陰のようになる。
三こうして、見る者の目は開かれ、
聞く者の耳はよく聞き、
四気短な者の心は悟る知識を得、
どもりの舌はたやすく、
あざやかに語ることができる。
五愚かな者は、もはや尊い人と呼ばれることなく、
悪人はもはや、りっぱな人と言われることはない。
六それは愚かな者は愚かなことを語り、
その心は不義をたくらみ、よこしまを行い、
主について誤ったことを語り、
飢えた者の望みを満たさず、

かわいた者(もの)の飲(の)み物(もの)を奪(うば)い取(と)るからである。
七悪人(あくにん)の行(おこな)いは悪(わる)い。
彼(かれ)は悪(わる)い計(はか)りごとをめぐらし、
偽(いつわ)りの言葉(ことば)をもって貧(まず)しい者(もの)をおとしいれ、
乏(とぼ)しい者(もの)が正(ただ)しいことを語(かた)っても、
なお、これをおとしいれる。
八しかし尊(たっと)い人(ひと)は尊(たっと)いことを語(かた)り、
つねに尊(たっと)いことを行(おこな)う。
九安(やす)んじている女(おんな)たちよ、起(お)きて、わが声(こえ)を聞(き)け。
思(おも)い煩(わずら)いなき娘(むすめ)たちよ、わが言葉(ことば)に耳(みみ)を傾(かたむ)けよ。
一〇思(おも)い煩(わずら)いなき女(おんな)たちよ、
一年(ねん)あまりの日(ひ)をすぎて、

あなたがたは震えおののく。
ぶどうの収穫がむなしく、
実を取り入れる時が来ないからだ。
一一 安んじている女たちよ、震え恐れよ。
思い煩いなき女たちよ、震えおののけ。
衣を脱ぎ、裸になって腰に荒布をまとえ。
一二 良き畑のため、
実り豊かなぶどうの木のために胸を打て。
一三 いばら、おどろの生えているわが民の地のため、
喜びに満ちている町にある
すべての喜びの家のために胸を打て。
一四 宮殿は捨てられ、にぎわった町は荒れすたれ、

丘と、やぐらとは、とこしえにほら穴となり、
野のろばの楽しむ所、
　羊の群れの牧場となるからである。
一五しかし、ついには霊が上から
われわれの上にそそがれて、
荒野は良き畑となり、
良き畑は林のごとく見られるようになる。
一六その時、公平は荒野に住み、
正義は良き畑にやどる。
一七正義は平和を生じ、
正義の結ぶ実はとこしえの平安と信頼である。
一八わが民は平和の家におり、

安らかなすみかにおり、
静かな休み所におる。
一九しかし林はことごとく切り倒され、
町もことごとく倒される。
二〇すべての水のほとりに種をまき、
牛およびろばを自由に放ちおくあなたがたは、
さいわいである。

第三三章

一わざわいなるかな、
おのれ自ら滅ぼされないのに、人を滅ぼし、
だれも欺かないのに人を欺く者よ。
あなたが滅ぼすことをやめたとき、
あなたは滅ぼされ、

あなたが欺くことを終えたとき、
あなたは欺かれる。
二主よ、われわれをお恵みください、
われわれはあなたを待ち望む。
朝ごとに、われわれの腕となり、
悩みの時に、救となってください。
三鳴りとどろく声によって、もろもろの民は逃げ去り、
あなたが立ちあがられると、
もろもろの国は散らされる。
四青虫が物を集めるようにぶんどり品は集められ、
いなごのとびつどうように、
人々はその上にとびつどう。

五 主は高くいらせられ、高い所に住まわれる。
主はシオンに公平と正義とを満たされる。
六 また主は救と知恵と知識を豊かにして、
あなたの代を堅く立てられる。
主を恐れることはその宝である。
七 見よ、勇士たちは外にあって叫び、
平和の使者はいたく嘆く。
八 大路は荒れすたれて、旅びとは絶え、
契約は破られ、証人は軽んぜられ、
人を顧みることがない。
九 地は嘆き衰え、
レバノンは恥じて枯れ、

シャロンは荒野(あらの)のようになり、
バシャンとカルメルはその葉(は)を落(お)とす。
一〇主(しゅ)は言(い)われる、
「今(いま)わたしは起(お)きよう、いま立(た)ちあがろう、
いま自(みずか)らを高(たか)くしよう。
一一あなたがたは、もみがらをはらみ、わらを産(う)む。
あなたがたの息(いき)は火(ひ)となって、
あなたがたを食(く)いつくす。
一二もろもろの民(たみ)は焼(や)かれて石灰(いしばい)のようになり、いばらが切(き)られて火(ひ)
に燃(も)やされたようになる」。
一三あなたがた遠(とお)くにいる者(もの)よ、
わたしがおこなったことを聞(き)け。

あなたがた近(ちか)くにいる者(もの)よ、
わが大能(たいのう)を知(し)れ。
一四シオンの罪(つみ)びとは恐(おそ)れに満(み)たされ、
おののきは神(かみ)を恐(おそ)れない者(もの)を捕(とら)えた。
「われわれのうち、だれが
焼(や)きつくす火(ひ)の中(なか)におることができよう。
われわれのうち、だれが
とこしえの燃(も)える火(ひ)の中(なか)におることができよう」。
一五正(ただ)しく歩(あゆ)む者(もの)、正直(しょうじき)に語(かた)る者(もの)、
しえたげて得(え)た利(り)をいやしめる者(もの)、
手(て)を振(ふ)って、まいないを取(と)らない者(もの)、
耳(みみ)をふさいで血(ち)を流(なが)す謀略(ぼうりゃく)を聞(き)かない者(もの)、
目(め)を閉(と)じて悪(あく)を見(み)ない者(もの)、

一六このような人は高い所に住み、
堅い岩はそのとりでとなり、
そのパンは与えられ、その水は絶えることがない。
一七あなたの目は麗しく飾った王を見、
遠く広い国を見る。
一八あなたの心はかの恐ろしかった事を思い出す。
「数を調べた者はどこにいるか。
みつぎを量った者はどこにいるか。
やぐらを数えた者はどこにいるか」。
一九あなたはもはや高慢な民を見ない。
かの民の言葉はあいまいで、聞きとりがたく、
その舌はどもって、悟りがたい。

二〇定(さだ)めの祭(まつり)の町(まち)シオンを見(み)よ。
あなたの目(め)は平和(へいわ)なすまい、
移(うつ)されることのない幕屋(まくや)エルサレムを見(み)る。
その杭(くい)はとこしえに抜(ぬ)かれず、
その綱(つな)は、ひとすじも断(た)たれることはない。
二一主(しゅ)は威厳(いげん)をもってかしこにいまし、
われわれのために広(ひろ)い川(かわ)と流(なが)れのある所(ところ)となり、
その中(なか)には、こぐ舟(ふね)も入(い)らず、
大(おお)きな船(ふね)も過(す)ぎることはない。
二二主(しゅ)はわれわれのさばき主(ぬし)、
主(しゅ)はわれわれのつかさ、
主(しゅ)はわれわれの王(おう)であって、われわれを救(すく)われる。

二三あなたの船綱(ふなづな)は解(と)けて、
帆柱(ほばしら)のもとを結(むす)びかためることができず、
帆(ほ)を張(は)ることもできない。
その時多(ときおお)くの獲物(えもの)とぶんどり品(ひん)は分(わ)けられ、
足(あし)なえまでも獲物(えもの)を取(と)る。
二四そこに住(す)む者(もの)のうちには、
「わたしは病気(びょうき)だ」と言(い)う者(もの)はなく、
そこに住(す)む民(たみ)はその罪(つみ)がゆるされる。

第三四章

一もろもろの国(くに)よ、近(ちか)づいて聞(き)け。
もろもろの民(たみ)よ、耳(みみ)を傾(かたむ)けよ。
地(ち)とそれに満(み)ちるもの、

世界とそれから出るすべてのものよ、聞け。
二主はすべての国にむかって怒り、
そのすべての軍勢にむかって憤り、
彼らをことごとく滅ぼし、
彼らをわたして、ほふらせられた。
三彼らは殺されて投げすてられ、
その死体の悪臭は立ちのぼり、
山々はその血で溶けて流れる。
四天の万象は衰え、
もろもろの天は巻物のように巻かれ、
その万象はぶどうの木から葉の落ちるように、
いちじくの木から葉の落ちるように落ちる。

五わたしのつるぎは天において憤りをもって酔った。
見よ、これはエドムの上にくだり、
わたしが滅びに定めた民の上にくだって、
これをさばく。
六主のつるぎは血で満ち、脂肪で肥え、
小羊とやぎの血、
雄羊の腎臓の脂肪で肥えている。
主がボズラで犠牲の獣をほふり、
エドムの地で大いに殺されたからである。
七野牛は彼らと共にほふり場にくだり、
子牛は力ある雄牛と共にくだる。
その国は血で酔い、

その土は脂肪で肥やされる。
八主はあだをかえす日をもち、
シオンの訴えのために報いられる年を
もたれるからである。
九エドムのもろもろの川は変って樹脂となり、
その土は変って硫黄となり、
その地は変って燃える樹脂となって、
一〇夜も昼も消えず、
その煙は、とこしえに立ちのぼる。
これは世々荒れすたれて、
とこしえまでもそこを通る者はない。
一一たかと、やまあらしとがそこをすみかとし、
ふくろうと、からすがそこに住む。

主はその上に荒廃をきたらせる測りなわを張り、
尊い人々の上に混乱を起す下げ振りをさげられる。
一二人々はこれを名づけて「国なき所」といい、
その君たちは皆うせてなくなる。
一三そのとりでの上には、いばらが生え、
その城には、いらくさと、あざみとが生え、
山犬のすみか、だちょうのおる所となる。
一四野の獣はハイエナと出会い、
鬼神はその友を呼び、
夜の魔女もそこに降りてきて、休み所を得る。
一五ふくろうはそこに巣をつくって卵を産み、
それをかえして、そのひなを翼の陰に集める。

とびもまた、おのおのその連れ合いと共に、
そこに集まる。
一六あなたがたは主の書をつまびらかに
たずねて、これを読め。
これらのものは一つも欠けることなく、
また一つもその連れ合いを欠くものはない。
これは主の口がこれを命じ、
その霊が彼らを集められたからである。
一七主は彼らのためにくじを引き、
手ずから測りなわをもって、この地を分け与え、
長く彼らに所有させ、
世々ここに住まわせられる。

第三五章

一 荒野(あらの)と、かわいた地(ち)とは楽(たの)しみ、
さばくは喜(よろこ)びて花咲(はなさ)き、さふらんのように、
二 さかんに花咲(はなさ)き、
かつ喜(よろこ)び楽(たの)しみ、かつ歌(うた)う。
これにレバノンの栄(さか)えが与(あた)えられ、
カルメルおよびシャロンの麗(うるわ)しさが与(あた)えられる。
彼(かれ)らは主(しゅ)の栄光(えいこう)を見(み)、われわれの神(かみ)の麗(うるわ)しさを見(み)る。
三 あなたがたは弱(よわ)った手(て)を強(つよ)くし、
よろめくひざを健(すこ)やかにせよ。
四 心(こころ)おののく者(もの)に言(い)え、
「強(つよ)くあれ、恐(おそ)れてはならない。

見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、
神の報いをもってこられる。
神は来て、あなたがたを救われる」と。
五その時、目しいの目は開かれ、
耳しいの耳はあけられる。
六その時、足なえは、しかのように飛び走り、
おしの舌は喜び歌う。
それは荒野に水がわきいで、
さばくに川が流れるからである。
七焼けた砂は池となり、
かわいた地は水の源となり、
山犬の伏したすみかは、

葦(あし)、よしの茂(しげ)りあう所(ところ)となる。
八そこに大路(おおじ)があり、
その道(みち)は聖(せい)なる道(みち)ととなえられる。
汚(けが)れた者(もの)はこれを通(とお)り過(す)ぎることはできない、
愚(おろ)かなる者(もの)はそこに迷(まよ)い入(い)ることはない。
九そこには、ししはおらず、
飢(う)えた獣(けもの)も、その道(みち)にのぼることはなく、
その所(ところ)でこれに会(あ)うことはない。
ただ、あがなわれた者(もの)のみ、そこを歩(あゆ)む。
一〇主(しゅ)にあがなわれた者(もの)は帰(かえ)ってきて、
その頭(あたま)に、とこしえの喜(よろこ)びをいただき、
歌(うた)うたいつつ、シオンに来(く)る。

彼らは楽しみと喜びとを得、
悲しみと嘆きとは逃げ去る。

第三六章

一ヒゼキヤ王の第十四年に、アッスリヤの王セナケリブが上ってきて、ユダのすべての堅固な町々を攻め取った。二アッスリヤの王はラキシからラブシャケをエルサレムにつかわし、大軍を率いてヒゼキヤ王のもとへ行かせた。ラブシャケは布さらしの野へ行く大路に沿う、上の池の水道のかたわらに立った。三この時ヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナおよびアサフの子である史官ヨアが彼の所に出てきた。

四ラブシャケは彼らに言った、「ヒゼキヤに言いなさい、『大王アッスリヤの王はこう仰せられる、あなたが頼みとする者は何か。五口先だけの言葉が戦争をする計略と力だと考えるのか。あなたは今だれを頼んで、わたしにそむいたのか。六見よ、あなたはかの折れかけている葦のつえエジ

プトを頼みとしているが、それは人が寄りかかるとき、その人の手を刺し
通す。エジプトの王パロはすべて寄り頼む者にそのようにするのだ。七し
かし、あなたがもし「われわれはわれわれの神、主を頼む」とわたしに言う
ならば、ヒゼキヤがユダとエルサレムに告げて、「あなたがたはこの祭壇の
前で礼拝しなければならない」と言って除いたのは、その神の高き所と
祭壇ではなかったのか。八さあ、今わたしの主君アッスリヤの王とかけを
せよ。もしあなたの方に乗る人があるならば、わたしは馬二千頭を与えよ
う。九あなたはエジプトを頼み、戦車と騎兵を請い求めているが、わたし
の主君の家来のうちの最も小さい一隊長でさえ、どうして撃退すること
ができようか。一〇わたしがこの国を滅ぼすために上ってきたのは、主の
許しなしでしたことであろうか。主はわたしに、この国へ攻め上って、こ
れを滅ぼせと言われたのだ』」。

一一その時、エリアキム、セブナおよびヨアはラブシャケに言った、「ど
うぞ、アラム語でしもべたちに話してください。わたしたちはそれがわか
るからです。城壁の上にいる民の聞いているところで、わたしたちにユ
ダヤの言葉で話さないでください」。
一二しかしラブシャケは言った、「わた
しの主君は、あなたの主君とあなたにだけでなく、城壁の上に座してい
る人々にも、この言葉を告げるために、わたしをつかわされたのではない
か。彼らをも、あなたがたと共に自分の糞尿を食い飲みするに至らせる
ためではないか」。
一三そしてラブシャケは立ちあがり、ユダヤの言葉で大声に呼ばわって
言った、「大王、アッスリヤの王の言葉を聞け。
一四王はこう仰せられる、
『あなたがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。彼はあなたがたを救い出
すことはできない。
一五ヒゼキヤが、主は必ずわれわれを救い出される。

この町はアッスリヤの王の手に陥ることはない、と言っても、あなたがた
は主を頼みとしてはならない』。一六あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いて
はならない。アッスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたは、わたしと
和ぼくして、わたしに降服せよ。そうすれば、あなたがたはめいめい自分
のぶどうの実を食べ、めいめい自分のいちじくの実を食べ、めいめい自分の
井戸の水を飲むことができる。一七やがて、わたしが来て、あなたがたを一
つの国へ連れて行く。それは、あなたがたの国のように穀物とぶどう酒の
多い地、パンとぶどう畑の多い地だ。一八ヒゼキヤが、主はわれわれを救
われる、と言って、あなたがたを惑わすことのないように気をつけよ。も
ろもろの国の神々のうち、どの神がその国をアッスリヤの王の手から救っ
たか。一九ハマテやアルパデの神々はどこにいるか。セパルワイムの神々
はどこにいるか。彼らはサマリヤをわたしの手から救い出したか。二〇こ

れらの国々のすべての神々のうちに、だれかその国をわたしの手から救い
出した者があるか。主がどうしてエルサレムをわたしの手から救い出すこ
とができよう』」。
二一しかし民は黙ってひと言も答えなかった。王が命じて、「彼に答え
てはならない」と言っておいたからである。二二その時ヒルキヤの子である
宮内卿エリアキム、書記官セブナおよびアサフの子である史官ヨアは衣
を裂き、ヒゼキヤのもとに来て、ラブシャケの言葉を彼に告げた。
第三七章一ヒゼキヤ王はこれを聞いて、衣を裂き、荒布を身にまとっ
て主の宮に入り、二宮内卿エリアキムと書記官セブナおよび祭司のうちの
年長者たちに荒布をまとわせて、アモツの子預言者イザヤのもとへつか
わした。三彼らはイザヤに言った、「ヒゼキヤはこう言います、『きょうは
悩みと責めと、はずかしめの日です。胎児がまさに生れようとして、これ

を産み出す力がないのです。四あなたの神、主は、あるいはラブシャケの
もろもろの言葉を聞かれたかもしれません。彼はその主君アッスリヤの王
につかわされて、生ける神をそしりました。あなたの神、主はその言葉を
聞いて、あるいは責められるかもしれません。それゆえ、この残っている
者のために祈をささげてください』」。
五ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに来たとき、六イザヤは彼らに
言った、「あなたがたの主君にこう言いなさい、『主はこう仰せられる、アッ
スリヤの王のしもべらが、わたしをそしった言葉を聞いて恐れるには及ば
ない。七見よ、わたしは一つの霊を彼のうちに送って、一つのうわさを聞
かせ、彼を自分の国へ帰らせて、その国でつるぎに倒れさせる』」。
八ラブシャケは引き返して、アッスリヤの王がリブナを攻めているとこ
ろへ行った。彼は王がラキシを去ったことを聞いたからである。九この時、

アッスリヤの王はエチオピヤの王テルハカについて、「彼はあなたと戦う
ために出てきた」と人々が言うのを聞いた。彼はこのことを聞いて、使者
をヒゼキヤにつかわそうとして言った、一〇「ユダの王ヒゼキヤにこう言い
なさい、『あなたは、エルサレムはアッスリヤの王の手に陥ることはない、
と言うあなたの信頼する神に欺かれてはならない。一一あなたはアッスリ
ヤの王たちが、国々にしたこと、彼らを全く滅ぼしたことを聞いている。
どうしてあなたは救われることができようか。一二わたしの先祖たちはゴザ
ン、ハラン、レゼフおよびテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、そ
の国々の神々は彼らを救ったか。一三ハマテの王、アルパデの王、セパル
ワイムの町の王、ヘナの王およびイワの王はどこにいるか』」。
一四ヒゼキヤは使者の手から手紙を受け取ってそれを読み、主の宮にの
ぼっていって、主の前にそれをひろげ、一五主に祈って言った、一六「ケル

ビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ、地のすべての国
のうちで、ただあなただけが神でいらせられます。あなたは天と地を造ら
れました。
一七主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いて見て
ください。セナケリブが生ける神をそしるために書き送った言葉を聞いて
ください。
一八主よ、まことにアッスリヤの王たちは、もろもろの民とそ
の国々を滅ぼし、
一九またその神々を火に投げ入れました。それらは神で
はなく、人の手の造ったもので、木や石だから滅ぼされたのです。
二〇今
われわれの神、主よ、どうぞ、われわれを彼の手から救い出してください。
そうすれば地の国々は皆あなただけが主でいらせられることを知るように
なるでしょう」。

二一その時アモツの子イザヤは人をつかわしてヒゼキヤに言った、「イス
ラエルの神、主はこう言われる、あなたはアッスリヤの王セナケリブにつ

いてわたしに祈ったゆえ、二二主が彼について語られた言葉はこうである、
『処女であるシオンの娘は
あなたを侮り、あなたをあざける。
エルサレムの娘は、あなたのうしろで頭を振る。
二三あなたはだれをそしり、だれをののしったのか。
あなたはだれにむかって声をあげ、
目を高くあげたのか。
イスラエルの聖者にむかってだ。
二四あなたは、そのしもべらによって
主をそしって言った、
「わたしは多くの戦車を率いて山々の頂にのぼり、
レバノンの奥へ行き、
たけの高い香柏と、最も良いいとすぎを切り倒し、

またその果(はて)の高地(こうち)へ行(い)き、その密林(みつりん)にはいった。
二五わたしは井戸(いど)を掘(ほ)って水(みず)を飲(の)んだ。
わたしは足(あし)の裏(うら)で
エジプトのすべての川(かわ)を踏(ふ)みからした」。
二六あなたは聞(き)かなかったか、
昔(むかし) わたしがそれを定(さだ)めたことを。
堅固(けんご)な町々(まちまち)を、
あなたがこわして荒塚(あらつか)とすることも、
いにしえの日(ひ)から、わたしが計画(けいかく)して
今(いま)それをきたらせたのだ。
二七そのうちに住(す)む民(たみ)は 力弱(ちからよわ)く、
おののき恥(はじ)をいだいて、

野(の)の草(くさ)のように、青菜(あおな)のようになり、
育(そだ)たずに枯(か)れる屋根(やね)の草(くさ)のようになった。
二八わたしは、あなたの座(ざ)すること、出入(でい)りすること、
また、わたしにむかって
怒(いか)り叫(さけ)んだことをも知(し)っている。
二九あなたが、わたしにむかって怒(いか)り叫(さけ)んだことと、
あなたの高慢(こうまん)な言葉(ことば)がわたしの耳(みみ)にはいったゆえ、
わたしは、あなたの鼻(はな)に輪(わ)をつけ、
あなたの口(くち)にくつわをはめて、
あなたを、もと来(き)た道(みち)へ引(ひ)きもどす』。
三〇あなたに与(あた)えるしるしはこれである。すなわち、ことしは落(お)ち穂(ぼ)か
ら生(は)えた物(もの)を食(た)べ、二年目(ねんめ)には、またその落(お)ち穂(ぼ)から生(は)えた物(もの)を食(た)べ、三

年目には種をまき、刈り入れ、ぶどう畑を作ってその実を食べる。三一ユ
ダの家の、のがれて残る者は再び下に根を張り、上に実を結ぶ。三二すな
わち残る者はエルサレムから出、のがれる物はシオンの山から出る。万軍
の主の熱心がこれをなし遂げられる。
三三それゆえ、主はアッスリヤの王について、こう仰せられる、『彼はこ
の町にこない。またここに矢を放たない。また盾をもって、その前にこな
い。また塁を築いて、これを攻めることはない。三四彼は来た道から帰っ
て、この町に、はいることはない、と主は言う。三五わたしは自分のため、
また、わたしのしもべダビデのために町を守って、これを救おう』。
三六主の使が出て、アッスリヤびとの陣営で十八万五千人を撃ち殺した。
人々が朝早く起きて見ると、彼らは皆死体となっていた。三七アッスリヤ
の王セナケリブは立ち去り、帰っていってニネベにいたが、三八その神ニ

スロクの神殿で礼拝していた時、その子らのアデラン・メレクとシャレゼ
ルがつるぎをもって彼を殺し、ともにアララテの地へ逃げていった。それ
で、その子エサルハドンが代って王となった。

第三八章 一 そのころヒゼキヤは病気になって死にかかっていた。アモツ
の子預言者イザヤは彼のところに来て言った、「主はこう仰せられます、あ
なたの家を整えておきなさい。あなたは死にます、生きながらえること
はできません」。二 そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて主に祈って言った、三
「ああ主よ、願わくは、わたしが真実と真心とをもって、み前に歩み、あ
なたの目にかなう事を行ったのを覚えてください」。そしてヒゼキヤはひ
どく泣いた。四 その時主の言葉がイザヤに臨んで言った、五「行って、ヒゼ
キヤに言いなさい、『あなたの父ダビデの神、主はこう仰せられます、「わ
たしはあなたの祈を聞いた。あなたの涙を見た。見よ、わたしはあなた

のよわいを十五年増そう。六わたしはあなたと、この町とをアッスリヤの
王の手から救い、この町を守ろう」。
七主が約束されたことを行われることについては、あなたは主からこ
のしるしを得る。八見よ、わたしはアハズの日時計の上に進んだ日影を十
度退かせよう』。すると日時計の上に進んだ日影が十度退いた。
九次の言葉はユダの王ヒゼキヤが病気になって、その病気が直った後、
書きしるしたものである。
一〇わたしは言った、わたしはわが一生のまっ盛りに、
去らなければならない。
わたしは陰府の門に閉ざされて、
わが残りの年を失わなければならない。
一一わたしは言った、わたしは生ける者の地で、

主を見ることなく、
世における人々のうちに、再び人を見ることがない。
一二わがすまいは抜き去られて
羊飼の天幕のようにわたしを離れる。
わたしは、わが命を機織りのように巻いた。
彼はわたしを機から切り離す。
あなたは朝から夕までの間に、わたしを滅ぼされる。
一三わたしは朝まで叫んだ。
主はししのようにわが骨をことごとく砕かれる。
あなたは朝から夕までの間に、わたしを滅ぼされる。
一四わたしは、つばめのように、つるのように鳴き、
はとのようにうめき、

わが目は上を見て衰える。
主よ、わたしは、しえたげられています。
どうか、わたしの保証人となってください。
一五しかし、わたしは何を言うことができましょう。
主はわたしに言われ、
かつ、自らそれをなされたからである。
わが魂の苦しみによって、
わが眠りはことごとく逃げ去った。
一六主よ、これらの事によって人は生きる。
わが霊の命もすべてこれらの事による。
どうか、わたしをいやし、
わたしを生かしてください。

一七見よ、わたしが大いなる苦しみにあったのは、
わが幸福のためであった。
あなたはわが命を引きとめて、
滅びの穴をまぬかれさせられた。
これは、あなたがわが罪をことごとく、
あなたの後に捨てられたからである。
一八陰府は、あなたに感謝することはできない。
死はあなたをさんびすることはできない。
墓にくだる者は、
あなたのまことを望むことはできない。
一九ただ生ける者、生ける者のみ、
きょう、わたしがするように、あなたに感謝する。

父はあなたのまことを、その子らに知らせる。
二〇主はわたしを救われる。
われわれは世にあるかぎり、
主の家で琴にあわせて、歌をうたおう。
二一イザヤは言った、「干いちじくのひとかたまりを持ってこさせ、それを
腫物につけなさい。そうすれば直るでしょう」。二二ヒゼキヤはまた言った、
「わたしが主の家に上ることについて、どんなしるしがありましょうか」。
第三九章一そのころ、バラダンの子であるバビロンの王メロダク・バラダ
ンは手紙と贈り物を持たせて使節をヒゼキヤにつかわした。これはヒゼキ
ヤが病気であったが、直ったことを聞いたからである。二ヒゼキヤは彼ら
を喜び迎えて、宝物の蔵、金銀、香料、貴重な油および武器倉、なら
びにその倉庫にあるすべての物を彼らに見せた。家にある物も、国にある

物も、ヒゼキヤが彼らに見せない物は一つもなかった。
三時に預言者イザヤはヒゼキヤ王のもとに来て言った、「あの人々は何を言いましたか。どこから来たのですか」。ヒゼキヤは言った、「彼らは遠い国から、すなわちバビロンから来たのです」。
四イザヤは言った、「彼らは、あなたの家で何を見ましたか」。ヒゼキヤは答えて言った、「彼らは、わたしの家にある物を皆見ました。倉庫のうちには、彼らに見せなかった物は一つもありません」。
五そこでイザヤはヒゼキヤに言った、「万軍の主の言葉を聞きなさい。
六見よ、すべてあなたの家にある物およびあなたの先祖たちが今日までに積みたくわえた物がバビロンに運び去られる日が来る。何も残るものはない、と主が言われます。
七また、あなたの身から出るあなたの子たちも連れ去られて、バビロンの王の宮殿において宦官となるでしょう」。
八ヒゼキヤはイザヤに言った、「あなたが言われた主の言葉は結構です」。彼は「少なく

とも自分(じぶん)が世(よ)にある間(あいだ)は太平(たいへい)と安全(あんぜん)があるだろう」と思(おも)ったからである。

第四〇章

一あなたがたの神(かみ)は言(い)われる、
「慰(なぐさ)めよ、わが民(たみ)を慰(なぐさ)めよ、
二ねんごろにエルサレムに語(かた)り、これに呼(よ)ばわれ、
その服役(ふくえき)の期(き)は終(おわ)り、
そのとがはすでにゆるされ、
そのもろもろの罪(つみ)のために二倍(ばい)の刑罰(けいばつ)を
主(しゅ)の手(て)から受(う)けた」。
三呼(よ)ばわる者(もの)の声(こえ)がする、
「荒野(あらの)に主(しゅ)の道(みち)を備(そな)え、
さばくに、われわれの神(かみ)のために、

大路をまっすぐにせよ。
四もろもろの谷は高くせられ、
もろもろの山と丘とは低くせられ、
高底のある地は平らになり、
険しい所は平地となる。
五こうして主の栄光があらわれ、
人は皆ともにこれを見る。
これは主の口が語られたのである」。
六声が聞える、「呼ばわれ」。
わたしは言った、「なんと呼ばわりましょうか」。
「人はみな草だ。
その麗しさは、すべて野の花のようだ。

七主の息がその上に吹けば、
草は枯れ、花はしぼむ。
たしかに人は草だ。
八草は枯れ、花はしぼむ。
しかし、われわれの神の言葉は
とこしえに変ることはない」。
九よきおとずれをシオンに伝える者よ、
高い山にのぼれ。
よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、
強く声をあげよ、
声をあげて恐れるな。
ユダのもろもろの町に言え、

「あなたがたの神を見よ」と。
一〇見よ、主なる神は大能をもってこられ、
その腕は世を治める。
見よ、その報いは主と共にあり、
そのはたらきの報いは、そのみ前にある。
一一主は牧者のようにその群れを養い、
そのかいなに小羊をいだき、
そのふところに入れて携えゆき、
乳を飲ませているものをやさしく導かれる。
一二だれが、たなごころをもって海をはかり、
指を伸ばして天をはかり、
地のちりを枡に盛り、

てんびんをもって、もろもろの山をはかり、
はかりをもって、もろもろの丘をはかったか。
一三だれが、主の霊を導き、
その相談役となって主を教えたか。
一四主はだれと相談して悟りを得たか。
だれが主に公義の道を教え、
知識を教え、悟りの道を示したか。
一五見よ、もろもろの国民は、おけの一しずくのように、
はかりの上のちりのように思われる。
見よ、主は島々を、ほこりのようにあげられる。
一六レバノンは、たきぎに足りない、
またその獣は、燔祭に足りない。

一七主のみ前には、もろもろの国民は無きにひとしい。
彼らは主によって、無きもののように、
むなしいもののように思われる。
一八それで、あなたがたは神をだれとくらべ、
どんな像と比較しようとするのか。
一九偶像は細工人が鋳て造り、
鍛冶が、金をもって、それをおおい、
また、これがために銀の鎖を造る。
二〇貧しい者は、ささげ物として
朽ちることのない木を選び、
巧みな細工人を求めて、
動くことのない像を立たせる。

二一あなたがたは知らなかったか。
あなたがたは聞かなかったか。
初めから、あなたがたに伝えられなかったか。
地の基をおいた時から、
あなたがたは悟らなかったか。
二二主は地球のはるか上に座して、
地に住む者をいなごのように見られる。
主は天を幕のようにひろげ、
これを住むべき天幕のように張り、
二三また、もろもろの君を無きものとせられ、
地のつかさたちを、むなしくされる。
二四彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、

その幹がかろうじて地に根をおろしたとき、
神がその上を吹かれると、彼らは枯れて、
わらのように、つむじ風にまき去られる。
二五聖者は言われる、
「それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、
わたしは、だれにひとしいというのか」。
二六目を高くあげて、
だれが、これらのものを創造したかを見よ。
主は数をしらべて万軍をひきいだし、
おのおのをその名で呼ばれる。
その勢いの大いなるにより、
またその力の強きがゆえに、
一つも欠けることはない。

二七ヤコブよ、何ゆえあなたは、
「わが道は主に隠れている」と言うか。
イスラエルよ、何ゆえあなたは、
「わが訴えはわが神に顧みられない」と言うか。
二八あなたは知らなかったか、
あなたは聞かなかったか。
主はとこしえの神、地の果の創造者であって、
弱ることなく、また疲れることなく、
その知恵ははかりがたい。
二九弱った者には力を与え、
勢いのない者には強さを増し加えられる。
三〇年若い者も弱り、かつ疲れ、

壮年の者も疲れはてて倒れる。
三一 しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、
わしのように翼をはって、のぼることができる。
走っても疲れることなく、
歩いても弱ることはない。

第四一章

一 海沿いの国々よ、
静かにして、わたしに聞け。
もろもろの民よ、力を新たにし、近づいて語れ。
われわれは共にさばきの座に近づこう。
二 だれが東から人を起したか。
彼はその行く所で勝利をもって迎えられ、

もろもろの国を征服し、
もろもろの王を足の下に踏みつけ、
そのつるぎをもって彼らをちりのようにし、
その弓をもって吹き去られる、わらのようにする。
三 彼はこれらの者を追って
その足のまだ踏んだことのない道を、
安らかに過ぎて行く。
四 だれがこの事を 行ったか、なしたか。
だれが初めから世々の人々を呼び出したか。
主なるわたしは初めであって、
また終りと共にあり、わたしがそれだ。
五 海沿いの国々は見て恐れ、

地の果は、おののき、近づいて来た。
六彼らはおのおのその隣を助け、
その兄弟たちに言う、「勇気を出せよ」と。
七細工人は鍛冶を励まし、
鎚をもって平らかにする者は金敷きを打つ者に、
はんだづけについて言う、「それは良い」と。
また、くぎをもってそれを堅くし、
動くことのないようにする。
八しかし、わがしもべイスラエルよ、
わたしの選んだヤコブ、
わが友アブラハムの子孫よ、
九わたしは地の果から、あなたを連れてき、

地(ち)のすみずみから、あなたを召(め)して、
あなたに言(い)った、「あなたは、わたしのしもべ、
わたしは、あなたを選(えら)んで捨(す)てなかった」と。
一〇恐(おそ)れてはならない、わたしはあなたと共(とも)にいる。
驚(おどろ)いてはならない、わたしはあなたの神(かみ)である。
わたしはあなたを強(つよ)くし、あなたを助(たす)け、
わが勝利(しょうり)の右(みぎ)の手(て)をもって、あなたをささえる。
一一見(み)よ、あなたにむかって怒(いか)る者(もの)はみな、
はじて、あわてふためき、
あなたと争(あらそ)う者(もの)は滅(ほろ)びて無(む)に帰(き)する。
一二あなたは、あなたと争(あらそ)う者(もの)を尋(たず)ねても見(み)いださず、
あなたと戦(たたか)う者(もの)は全(まった)く消(き)えうせる。

一三あなたの神、主なるわたしは
あなたの右の手をとってあなたに言う、
「恐れてはならない、わたしはあなたを助ける」。
一四主は言われる、「虫にひとしいヤコブよ、
イスラエルの人々よ、恐れてはならない。
わたしはあなたを助ける。
あなたをあがなう者はイスラエルの聖者である。
一五見よ、わたしはあなたを鋭い歯のある
新しい打穀機とする。
あなたは山を打って、これを粉々にし、
丘をもみがらのようにする。
一六あなたがあおげば風はこれを巻き去り、

つむ風がこれを吹き散らす。
あなたは主によって喜び
イスラエルの聖者によって誇る。
一七貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、
その舌がかわいて焼けているとき、
主なるわたしは彼らに答える、
イスラエルの神なるわたしは
彼らを捨てることがない。
一八わたしは裸の山に川を開き、
谷の中に泉をいだし、
荒野を池となし、かわいた地を水の源とする。
一九わたしは荒野に香柏、アカシヤ、

ミルトスおよびオリブの木(き)を植(う)え、
さばくに、いとすぎ、すずかけ、
からまつをともに置(お)く。
二〇人々(ひとびと)はこれを見(み)て、主(しゅ)のみ手(て)がこれをなし、
イスラエルの聖者(せいじゃ)がこれを創造(そうぞう)されたことを知(し)り、
かつ、よく考(かんが)えて共(とも)に悟(さと)る」。
二一主(しゅ)は言(い)われる、
「あなたがたの訴(うった)えを出(だ)せ」と。
ヤコブの王(おう)は言(い)われる、
「あなたがたの証拠(しょうこ)を持(も)ってこい。
二二それを持(も)ってきて、起(おこ)るべき事(こと)をわれわれに告(つ)げよ。
さきの事(こと)どもの何(なに)であるかを告(つ)げよ。

われわれはよく考えて、その結末を知ろう。
あるいはきたるべき事をわれわれに聞かせよ。
二三この後きたるべき事をわれわれに告げよ。
われわれはあなたがたが神であることを
知るであろう。
幸をくだし、あるいは災をくだせ。
われわれは驚いて肝をつぶすであろう。
二四見よ、あなたがたは無きものである。
あなたがたのわざはむなしい。
あなたがたを選ぶ者は憎むべき者である」。
二五わたしはひとりを起して北からこさせ、
わが名を呼ぶ者を東からこさせる。

彼はもろもろのつかさを踏みつけて
しっくいのようにし、
陶器師が粘土を踏むようにする。
二六だれか、初めからこの事を
われわれに告げ知らせたか。
だれか、あらかじめわれわれに告げて、
「彼は正しい」と言わせたか。
ひとりもこの事を告げた者はない。
ひとりも聞かせた者はない。
ひとりもあなたがたの言葉を聞いた者はない。
二七わたしははじめてこれをシオンに告げた。
わたしは、よきおとずれを伝える者を

エルサレムに与える。
二八しかし、わたしが見ると、ひとりもない。
彼らのなかには、わたしが尋ねても
答えうる助言者はひとりもない。
二九見よ、彼らはみな人を惑わす者であって、
そのわざは無きもの、
その鋳た像はむなしき風である。

第四二章

一わたしの支持するわがしもべ、
わたしの喜ぶわが選び人を見よ。
わたしはわが霊を彼に与えた。
彼はもろもろの国びとに道をしめす。

二彼(かれ)は叫(さけ)ぶことなく、声(こえ)をあげることなく、
その声(こえ)をちまたに聞(きこ)えさせず、
三また傷(きず)ついた葦(あし)を折(お)ることなく、
ほのぐらい灯心(とうしん)を消(け)すことなく、
真実(しんじつ)をもって道(みち)をしめす。
四彼(かれ)は衰(おとろ)えず、落胆(らくたん)せず、
ついに道(みち)を地(ち)に確立(かくりつ)する。
海沿(うみぞ)いの国々(くにぐに)はその教(おしえ)を待(ま)ち望(のぞ)む。
五天(てん)を創造(そうぞう)してこれをのべ、
地(ち)とそれに生(しょう)ずるものをひらき、
その上(うえ)の民(たみ)に息(いき)を与(あた)え、
その中(なか)を歩(あゆ)む者(もの)に霊(れい)を与(あた)えられる

主(しゅ)なる神(かみ)はこう言(い)われる、
六「主(しゅ)なるわたしは正義(せいぎ)をもってあなたを召(め)した。
わたしはあなたの手(て)をとり、あなたを守(まも)った。
わたしはあなたを民(たみ)の契約(けいやく)とし、
もろもろの国(くに)びとの光(ひかり)として与(あた)え、
七盲人(もうじん)の目(め)を開(ひら)き、
囚人(しゅうじん)を地下(ちか)の獄屋(ごくや)から出(だ)し、
暗(くら)きに座(ざ)する者(もの)を獄屋(ごくや)から出(だ)させる。
八わたしは主(しゅ)である、これがわたしの名(な)である。
わたしはわが栄光(えいこう)をほかの者(もの)に与(あた)えない。
また、わが誉(ほまれ)を刻(きざ)んだ像(ぞう)に与(あた)えない。
九見(み)よ、さきに預言(よげん)した事(こと)は起(おこ)った。

わたしは新しい事を告げよう。
その事がまだ起らない前に、
わたしはまず、あなたがたに知らせよう」。
一〇主にむかって新しき歌をうたえ。
地の果から主をほめたたえよ。
海とその中に満ちるもの、
海沿いの国々とそれに住む者とは鳴りどよめ。
一一荒野とその中のもろもろの町と、
ケダルびとの住むもろもろの村里は声をあげよ。
セラの民は喜びうたえ。
山の頂から呼ばわり叫べ。
一二栄光を主に帰し、

その誉(ほまれ)を海沿(うみぞ)いの国々(くにぐに)で語(かた)り告(つ)げよ。
一三 主(しゅ)は勇士(ゆうし)のように出(で)て行(い)き、
いくさ人(ひと)のように熱心(ねっしん)を起(おこ)し、
ときの声(こえ)をあげて呼(よ)ばわり、
その敵(てき)にむかって大能(たいのう)をあらわされる。
一四 わたしは久(ひさ)しく声(こえ)を出(だ)さず、
黙(もく)して、おのれをおさえていた。
今(いま)わたしは子(こ)を産(う)もうとする女(おんな)のように叫(さけ)ぶ。
わたしの息(いき)は切(き)れ、かつあえぐ。
一五 わたしは山(やま)と丘(おか)とを荒(あら)し、
すべての草(くさ)を枯(か)らし、
もろもろの川(かわ)を島(しま)とし、

もろもろの池をからす。
一六わたしは目しいを
彼らのまだ知らない大路に行かせ、
まだ知らない道に導き、
暗きをその前に光とし、
高低のある所を平らにする。
わたしはこれらの事をおこなって彼らを捨てない。
一七刻んだ偶像に頼み、鋳た偶像にむかって
「あなたがたは、われわれの神である」と言う者は
退けられて、大いに恥をかく。
一八耳しいよ、聞け。
目しいよ、目を注いで見よ。

一九だれか、わがしもべのほかに目しいがあるか。
だれか、わがつかわす使者のような耳しいがあるか。
だれか、わが献身者のような目しいがあるか。
だれか、主のしもべのような目しいがあるか。
二〇彼は多くの事を見ても認めず、
耳を開いても聞かない。
二一主はおのれの義のために、
その教を大いなるものとし、
かつ光栄あるものとすることを喜ばれた。
二二ところが、この民はかすめられ、奪われて、
みな穴の中に捕われ、獄屋の中に閉じこめられた。
彼らはかすめられても助ける者がなく、

物を奪われても「もどせ」と言う者もない。
二三あなたがたのうち、
だれがこの事に耳を傾けるだろうか、
だれが心をもちいて
後のためにこれを聞くだろうか。
二四ヤコブを奪わせた者はだれか。
かすめる者にイスラエルをわたした者はだれか。
これは主ではないか。
われわれは主にむかって罪を犯し、
その道に歩むことを好まず、
またその教に従うことを好まなかった。
二五それゆえ、主は激しい怒りと、

猛烈な戦いを彼らに臨ませられた。
それが火のように周囲に燃えても、彼らは悟らず、
彼らを焼いても、心にとめなかった。

第四三章
一ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエ
ルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、
「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。
わたしはあなたの名を呼んだ、
あなたはわたしのものだ。
二あなたが水の中を過ぎるとき、
わたしはあなたと共におる。
川の中を過ぎるとき、
水はあなたの上にあふれることがない。

あなたが火(ひ)の中(なか)を行(い)くとき、焼(や)かれることもなく、
炎(ほのお)もあなたに燃(も)えつくことがない。
三わたしはあなたの神(かみ)、主(しゅ)である、
イスラエルの聖者(せいじゃ)、あなたの救主(すくいぬし)である。
わたしはエジプトを与(あた)えて
あなたのあがないしろとし、
エチオピヤとセバとをあなたの代(かわ)りとする。
四あなたはわが目(め)に尊(たっと)く、重(おも)んぜられるもの、
わたしはあなたを愛(あい)するがゆえに、
あなたの代(かわ)りに人(ひと)を与(あた)え、
あなたの命(いのち)の代(かわ)りに民(たみ)を与(あた)える。
五恐(おそ)れるな、わたしはあなたと共(とも)におる。

わたしは、あなたの子孫（しそん）を東（ひがし）からこさせ、
西（にし）からあなたを集（あつ）める。
六わたしは北（きた）にむかって『ゆるせ』と言（い）い、
南（みなみ）にむかって『留（と）めるな』と言（い）う。
わが子（こ）らを遠（とお）くからこさせ、
わが娘（むすめ）らを地（ち）の果（はて）からこさせよ。
七すべてわが名（な）をもってとなえられる者（もの）をこさせよ。
わたしは彼（かれ）らをわが栄光（えいこう）のために創造（そうぞう）し、
これを造（つく）り、これを仕立（した）てた」。
八目（め）があっても目（め）しいのような民（たみ）、
耳（みみ）があっても耳（みみ）しいのような民（たみ）を連（つ）れ出（だ）せ。
九国々（くにぐに）はみな相（あい）つどい、

もろもろの民は集まれ。
彼らのうち、だれがこの事を告げ、
さきの事どもを、
われわれに聞かせることができるか。
その証人を出して、おのれの正しい事を証明させ、
それを聞いて「これは真実だ」と言わせよ。
一〇主は言われる、「あなたがたはわが証人、
わたしが選んだわがしもべである。
それゆえ、あなたがたは知って、わたしを信じ、
わたしが主であることを悟ることができる。
わたしより前に造られた神はなく、
わたしより後にもない。

一一ただわたしのみ主である。
わたしのほかに救う者はいない。
一二わたしはさきに告げ、かつ救い、かつ聞かせた。
あなたがたのうちには、ほかの神はなかった。
あなたがたはわが証人である」と主は言われる。
一三「わたしは神である、今より後もわたしは主である。
わが手から救い出しうる者はない。
わたしがおこなえば、
だれが、これをとどめることができよう」。
一四あなたがたをあがなう者、イスラエルの聖者、
主はこう言われる、
「あなたがたのために、
わたしは人をバビロンにつかわし、

すべての貫の木をこわし、
カルデヤびとの喜びの声を嘆きに変らせる。
一五わたしは主、あなたがたの聖者、
イスラエルの創造者、あなたがたの王である」。
一六海のなかに大路を設け、
大いなる水の中に道をつくり、
一七戦車および馬、軍勢および兵士を出てこさせ、
これを倒して起きることができないようにし、
絶え滅ぼして、灯心の消えうせるようにされる
主はこう言われる、
一八「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、
また、いにしえのことを考えてはならない。

一九見よ、わたしは新しい事をなす。
やがてそれは起る、
あなたがたはそれを知らないのか。
わたしは荒野に道を設け、
さばくに川を流れさせる。
二〇野の獣はわたしをあがめ、
山犬および、だちょうもわたしをあがめる。
わたしが荒野に水をいだし、
さばくに川を流れさせて、
わたしの選んだ民に飲ませるからだ。
二一この民は、わが誉を述べさせるために
わたしが自分のために造ったものである。

二二ところがヤコブよ、あなたはわたしを呼ばなかった。
イスラエルよ、あなたはわたしをうとんじた。
二三あなたは燔祭の羊をわたしに持ってこなかった。
また犠牲をもってわたしをあがめなかった。
わたしは供え物の重荷をあなたに負わせなかった。
また乳香をもってあなたを煩わさなかった。
二四あなたは金を出して、
わたしのために菖蒲を買わず、
犠牲の脂肪を供えて、わたしを飽かせず、
かえって、あなたの罪の重荷をわたしに負わせ、
あなたの不義をもって、わたしを煩わせた。
二五わたしこそ、わたし自身のために

あなたのとがを消す者である。
わたしは、あなたの罪を心にとめない。
二六あなたは、自分の正しいことを証明するために
自分のことを述べて、わたしに思い出させよ。
われわれは共に論じよう。
二七あなたの遠い先祖は罪を犯し、
あなたの仲保者らはわたしにそむいた。
二八それゆえ、わたしは聖所の君たちを汚し、
ヤコブを全き滅びにわたし、
イスラエルをののしらしめた。

第四四章

一しかし、わがしもべヤコブよ、
わたしが選んだイスラエルよ、いま聞け。

二あなたを造り、あなたを胎内に形造り、
あなたを助ける主はこう言われる、
『わがしもべヤコブよ、
わたしが選んだエシュルンよ、恐れるな。
三わたしは、かわいた地に水を注ぎ、
干からびた地に流れをそそぎ、
わが霊をあなたの子らにそそぎ、
わが恵みをあなたの子孫に与えるからである。
四こうして、彼らは水の中の草のように、
流れのほとりの柳のように、生え育つ。
五ある人は「わたしは主のものである」と言い、
ある人はヤコブの名をもって自分を呼び、

またある人は「主のものである」と手にしるして、
イスラエルの名をもって自分を呼ぶ』。
六主、イスラエルの王、イスラエルをあがなう者、
万軍の主はこう言われる、
「わたしは初めであり、わたしは終りである。
わたしのほかに神はない。
七だれかわたしに等しい者があるか。
その者はそれを示し、またそれを告げ、
わが前に言いつらねよ。
だれが、昔から、きたるべき事を聞かせたか。
その者はやがて成るべき事をわれわれに告げよ。
八恐れてはならない、またおののいてはならない。

わたしはこの事を昔から、
あなたがたに聞かせなかったか、
また告げなかったか。
あなたがたはわが証人である。
わたしのほかに神があるか。
わたしのほかに岩はない。
わたしはそのあることを知らない」。
九偶像を造る者は皆むなしく、彼らの喜ぶところのものは、なんの役
にも立たない。その信者は見ることもなく、また知ることもない。ゆえに
彼らは恥を受ける。一〇だれが神を造り、またなんの役にも立たない偶像
を鋳たか。一一見よ、その仲間は皆恥を受ける。その細工人らは人間にす
ぎない。彼らが皆集まって立つとき、恐れて共に恥じる。

一二鉄の細工人はこれを造るのに炭の火をもって細工し、鎚をもってこ
れを造り、強い腕をもってこれを鍛える。彼が飢えれば力は衰え、水を
飲まなければ疲れはてる。一三木の細工人は線を引き、鉛筆でえがき、か
んなで削り、コンパスでえがき、それを人の美しい姿にしたがって人の
形に造り、家の中に安置する。一四彼は香柏を切り倒し、あるいはかしの
木、あるいはかしわの木を選んで、それを林の木の中で強く育てる。あ
るいは香柏を植え、雨にそれを育てさせる。一五こうして人はその一部を
とって、たきぎとし、これをもって身を暖め、またこれを燃やしてパンを
焼き、また他の一部を神に造って拝み、刻んだ像に造ってその前にひれ伏
す。一六その半ばは火に燃やし、その半ばで肉を煮て食べ、あるいは肉をあ
ぶって食べ飽き、また身を暖めて言う、「ああ、暖まった、熱くなった」
と。一七そしてその余りをもって神を造って偶像とし、その前にひれ伏し

て拝(おが)み、これに祈(いの)って、「あなたはわが神(かみ)だ、わたしを救(すく)え」と言(い)う。
一八これらの人(ひと)は知(し)ることがなく、また悟(さと)ることがない。その目(め)はふさが
れて見(み)ることができず、その心(こころ)は鈍(にぶ)くなって悟(さと)ることができない。一九そ
の心(こころ)のうちに思(おも)うことをせず、また知識(ちしき)がなく、悟(さと)りがないために、「わた
しはその半(なか)ばを火(ひ)に燃(も)やし、またその炭火(すみび)の上(うえ)でパンを焼(や)き、肉(にく)をあぶっ
て食(た)べ、その残(のこ)りの木(き)をもって憎(にく)むべきものを造(つく)るのか。木(き)のはしくれの
前(まえ)にひれ伏(ふ)すのか」と言(い)う者(もの)もない。二〇彼(かれ)は灰(はい)を食(く)い、迷(まよ)った心(こころ)に惑(まど)わ
されて、おのれを救(すく)うことができず、また「わが右(みぎ)の手(て)に偽(いつわ)りがあるでは
ないか」と言(い)わない。

二一ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事(こと)を心(こころ)にとめよ。
あなたはわがしもべだから。
わたしはあなたを造(つく)った、

あなたはわがしもべだ。
イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。
二二わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、
あなたの罪を霧のように消した。
わたしに立ち返れ、
わたしはあなたをあがなったから。
二三天よ、歌え、主がこの事をなされたから。
地の深き所よ、呼ばわれ。
もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、
声を放って歌え。
主はヤコブをあがない、
イスラエルのうちに栄光をあらわされたから。
二四あなたをあがない、

あなたを胎内に造られた主はこう言われる、
「わたしは主である。わたしはよろずの物を造り、
ただわたしだけが天をのべ、地をひらき、
――だれがわたしと共にいたか――
二五偽る物のしるしをむなしくし、
占う者を狂わせ、
賢い者をうしろに退けて、その知識を愚かにする。
二六わたしは、わがしもべの言葉を遂げさせ、
わが使の計りごとを成らせ、
エルサレムについては、
『これは民の住む所となる』と言い、
ユダのもろもろの町については、

『ふたたび建(た)てられる、
わたしはその荒(あ)れ跡(あと)を興(おこ)そう』と言(い)い、
二七また淵(ふち)については、『かわけ、わたしは
あなたのもろもろの川(かわ)を干(ほ)す』と言(い)い、
二八またクロスについては、『彼(かれ)はわが牧者(ぼくしゃ)、
わが目的(もくてき)をことごとくなし遂(と)げる』と言(い)い、
エルサレムについては、
『ふたたび建(た)てられる』と言(い)い、
神殿(しんでん)については、
『あなたの 基(もとい) がすえられる』と言(い)う」。

第四五章

一わたしはわが受膏者(じゅこうしゃ)クロスの

右の手をとって、
もろもろの国をその前に従わせ、
もろもろの王の腰を解き、
とびらをその前に開かせて、
門を閉じさせない、と言われる主は
その受膏者クロスにこう言われる、
二「わたしはあなたの前に行って、
もろもろの山を平らにし、
青銅のとびらをこわし、鉄の貫の木を断ち切り、
三あなたに、暗い所にある財宝と、
ひそかな所に隠した宝物とを与えて、
わたしは主、あなたの名を呼んだ

イスラエルの神であることをあなたに知らせよう。
四わがしもべヤコブのために、
わたしの選んだイスラエルのために、
わたしはあなたの名を呼んだ。
あなたがわたしを知らなくても、
わたしはあなたに名を与えた。
五わたしは主である。
わたしのほかに神はない、ひとりもない。
あなたがわたしを知らなくても、
わたしはあなたを強くする。
六これは日の出る方から、また西の方から、
人々がわたしのほかに神のないことを

知(し)るようになるためである。
わたしは主(しゅ)である、わたしのほかに神(かみ)はない。
七わたしは光(ひかり)をつくり、また暗(くら)きを創造(そうぞう)し、
繁栄(はんえい)をつくり、またわざわいを創造(そうぞう)する。
わたしは主(しゅ)である、
すべてこれらの事(こと)をなす者(もの)である。
八天(てん)よ、上(うえ)より水(みず)を注(そそ)げ、
雲(くも)は義(ぎ)を降(ふ)らせよ。
地(ち)は開(ひら)けて救(すくい)を生(しょう)じ、また義(ぎ)をも、生(は)えさせよ。
主(しゅ)なるわたしはこれを創造(そうぞう)した。
九陶器(とうき)が陶器師(とうきし)と争(あらそ)うように、
おのれを造(つく)った者(もの)と争(あらそ)う者(もの)はわざわいだ。

粘土は陶器師にむかって
『あなたは何を造るか』と言い、
あるいは『あなたの造った物には手がない』と
言うだろうか。
一〇父にむかって
『あなたは、なぜ子をもうけるのか』と言い、
あるいは女にむかって
『あなたは、なぜ産みの苦しみをするのか』と
言う者はわざわいだ」。
一一イスラエルの聖者、
イスラエルを造られた主はこう言われる、
「あなたがたは、わが子らについてわたしに問い、

またわが手のわざについてわたしに命ずるのか。
一二わたしは地を造って、その上に人を創造した。
わたしは手をもって天をのべ、
その万軍を指揮した。
一三わたしは義をもってクロスを起した。
わたしは彼のすべての道をまっすぐにしよう。
彼はわが町を建て、
わが捕囚を価のためでなく、
また報いのためでもなく解き放つ」と
万軍の主は言われる。
一四主はこう言われる、
「エジプトの富と、エチオピヤの商品と、

たけの高いセバびととは
あなたに来て、あなたのものとなり、あなたに従い、
彼らは鎖につながれて来て、あなたの前にひれ伏し、
あなたに願って言う、
『神はただあなたと共にいまし、
このほかに神はなく、ひとりもない』。
一五イスラエルの神、救主よ、
まことに、あなたは
ご自分を隠しておられる神である。
一六偶像を造る者は皆恥を負い、はずかしめを受け、
ともに、あわてふためいて退く。
一七しかし、イスラエルは主に救われて、

とこしえの救を得る。
あなたがたは世々かぎりなく、
恥を負わず、はずかしめを受けない。
一八天を創造された主、すなわち神であって
また地をも造り成し、これを堅くし、
いたずらにこれを創造されず、
これを人のすみかに造られた主はこう言われる、
「わたしは主である、わたしのほかに神はない。
一九わたしは隠れたところ、地の暗い所で語らず、
ヤコブの子孫に
『わたしを尋ねるのはむだだ』と言わなかった。
主なるわたしは正しい事を語り、

まっすぐな事を告げる。
二〇もろもろの国からのがれてきた者よ、
集まってきて、共に近寄れ。
木像をにない、
救うことのできない神に祈る者は無知である。
二一あなたがたの言い分を持ってきて述べよ。
また共に相談せよ。
この事をだれがいにしえから示したか。
だれが昔から告げたか。
わたし、すなわち主ではなかったか。
わたしのほかに神はない。
わたしは義なる神、救主であって、

わたしのほかに神はない。
二二地の果なるもろもろの人よ、
わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。
わたしは神であって、ほかに神はないからだ。
二三わたしは自分をさして誓った、
わたしの口から出た正しい言葉は帰ることがない、
『すべてのひざはわが前にかがみ、
すべての舌は誓いをたてる』。
二四人はわたしについて言う、
『正義と力とは主にのみある』と。
人々は主にきたり、
主にむかって怒る者は皆恥を受ける。

二五しかしイスラエルの子孫は皆
主によって勝ち誇ることができる」。

第四六章

一ベルは伏し、ネボはかがみ、
彼らの像は獣と家畜との上にある。
あなたがたが持ち歩いたものは荷となり、
疲れた獣の重荷となった。
二彼らはかがみ、彼らは共に伏し、
重荷となった者を救うことができず
かえって、自分は捕われて行く。
三「ヤコブの家よ、
イスラエルの家の残ったすべての者よ、

生れ出た時から、わたしに負われ、
胎を出た時から、わたしに持ち運ばれた者よ、
わたしに聞け。
四わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、
白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。
わたしは造ったゆえ、必ず負い、
持ち運び、かつ救う。
五あなたがたは、わたしをだれにたぐい、
だれと等しくし、だれにくらべ、
かつなぞらえようとするのか。
六彼らは袋からこがねを注ぎ出し、
はかりをもって、しろがねをはかり、
金細工人を雇って、それを神に造らせ、

これにひれ伏して拝む。
七彼らはこれをもたげて肩に載せ、
持って行って、その所に置き、そこに立たせる。
これはその所から動くことができない。
人がこれに呼ばわっても答えることができない。
また彼をその悩みから救うことができない。
八あなたがたはこの事をおぼえ、よく考えよ。
そむける者よ、この事を心にとめよ、
九いにしえよりこのかたの事をおぼえよ。
わたしは神である、わたしのほかに神はない。
わたしは神である、わたしと等しい者はない。
一〇わたしは終りの事を初めから告げ、

まだなされない事を昔から告げて言う、
『わたしの計りごとは必ず成り、
わが目的をことごとくなし遂げる』と。
一一わたしは東から猛禽を招き、
遠い国からわが計りごとを行う人を招く。
わたしはこの事を語ったゆえ、必ずこさせる。
わたしはこの事をはかったゆえ、必ず行う。
一二心をかたくなにして、救に遠い者よ、
わたしに聞け。
一三わたしはわが救を近づかせるゆえ、
その来ることは遠くない。
わが救はおそくない。

わたしは救をシオンに与え、
わが栄光をイスラエルに与える」。

第四七章

一処女なるバビロンの娘よ、
下って、ちりの中にすわれ。
カルデヤびとの娘よ、
王座のない地にすわれ。
あなたはもはや、やさしく、たおやかな女と
となえられることはない。
二石うすをとって粉をひけ、
顔おおいを取り去り、うちぎを脱ぎ、
すねをあらわして川を渡れ。

三あなたの裸(はだか)はあらわれ、
あなたの恥(はじ)は見(み)られる。
わたしはあだを報(むく)いて、何人(なにびと)をも助(たす)けない。
四われわれをあがなう者(もの)は
その名(な)を万軍(ばんぐん)の主(しゅ)といい、
イスラエルの聖者(せいじゃ)である。
五カルデヤびとの娘(むすめ)よ、
黙(もく)してすわれ、また暗(くら)い所(ところ)にはいれ。
あなたはもはや、もろもろの国(くに)の女王(じょおう)と
となえられることはない。
六わたしはわが民(たみ)を憤(いきどお)り、
わが嗣業(しぎょう)を汚(けが)して、これをあなたの手(て)に渡(わた)した。

あなたはこれに、あわれみを施さず、
年老いた者の上に、はなはだ重いくびきを負わせた。
七あなたは言った、
「わたしは、とこしえに女王となる」と。
そして、あなたはこれらの事を心にとめず、
またその終りを思わなかった。
八楽しみにふけり、安らかにおり、
心のうちに「ただわたしだけで、
わたしのほかにだれもなく、
わたしは寡婦となることはない、
また子を失うことはない」と言う者よ、
今この事を聞け。

九これらの二つの事は一日のうちに、
またたくまにあなたに臨む。
すなわち子を失い、寡婦となる事は
たといあなたが多くの魔術を行い、
魔法の大いなる力をもってしても
ことごとくあなたに臨む。
一〇あなたは自分の悪に寄り頼んで言う、
「わたしを見る者はない」と。
あなたの知恵と、あなたの知識とは
あなたを惑わした。
あなたは心のうちに言った、
「ただわたしだけで、わたしのほかにだれもない」と。

一一しかし、わざわいが、あなたに臨む、
あなたは、それをあがなうことができない。
なやみが、あなたを襲う、
あなたは、それをつぐなうことができない。
滅びが、にわかにあなたに臨む、
あなたは、それについて何も知らない。
一二あなたが若い時から勤め行ったあなたの魔法と、
多くの魔術とをもって立ちむかってみよ、
あるいは成功するかもしれない、
あるいは敵を恐れさせるかもしれない。
一三あなたは多くの計りごとによってうみ疲れた。
かの天を分かつ者、星を見る者、
新月によって、あなたに臨む事を告げる者を

立ちあがらせて、あなたを救わせてみよ。
一四見よ、彼らはわらのようになって、
火に焼き滅ぼされ、
自分の身を炎の勢いから、救い出すことができない。
その火は身を暖める炭火ではない、
またその前にすわるべき火でもない。
一五あなたが勤めて行ったものと、
あなたの若い時からあなたと売り買いした者とは、
ついにこのようになる。
彼らはめいめい自分の方向にさすらいゆき、
ひとりもあなたを救う者はない。

第四八章

一ヤコブの家よ、これを聞け。
あなたがたはイスラエルの名をもってとなえられ、
ユダの腰から出、
主の名によって誓い、
イスラエルの神をとなえるけれども、
真実をもってせず、正義をもってしない。
二彼らはみずから聖なる都のものととなえ、
イスラエルの神に寄り頼む。
その名は万軍の主という。
三「わたしはさきに成った事を、いにしえから告げた。
わたしは口から出して彼らに知らせた。
わたしは、にわかにこの事を行い、そして成った。

四わたしはあなたが、かたくなで、その首は鉄の筋、
その額は青銅であることを知るゆえに、
五いにしえから、かの事をあなたに告げ、
その成らないさきに、これをあなたに聞かせた。
そうでなければ、あなたは言うだろう、
『わが偶像がこれをしたのだ、
わが刻んだ像と、鋳た像がこれを命じたのだ』と。
六あなたはすでに聞いた、
すべてこれが成ったことを見よ。
あなたがたはこれを宣べ伝えないのか。
わたしは今から新しい事、
あなたがまだ知らない隠れた事を

あなたに聞かせよう。
七これらの事はいま創造されたので、
いにしえからあったのではない。
この日以前には、あなたはこれを聞かなかった。
そうでなければ、あなたは言うだろう、
『見よ、わたしはこれを知っていた』と。
八あなたはこれを聞くこともなく、知ることもなく、
あなたの耳は、いにしえから開かれなかった。
わたしはあなたが全く不信実で、
生れながら反逆者ととなえられたことを
知っていたからである。
九わが名のために、わたしは怒りをおそくする。

わが誉(ほまれ)のために、わたしはこれをおさえて、
あなたを断(た)ち滅(ほろ)ぼすことをしない。
一〇見(み)よ、わたしはあなたを練(ね)った。
しかし銀(ぎん)のようにではなくて、
苦(くる)しみの炉(ろ)をもってあなたを試(こころ)みた。
一一わたしは自分(じぶん)のために、自分(じぶん)のためにこれを行(おこな)う。
どうしてわが名(な)を汚(けが)させることができよう。
わたしはわが栄光(えいこう)を
ほかの者(もの)に与(あた)えることをしない。
一二ヤコブよ、わたしの召(め)したイスラエルよ、
わたしに聞(き)け。
わたしはそれだ、わたしは初(はじ)めであり、

わたしはまた終りである。
一三わが手は地の基をすえ、
わが右の手は天をのべた。
わたしが呼ぶと、彼らはもろともに立つ。
一四あなたがたは皆集まって聞け。
彼らのうち、だれがこれらの事を告げたか。
主の愛せられる彼は
主のみこころをバビロンに行い、
その腕はカルデヤびとの上に臨む。
一五語ったのは、ただわたしであって、
わたしは彼を召した。
わたしは彼をこさせた。

彼はその道に栄える。
一六あなたがたはわたしに近寄って、これを聞け。
わたしは初めから、ひそかに語らなかった。
それが成った時から、わたしはそこにいたのだ」。
いま主なる神は、わたしとその霊とをつかわされた。
一七あなたのあがない主、イスラエルの聖者、
主はこう言われる、
「わたしはあなたの神、主である。
わたしは、あなたの利益のために、あなたを教え、
あなたを導いて、その行くべき道に行かせる。
一八どうか、あなたはわたしの戒めに聞き従うように。
そうすれば、あなたの平安は川のように、

あなたの義は海の波のようになり、
一九あなたのすえは砂のように、
あなたの子孫は砂粒のようになって、
その名はわが前から断たれることなく、滅ぼされることはない」。
二〇あなたがたはバビロンから出、
カルデヤからのがれよ。
喜びの声をもってこれをのべ聞かせ、
地の果にまで語り伝え、
「主はそのしもべヤコブをあがなわれた」と言え。
二一主が彼らを導いて、さばくを通らせられたとき、
彼らは、かわいたことがなかった。
主は彼らのために岩から水を流れさせ、

また岩を裂かれると、水がほとばしり出た。
二二主は言われた、
「悪い者には平安がない」と。

第四九章

一海沿いの国々よ、わたしに聞け。
遠いところのもろもろの民よ、耳を傾けよ。
主はわたしを生れ出た時から召し、
母の胎を出た時からわが名を語り告げられた。
二主はわが口を鋭利なつるぎとなし、
わたしをみ手の陰にかくし、
とぎすました矢となして、
箙にわたしを隠された。

三また、わたしに言われた、
「あなたはわがしもべ、
わが栄光をあらわすべきイスラエルである」と。
四しかし、わたしは言った、
「わたしはいたずらに働き、
益なく、むなしく力を費した。
しかもなお、まことにわが正しきは主と共にあり、
わが報いはわが神と共にある」と。
五ヤコブをおのれに帰らせ、
イスラエルをおのれのもとに集めるために、
わたしを腹の中からつくって
そのしもべとされた主は言われる。

（わたしは主の前に尊ばれ、
わが神はわが力となられた）
六主は言われる、
「あなたがわがしもべとなって、
ヤコブのもろもろの部族をおこし、
イスラエルのうちの残った者を帰らせることは、
いとも軽い事である。
わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、
わが救を地の果にまでいたらせよう」と。
七イスラエルのあがない主、
イスラエルの聖者なる主は、
人に侮られる者、民に忌みきらわれる者、

つかさたちのしもべにむかってこう言われる、
「もろもろの王は見て、立ちあがり、
もろもろの君は立って、拝する。
これは真実なる主、イスラエルの聖者が、
あなたを選ばれたゆえである」。
八主はこう言われる、
「わたしは恵みの時に、あなたに答え、
救の日にあなたを助けた。
わたしはあなたを守り、
あなたを与えて民の契約とし、
国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。
九わたしは捕えられた人に『出よ』と言い、

暗(くら)きにおる者(もの)に『あらわれよ』と言(い)う。
彼(かれ)らは道(みち)すがら食(た)べることができ、
すべての裸(はだか)の山(やま)にも牧草(ぼくそう)を得(え)る。
一〇彼(かれ)らは飢(う)えることがなく、かわくこともない。
また熱(あつ)い風(かぜ)も、太陽(たいよう)も彼(かれ)らを撃(う)つことはない。
彼(かれ)らをあわれむ者(もの)が彼(かれ)らを導(みちび)き、
泉(いずみ)のほとりに彼(かれ)らを導(みちび)かれるからだ。
一一わたしは、わがもろもろの山(やま)を道(みち)とし、
わが大路(おおじ)を高(たか)くする。
一二見(み)よ、人々(ひとびと)は遠(とお)くから来(く)る。
見(み)よ、人々(ひとびと)は北(きた)から西(にし)から、
またスエネの地(ち)から来(く)る」。

一三 天よ、歌え、地よ、喜べ。
もろもろの山よ、声を放って歌え。
主はその民を慰め、
その苦しむ者をあわれまれるからだ。
一四 しかしシオンは言った、
「主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた」と。
一五 「女がその乳のみ子を忘れて、
その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。
たとい彼らが忘れるようなことがあっても、
わたしは、あなたを忘れることはない。
一六 見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。
あなたの石がきは常にわが前にある。

一七あなたを建てる者は、あなたをこわす者を追い越し、
あなたを荒した者は、あなたから出て行く。
一八あなたの目をあげて見まわせ。
彼らは皆集まって、あなたのもとに来る。
主は言われる、わたしは生きている、
あなたは彼らを皆、飾りとして身につけ、
花嫁の帯のようにこれを結ぶ。
一九あなたの荒れ、かつすたれた所、こわされた地は、
住む人の多いために狭くなり、
あなたを、のみつくした者は、はるかに離れ去る。
二〇あなたが子を失った後に生れた子らは、
なおあなたの耳に言う、

『この所はわたしには狭すぎる、
わたしのために住むべき所を得させよ』と。
二一その時あなたは心のうちに言う、
『だれがわたしのためにこれらの者を産んだのか。
わたしは子を失って、子をもたない。
わたしは捕われ、かつ追いやられた。
だれがこれらの者を育てたのか。
見よ、わたしはひとり残された。
これらの者はどこから来たのか』と」。
二二主なる神はこう言われる、
「見よ、わたしは手をもろもろの国にむかってあげ、
旗をもろもろの民にむかって立てる。

彼(かれ)らはそのふところにあなたの子(こ)らを携(たずさ)え、
その肩(かた)にあなたの娘(むすめ)たちを載(の)せて来(く)る。
二三もろもろの王(おう)は、あなたの養父(ようふ)となり、
その王妃(おうひ)たちは、あなたの乳母(うば)となり、
彼(かれ)らはその顔(かお)を地(ち)につけて、あなたにひれ伏(ふ)し、
あなたの足(あし)のちりをなめる。
こうして、あなたはわたしが主(しゅ)であることを知(し)る。
わたしを待(ま)ち望(のぞ)む者(もの)は恥(はじ)をこうむることがない」。
二四勇士(ゆうし)が奪(うば)った獲物(えもの)を
どうして取(と)り返(かえ)すことができようか。
暴君(ぼうくん)がかすめた捕虜(ほりょ)を
どうして救(すく)い出(だ)すことができようか。

二五しかし主(しゅ)はこう言(い)われる、
「勇士(ゆうし)がかすめた捕虜(ほりょ)も取(と)り返(かえ)され、
暴君(ぼうくん)が奪(うば)った獲物(えもの)も救(すく)い出(だ)される。
わたしはあなたと争(あらそ)う者(もの)と争(あらそ)い、
あなたの子(こ)らを救(すく)うからである。
二六わたしはあなたをしえたげる者(もの)にその肉(にく)を食(く)わせ、
その血(ち)を新(あたら)しい酒(さけ)のように飲(の)ませて酔(よ)わせる。
こうして、すべての人(ひと)はわたしが主(しゅ)であって、
あなたの救主(すくいぬし)、またあなたのあがない主(ぬし)、
ヤコブの全能者(ぜんのうしゃ)であることを知(し)るようになる」。

第五〇章

一主(しゅ)はこう言(い)われる、

「わたしがあなたがたの母（はは）を去（さ）らせたその離縁状（りえんじょう）は、
どこにあるか。
わたしはどの債主（さいしゅ）にあなたがたを売（う）りわたしたか。
見（み）よ、あなたがたは、その不義（ふぎ）のために売（う）られ、
あなたがたの母（はは）は、
あなたがたのとがのために出（だ）されたのだ。
ニわたしが来（き）たとき、
なぜひとりもいなかったか。
わたしが呼（よ）んだとき、
なぜひとりも答（こた）える者（もの）がなかったか。
わたしの手（て）が短（みじか）くて、
あがなうことができないのか。
わたしは救（すく）う力（ちから）を持（も）たないのか。

見よ、わたしが、しかると海はかれ、
川は荒野となり、
その中の魚は水がないために、
かわき死んで悪臭を放つ。
三わたしは黒い衣を天に着せ、
荒布をもってそのおおいとする」。
四主なる神は教をうけた者の舌をわたしに与えて、
疲れた者を言葉をもって助けることを知らせ、
また朝ごとにさまし、わたしの耳をさまして、
教をうけた者のように聞かせられる。
五主なる神はわたしの耳を開かれた。
わたしは、そむくことをせず、

退くことをしなかった。
六わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、
わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、
恥とつばきとを避けるために、
顔をかくさなかった。
七しかし主なる神はわたしを助けられる。
それゆえ、わたしは恥じることがなかった。
それゆえ、わたしは顔を火打石のようにした。
わたしは決してはずかしめられないことを知る。
八わたしを義とする者が近くおられる。
だれがわたしと争うだろうか、
われわれは共に立とう。

わたしのあだはだれか、
わたしの所へ近くこさせよ。
九見よ、主なる神はわたしを助けられる。
だれがわたしを罪に定めるだろうか。
見よ、彼らは皆衣のようにふるび、
しみのために食いつくされる。
一〇あなたがたのうち主を恐れ、
そのしもべの声に聞き従い、
暗い中を歩いて光を得なくても、なお主の名を頼み、
おのれの神にたよる者はだれか。
一一見よ、火を燃やし、たいまつをともす者よ、
皆その火の炎の中を歩め、
またその燃やした、たいまつの中を歩め。

あなたがたは、これをわたしの手から受けて、
苦しみのうちに伏し倒れる。

第五一章

一「義を追い求め、
主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。
あなたがたの切り出された岩と、
あなたがたの掘り出された穴とを思いみよ。
二あなたがたの父アブラハムと、
あなたがたを産んだサラとを思いみよ。
わたしは彼をただひとりであったときに召し、
彼を祝福して、その子孫を増し加えた。
三主はシオンを慰め、

またそのすべて荒れた所を慰めて、
その荒野をエデンのように、
そのさばくを主の園のようにされる。
こうして、その中に喜びと楽しみとがあり、
感謝と歌の声とがある。
四わが民よ、わたしに聞け、
わが国びとよ、わたしに耳を傾けよ。
律法はわたしから出、
わが道はもろもろの民の光となる。
五わが義はすみやかに近づき、
わが救は出て行った。
わが腕はもろもろの民を治める。

海沿(うみぞ)いの国々(くにぐに)はわたしを待(ま)ち望(のぞ)み、
わが腕(うで)に寄(よ)り頼(たの)む。
六目(め)をあげて天(てん)を見(み)、また下(した)なる地(ち)を見(み)よ。
天(てん)は煙(けむり)のように消(き)え、地(ち)は衣(ころも)のようにふるび、
その中(なか)に住(す)む者(もの)は、ぶよのように死(し)ぬ。
しかし、わが救(すくい)はとこしえにながらえ、
わが義(ぎ)はくじけることがない。
七義(ぎ)を知(し)る者(もの)よ、
心(こころ)のうちにわが律法(りっぽう)をたもつ者(もの)よ、わたしに聞(き)け。
人(ひと)のそしりを恐(おそ)れてはならない、
彼(かれ)らののしりに驚(おどろ)いてはならない。
八彼(かれ)らは衣(ころも)のように、しみに食(く)われ、

羊の毛のように虫に食われるからだ。
しかし、わが義はとこしえにながらえ、
わが救はよろず代に及ぶ」。
九主のかいなよ、
さめよ、さめよ、力を着よ。
さめて、いにしえの日、昔の代にあったようになれ。
ラハブを切り殺し、
龍を刺し貫いたのは、あなたではなかったか。
一〇海をかわかし、大いなる淵の水をかわかし、
また海の深き所を、
あがなわれた者の過ぎる道とされたのは、
あなたではなかったか。

一一主にあがなわれた者は、
歌うたいつつ、シオンに帰ってきて、
そのこうべに、とこしえの喜びをいただき、
彼らは喜びと楽しみとを得、
悲しみと嘆きとは逃げ去る。
一二「わたしこそあなたを慰める者だ。
あなたは何者なれば、死ぬべき人を恐れ、
草のようになるべき人の子を恐れるのか。
一三天をのべ、地の基をすえられた
あなたの造り主、主を忘れて、
なぜ、しえたげる者が滅ぼそうと備えをするとき、
その憤りのゆえに常にひねもす恐れるのか。

しえたげる者の憤りはどこにあるか。
一四身をかがめている捕われ人は、すみやかに解かれて、
死ぬことなく、穴にくだることなく、
その食物はつきることがない。
一五わたしは海をふるわせ、
その波をなりどよめかすあなたの神、主である。
その名を万軍の主という。
一六わたしはわが言葉をあなたの口におき、
わが手の陰にあなたを隠した。
こうして、わたしは天をのべ、地の基をすえ、
シオンにむかって、あなたはわが民であると言う」。
一七エルサレムよ、起きよ、起きよ、立て。

あなたはさきに主（しゅ）の手（て）から憤（いきどお）りの杯（さかずき）をうけて飲（の）み、
よろめかす大杯（おおさかずき）を、滓（おり）までも飲（の）みほした。
一八その産（う）んだもろもろの子（こ）のなかに、
自分（じぶん）を導（みちび）く者（もの）なく、
その育（そだ）てたもろもろの子（こ）のなかに、
自分（じぶん）の手（て）をとる者（もの）がない。
一九これら二つの事（こと）があなたに臨（のぞ）んだ――
だれがあなたと共（とも）に嘆（なげ）くだろうか――
荒廃（こうはい）と滅亡（めつぼう）、ききんとつるぎ。
だれがあなたを慰（なぐさ）めるだろうか。
二〇あなたの子（こ）らは息絶（いきた）えだえになり、
網（あみ）にかかった、かもしかのように、

すべてのちまたのすみに横(よこ)たわり、
主(しゅ)の憤(いきどお)りと、あなたの神(かみ)の責(せ)めとは、
彼(かれ)らに満(み)ちている。
二一それゆえ、苦(くる)しめる者(もの)、
酒(さけ)にではなく酔(よ)っている者(もの)よ、これを聞(き)け。
二二あなたの主(しゅ)、おのが民(たみ)の訴(うった)えを弁護(べんご)される
あなたの神(かみ)、主(しゅ)はこう言(い)われる、
「見(み)よ、わたしはよろめかす杯(さかずき)を
あなたの手(て)から取(と)り除(のぞ)き、
わが憤(いきどお)りの大杯(おおさかずき)を取(と)り除(のぞ)いた。
あなたは再(ふたた)びこれを飲(の)むことはない。
二三わたしはこれをあなたを悩(なや)ます者(もの)の手(て)におく。

彼らはさきにあなたにむかって言った、
『身をかがめよ、われわれは越えていこう』と。
そしてあなたはその背を地のようにし、
ちまたのようにして、
彼らの越えていくにまかせた」。

第五二章

一シオンよ、さめよ、さめよ、
力を着よ。
聖なる都エルサレムよ、美しい衣を着よ。
割礼を受けない者および汚れた者は、
もはやあなたのところに、はいることがないからだ。
二捕われたエルサレムよ、
あなたの身からちりを振り落せ、起きよ。

捕われたシオンの娘よ、
あなたの首のなわを解きすてよ。
三主はこう言われる、「あなたがたは、ただで売られた。金を出さずにあが
なわれる」。四主なる神はこう言われる、「わが民はさきにエジプトへ下っ
て行って、かしこに寄留した。またアッスリヤびとはゆえなく彼らをしえ
たげた。五それゆえ、今わたしはここに何をしようか。わが民はゆえなく捕
われた」と主は言われる。主は言われる、「彼らをつかさどる者はわめき、
わが名は常にひねもす侮られる。六それゆえ、わが民はわが名を知るにい
たる。その日には彼らはこの言葉を語る者がわたしであることを知る。わ
たしはここにおる」。
七よきおとずれを伝え、平和を告げ、
よきおとずれを伝え、救を告げ、

シオンにむかって「あなたの神は王となられた」と
言う者の足は山の上にあって、
なんと麗しいことだろう。
八聞けよ、あなたの見張びとは声をあげて、
共に喜び歌っている。
彼らは目と目と相合わせて、
主がシオンに帰られるのを見るからだ。
九エルサレムの荒れすたれた所よ、
声を放って共に歌え。
主はその民を慰め、
エルサレムをあがなわれたからだ。
一〇主はその聖なるかいなを、

もろもろの国びとの前にあらわされた。
地のすべての果は、われわれの神の救を見る。
一一去れよ、去れよ、そこを出て、
汚れた物にさわるな。
その中を出よ、主の器をになう者よ、
おのれを清く保て。
一二あなたがたは急いで出るに及ばない、
また、とんで行くにも及ばない。
主はあなたがたの前に行き、
イスラエルの神はあなたがたの
しんがりとなられるからだ。
一三見よ、わがしもべは栄える。

彼は高められ、あげられ、ひじょうに高くなる。
一四 多くの人が彼に驚いたように——
彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、
その姿は人の子と異なっていたからである——
一五 彼は多くの国民を驚かす。
王たちは彼のゆえに口をつむぐ。
それは彼らがまだ伝えられなかったことを見、
まだ聞かなかったことを悟るからだ。

第五三章

一 だれがわれわれの聞いたことを
信じ得たか。
主の腕は、だれにあらわれたか。

二彼は主の前に若木のように、
かわいた土から出る根のように育った。
彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、
われわれの慕うべき美しさもない。
三彼は侮られて人に捨てられ、
悲しみの人で、病を知っていた。
また顔をおおって忌みきらわれる者のように、
彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。
四まことに彼はわれわれの病を負い、
われわれの悲しみをになった。
しかるに、われわれは思った、
彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

五しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、
われわれの不義のために砕かれたのだ。
彼はみずから懲しめをうけて、
われわれに平安を与え、
その打たれた傷によって、
われわれはいやされたのだ。
六われわれはみな羊のように迷って、
おのおの自分の道に向かって行った。
主はわれわれすべての者の不義を、
彼の上におかれた。
七彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、
口を開かなかった。

ほふり場にひかれて行く小羊のように、
また毛を切る者の前に黙っている羊のように、
口を開かなかった。
八彼は暴虐なさばきによって取り去られた。
その代の人のうち、だれが思ったであろうか、
彼はわが民のとがのために打たれて、
生けるものの地から断たれたのだと。
九彼は暴虐を行わず、
その口には偽りがなかったけれども、
その墓は悪しき者と共に設けられ、
その塚は悪をなす者と共にあった。
一〇しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、

主(しゅ)は彼(かれ)を悩(なや)まされた。
彼(かれ)が自分(じぶん)を、とがの供(そな)え物(もの)となすとき、
その子孫(しそん)を見(み)ることができ、
その命(いのち)をながくすることができる。
かつ主(しゅ)のみ旨(むね)が彼(かれ)の手(て)によって栄(さか)える。
一一彼(かれ)は自分(じぶん)の魂(たましい)の苦(くる)しみにより光(ひかり)を見(み)て満足(まんぞく)する。
義(ぎ)なるわがしもべはその知識(ちしき)によって、
多(おお)くの人(ひと)を義(ぎ)とし、また彼(かれ)らの不義(ふぎ)を負(お)う。
一二それゆえ、わたしは彼(かれ)に大(おお)いなる者(もの)と共(とも)に
物(もの)を分(わ)かち取(と)らせる。
彼(かれ)は強(つよ)い者(もの)と共(とも)に獲物(えもの)を分(わ)かち取(と)る。
これは彼(かれ)が死(し)にいたるまで、自分(じぶん)の魂(たましい)をそそぎだし、

とがある者と共に数えられたからである。
しかも彼は多くの人の罪を負い、
とがある者のためにとりなしをした。

第五四章

一「子を産まなかったうまずめよ、歌え。
産みの苦しみをしなかった者よ、
声を放って歌いよばわれ。
夫のない者の子は、
とついだ者の子よりも多い」と主は言われる。
二「あなたの天幕の場所を広くし、
あなたのすまいの幕を張りひろげ、
惜しむことなく、あなたの綱を長くし、

あなたの杭（くい）を強固（きょうこ）にせよ。
三あなたは右（みぎ）に左（ひだり）にひろがり、
あなたの子孫（しそん）はもろもろの国（くに）を獲（え）、
荒（あ）れすたれた町々（まちまち）をも住民（じゅうみん）で満（み）たすからだ。
四恐（おそ）れてはならない。
あなたは恥（は）じることがない。
あわてふためいてはならない。
あなたは、はずかしめられることがない。
あなたは若（わか）い時（とき）の恥（はじ）を忘（わす）れ、
寡婦（かふ）であった時（とき）のはずかしめを、
　再（ふたた）び思（おも）い出（だ）すことがない。
五あなたを造（つく）られた者（もの）はあなたの夫（おっと）であって、
その名（な）は万軍（ばんぐん）の主（しゅ）。

あなたをあがなわれる者は、
イスラエルの聖者であって、
全地の神ととなえられる。
六捨てられて心悲しむ妻、
また若い時にとついで出された妻を招くように
主はあなたを招かれた」と
あなたの神は言われる。
七「わたしはしばしばあなたを捨てたけれども、
大いなるあわれみをもってあなたを集める。
八あふれる憤りをもって、
しばしわが顔を隠したけれども、
とこしえのいつくしみをもって、
あなたをあわれむ」と

あなたをあがなわれる主は言われる。
九「このことはわたしにはノアの時のようだ。
わたしはノアの洪水を、
再び地にあふれさせないと誓ったが、
そのように、わたしは再びあなたを怒らない、
再びあなたを責めないと誓った。
一〇山は移り、丘は動いても、
わがいつくしみはあなたから移ることなく、
平安を与えるわが契約は動くことがない」と
あなたをあわれまれる主は言われる。
一一「苦しみをうけ、あらしにもてあそばれ、
慰めを得ない者よ、

見よ、わたしはアンチモニーであなたの石をすえ、
サファイヤであなたの基をおき、
12 めのうであなたの尖塔を造り、
紅玉であなたの門を造り、
あなたの城壁をことごとく宝石で造る。
13 あなたの子らはみな主に教をうけ、
あなたの子らは大いに栄える。
14 あなたは義をもって堅く立ち、
しえたげから遠ざかって恐れることはない。
また恐怖から遠ざかる、
それはあなたに近づくことがないからである。
15 たとい争いを起す者があっても

わたしによるのではない。
すべてあなたと争う者は、あなたのゆえに倒れる。
一六見よ、炭火を吹きおこして、
その目的にかなう武器を造り出す鍛冶は、
わたしが創造した者、
また荒し滅ぼす者も、わたしが創造した者である。
一七すべてあなたを攻めるために造られる武器は、
その目的を達しない。
すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、
あなたに説き破られる。
これが主のしもべらの受ける嗣業であり、
また彼らがわたしから受ける義である」と
主は言われる。

第五五章

一「さあ、かわいている者は
みな水にきたれ。
金のない者もきたれ。
来て買い求めて食べよ。
あなたがたは来て、金を出さずに、
ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ。
二なぜ、あなたがたは、
かてにもならぬもののために金を費し、
飽きることもできぬもののために労するのか。
わたしによく聞き従え。
そうすれば、良い物を食べることができ、
最も豊かな食物で、自分を楽しませることができる。

三耳を傾け、わたしにきて聞け。
そうすれば、あなたがたは生きることができる。
わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、
ダビデに約束した変らない確かな恵みを与える。
四見よ、わたしは彼を立てて、
もろもろの民への証人とし、
また、もろもろの民の君とし、命令する者とした。
五見よ、あなたは知らない国民を招く、
あなたを知らない国民は
あなたのもとに走ってくる。
これはあなたの神、主、
イスラエルの聖者のゆえであり、

主があなたに光栄を与えられたからである。
六あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、
主を尋ねよ。
近くおられるうちに呼び求めよ。
七悪しき者はその道を捨て、
正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。
そうすれば、主は彼にあわれみを施される。
われわれの神に帰れ、
主は豊かにゆるしを与えられる。
八わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、
わが道は、あなたがたの道とは異なっていると
主は言われる。

九天が地よりも高いように、
わが道は、あなたがたの道よりも高く、
わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。
一〇天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、
地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、
種まく者に種を与え、
食べる者にかてを与える。
一一このように、わが口から出る言葉も、
むなしくわたしに帰らない。
わたしの喜ぶところのことをなし、
わたしが命じ送った事を果す。
一二あなたがたは喜びをもって出てきて、

安らかに導かれて行く。
山と丘とはあなたの前に声を放って喜び歌い、
野にある木はみな手を打つ。
一三いとすぎは、いばらに代って生え、
ミルトスの木は、おどろに代って生える。
これは主の記念となり、
また、とこしえのしるしとなって、
絶えることはない」。

第五六章

一主はこう言われる、
「あなたがたは公平を守って正義を行え。
わが救の来るのは近く、

わが助けのあらわれるのが近いからだ。
二安息日を守って、これを汚さず、
その手をおさえて、悪しき事をせず、
このように行う人、
これを堅く守る人の子はさいわいである」。
三主に連なっている異邦人は言ってはならない、
「主は必ずわたしをその民から分かたれる」と。
宦官もまた言ってはならない、
「見よ、わたしは枯れ木だ」と。
四主はこう言われる、
「わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、
わが契約を堅く守る宦官には、

五わが家（いえ）のうちで、わが垣（かき）のうちで、
むすこにも 娘（むすめ） にもまさる記念（きねん）のしるしと名（な）を与（あた）え、
絶（た）えることのない、とこしえの名（な）を与（あた）える。
六また主（しゅ）に連（つら）なり、主（しゅ）に仕（つか）え、
主（しゅ）の名（な）を愛（あい）し、そのしもべとなり、
すべて安息日（あんそくにち）を守（まも）って、これを汚（けが）さず、
わが契約（けいやく）を堅（かた）く守（まも）る異邦人（いほうじん）は――
七わたしはこれをわが聖（せい）なる山（やま）にこさせ、
わが 祈（いのり） の家（いえ）のうちで楽（たの）しませる、
彼（かれ）らの燔祭（はんさい）と犠牲（ぎせい）とは、
わが祭壇（さいだん）の上（うえ）に受（う）けいれられる。
わが家（いえ）はすべての民（たみ）の

祈の家ととなえられるからである」。
八イスラエルの追いやられた者を集められる
主なる神はこう言われる、
「わたしはさらに人を集めて、
すでに集められた者に加えよう」と。
九野のすべての獣よ、
林におるすべての獣よ、来て食らえ。
一〇見張人らはみな目しいで、知ることがなく、
みな、おしの犬で、ほえることができない。
みな夢みる者、伏している者、
まどろむことを好む者だ。
一一この犬どもは強欲で、飽くことを知らない。

彼らはまた悟ることのできない牧者で、
皆おのが道にむかいゆき、
おのおのみな、おのれの利を求める。
一二彼らは互に言う、
「さあ、われわれは酒を手に入れ、
濃い酒をあびるほど飲もう。
あすも、きょうのようであるだろう、
すばらしい日だ」と。

第五七章

一正しい者が滅びても、
心にとめる人がなく、
神を敬う人々が取り去られても、悟る者はない。

正しい者は災の前に取り去られて、
二平安に入るからである。
すべて正直に歩む者は、その床に休むことができる。
三しかし、あなたがた女魔法使の子よ、
姦夫と遊女のすえよ、こちらへ近寄れ。
四あなたがたは、だれにむかって戯れをなすのか。
だれにむかって口を開き、舌を出すのか。
あなたがたは背信の子ら、
偽りのすえではないか。
五あなたがたは、かしの木の間、
すべての青木の下で心をこがし、
谷の中、岩のはざまで子どもを殺した。

六あなたは谷のなめらかな石を自分の嗣業とし、
これを自分の分け前とし、
これに灌祭をそそぎ、供え物をささげた。
わたしはこれらの物によってなだめられようか。
七あなたは高くそびえた山の上に自分の床を設け、
またそこに登って行って犠牲をささげた。
八また戸および柱のうしろに、
あなたのしるしを置いた。
あなたはわたしを離れて自分の床をあらわし、
それにのぼって、その床をひろくした。
また彼らと契約をなし、彼らの床を愛し、
その裸を見た。

九あなたは、におい油（あぶら）を携（たずさ）えてモレクに行（い）き、
多（おお）くのかおり物（もの）をささげた。
またあなたの使者（ししゃ）を遠（とお）くにつかわし、
陰府（よみ）の深（ふか）い所（ところ）にまでつかわした。
一〇あなたは道（みち）の長（なが）いのに疲（つか）れても、
なお「望（のぞ）みがない」とは言（い）わなかった。
あなたはおのが力（ちから）の回復（かいふく）を得（え）たので、
衰（おとろ）えることがなかった。
一一あなたはだれをおじ恐（おそ）れて、偽（いつわ）りを言（い）い、
わたしを覚（おぼ）えず、また心（こころ）におかなかったのか。
わたしが久（ひさ）しく黙（だま）っていたために、
あなたはわたしを恐（おそ）れなかったのではなかったか。

一二わたしはあなたの義と、あなたのわざを告げ示そう、
しかしこれらはあなたを益しない。
一三あなたが呼ばわる時、
あなたが集めておいた偶像にあなたを救わせよ。
風は彼らを運び去り、
息は彼らを取り去る。
しかしわたしに寄り頼む者は地を継ぎ、
わが聖なる山をまもる。
一四主は言われる、
「土を盛り、土を盛って道を備えよ、
わが民の道から、つまずく物を取り去れ」と。
一五いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、

その名を聖ととなえられる者がこう言われる、
「わたしは高く、聖なる所に住み、
また心砕けて、へりくだる者と共に住み、
へりくだる者の霊をいかし、
砕ける者の心をいかす。
一六わたしはかぎりなく争わない、
また絶えず怒らない。
霊はわたしから出、
いのちの息はわたしがつくったからだ。
一七彼のむさぼりの罪のゆえに、
わたしは怒って彼を打ち、
わが顔をかくして怒った。

しかし彼はなおそむいて、おのが心の道へ行った。
一八わたしは彼の道を見た。
わたしは彼をいやし、
また彼を導き、慰めをもって彼に報い、
悲しめる者のために、くちびるの実を造ろう。
一九遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、
わたしは彼をいやそう」と主は言われる。
二〇しかし悪しき者は波の荒い海のようだ。
静まることができないで、
その水はついに泥と汚物とを出す。
二一わが神は言われる、
「よこしまな者には平安がない」と。

第五八章

一「大いに呼ばわって声を惜しむな。
あなたの声をラッパのようにあげ、
わが民にそのとがを告げ、
ヤコブの家にその罪を告げ示せ。
二彼らは日々わたしを尋ね求め、
義を行い、神のおきてを捨てない国民のように、
わが道を知ることを喜ぶ。
彼らは正しいさばきをわたしに求め、
神に近づくことを喜ぶ。
三彼らは言う、
『われわれが断食したのに、
なぜ、ごらんにならないのか。

われわれがおのれを苦しめたのに、
なぜ、ごぞんじないのか』と。
見よ、あなたがたの断食の日には、
おのが楽しみを求め、
その働き人をことごとくしえたげる。
四見よ、あなたがたの断食するのは、
ただ争いと、いさかいのため、
また悪のこぶしをもって人を打つためだ。
きょう、あなたがたのなす断食は、
その声を上に聞えさせるものではない。
五このようなものは、わたしの選ぶ断食であろうか。
人がおのれを苦しめる日であろうか。

そのこうべを葦のように伏せ、
荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。
あなたは、これを断食ととなえ、
主に受けいれられる日と、となえるであろうか。
六わたしが選ぶところの断食は、
悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、
しえたげられる者を放ち去らせ、
すべてのくびきを折るなどの事ではないか。
七また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、
さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、
裸の者を見て、これを着せ、
自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。

八そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、
あなたは、すみやかにいやされ、
あなたの義はあなたの前に行き、
主の栄光はあなたのしんがりとなる。
九また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、
あなたが叫ぶとき、
『わたしはここにおる』と言われる。
もし、あなたの中からくびきを除き、
指をさすこと、悪い事を語ることを除き、
一〇飢えた者にあなたのパンを施し、
苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、
あなたの光は暗きに輝き、

あなたのやみは真昼(まひる)のようになる。
一一主(しゅ)は常(つね)にあなたを導(みちび)き、
良(よ)き物(もの)をもってあなたの願(ねが)いを満(み)ち足(た)らせ、
あなたの骨(ほね)を強(つよ)くされる。
あなたは潤(うるお)った園(その)のように、
水(みず)の絶(た)えない泉(いずみ)のようになる。
一二あなたの子(こ)らは久(ひさ)しく荒(あ)れすたれたる所(ところ)を興(おこ)し、
あなたは代々(よよ)やぶれた基(もとい)を立(た)て、
人(ひと)はあなたを『破(やぶ)れを繕(つくろ)う者(もの)』と呼(よ)び、
『市街(しがい)を繕(つくろ)って住(す)むべき所(ところ)となす者(もの)』と
呼(よ)ぶようになる。
一三もし安息日(あんそくにち)にあなたの足(あし)をとどめ、

わが聖日にあなたの楽しみをなさず、
安息日を喜びの日と呼び、
主の聖日を尊ぶべき日ととなえ、
これを尊んで、おのが道を行わず、
おのが楽しみを求めず、
むなしい言葉を語らないならば、
一四その時あなたは主によって喜びを得、
わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、
あなたの先祖ヤコブの嗣業をもって、
あなたを養う」。
これは主の口から語られたものである。

第五九章

一見よ、主の手が短くて、
救い得ないのではない。
その耳が鈍くて聞き得ないのでもない。
二ただ、あなたがたの不義が
あなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。
またあなたがたの罪が
主の顔をおおったために、お聞きにならないのだ。
三あなたがたの手は血で汚れ、
あなたがたの指は不義で汚れ、
あなたがたのくちびるは偽りを語り、
あなたがたの舌は悪をささやき、
四ひとりも正義をもって訴え、

真実をもって論争する者がない。
彼らはむなしきことを頼み、偽りを語り、
害悪をはらみ、不義を産む。
五彼らはまむしの卵をかえし、くもの巣を織る。
その卵を食べる者は死ぬ。
卵が踏まれると破れて毒蛇を出す。
六その織る物は着物とならない。
その造る物をもって身をおおうことができない。
彼のわざは不義のわざであり、
彼らの手には暴虐の行いがある。
七彼らの足は悪に走り、
罪のない血を流すことに速い。

彼らの思いは不義の思いであり、
荒廃と滅亡とがその道にある。
八彼らは平和の道を知らず、
その行く道には公平がない。
彼らはその道を曲げた。
すべてこれを歩む者は平和を知らない。
九それゆえ、公平は遠くわれわれを離れ、
正義はわれわれに追いつかない。
われわれは光を望んでも、暗きを見、
輝きを望んでも、やみを行く。
一〇われわれは盲人のように、かきを手さぐりゆき、
目のない者のように手さぐりゆき、

真昼でも、たそがれのようにつまずき、
強壮な者の中にあっても死人のようだ。
一一われわれは皆くまのようにほえ、
はとのようにいたくうめき、
公平を望んでも、きたらず、
救を望んでも、遠くわれわれを離れ去る。
一二われわれのとがは、あなたの前に多く、
罪は、われわれを訴えて、あかしをなし、
とがは、われわれと共にあり、
不義は、われわれがこれを知る。
一三われわれは、そむいて主をいなみ、
退いて、われわれの神に従わず、

しえたげと、そむきとを語り、
偽りの言葉を心にはらんで、それを言いあらわす。
一四公平はうしろに退けられ、
正義ははるかに立つ。
それは、真実は広場に倒れ、
正直は、はいることができないからである。
一五真実は欠けてなく、
悪を離れる者はかすめ奪われる。
主はこれを見て、
公平がなかったことを喜ばれなかった。
一六主は人のないのを見られ、
仲に立つ者のないのをあやしまれた。

それゆえ、ご自分(じぶん)のかいなをもって、勝利(しょうり)を得(え)、
その義(ぎ)をもって、おのれをささえられた。
一七主(しゅ)は義(ぎ)を胸当(むねあて)としてまとい、
救(すくい)のかぶとをその頭(あたま)にいただき、
報復(ほうふく)の衣(ころも)をまとって着物(きもの)とし、
熱心(ねっしん)を外套(がいとう)として身(み)を包(つつ)まれた。
一八主(しゅ)は彼(かれ)らの行(おこな)いにしたがって報(むく)いをなし、
あだにむかって怒(いか)り、
敵(てき)にむかって報(むく)いをなし、
海沿(うみぞ)いの国々(くにぐに)にむかって報(むく)いをされる。
一九こうして、人々(ひとびと)は西(にし)の方(ほう)から主(しゅ)の名(な)を恐(おそ)れ、
日(ひ)の出(で)る方(ほう)からその栄光(えいこう)を恐(おそ)れる。

主は、せき止めた川を、
そのいぶきで押し流すように、こられるからである。
二〇主は言われる、
「主は、あがなう者としてシオンにきたり、
ヤコブのうちの、とがを離れる者に至る」と。
二一主は言われる、「わたしが彼らと立てる契約はこれである。あなたの上
にあるわが霊、あなたの口においたわが言葉は、今から後とこしえに、あ
なたの口から、あなたの子らの口から、あなたの子らの子の口から離れる
ことはない」と。

第六〇章

一起きよ、光を放て。
あなたの光が臨み、

主の栄光があなたの上にのぼったから。
二見よ、暗きは地をおおい、
やみはもろもろの民をおおう。
しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、
主の栄光があなたの上にあらわれる。
三もろもろの国は、あなたの光に来、
もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る。
四あなたの目をあげて見まわせ、
彼らはみな集まってあなたに来る。
あなたの子らは遠くから来、
あなたの娘らは、かいなにいだかれて来る。
五その時あなたは見て、喜びに輝き、

あなたの心(こころ)はどよめき、かつ喜(よろこ)ぶ。
海(うみ)の富(とみ)が移(うつ)ってあなたに来(き)、
もろもろの国(くに)の宝(たから)が、あなたに来(く)るからである。
六 多(おお)くのらくだ、ミデアンおよびエパの若(わか)きらくだは
あなたをおおい、
シバの人々(ひとびと)はみな黄金(おうごん)、乳香(にゅうこう)を携(たずさ)えてきて、
主(しゅ)の誉(ほまれ)を宣(の)べ伝(つた)える。
七 ケダルの羊(ひつじ)の群(む)れはみなあなたに集(あつ)まって来(き)、
ネバヨテの雄羊(おひつじ)はあなたに仕(つか)え、
わが祭壇(さいだん)の上(うえ)にのぼって受(う)けいれられる。
こうして、わたしはわが栄光(えいこう)の家(いえ)を輝(かがや)かす。
八 雲(くも)のように飛(と)び、

はとがその小屋に
飛び帰るようにして来る者はだれか。
九海沿いの国々はわたしを待ち望み、
タルシシの船はいや先に
あなたの子らを遠くから載せて来、
また彼らの金銀を共に載せて来て、
あなたの神、主の名にささげ、
イスラエルの聖者にささげる。
主があなたを輝かされたからである。
一〇異邦人はあなたの城壁を築き、
彼らの王たちはあなたに仕える。
わたしは怒りをもってあなたを打ったけれども、

また恵(めぐ)みをもってあなたをあわれんだからである。
一一あなたの門(もん)は常(つね)に開(ひら)いて、
昼(ひる)も夜(よる)も閉(と)ざすことはない。
これは人々(ひとびと)が国々(くにぐに)の宝(たから)をあなたに携(たずさ)えて来(き)、
その王(おう)たちを率(ひき)いて来(く)るためである。
一二あなたに仕(つか)えない国(くに)と民(たみ)とは滅(ほろ)び、
その国々(くにぐに)は全(まった)く荒(あ)れすたれる。
一三レバノンの栄(さか)えはあなたに来(き)、
いとすぎ、すずかけ、まつは皆共(みなとも)に来(き)て、
わが聖所(せいじょ)をかざる。
またわたしはわが足(あし)をおく所(ところ)を尊(たっと)くする。
一四あなたを苦(くる)しめた者(もの)の子(こ)らは、

かがんで、あなたのもとに来、
あなたをさげすんだ者は、
ことごとくあなたの足もとに伏し、
あなたを主の都、
イスラエルの聖者のシオンととなえる。
一五あなたは捨てられ、憎まれて、
その中を過ぎる者もなかったが、
わたしはあなたを、とこしえの誇、
世々の喜びとする。
一六あなたはまた、もろもろの国の乳を吸い、
王たちの乳ぶさを吸い、
そして主なるわたしが、あなたの救主、

また、あなたのあがない主(ぬし)、
ヤコブの全能者(ぜんのうしゃ)であることを知(し)るにいたる。
一七わたしは青銅(せいどう)の代(かわ)りに黄金(おうごん)を携(たずさ)え、
くろがねの代(かわ)りにしろがねを携(たずさ)え、
木(き)の代(かわ)りに青銅(せいどう)を、石(いし)の代(かわ)りに鉄(てつ)を携(たずさ)えてきて、
あなたのまつりごとを平和(へいわ)にし、
あなたのつかさびとを正(ただ)しくする。
一八暴虐(ぼうぎゃく)は、もはやあなたの地(ち)に聞(き)かれず、
荒廃(こうはい)と滅亡(めつぼう)は、もはやあなたの境(さかい)のうちに聞(き)かれず、
あなたはその城壁(じょうへき)を「救(すくい)」ととなえ、
その門(もん)を「誉(ほまれ)」ととなえる。
一九昼(ひる)は、もはや太陽(たいよう)があなたの光(ひかり)とならず、

夜（よる）も月（つき）が輝（かがや）いてあなたを照（て）らさず、
主（しゅ）はとこしえにあなたの光（ひかり）となり、
あなたの神（かみ）はあなたの栄（さか）えとなられる。
二〇あなたの太陽（たいよう）は再（ふたた）び没（ぼっ）せず、
あなたの月（つき）はかけることがない。
主（しゅ）がとこしえにあなたの光（ひかり）となり、
あなたの悲（かな）しみの日（ひ）が終（おわ）るからである。
二一あなたの民（たみ）はことごとく正（ただ）しい者（もの）となって、
とこしえに地（ち）を所有（しょゆう）する。
彼（かれ）らはわたしの植（う）えた若枝（わかえだ）、わが手（て）のわざ、
わが栄光（えいこう）をあらわすものとなる。
二二その最（もっと）も小（ちい）さい者（もの）は氏族（しぞく）となり、

その最も弱い者は強い国となる。
わたしは主である。
その時がくるならば、すみやかにこの事をなす。

第六一章

一 主なる神の霊がわたしに臨んだ。
これは主がわたしに油を注いで、
貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、
わたしをつかわして心のいためる者をいやし、
捕われ人に放免を告げ、
縛られている者に解放を告げ、
二 主の恵みの年と
われわれの神の報復の日とを告げさせ、

また、すべての悲(かな)しむ者(もの)を慰(なぐさ)め、
三シオンの中(なか)の悲(かな)しむ者(もの)に喜(よろこ)びを与(あた)え、
灰(はい)にかえて冠(かんむり)を与(あた)え、
悲(かな)しみにかえて喜(よろこ)びの油(あぶら)を与(あた)え、
憂(うれ)いの心(こころ)にかえて、
さんびの衣(ころも)を与(あた)えさせるためである。
こうして、彼(かれ)らは義(ぎ)のかしの木(き)ととなえられ、
主(しゅ)がその栄光(えいこう)をあらわすために
植(う)えられた者(もの)ととなえられる。
四彼(かれ)らはいにしえの荒(あ)れた所(ところ)を建(た)てなおし、
さきに荒(あ)れすたれた所(ところ)を興(おこ)し、
荒(あ)れた町々(まちまち)を新(あら)たにし、

世々すたれた所を再び建てる。
五外国人は立ってあなたがたの群れを飼い、
異邦人はあなたがたの畑を耕す者となり、
ぶどうを作る者となる。
六しかし、あなたがたは主の祭司ととなえられ、
われわれの神の役者と呼ばれ、
もろもろの国の富を食べ、
彼らの宝を得て喜ぶ。
七あなたがたは、さきに受けた恥にかえて、
二倍の賜物を受け、
はずかしめにかえて、その嗣業を得て楽しむ。
それゆえ、あなたがたはその地にあって、

二倍の賜物を獲、
とこしえの喜びを得る。
八主なるわたしは公平を愛し、
強奪と邪悪を憎み、
真実をもって彼らに報いを与え、
彼らと、とこしえの契約を結ぶからである。
九彼らの子孫は、もろもろの国の中で知られ、
彼らの子らは、もろもろの民の中に知られる。
すべてこれを見る者は
これが主の祝福された民であることを認める。
一〇わたしは主を大いに喜び、
わが魂はわが神を楽しむ。

主(しゅ)がわたしに救(すくい)の衣(ころも)を着(き)せ、
義(ぎ)の上衣(うわぎ)をまとわせて、
花婿(はなむこ)が冠(かんむり)をいただき、
花嫁(はなよめ)が宝玉(ほうぎょく)をもって飾(かざ)るようにされたからである。
一一 地(ち)が芽(め)をいだし、園(その)がまいたものを生(は)やすように、
主(しゅ)なる神(かみ)は義(ぎ)と誉(ほまれ)とを、
もろもろの国(くに)の前(まえ)に、生(は)やされる。

第六二章

一 シオンの義(ぎ)が
朝日(あさひ)の輝(かがや)きのようにあらわれいで、
エルサレムの救(すくい)が燃(も)えるたいまつの様(よう)になるまで、
わたしはシオンのために黙(もく)せず、

エルサレムのために休(やす)まない。
二もろもろの国(くに)はあなたの義(ぎ)を見(み)、
もろもろの王(おう)は皆(みな)あなたの栄(さか)えを見(み)る。
そして、あなたは主(しゅ)の口(くち)が定(さだ)められる
新(あたら)しい名(な)をもってとなえられる。
三また、あなたは主(しゅ)の手(て)にある麗(うるわ)しい冠(かんむり)となり、
あなたの神(かみ)の手(て)にある王(おう)の冠(かんむり)となる。
四あなたはもはや「捨(す)てられた者(もの)」と言(い)われず、
あなたの地(ち)はもはや「荒(あ)れた者(もの)」と言(い)われず、
あなたは「わが喜(よろこ)びは彼女(かのじょ)にある」ととなえられ、
あなたの地(ち)は「配偶(はいぐう)ある者(もの)」ととなえられる。
主(しゅ)はあなたを喜(よろこ)ばれ、

あなたの地（ち）は配偶（はいぐう）を得（え）るからである。
五若（わか）い者（もの）が処女（しょじょ）をめとるように
あなたの子（こ）らはあなたをめとり、
花婿（はなむこ）が花嫁（はなよめ）を喜（よろこ）ぶように
あなたの神（かみ）はあなたを喜（よろこ）ばれる。
六エルサレムよ、
わたしはあなたの城壁（じょうへき）の上（うえ）に見張人（みはりにん）をおいて、
昼（ひる）も夜（よる）もたえず、もだすことのないようにしよう。
主（しゅ）に思（おも）い出（だ）されることを求（もと）める者（もの）よ、
みずから休（やす）んではならない。
七主（しゅ）がエルサレムを堅（かた）く立（た）てて、
全地（ぜんち）に誉（ほまれ）を得（え）させられるまで、

お休みにならぬようにせよ。
八主はその右の手をさし、
大能のかいなをさして誓われた、
「わたしは再びあなたの穀物を
あなたの敵に与えて食べさせない。
また、あなたが労して得たぶどう酒を
異邦人に与えて飲ませない。
九しかし、穀物を刈り入れた者は
これを食べて主をほめたたえ、
ぶどうを集めた者は
わが聖所の庭でこれを飲む」。
一〇門を通って行け、通って行け。

民の道を備えよ。
土を盛り、土を盛って大路を設けよ。
石を取りのけ。
もろもろの民の上に旗をあげよ。
一一見よ、主は地の果にまで告げて言われた、
「シオンの娘に言え、
『見よ、あなたの救は来る。
見よ、その報いは主と共にあり、
その働きの報いは、その前にある』と。
一二彼らは『聖なる民、
主にあがなわれた者』ととなえられ、
あなたは『人に尋ね求められる者、

捨(す)てられない町(まち)』ととなえられる」。

第六三章

一「このエドムから来(く)る者(もの)、
深紅(しんく)の衣(ころも)を着(き)て、ボズラから来(く)る者(もの)はだれか。
その装(よそお)いは、はなやかに、
大(おお)いなる力(ちから)をもって進(すす)み来(く)る者(もの)はだれか」。
「義(ぎ)をもって語(かた)り、
救(すくい)を施(ほどこ)す力(ちから)あるわたしがそれだ」。
二「何(なに)ゆえあなたの装(よそお)いは赤(あか)く、
あなたの衣(ころも)は酒(さか)ぶねを踏(ふ)む者(もの)のように赤(あか)いのか」。
三「わたしはひとりで酒(さか)ぶねを踏(ふ)んだ。
もろもろの民(たみ)のなかに、

わたしと事を共にする者はなかった。
わたしは怒りによって彼らを踏み、
憤りによって彼らを踏みにじったので、
彼らの血がわが衣にふりかかり、
わが装いをことごとく汚した。
四報復の日がわが心のうちにあり、
わがあがないの年が来たからである。
五わたしは見たけれども、助ける者はなく、
怪しんだけれども、ささえる者はなかった。
それゆえ、わがかいながわたしを勝たせ、
わが憤りがわたしをささえた。
六わたしは怒りによって、もろもろの民を踏みにじり、

憤りによって彼らを酔わせ、
彼らの血を、地に流れさせた」。
七わたしは主がわれわれになされた
すべてのことによって、
主のいつくしみと、主の誉とを語り告げ、
また、そのあわれみにより、
その多くのいつくしみによって、
イスラエルの家に施された
その大いなる恵みを語り告げよう。
八主は言われた、「まことに彼らはわが民、
偽りのない子らである」と。
そして主は彼らの救主となられた。

九彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、
そのみ前の使をもって彼らを救い、
その愛とあわれみとによって彼らをあがない、
いにしえの日、つねに彼らをもたげ、
彼らを携えられた。
一〇ところが彼らはそむいて
その聖なる霊を憂えさせたので、
主はひるがえって彼らの敵となり、
みずから彼らと戦われた。
一一その時、民はいにしえのモーセの日を
思い出して言った、
「その群れの牧者を、

海(うみ)から携(たずさ)えあげた者(もの)はどこにいるか。
彼(かれ)らの中(なか)に聖(せい)なる霊(れい)をおいた者(もの)はどこにいるか。
一二 栄光(えいこう)のかいなをモーセの右(みぎ)に行(い)かせ、
彼(かれ)らの前(まえ)に水(みず)を二つに分(わ)けて、
みずから、とこしえの名(な)をつくり、
一三 彼(かれ)らを導(みちび)いて、馬(うま)が野(の)を走(はし)るように、
つまずくことなく淵(ふち)を通(とお)らせた者(もの)はどこにいるか。
一四 谷(たに)にくだる家畜(かちく)のように、
主(しゅ)の霊(れい)は彼(かれ)らをいこわせられた。
このように、あなたはおのれの民(たみ)を導(みちび)いて
みずから栄光(えいこう)の名(な)をつくられた」。
一五 どうか、天(てん)から見(み)おろし、

その聖(せい)なる栄光(えいこう)あるすみかからごらんください。
あなたの熱心(ねっしん)と、大能(たいのう)とはどこにありますか。
あなたのせつなる同情(どうじょう)とあわれみとは
おさえられて、わたしにあらわれません。
一六たといアブラハムがわれわれを知(し)らず、
イスラエルがわれわれを認(みと)めなくても、
あなたはわれわれの父(ちち)です。
主(しゅ)よ、あなたはわれわれの父(ちち)、
いにしえからあなたの名(な)は
われわれのあながい主(ぬし)です。
一七主(しゅ)よ、なぜ、われわれをあなたの道(みち)から離(はな)れ迷(まよ)わせ、
われわれの心(こころ)をかたくなにして、

あなたを恐れないようにされるのですか。
どうぞ、あなたのしもべらのために、
あなたの嗣業である部族らのために、
お帰りください。
一八あなたの聖なる民が、
あなたの聖所を獲て間もないのに、
われわれのあだは、それを踏みにじりました。
一九われわれはあなたによって、
いにしえから治められない者のようになり、
あなたの名をもって、
となえられない者のようになりました。

第六四章

一どうか、あなたが天を裂いて下り、

あなたの前に山々が震い動くように。
二 火が柴木を燃やし、
火が水を沸かすときのごとく下られるように。
そして、み名をあなたのあだにあらわし、
もろもろの国をあなたの前に
震えおののかせられるように。
三 あなたは、われわれが期待しなかった恐るべき事を
なされた時に下られたので、山々は震い動いた。
四 いにしえからこのかた、
あなたのほか神を待ち望む者に、
このような事を行われた神を聞いたことはなく、
耳に入れたこともなく、目に見たこともない。

五あなたは喜んで義を行い、
あなたの道にあって、
あなたを記念する者を迎えられる。
見よ、あなたは怒られた、われわれは罪を犯した。
われわれは久しく罪のうちにあった。
われわれは救われるであろうか。
六われわれはみな汚れた人のようになり、
われわれの正しい行いは、
ことごとく汚れた衣のようである。
われわれはみな木の葉のように枯れ、
われわれの不義は風のようにわれわれを吹き去る。
七あなたの名を呼ぶ者はなく、

みずから励(はげ)んで、あなたによりすがる者(もの)はない。
あなたはみ顔(かお)を隠(かく)して、われわれを顧(かえり)みられず、
われわれをおのれの不義(ふぎ)の手(て)に渡(わた)された。
八されど主(しゅ)よ、あなたはわれわれの父(ちち)です。
われわれは粘土(ねんど)であって、あなたは陶器師(とうきし)です。
われわれはみな、み手(て)のわざです。
九主(しゅ)よ、ひどくお怒(いか)りにならぬように、
いつまでも不義(ふぎ)をみこころにとめられぬように。
どうぞ、われわれを顧(かえり)みてください。
われわれはみな、あなたの民(たみ)です。
一〇あなたの聖(せい)なる町々(まちまち)は荒野(あらの)となり、
シオンは荒野(あらの)となり、

エルサレムは荒(あ)れすたれた。
一一われわれの先祖(せんぞ)があなたをほめたたえた
聖(せい)なる麗(うるわ)しいわれわれの宮(みや)は火(ひ)で焼(や)かれ、
われわれが慕(した)った所(ところ)はことごとく荒(あ)れはてた。
一二主(しゅ)よ、これらの事(こと)があっても
なお、あなたはみずからをおさえ、
黙(もく)して、われわれをいたく苦(くる)しめられるのですか。

第六五章

一わたしはわたしを求(もと)めなかった者(もの)に
問(と)われることを喜(よろこ)び、
わたしを尋(たず)ねなかった者(もの)に
見(み)いだされることを喜(よろこ)んだ。

わたしはわが名を呼ばなかった国民に言った、
「わたしはここにいる、わたしはここにいる」と。
二よからぬ道に歩み、
自分の思いに従うそむける民に、
わたしはひねもす手を伸べて招いた。
三この民はまのあたり常にわたしを怒らせ、
園の中で犠牲をささげ、
かわらの上で香をたき、
四墓場にすわり、ひそかな所にやどり、
豚の肉を食らい、
憎むべき物の、あつものをその器に盛って、
五言う、「あなたはそこに立って、

わたしに近づいてはならない。
わたしはあなたと区別されたものだから」と。
これらはわが鼻の煙、ひねもす燃える火である。
六見よ、この事はわが前にしるされた、
「わたしは黙っていないで報い返す。
そうだ、わたしは彼らのふところに、
七彼らの不義と、彼らの先祖たちの不義とを
共に報い返す。
彼らが山の上で香をたき、
丘の上でわたしをそしったゆえ、
わたしは彼らのさきのわざを量って、
そのふところに返す」と主は言われる。

八主はこう言われる、
「人がぶどうのふさの中に、
ぶどうのしるのあるのを見るならば、
『それを破るな、その中に祝福があるから』と言う。
そのようにわたしは、わがしもべらのために行って、
ことごとくは滅ぼさない。
九わたしはヤコブから子孫をいだし、
ユダからわが山々を受けつぐべき者をいだす。
わたしが選んだ者はこれを受けつぎ、
わがしもべらはそこに住む。
一〇シャロンは羊の群れの牧場となり、
アコルの谷は牛の群れの伏す所となって、

わたしを尋ね求めたわが民のものとなる。
一一しかし主を捨て、
わが聖なる山を忘れ、
机を禍福の神に供え、
混ぜ合わせた酒を盛って
運命の神にささげるあなたがたよ、
一二わたしは、あなたがたを
つるぎに渡すことに定めた。
あなたがたは皆かがんでほふられる。
あなたがたはわたしが呼んだときに答えず、
わたしが語ったときに聞かず、
わたしの目に悪い事をおこない、

わたしの好まなかった事を選んだからだ」。
一三それゆえ、主なる神はこう言われる、
「見よ、わがしもべたちは食べる、
しかし、あなたがたは飢える。
見よ、わがしもべたちは飲む、
しかし、あなたがたはかわく。
見よ、わがしもべたちは喜ぶ、
しかし、あなたがたは恥じる。
一四見よ、わがしもべたちは心の楽しみによって歌う、
しかし、あなたがたは心の苦しみによって叫び、
たましいの悩みによって泣き叫ぶ。
一五あなたがたの残す名は

わが選んだ者には、のろいの文句となり、
主なる神はあなたがたを殺される。
しかし、おのれのしもべたちを、
ほかの名をもって呼ばれる。
一六それゆえ、地にあって
おのれのために祝福を求める者は、
真実の神によっておのれの祝福を求め、
地にあって誓う者は、真実の神をさして誓う。
さきの悩みは忘れられて、とわが目から隠れうせるからである。
一七見よ、わたしは新しい天と、新しい地とを創造する。
さきの事はおぼえられることなく、
心に思い起すことはない。

一八しかし、あなたがたはわたしの創造するものにより、
とこしえに楽しみ、喜びを得よ。
見よ、わたしはエルサレムを造って喜びとし、
その民を楽しみとする。
一九わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。
泣く声と叫ぶ声は再びその中に聞えることはない。
二〇わずか数日で死ぬみどりごと、
おのが命の日を満たさない老人とは、
もはやその中にいない。
百歳で死ぬ者も、なお若い者とせられ、
百歳で死ぬ者は、のろわれた罪びととされる。
二一彼らは家を建てて、それに住み、

ぶどう畑を作って、その実を食べる。
二二彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、
彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。
わが民の命は、木の命のようになり、
わが選んだ者は、
その手のわざをながく楽しむからである。
二三彼らの勤労はむだでなく、
その生むところの子らは災にかからない。
彼らは主に祝福された者のすえであって、
その子らも彼らと共におるからである。
二四彼らが呼ばないさきに、わたしは答え、
彼らがなお語っているときに、わたしは聞く。

二五おおかみと小羊とは共に食らい、
ししは牛のようにわらを食らい、
へびはちりを食物とする。
彼らはわが聖なる山のどこでもそこなうことなく、
やぶることはない」と主は言われる。

第六六章

一主はこう言われる、
「天はわが位、地はわが足台である。
あなたがたはわたしのためにどんな家を建てようとするのか。
またどんな所がわが休み所となるのか」。
二主は言われる、
「わが手はすべてこれらの物を造った。

これらの物はことごとくわたしのものである。
しかし、わたしが顧みる人はこれである。
すなわち、へりくだって心悔い、
わが言葉に恐れおののく者である。
三牛をほふる者は、また人を殺す者、
小羊を犠牲とする者は、また犬をくびり殺す者、
供え物をささげる者は、また豚の血をささげる者、
乳香を記念としてささげる者は、
また偶像をほめる者である。
これはおのが道を選び、
その心は憎むべきものを楽しむ。
四わたしもまた彼らのために悩みを選び、

彼らの恐れるところのものを彼らに臨ませる。
これは、わたしが呼んだときに答える者なく、
わたしが語ったときに聞くことをせず、
わたしの目に悪い事を行い、
わたしの好まなかった事を選んだからである」。
五あなたがた、主の言葉に恐れおののく者よ、
主の言葉を聞け、
「あなたがたの兄弟たちはあなたがたを憎み、
あなたがたをわが名のために追い出して言った、
『願わくは主がその栄光をあらわして
われわれにあなたがたの喜びを見させよ』と。
しかし彼らは恥を受ける。

六 聞けよ、町から起る騒ぎを。
宮から聞える声を。
主がその敵に報復される声を。
七 シオンは産みの苦しみをなす前に産み、
その苦しみの来ない前に男子を産んだ。
八 だれがこのような事を聞いたか、
だれがこのような事どもを見たか。
一つの国は一日の苦しみで生れるだろうか。
一つの国民はひと時に生れるだろうか。
しかし、シオンは産みの苦しみをするやいなや
その子らを産んだ。
九 わたしが出産に臨ませて

産(う)ませないことがあろうか」と
主(しゅ)は言(い)われる。
「わたしは産(う)ませる者(もの)なのに
胎(たい)をとざすであろうか」と
あなたの神(かみ)は言(い)われる。
一〇「すべてエルサレムを愛(あい)する者(もの)よ、
彼女(かのじょ)と共(とも)に喜(よろこ)べ、彼女(かのじょ)のゆえに楽(たの)しめ。
すべて彼女(かのじょ)のために悲(かな)しむ者(もの)よ、
彼女(かのじょ)と共(とも)に喜(よろこ)び楽(たの)しめ。
一一あなたがたは慰(なぐさ)めを与(あた)えるエルサレムの乳(ち)ぶさから
乳(ちち)を吸(す)って飽(あ)くことができ、
またその豊(ゆた)かな栄(さか)えから

飲んで楽しむことができるからだ」。
一二主はこう言われる、
「見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、
みなぎる流れのように、もろもろの国の富を与える。
あなたがたは乳を飲み、腰に負われ、
ひざの上であやされる。
一三母のその子を慰めるように、
わたしもあなたがたを慰める。
あなたがたはエルサレムで慰めを得る。
一四あなたがたは見て、心喜び、
あなたがたの骨は若草のように栄える。
主の手はそのしもべらと共にあり、

その憤りはその敵にむかっていることを知る。
一五見よ、主は火の中にあらわれて来られる。
その車はつむじ風のようだ。
激しい怒りをもってその憤りをもらし、
火の炎をもって責められる。
一六主は火をもって、またつるぎをもって、
すべての人にさばきを行われる。
主に殺される者は多い」。
一七「みずからを聖別し、みずからを清めて園に行き、その中にあるも
のに従い、豚の肉、憎むべき物およびねずみを食う者はみな共に絶えう
せる」と主は言われる。
一八「わたしは彼らのわざと、彼らの思いとを知っている。わたしは来て、

すべての国民と、もろもろのやからとを集める。彼らは来て、わが栄光を
見る。一九わたしは彼らの中に一つのしるしを立てて、のがれた者をもろ
もろの国、すなわちタルシシ、よく弓をひくプトおよびルデ、トバル、ヤワ
ン、またわが名声を聞かず、わが栄光を見ない遠くの海沿いの国々につか
わす。彼らはわが栄光をもろもろの国民の中に伝える。二〇彼らはイスラ
エルの子らが清い器に供え物を盛って主の宮に携えて来るように、あな
たがたの兄弟をことごとくもろもろの国の中から馬、車、かご、騾馬、
らくだに乗せて、わが聖なる山エルサレムにこさせ、主の供え物とする」と
主は言われる。二一「わたしはまた彼らの中から人を選んで祭司とし、レ
ビびととする」と主は言われる。

二二「わたしが造ろうとする新しい天と、新しい地が
わたしの前にながくとどまるように、

あなたの子孫と、あなたの名は
ながくとどまる」と主は言われる。
二三「新月ごとに、安息日ごとに、
すべての人はわが前に来て礼拝する」と
主は言われる。
二四「彼らは出て、わたしにそむいた人々のしかばねを見る。そのうじは
死なず、その火は消えることがない。彼らはすべての人に忌みきらわれる」。

エレミヤ書

第一章 一 ベニヤミンの地アナトテの祭司のひとりである、ヒルキヤの子エ
レミヤの言葉。二 アモンの子、ユダの王ヨシヤの時、すなわちその治世の十
三年に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。三 その言葉はまたヨシヤの子、ユ
ダの王エホヤキムの時にも臨んで、ヨシヤの子、ユダの王ゼデキヤの十一
年の終り、すなわちその年の五月にエルサレムの民が捕え移された時にま
で及んだ。
四 主の言葉がわたしに臨んで言う、
五 「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、
あなたを知り、
あなたがまだ生れないさきに、

あなたを聖別し、
あなたを立てて万国の預言者とした」。
六その時わたしは言った、「ああ、主なる神よ、わたしはただ若者にすぎず、
どのように語ってよいか知りません」。七しかし主はわたしに言われた、
「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。
だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、
あなたに命じることをみな語らなければならない。
八彼らを恐れてはならない、
わたしがあなたと共にいて、
あなたを救うからである」と主は仰せられる。
九そして主はみ手を伸べて、わたしの口につけ、主はわたしに言われた、
「見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた。

一〇見よ、わたしはきょう、
あなたを万民の上と、万国の上に立て、
あなたに、あるいは抜き、あるいはこわし、
あるいは滅ぼし、あるいは倒し、
あるいは建て、あるいは植えさせる」。
一一主の言葉がまたわたしに臨んで言う、「エレミヤよ、あなたは何を見る
か」。わたしは答えた、「あめんどうの枝を見ます」。一二主はわたしに言わ
れた、「あなたの見たとおりだ。わたしは自分の言葉を行おうとして見張っ
ているのだ」。
一三主の言葉がふたたびわたしに臨んで言う、「あなたは何を見るか」。わ
たしは答えた、「煮え立っているなべを見ます。北からこちらに向かってい
ます」。一四主はわたしに言われた、「災が北から起って、この地に住む

すべての者の上に臨む」。一五主は言われる、「見よ、わたしは北の国々の
すべての民を呼ぶ。彼らは来て、エルサレムの門の入口と、周囲のすべて
の城壁、およびユダのすべての町々に向かって、おのおのその座を設け
る。一六わたしは、彼らがわたしを捨てて、すべての悪事を行ったゆえに、
わたしのさばきを彼らに告げる。彼らは他の神々に香をたき、自分の手で
作った物を拝したのである。一七しかしあなたは腰に帯して立ち、わたし
が命じるすべての事を彼らに告げよ。彼らを恐れてはならない。さもない
と、わたしは彼らの前であなたをあわてさせる。一八見よ、わたしはきょ
う、この全国と、ユダの王と、そのつかさと、その祭司と、その地の民の
前に、あなたを堅き城、鉄の柱、青銅の城壁とする。一九彼らはあなた
と戦うが、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、あ
なたを救うからである」と主は言われる。

第二章 一 主の言葉がわたしに臨んで言う、二「行って、エルサレムに住む
者の耳に告げよ、主はこう言われる、
わたしはあなたの若い時の純情、
花嫁の時の愛、
荒野なる、種まかぬ地で
わたしに従ったことを覚えている。
三 イスラエルは主のために聖別されたもの、
その刈入れの初穂である。
すべてこれを食べる者は罪せられ、
災にあう」と主は言われる。
四 ヤコブの家とイスラエルの家のすべてのやからよ、主の言葉を聞け。 五
主はこう言われる、

「あなたがたの先祖は、
わたしになんの悪い事があるのを見て、
わたしから遠ざかり、
むなしいものに従って、むなしくなったのか。
六彼らは言わなかった、
『われわれをエジプトの地より導き出し、
荒野なる、穴の多い荒れた地、
かわいた濃い暗黒の地、
人の通らない、人の住まない地を
通らせた主はどこにおられるか』と。
七わたしはあなたがたを導いて豊かな地に入れ、
その実と良い物を食べさせた。

しかしあなたがたはここにはいって、
わたしの地を汚し、
わたしの嗣業を憎むべきものとした。
八祭司たちは、
『主はどこにおられるか』と言わなかった。
律法を扱う者たちはわたしを知らず、
つかさたちはわたしにそむき、
預言者たちはバアルによって預言し、
益なき者に従って行った。

九それゆえ、わたしはなお、あなたがたと争う、
またあなたがたの子孫と争う」と主は言われる。
一〇「あなたがたはクプロの島々に渡ってみよ、
また人をケダルにつかわして、

このようなことがかつてあったかを
つまびらかに、しらべてみよ。
一一その神(かみ)を神(かみ)ではない者(もの)に取(と)り替(か)えた国(くに)があろうか。
ところが、わたしの民(たみ)はその栄光(えいこう)を
益(えき)なきものと取(と)り替(か)えた。
一二天(てん)よ、この事(こと)を知(し)って驚(おどろ)け、
おののけ、いたく恐(おそ)れよ」と主(しゅ)は言(い)われる。
一三「それは、わたしの民(たみ)が
二つの悪(あ)しき事(こと)を行(おこな)ったからである。
すなわち生(い)ける水(みず)の源(みなもと)であるわたしを捨(す)てて、
自分(じぶん)で水(みず)ためを掘(ほ)った。
それは、こわれた水(みず)ためで、
水(みず)を入(い)れておくことのできないものだ。

一四イスラエルは奴隷であるか、
家に生れたしもべであるか。
それならなぜ捕われの身となったのか。
一五ししは彼に向かってほえ、
その声を高くあげて、彼の地を荒した。
その町々は滅びて住む人もない。
一六メンピスとタパネスの人々もまた、
あなたのかしらの冠を砕いた。
一七あなたの神、主があなたを道に導かれた時、
あなたは主を捨てたので、
この事があなたに及んだのではないか。
一八あなたがナイルの水を飲もうとして、

エジプトへ行くのは何のためか。
またユフラテの水を飲もうとして、
アッスリヤへ行くのは何のためか。
一九あなたの悪事はあなたを懲しめ、
あなたの背信はあなたを責める。
あなたが、あなたの神、主を捨てることの
悪しくかつ苦いことであるのを見て知るがよい。
わたしを恐れることがあなたのうちにないのだ」と
万軍の神、主は言われる。
二〇「あなたは久しい以前に自分のくびきを折り、
自分のなわめを断ち切って、
『わたしは仕えることをしない』と言った。

そして、すべての高い丘の上と、
すべての青木の下で、
遊女のように身をかがめた。
二一わたしはあなたを、まったく良い種の
すぐれたぶどうの木として植えたのに、
どうしてあなたは変って、
悪い野ぶどうの木となったのか。
二二たといソーダをもって自ら洗い、
また多くの灰汁を用いても、
あなたの悪の汚れは、なおわたしの前にある」と
主なる神は言われる。
二三「どうしてあなたは、『わたしは汚れていない、

バアルに従(したが)わなかった』と言(い)うことができようか。
谷(たに)の中(なか)でのあなたの行(おこな)いを見(み)るがよい。
あなたのしたことを知(し)るがよい。
あなたは御(ぎょ)しがたい若(わか)いらくだであって、
その道(みち)を行(ゆ)きつもどりつする。
二四あなたは荒野(あらの)に慣(な)れた野(の)の雌(め)ろばである、
その欲情(よくじょう)のために風(かぜ)にあえぐ。
その欲情(よくじょう)をだれがとどめることができようか。
すべてこれを尋(たず)ねる者(もの)は苦労(くろう)するにおよばない、
その月(つき)であればこれに会(あ)うことができる。
二五あなたの足(あし)が、はだしにならないように、
のどが、かわかないようにせよ。

ところが、あなたは言った、『それはだめだ、
わたしは異なる国の者を愛して、
それに従って行こう』と。
二六盗びとが捕えられて、はずかしめを受けるように、
イスラエルの家は、はずかしめを受ける。
彼らはその王も、そのつかさも、
その祭司も、その預言者もみなそのとおりである。
二七彼らは木に向かって、
『あなたはわたしの父です』と言い、
また石に向かって、
『あなたはわたしを生んでくださった』と言う。
彼らは背をわたしに向けて、

その顔をわたしに向けない。
しかし彼らが災にあう時は、
『立って、われわれを救いたまえ』と言う。
二八あなたが自分のために造った神々は
どこにいるのか。
あなたが災にあう時、
もし彼らがあなたを救えるなら、
立ってもらうがよい。
ユダよ、あなたの神々は、
あなたの町の数ほど多いからである。
二九あなたがたは、なぜわたしと争うのか。
あなたがたは皆わたしにそむいている」と

主は言われる。
三〇「わたしがあなたがたの子どもたちを
打ったのはむだであった。
彼らは戒めを受けず、
あなたがたのつるぎは、
たけりたつししのように、預言者たちを滅ぼした。
三一あなたがたこの世代の人よ、
主の言葉を聞け。
わたしはイスラエルにとって、
荒野であったであろうか。
暗黒の地であったであろうか。
それならなぜ、わたしの民は『われわれは自由だ、
もはやあなたのところへは行かない』と言うのか。

三二おとめはその飾り物を忘れることができようか。
花嫁はその帯を忘れることができようか。
ところが、わたしの民の、
わたしを忘れた日は数えがたい。
三三あなたは恋人を尋ねて、
いかにも巧みにその方に足を向ける。
それゆえ悪い女さえ、あなたの道を学んだ。
三四また、あなたの着物のすそには
罪のない貧しい人の命の血がついている。
あなたは彼らが押し入るのを見たのではない。
しかも、すべてこれらの事にもかかわらず、
三五あなたは言う、『わたしは罪がない。彼の怒りは、

決してわたしに臨むことがない』と。
あなたが『わたしは罪を犯さなかった』と
言うことによって、わたしはあなたをさばく。
三六あなたはなぜ軽々しくさまよって、
その道を変えようとするのか。
あなたはアッスリヤに、はずかしめを受けたように、
エジプトにもまた、はずかしめを受ける。
三七あなたはまた両手を頭に置いて、そこから出て来る。
主があなたの頼みとする者どもを捨てられたので、
あなたは彼らによって栄えることがないからだ。

第三章

一もし人がその妻を離婚し、

女(おんな)が彼(かれ)のもとを去(さ)って、他人(たにん)の妻(つま)となるなら、
その人(ひと)はふたたび彼女(かのじょ)に帰(かえ)るであろうか。
その地(ち)は大(おお)いに汚(けが)れないであろうか。
あなたは多(おお)くの恋人(こいびと)と姦淫(かんいん)を行(おこな)った。
しかもわたしに帰(かえ)ろうというのか」と主(しゅ)は言(い)われる。
二「目(め)をあげてもろもろの裸(はだか)の山(やま)を見(み)よ、
姦淫(かんいん)を行(おこな)わなかった所(ところ)がどこにあるか。
荒野(あらの)にいるアラビヤびとがするように、
あなたは道(みち)のかたわらに座(ざ)して恋人(こいびと)を待(ま)った。
あなたは姦淫(かんいん)の悪事(あくじ)をもって、この地(ち)を汚(けが)した。
三それゆえ雨(あめ)はとどめられ、春(はる)の雨(あめ)は降(ふ)らなかった。
しかもあなたには遊女(ゆうじょ)の額(ひたい)があり、

少しも恥じようとはしない。
四今あなたは、わたしを呼んで言ったではないか、
『わが父よ、あなたはわたしの若い時の友です。
五永久に怒られるのですか、
終りまで憤られるのですか』と。
見よ、あなたはこう言ったけれども、
なしうるかぎりのもろもろの悪を行った」。
六ヨシヤ王の時、主はまたわたしに言われた、「あなたは、かの背信のイ
スラエルがしたことを見たか。彼女はすべての高い丘にのぼり、すべての
青木の下に行って、そこで姦淫を行った。七わたしは、彼女がこのすべて
を行った後、わたしの所に帰るであろうと思ったが、帰ってこなかった。
その不信の姉妹ユダはこれを見た。八わたしが背信のイスラエルを、その

すべての姦淫のゆえに、離縁状を与えて出したのをユダは見た。しかも
その不信の姉妹ユダは恐れず、自分も行って姦淫を行った。九彼女にとっ
て姦淫は軽いことであったので、石と木とに姦淫を行って、この地を汚し
た。一〇このすべての事があっても、なおその不信の姉妹ユダは真心をもっ
てわたしに帰らない、ただ偽っているだけだ」と主は言われる。
一一主はまたわたしに言われた、「背信のイスラエルは不信のユダよりも
自分の罪の少ないことを示した。一二あなたは行って北にむかい、この言葉
をのべて言うがよい、

『主は言われる、背信のイスラエルよ、帰れ。
わたしは怒りの顔をあなたがたに向けない、
わたしはいつくしみ深い者である。
いつまでも怒ることはしないと、主は言われる。

一三ただあなたは自分の罪を認め、
あなたの神、主にそむいて
すべての青木の下で異なる神々に
あなたの愛を惜しまず与えたこと、
わたしの声に聞き従わなかったことを
言いあらわせと、主は言われる。
一四主は言われる、背信の子らよ、帰れ。
わたしはあなたがたの夫だからである。
町からひとり、氏族からふたりを取って、
あなたがたをシオンへ連れて行こう。
一五わたしは自分の心にかなう牧者たちをあなたがたに与える。彼らは
知識と悟りとをもってあなたがたを養う。一六主は言われる、あなたがた

が地に増して多くなるとき、その日には、人々はかさねて「主の契約の箱」
と言わず、これを思い出さず、これを覚えず、これを尋ねず、これを作らな
い。一七そのときエルサレムは主のみ位ととなえられ、万国の民はここに
集まる。すなわち主の名のもとにエルサレムに集まり、かさねて、かたく
なに自分の悪い心に従うことはしない。一八その日には、ユダの家はイ
スラエルの家と一緒になり、北の地から出て、わたしがあなたがたの先祖
たちに嗣業として与えた地に共に来る。

一九どのようにして、
あなたをわたしの子どもたちのうちに置き、
万国のうちで最も美しい嗣業である良い地を
あなたに与えようかと、わたしは思っていた。
わたしはまた、あなたがわたしを「わが父」と呼び、

わたしに従って離れることはないと思っていた。
二〇イスラエルの家よ、
背信の妻が夫のもとを去るように、
たしかに、あなたがたはわたしにそむいた』と
主は言われる」。
二一裸の山の上に声が聞える、
イスラエルの民が悲しみ祈るのである。
彼らが曲った道に歩み、その神、主を忘れたからだ。
二二「背信の子どもたちよ、帰れ。
わたしはあなたがたの背信をいやす」。
「見よ、われわれはあなたのもとに帰ります。
あなたはわれわれの神、主であらせられます。

二三まことに、もろもろの丘は迷いであり、
山の上の騒ぎも同じです。
まことに、イスラエルの救は
われわれの神、主にあるのです。
二四しかし、われわれの幼少の時から、恥ずべきことが、われわれの先祖
のほねおって得たもの、すなわちその羊、その牛、およびそのむすこ、娘
たちをことごとくのみ尽しました。二五われわれは恥の中に伏し、はずか
しめにおおわれています。それはわれわれと先祖とが、われわれの幼少の
時から今日まで、われわれの神、主に罪を犯し、われわれの神、主の声に
従わなかったからです」。

第四章

一主は言われる、「イスラエルよ、

もし、あなたが帰るならば、
わたしのもとに帰らなければならない。
もし、あなたが憎むべき者を
わたしの前から取り除いて、ためらうことなく、
二 また真実と正義と正直とをもって、
『主は生きておられる』と誓うならば、
万国の民は彼によって祝福を受け、
彼によって誇る」。
三 主はユダの人々とエルサレムに住む人々に
こう言われる、
「あなたがたの新田を耕せ、
いばらの中に種をまくな。

四ユダの人々とエルサレムに住む人々よ、
あなたがたは自ら割礼を行って、
主に属するものとなり、
自分の心の前の皮を取り去れ。
さもないと、あなたがたの悪しき行いのために
わたしの怒りが火のように発して燃え、
これを消す者はない」。
五ユダに告げ、エルサレムに示して言え、
「国中にラッパを吹き、大声に呼ばわって言え、
『集まれ、われわれは堅固な町々へ行こう』と。
六シオンの方を示す旗を立てよ。
避難せよ、とどまってはならない、

わたしが北から災と
大いなる破滅をこさせるからだ。
七ししはその森から出てのぼり、
国々を滅ぼす者は進んできた。
彼はあなたの国を荒そうとして、
すでにその所から出てきた。
あなたの町々は滅ぼされて、
住む者もなくなる。
八このために、あなたがたは荒布を身にまとって、
悲しみ嘆け。
主の激しい怒りが、
まだわれわれを離れないからだ」。

九主は言われる、「その日、王と君たちとはその心を失い、祭司は驚
き、預言者は怪しむ」。一〇そこでわたしは言った、「ああ主なる神よ、まこ
とにあなたはこの民とエルサレムとをまったく欺かれました。『あなたが
たは安らかになる』と言われましたが、つるぎが命にまでも及びました」。
一一その時この民とエルサレムとはこう告げられる、「熱い風が荒野の裸
の山からわたしの民の娘のほうに吹いてくる。これはあおぎ分けるため
ではなく、清めるためでもない。一二これよりもなお激しい風がわたしの
ために吹く。いまわたしは彼らにさばきを告げる」。
一三見よ、彼は雲のように上ってくる。
その戦車はつむじ風のよう、
その馬はわしの飛ぶよりも速い。
ああ、われわれはわざわいだ、

われわれは滅ぼされる。
一四エルサレムよ、あなたの心の悪を洗い清めよ、
そうするならば救われる。
悪しき思いはいつまで
あなたのうちにとどまるのか。
一五ダンから告げる声がある、
エフライムの山から災を知らせている。
一六国々の民に彼の来ることを告げ、
またエルサレムに知らせよ。
「攻めかこむ者が遠くの国から来て、
ユダの町々にむかってその声をあげる。
一七彼らは畑を守る者のようにこれを攻めかこむ。

それはわたしにそむいたからだと、主(しゅ)は言(い)われる。
一八あなたの道(みち)とその行(おこな)いとが、
あなたの身(み)にこれを招(まね)いたのだ。
これはあなたの悪(あく)の結果(けっか)で、まことに苦(にが)く、
あなたの心(こころ)をつらぬく」。
一九ああ、わがはらわたよ、わがはらわたよ、
わたしは苦(くる)しみにもだえる。
ああ、わが心臓(しんぞう)の壁(かべ)よ、
わたしの心臓(しんぞう)は、はげしく鼓動(こどう)する。
わたしは沈黙(ちんもく)を守(まも)ることができない、
ラッパの声(こえ)と、戦(たたか)いの叫(さけ)びを聞(き)くからである。
二〇破壊(はかい)に次(つ)ぐに破壊(はかい)があり、

全地は荒され、
わたしの天幕はにわかに破られ、
わたしの幕はたちまち破られた。
二一いつまでわたしは旗を見、
またラッパの声を聞かなければならないのか。
二二「わたしの民は愚かであって、わたしを知らない。
彼らは愚鈍な子どもらで、悟ることがない。
彼らは悪を行うのにさといけれども、
善を行うことを知らない」。
二三わたしは地を見たが、
それは形がなく、またむなしかった。
天をあおいだが、そこには光がなかった。

二四わたしは山を見たが、みな震え、
もろもろの丘は動いていた。
二五わたしは見たが、人はひとりもおらず、
空の鳥はみな飛び去っていた。
二六わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、
そのすべての町は、主の前に、
その激しい怒りの前に、破壊されていた。
二七それは主がこう言われたからだ、「全地は荒れ地となる。しかしわ
たしはことごとくはこれを滅ぼさない。
二八このために地は悲しみ、上なる天は暗くなる。
わたしがすでにこれを言い、これを定めたからだ。
わたしは悔いない、またそれをする事をやめない」。

二九どの町(まち)の人(ひと)も、騎兵(きへい)と射手(いて)の叫(さけ)びのために
逃(に)げて森(もり)に入(はい)り、岩(いわ)に上(のぼ)る。
町(まち)はみな捨(す)てられ、そこに住(す)む人(ひと)はない。
三〇ああ、荒(あら)された女(おんな)よ、あなたが紅(べに)の着物(きもの)をき、
金(きん)の飾(かざ)りで身(み)をよそおい、
目(め)を塗(ぬ)って大(おお)きくするのは、なんのためか。
あなたが美(うつく)しくしても、むだである。
あなたの恋人(こいびと)らはあなたを卑(いや)しめ、
あなたの命(いのち)を求(もと)めている。
三一わたしは子(こ)を産(う)む女(おんな)のような声(こえ)、
ういごを産(う)む女(おんな)の苦(くる)しむような声(こえ)を聞(き)いた。
シオンの娘(むすめ)のあえぐ叫(さけ)びである。

両手を伸べて彼女は言う、「わたしはわざわいだ、
わたしを殺す者らの前にわたしは気が遠くなる」と。

第五章

一エルサレムのちまたを行きめぐり、
見て、知るがよい。
その広場を尋ねて、公平を行い、
真実を求める者が、ひとりでもあるか捜してみよ。
あれば、わたしはエルサレムをゆるす。
二彼らは、「主は生きておられる」と言うけれども、
実は、偽って誓うのだ。
三主よ、あなたの目は、
真実を顧みられるではありませんか。

あなたが彼らを打たれても、痛みを覚えず、
彼らを滅ぼされても、懲しめを受けることを拒み、
その顔を岩よりも堅くして、
悔い改めることを拒みました。
四それで、わたしは言った、
「これらはただ貧しい愚かな人々で、
主の道と、神のおきてを知りません。
五わたしは偉い人たちの所へ行って、彼らに語ります。
彼らは主の道を知り、神のおきてを知っています」。
ところが、彼らも皆おなじように、くびきを折り、
なわめを断っていた。
六それゆえ林から、ししが出てきて彼らを殺し、

荒野(あらの)から、おおかみが出(で)てきて彼(かれ)らを滅(ほろ)ぼす。
ひょうは彼(かれ)らの町々(まちまち)をねらっている。
そこから出(で)る者(もの)はみな裂(さ)かれる。
彼(かれ)らの罪(つみ)が多(おお)く、
その背信(はいしん)がはなはだしいからである。
七「わたしはどうしてあなたを、
ゆるすことができようか。
あなたの子(こ)どもらは、わたしを捨(す)てさり、
神(かみ)でもないものをさして誓(ちか)った。
わたしが彼(かれ)らを満(み)ち足(た)らせた時(とき)、
彼(かれ)らは姦淫(かんいん)を行(おこな)い、遊女(ゆうじょ)の家(いえ)に群(む)れ集(あつ)まった。
八彼(かれ)らは肥(こ)え太(ふと)った丈夫(じょうぶ)な雄馬(おうま)のように、

おのおの、いなないて隣(となり)の妻(つま)を慕(した)う。
九わたしはこれらの事(こと)のために
彼(かれ)らを罰(ばっ)しないでいられようか。
このような国民(こくみん)にあだを返(かえ)さないであろうか」と
主(しゅ)は言(い)われる。
一〇「あなたがたはユダのぶどうの並(な)み木(き)の間(あいだ)を、
のぼって行(い)って、滅(ほろ)ぼせ、
ただ、ことごとく滅(ほろ)ぼしてはならない。
その枝(えだ)を切(き)り除(のぞ)け、
主(しゅ)のものではないからである。
一一イスラエルの家(いえ)とユダの家(いえ)とは
わたしにまったく不信(ふしん)であった」と主(しゅ)は言(い)われる。

一二「彼らは主について偽り語って言った、
『主は何事もなされない、
災はわれわれに来ない、
またつるぎや、ききんを見ることはない。
一三預言者らは風となり、彼らのうちに言葉はない。
彼らはこのようになる』と」。
一四それゆえ万軍の神、主はこう言われる、
「彼らがこの言葉を語ったので、
見よ、わたしはあなたの口にある
わたしの言葉を火とし、この民をたきぎとする。
火は彼らを焼き尽す」。
一五主は言われる、「イスラエルの家よ、

見よ、わたしは遠い国の民を
あなたがたのところに攻めこさせる。
その国は長く続く国、古い国で、
あなたがたはその国の言葉を知らず、
人々の語るのを悟ることもできない。
一六その箙は開いた墓のようであり、
彼らはみな勇士である。
一七彼らはあなたが刈り入れた物と、
あなたの糧食とを食い尽し、
あなたのむすこ娘を食い尽し、
あなたの羊と牛を食い尽し、
あなたのぶどうの木といちじくの木を食い尽し、

またつるぎをもって、あなたが頼みとする
堅固な町々を滅ぼす」。
一八主は言われる、「しかしその時でも、わたしはことごとくはあなたを
滅ぼさない。一九あなたの民が、『どうしてわれわれの神、主はこれらのす
べての事をわれわれになされたのか』と言うならば、あなたは彼らに答え
なければならない、『あなたがたがわたしを捨てて、自分の地で異なる神々
に仕えたように、あなたがたは自分のものでない地で異邦の人に仕えるよ
うになる』と」。

二〇これをヤコブの家にのべ、
またユダに示して言え、
二一「愚かで、悟りもなく、
目があっても見えず、

耳があっても聞えない民よ、これを聞け。
二二主は言われる、あなたがたはわたしを恐れないのか、
わたしの前におののかないのか。
わたしは砂を置いて海の境とし、
これを永遠の限界として、
越えることができないようにした。
波はさかまいても、勝つことはできない、
鳴りわたっても、これを越えることはできない。
二三ところが、この民には強情な、そむく心があり、
彼らはわき道にそれて、去ってしまった。
二四彼らは『われわれに雨を与え、
秋の雨と春の雨を時にしたがって降らせ、

われわれのために刈入れの時を定められた
われわれの神、主を恐れよう』と
その心のうちに言わないのだ。
二五あなたがたのとがは、これらの事をしりぞけ、
あなたがたの罪は、
良い物があなたがたに来るのをさまたげた。
二六わが民のうちには悪い者があって、
鳥をとる人のように身をかがめてうかがい、
わなを置いて人を捕える。
二七かごに鳥が満ちているように、
彼らの家は不義の宝で満ちている。
それゆえ、彼らは大いなる者、裕福な者となり、

二八 肥えて、つやがあり、
その悪しき行いには際限がない。
彼らは公正に、みなしごの訴えをさばいて、
それを助けようとはせず、
また貧しい人の訴えをさばかない。
二九 主は言われる、わたしはこのような事のために、
彼らを罰しないであろうか。
わたしはこのような民に、
あだを返さないであろうか」。
三〇 驚くべきこと、恐るべきことがこの地に起っている。
三一 預言者は偽って預言し、
祭司は自分の手によって治め、

わが民はこのようにすることを愛している。
しかしあなたがたは
その終りにはどうするつもりか。

第六章

一ベニヤミンの人々よ、
エルサレムの中から避難せよ。
テコアでラッパを吹き、
ベテハケレムに合図の火をあげよ。
北から災が臨み、大いなる滅びが来るからである。
二わたしは美しい、たおやかなシオンの娘を滅ぼす。
三牧者たちは、その群れをひきいて来て、
彼女を攻め、彼女の周囲に天幕を張る。

群(む)れはおのおのその所(ところ)で草(くさ)を食(く)う。
四「戦(たたか)いを始(はじ)め、彼女(かのじょ)を攻(せ)めよ。
立(た)て、われわれは真昼(まひる)に攻撃(こうげき)しよう」。
「わざわいなるかな、日(ひ)はや傾(かたむ)き、
夕日(ゆうひ)の影(かげ)は長(なが)くなった」。
五「立(た)て、われわれは夜(よる)の間(あいだ)に攻撃(こうげき)しよう、
そして彼女(かのじょ)のもろもろの宮殿(きゅうでん)を破壊(はかい)しよう」。
六万軍(ばんぐん)の主(しゅ)はこう言(い)われる、
「あなたがたは彼女(かのじょ)の木(き)を切(き)り倒(たお)し、
エルサレムにむかって塁(るい)を築(きず)け。
これは罰(ばっ)すべき町(まち)である、そのうちにはただ圧制(あっせい)だけがある。
七井戸(いど)に新(あたら)しい水(みず)がわくように

彼女はその悪を常にあらたに流す。
そのうちには暴虐と破滅とが聞える。
わたしの前に病と傷とが絶えない。
八エルサレムよ、戒めを受けいれよ。
さもないと、わたしはあなたから離れ、
あなたを荒れ地とし、住む人のない地とする」。
九万軍の主はこう言われる、
「ぶどうの残りを摘みとるように、
イスラエルの残りの民をのこらず摘み取れ。
ぶどうを摘みとる人のように、
あなたの手をふたたびその枝に伸ばせ」。
一〇わたしはだれに語り、だれを戒めて、聞かせようか。

見よ、彼らの耳は閉ざされて、聞くことができない。
見よ、彼らは主の言葉をあざけり、それを喜ばない。
一一それゆえ、わたしの身には主の怒りが満ち、
それを忍ぶのに、うみつかれている。
「それをちまたにいる子供らと、
集まっている若い人々とに漏らせ。
夫も妻も、老いた人も、
年のひじょうに進んだ人も捕えられ、
一二彼らの家と畑と妻とは共に他人に渡る。
わたしが手を伸ばして、
この地に住む者を撃つからである」と主は言われる。
一三「それは彼らが、小さい者から大きい者まで、

みな不正な利をむさぼり、
また預言者から祭司にいたるまで、
みな偽りを行っているからだ。
一四彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、
平安がないのに『平安、平安』と言っている。
一五彼らは憎むべきことをして、恥じたであろうか。
すこしも恥ずかしいとは思わず、
また恥じることを知らなかった。
それゆえ彼らは倒れる者と共に倒れる。
わたしが彼らを罰するとき、
彼らは倒れる」と主は言われる。
一六主はこう言われる、

「あなたがたはわかれ道(みち)に立(た)って、よく見(み)、
いにしえの道(みち)につき、
良(よ)い道(みち)がどれかを尋(たず)ねて、その道(みち)に歩(あゆ)み、
そしてあなたがたの魂(たましい)のために、安息(あんそく)を得(え)よ。
しかし彼(かれ)らは答(こた)えて、
『われわれはその道(みち)に歩(あゆ)まない』と言(い)った。
一七わたしはあなたがたの上(うえ)に見張(みはり)びとを立(た)て、
『ラッパの音(おと)に気(き)をつけよ』と言(い)った。
しかし彼(かれ)らは答(こた)えて、
『われわれは気(き)をつけることはしない』と言(い)った。
一八それゆえ国々(くにぐに)の民(たみ)よ、聞(き)け。
会衆(かいしゅう)よ、彼(かれ)らにどのようなことが起(おこ)るかを知(し)れ。

一九地（ち）よ、聞（き）け。見（み）よ、わたしはこの民（たみ）に災（わざわい）をくだす。
それは彼（かれ）らのたくらみの実（み）である。
彼（かれ）らがわたしの言葉（ことば）に気（き）をつけず、
わたしのおきてを捨（す）てたからである。
二〇シバから、わたしの所（ところ）に乳香（にゅうこう）が来（き）、
遠（とお）い国（くに）から、菖蒲（しょうぶ）が来（く）るのはなんのためか。
あなたがたの燔祭（はんさい）はわたしには喜（よろこ）ばしくなく、
あなたがたの犠牲（ぎせい）もうれしくはない。
二一それゆえ主（しゅ）はこう言（い）われる、
『見（み）よ、わたしはこの民（たみ）の前（まえ）につまずく石（いし）を置（お）く、
人々（ひとびと）は父（ちち）も子（こ）も共（とも）にそれにつまずき、
隣（とな）り人（びと）もその友（とも）も滅（ほろ）びる』」。

二二主はこう言われる、
「見よ、民が北の国から来る、
大いなる国民が地の果から興る。
二三彼らは弓とやりをとる。
彼らは残忍で、あわれみがなく、
海のような響きを立てる。
シオンの娘よ、彼らは馬に乗り、
いくさ人のように身をよろって、
あなたを攻める」。
二四われわれはそのうわさを聞いて、
手は弱り、子を産む女に臨むような
悩みと苦しみとに捕えられた。

二五 畑(はたけ)に出(で)てはならない、
また道(みち)を歩(ある)いてはならない。
敵(てき)はつるぎを持(も)ち、恐(おそ)れが四方(しほう)にあるからだ。
二六 わが民(たみ)の娘(むすめ)よ、荒布(あらぬの)を身(み)にまとい、
灰(はい)の中(なか)にまろび、
ひとり子(こ)を失(うしな)った時(とき)のように、悲(かな)しみ、いたく嘆(なげ)け。
滅(ほろ)ぼす者(もの)が、にわかにわれわれを襲(おそ)うからだ。
二七 「わたしはあなたを民(たみ)のうちに立(た)てて、
ためす者(もの)、試(こころ)みる者(もの)とした。
あなたが彼(かれ)らの道(みち)を知(し)り、
それをためすことができるようにするためである。
二八 彼(かれ)らはみな、強情(ごうじょう)な反逆者(はんぎゃくしゃ)であって、

歩きまわって人をそしる。
彼らは青銅や鉄であって、みな卑しいことを行う。
二九ふいごは激しく吹き、
鉛は火にとけて尽き、
精錬はいたずらに進む。
悪しき者がまだ除かれないからである。
三〇主が彼らを捨てられたので、
彼らは捨てられた銀と呼ばれる」。

第七章一主からエレミヤに臨んだ言葉はこうである。二「主の家の門に
立ち、その所で、この言葉をのべて言え、主を拝むために、この門をはい
るユダのすべての人よ、主の言葉を聞け。三万軍の主、イスラエルの神は
こう言われる、あなたがたの道とあなたがたの行いを改めるならば、わ

たしはあなたがたをこの所に住まわせる。四あなたがたは、『これは主の
神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ』という偽りの言葉を頼みとしてはな
らない。
五もしあなたがたが、まことに、その道と行いを改めて、互に公正を
行い、六寄留の他国人と、みなしごと、やもめをしえたげることなく、罪
のない人の血をこの所に流すことなく、また、ほかの神々に従って自
ら害をまねくことをしないならば、七わたしはあなたがたを、わたしが昔
あなたがたの先祖に与えたこの地に永遠に住まわせる。
八見よ、あなたがたは偽りの言葉を頼みとしているが、それはむだであ
る。九あなたがたは盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、
あなたがたが以前には知らなかった他の神々に従いながら、一〇わたしの
名をもって、となえられるこの家に来てわたしの前に立ち、『われわれは救

われた』と言い、しかもすべてこれら憎むべきことを行うのは、どうした
ことか。一一わたしの名をもって、となえられるこの家が、あなたがたの
目には盗賊の巣と見えるのか。わたし自身、そう見たと主は言われる。一
二わたしが初めにわたしの名を置いた場所シロへ行き、わが民イスラエル
の悪のために、わたしがその場所に対して行ったことを見よ。一三主は言
われる、今あなたがたはこれらのすべてのことを行っている。またわたし
はあなたがたに、しきりに語ったけれども、あなたがたは聞かず、あなた
がたを呼んだけれども答えなかった。一四それゆえわたしはシロに対して
行ったように、わたしの名をもって、となえられるこの家にも行う。す
なわちあなたがたが頼みとする所、わたしがあなたがたと、あなたがたの
先祖に与えたこの所に行う。一五そしてわたしは、あなたがたのすべて
の兄弟、すなわちエフライムのすべての子孫を捨てたように、わたしの前

からあなたがたをも捨てる。
一六あなたはこの民のために祈ってはならない。彼らのために嘆き、祈っ
てはならない。またわたしに、とりなしをしてはならない。わたしはあなた
の求めを聞かない。一七あなたは彼らがユダの町々と、エルサレムのちま
たでしていることを見ないのか。一八子どもらは、たきぎを集め、父たちは
火をたき、女は粉をこね、パンを造ってこれを天后に供える。また彼ら
は他の神々の前に酒を注いで、わたしを怒らせる。一九主は言われる、彼
らが怒らせるのはわたしなのか。自分たち自身ではないのか。そして自ら
うろたえている。二〇それゆえ主なる神はこう言われる、見よ、わたしの
怒りと憤りを、この所と、人と獣と、畑の木と、地の産物とに注ぐ。
怒りは燃えて消えることがない」。
二一万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、「あなたがたの犠牲に燔祭

の物を合わせて肉を食べるがよい。二二それはあなたがたの先祖をエジプト
の地から導き出した日に、わたしは燔祭と犠牲とについて彼らに語った
こともなく、また命じたこともないからである。二三ただわたしはこの戒
めを彼らに与えて言った、『わたしの声に聞きしたがいなさい。そうすれ
ば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。わた
しがあなたがたに命じるすべての道を歩んで幸を得なさい』と。二四し
かし彼らは聞き従わず、耳を傾けず、自分の悪い心の計りごとと強情
にしたがって歩み、悪くなるばかりで、よくはならなかった。二五あなたが
たの先祖がエジプトの地を出た日から今日まで、わたしはわたしのしもべ
である預言者たちを日々彼らにつかわした。二六しかし彼らはわたしに聞
かず、耳を傾けないで強情になり、先祖たちにもまさって悪を行った。
二七たといあなたが彼らにこのすべての言葉を語っても彼らは聞かない。

また彼らを呼んでもあなたに答えない。二八それゆえ、あなたはこう彼ら
に言わなければならない、『これはその神、主の声に聞き従わず、その戒
めを受けいれなかった国民である。真実はうせ、彼らの口から絶えた。
二九あなたの髪の毛を切って捨てよ、
裸の山の上に嘆きの声をあげよ。
主が、お怒りになっている世の人を
退け捨てられたからだ』。
三〇主は言われる、ユダの民はわたしの前に悪を行い、わたしの名をもっ
てとなえられる家に、憎むべき者を置いてそこを汚した。三一またベンヒ
ンノムの谷にあるトペテの高き所を築いて、むすこ娘を火に焼いた。わ
たしはそれを命じたことはなく、またそのようなことを考えたこともな
かった。三二主は言われる、それゆえに見よ、その所をトペテ、またはベ

ンヒンノムの谷と呼ばないで、ほふりの谷と呼ぶ日が来る。それはほかに
場所がないので、トペテに葬るからである。三三この民の死体は空の鳥と
地の獣の食物となり、これを追い払う者もない。三四そのときわたしは
ユダの町々とエルサレムのちまたに、喜びの声、楽しみの声、花婿の声、
花嫁の声を絶やす。この地は荒れ果てるからである。

第八章一主は言われる、その時ユダの王たちの骨と、そのつかさたちの
骨と、祭司たちの骨と、預言者たちの骨と、エルサレムに住む人々の骨は
墓より掘り出されて、二彼らの愛し、仕え、従い、求め、また拝んだ、日
と月と天の衆群の前にさらされる。その骨は集める者も葬る者もなく、
地のおもてに糞土のようになる。三この悪しき民のうちの残っている残り
の者はみな、わたしが追いやった場所で、生きることよりも死ぬことを願
うようになると、万軍の主は言われる。

四あなたは彼(かれ)らに言(い)わなければならない。
主(しゅ)はこう仰(おお)せられる、
人(ひと)は倒(たお)れたならば、また起(お)きあがらないであろうか。
離(はな)れていったならば、帰(かえ)ってこないであろうか。
五それにどうしてこの民(たみ)は、
常(つね)にそむいて離(はな)れていくのか。
彼(かれ)らは偽(いつわ)りを固(かた)くとらえて、
帰(かえ)ってくることを拒(こば)んでいる。
六わたしは気(き)をつけて聞(き)いたが、
彼(かれ)らは正(ただ)しくは語(かた)らなかった。
その悪(あく)を悔(く)いて、
『わたしのした事(こと)は何(なに)か』という者(もの)はひとりもない。

彼らはみな戦場に、はせ入る馬のように、
自分のすきな道に向かう。
七空のこうのとりでもその時を知り、
山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。
しかしわが民は主のおきてを知らない。
八どうしてあなたがたは、『われわれには知恵がある、
主のおきてがある』と言うことができようか。
見よ、まことに書記の偽りの筆が
これを偽りにしたのだ。
九知恵ある者は、はずかしめられ、
あわてふためき、捕えられる。
見よ、彼らは主の言葉を捨てた、

彼らになんの知恵があろうか。
一〇それゆえ、わたしは彼らの妻を他人に与え、
その畑を征服者に与える。
それは彼らが小さい者から大きい者にいたるまで、
みな不正な利をむさぼり、
預言者から祭司にいたるまで、
みな偽りを行っているからである。
一一彼らは手軽に、わたしの民の傷をいやし、
平安がないのに、『平安、平安』と言っている。
一二彼らは憎むべきことをして、恥じたであろうか。
すこしも恥ずかしいとは思わず、
また恥じることを知らなかった。

それゆえ彼(かれ)らは倒(たお)れる者(もの)と共(とも)に倒(たお)れる。
わたしが彼(かれ)らを罰(ばっ)するとき、
彼(かれ)らは倒(たお)れると、主(しゅ)は言(い)われる。
一三主(しゅ)は言(い)われる、わたしが集(あつ)めようと思(おも)うとき、
ぶどうの木(き)にぶどうはなく、
いちじくの木(き)に、いちじくはなく、
葉(は)さえ、しぼんでいる。
わたしが彼(かれ)らに与(あた)えたものも、
彼(かれ)らを離(はな)れて、うせ去(さ)った」。
一四どうしてわれわれはなす事(こと)もなく座(ざ)しているのか。
集(あつ)まって、堅固(けんご)な町(まち)にはいり、
そこでわれわれは滅(ほろ)びよう。

われわれが主に罪を犯したので、
われわれの神、主がわれわれを滅ぼそうとして、
毒の水を飲ませられるのだ。
一五われわれは平安を望んだが、良い事はこなかった。
いやされる時を望んだが、かえって恐怖が来た。
一六「彼らの馬のいななきはダンから聞えてくる。
彼らの強い馬の声によって全地は震う。
彼らは来て、この地と、ここにあるすべてのもの、
町と、そのうちに住む者とを食い滅ぼす。
一七見よ、魔法をもってならすことのできない、
へびや、まむしをあなたがたのうちにつかわす。
それはあなたがたをかむ」と主は言われる。

一八わが嘆きはいやしがたく、
わが心はうちに悩む。
一九聞け、地の全面から、
わが民の娘の声があがるのを。
「主はシオンにおられないのか、
シオンの王はそのうちにおられないのか」。
「なぜ彼らはその彫像と、
異邦の偶像とをもって、わたしを怒らせたのか」。
二〇「刈入れの時は過ぎ、夏もはや終った、
しかしわれわれはまだ救われない」。
二一わが民の娘の傷によって、わが心は痛む。
わたしは嘆き、うろたえる。

二二ギレアデに乳香があるではないか。
その所に医者がいるではないか。
それにどうしてわが民の娘は
いやされることがないのか。

第九章

一ああ、わたしの頭が水となり、
わたしの目が涙の泉となればよいのに。
そうすれば、わたしは民の娘の殺された者のために
昼も夜も嘆くことができる。
二ああ、わたしが荒野に、
隊商の宿を得ることができればよいのに。
そうすれば、わたしは民を離れて

去って行くことができる。
彼らはみな姦淫する者、
不信のともがらだからである。
三彼らは弓をひくように、その舌を曲げる。
真実ではなく、偽りがこの地に強くなった。
彼らは悪より悪に進み、
またわたしを知らないと、主は言われる。
四あなたがたはおのおの隣り人に気をつけよ。
どの兄弟をも信じてはならない。
兄弟はみな、押しのける者であり、
隣り人はみな、ののしって歩く者だからである。
五人はみな、その隣り人を欺き、

真実を言う者はない。
彼らは自分の舌に偽りを言うことを教え、
悪を行い、疲れて悔い改めるいとまもなく、
六しえたげに、しえたげを積み重ね、
偽りに偽りを積み重ね、
わたしを知ることを拒んでいると、主は言われる。
七それゆえ万軍の主はこう言われる、
「見よ、わたしは彼らを溶かし、試みる。
このほか、わが民をどうすることができよう。
八彼らの舌は殺す矢のようだ、
それは偽りを言う。
その口ではおのおの隣り人におだやかに語るが、

その心では彼を待ち伏せる計りごとを立てる。
九主は言われる、これらのことのために、
わたしが彼らを罰しないだろうか。
わたしがこのような民にあだを返さないだろうか。
一〇山のために泣き叫び、野の牧場のために悲しめ。
これらは荒れすたれて、通り過ぎる人もない。
ここには牛、羊の鳴く声も聞えず、
空の鳥も獣も皆逃げ去った。
一一わたしはエルサレムを荒塚とし、山犬の巣とする。
またユダの町々を荒して、住む人もない所とする」。
一二知恵があって、これを悟ることのできる人はだれか。主の口の言葉を
うけて、それを示す人はだれか。この地が滅ぼされて荒野のようになり、通

り過ぎる人もなくなったのはどういうわけか。一三主は言われる、「それは
彼らの前にわたしが立てたおきてを彼らが捨てて、わたしの声に聞き従わ
ず、そのとおりに歩かなかったからである。一四彼らは強情に自分の心
に従い、また先祖の教えたようにバアルに従った。一五それゆえ万軍の
主、イスラエルの神はこう言われる、見よ、わたしはこの民に、にがよも
ぎを食べさせ、毒の水を飲ませ、一六彼らも、その先祖たちも知らなかった
国びとのうちに彼らを散らし、また彼らを滅ぼし尽すまで、そのうしろに、
つるぎをつかわす」。

一七万軍の主はこう言われる、
「よく考えて、泣き女を呼べ。
また人をつかわして巧みな女を招け。
一八彼らに急いでこさせ、

われわれのために泣き悲しませて、
われわれの目に涙をこぼさせ、
まぶたから水をあふれさせよ。
一九シオンから悲しみの声が聞える。
それは言う、『ああ、われわれは滅ぼされ、
いたく、はずかしめられている。
われわれはその地を去り、
彼らがわれわれのすみかをこわしたからだ』。
二〇女たちよ、主の言葉を聞け。
あなたがたの耳に、その口の言葉をいれよ。
あなたがたの娘に悲しみの歌を教え、
おのおのその隣り人に哀悼の歌を教えよ。

二一死がわれわれの窓に上って来、
われわれの邸宅の中にはいり、
ちまたにいる子どもらを絶やし、
広場にいる若い人たちを殺そうとしているからだ。
二二あなたはこう言いなさい、
「主は言われる、『人の死体が糞土のように、
野に倒れているようになり、
また刈入れする人のうしろに残って、
だれも集めることをしない束のようになる』」。
二三主はこう言われる、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力
ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはなら
ない。
二四誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを

知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を
行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を
喜ぶと、主は言われる」。
二五主は言われる、「見よ、このような日が来る。その日には、割礼をう
けても、心に割礼をうけていないすべての人をわたしは罰する。二六エジ
プト、ユダ、エドム、アンモンの人々、モアブ、および野にいて、髪の毛
のすみずみをそる人々はそれである。これらの国びとはみな割礼をうけて
いない者であり、イスラエルの全家もみな心に割礼をうけていない者で
ある」。

第一〇章一イスラエルの家よ、主のあなたがたに語られる言葉を聞け。二
主はこう言われる、
「異邦の人の道に習ってはならない。

また異邦の人が天に現れるしるしを恐れても、
あなたがたはそれを恐れてはならない。
三異邦の民のならわしはむなしいからだ。
彼らの崇拝するものは、林から切りだした木で、
木工の手で、おのをもって造ったものだ。
四人々は銀や金をもって、それを飾り、
くぎと鎚をもって動かないようにそれをとめる。
五その偶像は、きゅうり畑のかかしのようで、
ものを言うことができない。
歩くこともできないから、
人に運んでもらわなければならない。
それを恐れるに及ばない。

それは災をくだすことができず、
また幸をくだす力もないからだ」。
六主よ、あなたに並びうる者はありません。
あなたは大いなる者であり、あなたの名も
その力のために大いなるものであります。
七万国の王であるあなたを、
恐れない者がありましょうか。
あなたを恐れるのは当然のことであります。
万国のすべての知恵ある者のうちにも、
その国々のうちにも、
あなたに並びうる者はありません。
八彼らは皆、愚かで鈍く、

偶像(ぐうぞう)の教(おしえ)は、ただ木(き)にすぎない。
九 銀(ぎん)ぱくはタルシシから渡来(とらい)し、
金(きん)はウパズから携(たずさ)えてくる。
これらは工人(こうじん)と金細工人(きんざいくにん)の工作(こうさく)である。
彼(かれ)らの着物(きもの)はすみれ色(いろ)と紫色(むらさきいろ)である。
これらはみな巧(たく)みな細工人(さいくにん)の作(つく)った物(もの)である。
一〇 しかし主(しゅ)はまことの神(かみ)である。
生(い)きた神(かみ)であり、永遠(えいえん)の王(おう)である。
その怒(いか)りによって地(ち)は震(ふる)いうごき、
万国(ばんこく)はその憤(いきどお)りに当(あた)ることができない。
一一 あなたがたは彼(かれ)らに、こう言(い)わなければならない、「天地(てんち)を造(つく)らなかった神々(かみがみ)は地(ち)の上(うえ)、天(てん)の下(した)から滅(ほろ)び去(さ)る」と。

一二主(しゅ)はその力(ちから)をもって地(ち)を造(つく)り、
その知恵(ちえ)をもって世界(せかい)を建(た)て、
その悟(さと)りをもって天(てん)をのべられた。
一三彼(かれ)が声(こえ)を出(だ)されると、
天(てん)に多(おお)くの水(みず)のざわめきがあり、
また地(ち)の果(はて)から霧(きり)を立(た)ちあがらせられる。
彼(かれ)は雨(あめ)のために、いなびかりをおこし、
その倉(くら)から風(かぜ)を取(と)り出(だ)される。
一四すべての人(ひと)は愚(おろ)かで知恵(ちえ)がなく、
すべての金細工人(きんざいくにん)は
その造(つく)った偶像(ぐうぞう)のために恥(はじ)をこうむる。
その偶像(ぐうぞう)は偽(いつわ)り物(もの)で、

そのうちに息がないからだ。
一五これらは、むなしいもので、迷いのわざである。
罰せられる時に滅びるものである。
一六ヤコブの分である彼はこのようなものではない。
彼は万物の造り主だからである。
イスラエルは彼の嗣業としての部族である。
彼の名を万軍の主という。
一七囲みの中におる者よ、
あなたの包を地から取り上げよ。
一八主がこう言われるからだ、
「見よ、わたしはこのたび、
この地に住む者を投げ捨てる。

かつ彼(かれ)らをせめなやまして、思(おも)い知(し)らせる」。
一九わたしはいたでをうけた、ああ、わざわいなるかな、
わたしの傷(きず)は重(おも)い。
しかしわたしは言(い)った、
「まことに、これは悩(なや)みである。
わたしはこれを忍(しの)ばなければならない」と。
二〇わたしの天幕(てんまく)は破(やぶ)れ、綱(つな)はことごとく切(き)れ、
子(こ)どもたちはわたしを捨(す)てて行(い)って、いなくなった。
もはやわたしの天幕(てんまく)を張(は)る者(もの)はなく、
幕(まく)を掛(か)ける者(もの)もない。
二一牧者(ぼくしゃ)は愚(おろ)かであって、
主(しゅ)に問(と)うことをしないからである。

それゆえ彼らは栄えることもなく、
その群れはみな散り去っている。
二二聞けよ、うわさのあるのを。
見よ、北の国から大いなる騒ぎが来る。
これはユダの町々を荒して山犬の巣とする。
二三主よ、わたしは知っています、
人の道は自身によるのではなく、
歩む人が、その歩みを
自分で決めることのできないことを。
二四主よ、わたしを懲らしてください。
正しい道にしたがって、怒らずに懲らしてください。
さもないと、わたしは無に帰してしまうでしょう。

二五あなたを知らない国民と、
あなたの名をとなえない人々に
あなたの怒りを注いでください。
彼らはヤコブを食い尽し
これを食い尽して滅ぼし、
そのすみかを荒したからです。

第一一章 一主からエレミヤに臨んだ言葉は言う、二「この契約の言葉を
聞き、ユダの人々とエルサレムに住む者に告げよ。三彼らに言え、イスラ
エルの神、主はこう仰せられる、この契約の言葉に従わない人は、のろ
われる。四この契約は、わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地、鉄の
かまどの中から導き出した時に、彼らに命じたところのものである。す
なわち、その時わたしは彼らに言った、わたしの声を聞き、あなたがたに

命じるすべてのことを行うならば、あなたがたはわたしの民となり、わた
しはあなたがたの神となる。五そして、わたしがあなたがたの先祖に、乳
と蜜との流れる地を与えると誓ったことを、なし遂げると。すなわち今日
のとおりである」。その時わたしは、「主よ、仰せのとおりです」と答えた。
六主はわたしに言われた、「このすべての言葉を、ユダの町々と、エルサ
レムのちまたに告げ示し、この契約の言葉を聞き、これを行え、と言いな
さい。七わたしは、あなたがたの先祖をエジプトの地から導き出した時か
ら今日にいたるまで、おごそかに彼らを戒め、絶えず戒めて、わたしの
声に聞き従うようにと言った。八しかし彼らは従わず、その耳を傾け
ず、おのおの自分の悪い強情な心に従って歩んだ。それゆえ、わたし
はこの契約の言葉をもって彼らを責めた。これはわたしが彼らに行えと
命じたが、行わなかったものである」。

九主はまたわたしに言われた、「ユダの人々とエルサレムに住む者のう
ちに反逆の事がある。一〇彼らは、わたしの言葉を聞くことを拒んだその
先祖たちの罪に立ち返り、またほかの神々に従ってそれに仕えた。イス
ラエルの家とユダの家とは、わたしがその先祖たちと結んだ契約を破った。
一一それゆえ主はこう言われる、見よ、わたしは災を彼らの上に下す。彼
らはそれを免れることはできない。彼らがわたしを呼んでも、わたしは聞
かない。一二ユダの町々とエルサレムに住む者は、行って、自分たちがそれ
に香をたいている神々に呼び求めるが、これらは、彼らの災の時にも決
して彼らを救うことはできない。一三ユダよ、あなたの神々は、あなたの
町の数ほど多くなった。またあなたがたはエルサレムのちまたの数ほどの
祭壇を恥ずべき者のために立てた。すなわちバアルに香をたくための祭壇
である。

一四それゆえ、この民のために祈ってはならない。また彼らのために泣
き、あるいは祈り求めてはならない。彼らがその災の時に、わたしに呼
ばわっても、わたしは彼らに聞くことをしないからだ。一五わが愛する者
は、わたしの家で何をするのか。すでにこれは悪事を行った。誓願と犠牲
の肉とがあなたに災を免れさせることができるであろうか。それであ
なたは喜ぶことができるであろうか。一六主はあなたを、かつては『良い
実のなる美しい青々としたオリブの木』と呼ばれたが、激しい暴風のと
どろきと共に、主はそれに火をかけ、その枝を焼き払われるのである。一
七あなたを植えた万軍の主は、あなたに向かって災を言い渡された。こ
れはイスラエルの家とユダの家とが悪を行い、バアルに香をたいて、わ
たしを怒らせたからである」。

一八主が知らせてくださったので、

わたしはそれを知った。
その時、あなたは彼らの悪しきわざを
わたしに示された。
一九しかしわたしは、
ほふられに行く、おとなしい小羊のようで、
彼らがわたしを害しようと、
計りごとをめぐらしているのを知らなかった。
彼らは言う、「さあ、木とその実を共に滅ぼそう。
生ける者の地から彼を絶って、
その名を人に忘れさせよう」。
二〇正しいさばきをし、
人の心と思いを探られる万軍の主よ、

わたしは自分の訴えをあなたにお任せしました。
あなたが彼らにあだをかえされるのを見させてください。
二一それゆえ主はアナトテの人々についてこう言われる、彼らはあなた
の命を取ろうと求めて言う、「主の名によって預言してはならない。それ
をするならば、あなたはわれわれの手にかかって死ぬであろう」。二二それ
で万軍の主はこう言われる、「見よ、わたしは彼らを罰する。若い人はつ
るぎで死に、彼らのむすこ娘は、ききんで死に、二三だれも残る者はない。
わたしがアナトテの人々に災を下し、彼らを罰する年をこさせるからで
ある」。

第二二章

一主よ、わたしがあなたと論じ争う時、
あなたは常に正しい。

しかしなお、わたしはあなたの前に、
さばきのことを論じてみたい。
悪人の道がさかえ、
不信実な者がみな繁栄するのはなにゆえですか。
二あなたが彼らを植えられたので、
彼らは根づき、育って、実を結びます。
彼らは口ではあなたに近づきますが、
心はあなたから遠ざかっています。
三主よ、あなたはわたしを知り、わたしを見、
わたしの心があなたに対して
いかにあるかを試みられます。
ほふるために羊を引き出すように、彼らを引き出し、

殺(ころ)す日(ひ)にそなえて、彼(かれ)らを残(のこ)しておいてください。
四 いつまで、この地(ち)は嘆(なげ)き、
どの畑(はたけ)の野菜(やさい)も枯(か)れていてよいでしょうか。
この地(ち)に住(す)む者(もの)の悪(あく)によって、
獣(けもの)と鳥(とり)は滅(ほろ)びうせます。
人々(ひとびと)は言(い)いました、
「彼(かれ)はわれわれの終(おわ)りを見(み)ることはない」と。
五 「もしあなたが、徒歩(とほ)の人(ひと)と競争(きょうそう)して疲(つか)れるなら、
どうして騎馬(きば)の人(ひと)と競(きそ)うことができようか。
もし安全(あんぜん)な地(ち)で、あなたが倒(たお)れるなら、
ヨルダンの密林(みつりん)では、どうするつもりか。
六 あなたの兄弟(きょうだい)たち、あなたの父(ちち)の家(いえ)のものさえ、

あなたを欺(あざむ)き、大声(おおごえ)をあげて、あなたを追(お)っている。
彼(かれ)らが親(した)しげにあなたに語(かた)ることがあっても、
彼(かれ)らを信(しん)じてはならない」。
七「わたしはわが家(いえ)を離(はな)れ、わが嗣業(しぎょう)を捨(す)て、
わが魂(たましい)の愛(あい)する者(もの)を敵(てき)の手(て)に渡(わた)した。
八わたしの嗣業(しぎょう)は、わたしにとって
林(はやし)の中(なか)のししのようになった。
これはわたしに向(む)かってその声(こえ)をあげる。
それゆえわたしはこれを憎(にく)む。
九わたしの嗣業(しぎょう)は、わたしにとって、
斑点(はんてん)のある猛禽(もうきん)のようではないか。
他(た)の猛禽(もうきん)がこれを囲(かこ)んでいるではないか。

行って、野の獣をみな集め、
連れてきてこれを食べさせよ。
一〇多くの牧者たちはわたしのぶどう畑を滅ぼし、
わたしの地を踏み荒した。
わたしの麗しい地を荒れた野にした。
一一彼らはこれを荒れ地としてしまった。
その荒れ地がわたしに向かって嘆くのだ。
全地は荒れ地にされた。
しかし、ひとりもこれを心に留める者はない。
一二滅ぼす者どもが荒野のすべての、はげ山の上にきた。
主のつるぎが、地の、この果から、かの果までを滅ぼすのだ。
命あるものは安らかであることができない。

一三彼らは麦をまいて、いばらを刈り取る。
苦労してもなんの利益もない。
彼らはその収穫を恥じるようになる。
主の激しい怒りによってである」。
一四わたしがわが民イスラエルにつがせた嗣業に手を触れるすべての悪
い隣り人について、主はこう言われる、「見よ、わたしは彼らをその地から
抜き出し、ユダの家を彼らのうちから抜き出す。一五わたしは、彼らを抜き
出したのちに、また彼らをあわれんで、それぞれその嗣業に導き返し、
おのおのを、その地に帰らせる。一六もし彼らがわたしの民の道を学び、わ
たしの名によって、『主は生きておられる』と言って誓うことが、かつて彼
らがわたしの民に教えてバアルをさして誓わせたようになるならば、彼ら
はわたしの民のうちに建てられる。一七しかし耳をかさない民があるとき

は、わたしはその民を抜き出して滅ぼすと、主は言われる」。
第一三章 一主はわたしにこう言われた、「行って、亜麻布の帯を買い、腰に
結べ。水につけてはならない」。二そこで、わたしは主の言葉に従い、帯を
買って腰に結んだ。三主の言葉は、再びわたしに臨んで言った、四「あなた
が買って腰に結んでいる帯を手に取り、立ってユフラテの川へ行き、その
所の岩の裂け目にこれを隠せ」。五わたしは主が命じられたように、行っ
て、これをユフラテの川のほとりに隠した。六多くの日を経てのち、主は
わたしに言われた、「立って、ユフラテの川へ行き、あなたに命じて、そこ
に隠させた帯をその所から取ってきなさい」。七そこでわたしはユフラテ
の川へ行き、地を掘って、隠した所から帯を取り出したが、その帯はそこ
なわれて、役に立たなくなっていた。
八その時、主の言葉がわたしに臨んだ、九「主はこう仰せられる、これ

と同じように、わたしはユダの高ぶりとエルサレムの大いなる高ぶりを、
破るのである。一〇この悪しき民はわたしの言葉を聞くことを拒み、自分
の心を強情にして歩み、また他の神々に従ってこれに仕え、これを拝
んでいる。彼らはこの帯のように、なんの役にも立たなくなる」。一一主は
言われる、「帯が人の腰に着くように、イスラエルのすべての家とユダのす
べての家とをわたしに着かせ、これをわたしの民とし、名とし、誉とし、
栄えとしようとした。しかし彼らは聞き従おうともしなかった」。
一二「あなたはこの言葉を彼らに語らなければならない、『イスラエルの
神はこう言われる、酒つぼには、みな酒が満ちる』と。彼らはあなたに言
うであろう、『酒つぼに、みな酒が満ちることをわれわれが知らないことが
あろうか』と。一三その時、あなたは彼らに言わなければならない、『主は
こう言われる、見よ、わたしはこの地に住むすべての者と、ダビデの位に

座す王たちと、祭司と預言者およびエルサレムに住むすべての者に酔いを
満たし、一四彼らを互に打ち当てて砕く。父と子をもそのようにすると、
主は言われる。わたしは彼らをあわれまず、惜しまず、かわいそうとも思
わずに滅ぼす』と」。

一五耳を傾けて聞け、高ぶってはならない、
主がお語りになるからである。
一六主がまだやみを起されないうちに、
またあなたがたの足が
薄暗がりの山につまずかないうちに、
あなたがたの神、主に栄光を帰せよ。
さもないと、あなたがたが光を望んでいる間に、
主はそれを暗黒に変え、

それを暗やみとされるからである。
一七もしあなたがたが聞かないならば、
わたしの魂はひそかな所で、
あなたがたの高ぶりのために悲しむ。
また主の群れが、かすめられたために、
わたしの目はいたく泣いて、涙を流すのである。
一八王と太后とに告げよ、
「あなたがたは低い座にすわりなさい。
麗しい冠はすでに
あなたがたの頭から落ちてしまったからです」。
一九ネゲブの町々は閉ざされて、これを開く人がない。
ユダはみな捕え移される、

ことごとく捕え移される。
二〇「目をあげて、北の方からくる者を見よ、
あなたに賜わった群れ、
あなたの麗しい群れはどこにいるのか。
二一彼らがあなたの親しみ慣れた人たちを、
あなたの上に立ててかしらとするとき、
あなたは何を言おうとするのか。
あなたの苦しみは、
子を産む女の苦しみのようでないであろうか。
二二あなたが心のうちに、
『どうしてこのようなことが
わたしに起ったのか』というならば、

あなたの罪が重いゆえに、
あなたの着物のすそはあげられ、
はずかしめを受けるのだ。
二三エチオピヤびとは
その皮膚を変えることができようか。
ひょうはその斑点を変えることができようか。
もしそれができるならば、 悪に慣れたあなたがたも、
善を行うことができる。
二四わたしはあなたがたを散らし、
野の風に吹き散らされるもみがらのようにする。
二五主は言われる、 これがあなたに授けられた定め、
わたしが量ってあなたに与える分である。

あなたがわたしを忘れて、
偽りを頼みとしたからだ。
二六わたしはまたあなたの着物のすそを顔まであげて、
あなたの恥をあらわす。
二七わたしはあなたの憎むべき行い、
あなたの姦淫と、いななき、
野の丘の上で行ったあなたのみだらな行いを見た。
エルサレムよ、あなたはわざわいだ、
あなたの清められるのはいつのことであろうか」。

第一四章

ひでりの事についてエレミヤに臨んだ主の言葉。
二「ユダは悲しみ、
その町々の門は傾き、

民は地に座して嘆き、
エルサレムの叫びはあがる。
三その君たちは、しもべをつかわして水をくませる。
彼らが井戸の所にきても、水は見つからず、
むなしい器をもって帰り、
恥じ、かつ当惑して、その頭をおおう。
四地に雨が降らず、土が、かわいて割れたため、
農夫は恥じて、その頭をおおう。
五野にいる雌じかでさえも子を産んで、これを捨てる。
草がないからである。
六野ろばは、はげ山の上に立って、
山犬のようにあえぎ、

草のないために、その目はくらむ。
七主よ、われわれの罪がわれわれを訴えて
不利な証言をしても、
あなたの名のために、事をなしてください。
われわれの背信の数は多く、
あなたに向かって罪を犯しました。
八イスラエルの望みなる主よ、
悩みの時の救主よ、
なぜ、あなたはこの地に住む異邦の人のようにし、
また一夜の宿りのために立ち寄る旅びとのように
なさらねばならないのですか。
九なぜ、あなたは、うろたえている人のようにし、

また人を救いえない勇士のように
なさらねばならないのですか。
主よ、あなたはわれわれのうちにいらせられます。
われわれは、み名によって呼ばれている者です。
われわれを見捨てないでください」。
一〇この民について主はこう言われる、
「彼らはこのように好んで、さまよい、
その足をとどめることをしなかったので、
主は彼らを喜ばず、
いまそのとがを覚え、その罪を罰するのだ」。
一一主はわたしに言われた、「この民のために恵みを祈ってはならない。
一二彼らが断食しても、わたしは彼らの呼ぶのを聞かない。燔祭と素祭を

ささげても、わたしはそれを受けない。かえって、つるぎと、ききん、およ
び疫病をもって、彼らを滅ぼしてしまう」。
一三わたしは言った、「ああ、主なる神よ、預言者たちはこの民に向かい、
『あなたがたは、つるぎを見ることはない。ききんもこない。わたしはこの
所に確かな平安をあなたがたに与える』と言っています」。一四主はわた
しに言われた、「預言者らはわたしの名によって偽りの預言をしている。わ
たしは彼らをつかわさなかった。また彼らに命じたこともなく、話したこ
ともない。彼らは偽りの黙示と、役に立たない占い、および自分の心
でつくりあげた欺きをあなたがたに預言しているのだ。一五それゆえ、わ
たしがつかわさないのに、わたしの名によって預言して、『つるぎとききん
は、この地にこない』と言っているあの預言者について、主はこう仰せら
れる、この預言者らは、つるぎとききんに滅ぼされる。一六また彼らの預言

を聞く民は、ききんとつるぎとによって、エルサレムのちまたに投げ捨て
られる。だれもこれを葬る者はない。彼らとその妻、およびそのむすこ
娘も同様である。わたしが彼らの悪をその上に注ぐからである。
一七この言葉を彼らに語れ、
『わたしの目は夜も昼も絶えず涙を流す。
わが民の娘であるおとめが大きな傷と
重い打撃によって滅ぼされるからである。
一八わたしが出て畑に行くと、
つるぎで殺された者がある。
町にはいると、ききんで病んでいる者がある。
預言者も祭司も共にその地にさまよって、
知るところがない』。

一九あなたはまったくユダを捨てられたのですか。
あなたの心はシオンをきらわれるのですか。
あなたはわれわれを撃ったのに、どうしていやしてはくださらないの
ですか。
われわれは平安を望んだが、良い事はこなかった。
いやされる時を望んだが、かえって恐怖が来た。
二〇主よ、われわれは自分の悪と、
先祖のとがとを認めています。
われわれはあなたに罪を犯しました。
二一み名のために、われわれを捨てないでください。
あなたの栄えあるみ位を
はずかしめないでください。
あなたがわれわれにお立てになった契約を覚えて、

それを破らないでください。
二二異邦の偽りの神々のうちに、
雨を降らせうる者があるであろうか。
天が自分で夕立ちを降らすことができようか。
われわれの神、主よ、
あなたこそ、これをなさる方ではありませんか。
われわれの待ち望むのはあなたです。
あなたがこれらすべてのことをなさるからです。

第一五章一主はわたしに言われた、「たといモーセとサムエルとがわたし
の前に立っても、わたしの心はこの民を顧みない。彼らをわたしの前か
ら追い出し、ここを去らせよ。二もし彼らが、『われわれはどこに行けばよ
いのか』とあなたに尋ねるならば、彼らに言いなさい、

『主はこう仰せられる、
疫病に定められた者は疫病に、
つるぎに定められた者はつるぎに、
ききんに定められた者はききんに、
とりこに定められた者はとりこに行く』。
三 主は仰せられる、わたしは四つの物をもって彼らを罰する。すなわち、
つるぎをもって殺し、犬をもってかませ、空の鳥と地の獣をもって食い滅
ぼさせる。
四 またユダの王ヒゼキヤの子マナセが、エルサレムでした行い
のゆえに、わたしは彼らを地のすべての国が見て恐れおののくものとする。
五 エルサレムよ、だれがあなたをあわれむであろうか。
だれがあなたのために嘆くであろうか。
だれがふり返って、あなたの安否を問うであろうか。

六主(しゅ)は言(い)われる、あなたはわたしを捨(す)てた。
そしてますます退(しりぞ)いて行(い)く。
それゆえ、わたしは手(て)を伸(の)べてあなたを滅(ほろ)ぼした。
わたしはあわれむことには飽(あ)きた。
七わたしはこの地(ち)の門(もん)で、
箕(みの)で彼(かれ)らをあおぎ分(わ)けた。
彼(かれ)らがその道(みち)を離(はな)れなかったので、
わたしは彼(かれ)らの子(こ)を奪(うば)い、
わが民(たみ)を滅(ほろ)ぼした。
八わたしは彼(かれ)らの寡婦(かふ)の数(かず)を
浜(はま)べの砂(すな)よりも多(おお)くした。
わたしは真昼(まひる)に、滅(ほろ)ぼす者(もの)を連(つ)れてきて、

若者(わかもの)らの母(はは)たちをせめ、
驚(おどろ)きと恐(おそ)れを、にわかに母(はは)たちにおこした。
九七人(にん)の子(こ)を産(う)んだ女(おんな)は、弱(よわ)り衰(おとろ)えて、息絶(いきた)え、
まだ昼(ひる)であったが、彼女(かのじょ)の日(ひ)は没(ぼっ)した。
彼女(かのじょ)は恥(は)じ、うろたえた。
その残(のこ)りの者(もの)は、これを敵(てき)のつるぎに渡(わた)すと
主(しゅ)は言(い)われる」。
一〇ああ、わたしはわざわいだ。わが母(はは)よ、あなたは、なぜ、わたしを産(う)
んだのか。全国(ぜんこく)の人(ひと)はわたしと争(あらそ)い、わたしを攻(せ)める。わたしは人(ひと)に貸(か)
したこともなく、人(ひと)に借(か)りたこともないのに、皆(みな)わたしをのろう。一一主(しゅ)
よ、もしわたしが彼(かれ)らの幸福(こうふく)をあなたに祈(いの)り求(もと)めず、また敵(てき)のため、その
悩(なや)みのときと、災(わざわい)のときに、わたしがあなたにとりなしをしなかったの

であれば、彼らののろいも、やむをえないでしょう。
一二人は鉄を、北からくる鉄や青銅を砕くことができましょうか。
一三「わたしはあなたの富と宝を、ぶんどり物として他に与える。代価を受けることはできない。それはあなたのすべての罪によるので、領域内のいたる所にこのことが起る。
一四わたしはあなたの知らない地で、あなたの敵に仕えさせる。わたしの怒りによって火は点じられ、いつまでも燃え続けるからである」。

一五主よ、あなたは知っておられます。
わたしを覚え、わたしを顧みてください。
わたしを迫害する者に、あだを返し、
あなたの寛容によって、
わたしを取り去らないでください。

わたしがあなたのために、
はずかしめを受（う）けるのを知（し）ってください。
一六わたしはみ言葉（ことば）を与（あた）えられて、それを食（た）べました。
み言葉（ことば）は、わたしに喜（よろこ）びとなり、
心（こころ）の楽（たの）しみとなりました。
万軍（ばんぐん）の神（かみ）、主（しゅ）よ、わたしは、あなたの名（な）をもって
となえられている者（もの）です。
一七わたしは笑（わら）いさざめく人（ひと）のつどいに
すわることなく、また喜（よろこ）ぶことをせず、
ただひとりですわっていました。
あなたの手（て）がわたしの上（うえ）にあり、
あなたが憤（いきどお）りをもって
わたしを満（み）たされたからです。

一八どうしてわたしの痛みは止まらず、
傷は重くて、なおらないのですか。
あなたはわたしにとって、水がなくて人を欺く
谷川のようになられるのですか。
一九それゆえ主はこう仰せられる、
「もしあなたが帰ってくるならば、
もとのようにして、わたしの前に立たせよう。
もしあなたが、つまらないことを言うのをやめて、
貴重なことを言うならば、
わたしの口のようになる。
彼らはあなたの所に帰ってくる。
しかしあなたが彼らの所に帰るのではない。

二〇わたしはあなたをこの民の前に、
堅固な青銅の城壁にする。
彼らがあなたを攻めても、
あなたに勝つことはできない。
わたしがあなたと共にいて、あなたを助け、
あなたを救うからであると、主は言われる。
二一わたしはあなたを悪人の手から救い、
無慈悲な人の手からあがなう」。

第一六章
一主の言葉はまたわたしに臨んだ、
二「あなたはこの所で妻をめとってはならない。またむすこ娘を持ってはならない。
三この所で生れるむすこ娘と、この地でこれを産む母たちと、これを生む父たちとについて主はこう言われる、
四彼らは死の病にかかって死に、哀悼する者もな

く、埋葬する者もなく、地のおもてに、糞土のようになる。またつるぎと、
ききんに滅ぼされて、その死体は空の鳥と地の獣の食い物となる。
五主はこう言われる、喪のある家に、はいってはならない。また行って、
それを悲しみ嘆いてはならない。わたしがこの民からわたしの平安と、い
つくしみと、あわれみとを取り去ったからであると、主は言われる。六大い
なる者も小さき者も、この地に死ぬ。彼らは葬られず、また彼らのために
悲しむ者もなく、自分の身を傷つける者もなく、髪をそる者もない。七悲
しむ者のためにパンをさいて、死者のためにこれを慰める者はなく、また
父あるいは母のために慰めの杯をこれに与えて飲ませる者もない。八
またあなたは宴会をする家にはいって、人々と共にすわって食い飲みして
はならない。九万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、見よ、あなた
の目の前で、あなたのなおこの世にいる間に、わたしは喜びの声と楽し

みの声、花婿の声と花嫁の声とをこの所に絶やしてしまう。
一〇あなたがこのすべての言葉をこの民に告げるとき、彼らがあなたに
尋ねて、『主がわれわれにこの大きな災を宣告されるのはどうしてです
か。われわれにどんな悪い所があるのですか。われわれの神、主にそむ
いて、われわれが犯した罪とはなんですか』と言うならば、一一あなたは彼
らに答えなければならない、『主は仰せられる、それはあなたがたの先祖が
わたしを捨てて他の神々に従い、これに仕え、これを拝し、またわたし
を捨て、わたしの律法を守らなかったからである。一二あなたがたは、あ
なたがたの先祖よりも、いっそう悪いことをした。見よ、あなたがたはお
のおの自分の悪い強情な心に従い、わたしに聞き従うことはしない。
一三それゆえ、わたしはあなたがたをこの地より追い出し、あなたがたも、
あなたがたの先祖も知らない地に行かせる。その所であなたがたは昼夜、

ほかの神々に仕えるようになる。これはわたしがあなたがたにあわれみを
示さないからである』と。
一四主は言われる、それゆえ、見よ、こののち『イスラエルの民をエジプ
トの地から導き出した主は生きておられる』とは言わないで、一五『イス
ラエルの民を北の国と、そのすべて追いやられた国々から導き出した主
は生きておられる』という日がくる。わたしが彼らを、その先祖に与えた
彼らの地に導きかえすからである。
一六主は言われる、見よ、わたしは多くの漁夫を呼んできて、彼らをすな
どらせ、また、そののち多くの猟師を呼んできて、もろもろの山、もろも
ろの丘、および岩の裂け目から彼らをかり出させる。一七わたしの目は彼
らのすべての道を見ているからである。みなわたしに隠れてはいない。ま
たその悪はわたしの目に隠れることはない。一八わたしはその悪とその罪

の報いを二倍にする。彼らがその忌むべき偶像の死体をもって、わたしの
地を汚し、その憎むべきものをもって、わたしの嗣業を満たしたからで
ある」。

一九主、わが力、わが城、
悩みの時の、のがれ場よ、
万国の民は地の果から
あなたのもとにきて申します、
「われわれの先祖が受け嗣いだのは、
ただ偽りと、役に立たないつまらない事ばかりです。
二〇人が自分で神々を造ることができましょうか。
そういうものは神ではありません」。
二一「それゆえ、見よ、わたしは彼らに知らせよう。すなわち、この際わ

たしの力と、わたしの勢いとを知らせよう。彼らはわたしの名が、主で
あることを知るようになる」。

第一七章
一「ユダの罪は、鉄の筆、金剛石のとがりをもってしるされ、
彼らの心の碑と、祭壇の角に彫りつけられている。
二彼らの子供たち
は青木の下と、高い丘の上、野の山の上にある祭壇とアシラのことを覚え
ている。
三わたしはあなたの富とすべての宝とを、あなたの全領域の内
で犯した罪の代価として、ぶんどり物とならせる。
四わたしがあなたに与
えた嗣業からあなたは手をはなすようになる。またわたしは、あなたの知
らない地で、あなたの敵に仕えさせる。わたしの怒りによって、火は点じ
られ、いつまでも燃え続けるからである」。

五主はこう言われる、
「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、

その心が主を離れている人は、のろわれる。
六彼は荒野に育つ小さい木のように、
何も良いことの来るのを見ない。
荒野の、干上がった所に住み、
人の住まない塩地にいる。
七おおよそ主にたより、
主を頼みとする人はさいわいである。
八彼は水のほとりに植えた木のようで、
その根を川にのばし、
暑さにあっても恐れることはない。
その葉は常に青く、
ひでりの年にも憂えることなく、

絶えず実を結ぶ」。
九 心はよろずの物よりも偽るもので、
はなはだしく悪に染まっている。
だれがこれを、よく知ることができようか。
一〇「主であるわたしは心を探り、思いを試みる。
おのおのに、その道にしたがい、
その行いの実によって報いをするためである」。
一一しゃこが自分が産んだのではない卵を抱くように、
不正な財産を得る者がある。
その人は一生の半ばにそれから離れて、
その終りには愚かな者となる。
一二初めから高くあげられた栄えあるみ座は、

われわれの聖所のある所である。
一三またイスラエルの望みである主よ、
あなたを捨てる者はみな恥をかき、
あなたを離れる者は土に名をしるされます。
それは生ける水の源である主を捨てたからです。
一四主よ、わたしをいやしてください、
そうすれば、わたしはいえます。
わたしをお救いください、
そうすれば、わたしは救われます。
あなたはわたしのほめたたえる者だからです。
一五彼らはわたしに言います、
「主の言葉はどこにあるのか。

今(いま)、それを出(だ)して見(み)せよ」と。
一六悪(あく)をつかわされるようにとは、
わたしはたって求(もと)めませんでした。
また災(わざわい)の日(ひ)を願(ねが)わなかったのを、
あなたはごぞんじです。
わたしのくちびるから出(で)たことは、み前(まえ)にあります。
一七どうか、わたしを恐(おそ)れさせないでください。
災(わざわい)のときに、あなたはわたしののがれ場(ば)です。
一八わたしを攻(せ)め悩(なや)ます者(もの)をはずかしめてください。
しかしわたしをはずかしめないでください。
彼(かれ)らを恐(おそ)れさせてください。
しかしわたしを恐(おそ)れさせないでください。
災(わざわい)の日(ひ)を彼(かれ)らにきたらせ、

滅びを倍にして彼らを滅ぼしてください。
一九主はわたしにこう言われた、「行って、ユダの王たちの出入りするべ
ニヤミンの門、およびエルサレムのすべての門に立って、二〇言いなさい、
『これらの門からはいるユダの王たち、およびユダのすべての民とエルサ
レムに住むすべての者よ、主の言葉を聞きなさい。二一主はこう言われる、
命が惜しいならば気をつけるがよい。安息日に荷をたずさえ、またはそれ
を持ってエルサレムの門にはいってはならない。二二また安息日にあなた
がたの家から荷を運び出してはならない。なんのわざをもしてはならない。
わたしがあなたがたの先祖に命じたように安息日を聖別して守りなさい。
二三しかし彼らは従わず耳を傾けず、聞くことも、戒めをうけることを
も強情に拒んだ。
二四主は言われる、もしあなたがたがわたしに聞き従い、安息日に荷を

たずさえてこの町の門にはいらず、安息日を聖別して、なんのわざをもし
ないならば、二五ダビデの位に座する王たち、つかさたち、ユダの人々、
エルサレムに住む者は、車と馬に乗ってこの町の門からはいることがで
きる。そしてこの町には長く人が住むようになる。二六また人々はユダの
町々やエルサレムの周囲、ベニヤミンの地、平地と山地およびネゲブから
来て燔祭、犠牲、素祭、乳香、感謝祭をたずさえて主の家にはいる。二
七しかし、もしあなたがたがわたしに聞き従わないで、安息日を聖別し
て守ることをせず、安息日に荷をたずさえてエルサレムの門にはいるなら
ば、わたしは火をその門の中に燃やして、エルサレムのもろもろの宮殿を
焼き滅ぼす。その火は消えることがない』」。

第一八章一主からエレミヤに臨んだ言葉。二「立って、陶器師の家に下っ
て行きなさい。そのところでわたしはあなたにわたしの言葉を聞かせよう」。三

わたしは陶器師の家へ下って行った。見ると彼は、ろくろで仕事をしてい
たが、四粘土で造っていた器が、その人の手の中で仕損じたので、彼は自分
の意のままに、それをもってほかの器を造った。
五その時、主の言葉がわたしに臨んだ、六「主は仰せられる、イスラエル
の家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろう
か。イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわ
たしの手のうちにある。七ある時には、わたしが民または国を抜く、破る、
滅ぼすということがあるが、八もしわたしの言った国がその悪を離れるな
らば、わたしはこれに災を下そうとしたことを思いかえす。九またある
時には、わたしが民または国を建てる、植えるということがあるが、一〇も
しその国がわたしの目に悪と見えることを行い、わたしの声に聞き従わ
ないなら、わたしはこれに幸を与えようとしたことを思いかえす。一一

それゆえ、ユダの人々とエルサレムに住む者に言いなさい、『主はこう仰
せられる、見よ、わたしはあなたがたに災を下そうと工夫し、あなたが
たを攻める計りごとを立てている。あなたがたはおのおのその悪しき道を
離れ、その道と行いを改めなさい』と。
一二しかし彼らは言う、『それはむだです。われわれは自分の図るところ
に従い、おのおのその悪い強情な心にしたがって行動します』と。
一三それゆえ主はこう言われる、
異邦の民のうちのある者に尋ねてみよ、
このような事を聞いた者があろうか。
おとめイスラエルは恐ろしい事をした。
一四レバノンの雪が、
どうしてシリオンの岩を離れようか。

山の水、冷たい川の流れが、
どうしてかわいてしまおうか。
一五それなのにわが民はわたしを忘れて、
偽りの神々に香をたいている。
彼らはその道、古い道につまずき、
また小道に入り、大路からはなれた。
一六自分の地を荒れすたれさせて、
いつまでも人に舌打ちされるものとした。
そこを通る人はみな身震いして、首を振る。
一七わたしは東風のように、彼らをその敵の前に散らす。
その滅びの日には、
わたしは彼らに背を向け、顔を向けない」。

一八彼(かれ)らは言(い)った、「さあ、計略(けいりゃく)をめぐらして、エレミヤを倒(たお)そう。祭司(さいし)
には律法(りっぽう)があり、知恵(ちえ)ある者(もの)には計(はか)りごとがあり、預言者(よげんしゃ)には言葉(ことば)があっ
て、これらのものが滅(ほろ)びてしまうことはない。さあ、われわれは舌(した)をもっ
て彼(かれ)を撃(う)とう。彼(かれ)のすべての言葉(ことば)に、心(こころ)を留(と)めないことにしよう」。
一九主(しゅ)よ、どうぞわたしにみ心(こころ)を留(と)め、
わたしの訴(うった)えをお聞(き)きください。
二〇悪(あく)をもって善(ぜん)に報(むく)いるべきでしょうか。
しかもなお彼(かれ)らはわたしの命(いのち)を取(と)ろうとして
穴(あな)を掘(ほ)りました。
わたしがあなたの前(まえ)に立(た)って、
彼(かれ)らのことを良(よ)く言(い)い、
あなたの憤(いきどお)りを止(と)めようとしたのを

覚(おぼ)えてください。
二一それゆえ、彼(かれ)らの子(こ)どもたちをききんに渡(わた)し、
彼(かれ)らをつるぎの刃(は)に渡(わた)してください。
彼(かれ)らの妻(つま)は子(こ)を失(うしな)い、また寡婦(かふ)となり、
男(おとこ)は疫病(えきびょう)にかかって死(し)に、
若(わか)い者(もの)は、戦争(せんそう)でつるぎに殺(ころ)されますように。
二二あなたが敵(てき)をにわかに彼(かれ)らに臨(のぞ)ませられるとき、
彼(かれ)らの家(いえ)から叫(さけ)び声(ごえ)が聞(き)こえますように。
彼(かれ)らは穴(あな)を掘(ほ)って、わたしを捕(とら)えようとし、
わなをつくって、わたしの足(あし)を
捕(とら)えようとしたからです。
二三主(しゅ)よ、あなたは彼(かれ)らがわたしを殺(ころ)すために

めぐらしている計略を皆ごぞんじです。
その悪をゆるすことなく、
その罪をあなたの前から消し去らないでください。
彼らをあなたの前に倒れさせてください。
あなたのお怒りになる時に彼らを罰してください。

第一九章

一主はこう言われる、「行って、陶器師のびんを買い、民の長老
と年長の祭司のうちの数人を伴って、二瀬戸かけの門の入口にあるベン
ヒンノムの谷へ行き、その所で、わたしがあなたに語る言葉をのべて、三
言いなさい、『ユダの王たち、およびエルサレムに住む者よ、主の言葉を聞
きなさい。万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、見よ、わたしは
災をこの所に下す。おおよそ、その災のことを聞くものの耳は両方
とも鳴る。四彼らがわたしを捨て、この所を汚し、この所で、自分も先祖

たちもユダの王たちも知らなかった他の神々に香をたき、かつ罪のない者
の血を、この所に満たしたからである。五また彼らはバアルのために高き
所を築き、火をもって自分の子どもたちを焼き、燔祭としてバアルにささ
げた。これはわたしの命じたことではなく、定めたことでもなく、また思い
もしなかったことである。六主は言われる、それゆえ、見よ、この所をト
ペテまたはベンヒンノムの谷と呼ばないで、虐殺の谷と呼ぶ日がくる。七
またわたしはこの所でユダとエルサレムの計りごとを打ち破り、つるぎを
もって、彼らをその敵の前と、そのいのちを求める者の手に倒れさせ、ま
たその死体を空の鳥と地の獣の食い物とし、八かつ、この町を荒れすたれ
させて、人に舌打ちされるものとする。そこを通る人は皆そのもろもろの
災を見て身震いし、舌打ちする。九また彼らがその敵とその命を求め
る者とに囲まれて苦しみ悩む時、わたしは彼らに自分のむすこの肉、娘

の肉を食べさせる。彼らはまた互にその友の肉を食べるようになる』。
一〇そこで、あなたは、一緒に行く人々の目の前で、そのびんを砕き、一
一そして彼らに言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる、陶器師の器を
ひとたび砕くならば、もはやもとのようにすることはできない。このように
わたしはこの民とこの町とを砕く。人々はほかに葬るべき場所がないた
めに、トペテに葬るであろう。一二主は仰せられる、わたしはこの所と、
ここに住む者とにこのようにし、この町をトペテのようにする。一三エル
サレムの家とユダの王たちの家、すなわち彼らがその屋上で天の衆群
に香をたき、ほかの神々に酒を注いだ家は、皆トペテの所のように汚さ
れる』。
一四エレミヤは主が彼をつかわして預言させられたトペテから帰ってき
て、主の家の庭に立ち、すべての民に言った、一五「万軍の主、イスラエ

ルの神はこう仰せられる、見よ、わたしは、この町とそのすべての村々に、
わたしの言ったもろもろの災を下す。彼らが強情で、わたしの言葉に
聞き従おうとしないからである」。

第二〇章 一さて祭司インメルの子で、主の宮のつかさの長であったパ
シュルは、エレミヤがこれらの事を預言するのを聞いた。二そしてパシュル
は預言者エレミヤを打ち、主の宮にある上のベニヤミンの門の足かせにつ
ないだ。三その翌日パシュルがエレミヤを足かせから解き放した時、エレ
ミヤは彼に言った、「主はあなたの名をパシュルとは呼ばないで、『恐れが
周囲にある』と呼ばれる。四主はこう仰せられる、見よ、わたしはあなた
を、あなた自身とあなたのすべての友だちに恐れを起させる者とする。彼
らはあなたが見ている目の前で敵のつるぎに倒れる。わたしはまたユダの
すべての民をバビロン王の手に渡す。彼は彼らを捕えてバビロンに移し、

つるぎをもって殺す。五わたしはまたこの町のすべての富と、その獲たす
べての物と、そのすべての貴重な物と、ユダの王たちのすべての宝物をそ
の敵の手に渡す。彼らはこれをかすめ、民を捕えてバビロンに移す。六パ
シュルよ、あなたと、あなたの家に住む者とはみな捕え移される。あなた
はバビロンに行って、その所で死に、その所に葬られる。あなたも、あ
なたが偽って預言した言葉に聞き従った友もみなそのようになる」。

七主よ、あなたがわたしを欺かれたので、
わたしはその欺きに従いました。
あなたはわたしよりも強いので、
わたしを説き伏せられたのです。
わたしは一日中、物笑いとなり、
人はみなわたしをあざけります。

八それは、わたしが語(かた)り、呼(よ)ばわるごとに、
「暴虐(ぼうぎゃく)、滅亡(めつぼう)」と叫(さけ)ぶからです。
主(しゅ)の言葉(ことば)が一日中(いちにちぢゅう)、
わが身(み)のはずかしめと、あざけりになるからです。
九もしわたしが、「主(しゅ)のことは、重(かさ)ねて言(い)わない、
このうえその名(な)によって語(かた)る事(こと)はしない」と言(い)えば、
主(しゅ)の言葉(ことば)がわたしの心(こころ)にあって、燃(も)える火(ひ)の
わが骨(ほね)のうちに閉(と)じこめられているようで、
それを押(おさ)えるのに疲(つか)れはてて、
耐(た)えることができません。
一〇多(おお)くの人(ひと)のささやくのを聞(き)くからです。
恐(おそ)れが四方(しほう)にあります。

「告発(こくはつ)せよ。さあ、彼(かれ)を告発(こくはつ)しよう」と言(い)って、
わが親(した)しい友(とも)は皆(みな)
わたしのつまずくのを、うかがっています。
また、「彼(かれ)は欺(あざむ)かれるだろう。
そのとき、われわれは彼(かれ)に勝(か)って、
あだを返(かえ)すことができる」と言(い)います。
一一しかし主(しゅ)は強(つよ)い勇士(ゆうし)のように
わたしと共(とも)におられる。
それゆえ、わたしに迫(せま)りくる者(もの)はつまずき、
わたしに打(う)ち勝(か)つことはできない。
彼(かれ)らは、なし遂(と)げることができなくて、
大(おお)いに恥(はじ)をかく。

その恥は、いつまでも忘れられることはない。
一二正しき者を試み、
人の心と思いを見られる万軍の主よ、
あなたが彼らに、
あだを返されるのを見せてください。
わたしはあなたに、わたしの訴えを
お任せしたからです。
一三主に向かって歌い、主をほめたたえよ。
主は貧しい者の命を、
悪人の手から救われたからである。
一四わたしの生れた日はのろわれよ。
母がわたしを産んだ日は祝福を受けるな。

一五わたしの父に「男の子が、生れました」と告げて、
彼を大いに喜ばせた人は、のろわれよ。
一六その人は、主のあわれみを受けることなく、
滅ぼされた町のようになれ。
朝には、彼に叫びを聞かせ、
昼には戦いの声を聞かせよ。
一七彼がわたしを胎内で殺さず、
わが母をわたしの墓場となさず、
その胎をいつまでも大きくしなかったからである。
一八なにゆえにわたしは胎内を出てきて、
悩みと悲しみに会い、恥を受けて一生を過ごすのか。
第二一章一ゼデキヤ王は、マルキヤの子パシュルと祭司マアセヤの子ゼ

パニヤを、エレミヤのもとにつかわし、二「バビロンの王ネブカデレザル
がわれわれを攻めようとしているゆえ、われわれのために主に尋ねてほし
い。主はそのもろもろの不思議なわざをもって、われわれを助け、バビロ
ンの王をわれわれから退かせられるかも知れない」と言わせた。その時、
主の言葉がエレミヤに臨んだ。
三エレミヤは彼らに答えて言った、「あなたがたはゼデキヤにこのように
言いなさい、四『イスラエルの神、主はこう仰せられる、見よ、あなたが
たが、この城壁の外にあって、あなたがたを攻め囲むバビロンの王およ
びカルデヤびとと戦うとき、わたしはあなたがたの手に持っている武器
をとりあげ、これを町の中に集めさせる。五わたしは手を伸べ、強い腕を
もって、怒り、憤り、激しく怒って、あなたがたを攻める。六わたしはま
たこの町に住む人と獣とを撃つ。彼らはみな重い疫病にかかって死ぬ。

七主は言われる、この後、わたしはユダの王ゼデキヤとその家来たち、およ
び疫病と、つるぎと、ききんを免れて、この町に残っている民を、バビ
ロンの王ネブカデレザルの手と、その敵の手、およびその命を求める者
の手に渡す。バビロンの王はつるぎの刃にかけて彼らを撃ち、彼らを惜し
まず、顧みず、またあわれむこともしない』。
八あなたはまたこの民に言いなさい、『主はこう仰せられる、見よ、わた
しは命の道と死の道とをあなたがたの前に置く。九この町にとどまる者
は、つるぎと、ききんと、疫病とで死ぬ。しかし、出て行って、あなたがた
を攻め囲んでいるカルデヤびとに降伏する者は死を免れ、その命は自分
のぶんどり物となる。一〇主は言われる、わたしがこの町に顔を向けたの
は幸を与えるためではなく、災を与えるためである。この町はバビロ
ンの王の手に渡される。彼は火をもって、これを焼き払う』。

一一またユダの王の家に言いなさい、『主の言葉を聞きなさい。一二ダビ
デの家よ、主はこう仰せられる、
朝ごとに、正しいさばきを行い、
物を奪われた人をしえたげる者の手から救え。
そうしないと、あなたがたの悪い行いのために、
わたしの怒りは火のように燃えて、
それを消すことはできない』。
一三「主は言われる、谷に住む者よ、平原の岩よ、
見よ、わたしはあなたに敵する。
あなたがたは言う、
『だれが下ってきて、われわれを攻めるものか、
だれがわれわれのいる所に、はいるものか』と。

一四わたしはあなたがたを、
その行いの実によって罰する。
またその林に火をつけて、
その周囲のものをみな焼き尽すと、主は言われる」。

第二二章 一主はこう言われる、「ユダの王の家に下り、その所にこの言葉
をのべて、二言いなさい、『ダビデの位にすわるユダの王よ、あなたと、あ
なたの家臣、および、この門からはいるあなたの民は主の言葉を聞きなさ
い。三主はこう言われる、公平と正義を行い、物を奪われた人を、しえた
げる者の手から救い、異邦の人、孤児、寡婦を悩まし、しえたげてはなら
ない。またこの所に、罪なき者の血を流してはならない。四もしあなたが
たがこの言葉を真実に行うならば、ダビデの位にすわる王とその家臣、
およびその民は、車と馬に乗って、この家の門にはいることができる。五
しかしあなたがたがこの言葉を聞かないならば、わたしは自身をさして誓

うが、この家は荒れ地となると、主は言われる。六主はユダの王の家につ
いてこう言われる、
あなたはわたしに対してギレアデのようであり、
レバノンの頂のようである。
しかし、わたしは必ずあなたを荒れ地にし、
人の住まない町にする。
七わたしは滅ぼす者を設けて、あなたを攻めさせる、
彼らはおのおのその武器をとり、
あなたの麗しい香柏を切り倒し、
火に投げ入れる。
八多くの国の人はこの町を過ぎ、互に語って、「なぜ主はこの大いなる
町をこのようにされたのか」と言うとき、九人は答えて、「これは彼らがそ

の神、主の契約を捨てて他の神々を拝し、これに仕えたからである」と言
うであろう』」。
一〇死んだ者のために泣くことなく、
またそのために嘆いてはならない。
捕え移されてゆく者のために、激しく泣け。
彼はふたたび帰ってきて、
その故郷を見ることがないからである。
一一ユダの王ヨシヤの子シャルムは父ヨシヤについで王となったが、つ
いにこの所から出て行った。主は彼についてこう言われる、「彼は再び
ここに帰らない。一二彼はその捕え行かれた所で死に、再びこの地を見
ない」。
一三「不義をもってその家を建て、

不法をもってその高殿を造り、
隣り人を雇って何をも与えず、
その賃金を払わない者はわざわいである。
一四彼は言う、『わたしは自分のために大きな家を建て、
広い高殿を造ろう』と。
そしてこれがために窓を造り、
香柏の鏡板でおおい、それを朱で塗る。
一五あなたは競って香柏を用いることによって、
王であると思うのか。
あなたの父は食い飲みし、
公平と正義を行って、幸を得たのではないか。
一六彼は貧しい人と乏しい人の訴えをただして、

さいわいを得た。
こうすることがわたしを知ることではないかと
主は言われる。
一七しかし、あなたは目も心も、
不正な利益のためにのみ用い、
罪なき者の血を流そうとし、
圧制と暴虐を行おうとする」。
一八それゆえ、主はユダの王ヨシヤの子エホヤキムについてこう言われる、
「人々は『悲しいかな、わが兄』、
『悲しいかな、わが姉』と言って、
彼のために嘆かない。
また『悲しいかな、主君よ』、

『悲しいかな、陛下よ』と言って嘆かない。
一九ろばが埋められるように、彼は葬られる。
引かれて行って、
エルサレムの門の外に投げ捨てられる」。
二〇「レバノンに登って呼ばわり、
バシャンにあなたの声をあげ、
アバリムから呼ばわれ。
あなたの愛する者がみな滅ぼされるからだ。
二一あなたの栄えていた時、わたしはあなたに語ったが
『聞きたくはない』と言った。
あなたがわたしの声に聞き従わないことは、
あなたの幼い時からの、ならわしであった。

二二あなたの牧者はみな、風に追い立てられ、
あなたの愛する者は捕え移される。
その時、あなたは自分のもろもろの悪のために、
恥じ、うろたえる。
二三レバノンに住み、
香柏の中に巣をつくっている者よ、
子を産む女に臨む苦しみのような苦痛が
あなたに臨むとき、
あなたはどんなに嘆くことであろうか」。
二四「主は言われる、わたしは生きている。ユダの王エホヤキムの子コニ
ヤが、わたしの右手の指輪であっても、わたしはあなたを抜き取る。二五あ
なたの命を求める者の手、あなたがその顔を恐れる者の手、すなわちバ

ビロンの王ネブカデレザルの手と、カルデヤびとの手にあなたを渡す。二
六わたしは、あなたと、あなたを産んだ母を、あなたがたの生れた国でな
い他の国に追いやる。あなたがたはそこで死ぬ。二七彼らが帰りたいとせ
つに願う国に、彼らは再び帰ることができない」。

二八この人コニヤは
卑しむべき、こわれたつぼであろうか、
だれも心に留めない器であろうか。
なぜ彼とその子孫は追いやられて、
知らない地に投げやられるのか。
二九ああ、地よ、地よ、地よ、
主の言葉を聞けよ。
三〇主はこう言われる、

「この人を、子なき人として、
またその一生のうち、
栄えることのない人として記録せよ。
その子孫のうち、ひとりも栄えて、
ダビデの位にすわり、
ユダを治めるものが再び起らないからである」。
第二三章 一 主は言われる、「わが牧場の羊を滅ぼし散らす牧者はわざわ
いである」。二 それゆえイスラエルの神、主はわが民を養う牧者について
こう言われる、「あなたがたはわたしの群れを散らし、これを追いやって顧
みなかった。見よ、わたしはあなたがたの悪しき行いによってあなたがた
に報いると、主は言われる。三 わたしの群れの残った者を、追いやったす
べての地から集め、再びこれをそのおりに帰らせよう。彼らは子を産ん

でその数が多くなる。四わたしはこれを養う牧者をその上に立てる、彼
らは再び恐れることなく、またおののくことなく、いなくなることもない
と、主は言われる。
五主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために一つの正しい枝を起
す日がくる。彼は王となって世を治め、栄えて、公平と正義を世に行う。
六その日ユダは救を得、イスラエルは安らかにおる。その名は『主はわれ
われの正義』ととなえられる。
七主は言われる、それゆえ見よ、人々は『イスラエルの民をエジプトの
地から導き出された主は生きておられる』とまた言わないで、八『イスラ
エルの家の子孫を北の地と、そのすべて追いやられた地から導き出された
神は生きておられる』という日がくる。その時、彼らは自分の地に住んで
いる」。

九預言者たちについて。
わが心はわたしのうちに破れ、
わが骨はみな震う。
主とその聖なる言葉のために、
わたしは酔っている人のよう、
酒に打ち負かされた人のようである。
一〇この地に姦淫を行うものが満ちているからだ。
のろいによって地は嘆き、荒野の牧場はかわく。
彼らの道は悪く、その力は正しくない。
一一「預言者と祭司とは共に神を汚す者である。
わたしの家においてすら
彼らの悪を見たと、主は言われる。

一二それゆえ、彼(かれ)らの道(みち)は、
おのずから暗黒(あんこく)の中(なか)にある
なめらかな道(みち)のようになり、
彼(かれ)らは押(お)されてその道(みち)に倒(たお)れる。
わたしが彼(かれ)らの罰(ばっ)せられる年(とし)に、
災(わざわい)をその上(うえ)に臨(のぞ)ませるからであると、主(しゅ)は言(い)われる。
一三わたしはサマリヤの預言者(よげんしゃ)のうちに
不快(ふかい)な事(こと)のあるのを見(み)た。
彼(かれ)らはバアルによって預言(よげん)し、
わが民(たみ)イスラエルを惑(まど)わした。
一四しかしエルサレムの預言者(よげんしゃ)のうちには、
恐(おそ)ろしい事(こと)のあるのを見(み)た。

彼らは姦淫を行い、偽りに歩み、
悪人の手を強くし、
人をその悪から離れさせない。
彼らはみなわたしにはソドムのようであり、
その民はゴモラのようである」。
一五それゆえ万軍の主は預言者についてこう言われる、
「見よ、わたしは彼らに、にがよもぎを食べさせ、
毒の水を飲ませる。
神を汚すことがエルサレムの預言者から出て、
全地に及んでいるからである」。
一六万軍の主はこう言われる、「あなたがたに預言する預言者の言葉を聞いてはならない。彼らはあなたがたに、むなしい望みをいだかせ、主の口

から出たのでない、自分の心の黙示を語るのである。
一七彼らは主の言葉を軽んじる者に向かって絶えず、『あなたがたは平安を得る』と言い、また自分の強情な心にしたがって歩むすべての人に向かって、『あなたがたに災はこない』と言う」。
一八彼らのうちだれか主の議会に立って、
その言葉を見聞きした者があろうか。
だれか耳を傾けてその言葉を聞いた者があろうか。
一九見よ、主の暴風がくる。
憤りと、つむじ風が出て、悪人のこうべをうつ。
二〇主の怒りは、み心に思い定められたことを
なし遂げられるまで退くことはない。
末の日にあなたがたはそれを明らかに悟る。

二一預言者たちはわたしがつかわさなかったのに、
彼らは走った。
わたしが、彼らに告げなかったのに、
彼らは預言した。
二二もし彼らがわたしの議会に立ったのであれば、
わたしの民にわが言葉を告げ示して、
その悪い道と悪い行いから、離れさせたであろうに。
二三「主は言われる、わたしはただ近くの神であって、遠くの神ではない
のであるか。二四主は言われる、人は、ひそかな所に身を隠して、わたしに
見られないようにすることができようか。主は言われる、わたしは天と地
とに満ちているではないか。二五わが名によって偽りを預言する預言者た
ちが、『わたしは夢を見た、わたしは夢を見た』と言うのを聞いた。二六偽

りを預言する預言者たちの心に、いつまで偽りがあるのであるか。彼ら
はその心の欺きを預言する。二七彼らはその先祖がバアルに従ってわが
名を忘れたように、互に夢を語って、わたしの民にわが名を忘れさせよ
うとする。二八夢をみた預言者は夢を語るがよい。しかし、わたしの言葉
を受けた者は誠実にわたしの言葉を語らなければならない。わらと麦とを
くらべることができようかと、主は言われる。二九主は仰せられる、わたし
の言葉は火のようではないか。また岩を打ち砕く鎚のようではないか。三
〇それゆえ見よ、わたしはわたしの言葉を互に盗む預言者の敵となると、
主は言われる。三一見よ、わたしは、『主は言いたもう』と舌をもって語る
預言者の敵となると、主は言われる。三二主は仰せられる、見よ、わたし
は偽りの夢を預言する者の敵となる。彼らはそれを語り、またその偽り
と大言をもってわたしの民を惑わす。わたしが彼らをつかわしたのではな

く、また彼らに命じたのでもない。それで彼らはこの民にすこしも益にな
らないと、主は言われる。
三三この民のひとり、または預言者、または祭司があなたに、『主の重荷は
なんですか』と問うならば、彼らに答えなさい、『あなたがたがその重荷で
す。そして主は、あなたがたを捨てると言っておられます』と。三四そして、
『主の重荷』と言うその預言者、祭司、または民のひとりを、その家族と共
にわたしは罰する。三五あなたがたは、みな互に、隣り人に、また兄弟
に、こう言わなければならない、『主はなんと答えられましたか』、『主はな
んと言われましたか』と。三六しかし重ねて『主の重荷』と言ってはならな
い。重荷は人おのおのの自分の言葉だからである。あなたがたは生ける神、
万軍の主なるわれわれの神の言葉を曲げる者である。三七あなたは預言者
にこう言わなければならない、『主はあなたになんと答えられましたか』、

『主はなんと言われましたか』と。三八もしあなたがたが『主の重荷』と言
うならば、主はこう仰せられる、『わたしが人をあなたがたにつかわして、
あなたがたは「主の重荷」と言ってはならないと言わせたのに、あなたが
たは「主の重荷」という言葉を言ったので、三九わたしは必ずあなたがた
を捕え移させ、あなたがたとあなたがたの先祖とに与えたこの町と、あな
たがたとを、わたしの前から捨て去る。四〇そして、忘れられることのない
永遠のはずかしめと永遠の恥を、あなたがたにこうむらせる』」。

第二四章一バビロンの王ネブカデレザルがユダの王エホヤキムの子エコ
ニヤおよびユダの君たちと工匠と鍛冶をエルサレムからバビロンに移し
て後、主はわたしにこの幻をお示しになった。見よ、主の宮の前に置か
れているいちじくを盛った二つのかごがあった。二その一つのかごには、は
じめて熟したような非常に良いいちじくがあり、ほかのかごには非常に

悪くて食べられないほどの悪いいちじくが入れてあった。三主はわたしに、
「エレミヤよ、何を見るか」と言われた。わたしは、「いちじくです。その
良いいちじくは非常によく、悪いほうのいちじくは非常に悪くて、食べら
れません」と答えた。
四主の言葉がまたわたしに臨んだ、五「イスラエルの神、主はこう仰せ
られる、この所からカルデヤびとの地に追いやったユダの捕われ人を、わ
たしはこの良いいちじくのように顧みて恵もう。六わたしは彼らに目をか
けてこれを恵み、彼らをこの地に返し、彼らを建てて倒さず、植えて抜か
ない。七わたしは彼らにわたしが主であることを知る心を与えよう。彼
らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らは一心にわたしの
もとに帰ってくる。
八主はこう仰せられる、わたしはユダの王ゼデキヤとそのつかさたち、お

よびエルサレムの人の残ってこの地にいる者、ならびにエジプトの地に住
んでいる者を、この悪くて食べられない悪いいちじくのようにしよう。九
わたしは彼らを地のもろもろの国で、忌みきらわれるものとし、またわた
しの追いやるすべての所で、はずかしめに会わせ、ことわざとなり、あざ
けりと、のろいに会わせる。一〇わたしはつるぎと、ききんと、疫病を彼
らのうちに送って、ついに彼らをわたしが彼らとその先祖とに与えた地か
ら絶えさせる」。

第二五章一ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年（バビロンの王ネブカ
デレザルの元年）にユダのすべての民についての言葉がエレミヤに臨んだ。
二預言者エレミヤはこの言葉をユダのすべての民とエルサレムに住むすべ
ての人に告げて言った、三「ユダの王アモンの子ヨシヤの十三年から今日
にいたるまで二十三年の間、主の言葉がわたしに臨んだ。わたしはたゆ

まずにそれをあなたがたに語ってきたが、あなたがたは聞かなかった。四
主はたゆまず、そのしもべである預言者を、あなたがたにつかわされたが、
あなたがたは聞かずまた耳を傾けて聞こうともしなかった。五彼らは言っ
た、『あなたがたはおのおの今その悪の道と悪い行いを捨てなさい。そう
すれば主が昔からあなたがたと先祖たちとに与えられた地に永遠に住む
ことができる。六あなたがたは、ほかの神に従って、それに仕え、それを
拝んではならない。あなたがたの手で作ったものをもって、わたしを怒ら
せてはならない。このようなことをしないなら、わたしはあなたがたをそこ
なうことはない』と。七しかしあなたがたはわたしに聞き従わず、あなた
がたの手で作った物をもって、わたしを怒らせて自ら害を招いたと、主
は言われる。
八それゆえ万軍の主はこう仰せられる、あなたがたがわたしの言葉に聞

き従わないゆえ、
九見よ、わたしは北の方のすべての種族と、わたしのしもべであるバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この地とその民と、そのまわりの国々を攻め滅ぼさせ、これを忌みきらわれるものとし、人の笑いものとし、永遠のはずかしめとすると、主は言われる。
一〇またわたしは喜びの声、楽しみの声、花婿の声、花嫁の声、ひきうすの音、ともしびの光を彼らの中に絶えさせる。
一一この地はみな滅ぼされて荒れ地となる。そしてその国々は七十年の間バビロンの王に仕える。
一二主は言われる、七十年の終った後に、わたしはバビロンの王と、その民と、カルデヤびとの地を、その罪のために罰し、永遠の荒れ地とする。
一三わたしはあの地について、わたしが語ったすべての言葉をその上に臨ませる。これはエレミヤが、万国のことについて預言したものであって、みなこの書にしるされている。
一四多くの国々と偉大な王たちとは、彼らをさえ奴隷として仕

えさせる。わたしは彼らの行いと、その手のわざに従って報いる」。
一五イスラエルの神、主はわたしにこう仰せられた、「わたしの手から、
この怒りの杯を受けて、わたしがあなたをつかわす国々の民に飲ませな
さい。一六彼らは飲んで、よろめき狂う。これはわたしが彼らのうちに、つ
るぎをつかわそうとしているからである」。
一七こうしてわたしは主の手から杯を受け、主がわたしをつかわされ
た国々の民に飲ませた。一八すなわちエルサレムとユダのすべての町と、そ
の王たちおよびそのつかさたちに飲ませて、それらを滅ぼし、荒れ地とし、
人の笑いものとし、のろわれるものとした。今日のとおりである。一九ま
たエジプトの王パロとその家来たち、その君たち、そのすべての民と、二
〇もろもろの寄留の異邦人、およびウズの地のすべての王たち、およびペ
リシテびとの地のすべての王たち、（アシケロン、ガザ、エクロン、アシド

ドの残りの者）、二一エドム、モアブ、アンモンの子孫、二二ツロのすべての
王たち、シドンのすべての王たち、海のかなたの海沿いの地の王たち、二
三デダン、テマ、ブズおよびすべて髪の毛のすみずみをそる者、二四アラビ
ヤのすべての王たち、荒野の雑種の民のすべての王たち、二五ジムリのす
べての王たち、エラムのすべての王たち、メデアのすべての王たち、二六北
のすべての王たちの遠き者、近き者もつぎつぎに、またすべて地のおもて
にある世の国々の王たちもこの杯を飲む。そして彼らの次にバビロンの
王もこれを飲む。

二七「それであなたは彼らに言いなさい、『万軍の主、イスラエルの神は
こう仰せられる、飲め、酔って吐け、倒れて再び立つな、わたしがあなた
がたのうちに、つるぎをつかわすからである』。

二八「もし彼らがあなたの手から杯を受けて飲むことをしないならば、

あなたは彼(かれ)らに言(い)いなさい、『万軍(ばんぐん)の主(しゅ)はこう仰(おお)せられる、あなたがたは必(かなら)ず飲(の)まなければならない。
二九見(み)よ、わたしの名(な)をもって呼(よ)ばれるこの町(まち)にさえ災(わざわい)を下(くだ)すのだ。どうしてあなたがたが罰(ばっ)を免(まぬか)れることができようか。あなたがたは罰(ばっ)を免(まぬか)れることはできない。わたしがつるぎを呼(よ)び寄(よ)せて、地(ち)に住(す)むすべての者(もの)を攻(せ)めるからであると、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)は仰(おお)せられる』。

三〇それゆえ、あなたは彼(かれ)らにこのすべての言葉(ことば)を預言(よげん)して言(い)いなさい、
『主(しゅ)は高(たか)い所(ところ)から呼(よ)ばわり、
その聖(せい)なるすまいから声(こえ)を出(だ)し、
自分(じぶん)のすみかに向(む)かって大(おお)いに呼(よ)ばわり、
地(ち)に住(す)むすべての者(もの)に向(む)かって
ぶどうを踏(ふ)む者(もの)のように叫(さけ)ばれる。

三一 叫びは地の果にまで響きわたる。
主が国々と争い、
すべての肉なる者をさばき、
悪人をつるぎに渡すからであると、主は言われる』。
三二 万軍の主はこう仰せられる、
見よ、国から国へ災が出て行く。
大きなあらしが地の果からおこる。
三三 その日、主に殺される人々は、地のこの果から、かの果に及ぶ。彼
らは悲しまれず、集められず、また葬られずに、地のおもてに糞土となる。
三四 牧者よ、嘆き叫べ、
群れのかしらたちよ、灰の中にまろべ。
あなたがたのほふられる日、

散らされる日が来たからだ。
あなたがたは選び分けられた雄羊のように倒れる。
三五牧者には、のがれ場なく、
群れのかしらたちは逃げる所がない。
三六牧者の叫び声と、
群れのかしらたちの嘆きの声が聞える。
主が彼らの牧場を滅ぼしておられるからだ。
三七主の激しい怒りによって、
平和な牧場は荒れていく。
三八ししのように彼はその巣を出た。
主のつるぎと、その激しい怒りによって、
彼らの地は荒れ地となった」。

第二六章一ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが世を治めた初めのころ、主
からこの言葉があった、二「主はこう仰せられる、主の宮の庭に立ち、わ
たしがあなたに命じて言わせるすべての言葉を、主の宮で礼拝するために
来ているユダの町々の人々に告げなさい。ひと言をも言い残しておいては
ならない。三彼らが聞いて、おのおのその悪い道を離れることがあるかも
知れない。そのとき、わたしは彼らの行いの悪いために、災を彼らに
下そうとしたのを思いなおす。四あなたは彼らに言いなさい、『主はこう仰
せられる、もしあなたがたがわたしに聞き従わず、わたしがあなたがたの
前に定めおいた律法を行わず、五わたしがあなたがたに、しきりにつかわ
すわたしのしもべである預言者の言葉に聞き従わないならば、（あなたが
たは聞き従わなかったが、）六わたしはこの宮をシロのようにし、またこ
の町を地の万国にのろわれるものとする』」。

七祭司と預言者およびすべての民は、エレミヤが主の宮でこれらの言葉
を語るのを聞いた。八エレミヤが主に命じられたすべての言葉を民に告げ
終った時、祭司と預言者および民はみな彼を捕えて言った、「あなたは死な
なければならない。九なぜあなたは主の名によって預言し、この宮はシロ
のようになり、この町は荒されて住む人もなくなるであろうと言ったのか」
と。民はみな主の宮に集まってエレミヤを取り囲んだ。
一〇ユダのつかさたちはこの事を聞いて王の宮殿を出て主の宮に上り、
主の宮の「新しい門」の入口に座した。一一祭司と預言者らは、つかさた
ちとすべての民に訴えて言った、「この人は死刑に処すべき者です。あな
たがたが自分の耳で聞かれたように、この町に逆らう預言をしたのです」。
一二その時エレミヤは、つかさたちとすべての民に言った、「主はわたし
をつかわし、この宮とこの町にむかって、預言をさせられたので、そのすべ

ての言葉をあなたがたは聞いた。一三それで、あなたがたは今、あなたがた
の道と行いを改め、あなたがたの神、主の声に聞き従いなさい。そう
するならば主はあなたがたに災を下そうとしたことを思いなおされる。
一四見よ、わたしはあなたがたの手の中にある。あなたがたの目に、良いと
見え、正しいと思うことをわたしに行うがよい。一五ただ明らかにこのこ
とを知っておきなさい。もしあなたがたがわたしを殺すならば、罪なき者
の血はあなたがたの身と、この町と、その住民とに帰する。まことに主が
わたしをつかわして、このすべての言葉をあなたがたの耳に、告げさせら
れたからである」。
一六つかさたちと、すべての民とは、祭司と預言者に言った、「この人は死刑
に処すべき者ではない。われわれの神、主の名によってわれわれに語った
のである」。一七その時この地の長老たち数人が立って、そこに集まって

いるすべての者に告げて言った、
一八「ユダの王ヒゼキヤの世に、モレシテびとミカはユダのすべての民に預言して言った、『万軍の主はこう仰せられる、

シオンは畑のように耕され、
エルサレムは石塚となり、
宮の山は木のおい茂る高い所となる』。

一九ユダの王ヒゼキヤと、すべてのユダの人は彼を殺そうとしたことがあろうか。ヒゼキヤは主を恐れ、主の恵みを求めたので、主は彼らに災を下すとお告げになったのを思いなおされたではないか。しかし、われわれは、自分の身に大きな災を招こうとしている」。

二〇主の名によって預言した人がほかにもあった。すなわちキリアテ・ヤリムのシマヤの子ウリヤである。彼はエレミヤとおなじような言葉をもっ

て、この町とこの地にむかって預言した。二一エホヤキム王と、そのすべて
の勇士と、すべてのつかさたちはその言葉を聞いた。そして王は彼を殺そ
うと思ったが、ウリヤはこれを聞いて恐れ、エジプトに逃げて行ったので、
二二エホヤキム王は人をエジプトにつかわした。すなわちアクボルの子エ
ルナタンと他の数名の人を、エジプトにつかわした。二三彼らはウリヤを
エジプトから引き出し、エホヤキム王のもとに連れてきたので、王はつる
ぎをもって彼を殺し、その死体を共同墓地に捨てさせた。
二四しかしシャパンの子アヒカムはエレミヤを助け、民の手に渡されて
殺されることのないようにした。

第二七章一ユダの王ヨシヤの子ゼデキヤが世を治め始めたころ、この言葉
が主からエレミヤに臨んだ。二すなわち主はこうわたしに仰せられた、「綱
と、くびきとを作って、それをあなたの首につけ、三エルサレムにいるユ

ダの王ゼデキヤの所に来た使者たちによって、エドムの王、モアブの王、
アンモンびとの王、ツロの王、シドンの王に言いおくりなさい。四彼らの
主君にこの命を伝えさせなさい、『万軍の主、イスラエルの神はこう仰
せられる、あなたがたは主君にこのように告げなければならない。五わた
しは大いなる力と伸べた腕とをもって、地と地の上にいる人と獣とをつ
くった者である。そして心のままに地を人に与える。六いまわたしはこの
すべての国を、わたしのしもべであるバビロンの王ネブカデネザルの手に
与え、また野の獣をも彼に与えて彼に仕えさせた。七彼の地に時がくる
まで、万国民は彼とその子とその孫に仕える。その時がくるならば、多く
の国と大いなる王たちとが彼を自分の奴隷にする。
八バビロンの王ネブカデネザルに仕えず、バビロンの王のくびきを自分
の首に負わない民と国とは、わたしがつるぎと、ききんと、疫病をもって

罰し、ついには彼の手によってことごとく滅ぼすと主は言われる。九それ
で、あなたがたの預言者、占い師、夢みる者、法術師、魔法使が、「あ
なたがたはバビロンの王に仕えることはない」と言っても、聞いてはなら
ない。一〇彼らはあなたがたに偽りを預言して、あなたがたを自分の国か
ら遠く離れさせ、わたしに、あなたがたを追い出してあなたがたを滅ぼさ
せるのである。一一しかしバビロンの王のくびきを首に負って、彼に仕え
る国民を、わたしはその故国に残らせ、それを耕して、そこに住まわせる
と主は言われる』」。

一二わたしはユダの王ゼデキヤにも同じように言った、「あなたがたは、
バビロンの王のくびきを自分の首に負って、彼とその民とに仕え、そして
生きなさい。一三どうしてあなたと、あなたの民とが、主がバビロンの王に
仕えない国民について言われたように、つるぎと、ききんと、疫病に死

んでよかろうか。一四あなたがたはバビロンの王に仕えることはないとあ
なたがたに告げる預言者の言葉を聞いてはならない。彼らがあなたがたに
預言していることは偽りであるからだ。一五主は言われる、わたしが彼ら
をつかわしたのではないのに、彼らはわたしの名によって偽って預言して
いる。そのために、わたしはあなたがたを追い払い、あなたがたと、あな
たがたに預言する預言者たちを滅ぼすようになるのだ」。
一六わたしはまた祭司とこのすべての民とに語って言った、「主はこう仰
せられる、『見よ、主の宮の器は今、すみやかに、バビロンから返されて
くる』とあなたがたに預言する預言者の言葉を聞いてはならない。それは、
彼らがあなたがたに預言していることは偽りであるからだ。一七彼らのい
うことを聞いてはならない。バビロンの王に仕え、そして生きなさい。ど
うしてこの町が荒れ地となってよかろうか。一八もし彼らが預言者であっ

て、主の言葉が彼らのうちにあるのであれば、主の宮とユダの王の宮殿
とエルサレムとに残されている器が、バビロンに移されないように、万軍
の主に、とりなしを願うべきだ。一九万軍の主は柱と海と台、その他この
町に残っている器について、こう仰せられる。二〇これはバビロンの王ネ
ブカデネザルが、ユダの王エホヤキムの子エコニヤ、およびユダとエルサ
レムのすべての身分の尊い人々を捕えてエルサレムからバビロンに移し
たときに、持ち去らなかった器である。——二一すなわち万軍の主、イス
ラエルの神は、主の宮とユダの王の宮殿とエルサレムとに残されている
器について、こう仰せられる。二二これらはバビロンに携え行かれ、わ
たしが顧みる日までそこにおかれている。その後、わたしはこれらのもの
を、この所に携え帰らせると主は言われる」。

第二八章一その年、すなわちユダの王ゼデキヤの治世の初め、その第四

年の五月、ギベオン出身の預言者であって、アズルの子であるハナニヤ
は、主の宮で祭司とすべての民の前でわたしに語って言った、二「万軍の
主、イスラエルの神はこう仰せられる、わたしはバビロンの王のくびきを
砕いた。三二年の内に、バビロンの王ネブカデネザルが、この所から取っ
てバビロンに携えて行った主の宮の器を、皆この所に帰らせる。四わ
たしはまたユダの王エホヤキムの子エコニヤと、バビロンに行ったユダの
すべての捕われ人をこの所に帰らせる。それは、わたしがバビロンの王
のくびきを、砕くからであると主は言われる」。
五そこで預言者エレミヤは主の宮のうちに立っている祭司とすべての民
の前で、預言者ハナニヤに言った。六すなわち預言者エレミヤは言った、「ア
アメン。どうか主がこのようにしてくださるように。どうかあなたの預言
した言葉が成就して、バビロンに携えて行った主の宮の器とすべての

捕われ人を、主がバビロンから再びこの所に帰らせてくださるように。
七ただし、今わたしがあなたとすべての民の聞いている所で語るこの言葉
を聞きなさい。八わたしと、あなたの先に出た預言者は、むかしから、多
くの地と大きな国について、戦いと、ききんと、疫病の事を預言した。
九平和を預言する預言者は、その預言者の言葉が成就するとき、真実に主
がその預言者をつかわされたのであることが知られるのだ」。
一〇そこで預言者ハナニヤは預言者エレミヤの首から、くびきを取って、
それを砕いた。一一そしてハナニヤは、すべての民の前で語り、「主はこう
仰せられる、『わたしは二年のうちに、このように、万国民の首からバビ
ロンの王ネブカデネザルのくびきを離して砕く』と言った。預言者エレミ
ヤは去って行った。
一二預言者ハナニヤが預言者エレミヤの首から、くびきを離して砕いた

後、しばらくして主の言葉がエレミヤに臨んだ、一三「行って、ハナニヤ
に告げなさい、『主はこう仰せられる、あなたは木のくびきを砕いたが、わ
たしはそれに替えて鉄のくびきを作ろう。一四万軍の主、イスラエルの神
はこう仰せられる、わたしは鉄のくびきをこの万国民の首に置いて、バビ
ロンの王ネブカデネザルに仕えさせる。彼らはこれに仕える。わたしは野
の獣をも彼に与えた』」。一五預言者エレミヤはまた預言者ハナニヤに言っ
た、「ハナニヤよ、聞きなさい。主があなたをつかわされたのではない。あ
なたはこの民に偽りを信じさせた。一六それゆえ主は仰せられる、『わた
しはあなたを地のおもてから除く。あなたは主に対する反逆を語ったの
で、今年のうちに死ぬのだ』と」。
一七預言者ハナニヤはその年の七月に死んだ。
第二九章一これは預言者エレミヤがエルサレムから、かの捕え移された

長老たち、およびネブカデネザルによってエルサレムからバビロンに捕
え移された祭司と預言者ならびにすべての民に送った手紙に書きしるした
言葉である。
二それはエコニヤ王と太后と宦官およびユダとエルサレムの
つかさたち、および工匠と鍛冶とがエルサレムを去ってのちに書かれたも
のであって、
三エレミヤはその手紙をシャパンの子エラサおよびヒルキヤ
の子ゲマリヤの手によって送った。この人々はユダの王ゼデキヤがバビロ
ンに行かせ、バビロンの王ネブカデネザルのもとにつかわしたものであっ
た。その手紙には次のように書いてあった。
四「万軍の主、イスラエルの
神は、すべて捕え移された者、すなわち、わたしがエルサレムから、バビロ
ンに捕え移させた者に、こう言う、
五あなたがたは家を建てて、それに住
み、畑を作ってその産物を食べよ。
六妻をめとって、むすこ娘を産み、ま
た、そのむすこに嫁をめとり、娘をとつがせて、むすこ娘を産むようにせ

よ。その所であなたがたの数を増し、減ってはならない。七わたしがあな
たがたを捕え移させたところの町の平安を求め、そのために主に祈るがよ
い。その町が平安であれば、あなたがたも平安を得るからである。八万軍
の主、イスラエルの神はこう言われる、あなたがたのうちにいる預言者と
占い師に惑わされてはならない。また彼らの見る夢に聞き従ってはなら
ない。九それは、彼らがわたしの名によってあなたがたに偽りを預言して
いるからである。わたしが彼らをつかわしたのではないと主は言われる。
一〇主はこう言われる、バビロンで七十年が満ちるならば、わたしはあ
なたがたを顧み、わたしの約束を果し、あなたがたをこの所に導き帰
る。一一主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画は
わたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与
えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようと

するものである。一二その時、あなたがたはわたしに呼ばわり、来て、わた
しに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く。一三あなたがたはわたしを尋
ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるな
らば、一四わたしはあなたがたに会うと主は言われる。わたしはあなたがた
の繁栄を回復し、あなたがたを万国から、すべてわたしがあなたがたを追
いやった所から集め、かつ、わたしがあなたがたを捕われ離れさせたその
もとの所に、あなたがたを導き帰ろうと主は言われる。
一五あなたがたは、『主はバビロンでわれわれのために預言者たちを起さ
れた』と言ったが、――一六主はダビデの位に座している王と、この町に
住むすべての民で、あなたがたと共に捕え移されなかった兄弟たちにつ
いて、こう言われる、一七『万軍の主はこう言われる、見よ、わたしは、つる
ぎと、ききんと、疫病を彼らに送り、彼らを悪くて食べられない腐った

いちじくのようにしてしまう。一八わたしはつるぎと、ききんと、疫病を
もって彼らのあとを追い、また彼らを地の万国に忌みきらわれるものとな
し、わたしが彼らを追いやる国々で、のろいとなり、恐れとなり、物笑い
となり、はずかしめとならせる。一九それは彼らがわたしの言葉に聞き従
わなかったからであると主は言われる。わたしはこの言葉を、わたしのし
もべである預言者たちによって、しきりに送ったが、あなたがたは聞こう
ともしなかったと主は言われる』。――二〇わたしがエルサレムからバビロ
ンに送ったあなたがたすべての捕われ人よ、主の言葉を聞きなさい、二一
『わたしの名によって、あなたがたに偽りを預言しているコラヤの子アハ
ブと、マアセヤの子ゼデキヤについて万軍の主、イスラエルの神はこう仰
せられる、見よ、わたしは彼らをバビロンの王ネブカデレザルの手に渡す。
王はあなたがたの目の前で彼らを殺す。二二バビロンにいるユダの捕われ

人は皆、彼らの名を、のろいの言葉に用いて、「主があなたをバビロンの
王が火で焼いたゼデキヤとアハブのようにされるように」という。二三それ
は、彼らがイスラエルのうちで愚かな事をし、隣の妻と不義を行い、わ
たしが命じたのでない偽りの言葉を、わたしの名によって語ったことによ
るのである。わたしはそれを知っており、またその証人であると主は言わ
れる』」。
二四ネヘラムびとシマヤにあなたは言いなさい、二五「万軍の主、イスラ
エルの神はこう仰せられる、あなたは自分の名でエルサレムにいるすべて
の民と、マアセヤの子祭司ゼパニヤおよびすべての祭司に手紙を送って言
う、二六『主は祭司エホヤダに代ってあなたを祭司とし、主の宮をつかさ
どらせ、すべて狂い、かつ預言する者を足かせと首かせにつながせられる。
二七そうであるのに、どうしてあなたは、あなたがたに預言しているアナト

テのエレミヤを戒めないのか。二八彼はバビロンにいるわれわれの所に
手紙を送って、捕われの時はなお長いゆえ、あなたがたは家を建ててそこ
に住み、畑を作ってその産物を食べよと言ってきた』」。
二九祭司ゼパニヤはこの手紙を預言者エレミヤに読み聞かせた。三〇その
時、主の言葉がエレミヤに臨んだ、三一「すべての捕われ人に書き送って
言いなさい、ネヘラムびとシマヤの事について主はこう仰せられる、わた
しはシマヤをつかわさなかったのに、彼があなたがたに預言して偽りを信
じさせたので、三二主はこう仰せられる、見よ、わたしはネヘラムびとシマ
ヤとその子孫を罰する。彼は主に対する反逆を語ったゆえ、彼に属する
者で、この民のうちに住み、わたしが自分の民に行おうとしている良い事
を見るものはひとりもいない」。

第三〇章一主からエレミヤに臨んだ言葉。二「イスラエルの神、主はこ

う仰せられる、わたしがあなたに語った言葉を、ことごとく書物にしるし
なさい。三主は言われる、見よ、わたしがわが民イスラエルとユダの繁栄
を回復する日が来る。主がこれを言われる。わたしは彼らを、その先祖に
与えた地に帰らせ、彼らにこれを保たせる」。
四これは主がイスラエルとユダについて言われた言葉である。
五「主はこう仰せられる、
われわれはおののきの声を聞いた。
恐れがあり、平安はない。
六子を産む男があるか、尋ねてみよ。
どうして男がみな子を産む女のように
手を腰におくのをわたしは見るのか。
なぜ、どの人の顔色も青く変っているのか。

七悲しいかな、その日は大いなる日であって、
それに比べるべき日はない。
それはヤコブの悩みの時である。
しかし彼はそれから救い出される。
八万軍の主は仰せられる、その日わたしは彼らの首からそのくびきを砕
き離し、彼らの束縛を解く。異邦の人はもはや、彼らを使役することをし
ない。九彼らはその神、主と、わたしが彼らのために立てるその王ダビデ
に仕える。

一〇主は仰せられる、
わがしもべヤコブよ、恐れることはない、
イスラエルよ、驚くことはない。
見よ、わたしがあなたを救って、遠くからかえし、

あなたの子孫を救って、
その捕え移された地からかえすからだ。
ヤコブは帰ってきて、穏やかに安らかにおり、
彼を恐れさせる者はない。
一一主は言われる、
わたしはあなたと共にいて、あなたを救う。
わたしはあなたを散らした国々を
ことごとく滅ぼし尽す。
しかし、あなたを滅ぼし尽すことはしない。
わたしは正しい道に従ってあなたを懲らしめる。
決して罰しないではおかない。
一二主はこう仰せられる、

あなたの痛(いた)みはいえず、あなたの傷(きず)は重(おも)い。
一三あなたの訴(うった)えを支持(しじ)する者(もの)はなく、
あなたの傷(きず)をつつむ薬(くすり)はなく、
あなたをいやすものもない。
一四あなたの愛(あい)する者(もの)は皆(みな)あなたを忘(わす)れて
あなたの事(こと)を心(こころ)に留(と)めない。
それは、あなたのとがが多(おお)く、
あなたの罪(つみ)がはなはだしいので、
わたしがあだを撃(う)つようにあなたを撃(う)ち、
残忍(ざんにん)な敵(てき)のように懲(こ)らしたからだ。
一五なぜ、あなたの傷(きず)のために叫(さけ)ぶのか、
あなたの悩(なや)みはいえることはない。

あなたのとがが多(おお)く、
あなたの罪(つみ)がはなはだしいので、
これらの事(こと)をわたしはあなたにしたのである。
一六しかし、すべてあなたを食(く)い滅(ほろ)ぼす者(もの)は
食(く)い滅(ほろ)ぼされ、
あなたをしえたげる者(もの)は、
ひとり残(のこ)らず、捕(とら)え移(うつ)され、
あなたをかすめる者(もの)は、かすめられ、
すべてあなたの物(もの)を奪(うば)う者(もの)は奪(うば)われる者(もの)となる。
一七主(しゅ)は言(い)われる、
わたしはあなたの健康(けんこう)を回復(かいふく)させ、
あなたの傷(きず)をいやす。

それは、人(ひと)があなたを捨(す)てられた者(もの)とよび、
『だれも心(こころ)に留(と)めないシオン』というからである。
一八主(しゅ)はこう仰(おお)せられる、
見(み)よ、わたしはヤコブの天幕(てんまく)を再(ふたた)び栄(さか)えさせ、
そのすまいにあわれみを施(ほどこ)す。
町(まち)は、その丘(おか)に建(た)てなおされ、
宮殿(きゅうでん)はもと立(た)っていた所(ところ)に立(た)つ。
一九感謝(かんしゃ)の歌(うた)と喜(よろこ)ぶ者(もの)の声(こえ)とが、その中(なか)から出(で)る。
わたしが彼(かれ)らを増(ま)すゆえ、彼(かれ)らは少(すく)なくはなく、
また彼(かれ)らを尊(たっと)ばれしめるゆえ、
卑(いや)しめられることはない。
二〇その子(こ)らは、いにしえのようになり、

その会衆はわたしの前に堅く立つ。
すべて彼らをしえたげる者をわたしは罰する。
二一その君は彼ら自身のうちのひとりであり、
そのつかさは、そのうちから出る。
わたしは彼をわたしに近づけ、彼はわたしに近づく。
だれか自分の命をかけて
わたしに近づく者があろうかと
主は言われる。
二二あなたがたは、わたしの民となり、
わたしはあなたがたの神となる」。
二三見よ、主の暴風がくる。
憤りと、つむじ風が出て、悪人のこうべをうつ。

二四主の激しい怒りは、
み心に思い定められたことを行って、
これを遂げるまで、退くことはない。
末の日にあなたがたはこれを悟るのである。

第三一章

一「主は言われる、その時わたしはイスラエルの全部族の神と
なり、彼らはわたしの民となる」。
二主はこう言われる、
「つるぎをのがれて生き残った民は、
荒野で恵みを得た。
イスラエルが安息を求めた時、
三主は遠くから彼に現れた。
わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。

それゆえ、わたしは絶えずあなたに
真実をつくしてきた。
四イスラエルのおとめよ、
再びわたしはあなたを建てる、あなたは建てられる。
あなたは再び鼓をもって身を飾り、
出て行って、喜び楽しむ者と共に踊る。
五またあなたはぶどうの木をサマリヤの山に植える。
植える者は、植えてその実を食べることができる。
六見守る者がエフライムの山の上に立って
呼ばわる日が来る。
『立って、シオンに上り、
われわれの神、主に、もうでよう』と」。

七主はこう仰せられる、
「ヤコブのために喜んで声高く歌い、
万国のかしらのために叫び声をあげよ。
告げ示し、ほめたたえて言え、
『主はその民イスラエルの残りの者を救われた』と。
八見よ、わたしは彼らを北の国から連れ帰り、
彼らを地の果から集める。
彼らのうちには、盲人やあしなえ、
妊婦、産婦も共にいる。
彼らは大きな群れとなって、ここに帰ってくる。
九彼らは泣き悲しんで帰ってくる。
わたしは慰めながら彼らを導き帰る。

彼らがつまずかないように、まっすぐな道により、
水の流れのそばを通らせる。
それは、わたしがイスラエルの父であり、
エフライムはわたしの長子だからである。
一〇 万国の民よ、あなたがたは主の言葉を聞き、
これを遠い、海沿いの地に示して言いなさい、
『イスラエルを散らした者がこれを集められる。
牧者がその群れを守るようにこれを守られる』と。
一一 すなわち主はヤコブをあがない、
彼らよりも強い者の手から彼を救いだされた。
一二 彼らは来てシオンの山で声高く歌い、
主から賜わった良い物のために、

穀物と酒と油および若き羊と牛のために、
　喜びに輝く。
その魂は潤う園のようになり、
彼らは重ねて憂えることがない。
一三その時おとめたちは舞って楽しみ、
若い者も老いた者も共に楽しむ。
わたしは彼らの悲しみを喜びにかえ、
彼らを慰め、憂いの代りに喜びを与える。
一四わたしは多くのささげ物で、祭司の心を飽かせ、
わたしの良き物で、わたしの民を満ち足らせると
主は言われる」。
一五主はこう仰せられる、

「嘆き悲しみ、いたく泣く声がラマで聞える。
ラケルがその子らのために嘆くのである。
子らがもはやいないので、
彼女はその子らのことで慰められるのを願わない」。
一六主はこう仰せられる、
「あなたは泣く声をとどめ、
目から涙をながすことをやめよ。
あなたのわざに報いがある。
彼らは敵の地から帰ってくると主は言われる。
一七あなたの将来には希望があり、
あなたの子供たちは自分の国に帰ってくると
主は言われる。

一八わたしは確かに、エフライムが
こう言って嘆くの聞いた、
『あなたはわたしを懲しめられた、
わたしはくびきに慣れない子牛のように
懲しめをうけた。
主よ、あなたはわたしの神、主でいらせられる、
わたしを連れ帰って、もとにかえしてください。
一九わたしはそむき去った後、悔い、
教をうけた後、ももを打った。
若い時のはずかしめが身にあるので、
わたしは恥じ、うろたえた』。
二〇主は言われる、

エフライムはわたしの愛(あい)する子(こ)、
わたしの喜(よろこ)ぶ子(こ)であろうか。
わたしは彼(かれ)について語(かた)るごとに、
なお彼(かれ)を忘(わす)れることができない。
それゆえ、わたしの心(こころ)は彼(かれ)をしたっている。
わたしは必(かなら)ず彼(かれ)をあわれむ。
二一みずからのために道(みち)しるべを置(お)き、
みずからのために標柱(ひょうちゅう)を立(た)てよ。
大路(おおじ)に、あなたの通(とお)って行(い)った道(みち)に心(こころ)を留(と)めよ。
イスラエルのおとめよ、帰(かえ)れ、
これらの、あなたの町々(まちまち)に帰(かえ)れ。
二二不信(ふしん)の娘(むすめ)よ、いつまでさまようのか。

主は地の上に新しい事を創造されたのだ、
女が男を保護する事である」。
二三万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、「わたしが彼らを再び
栄えさせる時、人々はまたユダの地とその町々でこの言葉を言う、
『正義のすみかよ、聖なる山よ、
どうか主がおまえを祝福してくださるように』。
二四ユダとそのすべての町の人、および農夫と群れを飼って歩き回る者は
共にそこに住む。二五わたしが疲れた魂を飽き足らせ、すべて悩んでい
る魂を慰めるからである」。
二六ここでわたしは目をさましたが、わたしの眠りは、ここちよかった。
二七「主は言われる、見よ、わたしが人の種と獣の種とをイスラエルの
家とユダの家とにまく日が来る。二八わたしは彼らを抜き、砕き、倒し、滅

ぼし、悩まそうと待ちかまえていたように、また彼らを建て、植えようと
待ちかまえていると主は言われる。二九その時、彼らはもはや、
『父がすっぱいぶどうを食べたので、
子どもの歯がうく』
とは言わない。三〇人はめいめい自分の罪によって死ぬ。すっぱいぶどう
を食べる人はみな、その歯がうく。
三一主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新し
い契約を立てる日が来る。三二この契約はわたしが彼らの先祖をその手を
とってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わた
しは彼らの夫であったのだが、彼らはそのわたしの契約を破ったと主は
言われる。三三しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立て
る契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置

き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民とな
ると主は言われる。三四人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教え
て、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大
に至るまで皆、わたしを知るようになるからであると主は言われる。わた
しは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」。

三五主はこう言われる、すなわち
太陽を与えて昼の光とし、
月と星とを定めて夜の光とし、
海をかき立てて、その波を鳴りとどろかせる者――
その名は万軍の主という。

三六主は言われる、
「もしこの定めがわたしの前ですたれてしまうなら、

イスラエルの子孫もすたって、
永久にわたしの前で民であることはできない」。
三七主はこう言われる、
「もし上の天を量ることができ、
下の地の基を探ることができるなら、
そのとき、わたしはイスラエルのすべての子孫を
そのもろもろの行いのために捨て去ると
主は言われる」。
三八主は言われる、「見よ、この町が、ハナネルの塔から隅の門まで、主のた
めに再建される時が来る。三九測りなわはそれよりも遠くまっすぐに延び
て、ガレブの丘に達し、ゴアのほうに向かう。四〇死体と灰との谷の全部、
またキデロンの谷に行くまでと、東のほうの馬の門のすみに行くまでと

のすべての畑はみな主の聖なる所となり、永遠にわたって、ふたたび抜
かれ、また倒されることはない」。

第三二章
一ユダの王ゼデキヤの十年、すなわちネブカデレザルの十八年
に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。
二その時、バビロンの王の軍勢がエル
サレムを攻め囲んでいて、預言者エレミヤはユダの王の宮殿にある監視
の庭のうちに監禁されていた。
三ユダの王ゼデキヤが彼を閉じ込めたので
あるが、王は言った、「なぜあなたは預言して言うのか、『主はこう仰せら
れる、見よ、わたしはこの町をバビロンの王の手に渡し、彼はこれを取る。
四またユダの王ゼデキヤはカルデヤびとの手をのがれることなく、かなら
ずバビロンの王の手に渡され、顔と顔を合わせて彼と語り、目と目は相ま
みえる。
五そして彼はゼデキヤをバビロンに引いていき、ゼデキヤは、わた
しが彼を顧みる時まで、そこにいると主は言われる。あなたがたは、カル

デヤびとと戦っても勝つことはできない』と」。
六エレミヤは言った、「主の言葉がわたしに臨んで言われる、七『見よ、あ
なたのおじシャルムの子ハナメルがあなたの所に来て言う、「アナトテに
あるわたしの畑を買いなさい。それは、これを買い取り、あがなう権利が
あなたにあるから」と』。八はたして主の言葉のように、わたしのいとこで
あるハナメルが監視の庭のうちにいるわたしの所に来て言った、『ベニヤ
ミンの地のアナトテにあるわたしの畑を買ってください。所有するのも、
あがなうのも、あなたの権利なのです。買い取ってあなたの物にしてくだ
さい。これが主の言葉であるのをわたしは知っていました』。
九そこでわたしは、いとこのハナメルからアナトテにある畑を買い取り、
銀十七シケルを量って彼に支払った。一〇すなわち、わたしはその証書
をつくって、これに記名し、それを封印し、証人を立て、はかりをもっ

て銀を量って与えた。一一そしてわたしはその約定をしるして封印した
買収証書と、封印のない写しとを取り、一二いとこのハナメルと、買収証書
に記名した証人たち、および監視の庭にすわっているすべてのユダヤ人
の前で、その証書をマアセヤの子であるネリヤの子バルクに与え、一三彼
らの前で、わたしはバルクに命じて言った、一四『万軍の主、イスラエル
の神はこう仰せられる、これらの証書すなわち、この買収証書の封印
したものと、封印のない写しとを取り、これらを土の器に入れて、長く
保存せよ。一五万軍の主、イスラエルの神がこう言われるからである、「こ
の地で人々はまた家と畑とぶどう畑を買うようになる」と』。
一六わたしは買収証書をネリヤの子バルクに渡したあとで主に祈って
言った、一七『ああ主なる神よ、あなたは大いなる力と、伸べた腕をもって
天と地をお造りになったのです。あなたのできないことは、ひとつもあり

ません。一八あなたはいつくしみを千万人に施し、また父の罪をそののち
の子孫に報いられるのです。あなたは大いなる全能の神でいらせられ、そ
の名は万軍の主と申されます。一九あなたの計りごとは大きく、また、事
を行うのに力があり、あなたの目は人々の歩むすべての道を見て、おの
おのの道にしたがい、その行いの実によってこれに報いられます。二〇あ
なたは、しるしと、不思議なわざとをエジプトの地に行い、また今日に至
るまでイスラエルと全人類のうちに行い、そして今日のように名をあげ
られました。二一あなたは、しるしと、不思議なわざと、強い手と、伸べた
腕と、大いなる恐るべき事をもって、あなたの民イスラエルをエジプトの
地から導き出し、二二この地を彼らに賜わりました。これはあなたが彼ら
の先祖たちに与えようと誓われた乳と蜜の流れる地です。二三こうして彼
らは、はいってこれを獲たのですが、あなたの声に聞き従わず、あなたの

律法を行わず、すべてあなたがせよと命じられたことをしなかったので、
あなたはこの災を彼らの上にお下しになりました。二四見よ、塁が築き
あげられたのは、この町を取るためです。つるぎと、ききんと、疫病のた
めに、町はこれを攻めているカルデヤびとの手に渡されます。あなたの言
われたようになりましたのは、ごらんのとおりであります。二五主なる神
よ、あなたはわたしに言われました、「銀をもって畑を買い、証人を立て
よ」と。そうであるのに、町はカルデヤびとの手に渡されています』」。
二六主の言葉がエレミヤに臨んだ、二七「見よ、わたしは主である、すべ
て命ある者の神である。わたしにできない事があろうか。二八それゆえ、
主はこう言われる、見よ、わたしはこの町をカルデヤびととバビロンの
王ネブカデレザルの手に渡す。彼はこれを取る。二九この町を攻めている
カルデヤびとがきて、この町に火をつけて焼き払う。屋根の上で人々が、

バアルに香をたき、ほかの神々に酒をそそいで、わたしを怒らせたその家
をも彼らは焼く。三〇それは、イスラエルの人々とユダの人々とは、その
若い時から、わたしの前に悪いことのみを行い、またイスラエルの民は
その手のわざをもって、わたしを怒らせることばかりをしたからであると
主は言われる。三一この町はそれが建った日からきょうまで、わたしの怒
りと憤りとをひき起してきたので、わたしの前からこれを除き去るので
ある。三二それは、イスラエルの民とユダの民とが、もろもろの悪を行っ
て、わたしを怒らせたことによるのである。――彼らの王たちと、そのつ
かさたち、祭司たち、預言者たち、またユダの人々とエルサレムの住民た
ちが皆そうである。三三彼らはその背中をわたしに向けて顔をわたしに向
けず、わたしがたゆまず教えたにもかかわらず、彼らは教を聞かず、また
うけないのである。三四彼らは憎むべき物を、わが名をもって呼ばれてい

る家にすえつけて、そこを汚し、三五またベンヒンノムの谷にバアルの高
き所を築いて、むすこ娘をモレクにささげた。わたしは彼らにこのよう
なことを命じたことはなく、また彼らがこの憎むべきことを行って、ユダ
に罪を犯させようとは考えもしなかった。
三六それゆえ今イスラエルの神、主は、この町、すなわちあなたがたが、
『つるぎと、ききんと、疫病のためにバビロンの王の手に渡される』といっ
ている町についてこう仰せられる、三七見よ、わたしは、わたしの怒りと
憤りと大いなる怒りをもって、彼らを追いやったもろもろの国から彼ら
を集め、この所へ導きかえって、安らかに住まわせる。三八そして彼ら
はわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。三九わたしは彼らに一つの
心と一つの道を与えて常にわたしを恐れさせる。これは彼らが彼ら自身
とその後の子孫の幸を得るためである。四〇わたしは彼らと永遠の契約

を立てて、彼らを見捨てずに恵みを施すことを誓い、またわたしを恐れる
恐れを彼らの心に置いて、わたしを離れることのないようにしよう。四一
わたしは彼らに恵みを施すことを喜びとし、心をつくし、精神をつく
し、真実をもって彼らをこの地に植える。四二主はこう仰せられる、わた
しがこのもろもろの大きな災をこの民に下したように、わたしが彼らに
約束するもろもろの幸を彼らの上に下す。四三人々はこの地に畑を買
うようになる。あなたがたが、『それは荒れて人も獣もいなくなり、カル
デヤびとの手に渡されてしまう』といっている地である。四四人々はベニ
ヤミンの地と、エルサレムの周囲と、ユダの町々と、山地の町々と、平地
の町々と、ネゲブの町々で、銀をもって畑を買い、証書をつくって、こ
れに記名し封印し、また証人を立てる。それは、わたしが彼らを再び栄
えさせるからであると主は言われる」。

第三三章一エレミヤがなお監視の庭に閉じ込められている時、主の言葉
はふたたび彼に臨んだ、二「地を造られた主、それを形造って堅く立た
せられた主、その名を主と名のっておられる者がこう仰せられる、三わた
しに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの
知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。四イスラエルの神、主
は塁と、つるぎとを防ぐために破壊されたこの町の家と、ユダの王の家に
ついてこう言われる、五カルデヤびとは来て戦い、わたしが怒りと憤り
をもって殺す人々の死体を、それに満たす。わたしは人々のもろもろの悪
のために、この町にわたしの顔をおおい隠した。六見よ、わたしは健康と、
いやしとを、ここにもたらして人々をいやし、豊かな繁栄と安全とを彼ら
に示す。七わたしはユダとイスラエルを再び栄えさせ、彼らを建てて、も
とのようにする。八わたしは彼らがわたしに向かって犯した罪のすべての

とがを清め、彼らがわたしに向かって犯した罪と反逆のすべてのとがを
ゆるす。九この町は地のもろもろの民の前に、わたしのために喜びの名と
なり、誉となり、栄えとなる。彼らはわたしがわたしの民に施すもろも
ろの恵みのことを聞く。そして、わたしがこの町に施すもろもろの恵み
と、もろもろの繁栄のために恐れて身をふるわす。
一〇主はこう言われる、あなたがたが、『それは荒れて、人もおらず獣
もいない』というこの所、すなわち、荒れて、人もおらず住む者もなく、
獣もいないユダの町とエルサレムのちまたに、一一再び喜びの声、楽し
みの声、花婿の声、花嫁の声、および

『万軍の主に感謝せよ、
主は恵みふかく、
そのいつくしみは、いつまでも絶えることがない』

といって、感謝の供え物を主の宮に携えてくる者の声が聞える。それは、
わたしがこの地を再び栄えさせて初めのようにするからであると主は言
われる。
一二万軍の主はこう言われる、荒れて、人もおらず獣もいないこの所
と、そのすべての町々に再びその群れを伏させる牧者のすまいがあるよ
うになる。一三山地の町々と、平地の町々と、ネゲブの町々と、ベニヤミ
ンの地、エルサレムの周囲と、ユダの町々で、群れは再びそれを数える
者の手の下を通りすぎると主は言われる。
一四主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に約束し
たことをなし遂げる日が来る。一五その日、その時になるならば、わたしは
ダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に
行う。一六その日、ユダは救を得、エルサレムは安らかにおる。その名

は『主はわれわれの正義』ととなえられる。
一七主はこう仰せられる、イスラエルの家の位に座する人がダビデの
子孫のうちに欠けることはない。一八またわたしの前に燔祭をささげ、素祭
を焼き、つねに犠牲をささげる人が、レビびとである祭司のうちに絶える
ことはない」。
一九主の言葉はエレミヤに臨んだ、二〇「主はこう仰せられる、もしあな
たがたが、昼と結んだわたしの契約を破り、また夜と結んだわたしの契約
を破り、昼と夜が定められた時に来ないようにすることができるならば、
二一しもべダビデとわたしが結んだ契約もまた破れ、彼はその位に座して
王となる子を与えられない。またわたしがわたしに仕えるレビびとである
祭司に立てた契約も破れる。二二天の星は数えることができず、浜の砂は
量ることができない。そのようにわたしは、しもべダビデの子孫と、わた

しに仕えるレビびとである祭司の数を増そう」。
二三主の言葉はエレミヤに臨んだ、二四「あなたはこの民が、『主は自ら
選んだ二つのやからを捨てた』といっているのを聞かないか。彼らはこの
ようにわたしの民を侮って、これを国とみなさないのである。二五主はこ
う言われる、もしわたしが昼と夜とに契約を立てず、また天地のおきてを
定めなかったのであれば、二六わたしは、ヤコブとわたしのしもべダビデと
の子孫を捨てて、再び彼の子孫のうちからアブラハム、イサク、ヤコブの
子孫を治める者を選ばない。わたしは彼らを再び栄えさせ、彼らにあわ
れみをたれよう」。

第三四章一バビロンの王ネブカデレザルがその全軍と、彼に従ってい
る地のすべての国の人々、およびもろもろの民を率いて、エルサレムとそ
の町々を攻めて戦っていた時に、主からエレミヤに臨んだ言葉、二「イ

スラエルの神、主はこう言われる、行ってユダの王ゼデキヤに告げて言い
なさい、『主はこう言われる、見よ、わたしはこの町をバビロンの王の手に
渡す。彼は火でこれを焼く。三あなたはその手をのがれることはできない、
必ず捕えられてその手に渡される。あなたはまのあたりバビロンの王を
見、顔と顔を合わせて彼と語る。それからバビロンへ行く』。四しかしユダ
の王ゼデキヤよ、主の言葉を聞きなさい。主はあなたの事についてこう言
われる、『あなたはつるぎで死ぬことはない。五あなたは安らかに死ぬ。民
はあなたの先祖であるあなたの先の王たちのために香をたいたように、あ
なたのためにも香をたき、またあなたのために嘆いて「ああ、主君よ」と
言う』。わたしがこの言葉をいうのであると主は言われる」。

六そこで預言者エレミヤはこの言葉をことごとくエルサレムでユダの王ゼ
デキヤに告げた。七その時バビロンの王の軍勢はエルサレム、および残って

いるユダのすべての町、すなわちラキシとアゼカを攻めて戦っていた。そ
れはユダの町々のうちに、これらの堅固な町がなお残っていたからである。
八ゼデキヤ王がエルサレムにいるすべての民と契約を立てて、彼らに釈放
のことを告げ示した後に、主からエレミヤに臨んだ言葉。九その契約はす
なわち人がおのおのそのヘブルびとである男女の奴隷を解放し、その兄弟
であるユダヤ人を奴隷としないことを定めたものであった。一〇この契約
をしたつかさたちと、すべての民は人がおのおのその男女の奴隷を解放し、
再びこれを奴隷としないということに聞き従って、これを解放したが、
一一後に心を翻し、解放した男女の奴隷をひきかえさせ、再びこれを
従わせて奴隷とした。一二そこで主の言葉が主からエレミヤに臨んだ、一
三「イスラエルの神、主はこう言われる、わたしはあなたがたの先祖をエ
ジプトの地、その奴隷であった家から導き出した時、彼らと契約を立て

て言った、一四『あなたがたの兄弟であるヘブルびとで、あなたがたに身
を売り、六年の間あなたがたに仕えた者は、六年の終りに、あなたがた
おのおのがこれを解放しなければならない。あなたがたは彼を解放して、
あなたがたに仕えることをやめさせなければならない』。ところがあなたが
たの先祖たちはわたしに聞き従わず、またその耳を傾けなかった。一五
しかしあなたがたは今日、心を改め、おのおのその隣り人に釈放のこ
とを告げ示して、わたしの見て正しいとすることを行い、かつわたしの名
をもってとなえられる家で、わたしの前に契約を立てた。一六ところがあ
なたがたは再び心を翻して、わたしの名を汚し、おのおの男女の奴隷
をその願いのままに解放したのをひきかえさせ、再びこれを従わせて、
あなたがたの奴隷とした。一七それゆえに、主はこう仰せられる、あなたが
たがわたしに聞き従わず、おのおのその兄弟とその隣に釈放のことを

告げ示さなかったので、見よ、わたしはあなたがたのために釈放を告げ示
して、あなたがたをつるぎと、疫病と、ききんとに渡すと主は言われる。
わたしはあなたがたを地のもろもろの国に忌みきらわれるものとする。一
八わたしの契約を破り、わたしの前に立てた契約の定めに従わない人々
を、わたしは彼らが二つに裂いて、その二つの間を通った子牛のようにす
る。――一九すなわち二つに分けた子牛の間を通ったユダのつかさたち、
エルサレムのつかさたちと宦官と祭司と、この地のすべての民を、二〇わた
しはその敵の手と、その命を求める者の手に渡す。その死体は空の鳥と
野の獣の食物となる。二一わたしはまたユダの王ゼデキヤと、そのつか
さたちをその敵の手、その命を求める者の手、あなたがたを離れて去っ
たバビロンの王の軍勢の手に渡す。二二主は言われる、見よ、わたしは彼
らに命じて、この町に引きかえしてこさせる。彼らはこの町を攻めて戦

い、これを取り、火を放って焼き払う。わたしはユダの町々を住む人のな
い荒れ地とする」。

第三五章一ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの時、主からエレミヤに臨ん
だ言葉。二「レカブびとの家に行って、彼らと語り、彼らを主の宮の一室
に連れてきて、酒を飲ませなさい」。三そこでわたしはハバジニヤの子エレ
ミヤの子であるヤザニヤと、その兄弟と、そのむすこたち、およびレカ
ブびとの全家を連れ、四これを主の宮にあるハナンの子たちの室に連れて
きた。ハナンはイグダリヤの子であって神の人であった。その室は、つか
さたちの室の次にあって、門を守るシャルムの子マアセヤの室の上にあっ
た。五わたしはレカブびとの前に酒を満たしたつぼと杯を置き、彼らに、
「酒を飲みなさい」と言ったが、六彼らは答えた、「われわれは酒を飲みませ
ん。それは、レカブの子であるわれわれの先祖ヨナダブがわれわれに命じ

て、『あなたがたとあなたがたの子孫はいつまでも酒を飲んではならない。
七また家を建てず、種をまかず、またぶどう畑を植えてはならない。また
これを所有してはならない。あなたがたは生きながらえる間は幕屋に住
んでいなさい。そうするならば、あなたがたはその宿っている地に長く生
きることができると言ったからです』。八こうしてわれわれは、レカブの子
であるわれわれの先祖ヨナダブがすべて命じた言葉に従って、われわれ
も、妻も、むすこ娘も生きながらえる間、酒を飲まず、九住む家を建て
ず、ぶどう畑も畑も種も持たないで、一〇幕屋に住み、すべてわれわれ
の先祖ヨナダブがわれわれに命じたところに従い、そのように行いまし
た。一一しかしバビロンの王ネブカデレザルがこの地に上ってきた時、わ
れわれは言いました、『さあ、われわれはエルサレムへ行こう。カルデヤび
との軍勢とスリヤびとの軍勢が恐ろしい』と。こうしてわれわれはエルサ

レムに住んでいるのです」。
一二その時、主の言葉がエレミヤに臨んだ、一三「万軍の主、イスラエルの
神はこう言われる、行って、ユダの人々とエルサレムに住む者とに告げよ。
主は仰せられる、あなたがたはわたしの言葉を聞いて教を受けないのか。
一四レカブの子ヨナダブがその子孫に酒を飲むなと命じた言葉は守られて
きた。彼らは今日に至るまで酒を飲まず、その先祖の命に従ってきた。
ところがあなたがたはわたしがしきりに語ったけれども、わたしに聞き従
わなかった。一五わたしはまた、わたしのしもべである預言者たちを、しき
りにあなたがたにつかわして言わせた、『あなたがたは今おのおのその悪い
道を離れ、その行いを改めなさい。ほかの神々に従い仕えてはならな
い。そうすれば、あなたがたはわたしがあなたがたと、あなたがたの先祖
に与えたこの地に住むことができる』と。しかしあなたがたは耳を傾け

ず、わたしに聞かなかった。
一六レカブの子ヨナダブの子孫は、その先祖が彼らに命じた命令を守っているのである。しかしこの民はわたしに従わなかった。
一七それゆえ万軍の神、主、イスラエルの神はこう仰せられる、見よ、わたしはユダとエルサレムに住む者とに、わたしが彼らの上に宣告した災を下す。わたしが彼らに語っても聞かず、彼らを呼んでも答えなかったからである」。

一八ところでエレミヤはレカブびとの家の人々に言った、「万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、あなたがたは先祖ヨナダブの命に従い、そのすべての戒めを守り、彼があなたがたに命じた事を行った。
一九それゆえ、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、レカブの子ヨナダブには、わたしの前に立つ人がいつまでも欠けることはない」。

第三六章
一ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年に主からこの言葉がエ

レミヤに臨んだ、二「あなたは巻物を取り、わたしがあなたに語った日、す
なわちヨシヤの日から今日に至るまで、イスラエルとユダと万国とに関し
てあなたに語ったすべての言葉を、それにしるしなさい。三ユダの家がわ
たしの下そうとしているすべての災を聞いて、おのおのその悪い道を離
れて帰ることもあろう。そうすれば、わたしはそのとがとその罪をゆるす
かも知れない」。

四そこでエレミヤはネリヤの子バルクを呼んだ。バルクはエレミヤの口述
にしたがって、主が彼にお告げになった言葉をことごとく巻物に書きしる
した。五そしてエレミヤはバルクに命じて言った、「わたしは主の宮に行く
ことを妨げられている。六それで、あなたが行って、断食の日に主の宮
で、すべての民が聞いているところで、あなたがわたしの口述にしたがっ
て、巻物に筆記した主の言葉を読みなさい。またユダの人々がその町々か

ら来て聞いているところで、それを読みなさい。七彼らは主の前に祈願を
ささげ、おのおのその悪い道を離れて帰ることもあろう。主がこの民に対
して宣告された怒りと憤りは大きいからである」。八こうしてネリヤの
子バルクはすべて預言者エレミヤが自分に命じたように、主の宮で、その
巻物に書かれた主の言葉を読んだ。

九ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの五年九月、エルサレムのすべての民
と、ユダの町々からエルサレムに来たすべての民とは、主の前に断食を行
うべきことを告げ示された。一〇バルクは主の宮の上の庭で、主の宮の新
しい門の入口のかたわらにある書記シャパンの子であるゲマリヤのへやで、
巻物に書かれたエレミヤの言葉をすべての民に読み聞かせた。

一一シャパンの子であるゲマリヤの子ミカヤはその巻物にある主の言葉
をことごとく聞いて、一二王の家にある書記のへやに下って行くと、もろ

もろのつかさたち、すなわち書記エリシャマ、シマヤの子デラヤ、アカボ
ルの子エルナタン、シャパンの子ゲマリヤ、ハナニヤの子ゼデキヤおよび
すべてのつかさたちがそこに座していた。一三ミカヤはバルクが民に巻物
を読んで聞かせたとき、自分の聞いたすべての言葉を彼らに告げたので、一
四つかさたちはクシの子セレミヤの子であるネタニヤの子エホデをバルク
のもとにつかわして言わせた、「あなたが民に読み聞かせたその巻物を手に
取って、来てください」。そこでネリヤの子バルクは巻物を手に取って、彼
らのもとに来たので、一五彼らはバルクに言った、「座してそれを読んでくだ
さい」。バルクはそれを彼らに読みきかせた。一六彼らはそのすべての言葉
を聞き、恐れて互に見かわし、バルクに言った、「われわれはこのすべて
の言葉を、王に報告しなければならない」。一七そしてバルクに尋ねて言っ
た、「このすべての言葉を、あなたがどのようにして書いたのか話してくだ

さい。彼の口述によるのですか」。一八バルクは彼らに答えた、「彼がわた
しにこのすべての言葉を口述したので、わたしはそれを墨汁で巻物に書
いたのです」。一九つかさたちはバルクに言った、「行って、エレミヤと一緒
に身を隠しなさい。人に所在を知られてはなりません」。
二〇そこで彼らは巻物を書記エリシャマのへやに置いて庭にはいり、王
のもとへ行って、このすべての言葉を王に告げたので、二一王はその巻物を
持ってこさせるためにエホデをつかわした。エホデは書記エリシャマのへや
から巻物を取ってきて、それを王と王のかたわらに立っているすべてのつ
かさたちに読みきかせた。二二時は九月であって、王は冬の家に座してい
た。その前に炉があって火が燃えていた。二三エホデが三段か四段を読む
と、王は小刀をもってそれを切り取り、炉の火に投げいれ、ついに巻物全部
を炉の火で焼きつくした。二四王とその家来たちはこのすべての言葉を聞い

ても恐れず、またその着物を裂くこともしなかった。二五エルナタン、デラ
ヤおよびゲマリヤが王にその巻物を焼かないようにと願ったときにも彼は
聞きいれなかった。二六そして王は王子エラメルとアヅリエルの子セラヤと
アブデルの子セレミヤに、書記バルクと預言者エレミヤを捕えるようにと
命じたが、主は彼らを隠された。

二七バルクがエレミヤの口述にしたがって筆記した言葉を載せた巻物を
王が焼いた後、主の言葉がエレミヤに臨んだ、二八「他の巻物を取り、ユ
ダの王エホヤキムが焼いた、前の巻物のうちにある言葉を皆それに書きし
るしなさい。二九またユダの王エホヤキムについて言いなさい、『主はこう
仰せられる、あなたはこの巻物を焼いて言った、「どうしてあなたはこの
巻物に、バビロンの王が必ず来てこの地を滅ぼし、ここから人と獣とを
絶やす、と書いたのか」と。三〇それゆえ主はユダの王エホヤキムについて

こう言われる、彼の子孫にはダビデの位にすわる者がなくなる。また彼
の死体は捨てられて昼は暑さにあい、夜は霜にあう。三一わたしはまた彼
とその子孫とその家来たちをその罪のために罰する。また彼らとエルサレ
ムの民とユダの人々には災を下す。このことについては、すでに
語ったけれども、彼らは聞くことをしなかった』」。
三二そこでエレミヤは他の巻物を取り、ネリヤの子書記バルクに与えたの
で、バルクはユダの王エホヤキムが火にくべて焼いた巻物のすべての言葉
を、エレミヤの口述にしたがってそれに書きしるし、また同じような言葉
を多くそれに加えた。

第三七章一ヨシヤの子ゼデキヤはエホヤキムの子コニヤに代って王となっ
た。バビロンの王ネブカデレザルが彼をユダの地の王としたのである。二
彼もその家来たちも、その地の人々も、主が預言者エレミヤによって語ら

れた言葉に聞き従わなかった。
三ゼデキヤ王はセレミヤの子ユカルと、マアセヤの子祭司ゼパニヤを預言者
エレミヤにつかわして、「われわれのために、われわれの神、主に祈ってく
ださい」と言わせた。四エレミヤは民の中に出入りしていた。まだ獄屋に
入れられなかったからである。五パロの軍勢がエジプトから出て来たので、
エルサレムを攻め囲んでいたカルデヤびとはその情報を聞いてエルサレ
ムを退いた。六その時、主の言葉は預言者エレミヤに臨んだ、七「イスラ
エルの神、主はこう言われる、あなたがたをつかわしてわたしに求めたユ
ダの王にこう言いなさい、『あなたがたを救うために出てきたパロの軍勢は
その国エジプトに帰ろうとしている。八カルデヤびとが再び来てこの町を
攻めて戦い、これを取って火で焼き滅ぼす。九主はこう言われる、あなた
がたは、「カルデヤびとはきっとわれわれを離れ去る」といって自分を欺

いてはならない。彼(かれ)らは去(さ)ることはない。一〇たといあなたがたが自分(じぶん)を攻(せ)
めて戦(たたか)うカルデヤびとの全軍(ぜんぐん)を撃(う)ち破(やぶ)って、その天幕(てんまく)のうちに負傷者(ふしょうもの)の
みを残(のこ)しても、彼(かれ)らは立(た)ち上(あ)がって火(ひ)でこの町(まち)を焼(や)き滅(ほろ)ぼす』」。
一一さてカルデヤびとの軍勢(ぐんぜい)がパロの軍勢(ぐんぜい)の来(く)るのを聞(き)いてエルサレム
を退(しりぞ)いたとき、一二エレミヤは、ベニヤミンの地(ち)で民(たみ)のうちに自分(じぶん)の分(わ)け
前(まえ)を受(う)け取(と)るため、エルサレムを立(た)ってその地(ち)へ行(い)こうと、一三ベニヤミン
の門(もん)に着(つ)いたとき、そこにハナニヤの子(こ)セレミヤの子(こ)でイリヤという名(な)の
番兵(ばんぺい)がいて、預言者(よげんしゃ)エレミヤを捕(とら)え、「あなたはカルデヤびとの側(がわ)に脱走(だっそう)
しようとしている」と言(い)った。一四エレミヤは言(い)った、「それはまちがいだ。
わたしはカルデヤびとの側(がわ)に脱走(だっそう)しようとしていない」。しかしイリヤは
聞(き)かず、エレミヤを捕(とら)えて、つかさたちのもとへ引(ひ)いて行(い)った。一五つかさ
たちは怒(いか)って、エレミヤを打(う)ちたたき、書記(しょき)ヨナタンの家(いえ)の獄屋(ごくや)にいれた。

この家が獄屋になっていたからである。
一六エレミヤが地下の獄屋にはいって、そこに多くの日を送ってのち、一
七ゼデキヤ王は人をつかわし、彼を連れてこさせた。王は自分の家でひそ
かに彼に尋ねて言った、「主から何かお言葉があったか」。エレミヤはあっ
たと答えた。そして言った、「あなたはバビロンの王の手に引き渡されま
す」。一八エレミヤはまたゼデキヤ王に言った、「わたしが獄屋にいれられ
たのは、あなたに、またはあなたの家来に、あるいはこの民に、どのよう
な罪を犯したからなのですか。一九あなたがたに預言して、『バビロンの王
はあなたがたをも、この地をも攻めにこない』と言っていたあなたがたの
預言者は今どこにいるのですか。二〇王なるわが君よ、どうぞ今お聞きくだ
さい。わたしの願いをお聞きとどけください。わたしを書記ヨナタンの家
へ帰らせないでください。そうでないと、わたしはそこで殺されるでしょ

う」。**二一**そこでゼデキヤ王は命を下し、エレミヤを監視の庭に入れさせ、
かつ、パンを造る者の町から毎日パン一個を彼に与えさせた。これは町に
パンがなくなるまで続いた。こうしてエレミヤは監視の庭にいた。

第三八章
一マッタンの子シパテヤ、パシュルの子ゲダリヤ、セレミヤの
子ユカル、マルキヤの子パシュルはエレミヤがすべての民に告げていたそ
の言葉を聞いた。**二**彼は言った、「主はこう言われる、この町にとどまる者
は、つるぎや、ききんや、疫病で死ぬ。しかし出てカルデヤびとにくだる
者は死を免れる。すなわちその命を自分のぶんどり物として生きること
ができる。**三**主はこう言われる、この町は必ずバビロンの王の軍勢の手
に渡される。彼はこれを取る」。**四**すると、つかさたちは王に言った、「この
人を殺してください。このような言葉をのべて、この町に残っている兵士
の手と、すべての民の手を弱くしているからです。この人は民の安泰を求

めないで、その災を求めているのです」。五ゼデキヤ王は言った、「見よ、
彼はあなたがたの手にある。王はあなたがたに逆らって何事をもなし得な
い」。六そこで彼らはエレミヤを捕え、監視の庭にある王子マルキヤの穴に
投げ入れた。すなわち、綱をもってエレミヤをつり降ろしたが、その穴に
は水がなく、泥だけであったので、エレミヤは泥の中に沈んだ。
七王の家の宦官エチオピヤびとエベデメレクは、彼らがエレミヤを穴に
投げ入れたことを聞いた。その時、王はベニヤミンの門に座していたので、
八エベデメレクは王の家から出て行って王に言った、九「王なるわが君よ、
この人々が預言者エレミヤにしたことはみな良いことではありません。彼
を穴に投げ入れました。町に食物がなくなりましたから、彼はそこで餓死
するでしょう」。一〇王はエチオピヤびとエベデメレクに命じて言った、「こ
こから三人のひとを連れて行って、預言者エレミヤを、死なないうちに穴

から引き上げなさい」。一一そこでエベデメレクはその人々を連れて王の家
の倉の衣服室に行き、そこから古い布切れや、着ふるした着物を取り、こ
れを穴の中にいるエレミヤのところへ、綱をもってつり降ろした。一二そし
てエチオピヤびとエベデメレクは、「この布切れや着物を、あなたのわきの
下にはさんで、綱に当てなさい」とエレミヤに言った。エレミヤはそのよ
うにした。一三すると彼らは綱をもってエレミヤを穴から引き上げた。そ
してエレミヤは監視の庭にとどまった。

一四ゼデキヤ王は人をつかわして預言者エレミヤを主の宮の第三の門に
連れてこさせ、王はエレミヤに言った、「あなたに尋ねたいことがある。何事
もわたしに隠してはならない」。一五エレミヤはゼデキヤに言った、「もしわ
たしがお話するなら、あなたは必ずわたしを殺されるではありませんか。
たといわたしが忠告をしても、あなたはお聞きにならないでしょう」。一六

その時ゼデキヤ王は、ひそかにエレミヤに誓って言った、「われわれの魂
を造られた主は生きておられる。わたしはあなたを殺さない、またあなた
の命を求める者の手に、あなたを渡すこともしない」。
一七そこでエレミヤはゼデキヤに言った、「万軍の神、イスラエルの神、主
はこう仰せられる、もしあなたがバビロンの王のつかさたちに降伏するな
らば、あなたの命は助かり、またこの町は火で焼かれることなく、あなた
も、あなたの家の者も生きながらえることができる。一八しかし、もしあな
たが出てバビロンの王のつかさたちに降伏しないならば、この町はカルデ
ヤびとの手に渡される。彼らは火でこれを焼く。あなたはその手をのがれ
ることができない」。一九ゼデキヤ王はエレミヤに言った、「わたしはカルデ
ヤびとに脱走したユダヤ人を恐れている。カルデヤびとはわたしを彼らの
手に渡し、彼らはわたしをはずかしめる」。二〇エレミヤは言った、「彼らは

あなたを渡さないでしょう。どうか、わたしがあなたに告げた主の声に聞き従ってください。そうすれば幸を得、また命が助かります。
二一しかし降伏することを拒むならば、主がわたしに示された幻を申しましょう。
二二すなわち、ユダの王の家に残っている女たちは、みなバビロンの王のつかさたちの所へ引いて行かれます。その女たちは言うのです、

『あなたの親しい友だちがあなたを欺いた、
　そしてあなたに勝った。
今あなたの足は泥に沈んでいるので、
　彼らはあなたを捨てて去る』。

二三あなたの妻たちと子供たちは皆カルデヤびとの所へひき出される。あなた自身もその手をのがれることができず、バビロンの王に捕えられる。そしてこの町は火で焼かれるでしょう」。

二四ゼデキヤはエレミヤに言った、「これらの言葉を人に知らせてはなら
ない。そうすればあなたは殺されることはない。二五わたしがあなたと話
をしたことを、つかさたちが聞いて、彼らがあなたの所に来て、『あなたが
王に話したこと、王があなたに話したことをわれわれに告げなさい。何事
も隠してはならない。われわれはあなたを殺しはしない』と言うならば、二
六あなたは彼らに、『わたしは王に願って、わたしをヨナタンの家に送り返
さず、そこで死ぬことのないようにしてくださいと言った』と答えなさい」。
二七さて、つかさたちは皆エレミヤのところへ来て尋ねたが、王が彼に教
えたように彼らに答えたので、彼らは彼と話すことをやめた。その会話を
聞いた者がなかったからである。二八エレミヤはエルサレムの取られる日ま
で監視の庭にとどまっていた。

第三九章一ユダの王ゼデキヤの九年十月、バビロンの王ネブカデレザルは

その全軍を率い、エルサレムに来てこれを攻め囲んだが、**二**ゼデキヤの十一
年四月九日になって町の一角が破られた。**三**エルサレムが取られたので、バ
ビロンの王のつかさたち、すなわちネルガル・シャレゼル、サムガル・ネ
ボ、ラブサリスのサルセキム、ラブマグのネルガル・シャレゼルおよびバビ
ロンの王のその他のつかさたちは皆ともに来て中の門に座した。**四**ユダの
王ゼデキヤとすべての兵士たちはこれを見て逃げ、夜のうちに、王の庭園
の道を通って、二つの城壁の間の門から町を出て、アラバの方へ行った
が、**五**カルデヤびとの軍勢はこれを追って、エリコの平地でゼデキヤに追い
つき、これを捕えて、ハマテの地リブラにいるバビロンの王ネブカデレザ
ルのもとに引いて行ったので、王はそこで彼の罪をさだめた。**六**バビロン
の王はリブラで、ゼデキヤの子たちを彼の目の前で殺した。バビロンの王
はまたユダのすべての貴族たちを殺した。**七**王はまたゼデキヤの目をつぶ

させ、彼をバビロンに引いて行くために、鎖につないだ。八またカルデヤ
びとは王宮と民家を火で焼き、エルサレムの城壁を破壊した。九そして
侍衛の長ネブザラダンは町のうちに残っている民と、自分に降伏した者、
およびその他の残っている民をバビロンに捕え移した。一〇しかし侍衛の
長ネブザラダンは、民の貧しい無産者をユダの地に残し、同時にぶどう
畑と田地をこれに与えた。

一一さてバビロンの王ネブカデレザルはエレミヤの事について侍衛の長
ネブザラダンに命じて言った、一二「彼をとり、よく世話をせよ。害を加
えることなく、彼があなたに言うようにしてやりなさい」。一三そこで侍衛
の長ネブザラダン、ラブサリスのネブシャズバン、ラブマグのネルガル・
シャレゼル、およびバビロンの王のつかさたちは、一四人をつかわして、エ
レミヤを監視の庭から連れてこさせ、シャパンの子アヒカムの子であるゲ

ダリヤに託して、家につれて行かせた。こうして彼は民のうちにいた。
一五エレミヤが監視の庭に閉じこめられていた時、主の言葉が彼に臨ん
だ、一六「行って、エチオピヤびとエベデメレクに告げなさい、『万軍の主、イス
ラエルの神はこう言われる、わたしの言った災をわたしはこの町に下す、
幸をこれに下すのではない。その日、この事があなたの目の前で成就
する。一七主は言われる、その日わたしはあなたを救う。あなたは自分の
恐れている人々の手に渡されることはない。一八わたしが必ずあなたを
救い、つるぎに倒れることのないようにするからである。あなたの命はあ
なたのぶんどり物となる。あなたがわたしに寄り頼んだからであると主は
言われる』」。

第四〇章一侍衛の長ネブザラダンは、バビロンに移されるエルサレムと
ユダの人々のうちにエレミヤを鎖につないでおいて、これを捕えて行った

が、ついにラマで彼を釈放した。その後、主の言葉がエレミヤに臨んだ。
二侍衛の長はエレミヤを召して彼に言った、「あなたの神、主はこの所に
この災を下すと告げ示された。三主はこれを下し、自ら言われたとお
りに行われた。あなたがたが主に対して罪を犯し、み声に従わなかった
から、この事があなたがたの上に臨んだのだ。四見よ、わたしはきょう、あ
なたの手の鎖を解いてあなたを釈放する。もしあなたがわたしと一緒に
バビロンへ行くのが良いと思われるなら、おいでなさい。わたしは、じゅう
ぶんあなたの世話をします。もしあなたがわたしと一緒にバビロンには行
きたくないなら、行かなくてもよろしい。見よ、この地はみなあなたの前
にあります、あなたが良いと思い、正しいと思う所に行きなさい。五あな
たがとどまるならば、バビロンの王がユダの町々の総督として立てたシャ
パンの子アヒカムの子であるゲダリヤの所へ帰り、彼と共に民のうちに

住みなさい。あるいはまたあなたが正しいと思う所へ行きなさい」。こう
して侍衛の長は彼に糧食と贈り物を与えて去らせた。六そこでエレミ
ヤはミヅパへ行き、アヒカムの子ゲダリヤの所へ行って、彼と共にその地
に残っている民のうちに住んだ。
七さて野外にいた軍勢の長たちと、その配下の人々は、バビロンの王が
アヒカムの子ゲダリヤを立てて、その地の総督とし、男、女、子供、およ
び国のうちのバビロンに移されない貧しい者を彼に委託した事を聞いたの
で、八ネタニヤの子イシマエルと、カレヤの子ヨハナンおよびタンホメテの
子セラヤと、ネトパびとであるエパイの子たちと、マアカびとの子ヤザニヤ
およびその配下の人々は、ミヅパにいるゲダリヤのもとへ行った。九シャ
パンの子であるアヒカムの子ゲダリヤは、彼らとその配下の人々に誓って
言った、「カルデヤびとに仕えることを恐れるに及ばない。この地に住んで

バビロンの王に仕えるならば、あなたがたは幸福になる。一〇わたしはミ
ヅパにいて、われわれの所に来るカルデヤびとの前に、あなたがたのため
に立ちましょう。あなたがたは、ぶどう酒や夏のくだもの、油を集めて、
それを器にたくわえ、あなたがたの獲た町々に住みなさい」。一一同じよ
うに、モアブとアンモンびとのうち、またエドムおよび他の国々にいるユ
ダヤ人は、バビロンの王がユダに人を残したことと、シャパンの子である
アヒカムの子ゲダリヤを立ててその総督としたこととを聞いた。一二そこ
でそのユダヤ人らはみなその追いやられたもろもろの所から帰ってきて、
ユダの地のミヅパにいるゲダリヤのもとにきた。そして多くのぶどう酒と
夏のくだものを集めた。
一三またカレヤの子ヨハナンと、野外にいた軍勢の長たちはみなミヅパ
にいるゲダリヤのもとにきて、一四彼に言った、「アンモンびとの王バアリ

スがあなたを殺すためにネタニヤの子イシマエルをつかわしたことを知っ
ていますか」。しかしアヒカムの子ゲダリヤは彼らの言うことを信じなかっ
たので、一五カレヤの子ヨハナンはミヅパでひそかにゲダリヤに言った、「わ
たしが行って、人に知れないように、ネタニヤの子イシマエルを殺しましょ
う。どうして彼があなたを殺して、あなたの周囲に集まっているユダヤ人
を散らし、ユダの残った者を滅ぼしてよいでしょう」。一六しかしアヒカム
の子ゲダリヤはカレヤの子ヨハナンに言った、「この事をしてはならない。
あなたはイシマエルについて偽りを言っているのです」。

第四一章一七月のころ、王家のもので、エリシャマの子ネタニヤの子であ
り、また王の高官のひとりであるイシマエルは、王の十人のつかさたちと
共にミヅパにいたアヒカムの子ゲダリヤのもとにきて、ミヅパで食を共に
したが、二ネタニヤの子イシマエルおよび共にいた十人の者は立ち上がっ

て、バビロンの王がこの地の総督としたシャパンの子アヒカムの子である
ゲダリヤを刀で殺し、三イシマエルはまたミヅパでゲダリヤと共にいたす
べてのユダヤ人と、たまたまそこにいたカルデヤびとの兵士たちを殺した。
四ゲダリヤが殺された次の日、まだだれもその事を知らないうちに、五
八十人の人々がそのひげをそり、衣服をさき、身に傷をつけ、手には素祭
のささげ物と香を携え、シケム、シロ、サマリヤからきて、主の宮にさ
さげようとした。六ネタニヤの子イシマエルはミヅパから泣きながら出て
きて彼らを迎え、彼らに会って、「アヒカムの子ゲダリヤのもとにおいでな
さい」と言った。七そして彼らが町の中にはいったとき、ネタニヤの子イ
シマエルは自分と一緒にいた人々と共に彼らを殺して、その死体を穴に投
げ入れた。八しかしそのうちの十人はイシマエルに向かい、「わたしたちは
畑に小麦、大麦、油、および蜜を隠しています、わたしたちを殺さない

でください」と言ったので、彼らをその仲間と共に殺さないでしまった。
九イシマエルが自分の殺した人々の死体を投げ入れた穴は、アサ王がイ
スラエルの王バアシャを恐れて掘った穴であった。ネタニヤの子イシマエ
ルは殺した人々をこれに満たした。一〇次いでイシマエルはミヅパに残っ
ているすべての民、すなわち王の娘たちと侍衛の長ネブザラダンがアヒ
カムの子ゲダリヤに託したミヅパに残っているすべての民とを捕虜とした。
ネタニヤの子イシマエルは彼らを捕虜とし、アンモンびとのもとに渡り行
こうとして立ち去った。
一一カレヤの子ヨハナンおよび彼と共にいる軍勢の長たちはネタニヤの
子イシマエルの行った悪事をみな聞き、一二その兵士たちを率いて、ネタニ
ヤの子イシマエルと戦うために出て行き、ギベオンの大池のほとりで彼
に会った。一三イシマエルと共にいる人々は、カレヤの子ヨハナンおよび

彼と共にいる軍勢の長たちを見て喜んだ。一四そしてイシマエルがミヅ
パから捕虜にしてきた人々は身をめぐらしてカレヤの子ヨハナンのもとへ
行った。一五ネタニヤの子イシマエルは八人の者と共にヨハナンを避けて
逃げ、アンモンびとの所へ行った。一六そこでカレヤの子ヨハナンおよび
彼と共にいる軍勢の長たちはネタニヤの子イシマエルがアヒカムの子ゲ
ダリヤを殺して、ミヅパから捕虜として連れてきた、あの残っていた民、す
なわち兵士や女、子供、宦官をギベオンから連れ帰ったが、一七彼らはエ
ジプトへ行こうとしてベツレヘムの近くにあるゲルテ・キムハムへ行って、
そこにとどまった。一八これは、ネタニヤの子イシマエルが、バビロンの王
によってこの地の総督に任じられたアヒカムの子ゲダリヤを殺したことに
より、カルデヤびとを恐れたからである。

第四二章一そのとき軍勢の長たち、およびカレヤの子ヨハナンと、ホシャ

ヤの子アザリヤ、ならびに民の最も小さい者から最も大いなる者にいた
るまで、二みな預言者エレミヤの所に来て言った、「どうかあなたの前に
われわれの求めが受けいれられますように。われわれのため、この残って
いる者すべてのために、あなたの神、主に祈ってください、(今ごらんのと
おり、われわれは多くのうち、わずかに残っている者です)
三そうすれば、
あなたの神、主は、われわれの行くべき道と、なすべき事をお示しになる
でしょう」。
四預言者エレミヤは彼らに言った、「よくわかりました。あな
たがたの求めにしたがって、あなたがたの神、主に祈りましょう。主があ
なたがたに答えられることを、何事も隠さないであなたがたに言いましょ
う」。
五彼らはエレミヤに言った、「もし、あなたの神、主があなたをつか
わしてお告げになるすべての言葉を、われわれが行わないときは、どうか
主がわれわれに対してまことの真実な証人となられるように。
六われわれわ

れは良くても悪くても、われわれがあなたをつかわそうとするわれわれの
神、主の声に従います。われわれの神、主の声に従うとき、われわれは
幸を得るでしょう」。
七十日の後、主の言葉がエレミヤに臨んだ。八エレミヤはカレヤの子ヨ
ハナンおよび彼と共にいる軍勢の長たち、ならびに民の最も小さい者
から最も大いなる者までことごとく招いて、九彼らに言った、「あなたが
たがわたしをつかわして、あなたの祈願をその前にのべさせたイスラエル
の神、主はこう言われます、一〇もしあなたがたがこの地にとどまるなら
ば、わたしはあなたがたを建てて倒すことなく、あなたがたを植えて抜く
ことはしない。わたしはあなたがたに災を下したことを悔いているから
である。一一主は言われる、あなたが恐れているバビロンの王を恐れては
ならない。彼を恐れてはならない、わたしが共にいて、あなたがたを救い、

彼の手から助け出すからである。一二わたしはあなたがたをあわれみ、また
彼にあなたがたをあわれませ、あなたがたを自分の地にとどまらせる。一三
しかし、もしあなたがたが、『われわれはこの地にとどまらない』といって、
あなたがたの神、主の声にしたがわず、一四また、『いいえ、われわれはあ
の戦争を見ず、ラッパの声を聞かず、食物も乏しくないエジプトの地へ
行って、あそこに住まおう』と言うならば、一五あなたがた、ユダの残って
いる者たちよ、主の言葉を聞きなさい。万軍の主、イスラエルの神はこう
言われる、もしあなたがたがむりにエジプトへ行ってそこに住むならば、一
六あなたがたの恐れているつるぎはエジプトの地であなたがたに追いつき、
あなたがたの恐れているききんは、すぐあとを追ってエジプトまで行き、そ
の所であなたがたは死ぬ。一七すべてむりにエジプトへ行ってそこに住む
者は、つるぎと、ききんと、疫病で死ぬ。わたしが彼らに下そうとして

いる災をのがれて残る者はそのうちにない。
一八万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、わたしの怒りと憤り
とをエルサレムの住民の上に注いだように、わたしの憤りは、あなた
がたがエジプトへ行くとき、あなたがたの上に注ぐ。あなたがたは、のろ
いとなり、恐怖となり、ののしりとなり、はずかしめとなる。あなたがたは
再びこの所を見ることができない。一九ユダの残っている者たちよ、『エ
ジプトへ行ってはならない』と主はあなたがたに言われた。わたしがきょ
う警告したことを、あなたがたは確かに知らなければならない。二〇あな
たがたはみずからそむき去って、命を失った。なぜなら、あなたがたが
わたしをあなたがたの神、主につかわし、『われわれの神、主に祈り、われ
われの神、主の言われることをことごとく示してください。われわれはそ
れを行います』と言ったので、二一わたしはきようそれを示したが、あな

たがたはあなたがたの神、主の声を聞かず、主がわたしをつかわして命じ
させられた事には、すこしも従わなかったからである。二二それゆえ、あ
なたがたが行って住まうことを願っているその所で、あなたがたはつるぎ
と、ききんと、疫病で死ぬことを確かに知らなければならない」。

第四三章一エレミヤがすべての民にむかって、彼らの神、主の言葉をこ
とごとく語り、彼らの神、主が自分をつかわして言わせられるその言葉を
みな告げ終った時、二ホシャヤの子アザリヤと、カレヤの子ヨハナンおよ
び高慢な人々はみなエレミヤに言った、「あなたは偽りを言っている。わ
れわれの神、主が、『エジプトへ行ってそこに住むな』と言わせるためにあ
なたをつかわされたのではない。三ネリヤの子バルクがあなたをそそのか
して、われわれに逆らわせ、われわれをカルデヤびとの手に渡して殺すか、
あるいはバビロンに捕え移させるのだ」。四こうしてカレヤの子ヨハナンと

軍勢の長たちおよび民らは皆、主の声にしたがわず、ユダの地にとどま
ろうとしなかった。五そしてカレヤの子ヨハナンと軍勢の長たちは、ユダ
に残っている者すなわち追いやられた国々からユダの地に住むために帰っ
てきた者、――六男、女、子供、王の娘たち、およびすべて侍衛の長
ネブザラダンがシャパンの子であるアヒカムの子ゲダリヤに渡しておいた
者、ならびに預言者エレミヤとネリヤの子バルクをつれて、七エジプトの地
へ行った。彼らは主の声にしたがわなかったのである。そして彼らはつい
にタパネスに行った。
八主の言葉はタパネスでエレミヤに臨んだ、九「大きな石を手に取り、ユ
ダの人々の目の前で、これをタパネスにあるパロの宮殿の入口の敷石の
しっくいの中に隠して、一〇彼らに言いなさい、『万軍の主、イスラエルの神
はこう言われる、見よ、わたしは使者をつかわして、わたしのしもべである

バビロンの王ネブカデレザルを招く。彼はその位をこの隠した石の上に
すえ、その上に王の天蓋を張る。一一彼は来てエジプトの地を撃ち、疫病
に定まっている者を疫病に渡し、とりこに定まっている者をとりこにし、
つるぎに定まっている者をつるぎにかける。一二彼はエジプトの神々の宮
に火をつけてこれを焼き、彼らをとりこにする。そして羊を飼う者が着物
の虫をはらいきよめるように、エジプトの地をきよめる。彼は安らかにそ
こを去る。一三彼はエジプトの地にあるヘリオポリスのオベリスクをこわ
し、エジプトの神々の宮を火で焼く』。

第四四章一エジプトの地に住んでいるユダヤ人すなわちミグドル、タパネ
ス、メンピス、パテロスの地に住む者の事についてエレミヤに臨んだ言葉、
二「万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、あなたがたはわたしがエ
ルサレムとユダの町々に下した災を見た。見よ、これらは今日、すでに

荒れ地となって住む人もない。三これは彼らが悪を行って、わたしを怒ら
せたことによるのである。すなわち彼らは自分も、あなたがたも、あなた
がたの先祖たちも知らなかった、ほかの神々に行って、香をたき、これに
仕えた。四わたしは自分のしもべであるすべての預言者たちを、しきりに
あなたがたにつかわして、『どうか、わたしの忌みきらうこの憎むべき事を
しないように』と言わせたけれども、五彼らは聞かず、耳を傾けず、ほか
の神々に香をたいて、その悪を離れなかった。六それゆえ、わたしは怒り
と憤りをユダの町々とエルサレムのちまたに注ぎ、それを焼いたので、
それらは今日のように荒れ、滅びてしまった。七万軍の神、イスラエルの
神、主は今こう言われる、あなたがたはなぜ大いなる悪を行って自分自身
を害し、ユダのうちから、あなたがたの男と女と、子供と乳のみ子を断っ
て、ひとりも残らないようにしようとするのか。八なぜあなたがたはその

手のわざをもってわたしを怒らせ、あなたがたが行って住まうエジプトの
地で、ほかの神々に香をたいて自分の身を滅ぼし、地の万国のうちに、の
ろいとなり、はずかしめとなろうとするのか。九ユダの地とエルサレムのち
またで行ったあなたがたの先祖たちの悪、ユダの王たちの悪、その妻たち
の悪、およびあなたがた自身の悪、あなたがたの妻たちの悪をあなたがた
は忘れたのか。一〇彼らは今日に至るまで悔いず、また恐れず、あなたが
たとあなたがたの先祖たちの前に立てた、わたしの律法とわたしの定めと
に従って歩まないのである。

一一それゆえ万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、見よ、わたしは
顔をあなたがたに向けて災を下し、ユダの人々をことごとく断つ。一二
またわたしは、エジプトの地に住むためにむりに行ったあのユダの残り
の者を取り除く。彼らはみな滅ぼされてエジプトの地に倒れる。彼らは、

つるぎとききんに滅ぼされ、最も小さい者から最も大いなる者まで、つ
るぎとききんによって死ぬ。そして、のろいとなり、恐怖となり、ののし
りとなり、はずかしめとなる。一三わたしはエルサレムを罰したように、つ
るぎと、ききんと、疫病をもってエジプトに住んでいる者を罰する。一四
それゆえ、エジプトの地へ行ってそこに住んでいるユダの残りの者のうち、
のがれ、または残って、帰り住まおうと願うユダの地へ帰る者はひとりも
ない。少数ののがれる者のほかには、帰ってくる者はない」。
一五その時、自分の妻がほかの神々に香をたいたことを知っている人々、
およびその所に立っている女たちの大いなる群衆、ならびにエジプト
の地のパテロスに住んでいる民はエレミヤに答えて言った、一六「あなたが
主の名によってわたしたちに述べられた言葉は、わたしたちは聞くことが
できません。一七わたしたちは誓ったことをみな行い、わたしたちが、も

と行っていたように香を天后にたき、また酒をその前に注ぎます。すなわ
ち、ユダの町々とエルサレムのちまたで、わたしたちとわたしたちの先祖
たちおよびわたしたちの王たちと、わたしたちのつかさたちが行ったよう
にいたします。その時には、わたしたちは糧食には飽き、しあわせで、
災に会いませんでした。一八ところが、わたしたちが、天后に香をたく
ことをやめ、酒をその前に注がなくなった時から、すべての物に乏しくな
り、つるぎとききんに滅ぼされました」。一九また女たちは言った、「わた
したちが天后に香をたき、酒をその前に注ぐに当って、これにかたどって
パンを造り、酒を注いだのは、わたしたちの夫が許したことではありま
せんか」。
二〇そこでエレミヤは男女のすべての人、およびこの答をしたすべての
民に言った、二一「ユダの町々とエルサレムのちまたで、あなたがたとあ

なたがたの先祖たち、およびあなたがたの王たちとあなたがたのつかさた
ち、およびその地の民が香をたいたことは、主がこれを忘れず、また、心
にとどめておられることではないか。
二二主はあなたがたの悪しきわざの
ため、あなたがたの憎むべき行いのために、もはや忍ぶことができなく
なられた。それゆえ、あなたがたの地は今日のごとく荒れ地となり、驚き
となり、のろいとなり、住む人のない地となった。
二三あなたがたが香をた
き、主に罪を犯し、主の声に聞き従わず、その律法と、定めと、あかし
に従って歩まなかったので、今日のようにこの災があなたがたに臨ん
だのである」。
二四エレミヤはまたすべての民と女たちに言った、「あなたがたすべて
エジプトの地にいるユダの人々よ、主の言葉を聞きなさい。
二五万軍の主、
イスラエルの神はこう言われる、あなたがたとあなたがたの妻たちは口で

言い、手で行い、『わたしたちは天后に香をたき、酒を注いで立てた誓い
を必ずなし遂げる』と言う。それならば、あなたがたの誓いをかため、あ
なたがたの誓いをなし遂げなさい。二六それゆえ、あなたがたすべてエジプ
トの地にいるユダの人々よ、主の言葉を聞きなさい。主は言われる、わた
しは自分の大いなる名をさして誓う、すなわちエジプトの全地に、ユダの
人々で、その口に、『主なる神は生きておられる』と言って、わたしの名を
となえるものは、もはやひとりもないようになる。二七見よ、わたしは彼ら
を見守っている、それは幸を与えるためではなく、災を下すためであ
る。エジプトの地にいるユダの人々は、つるぎとききんによって滅び絶え
る。二八しかし、つるぎをのがれるわずかの者はエジプトの地を出てユダの
地に帰る。そしてユダの残っている民でエジプトに来て住んだ者は、わた
しの言葉が立つか、彼らの言葉が立つか、いずれであるかを知るようにな

る。二九主は言われる、わたしがこの所であなたがたを罰するしるしはこ
れである。わたしはこのようにしてわたしがあなたがたに災を下そうと
言った事の必ず立つことを知らせよう。三〇すなわち主はこう言われる、
見よ、わたしはユダの王ゼデキヤを、その命を求める敵であるバビロンの
王ネブカデレザルの手に渡したように、エジプトの王パロ・ホフラをその
敵の手、その命を求める者の手に渡す」。

第四五章一ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年に、ネリヤの子バルク
がこれらの言葉をエレミヤの口述にしたがって書にしるした時、預言者
エレミヤが彼に語った言葉、二「バルクよ、イスラエルの神、主はあなたに
ついてこう言われる、三あなたはかつて、『ああ、わたしはわざわいだ、主
がわたしの苦しみに悲しみをお加えになった。わたしは嘆き疲れて、安息
が得られない』と言った。四あなたはこう彼に言いなさい、主はこう言わ

れる、見よ、わたしは自分で建てたものをこわし、自分で植えたものを抜
いている――それは、この全地である。五あなたは自分のために大いなる
事を求めるのか、これを求めてはならない。見よ、わたしはすべての人に
災を下そうとしている。しかしあなたの命はあなたの行くすべての所
で、ぶんどり物としてあなたに与えると主は言われる」。

第四六章一もろもろの国の事について預言者エレミヤに臨んだ主の言葉。
二エジプトの事、すなわちユフラテ川のほとりにあるカルケミシの近く
にいるエジプトの王パロ・ネコの軍勢の事について。これはユダの王ヨシ
ヤの子エホヤキムの四年に、バビロンの王ネブカデレザルが撃ち破ったも
のである。その言葉は次のとおりである、
三「大盾と小盾とを備え、進んで戦え。
四騎兵よ、馬を戦車につなぎ、馬に乗れ。

かぶとをかぶって立て。
ほこをみがき、よろいを着よ。
五わたしは見たが、何ゆえか彼らは恐れて退き、
その勇士たちは打ち敗られ、あわてて逃げて、
うしろをふり向くこともしない、――
恐れが彼らの周囲にあると主は言われる。
六足早き者も逃げることができず、
勇士ものがれることができない。
北の方、ユフラテ川のほとりで
彼らはつまずき倒れた。
七あのナイル川のようにわきあがり、
川々のように、その水のさかまく者はだれか。

八エジプトはナイル川のようにわきあがり、
その水は川々のようにさかまく。
そしてこれは言う、わたしは上って、地をおおい、
町々とそのうちに住む者を滅ぼそう。
九馬よ、進め、車よ、激しく走れ。
勇士よ、盾を取るエチオピヤびとと、プテびとよ、
弓を巧みに引くルデびとよ、進み出よ。
一〇その日は万軍の神、主の日であって、
主があだを報いられる日、
その敵にあだをかえされる日だ。
つるぎは食べて飽き、
彼らの血に酔う。

万軍の神、主が、北の地で、ユフラテ川のほとりで、
ほふることをなされるからだ。
一一おとめなるエジプトの娘よ、
ギレアデに上って乳香を取れ。
あなたは多くの薬を用いても、むだだ。
あなたは、いやされることはない。
一二あなたの恥は国々に聞えている、
あなたの叫びは地に満ちている。
勇士が勇士につまずいて、共に倒れたからである」。
一三バビロンの王ネブカデレザルが来て、エジプトの地を撃とうとする事
について、主が預言者エレミヤにお告げになった言葉、
一四「エジプトで宣べ、ミグドルで告げ示し、

またメンピスとタパネスに告げ示して言え、
『堅く立って、備えせよ、
つるぎがあなたの周囲を、滅ぼし尽すからだ』。
一五なぜ、アピスはのがれたのか。
あなたの雄牛は、なぜ立たなかったのか。
それは主がこれを倒されたからだ。
一六あなたに属する多くの兵は、つまずいて倒れた。
そして互に言った、『立てよ、
われわれは、しえたげる者のつるぎを避けて、
われわれの民に帰り、故郷の地へ行こう』と。
一七エジプトの王パロの名を、
『好機を逸する騒がしい者』と呼べ。

一八万軍の主という名の王は言われる、
わたしは生きている、
彼は山々のうちのタボルのように、
海のほとりのカルメルのように来り臨む。
一九エジプトに住む民よ、
捕われのために荷物を備えよ。
メンピスは荒れ地となり、
廃虚となって住む人もなくなる。
二〇エジプトは美しい雌の子牛だ、
しかし北から、牛ばえが来て、それにとまった。
二一そのうちにいる雇兵でさえ、肥えた子牛のようだ。
彼らはふり返って共に逃げ、立つことをしなかった。

彼らの災難の日、その罰せられる時が来たからだ。
二二彼は逃げ去るへびのような音をたてる。
その敵が軍勢を率いて彼に臨み、
きこりのように、おのをもって来るからだ。
二三彼らは彼の林がいかに入り込みがたくとも、
それを切り倒す。
彼らはいなごよりも多く、
数えがたいからであると、主は言われる。
二四エジプトの娘ははずかしめを受け、
北からくる民の手に渡される」。
二五万軍の主、イスラエルの神は言われた、「見よ、わたしはテーベのア
モンと、パロと、エジプトとその神々とその王たち、すなわちパロと彼を

頼む者とを罰する。二六わたしは彼らを、その命を求める者の手と、バビ
ロンの王ネブカデレザルの手と、その家来たちの手に渡す。その後、エジ
プトは昔のように人の住む所となると、主は言われる。

二七わたしのしもべヤコブよ、恐れることはない、
イスラエルよ、驚くことはない。
見よ、わたしがあなたを遠くから救い、
あなたの子孫をその捕え移された地から
救うからだ。
ヤコブは帰ってきて、おだやかに、安らかになり、
彼を恐れさせる者はない。
二八主は言われる、わたしのしもべヤコブよ、
恐れることはない、わたしが共にいるからだ。

わたしはあなたを追いやった国々を
ことごとく滅ぼし尽す。
しかしあなたを滅ぼし尽すことはしない。
わたしは正しい道に従って、あなたを懲らしめる、
決して罰しないではおかない」。

第四七章

一 パロがまだガザを撃たなかったころ、ペリシテびとの事について預言者エレミヤに臨んだ主の言葉。
二「主はこう言われる、
見よ、水は北から起り、あふれ流れて、
この地と、そこにあるすべての物、
その町と、その中に住む者とにあふれかかる。
その時、人々は叫び、この地に住む者はみな嘆く。

三そのたくましい馬のひずめの踏み鳴らす音のため、
その戦車の響きのため、
その車輪のとどろきのために、
父はその手が弱くなって、
自分の子をも顧みない。
四これは、ペリシテびとを滅ぼし尽し、
ツロとシドンに残って助けをなす者を
ことごとく絶やす日が来るからである。
主はカフトルの海岸に残っている
ペリシテびとを滅ぼされる。
五ガザには髪をそることが始まっている。
アシケロンは滅びた。

アナクびとの残りの民よ、
いつまで自分の身に傷つけるのか。
六主のつるぎよ、
おまえはいつになれば静かになるのか。
おまえのさやに帰り、休んで静かにしておれ。
七主がこれに命を下されたのだ、
どうして静かにしておれようか。
アシケロンと海岸の地を攻めることを
定められたのだ」。

第四八章ーモアブの事について、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、
「ああ、ネボはわざわいだ、これは滅ぼされた。

キリヤタイムははずかしめられて取(と)られ、
とりでは、はずかしめられてこわされた。
二モアブの誉(ほまれ)は、消(き)え去(さ)った。
ヘシボンで人々(ひとびと)はモアブの害(がい)を図(はか)り、
『さあ、この国(くに)を断(た)ち滅(ほろ)ぼそう』という。
マデメンよ、おまえもまた滅(ほろ)ぼされる、
つるぎがおまえを追(お)う。
三ホロナイムから叫(さけ)び声(ごえ)が聞(きこ)える、
『荒廃(こうはい)と大(おお)いなる滅亡(めつぼう)だ』という。
四モアブは滅(ほろ)ぼされ、
叫(さけ)びはゾアルにまで聞(きこ)える。
五彼(かれ)らは泣(な)きながらルヒテの坂(さか)を登(のぼ)る。

彼らはホロナイムの下り坂で、
『滅亡』の叫びを聞いたからだ。
六逃げて、自分の身を救え、
荒野の野ろばのようになれ。
七おまえが、とりでと財宝とを頼みにしたので、
おまえも捕えられるからだ。
またケモシは、その祭司とつかさたちと共に、
捕えられて行く。
八滅ぼす者はすべての町に来る、
一つの町ものがれることができない。
谷は滅び、平地は荒される、
主の言われたとおりである。

九モアブに翼を与えて、飛び去らせよ。
その町々は荒れて、住む者はなくなる。
一〇主のわざを行うことを怠る者はのろわれる。またそのつるぎを押
えて血を流さない者はのろわれる。
一一モアブはその幼い時から安らかで、
酒が、沈んだおりの上にとどまって、
器から器に、くみ移されなかったように、
捕え移されなかったので、
その味はなお存し、その香気も変ることがない。
一二主は言われる、それゆえ見よ、わたしがこれを傾ける者どもをつか
わす日が来る。彼らはこれを傾け、その器をあけ、そのかめを砕く。一
三その時モアブはケモシのために恥をかく。ちょうどイスラエルの家がそ

の頼みとしたベテルのために恥をかいたようになる。
一四あなたがたはどうして
『われわれは勇士だ。強い戦士だ』というのか。
一五モアブとその町々を滅ぼす者は上って来、
モアブのえり抜きの若者たちは下って殺されたと
万軍の主と名のる王が言われる。
一六モアブの災難は近づいている、
その苦難はすみやかに来る。
一七すべてその周囲にある者よ、
またその名を知る者よ、
彼のために嘆いて、
『ああ、強き笏、麗しきつえは、

ついに折れた』と言え。
一八デボンに住む者よ、ああなたの栄えを離れて下り、かわいた地に
座せよ。
モアブを滅ぼす者があなたに攻めのぼって来て、
あなたの城を滅ぼしたからだ。
一九アロエルに住む者よ、
道のかたわらに立って見張りし、
逃げてくる男、のがれてくる女に尋ねて、
『何が起ったのか』と言え。
二〇モアブは敗れて、恥をこうむっている。
嘆き呼ばわれ。
アルノン川のほとりで、

モアブは滅ぼされたと告げよ。
二一さばきは高原の地に臨み、ホロン、ヤハズ、メパアテ、二二デボン、
ネボ、ベテ・デブラタイム、二三キリヤタイム、ベテ・ガムル、ベテ・メオ
ン、二四ケリオテ、ボズラなどモアブの地のすべての町の、遠いものにも近
いものにも、臨んだ。二五モアブの角は砕け、その腕は折れたと主は言わ
れる。
二六モアブを酔わせよ、彼が主に敵して自ら高ぶったからである。モア
ブは自分の吐いた物の中にころがって、笑い草となる。二七イスラエルはあ
なたの笑い草ではなかったか。あなたが、彼のことを語るごとに首を振っ
たのは、彼が盗賊の中にいたとでもいうのか。
二八モアブに住む者よ、町を去って岩の間に住め。
谷の入口のかたわらに巣を作る

山ばとのようにせよ。
二九われわれはモアブの高慢な事を聞いた、
その高慢は、はなはだしい。
すなわち、その尊大、高慢、横柄、
およびその心の高ぶりのことを聞いた。
三〇主は言われる、わたしは彼の横着なのを知る、
彼の自慢は偽りで、その行いも偽りである。
三一それゆえ、わたしはモアブのために嘆き、
モアブの全地のために呼ばわる。
キルヘレスの人々のためにわたしは悲しむ。
三二シブマのぶどうの木よ、
わたしはヤゼルのために泣くのにまさって

おまえのために泣く。
おまえのつるは延びて海を越え、ヤゼルに及んだ。
おまえの夏の実と、その収穫を滅ぼす者が
襲ってきた。
三三 喜びと楽しみは、実り多いモアブの地を去った。
わたしは、ぶどうをしぼる所にも酒をなくした。
楽しく呼ばわって、ぶどうを踏む者もなくなった。
呼ばわっても、喜んで呼ばわる声ではない。
三四 ヘシボンとエレアレは叫ぶ。ヤハヅに至るまで、ゾアルからホロナイ
ムとエグラテ・シリシヤに至るまで、彼らはその声をあげる。ニムリムの
水も絶えたからである。
三五 主は言われる、わたしは犠牲を高き所にささ
げ、香をその神にたく者をモアブのうちに滅ぼす。
三六 それゆえ、わたし

の心はモアブのために笛のように嘆き、わたしの心はキルヘレスの人々
のために笛のように嘆く。彼らの獲た富が消えうせたからである。
三七人はみな髪をそり、皆ひげをそり、みな手に傷をつけ、腰に荒布を
着ける。三八モアブではどこの屋根の上も、広場も、ただ悲しみに包まれて
いる。これは、わたしが、だれもほしがらない器のようにモアブを砕いた
からであると主は言われる。三九ああ、モアブはついに滅びた。人々は嘆
く。ああ、モアブは恥じて顔をそむけた。モアブはその周囲のすべての者
の笑い草となり恐れとなった」。

四〇主はこう言われる、
「見よ、敵はわしのように速く飛んできて、
モアブに向かって翼をのべる。
四一町々は取られ、城は奪われる。

その日モアブの勇士の心は
子を産む女の心のようになる。
四二 モアブは滅ぼされて、国を成さないようになる。
主に敵して自ら誇ったからである。
四三 主は言われる、
モアブに住む者よ、
恐れと、穴と、わなとがあなたに臨んでいる。
四四 恐れをさけて逃げる者は穴におちいり、
穴をよじ上って出る者は、わなに捕えられる。
わたしがモアブに、その罰せられる年に、
これらのものを臨ませるからであると
主は言われる。

四五逃(に)げた者(もの)はヘシボンの陰(かげ)に、力(ちから)なく立(た)ちどまる。
ヘシボンから火(ひ)が出(で)、シホンの家(いえ)から炎(ほのお)が出(で)て、
モアブの額(ひたい)、騒(さわ)ぐ人々(ひとびと)の頭(あたま)の頂(いただき)を焼(や)いたからだ。
四六モアブよ、おまえはわざわいだ。
ケモシの民(たみ)は滅(ほろ)びた。
おまえのむすこらは捕(とら)え移(うつ)され、
おまえの娘(むすめ)らも捕(とら)え行(ゆ)かれたからである。
四七しかし末(すえ)の日(ひ)にわたしは再(ふたた)びモアブを栄(さか)えさせると
主(しゅ)は言(い)われる」。
ここまではモアブのさばきの事(こと)をいったのである。

第四九章

一アンモンびとについて、
主(しゅ)はこう言(い)われる、

「イスラエルには子がないのか、世継ぎがないのか。
どうしてミルコムがガドを追い出して、
その民がその町々に住んでいるのか。
二主は言われる、
それゆえ、見よ、アンモンびとのラバを攻める
戦いの叫びを、わたしが聞えさせる日が来る。
ラバは荒塚となり、その村々は火で焼かれる。
そのときイスラエルは自分を追い出した者どもを
追い出すと主は言われる。
三ヘシボンよ嘆け、アイは滅ぼされた。
ラバの娘たちよ呼ばわれ。
荒布を身にまとい、悲しんで、

まがきのうちを走りまわれ。
ミルコムとその祭司およびつかさが
共に捕え移されるからだ。
四
不信の娘よ、
あなたはなぜ自分の谷の事を誇るのか。
あなたは自分の富に寄り頼んで、
『だれがわたしに攻めてくるものか』と言う。
五
主なる万軍の神は言われる、
見よ、わたしはあなたの上に恐れを臨ませる、
それはあなたの周囲の者から来る。
あなたは追われて、おのおの直ちに他人に続き、
逃げる者を集める人もない。

六しかし、のちになって、わたしはアンモンびとを再(ふたた)び栄(さか)えさせると、主(しゅ)
は言(い)われる」。
七エドムの事(こと)について、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)はこう言(い)われる、
「テマンには、もはや知恵(ちえ)がないのか。
さとい者(もの)には計(はか)りごとがなくなったのか。
その知恵(ちえ)は消(き)えうせたのか。
八デダンに住(す)む者(もの)よ、
逃(に)げよ、のがれよ、深(ふか)い所(ところ)に隠(かく)れよ。
わたしがエサウの災難(さいなん)を彼(かれ)の上(うえ)に臨(のぞ)ませ、
彼(かれ)を罰(ばっ)する時(とき)をこさせるからだ。
九ぶどうを集(あつ)める者(もの)があなたの所(ところ)に来(き)たならば、
すこしの実(み)をも残(のこ)さないであろうか。

夜、盗びとが来たならば、
自分たちの満足するだけ滅ぼさないであろうか。
一〇しかしわたしはエサウを裸にし、
その隠れる所を現したので、
彼はその身を隠すことができない。
その子どもたちも、兄弟も、隣り人も滅ぼされる。
そして彼は、いなくなる。
一一あなたのみなしごを残せ、
わたしがそれを生きながらえさせる。
あなたのやもめには、わたしに寄り頼ませよ」。
一二主はこう言われる、「もし、杯を飲むべきでない者もそれを飲まなければならなかったとすれば、あなたは罰を免れることができようか。あ

なたは罰を免れない。それを飲まなければならない。一三主は言われる、
わたしは自分をさして誓った、ボズラは驚きとなり、ののしりとなり、荒
れ地となり、のろいとなる。その町々は長く荒れ地となる」。
一四わたしは主からのおとずれを聞いた。
ひとりの使者がつかわされて万国に行き、
そして言った、
「あなたがたは集まり、行って彼を攻め、立って戦え。
一五見よ、わたしはあなたを万国のうちに小さい者とし、
人々のうちに卑しめられる者とする。
一六岩の割れ目に住み、山の高みを占める者よ、
あなたの恐ろしい事と、あなたの心の高ぶりが、
あなたを欺いた。

あなたは、わたしのように巣を高い所に作っているが、
わたしはその所からあなたを取りおろすと
主は言われる。
一七エドムは恐れとなる。そのかたわらを通り過ぎる者はみな恐れ、その
災のために、舌打ちする。一八主は言われる、ソドムとゴモラとその隣
の町々がくつがえされた時のように、そこに住む人はなく、そこに宿る人
もなくなる。一九見よ、ししがヨルダンの密林から上ってきて、じょうぶな
羊のおりを襲うように、わたしは、たちまち彼らをそこから逃げ走らせ、
わたしの選ぶ者をその上に立てる。だれかわたしのような者があるであろ
うか。だれがわたしを呼びつけることができようか。どの牧者がわたしの
前に立つことができようか。二〇それゆえ、エドムに対して主が立てた計
りごとと、テマンに住む者に対してしようとする事を聞くがよい。彼らの

群れのうちの小さいものまでも皆、引かれて行く。彼らのおりのものもそ
の終りを見て恐れる。
二一その倒れる音を聞いて、地は震い、彼らの叫び
声は紅海にも聞える。
二二見よ、敵はわしのように上り、すみやかに飛び
かけり、その翼をボズラの上に張り広げる。その日エドムの勇士の心は
子を産む女の心のようになる」。

二三ダマスコの事について、
「ハマテとアルパデは、うろたえている、
彼らは悪いおとずれを聞いたからだ。
彼らは勇気を失い、
穏やかになることのできない海のように悩む。
二四ダマスコは弱り、身をめぐらして逃げた、
恐怖に襲われている。

子を産む女に臨むように痛みと悲しみと彼に臨む。
二五ああ、名ある町、楽しい町は捨てられる。
二六それゆえ、その日に、若い者は、広場に倒れ、
兵士はことごとく滅ぼされると
万軍の主は言われる。
二七わたしはダマスコの城壁の上に火を燃やし、
ベネハダデの宮殿を焼き尽す」。
二八バビロンの王ネブカデレザルが攻め撃ったケダルとハゾルの諸国の
事について、
主はこう言われる、「立って、ケダルに向かって進み、
東の人々を滅ぼせ。
二九彼らの天幕と、その羊の群れとは取られ、

その垂幕とそのもろもろの器と、
らくだとは彼らの所から運び去られ、
人々は彼らに向かって叫ぶ、
『恐ろしいことが四方にある』と。
三〇主は言われる、ハゾルに住む者よ、
逃げよ、遠くさまよい行き、深い所に隠れよ。
バビロンの王ネブカデレザルが
あなたがたを攻める計りごとをめぐらし、
あなたがたを攻める、てだてを設けたからだ。
三一主は言われる、
立って進み、安全な所に住むきらくな民を攻めよ、
彼らは門もなく、貫の木もなく、ひとり離れて住む。

三二彼らのらくだは、ぶんどり物となり、
家畜の群れは奪われる。
わたしは、かの髪の毛のすみずみを切る者を
四方に散らし、
その災難を八方からこさせると主は言われる。
三三ハゾルは山犬のすまいとなり、
いつまでも荒れ地となっている。
だれもそこに住む人はなく、
そこに宿る人もない」。
三四ユダの王ゼデキヤの治世の初めのころに、エラムの事について預言者
エレミヤに臨んだ主の言葉。
三五万軍の主はこう言われる、「見よ、わたしはエラムが 力として頼んで

いる弓を折る。三六わたしは天の四方から、四方の風をエラムにこさせ、彼
らを四方の風に散らす。エラムから追い出される者の行かない国はない。
三七主は言われる、わたしはエラムをしてその敵の前、またその命を求め
る者の前に恐れさせる。わたしは災をくだし、激しい怒りをその上にく
だす。彼らのうしろに、つるぎを送って滅ぼし尽す。三八そしてわたしの
位をエラムにすえ、王とつかさたちとを滅ぼすと主は言われる。
三九しかし末の日に、わたしはエラムを再び栄えさせると、主は言わ
れる」。

第五〇章一主が預言者エレミヤによって語られたバビロンとカルデヤび
との地の事についての言葉。
二「国々のうちに告げ、また触れ示せよ、
旗を立てて、隠すことなく触れ示して言え、

『バビロンは取られ、ベルははずかしめられ、
メロダクは砕かれ、その像ははずかしめられ、
その偶像は砕かれる』と。
三それは、北の方から一つの国民がきて、これを攻め、その地を荒して、
住む人もないようにするからである。人も獣もみな逃げ去ってしまう。
四主は言われる、その日その時、イスラエルの民とユダの民は共に帰っ
てくる。彼らは嘆きながら帰ってくる。そしてその神、主を求める。五彼
らは顔をシオンに向けて、その道を問い、『さあ、われわれは、永遠に忘れ
られることのない契約を結んで主に連なろう』と言う。
六わたしの民は迷える羊の群れである、その牧者がこれをいざなって、
山に踏み迷わせたので、山から丘へと行きめぐり、その休む所を忘れた。
七これに会う者はみなこれを食べた。その敵は言った、『われわれに罪はな

い。彼らがそのまことのすみかである主、先祖たちの希望であった主に対
して罪を犯したのだ』と。
八バビロンのうちから逃げよ。カルデヤびとの地から出よ。群れの前に
行く雄やぎのようにせよ。九見よ、わたしは大きい国々を起し集めて、北
の地からバビロンに攻めこさせる。彼らはこれに向かって勢ぞろいをし、こ
れをその所から取る。彼らの矢はむなしく帰らない老練な勇士のようで
ある。一〇カルデヤは人にかすめられる。これをかすめる者はみな飽くこ
とができると、主は言われる。
一一わたしの嗣業をかすめる者どもよ、
あなたがたは喜び楽しみ、
雌の子牛のように草に戯れ、
雄馬のように、いなないているが、

一二あなたがたの母(はは)はいたくはずかしめられ、
あなたがたを産(う)んだ者(もの)は恥(はじ)をこうむる。
見(み)よ、彼女(かのじょ)は国々(くにぐに)のうちの 最(もっと)もあとなるものとなり、
かわいた砂原(すなはら)の荒野(あらの)となる。
一三主(しゅ)の怒(いか)りによって、ここに住(す)む者(もの)はなく、
完全(かんぜん)に荒(あ)れ地(ち)となる。
バビロンのかたわらを通(とお)る者(もの)は、
みなその傷(きず)を見(み)て 驚(おどろ)き、かつあざ笑(わら)う。
一四あなたがたすべて弓(ゆみ)を張(は)る者(もの)よ、
バビロンの周囲(しゅうい)に勢(せい)ぞろいして、これを攻(せ)め、
矢(や)を惜(お)しまずに、これを射(い)よ、
彼女(かのじょ)が主(しゅ)に罪(つみ)を犯(おか)したからだ。

一五その周囲に叫び声をあげよ、彼女は降伏した。
そのとりでは倒れ、その城壁はくずれた、
主があだをかえされたからだ。
彼女に報復せよ、彼女がおこなったように、
これに行え。
一六種まく者と、刈入れどきに、かまを取る者を
バビロンに絶やせ。
滅ぼす者のつるぎを恐れて、
人はおのおの自分の民の所に帰り、
そのふるさとに逃げて行く。
一七イスラエルは、ししに追われて散った羊である。初めにアッスリヤ
の王がこれを食い、そして今はついにバビロンの王ネブカデレザルがその

骨をかじった。一八それゆえ万軍の主、イスラエルの神は、こう言われる、
見よ、わたしはアッスリヤの王を罰したように、バビロンの王とその国に
罰を下す。一九わたしはイスラエルを再びその牧場に帰らせる。彼はカル
メルとバシャンで草を食べる。またエフライムの山とギレアデでその望み
が満たされる。二〇主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを
探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それはわたしが残しておく
人々を、ゆるすからである。

二一主は言われる、
上って行って、メラタイムの地を攻め、
ペコデの民を攻め、
彼らを殺して全く滅ぼし、
わたしがあなたがたに命じたことを皆、行いなさい。

二二その地に、いくさの叫びと、大いなる滅びがある。
二三ああ、全地を砕いた鎚はついに折れ砕ける。
ああ、バビロンはついに国々のうちの
恐るべき見ものとなる。
二四バビロンよ、
わたしは、おまえを捕えるためにわなをかけたが、
おまえはそれにかかった。
そしておまえはそれを知らなかった。
おまえは主に敵したので、尋ね出され、捕えられた。
二五主は武器の倉を開いて
その怒りの武器を取り出された。
主なる万軍の神が、
カルデヤびとの地に事を行われるからである。

二六あらゆる方面からきて、これを攻め、
その穀倉を開き、
これを穀物の山のように積み上げ、
完全に滅ぼし尽し、そこに残る者のないようにせよ。
二七その雄牛をことごとく殺せ、
それを、ほふり場に下らせよ。
それらのものはわざわいだ、
その日、その罰を受ける時がきたからだ。
二八聞けよ、バビロンの地から逃げ、のがれてきた者の声がする。われわれの神、主の報復、その宮の報復の事をシオンに告げ示す。
二九弓を張る射手をことごとく呼び集めて、バビロンを攻めよ。その周囲に陣を敷け。ひとりも逃がすな。そのしわざにしたがってバビロンに報い、

これがおこなった所にしたがってこれに行え。彼がイスラエルの聖者で
ある主に向かって高慢にふるまったからだ。三〇それゆえ、その日、若い
者は、広場に倒れ、兵士はみな絶やされると主は言われる。

三一主なる万軍の神は言われる、
高ぶる者よ、見よ、わたしはおまえの敵となる、
あなたの日、わたしがおまえを罰する時が来た。
三二高ぶる者はつまずき倒れる、
これを助け起すものはない。
わたしはその町々に火を燃やして、
その周囲の者をことごとく焼き尽す。

三三万軍の主はこう言われる、イスラエルの民とユダの民は共にしえた
げられている。彼らをとりこにした者はみな彼らを固く守って釈放する

ことを拒む。三四彼らをあがなう者は強く、その名は万軍の主といわれる。
彼は必ず彼らの訴えをただし、この地に安きを与えるが、バビロンに住
む者には不安を与えられる。
三五主は言われる、
カルデヤびとの上とバビロンに住む者の上、
そのつかさたち、その知者たちの上につるぎが臨む。
三六占い師の上につるぎが臨み、彼らは愚か者となる。
その勇士の上につるぎが臨み、彼らは滅ぼされる。
三七その馬の上と、その車の上につるぎが臨み、
またそのうちにあるすべての雇兵の上に臨み、
彼らは女のようになる。
その財宝の上につるぎが臨み、それはかすめられる。

三八その水の上に、ひでりが来て、それはかわく。
それは、この地が偶像の地であって、
人々が偶像に心が狂っているからだ。
三九それゆえ、野の獣と山犬とは共にバビロンにおり、だちょうもそこ
に住む。しかし、いつまでもその地に住む人はなく、世々ここに住む人は
ない。四〇主は言われる、神がソドムとゴモラと、その隣の町々を滅ぼさ
れたように、そこに住む人はなく、そこに宿る人の子はない。
四一見よ、一つの民が北の方から来る。
大いなる国と多くの王が
地の果から立ち上がっている。
四二彼らは弓と、やりを取る。
残忍で、あわれみがなく、

その響(ひび)きは海(うみ)の鳴(な)りとどろくようである。
バビロンの娘(むすめ)よ、彼(かれ)らは馬(うま)に乗(の)り、
いくさびとのように身(み)をよろって、
あなたを攻(せ)める。
四三バビロンの王(おう)はそのうわさを聞(き)いて、
その手(て)は弱(よわ)り、子(こ)を産(う)む女(おんな)に臨(のぞ)むような
痛(いた)みと苦(くる)しみに迫(せま)られた。
四四見(み)よ、ししがヨルダンの密林(みつりん)から上(のぼ)ってきて、じょうぶな羊(ひつじ)のおり
を襲(おそ)うように、わたしは、たちまち彼(かれ)らをそこから逃(に)げ去(さ)らせる。そして
わたしの選(えら)ぶ者(もの)をその上(うえ)に立(た)てる。だれかわたしのような者(もの)があるであろ
うか。だれがわたしを呼(よ)びつけることができようか。どの牧者(ぼくしゃ)がわたしの
前(まえ)に立(た)つことができようか。
四五それゆえ、バビロンに対(たい)して主(しゅ)が立(た)てた

計りごとと、カルデヤびととの地に対してしようとする事を聞くがよい。彼
らの群れのうちの小さい者は、かならず引かれて行く。彼らのおりのもの
も必ずその終りを見て恐れる。四六バビロンが取られたとの声によって地
は震い、その叫びは国々のうちに聞える」。

第五一章

一主はこう言われる、
「見よ、わたしは、滅ぼす者の心を奮い起して、
バビロンを攻め、カルデヤに住む者を攻めさせる。
二わたしはバビロンに、あおぎ分ける者をつかわす。
彼らは、その災の日に、四方からこれを攻め、
それをあおぎ分けて、その地をむなしくする。
三射手にはその弓を張らせることなく、

よろいを着て立ち上がらせるな。
その若き者をあわれむことなく、その軍勢をことごとく滅ぼせ。
四彼らはカルデヤびとの地に殺されて倒れ、
そのちまたに傷ついて倒れる。
五イスラエルとユダは
その神、万軍の主に捨てられてはいないが、
しかしカルデヤびとの地には
イスラエルの聖者に向かって犯した罪が
満ちている。
六バビロンのうちからのがれ出て、
おのおのその命を救え。
その罰にまきこまれて断ち滅ぼされてはならない。

今は主があだを返される時だから、
それに報復をされるのである。
七バビロンは主の手のうちにある金の杯であって、
すべての地を酔わせた。
国々はその酒を飲んだので、国々は狂った。
八バビロンはたちまち倒れて破れた。
これがために嘆け。
その傷のために乳香を取れ。
あるいは、いえるかも知れない。
九われわれはバビロンをいやそうとしたが、
これはいえなかった。
われわれはこれを捨てて、
おのおの自分の国に帰ろう。

その罰が天に達し、
雲にまで及んでいるからだ。
一〇主はわれわれの正しいことを明らかにされた。
さあ、われわれはシオンで、
われわれの神、主のみわざを告げ示そう。
一一矢をとぎ、
盾を取れ。主はメデアびとの王たちの心を引き立てられる。主のバビロンに思い図ることは、これを滅ぼすことであり、主があだを返し、その宮のあだを返されるのである。
一二バビロンの城壁に向かって旗を立て、
見張りを強固にし、番兵を置き、伏兵を備えよ。
主がバビロンに住む者を攻めようと図り、

その言われたことを、いま行われるからだ。
一三多くの水のほとりに住み、
多くの財宝を持つ者よ、
あなたの終りが来て、その命の糸は断たれる。
一四万軍の主はみずからをさして誓い、言われる、
わたしは必ずあなたのうちに、
人をいなごのように満たす。
彼らはあなたに向かって、かちどきの声をあげる。
一五主はその力をもって地を造り、
その知恵をもって世界を建て、
その悟りをもって天をのべられた。
一六彼が声を出されると、

天(てん)に多(おお)くの水(みず)のざわめきがあり、
また地(ち)の果(はて)から霧(きり)を立(た)ちあがらせられる。
彼(かれ)は雨(あめ)のためにいなびかりをおこし、
その倉(くら)から風(かぜ)を取(と)り出(だ)される。
一七すべての人(ひと)は愚(おろ)かで知恵(ちえ)がなく、
すべての金細工人(きんざいくにん)は
その造(つく)った偶像(ぐうぞう)のために恥(はじ)をこうむる。
その偶像(ぐうぞう)は偽(いつわ)り物(もの)で、
そのうちに息(いき)がないからだ。
一八それらは、むなしいもの、迷(まよ)いのわざである。
罰(ばっ)せられる時(とき)になれば滅(ほろ)びるものである。
一九ヤコブの分(ぶん)である彼(かれ)はこのようなものではない、

彼は万物の造り主だからである。
イスラエルは彼の嗣業としての部族である。
彼の名は万軍の主という。
二〇おまえはわたしの鎚であり、戦いの武器である。
わたしはおまえをもってすべての国を砕き、
おまえをもって万国を滅ぼす。
二一おまえをもってわたしは馬と、その騎手とを砕き、
おまえをもって戦車とそれに乗る者とを砕く。
二二わたしはおまえをもって男と女とを砕き、
おまえをもって老いた者と幼い者とを砕き、
おまえをもって若い者と、おとめとを砕く。
二三わたしはおまえをもって、

羊飼と、その群れとを砕き、
おまえをもって農夫と、くびきを負う家畜とを砕き、
おまえをもっておさたちと、つかさたちとを砕く。
二四わたしはバビロンとカルデヤに住むすべての者とに、彼らがシオン
で行ったもろもろの悪しき事のために、あなたがたの目の前で報いをする
と、主は言われる。
二五主は言われる、
全地を滅ぼし尽す滅ぼしの山よ、
見よ、わたしはおまえの敵となる、
わたしは手をおまえの上に伸べて、
おまえを岩からころばし、
おまえを焼け山にする。

二六主（しゅ）は言（い）われる、
人（ひと）がおまえから石（いし）を取（と）って、隅（すみ）の石（いし）とすることなく、
また礎（いしずえ）とすることもない。
おまえはいつまでも荒（あ）れ地（ち）となっている。
二七地（ち）に旗（はた）を立（た）て、国々（くにぐに）のうちにラッパを吹（ふ）き、
国々（くにぐに）の民（たみ）を集（あつ）めてそれを攻（せ）め、
アララテ、ミンニ、アシケナズの国々（くにぐに）をまねいて
それを攻（せ）め、
軍（ぐん）の長（ちょう）を立（た）ててそれを攻（せ）め、
群（むら）がるいなごのように馬（うま）を上（のぼ）り行（い）かせよ。
二八国々（くにぐに）の民（たみ）を集（あつ）めてそれを攻（せ）め、
メデアびとの王（おう）たちと、

そのおさたち、つかさたち、
およびすべての領地の人々を集めてこれを攻めよ。
二九その地は震い、かつもだえ苦しむ、
主がその思い図ることをバビロンにおこない、
バビロンの地を、住む人なき荒れ地とされるからだ。
三〇バビロンの勇士たちは戦いをやめて、
その城にこもり、力はうせて、女のようになる。
その家は焼け、その貫の木は砕かれる。
三一飛脚は走って飛脚に会い、使者は走って使者に会い、
バビロンの王に告げて、町はことごとく取られ、
三二渡し場は奪われ、とりでは火で焼かれ、
兵士はおびえていると言う。
三三万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、

バビロンの娘は、打ち場のようだ、
その踏まれる時が来たのだ。
しばらくしてその刈り取られる時が来る」。
三四「バビロンの王ネブカデレザルはわたしを食い尽し、
わたしを滅ぼし、わたしを、からの器のようにし、
龍のようにわたしを飲み、
わたしのうまい物でその腹を満たし、
わたしを洗いざらいにした。
三五わたしとわたしの肉親におこなった暴虐は、
バビロンにふりかかる」と
シオンに住む者は言わなければならない。
「わたしの血はカルデヤに住む者にふりかかる」と

エルサレムは言わなければならない。
三六それゆえ主はこう言われる、
「見よ、わたしはあなたの訴えをただし、
あなたのためにあだを返す。
わたしはバビロンの海をかわかし、
その泉をかわかす。
三七バビロンは荒塚となり、山犬のすまいとなり、
驚きとなり、笑いとなり、
住む人のない所となる。
三八彼らはししのように共にほえ、
若いししのようにほえる。
三九彼らの欲の燃えている時、

わたしは宴を設けて彼らを酔わせ、
彼らがついに気を失って、ながい眠りにいり、
もはや目をさますことのないようにしようと
主は言われる。
四〇わたしは彼らを小羊のように、
また雄羊や雄やぎのように、ほふり場に下らせよう。
四一ああ、バビロンはついに取られた、
全地の人の、ほめたたえた者は捕えられた。
ああ、バビロンはついに国々のうちに驚きとなった。
四二海はバビロンにあふれかかり、
どよめく波におおわれた。
四三その町々は荒れて、

かわいた地となり、砂原となり、
住む人のない地となる。
人の子はひとりとしてそこを過ぎることはない。
四四わたしはバビロンでベルを罰し、
そののみこんだものを口から取り出す。
国々が川のように彼に流れ入ることはなくなる。
バビロンの城壁は倒れた。
四五わが民よ、あなたがたはその中から出て、
おのおの主の激しい怒りを免れ、その命を救え。
四六心を弱くしてはならない、
この地で聞くうわさを恐れてはならない。
うわさはこの年にもくれば、また次の年にもくる。

この地に暴虐があり、
つかさとつかさとが攻めあうことがある。
四七それゆえ見よ、
わたしがバビロンの偶像を罰する日が来る。
その全地ははずかしめられ、
その殺される者はみなその中に倒れる。
四八天と地とそのうちにあるすべてのものは
バビロンの事で喜び歌う。
滅ぼす者が北の方からここに来るからであると
主は言われる。
四九イスラエルの殺された者たちのために、
バビロンは倒れなければならない、

バビロンのために全地(ぜんち)の殺(ころ)された者(もの)は倒(たお)れたのだ。
五〇つるぎをのがれてきたあなたがたは、
行(い)け、立(た)ちとどまってはならない。
遠(とお)くから主(しゅ)を覚(おぼ)え、
エルサレムを心(こころ)にとめよ。
五一『われわれはののしりを聞(き)いたので、恥(は)じている。
異邦人(いほうじん)が主(しゅ)の宮(みや)の聖所(せいじょ)にはいったので、
恥(はじ)がわれわれの顔(かお)をおおった』。
五二主(しゅ)は言(い)われる、
それゆえ見(み)よ、わたしがその偶像(ぐうぞう)を罰(ばっ)する日(ひ)が来(く)る、
傷(きず)つけられた者(もの)が、その全国(ぜんこく)にうめくようになる。
五三たといバビロンが天(てん)に上(のぼ)っても、

その城を高くして固めても、
滅ぼす者はわたしから出て、
これに臨むと主は言われる。
五四聞け、バビロンの叫びを、
カルデヤびとの地に起る大いなる滅びの騒ぎ声を。
五五主がバビロンを滅ぼし、
その大いなる声を絶やされるのだ。
その波は大水のように鳴りとどろき、
その声はひびき渡る。
五六滅ぼす者がこれに臨み、バビロンに来た。
その勇士たちは捕えられ、その弓は折られる。
主は報いをする神であるから 必ず報いられるのだ。

五七わたしはその君たちと知者たち、
おさたち、つかさたち、および勇士たちを酔わせる。
彼らは、ながい眠りにいり、目をさますことはない。
万軍の主と呼ばれる王がこれを言わせる。
五八万軍の主はこう言われる、
バビロンの広い城壁は地にくずされ、
その高い門は火に焼かれる。
こうして民の労苦はむなしくなり、
国民はただ火のために疲れる」。

五九マアセヤの子であるネリヤの子セラヤが、ユダの王ゼデキヤと共に、その治世の四年にバビロンへ行くとき、預言者エレミヤがセラヤに命じた言葉。セラヤは宿営の長であった。六〇エレミヤはバビロンに臨もうと

するすべての災を巻物にしるした。これはすなわちバビロンの事につい
てしるしたすべての言葉である。六一エレミヤはセラヤに言った、「あなたは
バビロンへ行ったならば、忘れることなくこのすべての言葉を読み、六二そ
して言いなさい、『主よ、あなたはこの所を滅ぼし、人と獣とを問わず、
すべてここに住む者のないようにし、永久にここを荒れ地としようと、こ
の所について語られました』と。六三あなたがこの巻物を読み終ったなら
ば、これに石をむすびつけてユフラテ川の中に投げこみ、六四そして言いな
さい、『バビロンはこのように沈んで、二度と上がってこない。わたしがこ
れに災を下すからである』と」。ここまではエレミヤの言葉である。

第五二章一ゼデキヤは王となったとき二十一歳であったが、エルサレム
で十一年世を治めた。母の名はハムタルといい、リブナのエレミヤの娘で
ある。二ゼデキヤはエホヤキムがすべて行ったように、主の目の前に悪事

を行った。三たしかに、主の怒りによって、エルサレムとユダとは、その
み前から捨て去られるようなことになった。
そしてゼデキヤはバビロンの王にそむいた。四そこで彼の治世の九年十
月十日に、バビロンの王ネブカデレザルはその軍勢を率い、エルサレムに
きて、これを包囲し、周囲に塁を築いてこれを攻めた。五こうしてこの町
は攻め囲まれて、ゼデキヤ王の十一年にまで及んだが、六その四月九日に
なって、町の中の食糧は、はなはだしく欠乏し、その地の民は食物を
得ることができなくなった。七そして町の城壁はついに打ち破られたの
で、兵士たちはみな逃げ、夜のうちに、王の園の近くの、二つの城壁の
間の門から町をのがれ出て、カルデヤびとが、町を攻め囲んでいるうち
に、アラバの方へ落ちて行った。八しかしカルデヤびとの軍勢は王を追っ
て行って、エリコの平地でゼデキヤに追いついたが、彼の軍勢がみな散っ

て彼のそばを離れたので、九カルデヤびとは王を捕え、ハマテの地のリブ
ラにいるバビロンの王のもとに引いていったので、王は彼の罪を定めた。
一〇すなわちバビロンの王はゼデキヤの子たちをその目の前で殺させ、ユ
ダのつかさたちをことごとくリブラで殺させ、一一またゼデキヤの目をつぶ
させた。そしてバビロンの王は彼を鎖につないでバビロンへ連れて行き、
その死ぬ日まで獄屋に入れて置いた。
一二五月十日に、――それはバビロンの王ネブカデレザルの世の十九年で
あった――バビロンの王に仕える侍衛の長ネブザラダンはエルサレムに、
はいって、一三主の宮と王の宮殿を焼き、エルサレムのすべての家を焼い
た。彼は大きな家をみな焼きはらった。一四また侍衛の長と共にいたカル
デヤびとの軍勢は、エルサレムの周囲の城壁をみな取りこわした。一五そ
して侍衛の長ネブザラダンは民のうちの最も貧しい者若干、そのほか

町のうちに残った者、およびバビロンの王にくだった人、その他工匠た
ちを捕え移した。一六しかし侍衛の長ネブザラダンはその地の最も貧し
い者若干を残して、ぶどうを作る者とし、農夫とした。
一七カルデヤびとはまた主の宮の青銅の柱と、洗盤の台と、青銅の海
を砕いて、その青銅をことごとくバビロンへ運び、一八また、つぼと、十能
と、心切りばさみと、鉢と、香を盛る皿および宮の勤めに用いる青銅の器
をことごとく取って行った。一九また彼らは小鉢と、心取り皿と、鉢と、つ
ぼと、燭台と、香を盛る皿と、灌祭の鉢を取った。金で作った物は金と
して、銀で作った物は銀として、侍衛の長は運び去った。二〇ソロモン王
が主の宮に造った二本の柱と、一つの海と、海の下の十二の青銅の牛と、
台など、このすべての物の青銅の重さは量ることもできなかった。二一こ
の一本の柱の高さは十八キュビト、周囲は十二キュビトで、指四本の厚

さがあり、中は、うつろであった。二二その上に青銅の柱頭があり、柱頭
の高さは五キュビト、柱頭の周囲は網細工と、ざくろとで飾り、これら
もみな青銅であった。他の柱もそのざくろも、これと同じであった。二三
その四方に九十六個のざくろがあり、周囲の網細工の上にあるざくろの数
は百個であった。

二四侍衛の長は祭司長セラヤと次席の祭司ゼパニヤと三人の門を守る
者を捕え、二五また兵士をつかさどるひとりの役人と、町にいた王の側近
の者七人と、その地の民を募る軍勢の長の書記官と、町の中にいた六十
人の者を町から捕え去った。二六侍衛の長ネブザラダンは、これらの人を
捕えて、リブラにいるバビロンの王のもとに連れて行った。二七バビロンの
王は、ハマテの地のリブラで彼らを撃ち殺した。こうして、ユダは自分の
地から捕え移された。

二八ネブカデレザルが捕え移した民の数は次のとおりである。第七年に
はユダヤ人三千二十三人。二九またネブカデレザルはその第十八年にエル
サレムから八百三十二人を捕え移した。三〇ネブカデレザルの二十三年に
侍衛の長ネブザラダンは、ユダヤ人七百四十五人を捕え移した。この総数
は四千六百人であった。

三一ユダの王エホヤキンが捕え移されて後三十七年の十二月二十五日に、
バビロンの王エビルメロダクはその即位の年に、ユダの王エホヤキンを獄屋
から出し、そのこうべを挙げさせ、三二親切に彼を慰め、その位を、バ
ビロンで共にいる王たちの位よりも高くした。三三こうしてエホヤキンは
獄屋の服を脱いだ。そして生きている間は毎日王の食卓で食事し、三四
彼の給与としては、その死ぬ日まで一生の間、たえず日々の必要にした
がって、バビロンの王から給与を賜わった。

哀歌

第一章

一ああ、むかしは、
民の満ちみちていたこの都、
国々の民のうちで大いなる者であったこの町、
今は寂しいさまで座し、やもめのようになった。
もろもろの町のうちで女王であった者、
今は奴隷となった。
二これは夜もすがらいたく泣き悲しみ、
そのほおには涙が流れている。
そのすべての愛する者のうちには、

これを慰める者はひとりもなく、
そのすべての友はこれにそむいて、その敵となった。
三 ユダは悩みのゆえに、
また激しい苦役のゆえに、のがれて行って、
もろもろの国民のうちに住んでいるが、安息を得ず、
これを追う者がみな追いついてみると、
悩みのうちにあった。
四 シオンの道は祭に上ってくる者のないために悲しみ、
その門はことごとく荒れ、
その祭司たちは嘆き、
そのおとめたちは引かれて行き、
シオンはみずからいたく苦しむ。

五そのあだはかしらとなり、その敵は栄えている。
そのとがが多いので、
主がこれを悩まされたからである。
その幼な子たちは捕われて、あだの前に行った。
六シオンの娘の栄華はことごとく彼女を離れ去り、
その君たちは牧草を得ない、しかのようになり、
自分を追う者の前に力なく逃げ去った。
七エルサレムはその悩みと苦しみの日に、
昔から持っていたもろもろの宝を思い出す。
その民があだの手に陥り、
だれもこれを助ける者のない時、
あだはこれを見て、その滅びをあざ笑った。

八エルサレムは、はなはだしく罪(つみ)を犯(おか)したので、
汚(けが)れたものとなった。
これを尊(たっと)んだ者(もの)も皆(みな)その裸(はだか)を見(み)たので、
これを卑(いや)しめる。
これもまたみずから嘆(なげ)き、顔(かお)をそむける。
九その汚(けが)れはその衣(ころも)のすそにあり、
これはその終(おわ)りを思(おも)わなかった。
それゆえ、これは驚(おどろ)くばかりに落(お)ちぶれ、
これを慰(なぐさ)める者(もの)はひとりもない。
「主(しゅ)よ、わが悩(なや)みを顧(かえり)みてください、
敵(てき)は勝(か)ち誇(ほこ)っていますから」。
一〇敵(てき)は手(て)を伸(の)べて、その財宝(ざいほう)をことごとく奪(うば)った。

あなたがさきに異邦人らはあなたの公会に、
はいってはならないと命じられたのに、
彼らがその聖所にはいるのをシオンは見た。
一一その民はみな嘆いて食物を求め、
その命をささえるために、財宝を食物にかえた。
「主よ、みそなわして、
わたしの卑しめられるのを顧みてください」。
一二「すべて道行く人よ、
あなたがたはなんとも思わないのか。
主がその激しい怒りの日にわたしを悩まして、
わたしにくだされた苦しみのような苦しみが、
また世にあるだろうか、尋ねて見よ。

一三主は上から火を送り、
それをわが骨にくだし、
網を張ってわが足を捕え、
わたしを引き返させ、
ひねもす心わびしく、かつ病み衰えさせられた。
一四わたしのとがは、つかねられて、
一つのくびきとせられ、
主のみ手により固く締められて、
わたしの首におかれ、
わたしの力を衰えさせられた。
主はわたしを、立ちむかい得ざる者の手に渡された。
一五主はわたしのうちにあるすべての勇士を無視し、
聖会を召集して、わたしを攻め、

わが若(わか)き人々(ひとびと)を打(う)ち滅(ほろ)ぼされた。
主(しゅ)は酒(さか)ぶねを踏(ふ)むように、
ユダの娘(むすめ)なるおとめを踏(ふ)みつけられた。
一六このために、わたしは泣(な)き悲(かな)しみ、
わたしの目(め)は涙(なみだ)であふれる。
わたしを慰(なぐさ)める者(もの)、わたしを勇気(ゆうき)づける者(もの)が
わたしから遠(とお)く離(はな)れたからである。
わが子(こ)らは敵(てき)が勝(か)ったために、
わびしい者(もの)となった」。
一七シオンは手(て)を伸(の)ばしても、
これを慰(なぐさ)める者(もの)はひとりもない。
ヤコブについては、主(しゅ)は命(めい)じて、

その周囲の者を、これがあだとせられた。
エルサレムは彼らの中にあって、
汚れた物のようになった。
一八「主は正しい、
わたしは、み言葉にそむいた。
すべての民よ、聞け、
わが苦しみを顧みよ。
わがおとめらも、わが若人らも捕われて行った。
一九わたしはわが愛する者を呼んだが、
彼らはわたしを欺いた。
わが祭司および長老たちは、その命をささえようと、
食物を求めている間に、町のうちで息絶えた。

二〇主(しゅ)よ、顧(かえり)みてください、
わたしは悩(なや)み、わがはらわたはわきかえり、
わが心臓(しんぞう)はわたしの内(うち)に転倒(てんとう)しています。
わたしは、はなはだしくそむいたからです。
外(そと)にはつるぎがあって、わが子(こ)を奪(うば)い、
家(いえ)の内(うち)には死(し)のようなものがある。

二一わたしがどんなに嘆(なげ)くかを聞(き)いてください。
わたしを慰(なぐさ)める者(もの)はひとりもなく、
敵(てき)はみなわたしの悩(なや)みを聞(き)いて、
あなたがこれをなされたのを喜(よろこ)んだ。
あなたがさきに告(つ)げ知(し)らせたその日(ひ)をきたらせ、
彼(かれ)らをも、わたしのようにしてください。

二二彼(かれ)らの悪(あく)をことごとくあなたの前(まえ)にあらわし、
さきにわがもろもろのとがのために、
わたしに行(おこな)われたように、彼(かれ)らにも行(おこな)ってください。
わが嘆(なげ)きは多(おお)く、
わが心(こころ)は弱(よわ)りはてているからです」。

第二章

一ああ、主(しゅ)は怒(いか)りを起(おこ)し、
黒雲(くろくも)をもってシオンの娘(むすめ)をおおわれた。
主(しゅ)はイスラエルの栄光(えいこう)を天(てん)から地(ち)に投(な)げ落(おと)し、
その怒(いか)りの日(ひ)に、
おのれの足台(あしだい)を心(こころ)にとめられなかった。
二主(しゅ)はヤコブのすべてのすまいを

滅(ほろ)ぼして、あわれまず、
その怒(いか)りによって、ユダの娘(むすめ)のとりでをこわし、
これを地(ち)に倒(たお)して、
その国(くに)とそのつかさたちをはずかしめられた。
三 主(しゅ)は激(はげ)しい怒(いか)りをもって、
イスラエルのすべての力(ちから)を断(た)ち、
敵(てき)の前(まえ)で、おのれの右(みぎ)の手(て)を引(ひ)きもどし、
周囲(しゅうい)を焼(や)きつくす燃(も)える火(ひ)のように、
ヤコブを焼(や)かれた。
四 主(しゅ)は敵(てき)のように弓(ゆみ)を張(は)り、
あだのように右(みぎ)の手(て)を伸(の)べて立(た)ち、
シオンの娘(むすめ)の天幕(てんまく)におるわれわれの目(め)に誇(ほこ)る者(もの)を、

ことごとく殺(ころ)し、
火(ひ)のようにその怒(いか)りを注(そそ)がれた。
五主(しゅ)は敵(てき)のようになって、イスラエルを滅(ほろ)ぼし、
そのすべての宮殿(きゅうでん)を滅(ほろ)ぼし、そのとりでをこわし、
ユダの娘(むすめ)の上(うえ)に憂(うれ)いと悲(かな)しみとを増(ま)し加(くわ)えられた。
六主(しゅ)は園(その)の小屋(こや)のようにおのれの幕屋(まくや)を倒(たお)し、
その祭(まつり)の場所(ばしょ)をこわされた。
主(しゅ)は祭(まつり)と安息日(あんそくにち)とをシオンに忘(わす)れさせ、
激(はげ)しい怒(いか)りによって、王(おう)と祭司(さいし)とを捨(す)てられた。
七主(しゅ)はその祭壇(さいだん)を忌(い)み、その聖所(せいじょ)をきらって、
もろもろの宮殿(きゅうでん)の石(いし)がきを敵(てき)の手(て)に渡(わた)された。
彼(かれ)らは祭(まつり)の日(ひ)のように、主(しゅ)の宮(みや)で声(こえ)をあげた。

八主はシオンの娘の城壁を破壊しようと
思い定めて、なわを張り、
打ちこわして、その手をひかず、
城壁と石がきとを悲しませられた。
これらは共に衰える。
九その門は地にうずもれ、
主はその貫の木をこわし砕かれた。
その王と君たちはもろもろの国民の中におり、
もはや律法はなく、
またその預言者は主から幻を得ない。
一〇シオンの娘の長老たちは地に座して黙し、
頭にちりをかぶり、身に荒布をまとった。

エルサレムのおとめたちはこうべを地(ち)にたれた。
一一わが目(め)は涙(なみだ)のためにつぶれ、
わがはらわたはわきかえり、
わが肝(きも)はわが民(たみ)の娘(むすめ)の滅(ほろ)びのために、
地(ち)に注(そそ)ぎ出(だ)される。
幼(おさ)な子(こ)や乳(ち)のみ子(ご)が町(まち)のちまたに
息(いき)も絶(た)えようとしているからである。
一二彼(かれ)らが、傷(きず)ついた者(もの)のように町(まち)のちまたで
息(いき)も絶(た)えようとするとき、
その母(はは)のふところにその命(いのち)を注(そそ)ぎ出(だ)そうとするとき、
母(はは)にむかって、「パンとぶどう酒(しゅ)とは
どこにありますか」と叫(さけ)ぶ。

一三エルサレムの娘よ、わたしは何をあなたに言い、
何にあなたを比べることができようか。
シオンの娘なるおとめよ、
わたしは何をもってあなたになぞらえて、
あなたを慰めることができようか。
あなたの破れは海のように大きい、
だれがあなたをいやすことができようか。
一四あなたの預言者たちはあなたのために
人を欺く偽りの幻を見た。
彼らはあなたの不義をあらわして
捕われを免れさせようとはせず、
あなたのために人を迷わす偽りの託宣を見た。

一五 すべて道行く人は、あなたにむかって手を打ち、
エルサレムの娘にむかって、あざ笑い、
かつ頭を振って言う、
「麗しさのきわみ、全地の喜びと
となえられた町はこれなのか」と。
一六 あなたのもろもろの敵は、あなたをののしり、
あざ笑い、歯がみして言う、
「われわれはこれを滅ぼした、
ああ、これはわれわれが望んだ日だ、
今われわれはこれにあい、これを見た」と。
一七 主はその計画されたことを行い、
警告されたことをなし遂げ、

いにしえから命じておかれたように、
滅ぼして、あわれむことをせず、
あなたについて敵を喜ばせ、
あなたのあだの力を高められた。
一八シオンの娘よ、声高らかに主に呼ばわれ、
夜も昼も川のように涙を流せ。
みずから安んじることをせず、
あなたのひとみを休ませるな。
一九夜、初更に起きて叫べ。
主の前にあなたの心を水のように注ぎ出せ。
町のかどで、飢えて
息も絶えようとする幼な子の命のために、

主（しゅ）にむかって両手（りょうて）をあげよ。
二〇主（しゅ）よ、みそなわして、顧（かえり）みてください。
あなたはだれにむかって
このように行（おこな）われたのですか。
女（おんな）は自分（じぶん）の産（う）んだ子（こ）、
その大事（だいじ）に育（そだ）てた幼（おさ）な子（ご）を食（た）べるでしょうか。
祭司（さいし）と預言者（よげんしゃ）が主（しゅ）の聖所（せいじょ）で殺（ころ）されていいでしょうか。
二一老（お）いも若（わか）きも、ちまたのちりに伏（ふ）し、
わがおとめも、若人（わこうど）も、
つるぎで倒（たお）されてしまった。
あなたは、その怒（いか）りの日（ひ）にこれを殺（ころ）し、
これをほふって、あわれむことをされなかった。
二二あなたは、わたしの恐（おそ）れるものを、

祭(まつり)の日(ひ)のように四方(しほう)から呼(よ)び集(あつ)められた。
主(しゅ)の怒(いか)りの日(ひ)には、
のがれた者(もの)も残(のこ)った者(もの)もなかった。
わたしが、いだき育(そだ)てた者(もの)を
わたしの敵(てき)は滅(ほろ)ぼし尽(つく)した。

第三章

一わたしは彼(かれ)の怒(いか)りのむちによって、
悩(なや)みにあった人(ひと)である。
二彼(かれ)はわたしをかり立(た)てて、光(ひかり)のない暗(くら)い中(なか)を歩(ある)かせ、
三まことにその手(て)をしばしばかえて、
ひねもすわたしを攻(せ)められた。
四彼(かれ)はわが肉(にく)と皮(かわ)を衰(おとろ)えさせ、わが骨(ほね)を砕(くだ)き、

五苦しみと悩みをもって、
わたしを囲み、わたしを閉じこめ、
六遠い昔に死んだ者のように、
暗い所に住まわせられた。
七彼はわたしのまわりに、かきをめぐらして、
出ることのできないようにし、
重い鎖でわたしをつながれた。
八わたしは叫んで助けを求めたが、
彼はわたしの祈をしりぞけ、
九切り石をもって、わたしの行く道をふさぎ、
わたしの道筋を曲げられた。
一〇彼はわたしに対して待ち伏せするくまのように、

潜(ひそ)み隠(かく)れるししのように、
一一わが道(みち)を離(はな)れさせ、わたしを引(ひ)き裂(さ)いて、
見(み)るかげもないみじめな者(もの)とし、
一二その弓(ゆみ)を張(は)って、
わたしを矢(や)の的(まと)のようにされた。
一三彼(かれ)はその箙(えびら)の矢(や)を
わたしの心臓(しんぞう)に打(う)ち込(こ)まれた。
一四わたしはすべての民(たみ)の物笑(ものわら)いとなり、
ひねもす彼(かれ)らの歌(うた)となった。
一五彼(かれ)はわたしを苦(にが)い物(もの)で飽(あ)かせ、
にがよもぎをわたしに飲(の)ませられた。
一六彼(かれ)は小石(こいし)をもって、わたしの歯(は)を砕(くだ)き、

灰の中にわたしをころがされた。
一七わが魂は平和を失い、
わたしは幸福を忘れた。
一八そこでわたしは言った、「わが栄えはうせ去り、
わたしが主に望むところのものもうせ去った」と。
一九どうか、わが悩みと苦しみ、
にがよもぎと胆汁とを心に留めてください。
二〇わが魂は絶えずこれを思って、
わがうちにうなだれる。
二一しかし、わたしはこの事を心に思い起す。
それゆえ、わたしは望みをいだく。
二二主のいつくしみは絶えることがなく、

そのあわれみは尽(つ)きることがない。
二三 これは朝(あさ)ごとに新(あたら)しく、
あなたの真実(しんじつ)は大(おお)きい。
二四 わが魂(たましい)は言(い)う、「主(しゅ)はわたしの受(う)くべき分(ぶん)である、
それゆえ、わたしは彼(かれ)を待(ま)ち望(のぞ)む」と。
二五 主(しゅ)はおのれを待(ま)ち望(のぞ)む者(もの)と、
おのれを尋(たず)ね求(もと)める者(もの)にむかって恵(めぐ)みふかい。
二六 主(しゅ)の救(すくい)を静(しず)かに待(ま)ち望(のぞ)むことは、良(よ)いことである。
二七 人(ひと)が若(わか)い時(とき)にくびきを負(お)うことは、良(よ)いことである。
二八 主(しゅ)がこれを負(お)わせられるとき、
ひとりすわって黙(もく)しているがよい。
二九 口(くち)をちりにつけよ、

あるいはなお望(のぞ)みがあるであろう。
三〇おのれを撃(う)つ者(もの)にほおを向(む)け、
満(み)ち足(た)りるまでに、はずかしめを受(う)けよ。
三一主(しゅ)はとこしえにこのような人(ひと)を
捨(す)てられないからである。
三二彼(かれ)は悩(なや)みを与(あた)えられるが、
そのいつくしみが豊(ゆた)かなので、
またあわれみをたれられる。
三三彼(かれ)は心(こころ)から人(ひと)の子(こ)を
苦(くる)しめ悩(なや)ますことをされないからである。
三四地(ち)のすべての捕(とら)われ人(びと)を足(あし)の下(した)に踏(ふ)みにじり、
三五いと高(たか)き者(もの)の前(まえ)に人(ひと)の公義(こうぎ)をまげ、

三六人(ひと)の訴(うった)えをくつがえすことは、
主(しゅ)のよみせられないことである。
三七主(しゅ)が命(めい)じられたのでなければ、
だれが命(めい)じて、その事(こと)の成(な)ったことがあるか。
三八災(わざわい)もさいわいも、
いと高(たか)き者(もの)の口(くち)から出(で)るではないか。
三九生(い)ける人(ひと)はどうしてつぶやかねばならないのか、
人(ひと)は自分(じぶん)の罪(つみ)の罰(ばっ)せられるのを、
つぶやくことができようか。
四〇われわれは、自分(じぶん)の行(おこな)いを調(しら)べ、
かつ省(かえり)みて、主(しゅ)に帰(かえ)ろう。
四一われわれは天(てん)にいます神(かみ)にむかって、

手(て)と共(とも)に心(こころ)をもあげよう。
四二「わたしたちは罪(つみ)を犯(おか)し、そむきました、
あなたはおゆるしになりませんでした。
四三あなたは怒(いか)りをもってご自分(じぶん)をおおい、
わたしたちを追(お)い攻(せ)め、殺(ころ)して、あわれまず、
四四また雲(くも)をもってご自分(じぶん)をおおい、
祈(いのり)を通(つう)じないようにし、
四五もろもろの民(たみ)の中(なか)に、
わたしたちをちりあくたとなさいました。
四六敵(てき)はみなわたしたちをののしり、
四七恐(おそ)れと落(おと)し穴(あな)と、荒廃(こうはい)と滅亡(めつぼう)とが、
わたしたちに臨(のぞ)みました。
四八わが民(たみ)の娘(むすめ)の滅(ほろ)びによって、

わたしの目(め)には涙(なみだ)の川(かわ)が流(なが)れています。
四九わが目(め)は絶(た)えず涙(なみだ)を注(そそ)ぎ出(だ)して、やむことなく、
五〇主(しゅ)が天(てん)から見(み)おろして、
顧(かえり)みられる時(とき)にまで及(およ)ぶでしょう。
五一わが目(め)はわが町(まち)のすべての娘(むすめ)の最期(さいご)のゆえに、
わたしを痛(いた)ませます。
五二ゆえなくわたしに敵(てき)する者(もの)どもによって、
わたしは鳥(とり)のように追(お)われました。
五三彼(かれ)らは生(い)きているわたしを穴(あな)の中(なか)に投(な)げ入(い)れ、
わたしの上(うえ)に石(いし)を投(な)げつけました。
五四水(みず)はわたしの頭(あたま)の上(うえ)にあふれ、
わたしは『断(た)ち滅(ほろ)ぼされた』と言(い)いました。

五五主(しゅ)よ、わたしは深(ふか)い穴(あな)からみ名(な)を呼(よ)びました。
五六あなたはわが声(こえ)を聞(き)かれました、
『わが嘆(なげ)きと叫(さけ)びに耳(みみ)をふさがないでください』。
五七わたしがあなたに呼(よ)ばわったとき、
あなたは近寄(ちかよ)って、『恐(おそ)れるな』と言(い)われました。
五八主(しゅ)よ、あなたはわが訴(うった)えを取(と)りあげて、
わたしの命(いのち)をあがなわれました。
五九主(しゅ)よ、あなたはわたしがこうむった不義(ふぎ)を
ごらんになりました。
わたしの訴(うった)えをおさばきください。
六〇あなたはわたしに対(たい)する彼(かれ)らの報復(ほうふく)と、
陰謀(いんぼう)とを、ことごとくごらんになりました。

六一主よ、あなたはわたしに対する彼らのそしりと、
陰謀とを、ことごとく聞かれました。
六二立ってわたしに逆らう者どものくちびると、
その思いは、ひねもすわたしを攻めています。
六三どうか、彼らのすわるをも、立つをも、
みそなわしてください。
わたしは彼らの歌となっています。
六四主よ、彼らの手のわざにしたがって、彼らに報い、
六五彼らの心をかたくなにし、
あなたののろいを彼らに注いでください。
六六主よ、怒りをもって彼らを追い、
天が下から彼らを滅ぼしてください」。

第四章

一ああ、黄金は光を失い、
純金は色を変じ、
聖所の石は
すべてのちまたのかどに投げ捨てられた。
二ああ、精金にも比すべきシオンのいとし子らは、
陶器師の手のわざである土の器のようにみなされる。
三山犬さえも乳ぶさをたれて、その子に乳を飲ませる。
ところが、わが民の娘は、
荒野のだちょうのように無慈悲になった。
四乳のみ子の舌はかわいて、上あごに、ひたとつき、
幼な子らはパンを求めても、これに与える者がない。
五うまい物を食べていた者は、

落ちぶれて、ちまたにおり、
紫の着物で育てられた者も、
今は灰だまりの上に伏している。
六わが民の娘のうけた懲しめは、
ソドムの罰よりも大きかった。
ソドムは昔、人の手によらないで、
またたくまに滅ぼされたのだ。
七わが民の君たちは雪よりも清らかに、
乳よりも白く、
そのからだは、さんごよりも赤く、
その姿の美しさはサファイヤのようであった。
八今はその顔はすすよりも黒く、

町(まち)の中(なか)にいても人(ひと)に知(し)られず、
その皮膚(ひふ)は縮(ちぢ)んで骨(ほね)につき、
かわいて枯(か)れ木(き)のようになった。
九 つるぎで殺(ころ)される者(もの)は、
飢(う)えて死(し)ぬ者(もの)よりもさいわいである。
彼(かれ)らは田畑(たはた)の産物(さんぶつ)の欠乏(けつぼう)によって、
刺(さ)された者(もの)のように衰(おとろ)え行(い)くからである。
一〇 わが民(たみ)の娘(むすめ)の滅(ほろ)びる時(とき)には
情深(なさけぶか)い女(おんな)たちさえも、
手(て)ずから自分(じぶん)の子(こ)どもを煮(に)て、それを食物(しょくもつ)とした。
一一 主(しゅ)はその憤(いきどお)りをことごとく漏(も)らし、
激(はげ)しい怒(いか)りをそそぎ、

シオンに火を燃やして、
その礎までも焼き払われた。
12地の王たちも、世の民らもみな、
エルサレムの門に、あだや敵が、
討ち入ろうとは信じなかった。
13これはその預言者たちの罪のため、
その祭司たちの不義のためであった。
彼らは義人の血をその町の中に流した者である。
14彼らは盲人のように、ちまたにさまよい、
血で汚れている。
だれもその衣にさわることができない。
15人々は彼らにむかって、「去れよ、けがらわしい」、

「去れよ、去れよ、さわるな」と叫んだので、
彼らは逃げ去って放浪者となったが、
異邦人の中でも人々は「もうわれわれのうちに
宿ってはならない」と言った。
一六 主はみずから彼らを散らして、
再び彼らを顧みず、
祭司を尊ばず、
長老をいたわられなかった。
一七 われわれの目は、むなしく助けを待ち望んで
疲れ衰えた。
われわれは待ち望んだが、
救を与え得ない国びとを待ち望んだ。

一八人々（ひとびと）がわれわれの歩（あゆ）みをうかがうので、
われわれは自分（じぶん）の町（まち）の中（なか）をも、
歩（ある）くことができなかった。
われわれの終（おわ）りは近（ちか）づいた、日（ひ）は尽（つ）きた。
われわれの終（おわ）りが来（き）たからである。
一九われわれを追（お）う者（もの）は空（そら）のはげたかよりも速（はや）く、
彼（かれ）らは山（やま）でわれわれを追（お）い立（た）て、
野（の）でわれわれを待（ま）ち伏（ぶ）せる。
二〇われわれが鼻（はな）の息（いき）とたのんだ者（もの）、
主（しゅ）に油（あぶら）そそがれた者（もの）は、彼（かれ）らの落（おと）し穴（あな）で捕（とら）えられた。
彼（かれ）はわれわれが「異邦人（いほうじん）の中（なか）でも
その陰（かげ）に生（い）きるであろう」と思（おも）った者（もの）である。

二一 ウズの地に住むエドムの娘よ、
喜び楽しめ、
あなたにもまた杯がめぐって行く、
あなたも酔って裸になる。
二二 シオンの娘よ、あなたの不義の罰は終った。
主は重ねてあなたを捕え移されない。
エドムの娘よ、主はあなたの不義を罰し、
あなたの罪をあらわされる。

第五章

一 主よ、われわれに臨んだ事を
覚えてください。
われわれのはずかしめを顧みてください。

二われわれの嗣業は他国の人に移り、
家は異邦人のものとなった。
三われわれはみなしごとなって父はなく、
母はやもめにひとしい。
四われわれは金を出して水を飲み、
価を払って、たきぎを獲なければならない。
五われわれは首にくびきをかけられて追い使われ、
疲れても休むことができない。
六われわれは足りるだけの食物を獲るために、
エジプトおよびアッスリヤに手をさし伸べた。
七われわれの先祖は罪を犯して、すでに世になく、
われわれはその不義の責めを負っている。

八 奴隷(どれい)であった者(もの)がわれわれを治(おさ)めるが、
われわれをその手(て)から救(すく)い出(だ)す者(もの)がない。
九 われわれは荒野(あらの)のつるぎのゆえに、
おのが命(いのち)をかけて食物(しょくもつ)を獲(え)る。
一〇 われわれの皮膚(ひふ)は飢餓(きが)の激(はげ)しい熱(ねつ)のために、
炉(ろ)のように熱(あつ)い。
一一 女(おんな)たちはシオンで犯(おか)され、
おとめたちはユダの町々(まちまち)で汚(けが)された。
一二 君(きみ)たる者(もの)も彼(かれ)らの手(て)でつるされ、
長老(ちょうろう)たちも尊(たっと)ばれず、
一三 若者(わかもの)たちは、ひきうすをになわせられ、
わらべたちは、たきぎを負(お)って、よろめき、

一四 長老たちは門に集まることをやめ、
若者たちはその音楽を廃した。
一五 われわれの心の喜びはやみ、
踊りは悲しみに変り、
一六 われわれの冠はこうべから落ちた。
わざわいなるかな、われわれは罪を犯したからである。
一七 このために、われわれの心は衰え、
これらの事のために、われわれの目はくらくなった。
一八 シオンの山は荒れはて、
山犬がその上を歩いているからである。
一九 しかし主よ、あなたはとこしえに統べ治められる。
あなたの、み位は世々絶えることがない。

二〇なぜ、あなたはわれわれをながく忘(わす)れ、
われわれを久(ひさ)しく捨(す)てておかれるのですか。
二一主(しゅ)よ、あなたに帰(かえ)らせてください、
われわれは帰(かえ)ります。
われわれの日(ひ)を新(あら)たにして、
いにしえの日(ひ)のようにしてください。
二二あなたは全(まった)くわれわれを捨(す)てられたのですか、
はなはだしく怒(いか)っていられるのですか。

エゼキエル書

第一章

一第三十年四月五日に、わたしがケバル川のほとりで、捕囚の人々のうちにいた時、天が開けて、神の幻を見た。二これはエホヤキン王の捕え移された第五年であって、その月の五日に、三主の言葉がケバル川のほとり、カルデヤびとの地でブジの子祭司エゼキエルに臨み、主の手がその所で彼の上にあった。

四わたしが見ていると、見よ、激しい風と大いなる雲が北から来て、その周囲に輝きがあり、たえず火を吹き出していた。その火の中に青銅のように輝くものがあった。五またその中から四つの生きものの形が出てきた。その様子はこうである。彼らは人の姿をもっていた。六おのおの四つの顔をもち、またそのおのおのに四つの翼があった。七その足はまっ

すぐで、足のうらは子牛の足のうらのようであり、みがいた青銅のように
光っていた。八その四方に、そのおのおのの翼の下に人の手があった。こ
の四つの者はみな顔と翼をもち、九翼は互に連なり、行く時は回らず
に、おのおの顔の向かうところにまっすぐに進んだ。一〇顔の形は、おの
おのその前方に人の顔をもっていた。四つの者は右の方に、ししの顔をも
ち、四つの者は左の方に牛の顔をもち、また四つの者は後ろの方に、わ
しの顔をもっていた。一一彼らの顔はこのようであった。その翼は高く伸
ばされ、その二つは互に連なり、他の二つをもってからだをおおっていた。
一二彼らはおのおのその顔の向かうところへまっすぐに行き、霊の行くと
ころへ彼らも行き、その行く時は回らない。一三この生きもののうちには
燃える炭の火のようなものがあり、たいまつのように、生きものの中を行
き来している。火は輝いて、その火から、いなずまが出ていた。一四生き

ものは、いなずまのひらめきのように速く行き来していた。
一五わたしが生きものを見ていると、生きもののかたわら、地の上に輪が
あった。四つの生きもののおのおのに、一つずつの輪である。一六もろもろの
輪の形と作りは、光る貴かんらん石のようである。四つのものは同じ形
で、その作りは、あたかも、輪の中に輪があるようである。一七その行く時、
彼らは四方のいずれかに行き、行く時は回らない。一八四つの輪には輪縁
と輻とがあり、その輪縁の周囲は目をもって満たされていた。一九生きも
のが行く時には、輪もそのかたわらに行き、生きものが地からあがる時は、
輪もあがる。二〇霊の行く所には彼らも行き、輪は彼らに伴ってあがる。
生きものの霊が輪の中にあるからである。二一彼らが行く時は、これらも
行き、彼らがとどまる時は、これらもとどまり、彼らが地からあがる時は、
輪もまたこれらと共にあがる。生きものの霊が輪の中にあるからである。

二二生きものの頭の上に水晶のように輝く大空の形があって、彼ら
の頭の上に広がっている。二三大空の下にはまっすぐに伸ばした翼が
あり、たがいに相連なり、生きものはおのおの二つの翼をもって、からだ
をおおっている。二四その行く時、わたしは大水の声、全能者の声のよう
な翼の声を聞いた。その声の響きは大軍の声のようで、そのとどまる時
は翼をたれる。二五また彼らの頭の上の大空から声があった。彼らが立
ちとどまる時は翼をおろした。

二六彼らの頭の上の大空の上に、サファイヤのような位の形があっ
た。またその位の形の上に、人の姿のような形があった。二七そして
その腰とみえる所の上の方に、火の形のような光る青銅の色のものが、
これを囲んでいるのを見た。わたしはその腰とみえる所の下の方に、火
のようなものを見た。そして彼のまわりに輝きがあった。二八そのまわり

にある輝きのさまは、雨の日に雲に起るにじのようであった。
　主の栄光の形のさまは、このようであった。わたしはこれを見て、わた
しの顔をふせたとき、語る者の声を聞いた。
第二章 一 彼はわたしに言われた、「人の子よ、立ちあがれ、わたしはあなた
に語ろう」。二 そして彼がわたしに語られた時、霊がわたしのうちに入り、
わたしを立ちあがらせた。そして彼のわたしに語られるのを聞いた。三 彼
はわたしに言われた、「人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの民、すな
わちわたしにそむいた反逆の民につかわす。彼らもその先祖も、わたしに
そむいて今日に及んでいる。四 彼らは厚顔で強情な者たちである。わた
しはあなたを彼らにつかわす。あなたは彼らに『主なる神はこう言われる』
と言いなさい。五 彼らは聞いても、拒んでも、(彼らは反逆の家だから)
彼らの中に預言者がいたことを知るだろう。六 人の子よ、彼らを恐れては

ならない。彼らの言葉をも恐れてはならない。たといあざみといばらがあ
なたと一緒にあっても、またあなたが、さそりの中に住んでも、彼らの言葉
を恐れてはならない。彼らの顔をはばかってはならない。彼らは反逆の
家である。七彼らが聞いても、拒んでも、あなたはただわたしの言葉を彼
らに語らなければならない。彼らは反逆の家だから。
八人の子よ、わたしがあなたに語るところを聞きなさい。反逆の家のよ
うにそむいてはならない。あなたの口を開いて、わたしが与えるものを食
べなさい」。九この時わたしが見ると、見よ、わたしの方に伸べた手があっ
た。また見よ、手の中に巻物があった。一〇彼がわたしの前にこれを開く
と、その表にも裏にも文字が書いてあった。その書かれていることは悲し
みと、嘆きと、災の言葉であった。
第三章一彼はわたしに言われた。「人の子よ、あなたに与えられたものを

食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい」。二そ
こでわたしが口を開くと、彼はわたしにその巻物を食べさせた。三そして
彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしがあなたに与えるこの巻物を
食べ、これであなたの腹を満たしなさい」。わたしがそれを食べると、それ
はわたしの口に甘いこと蜜のようであった。
四彼はまたわたしに言われた、「人の子よ、イスラエルの家に行って、わ
たしの言葉を語りなさい。五わたしはあなたを、異国語を用い、舌の重い
民につかわすのでなく、イスラエルの家につかわすのである。六すなわち
あなたがその言葉を知らない、異国語の舌の重い多くの民につかわすので
はない。もしわたしがあなたをそのような民につかわしたら、彼らはあな
たに聞いたであろう。七しかしイスラエルの家はあなたに聞くのを好まな
い。彼らはわたしに聞くのを好まないからである。イスラエルの家はすべ

て厚顔でまた強情である。八見よ、わたしはあなたの顔を彼らの顔に向
かって堅くし、あなたの額を彼らの額に向かって堅くした。九わたしは
あなたの額を岩よりも堅いダイヤモンドのようにした。ゆえに彼らを恐
れてはならない。彼らの顔をはばかってはならない。彼らは反逆の家で
ある」。一〇また彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしがあなたに語
るすべての言葉をあなたの心におさめ、あなたの耳に聞きなさい。一一そ
して捕囚の人々、あなたの民の人々の所へ行って、彼らが聞いても、彼
らが拒んでも、『主なる神はこう言われる』と彼らに言いなさい」。
一二時に霊がわたしをもたげた。そして主の栄光がその所からのぼっ
た時、わたしの後に大いなる地震の響きを聞いた。一三それは互に相触
れる生きものの翼の音と、そのかたわらの輪の音で、大いなる地震のよ
うに響いた。一四霊はわたしをもたげ、わたしを取り去ったので、わたし

は心を熱くし、苦々しい思いで出て行った。主の手が強くわたしの上に
あった。一五そしてわたしはケバル川のほとりのテルアビブにいる捕囚の
人々のもとへ行き、七日の間、驚きあきれて彼らの中に座した。
一六七日過ぎて後、主の言葉がわたしに臨んだ、一七「人の子よ、わたし
はあなたをイスラエルの家のために見守る者とした。あなたはわたしの口
から言葉を聞くたびに、わたしに代って彼らを戒めなさい。一八わたしが
悪人に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、あなたは彼の命を救うために
彼を戒めず、また悪人を戒めて、その悪い道から離れるように語らない
なら、その悪人は自分の悪のために死ぬ。しかしその血をわたしはあなた
の手から求める。一九しかし、もしあなたが悪人を戒めても、彼がその悪
をも、またその悪い道をも離れないなら、彼はその悪のために死ぬ。しか
しあなたは自分の命を救う。二〇また義人がその義にそむき、不義を行

うなら、わたしは彼の前に、つまずきを置き、彼は死ぬ。あなたが彼を戒
めなかったゆえ、彼はその罪のために死に、その行った義は覚えられな
い。しかしその血をわたしはあなたの手から求める。二一けれども、もしあ
なたが義人を戒めて、罪を犯さないように語り、そして彼が罪を犯さな
いなら、彼は戒めを受けいれたゆえに、その命を保ち、あなたは自分の
命を救う」。
二二その所で主の手がわたしの上に臨み、彼はわたしに言われた、「立っ
て、平野に出て行きなさい。その所でわたしはあなたに語ろう」。二三そ
こで、わたしは立って平野に出て行った。見よ、主の栄光が、かつてわた
しがケバル川のほとりで見た栄光のように、その所に立ち現れたので、
わたしはひれ伏した。二四しかし霊がわたしのうちにはいって、わたしを立
ちあがらせ、わたしに語って言った、「行って、あなたの家にこもっていな

さい。二五人の子よ、見よ、彼らはあなたの上になわをかけ、それであなた
を縛り、あなたを民の中に行かせないようにする。二六わたしはあなたの
舌を上あごにつかせ、あなたをおしにして、彼らを戒めることができな
いようにする。彼らは反逆の家だからである。二七しかし、わたしがあな
たと語るときは、あなたの口を開く。あなたは彼らに『主なる神はこう言
われる』と言わなければならない。聞く者は聞くがよい、拒む者は拒むが
よい。彼らは反逆の家だからである。

第四章一人の子よ、一枚のかわらを取って、あなたの前に置き、その上
にエルサレムの町を描きなさい。二そしてこれを取り囲み、これにむかっ
て雲梯を設け、塁を築き、陣を張り、その回りに城くずしを備えてこれを
攻めなさい。三また鉄の板をとり、それをあなたと町の間に置いて鉄の
壁となし、あなたの顔をこれに向けなさい。町をこのように囲んで、その

包囲を押し進めなさい。これがイスラエルの家のしるしである。
四あなたはまた自分の左脇を下にして寝なさい。わたしはあなたの上に
イスラエルの家の罰を置く。あなたはこのようにして寝ている日の間、彼
らの罰を負わなければならない。五わたしは彼らの罰の年数に等しいその
日数、すなわち三百九十日をあなたのために定める。その間あなたはイス
ラエルの家の罰を負わなければならない。六あなたはその期間を終ったな
ら、また右脇を下にして寝て、ユダの家の罰を負わなければならない。わ
たしは一日を一年として四十日をあなたのために定める。七あなたは自分
の顔をエルサレムの包囲の方に向け、腕をあらわし、町に向かって預言し
なければならない。八見よ、わたしはあなたに、なわをかけて、あなたの
包囲の期間の終るまで、左右に動くことができないようにする。
九あなたはまた小麦、大麦、豆、レンズ豆、あわ、はだか麦を取って、一

つの器に入れ、これでパンを造り、あなたが横になって寝る日の数、す
なわち三百九十日の間これを食べなければならない。
一〇あなたが食べる
食物は量って一日に二十シケルである。あなたは一日に一度これを食べ
なければならない。
一一また水を量って一ヒンの六分の一を一日に一度飲
まなければならない。
一二あなたは大麦の菓子のようにしてこれを食べなさ
い。すなわち彼らの目の前でこれを人の糞で焼かなければならない」。
一三
そして主は言われた、「このようにイスラエルの民はわたしが追いやろうと
する国々の中で汚れたパンを食べなければならない」。
一四そこでわたしは
言った、「ああ、主なる神よ、わたしは自分を汚したことはありません。わ
たしは幼い時から今日まで、自然に死んだものや、野獣に裂き殺された
ものを食べたことはありません。また汚れた肉がわたしの口にはいったこ
とはありません」。
一五すると彼はわたしに言われた、「見よ、わたしは牛の

糞をもって人の糞に換えることをあなたにゆるす。あなたはそれで自分の
パンを整えなさい」。一六またわたしに言われた、「人の子よ、見よ、わた
しはエルサレムで人のつえとするパンを打ち砕く。彼らはパンを量って、
恐れながら食べ、また水を量って驚きながら飲む。一七これは彼らをパン
と水とに乏しくし、互に驚いて顔を見合わせ、その罰のために衰えさ
せるためである。

第五章一人の子よ、鋭いつるぎを取り、それを理髪師のかみそりとして、
あなたの頭と、ひげとをそり、はかりで量って、その毛を分けなさい。二
その三分の一は包囲の期間の終る時、町の中で火で焼き、また三分の一を
取り、つるぎで町のまわりでこれを打ち、さらに三分の一を風に散らしな
さい。わたしはつるぎを抜いて、彼らのあとを追う。三あなたはその毛を少
し取って、衣のすそに包み、四またそのうちから少しを取って火の中に投

げ入れ、火でこれを焼きなさい。火はその中から出て、イスラエルの全家に
及ぶ。五主なる神はこう言われる、わたしはこのエルサレムを万国の中に
置き、国々をそのまわりに置いた。六エルサレムは他の国々よりも悪しく、
わたしのおきてにそむき、そのまわりの国々よりもわたしの定めにそむい
た。すなわち彼らはわたしのおきてを捨て、わたしの定めに歩まなかった。
七それゆえ主はこう言われる、あなたがたはそのまわりにいる異邦人より
も狂暴であって、わたしの定めに歩まず、わたしのおきてを行わず、む
しろ、あなたがたの回りにいる異邦人のおきてを守っていた。八それゆえ
主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたを攻め、異邦人の目の前
で、あなたの中にさばきを行う。九あなたのもろもろの憎むべき事のため
に、わたしがまだした事のないような事、またこの後ふたたびしないよう
な事をあなたに対してする。一〇それゆえ、あなたのうちで父はその子を

食い、子はその父を食う。わたしはあなたに対してさばきを行い、あなた
のうちの残りの者をことごとく四方の風に散らす。一一それゆえ、主なる
神は言われる、わたしは生きている。あなたはその忌むべき物と、その憎
むべき事とをもって、わたしの聖所を汚したので、わたしは必ずあなた
の数を減らす。わたしの目はあなたを惜しみ見ず、またわたしはあなたを
あわれまない。一二あなたの三分の一はあなたの中で疫病で死に、ききん
で滅び、三分の一はあなたのまわりでつるぎに倒れ、三分の一は四方の風
に散らされる。わたしはつるぎを抜いてそのあとを追う。
一三こうしてわたしは怒りを漏らし尽し、憤りを彼らの上に漏らして、
満足する。こうして、わたしの憤りを彼らの上に漏らし尽した時、彼ら
は主であるわたしが熱心に語ったことを知るであろう。一四わたしはまわ
りにある国々の中と、すべてそばを通る者の目の前であなたを滅亡とあざ

けりに渡す。一五わたしが怒りと、憤りと、重い懲罰とをもって、あ
なたに対してさばきを行う時、あなたはそのまわりにある国々のあざけ
りとなり、そしりとなり、戒めとなり、驚きとなる。これは主であるわ
たしが語るのである。一六すなわち、わたしがあなたを滅ぼすききんの矢、
滅亡の矢をあなたに放つ時、わたしはあなたを滅ぼすために放つのだ。わ
たしはあなたの上にききんを増し加え、あなたがつえとするパンを打ち砕
く。一七わたしはあなたにききんと野獣を送って、あなたの子を奪い取り、
また疫病と流血にあなたの中を通らせ、またつるぎをあなたに送る。主
であるわたしがこれを言う」。

第六章一主の言葉が、わたしに臨んで言った、二「人の子よ、あなたの顔
をイスラエルの山々に向け、預言して、三言え。イスラエルの山々よ、主
なる神の言葉を聞け。主なる神は山と丘と、谷と川に向かって、こう言わ

れる、見よ、わたしはつるぎをあなたがたに送り、あなたがたの高き所を
滅ぼす。四あなたがたの祭壇は荒され、あなたがたの香の祭壇はこわされ
る。わたしはあなたがたの偶像の前に、あなたがたの殺された者を投げ出
す。五わたしはイスラエルの民の死体を彼らの偶像の前に置き、骨をあな
たがたの祭壇のまわりに散らす。六すべてあなたがたの住む所で町々は
滅ぼされ、高き所は荒される。こうしてあなたがたの祭壇はこわし荒さ
れ、あなたがたの偶像は砕かれて滅び、あなたがたの香の祭壇は倒され、
あなたがたのわざは消し去られる。七また殺された者はあなたがたのうち
に倒れる。これによって、あなたがたはわたしが主であることを知るよう
になる。

八わたしは、あなたがたのある者を生かしておく。あなたがたが、つるぎ
をのがれて国々の中におり、国々に散らされる時、九あなたがたのうちの

のがれた者は、その捕え移された国々の中でわたしを思い出す。これはわ
たしが、彼らのわたしを離れた姦淫の心と、偶像を慕って姦淫を行う
目をくじくからである。そして彼らはそのもろもろの憎むべきことと、そ
の犯した悪のために、みずからをいとうようになる。
一〇そして彼らはわた
しが主であることを知る。この災を彼らに対して下すと、わたしが言っ
たのは決してむなしい事ではない」。

一一主なる神はこう言われる、「あなたは手を打ち、足を踏みならして言
え。ああ、イスラエルの家のすべての悪しき憎むべき者はわざわいだ。彼
らはつるぎと、ききんと、疫病に倒れるからである。
一二遠くにいる者は
疫病で死に、近くにいる者はつるぎに倒れる。生き残って身を全うする
者はききんによって死ぬ。このようにわたしはわが憤りを彼らの上に漏
らし尽す。
一三彼らの殺される者がその偶像の中にあり、その祭壇のまわ

りにあり、すべての高き丘の上にあり、すべての山の頂にあり、すべて
の青木の下にあり、すべての茂ったかしの木の下にあり、彼らがこうばし
いかおりを、すべての偶像にささげた所にある時、あなたがたはわたしが
主であることを知るのである。一四わたしはまた手を彼らの上に伸べて、そ
の地を荒し、すべて彼らの住む所を、荒野からリブラまで荒れ地とする。
これによって彼らはわたしが主であることを知るようになる」。

第七章一主の言葉がまたわたしに臨んだ、二「人の子よ、イスラエルの地
の終りについて主はこう言われる、この国の四方の境に終りが来た。三い
ま、あなたの終りが来た。わたしはわが怒りをあなたに漏らし、あなたの
行いに従って、あなたをさばき、あなたのもろもろの憎むべき物のため
にあなたを罰する。四わたしの目はあなたを惜しみ見ず、またあなたをあわ
れまない。わたしはあなたの行いのためにあなたを罰する。あなたの憎

むべき事があなたのうちにある。これによって、あなたがたはわたしが主
であることを知るようになる。
五主なる神はこう言われる、災が引き続いて起る。見よ、災が来る。
六終りが来る。その終りが来る。それが起って、あなたに臨む。見よ、それ
が来る。七この地に住む者よ、あなたの最後の運命があなたに来た。時は
来た。日が近づいた。混乱の日で、山々に聞える喜びの日ではない。八
今わたしは、すみやかにわたしの憤りをあなたの上に注ぎ、わたしの怒
りをあなたに漏らし尽し、あなたの行いに従ってあなたをさばき、あな
たのもろもろの憎むべき事のためにあなたを罰する。九わたしの目はあな
たを惜しみ見ず、またあなたをあわれまない。わたしはあなたの行いのた
めにあなたを罰する。あなたの憎むべき事があなたのうちにある。これに
よって、あなたがたは、主であるわたしがあなたを撃つことを知るように

なる。
一〇見よ、その日を。また見よ、かの日が来た。あなたの最後の運命が来
た。不義は花咲き、高ぶりは芽を出した。一一暴虐はつのって悪のつえと
なった。彼らもその群衆も、その富も消え、また彼らの名声も消えて何も
残らなくなる。一二時は来た。日は近づいた。買う者は喜ぶな。売る者は
悲しむな。怒りがすべての群衆の上に臨むからだ。一三売る者はたとい生
きていても、その売ったものに帰ることはない。怒りがそのすべての民衆
の上にあるからだ。それはもとに帰らない。その不義のために、だれも命
を全うすることはできない。
一四人々がラッパを吹いて備えをしても戦いに出る者はない。それはわ
たしの怒りがそのすべての群衆の上にあるからだ。一五外にはつるぎがあ
り、内には疫病とききんがある。畑にいる者はつるぎに死に、町にいる
者はききんと疫病に滅ぼされる。一六そのうちの、のがれる者は谷間のは

とのように山々に行って、おのおの皆その罪のために悲しむ。一七両手と
も弱くなり、両ひざとも水のように弱くなる。一八彼らは荒布を身にま
とい、恐れが彼らをおおい、すべての顔には恥があらわれ、すべての頭
は髪をそり落す。一九彼らはその銀をちまたに捨て、その金はあくたのよ
うになる。主の怒りの日には金銀も彼らを救うことはできない。それらは
彼らの飢えを満足させることができない、またその腹を満たすことができ
ない。それは彼らの不義のつまずきであったからだ。二〇彼らはその美し
い飾り物を高ぶりのために用い、またこれをもってその憎むべき偶像と忌
むべき物を造った。それゆえわたしはこれを彼らに対して汚れたものとす
る。二一わたしはこれを外国人の手に渡して奪わせ、地の悪人に渡してか
すめさせる。彼らはこれを汚す。二二わたしは彼らから顔をそむけて、彼
らにわたしの聖所を汚させる。強盗がこれにはいって汚し、二三また荒れ

地とする。
この地は流血のとがに満ち、この町は暴虐に満ちているゆえ、二四わ
たしは国々のうちの悪い者どもを招いて、彼らの家をかすめさせる。わた
しは強い者の高ぶりをやめさせる。また彼らの聖所は汚される。二五滅び
が来るとき、彼らは平安を求めても得られない。二六災に災が重なり
きたり、知らせに知らせが相つぐ。その時、彼らは預言者に幻を求める。
しかし律法は祭司のうちに絶え、計りごとは長老のうちに絶える。二七王
は悲しみ、つかさは望みを失い、その地の民の手はおののきによってこわ
ばる。わたしは彼らの行いに従って彼らをあつかい、そのさばきに従っ
て彼らをさばく。そして彼らはわたしが主であることを知るようになる」。
第八章一第六年の六月五日にわたしがわたしの家に座し、ユダの長老た
ちがわたしの前に座していたとき、主なる神の手がわたしの上に下った。二

わたしは見ていると、見よ、人のような形があって、その腰とみられる所
から下は火のように見え、腰から上は光る青銅のように輝いて見えた。三
彼は手のようなものを伸べて、わたしの髪の毛をつかんだ。そして霊がわ
たしを天と地の間に引きあげ、神の幻のうちにわたしをエルサレムに
携えて行き、北に向かった内庭の門の入口に至らせた。そこには、ねた
みをひき起すねたみの偶像があった。四見よ、そこに、わたしがかの平野
で見た幻のようなイスラエルの神の栄光があらわれた。
五時に彼はわたしに言われた、「人の子よ、目をあげて北の方をのぞめ」。
そこでわたしが目をあげて北の方をのぞむと、見よ、祭壇の門の北にあたっ
て、その入口に、このねたみの偶像があった。六彼はまたわたしに言われ
た、「人の子よ、あなたは彼らのしていること、すなわちイスラエルの家が
ここでしている大いなる憎むべきことを見るか。これはわたしを聖所から

遠ざけるものである。しかしあなたは、さらに大いなる憎むべきことを見
るだろう」。
七そして彼はわたしを庭の門に行かせた。わたしが見ると、見よ、壁に一
つの穴があった。八彼はわたしに言われた、「人の子よ、壁に穴をあけよ」。
そこでわたしが壁に穴をあけると、見よ、一つの戸があった。九彼はわたし
に言われた、「はいって、彼らがここでなす所の悪しき憎むべきことを見
よ」。一〇そこでわたしがはいって見ると、もろもろの這うものと、憎むべ
き獣の形、およびイスラエルの家のもろもろの偶像が、まわりの壁に描
いてあった。一一またイスラエルの家の長老七十人が、その前に立ってい
た。シャパンの子ヤザニヤも、彼らの中に立っていた。おのおの手に香炉
を持ち、そしてその香の煙が雲のようにのぼった。一二時に彼はわたしに
言われた、「人の子よ、イスラエルの家の長老たちが暗い所で行う事、

すなわちおのおのその偶像の室で行う事を見るか。彼らは言う、『主はわ
れわれを見られない。主はこの地を捨てられた』と」。一三またわたしに言
われた、「あなたはさらに彼らがなす大いなる憎むべきことを見る」。
一四そして彼はわたしを連れて主の家の北の門の入口に行った。見よ、
そこに女たちがすわって、タンムズのために泣いていた。一五その時、彼
はわたしに言われた、「人の子よ、あなたはこれを見たか。これよりもさら
に大いなる憎むべきことを見るだろう」。
一六彼はまたわたしを連れて、主の家の内庭にはいった。見よ、主の宮
の入口に、廊と祭壇との間に二十五人ばかりの人が、主の宮にその背中
を向け、顔を東に向け、東に向かって太陽を拝んでいた。一七時に彼は
わたしに言われた、「人の子よ、あなたはこれを見たか。ユダの家にとって、
彼らがここでしているこれらの憎むべきわざは軽いことであるか。彼らは

この地を暴虐で満たし、さらにわたしを怒らせる。見よ、彼らはその鼻
に木の枝を置く。一八それゆえ、わたしも憤って事を行う。わたしの目
は彼らを惜しみ見ず、またあわれまない。たとい彼らがわたしの耳に大声
で呼ばわっても、わたしは彼らの言うことを聞かない」。
第九章一時に彼はわたしの耳に大声に呼ばわって言われた、「町を罰す
る者たちよ、おのおの滅ぼす武器をその手に持って近よれ」と。二見よ、北
に向かう上の門の道から出て来る六人の者があった。おのおのその手に滅
ぼす武器を持ち、彼らの中のひとりは亜麻布を着、その腰に物を書く墨つ
ぼをつけていた。彼らははいって来て、青銅の祭壇のかたわらに立った。
三ここにイスラエルの神の栄光がその座しているケルビムから立ちあがっ
て、宮の敷居にまで至った。そして主は、亜麻布を着て、その腰に物を書
く墨つぼをつけている者を呼び、四彼に言われた、「町の中、エルサレム

の中をめぐり、その中で行われているすべての憎むべきことに対して嘆
き悲しむ人々の額にしるしをつけよ」。
五またわたしの聞いている所で
他の者に言われた、「彼のあとに従い町をめぐって、撃て。あなたの目は
惜しみ見るな。またあわれむな。
六老若男女をことごとく殺せ。しかし
身にしるしのある者には触れるな。まずわたしの聖所から始めよ」。そこ
で、彼らは宮の前にいた老人から始めた。
七この時、主は彼らに言われた、
「宮を汚し、死人で庭を満たせ。行け」。そこで彼らは出て行って、町の中
で撃った。
八さて彼らが人々を打ち殺していた時、わたしひとりだけが残
されたので、ひれ伏して、叫んで言った、「ああ主なる神よ、あなたがエル
サレムの上に怒りを注がれるとき、イスラエルの残りの者を、ことごとく
滅ぼされるのですか」。
九主はわたしに言われた、「イスラエルとユダの家の罪は非常に大きい。

国は血で満ち、町は不義で満ちている。彼らは言う、『主はこの地を捨てら
れた。主は顧みられない』。一〇それゆえ、わたしの目は彼らを惜しみ見
ず、またあわれまない。彼らの行うところを、彼らのこうべに報いる」。
一一時に、かの亜麻布を着、物を書く墨つぼを腰につけていた人が報告
して言った、「わたしはあなたがお命じになったように行いました」。

第一〇章
一時にわたしは見ていたが、見よ、ケルビムの頭の上の大空
に、サファイヤのようなものが王座の形をして、その上に現れた。二彼
は亜麻布を着たその人に言われた、「ケルビムの下の回る車の間にはい
り、ケルビムの間から炭火をとってあなたの手に満たし、これを町中に
まき散らせ」。
そして彼はわたしの目の前ではいった。三この人がはいった時、ケルビ
ムは宮の南側に立っていた。また雲はその内庭を満たしていた。四主の

栄光はケルビムの上から宮の敷居の上にあがり、宮は雲で満ち、庭は主の
栄光の輝きで満たされた。五時にケルビムの翼の音が大能の神が語ら
れる声のように外庭にまで聞えた。
六彼が亜麻布を着ている人に、「回る車の間、ケルビムの間から火を
取れ」と命じた時、その人ははいって、輪のかたわらに立った。七ひとり
のケルブはその手をケルビムの間から伸べて、ケルビムの間にある火を
取り、亜麻布を着た人の手に置いた。すると彼はこれを取って出て行った。
八ケルビムはその翼の下に人の手のような形のものを持っているように
見えた。
九わたしが見ていると、見よ、ケルビムのかたわらに四つの輪があり、一
つの輪はひとりのケルブのかたわらに、他の輪は他のケルブのかたわらに
あった。輪のさまは、光る貴かんらん石のようであった。一〇そのさまは四

つとも同じ形で、あたかも輪の中に輪があるようであった。
一一その行く時は四方のどこへでも行く。その行く時は回らない。ただ先頭の輪の向くところに従い、その行く時は回ることをしない。
一二その輪縁、その輻、およびその輪には、まわりに目が満ちていた。その輪は四つともこれを持っていた。
一三その輪はわたしの聞いている所で、「回る輪」と呼ばれた。
一四そのおのおのには四つの顔があった。第一の顔はケルブの顔、第二の顔は人の顔、第三はししの顔、第四はわしの顔であった。
一五その時ケルビムはのぼった。これがケバル川でわたしが見た生きものである。
一六ケルビムの行く時、輪もそのかたわらに行き、ケルビムが翼をあげて地から飛びあがる時は、輪もそのかたわらを離れない。
一七その立ちどまる時は、輪も立ちどまり、そののぼる時は、輪も共にのぼる。生きものの霊がその中にあるからである。

一八時に主の栄光が宮の敷居から出て行って、ケルビムの上に立った。一
九するとケルビムは翼をあげて、わたしの目の前で、地からのぼった。そ
の出て行く時、輪もまたこれと共にあり、主の宮の東の門の入口の所へ
行って止まった。イスラエルの神の栄光がその上にあった。
二〇これがすなわちわたしがケバル川のほとりで、イスラエルの神の下
に見たかの生きものである。わたしはそれがケルビムであることを知って
いた。二一これにはおのおの四つの顔があり、おのおの四つの翼があり、
また人の手のようなものがその翼の下にあった。二二その顔の形は、ケ
バル川のほとりでわたしが見たそのままの顔である。おのおのその前の方
にまっすぐに行った。

第一一章一時に霊はわたしをあげて、東に向かう主の宮の東の門に連
れて行った。見よ、その門の入口に二十五人の者がいた。わたしはその中

にアズルの子ヤザニヤと、ベナヤの子ペラテヤを見た。共に民のつかさで
あった。二すると彼はわたしに言われた、「人の子よ、これらの者はこの町
の中で悪い事を考え、悪い計りごとをめぐらす人々である。三彼らは言
う、『家を建てる時は近くはない。この町はなべであり、われわれは肉で
ある』と。四それゆえ、彼らに向かって預言せよ。人の子よ、預言せよ」。
五時に、主の霊がわたしに下って、わたしに言われた、「主はこう言われ
ると言え、イスラエルの家よ、考えてみよ。わたしはあなたがたの心に
ある事どもを知っている。六あなたがたはこの町に殺される者を増し、殺
された者をもってちまたを満たした。七それゆえ、主なる神はこう言われ
る、町の中にあなたがたが置く殺された者は肉である。この町はなべであ
る。しかし、あなたがたはその中から取り出される。八あなたがたはつるぎ
を恐れた。わたしはあなたがたにつるぎを臨ませると、主は言われる。九

またわたしはあなたがたをその中から引き出して、他国人の手に渡し、あ
なたがたをさばく。一〇あなたがたはつるぎに倒れる。わたしはあなたが
たをイスラエルの境でさばく。これによってあなたがたはわたしが主であ
ることを知るようになる。一一この町はあなたがたに対してなべとはなら
ず、あなたがたはその肉とはならない。わたしはイスラエルの境であなた
がたをさばく。一二これによって、あなたがたはわたしが主であることを知
るようになる。あなたがたはわたしの定めに歩まず、またわたしのおきて
を行わず、かえってその周囲の他国人のおきてに従って行っているか
らである」。

一三このようにわたしが預言していた時、ベナヤの子ペラテヤが死んだの
で、わたしは打ち伏して、大声で叫んで言った、「ああ主なる神よ、あなた
はイスラエルの残りの者をことごとく滅ぼそうとされるのですか」。

一四時に主の言葉がわたしに臨んで言った、一五「人の子よ、あなたの
兄弟、あなたの友、あなたの兄弟である捕われ人、イスラエルの全家、
エルサレムの住民は言った、『彼らが主から遠く離れた。この地はわれわ
れの所有として与えられているのだ』と。一六それゆえ、言え、『主なる神
はこう言われる、たといわたしは彼らを遠く他国人の中に移し、国々の中
に散らしても、彼らの行った国々で、わたしはしばらく彼らのために聖所
となる』と。一七それゆえ、言え、『主はこう言われる、わたしはあなたが
たをもろもろの民の中から集め、その散らされた国々から集めて、イスラ
エルの地をあなたがたに与える』と。一八彼らはその所に来る時、そのも
ろもろのいとうべきものと、もろもろの憎むべきものとをその所から取り
除く。一九そしてわたしは彼らに一つの心を与え、彼らのうちに新しい
霊を授け、彼らの肉から石の心を取り去って、肉の心を与える。二〇こ

れは彼らがわたしの定めに歩み、わたしのおきてを守って行い、そして
彼らがわたしの民となり、わたしが彼らの神となるためである。二一しか
しいとうべきもの、憎むべきものをその心に慕って歩む者には、彼らの
行いに従ってそのこうべに報いると、主なる神は言われる」。
二二時にケルビムはその翼をあげた。輪がそのかたわらにあり、イスラ
エルの神の栄光がその上にあった。二三主の栄光が町の中からのぼって、
町の東にある山の上に立ちどまった。二四その時、霊はわたしをあげ、神
の霊によって、幻のうちにわたしをカルデヤの捕われ人の所へ携えて
行った。そしてわたしが見た幻はわたしを離れてのぼった。二五そこで
わたしは主がわたしに示された事をことごとくかの捕われ人に告げた。

第一二章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたは反逆の家
の中にいる。彼らは見る目があるが見ず、聞く耳があるが聞かず、彼らは

反逆の家である。三それゆえ、人の子よ、捕囚の荷物を整え、彼らの目
の前で昼のうちに移れ、彼らの目の前であなたの所から他の所に移れ。
彼らは反逆の家であるが、あるいは彼らは顧みるところがあろう。四あ
なたは、捕囚の荷物のようなあなたの荷物を、彼らの目の前で昼のうちに
持ち出せ。そして捕囚に行くべき人々のように、彼らの目の前で夕べのう
ちに出て行け。五すなわち彼らの目の前で壁に穴をあけ、そこから出て行
け。六あなたは彼らの目の前でその荷物を肩に負い、やみのうちにそれを
運び出せ。あなたの顔をおおって地を見るな。わたしはあなたをしるしと
なして、イスラエルの家に示すのだ」。
七そこでわたしは命じられたようにし、捕囚の荷物のような荷物を昼の
うちに持ち出し、夕べにはわたしの手で壁に穴をあけ、やみのうちに彼ら
の目の前で、これを肩に負って運び出した。

八次の朝、主の言葉がわたしに臨んだ、九「人の子よ、反逆の家である
イスラエルの家は、あなたに向かって、『何をしているのか』と言わなかった
か。一〇あなたは彼らに言いなさい、『主なる神はこう言われる、この託宣
はエルサレムの君、およびその中にあるイスラエルの全家にかかわるもの
である』と。一一また言いなさい、『わたしはあなたがたのしるしである。わ
たしがしたとおりに彼らもされる。彼らはとりこにされて移される』と。一
二彼らのうちの君は、やみのうちにその荷物を肩に載せて出て行く。彼は
壁に穴をあけて、そこから出て行く。彼は顔をおおって、自分の目でこの
地を見ない。一三わたしはわたしの網を彼の上に打ちかける。彼はわたし
のわなにかかる。わたしは彼をカルデヤびとの地のバビロンに引いて行く。
しかし彼はそれを見ないで、そこで死ぬであろう。一四またすべて彼の周囲
にいて彼を助ける者および彼の軍隊を、わたしは四方に散らし、つるぎを

抜いてそのあとを追う。一五わたしが彼らを諸国民の中に散らし、国々に
まき散らすとき、彼らはわたしが主であることを知る。一六ただし、わた
しは彼らのうちに、わずかの者を残して、つるぎと、ききんと、疫病を
免れさせ、彼らがおこなったもろもろの憎むべきことを、彼らが行く国
びとの中に告白させよう。そして彼らはわたしが主であることを知るよう
になる」。
一七主の言葉がまたわたしに臨んだ、一八「人の子よ、震えてあなたのパ
ンを食べ、おののきと恐れとをもって水を飲め。一九そしてこの地の民に
ついて言え、主なる神はイスラエルの地のエルサレムの民についてこう言
われる、彼らは恐れをもってそのパンを食べ、驚きをもってその水を飲
むようになる。これはその地が、すべてその中に住む者の暴虐のために
衰え、荒れ地となるからである。二〇人の住んでいた町々は荒れはて、地

は荒塚となる。そしてあなたがたは、わたしが主であることを知るように
なる」。
二一主の言葉がわたしに臨んだ、二二「人の子よ、イスラエルの地につい
て、あなたがたが『日は延び、すべての幻はむなしくなった』という、こ
のことわざはなんであるか。二三それゆえ、彼らに言え、『主なる神はこう
言われる、わたしはこのことわざをやめさせ、彼らが再びイスラエルで、
これをことわざとしないようにする』と。しかし、あなたは彼らに言え、『日
とすべての幻の実現とは近づいた』と。二四イスラエルの家のうちには、
もはやむなしい幻も、偽りの占いもなくなる。二五しかし主なるわた
しは、わが語るべきことを語り、それは必ず成就する。決して延びるこ
とはない。ああ、反逆の家よ、あなたの日にわたしはこれを語り、これを
成就すると、主なる神は言われる」。

二六主の言葉がまたわたしに臨んだ、二七「人の子よ、見よ、イスラエル
の家は言う、『彼の見る幻は、なお多くの日の後の事である。彼が預言
することは遠い後の時のことである』と。二八それゆえ、彼らに言え、主な
る神はこう言われる、わたしの言葉はもはや延びない。わたしの語る言葉
は成就すると、主なる神は言われる」。

第一三章
一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、イスラエルの預言者
たちに向かって預言せよ。すなわち自分の心のままに預言する人々に向
かって、預言して言え、『あなたがたは主の言葉を聞け』。三主なる神はこ
う言われる、なにも見ないで、自分の霊に従う愚かな預言者たちはわざわ
いだ。四イスラエルよ、あなたの預言者たちは、荒れ跡にいるきつねのよ
うだ。五あなたがたは主の日に戦いに立つため、破れ口にのぼらず、また
イスラエルの家のために石がきを築こうともしない。六彼らは虚偽を言い、

偽りを占った。彼らは主が彼らをつかわさないのに『主が言われる』と
言い、なおその言葉の成就することを期待する。七あなたがたはむなしい
幻を見、偽りの占いを語り、わたしが言わないのに『主が言われる』
と言ったではないか」。
八それゆえ、主なる神はこう言われる、「あなたがたはむなしいことを語
り、偽りの物を見るゆえ、わたしはあなたがたを罰すると主なる神は言
われる。九わたしの手は、むなしい幻を見、偽りの占いを言う預言者
に敵対する。彼らはわが民の会に臨まず、イスラエルの家の籍にしるされ
ず、イスラエルの地に、はいることができない。そしてあなたがたはわたし
が主なる神であることを知るようになる。一〇彼らはわが民を惑わし、平和
がないのに『平和』と言い、また民が塀を築く時、これらの預言者たちは
水しっくいをもってこれを塗る。一一それゆえ、水しっくいを塗る者ども

に『これはかならずくずれる』と言え。これに大雨が注ぎ、ひょうが降り、
あらしが吹く。一二そして塀がくずれる時、人々はあなたがたに向かって、
『あなたがたが塗った水しっくいはどこにあるか』と言わないであろうか。
一三それゆえ、主なる神はこう言われる、わたしはわが憤りをもって大風
を起し、わが怒りをもって大雨を注がせ、憤りをもってひょうを降らせ
て、これを滅ぼす。一四またわたしはあなたがたが水しっくいをもって塗っ
た塀をこわして、これを地に倒し、その基をあらわす。これが倒れる時、
あなたがたはその中に滅びる。そしてあなたがたは、わたしが主であるこ
とを知るようになる。一五こうしてわたしが、その塀と、これを水しっくい
で塗った者との上に、わたしの憤りを漏らし尽して、あなたがたに言う、
塀はなくなり、これを塗った者もなくなる。一六これがすなわち平和がない
のに平和の幻を見、エルサレムについて預言したイスラエルの預言者で

あると、主なる神は言われる。
一七人の子よ、心のままに預言するあなたの民の娘たちに対して、あ
なたの顔を向け、彼らに向かって預言して、一八言え、主なる神はこう言わ
れる、手の節々に占いひもを縫いつけ、もろもろの大きさの人の頭に、
かぶり物を作りかぶせて、魂をかり取ろうとする女はわざわいだ。あ
なたがたは、わが民の魂をかり取って、あなたがたの利益のために、他の
魂を生かしおこうとするのか。一九あなたがたは少しばかりの大麦のた
め、少しばかりのパンのために、わが民のうちに、わたしを汚し、かの偽
りを聞きいれるわが民に偽りを述べて、死んではならない者を死なせ、生
きていてはならない者を生かす。
二〇それゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたがたが用
いて、魂をかり取るところの占いひもを奪い、あなたがたの腕から占

いひもを裂き取って、あなたがたがかり取るところの魂を、鳥のように
放ちやる。二一わたしはまたあなたがたの、かぶり物を裂き、わが民をあ
なたがたの手から救う。彼らは再びあなたがたの獲物とはならない。そ
してあなたがたはわたしが主であることを知るようになる。二二あなたがた
は偽りをもって正しい者の心を悩ました。わたしはこれを悩まさなかっ
た。またあなたがたは悪人が、その命を救うために、その悪しき道から
離れようとする時、それをしないように勧める。二三それゆえ、あなたが
たは重ねてむなしい幻を見ることができず、占いをすることができな
いようになる。わたしはわが民を、あなたがたの手から救い出す。そのと
き、あなたがたはわたしが主であることを知るようになる」。

第一四章一ここにイスラエルの長老のうちのある人々が、わたしの所
に来て、わたしの前に座した。二時に主の言葉が、わたしに臨んだ、三「人

の子よ、これらの人々は、その偶像を心の中に持ち、罪に落しいれると
ころのつまずきを、その顔の前に置いている。わたしはどうして彼らの願
いをいれることができようか。四それゆえ彼らに告げて言え、主なる神は、
こう言われる、イスラエルの家の人々で、その偶像を心の中に持ち、そ
の顔の前に罪に落しいれるところのつまずくものを置きながら、預言者の
もとに来る者には、その多くの偶像のゆえに、主なるわたしは、みずから
これに答をする。五これはその偶像のために、すべてわたしを離れたイス
ラエルの家の心を、わたしが捕えるためである。
六それゆえイスラエルの家に言え、主なる神はこう言われる、あなたが
たは悔いて、あなたがたの偶像を捨てよ。あなたがたの顔を、そのすべて
の憎むべきものからそむけよ。七イスラエルの家の者およびイスラエルに
宿る外国人のだれでも、わたしから離れ、その心に偶像を持ち、その顔

の前に罪に落しいれるところのつまずきを置きながら、預言者に来て、心
のままにわたしに求めるときは、主であるわたしは、みずからこれに答を
する。八わたしはわたしの顔を、その人に向け、彼を、しるし、およびこと
わざとなし、これをわが民のうちから断ち滅ぼす。その時、あなたがたは
わたしが主であることを知るようになる。九もし預言者が欺かれて言葉を
出すことがあれば、それは主であるわたしが、その預言者を欺いたのであ
る。わたしは手を彼の上に伸べ、わが民イスラエルのうちから彼を滅ぼす。
一〇彼らはその罰を負う。その預言者の罰は、問い求める者の罰と同様で
ある。一一これはイスラエルの家が、重ねてわたしを離れて迷わず、重ね
てそのもろもろのとがによって、おのれを汚さないため、また彼らがわが
民となり、わたしが彼らの神となるためであると、主なる神は言われる」。
一二主の言葉が、またわたしに臨んだ、一三「人の子よ、もし国がわたし

に、もとりそむいて罪を犯し、わたしがその上に手を伸べて、そのつえと
たのむパンを砕き、これにききんを送り、人と獣とをそのうちから断つ
時、
一四たといそこにノア、ダニエル、ヨブの三人がいても、彼らはその義
によって、ただ自分の命を救いうるのみであると、主なる神は言われる。
一五もしわたしが野の獣にこの地を通らせ、これを荒させ、これを荒れ地
となし、その獣のためにそこを通る者がないようにしたなら、
一六主なる
神は言われる、わたしは生きている、たといこれら三人の者がその中にい
ても、そのむすこ娘を救うことはできない。ただ自分自身を救いうるのみ
で、その地は荒れ地となる。
一七あるいは、わたしがもし、つるぎをその地
に臨ませ、つるぎよ、この地を行きめぐれと言って、人と獣とをそこから
断つならば、
一八主なる神は言われる、わたしは生きている、たといこれ
ら三人の者がその中にいても、そのむすこ娘を救うことはできない。た

だ自分自身を救いうるのみである。一九あるいは、わたしがもし、この地に
疫病を送り、血をもってわが憤りをその上に注ぎ、人と獣とをそこ
から断つならば、二〇主なる神は言われる、わたしは生きている、たといノ
ア、ダニエル、ヨブがそこにいても、彼らはそのむすこ娘を救うことがで
きない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである。
二一主なる神はこう言われる、わたしが人と獣とを地から断つために、
つるぎと、ききんと、悪しき獣と、疫病との四つのきびしい罰をエルサ
レムに送る時はどうであろうか。二二しかし、もしそれがあなたがたに来る
とき、むすこ娘たちを助け出す者が、その中に残っていて、あなたがた
がその行いと、わざとを見るならば、わたしがエルサレムの上に与えたす
べての災について慰められるであろう。二三すなわち、あなたがたが、
その行いと、わざとを見る時、彼らはあなたがたを慰め、あなたがたは

わたしがこれに行った事は、すべてゆえなくしたのではないことを知るよ
うになると、主なる神は言われる」。
第一五章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ぶどうの木、森
の木のうちにあるぶどうの枝は、ほかの木になんのまさる所があるか。三
その木は何かを造るために用いられるか。また人はこれを用いて、器物
を掛ける木釘を造るだろうか。四見よ、これは火に投げ入れられて燃える。
火がその両端を焼いたとき、またその中ほどがこげたとき、それはなんの
役に立つだろうか。五見よ、これは完全な時でも、なんの用をもなさない。
まして火がこれを焼き、これをこがした時には、なんの役に立つだろうか。
六それゆえ主なる神はこう言われる、わたしが森の木の中のぶどうの木を、
火に投げ入れて焼くように、エルサレムの住民をそのようにする。七わた
しはわたしの顔を彼らに向けて攻める。彼らがその火からのがれても、火

は彼らを焼き尽す。わたしが顔を彼らに向けて攻める時、あなたがたはわ
たしが主であることを知る。八彼らが、もとりそむいたゆえに、わたしは
この地を荒れ地とすると、主なる神は言われる」。

第一六章一主の言葉が再びわたしに臨んだ、二「人の子よ、エルサレム
にその憎むべき事どもを示して、三言え。主なる神はエルサレムにこう言
われる、あなたの起り、あなたの生れはカナンびとの地である。あなたの
父はアモリびと、あなたの母はヘテびとである。四あなたの生れについて
いえば、その生れた日に、へその緒は切られず、水で洗い清められず、塩
でこすられず、また布で包まれなかった。五ひとりもあなたをあわれみ見
る者なく、情をもってこれらのことの一つをも、あなたにしてやる者もな
く、あなたの生れた日に、あなたはきらわれて、野原に捨てられた。
六わたしはあなたのかたわらを通り、あなたが血の中にころがりまわっ

ているのを見た時、わたしは血の中にいるあなたに言った、『生きよ、七野
の木のように育て』と。すなわちあなたは成長して大きくなり、一人前
の女になり、その乳ぶさは形が整い、髪は長くなったが、着物がなく、
裸であった。
八わたしは再びあなたのかたわらをとおって、あなたを見たが、見よ、
あなたは愛せられる年齢に達していたので、わたしは着物のすそであなた
をおおい、あなたの裸をかくし、そしてあなたに誓い、あなたと契約を
結んだ。そしてあなたはわたしのものとなったと、主なる神は言われる。
九そこでわたしは水であなたを洗い、あなたの血を洗い落して油を塗り、
一〇縫い取りした着物を着せ、皮のくつをはかせ、細布をかぶらせ、絹の
きれであなたをおおった。一一また飾り物であなたを飾り、腕輪をあなた
の手にはめ、鎖をあなたの首にかけ、一二鼻には鼻輪、耳には耳輪、頭

には美しい冠を与えた。一三このようにあなたは金銀で飾られ、細布、
絹、縫い取りの服をあなたの衣とし、麦粉と、蜜と、油とを食べた。あ
なたは非常に美しくなって王の地位に進み、一四あなたの美しさのため
に、あなたの名声は国々に広まった。これはわたしが、あなたに施した
飾りによって全うされたからであると、主なる神は言われる。
一五ところが、あなたは自分の美しさをたのみ、自分の名声によって姦淫
を行い、すべてかたわらを通る者と、ほしいままに姦淫を行った。一六
あなたは自分の衣をとって、自分のために、はなやかに色どった聖所を造
り、その上で姦淫を行っている。こんなことはかつてなかったこと、また
あってはならないことである。一七あなたはわたしが与えた金銀の美しい
飾りの品をとり、自分のために男の像を造って、これと姦淫を行った。
一八また縫い取りのある自分の衣をとって彼らに着せ、わたしの油と香

とをその前に供え、一九またわたしがあなたに与えたパン、わたしがあなた
を養うための麦粉、油および蜜を、こうばしきかおりとして彼らの前に
供えたと、主なる神は言われる。二〇あなたはまた、あなたがわたしに産
んだむすこ、娘たちをとって、その像に供え、彼らに食わせた。このよう
なあなたの姦淫は小さい事であろうか。二一あなたはわたしの子どもを殺
し、火の中を通らせて彼らにささげた。二二あなたがそのすべての憎むべ
きことや姦淫を行うに当って、あなたが衣もなく、裸で、血の中にこ
ろがりまわっていた自分の若き日のことを思わなかった。
二三あなたがもろもろの悪を行った後、(あなたはわざわいだ、わざわい
だと、主なる神は言われる)二四あなたは自分のために高楼を建て、広場、
広場に台を造り、二五ちまた、ちまたのつじに台を造って、あなたの美し
さを汚し、すべてかたわらを通る者に身をまかせて、大いに姦淫を行って

いる。二六あなたはまた、かの肉欲的な隣りエジプトの人々と姦淫を行
い、大いに姦淫を行って、わたしを怒らせた。二七それゆえ、わたしはわ
たしの手をあなたの上に伸べて、あなたの賜わる分を減らし、あなたの敵、
すなわち、あなたのみだらな行為を恥じるペリシテびとの娘らの欲のまま
に、あなたを渡した。二八あなたは飽くことがないので、またアッスリヤの
人々と姦淫を行ったが、彼らと姦淫を行っても、なお飽くことがなかっ
た。二九あなたはまたカルデヤの商業地と大いに姦淫を行ったが、これ
と姦淫を行っても、なお飽くことがなかった。

三〇主なる神は言われる、あなたの心はどんなに恋いわずらうのか。あ
なたは、これらすべての事を行った。これはあつかましい姦淫のわざであ
る。三一あなたは、ちまた、ちまたのつじに高楼を建て、広場、広場に台を
設けたが、価をもらうことをあざけったので、遊女のようではなかった。

三二自分の夫に替えて他人と通じる姦婦よ。三三人はすべての遊女に物を
与える。しかしあなたはすべての恋人に物を与え、彼らにまいないして、
あなたと姦淫するために、四方からあなたの所にこさせる。三四このよう
にあなたは姦淫を行うに当って、他の女と違っている。すなわち、だれ
もあなたに姦淫をさせたのではない。あなたはかえって価を払い、相手
はあなたに払わない。これがあなたの違うところである。
三五それで遊女よ、主の言葉を聞け。三六主なる神はこう言われる、あな
たがその恋人と姦淫して、あなたの恥じる所をあらわし、あなたの裸を
あらわし、またすべての偶像と、あなたが彼らにささげたあなたの子どもら
の血のゆえに、三七見よ、わたしはあなたと遊んだあなたのすべての恋人、
およびすべてあなたが恋した者と、すべてあなたが憎んだ者とを集め、四方
から彼らをあなたの所に集めて、あなたの裸を彼らにあらわす。彼らは

あなたの裸を、ことごとく見る。三八わたしは姦淫を行った女と、血を
流した女がさばかれるように、あなたをさばき、憤りと、ねたみの血と
を、あなたに注ぐ。三九わたしはあなたを恋人の手に渡す。彼らはあなた
の高楼を倒し、台をこわし、あなたの衣をはぎ取り、あなたの美しい飾
りの品を奪い、あなたを衣服のない裸者にする。四〇彼らは民衆をかり
立ててあなたを攻め、石であなたを撃ち、つるぎであなたを切り、四一火で
あなたの家を焼き、多くの女たちの前で、あなたにさばきを行う。こう
してわたしはあなたに淫行をやめさせ、重ねて価を払わせないようにす
る。四二そしてあなたに対するわが憤りをしずめ、わがねたみをあなた
から離し、わたしは心を安んじて、再び怒ることをしない。四三またあ
なたはその若き日の事を覚えず、すべてこれらの事をもって、わたしを怒
らせたから、見よ、わたしもあなたの行うところをあなたのこうべに報い

ると、主なる神は言われる。
あなたはもろもろの憎むべき事に加えて、このみだらな事をおこなった
ではないか。
四四見よ、すべてことわざを用いる者は、あなたについて、『こ
の母にしてこの娘あり』という、ことわざを用いる。
四五あなたは、その
夫と子どもとを捨てたあなたの母の娘、またその夫と子どもとを捨て
た姉妹を持っている。あなたの母はヘテびと、あなたの父はアモリびと、
四
六あなたの姉はサマリヤ、サマリヤはその娘たちと共に、あなたの北に住
み、あなたの妹はソドムで、その娘たちと共に、あなたの南に住んで
いる。
四七あなたは彼らの道を歩まず、彼らの憎むべき事に従っていな
いが、しばらくすると、あなたのおこないは、彼らよりもさらに悪くなる。
四八主なる神は言われる、わたしは生きている。あなたの妹ソドムとそ
の娘たちは、あなたとあなたの娘たちがしたほどのことはしなかった。

四九見よ、あなたの妹ソドムの罪はこれである。すなわち彼女と、その
娘たちは高ぶり、食物に飽き、安泰に暮していたが、彼らは、乏しい
者と貧しい者を助けなかった。五〇彼らは高ぶり、わたしの前に憎むべき
事をおこなったので、わたしはそれを見た時、彼らを除いた。五一サマリ
ヤはあなたの半分も罪を犯さなかった。あなたは彼らよりも多く憎むべき
事をおこない、あなたのおこなったもろもろの憎むべき事によって、あな
たの姉妹を義と見せかけた。五二あなたはその姉妹を有利にさばいたことに
よって、あなたもまた自分のはずかしめを負わなければならない。それは
あなたが彼らよりも、さらに憎むべきことをした罪によって、彼らはあな
たよりも義とされるからである。それであなたも恥を受け、はずかしめを
負わなければならない。それはあなたがその姉妹を義と見せかけたからで
ある。

五三わたしは彼らの幸福をもとに返す。すなわちソドムとその娘たちの
幸福、サマリヤとその娘たちの幸福、また彼らの中にいるあなたの幸福
をもとに返す。五四これはあなたに自分のはずかしめを負わせるため、また
すべてあなたのなした事を恥じさせるためである。こうしてあなたは彼ら
の慰めとなる。五五あなたの姉妹ソドムと、その娘たちとは、そのもとの
所に帰り、サマリヤと、その娘たちとは、そのもとの所に帰り、あな
たと、あなたの娘たちとは、そのもとの所に帰る。五六あなたの高ぶり
の日に、あなたの姉妹ソドムは、あなたの口に、ことわざとなったではな
かったか。五七すなわちあなたの悪があらわされた時まで、そうではなかっ
たか。しかし今はあなたも彼女と同様に、エドムの娘たちと、すべてそ
の周囲の者、および四方からあなたをあざけるペリシテの娘たちのそし
りとなった。五八あなたはあなたのみだらな行為と、あなたの憎むべき事の

とがとを、身に負っていると主は言われる。
五九主なる神はこう言われる、誓いを軽んじ、契約を破ったあなたには、
あなたがしたように、わたしもあなたにする。六〇しかしわたしはあなたの
若き日に、あなたと結んだ契約を覚え、永遠の契約をあなたと立てる。六
一わたしがあなたの姉および妹を受け、またあなたとの契約によらずに、
娘として彼らをあなたに与える時、あなたは自分のおこないを思い出し
て恥じる。六二わたしはあなたと契約を立て、あなたはわたしが主である
ことを知るようになる。六三こうしてすべてあなたの行ったことにつき、
わたしがあなたをゆるす時、あなたはそれを思い出して恥じ、その恥のゆ
えに重ねて口を開くことがないと、主なる神は言われる」。

第一七章一時に主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、イスラエルの
家になぞをかけ、たとえを語って、三言え。主なる神がこう言われる、さま

ざまの色の羽毛を多く持ち、大きな翼と、長い羽根とを持つ大わしがレ
バノンに来て、香柏のこずえにとまり、四その若枝の頂を摘み切り、こ
れを商業の地に運び、商人の町に置いた。五またその地の種をとって、
これを肥えた土に植えた。すなわち水の多い所にもって行って、柳を植
えるようにこれを植えた。六これが成長して、たけ低く、はびこるぶどう
の木となり、枝はわしに向かい、根はわしの下にあり、こうしてついにぶ
どうの木となり、枝を伸ばし、葉を出した。
七ここにまた大きな翼と、羽毛の多いほかの一羽の大わしがあった。見
よ、このぶどうの木は、潤いを得るために、その根をわしに向かってまげ、
その枝をわしに向かって伸ばした。八これが枝を出し、実を結び、みごとな
ぶどうの木となるために、わしはこれを植えた苗床から水の多い良い地に
移し植えた。九あなたは、主なる神がこう言われると言え、これは栄えるで

あろうか。わしはその根を抜き、その枝を切り、その若葉を皆枯らさない
であろうか。これをその根からあげるには、強い腕や多くの民を必要とし
ない。一〇見よ、それが移し植えられたら、また栄えるであろうか。東風
がこれを打つ時、それは枯れてしまわないであろうか。その育った苗床で
枯れないであろうか」。

一一主の言葉がまたわたしに臨んだ、一二「反逆の家に言え。これらが
なんであるかをあなたがたは知らないのか。彼らに言え、見よ、バビロン
の王がエルサレムにきて、その王とつかさとを捕え、これをバビロンに引
いて行った。一三また王の子孫のひとりを捕えて、これと契約を結び、誓
いを立てさせ、また国のおもだった人々を捕えて行った。一四これはこの
国を卑しくして、みずから立つことができないようにし、その契約を守る
ことによって立たせるためである。一五しかし彼はバビロンの王にそむき、

使者をエジプトに送って、馬と多くの兵とをそこから獲ようとした。彼は
成功するだろうか。このようなことをなす者は、のがれることができよう
か。一六契約を破ってなおのがれることができようか。主なる神は言われ
る、わたしは生きている、必ず彼は自分を王となした王の住む所、彼が
立てた誓いを軽んじ、その契約を破った相手の王のいるバビロンで彼は死
ぬ。一七多くの命を断つために塁を築き、雲梯を建てるとき、パロは決し
て大いなる軍勢と、多くの人とをもって、彼を助けて戦いをしない。一
八彼は誓いを軽んじ、契約を破り、その手を与えて誓いながら、なおこれ
らの事をしたゆえ、のがれることはできない。一九それゆえ、主なる神は
こう言われる、わたしは生きている、彼がわたしの誓いを軽んじ、わたし
の契約を破ったことを、必ず彼のこうべに報いる。二〇わたしはわが網を
彼の上に打ちかけ、彼をわがわなに捕えて、バビロンに引いて行き、彼が

わたしにむかって犯した反逆のために、その所で彼をさばく。二一彼の
すべての軍隊のえり抜きの兵士は皆つるぎに倒れ、生き残った者は八方に
散らされる。そしてあなたがたは主なるわたしが、これを語ったことを知
るようになる」。
二二主なる神はこう言われる、「わたしはまた香柏の高いこずえから小枝
をとって、これを植え、その若芽の頂から柔かい芽を摘みとり、これを
高いすぐれた山に植える。二三わたしはイスラエルの高い山にこれを植え
る。これは枝を出し、実を結び、みごとな香柏となり、その下にもろもろ
の種類の獣が住み、その枝の陰に各種の鳥が巣をつくる。二四そして野
のすべての木は、主なるわたしが高い木を低くし、低い木を高くし、緑
の木を枯らし、枯れ木を緑にすることを知るようになる。主であるわたし
はこれを語り、これをするのである」。

第一八章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「あなたがたがイスラエルの地
について、このことわざを用い、『父たちが、酢いぶどうを食べたので子供
たちの歯がうく』というのはどんなわけか。三主なる神は言われる、わた
しは生きている、あなたがたは再びイスラエルでこのことわざを用いるこ
とはない。四見よ、すべての魂はわたしのものである。父の魂も子の
魂もわたしのものである。罪を犯した魂は必ず死ぬ。
五人がもし正しくあって、公道と正義とを行い、六山の上で食事をせ
ず、またイスラエルの家の偶像を仰がず、隣り人の妻を犯さず、
汚れの時にある女に近づかず、七だれをもしえたげず、質物を返し、決し
て奪わず、食物を飢えた者に与え、裸の者に衣服を着せ、八利息や高利
をとって貸さず、手をひいて悪を行わず、人と人との間に真実のさばき
を行い、九わたしの定めに歩み、わたしのおきてを忠実に守るならば、

彼は正しい人である。彼は必ず生きることができると、主なる神は言わ
れる。
一〇しかし彼が子を生み、その子が荒い者で、人の血を流し、これらの
義務の一つをも行わず、一一かえって山の上で食事をし、隣り人の妻を
犯し、一二乏しい者や貧しい者をしえたげ、物を奪い、質物を返さず、目
をあげて偶像を仰ぎ、憎むべき事をおこない、一三利息や高利をとって貸
すならば、その子は生きるであろうか。彼は生きることはできない。彼は
これらの憎むべき事をしたので、必ず死に、その血は彼自身に帰する。
一四しかし彼が子を生み、その子が父の行ったすべての罪を見て、恐れ、
そのようなことを行わず、一五山の上で食事せず、目をあげてイスラエル
の家の偶像を仰がず、隣り人の妻を犯さず、一六だれをもしえたげず、質物
をひき留めず、物を奪わず、かえって自分の食物を飢えた者に与え、裸

の者に衣服を着せ、一七その手をひいて悪を行わず、利息や高利をとらず、
わたしのおきてを行い、わたしの定めに歩むならば、彼はその父の悪の
ために死なず、必ず生きる。一八しかしその父は人をかすめ、その兄弟
の物を奪い、その民の中で良くない事を行ったゆえ、見よ、彼はその悪
のために死ぬ。

一九しかしあなたがたは、『なぜ、子は父の悪を負わないのか』と言う。子
は公道と正義とを行い、わたしのすべての定めを守っておこなったので、
必ず生きるのである。二〇罪を犯す魂は死ぬ。子は父の悪を負わない。
父は子の悪を負わない。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰
する。

二一しかし、悪人がもしその行ったもろもろの罪を離れ、わたしのすべ
ての定めを守り、公道と正義とを行うならば、彼は必ず生きる。死ぬこ

とはない。二二その犯したもろもろのとがは、彼に対して覚えられない。彼
はそのなした正しい事のために生きる。二三主なる神は言われる、わたし
は悪人の死を好むであろうか。むしろ彼がそのおこないを離れて生きるこ
とを好んでいるではないか。二四しかし義人がもしその義を離れて悪を行
い、悪人のなすもろもろの憎むべき事を行うならば、生きるであろうか。
彼が行ったもろもろの正しい事は覚えられない。彼はその犯したとがと、
その犯した罪とのために死ぬ。
二五しかしあなたがたは、『主のおこないは正しくない』と言う。イスラ
エルの家よ、聞け。わたしのおこないは正しくないのか。正しくないのは、
あなたがたのおこないではないか。二六義人がその義を離れて悪を行い、
そのために死ぬならば、彼は自分の行った悪のために死ぬのである。二七
しかし悪人がその行った悪を離れて、公道と正義とを行うならば、彼は

自分の命を救うことができる。二八彼は省みて、その犯したすべてのと
がを離れたのだから必ず生きる。死ぬことはない。二九しかしイスラエル
の家は『主のおこないは正しくない』と言う。イスラエルの家よ、わたし
のおこないは、はたして正しくないのか。正しくないのは、あなたがたの
おこないではないか。

三〇それゆえ、イスラエルの家よ、わたしはあなたがたを、おのおのその
おこないに従ってさばくと、主なる神は言われる。悔い改めて、あなた
がたのすべてのとがを離れよ。さもないと悪はあなたがたを滅ぼす。三一
あなたがたがわたしに対しておこなったすべてのとがを捨て去り、新しい
心と、新しい霊とを得よ。イスラエルの家よ、あなたがたはどうして死
んでよかろうか。三二わたしは何人との死をも喜ばないのであると、主な
る神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」。

第一九章

一あなたはイスラエルの君たちのために悲しみの歌をのべて
二言え、
あなたの母はししのうちにあって、
どんな雌じしであったろう。
彼女は若いししのうちに伏して子じしを養った。
三彼女は子じしの一つを育てたが、
それは若いししとなって、
獲物をとることを学び、人を食べた。
四国々の人は彼に対して叫び声をあげ、
落し穴でこれを捕え、
かぎでこれをエジプトの地に引いて行った。
五雌じしは自分の思いが破れ、

その望(のぞ)みを 失(うしな)ったのを見(み)たので、
ほかの子(こ)じしをとって、これを若(わか)い子(こ)じしとした。
六彼(かれ)はししのうちに行(ゆ)き来(き)し、若(わか)いししとなって、
獲物(えもの)をとることを学(まな)び、人(ひと)を食(た)べた。
七彼(かれ)はその要害(ようがい)を荒(あら)し、その町々(まちまち)を滅(ほろ)ぼした。
そのほえる声(こえ)によって、
その地(ち)とその中(なか)に満(み)ちるものとは皆恐(みなおそ)れた。
八そこで国々(くにぐに)の人(ひと)は彼(かれ)に対(たい)して四方(しほう)にわなを設(もう)け、
彼(かれ)に網(あみ)を打(う)ちかけ、落(おと)し穴(あな)で彼(かれ)を捕(とら)えた。
九彼(かれ)らはかぎをもって、これをかごに入(い)れ、
これをバビロンの王(おう)のもとに連(つ)れて行(い)き、
これをおりの中(なか)に入(い)れて、

再(ふたた)びその声(こえ)をイスラエルの山々(やまやま)に
聞(きこ)えさせないようにした。
一〇あなたの母(はは)は水(みず)のほとりに移(うつ)し植(う)えられた
ぶどう畑(はたけ)のぶどうの木(き)のようで、
水(みず)が多(おお)いために実(みの)りがよく、枝(えだ)がはびこった。
一一その強(つよ)い幹(みき)は君(きみ)たる者(もの)のつえとなった。
それは茂(しげ)みの中(なか)に高(たか)くそびえ、
多(おお)くの枝(えだ)をつけて高(たか)く見(み)えた。
一二しかしこのぶどうの木(き)は憤(いきどお)りによって抜(ぬ)かれ、
地(ち)に投(な)げうたれ、東風(ひがしかぜ)がそれを枯(か)らし、
その実(み)はもぎ取(と)られ、その強(つよ)い幹(みき)は枯(か)れて、
火(ひ)に焼(や)き滅(ほろ)ぼされた。

一三今これは荒野に、
かわいた、水のない地に移し植えられ、
一四火がその幹から出て、その枝と実とを滅ぼしたので、
強い幹で、君たる者のつえと
なるべきものはそこにない。
これが悲しみの言葉、また悲しみの歌となった。

第二〇章
一第七年の五月十日に、イスラエルの長老たちのある人々が、
主に尋ねるためにきて、わたしの前に座した。二時に主の言葉がわたしに
臨んだ、三「人の子よ、イスラエルの長老たちに告げて言え。主なる神
はこう言われる、あなたがたがわたしのもとに来たのは、わたしに何か尋
ねるためであるか。主なる神は言われる、わたしは生きている、わたしは
あなたがたの尋ねに答えない。四あなたは彼らをさばこうとするのか。人

の子よ、あなたは彼らをさばこうとするのか。それなら彼らの先祖たちの
した憎むべき事を彼らに知らせ、五かつ彼らに言え。主なる神はこう言わ
れる、わたしがイスラエルを選び、ヤコブの家の子孫に誓い、エジプトの
地でわたし自身を彼らに知らせ彼らに誓って、わたしはあなたがたの神、
主であると言った日、六その日にわたしは彼らに誓って、エジプトの地か
ら彼らを導き出し、わたしが彼らのために探り求めた乳と蜜との流れる
地、全地の中で最もすばらしい所へ行かせると言った。七わたしは彼ら
に言った、あなたがたは、おのおのその目を楽しませる憎むべきものを捨
てよ。エジプトの偶像をもって、その身を汚すな。わたしはあなたがたの
神、主であると。八ところが彼らはわたしにそむき、わたしの言うことを
聞こうともしなかった。彼らは、おのおのその目を楽しませた憎むべきも
のを捨てず、またエジプトの偶像を捨てなかった。

それで、わたしはエジプトの地のうちで、わたしの憤りを彼らに注ぎ、
わたしの怒りを彼らに漏らそうと思った。九しかしわたしはわたしの名の
ために行動した。それはエジプトの地から彼らを導き出して、周囲に住
んでいた異邦人たちに、わたしのことを知らせ、わたしの名が彼らの目の前
に、はずかしめられないためである。一〇すなわち、わたしはエジプトの地
から彼らを導き出して、荒野に連れて行き、一一わたしの定めを彼らに授
け、わたしのおきてを彼らに示した。これは人がこれを行うことによっ
て生きるものである。一二わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと
彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したこと
を、彼らに知らせるためである。一三しかしイスラエルの家は荒野でわたし
にそむき、わたしの定めに歩まず、人がそれを行うことによって、生きる
ことのできるわたしのおきてを捨て、大いにわたしの安息日を汚した。

そこでわたしは荒野で、わたしの憤りを彼らの上に注ぎ、これを滅ぼ
そうと思ったが、一四わたしはわたしの名のために行動した。それはわた
しが彼らを導き出して見せた異邦人の前に、わたしの名が汚されないた
めである。一五ただし、わたしは荒野で彼らに誓い、わたしが彼らに与え
た乳と蜜との流れる地、全地の最もすばらしい地に、彼らを導かないと
言った。一六これは彼らがその心に偶像を慕って、わがおきてを捨て、わ
が定めに歩まず、わが安息日を汚したからである。一七けれどもわたしは
彼らを惜しみ見て、彼らを滅ぼさず、荒野で彼らを絶やさなかった。
一八わたしはまた荒野で彼らの子どもたちに言った、あなたがたの先祖
の定めに歩んではならない。そのおきてを守ってはならない。その偶像を
もって、あなたがたの身を汚してはならない。一九主なるわたしはあなたが
たの神である。わが定めに歩み、わがおきてを守ってこれを行い、二〇わ

が安息日を聖別せよ。これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなっ
て、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせる
ためである。二一しかしその子どもたちはわたしにそむき、わが定めに歩ま
ず、人がこれを行うことによって、生きることのできるわたしのおきてを
守り行わず、わが安息日を汚した。

そこでわたしはわが憤りを彼らの上に注ぎ、荒野で彼らに対し、わが
怒りを漏らそうと思った。二二しかしわたしはわが手を翻して、わが名
のために行動した。それはわたしが彼らを導き出して見せた異邦人の前
に、わたしの名が汚されないためである。二三ただしわたしは荒野で彼らに
誓い、わたしは異邦人の間に彼らを散らし、国々の中に彼らをふりまく
と言った。二四これは彼らがわがおきてを行わず、わが定めを捨て、わが
安息日を汚し、彼らの目にその先祖の偶像を慕ったからである。二五また

わたしは彼らに良くない定めと、それによって生きることのできないおき
てとを与え、二六そして、彼らのういごに火の中を通らせるその供え物に
よって、彼らを汚し、彼らを恐れさせた。わたしがこれを行ったのは、わ
たしが主であることを、彼らに知らせるためである。
二七それゆえ人の子よ、イスラエルの家に告げて言え。主なる神はこう
言われる、あなたがたの先祖はまた、不信の罪を犯してわたしを汚した。二
八わたしが彼らに与えようと誓った地に、彼らを導き入れた時、彼らは
すべての高い丘と、すべての茂った木とを見て、その所で犠牲をささげ、
忌むべき供え物をささげ、またこうばしいかおりをその所に上らせ、そ
の所に灌祭を注いだ。二九（わたしは彼らに言った、あなたがたが通うそ
の高き所はなんであるか。それでその名は今日までバマととなえられて
いる。）三〇それゆえ、イスラエルの家に言え。主なる神はこう言われる、

あなたがたは、その先祖のおこないに従って、その身を汚し、その憎むべ
きものを慕うのか。三一あなたがたは、その供え物をささげ、その子供に
火の中を通らせて、今日まですべての偶像をもって、その身を汚すのであ
る。イスラエルの家よ、わたしは、なおあなたがたに尋ねられるべきであ
ろうか。わたしは生きている。わたしは決してあなたがたに尋ねられるは
ずはないと、主なる神は言われる。
三二あなたがたの心にあること、すなわち『われわれは異邦人のように
なり、国々のもろもろのやからのようになって、木や石を拝もう』との考
えは決して成就しない。
三三主なる神は言われる、わたしは生きている、わたしは必ず強い手と
伸べた腕と注がれた憤りとをもって、あなたがたを治める。三四わたし
はわが強い手と伸べた腕と注がれた憤りとをもって、あなたがたをもろ

もろの民の中から導き出し、その散らされた国々から集め、三五もろもろ
の民の荒野に導き入れ、その所で顔と顔とを合わせて、あなたがたをさ
ばく。三六すなわち、エジプトの地の荒野で、あなたがたの先祖をさばいた
ように、わたしはあなたがたをさばくと、主なる神は言われる。三七わたし
はあなたがたに、むちの下を通らせ、数えてはいらせ、三八あなたがたのう
ちから、従わぬ者と、わたしにそむいた者とを分かち、その寄留した地
から、彼らを導き出す。しかし彼らはイスラエルの地に入ることはできな
い。こうしてあなたがたはわたしが主であることを知るようになる。
三九それで、イスラエルの家よ、主なる神はこう言われる、あなたがたは
わたしに聞かないなら、今も後も、おのおのその偶像に行って仕えるがよ
い。しかし再び供え物と偶像とをもって、わたしの聖なる名を汚しては
ならない。

四〇主なる神は言われる、わたしの聖なる山、イスラエルの高い山の上
で、イスラエルの全家はその地で、ことごとくわたしに仕える。その所で
わたしは喜んで彼らを受けいれ、あなたがたのささげ物と最上の供え物
とを、その聖なるささげ物と共に求める。四一わたしがあなたがたをもろ
もろの民の中から導き出し、かつてあなたがたを散らした国々から集め
る時、こうばしいかおりとして、あなたがたを喜んで受けいれる。そして
わたしは異邦人の前で、あなたがたの中に、わたしの聖なることをあらわ
す。四二こうしてわたしがあなたがたを、イスラエルの地、すなわちあなた
がたの先祖たちに与えると誓った地に、はいらせる時、あなたがたはわた
しが主であることを知るようになる。四三またその所であなたがたは、そ
の身を汚したあなたがたのおこないと、すべてのわざとを思い出し、みず
から行ったすべての悪事のために、自分を忌みきらうようになる。四四イ

スラエルの家よ、わたしがあなたがたの悪しきおこないによらず、またそ
の腐れたわざによらず、わたしの名のために、あなたがたを扱う時、あな
たがたはわたしが主であることを知るのであると、主なる神は言われる」。
四五主の言葉がまたわたしに臨んだ、四六「人の子よ、顔を南に向け、南
に向かって語り、ネゲブの森の地に対して預言せよ。四七すなわちネゲブ
の森に言え、主の言葉を聞け、主なる神はこう言われる、見よ、わたしは
あなたのうちに火を燃やす。その火はあなたのうちのすべての青木と、す
べての枯れ木を焼き滅ぼし、その燃える炎は消されることがなく、南か
ら北まで、すべての地のおもては、これがために焼ける。四八すべて肉な
る者は、主なるわたしがこれを焼いたことを見る。その火は消されない」。
四九そこでわたしは言った、「ああ主なる神よ、彼らはわたしについてこう
語っています、『彼はたとえをもって語る者ではないか』と」。

第二一章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたの顔をエ
ルサレムに向け、あなたの言葉を聖所に向けてのべ、イスラエルの地に向
かって預言し、三イスラエルの地に言え。主はこう言われる、見よ、わたし
はあなたを攻め、わたしのつるぎをさやから抜き、あなたのうちから、正し
い者も悪しき者をも断ってしまう。四わたしがあなたのうちから、正しい
者も悪しき者をも断つゆえに、わたしのつるぎはさやから抜け出て、南か
ら北までのすべての肉なる者を攻める。五すべて肉なる者は、主なるわた
しが、そのつるぎをさやから抜き放ったことを知る。このつるぎは再びさ
やに納められない。六それゆえ、人の子よ、嘆け、心砕けるまでに嘆き、
彼らの目の前でいたく嘆け。七人があなたに向かって、『なぜ嘆くのか』と
言うなら、『この知らせのためである。それが来れば人の心はみな溶け、手
はみななえ、霊はみな弱り、ひざはみな水のようになる。見よ、それは来

る、必ず成就する』と言え」と主なる神は言われる。
八主の言葉がわたしに臨んだ、九「人の子よ、預言して言え、主はこう言
われる、
　つるぎがある、
　とぎ、かつ、みがいたつるぎがある。
一〇殺すためにといであり、
　いなずまのようにきらめくためにみがいてある。
わたしたちは喜ぶことができるか。わが子よ、あなたはつえと、すべて木
で作ったものとを軽んじた。一一このつるぎは手にとるために、とがれ、殺
す者の手に渡すために、とがれみがかれるのである。一二人の子よ、叫び
嘆け、このことはわが民に臨み、イスラエルのすべての君たちに臨むから
である。彼らはわが民と共につるぎにわたされる。それゆえ、あなたのも
もを打て。一三これはためしにすることではない。もしあなたが、つえをあ

ざけったら、どういうことになろうか」と主なる神は言われる。
一四「それゆえ、人の子よ、あなたは預言し、手を打ちならせ。つるぎを
二度も三度も臨ませよ。これは人を殺すつるぎ、大いに殺すつるぎであっ
て、彼らを囲むものである。一五これがために彼らの心は溶け、多くの者
がすべての門に倒れる。わたしはひらめくつるぎを彼らに送る。ああ、こ
れはいなずまのようになり、人を殺すためにみがかれている。一六あなたの
刃の向かうところで、右に左になぎ倒せ。一七わたしもまた、わたしの手
を打ちならし、わたしの怒りをしずめると、主なるわたしは言った」。
一八主の言葉がまたわたしに臨んだ、一九「人の子よ、バビロンの王のつ
るぎが来るために、二つの道を備えよ。この二つの道は一つの国から出て
いる。あなたは道しるべを作り、これを町に向かう道のはじめに置け。二
〇あなたはまたアンモンの人々のラバと、ユダと、堅固な城の町エルサレム

とにつるぎの来る道を設けよ。二一バビロンの王は道の分れ目、二つの道
のはじめに立って占いをし、矢をふり、テラピムに問い、肝を見る。二二
彼の右にエルサレムのために占いが出る。すなわち口を開いて叫び、声
をあげ、ときを作り、門に向かって城くずしを設け、塁を築き、雲梯を建
てよと言う。二三しかしこれは彼らの目には偽りの占いと思われ、彼ら
は堅き誓いをなした。しかし彼は、彼らを捕えることによって、罪を思い
出させる。

二四それゆえ、主なる神はこう言われる、あなたがたの罪は覚えられ、そ
の反逆は現れ、その罪はすべてのわざに現れる。このようにあなたが
たは、すでに覚えられているから、彼らの手に捕えられる。二五汚れた悪人
であるイスラエルの君よ、あなたの終りの刑罰の時であるその日が来る。
二六主なる神はこう言われる、かぶり物を脱ぎ、冠を取り離せ。すべて

のものは、そのままには残らない。卑しい者は高くされ、高い者は卑しく
される。二七ああ破滅、破滅、破滅、わたしはこれをこさせる。わたしが与
える権威をもつ者が来る時まで、その跡形さえも残らない。
二八人の子よ、預言して言え。主なる神はアンモンの人々と、そのあざ
けりについて、こう言われる、つるぎがある。このつるぎは殺すために抜か
れ、いなずまのようにひかりきらめくようにとがれている。二九彼らがあな
たに偽りの幻を示し、偽りを占ったゆえ、これは殺さるべき悪しき
者の首の上に置かれる。彼らの終りの刑罰の時であるその日がきている。
三〇これをさやに納めよ、わたしはあなたの造られた所、あなたの生れた
地であなたをさばく。三一わたしの怒りをあなたに注ぎ、わたしの憤り
の火をあなたに向けて燃やし、滅ぼすことに巧みな残忍な人の手にあなた
を渡す。三二あなたは火のための、たきぎとなり、あなたの血は国の中に

流され、覚えられることはない、主なるわたしが言う」。
第二二章一また主の言葉がわたしに臨んで言った、二「人の子よ、あな
たはさばくのか。血を流すこの町をさばくのか。それならこの町にそのも
ろもろの憎むべき事を示して、三言え。主なる神はこう言われる、自分の
うちに血を流して、その刑罰の時をまねき、偶像を造ってその身を汚す町
よ、四あなたはその流した血によって罪を得、その造った偶像によって汚
れ、あなたの日を近づかせ、あなたの年の定めの時はきた。それゆえわたし
はあなたをもろもろの国民のあざけりとなし、万国の物笑いとする。五あ
なたに近い者も、遠い者も、汚れと、混乱に満ちているあなたをあざける。
六見よ、あなたのうちのイスラエルの君たちは、おのおのその力にし
たがって、血を流そうとしている。七父母はあなたのうちで卑しめられ、
寄留者はあなたのうちで虐待をうけ、みなしごと、やもめとはあなたの

うちで悩まされている。八あなたはわたしの聖なるものを卑しめ、わたし
の安息日を汚した。九人をののしって血を流そうとする者は、あなたのう
ちにおり、人々はあなたのうちで、山の上で食事をし、あなたのうちで、
みだらなおこないをし、一〇あなたのうちで、父の裸を現し、あなたの
うちで、汚れのうちにある女を犯す。一一またあなたのうちに、その隣
の妻と憎むべき事を行う者があり、淫行をもって、その嫁を汚す者があ
り、自分の父の娘である自分の姉妹を犯す者があり、一二また血を流そう
として、あなたのうちで、まいないを取る者がある。あなたは利息と高利
とを取り、しえたげによって、あなたの隣り人のものをかすめ、そしてわ
たしを忘れてしまったと、主なる神は言われる。
一三それゆえ見よ、あなたが得た不正の利の事、およびあなたのうちにあ
る流血の事に対して、わたしは手を打ちならす。一四わたしがあなたを攻

める日には、あなたの勇気は、これに耐え得ようか。またあなたの手は強
くあり得ようか。主なるわたしはこれを宣言し、これをなす。一五わたし
はあなたを、もろもろの国民のうちに散らし、国々の間にまき、そして
あなたから汚れを除く。一六わたしはあなたによって、もろもろの国民の
前に汚される。そしてあなたはわたしが主であることを知る」。
一七主の言葉がまたわたしに臨んだ、一八「人の子よ、イスラエルの家は
わたしに対して、かなかすとなった。彼らはすべて炉の中の銀、青銅、す
ず、鉄、鉛のかなかすとなった。一九それゆえ、主なる神はこう言われる、
あなたがたは皆かなかすとなったゆえ、見よ、わたしはあなたがたをエル
サレムの中に集める。二〇人が銀、青銅、鉄、鉛、すずなどを炉の中に集
め、これに火を吹きかけて溶かすように、わたしは怒りと憤りとをもっ
て、あなたがたを集め入れて溶かす。二一すなわち、わたしはあなたがたを

集め、わたしの怒りの火を、あなたがたに吹きかける。あなたがたはその
中で溶ける。二二銀が炉の中で溶けるように、あなたがたもその中で溶け
る。そしてあなたがたは主なるわたしが、あなたがたの上に、わたしの怒
りを注いだことを知るようになる」。
二三主の言葉がまたわたしに臨んだ、二四「人の子よ、これに言え、あな
たは怒りの日に清められず、また雨の降らない地である。二五その中の君
たちは、獲物を裂くほえるししのような者で、彼らは人々を滅ぼし、宝
と尊い物とを取り、そのうちに、やもめの数をふやす。二六その祭司たち
はわが律法を犯し、聖なる物を汚した。彼らは聖なる物と汚れた物とを
区別せず、清くない物と清い物との違いを教えず、わが安息日を無視し、
こうしてわたしは彼らの間に汚されている。二七その中にいる君たちは、
獲物を裂くおおかみのようで、血を流し、不正の利を得るために人々を滅

ぼす。二八その預言者たちは、水しっくいでこれを塗り、偽りの幻を見、
彼らに偽りを占い、主が語らないのに『主なる神はこう言われる』と言
う。二九国の民はしえたげを行い、奪うことをなし、乏しい者と貧しい者
とをかすめ、不法に他国人をしえたぐ。三〇わたしは、国のために石がき
を築き、わたしの前にあって、破れ口に立ち、わたしにこれを滅ぼさせな
いようにする者を、彼らのうちに尋ねたが得られなかった。三一それゆえ、
わたしはわが怒りを彼らの上に注ぎ、わが憤りの火をもって彼らを滅ぼ
し、彼らのおこないを、そのこうべに報いたと、主なる神は言われる」。
第二三章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ここにふたりの
女があった。ひとりの母の娘である。三彼らはエジプトで淫行をした。
彼らは若い時に淫行をした。すなわちその所で彼らの胸は押され、その
処女の乳ぶさはいじられた。四彼らの名は姉はアホラ、妹はアホリバで

ある。彼らはわたしのものとなって、むすこ娘たちを産んだ。その本名
はアホラはサマリヤ、アホリバはエルサレムである。
五アホラはわたしのものである間に淫行をなし、その恋人なるアッスリ
ヤびとにこがれた。六すなわち紫の衣をきた軍人、長官、司令官、すべ
て好ましい若者、馬に乗る者たちである。七彼女は彼らに淫行を供えた。
彼らはすべてアッスリヤのえり抜きの人々である。彼女はまた、そのこが
れたすべての者のもろもろの偶像をもって、おのれを汚した。八彼女はエ
ジプトの日からおこなっていた、その淫行を捨てなかった。それは彼女の
若い時に、彼らが彼女と寝、その処女の乳ぶさをいじり、その情欲を彼女
の上に注いだからである。九それゆえ、わたしは彼女をその恋人の手に渡
し、そのこがれたアッスリヤの人々の手に渡した。一〇彼らは彼女の裸を
現し、そのむすこ娘たちを奪い、つるぎをもって彼女を殺した。こうし

て彼女に対するさばきが行われたとき、彼女は女たちの間の語り草と
なった。
一一その妹アホリバはこれを見て、姉よりも情欲をほしいままにし、姉
の淫行よりも多く淫行をなし、一二アッスリヤの人々に恋こがれた。長官、
司令官、盛装した軍人、馬に乗る者たちで、すべて好ましい若者たちで
ある。一三わたしは彼女が身を汚したのを見た。彼らは共に一つの道をた
どったが、一四彼女はさらにその淫行を続け、壁に描いた人々を見た。す
なわち朱で描いたカルデヤびとの像で、一五腰には帯を結び、頭にはたれ
さがったずきんをいただいていた。これらはみな官吏のような姿で、その
生れた国カルデヤのバビロン人に似ていた。一六彼女はこれらを見て、こ
れに恋こがれ、使者をカルデヤの彼らのもとに送った。一七そこでバビロ
ンの人々は彼女のもとに来て、恋の床につき、情欲をもって彼女を汚し

たが、彼女は彼らに汚されるにおよんで、その心は彼らから離れた。一
八彼女がその淫行を公然と続け、その裸をさらしたので、わたしの心は
彼女から離れた。これはあたかもわたしの心が、彼女の姉から離れたと
同様である。一九しかし彼女はなおエジプトの地で姦淫をしたその若き日
を覚えて、その淫行を続け、二〇その情夫たちに恋こがれた。その人の肉
は、ろばの肉のごとく、その精は馬の精のようであった。二一このように
あなたは、かのエジプトびとが、あなたの胸に手をつけ、あなたの若い乳
ぶさをおさえた時の、若い時の淫行を慕っている」。
二二それゆえ、アホリバよ、主なる神はこう言われる、「見よ、わたしは、
あなたの心がすでに離れたあなたの恋人らを起して、あなたを攻めさせ、
彼らに四方から来てあなたを攻めさせる。二三すなわちバビロンの人々お
よびカルデヤのすべての人々、ペコデ、ショア、コア、アッスリヤのすべて

の人々、好ましい若者、長官、司令官、官吏、軍人など、すべて馬に乗
る者たちである。二四彼らは戦車、貨車、および多くの民を率いて、北か
らあなたに攻めて来る。大盾、小盾、かぶとを備えて、四方からあなたに
攻めかかる。わたしが彼らにさばきをゆだねるゆえ、彼らは、そのおきて
に従って、あなたをさばく。二五わたしはあなたに向かってわたしの憤
りを起すゆえ、彼らは怒りをもってあなたを扱い、あなたの鼻と耳とを
切り落し、そして残りの者はつるぎに倒れる。彼らはあなたのむすこ娘
たちを奪い、生き残った者を火で焼く。二六彼らはまたあなたの衣服をは
ぎ取り、あなたの美しい飾りを取り去る。二七こうしてわたしはあなたの
淫乱と、エジプトの地から持って来た淫行とを取り除き、重ねてあなたの
目を、エジプトびとに向けて上げさせず、彼らの事を思わないようにする。
二八主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたの憎む者の手、あなた

の心の離れた者の手にあなたを渡す。二九彼らは憎しみをもってあなたを
扱い、あなたの所得をことごとく取り去り、あなたを赤はだかにし、あな
たの淫行の裸を現す。あなたの淫乱と淫行とのゆえに、三〇すなわち、
あなたが異邦人を慕って姦淫を行い、彼らの偶像をもって身を汚したゆ
えに、これらのことがあなたに臨むのだ。三一あなたはその姉の道を歩ん
だので、わたしも彼女の杯をあなたにわたす。三二主なる神はこう言わ
れる、

あなたは姉の深い、大きな杯を飲み、
笑い物となり、あざけりとなる、
この杯にはそれらが多くこもっている。
三三あなたは酔いと憂いとに満たされる。
驚きと滅びの杯、

これがあなたの姉サマリヤの杯である。
三四あなたはこれを飲みこれをかたむけ、
あなたの髪の毛をひきむしり、
あなたの乳ぶさをかきさく。
わたしがこれを言うと、主なる神は言われる。三五それゆえ、主なる神はこ
う言われる、あなたはわたしを忘れ、わたしをあなたのうしろに捨て去っ
たゆえ、あなたは自分の淫乱と淫行との罪を負わねばならぬ」。
三六主はわたしに言われた、「人の子よ、あなたはアホラとアホリバをさ
ばくのか。それならば彼らにその憎むべき事を告げよ。三七彼らは姦淫を
行い、血が彼らの手の上にある。彼らはその偶像と姦淫を行い、またわ
たしに産んだ子らを、食物のために彼らにささげた。三八さらに彼らは、
わたしに対してこのようにした。すなわち、彼らは同じ日にわたしの聖所

を汚し、わたしの安息日を犯した。三九彼らはその子らを、偶像にささげ
るためにほふった同じ日に、わたしの聖所にきて、これを汚した。見よ、
彼らがわたしの家の中でしたことはこれである。四〇さらに彼らは使者を
やって、遠くから来るように人々を招いた。見よ、彼らはきた。あなたは、
この人々のために身を洗い、目を描き、飾り物を身につけ、四一尊い床に
座し、食卓をその前に設け、わたしの香と、わたしの油とを、その上に
供えた。四二こうして、のんきな群衆の声は彼女と共にあり、また、荒野
から連れて来た通りがかりの酔いどれも、彼らと共にいた。彼らは女た
ちの手に腕輪をはめさせ、頭に美しい冠をいただかせた。
四三そこでわたしは言った、彼女と姦淫を行う時、人々は姦淫を犯さ
ないであろうか。四四人が遊女の所にはいるように、彼らは彼女の所に
はいった。こうして彼らは姦淫を行うために、アホラおよびアホリバの

所にはいった。四五しかし正しい人々は淫婦のさばきと、血を流した女
のさばきとをもって、彼らをさばく。それは彼らが淫婦であって、その手
に血があるからである」。
四六主なる神はこう言われる、「わたしは軍隊を彼らに向かって攻め上ら
せ、彼らを恐れと略奪とに渡す。四七軍隊は彼らを石で打ち、つるぎで
切り、そのむすこ娘たちを殺し、火でその家を焼く。四八こうしてわたし
はこの地に淫乱を絶やす。すべての女はみずからいましめて、あなたがた
がしたような淫乱を行わない。四九あなたがたの淫乱の報いは、あなたが
たの上にくだり、あなたがたはその偶像礼拝の罪を負い、そしてわたしが
主なる神であることを知るようになる」。

第二四章一第九年の十月十日に、主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子
よ、あなたはこの日すなわち今日の名を書きしるせ。バビロンの王は、こ

の日エルサレムを包囲した。三あなたはこの反逆の家にたとえを語って言
え。主なる神はこう言われる、
かますをすえ、これをすえて、水をくみ入れよ。
四その中に肉の切れを入れよ、
すべて良い肉の切れ、
すなわち、ももと肩の肉をこれに入れよ。
良い骨をこれに満たせ。
五羊の最も良いものを取れ。
かまの下にまきを積み、
その肉を煮たぎらせ、またその中の骨を煮よ。
六それゆえ、主なる神はこう言われる、わざわいなるかな、流血の町、
さびているかま。そのさびはこれを離れない。肉をひとつびとつ無差別に

取り出せ。七その流した血はまだその中にある。彼女はこれを裸岩の上
に流し、土でこれをおおうために、地面には注がなかった。八これは、わ
たしの怒りをつのらせ、あだを返すために、その流した血がおおわれない
ように、裸岩の上に流したのである。九それゆえ、主なる神はこう言わ
れる、わざわいなるかな、流血の町。わたしもまた、まきをさらに積み重
ねる。一〇まきを積み重ね、火を燃やし、肉をよく煮て、煮つくし、骨を焼
け。一一そしてかまを熱くするため、それをからにして炭火の上に置き、そ
の銅を焼いて、汚れをその中に溶かし、そのさびを去れ。一二しかしわたし
のほねおりは、むだであった。その多くのさびは火によって消えない。一三
そのさびとは、あなたの不潔な淫行である。わたしはあなたを清めようと
したが、あなたはあなたの不潔から清められようとしないから、わたしの
怒りをあなたに漏らし尽すまでは、あなたは汚れから清まることはない。

一四主なるわたしはこれを言った。そしてこれは必ず成る。わたしはこれ
をなす。わたしはやめない、惜しまない、悔いない。あなたのおこないに
より、あなたのわざによって、あなたをさばくと、主なる神は言われる」。
一五また主の言葉がわたしに臨んだ、一六「人の子よ、見よ、わたしは、
にわかにあなたの目の喜ぶ者を取り去る。嘆いてはならない。泣いては
ならない。涙を流してはならない。一七声をたてずに嘆け。死人のために
嘆き悲しむな。ずきんをかぶり、足にくつをはけ。口をおおうな。嘆きの
パンを食べるな」。一八朝のうちに、わたしは人々に語ったが、夕べには、
わたしの妻は死んだ。翌朝わたしは命じられたようにした。
一九人々はわたしに言った、「あなたがするこの事は、われわれになんの
関係があるのか、それをわれわれに告げてはくれまいか」。二〇わたしは彼
らに言った、「主の言葉がわたしに臨んだ、二一『イスラエルの家に言え、主

なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたがたの力の誇、目の喜び、
心の望みであるわが聖所を汚す。あなたがたが残すむすこ娘たちは、つ
るぎに倒れる。
二二あなたがたもわたしがしたようにし、口をおおわず、嘆
きのパンを食べず、
二三頭にずきんをかぶり、足にくつをはき、嘆かず、
泣かず、その罪の中にやせ衰えて、互にうめくようになる。
二四このよ
うにエゼキエルはあなたがたのためにしるしとなる。彼がしたようにあな
たがたもせよ。この事が成る時、あなたがたはわたしが主なる神であるこ
とを知るようになる』。
二五人の子よ、わたしが、彼らのとりで、彼らの喜びと栄え、彼らの目
の喜びであり、その心の望みであるもの、また彼らのむすこ娘たちを
取り去る日、
二六その日に難をのがれて来る者が、あなたのもとにきて、あ
なたに事を告げる。
二七その日あなたは、そののがれてきた者に向かって口

を開き、語り、もはや沈黙しない。こうしてあなたは彼らのためにしるし
となり、彼らはわたしが主であることを知る」。

第二五章 一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたの顔をアン
モンの人々に向け、これに向かって預言し、三アンモンの人々に言え。主
なる神の言葉を聞け。主なる神はこう言われる、あなたはわが聖所の汚さ
れた時、またイスラエルの地の荒された時、またユダの家が捕え移された
時、ああ、それはよい気味であると言った。四それゆえ、わたしはあなた
を、東の人々に渡して彼らの所有とする。彼らはあなたのうちに陣営を
設け、あなたのうちに住居を造り、あなたのくだものを食べ、あなたの
乳を飲む。五わたしはラバを、らくだを飼う所とし、アンモンびとの町々
を、羊の伏す所とする。そしてあなたがたは、わたしが主であることを
知るようになる。六主なる神はこう言われる、あなたはイスラエルの地に

向かって手をうち、足を踏み、心に悪意を満たして喜んだ。七それゆえ、
見よ、わたしはわが手をあなたに向けて伸べ、あなたを、もろもろの国民
に渡して略奪にあわせ、あなたを、もろもろの民の中から断ち、諸国の
中から滅ぼし絶やす。そしてあなたは、わたしが主であることを知るよう
になる。
八主なる神はわたしにこう言われる、モアブは言った、見よ、ユダの家は、
他のすべての国民と同様であると。九それゆえ、わたしはモアブの境界
の町々、すなわち国の栄えであるベテエシモテ、バアルメオン、キリアタ
イムの横腹を開き、一〇これをアンモンの人々と共に、東方の人々に与え
て、その所有とし、モアブの人々をもろもろの国民の中に記憶させない。
一一わたしはモアブの上にさばきを行う。そのとき、彼らはわたしが主で
あることを知る。

一二主なる神はこう言われる、エドムは恨みをふくんでユダの家に敵対
し、これに恨みを返して、はなはだしく罪を犯した。一三それゆえ、主な
る神はこう言われる、わたしはエドムの上に手を伸べて、その中から人と
獣とを断ち、これを荒れ地とする。テマンからデダンまで人々はつるぎに
倒れる。一四わたしはわが民イスラエルの手をもって、エドムにわがあだを
報いる。彼らがわが怒り、わが憤りに従ってエドムに行う時、エドム
の人々は、わたしがあだを返すことを知るようになると、主なる神は言わ
れる。

一五主なる神はこう言われる、ペリシテびとは恨みをふくんで行動し、心
に悪意をもってあだを返し、深い敵意をもって、滅ぼすことをした。一六そ
れゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしは手をペリシテびとの上
に伸べ、ケレテびとを断ち、海べの残りの者を滅ぼす。一七わたしは怒り

に満ちた懲罰をもって、大いなる復讐を彼らになす。わたしが彼らにあ
だを返す時、彼らはわたしが主であることを知るようになる」。

第二六章

一第十一年の第一日に主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子
よ、ツロはエルサレムについて言った、『ああ、それはよい気味である。も
ろもろの民の門は破れて、わたしに開かれた。わたしは豊かになり、彼は
破れはてた』と。三それゆえ、主なる神はこう言われる、ツロよ、わたしは
あなたを攻め、海がその波を起すように、わたしは多くの国民を、あなた
に攻めこさせる。四彼らはツロの城壁をこわし、そのやぐらを倒す。わた
しはその土を払い去って、裸の岩にする。五ツロは海の中にあって、網
をはる場所になる。これはわたしが言ったのであると、主なる神は言われ
る。ツロは、もろもろの民にかすめられ、六その本土におる娘たちは、つ
るぎで殺される。そして彼らは、わたしが主であることを知るようになる。

七主なる神はこう言われる、見よ、わたしは王の王なるバビロンの王ネ
ブカデレザルに、馬、戦車、騎兵、および多くの軍勢をひきいて、北から
ツロに攻めこさせる。八彼は本土におるあなたの娘たちを、つるぎで殺
し、あなたに向かって雲梯を建て、塁を築き、盾を備え、九城くずしをあ
なたの城壁に向け、おのであなたのやぐらを打ち砕く。一〇その多くの馬
の土煙は、あなたをおおう。人が破れた町にはいるように、彼があなた
の門にはいる時、騎兵と貨車と戦車の響きによって、あなたの石がきはゆ
るぐ。一一彼はその馬のひずめで、あなたのすべてのちまたを踏みあらし、
つるぎであなたの民を殺す。あなたの力強い柱は地に倒れる。一二彼ら
はあなたの財宝を奪い、商品をかすめ、城壁をくずし、楽しい家をこわ
し、石と木と土とを水の中に投げ込む。一三わたしはあなたの歌の声をと
どめる。琴の音はもはや聞えなくなる。一四わたしはあなたを裸の岩にす

る。あなたは網を張る場所となり、再び建てられることはない。主なるわ
たしがこれを言ったと、主なる神は言われる。
一五主なる神はツロにこう言われる、海沿いの国々はあなたの倒れる響
き、手負いのうめき、あなたのうちの殺人のゆえに、身震いしないであろ
うか。一六その時、海の君たちは皆その位からおり、朝服を脱ぎ、縫い取
りの衣服を取り去り、恐れを身にまとい、地に座して、いたく恐れ、あな
たの事を驚き、一七あなたのために悲しみの歌をのべて言う、

『あなたは海にあって、強い誉ある町、
本土に恐れを与えていたあなたも、その住民も、
海から消え去った。
一八島々はあなたの倒れる日に身震いする。
海の島々はあなたの去り行くことを見て驚く』。

一九主なる神はこう言われる、わたしはあなたを、荒れた町となし、住
む者のない町のようにし、淵をあなたに向かってわきあがらせ、大水にあ
なたをおおわせる時、二〇あなたを穴に下る者どもと共に、昔の民の所
に下し、穴に下る者と共に下の国に、昔のままの荒れ跡の中に、あなた
を住ませる。それゆえ、あなたは人の住む所とならず、また生ある者の地
に所を得ない。二一わたしはあなたの終りを、恐るべきものとする。あな
たは無に帰する。あなたを尋ねる人があっても、永久に見いださないと、
主なる神は言われる」。

第二七章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ツロのために悲
しみの歌をのべ、三海の入口に住んで、多くの海沿いの国々の民の商人
であるツロに対して言え、主なる神はこう言われる、

ツロよ、あなたは言った、

『わたしの美(び)は完全(かんぜん)である』と。
四あなたの境(さかい)は海(うみ)の中(なか)にあり、
あなたの建設者(けんせつしゃ)はあなたの美(び)を完全(かんぜん)にした。
五人々(ひとびと)はセニルのもみの木(き)で
あなたのために船板(ふないた)を造(つく)り、
レバノンから香柏(こうはく)をとって、
あなたのために帆柱(ほばしら)を造(つく)り、
六バシャンのかしの木(き)で、
あなたのためにかいを造(つく)り、
クプロの島(しま)から来(く)る松(まつ)の木(き)に象牙(ぞうげ)をはめて、
あなたのために甲板(かんぱん)を造(つく)った。
七あなたの帆(ほ)はエジプトから来(く)るあや布(ぬの)であって、

あなたの旗に用いられ、
あなたのおおいはエリシャの海岸から来る
青と紫の布である。
八あなたのこぎ手は、
シドンとアルワデの住民、
あなたのかじとりは、
あなたのうちにいる熟練なゼメルの人々である。
九ゲバルの老人たち、およびその熟練な人々は、
あなたのうちにいて漏りを繕い、
海のすべての船およびその船員らは
あなたのうちにいて、あなたの商品を交易する。
一〇ペルシャ人、ルデびと、プテびとはあなたの軍に加わって、あなた

の戦士となる。彼らはあなたのうちに、盾とかぶとを掛け、あなたに輝き
をそえた。一一アルワデとヘレクの人々は、あなたの周囲の城壁の上にあ
り、ガマデの人々は、あなたのやぐらの中にあり、彼らは、あなたの周囲
の城壁にその盾を掛けて、あなたの美観を全うした。
一二あなたはそのすべての貨物に富むゆえに、タルシシはあなたと交易
をなし、銀、鉄、すず、鉛をあなたの商品と交換した。一三ヤワン、ト
バル、およびメセクはあなたと取引し、彼らは人身と青銅の器とを、あ
なたの商品と交換した。一四ベテ・トガルマは馬、軍馬、および騾馬をあ
なたの商品と交換した。一五ローヅ島の人々はあなたと取引し、多くの
海沿いの国々は、あなたの市場となり、象牙と黒たんとを、みつぎとしてあ
なたに持ってきた。一六あなたの製品が多いので、エドムはあなたと商売
し、彼らは赤玉、紫、縫い取りの布、細布、さんご、めのうをもって、あ

なたの商品と交換した。一七ユダとイスラエルの地は、あなたと取引し、
麦、オリブ、いちじく、蜜、油、および乳香をもって、あなたの商品
と交換した。一八あなたの製品が多く、あなたの富が多いので、ダマスコ
はあなたと取引し、ヘルボンの酒と、さらした羊毛と、一九ウザルの酒を
もって、あなたの商品と交換し、銑鉄、肉桂、菖蒲をもって、あなたの
商品と交易した。二〇デダンは乗物の鞍敷をもって、あなたと取引した。
二一アラビヤびと、およびケダルのすべての君たちは小羊、雄羊、やぎを
もって、あなたと取引し、これらの物をあなたと交易した。二二シバとラ
アマの商人は、あなたと取引し、もろもろの尊い香料と、もろもろの
宝石と金とをもって、あなたの商品と交換した。二三ハラン、カンネ、エ
デン、アッスリヤ、キルマデはあなたと取引した。二四彼らは、はなやかな
衣服と、青く縫い取りした布と、ひもで結んで、じょうぶにした敷物など

をもって、あなたと取引した。二五タルシシの船はあなたの商品を運んで
まわった。
あなたは海の中にいて満ち足り、いたく栄えた。
二六あなたのこぎ手らはあなたを大海の中に進め、
海の中で東風があなたの船を破った。
二七あなたの財宝、あなたの貨物、あなたの商品、
あなたの船員、あなたのかじ取り、
あなたの漏りを繕う者、あなたの商品を商う者、
あなたの中にいるすべての軍人、
あなたの中にいるすべての仲間は皆、
あなたの破滅の日に海の中に沈む。
二八あなたのかじ取りの叫び声に、近郷は震い、

二九すべてかいをとる者(もの)は船(ふね)からくだる。
船員(せんいん)および海(うみ)のすべてのかじ取(と)りは海(うみ)べに立(た)ち、
三〇あなたのために声(こえ)をあげて泣(な)き、はげしく叫(さけ)び、
ちりをこうべにかぶり、灰(はい)の中(なか)にまろび、
三一あなたのために髪(かみ)をそり、荒布(あらぬの)をまとい、
あなたのために心(こころ)を痛(いた)めて泣(な)き、はげしく嘆(なげ)く。
三二彼(かれ)らは悲(かな)しんで、あなたのために悲(かな)しみの歌(うた)をのべ、
あなたを弔(とむら)って言(い)う、
『だれかツロのように海(うみ)の中(なか)で滅(ほろ)びたものがあるか。
三三あなたの商品(しょうひん)が海(うみ)を越(こ)えてきた時(とき)、
あなたは多(おお)くの民(たみ)を飽(あ)かせ、
あなたの多(おお)くの財宝(ざいほう)と商品(しょうひん)とをもって、

地の王たちを富ませた。
三四今あなたは海で破船し、深い水に沈み、
あなたの商品と、あなたのすべての船員とは、
あなたと共に沈んだ。
三五海沿いの国々に住む者は皆あなたについて驚き、
その王たちは大いに恐れてその顔を震わす。
三六もろもろの民の中の商人らはあなたをあざける。
あなたは恐るべき終りを遂げ、
永遠にうせはてる』。
第二八章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ツロの君に言え、
主なる神はこう言われる、
あなたは心に高ぶって言う、

『わたしは神(かみ)である、神々(かみがみ)の座(ざ)にすわって、海(うみ)の中(なか)にいる』と。
しかし、あなたは自分(じぶん)を神(かみ)のように賢(かしこ)いと思(おも)っても、
人(ひと)であって、神(かみ)ではない。
三見(み)よ、あなたはダニエルよりも賢(かしこ)く、
すべての秘密(ひみつ)もあなたには隠(かく)れていない。
四あなたは知恵(ちえ)と悟(さと)りとによって富(とみ)を得(え)、
金銀(きんぎん)を倉(くら)にたくわえた。
五あなたは大(おお)いなる貿易(ぼうえき)の知恵(ちえ)によって
あなたの富(とみ)を増(ま)し、
その富(とみ)によってあなたの心(こころ)は高(たか)ぶった。
六それゆえ、主(しゅ)なる神(かみ)はこう言(い)われる、
あなたは自分(じぶん)を神(かみ)のように賢(かしこ)いと思(おも)っているゆえ、

七見よ、わたしは、もろもろの国民の最も恐れている
異邦人をあなたに攻めこさせる。
彼らはつるぎを抜いて、
あなたが知恵をもって得た麗しいものに向かい、
あなたの輝きを汚し、
八あなたを穴に投げ入れる。
あなたは海の中で殺された者のような死を遂げる。
九それでもなおあなたは、『自分は神である』と、
あなたを殺す人々の前で言うことができるか。
あなたは自分を傷つける者の手にかかっては、
人であって、神ではないではないか。
一〇あなたは異邦人の手によって

割礼を受けない者の死を遂げる。
これはわたしが言うのであると、
主なる神は言われる」。
一一また主の言葉がわたしに臨んだ、一二「人の子よ、ツロの王のために
悲しみの歌をのべて、これに言え。主なる神はこう言われる、
あなたは知恵に満ち、
美のきわみである完全な印である。
一三あなたは神の園エデンにあって、
もろもろの宝石が、あなたをおおっていた。
すなわち赤めのう、黄玉、青玉、貴かんらん石、
緑柱石、縞めのう、
サファイヤ、ざくろ石、エメラルド。

そしてあなたの象眼も彫刻も金でなされた。
これらはあなたの造られた日に、
あなたのために備えられた。
一四わたしはあなたを油そそがれた
守護のケルブと一緒に置いた。
あなたは神の聖なる山にいて、
火の石の間を歩いた。
一五あなたは造られた日から、
あなたの中に悪が見いだされた日までは
そのおこないが完全であった。
一六あなたの商売が盛んになると、
あなたの中に暴虐が満ちて、あなたは罪を犯した。

それゆえ、わたしはあなたを神(かみ)の山(やま)から
汚(けが)れたものとして投(な)げ出(だ)し、
守護(しゅご)のケルブはあなたを
火(ひ)の石(いし)の間(あいだ)から追(お)い出(だ)した。
一七あなたは自分(じぶん)の美(うつく)しさのために心(こころ)高(たか)ぶり、
その輝(かがや)きのために自分(じぶん)の知恵(ちえ)を汚(けが)したゆえに、
わたしはあなたを地(ち)に投(な)げうち、
王(おう)たちの前(まえ)に置(お)いて見(み)せ物(もの)とした。
一八あなたは不正(ふせい)な交易(こうえき)をして犯(おか)した多(おお)くの罪(つみ)によって
あなたの聖所(せいじょ)を汚(けが)したゆえ、
わたしはあなたの中(なか)から火(ひ)を出(だ)して
あなたを焼(や)き、

あなたを見るすべての者の前で
あなたを地の上の灰とした。
一九もろもろの民のうちであなたを知る者は皆
あなたについて驚く。
あなたは恐るべき終りを遂げ、
永遠にうせはてる」。
二〇主の言葉がわたしに臨んだ、二一「人の子よ、あなたの顔をシドンに
向け、これに向かって預言して、二二言え。主なる神はこう言われる、
シドンよ、見よ、わたしはあなたの敵となる、
わたしはあなたのうちで栄えをあらわす。
わたしがシドンのうちにさばきをおこない、
そのうちにわたしの聖なることをあらわす時、

彼らはわたしが主であることを知る。
二三わたしは疫病をこれに送り、
そのちまたに流血を送る。
その四方からこれに臨むつるぎによって
殺される者がその中に倒れる時、
彼らはわたしが主であることを知る。
二四イスラエルの家には、もはや刺すいばらはなく、これを卑しめたその
周囲の人々のうちには、苦しめるとげもなくなる。こうして彼らはわたし
が主であることを知るようになる。
二五主なる神はこう言われる、わたしがイスラエルの家の者を、その散ら
されたもろもろの民の中から集め、もろもろの国民の目の前で、彼らにわ
たしの聖なることをあらわす時、彼らはわたしが、わがしもべヤコブに与え

た地に住むようになる。二六彼らはそこに安らかに住み、家を建て、またぶ
どう畑を作る。かつて彼らを卑しめたすべての隣り人たちに対して、わ
たしがさばきを行う時、彼らは安らかに住む。こうして彼らは、わたし
が彼らの神、主であることを知る」。
第二九章 一 第十年の十月十二日に、主の言葉がわたしに臨んだ、二「人
の子よ、あなたの顔をエジプトの王パロに向け、彼とエジプト全国に対し
て預言し、三語って言え。主なる神はこう言われる、

　エジプトの王パロよ、
見よ、わたしはあなたの敵となる。
あなたはその川の中に伏す大いなる龍で、
『ナイル川はわたしのもの、
わたしがこれを造った』と言う。

四わたしは、かぎをあなたのあごにかけ、
あなたの川の魚を、あなたのうろこにつかせ、
あなたと、あなたのうろこについている
もろもろの魚を、あなたの川から引きあげ、
五あなたとあなたの川のもろもろの魚を、
荒野に投げ捨てる。
あなたは野の面に倒れ、
あなたを取り集める者も、葬る者もない。
わたしはあなたを
地の獣と空の鳥のえじきとして与える。
六そしてエジプトのすべての住民はわたしが主であることを知る。あな
たはイスラエルの家に対して葦のつえであった。七彼らがあなたを手にと
る時、あなたは折れ、彼らの肩はことごとく裂ける。彼らがまたあなたに

寄りかかる時、あなたは破れ、彼らの腰をことごとく震えさせる。八それ
ゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはつるぎをあなたに持って
きて、人と獣とをあなたのうちから断つ。九エジプトの地は荒れて、むな
しくなる。そして彼はわたしが主であることを知る。
あなたは『ナイル川はわたしのもの、わたしがこれを造った』と言って
いるゆえに、一〇見よ、わたしはあなたとあなたの川々の敵となって、エジ
プトの地をミグドルからスエネまで、エチオピヤの境に至るまで、ことご
とく荒し、むなしくする。一一人の足はこれを渡らず、獣の足もこれを渡
らない。四十年の間、ここに住む者はない。一二わたしはエジプトの地を
荒して、荒れた国々の中に置き、その町々は荒れて、四十年のあいだ荒れ
た町々の中にある。わたしはエジプトびとを、もろもろの国民の中に散ら
し、もろもろの国の中に散らす。

一三主なる神はこう言われる、四十年の後、わたしはエジプトびとを、そ
の散らされたもろもろの民の中から集める。一四すなわちエジプトの運命
をもとに返し、彼らをその生れた地であるパテロスの地に帰らせる。その
所で彼らは卑しい国となる。一五これはもろもろの国よりも卑しくなり、
再びもろもろの国民の上に出ることができない。わたしは彼らを小さく
するゆえ、再びもろもろの国民を治めることはない。一六これはイスラエ
ルが助けを求める時、その罪を思い出して、再びイスラエルの家の頼み
とはならない。こうして彼らは、わたしが主なる神であることを知る」。
一七第二十七年の一月一日に、主の言葉がわたしに臨んだ、一八「人の子
よ、バビロンの王ネブカデレザルは、その軍勢をツロに対して大いに働
かせた。頭は皆はげ、肩はみな破れた。しかし彼もその軍勢も、ツロに
対してなしたその働きのために、なんの報いをも得なかった。一九それゆ

え、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはバビロンの王ネブカデレザ
ルに、エジプトの地を与える。彼はその財宝を取り、物をかすめ、物を奪
い、それをその軍勢に与えて報いとする。二〇彼の働いた報酬として、
わたしはエジプトの地を彼に与える。彼らはわたしのために、これをした
からであると、主なる神は言われる。
二一その日、わたしはイスラエルの家に、一つの角を生じさせ、あなたの
口を彼らのうちに開かせる。そして彼らはわたしが主であることを知る」。
第三〇章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、預言して言え、主
なる神はこう言われる、
　嘆け、その日はわざわいだ。
三その日は近い、主の日は近い。
　これは雲の日、異邦人の滅びの時である。

四つるぎがエジプトに臨む。
エジプトで殺される者の倒れる時、
エチオピヤには苦しみがあり、
その財宝は奪い去られ、その基は破られる。
五エチオピヤ、プテ、ルデ、アラビヤ、リビヤおよび同盟国の人々は、彼
らと共につるぎに倒れる。
六主はこう言われる、
エジプトを助ける者は倒れ、
その誇る力はうせる。
ミグドルからスエネまで、
人々はつるぎによってそのうちに倒れると
主なる神が言われる。

七それは荒れて、荒れはてた国々のうちにあり、
その町々は荒れた町々のうちにある。
八わたしがエジプトに火を送り、
これを助ける者が皆滅びる時、
彼らはわたしが主であることを知る。
九その日、早足の使者がわたしから出て、何事も知らぬエチオピヤびと
を恐れさせる。そしてかのエジプトの滅びの日に、彼らに苦しみが来る。
見よ、これはかならず来る。
一〇主なる神はこう言われる、
わたしはバビロンの王ネブカデレザルの手によって
エジプトの富を滅ぼす。
一一彼と彼に従うその民、すなわち国民のうちの

最も恐るべき者がきて、その地を滅ぼす。
彼らはつるぎを抜いて、エジプトを攻め、
殺した者を国に満たす。
一二わたしはナイル川をからし、
その国を悪しき者の手に売り、
異邦人の手によって国とその中のものとを荒す。
主なるわたしはこれを言った。
一三主なる神はこう言われる、
わたしは偶像をこわし、メンピスで偶像を滅ぼす。
エジプトの国には、もはや君たる者がなくなる。
わたしはエジプトの国に恐れを与える。
一四わたしはパテロスを荒し、

ゾアンに火(ひ)を放(はな)ち、
テーベにさばきをおこない、
一五わたしの怒(いか)りを、
エジプトの要害(ようがい)であるペルシゥウムに注(そそ)ぎ、
テーベの群衆(ぐんしゅう)を断(た)ち、
一六エジプトに火(ひ)を下(くだ)す。
ペルシゥウムはいたく苦(くる)しみ、
テーベは打(う)ち破(やぶ)られ、
その城壁(じょうへき)は破壊(はかい)され、
一七オンとピベセテの若者(わかもの)はつるぎに倒(たお)れ、
女(おんな)たちは捕(とら)え移(うつ)される。
一八わたしがエジプトの支配(しはい)を砕(くだ)く時(とき)、

テパネスでは日は暗くなり、
その誇る力は絶え、
雲はこれをおおい、
その娘たちは捕え移される。
一九このようにわたしはエジプトにさばきを行う。
そのとき彼らはわたしが主であることを知る」。
二〇第十一年の一月七日に主の言葉がわたしに臨んだ、二一「人の子よ、
わたしはエジプトの王パロの腕を折った。見よ、これは包まれず、いやさ
れず、ほうたいをも施されない。それは強くなって、つるぎを執ることが
できない。二二それゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはエジ
プトの王パロを攻め、その強い腕と、折れた腕とを共に折り、その手から
つるぎを落させる。二三わたしはエジプトびとを、もろもろの国民の中に

散らし、国々に散らす。二四わたしはバビロンの王の腕を強くし、わたし
のつるぎを、その手に与える。しかしわたしはパロの腕を折るゆえ、彼は
深手を負った者のように、彼の前にうめく。二五わたしがバビロンの王の
腕を強くし、パロの腕がたれる時、彼らはわたしが主であることを知る。
わたしがわたしのつるぎを、バビロンの王に授け、これをエジプトの国に
向かって伸べさせ、二六わたしがエジプトびとを、もろもろの国民の中に散
らし、国々に散らす時、彼らはわたしが主であることを知る」。

第三一章

第十一年の三月一日に主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の
子よ、エジプトの王パロと、その民衆とに言え、

あなたはその大いなること、だれに似ているか。
三見よ、わたしはあなたを
レバノンの香柏のようにする。

麗(うるわ)しき枝(えだ)と森(もり)の陰(かげ)があり、たけが高(たか)く、
その頂(いただき)は雲(くも)の中(なか)にある。
四水(みず)はこれを育(そだ)て、
大水(おおみず)がこれを高(たか)くする。
その川々(かわがわ)はその植(う)えた所(ところ)をめぐって流(なが)れ、
その流(なが)れを野(の)のすべての木(き)に送(おく)る。
五これによってそのたけは、
野(の)のすべての木(き)よりも高(たか)くなり、
その育(そだ)つとき多(おお)くの水(みず)のために
枝葉(えだは)は茂(しげ)り、枝(えだ)は伸(の)び、
六その枝葉(えだは)に空(そら)のすべての鳥(とり)が、巣(す)をつくり、
その枝(えだ)の下(した)に野(の)のすべての獣(けもの)は子(こ)を生(う)み、

その陰にもろもろの国民は住む。
七これはその大きなことと、
その枝の長いことによって美しかった。
その根を多くの水に、おろしていたからである。
八神の園の香柏も、これと競うことはできない。
もみの木もその枝葉に及ばない。
けやきもその枝と比べられない。
神の園のすべての木も、その麗しきこと、
これに比すべきものはない。
九わたしはその枝を多くして、これを美しくした。
神の園にあるエデンの木は皆
これをうらやんだ。

一〇それゆえ、主なる神はこう言われる、これは、たけが高くなり、その
頂を雲の中におき、その心が高ぶりおごるゆえ、一一わたしはこれを、
もろもろの国民の力ある者の手に渡す。彼はこれに対してその悪のため
に正しい処置をとる。わたしはこれを追い出した。一二もろもろの国民の
最も恐れている異邦人はこれを切り倒して捨てる。その枝はもろもろの
山と、すべての谷とに落ち、その枝葉は砕けて、地のすべての流れにあり、
地のすべての民は、その陰を離れて、これを捨てる。一三その倒れた所に、
空のもろもろの鳥は住み、その枝の上に、野のもろもろの獣はいる。一四
これは水のほとりのすべての木が、その高さのために誇ることなく、その
頂を雲の中におくことなく、水に潤う木が、みずから高ぶり立つこと
のないためである。これらは皆、死に渡され、下の国に入り、穴に下る者
と共に他の人々のうちにいる。

一五主(しゅ)なる神(かみ)はこう言(い)われる、これが陰府(よみ)に下(くだ)る日(ひ)にわたしが淵(ふち)をこれ
がために悲(かな)しませ、その川々(かわがわ)をせきとめるので、大水(おおみず)はとどまる。わたし
はレバノンを、これがために嘆(なげ)かせ、野(の)のすべての木(き)を、これがために衰(おとろ)
えさせる。一六わたしがこれを穴(あな)に下(くだ)る者(もの)と共(とも)に陰府(よみ)に落(おと)す時(とき)、もろもろ
の国民(こくみん)をその落(お)ちる響(ひび)きのために、打(う)ち震(ふる)えさせる。そしてエデンのすべ
ての木(き)、レバノンのすぐれて美(うつく)しいもの、すべて水(みず)に潤(うるお)うものは、下(した)の
国(くに)で慰(なぐさ)められる。一七彼(かれ)らもこれと共(とも)に陰府(よみ)に下(くだ)り、つるぎで殺(ころ)された者(もの)
のところに至(いた)る。まことにもろもろの国民(こくみん)のうちで、その陰(かげ)に住(す)んだ者(もの)も
滅(ほろ)びる。一八エデンの木(き)のうちで、その栄(さか)えと大(おお)いなることで、あなたはど
れに似(に)ているのか。あなたはこのように、エデンの木(き)と共(とも)に、下(した)の国(くに)に落(おと)
され、つるぎで殺(ころ)された者(もの)と共(とも)に、割礼(かつれい)を受(う)けない者(もの)のうちに住(す)む。
これがパロとその民衆(みんしゅう)であると、主(しゅ)なる神(かみ)は言(い)われる」。

第三二章 一 第十二年の十二月一日に、主の言葉がわたしに臨んだ、二「人
の子よ、エジプトの王パロのために、悲しみの歌をのべて、これに言え、
あなたは自分をもろもろの国民のうちの
ししであると考えているが、
あなたは海の中の龍のような者である。
あなたは川の中に、はね起き、
足で水をかきまぜ、川を濁す。
三主なる神はこう言われる、
わたしは多くの民の集団をもって、
わたしの網をあなたに投げかけ、
あなたを網で引きあげる。
四わたしはあなたを地に投げ捨て、

野の面に投げうち、
空のすべての鳥をあなたの上にとまらせ、
全地の獣にあなたを与えて飽かせる。
五わたしはあなたの肉を山々に捨て、
あなたの死体で谷を満たす。
六わたしはあなたの流れる血で、
地を潤し、山々にまで及ぼす。
谷川はあなたの死体で満ちる。
七わたしはあなたを滅ぼす時、
空をおおい、星を暗くし、
雲で日をおおい、月に光を放たせない。
八わたしは空の輝く光を、

ことごとくあなたの上に暗くし、
あなたの国をやみとすると
主なる神は言う。
九わたしはもろもろの国民、あなたの知らない国々の中に、あなたを捕
え移す時、多くの民の心を痛ませる。一〇わたしはあなたについて、多く
の民を驚かせる。その王たちは、わたしがわたしのつるぎを、彼らの前に
振るう時、あなたの事でおののく。あなたの倒れる日には、彼らはおのお
の自分の命を思って、絶えず打ち震える。一一主なる神はこう言われる、
バビロンの王のつるぎはあなたに臨む。一二わたしはあなたの民衆を勇士
のつるぎに倒れさせる。彼らは皆、もろもろの国民の中で、最も恐れら
れている者たちである。
彼らはエジプトの誇を断つ、

エジプトの民衆は皆滅ぼされる。
一三わたしはその家畜をことごとく、
多くの水のかたわらから滅ぼす。
人の足は再びこれを濁さず、
家畜のひずめもこれを乱さない。
一四その時わたしはその水を清くし、
その川々を油のように流れさせると、
主なる神は言う。
一五わたしはエジプトの国を荒し、
その国に満ちるものが、ことごとく取り去られる時、
わたしがその中に住む者をことごとく撃つ時、
彼らはわたしが主であることを知る。

一六これは悲しみの歌である。人々はこれを歌い、もろもろの国の娘たち
はこれを歌う。すなわちエジプトと、そのすべての民衆とのために、これ
を歌うのであると、主なる神は言われる」。
一七第十二年の一月十五日に、主の言葉がわたしに臨んだ、
一八「人の子
よ、エジプトの民衆のために嘆き、これと大いなる国々の娘らとを、下
の国に投げ下し、穴に下った者のところに至らせよ。
一九『あなたの美はだれにまさっているか。
下って、割礼を受けない者と共に伏せよ』。
二〇彼らはつるぎに殺される者のうちに倒れる。その民衆はこれと共に
伏せる。
二一勇士の首領はその助け手と共に、陰府の中から彼らに言う、
『割礼を受けない者、つるぎに殺された者は下って伏している』と。
二二アッスリヤとその仲間とはその所におり、その墓はこれを囲む。彼

らはみな殺された者、またつるぎに倒れた者である。二三彼らの墓は穴の
奥に設けられ、その仲間はその墓の周囲にあり、これはみな殺された者、
つるぎに倒れた者、生ける者の地に恐れを起した者である。
二四その所にエラムがおり、その民衆は皆、その墓の周囲におる。彼ら
はみな殺された者、つるぎに倒れた者、割礼を受けないで、下の国に下っ
た者、生ける者の地に、恐れを起した者で、穴に下る者と共に、恥を負う
のである。二五彼らはそのすべての民衆と共に、殺された者の中に床を
置き、その墓はこれを囲む。これは皆、割礼を受けない者、つるぎに殺さ
れた者、生ける者の地に恐れを起した者で、穴に下る者と共に恥を負う。
彼らは殺された者の中に置かれている。
二六その所にメセクとトバル、およびすべての民衆がおる。その墓はこ
れを囲む。彼らは皆、割礼を受けない者で、つるぎで殺された者である。

生ける者の地に恐れを起したからである。二七彼らは昔の倒れた勇士と
共に伏さない。これらの勇士は、武具を持って陰府に下り、つるぎをまく
らとし、その盾は骨の上にある。これは勇士の恐れが、生ける者の地にあっ
たからである。二八あなたは割礼を受けない者のうちに、つるぎで殺され
た者と共に横たわる。
二九その所にエドムとその王たちと、そのすべての君たちがおる。彼ら
はその力を持つにもかかわらず、かのつるぎで殺された者と共に横たえ
られ、割礼を受けない者および穴に下る者と共に伏している。
三〇その所に北の君たち、およびシドンびとが皆おる。彼らは自分の力
によって恐れを起したので、殺された者と共に恥を受けて、下って行った
者である。彼らはつるぎで殺された者と共に、割礼を受けずに伏し、穴に
下る者と共に恥を負う。

三一パロは彼らを見る時、そのすべての民衆について慰められる。パ
ロとそのすべての軍勢とは、つるぎで殺されると、主なる神は言われる。
三二彼は生ける者の国に恐れを広げた。それゆえ、パロとすべての民衆と
は、割礼を受けない者のうちにあって、つるぎで殺された者と共に伏すと、
主なる神は言われる」。

第三三章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたの民の人々
に語って言え、わたしがつるぎを一つの国に臨ませる時、その国の民が彼
らのうちからひとりを選んで、これを自分たちの見守る者とする。三彼は
国につるぎが臨むのを見て、ラッパを吹き、民を戒める。四しかし人が
ラッパの音を聞いても、みずから警戒せず、ついにつるぎが来て、その人
を殺したなら、その血は彼のこうべに帰する。五彼はラッパの音を聞いて、
みずから警戒しなかったのであるから、その血は彼自身に帰する。しかし

その人が、みずから警戒したなら、その命は救われる。六しかし見守る者
が、つるぎの臨むのを見ても、ラッパを吹かず、そのため民が、みずから
警戒しないでいるうちに、つるぎが臨み、彼らの中のひとりを失うなら
ば、その人は、自分の罪のために殺されるが、わたしはその血の責任を、
見守る者の手に求める。

七それゆえ、人の子よ、わたしはあなたを立てて、イスラエルの家を見守
る者とする。あなたはわたしの口から言葉を聞き、わたしに代って彼らを
戒めよ。八わたしが悪人に向かって、悪人よ、あなたは必ず死ぬと言う
時、あなたが悪人を戒めて、その道から離れさせるように語らなかった
ら、悪人は自分の罪によって死ぬ。しかしわたしはその血を、あなたの手
に求める。九しかしあなたが悪人に、その道を離れるように戒めても、そ
の悪人がその道を離れないなら、彼は自分の罪によって死ぬ。しかしあな

たの命は救われる。
一〇それゆえ、人の子よ、イスラエルの家に言え、あなたがたはこう言っ
た、『われわれのとがと、罪はわれわれの上にある。われわれはその中に
あって衰えはてる。どうして生きることができようか』と。一一あなたは
彼らに言え、主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の
死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなた
がたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。イスラエルの
家よ、あなたはどうして死んでよかろうか。一二人の子よ、あなたの民の
人々に言え、義人の義は、彼が罪を犯す時には、彼を救わない。悪人の悪
は、彼がその悪を離れる時、その悪のために倒れることはない。義人は彼
が罪を犯す時、その義のために生きることはできない。一三わたしが義人
に、彼は必ず生きると言っても、もし彼が自分の義をたのんで、罪を犯

すなら、彼のすべての義は覚えられない。彼はみずから犯した罪のために
死ぬ。一四また、わたしが悪人に『あなたは必ず死ぬ』と言っても、もし
彼がその罪を離れ、公道と正義とを行うならば、一五すなわちその悪人
が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないな
らば、彼は必ず生きる。決して死なない。一六彼の犯したすべての罪は彼
に対して覚えられない。彼は公道と正義とを行ったのであるから、必ず
生きる。

一七あなたの民の人々は『主の道は公平でない』と言う。しかし彼らの
道こそ公平でないのである。一八義人がその義を離れて、罪を犯すならば、
彼はこれがために死ぬ。一九悪人がその悪を離れて、公道と正義とを行
うならば、彼はこれによって生きる。二〇それであるのに、あなたがたは
『主の道は公平でない』と言う。イスラエルの家よ、わたしは各自のおこ

ないにしたがって、あなたがたをさばく」。
二一わたしたちが捕え移された後、すなわち第十二年の十月五日に、エ
ルサレムからのがれて来た者が、わたしのもとに来て言った、「町は打ち破
られた」と。二二その者が来た前の夜、主の手がわたしに臨んだ。次の朝、
その人がわたしのもとに来たころ、主はわたしの口を開かれた。わたしの
口が開けたので、もはやわたしは沈黙しなかった。
二三主の言葉がわたしに臨んだ、二四「人の子よ、イスラエルの地の、か
の荒れ跡の住民らは、語り続けて言う、『アブラハムはただひとりで、な
おこの地を所有した。しかしわたしたちの数は多い。この地はわれわれの
所有として与えられている』と。二五それゆえ、あなたがたは彼らに言え、主
なる神はこう言われる、あなたがたは肉を血のついたままで食べ、おのが
偶像を仰ぎ、血を流していて、なおこの地を所有することができるか。二
六あなたがたはつるぎをたのみ、憎むべき事をおこない、おのおの隣り人

の妻を汚して、なおこの地を所有することができるか。二七あなたは彼ら
に言いなさい。主なる神はこう言われる、わたしは生きている。かの荒れ
跡にいる者は必ずつるぎに倒れる。わたしは野の面にいる者を、獣に
与えて食わせ、要害とほら穴とにいる者は疫病で死ぬ。二八わたしはこの
国を全く荒す。彼の誇る力はうせ、イスラエルの山々は荒れて通る者
もなくなる。二九彼らがおこなったすべての憎むべきことのために、わたし
がこの国を全く荒す時、彼らはわたしが主であることを悟る。
三〇人の子よ、あなたの民の人々は、かきのかたわら、家の入口で、あな
たの事を論じ、たがいに語りあって言う、『さあ、われわれは、どんな言葉が
主から出るかを聞こう』と。三一彼らは民が来るようにあなたの所に来、
わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言葉を聞く。しかし彼
らはそれを行わない。彼等は口先では多くの愛を現すが、その心は利

におもむいている。三二見よ、あなたは彼らには、美しい声で愛の歌をう
たう者のように、また楽器をよく奏する者のように思われる。彼らはあな
たの言葉は聞くが、それを行おうとはしない。三三この事が起る時——こ
れは必ず起る——そのとき彼らの中にひとりの預言者がいたことを彼ら
は悟る」。

第三四章 一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、イスラエルの牧者
たちに向かって預言せよ。預言して彼ら牧者に言え、主なる神はこう言わ
れる、わざわいなるかな、自分自身を養うイスラエルの牧者。牧者は群れ
を養うべき者ではないか。三ところが、あなたがたは脂肪を食べ、毛織物
をまとい、肥えたものをほふるが、群れを養わない。四あなたがたは弱っ
た者を強くせず、病んでいる者をいやさず、傷ついた者をつつまず、迷い
出た者を引き返らせず、うせた者を尋ねず、彼らを手荒く、きびしく治め

ている。五彼らは牧者がないために散り、野のもろもろの獣のえじきにな
る。六わが羊は散らされている。彼らはもろもろの山と、もろもろの高き
丘にさまよい、わが羊は地の全面に散らされているが、これを捜す者も
なく、尋ねる者もない。
七それゆえ、牧者よ、主の言葉を聞け。八主なる神は言われる、わたし
は生きている。わが羊はかすめられ、わが羊は野のもろもろの獣のえ
じきとなっているが、その牧者はいない。わが牧者はわが羊を尋ねない。
牧者は自身を養うが、わが羊を養わない。九それゆえ牧者らよ、主の
言葉を聞け。一〇主なる神はこう言われる、見よ、わたしは牧者らの敵とな
り、わたしの羊を彼らの手に求め、彼らにわたしの群れを養うことをや
めさせ、再び牧者自身を養わせない。またわが羊を彼らの口から救っ
て、彼らの食物にさせない。

一一主なる神はこう言われる、見よ、わたしは、わたしみずからわが羊
を尋ねて、これを捜し出す。一二牧者がその羊の散り去った時、その羊
の群れを捜し出すように、わたしはわが羊を捜し出し、雲と暗やみの日
に散った、すべての所からこれを救う。一三わたしは彼らをもろもろの民
の中から導き出し、もろもろの国から集めて、彼らの国に携え入れ、イ
スラエルの山の上、泉のほとり、また国のうちの人の住むすべての所で
これを養う。一四わたしは良き牧場で彼らを養う。その牧場はイスラエ
ルの高い山にあり、その所で彼らは良い羊のおりに伏し、イスラエルの
山々の上で肥えた牧場で草を食う。一五わたしはみずからわが羊を飼い、
これを伏させると主なる神は言われる。一六わたしは、うせたものを尋ね、
迷い出たものを引き返し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くし、肥
えたものと強いものとは、これを監督する。わたしは公平をもって彼らを

養う。
一七主なる神はこう言われる、あなたがた、わが群れよ、見よ、わたしは
羊と羊との間、雄羊と雄やぎとの間をさばく。一八あなたがたは良き
牧場で草を食い、その草の残りを足で踏み、また澄んだ水を飲み、その残
りを足で濁すが、これは、あまりのことではないか。一九わが羊はあなた
がたが、足で踏んだものを食い、あなたがたの足で濁したものを、飲まな
ければならないのか。
二〇それゆえ、主なる神はこう彼らに言われる、見よ、わたしは肥えた
羊と、やせた羊との間をさばく。二一あなたがたは、わきと肩とをもっ
て押し、角をもって、すべて弱い者を突き、ついに彼らを外に追い散らし
た。二二それゆえ、わたしはわが群れを助けて、再びかすめさせず、羊と
羊との間をさばく。二三わたしは彼らの上にひとりの牧者を立てる。す

なわちわがしもべダビデである。彼は彼らを養う。彼は彼らを養い、彼
らの牧者となる。二四主なるわたしは彼らの神となり、わがしもべダビデ
は彼らのうちにあって君となる。主なるわたしはこれを言う。
二五わたしは彼らと平和の契約を結び、国の内から野獣を追い払う。彼
らは心を安んじて荒野に住み、森の中に眠る。二六わたしは彼らおよび
わが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがって雨を降らす。これは
祝福の雨となる。二七野の木は実を結び、地は産物を出す。彼らは心を
安んじてその国におり、わたしが彼らのくびきの棒を砕き、彼らを奴隷と
した者の手から救い出す時、彼らはわたしが主であることを悟る。二八彼
らは重ねて、もろもろの国民にかすめられることなく、地の獣も彼らを
食うことはない。彼らは心を安んじて住み、彼らを恐れさせる者はない。
二九わたしは彼らのために、良い栽培所を与える。彼らは重ねて、国のき

きんに滅びることなく重ねて諸国民のはずかしめを受けることはない。三
〇彼らはその神、主なるわたしが彼らと共におり、彼らイスラエルの家が、
わが民であることを悟ると、主なる神は言われる。三一あなたがたはわが
羊、わが牧場の羊である。わたしはあなたがたの神であると、主なる神
は言われる」。
第三五章一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたの顔をセイ
ル山に向け、これに対して預言し、三これに言え。主なる神はこう言われ
る、セイル山よ、見よ、わたしはあなたを敵とし、わたしの手をあなたに向
かって伸べ、あなたを全く荒し、四あなたの町々を滅ぼす。あなたは荒れ
はてる。そしてわたしが主であることを悟る。五あなたは限りない敵意を
いだいて、イスラエルの人々をその災の時、終りの時に、つるぎ
の手に渡した。六それゆえ、主なる神は言われる、わたしは生きている。わ

たしはあなたを血にわたす。血はあなたを追いかける。あなたには血のと
がががあるゆえ、血はあなたを追いかける。七わたしはセイル山を全く荒し、
そこに行き来する者を断ち、八その山々を殺された者で満たす。つるぎで
殺された者が、あなたのもろもろの丘、もろもろの谷、もろもろのくぼ地
に倒れる。九わたしはあなたを、永遠の荒れ地とし、あなたの町々には住
む者がなくなる。そしてあなたがたは、わたしが主であることを悟る。
一〇あなたは言う、『これら二つの国民、二つの国はわたしのもの、われわ
れはこれを獲よう』と。しかし主はそこにおられる。一一それゆえ、主なる
神は言われる、わたしは生きている。あなたが彼らを憎んで、彼らに示し
た怒りと、ねたみにしたがって、わたしはあなたを扱う。わたしがあなた
をさばく時、わたし自身をあなたに示す。一二あなたがイスラエルの山々
に向かって、『これは荒れはてて、われわれの食となる』と言ったもろも

ろのそしりを、主なるわたしが聞いたことをあなたは悟る。一三あなたが
たは、わたしに対して口をもって誇り、またわたしに対して、あなたがた
の言葉を多くした。わたしはそれを聞いた。一四主なる神はこう言われる、
全地の喜びのために、わたしはあなたを荒れ地とする。一五あなたが、イ
スラエルの家の嗣業の荒れるのを喜んだように、わたしはあなたに、そ
のようにする。セイル山よ、あなたは荒れ地となる。エドムもすべてその
ようになる。そのとき彼らは、わたしが主であることを悟るようになる。
第三六章一人の子よ、イスラエルの山々に預言して言え。イスラエルの
山々よ、主の言葉を聞け。二主なる神はこう言われる、敵はあなたがたに
ついて言う、『ああ、昔の高き所が、われわれのものとなった』と。三そ
れゆえ、あなたは預言して言え。主なる神はこう言われる、彼らはあなた
がたを荒し、四方からあなたがたを打ち滅ぼしたので、あなたがたは他の

国民の所有となり、また民の悪いうわさとなった。四それゆえ、イスラエ
ルの山々よ、主なる神の言葉を聞け。主なる神は、山と、丘と、くぼ地と、
谷と、滅びた荒れ跡と、人の捨てた町々、すなわちその周囲にある諸国民
の残った者にかすめられ、あざけられるようになったものに、こう言われ
る。五主なる神はこう言われる、わたしはねたみの炎をもって、他の国民
とエドム全国とに対して言う、彼らは心ゆくまで喜び、心に誇ってわ
が地を自分の所有とし、これを奪い、かすめた者である。六それゆえ、あ
なたはイスラエルの地の事を預言し、山と、丘と、くぼ地と、谷とに言え。
主なる神はこう言われる、見よ、あなたがたは諸国民のはずかしめを受け
たので、わたしはねたみと怒りとをもって語る。七それゆえ、主なる神は
こう言われる、わたしは誓って言う、あなたがたの周囲の諸国民は必ず
はずかしめを受ける。

八しかしイスラエルの山々よ、あなたがたは枝を出し、わが民イスラエ
ルのために実を結ぶ。この事の成るのは近い。九見よ、わたしはあなたが
たに臨み、あなたがたを顧みる。あなたがたは耕され、種をまかれる。
一〇わたしはあなたがたの上に人をふやす。これはことごとくイスラエル
の家の者となり、町々には人が住み、荒れ跡は建て直される。一一わたし
はあなたがたの上に人と獣とをふやす。彼らはふえて、子を生む。わた
しはあなたがたの上に、昔のように人を住ませ、初めの時よりも、まさ
る恵みをあなたがたに施す。その時あなたがたは、わたしが主であるこ
とを悟る。一二わたしはわが民イスラエルの人々をあなたがたの上に歩ま
せる。彼らはあなたがたを所有し、あなたがたはその嗣業となり、あな
たがたは重ねて彼らに子のない嘆きをさせない。一三主なる神はこう言わ
れる、彼らはあなたがたに向かって、『あなたは人を食い、あなたの民に子

のない嘆きをさせる』と言う。一四あなたはもはや人を食わない。あなたの
民に重ねて子のない嘆きをさせることはないと、主なる神は言われる。一
五わたしは重ねて諸国民のはずかしめをあなたに聞かせない。あなたは重
ねて、もろもろの民のはずかしめを受けることはなく、あなたの民を重ね
てつまずかせることはないと、主なる神は言われる」。
一六主の言葉がわたしに臨んだ、一七「人の子よ、昔、イスラエルの家
が、自分の国に住んだとき、彼らはおのれのおこないとわざとをもって、こ
れを汚した。そのおこないは、わたしの前には、汚れにある女の汚れの
ようであった。一八彼らが国に血を流し、またその偶像をもって、国を汚
したため、わたしはわが怒りを彼らの上に注ぎ、一九彼らを諸国民の中に
散らしたので、彼らは国々の中に散った。わたしは彼らのおこないと、わ
ざとにしたがって、彼らをさばいた。二〇彼らがその行くところの国々へ

行ったとき、わが聖なる名を汚した。これは人々が彼らについて『これは
主の民であるが、その国から出た者である』と言ったからである。二一し
かしわたしはイスラエルの家が、その行くところの諸国民の中で汚したわ
が聖なる名を惜しんだ。
二二それゆえ、あなたはイスラエルの家に言え。主なる神はこう言われ
る、イスラエルの家よ、わたしがすることはあなたがたのためではない。
それはあなたがたが行った諸国民の中で汚した、わが聖なる名のためであ
る。二三わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼ら
の中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしがあなたがた
によって、彼らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわた
しが主であることを悟ると、主なる神は言われる。二四わたしはあなたが
たを諸国民の中から導き出し、万国から集めて、あなたがたの国に行か

せる。二五わたしは清い水をあなたがたに注いで、すべての汚れから清め、
またあなたがたを、すべての偶像から清める。二六わたしは新しい心を
あなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉
から、石の心を除いて、肉の心を与える。二七わたしはまたわが霊をあ
なたがたのうちに置いて、わが定めに歩ませ、わがおきてを守ってこれを
行わせる。二八あなたがたは、わたしがあなたがたの先祖に与えた地に住
んで、わが民となり、わたしはあなたがたの神となる。二九わたしはあなた
がたをそのすべての汚れから救い、穀物を呼びよせてこれを増し、ききん
をあなたがたに臨ませない。三〇またわたしは木の実と、田畑の作物とを
多くする。あなたがたは重ねて諸国民の間に、ききんのはずかしめを受
けることがない。三一その時あなたがたは自身の悪しきおこないと、良から
ぬわざとを覚えて、その罪と、その憎むべきこととのために、みずから恨

む。三二わたしがなすことはあなたがたのためではないと、主なる神は言わ
れる。あなたがたはこれを知れ。イスラエルの家よ、あなたがたは自分の
おこないを恥じて悔やむべきである。
三三主なる神はこう言われる、わたしは、あなたがたのすべての罪を清め
る日に、町々に人を住ませ、その荒れ跡を建て直す。三四荒れた地は、行き
来の人々の目に荒れ地と見えたのに引きかえて耕される。三五そこで人々
は言う、『この荒れた地は、エデンの園のようになった。荒れ、滅び、くずれ
た町々は、堅固になり、人の住む所となった』と。三六あなたがたの周囲
に残った諸国民は主なるわたしがくずれた所を建て直し、荒れた所にも
のを植えたということを悟るようになる。主なるわたしがこれを言い、こ
れをなすのである。
三七主なる神はこう言われる、イスラエルの家は、わたしが次のことを

彼らのためにするように、わたしに求めるべきである。すなわち人を群れ
のようにふやすこと、三八すなわち犠牲のための群れのように、エルサレム
の祝い日の群れのようにすることである。こうして荒れた町々は人の群れ
で満ちる。その時人々は、わたしが主であることを悟るようになる」。
第三七章一主の手がわたしに臨み、主はわたしを主の霊に満たして出て
行かせ、谷の中にわたしを置かれた。そこには骨が満ちていた。二彼はわ
たしに谷の周囲を行きめぐらせた。見よ、谷の面には、はなはだ多くの骨
があり、皆いたく枯れていた。三彼はわたしに言われた、「人の子よ、これ
らの骨は、生き返ることができるのか」。わたしは答えた、「主なる神よ、
あなたはご存じです」。四彼はまたわたしに言われた、「これらの骨に預言
して、言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。五主なる神はこれらの骨にこ
う言われる、見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがた

を生かす。六わたしはあなたがたの上に筋を与え、肉を生じさせ、皮でお
おい、あなたがたのうちに息を与えて生かす。そこであなたがたはわたし
が主であることを悟る」。
七わたしは命じられたように預言したが、わたしが預言した時、声があっ
た。見よ、動く音があり、骨と骨が集まって相つらなった。八わたしが見
ていると、その上に筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおったが、息は
その中になかった。九時に彼はわたしに言われた、「人の子よ、息に預言せ
よ、息に預言して言え。主なる神はこう言われる、息よ、四方から吹いて
来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ」。一〇そこでわたし
が命じられたように預言すると、息はこれにはいった。すると彼らは生き、
その足で立ち、はなはだ大いなる群衆となった。
一一そこで彼はわたしに言われた、「人の子よ、これらの骨はイスラエル

の全家である。見よ、彼らは言う、『われわれの骨は枯れ、われわれの望み
は尽き、われわれは絶え果てる』と。一一それゆえ彼らに預言して言え。主
なる神はこう言われる、わが民よ、見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、
あなたがたを墓からとりあげて、イスラエルの地にはいらせる。一三わが民
よ、わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓からとりあげる
時、あなたがたは、わたしが主であることを悟る。一四わたしがわが霊を、
あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし、あなたがたをその地に
安住させる時、あなたがたは、主なるわたしがこれを言い、これをおこ
なったことを悟ると、主は言われる」。
一五主の言葉がわたしに臨んだ、一六「人の子よ、あなたは一本の木を取
り、その上に『ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために』と書
き、また一本の木を取って、その上に『ヨセフおよびその友であるイスラ

エルの全家のために』と書け。これはエフライムの木である。一七あなたは
これらを合わせて、一つの木となせ。これらはあなたの手で一つになる。一
八あなたの民の人々があなたに向かって、『これはなんのことであるか、わ
れわれに示してくれないか』と言う時は、一九これに言え、主なる神はこ
う言われる、見よ、わたしはエフライムの手にあるヨセフと、その友であ
るイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、一つの木と
なす。これらはわたしの手で一つとなる。二〇あなたが文字を書いた木が、
彼らの目の前で、あなたの手にあるとき、二一あなたは彼らに言え。主な
る神は、こう言われる、見よ、わたしはイスラエルの人々を、その行った
国々から取り出し、四方から彼らを集めて、その地にみちびき、二二その
地で彼らを一つの民となしてイスラエルの山々におらせ、ひとりの王が彼
ら全体の王となり、彼らは重ねて二つの国民とならず、再び二つの国に

分れない。二三彼らはまた、その偶像と、その憎むべきことどもと、もろ
もろのとがとをもって、身を汚すことはない。わたしは彼らを、その犯し
たすべての背信から救い出して、これを清める。そして彼らはわが民とな
り、わたしは彼らの神となる。

二四わがしもべダビデは彼らの王となる。彼らすべての者のために、ひと
りの牧者が立つ。彼らはわがおきてに歩み、わが定めを守って行う。二
五彼らはわがしもべヤコブに、わたしが与えた地に住む。これはあなたがた
の先祖の住んだ所である。そこに彼らと、その子らと、その子孫とが永遠
に住み、わがしもべダビデが、永遠に彼らの君となる。二六わたしは彼ら
と平和の契約を結ぶ。これは彼らの永遠の契約となる。わたしは彼らを
祝福し、彼らをふやし、わが聖所を永遠に彼らの中に置く。二七わがす
みかは彼らと共にあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわが民となる。

二八そしてわが聖所が永遠に、彼らのうちにあるようになるとき、諸国民
は主なるわたしが、イスラエルを聖別する者であることを悟る」。

第三八章 一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、メセクとトバル
の大君であるマゴグの地のゴグに、あなたの顔を向け、これに対して預言
して、三言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴ
グよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。四わたしはあなたを引きもどし、
あなたのあごにかぎをかけて、あなたと、あなたのすべての軍勢と、馬と、
騎兵とを引き出す。彼らはみな武具をつけ、大盾、小盾を持ち、すべてつ
るぎをとる者で大軍である。五ペルシャ、エチオピヤ、プテは彼らと共に
おり、みな盾とかぶとを持つ。六ゴメルとそのすべての軍隊、北の果のベ
テ・トガルマと、そのすべての軍隊など、多くの民もあなたと共におる。
七あなたは備えをなせ。あなたとあなたの所に集まった軍隊は、みな

備えをなせ。そしてあなたは彼らの保護者となれ。八多くの日の後、あな
たは集められ、終りの年にあなたは戦いから回復された地、すなわち多
くの民の中から、人々が集められた地に向かい、久しく荒れすたれたイス
ラエルの山々に向かって進む。その人々は国々から導き出されて、みな
安らかに住んでいる。九あなたはそのすべての軍隊および多くの民を率い
て上り、暴風のように進み、雲のように地をおおう。
一〇主なる神はこう言われる、その日に、あなたの心に思いが起り、悪
い計りごとを企てて、一一言う、『わたしは無防備の村々の地に上り、穏
やかにして安らかに住む民、すべて石がきもなく、貫の木も門もない地に
住む者どもを攻めよう』と。一二そしてあなたは物を奪い、物をかすめ、い
ま人の住むようになっている荒れ跡を攻め、また国々から集まってきて、
地の中央に住み、家畜と貨財とを持つ民を攻めようとする。一三シバ、デ

ダン、タルシシの商人、およびそのもろもろの村々はあなたに言う、『あ
なたは物を奪うために来たのか。物をかすめるために軍隊を集めたのか。
あなたは金銀を持ち去り、家畜と貨財とを取りあげ、大いに物を奪おうと
するのか』と。
一四それゆえ、人の子よ、ゴグに預言して言え。主なる神はこう言われ
る、わが民イスラエルの安らかに住むその日に、あなたは立ちあがり、一五
北の果のあなたの所から来る。多くの民はあなたと共におり、みな馬に
乗り、その軍隊は大きく、その兵士は強い。一六あなたはわが民イスラエ
ルに攻めのぼり、雲のように地をおおう。ゴグよ、終りの日にわたしはあ
なたを、わが国に攻めきたらせ、あなたをとおして、わたしの聖なること
を諸国民の目の前にあらわして、彼らにわたしを知らせる。
一七主なる神はこう言われる、わたしが昔、わがしもべイスラエルの

預言者たちによって語ったのは、あなたのことではないか。すなわち彼ら
は、そのころ年久しく預言して、わたしはあなたを送って、彼らを攻めさ
せると言ったではないか。
一八しかし主なる神は言われる、その日、すなわ
ちゴグがイスラエルの地に攻め入る日に、わが怒りは現れる。
一九わたし
は、わがねたみと、燃えたつ怒りとをもって言う。その日には必ずイスラ
エルの地に、大いなる震動があり、
二〇海の魚、空の鳥、野の獣、すべての
地に這うもの、地のおもてにあるすべての人は、わが前に打ち震える。ま
た山々はくずれ、がけは落ち、すべての石がきは地に倒れる。
二一主なる
神は言われる、わたしはゴグに対し、すべての恐れを呼びよせる。すべて
の人のつるぎは、その兄弟に向けられる。
二二わたしは疫病と流血と
をもって彼をさばく。わたしはみなぎる雨と、ひょうと、火と、硫黄とを、
彼とその軍隊および彼と共におる多くの民の上に降らせる。
二三そしてわ

たしはわたしの大いなることと、わたしの聖なることとを、多くの国民の
目に示す。そして彼らはわたしが主であることを悟る。
第三九章 一人の子よ、ゴグに向かって預言して言え。主なる神はこう言
われる、メセクとトバルの大君であるゴグよ、見よ、わたしはあなたの敵と
なる。二わたしはあなたを引きもどし、あなたを押しやり、北の果から上ら
せ、イスラエルの山々に導き、三あなたの左の手から弓を打ち落し、右の
手から矢を落させる。四あなたとあなたのすべての軍隊およびあなたと共
にいる民たちは、イスラエルの山々に倒れる。わたしはあなたを、諸種の
猛禽と野獣とに与えて食わせる。五あなたは野の面に倒れる。わたしが
これを言ったからであると、主なる神は言われる。六わたしはゴグと、海沿
いの国々に安らかに住む者に対して火を送り、彼らにわたしが主であるこ
とを悟らせる。

七わたしはわが聖なる名を、わが民イスラエルのうちに知らせ、重ねて
わが聖なる名を汚させない。諸国民はわたしが主、イスラエルの聖者であ
ることを悟る。八主なる神は言われる、見よ、これは来る、必ず成就す
る。これはわたしが言った日である。九イスラエルの町々に住む者は出て
来て、武器すなわち大盾、小盾、弓、矢、手やり、およびやりなどを燃や
し、焼き、七年の間これを火に燃やす。一〇彼らは野から木を取らず、森
から木を切らず、武器で火を燃やし、自分をかすめた者をかすめ、自分の
物を奪った者を奪うと、主なる神は言われる。

一一その日、わたしはイスラエルのうちに、墓地をゴグに与える。これは
旅びとの谷にあって海の東にある。これは旅びとを妨げる。そこにゴグ
とその民衆を埋めるからである。これをハモン・ゴグの谷と名づける。一
二イスラエルの家はこれを埋めて、地を清めるために七か月を費す。一三

国のすべての民はこれを埋め、これによって名を高める。これはわが栄え
を現す日であると、主なる神は言われる。一四彼らは人々を選んで、絶え
ず国の中を行きめぐらせ、地のおもてに残っている者を埋めて、これを清
めさせる。七か月の終りに彼らは尋ねる。一五国を行きめぐる者が行きめ
ぐって、人の骨を見る時、死人を埋める者が、これをハモン・ゴグの谷に
埋めるまで、そのかたわらに、標を建てて置く。一六（ハモナの町もそこ
にある。）こうして彼らはその国を清める。

一七主なる神はこう言われる、人の子よ、諸種の鳥と野の獣とに言え、
みな集まってこい。わたしがおまえたちのために供えた犠牲、すなわちイ
スラエルの山々の上にある、大いなる犠牲に、四方から集まり、その肉を
食い、その血を飲め。一八おまえたちは勇士の肉を食い、地の君たちの血を
飲め。雄羊、小羊、雄やぎ、雄牛などすべてバシャンの肥えた獣を食え。

一九わたしがおまえたちのために供えた犠牲は、飽きるまでその脂肪を食
べ、酔うまで血を飲め。二〇おまえたちはわが食卓について馬と、騎手と、
勇士と、もろもろの戦士とを飽きるほど食べると、主なる神は言われる。
二一わたしはわが栄光を諸国民に示す。すべての国民はわたしが行っ
たさばきと、わたしが彼らの上に加えた手とを見る。二二この日から後、イ
スラエルの家はわたしが彼らの神、主であることを悟るようになる。二三ま
た諸国民はイスラエルの家が、その悪によって捕え移されたことを悟る。
彼らがわたしにそむいたので、わたしはわが顔を彼らに隠し、彼らをその
敵の手に渡した。それで彼らは皆つるぎに倒れた。二四わたしは彼らの汚
れと、とがとに従って、彼らを扱い、わたしの顔を彼らに隠した。
二五それゆえ、主なる神はこう言われる、いまわたしはヤコブの幸福を
もとに返し、イスラエルの全家をあわれみ、わが聖なる名のために、ねた

みを起す。二六彼らは、その国に安らかに住み、だれもこれを恐れさせる
者がないようになった時、自分の恥と、わたしに向かってなした反逆とを
忘れる。二七わたしが彼らを諸国民の中から帰らせ、その敵の国から呼び
集め、彼らによって、わたしの聖なることを、多くの国民の前に示す時、
二八彼らは、わたしが彼らの神、主であることを悟る。これはわたしが彼
らを諸国民のうちに移し、またこれをその国に呼び集めたからである。わ
たしはそのひとりをも、国々のうちに残すことをしない。二九わたしは、わ
が霊をイスラエルの家に注ぐ時、重ねてわが顔を彼らに隠さないと、主な
る神は言われる」。

第四〇章一われわれが捕え移されてから二十五年、都が打ち破られて後
十四年、その年の初めの月の十日、その日に主の手がわたしに臨み、わた
しをかの所に携えて行った。二すなわち神は幻のうちに、わたしをイ

スラエルの地に携えて行って、非常に高い山の上におろされた。その山
の上に、わたしと相対して、一つの町のような建物があった。三神がわた
しをそこに携えて行かれると、見よ、ひとりの人がいた。その姿は青銅
の形のようで、手に麻のなわと、測りざおとを持って門に立っていた。四
その人はわたしに言った、「人の子よ、目で見、耳で聞き、わたしがあなた
に示す、すべての事を心にとめよ。あなたをここに携えて来たのは、こ
れをあなたに示すためである。あなたの見ることを、ことごとくイスラエ
ルの家に告げよ」。
五見よ、宮の外の周囲に、かきがあり、その人の手に六キュビトの測りざ
おがあった。そのキュビトは、おのおの一キュビトと一手幅とである。彼
が、そのかきの厚さを測ると、一さおあり、高さも一さおあった。六彼が
東向きの門に行き、その階段を上って、門の敷居を測ると、その厚さは

一さあり、七その詰め所は長さ一さお、幅一さお、詰め所と、詰め所と
の間は五キュビトあり、内の門の廊のかたわらの門の敷居は一さおあっ
た。八門の廊を測ると八キュビトあり、九その脇柱は二キュビト、門の廊
は内側にあった。一〇東向きの門の詰め所は、こなたに三つ、かなたに三
つあり、三つとも同じ寸法である。脇柱もまた、こなたかなたともに同
じ寸法である。一一門の入口の広さを測ると十キュビトあり、門の長さは
十三キュビトあった。一二詰め所の前の境は一キュビト、かなたの境も
一キュビトで、詰め所は、こなたかなたともに六キュビトあった。一三彼
がまたこの詰め所の裏から、かの詰め所の裏まで、門を測ると、入口から
入口まで二十五キュビトあった。一四彼がまた廊を測ると二十キュビトあ
り、門の廊の周囲は、すべて庭である。一五入口の門の前から内の門の廊
の前まで五十キュビトあり、一六詰め所と、門の内側の周囲の脇柱とに

窓があり、廊の内側の周囲にも、同様に窓があり、脇柱には、しゅろが
あった。
一七彼がまたわたしを外庭に携え入れると、見よ、庭の周囲に設けた室
と、敷石とがあり、敷石の上に三十の室があった。一八敷石は門のわきに
あり、門と同じ長さで、これは下の敷石である。一九彼が下の門の内の前
から、内庭の外の前までの距離を測ると、百キュビトあった。
二〇また彼はわたしに先だって北へ行った。見よ、そこに外庭に属する
北向きの門があった。彼はその長さと幅とを測った。二一その詰め所が、
こなたに三つ、かなたに三つあり、また脇柱と廊とがあった。これらは初
めの門と同じ寸法で、長さは五十キュビト、幅は二十五キュビトである。
二二その窓と、廊と、しゅろとは、東向きの門にあるものと同じ寸法で
ある。そして七段の階段を経て、それに上ると、廊は内側にあった。二三

内庭の門は北と東の門に向かっていた。彼が門から門までを測ると、百
キュビトあった。
二四彼がまたわたしを南へ行かせると、見よ、南向きの門があった。そ
の脇柱と廊を測ると、他と同じ寸法であった。**二五**これと、その廊の周囲
とに、他の窓のような窓があって、その長さは五十キュビト、幅は二十五
キュビトあった。**二六**これを上るのに七段の階段があり、その廊は内側に
あった。その脇柱の上には、こなたに一つ、かなたに一つのしゅろがあっ
た。**二七**内庭には南向きの門があり、門から門まで南の方へ測ると、百
キュビトあった。

二八彼がわたしを南の門から内庭にはいらせ、南の門を測ると、さき
のものと、同じ寸法であった。**二九**その詰め所と、脇柱と、廊とは、他の
ものと同じ寸法で、その門と、廊の周囲とには窓があり、門の長さは五十
キュビト、幅は二十五キュビトであった。**三〇**周囲に廊があって、その長

さは二十五キュビト、幅は五キュビトである。三一その廊は外庭に面して、
脇柱の上にしゅろがあり、その階段は八段であった。
三二彼はまたわたしを内庭の東の方に携えて行って、門を測った。そ
れは他と同じ寸法であった。三三その詰め所と、脇柱と、廊とは、他と
同じ寸法で、その門と、その廊の周囲とに窓があり、門の長さは五十キュ
ビト、幅は二十五キュビトである。三四その廊は外庭に面し、その脇柱の
上には、こなたかなたに、しゅろがあり、その階段は八段であった。
三五彼がまたわたしを北の門に携えて行って、これを測ると、それは他
と同じ寸法であった。三六その詰め所と、脇柱と、廊とは、他と同じ寸法
で、その周囲に窓があり、門の長さは五十キュビト、幅は二十五キュビト
である。三七その廊は外庭に面し、その脇柱の上には、こなたかなたに、
しゅろがあり、その階段は八段であった。

三八門の廊に戸のある室があって、そこは燔祭の物を洗う所である。三
九門の廊に、こなたに二つの台、かなたに二つの台があり、その上で、燔祭、
罪祭、愆祭の物をほふるのであった。四〇北の門の入口にある廊の外の
片側に、二つの台があり、門の廊の他の側にも、二つの台があり、四一門
のかたわら、内側に四つの台、外側に四つの台があって、合わせて八つの
台である。その上で、犠牲の物をほふるのである。四二そこにまた燔祭の
ために四つの切り石の台があり、その長さは一キュビト半、幅は一キュビ
ト半、高さは一キュビト、その上に燔祭および犠牲をほふる器を置くの
である。四三内の周囲に、一手幅の折り釘が打ちつけてあって、供え物の
肉は、台の上に置かれるのである。
四四彼はまたわたしを、外から内庭に連れてはいった。見よ、内庭に二つ
の室があり、一つは北の門のかたわらにあって南に向かい、一つは南の

門のかたわらにあって、北に向かっていた。
四五彼はわたしに言った、この南向きの室は、宮を守る祭司のためのもの、
四六また北向きの室は、祭壇を守る祭司のためのものである。その人たちは、レビの子孫のうちのザドクの子孫であって、主に近く仕える者たちである。
四七そして彼が庭を測ると、その長さは百キュビト、幅も百キュビトで四角である。宮の前には祭壇があった。

四八彼がわたしを宮の廊に連れて行って、廊の脇柱を測ると、こなたも五キュビト、かなたも五キュビトであり、門の幅は十四キュビトである。門の壁は、こなたも三キュビト、かなたも三キュビトである。
四九廊の長さは二十キュビト、幅は十二キュビトであり、十の階段によって上るのである。脇柱に沿って、こなたに一つ、かなたに一つの柱があった。

第四一章
一彼がわたしを拝殿に連れて行って、脇柱を測ると、こなたの

幅も六キュビト、かなたの幅も六キュビトあった。二その戸の幅は十キュ
ビト、戸のわきの壁は、こなたも五キュビト、かなたも五キュビトあった。
彼はまた拝殿の長さを測ると四十キュビト、その幅は二十キュビトあった。
三彼がまた内にはいって、戸の脇柱を測ると、それは二キュビトあり、戸
の幅は六キュビト、戸のわきの壁は七キュビトあった。四彼はまた拝殿の
奥の室の長さを測ると二十キュビト、幅も二十キュビトあった。そして彼
はわたしに、これは至聖所であると言った。
五彼が宮の壁を測ると、その厚さは六キュビトあり、宮の周囲の脇間の
広さは、四方おのおの四キュビトあり、六脇間は、室の上に室があって三階
になり、各階に三十の室がある。宮の周囲の壁には、脇間をささえる突起
があった。これは脇間が、宮の壁そのものによってささえられないためであ
る。七脇間は、宮の周囲の各階にある突起につれて、階を重ねて上にいく

にしたがって広くなり、宮の外部の階段が上に通じ、一階から三階へは、
二階をとおって上るのである。八わたしはまた宮の周囲に高い所のある
のを見た。脇間の基を測ると、六キュビトの一さおあった。九脇間の外の
壁の厚さは五キュビト、あき地になっている高い所は五キュビトあった。
宮の高い所と、一〇庭の室の間には、宮の周囲に、広さ二十キュビトの
所があった。一一脇間の戸は、あき地になっている高い所に向かって開
け、一つの戸は北に向かい、一つの戸は南に向かっていた。そのあき地に
なっている所の幅は、周囲五キュビトであった。
一二西の方の宮の庭に面した建物は、幅七十キュビト、その建物の周囲
の壁の厚さは五キュビト、長さは九十キュビトであった。
一三彼が宮を測ると、その長さは百キュビトあり、その庭と建物と、そ
の壁は長さ百キュビト、一四また宮の東に面した所と庭との幅は百キュ

ビトであった。
一五彼が西の方の庭に面した建物と、その壁の長さを測ると、かなた、
こなたともに百キュビトであった。宮の拝殿と、内部の室と、外の廊とに
は、羽目板があった。一六これらの三つのものの周囲には、すべて引込み
枠の窓があり、宮の敷居に面して、宮の周囲は、床から窓まで、羽目板で
あって、窓には、おおいがあった。一七戸の上の空所、内室、外室とも
に、羽目板であった。内室および拝殿の周囲のすべての壁には、同じよう
に彫刻してあった。一八すなわちケルビムと、しゅろとが彫刻してあっ
た。ケルブとケルブとの間に、しゅろがあり、おのおののケルブには、二
つの顔があり、一九こなたには、しゅろに向かって、人の顔があり、かなた
には、しゅろに向かって、若じしの顔があり、宮の周囲は、すべてこのよ
うに彫刻してあった。二〇床から戸の上まで、ケルビムと、しゅろとが、
壁に彫刻してあった。

二一拝殿の柱は四角であった。聖所の前には、木の祭壇に似たものが
あった。二二その高さは三キュビト、長さは二キュビト、幅は二キュビト
で、すみと、台と、壁とは、ともに木である。彼はわたしに言った、「これ
は主の前にある机である」二三拝殿と聖所とには、二つの戸があり、二四
その戸には、二つのとびらがあった。すなわち二つの開き戸である。二五
拝殿の戸には、おのおのにケルビムと、しゅろとが、彫刻してあって、そ
れは壁に彫刻したものと同じである。また外の廊に面して、木の天蓋が
あり、二六廊の壁には、こなたかなたに引込み窓と、しゅろとがあった。
第四二章一彼はわたしを北の方の内庭に連れ出し、庭に向かった北の方
の建物に対する室に導いた。二北側にある建物の長さは百キュビト、幅
は五十キュビトである。三二十キュビトの内庭に続いて、外庭の敷石に面
し、三階になった廊下があった。四また室の前に幅十キュビト、長さ百キュ

ビトの通路があった。その戸は北に向かっていた。五その建物の上の室は、
下の室と中の室よりも狭かった。それは廊下のために、場所を取ったため
である。六これらは三階であって、外庭の柱のような柱は持たなかった。
それで上の室は、下および中の室よりも狭いのである。七室の外に沿って
かきがあり、それは他の室に向かって外庭に至る。その長さは五十キュビ
ト、八外庭の室の長さも五十キュビトあった。宮に面する所は百キュビ
トであった。九これらの室の下に外庭からこれにはいるように、東側に
入口があった。一〇外側のかきは、外庭に始まっている。
南の方で、庭と建物との前に、室があった。一一北向きの室と同様に、
その前に通路があり、その長さも幅も同様で、その出口もその配置もその
戸も同様である。一二南の室の下に、人々が通路にはいる東の入口があ
り、これに対して隔てのかきがあった。

一三時に彼はわたしに言った、「庭に面した北の室と、南の室とは、聖
なる室であって、主に近く仕える祭司たちが、最も聖なるものを食べる
場所である。その場所に彼らは、最も聖なるもの、すなわち素祭、罪祭、
愆祭のものを置かなければならない。その場所は聖だからである。一四祭司
たちが、聖所にはいった時は、そこから外庭に出てはならない。彼らは勤
めを行う衣服を、その所に置かなければならない。これは聖だからであ
る。彼らは民衆に属する場所に近づく前に、他の衣服を着けなければな
らない」。

一五彼らは宮の庭の内部を測り終えると、東向きの門の道から、わたし
を連れ出して、宮の周囲を測った。一六彼が測りざおで、東側を測ると、
測りざおで五百キュビトあり、一七また転じて、北側を測ると、測りざおで
五百キュビトあり、一八また転じて、南側を測ると、測りざおで五百キュ

ビトあり、一九また転じて、西側を測ると、測りざおで五百キュビトあっ
た。二〇このように、四方を測ったが、その周囲に、長さ五百キュビト、幅
五百キュビトのかきがあって、聖所と、俗の所との隔てをなしていた。

第四三章一その後、彼はわたしを門に導いた。門は東に面していた。
二その時、見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から来たが、その来る
響きは、大水の響きのようで、地はその栄光で輝いた。三わたしが見た
幻の様は、彼がこの町を滅ぼしに来た時に、わたしが見た幻と同様
で、これはまたわたしがケバル川のほとりで見た幻のようであった。そ
れでわたしは顔を伏せた。四主の栄光が、東の方に面した門の道から宮
にはいった時、五霊がわたしを引き上げて、内庭に導き入れると、見よ、
主の栄光が宮に満ちた。
六その人がわたしのかたわらに立った時、わたしはひとりの人が、宮の

中からわたしに語るのを聞いた。七彼はわたしに言った、「人の子よ、これ
はわたしの位のある所、わたしの足の裏の踏む所、わたしが永久にイ
スラエルの人々の中に住む所である。またイスラエルの家は、民もその
王たちも、再び姦淫と、王たちの死体とをもって、わが聖なる名を汚さ
ない。八彼らはその敷居を、わが敷居のかたわらに設け、その門柱を、わ
が門柱のかたわらに設けたので、わたしと彼らとの間には、わずかに壁
があるのみである。そして彼らは、その犯した憎むべき事をもって、わが
聖なる名を汚したので、わたしは怒りをもって、これを滅ぼした。九今彼
らに命じて姦淫と、その王たちの死体を、わたしから遠く取り除かせよ。
そうしたら、わたしは永久に彼らの中に住む。
一〇人の子よ、宮と、その外形と、設計とをイスラエルの家に示せ。彼
らはその悪を恥じるであろう。一一彼らがその犯したすべての事を恥じた

ら、彼らに、この宮の建て方、設備、出口、入口、すべての形式、すべての
おきて、すべての規定を示せ。これを彼らの目の前に書き、彼らにそのす
べての規定と、おきてとを守り行わせよ。
一二宮の規定はこれである。山
の頂の四方の地域はみな最も聖である。見よ、これは宮の規定である。
一三祭壇の寸法はキュビトですれば、次のようである。(そのキュビトは
一キュビトと一手幅である。)土台は高さ一キュビト、幅一キュビト、そ
の周囲の縁は半キュビトである。
一四祭壇の高さは、次のとおりである。
地面の土台から下のかさねまで二キュビト、幅は一キュビト、また小さい
かさねから大きいかさねまで四キュビト、その幅は一キュビトである。
一五
祭壇の炉は四キュビトで、祭壇の炉から高さ一キュビトの角が四本出てい
た。
一六炉は長さ十二キュビト、幅十二キュビトの四角形である。
一七その
かさねは四方とも長さ十四キュビト、幅十四キュビトの四角形、その周囲

の縁は幅半キュビト、その台は四方一キュビト、その階段は東に面する」。
一八彼はわたしに言った、「人の子よ、主なる神はこう言われる、祭壇を
建て、その上に燔祭をささげ、これに血を注ぐ日には、次のことを祭壇の
定めとせよ。一九すなわち主なる神は言われる、ザドクの子孫で、わたしに
近く仕えるレビびとである祭司には、罪祭のために雄牛の子を与えよ。二
〇またその血をとって、これを祭壇の四つの角と、かさねの四すみと、周囲
の縁に塗って、祭壇を清め、これをあがなえ。二一あなたはまた罪祭の牛
をとって、これを聖所の外、宮のうちの定められた所で焼け。二二第二日
に、あなたは無傷の雄やぎを、罪祭としてささげよ。すなわち雄牛で清め
たように、これで祭壇を清めよ。二三清めごとを終えたなら、無傷の雄牛の
子と、群れの中の無傷の雄羊とをささげよ。二四これを主の前に持ってき
て、祭司らはその上に塩をまき、これらを燔祭として主にささげよ。二五

七日の間、あなたは日々雄やぎを罪祭とせよ。また雄牛の子と、群れの中
の雄羊との無傷のものをととのえ、二六七日の間、彼らは祭壇をあがない、
これを清め、これを聖別しなければならない。二七彼らがこれらの日を満
たしたとき、八日目から後は、祭司たちは、あなたがたの燔祭と、酬恩祭
とを祭壇の上に供える。そうすれば、わたしは、あなたがたを受けいれる
と、主なる神は言われる」。

第四四章一こうして、彼はわたしを連れて、聖所の東に向いている外の
門に帰ると、門は閉じてあった。二彼はわたしに言った、「この門は閉じた
ままにしておけ、開いてはならない。ここからだれもはいってはならない。
イスラエルの神、主が、ここからはいったのだから、これは閉じたままに
しておけ。三ただ君たる者だけが、この内に座し、主の前でパンを食し、
門の廊を通ってはいり、またそこから外に出よ」。

四彼はまたわたしを連れて、北の門の道から宮の前に行った。わたしが
見ていると、見よ、主の栄光が主の宮に満ちた。わたしがひれ伏すと、五
主はわたしに言われた、「人の子よ、主の宮のすべてのおきてと、そのすべ
ての規定とについて、わたしがあなたに告げるすべての事に心をとめ、目
を注ぎ、耳を傾けよ。また宮にはいることを許されている者と、聖所に
はいることのできない者とに心せよ。六また反逆の家であるイスラエル
の家に言え。主なる神は、こう言われる、イスラエルの家よ、その憎むべ
きことをやめよ。七すなわちあなたがたは、わたしの食物である脂肪と血
とがささげられる時、心にも肉にも、割礼を受けない異邦人を入れて、わ
が聖所におらせ、これを汚した。また、もろもろの憎むべきものをもって、
わが契約を破った。八あなたがたは、わが聖なる物を守る務を怠り、か
えって異邦人を立てて、わが聖所の務を守らせた。

九それゆえ、主なる神は、こう言われる、イスラエルの人々のうちにいる
すべての異邦人のうち、心と肉とに割礼を受けないすべての者は、わが
聖所にはいってはならない。一〇またレビ人であって、イスラエルが迷った
時、偶像を慕い、わたしから迷い出て、遠く離れた者は、その罪を負わな
ければならない。一一すなわち彼らはわが聖所で、仕え人となり、宮の門
を守る者となり、宮に仕えるしもべとなり、民のために、燔祭および犠牲
のものを殺し、彼らの前に立って仕えなければならない。一二彼らはその
偶像の前で民に仕え、イスラエルの家にとって、罪のつまずきとなったゆ
え、主なる神は言われる、わたしは彼らについて誓った。彼らはその罪を
負わなければならない。一三彼らはわたしに近づき、祭司として、わたしに
仕えることはできない。またわたしの聖なる物、および最も聖なる物に、
近づいてはならない。彼らはそのおこなった憎むべきことのため、恥を負

わなければならない。一四しかし彼らには、宮を守る務をさせ、そのもろ
もろの務と、宮でなすべきすべての事とに当らせる。
一五しかしザドクの子孫であるレビの祭司たち、すなわちイスラエルの
人々が、わたしを捨てて迷った時に、わが聖所の務を守った者どもは、
わたしに仕えるために近づき、脂肪と血とをわたしにささげるために、わた
しの前に立てと、主なる神は言われる。一六すなわち彼らはわが聖所に入
り、わが台に近づいてわたしに仕え、わたしの務を守る。一七彼らが内庭
の門にはいる時は、麻の衣服を着なければならない。内庭の門および宮の
内で、務をなす時は、毛織物を身につけてはならない。一八また頭には
亜麻布の冠をつけ、腰には亜麻布の袴をつけなければならない。ただ
し汗の出るような衣を身につけてはならない。一九彼らは外庭に出る時、
すなわち外庭に出て民に接する時は、務をなす時の衣服は脱いで聖なる

室に置き、ほかの衣服を着なければならない。これはその衣服をもって、そ
の聖なることを民にうつさないためである。
二〇彼らはまた頭をそってはならない。また髪を長くのばしてはならない。その頭の髪は切らなければならない。
二一祭司はすべて内庭にはいる時は、酒を飲んではならない。
二二また寡婦、および出された女をめとってはならない。ただイスラエルの家の血統の処女、あるいは祭司の妻で、やもめになったものをめとらなければならない。
二三彼らはわが民に、聖と俗との区別を教え、汚れたものと、清いものとの区別を示さなければならない。
二四争いのある時は、さばきのために立ち、わがおきてにしたがってさばき、また、わたしのもろもろの祭の時は、彼らはわが律法と定めを守り、わが安息日を、聖別しなければならない。
二五死人に近づいて、身を汚してはならない。ただ父のため、母のため、むすこのため、娘のため、兄弟のため、夫をもた

ない姉妹のためには、近よって身を汚すことも許される。二六このような
人は、汚れた後、自身のために、七日の期間を数えよ。そうすれば清まる。
二七彼は聖所に入り、内庭に行き、聖所で務に当る日には、罪祭をささ
げなければならないと、主なる神は言われる。
二八彼らには嗣業はない。わたしがその嗣業である。あなたがたはイ
スラエルの中で、彼らに所有を与えてはならない。わたしが彼らの所有で
ある。二九彼らは素祭、罪祭、愆祭の物を食べる。すべてイスラエルのう
ちのささげられた物は彼らの物となる。三〇すべての物の初なりの初物、
およびすべてあなたがたのささげるもろもろのささげ物は、みな祭司のも
のとなる。またあなたがたの麦粉の初物は祭司に与えよ。これはあなたが
たの家が、祝福されるためである。三一祭司は、鳥でも獣でも、すべて
自然に死んだもの、または裂き殺されたものを食べてはならない。

第四五章一あなたがたは、くじを引き、地を分けて、それを所有すると
きには、地の一部を聖なる地所として主にささげよ。その長さは二万五千
キュビト、幅は二万キュビトで、その区域はすべて聖なる地である。二その
うち聖所に属するものは縦横五百キュビトずつであって、それは四角であ
る。また五十キュビトの空地をその周囲につくれ。三あなたはこの聖なる
地所から長さ二万五千キュビト、幅一万キュビトを測り取り、その中に聖所
と至聖所とを設けよ。四これは国の中で聖なる所であって、主に近く仕
える聖所の仕え人である祭司に帰属する。これは彼らのためには家を建て
る所、聖所のためには聖地となる。五また長さ二万五千キュビト、幅一万
キュビトの別の地所は、宮に仕えるレビびとに帰属し、彼らの住む町のた
めの所有とする。
六聖地として区別した部分に沿い、幅五千キュビト、長さ二万五千キュ

ビトは、町の所有とせよ。これはイスラエル全家のものとなる。
七また君たる者の分は、かの聖地と町の所有地との、こなたかなたにあ
る。すなわち聖地と町の所有地に沿い、西と東に向かい、部族の分の一
つに応じて、地所の西から東の境に至り、八その所有の地所はイスラエ
ルの中にある。わたしの君たちは、重ねてわたしの民をしえたげず、部族
にしたがってイスラエルの家に土地を与える。
九主なる神は、こう言われる、イスラエルの君たちよ、暴虐と略奪と
をやめ、公道と正義を行え。わが民を追いたてることをやめよと、主な
る神は言われる。
一〇あなたがたは正しいはかり、正しいエパ、正しいバテを用いよ。一一
エパとバテとは同量にせよ。すなわちバテをホメルの十分の一とし、エ
パもホメルの十分の一とし、すべてホメルによって量を定めよ。一二シ

ケルは二十ゲラである。五シケルは五シケル、十シケルは十シケルとせよ。
一ミナは五十シケルとせよ。
一三あなたがたがささげるささげ物はこれである。すなわち、一ホメルの
小麦のうちから六分の一エパをささげ、大麦一ホメルのうちから六分の一
エパをささげよ。一四油は一コルのうちから十分の一バテをささげよ。コ
ルはホメルと同じく十バテに当る。一五またイスラエルの氏族から、家畜の
群れ二百につき一頭の羊を出して、素祭、燔祭、酬恩祭とし、彼らのた
めに、あがないをなせと主なる神は言われる。一六国の民は皆これをイス
ラエルの君にささげ物とせよ。一七また祭日、ついたち、安息日、すなわ
ちイスラエルの家のすべての祝い日に、燔祭、素祭、灌祭を供えるのは、
君たる者の務である。すなわち彼はイスラエルの家のあがないのために、
罪祭、素祭、燔祭、酬恩祭をささげなければならない。
一八主なる神は、こう言われる、正月の元日に、あなたは無傷の雄牛の

子を取って聖所を清めよ。一九祭司は罪祭の獣の血を取って、宮の柱と
祭壇のかさねの四すみ、および内庭の門の柱に塗れ。二〇月の七日に、あ
なたがたは、過失や無知のために罪を犯した者のために、このように行っ
て宮のためにあがないをなせ。
二一正月の十四日に、あなたがたは過越の祭を祝え。七日の間、種を
入れぬパンを食べよ。二二その日に君たる者は、自身のため、また国のすべ
ての民のため、雄牛をささげて罪祭とし、二三祝い日である七日の間は、
七頭の雄牛と、七頭の雄羊の無傷のものを、七日の間毎日、燔祭として
主に供えよ。また、雄やぎを罪祭として日々ささげよ。二四また素祭とし
て麦粉一エパを各雄牛のため、一エパを各雄羊のためにととのえ、油一ヒ
ンを各エパに加えよ。二五七月十五日の祝い日に、彼は七日の間、罪祭、
燔祭、素祭および油を、このように供えなければならない。

第四六章 **一**主なる神は、こう言われる、内庭にある東向きの門は、働
きをする六日の間は閉じ、安息日にはこれを開き、またついたちにはこ
れを開け。**二**君たる者は、外から門の廊をとおってはいり、門の柱のか
たわらに立て。そのとき祭司たちは、燔祭と酬恩祭とをささげ、彼は門
の敷居で、礼拝して出て行くのである。しかし門は夕暮まで閉じてはなら
ない。**三**国の民は安息日と、ついたちとに、その門の入口で主の前に礼拝
をせよ。**四**君たる者が、安息日に主にささげる燔祭は、六頭の無傷の小羊
と、一頭の無傷の雄羊とである。**五**また素祭は雄羊のために麦粉一エパ、
小羊のための素祭は、その人のささげうる程度とし、麦粉一エパに油一
ヒンを加えよ。**六**ついたちには無傷の雄牛の子一頭、六頭の小羊および一
頭の雄羊をささげよ。これらはすべて無傷のものでなければならない。**七**
素祭は雄牛のために麦粉一エパ、雄羊のために麦粉一エパ、小羊のために

は、その人のささげうる程度のものを供えよ。また麦粉一エパに油一ヒン
を加えよ。八君たる者がはいる時は門の廊の道からはいり、またその道か
ら出よ。
九国の民が、祝い日に主の前に出る時、礼拝のため、北の門の道からは
いる者は、南の門の道から出て行き、南の門の道からはいる者は、北
の門の道から出て行け。そのはいった門の道からは、帰ってはならない。
まっすぐに進んで、出て行かなければならない。一〇彼らがはいる時、君
たる者は、彼らと共にはいり、彼らが出る時、彼も出なければならない。
一一祭日と祝い日には、素祭として、若い雄牛のために麦粉一エパ、雄羊
のために麦粉一エパ、小羊のためには、その人のささげうる程度のものを
供え、麦粉一エパには油一ヒンを加えよ。一二また君たる者が、心から
の供え物として、燔祭または酬恩祭を主にささげる時は、彼のために東

に面した門を開け。彼は安息日に行うように、その燔祭と酬恩祭を供
え、そして退出する。その退出の後、門は閉ざされる。
一三彼は日ごとに一歳の無傷の小羊を燔祭として、主にささげなければ
ならない。すなわち朝ごとに、これをささげなければならない。一四彼は
朝ごとに、素祭をこれに添えてささげなければならない。すなわち麦粉一
エパの六分の一に、これを潤す油一ヒンの三分の一を、素祭として主に
ささげなければならない。これは常燔祭のおきてである。一五すなわち朝
ごとに常燔祭として、小羊と素祭と油とをささげなければならない。
一六主なる神は、こう言われる、君たる者が、もしその嗣業から、その子
のひとりに財産を与える時は、それはその子らの嗣業の所有となる。一
七しかし彼がその奴隷のひとりに、嗣業の一部分を与える時は、それは彼
の解放の年まで、その人に属していて、その後は君たる人に帰る。彼の

嗣業は、ただその子らにだけ伝わるべきである。一八君たる者はその民の
嗣業を取って、その財産を継がせないようにしてはならない。彼はただ、
自分の財産のうちから、その子らにその嗣業を、与えなければならない。
これはわが民のひとりでも、その財産を失わないためである」。
一九こうして彼はわたしを連れて、門のかたわらの入口から、北向きの
祭司の聖なる室に、はいらせた。見ると、西の奥の方に一つの場所があっ
た。二〇彼はわたしに言った、「これは祭司たちが愆祭および罪祭のものを
煮、素祭のものを焼く所である。これは外庭にそれらを携え出て、聖な
るべきことを、民にうつさないためである」。
二一彼はまたわたしを外庭に連れ出し、庭の四すみを通らせた。見よ、庭
のこのすみにも庭があり、また庭のかのすみにも庭があった。二二すなわち
庭の四すみに小さい庭があり、長さ四十キュビト、幅三十キュビトで、四

つとも同じ大きさである。二三その四つの小さい庭の内部の四方には、石
の壁があり、周囲の壁の下に、物を煮る所が設けてあった。二四彼はわ
たしに言った、「これらは宮の仕え人たちが、民のささげる犠牲のものを煮
る台所である」。

第四七章一そして彼はわたしを宮の戸口に帰らせた。見よ、水の宮の敷居
の下から、東の方へ流れていた。宮は東に面し、その水は、下から出て、
祭壇の南にある宮の敷居の南の端から、流れ下っていた。二彼は北の門
の道から、わたしを連れ出し、外をまわって、東に向かう外の門に行かせ
た。見よ、水は南の方から流れ出ていた。
三その人は東に進み、手に測りなわをもって一千キュビトを測り、わた
しを渡らせた。すると水はくるぶしに達した。四彼がまた一千キュビトを
測って、わたしを渡らせると、水はひざに達した。彼がまた一千キュビト

を測って、わたしを渡らせると、水は腰に達した。五彼がまた一千キュビ
トを測ると、渡り得ないほどの川になり、水は深くなって、泳げるほどの
水、越え得ないほどの川になった。六彼はわたしに「人の子よ、あなたは
これを見るか」と言った。
それから、彼はわたしを川の岸に沿って連れ帰った。七わたしが帰って
くると、見よ、川の岸のこなたかなたに、はなはだ多くの木があった。八彼
はわたしに言った、「この水は東の境に流れて行き、アラバに落ち下り、
その水が、よどんだ海にはいると、それは清くなる。九おおよそこの川の
流れる所では、もろもろの動く生き物が皆生き、また、はなはだ多くの
魚がいる。これはその水がはいると、海の水を清くするためである。この
川の流れる所では、すべてのものが生きている。一〇すなどる者が、海の
かたわらに立ち、エンゲデからエン・エグライムまで、網を張る所となる。

その魚は、大海の魚のように、その種類がはなはだ多い。一一ただし、その
沢と沼とは清められないで、塩地のままで残る。一二川のかたわら、その
岸のこなたかなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、そ
の実は絶えず、月ごとに新しい実がなる。これはその水が聖所から流れ
出るからである。その実は食用に供せられ、その葉は薬となる」。
一三主なる神は、こう言われる、「あなたがたがイスラエルの十二の部族
に、嗣業として土地を分け与えるには、その境を次のように定めなけれ
ばならない。ヨセフには二つの分を与えよ。一四あなたがたは、これを公平
に分けよ。これはわたしが、あなたがたの先祖に与えると誓ったもので、こ
れは嗣業として、あなたがたに属するものである。
一五その地の境はこのとおりである。北は大海からヘテロンの道を経
て、ハマテの入口およびゼダデに至り、一六またベロテおよびダマスコとハ

マテの境にあるシブライムに至り、ハウランの境にあるハザル・ハテコ
ンに及ぶ。
一七その境は海からダマスコの北の境にあるハザル・エノン
におよび、北の方はハマテがその境である。これが北の方である。
一八東の方は、ハウランとダマスコの間のハザル・エノンから、ギレ
アデとイスラエルの地との間の、ヨルダンに沿い、東の海に至り、タマ
ルに及ぶ。これが東の方である。
一九南の方はタマルからメリボテ・カデシの川に及び、そこからエジプ
トの川に沿って大海に至る。これが南の方である。
二〇西の方はハマテの入口に至る大海を境とする。これが西の方であ
る。
二一あなたがたはこのように、イスラエルの部族に従って、この地をあ
なたがたの間に分割せよ。
二二あなたがたは、くじをもって、これをあな

たがたのうちに分け、またあなたがたのうちにいて、あなたがたのうちに、
子を生んだ寄留の他国人のうちに分けて、嗣業とせよ。彼らは、あなた
がたには、イスラエルの人々のうちの本国人と同様である。彼らもあなた
がたと一緒にくじを引いて、イスラエルの部族のうちに嗣業を得るべきで
ある。二三他国人には、その住んでいる部族のうちで、その嗣業をこれに
与えなければならないと、主なる神は言われる。

第四八章一イスラエルの部族の名は次のとおりである。北の果からヘテ
ロンの道を経て、ハマテの入口に至り、ハマテに相対するダマスコの北の
境にあるハザル・エノンに及び、東の方から西の方へのびる地方、これ
がダンの分である。二ダンの領地に沿って、東の方から西の方へのびる
地方、これがアセルの分である。三アセルの領地に沿って、東の方から西
の方へのびる地方、これがナフタリの分である。四ナフタリの領地に沿っ

て、東の方から西の方へのびる地方、これがマナセの分である。五マナセ
の領地に沿って、東の方から西の方へのびる地方、これがエフライムの分
である。六エフライムの領地に沿って、東の方から西の方へのびる地方、
これがルベンの分である。七ルベンの領地に沿って、東の方から西の方
へのびる地方、これがユダの分である。
八ユダの領地に沿って、東の方から西の方へのびる地方は、あなたがた
のささげる献納地とせよ。その幅は二万五千キュビト、その東の方から
西の方へのびる長さは、部族の一つの分に同じで、聖所はその中にある。
九すなわちあなたがたの主にささげる献納地は長さ二万五千キュビト、幅
二万キュビトとである。一〇これが祭司への聖なる献納地である。すなわ
ち祭司の分は、北は二万五千キュビト、西は幅一万キュビト、東は幅一
万キュビト、南は長さ二万五千キュビトである。主の聖所はその中にあ

る。一一これはイスラエルの人々が迷い出た時、レビびとが迷ったように
迷ったことはなく、わが務を守り通したザドクの子孫のうちから、聖別
された祭司に属する。一二このようにレビびとの境に沿って、いと聖なる
地、すなわち聖なる献納地が、特別な分として彼らに帰属する。一三レビ
びとの分は祭司の所有地の境に沿って、長さ二万五千キュビト、幅一万
キュビト、すなわち、そのすべての長さ二万五千キュビト、幅二万キュビ
トである。一四彼らはこれを売ってはならない、また交換してはならない、
またその大事な分を手ばなしてはならない。これは主に属する聖なる物だ
からである。

一五その残りの地すなわち幅五千キュビト、長さ二万五千キュビトは町
のため、すみかのため、また郊外のための一般人の地所とせよ。町はその
中に置け。一六一般人の地所の広さは次のとおりである。すなわち北の方

四千五百キュビト、南の方四千五百キュビト、東の方四千五百キュビト、
西の方四千五百キュビトである。一七町は郊外を含む。郊外は北二百五十
キュビト、南二百五十キュビト、東二百五十キュビト、西二百五十キュ
ビトである。一八聖なる献納地に沿っている残りの地の長さは東へ一万
キュビト、西へ一万キュビトである。これは聖なる献納地に沿っており、
その産物は町の働き人の食物となる。一九町の働き人は、イスラエル
のすべての部族から出て、これを耕作するのである。二〇あなたがたがさ
さげる献納地の全体は二万五千キュビト四方である。これは町の所有地と
共に聖なる献納地である。

二一聖なる献納地と町の所有地との、こなたかなたの残りの地は、君た
る者に属する。これは聖なる献納地の二万五千キュビトに面して東の境
に至り、西はその二万五千キュビトに面して西の境に至り、部族の分に

沿うもので、君たる者に属する。聖なる献納地と、宮の聖所とは、その中
にある。二二町の所有地は、君たる者に属する部分の中にあり、そして君
たる者の分は、ユダの領地と、ベニヤミンの領地との間にある。
二三なお残りの部族では東の方から西の方に至る地方、これがベニヤミ
ンの分である。二四ベニヤミンの領地に沿って、東の方から西の方に至
る地方、これがシメオンの分である。二五シメオンの領地に沿って、東の
方から西の方に至る地方、これがイッサカルの分である。二六イッサカル
の領地に沿って、東の方から西の方に至る地方、これがゼブルンの分で
ある。二七ゼブルンの領地に沿って、東の方から西の方に至る地方、これ
がガドの分である。二八南の方はガドの領地に沿って、タマルからメリボ
テ・カデシの水に至り、そこからエジプトの川に沿って大海に至る。二九こ
れはあなたがたが、くじをもってイスラエルの部族のうちに分けて、嗣業

とすべき地である。これが彼らの分であると、主なる神は言われる。
三〇町の出口は次のとおりである。北の方の長さは四千五百キュビトで
ある。三一町の門はイスラエルの部族の名にしたがい、三つの門になって
いる。すなわちルベンの門、ユダの門、レビの門である。三二東の方は四
千五百キュビトであって、三つの門がある。すなわちヨセフの門、ベニヤミ
ンの門、ダンの門である。三三南の方は四千五百キュビトであって、三つ
の門がある。すなわちシメオンの門、イッサカルの門、ゼブルンの門であ
る。三四西の方は四千五百キュビトであって、三つの門がある。すなわちガ
ドの門、アセルの門、ナフタリの門である。三五町の周囲は一万八千キュ
ビトあり、この日から後、この町の名は『主そこにいます』と呼ばれる」。

ダニエル書

第一章一ユダの王エホヤキムの治世の第三年にバビロンの王ネブカデネ
ザルはエルサレムにきて、これを攻め囲んだ。二主はユダの王エホヤキム
と、神の宮の器具の一部とを、彼の手にわたされたので、彼はこれをシナ
ルの地の自分の神の宮に携えゆき、その器具を自分の神の蔵に納めた。三
時に王は宦官の長アシペナズに、イスラエルの人々の中から、王の血統
の者と、貴族たる者数人とを、連れて来るように命じた。四すなわち身に傷
がなく、容姿が美しく、すべての知恵にさとく、知識があって、思慮深く、
王の宮に仕えるに足る若者を連れてこさせ、これにカルデヤびとの文学と
言語とを学ばせようとした。五そして王は王の食べる食物と、王の飲む酒
の中から、日々の分を彼らに与えて、三年のあいだ彼らを養い育て、そ

の後、彼らをして王の前に、はべらせようとした。六彼らのうちに、ユダ
の部族のダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤがあった。七宦官の
長は彼らに名を与えて、ダニエルをベルテシャザルと名づけ、ハナニヤを
シャデラクと名づけ、ミシャエルをメシャクと名づけ、アザリヤをアベデ
ネゴと名づけた。

八ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと、
心に思い定めたので、自分を汚させることのないように、宦官の長に求
めた。九神はダニエルをして、宦官の長の前に、恵みとあわれみとを得さ
せられたので、一〇宦官の長はダニエルに言った、「わが主なる王は、あ
なたがたの食べ物と、飲み物とを定められたので、わたしはあなたがたの
健康の状態が、同年輩の若者たちよりも悪いと、王が見られることを恐
れるのです。そうすればあなたがたのために、わたしのこうべが、王の前

に危くなるでしょう」。一一そこでダニエルは宦官の長がダニエル、ハナ
ニヤ、ミシャエルおよびアザリヤの上に立てた家令に言った、一二「どうぞ、
しもべらを十日の間ためしてください。わたしたちにただ野菜を与えて
食べさせ、水を飲ませ、一三そしてわたしたちの顔色と、王の食物を食べ
る若者の顔色とをくらべて見て、あなたの見るところにしたがって、しも
べらを扱ってください」。一四家令はこの事について彼らの言うところを
聞きいれ、十日の間、彼らをためした。一五十日の終りになってみると、
彼らの顔色は王の食物を食べたすべての若者よりも美しく、また肉も
肥え太っていた。一六それで家令は彼らの食物と、彼らの飲むべき酒とを
除いて、彼らに野菜を与えた。

一七この四人の者には、神は知識を与え、すべての文学と知恵にさとい
者とされた。ダニエルはまたすべての幻と夢とを理解した。一八さて、王

が命じたところの若者を召し入れるまでの日数が過ぎたので、宦官の町は
彼らをネブカデネザルの前に連れていった。一九王が彼らと語ってみると、
彼らすべての中にはダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤにならぶ
者がなかったので、彼らは王の前にはべることとなった。二〇王が彼らに
さまざまの事を尋ねてみると、彼らは知恵と理解において、全国の博士、
法術士にまさること十倍であった。二一ダニエルはクロス王の元年まで
仕えていた。

第二章一ネブカデネザルの治世の第二年に、ネブカデネザルは夢を見、そ
のために心に思い悩んで眠ることができなかった。二そこで王は命じて
王のためにその夢を解かせようと、博士、法術士、魔術士、カルデヤびと
を召させたので、彼らはきて王の前に立った。三王は彼らにむかって、「わ
たしは夢を見たが、その夢を知ろうと心に思い悩んでいる」と言ったの

で、四カルデヤびとらはアラム語で王に言った、「王よ、とこしえに生きな
がらえられますように。どうぞしもべらにその夢をお話しください。わた
したちはその解き明かしを申しあげましょう」。五王は答えてカルデヤびと
に言った、「わたしの言うことは必ず行う。あなたがたがもしその夢と、
その解き明かしを、わたしに示さないならば、あなたがたの身は切り裂か
れ、あなたがたの家は滅ぼされる。六しかし、その夢とその解き明かしと
を示すならば、贈り物と報酬と大いなる栄誉とを、わたしから受けるだ
ろう。それゆえその夢とその解き明かしとを、わたしに示しなさい」。七彼
らは再び答えて言った、「王よ、しもべらにその夢をお話しください。そ
うすればわたしたちはその解き明かしを示しましょう」。八王は答えて言っ
た、「あなたがたはわたしが言ったことは、必ず行うことを承知している
ので、時を延ばそうとしているのを、わたしは確かに知っている。九もし

その夢をわたしに示さないならば、あなたがたの受ける刑罰はただ一つあ
るのみだ。あなたがたは一致して、偽りと、欺きの言葉をわたしの前に
述べて、時の変るのを待とうとしているのだ。まずその夢をわたしに示し
なさい。そうすれば、わたしはあなたがたがその解き明かしをも、示しう
ることを知るだろう」。一〇カルデヤびとらは王の前に答えて言った、「世
の中には王のその要求に応じうる者はひとりもありません。どんな大い
なる力ある王でも、このような事を、博士、法術士、カルデヤびとに尋
ねた者はありませんでした。一一王の尋ねられる事はむずかしい事であっ
て、肉なる者と共におられない神々を除いては、王の前にこれを示しうる
者はないでしょう」。

一二これによって王は怒り、かつ大いに憤り、バビロンの知者をすべ
て滅ぼせと命じた。一三この命令が発せられたので、知者らは殺されるこ

とになった。またダニエルとその同僚をも殺そうと求めた。一四そして王
の侍衛の長アリオクが、バビロンの知者らを殺そうと出てきたので、ダニ
エルは思慮と知恵とをもってこれに応答した。一五すなわち王の高官アリ
オクに「どうして王はそんなにきびしい命令を出されたのですか」と言っ
た。アリオクがその事をダニエルに告げ知らせると、一六ダニエルは王のと
ころへはいっていって、その解き明かしを示すために、しばらくの時を与
えられるよう王に願った。

一七それからダニエルは家に帰り、同僚のハナニヤ、ミシャエルおよび
アザリヤにこの事を告げ知らせ、一八共にこの秘密について天の神のあわ
れみを請い、ダニエルとその同僚とが、他のバビロンの知者と共に滅ぼさ
れることのないように求めた。一九ついに夜の幻のうちにこの秘密がダ
ニエルに示されたので、ダニエルは天の神をほめたたえた。

二〇ダニエルは言(い)った、
「神(かみ)のみ名(な)は永遠(えいえん)より永遠(えいえん)に至(いた)るまでほむべきかな、
知恵(ちえ)と権能(けんのう)とは神(かみ)のものである。
二一神(かみ)は時(とき)と季節(きせつ)とを変(へん)じ、
王(おう)を廃(はい)し、王(おう)を立(た)て、
知者(ちしゃ)に知恵(ちえ)を与(あた)え、
賢者(けんじゃ)に知識(ちしき)を授(さず)けられる。
二二神(かみ)は深妙(しんみょう)、秘密(ひみつ)の事(こと)をあらわし、
暗黒(あんこく)にあるものを知(し)り、
光(ひかり)をご自身(じしん)のうちに宿(やど)す。
二三わが先祖(せんぞ)たちの神(かみ)よ、
あなたはわたしに知恵(ちえ)と力(ちから)とを賜(たま)い、

今われわれがあなたに請い求めたところのものをわたしに示し、
王の求めたことをわれわれに示されたので、
わたしはあなたに感謝し、あなたをさんびします」。
二四そこでダニエルは、王がバビロンの知者たちを滅ぼすことを命じて
おいたアリオクのもとへ行って、彼にこう言った、「バビロンの知者たちを
滅ぼしてはなりません。わたしを王の前に連れて行ってください。わたし
はその解き明かしを王に示します」。
二五アリオクは急いでダニエルを王の前に連れて行き、王にこう言った、
「ユダから捕え移した者の中に、その解き明かしを王にお知らせすること
のできる、ひとりの人を見つけました」。二六王は答えて、ベルテシャザルと
いう名のダニエルに言った、「あなたはわたしが見た夢と、その解き明かし
とをわたしに知らせることができるのか」。二七ダニエルは王に答えて言っ

た、「王が求められる秘密は、知者、法術士、博士、占い師など、これを
王に示すことはできません。二八しかし秘密をあらわすひとりの神が天に
おられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされた
のです。あなたの夢と、あなたが床にあって見た脳中の幻はこれです。
二九王よ、あなたが床におられたとき、この後どんな事があろうかと、思
いまわされたが、秘密をあらわされるかたが、将来どんな事が起るかを、
あなたに知らされたのです。三〇この秘密をわたしにあらわされたのは、す
べての生ける者にまさって、わたしに知恵があるためではなく、ただその
解き明かしを、王にお知らせすることによって、あなたが心に思われたこ
とを、お知りになるためです。

三一王よ、あなたは一つの大いなる像が、あなたの前に立っているのを見
られました。その像は大きく、非常に光り輝いて、恐ろしい外観をもっ

ていました。三二その像の頭は純金、胸と両腕とは銀、腹と、ももとは
青銅、三三すねは鉄、足の一部は鉄、一部は粘土です。三四あなたが見てお
られたとき、一つの石が人手によらずに切り出されて、その像の鉄と粘土
との足を撃ち、これを砕きました。三五こうして鉄と、粘土と、青銅と、銀
と、金とはみな共に砕けて、夏の打ち場のもみがらのようになり、風に吹
き払われて、あとかたもなくなりました。ところがその像を撃った石は、
大きな山となって全地に満ちました。

三六これがその夢です。今わたしたちはその解き明かしを、王の前に申
しあげましょう。三七王よ、あなたは諸王の王であって、天の神はあなた
に国と力と勢いと栄えとを賜い、三八また人の子ら、野の獣、空の鳥
はどこにいるものでも、皆これをあなたの手に与えて、ことごとく治めさ
せられました。あなたはあの金の頭です。三九あなたの後にあなたに劣る

一つの国が起ります。また第三に青銅の国が起って、全世界を治めるよう
になります。
四〇
第四の国は鉄のように強いでしょう。鉄はよくすべての
物をこわし砕くからです。鉄がこれらをことごとく打ち砕くように、その
国はこわし砕くでしょう。
四一
あなたはその足と足の指を見られましたが、
その一部は陶器師の粘土、一部は鉄であったので、それは分裂した国をさ
します。しかしあなたが鉄と粘土との混じったのを見られたように、その
国には鉄の強さがあるでしょう。
四二
その足の指の一部は鉄、一部は粘土
であったように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう。
四三
あなた
が鉄と粘土との混じったのを見られたように、それらは婚姻によって、互
に混ざるでしょう。しかし鉄と粘土とは相混じらないように、かれとこれ
と相合することはありません。
四四
それらの王たちの世に、天の神は一つ
の国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他

の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすで
しょう。そしてこの国は立って永遠に至るのです。四五一つの石が人手に
よらずに山から切り出され、その石が鉄と、青銅と、粘土と、銀と、金と
を打ち砕いたのを、あなたが見られたのはこの事です。大いなる神がこの
後に起るべきことを、王に知らされたのです。その夢はまことであって、
この解き明かしは確かです」。
四六そこでネブカデネザル王はひれ伏して、ダニエルを拝し、供え物と
薫香とを、彼にささげることを命じた。四七そして王はダニエルに答えて
言った、「あなたがこの秘密をあらわすことができたのを見ると、まことに、
あなたがたの神は神々の神、王たちの主であって、秘密をあらわされるか
ただ」。四八こうして王はダニエルに高い位を授け、多くの大いなる贈り
物を与えて、彼をバビロン全州の総督とし、またバビロンの知者たちを

統轄する者の長とした。四九王はまたダニエルの願いによって、シャデラ
クとメシャクとアベデネゴを任命して、バビロン州の事務をつかさどらせ
た。ただしダニエルは王の宮にとどまっていた。
第三章一ネブカデネザル王は一つの金の像を造った。その高さは六十キ
ユビト、その幅は六キュビトで、彼はこれをバビロン州のドラの平野に
立てた。二そしてネブカデネザル王は、総督、長官、知事、参議、庫官、
法官、高僧および諸州の官吏たちを召し集め、ネブカデネザル王の立てた
この像の落成式に臨ませようとした。三そこで、総督、長官、知事、参議、
庫官、法官、高僧および諸州の官吏たちは、ネブカデネザル王の立てた
像の落成式に臨み、そのネブカデネザルの立てた像の前に立った。四時に
伝令者は大声に呼ばわって言った、「諸民、諸族、諸国語の者よ、あなたが
たにこう命じられる。五角笛、横笛、琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろ

もろの楽器の音を聞く時は、ひれ伏してネブカデネザル王の立てた金の像
を拝まなければならない。六だれでもひれ伏して拝まない者は、ただちに
火の燃える炉の中に投げ込まれる」と。七そこで民らはみな、角笛、横笛、
琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの楽器の音を聞くや、諸民、諸族、
諸国語の者たちはみな、ひれ伏して、ネブカデネザル王の立てた金の像を
拝んだ。

八その時、あるカルデヤびとらが進みきて、ユダヤ人をあしざまに訴え
た。九すなわち彼らはネブカデネザル王に言った、「王よ、とこしえに生き
ながらえられますように。一〇王よ、あなたは命令を出して仰せられまし
た。すべて、角笛、横笛、琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの
楽器の音を聞く者は皆、ひれ伏して金の像を拝まなければならない。一一
また、だれでもひれ伏して拝まない者はみな、火の燃える炉の中に投げ込

まれると。一二ここにあなたが任命して、バビロン州の事務をつかさどら
せられているユダヤ人シャデラク、メシャクおよびアベデネゴがおります。
王よ、この人々はあなたを尊ばず、あなたの神々にも仕えず、あなたの
立てられた金の像をも拝もうとしません」。
一三そこでネブカデネザルは怒りかつ憤って、シャデラク、メシャク
およびアベデネゴを連れてこいと命じたので、この人々を王の前に連れて
きた。一四ネブカデネザルは彼らに言った、「シャデラク、メシャク、アベ
デネゴよ、あなたがたがわが神々に仕えず、またわたしの立てた金の像を
拝まないとは、ほんとうなのか。一五あなたがたがもし、角笛、横笛、琴、
三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの楽器の音を聞くときにひれ伏して、
わたしが立てた像を、ただちに拝むならば、それでよろしい。しかし、拝
むことをしないならば、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。いっ

たい、どの神が、わたしの手からあなたがたを救うことができようか」。
一六シャデラク、メシャクおよびアベデネゴは王に答えて言った、「ネブ
カデネザルよ、この事について、お答えする必要はありません。一七もしそ
んなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、
わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わた
したちを救い出されます。一八たといそうでなくても、王よ、ご承知くだ
さい。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を
拝みません」。
一九そこでネブカデネザルは怒りに満ち、シャデラク、メシャクおよびア
ベデネゴにむかって、顔色を変え、炉を平常よりも七倍熱くせよと命じ
た。二〇またその軍勢の中の力の強い人々を呼んで、シャデラク、メシャ
クおよびアベデネゴを縛って、彼らを火の燃える炉の中に投げ込めと命じ

た。二一そこでこの人々は、外套、下着、帽子、その他の衣服のまま縛ら
れて、火の燃える炉の中に投げ込まれた。二二王の命令はきびしく、かつ
炉は、はなはだしく熱していたので、シャデラク、メシャクおよびアベデネ
ゴを引きつれていった人々は、その火炎に焼き殺された。二三シャデラク、
メシャク、アベデネゴの三人は縛られたままで、火の燃える炉の中に落ち
込んだ。
二四その時、ネブカデネザル王は驚いて急ぎ立ちあがり、大臣たちに
言った、「われわれはあの三人を縛って、火の中に投げ入れたではないか」。
彼らは王に答えて言った、「王よ、そのとおりです」。二五王は答えて言っ
た、「しかし、わたしの見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩い
ているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のよ
うだ」。

二六そこでネブカデネザルは、その火の燃える炉の入口に近寄って、「い
と高き神のしもべシャデラク、メシャク、アベデネゴよ、出てきなさい」と
言ったので、シャデラク、メシャク、アベデネゴはその火の中から出てき
た。二七総督、長官、知事および王の大臣たちも集まってきて、この人々
を見たが、火は彼らの身にはなんの力もなく、その頭の毛は焼けず、そ
の外套はそこなわれず、火のにおいもこれに付かなかった。二八ネブカデネ
ザルは言った、「シャデラク、メシャク、アベデネゴの神はほむべきかな。
神はその使者をつかわして、自分に寄り頼むしもべらを救った。また彼ら
は自分の神以外の神に仕え、拝むよりも、むしろ王の命令を無視し、自分
の身をも捨てようとしたのだ。二九それでわたしはいま命令を下す。諸民、
諸族、諸国語の者のうちだれでも、シャデラク、メシャク、アベデネゴの
神をののしる者があるならば、その身は切り裂かれ、その家は滅ぼされな

ければならない。このように救を施すことのできる神は、ほかにないか
らだ」。三〇こうして、王はシャデラク、メシャクおよびアベデネゴの位を
進めて、バビロン州におらせた。

第四章一ネブカデネザル王は全世界に住む諸民、諸族、諸国語の者に告
げる。どうか、あなたがたに平安が増すように。二いと高き神はわたしに
しるしと奇跡とを行われた。わたしはこれを知らせたいと思う。

三ああ、そのしるしの大いなること、
ああ、その奇跡のすばらしいこと、
その国は永遠の国、
その主権は世々に及ぶ。

四われネブカデネザルはわが家に安らかにおり、わが宮にあって栄えて
いたが、五わたしは一つの夢を見て、そのために恐れた。すなわち床にあっ

て、その事を思いめぐらし、わが脳中の幻のために心を悩ました。六
そこでわたしは命令を下し、バビロンの知者をことごとくわが前に召し寄
せて、その夢の解き明かしを示させようとした。七すると、博士、法術士、
カルデヤびと、占い師たちがきたので、わたしはその夢を彼らに語った
が、彼らはその解き明かしを示すことができなかった。八最後にダニエルが
わたしの前にきた、――彼の名はわが神の名にちなんで、ベルテシャザル
ととなえられ、彼のうちには聖なる神の霊がやどっていた――わたしは彼
にその夢を語って言った、九「博士の長ベルテシャザルよ、わたしは知っ
ている。聖なる神の霊があなたのうちにやどっているから、どんな秘密も
あなたにはむずかしいことはない。ここにわたしが見た夢がある。その解
き明かしをわたしに告げなさい。一〇わたしが床にあって見た脳中の幻
はこれである。わたしが見たのに、地の中央に一本の木があって、そのた

けが高かったが、一一その木は成長して強くなり、天に達するほどの高さ
になって、地の果までも見えわたり、一二その葉は美しく、その実は豊か
で、すべての者がその中から食物を獲、また野の獣はその陰にやどり、
空の鳥はその枝にすみ、すべての肉なる者はこれによって養われた。
一三わたしが床にあって見た脳中の幻の中に、ひとりの警護者、ひと
りの聖者の天から下るのを見たが、一四彼は声高く呼ばわって、こう言っ
た、『この木を切り倒し、その枝を切りはらい、その葉をゆり落し、その実を
打ち散らし、獣をその下から逃げ去らせ、鳥をその枝から飛び去らせよ。
一五ただしその根の切り株を地に残し、それに鉄と青銅のなわをかけて、野
の若草の中におき、天からくだる露にぬれさせ、また地の草の中で、獣
と共にその分にあずからせよ。一六またその心は変って人間の心のよう
でなく、獣の心が与えられて、七つの時を過ごさせよ。一七この宣言は

警護者たちの命令によるもの、この決定は聖者たちの言葉によるもので、
いと高き者が、人間の国を治めて、自分の意のままにこれを人に与え、ま
た人のうちの最も卑しい者を、その上に立てられるという事を、すべて
の者に知らせるためである』と。
一八われネブカデネザル王はこの夢を見
た。ベルテシャザルよ、あなたはその解き明かしをわたしに告げなさい。わ
が国の知者たちは、いずれもその解き明かしを、わたしに示すことができ
なかったけれども、あなたにはそれができる。あなたのうちには、聖なる
神の霊がやどっているからだ」。
一九その時、その名をベルテシャザルととなえるダニエルは、しばらくの
あいだ驚き、思い悩んだので、王は彼に告げて言った、「ベルテシャザル
よ、あなたはこの夢と、その解き明かしのために、悩むには及ばない」。べ
ルテシャザルは答えて言った、「わが主よ、どうか、この夢は、あなたを憎

む者にかかわるように。この解き明かしは、あなたの敵に臨むように。二〇
あなたが見られた木、すなわちその成長して強くなり、天に達するほどの
高さになって、地の果までも見えわたり、二一その葉は美しく、その実は
豊かで、すべての者がその中から食物を獲、また野の獣がその陰にやど
り、空の鳥がその枝に住んだ木、二二王よ、それはすなわちあなたです。あ
なたは成長して強くなり、天に達するほどに大きくなり、あなたの主権
は地の果にまで及びました。二三ところが、王はひとりの警護者、ひとり
の聖者が、天から下って、こう言うのを見られました、『この木を切り倒
して、これを滅ぼせ。ただしその根の切り株を地に残し、それに鉄と青銅
のなわをかけて、野の若草の中におき、天からくだる露にぬれさせ、また
野の獣と共にその分にあずからせて、七つの時を過ごさせよ』と。二四王
よ、その解き明かしはこうです。すなわちこれはいと高き者の命令であっ

て、わが主なる王に臨まんとするものです。二五すなわちあなたは追われ
て世の人を離れ、野の獣と共におり、牛のように草を食い、天からくだ
る露にぬれるでしょう。こうして七つの時が過ぎて、ついにあなたは、い
と高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられる
ことを知るに至るでしょう。二六また彼らはその木の根の切り株を残しお
けと命じたので、あなたが、天はまことの支配者であるということを知っ
た後、あなたの国はあなたに確保されるでしょう。二七それゆえ王よ、あな
たはわたしの勧告をいれ、義を行って罪を離れ、しえたげられる者をあわ
れんで、不義を離れなさい。そうすれば、あるいはあなたの繁栄が、長く
続くかもしれません」。

二八この事は皆ネブカデネザル王に臨んだ。二九十二か月を経て後、王
がバビロンの王宮の屋上を歩いていたとき、三〇王は自ら言った、「こ

の大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもって建てた王城であっ
て、わが威光を輝かすものではないか」。
三一その言葉がなお王の口にあるうちに、天から声がくだって言った、「ネブカデネザル王よ、あなたに告げる。国はあなたを離れ去った。
三二あなたは、追われて世の人を離れ、野の獣と共におり、牛のように草を食い、こうして七つの時を経て、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至るだろう」。
三三この言葉は、ただちにネブカデネザルに成就した。彼は追われて世の人を離れ、牛のように草を食い、その身は天からくだる露にぬれ、ついにその毛は、わしの羽のようになり、そのつめは鳥のつめのようになった。
三四こうしてその期間が満ちた後、われネブカデネザルは、目をあげて天を仰ぎ見ると、わたしの理性が自分に帰ったので、わたしはいと高き者を

ほめ、その永遠に生ける者をさんびし、かつあがめた。
その主権は永遠の主権、
その国は世々かぎりなく、
三五地に住む民はすべて無き者のように思われ、
天の衆群にも、
地に住む民にも、
彼はその意のままに事を行われる。
だれも彼の手をおさえて
「あなたは何をするのか」と言いうる者はない。
三六この時わたしの理性は自分に帰り、またわが国の光栄のために、わが
尊厳と光輝とが、わたしに帰った。わが大臣、わが貴族らもきて、わたし
に求め、わたしは国の上に堅く立って、前にもまさって大いなる者となっ

た。三七そこでわれネブカデネザルは今、天の王をほめたたえ、かつあが
めたてまつる。そのみわざはことごとく真実で、その道は正しく、高ぶり
歩む者を低くされる。

第五章一ベルシャザル王は、その大臣一千人のために、盛んな酒宴を設
け、その一千人の前で酒を飲んでいた。
二酒が進んだとき、ベルシャザルは、その父ネブカデネザルがエルサレ
ムの神殿から取ってきた金銀の器を持ってこいと命じた。王とその大臣
たち、および王の妻とそばめらが、これをもって酒を飲むためであった。
三そこで人々はそのエルサレムの神の宮すなわち神殿から取ってきた金銀
の器を持ってきたので、王とその大臣たち、および王の妻とそばめらは、
これをもって飲んだ。四すなわち彼らは酒を飲んで、金、銀、青銅、鉄、
木、石などの神々をほめたたえた。

五すると突然人の手の指があらわれて、燭台と相対する王の宮殿の
塗り壁に物を書いた。王はその物を書いた手の先を見た。六そのために王
の顔色は変り、その心は思い悩んで乱れ、その腰のつがいはゆるみ、ひざ
は震えて互に打ちあった。七王は大声に呼ばわって、法術士、カルデヤ
びと、占い師らを召してこさせた。王はバビロンの知者たちに告げて言っ
た、「この文字を読み、その解き明かしをわたしに示す者には紫の衣を
着せ、首に金の鎖をかけさせて、国の第三のつかさとしよう」と。八王の
知者たちは皆はいってきた。しかしその文字を読むことができず、またそ
の解き明かしを王に示すことができなかったので、九ベルシャザル王は大
いに思い悩んで、その顔色は変り、王の大臣たちも当惑した。
一〇時に王妃は王と大臣たちの言葉を聞いて、その宴会場にはいってき
た。そして王妃は言った、「王よ、どうか、とこしえに生きながらえられま

すように。あなたは心に思い悩んではなりません。また顔色を変えるに
は及びません。一一あなたの国には、聖なる神の霊のやどっているひとり
の人がおります。あなたの父の代に、彼は、明知、分別および神のような
知恵のあることをあらわしました。あなたの父ネブカデネザル王は、彼を
立てて、博士、法術士、カルデヤびと、占い師らの長とされました。一
二彼は、王がベルテシャザルという名を与えたダニエルという者ですが、こ
のダニエルには、すぐれた霊、知識、分別があって、夢を解き、なぞを解
き、難問を解くことができます。ゆえにダニエルを召しなさい。彼はその
解き明かしを示すでしょう」。

一三そこでダニエルは王の前に召された。王はダニエルに言った、「あな
たは、わが父の王が、ユダからひきつれてきたユダの捕囚のひとりなのか。
一四聞くところによると、あなたのうちには、聖なる神の霊がやどっていて、

明知、分別および非凡な知恵があるそうだ。一五わたしは、知者、法術士
らを、わが前に召しよせて、この文字を読ませ、その解き明かしを示させよ
うとしたが、彼らは、この事の解き明かしを示すことができなかった。一
六しかしまた聞くところによると、あなたは解き明かしをなし、かつ難問
を解くことができるそうだ。それで、あなたがもし、この文字を読み、その
解き明かしをわたしに示すことができたなら、あなたに紫の衣を着せ、
金の鎖を首にかけさせて、この国の第三のつかさとしよう」。
一七ダニエルは王の前に答えて言った、「あなたの賜物は、あなたご自身に
とっておき、あなたの贈り物は、他人にお与えください。それでも、わたし
は王のためにその文字を読み、その解き明かしをお知らせいたしましょう。
一八王よ、いと高き神はあなたの父ネブカデネザルに国と権勢と、光栄と
尊厳とを賜いました。一九彼に権勢を賜わったことによって、諸民、諸族、

諸国語の者はみな、彼の前におののき恐れました。彼は自分の欲する者を
殺し、自分の欲する者を生かし、自分の欲する者を上げ、自分の欲する者
を下しました。
二〇しかし彼は心に高ぶり、かたくなになり、ごうまんに
ふるまったので、王位からしりぞけられ、その光栄を奪われ、
二一追われて
世の人と離れ、その思いは獣のようになり、そのすまいは野ろばと共に
あり、牛のように草を食い、その身は天からくだる露にぬれ、こうしてつ
いに彼は、いと高き神が人間の国を治めて、自分の意のままに人を立てら
れるということを、知るようになりました。
二二ベルシャザルよ、あなたは
彼の子であって、この事をことごとく知っていながら、なお心を低くせ
ず、
二三かえって天の主にむかって、みずから高ぶり、その宮の器物をあ
なたの前に持ってこさせ、あなたとあなたの大臣たちと、あなたの妻とそ
ばめたちは、それをもって酒を飲み、そしてあなたは見ることも、聞くこ

とも、物を知ることもできない金、銀、青銅、鉄、木、石の神々をほめた
たえたが、あなたの命をその手ににぎり、あなたのすべての道をつかさど
られる神をあがめようとはしなかった。
二四それゆえ、彼の前からこの手が出てきて、この文字が書きしるされた
のです。二五そのしるされた文字はこうです。メネ、メネ、テケル、ウパル
シン。二六その事の解き明かしはこうです、メネは神があなたの治世を数
えて、これをその終りに至らせたことをいうのです。二七テケルは、あなた
がはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうので
す。二八ペレスは、あなたの国が分かたれて、メデアとペルシャの人々に
与えられることをいうのです」。
二九そこでベルシャザルは命じて、ダニエルに紫の衣を着せ、金の鎖
をその首にかけさせ、彼について布告を発して、彼は国の第三のつかさで

あると言わせた。
三〇カルデヤびとの王ベルシャザルは、その夜のうちに殺され、三一メデ
アびとダリヨスが、その国を受けた。この時ダリヨスは、おおよそ六十二
歳であった。
第六章一ダリヨスは全国を治めるために、その国に百二十人の総督を立
てることをよしとし、二また彼らの上に三人の総監を立てた。ダニエルは
そのひとりであった。これは総督たちをして、この三人の前に、その職務
に関する報告をさせて、王に損失の及ぶことのないようにするためであっ
た。三ダニエルは彼のうちにあるすぐれた霊のゆえに、他のすべての総監
および総督たちにまさっていたので、王は彼を立てて全国を治めさせよう
とした。四そこで総監および総督らは、国事についてダニエルを訴えるべ
き口実を得ようとしたが、訴えるべきなんの口実も、なんのとがをも見い

だすことができなかった。それは彼が忠信な人であって、その身になん
のあやまちも、とがも見いだされなかったからである。五そこでその人々
は言った、「われわれはダニエルの神の律法に関して、彼を訴える口実を
得るのでなければ、ついに彼を訴えることはできまい」と。
六こうして総監と総督らは、王のもとに集まってきて、王に言った、「ダ
リヨス王よ、どうかとこしえに生きながらえられますように。七国の総監、
長官および総督、参議および知事らは、相はかって、王が一つのおきて
を立て、一つの禁令を定められるよう求めることになりました。王よ、そ
れはこうです。すなわち今から三十日の間は、ただあなたにのみ願い事
をさせ、もしあなたをおいて、神または人にこれをなす者があれば、すべて
その者を、ししの穴に投げ入れるというのです。八それで王よ、その禁令
を定め、その文書に署名して、メデアとペルシャの変ることのない法律の

ごとく、これを変えることのできないようにしてください」。九そこでダリ
ヨス王は、その禁令の文書に署名した。
一〇ダニエルは、その文書の署名されたことを知って家に帰り、二階の
へやの、エルサレムに向かって窓の開かれた所で、以前からおこなってい
たように、一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した。
一一そこでその人々は集まってきて、ダニエルがその神の前に祈り、かつ
求めていることを見たので、一二彼らは王の前にきて、王の禁令について
奏上して言った、「王よ、あなたは禁令に署名して、今から三十日の間
は、ただあなたにのみ願い事をさせ、もしあなたをおいて、神または人に、
これをなす者があれば、すべてその者を、ししの穴に投げ入れると、定め
られたではありませんか」。王は答えて言った、「その事は確かであって、
メデアとペルシャの法律のごとく、変えることのできないものだ」。一三彼

らは王の前に答えて言った、「王よ、ユダから引いてきた捕囚のひとりで
ある、かのダニエルは、あなたをも、あなたの署名された禁令をも顧み
ず、一日に三度ずつ、祈をささげています」。
一四王はこの言葉を聞いて大いに憂え、ダニエルを救おうと心を用い、
日の入るまで、彼を救い出すことに努めた。一五時にその人々は、また王
のもとに集まってきて、王に言った、「王よ、メデアとペルシャの法律によ
れば、王の立てた禁令、または、おきては変えることのできないものであ
ることを、ご承知ください」。
一六そこで王は命令を下したので、ダニエルは引き出されて、ししの穴
に投げ入れられた。王はダニエルに言った、「どうか、あなたの常に仕える
神が、あなたを救われるように」。一七そして一つの石を持ってきて、穴の
口をふさいだので、王は自分の印と、大臣らの印をもって、これに封印し

た。これはダニエルの処置を変えることのないようにするためであった。一
八こうして王はその宮殿に帰ったが、その夜は食をとらず、また、そば
めたちを召し寄せず、全く眠ることもしなかった。
一九こうして王は朝まだき起きて、ししの穴へ急いで行ったが、二〇ダニ
エルのいる穴に近づいたとき、悲しげな声をあげて呼ばわり、ダニエルに
言った、「生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあな
たを救って、ししの害を免れさせることができたか」。二一ダニエルは王
に言った、「王よ、どうか、とこしえに生きながらえられますように。二二わ
たしの神はその使をおくって、ししの口を閉ざされたので、ししはわたし
を害しませんでした。これはわたしに罪のないことが、神の前に認められ
たからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事をしなかったの
です」。二三そこで王は大いに喜び、ダニエルを穴の中から出せと命じた

ので、ダニエルは穴の中から出されたが、その身になんの害をも受けてい
なかった。これは彼が自分の神を頼みとしていたからである。二四王はま
た命令を下して、ダニエルをあしざまに訴えた人々を引いてこさせ、彼
らをその妻子と共に、ししの穴に投げ入れさせた。彼らが穴の底に達しな
いうちに、ししは彼らにとびかかって、その骨までもかみ砕いた。
二五そこでダリヨス王は全世界に住む諸民、諸族、諸国語の者に詔
を書きおくって言った、「どうか、あなたがたに平安が増すように。二六わ
たしは命令を出す。わが国のすべての州の人は、皆ダニエルの神を、お
ののき恐れなければならない。

彼は生ける神であって、
とこしえに変ることなく、
その国は滅びず、その主権は終りまで続く。

二七彼は救を施し、助けをなし、
天においても、地においても、
しるしと奇跡とをおこない、
ダニエルを救って、
ししの力をのがれさせたかたである」。
二八こうして、このダニエルはダリヨスの世と、ペルシャ人クロスの世に
おいて栄えた。
第七章一バビロンの王ベルシャザルの元年に、ダニエルは床にあって夢
を見、また脳中に幻を得たので、彼はその夢をしるして、その事の大意
を述べた。二ダニエルは述べて言った、「わたしは夜の幻のうちに見た。
見よ、天の四方からの風が大海をかきたてると、三四つの大きな獣が海
からあがってきた。その形は、おのおの異なり、四第一のものは、ししの

ようで、わしの翼をもっていたが、わたしが見ていると、その翼は抜きと
られ、また地から起されて、人のように二本の足で立たせられ、かつ人の
心が与えられた。
五 見よ、第二の獣は熊のようであった。これはそのか
らだの一方をあげ、その口の歯の間に、三本の肋骨をくわえていたが、こ
れに向かって『起きあがって、多くの肉を食らえ』と言う声があった。
六 そ
の後わたしが見たのは、ひょうのような獣で、その背には鳥の翼が四つ
あった。またこの獣には四つの頭があり、主権が与えられた。
七 その後
わたしが夜の幻のうちに見た第四の獣は、恐ろしい、ものすごい、非常
に強いもので、大きな鉄の歯があり、食らい、かつ、かみ砕いて、その残り
を足で踏みつけた。これは、その前に出たすべての獣と違って、十の角
を持っていた。
八 わたしが、その角を注意して見ていると、その中に、ま
た一つの小さい角が出てきたが、この小さい角のために、さきの角のうち

三つがその根から抜け落ちた。見よ、この小さい角には、人の目のような
目があり、また大きな事を語る口があった。九わたしが見ていると、
もろもろのみ座が設けられて、
日の老いたる者が座しておられた。
その衣は雪のように白く、
頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。
そのみ座は火の炎であり、
その車輪は燃える火であった。
一〇彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。
彼に仕える者は千々、
彼の前にはべる者は万々、
審判を行う者はその席に着き、

かずかずの書き物が開かれた。
一一わたしは、その角の語る大いなる言葉の声がするので見ていたが、わた
しが見ている間にその獣は殺され、そのからだはそこなわれて、燃える
火に投げ入れられた。一二その他の獣はその主権を奪われたが、その命
は、時と季節の来るまで延ばされた。一三わたしはまた夜の幻のうちに
見ていると、
見よ、人の子のような者が、
天の雲に乗ってきて、
日の老いたる者のもとに来ると、
その前に導かれた。
一四彼に主権と光栄と国とを賜い、
諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。

その主権は永遠の主権であって、
なくなることがなく、
その国は滅びることがない。

一五そこで、われダニエル、わがうちなる霊は憂え、わが脳中の幻
は、わたしを悩ましたので、一六わたしは、そこに立っている者のひとりに
近寄って、このすべての事の真意を尋ねた。するとその者は、わたしにこ
の事の解き明かしを告げ知らせた。一七『この四つの大きな獣は、地に起
らんとする四人の王である。一八しかしついには、いと高き者の聖徒が国
を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く』。
一九そこでわたしは、さらに第四の獣の真意を知ろうとした。その獣
は他の獣と異なって、はなはだ恐ろしく、その歯は鉄、そのつめは青銅
であって、食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。二〇こ

の獣の頭には、十の角があったが、そのほかに一つの角が出てきたので、
この角のために、三つの角が抜け落ちた。この角には目があり、また大き
な事を語る口があって、その形は、その同類のものよりも大きく見えた。
二一わたしが見ていると、この角は聖徒と戦って、彼らに勝ったが、二二
ついに日の老いたる者がきて、いと高き者の聖徒のために審判をおこなっ
た。そしてその時がきて、この聖徒たちは国を受けた。

二三彼はこう言った、
『第四の獣は地上の第四の国である。
これはすべての国と異なって、
全世界を併合し、
これを踏みつけ、かつ打ち砕く。
二四十の角はこの国から起る十人の王である。

その後にまたひとりの王が起る。
彼は先の者と異なり、
かつ、その三人の王を倒す。
二五彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、
かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。
彼はまた時と律法とを変えようと望む。
聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、
彼の手にわたされる。
二六しかし審判が行われ、
彼の主権は奪われて、
永遠に滅び絶やされ、
二七国と主権と全天下の国々の権威とは、

いと高き者の聖徒たる民に与えられる。
彼らの国は永遠の国であって、
諸国の者はみな彼らに仕え、かつ従う』。
二八その事はここで終った。われダニエルは、これを思いまわして、非常
に悩み、顔色も変った。しかし、わたしはこの事を心に留めた」。
第八章一われダニエルは先に幻を見たが、後またベルシャザル王の治世
の第三年に、一つの幻がわたしに示された。二その幻を見たのは、エ
ラム州の首都スサにいた時であって、ウライ川のほとりにおいてであっ
た。三わたしが目をあげて見ると、川の岸に一匹の雄羊が立っていた。こ
れに二つの角があって、その角は共に長かったが、一つの角は他の角より
も長かった。その長いのは後に伸びたのである。四わたしが見ていると、そ
の雄羊は、西、北、南にむかって突撃したが、これに当ることのできる

獣は一匹もなく、またその手から救い出すことのできるものもなかった。
これはその心のままにふるまい、みずから高ぶっていた。
五わたしがこれを考え、見ていると、一匹の雄やぎが、全地のおもてを
飛びわたって西からきたが、その足は土を踏まなかった。このやぎには、
目の間に著しい一つの角があった。六この者は、さきにわたしが川の
岸に立っているのを見た、あの二つの角のある雄羊にむかってきて、激し
く怒ってこれに走り寄った。七わたしが見ていると、それが雄羊に近寄る
や、これにむかって怒りを発し、雄羊を撃って、その二つの角を砕いた。
雄羊には、これに当る力がなかったので、やぎは雄羊を地に打ち倒して
踏みつけた。また、その雄羊を、やぎの力から救いうる者がなかった。八
こうして、その雄やぎは、はなはだしく高ぶったが、その盛んになった時、
あの大きな角が折れて、その代りに四つの著しい角が生じ、天の四方

に向かった。
九その角の一つから、一つの小さい角が出て、南に向かい、東に向か
い、麗しい地に向かって、はなはだしく大きくなり、一〇天の衆群に及
ぶまでに大きくなり、星の衆群のうちの数個を地に投げ下して、これを
踏みつけ、一一またみずから高ぶって、その衆群の主に敵し、その常供の
燔祭を取り除き、かつその聖所を倒した。一二そしてその衆群は、罪に
よって、常供の燔祭と共に、これにわたされた。その角はまた真理を地に
投げうち、ほしいままにふるまって、みずから栄えた。一三それから、わた
しはひとりの聖者の語っているのを聞いた。またひとりの聖者があって、
その語っている聖者にむかって言った、「常供の燔祭と、荒すことをなす
罪と、聖所とその衆群がわたされて、足の下に踏みつけられることについ
て、幻にあらわれたことは、いつまでだろうか」と。一四彼は言った、「二

千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態
に復する」。
一五われダニエルはこの幻を見て、その意味を知ろうと求めていた時、
見よ、人のように見える者が、わたしの前に立った。一六わたしはウライ
川の両岸の間から人の声が出て、呼ばわるのを聞いた、「ガブリエルよ、
この幻をその人に悟らせよ」。一七すると彼はわたしの立っている所に
きた。彼がきたとき、わたしは恐れて、ひれ伏した。しかし、彼はわたし
に言った、「人の子よ、悟りなさい。この幻は終りの時にかかわるもの
です」。
一八彼がわたしに語っていた時、わたしは地にひれ伏して、深い眠りに
陥ったが、彼はわたしに手を触れ、わたしを立たせて、一九言った、「見
よ、わたしは憤りの終りの時に起るべきことを、あなたに知らせよう。

それは定められた終りの時にかかわるものであるから。二〇あなたが見た、
あの二つの角のある雄羊は、メデアとペルシャの王です。二一また、かの
雄やぎはギリシヤの王です、その目の間の大きな角は、その第一の王で
す。二二またその角が折れて、その代りに四つの角が生じたのは、その民
から四つの国が起るのです。しかし、第一の王のような勢力はない。二三
彼らの国の終りの時になり、罪びとの罪が満ちるに及んで、ひとりの王が
起るでしょう。その顔は猛悪で、彼はなぞを解き、二四その勢力は盛んで
あって、恐ろしい破壊をなし、そのなすところ成功して、有力な人々と、
聖徒である民を滅ぼすでしょう。二五彼は悪知恵をもって、偽りをその手
におこない遂げ、みずから心に高ぶり、不意に多くの人を打ち滅ぼし、ま
た君の君たる者に敵するでしょう。しかし、ついに彼は人手によらずに滅
ぼされるでしょう。二六先に示された朝夕の幻は真実です。しかし、あ

なたはその幻を秘密にしておかなければならない。これは多くの日の後
にかかわる事だから」。
二七われダニエルは疲れはてて、数日の間病みわずらったが、後起きて、
王の事務を執った。しかし、わたしはこの幻の事を思って驚いた。ま
たこれを悟ることができなかった。

第九章一メデアびとアハシュエロスの子ダリヨスが、カルデヤびとの王
となったその元年、二すなわちその治世の第一年に、われダニエルは主が
預言者エレミヤに臨んで告げられたその言葉により、エルサレムの荒廃の終
るまでに経ねばならぬ年の数は七十年であることを、文書によって悟った。
三それでわたしは、わが顔を主なる神に向け、断食をなし、荒布を着、
灰をかぶって祈り、かつ願い求めた。四すなわちわたしは、わが神、主に
祈り、ざんげして言った、「ああ、大いなる恐るべき神、主、おのれを愛

し、おのれの戒めを守る者のために契約を保ち、いつくしみを施される
者よ、五われわれは罪を犯し、悪をおこない、よこしまなふるまいをなし、
そむいて、あなたの戒めと、おきてを離れました。六われわれはまた、あ
なたのしもべなる預言者たちが、あなたの名をもって、われわれの王たち、
君たち、先祖たち、および国のすべての民に告げた言葉に聞き従いません
でした。七主よ、正義はあなたのものですが、恥はわれわれに加えられて、
今日のような有様です。すなわちユダの人々、エルサレムの住民および
全イスラエルの者は、近き者も、遠き者もみな、あなたが追いやられたす
べての国々で恥をこうむりました。これは彼らがあなたにそむいて犯した
罪によるのです。八主よ、恥はわれわれのもの、われわれの王たち、君た
ちおよび先祖たちのものです。これはわれわれがあなたにむかって罪を犯
したからです。九あわれみと、ゆるしはわれわれの神、主のものです。こ

れはわれわれが彼にそむいたからです。一〇またわれわれの神、主のみ声
に聞き従わず、主がそのしもべ預言者たちによって、われわれの前に賜
わった律法を行わなかったからです。一一まことにイスラエルの人々は
皆あなたの律法を犯し、離れ去って、あなたのみ声に聞き従わなかった
ので、神のしもべモーセの律法にしるされたのろいと誓いが、われわれの
上に注ぎかかりました。これはわれわれが神にむかって罪を犯したからで
す。一二すなわち神は大いなる災をわれわれの上にくだして、さきにわ
れわれと、われわれを治めたつかさたちにむかって告げられた言葉を実行
されたのです。あのエルサレムに臨んだような事は、全天下にいまだかつ
てなかった事です。一三モーセの律法にしるされたように、この災はす
べてわれわれに臨みましたが、なおわれわれの神、主の恵みを請い求める
ことをせず、その不義を離れて、あなたの真理を悟ることをもしませんで

した。一四それゆえ、主はこれを心に留めて、災をわれわれに下された
のです。われわれの神、主は、何事をされるにも、正しくあらせられます。
ところが、われわれはそのみ声に聞き従わなかったのです。一五われわれ
の神、主よ、あなたは強きみ手をもって、あなたの民をエジプトの地から
導き出して、今日のように、み名をあげられました。われわれは罪を犯
し、よこしまなふるまいをしました。一六主よ、どうぞあなたが、これまで
正しいみわざをなされたように、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる
山から、あなたの怒りと憤りとを取り去ってください。これはわれわれ
の罪と、われわれの先祖の不義のために、エルサレムと、あなたの民が、わ
れわれの周囲の者の物笑いとなったからです。一七それゆえ、われわれの
神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。主よ、あなたご自身のため
に、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください。一八

わが神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、われわれの荒れたさ
まを見、み名をもってとなえられる町をごらんください。われわれがあな
たの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなた
の大いなるあわれみによるのです。一九主よ、聞いてください。主よ、ゆ
るしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、
あなたご自身のために、これを延ばさないでください。あなたの町と、あ
なたの民は、み名をもってとなえられているからです」。
二〇わたしがこう言って祈り、かつわが罪とわが民イスラエルの罪をざん
げし、わが神の聖なる山のために、わが神、主の前に願いをしていたとき、
二一すなわちわたしが祈の言葉を述べていたとき、わたしが初めに幻の
うちに見た、かの人ガブリエルは、すみやかに飛んできて、夕の供え物を
ささげるころ、わたしに近づき、二二わたしに告げて言った、「ダニエルよ、

わたしは今あなたに、知恵と悟りを与えるためにきました。二三あなたが
祈を始めたとき、み言葉が出たので、それをあなたに告げるためにきたの
です。あなたは大いに愛せられている者です。ゆえに、このみ言葉を考
えて、この幻を悟りなさい。
二四あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められて
います。これはとがを終らせ、罪に終りを告げ、不義をあがない、永遠の
義をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なる者に油を注ぐためです。
二五それゆえ、エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひ
とりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。
その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって、建て
直されるでしょう。二六その六十二週の後にメシヤは断たれるでしょう。
ただし自分のためにではありません。またきたるべき君の民は、町と聖所

とを滅ぼすでしょう。その終りは洪水のように臨むでしょう。そしてその
終りまで戦争が続き、荒廃は定められています。二七彼は一週の間多く
の者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と
供え物とを廃するでしょう。また荒す者が憎むべき者の翼に乗って来る
でしょう。こうしてついにその定まった終りが、その荒す者の上に注がれ
るのです」。

第一〇章一ペルシャの王クロスの第三年に、ベルテシャザルと名づけら
れたダニエルに、一つの言葉が啓示されたが、その言葉は真実であり、大い
なる戦いを意味するものであった。彼はその言葉に心を留め、その幻
を悟った。
二そのころ、われダニエルは三週の間、悲しんでいた。三すなわち三
週間の全く満ちるまでは、うまい物を食べず、肉と酒とを口にせず、ま

た身に油を塗らなかった。四正月の二十四日に、わたしがチグリスとい
う大川の岸に立っていたとき、五目をあげて望み見ると、ひとりの人がい
て、亜麻布の衣を着、ウパズの金の帯を腰にしめていた。六そのからだは
緑柱石のごとく、その顔は電光のごとく、その目は燃えるたいまつのご
とく、その腕と足は、みがいた青銅のように輝き、その言葉の声は、群衆
の声のようであった。七この幻を見た者は、われダニエルのみであって、
わたしと共にいた人々は、この幻を見なかったが、彼らは大いにおのの
いて、逃げかくれた。八それでわたしひとり残って、この大いなる幻を
見たので、力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力が
なくなった。九わたしはその言葉の声を聞いたが、その言葉の声を聞いた
とき、顔を伏せ、地にひれ伏して、深い眠りに陥った。
一〇見よ、一つの手があって、わたしに触れたので、わたしは震えながら

ひざまずき、手をつくと、一一彼はわたしに言った、「大いに愛せられる人
ダニエルよ、わたしがあなたに告げる言葉に心を留め、立ちあがりなさい。
わたしは今あなたのもとにつかわされたのです」。彼がこの言葉をわたしに
告げているとき、わたしは震えながら立ちあがった。一二すると彼はわた
しに言った、「ダニエルよ、恐れるに及ばない。あなたが悟ろうと心をこ
め、あなたの神の前に身を悩ましたその初めの日から、あなたの言葉は、す
でに聞かれたので、わたしは、あなたの言葉のゆえにきたのです。一三ペル
シャの国の君が、二十一日の間わたしの前に立ちふさがったが、天使の
長のひとりであるミカエルがきて、わたしを助けたので、わたしは、彼を
ペルシャの国の君と共に、そこに残しておき、一四末の日に、あなたの民
に臨まんとする事を、あなたに悟らせるためにきたのです。この幻は、
なおきたるべき日にかかわるものです」。

一五彼がこれらの言葉を、わたしに述べていたとき、わたしは、地にひれ
伏して黙っていたが、一六見よ、人の子のような者が、わたしのくちびる
にさわったので、わたしは口を開き、わが前に立っている者に語って言っ
た、「わが主よ、この幻によって、苦しみがわたしに臨み、全く力を
失いました。一七わが主のしもべは、どうしてわが主と語ることができま
しょう。わたしは全く力を失い、息も止まるばかりです」。
一八人の形をした者は、再びわたしにさわり、わたしを力づけて、一
九言った、「大いに愛せられる人よ、恐れるには及ばない。安心しなさい。
心を強くし、勇気を出しなさい」。彼がこう言ったとき、わたしは力づい
て言った、「わが主よ、語ってください。わたしに力をつけて
くださったから」。二〇そこで彼は言った、「あなたは、わたしがなんのため
にきたかを知っていますか。わたしは、今帰っていって、ペルシャの君と

戦おうとしているのです。彼との戦いがすむと、ギリシヤの君があらわ
れるでしょう。二しかしわたしは、まず真理の書にしるされている事を、
あなたに告げよう。わたしを助けて、彼らと戦う者は、あなたがたの君
ミカエルのほかにはありません。
第一一章一わたしはまたメデアびとダリヨスの元年に立って彼を強め、
彼を力づけたことがあります。
二わたしは今あなたに真理を示そう。見よ、ペルシヤになお三人の王が
起るでしょう。その第四の者は、他のすべての者にまさって富み、その富
によって強くなったとき、彼はすべてのものを動員して、ギリシヤの国を
攻めます。三またひとりの勇ましい王が起り、大いなる権力をもって世
を治め、その意のままに事をなすでしょう。四彼が強くなった時、その国
は破られ、天の四方に分かたれます。それは彼の子孫に帰せず、また彼が

治めたほどの権力もなく、彼の国は抜き取られて、これら以外の者ども
に帰するでしょう。
五南の王は強くなります。しかしその将軍のひとりが、彼にまさって
強くなり、権力をふるいます。その権力は、大いなる権力です。六年
を経て後、彼らは縁組をなし、南の王の娘が、北の王にきて、和親をは
かります。しかしその女は、その腕の力を保つことができず、またその
王も、その子も立つことができません。その女と、その従者と、その子
およびその女を獲た者とは、わたされるでしょう。
七そのころ、この女の根から、一つの芽が起って彼に代り、北の王の
軍勢にむかってきて、その城に討ち入り、これを攻めて勝つでしょう。八
彼はまた彼らの神々、鋳像および金銀の貴重な器物を、エジプトに携
え去り、そして数年の間、北の王を討つことを控えます。九その後、北

の王は、南の王の国に討ち入るが、自分の国に帰るでしょう。
一〇その子らはまた憤激して、あまたの大軍を集め、進んで行って、み
なぎりあふれ、通り過ぎるが、また行って、その城にまで攻め寄せるでしょ
う。一一そこで南の王は、大いに怒り、出てきて北の王と戦います。彼
は大軍を起すけれども、その軍は相手の手にわたされるでしょう。一二彼
がその軍を打ち破ったとき、その心は高ぶり、数万人を倒します。しか
し、勝つことはありません。一三それは北の王がまた初めよりも大いなる
軍を起し、数年の後、大いなる軍勢と多くの軍需品とをもって、攻めて
来るからです。
一四そのころ多くの者が起って、南の王に敵します。またあなたの民の
うちのあらくれ者が、みずから高ぶって事をなし、幻を成就しようと
するが失敗するでしょう。一五こうして北の王がきて、塁を築き、堅固な

町を取るが、南の王の力は、これに立ち向かうことができず、またその
えり抜きの民も、これに立ち向かう力がありません。一六これに攻めて来
る者は、その心のままに事をなし、その前に立ち向かうことのできる者
はなく、彼は麗しい地に立ち、その地は全く彼のために荒されます。一
七彼は全国の力をもって討ち入ろうと、その顔を向けるが、相手と仲直
りをし、その娘を与えて、その国を取ろうとします。しかし、その事は成
らず、また彼の利益にはならないでしょう。一八その後、彼は顔を海沿い
の国々に向けて、その多くのものを取ります。しかし、ひとりの大将が
あって、彼が与えた恥辱をそそぎ、その恥辱を彼の上に返します。一九こ
うして彼は、その顔を自分の国の要害に向けるが、彼はつまずき倒れて消
えうせるでしょう。
二〇彼に代って起る者は、栄光の国に人をつかわして、租税を取り立て

させるでしょう。しかし彼は、怒りにも戦いにもよらず、数日のうちに滅
ぼされます。二一彼に代って起る者は、卑しむべき者であって、彼には、王
の尊厳が与えられず、彼は不意にきて、巧言をもって国を獲るでしょう。
二二洪水のような軍勢は、彼の前に押し流されて敗られ、契約の君たる者
もまた敗られるでしょう。二三彼は、これと同盟を結んで後、偽りのおこ
ないをなし、わずかな民をもって強くなり、二四不意にその州の最も肥
えた所に攻め入り、その父も、その父の父もしなかった事をおこない、そ
の奪った物、かすめた物および財宝を、人々の中に散らすでしょう。彼は
また計略をめぐらして、堅固な城を攻めるが、ただし、それは時の至るま
でです。二五彼はその勢力と勇気とを奮い起し、大軍を率いて南の王を
攻めます。南の王もまたみずから奮い、はなはだ大いなる強力な軍勢
をもって戦います。しかし、彼に対して、陰謀をめぐらす者があるので、

これに立ち向かうことができません。二六すなわち彼の食物を食べる者た
ちが、彼を滅ぼします。そして、その軍勢は押し流されて、多くの者が倒
れ死ぬでしょう。二七このふたりの王は、害を与えようと心にはかり、ひ
とつ食卓に共に食して、偽りを語るが、それは成功しません。終りは
なお定まった時の来るまでこないからです。二八彼は大いなる財宝をもっ
て、自分の国に帰るでしょう。しかし、彼の心は聖なる契約にそむき、ほ
しいままに事をなして、自分の国に帰ります。
二九定まった時になって、彼はまた南に討ち入ります。しかし、この時
は前の時のようではありません。三〇それはキッテムの船が、彼に立ち向
かって来るので、彼は脅かされて帰り、聖なる契約に対して憤り、事
を行うでしょう。彼は帰っていって、聖なる契約を捨てる者を顧み用い
るでしょう。三一彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭

を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。三二彼は契約を破る者
どもを、巧言をもってそそのかし、そむかせるが、自分の神を知る民は、堅
く立って事を行います。三三民のうちの賢い人々は、多くの人を悟りに
至らせます。それでも、彼らはしばらくの間、やいばにかかり、火に焼
かれ、捕われ、かすめられなどして倒れます。三四その倒れるとき、彼ら
は少しの助けを獲ます。また多くの人が、巧言をもって彼らにくみするで
しょう。三五また賢い者のうちのある者は、終りの時まで、自分を練り、
清め、白くするために倒れるでしょう。終りはなお定まった時の来るまで
こないからです。

三六この王は、その心のままに事をおこない、すべての神を越えて、自分
を高くし、自分を大いにし、神々の神たる者にむかって、驚くべき事を
語り、憤りのやむ時まで栄えるでしょう。これは定められた事が成就

するからです。三七彼はその先祖の神々を顧みず、また婦人の好む者も、
いかなる神をも顧みないでしょう。彼はすべてにまさって、自分を大い
なる者とするからです。三八彼はこれらの者の代りに、要害の神をあがめ、
金、銀、宝石、および宝物をもって、その先祖たちの知らなかった神を
あがめ、三九異邦の神の助けによって、最も強固な城にむかって、事をな
すでしょう。そして彼を認める者には、栄誉を増し与え、これに多くの人
を治めさせ、賞与として土地を分け与えるでしょう。
四〇終りの時になって、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵
と、多くの船をもって、つむじ風のように彼を攻め、国々にはいっていっ
て、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう。四一彼はまた麗しい国にはい
ります。また彼によって、多くの者が滅ぼされます。しかし、エドム、モ
アブ、アンモンびとらのうちのおもな者は、彼の手から救われましょう。四

二彼は国々にその手を伸ばし、エジプトの地も免れません。四三彼は金銀
の財宝と、エジプトのすべての宝物を支配し、リビヤびと、エチオピヤ
びとは、彼のあとに従います。四四しかし東と北からの知らせが彼を驚
かし、彼は多くの人を滅ぼし絶やそうと、大いなる怒りをもって出て行き
ます。四五彼は海と麗しい聖山との間に、天幕の宮殿を設けるでしょ
う。しかし、彼はついにその終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう。
第一二章一その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあ
がります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかった
ほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。
すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。二また地のちりの中
に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の
生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょ

う。三賢い者は、大空の輝きのように輝き、また多くの人を義に導く
者は、星のようになって永遠にいたるでしょう。四ダニエルよ、あなたは
終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、
あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」。

五そこで、われダニエルが見ていると、ほかにまたふたりの者があって、
ひとりは川のこなたの岸に、ひとりは川のかなたの岸に立っていた。六わ
たしは、かの亜麻布を着て川の水の上にいる人にむかって言った、「この
異常なできごとは、いつになって終るでしょうか」と。七かの亜麻布を着
て、川の水の上にいた人が、天に向かって、その右の手と左の手をあげ、
永遠に生ける者をさして誓い、それは、ひと時とふた時と半時である。聖
なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろう
と言うのを、わたしは聞いた。八わたしはこれを聞いたけれども悟れなかっ

た。わたしは言った、「わが主よ、これらの事の結末はどんなでしょうか」。
九彼は言った、「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終りの
時まで秘し、かつ封じておかれます。一〇多くの者は、自分を清め、自分
を白くし、かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、
ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう。一一常供の燔祭が
取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、千二百九十日が定め
られている。一二待っていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。一三
しかし、終りまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに入り、定めら
れた日の終りに立って、あなたの分を受けるでしょう」。

ホセア書

第一章 一ユダヤの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世、イスラエル
の王ヨアシの子ヤラベアムの世に、ベエリの子ホセアに臨んだ主の言葉。
二主が最初ホセアによって語られた時、主はホセアに言われた、「行っ
て、淫行の妻と、淫行によって生れた子らを受けいれよ。この国は主にそ
むいて、はなはだしい淫行をなしているからである」。三そこで彼は行って
デブライムの娘ゴメルをめとった。彼女はみごもって男の子を産んだ。
四主はまた彼に言われた、「あなたはその子の名をエズレルと名づけよ。
しばらくしてわたしはエズレルの血のためにエヒウの家を罰し、イスラエ
ルの家の国を滅ぼすからである。五その日、わたしはエズレルの谷でイス
ラエルの弓を折る」と。

六ゴメルはまたみごもって女の子を産んだ。主はホセアに言われた、「あ
なたはその名をロルハマと名づけよ。わたしはもはやイスラエルの家をあ
われまず、決してこれをゆるさないからである。七しかし、わたしはユダ
の家をあわれみ、その神、主によってこれを救う。わたしは弓、つるぎ、
戦争、馬および騎兵によって救うのではない」と。
八ゴメルはロルハマを乳離れさせたとき、またみごもって男の子を産ん
だ。九主は言われた、「その子の名をロアンミと名づけよ。あなたがたは、
わたしの民ではなく、わたしは、あなたがたの神ではないからである」。
一〇しかしイスラエルの人々の数は海の砂のように量ることも、数える
こともできないほどになって、さきに彼らが「あなたがたは、わたしの民
ではない」と言われたその所で、「あなたがたは生ける神の子である」と
言われるようになる。一一そしてユダの人々とイスラエルの人々は共に集

まり、ひとりの長を立てて、その地からのぼって来る。エズレルの日は大
いなるものとなる。
第二章一あなたがたの兄弟に向かっては「アンミ（わが民）」と言い、あ
なたがたの姉妹に向かっては「ルハマ（あわれまれる者）」と言え。
二「あなたがたの母とあげつらえ、あげつらえ――
彼女はわたしの妻ではない、
わたしは彼女の夫ではない――
そして彼女にその顔から淫行を除かせ、
その乳ぶさの間から姦淫を除かせよ。
三そうでなければ、
わたしは彼女の着物をはいで裸にし、
その生れ出た日のようにし、
また荒野のようにし、

かわききった地のようにし、
かわきによって彼女を殺す。
四わたしはその子らをあわれまない、
彼らは淫行の子らだからである。
五彼らの母は淫行をなし、
彼らをはらんだ彼女は恥ずべきことを行った。
彼女は言った、
『わたしはわが恋人たちについて行こう。
彼らはパンと水と羊の毛と麻と油と飲み物とを、
わたしに与える者である』と。
六それゆえ、わたしはいばらで彼女の道をふさぎ、
かきをたてて、彼女には

その道(みち)がわからないようにする。
七彼女(かのじょ)はその恋人(こいびと)たちのあとを慕(した)って行(い)く、
しかし彼(かれ)らに追(お)いつくことはない。
彼(かれ)らを尋(たず)ねる、しかし見(み)いだすことはない。
そこで彼女(かのじょ)は言(い)う、
『わたしは行(い)って、さきの夫(おっと)に帰(かえ)ろう。
あの時(とき)は今(いま)よりもわたしによかったから』と。
八彼女(かのじょ)に穀物(こくもつ)と酒(さけ)と油(あぶら)とを与(あた)えた者(もの)、
またバアルのために用(もち)いた銀(ぎん)と金(きん)とを
多(おお)く彼女(かのじょ)に与(あた)えた者(もの)は、
わたしであったことを彼女(かのじょ)は知(し)らなかった。
九それゆえ、わたしは穀物(こくもつ)をその時(とき)になって奪(うば)い、

ぶどう酒をその季節になって奪い、
また彼女の裸をおおうために用いる
羊の毛と麻とを奪い取る。
一〇わたしは今、彼女のみだらなことを
その恋人たちの目の前にあらわす。
だれも彼女をわたしの手から救う者はない。
一一わたしは彼女のすべての楽しみ、
すなわち祝、新月、安息日、
すべての祭をやめさせる。
一二わたしはまた彼女が先に『これはわたしの恋人らが、わたしに与
えた報酬だ』と言った彼女の
ぶどうの木と、いちじくの木とを荒し、

これを林(はやし)とし、
野(の)の獣(けもの)にこれを食(く)わせる。
一三また彼女(かのじょ)が耳輪(みみわ)と宝石(ほうせき)で身(み)を飾(かざ)り、
その恋人(こいびと)たちを慕(した)って行(い)って、わたしを忘(わす)れ、
香(こう)をたいて仕(つか)えたバアルの祭(まつり)の日(ひ)のために、
わたしは彼女(かのじょ)を罰(ばっ)すると主(しゅ)は言(い)われる。
一四それゆえ、見(み)よ、わたしは彼女(かのじょ)をいざなって、
荒野(あらの)に導(みちび)いて行(い)き、ねんごろに彼女(かのじょ)に語(かた)ろう。
一五その所(ところ)でわたしは彼女(かのじょ)にそのぶどう畑(ばたけ)を与(あた)え、
アコルの谷(たに)を望(のぞ)みの門(もん)として与(あた)える。
その所(ところ)で彼女(かのじょ)は若(わか)かった日(ひ)のように、
エジプトの国(くに)からのぼって来(き)た時(とき)のように、

答えるであろう。
一六主は言われる、その日には、あなたはわたしを『わが夫』と呼び、
もはや『わがバアル』とは呼ばない。一七わたしはもろもろのバアルの名を
彼女の口から取り除き、重ねてその名をとなえることのないようにする。
一八その日には、わたしはまたあなたのために野の獣、空の鳥および地の
這うものと契約を結び、また弓と、つるぎと、戦争とを地から断って、あ
なたを安らかに伏させる。一九またわたしは永遠にあなたとちぎりを結ぶ。
すなわち正義と、公平と、いつくしみと、あわれみとをもってちぎりを結
ぶ。二〇わたしは真実をもって、あなたとちぎりを結ぶ。そしてあなたは
主を知るであろう。
二一主は言われる、
その日わたしは天に答え、

天は地に答える。
二二地は穀物と酒と油とに答え、
またこれらのものはエズレルに答える。
二三わたしはわたしのために彼を地にまき、
あわれまれぬ者をあわれみ、
わたしの民でない者に向かって、
『あなたはわたしの民である』と言い、
彼は『あなたはわたしの神である』と言う」。
第三章一主はわたしに言われた、「あなたは再び行って、イスラエルの
人々が他の神々に転じて、干ぶどうの菓子を愛するにもかかわらず、主が
これを愛せられるように、姦夫に愛せられる女、姦淫を行う女を愛せ
よ」と。二そこでわたしは銀十五シケルと大麦一ホメル半とをもって彼女

を買い取った。三わたしは彼女に言った、「あなたは長くわたしの所にと
どまって、淫行をなさず、また他の人のものとなってはならない。わたし
もまた、あなたにそうしよう」と。四イスラエルの子らは多くの日の間、
王なく、君なく、犠牲なく、柱なく、エポデおよびテラピムもなく過ご
す。五そしてその後イスラエルの子らは帰って来て、その神、主と、その
王ダビデとをたずね求め、終りの日におののいて、主とその恵みに向かっ
て来る。

第四章

一イスラエルの人々よ、
主の言葉を聞け。
主はこの地に住む者と争われる。
この地には真実がなく、愛情がなく、

また神を知ることもないからである。
二ただのろいと、偽りと、人殺しと、
盗みと、姦淫することのみで、
人々は皆荒れ狂い、
殺害に殺害が続いている。
三それゆえ、この地は嘆き、これに住む者はみな、
野の獣も空の鳥も共に衰え、
海の魚さえも絶えはてる。
四しかし、だれも争ってはならない、
責めてはならない。
祭司よ。わたしの争うのは、あなたと争うのだ。
五あなたは昼つまずき、

預言者もまたあなたと共に夜つまずく。
わたしはあなたの母を滅ぼす。
六わたしの民は知識がないために滅ぼされる。
あなたは知識を捨てたゆえに、
わたしもあなたを捨てて、わたしの祭司としない。
あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、
わたしもまたあなたの子らを忘れる。
七彼らは大きくなるにしたがって、
ますますわたしに罪を犯したゆえ、
わたしは彼らの栄えを恥に変える。
八彼らはわが民の罪を食いものにし、
その罪を犯すことをせつに願っている。

九それゆえ祭司（さいし）も民（たみ）と同（おな）じようになる。
わたしはそのわざのために彼（かれ）らを罰（ばっ）し、
そのおこないのために彼（かれ）らに報（むく）いる。
一〇彼（かれ）らは食（た）べても飽（あ）くことなく、
淫行（いんこう）をなしてもその数（かず）を増（ま）すことがない。
彼（かれ）らは主（しゅ）を捨（す）てて、淫行（いんこう）を愛（あい）したからである。
一一酒（さけ）と新（あたら）しい酒（さけ）とは思慮（しりょ）を奪（うば）う。
一二わが民（たみ）は木（き）に向（む）かって事（こと）を尋（たず）ねる。
またそのつえは彼（かれ）らに事（こと）を示（しめ）す。
これは淫行（いんこう）の霊（れい）が彼（かれ）らを迷（まよ）わしたからである。
彼（かれ）らはその神（かみ）を捨（す）てて淫行（いんこう）をなした。
一三彼（かれ）らは山々（やまやま）の頂（いただき）で犠牲（ぎせい）をささげ、

丘の上、かしの木、柳の木、
テレビンの木の下で供え物をささげる。
これはその木陰がここちよいためである。
それゆえ、あなたがたの娘は淫行をなし、
あなたがたの嫁は姦淫を行う。
一四わたしはあなたがたの娘が淫行をしても罰しない。
またあなたがたの嫁が姦淫を行っても罰しない。
男たちみずから遊女と共に離れ去り、
宮の遊女と共に犠牲をささげているからである。
悟りのない民は滅びる。
一五イスラエルよ、あなたは淫行をなしても、
ユダに罪を犯させてはならない。

ギルガルへ行ってはならない。
ベテアベンにのぼってはならない。
また「主は生きておられる」と言って
誓ってはならない。
一六イスラエルは強情な雌牛のように強情である。
今、主は小羊を広い野に放つようにして、
彼らを養うことができようか。
一七エフライムは偶像に結びつらなった。
そのなすにまかせよ。
一八彼らは酒宴のとりことなり、
淫行にふけっている。
彼らはその光栄よりも恥を愛する。

一九 風はその翼に彼らを包んだ。
彼らはその祭壇のゆえに恥を受ける。

第五章

一 祭司たちよ、これを聞け、
イスラエルの家よ、心をとめよ、
王の家よ、耳を傾けよ、
さばきはあなたがたに臨む。
あなたがたはミヅパにわなを設け、
タボルの上に網を張ったからだ。
二 彼らはシッテムの穴を深くしたが、
わたしは彼らをことごとく懲らしめる。
三 わたしはエフライムを知っている。

イスラエルはわたしに隠れることがない。
エフライムよ、あなたは今淫行をなし、
イスラエルは汚された。
四彼らのおこないは彼らを神に帰らせない。
それは淫行の霊が彼らのうちにあって、
主を知ることができないからだ。
五イスラエルの誇はその顔に向かって証言している。
エフライムはその不義によってつまずき、
ユダもまた彼らと共につまずく。
六彼らは羊の群れ、牛の群れを携えて行って、
主を求めても、主に会うことはない。
主は彼らから離れ去られた。

七彼(かれ)らは主(しゅ)にむかって貞操(ていそう)を守(まも)らず、
ほかの者(もの)の子(こ)を産(う)んだ。
新月(しんげつ)は彼(かれ)らをその田畑(たはた)と共(とも)に滅(ほろ)ぼす。
八ギベアで角笛(つのぶえ)を吹(ふ)き、
ラマでラッパを鳴(な)らし、
ベテアベンで呼(よ)ばわり叫(さけ)べ。
ベニヤミンよ、おののけ。
九エフライムは刑罰(けいばつ)の日(ひ)に荒(あ)れすたれる。
わたしはイスラエルの部族(ぶぞく)のうちに、
必(かなら)ず起(お)こるべき事(こと)を知(し)らせる。
一〇ユダの君(きみ)たちは境(さかい)を移(うつ)す者(もの)のようになった。
わたしはわが怒(いか)りを水(みず)のように彼(かれ)らの上(うえ)に注(そそ)ぐ。

一一エフライムは甘んじて、
むなしいものに従って歩んだゆえ、
さばきを受けて、しえたげられ、打ちひしがれる。
一二それゆえ、わたしはエフライムには、しみのように、
ユダの家には腐れのようになる。
一三エフライムはおのれの病を見、
ユダはおのれの傷を見たとき、
エフライムはアッスリヤに行き、
大王に人をつかわした。
しかし彼はあなたがたをいやすことができない。
また、あなたがたの傷をなおすことができない。
一四わたしはエフライムに対しては、ししのようになり、

ユダの家に対しては若きししのようになる。
わたしは、わたしこそ、かき裂いて去り、
かすめて行くが、だれも救う者はない。
一五わたしは彼らがその罪を認めて、
わが顔をたずね求めるまで、
わたしの所に帰っていよう。
彼らは悩みによって、わたしを尋ね求めて言う、

第六章

一「さあ、わたしたちは主に帰ろう。
主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、
わたしたちを打たれたが、
また包んでくださるからだ。

二 主(しゅ)は、ふつかの後(のち)、わたしたちを生(い)かし、
三日目(かめ)にわたしたちを立(た)たせられる。
わたしたちはみ前(まえ)で生(い)きる。
三 わたしたちは主(しゅ)を知(し)ろう、
せつに主(しゅ)を知(し)ることを求(もと)めよう。
主(しゅ)はあしたの光(ひかり)のように必(かなら)ず現(あらわ)れいで、
冬(ふゆ)の雨(あめ)のように、わたしたちに臨(のぞ)み、
春(はる)の雨(あめ)のように地(ち)を潤(うるお)される」。
四 エフライムよ、わたしはあなたに何(なに)をしようか。
ユダよ、わたしはあなたに何(なに)をしようか。
あなたがたの愛(あい)はあしたの雲(くも)のごとく、
また、たちまち消(き)える露(つゆ)のようなものである。

五それゆえ、わたしは預言者たちによって
彼らを切り倒し、
わが口の言葉をもって彼らを殺した。
わがさばきは現れ出る光のようだ。
六わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。
燔祭よりもむしろ神を知ることを喜ぶ。
七ところが彼らはアダムで契約を破り、
かしこでわたしにそむいた。
八ギレアデは悪を行う者の町で、
血の足跡で満たされている。
九盗賊が人を待ち伏せするように、
祭司たちは党を組み、

シケムへ行（ゆ）く道（みち）で人（ひと）を殺（ころ）す。
このように彼（かれ）らは悪（あ）しき事（こと）を 行（おこな）う。
一〇わたしはイスラエルの家（いえ）に恐（おそ）るべき事（こと）を見（み）た。
かしこでエフライムは淫行（いんこう）をなし、
イスラエルは汚（けが）された。
一一ユダよ、あなたのためにも刈入（かりい）れが定（さだ）められている。
わたしがわが民（たみ）の繁栄（はんえい）を回復（かいふく）するとき、

第七章

一わたしがイスラエルをいやすとき、
エフライムの不義（ふぎ）と、
サマリヤの悪（あ）しきわざとは 現（あらわ）れる。
彼（かれ）らは 偽（いつわ）りをおこない、

内では盗びとが押し入り、
外では山賊の群れが襲いきたる。
二しかし、彼らはわたしが彼らのすべての悪を
覚えていることを悟らない。
今、そのわざは彼らを囲んで、
わたしの顔の前にある。
三彼らはその悪をもって王を喜ばせ、
その偽りをもって君たちを喜ばせる。
四彼らはみな姦淫を行う者で、
パンを焼く者が熱くする炉のようだ。
パンを焼く者は、ねり粉をこねてから、
それがふくれるまで、しばらく、火をおこす事をしないだけだ。

五われわれの王の日に、
つかさたちは酒の熱によって病みわずらい、
王はあざける者と共に手を伸べた。
六彼らは陰謀をもってその心を炉のように燃やす。
その怒りは夜通しくすぶり、
朝になると炎のように燃える。
七彼らは皆、炉のように熱くなって、
そのさばきびとを焼き滅ぼす。
そのもろもろの王は皆たおれる。
彼らの中にはわたしを呼ぶ者がひとりもない。
八エフライムはもろもろの民の中に入り混じる。
エフライムは火にかけて、かえさない菓子である。

九他国人らは彼の力を食い尽すが、
彼はそれを知らない。
しらが混じってはえても、それを悟らない。
一〇イスラエルの誇は自らに向かって証言している、
彼らはこのもろもろの事があっても、
なおその神、主に帰らず、
また主を求めない。
一一エフライムは知恵のない愚かな、はとのようだ。
彼らはエジプトに向かって呼び求め、
またアッスリヤへ行く。
一二彼らが行くとき、わたしは彼らの上に網を張って、
空の鳥のように引き落し、

その悪しきおこないのゆえに、彼らを懲らしめる。
一三わざわいなるかな、彼らはわたしを離れて迷い出た。
滅びは彼らに臨む。
彼らがわたしに向かって罪を犯したからだ。
わたしは彼らをあがなおうと思うが、
彼らはわたしに逆らって偽りを言う。
一四彼らは真心をもってわたしを呼ばず、
ただ床の上で悲しみ叫ぶ。
彼らは穀物と酒のためには集まるが、
わたしに逆らう。
一五わたしは彼らを教え、その腕を強くしたが、
彼らはわたしに逆らって、悪しき事をはかる。

一六彼(かれ)らはバアルに帰(かえ)る。
彼(かれ)らはあざむく弓(ゆみ)のようだ。
彼(かれ)らの君(きみ)たちはその舌(した)の高(たか)ぶりのために、
つるぎに倒(たお)れる。
これはエジプトの国(くに)で人々(ひとびと)のあざけりとなる。

第八章

一ラッパをあなたの口(くち)にあてよ、
はげたかは主(しゅ)の家(いえ)に臨(のぞ)む。
彼(かれ)らがわたしの契約(けいやく)を破(やぶ)り、
わたしの律法(りっぽう)を犯(おか)したからだ。
二彼(かれ)らはわたしに向(む)かって叫(さけ)ぶ、
「わが神(かみ)よ、われわれイスラエルはあなたを知(し)る」と。

三イスラエルは善はしりぞけた。
敵はこれを追うであろう。
四彼らは王を立てた、
しかし、わたしによって立てたのではない。
彼らは君を立てた、
しかし、わたしはこれを知らない。
彼らは銀と金をもって、
自分たちの滅びのために偶像を造った。
五サマリヤよ、わたしはあなたの子牛を忌みきらう。
わたしの怒りは彼らに向かって燃える。
彼らはいつになればイスラエルで
罪なき者となるであろうか。

六これは工人の作ったもので、神ではない。
サマリヤの子牛は砕けて粉となる。
七彼らは風をまいて、つむじ風を刈り取る。
立っている穀物は穂を持たず、また実らない。
たとい実っても、他国人がこれを食い尽す。
八イスラエルはのまれた。
彼らは諸国民の間にあって、
すでに無用な器のようになった。
九彼らはひとりさまよう野のろばのように、
アッスリヤにのぼって行った。
エフライムは物を贈って恋人を得た。
一〇たとい彼らが国々に物を贈って同盟者を得ても、

わたしはまもなく彼らを集める。
彼らはしばらくにして、
王や君たちに 油 をそそぐことをやめる。
一一エフライムは多くの祭壇を造って罪を犯したゆえ、
これは彼には罪を犯すための祭壇となった。
一二わたしは彼のために、
あまたの律法を書きしるしたが、
これはかえって怪しい物のように思われた。
一三彼らは犠牲を好み、 肉をささげてこれを食べる。
しかし主はこれを 喜 ばれない。
今、 彼らの不義を覚え、 彼らの罪を罰せられる。
彼らはエジプトに帰る。

一四イスラエルは自分の造り主を忘れて、
もろもろの宮殿を建てた。
ユダは堅固な町々を多く増し加えた。
しかしわたしは火をその町々に送って、
もろもろの城を焼き滅ぼす。

第九章

一イスラエルよ、
もろもろの民のように喜びおどるな。
あなたは淫行をなして、あなたの神を離れ、
すべての穀物の打ち場で受ける淫行の価を愛した。
二打ち場と酒ぶねとは彼らを養わない。
また新しい酒もむなしくなる。

三彼(かれ)らは主(しゅ)の地(ち)に住(す)むことなく、
エフライムはエジプトに帰(かえ)り、
アッスリヤで汚(けが)れた物(もの)を食(た)べる。
四彼(かれ)らは主(しゅ)に向(む)かって酒(さけ)を注(そそ)がず、
また犠牲(ぎせい)をもって主(しゅ)を喜(よろこ)ばせず、
彼(かれ)らのパンは喪(も)におる者(もの)のパンのようで、
すべてこれを食(た)べる者(もの)は汚(けが)される。
彼(かれ)らのパンはただ自分(じぶん)の飢(う)えを満(み)たすためで、
主(しゅ)の家(いえ)に、はいることはできない。
五あなたがたは祝(いわい)の日(ひ)と、主(しゅ)の祭(まつり)の日(ひ)に、
何(なに)をしようとするのか。
六見(み)よ、彼(かれ)らはアッスリヤへ行(い)く。

エジプトは彼らを集め、
メンピスは彼らを葬る。
あざみは彼らの銀の宝物を所有し、
いばらは彼らの天幕にはびこる。
七 刑罰の日は来た。
報いの日は来た。
イスラエルはこれを知る。
預言者は愚かな者、
霊に感じた人は狂った者だ。
これはあなたがたの不義が多く、
恨みが大きいためである。
八 預言者はわが神の民エフライムの見張人である。

しかし預言者(よげんしゃ)のすべての道(みち)には
鳥(とり)をとる者(もの)のわながあり、
恨(うら)みはその神(かみ)の家(いえ)にある。
九彼(かれ)らはギベアの日(ひ)のように、
深(ふか)くおのれを腐(くさ)らせた。
主(しゅ)はその不義(ふぎ)を覚(おぼ)え、その罪(つみ)を罰(ばっ)せられる。
一〇わたしはイスラエルを荒野(あらの)のぶどうのように見(み)、
あなたがたの先祖(せんぞ)たちを、
いちじくの木(き)の初(はじ)めに結(むす)んだ初(はつ)なりのように見(み)た。
ところが彼(かれ)らはバアル・ペオルへ行(い)き、
身(み)をバアルにゆだね、
彼(かれ)らが愛(あい)した物(もの)と同(おな)じように憎(にく)むべき者(もの)となった。

一一エフライムの栄光は、鳥のようにとび去る。
すなわち産むことも、はらむことも、
みごもることもなくなる。
一二たとい彼らが子を育てても、
わたしはその子を奪って、残る者のないようにする。
わたしが彼らを離れるとき、彼らはわざわいだ。
一三わたしが見たように、
エフライムの子らはえじきに定められた。
エフライムはその子らを、
人を殺す者に渡さなければならない。
一四主よ、彼らに与えてください。
あなたは何を与えられますか。

流産の胎と、かわいた乳ぶさを
彼らに与えてください。
一五彼らのすべての悪はギルガルにある。
わたしはかしこで彼らを憎んだ。
彼らのおこないの悪しきがゆえに、
彼らをわが家から追いだし、
重ねて愛することをしない。
その君たちはみな、反逆者である。
一六エフライムは撃たれ、
その根は枯れて、実を結ばない。
たとい彼らが子を産んでも、
わたしはそのいつくしむ子らを殺す。

一七彼らは聞き従わないので、
わが神はこれを捨てられる。
彼らはもろもろの国民のうちに、
さすらい人となる。

第一〇章

一イスラエルは実を結ぶ茂った
ぶどうの木である。
その実を多く結ぶにしたがって、
祭壇を増し、
その地の豊かなるにしたがって、
柱の像を麗しくした。
二彼らの心は偽りである。

今(いま)、彼(かれ)らはその罪(つみ)を負(お)わなければならない。
主(しゅ)はその祭壇(さいだん)をこわし、
その柱(はしら)の像(ぞう)を砕(くだ)かれる。
三今(いま)、彼(かれ)らは言(い)う、
「われわれは主(しゅ)を恐(おそ)れないので、
われわれには王(おう)がない。
王(おう)はわれわれのために何(なに)をなしえようか」と。
四彼(かれ)らはむなしき言葉(ことば)をいだし、
偽(いつわ)りの誓(ちか)いをもって契約(けいやく)を結(むす)ぶ。
それゆえ、さばきは畑(はたけ)のうねの毒草(どくそう)のように現(あらわ)れる。
五サマリヤの住民(じゅうみん)は、
ベテアベンの子牛(こうし)のためにおののき、

その民はこれがために嘆き、
その偶像に仕える祭司たちは、
その栄光のうせたるがために泣き悲しむ。
六その子牛はアッスリヤに携えられ、
礼物として大王にささげられ、
エフライムは恥をうけ、
イスラエルはおのれの偶像を恥じる。
七サマリヤの王は、
水のおもての木切れのように滅ぼされる。
八イスラエルの罪であるアベンの高き所も滅び、
いばらとあざみがその祭壇の上にはえ茂る。
その時彼らは山に向かって、

「われわれをおおえ」と言(い)い、
丘(おか)に向(む)かって「われわれの上(うえ)に倒(たお)れよ」と言(い)う。
九イスラエルよ、
あなたはギベアの日(ひ)からこのかた罪(つみ)を犯(おか)した。
彼(かれ)らはその所(ところ)に立(た)っていた。
戦(たたか)いはギベアにおる彼(かれ)らに及(およ)ばないであろうか。
一〇わたしは来(き)てよこしまな民(たみ)を攻(せ)め、
これを懲(こ)らしめる。
彼(かれ)らがその二つの罪(つみ)のために懲(こら)しめられるとき、
もろもろの民(たみ)は集(あつ)まって彼(かれ)らを攻(せ)める。
一一エフライムはならされた若(わか)い雌牛(めうし)であって、
穀物(こくもつ)を踏(ふ)むことを好(この)む。

わたしはその麗しい首を惜しんだ。
しかし、わたしはエフライムにくびきをかける。
ユダは耕し、
ヤコブは自分のために、まぐわをひかねばならない。
一二あなたがたは自分のために正義をまき、
いつくしみの実を刈り取り、
あなたがたの新田を耕せ。
今は主を求むべき時である。
主は来て救いを雨のように、
あなたがたに降りそそがれる。
一三あなたがたは悪を耕し、
不義を刈りおさめ、

偽りの実を食べた。
これはあなたがたが自分の戦車を頼み、
勇士の多いことを頼んだためである。
一四それゆえ、あなたがたの民の中に
いくさの騒ぎが起り、
シャルマンが戦いの日に
ベテ・アルベルを打ち破ったように、
あなたがたの城はことごとく打ち破られる。
母らはその子らと共に打ち砕かれた。
一五イスラエルの家よ、
あなたがたの大いなる悪のゆえに、
このように、あなたがたにも行われ、

イスラエルの王は、あらしの中に全く滅ぼされる。

第一一章

一わたしはイスラエルの幼い時、
これを愛した。
わたしはわが子をエジプトから呼び出した。
二わたしが呼ばわるにしたがって、
彼らはいよいよわたしから遠ざかり、
もろもろのバアルに犠牲をささげ、
刻んだ像に香をたいた。
三わたしはエフライムに歩むことを教え、
彼らをわたしの腕にいだいた。
しかし彼らはわたしにいやされた事を

知らなかった。
四わたしはあわれみの綱、
すなわち愛のひもで彼らを導いた。
わたしは彼らに対しては、
あごから、くびきをはずす者のようになり、
かがんで彼らに食物を与えた。
五彼らはエジプトの地に帰り、
アッスリヤびとが彼らの王となる。
彼らがわたしに帰ることを拒んだからである。
六つるぎは、そのもろもろの町にあれ狂い、
その門の貫の木を砕き、その城の中に彼らを滅ぼす。
七わが民はわたしからそむき去ろうとしている。

それゆえ、彼らはくびきをかけられ、
これを除きうる者はひとりもいない。
八エフライムよ、
どうして、あなたを捨てることができようか。
イスラエルよ、
どうしてあなたを渡すことができようか。
どうしてあなたをアデマのように
することができようか。
どうしてあなたをゼボイムのように
扱うことができようか。
わたしの心は、わたしのうちに変り、
わたしのあわれみは、ことごとくもえ起っている。
九わたしはわたしの激しい怒りをあらわさない。

わたしは再びエフライムを滅ぼさない。
わたしは神であって、人ではなく、
あなたのうちにいる聖なる者だからである。
わたしは滅ぼすために臨むことをしない。
一〇彼らは主に従って歩む。
主はししのほえるように声を出される。
主が声を出されると、
子らはおののきつつ西から来る。
一一彼らはエジプトから鳥のように、
アッスリヤの地から、はとのように急いで来る。
わたしは彼らをその家に帰らせると
主は言われる。

一二エフライムは偽(いつわ)りをもって、わたしを囲(かこ)み、
イスラエルの家(いえ)は欺(あざむ)きをもって、わたしを囲(かこ)んだ。
しかしユダはなお神(かみ)に知(し)られ、
聖(せい)なる者(もの)に向(む)かって真実(しんじつ)である。

第一二章

一エフライムはひねもす風(かぜ)を牧(ぼく)し、
東風(ひがしかぜ)を追(お)い、
偽(いつわ)りと暴虐(ぼうぎゃく)とを増(ま)し加(くわ)え、
アッスリヤと取引(とりひき)をなし、
油(あぶら)をエジプトに送(おく)った。
二主(しゅ)はユダと争(あらそ)い、
ヤコブをそのしわざにしたがって罰(ばっ)し、

そのおこないにしたがって報いられる。
三ヤコブは胎にいたとき、その兄弟のかかとを捕え、
成人したとき神と争った。
四彼は天の使と争って勝ち、
泣いてこれにあわれみを求めた。
彼はベテルで神に出会い、
その所で神は彼と語られた。
五主は万軍の神、その名は主である。
六それゆえ、あなたはあなたの神に帰り、
いつくしみと正しきとを守り、
つねにあなたの神を待ち望め。
七商人はその手に偽りのはかりを持ち、

しえたげることを好む。
八エフライムは言った、
「まことにわたしは富める者となった。
わたしは自分ために財宝を得た」と。
しかし彼のすべての富も
その犯した罪をつぐなうことはできない。
九わたしはエジプトの国を出たときから、
あなたの神、主である。
わたしは祭の日のように、
再びあなたを天幕に住まわせよう。
一〇わたしは預言者たちに語った。
幻を多く示したのはわたしである。

わたしは預言者たちによってたとえを語った。
一一もしギレアデに不義があるなら、
彼らは必ずむなしき者となる。
もし彼らがギルガルで雄牛を犠牲にささげるなら、
彼らの祭壇は畑のうねに積んだ石塚のようになる。
一二（ヤコブはアラムの地に逃げっていった。
イスラエルは妻をめとるために人に仕えた。
彼は妻をめとるために羊を飼った。）
一三主はひとりの預言者によって、
イスラエルをエジプトから導き出し、
ひとりの預言者によってこれを守られた。
一四エフライムはいたく主を怒らせた。

それゆえ主はその血のとがを彼の上にのこし、
そのはずかしめを彼に返される。

第一三章

一エフライムが物言えば、
人々はおののいた。
彼はイスラエルの中に自分を高くした。
しかし彼はバアルによって罪を犯して死んだ。
二そして彼らは今もなおますます罪を犯し、
その銀をもって自分のために像を鋳、
巧みに偶像を造る。
これは皆工人のわざである。
彼らは言う、

これに犠牲をささげよ、人々は子牛に口づけせよと。
三それゆえ彼らは朝の霧のように、
すみやかに消えうせる露のように、
打ち場から風に吹き去られるもみがらのように、
また窓から出て行く煙のようになる。
四わたしはエジプトの国を出てからこのかた、
あなたの神、主である。
あなたはわたしのほかに神を知らない。
わたしのほかに救う者はない。
五わたしは荒野で、またかわいた地で、
あなたを知った。
六しかし彼らは食べて飽き、

飽きて、その心が高ぶり、わたしを忘れた。
七それゆえ、わたしは彼らに向かって、
ししのようになり、
ひょうのように道のかたわらに潜んでうかがう。
八わたしは子を取られた熊のように彼らに出会って、
その胸をかきさき、
その所で、ししのようにこれを食い尽し、
野の獣のようにこれをかき破る。
九イスラエルよ、わたしはあなたを滅ぼす。
だれがあなたを助けることができよう。
一〇あなたを助けるあなたの王は今、どこにいるのか。
あなたがかつて「わたしに王と君たちとを与えよ」と言ったあなたを

保護(ほご)すべき、すべてのつかさたちは
今(いま)、どこにいるのか。
一一わたしは怒(いか)りをもってあなたに王(おう)を与(あた)えた、
また憤(いきどお)りをもってこれを奪(うば)い取(と)った。
一二エフライムの不義(ふぎ)は包(つつ)みおかれ、
その罪(つみ)は積(つ)みたくわえられてある。
一三子(こ)を産(う)む女(おんな)の苦(くる)しみが彼(かれ)に臨(のぞ)む。
彼(かれ)は知恵(ちえ)のない子(こ)である。
生(う)まれる時(とき)が来(き)ても彼(かれ)は産門(さんもん)にあらわれない。
一四わたしは彼(かれ)らを陰府(よみ)の力(ちから)から、
あがなうことがあろうか。
彼(かれ)らを死(し)から、あがなうことがあろうか。

死(し)よ、おまえの 災(わざわい) はどこにあるのか。
陰府(よみ)よ、おまえの滅(ほろ)びはどこにあるのか。
あわれみは、わたしの目(め)から隠(かく)されている。
一五たとい彼(かれ)は葦(あし)のように栄(さか)えても、
東風(ひがしかぜ)が吹(ふ)いて来(く)る。
主(しゅ)の風(かぜ)が荒野(あらの)から吹(ふ)き起(おこ)る。
これがためにその 源(みなもと) はかれ、その 泉(いずみ) はかわく。
それはすべての 尊(たっと) い物(もの)の宝庫(ほうこ)をかすめ奪(うば)う。
一六サマリヤはその神(かみ)にそむいたので、
その罪(つみ)を負(お)い、つるぎに倒(たお)れ、
その幼(おさ)な子(ご)は投(な)げ砕(くだ)かれ、
そのはらめる 女(おんな) は引(ひ)き裂(さ)かれる。

第一四章

一イスラエルよ、
あなたの神、主に帰れ。
あなたは自分の不義によって、つまずいたからだ。
二あなたがたは言葉を携えて、主に帰って言え、
「不義はことごとくゆるして、
よきものを受けいれてください。
わたしたちは自分のくちびるの実をささげます。
三アッスリヤはわたしたちを助けず、
わたしたちは馬に乗りません。
わたしたちはもはや自分たちの手のわざに向かって
『われわれの神』とは言いません。
みなしごはあなたによって、

あわれみを得(え)るでしょう」。
四わたしは彼(かれ)らのそむきをいやし、
喜(よろこ)んでこれを愛(あい)する。
わたしの怒(いか)りは彼(かれ)らを離(はな)れ去(さ)ったからである。
五わたしはイスラエルに対(たい)しては露(つゆ)のようになる。
彼(かれ)はゆりのように花咲(はなさ)き、
ポプラのように根(ね)を張(は)り、
六その枝(えだ)は茂(しげ)りひろがり、
その麗(うるわ)しさはオリブの木(き)のように、
そのかんばしさはレバノンのようになる。
七彼(かれ)らは帰(かえ)って来(き)て、わが陰(かげ)に住(す)み、
園(その)のように栄(さか)え、

ぶどうの木(き)のように花咲(はなさ)き、
そのかんばしさはレバノンの酒(さけ)のようになる。
八エフライムよ、
わたしは偶像(ぐうぞう)となんの係(かか)わりがあろうか。
あなたに答(こた)え、あなたを顧(かえり)みる者(もの)はわたしである。
わたしは緑(みどり)のいとすぎのようだ。
あなたはわたしから実(み)を得(え)る。
九知恵(ちえ)のある者(もの)はだれか。
その人(ひと)にこれらのことを悟(さと)らせよ。
悟(さと)りある者(もの)はだれか。
その人(ひと)にこれらのことを知(し)らせよ。
主(しゅ)の道(みち)は直(なお)く、

正(ただ)しき者(もの)はこれを歩(あゆ)む。
しかし罪(つみ)びとはこれにつまずく。

ヨエル書

第一章

一ペトエルの子(こ)ヨエルに臨(のぞ)んだ主(しゅ)の言葉(ことば)。
二老人(ろうじん)たちよ、これを聞(き)け。
すべてこの地(ち)に住(す)む者(もの)よ、
耳(みみ)を傾(かたむ)けよ。
あなたがたの世(よ)、またはあなたがたの先祖(せんぞ)の世(よ)に
このような事(こと)があったか。
三これをあなたがたの子(こ)たちに語(かた)り、
子(こ)たちはまたその子(こ)たちに語(かた)り、
その子(こ)たちはまたこれを後(のち)の代(よ)に語(かた)り伝(つた)えよ。
四かみ食(く)らういなごの残(のこ)したものは、

群がるいなごがこれを食い、
群がるいなごの残したものは、
とびいなごがこれを食い、
とびいなごの残したものは、滅ぼすいなごがこれを食った。
五酔える者よ、目をさまして泣け。
すべて酒を飲む者よ、
うまい酒のゆえに泣き叫べ。
うまい酒はあなたがたの口から断たれるからだ。
六一つの国民がわたしの国に攻めのぼってきた。
その勢いは強く、その数は計られず、
その歯はししの歯のようで、
雌じしのきばをもっている。

七彼(かれ)らはわがぶどうの木(き)を荒(あら)し、
わがいちじくの木(き)を折(お)り、
その皮(かわ)をはだかにして捨(す)てた。
その枝(えだ)は白(しろ)くなった。
八あなたがたは若(わか)い時(とき)の夫(おっと)のために
荒布(あらぬの)を腰(こし)にまとったおとめのように泣(な)き悲(かな)しめ。
九素祭(そさい)と灌祭(かんさい)とは主(しゅ)の家(いえ)に絶(た)え、
主(しゅ)に仕(つか)える祭司(さいし)たちは嘆(なげ)き悲(かな)しむ。
一〇畑(はたけ)は荒(あ)れ、地(ち)は悲(かな)しむ。
これは穀物(こくもつ)が荒(あ)れはて、
新(あたら)しい酒(さけ)は尽(つ)き、油(あぶら)も絶(た)えるためである。
一一小麦(こむぎ)および大麦(おおむぎ)のために、

農夫たちよ、恥じよ、
ぶどう作りたちよ、泣け。
　畑の収穫がうせ去ったからである。
一二ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、
ざくろ、やし、りんご、野のすべての木はしぼんだ。
それゆえ楽しみは人の子らからかれうせた。
一三祭司たちよ、荒布を腰にまとい、泣き悲しめ。
祭壇に仕える者たちよ、泣け。
神に仕える者たちよ、
来て、荒布をまとい、夜を過ごせ。
素祭も灌祭も
あなたがたの神の家から退けられたからである。

一四あなたがたは断食を聖別し、
聖会を召集し、長老たちを集め、
国の民をことごとくあなたがたの神、主の家に集め、
主に向かって叫べ。
一五ああ、その日はわざわいだ。
主の日は近く、
全能者からの滅びのように来るからである。
一六われわれの目の前に食物は絶え、
われわれの神の家から
喜びと楽しみが絶えたではないか。
一七種は土の下に朽ち、倉は荒れ、
穀物がつきたので、穀倉はこわされる。

一八いかに家畜はうめき鳴くか。
牛の群れはさまよう。
彼らには牧草がないからだ。
羊の群れも滅びうせる。
一九主よ、わたしはあなたに向かって呼ばわる。
火が荒野の牧草を焼き滅ぼし、
炎が野のすべての木を焼き尽くしたからである。
二〇野の獣もまたあなたに向かって呼ばわる。
水の流れがかれはて、
火が荒野の牧草を焼き滅ぼしたからである

第二章

一あなたがたはシオンでラッパを吹け。

わが聖なる山で警報を吹きならせ。
国の民はみな、ふるいわななけ。
主の日が来るからである。
それは近い。
二これは暗く、薄暗い日、
雲の群がるまっくらな日である。
多くの強い民が
暗やみのようにもろもろの山をおおう。
このようなことは昔からあったことがなく、
後の代々の年にも再び起ることがないであろう。
三火は彼らの前を焼き、炎は彼らの後に燃える。
彼らのこない前には、

地(ち)はエデンの園(その)のようであるが、
その去(さ)った後(のち)は荒(あ)れ果(は)てた野(の)のようになる。
これをのがれうるものは一つもない。
四そのかたちは馬(うま)のかたちのようであり、
その走(はし)ることは軍馬(ぐんば)のようである。
五山(やま)の頂(いただき)でとびおどる音(おと)は、
戦車(せんしゃ)のとどろくようである。
また刈(か)り株(かぶ)を焼(や)く火(ひ)の炎(ほのお)の音(おと)のようであり、
戦(たたか)いの備(そな)えをした強(つよ)い軍隊(ぐんたい)のようである。
六その前(まえ)にもろもろの民(たみ)はなやみ、
すべての顔(かお)は色(いろ)を失(うしな)う。
七彼(かれ)らは勇士(ゆうし)のように走(はし)り、

兵士のように城壁によじ登る。
彼らはおのおの自分の道を進んで行って、
その道を踏みはずさない。
八彼らは互におしあわず、おのおのその道を進み行く。
彼らは武器の中にとびこんでも、身をそこなわない。
九彼らは町にとび入り、城壁の上を走り、
家々によじ登り、盗びとのように窓からはいる。
一〇地は彼らの前におののき、天はふるい、
日も月も暗くなり、星はその光を失う。
一一主はその軍勢の前で声をあげられる。
その軍隊は非常に多いからである。
そのみ言葉をなし遂げる者は強い。

主の日は大いにして、はなはだ恐ろしいゆえ、
だれがこれに耐えることができよう。
一二主は言われる、
「今からでも、あなたがたは心をつくし、
断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。
一三あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」。
あなたがたの神、主に帰れ。
主は恵みあり、あわれみあり、
怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、
災を思いかえされるからである。
一四神があるいは立ち返り、
思いかえして祝福をその後に残し、

素祭と灌祭とを
あなたがたの神、主にささげさせられる事はないと
だれが知るだろうか。

一五シオンでラッパを吹きならせ。
断食を聖別し、聖会を召集し、
一六民を集め、会衆を聖別し、
老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、
花婿をその家から呼びだし、
花嫁をそのへやから呼びだせ。
一七主に仕える祭司たちは、
廊と祭壇との間で泣いて言え、
「主よ、あなたの民をゆるし、

あなたの嗣業をもろもろの国民のうちに、
そしりと笑い草にさせないでください。
どうしてもろもろの国民に、
『彼らの神はどこにいるのか』と
言わせてよいでしょうか」。
一八その時主は自分の地のために、ねたみを起し、
その民をあわれまれた。
一九主は答えて、その民に言われた、
「見よ、わたしは穀物と新しい酒と油とを
あなたがたに送る。
あなたがたはこれを食べて飽きるであろう。
わたしは重ねてあなたがたに

もろもろの国民のうちでそしりを受けさせない。
二〇わたしは北から来る者をあなたがたから遠ざけ、
これをかわいた荒れ地に追いやり、
その前の者を東の海に、
その後の者を西の海に追いやる。
その臭いにおいは起り、その悪しきにおいは上る。
これは大いなる事をしたからである。
二一地よ恐るな、喜び楽しめ、
主は大いなる事を行われたからである。
二二野のもろもろの獣よ、恐るな。
荒野の牧草はもえいで、木はその実を結び、
いちじくの木とぶどうの木とは豊かに実る。

二三シオンの子らよ、
あなたがたの神、主によって喜び楽しめ。
主はあなたがたを義とするために秋の雨を賜い、
またあなたがたのために豊かに雨を降らせ、
前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる。
二四打ち場は穀物で満ち、
石がめは新しい酒と油とであふれる。
二五わたしがあなたがたに送った大軍、
すなわち群がるいなご、とびいなご、
滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに
償う。
二六あなたがたは、じゅうぶん食べて飽き、

あなたがたに不思議なわざをなされた
あなたがたの神、主のみ名をほめたたえる。
わが民は永遠にはずかしめられることがない。二七あなたがたはイス
ラエルのうちに
わたしのいることを知り、
主なるわたしがあなたがたの神であって、
ほかにないことを知る。
わが民は永遠にはずかしめられることがない。
二八その後わたしはわが霊を
すべての肉なる者に注ぐ。
あなたがたのむすこ、娘は預言をし、
あなたがたの老人たちは夢を見、

あなたがたの若者たちは幻を見る。
二九その日わたしはまた
わが霊をしもべ、はしために注ぐ。
三〇わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱
とがあるであろう。三一主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月
は血に変る。三二すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われた
ように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。そ
の残った者のうちに、主のお召しになる者がある。
第三章一見よ、わたしがユダとエルサレムとの幸福をもとに返すその日、
その時、二わたしは万国の民を集めて、これをヨシャパテの谷に携えく
だり、その所でわが民、わが嗣業であるイスラエルのために彼らをさば
く。彼らがわが民を諸国民のうちに散らして、わたしの地を分かち取った

からである。三彼らはわが民をくじ引きにし、遊女のために少年をわた
し、酒のために少女を売って飲んだ。
四ツロとシドンよ、ペリシテのすべての地方よ、おまえたちは、わたし
となんのかかわりがあるか。おまえたちはわたしに報復をしようとするの
か。もしおまえたちがわたしに報復しようとするなら、わたしは時をうつ
さず、すみやかに、おまえたちのおこないの報復をおまえたちの頭上にこ
させる。五これはおまえたちがわたしの銀と金とをとり、わたしの貴重な
宝をおまえたちの宮に携え行き、六またユダの人々とエルサレムの人々
とをギリシヤびとに売って、その本国から遠く離れさせたからである。七
見よ、わたしはおまえたちが売ったその所から彼らを起して、おまえたち
のおこないの報復をおまえたちの頭上にこさせる。八わたしはおまえたち
のむすこ娘たちをユダの人々の手に売る。彼らはこれを遠い国びとであ

るシバびとに売ると、主は言われる」。
九もろもろの国民の中に宣べ伝えよ。
戦いの備えをなし、
勇士をふるい立たせ、
兵士をことごとく近づかせ、のぼらせよ。
一〇あなたがたのすきを、つるぎに、
あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ。
弱い者に「わたしは勇士である」と言わせよ。
一一周囲のすべての国民よ、
急ぎ来て、集まれ。
主よ、あなたの勇士をかしこにお下しください。
一二もろもろの国民をふるい立たせ、

ヨシャパテの谷にのぼらせよ。
わたしはそこに座して、
周囲のすべての国民をさばく。
一三かまを入れよ、作物は熟した。
来て踏め、
酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。
彼らの悪が大きいからだ。
一四群衆また群衆は、さばきの谷におる。
主の日がさばきの谷に近いからである。
一五日も月も暗くなり、星もその光を失う。
一六主はシオンから大声で叫び、
エルサレムから声を出される。

天も地もふるい動く。
しかし主はその民の避け所、
イスラエルの人々のとりでである。
一七「そこであなたがたは知るであろう、
わたしはあなたがたの神、主であって、
わが聖なる山シオンに住むことを。
エルサレムは聖所となり、
他国人は重ねてその中を通ることがない。
一八その日もろもろの山にうまい酒がしたたり、
もろもろの丘は乳を流し、
ユダのすべての川は水を流す。
泉は主の家から出て、

シッテムの谷を潤す。
一九エジプトは荒れ地となり、エドムは荒野となる。
彼らはその国でユダの人々をしえたげ、
罪なき者の血を流したからである。
二〇しかしユダは永遠に人の住む所となり、
エルサレムは世々に保つ。
二一わたしは彼らに血の報復をなし、
とがある者をゆるさない。
主はシオンに住まわれる」。

アモス書

第一章

一テコアの牧者のひとりであるアモスの言葉。これはユダの王ウジヤの世、イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世、地震の二年前に、彼がイスラエルについて示されたものである。
二彼は言った、
「主はシオンからほえ、
エルサレムから声を出される。
牧者の牧場は嘆き、
カルメルの頂は枯れる」。
三主はこう言われる、
「ダマスコの三つのとが、

四つのとがのために、
わたしはこれを罰してゆるさない。
これは彼らが鉄のすり板で、
ギレアデを踏みにじったからである。
四わたしはハザエルの家に火を送り、
ベネハダデのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。
五わたしはダマスコの貫の木を砕き、
アベンの谷から住民を断ち、
ベテエデンから王のつえをとる者を断つ。
スリヤの民はキルに捕えられて行く」と
主は言われる。
六主はこう言われる、
「ガザの三つのとがが、

四つのとがのために、
わたしはこれを罰してゆるさない。
これは彼らが人々をことごとく捕えて行って、
エドムに渡したからである。
七わたしはガザの石がきに火を送り、
そのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。
八わたしはアシドドから住民を断ち、
アシケロンから王のつえをとる者を断つ。
わたしはまた手をかえしてエクロンを撃つ。
そして残ったペリシテびとも滅びる」と
主なる神は言われる。
九主はこう言われる、
「ツロの三つのとが、

四つのとがのために、
わたしはこれを罰してゆるさない。
これは彼らが人々をことごとくエドムに渡し、
また兄弟の契約を心に留めなかったからである。
一〇それゆえ、わたしはツロの石がきに火を送り、
そのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす」。
一一主はこう言われる、
「エドムの三つのとがが、
四つのとがのために、
わたしはこれを罰してゆるさない。
これは彼がつるぎをもってその兄弟を追い、
全くあわれみの情を断ち、
常に怒って、人をかき裂き、

ながくその憤りを保ったからである。
一二それゆえ、わたしはテマンに火を送り、
ボズラのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす」。
一三主はこう言われる、
「アンモンの人々の三つのとが、
四つのとがのために、
わたしはこれを罰してゆるさない。
これは彼らがその国境を広げるために、
ギレアデのはらんでいる女を
ひき裂いたからである。
一四それゆえ、わたしはラバの石がきに火をはなち、
そのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。

これは戦(たたか)いの日(ひ)に、ときの声(こえ)をもってせられ、
つむじ風(かぜ)の日(ひ)に、暴風(ぼうふう)をもってせられる。
一五彼(かれ)らの王(おう)はそのつかさたちと共(とも)に
捕(とら)えられて行(い)く」と主(しゅ)は言(い)われる。

第二章

一主(しゅ)はこう言(い)われる、
「モアブの三つのとが、
四つのとがのために、
わたしはこれを罰(ばっ)してゆるさない。
これは彼(かれ)がエドムの王(おう)の骨(ほね)を焼(や)いて
灰(はい)にしたからである。
二それゆえ、わたしはモアブに火(ひ)を送(おく)り、
ケリオテのもろもろの宮殿(きゅうでん)を焼(や)き滅(ほろ)ぼす。

モアブは騒ぎと、ときの声と、
ラッパの音の中に死ぬ。
三わたしはそのうちから、支配者を断ち、
そのすべてのつかさを彼と共に殺す」と
主は言われる。
四主はこう言われる、
「ユダの三つのとが、
四つのとがのために、
わたしはこれを罰してゆるさない。
これは彼らが主の律法を捨て、その定めを守らず、
その先祖たちが従い歩いた
偽りの物に惑わされたからである。

五それゆえ、わたしはユダに火を送り、
エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす」。
六主はこう言われる、
「イスラエルの三つのとがと、
四つのとがのために、
わたしはこれを罰してゆるさない。
これは彼らが正しい者を金のために売り、
貧しい者をくつ一足のために売るからである。
七彼らは弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、
苦しむ者の道をまげ、
また父子ともにひとりの女のところへ行って、
わが聖なる名を汚す。

八彼(かれ)らはすべての祭壇(さいだん)のかたわらに
質(しち)に取(と)った衣服(いふく)を敷(し)いて、その上(うえ)に伏(ふ)し、
罰金(ばっきん)をもって得(え)た酒(さけ)を、その神(かみ)の家(いえ)で飲(の)む。
九さきにわたしはアモリびとを
彼(かれ)らの前(まえ)から滅(ほろ)ぼした。
これはその高(たか)きこと、香柏(こうはく)のごとく、
その強(つよ)きこと、かしの木(き)のようであったが、
わたしはその上(うえ)の実(み)と、下(した)の根(ね)とを滅(ほろ)ぼした。
一〇わたしはまた、あなたがたを
エジプトの地(ち)から連(つ)れ上(のぼ)り、
四十年(ねん)のあいだ荒野(あらの)で、あなたがたを導(みちび)き、
アモリびとの地(ち)を獲(え)させた。

一一わたしはあなたがたの子らのうちから
預言者を起し、
あなたがたの若者のうちからナジルびとを起した。
イスラエルの人々よ、そうではないか」と
主は言われる。
一二「ところがあなたがたはナジルびとに酒を飲ませ、
預言者に命じて『預言するな』と言う。
一三見よ、わたしは麦束をいっぱい積んだ車が
物を圧するように、
あなたがたをその所で圧する。
一四速く走る者も逃げ場を失い、
強い者もその力をふるうことができず、

勇士もその命を救うことができない。
一五弓をとる者も立つことができず、
足早の者も自分を救うことができず、
馬に乗る者もその命を救うことができない。
一六勇士のうちの雄々しい心の者も
その日には裸で逃げる」と
主は言われる。

第三章

一イスラエルの人々よ、
主があなたがたに向かって言われたこと、
わたしがエジプトの地から導き上った
全家に向かって言ったこの言葉を聞け。

二「地(ち)のもろもろのやからのうちで、
わたしはただ、あなたがただけを知(し)った。
それゆえ、わたしはあなたがたの
もろもろの罪(つみ)のため、あなたがたを罰(ばっ)する。
三ふたりの者(もの)がもし約束(やくそく)しなかったなら、
一緒(いっしょ)に歩(ある)くだろうか。
四ししがもし獲物(えもの)がなかったなら、
林(はやし)の中(なか)でほえるだろうか。
若(わか)いししがもし物(もの)をつかまなかったなら、
その穴(あな)から声(こえ)を出(だ)すだろうか。
五もしわながなかったなら、
鳥(とり)は地(ち)に張(は)った網(あみ)にかかるだろうか。
網(あみ)にもし何(なに)もかからなかったなら、

地からとびあがるだろうか。
六町でラッパが鳴ったなら、
民は驚かないだろうか。
主がなされるのでなければ、
町に災が起るだろうか。
七まことに主なる神は
そのしもべである預言者にその隠れた事を
示さないでは、何事をもなされない。
八ししがほえる、
だれが恐れないでいられよう。
主なる神が語られる、
だれが預言しないでいられよう」。

九アッスリヤにあるもろもろの宮殿、
エジプトの地にあるもろもろの宮殿に宣べて言え、
「サマリヤの山々に集まり、
そのうちにある大いなる騒ぎと、
その中で行われる暴虐とを見よ」と。
一〇主は言われる、
「彼らは正義を行うことを知らず、
しえたげ取った物と奪い取った物とを
そのもろもろの宮殿にたくわえている」。
一一それゆえ主なる神はこう言われる、
「敵がきて、この国を囲み、
あなたの防備をあなたから取り除き、

あなたのもろもろの宮殿はかすめられる」。
一二主はこう言われる、「羊飼がししの口から、羊の両足、あるいは片耳
を取り返すように、サマリヤに住むイスラエルの人々も、長いすのすみや、
寝台の一部を携えて救われるであろう」。
一三万軍の神、主なる神は言われる、
「聞け、そしてヤコブの家に証言せよ。
一四わたしはイスラエルのもろもろのとがを罰する日に
ベテルの祭壇を罰する。
その祭壇の角は折れて、地に落ちる。
一五わたしはまた冬の家と夏の家とを撃つ、
象牙の家は滅び、大いなる家は消えうせる」と
主は言われる。

第四章

一「バシャンの雌牛どもよ、
この言葉を聞け。
あなたがたはサマリヤの山におり、
弱い者をしえたげ、貧しい者を圧迫し、
またその主人に向かって、
『持ってきて、わたしたちに飲ませよ』と言う。
二主なる神はご自分の聖なることによって誓われた、
見よ、あなたがたの上にこのような時が来る。
その時、人々はあなたがたをつり針にかけ、
あなたがたの残りの者を
魚つり針にかけて引いて行く。
三あなたがたはおのおのまっすぐに

石(いし)がきの破(やぶ)れた所(ところ)を出(で)て、
ハルモンに追(お)いやられる」と
主(しゅ)は言(い)われる。

四「あなたがたはベテルへ行(い)って罪(つみ)を犯(おか)し、
ギルガルへ行(い)って、とがを増(ま)し加(くわ)えよ。
朝(あさ)ごとに、あなたがたの犠牲(ぎせい)を携(たずさ)えて行(い)け、
三日(か)ごとに、あなたがたの十分(ぶん)の一を携(たずさ)えて行(い)け。
五種(たね)を入(い)れたパンの感謝祭(かんしゃさい)をささげ、
心(こころ)よりの供(そな)え物(もの)をふれ示(しめ)せ。
イスラエルの人々(ひとびと)よ、
あなたがたはこのようにするのを好(この)んでいる」と
主(しゅ)なる神(かみ)は言(い)われる。

六「わたしはまた、あなたがたのすべての町(まち)で
あなたがたの歯(は)を清(きよ)くし、
あなたがたのすべての所(ところ)でパンを乏(とぼ)しくした。
それでも、あなたがたはわたしに帰(かえ)らなかった」と
主(しゅ)は言(い)われる。
七「わたしはまた、刈入(かりい)れまでなお三月(つき)あるのに
雨(あめ)をとどめて、あなたがたの上(うえ)にくださず、
この町(まち)には雨(あめ)を降(ふ)らし、
かの町(まち)には雨(あめ)を降(ふ)らさず、
この畑(はたけ)は雨(あめ)をえ、
かの畑(はたけ)は雨(あめ)をえないで枯(か)れた。
八そこで二つ三つの町(まち)が

一つの町によろめいて行って、
水を飲んでも、飽くことができなかった。
それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と
主は言われる。
九「わたしは立ち枯れと腐り穂とをもって
あなたがたを撃ち、
あなたがたの園と、ぶどう畑とを荒した。
いちじくの木とオリブの木とは、いなごが食った。
それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と
主は言われる。
一〇「わたしはエジプトにしたように
あなたがたのうちに疫病を送り、

つるぎをもってあなたがたの若者を殺し、
あなたがたの馬を奪い去り、
あなたがたの宿営の臭気を上らせて、
あなたがたの鼻をつかせた。
それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と
主は言われる。
一一「わたしはあなたがたのうちの町を
神がソドムとゴモラを滅ぼされた時のように
滅ぼしたので、
あなたがたは炎の中から取り出された
燃えさしのようであった。
それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と

主は言われる。
一二「それゆえイスラエルよ、
わたしはこのようにあなたに行う。
わたしはこれを行うゆえ、
イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ」。
一三見よ、彼は山を造り、風を創造し、
人にその思いのいかなるかを示し、
また、あけぼのを変えて暗やみとなし、
地の高い所を踏まれる者、
その名を万軍の神、主と言う。

第五章一イスラエルの家よ、わたしが悲しみの歌をもって、あなたがた
について宣べるこの言葉を聞け、

二「おとめイスラエルは倒れて、
また起き上がらず、
彼女はおのれの地に投げ倒されて
これを起す者がない」。
三主なる神はこう言われる、
「イスラエルの家では、
千人出た町は百人残り、
百人出た町は十人残る」。
四主はイスラエルの家にこう言われる、
「あなたがたはわたしを求めよ、そして生きよ。
五ベテルを求めるな、
ギルガルに行くな。

ベエルシバにおもむくな。
ギルガルは必ず捕えられて行き、
ベテルは無に帰するからである」。
六あなたがたは主を求めよ、そして生きよ。
さもないと主は火のように
ヨセフの家に落ち下られる。
火はこれを焼くが、
ベテルのためにこれを消す者はひとりもない。
七あなたがた、公道をにがよもぎに変え、
正義を地に投げ捨てる者よ。
八プレアデスおよびオリオンを造り、
暗黒を朝に変じ、

昼を暗くして夜となし、
海の水を呼んで、地のおもてに注がれる者、
その名は主という。
九主は滅びをたちまち強い者に臨ませられるので、
滅びはついに城に臨む。
一〇彼らは門にいて戒める者を憎み、
真実を語る者を忌みきらう。
一一あなたがたは貧しい者を踏みつけ、
彼から麦の贈り物をとるゆえ、
あなたがたは切り石の家を建てても、
その中に住むことはできない。
美しいぶどう畑を作っても、

その酒(さけ)を飲(の)むことはできない。
一二わたしは知(し)る、あなたがたのとがは多(おお)く、
あなたがたの罪(つみ)は大(おお)きいからである。
あなたがたは正(ただ)しい者(もの)をしえたげ、まいないを取(と)り、
門(もん)で貧(まず)しい者(もの)を退(しりぞ)ける。
一三それゆえ、このような時(とき)には賢(かしこ)い者(もの)は沈黙(ちんもく)する、
これは悪(わる)い時(とき)だからである。
一四善(ぜん)を求(もと)めよ、悪(あく)を求(もと)めるな。
そうすればあなたがたは生(い)きることができる。
またあなたがたが言(い)うように、
万軍(ばんぐん)の神(かみ)、主(しゅ)はあなたがたと共(とも)におられる。
一五悪(あく)を憎(にく)み、善(ぜん)を愛(あい)し、門(もん)で公義(こうぎ)を立(た)てよ。

万軍の神、主は、あるいは
ヨセフの残りの者をあわれまれるであろう。
一六それゆえ、主なる万軍の神、
主はこう言われる、
「すべての広場で泣くことがあろう。
すべてのちまたで人々は
『悲しいかな、悲しいかな』と言う。
また彼らは農夫を呼んできて嘆かせ、
巧みな泣き女を招いて泣かせ、
一七またすべてのぶどう畑にも泣くことがあろう。
それはわたしがあなたがたの中を
通るからである」と主は言われる。

一八 わざわいなるかな、主の日を望む者よ、
あなたがたは何ゆえ主の日を望むのか。
これは暗くて光がない。
一九 人がししの前を逃れてもくまに出会い、
また家にはいって、手を壁につけると、
へびにかまれるようなものである。
二〇 主の日は暗くて、光がなく、
薄暗くて輝きがないではないか。
二一 わたしはあなたがたの祭を憎み、かつ卑しめる。
わたしはまた、あなたがたの聖会を喜ばない。
二二 たといあなたがたは燔祭や素祭をささげても、
わたしはこれを受けいれない。

あなたがたの肥えた獣の酬恩祭は
わたしはこれを顧みない。
二三あなたがたの歌の騒がしい音を
わたしの前から断て。
あなたがたの琴の音は、わたしはこれを聞かない。
二四公道を水のように、
正義をつきない川のように流れさせよ。
二五「イスラエルの家よ、あなたがたは四十年の間、荒野でわたしに犠牲
と供え物をささげたか。
二六かえってあなたがたの王シクテをにない、あ
なたがたが自分で作ったあなたがたの偶像、星の神、キウンをになった。
二七それゆえわたしはあなたがたをダマスコのかなたに捕え移す」と、その
名を万軍の神ととなえられる主は言われる。

第六章

一「わざわいなるかな、
安らかにシオンにいる者、
また安心してサマリヤの山にいる者、
諸国民のかしらのうちの著名な人々で、
イスラエルの家がきて従う者よ。
二カルネに渡って見よ。
そこから大ハマテに行き、
またペリシテびとのガテに下って見よ。
彼らはこれらの国にまさっているか。
彼らの土地はあなたがたの土地よりも大きいか。
三あなたがたは災の日を遠ざけ、
強暴の座を近づけている。

四わざわいなるかな、みずから象牙の寝台に伏し、
長いすの上に身を伸ばし、
群れのうちから小羊を取り、
牛舎のうちから子牛を取って食べ、
五琴の音に合わせて歌い騒ぎ、
ダビデのように楽器を造り出し、
六鉢をもって酒を飲み、
いとも尊い油を身にぬり、
ヨセフの破滅を悲しまない者たちよ。
七それゆえ今、彼らは捕われて、
捕われ人のまっ先に立って行く。
そしてかの身を伸ばした者どもの

騒ぎはやむであろう」。
八主なる神はおのれによって誓われた、
(万軍の神、主は言われる、)
「わたしはヤコブの誇を忌みきらい、
そのもろもろの宮殿を憎む。
わたしはこの町とすべてその中にいる者を渡す」。
九一つの家に十人の者が残っていても、彼らは死に、一〇そしてその親戚、
すなわちこれを焼く者は、骨を家から運びだすために、これを取り上げ、
またその家の奥にいる者に向かって、「まだあなたと共にいる者があるか」
と言い、「ない」との答がある時、かの人はまた「声を出すな、主の名を
となえるな」と言うであろう。
一一見よ、主は命じて、

大きな家を撃って、みじんとなし、
小さな家を撃って、切れ切れとされる。
一二馬は岩の上を走るだろうか。
人は牛で海を耕すだろうか。
ところがあなたがたは公道を毒に変じ、
正義の実をにがよもぎに変じた。
一三あなたがたはロデバルを喜び、
「われわれは自分の力で
カルナイムを得たではないか」と言う。
一四それゆえ、万軍の神、主は言われる、
「イスラエルの家よ、
見よ、わたしは一つの国民を起して、

あなたがたに敵対させる。
彼らはハマテの入口からアラバの川まで
あなたがたを悩ます」。
第七章一主なる神はこのようにわたしに示された。見よ、二番草のはえ
出る初めに主は、いなごを造られた。見よ、その二番草は王の刈った後に、
はえたものである。二そのいなごが地の青草を食い尽した時、わたしは言
った、
「主なる神よ、どうぞ、ゆるしてください。
ヤコブは小さい者です、
どうして立つことができましょう」。
三主はこのことについて思いかえされ、
「このことは起さない」と主は言われた。

四主なる神はこのようにわたしに示された。見よ、主なる神はさばきのた
めに火を呼ばれた。火は大淵を焼き、また地を焼こうとした。五その時わ
たしは言った、
「主なる神よ、どうぞ、やめてください。
ヤコブは小さい者です、
どうして立つことができましょう」。
六主はこのことについて思いかえされ、
「このこともまた起さない」と主なる神は言われた。
七また主はわたしに示された。見よ、主は測りなわをもって築いた石がき
の上に立ち、その手に測りなわをもっておられた。八そして主はわたしに
言われた、「アモスよ、あなたは何を見るか」。「測りなわ」とわたしが答え
ると、主はまた言われた、

「見(み)よ、わたしは測(はか)りなわを
わが民(たみ)イスラエルの中(なか)に置(お)く。
わたしはもはや彼(かれ)らを見過(みすご)しにしない。
九イサクの高(たか)き所(ところ)は荒(あら)され、
イスラエルの聖所(せいじょ)は荒(あ)れはてる。
わたしはつるぎをもってヤラベアムの家(いえ)に立(た)ち向(む)かう」。
一〇時(とき)にベテルの祭司(さいし)アマジヤは、イスラエルの王(おう)ヤラベアムに人(ひと)をつかわ
して言(い)う、「イスラエルの家(いえ)のただ中(なか)で、アモスはあなたにそむきました。
この地(ち)は彼(かれ)のもろもろの言葉(ことば)に耐(た)えることができません。
一一アモスはこのように言(い)っています、
『ヤラベアムはつるぎによって死(し)ぬ、
イスラエルは必(かなら)ず捕(とら)えられて行(い)って、

その国を離れる』と」。
一二それからアマジヤはアモスに言った、「先見者よ、行ってユダの地にの
がれ、かの地でパンを食べ、かの地で預言せよ。一三しかしベテルでは二度
と預言してはならない。ここは王の聖所、国の宮だから」。
一四アモスはアマジヤに答えた、「わたしは預言者でもなく、また預言者の
子でもない。わたしは牧者である。わたしはいちじく桑の木を作る者であ
る。一五ところが主は群れに従っている所からわたしを取り、『行って、
わが民イスラエルに預言せよ』と、主はわたしに言われた。
一六それゆえ今、主の言葉を聞け。

あなたは言う、
『イスラエルに向かって預言するな、
イサクの家に向かって語るな』と。

一七それゆえ、主はこう言われる、
『あなたの妻は町で遊女となり、
あなたのむすこ、娘たちはつるぎに倒れ、
あなたの地は測りなわで分かたれる。
そしてあなたは汚れた地で死に、
イスラエルは必ず捕えられて行って、
その国を離れる』」。

第八章一主なる神は、このようにわたしに示された。見よ、ひとかごの
夏のくだものがある。二主は言われた、「アモスよ、あなたは何を見るか」。
わたしは「ひとかごの夏のくだもの」と答えた。すると主はわたしに言わ
れた、
「わが民イスラエルの終りがきた。

わたしは再び彼らを見過しにしない。
三その日には宮の歌は嘆きに変り、
しかばねがおびただしく、
人々は無言でこれを至る所に投げ捨てる」と
主なる神は言われる。
四あなたがた、貧しい者を踏みつけ、
また国の乏しい者を滅ぼす者よ、
これを聞け。
五あなたがたは言う、
「新月はいつ過ぎ去るだろう、
そうしたら、われわれは穀物を売ろう。
安息日はいつ過ぎ去るだろう、

そうしたら、われわれは麦を売り出そう。
われわれはエパを小さくし、シケルを大きくし、
偽りのはかりをもって欺き、
六乏しい者を金で買い、
貧しい者をくつ一足で買いとり、
また、くず麦を売ろう」。
七主はヤコブの誇をさして誓われた、
「わたしは必ず彼らのすべてのわざを
いつまでも忘れない。
八これがために地は震わないであろうか。
地に住む者はみな嘆かないであろうか。
地はみなナイル川のようにわきあがり、

エジプトのナイル川のようにみなぎって、また沈まないであろうか」。
九主なる神は言われる、
「その日には、
わたしは真昼に太陽を沈ませ、
白昼に地を暗くし、
一〇あなたがたの祭を嘆きに変らせ、
あなたがたの歌をことごとく悲しみの歌に変らせ、
すべての人に荒布を腰にまとわせ、
すべての人に髪をそり落させ、
その日を、ひとり子を失った喪中のようにし、
その終りを、苦い日のようにする」。
一一主なる神は言われる、

「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、
それはパンのききんではない、
水にかわくのでもない、
主の言葉を聞くことのききんである。
一二彼らは海から海へさまよい歩き、
主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、
しかしこれを得ないであろう。
一三その日には美しいおとめも、
若い男もかわきのために気を失う。
一四かのサマリヤのアシマをさして誓い、
『ダンよ、あなたの神は生きている』と言い、また
『ベエルシバの道は生きている』と言う者どもは

必ず倒れる。再び起きあがることはない」。

第九章

一わたしは祭壇のかたわらに立っておられる主を見た。
主は言われた、
「柱の頭を打って、敷居を震わせ、
これを打ち砕いて、
すべての民の頭の上に落ちかからせよ。
その残った者を、わたしはつるぎで殺し、
そのひとりも逃げおおす者はなく、
のがれうる者はない。
二たとい彼らは陰府に掘り下っても、
わたしの手はこれをそこから引き出す。

たとい彼らは天によじのぼっても、
わたしはそこからこれを引きおろす。
三たとい彼らはカルメルの頂に隠れても、
わたしはこれを捜して、そこから引き出す。
たとい彼らはわたしの目をのがれて、
海の底に隠れても、
わたしはへびに命じて、その所でこれをかませる。
四たとい彼らは捕われて、その敵の前に行っても、
わたしはその所でつるぎに命じて、これを殺させる。
わたしは彼らの上にわたしの目を注ぐ、
それは災のためであって、幸のためではない」。
五万軍の神、主が地に触れられると、地は溶け、

その中に住む者はみな嘆き、
地はみなナイル川のようにわきあがり、
エジプトのナイル川のようにまた沈む。
六主はご自分の高殿を天に築き、
大空の基を地の上にすえ、
海の水を呼んで、地のおもてに注がれる。
その名は主ととなえられる。
七主は言われる、
「イスラエルの子らよ、あなたがたはわたしにとって
エチオピヤびとのようではないか。
わたしはイスラエルをエジプトの国から、
ペリシテびとをカフトルから、
スリヤびとをキルから導き上ったではないか。

八見よ、主なる神の目は
この罪を犯した国の上に注がれている。
わたしはこれを地のおもてから断ち滅ぼす。
しかし、わたしはヤコブの家を
ことごとくは滅ぼさない」と主は言われる。
九「見よ、わたしは命じて、
人がふるいで物をふるうように、
わたしはイスラエルの家を万国民のうちでふるう。
ひと粒も地に落ちることはない。
一〇わが民の罪びと、すなわち
『災はわれわれに近づかない、
われわれに臨まない』と

言う者どもはみな、つるぎで殺される。
一一その日には、
わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、
その破損を繕い、そのくずれた所を興し、
これを昔の時のように建てる。
一二これは彼らがエドムの残った者、
およびわが名をもって呼ばれるすべての国民を
所有するためである」と
この事をなされる主は言われる。
一三主は言われる、
「見よ、このような時が来る。
その時には、耕す者は刈る者に相継ぎ、

ぶどうを踏む者は種まく者に相継ぐ。
もろもろの山にはうまい酒がしたたり、
もろもろの丘は溶けて流れる。
一四わたしはわが民イスラエルの幸福をもとに返す。
彼らは荒れた町々を建てて住み、
ぶどう畑を作ってその酒を飲み、
園を作ってその実を食べる。
一五わたしは彼らをその地に植えつける。
彼らはわたしが与えた地から
再び抜きとられることはない」と
あなたの神、主は言われる。

オバデヤ書

第一章

一オバデヤの幻。
主なる神はエドムについてこう言われる、
われわれは主から出たおとずれを聞いた。
ひとりの使者が諸国民のうちにつかわされて言う、
「立てよ、われわれは立ってエドムと戦おう」。
二見よ、わたしはあなたを国々のうちで
小さい者とする。
あなたはひどく卑しめられる。
三岩のはざまにおり、高い所に住む者よ、

あなたの心の高ぶりは、あなたを欺いた。
あなたは心のうちに言う、
「だれがわたしを地に引き下らせる事ができるか」。
四たといあなたは、わしのように高くあがり、
星の間に巣を設けても、
わたしはそこからあなたを引きおろすと
主は言われる。
五もし盗びとがあなたの所に来、強盗が夜きても、
彼らは、ほしいだけ盗むではないか。
ああ、あなたは全く滅ぼされてしまう。
もしぶどうを集める者があなたの所に来たなら、
彼らはなお余りの実を残さないであろうか。

六ああ、エサウはかすめられ、
その隠しておいた宝は探り出される。
七あなたと契約を結んだ人々はみな、
あなたを欺き、あなたを国境に追いやった。
あなたと同盟を結んだ人々はあなたに勝った。
あなたの信頼する友はあなたの下にわなを設けた、
しかしその事を悟らない。
八主は言われる、
その日には、わたしはエドムから知者を滅ぼし、
エサウの山から悟りを断ち除かないだろうか。
九テマンよ、あなたの勇士は驚き恐れる。
人はみな殺されてエサウの山から断ち除かれる。
一〇あなたはその兄弟ヤコブに暴虐を行ったので、

恥はあなたをおおい、あなたは永遠に断たれる。
一一あなたが離れて立っていた日、
すなわち異邦人がその財宝を持ち去り、
外国人がその門におし入り、
エルサレムをくじ引きにした日、
あなたも彼らのひとりのようであった。
一二しかしあなたは自分の兄弟の日、
すなわちその災の日をながめていてはならなかった。
あなたはユダの人々の滅びの日に、
これを喜んではならず、
その悩みの日に誇ってはならなかった。
一三あなたはわが民の災の日に、

その門(もん)にはいってはならず、
その災(わざわい)の日(ひ)にその苦(くる)しみをながめてはならなかった。
またその災(わざわい)の日(ひ)に、
その財宝(ざいほう)に手(て)をかけてはならなかった。
一四あなたは分(わか)れ道(みち)に立(た)って、
そののがれる者(もの)を切(き)ってはならなかった。
あなたは悩(なや)みの日(ひ)にその残(のこ)った者(もの)を
敵(てき)にわたしてはならなかった。
一五主(しゅ)の日(ひ)が万国(ばんこく)の民(たみ)に臨(のぞ)むのは近(ちか)い。
あなたがしたようにあなたもされる。
あなたの報(むく)いはあなたのこうべに帰(き)する。
一六あなたがたがわが聖(せい)なる山(やま)で飲(の)んだように、

周囲のもろもろの民も飲む。
すなわち彼らは飲んでよろめき、
かつてなかったようになる。
一七しかしシオンの山には、のがれる者がいて、
聖なる所となる。
またヤコブの家はその領地を獲る。
一八ヤコブの家は火となり、
ヨセフの家は炎となり、
エサウの家はわらとなる。
彼らはその中に燃えて、これを焼く。
エサウの家には残る者がないようになると
主は言われた。

一九ネゲブの人々はエサウの山を獲、
セフェラの人々はペリシテびとを獲る。
また彼らはエフライムの地、
およびサマリヤの地を獲、
ベニヤミンはギレアデを獲る。
二〇ハラにいるイスラエルの人々の捕われ人は、
フェニキヤをザレパテまで取り、
セパラデにいるエルサレムの捕われ人は、
ネゲブの町々を獲る。
二一こうして救う者はシオンの山に上って、
エサウの山を治める。
そして王国は主のものとなる。

ヨナ書

第一章 一主の言葉がアミッタイの子ヨナに臨んで言った、二「立って、あ
の大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの
前に上ってきたからである」。三しかしヨナは主の前を離れてタルシシへ
のがれようと、立ってヨッパに下って行った。ところがちょうど、タルシ
シへ行く船があったので、船賃を払い、主の前を離れて、人々と共にタル
シシへ行こうと船に乗った。
四時に、主は大風を海の上に起されたので、船が破れるほどの激しい
暴風が海の上にあった。五それで水夫たちは恐れて、めいめい自分の神を
呼び求め、また船を軽くするため、その中の積み荷を海に投げ捨てた。し
かし、ヨナは船の奥に下り、伏して熟睡していた。六そこで船長は来て、

彼に言った、「あなたはどうして眠っているのか。起きて、あなたの神に呼
ばわりなさい。神があるいは、われわれを顧みて、助けてくださるだろう」。
七やがて人々は互に言った、「この災がわれわれに臨んだのは、だれ
のせいか知るために、さあ、くじを引いてみよう」。そして彼らが、くじを
引いたところ、くじはヨナに当った。八そこで人々はヨナに言った、「この
災がだれのせいで、われわれに臨んだのか、われわれに告げなさい。あ
なたの職業は何か。あなたはどこから来たのか。あなたの国はどこか。
あなたはどこの民か」。九ヨナは彼らに言った、「わたしはヘブルびとです。
わたしは海と陸とをお造りになった天の神、主を恐れる者です」。一〇そ
こで人々ははなはだしく恐れて、彼に言った、「あなたはなんたる事をし
てくれたのか」。人々は彼がさきに彼らに告げた事によって、彼が主の前
を離れて、のがれようとしていた事を知っていたからである。

一一人々は彼に言った、「われわれのために海が静まるには、あなたをどう
したらよかろうか」。それは海がますます荒れてきたからである。一二ヨナ
は彼らに言った、「わたしを取って海に投げ入れなさい。そうしたら海は、
あなたがたのために静まるでしょう。わたしにはよくわかっています。こ
の激しい暴風があなたがたに臨んだのは、わたしのせいです」。一三しかし
人々は船を陸にこぎもどそうとつとめたが、成功しなかった。それは海が
彼らに逆らって、いよいよ荒れたからである。一四そこで人々は主に呼ば
わって言った、「主よ、どうぞ、この人の生命のために、われわれを滅ぼさ
ないでください。また罪なき血を、われわれに帰しないでください。主よ、
これはみ心に従って、なされた事だからです」。一五そして彼らはヨナを
取って海に投げ入れた。すると海の荒れるのがやんだ。一六そこで人々は
大いに主を恐れ、犠牲を主にささげて、誓願を立てた。

一七主は大いなる魚を備えて、ヨナをのませられた。ヨナは三日三夜その
魚の腹の中にいた。

第二章一ヨナは魚の腹の中からその神、主に祈って、二言った、

「わたしは悩みのうちから主に呼ばわると、
主はわたしに答えられた。
わたしが陰府の腹の中から叫ぶと、
あなたはわたしの声を聞かれた。
三あなたはわたしを淵の中、
海のまん中に投げ入れられた。
大水はわたしをめぐり、
あなたの波と大波は皆、わたしの上を越えて行った。
四わたしは言った、

『わたしはあなたの前から追われてしまった、
どうして再びあなたの聖なる宮を望みえようか』。
五水がわたしをめぐって魂にまでおよび、
淵はわたしを取り囲み、
海草は山の根元でわたしの頭にまといついた。
六わたしは地に下り、
地の貫の木はいつもわたしの上にあった。
しかしわが神、主よ、
あなたはわが命を穴から救いあげられた。
七わが魂がわたしのうちに弱っているとき、
わたしは主をおぼえ、
わたしの祈はあなたに至り、

あなたの聖なる宮に達した。
八むなしい偶像に心を寄せる者は、
そのまことの忠節を捨てる。
九しかしわたしは感謝の声をもって、
あなたに犠牲をささげ、わたしの誓いをはたす。
救は主にある」。
一〇主は魚にお命じになったので、魚はヨナを陸に吐き出した。

第三章
一時に主の言葉は再びヨナに臨んで言った、二「立って、あの大
きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。三そこでヨナ
は主の言葉に従い、立って、ニネベに行った。ニネベは非常に大きな町
であって、これを行きめぐるには、三日を要するほどであった。四ヨナはそ
の町にはいり、初め一日路を行きめぐって呼ばわり、「四十日を経たらニネ

べは滅びる」と言った。五そこでニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、
大きい者から小さい者まで荒布を着た。
六このうわさがニネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、
朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。七また王とその大臣の布告
をもって、ニネベ中にふれさせて言った、「人も獣も牛も羊もみな、何
をも味わってはならない。物を食い、水を飲んではならない。八人も獣も
荒布をまとい、ひたすら神に呼ばわり、おのおのその悪い道およびその手
にある強暴を離れよ。九あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをや
めて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だれがそれを知るだろう」。
一〇神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上
に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった。

第四章一ところがヨナはこれを非常に不快として、激しく怒り、二主に

祈って言った、「主よ、わたしがなお国におりました時、この事を申したで
はありませんか。それでこそわたしは、急いでタルシシにのがれようとし
たのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒る
ことおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知ってい
たからです。三それで主よ、どうぞ今わたしの命をとってください。わた
しにとっては、生きるよりも死ぬ方がましだからです」。四主は言われた、
「あなたの怒るのは、よいことであろうか」。五そこでヨナは町から出て、町
の東の方に座し、そこに自分のために一つの小屋を造り、町のなりゆきを
見きわめようと、その下の日陰にすわっていた。
六時に主なる神は、ヨナを暑さの苦痛から救うために、とうごまを備え
て、それを育て、ヨナの頭の上に日陰を設けた。ヨナはこのとうごまを
非常に喜んだ。七ところが神は翌日の夜明けに虫を備えて、そのとうご

まをかませられたので、それは枯れた。八やがて太陽が出たとき、神が暑
い東風を備え、また太陽がヨナの頭を照したので、ヨナは弱りはて、死
ぬことを願って言った、「生きるよりも死ぬ方がわたしにはましだ」。九し
かし神はヨナに言われた、「とうごまのためにあなたの怒るのはよくない」。
ヨナは言った、「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」。一〇主は言わ
れた、「あなたは労せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとう
ごまをさえ、惜しんでいる。一一ましてわたしは十二万あまりの、右左を
わきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜し
まないでいられようか」。

ミカ書

第一章一ユダの王ヨタム、アハズおよびヒゼキヤの世に、モレシテびとミ
カが、サマリヤとエルサレムについて示された主の言葉。
二あなたがたすべての民よ、聞け。
地とその中に満てる者よ、耳を傾けよ。
主なる神はあなたがたにむかって証言し、
主はその聖なる宮から証言される。
三見よ、主はそのご座所から出てこられ、
下ってきて地の高い所を踏まれる。
四山は彼の下に溶け、谷は裂け、
火の前のろうのごとく、

坂に流れる水のようだ。
五これはみなヤコブのとがのゆえ、
イスラエルの家の罪のゆえである。
ヤコブのとがとは何か、
サマリヤではないか。
ユダの家の罪とは何か、
エルサレムではないか。
六このゆえにわたしはサマリヤを野の石塚となし、
ぶどうを植える所となし、
またその石を谷に投げ落し、
その基をあらわにする。
七その彫像はみな砕かれ、
その獲た価はみな火で焼かれる。

わたしはその偶像をことごとくこわす。
これは遊女の価から集めたのだから、
遊女の価に帰る。
八わたしはこれがために嘆き悲しみ、
はだしと裸で歩きまわり、
山犬のように嘆き、
だちょうのように悲しみ鳴く。
九サマリヤの傷はいやすことのできないもので、
ユダまでひろがり、
わが民の門、エルサレムまで及んでいる。
一〇ガテに告げるな、泣き叫ぶな。
ベテレアフラで、ちりの中にころがれ。

一一サピルに住む者よ、
裸になり、恥をこうむって進み行け。
ザアナンに住む者は出てこない。
ベテエゼルの嘆きはあなたがたからその跡を断つ。
一二マロテに住む者は気づかわしそうに幸を待つ。
災が主から出て、
エルサレムの門に臨んだからである。
一三ラキシに住む者よ、
戦車に早馬をつなげ。
ラキシはシオンの娘にとって罪の初めであった。
イスラエルのとがが、
あなたがたのうちに見られたからである。
一四それゆえ、あなたはモレセテ・ガテに

別れの贈り物を与える。
アクジブの家々はイスラエルの王たちにとって、
人を欺くものとなる。
一五マレシャに住む者よ、
わたしはまた侵略者をあなたの所に連れて行く。
イスラエルの栄光はアドラムに去るであろう。
一六あなたの喜ぶ子らのために、あなたの髪をそり落せ。
そのそった所をはげたかのように大きくせよ。
彼らは捕えられてあなたを離れるからである。

第二章

一その床の上で不義を計り、
悪を行う者はわざわいである。

彼らはその手に力あるゆえ、
夜が明けるとこれを行う。
二彼らは田畑をむさぼってこれを奪い、
家をむさぼってこれを取る。
彼らは人をしえたげてその家を奪い、
人をしえたげてその嗣業を奪う。
三それゆえ、主はこう言われる、
見よ、わたしはこのやからにむかって
災を下そうと計る。
あなたがたはその首を
これから、はずすことはできない。
また、まっすぐに立って歩くことはできない。

これは災の時だからである。
四その日、人々は歌を作ってあなたがたをののしり、
悲しみの歌をもって嘆き悲しみ、
「われわれはことごとく滅ぼされる、
わが民の分は人に与えられる。
どうしてこれはわたしから離れるのであろう。
われわれの田畑はわれわれを捕えた者の間に分け与えられる」と言
う。
五それゆえ、主の会衆のうちには
くじによって測りなわを張る者はひとりもなくなる。
六彼らは言う、「あなたがたは説教してはならない。
そのような事について説教してはならない。

そうすればわれわれは恥をこうむることがない」と。
七ヤコブの家よ、そんなことは言えるのだろうか。
主は気短な方であろうか。
これらは主のみわざなのであろうか。
わが言葉は正しく歩む者に、
益とならないのであろうか。
八ところが、あなたがたは立ってわが民の敵となり、
いくさのことを知らずに、安らかに過ぎゆく者から、
平和な者から、上着をはぎ取り、
九わが民の女たちをその楽しい家から追い出し、
その子どもから、わが栄えをとこしえに奪う。
一〇立って去れ、

これはあなたがたの休(やす)み場所(ばしょ)ではない。
これは汚(けが)れのゆえに滅(ほろ)びる。
その滅(ほろ)びは悲惨(ひさん)な滅(ほろ)びだ。
一一もし人(ひと)が風(かぜ)に歩(あゆ)み、偽(いつわ)りを言(い)い、
「わたしはぶどう酒(しゅ)と濃(こ)き酒(さけ)とについて、
あなたに説教(せっきょう)しよう」と言(い)うならば、
その人(ひと)はこの民(たみ)の説教者(せっきょうしゃ)となるであろう。
一二ヤコブよ、わたしは必(かなら)ずあなたをことごとく集(あつ)め、
イスラエルの残(のこ)れる者(もの)を集(あつ)める。
わたしはこれをおりの羊(ひつじ)のように、
牧場(まきば)の中(なか)の群(む)れのように共(とも)におく。
これは人(ひと)の多(おお)きによって騒(さわ)がしくなる。

一三打ち破る者は彼らに先だって登りゆき、
彼らは門を打ち破り、これをとおって外に出て行く。
彼らの王はその前に進み、
主はその先頭に立たれる。

第三章

一わたしは言った、
ヤコブのかしらたちよ、
イスラエルの家のつかさたちよ、聞け、
公義はあなたがたの知っておるべきことではないか。
二あなたがたは善を憎み、悪を愛し、
わが民の身から皮をはぎ、その骨から肉をそぎ、
三またわが民の肉を食らい、

その皮をはぎ、その骨を砕き、
これを切りきざんで、なべに入れる食物のようにし、
大なべに入れる肉のようにする。
四こうして彼らが主に呼ばわっても、
主はお答えにならない。
かえってその時には、み顔を彼らに隠される。
彼らのおこないが悪いからである。
五わが民を惑わす預言者について主はこう言われる、
彼らは食べ物のある時には、
「平安」を叫ぶけれども、
その口に何も与えない者にむかっては、
宣戦を布告する。

六それゆえ、あなたがたには夜(よる)があっても 幻(まぼろし)がなく、
暗(くら)やみがあっても 占(うらな)いがない。
太陽(たいよう)はその預言者(よげんしゃ)たちに没(ぼっ)し、
昼(ひる)も彼(かれ)らの上(うえ)に暗(くら)くなる。
七先見者(せんけんしゃ)は恥(はじ)をかき、 占(うらな)い師(し)は顔(かお)をあからめ、
彼(かれ)らは皆(みな)そのくちびるをおおう。
神(かみ)の 答(こたえ)がないからである。
八しかしわたしは主(しゅ)のみたまによって 力(ちから)に満(み)ち、
公義(こうぎ)と勇気(ゆうき)とに満(み)たされ、
ヤコブにそのとがを示(しめ)し、 イスラエルにその罪(つみ)を示(しめ)すことができる。
九ヤコブの家(いえ)のかしらたち、
イスラエルの家(いえ)のつかさたちよ、

すなわち公義を憎み、
すべての正しい事を曲げる者よ、これを聞け。
一〇あなたがたは血をもってシオンを建て、
不義をもってエルサレムを建てた。
一一そのかしらたちは、まいないをとってさばき、
その祭司たちは価をとって教え、
その預言者たちは金をとって占う。
しかもなお彼らは主に寄り頼んで、
「主はわれわれの中におられるではないか、
だから災はわれわれに臨むことがない」と言う。
一二それゆえ、シオンはあなたがたのゆえに
田畑となって耕され、
エルサレムは石塚となり、

宮の山は木のおい茂る高い所となる。

第四章

一末の日になって、
主の家の山はもろもろの山のかしらとして
堅く立てられ、
もろもろの峰よりも高くあげられ、
もろもろの民はこれに流れくる。
二多くの国民は来て言う、
「さあ、われわれは主の山に登り、
ヤコブの神の家に行こう。
彼はその道をわれわれに教え、
われわれはその道に歩もう」と。

律法はシオンから出、
主の言葉はエルサレムから出るからである。
三彼は多くの民の間をさばき、
遠い所まで強い国々のために仲裁される。
そこで彼らはつるぎを打ちかえて、すきとし、
そのやりを打ちかえて、かまとし、
国は国にむかってつるぎをあげず、
再び戦いのことを学ばない。
四彼らは皆そのぶどうの木の下に座し、
そのいちじくの木の下にいる。
彼らを恐れさせる者はない。
これは万軍の主がその口で語られたことである。

五すべての民はおのおのその神の名によって歩む。
しかしわれわれは
われわれの神、主の名によって、とこしえに歩む。
六主は言われる、その日には、
わたしはかの足のなえた者を集め、
またかの追いやられた者および
わたしが苦しめた者を集め、
七その足のなえた者を残れる民とし、
遠く追いやられた者を強い国民とする。
主はシオンの山で、今よりとこしえに
彼らを治められる。
八羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、

以前の主権はあなたに帰ってくる。
すなわちエルサレムの娘の国は
あなたに帰ってくる。
九今あなたは何ゆえわめき叫ぶのか、
あなたのうちに王がないのか。
あなたの相談相手は絶えはて、
産婦のように激しい痛みがあなたを捕えたのか。
一〇シオンの娘よ、
産婦のように苦しんでうめけ。
あなたは今、町を出て野にやどり、
バビロンに行かなければならない。
その所であなたは救われる。

主（しゅ）はその所（ところ）であなたを敵（てき）の手（て）からあがなわれる。
一一いま多（おお）くの国民（くにたみ）はあなたに逆（さか）らい、集（あつ）まって言（い）う、
「どうかシオンが汚（けが）されるように、
われわれの目（め）がシオンを見（み）てあざ笑（わら）うように」と。
一二しかし彼（かれ）らは主（しゅ）の思（おも）いを知（し）らず、
またその計画（けいかく）を悟（さと）らない。
すなわち主（しゅ）が麦束（むぎたば）を打（う）ち場（ば）に集（あつ）めるように、
彼（かれ）らを集（あつ）められることを悟（さと）らない。
一三シオンの娘（むすめ）よ、立（た）って打（う）ちこなせ。
わたしはあなたの角（つの）を鉄（てつ）となし、
あなたのひずめを青銅（せいどう）としよう。
あなたは多（おお）くの民（たみ）を打（う）ち砕（くだ）き、

彼らのぶんどり物を主にささげ、
彼らの富を全地の主にささげる。

第五章

一今あなたは壁でとりまかれている。
敵はわれわれを攻め囲み、
つえをもってイスラエルのつかさのほおを撃つ。
二しかしベツレヘム・エフラタよ、
あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、
イスラエルを治める者があなたのうちから
わたしのために出る。
その出るのは昔から、いにしえの日からである。
三それゆえ、産婦の産みおとす時まで、

主は彼らを渡しおかれる。
その後その兄弟たちの残れる者は
イスラエルの子らのもとに帰る。
四彼は主の力により、
その神、主の名の威光により、
立ってその群れを養い、
彼らを安らかにおらせる。
今、彼は大いなる者となって、
地の果にまで及ぶからである。
五これは平和である。
アッスリヤびとがわれわれの国に来て、
われわれの土地を踏むとき、

七人の牧者を起し、
八人の君を起してこれに当らせる。
六彼らはつるぎをもってアッスリヤの地を治め、
ぬきみのつるぎをもってニムロデの地を治める。
アッスリヤびとがわれわれの地に来て、
われわれの境を踏み荒すとき、
彼らはアッスリヤびとから、われわれを救う。
七その時ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること、
人によらず、また人の子らを待たずに
主からくだる露のごとく、
青草の上に降る夕立ちのようである。
八またヤコブの残れる者が国々の中におり、

多くの民の中にいること、
林の獣の中のししのごとく、
羊の群れの中の若いししのようである。
それが過ぎるときは踏み、かつ裂いて救う者はない。
九あなたの手はもろもろのあだの上にあげられ、
あなたの敵はことごとく断たれる。
一〇主は言われる、その日には、
わたしはあなたのうちから馬を絶やし、
戦車をこわし、
一一あなたの国の町々を絶やし、
あなたの城をことごとくくつがえす。
一二またあなたの手から魔術を絶やす。

あなたのうちには占い師がないようになる。
一三またあなたのうちから彫像および石の柱を絶やす。
あなたは重ねて手で作った物を拝むことはない。
一四またあなたのうちからアシラ像を抜き倒し、
あなたの町々を滅ぼす。
一五そしてわたしは怒りと憤りとをもって
その聞き従わないもろもろの国民に復讐する。

第六章

一あなたがたは
主の言われることを聞き、
立ちあがって、もろもろの山の前に訴えをのべ、
もろもろの丘にあなたの声を聞かせよ。

二もろもろの山よ、地の変ることなき基よ、
主の言い争いを聞け。
主はその民と言い争い、
イスラエルと論争されるからである。
三「わが民よ、わたしはあなたに何をなしたか、
何によってあなたを疲れさせたか、
わたしに答えよ。
四わたしはエジプトの国からあなたを導きのぼり、
奴隷の家からあなたをあがない出し、
モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたに先だたせた。
五わが民よ、モアブの王バラクがたくらんだ事、
ベオルの子バラムが彼に答えた事、

シッテムからギルガルに至(いた)るまでに
起(おこ)った事(こと)どもを思(おも)い起(おこ)せ。
そうすれば、あなたは主(しゅ)の正義(せいぎ)のみわざを
知(し)るであろう」。
六「わたしは何(なに)をもって主(しゅ)のみ前(まえ)に行(い)き、
高(たか)き神(かみ)を拝(はい)すべきか。
燔祭(はんさい)および当歳(とうさい)の子牛(こうし)をもって
そのみ前(まえ)に行(ゆ)くべきか。
七主(しゅ)は数千(すうせん)の雄羊(おひつじ)、
万流(まんりゅう)の油(あぶら)を喜(よろこ)ばれるだろうか。
わがとがのためにわが長子(ちょうし)をささぐべきか。
わが魂(たましい)の罪(つみ)のためにわが身(み)の子(こ)をささぐべきか」。

八人(ひと)よ、彼(かれ)はさきによい事(こと)のなんであるかを
あなたに告(つ)げられた。
主(しゅ)のあなたに求(もと)められることは、
ただ公義(こうぎ)をおこない、いつくしみを愛(あい)し、
へりくだってあなたの神(かみ)と共(とも)に歩(あゆ)むことではないか。
九主(しゅ)の声(こえ)が町(まち)にむかって呼(よ)ばわる――
全(まった)き知恵(ちえ)はあなたの名(な)を恐(おそ)れることである――
「部族(ぶぞく)および町(まち)の会衆(かいしゅう)よ、聞(き)け。
一〇わたしは悪人(あくにん)の家(いえ)にある不義(ふぎ)の財宝(ざいほう)、
のろうべき不正(ふせい)な枡(ます)を忘(わす)れ得(え)ようか。
一一不正(ふせい)なはかりを用(もち)い、
偽(いつわ)りのおもしを入(い)れた袋(ふくろ)を用(もち)いる人(ひと)を

わたしは罪なしとするだろうか。
一二あなたのうちの富める人は暴虐で満ち、
あなたの住民は偽りを言い、
その舌は口で欺くことをなす。
一三それゆえ、わたしはあなたを撃ち、
あなたをその罪のために滅ぼすことを始めた。
一四あなたは食べても、飽くことがなく、
あなたの腹はいつもひもじい。
あなたは移しても、救うことができない。
あなたが救う者を、わたしはつるぎにわたす。
一五あなたは種をまいても、刈ることがなく、
オリブの実を踏んでも、その身に油を塗ることがなく、

ぶどうを踏(ふ)んでも、その酒(さけ)を飲(の)むことがない。
一六あなたはオムリの定(さだ)めを守(まも)り、
アハブの家(いえ)のすべてのわざをおこない、
彼(かれ)らの計(はか)りごとに従(したが)って歩(あゆ)んだ。
これはわたしがあなたを荒(あら)し、
その住民(じゅうみん)を笑(わら)い物(もの)とするためである。
あなたがたは民(たみ)のはずかしめを負(お)わねばならぬ」。

第七章

一わざわいなるかな、
わたしは夏(なつ)のくだものを集(あつ)める時(とき)のように、
ぶどうの収穫(しゅうかく)の残(のこ)りを集(あつ)める時(とき)のようになった。
食(く)らうべきぶどうはなく、

わが心の好む初なりのいちじくもない。
二神を敬う人は地に絶え、人のうちに正しい者はない。
みな血を流そうと待ち伏せし、
おのおの網をもってその兄弟を捕える。
三両手は悪い事をしようと努めてやまない。
つかさと裁判官はまいないを求め、
大いなる人はその心の悪い欲望を言いあらわし、
こうして彼らはその悪を仕組む。
四彼らの最もよい者もいばらのごとく、
最も正しい者もいばらのいけがきのようだ。
彼らの見張びとの日、
すなわち彼らの刑罰の日が来る。

いまや彼らの混乱が近い。
五あなたがたは隣り人を信じてはならない。
友人をたのんではならない。
あなたのふところに寝る者にも、
あなたの口の戸を守れ。
六むすこは父をいやしめ、娘はその母にそむき、
嫁はそのしゅうとめにそむく。
人の敵はその家の者である。
七しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。
わが神はわたしの願いを聞かれる。
八わが敵よ、わたしについて喜ぶな。
たといわたしが倒れるとも起きあがる。

たといわたしが暗(くら)やみの中(なか)にすわるとも、
主(しゅ)はわが光(ひかり)となられる。
九 主(しゅ)はわが訴(うった)えを取(と)りあげ、
わたしのためにさばきを行(おこな)われるまで、
わたしは主(しゅ)の怒(いか)りを負(お)わなければならない。
主(しゅ)に対(たい)して罪(つみ)を犯(おか)したからである。
主(しゅ)はわたしを光(ひかり)に導(みちび)き出(だ)してくださる。
わたしは主(しゅ)の正義(せいぎ)を見(み)るであろう。
一〇 その時(とき)「あなたの神(かみ)、主(しゅ)はどこにいるか」と
わたしに言(い)ったわが敵(てき)は、これを見(み)て恥(はじ)をこうむり、
わが目(め)は彼(かれ)を見(み)てあざ笑(わら)う。
彼(かれ)は街路(がいろ)の泥(どろ)のように踏(ふ)みつけられる。

一一あなたの城壁(じょうへき)を築(きず)く日(ひ)が来(く)る。
その日(ひ)には国境(くにざかい)が遠(とお)く広(ひろ)がる。
一二その日(ひ)にはアッスリヤからエジプトまで、
エジプトからユフラテ川(がわ)まで、
海(うみ)から海(うみ)まで、山(やま)から山(やま)まで、
人々(ひとびと)はあなたに来(く)る。
一三しかしかの地(ち)はその住民(じゅうみん)のゆえに、
そのおこないの実(み)によって荒(あ)れはてる。
一四どうか、あなたのつえをもってあなたの民(たみ)、
すなわち園(その)の中(なか)の林(はやし)にひとりおる
あなたの嗣業(しぎょう)の羊(ひつじ)を牧(ぼく)し、
いにしえの日(ひ)のようにバシャンとギレアデで、

彼らを養ってください。
一五あなたがエジプトの国を出た時のように、
わたしはもろもろの不思議な事を彼らに示す。
一六国々の民は見て、そのすべての力を恥じ、
その手を口にあて、
その耳は聞えぬ耳となる。
一七彼らはへびのように、
地に這うもののようにちりをなめ、
震えながらその城から出、
おののきつつ、われわれの神、主に近づいてきて、
あなたのために恐れる。
一八だれかあなたのように不義をゆるし、

その嗣業（しぎょう）の残（のこ）れる者（もの）のために
とがを見過（みす）ごされる神（かみ）があろうか。
神（かみ）はいつくしみを喜（よろこ）ばれるので、
その怒（いか）りをながく保（たも）たず、
一九 再（ふたた）びわれわれをあわれみ、
われわれの不義（ふぎ）を足（あし）で踏（ふ）みつけられる。
あなたはわれわれのもろもろの罪（つみ）を
海（うみ）の深（ふか）みに投（な）げ入（い）れ、
二〇 昔（むかし）からわれわれの先祖（せんぞ）たちに誓（ちか）われたように、
真実（しんじつ）をヤコブに示（しめ）し、
いつくしみをアブラハムに示（しめ）される。

ナホム書

第一章 **一**ニネベについての託宣(たくせん)。エルコシびとナホムの幻(まぼろし)の書(しょ)。
二主(しゅ)はねたみ、かつあだを報(むく)いる神(かみ)、
主(しゅ)はあだを報(むく)いる者(もの)、また憤(いきどお)る者(もの)、
主(しゅ)はおのがあだに報復(ほうふく)し、
おのが敵(てき)に対(たい)して憤(いきどお)りをいだく。
三主(しゅ)は怒(いか)ることおそく、力強(ちからづよ)き者(もの)、
主(しゅ)は罰(ばっ)すべき者(もの)を決(けっ)してゆるされない者(もの)、
主(しゅ)の道(みち)はつむじ風(かぜ)と大風(おおかぜ)の中(なか)にあり、
雲(くも)はその足(あし)のちりである。
四彼(かれ)は海(うみ)を戒(いまし)めて、これをかわかし、

すべての川をかれさせる。
バシャンとカルメルはしおれ、
レバノンの花はしぼむ。
五もろもろの山は彼の前に震い、もろもろの丘は溶け、
地は彼の前にむなしくなり、
世界とその中に住む者も皆、むなしくなる。
六だれが彼の憤りの前に立つことができよう。
だれが彼の燃える怒りに耐えることができよう。
その憤りは火のように注がれ、
岩も彼によって裂かれる。
七主は恵み深く、なやみの日の要害である。
彼はご自分を避け所とする者を知っておられる。

八しかし、彼はみなぎる洪水であだを全く滅ぼし、
おのが敵を暗やみに追いやられる。
九あなたがたは主に対して何を計るか。
彼はその敵に二度としかえしをする必要がないように
敵を全く滅ぼされる。
一〇彼らは結びからまったいばらのように、
かわいた刈り株のように、焼き尽される。
一一主に対して悪事を計り、
よこしまな事を勧める者が
あなたのうちから出たではないか。
一二主はこう言われる、
「たとい彼らは強く、かつ多くあっても、

切り倒されて絶えはてる。
わたしはあなたを苦しめたが、
重ねてあなたを苦しめない。
一三今わたしは彼のくびきを砕いて、
あなたからとり除き、
あなたのなわめを切りはなす」。
一四主はあなたについてお命じになった、
「あなたの名は長く続かない。
わたしはあなたの神々の家から、
彫像および鋳造を除き去る。
あなたは罪深い者だから、
わたしはあなたの墓を設ける」。

一五 見よ、良きおとずれを伝える者の足は山の上にある。
彼は平安を宣べている。
ユダよ、あなたの祭を行い、
あなたの誓願をはたせ。
よこしまな者は重ねて、
あなたに向かって攻めてこないからである。
彼は全く断たれる。

第二章

一 撃ち破る者が
あなたに向かって上って来る。
城を守れ、道をうかがえ。
腰に帯せよ、大いに力を強くせよ。

二主はヤコブの栄えを回復して、
イスラエルの栄えのようにされる。
かすめる者が彼らをかすめ、
そのぶどうづるを、そこなったからである。
三その勇士の盾は赤くいろどられ、
その兵士は紅に身をよろう。
戦車はその備えの日に、火のように輝き、
軍馬はおどる。
四戦車はちまたに狂い走り、
大路に飛びかける。
彼らはたいまつのように輝き、
いなずまのように飛びかける。

五将士らは召集され、
彼らはその道でつまずき倒れ、
城壁に向かって急いで行って大盾を備える。
六川々の門は開け、
宮殿はあわてふためく。
七その王妃は裸にされて、捕われゆき、
その侍女たちは悲しみ、
胸を打って、はとのようにうめく。
八ニネベは池のようであったが、
その水は注ぎ出された。
「立ち止まれ、立ち止まれ」と呼んでも、
ふりかえるものもない。

九銀(ぎん)を奪(うば)え、金(きん)を奪(うば)え。
その宝(たから)は限(かぎ)りなく、
もろもろの尊(たっと)い物(もの)はおびただしい。
一〇消(き)えうせ、むなしくなり、荒(あ)れはてた。
心(こころ)は消(き)え、ひざは震(ふる)え、
すべての腰(こし)には痛(いた)みがあり、
すべての顔(かお)は色(いろ)を失(うしな)った。
一一ししのすみかはどこであるか。
若(わか)いししの穴(あな)はどこであるか。
そこに雄(お)じしはその獲物(えもの)を携(たずさ)え行(い)き、
その子(こ)じしと共(とも)にいても、これを恐(おそ)れさせる者(もの)はない。
一二雄(お)じしはその子(こ)じしのために引(ひ)き裂(さ)き、

雌じしのために獲物を絞め殺し、
獲物をもってその穴を満たし、
引き裂いた肉をもってそのすみかを満たした。
一三万軍の主は言われる、見よ、わたしはあなたに臨む。わたしはあなたの戦車を焼いて煙にする。つるぎはあなたの若いししを滅ぼす。わたしはまた、あなたの獲物を地から断つ。あなたの使者の声は重ねて聞かれない。

第三章

一わざわいなるかな、血を流す町。
その中には偽りと、ぶんどり物が満ち、
略奪はやまない。
二むちの音がする。車輪のとどろく音が聞える。

かける馬があり、走る戦車がある。
三騎兵は突撃し、
つるぎがきらめき、やりがひらめく。
殺される者はおびただしく、
しかばねは山をなす。
死体は数限りなく、人々はその死体につまずく。
四これは皆あでやかな遊女の恐るべき魔力と、
多くの淫行のためであって、
その淫行をもって諸国民を売り、
その魔力をもって諸族を売り渡したものである。
五万軍の主は言われる、
見よ、わたしはあなたに臨む、

わたしはあなたのすそを顔の上まであげ、
あなたの裸を諸民に見せ、
あなたの恥じる所を諸国に見せる。
六わたしは汚らわしい物を、あなたの上に投げかけて、
あなたをはずかしめ、あなたを見ものとする。
七すべてあなたを見るものは、
あなたを避けて逃げ去って言う、
「ニネベは滅びた」と。
だれがこのために嘆こう。
わたしはどこから彼女を慰める者を、
尋ね出し得よう。
八あなたはテーベにまさっているか。

これはナイル川のかたわらに座し、
水をその周囲にめぐらし、
海をとりでとなし、
水をその垣としている。
九その力はエチオピヤ、またエジプトであって、
限りがない。
プトびと、リビヤびともその助け手であった。
一〇しかし、これもとりことなって捕えられて行き、
その子供もすべてのちまたのかどで打ち砕かれ、
その尊い人々はくじで分けられ、
その大いなる人々は皆、鎖につながれた。
一一あなたもまた酔わされて気を失い、

あなたは敵(てき)を避(さ)けて逃(に)げ場(ば)を求(もと)める。
一二 あなたのとりでは皆(みな)
初(はつ)なりの実(み)をもつ、いちじくの木(き)のようだ。
これをゆすぶればその実(み)は落(お)ちて、
食(た)べようとする者(もの)の口(くち)にはいる。
一三 見(み)よ、あなたのうちにいる兵士(へいし)は女(おんな)のようだ。
あなたの国(くに)の門(もん)はあなたの敵(てき)の前(まえ)に広(ひろ)く開(ひら)かれ、
火(ひ)はあなたの貫(かん)の木(き)を焼(や)いた。
一四 籠城(ろうじょう)のために水(みず)をくめ。
あなたのとりでを堅(かた)めよ。
粘土(ねんど)の中(なか)にはいって、しっくいを踏(ふ)み、
れんがの型(かた)をとれ。

一五その所で火はあなたを焼き、
つるぎはあなたを切る。
それはいなごのようにあなたを食い滅ぼす。
あなたはいなごのように数を増せ。
ばったのようにふえよ。
一六あなたは自分の商人を天の星よりも多くした。
いなごは羽をはって飛び去る。
一七あなたの君たちは、ばったのように、
あなたの学者たちは、いなごのように、
寒い日には垣にとまり、
日が出て来ると飛び去る。
そのありかはだれも知らない。

一八アッスリヤの王よ、
あなたの牧者は眠り、あなたの貴族はまどろむ。
あなたの民は山の上に散らされ、
これを集める者はない。
一九あなたの破れは、いえることがなく、
あなたの傷は重い。
あなたのうわさを聞く者は皆、
あなたの事について手を打つ。
あなたの悪を常に身に受けなかったような者が、
だれひとりあるか。

ハバクク書

第一章

一預言者(よげんしゃ)ハバククが見(み)た神(かみ)の託宣(たくせん)。
二主(しゅ)よ、わたしが呼(よ)んでいるのに、
いつまであなたは聞(き)きいれて下(くだ)さらないのか。
わたしはあなたに「暴虐(ぼうぎゃく)がある」と訴(うった)えたが、
あなたは助(たす)けて下(くだ)さらないのか。
三あなたは何(なに)ゆえ、わたしによこしまを見(み)せ、
何(なに)ゆえ、わたしに災(わざわい)を見(み)せられるのか。
略奪(りゃくだつ)と暴虐(ぼうぎゃく)がわたしの前(まえ)にあり、
また論争(ろんそう)があり、闘争(とうそう)も起(おこ)っている。

四それゆえ、律法はゆるみ、公義は行われず、
悪人は義人を囲み、公義は曲げて行われている。
五諸国民のうちを望み見て、
驚け、そして怪しめ。
わたしはあなたがたの日に一つの事をする。
人がこの事を知らせても、
あなたがたはとうてい信じまい。
六見よ、わたしはカルデヤびとを興す。
これはたけく、激しい国民であって、
地を縦横に行きめぐり、
自分たちのものでないすみかを奪う。
七これはきびしく、恐ろしく、

そのさばきと威厳（いげん）とは彼（かれ）ら自身（じしん）から出（で）る。
八その馬（うま）はひょうよりも速（はや）く、
夜（よる）のおおかみよりも荒（あら）い。
その騎兵（きへい）は威勢（いせい）よく進（すす）む。
すなわち、その騎兵（きへい）は遠（とお）い所（ところ）から来（く）る。
彼（かれ）らは物（もの）を食（く）おうと急（いそ）ぐわしのように飛（と）ぶ。
九彼（かれ）らはみな暴虐（ぼうぎゃく）のために来（く）る。
彼（かれ）らを恐（おそ）れる恐（おそ）れが彼（かれ）らの前（まえ）を行（い）く。
彼（かれ）らはとりこを砂（すな）のように集（あつ）める。
一〇彼（かれ）らは王（おう）たちを侮（あなど）り、つかさたちをあざける。
彼（かれ）らはすべての城（しろ）をあざ笑（わら）い、
土（つち）を積（つ）み上（あ）げてこれを奪（うば）う。

一一こうして、彼らは風のようになぎ倒して行き過ぎる。
彼らは罪深い者で、おのれの力を神となす。
一二わが神、主、わが聖者よ。
あなたは永遠からいますかたではありませんか。
わたしたちは死んではならない。
主よ、あなたは彼らをさばきのために備えられた。
岩よ、あなたは彼らを懲しめのために立てられた。
一三あなたは目が清く、悪を見られない者、
また不義を見られない者であるのに、
何ゆえ不真実な者に目をとめていられるのですか。
悪しき者が自分よりも正しい者を、のみ食らうのに、
何ゆえ黙っていられるのですか。

一四あなたは人を海の魚のようにし、
治める者のない這う虫のようにされる。
一五彼はつり針でこれをことごとくつり上げ、
網でこれを捕え、
引き網でこれを集め、
こうして彼は喜び楽しむ。
一六それゆえ、彼はその網に犠牲をささげ、
その引き網に香をたく。
これによって彼はぜいたくに暮し、
その食物も豊かになるからである。
一七それで、彼はいつまでもその網の獲物を取り入れて、
無情にも諸国民を殺すのであろうか。

第二章

一わたしはわたしの見張所に立ち、
物見やぐらに身を置き、
望み見て、彼がわたしになんと語られるかを見、
またわたしの訴えについて
わたし自らなんと答えたらよかろうかを見よう。
二主はわたしに答えて言われた、
「この幻を書き、
これを板の上に明らかにしるし、
走りながらも、これを読みうるようにせよ。
三この幻はなお定められたときを待ち、
終りをさして急いでいる。それは偽りではない。
もしおそければ待っておれ。

それは必ず臨む。滞りはしない。
四見よ、その魂の正しくない者は衰える。
しかし義人はその信仰によって生きる。
五また、酒は欺くものだ。
高ぶる者は定まりがない。
彼の欲は陰府のように広い。
彼は死のようであって、飽くことなく、
万国をおのれに集め、
万民をおのれのものとしてつどわせる」。
六これらは皆ことわざをもって彼をあざけり、
あざけりのなぞをもって彼をあざ笑わないだろうか。
すなわち言う、

「わざわいなるかな、
おのれに属(ぞく)さないものを増(ま)し加(くわ)える者(もの)よ。
いつまでこのようであろうか。
質物(しちもの)でおのれを重(おも)くする者(もの)よ」。
七あなたの負債者(ふさいしゃ)は、にわかに興(おこ)らないであろうか。
あなたを激(はげ)しくゆすぶる者(もの)は目(め)ざめないであろうか。
その時(とき)あなたは彼(かれ)らにかすめられる。
八あなたは多(おお)くの国民(こくみん)をかすめたゆえ、
そのもろもろの民(たみ)の残(のこ)れる者(もの)は皆(みな)あなたをかすめる。
これは人(ひと)の血(ち)を流(なが)し、
国(くに)と町(まち)と、その中(なか)に住(す)むすべての者(もの)に
暴虐(ぼうぎゃく)を行(おこな)ったからである。
九わざわいなるかな、

災の手を免れるために高い所に巣を構えようと、
おのが家のために不義の利を取る者よ。
一〇あなたは事をはかって自分の家に恥を招き、
多くの民を滅ぼして、自分の生命を失った。
一一石は石がきから叫び、
梁は建物からこれに答えるからである。
一二わざわいなるかな、
血をもって町を建て、
悪をもって町を築く者よ。
一三見よ、もろもろの民は火のために労し、
もろもろの国びとはむなしい事のために疲れる。
これは万軍の主から出る言葉ではないか。

一四海が水でおおわれているように、
地は主の栄光の知識で満たされるからである。
一五わざわいなるかな、
その隣り人に怒りの杯を飲ませて、これを酔わせ、
彼らの隠し所を見ようとする者よ。
一六あなたは誉の代りに恥に飽き、
あなたもまた飲んでよろめけ。
主の右の手の杯は、あなたに巡り来る。
恥はあなたの誉に代る。
一七あなたがレバノンになした暴虐は、あなたを倒し、
獣のような滅亡は、あなたを恐れさせる。
これは人の血を流し、

国と町と、町の中に住むすべての者に、
　暴虐を行ったからである。
一八刻める像、鋳像および偽りを教える者は、
その作者がこれを刻んだとてなんの益があろうか。
その作者が物言わぬ偶像を造って、
その造ったものに頼んでみても、
なんの益があろうか。
一九わざわいなるかな、
木に向かって、さめよと言い、
物言わぬ石に向かって、起きよと言う者よ。
これは黙示を与え得ようか。
見よ、これは金銀をきせたもので、

その中には命の息は少しもない。
二〇しかし、主はその聖なる宮にいます、
全地はそのみ前に沈黙せよ。

第三章

一シギヨノテの調べによる、
預言者ハバククの祈。
二主よ、わたしはあなたのことを聞きました。
主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。
この年のうちにこれを新たにし、
この年のうちにこれを知らせてください。
怒る時にもあわれみを思いおこしてください。
三神はテマンからこられ、

聖者はパランの山からこられた。
その栄光は天をおおい、
そのさんびは地に満ちた。〔セラ
四その輝きは光のようであり、
その光は彼の手からほとばしる。
かしこにその力を隠す。
五疫病はその前に行き、熱病はその後に従う。
六彼は立って、地をはかり、
彼は見て、諸国民をおののかせられる。
とこしえの山は散らされ、永遠の丘は沈む。
彼の道は昔のとおりである。
七わたしが見ると、クシャンの天幕に悩みがあり、

ミデアンの国の幕は震う。
八主よ、あなたが馬に乗り、
勝利の戦車に乗られる時、
あなたは川に向かって怒られるのか。
川に向かって憤られるのか。
あるいは海に向かって立腹されるのか。
九あなたの弓は取り出された。
矢は、弦につがえられた。〔セラ
あなたは川をもって地を裂かれた。
一〇山々はあなたを見て震い、
荒れ狂う水は流れいで、
淵は声を出して、その手を高くあげた。

一一飛び行くあなたの矢の光のために、
電光のようにきらめく、あなたのやりのために、
日も月もそのすみかに立ち止まった。
一二あなたは憤って地を行きめぐり、
怒って諸国民を踏みつけられた。
一三あなたはあなたの民を救うため、
あなたの油そそいだ者を救うために出て行かれた。
あなたは悪しき者の頭を砕き、
彼を腰から首まで裸にされた。〔セラ
一四あなたはあなたのやりで将軍の首を刺しとおされた。
彼らはわたしを散らそうとして、
つむじ風のように来、

貧しい者をひそかに、のみ滅ぼすことを楽しみとした。
一五あなたはあなたの馬を使って、
海と大水のさかまくところを踏みつけられた。
一六わたしは聞いて、わたしのからだはわななき、
わたしのくちびるはその声を聞いて震える。
腐れはわたしの骨に入り、
わたしの歩みは、わたしの下によろめく。
わたしはわれわれに攻め寄せる民の上に
悩みの日の臨むのを静かに待とう。
一七いちじくの木は花咲かず、
ぶどうの木は実らず、
オリブの木の産はむなしくなり、

田畑(たはた)は食物(しょくもつ)を生(しょう)ぜず、
おりには羊(ひつじ)が絶(た)え、
牛舎(ぎゅうしゃ)には牛(うし)がいなくなる。
一八しかし、わたしは主(しゅ)によって楽(たの)しみ、
わが救(すくい)の神(かみ)によって喜(よろこ)ぶ。
一九主(しゅ)なる神(かみ)はわたしの力(ちから)であって、
わたしの足(あし)を雌(め)じかの足(あし)のようにし、
わたしに高(たか)い所(ところ)を歩(あゆ)ませられる。
これを琴(こと)に合(あ)わせ、
聖歌隊(せいかたい)の指揮者(しきしゃ)によって歌(うた)わせる。

ゼパニヤ書

第一章
一ユダの王アモンの子ヨシヤの世に、ゼパニヤに臨んだ主の言葉。
ゼパニヤはクシの子、クシはゲダリヤの子、ゲダリヤはアマリヤの子、アマリヤはヒゼキヤの子である。
二主は言われる、
「わたしは地のおもてからすべてのものを一掃する」。
三主は言われる、
「わたしは人も獣も一掃し、
空の鳥、海の魚をも一掃する。
わたしは悪人を倒す。
わたしは地のおもてから人を絶ち滅ぼす」。

四「わたしはユダとエルサレムの
すべての住民との上に手を伸べる。
わたしはこの所からバアルの残党と、
偶像の祭司の名とを断つ。
五また屋上で天の万象を拝む者、
主に誓いを立てて拝みながら、
またミルコムをさして誓う者、
六主にそむいて従わない者、
主を求めず、主を尋ねない者を断つ」。
七主なる神の前に沈黙せよ。
主の日は近づき、
主はすでに犠牲を備え、
その招いた者を聖別されたからである。

八主の犠牲をささげる日に、
「わたしはつかさたちと王の子たち、
およびすべて異邦の衣服を着る者を罰する。
九その日にわたしはまた、すべて敷居をとび越え、
暴虐と欺きとを自分の主君の家に満たす者を罰する」。
一〇主は言われる、
「その日には魚の門から叫び声がおこり、
第二の町からうめき声がおこり、
もろもろの丘からすさまじい響きがおこる。
一一しっくいの家の住民よ、泣き叫べ。
あきないする民は皆滅ぼされ、
銀を量る者は皆断たれるからである。

一二その時、わたしはともしびをもって、
エルサレムを尋ねる。
そして滓の上に凝り固まり、
その心の中で
『主は良いことも、悪いこともしない』と
言う人々をわたしは罰する。
一三彼らの財宝はかすめられ、
彼らの家は荒れはてる。
彼らは家を建てても、それに住むことができない、
ぶどう畑を作っても、そのぶどう酒を飲むことができない」。
一四主の大いなる日は近い、
近づいて、すみやかに来る。

主(しゅ)の日(ひ)の声(こえ)は耳(みみ)にいたい。
そこに、勇士(ゆうし)もいたく叫(さけ)ぶ。
一五その日(ひ)は怒(いか)りの日(ひ)、
なやみと苦(くる)しみの日(ひ)、
荒(あ)れ、また滅(ほろ)びる日(ひ)、
暗(くら)く、薄暗(うすぐら)い日(ひ)、
雲(くも)と黒雲(くろくも)の日(ひ)、
一六ラッパとときの声(こえ)の日(ひ)、
堅固(けんご)な町(まち)と高(たか)いやぐらを攻(せ)める日(ひ)である。
一七わたしは人々(ひとびと)になやみを下(くだ)して、
盲人(もうじん)のように歩(ある)かせる。
彼(かれ)らが主(しゅ)に対(たい)して罪(つみ)を犯(おか)したからである。

彼らの血はちりのように流され、
彼らの肉は糞土のように捨てられる。
一八彼らの銀も金も、
主の怒りの日には彼らを救うことができない。
全地は主のねたみの火にのまれる。
主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽くされる。

第二章

一あなたがた、恥を知らぬ民よ、
共につどい、集まれ。
二すなわち、もみがらのように追いやられる前に、
主の激しい怒りがまだあなたがたに臨まない前に、
主の憤りの日がまだあなたがたに来ない前に。

三すべて主の命令を行うこの地のへりくだる者よ、
主を求めよ。
正義を求めよ。
謙遜を求めよ。
そうすればあなたがたは主の怒りの日に、
あるいは隠されることがあろう。
四ともあれ、ガザは捨てられ、
アシケロンは荒れはて、
アシドドは真昼に追い払われ、
エクロンは抜き去られる。
五わざわいなるかな、
海べに住む者、ケレテの国民。

ペリシテびとの地(ち)、カナンよ、
主(しゅ)の言葉(ことば)があなたがたに臨(のぞ)む。
わたしはあなたを滅(ほろ)ぼして、
住(す)む者(もの)がないようにする。
六海(うみ)べよ、あなたは牧場(まきば)となり、
羊飼(ひつじかい)の牧草地(ぼくそうち)となり、
また羊(ひつじ)のおりとなる。
七海(うみ)べはユダの家(いえ)の残(のこ)りの者(もの)に帰(き)する。
彼(かれ)らはその所(ところ)で群(む)れを養(やしな)い、
夕暮(ゆうぐれ)にはアシケロンの家(いえ)に伏(ふ)す。
彼(かれ)らの神(かみ)、主(しゅ)が彼(かれ)らを顧(かえり)み、
その幸福(こうふく)を回復(かいふく)されるからである。

八「わたしはモアブのあざけりと、
アンモンの人々の、ののしりを聞いた。
彼らはわが民をあざけり、
自ら誇って彼らの国境を侵した。
九それゆえ、万軍の主、イスラエルの神は言われる、
わたしは生きている。
モアブは必ずソドムのようになる。
アンモンの人々はゴモラのようになる。
いらくさと塩穴とがここを占領して、
永遠に荒れ地となる。
わが民の残りの者は彼らをかすめ、
わが国民の残りの者はこれを所有する」。
一〇この事の彼らに臨むのはその高ぶりによるのだ。

彼らが万軍の主の民をあざけり、
みずから誇ったからである。
一一主は彼らに対して恐るべき者となられる。
主は地のすべての神々を飢えさせられる。
もろもろの国の民は、
おのおの自分の所から出て主を拝む。
一二エチオピヤびとよ、あなたがたもまた
わがつるぎによって殺される。
一三主はまた北に向かって手を伸べ、
アッスリヤを滅ぼし、
ニネベを荒して、
荒野のような、かわいた地とされる。

一四家畜の群れ、もろもろの野の獣はその中に伏し、
はげたかや、やまあらしはその柱の頂に住み、
ふくろうは、その窓のうちになき、
からすは、その敷居の上に鳴く。
その香柏の細工が裸にされるからである。
一五この町は勝ち誇って、安らかに落ち着き、
その心の中で、
「ただわたしだけだ、わたしの外にはだれもない」と
言った町であるが、
このように荒れはてて、
獣の伏す所になってしまった。
ここを通り過ぎる者は

皆(みな)あざけって、手(て)を振(ふ)る。

第三章

一わざわいなるかな、
このそむき汚(けが)れた暴虐(ぼうぎゃく)の町(まち)。
二これはだれの声(こえ)にも耳(みみ)を傾(かたむ)けず、
懲(こら)しめを受(う)けいれず、
主(しゅ)に寄(よ)り頼(たの)まず、
おのれの神(かみ)に近(ちか)よらない。
三その中(なか)にいるつかさたちは、ほえるしし、
そのさばきびとたちは、夜(よる)のおおかみで、
彼(かれ)らは朝(あさ)まで何(なに)一つ残(のこ)さない。
四その預言者(よげんしゃ)たちは、放縦(ほうじゅう)で偽(いつわ)りびと、

その祭司たちは聖なる物を汚し、律法を破る。
五その中にいます主は義であって、不義を行われない。
朝ごとにその公義を現して、誤ることがない。
しかし不義な者は恥を知らない。
六「わたしは諸国民を滅ぼした。
そのやぐらは荒れはてた。
わたしはそのちまたを荒したので、
ちまたを行き来する者もない。
その町々は荒れすたれて、
人の姿もなく、住む者もない。
七わたしは言った、
『これは必ずわたしを恐れ、懲しめを受ける。

これはわたしが命じたすべての事を見失わない』と。
しかし彼らはしきりに自分の行状を乱した」。
八主は言われる、
「それゆえ、あなたがたは、わたしが立って、
証言する日を待て。
わたしの決意は諸国民をよせ集め、
もろもろの国を集めて、
わが憤り、わが激しい怒りを
ことごとくその上に注ぐことであって、
全地は、ねたむわたしの怒りの火に
焼き滅ぼされるからである。
九その時わたしはもろもろの民に清きくちびるを与え、

すべて彼(かれ)らに主(しゅ)の名(な)を呼(よ)ばせ、
心(こころ)を一つにして主(しゅ)に仕(つか)えさせる。
一〇わたしを拝(おが)む者(もの)、
わたしが散(ち)らした者(もの)の娘(むすめ)は
エチオピヤの川々(かわがわ)の向(む)こうから来(き)て、
わたしに供(そな)え物(もの)をささげる。
一一その日(ひ)には、
あなたはわたしにそむいたすべてのわざのゆえに、
はずかしめられることはない。
その時(とき)わたしはあなたのうちから、
高(たか)ぶって誇(ほこ)る者(もの)どもを除(のぞ)くゆえ、
あなたは重(かさ)ねてわが聖(せい)なる山(やま)で、高(たか)ぶることはない。

一二わたしは柔和にしてへりくだる民を、
あなたのうちに残す。
彼らは主の名を避け所とする。
一三イスラエルの残りの者は不義を行わず、偽りを言わず、
その口には欺きの舌を見ない。
それゆえ、彼らは食を得て伏し、
彼らをおびやかす者はいない」。
一四シオンの娘よ、喜び歌え。
イスラエルよ、喜び呼ばわれ。
エルサレムの娘よ、心のかぎり喜び楽しめ。
一五主はあなたを訴える者を取り去り、
あなたの敵を追い払われた。

イスラエルの王(おう)なる主(しゅ)はあなたのうちにいます。
あなたはもはや災(わざわい)を恐(おそ)れることはない。
一六その日(ひ)、人々(ひとびと)はエルサレムに向(む)かって言(い)う、
「シオンよ、恐(おそ)れるな。
あなたの手(て)を弱々(よわよわ)しくたれるな。
一七あなたの神(かみ)、主(しゅ)はあなたのうちにいまし、
勇士(ゆうし)であって、勝利(しょうり)を与(あた)えられる。
彼(かれ)はあなたのために喜(よろこ)び楽(たの)しみ、
その愛(あい)によってあなたを新(あらた)にし、
祭(まつり)の日(ひ)のようにあなたのために喜(よろこ)び呼(よ)ばわられる」。
一八「わたしはあなたから悩(なや)みを取(と)り去(さ)る。
あなたは恥(はじ)を受(う)けることはない。

一九見よ、その時あなたをしえたげる者を
わたしはことごとく処分し、
足なえを救い、追いやられた者を集め、
彼らの恥を誉にかえ、
全地にほめられるようにする。
二〇その時、わたしはあなたがたを連れかえる。
わたしがあなたがたを集めるとき、
わたしがあなたがたの目の前に、
あなたがたの幸福を回復するとき、
地のすべての民の中で、
あなたがたに名を得させ、誉を得させる」と
主は言われる。

ハガイ書

第一章一ダリヨス王の二年六月、その月の一日に、主の言葉が預言者ハ
ガイによって、シャルテルの子、ユダの総督ゼルバベル、およびヨザダクの
子、大祭司ヨシュアに臨んだ、**二**「万軍の主はこう言われる、この民は、主
の家を再び建てる時は、まだこないと言っている」。**三**そこで、主の言葉
はまた預言者ハガイに臨んだ、**四**「主の家はこのように荒れはてているの
に、あなたがたは、みずから板で張った家に住んでいる時であろうか。**五**
それで今、万軍の主はこう言われる、あなたがたは自分のなすべきことを
よく考えるがよい。**六**あなたがたは多くまいても、取入れは少なく、食べ
ても、飽きることはない。飲んでも、満たされない。着ても、暖まらない。
賃銀を得ても、これを破れた袋に入れているようなものである。

七万軍の主はこう言われる、あなたがたは、自分のなすべきことを考え
るがよい。八山に登り、木を持ってきて主の家を建てよ。そうすればわた
しはこれを喜び、かつ栄光のうちに現れると主は言われる。九あなたが
たは多くを望んだが、見よ、それは少なかった。あなたがたが家に持って
きたとき、わたしはそれを吹き払った。これは何ゆえであるかと、万軍の
主は言われる。これはわたしの家が荒れはてているのに、あなたがたは、お
のおの自分の家の事だけに、忙しくしている。一〇それゆえ、あなたがた
の上の天は露をさし止め、地はその産物をさし止めた。一一また、わたし
は地にも、山にも、穀物にも、新しい酒にも、油にも、地に生じるも
のにも、人間にも、家畜にも、手で作るすべての作物にも、ひでりを呼び
寄せた」。
一二そこで、シャルテルの子ゼルバベルとヨザダクの子、大祭司ヨシュア

および残りのすべての民は、その神、主の声と、その神、主のつかわされ
た預言者ハガイの言葉とに聞きしたがい、そして民は、主の前に恐れかし
こんだ。一三時に、主の使者ハガイは主の命令により、民に告げて言った、
「わたしはあなたがたと共にいると主は言われる」。一四そして主は、シャ
ルテルの子、ユダの総督ゼルバベルの心と、ヨザダクの子、大祭司ヨシュ
アの心、および残りのすべての民の心を、振り動かされたので、彼らは
来て、その神、万軍の主の家の作業にとりかかった。一五これは六月二十
四日のことであった。

第二章一ダリヨス王の二年の七月二十一日に、主の言葉が預言者ハガイ
に臨んだ、二「シャルテルの子、ユダの総督ゼルバベルと、ヨザダクの子、
大祭司ヨシュア、および残りのすべての民に告げて言え、三『あなたがた
残りの者のうち、以前の栄光に輝く主の家を見た者はだれか。あなたが

たは今、この状態をどう思うか。これはあなたがたの目には、無にひとし
いではないか。四主は言われる、ゼルバベルよ、勇気を出せ。ヨザダクの
子、大祭司ヨシュアよ、勇気を出せ。主は言われる。この地のすべての民
よ、勇気を出せ。働け。わたしはあなたがたと共にいると、万軍の主は
言われる。五これはあなたがたがエジプトから出た時、わたしがあなたが
たに、約束した言葉である。わたしの霊が、あなたがたのうちに宿ってい
る。恐れるな。六万軍の主はこう言われる、しばらくして、いま一度、わた
しは天と、地と、海と、かわいた地とを震う。七わたしはまた万国民を震
う。万国民の財宝は、はいって来て、わたしは栄光をこの家に満たすと、
万軍の主は言われる。八銀はわたしのもの、金もわたしのものであると、
万軍の主は言われる。九主の家の後の栄光は、前の栄光よりも大きいと、
万軍の主は言われる。わたしはこの所に繁栄を与えると、万軍の主は言

われる』。
一〇ダリヨスの二年の九月二十四日に、主の言葉が預言者ハガイに臨ん
だ、一一「万軍の主はこう言われる、律法について祭司たちに尋ねて言え、
一二『人がその衣服のすそで聖なる肉を運んで行き、そのすそがもし、パン
またはあつもの、または酒、または油、またはどんな食物にでもさわっ
たなら、それらは聖なるものとなるか』と」。祭司たちは「ならない」と答
えた。一三ハガイはまた言った、「もし、死体によって汚れた人が、これらの
一つにさわったなら、それは汚れるか」。祭司たちは「汚れる」と答えた。
一四そこで、ハガイは言った、「主は言われる、この民も、この国も、わたし
の前では、そのようである。またその手のわざもそのようである。その所
で彼らのささげるものは、汚れたものである。一五今、あなたがたはこの
日から、後の事を思うがよい。主の宮で石の上に石が積まれなかった前、
あなたがたは、どんなであったか。一六あの時には、二十枡の麦の積まれ

る所に行ったが、わずかに十枡を得、また五十桶をくもうとして、酒ぶね
に行ったが、二十桶を得たのみであった。一七わたしは立ち枯れと、腐り穂
と、ひょうをもってあなたがたと、あなたがたのすべての手のわざを撃っ
た。しかし、あなたがたは、わたしに帰らなかったと主は言われる。一八あ
なたがたはこの日より後、すなわち、九月二十四日よりの事を思うがよい。
また主の宮の基をすえた日から後の事を心にとめるがよい。一九種はな
お、納屋にあるか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリブの木も
まだ実を結ばない。しかし、わたしはこの日から、あなたがたに恵みを与
える」。

二〇この月の二十四日に、主の言葉がふたたびハガイに臨んだ、二一「ユ
ダの総督ゼルバベルに告げて言え、わたしは天と地を震う。二二わたしは
国々の王位を倒し、異邦の国々の力を滅ぼし、また戦車、およびこれに乗

る者を倒す。馬およびこれに乗る者は、たがいにその仲間のつるぎによって倒れる。
二三万軍の主は言われる、シャルテルの子、わがしもべゼルバベルよ、主は言われる、その日、わたしはあなたを立て、あなたを印章のようにする。わたしはあなたを選んだからであると、万軍の主は言われる」。

ゼカリヤ書

第一章ーダリヨスの第二年の八月に、主の言葉がイドの子ベレキヤの子
である預言者ゼカリヤに臨んだ、
二「主はあなたがたの先祖たちに対して、
いたくお怒りになった。
三それゆえ、万軍の主はこう仰せられると、彼ら
に告げよ。万軍の主は仰せられる、わたしに帰れ、そうすれば、わたしもあ
なたがたに帰ろうと、万軍の主は仰せられる。
四あなたがたの先祖たちの
ようであってはならない。先の預言者たちは、彼らにむかって叫んで言っ
た、『万軍の主はこう仰せられる、悪い道を離れ、悪いおこないを捨てて
帰れ』と。しかし彼らは聞きいれず、耳をわたしに傾けなかったと主は
言われる。
五あなたがたの先祖たち、彼らはどこにいるか。預言者たち、彼
らは永遠に生きているのか。
六しかしわたしのしもべである預言者たちに

命じたわが言葉と、わが定めとは、あなたがたの先祖たちに及んだではな
いか。それで彼らは立ち返って言った、『万軍の主がわれわれの道にした
がい、おこないに従って、われわれに、なそうと思い定められたように、
そのとおりされたのだ』と」。
七ダリヨスの第二年の十一月、すなわちセバテという月の二十四日に、主
の言葉がイドの子ベレキヤの子である預言者ゼカリヤに臨んだ。そしてゼ
カリヤは言った、八「わたしは夜、見ていると、ひとりの人が赤馬に乗って、
谷間にあるミルトスの木の中に立ち、その後に赤馬、栗毛の馬、白馬が
いた。九その時わたしが『わが主よ、これらはなんですか』と尋ねると、わ
たしと語る天の使は言った、『これがなんであるか、あなたに示しましょ
う』。一〇すると、ミルトスの木の中に立っている人が答えて、『これらは地
を見回らせるために、主がつかわされた者です』と言うと、一一彼らは答え

て、ミルトスの中に立っている主の使に言った、『われわれは地を見回っ
たが、全地はすべて平穏です』。一二すると主の使は言った、『万軍の主
よ、あなたは、いつまでエルサレムとユダの町々とを、あわれんで下さら
ないのですか。あなたはお怒りになって、すでに七十年になりました』。一
三主はわたしと語る天の使に、ねんごろな慰めの言葉をもって答えられ
た。一四そこで、わたしと語る天の使は言った、『あなたは呼ばわって言
いなさい。万軍の主はこう仰せられます、わたしはエルサレムのため、シ
オンのために、大いなるねたみを起し、一五安らかにいる国々の民に対し
て、大いに怒る。なぜなら、わたしが少しばかり怒ったのに、彼らは、大
いにこれを悩ましたからであると。一六それゆえ、主はこう仰せられます、
わたしはあわれみをもってエルサレムに帰る。わたしの家はその中に建て
られ、測りなわはエルサレムに張られると、万軍の主は仰せられます。一

七あなたはまた呼ばわって言いなさい。万軍の主はこう仰せられます、わ
が町々は再び良い物で満ちあふれ、主は再びシオンを慰め、再びエル
サレムを選ぶ』と」。
一八わたしが目をあげて見ていると、見よ、四つの角があった。一九わた
しと語る天の使に「これらはなんですか」と言うと、彼は答えて言った、
「これらはユダ、イスラエルおよびエルサレムを散らした角です」。二〇その
時、主は四人の鍛冶をわたしに示された。二一わたしが「これらは何をす
るために来たのですか」と言うと、彼は答えた、「これらの角はユダを散ら
して、人にその頭をあげさせなかったものですが、この四人の者が来たの
は彼らをおどし、かのユダの地にむかって角をあげ、これを散らした国々
の民の角を投げうつためです」。

第二章一またわたしが目をあげて見ていると、見よ、ひとりの人が、測

りなわを手に持っているので、二「あなたはどこへ行くのですか」と尋ね
ると、その人はわたしに言った、「エルサレムを測って、その広さと、長さ
を見ようとするのです」。三すると見よ、わたしと語る天の使が出て行く
と、またひとりの天の使が出てきて、これに出会って、四言った、「走って
行って、あの若い人に言いなさい、『エルサレムはその中に、人と家畜が多
くなるので、城壁のない村里のように、人の住む所となるでしょう。五
主は仰せられます、わたしはその周囲で火の城壁となり、その中で栄光
となる』と」。

六主は仰せられる、さあ、北の地から逃げて来なさい。わたしはあなたが
たを、天の四方の風のように散らしたからである。七さあ、バビロンの娘
と共にいる者よ、シオンにのがれなさい。八あなたがたにさわる者は、彼の
目の玉にさわるのであるから、あなたがたを捕えていった国々の民に、そ

の栄光にしたがって、わたしをつかわされた万軍の主は、こう仰せられる、
九「見よ、わたしは彼らの上に手を振る。彼らは自分に仕えた者のとりこ
となる。その時あなたがたは万軍の主が、わたしをつかわされたことを知
る。一〇主は言われる、シオンの娘よ、喜び歌え。わたしが来て、あなた
の中に住むからである。一一その日には、多くの国民が主に連なって、わた
しの民となる。わたしはあなたの中に住む。一二あなたは万軍の主が、わ
たしをあなたにつかわされたことを知る。主は聖地で、ユダを自分の分と
して取り、エルサレムを再び選ばれるであろう」。一三すべて肉なる者よ、
主の前に静まれ。主はその聖なるすみかから立ちあがられたからである。
第三章一時に主は大祭司ヨシュアが、主の使の前に立ち、サタンがそ
の右に立って、これを訴えているのをわたしに示された。二主はサタンに
言われた、「サタンよ、主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選

んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしでは
ないか」。三ヨシュアは汚れた衣を着て、み使の前に立っていたが、四み
使は自分の前に立っている者どもに言った、「彼の汚れた衣を脱がせな
さい」。またヨシュアに向かって言った、「見よ、わたしはあなたの罪を取
り除いた。あなたに祭服を着せよう」。五わたしは言った、「清い帽子を頭
にかぶらせなさい」。そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた。
主の使はかたわらに立っていた。
六主の使は、ヨシュアを戒めて言った、七「万軍の主は、こう仰せら
れる、あなたがもし、わたしの道に歩み、わたしの務を守るならば、わた
しの家をつかさどり、わたしの庭を守ることができる。わたしはまた、こ
こに立っている者どもの中に行き来することを得させる。八大祭司ヨシュ
アよ、あなたも、あなたの前にすわっている同僚たちも聞きなさい。彼ら

はよいしるしとなるべき人々だからである。見よ、わたしはわたしのしも
べなる枝を生じさせよう。九万軍の主は言われる、見よ、ヨシュアの前に
わたしが置いた石の上に、すなわち七つの目をもっているこの一つの石の
上に、わたしはみずから文字を彫刻する。そしてわたしはこの地の罪を、
一日の内に取り除く。一〇万軍の主は言われる、その日には、あなたがた
はめいめいその隣り人を招いて、ぶどうの木の下、いちじくの木の下に座
すのである」。

第四章一わたしと語った天の使がまた来て、わたしを呼びさました。わ
たしは眠りから呼びさまされた人のようであった。二彼がわたしに向かっ
て「何を見るか」と言ったので、わたしは言った、「わたしが見ていると、
すべて金で造られた燭台が一つあって、その上に油を入れる器があり、
また燭台の上に七つのともしび皿があり、そのともしび皿は燭台の上に

あって、これにおのおの七本ずつの管があります。三また燭台のかたわら
に、オリブの木が二本あって、一本は油をいれる器の右にあり、一本は
その左にあります」。四わたしはまたわたしと語る天の使に言った、「わ
が主よ、これらはなんですか」。五わたしと語る天の使は答えて、「あなた
はそれがなんであるか知らないのですか」と言ったので、わたしは「わが主
よ、知りません」と言った。六すると彼はわたしに言った、「ゼルバベルに、
主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢に
よらず、能力によらず、わたしの霊によるのである。七大いなる山よ、お
まえは何者か。おまえはゼルバベルの前に平地となる。彼は『恵みあれ、
これに恵みあれ』と呼ばわりながら、かしら石を引き出すであろう」。八主
の言葉がわたしに臨んで言うには、九「ゼルバベルの手はこの宮の礎を
すえた。彼の手はこれを完成する。その時あなたがたは万軍の主が、わた

しをあなたがたにつかわされたことを知る。一〇だれでも小さい事の日を
いやしめた者は、ゼルバベルの手に、下げ振りのあるのを見て、喜ぶ。
これらの七つのものは、あまねく全地を行き来する主の目である」。一一
わたしはまた彼に尋ねて、「燭台の左右にある、この二本のオリブの木は
なんですか」と言い、一二重ねてまた「この二本の金の管によって、油を
それから注ぎ出すオリブの二枝はなんですか」と言うと、一三彼はわたしに
答えて、「あなたはそれがなんであるか知らないのですか」と言ったので、
「わが主よ、知りません」と言った。一四すると彼は言った、「これらはふた
りの油そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です」。

第五章一わたしがまた目をあげて見ていると、飛んでいる巻物を見た。二
彼がわたしに「何を見るか」と言ったので、「飛んでいる巻物を見ます。そ
の長さは二十キュビト、その幅は十キュビトです」と答えた。三すると彼は

また、わたしに言った、「これは全地のおもてに出て行く、のろいの言葉で
す。すべて盗む者はこれに照して除き去られ、すべて偽り誓う者は、これ
に照して除き去られるのです。
四万軍の主は仰せられます、わたしはこれ
を出て行かせる。これは盗む者の家に入り、またわたしの名をさして偽
り誓う者の家に入り、その家の中に宿って、これをその木と石と共に滅ぼ
すと」。
五わたしと語る天の使は進んで来て、わたしに「目をあげて、この出て
きた物が、なんであるかを見なさい」と言った。
六わたしが「これはなん
ですか」と言うと、彼は「この出てきた物は、エパ枡です」と言い、また
「これは全地の罪です」と言った。
七そして見よ、鉛のふたを取りあげる
と、そのエパ枡の中にひとりの女がすわっていた。
八すると彼は「これは
罪悪である」と言って、その女をエパ枡の中に押し入れ、鉛の重しを、

その枡の口に投げかぶせた。九それからわたしが目をあげて見ていると、ふ
たりの女が出てきた。これに、こうのとりの翼のような翼があり、そ
の翼に風をはらんで、エパ枡を天と地との間に持ちあげた。一〇わたし
は、わたしと語る天の使に言った、「彼らはエパ枡を、どこへ持って行く
のですか」。一一彼はわたしに言った、「シナルの地で、女たちのために家
を建てるのです。それが建てられると、彼らはエパ枡をそこにすえ、それ
の土台の上に置くのです」。

第六章一わたしがまた目をあげて見ていると、四両の戦車が二つの山の
間から出てきた。その山は青銅の山であった。二第一の戦車には赤馬を
着け、第二の戦車には黒馬を着け、三第三の戦車には白馬を着け、第四の
戦車には、まだらのねずみ色の馬を着けていた。四わたしは、わたしと語
るみ使に尋ねた、「わが主よ、これらはなんですか」。五天の使は答えて、

わたしに言った、「これらは全地の主の前に現れて後、天の四方に出て行
くものです。六黒馬を着けた戦車は、北の国をさして出て行き、白馬は西
の国をさして出て行き、まだらの馬は南の国をさして出て行くのです」。
七馬が出てくると、彼らは、地をあまねくめぐるために、しきりに出たが
るのであった。それで彼が「行って、地をあまねくめぐれ」と言うと、彼
らは地を行きめぐった。八すると彼はわたしを呼んで、「北の国をさして行
く者どもは、北の国でわたしの心を静まらせてくれた」と言った。
九主の言葉がまたわたしに臨んだ、一〇「バビロンから帰ってきたかの
捕囚の中から、ヘルダイ、トビヤおよびエダヤを連れて、その日にゼパニ
ヤの子ヨシヤの家に行き、一一彼らから金銀を受け取って、一つの冠を
造り、それをヨザダクの子である大祭司ヨシュアの頭にかぶらせて、一二
彼に言いなさい、『万軍の主は、こう仰せられる、見よ、その名を枝とい

う人がある。彼は自分の場所で成長して、主の宮を建てる。一三すなわち
彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び、その位に座して治める。そ
の位のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間に平和の一致
がある』。一四またその冠はヘルダイ、トビヤ、エダヤおよびゼパニヤの
子ヨシヤの記念として、主の宮に納められる。
一五また遠い所の者どもが来て、主の宮を建てることを助ける。そして
あなたがたは万軍の主が、わたしをつかわされたことを知るようになる。
あなたがたがもし励んで、あなたがたの神、主の声に聞き従うならば、こ
のようになる」。
第七章一ダリヨス王の第四年の九月、すなわちキスリウという月の四日
に、主の言葉がゼカリヤに臨んだ。二その時ベテルの人々は、シャレゼル、
レゲン・メレクおよびその従者をつかわして、主の恵みを請い、三かつ

万軍の主の宮にいる祭司に問わせ、かつ預言者に問わせて言った、「わたし
は今まで、多年おこなってきたように、五月に泣き悲しみ、かつ断食すべき
でしょうか」。四この時、万軍の主の言葉がわたしに臨んだ、五「地のすべ
ての民、および祭司に告げて言いなさい、あなたがたが七十年の間、五月
と七月とに断食し、かつ泣き悲しんだ時、はたして、わたしのために断食
したか。六あなたがたが食い飲みする時、それは全く自分のために食い、
自分のために飲むのではないか。七昔エルサレムがその周囲の町々と共
に、人が住み、栄えていた時、また南の地および平野にも、人が住んでい
た時に、さきの預言者たちによって、主がお告げになった言葉は、これら
の事ではなかったか」。

八主の言葉が、またゼカリヤに臨んだ、九「万軍の主はこう仰せられる、
真実のさばきを行い、互に相いつくしみ、相あわれみ、一〇やもめ、みな

しご、寄留の他国人および貧しい人を、しえたげてはならない。互に人
を害することを、心に図ってはならない」。一一ところが、彼らは聞くこと
を拒み、肩をそびやかし、耳を鈍くして聞きいれず、一二その心を金剛石
のようにして、万軍の主がそのみたまにより、さきの預言者によって伝え
られた、律法と言葉とに聞き従わなかった。それゆえ、大いなる怒りが、
万軍の主から出て、彼らに臨んだのである。一三「わたしが呼ばわったけ
れども、彼らは聞こうとしなかった。そのとおりに、彼らが呼ばわっても、
わたしは聞かない」と万軍の主は仰せられる。一四「わたしは、つむじ風
をもって、彼らを未知のもろもろの国民の中に散らした。こうして彼らが
去った後、この地は荒れて行き来する者もなく、この麗しい地は荒れ地と
なったのである」。

第八章一万軍の主の言葉がわたしに臨んだ、二「万軍の主は、こう仰せ

られる、『わたしはシオンのために、大いなるねたみを起し、またこれがた
めに、大いなる憤りをもってねたむ』。三主はこう仰せられる、『わたし
はシオンに帰って、エルサレムの中に住む。エルサレムは忠信な町とと
なえられ、万軍の主の山は聖なる山と、となえられる』。四万軍の主は、こ
う仰せられる、『エルサレムの街路には再び老いた男、老いた女が座す
るようになる。みな年寄の人々で、おのおのつえを手に持つ。五またその
町の街路には、男の子、女の子が満ちて、街路に遊び戯れる』。六万軍
の主は、こう仰せられる、『その日には、たとい、この民の残れる者の目
に、不思議な事であっても、それはわたしの目にも、不思議な事であろう
か』と万軍の主は言われる。七万軍の主は、こう仰せられる、『見よ、わが
民を東の国から、また西の国から救い出し、八彼らを連れてきて、エルサ
レムに住まわせ、彼らはわが民となり、わたしは彼らの神となって、共に

真実と正義とをもって立つ』」。
九万軍の主は、こう仰せられる、「万軍の主の家である宮を建てるため
に、その礎をすえた日からこのかた、預言者たちの口から出たこれらの
言葉を、きょう聞く者よ、あなたがたの手を強くせよ。一〇この日の以前に
は、人も働きの価を得ず、獣も働きの価を得ず、また出る者もはいる
者も、あだのために安全ではなかった。わたしはまた人々を相たがいにそ
むかせた。一一しかし今は、わたしのこの民の残れる者に対することは、さ
きの日のようではないと、万軍の主は言われる。一二そこには、平和と繁栄
との種がまかれるからである。すなわちぶどうの木は実を結び、地は産物
を出し、天は露を与える。わたしはこの民の残れる者に、これをことごと
く与える。一三ユダの家およびイスラエルの家よ、あなたがたが、国々の
民の中に、のろいとなっていたように、わたしはあなたがたを救って祝福

とする。恐れてはならない。あなたがたの手を強くせよ」。
一四万軍の主は、こう仰せられる、「あなたがたの先祖が、わたしを怒ら
せた時に、災を下そうと思って、これをやめなかったように、――万軍
の主は言われる――一五そのように、わたしはまた今日、エルサレムとユ
ダの家に恵みを与えよう。恐れてはならない。一六あなたがたのなすべき
事はこれである。あなたがたは互に真実を語り、またあなたがたの門で、
真実と平和のさばきとを、行わなければならない。一七あなたがたは、互
に人を害することを、心に図ってはならない。偽りの誓いを好んではな
らない。わたしはこれらの事を憎むからであると、主は言われる」。
一八万軍の主の言葉がわたしに臨んだ、一九「万軍の主は、こう仰せられ
る、四月の断食と、五月の断食と、七月の断食と、十月の断食とは、ユ
ダの家の喜び楽しみの時となり、よき祝の時となる。ゆえにあなたがた

は、真実と平和とを愛せよ。
二〇万軍の主は、こう仰せられる、もろもろの民および多くの町の住民、
すなわち、一つの町の住民は、他の町の人々のところに行き、二一『われ
われは、ただちに行って、主の恵みを請い、万軍の主に呼び求めよう』と
言うと、『わたしも行こう』と言う。二二多くの民および強い国民はエルサ
レムに来て、万軍の主を求め、主の恵みを請う。二三万軍の主は、こう仰
せられる、その日には、もろもろの国ことばの民の中から十人の者が、ひ
とりのユダヤ人の衣のすそをつかまえて、『あなたがたと一緒に行こう。
神があなたがたと共にいますことを聞いたから』と言う」。

第九章

一託宣
主の言葉はハデラクの地に臨み、

ダマスコの上にとどまる。
アラムの町々はイスラエルのすべての部族のように主に属するからで
ある。
二これに境するハマテもまたそのとおりだ。
非常に賢いが、ツロとシドンもまた同様である。
三ツロは自分のために、とりでを築き、
銀をちりのように積み、
金を道ばたの泥のように積んだ。
四しかし見よ、主はこれを攻め取り、
その富を海の中に投げ入れられる。
これは火で焼き滅ぼされる。
五アシケロンはこれを見て恐れ、

ガザもまた見てもだえ苦しみ、
エクロンもまたその望む所のものが
はずかしめられて苦しむ。
ガザには王が絶え、
アシケロンには住む者がなくなり、
六アシドドには混血の民が住む。
わたしはペリシテびとの誇を断つ。
七またその口から血を取り除き、
その歯の間から憎むべき物を取り除く。
これもまた残ってわれわれの神に帰し、
ユダの一民族のようになる。
またエクロンはエブスびとのようになる。

八その時わたしは、わが家のために営を張って、
見張りをし、行き来する者のないようにする。
しえたげる者は、かさねて通ることがない。
わたしが今、自分の目で見ているからである。
九シオンの娘よ、大いに喜べ、
エルサレムの娘よ、呼ばわれ。
見よ、あなたの王はあなたの所に来る。
彼は義なる者であって勝利を得、
柔和であって、ろばに乗る。
すなわち、ろばの子である子馬に乗る。
一〇わたしはエフライムから戦車を断ち、
エルサレムから軍馬を断つ。

また、いくさ弓も断たれる。
彼は国々の民に平和を告げ、
その政治は海から海に及び、
大川から地の果にまで及ぶ。
一一あなたについてはまた、
あなたとの契約の血のゆえに、
わたしはかの水のない穴から、
あなたの捕われ人を解き放す。
一二望みをいだく捕われ人よ、あなたの城に帰れ。
わたしはきょうもなお告げて言う、
必ず倍して、あなたをもとに返すことを。
一三わたしはユダを張って、わが弓となし、

エフライムをその矢とした。
シオンよ、わたしはあなたの子らを呼び起して、
ギリシヤの人々を攻めさせ、
あなたを勇士のつるぎのようにさせる。
一四その時、主は彼らの上に現れて、
その矢をいなずまのように射られる。
主なる神はラッパを吹きならし、
南のつむじ風に乗って出てこられる。
一五万軍の主は彼らを守られるので、
彼らは石投げどもを食い尽し、踏みつける。
彼らはまたぶどう酒のように彼らの血を飲み、
鉢のようにそれで満たされ、

祭壇のすみのように浸される。
一六その日、彼らの神、主は、彼らを救い、
その民を羊のように養われる。
彼らは冠の玉のように、その地に輝く。
一七そのさいわい、その麗しさは、いかばかりであろう。
穀物は若者を栄えさせ、
新しいぶどう酒は、おとめを栄えさせる。

第一〇章

一あなたがたは春の雨の時に、
雨を主に請い求めよ。
主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い、
野の青草をおのおのに賜わる。

二テラピムは、たわごとを言(い)い、
占(うらな)い師(し)は偽(いつわ)りを見(み)、
夢見(ゆめみ)る者(もの)は偽(いつわ)りの夢(ゆめ)を語(かた)り、
むなしい慰(なぐさ)めを与(あた)える。
このゆえに、民(たみ)は羊(ひつじ)のようにさまよい、
牧者(ぼくしゃ)がないために悩(なや)む。
三「わが怒(いか)りは牧者(ぼくしゃ)にむかって燃(も)え、
わたしは雄(お)やぎを罰(ばっ)する。
万軍(ばんぐん)の主(しゅ)が、その群(む)れの羊(ひつじ)であるユダの家(いえ)を顧(かえり)み、
これをみごとな軍馬(ぐんば)のようにされるからである。
四隅石(すみいし)は彼(かれ)らから出(で)、
天幕(てんまく)の杭(くい)も彼(かれ)らから出(で)、

いくさ弓も彼らから出、
支配者も皆彼らの中から出る。
五彼らが戦う時は勇士のようになって、
道ばたの泥の中に敵を踏みにじる。
主が彼らと共におられるゆえに彼らは戦い、
馬に乗る者どもを困らせる。
六わたしはユダの家を強くし、ヨセフの家を救う。
わたしは彼らをあわれんで、彼らを連れ帰る。
彼らはわたしに捨てられたことのないようになる。
わたしは彼らの神、主であって、
彼らに答えるからである。
七エフライムびとは勇士のようになり、

その心は酒を飲んだように喜ぶ。
その子供らはこれを見て喜び、
その心は主によって楽しむ。
八わたしは彼らに向かい、口笛を吹いて彼らを集める、
わたしが彼らをあがなったからである。
彼らは昔のように数多くなる。
九わたしは彼らを国々の民の中に散らした。
しかし彼らは遠い国々でわたしを覚え、
その子供らと共に生きながらえて帰ってくる。
一〇わたしは彼らをエジプトの国から連れ帰り、
アッスリヤから彼らを集める。
わたしはギレアデの地およびレバノンに

彼らを連れて行く。
彼らはいる所もないほどに多くなる。
一一彼らはエジプトの海を通る。
海の波は撃たれ、
ナイルの淵はことごとくかれた。
アッスリヤの高ぶりは低くされ、
エジプトのつえは移り去る。
一二わたしは彼らを主によって強くする。
彼らは主の名を誇る」と
主は言われる。

第一一章

一レバノンよ、おまえの門を開き、

おまえの香柏を火に焼き滅ぼさせよ。
二いとすぎよ、泣き叫べ。
香柏は倒れ、
みごとな木は、そこなわれたからである。
バシャンのかしよ、泣き叫べ。
茂った林は倒れたからである。
三聞け、牧者の泣き叫ぶ声を。
彼らの栄えが消え去ったからである。
聞け、ししのほえる声を。
ヨルダンの草むらが荒れ果てたからである。
四わが神、主はこう仰せられた、「ほふらるべき羊の群れの牧者となれ。
五これを買う者は、これをほふっても罰せられない。これを売る者は言う、

『主はほむべきかな、わたしは富んだ』と。そしてその牧者は、これをあわれ
まない。六わたしは、もはやこの地の住民をあわれまないと、主は言われ
る。見よ、わたしは人をおのおのその牧者の手に渡し、おのおのその王の
手に渡す。彼らは地を荒す。わたしは彼らの手からこれを救い出さない」。
七わたしは羊の商人のために、ほふらるべき羊の群れの牧者となっ
た。わたしは二本のつえを取り、その一本を恵みと名づけ、一本を結びと
名づけて、その羊を牧した。八わたしは一か月に牧者三人を滅ぼした。わ
たしは彼らに、がまんしきれなくなったが、彼らもまた、わたしを忌みき
らった。九それでわたしは言った、「わたしはあなたがたの牧者とならない。
死ぬ者は死に、滅びる者は滅び、残った者はたがいにその肉を食いあうが
よい」。一〇わたしは恵みというつえを取って、これを折った。これはわた
しがもろもろの民と結んだ契約を、廃するためであった。一一そしてこれ

は、その日に廃された。そこで、わたしに目を注いでいた羊の商人らは、
これが主の言葉であったことを知った。一二わたしは彼らに向かって、「あ
なたがたがもし、よいと思うならば、わたしに賃銀を払いなさい。もし、
いけなければやめなさい」と言ったので、彼らはわたしの賃銀として、銀
三十シケルを量った。一三主はわたしに言われた、「彼らによって、わたし
が値積られたその尊い価を、宮のさいせん箱に投げ入れよ」。わたしは
銀三十シケルを取って、これを主の宮のさいせん箱に投げ入れた。一四そ
してわたしは結びという第二のつえを折った。これはユダとイスラエルの
間の、兄弟関係を廃するためであった。

一五主はわたしに言われた、「おまえはまた愚かな牧者の器を取れ。一
六見よ、わたしは地にひとりの牧者を起す。彼は滅ぼされる者を顧みず、
迷える者を尋ねず、傷ついた者をいやさず、健やかな者を養わず、肥え

た者の肉を食らい、そのひずめをさえ裂く者である。
一七その羊の群れを捨てる愚かな牧者はわざわいだ。
どうか、つるぎがその腕を撃ち、
その右の目を撃つように。
その腕は全く衰え、
その右の目は全く見えなくなるように」。

第一二章ー託宣

イスラエルについての主の言葉。すなわち天をのべ、地の基をすえ、人
の霊をその中に造られた主は、こう仰せられる、二「見よ、わたしはエルサ
レムを、その周囲にあるすべての民をよろめかす杯にしようとしている。
これはエルサレムの攻め囲まれる時、ユダにも及ぶ。三その日には、わた
しはエルサレムをすべての民に対して重い石とする。これを持ちあげる者

はみな大傷を受ける。地の国々の民は皆集まって、これを攻める。四主は
言われる、その日には、わたしはすべての馬を撃って驚かせ、その乗り手
を撃って狂わせる。しかし、もろもろの民の馬を、ことごとく撃って、め
くらとするとき、ユダの家に対しては、わたしの目を開く。五その時ユダ
の諸族は、その心の中に『エルサレムの住民は、その神、万軍の主に
よって力強くなった』と言う。六その日には、わたしはユダの諸族を、た
きぎの中の火皿のようにし、麦束の中のたいまつのようにする。彼らは右
に左に、その周囲にあるすべての民を、焼き滅ぼす。しかしエルサレム
はなお、そのもとの所、すなわちエルサレムで、人の住む所となる。
七主はまずユダの幕屋を救われる。これはダビデの家の光栄と、エルサ
レムの住民の光栄とが、ユダの光栄にまさることのないようにするため
である。八その日、主はエルサレムの住民を守られる。彼らの中の弱い

者も、その日には、ダビデのようになる。またダビデの家は神のように、彼
らに先だつ主の使のようになる。九その日には、わたしはエルサレムに攻
めて来る国民を、ことごとく滅ぼそうと努める。
一〇わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に、恵みと祈の霊と
を注ぐ。彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼の
ために嘆き、ういごのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ。一
一その日には、エルサレムの嘆きは、メギドの平野にあったハダデ・リン
モンのための嘆きのように大きい。一二国じゅう、氏族おのおの別れて嘆
く。すなわちダビデの家の氏族は別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆く。
ナタンの家の氏族は別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆く。一三レビの家
の氏族は別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆く。シメイの氏族は別れて嘆
き、その妻たちも別れて嘆く。一四その他の氏族も皆別れて嘆き、その妻

たちも別れて嘆くのである。
第一三章 一その日には、罪と汚れとを清める一つの泉が、ダビデの家と
エルサレムの住民とのために開かれる。
二万軍の主は言われる、その日には、わたしは地から偶像の名を取り除
き、重ねて人に覚えられることのないようにする。わたしはまた預言者お
よび汚れの霊を、地から去らせる。三もし、人が今後預言するならば、そ
の産みの父母はこれにむかって、『あなたは主の名をもって偽りを語るゆ
え、生きていることができない』と言い、その産みの父母は彼が預言してい
る時、彼を刺すであろう。四その日には、預言者たちは皆預言する時、そ
の幻を恥じる。また人を欺くための毛の上着を着ない。五そして『わた
しは預言者ではない、わたしは土地を耕す者だ。若い時から土地を持って
いる』と言う。六もし、人が彼に『あなたの背中の傷は何か』と尋ねるな

らば、『これはわたしの友だちの家で受けた傷だ』と、彼は言うであろう」。
七 万軍の主は言われる、
「つるぎよ、立ち上がってわが牧者を攻めよ。
わたしの次に立つ人を攻めよ。
牧者を撃て、その羊は散る。
わたしは手をかえして、小さい者どもを攻める。
八 主は言われる、全地の人の三分の二は断たれて死に、
三分の一は生き残る。
九 わたしはこの三分の一を火の中に入れ、
銀をふき分けるように、これをふき分け、
金を精錬するように、これを精錬する。
彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。

わたしは『彼らはわが民である』と言い、彼らは『主はわが神である』
と言う」。
第一四章 一見よ、主の日が来る。その時あなたの奪われた物は、あなた
の中で分かたれる。二わたしは万国の民を集めて、エルサレムを攻め撃た
せる。町は取られ、家はかすめられ、女は犯され、町の半ばは捕えられ
て行く。しかし残りの民は町から断たれることはない。三その時、主は出
てきて、いくさの日にみずから戦われる時のように、それらの国びとと
戦われる。四その日には彼の足が、東の方エルサレムの前にあるオリブ
山の上に立つ。そしてオリブ山は、非常に広い一つの谷によって、東か
ら西に二つに裂け、その山の半ばは北に、半ばは南に移り、五わが山の
谷はふさがれる。裂けた山の谷が、そのかたわらに接触するからである。
そして、あなたがたはユダの王ウジヤの世に、地震を避けて逃げたように

逃げる。こうして、あなたがたの神、主はこられる、もろもろの聖者と共
にこられる。
六その日には、寒さも霜もない。七そこには長い連続した日がある（主
はこれを知られる）。これには昼もなく、夜もない。夕暮になっても、光
があるからである。
八その日には、生ける水がエルサレムから流れ出て、その半ばは東の海
に、その半ばは西の海に流れ、夏も冬もやむことがない。
九主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみと
なる。
一〇全地はゲバからエルサレムの南リンモンまで、平地のように変る。
しかしエルサレムは高くなって、そのもとの所にとどまり、ベニヤミンの
門から、先にあった門の所に及び、隅の門に至り、ハナネルのやぐらか
ら、王の酒ぶねにまで及ぶ。一一その中には人が住み、もはやのろいはな

く、エルサレムは安らかに立つ。
一二エルサレムを攻撃したもろもろの民を、主は災をもって撃たれる。
すなわち彼らはなお足で立っているうちに、その肉は腐れ、目はその穴の
中で腐れ、舌はその口の中で腐れる。一三その日には、主は彼らを大いに
あわてさせられるので、彼らはおのおのその隣り人を捕え、手をあげてそ
の隣り人を攻める。一四ユダもまた、エルサレムに敵して戦う。その周囲
のすべての国びとの財宝、すなわち金銀、衣服などが、はなはだ多く集め
られる。一五また馬、騾、らくだ、ろば、およびその陣営にあるすべての
家畜にも、この災のような災が臨む。
一六エルサレムに攻めて来たもろもろの国びとの残った者は、皆年々上っ
て来て、王なる万軍の主を拝み、仮庵の祭を守るようになる。一七地の
諸族のうち、王なる万軍の主を拝むために、エルサレムに上らない者の上

には、雨が降らない。一八エジプトの人々が、もし上ってこない時には、主
が仮庵の祭を守るために、上ってこないすべての国びとを撃たれるその
災が、彼らの上に臨む。一九これが、エジプトびとの受ける罰、および
すべて仮庵の祭を守るために上ってこない国びとの受ける罰である。
二〇その日には、馬の鈴の上に「主に聖なる者」と、しるすのである。ま
た主の宮のなべは、祭壇の前の鉢のように、聖なる物となる。二一エルサ
レムおよびユダのすべてのなべは、万軍の主に対して聖なる物となり、す
べて犠牲をささげる者は来てこれを取り、その中で犠牲の肉を煮ることが
できる。その日には、万軍の主の宮に、もはや商人はいない。

マラキ書

第一章一マラキによってイスラエルに臨(のぞ)んだ主(しゅ)の言葉(ことば)の託宣(たくせん)。
二主(しゅ)は言(い)われる、「わたしはあなたがたを愛(あい)した」と。ところがあなたが
たは言(い)う、「あなたはどんなふうに、われわれを愛(あい)されたか」。主(しゅ)は言(い)われ
る、「エサウはヤコブの兄(あに)ではないか。しかしわたしはヤコブを愛(あい)し、三エ
サウを憎(にく)んだ。かつ、わたしは彼(かれ)の山地(やまち)を荒(あら)し、その嗣業(しぎょう)を荒野(あらの)の山犬(やまいぬ)
に与(あた)えた」。四もしエドムが「われわれは滅(ほろ)ぼされたけれども、荒(あ)れた所(ところ)を
再(ふたた)び建(た)てる」と言(い)うならば、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)は「彼(かれ)らは建(た)てるかもしれない。し
かしわたしはそれを倒(たお)す。人々(ひとびと)は、彼(かれ)らを悪(あ)しき国(くに)ととなえ、とこしえに
主(しゅ)の怒(いか)りをうける民(たみ)ととなえる」と言(い)われる。五あなたがたの目(め)はこれを
見(み)て、「主(しゅ)はイスラエルの境(さかい)を越(こ)えて大(おお)いなる神(かみ)である」と言(い)うであろう。

六「子はその父を敬い、しもべはその主人を敬う。それでわたしがも
し父であるならば、あなたがたのわたしを敬う事実が、どこにあるか。わ
たしがもし主人であるならば、わたしを恐れる事実が、どこにあるか。わ
たしの名を侮る祭司たちよ、と万軍の主はあなたがたに言われる。とこ
ろがあなたがたは『われわれはどんなふうにあなたの名を侮ったか』と言
い、七汚れた食物をわたしの祭壇の上にささげる。またあなたがたは、主
の台は卑しむべき物であると考えて、『われわれはどんなふうに、それを
汚したか』と言う。八あなたがたが盲目の獣を、犠牲にささげるのは悪い
事ではないか。また足のなえたもの、病めるものをささげるのは悪い事で
はないか。今これをあなたのつかさにささげてみよ。彼はあなたを喜び、
あなたを受けいれるであろうかと、万軍の主は言われる。九あなたがたは、
神がわれわれをあわれまれるように、神の恵みを求めてみよ。このような

あなたがたの手のささげ物をもって、彼はあなたがたを受けいれられるで
あろうかと、万軍の主は言われる。一〇あなたがたがわが祭壇の上にいた
ずらに、火をたくことのないように戸を閉じる者があなたがたのうちに、ひ
とりあったらいいのだが。わたしはあなたがたを喜ばない、またあなたが
たの手からささげ物を受けないと、万軍の主は言われる。一一日の出る所
から没する所まで、国々のうちにわが名はあがめられている。また、どこ
でも香と清いささげ物が、わが名のためにささげられる。これはわが名が
国々のうちにあがめられているからであると、万軍の主は言われる。一二
ところがあなたがたは、主の台は汚れている、またこの食物は卑しむべ
き物であると言って、これを汚した。一三あなたがたはまた『これはなんと
煩わしい事か』と言って、わたしを鼻であしらうと、万軍の主は言われ
る。あなたがたはまた奪った物、足なえのもの、病めるものを、ささげ物

として携(たずさ)えて来(く)る。わたしはそれを、あなたがたの手(て)から、受(う)けるであろ
うかと主(しゅ)は言(い)われる。一四群(む)れのうちに雄(おす)の獣(けもの)があり、それをささげると
誓(ちか)いを立(た)てているのに、傷(きず)のあるものを、主(しゅ)にささげる偽(いつわ)り者(もの)はのろわ
れる。わたしは大(おお)いなる王(おう)で、わが名(な)は国々(くにぐに)のうちに恐(おそ)れられるべきであ
ると、万軍(ばんぐん)の主(しゅ)は言(い)われる。

第二章一祭司(さいし)たちよ、今(いま)この命令(めいれい)があなたがたに与(あた)えられる。二万軍(ばんぐん)の
主(しゅ)は言(い)われる、あなたがたがもし聞(き)き従(したが)わず、またこれを心(こころ)に留(と)めず、わ
が名(な)に栄光(えいこう)を帰(き)さないならば、わたしはあなたがたの上(うえ)に、のろいを送(おく)り、
またあなたがたの祝福(しゅくふく)をのろいに変(か)える。あなたがたは、これを心(こころ)に留(と)
めないので、わたしはすでにこれをのろった。三見(み)よ、わたしはあなたがた
の子孫(しそん)を責(せ)める。またあなたがたの犠牲(ぎせい)の糞(ふん)を、あなたがたの顔(かお)の上(うえ)にま
き散(ち)らし、あなたがたをわたしの前(まえ)から退(しりぞ)ける。四こうしてわたしが、こ

の命令をあなたがたに与えたのは、レビと結んだわが契約が、保たれるた
めであることを、あなたがたが知るためであると、万軍の主は言われる。五
彼と結んだわが契約は、生命と平安との契約であって、わたしがこれを彼
に与えたのは、彼にわたしを恐れさせるためである。彼はすでにわたしを
恐れ、わが名の前におののいた。六彼の口には、まことの律法があり、そ
のくちびるには、不義が見られなかった。彼は平安と公義とをもって、わ
たしと共に歩み、また多くの人を不義から立ち返らせた。七祭司のくちび
るは知識を保ち、人々が彼の口から律法を尋ねるのが当然である。彼は
万軍の主の使者だからだ。八ところが、あなたがたは道を離れ、多くの人
を教えてつまずかせ、レビの契約を破ったと、万軍の主は言われる。九あ
なたがたはわたしの道を守らず、律法を教えるに当って、人にかたよった
がために、あなたがたをすべての民の前に侮られ、卑しめられるように

する」。
一〇われわれの父は皆一つではないか。われわれを造った神は一つではな
いか。なにゆえ、われわれは先祖たちの契約を破って、おのおのその兄弟
に偽りを行うのか。一一ユダは偽りを行い、イスラエルおよびエルサ
レムの中には憎むべき事が行われた。すなわちユダは主が愛しておられ
る聖所を汚して、他の神に仕える女をめとった。一二どうか、主がこうし
た事を行う人をば、証言する者も、答弁する者も、また万軍の主にさ
さげ物をする者をも、ヤコブの幕屋から断たれるように。
一三あなたがたはまたこのような事をする。すなわち神がもはやささげ物
をかえりみず、またこれをあなたがたの手から、喜んで受けられないため
に、あなたがたは涙と、泣くことと、嘆きとをもって、主の祭壇をおおい、
一四「なぜ神は受けられないのか」と尋ねる。これは主があなたと、あなた
の若い時の妻との間の、契約の証人だったからである。彼女は、あな

たの連れ合い、契約によるあなたの妻であるのに、あなたは彼女を裏切っ
た。一五一つ神は、われわれのために命の霊を造り、これをささえられた
ではないか。彼は何を望まれるか。神を敬う子孫であるゆえ、あなたが
たはみずから慎んで、その若い時の妻を裏切ってはならない。一六イスラ
エルの神、主は言われる、「わたしは離縁する者を憎み、また、しえたげを
もってその衣をおおう人を憎むと、万軍の主は言われる。ゆえにみずか
ら慎んで、裏切ることをしてはならない」。
一七あなたがたは言葉をもって主を煩わした。しかしあなたがたは言う、
「われわれはどんなふうに、彼を煩わしたか」。それはあなたがたが「す
べて悪を行う者は主の目に良く見え、かつ彼に喜ばれる」と言い、また
「さばきを行う神はどこにあるか」と言うからである。

第三章一「見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を

備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見
よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。二そ
の来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得
よう。

彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。
三彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀
のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげ
る。四その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先
の年のように主に喜ばれる。

五そしてわたしはあなたがたに近づいて、さばきをなし、占い者、姦淫
を行う者、偽りの誓いをなす者にむかい、雇人の賃銀をかすめ、やも
めと、みなしごとをしえたげ、寄留の他国人を押しのけ、わたしを恐れな

い者どもにむかって、すみやかにあかしを立てると、万軍の主は言われる。
六主なるわたしは変ることがない。それゆえ、ヤコブの子らよ、あなた
がたは滅ぼされない。七あなたがたは、その先祖の日から、わが定めを離
れて、これを守らなかった。わたしに帰れ、わたしはあなたがたに帰ろう
と、万軍の主は言われる。ところが、あなたがたは『われわれはどうして
帰ろうか』と尋ねる。八人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあ
なたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれ
われは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物を
もってである。九あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがた
すべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである。一〇わたしの宮に
食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これ
をもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あ

なたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。一一わたしは
食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、
滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する
前に、その実を畑に落すことのないようにしようと、万軍の主は言われ
る。一二こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者ととなえるであ
ろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる。
一三主は言われる、あなたがたは言葉を激しくして、わたしに逆らった。
しかもあなたがたは『われわれはあなたに逆らって、どんな事を言ったか』
と言う。一四あなたがたは言った、『神に仕える事はつまらない。われわれ
がその命令を守り、かつ万軍の主の前に、悲しんで歩いたからといって、
なんの益があるか。一五今われわれは高ぶる者を、祝福された者と思う。
悪を行う者は栄えるばかりでなく、神を試みても罰せられない』」。

一六そのとき、主を恐れる者は互に語った。主は耳を傾けてこれを聞
かれた。そして主を恐れる者、およびその名を心に留めている者のため
に、主の前に一つの覚え書がしるされた。一七「万軍の主は言われる、彼
らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝
となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわ
れむ。一八その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と、仕え
ない者との区別を知るようになる。

第四章一万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その
時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日
は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない。二しかしわが名を恐れるあな
たがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。
あなたがたは牛舎から出る子牛のように外に出て、とびはねる。三また、

あなたがたは悪人を踏みつけ、わたしが事を行う日に、彼らはあなたが
たの足の裏の下にあって、灰のようになると、万軍の主は言われる。
四あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、
イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ。
五見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤを
あなたがたにつかわす。**六**彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供た
ちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの
国を撃つことのないようにするためである」。

新約聖書

マタイによる福音書

第一章　一アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの
系図。
二アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブは
ユダとその兄弟たちとの父、三ユダはタマルによるパレスとザラとの
父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、四アラムはアミ
ナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、
五サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの
父、オベデはエッサイの父、六エッサイはダビデ王の父であった。
　ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、七ソロモンはレハ
ベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、八アサは
ヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、九ウジ

ヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、一〇
ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、アモンはヨシヤの父、
一一ヨシヤはバビロンへ移されたころ、エコニヤとその兄弟たちとの
父となった。

一二バビロンへ移されたのち、エコニヤはサラテルの父となった。
サラテルはゾロバベルの父、一三ゾロバベルはアビウデの父、アビウ
デはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、一四アゾルはサドク
の父、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、一五エリウデは
エレアザルの父、エレアザルはマタンの父、マタンはヤコブの父、一
六ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリスト
といわれるイエスがお生れになった。

一七だから、アブラハムからダビデまでの代は合わせて十四代、ダ
ビデからバビロンへ移されるまでは十四代、そして、バビロンへ移さ
れてからキリストまでは十四代である。

一八イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨ

セフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重
になった。一九夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公け
になることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した。二〇彼がこの
ことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビ
デの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。そ
の胎内に宿っているものは聖霊によるのである。二一彼女は男の子を
産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民
をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。二二すべてこれ
らのことが起ったのは、主が預言者によって言われたことの成就す
るためである。すなわち、

二三「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。
その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。

これは、「神われらと共にいます」という意味である。二四ヨセフは
眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎え
た。二五しかし、子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった。そ

して、その子をイエスと名づけた。
第二章 **一** イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れに
なったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言っ
た、**二**「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられま
すか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みに
きました」。**三** ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレ
ムの人々もみな、同様であった。**四** そこで王は祭司長たちと民の律法
学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに
問いただした。**五** 彼らは王に言った、「それはユダヤのベツレヘムで
す。預言者がこうしるしています、
六『ユダの地、ベツレヘムよ、
おまえはユダの君たちの中で、
決して最も小さいものではない。
おまえの中からひとりの君が出て、
わが民イスラエルの牧者となるであろう』」。

七そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時につ
いて詳しく聞き、八彼らをベツレヘムにつかわして言った、「行って、
その幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてく
れ。わたしも拝みに行くから」。九彼らは王の言うことを聞いて出か
けると、見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子
のいる所まで行き、その上にとどまった。一〇彼らはその星を見て、
非常な喜びにあふれた。一一そして、家にはいって、母マリヤのそば
にいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・
乳香・没薬などの贈り物をささげた。一二そして、夢でヘロデのとこ
ろに帰るなとのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国へ
帰って行った。

一三彼らが帰って行ったのち、見よ、主の使が夢でヨセフに現れて
言った、「立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。
そして、あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデ
が幼な子を捜し出して、殺そうとしている」。一四そこで、ヨセフは

立って、夜の間に幼な子とその母とを連れてエジプトへ行き、一五へ
ロデが死ぬまでそこにとどまっていた。それは、主が預言者によっ
て「エジプトからわが子を呼び出した」と言われたことが、成就する
ためである。
一六さて、ヘロデは博士たちにだまされたと知って、非常に立腹し
た。そして人々をつかわし、博士たちから確かめた時に基いて、べ
ツレヘムとその附近の地方とにいる二歳以下の男の子を、ことごと
く殺した。一七こうして、預言者エレミヤによって言われたことが、
成就したのである。
一八「叫び泣く大いなる悲しみの声が
　ラマで聞えた。
　ラケルはその子らのためになげいた。
　子らがもはやいないので、
　慰められることさえ願わなかった」。
一九さて、ヘロデが死んだのち、見よ、主の使がエジプトにいるヨ

セフに夢で現れて言った、二〇「立って、幼な子とその母を連れて、
イスラエルの地に行け。幼な子の命をねらっていた人々は、死んでし
まった」。二一そこでヨセフは立って、幼な子とその母とを連れて、イ
スラエルの地に帰った。二二しかし、アケラオがその父ヘロデに代っ
てユダヤを治めていると聞いたので、そこへ行くことを恐れた。そ
して夢でみ告げを受けたので、ガリラヤの地方に退き、二三ナザレと
いう町に行って住んだ。これは預言者たちによって、「彼はナザレ人
と呼ばれるであろう」と言われたことが、成就するためである。

第三章一そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教
を宣べて言った、二「悔い改めよ、天国は近づいた」。三預言者イザ
ヤによって、

「荒野で呼ばわる者の声がする、
『主の道を備えよ、
その道筋をまっすぐにせよ』」

と言われたのは、この人のことである。

四このヨハネは、らくだの毛ごろもを着物にし、腰に皮の帯をし
め、いなごと野蜜とを食物としていた。五すると、エルサレムとユダ
ヤ全土とヨルダン附近一帯の人々が、ぞくぞくとヨハネのところに
出てきて、六自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマ
を受けた。七ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマ
を受けようとしてきたのを見て、彼らに言った、「まむしの子らよ、
迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれられると、だれが
教えたのか。八だから、悔改めにふさわしい実を結べ。九自分たちの
父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。おまえ
たちに言っておく、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を
起すことができるのだ。一〇斧がすでに木の根もとに置かれている。
だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込
まれるのだ。一一わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテ
スマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも
力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。

このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授け
になるであろう。一二また、箕を手に持って、打ち場の麦をふるい分
け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」。
一三そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、ヨハネ
のところにきて、バプテスマを受けようとされた。一四ところがヨハ
ネは、それを思いとどまらせようとして言った、「わたしこそあなた
からバプテスマを受けるはずですのに、あなたがわたしのところにお
いでになるのですか」。一五しかし、イエスは答えて言われた、「今は
受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就す
るのは、われわれにふさわしいことである」。そこでヨハネはイエス
の言われるとおりにした。一六イエスはバプテスマを受けるとすぐ、
水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはとのよう
に自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。一七また天から声が
あって言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者で
ある」。

第四章 **一** さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試み
られるためである。**二** そして、四十日四十夜、断食をし、そののち
空腹になられた。**三** すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神
の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさ
い」。**四** イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものでは
なく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてあ
る」。**五** それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上
に立たせて **六** 言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びお
りてごらんなさい。

　『神はあなたのために御使たちにお命じになると、
あなたの足が石に打ちつけられないように、
　彼らはあなたを手でささえるであろう』

と書いてありますから」。**七** イエスは彼に言われた、「『主なるあなた
の神を試みてはならない』とまた書いてある」。**八** 次に悪魔は、イエ
スを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華

とを見せて九言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、
これらのものを皆あなたにあげましょう」。一〇するとイエスは彼に
言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神に
のみ仕えよ』と書いてある」。一一そこで、悪魔はイエスを離れ去り、
そして、御使たちがみもとにきて仕えた。
一二さて、イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退か
れた。一三そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの地方にある
海べの町カペナウムに行って住まわれた。一四これは預言者イザヤに
よって言われた言が、成就するためである。
一五「ゼブルンの地、ナフタリの地、
海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、
異邦人のガリラヤ、
一六暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、
死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」。
一七この時からイエスは教を宣べはじめて言われた、「悔い改め

よ、天国は近づいた」。
一八さて、イエスがガリラヤの海べを歩いておられると、ふたりの
兄弟、すなわち、ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレとが、
海に網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。一
九イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがた
を、人間をとる漁師にしてあげよう」。二〇すると、彼らはすぐに網を
捨てて、イエスに従った。二一そこから進んで行かれると、ほかのふ
たりの兄弟、すなわち、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、
父ゼベダイと一緒に、舟の中で網を繕っているのをごらんになった。
そこで彼らをお招きになると、二二すぐ舟と父とをおいて、イエスに
従って行った。

二三イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の
福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいや
しになった。二四そこで、その評判はシリヤ全地にひろまり、人々が
あらゆる病にかかっている者、すなわち、いろいろの病気と苦しみと

に悩んでいる者、悪霊につかれている者、てんかん、中風の者などを
イエスのところに連れてきたので、これらの人々をおいやしになっ
た。二五こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及び
ヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従った。
第五章一イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子
たちがみもとに近寄ってきた。二そこで、イエスは口を開き、彼らに
教えて言われた。
三「こころの貧しい人たちは、さいわいである、
天国は彼らのものである。
四悲しんでいる人たちは、さいわいである、
彼らは慰められるであろう。
五柔和な人たちは、さいわいである、
彼らは地を受けつぐであろう。
六義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、
彼らは飽き足りるようになるであろう。

七あわれみ深い人たちは、さいわいである、
彼らはあわれみを受けるであろう。
八心の清い人たちは、さいわいである、
彼らは神を見るであろう。
九平和をつくり出す人たちは、さいわいである、
彼らは神の子と呼ばれるであろう。
一〇義のために迫害されてきた人たちは、
さいわいである、
天国は彼らのものである。
一一わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あな
たがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわ
いである。一二喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報い
は大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害され
たのである。
一三あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、

何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立た
ず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。一四あ
なたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができな
い。一五また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。む
しろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。
一六そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々
があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父を
あがめるようにしなさい。

一七わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならな
い。廃するためではなく、成就するためにきたのである。一八よく
言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたるこ
とはなく、ことごとく全うされるのである。一九それだから、これら
の最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教
えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、
これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれる

であろう。二〇わたしは言っておく。あなたがたの義が律法学者やパ
リサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはで
きない。
二一昔の人々に『殺すな。殺す者は裁判を受けねばならない』と言
われていたことは、あなたがたの聞いているところである。二二しか
し、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも
裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会
に引きわたされるであろう。また、ばか者と言う者は、地獄の火に投
げ込まれるであろう。二三だから、祭壇に供え物をささげようとする
場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで
思い出したなら、二四その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行っ
てその兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることに
しなさい。二五あなたを訴える者と一緒に道を行く時には、その途中
で早く仲直りをしなさい。そうしないと、その訴える者はあなたを
裁判官にわたし、裁判官は下役にわたし、そして、あなたは獄に入れ

られるであろう。二六よくあなたに言っておく。最後の一コドラント
を支払ってしまうまでは、決してそこから出てくることはできない。
二七『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いてい
るところである。二八しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、
情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。
二九もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨て
なさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方
が、あなたにとって益である。三〇もしあなたの右の手が罪を犯させ
るなら、それを切って捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が
地獄に落ち込まない方が、あなたにとって益である。三一また『妻を
出す者は離縁状を渡せ』と言われている。三二しかし、わたしはあな
たがたに言う。だれでも、不品行以外の理由で自分の妻を出す者は、
姦淫を行わせるのである。また出された女をめとる者も、姦淫を行
うのである。
三三また昔の人々に『いつわり誓うな、誓ったことは、すべて主に

対して果せ』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところ
である。三四しかし、わたしはあなたがたに言う。いっさい誓っては
ならない。天をさして誓うな。そこは神の御座であるから。三五また
地をさして誓うな。そこは神の足台であるから。またエルサレムを
さして誓うな。それは『大王の都』であるから。三六また、自分の頭
をさして誓うな。あなたは髪の毛一すじさえ、白くも黒くもするこ
とができない。三七あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、
否、であるべきだ。それ以上に出ることは、悪から来るのである。
三八『目には目を、歯には歯を』と言われていたことは、あなたが
たの聞いているところである。三九しかし、わたしはあなたがたに言
う。悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、
ほかの頬をも向けてやりなさい。四〇あなたを訴えて、下着を取ろう
とする者には、上着をも与えなさい。四一もし、だれかが、あなたを
しいて一マイル行かせようとするなら、その人と共に二マイル行き
なさい。四二求める者には与え、借りようとする者を断るな。

四三『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたが
たの聞いているところである。四四しかし、わたしはあなたがたに言
う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。四五こうして、天にいます
あなたがたの父の子となるためである。天の父は、悪い者の上にも
良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、
雨を降らして下さるからである。四六あなたがたが自分を愛する者を
愛したからとて、なんの報いがあろうか。そのようなことは取税人
でもするではないか。四七兄弟だけにあいさつをしたからとて、なん
のすぐれた事をしているだろうか。そのようなことは異邦人でもし
ているではないか。四八それだから、あなたがたの天の父が完全であ
られるように、あなたがたも完全な者となりなさい。

第六章
一自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意
しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報い
を受けることがないであろう。
二だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため

会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よ
く言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。三あなたは
施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。四そ
れは、あなたのする施しが隠れているためである。すると、隠れた事
を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。
五また祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せよ
うとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。よく言って
おくが、彼らはその報いを受けてしまっている。六あなたは祈る時、
自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなた
の父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、
報いてくださるであろう。七また、祈る場合、異邦人のように、くど
くどと祈るな。彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと
思っている。八だから、彼らのまねをするな。あなたがたの父なる神
は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。
九だから、あなたがたはこう祈りなさい、

天にいますわれらの父よ、
御名があがめられますように。
一〇御国がきますように。
みこころが天に行われるとおり、
地にも行われますように。
一一わたしたちの日ごとの食物を、
きょうもお与えください。
一二わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、
わたしたちの負債をもおゆるしください。
一三わたしたちを試みに会わせないで、
悪しき者からお救いください。
一四もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなた
がたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。一五もし人
をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆ
るして下さらないであろう。

一六また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきを
するな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の
顔を見苦しくするのである。よく言っておくが、彼らはその報いを
受けてしまっている。一七あなたがたは断食をする時には、自分の頭
に油を塗り、顔を洗いなさい。一八それは断食をしていることが人に
知れないで、隠れた所においでになるあなたの父に知られるためで
ある。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さる
であろう。

一九あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人
らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。
二〇むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが
押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。二一あな
たの宝のある所には、心もあるからである。二二目はからだのあかり
である。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。
二三しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、も

しあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう。二四
だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで
他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからであ
る。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。
二五それだから、あなたがたに言っておく。何を食べようか、何を
飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分の
からだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物
にまさるではないか。二六空の鳥を見るがよい。まくことも、刈るこ
ともせず、倉に取りいれることもしない。それだのに、あなたがたの
天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はる
かにすぐれた者ではないか。二七あなたがたのうち、だれが思いわず
らったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。
二八また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして
育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。二九
しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、

この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。三〇きょうは生えてい
て、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って
下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずが
あろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。三一だから、何を食べようか、
何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。三二
これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなた
がたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であ
ることをご存じである。三三まず神の国と神の義とを求めなさい。そ
うすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。三四
だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思
いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。

第七章 一人をさばくな。自分がさばかれないためである。二あなた
がたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそ
のはかりで、自分にも量り与えられるであろう。三なぜ、兄弟の目に
あるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。四自分の目

には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちり
を取らせてください、と言えようか。五偽善者よ、まず自分の目から
梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、
兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。
六聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく
彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみつい
てくるであろう。
七求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、
見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであ
ろう。八すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあ
けてもらえるからである。九あなたがたのうちで、自分の子がパンを
求めるのに、石を与える者があろうか。一〇魚を求めるのに、へびを
与える者があろうか。一一このように、あなたがたは悪い者であって
も、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、
天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下

さらないことがあろうか。一二だから、何事でも人々からしてほしい
と望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者
である。
一三狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。
そして、そこからはいって行く者が多い。一四命にいたる門は狭く、
その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。
一五にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのと
ころに来るが、その内側は強欲なおおかみである。一六あなたがたは、
その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あざみ
からいちじくを集める者があろうか。一七そのように、すべて良い木
は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。一八良い木が悪い実をなら
せることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。一九
良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれる。
二〇このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのであ
る。二一わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国には

いるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、は
いるのである。二二その日には、多くの者が、わたしにむかって『主
よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありません
か。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって
多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。二三
そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全
く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。

二四それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上
に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。二五雨が降り、
洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることは
ない。岩を土台としているからである。二六また、わたしのこれらの
言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人
に比べることができよう。二七雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹い
てその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひど
いのである」。

二八イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆はその教にひど
く驚いた。二九それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者の
ように、教えられたからである。

第八章一イエスが山をお降りになると、おびただしい群衆がついて
きた。二すると、そのとき、ひとりのらい病人がイエスのところにき
て、ひれ伏して言った、「主よ、みこころでしたら、きよめていただ
けるのですが」。三イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「そうしてあ
げよう、きよくなれ」と言われた。すると、らい病は直ちにきよめら
れた。四イエスは彼に言われた、「だれにも話さないように、注意し
なさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセ
が命じた供え物をささげて、人々に証明しなさい」。

五さて、イエスがカペナウムに帰ってこられたとき、ある百卒長
がみもとにきて訴えて言った、六「主よ、わたしの僕が中風でひどく
苦しんで、家に寝ています」。七イエスは彼に、「わたしが行ってなお
してあげよう」と言われた。八そこで百卒長は答えて言った、「主よ、

わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはござい
ません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。九わた
しも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいまして、ひと
りの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と言えばきます
し、また、僕に『これをせよ』と言えば、してくれるのです」。一〇
イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、
「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たこ
とがない。一一なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西から
きて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく
が、一二この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、
歯がみをしたりするであろう」。一三それからイエスは百卒長に「行
け、あなたの信じたとおりになるように」と言われた。すると、ちょ
うどその時に、僕はいやされた。

一四それから、イエスはペテロの家にはいって行かれ、そのしゅう
とめが熱病で、床についているのをごらんになった。一五そこで、そ

の手にさわられると、熱が引いた。そして女は起きあがってイエスを
もてなした。一六夕暮になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、
みもとに連れてきたので、イエスはみ言葉をもって霊どもを追い出
し、病人をことごとくおいやしになった。一七これは、預言者イザヤ
によって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病
を負うた」と言われた言葉が成就するためである。
一八イエスは、群衆が自分のまわりに群がっているのを見て、向こ
う岸に行くようにと弟子たちにお命じになった。一九するとひとりの
律法学者が近づいてきて言った、「先生、あなたがおいでになる所な
ら、どこへでも従ってまいります」。二〇イエスはその人に言われた、
「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはま
くらする所がない」。二一また弟子のひとりが言った、「主よ、まず、
父を葬りに行かせて下さい」。二二イエスは彼に言われた、「わたしに
従ってきなさい。そして、その死人を葬ることは、死人に任せておく
がよい」。

二三それから、イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。二
四すると突然、海上に激しい暴風が起って、舟は波にのまれそうになっ
た。ところが、イエスは眠っておられた。二五そこで弟子たちはみそ
ばに寄ってきてイエスを起し、「主よ、お助けください、わたしたち
は死にそうです」と言った。二六するとイエスは彼らに言われた、「な
ぜこわがるのか、信仰の薄い者たちよ」。それから起きあがって、風
と海とをおしかりになると、大なぎになった。二七彼らは驚いて言っ
た、「このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは」。
二八それから、向こう岸、ガダラ人の地に着かれると、悪霊につか
れたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手
に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどで
あった。二九すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたは
わたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、
ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。三〇さて、そこから
はるか離れた所に、おびただしい豚の群れが飼ってあった。三一悪霊

どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのな
ら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。三二そこで、イエスが
「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。
すると、その群れ全体が、がけから海へなだれを打って駆け下り、水
の中で死んでしまった。三三飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につ
かれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。三四すると、町中の
者がイエスに会いに出てきた。そして、イエスに会うと、この地方か
ら去ってくださるようにと頼んだ。
第九章 一さて、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。
二すると、人々が中風の者を床の上に寝かせたままでみもとに運んで
きた。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、しっかりし
なさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われた。三すると、ある
律法学者たちが心の中で言った、「この人は神を汚している」。四イエ
スは彼らの考えを見抜いて、「なぜ、あなたがたは心の中で悪いこと
を考えているのか。五あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて

歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。六しかし、人の子は地上で
罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と
言い、中風の者にむかって、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言
われた。七すると彼は起きあがり、家に帰って行った。八群衆はそれ
を見て恐れ、こんな大きな権威を人にお与えになった神をあがめた。
九さてイエスはそこから進んで行かれ、マタイという人が収税所に
すわっているのを見て、「わたしに従ってきなさい」と言われた。す
ると彼は立ちあがって、イエスに従った。一〇それから、イエスが家
で食事の席についておられた時のことである。多くの取税人や罪人
たちがきて、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。一一パリ
サイ人たちはこれを見て、弟子たちに言った、「なぜ、あなたがたの
先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」。一二イエスはこ
れを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人
である。一三『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではな
い』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人

を招くためではなく、罪人を招くためである」。
一四そのとき、ヨハネの弟子たちがイエスのところにきて言った、
「わたしたちとパリサイ人たちとが断食をしているのに、あなたの弟子
たちは、なぜ断食をしないのですか」。一五するとイエスは言われた、
「婚礼の客は、花婿が一緒にいる間は、悲しんでおられようか。しか
し、花婿が奪い去られる日が来る。その時には断食をするであろう。
一六だれも、真新しい布ぎれで、古い着物につぎを当てはしない。そ
のつぎきれは着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなるか
ら。一七だれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそ
んなことをしたら、その皮袋は張り裂け、酒は流れ出るし、皮袋もむ
だになる。だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきであ
る。そうすれば両方とも長もちがするであろう」。
一八これらのことを彼らに話しておられると、そこにひとりの会堂司
がきて、イエスを拝して言った、「わたしの娘がただ今死にました。
しかしおいでになって手をその上においてやって下さい。そうした

ら、娘は生き返るでしょう」。一九そこで、イエスが立って彼につい
て行かれると、弟子たちも一緒に行った。二〇するとそのとき、十二
年間も長血をわずらっている女が近寄ってきて、イエスのうしろか
らみ衣のふさにさわった。二一み衣にさわりさえすれば、なおしてい
ただけるだろう、と心の中で思っていたからである。二二イエスは振
り向いて、この女を見て言われた、「娘よ、しっかりしなさい。あな
たの信仰があなたを救ったのです」。するとこの女はその時に、いや
された。二三それからイエスは司の家に着き、笛吹きどもや騒いでい
る群衆を見て言われた。二四「あちらへ行っていなさい。少女は死ん
だのではない。眠っているだけである」。すると人々はイエスをあざ
笑った。二五しかし、群衆を外へ出したのち、イエスは内へはいって、
少女の手をお取りになると、少女は起きあがった。二六そして、その
うわさがこの地方全体にひろまった。

　二七そこから進んで行かれると、ふたりの盲人が、「ダビデの子よ、
わたしたちをあわれんで下さい」と叫びながら、イエスについてき

た。二八そしてイエスが家にはいられると、盲人たちがみもとにきた
ので、彼らに「わたしにそれができると信じるか」と言われた。彼
らは言った、「主よ、信じます」。二九そこで、イエスは彼らの目にさ
わって言われた、「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になる
ように」。三〇すると彼らの目が開かれた。イエスは彼らをきびしく
戒めて言われた、「だれにも知れないように気をつけなさい」。三一し
かし、彼らは出て行って、その地方全体にイエスのことを言いひろ
めた。

三二彼らが出て行くと、人々は悪霊につかれたおしをイエスのとこ
ろに連れてきた。三三すると、悪霊は追い出されて、おしが物を言う
ようになった。群衆は驚いて、「このようなことがイスラエルの中で
見られたことは、これまで一度もなかった」と言った。三四しかし、
パリサイ人たちは言った、「彼は、悪霊どものかしらによって悪霊ど
もを追い出しているのだ」。

三五イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国

の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしに
なった。三六また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れて
いるのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。三七そして弟子
たちに言われた、「収穫は多いが、働き人が少ない。三八だから、収穫
の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもら
いなさい」。

第一〇章一そこで、イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊を追
い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威をお授けに
なった。
二十二使徒の名は、次のとおりである。まずペテロと呼ばれたシモ
ンとその兄弟アンデレ、それからゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨ
ハネ、三ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの
子ヤコブとタダイ、四熱心党のシモンとイスカリオテのユダ。このユ
ダはイエスを裏切った者である。
五イエスはこの十二人をつかわすに当り、彼らに命じて言われた、

「異邦人の道に行くな。またサマリヤ人の町にはいるな。六むしろ、
イスラエルの家の失われた羊のところに行け。七行って、『天国が近
づいた』と宣べ伝えよ。八病人をいやし、死人をよみがえらせ、らい
病人をきよめ、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与え
るがよい。九財布の中に金、銀または銭を入れて行くな。一〇旅行の
ための袋も、二枚の下着も、くつも、つえも持って行くな。働き人が
その食物を得るのは当然である。一一どの町、どの村にはいっても、
その中でだれがふさわしい人か、たずね出して、立ち去るまではそ
の人のところにとどまっておれ。一二その家にはいったなら、平安を
祈ってあげなさい。一三もし平安を受けるにふさわしい家であれば、
あなたがたの祈る平安はその家に来るであろう。もしふさわしくな
ければ、その平安はあなたがたに帰って来るであろう。一四もしあな
たがたを迎えもせず、またあなたがたの言葉を聞きもしない人があ
れば、その家や町を立ち去る時に、足のちりを払い落しなさい。一五
あなたがたによく言っておく。さばきの日には、ソドム、ゴモラの地

の方が、その町よりは耐えやすいであろう。
一六わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送る
ようなものである。だから、へびのように賢く、はとのように素直で
あれ。一七人々に注意しなさい。彼らはあなたがたを衆議所に引き渡
し、会堂でむち打つであろう。一八またあなたがたは、わたしのため
に長官たちや王たちの前に引き出されるであろう。それは、彼らと
異邦人とに対してあかしをするためである。一九彼らがあなたがたを
引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきこ
とは、その時に授けられるからである。二〇語る者は、あなたがたで
はなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である。二一兄弟は兄弟
を、父は子を殺すために渡し、また子は親に逆らって立ち、彼らを殺
させるであろう。二二またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべて
の人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
二三一つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい。よく言ってお
く。あなたがたがイスラエルの町々を回り終らないうちに、人の子

は来るであろう。
二四弟子はその師以上のものではなく、僕はその主人以上の者では
ない。二五弟子がその師のようであり、僕がその主人のようであれば、
それで十分である。もし家の主人がベルゼブルと言われるならば、そ
の家の者どもはなおさら、どんなにか悪く言われることであろう。二
六だから彼らを恐れるな。おおわれたもので、現れてこないものはな
く、隠れているもので、知られてこないものはない。二七わたしが暗
やみであなたがたに話すことを、明るみで言え。耳にささやかれたこ
とを、屋根の上で言いひろめよ。二八また、からだを殺しても、魂を
殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で
滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。二九二羽のすずめは一アサリオン
で売られているではないか。しかもあなたがたの父の許しがなけれ
ば、その一羽も地に落ちることはない。三〇またあなたがたの頭の毛
までも、みな数えられている。三一それだから、恐れることはない。
あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。三二だから人

の前でわたしを受けいれる者を、わたしもまた、天にいますわたしの
父の前で受けいれるであろう。三三しかし、人の前でわたしを拒む者
を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう。
三四地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和で
はなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。三五わたしがきたの
は、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさ
せるためである。三六そして家の者が、その人の敵となるであろう。
三七わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。
わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。三
八また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさ
わしくない。三九自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのため
に自分の命を失っている者は、それを得るであろう。
四〇あなたがたを受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。
わたしを受けいれる者は、わたしをおつかわしになったかたを受け
いれるのである。四一預言者の名のゆえに預言者を受けいれる者は、

預言者の報いを受け、義人の名のゆえに義人を受けいれる者は、義人
の報いを受けるであろう。四二わたしの弟子であるという名のゆえに、
この小さい者のひとりに冷たい水一杯でも飲ませてくれる者は、よ
く言っておくが、決してその報いからもれることはない」。

第一一章一イエスは十二弟子にこのように命じ終えてから、町々で
教えまた宣べ伝えるために、そこを立ち去られた。
二さて、ヨハネは獄中でキリストのみわざについて伝え聞き、自分
の弟子たちをつかわして、三イエスに言わせた、「『きたるべきかた』
はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょう
か」。四イエスは答えて言われた、「行って、あなたがたが見聞きして
いることをヨハネに報告しなさい。五盲人は見え、足なえは歩き、ら
い病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々
は福音を聞かされている。六わたしにつまずかない者は、さいわいで
ある」。七彼らが帰ってしまうと、イエスはヨハネのことを群衆に語
りはじめられた、「あなたがたは、何を見に荒野に出てきたのか。風

に揺らぐ葦であるか。**八**では、何を見に出てきたのか。柔らかい着物
をまとった人か。柔らかい着物をまとった人々なら、王の家にいる。
九では、なんのために出てきたのか。預言者を見るためか。そうだ、
あなたがたに言うが、預言者以上の者である。

一〇『見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、
あなたの前に、道を整えさせるであろう』

と書いてあるのは、この人のことである。**一一**あなたがたによく言っ
ておく。女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物
は起らなかった。しかし、天国で最も小さい者も、彼よりは大きい。
一二バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われ
ている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている。**一三**すべ
ての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである。**一四**そ
して、もしあなたがたが受けいれることを望めば、この人こそは、き
たるべきエリヤなのである。**一五**耳のある者は聞くがよい。
一六今の時代を何に比べようか。それは子供たちが広場にすわって、

ほかの子供たちに呼びかけ、
一七『わたしたちが笛を吹いたのに、
　あなたたちは踊ってくれなかった。
　弔いの歌を歌ったのに、
　胸を打ってくれなかった』
と言うのに似ている。一八なぜなら、ヨハネがきて、食べることも、
飲むこともしないと、あれは悪霊につかれているのだ、と言い、一九
また人の子がきて、食べたり飲んだりしていると、見よ、あれは食を
むさぼる者、大酒を飲む者、また取税人、罪人の仲間だ、と言う。し
かし、知恵の正しいことは、その働きが証明する」。
二〇それからイエスは、数々の力あるわざがなされたのに、悔い改
めることをしなかった町々を、責めはじめられた。二一「わざわいだ、
コラジンよ。わざわいだ、ベツサイダよ。おまえたちのうちでなさ
れた力あるわざが、もしツロとシドンでなされたなら、彼らはとう
の昔に、荒布をまとい灰をかぶって、悔い改めたであろう。二二しか

し、おまえたちに言っておく。さばきの日には、ツロとシドンの方が
おまえたちよりも、耐えやすいであろう。二三ああ、カペナウムよ、
おまえは天にまで上げられようとでもいうのか。黄泉にまで落され
るであろう。おまえの中でなされた力あるわざが、もしソドムでな
されたなら、その町は今日までも残っていたであろう。二四しかし、
あなたがたに言う。さばきの日には、ソドムの地の方がおまえより
は耐えやすいであろう」。
二五そのときイエスは声をあげて言われた、「天地の主なる父よ。あ
なたをほめたたえます。これらの事を知恵のある者や賢い者に隠し
て、幼な子にあらわしてくださいました。二六父よ、これはまことに
みこころにかなった事でした。二七すべての事は父からわたしに任せ
られています。そして、子を知る者は父のほかにはなく、父を知る者
は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもあ
りません。
二八すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさ

い。あなたがたを休ませてあげよう。二九わたしは柔和で心のへりく
だった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさ
い。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。三〇
わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。
第一二章一そのころ、ある安息日に、イエスは麦畑の中を通られ
た。すると弟子たちは、空腹であったので、穂を摘んで食べはじめ
た。二パリサイ人たちがこれを見て、イエスに言った、「ごらんなさ
い、あなたの弟子たちが、安息日にしてはならないことをしていま
す」。三そこでイエスは彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデと
その供の者たちとが飢えたとき、ダビデが何をしたか読んだことが
ないのか。四すなわち、神の家にはいって、祭司たちのほか、自分も
供の者たちも食べてはならぬ供えのパンを食べたのである。五また、
安息日に宮仕えをしている祭司たちは安息日を破っても罪にはなら
ないことを、律法で読んだことがないのか。六あなたがたに言ってお
く。宮よりも大いなる者がここにいる。七『わたしが好むのは、あわ

れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたな
ら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう。八人の子は
安息日の主である」。
九イエスはそこを去って、彼らの会堂にはいられた。一〇すると、
そのとき、片手のなえた人がいた。人々はイエスを訴えようと思っ
て、「安息日に人をいやしても、さしつかえないか」と尋ねた。一一イ
エスは彼らに言われた、「あなたがたのうちに、一匹の羊を持ってい
る人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだなら、手をか
けて引き上げてやらないだろうか。一二人は羊よりも、はるかにすぐ
れているではないか。だから、安息日に良いことをするのは、正しい
ことである」。一三そしてイエスはその人に、「手を伸ばしなさい」と
言われた。そこで手を伸ばすと、ほかの手のように良くなった。一四
パリサイ人たちは出て行って、なんとかしてイエスを殺そうと相談し
た。一五イエスはこれを知って、そこを去って行かれた。ところが多
くの人々がついてきたので、彼らを皆いやし、一六そして自分のことを

人々にあらわさないようにと、彼らを戒められた。一七これは預言者
イザヤの言った言葉が、成就するためである、
一八「見よ、わたしが選んだ僕、
わたしの心にかなう、愛する者。
わたしは彼にわたしの霊を授け、
そして彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう。
一九彼は争わず、叫ばず、
またその声を大路で聞く者はない。
二〇彼が正義に勝ちを得させる時まで、
いためられた葦を折ることがなく、
煙っている燈心を消すこともない。
二一異邦人は彼の名に望みを置くであろう」。
二二そのとき、人々が悪霊につかれた盲人のおしを連れてきたので、
イエスは彼をいやして、物を言い、また目が見えるようにされた。二
三すると群衆はみな驚いて言った、「この人が、あるいはダビデの子

ではあるまいか」。二四しかし、パリサイ人たちは、これを聞いて言っ
た、「この人が悪霊を追い出しているのは、まったく悪霊のかしらべ
ルゼブルによるのだ」。二五イエスは彼らの思いを見抜いて言われた、
「おおよそ、内部で分れ争う国は自滅し、内わで分れ争う町や家は立
ち行かない。二六もしサタンがサタンを追い出すならば、それは内わ
で分れ争うことになる。それでは、その国はどうして立ち行けよう。
二七もしわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出すとすれば、あな
たがたの仲間はだれによって追い出すのであろうか。だから、彼ら
があなたがたをさばく者となるであろう。二八しかし、わたしが神の
霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたが
たのところにきたのである。二九まただれでも、まず強い人を縛りあ
げなければ、どうして、その人の家に押し入って家財を奪い取ること
ができようか。縛ってから、はじめてその家を掠奪することができ
る。三〇わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わ
たしと共に集めない者は、散らすものである。三一だから、あなたが

たに言っておく。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆ
るされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。三二
また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、
聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆる
されることはない。三三木が良ければ、その実も良いとし、木が悪け
れば、その実も悪いとせよ。木はその実でわかるからである。三四ま
むしの子らよ。あなたがたは悪い者であるのに、どうして良いことを
語ることができようか。おおよそ、心からあふれることを、口が語る
ものである。三五善人はよい倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉
から悪い物を取り出す。三六あなたがたに言うが、審判の日には、人
はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないで
あろう。三七あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分
の言葉によって罪ありとされるからである」。
三八そのとき、律法学者、パリサイ人のうちのある人々がイエスに
むかって言った、「先生、わたしたちはあなたから、しるしを見せてい

ただきとうございます」。三九すると、彼らに答えて言われた、「邪悪
で不義な時代は、しるしを求める。しかし、預言者ヨナのしるしのほ
かには、なんのしるしも与えられないであろう。四〇すなわち、ヨナ
が三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中
にいるであろう。四一ニネベの人々が、今の時代の人々と共にさばき
の場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、ニネベの人々
はヨナの宣教によって悔い改めたからである。しかし見よ、ヨナに
まさる者がここにいる。四二南の女王が、今の時代の人々と共にさば
きの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、彼女はソロ
モンの知恵を聞くために地の果から、はるばるきたからである。し
かし見よ、ソロモンにまさる者がここにいる。四三汚れた霊が人から
出ると、休み場を求めて水の無い所を歩きまわるが、見つからない。
四四そこで、出てきた元の家に帰ろうと言って帰って見ると、その家
はあいていて、そうじがしてある上、飾りつけがしてあった。四五そ
こでまた出て行って、自分以上に悪い他の七つの霊を一緒に引き連

れてきて中にはいり、そこに住み込む。そうすると、その人ののちの
状態は初めよりももっと悪くなるのである。よこしまな今の時代も、
このようになるであろう」。
四六イエスがまだ群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちと
が、イエスに話そうと思って外に立っていた。四七それで、ある人が
イエスに言った、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟がたが、あな
たに話そうと思って、外に立っておられます」。四八イエスは知らせ
てくれた者に答えて言われた、「わたしの母とは、だれのことか。わ
たしの兄弟とは、だれのことか」。四九そして、弟子たちの方に手を
さし伸べて言われた、「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの
兄弟がいる。五〇天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれで
も、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。

第一三章一その日、イエスは家を出て、海べにすわっておられた。
二ところが、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に
乗ってすわられ、群衆はみな岸に立っていた。三イエスは譬で多くの

事を語り、こう言われた、「見よ、種まきが種をまきに出て行った。
四まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて
食べてしまった。五ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深
くないので、すぐ芽を出したが、六日が上ると焼けて、根がないため
に枯れてしまった。七ほかの種はいばらの地に落ちた。すると、いば
らが伸びて、ふさいでしまった。八ほかの種は良い地に落ちて実を結
び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなっ
た。九耳のある者は聞くがよい」。
一〇それから、弟子たちがイエスに近寄ってきて言った、「なぜ、彼
らに譬でお話しになるのですか」。一一そこでイエスは答えて言われ
た、「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼
らには許されていない。一二おおよそ、持っている人は与えられて、
いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも
取り上げられるであろう。一三だから、彼らには譬で語るのである。
それは彼らが、見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからで

ある。一四こうしてイザヤの言った預言が、彼らの上に成就したので
ある。

『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。
見るには見るが、決して認めない。
一五この民の心は鈍くなり、
その耳は聞えにくく、
その目は閉じている。
それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、
悔い改めていやされることがないためである』。

一六しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さい
わいである。一七あなたがたによく言っておく。多くの預言者や義人
は、あなたがたの見ていることを見ようと熱心に願ったが、見ること
ができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞け
なかったのである。一八そこで、種まきの譬を聞きなさい。一九だれ
でも御国の言を聞いて悟らないならば、悪い者がきて、その人の心に

まかれたものを奪いとって行く。道ばたにまかれたものというのは、
そういう人のことである。二〇石地にまかれたものというのは、御言
を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。二一その中に根がな
いので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起っ
てくると、すぐつまずいてしまう。二二また、いばらの中にまかれた
ものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさ
ぐので、実を結ばなくなる人のことである。二三また、良い地にまか
れたものとは、御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実
を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである」。
二四また、ほかの譬を彼らに示して言われた、「天国は、良い種を
自分の畑にまいておいた人のようなものである。二五人々が眠ってい
る間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った。二六芽がはえ出
て実を結ぶと、同時に毒麦もあらわれてきた。二七僕たちがきて、家
の主人に言った、『ご主人様、畑におまきになったのは、良い種ではあ
りませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのですか』。二八主人

は言った、『それは敵のしわざだ』。すると僕たちが言った『では行っ
て、それを抜き集めましょうか』。二九彼は言った、『いや、毒麦を集
めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない。三〇収穫まで、両方と
も育つままにしておけ。収穫の時になったら、刈る者に、まず毒麦を
集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、と言いつけ
よう』」。
三一また、ほかの譬を彼らに示して言われた、「天国は、一粒のか
らし種のようなものである。ある人がそれをとって畑にまくと、三二
それはどんな種よりも小さいが、成長すると、野菜の中でいちばん大
きくなり、空の鳥がきて、その枝に宿るほどの木になる」。
三三またほかの譬を彼らに語られた、「天国は、パン種のようなも
のである。女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると、全体がふく
らんでくる」。
三四イエスはこれらのことをすべて、譬で群衆に語られた。譬によ
らないでは何事も彼らに語られなかった。三五これは預言者によって

言われたことが、成就するためである、
「わたしは口を開いて譬を語り、
世の初めから隠されていることを語り出そう」。
三六それからイエスは、群衆をあとに残して家にはいられた。する
と弟子たちは、みもとにきて言った、「畑の毒麦の譬を説明してくだ
さい」。三七イエスは答えて言われた、「良い種をまく者は、人の子で
ある。三八畑は世界である。良い種と言うのは御国の子たちで、毒麦
は悪い者の子たちである。三九それをまいた敵は悪魔である。収穫と
は世の終りのことで、刈る者は御使たちである。四〇だから、毒麦が
集められて火で焼かれるように、世の終りにもそのとおりになるで
あろう。四一人の子はその使たちをつかわし、つまずきとなるものと
不法を行う者とを、ことごとく御国からとり集めて、四二炉の火に投
げ入れさせるであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりす
るであろう。四三そのとき、義人たちは彼らの父の御国で、太陽のよ
うに輝きわたるであろう。耳のある者は聞くがよい。

四四天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見
つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはら
い、そしてその畑を買うのである。
四五また天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。
四六高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、
そしてこれを買うのである。
四七また天国は、海におろして、あらゆる種類の魚を囲みいれる網
のようなものである。四八それがいっぱいになると岸に引き上げ、そ
してすわって、良いのを器に入れ、悪いのを外へ捨てるのである。四
九世の終りにも、そのとおりになるであろう。すなわち、御使たちが
きて、義人のうちから悪人をえり分け、五〇そして炉の火に投げこむ
であろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。
五一あなたがたは、これらのことが皆わかったか」。彼らは「わか
りました」と答えた。五二そこで、イエスは彼らに言われた、「それ
だから、天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとを、そ

の倉から取り出す一家の主人のようなものである」。
五三イエスはこれらの譬を語り終えてから、そこを立ち去られた。
五四そして郷里に行き、会堂で人々を教えられたところ、彼らは驚い
て言った、「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで
習ってきたのか。五五この人は大工の子ではないか。母はマリヤとい
い、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。五六ま
たその姉妹たちもみな、わたしたちと一緒にいるではないか。こん
な数々のことを、いったい、どこで習ってきたのか」。五七こうして
人々はイエスにつまずいた。しかし、イエスは言われた、「預言者は、
自分の郷里や自分の家以外では、どこでも敬われないことはない」。
五八そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは力あるわざを、あまりな
さらなかった。
第一四章一そのころ、領主ヘロデはイエスのうわさを聞いて、二家来
に言った、「あれはバプテスマのヨハネだ。死人の中からよみがえっ
たのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」。三と

いうのは、ヘロデは先に、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、
ヨハネを捕えて縛り、獄に入れていた。四すなわち、ヨハネはヘロデ
に、「その女をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。五
そこでヘロデはヨハネを殺そうと思ったが、群衆を恐れた。彼らが
ヨハネを預言者と認めていたからである。六さてヘロデの誕生日の祝
に、ヘロデヤの娘がその席上で舞をまい、ヘロデを喜ばせたので、七
彼女の願うものは、なんでも与えようと、彼は誓って約束までした。
八すると彼女は母にそそのかされて、「バプテスマのヨハネの首を盆
に載せて、ここに持ってきていただきとうございます」と言った。九
王は困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、それ
を与えるように命じ、一〇人をつかわして、獄中でヨハネの首を切ら
せた。一一その首は盆に載せて運ばれ、少女にわたされ、少女はそれ
を母のところに持って行った。一二それから、ヨハネの弟子たちがき
て、死体を引き取って葬った。そして、イエスのところに行って報告
した。

一三イエスはこのことを聞くと、舟に乗ってそこを去り、自分ひとり
で寂しい所へ行かれた。しかし、群衆はそれと聞いて、町々から徒歩
であとを追ってきた。一四イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆を
ごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人たちをおいや
しになった。一五夕方になったので、弟子たちがイエスのもとにきて
言った、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。群衆
を解散させ、めいめいで食物を買いに、村々へ行かせてください」。一
六するとイエスは言われた、「彼らが出かけて行くには及ばない。あ
なたがたの手で食物をやりなさい」。一七弟子たちは言った、「わたし
たちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っていません」。一八イエ
スは言われた、「それをここに持ってきなさい」。一九そして群衆に命
じて、草の上にすわらせ、五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天
を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡された。弟子た
ちはそれを群衆に与えた。二〇みんなの者は食べて満腹した。パンく
ずの残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。二一食べた者

は、女と子供とを除いて、おおよそ五千人であった。
二二それからすぐ、イエスは群衆を解散させておられる間に、しい
て弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。二三
そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方
になっても、ただひとりそこにおられた。二四ところが舟は、もうす
でに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まさ
れていた。二五イエスは夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らの方
へ行かれた。二六弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを
見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。二七
しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、「しっかりするのだ、わ
たしである。恐れることはない」と言われた。二八するとペテロが答
えて言った、「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の
上を渡ってみもとに行かせてください」。二九イエスは、「おいでなさ
い」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスの
ところへ行った。三〇しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれ

かけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。三一
イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い
者よ、なぜ疑ったのか」。三二ふたりが舟に乗り込むと、風はやんで
しまった。三三舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、
あなたは神の子です」と言った。
三四それから、彼らは海を渡ってゲネサレの地に着いた。三五する
とその土地の人々はイエスと知って、その附近全体に人をつかわし、
イエスのところに病人をみな連れてこさせた。三六そして彼らにイエ
スの上着のふさにでも、さわらせてやっていただきたいとお願いし
た。そしてさわった者は皆いやされた。

第一五章一ときに、パリサイ人と律法学者たちとが、エルサレムか
らイエスのもとにきて言った、二「あなたの弟子たちは、なぜ昔の人々
の言伝えを破るのですか。彼らは食事の時に手を洗っていません」。
三イエスは答えて言われた、「なぜ、あなたがたも自分たちの言伝え
によって、神のいましめを破っているのか。四神は言われた、『父と

母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められ
る』と。五それだのに、あなたがたは『だれでも父または母にむかっ
て、あなたにさしあげるはずのこのものは供え物です、と言えば、六
父または母を敬わなくてもよろしい』と言っている。こうしてあなた
がたは自分たちの言伝えによって、神の言を無にしている。七偽善者
たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をして
いる、

八『この民は、口さきではわたしを敬うが、
その心はわたしから遠く離れている。
九人間のいましめを教として教え、
無意味にわたしを拝んでいる』」。

一〇それからイエスは群衆を呼び寄せて言われた、「聞いて悟るが
よい。一一口にはいるものは人を汚すことはない。かえって、口から
出るものが人を汚すのである」。一二そのとき、弟子たちが近寄って
きてイエスに言った、「パリサイ人たちが御言を聞いてつまずいたこ

とを、ご存じですか」。一三イエスは答えて言われた、「わたしの天の
父がお植えにならなかったものは、みな抜き取られるであろう。一
四彼らをそのままにしておけ。彼らは盲人を手引きする盲人である。
もし盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろ
う」。一五ペテロが答えて言った、「その譬を説明してください」。一六
イエスは言われた、「あなたがたも、まだわからないのか。一七口に
はいってくるものは、みな腹の中にはいり、そして、外に出て行くこ
とを知らないのか。一八しかし、口から出て行くものは、心の中から
出てくるのであって、それが人を汚すのである。一九というのは、悪
い思い、すなわち、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、誹りは、心の
中から出てくるのであって、二〇これらのものが人を汚すのである。
しかし、洗わない手で食事することは、人を汚すのではない」。
　二一さて、イエスはそこを出て、ツロとシドンとの地方へ行かれた。
二二すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダ
ビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて

苦しんでいます」と言って叫びつづけた。二三しかし、イエスはひと
言もお答えにならなかった。そこで弟子たちがみもとにきて願って
言った、「この女を追い払ってください。叫びながらついてきていま
すから」。二四するとイエスは答えて言われた、「わたしは、イスラエ
ルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。二五しか
し、女は近寄りイエスを拝して言った、「主よ、わたしをお助けくだ
さい」。二六イエスは答えて言われた、「子供たちのパンを取って小犬
に投げてやるのは、よろしくない」。二七すると女は言った、「主よ、
お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンく
ずは、いただきます」。二八そこでイエスは答えて言われた、「女よ、
あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるよ
うに」。その時に、娘はいやされた。

二九イエスはそこを去って、ガリラヤの海べに行き、それから山に
登ってそこにすわられた。三〇すると大ぜいの群衆が、足なえ、不具者、
盲人、おし、そのほか多くの人々を連れてきて、イエスの足もとに置

いたので、彼らをおいやしになった。三一群衆は、おしが物を言い、
不具者が直り、足なえが歩き、盲人が見えるようになったのを見て驚
き、そしてイスラエルの神をほめたたえた。
三二イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「この群衆がかわい
そうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるも
のがない。しかし、彼らを空腹のままで帰らせたくはない。恐らく
途中で弱り切ってしまうであろう」。三三弟子たちは言った、「荒野の
中で、こんなに大ぜいの群衆にじゅうぶん食べさせるほどたくさんの
パンを、どこで手に入れましょうか」。三四イエスは弟子たちに「パ
ンはいくつあるか」と尋ねられると、「七つあります。また小さい魚
が少しあります」と答えた。三五そこでイエスは群衆に、地にすわる
ようにと命じ、三六七つのパンと魚とを取り、感謝してこれをさき、
弟子たちにわたされ、弟子たちはこれを群衆にわけた。三七一同の者
は食べて満腹した。そして残ったパンくずを集めると、七つのかご
にいっぱいになった。三八食べた者は、女と子供とを除いて四千人で

あった。三九そこでイエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダンの
地方へ行かれた。

第一六章一パリサイ人とサドカイ人とが近寄ってきて、イエスを試
み、天からのしるしを見せてもらいたいと言った。二イエスは彼らに
言われた、「あなたがたは夕方になると、『空がまっかだから、晴だ』
と言い、三また明け方には『空が曇ってまっかだから、きょうは荒れ
だ』と言う。あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時
のしるしを見分けることができないのか。四邪悪で不義な時代は、し
るしを求める。しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与
えられないであろう」。そして、イエスは彼らをあとに残して立ち去
られた。

五弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れてい
た。六そこでイエスは言われた、「パリサイ人とサドカイ人とのパン
種を、よくよく警戒せよ」。七弟子たちは、これは自分たちがパンを
持ってこなかったためであろうと言って、互に論じ合った。八イエス

はそれと知って言われた、「信仰の薄い者たちよ、なぜパンがないか
らだと互に論じ合っているのか。九まだわからないのか。覚えていな
いのか。五つのパンを五千人に分けたとき、幾かご拾ったか。一〇ま
た、七つのパンを四千人に分けたとき、幾かご拾ったか。一一わたし
が言ったのは、パンについてではないことを、どうして悟らないの
か。ただ、パリサイ人とサドカイ人とのパン種を警戒しなさい」。一
二そのとき彼らは、イエスが警戒せよと言われたのは、パン種のこと
ではなく、パリサイ人とサドカイ人との教のことであると悟った。
一三イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たち
に尋ねて言われた、「人々は人の子をだれと言っているか」。一四彼ら
は言った、「ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しか
し、ほかの人たちは、エリヤだと言い、また、エレミヤあるいは預言者
のひとりだ、と言っている者もあります」。一五そこでイエスは彼ら
に言われた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。一六
シモン・ペテロが答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリス

トです」。一七すると、イエスは彼にむかって言われた、「バルヨナ・
シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたの
は、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。一八そこで、わた
しもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの
岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つこと
はない。一九わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あ
なたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くこ
とは天でも解かれるであろう」。二〇そのとき、イエスは、自分がキ
リストであることをだれにも言ってはいけないと、弟子たちを戒め
られた。

二一この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行
き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、
そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられ
た。二二すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ、
「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございませ

ん」と言った。二三イエスは振り向いて、ペテロに言われた、「サタ
ンよ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを
思わないで、人のことを思っている」。二四それからイエスは弟子た
ちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を
捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。二五自分の
命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者
は、それを見いだすであろう。二六たとい人が全世界をもうけても、
自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価
を払って、その命を買いもどすことができようか。二七人の子は父の
栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこ
ないに応じて、それぞれに報いるであろう。二八よく聞いておくがよ
い、人の子が御国の力をもって来るのを見るまでは、死を味わわない
者が、ここに立っている者の中にいる」。

第一七章一六日ののち、イエスはペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨ
ハネだけを連れて、高い山に登られた。二ところが、彼らの目の前で

イエスの姿が変り、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白
くなった。三すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れて、イエス
と語り合っていた。四ペテロはイエスにむかって言った、「主よ、わ
たしたちがここにいるのは、すばらしいことです。もし、おさしつ
かえなければ、わたしはここに小屋を三つ建てましょう。一つはあ
なたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。五
彼がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そ
して雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心に
かなう者である。これに聞け」。六弟子たちはこれを聞いて非常に恐
れ、顔を地に伏せた。七イエスは近づいてきて、手を彼らにおいて言
われた、「起きなさい、恐れることはない」。八彼らが目をあげると、
イエスのほかには、だれも見えなかった。

九一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよ
みがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼
らに命じられた。一〇弟子たちはイエスにお尋ねして言った、「いっ

たい、律法学者たちは、なぜ、エリヤが先に来るはずだと言っている
のですか」。一一答えて言われた、「確かに、エリヤがきて、万事を元
どおりに改めるであろう。一二しかし、あなたがたに言っておく。エ
リヤはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かってに彼
をあしらった。人の子もまた、そのように彼らから苦しみを受ける
ことになろう」。一三そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマの
ヨハネのことを言われたのだと悟った。
一四さて彼らが群衆のところに帰ると、ひとりの人がイエスに近寄っ
てきて、ひざまずいて、言った、一五「主よ、わたしの子をあわれん
でください。てんかんで苦しんでおります。何度も何度も火の中や
水の中に倒れるのです。一六それで、その子をお弟子たちのところに
連れてきましたが、なおしていただけませんでした」。一七イエスは
答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な、曲った時代であろう。
いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまであな
たがたに我慢ができようか。その子をここに、わたしのところに連れ

てきなさい」。一八イエスがおしかりになると、悪霊はその子から出
て行った。そして子はその時いやされた。一九それから、弟子たちが
ひそかにイエスのもとにきて言った、「わたしたちは、どうして霊を
追い出せなかったのですか」。二〇するとイエスは言われた、「あなた
がたの信仰が足りないからである。よく言い聞かせておくが、もし、
からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあ
そこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにで
きない事は、何もないであろう。〔二一しかし、このたぐいは、祈と
断食とによらなければ、追い出すことはできない〕」。
二二彼らがガリラヤで集まっていた時、イエスは言われた、「人の
子は人々の手にわたされ、二三彼らに殺され、そして三日目によみが
えるであろう」。弟子たちは非常に心をいためた。
二四彼らがカペナウムにきたとき、宮の納入金を集める人たちがペ
テロのところにきて言った、「あなたがたの先生は宮の納入金を納め
ないのか」。二五ペテロは「納めておられます」と言った。そして彼が

家にはいると、イエスから先に話しかけて言われた、「シモン、あなた
はどう思うか。この世の王たちは税や貢をだれから取るのか。自分
の子からか、それとも、ほかの人たちからか」。二六ペテロが「ほか
の人たちからです」と答えると、イエスは言われた、「それでは、子
は納めなくてもよいわけである。二七しかし、彼らをつまずかせない
ために、海に行って、つり針をたれなさい。そして最初につれた魚を
とって、その口をあけると、銀貨一枚が見つかるであろう。それをと
り出して、わたしとあなたのために納めなさい」。

第一八章
一そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「いっ
たい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」。二すると、イエスは
幼な子を呼び寄せ、彼らのまん中に立たせて言われた、三「よく聞き
なさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはい
ることはできないであろう。四この幼な子のように自分を低くする者
が、天国でいちばん偉いのである。五また、だれでも、このようなひ
とりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受

けいれるのである。六しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひ
とりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深
みに沈められる方が、その人の益になる。七この世は、罪の誘惑があ
るから、わざわいである。罪の誘惑は必ず来る。しかし、それをき
たらせる人は、わざわいである。八もしあなたの片手または片足が、
罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。両手、両足がそろった
ままで、永遠の火に投げ込まれるよりは、片手、片足になって命に入
る方がよい。九もしあなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出
して捨てなさい。両眼がそろったままで地獄の火に投げ入れられる
よりは、片目になって命に入る方がよい。一〇あなたがたは、これら
の小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。あな
たがたに言うが、彼らの御使たちは天にあって、天にいますわたしの
父のみ顔をいつも仰いでいるのである。〔一一人の子は、滅びる者を
救うためにきたのである。〕一二あなたがたはどう思うか。ある人に
百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に

残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。
一三もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十
九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。一四その
ように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあな
たがたの父のみこころではない。

一五もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの
所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことに
なる。一六もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に
連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、
すべてのことがらが確かめられるためである。一七もし彼らの言うこ
とを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞か
ないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい。一八よく
言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つながれ、
あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう。一九
また、よく言っておく。もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願

い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父は
それをかなえて下さるであろう。二〇ふたりまたは三人が、わたしの
名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」。
二一そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った、「主よ、兄弟
がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。
七たびまでですか」。二二イエスは彼に言われた、「わたしは七たびま
でとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい。二三それだか
ら、天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。二四決算が始まる
と、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。
二五しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち
物全部とを売って返すように命じた。二六そこで、この僕はひれ伏し
て哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。
二七僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやっ
た。二八その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に
出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。二九そこ

でこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼ん
だ。三〇しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返す
まで獄に入れた。三一その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に
心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。三二そこでこ
の主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、
あの負債を全部ゆるしてやったのだ。三三わたしがあわれんでやった
ように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。三四そし
て主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわ
たした。三五あなたがたがめいめいも、もし心から兄弟をゆるさないな
らば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさる
であろう」。

第一九章 一イエスはこれらのことを語り終えられてから、ガリラヤ
を去ってヨルダンの向こうのユダヤの地方へ行かれた。二すると大ぜ
いの群衆がついてきたので、彼らをそこでおいやしになった。
三さてパリサイ人たちが近づいてきて、イエスを試みようとして

言った、「何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえないで
しょうか」。四イエスは答えて言われた、「あなたがたはまだ読んだこ
とがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ、五そして
言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの
者は一体となるべきである』。六彼らはもはや、ふたりではなく一体
である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。
七彼らはイエスに言った、「それでは、なぜモーセは、妻を出す場合
には離縁状を渡せ、と定めたのですか」。八イエスが言われた、「モー
セはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したの
だが、初めからそうではなかった。九そこでわたしはあなたがたに言
う。不品行のゆえでなくて、自分の妻を出して他の女をめとる者は、
姦淫を行うのである」。一〇弟子たちは言った、「もし妻に対する夫の
立場がそうだとすれば、結婚しない方がましです」。一一するとイエ
スは彼らに言われた、「その言葉を受けいれることができるのはすべ
ての人ではなく、ただそれを授けられている人々だけである。一二と

いうのは、母の胎内から独身者に生れついているものがあり、また他
から独身者にされたものもあり、また天国のために、みずから進んで
独身者となったものもある。この言葉を受けられる者は、受けいれ
るがよい」。
一三そのとき、イエスに手をおいて祈っていただくために、人々が
幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしな
めた。一四するとイエスは言われた、「幼な子らをそのままにしてお
きなさい。わたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこ
のような者の国である」。一五そして手を彼らの上においてから、そ
こを去って行かれた。
一六すると、ひとりの人がイエスに近寄ってきて言った、「先生、永遠
の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」。
一七イエスは言われた、「なぜよい事についてわたしに尋ねるのか。よ
いかたはただひとりだけである。もし命に入りたいと思うなら、い
ましめを守りなさい」。一八彼は言った、「どのいましめですか」。イ

エスは言われた、『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。
一九父と母とを敬え』。また『自分を愛するように、あなたの隣り人
を愛せよ』」。二〇この青年はイエスに言った、「それはみな守ってき
ました。ほかに何が足りないのでしょう」。二一イエスは彼に言われ
た、「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち
物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つ
ようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。二二この言葉を
聞いて、青年は悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持って
いたからである。

二三それからイエスは弟子たちに言われた、「よく聞きなさい。富
んでいる者が天国にはいるのは、むずかしいものである。二四また、
あなたがたに言うが、富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだ
が針の穴を通る方が、もっとやさしい」。二五弟子たちはこれを聞い
て非常に驚いて言った、「では、だれが救われることができるのだろ
う」。二六イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはそれはできない

が、神にはなんでもできない事はない」。二七そのとき、ペテロがイ
エスに答えて言った、「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨て
て、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか」。
二八イエスは彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。世が改まっ
て、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなた
がたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであ
ろう。二九おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、
子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を
受けつぐであろう。三〇しかし、多くの先の者はあとになり、あとの
者は先になるであろう。

第二〇章一天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇
うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。二
彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをぶどう園に
送った。三それから九時ごろに出て行って、他の人々が市場で何もせ
ずに立っているのを見た。四そして、その人たちに言った、『あなた

がたも、ぶどう園に行きなさい。相当な賃銀を払うから』。五そこで、
彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろとに出て
行って、同じようにした。六五時ごろまた出て行くと、まだ立ってい
る人々を見たので、彼らに言った、『なぜ、何もしないで、一日中ここ
に立っていたのか』。七彼らが『だれもわたしたちを雇ってくれませ
んから』と答えたので、その人々に言った、『あなたがたも、ぶどう
園に行きなさい』。八さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人
に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々から
はじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃銀を払ってやり
なさい』。九そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デ
ナリずつもらった。一〇ところが、最初の人々がきて、もっと多くも
らえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけで
あった。一一もらったとき、家の主人にむかって不平をもらして一二
言った、『この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなた
は一日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさ

いました』。一三そこで彼はそのひとりに答えて言った、『友よ、わた
しはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナ
リの約束をしたではないか。一四自分の賃銀をもらって行きなさい。
わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。一
五自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか。そ
れともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか』。一六
このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」。
一七さて、イエスはエルサレムへ上るとき、十二弟子をひそかに呼
びよせ、その途中で彼らに言われた、一八「見よ、わたしたちはエル
サレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に渡され
るであろう。彼らは彼に死刑を宣告し、一九そして彼をあざけり、む
ち打ち、十字架につけさせるために、異邦人に引きわたすであろう。
そして彼は三日目によみがえるであろう」。
二〇そのとき、ゼベダイの子らの母が、その子らと一緒にイエスのも
とにきてひざまずき、何事かをお願いした。二一そこでイエスは彼女

に言われた、「何をしてほしいのか」。彼女は言った、「わたしのこの
ふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひと
りは左にすわれるように、お言葉をください」。二二イエスは答えて
言われた、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかってい
ない。わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」。彼らは
「できます」と答えた。二三イエスは彼らに言われた、「確かに、あな
たがたはわたしの杯を飲むことになろう。しかし、わたしの右、左に
すわらせることは、わたしのすることではなく、わたしの父によって
備えられている人々だけに許されることである」。二四十人の者はこ
れを聞いて、このふたりの兄弟たちのことで憤慨した。二五そこで、
イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとお
り、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民
の上に権力をふるっている。二六あなたがたの間ではそうであっては
ならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕
える人となり、二七あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、

僕とならねばならない。二八それは、人の子がきたのも、仕えられる
ためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、
自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」。
二九それから、彼らがエリコを出て行ったとき、大ぜいの群衆がイ
エスに従ってきた。三〇すると、ふたりの盲人が道ばたにすわってい
たが、イエスがとおって行かれると聞いて、叫んで言った、「主よ、
ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。三一群衆は彼らを
しかって黙らせようとしたが、彼らはますます叫びつづけて言った、
「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」。三二イエス
は立ちどまり、彼らを呼んで言われた、「わたしに何をしてほしいの
か」。三三彼らは言った、「主よ、目をあけていただくことです」。三四
イエスは深くあわれんで、彼らの目にさわられた。すると彼らは、た
ちまち見えるようになり、イエスに従って行った。

第二一章一さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブ山沿いのベテ
パゲに着いたとき、イエスはふたりの弟子をつかわして言われた、二

「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつながれていて、子
ろばがそばにいるのを見るであろう。それを解いてわたしのところ
に引いてきなさい。三もしだれかが、あなたがたに何か言ったなら、
主がお入り用なのです、と言いなさい。そう言えば、すぐ渡してくれ
るであろう」。四こうしたのは、預言者によって言われたことが、成就
するためである。五すなわち、
　「シオンの娘に告げよ、
　見よ、あなたの王がおいでになる、
　柔和なおかたで、ろばに乗って、
　くびきを負うろばの子に乗って」。
六弟子たちは出て行って、イエスがお命じになったとおりにし、七ろ
ばと子ろばとを引いてきた。そしてその上に自分たちの上着をかけ
ると、イエスはそれにお乗りになった。八群衆のうち多くの者は自分
たちの上着を道に敷き、また、ほかの者たちは木の枝を切ってきて道
に敷いた。九そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も、共に叫

びつづけた、
「ダビデの子に、ホサナ。
主の御名によってきたる者に、祝福あれ。
いと高き所に、ホサナ」。
一〇イエスがエルサレムにはいって行かれたとき、町中がこぞって騒
ぎ立ち、「これは、いったい、どなただろう」と言った。一一そこで
群衆は、「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである」
と言った。
一二それから、イエスは宮にはいられた。そして、宮の庭で売り買
いしていた人々をみな追い出し、また両替人の台や、はとを売る者の
腰掛をくつがえされた。一三そして彼らに言われた、『わたしの家は、
祈の家ととなえらるべきである』と書いてある。それだのに、あなた
がたはそれを強盗の巣にしている」。一四そのとき宮の庭で、盲人や
足なえがみもとにきたので、彼らをおいやしになった。一五しかし、
祭司長、律法学者たちは、イエスがなされた不思議なわざを見、また

宮の庭で「ダビデの子に、ホサナ」と叫んでいる子供たちを見て立腹
し、一六イエスに言った、「あの子たちが何を言っているのか、お聞
きですか」。イエスは彼らに言われた、「そうだ、聞いている。あなた
がたは『幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた』とあるの
を読んだことがないのか」。一七それから、イエスは彼らをあとに残
し、都を出てベタニヤに行き、そこで夜を過ごされた。
一八朝はやく都に帰るとき、イエスは空腹をおぼえられた。一九そ
して、道のかたわらに一本のいちじくの木があるのを見て、そこに行
かれたが、ただ葉のほかは何も見当らなかった。そこでその木にむ
かって、「今から後いつまでも、おまえには実がならないように」と
言われた。すると、いちじくの木はたちまち枯れた。二〇弟子たちは
これを見て、驚いて言った、「いちじくがどうして、こうすぐに枯れ
たのでしょう」。二一イエスは答えて言われた、「よく聞いておくがよ
い。もしあなたがたが信じて疑わないならば、このいちじくにあった
ようなことが、できるばかりでなく、この山にむかって、動き出して

海の中にはいれと言っても、そのとおりになるであろう。二二また、
祈のとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」。
二三イエスが宮にはいられたとき、祭司長たちや民の長老たちが、
その教えておられる所にきて言った、「何の権威によって、これらの
事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」。二四
そこでイエスは彼らに言われた、「わたしも一つだけ尋ねよう。あな
たがたがそれに答えてくれたなら、わたしも、何の権威によってこれ
らの事をするのか、あなたがたに言おう。二五ヨハネのバプテスマは
どこからきたのであったか。天からであったか、人からであったか」。
すると、彼らは互に論じて言った、「もし天からだと言えば、では、
なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。二六しかし、も
し人からだと言えば、群衆が恐ろしい。人々がみなヨハネを預言者
と思っているのだから」。二七そこで彼らは、「わたしたちにはわかり
ません」と答えた。するとイエスが言われた、「わたしも何の権威
によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい。

二八あなたがたはどう思うか。ある人にふたりの子があったが、兄
のところに行って言った、『子よ、きょう、ぶどう園へ行って働いて
くれ』。二九すると彼は『おとうさん、参ります』と答えたが、行か
なかった。三〇また弟のところにきて同じように言った。彼は『いや
です』と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。三一このふたり
のうち、どちらが父の望みどおりにしたのか」。彼らは言った、「あと
の者です」。イエスは言われた、「よく聞きなさい。取税人や遊女は、
あなたがたより先に神の国にはいる。三二というのは、ヨハネがあな
たがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じ
なかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそ
れを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしな
かった。

三三もう一つの譬を聞きなさい。ある所に、ひとりの家の主人がい
たが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘
り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。三四収穫

の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫
のところへ送った。三五すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえ
て、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち
殺した。三六また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも
同じようにあしらった。三七しかし、最後に、わたしの子は敬ってく
れるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。三八す
ると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さ
あ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。三九そして彼をつか
まえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。四〇このぶどう園の主人
が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」。四一彼らはイ
エスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納め
るほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。四二イ
エスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがな
いのか、

　『家造りらの捨てた石が

隅のかしら石になった。
これは主がなされたことで、
わたしたちの目には不思議に見える』。
四三それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り
上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられる
であろう。四四またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれ
かの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」。
四五祭司長たちやパリサイ人たちがこの譬を聞いたとき、自分たちの
ことをさして言っておられることを悟ったので、四六イエスを捕えよ
うとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者だと思っていた
からである。
第二二章一イエスはまた、譬で彼らに語って言われた、二「天国は、
ひとりの王がその王子のために、婚宴を催すようなものである。三王
はその僕たちをつかわして、この婚宴に招かれていた人たちを呼ば
せたが、その人たちはこようとはしなかった。四そこでまた、ほかの

僕たちをつかわして言った、『招かれた人たちに言いなさい。食事の
用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意がで
きました。さあ、婚宴においでください』。五しかし、彼らは知らぬ
顔をして、ひとりは自分の畑に、ひとりは自分の商売に出て行き、六
またほかの人々は、この僕たちをつかまえて侮辱を加えた上、殺して
しまった。七そこで王は立腹し、軍隊を送ってそれらの人殺しどもを
滅ぼし、その町を焼き払った。八それから僕たちに言った、『婚宴の
用意はできているが、招かれていたのは、ふさわしくない人々であっ
た。九だから、町の大通りに出て行って、出会った人はだれでも婚宴
に連れてきなさい』。一〇そこで、僕たちは道に出て行って、出会う人
は、悪人でも善人でもみな集めてきたので、婚宴の席は客でいっぱい
になった。一一王は客を迎えようとしてはいってきたが、そこに礼服
をつけていないひとりの人を見て、一二彼に言った、『友よ、どうし
てあなたは礼服をつけないで、ここにはいってきたのですか』。しか
し、彼は黙っていた。一三そこで、王はそばの者たちに言った、『こ

の者の手足をしばって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫ん
だり、歯がみをしたりするであろう』。一四招かれる者は多いが、選
ばれる者は少ない」。
一五そのときパリサイ人たちがきて、どうかしてイエスを言葉のわ
なにかけようと、相談をした。一六そして、彼らの弟子を、ヘロデ党
の者たちと共に、イエスのもとにつかわして言わせた、「先生、わた
したちはあなたが真実なかたであって、真理に基いて神の道を教え、
また、人に分け隔てをしないで、だれをもはばかられないことを知っ
ています。一七それで、あなたはどう思われますか、答えてください。
カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」。一
八イエスは彼らの悪意を知って言われた、「偽善者たちよ、なぜわた
しをためそうとするのか。一九税に納める貨幣を見せなさい」。彼ら
はデナリ一つを持ってきた。二〇そこでイエスは言われた、「これは、
だれの肖像、だれの記号か」。二一彼らは「カイザルのです」と答え
た。するとイエスは言われた、「それでは、カイザルのものはカイザ

ルに、神のものは神に返しなさい」。二二彼らはこれを聞いて驚嘆し、
イエスを残して立ち去った。
二三復活ということはないと主張していたサドカイ人たちが、その
日、イエスのもとにきて質問した、二四「先生、モーセはこう言ってい
ます、『もし、ある人が子がなくて死んだなら、その弟は兄の妻をめ
とって、兄のために子をもうけねばならない』。二五さて、わたしたち
のところに七人の兄弟がありました。長男は妻をめとったが死んでし
まい、そして子がなかったので、その妻を弟に残しました。二六次男
も三男も、ついに七人とも同じことになりました。二七最後に、その
女も死にました。二八すると復活の時には、この女は、七人のうちだ
れの妻なのでしょうか。みんながこの女を妻にしたのですが」。二九
イエスは答えて言われた、「あなたがたは聖書も神の力も知らないか
ら、思い違いをしている。三〇復活の時には、彼らはめとったり、と
ついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。
三一また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を

読んだことがないのか。三二『わたしはアブラハムの神、イサクの神、
ヤコブの神である』と書いてある。神は死んだ者の神ではなく、生
きている者の神である」。三三群衆はこれを聞いて、イエスの教に驚
いた。
三四さて、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを言いこめ
られたと聞いて、一緒に集まった。三五そして彼らの中のひとりの
律法学者が、イエスをためそうとして質問した、三六「先生、律法の
中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。三七イエスは言わ
れた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなた
の神を愛せよ』。三八これがいちばん大切な、第一のいましめである。
三九第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人
を愛せよ』。四〇これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、
かかっている」。
四一パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねに
なった、四二「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。

彼らは「ダビデの子です」と答えた。四三イエスは言われた、「それで
はどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。
四四すなわち
『主はわが主に仰せになった、
あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、
わたしの右に座していなさい』。
四五このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリ
ストはどうしてダビデの子であろうか」。四六イエスにひと言でも答
えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問す
る者も、いなくなった。
第二三章一そのときイエスは、群衆と弟子たちとに語って言われ
た、二「律法学者とパリサイ人とは、モーセの座にすわっている。三
だから、彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。
しかし、彼らのすることには、ならうな。彼らは言うだけで、実行し
ないから。四また、重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを

動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない。五そのすること
は、すべて人に見せるためである。すなわち、彼らは経札を幅広くつ
くり、その衣のふさを大きくし、六また、宴会の上座、会堂の上席を
好み、七広場であいさつされることや、人々から先生と呼ばれること
を好んでいる。八しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはならない。
あなたがたの先生は、ただひとりであって、あなたがたはみな兄弟な
のだから。九また、地上のだれをも、父と呼んではならない。あなた
がたの父はただひとり、すなわち、天にいます父である。一〇また、
あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただ
ひとり、すなわち、キリストである。一一そこで、あなたがたのうちで
いちばん偉い者は、仕える人でなければならない。一二だれでも自分
を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。
一三偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわい
である。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分も
はいらないし、はいろうとする人をはいらせもしない。〔一四偽善な

律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あな
たがたは、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。
だから、もっときびしいさばきを受けるに違いない。」一五偽善な律法
学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたが
たはひとりの改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く。そして、
つくったなら、彼を自分より倍もひどい地獄の子にする。
一六盲目な案内者たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなた
がたは言う、『神殿をさして誓うなら、そのままでよいが、神殿の黄金
をさして誓うなら、果す責任がある』と。一七愚かな盲目な人たちよ。
黄金と、黄金を神聖にする神殿と、どちらが大事なのか。一八また、
あなたがたは言う、『祭壇をさして誓うなら、そのままでよいが、そ
の上の供え物をさして誓うなら、果す責任がある』と。一九盲目な人
たちよ。供え物と供え物を神聖にする祭壇とどちらが大事なのか。二
〇祭壇をさして誓う者は、祭壇と、その上にあるすべての物とをさし
て誓うのである。二一神殿をさして誓う者は、神殿とその中に住んで

おられるかたとをさして誓うのである。二二また、天をさして誓う者
は、神の御座とその上にすわっておられるかたとをさして誓うので
ある。
二三偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわい
である。はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を宮に納め
ておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを
見のがしている。それもしなければならないが、これも見のがして
はならない。二四盲目な案内者たちよ。あなたがたは、ぶよはこして
いるが、らくだはのみこんでいる。
二五偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわい
である。杯と皿との外側はきよめるが、内側は貪欲と放縦とで満ちて
いる。二六盲目なパリサイ人よ。まず、杯の内側をきよめるがよい。
そうすれば、外側も清くなるであろう。
二七偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわい
である。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見え

るが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。二
八このようにあなたがたも、外側は人に正しく見えるが、内側は偽善
と不法とでいっぱいである。
二九偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわい
である。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こ
う言っている、三〇『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、
預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。三一こ
のようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫であることを、
自分で証明している。三二あなたがたもまた先祖たちがした悪の枡目
を満たすがよい。三三へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰
をのがれることができようか。三四それだから、わたしは、預言者、
知者、律法学者たちをあなたがたにつかわすが、そのうちのある者
を殺し、また十字架につけ、そのある者を会堂でむち打ち、また町か
ら町へと迫害して行くであろう。三五こうして義人アベルの血から、
聖所と祭壇との間であなたがたが殺したバラキヤの子ザカリヤの血

に至るまで、地上に流された義人の血の報いが、ことごとくあなたが
たに及ぶであろう。三六よく言っておく。これらのことの報いは、み
な今の時代に及ぶであろう。
三七ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえに
つかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼
の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集
めようとしたことであろう。それだのに、おまえたちは応じようと
しなかった。三八見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう。三九
わたしは言っておく、
『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』
とおまえたちが言う時までは、今後ふたたび、わたしに会うことはな
いであろう」。

第二四章一イエスが宮から出て行こうとしておられると、弟子たち
は近寄ってきて、宮の建物にイエスの注意を促した。二そこでイエス
は彼らにむかって言われた、「あなたがたは、これらすべてのものを

見ないか。よく言っておく。その石一つでもくずされずに、そこに
他の石の上に残ることもなくなるであろう」。
三またオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみも
とにきて言った、「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起る
のでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どん
な前兆がありますか」。四そこでイエスは答えて言われた、「人に惑わ
されないように気をつけなさい。五多くの者がわたしの名を名のって
現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。六ま
た、戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。注意していなさい、あわ
ててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない。七
民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、
ききんが起り、また地震があるであろう。八しかし、すべてこれらは
産みの苦しみの初めである。九そのとき人々は、あなたがたを苦しみ
にあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえ
にすべての民に憎まれるであろう。一〇そのとき、多くの人がつまず

き、また互に裏切り、憎み合うであろう。一一また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。一二また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。一三しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。一四そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。

一五預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、一六そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。一七屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりるな。一八畑にいる者は、上着を取りにあともどるな。一九その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。二〇あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。二一その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである。二二もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民の

ためには、その期間が縮められるであろう。
二三そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがい
る』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。二四にせ
キリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡
とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。二五見よ、
あなたがたに前もって言っておく。二六だから、人々が『見よ、彼は
荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にい
る』と言っても、信じるな。二七ちょうど、いなずまが東から西にひ
らめき渡るように、人の子も現れるであろう。二八死体のあるところ
には、はげたかが集まるものである。

二九しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月は
その光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされる
であろう。三〇そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。ま
たそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とを
もって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。三

一また、彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天の
はてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。
三二いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかにな
り、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。三三そのように、
すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいている
と知りなさい。三四よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごと
く起るまでは、この時代は滅びることがない。三五天地は滅びるであ
ろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。三六その日、その時
は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父
だけが知っておられる。三七人の子の現れるのも、ちょうどノアの時
のようであろう。三八すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる
日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。三九そし
て洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは
気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう。四〇そ
のとき、ふたりの者が畑にいると、ひとりは取り去られ、ひとりは

取り残されるであろう。四一ふたりの女がうすをひいていると、ひと
りは取り去られ、ひとりは残されるであろう。四二だから、目をさま
していなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか、あなた
がたには、わからないからである。四三このことをわきまえているが
よい。家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、目を
さましていて、自分の家に押し入ることを許さないであろう。四四だ
から、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子
が来るからである。四五主人がその家の僕たちの上に立てて、時に応
じて食物をそなえさせる忠実な思慮深い僕は、いったい、だれであ
ろう。四六主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見ら
れる僕は、さいわいである。四七よく言っておくが、主人は彼を立て
て自分の全財産を管理させるであろう。四八もしそれが悪い僕であっ
て、自分の主人は帰りがおそいと心の中で思い、四九その僕仲間をた
たきはじめ、また酒飲み仲間と一緒に食べたり飲んだりしているな
ら、五〇その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰ってき

て、五一彼を厳罰に処し、偽善者たちと同じ目にあわせるであろう。
彼はそこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。
第二五章一そこで天国は、十人のおとめがそれぞれあかりを手に
して、花婿を迎えに出て行くのに似ている。二その中の五人は思慮が
浅く、五人は思慮深い者であった。三思慮の浅い者たちは、あかりは
持っていたが、油を用意していなかった。四しかし、思慮深い者たち
は、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。
五花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てし
まった。六夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がし
た。七そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれあかりを整えた。
八ところが、思慮の浅い女たちが、思慮深い女たちに言った、『あな
たがたの油をわたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが
消えかかっていますから』。九すると、思慮深い女たちは答えて言っ
た、『わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう。
店に行って、あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう』。一

○彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。そこで、用意のでき
ていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめ
られた。一一そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご
主人様、どうぞ、あけてください』と言った。一二しかし彼は答えて、
『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と言った。一三
だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわ
からないからである。

一四また天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分
の財産を預けるようなものである。一五すなわち、それぞれの能力に
応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者に
は一タラントを与えて、旅に出た。一六五タラントを渡された者は、
すぐに行って、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。一
七二タラントの者も同様にして、ほかに二タラントをもうけた。一八
しかし、一タラントを渡された者は、行って地を掘り、主人の金を隠
しておいた。一九だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰って
して

きて、彼らと計算をしはじめた。
二〇すると五タラントを渡された者
が進み出て、ほかの五タラントをさし出して言った、『ご主人様、あ
なたはわたしに五タラントをお預けになりましたが、ごらんのとお
り、ほかに五タラントをもうけました』。
二一主人は彼に言った、『良
い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であった
から、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。
二二
二タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに二
タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに二タラン
トをもうけました』。
二三主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よく
やった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを
管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。
二四一タラントを渡され
た者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所
から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知してい
ました。
二五そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを
地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金

がございます』。二六すると、主人は彼に答えて言った、『悪い怠惰な
僕よ、あなたはわたしが、まかない所から刈り、散らさない所から集
めることを知っているのか。二七それなら、わたしの金を銀行に預け
ておくべきであった。そうしたら、わたしは帰ってきて、利子と一緒
にわたしの金を返してもらえたであろうに。二八さあ、そのタラント
をこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。
二九おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、
持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。
三〇この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこ
で泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』。

三一人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼は
その栄光の座につくであろう。三二そして、すべての国民をその前に
集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、三三羊
を右に、やぎを左におくであろう。三四そのとき、王は右にいる人々
に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初め

からあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。三五
あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに
飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、三六裸であったときに着せ、
病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。三
七そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わた
したちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいている
のを見て飲ませましたか。三八いつあなたが旅人であるのを見て宿を
貸し、裸なのを見て着せましたか。三九また、いつあなたが病気をし、
獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。四〇すると、王は
答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟
であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わた
しにしたのである』。四一それから、左にいる人々にも言うであろう、
『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのため
に用意されている永遠の火にはいってしまえ。四二あなたがたは、わ
たしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、四三

旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気
のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからであ
る』。四四そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、
あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気
であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでし
たか』。四五そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく
言っておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すな
わち、わたしにしなかったのである』。四六そして彼らは永遠の刑罰
を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」。

第二六章一イエスはこれらの言葉をすべて語り終えてから、弟子た
ちに言われた。二「あなたがたが知っているとおり、ふつかの後には
過越の祭になるが、人の子は十字架につけられるために引き渡され
る」。三そのとき、祭司長たちや民の長老たちが、カヤパという大祭司
の中庭に集まり、四策略をもってイエスを捕えて殺そうと相談した。
五しかし彼らは言った、「祭の間はいけない。民衆の中に騒ぎが起る

かも知れない」。
六さて、イエスがベタニヤで、らい病人シモンの家におられたとき、
七ひとりの女が、高価な香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、
イエスに近寄り、食事の席についておられたイエスの頭に香油を注
ぎかけた。八すると、弟子たちはこれを見て憤って言った、「なんの
ためにこんなむだ使をするのか。九それを高く売って、貧しい人たち
に施すことができたのに」。一〇イエスはそれを聞いて彼らに言われ
た、「なぜ、女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。
一一貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつ
も一緒にいるわけではない。一二この女がわたしのからだにこの香油
を注いだのは、わたしの葬りの用意をするためである。一三よく聞き
なさい。全世界のどこででも、この福音が宣べ伝えられる所では、こ
の女のした事も記念として語られるであろう」。
一四時に、十二弟子のひとりイスカリオテのユダという者が、祭司長
たちのところに行って一五言った、「彼をあなたがたに引き渡せば、い

くらくださいますか」。すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。一
六その時から、ユダはイエスを引きわたそうと、機会をねらっていた。
一七さて、除酵祭の第一日に、弟子たちはイエスのもとにきて言っ
た、「過越の食事をなさるために、わたしたちはどこに用意をしたら
よいでしょうか」。一八イエスは言われた、「市内にはいり、かねて話
してある人の所に行って言いなさい、『先生が、わたしの時が近づい
た、あなたの家で弟子たちと一緒に過越を守ろうと、言っておられま
す』」。一九弟子たちはイエスが命じられたとおりにして、過越の用意
をした。
二〇夕方になって、イエスは十二弟子と一緒に食事の席につかれた。
二一そして、一同が食事をしているとき言われた、「特にあなたがた
に言っておくが、あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうと
している」。二二弟子たちは非常に心配して、つぎつぎに「主よ、ま
さか、わたしではないでしょう」と言い出した。二三イエスは答えて
言われた、「わたしと一緒に同じ鉢に手を入れている者が、わたしを

裏切ろうとしている。二四たしかに人の子は、自分について書いてあ
るとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわ
いである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろ
う」。二五イエスを裏切ったユダが答えて言った、「先生、まさか、わ
たしではないでしょう」。イエスは言われた、「いや、あなただ」。
二六一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこ
れをさき、弟子たちに与えて言われた、「取って食べよ、これはわた
しのからだである」。二七また杯を取り、感謝して彼らに与えて言わ
れた、「みな、この杯から飲め。二八これは、罪のゆるしを得させる
ように、多くの人のために流すわたしの契約の血である。二九あな
たがたに言っておく。わたしの父の国であなたがたと共に、新しく
飲むその日までは、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったもの
を飲むことをしない」。
三〇彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。
三一そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがた

は皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊
の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。三二しか
しわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行
くであろう」。三三するとペテロはイエスに答えて言った、「たとい、
みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきませ
ん」。三四イエスは言われた、「よくあなたに言っておく。今夜、鶏が
鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。三五ペテ
ロは言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あ
なたを知らないなどとは、決して申しません」。弟子たちもみな同じ
ように言った。

三六それから、イエスは彼らと一緒に、ゲツセマネという所へ行か
れた。そして弟子たちに言われた、「わたしが向こうへ行って祈って
いる間、ここにすわっていなさい」。三七そしてペテロとゼベダイの子
ふたりとを連れて行かれたが、悲しみを催しまた悩みはじめられた。
三八そのとき、彼らに言われた、「わたしは悲しみのあまり死ぬほど

である。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」。
三九そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わ
が父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去
らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころ
のままになさって下さい」。四〇それから、弟子たちの所にきてごら
んになると、彼らが眠っていたので、ペテロに言われた、「あなたが
たはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、で
きなかったのか。四一誘惑に陥らないように、目をさまして祈ってい
なさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。四二また二度目
に行って、祈って言われた、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がな
いのでしたら、どうか、みこころが行われますように」。四三またき
てごらんになると、彼らはまた眠っていた。その目が重くなってい
たのである。四四それで彼らをそのままにして、また行って、三度目
に同じ言葉で祈られた。四五それから弟子たちの所に帰ってきて、言
われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。

人の子は罪人らの手に渡されるのだ。四六立て、さあ行こう。見よ、
わたしを裏切る者が近づいてきた」。
四七そして、イエスがまだ話しておられるうちに、そこに、十二弟子
のひとりのユダがきた。また祭司長、民の長老たちから送られた大ぜ
いの群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。四八イエスを裏切っ
た者が、あらかじめ彼らに、「わたしの接吻する者が、その人だ。そ
の人をつかまえろ」と合図をしておいた。四九彼はすぐイエスに近寄
り、「先生、いかがですか」と言って、イエスに接吻した。五〇しか
し、イエスは彼に言われた、「友よ、なんのためにきたのか」。この
とき、人々が進み寄って、イエスに手をかけてつかまえた。五一する
と、イエスと一緒にいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、そし
て大祭司の僕に切りかかって、その片耳を切り落した。五二そこで、
イエスは彼に言われた、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣
をとる者はみな、剣で滅びる。五三それとも、わたしが父に願って、
天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができな

いと、あなたは思うのか。五四しかし、それでは、こうならねばなら
ないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」。五五そ
のとき、イエスは群衆に言われた、「あなたがたは強盗にむかうよう
に、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。わたしは毎日、宮で
すわって教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。五六しか
し、すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するた
めである」。そのとき、弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。
五七さて、イエスをつかまえた人たちは、大祭司カヤパのところに
イエスを連れて行った。そこには律法学者、長老たちが集まってい
た。五八ペテロは遠くからイエスについて、大祭司の中庭まで行き、
そのなりゆきを見とどけるために、中にはいって下役どもと一緒に
すわっていた。五九さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑に
するため、イエスに不利な偽証を求めようとしていた。六〇そこで多
くの偽証者が出てきたが、証拠があがらなかった。しかし、最後にふ
たりの者が出てきて六一言った、「この人は、わたしは神の宮を打ち

こわし、三日の後に建てることができる、と言いました」。六二する
と、大祭司が立ち上がってイエスに言った、「何も答えないのか。こ
れらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうな
のか」。六三しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言っ
た、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれ
われに答えよ」。六四イエスは彼に言われた、「あなたの言うとおりで
ある。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の
子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。
六五すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「彼は神を汚した。
どうしてこれ以上、証人の必要があろう。あなたがたは今このけが
し言を聞いた。六六あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは答
えて言った、「彼は死に当るものだ」。六七それから、彼らはイエスの
顔につばきをかけて、こぶしで打ち、またある人は手のひらでたたい
て言った、六八「キリストよ、言いあててみよ、打ったのはだれか」。
六九ペテロは外で中庭にすわっていた。するとひとりの女中が彼の

ところにきて、「あなたもあのガリラヤ人イエスと一緒だった」と言っ
た。七〇するとペテロは、みんなの前でそれを打ち消して言った、「あ
なたが何を言っているのか、わからない」。七一そう言って入口の方
に出て行くと、ほかの女中が彼を見て、そこにいる人々にむかって、
「この人はナザレ人イエスと一緒だった」と言った。七二そこで彼は
再びそれを打ち消して、「そんな人は知らない」と誓って言った。七三
しばらくして、そこに立っていた人々が近寄ってきて、ペテロに言っ
た、「確かにあなたも彼らの仲間だ。言葉づかいであなたのことがわ
かる」。七四彼は「その人のことは何も知らない」と言って、激しく誓
いはじめた。するとすぐ鶏が鳴いた。七五ペテロは「鶏が鳴く前に、
三度わたしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を
思い出し、外に出て激しく泣いた。

第二七章一夜が明けると、祭司長たち、民の長老たち一同は、イエス
を殺そうとして協議をこらした上、二イエスを縛って引き出し、総督
ピラトに渡した。

三そのとき、イエスを裏切ったユダは、イエスが罪に定められたの
を見て後悔し、銀貨三十枚を祭司長、長老たちに返して四言った、「わ
たしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」。
しかし彼らは言った、「それは、われわれの知ったことか。自分で始末
するがよい」。五そこで、彼は銀貨を聖所に投げ込んで出て行き、首を
つって死んだ。六祭司長たちは、その銀貨を拾いあげて言った、「こ
れは血の代価だから、宮の金庫に入れるのはよくない」。七そこで彼
らは協議の上、外国人の墓地にするために、その金で陶器師の畑を
買った。八そのために、この畑は今日まで血の畑と呼ばれている。九
こうして預言者エレミヤによって言われた言葉が、成就したのであ
る。すなわち、「彼らは、値をつけられたもの、すなわち、イスラエ
ルの子らが値をつけたものの代価、銀貨三十を取って、一〇主がお命
じになったように、陶器師の畑の代価として、その金を与えた」。
一一さて、イエスは総督の前に立たれた。すると総督はイエスに尋
ねて言った、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのと

おりである」と言われた。一二しかし、祭司長、長老たちが訴えてい
る間、イエスはひと言もお答えにならなかった。一三するとピラトは
言った、「あんなにまで次々に、あなたに不利な証言を立てているの
が、あなたには聞えないのか」。一四しかし、総督が非常に不思議に
思ったほどに、イエスは何を言われても、ひと言もお答えにならな
かった。一五さて、祭のたびごとに、総督は群衆が願い出る囚人ひと
りを、ゆるしてやる慣例になっていた。一六ときに、バラバという評判
の囚人がいた。一七それで、彼らが集まったとき、ピラトは言った、
「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバか、それとも、
キリストといわれるイエスか」。一八彼らがイエスを引きわたしたの
は、ねたみのためであることが、ピラトにはよくわかっていたからで
ある。一九また、ピラトが裁判の席についていたとき、その妻が人を
彼のもとにつかわして、「あの義人には関係しないでください。わた
しはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」と言
わせた。二〇しかし、祭司長、長老たちは、バラバをゆるして、イエ

スを殺してもらうようにと、群衆を説き伏せた。二一総督は彼らにむ
かって言った、「ふたりのうち、どちらをゆるしてほしいのか」。彼
らは「バラバの方を」と言った。二二ピラトは言った、「それではキ
リストといわれるイエスは、どうしたらよいか」。彼らはいっせいに
「十字架につけよ」と言った。二三しかし、ピラトは言った、「あの人
は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると彼らはいっそう激し
く叫んで、「十字架につけよ」と言った。二四ピラトは手のつけよう
がなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で
手を洗って言った、「この人の血について、わたしには責任がない。
おまえたちが自分で始末をするがよい」。二五すると、民衆全体が答
えて言った、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にか
かってもよい」。二六そこで、ピラトはバラバをゆるしてやり、イエ
スをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。
二七それから総督の兵士たちは、イエスを官邸に連れて行って、全
部隊をイエスのまわりに集めた。二八そしてその上着をぬがせて、赤

い外套を着せ、二九また、いばらで冠を編んでその頭にかぶらせ、右
の手には葦の棒を持たせ、それからその前にひざまずき、嘲弄して、
「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。三〇また、イエスにつばきを
かけ、葦の棒を取りあげてその頭をたたいた。三一こうしてイエスを
嘲弄したあげく、外套をはぎ取って元の上着を着せ、それから十字架
につけるために引き出した。

三二彼らが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会ったので、
イエスの十字架を無理に負わせた。三三そして、ゴルゴタ、すなわち、
されこうべの場、という所にきたとき、三四彼らはにがみをまぜたぶ
どう酒を飲ませようとしたが、イエスはそれをなめただけで、飲もう
とされなかった。三五彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引
いて、その着物を分け、三六そこにすわってイエスの番をしていた。
三七そしてその頭の上の方に、「これはユダヤ人の王イエス」と書いた
罪状書きをかかげた。三八同時に、ふたりの強盗がイエスと一緒に、
ひとりは右に、ひとりは左に、十字架につけられた。三九そこを通り

かかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって四〇言った、
「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分
を救え。そして十字架からおりてこい」。四一祭司長たちも同じよう
に、律法学者、長老たちと一緒になって、嘲弄して言った、四二「他人
を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの
王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。四三彼
は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらう
がよい。自分は神の子だと言っていたのだから」。四四一緒に十字架
につけられた強盗どもまでも、同じようにイエスをののしった。
四五さて、昼の十二時から地上の全面が暗くなって、三時に及んだ。
四六そして三時ごろに、イエスは大声で叫んで、「エリ、エリ、レマ、
サバクタニ」と言われた。それは「わが神、わが神、どうしてわたし
をお見捨てになったのですか」という意味である。四七すると、そこ
に立っていたある人々が、これを聞いて言った、「あれはエリヤを呼
んでいるのだ」。四八するとすぐ、彼らのうちのひとりが走り寄って、

海綿を取り、それに酢いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ、イエスに
飲ませようとした。四九ほかの人々は言った、「待て、エリヤが彼を
救いに来るかどうか、見ていよう」。五〇イエスはもう一度大声で叫
んで、ついに息をひきとられた。五一すると見よ、神殿の幕が上から
下まで真二つに裂けた。また地震があり、岩が裂け、五二また墓が開
け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。五三そしてイエ
スの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現
れた。五四百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、
地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人
は神の子であった」と言った。五五また、そこには遠くの方から見て
いる女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従っ
てきた人たちであった。五六その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブ
とヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。
　五七夕方になってから、アリマタヤの金持で、ヨセフという名の人
がきた。彼もまたイエスの弟子であった。五八この人がピラトの所へ

行って、イエスのからだの引取りかたを願った。そこで、ピラトは
それを渡すように命じた。五九ヨセフは死体を受け取って、きれいな
亜麻布に包み、六〇岩を掘って造った彼の新しい墓に納め、そして墓
の入口に大きい石をころがしておいて、帰った。六一マグダラのマリ
ヤとほかのマリヤとが、墓にむかってそこにすわっていた。

六二あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パ
リサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、六三「長官、あの偽
り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言っ
たのを、思い出しました。六四ですから、三日目まで墓の番をするよ
うに、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み
出し、『イエスは死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふら
すかも知れません。そうなると、みんなが前よりも、もっとひどくだ
まされることになりましょう」。六五ピラトは彼らに言った、「番人が
いるから、行ってできる限り、番をさせるがよい」。六六そこで、彼
らは行って石に封印をし、番人を置いて墓の番をさせた。

第二八章一さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグ
ダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。二すると、大きな
地震が起った。それは主の使が天から下って、そこにきて石をわき
へころがし、その上にすわったからである。三その姿はいなずまの
ように輝き、その衣は雪のように真白であった。四見張りをしていた
人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。五こ
の御使は女たちにむかって言った、「恐れることはない。あなたがた
が十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしに
わかっているが、六もうここにはおられない。かねて言われたとおり
に、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所
をごらんなさい。七そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさ
い、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより
先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたが
たに、これだけ言っておく」。八そこで女たちは恐れながらも大喜び
で、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。

九すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼
らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。一〇そのとき、イエスは
彼らに言われた、「恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤ
に行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい」。
一一女たちが行っている間に、番人のうちのある人々が都に帰って、
いっさいの出来事を祭司長たちに話した。一二祭司長たちは長老たち
と集まって協議をこらし、兵卒たちにたくさんの金を与えて言った、
一三『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』
と言え。一四万一このことが総督の耳にはいっても、われわれが総督
に説いて、あなたがたに迷惑が掛からないようにしよう」。一五そこ
で、彼らは金を受け取って、教えられたとおりにした。そしてこの話
は、今日に至るまでユダヤ人の間にひろまっている。
一六さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエスが彼らに
行くように命じられた山に登った。一七そして、イエスに会って拝し
た。しかし、疑う者もいた。一八イエスは彼らに近づいてきて言われ

た、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授け
られた。一九それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子
として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、二
〇あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見
よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。

マルコによる福音書

第一章 一神の子イエス・キリストの福音のはじめ。
二預言者イザヤの書に、
「見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、
あなたの道を整えさせるであろう。
三荒野で呼ばわる者の声がする、
『主の道を備えよ、
その道筋をまっすぐにせよ』」
と書いてあるように、四バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪のゆ
るしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。五そこで、ユ
ダヤ全土とエルサレムの全住民とが、彼のもとにぞくぞくと出て行っ
て、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受け

た。六このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯を
しめ、いなごと野蜜とを食物としていた。七彼は宣べ伝えて言った、
「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはか
がんで、そのくつのひもを解く値うちもない。八わたしは水でバプテ
スマを授けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けにな
るであろう」。
九そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川
で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。一〇そして、水の中か
ら上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って
来るのを、ごらんになった。一一すると天から声があった、「あなた
はわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。
一二それからすぐに、御霊がイエスを荒野に追いやった。一三イエ
スは四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして
獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた。
一四ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を

宣べ伝えて言われた、一五「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改
めて福音を信ぜよ」。
一六さて、イエスはガリラヤの海べを歩いて行かれ、シモンとシモ
ンの兄弟アンデレとが、海で網を打っているのをごらんになった。彼
らは漁師であった。一七イエスは彼らに言われた、「わたしについて
きなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。一八す
ると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。一九また少し進ん
で行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、舟の中で
網を繕っているのをごらんになった。二〇そこで、すぐ彼らをお招き
になると、父ゼベダイを雇人たちと一緒に舟において、イエスのあと
について行った。
二一それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、
イエスは会堂にはいって教えられた。二二人々は、その教に驚いた。
律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたか
らである。二三ちょうどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にい

て、叫んで言った、二四「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちと
なんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのです
か。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。二
五イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われ
た。二六すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、そ
の人から出て行った。二七人々はみな驚きのあまり、互に論じて言っ
た、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊に
さえ命じられると、彼らは従うのだ」。二八こうしてイエスのうわさ
は、たちまちガリラヤの全地方、いたる所にひろまった。
二九それから会堂を出るとすぐ、ヤコブとヨハネとを連れて、シモン
とアンデレとの家にはいって行かれた。三〇ところが、シモンのしゅ
うとめが熱病で床についていたので、人々はさっそく、そのことをイ
エスに知らせた。三一イエスは近寄り、その手をとって起されると、
熱が引き、女は彼らをもてなした。
三二夕暮になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた者をみ

な、イエスのところに連れてきた。三三こうして、町中の者が戸口に
集まった。三四イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々
をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言
うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからで
ある。
三五朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ
出て行き、そこで祈っておられた。三六すると、シモンとその仲間と
が、あとを追ってきた。三七そしてイエスを見つけて、「みんなが、あ
なたを捜しています」と言った。三八イエスは彼らに言われた、「ほ
かの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教を宣べ伝えよう。わ
たしはこのために出てきたのだから」。三九そして、ガリラヤ全地を
巡りあるいて、諸会堂で教を宣べ伝え、また悪霊を追い出された。
四〇ひとりのらい病人が、イエスのところに願いにきて、ひざまず
いて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。四
一イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげ

よう、きよくなれ」と言われた。四二すると、らい病が直ちに去って、
その人はきよくなった。四三イエスは彼をきびしく戒めて、すぐにそ
こを去らせ、こう言い聞かせられた、四四「何も人に話さないように、
注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、
モーセが命じた物をあなたのきよめのためにささげて、人々に証明
しなさい」。四五しかし、彼は出て行って、自分の身に起ったことを
盛んに語り、また言いひろめはじめたので、イエスはもはや表立って
は町に、はいることができなくなり、外の寂しい所にとどまっておら
れた。しかし、人々は方々から、イエスのところにぞくぞくと集まっ
てきた。

第二章
一幾日かたって、イエスがまたカペナウムにお帰りになっ
たとき、家におられるといううわさが立ったので、二多くの人々が集
まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになっ
た。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。三すると、人々
がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れ

てきた。四ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエ
スのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせ
たまま、床をつりおろした。五イエスは彼らの信仰を見て、中風の者
に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。六ところが、そ
こに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、七「この人
は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひと
りのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。八イエスは、彼ら
が内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、
あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。九中風の者に、
あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩
け、と言うのと、どちらがたやすいか。一〇しかし、人の子は地上で
罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と
彼らに言い、中風の者にむかって、一一「あなたに命じる。起きよ、
床を取りあげて家に帰れ」と言われた。一二すると彼は起きあがり、
すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに

驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と
言った。
一三イエスはまた海べに出て行かれると、多くの人々がみもとに集
まってきたので、彼らを教えられた。一四また途中で、アルパヨの子
レビが収税所にすわっているのをごらんになって、「わたしに従って
きなさい」と言われた。すると彼は立ちあがって、イエスに従った。
一五それから彼の家で、食事の席についておられたときのことである。
多くの取税人や罪人たちも、イエスや弟子たちと共にその席に着いて
いた。こんな人たちが大ぜいいて、イエスに従ってきたのである。一
六パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を
共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人
や罪人などと食事を共にするのか」。一七イエスはこれを聞いて言わ
れた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたし
がきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。
一八ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々

がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子た
ちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしない
のですか」。一九するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒
にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食
はできない。二〇しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には
断食をするであろう。二一だれも、真新しい布ぎれを、古い着物に縫
いつけはしない。もしそうすれば、新しいつぎは古い着物を引き破
り、そして、破れがもっとひどくなる。二二またたれも、新しいぶど
う酒を古い皮袋に入れはしない。もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋
をはり裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう。〔だか
ら、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである〕」。
二三ある安息日に、イエスは麦畑の中をとおって行かれた。そのと
き弟子たちが、歩きながら穂をつみはじめた。二四すると、パリサイ
人たちがイエスに言った、「いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはな
らぬことをするのですか」。二五そこで彼らに言われた、「あなたがた

は、ダビデとその供の者たちとが食物がなくて飢えたとき、ダビデが
何をしたか、まだ読んだことがないのか。二六すなわち、大祭司アビ
アタルの時、神の家にはいって、祭司たちのほか食べてはならぬ供え
のパンを、自分も食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。二七
また彼らに言われた、「安息日は人のためにあるもので、人が安息日
のためにあるのではない。二八それだから、人の子は、安息日にもま
た主なのである」。

第三章一イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人
がいた。二人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいや
されるかどうかをうかがっていた。三すると、イエスは片手のなえた
その人に、「立って、中へ出てきなさい」と言い、四人々にむかって、
「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どち
らがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。五イエスは怒りを含ん
で彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を
伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおり

になった。六パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たち
と、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。
七それから、イエスは弟子たちと共に海べに退かれたが、ガリラヤ
からきたおびただしい群衆がついて行った。またユダヤから、八エル
サレムから、イドマヤから、更にヨルダンの向こうから、ツロ、シド
ンのあたりからも、おびただしい群衆が、そのなさっていることを聞
いて、みもとにきた。九イエスは群衆が自分に押し迫るのを避けるた
めに、小舟を用意しておけと、弟子たちに命じられた。一〇それは、
多くの人をいやされたので、病苦に悩む者は皆イエスにさわろうと
して、押し寄せてきたからである。一一また、けがれた霊どもはイエ
スを見るごとに、みまえにひれ伏し、叫んで、「あなたこそ神の子で
す」と言った。一二イエスは御自身のことを人にあらわさないように
と、彼らをきびしく戒められた。
一三さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せ
られたので、彼らはみもとにきた。一四そこで十二人をお立てになっ

た。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、一
五また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。一六こうして、
この十二人をお立てになった。そしてシモンにペテロという名をつ
け、一七またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らには
ボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。一八つぎにア
ンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコ
ブ、タダイ、熱心党のシモン、一九それからイスカリオテのユダ。こ
のユダがイエスを裏切ったのである。
　イエスが家にはいられると、二〇群衆がまた集まってきたので、一同
は食事をする暇もないほどであった。二一身内の者たちはこの事を聞
いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。
二二また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブ
ルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊
どもを追い出しているのだ」とも言った。二三そこでイエスは彼らを
呼び寄せ、譬をもって言われた、「どうして、サタンがサタンを追い

出すことができようか。二四もし国が内部で分れ争うなら、その国は
立ち行かない。二五また、もし家が内わで分れ争うなら、その家は立
ち行かないであろう。二六もしサタンが内部で対立し分争するなら、
彼は立ち行けず、滅んでしまう。二七だれでも、まず強い人を縛りあ
げなければ、その人の家に押し入って家財を奪い取ることはできな
い。縛ってからはじめて、その家を略奪することができる。二八よく
言い聞かせておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけが
す言葉も、ゆるされる。二九しかし、聖霊をけがす者は、いつまでも
ゆるされず、永遠の罪に定められる」。三〇そう言われたのは、彼ら
が「イエスはけがれた霊につかれている」と言っていたからである。
三一さて、イエスの母と兄弟たちとがきて、外に立ち、人をやって
イエスを呼ばせた。三二ときに、群衆はイエスを囲んですわっていた
が、「ごらんなさい。あなたの母上と兄弟、姉妹たちが、外であなた
を尋ねておられます」と言った。三三すると、イエスは彼らに答えて
言われた、「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」。三四そ

して、自分をとりかこんで、すわっている人々を見まわして、言われ
た、「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。三五
神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母
なのである」。

第四章一イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただし
い群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、
海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。二イエスは譬で多
くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、三「聞き
なさい、種まきが種をまきに出て行った。四まいているうちに、道ば
たに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。五ほかの
種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出
したが、六日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。七ほ
かの種はいばらの中に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいで
しまったので、実を結ばなかった。八ほかの種は良い地に落ちた。そ
してはえて、育って、ますます実を結び、三十倍、六十倍、百倍にも

なった」。九そして言われた、「聞く耳のある者は聞くがよい」。
一〇イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子
と共に、これらの譬について尋ねた。一一そこでイエスは言われた、
「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちに
は、すべてが譬で語られる。
一二それは
『彼らは見るには見るが、認めず、
聞くには聞くが、悟らず、
悔い改めてゆるされることがない』ためである」。
一三また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。そ
れでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。一四種まきは御言を
まくのである。一五道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちの
ことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼ら
の中にまかれた御言を、奪って行くのである。一六同じように、石地
にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、

すぐに喜んで受けるが、一七自分の中に根がないので、しばらく続く
だけである。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、す
ぐつまずいてしまう。一八また、いばらの中にまかれたものとは、こ
ういう人たちのことである。御言を聞くが、一九世の心づかいと、富
の惑わしと、その他いろいろな欲とがはいってきて、御言をふさぐの
で、実を結ばなくなる。二〇また、良い地にまかれたものとは、こう
いう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、
百倍の実を結ぶのである」。

二一また彼らに言われた、「ますの下や寝台の下に置くために、あ
かりを持ってくることがあろうか。燭台の上に置くためではないか。
二二なんでも、隠されているもので、現れないものはなく、秘密にさ
れているもので、明るみに出ないものはない。二三聞く耳のある者は
聞くがよい」。二四また彼らに言われた、「聞くことがらに注意しなさ
い。あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられ、その上
になお増し加えられるであろう。二五だれでも、持っている人は更に

与えられ、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる
であろう」。
二六また言われた、「神の国は、ある人が地に種をまくようなもの
である。二七夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行く
が、どうしてそうなるのか、その人は知らない。二八地はおのずから
実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実
ができる。二九実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたか
らである」。
三〇また言われた、「神の国を何に比べようか。また、どんな譬で
言いあらわそうか。三一それは一粒のからし種のようなものである。
地にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、三二まかれる
と、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰
に空の鳥が宿るほどになる」。
三三イエスはこのような多くの譬で、人々の聞く力にしたがって、
御言を語られた。三四譬によらないでは語られなかったが、自分の

弟子たちには、ひそかにすべてのことを解き明かされた。
三五さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ
渡ろう」と言われた。三六そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエス
が舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。
三七すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に
満ちそうになった。三八ところがイエス自身は、舳の方でまくらをし
て、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、
わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言っ
た。三九イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、
黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。四〇イエスは彼
らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がない
のか」。四一彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方
はだれだろう。風も海も従わせるとは」。

第五章一こうして彼らは海の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。二
それから、イエスが舟からあがられるとすぐに、けがれた霊につか

れた人が墓場から出てきて、イエスに出会った。三この人は墓場をす
みかとしており、もはやだれも、鎖でさえも彼をつなぎとめて置け
なかった。四彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎ
り、足かせを砕くので、だれも彼を押えつけることができなかったか
らである。五そして、夜昼たえまなく墓場や山で叫びつづけて、石で
自分のからだを傷つけていた。六ところが、この人がイエスを遠くか
ら見て、走り寄って拝し、七大声で叫んで言った、「いと高き神の子
イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。神に誓っ
てお願いします。どうぞ、わたしを苦しめないでください」。八それ
は、イエスが、「けがれた霊よ、この人から出て行け」と言われたか
らである。九また彼に、「なんという名前か」と尋ねられると、「レギ
オンと言います。大ぜいなのですから」と答えた。一〇そして、自分
たちをこの土地から追い出さないようにと、しきりに願いつづけた。
一一さて、そこの山の中腹に、豚の大群が飼ってあった。一二霊はイ
エスに願って言った、「わたしどもを、豚にはいらせてください。そ

の中へ送ってください」。一三イエスがお許しになったので、けがれ
た霊どもは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ
は二千匹ばかりであったが、がけから海へなだれを打って駆け下り、
海の中でおぼれ死んでしまった。一四豚を飼う者たちが逃げ出して、
町や村にふれまわったので、人々は何事が起ったのかと見にきた。一
五そして、イエスのところにきて、悪霊につかれた人が着物を着て、
正気になってすわっており、それがレギオンを宿していた者である
のを見て、恐れた。一六また、それを見た人たちは、悪霊につかれた
人の身に起った事と豚のこととを、彼らに話して聞かせた。一七そこ
で、人々はイエスに、この地方から出て行っていただきたいと、頼み
はじめた。一八イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた
人がお供をしたいと願い出た。一九しかし、イエスはお許しにならな
いで、彼に言われた、「あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに
大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださっ
たか、それを知らせなさい」。二〇そこで、彼は立ち去り、そして自分

にイエスがしてくださったことを、ことごとくデカポリスの地方に
言いひろめ出したので、人々はみな驚き怪しんだ。
二一イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大ぜいの群衆がみも
とに集まってきた。イエスは海べにおられた。二二そこへ、会堂司の
ひとりであるヤイロという者がきて、イエスを見かけるとその足も
とにひれ伏し、二三しきりに願って言った、「わたしの幼い娘が死に
かかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、お
いでになって、手をおいてやってください」。二四そこで、イエスは
彼と一緒に出かけられた。大ぜいの群衆もイエスに押し迫りながら、
ついて行った。

二五さてここに、十二年間も長血をわずらっている女がいた。二六
多くの医者にかかって、さんざん苦しめられ、その持ち物をみな費し
てしまったが、なんのかいもないばかりか、かえってますます悪くな
る一方であった。二七この女がイエスのことを聞いて、群衆の中にま
ぎれ込み、うしろから、み衣にさわった。二八それは、せめて、み衣

にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからであ
る。二九すると、血の元がすぐにかわき、女は病気がなおったことを、
その身に感じた。三〇イエスはすぐ、自分の内から力が出て行ったこ
とに気づかれて、群衆の中で振り向き、「わたしの着物にさわったの
はだれか」と言われた。三一そこで弟子たちが言った、「ごらんのと
おり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、
おっしゃるのですか」。三二しかし、イエスはさわった者を見つけよ
うとして、見まわしておられた。三三その女は自分の身に起ったこと
を知って、恐れおののきながら進み出て、みまえにひれ伏して、すべ
てありのままを申し上げた。三四イエスはその女に言われた、「娘よ、
あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっ
かりなおって、達者でいなさい」。
三五イエスが、まだ話しておられるうちに、会堂司の家から人々が
きて言った、「あなたの娘はなくなりました。このうえ、先生を煩わ
すには及びますまい」。三六イエスはその話している言葉を聞き流し

て、会堂司に言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい」。三七
そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来るこ
とを、だれにもお許しにならなかった。三八彼らが会堂司の家に着く
と、イエスは人々が大声で泣いたり、叫んだりして、騒いでいるのを
ごらんになり、三九内にはいって、彼らに言われた、「なぜ泣き騒い
でいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。四
〇人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出
し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいって
行かれた。四一そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われ
た。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。四二
すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなって
いたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。四三イエス
は、だれにもこの事を知らすなと、きびしく彼らに命じ、また、少女
に食物を与えるようにと言われた。

第六章一イエスはそこを去って、郷里に行かれたが、弟子たちも

従って行った。二そして、安息日になったので、会堂で教えはじめら
れた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った、「この人は、これ
らのことをどこで習ってきたのか。また、この人の授かった知恵は
どうだろう。このような力あるわざがその手で行われているのは、ど
うしてか。三この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、
ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここに
わたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつま
ずいた。四イエスは言われた、「預言者は、自分の郷里、親族、家以外
では、どこででも敬われないことはない」。五そして、そこでは力あ
るわざを一つもすることができず、ただ少数の病人に手をおいてい
やされただけであった。六そして、彼らの不信仰を驚き怪しまれた。
　それからイエスは、附近の村々を巡りあるいて教えられた。七また
十二弟子を呼び寄せ、ふたりずつつかわすことにして、彼らにけがれ
た霊を制する権威を与え、八また旅のために、つえ一本のほかには何
も持たないように、パンも、袋も、帯の中に銭も持たず、九ただわら

じをはくだけで、下着も二枚は着ないように命じられた。一〇そして
彼らに言われた、「どこへ行っても、家にはいったなら、その土地を
去るまでは、そこにとどまっていなさい。一一また、あなたがたを迎
えず、あなたがたの話を聞きもしない所があったなら、そこから出て
行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足の裏のちりを払い落しな
さい」。一二そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、一三多く
の悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした。
一四さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。
ある人々は「バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきた
のだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言い、
一五他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者
のような預言者だ」と言った。一六ところが、ヘロデはこれを聞いて、
「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った。一
七このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、その
ことで、人をつかわし、ヨハネを捕えて獄につないだ。一八それは、

ヨハネがヘロデに、「兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言っ
たからである。一九そこで、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺そうと
思っていたが、できないでいた。二〇それはヘロデが、ヨハネは正し
くて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、また
その教を聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで聞いていたからであ
る。二一ところが、よい機会がきた。ヘロデは自分の誕生日の祝に、
高官や将校やガリラヤの重立った人たちを招いて宴会を催したが、二
二そこへ、このヘロデヤの娘がはいってきて舞をまい、ヘロデをはじ
め列座の人たちを喜ばせた。そこで王はこの少女に「ほしいものはな
んでも言いなさい。あなたにあげるから」と言い、二三さらに「ほしけ
れば、この国の半分でもあげよう」と誓って言った。二四そこで少女
は座をはずして、母に「何をお願いしましょうか」と尋ねると、母は
「バプテスマのヨハネの首を」と答えた。二五するとすぐ、少女は急
いで王のところに行って願った、「今すぐに、バプテスマのヨハネの
首を盆にのせて、それをいただきとうございます」。二六王は非常に

困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、少女の願
いを退けることを好まなかった。二七そこで、王はすぐに衛兵をつか
わし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵は出て行き、獄中
でヨハネの首を切り、二八盆にのせて持ってきて少女に与え、少女は
それを母にわたした。二九ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、その
死体を引き取りにきて、墓に納めた。

三〇さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがし
たことや教えたことを、みな報告した。三一するとイエスは彼らに言
われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばら
く休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もな
かったからである。三二そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所
へ行った。三三ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、
それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らよ
り先に着いた。三四イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をごらんに
なり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろい

ろと教えはじめられた。三五ところが、はや時もおそくなったので、
弟子たちはイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい所でもあり、
もう時もおそくなりました。三六みんなを解散させ、めいめいで何か
食べる物を買いに、まわりの部落や村々へ行かせてください」。三七イ
エスは答えて言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。弟子
たちは言った、「わたしたちが二百デナリものパンを買ってきて、み
んなに食べさせるのですか」。三八するとイエスは言われた、「パンは
幾つあるか。見てきなさい」。彼らは確かめてきて、「五つあります。
それに魚が二ひき」と言った。三九そこでイエスは、みんなを組々に
分けて、青草の上にすわらせるように命じられた。四〇人々は、ある
いは百人ずつ、あるいは五十人ずつ、列をつくってすわった。四一そ
れから、イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰い
でそれを祝福し、パンをさき、弟子たちにわたして配らせ、また、二
ひきの魚もみんなにお分けになった。四二みんなの者は食べて満腹し
た。四三そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっ

ぱいになった。四四パンを食べた者は男五千人であった。
四五それからすぐ、イエスは自分で群衆を解散させておられる間に、
しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダへ先にお
やりになった。四六そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれ
た。四七夕方になったとき、舟は海のまん中に出ており、イエスだけ
が陸地におられた。四八ところが逆風が吹いていたために、弟子たち
がこぎ悩んでいるのをごらんになって、夜明けの四時ごろ、海の上
を歩いて彼らに近づき、そのそばを通り過ぎようとされた。四九彼ら
はイエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で
叫んだ。五〇みんなの者がそれを見て、おじ恐れたからである。しか
し、イエスはすぐ彼らに声をかけ、「しっかりするのだ。わたしであ
る。恐れることはない」と言われた。五一そして、彼らの舟に乗り込
まれると、風はやんだ。彼らは心の中で、非常に驚いた。五二先のパ
ンのことを悟らず、その心が鈍くなっていたからである。
五三彼らは海を渡り、ゲネサレの地に着いて舟をつないだ。五四そ

して舟からあがると、人々はすぐイエスと知って、五五その地方をあ
まねく駆けめぐり、イエスがおられると聞けば、どこへでも病人を床
にのせて運びはじめた。五六そして、村でも町でも部落でも、イエス
がはいって行かれる所では、病人たちをその広場におき、せめてその
上着のふさにでも、さわらせてやっていただきたいと、お願いした。
そしてさわった者は皆いやされた。

第七章 一さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレ
ムからきて、イエスのもとに集まった。二そして弟子たちのうちに、
不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている者があるのを見
た。三もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝
えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしな
い。四また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと、食事
をせず、なおそのほかにも、杯、鉢、銅器を洗うことなど、昔から受
けついでかたく守っている事が、たくさんあった。五そこで、パリサ
イ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子た

ちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べる
のですか」。六イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者につ
いて、こう書いているが、それは適切な預言である、
　『この民は、口さきではわたしを敬うが、
　その心はわたしから遠く離れている。
　七人間のいましめを教として教え、
　無意味にわたしを拝んでいる』。
八あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執し
ている」。九また、言われた、「あなたがたは、自分たちの言伝えを守
るために、よくも神のいましめを捨てたものだ。一〇モーセは言った
ではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、
必ず死に定められる』と。一一それだのに、あなたがたは、もし人が
父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバ
ン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、一二その人
は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている。一三こう

してあなたがたは、自分たちが受けついだ言伝えによって、神の言を
無にしている。また、このような事をしばしばおこなっている」。一
四それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた、「あなたがた
はみんな、わたしの言うことを聞いて悟るがよい。一五すべて外から
人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中か
ら出てくるものが、人をけがすのである。〔一六聞く耳のある者は聞
くがよい〕」。
一七イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬に
ついて尋ねた。一八すると、言われた、「あなたがたも、そんなに鈍
いのか。すべて、外から人の中にはいって来るものは、人を汚し得な
いことが、わからないのか。一九それは人の心の中にはいるのではな
く、腹の中にはいり、そして、外に出て行くだけである」。イエスは
このように、どんな食物でもきよいものとされた。二〇さらに言われ
た、「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。二一すなわ
ち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、

殺人、二二姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。
二三これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」。
二四さて、イエスは、そこを立ち去って、ツロの地方に行かれた。
そして、だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れてい
ることができなかった。二五そして、けがれた霊につかれた幼い娘を
もつ女が、イエスのことをすぐ聞きつけてきて、その足もとにひれ伏
した。二六この女はギリシヤ人で、スロ・フェニキヤの生れであった。
そして、娘から悪霊を追い出してくださいとお願いした。二七イエス
は女に言われた、「まず子供たちに十分食べさすべきである。子供た
ちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。二八する
と、女は答えて言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、食卓の下
にいる小犬も、子供たちのパンくずは、いただきます」。二九そこで
イエスは言われた、「その言葉で、じゅうぶんである。お帰りなさい。
悪霊は娘から出てしまった」。三〇そこで、女が家に帰ってみると、そ
の子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

三一それから、イエスはまたツロの地方を去り、シドンを経てデカ
ポリス地方を通りぬけ、ガリラヤの海べにこられた。三二すると人々
は、耳が聞えず口のきけない人を、みもとに連れてきて、手を置いて
やっていただきたいとお願いした。三三そこで、イエスは彼ひとりを
群衆の中から連れ出し、その両耳に指をさし入れ、それから、つばき
でその舌を潤し、三四天を仰いでため息をつき、その人に「エパタ」
と言われた。これは「開けよ」という意味である。三五すると彼の耳
が開け、その舌のもつれもすぐ解けて、はっきりと話すようになっ
た。三六イエスは、この事をだれにも言ってはならぬと、人々に口止
めをされたが、口止めをすればするほど、かえって、ますます言いひ
ろめた。三七彼らは、ひとかたならず驚いて言った、「このかたのな
さった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるように
してやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」。

第八章一そのころ、また大ぜいの群衆が集まっていたが、何も食べ
るものがなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、二

「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるの
に、何も食べるものがない。三もし、彼らを空腹のまま家に帰らせる
なら、途中で弱り切ってしまうであろう。それに、なかには遠くか
らきている者もある」。四弟子たちは答えた、「こんな荒野で、どこか
らパンを手に入れて、これらの人々にじゅうぶん食べさせることが
できましょうか」。五イエスが弟子たちに、「パンはいくつあるか」と
尋ねられると、「七つあります」と答えた。六そこでイエスは群衆に
地にすわるように命じられた。そして七つのパンを取り、感謝して
これをさき、人々に配るように弟子たちに渡されると、弟子たちは
それを群衆に配った。七また小さい魚が少しばかりあったので、祝福
して、それをも人々に配るようにと言われた。八彼らは食べて満腹し
た。そして残ったパンくずを集めると、七かごになった。九人々の数
はおよそ四千人であった。それからイエスは彼らを解散させ、一〇す
ぐ弟子たちと共に舟に乗って、ダルマヌタの地方へ行かれた。
一一パリサイ人たちが出てきて、イエスを試みようとして議論をし

かけ、天からのしるしを求めた。一二イエスは、心の中で深く嘆息し
て言われた、「なぜ、今の時代はしるしを求めるのだろう。よく言い
聞かせておくが、しるしは今の時代には決して与えられない」。一三
そして、イエスは彼らをあとに残し、また舟に乗って向こう岸へ行か
れた。
一四弟子たちはパンを持って来るのを忘れていたので、舟の中には
パン一つしか持ち合わせがなかった。一五そのとき、イエスは彼らを
戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒
せよ」と言われた。一六弟子たちは、これは自分たちがパンを持って
いないためであろうと、互に論じ合った。一七イエスはそれと知って、
彼らに言われた、「なぜ、パンがないからだと論じ合っているのか。
まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなって
いるのか。一八目があっても見えないのか。耳があっても聞えないの
か。まだ思い出さないのか。一九五つのパンを五千人に分けた
とき、拾い集めたパンくずは、幾つのかごになったか」。弟子たちは

答えた、「十二かごです」。二〇「七つのパンを四千人に分けたときに
は、パンくずを幾つのかごに拾い集めたか」。「七かごです」と答え
た。二一そこでイエスは彼らに言われた、「まだ悟らないのか」。
二二そのうちに、彼らはベツサイダに着いた。すると人々が、ひと
りの盲人を連れてきて、さわってやっていただきたいとお願いした。
二三イエスはこの盲人の手をとって、村の外に連れ出し、その両方の
目につばきをつけ、両手を彼に当てて、「何か見えるか」と尋ねられ
た。二四すると彼は顔を上げて言った、「人が見えます。木のように
見えます。歩いているようです」。二五それから、イエスが再び目の
上に両手を当てられると、盲人は見つめているうちに、なおってき
て、すべてのものがはっきりと見えだした。二六そこでイエスは、「村
にはいってはいけない」と言って、彼を家に帰された。
二七さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけ
られたが、その途中で、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、わた
しをだれと言っているか」。二八彼らは答えて言った、「バプテスマの

ヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者の
ひとりだと言っている者もあります」。二九そこでイエスは彼らに尋
ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロ
が答えて言った、「あなたこそキリストです」。三〇するとイエスは、
自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。
三一それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、
律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえる
べきことを、彼らに教えはじめ、三二しかもあからさまに、この事を
話された。すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじ
めたので、三三イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロを
しかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思
わないで、人のことを思っている」。
三四それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われ
た、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の
十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。三五自分の命を救おうと

思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を
失う者は、それを救うであろう。三六人が全世界をもうけても、自分
の命を損したら、なんの得になろうか。三七また、人はどんな代価を
払って、その命を買いもどすことができようか。三八邪悪で罪深いこ
の時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人
の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、そ
の者を恥じるであろう」。

第九章一また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国
が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここ
に立っている者の中にいる」。
二六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、
高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、三
その衣は真白く輝き、どんな布さらしでも、それほどに白くすること
はできないくらいになった。四すると、エリヤがモーセと共に彼らに
現れて、イエスと語り合っていた。五ペテロはイエスにむかって言っ

た、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。そ
れで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため
に、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。六そう言った
のは、みんなの者が非常に恐れていたので、ペテロは何を言ってよい
か、わからなかったからである。七すると、雲がわき起って彼らをお
おった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの愛す
る子である。これに聞け」。八彼らは急いで見まわしたが、もはやだ
れも見えず、ただイエスだけが、自分たちと一緒におられた。
九一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよ
みがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼
らに命じられた。一〇彼らはこの言葉を心にとめ、死人の中からよみ
がえるとはどういうことかと、互に論じ合った。一一そしてイエスに
尋ねた、「なぜ、律法学者たちは、エリヤが先に来るはずだと言って
いるのですか」。一二イエスは言われた、「確かに、エリヤが先にきて、
万事を元どおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦し

みを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか。
一三しかしあなたがたに言っておく、エリヤはすでにきたのだ。そして彼について書いてあるように、人々は自分かってに彼をあしらった」。
一四さて、彼らがほかの弟子たちの所にきて見ると、大ぜいの群衆が弟子たちを取り囲み、そして律法学者たちが彼らと論じ合っていた。
一五群衆はみな、すぐイエスを見つけて、非常に驚き、駆け寄ってきて、あいさつをした。
一六イエスが彼らに、「あなたがたは彼らと何を論じているのか」と尋ねられると、
一七群衆のひとりが答えた、「先生、おしの霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。
一八霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。
一九イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがた

に我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。二〇
そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや
否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きなが
らころげまわった。二一そこで、イエスが父親に「いつごろから、こ
んなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からで
す。二二霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そ
うとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助
けください」。二三イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うの
か。信ずる者には、どんな事でもできる」。二四その子の父親はすぐ
叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。二
五イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊を
しかって言われた、「おしとつんぼの霊よ、わたしがおまえに命じる。
この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。二六すると霊は叫
び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のよ
うになったので、多くの人は、死んだのだと言った。二七しかし、イ

エスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。二八家にはい
られたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どう
して霊を追い出せなかったのですか」。二九すると、イエスは言われ
た、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことは
できない」。

三〇それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、
イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。三一それは、イエスが
弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、
殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたか
らである。三二しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また
尋ねるのを恐れていた。

三三それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、
イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じてい
たのか」。三四彼らは黙っていた。それは途中で、だれが一ばん偉い
かと、互に論じ合っていたからである。三五そこで、イエスはすわっ

て十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと
思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならな
い」。三六そして、ひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立た
せ、それを抱いて言われた。三七「だれでも、このような幼な子のひ
とりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるの
である。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるので
はなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。
三八ヨハネがイエスに言った、「先生、わたしたちについてこない
者が、あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、そ
の人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました」。三九
イエスは言われた、「やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力
あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはでき
ない。四〇わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方である。
四一だれでも、キリストについている者だというので、あなたがたに
水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言っておくが、決してその報

いからもれることはないであろう。
四二また、わたしを信じるこれら
の小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にか
けられて海に投げ込まれた方が、はるかによい。
四三もし、あなたの
片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろった
ままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、かたわになって命に
入る方がよい。〔
四四地獄では、うじがつきず、火も消えることがな
い。〕
四五もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てな
さい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命
に入る方がよい。〔
四六地獄では、うじがつきず、火も消えることが
ない。〕
四七もし、あなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出し
なさい。両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目に
なって神の国に入る方がよい。
四八地獄では、うじがつきず、火も消
えることがない。
四九人はすべて火で塩づけられねばならない。
五〇
塩はよいものである。しかし、もしその塩の味がぬけたら、何によっ
てその味が取りもどされようか。あなたがた自身の内に塩を持ちな

さい。そして、互に和らぎなさい」。
第一〇章 一それから、イエスはそこを去って、ユダヤの地方とヨル
ダンの向こう側へ行かれたが、群衆がまた寄り集まったので、いつも
のように、また教えておられた。二そのとき、パリサイ人たちが近づ
いてきて、イエスを試みようとして質問した、「夫はその妻を出して
も差しつかえないでしょうか」。三イエスは答えて言われた、「モーセ
はあなたがたになんと命じたか」。四彼らは言った、「モーセは、離縁
状を書いて妻を出すことを許しました」。五そこでイエスは言われた、
「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、あなたがたのために
この定めを書いたのである。六しかし、天地創造の初めから、『神は
人を男と女とに造られた。七それゆえに、人はその父母を離れ、八ふ
たりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく
一体である。九だから、神が合わせられたものを、人は離してはなら
ない」。一〇家にはいってから、弟子たちはまたこのことについて尋
ねた。一一そこで、イエスは言われた、「だれでも、自分の妻を出して

他の女をめとる者は、その妻に対して姦淫を行うのである。一二また
妻が、その夫と別れて他の男にとつぐならば、姦淫を行うのである」。
一三イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに
連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。一四それを見
てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るま
まにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の
国である。一五よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の
国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。
一六そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。
一七イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、みまえ
にひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何
をしたらよいでしょうか」。一八イエスは言われた、「なぜわたしをよ
き者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。一九いましめは
あなたの知っているとおりである。『殺すな、姦淫するな、盗むな、
偽証を立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え』」。二〇すると、彼は

言った、「先生、それらの事はみな、小さい時から守っております」。
二一イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足り
ないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧
しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そ
して、わたしに従ってきなさい」。二二すると、彼はこの言葉を聞い
て、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持って
いたからである。

二三それから、イエスは見まわして、弟子たちに言われた、「財産の
ある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう」。二
四弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。イエスは更に言われた、「子
たちよ、神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。二五
富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、
もっとやさしい」。二六すると彼らはますます驚いて、互に言った、「そ
れでは、だれが救われることができるのだろう」。二七イエスは彼ら
を見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなん

でもできるからである」。二八ペテロがイエスに言い出した、「ごらん
なさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りまし
た」。二九イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわた
しのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もし
くは畑を捨てた者は、三〇必ずその百倍を受ける。すなわち、今この
時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、
きたるべき世では永遠の生命を受ける。三一しかし、多くの先の者は
あとになり、あとの者は先になるであろう」。
三二さて、一同はエルサレムへ上る途上にあったが、イエスが先頭
に立って行かれたので、彼らは驚き怪しみ、従う者たちは恐れた。す
るとイエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとする
ことについて語りはじめられた、三三「見よ、わたしたちはエルサレ
ムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたさ
れる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすで
あろう。三四また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺

してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。
三五さて、ゼベダイの子のヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて
言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえて
くださるようにお願いします」。三六イエスは彼らに「何をしてほし
いと、願うのか」と言われた。三七すると彼らは言った、「栄光をお
受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるように
してください」。三八イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求
めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を
飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。三九彼
らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがた
は、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであ
ろう。四〇しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのす
ることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることであ
る」。四一十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨
し出した。四二そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あな

たがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、
その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるってい
る。四三しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。か
えって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人とな
り、四四あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人
の僕とならねばならない。四五人の子がきたのも、仕えられるためで
はなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の
命を与えるためである」。
四六それから、彼らはエリコにきた。そして、イエスが弟子たちや
大ぜいの群衆と共にエリコから出かけられたとき、テマイの子、バ
ルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。四七ところ
が、ナザレのイエスだと聞いて、彼は「ダビデの子イエスよ、わたし
をあわれんでください」と叫び出した。四八多くの人々は彼をしかっ
て黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデ
の子イエスよ、わたしをあわれんでください」。四九イエスは立ちど

まって「彼を呼べ」と命じられた。そこで、人々はその盲人を呼ん
で言った、「喜べ、立て、おまえを呼んでおられる」。五〇そこで彼は
上着を脱ぎ捨て、踊りあがってイエスのもとにきた。五一イエスは彼
にむかって言われた、「わたしに何をしてほしいのか」。その盲人は
言った、「先生、見えるようになることです」。五二そこでイエスは言
われた、「行け、あなたの信仰があなたを救った」。すると彼は、たち
まち見えるようになり、イエスに従って行った。

第一一章 一さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブの山に沿った
ベテパゲ、ベタニヤの附近にきた時、イエスはふたりの弟子をつかわ
して言われた、二「むこうの村へ行きなさい。そこにはいるとすぐ、
まだだれも乗ったことのないろばの子が、つないであるのを見るで
あろう。それを解いて引いてきなさい。三もし、だれかがあなたがた
に、なぜそんな事をするのかと言ったなら、主がお入り用なのです。
またすぐ、ここへ返してくださいますと、言いなさい」。四そこで、
彼らは出かけて行き、そして表通りの戸口に、ろばの子がつないで

あるのを見たので、それを解いた。五すると、そこに立っていた人々
が言った、「そのろばの子を解いて、どうするのか」。六弟子たちは、
イエスが言われたとおり彼らに話したので、ゆるしてくれた。七そこ
で、弟子たちは、そのろばの子をイエスのところに引いてきて、自分
たちの上着をそれに投げかけると、イエスはその上にお乗りになっ
た。八すると多くの人々は自分たちの上着を道に敷き、また他の人々
は葉のついた枝を野原から切ってきて敷いた。九そして、前に行く者
も、あとに従う者も共に叫びつづけた、

「ホサナ、
主の御名によってきたる者に、祝福あれ。
一〇今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。
いと高き所に、ホサナ」。

一一こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、
すべてのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十
二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。

一二翌日、彼らがベタニヤから出かけてきたとき、イエスは空腹を
おぼえられた。一三そして、葉の茂ったいちじくの木を遠くからごら
んになって、その木に何かありはしないかと近寄られたが、葉のほか
は何も見当らなかった。いちじくの季節でなかったからである。一四
そこで、イエスはその木にむかって、「今から後いつまでも、おまえ
の実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞い
ていた。

一五それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の
庭で売り買いしていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はと
を売る者の腰掛をくつがえし、一六また器ものを持って宮の庭を通り
抜けるのをお許しにならなかった。一七そして、彼らに教えて言われ
た、『わたしの家は、すべての国民の祈の家ととなえらるべきであ
る』と書いてあるではないか。それだのに、あなたがたはそれを強盗
の巣にしてしまった」。一八祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、ど
うかしてイエスを殺そうと計った。彼らは、群衆がみなその教に感動

していたので、イエスを恐れていたからである。
一九夕方になると、イエスと弟子たちとは、いつものように都の外
に出て行った。
二〇朝はやく道をとおっていると、彼らは先のいちじくが根元から
枯れているのを見た。二一そこで、ペテロは思い出してイエスに言っ
た、「先生、ごらんなさい。あなたがのろわれたいちじくが、枯れて
います」。二二イエスは答えて言われた、「神を信じなさい。二三よく
聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれ
と言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、
そのとおりに成るであろう。二四そこで、あなたがたに言うが、なん
でも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうす
れば、そのとおりになるであろう。二五また立って祈るとき、だれか
に対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれ
ば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるし
てくださるであろう。〔二六もしゆるさないならば、天にいますあな

たがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださらないであ
ろう」」。
二七彼らはまたエルサレムにきた。そして、イエスが宮の内を歩い
ておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、みもとにきて言っ
た、二八「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そう
する権威を授けたのですか」。二九そこで、イエスは彼らに言われた、
「一つだけ尋ねよう。それに答えてほしい。そうしたら、何の権威に
よって、わたしがこれらの事をするのか、あなたがたに言おう。三〇
ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えな
さい」。三一すると、彼らは互に論じて言った、「もし天からだと言え
ば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。三二
しかし、人からだと言えば……」。彼らは群衆を恐れていた。人々が
皆、ヨハネを預言者だとほんとうに思っていたからである。三三それ
で彼らは「わたしたちにはわかりません」と答えた。するとイエスは
言われた、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あな

たがたに言うまい」。
第一二章一そこでイエスは譬で彼らに語り出された、「ある人がぶ
どう園を造り、垣をめぐらし、また酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立
て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。二季節になったので、
農夫たちのところへ、ひとりの僕を送って、ぶどう園の収穫の分け前
を取り立てさせようとした。三すると、彼らはその僕をつかまえて、
袋だたきにし、から手で帰らせた。四また他の僕を送ったが、その頭
をなぐって侮辱した。五そこでまた他の者を送ったが、今度はそれを
殺してしまった。そのほか、なお大ぜいの者を送ったが、彼らを打っ
たり、殺したりした。六ここに、もうひとりの者がいた。それは彼の
愛子であった。自分の子は敬ってくれるだろうと思って、最後に彼
をつかわした。七すると、農夫たちは『あれはあと取りだ。さあ、こ
れを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものにな
るのだ』と話し合い、八彼をつかまえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨
てた。九このぶどう園の主人は、どうするだろうか。彼は出てきて、

農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう。一〇あなた
がたは、この聖書の句を読んだことがないのか。

『家造りらの捨てた石が
隅のかしら石になった。
一一これは主がなされたことで、
わたしたちの目には不思議に見える』」。

一二彼らはいまの譬が、自分たちに当てて語られたことを悟ったので、
イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。そしてイエスをそこに
残して立ち去った。

一三さて、人々はパリサイ人やヘロデ党の者を数人、イエスのもと
につかわして、その言葉じりを捕えようとした。一四彼らはきてイエ
スに言った、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、
はばかられないことを知っています。あなたは人に分け隔てをなさ
らないで、真理に基いて神の道を教えてくださいます。ところで、カ
イザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか。納め

るべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。一五イエスは
彼らの偽善を見抜いて言われた、「なぜわたしをためそうとするのか。
デナリを持ってきて見せなさい」。一六彼らはそれを持ってきた。そ
こでイエスは言われた、「これは、だれの肖像、だれの記号か」。彼ら
は「カイザルのです」と答えた。一七するとイエスは言われた、「カ
イザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。彼らはイ
エスに驚嘆した。
一八復活ということはないと主張していたサドカイ人たちが、イエ
スのもとにきて質問した、一九「先生、モーセは、わたしたちのため
にこう書いています、『もし、ある人の兄が死んで、その残された妻
に、子がない場合には、弟はこの女をめとって、兄のために子をもう
けねばならない』。二〇ここに、七人の兄弟がいました。長男は妻を
めとりましたが、子がなくて死に、二一次男がその女をめとって、ま
た子をもうけずに死に、三男も同様でした。二二こうして、七人とも
みな子孫を残しませんでした。最後にその女も死にました。二三復活

のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょう
か。七人とも彼女を妻にしたのですが」。二四イエスは言われた、「あ
なたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らな
いからではないか。二五彼らが死人の中からよみがえるときには、め
とったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のような
ものである。二六死人がよみがえることについては、モーセの書の柴
の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。『わ
たしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるでは
ないか。二七神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。
あなたがたは非常な思い違いをしている」。
二八ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、
またイエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した、「す
べてのいましめの中で、どれが第一のものですか」。二九イエスは答え
られた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主な
るわたしたちの神は、ただひとりの主である。三〇心をつくし、精神

をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せ
よ』。三一第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を
愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。三二そこで、こ
の律法学者はイエスに言った、「先生、仰せのとおりです、『神はひと
りであって、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。
三三また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また
自分を愛するように隣り人を愛する』ということは、すべての燔祭や
犠牲よりも、はるかに大事なことです」。三四イエスは、彼が適切な
答をしたのを見て言われた、「あなたは神の国から遠くない」。それ
から後は、イエスにあえて問う者はなかった。

三五イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた、「律法学者た
ちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。三六ダビデ自身
が聖霊に感じて言った、

『主はわが主に仰せになった、
あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、

わたしの右に座していなさい』。
三七このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、
どうしてキリストはダビデの子であろうか」。

大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた。三八イエスはそ
の教の中で言われた、「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣を
着て歩くことや、広場であいさつされることや、三九また会堂の上席、
宴会の上座を好んでいる。四〇また、やもめたちの家を食い倒し、見
えのために長い祈をする。彼らはもっときびしいさばきを受けるで
あろう」。

四一イエスは、さいせん箱にむかってすわり、群衆がその箱に金を
投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持は、たくさんの金を投げ
入れていた。四二ところが、ひとりの貧しいやもめがきて、レプタ二
つを入れた。それは一コドラントに当る。四三そこで、イエスは弟子
たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、
さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れ

たのだ。四四みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人
はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたから
である」。

第一三章一イエスが宮から出て行かれるとき、弟子のひとりが言っ
た、「先生、ごらんなさい。なんという見事な石、なんという立派な
建物でしょう」。二イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな
建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他
の石の上に残ることもなくなるであろう」。
三またオリブ山で、宮にむかってすわっておられると、ペテロ、ヤ
コブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにお尋ねした。四「わたしたちに
お話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。またそんな
ことがことごとく成就するような場合には、どんな前兆がありますす
か」。五そこで、イエスは話しはじめられた、「人に惑わされないよう
に気をつけなさい。六多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分が
それだと言って、多くの人を惑わすであろう。七また、戦争と戦争の

うわさとを聞くときにも、あわてるな。それは起らねばならないが、
まだ終りではない。八民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろ
う。またあちこちに地震があり、またききんが起るであろう。これ
らは産みの苦しみの初めである。
九あなたがたは自分で気をつけていなさい。あなたがたは、わたし
のために、衆議所に引きわたされ、会堂で打たれ、長官たちや王たち
の前に立たされ、彼らに対してあかしをさせられるであろう。一〇こ
うして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。一一そ
して、人々があなたがたを連れて行って引きわたすとき、何を言お
うかと、前もって心配するな。その場合、自分に示されることを語る
がよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。一二また
兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、子は両親に逆らって立ち、
彼らを殺させるであろう。一三また、あなたがたはわたしの名のゆえ
に、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は
救われる。

一四荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たなら
ば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。一
五屋上にいる者は、下におりるな。また家から物を取り出そうとし
て内にはいるな。一六畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。
一七その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。一
八この事が冬おこらぬように祈れ。一九その日には、神が万物を造ら
れた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような
患難が起るからである。二〇もし主がその期間を縮めてくださらない
なら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選ばれた選民の
ために、その期間を縮めてくださったのである。二一そのとき、だれ
かがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、『見よ、あそこに
いる』と言っても、それを信じるな。二二にせキリストたちや、にせ
預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑
わそうとするであろう。二三だから、気をつけていなさい。いっさい
の事を、あなたがたに前もって言っておく。

二四その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つ
ことをやめ、二五星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。
二六そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来
るのを、人々は見るであろう。二七そのとき、彼は御使たちをつかわ
して、地のはてから天のはてまで、四方からその選民を呼び集めるで
あろう。

二八いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかにな
り、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。二九そのように、
これらの事が起るのを見たならば、人の子が戸口まで近づいている
と知りなさい。三〇よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごと
く起るまでは、この時代は滅びることがない。三一天地は滅びるであ
ろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。三二その日、その時
は、だれも知らない。天にいる御使たちも、また子も知らない、ただ
父だけが知っておられる。三三気をつけて、目をさましていなさい。
その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである。三四

それはちょうど、旅に立つ人が家を出るに当り、その僕たちに、そ
れぞれ仕事を割り当てて責任をもたせ、門番には目をさましておれ
と、命じるようなものである。三五だから、目をさましていなさい。
いつ、家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、にわとりの鳴く
ころか、明け方か、わからないからである。三六あるいは急に帰って
きて、あなたがたの眠っているところを見つけるかも知れない。三七
目をさましていなさい。わたしがあなたがたに言うこの言葉は、す
べての人々に言うのである」。
第一四章一さて、過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たち
や律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして
殺そうと計っていた。二彼らは、「祭の間はいけない。民衆が騒ぎを
起すかも知れない」と言っていた。
三イエスがベタニヤで、らい病人シモンの家にいて、食卓について
おられたとき、ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入
れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭

に注ぎかけた。四すると、ある人々が憤って互に言った、「なんのた
めに香油をこんなにむだにするのか。五この香油を三百デナリ以上に
でも売って、貧しい人たちに施すことができたのに」。そして女をき
びしくとがめた。六するとイエスは言われた、「するままにさせてお
きなさい。なぜ女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたの
だ。七貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいと
きにはいつでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたが
たといつも一緒にいるわけではない。八この女はできる限りの事をし
たのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬り
の用意をしてくれたのである。九よく聞きなさい。全世界のどこでで
も、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語ら
れるであろう」。
一〇ときに、十二弟子のひとりイスカリオテのユダは、イエスを
祭司長たちに引きわたそうとして、彼らの所へ行った。一一彼らはこ
れを聞いて喜び、金を与えることを約束した。そこでユダは、どうか

してイエスを引きわたそうと、機会をねらっていた。
一二除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊をほふる日に、弟子たち
がイエスに尋ねた、「わたしたちは、過越の食事をなさる用意を、ど
こへ行ってしたらよいでしょうか」。一三そこで、イエスはふたりの
弟子を使いに出して言われた、「市内に行くと、水がめを持っている
男に出会うであろう。その人について行きなさい。一四そして、その
人がはいって行く家の主人に言いなさい、『弟子たちと一緒に過越の
食事をする座敷はどこか、と先生が言っておられます』。一五すると
その主人は、席を整えて用意された二階の広間を見せてくれるから、
そこにわたしたちのために用意をしなさい」。一六弟子たちは出かけ
て市内に行って見ると、イエスが言われたとおりであったので、過越
の食事の用意をした。

一七夕方になって、イエスは十二弟子と一緒にそこに行かれた。一
八そして、一同が席について食事をしているとき言われた、「特にあ
なたがたに言っておくが、あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒

に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。一九弟子た
ちは心配して、ひとりびとり「まさか、わたしではないでしょう」と
言い出した。二〇イエスは言われた、「十二人の中のひとりで、わた
しと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者が、それである。二一たし
かに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しか
し、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかっ
た方が、彼のためによかったであろう」。
二二一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこ
れをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしのから
だである」。二三また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同
はその杯から飲んだ。二四イエスはまた言われた、「これは、多くの
人のために流すわたしの契約の血である。二五あなたがたによく言っ
ておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、
ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」。
二六彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。

二七そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたは皆、わ
たしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散ら
されるであろう』と書いてあるからである。二八しかしわたしは、よ
みがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。二
九するとペテロはイエスに言った、「たとい、みんなの者がつまずい
ても、わたしはつまずきません」。三〇イエスは言われた、「あなたに
よく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そう言う
あなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」。三一ペテロは力を
こめて言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、
あなたを知らないなどとは、決して申しません」。みんなの者もまた、
同じようなことを言った。

三二さて、一同はゲツセマネという所にきた。そしてイエスは弟子
たちに言われた、「わたしが祈っている間、ここにすわっていなさい」。
三三そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れ
おののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、三四「わたしは悲し

みのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていな
さい」。三五そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできること
なら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言
われた、三六「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。
どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたし
の思いではなく、みこころのままになさってください」。三七それか
ら、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言わ
れた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていること
ができなかったのか。三八誘惑に陥らないように、目をさまして祈っ
ていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。三九また離
れて行って同じ言葉で祈られた。四〇またきてごらんになると、彼ら
はまだ眠っていた。その目が重くなっていたのである。そして、彼
らはどうお答えしてよいか、わからなかった。四一三度目にきて言わ
れた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。もうそれでよかろう。
時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ。四二立て、さ

あ行こう。見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた」。
四三そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子の
ひとりのユダが進みよってきた。また祭司長、律法学者、長老たちか
ら送られた群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。四四イエスを
裏切る者は、あらかじめ彼らに合図をしておいた、「わたしの接吻す
る者が、その人だ。その人をつかまえて、まちがいなく引っぱって
行け」。四五彼は来るとすぐ、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻
した。四六人々はイエスに手をかけてつかまえた。四七すると、イエ
スのそばに立っていた者のひとりが、剣を抜いて大祭司の僕に切り
かかり、その片耳を切り落した。四八イエスは彼らにむかって言われ
た、「あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕
えにきたのか。四九わたしは毎日あなたがたと一緒に宮にいて教えて
いたのに、わたしをつかまえはしなかった。しかし聖書の言葉は成就
されねばならない」。五〇弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。
五一ときに、ある若者が身に亜麻布をまとって、イエスのあとにつ

いて行ったが、人々が彼をつかまえようとしたので、五二その亜麻布
を捨てて、裸で逃げて行った。
五三それから、イエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、
長老、律法学者たちがみな集まってきた。五四ペテロは遠くからイエ
スについて行って、大祭司の中庭まではいり込み、その下役どもにま
じってすわり、火にあたっていた。
五五さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするために、
イエスに不利な証拠を見つけようとしたが、得られなかった。五六多
くの者がイエスに対して偽証を立てたが、その証言が合わなかったか
らである。五七ついに、ある人々が立ちあがり、イエスに対して偽証
を立てて言った、五八「わたしたちはこの人が『わたしは手で造った
この神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建て
るのだ』と言うのを聞きました」。五九しかし、このような証言も互
に合わなかった。六〇そこで大祭司が立ちあがって、まん中に進み、
イエスに聞きただして言った、「何も答えないのか。これらの人々が

あなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。六一
しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。大祭司
は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリスト
であるか」。六二イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたが
たは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るで
あろう」。六三すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「どうし
て、これ以上、証人の必要があろう。六四あなたがたはこのけがし言
を聞いた。あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは皆、イエス
を死に当るものと断定した。六五そして、ある者はイエスにつばきを
かけ、目隠しをし、こぶしでたたいて、「言いあててみよ」と言いは
じめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。
　六六ペテロは下で中庭にいたが、大祭司の女中のひとりがきて、六
七ペテロが火にあたっているのを見ると、彼を見つめて、「あなたも
あのナザレ人イエスと一緒だった」と言った。六八するとペテロはそ
れを打ち消して、「わたしは知らない。あなたの言うことがなんの事

か、わからない」と言って、庭口の方に出て行った。六九ところが、
先の女中が彼を見て、そばに立っていた人々に、またもや「この人は
あの仲間のひとりです」と言いだした。七〇ペテロは再びそれを打ち
消した。しばらくして、そばに立っていた人たちがまたペテロに言っ
た、「確かにあなたは彼らの仲間だ。あなたもガリラヤ人だから」。七
一しかし、彼は、「あなたがたの話しているその人のことは何も知ら
ない」と言い張って、激しく誓いはじめた。七二するとすぐ、にわと
りが二度目に鳴いた。ペテロは、「にわとりが二度鳴く前に、三度わ
たしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を思い出
し、そして思いかえして泣きつづけた。

第一五章 一夜が明けるとすぐ、祭司長たちは長老、律法学者たち、
および全議会と協議をこらした末、イエスを縛って引き出し、ピラ
トに渡した。二ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王で
あるか」。イエスは、「そのとおりである」とお答えになった。三そこ
で祭司長たちは、イエスのことをいろいろと訴えた。四ピラトはもう

一度イエスに尋ねた、「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあ
んなにまで次々に訴えているではないか」。五しかし、イエスはピラ
トが不思議に思うほどに、もう何もお答えにならなかった。
六さて、祭のたびごとに、ピラトは人々が願い出る囚人ひとりを、
ゆるしてやることにしていた。七ここに、暴動を起し人殺しをしてつ
ながれていた暴徒の中に、バラバという者がいた。八群衆が押しかけ
てきて、いつものとおりにしてほしいと要求しはじめたので、九ピラ
トは彼らにむかって、「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらい
たいのか」と言った。一〇それは、祭司長たちがイエスを引きわたし
たのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからであ
る。一一しかし祭司長たちは、バラバの方をゆるしてもらうように、
群衆を煽動した。一二そこでピラトはまた彼らに言った、「それでは、
おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよい
か」。一三彼らは、また叫んだ、「十字架につけよ」。一四ピラトは言っ
た、「あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか」。すると、彼らは

一そう激しく叫んで、「十字架につけよ」と言った。一五それで、ピ
ラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエス
をむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。
一六兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の内に連れて行
き、全部隊を呼び集めた。一七そしてイエスに紫の衣を着せ、いばら
の冠を編んでかぶらせ、一八「ユダヤ人の王、ばんざい」と言って敬礼
をしはじめた。一九また、葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、
ひざまずいて拝んだりした。二〇こうして、イエスを嘲弄したあげく、
紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを
十字架につけるために引き出した。二一そこへ、アレキサンデルとル
ポスとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったの
で、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。二二そしてイエスをゴ
ルゴタ、その意味は、されこうべ、という所に連れて行った。二三そ
してイエスに、没薬をまぜたぶどう酒をさし出したが、お受けにな
らなかった。二四それから、イエスを十字架につけた。そしてくじを

引いて、だれが何を取るかを定めたうえ、イエスの着物を分けた。二
五イエスを十字架につけたのは、朝の九時ごろであった。二六イエス
の罪状書きには「ユダヤ人の王」と、しるしてあった。二七また、イ
エスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、ひとりを左に、十字架に
つけた。〔二八こうして「彼は罪人たちのひとりに数えられた」と書
いてある言葉が成就したのである。〕二九そこを通りかかった者たち
は、頭を振りながら、イエスをののしって言った、「ああ、神殿を打
ちこわして三日のうちに建てる者よ、三〇十字架からおりてきて自分
を救え」。三一祭司長たちも同じように、律法学者たちと一緒になっ
て、かわるがわる嘲弄して言った、「他人を救ったが、自分自身を救
うことができない。三二イスラエルの王キリスト、いま十字架からお
りてみるがよい。それを見たら信じよう」。また、一緒に十字架につ
けられた者たちも、イエスをののしった。
三三昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。三四
そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタ

二」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨
てになったのですか」という意味である。
三五すると、そばに立って
いたある人々が、これを聞いて言った、「そら、エリヤを呼んでいる」。
三六ひとりの人が走って行き、海綿に酢いぶどう酒を含ませて葦の棒
につけ、イエスに飲ませようとして言った、「待て、エリヤが彼をお
ろしに来るかどうか、見ていよう」。
三七イエスは声高く叫んで、つ
いに息をひきとられた。
三八そのとき、神殿の幕が上から下まで真二
つに裂けた。
三九イエスにむかって立っていた百卒長は、このよう
にして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の
子であった」。
四〇また、遠くの方から見ている女たちもいた。その
中には、マグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、またサロ
メがいた。
四一彼らはイエスがガリラヤにおられたとき、そのあとに
従って仕えた女たちであった。なおそのほか、イエスと共にエルサ
レムに上ってきた多くの女たちもいた。
四二さて、すでに夕がたになったが、その日は準備の日、すなわち

安息日の前日であったので、四三アリマタヤのヨセフが大胆にもピラ
トの所へ行き、イエスのからだの引取りかたを願った。彼は地位の高
い議員であって、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であった。四四
ピラトは、イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思い、百卒長
を呼んで、もう死んだのかと尋ねた。四五そして、百卒長から確か
めた上、死体をヨセフに渡した。四六そこで、ヨセフは亜麻布を買い
求め、イエスをとりおろして、その亜麻布に包み、岩を掘って造った
墓に納め、墓の入口に石をころがしておいた。四七マグダラのマリヤ
とヨセの母マリヤとは、イエスが納められた場所を見とどけた。

第一六章一さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブ
の母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い
求めた。二そして週の初めの日に、早朝、日の出のころ墓に行った。
三そして、彼らは「だれが、わたしたちのために、墓の入口から石を
ころがしてくれるのでしょうか」と話し合っていた。四ところが、目
をあげて見ると、石はすでにころがしてあった。この石は非常に大

きかった。五墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がす
わっているのを見て、非常に驚いた。六するとこの若者は言った、「驚
くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを
捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられな
い。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。七今から弟子たち
とペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたよ
り先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、
そこでお会いできるであろう、と」。八女たちはおののき恐れながら、
墓から出て逃げ去った。そして、人には何も言わなかった。恐ろし
かったからである。

〔九週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラ
のマリヤに御自身をあらわされた。イエスは以前に、この女から七
つの悪霊を追い出されたことがある。一〇マリヤは、イエスと一緒に
いた人々が泣き悲しんでいる所に行って、それを知らせた。一一彼ら
は、イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事と

を聞いたが、信じなかった。
一二この後、そのうちのふたりが、いなかの方へ歩いていると、イ
エスはちがった姿で御自身をあらわされた。一三このふたりも、ほか
の人々の所に行って話したが、彼らはその話を信じなかった。
一四その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、
彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よ
みがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからで
ある。一五そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての
造られたものに福音を宣べ伝えよ。一六信じてバプテスマを受ける者
は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。一七信じる者に
は、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を
追い出し、新しい言葉を語り、一八へびをつかむであろう。また、毒
を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」。
一九主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にす
わられた。二〇弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。

主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。」

ルカによる福音書

第一章一わたしたちの間に成就された出来事を、最初から親しく見
た人々であって、二御言に仕えた人々が伝えたとおり物語に書き連ね
ようと、多くの人が手を着けましたが、三テオピロ閣下よ、わたしも
すべての事を初めから詳しく調べていますので、ここに、それを順序
正しく書きつづって、閣下に献じることにしました。四すでにお聞き
になっている事が確実であることを、これによって十分に知ってい
ただきたいためであります。

五ユダヤの王ヘロデの世に、アビヤの組の祭司で名をザカリヤとい
う者がいた。その妻はアロン家の娘のひとりで、名をエリサベツと
いった。六ふたりとも神のみまえに正しい人であって、主の戒めと定
めとを、みな落度なく行っていた。七ところが、エリサベツは不妊の

女であったため、彼らには子がなく、そしてふたりともすでに年老い
ていた。
八さてザカリヤは、その組が当番になり神のみまえに祭司の務を
していたとき、九祭司職の慣例に従ってくじを引いたところ、主の
聖所にはいって香をたくことになった。一〇香をたいている間、多く
の民衆はみな外で祈っていた。一一すると主の御使が現れて、香壇の
右に立った。一二ザカリヤはこれを見て、おじ惑い、恐怖の念に襲わ
れた。一三そこで御使が彼に言った、「恐れるな、ザカリヤよ、あなた
の祈が聞きいれられたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産む
であろう。その子をヨハネと名づけなさい。一四彼はあなたに喜びと
楽しみとをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。一五彼
は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲
まず、母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされており、一六そし
て、イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであ
ろう。一七彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、

父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えら
れた民を主に備えるであろう」。一八するとザカリヤは御使に言った、
「どうしてそんな事が、わたしにわかるでしょうか。わたしは老人で
すし、妻も年をとっています」。一九御使が答えて言った、「わたしは
神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなた
に語り伝えるために、つかわされたものである。二〇時が来れば成就
するわたしの言葉を信じなかったから、あなたはおしになり、この事
の起る日まで、ものが言えなくなる」。二一民衆はザカリヤを待って
いたので、彼が聖所内で暇どっているのを不思議に思っていた。二二
ついに彼は出てきたが、物が言えなかったので、人々は彼が聖所内で
まぼろしを見たのだと悟った。彼は彼らに合図をするだけで、引き
つづき、おしのままでいた。二三それから務の期日が終ったので、家
に帰った。

二四そののち、妻エリサベツはみごもり、五か月のあいだ引きこもっ
ていたが、二五「主は、今わたしを心にかけてくださって、人々の間か

らわたしの恥を取り除くために、こうしてくださいました」と言った。
二六六か月目に、御使ガブリエルが、神からつかわされて、ナザレ
というガリラヤの町の一処女のもとにきた。二七この処女はダビデ家
の出であるヨセフという人のいいなづけになっていて、名をマリヤ
といった。二八御使がマリヤのところにきて言った、「恵まれた女よ、
おめでとう、主があなたと共におられます」。二九この言葉にマリヤ
はひどく胸騒ぎがして、このあいさつはなんの事であろうかと、思い
めぐらしていた。三〇すると御使が言った、「恐れるな、マリヤよ、あ
なたは神から恵みをいただいているのです。三一見よ、あなたはみご
もって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。三二
彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。
そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、三三彼はと
こしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」。
三四そこでマリヤは御使に言った、「どうして、そんな事があり得ま
しょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」。三五御使が答えて

言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうで
しょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、と
なえられるでしょう。三六あなたの親族エリサベツも老年ながら子を
宿しています。不妊の女といわれていたのに、はや六か月になって
います。三七神には、なんでもできないことはありません」。三八そこ
でマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの
身に成りますように」。そして御使は彼女から離れて行った。
三九そのころ、マリヤは立って、大急ぎで山里へむかいユダの町に
行き、四〇ザカリヤの家にはいってエリサベツにあいさつした。四一
エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどっ
た。エリサベツは聖霊に満たされ、四二声高く叫んで言った、「あなた
は女の中で祝福されたかた、あなたの胎の実も祝福されています。四
三主の母上がわたしのところにきてくださるとは、なんという光栄で
しょう。四四ごらんなさい。あなたのあいさつの声がわたしの耳には
いったとき、子供が胎内で喜びおどりました。四五主のお語りになっ

たことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょ
う」。四六するとマリヤは言った、
「わたしの魂は主をあがめ、
四七わたしの霊は救主なる神をたたえます。
四八この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。
今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう、
四九力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。
そのみ名はきよく、
五〇そのあわれみは、代々限りなく
主をかしこみ恐れる者に及びます。
五一主はみ腕をもって力をふるい、
心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、
五二権力ある者を王座から引きおろし、
卑しい者を引き上げ、
五三飢えている者を良いもので飽かせ、

富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。
五四主は、あわれみをお忘れにならず、
その僕イスラエルを助けてくださいました、
五五わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とを
とこしえにあわれむと約束なさったとおりに」。
五六マリヤは、エリサベツのところに三か月ほど滞在してから、家に
帰った。
五七さてエリサベツは月が満ちて、男の子を産んだ。五八近所の人々
や親族は、主が大きなあわれみを彼女におかけになったことを聞い
て、共どもに喜んだ。五九八日目になったので、幼な子に割礼をする
ために人々がきて、父の名にちなんでザカリヤという名にしようと
した。六〇ところが、母親は、「いいえ、ヨハネという名にしなくて
はいけません」と言った。六一人々は、「あなたの親族の中には、そ
ういう名のついた者は、ひとりもいません」と彼女に言った。六二そ
して父親に、どんな名にしたいのですかと、合図で尋ねた。六三ザカ

リヤは書板を持ってこさせて、それに「その名はヨハネ」と書いたの
で、みんなの者は不思議に思った。六四すると、立ちどころにザカリ
ヤの口が開けて舌がゆるみ、語り出して神をほめたたえた。六五近所
の人々はみな恐れをいだき、またユダヤの山里の至るところに、これ
らの事がことごとく語り伝えられたので、六六聞く者たちは皆それを
心に留めて、「この子は、いったい、どんな者になるだろう」と語り
合った。主のみ手が彼と共にあった。
六七父ザカリヤは聖霊に満たされ、預言して言った、
六八「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。
神はその民を顧みてこれをあがない、
六九わたしたちのために救の角を
僕ダビデの家にお立てになった。
七〇古くから、聖なる預言者たちの口によってお語りになったよ
うに、
七一わたしたちを敵から、またすべてわたしたちを憎む者の手か

ら、救い出すためである。
七二こうして、神はわたしたちの父祖たちにあわれみをかけ、そ
の聖なる契約、
七三すなわち、父祖アブラハムにお立てになった誓いをおぼえて、
七四わたしたちを敵の手から救い出し、
七五生きている限り、きよく正しく、
みまえに恐れなく仕えさせてくださるのである。
七六幼な子よ、あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであ
ろう。
主のみまえに先立って行き、その道を備え、
七七罪のゆるしによる救を
その民に知らせるのであるから。
七八これはわたしたちの神のあわれみ深いみこころによる。
また、そのあわれみによって、日の光が上からわたしたちに臨み、
七九暗黒と死の陰とに住む者を照し、

わたしたちの足を平和の道へ導くであろう」。
八〇幼な子は成長し、その霊も強くなり、そしてイスラエルに現れる
日まで、荒野にいた。
第二章一そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウ
グストから出た。二これは、クレニオがシリヤの総督であった時に行
われた最初の人口調査であった。三人々はみな登録をするために、そ
れぞれ自分の町へ帰って行った。四ヨセフもダビデの家系であり、ま
たその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベ
ツレヘムというダビデの町へ上って行った。五それは、すでに身重に
なっていたいいなづけの妻マリヤと共に、登録をするためであった。
六ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満
ちて、七初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間
には彼らのいる余地がなかったからである。
八さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をし
ていた。九すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したの

で、彼らは非常に恐れた。一〇御使は言った、「恐れるな。見よ、すべ
ての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。一一きょう
ダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このか
たこそ主なるキリストである。一二あなたがたは、幼な子が布にくる
まって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あ
なたがたに与えられるしるしである」。一三するとたちまち、おびた
だしい天の軍勢が現れ、御使と一緒になって神をさんびして言った、
一四「いと高きところでは、神に栄光があるように、
地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。
一五御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、ベ
ツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようで
はないか」と、互に語り合った。一六そして急いで行って、マリヤと
ヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。一七彼ら
に会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々
に伝えた。一八人々はみな、羊飼たちが話してくれたことを聞いて、

不思議に思った。一九しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に
留めて、思いめぐらしていた。二〇羊飼たちは、見聞きしたことが何
もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさ
んびしながら帰って行った。
二一八日が過ぎ、割礼をほどこす時となったので、受胎のまえに御使
が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた。
二二それから、モーセの律法による彼らのきよめの期間が過ぎたと
き、両親は幼な子を連れてエルサレムへ上った。二三それは主の律法
に「母の胎を初めて開く男の子はみな、主に聖別された者と、となえ
られねばならない」と書いてあるとおり、幼な子を主にささげるた
めであり、二四また同じ主の律法に、「山ばと一つがい、または、家
ばとのひな二羽」と定めてあるのに従って、犠牲をささげるためで
あった。二五その時、エルサレムにシメオンという名の人がいた。こ
の人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望ん
でいた。また聖霊が彼に宿っていた。二六そして主のつかわす救主に

会うまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けていた。二七この人
が御霊に感じて宮にはいった。すると律法に定めてあることを行う
ため、両親もその子イエスを連れてはいってきたので、二八シメオン
は幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、

二九「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりに
この僕を安らかに去らせてくださいます、
三〇わたしの目が今あなたの救を見たのですから。
三一この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、
三二異邦人を照す啓示の光、
み民イスラエルの栄光であります」。

三三父と母とは幼な子についてこのように語られたことを、不思議に
思った。三四するとシメオンは彼らを祝し、そして母マリヤに言った、
「ごらんなさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせた
り立ちあがらせたりするしるしとして、また反対を受けるしるしとして、定
められています。――三五そして、あなた自身もつるぎで胸を刺し貫

かれるでしょう。――それは多くの人の心にある思いが、現れるよ
うになるためです」。
三六また、アセル族のパヌエルの娘で、アンナという女預言者がい
た。彼女は非常に年をとっていた。むすめ時代にとついで、七年間
だけ夫と共に住み、三七その後やもめぐらしをし、八十四歳になって
いた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって神に仕えて
いた。三八この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝を
ささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでい
るすべての人々に語りきかせた。
三九両親は主の律法どおりすべての事をすませたので、ガリラヤへ
むかい、自分の町ナザレに帰った。
四〇幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神
の恵みがその上にあった。
四一さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上って
いた。四二イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のために

上京した。四三ところが、祭が終って帰るとき、少年イエスはエルサ
レムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。四四そし
て道連れの中にいることと思いこんで、一日路を行ってしまい、それ
から、親族や知人の中を捜しはじめたが、四五見つからないので、捜
しまわりながらエルサレムへ引返した。四六そして三日の後に、イエ
スが宮の中で教師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問
したりしておられるのを見つけた。四七聞く人々はみな、イエスの賢
さやその答に驚嘆していた。四八両親はこれを見て驚き、そして母が
彼に言った、「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、
おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」。四九す
るとイエスは言われた、「どうしてお捜しになったのですか。わたし
が自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」。五
〇しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかった。五一
それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕え
になった。母はこれらの事をみな心に留めていた。

五二イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人
から愛された。
第三章 **一**皇帝テベリオ在位の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤ
の総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟ピリポがイツリヤ・テラ
コニテ地方の領主、ルサニヤがアビレネの領主、**二**アンナスとカヤパ
とが大祭司であったとき、神の言が荒野でザカリヤの子ヨハネに臨ん
だ。**三**彼はヨルダンのほとりの全地方に行って、罪のゆるしを得させ
る悔改めのバプテスマを宣べ伝えた。**四**それは、預言者イザヤの言葉
の書に書いてあるとおりである。すなわち
「荒野で呼ばわる者の声がする、
『主の道を備えよ、
その道筋をまっすぐにせよ』。
五すべての谷は埋められ、
すべての山と丘とは、平らにされ、
曲ったところはまっすぐに、

わるい道はならされ、
六人はみな神の救を見るであろう」。
七さて、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出てきた群衆
にむかって言った、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、
のがれられると、おまえたちにだれが教えたのか。八だから、悔改め
にふさわしい実を結べ。自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、
心の中で思ってもみるな。おまえたちに言っておく。神はこれらの
石ころからでも、アブラハムの子を起すことができるのだ。九斧がす
でに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はこと
ごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ」。一〇そこで群衆が彼
に、「それでは、わたしたちは何をすればよいのですか」と尋ねた。一
一彼は答えて言った、「下着を二枚もっている者は、持たない者に分け
てやりなさい。食物を持っている者も同様にしなさい」。一二取税人
もバプテスマを受けにきて、彼に言った、「先生、わたしたちは何を
すればよいのですか」。一三彼らに言った、「きまっているもの以上に

取り立ててはいけない」。一四兵卒たちもたずねて言った、「では、わ
たしたちは何をすればよいのですか」。彼は言った、「人をおどかし
たり、だまし取ったりしてはいけない。自分の給与で満足していな
さい」。
一五民衆は救主を待ち望んでいたので、みな心の中でヨハネのこと
を、もしかしたらこの人がそれではなかろうかと考えていた。一六そ
こでヨハネはみんなの者にむかって言った、「わたしは水でおまえた
ちにバプテスマを授けるが、わたしよりも力のあるかたが、おいでに
なる。わたしには、そのくつのひもを解く値うちもない。このかた
は、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるで
あろう。一七また、箕を手に持って、打ち場の麦をふるい分け、麦は
倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」。
一八こうしてヨハネはほかにもなお、さまざまの勧めをして、民衆
に教を説いた。一九ところが領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロデヤのこと
で、また自分がしたあらゆる悪事について、ヨハネから非難されてい

たので、二〇彼を獄に閉じ込めて、いろいろな悪事の上に、もう一つ
この悪事を重ねた。
二一さて、民衆がみなバプテスマを受けたとき、イエスもバプテス
マを受けて祈っておられると、天が開けて、二二聖霊がはとのような
姿をとってイエスの上に下り、そして天から声がした、「あなたはわ
たしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。
二三イエスが宣教をはじめられたのは、年およそ三十歳の時であっ
て、人々の考えによれば、ヨセフの子であった。ヨセフはヘリの子、
二四それから、さかのぼって、マタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨ
セフ、二五マタテヤ、アモス、ナホム、エスリ、ナンガイ、二六マハ
テ、マタテヤ、シメイ、ヨセク、ヨダ、二七ヨハナン、レサ、ゾロバ
ベル、サラテル、ネリ、二八メルキ、アデイ、コサム、エルマダム、
エル、二九ヨシュア、エリエゼル、ヨリム、マタテ、レビ、三〇シメ
オン、ユダ、ヨセフ、ヨナム、エリヤキム、三一メレヤ、メナ、マタ
タ、ナタン、ダビデ、三二エッサイ、オベデ、ボアズ、サラ、ナアソ

ン、三三アミナダブ、アデミン、アルニ、エスロン、パレス、ユダ、
三四ヤコブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、三五セルグ、レウ、
ペレグ、エベル、サラ、三六カイナン、アルパクサデ、セム、ノア、
ラメク、三七メトセラ、エノク、ヤレデ、マハラレル、カイナン、三
八エノス、セツ、アダム、そして神にいたる。

第四章一さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダン川から帰り、二荒野
を四十日のあいだ御霊にひきまわされて、悪魔の試みにあわれた。そ
のあいだ何も食べず、その日数がつきると、空腹になられた。三そこ
で悪魔が言った、「もしあなたが神の子であるなら、この石に、パン
になれと命じてごらんなさい」。四イエスは答えて言われた、『人は
パンだけで生きるものではない』と書いてある」。五それから、悪魔
はイエスを高い所へ連れて行き、またたくまに世界のすべての国々
を見せて六言った、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなた
にあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好き
な人にあげてよいのですから。七それで、もしあなたがわたしの前に

ひざまずくなら、これを全部あなたのものにしてあげましょう」。八
イエスは答えて言われた、『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ
仕えよ』と書いてある」。九それから悪魔はイエスをエルサレムに連
れて行き、宮の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子である
なら、ここから下へ飛びおりてごらんなさい。一〇『神はあなたのた
めに、御使たちに命じてあなたを守らせるであろう』とあり、一一ま
た、『あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手
でささえるであろう』とも書いてあります」。一二イエスは答えて言
われた、『主なるあなたの神を試みてはならない』と言われている」。
一三悪魔はあらゆる試みをしつくして、一時イエスを離れた。
一四それからイエスは御霊の力に満ちあふれてガリラヤへ帰られる
と、そのうわさがその地方全体にひろまった。一五イエスは諸会堂で
教え、みんなの者から尊敬をお受けになった。
一六それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように
会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。一七すると預言者

イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を
出された、
一八「主の御霊がわたしに宿っている。
貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、
わたしを聖別してくださったからである。
主はわたしをつかわして、
囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、
打ちひしがれている者に自由を得させ、
一九主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。
二〇イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂に
いるみんなの者の目がイエスに注がれた。二一そこでイエスは、「こ
の聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめ
られた。二二すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て
来るめぐみの言葉に感嘆して言った、「この人はヨセフの子ではない
か」。二三そこで彼らに言われた、「あなたがたは、きっと『医者よ、

自分自身をいやせ』ということわざを引いて、カペナウムで行われた
と聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであ
ろう」。二四それから言われた、「よく言っておく。預言者は、自分の
郷里では歓迎されないものである。二五よく聞いておきなさい。エリ
ヤの時代に、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大き
きんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、二六エリヤはそ
のうちのだれにもつかわされないで、ただシドンのサレプタにいる
ひとりのやもめにだけつかわされた。二七また預言者エリシャの時代
に、イスラエルには多くのらい病人がいたのに、そのうちのひとり
もきよめられないで、ただシリヤのナアマンだけがきよめられた」。
二八会堂にいた者たちはこれを聞いて、みな憤りに満ち、二九立ち上
がってイエスを町の外へ追い出し、その町が建っている丘のがけま
でひっぱって行って、突き落そうとした。三〇しかし、イエスは彼ら
のまん中を通り抜けて、去って行かれた。
三一それから、イエスはガリラヤの町カペナウムに下って行かれた。

そして安息日になると、人々をお教えになったが、三二その言葉に権威
があったので、彼らはその教に驚いた。三三すると、汚れた悪霊につ
かれた人が会堂にいて、大声で叫び出した、三四「ああ、ナザレのイ
エスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたした
ちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっ
ています。神の聖者です」。三五イエスはこれをしかって、「黙れ、こ
の人から出て行け」と言われた。すると悪霊は彼を人なかに投げ倒
し、傷は負わせずに、その人から出て行った。三六みんなの者は驚い
て、互に語り合って言った、「これは、いったい、なんという言葉だ
ろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じられると、彼らは出て行
くのだ」。三七こうしてイエスの評判が、その地方のいたる所にひろ
まっていった。

三八イエスは会堂を出てシモンの家におはいりになった。ところが
シモンのしゅうとめが高い熱を病んでいたので、人々は彼女のため
にイエスにお願いした。三九そこで、イエスはそのまくらもとに立っ

て、熱が引くように命じられると、熱は引き、女はすぐに起き上がっ
て、彼らをもてなした。
四〇日が暮れると、いろいろな病気になやむ者をかかえている人々
が、皆それをイエスのところに連れてきたので、そのひとりびとり
に手を置いて、おいやしになった。四一悪霊も「あなたこそ神の子で
す」と叫びながら多くの人々から出ていった。しかし、イエスは彼ら
を戒めて、物を言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスは
キリストだと知っていたからである。
四二夜が明けると、イエスは寂しい所へ出て行かれたが、群衆が捜
しまわって、みもとに集まり、自分たちから離れて行かれないように
と、引き止めた。四三しかしイエスは、「わたしは、ほかの町々にも
神の国の福音を宣べ伝えねばならない。自分はそのためにつかわさ
れたのである」と言われた。四四そして、ユダヤの諸会堂で教を説か
れた。
第五章一さて、群衆が神の言を聞こうとして押し寄せてきたとき、

イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、二そこに二そうの小舟が
寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っ
ていた。三その一そうはシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り
込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の
中から群衆にお教えになった。四話がすむと、シモンに「沖へこぎ出
し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。五シモンは答えて
言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れません
でした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましょう」。六そ
してそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れがはいって、網
が破れそうになった。七そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢
に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入
れた。そのために、舟が沈みそうになった。八これを見てシモン・ペ
テロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから
離れてください。わたしは罪深い者です」。九彼も一緒にいた者たち
もみな、取れた魚がおびただしいのに驚いたからである。一〇シモン

の仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。す
ると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあな
たは人間をとる漁師になるのだ」。一一そこで彼らは舟を陸に引き上
げ、いっさいを捨ててイエスに従った。
一二イエスがある町におられた時、全身らい病になっている人がそ
こにいた。イエスを見ると、顔を地に伏せて願って言った、「主よ、
みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。一三イエスは手
を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われ
た。すると、らい病がただちに去ってしまった。一四イエスは、だれ
にも話さないようにと彼に言い聞かせ、「ただ行って自分のからだを
祭司に見せ、それからあなたのきよめのため、モーセが命じたとお
りのささげ物をして、人々に証明しなさい」とお命じになった。一五
しかし、イエスの評判はますますひろまって行き、おびただしい群衆
が、教を聞いたり、病気をなおしてもらったりするために、集まって
きた。一六しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた。

一七ある日のこと、イエスが教えておられると、ガリラヤやユダヤ
の方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者た
ちが、そこにすわっていた。主の力が働いて、イエスは人々をいやさ
れた。一八その時、ある人々が、ひとりの中風をわずらっている人を
床にのせたまま連れてきて、家の中に運び入れ、イエスの前に置こう
とした。一九ところが、群衆のためにどうしても運び入れる方法がな
かったので、屋根にのぼり、瓦をはいで、病人を床ごと群衆のまん中
につりおろして、イエスの前においた。二〇イエスは彼らの信仰を見
て、「人よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。二一すると律法
学者とパリサイ人たちとは、「神を汚すことを言うこの人は、いった
い、何者だ。神おひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができる
か」と言って論じはじめた。二二イエスは彼らの論議を見ぬいて、「あ
なたがたは心の中で何を論じているのか。二三あなたの罪はゆるされ
たと言うのと、起きて歩けと言うのと、どちらがたやすいか。二四し
かし、人の子は地上で罪をゆるす権威を持っていることが、あなたが

たにわかるために」と彼らに対して言い、中風の者にむかって、「あ
なたに命じる。起きよ、床を取り上げて家に帰れ」と言われた。二五
すると病人は即座にみんなの前で起きあがり、寝ていた床を取りあ
げて、神をあがめながら家に帰って行った。二六みんなの者は驚嘆し
てしまった。そして神をあがめ、おそれに満たされて、「きょうは驚
くべきことを見た」と言った。

二七そののち、イエスが出て行かれると、レビという名の取税人が
収税所にすわっているのを見て、「わたしに従ってきなさい」と言われ
た。二八すると、彼はいっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってき
た。二九それから、レビは自分の家で、イエスのために盛大な宴会を
催したが、取税人やそのほか大ぜいの人々が、共に食卓に着いていた。
三〇ところが、パリサイ人やその律法学者たちが、イエスの弟子たち
に対してつぶやいて言った、「どうしてあなたがたは、取税人や罪人な
どと飲食を共にするのか」。三一イエスは答えて言われた、「健康な人
には医者はいらない。いるのは病人である。三二わたしがきたのは、

義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」。
三三また彼らはイエスに言った、「ヨハネの弟子たちは、しばしば
断食をし、また祈をしており、パリサイ人の弟子たちもそうしている
のに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています」。三四する
とイエスは言われた、「あなたがたは、花婿が一緒にいるのに、婚礼
の客に断食をさせることができるであろうか。三五しかし、花婿が奪
い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」。三六それか
らイエスはまた一つの譬を語られた、「だれも、新しい着物から布ぎ
れを切り取って、古い着物につぎを当てるものはない。もしそんな
ことをしたら、新しい着物を裂くことになるし、新しいのから取った
布ぎれも古いのに合わないであろう。三七まただれも、新しいぶどう
酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなことをしたら、新しいぶ
どう酒は皮袋をはり裂き、そしてぶどう酒は流れ出るし、皮袋もむだ
になるであろう。三八新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきであ
る。三九まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはし

ない。『古いのが良い』と考えているからである」。
第六章一ある安息日にイエスが麦畑の中をとおって行かれたとき、
弟子たちが穂をつみ、手でもみながら食べていた。二すると、あるパ
リサイ人たちが言った、「あなたがたはなぜ、安息日にしてはならぬ
ことをするのか」。三そこでイエスが答えて言われた、「あなたがた
は、ダビデとその供の者たちとが飢えていたとき、ダビデのしたこと
について、読んだことがないのか。四すなわち、神の家にはいって、
祭司たちのほかだれも食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、ま
た供の者たちにも与えたではないか」。五また彼らに言われた、「人の
子は安息日の主である」。
六また、ほかの安息日に会堂にはいって教えておられたところ、そ
こに右手のなえた人がいた。七律法学者やパリサイ人たちは、イエス
を訴える口実を見付けようと思って、安息日にいやされるかどうか
をうかがっていた。八イエスは彼らの思っていることを知って、その
手のなえた人に、「起きて、まん中に立ちなさい」と言われると、起

き上がって立った。九そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あ
なたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救う
のと殺すのと、どちらがよいか」。一〇そして彼ら一同を見まわして、
その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、そ
の手は元どおりになった。一一そこで彼らは激しく怒って、イエスを
どうかしてやろうと、互に話合いをはじめた。
一二このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈ら
れた。一三夜が明けると、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を
選び出し、これに使徒という名をお与えになった。一四すなわち、ペ
テロとも呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピ
リポとバルトロマイ、一五マタイとトマス、アルパヨの子ヤコブと、
熱心党と呼ばれたシモン、一六ヤコブの子ユダ、それからイスカリオ
テのユダ。このユダが裏切者となったのである。一七そして、イエス
は彼らと一緒に山を下って平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、
ユダヤ全土、エルサレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆

が、一八教を聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとして、そこに
きていた。そして汚れた霊に悩まされている者たちも、いやされた。
一九また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの内か
ら出て、みんなの者を次々にいやしたからである。二〇そのとき、イ
エスは目をあげ、弟子たちを見て言われた、
「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。
神の国はあなたがたのものである。
二一あなたがたいま飢えている人たちは、さいわいだ。
飽き足りるようになるからである。
あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。
笑うようになるからである。
二二人々があなたがたを憎むとき、また人の子のためにあなたが
たを排斥し、ののしり、汚名を着せるときは、あなたがたはさい
わいだ。
二三その日には喜びおどれ。見よ、天においてあなたがたの受け

る報いは大きいのだから。彼らの祖先も、預言者たちに対して
同じことをしたのである。
二四しかしあなたがた富んでいる人たちは、わざわいだ。
慰めを受けてしまっているからである。
二五あなたがた今満腹している人たちは、わざわいだ。
飢えるようになるからである。
あなたがた今笑っている人たちは、わざわいだ。悲しみ泣くよ
うになるからである。
二六人が皆あなたがたをほめるときは、あなたがたはわざわい
だ。彼らの祖先も、にせ預言者たちに対して同じことをしたの
である。
二七しかし、聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、憎む者に親切
にせよ。二八のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ。二九
あなたの頬を打つ者にはほかの頬をも向けてやり、あなたの上着を
奪い取る者には下着をも拒むな。三〇あなたに求める者には与えてや

り、あなたの持ち物を奪う者からは取りもどそうとするな。三一人々
にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりに
せよ。三二自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄
になろうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。三三
自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄になろう
か。罪人でさえ、それくらいの事はしている。三四また返してもらう
つもりで貸したとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でも、同じ
だけのものを返してもらおうとして、仲間に貸すのである。三五しか
し、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにし
ないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがたは
いと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも
悪人にも、なさけ深いからである。三六あなたがたの父なる神が慈悲
深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。三七人をさばくな。そ
うすれば、自分もさばかれることがないであろう。また人を罪に定め
るな。そうすれば、自分も罪に定められることがないであろう。ゆ

るしてやれ。そうすれば、自分もゆるされるであろう。三八与えよ。
そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり
入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れ
てくれるであろう。あなたがたの量るその量りで、自分にも量りか
えされるであろうから」。
三九イエスはまた一つの譬を語られた、「盲人は盲人の手引ができよ
うか。ふたりとも穴に落ち込まないだろうか。四〇弟子はその師以上
のものではないが、修業をつめば、みなその師のようになろう。四一
なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めない
のか。四二自分の目にある梁は見ないでいて、どうして兄弟にむかっ
て、兄弟よ、あなたの目にあるちりを取らせてください、と言えよう
か。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい、そうすれ
ば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるちりを取りのける
ことができるだろう。四三悪い実のなる良い木はないし、また良い実
のなる悪い木もない。四四木はそれぞれ、その実でわかる。いばらか

らいちじくを取ることはないし、野ばらからぶどうを摘むこともな
い。四五善人は良い心の倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から
悪い物を取り出す。心からあふれ出ることを、口が語るものである。
四六わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを
行わないのか。四七わたしのもとにきて、わたしの言葉を聞いて行う
者が、何に似ているか、あなたがたに教えよう。四八それは、地を深
く掘り、岩の上に土台をすえて家を建てる人に似ている。洪水が出
て激流がその家に押し寄せてきても、それを揺り動かすことはできな
い。よく建ててあるからである。四九しかし聞いても行わない人は、
土台なしで、土の上に家を建てた人に似ている。激流がその家に押し
寄せてきたら、たちまち倒れてしまい、その被害は大きいのである」。
第七章一イエスはこれらの言葉をことごとく人々に聞かせてしまっ
たのち、カペナウムに帰ってこられた。二ところが、ある百卒長の頼
みにしていた僕が、病気になって死にかかっていた。三この百卒長
はイエスのことを聞いて、ユダヤ人の長老たちをイエスのところにつ

かわし、自分の僕を助けにきてくださるようにと、お願いした。四彼
らはイエスのところにきて、熱心に願って言った、「あの人はそうし
ていただくねうちがございます。五わたしたちの国民を愛し、わたし
たちのために会堂を建ててくれたのです」。六そこで、イエスは彼ら
と連れだってお出かけになった。ところが、その家からほど遠くない
あたりまでこられたとき、百卒長は友だちを送ってイエスに言わせ
た、「主よ、どうぞ、ご足労くださいませんように。わたしの屋根の
下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。七それで
すから、自分でお迎えにあがるねうちさえないと思っていたのです。
ただ、お言葉を下さい。そして、わたしの僕をなおしてください。八
わたしも権威の下に服している者ですが、わたしの下にも兵卒がい
まして、ひとりの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と
言えばきますし、また、僕に『これをせよ』と言えば、してくれるの
です」。九イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた群衆の
方に振り向いて言われた、「あなたがたに言っておくが、これほどの

信仰は、イスラエルの中でも見たことがない」。一〇使にきた者たち
が家に帰ってみると、僕は元気になっていた。
一一そののち、間もなく、ナインという町へおいでになったが、弟子
たちや大ぜいの群衆も一緒に行った。一二町の門に近づかれると、ちょ
うど、あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだので、葬
りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが、その母につきそっ
ていた。一三主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでい
なさい」と言われた。一四そして近寄って棺に手をかけられると、か
ついでいる者たちが立ち止まったので、「若者よ、さあ、起きなさい」
と言われた。一五すると、死人が起き上がって物を言い出した。イエ
スは彼をその母にお渡しになった。一六人々はみな恐れをいだき、「大
預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくだ
さった」と言って、神をほめたたえた。一七イエスについてのこの話
は、ユダヤ全土およびその附近のいたる所にひろまった。
一八ヨハネの弟子たちは、これらのことを全部彼に報告した。する

とヨハネは弟子の中からふたりの者を呼んで、一九主のもとに送り、
『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを
待つべきでしょうか」と尋ねさせた。二〇そこで、この人たちがイエ
スのもとにきて言った、「わたしたちはバプテスマのヨハネからの使
ですが、『きたるべきかた』はあなたなのですか、それとも、ほかにだ
れかを待つべきでしょうか、とヨハネが尋ねています」。二一そのと
き、イエスはさまざまの病苦と悪霊とに悩む人々をいやし、また多く
の盲人を見えるようにしておられたが、二二答えて言われた、「行っ
て、あなたがたが見聞きしたことを、ヨハネに報告しなさい。盲人は
見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生
きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。二三わたしにつまず
かない者は、さいわいである」。

二四ヨハネの使が行ってしまうと、イエスはヨハネのことを群衆に
語りはじめられた、「あなたがたは、何を見に荒野に出てきたのか。
風に揺らぐ葦であるか。二五では、何を見に出てきたのか。柔らかい

着物をまとった人か。きらびやかに着かざって、ぜいたくに暮してい
る人々なら、宮殿にいる。二六では、何を見に出てきたのか。預言者
か。そうだ、あなたがたに言うが、預言者以上の者である。

二七『見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、
あなたの前に、道を整えさせるであろう』

と書いてあるのは、この人のことである。二八あなたがたに言ってお
く。女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない。しかし、
神の国で最も小さい者も、彼よりは大きい。二九（これを聞いた民衆
は皆、また取税人たちも、ヨハネのバプテスマを受けて神の正しいこ
とを認めた。三〇しかし、パリサイ人と律法学者たちとは彼からバプ
テスマを受けないで、自分たちに対する神のみこころを無にした。）三
一だから今の時代の人々を何に比べようか。彼らは何に似ているか。
三二それは子供たちが広場にすわって、互に呼びかけ、

『わたしたちが笛を吹いたのに、
あなたたちは踊ってくれなかった。

　弔いの歌を歌ったのに、
　泣いてくれなかった』
と言うのに似ている。三三なぜなら、バプテスマのヨハネがきて、パ
ンを食べることも、ぶどう酒を飲むこともしないと、あなたがたは、
あれは悪霊につかれているのだ、と言い、三四また人の子がきて食べ
たり飲んだりしていると、見よ、あれは食をむさぼる者、大酒を飲む
者、また取税人、罪人の仲間だ、と言う。三五しかし、知恵の正しい
ことは、そのすべての子が証明する」。
三六あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、
そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。三七するとそのとき、
その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いてお
られることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、三
八泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエス
の足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、
香油を塗った。三九イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中

で言った、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女
がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。
四〇そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言う
ことがある」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。四一
イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひ
とりは五百デナリ、もうひとりは五十デナリを借りていた。四二とこ
ろが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった。
このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。四三シモ
ンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イ
エスが言われた、「あなたの判断は正しい」。四四それから女の方に振
り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなた
の家にはいってきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。と
ころが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。
四五あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家
にはいった時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった。四六あな

たはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に
香油を塗ってくれた。四七それであなたに言うが、この女は多く愛し
たから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされ
た者は、少しだけしか愛さない」。四八そして女に、「あなたの罪はゆ
るされた」と言われた。四九すると同席の者たちが心の中で言いはじ
めた、「罪をゆるすことさえするこの人は、いったい、何者だろう」。
五〇しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があな
たを救ったのです。安心して行きなさい」。

第八章一そののちイエスは、神の国の福音を説きまた伝えながら、
町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。二また悪霊
を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの
悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、三ヘロデの
家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒
にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。
四さて、大ぜいの群衆が集まり、その上、町々からの人たちがイエ

スのところに、ぞくぞくと押し寄せてきたので、一つの譬で話をされ
た、五「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、ある種
は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまっ
た。六ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れて
しまった。七ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらも一緒に
茂ってきて、それをふさいでしまった。八ところが、ほかの種は良い
地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。こう語られたの
ち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。

九弟子たちは、この譬はどういう意味でしょうか、とイエスに質問
した。一〇そこで言われた、「あなたがたには、神の国の奥義を知る
ことが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても
悟られないために、譬で話すのである。一一この譬はこういう意味で
ある。種は神の言である。一二道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信
じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言
が奪い取られる人たちのことである。一三岩の上に落ちたのは、御言

を聞いた時には喜んで受けいれるが、根が無いので、しばらくは信
じていても、試錬の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。
一四いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の
心づかいや富や快楽にふさがれて、実の熟するまでにならない人た
ちのことである。一五良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これ
を正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人た
ちのことである。
一六だれもあかりをともして、それを何かの器でおおいかぶせたり、
寝台の下に置いたりはしない。燭台の上に置いて、はいって来る人
たちに光が見えるようにするのである。一七隠されているもので、あ
らわにならないものはなく、秘密にされているもので、ついには知ら
れ、明るみに出されないものはない。一八だから、どう聞くかに注意
するがよい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は、持っ
ているものまでも、取り上げられるであろう」。
一九さて、イエスの母と兄弟たちとがイエスのところにきたが、群衆

のためそば近くに行くことができなかった。二〇それで、だれかが「あ
なたの母上と兄弟がたが、お目にかかろうと思って、外に立ってお
られます」と取次いだ。二一するとイエスは人々にむかって言われ
た、「神の御言を聞いて行う者こそ、わたしの母、わたしの兄弟なの
である」。
二二ある日のこと、イエスは弟子たちと舟に乗り込み、「湖の向こう
岸へ渡ろう」と言われたので、一同が船出した。二三渡って行く間に、
イエスは眠ってしまわれた。すると突風が湖に吹きおろしてきたの
で、彼らは水をかぶって危険になった。二四そこで、みそばに寄って
きてイエスを起し、「先生、先生、わたしたちは死にそうです」と言っ
た。イエスは起き上がって、風と荒浪とをおしかりになると、止んで
なぎになった。二五イエスは彼らに言われた、「あなたがたの信仰は、
どこにあるのか」。彼らは恐れ驚いて互に言い合った、「いったい、こ
のかたはだれだろう。お命じになると、風も水も従うとは」。
二六それから、彼らはガリラヤの対岸、ゲラサ人の地に渡った。二

七陸にあがられると、その町の人で、悪霊につかれて長いあいだ着物
も着ず、家に居つかないで墓場にばかりいた人に、出会われた。二八
この人がイエスを見て叫び出し、みまえにひれ伏して大声で言った、
「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるの
です。お願いです、わたしを苦しめないでください」。二九それは、イ
エスが汚れた霊に、その人から出て行け、とお命じになったからで
ある。というのは、悪霊が何度も彼をひき捕えたので、彼は鎖と足
かせとでつながれて看視されていたが、それを断ち切っては悪霊に
よって荒野へ追いやられていたのである。三〇イエスは彼に「なんと
いう名前か」とお尋ねになると、「レギオンと言います」と答えた。
彼の中にたくさんの悪霊がはいり込んでいたからである。三一悪霊ど
もは、底知れぬ所に落ちて行くことを自分たちにお命じにならぬよう
にと、イエスに願いつづけた。三二ところが、そこの山べにおびただ
しい豚の群れが飼ってあったので、その豚の中へはいることを許して
いただきたいと、悪霊どもが願い出た。イエスはそれをお許しになっ

た。三三そこで悪霊どもは、その人から出て豚の中へはいり込んだ。
するとその群れは、がけから湖へなだれを打って駆け下り、おぼれ
死んでしまった。三四飼う者たちは、この出来事を見て逃げ出して、
町や村里にふれまわった。三五人々はこの出来事を見に出てきた。そ
して、イエスのところにきて、悪霊を追い出してもらった人が着物を
着て、正気になってイエスの足もとにすわっているのを見て、恐れ
た。三六それを見た人たちは、この悪霊につかれていた者が救われた
次第を、彼らに語り聞かせた。三七それから、ゲラサの地方の民衆は
こぞって、自分たちの所から立ち去ってくださるようにとイエスに頼
んだ。彼らが非常な恐怖に襲われていたからである。そこで、イエス
は舟に乗って帰りかけられた。三八悪霊を追い出してもらった人は、
お供をしたいと、しきりに願ったが、イエスはこう言って彼をお帰し
になった。三九「家へ帰って、神があなたにどんなに大きなことをし
てくださったか、語り聞かせなさい」。そこで彼は立ち去って、自分
にイエスがして下さったことを、ことごとく町中に言いひろめた。

四〇イエスが帰ってこられると、群衆は喜び迎えた。みんながイエ
スを待ちうけていたのである。四一するとそこに、ヤイロという名の
人がきた。この人は会堂司であった。イエスの足もとにひれ伏して、
自分の家においでくださるようにと、しきりに願った。四二彼に十二
歳ばかりになるひとり娘があったが、死にかけていた。ところが、イ
エスが出て行かれる途中、群衆が押し迫ってきた。
四三ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分
の身代をみな使い果してしまったが、だれにもなおしてもらえなかっ
た女がいた。四四この女がうしろから近寄ってみ衣のふさにさわった
ところ、その長血がたちまち止まってしまった。四五イエスは言われ
た、「わたしにさわったのは、だれか」。人々はみな自分ではないと
言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき
合っているのです」と答えた。四六しかしイエスは言われた、「だれか
がわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。
四七女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひ

れ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったことと
を、みんなの前で話した。四八そこでイエスが女に言われた、「娘よ、
あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。
四九イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、
「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びませ
ん」と言った。五〇しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言
われた、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。五
一それから家にはいられるとき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブおよびその
子の父母のほかは、だれも一緒にはいって来ることをお許しにならな
かった。五二人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言
われた、「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである」。
五三人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。
五四イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きな
さい」。五五するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。
イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。五六両親は驚

いてしまった。イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと、彼
らに命じられた。
第九章一それからイエスは十二弟子を呼び集めて、彼らにすべての
悪霊を制し、病気をいやす力と権威とをお授けになった。二また神の
国を宣べ伝え、かつ病気をなおすためにつかわして三言われた、「旅
のために何も携えるな。つえも袋もパンも銭も持たず、また下着も
二枚は持つな。四また、どこかの家にはいったら、そこに留まってお
れ。そしてそこから出かけることにしなさい。五だれもあなたがたを
迎えるものがいなかったら、その町を出て行くとき、彼らに対する
抗議のしるしに、足からちりを払い落しなさい」。六弟子たちは出て
行って、村々を巡り歩き、いたる所で福音を宣べ伝え、また病気をい
やした。
七さて、領主ヘロデはいろいろな出来事を耳にして、あわて惑って
いた。それは、ある人たちは、ヨハネが死人の中からよみがえったと
言い、八またある人たちは、エリヤが現れたと言い、またほかの人た

ちは、昔の預言者のひとりが復活したのだと言っていたからである。
九そこでヘロデが言った、「ヨハネはわたしがすでに首を切ったのだ
が、こうしてうわさされているこの人は、いったい、だれなのだろ
う」。そしてイエスに会ってみようと思っていた。
一〇使徒たちは帰ってきて、自分たちのしたことをすべてイエスに
話した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそ
かに退かれた。一一ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、
これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療を要する人たちを
いやされた。一二それから日が傾きかけたので、十二弟子がイエスの
もとにきて言った、「群衆を解散して、まわりの村々や部落へ行って
宿を取り、食物を手にいれるようにさせてください。わたしたちはこ
んな寂しい所にきているのですから」。一三しかしイエスは言われた、
「あなたがたの手で食物をやりなさい」。彼らは言った、「わたしたち
にはパン五つと魚二ひきしかありません、この大ぜいの人のために
食物を買いに行くかしなければ」。一四というのは、男が五千人ばか

りもいたからである。しかしイエスは弟子たちに言われた、「人々を
おおよそ五十人ずつの組にして、すわらせなさい」。一五彼らはその
とおりにして、みんなをすわらせた。一六イエスは五つのパンと二ひ
きの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福してさき、弟子たちにわ
たして群衆に配らせた。一七みんなの者は食べて満腹した。そして、
その余りくずを集めたら、十二かごあった。
一八イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちが近くにいた
ので、彼らに尋ねて言われた、「群衆はわたしをだれと言っているか」。
一九彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。
しかしほかの人たちは、エリヤだと言い、また昔の預言者のひとり
が復活したのだと、言っている者もあります」。二〇彼らに言われた、
「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて
言った、「神のキリストです」。二一イエスは彼らを戒め、この事をだ
れにも言うなと命じ、二二「人の子は必ず多くの苦
しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、

そして三日目によみがえる」。二三それから、みんなの者に言われた、
「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分
の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。二四自分の命を救おう
と思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを
救うであろう。二五人が全世界をもうけても、自分自身を失いまたは
損したら、なんの得になろうか。二六わたしとわたしの言葉とを恥じ
る者に対しては、人の子もまた、自分の栄光と、父と聖なる御使との
栄光のうちに現れて来るとき、その者を恥じるであろう。二七よく聞
いておくがよい、神の国を見るまでは、死を味わわない者が、ここに
立っている者の中にいる」。

二八これらのことを話された後、八日ほどたってから、イエスはペ
テロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。二九祈っ
ておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに白く輝い
た。三〇すると見よ、ふたりの人がイエスと語り合っていた。それは
モーセとエリヤであったが、三一栄光の中に現れて、イエスがエルサ

レムで遂げようとする最後のことについて話していたのである。
三二ペテロとその仲間の者たちとは熟睡していたが、目をさますと、イエスの栄光の姿と、共に立っているふたりの人とを見た。
三三このふたりがイエスを離れ去ろうとしたとき、ペテロは自分が何を言っているのかわからないで、イエスに言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。
三四彼がこう言っている間に、雲がわき起って彼らをおおいはじめた。そしてその雲に囲まれたとき、彼らは恐れた。
三五すると雲の中から声があった、「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」。
三六そして声が止んだとき、イエスがひとりだけになっておられた。弟子たちは沈黙を守って、自分たちが見たことについては、そのころだれにも話さなかった。

三七翌日、一同が山を降りて来ると、大ぜいの群衆がイエスを出迎えた。
三八すると突然、ある人が群衆の中から大声をあげて言った、

「先生、お願いです。わたしのむすこを見てやってください。この子
はわたしのひとりむすこですが、三九霊が取りつきますと、彼は急に
叫び出すのです。それから、霊は彼をひきつけさせて、あわを吹か
せ、彼を弱り果てさせて、なかなか出て行かないのです。四〇それで、
お弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、で
きませんでした」。四一イエスは答えて言われた、「ああ、なんという
不信仰な、曲った時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと
一緒におられようか、またあなたがたに我慢ができようか。あなた
の子をここに連れてきなさい」。四二ところが、その子がイエスのと
ころに来る時にも、悪霊が彼を引き倒して、引きつけさせた。イエス
はこの汚れた霊をしかりつけ、その子供をいやして、父親にお渡しに
なった。四三人々はみな、神の偉大な力に非常に驚いた。

　みんなの者がイエスのしておられた数々の事を不思議に思ってい
ると、弟子たちに言われた、四四「あなたがたはこの言葉を耳におさ
めて置きなさい。人の子は人々の手に渡されようとしている」。四五

しかし、彼らはなんのことかわからなかった。それが彼らに隠され
ていて、悟ることができなかったのである。また彼らはそのことに
ついて尋ねるのを恐れていた。
四六弟子たちの間に、彼らのうちでだれがいちばん偉いだろうかと
いうことで、議論がはじまった。四七イエスは彼らの心の思いを見抜
き、ひとりの幼な子を取りあげて自分のそばに立たせ、彼らに言わ
れた、四八「だれでもこの幼な子をわたしの名のゆえに受けいれる者
は、わたしを受けいれるのである。そしてわたしを受けいれる者は、
わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである。あなたが
たみんなの中でいちばん小さい者こそ、大きいのである」。
四九するとヨハネが答えて言った、「先生、わたしたちはある人が
あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人は
わたしたちの仲間でないので、やめさせました」。五〇イエスは彼に
言われた、「やめさせないがよい。あなたがたに反対しない者は、あ
なたがたの味方なのである」。

五一さて、イエスが天に上げられる日が近づいたので、エルサレムへ
行こうと決意して、その方へ顔をむけられ、五二自分に先立って使者
たちをおつかわしになった。そして彼らがサマリヤ人の村へはいっ
て行き、イエスのために準備をしようとしたところ、五三村人は、エ
ルサレムへむかって進んで行かれるというので、イエスを歓迎しよう
とはしなかった。五四弟子のヤコブとヨハネとはそれを見て言った、
「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火
をよび求めましょうか」。五五イエスは振りかえって、彼らをおしか
りになった。五六そして一同はほかの村へ行った。

五七道を進んで行くと、ある人がイエスに言った、「あなたがおいで
になる所ならどこへでも従ってまいります」。五八イエスはその人に
言われた、「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人
の子にはまくらする所がない」。五九またほかの人に、「わたしに従っ
てきなさい」と言われた。するとその人が言った、「まず、父を葬り
に行かせてください」。六〇彼に言われた、「その死人を葬ることは、

死人に任せておくがよい。あなたは、出て行って神の国を告げひろめ
なさい」。六一またほかの人が言った、「主よ、従ってまいりますが、
まず家の者に別れを言いに行かせてください」。六二イエスは言われ
た、「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわし
くないものである」。

第一〇章一その後、主は別に七十二人を選び、行こうとしておられ
たすべての町や村へ、ふたりずつ先におつかわしになった。二そのと
き、彼らに言われた、「収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫
の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらい
なさい。三さあ、行きなさい。わたしがあなたがたをつかわすのは、
小羊をおおかみの中に送るようなものである。四財布も袋もくつも
持って行くな。だれにも道であいさつするな。五どこかの家にはいっ
たら、まず『平安がこの家にあるように』と言いなさい。六もし平安
の子がそこにおれば、あなたがたの祈る平安はその人の上にとどま
るであろう。もしそうでなかったら、それはあなたがたの上に帰っ

て来るであろう。七それで、その同じ家に留まっていて、家の人が出
してくれるものを飲み食いしなさい。働き人がその報いを得るのは
当然である。家から家へと渡り歩くな。八どの町へはいっても、人々
があなたがたを迎えてくれるなら、前に出されるものを食べなさい。
九そして、その町にいる病人をいやしてやり、『神の国はあなたがた
に近づいた』と言いなさい。一〇しかし、どの町へはいっても、人々
があなたがたを迎えない場合には、大通りに出て行って言いなさい、
一一『わたしたちの足についているこの町のちりも、ぬぐい捨てて行
く。しかし、神の国が近づいたことは、承知しているがよい』。一二
あなたがたに言っておく。その日には、この町よりもソドムの方が
耐えやすいであろう。一三わざわいだ、コラジンよ。わざわいだ、べ
ツサイダよ。おまえたちの中でなされた力あるわざが、もしツロと
シドンでなされたなら、彼らはとうの昔に、荒布をまとい灰の中にす
わって、悔い改めたであろう。一四しかし、さばきの日には、ツロと
シドンの方がおまえたちよりも、耐えやすいであろう。一五ああ、カ

ペナウムよ、おまえは天にまで上げられようとでもいうのか。黄泉
にまで落されるであろう。一六あなたがたに聞き従う者は、わたしに
聞き従うのであり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。
そしてわたしを拒む者は、わたしをおつかわしになったかたを拒む
のである」。
一七七十二人が喜んで帰ってきて言った、「主よ、あなたの名によっ
ていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します」。一八彼らに
言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た。
一九わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる
力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者
はまったく無いであろう。二〇しかし、霊があなたがたに服従するこ
とを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされていることを
喜びなさい」。
二一そのとき、イエスは聖霊によって喜びあふれて言われた、「天地
の主なる父よ。あなたをほめたたえます。これらの事を知恵のある

者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださいました。父よ、こ
れはまことに、みこころにかなった事でした。二二すべての事は父か
らわたしに任せられています。そして、子がだれであるかは、父のほ
か知っている者はありません。また父がだれであるかは、子と、父
をあらわそうとして子が選んだ者とのほか、だれも知っている者は
いません」。二三それから弟子たちの方に振りむいて、ひそかに言わ
れた、「あなたがたが見ていることを見る目は、さいわいである。二
四あなたがたに言っておく。多くの預言者や王たちも、あなたがたの
見ていることを見ようとしたが、見ることができず、あなたがたの聞
いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである」。
　二五するとそこへ、ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして
言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。二六彼
に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」。
二七彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、
思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛する

ように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。二八彼に言われた、
「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのち
が得られる」。二九すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イ
エスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。三〇
イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って
行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、
半殺しにしたまま、逃げ去った。三一するとたまたま、ひとりの祭司
がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行っ
た。三二同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見る
と向こう側を通って行った。三三ところが、あるサマリヤ人が旅をし
てこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、三四近寄っ
てきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、
自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。三五翌日、デナリ
二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってくださ
い。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』

と言った。三六この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人に
なったと思うか」。三七彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人
です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしな
さい」。
三八一同が旅を続けているうちに、イエスがある村へはいられた。
するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。三九この女に
マリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っ
ていた。四〇ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりみ
だし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待
をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝
いをするように妹におっしゃってください」。四一主は答えて言われ
た、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわ
ずらっている。四二しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、
一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、
彼女から取り去ってはならないものである」。

第一一章

一また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終っ
たとき、弟子のひとりが言った、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教
えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」。二そこで
彼らに言われた、「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があ
がめられますように。御国がきますように。三わたしたちの日ごとの
食物を、日々お与えください。四わたしたちに負債のある者を皆ゆる
しますから、わたしたちの罪をもおゆるしください。わたしたちを
試みに会わせないでください』」。五そして彼らに言われた、「あなた
がたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中
に行き、『友よ、パンを三つ貸してください。六友だちが旅先からわ
たしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから』と
言った場合、七彼は内から、『面倒をかけないでくれ。もう戸は締め
てしまったし、子供たちもわたしと一緒に床にはいっているので、い
ま起きて何もあげるわけにはいかない』と言うであろう。八しかし、
よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきり

に願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう。九そ
こでわたしはあなたがたに言う。求めよ、そうすれば、与えられる
であろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうす
れば、あけてもらえるであろう。一〇すべて求める者は得、捜す者は
見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである。一一あなたが
たのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りに
へびを与えるだろうか。一二卵を求めるのに、さそりを与えるだろう
か。一三このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供に
は、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさ
ら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか」。
一四さて、イエスが悪霊を追い出しておられた。それは、おしの霊で
あった。悪霊が出て行くと、おしが物を言うようになったので、群衆
は不思議に思った。一五その中のある人々が、「彼は悪霊のかしらべ
ルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言い、一六ま
たほかの人々は、イエスを試みようとして、天からのしるしを求め

た。一七しかしイエスは、彼らの思いを見抜いて言われた、「おおよ
そ国が内部で分裂すれば自滅してしまい、また家が分れ争えば倒れ
てしまう。一八そこでサタンも内部で分裂すれば、その国はどうして
立ち行けよう。あなたがたはわたしがベルゼブルによって悪霊を追
い出していると言うが、一九もしわたしがベルゼブルによって悪霊を
追い出すとすれば、あなたがたの仲間はだれによって追い出すので
あろうか。だから、彼らがあなたがたをさばく者となるであろう。二
〇しかし、わたしが神の指によって悪霊を追い出しているのなら、神
の国はすでにあなたがたのところにきたのである。二一強い人が十分
に武装して自分の邸宅を守っている限り、その持ち物は安全である。
二二しかし、もっと強い者が襲ってきて彼に打ち勝てば、その頼みに
していた武具を奪って、その分捕品を分けるのである。二三わたしの
味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めな
い者は、散らすものである。二四汚れた霊が人から出ると、休み場を
求めて水の無い所を歩きまわるが、見つからないので、出てきた元の

家に帰ろうと言って、二五帰って見ると、その家はそうじがしてある
上、飾りつけがしてあった。二六そこでまた出て行って、自分以上に
悪い他の七つの霊を引き連れてきて中にはいり、そこに住み込む。そ
うすると、その人の後の状態は初めよりももっと悪くなるのである」。
二七イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が
声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房
は、なんとめぐまれていることでしょう」。二八しかしイエスは言わ
れた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを
守る人たちである」。

二九さて群衆が群がり集まったので、イエスは語り出された、「こ
の時代は邪悪な時代である。それはしるしを求めるが、ヨナのしる
しのほかには、なんのしるしも与えられないであろう。三〇というの
は、ニネべの人々に対してヨナがしるしとなったように、人の子もこ
の時代に対してしるしとなるであろう。三一南の女王が、今の時代の
人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜ

なら、彼女はソロモンの知恵を聞くために、地の果からはるばるきた
からである。しかし見よ、ソロモンにまさる者がここにいる。三二ニ
ネベの人々が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪
に定めるであろう。なぜなら、ニネベの人々はヨナの宣教によって
悔い改めたからである。しかし見よ、ヨナにまさる者がここにいる。
三三だれもあかりをともして、それを穴倉の中や枡の下に置くこと
はしない。むしろはいって来る人たちに、そのあかりが見えるよう
に、燭台の上におく。三四あなたの目は、からだのあかりである。あ
なたの目が澄んでおれば、全身も明るいが、目がわるければ、から
だも暗い。三五だから、あなたの内なる光が暗くならないように注意
しなさい。三六もし、あなたのからだ全体が明るくて、暗い部分が少
しもなければ、ちょうど、あかりが輝いてあなたを照す時のように、
全身が明るくなるであろう」。
三七イエスが語っておられた時、あるパリサイ人が、自分の家で食事
をしていただきたいと申し出たので、はいって食卓につかれた。三八

ところが、食前にまず洗うことをなさらなかったのを見て、そのパリ
サイ人が不思議に思った。三九そこで主は彼に言われた、「いったい、
あなたがたパリサイ人は、杯や盆の外側をきよめるが、あなたがたの
内側は貪欲と邪悪とで満ちている。四〇愚かな者たちよ、外側を造っ
たかたは、また内側も造られたではないか。四一ただ、内側にあるも
のをきよめなさい。そうすれば、いっさいがあなたがたにとって、清
いものとなる。

四二しかし、あなた方パリサイ人は、わざわいである。はっか、う
ん香、あらゆる野菜などの十分の一を宮に納めておりながら、義と神
に対する愛とをなおざりにしている。それもなおざりにはできない
が、これは行わねばならない。四三あなたがたパリサイ人は、わざわ
いである。会堂の上席や広場での敬礼を好んでいる。四四あなたがた
は、わざわいである。人目につかない墓のようなものである。その
上を歩いても人々は気づかないでいる」。

四五ひとりの律法学者がイエスに答えて言った、「先生、そんなこ

とを言われるのは、わたしたちまでも侮辱することです」。四六そこ
で言われた、「あなたがた律法学者も、わざわいである。負い切れな
い重荷を人に負わせながら、自分ではその荷に指一本でも触れよう
としない。四七あなたがたは、わざわいである。預言者たちの碑を建
てるが、しかし彼らを殺したのは、あなたがたの先祖であったのだ。
四八だから、あなたがたは、自分の先祖のしわざに同意する証人なの
だ。先祖が彼らを殺し、あなたがたがその碑を建てるのだから。四九
それゆえに、『神の知恵』も言っている、『わたしは預言者と使徒とを
彼らにつかわすが、彼らはそのうちのある者を殺したり、迫害した
りするであろう』。五〇それで、アベルの血から祭壇と神殿との間で
殺されたザカリヤの血に至るまで、世の初めから流されてきたすべ
ての預言者の血について、この時代がその責任を問われる。五一そう
だ、あなたがたに言っておく、この時代がその責任を問われるであろ
う。五二あなたがた律法学者は、わざわいである。知識のかぎを取り
あげて、自分がはいらないばかりか、はいろうとする人たちを妨げて

きた」。
五三イエスがそこを出て行かれると、律法学者やパリサイ人は、激
しく詰め寄り、いろいろな事を問いかけて、五四イエスの口から何か
言いがかりを得ようと、ねらいはじめた。
第一二章一その間に、おびただしい群衆が、互に踏み合うほどに群
がってきたが、イエスはまず弟子たちに語りはじめられた、「パリサ
イ人のパン種、すなわち彼らの偽善に気をつけなさい。二おおいかぶ
されたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知ら
れてこないものはない。三だから、あなたがたが暗やみで言ったこ
とは、なんでもみな明るみで聞かれ、密室で耳にささやいたことは、
屋根の上で言いひろめられるであろう。四そこでわたしの友であるあ
なたがたに言うが、からだを殺しても、そのあとでそれ以上なにもで
きない者どもを恐れるな。五恐るべき者がだれであるか、教えてあげ
よう。殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れな
さい。そうだ、あなたがたに言っておくが、そのかたを恐れなさい。

六五羽のすずめは二アサリオンで売られているではないか。しかも、
その一羽も神のみまえで忘れられてはいない。七その上、あなたがた
の頭の毛までも、みな数えられている。恐れることはない。あなた
がたは多くのすずめよりも、まさった者である。八そこで、あなたが
たに言う。だれでも人の前でわたしを受けいれる者を、人の子も神
の使たちの前で受けいれるであろう。九しかし、人の前でわたしを拒
む者は、神の使たちの前で拒まれるであろう。一〇また、人の子に言
い逆らう者はゆるされるであろうが、聖霊をけがす者は、ゆるされる
ことはない。一一あなたがたが会堂や役人や高官の前へひっぱられて
行った場合には、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しない
がよい。一二言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださるからで
ある」。

一三群衆の中のひとりがイエスに言った、「先生、わたしの兄弟に、
遺産を分けてくれるようにおっしゃってください」。一四彼に言われ
た、「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立て

たのか」。一五それから人々にむかって言われた、「あらゆる貪欲に対
してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人
のいのちは、持ち物にはよらないのである」。一六そこで一つの譬を
語られた、「ある金持の畑が豊作であった。一七そこで彼は心の中で、
『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思い
めぐらして一八言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっ
と大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。一九そ
して自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がた
くさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。二〇
すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちに
も取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれの
ものになるのか』。二一自分のために宝を積んで神に対して富まない
者は、これと同じである」。

二二それから弟子たちに言われた、「それだから、あなたがたに言っ
ておく。何を食べようかと、命のことで思いわずらい、何を着ようか

とからだのことで思いわずらうな。二三命は食物にまさり、からだは
着物にまさっている。二四からすのことを考えて見よ。まくことも、
刈ることもせず、また、納屋もなく倉もない。それだのに、神は彼ら
を養っていて下さる。あなたがたは鳥よりも、はるかにすぐれてい
るではないか。二五あなたがたのうち、だれが思いわずらったからと
て、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。二六そんな小
さな事さえできないのに、どうしてほかのことを思いわずらうのか。
二七野の花のことを考えて見るがよい。紡ぎもせず、織りもしない。
しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、
この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。二八きょうは野にあっ
て、あすは炉に投げ入れられる草でさえ、神はこのように装って下さ
るのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろ
うか。ああ、信仰の薄い者たちよ。二九あなたがたも、何を食べ、何
を飲もうかと、あくせくするな、また気を使うな。三〇これらのもの
は皆、この世の異邦人が切に求めているものである。あなたがたの父

は、これらのものがあなたがたに必要であることを、ご存じである。
三一ただ、御国を求めなさい。そうすれば、これらのものは添えて与
えられるであろう。三二恐れるな、小さい群れよ。御国を下さること
は、あなたがたの父のみこころなのである。三三自分の持ち物を売っ
て、施しなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、盗人
も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえ
なさい。三四あなたがたの宝のある所には、心もあるからである。
三五腰に帯をしめ、あかりをともしていなさい。三六主人が婚宴か
ら帰ってきて戸をたたくとき、すぐあけてあげようと待っている人
のようにしていなさい。三七主人が帰ってきたとき、目を覚している
のを見られる僕たちは、さいわいである。よく言っておく。主人が
帯をしめて僕たちを食卓につかせ、進み寄って給仕をしてくれるで
あろう。三八主人が夜中ごろ、あるいは夜明けごろに帰ってきても、
そうしているのを見られるなら、その人たちはさいわいである。三九
このことを、わきまえているがよい。家の主人は、盗賊がいつごろ

来るかわかっているなら、自分の家に押し入らせはしないであろう。
四〇あなたがたも用意していなさい。思いがけない時に人の子が来る
からである」。
四一するとペテロが言った、「主よ、この譬を話しておられるのは
わたしたちのためなのですか。それとも、みんなの者のためなのです
か」。四二そこで主が言われた、「主人が、召使たちの上に立てて、時
に応じて定めの食事をそなえさせる忠実な思慮深い家令は、いった
いだれであろう。四三主人が帰ってきたとき、そのようにつとめてい
るのを見られる僕は、さいわいである。四四よく言っておくが、主人
はその僕を立てて自分の全財産を管理させるであろう。四五しかし、
もしその僕が、主人の帰りがおそいと心の中で思い、男女の召使たち
を打ちたたき、そして食べたり、飲んだりして酔いはじめるならば、
四六その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰って来るで
あろう。そして、彼を厳罰に処して、不忠実なものたちと同じ目にあ
わせるであろう。四七主人のこころを知っていながら、それに従って

用意もせず勤めもしなかった僕は、多くむち打たれるであろう。四八
しかし、知らずに打たれるようなことをした者は、打たれ方が少ない
だろう。多く与えられた者からは多く求められ、多く任せられた者
からは更に多く要求されるのである。
四九わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃え
ていたならと、わたしはどんなに願っていることか。五〇しかし、わ
たしには受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受け
てしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろ
う。五一あなたがたは、わたしが平和をこの地上にもたらすためにき
たと思っているのか。あなたがたに言っておく。そうではない。む
しろ分裂である。五二というのは、今から後は、一家の内で五人が相
分れて、三人はふたりに、ふたりは三人に対立し、五三また父は子に、
子は父に、母は娘に、娘は母に、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめ
に、対立するであろう」。
五四イエスはまた群衆に対しても言われた、「あなたがたは、雲が

西に起るのを見るとすぐ、にわか雨がやって来る、と言う。果してそ
のとおりになる。五五それから南風が吹くと、暑くなるだろう、と
言う。果してそのとおりになる。五六偽善者よ、あなたがたは天地の
模様を見分けることを知りながら、どうして今の時代を見分けること
ができないのか。五七また、あなたがたは、なぜ正しいことを自分で
判断しないのか。五八たとえば、あなたを訴える人と一緒に役人のと
ころへ行くときには、途中でその人と和解するように努めるがよい。
そうしないと、その人はあなたを裁判官のところへひっぱって行き、
裁判官はあなたを獄吏に引き渡し、獄吏はあなたを獄に投げ込むで
あろう。五九わたしは言って置く、最後の一レプタまでも支払ってし
まうまでは、決してそこから出て来ることはできない」。
第一三章一ちょうどその時、ある人々がきて、ピラトがガリラヤ人
たちの血を流し、それを彼らの血に混ぜたことを、イエスに
知らせた。二そこでイエスは答えて言われた、「それらのガリラヤ人
が、そのような災難にあったからといって、他のすべてのガリラヤ

人以上に罪が深かったと思うのか。三あなたがたに言うが、そうでは
ない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであ
ろう。四また、シロアムの塔が倒れたためにおし殺されたあの十八人
は、エルサレムの他の全住民以上に罪の負債があったと思うか。五あ
なたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、
みな同じように滅びるであろう」。

六それから、この譬を語られた、「ある人が自分のぶどう園にいち
じくの木を植えて置いたので、実を捜しにきたが見つからなかった。
七そこで園丁に言った、『わたしは三年間も実を求めて、このいちじ
くの木のところにきたのだが、いまだに見あたらない。その木を切り
倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか』。
八すると園丁は答えて言った、『ご主人様、ことしも、そのままにし
て置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから。九
それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、
切り倒してください』。

一〇安息日に、ある会堂で教えておられると、一一そこに十八年間
も病気の霊につかれ、かがんだままで、からだを伸ばすことの全くで
きない女がいた。一二イエスはこの女を見て、呼びよせ、「女よ、あ
なたの病気はなおった」と言って、一三手をその上に置かれた。する
と立ちどころに、そのからだがまっすぐになり、そして神をたたえ
はじめた。一四ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされ
たことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。そ
の間に、なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。一五主
はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、
安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ま
せに引き出してやるではないか。一六それなら、十八年間もサタンに
縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、
その束縛から解いてやるべきではなかったか」。一七こう言われたの
で、イエスに反対していた人たちはみな恥じ入った。そして群衆はこ
ぞって、イエスがなされたすべてのすばらしいみわざを見て喜んだ。

一八そこで言われた、「神の国は何に似ているか。またそれを何に
たとえようか。一九一粒のからし種のようなものである。ある人がそ
れを取って庭にまくと、育って木となり、空の鳥もその枝に宿るよう
になる」。二〇また言われた、「神の国を何にたとえようか。二一パン
種のようなものである。女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると、
全体がふくらんでくる」。

二二さてイエスは教えながら町々村々を通り過ぎ、エルサレムへと
旅を続けられた。二三すると、ある人がイエスに、「主よ、救われる
人は少ないのですか」と尋ねた。二四そこでイエスは人々にむかって
言われた、「狭い戸口からはいるように努めなさい。事実、はいろう
としても、はいれない人が多いのだから。二五家の主人が立って戸を
閉じてしまってから、あなたがたが外に立ち戸をたたき始めて、『ご
主人様、どうぞあけてください』と言っても、主人はそれに答えて、
『あなたがたがどこからきた人なのか、わたしは知らない』と言うで
あろう。二六そのとき、『わたしたちはあなたとご一緒に飲み食いし

ました。また、あなたはわたしたちの大通りで教えてくださいまし
た』と言い出しても、二七彼は、『あなたがたがどこからきた人なの
か、わたしは知らない。悪事を働く者どもよ、みんな行ってしまえ』
と言うであろう。二八あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブや
すべての預言者たちが、神の国にはいっているのに、自分たちは外に
投げ出されることになれば、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりす
るであろう。二九それから人々が、東から西から、また南から北から
きて、神の国で宴会の席につくであろう。三〇こうしてあとのもので
先になるものがあり、また、先のものであとになるものもある」。
三一ちょうどその時、あるパリサイ人たちが、イエスに近寄ってき
て言った、「ここから出て行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうとし
ています」。三二そこで彼らに言われた、「あのきつねのところへ行っ
てこう言え、『見よ、わたしはきょうもあすも悪霊を追い出し、また、
病気をいやし、そして三日目にわざを終えるであろう。三三しかし、
きょうもあすも、またその次の日も、わたしは進んで行かねばならな

い。預言者がエルサレム以外の地で死ぬことは、あり得ないからで
ある』。三四ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、お
まえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ。ちょうどめんどりが
翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集め
ようとしたことであろう。それだのに、おまえたちは応じようとし
なかった。三五見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう。わたし
は言って置く、
『主の名によってきたるものに、祝福あれ』
とおまえたちが言う時の来るまでは、再びわたしに会うことはない
であろう」。

第一四章一ある安息日のこと、食事をするために、あるパリサイ派
のかしらの家にはいって行かれたが、人々はイエスの様子をうかがっ
ていた。二するとそこに、水腫をわずらっている人が、みまえにいた。
三イエスは律法学者やパリサイ人たちにむかって言われた、「安息日
に人をいやすのは、正しいことかどうか」。四彼らは黙っていた。そ

こでイエスはその人に手を置いていやしてやり、そしてお帰しになっ
た。五それから彼らに言われた、「あなたがたのうちで、自分のむす
こか牛が井戸に落ち込んだなら、安息日だからといって、すぐに引き
上げてやらない者がいるだろうか」。六彼らはこれに対して返す言葉
がなかった。
七客に招かれた者たちが上座を選んでいる様子をごらんになって、
彼らに一つの譬を語られた。八「婚宴に招かれたときには、上座につ
くな。あるいは、あなたよりも身分の高い人が招かれているかも知
れない。九その場合、あなたとその人とを招いた者がきて、『このか
たに座を譲ってください』と言うであろう。そのとき、あなたは恥
じ入って末座につくことになるであろう。一〇むしろ、招かれた場合
には、末座に行ってすわりなさい。そうすれば、招いてくれた人が
きて、『友よ、上座の方へお進みください』と言うであろう。そのと
き、あなたは席を共にするみんなの前で、面目をほどこすことになる
であろう。一一おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低く

する者は高くされるであろう」。
一二また、イエスは自分を招いた人に言われた、「午餐または晩餐
の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持の隣り人などは呼ば
ぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を
受けることになるから。一三むしろ、宴会を催す場合には、貧乏人、
不具者、足なえ、盲人などを招くがよい。一四そうすれば、彼らは返礼
ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の
復活の際には、あなたは報いられるであろう」。
一五列席者のひとりがこれを聞いてイエスに「神の国で食事をする
人は、さいわいです」と言った。一六そこでイエスが言われた、「あ
る人が盛大な晩餐会を催して、大ぜいの人を招いた。一七晩餐の時刻
になったので、招いておいた人たちのもとに僕を送って、『さあ、お
いでください。もう準備ができましたから』と言わせた。一八ところ
が、みんな一様に断りはじめた。最初の人は、『わたしは土地を買い
ましたので、行って見なければなりません。どうぞ、おゆるしくださ

い』と言った。一九ほかの人は、『わたしは五対の牛を買いましたの
で、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるしください』、二
〇もうひとりの人は、『わたしは妻をめとりましたので、参ることがで
きません』と言った。二一僕は帰ってきて、以上の事を主人に報告し
た。すると家の主人はおこって僕に言った、『いますぐに、町の大通
りや小道へ行って、貧乏人、不具者、盲人、足なえなどを、ここへ連
れてきなさい』。二二僕は言った、『ご主人様、仰せのとおりにいたし
ましたが、まだ席がございます』。二三主人が僕に言った、『道やかき
ねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を
無理やりにひっぱってきなさい。二四あなたがたに言って置くが、招
かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう』」。

二五大ぜいの群衆がついてきたので、イエスは彼らの方に向いて言
われた、二六「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分
の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子
となることはできない。二七自分の十字架を負うてわたしについて来

るものでなければ、わたしの弟子となることはできない。二八あなた
がたのうちで、だれかが邸宅を建てようと思うなら、それを仕上げ
るのに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため、まず、す
わってその費用を計算しないだろうか。二九そうしないと、土台をす
えただけで完成することができず、見ているみんなの人が、三〇『あ
の人は建てかけたが、仕上げができなかった』と言ってあざ笑うよう
になろう。三一また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えるために
出て行く場合には、まず座して、こちらの一万人をもって、二万人を
率いて向かって来る敵に対抗できるかどうか、考えて見ないだろう
か。三二もし自分の力にあまれば、敵がまだ遠くにいるうちに、使者
を送って、和を求めるであろう。三三それと同じように、あなたがた
のうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたし
の弟子となることはできない。三四塩は良いものだ。しかし、塩もき
きめがなくなったら、何によって塩味が取りもどされようか。三五土
にも肥料にも役立たず、外に投げ捨てられてしまう。聞く耳のある

ものは聞くがよい」。
第一五章 一さて、取税人や罪人たちが皆、イエスの話を聞こうとし
て近寄ってきた。二するとパリサイ人や律法学者たちがつぶやいて、
「この人は罪人たちを迎えて一緒に食事をしている」と言った。三そ
こでイエスは彼らに、この譬をお話しになった、四「あなたがたのう
ちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなっ
たら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけ
るまでは捜し歩かないであろうか。五そして見つけたら、喜んでそれ
を自分の肩に乗せ、六家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め、『わ
たしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』
と言うであろう。七よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひと
りでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人
のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。
八また、ある女が銀貨十枚を持っていて、もしその一枚をなくした
とすれば、彼女はあかりをつけて家中を掃き、それを見つけるまでは

注意深く捜さないであろうか。九そして、見つけたなら、女友だちや
近所の女たちを呼び集めて、『わたしと一緒に喜んでください。なく
した銀貨が見つかりましたから』と言うであろう。一〇よく聞きなさ
い。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使
たちの前でよろこびがあるであろう」。

一一また言われた、「ある人に、ふたりのむすこがあった。一二とこ
ろが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがい
ただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやっ
た。一三それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とり
まとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果
した。一四何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききん
があったので、彼は食べることにも窮しはじめた。一五そこで、その
地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼
を畑にやって豚を飼わせた。一六彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満
たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。一七そこ

で彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っ
ている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとして
いる。一八立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたし
は天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。一九もう、
あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひと
り同様にしてください』。二〇そこで立って、父のところへ出かけた。
まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、
その首をだいて接吻した。二一むすこは父に言った、『父よ、わたしは
天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたの
むすこと呼ばれる資格はありません』。二二しかし父は僕たちに言い
つけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪
を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。二三また、肥えた子牛を
引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。二四このむす
こが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったの
だから』。それから祝宴がはじまった。二五ところが、兄は畑にいた

が、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、二六ひ
とりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。二七
僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えた
というので、父上が肥えた子牛をほふらせなさったのです』。二八兄
はおこって家にはいろうとしなかったので、父が出てきてなだめる
と、二九兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕え
て、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友
だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。三〇そ
れだのに、遊女どもと一緒になって、あなたの身代を食いつぶした
このあなたの子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりな
さいました』。三一すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたし
と一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。三二しか
し、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていた
のに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』」。

第一六章
一イエスはまた、弟子たちに言われた、「ある金持のとこ

ろにひとりの家令がいたが、彼は主人の財産を浪費していると、告げ
口をする者があった。二そこで主人は彼を呼んで言った、『あなたに
ついて聞いていることがあるが、あれはどうなのか。あなたの会計
報告を出しなさい。もう家令をさせて置くわけにはいかないから』。
三この家令は心の中で思った、『どうしようか。主人がわたしの職を
取り上げようとしている。土を掘るには力がないし、物ごいするのは
恥ずかしい。四そうだ、わかった。こうしておけば、職をやめさせら
れる場合、人々がわたしをその家に迎えてくれるだろう』。五それか
ら彼は、主人の負債者をひとりびとり呼び出して、初めの人に、『あな
たは、わたしの主人にどれだけ負債がありますか』と尋ねた。六『油
百樽です』と答えた。そこで家令が言った、『ここにあなたの証書が
ある。すぐそこにすわって、五十樽と書き変えなさい』。七次に、も
うひとりに、『あなたの負債はどれだけですか』と尋ねると、『麦百
石です』と答えた。これに対して、『ここに、あなたの証書があるが、
八十石と書き変えなさい』と言った。八ところが主人は、この不正な

家令の利口なやり方をほめた。この世の子らはその時代に対しては、
光の子らよりも利口である。九またあなたがたに言うが、不正の富を
用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富
が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであ
ろう。一〇小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして、小事に
不忠実な人は大事にも不忠実である。一一だから、もしあなたがたが
不正の富について忠実でなかったら、だれが真の富を任せるだろう
か。一二また、もしほかの人のものについて忠実でなかったら、だれ
があなたがたのものを与えてくれようか。一三どの僕でも、ふたりの
主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、ある
いは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、
神と富とに兼ね仕えることはできない」。
一四欲の深いパリサイ人たちが、すべてこれらの言葉を聞いて、イ
エスをあざ笑った。一五そこで彼らにむかって言われた、「あなたが
たは、人々の前で自分を正しいとする人たちである。しかし、神は

あなたがたの心をご存じである。人々の間で尊ばれるものは、神の
みまえでは忌みきらわれる。一六律法と預言者とはヨハネの時までの
ものである。それ以来、神の国が宣べ伝えられ、人々は皆これに突入
している。一七しかし、律法の一画が落ちるよりは、天地の滅びる方
が、もっとたやすい。一八すべて自分の妻を出して他の女をめとる者
は、姦淫を行うものであり、また、夫から出された女をめとる者も、
姦淫を行うものである。

一九ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊
び暮していた。二〇ところが、ラザロという貧乏人が全身でき物でお
おわれて、この金持の玄関の前にすわり、二一その食卓から落ちるも
ので飢えをしのごうと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物を
なめていた。二二この貧乏人がついに死に、御使たちに連れられてア
ブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。二三そして
黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところ
にいるラザロとが、はるかに見えた。二四そこで声をあげて言った、

『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつか
わしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてく
ださい。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。二五アブ
ラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを
受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰
められ、あなたは苦しみもだえている。二六そればかりか、わたした
ちとあなたがたとの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあ
なたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたした
ちの方へ越えて来ることもできない』。二七そこで金持が言った、『父
よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてくださ
い。二八わたしに五人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来るこ
とがないように、彼らに警告していただきたいのです』。二九アブラ
ハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよ
かろう』。三〇金持が言った、『いいえ、父アブラハムよ、もし死人
の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは

悔い改めるでしょう』。三一アブラハムは言った、『もし彼らがモーセ
と預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者
があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』」。
第一七章一イエスは弟子たちに言われた、「罪の誘惑が来ることは
避けられない。しかし、それをきたらせる者は、わざわいである。二
これらの小さい者のひとりを罪に誘惑するよりは、むしろ、ひきうす
を首にかけられて海に投げ入れられた方が、ましである。三あなたが
たは、自分で注意していなさい。もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、
彼をいさめなさい。そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい。四も
しあなたに対して一日に七度罪を犯し、そして七度『悔い改めます』
と言ってあなたのところへ帰ってくれば、ゆるしてやるがよい」。
五使徒たちは主に「わたしたちの信仰を増してください」と言った。
六そこで主が言われた、「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、
この桑の木に、『抜け出して海に植われ』と言ったとしても、その言葉
どおりになるであろう。七あなたがたのうちのだれかに、耕作か牧畜

かをする僕があるとする。その僕が畑から帰って来たとき、彼に『す
ぐきて、食卓につきなさい』と言うだろうか。八かえって、『夕食の
用意をしてくれ。そしてわたしが飲み食いをするあいだ、帯をしめ
て給仕をしなさい。そのあとで、飲み食いをするがよい』と、言う
ではないか。九僕が命じられたことをしたからといって、主人は彼に
感謝するだろうか。一〇同様にあなたがたも、命じられたことを皆し
てしまったとき、『わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をした
に過ぎません』と言いなさい」。
一一イエスはエルサレムへ行かれるとき、サマリヤとガリラヤとの
間を通られた。一二そして、ある村にはいられると、十人のらい病人
に出会われたが、彼らは遠くの方で立ちとどまり、一三声を張りあげ
て、「イエスさま、わたしたちをあわれんでください」と言った。一
四イエスは彼らをごらんになって、「祭司たちのところに行って、か
らだを見せなさい」と言われた。そして、行く途中で彼らはきよめら
れた。一五そのうちのひとりは、自分がいやされたことを知り、大声

で神をほめたたえながら帰ってきて、一六イエスの足もとにひれ伏し
て感謝した。これはサマリヤ人であった。一七イエスは彼にむかって
言われた、「きよめられたのは、十人ではなかったか。ほかの九人は、
どこにいるのか。一八神をほめたたえるために帰ってきたものは、こ
の他国人のほかにはいないのか」。一九それから、その人に言われた、
「立って行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ」。
二〇神の国はいつ来るのかと、パリサイ人が尋ねたので、イエスは
答えて言われた、「神の国は、見られるかたちで来るものではない。
二一また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神
の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」。
二二それから弟子たちに言われた、「あなたがたは、人の子の日を一
日でも見たいと願っても見ることができない時が来るであろう。二三
人々はあなたがたに、『見よ、あそこに』『見よ、ここに』と言うだろ
う。しかし、そちらへ行くな、彼らのあとを追うな。二四いなずまが
天の端からひかり出て天の端へとひらめき渡るように、人の子もその

日には同じようであるだろう。二五しかし、彼はまず多くの苦しみを
受け、またこの時代の人々に捨てられねばならない。二六そして、ノ
アの時にあったように、人の子の時にも同様なことが起るであろう。
二七ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎな
どしていたが、そこへ洪水が襲ってきて、彼らをことごとく滅ぼした。
二八ロトの時にも同じようなことが起った。人々は食い、飲み、買い、
売り、植え、建てなどしていたが、二九ロトがソドムから出て行った
日に、天から火と硫黄とが降ってきて、彼らをことごとく滅ぼした。
三〇人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう。三一その日
には、屋上にいる者は、自分の持ち物が家の中にあっても、取りにお
りるな。畑にいる者も同じように、あとへもどるな。三二ロトの妻の
ことを思い出しなさい。三三自分の命を救おうとするものは、それを
失い、それを失うものは、保つのである。三四あなたがたに言ってお
く。その夜、ふたりの男が一つ寝床にいるならば、ひとりは取り去ら
れ、他のひとりは残されるであろう。三五ふたりの女が一緒にうすを

ひいているならば、ひとりは取り去られ、他のひとりは残されるであ
ろう。〔三六ふたりの男が畑におれば、ひとりは取り去られ、他のひ
とりは残されるであろう〕」。三七弟子たちは「主よ、それはどこであ
るのですか」と尋ねた。するとイエスは言われた、「死体のある所に
は、またはげたかが集まるものである」。

第一八章一また、イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々
に譬で教えられた。二「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ
裁判官がいた。三ところが、その同じ町にひとりのやもめがいて、彼
のもとにたびたびきて、『どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わ
たしを守ってください』と願いつづけた。四彼はしばらくの間きき入
れないでいたが、そののち、心のうちで考えた、『わたしは神をも恐
れず、人を人とも思わないが、五このやもめがわたしに面倒をかける
から、彼女のためになる裁判をしてやろう。そうしたら、絶えずやっ
てきてわたしを悩ますことがなくなるだろう』」。六そこで主は言われ
た、「この不義な裁判官の言っていることを聞いたか。七まして神は、

日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長
い間そのままにしておかれることがあろうか。八あなたがたに言って
おくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう。しかし、人の子
が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」。
九自分を義人だと自任して他人を見下げている人たちに対して、イ
エスはまたこの譬をお話しになった。一〇「ふたりの人が祈るために
宮に上った。そのひとりはパリサイ人であり、もうひとりは取税人
であった。一一パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わ
たしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者で
はなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。
一二わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげて
います』。一三ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけよ
うともしないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをお
ゆるしください』と。一四あなたがたに言っておく。神に義とされて
自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではな

かった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者
は高くされるであろう」。
一五イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに
連れてきた。ところが、弟子たちはそれを見て、彼らをたしなめた。
一六するとイエスは幼な子らを呼び寄せて言われた、「幼な子らをわ
たしのところに来るままにしておきなさい、止めてはならない。神
の国はこのような者の国である。一七よく聞いておくがよい。だれで
も幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいる
ことは決してできない」。
一八また、ある役人がイエスに尋ねた、「よき師よ、何をしたら永遠
の生命が受けられましょうか」。一九イエスは言われた、「なぜわたし
をよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。二〇いまし
めはあなたの知っているとおりである、『姦淫するな、殺すな、盗む
な、偽証を立てるな、父と母とを敬え』」。二一すると彼は言った、「そ
れらのことはみな、小さい時から守っております」。二二イエスはこ

れを聞いて言われた、「あなたのする事がまだ一つ残っている。持っ
ているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そ
うすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきな
さい」。二三彼はこの言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持であった
からである。二四イエスは彼の様子を見て言われた、「財産のある者
が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。二五富んでい
る者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとや
さしい」。二六これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われること
ができるのですか」と尋ねると、二七イエスは言われた、「人にはでき
ない事も、神にはできる」。二八ペテロが言った、「ごらんなさい、わ
たしたちは自分のものを捨てて、あなたに従いました」。二九イエス
は言われた、「よく聞いておくがよい。だれでも神の国のために、家、
妻、兄弟、両親、子を捨てた者は、三〇必ずこの時代ではその幾倍も
を受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受けるのである」。
三一イエスは十二弟子を呼び寄せて言われた、「見よ、わたしたち

はエルサレムへ上って行くが、人の子について預言者たちがしるし
たことは、すべて成就するであろう。三二人の子は異邦人に引きわた
され、あざけられ、はずかしめを受け、つばきをかけられ、三三また、
むち打たれてから、ついに殺され、そして三日目によみがえるであろ
う」。三四弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。こ
の言葉が彼らに隠されていたので、イエスの言われた事が理解でき
なかった。

三五イエスがエリコに近づかれたとき、ある盲人が道ばたにすわっ
て、物ごいをしていた。三六群衆が通り過ぎる音を耳にして、彼は何事
があるのかと尋ねた。三七ところが、ナザレのイエスがお通りなのだ
と聞かされたので、三八声をあげて、「ダビデの子イエスよ、わたし
をあわれんで下さい」と言った。三九先頭に立つ人々が彼をしかって
黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた、「ダビデの
子よ、わたしをあわれんで下さい」。四〇そこでイエスは立ちどまっ
て、その者を連れて来るように、とお命じになった。彼が近づいたと

き、四一「わたしに何をしてほしいのか」とおたずねになると、「主
よ、見えるようになることです」と答えた。四二そこでイエスは言わ
れた、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った」。四三す
ると彼は、たちまち見えるようになった。そして神をあがめながら
イエスに従って行った。これを見て、人々はみな神をさんびした。

第一九章一さて、イエスはエリコにはいって、その町をお通りに
なった。二ところが、そこにザアカイという名の人がいた。この人は
取税人のかしらで、金持であった。三彼は、イエスがどんな人か見た
いと思っていたが、背が低かったので、群衆にさえぎられて見ること
ができなかった。四それでイエスを見るために、前の方に走って行っ
て、いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからであ
る。五イエスは、その場所にこられたとき、上を見あげて言われた、
「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まる
ことにしているから」。六そこでザアカイは急いでおりてきて、よろ
こんでイエスを迎え入れた。七人々はみな、これを見てつぶやき、「彼

は罪人の家にはいって客となった」と言った。八ザアカイは立って主
に言った、「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施しま
す。また、もしだれかから不正な取立てをしていましたら、それを
四倍にして返します」。九イエスは彼に言われた、「きょう、救がこの
家にきた。この人もアブラハムの子なのだから。一〇人の子がきたの
は、失われたものを尋ね出して救うためである」。
一一人々がこれらの言葉を聞いているときに、イエスはなお一つの
譬をお話しになった。それはエルサレムに近づいてこられたし、また
人々が神の国はたちまち現れると思っていたためである。一二それで
言われた、「ある身分の高い人が、王位を受けて帰ってくるために遠
い所へ旅立つことになった。一三そこで十人の僕を呼び十ミナを渡し
て言った、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』。一四
ところが、本国の住民は彼を憎んでいたので、あとから使者をおくっ
て、『この人が王になるのをわれわれは望んでいない』と言わせた。
一五さて、彼が王位を受けて帰ってきたとき、だれがどんなもうけを

したかを知ろうとして、金を渡しておいた僕たちを呼んでこさせた。
一六最初の者が進み出て言った、『ご主人様、あなたの一ミナで十ミ
ナをもうけました』。一七主人は言った、『よい僕よ、うまくやった。
あなたは小さい事に忠実であったから、十の町を支配させる』。一八
次の者がきて言った、『ご主人様、あなたの一ミナで五ミナをつくり
ました』。一九そこでこの者にも、『では、あなたは五つの町のかしら
になれ』と言った。二〇それから、もうひとりの者がきて言った、『ご
主人様、さあ、ここにあなたの一ミナがあります。わたしはそれをふ
くさに包んで、しまっておきました。二一あなたはきびしい方で、お
あずけにならなかったものを取りたて、おまきにならなかったもの
を刈る人なので、おそろしかったのです』。二二彼に言った、『悪い僕
よ、わたしはあなたの言ったその言葉であなたをさばこう。わたし
がきびしくて、あずけなかったものを取りたて、まかなかったものを
刈る人間だと、知っているのか。二三では、なぜわたしの金を銀行に
入れなかったのか。そうすれば、わたしが帰ってきたとき、その金を

利子と一緒に引き出したであろうに』。二四そして、そばに立ってい
た人々に、『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナを持っている者
に与えなさい』と言った。二五彼らは言った、『ご主人様、あの人は
既に十ミナを持っています』。二六『あなたがたに言うが、おおよそ
持っている人には、なお与えられ、持っていない人からは、持ってい
るものまでも取り上げられるであろう。二七しかしわたしが王になる
ことを好まなかったあの敵どもを、ここにひっぱってきて、わたしの
前で打ち殺せ』」。

二八イエスはこれらのことを言ったのち、先頭に立ち、エルサレム
へ上って行かれた。二九そしてオリブという山に沿ったベテパゲとベ
タニヤに近づかれたとき、ふたりの弟子をつかわして言われた、三〇
「向こうの村へ行きなさい。そこにはいったら、まだだれも乗ったこ
とのないろばの子がつないであるのを見るであろう。それを解いて、
引いてきなさい。三一もしだれかが『なぜ解くのか』と問うたら、『主
がお入り用なのです』と、そう言いなさい」。三二そこで、つかわさ

れた者たちが行って見ると、果して、言われたとおりであった。三三
彼らが、そのろばの子を解いていると、その持ち主たちが、「なぜろ
ばの子を解くのか」と言ったので、三四「主がお入り用なのです」と
答えた。三五そしてそれをイエスのところに引いてきて、その子ろば
の上に自分たちの上着をかけてイエスをお乗せした。三六そして進ん
で行かれると、人々は自分たちの上着を道に敷いた。三七いよいよオ
リブ山の下り道あたりに近づかれると、大ぜいの弟子たちはみな喜
んで、彼らが見たすべての力あるみわざについて、声高らかに神をさ
んびして言いはじめた、

三八「主の御名によってきたる王に、
祝福あれ。
天には平和、
いと高きところには栄光あれ」。

三九ところが、群衆の中にいたあるパリサイ人たちがイエスに言った、
「先生、あなたの弟子たちをおしかり下さい」。四〇答えて言われた、

「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」。
四一いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣い
て言われた、四二「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知っ
てさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。四三
いつかは、敵が周囲に塁を築き、おまえを取りかこんで、四方から
押し迫り、四四おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の
一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、
おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」。四五それ
から宮にはいり、商売人たちを追い出しはじめて、四六彼らに言われ
た、「『わが家は祈の家であるべきだ』と書いてあるのに、あなたがた
はそれを盗賊の巣にしてしまった」。
四七イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者また民衆
の重立った者たちはイエスを殺そうと思っていたが、四八民衆がみな
熱心にイエスに耳を傾けていたので、手のくだしようがなかった。
第二〇章一ある日、イエスが宮で人々に教え、福音を宣べておられ

ると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと共に近寄ってきて、二イ
エスに言った、「何の権威によってこれらの事をするのですか。そう
する権威をあなたに与えたのはだれですか、わたしたちに言ってく
ださい」。三そこで、イエスは答えて言われた、「わたしも、ひと言た
ずねよう。それに答えてほしい。四ヨハネのバプテスマは、天からで
あったか、人からであったか」。五彼らは互に論じて言った、「もし天
からだと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言
うだろう。六しかし、もし人からだと言えば、民衆はみな、ヨハネを
預言者だと信じているから、わたしたちを石で打つだろう」。七それ
で彼らは「どこからか、知りません」と答えた。八イエスはこれに対
して言われた、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、
あなたがたに言うまい」。

九そこでイエスは次の譬を民衆に語り出された、「ある人がぶどう
園を造って農夫たちに貸し、長い旅に出た。一〇季節になったので、
農夫たちのところへ、ひとりの僕を送って、ぶどう園の収穫の分け

前を出させようとした。ところが、農夫たちは、その僕を袋だたき
にし、から手で帰らせた。一一そこで彼はもうひとりの僕を送った。一
彼らはその僕も袋だたきにし、侮辱を加えて、から手で帰らせた。一
二そこで更に三人目の者を送ったが、彼らはこの者も、傷を負わせて
追い出した。一三ぶどう園の主人は言った、『どうしようか。そうだ、
わたしの愛子をつかわそう。これなら、たぶん敬ってくれるだろう』。
一四ところが、農夫たちは彼を見ると、『あれはあと取りだ。あれを
殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるの
だ』と互に話し合い、一五彼をぶどう園の外に追い出して殺した。そ
のさい、ぶどう園の主人は、彼らをどうするだろうか。一六彼は出て
きて、この農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう」。
人々はこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。
一七そこで、イエスは彼らを見つめて言われた、「それでは、

『家造りらの捨てた石が
隅のかしら石になった』

と書いてあるのは、どういうことか。一八すべてその石の上に落ちる
者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこな
みじんにされるであろう」。
一九このとき、律法学者たちや祭司長たちはイエスに手をかけよう
と思ったが、民衆を恐れた。いまの譬が自分たちに当てて語られたの
だと、悟ったからである。二〇そこで、彼らは機会をうかがい、義人
を装うまわし者どもを送って、イエスを総督の支配と権威とに引き渡
すため、その言葉じりを捕えさせようとした。二一彼らは尋ねて言っ
た、「先生、わたしたちは、あなたの語り教えられることが正しく、ま
た、あなたは分け隔てをなさらず、真理に基いて神の道を教えてお
れることを、承知しています。二二ところで、カイザルに貢を納めて
よいでしょうか、いけないでしょうか」。二三イエスは彼らの悪巧み
を見破って言われた、二四「デナリを見せなさい。それにあるのは、
だれの肖像、だれの記号なのか」。「カイザルのです」と、彼らが答
えた。二五するとイエスは彼らに言われた、「それなら、カイザルの

ものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。二六そこで彼らは、
民衆の前でイエスの言葉じりを捕えることができず、その答に驚嘆
して、黙ってしまった。
二七復活ということはないと言い張っていたサドカイ人のある者た
ちが、イエスに近寄ってきて質問した、二八「先生、モーセは、わたし
たちのためにこう書いています、『もしある人の兄が妻をめとり、子
がなくて死んだなら、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけ
ねばならない』。二九ところで、ここに七人の兄弟がいました。長男
は妻をめとりましたが、子がなくて死に、三〇そして次男、三男と、
次々に、その女をめとり、三一七人とも同様に、子をもうけずに死に
ました。三二のちに、その女も死にました。三三さて、復活の時には、
この女は七人のうち、だれの妻になるのですか。七人とも彼女を妻に
したのですが」。三四イエスは彼らに言われた、「この世の子らは、め
とったり、とついだりするが、三五かの世にはいって死人からの復活
にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついだりすること

はない。三六彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆ
えに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。
三七死人がよみがえることは、モーセも柴の篇で、主を『アブラハム
の神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、これを示した。三八神は
死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生き
るものだからである」。三九律法学者のうちのある人々が答えて言っ
た、「先生、仰せのとおりです」。四〇彼らはそれ以上何もあえて問い
かけようとしなかった。

四一イエスは彼らに言われた、「どうして人々はキリストをダビデ
の子だと言うのか。四二ダビデ自身が詩篇の中で言っている、

『主はわが主に仰せになった、
四三あなたの敵をあなたの足台とする時までは、
わたしの右に座していなさい』。

四四このように、ダビデはキリストを主と呼んでいる。それなら、ど
うしてキリストはダビデの子であろうか」。

四五民衆がみな聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた、四
六「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣を着て歩くのを好み、
広場での敬礼や会堂の上席や宴会の上座をよろこび、四七やもめたち
の家を食い倒し、見えのために長い祈をする。彼らはもっときびし
いさばきを受けるであろう」。

第二一章一イエスは目をあげて、金持たちがさいせん箱に献金を投
げ入れるのを見られ、二また、ある貧しいやもめが、レプタ二つを入
れるのを見て三言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだ
れよりもたくさん入れたのだ。四これらの人たちはみな、ありあまる
中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持って
いる生活費全部を入れたからである」。

五ある人々が、見事な石と奉納物とで宮が飾られていることを話し
ていたので、イエスは言われた、六「あなたがたはこれらのものをな
がめているが、その石一つでもくずされずに、他の石の上に残ること
もなくなる日が、来るであろう」。七そこで彼らはたずねた、「先生、

では、いつそんなことが起るのでしょうか。またそんなことが起るよ
うな場合には、どんな前兆がありますか」。八イエスが言われた、「あ
なたがたは、惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわた
しの名を名のって現れ、自分がそれだとか、時が近づいたとか、言う
であろう。彼らについて行くな。九戦争と騒乱とのうわさを聞くとき
にも、おじ恐れるな。こうしたことはまず起らねばならないが、終り
はすぐにはこない」。
一〇それから彼らに言われた、「民は民に、国は国に敵対して立ち
上がるであろう。一一また大地震があり、あちこちに疫病やききんが
起り、いろいろ恐ろしいことや天からの物すごい前兆があるであろ
う。一二しかし、これらのあらゆる出来事のある前に、人々はあなた
がたに手をかけて迫害をし、会堂や獄に引き渡し、わたしの名のゆ
えに王や総督の前にひっぱって行くであろう。一三それは、あなたが
たがあかしをする機会となるであろう。一四だから、どう答弁しよう
かと、前もって考えておかないことに心を決めなさい。一五あなたの

反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わた
しが授けるから。一六しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人
にさえ裏切られるであろう。また、あなたがたの中で殺されるもの
もあろう。一七また、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであ
ろう。一八しかし、あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはな
い。一九あなたがたは耐え忍ぶことによって、自分の魂をかち取るで
あろう。

二〇エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、
その滅亡が近づいたとさとりなさい。二一そのとき、ユダヤにいる
人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい。ま
た、いなかにいる者は市内にはいってはいけない。二二それは、聖書
にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ。二三その
日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。地上には
大きな苦難があり、この民にはみ怒りが臨み、二四彼らはつるぎの刃
に倒れ、また捕えられて諸国へ引きゆかれるであろう。そしてエル

サレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられている
であろう。二五また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そし
て、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い、二
六人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろ
う。もろもろの天体が揺り動かされるからである。二七そのとき、大
いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見
るであろう。二八これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげ
なさい。あなたがたの救が近づいているのだから」。

二九それから一つの譬を話された、「いちじくの木を、またすべて
の木を見なさい。三〇はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏
がすでに近いと、自分で気づくのである。三一このようにあなたがた
も、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさ
い。三二よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまで
は、この時代は滅びることがない。三三天地は滅びるであろう。しか
しわたしの言葉は決して滅びることがない。

三四あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍ってい
るうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを
捕えることがないように、よく注意していなさい。三五その日は地の
全面に住むすべての人に臨むのであるから。三六これらの起ろうとし
ているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるよ
うに、絶えず目をさまして祈っていなさい」。
三七イエスは昼のあいだは宮で教え、夜には出て行ってオリブとい
う山で夜をすごしておられた。三八民衆はみな、み教を聞こうとして、
いつも朝早く宮に行き、イエスのもとに集まった。
第二二章一さて、過越といわれている除酵祭が近づいた。二祭司長
たちや律法学者たちは、どうかしてイエスを殺そうと計っていた。
民衆を恐れていたからである。
三そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれていたユ
ダに、サタンがはいった。四すなわち、彼は祭司長たちや宮守がしら
たちのところへ行って、どうしてイエスを彼らに渡そうかと、その

方法について協議した。五彼らは喜んで、ユダに金を与える取決めを
した。六ユダはそれを承諾した。そして、群衆のいないときにイエス
を引き渡そうと、機会をねらっていた。
七さて、過越の小羊をほふるべき除酵祭の日がきたので、八イエス
はペテロとヨハネとを使いに出して言われた、「行って、過越の食事
ができるように準備をしなさい」。九彼らは言った、「どこに準備をし
たらよいのですか」。一〇イエスは言われた、「市内にはいったら、水
がめを持っている男に出会うであろう。その人がはいる家までつい
て行って、一一その家の主人に言いなさい、『弟子たちと一緒に過越
の食事をする座敷はどこか、と先生が言っておられます』。一二する
と、その主人は席の整えられた二階の広間を見せてくれるから、そこ
に用意をしなさい」。一三弟子たちは出て行ってみると、イエスが言
われたとおりであったので、過越の食事の用意をした。
一四時間になったので、イエスは食卓につかれ、使徒たちも共に席
についた。一五イエスは彼らに言われた、「わたしは苦しみを受ける

前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。一
六あなたがたに言って置くが、神の国で過越が成就する時までは、わ
たしは二度と、この過越の食事をすることはない」。一七そして杯を
取り、感謝して言われた、「これを取って、互に分けて飲め。一八あな
たがたに言っておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶ
どうの実から造ったものを、いっさい飲まない」。一九またパンを取
り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「これは、あ
なたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念する
ため、このように行いなさい」。二〇食事ののち、杯も同じ様にして
言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てら
れる新しい契約である。二一しかし、そこに、わたしを裏切る者が、
わたしと一緒に食卓に手を置いている。二二人の子は定められたとお
りに、去って行く。しかし人の子を裏切るその人は、わざわいであ
る」。二三弟子たちは、自分たちのうちのだれが、そんな事をしよう
としているのだろうと、互に論じはじめた。

二四それから、自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうかと言っ
て、争論が彼らの間に、起った。二五そこでイエスが言われた、「異邦
の王たちはその民の上に君臨し、また、権力をふるっている者たちは
恩人と呼ばれる。二六しかし、あなたがたは、そうであってはならな
い。かえって、あなたがたの中でいちばん偉い人はいちばん若い者の
ように、指導する人は仕える者のようになるべきである。二七食卓に
つく人と給仕する者と、どちらが偉いのか。食卓につく人の方では
ないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、給仕をする者のように
している。二八あなたがたは、わたしの試錬のあいだ、わたしと一緒
に最後まで忍んでくれた人たちである。二九それで、わたしの父が国
の支配をわたしにゆだねてくださったように、わたしもそれをあな
たがたにゆだね、三〇わたしの国で食卓について飲み食いをさせ、ま
た位に座してイスラエルの十二の部族をさばかせるであろう。三一シ
モン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけ
ることを願って許された。三二しかし、わたしはあなたがたの信仰がなく

ならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直っ
たときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。三三シモンが言った、
「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に
行く覚悟です」。三四するとイエスが言われた、「ペテロよ、あなたに
言っておく。きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らな
いと言うだろう」。
三五そして彼らに言われた、「わたしが財布も袋もくつも持たせず
にあなたがたをつかわしたとき、何かこまったことがあったか」。彼
らは、「いいえ、何もありませんでした」と答えた。三六そこで言われ
た、「しかし今は、財布のあるものは、それを持って行け。袋も同様
に持って行け。また、つるぎのない者は、自分の上着を売って、それ
を買うがよい。三七あなたがたに言うが、『彼は罪人のひとりに数え
られた』としるしてあることは、わたしの身に成しとげられねばな
らない。そうだ、わたしに係わることは成就している」。三八弟子た
ちが言った、「主よ、ごらんなさい、ここにつるぎが二振りございま

す」。イエスは言われた、「それでよい」。
三九イエスは出て、いつものようにオリブ山に行かれると、弟子た
ちも従って行った。四〇いつもの場所に着いてから、彼らに言われた、
「誘惑に陥らないように祈りなさい」。四一そしてご自分は、石を投げ
てとどくほど離れたところへ退き、ひざまずいて、祈って言われた、
四二「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけ
てください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るように
してください」。四三そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力
づけた。四四イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そし
て、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。四五祈を終えて立ち
あがり、弟子たちのところへ行かれると、彼らが悲しみのはて寝入っ
ているのをごらんになって四六言われた、「なぜ眠っているのか。誘惑
に陥らないように、起きて祈っていなさい」。
四七イエスがまだそう言っておられるうちに、そこに群衆が現れ、
十二弟子のひとりでユダという者が先頭に立って、イエスに接吻し

ようとして近づいてきた。四八そこでイエスは言われた、「ユダ、あ
なたは接吻をもって人の子を裏切るのか」。四九イエスのそばにいた
人たちは、事のなりゆきを見て、「主よ、つるぎで切りつけてやりま
しょうか」と言って、五〇そのうちのひとりが、祭司長の僕に切りつ
け、その右の耳を切り落した。五一イエスはこれに対して言われた、
「それだけでやめなさい」。そして、その僕の耳に手を触て、おいやし
になった。五二それから、自分にむかって来る祭司長、宮守がしら、
長老たちに対して言われた、「あなたがたは、強盗にむかうように剣
や棒を持って出てきたのか。五三毎日あなたがたと一緒に宮にいた時
には、わたしに手をかけなかった。だが、今はあなたがたの時、ま
た、やみの支配の時である」。
五四それから人々はイエスを捕え、ひっぱって大祭司の邸宅へつれ
て行った。ペテロは遠くからついて行った。五五人々は中庭のまん中
に火をたいて、一緒にすわっていたので、ペテロもその中にすわっ
た。五六すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、

彼を見つめて、「この人もイエスと一緒にいました」と言った。五七
ペテロはそれを打ち消して、「わたしはその人を知らない」と言った。
五八しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、「あなたもあの
仲間のひとりだ」。するとペテロは言った、「いや、それはちがう」。
五九約一時間たってから、またほかの者が言い張った、「たしかにこの
人もイエスと一緒だった。この人もガリラヤ人なのだから」。六〇ペ
テロは言った、「あなたの言っていることは、わたしにわからない」。
すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。六一主
は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、「きょう、
鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われた主
のお言葉を思い出した。六二そして外へ出て、激しく泣いた。
　六三イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、
六四目かくしをして、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」ときい
たりした。六五そのほか、いろいろな事を言って、イエスを愚弄した。
六六夜が明けたとき、人民の長老、祭司長たち、律法学者たちが集

まり、イエスを議会に引き出して言った、六七「あなたがキリストな
ら、そう言ってもらいたい」。イエスは言われた、「わたしが言って
も、あなたがたは信じないだろう。六八また、わたしがたずねても、答
えないだろう。六九しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座
するであろう」。七〇彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。
イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。七一すると彼
らは言った、「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の
口から聞いたのだから」。

第二三章 一群衆はみな立ちあがって、イエスをピラトのところへ連
れて行った。二そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民
を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキ
リストだと、となえているところを目撃しました」。三ピラトはイエ
スに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのとお
りである」とお答えになった。四そこでピラトは祭司長たちと群衆と
にむかって言った、「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。五と

ころが彼らは、ますます言いつのってやまなかった、「彼は、ガリラ
ヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動
しているのです」。六ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人か
と尋ね、七そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、
ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そち
らへイエスを送りとどけた。八ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。
それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長
いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと
望んでいたからである。九それで、いろいろと質問を試みたが、イエ
スは何もお答えにならなかった。一〇祭司長たちと律法学者たちとは
立って、激しい語調でイエスを訴えた。一一またヘロデはその兵卒ど
もと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はな
やかな着物を着せてピラトへ送りかえした。一二ヘロデとピラトとは
以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。
一三ピラトは、祭司長たちと役人たちと民衆とを、呼び集めて言っ

た、一四「おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしの
ところに連れてきたので、おまえたちの面前でしらべたが、訴え出て
いるような罪は、この人に少しもみとめられなかった。一五ヘロデも
またみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてき
た。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。一六
だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」。〔一七祭
ごとにピラトがひとりの囚人をゆるしてやることになっていた。〕一
八ところが、彼らはいっせいに叫んで言った、「その人を殺せ。バラ
バをゆるしてくれ」。一九このバラバは、都で起った暴動と殺人との
かどで、獄に投ぜられていた者である。二〇ピラトはイエスをゆるし
てやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。二一しかし彼ら
は、わめきたてて「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と言いつ
づけた。二二ピラトは三度目に彼らにむかって言った、「では、この
人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全く
みとめられなかった。だから、むち打ってから彼をゆるしてやるこ

とにしよう」。二三ところが、彼らは大声をあげて詰め寄り、イエス
を十字架につけるように要求した。そして、その声が勝った。二四ピ
ラトはついに彼らの願いどおりにすることに決定した。二五そして、
暴動と殺人とのかどで獄に投ぜられた者の方を、彼らの要求に応じ
てゆるしてやり、イエスの方は彼らに引き渡して、その意のままにま
かせた。

二六彼らがイエスをひいてゆく途中、シモンというクレネ人が郊外
から出てきたのを捕えて十字架を負わせ、それをになってイエスの
あとから行かせた。

二七大ぜいの民衆と、悲しみ嘆いてやまない女たちの群れとが、イエ
スに従って行った。二八イエスは女たちの方に振りむいて言われた、
「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたが
た自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。二九『不妊
の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、さいわい
だ』と言う日が、いまに来る。三〇そのとき、人々は山にむかって、

われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにお
おいかぶされと言い出すであろう。三一もし、生木でさえもそうされ
るなら、枯木はどうされることであろう」。
三二さて、イエスと共に刑を受けるために、ほかにふたりの犯罪人
も引かれていった。三三されこうべと呼ばれている所に着くと、人々
はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとりは右に、ひと
りは左に、十字架につけた。三四そのとき、イエスは言われた、「父
よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからず
にいるのです」。人々はイエスの着物をくじ引きで分け合った。三五
民衆は立って見ていた。役人たちもあざ笑って言った、「彼は他人を
救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身
を救うがよい」。三六兵卒どももイエスをののしり、近寄ってきて酢
いぶどう酒をさし出して言った、三七「あなたがユダヤ人の王なら、
自分を救いなさい」。三八イエスの上には、「これはユダヤ人の王」と
書いた札がかけてあった。

三九十字架にかけられた犯罪人のひとりが、「あなたはキリストで
はないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と、
イエスに悪口を言いつづけた。四〇もうひとりは、それをたしなめて
言った、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。四
一お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなった
のは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。
四二そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいで
になる時には、わたしを思い出してください」。四三イエスは言われ
た、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイ
スにいるであろう」。

四四時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は
暗くなって、三時に及んだ。四五そして聖所の幕がまん中から裂けた。
四六そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ
手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。四七百卒長
はこの有様を見て、神をあがめ、「ほんとうに、この人は正しい人で

あった」と言った。四八この光景を見に集まってきた群衆も、これら
の出来事を見て、みな胸を打ちながら帰って行った。四九すべてイエ
スを知っていた者や、ガリラヤから従ってきた女たちも、遠い所に
立って、これらのことを見ていた。
五〇ここに、ヨセフという議員がいたが、善良で正しい人であった。
五一この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでい
た。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。五二この人がピ
ラトのところへ行って、イエスのからだの引取り方を願い出て、五三そ
れを取りおろして亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を
掘って造った墓に納めた。五四この日は準備の日であって、安息日が
始まりかけていた。五五イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、
あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが納められる
様子を見とどけた。五六そして帰って、香料と香油とを用意した。
それからおきてに従って安息日を休んだ。
第二四章一週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた

香料を携えて、墓に行った。二ところが、石が墓からころがしてある
ので、三中にはいってみると、主イエスのからだが見当らなかった。
四そのため途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、
彼らに現れた。五女たちは驚き恐れて、顔を地に伏せていると、この
ふたりの者が言った、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にた
ずねているのか。六そのかたは、ここにはおられない。よみがえられ
たのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになっ
たことを思い出しなさい。七すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡
され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられた
ではないか」。八そこで女たちはその言葉を思い出し、九墓から帰っ
て、これらいっさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告
した。一〇この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、お
よびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女た
ちも、このことを使徒たちに話した。一一ところが、使徒たちには、
それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。〔一二ペテ

ロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこ
にあったので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。」
一三この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れ
たエマオという村へ行きながら、一四このいっさいの出来事について
互に語り合っていた。一五語り合い論じ合っていると、イエスご自身
が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。一六しかし、彼らの
目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。一七イエス
は彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なん
のことなのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。一八その
ひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレム
に泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったこと
をご存じないのですか」。一九「それは、どんなことか」と言われる
と、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神と
すべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、二
〇祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架に

つけたのです。二一わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であ
ろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってか
ら、きょうが三日目なのです。二二ところが、わたしたちの仲間であ
る数人の女が、わたしたちを驚かせました。というのは、彼らが朝早
く墓に行きますと、二三イエスのからだが見当らないので、帰ってき
ましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告
げたと申すのです。二四それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行っ
て見ますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませ
んでした」。二五そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶい
ため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。二六
キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではな
かったのか」。二七こう言って、モーセやすべての預言者からはじめ
て、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説き
あかされた。二八それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、
イエスがなお先へ進み行かれる様子であった。二九そこで、しいて引

き止めて言った、「わたしたちと一緒にお泊まり下さい。もう夕暮に
なっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に泊まる
ために、家にはいられた。三〇一緒に食卓につかれたとき、パンを取
り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、三一彼らの目が開
けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなく
なった。三二彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書
を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。
三三そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とそ
の仲間が集まっていて、三四「主は、ほんとうによみがえって、シモ
ンに現れなさった」と言っていた。三五そこでふたりの者は、途中で
あったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったこと
などを話した。三六こう話していると、イエスが彼らの中にお立ちに
なった。〔そして「やすかれ」と言われた。〕三七彼らは恐れ驚いて、
霊を見ているのだと思った。三八そこでイエスが言われた、「なぜお
じ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。三九わたしの手や

足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には
肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。
〔四〇こう言って、手と足とをお見せになった。〕四一彼らは喜びのあ
まり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここに
何か食物があるか」と言われた。四二彼らが焼いた魚の一きれをさし
あげると、四三イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。
四四それから彼らに対して言われた、「わたしが以前あなたがたと
一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、
モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあること
は、必ずことごとく成就する」。四五そこでイエスは、聖書を悟らせ
るために彼らの心を開いて四六言われた、「こう、しるしてある。キ
リストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。四七そ
して、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレム
からはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。四八あなたがた
は、これらの事の証人である。四九見よ、わたしの父が約束されたも

のを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あ
なたがたは都にとどまっていなさい」。
五〇それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手
をあげて彼らを祝福された。五一祝福しておられるうちに、彼らを離
れて、〔天にあげられた。〕五二彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜び
をもってエルサレムに帰り、五三絶えず宮にいて、神をほめたたえて
いた。

ヨハネによる福音書

第一章一初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であっ
た。二この言は初めに神と共にあった。三すべてのものは、これに
よってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものは
なかった。四この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。
五光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。
六ここにひとりの人があって、神からつかわされていた。その名を
ヨハネと言った。七この人はあかしのためにきた。光についてあか
しをし、彼によってすべての人が信じるためである。八彼は光ではな
く、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。
九すべての人を照すまことの光があって、世にきた。一〇彼は世に
いた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らず

にいた。一一彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれ
なかった。一二しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じ
た人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。一三それらの人
は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、た
だ神によって生れたのである。

一四そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたした
ちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、め
ぐみとまこととに満ちていた。一五ヨハネは彼についてあかしをし、
叫んで言った、「『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれ
たかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが
言ったのは、この人のことである」。一六わたしたちすべての者は、そ
の満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられ
た。一七律法はモーセをとおして与えられ、めぐみとまこととは、イ
エス・キリストをとおしてきたのである。一八神を見た者はまだひと
りもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神を

あらわしたのである。
一九さて、ユダヤ人たちが、エルサレムから祭司たちやレビ人たち
をヨハネのもとにつかわして、「あなたはどなたですか」と問わせた
が、その時ヨハネが立てたあかしは、こうであった。二〇すなわち、
彼は告白して否まず、「わたしはキリストではない」と告白した。二
一そこで、彼らは問うた、「それでは、どなたなのですか、あなたは
エリヤですか」。彼は「いや、そうではない」と言った。「では、あの
預言者ですか」。彼は「いいえ」と答えた。二二そこで、彼らは言っ
た、「あなたはどなたですか。わたしたちをつかわした人々に、答を
持って行けるようにしていただきたい。あなた自身をだれだと考え
るのですか」。二三彼は言った、「わたしは、預言者イザヤが言ったよ
うに、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」。
二四つかわされた人たちは、パリサイ人であった。二五彼らはヨハ
ネに問うて言った、「では、あなたがキリストでもエリヤでもまたあ
の預言者でもないのなら、なぜバプテスマを授けるのですか」。二六

ヨハネは彼らに答えて言った、「わたしは水でバプテスマを授けるが、
あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中に立っておられる。二
七それがわたしのあとにあとにおいでになる方であって、わたしはそ
の人のくつのひもを解く値うちもない」。二八これらのことは、ヨハ
ネがバプテスマを授けていたヨルダンの向こうのベタニヤであった
のである。
二九その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言っ
た、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。三〇『わたしのあとに来る
かたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におら
れたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである。三一
わたしはこのかたを知らなかった。しかし、このかたがイスラエル
に現れてくださるそのことのために、わたしはきて、水でバプテスマ
を授けているのである」。三二ヨハネはまたあかしをして言った、「わ
たしは、御霊がはとのように天から下って、彼の上にとどまるのを見
た。三三わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを

授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに
言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その
人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。三四わた
しはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたの
である」。
三五その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていた
が、三六イエスが歩いておられるのに目をとめて言った、「見よ、神の
小羊」。三七そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イ
エスについて行った。三八イエスはふり向き、彼らがついてくるのを
見て言われた、「何か願いがあるのか」。彼らは言った、「ラビ（訳し
て言えば、先生）どこにおとまりなのですか」。三九イエスは彼らに
言われた、「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」。そこで彼
らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、そ
の日はイエスのところに泊まった。時は午後四時ごろであった。四〇
ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとりは、

シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。四一彼はまず自分の兄弟シ
モンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）に
いま出会った」。四二そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イ
エスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シモンである。
あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」。
四三その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに
出会って言われた、「わたしに従ってきなさい」。四四ピリポは、アン
デレとペテロとの町ベツサイダの人であった。四五このピリポがナタ
ナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしる
しており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエ
スにいま出会った」。四六ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、な
んのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。
四七イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言わ
れた、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心
には偽りがない」。四八ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存

じなのですか」。イエスは答えて言われた、「ピリポがあなたを呼ぶ
前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。四九
ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラ
エルの王です」。五〇イエスは答えて言われた、「あなたが、いちじく
の木の下にいるのを見たと、わたしが言ったので信じるのか。これよ
りも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」。五一また言わ
れた、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使た
ちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」。

第二章一三日目にガリラヤのカナに婚礼があって、イエスの母がそ
こにいた。二イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた。三ぶどう酒
がなくなったので、母はイエスに言った、「ぶどう酒がなくなってし
まいました」。四イエスは母に言われた、「婦人よ、あなたは、わたし
と、なんの係わりがありますか。わたしの時は、まだきていません」。
五母は僕たちに言った、「このかたが、あなたがたに言いつけること
は、なんでもして下さい」。六そこには、ユダヤ人のきよめのならわ

しに従って、それぞれ四、五斗もはいる石の水がめが、六つ置いて
あった。七イエスは彼らに「かめに水をいっぱい入れなさい」と言わ
れたので、彼らは口のところまでいっぱいに入れた。八そこで彼らに
言われた、「さあ、くんで、料理がしらのところに持って行きなさい」。
すると、彼らは持って行った。九料理がしらは、ぶどう酒になった水
をなめてみたが、それがどこからきたのか知らなかったので、（水を
くんだ僕たちは知っていた）花婿を呼んで一〇言った、「どんな人で
も、初めによいぶどう酒を出して、酔いがまわったころにわるいのを
出すものだ。それだのに、あなたはよいぶどう酒を今までとってお
かれました」。一一イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで
行い、その栄光を現された。そして弟子たちはイエスを信じた。
一二そののち、イエスは、その母、兄弟たち、弟子たちと一緒に、
カペナウムに下って、幾日かそこにとどまられた。
一三さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレ
ムに上られた。一四そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが

宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、一五なわでむちを造
り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台を
ひっくりかえし、一六はとを売る人々には「これらのものを持って、
ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」と言われ
た。一七弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつく
すであろう」と書いてあることを思い出した。一八そこで、ユダヤ人
はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわ
たしたちに見せてくれますか」。一九イエスは彼らに答えて言われた、
「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろ
う」。二〇そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、
四十六年もかかっています。それだのに、あなたは三日のうちに、そ
れを建てるのですか」。二一イエスは自分のからだである神殿のこと
を言われたのである。二二それで、イエスが死人の中からよみがえっ
たとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書と
イエスのこの言葉とを信じた。二三過越の祭の間、イエスがエルサレ

ムに滞在しておられたとき、多くの人々は、その行われたしるしを見
て、イエスの名を信じた。二四しかしイエスご自身は、彼らに自分を
お任せにならなかった。それは、すべての人を知っておられ、二五ま
た人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。そ
れは、ご自身人の心の中にあることを知っておられたからである。
第三章一パリサイ人のひとりで、その名をニコデモというユダヤ人
の指導者があった。二この人が夜イエスのもとにきて言った、「先生、
わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っていま
す。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようなしる
しは、だれにもできはしません」。三イエスは答えて言われた、「よく
よくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を
見ることはできない」。四ニコデモは言った、「人は年をとってから生
れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいって生
れることができましょうか」。五イエスは答えられた、「よくよくあな
たに言っておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国に

はいることはできない。六肉から生れる者は肉であり、霊から生れる
者は霊である。七あなたがたは新しく生れなければならないと、わた
しが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。八風は思いのまま
に吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行
くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである」。九ニ
コデモはイエスに答えて言った、「どうして、そんなことがあり得ま
しょうか」。一〇イエスは彼に答えて言われた、「あなたはイスラエル
の教師でありながら、これぐらいのことがわからないのか。一一よく
よく言っておく。わたしたちは自分の知っていることを語り、また
自分の見たことをあかししているのに、あなたがたはわたしたちの
あかしを受けいれない。一二わたしが地上のことを語っているのに、
あなたがたが信じないならば、天上のことを語った場合、どうしてそ
れを信じるだろうか。一三天から下ってきた者、すなわち人の子のほ
かには、だれも天に上った者はない。一四そして、ちょうどモーセが
荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならな

い。一五それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。
一六神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。
それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るため
である。一七神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためでは
なく、御子によって、この世が救われるためである。一八彼を信じる
者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神の
ひとり子の名を信じることをしないからである。一九そのさばきとい
うのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、
光よりもやみの方を愛したことである。二〇悪を行っている者はみな
光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光
にこようとはしない。二一しかし、真理を行っている者は光に来る。
その人のおこないの、神にあってなされたということが、明らかにさ
れるためである。
　二二このち、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らと一緒
にそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。二三ヨハネもサリ

ムに近いアイノンで、バプテスマを授けていた。そこには水がたく
さんあったからである。人々がぞくぞくとやってきてバプテスマを
受けていた。二四そのとき、ヨハネはまだ獄に入れられてはいなかっ
た。二五ところが、ヨハネの弟子たちとひとりのユダヤ人との間に、
きよめのことで争論が起った。二六そこで彼らはヨハネのところにき
て言った、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒
にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかた
が、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけ
ています」。二七ヨハネは答えて言った、「人は天から与えられなけれ
ば、何ものも受けることはできない。二八『わたしはキリストではな
く、そのかたよりも先につかわされた者である』と言ったことをあか
ししてくれるのは、あなたがた自身である。二九花嫁をもつ者は花婿
である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに
喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。三〇彼は必ず
栄え、わたしは衰える。

三一上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、
地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、すべての
ものの上にある。三二彼はその見たところ、聞いたところをあかし
ているが、だれもそのあかしを受けいれない。三三しかし、そのあか
しを受けいれる者は、神がまことであることを、たしかに認めたの
である。三四神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は
聖霊を限りなく賜うからである。三五父は御子を愛して、万物をその
手にお与えになった。三六御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に
従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上
にとどまるのである」。

第四章一イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、またバプテス
マを授けておられるということを、パリサイ人たちが聞き、それを主
が知られたとき、二(しかし、イエスみずからが、バプテスマをお授
けになったのではなく、その弟子たちであった)三ユダヤを去って、
またガリラヤへ行かれた。四しかし、イエスはサマリヤを通過しなけ

ればならなかった。五そこで、イエスはサマリヤのスカルという町に
おいでになった。この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近
くにあったが、六そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れを
覚えて、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた。時は昼の十
二時ごろであった。七ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、
イエスはこの女に、「水を飲ませて下さい」と言われた。八弟子たちは
食物を買いに町に行っていたのである。九すると、サマリヤの女はイ
エスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤ
の女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。これは、ユ
ダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである。一〇イエスは
答えて言われた、「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を
飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あな
たの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。
一一女はイエスに言った、「主よ、あなたは、くむ物をお持ちになら
ず、その上、井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れ

るのですか。一二あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコ
ブよりも、偉いかたなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、そ
の家畜も、この井戸から飲んだのですが」。一三イエスは女に答えて
言われた、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。一四
しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがな
いばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の
命に至る水が、わきあがるであろう」。一五女はイエスに言った、「主
よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよい
ように、その水をわたしに下さい」。一六イエスは女に言われた、「あ
なたの夫を呼びに行って、ここに連れてきなさい」。一七女は答えて
言った、「わたしには夫はありません」。イエスは女に言われた、「夫
がないと言ったのは、もっともだ。一八あなたには五人の夫があった
が、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」。一
九女はイエスに言った、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます。二
〇わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは

礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。二一イエス
は女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたが
たが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が
来る。二二あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたし
たちは知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るから
である。二三しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととを
もって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このよう
な礼拝をする者たちを求めておられるからである。二四神は霊である
から、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。
二五女はイエスに言った、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤが
こられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたし
たちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう」。二六イエスは
女に言われた、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」。
二七そのとき、弟子たちが帰って来て、イエスがひとりの女と話し
ておられるのを見て不思議に思ったが、しかし、「何を求めておられ

ますか」とも、「何を彼女と話しておられるのですか」とも、尋ねる者
はひとりもなかった。二八この女は水がめをそのままそこに置いて町
に行き、人々に言った、二九「わたしのしたことを何もかも、言いあ
てた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい。もしかしたら、この
人がキリストかも知れません」。三〇人々は町を出て、ぞくぞくとイ
エスのところへ行った。三一その間に弟子たちはイエスに、「先生、召
しあがってください」とすすめた。三二ところが、イエスは言われた、
「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」。三三そこで、弟子
たちが互に言った、「だれかが、何か食べるものを持ってきてさしあ
げたのであろうか」。三四イエスは彼らに言われた、「わたしの食物と
いうのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざ
をなし遂げることである。三五あなたがたは、刈入れ時が来るまでに
は、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあ
なたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを
待っている。三六刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めて

いる。まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。三七そこで、『ひ
とりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととな
る。三八わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたがそのため
に労苦しなかったものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あな
たがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」。
三九さて、この町からきた多くのサマリヤ人は、「この人は、わた
しのしたことを何もかも言いあてた」とあかしした女の言葉によっ
て、イエスを信じた。四〇そこで、サマリヤ人たちはイエスのもとに
きて、自分たちのところに滞在していただきたいと願ったので、イエ
スはそこにふつか滞在された。四一そしてなお多くの人々が、イエス
の言葉を聞いて信じた。四二彼らは女に言った、「わたしたちが信じ
るのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親し
く聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったから
である」。
四三ふつかの後に、イエスはここを去ってガリラヤへ行かれた。四

四四イエスはみずからはっきり、「預言者は自分の故郷では敬われない
ものだ」と言われたのである。四五ガリラヤに着かれると、ガリラヤ
の人たちはイエスを歓迎した。それは、彼らも祭に行っていたので、
その祭の時、イエスがエルサレムでなされたことをことごとく見て
いたからである。

四六イエスは、またガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水
をぶどう酒にかえられた所である。ところが、病気をしているむすこ
を持つある役人がカペナウムにいた。四七この人が、ユダヤからガリ
ラヤにイエスのきておられることを聞き、みもとにきて、カペナウム
に下って、彼の子をなおしていただきたいと、願った。その子が死に
かかっていたからである。四八そこで、イエスは彼に言われた、「あ
なたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」。
四九この役人はイエスに言った、「主よ、どうぞ、子供が死なないう
ちにきて下さい」。五〇イエスは彼に言われた、「お帰りなさい。あな
たのむすこは助かるのだ」。彼は自分に言われたイエスの言葉を信じ

て帰って行った。五一その下って行く途中、僕たちが彼に出会い、そ
の子が助かったことを告げた。五二そこで、彼は僕たちに、そのなお
りはじめた時刻を尋ねてみたら、「きのうの午後一時に熱が引きまし
た」と答えた。五三それは、イエスが「あなたのむすこは助かるのだ」
と言われたのと同じ時刻であったことを、この父は知って、彼自身も
その家族一同も信じた。五四これは、イエスがユダヤからガリラヤに
きてなされた第二のしるしである。

第五章一こののち、ユダヤ人の祭があったので、イエスはエルサレ
ムに上られた。
二エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれ
る池があった。そこには五つの廊があった。三その廊の中には、病人、
盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。
〔彼らは水の動くのを待っていたのである。四それは、時々、主の御使
がこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時まっ
先にはいる者は、どんな病気にかかっていても、いやされたからであ

る。〕五さて、そこに三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があっ
た。六イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっ
ていたのを知って、その人に「なおりたいのか」と言われた。七この
病人はイエスに答えた、「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入
れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先
に降りて行くのです」。八イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの
床を取りあげ、そして歩きなさい」。九すると、この人はすぐにいや
され、床をとりあげて歩いて行った。

その日は安息日であった。一〇そこでユダヤ人たちは、そのいやさ
れた人に言った、「きょうは安息日だ。床を取りあげるのは、よろし
くない」。一一彼は答えた、「わたしをなおして下さったかたが、床を
取りあげて歩けと、わたしに言われました」。一二彼らは尋ねた、「取
りあげて歩けと言った人は、だれか」。一三しかし、このいやされた人
は、それがだれであるか知らなかった。群衆がその場にいたので、イ
エスはそっと出て行かれたからである。一四そののち、イエスは宮で

その人に出会ったので、彼に言われた、「ごらん、あなたはよくなっ
た。もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの
身に起るかも知れないから」。一五彼は出て行って、自分をいやした
のはイエスであったと、ユダヤ人たちに告げた。一六そのためユダヤ
人たちは、安息日にこのようなことをしたと言って、イエスを責め
た。一七そこで、イエスは彼らに答えられた、「わたしの父は今に至る
まで働いておられる。わたしも働くのである」。一八このためにユダ
ヤ人たちは、ますますイエスを殺そうと計るようになった。それは、
イエスが安息日を破られたばかりではなく、神を自分の父と呼んで、
自分を神と等しいものとされたからである。
一九さて、イエスは彼らに答えて言われた、「よくよくあなたがた
に言っておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは
何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子も
そのとおりにするのである。二〇なぜなら、父は子を愛して、みずか
らなさることは、すべて子にお示しになるからである。そして、そ

れよりもなお大きなわざを、お示しになるであろう。あなたがたが、
それによって不思議に思うためである。二一すなわち、父が死人を起
して命をお与えになるように、子もまた、そのこころにかなう人々に
命を与えるであろう。二二父はだれをもさばかない。さばきのことは
すべて、子にゆだねられたからである。二三それは、すべての人が父
を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつか
わされた父をも敬わない。二四よくよくあなたがたに言っておく。わ
たしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠
の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているの
である。二五よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが、神
の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生き
るであろう。二六それは、父がご自分のうちに生命をお持ちになって
いると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許し
になったからである。二七そして子は人の子であるから、子にさばき
を行う権威をお与えになった。二八このことを驚くには及ばない。墓

の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、
二九善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。
三〇わたしは、自分からは何事もすることができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。それは、わたし自身の考えでするのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである。
三一もし、わたしが自分自身についてあかしをするならば、わたしのあかしはほんとうではない。
三二わたしについてあかしをするかたはほかにあり、そして、その人がするあかしがほんとうであることを、わたしは知っている。
三三あなたがたはヨハネのもとへ人をつかわしたが、そのとき彼は真理についてあかしをした。
三四わたしは人からあかしを受けないが、このことを言うのは、あなたがたが救われるためである。
三五ヨハネは燃えて輝くあかりであった。あなたがたは、しばらくの間その光を喜び楽しもうとした。
三六しかし、わたしには、ヨハネのあかしよりも、もっ

と力あるあかしがある。父がわたしに成就させようとしてお与えに
なったわざ、すなわち、今わたしがしているこのわざが、父のわたし
をつかわされたことをあかししている。三七また、わたしをつかわさ
れた父も、ご自分でわたしについてあかしをされた。あなたがたは、
まだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない。三八
また、神がつかわされた者を信じないから、神の御言はあなたがたの
うちにとどまっていない。三九あなたがたは、聖書の中に永遠の命が
あると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをす
るものである。四〇しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしの
もとにこようともしない。四一わたしは人からの誉を受けることはし
ない。四二しかし、あなたがたのうちには神を愛する愛がないことを
知っている。四三わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわ
たしを受けいれない。もし、ほかの人が彼自身の名によって来るな
らば、その人を受けいれるのであろう。四四互に誉を受けながら、た
だひとりの神からの誉を求めようとしないあなたがたは、どうして

信じることができようか。四五わたしがあなたがたのことを父に訴え
ると、考えてはいけない。あなたがたを訴える者は、あなたがたが頼
みとしているモーセその人である。四六もし、あなたがたがモーセを
信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについ
て書いたのである。四七しかし、モーセの書いたものを信じないなら
ば、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか」。

第六章一そののち、イエスはガリラヤの海、すなわち、テベリヤ湖
の向こう岸へ渡られた。二すると、大ぜいの群衆がイエスについてき
た。病人たちになさっていたしるしを見たからである。三イエスは山
に登って、弟子たちと一緒にそこで座につかれた。四時に、ユダヤ人
の祭である過越が間近になっていた。五イエスは目をあげ、大ぜいの
群衆が自分の方に集まって来るのを見て、ピリポに言われた、「どこ
からパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。六これはピリ
ポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとするこ
とを、よくご承知であった。七すると、ピリポはイエスに答えた、「二

百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足り
ますまい」。八弟子のひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエ
スに言った、九「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っ
ている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何に
なりましょう」。一〇イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。
その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどで
あった。一一そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわって
いる人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ
分け与えられた。一二人々がじゅうぶんに食べたのち、イエスは弟子
たちに言われた、「少しでもむだにならないように、パンくずのあま
りを集めなさい」。一三そこで彼らが集めると、五つの大麦のパンを
食べて残ったパンくずは、十二のかごにいっぱいになった。一四人々
はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世
にきたるべき預言者である」と言った。
一五イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると

知って、ただひとり、また山に退かれた。
一六夕方になったとき、弟子たちは海べに下り、一七舟に乗って海
を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた。すでに暗くなってい
たのに、イエスはまだ彼らのところにおいでにならなかった。一八そ
の上、強い風が吹いてきて、海は荒れ出した。一九四、五十丁こぎ出
したとき、イエスが海の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、
彼らは恐れた。二〇すると、イエスは彼らに言われた、「わたしだ、恐
れることはない」。二一そこで、彼らは喜んでイエスを舟に迎えよう
とした。すると舟は、すぐ、彼らが行こうとしていた地に着いた。
二二その翌日、海の向こう岸に立っていた群衆は、そこに小舟が一そ
うしかなく、またイエスは弟子たちと一緒に小舟にお乗りにならず、
ただ弟子たちだけが船出したのを見た。二三しかし、数そうの小舟が
テベリヤからきて、主が感謝されたのちパンを人々に食べさせた場所
に近づいた。二四群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知って、
それらの小舟に乗り、イエスをたずねてカペナウムに行った。二五そ

して、海の向こう岸でイエスに出会ったので言った、「先生、いつ、こ
こにおいでになったのですか」。
二六イエスは答えて言われた、「よく
よくあなたがたに言っておく。あなたがたがわたしを尋ねてきてい
るのは、しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからであ
る。
二七朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物の
ために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるものである。
父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである」。
二八そこで、彼
らはイエスに言った、「神のわざを行うために、わたしたちは何をし
たらよいでしょうか」。
二九イエスは彼らに答えて言われた、「神がつ
かわされた者を信じることが、神のわざである」。
三〇彼らはイエス
に言った、「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるし
を行って下さいますか。どんなことをして下さいますか。
三一わたし
たちの先祖は荒野でマナを食べました。それは『天よりのパンを彼
らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです」。
三二そこでイエ
スは彼らに言われた、「よくよく言っておく。天からのパンをあなた

がたに与えたのは、モーセではない。天からのまことのパンをあな
たがたに与えるのは、わたしの父なのである。
三三神のパンは、天か
ら下ってきて、この世に命を与えるものである」。
三四彼らはイエス
に言った、「主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい」。
三五イエ
スは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は
決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことが
ない。
三六しかし、あなたがたに言ったが、あなたがたはわたしを見
たのに信じようとはしない。
三七父がわたしに与えて下さる者は皆、
わたしに来るであろう。そして、わたしに来る者を決して拒みはし
ない。
三八わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行
うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うため
である。
三九わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与え
て下さった者を、わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえ
らせることである。
四〇わたしの父のみこころは、子を見て信じる者
が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはそ

の人々を終りの日によみがえらせるであろう」。
四一ユダヤ人らは、イエスが「わたしは天から下ってきたパンであ
る」と言われたので、イエスについてつぶやき始めた。四二そして言っ
た、「これはヨセフの子イエスではないか。わたしたちはその父母を
知っているではないか。わたしは天から下ってきたと、どうして今い
うのか」。四三イエスは彼らに答えて言われた、「互につぶやいてはい
けない。四四わたしをつかわされた父が引きよせて下さらなければ、
だれもわたしに来ることはできない。わたしは、その人々を終りの
日によみがえらせるであろう。四五預言者の書に、『彼らはみな神に
教えられるであろう』と書いてある。父から聞いて学んだ者は、みな
わたしに来るのである。四六神から出た者のほかに、だれかが父を見
たのではない。その者だけが父を見たのである。四七よくよくあなた
がたに言っておく。信じる者には永遠の命がある。四八わたしは命の
パンである。四九あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んで
しまった。五〇しかし、天から下ってきたパンを食べる人は、決して

死ぬことはない。五一わたしは天から下ってきた生きたパンである。
それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパ
ンは、世の命のためにわたしの肉である」。

五二そこで、ユダヤ人らが互に論じて言った、「この人はどうして、
自分の肉をわたしたちに与えて食べさせることができようか」。五三
イエスは彼らに言われた、「よくよく言っておく。人の子の肉を食べ
ず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。五四
わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わた
しはその人を終りの日によみがえらせるであろう。五五わたしの肉は
まことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。五六わたしの肉
を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人に
おる。五七生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によっ
て生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるで
あろう。五八天から下ってきたパンは、先祖たちが食べたが死んでし
まったようなものではない。このパンを食べる者は、いつまでも生

きるであろう」。五九これらのことは、イエスがカペナウムの会堂で
教えておられたときに言われたものである。
六〇弟子たちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、「これは、
ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」。六一しか
しイエスは、弟子たちがそのことでつぶやいているのを見破って、彼
らに言われた、「このことがあなたがたのつまずきになるのか。六二
それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるの
か。六三人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。
わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。六四し
かし、あなたがたの中には信じない者がいる」。イエスは、初めから、
だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたの
である。六五そしてイエスは言われた、「それだから、父が与えて下
さった者でなければ、わたしに来ることはできないと、言ったので
ある」。
六六それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動

を共にしなかった。**六七**そこでイエスは十二弟子に言われた、「あな
たがたも去ろうとするのか」。**六八**シモン・ペテロが答えた、「主よ、
わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもって
いるのはあなたです。**六九**わたしたちは、あなたが神の聖者であるこ
とを信じ、また知っています」。**七〇**イエスは彼らに答えられた、「あ
なたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それだのに、
あなたがたのうちのひとりは悪魔である」。**七一**これは、イスカリオ
テのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二
弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

第七章
一そののち、イエスはガリラヤを巡回しておられた。ユダヤ
人たちが自分を殺そうとしていたので、ユダヤを巡回しようとはされ
なかった。**二**時に、ユダヤ人の仮庵の祭が近づいていた。**三**そこで、
イエスの兄弟たちがイエスに言った、「あなたがしておられるわざを
弟子たちにも見せるために、ここを去りユダヤに行ってはいかがで
す。**四**自分を公けにあらわそうと思っている人で、隠れて仕事をする

ものはありません。あなたがこれらのことをするからには、自分を
はっきりと世にあらわしなさい」。五こう言ったのは、兄弟たちもイ
エスを信じていなかったからである。六そこでイエスは彼らに言われ
た、「わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつ
も備わっている。七世はあなたがたを憎み得ないが、わたしを憎んで
いる。わたしが世のおこないの悪いことを、あかししているからで
ある。八あなたがたこそ祭に行きなさい。わたしはこの祭には行かな
い。わたしの時はまだ満ちていないから」。九彼らにこう言って、イ
エスはガリラヤにとどまっておられた。
一〇しかし、兄弟たちが祭に行ったあとで、イエスも人目にたたぬ
ように、ひそかに行かれた。一一ユダヤ人らは祭の時に、「あの人は
どこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。一二群衆の中に、
イエスについていろいろとうわさが立った。ある人々は、「あれはよ
い人だ」と言い、他の人々は、「いや、あれは群衆を惑わしている」と
言った。一三しかし、ユダヤ人らを恐れて、イエスのことを公然と口

にする者はいなかった。
一四祭も半ばになってから、イエスは宮に上って教え始められた。
一五すると、ユダヤ人たちは驚いて言った、「この人は学問をしたこ
ともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろう」。一六そ
こでイエスは彼らに答えて言われた、「わたしの教はわたし自身の教
ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。一七神のみこころ
を行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教
が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるで
あろう。一八自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求めるが、
自分をつかわされたかたの栄光を求める者は真実であって、その人の
内には偽りがない。一九モーセはあなたがたに律法を与えたではない
か。それだのに、あなたがたのうちには、その律法を行う者がひとり
もない。あなたがたは、なぜわたしを殺そうと思っているのか」。二
〇群衆は答えた、「あなたは悪霊に取りつかれている。だれがあなた
を殺そうと思っているものか」。二一イエスは彼らに答えて言われた、

「わたしが一つのわざをしたところ、あなたがたは皆それを見て驚い
ている。二二モーセはあなたがたに割礼を命じたので、（これは、実
は、モーセから始まったのではなく、先祖たちから始まったものであ
る）あなたがたは安息日にも人に割礼を施している。二三もし、モー
セの律法が破られないように、安息日であっても割礼を受けるのな
ら、安息日に人の全身を丈夫にしてやったからといって、どうして、
そんなにおこるのか。二四うわべで人をさばかないで、正しいさばき
をするがよい」。

二五さて、エルサレムのある人たちが言った、「この人は人々が殺
そうと思っている者ではないか。二六見よ、彼は公然と語っているの
に、人々はこれに対して何も言わない。役人たちは、この人がキリス
トであることを、ほんとうに知っているのではなかろうか。二七わた
したちはこの人がどこからきたのか知っている。しかし、キリストが
現れる時には、どこから来るのか知っている者は、ひとりもいない」。
二八イエスは宮の内で教えながら、叫んで言われた、「あなたがたは、

わたしを知っており、また、わたしがどこからきたかも知っている。
しかし、わたしは自分からきたのではない。わたしをつかわされた
かたは真実であるが、あなたがたは、そのかたを知らない。二九わた
しは、そのかたを知っている。わたしはそのかたのもとからきた者
で、そのかたがわたしをつかわされたのである」。三〇そこで人々は
イエスを捕えようと計ったが、だれひとり手をかける者はなかった。
イエスの時が、まだきていなかったからである。三一しかし、群衆の
中の多くの者が、イエスを信じて言った、「キリストがきても、この
人が行ったよりも多くのしるしを行うだろうか」。
三二群衆がイエスについてこのようなうわさをしているのを、パリ
サイ人たちは耳にした。そこで、祭司長たちやパリサイ人たちは、イ
エスを捕えようとして、下役どもをつかわした。三三イエスは言われ
た、「今しばらくの間、わたしはあなたがたと一緒にいて、それから、
わたしをおつかわしになったかたのみもとに行く。三四あなたがたは
わたしを捜すであろうが、見つけることはできない。そしてわたし

のいる所に、あなたがたは来ることができない」。三五そこでユダヤ
人たちは互に言った、「わたしたちが見つけることができないという
のは、どこへ行こうとしているのだろう。ギリシヤ人の中に離散し
ている人たちのところにでも行って、ギリシヤ人を教えようという
のだろうか。三六また、『わたしを捜すが、見つけることはできない。
そしてわたしのいる所には来ることができないだろう』と言ったそ
の言葉は、どういう意味だろう」。
三七祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、「だ
れでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。三八わたしを
信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川と
なって流れ出るであろう」。三九これは、イエスを信じる人々が受け
ようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスは
まだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかった
のである。四〇群衆のある者がこれらの言葉を聞いて、「このかたは、
ほんとうに、あの預言者である」と言い、四一ほかの人たちは「この

かたはキリストである」と言い、また、ある人々は、「キリストはま
さか、ガリラヤからは出てこないだろう。四二キリストは、ダビデの
子孫から、またダビデのいたベツレヘムの村から出ると、聖書に書い
てあるではないか」と言った。四三こうして、群衆の間にイエスのこ
とで分争が生じた。四四彼らのうちのある人々は、イエスを捕えよう
と思ったが、だれひとり手をかける者はなかった。
四五さて、下役どもが祭司長たちやパリサイ人たちのところに帰っ
てきたので、彼らはその下役どもに言った、「なぜ、あの人を連れて
こなかったのか」。四六下役どもは答えた、「この人の語るように語っ
た者は、これまでにありませんでした」。四七パリサイ人たちが彼ら
に答えた、「あなたがたまでが、だまされているのではないか。四八
役人たちやパリサイ人たちの中で、ひとりでも彼を信じた者があっ
ただろうか。四九律法をわきまえないこの群衆は、のろわれている」。
五〇彼らの中のひとりで、以前にイエスに会いにきたことのあるニコ
デモが、彼らに言った、五一「わたしたちの律法によれば、まずその

人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばく
ことをしないのではないか」。五二彼らは答えて言った、「あなたもガ
リラヤ出なのか。よく調べてみなさい、ガリラヤからは預言者が出
るものではないことが、わかるだろう」。
〔五三そして、人々はおのおの家に帰って行った。
第八章一イエスはオリブ山に行かれた。二朝早くまた宮にはいられ
ると、人々が皆みもとに集まってきたので、イエスはすわって彼らを
教えておられた。三すると、律法学者たちやパリサイ人たちが、姦淫
をしている時につかまえられた女をひっぱってきて、中に立たせた
上、イエスに言った、四「先生、この女は姦淫の場でつかまえられま
した。五モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じまし
たが、あなたはどう思いますか」。六彼らがそう言ったのは、イエス
をためして、訴える口実を得るためであった。しかし、イエスは身
をかがめて、指で地面に何か書いておられた。七彼らが問い続けるの
で、イエスは身を起して彼らに言われた、「あなたがたの中で罪のな

い者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。八そしてまた身をか
がめて、地面に物を書きつづけられた。九これを聞くと、彼らは年寄
から始めて、ひとりびとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女
は中にいたまま残された。一〇そこでイエスは身を起して女に言われ
た、「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったの
か」。一一女は言った、「主よ、だれもございません」。イエスは言わ
れた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を
犯さないように」。〕
一二イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光
である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命
の光をもつであろう」。一三するとパリサイ人たちがイエスに言った、
「あなたは、自分のことをあかししている。あなたのあかしは真実で
はない」。一四イエスは彼らに答えて言われた、「たとい、わたしが自分
のことをあかししても、わたしのあかしは真実である。それは、わた
しがどこからきたのか、また、どこへ行くのかを知っているからで

ある。しかし、あなたがたは、わたしがどこからきて、どこへ行くの
かを知らない。一五あなたがたは肉によって人をさばくが、わたしは
だれもさばかない。一六しかし、もしわたしがさばくとすれば、わた
しのさばきは正しい。なぜなら、わたしはひとりではなく、わたし
をつかわされたかたが、わたしと一緒だからである。一七あなたがた
の律法には、ふたりによる証言は真実だと、書いてある。一八わたし
自身のことをあかしするのは、わたしであるし、わたしをつかわさ
れた父も、わたしのことをあかしして下さるのである」。一九すると、
彼らはイエスに言った、「あなたの父はどこにいるのか」。イエスは
答えられた、「あなたがたは、わたしをもわたしの父をも知っていな
い。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも
知っていたであろう」。二〇イエスが宮の内で教えていた時、これら
の言葉をさいせん箱のそばで語られたのであるが、イエスの時がま
だきていなかったので、だれも捕える者がなかった。
二一さて、また彼らに言われた、「わたしは去って行く。あなたが

たはわたしを捜し求めるであろう。そして自分の罪のうちに死ぬで
あろう。わたしの行く所には、あなたがたは来ることができない」。
二二そこでユダヤ人たちは言った、「わたしの行く所に、あなたがた
は来ることができないと、言ったのは、あるいは自殺でもしようとす
るつもりか」。二三イエスは彼らに言われた、「あなたがたは下から出
た者だが、わたしは上からきた者である。あなたがたはこの世の者
であるが、わたしはこの世の者ではない。二四だからわたしは、あな
たがたは自分の罪のうちに死ぬであろうと、言ったのである。もし
わたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、罪の
うちに死ぬことになるからである」。二五そこで彼らはイエスに言っ
た、「あなたは、いったい、どういうかたですか」。イエスは彼らに
言われた、「わたしがどういう者であるかは、初めからあなたがたに
言っているではないか。二六あなたがたについて、わたしの言うべき
こと、さばくべきことが、たくさんある。しかし、わたしをつかわ
されたかたは真実なかたである。わたしは、そのかたから聞いたま

まを世にむかって語るのである」。二七彼らは、イエスが父について
話しておられたことを悟らなかった。二八そこでイエスは言われた、
「あなたがたが人の子を上げてしまった後はじめて、わたしがそうい
う者であること、また、わたしは自分からは何もせず、ただ父が教
えて下さったままを話していたことが、わかってくるであろう。二九
わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、
いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり
置きざりになさることはない」。三〇これらのことを語られたところ、
多くの人々がイエスを信じた。
三一イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた、「もしわたし
の言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわた
しの弟子なのである。三二また真理を知るであろう。そして真理は、
あなたがたに自由を得させるであろう」。三三そこで、彼らはイエスに
言った、「わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になっ
たことなどは、一度もない。どうして、あなたがたに自由を得させる

であろうと、言われるのか」。三四イエスは彼らに答えられた、「よく
よくあなたがたに言っておく。すべて罪を犯す者は罪の奴隷である。
三五そして、奴隷はいつまでも家にいる者ではない。しかし、子はい
つまでもいる。三六だから、もし子があなたがたに自由を得させるな
らば、あなたがたは、ほんとうに自由な者となるのである。三七わた
しは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っている。それ
だのに、あなたがたはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉が、
あなたがたのうちに根をおろしていないからである。三八わたしはわ
たしの父のもとで見たことを語っているが、あなたがたは自分の父か
ら聞いたことを行っている」。三九彼らはイエスに答えて言った、「わ
たしたちの父はアブラハムである」。イエスは彼らに言われた、「も
しアブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい。四〇
ところが今、神から聞いた真理をあなたがたに語ってきたこのわた
しを、殺そうとしている。そんなことをアブラハムはしなかった。四
一あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っているのである」。彼

らは言った、「わたしたちは、不品行の結果うまれた者ではない。わ
たしたちにはひとりの父がある。それは神である」。四二イエスは彼
らに言われた、「神があなたがたの父であるならば、あなたがたはわ
たしを愛するはずである。わたしは神から出た者、また神からきて
いる者であるからだ。わたしは自分からきたのではなく、神からつ
かわされたのである。四三どうしてあなたがたは、わたしの話すこと
がわからないのか。あなたがたが、わたしの言葉を悟ることができ
ないからである。四四あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出
てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼
は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには
真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音を
はいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。四
五しかし、わたしが真理を語っているので、あなたがたはわたしを信
じようとしない。四六あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると
責めうるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜあなたがたは、

わたしを信じないのか。四七神からきた者は神の言葉に聞き従うが、
あなたがたが聞き従わないのは、神からきた者でないからである」。
四八ユダヤ人たちはイエスに答えて言った、「あなたはサマリヤ人
で、悪霊に取りつかれていると、わたしたちが言うのは、当然ではな
いか」。四九イエスは答えられた、「わたしは、悪霊に取りつかれてい
るのではなくて、わたしの父を重んじているのだが、あなたがたは
わたしを軽んじている。五〇わたしは自分の栄光を求めてはいない。
それを求めるかたが別にある。そのかたは、またさばくかたである。
五一よくよく言っておく。もし人がわたしの言葉を守るならば、その
人はいつまでも死を見ることがないであろう」。五二ユダヤ人たちが
言った、「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今わかった。アブ
ラハムは死に、預言者たちも死んでいる。それだのに、あなたは、わ
たしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろうと、
言われる。五三あなたは、わたしたちの父アブラハムより偉いのだろ
うか。彼も死に、預言者たちも死んだではないか。あなたは、いった

い、自分をだれと思っているのか」。五四イエスは答えられた、「わた
しがもし自分に栄光を帰するなら、わたしの栄光は、むなしいもの
である。わたしに栄光を与えるかたは、わたしの父であって、あな
たがたが自分の神だと言っているのは、そのかたのことである。五五
あなたがたはその神を知っていないが、わたしは知っている。もし
わたしが神を知らないと言うならば、あなたがたと同じような偽り
者であろう。しかし、わたしはそのかたを知り、その御言を守って
いる。五六あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようと
して楽しんでいた。そしてそれを見て喜んだ」。五七そこでユダヤ人
たちはイエスに言った、「あなたはまだ五十にもならないのに、アブ
ラハムを見たのか」。五八イエスは彼らに言われた、「よくよくあなた
がたに言っておく。アブラハムの生れる前からわたしは、いるので
ある」。五九そこで彼らは石をとって、イエスに投げつけようとした。
しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。
第九章一イエスが道をとおっておられるとき、生れつきの盲人を見

られた。二弟子たちはイエスに尋ねて言った、「先生、この人が生まれ
つき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それ
ともその両親ですか」。三イエスは答えられた、「本人が罪を犯したの
でもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、
彼の上に現れるためである。四わたしたちは、わたしをつかわされた
かたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だ
れも働けなくなる。五わたしは、この世にいる間は、世の光である」。
六イエスはそう言って、地につばきをし、そのつばきで、どろをつく
り、そのどろを盲人の目に塗って言われた、七「シロアム（つかわさ
れた者、の意）の池に行って洗いなさい」。そこで彼は行って洗った。
そして見えるようになって、帰って行った。八近所の人々や、彼がも
と、こじきであったのを見知っていた人々が言った、「この人は、す
わってこじきをしていた者ではないか」。九ある人々は「その人だ」と
言い、他の人々は「いや、ただあの人に似ているだけだ」と言った。
しかし、本人は「わたしがそれだ」と言った。一〇そこで人々は彼に

言った、「では、おまえの目はどうしてあいたのか」。一一彼は答えた、
「イエスというかたが、どろをつくって、わたしの目に塗り、『シロ
アムに行って洗え』と言われました。それで、行って洗うと、見える
ようになりました」。一二人々は彼に言った、「その人はどこにいるの
か」。彼は「知りません」と答えた。
一三人々は、もと盲人であったこの人を、パリサイ人たちのところ
につれて行った。一四イエスがどろをつくって彼の目をあけたのは、
安息日であった。一五パリサイ人たちもまた、「どうして見えるよう
になったのか」と彼に尋ねた。彼は答えた、「あのかたがわたしの
目にどろを塗り、わたしがそれを洗い、そして見えるようになりま
した」。一六そこで、あるパリサイ人たちが言った、「その人は神から
きた人ではない。安息日を守っていないのだから」。しかし、ほかの
人々は言った、「罪のある人が、どうしてそのようなしるしを行うこ
とができようか」。そして彼らの間に分争が生じた。一七そこで彼ら
は、もう一度この盲人に聞いた、「おまえの目をあけてくれたその人

を、どう思うか」。「預言者だと思います」と彼は言った。一八ユダヤ
人たちは、彼がもと盲人であったが見えるようになったことを、ま
だ信じなかった。ついに彼らは、目が見えるようになったこの人の
両親を呼んで、一九尋ねて言った、「これが、生れつき盲人であった
と、おまえたちの言っているむすこか。それではどうして、いま目
が見えるのか」。二〇両親は答えて言った、「これがわたしどものむす
こであること、また生れつき盲人であったことは存じています。二一
しかし、どうしていま見えるようになったのか、それは知りません。
また、だれがその目をあけて下さったのかも知りません。あれに聞
いて下さい。あれはもうおとなですから、自分のことは自分で話せ
るでしょう」。二二両親はユダヤ人たちを恐れていたので、こう答え
たのである。それは、もしイエスをキリストと告白する者があれば、
会堂から追い出すことに、ユダヤ人たちが既に決めていたからであ
る。二三彼の両親が「おとなですから、あれに聞いて下さい」と言っ
たのは、そのためであった。

二四そこで彼らは、盲人であった人をもう一度呼んで言った、「神
に栄光を帰するがよい。あの人が罪人であることは、わたしたちに
はわかっている」。二五すると彼は言った、「あのかたが罪人であるか
どうか、わたしは知りません。ただ一つのことだけ知っています。わ
たしは盲であったが、今は見えるということです」。二六そこで彼ら
は言った、「その人はおまえに何をしたのか。どんなにしておまえの
目をあけたのか」。二七彼は答えた、「そのことはもう話してあげたの
に、聞いてくれませんでした。なぜまた聞こうとするのですか。あな
たがたも、あの人の弟子になりたいのですか」。二八そこで彼らは彼
をののしって言った、「おまえはあれの弟子だが、わたしたちはモー
セの弟子だ。二九モーセに神が語られたということは知っている。だ
が、あの人がどこからきた者か、わたしたちは知らぬ」。三〇そこで
彼が答えて言った、「わたしの目をあけて下さったのに、そのかたが
どこからきたか、ご存じないとは、不思議千万です。三一わたしたち
はこのことを知っています。神は罪人の言うことはお聞きいれにな

りませんが、神を敬い、そのみこころを行う人の言うことは、聞きい
れて下さいます。三二生れつき盲であった者の目をあけた人があると
いうことは、世界が始まって以来、聞いたことがありません。三三も
しあのかたが神からきた人でなかったら、何一つできなかったはず
です」。三四これを聞いて彼らは言った、「おまえは全く罪の中に生れ
ていながら、わたしたちを教えようとするのか」。そして彼を外へ追
い出した。
三五イエスは、その人が外へ追い出されたことを聞かれた。そして
彼に会って言われた、「あなたは人の子を信じるか」。三六彼は答えて
言った、「主よ、それはどなたですか。そのかたを信じたいのですが」。
三七イエスは彼に言われた、「あなたは、もうその人に会っている。今
あなたと話しているのが、その人である」。三八すると彼は、「主よ、
信じます」と言って、イエスを拝した。三九そこでイエスは言われた、
「わたしがこの世にきたのは、さばくためである。すなわち、見えな
い人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるた

めである」。四〇そこにイエスと一緒にいたあるパリサイ人たちが、そ
れを聞いてイエスに言った、「それでは、わたしたちも盲なのでしょ
うか」。四一イエスは彼らに言われた、「もしあなたがたが盲人であっ
たなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』
と言い張るところに、あなたがたの罪がある。

第一〇章一よくよくあなたがたに言っておく。羊の囲いにはいるの
に、門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、
強盗である。二門からはいる者は、羊の羊飼である。三門番は彼のた
めに門を開き、羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよん
で連れ出す。四自分の羊をみな出してしまうと、彼は羊の先頭に立っ
て行く。羊はその声を知っているので、彼について行くのである。五
ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らない
からである」。六イエスは彼らにこの比喩を話されたが、彼らは自分
たちにお話しになっているのが何のことだか、わからなかった。
七そこで、イエスはまた言われた、「よくよくあなたがたに言ってお

く。わたしは羊の門である。八わたしよりも前にきた人は、みな盗人
であり、強盗である。羊は彼らに聞き従わなかった。九わたしは門で
ある。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草に
ありつくであろう。一〇盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼ
したりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得さ
せ、豊かに得させるためである。一一わたしはよい羊飼である。よい
羊飼は、羊のために命を捨てる。一二羊飼ではなく、羊が自分のもの
でもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。
そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。一三彼は雇人であっ
て、羊のことを心にかけていないからである。一四わたしはよい羊飼
であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知ってい
る。一五それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を
知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨て
るのである。一六わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。
わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従

うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろ
う。一七父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さ
るのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。一八だれ
かが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそ
れを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれ
を受ける力もある。これはわたしの父から授かった定めである」。
一九これらの言葉を語られたため、ユダヤ人の間にまたも分争が生
じた。二〇そのうちの多くの者が言った、「彼は悪霊に取りつかれて、
気が狂っている。どうして、あなたがたはその言うことを聞くのか」。
二一他の人々は言った、「それは悪霊に取りつかれた者の言葉ではな
い。悪霊は盲人の目をあけることができようか」。
二二そのころ、エルサレムで宮きよめの祭が行われた。時は冬で
あった。二三イエスは、宮の中にあるソロモンの廊を歩いておられた。
二四するとユダヤ人たちが、イエスを取り囲んで言った、「いつまで
わたしたちを不安のままにしておくのか。あなたがキリストである

なら、そうとはっきり言っていただきたい」。二五イエスは彼らに答
えられた、「わたしは話したのだが、あなたがたは信じようとしない。
わたしの父の名によってしているすべてのわざが、わたしのことをあ
かししている。二六あなたがたが信じないのは、わたしの羊でないか
らである。二七わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを
知っており、彼らはわたしについて来る。二八わたしは、彼らに永遠
の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、
彼らをわたしの手から奪い去る者はない。二九わたしの父がわたしに
下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ
手から、それを奪い取ることはできない。三〇わたしと父とは一つで
ある」。三一そこでユダヤ人たちは、イエスを打ち殺そうとして、ま
た石を取りあげた。三二するとイエスは彼らに答えられた、「わたし
は、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のど
のわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」。三三ユダヤ
人たちは答えた、「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをした

からではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間である
のに、自分を神としているからである」。三四イエスは彼らに答えら
れた、「あなたがたの律法に、『わたしは言う、あなたがたは神々であ
る』と書いてあるではないか。三五神の言を託された人々が、神々と
いわれておるとすれば、（そして聖書の言は、すたることがあり得な
い）三六父が聖別して、世につかわされた者が、『わたしは神の子で
ある』と言ったからとて、どうして『あなたは神を汚す者だ』と言う
のか。三七もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じ
なくてもよい。三八しかし、もし行っているなら、たといわたしを信
じなくても、わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父がわた
しにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」。三
九そこで、彼らはまたイエスを捕えようとしたが、イエスは彼らの手
をのがれて、去って行かれた。

四〇さて、イエスはまたヨルダンの向こう岸、すなわち、ヨハネが
初めにバプテスマを授けていた所に行き、そこに滞在しておられた。

四一多くの人々がイエスのところにきて、互に言った、「ヨハネはな
んのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったこ
とは、皆ほんとうであった」。四二そして、そこで多くの者がイエス
を信じた。

第一一章一さて、ひとりの病人がいた。ラザロといい、マリヤとそ
の姉妹マルタの村ベタニヤの人であった。二このマリヤは主に香油を
ぬり、自分の髪の毛で、主の足をふいた女であって、病気であったの
は、彼女の兄弟ラザロであった。三姉妹たちは人をイエスのもとにつ
かわして、「主よ、ただ今、あなたが愛しておられる者が病気をして
います」と言わせた。四イエスはそれを聞いて言われた、「この病気
は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子が
それによって栄光を受けるためのものである」。

五イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。六ラ
ザロが病気であることを聞いてから、なおふつか、そのおられた所に
滞在された。七それから弟子たちに、「もう一度ユダヤに行こう」と

言われた。八弟子たちは言った、「先生、ユダヤ人らが、さきほども
あなたを石で殺そうとしていましたのに、またそこに行かれるので
すか」。九イエスは答えられた、「一日には十二時間あるではないか。
昼間あるけば、人はつまずくことはない。この世の光を見ているから
である。一〇しかし、夜あるけば、つまずく。その人のうちに、光が
ないからである」。一一そう言われたが、それからまた、彼らに言わ
れた、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行
く」。一二すると弟子たちは言った、「主よ、眠っているのでしたら、
助かるでしょう」。一三イエスはラザロが死んだことを言われたので
あるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと
思った。一四するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、「ラザ
ロは死んだのだ。一五そして、わたしがそこにいあわせなかったこと
を、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようにな
るためである。では、彼のところに行こう」。一六するとデドモと呼
ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行っ

て、先生と一緒に死のうではないか」。
一七さて、イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間
も墓の中に置かれていた。一八ベタニヤはエルサレムに近く、二十五
丁ばかり離れたところにあった。一九大ぜいのユダヤ人が、その兄弟
のことで、マルタとマリヤとを慰めようとしてきていた。二〇マルタ
はイエスがこられたと聞いて、出迎えに行ったが、マリヤは家です
わっていた。二一マルタはイエスに言った、「主よ、もしあなたがここ
にいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう。二二し
かし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さる
ことを、わたしは今でも存じています」。二三イエスはマルタに言わ
れた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。二四マルタは言った、
「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。二五
イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。
わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。二六また、生きていて、
わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じる

か」。二七マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの
世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」。二八
マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、「先生がおい
でになって、あなたを呼んでおられます」と小声で言った。二九これ
を聞いたマリヤはすぐ立ち上がって、イエスのもとに行った。三〇イ
エスはまだ村に、はいってこられず、マルタがお迎えしたその場所に
おられた。三一マリヤと一緒に家にいて彼女を慰めていたユダヤ人た
ちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、彼女は墓に泣
きに行くのであろうと思い、そのあとからついて行った。三二マリヤ
は、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏
して言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたし
の兄弟は死ななかったでしょう」。三三イエスは、彼女が泣き、また、
彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激し
く感動し、また心を騒がせ、そして言われた、三四「彼をどこに置い
たのか」。彼らはイエスに言った、「主よ、きて、ごらん下さい」。三

五イエスは涙を流された。三六するとユダヤ人たちは言った、「ああ、
なんと彼を愛しておられたことか」。三七しかし、彼らのある人たち
は言った、「あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせない
ようには、できなかったのか」。三八イエスはまた激しく感動して、墓
にはいられた。それは洞穴であって、そこに石がはめてあった。三九
イエスは言われた、「石を取りのけなさい」。死んだラザロの姉妹マ
ルタが言った、「主よ、もう臭くなっております。四日もたっていま
すから」。四〇イエスは彼女に言われた、「もし信じるなら神の栄光を
見るであろうと、あなたに言ったではないか」。四一人々は石を取り
のけた。すると、イエスは目を天にむけて言われた、「父よ、わたし
の願いをお聞き下さったことを感謝します。四二あなたがいつでもわ
たしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。しかし、
こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつ
かわされたことを、信じさせるためであります」。四三こう言いなが
ら、大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた。四四すると、

死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。
イエスは人々に言われた、「彼をほどいてやって、帰らせなさい」。
四五マリヤのところにきて、イエスのなさったことを見た多くのユ
ダヤ人たちは、イエスを信じた。四六しかし、そのうちの数人がパリ
サイ人たちのところに行って、イエスのされたことを告げた。四七そ
こで、祭司長たちとパリサイ人たちとは、議会を召集して言った、「こ
の人が多くのしるしを行っているのに、お互は何をしているのだ。四
八もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。
そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪っ
てしまうであろう」。四九彼らのうちのひとりで、その年の大祭司で
あったカヤパが、彼らに言った、「あなたがたは、何もわかっていな
いし、五〇ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないよう
になるのがわたしたちにとって得だということを、考えてもいない」。
五一このことは彼が自分から言ったのではない。彼はこの年の大祭司
であったので、預言をして、イエスが国民のために、五二ただ国民の

ためだけではなく、また散在している神の子らを一つに集めるため
に、死ぬことになっていると、言ったのである。五三彼らはこの日か
らイエスを殺そうと相談した。五四そのためイエスは、もはや公然と
ユダヤ人の間を歩かないで、そこを出て、荒野に近い地方のエフライ
ムという町に行かれ、そこに弟子たちと一緒に滞在しておられた。
五五さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、多くの人々は身を
きよめるために、祭の前に、地方からエルサレムへ上った。五六人々
はイエスを捜し求め、宮の庭に立って互に言った、「あなたがたはど
う思うか。イエスはこの祭にこないのだろうか」。五七祭司長たちと
パリサイ人たちとは、イエスを捕えようとして、そのいどころを知っ
ている者があれば申し出よ、という指令を出していた。
第一二章一過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。
そこは、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロのいた所であ
る。二イエスのためにそこで夕食の用意がされ、マルタは給仕をして
いた。イエスと一緒に食卓についていた者のうちに、ラザロも加わっ

ていた。三その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持っ
てきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、
香油のかおりが家にいっぱいになった。四弟子のひとりで、イエスを
裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、五「なぜこの香油
を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。六彼
がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからで
はなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまか
していたからであった。七イエスは言われた、「この女のするままに
させておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておい
たのだから。八貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わた
しはいつも共にいるわけではない」。九大ぜいのユダヤ人たちが、そ
こにイエスのおられるのを知って、押しよせてきた。それはイエス
に会うためだけではなく、イエスが死人のなかから、よみがえらせた
ラザロを見るためでもあった。一〇そこで祭司長たちは、ラザロも殺
そうと相談した。一一それは、ラザロのことで、多くのユダヤ人が彼

らを離れ去って、イエスを信じるに至ったからである。
一二その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレム
にこられると聞いて、一三しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。
そして叫んだ、

「ホサナ、
主の御名によってきたる者に祝福あれ、
イスラエルの王に」。

一四イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは

一五「シオンの娘よ、恐れるな。
見よ、あなたの王が
ろばの子に乗っておいでになる」

と書いてあるとおりであった。一六弟子たちは初めにはこのことを悟
らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスに
ついて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してした
のだということを、思い起した。一七また、イエスがラザロを墓から

呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた
群衆が、そのあかしをした。一八群衆がイエスを迎えに出たのは、イ
エスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。
一九そこで、パリサイ人たちは互に言った、「何をしてもむだだった。
世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」。
二〇祭で礼拝するために上ってきた人々のうちに、数人のギリシヤ
人がいた。二一彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところ
にきて、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼ん
だ。二二ピリポはアンデレのところに行ってそのことを話し、アンデ
レとピリポは、イエスのもとに行って伝えた。二三すると、イエスは
答えて言われた、「人の子が栄光を受ける時がきた。二四よくよくあ
なたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それ
はただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結
ぶようになる。二五自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分
の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう。二六もしわ

たしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るが
よい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、お
るであろう。もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父
は重んじて下さるであろう。二七今わたしは心が騒いでいる。わたし
はなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい。しか
し、わたしはこのために、この時に至ったのです。二八父よ、み名が
あがめられますように」。すると天から声があった、「わたしはすで
に栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」。二九
すると、そこに立っていた群衆がこれを聞いて、「雷がなったのだ」
と言い、ほかの人たちは、「御使が彼に話しかけたのだ」と言った。
三〇イエスは答えて言われた、「この声があったのは、わたしのため
ではなく、あなたがたのためである。三一今はこの世がさばかれる時
である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。三二そして、わ
たしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところ
に引きよせるであろう」。三三イエスはこう言って、自分がどんな死

に方で死のうとしていたかを、お示しになったのである。三四すると
群衆はイエスにむかって言った、「わたしたちは律法によって、キリ
ストはいつまでも生きておいでになるのだ、と聞いていました。そ
れだのに、どうして人の子は上げられねばならないと、言われるので
すか。その人の子とは、だれのことですか」。三五そこでイエスは彼
らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここに
ある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。
やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。三六光
のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。

イエスはこれらのことを話してから、そこを立ち去って、彼らか
ら身をお隠しになった。三七このように多くのしるしを彼らの前でな
さったが、彼らはイエスを信じなかった。三八それは、預言者イザヤ
の次の言葉が成就するためである、「主よ、わたしたちの説くところ
を、だれが信じたでしょうか。また、主のみ腕はだれに示されたで
しょうか」。三九こういうわけで、彼らは信じることができなかった。

イザヤはまた、こうも言った、四〇「神は彼らの目をくらまし、心を
かたくなになさった。それは、彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改
めていやされることがないためである」。四一イザヤがこう言ったの
は、イエスの栄光を見たからであって、イエスのことを語ったので
ある。四二しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かった
が、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出さ
れるのを恐れていたのである。四三彼らは神のほまれよりも、人のほ
まれを好んだからである。
四四イエスは大声で言われた、「わたしを信じる者は、わたしを信
じるのではなく、わたしをつかわされたかたを信じるのであり、四五
また、わたしを見る者は、わたしをつかわされたかたを見るのであ
る。四六わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者
が、やみのうちにとどまらないようになるためである。四七たとい、
わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わたしは
その人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではな

く、この世を救うためである。四八わたしを捨てて、わたしの言葉を
受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語った
その言葉が、終りの日にその人をさばくであろう。四九わたしは自分
から語ったのではなく、わたしをつかわされた父ご自身が、わたしの
言うべきこと、語るべきことをお命じになったのである。五〇わたし
は、この命令が永遠の命であることを知っている。それゆえに、わた
しが語っていることは、わたしの父がわたしに仰せになったことを、
そのまま語っているのである」。

第一三章
一過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもと
に行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛
して、彼らを最後まで愛し通された。二夕食のとき、悪魔はすでにシ
モンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思い
を入れていたが、三イエスは、父がすべてのものを自分の手にお与え
になったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしてい
ることを思い、四夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐい

をとって腰に巻き、五それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を
洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた。六こうして、シモン・
ペテロの番になった。すると彼はイエスに、「主よ、あなたがわたし
の足をお洗いになるのですか」と言った。七イエスは彼に答えて言わ
れた、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとで
わかるようになるだろう」。八ペテロはイエスに言った、「わたしの足
を決して洗わないで下さい」。イエスは彼に答えられた、「もしわた
しがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりも
なくなる」。九シモン・ペテロはイエスに言った、「主よ、では、足だ
けではなく、どうぞ、手も頭も」。一〇イエスは彼に言われた、「すで
にからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれい
なのだから。あなたがたはきれいなのだ。しかし、みんながそうな
のではない」。一一イエスは自分を裏切る者を知っておられた。それ
で、「みんながきれいなのではない」と言われたのである。
一二こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にも

どって、彼らに言われた、「わたしがあなたがたにしたことがわかる
か。一三あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言う
のは正しい。わたしはそのとおりである。一四しかし、主であり、ま
た教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたが
たもまた、互に足を洗い合うべきである。一五わたしがあなたがたに
したとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したの
だ。一六よくよくあなたがたに言っておく。僕はその主人にまさるも
のではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない。
一七もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがた
はさいわいである。一八あなたがた全部の者について、こう言ってい
るのではない。わたしは自分が選んだ人たちを知っている。しかし、
『わたしのパンを食べている者が、わたしにむかってそのかかとをあ
げた』とある聖書は成就されなければならない。一九そのことがまだ
起らない今のうちに、あなたがたに言っておく。いよいよ事が起った
とき、わたしがそれであることを、あなたがたが信じるためである。

二〇よくよくあなたがたに言っておく。わたしがつかわす者を受けい
れる者は、わたしを受けいれるのである。わたしを受けいれる者は、
わたしをつかわされたかたを、受けいれるのである」。
二一イエスがこれらのことを言われた後、その心が騒ぎ、おごそか
に言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたのうち
のひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。二二弟子たちはだれの
ことを言われたのか察しかねて、互に顔を見合わせた。二三弟子たち
のひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についてい
いた。二四そこで、シモン・ペテロは彼に合図をして言った、「だれ
のことをおっしゃったのか、知らせてくれ」。二五その弟子はそのま
まイエスの胸によりかかって、「主よ、だれのことですか」と尋ねる
と、二六イエスは答えられた、「わたしが一きれの食物をひたして与
える者が、それである」。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、
シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。二七この一きれの
食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼

に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。二八席
を共にしていた者のうち、なぜユダにこう言われたのか、わかってい
た者はひとりもなかった。二九ある人々は、ユダが金入れをあずかっ
ていたので、イエスが彼に、「祭のために必要なものを買え」と言わ
れたか、あるいは、貧しい者に何か施させようとされたのだと思って
いた。三〇ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は
夜であった。
三一さて、彼が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光
を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。三二彼によっ
て栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けにな
るであろう。すぐにもお授けになるであろう。三三子たちよ、わたし
はまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを
捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたに
も言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。三四
わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさ

い。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合
いなさい。三五互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわ
たしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。
三六シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになる
のですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、
今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、つい
て来ることになろう」。三七ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、
今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、
命も捨てます」。三八イエスは答えられた、「わたしのために命を捨て
ると言うのか。よくよくあなたに言っておく。鶏が鳴く前に、あな
たはわたしを三度知らないと言うであろう」。

第一四章
一「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、ま
たわたしを信じなさい。二わたしの父の家には、すまいがたくさんあ
る。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あな
たがたのために、場所を用意しに行くのだから。三そして、行って、

場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところ
に迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。四
わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」。五
トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたし
たちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。六イエ
スは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だ
れでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。七
もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知っ
たであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たの
である」。八ピリポはイエスに言った、「主よ、わたしたちに父を示し
て下さい。そうして下されば、わたしたちは満足します」。九イエス
は彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいる
のに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見た
のである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。
一〇わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じな

いのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話して
いるのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさって
いるのである。一一わたしが父におり、父がわたしにおられることを
信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによっ
て信じなさい。一二よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じ
る者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、
もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くから
である。一三わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげ
よう。父が子によって栄光をお受けになるためである。一四何事でも
わたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。
一五もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守
るべきである。一六わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別
に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるで
あろう。一七それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせ
ず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなた

がたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、
またあなたがたのうちにいるからである。
一八わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのと
ころに帰って来る。一九もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見
なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしが生
きるので、あなたがたも生きるからである。二〇その日には、わたし
はわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあ
なたがたにおることが、わかるであろう。二一わたしのいましめを心
にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛
する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、
その人にわたし自身をあらわすであろう」。二二イスカリオテでない
方のユダがイエスに言った、「主よ、あなたご自身をわたしたちにあ
らわそうとして、世にはあらわそうとされないのはなぜですか」。二
三イエスは彼に答えて言われた、「もしだれでもわたしを愛するなら
ば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を

愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に
住むであろう。二四わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。
あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつ
かわされた父の言葉である。
二五これらのことは、あなたがたと一緒にいた時、すでに語ったこ
とである。二六しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によって
つかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわた
しが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。二七わ
たしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがた
に与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。
あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。二八『わたしは去っ
て行くが、またあなたがたのところに帰って来る』と、わたしが言っ
たのを、あなたがたは聞いている。もしわたしを愛しているなら、わ
たしが父のもとに行くのを喜んでくれるであろう。父がわたしより
大きいかたであるからである。二九今わたしは、そのことが起らない

先にあなたがたに語った。それは、事が起った時にあなたがたが信
じるためである。三〇わたしはもはや、あなたがたに、多くを語るま
い。この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、な
んの力もない。三一しかし、わたしが父を愛していることを世が知る
ように、わたしは父がお命じになったとおりのことを行うのである。
立て。さあ、ここから出かけて行こう。

第一五章
一わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫であ
る。二わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべて
これをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、
手入れしてこれをきれいになさるのである。三あなたがたは、わたし
が語った言葉によって既にきよくされている。四わたしにつながって
いなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝
がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶこと
ができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実
を結ぶことができない。五わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝

である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人と
つながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしか
ら離れては、あなたがたは何一つできないからである。
六人がわたし
につながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。
人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。
七
あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがた
にとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そう
すれば、与えられるであろう。
八あなたがたが実を豊かに結び、そし
てわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光を
お受けになるであろう。
九父がわたしを愛されたように、わたしもあ
なたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。
一〇もし
わたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちに
おるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、
その愛のうちにおるのと同じである。
一一わたしがこれらのことを話
したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あ

なたがたの喜びが満ちあふれるためである。
一二わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛し
たように、あなたがたも互に愛し合いなさい。一三人がその友のため
に自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。一四あなたが
たにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友で
ある。一五わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人の
していることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼
んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたから
である。一六あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあな
たがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あ
なたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、
また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、
父が与えて下さるためである。一七これらのことを命じるのは、あな
たがたが互に愛し合うためである。
一八もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先に

わたしを憎んだことを、知っておくがよい。一九もしあなたがたがこ
の世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のも
のとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものでは
ない。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したので
ある。だから、この世はあなたがたを憎むのである。二〇わたしがあ
なたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、
おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがた
をも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守ってい
たなら、あなたがたの言葉をも守るであろう。二一彼らはわたしの名
のゆえに、あなたがたに対してすべてそれらのことをするであろう。
それは、わたしをつかわされたかたを彼らが知らないからである。二
二もしわたしがきて彼らに語らなかったならば、彼らは罪を犯さない
ですんだであろう。しかし今となっては、彼らには、その罪につい
て言いのがれる道がない。二三わたしを憎む者は、わたしの父をも憎
む。二四もし、ほかのだれもがしなかったようなわざを、わたしが彼

らの間でしなかったならば、彼らは罪を犯さないですんだであろう。
しかし事実、彼らはわたしとわたしの父とを見て、憎んだのである。
二五それは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と書いてある彼ら
の律法の言葉が成就するためである。二六わたしが父のみもとからあ
なたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとか
ら来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするで
あろう。二七あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるか
ら、あかしをするのである。

第一六章一わたしがこれらのことを語ったのは、あなたがたがつま
ずくことのないためである。二人々はあなたがたを会堂から追い出す
であろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たち
は神に仕えているのだと思う時が来るであろう。三彼らがそのような
ことをするのは、父をもわたしをも知らないからである。四わたしが
あなたがたにこれらのことを言ったのは、彼らの時がきた場合、わた
しが彼らについて言ったことを、思い起させるためである。これらの

ことを初めから言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にい
たからである。五けれども今わたしは、わたしをつかわされたかたの
ところに行こうとしている。しかし、あなたがたのうち、だれも『ど
こへ行くのか』と尋ねる者はない。六かえって、わたしがこれらのこ
とを言ったために、あなたがたの心は憂いで満たされている。七しか
し、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って
行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなけ
れば、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、
それをあなたがたにつかわそう。八それがきたら、罪と義とさばきと
について、世の人の目を開くであろう。九罪についてと言ったのは、
彼らがわたしを信じないからである。一〇義についてと言ったのは、
わたしが父のみもとに行き、あなたがたは、もはやわたしを見なくな
るからである。一一さばきについてと言ったのは、この世の君がさば
かれるからである。
一二わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あ

なたがたは今はそれに堪えられない。一三けれども真理の御霊が来る
時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それ
は自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事を
あなたがたに知らせるであろう。一四御霊はわたしに栄光を得させる
であろう。わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるか
らである。一五父がお持ちになっているものはみな、わたしのもので
ある。御霊はわたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせる
のだと、わたしが言ったのは、そのためである。
一六しばらくすれば、あなたがたはもうわたしを見なくなる。しか
し、またしばらくすれば、わたしに会えるであろう」。一七そこで、
弟子たちのうちのある者は互に言い合った、「『しばらくすれば、わ
たしを見なくなる。またしばらくすれば、わたしに会えるであろう』
と言われ、『わたしの父のところに行く』と言われたのは、いったい、
どういうことなのであろう」。一八彼らはまた言った、「『しばらくす
れば』と言われるのは、どういうことか。わたしたちには、その言葉

の意味がわからない」。
一九イエスは、彼らが尋ねたがっていること
に気がついて、彼らに言われた、「しばらくすればわたしを見なくな
る、またしばらくすればわたしに会えるであろうと、わたしが言った
ことで、互に論じ合っているのか。
二〇よくよくあなたがたに言って
おく。あなたがたは泣き悲しむが、この世は喜ぶであろう。あなた
がたは憂えているが、その憂いは喜びに変るであろう。
二一女が子を
産む場合には、その時がきたというので、不安を感じる。しかし、子
を産んでしまえば、もはやその苦しみをおぼえてはいない。ひとり
の人がこの世に生れた、という喜びがあるためである。
二二このよう
に、あなたがたにも今は不安がある。しかし、わたしは再びあなたが
たと会うであろう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるであ
ろう。その喜びをあなたがたから取り去る者はいない。
二三その日に
は、あなたがたがわたしに問うことは、何もないであろう。よくよく
あなたがたに言っておく。あなたがたが父に求めるものはなんでも、
わたしの名によって下さるであろう。
二四今までは、あなたがたはわ

たしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば、
与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるで
あろう。
二五わたしはこれらのことを比喩で話したが、もはや比喩では話さ
ないで、あからさまに、父のことをあなたがたに話してきかせる時が
来るであろう。二六その日には、あなたがたは、わたしの名によって
求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげよ
うとは言うまい。二七父ご自身があなたがたを愛しておいでになるか
らである。それは、あなたがたがわたしを愛したため、また、わたし
が神のみもとからきたことを信じたためである。二八わたしは父から
出てこの世にきたが、またこの世を去って、父のみもとに行くので
ある」。
二九弟子たちは言った、「今はあからさまにお話しになって、少し
も比喩ではお話しになりません。三〇あなたはすべてのことをご存じ
であり、だれもあなたにお尋ねする必要のないことが、今わかりまし

た。このことによって、わたしたちはあなたが神からこられたかた
であると信じます」。三一イエスは答えられた、「あなたがたは今信じ
ているのか。三二見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家
に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでにき
ている。しかし、わたしはひとりでいるのではない。父がわたしと
一緒におられるのである。三三これらのことをあなたがたに話したの
は、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世で
はなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に
勝っている」。

第一七章一これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言
われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわ
すように、子の栄光をあらわして下さい。二あなたは、子に賜わった
すべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を
子にお与えになったのですから。三永遠の命とは、唯一の、まことの
神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリスト

とを知ることであります。四わたしは、わたしにさせるためにお授け
になったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。
五父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今
み前にわたしを輝かせて下さい。
六わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名
をあらわしました。彼らはあなたのものでありましたが、わたしに
下さいました。そして、彼らはあなたの言葉を守りました。七いま彼
らは、わたしに賜わったものはすべて、あなたから出たものであるこ
とを知りました。八なぜなら、わたしはあなたからいただいた言葉を
彼らに与え、そして彼らはそれを受け、わたしがあなたから出たもの
であることをほんとうに知り、また、あなたがわたしをつかわされ
たことを信じるに至ったからです。九わたしは彼らのためにお願いし
ます。わたしがお願いするのは、この世のためにではなく、あなた
がわたしに賜わった者たちのためです。彼らはあなたのものなので
す。一〇わたしのものは皆あなたのもの、あなたのものはわたしのも

のです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。一一わた
しはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、
わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名に
よって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、
彼らも一つになるためであります。一二わたしが彼らと一緒にいた間
は、あなたからいただいた御名によって彼らを守り、また保護してま
いりました。彼らのうち、だれも滅びず、ただ滅びの子だけが滅びま
した。それは聖書が成就するためでした。一三今わたしはみもとに参
ります。そして世にいる間にこれらのことを語るのは、わたしの喜
びが彼らのうちに満ちあふれるためであります。一四わたしは彼らに
御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のもので
ないように、彼らも世のものではないからです。一五わたしがお願い
するのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から
守って下さることであります。一六わたしが世のものでないように、
彼らも世のものではありません。一七真理によって彼らを聖別して下

さい。あなたの御言は真理であります。一八あなたがわたしを世につ
かわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。一九また彼
らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別
いたします。
二〇わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわた
しを信じている人々のためにも、お願いいたします。二一父よ、それ
は、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるよ
うに、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らを
もわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなた
がわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるため
であります。二二わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与
えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つに
なるためであります。二三わたしが彼らにおり、あなたがわたしにい
ますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわた
しをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったこ

とを、世が知るためであります。二四父よ、あなたがわたしに賜わっ
た人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい。天地が
造られる前からわたしを愛して下さって、わたしに賜わった栄光を、
彼らに見させて下さい。二五正しい父よ、この世はあなたを知ってい
ません。しかし、わたしはあなたを知り、また彼らも、あなたがわた
しをおつかわしになったことを知っています。二六そしてわたしは彼
らに御名を知らせました。またこれからも知らせましょう。それは、
あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、また
わたしも彼らのうちにおるためであります」。

第一八章

一イエスはこれらのことを語り終えて、弟子たちと一緒に
ケデロンの谷の向こうへ行かれた。そこには園があって、イエスは
弟子たちと一緒にその中にはいられた。二イエスを裏切ったユダは、
その所をよく知っていた。イエスと弟子たちとがたびたびそこで集
まったことがあるからである。三さてユダは、一隊の兵卒と祭司長や
パリサイ人たちの送った下役どもを引き連れ、たいまつやあかりや

武器を持って、そこへやってきた。四しかしイエスは、自分の身に起
ろうとすることをことごとく承知しておられ、進み出て彼らに言わ
れた、「だれを捜しているのか」。五彼らは「ナザレのイエスを」と答
えた。イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを
裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。六イエスが彼らに「わた
しが、それである」と言われたとき、彼らはうしろに引きさがって地
に倒れた。七そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ね
になると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。八イエスは答えら
れた、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを捜して
いるのなら、この人たちを去らせてもらいたい」。九それは、「あなた
が与えて下さった人たちの中のひとりも、わたしは失わなかった」と
イエスの言われた言葉が、成就するためである。一〇シモン・ペテロ
は剣を持っていたが、それを抜いて、大祭司の僕に切りかかり、その
右の耳を切り落した。その僕の名はマルコスであった。一一すると、
イエスはペテロに言われた、「剣をさやに納めなさい。父がわたしに

下さった杯は、飲むべきではないか」。
一二それから一隊の兵卒やその千卒長やユダヤ人の下役どもが、イ
エスを捕え、縛りあげて、一三まずアンナスのところに引き連れて行っ
た。彼はその年の大祭司カヤパのしゅうとであった。一四カヤパは前
に、ひとりの人が民のために死ぬのはよいことだと、ユダヤ人に助言
した者であった。

一五シモン・ペテロともうひとりの弟子とが、イエスについて行った。
この弟子は大祭司の知り合いであったので、イエスと一緒に大祭司
の中庭にはいった。一六しかし、ペテロは外で戸口に立っていた。す
ると大祭司の知り合いであるその弟子が、外に出て行って門番の女に
話し、ペテロを内に入れてやった。一七すると、この門番の女がペテ
ロに言った、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」。
ペテロは「いや、そうではない」と答えた。一八僕や下役どもは、寒
い時であったので、炭火をおこし、そこに立ってあたっていた。ペテ
ロもまた彼らに交じり、立ってあたっていた。

一九大祭司はイエスに、弟子たちのことやイエスの教のことを尋ね
た。二〇イエスは答えられた、「わたしはこの世に対して公然と語っ
てきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。
何事も隠れて語ったことはない。二一なぜ、わたしに尋ねるのか。わ
たしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。わた
しの言ったことは、彼らが知っているのだから」。二二イエスがこう
言われると、そこに立っていた下役のひとりが、「大祭司にむかって、
そのような答をするのか」と言って、平手でイエスを打った。二三イ
エスは答えられた、「もしわたしが何か悪いことを言ったのなら、そ
の悪い理由を言いなさい。しかし、正しいことを言ったのなら、なぜ
わたしを打つのか」。二四それからアンナスは、イエスを縛ったまま
大祭司カヤパのところへ送った。二五シモン・ペテロは、立って火に
あたっていた。すると人々が彼に言った、「あなたも、あの人の弟子
のひとりではないか」。彼はそれをうち消して、「いや、そうではな
い」と言った。二六大祭司の僕のひとりで、ペテロに耳を切りおとさ

れた人の親族の者が言った、「あなたが園であの人と一緒にいるのを、
わたしは見たではないか」。二七ペテロはまたそれを打ち消した。す
るとすぐに、鶏が鳴いた。
二八それから人々は、イエスをカヤパのところから官邸につれて
行った。時は夜明けであった。彼らは、けがれを受けないで過越の
食事ができるように、官邸にはいらなかった。二九そこで、ピラトは
彼らのところに出てきて言った、「あなたがたは、この人に対してど
んな訴えを起すのか」。三〇彼らはピラトに答えて言った、「もしこの
人が悪事をはたらかなかったなら、あなたに引き渡すようなことはし
なかったでしょう」。三一そこでピラトは彼らに言った、「あなたがた
は彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」。ユダヤ人らは
彼に言った、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」。
三二これは、ご自身がどんな死にかたをしようとしているかを示すた
めに言われたイエスの言葉が、成就するためである。
三三さて、ピラトはまた官邸にはいり、イエスを呼び出して言った、

「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。三四イエスは答えられた、「あ
なたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わ
たしのことをあなたにそう言ったのか」。三五ピラトは答えた、「わた
しはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわた
しに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか」。三六イ
エスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわた
しの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わた
しをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わた
しの国はこの世のものではない」。三七そこでピラトはイエスに言っ
た、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あな
たの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかし
をするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれで
も真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」。三八ピラトはイエス
に言った、「真理とは何か」。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に出
て行き、彼らに言った、「わたしには、この人になんの罪も見いだせ

ない。三九過越の時には、わたしがあなたがたのために、ひとりの人
を許してやるのが、あなたがたのしきたりになっている。ついては、
あなたがたは、このユダヤ人の王を許してもらいたいのか」。四〇す
ると彼らは、また叫んで「その人ではなく、バラバを」と言った。こ
のバラバは強盗であった。
第一九章 一そこでピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。二兵卒
たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着
せ、三それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と
言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。四するとピラトは、ま
た出て行ってユダヤ人たちに言った、「見よ、わたしはこの人をあな
たがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせない
ことを、あなたがたに知ってもらうためである」。五イエスはいばら
の冠をかぶり、紫の上着を着たままで外へ出られると、ピラトは彼
らに言った、「見よ、この人だ」。六祭司長たちや下役どもはイエスを
見ると、叫んで「十字架につけよ、十字架につけよ」と言った。ピ

ラトは彼らに言った、「あなたがたが、この人を引き取って十字架に
つけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」。七ユダ
ヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法
によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。
八ピラトがこの言葉を聞いたとき、ますますおそれ、九もう一度官邸
にはいってイエスに言った、「あなたは、もともと、どこからきたの
か」。しかし、イエスはなんの答もなさらなかった。一〇そこでピラ
トは言った、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威が
あり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。一一
イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わた
しに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡し
た者の罪は、もっと大きい」。一二これを聞いて、ピラトはイエスを
許そうと努めた。しかしユダヤ人たちが叫んで言った、「もしこの人
を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王
とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。一三ピラトはこれ

らの言葉を聞いて、イエスを外へ引き出して行き、敷石（ヘブル語で
はガバタ）という場所で裁判の席についた。一四その日は過越の準備
の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピラトはユダヤ人ら
に言った、「見よ、これがあなたがたの王だ」。一五すると彼らは叫ん
だ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あ
なたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答え
た、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。一六そこで
ピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。
　彼らはイエスを引き取った。一七イエスはみずから十字架を背負っ
て、されこうべ（ヘブル語ではゴルゴダ）という場所に出て行かれた。
一八彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、
ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。一九ピ
ラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダ
ヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。二〇イエスが十字架に
つけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書

きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあっ
た。二一ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、『ユダヤ人の王』
と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほし
い」。二二ピラトは答えた、「わたしが書いたことは、書いたままにし
ておけ」。
二三さて、兵卒たちはイエスを十字架につけてから、その上着をとっ
て四つに分け、おのおの、その一つを取った。また下着を手に取って
みたが、それには縫い目がなく、上の方から全部一つに織ったもので
あった。二四そこで彼らは互に言った、「それを裂かないで、だれのも
のになるか、くじを引こう」。これは、「彼らは互にわたしの上着を分
け合い、わたしの衣をくじ引にした」という聖書が成就するためで、
兵卒たちはそのようにしたのである。二五さて、イエスの十字架のそ
ばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラ
のマリヤとが、たたずんでいた。二六イエスは、その母と愛弟子とが
そばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ご

らんなさい。これはあなたの子です」。二七それからこの弟子に言わ
れた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この
弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。
二八そののち、イエスは今や万事が終ったことを知って、「わたし
は、かわく」と言われた。それは、聖書が全うされるためであった。
二九そこに、酢いぶどう酒がいっぱい入れてある器がおいてあったの
で、人々は、このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけ
て、イエスの口もとにさし出した。三〇すると、イエスはそのぶどう
酒を受けて、「すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとら
れた。
三一さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日
に死体を十字架の上に残しておくまいと、(特にその安息日は大事な
日であったから)、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろ
すことにした。三二そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につ
けられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。三三しかし、

彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを
見て、その足を折ることはしなかった。三四しかし、ひとりの兵卒が
やりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。三五それを
見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人
は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたが
たも信ずるようになるためである。三六これらのことが起ったのは、
「その骨はくだかれないであろう」との聖書の言葉が、成就するため
である。三七また聖書のほかのところに、「彼らは自分が刺し通した
者を見るであろう」とある。

三八そののち、ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となっ
たアリマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたい
と、ピラトに願い出た。ピラトはそれを許したので、彼はイエスの
死体を取りおろしに行った。三九また、前に、夜、イエスのもとに
行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってき
た。四〇彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣

にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。四一イエスが十字架に
かけられた所には、一つの園があり、そこにはまだだれも葬られたこ
とのない新しい墓があった。四二その日はユダヤ人の準備の日であっ
たので、その墓が近くにあったため、イエスをそこに納めた。

第二〇章一さて、一週の初めの日に、朝早くまだ暗いうちに、マグ
ダラのマリヤが墓に行くと、墓から石がとりのけてあるのを見た。二
そこで走って、シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひと
りの弟子のところへ行って、彼らに言った、「だれかが、主を墓から
取り去りました。どこへ置いたのか、わかりません」。三そこでペテ
ロともうひとりの弟子は出かけて、墓へむかって行った。四ふたりは
一緒に走り出したが、そのもうひとりの弟子の方が、ペテロよりも早
く走って先に墓に着き、五そして身をかがめてみると、亜麻布がそこ
に置いてあるのを見たが、中へははいらなかった。六シモン・ペテロ
も続いてきて、墓の中にはいった。彼は亜麻布がそこに置いてある
のを見たが、七イエスの頭に巻いてあった布は亜麻布のそばにはなく

て、はなれた場所にくるめてあった。八すると、先に墓に着いた
もうひとりの弟子もはいってきて、これを見て信じた。九しかし、彼
らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、
まだ悟っていなかった。一〇それから、ふたりの弟子たちは自分の家
に帰って行った。

一一しかし、マリヤは墓の外に立って泣いていた。そして泣きなが
ら、身をかがめて墓の中をのぞくと、一二白い衣を着たふたりの御使
が、イエスの死体のおかれていた場所に、ひとりは頭の方に、ひとり
は足の方に、すわっているのを見た。一三すると、彼らはマリヤに、
「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。マリヤは彼らに言った、「だ
れかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、
わからないのです」。一四そう言って、うしろをふり向くと、そこにイ
エスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに
気がつかなかった。一五イエスは女に言われた、「女よ、なぜ泣いて
いるのか。だれを捜しているのか」。マリヤは、その人が園の番人だ

と思って言った、「もしあなたが、あのかたを移したのでしたら、ど
こへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを
引き取ります」。一六イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリ
ヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。
それは、先生という意味である。一七イエスは彼女に言われた、「わ
たしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていな
いのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わ
たしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがた
の神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」。
一八マグダラのマリヤは弟子たちのところに行って、自分が主に会っ
たこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、
報告した。

一九その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ
人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエス
がはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。二〇そう

言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て
喜んだ。二一イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしを
おつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。
二二そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受け
よ。二三あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたが
たがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。
二四十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエス
がこられたとき、彼らと一緒にいなかった。二五ほかの弟子たちが、
彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに
言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あと
にさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、
決して信じない」。
二六八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも
一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、
中に立って「安かれ」と言われた。二七それからトマスに言われた、

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばして
わたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信
じる者になりなさい」。二八トマスはイエスに答えて言った、「わが主
よ、わが神よ」。二九イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見た
ので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。
三〇イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、
弟子たちの前で行われた。三一しかし、これらのことを書いたのは、
あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、ま
た、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。
第二一章一そののち、イエスはテベリヤの海べで、ご自身をまた
弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。二
シモン・ペテロが、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナの
ナタナエル、ゼベダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にい
た時のことである。三シモン・ペテロは彼らに「わたしは漁に行くの
だ」と言うと、彼らは「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼ら

は出て行って舟に乗った。しかし、その夜はなんの獲物もなかった。
四夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちは
それがイエスだとは知らなかった。五イエスは彼らに言われた、「子
たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありません」と答えた。
六すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見
なさい。そうすれば、何かとれるだろう」。彼らは網をおろすと、魚
が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。七イエス
の愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモ
ン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとっ
て海にとびこんだ。八しかし、ほかの弟子たちは舟に乗ったまま、魚
のはいっている網を引きながら帰って行った。陸からはあまり遠く
ない五十間ほどの所にいたからである。

九彼らが陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚が
のせてあり、またそこにパンがあった。一〇イエスは彼らに言われた、
「今とった魚を少し持ってきなさい」。一一シモン・ペテロが行って、

網を陸へ引き上げると、百五十三びきの大きな魚でいっぱいにな
っていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた。一二イエスは彼
らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主である
ことがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進ん
で尋ねる者がなかった。一三イエスはそこにきて、パンをとり彼らに
与え、また魚も同じようにされた。一四イエスが死人の中からよみが
えったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。
一五彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、
「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたし
を愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを
愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊
を養いなさい」と言われた。一六またもう一度彼に言われた、「ヨハ
ネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言った、「主よ、
そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。
イエスは彼に言われた、「わたしの羊を飼いなさい」。一七イエスは三

度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロ
は「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいため
てイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしが
あなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼
に言われた、「わたしの羊を養いなさい。一八よくよくあなたに言っ
ておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに
歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすこ
とになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくな
い所へ連れて行くであろう」。一九これは、ペテロがどんな死に方で、
神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こ
う話してから、「わたしに従ってきなさい」と言われた。二〇ペテロ
はふり返ると、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのを見た。
この弟子は、あの夕食のときイエスの胸近くに寄りかかって、「主よ、
あなたを裏切る者は、だれなのですか」と尋ねた人である。二一ペテ
ロはこの弟子を見て、イエスに言った、「主よ、この人はどうなので

すか」。二二イエスは彼に言われた、「たとい、わたしの来る時まで彼
が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなん
の係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」。二三こう
いうわけで、この弟子は死ぬことがないといううわさが、兄弟たちの
間にひろまった。しかし、イエスは彼が死ぬことはないと言われたの
ではなく、ただ「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っているこ
とを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか」
と言われただけである。

二四これらの事についてあかしをし、またこれらの事を書いたのは、
この弟子である。そして彼のあかしが真実であることを、わたした
ちは知っている。二五イエスのなさったことは、このほかにまだ数多
くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書
を収めきれないであろうと思う。

使徒行伝

第一章

一テオピロよ、わたしは先に第一巻を著わして、イエスが行い、また教えはじめてから、二お選びになった使徒たちに、聖霊によって命じたのち、天に上げられた日までのことを、ことごとくしるした。三イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。四そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。五すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。

六さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、

「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。
七彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めて
おられるのであって、あなたがたの知る限りではない。八ただ、聖霊
があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユ
ダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるで
あろう」。九こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げ
られ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。一〇イエスの上っ
て行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふ
たりの人が、彼らのそばに立っていて一一言った、「ガリラヤの人た
ちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上
げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見た
のと同じ有様で、またおいでになるであろう」。
一二それから彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。
この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにあ
る。一三彼らは、市内に行って、その泊まっていた屋上の間にあがっ

た。その人たちは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポとト
マス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモン
とヤコブの子ユダとであった。一四彼らはみな、婦人たち、特にイエ
スの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひた
すら祈をしていた。

一五そのころ、百二十名ばかりの人々が、一団となって集まってい
たが、ペテロはこれらの兄弟たちの中に立って言った、一六「兄弟た
ちよ、イエスを捕えた者たちの手びきになったユダについては、聖霊
がダビデの口をとおして預言したその言葉は、成就しなければなら
なかった。一七彼はわたしたちの仲間に加えられ、この務を授かって
いた者であった。（一八彼は不義の報酬で、ある地所を手に入れたが、
そこへまっさかさまに落ちて、腹がまん中から引き裂け、はらわたが
みな流れ出てしまった。一九そして、この事はエルサレムの全住民に
知れわたり、そこで、この地所が彼らの国語でアケルダマと呼ばれる
ようになった。「血の地所」との意である。）二〇詩篇に、

『その屋敷は荒れ果てよ、
そこにはひとりも住む者がいなくなれ』
と書いてあり、また
『その職は、ほかの者に取らせよ』
とあるとおりである。二一そういうわけで、主イエスがわたしたちの
間にゆききされた期間中、二二すなわち、ヨハネのバプテスマの時か
ら始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日に至るまで、始終
わたしたちと行動を共にした人たちのうち、だれかひとりが、わた
したちに加わって主の復活の証人にならねばならない」。二三そこで
一同は、バルサバと呼ばれ、またの名をユストというヨセフと、マッ
テヤとのふたりを立て、二四祈って言った、「すべての人の心をご存
じである主よ。このふたりのうちのどちらを選んで、二五ユダがこの
使徒の職務から落ちて、自分の行くべきところへ行ったそのあとを
継がせなさいますか、お示し下さい」。二六それから、ふたりのため
にくじを引いたところ、マッテヤに当ったので、この人が十一人の

使徒たちに加えられることになった。

第二章

一五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、
二突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同が
すわっていた家いっぱいに響きわたった。三また、舌のようなもの
が、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。四する
と、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国
の言葉で語り出した。

五さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダ
ヤ人たちがきて住んでいたが、六この物音に大ぜいの人が集まってき
て、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれも
かれも聞いてあっけに取られた。七そして驚き怪しんで言った、「見
よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。八それ
だのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされ
るとは、いったい、どうしたことか。九わたしたちの中には、パルテ
ヤ人、メジヤ人、エラム人もおれば、メソポタミヤ、ユダヤ、カパド

キヤ、ポントとアジヤ、一〇フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレ
ネに近いリビヤ地方などに住む者もいるし、またローマ人で旅にき
ている者、一一ユダヤ人と改宗者、クレテ人とアラビヤ人もいるのだ
が、あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを
聞くとは、どうしたことか」。一二みんなの者は驚き惑って、互に言
い合った、「これは、いったい、どういうわけなのだろう」。一三しか
し、ほかの人たちはあざ笑って、「あの人たちは新しい酒で酔ってい
るのだ」と言った。
一四そこで、ペテロが十一人の者と共に立ちあがり、声をあげて人々
に語りかけた。
「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべてのかたがた、
どうか、この事を知っていただきたい。わたしの言うことに耳を傾
けていただきたい。一五今は朝の九時であるから、この人たちは、あ
なたがたが思っているように、酒に酔っているのではない。一六そう
ではなく、これは預言者ヨエルが預言していたことに外ならないの

である。すなわち、
一七『神がこう仰せになる。
終りの時には、
わたしの霊をすべての人に注ごう。
そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、
若者たちは幻を見、
老人たちは夢を見るであろう。
一八その時には、わたしの男女の僕たちにも
わたしの霊を注ごう。
そして彼らも預言をするであろう。
一九また、上では、天に奇跡を見せ、
下では、地にしるしを、
すなわち、血と火と立ちこめる煙とを、
見せるであろう。
二〇主の大いなる輝かしい日が来る前に、

日はやみに
月は血に変るであろう。
二一そのとき、主の名を呼び求める者は、
みな救われるであろう』。
二二イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。あな
たがたがよく知っているとおり、ナザレ人イエスは、神が彼をとおし
て、あなたがたの中で行われた数々の力あるわざと奇跡としるしと
により、神からつかわされた者であることを、あなたがたに示された
かたであった。二三このイエスが渡されたのは神の定めた計画と予知
とによるのであるが、あなたがたは彼を不法の人々の手で十字架に
つけて殺した。二四神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よ
みがえらせたのである。イエスが死に支配されているはずはなかっ
たからである。二五ダビデはイエスについてこう言っている、
『わたしは常に目の前に主を見た。
主は、わたしが動かされないため、

わたしの右にいて下さるからである。
二六それゆえ、わたしの心は楽しみ、
わたしの舌はよろこび歌った。
わたしの肉体もまた、望みに生きるであろう。
二七あなたは、わたしの魂を黄泉に捨ておくことをせず、
あなたの聖者が朽ち果てるのを、お許しにならないであろう。
二八あなたは、いのちの道をわたしに示し、
み前にあって、わたしを喜びで満たして下さるであろう』。
二九兄弟たちよ、族長ダビデについては、わたしはあなたがたにむかっ
て大胆に言うことができる。彼は死んで葬られ、現にその墓が今日に
至るまで、わたしたちの間に残っている。三〇彼は預言者であって、
『その子孫のひとりを王位につかせよう』と、神が堅く彼に誓われた
ことを認めていたので、三一キリストの復活をあらかじめ知って、『彼
は黄泉に捨てておかれることがなく、またその肉体が朽ち果てることも
ない』と語ったのである。三二このイエスを、神はよみがえらせた。

そして、わたしたちは皆その証人なのである。三三それで、イエスは
神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに
注がれたのである。このことは、あなたがたが現に見聞きしている
とおりである。三四ダビデが天に上ったのではない。彼自身こう言っ
ている、
『主はわが主に仰せになった、
三五あなたの敵をあなたの足台にするまでは、
わたしの右に座していなさい』。
三六だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。
あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストと
してお立てになったのである」。
三七人々はこれを聞いて、強く心を刺され、ペテロやほかの使徒た
ちに、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」
と言った。三八すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、
あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリス

トの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがた
は聖霊の賜物を受けるであろう。三九この約束は、われらの主なる神
の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがた
の子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである」。四〇ペ
テロは、ほかになお多くの言葉であかしをなし、人々に「この曲った
時代から救われよ」と言って勧めた。四一そこで、彼の勧めの言葉を
受けいれた者たちは、バプテスマを受けたが、その日、仲間に加わっ
たものが三千人ほどあった。四二そして一同はひたすら、使徒たちの
教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。

四三みんなの者におそれの念が生じ、多くの奇跡としるしとが、使徒
たちによって、次々に行われた。四四信者たちはみな一緒にいて、いっ
さいの物を共有にし、四五資産や持ち物を売っては、必要に応じてみ
んなの者に分け与えた。四六そして日々心を一つにして、絶えず宮も
うでをなし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとをもって、
食事を共にし、四七神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。

そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである。
第三章一さて、ペテロとヨハネとが、午後三時の祈のときに宮に上
ろうとしていると、二生れながら足のきかない男が、かかえられてき
た。この男は、宮もうでに来る人々に施しをこうため、毎日、「美しの
門」と呼ばれる宮の門のところに、置かれていた者である。三彼は、
ペテロとヨハネとが、宮にはいって行こうとしているのを見て、施し
をこうた。四ペテロとヨハネとは彼をじっと見て、「わたしたちを見
なさい」と言った。五彼は何かもらえるのだろうと期待して、ふたり
に注目していると、六ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。し
かし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの
名によって歩きなさい」。七こう言って彼の右手を取って起してやる
と、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、八躍りあがって
立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびし
ながら、彼らと共に宮にはいって行った。九民衆はみな、彼が歩き回
り、また神をさんびしているのを見、一〇これが宮の「美しの門」の

そばにすわって、施しをこうていた者であると知り、彼の身に起った
ことについて、驚き怪しんだ。
一一彼がなおもペテロとヨハネとにつきまとっているとき、人々は
皆ひどく驚いて、「ソロモンの廊」と呼ばれる柱廊にいた彼らのところ
に駆け集まってきた。一二ペテロはこれを見て、人々にむかって言っ
た、「イスラエルの人たちよ、なぜこの事を不思議に思うのか。また、
わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜ
わたしたちを見つめているのか。一三アブラハム、イサク、ヤコブの
神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光を賜わったのであ
るが、あなたがたは、このイエスを引き渡し、ピラトがゆるすことに
決めていたのに、それを彼の面前で拒んだ。一四あなたがたは、この
聖なる正しいかたを拒んで、人殺しの男をゆるすように要求し、一五
いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中
から、よみがえらせた。わたしたちは、その事の証人である。一六そ
して、イエスの名が、それを信じる信仰のゆえに、あなたがたのいま

見て知っているこの人を、強くしたのであり、イエスによる信仰が、
彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである。
一七さて、兄弟たちよ、あなたがたは知らずにあのような事をした
のであり、あなたがたの指導者たちとても同様であったことは、わた
しにわかっている。一八神はあらゆる預言者の口をとおして、キリス
トの受難を予告しておられたが、それをこのように成就なさったので
ある。一九だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改
めて本心に立ちかえりなさい。二〇それは、主のみ前から慰めの時が
きて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエ
スを、神がつかわして下さるためである。二一このイエスは、神が聖
なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新
の時まで、天にとどめておかれねばならなかった。二二モーセは言っ
た、『主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟
の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。その預言者が
あなたがたに語ることには、ことごとく聞きしたがいなさい。二三彼

に聞きしたがわない者は、みな民の中から滅ぼし去られるであろう』。
二四サムエルをはじめ、その後つづいて語ったほどの預言者はみな、
この時のことを予告した。二五あなたがたは預言者の子であり、神が
あなたがたの先祖たちと結ばれた契約の子である。神はアブラハム
に対して、『地上の諸民族は、あなたの子孫によって祝福を受けるで
あろう』と仰せられた。二六神がまずあなたがたのために、その僕を
立てて、おつかわしになったのは、あなたがたひとりびとりを、悪か
ら立ちかえらせて、祝福にあずからせるためなのである」。

第四章一彼らが人々にこのように語っているあいだに、祭司たち、
宮守がしら、サドカイ人たちが近寄ってきて、二彼らが人々に教を説
き、イエス自身に起った死人の復活を宣伝しているのに気をいらだ
て、三彼らに手をかけて捕え、はや日が暮れていたので、翌朝まで留置
しておいた。四しかし、彼らの話を聞いた多くの人たちは信じた。そ
して、その男の数が五千人ほどになった。
五明くる日、役人、長老、律法学者たちが、エルサレムに召集され

た。六大祭司アンナスをはじめ、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル、
そのほか大祭司の一族もみな集まった。七そして、そのまん中に使徒
たちを立たせて尋問した、「あなたがたは、いったい、なんの権威、ま
た、だれの名によって、このことをしたのか」。八その時、ペテロが
聖霊に満たされて言った、「民の役人たち、ならびに長老たちよ、九
わたしたちが、きょう、取調べを受けているのは、病人に対してした
良いわざについてであり、この人がどうしていやされたかについてで
あるなら、一〇あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、
知っていてもらいたい。この人が元気になってみんなの前に立って
いるのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が
死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によ
るのである。一一このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられ
たが、隅のかしら石となった石』なのである。一二この人による以外
に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下の
だれにも与えられていないからである」。

一三人々はペテロとヨハネとの大胆な話しぶりを見、また同時に、
ふたりが無学な、ただの人たちであることを知って、不思議に思っ
た。そして彼らがイエスと共にいた者であることを認め、一四かつ、
彼らにいやされた者がそのそばに立っているのを見ては、まったく
返す言葉がなかった。一五そこで、ふたりに議会から退場するように
命じてから、互に協議をつづけて一六言った、「あの人たちを、どう
したらよかろうか。彼らによって著しいしるしが行われたことは、エ
ルサレムの住民全体に知れわたっているので、否定しようもない。一
七ただ、これ以上このことが民衆の間にひろまらないように、今後は
この名によって、いっさいだれにも語ってはいけないと、おどしてや
ろうではないか」。一八そこで、ふたりを呼び入れて、イエスの名に
よって語ることも説くことも、いっさい相成らぬと言いわたした。一
九ペテロとヨハネとは、これに対して言った、「神に聞き従うよりも、
あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもら
いたい。二〇わたしたちとしては、自分の見たことと聞いたことを、語

らないわけにはいかない」。二一そこで、彼らはふたりを更におどし
たうえ、ゆるしてやった。みんなの者が、この出来事のために、神を
あがめていたので、その人々の手前、ふたりを罰するすべがなかった
からである。二二そのしるしによっていやされたのは、四十歳あまり
の人であった。
二三ふたりはゆるされてから、仲間の者たちのところに帰って、祭司長
たちや長老たちが言ったいっさいのことを報告した。二四一同はこれ
を聞くと、口をそろえて、神にむかい声をあげて言った、「天と地と
海と、その中のすべてのものとの造りぬしなる主よ。二五あなたは、
わたしたちの先祖、あなたの僕ダビデの口をとおして、聖霊によっ
て、こう仰せになりました、
『なぜ、異邦人らは、騒ぎ立ち、
もろもろの民は、むなしいことを図り、
二六地上の王たちは、立ちかまえ、
支配者たちは、党を組んで、

主とそのキリストとに逆らったのか』。
二七まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人らやイスラエ
ルの民と一緒になって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖
なる僕イエスに逆らい、二八み手とみ旨とによって、あらかじめ定め
られていたことを、なし遂げたのです。二九主よ、いま、彼らの脅迫
に目をとめ、僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい。
三〇そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの名によっ
て、しるしと奇跡とを行わせて下さい」。三一彼らが祈り終えると、そ
の集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神
の言を語り出した。

三二信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとり
その持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有
にしていた。三三使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強く
あかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた。三四彼
らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった。地所や家屋を持ってい

る人たちは、それを売り、売った物の代金をもってきて、三五使徒た
ちの足もとに置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも
分け与えられた。
三六クプロ生れのレビ人で、使徒たちにバルナバ（「慰めの子」と
の意）と呼ばれていたヨセフは、三七自分の所有する畑を売り、その
代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた。
第五章一ところが、アナニヤという人とその妻サッピラとは共に
資産を売ったが、二共謀して、その代金をごまかし、一部だけを持っ
てきて、使徒たちの足もとに置いた。三そこで、ペテロが言った、「ア
ナニヤよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を
欺き、地所の代金をごまかしたのか。四売らずに残しておけば、あな
たのものであり、売ってしまっても、あなたの自由になったはずでは
ないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人
を欺いたのではなくて、神を欺いたのだ」。五アナニヤはこの言葉を
聞いているうちに、倒れて息が絶えた。このことを伝え聞いた人々

は、みな非常なおそれを感じた。六それから、若者たちが立って、そ
の死体を包み、運び出して葬った。
七三時間ばかりたってから、たまたま彼の妻が、この出来事を知
らずに、はいってきた。八そこで、ペテロが彼女にむかって言った、
「あの地所は、これこれの値段で売ったのか。そのとおりか」。彼女
は「そうです、その値段です」と答えた。九ペテロは言った、「あなた
がたふたりが、心を合わせて主の御霊を試みるとは、何事であるか。
見よ、あなたの夫を葬った人たちの足が、そこの門口にきている。あ
なたも運び出されるであろう」。一〇すると女は、たちまち彼の足も
とに倒れて、息が絶えた。そこに若者たちがはいってきて、女が死
んでしまっているのを見、それを運び出してその夫のそばに葬った。
一一教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれ
を感じた。
一二そのころ、多くのしるしと奇跡とが、次々に使徒たちの手によ
り人々の中で行われた。そして、一同は心を一つにして、ソロモンの

廊に集まっていた。一三ほかの者たちは、だれひとり、その交わりに
入ろうとはしなかったが、民衆は彼らを尊敬していた。一四しかし、
主を信じて仲間に加わる者が、男女とも、ますます多くなってきた。
一五ついには、病人を大通りに運び出し、寝台や寝床の上に置いて、
ペテロが通るとき、彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるように
したほどであった。一六またエルサレム附近の町々からも、大ぜいの
人が、病人や汚れた霊に苦しめられている人たちを引き連れて、集
まってきたが、その全部の者が、ひとり残らずいやされた。
一七そこで、大祭司とその仲間の者、すなわち、サドカイ派の人た
ちが、みな嫉妬の念に満たされて立ちあがり、一八使徒たちに手をか
けて捕え、公共の留置場に入れた。一九ところが夜、主の使が獄の戸
を開き、彼らを連れ出して言った、二〇「さあ行きなさい。そして、
宮の庭に立ち、この命の言葉を漏れなく、人々に語りなさい」。二一
彼らはこれを聞き、夜明けごろ宮にはいって教えはじめた。
一方では、大祭司とその仲間の者とが、議会とイス

ラエル人の長老一同とを召集し、使徒たちを引き出してこさせるた
めに、人を獄につかわした。二二そこで、下役どもが行って見ると、
使徒たちが獄にいないので、引き返して報告した、二三「獄には、しっ
かりと錠がかけてあり、戸口には、番人が立っていました。ところ
が、あけて見たら、中にはだれもいませんでした」。二四宮守がしら
と祭司長たちとは、この報告を聞いて、これは、いったい、どんな事
になるのだろうと、あわて惑っていた。二五そこへ、ある人がきて知
らせた、「行ってごらんなさい。あなたがたが獄に入れたあの人たち
が、宮の庭に立って、民衆を教えています」。二六そこで宮守がしら
が、下役どもと一緒に出かけて行って、使徒たちを連れてきた。しか
し、人々に石で打ち殺されるのを恐れて、手荒なことはせず、二七彼
らを連れてきて、議会の中に立たせた。すると、大祭司が問うて二八
言った、「あの名を使って教えてはならないと、きびしく命じておい
たではないか。それだのに、なんという事だ。エルサレム中にあな
たがたの教を、はんらんさせている。あなたがたは確かに、あの人の

血の責任をわたしたちに負わせようと、たくらんでいるのだ」。二九
これに対して、ペテロをはじめ使徒たちは言った、「人間に従うより
は、神に従うべきである。三〇わたしたちの先祖の神は、あなたがた
が木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、三一そして、イスラエル
を悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを
導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである。三二わた
したちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった
聖霊もまた、その証人である」。
三三これを聞いた者たちは、激しい怒りのあまり、使徒たちを殺そ
うと思った。三四ところが、国民全体に尊敬されていた律法学者ガマ
リエルというパリサイ人が、議会で立って、使徒たちをしばらくのあ
いだ外に出すように要求してから、三五一同にむかって言った、「イス
ラエルの諸君、あの人たちをどう扱うか、よく気をつけるがよい。三
六先ごろ、チウダが起って、自分を何か偉い者のように言いふらした
ため、彼に従った男の数が、四百人ほどもあったが、結局、彼は殺さ

れてしまい、従った者もみな四散して、全く跡方もなくなっている。
三七そののち、人口調査の時に、ガリラヤ人ユダが民衆を率いて反乱
を起したが、この人も滅び、従った者もみな散らされてしまった。三
八そこで、この際、諸君に申し上げる。あの人たちから手を引いて、
そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から
出たものなら、自滅するだろう。三九しかし、もし神から出たものな
ら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば、諸君は神を
敵にまわすことになるかも知れない」。そこで彼らはその勧告にした
がい、四〇使徒たちを呼び入れて、むち打ったのち、今後イエスの名
によって語ることは相成らぬと言いわたして、ゆるしてやった。四一
使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを
喜びながら、議会から出てきた。四二そして、毎日、宮や家で、イエ
スがキリストであることを、引きつづき教えたり宣べ伝えたりした。

第六章一そのころ、弟子の数がふえてくるにつれて、ギリシヤ語を
使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分

たちのやもめらが、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情
を申し立てた。二そこで、十二使徒は弟子全体を呼び集めて言った、
「わたしたちが神の言をさしおいて、食卓のことに携わるのはおもし
ろくない。三そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵
とに満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出してほしい。その人た
ちにこの仕事をまかせ、四わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に
当ることにしよう」。五この提案は会衆一同の賛成するところとなっ
た。そして信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、それからピリポ、プロ
コロ、ニカノル、テモン、パルメナ、およびアンテオケの改宗者ニコ
ラオを選び出して、六使徒たちの前に立たせた。すると、使徒たちは
祈って手を彼らの上においた。

七こうして神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子
の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受けいれるよう
になった。

八さて、ステパノは恵みと力とに満ちて、民衆の中で、めざましい

奇跡としるしとを行っていた。九すると、いわゆる「リベルテン」の
会堂に属する人々、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジ
ヤからきた人々などが立って、ステパノと議論したが、一〇彼は知恵
と御霊とで語っていたので、それに対抗できなかった。一一そこで、
彼らは人々をそそのかして、「わたしたちは、彼がモーセと神とを汚
す言葉を吐くのを聞いた」と言わせた。一二その上、民衆や長老たち
や律法学者たちを煽動し、彼を襲って捕えさせ、議会にひっぱって
こさせた。一三それから、偽りの証人たちを立てて言わせた、「この
人は、この聖所と律法とに逆らう言葉を吐いて、どうしても、やめよ
うとはしません。一四『あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこわ
し、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまうだろう』など
と、彼が言うのを、わたしたちは聞きました」。一五議会で席につい
ていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど
天使の顔のように見えた。
第七章一大祭司は「そのとおりか」と尋ねた。二そこで、ステパノ

が言った、
「兄弟たち、父たちよ、お聞き下さい。わたしたちの父祖アブラハ
ムが、カランに住む前、まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼
に現れて三仰せになった、『あなたの土地と親族から離れて、あなた
にさし示す地に行きなさい』。四そこで、アブラハムはカルデヤ人の
地を出て、カランに住んだ。そして、彼の父が死んだのち、神は彼
をそこから、今あなたがたの住んでいるこの地に移住させたが、五そ
こでは、遺産となるものは何一つ、一歩の幅の土地すらも、与えられ
なかった。ただ、その地を所領として授けようとの約束を、彼と、そ
して彼にはまだ子がなかったのに、その子孫とに与えられたのであ
る。六神はこう仰せになった、『彼の子孫は他国に身を寄せるであろ
う。そして、そこで四百年のあいだ、奴隷にされて虐待を受けるで
あろう』。七それから、さらに仰せになった、『彼らを奴隷にする国民
を、わたしはさばくであろう。その後、彼らはそこからのがれ出て、
この場所でわたしを礼拝するであろう』。八そして、神はアブラハム

に、割礼の契約をお与えになった。こうして、彼はイサクの父とな
り、これに八日目に割礼を施し、それから、イサクはヤコブの父とな
り、ヤコブは十二人の族長たちの父となった。
九族長たちは、ヨセフをねたんで、エジプトに売りとばした。しか
し、神は彼と共にいまして、一〇あらゆる苦難から彼を救い出し、エ
ジプト王パロの前で恵みを与え、知恵をあらわさせた。そこで、パロ
は彼を宰相の任につかせ、エジプトならびに王家全体の支配に当ら
せた。一一時に、エジプトとカナンとの全土にわたって、ききんが起
り、大きな苦難が襲ってきて、わたしたちの先祖たちは、食物が得ら
れなくなった。一二ヤコブは、エジプトには食糧があると聞いて、初
めに先祖たちをつかわしたが、一三二回目の時に、ヨセフが兄弟たち
に、自分の身の上を打ち明けたので、彼の親族関係がパロに知れてき
た。一四ヨセフは使をやって、父ヤコブと七十五人にのぼる親族一同
とを招いた。一五こうして、ヤコブはエジプトに下り、彼自身も先祖
たちもそこで死に、一六それから彼らは、シケムに移されて、かねて

アブラハムがいくらかの金を出してこの地のハモルの子らから買っ
ておいた墓に、葬られた。
一七神がアブラハムに対して立てられた約束の時期が近づくにつれ、
民はふえてエジプト全土にひろがった。一八やがて、ヨセフのことを
知らない別な王が、エジプトに起った。一九この王は、わたしたちの
同族に対し策略をめぐらして、先祖たちを虐待し、その幼な子らを生
かしておかないように捨てさせた。二〇モーセが生れたのは、ちょう
どこのころのことである。彼はまれに見る美しい子であった。三か
月の間は、父の家で育てられたが、二一そののち捨てられたのを、パ
ロの娘が拾いあげて、自分の子として育てた。二二モーセはエジプト
人のあらゆる学問を教え込まれ、言葉にもわざにも、力があった。
二三四十歳になった時、モーセは自分の兄弟であるイスラエル人た
ちのために尽すことを、思い立った。二四ところが、そのひとりがい
じめられているのを見て、これをかばい、虐待されているその人の
ために、相手のエジプト人を撃って仕返しをした。二五彼は、自分の

手によって神が兄弟たちを救って下さることを、みんなが悟るもの
と思っていたが、実際はそれを悟らなかったのである。二六翌日モー
セは、彼らが争い合っているところに現れ、仲裁しようとして言っ
た、『まて、君たちは兄弟同志ではないか。どうして互に傷つけ合っ
ているのか』。二七すると、仲間をいじめていた者が、モーセを突き
飛ばして言った、『だれが、君をわれわれの支配者や裁判人にしたの
か。二八君は、きのう、エジプト人を殺したように、わたしも殺そう
と思っているのか』。二九モーセは、この言葉を聞いて逃げ、ミデア
ンの地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけた。

三〇四十年たった時、シナイ山の荒野において、御使が柴の燃える
炎の中でモーセに現れた。三一彼はこの光景を見て不思議に思い、そ
れを見きわめるために近寄ったところ、主の声が聞えてきた、三二『わ
たしは、あなたの先祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神
である』。モーセは恐れおののいて、もうそれを見る勇気もなくなっ
た。三三すると、主が彼に言われた、『あなたの足から、くつを脱ぎ

なさい。あなたの立っているこの場所は、聖なる地である。三四わた
しは、エジプトにいるわたしの民が虐待されている有様を確かに見
とどけ、その苦悩のうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために
下ってきたのである。さあ、今あなたをエジプトにつかわそう』。
三五こうして、『だれが、君を支配者や裁判人にしたのか』と言っ
て排斥されたこのモーセを、神は、柴の中で彼に現れた御使の手に
よって、支配者、解放者として、おつかわしになったのである。三六
この人が、人々を導き出して、エジプトの地においても、紅海におい
ても、また四十年のあいだ荒野においても、奇跡としるしとを行った
のである。三七この人が、イスラエル人たちに、『神はわたしをお立
てになったように、あなたがたの兄弟たちの中から、ひとりの預言者
をお立てになるであろう』と言ったモーセである。三八この人が、シ
ナイ山で、彼に語りかけた御使や先祖たちと共に、荒野における集会
にいて、生ける御言葉を授かり、それをあなたがたに伝えたのであ
る。三九ところが、先祖たちは彼に従おうとはせず、かえって彼を退

け、心の中でエジプトにあこがれて、四〇『わたしたちを導いてくれる
神々を造って下さい。わたしたちをエジプトの地から導いてきたあ
のモーセがどうなったのか、わかりませんから』とアロンに言った。
四一そのころ、彼らは子牛の像を造り、その偶像に供え物をささげ、
自分たちの手で造ったものを祭ってうち興じていた。四二そこで、神
は顔をそむけ、彼らを天の星を拝むままに任せられた。預言者の書
にこう書いてあるとおりである、

『イスラエルの家よ、
四十年のあいだ荒野にいた時に、
いけにえと供え物とを、わたしにささげたことがあったか。
四三あなたがたは、モロクの幕屋やロンパの星の神を、かつぎ
回った。
それらは、拝むために自分で造った偶像に過ぎぬ。
だからわたしは、あなたがたをバビロンのかなたへ、移してし
まうであろう』。

四四わたしたちの先祖には、荒野にあかしの幕屋があった。それは、
見たままの型にしたがって造るようにと、モーセに語ったかたのご
命令どおりに造ったものである。四五この幕屋は、わたしたちの先祖
が、ヨシュアに率いられ、神によって諸民族を彼らの前から追い払
い、その所領をのり取ったときに、そこに持ち込まれ、次々に受け継
がれて、ダビデの時代に及んだものである。四六ダビデは、神の恵み
をこうむり、そして、ヤコブの神のために宮を造営したいと願った。
四七けれども、じっさいにその宮を建てたのは、ソロモンであった。
四八しかし、いと高き者は、手で造った家の内にはお住みにならない。
預言者が言っているとおりである、

四九『主が仰せられる、
どんな家をわたしのために建てるのか。
わたしのいこいの場所は、どれか。
天はわたしの王座、
地はわたしの足台である。

五〇これは皆わたしの手が造ったものではないか』。五一ああ、強情
で、心にも耳にも割礼のない人たちよ。あなたがたは、いつも聖霊
に逆らっている。それは、あなたがたの先祖たちと同じである。五二
いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、ひとりでも
いたか。彼らは正しいかたの来ることを予告した人たちを殺し、今
やあなたがたは、その正しいかたを裏切る者、また殺す者となった。
五三あなたがたは、御使たちによって伝えられた律法を受けたのに、
それを守ることをしなかった」。
五四人々はこれを聞いて、心の底から激しく怒り、ステパノにむかっ
て、歯ぎしりをした。五五しかし、彼は聖霊に満たされて、天を見つ
めていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるの
が見えた。五六そこで、彼は「ああ、天が開けて、人の子が神の右に
立っておいでになるのが見える」と言った。五七人々は大声で叫びな
がら、耳をおおい、ステパノを目がけて、いっせいに殺到し、五八彼を
市外に引き出して、石で打った。これに立ち合った人たちは、自分の

上着を脱いで、サウロという若者の足もとに置いた。五九こうして、
彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて
言った、「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」。六〇そして、ひ
ざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせ
ないで下さい」。こう言って、彼は眠りについた。

第八章一サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。
その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起り、使徒以外の者は
ことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った。二信仰
深い人たちはステパノを葬り、彼のために胸を打って、非常に悲し
んだ。三ところが、サウロは家々に押し入って、男や女を引きずり出
し、次々に獄に渡して、教会を荒し回った。
四さて、散らされて行った人たちは、御言を宣べ伝えながら、めぐ
り歩いた。五ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを
宣べはじめた。六群衆はピリポの話を聞き、その行っていたしるしを
見て、こぞって彼の語ることに耳を傾けた。七汚れた霊につかれた多

くの人々からは、その霊が大声でわめきながら出て行くし、また、多
くの中風をわずらっている者や、足のきかない者がいやされたからで
ある。八それで、この町では人々が、大変なよろこびかたであった。
九さて、この町に以前からシモンという人がいた。彼は魔術を行っ
てサマリヤの人たちを驚かし、自分をさも偉い者のように言いふらし
ていた。一〇それで、小さい者から大きい者にいたるまで皆、彼につ
いて行き、「この人こそは『大能』と呼ばれる神の力である」と言っ
ていた。一一彼らがこの人について行ったのは、ながい間その魔術に
驚かされていたためであった。一二ところが、ピリポが神の国とイエ
ス・キリストの名について宣べ伝えるに及んで、男も女も信じて、ぞ
くぞくとバプテスマを受けた。一三シモン自身も信じて、バプテスマ
を受け、それから、引きつづきピリポについて行った。そして、数々
のしるしやめざましい奇跡が行われるのを見て、驚いていた。
一四エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が、神の言を受
け入れたと聞いて、ペテロとヨハネとを、そこにつかわした。一五ふ

たりはサマリヤに下って行って、みんなが聖霊を受けるようにと、彼
らのために祈った。一六それは、彼らはただ主イエスの名によってバ
プテスマを受けていただけで、聖霊はまだだれにも下っていなかっ
たからである。一七そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、
彼らは聖霊を受けた。一八シモンは、使徒たちが手をおいたために、
御霊が人々に授けられたのを見て、金をさし出し、一九「わたしが手
をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力をわたしにも
下さい」と言った。二〇そこで、ペテロが彼に言った、「おまえの金
は、おまえもろとも、うせてしまえ。神の賜物が、金で得られるなど
と思っているのか。二一おまえの心が神の前に正しくないから、おま
えは、とうてい、この事にあずかることができない。二二だから、こ
の悪事を悔いて、主に祈れ。そうすればあるいはそんな思いを心に
いだいたことが、ゆるされるかも知れない。二三おまえには、まだ苦
い胆汁があり、不義のなわ目がからみついている。それが、わたしに
わかっている」。二四シモンはこれを聞いて言った、「仰せのような事

が、わたしの身に起らないように、どうぞ、わたしのために主に祈っ
て下さい」。
二五使徒たちは力強くあかしをなし、また主の言を語った後、サマ
リヤ人の多くの村々に福音を宣べ伝えて、エルサレムに帰った。
二六しかし、主の使がピリポにむかって言った、「立って南方に行
き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい」（このガザは、今は荒
れはてている）。二七そこで、彼は立って出かけた。すると、ちょう
ど、エチオピヤ人の女王カンダケの高官で、女王の財宝全部を管理し
ていた宦官であるエチオピヤ人が、礼拝のためエルサレムに上り、二
八その帰途についていたところであった。彼は自分の馬車に乗って、
預言者イザヤの書を読んでいた。二九御霊がピリポに「進み寄って、
あの馬車に並んで行きなさい」と言った。三〇そこでピリポが駆けて
行くと、預言者イザヤの書を読んでいるその人の声が聞えたので、「あ
なたは、読んでいることが、おわかりですか」と尋ねた。三一彼は「だ
れかが、手びきをしてくれなければ、どうしてわかりましょう」と答

えた。そして、馬車に乗って一緒にすわるようにと、ピリポにすすめ
た。三二彼が読んでいた聖書の箇所は、これであった、
「彼は、ほふり場に引かれて行く羊のように、
また、黙々として、
毛を刈る者の前に立つ小羊のように、
口を開かない。
三三彼は、いやしめられて、
そのさばきも行われなかった。
だれが、彼の子孫のことを語ることができようか、
彼の命が地上から取り去られているからには」。
三四宦官はピリポにむかって言った、「お尋ねしますが、ここで預言者
はだれのことを言っているのですか。自分のことですか、それとも、
だれかほかの人のことですか」。三五そこでピリポは口を開き、この
聖句から説き起して、イエスのことを宣べ伝えた。三六道を進んで行
くうちに、水のある所にきたので、宦官が言った、「ここに水があり

ます。わたしがバプテスマを受けるのに、なんのさしつかえがあり
ますか」。〔三七これに対して、ピリポは、「あなたがまごころから信
じるなら、受けてさしつかえはありません」と言った。すると、彼は
「わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます」と答えた。〕三八
そこで車をとめさせ、ピリポと宦官と、ふたりとも、水の中に降りて
行き、ピリポが宦官にバプテスマを授けた。三九ふたりが水から上が
ると、主の霊がピリポをさらって行ったので、宦官はもう彼を見る
ことができなかった。宦官はよろこびながら旅をつづけた。四〇その
後、ピリポはアゾトに姿をあらわして、町々をめぐり歩き、いたると
ころで福音を宣べ伝えて、ついにカイザリヤに着いた。

第九章一さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅迫、殺害の
息をはずませながら、大祭司のところに行って、二ダマスコの諸会堂
あての添書を求めた。それは、この道の者を見つけ次第、男女の別
なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった。三とこ
ろが、道を急いでダマスコの近くにきたとき、突然、天から光がさし

て、彼をめぐり照した。四彼は地に倒れたが、その時「サウロ、サウ
ロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。五そこで
彼は「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねた。すると答があった、
「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。六さあ立って、町
にはいって行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が
告げられるであろう」。七サウロの同行者たちは物も言えずに立って
いて、声だけは聞えたが、だれも見えなかった。八サウロは地から起
き上がって目を開いてみたが、何も見えなかった。そこで人々は、彼
の手を引いてダマスコへ連れて行った。九彼は三日間、目が見えず、
また食べることも飲むこともしなかった。

一〇さて、ダマスコにアナニヤというひとりの弟子がいた。この人
に主が幻の中に現れて、「アナニヤよ」とお呼びになった。彼は「主
よ、わたしでございます」と答えた。一一そこで主が彼に言われた、
「立って、『真すぐ』という名の路地に行き、ユダの家でサウロという
タルソ人を尋ねなさい。彼はいま祈っている。一二彼はアナニヤとい

う人がはいってきて、手を自分の上において再び見えるようにしてく
れるのを、幻で見たのである」。一三アナニヤは答えた、「主よ、あの
人がエルサレムで、どんなにひどい事をあなたの聖徒たちにしたか
については、多くの人たちから聞いています。一四そして彼はここで
も、御名をとなえる者たちをみな捕縛する権を、祭司長たちから得て
きているのです」。一五しかし、主は仰せになった、「さあ、行きなさ
い。あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わ
たしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である。一六わたしの
名のために彼がどんなに苦しまなければならないかを、彼に知らせ
よう」。一七そこでアナニヤは、出かけて行ってその家にはいり、手
をサウロの上において言った、「兄弟サウロよ、あなたが来る途中で
現れた主イエスは、あなたが再び見えるようになるため、そして聖霊
に満たされるために、わたしをここにおつかわしになったのです」。
一八するとたちどころに、サウロの目から、うろこのようなものが落
ちて、元どおり見えるようになった。そこで彼は立ってバプテスマ

を受け、一九また食事をとって元気を取りもどした。
　サウロは、ダマスコにいる弟子たちと共に数日間を過ごしてから、
二〇ただちに諸会堂でイエスのことを宣べ伝え、このイエスこそ神の
子であると説きはじめた。二一これを聞いた人たちはみな非常に驚い
て言った、「あれは、エルサレムでこの名をとなえる者たちを苦しめ
た男ではないか。その上ここにやってきたのも、彼らを縛りあげて、
祭司長たちのところへひっぱって行くためではなかったか」。二二し
かし、サウロはますます力が加わり、このイエスがキリストであるこ
とを論証して、ダマスコに住むユダヤ人たちを言い伏せた。
二三相当の日数がたったころ、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談を
した。二四ところが、その陰謀が彼の知るところとなった。彼らはサ
ウロを殺そうとして、夜昼、町の門を見守っていたのである。二五そ
こで彼の弟子たちが、夜の間に彼をかごに乗せて、町の城壁づたいに
つりおろした。
二六サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に加わろうと努

めたが、みんなの者は彼を弟子だとは信じないで、恐れていた。二七
ところが、バルナバは彼の世話をして使徒たちのところへ連れて行
き、途中で主が彼に現れて語りかけたことや、彼がダマスコでイエス
の名で大胆に宣べ伝えた次第を、彼らに説明して聞かせた。二八それ
以来、彼は使徒たちの仲間に加わり、エルサレムに出入りし、主の名
によって大胆に語り、二九ギリシヤ語を使うユダヤ人たちとしばしば
語り合い、また論じ合った。しかし、彼らは彼を殺そうとねらってい
た。三〇兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れてくだり、
タルソへ送り出した。

三一こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤ全地方にわたっ
て平安を保ち、基礎がかたまり、主をおそれ聖霊にはげまされて歩
み、次第に信徒の数を増して行った。

三二ペテロは方々をめぐり歩いたが、ルダに住む聖徒たちのところ
へも下って行った。三三そして、そこで、八年間も床についているア
イネヤという人に会った。この人は中風であった。三四ペテロが彼に

言った、「アイネヤよ、イエス・キリストがあなたをいやして下さる
のだ。起きなさい。そして床を取りあげなさい」。すると、彼はただ
ちに起きあがった。三五ルダとサロンに住む人たちは、みなそれを見
て、主に帰依した。
三六ヨッパにタビタ（これを訳すと、ドルカス、すなわち、かもし
か）という女弟子がいた。数々のよい働きや施しをしていた婦人で
あった。三七ところが、そのころ病気になって死んだので、人々はそ
のからだを洗って、屋上の間に安置した。三八ルダはヨッパに近かっ
たので、弟子たちはペテロがルダにきていると聞き、ふたりの者を
彼のもとにやって、「どうぞ、早くこちらにおいで下さい」と頼んだ。
三九そこでペテロは立って、ふたりの者に連れられてきた。彼が着く
とすぐ、屋上の間に案内された。すると、やもめたちがみんな彼のそ
ばに寄ってきて、ドルカスが生前つくった下着や上着の数々を、泣き
ながら見せるのであった。四〇ペテロはみんなの者を外に出し、ひざ
まずいて祈った。それから死体の方に向いて、「タビタよ、起きなさ

い」と言った。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起きなおった。
四一ペテロは彼女に手をかして立たせた。それから、聖徒たちや、や
もめたちを呼び入れて、彼女が生きかえっているのを見せた。四二こ
のことがヨッパ中に知れわたり、多くの人々が主を信じた。四三ペテ
ロは、皮なめしシモンという人の家に泊まり、しばらくの間ヨッパに
滞在した。

第一〇章一さて、カイザリヤにコルネリオという名の人がいた。イ
タリヤ隊と呼ばれた部隊の百卒長で、二信心深く、家族一同と共に
神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしていた。三ある
日の午後三時ごろ、神の使が彼のところにきて、「コルネリオよ」と呼
ぶのを、幻ではっきり見た。四彼は御使を見つめていたが、恐ろしく
なって、「主よ、なんでございますか」と言った。すると御使が言っ
た、「あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられている。五
ついては今、ヨッパに人をやって、ペテロと呼ばれるシモンという人
を招きなさい。六この人は、海べに家をもつ皮なめしシモンという者

の客となっている」。七このお告げをした御使が立ち去ったのち、コ
ルネリオは、僕ふたりと、部下の中で信心深い兵卒ひとりとを呼び、
八いっさいの事を説明して聞かせ、ヨッパへ送り出した。
九翌日、この三人が旅をつづけて町の近くにきたころ、ペテロは祈
をするため屋上にのぼった。時は昼の十二時ごろであった。一〇彼は
空腹をおぼえて、何か食べたいと思った。そして、人々が食事の用意
をしている間に、夢心地になった。一一すると、天が開け、大きな布
のような入れ物が、四すみをつるされて、地上に降りて来るのを見
た。一二その中には、地上の四つ足や這うもの、また空の鳥など、各種
の生きものがはいっていた。一三そして声が彼に聞えてきた、「ペテ
ロよ。立って、それらをほふって食べなさい」。一四ペテロは言った、
「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れ
たものは、何一つ食べたことがありません」。一五すると、声が二度目
にかかってきた、「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはな
らない」。一六こんなことが三度もあってから、その入れ物はすぐ天

に引き上げられた。
一七ペテロが、いま見た幻はなんの事だろうかと、ひとり思案にく
れていると、ちょうどその時、コルネリオから送られた人たちが、シ
モンの家を尋ね当てて、その門口に立っていた。一八そして声をかけ
て、「ペテロと呼ばれるシモンというかたが、こちらにお泊まりでは
ございませんか」と尋ねた。一九ペテロはなおも幻について、思いめ
ぐらしていると、御霊が言った、「ごらんなさい、三人の人たちが、
あなたを尋ねてきている。二〇さあ、立って下に降り、ためらわない
で、彼らと一緒に出かけるがよい。わたしが彼らをよこしたのであ
る」。二一そこでペテロは、その人たちのところに降りて行って言っ
た、「わたしがお尋ねのペテロです。どんなご用でおいでになったの
ですか」。二二彼らは答えた、「正しい人で、神を敬い、ユダヤの全国民
に好感を持たれている百卒長コルネリオが、あなたを家に招いてお
話を伺うようにとのお告げを、聖なる御使から受けましたので、参り
ました」。二三そこで、ペテロは、彼らを迎えて泊まらせた。

翌日、ペテロは立って、彼らと連れだって出発した。ヨッパの兄弟
たち数人も一緒に行った。二四その次の日に、一行はカイザリヤに着
いた。コルネリオは親族や親しい友人たちを呼び集めて、待ってい
た。二五ペテロがいよいよ到着すると、コルネリオは出迎えて、彼の足
もとにひれ伏して拝した。二六するとペテロは、彼を引き起して言っ
た、「お立ちなさい。わたしも同じ人間です」。二七それから共に話し
ながら、へやにはいって行くと、そこには、すでに大ぜいの人が集
まっていた。二八ペテロは彼らに言った、「あなたがたが知っている
とおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすること
は、禁じられています。ところが、神は、どんな人間をも清くないと
か、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりま
した。二九お招きにあずかった時、少しもためらわずに参ったのは、
そのためなのです。そこで伺いますが、どういうわけで、わたしを
招いてくださったのですか」。三〇これに対してコルネリオが答えた、
「四日前、ちょうどこの時刻に、わたしが自宅で午後三時の祈をして

いますと、突然、輝いた衣を着た人が、前に立って申しました、三一
『コルネリオよ、あなたの祈は聞きいれられ、あなたの施しは神のみ
前におぼえられている。三二そこでヨッパに人を送ってペテロと呼ば
れるシモンを招きなさい。その人は皮なめしシモンの海沿いの家に
泊まっている』。三三それで、早速あなたをお呼びしたのです。よう
こそおいで下さいました。今わたしたちは、主があなたにお告げに
なったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ている
のです」。
三四そこでペテロは口を開いて言った、「神は人をかたよりみない
かたで、三五神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さるこ
とが、ほんとうによくわかってきました。三六あなたがたは、神がす
べての者の主なるイエス・キリストによって平和の福音を宣べ伝え
て、イスラエルの子らにお送り下さった御言をご存じでしょう。三七
それは、ヨハネがバプテスマを説いた後、ガリラヤから始まってユダ
ヤ全土にひろまった福音を述べたものです。三八神はナザレのイエス

に聖霊と力とを注がれました。このイエスは、神が共におられるの
で、よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々をこと
ごとくいやしながら、巡回されました。三九わたしたちは、イエスが
こうしてユダヤ人の地やエルサレムでなさったすべてのことの証人
であります。人々はこのイエスを木にかけて殺したのです。四〇しか
し神はイエスを三日目によみがえらせ、四一全部の人々にではなかっ
たが、わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現れるよ
うにして下さいました。わたしたちは、イエスが死人の中から復活
された後、共に飲食しました。四二それから、イエスご自身が生者と
死者との審判者として神に定められたかたであることを、人々に宣
べ伝え、またあかしするようにと、神はわたしたちにお命じになった
のです。四三預言者たちもみな、イエスを信じる者はことごとく、そ
の名によって罪のゆるしが受けられると、あかしをしています」。
四四ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞
いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。四五割礼を受けている

信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が
注がれたのを見て、驚いた。四六それは、彼らが異言を語って神をさ
んびしているのを聞いたからである。そこで、ペテロが言い出した、
四七「この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、
彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこばみ得ようか」。四八
こう言って、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名に
よってバプテスマを受けさせた。それから、彼らはペテロに願って、
なお数日のあいだ滞在してもらった。

第一一章

一さて、異邦人たちも神の言を受けいれたということが、
使徒たちやユダヤにいる兄弟たちに聞えてきた。二そこでペテロがエ
ルサレムに上ったとき、割礼を重んじる者たちが彼をとがめて言っ
た、三「あなたは、割礼のない人たちのところに行って、食事を共にし
たということだが」。四そこでペテロは口を開いて、順序正しく説明
して言った、五「わたしがヨッパの町で祈っていると、夢心地になっ
て幻を見た。大きな布のような入れ物が、四すみをつるされて、天か

ら降りてきて、わたしのところにとどいた。六注意して見つめている
と、地上の四つ足、野の獣、這うもの、空の鳥などが、はいっていた。
七それから声がして、『ペテロよ、立って、それらをほふって食べな
さい』と、わたしに言うのが聞えた。八わたしは言った、『主よ、そ
れはできません。わたしは今までに、清くないものや汚れたものを口
に入れたことが一度もございません』。九すると、二度目に天から声
がかかってきた、『神がきよめたものを、清くないなどと言ってはな
らない』。一〇こんなことが三度もあってから、全部のものがまた天
に引き上げられてしまった。一一ちょうどその時、カイザリヤからつ
かわされてきた三人の人が、わたしたちの泊まっていた家に着いた。
一二御霊がわたしに、ためらわずに彼らと共に行けと言ったので、こ
こにいる六人の兄弟たちも、わたしと一緒に出かけて行き、一同がそ
の人の家にはいった。一三すると彼はわたしたちに、御使が彼の家に
現れて、『ヨッパに人をやって、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさ
い。一四この人は、あなたとあなたの全家族とが救われる言葉を語っ

て下さるであろう』と告げた次第を、話してくれた。一五そこでわた
しが語り出したところ、聖霊が、ちょうど最初わたしたちの上にく
だったと同じように、彼らの上にくだった。一六その時わたしは、主
が『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によって
バプテスマを受けるであろう』と仰せになった言葉を思い出した。一
七このように、わたしたちが主イエス・キリストを信じた時に下さっ
たのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったとすれば、わたしの
ような者が、どうして神を妨げることができようか」。一八人々はこ
れを聞いて黙ってしまった。それから神をさんびして、「それでは神
は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになったのだ」と言った。
一九さて、ステパノのことで起った迫害のために散らされた人々は、
ピニケ、クプロ、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の
者には、だれにも御言を語っていなかった。二〇ところが、その中に
数人のクプロ人とクレネ人がいて、アンテオケに行ってからギリシヤ
人にも呼びかけ、主イエスを宣べ伝えていた。二一そして、主のみ手

が彼らと共にあったため、信じて主に帰依するものの数が多かった。
二二このうわさがエルサレムにある教会に伝わってきたので、教会
はバルナバをアンテオケにつかわした。二三彼は、そこに着いて、神
のめぐみを見てよろこび、主に対する信仰を揺るがない心で持ちつ
づけるようにと、みんなの者を励ました。二四彼は聖霊と信仰とに満
ちた立派な人であったからである。こうして主に加わる人々が、大
ぜいになった。二五そこでバルナバはサウロを捜しにタルソへ出かけ
て行き、二六彼を見つけたうえ、アンテオケに連れて帰った。ふたり
は、まる一年、ともどもに教会で集まりをし、大ぜいの人々を教え
た。このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれる
ようになった。

二七そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケにくだって
きた。二八その中のひとりであるアガボという者が立って、世界中に
大ききんが起るだろうと、御霊によって預言したところ、果してそれ
がクラウデオ帝の時に起った。二九そこで弟子たちは、それぞれの力

に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに援助を送ることに決めた。
三〇そして、それをバルナバとサウロとの手に託して、長老たちに送
りとどけた。
第一二章一そのころ、ヘロデ王は教会のある者たちに圧迫の手をの
ばし、二ヨハネの兄弟ヤコブをつるぎで切り殺した。三そして、それ
がユダヤ人たちの意にかなったのを見て、さらにペテロをも捕えに
かかった。それは除酵祭の時のことであった。四ヘロデはペテロを捕
えて獄に投じ、四人一組の兵卒四組に引き渡して、見張りをさせてお
いた。過越の祭のあとで、彼を民衆の前に引き出すつもりであった
のである。五こうして、ペテロは獄に入れられていた。教会では、彼
のために熱心な祈が神にささげられた。
六ヘロデが彼を引き出そうとしていたその夜、ペテロは二重の鎖
につながれ、ふたりの兵卒の間に置かれて眠っていた。番兵たちは
戸口で獄を見張っていた。七すると、突然、主の使がそばに立ち、光
が獄内を照した。そして御使はペテロのわき腹をつついて起し、「早

く起きあがりなさい」と言った。すると鎖が彼の両手から、はずれ落
ちた。八御使が「帯をしめ、くつをはきなさい」と言ったので、彼は
そのとおりにした。それから「上着を着て、ついてきなさい」と言わ
れたので、九ペテロはついて出て行った。彼には御使のしわざが現実
のこととは考えられず、ただ幻を見ているように思われた。一〇彼ら
は第一、第二の衛所を通りすぎて、町に抜ける鉄門のところに来る
と、それがひとりでに開いたので、そこを出て一つの通路に進んだと
たんに、御使は彼を離れ去った。一一その時ペテロはわれにかえって
言った、「今はじめて、ほんとうのことがわかった。主が御使をつか
わして、ヘロデの手から、またユダヤ人たちの待ちもうけていたあら
ゆる災から、わたしを救い出して下さったのだ」。

一二ペテロはこうとわかってから、マルコと呼ばれているヨハネの
母マリヤの家に行った。その家には大ぜいの人が集まって祈ってい
た。一三彼が門の戸をたたいたところ、ロダという女中が取次ぎに出
てきたが、一四ペテロの声だとわかると、喜びのあまり、門をあけも

しないで家に駆け込み、ペテロが門口に立っていると報告した。一五
人々は「あなたは気が狂っている」と言ったが、彼女は自分の言うこ
とに間違いはないと、言い張った。そこで彼らは「それでは、ペテロ
の御使だろう」と言った。一六しかし、ペテロが門をたたきつづける
ので、彼らがあけると、そこにペテロがいたのを見て驚いた。一七ペ
テロは手を振って彼らを静め、主が獄から彼を連れ出して下さった
次第を説明し、「このことを、ヤコブやほかの兄弟たちに伝えて下さ
い」と言い残して、どこかほかの所へ出て行った。

一八夜が明けると、兵卒たちの間に、ペテロはいったいどうなった
のだろうと、大へんな騒ぎが起った。一九ヘロデはペテロを捜しても
見つからないので、番兵たちを取り調べたうえ、彼らを死刑に処する
ように命じ、そして、ユダヤからカイザリヤにくだって行って、そこ
に滞在した。

二〇さて、ツロとシドンとの人々は、ヘロデの怒りに触れていたので、
一同うちそろって王をおとずれ、王の侍従官ブラストに取りいって、

和解かたを依頼した。彼らの地方が、王の国から食糧を得ていたか
らである。二一定められた日に、ヘロデは王服をまとって王座にすわ
り、彼らにむかって演説をした。二二集まった人々は、「これは神の
声だ、人間の声ではない」と叫びつづけた。二三するとたちまち、主
の使が彼を打った。神に栄光を帰することをしなかったからである。
彼は虫にかまれて息が絶えてしまった。
二四こうして、主の言はますます盛んにひろまって行った。
二五バルナバとサウロとは、その任務を果したのち、マルコと呼ば
れていたヨハネを連れて、エルサレムから帰ってきた。
第一三章一さて、アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと
呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、
およびサウロなどの預言者や教師がいた。二一同が主に礼拝をささ
げ、断食をしていると、聖霊が「さあ、バルナバとサウロとを、わた
しのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい」と告
げた。三そこで一同は、断食と祈とをして、手をふたりの上においた

後、出発させた。
四ふたりは聖霊に送り出されて、セルキヤにくだり、そこから舟で
クプロに渡った。五そしてサラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神
の言を宣べはじめた。彼らはヨハネを助け手として連れていた。六島
全体を巡回して、パポスまで行ったところ、そこでユダヤ人の魔術
師、バルイエスというにせ預言者に出会った。七彼は地方総督セルギ
オ・パウロのところに出入りをしていた。この総督は賢明な人であっ
て、バルナバとサウロとを招いて、神の言を聞こうとした。八ところ
が魔術師エルマ（彼の名は「魔術師」との意）は、総督を信仰からそ
らそうとして、しきりにふたりの邪魔をした。九サウロ、またの名は
パウロ、は聖霊に満たされ、彼をにらみつけて一〇言った、「ああ、あ
らゆる偽りと邪悪とでかたまっている悪魔の子よ、すべて正しいもの
の敵よ。主のまっすぐな道を曲げることを止めないのか。一一見よ、
主のみ手がおまえの上に及んでいる。おまえは盲になって、当分、日
の光が見えなくなるのだ」。たちまち、かすみとやみとが彼にかかっ

たため、彼は手さぐりしながら、手を引いてくれる人を捜しまわっ
た。一二総督はこの出来事を見て、主の教にすっかり驚き、そして信
じた。
一三パウロとその一行は、パポスから船出して、パンフリヤのペル
ガに渡った。ここでヨハネは一行から身を引いて、エルサレムに帰っ
てしまった。一四しかしふたりは、ペルガからさらに進んで、ピシデヤ
のアンテオケに行き、安息日に会堂にはいって席に着いた。一五律法
と預言書の朗読があったのち、会堂司たちが彼らのところに人をつか
わして、「兄弟たちよ、もしあなたがたのうち、どなたか、この人々
に何か奨励の言葉がありましたら、どうぞお話し下さい」と言わせ
た。一六そこでパウロが立ちあがり、手を振りながら言った。
「イスラエルの人たち、ならびに神を敬うかたがたよ、お聞き下
さい。一七この民イスラエルの神は、わたしたちの先祖を選び、エジ
プトの地に滞在中、この民を大いなるものとし、み腕を高くさし上
げて、彼らをその地から導き出された。一八そして約四十年にわたっ

て、荒野で彼らをはぐくみ、一九カナンの地では七つの異民族を打ち
滅ぼし、その地を彼らに譲り与えられた。二〇それらのことが約四百
五十年の年月にわたった。その後、神はさばき人たちをおつかわし
になり、預言者サムエルの時に及んだ。二一その時、人々が王を要求
したので、神はベニヤミン族の人、キスの子サウロを四十年間、彼ら
におつかわしになった。二二それから神はサウロを退け、ダビデを立
てて王とされたが、彼についてあかしをして、『わたしはエッサイの
子ダビデを見つけた。彼はわたしの心にかなった人で、わたしの思
うところを、ことごとく実行してくれるであろう』と言われた。二三
神は約束にしたがって、このダビデの子孫の中から救主イエスをイ
スラエルに送られたが、二四そのこられる前に、ヨハネがイスラエル
のすべての民に悔改めのバプテスマを、あらかじめ宣べ伝えていた。
二五ヨハネはその一生の行程を終ろうとするに当って言った、『わた
しは、あなたがたが考えているような者ではない。しかし、わたし
のあとから来るかたがいる。わたしはそのくつを脱がせてあげる値

うちもない』。二六兄弟たち、アブラハムの子孫のかたがた、ならび
に皆さんの中の神を敬う人たちよ。この救の言葉はわたしたちに送
られたのである。二七エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イ
エスを認めずに刑に処し、それによって、安息日ごとに読む預言者の
言葉が成就した。二八また、なんら死に当る理由が見いだせなかった
のに、ピラトに強要してイエスを殺してしまった。二九そして、イエ
スについて書いてあることを、皆なし遂げてから、人々はイエスを木
から取りおろして墓に葬った。三〇しかし、神はイエスを死人の中か
ら、よみがえらせたのである。三一イエスは、ガリラヤからエルサレ
ムへ一緒に上った人たちに、幾日ものあいだ現れ、そして、彼らは今
や、人々に対してイエスの証人となっている。三二わたしたちは、神
が先祖たちに対してなされた約束を、ここに宣べ伝えているのであ
る。三三神は、イエスをよみがえらせて、わたしたち子孫にこの約束
を、お果しになった。それは詩篇の第二篇にも、『あなたこそは、わ
たしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ』と書いてあるとおり

である。三四また、神がイエスを死人の中からよみがえらせて、いつ
までも朽ち果てることのないものとされたことについては、『わたし
は、ダビデに約束した確かな聖なる祝福を、あなたがたに授けよう』
と言われた。三五だから、ほかの箇所でもこう言っておられる、『あ
なたの聖者が朽ち果てるようなことは、お許しにならないであろう』。
三六事実、ダビデは、その時代の人々に神のみ旨にしたがって仕えた
が、やがて眠りにつき、先祖たちの中に加えられて、ついに朽ち果て
てしまった。三七しかし、神がよみがえらせたかたは、朽ち果てるこ
とがなかったのである。三八だから、兄弟たちよ、この事を承知して
おくがよい。すなわち、このイエスによる罪のゆるしの福音が、今や
あなたがたに宣べ伝えられている。そして、モーセの律法では義と
されることができなかったすべての事についても、三九信じる者はも
れなく、イエスによって義とされるのである。四〇だから預言者たち
の書にかいてある次のようなことが、あなたがたの身に起らないよ
うに気をつけなさい。

四一『見よ、侮る者たちよ。驚け、そして滅び去れ。
わたしは、あなたがたの時代に一つの事をする。
それは、人がどんなに説明して聞かせても、
あなたがたのとうてい信じないような事なのである』」。
四二ふたりが会堂を出る時、人々は次の安息日にも、これと同じ話
をしてくれるようにと、しきりに願った。四三そして集会が終ってか
らも、大ぜいのユダヤ人や信心深い改宗者たちが、パウロとバルナバ
とについてきたので、ふたりは、彼らが引きつづき神のめぐみにとど
まっているようにと、説きすすめた。
四四次の安息日には、ほとんど全市をあげて、神の言を聞きに集まっ
てきた。四五するとユダヤ人たちは、その群衆を見てねたましく思い、
パウロの語ることに口ぎたなく反対した。四六パウロとバルナバとは
大胆に語った、「神の言は、まず、あなたがたに語り伝えられなけれ
ばならなかった。しかし、あなたがたはそれを退け、自分自身を永遠
の命にふさわしからぬ者にしてしまったから、さあ、わたしたちはこ

れから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ。**四七**主はわたした
ちに、こう命じておられる、
『わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。
あなたが地の果までも救をもたらすためである』」。
四八異邦人たちはこれを聞いてよろこび、主の御言をほめたたえてや
まなかった。そして、永遠の命にあずかるように定められていた者
は、みな信じた。**四九**こうして、主の御言はこの地方全体にひろまっ
て行った。**五〇**ところが、ユダヤ人たちは、信心深い貴婦人たちや町
の有力者たちを煽動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりを
その地方から追い出させた。**五一**ふたりは、彼らに向けて足のちりを
払い落して、イコニオムへ行った。**五二**弟子たちは、ますます喜びと
聖霊とに満たされていた。

第一四章一ふたりは、イコニオムでも同じようにユダヤ人の会堂に
はいって語った結果、ユダヤ人やギリシヤ人が大ぜい信じた。**二**とこ
ろが、信じなかったユダヤ人たちは異邦人たちをそそのかして、兄弟

たちに対して悪意をいだかせた。三それにもかかわらず、ふたりは長
い期間をそこで過ごして、大胆に主のことを語った。主は、彼らの手
によってしるしと奇跡とを行わせ、そのめぐみの言葉をあかしされ
た。四そこで町の人々が二派に分れ、ある人たちはユダヤ人の側につ
き、ある人たちは使徒の側についた。五その時、異邦人やユダヤ人が
役人たちと一緒になって反対運動を起し、使徒たちをはずかしめ、石
で打とうとしたので、六ふたりはそれと気づいて、ルカオニヤの町々、
ルステラ、デルベおよびその附近の地へのがれ、七そこで引きつづき
福音を伝えた。

八ところが、ルステラに足のきかない人が、すわっていた。彼は生
れながらの足なえで、歩いた経験が全くなかった。九この人がパウロ
の語るのを聞いていたが、パウロは彼をじっと見て、いやされるほど
の信仰が彼にあるのを認め、一〇大声で「自分の足で、まっすぐに立
ちなさい」と言った。すると彼は踊り上がって歩き出した。一一群衆
はパウロのしたことを見て、声を張りあげ、ルカオニヤの地方語で、

「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったの
だ」と叫んだ。一二彼らはバルナバをゼウスと呼び、パウロはおもに
語る人なので、彼をヘルメスと呼んだ。一三そして、郊外にあるゼウ
ス神殿の祭司が、群衆と共に、ふたりに犠牲をささげようと思って、
雄牛数頭と花輪とを門前に持ってきた。一四ふたりの使徒バルナバと
パウロとは、これを聞いて自分の上着を引き裂き、群衆の中に飛び
込んで行き、叫んで一五言った、「皆さん、なぜこんな事をするのか。
わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。そして、あ
なたがたがこのような愚にもつかぬものを捨てて、天と地と海と、そ
の中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るようにと、
福音を説いているものである。一六神は過ぎ去った時代には、すべて
の国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたが、一七それ
でも、ご自分のことをあかししないでおられたわけではない。すなわ
ち、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物
と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与

えになっているのである」。一八こう言って、ふたりは、やっとのこ
とで、群衆が自分たちに犠牲をささげるのを、思い止まらせた。
一九ところが、あるユダヤ人たちはアンテオケやイコニオムから押
しかけてきて、群衆を仲間に引き入れたうえ、パウロを石で打ち、死
んでしまったと思って、彼を町の外に引きずり出した。二〇しかし、
弟子たちがパウロを取り囲んでいる間に、彼は起きあがって町には
いって行った。そして翌日には、バルナバと一緒にデルベにむかって
出かけた。二一その町で福音を伝えて、大ぜいの人を弟子とした後、
ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、二二弟子た
ちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、「わたしたちが神
の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならない」と語った。
二三また教会ごとに彼らのために長老たちを任命し、断食をして祈り、
彼らをその信じている主にゆだねた。

二四それから、ふたりはピシデヤを通過してパンフリヤにきたが、
二五ペルガで御言を語った後、アタリヤにくだり、二六そこから舟で

アンテオケに帰った。彼らが今なし終った働きのために、神の祝福を
受けて送り出されたのは、このアンテオケからであった。二七彼らは
到着早々、教会の人々を呼び集めて、神が彼らと共にいてして下さっ
た数々のこと、また信仰の門を異邦人に開いて下さったことなどを、
報告した。二八そして、ふたりはしばらくの間、弟子たちと一緒に過
ごした。

第一五章一さて、ある人たちがユダヤから下ってきて、兄弟たちに
「あなたがたも、モーセの慣例にしたがって割礼を受けなければ、救
われない」と、説いていた。二そこで、パウロやバルナバと彼らとの
間に、少なからぬ紛糾と争論とが生じたので、パウロ、バルナバその
ほか数人の者がエルサレムに上り、使徒たちや長老たちと、この問題
について協議することになった。三彼らは教会の人々に見送られ、ピ
ニケ、サマリヤをとおって、道すがら、異邦人たちの改宗の模様をく
わしく説明し、すべての兄弟たちを大いに喜ばせた。四エルサレムに
着くと、彼らは教会と使徒たち、長老たちに迎えられて、神が彼らと

共にいてなされたことを、ことごとく報告した。五ところが、パリサ
イ派から信仰にはいってきた人たちが立って、「異邦人にも割礼を施
し、またモーセの律法を守らせるべきである」と主張した。
六そこで、使徒たちや長老たちが、この問題について審議するため
に集まった。七激しい争論があった後、ペテロが立って言った、「兄弟
たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞い
て信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中からわたしをお選
びになったのである。八そして、人の心をご存じである神は、聖霊を
われわれに賜わったと同様に彼らにも賜わって、彼らに対してあか
しをなし、九また、その信仰によって彼らの心をきよめ、われわれと
彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかった。一〇しかるに、
諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかった
くびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか。一一確かに、
主イエスのめぐみによって、われわれは救われるのだと信じるが、彼
らとても同様である」。

一二すると、全会衆は黙ってしまった。それから、バルナバとパウ
ロとが、彼らをとおして異邦人の間に神が行われた数々のしるしと
奇跡のことを、説明するのを聞いた。
一三ふたりが語り終えた後、ヤ
コブはそれに応じて述べた、「兄弟たちよ、わたしの意見を聞いていた
だきたい。
一四神が初めに異邦人たちを顧みて、その中から御名を負
う民を選び出された次第は、シメオンがすでに説明した。
一五預言者
たちの言葉も、それと一致している。すなわち、こう書いてある、
一六『その後、わたしは帰ってきて、
倒れたダビデの幕屋を建てかえ、
くずれた箇所を修理し、
それを立て直そう。
一七残っている人々も、
わたしの名を唱えているすべての異邦人も、
主を尋ね求めるようになるためである。
一八世の初めからこれらの事を知らせておられる主が、こう仰せ

になった』。
一九そこで、わたしの意見では、異邦人の中から神に帰依している人
たちに、わずらいをかけてはいけない。二〇ただ、偶像に供えて汚れ
た物と、不品行と、絞め殺したものと、血とを、避けるようにと、彼
らに書き送ることにしたい。二一古い時代から、どの町にもモーセの
律法を宣べ伝える者がいて、安息日ごとにそれを諸会堂で朗読する
ならわしであるから」。
二二そこで、使徒たちや長老たちは、全教会と協議した末、お互の
中から人々を選んで、パウロやバルナバと共に、アンテオケに派遣す
ることに決めた。選ばれたのは、バルサバというユダとシラスとで
あったが、いずれも兄弟たちの間で重んじられていた人たちであっ
た。二三この人たちに託された書面はこうである。
「あなたがたの兄弟である使徒および長老たちから、アンテオケ、
シリヤ、キリキヤにいる異邦人の兄弟がたに、あいさつを送る。二四
こちらから行ったある者たちが、わたしたちからの指示もないのに、

いろいろなことを言って、あなたがたを騒がせ、あなたがたの心を乱
したと伝え聞いた。二五そこで、わたしたちは人々を選んで、愛する
バルナバおよびパウロと共に、あなたがたのもとに派遣することに、
衆議一決した。二六このふたりは、われらの主イエス・キリストの名
のために、その命を投げ出した人々であるが、二七彼らと共に、ユダ
とシラスとを派遣する次第である。この人たちは、あなたがたに、同
じ趣旨のことを、口頭でも伝えるであろう。二八すなわち、聖霊とわ
たしたちとは、次の必要事項のほかは、どんな負担をも、あなたが
たに負わせないことに決めた。二九それは、偶像に供えたものと、血
と、絞め殺したものと、不品行とを、避けるということである。これ
らのものから遠ざかっておれば、それでよろしい。以上」。
三〇さて、一行は人々に見送られて、アンテオケに下って行き、会衆
を集めて、その書面を手渡した。三一人々はそれを読んで、その勧めの
言葉をよろこんだ。三二ユダとシラスとは共に預言者であったので、
多くの言葉をもって兄弟たちを励まし、また力づけた。三三ふたりは、

しばらくの時を、そこで過ごした後、兄弟たちから、旅の平安を祈ら
れて、見送りを受け、自分らを派遣した人々のところに帰って行っ
た。〔三四しかし、シラスだけは、引きつづきとどまることにした。〕
三五パウロとバルナバとはアンテオケに滞在をつづけて、ほかの多く
の人たちと共に、主の言葉を教えかつ宣べ伝えた。

三六幾日かの後、パウロはバルナバに言った、「さあ、前に主の言葉
を伝えたすべての町々にいる兄弟たちを、また訪問して、みんなが
どうしているかを見てこようではないか」。三七そこで、バルナバは
マルコというヨハネも一緒に連れて行くつもりでいた。三八しかし、
パウロは、前にパンフリヤで一行から離れて、働きを共にしなかった
ような者は、連れて行かないがよいと考えた。三九こうして激論が起
り、その結果ふたりは互に別れ別れになり、バルナバはマルコを連れ
てクプロに渡って行き、四〇パウロはシラスを選び、兄弟たちから主
の恵みにゆだねられて、出発した。四一そしてパウロは、シリヤ、キ
リキヤの地方をとおって、諸教会を力づけた。

第一六章 一それから、彼はデルベに行き、次にルステラに行った。
そこにテモテという名の弟子がいた。信者のユダヤ婦人を母とし、ギ
リシヤ人を父としており、二ルステラとイコニオムの兄弟たちの間
で、評判のよい人物であった。三パウロはこのテモテを連れて行きた
かったので、その地方にいるユダヤ人の手前、まず彼に割礼を受けさ
せた。彼の父がギリシヤ人であることは、みんな知っていたからで
ある。四それから彼らは通る町々で、エルサレムの使徒たちや長老た
ちの取り決めた事項を守るようにと、人々にそれを渡した。五こうし
て、諸教会はその信仰を強められ、日ごとに数を増していった。
六それから彼らは、アジヤで御言を語ることを聖霊に禁じられたの
で、フルギヤ・ガラテヤ地方をとおって行った。七そして、ムシヤの
あたりにきてから、ビテニヤに進んで行こうとしたところ、イエスの
御霊がこれを許さなかった。八それで、ムシヤを通過して、トロアス
に下って行った。九ここで夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマ
ケドニヤ人が立って、「マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助け

て下さい」と、彼に懇願するのであった。一〇パウロがこの幻を見た
時、これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお招きに
なったのだと確信して、わたしたちは、ただちにマケドニヤに渡って
行くことにした。
一一そこで、わたしたちはトロアスから船出して、サモトラケに直航
し、翌日ネアポリスに着いた。一二そこからピリピへ行った。これは
マケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった。わたしたち
は、この町に数日間滞在した。一三ある安息日に、わたしたちは町の
門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そ
こにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。一四ところが、テア
テラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。主
は彼女の心を開いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた。一五そし
て、この婦人もその家族も、共にバプテスマを受けたが、その時、彼女
は「もし、わたしを主を信じる者とお思いでしたら、どうぞ、わたし
の家にきて泊まって下さい」と懇望し、しいてわたしたちをつれて

行った。
一六ある時、わたしたちが、祈り場に行く途中、占いの霊につかれ
た女奴隷に出会った。彼女は占いをして、その主人たちに多くの利益
を得させていた者である。一七この女が、パウロやわたしたちのあと
を追ってきては、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたが
たに救の道を伝えるかただ」と、叫び出すのであった。一八そして、
そんなことを幾日間もつづけていた。パウロは困りはてて、その霊
にむかい「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行
け」と言った。すると、その瞬間に霊が女から出て行った。
一九彼女の主人たちは、自分らの利益を得る望みが絶えたのを見て、
パウロとシラスとを捕え、役人に引き渡すため広場に引きずって行っ
た。二〇それから、ふたりを長官たちの前に引き出して訴えた、「こ
の人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、二一
わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝し
ているのです」。二二群衆もいっせいに立って、ふたりを責めたてた

ので、長官たちはふたりの上着をはぎ取り、むちで打つことを命じ
た。二三それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、
獄吏にしっかり番をするようにと命じた。二四獄吏はこの厳命を受け
たので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかとかけて
おいた。

二五真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづ
けたが、囚人たちは耳をすまして聞きいっていた。二六ところが突然、
大地震が起って、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、み
んなの者の鎖が解けてしまった。二七獄吏は目をさまし、獄の戸が開
いてしまっているのを見て、囚人たちが逃げ出したものと思い、つる
ぎを抜いて自殺しかけた。二八そこでパウロは大声をあげて言った、
「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」。二
九すると、獄吏は、あかりを手に入れた上、獄に駆け込んできて、おの
のきながらパウロとシラスの前にひれ伏した。三〇それから、ふたり
を外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何を

すべきでしょうか」。三一ふたりが言った、「主イエスを信じなさい。
そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」。三二それから、彼
とその家族一同とに、神の言を語って聞かせた。三三彼は真夜中にも
かかわらず、ふたりを引き取って、その打ち傷を洗ってやった。そし
て、その場で自分も家族も、ひとり残らずバプテスマを受け、三四さ
らに、ふたりを自分の家に案内して食事のもてなしをし、神を信じる
者となったことを、全家族と共に心から喜んだ。

三五夜が明けると、長官たちは警吏らをつかわして、「あの人たち
を釈放せよ」と言わせた。三六そこで、獄吏はこの言葉をパウロに伝
えて言った、「長官たちが、あなたがたを釈放させるようにと、使を
よこしました。さあ、出てきて、無事にお帰りなさい」。三七ところ
が、パウロは警吏らに言った、「彼らは、ローマ人であるわれわれを、
裁判にかけもせずに、公衆の前でむち打ったあげく、獄に入れてし
まった。しかるに今になって、ひそかに、われわれを出そうとするの
か。それは、いけない。彼ら自身がここにきて、われわれを連れ出す

べきである」。三八警吏らはこの言葉を長官たちに報告した。すると
長官たちは、ふたりがローマ人だと聞いて恐れ、三九自分でやってき
てわびた上、ふたりを獄から連れ出し、町から立ち去るようにと頼ん
だ。四〇ふたりは獄を出て、ルデヤの家に行った。そして、兄弟たち
に会って勧めをなし、それから出かけた。

第一七章一一行は、アムピポリスとアポロニヤとをとおって、テサ
ロニケに行った。ここにはユダヤ人の会堂があった。二パウロは例に
よって、その会堂にはいって行って、三つの安息日にわたり、聖書に
基いて彼らと論じ、三キリストは必ず苦難を受け、そして死人の中か
らよみがえるべきこと、また「わたしがあなたがたに伝えているこの
イエスこそは、キリストである」とのことを、説明もし論証もした。
四ある人たちは納得がいって、パウロとシラスにしたがった。その中
には、信心深いギリシヤ人が多数あり、貴婦人たちも少なくなかっ
た。五ところが、ユダヤ人たちは、それをねたんで、町をぶらついて
いるならず者らを集めて暴動を起し、町を騒がせた。それからヤソ

ンの家を襲い、ふたりを民衆の前にひっぱり出そうと、しきりに捜
した。六しかし、ふたりが見つからないので、ヤソンと兄弟たち数人
を、市の当局者のところに引きずって行き、叫んで言った、「天下を
かき回してきたこの人たちが、ここにもはいり込んでいます。七その
人たちをヤソンが自分の家に迎え入れました。この連中は、みなカイ
ザルの詔勅にそむいて行動し、イエスという別の王がいるなどと言っ
ています」。八これを聞いて、群衆と市の当局者は不安に感じた。九
そして、ヤソンやほかの者たちから、保証金を取った上、彼らを釈放
した。

一〇そこで、兄弟たちはただちに、パウロとシラスとを、夜の間に
ベレヤへ送り出した。ふたりはベレヤに到着すると、ユダヤ人の会堂
に行った。一一ここにいるユダヤ人はテサロニケの者たちよりも素直
であって、心から教を受けいれ、果してそのとおりかどうかを知ろう
として、日々聖書を調べていた。一二そういうわけで、彼らのうちの
多くの者が信者になった。また、ギリシヤの貴婦人や男子で信じた者

も、少なくなかった。一三テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがべ
レヤでも神の言を伝えていることを知り、そこにも押しかけてきて、
群衆を煽動して騒がせた。一四そこで、兄弟たちは、ただちにパウロ
を送り出して、海べまで行かせ、シラスとテモテとはベレヤに居残っ
た。一五パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行き、テ
モテとシラスとになるべく早く来るようにとのパウロの伝言を受け
て、帰った。

一六さて、パウロはアテネで彼らを待っている間に、市内に偶像がお
びただしくあるのを見て、心に憤りを感じた。一七そこで彼は、会堂で
はユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会う人々
を相手に論じた。一八また、エピクロス派やストア派の哲学者数人も、
パウロと議論を戦わせていたが、その中のある者たちが言った、「こ
のおしゃべりは、いったい、何を言おうとしているのか」。また、ほ
かの者たちは、「あれは、異国の神々を伝えようとしているらしい」
と言った。パウロが、イエスと復活とを、宣べ伝えていたからであっ

た。一九そこで、彼らはパウロをアレオパゴスの評議所に連れて行っ
て、「君の語っている新しい教がどんなものか、知らせてもらえまい
か。二〇君がなんだか珍らしいことをわれわれに聞かせているので、
それがなんの事なのか知りたいと思うのだ」と言った。二一いったい、
アテネ人もそこに滞在している外国人もみな、何か耳新しいことを
話したり聞いたりすることのみに、時を過ごしていたのである。二二
そこでパウロは、アレオパゴスの評議所のまん中に立って言った。
「アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこ
ぶる宗教心に富んでおられると、わたしは見ている。二三実は、わた
しが道を通りながら、あなたがたの拝むいろいろなものを、よく見
ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇もあるのに気がつ
いた。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知ら
せてあげよう。二四この世界と、その中にある万物とを造った神は、
天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。
二五また、何か不足でもしておるかのように、人の手によって仕えら

れる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、二六
また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ま
わせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのであ
る。二七こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見
いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりか
ら遠く離れておいでになるのではない。二八われわれは神のうちに生
き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも
言ったように、

『われわれも、確かにその子孫である』。

二九このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、
人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見
なすべきではない。三〇神は、このような無知の時代を、これまでは
見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなけ
ればならないことを命じておられる。三一神は、義をもってこの世界
をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをな

し遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみ
がえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」。
三二死人のよみがえりのことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ま
たある者たちは、「この事については、いずれまた聞くことにする」
と言った。三三こうして、パウロは彼らの中から出て行った。三四し
かし、彼にしたがって信じた者も、幾人かあった。その中には、アレ
オパゴスの裁判人デオヌシオとダマリスという女、また、その他の
人々もいた。

第一八章一その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。二
そこで、アクラというポント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラと
に出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去
させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリヤから出てきた
のである。三パウロは彼らのところに行ったが、互に同業であったの
で、その家に住み込んで、一緒に仕事をした。天幕造りがその職業で
あった。四パウロは安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシ

ヤ人の説得に努めた。
五シラスとテモテが、マケドニヤから下ってきてからは、パウロは
御言を伝えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ
人たちに力強くあかしした。六しかし、彼らがこれに反抗してののし
り続けたので、パウロは自分の上着を振りはらって、彼らに言った、
「あなたがたの血は、あなたがた自身にかえれ。わたしには責任がな
い。今からわたしは異邦人の方に行く」。七こう言って、彼はそこを
去り、テテオ・ユストという神を敬う人の家に行った。その家は会堂
と隣り合っていた。八会堂司クリスポは、その家族一同と共に主を信
じた。また多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、ぞくぞく
とバプテスマを受けた。九すると、ある夜、幻のうちに主がパウロに
言われた、「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。一〇あなたに
は、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるよう
なことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」。一一パウロ
は一年六か月の間ここに腰をすえて、神の言を彼らの間に教えつづ

けた。
一二ところが、ガリオがアカヤの総督であった時、ユダヤ人たちは
一緒になってパウロを襲い、彼を法廷にひっぱって行って訴えた、一
三「この人は、律法にそむいて神を拝むように、人々をそそのかして
います」。一四パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人たち
に言った、「ユダヤ人諸君、何か不法行為とか、悪質の犯罪とかのこと
なら、わたしは当然、諸君の訴えを取り上げもしようが、一五これは
諸君の言葉や名称や律法に関する問題なのだから、諸君みずから始末
するがよかろう。わたしはそんな事の裁判人にはなりたくない」。一
六こう言って、彼らを法廷から追いはらった。一七そこで、みんなの
者は、会堂司ソステネを引き捕え、法廷の前で打ちたたいた。ガリオ
はそれに対して、そ知らぬ顔をしていた。
一八さてパウロは、なお幾日ものあいだ滞在した後、兄弟たちに別
れを告げて、シリヤへ向け出帆した。プリスキラとアクラも同行し
た。パウロは、かねてから、ある誓願を立てていたので、ケンクレヤ

で頭をそった。一九一行がエペソに着くと、パウロはふたりをそこに
残しておき、自分だけ会堂にはいって、ユダヤ人たちと論じた。二〇
人々は、パウロにもっと長いあいだ滞在するように願ったが、彼は聞
きいれないで、二一「神のみこころなら、またあなたがたのところに
帰ってこよう」と言って、別れを告げ、エペソから船出した。二二そ
れから、カイザリヤで上陸してエルサレムに上り、教会にあいさつし
てから、アンテオケに下って行った。二三そこにしばらくいてから、
彼はまた出かけ、ガラテヤおよびフルギヤの地方を歴訪して、すべて
の弟子たちを力づけた。

二四さて、アレキサンデリヤ生れで、聖書に精通し、しかも、雄弁な
アポロというユダヤ人が、エペソにきた。二五この人は主の道に通じ
ており、また、霊に燃えてイエスのことを詳しく語ったり教えたりし
ていたが、ただヨハネのバプテスマしか知っていなかった。二六彼は
会堂で大胆に語り始めた。それをプリスキラとアクラとが聞いて、彼
を招きいれ、さらに詳しく神の道を解き聞かせた。二七それから、ア

ポロがアカヤに渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、
先方の弟子たちに、彼をよく迎えるようにと、手紙を書き送った。彼
は到着して、すでにめぐみによって信者になっていた人たちに、大い
に力になった。二八彼はイエスがキリストであることを、聖書に基い
て示し、公然と、ユダヤ人たちを激しい語調で論破したからである。

第一九章一アポロがコリントにいた時、パウロは奥地をとおってエ
ペソにきた。そして、ある弟子たちに出会って、二彼らに「あなたが
たは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「い
いえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と
答えた。三「では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」と彼
がきくと、彼らは「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」と
答えた。四そこで、パウロが言った、「ヨハネは悔改めのバプテスマ
を授けたが、それによって、自分のあとに来るかた、すなわち、イ
エスを信じるように、人々に勧めたのである」。五人々はこれを聞い
て、主イエスの名によるバプテスマを受けた。六そして、パウロが彼

らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を
語ったり、預言をしたりし出した。七その人たちはみんなで十二人ほ
どであった。
八それから、パウロは会堂にはいって、三か月のあいだ、大胆に神
の国について論じ、また勧めをした。九ところが、ある人たちは心を
かたくなにして、信じようとせず、会衆の前でこの道をあしざまに
言ったので、彼は弟子たちを引き連れて、その人たちから離れ、ツラ
ノの講堂で毎日論じた。一〇それが二年間も続いたので、アジヤに住
んでいる者は、ユダヤ人もギリシヤ人も皆、主の言を聞いた。
一一神は、パウロの手によって、異常な力あるわざを次々になされ
た。一二たとえば、人々が、彼の身につけている手ぬぐいや前掛けを
取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであっ
た。一三そこで、ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが、
悪霊につかれている者にむかって、主イエスの名をとなえ、「パウロ
の宣べ伝えているイエスによって命じる。出て行け」と、ためしに

言ってみた。一四ユダヤの祭司長スケワという者の七人のむすこたち
も、そんなことをしていた。一五すると悪霊がこれに対して言った、
「イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おま
えたちは、いったい何者だ」。一六そして、悪霊につかれている人が、
彼らに飛びかかり、みんなを押えつけて負かしたので、彼らは傷を
負ったまま裸になって、その家を逃げ出した。一七このことがエペソ
に住むすべてのユダヤ人やギリシヤ人に知れわたって、みんな恐怖に
襲われ、そして、主イエスの名があがめられた。一八また信者になっ
た者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあけて告白した。一九それから、
魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんな
の前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上るこ
とがわかった。二〇このようにして、主の言はますます盛んにひろま
り、また力を増し加えていった。

二一これらの事があった後、パウロは御霊に感じて、マケドニヤ、ア
カヤをとおって、エルサレムへ行く決心をした。そして言った、「わ

たしは、そこに行ったのち、ぜひローマをも見なければならない」。
二二そこで、自分に仕えている者の中から、テモテとエラストとのふ
たりを、まずマケドニヤに送り出し、パウロ自身は、なおしばらくア
ジヤにとどまった。
二三そのころ、この道について容易ならぬ騒動が起った。二四その
いきさつは、こうである。デメテリオという銀細工人が、銀でアルテ
ミス神殿の模型を造って、職人たちに少なからぬ利益を得させてい
た。二五この男がその職人たちや、同類の仕事をしていた者たちを集
めて言った、「諸君、われわれがこの仕事で、金もうけをしているこ
とは、ご承知のとおりだ。二六しかるに、諸君の見聞きしているよう
に、あのパウロが、手で造られたものは神様ではないなどと言って、
エペソばかりか、ほとんどアジヤ全体にわたって、大ぜいの人々を説
きつけて誤らせた。二七これでは、お互の仕事に悪評が立つおそれが
あるばかりか、大女神アルテミスの宮も軽んじられ、ひいては全アジ
ヤ、いや全世界が拝んでいるこの大女神のご威光さえも、消えてしま

いそうである」。
二八これを聞くと、人々は怒りに燃え、大声で「大いなるかな、エ
ペソ人のアルテミス」と叫びつづけた。二九そして、町中が大混乱に
陥り、人々はパウロの道連れであるマケドニヤ人ガイオとアリスタ
ルコとを捕えて、いっせいに劇場へなだれ込んだ。三〇パウロは群衆
の中にはいって行こうとしたが、弟子たちがそれをさせなかった。三
一アジヤ州の議員で、パウロの友人であった人たちも、彼に使をよこ
して、劇場にはいって行かないようにと、しきりに頼んだ。三二中で
は、集会が混乱に陥ってしまって、ある者はこのことを、ほかの者は
あのことを、どなりつづけていたので、大多数の者は、なんのために
集まったのかも、わからないでいた。三三そこで、ユダヤ人たちが、
前に押し出したアレキサンデルなる者を、群衆の中のある人たちが
促したため、彼は手を振って、人々に弁明を試みようとした。三四と
ころが、彼がユダヤ人だとわかると、みんなの者がいっせいに「大い
なるかな、エペソ人のアルテミス」と二時間ばかりも叫びつづけた。

三五ついに、市の書記役が群衆を押し静めて言った、「エペソの諸君、
エペソ市が大女神アルテミスと、天くだったご神体との守護役である
ことを知らない者が、ひとりでもいるだろうか。三六これは否定ので
きない事実であるから、諸君はよろしく静かにしているべきで、乱暴
な行動は、いっさいしてはならない。三七諸君はこの人たちをここに
ひっぱってきたが、彼らは宮を荒す者でも、われわれの女神をそしる
者でもない。三八だから、もしデメテリオなりその職人仲間なりが、
だれかに対して訴え事があるなら、裁判の日はあるし、総督もいるの
だから、それぞれ訴え出るがよい。三九しかし、何かもっと要求した
い事があれば、それは正式の議会で解決してもらうべきだ。四〇きょ
うの事件については、この騒ぎを弁護できるような理由が全くない
のだから、われわれは治安をみだす罪に問われるおそれがある」。四
一こう言って、彼はこの集会を解散させた。

第二〇章 一騒ぎがやんだ後、パウロは弟子たちを呼び集めて激励を
与えた上、別れのあいさつを述べ、マケドニヤへ向かって出発した。

二そして、その地方をとおり、多くの言葉で人々を励ましたのち、ギ
リシヤにきた。三彼はそこで三か月を過ごした。それからシリヤへ向
かって、船出しようとしていた矢先、彼に対するユダヤ人の陰謀が
起ったので、マケドニヤを経由して帰ることに決した。四プロの子で
あるエペソ人ソパテロ、テサロニケ人アリスタルコとセクンド、デル
ベ人ガイオ、それからテモテ、またアジヤ人テキコとトロピモがパウ
ロの同行者であった。五この人たちは先発して、トロアスでわたした
ちを待っていた。六わたしたちは、除酵祭が終ったのちに、ピリピか
ら出帆し、五日かかってトロアスに到着して、彼らと落ち合い、そこ
に七日間滞在した。

七週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まった時、パ
ウロは翌日出発することにしていたので、しきりに人々と語り合い、
夜中まで語りつづけた。八わたしたちが集まっていた屋上の間には、
あかりがたくさんともしてあった。九ユテコという若者が窓に腰をか
けていたところ、パウロの話がながながと続くので、ひどく眠けが

さしてきて、とうとうぐっすり寝入ってしまい、三階から下に落ち
た。抱き起してみたら、もう死んでいた。一〇そこでパウロは降りて
きて、若者の上に身をかがめ、彼を抱きあげて、「騒ぐことはない。
まだ命がある」と言った。一一そして、また上がって行って、パンを
さいて食べてから、明けがたまで長いあいだ人々と語り合って、つい
に出発した。一二人々は生きかえった若者を連れかえり、ひとかたな
らず慰められた。

一三さて、わたしたちは先に舟に乗り込み、アソスへ向かって出帆
した。そこからパウロを舟に乗せて行くことにしていた。彼だけは
陸路をとることに決めていたからである。一四パウロがアソスで、わ
たしたちと落ち合った時、わたしたちは彼を舟に乗せてミテレネに
行った。一五そこから出帆して、その翌日キヨスの沖合にいたり、次の日
にサモスに寄り、その翌日ミレトに着いた。一六それは、パウロがア
ジヤで時間をとられないため、エペソには寄らないで続航すること
に決めていたからである。彼は、できればペンテコステの日には、エ

ルサレムに着いていたかったので、旅を急いだわけである。
一七そこでパウロは、ミレトからエペソに使をやって、教会の長老
たちを呼び寄せた。一八そして、彼のところに寄り集まってきた時、
彼らに言った。
「わたしが、アジヤの地に足を踏み入れた最初の日以来、いつもあ
なたがたとどんなふうに過ごしてきたか、よくご存じである。一九す
なわち、謙遜の限りをつくし、涙を流し、ユダヤ人の陰謀によってわ
たしの身に及んだ数々の試練の中にあって、主に仕えてきた。二〇ま
た、あなたがたの益になることは、公衆の前でも、また家々でも、す
べてあますところなく話して聞かせ、また教え、二一ユダヤ人にもギ
リシヤ人にも、神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する
信仰とを、強く勧めてきたのである。二二今や、わたしは御霊に迫ら
れてエルサレムへ行く。あの都で、どんな事がわたしの身にふりか
かって来るか、わたしにはわからない。二三ただ、聖霊が至るところ
の町々で、わたしにはっきり告げているのは、投獄と患難とが、わた

しを待ちうけているということだ。二四しかし、わたしは自分の行程
を走り終え、主イエスから賜わった、神のめぐみの福音をあかしする
任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しい
とは思わない。二五わたしはいま信じている、あなたがたの間を歩き
回って御国を宣べ伝えたこのわたしの顔を、みんなが今後二度と見
ることはあるまい。二六だから、きょう、この日にあなたがたに断言
しておく。わたしは、すべての人の血について、なんら責任がない。
二七神のみ旨を皆あますところなく、あなたがたに伝えておいたから
である。二八どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群
れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取
られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者
にお立てになったのである。二九わたしが去った後、狂暴なおおかみ
が、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すよう
になることを、わたしは知っている。三〇また、あなたがた自身の中
からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっ

ぱり込もうとする者らが起るであろう。三一だから、目をさましてい
なさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたが
たひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。三
二今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言
には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国
をつがせる力がある。三三わたしは、人の金や銀や衣服をほしがった
ことはない。三四あなたがた自身が知っているとおり、わたしのこの
両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、
働いてきたのだ。三五わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱
い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、
さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきこ
とを、万事について教え示したのである」。

三六こう言って、パウロは一同と共にひざまずいて祈った。三七み
んなの者は、はげしく泣き悲しみ、パウロの首を抱いて、幾度も接吻
し、三八もう二度と自分の顔を見ることはあるまいと彼が言ったので、

特に心を痛めた。それから彼を舟まで見送った。

第二一章一さて、わたしたちは人々と別れて船出してから、コスに
直航し、次の日はロドスに、そこからパタラに着いた。二ここでピニ
ケ行きの舟を見つけたので、それに乗り込んで出帆した。三やがて
クプロが見えてきたが、それを左手にして通りすぎ、シリヤへ航行
をつづけ、ツロに入港した。ここで積荷が陸上げされることになっ
ていたからである。四わたしたちは、弟子たちを捜し出して、そこに
七日間泊まった。ところが彼らは、御霊の示しを受けて、エルサレ
ムには上って行かないようにと、しきりにパウロに注意した。五しか
し、滞在期間が終った時、わたしたちはまた旅立つことにしたので、
みんなの者は、妻や子供を引き連れて、町はずれまで、わたしたちを
見送りにきてくれた。そこで、共に海岸にひざまずいて祈り、六互に
別れを告げた。それから、わたしたちは舟に乗り込み、彼らはそれぞ
れ自分の家に帰った。

七わたしたちは、ツロからの航行を終ってトレマイに着き、そこの

兄弟たちにあいさつをし、彼らのところに一日滞在した。八翌日そこ
をたって、カイザリヤに着き、かの七人のひとりである伝道者ピリポ
の家に行き、そこに泊まった。九この人に四人の娘があったが、いず
れも処女であって、預言をしていた。一〇幾日か滞在している間に、
アガボという預言者がユダヤから下ってきた。一一そして、わたした
ちのところにきて、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って
言った、「聖霊がこうお告げになっている、『この帯の持ち主を、ユダ
ヤ人たちがエルサレムでこのように縛って、異邦人の手に渡すであ
ろう』」。一二わたしたちはこれを聞いて、土地の人たちと一緒になっ
て、エルサレムには上って行かないようにと、パウロに願い続けた。
一三その時パウロは答えた、「あなたがたは、泣いたり、わたしの心
をくじいたりして、いったい、どうしようとするのか。わたしは、主
イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬこ
とをも覚悟しているのだ」。一四こうして、パウロが勧告を聞きいれ
てくれないので、わたしたちは「主のみこころが行われますように」

と言ったただけで、それ以上、何も言わなかった。
一五数日後、わたしたちは旅装を整えてエルサレムへ上って行った。
一六カイザリヤの弟子たちも数人、わたしたちと同行して、古くから
の弟子であるクプロ人マナソンの家に案内してくれた。わたしたち
はその家に泊まることになっていたのである。
一七わたしたちがエルサレムに到着すると、兄弟たちは喜んで迎え
てくれた。一八翌日パウロはわたしたちを連れて、ヤコブを訪問しに
行った。そこに長老たちがみな集まっていた。一九パウロは彼らにあ
いさつをした後、神が自分の働きをとおして、異邦人の間になさっ
た事どもを一々説明した。二〇一同はこれを聞いて神をほめたたえ、
そして彼に言った、「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者
になった者が、数万にものぼっているが、みんな律法に熱心な人た
ちである。二一ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あ
なたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施す
な、またユダヤの慣例にしたがうなと言って、モーセにそむくこと

を教えている、ということである。二二どうしたらよいか。あなたが
ここにきていることは、彼らもきっと聞き込むに違いない。二三つい
ては、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの
中に、誓願を立てている者が四人いる。二四この人たちを連れて行っ
て、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けて
やりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされていること
は、根も葉もないことで、あなたは律法を守って、正しい生活をして
いることが、みんなにわかるであろう。二五異邦人で信者になった人
たちには、すでに手紙で、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したも
のと、不品行とを、慎むようにとの決議が、わたしたちから知らせて
ある」。二六そこでパウロは、その次の日に四人の者を連れて、彼らと
共にきよめを受けてから宮にはいった。そしてきよめの期間が終っ
て、ひとりびとりのために供え物をささげる時を報告しておいた。
二七七日の期間が終ろうとしていた時、アジヤからきたユダヤ人た
ちが、宮の内でパウロを見かけて、群衆全体を煽動しはじめ、パウ

ロに手をかけて叫び立てた、二八「イスラエルの人々よ、加勢にきて
くれ。この人は、いたるところで民と律法とこの場所にそむくこと
を、みんなに教えている。その上に、ギリシヤ人を宮の内に連れ込
んで、この神聖な場所を汚したのだ」。二九彼らは、前にエペソ人ト
ロピモが、パウロと一緒に町を歩いていたのを見かけて、その人を
パウロが宮の内に連れ込んだのだと思ったのである。三〇そこで、市
全体が騒ぎ出し、民衆が駆け集まってきて、パウロを捕え、宮の外に
引きずり出した。そして、すぐそのあとに宮の門が閉ざされた。三一
彼らがパウロを殺そうとしていた時に、エルサレム全体が混乱状態
に陥っているとの情報が、守備隊の千卒長にとどいた。三二そこで、
彼はさっそく、兵卒や百卒長たちを率いて、その場に駆けつけた。
人々は千卒長や兵卒たちを見て、パウロを打ちたたくのをやめた。三
三千卒長は近寄ってきてパウロを捕え、彼を二重の鎖で縛っておくよ
うに命じた上、パウロは何者か、また何をしたのか、と尋ねた。三四
しかし、群衆がそれぞれ違ったことを叫びつづけるため、騒がしく

て、確かなことがわからないので、彼はパウロを兵営に連れて行くように命じた。三五パウロが階段にさしかかった時には、群衆の暴行を避けるため、兵卒たちにかつがれて行くという始末であった。三六大ぜいの民衆が「あれをやっつけてしまえ」と叫びながら、ついてきたからである。

三七パウロが兵営の中に連れて行かれようとした時、千卒長に、「ひと言あなたにお話してもよろしいですか」と尋ねると、千卒長が言った、「おまえはギリシヤ語が話せるのか。三八では、もしかおまえは、先ごろ反乱を起した後、四千人の刺客を引き連れて荒野へ逃げて行ったあのエジプト人ではないのか」。三九パウロは答えた、「わたしはタルソ生れのユダヤ人で、キリキヤのれっきとした都市の市民です。お願いですが、民衆に話をさせて下さい」。四〇千卒長が許してくれたので、パウロは階段の上に立ち、民衆にむかって手を振った。すると、一同がすっかり静粛になったので、パウロはヘブル語で話し出した。

第二二章一「兄弟たち、父たちよ、いま申し上げるわたしの弁明を聞
いていただきたい」。二パウロが、ヘブル語でこう語りかけるのを聞
いて、人々はますます静粛になった。三そこで彼は言葉をついで言っ
た、「わたしはキリキヤのタルソで生れたユダヤ人であるが、この都
で育てられ、ガマリエルのひざもとで先祖伝来の律法について、きび
しい薫陶を受け、今日の皆さんと同じく神に対して熱心な者であっ
た。四そして、この道を迫害し、男であれ女であれ、縛りあげて獄に
投じ、彼らを死に至らせた。五このことは、大祭司も長老たち一同も、
証明するところである。さらにわたしは、この人たちからダマスコの
同志たちへあてた手紙をもらって、その地にいる者たちを縛りあげ、
エルサレムにひっぱってきて、処罰するため、出かけて行った。
六旅をつづけてダマスコの近くにきた時に、真昼ごろ、突然、つよ
い光が天からわたしをめぐり照した。七わたしは地に倒れた。そし
て、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と、呼びかける
声を聞いた。八これに対してわたしは、『主よ、あなたはどなたです

か』と言った。すると、その声が、『わたしは、あなたが迫害している
ナザレ人イエスである』と答えた。九わたしと一緒にいた者たちは、
その光は見たが、わたしに語りかけたかたの声は聞かなかった。一〇
わたしが『主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか』と尋ねたとこ
ろ、主は言われた、『起きあがってダマスコに行きなさい。そうすれ
ば、あなたがするように決めてある事が、すべてそこで告げられるで
あろう』。一一わたしは、光の輝きで目がくらみ、何も見えなくなっ
ていたので、連れの者たちに手を引かれながら、ダマスコに行った。
一二すると、律法に忠実で、ダマスコ在住のユダヤ人全体に評判の
よいアナニヤという人が、一三わたしのところにきて、そばに立ち、
『兄弟サウロよ、見えるようになりなさい』と言った。するとその瞬間
に、わたしの目が開いて、彼の姿が見えた。一四彼は言った、『わた
したちの先祖の神が、あなたを選んでみ旨を知らせ、かの義人を見
させ、その口から声をお聞かせになった。一五それはあなたが、その
見聞きした事につき、すべての人に対して、彼の証人になるためであ

る。一六そこで今、なんのためらうことがあろうか。すぐ立って、み
名をとなえてバプテスマを受け、あなたの罪を洗い落しなさい』。
一七それからわたしは、エルサレムに帰って宮で祈っているうちに、
夢うつつになり、一八主にまみえたが、主は言われた、『急いで、す
ぐにエルサレムを出て行きなさい。わたしについてのあなたのあか
しを、人々が受けいれないから』。一九そこで、わたしが言った、『主
よ、彼らは、わたしがいたるところの会堂で、あなたを信じる人々を
獄に投じたり、むち打ったりしていたことを、知っています。二〇ま
た、あなたの証人ステパノの血が流された時も、わたしは立ち合っ
ていてそれに賛成し、また彼を殺した人たちの上着の番をしていた
のです』。二一すると、主がわたしに言われた、『行きなさい。わたし
が、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ』」。
二二彼の言葉をここまで聞いていた人々は、このとき、声を張りあ
げて言った、「こんな男は地上から取り除いてしまえ。生かしおくべ
きではない」。二三人々がこうわめき立てて、空中に上着を投げ、ち

りをまき散らす始末であったので、二四千卒長はパウロを兵営に引き
入れるように命じ、どういうわけで、彼に対してこんなにわめき立
てているのかを確かめるため、彼をむちの拷問にかけて、取り調べ
るように言いわたした。二五彼らがむちを当てるため、彼を縛りつけ
ていた時、パウロはそばに立っている百卒長に言った、「ローマの
市民たる者を、裁判にかけもしないで、むち打ってよいのか」。二六
百卒長はこれを聞き、千卒長のところに行って報告し、そして言っ
た、「どうなさいますか。あの人はローマの市民なのです」。二七そこ
で、千卒長がパウロのところにきて言った、「わたしに言ってくれ。
あなたはローマの市民なのか」。パウロは「そうです」と言った。二
八これに対して千卒長が言った、「わたしはこの市民権を、多額の金
で買い取ったのだ」。するとパウロは言った、「わたしは生れながら
の市民です」。二九そこで、パウロを取り調べようとしていた人たち
は、ただちに彼から身を引いた。千卒長も、パウロがローマの市民で
あること、また、そういう人を縛っていたことがわかって、恐れた。

三〇翌日、彼は、ユダヤ人がなぜパウロを訴え出たのか、その真相
を知ろうと思って彼を解いてやり、同時に祭司長たちと全議会とを
召集させ、そこに彼を引き出して、彼らの前に立たせた。
第二三章一パウロは議会を見つめて言った、「兄弟たちよ、わたし
は今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心にしたがって行動して
きた」。二すると、大祭司アナニヤが、パウロのそばに立っている者
たちに、彼の口を打てと命じた。三そのとき、パウロはアナニヤにむ
かって言った、「白く塗られた壁よ、神があなたを打つであろう。あ
なたは、律法にしたがって、わたしをさばくために座についている
のに、律法にそむいて、わたしを打つことを命じるのか」。四すると、
そばに立っている者たちが言った、「神の大祭司に対して無礼なこと
を言うのか」。五パウロは言った、「兄弟たちよ、彼が大祭司だとは知
らなかった。聖書に『民のかしらを悪く言ってはいけない』と、書い
てあるのだった」。
六パウロは、議員の一部がサドカイ人であり、一部はパリサイ人

であるのを見て、議会の中で声を高めて言った、「兄弟たちよ、わた
しはパリサイ人であり、パリサイ人の子である。わたしは、死人の
復活の望みをいだいていることで、裁判を受けているのである」。七
彼がこう言ったところ、パリサイ人とサドカイ人との間に争論が生
じ、会衆が相分れた。八元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊と
かは、いっさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな
存在すると主張している。九そこで、大騒ぎとなった。パリサイ派の
ある律法学者たちが立って、強く主張して言った、「われわれは、こ
の人には何も悪いことがないと思う。あるいは、霊か天使かが、彼
に告げたのかも知れない」。一〇こうして、争論が激しくなったので、
千卒長は、パウロが彼らに引き裂かれるのを気づかって、兵卒ども
に、降りて行ってパウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵営に連
れて来るように、命じた。
一一その夜、主がパウロに臨んで言われた、「しっかりせよ。あな
たは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあ

かしをしなくてはならない」。
一二夜が明けると、ユダヤ人らは申し合わせをして、パウロを殺す
までは飲食をいっさい断つと、誓い合った。一三この陰謀に加わった
者は、四十人あまりであった。一四彼らは、祭司長たちや長老たちの
ところに行って、こう言った。「われわれは、パウロを殺すまでは何も
食べないと、堅く誓い合いました。一五ついては、あなたがたは議会
と組んで、彼のことでなお詳しく取調べをするように見せかけ、パウ
ロをあなたがたのところに連れ出すように、千卒長に頼んで下さい。
われわれとしては、パウロがそこにこないうちに殺してしまう手は
ずをしています」。
一六ところが、パウロの姉妹の子が、この待伏せのことを耳にし、
兵営にはいって行って、パウロにそれを知らせた。一七そこでパウロ
は、百卒長のひとりを呼んで言った、「この若者を千卒長のところ
に連れて行ってください。何か報告することがあるようですから」。
一八この百卒長は若者を連れて行き、千卒長に引きあわせて言った、

「囚人のパウロが、この若者があなたに話したいことがあるので、あ
なたのところに連れて行ってくれるようにと、わたしを呼んで頼み
ました」。一九そこで千卒長は、若者の手を取り、人のいないところ
へ連れて行って尋ねた、「わたしに話したいことというのは、何か」。
二〇若者が言った、「ユダヤ人たちが、パウロのことをもっと詳しく
取調べをすると見せかけて、あす議会に彼を連れ出すように、あな
たに頼むことに決めています。二一どうぞ、彼らの頼みを取り上げな
いで下さい。四十人あまりの者が、パウロを待伏せしているのです。
彼らは、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、堅く誓い合って
います。そして、いま手はずをととのえて、あなたの許可を待ってい
るところなのです」。二二そこで千卒長は、「このことをわたしに知ら
せたことは、だれにも口外するな」と命じて、若者を帰した。
二三それから彼は、百卒長ふたりを呼んで言った、「歩兵二百名、
騎兵七十名、槍兵二百名を、カイザリヤに向け出発できるように、今夜
九時までに用意せよ。二四また、パウロを乗せるために馬を用意して、

彼を総督ペリクスのもとへ無事に連れて行け」。二五さらに彼は、次のような文面の手紙を書いた。二六「クラウデオ・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下の平安を祈ります。二七本人のパウロが、ユダヤ人らに捕えられ、まさに殺されようとしていたのを、彼のローマ市民であることを知ったので、わたしは兵卒たちを率いて行って、彼を救い出しました。二八それから、彼が訴えられた理由を知ろうと思い、彼を議会に連れて行きました。二九ところが、彼はユダヤ人の律法の問題で訴えられたものであり、なんら死刑または投獄に当る罪のないことがわかりました。三〇しかし、この人に対して陰謀がめぐらされているとの報告がありましたので、わたしは取りあえず、彼を閣下のもとにお送りすることにし、訴える者たちには、閣下の前で、彼に対する申立てをするようにと、命じておきました」。

三一そこで歩兵たちは、命じられたとおりパウロを引き取って、夜の間にアンテパトリスまで連れて行き、三二翌日は、騎兵たちにパウロを護送させることにして、兵営に帰って行った。三三騎兵たちは、

カイザリヤに着くと、手紙を総督に手渡し、さらにパウロを彼に引き
あわせた。三四総督は手紙を読んでから、パウロに、どの州の者かと
尋ね、キリキヤの出だと知って、三五「訴え人たちがきた時に、おま
えを調べることにする」と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っ
ておくように命じた。

第二四章一五日の後、大祭司アナニヤは、長老数名と、テルトロと
いう弁護人とを連れて下り、総督にパウロを訴え出た。二パウロが呼
び出されたので、テルトロは論告を始めた。

「ペリクス閣下、わたしたちが、閣下のお陰でじゅうぶんに平和を
楽しみ、またこの国が、ご配慮によって、三あらゆる方面に、またい
たるところで改善されていることは、わたしたちの感謝してやまない
ところであります。四しかし、ご迷惑をかけないように、くどくどと
述べずに、手短かに申し上げますから、どうぞ、忍んでお聞き取りの
ほど、お願いいたします。五さて、この男は、疫病のような人間で、
世界中のすべてのユダヤ人の中に騒ぎを起している者であり、また、

ナザレ人らの異端のかしらであります。六この者が宮までも汚そうと
していたので、わたしたちは彼を捕縛したのです。〔そして、律法に
したがって、さばこうとしていたところ、七千卒長ルシヤが干渉して、
彼を無理にわたしたちの手から引き離してしまい、八彼を訴えた人た
ちには、閣下のところに来るようにと命じました。〕それで、閣下ご
自身でお調べになれば、わたしたちが彼を訴え出た理由が、全部おわ
かりになるでしょう」。九ユダヤ人たちも、この訴えに同調して、全
くそのとおりだと言った。一〇そこで、総督が合図をして発言を促し
たので、パウロは答弁して言った。
「閣下が、多年にわたり、この国民の裁判をつかさどっておられ
ることを、よく承知していますので、わたしは喜んで、自分のこと
を弁明いたします。一一お調べになればわかるはずですが、わたしが
礼拝をしにエルサレムに上ってから、まだ十二日そこそこにしかなり
ません。一二そして、宮の内でも、会堂内でも、あるいは市内でも、
わたしがだれかと争論したり、群衆を煽動したりするのを見たもの

はありませんし、一三今わたしを訴え出ていることについて、閣下の
前に、その証拠をあげうるものはありません。一四ただ、わたしはこ
の事は認めます。わたしは、彼らが異端だとしている道にしたがっ
て、わたしたちの先祖の神に仕え、律法の教えるところ、また預言者
の書に書いてあることを、ことごとく信じ、一五また、正しい者も正
しくない者も、やがてよみがえるとの希望を、神を仰いでいだいてい
るものです。この希望は、彼ら自身も持っているのです。一六わたし
はまた、神に対しまた人に対して、良心に責められることのないよ
うに、常に努めています。一七さてわたしは、幾年ぶりかに帰ってき
て、同胞に施しをし、また、供え物をしていました。一八そのとき、
彼らはわたしが宮できよめを行っているのを見ただけであって、群衆
もいず、騒動もなかったのです。一九ところが、アジヤからきた数人
のユダヤ人が――彼らが、わたしに対して、何かとがめ立てをする
ことがあったなら、よろしく閣下の前にきて、訴えるべきでした。二
〇あるいは、何かわたしに不正なことがあったなら、わたしが議会の

前に立っていた時、彼らみずから、それを指摘すべきでした。二一た
だ、わたしは、彼らの中に立って、『わたしは、死人のよみがえりの
ことで、きょう、あなたがたの前でさばきを受けているのだ』と叫ん
だだけのことです」。
二二ここでペリクスは、この道のことを相当わきまえていたので、
「千卒長ルシヤが下って来るのを待って、おまえたちの事件を判決す
ることにする」と言って、裁判を延期した。二三そして百卒長に、パ
ウロを監禁するように、しかし彼を寛大に取り扱い、友人らが世話を
するのを止めないようにと、命じた。
二四数日たってから、ペリクスは、ユダヤ人である妻ドルシラと一緒
にきて、パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰のこと
を、彼から聞いた。二五そこで、パウロが、正義、節制、未来の審判
などについて論じていると、ペリクスは不安を感じてきて、言った、
「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すこ
とにする」。二六彼は、それと同時に、パウロから金をもらいたい下

ごころがあったので、たびたびパウロを呼び出しては語り合った。
二七さて、二か年たった時、ポルキオ・フェストが、ペリクスと交代
して任についた。ペリクスは、ユダヤ人の歓心を買おうと思って、パ
ウロを監禁したままにしておいた。
第二五章 **一**さて、フェストは、任地に着いてから三日の後、カイザリ
ヤからエルサレムに上ったところ、**二**祭司長たちやユダヤ人の重立っ
た者たちが、パウロを訴え出て、**三**彼をエルサレムに呼び出すよう取
り計らっていただきたいと、しきりに願った。彼らは途中で待ち伏
せして、彼を殺す考えであった。**四**ところがフェストは、パウロがカ
イザリヤに監禁してあり、自分もすぐそこへ帰ることになっている
と答え、**五**そして言った、「では、もしあの男に何か不都合なことが
あるなら、おまえたちのうちの有力者らが、わたしと一緒に下って
行って、訴えるがよかろう」。
六フェストは、彼らのあいだに八日か十日ほど滞在した後、カイザ
リヤに下って行き、その翌日、裁判の席について、パウロを引き出

すように命じた。七パウロが姿をあらわすと、エルサレムから下って
きたユダヤ人たちが、彼を取りかこみ、彼に対してさまざまの重い
罪状を申し立てたが、いずれもその証拠をあげることはできなかっ
た。八パウロは「わたしは、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対して
も、またカイザルに対しても、なんら罪を犯したことはない」と弁明
した。九ところが、フェストはユダヤ人の歓心を買おうと思って、パ
ウロにむかって言った、「おまえはエルサレムに上り、この事件に関
し、わたしからそこで裁判を受けることを承知するか」。一〇パウロ
は言った、「わたしは今、カイザルの法廷に立っています。わたしは
この法廷で裁判されるべきです。よくご承知のとおり、わたしはユ
ダヤ人たちに、何も悪いことをしてはいません。一一もしわたしが悪
いことをし、死に当るようなことをしているのなら、死を免れようと
はしません。しかし、もし彼らの訴えることに、なんの根拠もないと
すれば、だれもわたしを彼らに引き渡す権利はありません。わたし
はカイザルに上訴します」。一二そこでフェストは、陪席の者たちと

協議したうえ答えた、「おまえはカイザルに上訴を申し出た。カイザ
ルのところに行くがよい」。
一三数日たった後、アグリッパ王とベルニケとが、フェストに敬意
を表するため、カイザリヤにきた。一四ふたりは、そこに何日間も滞在
していたので、フェストは、パウロのことを王に話して言った、「ここ
に、ペリクスが囚人として残して行ったひとりの男がいる。一五わた
しがエルサレムに行った時、この男のことを、祭司長たちやユダヤ人
の長老たちが、わたしに報告し、彼を罪に定めるようにと要求した。
一六そこでわたしは、彼らに答えた、『訴えられた者が、訴えた者の
前に立って、告訴に対し弁明する機会を与えられない前に、その人を
見放してしまうのは、ローマ人の慣例にはないことである』。一七そ
れで、彼らがここに集まってきた時、わたしは時をうつさず、次の日
に裁判の席について、その男を引き出させた。一八訴えた者たちは立
ち上がったが、わたしが推測していたような悪事は、彼について何一
つ申し立てはしなかった。一九ただ、彼と争い合っているのは、彼ら

自身の宗教に関し、また、死んでしまったのに生きているとパウロ
が主張しているイエスなる者に関する問題に過ぎない。二〇これらの
問題を、どう取り扱ってよいかわからなかったので、わたしは彼に、
『エルサレムに行って、これらの問題について、そこでさばいてもら
いたくはないか』と尋ねてみた。二一ところがパウロは、皇帝の判決
を受ける時まで、このまま自分をとどめておいてほしいと言うので、
カイザルに彼を送りとどける時までとどめておくようにと、命じて
おいた」。二二そこで、アグリッパがフェストに「わたしも、その人
の言い分を聞いて見たい」と言ったので、フェストは、「では、あす
彼から聞きとるようにしてあげよう」と答えた。
二三翌日、アグリッパとベルニケとは、大いに威儀をととのえて、
千卒長たちや市の重立った人たちと共に、引見所にはいってきた。す
ると、フェストの命によって、パウロがそこに引き出された。二四そ
こで、フェストが言った、「アグリッパ王、ならびにご臨席の諸君。
ごらんになっているこの人物は、ユダヤ人たちがこぞって、エルサレ

ムにおいても、また、この地においても、これ以上、生かしておくべ
きでないと叫んで、わたしに訴え出ている者である。二五しかし、彼
は死に当ることは何もしていないと、わたしは見ているのだが、彼
自身が皇帝に上訴すると言い出したので、彼をそちらへ送ることに
決めた。二六ところが、彼について、主君に書きおくる確かなものが
何もないので、わたしは、彼を諸君の前に、特に、アグリッパ王よ、
あなたの前に引き出して、取調べをしたのち、上書すべき材料を得よ
うと思う。二七囚人を送るのに、その告訴の理由を示さないというこ
とは、不合理だと思えるからである」。

第二六章一アグリッパはパウロに、「おまえ自身のことを話しても
よい」と言った。そこでパウロは、手をさし伸べて、弁明をし始めた。
二「アグリッパ王よ、ユダヤ人たちから訴えられているすべての事
に関して、きょう、あなたの前で弁明することになったのは、わたし
のしあわせに思うところであります。三あなたは、ユダヤ人のあらゆ
る慣例や問題を、よく知り抜いておられるかたですから、わたしの申

すことを、寛大なお心で聞いていただきたいのです。
四さて、わたしは若い時代には、初めから自国民の中で、またエルサ
レムで過ごしたのですが、そのころのわたしの生活ぶりは、ユダヤ人
がみんなよく知っているところです。五彼らはわたしを初めから知っ
ているので、証言しようと思えばできるのですが、わたしは、わたし
たちの宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人としての生活を
していたのです。六今わたしは、神がわたしたちの先祖に約束なさっ
た希望をいだいているために、裁判を受けているのであります。七わ
たしたちの十二の部族は、夜昼、熱心に神に仕えて、その約束を得よ
うと望んでいるのです。王よ、この希望のために、わたしはユダヤ人
から訴えられています。八神が死人をよみがえらせるということが、
あなたがたには、どうして信じられないことと思えるのでしょうか。
九わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の
行動をすべきだと、思っていました。一〇そしてわたしは、それをエ
ルサレムで敢行し、祭司長たちから権限を与えられて、多くの聖徒た

ちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表し
ました。一一それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰し
て、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひど
く荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りま
した。
一二こうして、わたしは、祭司長たちから権限と委任とを受けて、
ダマスコに行ったのですが、一三王よ、その途中、真昼に、光が天か
らさして来るのを見ました。それは、太陽よりも、もっと光り輝い
て、わたしと同行者たちとをめぐり照しました。一四わたしたちはみ
な地に倒れましたが、その時ヘブル語でわたしにこう呼びかける声
を聞きました、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげ
のあるむちをければ、傷を負うだけである』。一五そこで、わたしが
『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、主は言われた、『わたし
は、あなたが迫害しているイエスである。一六さあ、起きあがって、
自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわ

たしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事とをあかし
し、これを伝える務に、あなたを任じるためである。一七わたしは、
この国民と異邦人との中から、あなたを救い出し、あらためてあなた
を彼らにつかわすが、一八それは、彼らの目を開き、彼らをやみから
光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるし
を得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためで
ある』。

一九それですから、アグリッパ王よ、わたしは天よりの啓示にそむ
かず、二〇まず初めにダマスコにいる人々に、それからエルサレムに
いる人々、さらにユダヤ全土、ならびに異邦人たちに、悔い改めて神
に立ち帰り、悔改めにふさわしいわざを行うようにと、説き勧めまし
た。二一そのために、ユダヤ人は、わたしを宮で引き捕えて殺そうと
したのです。二二しかし、わたしは今日に至るまで神の加護を受け、
このように立って、小さい者にも大きい者にもあかしをなし、預言者
たちやモーセが、今後起るべきだと語ったことを、そのまま述べて

きました。二三すなわち、キリストが苦難を受けること、また、死人
の中から最初によみがえって、この国民と異邦人とに、光を宣べ伝え
るに至ることを、あかししたのです」。二四パウロがこのように弁明
をしていると、フェストは大声で言った、「パウロよ、おまえは気が
狂っている。博学が、おまえを狂わせている」。二五パウロが言った、
「フェスト閣下よ、わたしは気が狂ってはいません。わたしは、まじ
めな真実の言葉を語っているだけです。二六王はこれらのことをよく
知っておられるので、王に対しても、率直に申し上げているのです。
それは、片すみで行われたのではないのですから、一つとして、王
が見のがされたことはないと信じます。二七アグリッパ王よ、あなた
は預言者を信じますか。信じておられると思います」。二八アグリッ
パがパウロに言った、「おまえは少し説いただけで、わたしをクリス
チャンにしようとしている」。二九パウロが言った、「説くことが少し
であろうと、多くであろうと、わたしが神に祈るのは、ただあなただ
けでなく、きょう、わたしの言葉を聞いた人もみな、わたしのように

なって下さることです。このような鎖は別ですが」。
三〇それから、王も総督もベルニケも、また列席の人々も、みな立
ちあがった。三一退場してから、互に語り合って言った、「あの人は、
死や投獄に当るようなことをしてはいない」。三二そして、アグリッ
パがフェストに言った、「あの人は、カイザルに上訴していなかった
ら、ゆるされたであろうに」。

第二七章一さて、わたしたちが、舟でイタリヤに行くことが決まっ
た時、パウロとそのほか数人の囚人とは、近衛隊の百卒長ユリアス
に託された。二そしてわたしたちは、アジヤ沿岸の各所に寄港するこ
とになっているアドラミテオの舟に乗り込んで、出帆した。テサロニ
ケのマケドニヤ人アリスタルコも同行した。三次の日、シドンに入港
したが、ユリアスは、パウロを親切に取り扱い、友人をおとずれてか
んたいを受けることを、許した。四それからわたしたちは、ここから
船出したが、逆風にあったので、クプロの島かげを航行し、五キリキ
ヤとパンフリヤの沖を過ぎて、ルキヤのミラに入港した。六そこに、

イタリヤ行きのアレキサンドリヤの舟があったので、百卒長は、わ
たしたちをその舟に乗り込ませた。七幾日ものあいだ、舟の進みがお
そくて、わたしたちは、かろうじてクニドの沖合にきたが、風がわた
したちの行く手をはばむので、サルモネの沖、クレテの島かげを航行
し、八その岸に沿って進み、かろうじて「良き港」と呼ばれる所に着
いた。その近くにラサヤの町があった。
九長い時が経過し、断食期も過ぎてしまい、すでに航海が危険な
季節になったので、パウロは人々に警告して言った、一〇「皆さん、
わたしの見るところでは、この航海では、積荷や船体ばかりでなく、
われわれの生命にも、危害と大きな損失が及ぶであろう」。一一しか
し百卒長は、パウロの意見よりも、船長や船主の方を信頼した。一
二なお、この港は冬を過ごすのに適しないので、大多数の者は、ここ
から出て、できればなんとかして、南西と北西とに面しているクレテ
のピニクス港に行って、そこで冬を過ごしたいと主張した。
一三時に、南風が静かに吹いてきたので、彼らは、この時とばかり

にいかりを上げて、クレテの岸に沿って航行した。一四すると間もなく、ユーラクロンと呼ばれる暴風が、島から吹きおろしてきた。一五そのために、舟が流されて風に逆らうことができないので、わたしたちは吹き流されるままに任せた。一六それから、クラウダという小島の陰に、はいり込んだので、わたしたちは、やっとのことで小舟を処置することができ、一七それを舟に引き上げてから、綱で船体を巻きつけた。また、スルテスの洲に乗り上げるのを恐れ、帆をおろして流れるままにした。一八わたしたちは、暴風にひどく悩まされつづけたので、次の日に、人々は積荷を捨てはじめ、一九三日目には、船具までも、てずから投げすてた。二〇幾日ものあいだ、太陽も星も見えず、暴風は激しく吹きすさぶので、わたしたちの助かる最後の望みもなくなった。

二一みんなの者は、長いあいだ食事もしないでいたが、その時、パウロが彼らの中に立って言った、「皆さん、あなたがたが、わたしの忠告を聞きいれて、クレテから出なかったら、このような危害や損失

を被らなくてすんだはずであった。二二だが、この際、お勧めする。
元気を出しなさい。舟が失われるだけで、あなたがたの中で生命を失
うものは、ひとりもいないであろう。二三昨夜、わたしが仕え、また
拝んでいる神からの御使が、わたしのそばに立って言った、二四『パ
ウロよ、恐れるな。あなたは必ずカイザルの前に立たなければならな
い。たしかに神は、あなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜わっ
ている』。二五だから、皆さん、元気を出しなさい。万事はわたしに
告げられたとおりに成って行くと、わたしは、神かけて信じている。
二六われわれは、どこかの島に打ちあげられるに相違ない」。
二七わたしたちがアドリヤ海に漂ってから十四日目の夜になった時、
真夜中ごろ、水夫らはどこかの陸地に近づいたように感じた。二八そ
こで、水の深さを測ってみたところ、二十ひろであることがわかっ
た。それから少し進んで、もう一度測ってみたら、十五ひろであっ
た。二九わたしたちが、万一暗礁に乗り上げては大変だと、人々は気
づかって、ともから四つのいかりを投げおろし、夜の明けるのを待ち

わびていた。三〇その時、水夫らが舟から逃げ出そうと思って、へさ
きからいかりを投げおろすと見せかけ、小舟を海におろしていたの
で、三一パウロは、百卒長や兵卒たちに言った、「あの人たちが、舟
に残っていなければ、あなたがたは助からない」。三二そこで兵卒た
ちは、小舟の綱を断ち切って、その流れて行くままに任せた。

三三夜が明けかけたころ、パウロは一同の者に、食事をするように
勧めて言った、「あなたがたが食事もせずに、見張りを続けてから、
何も食べないで、きょうが十四日目に当る。三四だから、いま食事を
取ることをお勧めする。それが、あなたがたを救うことになるのだか
ら。たしかに髪の毛ひとすじでも、あなたがたの頭から失われるこ
とはないであろう」。三五彼はこう言って、パンを取り、みんなの前
で神に感謝し、それをさいて食べはじめた。三六そこで、みんなの者
も元気づいて食事をした。三七舟にいたわたしたちは、合わせて二百
七十六人であった。三八みんなの者は、じゅうぶんに食事をした後、
穀物を海に投げすてて舟を軽くした。

三九夜が明けて、どこの土地かよくわからなかったが、砂浜のある入江が見えたので、できれば、それに舟を乗り入れようということになった。四〇そこで、いかりを切り離して海に捨て、同時にかじの綱をゆるめ、風に前の帆をあげて、砂浜にむかって進んだ。四一ところが、潮流の流れ合う所に突き進んだため、舟を浅瀬に乗りあげてしまって、へさきがめり込んで動かなくなり、ともの方は激浪のためにこわされた。四二兵卒たちは、囚人らが泳いで逃げるおそれがあるので、殺してしまおうと図ったが、四三百卒長は、パウロを救いたいと思うところから、その意図をしりぞけ、泳げる者はまず海に飛び込んで陸に行き、四四その他の者は、板や舟の破片に乗って行くように命じた。こうして、全部の者が上陸して救われたのであった。

第二八章一わたしたちが、こうして救われてからわかったが、これはマルタと呼ばれる島であった。二土地の人々は、わたしたちに並々ならぬ親切をあらわしてくれた。すなわち、降りしきる雨や寒さをしのぐために、火をたいてわたしたち一同をねぎらってくれたのであ

る。三そのとき、パウロはひとかかえの柴をたばねて火にくべたとこ
ろ、熱気のためにまむしが出てきて、彼の手にかみついた。四土地の
人々は、この生きものがパウロの手からぶら下がっているのを見て、
互に言った、「この人は、きっと人殺しに違いない。海からはのがれ
たが、ディケーの神様が彼を生かしてはおかないのだ」。五ところが
パウロは、まむしを火の中に振り落して、なんの害も被らなかった。
六彼らは、彼が間もなくはれ上がるか、あるいは、たちまち倒れて死
ぬだろうと、様子をうかがっていた。しかし、長い間うかがっていて
も、彼の身になんの変ったことも起らないのを見て、彼らは考えを変
えて、「この人は神様だ」と言い出した。
七さて、その場所の近くに、島の首長、ポプリオという人の所有地
があった。彼は、そこにわたしたちを招待して、三日のあいだ親切
にもてなしてくれた。八たまたま、ポプリオの父が赤痢をわずらい、
高熱で床についていた。そこでパウロは、その人のところにはいって
行って祈り、手を彼の上においていやしてやった。九このことがあっ

てから、ほかに病気をしている島の人たちが、ぞくぞくとやってき
て、みないやされた。一〇彼らはわたしたちを非常に尊敬し、出帆の
時には、必要な品々を持ってきてくれた。
一一三か月たった後、わたしたちは、この島に冬ごもりをしていた
デオスクリの船飾りのあるアレキサンドリヤの舟で、出帆した。一二
そして、シラクサに寄港して三日のあいだ停泊し、一三そこから進ん
でレギオンに行った。それから一日おいて、南風が吹いてきたのに
乗じ、ふつか目にポテオリに着いた。一四そこで兄弟たちに会い、勧
められるまま、彼らのところに七日間も滞在した。それからわたし
たちは、ついにローマに到着した。一五ところが、兄弟たちは、わた
したちのことを聞いて、アピオ・ポロおよびトレス・タベルネまで
出迎えてくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し勇み立った。
一六わたしたちがローマに着いた後、パウロは、ひとりの番兵をつ
けられ、ひとりで住むことを許された。
一七三日たってから、パウロは、重立ったユダヤ人たちを招いた。

みんなの者が集まったとき、彼らに言った、「兄弟たちよ、わたしは、
わが国民に対しても、あるいは先祖伝来の慣例に対しても、何一つそ
むく行為がなかったのに、エルサレムで囚人としてローマ人たちの
手に引き渡された。一八彼らはわたしを取り調べた結果、なんら死に
当る罪状もないので、わたしを釈放しようと思ったのであるが、一九
ユダヤ人たちがこれに反対したため、わたしはやむを得ず、カイザ
ルに上訴するに至ったのである。しかしわたしは、わが同胞を訴え
ようなどとしているのではない。二〇こういうわけで、あなたがたに
会って語り合いたいと願っていた。事実、わたしは、イスラエルの
いだいている希望のゆえに、この鎖につながれているのである」。二
一そこで彼らは、パウロに言った、「わたしたちは、ユダヤ人たちか
ら、あなたについて、なんの文書も受け取っていないし、また、兄弟
たちの中からここにきて、あなたについて不利な報告をしたり、悪口
を言ったりした者もなかった。二二わたしたちは、あなたの考えてい
ることを、直接あなたから聞くのが、正しいことだと思っている。実

は、この宗派については、いたるところで反対のあることが、わたし
たちの耳にもはいっている」。
二三そこで、日を定めて、大ぜいの人が、パウロの宿につめかけて
きたので、朝から晩まで、パウロは語り続け、神の国のことをあかし
し、またモーセの律法や預言者の書を引いて、イエスについて彼らの
説得につとめた。二四ある者はパウロの言うことを受けいれ、ある者
は信じようともしなかった。二五互に意見が合わなくて、みんなの者
が帰ろうとしていた時、パウロはひとこと述べて言った、「聖霊はよ
くも預言者イザヤによって、あなたがたの先祖に語ったものである。
二六『この民に行って言え、
あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。
見るには見るが、決して認めない。
二七この民の心は鈍くなり、
その耳は聞えにくく、
その目は閉じている。

それは、彼らが目で見ず、
耳で聞かず、
心で悟らず、悔い改めて
いやされることがないためである』。
二八そこで、あなたがたは知っておくがよい。神のこの救の言葉は、
異邦人に送られたのだ。彼らは、これに聞きしたがうであろう」。〔二
九パウロがこれらのことを述べ終ると、ユダヤ人らは、互に論じ合い
ながら帰って行った。〕
三〇パウロは、自分の借りた家に満二年のあいだ住んで、たずねて
来る人々をみな迎え入れ、三一はばからず、また妨げられることもな
く、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えつづけた。

ローマ人への手紙

第一章一キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び別たれ、召
されて使徒となったパウロから――二この福音は、神が、預言者たち
により、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、三御子に
関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、四聖
なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定
められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである。五わたし
たちは、その御名のために、すべての異邦人を信仰の従順に至らせる
ようにと、彼によって恵みと使徒の務とを受けたのであり、六あなた
がたもまた、彼らの中にあって、召されてイエス・キリストに属する
者となったのである――七ローマにいる、神に愛され、召された聖徒
一同へ。

わたしたちの父なる神および主イエス・キリストから、恵みと平安
とが、あなたがたにあるように。
八まず第一に、わたしは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えら
れていることを、イエス・キリストによって、あなたがた一同のため
に、わたしの神に感謝する。九一〇わたしは、祈のたびごとに、絶え
ずあなたがたを覚え、いつかは御旨にかなって道が開かれ、どうにか
して、あなたがたの所に行けるようにと願っている。このことにつ
いて、わたしのためにあかしをして下さるのは、わたしが霊により、
御子の福音を宣べ伝えて仕えている神である。一一わたしは、あなた
がたに会うことを熱望している。あなたがたに霊の賜物を幾分でも
分け与えて、力づけたいからである。一二それは、あなたがたの中に
いて、あなたがたとわたしとのお互の信仰によって、共に励まし合う
ためにほかならない。一三兄弟たちよ。このことを知らずにいてもら
いたくない。わたしはほかの異邦人の間で得たように、あなたがた
の間でも幾分かの実を得るために、あなたがたの所に行こうとしば

しば企てたが、今まで妨げられてきた。一四わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある。一五そこで、わたしとしての切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなのである。一六わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。一七神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである。

一八神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。一九なぜなら、神について知りうる事がらは、彼らには明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたのである。二〇神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。二一なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあ

がめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な
心は暗くなったからである。二二彼らは自ら知者と称しながら、愚か
になり、二三不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うも
のの像に似せたのである。

二四ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互に
はずかしめて、汚すままに任せられた。二五彼らは神の真理を変え
て虚偽とし、創造者の代りに被造物を拝み、これに仕えたのである。
創造者こそ永遠にほむべきものである、アァメン。

二六それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲に任せられた。すなわち、
彼らの中の女は、その自然の関係を不自然なものに代え、二七男もま
た同じように女との自然の関係を捨てて、互にその情欲の炎を燃や
し、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行の当然の報
いを、身に受けたのである。

二八そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神
は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せ

られた。二九すなわち、彼らは、あらゆる不義と悪と貪欲と悪意とに
あふれ、ねたみと殺意と争いと詐欺と悪念とに満ち、また、ざん言す
る者、三〇そしる者、神を憎む者、不遜な者、高慢な者、大言壮語す
る者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者となり、三一無知、不誠実、
無情、無慈悲な者となっている。三二彼らは、こうした事を行う者ど
もが死に価するという神の定めをよく知りながら、自らそれを行う
ばかりではなく、それを行う者どもを是認さえしている。
第二章一だから、ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の
余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に
定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである。二
わたしたちは、神のさばきが、このような事を行う者どもの上に正し
く下ることを、知っている。三ああ、このような事を行う者どもをさ
ばきながら、しかも自ら同じことを行う人よ。あなたは、神のさばき
をのがれうると思うのか。四それとも、神の慈愛があなたを悔改めに
導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるの

か。五あなたのかたくなな、悔改めのない心のゆえに、あなたは、神
の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に
積んでいるのである。六神は、おのおのに、そのわざにしたがって報
いられる。七すなわち、一方では、耐え忍んで善を行って、光栄とほ
まれと朽ちぬものとを求める人に、永遠のいのちが与えられ、八他方
では、党派心をいだき、真理に従わないで不義に従う人に、怒りと激
しい憤りとが加えられる。九悪を行うすべての人には、ユダヤ人をは
じめギリシヤ人にも、患難と苦悩とが与えられ、一〇善を行うすべて
の人には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、光栄とほまれと平安と
が与えられる。一一なぜなら、神には、かたより見ることがないから
である。

一二そのわけは、律法なしに罪を犯した者は、また律法なしに滅び、
律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる。一三なぜな
ら、律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者
が、義とされるからである。一四すなわち、律法を持たない異邦人が、

自然のままで、律法の命じる事を行うなら、たとい律法を持たなく
ても、彼らにとっては自分自身が律法なのである。一五彼らは律法の
要求がその心にしるされていることを現し、そのことを彼らの良心
も共にあかしをして、その判断が互にあるいは訴え、あるいは弁明
し合うのである。一六そして、これらのことは、わたしの福音によれ
ば、神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事がらをさばかれる
その日に、明らかにされるであろう。
一七もしあなたが、自らユダヤ人と称し、律法に安んじ、神を誇と
し、一八御旨を知り、律法に教えられて、なすべきことをわきまえて
おり、一九二〇さらに、知識と真理とが律法の中に形をとっていると
して、自ら盲人の手引き、やみにおる者の光、愚かな者の導き手、幼
な子の教師をもって任じているのなら、二一なぜ、人を教えて自分を
教えないのか。盗むなと人に説いて、自らは盗むのか。二二姦淫する
なと言って、自らは姦淫するのか。偶像を忌みきらいながら、自らは
宮の物をかすめるのか。二三律法を誇としながら、自らは律法に違反

して、神を侮っているのか。二四聖書に書いてあるとおり、「神の御名
は、あなたがたのゆえに、異邦人の間で汚されている」。二五もし、あ
なたが律法を行うなら、なるほど、割礼は役に立とう。しかし、も
し律法を犯すなら、あなたの割礼は無割礼となってしまう。二六だか
ら、もし無割礼の者が律法の規定を守るなら、その無割礼は割礼と見
なされるではないか。二七かつ、生れながら無割礼の者であって律法
を全うする者は、律法の文字と割礼とを持ちながら律法を犯してい
るあなたを、さばくのである。二八というのは、外見上のユダヤ人が
ユダヤ人ではなく、また、外見上の肉における割礼が割礼でもない。
二九かえって、隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、また、文字によら
ず霊による心の割礼こそ割礼であって、そのほまれは人からではな
く、神から来るのである。

第三章一では、ユダヤ人のすぐれている点は何か。また割礼の益は
何か。二それは、いろいろの点で数多くある。まず第一に、神の言が
彼らにゆだねられたことである。三すると、どうなるのか。もし、彼

らのうちに不真実の者があったとしたら、その不真実によって、神の
真実は無になるであろうか。四断じてそうではない。あらゆる人を偽
り者としても、神を真実なものとすべきである。それは、

「あなたが言葉を述べるときは、義とせられ、
あなたがさばきを受けるとき、勝利を得るため」

と書いてあるとおりである。
五しかし、もしわたしたちの不義が、神の義を明らかにするとした
ら、なんと言うべきか。怒りを下す神は、不義であると言うのか（こ
れは人間的な言い方ではある）。六断じてそうではない。もしそうで
あったら、神はこの世を、どうさばかれるだろうか。七しかし、もし
神の真実が、わたしの偽りによりいっそう明らかにされて、神の栄光
となるなら、どうして、わたしはなおも罪人としてさばかれるのだろ
うか。八むしろ、「善をきたらせるために、わたしたちは悪をしよう
ではないか」（わたしたちがそう言っていると、ある人々はそしって
いる）。彼らが罰せられるのは当然である。

九すると、どうなるのか。わたしたちには何かまさったところがあ
るのか。絶対にない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下
にあることを、わたしたちはすでに指摘した。一〇次のように書いて
ある、

「義人はいない、ひとりもいない。
一一悟りのある人はいない、
神を求める人はいない。
一二すべての人は迷い出て、
ことごとく無益なものになっている。
善を行う者はいない、
ひとりもいない。
一三彼らののどは、開いた墓であり、
彼らは、その舌で人を欺き、
彼らのくちびるには、まむしの毒があり、
一四彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている。

一五彼らの足は、血を流すのに速く、
一六彼らの道には、破壊と悲惨とがある。
一七そして、彼らは平和の道を知らない。
一八彼らの目の前には、神に対する恐れがない」。一九さて、わたし
たちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法のもとに
ある者たちに対して語られている。それは、すべての口がふさがれ、
全世界が神のさばきに服するためである。二〇なぜなら、律法を行う
ことによっては、すべての人間は神の前に義とせられないからであ
る。律法によっては、罪の自覚が生じるのみである。
二一しかし今や、神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者と
によってあかしされて、現された。二二それは、イエス・キリストを
信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるもの
である。そこにはなんらの差別もない。二三すなわち、すべての人は
罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、二四彼らは、
価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによっ

て義とされるのである。二五神はこのキリストを立てて、その血によ
る、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の
義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐
をもって見のがしておられたが、二六それは、今の時に、神の義を示
すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエ
スを信じる者を義とされるのである。二七すると、どこにわたしたち
の誇があるのか。全くない。なんの法則によってか。行いの法則に
よってか。そうではなく、信仰の法則によってである。二八わたした
ちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではな
く、信仰によるのである。二九それとも、神はユダヤ人だけの神であ
ろうか。また、異邦人の神であるのではないか。確かに、異邦人の神
でもある。三〇まことに、神は唯一であって、割礼のある者を信仰に
よって義とし、また、無割礼の者をも信仰のゆえに義とされるのであ
る。三一すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするので
あるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立

するのである。

第四章 **一**それでは、肉によるわたしたちの先祖アブラハムの場合については、なんと言ったらよいか。**二**もしアブラハムが、その行いによって義とされたのであれば、彼は誇ることができよう。しかし、神のみまえでは、できない。**三**なぜなら、聖書はなんと言っているか、「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」とある。**四**いったい、働く人に対する報酬は、恩恵としてではなく、当然の支払いとして認められる。**五**しかし、働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められるのである。**六**ダビデもまた、行いがなくても神に義と認められた人の幸福について、次のように言っている、

七「不法をゆるされ、罪をおおわれた人たちは、
さいわいである。
八罪を主に認められない人は、さいわいである」。

九さて、この幸福は、割礼の者だけが受けるのか。それとも、無割礼

の者にも及ぶのか。わたしたちは言う、「アブラハムには、その信仰
が義と認められた」のである。一〇それでは、どういう場合にそう認
められたのか。割礼を受けてからか、それとも受ける前か。割礼を受
けてからではなく、無割礼の時であった。一一そして、アブラハムは
割礼というしるしを受けたが、それは、無割礼のままで信仰によって
受けた義の証印であって、彼が、無割礼のままで信じて義とされるに
至るすべての人の父となり、一二かつ、割礼の者の父となるためなの
である。割礼の者というのは、割礼を受けた者ばかりではなく、われ
らの父アブラハムが無割礼の時に持っていた信仰の足跡を踏む人々
をもさすのである。一三なぜなら、世界を相続させるとの約束が、ア
ブラハムとその子孫とに対してなされたのは、律法によるのではな
く、信仰の義によるからである。一四もし、律法に立つ人々が相続人
であるとすれば、信仰はむなしくなり、約束もまた無効になってし
まう。一五いったい、律法は怒りを招くものであって、律法のないと
ころには違反なるものはない。一六このようなわけで、すべては信仰

によるのである。それは恵みによるのであって、すべての子孫に、す
なわち、律法に立つ者だけにではなく、アブラハムの信仰に従う者に
も、この約束が保証されるのである。アブラハムは、神の前で、わた
したちすべての者の父であって、
一七「わたしは、あなたを立てて多
くの国民の父とした」と書いてあるとおりである。彼はこの神、す
なわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのであ
る。
一八彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、
「あなたの子孫はこうなるであろう」と言われているとおり、多くの
国民の父となったのである。
一九すなわち、およそ百歳となって、彼
自身のからだが死んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であるの
を認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかった。
二〇彼は、神の約束
を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強
められ、栄光を神に帰し、
二一神はその約束されたことを、また成就
することができると確信した。
二二だから、彼は義と認められたので
ある。
二三しかし「義と認められた」と書いてあるのは、アブラハム

のためだけではなく、二四わたしたちのためでもあって、わたしたち
の主イエスを死人の中からよみがえらせたかたを信じるわたしたち
も、義と認められるのである。二五主は、わたしたちの罪過のために
死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえらされたので
ある。

第五章一このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだ
から、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得
ている。二わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵み
に信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望を
もって喜んでいる。三それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜ
なら、患難は忍耐を生み出し、四忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望
を生み出すことを、知っているからである。五そして、希望は失望に
終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によっ
て、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。六わたしした
ちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちの

ために死んで下さったのである。七正しい人のために死ぬ者は、ほと
んどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはい
るであろう。八しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキ
リストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛
を示されたのである。九わたしたちは、キリストの血によって今は義
とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われ
るであろう。一〇もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死
によって神との和解を受けたとすれば、和解を受けている今は、なお
さら、彼のいのちによって救われるであろう。一一そればかりではな
く、わたしたちは、今や和解を得させて下さったわたしたちの主イエ
ス・キリストによって、神を喜ぶのである。
一二このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、
また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が
罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。一三というの
は、律法以前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪として

認められないのである。一四しかし、アダムからモーセまでの間にお
いても、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者も、死の支配
を免れなかった。このアダムは、きたるべき者の型である。一五しか
し、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひと
りの罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、
ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多
くの人々に満ちあふれたはずではないか。一六かつ、この賜物は、ひ
とりの犯した罪の結果とは異なっている。なぜなら、さばきの場合
は、ひとりの罪過から、罪に定めることになったが、恵みの場合には、
多くの人の罪過から、義とする結果になるからである。一七もし、ひ
とりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至った
とすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている
者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあって、さ
らに力強く支配するはずではないか。一八このようなわけで、ひとり
の罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義な

る行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。
一九すなわち、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされ
たと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるの
である。**二〇**律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためで
ある。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあ
ふれた。**二一**それは、罪が死によって支配するに至ったように、恵み
もまた義によって支配し、わたしたちの主イエス・キリストにより、
永遠のいのちを得させるためである。

第六章
一では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わる
ために、罪にとどまるべきであろうか。**二**断じてそうではない。罪に
対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれる
だろうか。**三**それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエ
スにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかる
バプテスマを受けたのである。**四**すなわち、わたしたちは、その死に
あずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、

キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたよう
に、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。五もしわ
たしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さら
に、彼の復活の様にもひとしくなるであろう。六わたしたちは、この
事を知っている。わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架
につけられた。それは、この罪のからだが滅び、わたしたちがもは
や、罪の奴隷となることがないためである。七それは、すでに死んだ
者は、罪から解放されているからである。八もしわたしたちが、キリ
ストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる。九キリス
トは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はも
はや彼を支配しないことを、知っているからである。一〇なぜなら、
キリストが死んだのは、ただ一度罪に対して死んだのであり、キリス
トが生きるのは、神に生きるのだからである。一一このように、あな
たがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあっ
て神に生きている者であることを、認むべきである。一二だから、あ

なたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従わ
せることをせず、一三また、あなたがたの肢体を不義の武器として罪
にささげてはならない。むしろ、死人の中から生かされた者として、
自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげる
がよい。一四なぜなら、あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵
みの下にあるので、罪に支配されることはないからである。
一五それでは、どうなのか。律法の下にではなく、恵みの下にある
からといって、わたしたちは罪を犯すべきであろうか。断じてそう
ではない。一六あなたがたは知らないのか。あなたがた自身が、だれ
かの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者
の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順
の僕ともなるのである。一七しかし、神は感謝すべきかな。あなたが
たは罪の僕であったが、伝えられた教の基準に心から服従して、一八
罪から解放され、義の僕となった。一九わたしは人間的な言い方をす
るが、それは、あなたがたの肉の弱さのゆえである。あなたがたは、

かって自分の肢体を汚れと不法との僕としてささげて不法に陥った
ように、今や自分の肢体を義の僕としてささげて、きよくならねばな
らない。二〇あなたがたが罪の僕であった時は、義とは縁のない者で
あった。二一その時あなたがたは、どんな実を結んだのか。それは、
今では恥とするようなものであった。それらのものの終極は、死で
ある。二二しかし今や、あなたがたは罪から解放されて神に仕え、き
よきに至る実を結んでいる。その終極は永遠のいのちである。二三罪
の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリ
スト・イエスにおける永遠のいのちである。

第七章一それとも、兄弟たちよ。あなたがたは知らないのか。わた
しは律法を知っている人々に語るのであるが、律法は人をその生き
ている期間だけ支配するものである。二すなわち、夫のある女は、夫
が生きている間は、律法によって彼につながれている。しかし、夫が
死ねば、夫の律法から解放される。三であるから、夫の生存中に他の
男に行けば、その女は淫婦と呼ばれるが、もし夫が死ねば、その律法

から解かれるので、他の男に行っても、淫婦とはならない。四わたし
の兄弟たちよ。このように、あなたがたも、キリストのからだをとお
して、律法に対して死んだのである。それは、あなたがたが他の人、
すなわち、死人の中からよみがえられたかたのものとなり、こうし
て、わたしたちが神のために実を結ぶに至るためなのである。五とい
うのは、わたしたちが肉にあった時には、律法による罪の欲情が、死
のために実を結ばせようとして、わたしたちの肢体のうちに働いて
いた。六しかし今は、わたしたちをつないでいたものに対して死んだ
ので、わたしたちは律法から解放され、その結果、古い文字によって
ではなく、新しい霊によって仕えているのである。

七それでは、わたしたちは、なんと言おうか。律法は罪なのか。断
じてそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知
らなかったであろう。すなわち、もし律法が「むさぼるな」と言わな
かったら、わたしはむさぼりなるものを知らなかったであろう。八し
かるに、罪は戒めによって機会を捕え、わたしの内に働いて、あらゆ

るむさぼりを起させた。すなわち、律法がなかったら、罪は死んでい
るのである。**九**わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが
来るに及んで、罪は生き返り、**一〇**わたしは死んだ。そして、いのち
に導くべき戒めそのものが、かえってわたしを死に導いて行くこと
がわかった。**一一**なぜなら、罪は戒めによって機会を捕え、わたしを
欺き、戒めによってわたしを殺したからである。**一二**このようなわけ
で、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、
かつ善なるものである。**一三**では、善なるものが、わたしにとって死
となったのか。断じてそうではない。それはむしろ、罪の罪たるこ
とが現れるための、罪のしわざである。すなわち、罪は、戒めによっ
て、はなはだしく悪性なものとなるために、善なるものによってわた
しを死に至らせたのである。**一四**わたしたちは、律法は霊的なもので
あると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下
に売られているのである。**一五**わたしは自分のしていることが、わか
らない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分

の憎む事をしているからである。一六もし、自分の欲しない事をして
いるとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認している
ことになる。一七そこで、この事をしているのは、もはやわたしでは
なく、わたしの内に宿っている罪である。一八わたしの内に、すなわ
ち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたし
は知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、
それをする力がないからである。一九すなわち、わたしの欲している
善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。二〇もし、欲
しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわた
しではなく、わたしの内に宿っている罪である。二一そこで、善をし
ようと欲しているわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があ
るのを見る。二二すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を
喜んでいるが、二三わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心
の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中
に、わたしをとりこにしているのを見る。二四わたしは、なんという

みじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを
救ってくれるだろうか。二五わたしたちの主イエス・キリストによっ
て、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神
の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。
第八章一こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定
められることがない。二なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの
御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。三
律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神は
なし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪のために
つかわし、肉において罪を罰せられたのである。四これは律法の要求
が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるた
めである。五なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は
霊のことを思うからである。六肉の思いは死であるが、霊の思いは、
いのちと平安とである。七なぜなら、肉の思いは神に敵するからであ
る。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである。

八また、肉にある者は、神を喜ばせることができない。九しかし、神
の御霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉におる
のではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人が
いるなら、その人はキリストのものではない。一〇もし、キリストが
あなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、
霊は義のゆえに生きているのである。一一もし、イエスを死人の中か
らよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、
キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがた
の内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、
生かしてくださるであろう。

一二それゆえに、兄弟たちよ。わたしたちは、果すべき責任を負っ
ている者であるが、肉に従って生きる責任を肉に対して負っているの
ではない。一三なぜなら、もし、肉に従って生きるなら、あなたがた
は死ぬ外はないからである。しかし、霊によってからだの働きを殺す
なら、あなたがたは生きるであろう。一四すべて神の御霊に導かれて

いる者は、すなわち、神の子である。一五あなたがたは再び恐れをい
だかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受
けたのである。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶ
のである。一六御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが
神の子であることをあかしして下さる。一七もし子であれば、相続人
でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために
苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである。
一八わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現
されようとする栄光に比べると、言うに足りない。一九被造物は、実
に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。二〇なぜなら、
被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させ
たかたによるのであり、二一かつ、被造物自身にも、滅びのなわめか
ら解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されている
からである。二二実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共
に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。二三

それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、
心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、か
らだのあがなわれることを待ち望んでいる。二四わたしたちは、この
望みによって救われているのである。しかし、目に見える望みは望
みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人が
あろうか。二五もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたした
ちは忍耐して、それを待ち望むのである。
二六御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜ
なら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずか
ら、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのため
にとりなして下さるからである。二七そして、人の心を探り知るかた
は、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、
御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるから
である。二八神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召
された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さること

を、わたしたちは知っている。二九神はあらかじめ知っておられる者
たちを、更に御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定
めて下さった。それは、御子を多くの兄弟の中で長子とならせるた
めであった。三〇そして、あらかじめ定めた者たちを更に召し、召し
た者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に栄光を与えて下
さったのである。

三一それでは、これらの事について、なんと言おうか。もし、神が
わたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。三
二ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために
死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらない
ことがあろうか。三三だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神
は彼らを義とされるのである。三四だれが、わたしたちを罪に定める
のか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座
し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。三五だれ
が、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩

か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。
三六「わたしたちはあなたのために終日、
死に定められており、
ほふられる羊のように見られている」
と書いてあるとおりである。三七しかし、わたしたちを愛して下さっ
たかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得
て余りがある。三八わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、
現在のものも将来のものも、力あるものも、三九高いものも深いもの
も、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおけ
る神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。
第九章一わたしはキリストにあって真実を語る。偽りは言わない。
わたしの良心も聖霊によって、わたしにこうあかしをしている。二す
なわち、わたしに大きな悲しみがあり、わたしの心に絶えざる痛みが
ある。三実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこ
の身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない。四彼らはイ

スラエル人であって、子たる身分を授けられることも、栄光も、もろ
もろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も彼ら
のもの、五また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも
また彼らから出られたのである。万物の上にいます神は、永遠にほ
むべきかな、アァメン。
六しかし、神の言が無効になったというわけではない。なぜなら、
イスラエルから出た者が全部イスラエルなのではなく、七また、アブ
ラハムの子孫だからといって、その全部が子であるのではないから
である。かえって「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるで
あろう」。八すなわち、肉の子がそのまま神の子なのではなく、むし
ろ約束の子が子孫として認められるのである。九約束の言葉はこうで
ある。「来年の今ごろ、わたしはまた来る。そして、サラに男子が与
えられるであろう」。一〇それればかりではなく、ひとりの人、すなわ
ち、わたしたちの父祖イサクによって受胎したリベカの場合も、ま
た同様である。一一まだ子供らが生れもせず、善も悪もしない先に、

神の選びの計画が、一二わざによらず、召したかたによって行われる
ために、「兄は弟に仕えるであろう」と、彼女に仰せられたのである。
一三「わたしはヤコブを愛しエサウを憎んだ」と書いてあるとおりで
ある。
一四では、わたしたちはなんと言おうか。神の側に不正があるのか。
断じてそうではない。一五神はモーセに言われた、「わたしは自分の
あわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者を、いつく
しむ」。一六ゆえに、それは人間の意志や努力によるのではなく、た
だ神のあわれみによるのである。一七聖書はパロにこう言っている、
「わたしがあなたを立てたのは、この事のためである。すなわち、あ
なたによってわたしの力をあらわし、また、わたしの名が全世界に言
いひろめられるためである」。一八だから、神はそのあわれもうと思
う者をあわれみ、かたくなにしようと思う者を、かたくなになさるの
である。
一九そこで、あなたは言うであろう、「なぜ神は、なおも人を責めら

れるのか。だれが、神の意図に逆らい得ようか」。二〇ああ人よ。あ
なたは、神に言い逆らうとは、いったい、何者なのか。造られたもの
が造った者に向かって、「なぜ、わたしをこのように造ったのか」と
言うことがあろうか。二一陶器を造る者は、同じ土くれから、一つを
尊い器に、他を卑しい器に造りあげる権能がないのであろうか。二二
もし、神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力を知らせようと思われ
つつも、滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって
忍ばれたとすれば、二三かつ、栄光にあずからせるために、あらかじ
め用意されたあわれみの器にご自身の栄光の富を知らせようとされ
たとすれば、どうであろうか。二四神は、このあわれみの器として、
またわたしたちをも、ユダヤ人の中からだけではなく、異邦人の中か
らも召されたのである。二五それは、ホセアの書でも言われていると
おりである、

「わたしは、わたしの民でない者を、
わたしの民と呼び、

愛されなかった者を、愛される者と呼ぶであろう。
二六あなたがたはわたしの民ではないと、
彼らに言ったその場所で、
彼らは生ける神の子らであると、
呼ばれるであろう」。
二七また、イザヤはイスラエルについて叫んでいる、
「たとい、イスラエルの子らの数は、
浜の砂のようであっても、
救われるのは、残された者だけであろう。
二八主は、御言をきびしくまたすみやかに、
地上になしとげられるであろう」。
二九さらに、イザヤは預言した、
「もし、万軍の主がわたしたちに
子孫を残されなかったなら、
わたしたちはソドムのようになり、

ゴモラと同じようになったであろう」。
三〇では、わたしたちはなんと言おうか。義を追い求めなかった異邦人
は、義、すなわち、信仰による義を得た。三一しかし、義の律法を追
い求めていたイスラエルは、その律法に達しなかった。三二なぜであ
るか。信仰によらないで、行いによって得られるかのように、追い求
めたからである。彼らは、つまずきの石につまずいたのである。
三三「見よ、わたしはシオンに、
つまずきの石、さまたげの岩を置く。
それにより頼む者は、失望に終ることがない」
と書いてあるとおりである。
第一〇章一兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささ
げる祈は、彼らが救われることである。二わたしは、彼らが神に対し
て熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるもの
ではない。三なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立て
ようと努め、神の義に従わなかったからである。四キリストは、すべ

て信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。
五モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と
書いている。六しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなた
は心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリ
ストを引き降ろすことである。七また、「だれが底知れぬ所に下るで
あろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げるこ
とである。八では、なんと言っているか。「言葉はあなたの近くにあ
る。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣
べ伝えている信仰の言葉である。九すなわち、自分の口で、イエスは
主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえ
らせたと信じるなら、あなたは救われる。一〇なぜなら、人は心に信
じて義とされ、口で告白して救われるからである。一一聖書は、「す
べて彼を信じる者は、失望に終ることがない」と言っている。一二ユ
ダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、
彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。一三な

ぜなら、「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」とあるから
である。
一四しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあ
ろうか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあろうか。宣
べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。一五つかわ
されなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。「ああ、麗しい
かな、良きおとずれを告げる者の足は」と書いてあるとおりである。
一六しかし、すべての人が福音に聞き従ったのではない。イザヤは、
「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言って
いる。一七したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことは
キリストの言葉から来るのである。一八しかしわたしは言う、彼らに
は聞えなかったのであろうか。否、むしろ

「その声は全地にひびきわたり、
その言葉は世界のはてにまで及んだ」。

一九なお、わたしは言う、イスラエルは知らなかったのであろうか。

まずモーセは言っている、
「わたしはあなたがたに、
国民でない者に対してねたみを起させ、
無知な国民に対して、
怒りをいだかせるであろう」。
二〇イザヤも大胆に言っている、
「わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、
わたしを尋ねない者に、自分を現した」。
二一そして、イスラエルについては、
「わたしは服従せずに反抗する民に、
終日わたしの手をさし伸べていた」
と言っている。

第一一章
一そこで、わたしは問う、「神はその民を捨てたのであろう
か」。断じてそうではない。わたしもイスラエル人であり、アブラハ
ムの子孫、ベニヤミン族の者である。二神は、あらかじめ知っておら

れたその民を、捨てることはされなかった。聖書がエリヤについてな
んと言っているか、あなたがたは知らないのか。すなわち、彼はイス
ラエルを神に訴えてこう言った。三「主よ、彼らはあなたの預言者た
ちを殺し、あなたの祭壇をこぼち、そして、わたしひとりが取り残さ
れたのに、彼らはわたしのいのちをも求めています」。四しかし、彼
に対する御告げはなんであったか、「バアルにひざをかがめなかった
七千人を、わたしのために残しておいた」。五それと同じように、今
の時にも、恵みの選びによって残された者がいる。六しかし、恵みに
よるのであれば、もはや行いによるのではない。そうでないと、恵み
はもはや恵みでなくなるからである。七では、どうなるのか。イスラ
エルはその追い求めているものを得ないで、ただ選ばれた者が、それ
を得た。そして、他の者たちはかたくなになった。

八「神は、彼らに鈍い心と、
見えない目と、聞えない耳とを与えて、
きょう、この日に及んでいる」

と書いてあるとおりである。九ダビデもまた言っている、
「彼らの食卓は、彼らのわなとなれ、網となれ、
つまずきとなれ、報復となれ。
一〇彼らの目は、くらんで見えなくなれ、
彼らの背は、いつまでも曲っておれ」。
一一そこで、わたしは問う、「彼らがつまずいたのは、倒れるため
であったのか」。断じてそうではない。かえって、彼らの罪過によっ
て、救が異邦人に及び、それによってイスラエルを奮起させるためで
ある。一二しかし、もし、彼らの罪過が世の富となり、彼らの失敗が
異邦人の富となったとすれば、まして彼らが全部救われたなら、どん
なにかすばらしいことであろう。
一三そこでわたしは、あなたがた異邦人に言う。わたし自身は異邦人
の使徒なのであるから、わたしの務を光栄とし、一四どうにかしてわ
たしの骨肉を奮起させ、彼らの幾人かを救おうと願っている。一五も
し彼らの捨てられたことが世の和解となったとすれば、彼らの受けい

れられることは、死人の中から生き返ることではないか。一六もし、
麦粉の初穂がきよければ、そのかたまりもきよい。もし根がきよけれ
ば、その枝もきよい。一七しかし、もしある枝が切り去られて、野生
のオリブであるあなたがそれにつがれ、オリブの根の豊かな養分にあ
ずかっているとすれば、一八あなたはその枝に対して誇ってはならな
い。たとえ誇るとしても、あなたが根をささえているのではなく、根
があなたをささえているのである。一九すると、あなたは、「枝が切
り去られたのは、わたしがつがれるためであった」と言うであろう。
二〇まさに、そのとおりである。彼らは不信仰のゆえに切り去られ、
あなたは信仰のゆえに立っているのである。高ぶった思いをいだか
ないで、むしろ恐れなさい。二一もし神が元木の枝を惜しまなかった
とすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう。二二神の慈愛
と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、
もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。
そうでないと、あなたも切り取られるであろう。二三しかし彼らも、

不信仰を続けなければ、つがれるであろう。神には彼らを再びつぐ
力がある。二四なぜなら、もしあなたが自然のままの野生のオリブか
ら切り取られ、自然の性質に反して良いオリブにつがれたとすれば、
まして、これら自然のままの良い枝は、もっとたやすく、元のオリブ
につがれないであろうか。
二五兄弟たちよ。あなたがたが知者だと自負することのないために、
この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人が
かたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時までのこと
であって、二六こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。
すなわち、次のように書いてある、
「救う者がシオンからきて、
ヤコブから不信心を追い払うであろう。
二七そして、これが、彼らの罪を除き去る時に、
彼らに対して立てるわたしの契約である」。
二八福音について言えば、彼らは、あなたがたのゆえに、神の敵とさ

れているが、選びについて言えば、父祖たちのゆえに、神に愛せられ
る者である。二九神の賜物と召しとは、変えられることがない。三〇
あなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は彼らの不従順に
よってあわれみを受けたように、三一彼らも今は不従順になっている
が、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、彼ら自身も今あ
われみを受けるためなのである。三二すなわち、神はすべての人をあ
われむために、すべての人を不従順のなかに閉じ込めたのである。
三三ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めが
たく、その道は測りがたい。

三四「だれが、主の心を知っていたか。
だれが、主の計画にあずかったか。
三五また、だれが、まず主に与えて、
その報いを受けるであろうか」。

三六万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光
がとこしえに神にあるように、アァメン。

第一二章一兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあ
なたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、
聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき
霊的な礼拝である。二あなたがたは、この世と妥協してはならない。
むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨
であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、
わきまえ知るべきである。

三わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりび
とりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神
が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべき
である。四なぜなら、一つのからだにたくさんの肢体があるが、それ
らの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、五わたしたちも数は
多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互に肢体
だからである。六このように、わたしたちは与えられた恵みによっ
て、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であ

れば、信仰の程度に応じて預言をし、七奉仕であれば奉仕をし、また
教える者であれば教え、八勧めをする者であれば勧め、寄附する者は
惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く
慈善をすべきである。九愛には偽りがあってはならない。悪は憎み退
け、善には親しみ結び、一〇兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進ん
で互に尊敬し合いなさい。一一熱心で、うむことなく、霊に燃え、主
に仕え、一二望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。一
三貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。一四あなたがた
を迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない。一五
喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。一六互に思うことをひ
とつにし、高ぶった思いをいだかず、かえって低い者たちと交わる
がよい。自分が知者だと思いあがってはならない。一七だれに対して
も悪をもって悪に報いず、すべての人に対して善を図りなさい。一八
あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。一九愛
する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさ

い。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わ
たし自身が報復する」と書いてあるからである。二〇むしろ、「もし
あなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさ
い。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積
むことになるのである」。二一悪に負けてはいけない。かえって、善
をもって悪に勝ちなさい。

第一三章一すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜな
ら、神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべ
て神によって立てられたものだからである。二したがって、権威に逆
らう者は、神の定めにそむく者である。そむく者は、自分の身にさ
ばきを招くことになる。三いったい、支配者たちは、善事をする者に
は恐怖でなく、悪事をする者にこそ恐怖である。あなたは権威を恐
れないことを願うのか。それでは、善事をするがよい。そうすれば、
彼からほめられるであろう。四彼は、あなたに益を与えるための神の
僕なのである。しかし、もしあなたが悪事をすれば、恐れなければな

らない。彼はいたずらに剣を帯びているのではない。彼は神の僕で
あって、悪事を行う者に対しては、怒りをもって報いるからである。
五だから、ただ怒りをのがれるためだけではなく、良心のためにも従
うべきである。六あなたがたが貢を納めるのも、また同じ理由からで
ある。彼らは神に仕える者として、もっぱらこの務に携わっているの
である。七あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果しなさい。
すなわち、貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納
め、恐るべき者は恐れ、敬うべき者は敬いなさい。

八互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人
を愛する者は、律法を全うするのである。九「姦淫するな、殺すな、
盗むな、むさぼるな」など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局
「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というこの言葉に帰
する。一〇愛は隣り人に害を加えることはない。だから、愛は律法を
完成するものである。

一一なお、あなたがたは時を知っているのだから、特に、この事を

励まねばならない。すなわち、あなたがたの眠りからさめるべき時
が、すでにきている。なぜなら今は、わたしたちの救が、初め信じた
時よりも、もっと近づいているからである。一二夜はふけ、日が近づ
いている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の
武具を着けようではないか。一三そして、宴楽と泥酔、淫乱と好色、
争いとねたみを捨てて、昼歩くように、つつましく歩こうではない
か。一四あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満
たすことに心を向けてはならない。

第一四章 一信仰の弱い者を受けいれなさい。ただ、意見を批評する
ためであってはならない。二ある人は、何を食べてもさしつかえな
いと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる。三食べる者は食べな
い者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはなら
ない。神は彼を受けいれて下さったのであるから。四他人の僕をさ
ばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、
その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を

立たせることができるからである。五また、ある人は、この日がか
の日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。
各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである。六日を重ん
じる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる。
神に感謝して食べるからである。食べない者も主のために食べない。
そして、神に感謝する。七すなわち、わたしたちのうち、だれひとり
自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はな
い。八わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のため
に死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のも
のなのである。九なぜなら、キリストは、死者と生者との主となるた
めに、死んで生き返られたからである。一〇それだのに、あなたは、
なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか。わた
したちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。一一すなわち、

「主が言われる。わたしは生きている。
すべてのひざは、わたしに対してかがみ、

　すべての舌は、神にさんびをささげるであろう」
と書いてある。一二だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して
自分の言いひらきをすべきである。
一三それゆえ、今後わたしたちは、互にさばき合うことをやめよう。
むしろ、あなたがたは、妨げとなる物や、つまずきとなる物を兄弟の
前に置かないことに、決めるがよい。一四わたしは、主イエスにあっ
て知りかつ確信している。それ自体、汚れているものは一つもない。
ただ、それが汚れていると考える人にだけ、汚れているのである。一
五もし食物のゆえに兄弟を苦しめるなら、あなたは、もはや愛によっ
て歩いているのではない。あなたの食物によって、兄弟を滅ぼしては
ならない。キリストは彼のためにも、死なれたのである。一六それだ
から、あなたがたにとって良い事が、そしりの種にならぬようにしな
さい。一七神の国は飲食ではなく、義と、平和と、聖霊における喜び
とである。一八こうしてキリストに仕える者は、神に喜ばれ、かつ、
人にも受けいれられるのである。一九こういうわけで、平和に役立つ

ことや、互の徳を高めることを、追い求めようではないか。二〇食物
のことで、神のみわざを破壊してはならない。すべての物はきよい。
ただ、それを食べて人をつまずかせる者には、悪となる。二一肉を食
わず、酒を飲まず、そのほか兄弟をつまずかせないのは、良いこと
である。二二あなたの持っている信仰を、神のみまえに、自分自身に
持っていなさい。自ら良いと定めたことについて、やましいと思わな
い人は、さいわいである。二三しかし、疑いながら食べる者は、信仰
によらないから、罪に定められる。すべて信仰によらないことは、罪
である。

第一五章
一わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さをになうべ
きであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない。二わたした
ちひとりびとりは、隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼ら
を喜ばすべきである。三キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさ
らなかった。むしろ「あなたをそしる者のそしりが、わたしに降り
かかった」と書いてあるとおりであった。四これまでに書かれた事が

らは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは
聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。
五どうか、忍耐と慰めとの神が、あなたがたに、キリスト・イエスに
ならって互に同じ思いをいだかせ、六こうして、心を一つにし、声を
合わせて、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神をあがめさせ
て下さるように。
七こういうわけで、キリストもわたしたちを受けいれて下さった
ように、あなたがたも互に受けいれて、神の栄光をあらわすべきで
ある。八わたしは言う、キリストは神の真実を明らかにするために、
割礼のある者の僕となられた。それは父祖たちの受けた約束を保証
すると共に、九異邦人もあわれみを受けて神をあがめるようになるた
めである、

「それゆえ、わたしは、異邦人の中で
あなたにさんびをささげ、
また、御名をほめ歌う」

と書いてあるとおりである。
一〇また、こう言っている、
「異邦人よ、主の民と共に喜べ」。
一一また、
「すべての異邦人よ、主をほめまつれ。
もろもろの民よ、主をほめたたえよ」。
一二またイザヤは言っている、
「エッサイの根から芽が出て、
異邦人を治めるために立ち上がる者が来る。
異邦人は彼に望みをおくであろう」。
一三どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とを、あ
なたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれ
させて下さるように。
一四さて、わたしの兄弟たちよ。あなたがた自身が、善意にあふれ、
あらゆる知恵に満たされ、そして互に訓戒し合う力のあることを、わ

たしは堅く信じている。一五しかし、わたしはあなたがたの記憶を新
たにするために、ところどころ、かなり思いきって書いた。それは、
神からわたしに賜わった恵みによって、書いたのである。一六このよ
うに恵みを受けたのは、わたしが異邦人のためにキリスト・イエスに
仕える者となり、神の福音のために祭司の役を勤め、こうして異邦人
を、聖霊によってきよめられた、御旨にかなうささげ物とするためで
ある。一七だから、わたしは神への奉仕については、キリスト・イエ
スにあって誇りうるのである。一八わたしは、異邦人を従順にするた
めに、キリストがわたしを用いて、言葉とわざ、一九しるしと不思議
との力、聖霊の力によって、働かせて下さったことの外には、あえて
何も語ろうとは思わない。こうして、わたしはエルサレムから始ま
り、巡りめぐってイルリコに至るまで、キリストの福音を満たしてき
た。二〇その際、わたしの切に望んだところは、他人の土台の上に建
てることをしないで、キリストの御名がまだ唱えられていない所に
福音を宣べ伝えることであった。二一すなわち、

「彼のことを宣べ伝えられていなかった人々が見、
聞いていなかった人々が悟るであろう」
と書いてあるとおりである。
二二こういうわけで、わたしはあなたがたの所に行くことを、たびた
び妨げられてきた。二三しかし今では、この地方にはもはや働く余地
がなく、かつイスパニヤに赴く場合、あなたがたの所に行くことを、
多年、熱望していたので、――二四その途中あなたがたに会い、まず
幾分でもわたしの願いがあなたがたによって満たされたら、あなた
がたに送られてそこへ行くことを、望んでいるのである。二五しかし
今の場合、聖徒たちに仕えるために、わたしはエルサレムに行こうと
している。二六なぜなら、マケドニヤとアカヤとの人々は、エルサレ
ムにおる聖徒の中の貧しい人々を援助することに賛成したからであ
る。二七たしかに、彼らは賛成した。しかし同時に、彼らはかの人々
に負債がある。というのは、もし異邦人が彼らの霊の物にあずかった
とすれば、肉の物をもって彼らに仕えるのは、当然だからである。二

八そこでわたしは、この仕事を済ませて彼らにこの実を手渡した後、
あなたがたの所をとおって、イスパニヤに行こうと思う。二九そして
あなたがたの所に行く時には、キリストの満ちあふれる祝福をもっ
て行くことと、信じている。
三〇兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストにより、かつ御霊
の愛によって、あなたがたにお願いする。どうか、共に力をつくし
て、わたしのために神に祈ってほしい。三一すなわち、わたしがユダ
ヤにおる不信の徒から救われ、そしてエルサレムに対するわたしの
奉仕が聖徒たちに受けいれられるものとなるように、三二また、神の
御旨により、喜びをもってあなたがたの所に行き、共になぐさめ合う
ことができるように祈ってもらいたい。三三どうか、平和の神があな
たがた一同と共にいますように、アァメン。

第一六章一ケンクレヤにある教会の執事、わたしたちの姉妹フィベ
を、あなたがたに紹介する。二どうか、聖徒たるにふさわしく、主に
あって彼女を迎え、そして、彼女があなたがたにしてもらいたいこと

があれば、何事でも、助けてあげてほしい。彼女は多くの人の援助者
であり、またわたし自身の援助者でもあった。
三キリスト・イエスにあるわたしの同労者プリスカとアクラとに、
よろしく言ってほしい。四彼らは、わたしのいのちを救うために、自分
の首をさえ差し出してくれたのである。彼らに対しては、わたしだ
けではなく、異邦人のすべての教会も、感謝している。五また、彼ら
の家の教会にも、よろしく。わたしの愛するエパネトに、よろしく
言ってほしい。彼は、キリストにささげられたアジヤの初穂である。
六あなたがたのために一方ならず労苦したマリヤに、よろしく言って
ほしい。七わたしの同族であって、わたしと一緒に投獄されたことの
あるアンデロニコとユニアスとに、よろしく。彼らは使徒たちの間で
評判がよく、かつ、わたしよりも先にキリストを信じた人々である。
八主にあって愛するアムプリアトに、よろしく。九キリストにあるわ
たしたちの同労者ウルバノと、愛するスタキスとに、よろしく。一〇
キリストにあって錬達なアペレに、よろしく。アリストブロの家の

人たちに、よろしく。一一同族のヘロデオンに、よろしく。ナルキソ
の家の、主にある人たちに、よろしく。一二主にあって労苦している
ツルパナとツルポサとに、よろしく。主にあって一方ならず労苦し
た愛するペルシスに、よろしく。一三主にあって選ばれたルポスと、
彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。一四アスン
クリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよび彼らと一緒
にいる兄弟たちに、よろしく。一五ピロロゴとユリヤとに、またネレ
オとその姉妹とに、オルンパに、また彼らと一緒にいるすべての聖徒
たちに、よろしく言ってほしい。一六きよい接吻をもって、互にあい
さつをかわしなさい。キリストのすべての教会から、あなたがたに
よろしく。

一七さて兄弟たちよ。あなたがたに勧告する。あなたがたが学んだ
教にそむいて分裂を引き起し、つまずきを与える人々を警戒し、かつ
彼らから遠ざかるがよい。一八なぜなら、こうした人々は、わたした
ちの主キリストに仕えないで、自分の腹に仕え、そして甘言と美辞と

をもって、純朴な人々の心を欺く者どもだからである。一九あなたが
たの従順は、すべての人々の耳に達しており、それをあなたがたのた
めに喜んでいる。しかし、わたしの願うところは、あなたがたが善に
さとく、悪には、うとくあってほしいことである。二〇平和の神は、
サタンをすみやかにあなたがたの足の下に踏み砕くであろう。
どうか、わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるよ
うに。
二一わたしの同労者テモテおよび同族のルキオ、ヤソン、ソシパテ
ロから、あなたがたによろしく。二二（この手紙を筆記したわたしテ
ルテオも、主にあってあなたがたにあいさつの言葉をおくる。）二三
わたしと全教会との家主ガイオから、あなたがたによろしく。市の
会計係エラストと兄弟クワルトから、あなたがたによろしく。
〔二四わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同
と共にあるように、アァメン。〕
二五二六願わくは、わたしの福音とイエス・キリストの宣教とによ

り、かつ、長き世々にわたって、隠されていたが、今やあらわされ、預言の書をとおして、永遠の神の命令に従い、信仰の従順に至らせるために、もろもろの国人に告げ知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを力づけることのできるかた、二七すなわち、唯一の知恵深き神に、イエス・キリストにより、栄光が永遠より永遠にあるように、アァメン。

コリント人への第一の手紙

第一章一神(かみ)の御旨(みむね)により召(め)されてキリスト・イエスの使徒(しと)となった
パウロと、兄弟(きょうだい)ソステネから、二コリントにある神(かみ)の教会(きょうかい)、すなわち、
わたしたちの主(しゅ)イエス・キリストの御名(みな)を至(いた)る所(ところ)で呼(よ)び求(もと)めている
すべての人々(ひとびと)と共(とも)に、キリスト・イエスにあってきよめられ、聖徒(せいと)と
して召(め)されたかたがたへ。このキリストは、わたしたちの主(しゅ)であり、
また彼(かれ)らの主(しゅ)であられる。
三わたしたちの父(ちち)なる神(かみ)と主(しゅ)イエス・キリストから、恵(めぐ)みと平安(へいあん)と
が、あなたがたにあるように。
四わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあって与(あた)えられた神(かみ)
の恵(めぐ)みを思(おも)って、いつも神(かみ)に感謝(かんしゃ)している。五あなたがたはキリスト
にあって、すべてのことに、すなわち、すべての言葉(ことば)にもすべての

知識にも恵まれ、六キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに
確かなものとされ、七こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささか
も欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを
待ち望んでいる。八主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、
わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない
者にして下さるであろう。九神は真実なかたである。あなたがたは神
によって召され、御子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わり
に、はいらせていただいたのである。
一〇さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によっ
て、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにし、お互の間に分争
がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほ
しい。一一わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あ
なたがたの間に争いがあると聞かされている。一二はっきり言うと、
あなたがたがそれぞれ、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロ
に」「わたしはケパに」「わたしはキリストに」と言い合っていること

である。一三キリストは、いくつにも分けられたのか。パウロは、あ
なたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あ
なたがたは、パウロの名によってバプテスマを受けたのか。一四わた
しは感謝しているが、クリスポとガイオ以外には、あなたがたのうち
のだれにも、バプテスマを授けたことがない。一五それはあなたがた
がわたしの名によってバプテスマを受けたのだと、だれにも言われる
ことのないためである。一六もっとも、ステパナの家の者たちには、
バプテスマを授けたことがある。しかし、そのほかには、だれにも授
けた覚えがない。一七いったい、キリストがわたしをつかわされたの
は、バプテスマを授けるためではなく、福音を宣べ伝えるためであ
り、しかも知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、
キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。
一八十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわ
たしたちには、神の力である。一九すなわち、聖書に、
「わたしは知者の知恵を滅ぼし、

　賢い者の賢さをむなしいものにする」
と書いてある。二〇知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この
世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたでは
ないか。二一この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかっ
た。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさ
によって、信じる者を救うこととされたのである。二二ユダヤ人はし
るしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。二三しかしわたしたちは、
十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダ
ヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、二四召
された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神
の知恵たるキリストなのである。二五神の愚かさは人よりも賢く、神
の弱さは人よりも強いからである。
　二六兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよ
い。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くは
なく、身分の高い者も多くはいない。二七それだのに神は、知者をは

ずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめ
るために、この世の弱い者を選び、二八有力な者を無力な者にするた
めに、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無き
に等しい者を、あえて選ばれたのである。二九それは、どんな人間で
も、神のみまえに誇ることがないためである。三〇あなたがたがキリ
スト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てら
れて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたので
ある。三一それは、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりである。

第二章 一兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、
神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。
二なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられた
キリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心し
たからである。三わたしがあなたがたの所に行った時には、弱くかつ
恐れ、ひどく不安であった。四そして、わたしの言葉もわたしの宣教
も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのであ

る。五それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力に
よるものとなるためであった。
六しかしわたしたちは、円熟している者の間では、知恵を語る。こ
の知恵は、この世の者の知恵ではなく、この世の滅び行く支配者たち
の知恵でもない。七むしろ、わたしたちが語るのは、隠された奥義と
しての神の知恵である。それは神が、わたしたちの受ける栄光のた
めに、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである。
八この世の支配者たちのうちで、この知恵を知っていた者は、ひとり
もいなかった。もし知っていたなら、栄光の主を十字架につけはし
なかったであろう。九しかし、聖書に書いてあるとおり、

「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、
人の心に思い浮びもしなかったことを、
神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」

のである。一〇そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示
して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまで

もきわめるのだからである。一一いったい、人間の思いは、その内に
ある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神
の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。一二ところが、わた
したちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それ
によって、神から賜わった恵みを悟るためである。一三この賜物につ
いて語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、
御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである。
一四生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼に
は愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきで
あるから、彼はそれを理解することができない。一五しかし、霊の人
は、すべてのものを判断するが、自分自身はだれからも判断されるこ
とはない。一六「だれが主の思いを知って、彼を教えることができよ
うか」。しかし、わたしたちはキリストの思いを持っている。

第三章一兄弟たちよ。わたしはあなたがたには、霊の人に対するよ
うに話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリスト

にある幼な子に話すように話した。二あなたがたに乳を飲ませて、堅
い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったか
らである。今になってもその力がない。三あなたがたはまだ、肉の人
だからである。あなたがたの間に、ねたみや争いがあるのは、あな
たがたが肉の人であって、普通の人間のように歩いているためでは
ないか。四すなわち、ある人は「わたしはパウロに」と言い、ほかの
人は「わたしはアポロに」と言っているようでは、あなたがたは普通
の人間ではないか。五アポロは、いったい、何者か。また、パウロは
何者か。あなたがたを信仰に導いた人にすぎない。しかもそれぞれ、
主から与えられた分に応じて仕えているのである。六わたしは植え、
アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。七
だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事
なのは、成長させて下さる神のみである。八植える者と水をそそぐ者
とは一つであって、それぞれその働きに応じて報酬を得るであろう。
九わたしたちは神の同労者である。あなたがたは神の畑であり、神の

建物である。
一〇神から賜わった恵みによって、わたしは熟練した建築師のよう
に、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。し
かし、どういうふうに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。一一な
ぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれ
にもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。一二こ
の土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用い
て建てるならば、一三それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。
すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火
は、それぞれの仕事がどんなものであるかを、ためすであろう。一四
もしある人の建てた仕事がそのまま残れば、その人は報酬を受ける
が、一五その仕事が焼けてしまえば、損失を被るであろう。しかし彼
自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであ
ろう。
一六あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿って

いることを知らないのか。一七もし人が、神の宮を破壊するなら、神
はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、
そして、あなたがたはその宮なのだからである。
一八だれも自分を欺いてはならない。もしあなたがたのうちに、自分
がこの世の知者だと思う人がいるなら、その人は知者になるために愚
かになるがよい。一九なぜなら、この世の知恵は、神の前では愚かな
ものだからである。「神は、知者たちをその悪知恵によって捕える」
と書いてあり、二〇更にまた、「主は、知者たちの論議のむなしいこと
をご存じである」と書いてある。二一だから、だれも人間を誇っては
いけない。すべては、あなたがたのものなのである。二二パウロも、
アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、現在のものも、将来のもの
も、ことごとく、あなたがたのものである。二三そして、あなたがた
はキリストのもの、キリストは神のものである。
第四章一このようなわけだから、人はわたしたちを、キリストに仕え
る者、神の奥義を管理している者と見るがよい。二この場合、管理者

に要求されているのは、忠実であることである。三わたしはあなたが
たにさばかれたり、人間の裁判にかけられたりしても、なんら意に介
しない。いや、わたしは自分をさばくこともしない。四わたしは自ら
省みて、なんらやましいことはないが、それで義とされているわけで
はない。わたしをさばくかたは、主である。五だから、主がこられる
までは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗
い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられているこ
とを、あらわにされるであろう。その時には、神からそれぞれほまれ
を受けるであろう。
六兄弟たちよ。これらのことをわたし自身とアポロとに当てはめて
言って聞かせたが、それはあなたがたが、わたしたちを例にとって、
「しるされている定めを越えない」ことを学び、ひとりの人をあがめ、
ほかの人を見さげて高ぶることのないためである。七いったい、あな
たを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、も
らっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらって

いないもののように誇るのか。
八あなたがたは、すでに満腹しているのだ。すでに富み栄えている
のだ。わたしたちを差しおいて、王になっているのだ。ああ、王に
なっていてくれたらと思う。そうであったなら、わたしたちも、あ
なたがたと共に王になれたであろう。九わたしはこう考える。神はわ
たしたち使徒を死刑囚のように、最後に出場する者として引き出し、
こうしてわたしたちは、全世界に、天使にも人々にも見せ物にされ
たのだ。一〇わたしたちはキリストのゆえに愚かな者となり、あなた
がたはキリストにあって賢い者となっている。わたしたちは弱いが、
あなたがたは強い。あなたがたは尊ばれ、わたしたちは卑しめられ
ている。一一今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打
たれ、宿なしであり、一二苦労して自分の手で働いている。はずかし
められては祝福し、迫害されては耐え忍び、一三ののしられては優し
い言葉をかけている。わたしたちは今に至るまで、この世のちりの
ように、人間のくずのようにされている。

一四わたしがこのようなことを書くのは、あなたがたをはずかしめ
るためではなく、むしろ、わたしの愛児としてさとすためである。一
五たといあなたがたに、キリストにある養育掛が一万人あったとして
も、父が多くあるのではない。キリスト・イエスにあって、福音によ
りあなたがたを生んだのは、わたしなのである。一六そこで、あなた
がたに勧める。わたしにならう者となりなさい。一七このことのため
に、わたしは主にあって愛する忠実なわたしの子テモテを、あなた
がたの所につかわした。彼は、キリスト・イエスにおけるわたしの
生活のしかたを、わたしが至る所の教会で教えているとおりに、あな
たがたに思い起させてくれるであろう。一八しかしある人々は、わた
しがあなたがたの所に来ることはあるまいとみて、高ぶっていると
いうことである。一九しかし主のみこころであれば、わたしはすぐに
でもあなたがたの所に行って、高ぶっている者たちの言葉ではなく、
その力を見せてもらおう。二〇神の国は言葉ではなく、力である。二
一あなたがたは、どちらを望むのか。わたしがむちをもって、あなた

がたの所に行くことか、それとも、愛と柔和な心とをもって行くこと
であるか。

第五章 一現に聞くところによると、あなたがたの間に不品行な者が
あり、しかもその不品行は、異邦人の間にもないほどのもので、あ
る人がその父の妻と一緒に住んでいるということである。二それだの
に、なお、あなたがたは高ぶっている。むしろ、そんな行いをしてい
る者が、あなたがたの中から除かれねばならないことを思って、悲し
むべきではないか。三しかし、わたし自身としては、からだは離れて
いても、霊では一緒にいて、その場にいる者のように、そんな行いを
した者を、すでにさばいてしまっている。四すなわち、主イエスの名
によって、あなたがたもわたしの霊も共に、わたしたちの主イエスの
権威のもとに集まって、五彼の肉が滅ぼされても、その霊が主のさば
きの日に救われるように、彼をサタンに引き渡してしまったのであ
る。六あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、
少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らない

のか。七新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きな
さい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから。わたしたち
の過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。八ゆえに、
わたしたちは、古いパン種や、また悪意と邪悪とのパン種を用いず
に、パン種のはいっていない純粋で真実なパンをもって、祭をしよう
ではないか。

九わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけないと書
いたが、一〇それは、この世の不品行な者、貪欲な者、略奪をする者、
偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけないと、言ったのでは
ない。もしそうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねば
ならないことになる。一一しかし、わたしが実際に書いたのは、兄弟
と呼ばれる人で、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそ
しる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際をして
はいけない、食事を共にしてもいけない、ということであった。一二
外の人たちをさばくのは、わたしのすることであろうか。あなたが

たのさばくべき者は、内の人たちではないか。外の人たちは、神がさ
ばくのである。一三その悪人を、あなたがたの中から除いてしまいな
さい。

第六章 一あなたがたの中のひとりが、仲間の者と何か争いを起した
場合、それを聖徒に訴えないで、正しくない者に訴え出るようなこと
をするのか。二それとも、聖徒は世をさばくものであることを、あな
たがたは知らないのか。そして、世があなたがたによってさばかれる
べきであるのに、きわめて小さい事件でもさばく力がないのか。三あ
なたがたは知らないのか、わたしたちは御使をさえさばく者である。
ましてこの世の事件などは、いうまでもないではないか。四それだの
に、この世の事件が起ると、教会で軽んじられている人たちを、裁判
の席につかせるのか。五わたしがこう言うのは、あなたがたをはずか
しめるためである。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争い
を仲裁することができるほどの知者は、ひとりもいないのか。六しか
るに、兄弟が兄弟を訴え、しかもそれを不信者の前に持ち出すのか。

七そもそも、互に訴え合うこと自体が、すでにあなたがたの敗北なの
だ。なぜ、むしろ不義を受けないのか。なぜ、むしろだまされていな
いのか。八しかるに、あなたがたは不義を働き、だまし取り、しかも
兄弟に対してそうしているのである。九それとも、正しくない者が神
の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけない。
不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色
をする者、盗む者、一〇貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する
者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。一一あなたがたの
中には、以前はそんな人もいた。しかし、あなたがたは、主イエス・
キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、
きよめられ、義とされたのである。

一二すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのこ
とが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されてい
る。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。一三食物は
腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼす

であろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はか
らだのためである。一四そして、神は主をよみがえらせたが、その力
で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。一五あなたがた
は自分のからだがキリストの肢体であることを、知らないのか。それ
だのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じ
ていけない。一六それとも、遊女につく者はそれと一つのからだにな
ることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」と
あるからである。一七しかし主につく者は、主と一つの霊になるので
ある。一八不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外
にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯す
のである。一九あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から
受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もは
や自分自身のものではないのである。二〇あなたがたは、代価を払っ
て買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光
をあらわしなさい。

第七章一さて、あなたがたが書いてよこした事について答えると、
男子は婦人にふれないがよい。**二**しかし、不品行に陥ることのないた
めに、男子はそれぞれ自分の妻を持ち、婦人もそれぞれ自分の夫を
持つがよい。**三**夫は妻にその分を果し、妻も同様に夫にその分を果す
べきである。**四**妻は自分のからだを自由にすることはできない。それ
ができるのは夫である。夫も同様に自分のからだを自由にすること
はできない。それができるのは妻である。**五**互に拒んではいけない。
ただし、合意の上で祈に専心するために、しばらく相別れ、それから
また一緒になることは、さしつかえない。そうでないと、自制力のな
いのに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑するかも知れない。**六**以上
のことは、譲歩のつもりで言うのであって、命令するのではない。**七**
わたしとしては、みんなの者がわたし自身のようになってほしい。し
かし、ひとりびとり神からそれぞれの賜物をいただいていて、ある人
はこうしており、他の人はそうしている。
八次に、未婚者たちとやもめたちとに言うが、わたしのように、ひ

とりでおれば、それがいちばんよい。九しかし、もし自制することが
できないなら、結婚するがよい。情の燃えるよりは、結婚する方が、
よいからである。一〇更に、結婚している者たちに命じる。命じるの
は、わたしではなく主であるが、妻は夫から別れてはいけない。一一
（しかし、万一別れているなら、結婚しないでいるか、それとも夫と
和解するかしなさい）。また夫も妻と離婚してはならない。一二その
ほかの人々に言う。これを言うのは、主ではなく、わたしである。あ
る兄弟に不信者の妻があり、そして共にいることを喜んでいる場合に
は、離婚してはいけない。一三また、ある婦人の夫が不信者であり、そ
して共にいることを喜んでいる場合には、離婚してはいけない。一四
なぜなら、不信者の夫は妻によってきよめられており、また、不信者
の妻も夫によってきよめられているからである。もしそうでなけれ
ば、あなたがたの子は汚れていることになるが、実際はきよいではな
いか。一五しかし、もし不信者の方が離れて行くのなら、離れるまま
にしておくがよい。兄弟も姉妹も、こうした場合には、束縛されては

いない。神は、あなたがたを平和に暮させるために、召されたのであ
る。一六なぜなら、妻よ、あなたが夫を救いうるかどうか、どうして
わかるか。また、夫よ、あなたも妻を救いうるかどうか、どうしてわ
かるか。
一七ただ、各自は、主から賜わった分に応じ、また神に召されたま
まの状態にしたがって、歩むべきである。これが、すべての教会に
対してわたしの命じるところである。一八召されたとき割礼を受けて
いたら、その跡をなくそうとしないがよい。また、召されたとき割礼
を受けていなかったら、割礼を受けようとしないがよい。一九割礼が
あってもなくても、それは問題ではない。大事なのは、ただ神の戒め
を守ることである。二〇各自は、召されたままの状態にとどまってい
るべきである。二一召されたとき奴隷であっても、それを気にしない
がよい。しかし、もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりな
さい。二二主にあって召された奴隷は、主によって自由人とされた者
であり、また、召された自由人はキリストの奴隷なのである。二三あ

なたがたは、代価を払って買いとられたのだ。人の奴隷となっては
いけない。二四兄弟たちよ。各自は、その召されたままの状態で、神
のみまえにいるべきである。
　二五おとめのことについては、わたしは主の命令を受けてはいない
が、主のあわれみにより信任を受けている者として、意見を述べよう。
二六わたしはこう考える。現在迫っている危機のゆえに、人は現状に
とどまっているがよい。二七もし妻に結ばれているなら、解こうとす
るな。妻に結ばれていないなら、妻を迎えようとするな。二八しかし、
たとい結婚しても、罪を犯すのではない。また、おとめが結婚して
も、罪を犯すのではない。ただ、それらの人々はその身に苦難を受け
るであろう。わたしは、あなたがたを、それからのがれさせたいの
だ。二九兄弟たちよ。わたしの言うことを聞いてほしい。時は縮まっ
ている。今からは妻のある者はないもののように、三〇泣く者は泣か
ないもののように、喜ぶ者は喜ばないもののように、買う者は持たな
いもののように、三一世と交渉のある者は、それに深入りしないよう

にすべきである。なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである。三
二わたしはあなたがたが、思い煩わないようにしていてほしい。未婚
の男子は主のことに心をくばって、どうかして主を喜ばせようとする
が、三三結婚している男子はこの世のことに心をくばって、どうかし
て妻を喜ばせようとして、その心が分れるのである。三四未婚の婦人
とおとめとは、主のことに心をくばって、身も魂もきよくなろうとす
るが、結婚した婦人はこの世のことに心をくばって、どうかして夫を
喜ばせようとする。三五わたしがこう言うのは、あなたがたの利益に
なると思うからであって、あなたがたを束縛するためではない。そ
うではなく、正しい生活を送って、余念なく主に奉仕させたいからで
ある。

三六もしある人が、相手のおとめに対して、情熱をいだくようになっ
た場合、それは適当でないと思いつつも、やむを得なければ、望みど
おりにしてもよい。それは罪を犯すことではない。ふたりは結婚す
るがよい。三七しかし、彼が心の内で堅く決心していて、無理をしな

いで自分の思いを制することができ、その上で、相手のおとめをその
ままにしておこうと、心の中で決めたなら、そうしてもよい。三八だ
から、相手のおとめと結婚することはさしつかえないが、結婚しない
方がもっとよい。三九妻は夫が生きている間は、その夫につながれて
いる。夫が死ねば、望む人と結婚してもさしつかえないが、それは主
にある者とに限る。四〇しかし、わたしの意見では、そのままでいた
なら、もっと幸福である。わたしも神の霊を受けていると思う。
第八章一偶像への供え物について答えると、「わたしたちはみな知識
を持っている」ことは、わかっている。しかし、知識は人を誇らせ、
愛は人の徳を高める。二もし人が、自分は何か知っていると思うな
ら、その人は、知らなければならないほどの事すら、まだ知ってい
ない。三しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているの
である。四さて、偶像への供え物を食べることについては、わたした
ちは、偶像なるものは実際は世に存在しないこと、また、唯一の神の
ほかには神がないことを、知っている。五というのは、たとい神々と

いわれるものが、あるいは天に、あるいは地にあるとしても、そし
て、多くの神、多くの主があるようではあるが、六わたしたちには、
父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て、わ
たしたちもこの神に帰する。また、唯一の主イエス・キリストのみが
いますのである。万物はこの主により、わたしたちもこの主によっ
ている。七しかし、この知識をすべての人が持っているのではない。
ある人々は、偶像についての、これまでの習慣上、偶像への供え物
として、それを食べるが、彼らの良心が、弱いために汚されるので
ある。八食物は、わたしたちを神に導くものではない。食べなくても
損はないし、食べても益にはならない。九しかし、あなたがたのこの
自由が、弱い者たちのつまずきにならないように、気をつけなさい。
一〇なぜなら、ある人が、知識のあるあなたが偶像の宮で食事をして
いるのを見た場合、その人の良心が弱いため、それに「教育されて」、
偶像への供え物を食べるようにならないだろうか。一一するとその弱
い人は、あなたの知識によって滅びることになる。この弱い兄弟の

ためにも、キリストは死なれたのである。一二このようにあなたがた
が、兄弟たちに対して罪を犯し、その弱い良心を痛めるのは、キリス
トに対して罪を犯すことなのである。一三だから、もし食物がわたし
の兄弟をつまずかせるなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは
永久に、断じて肉を食べることはしない。

第九章一わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたした
ちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主にあるわたしの
働きの実ではないか。二わたしは、ほかの人に対しては使徒でないと
しても、あなたがたには使徒である。あなたがたが主にあることは、
わたしの使徒職の印なのである。三わたしの批判者たちに対する弁明
は、これである。四わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。
五わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケパのように、
信者である妻を連れて歩く権利がないのか。六それとも、わたしとバ
ルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。七いったい、
自分で費用を出して軍隊に加わる者があろうか。ぶどう畑を作って

いて、その実を食べない者があろうか。また、羊を飼っていて、そ
の乳を飲まない者があろうか。八わたしは、人間の考えでこう言うの
ではない。律法もまた、そのように言っているではないか。九すなわ
ち、モーセの律法に、「穀物をこなしている牛に、くつこをかけては
ならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだ
ろうか。一〇それとも、もっぱら、わたしたちのために言っておられ
るのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。
すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分
け前をもらう望みをもってこなすのである。一一もしわたしたちが、
あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたが
たから刈りとるのは、行き過ぎだろうか。一二もしほかの人々が、あ
なたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたち
はなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利
用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべ
てのことを忍んでいる。一三あなたがたは、宮仕えをしている人たち

は宮から下がる物を食べ、祭壇に奉仕している人たちは祭壇の供え
物の分け前にあずかることを、知らないのか。一四それと同様に、主
は、福音を宣べ伝えている者たちが福音によって生活すべきことを、
定められたのである。
一五しかしわたしは、これらの権利を一つも利用しなかった。また、
自分がそうしてもらいたいから、このように書くのではない。そうさ
れるよりは、死ぬ方がましである。わたしのこの誇は、何者にも奪い
去られてはならないのだ。一六わたしが福音を宣べ伝えても、それは
誇にはならない。なぜなら、わたしは、そうせずにはおれないからで
ある。もし福音を宣べ伝えないなら、わたしはわざわいである。一七
進んでそれをすれば、報酬を受けるであろう。しかし、進んでしない
としても、それは、わたしにゆだねられた務なのである。一八それで
は、その報酬はなんであるか。福音を宣べ伝えるのにそれを無代価
で提供し、わたしが宣教者として持つ権利を利用しないことである。
一九わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの

人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。二〇ユダヤ
人には、ユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得るためである。律法
の下にある人には、わたし自身は律法の下にはないが、律法の下にあ
る者のようになった。律法の下にある人を得るためである。二一律法
のない人には――わたしは神の律法の外にあるのではなく、キリス
トの律法の中にあるのだが――律法のない人のようになった。律法
のない人を得るためである。二二弱い人には弱い者になった。弱い人
を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになっ
た。なんとかして幾人かを救うためである。二三福音のために、わた
しはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである。
二四あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはす
るが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るよう
に走りなさい。二五しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制
をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ち
ない冠を得るためにそうするのである。二六そこで、わたしは目標の

はっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。
二七すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そ
うしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になる
かも知れない。

第一〇章 一兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない。
わたしたちの先祖はみな雲の下におり、みな海を通り、二みな雲の中、
海の中で、モーセにつくバプテスマを受けた。三また、みな同じ霊の
食物を食べ、四みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについ
てきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかなら
ない。五しかし、彼らの大多数は、神のみこころにかなわなかっ
たので、荒野で滅ぼされてしまった。
六これらの出来事は、わたしたちに対する警告であって、彼らが悪
をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためな
のである。七だから、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者に
なってはならない。すなわち、「民は座して飲み食いをし、また立っ

て踊り戯れた」と書いてある。八また、ある者たちがしたように、わ
たしたちは不品行をしてはならない。不品行をしたため倒された者
が、一日に二万三千人もあった。九また、ある者たちがしたように、
わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺さ
れた。一〇また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはなら
ない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。一一これらの事が
彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれた
のは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。
一二だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよ
い。一三あなたがたの会った試錬で、世の常でないものはない。神は
真実である。あなたがたを耐えられないような試錬に会わせること
はないばかりか、試錬と同時に、それに耐えられるように、のがれる
道も備えて下さるのである。

一四それだから、愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。一五賢明
なあなたがたに訴える。わたしの言うことを、自ら判断してみるが

よい。一六わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあ
ずかることではないか。わたしたちがさくパン、それはキリストの
からだにあずかることではないか。一七パンが一つであるから、わた
したちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一つ
のパンを共にいただくからである。一八肉によるイスラエルを見るが
よい。供え物を食べる人たちは、祭壇にあずかるのではないか。一九
すると、なんと言ったらよいか。偶像にささげる供え物は、何か意味
があるのか。また、偶像は何かほんとうにあるものか。二〇そうでは
ない。人々が供える物は、悪霊ども、すなわち、神ならぬ者に供える
のである。わたしは、あなたがたが悪霊の仲間になることを望まな
い。二一主の杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない。主
の食卓と悪霊どもの食卓とに、同時にあずかることはできない。二二
それとも、わたしたちは主のねたみを起そうとするのか。わたした
ちは、主よりも強いのだろうか。
二三すべてのことは許されている。しかし、すべてのことが益にな

るわけではない。すべてのことは許されている。しかし、すべてのこ
とが人の徳を高めるのではない。二四だれでも、自分の益を求めない
で、ほかの人の益を求めるべきである。二五すべて市場で売られてい
る物は、いちいち良心に問うことをしないで、食べるがよい。二六地
とそれに満ちている物とは、主のものだからである。二七もしあなた
がたが、不信者のだれかに招かれて、そこに行こうと思う場合、自分
の前に出される物はなんでも、いちいち良心に問うことをしないで、
食べるがよい。二八しかし、だれかがあなたがたに、これはささげ物
の肉だと言ったなら、それを知らせてくれた人のために、また良心
のために、食べないがよい。二九良心と言ったのは、自分の良心では
なく、他人の良心のことである。なぜなら、わたしの自由が、どうし
て他人の良心によって左右されることがあろうか。三〇もしわたしが
感謝して食べる場合、その感謝する物について、どうして人のそし
りを受けるわけがあろうか。三一だから、飲むにも食べるにも、また
何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。三二ユダヤ

人にもギリシヤ人にも神の教会にも、つまずきになってはいけない。
三三わたしもまた、何事にもすべての人に喜ばれるように努め、多く
の人が救われるために、自分の益ではなく彼らの益を求めている。

第一一章

一わたしがキリストにならう者であるように、あなたがた
もわたしにならう者になりなさい。
二あなたがたが、何かにつけわたしを覚えていて、あなたがたに伝
えたとおりに言伝えを守っているので、わたしは満足に思う。三しか
し、あなたがたに知っていてもらいたい。すべての男のかしらはキリ
ストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神である。
四祈をしたり預言をしたりする時、かしらに物をかぶる男は、そのか
しらをはずかしめる者である。五祈をしたり預言をしたりする時、か
しらにおおいをかけない女は、そのかしらをはずかしめる者である。
それは、髪をそったのとまったく同じだからである。六もし女がおお
いをかけないなら、髪を切ってしまうがよい。髪を切ったりそったり
するのが、女にとって恥ずべきことであるなら、おおいをかけるべき

である。七男は、神のかたちであり栄光であるから、かしらに物をか
ぶるべきではない。女は、また男の光栄である。八なぜなら、男が女
から出たのではなく、女が男から出たのだからである。九また、男は
女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのである。
一〇それだから、女は、かしらに権威のしるしをかぶるべきである。
それは天使たちのためでもある。一一ただ、主にあっては、男なしに
は女はないし、女なしには男はない。一二それは、女が男から出たよ
うに、男もまた女から生れたからである。そして、すべてのものは神
から出たのである。一三あなたがた自身で判断してみるがよい。女が
おおいをかけずに神に祈るのは、ふさわしいことだろうか。一四自然
そのものが教えているではないか。男に長い髪があれば彼の恥にな
り、一五女に長い髪があれば彼女の光栄になるのである。長い髪はお
おいの代りに女に与えられているものだからである。一六しかし、だ
れかがそれに反対の意見を持っていても、そんな風習はわたしたち
にはなく、神の諸教会にもない。

一七ところで、次のことを命じるについては、あなたがたをほめる
わけにはいかない。というのは、あなたがたの集まりが利益になら
ないで、かえって損失になっているからである。一八まず、あなたが
たが教会に集まる時、お互の間に分争があることを、わたしは耳に
しており、そしていくぶんか、それを信じている。一九たしかに、あ
なたがたの中でほんとうの者が明らかにされるためには、分派もな
ければなるまい。二〇そこで、あなたがたが一緒に集まるとき、主の
晩餐を守ることができないでいる。二一というのは、食事の際、各自
が自分の晩餐をかってに先に食べるので、飢えている人があるかと思
えば、酔っている人がある始末である。二二あなたがたには、飲み食
いをする家がないのか。それとも、神の教会を軽んじ、貧しい人々を
はずかしめるのか。わたしはあなたがたに対して、なんと言おうか。
あなたがたを、ほめようか。この事では、ほめるわけにはいかない。
二三わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたので
ある。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、二四感謝し

てこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わた
しのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。
二五食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わた
しの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、
このように行いなさい」。二六だから、あなたがたは、このパンを食
し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るま
で、主の死を告げ知らせるのである。二七だから、ふさわしくないま
までパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのであ
る。二八だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべ
きである。二九主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その
飲み食いによって自分にさばきを招くからである。三〇あなたがたの
中に、弱い者や病人が大ぜいおり、また眠った者も少なくないのは、
そのためである。三一しかし、自分をよくわきまえておくならば、わ
たしたちはさばかれることはないであろう。三二しかし、さばかれる
とすれば、それは、この世と共に罪に定められないために、主の懲ら

しめを受けることなのである。三三それだから、兄弟たちよ。食事の
ために集まる時には、互に待ち合わせなさい。三四もし空腹であった
ら、さばきを受けに集まることにならないため、家で食べるがよい。
そのほかの事は、わたしが行った時に、定めることにしよう。
第一二章 一兄弟たちよ。霊の賜物については、次のことを知らずに
いてもらいたくない。二あなたがたがまだ異邦人であった時、誘われ
るまま、物の言えない偶像のところに引かれて行ったことは、あなた
がたの承知しているとおりである。三そこで、あなたがたに言ってお
くが、神の霊によって語る者はだれも「イエスはのろわれよ」とは言
わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」
と言うことができない。
四霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。五務は種々あるが、
主は同じである。六働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてす
べてのことをなさる神は、同じである。七各自が御霊の現れを賜わっ
ているのは、全体の益になるためである。八すなわち、ある人には

御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によっ
て知識の言、九またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほか
の人には、一つの御霊によっていやしの賜物、一〇またほかの人には
力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わけ
る力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力
が、与えられている。一一すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の
働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられる
のである。

一二からだが一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべ
ての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの
場合も同様である。一三なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリ
シヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとな
るようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからであ
る。一四実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからで
きている。一五もし足が、わたしは手ではないから、からだに属して

いないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。一六ま
た、もし耳が、わたしは目ではないから、からだに属していないと
言っても、それで、からだに属さないわけではない。一七もしからだ
全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとす
れば、どこでかぐのか。一八そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞ
れ、からだに備えられたのである。一九もし、すべてのものが一つの
肢体なら、どこにからだがあるのか。二〇ところが実際、肢体は多く
あるが、からだは一つなのである。二一目は手にむかって、「おまえ
はいらない」とは言えず、また頭は足にむかって、「おまえはいらな
い」とも言えない。二二そうではなく、むしろ、からだのうちで他よ
りも弱く見える肢体が、かえって必要なのであり、二三からだのうち
で、他よりも見劣りがすると思えるところに、ものを着せていっそ
う見よくする。麗しくない部分はいっそう麗しくするが、二四麗しい
部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よく
して、からだに調和をお与えになったのである。二五それは、からだ

の中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなので
ある。二六もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一
つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。二七あなたがた
はキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である。二八そ
して、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、
第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持
つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた。二九み
んなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか。みんなが教師だろ
うか。みんなが力あるわざを行う者だろうか。三〇みんながいやしの
賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。み
んなが異言を解くのだろうか。三一だが、あなたがたは、更に大いな
る賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれ
た道をあなたがたに示そう。
　第一三章一たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語って
も、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と

同じである。二たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる
奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い
信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。三たとい
また、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだ
を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益で
ある。

四愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は
高ぶらない、誇らない、五不作法をしない、自分の利益を求めない、
いらだたない、恨みをいだかない。六不義を喜ばないで真理を喜ぶ。
七そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐
える。

八愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言
はやみ、知識はすたれるであろう。九なぜなら、わたしたちの知ると
ころは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。一〇全き
ものが来る時には、部分的なものはすたれる。一一わたしたちが幼な

子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼
な子らしく考えていた。しかし、おとなとなった今は、幼な子らしい
ことを捨ててしまった。一二わたしたちは、今は、鏡に映して見るよ
うにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、
見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。し
かしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るで
あろう。一三このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と
愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。
第一四章 一愛を追い求めなさい。また、霊の賜物を、ことに預言す
ることを、熱心に求めなさい。二異言を語る者は、人にむかって語る
のではなく、神にむかって語るのである。それはだれにもわからな
い。彼はただ、霊によって奥義を語っているだけである。三しかし
預言をする者は、人に語ってその徳を高め、彼を励まし、慰めるの
である。四異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は
教会の徳を高める。五わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言

を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高め
るように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の
方がまさっている。
六だから、兄弟たちよ。たといわたしがあなたがたの所に行って
異言を語るとしても、啓示か知識か預言か教かを語らなければ、あな
たがたに、なんの役に立つだろうか。
七また、笛や立琴のような楽器
でも、もしその音に変化がなければ、何を吹いているのか、弾いてい
るのか、どうして知ることができようか。
八また、もしラッパがはっ
きりした音を出さないなら、だれが戦闘の準備をするだろうか。
九そ
れと同様に、もしあなたがたが異言ではっきりしない言葉を語れば、
どうしてその語ることがわかるだろうか。それでは、空にむかって
語っていることになる。
一〇世には多種多様の言葉があるだろうが、
意味のないものは一つもない。
一一もしその言葉の意味がわからない
なら、語っている人にとっては、わたしは異国人であり、語っている
人も、わたしにとっては異国人である。
一二だから、あなたがたも、

霊の賜物を熱心に求めている以上は、教会の徳を高めるために、それ
を豊かにいただくように励むがよい。
一三このようなわけであるから、異言を語る者は、自分でそれを解
くことができるように祈りなさい。一四もしわたしが異言をもって祈
るなら、わたしの霊は祈るが、知性は実を結ばないからである。一五
すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈
ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう。一六そうでないと、
もしあなたが霊で祝福の言葉を唱えても、初心者の席にいる者は、あ
なたの感謝に対して、どうしてアァメンと言えようか。あなたが何
を言っているのか、彼には通じない。一七感謝するのは結構だが、そ
れで、ほかの人の徳を高めることにはならない。一八わたしは、あな
たがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する。
一九しかし教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、ほかの人たち
をも教えるために、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わ
しい。

二〇兄弟たちよ。物の考えかたでは、子供となってはいけない。悪事
については幼な子となるのはよいが、考えかたでは、おとなとなり
なさい。二一律法にこう書いてある、「わたしは、異国の舌と異国の
くちびるとで、この民に語るが、それでも、彼らはわたしに耳を傾け
ない、と主が仰せになる」。二二このように、異言は信者のためでは
なく未信者のためのしるしであるが、預言は未信者のためではなく
信者のためのしるしである。二三もし全教会が一緒に集まって、全員
が異言を語っているところに、初心者か不信者かがはいってきたら、
彼らはあなたがたを気違いだと言うだろう。二四しかし、全員が預言
をしているところに、不信者か初心者がはいってきたら、彼の良心は
みんなの者に責められ、みんなの者にさばかれ、二五その心の秘密が
あばかれ、その結果、ひれ伏して神を拝み、「まことに、神があなた
がたのうちにいます」と告白するに至るであろう。
二六すると、兄弟たちよ。どうしたらよいのか。あなたがたが一緒
に集まる時、各自はさんびを歌い、教をなし、啓示を告げ、異言を語

り、それを解くのであるが、すべては徳を高めるためにすべきであ
る。二七もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、
順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。二八もし解く
者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対しまた神に対し
て語っているべきである。二九預言をする者の場合にも、ふたりか三
人かが語り、ほかの者はそれを吟味すべきである。三〇しかし、席に
いる他の者が啓示を受けた場合には、初めの者は黙るがよい。三一あ
なたがたは、みんなが学びみんなが勧めを受けるために、ひとりず
つ残らず預言をすることができるのだから。三二かつ、預言者の霊は
預言者に服従するものである。三三神は無秩序の神ではなく、平和の
神である。

　聖徒たちのすべての教会で行われているように、三四婦人たちは
教会では黙っていなければならない。彼らは語ることが許されてい
ない。だから、律法も命じているように、服従すべきである。三五も
し何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。教会

で語るのは、婦人にとっては恥ずべきことである。三六それとも、神
の言はあなたがたのところから出たのか。あるいは、あなたがただ
けにきたのか。
三七もしある人が、自分は預言者か霊の人であると思っているなら、
わたしがあなたがたに書いていることは、主の命令だと認めるべきで
ある。三八もしそれを無視する者があれば、その人もまた無視される。
三九わたしの兄弟たちよ。このようなわけだから、預言することを
熱心に求めなさい。また、異言を語ることを妨げてはならない。四〇
しかし、すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行うがよい。

第一五章 一兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あ
なたがたが受けいれ、それによって立ってきたあの福音を、思い起し
てもらいたい。二もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたし
の宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば、この福音によって
救われるのである。三わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝
えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、

聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、四そ
して葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえっ
たこと、五ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。六そのの
ち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠っ
た者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。七そののち、ヤ
コブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、八そして最後に、いわ
ば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。九実際わ
たしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん
小さい者であって、使徒と呼ばれる値うちのない者である。一〇しか
し、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。そし
て、わたしに賜わった神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼
らの中のだれよりも多く働いてきた。しかしそれは、わたし自身で
はなく、わたしと共にあった神の恵みである。一一とにかく、わたし
にせよ彼らにせよ、そのように、わたしたちは宣べ伝えており、その
ように、あなたがたは信じたのである。

一二さて、キリストは死人の中からよみがえったのだと宣べ伝えら
れているのに、あなたがたの中のある者が、死人の復活などはないと
言っているのは、どうしたことか。一三もし死人の復活がないならば、
キリストもよみがえらなかったであろう。一四もしキリストがよみが
えらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがた
の信仰もまたむなしい。一五すると、わたしたちは神にそむく偽証人
にさえなるわけだ。なぜなら、万一死人がよみがえらないとしたら、
わたしたちは神が実際よみがえらせなかったはずのキリストを、よみ
がえらせたと言って、神に反するあかしを立てたことになるからで
ある。一六もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらな
かったであろう。一七もしキリストがよみがえらなかったとすれば、
あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の
中にいることになろう。一八そうだとすると、キリストにあって眠っ
た者たちは、滅んでしまったのである。一九もしわたしたちが、この
世の生活でキリストにあって単なる望みをいだいているだけだとす

れば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。
二〇しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中
からよみがえったのである。二一それは、死がひとりの人によってき
たのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければなら
ない。二二アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、
キリストにあってすべての人が生かされるのである。二三ただ、各自
はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の
来臨に際してキリストに属する者たち、二四それから終末となって、
その時に、キリストはすべての君たち、すべての権威と権力とを打
ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである。二五なぜなら、キリ
ストはあらゆる敵をその足もとに置く時までは、支配を続けること
になっているからである。二六最後の敵として滅ぼされるのが、死で
ある。二七「神は万物を彼の足もとに従わせた」からである。ところ
が、万物を従わせたと言われる時、万物を従わせたかたがそれに含ま
れていないことは、明らかである。二八そして、万物が神に従う時に

は、御子自身もまた、万物を従わせたそのかたに従うであろう。それ
は、神がすべての者にあって、すべてとなられるためである。
二九そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、
なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれ
ば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。三〇また、な
んのために、わたしたちはいつも危険を冒しているのか。三一兄弟た
ちよ。わたしたちの主キリスト・イエスにあって、わたしがあなたが
たにつき持っている誇にかけて言うが、わたしは日々死んでいるの
である。三二もし、わたしが人間の考えによってエペソで獣と戦った
とすれば、それはなんの役に立つのか。もし死人がよみがえらない
のなら、「わたしたちは飲み食いしようではないか。あすもわからぬ
いのちなのだ」。三三まちがってはいけない。
「悪い交わりは、良いならわしをそこなう」。
三四目ざめて身を正し、罪を犯さないようにしなさい。あなたがたの
うちには、神について無知な人々がいる。あなたがたをはずかしめ

るために、わたしはこう言うのだ。
三五しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよ
みがえるのか。どんなからだをして来るのか」。三六おろかな人であ
る。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。
三七また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではな
い。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。三
八ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ
一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。三九すべての肉が、同
じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚
の肉がある。四〇天に属するからだもあれば、地に属するからだもあ
る。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。
四一日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この
星とあの星との間に、栄光の差がある。

四二死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちな
いものによみがえり、四三卑しいものでまかれ、栄光あるものによみ

がえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、四四肉のからだ
でまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるの
だから、霊のからだもあるわけである。四五聖書に「最初の人アダム
は生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後の
アダムは命を与える霊となった。四六最初にあったのは、霊のもので
はなく肉のものであって、その後に霊のものが来るのである。四七第
一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。四八この土に
属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天
に属している人々は等しいのである。四九すなわち、わたしたちは、
土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形
をとるであろう。
五〇兄弟たちよ。わたしはこの事を言っておく。肉と血とは神の国
を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことが
ない。五一ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべて
は、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間

に、一瞬にして変えられる。五二というのは、ラッパが響いて、死人
は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。
五三なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬも
のは必ず死なないものを着ることになるからである。五四この朽ちる
ものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、
聖書に書いてある言葉が成就するのである。

五五「死は勝利にのまれてしまった。
死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。
死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」。

五六死のとげは罪である。罪の力は律法である。五七しかし感謝すべ
きことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わた
したちに勝利を賜わったのである。五八だから、愛する兄弟たちよ。
堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。
主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはないと、あなた
がたは知っているからである。

第一六章一聖徒たちへの献金については、わたしはガラテヤの諸
教会に命じておいたが、あなたがたもそのとおりにしなさい。二一週
の初めの日ごとに、あなたがたはそれぞれ、いくらでも収入に応じて
手もとにたくわえておき、わたしが着いた時になって初めて集める
ことのないようにしなさい。三わたしが到着したら、あなたがたが選
んだ人々に手紙をつけ、あなたがたの贈り物を持たせて、エルサレム
に送り出すことにしよう。四もしわたしも行く方がよければ、一緒に
行くことになろう。五わたしは、マケドニヤを通過してから、あなた
がたのところに行くことになろう。マケドニヤは通過するだけだが、
六あなたがたの所では、たぶん滞在するようになり、あるいは冬を過
ごすかも知れない。そうなれば、わたしがどこへゆくにしても、あな
たがたに送ってもらえるだろう。七わたしは今、あなたがたに旅のつ
いでに会うことは好まない。もし主のお許しがあれば、しばらくあ
なたがたの所に滞在したいと望んでいる。八しかし五旬節までは、エ
ペソに滞在するつもりだ。というのは、有力な働きの門がわたしの

ために大きく開かれているし、九また敵対する者も多いからである。
一〇もしテモテが着いたら、あなたがたの所で不安なしに過ごせる
ようにしてあげてほしい。彼はわたしと同様に、主のご用にあたっ
ているのだから。一一だれも彼を軽んじてはいけない。そして、わた
しの所に来るように、どうか彼を安らかに送り出してほしい。わた
しは彼が兄弟たちと一緒に来るのを待っている。一二兄弟アポロにつ
いては、兄弟たちと一緒にあなたがたの所に行くように、たびたび勧
めてみた。しかし彼には、今行く意志は、全くない。適当な機会があ
れば、行くだろう。

一三目をさましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく、強く
あってほしい。一四いっさいのことを、愛をもって行いなさい。

一五兄弟たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたが知っているよ
うに、ステパナの家はアカヤの初穂であって、彼らは身をもって聖徒
に奉仕してくれた。一六どうか、このような人々と、またすべて彼ら
と共に働き共に労する人々とに、従ってほしい。一七わたしは、ステ

パナとポルトナトとアカイコとがきてくれたのを喜んでいる。彼ら
はあなたがたの足りない所を満たし、一八わたしの心とあなたがたの
心とを、安らかにしてくれた。こうした人々は、重んじなければなら
ない。
一九アジヤの諸教会から、あなたがたによろしく。アクラとプリス
カとその家の教会から、主にあって心からよろしく。二〇すべての
兄弟たちから、よろしく。あなたがたも互に、きよい接吻をもってあ
いさつをかわしなさい。
二一ここでパウロが、手ずからあいさつをしるす。二二もし主を愛
さない者があれば、のろわれよ。マラナ・タ（われらの主よ、きたり
ませ）。二三主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。二四わ
たしの愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがた一同と共にある
ように。

コリント人への第二の手紙

第一章一神の御旨によりキリスト・イエスの使徒となったパウロ
と、兄弟テモテとから、コリントにある神の教会、ならびにアカヤ
全土にいるすべての聖徒たちへ。
二わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安と
が、あなたがたにあるように。
三ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あ
われみ深き父、慰めに満ちたる神。四神は、いかなる患難の中にいる
時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰
めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰
めることができるようにして下さるのである。五それは、キリストの
苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける

慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。六わた
したちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救とのためで
あり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、
その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力
となるのである。七だから、あなたがたに対していだいているわたし
たちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に
苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを
知っているからである。

八兄弟たちよ。わたしたちがアジヤで会った患難を、知らずにいて
もらいたくない。わたしたちは極度に、耐えられないほど圧迫され
て、生きる望みをさえ失ってしまい、九心のうちで死を覚悟し、自分
自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとす
るに至った。一〇神はこのような死の危険から、わたしたちを救い出
して下さった、また救い出して下さるであろう。わたしたちは、神が
今後も救い出して下さることを望んでいる。一一そして、あなたがた

もまた祈をもって、ともどもに、わたしたちを助けてくれるであろ
う。これは多くの人々の願いによりわたしたちに賜わった恵みにつ
いて、多くの人が感謝をささげるようになるためである。
一二さて、わたしたちがこの世で、ことにあなたがたに対し、人間
の知恵によってではなく神の恵みによって、神の神聖と真実とによっ
て行動してきたことは、実にわたしたちの誇であって、良心のあかし
するところである。一三わたしたちが書いていることは、あなたがた
が読んで理解できないことではない。それを完全に理解してくれる
ように、わたしは希望する。一四すでにある程度わたしたちを理解し
てくれているとおり、わたしたちの主イエスの日には、あなたがたが
わたしたちの誇であるように、わたしたちもあなたがたの誇なので
ある。

一五この確信をもって、わたしたちはもう一度恵みを得させたいの
で、まずあなたがたの所に行き、一六それからそちらを通ってマケドニ
ヤにおもむき、そして再びマケドニヤからあなたがたの所に帰り、あ

なたがたの見送りを受けてユダヤに行く計画を立てたのである。一七
この計画を立てたのは、軽率なことであったであろうか。それとも、
自分の計画を肉の思いによって計画したため、わたしの「しかり、し
かり」が同時に「否、否」であったのだろうか。一八神の真実にかけ
て言うが、あなたがたに対するわたしの言葉は、「しかり」と同時に
「否」というようなものではない。一九なぜなら、わたしたち、すな
わち、わたしとシルワノとテモテとが、あなたがたに宣べ伝えた神
の子キリスト・イエスは、「しかり」となると同時に「否」となった
のではない。そうではなく、「しかり」がイエスにおいて実現された
のである。二〇なぜなら、神の約束はことごとく、彼において「しか
り」となったからである。だから、わたしたちは、彼によって「アア
メン」と唱えて、神に栄光を帰するのである。二一あなたがたと共に
わたしたちを、キリストのうちに堅くささえ、油をそそいで下さった
のは、神である。二二神はまた、わたしたちに証印をおし、その保証
として、わたしたちの心に御霊を賜わったのである。

二三わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言うが、わた
しがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに対して寛大であり
たいためである。二四わたしたちは、あなたがたの信仰を支配する者
ではなく、あなたがたの喜びのために共に働いている者にすぎない。
あなたがたは、信仰に堅く立っているからである。
第二章一そこでわたしは、あなたがたの所に再び悲しみをもって行
くことはすまいと、決心したのである。二もしあなたがたを悲しませ
るとすれば、わたしが悲しませているその人以外に、だれがわたし
を喜ばせてくれるのか。三このような事を書いたのは、わたしが行く
時、わたしを喜ばせてくれるはずの人々から、悲しい思いをさせら
れたくないためである。わたし自身の喜びはあなたがた全体の喜び
であることを、あなたがたすべてについて確信しているからである。
四わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもってあなた
がたに書きおくった。それは、あなたがたを悲しませるためではな
く、あなたがたにいだいているわたしの愛

を、知ってもらうためであった。
五しかし、もしだれかが人を悲しませたとすれば、それはわたしを
悲しませたのではなく、控え目に言うが、ある程度、あなたがた一同
を悲しませたのである。六その人にとっては、多数の者から受けたあ
の処罰でもう十分なのだから、七あなたがたはむしろ彼をゆるし、ま
た慰めてやるべきである。そうしないと、その人はますます深い悲
しみに沈むかも知れない。八そこでわたしは、彼に対して愛を示すよ
うに、あなたがたに勧める。九わたしが書きおくったのも、あなたが
たがすべての事について従順であるかどうかを、ためすためにほか
ならなかった。一〇もしあなたがたが、何かのことについて人をゆる
すなら、わたしもまたゆるそう。そして、もしわたしが何かのことで
ゆるしたとすれば、それは、あなたがたのためにキリストのみまえで
ゆるしたのである。一一そうするのは、サタンに欺かれることのない
ためである。わたしたちは、彼の策略を知らないわけではない。
一二さて、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、わたし

のために主の門が開かれたにもかかわらず、一三兄弟テトスに会えな
かったので、わたしは気が気でなく、人々に別れて、マケドニヤに出
かけて行った。一四しかるに、神は感謝すべきかな。神はいつもわた
したちをキリストの凱旋に伴い行き、わたしたちをとおしてキリス
トを知る知識のかおりを、至る所に放って下さるのである。一五わた
したちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキ
リストのかおりである。一六後者にとっては、死から死に至らせるか
おりであり、前者にとっては、いのちからいのちに至らせるかおりで
ある。いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか。一七しか
し、わたしたちは、多くの人のように神の言を売物にせず、真心をこ
めて、神につかわされた者として神のみまえで、キリストにあって語
るのである。

第三章一わたしたちは、またもや、自己推薦をし始めているのだろ
うか。それとも、ある人々のように、あなたがたにあてた、あるいは、
あなたがたからの推薦状が必要なのだろうか。二わたしたちの推薦状

は、あなたがたなのである。それは、わたしたちの心にしるされて
いて、すべての人に知られ、かつ読まれている。三そして、あなたが
たは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、
墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心
の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている。
四こうした確信を、わたしたちはキリストにより神に対していだい
ている。五もちろん、自分自身で事を定める力が自分にある、と言う
のではない。わたしたちのこうした力は、神からきている。六神はわ
たしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。そ
れは、文字に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字は人を殺
し、霊は人を生かす。七もし石に彫りつけた文字による死の務が栄光
のうちに行われ、そのためイスラエルの子らは、モーセの顔の消え去
るべき栄光のゆえに、その顔を見つめることができなかったとすれ
ば、八まして霊の務は、はるかに栄光あるものではなかろうか。九も
し罪を宣告する務が栄光あるものだとすれば、義を宣告する務は、は

るかに栄光に満ちたものである。一〇そして、すでに栄光を受けたも
のも、この場合、はるかにまさった栄光のまえに、その栄光を失った
のである。一一もし消え去るべきものが栄光をもって現れたのなら、
まして永存すべきものは、もっと栄光のあるべきものである。
一二こうした望みをいだいているので、わたしたちは思いきって
大胆に語り、一三そしてモーセが、消え去っていくものの最後をイス
ラエルの子らに見られまいとして、顔におおいをかけたようなことは
しない。一四実際、彼らの思いは鈍くなっていた。今日に至るまで、
彼らが古い契約を朗読する場合、その同じおおいが取り去られない
ままで残っている。それは、キリストにあってはじめて取り除かれる
のである。一五今日に至るもなお、モーセの書が朗読されるたびに、
おおいが彼らの心にかかっている。一六しかし主に向く時には、その
おおいは取り除かれる。一七主は霊である。そして、主の霊のあると
ころには、自由がある。一八わたしたちはみな、顔おおいなしに、主
の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変

えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。
第四章一このようにわたしたちは、あわれみを受けてこの務につ
いているのだから、落胆せずに、二恥ずべき隠れたことを捨て去り、
悪巧みによって歩かず、神の言を曲げず、真理を明らかにし、神のみ
まえに、すべての人の良心に自分を推薦するのである。三もしわたし
たちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれ
ているのである。四彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いを
くらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見え
なくしているのである。五しかし、わたしたちは自分自身を宣べ伝え
るのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。わたしたち
自身は、ただイエスのために働くあなたがたの僕にすぎない。六「や
みの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝
く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して
下さったのである。
七しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測

り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでない
ことが、あらわれるためである。八わたしたちは、四方から患難を受
けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。九迫害に会っても
見捨てられない。倒されても滅びない。一〇いつもイエスの死をこの
身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるた
めである。一一わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死
に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの
死ぬべき肉体に現れるためである。一二こうして、死はわたしたちの
うちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである。一三「わた
しは信じた。それゆえに語った」としるしてあるとおり、それと同じ
信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに
語るのである。一四それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わた
したちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみ
まえに立たせて下さることを、知っているからである。一五すべての
ことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加

わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。
一六だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる
人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。一七なぜなら、
このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばか
りにわたしたちに得させるからである。一八わたしたちは、見えるも
のにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であ
り、見えないものは永遠につづくのである。

第五章一わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神から
いただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備え
てあることを、わたしたちは知っている。二そして、天から賜わるそ
のすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみも
だえている。三それを着たなら、裸のままではいないことになろう。
四この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえてい
る。それを脱ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うから
であり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうた

めである。五わたしたちを、この事にかなう者にして下さったのは、
神である。そして、神はその保証として御霊をわたしたちに賜わっ
たのである。六だから、わたしたちはいつも心強い。そして、肉体を
宿としている間は主から離れていることを、よく知っている。七わた
したちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているので
ある。八それで、わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れ
て主と共に住むことが、願わしいと思っている。九そういうわけだか
ら、肉体を宿としているにしても、それから離れているにしても、た
だ主に喜ばれる者となるのが、心からの願いである。一〇なぜなら、
わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪
であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならな
いからである。
一一このようにわたしたちは、主の恐るべきことを知っているので、
人々に説き勧める。わたしたちのことは、神のみまえには明らかに
なっている。さらに、あなたがたの良心にも明らかになるようにと

望む。一二わたしたちは、あなたがたに対して、またも自己推薦を
しようとするのではない。ただわたしたちを誇る機会を、あなたが
たに持たせ、心を誇るのではなくうわべだけを誇る人々に答えうる
ようにさせたいのである。一三もしわたしたちが、気が狂っているの
なら、それは神のためであり、気が確かであるのなら、それはあな
たがたのためである。一四なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強
く迫っているからである。わたしたちはこう考えている。ひとりの
人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである。
一五そして、彼がすべての人のために死んだのは、生きている者がも
はや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかた
のために、生きるためである。

一六それだから、わたしたちは今後、だれをも肉によって知ること
はすまい。かつてはキリストを肉によって知っていたとしても、今
はもうそのような知り方をすまい。一七だれでもキリストにあるなら
ば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見

よ、すべてが新しくなったのである。一八しかし、すべてこれらの事
は、神から出ている。神はキリストによって、わたしたちをご自分に
和解させ、かつ和解の務をわたしたちに授けて下さった。一九すなわ
ち、神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任を
これに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだね
られたのである。
二〇神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたし
たちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、
神の和解を受けなさい。二一神はわたしたちの罪のために、罪を知ら
ないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義と
なるためなのである。

第六章一わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに
勧める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。二神はこう言わ
れる、
「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、

救の日にあなたを助けた」。
見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。三この務がそしりを
招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与え
ないようにし、四かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を
人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機
にも、行き詰まりにも、五むち打たれることにも、入獄にも、騒乱に
も、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、六真実と知識と寛容と、慈愛と
聖霊と偽りのない愛と、七真理の言葉と神の力とにより、左右に持っ
ている義の武器により、八ほめられても、そしられても、悪評を受け
ても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたし
たちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、九人に
知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであ
るが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺され
ず、一〇悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようで
あるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物

を持っている。
一一コリントの人々よ。あなたがたに向かってわたしたちの口は開
かれており、わたしたちの心は広くなっている。一二あなたがたは、
わたしたちに心をせばめられていたのではなく、自分で心をせばめ
ていたのだ。一三わたしは子供たちに対するように言うが、どうかあ
なたがたの方でも心を広くして、わたしに応じてほしい。
一四不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となん
の係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。一五キリスト
とベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があ
るか。一六神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、生け
る神の宮である。神がこう仰せになっている、

「わたしは彼らの間に住み、
かつ出入りをするであろう。
そして、わたしは彼らの神となり、
彼らはわたしの民となるであろう」。

一七だから、「彼らの間から出て行き、
彼らと分離せよ、と主は言われる。
そして、汚れたものに触れてはならない。
触れなければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。
一八そしてわたしは、あなたがたの父となり、
あなたがたは、
わたしのむすこ、むすめとなるであろう。
全能の主が、こう言われる」。

第七章一愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えら
れているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神
をおそれて全く清くなろうではないか。
二どうか、わたしたちに心を開いてほしい。わたしたちは、だれに
も不義をしたことがなく、だれをも破滅におとしいれたことがなく、
だれからもだまし取ったことがない。三わたしは、責めるつもりでこ
う言うのではない。前にも言ったように、あなたがたはわたしの心の

うちにいて、わたしたちと生死を共にしているのである。四わたしは
あなたがたを大いに信頼し、大いに誇っている。また、あふれるばか
り慰めを受け、あらゆる患難の中にあって喜びに満ちあふれている。
五さて、マケドニヤに着いたとき、わたしたちの身に少しの休みも
なく、さまざまの患難に会い、外には戦い、内には恐れがあった。六
しかるに、うちしおれている者を慰める神は、テトスの到来によっ
て、わたしたちを慰めて下さった。七ただ彼の到来によるばかりでは
なく、彼があなたがたから受けたその慰めをもって、慰めて下さっ
た。すなわち、あなたがたがわたしを慕っていること、嘆いているこ
と、またわたしに対して熱心であることを知らせてくれたので、わた
しの喜びはいよいよ増し加わったのである。八そこで、たとい、あの
手紙であなたがたを悲しませたとしても、わたしはそれを悔いてい
ない。あの手紙がしばらくの間ではあるが、あなたがたを悲しませ
たのを見て悔いたとしても、九今は喜んでいる。それは、あなたがた
が悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからである。

あなたがたがそのように悲しんだのは、神のみこころに添うたことで
あって、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのである。一〇
神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導
き、この世の悲しみは死をきたらせる。一一見よ、神のみこころに添
うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。
また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたこと
か。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白で
あることを証明したのである。一二だから、わたしがあなたがたに書
きおくったのは、不義をした人のためでも、不義を受けた人のためで
もなく、わたしたちに対するあなたがたの熱情が、神の前にあなたが
たの間で明らかになるためである。一三こういうわけで、わたしたち
は慰められたのである。これらの慰めの上にテトスの喜びが加わっ
て、わたしたちはなおいっそう喜んだ。彼があなたがた一同によっ
て安心させられたからである。一四そして、わたしは彼に対してあな
たがたのことを少しく誇ったが、それはわたしの恥にならないですん

だ。あなたがたにいっさいのことを真実に語ったように、テトスに
対して誇ったことも真実となってきたのである。一五また彼は、あな
たがた一同が従順であって、おそれおののきつつ自分を迎えてくれ
たことを思い出して、ますます心をあなたがたの方に寄せている。一
六わたしは、あなたがたに全く信頼することができて、喜んでいる。

第八章一兄弟たちよ。わたしたちはここで、マケドニヤの諸教会に
与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせよう。二すなわち、彼ら
は、患難のために激しい試錬をうけたが、その満ちあふれる喜びは、
極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て惜しみなく施す富となった
のである。三わたしはあかしするが、彼らは力に応じて、否、力以上
に施しをした。すなわち、自ら進んで、四聖徒たちへの奉仕に加わる
恵みにあずかりたいと、わたしたちに熱心に願い出て、五わたしたち
の希望どおりにしたばかりか、自分自身をまず、神のみこころにし
たがって、主にささげ、また、わたしたちにもささげたのである。六
そこで、この募金をテトスがあなたがたの所で、すでに始めた以上、

またそれを完成するようにと、わたしたちは彼に勧めたのである。七
さて、あなたがたがあらゆる事がらについて富んでいるように、す
なわち、信仰にも言葉にも知識にも、あらゆる熱情にも、また、あな
たがたに対するわたしたちの愛にも富んでいるように、この恵みの
わざにも富んでほしい。八こう言っても、わたしは命令するのではな
い。ただ、他の人たちの熱情によって、あなたがたの愛の純真さを
ためそうとするのである。九あなたがたは、わたしたちの主イエス・
キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、
あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の
貧しさによって富む者になるためである。一〇そこで、わたしは、こ
の恵みのわざについて意見を述べよう。それがあなたがたの益にな
るからである。あなたがたはこの事を、昨年以来、他に先んじて実行
したばかりではなく、それを願っていた。一一だから今、それをやり
とげなさい。あなたがたが心から願っているように、持っていると
ころに応じて、それをやりとげなさい。一二もし心から願ってそうす

るなら、持たないところによらず、持っているところによって、神に
受けいれられるのである。一三それは、ほかの人々に楽をさせて、あ
なたがたに苦労をさせようとするのではなく、持ち物を等しくする
ためである。一四すなわち、今の場合は、あなたがたの余裕があの人
たちの欠乏を補い、後には、彼らの余裕があなたがたの欠乏を補い、
こうして等しくなるようにするのである。一五それは「多く得た者も
余ることがなく、少ししか得なかった者も足りないことはなかった」
と書いてあるとおりである。
一六わたしがあなたがたに対して持っている同じ熱情を、テトスの
心にも与えて下さった神に感謝する。一七彼はわたしの勧めを受けい
れ、そして更に熱心になって、自分から進んであなたがたのところに
行った。一八わたしたちはまた、テトスと一緒に、ひとりの兄弟を送
る。この兄弟が福音宣伝の上で得たほまれは、すべての教会に聞え
ているが、一九そのうえ、彼は、主ご自身の栄光があらわれるため、
また、わたしたちの好意を示すために、骨を折って贈り物を集めて

いるわたしたちの同伴者として、諸教会から選ばれたのである。二〇
そうしたのは、わたしたちが集めているこの寄附金のことについて、
人にかれこれ言われるのを避けるためである。二一わたしたちは、主
のみまえばかりではなく、人の前でも公正であるように、気を配っ
ているのである。二二また、もうひとりの兄弟を彼らと一緒に送る。
わたしたちは、多くの事について彼が熱心であったことを、たびたび
認めた。彼は今、あなたがたを非常に信頼して、ますます熱心になっ
ている。二三テトスについて言えば、彼はわたしの仲間であり、あな
たがたに対するわたしの協力者である。この兄弟たちについて言え
ば、彼らは諸教会の使者、キリストの栄光である。二四だから、あな
たがたの愛と、また、あなたがたについてわたしたちがいだいている
誇とが、真実であることを、諸教会の前で彼らにあかししていただき
たい。

第九章 一聖徒たちに対する援助については、いまさら、あなたがた
に書きおくる必要はない。二わたしは、あなたがたの好意を知ってお

り、そのために、あなたがたのことをマケドニヤの人々に誇って、ア
カヤでは昨年以来、すでに準備をしているのだと言った。そして、あ
なたがたの熱心は、多くの人を奮起させたのである。三わたしが兄弟
たちを送ることにしたのは、あなたがたについてわたしたちの誇っ
たことが、この場合むなしくならないで、わたしが言ったとおり準備
していてもらいたいからである。四そうでないと、万一マケドニヤ人
がわたしと一緒に行って、準備ができていないのを見たら、あなたが
たはもちろん、わたしたちも、かように信じきっていただけに、恥を
かくことになろう。五だから、わたしは兄弟たちを促して、あなたが
たの所へ先に行かせ、以前あなたがたが約束していた贈り物の準備
をさせておくことが必要だと思った。それをしぶりながらではなく、
心をこめて用意していてほしい。

六わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈
り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。七各自は惜
しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとお

りにすべきである。 神は喜んで施す人を愛して下さるのである。 八神
はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべ
てのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかた
なのである。

九「彼は貧しい人たちに散らして与えた。
その義は永遠に続くであろう」

と書いてあるとおりである。 一〇種まく人に種と食べるためのパンと
を備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そ
してあなたがたの義の実を増して下さるのである。 一一こうして、あ
なたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施
しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。
一二なぜなら、この援助の働きは、聖徒たちの欠乏を補えだけではな
く、神に対する多くの感謝によってますます豊かになるからである。
一三すなわち、この援助を行った結果として、あなたがたがキリスト
の福音の告白に対して従順であることや、彼らにも、すべての人に

も、惜しみなく施しをしていることがわかってきて、彼らは神に栄光
を帰し、一四そして、あなたがたに賜わったきわめて豊かな神の恵み
のゆえに、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るのである。一
五言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝する。

第一〇章一さて、「あなたがたの間にいて面と向かってはおとなし
いが、離れていると、気が強くなる」このパウロが、キリストの優し
さ、寛大さをもって、あなたがたに勧める。二わたしたちを肉に従っ
て歩いているかのように思っている人々に対しては、わたしは勇敢
に行動するつもりであるが、あなたがたの所では、どうか、そのよう
な思いきったことをしないですむようでありたい。三わたしたちは、
肉にあって歩いてはいるが、肉に従って戦っているのではない。四わ
たしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞を
も破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論
を破り、五神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこ
わし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ、六そして、

あなたがたが完全に服従した時、すべて不従順な者を処罰しようと、
用意しているのである。
七あなたがたは、うわべの事だけを見ている。もしある人が、キリ
ストに属する者だと自任しているなら、その人はもう一度よく反省
すべきである。その人がキリストに属する者であるように、わたした
ちもそうである。八たとい、あなたがたを倒すためではなく高めるた
めに主からわたしたちに賜わった権威について、わたしがやや誇り
すぎたとしても、恥にはなるまい。九ただ、わたしは、手紙であなた
がたをおどしているのだと、思われたくはない。一〇人は言う、「彼
の手紙は重味があって力強いが、会って見ると外見は弱々しく、話
はつまらない」。一一そういう人は心得ているがよい。わたしたちは、
離れていて書きおくる手紙の言葉どおりに、一緒にいる時でも同じ
ようにふるまうのである。一二わたしたちは、自己推薦をするような
人々と自分を同列においたり比較したりはしない。彼らは仲間同志
で互にはかり合ったり、互に比べ合ったりしているが、知恵のない

しわざである。一三しかし、わたしたちは限度をこえて誇るようなこ
とはしない。むしろ、神が割り当てて下さった地域の限度内で誇る
にすぎない。わたしはその限度にしたがって、あなたがたの所まで
行ったのである。一四わたしたちは、あなたがたの所まで行けない者
であるかのように、むりに手を延ばしているのではない。事実、わ
たしたちが最初にキリストの福音を携えて、あなたがたの所までも
行ったのである。一五わたしたちは限度をこえて、他人の働きを誇る
ようなことはしない。ただ、あなたがたの信仰が成長するにつれて、
わたしたちの働きの範囲があなたがたの中でますます大きくなるこ
とを望んでいる。一六こうして、わたしたちはほかの人の地域ですで
になされていることを誇ることはせずに、あなたがたを越えたさきざ
きにまで、福音を宣べ伝えたい。一七誇る者は主を誇るべきである。
一八自分で自分を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ、確か
な人なのである。

第一一章一わたしが少しばかり愚かなことを言うのを、どうか、忍

んでほしい。もちろん忍んでくれるのだ。二わたしは神の熱情をもっ
て、あなたがたを熱愛している。あなたがたを、きよいおとめとし
て、ただひとりの男子キリストにささげるために、婚約させたので
ある。三ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、
あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失
いはしないかということである。四というのは、もしある人がきて、
わたしたちが宣べ伝えもしなかったような異なるイエスを宣べ伝え、
あるいは、あなたがたが受けたことのない違った霊を受け、あるい
は、受けいれたことのない違った福音を聞く場合に、あなたがたはよ
くもそれを忍んでいる。五事実、わたしは、あの大使徒たちにいささ
かも劣ってはいないと思う。六たとい弁舌はつたなくても、知識はそ
うでない。わたしは、事ごとに、いろいろの場合に、あなたがたに対
してそれを明らかにした。
七それとも、あなたがたを高めるために自分を低くして、神の福音
を価なしにあなたがたに宣べ伝えたことが、罪になるのだろうか。八

わたしは他の諸教会をかすめたと言われながら得た金で、あなたがた
に奉仕し、九あなたがたの所にいて貧乏をした時にも、だれにも負担
をかけたことはなかった。わたしの欠乏は、マケドニヤからきた兄弟
たちが、補ってくれた。こうして、わたしはすべての事につき、あな
たがたに重荷を負わせまいと努めてきたし、今後も努めよう。一〇わ
たしの内にあるキリストの真実にかけて言う、この誇がアカヤ地方
で封じられるようなことは、決してない。一一なぜであるか。わたし
があなたがたを愛していないからか。それは、神がご存じである。
一二しかし、わたしは、現在していることを今後もしていこう。そ
れは、わたしたちと同じように誇りうる立ち場を得ようと機会をね
らっている者どもから、その機会を断ち切ってしまうためである。一
三こういう人々はにせ使徒、人をだます働き人であって、キリストの
使徒に擬装しているにすぎないからである。一四しかし、驚くには及
ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。一五だから、たとい
サタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議

ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなろう。
一六繰り返して言うが、だれも、わたしを愚か者と思わないでほし
い。もしそう思うなら、愚か者あつかいにされてもよいから、わたし
にも、少し誇らせてほしい。一七いま言うことは、主によって言うの
ではなく、愚か者のように、自分の誇とするところを信じきって言う
のである。一八多くの人が肉によって誇っているから、わたしも誇ろ
う。一九あなたがたは賢い人たちなのだから、喜んで愚か者を忍んで
くれるだろう。二〇実際、あなたがたは奴隷にされても、食い倒され
ても、略奪されても、いばられても、顔をたたかれても、それを忍ん
でいる。二一言うのも恥ずかしいことだが、わたしたちは弱すぎたの
だ。もしある人があえて誇るなら、わたしは愚か者になって言うが、
わたしもあえて誇ろう。二二彼らはヘブル人なのか。わたしもそうで
ある。彼らはイスラエル人なのか。わたしもそうである。彼らはア
ブラハムの子孫なのか。わたしもそうである。二三彼らはキリストの
僕なのか。わたしは気が狂ったように言う、わたしは彼ら以上

にそうである。苦労したことはもっと多く、投獄されたこともも っ
と多く、むち打たれたことは、はるかにおびただしく、死に面したこ
ともしばしばあった。二四ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受
けたことが五度、二五ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打
たれたことが一度、難船したことが三度、そして、一昼夜、海の上を
漂ったこともある。二六幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民
の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に
会い、二七労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、
しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった。二八なお
いろいろの事があった外に、日々わたしに迫って来る諸教会の心配
ごとがある。二九だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれ
ようか。だれかが罪を犯しているのに、わたしの心が燃えないでお
れようか。三〇もし誇らねばならないのなら、わたしは自分の弱さを
誇ろう。三一永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わ
たしが偽りを言っていないことを、ご存じである。

三二ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマス
コ人の町を監視したことがあったが、三三その時わたしは窓から町の
城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのがれた。

第一二章 一わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主
のまぼろしと啓示とについて語ろう。二わたしはキリストにあるひと
りの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げ
られた――それが、からだのままであったか、わたしは知らない。か
らだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。三こ
の人が――それが、からだのままであったか、からだを離れてであっ
たか、わたしは知らない。神がご存じである――四パラダイスに引き
上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉
を聞いたのを、わたしは知っている。五わたしはこういう人について
誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇るこ
とをすまい。六もっとも、わたしが誇ろうとすれば、ほんとうの事を
言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控え

よう。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見
たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられるかも知れないか
ら。七そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが
与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの
使なのである。八このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さ
るようにと、三度も主に祈った。九ところが、主が言われた、「わた
しの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに
完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るよう
に、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。一〇だから、わたしはキリ
ストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりと
に甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いから
である。

一一わたしは愚か者となった。あなたがたが、むりにわたしをそう
してしまったのだ。実際は、あなたがたから推薦されるべきであっ
た。というのは、たといわたしは取るに足りない者だとしても、あの

大使徒たちにはなんら劣るところがないからである。一二わたしは、
使徒たるの実を、しるしと奇跡と力あるわざとにより、忍耐をつくし
て、あなたがたの間であらわしてきた。一三いったい、あなたがたが
他の教会よりも劣っている点は何か。ただ、このわたしがあなたが
たに負担をかけなかったことだけではないか。この不義は、どうか、
ゆるしてもらいたい。
一四さて、わたしは今、三度目にあなたがたの所に行く用意をして
いる。しかし、負担はかけないつもりである。わたしの求めているの
は、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身なのだから。いっ
たい、子供は親のために財をたくわえて置く必要はなく、親が子供の
ためにたくわえて置くべきである。一五そこでわたしは、あなたがた
の魂のためには、大いに喜んで費用を使い、また、わたし自身をも使
いつくそう。わたしがあなたがたを愛すればするほど、あなたが
たからますます愛されなくなるのであろうか。一六わたしは、あなた
がたに重荷を負わせなかったとしても、悪がしこくて、あなたがたか

らだまし取ったのだと、人は言う。一七わたしは、あなたがたにつか
わした人たちのうちのだれかをとおして、あなたがたからむさぼり
取っただろうか。一八わたしは、テトスに勧めてそちらに行かせ、ま
た、かの兄弟を同行させた。テトスは、あなたがたからむさぼり取っ
たことがあろうか。わたしたちは、みな同じ心で歩いたではないか。
同じ足並みで歩いたではないか。

一九あなたがたは、わたしたちがあなたがたに対して弁明をしてい
るのだと、今までずっと思ってきたであろう。しかし、わたしたち
は、神のみまえでキリストにあって語っているのである。愛する者
たちよ。これらすべてのことは、あなたがたの徳を高めるためなの
である。二〇わたしは、こんな心配をしている。わたしが行ってみる
と、もしかしたら、あなたがたがわたしの願っているような者ではな
く、わたしも、あなたがたの願っているような者でないことになり
はすまいか。もしかしたら、争い、ねたみ、怒り、党派心、そしり、
ざんげん、高慢、騒乱などがありはすまいか。二一わたしが再びそち

らに行った場合、わたしの神が、あなたがたの前でわたしに恥をかか
せ、その上、多くの人が前に罪を犯していながら、その汚れと不品行
と好色とを悔い改めていないので、わたしを悲しませることになり
はすまいか。

第一三章 一わたしは今、三度目にあなたがたの所に行こうとしてい
る。すべての事がらは、ふたりか三人の証人の証言によって確定す
る。二わたしは、前に罪を犯した者たちやその他のすべての人々に、
二度目に滞在していたとき警告しておいたが、離れている今またあ
らかじめ言っておく。今度行った時には、決して容赦はしない。三な
ぜなら、あなたがたが、キリストのわたしにあって語っておられると
いう証拠を求めているからである。キリストは、あなたがたに対し
て弱くはなく、あなたがたのうちにあって強い。四すなわち、キリス
トは弱さのゆえに十字架につけられたが、神の力によって生きてお
られるのである。このように、わたしたちもキリストにあって弱い
者であるが、あなたがたに対しては、神の力によって、キリストと共

に生きるのである。五あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、
自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリスト
があなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らな
ければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。六しかしわた
しは、自分たちが見捨てられた者ではないことを、知っていてもら
いたい。七わたしたちは、あなたがたがどんな悪をも行わないように
と、神に祈る。それは、自分たちがほんとうの者であることを見せる
ためではなく、たといわたしたちが見捨てられた者のようになって
も、あなたがたに良い行いをしてもらいたいためである。八わたした
ちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力があ
る。九わたしたちは、自分は弱くても、あなたがたが強ければ、それ
を喜ぶ。わたしたちが特に祈るのは、あなたがたが完全に良くなっ
てくれることである。一〇こういうわけで、離れていて以上のような
ことを書いたのは、わたしがあなたがたの所に行ったとき、倒すため
ではなく高めるために主が授けて下さった権威を用いて、きびしい

処置をする必要がないようにしたいためである。
一一最後に、兄弟たちよ。いつも喜びなさい。全き者となりなさい。
互に励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和に過ごしなさ
い。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいて下さるであ
ろう。一二きよい接吻をもって互にあいさつをかわしなさい。聖徒た
ち一同が、あなたがたによろしく。
一三主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。

ガラテヤ人への手紙

第一章
一人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリス
トと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられ
た使徒パウロ、
二ならびにわたしと共にいる兄弟たち一同から、ガラ
テヤの諸教会へ。
三わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安と
が、あなたがたにあるように。
四キリストは、わたしたちの父なる神
の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご
自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである。
五栄光が世々
限りなく神にあるように、アアメン。
六あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの
内へお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくこと

が、わたしには不思議でならない。七それは福音というべきものでは
なく、ただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音
を曲げようとしているだけのことである。八しかし、たといわたした
ちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた
福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわ
るべきである。九わたしたちが前に言っておいたように、今わたしは
重ねて言う。もしある人が、あなたがたの受けいれた福音に反する
ことを宣べ伝えているなら、その人はのろわるべきである。
一〇今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に
喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めて
いるのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わ
たしはキリストの僕ではあるまい。
一一兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言っておく。わたしが宣
べ伝えた福音は人間によるものではない。一二わたしは、それを人間
から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの

啓示によったのである。一三ユダヤ教を信じていたころのわたしの
行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わ
たしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。一四そして、
同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進
し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。
一五ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもっ
てわたしをお召しになったかたが、一六異邦人の間に宣べ伝えさせる
ために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、
血肉に相談もせず、一七また先輩の使徒たちに会うためにエルサレム
にも上らず、アラビヤに出て行った。それから再びダマスコに帰った。

一八その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに
上り、彼のもとに十五日間、滞在した。一九しかし、主の兄弟ヤコブ
以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。二〇ここに書いている
ことは、神のみまえで言うが、決して偽りではない。二一その後、わ
たしはシリヤとキリキヤとの地方に行った。二二しかし、キリストに

あるユダヤの諸教会には、顔を知られていなかった。二三ただ彼らは、
「かつて自分たちを迫害した者が、以前には撲滅しようとしていたそ
の信仰を、今は宣べ伝えている」と聞き、二四わたしのことで、神を
ほめたたえた。

第二章一その後十四年たってから、わたしはバルナバと一緒に、テ
トスをも連れて、再びエルサレムに上った。二そこに上ったのは、啓示
によってである。そして、わたしが異邦人の間に宣べ伝えている福音
を、人々に示し、「重だった人たち」には個人的に示した。それは、わ
たしが現に走っており、またすでに走ってきたことが、むだにならな
いためである。三しかし、わたしが連れていたテトスでさえ、ギリシ
ヤ人であったのに、割礼をしいられなかった。四それは、忍び込んで
きたにせ兄弟らがいたので――彼らが忍び込んできたのは、キリス
ト・イエスにあって持っているわたしたちの自由をねらって、わたし
たちを奴隷にするためであった。五わたしたちは、福音の真理があな
たがたのもとに常にとどまっているように、瞬時も彼らの強要に屈服

しなかった。六そして、かの「重だった人たち」からは——彼らがど
んな人であったにしても、それは、わたしには全く問題ではない。神
は人を分け隔てなさらないのだから——事実、かの「重だった人た
ち」は、わたしに何も加えることをしなかった。七それどころか、彼
らは、ペテロが割礼の者への福音をゆだねられているように、わたし
には無割礼の者への福音がゆだねられていることを認め、八（という
のは、ペテロに働きかけて割礼の者への使徒の務につかせたかたは、
わたしにも働きかけて、異邦人につかわして下さったからである）、
九かつ、わたしに賜わった恵みを知って、柱として重んじられている
ヤコブとケパとヨハネとは、わたしとバルナバとに、交わりの手を差
し伸べた。そこで、わたしたちは異邦人に行き、彼らは割礼の者に行
くことになったのである。一〇ただ一つ、わたしたちが貧しい人々を
かえりみるようにとのことであったが、わたしはもとより、この事の
ためにも大いに努めてきたのである。

一一ところが、ケパがアンテオケにきたとき、彼に非難すべきこと

があったので、わたしは面とむかって彼をなじった。一二というのは、
ヤコブのもとからある人々が来るまでは、彼は異邦人と食を共にし
ていたのに、彼らがきてからは、割礼の者どもを恐れ、しだいに身を
引いて離れて行ったからである。一三そして、ほかのユダヤ人たちも
彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きず
り込まれた。一四彼らが福音の真理に従ってまっすぐに歩いていない
のを見て、わたしは衆人の面前でケパに言った、「あなたは、ユダヤ
人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人の
ように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人のようになる
ことをしいるのか」。
一五わたしたちは生れながらのユダヤ人であって、異邦人なる罪人
ではないが、一六人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、
ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたち
もキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによる
のではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。

なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがない
からである。一七しかし、キリストにあって義とされることを求める
ことによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリス
トは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。一八もしわ
たしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるとすれば、それこ
そ、自分が違反者であることを表明することになる。一九わたしは、
神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリスト
と共に十字架につけられた。二〇生きているのは、もはや、わたしで
はない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しか
し、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたし
のためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生
きているのである。二一わたしは、神の恵みを無にはしない。もし、
義が律法によって得られるとすれば、キリストの死はむだであった
ことになる。

第三章一ああ、物わかりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけら

れたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、
いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか。二わたしは、ただこの
一つの事を、あなたがたに聞いてみたい。あなたがたが御霊を受けた
のは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。三あな
たがたは、そんなに物わかりがわるいのか。御霊で始めたのに、今に
なって肉で仕上げるというのか。四あれほどの大きな経験をしたこと
は、むだであったのか。まさか、むだではあるまい。五すると、あな
たがたに御霊を賜い、力あるわざをあなたがたの間でなされたのは、
律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。

六このように、アブラハムは「神を信じた。それによって、彼は義
と認められた」のである。七だから、信仰による者こそアブラハム
の子であることを、知るべきである。八聖書は、神が異邦人を信仰に
よって義とされることを、あらかじめ知って、アブラハムに、「あなた
によって、すべての国民は祝福されるであろう」との良い知らせを、
予告したのである。九このように、信仰による者は、信仰の人アブラ

ハムと共に、祝福を受けるのである。一〇いったい、律法の行いによ
る者は、皆のろいの下にある。「律法の書に書いてあるいっさいのこ
とを守らず、これを行わない者は、皆のろわれる」と書いてあるから
である。一一そこで、律法によっては、神のみまえに義とされる者は
ひとりもないことが、明らかである。なぜなら、「信仰による義人は
生きる」からである。一二律法は信仰に基いているものではない。か
えって、「律法を行う者は律法によって生きる」のである。一三キリ
ストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法のの
ろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、
すべてのろわれる」と書いてある。一四それは、アブラハムの受けた
祝福が、イエス・キリストにあって異邦人に及ぶためであり、約束さ
れた御霊を、わたしたちが信仰によって受けるためである。
一五兄弟たちよ。世のならわしを例にとって言おう。人間の遺言で
さえ、いったん作成されたら、これを無効にしたり、これに付け加
えたりすることは、だれにもできない。一六さて、約束は、アブラハ

ムと彼の子孫とに対してなされたのである。それは、多数をさして
「子孫たちとに」と言わずに、ひとりをさして「あなたの子孫とに」と
言っている。これは、キリストのことである。
一七わたしの言う意味
は、こうである。神によってあらかじめ立てられた契約が、四百三十
年の後にできた律法によって破棄されて、その約束がむなしくなるよ
うなことはない。
一八もし相続が、律法に基いてなされるとすれば、
もはや約束に基いたものではない。ところが事実、神は約束によっ
て、相続の恵みをアブラハムに賜わったのである。
一九それでは、律法はなんであるか。それは違反を促すため、あと
から加えられたのであって、約束されていた子孫が来るまで存続す
るだけのものであり、かつ、天使たちをとおし、仲介者の手によっ
て制定されたものにすぎない。
二〇仲介者なるものは、一方だけに属
する者ではない。しかし、神はひとりである。
二一では、律法は神の
約束と相いれないものか。断じてそうではない。もし人を生かす力
のある律法が与えられていたとすれば、義はたしかに律法によって

実現されたであろう。二二しかし、約束が、信じる人々にイエス・キ
リストに対する信仰によって与えられるために、聖書はすべての人
を罪の下に閉じ込めたのである。
二三しかし、信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視さ
れており、やがて啓示される信仰の時まで閉じ込められていた。二四
このようにして律法は、信仰によって義とされるために、わたしたち
をキリストに連れて行く養育掛となったのである。二五しかし、いっ
たん信仰が現れた以上、わたしたちは、もはや養育掛のもとにはいな
い。二六あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神
の子なのである。二七キリストに合うバプテスマを受けたあなたがた
は、皆キリストを着たのである。二八もはや、ユダヤ人もギリシヤ人
もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリ
スト・イエスにあって一つだからである。二九もしキリストのもので
あるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人
なのである。

第四章一わたしの言う意味は、こうである。相続人が子供である間
は、全財産の持ち主でありながら、僕となんの差別もなく、二父親の
定めた時期までは、管理人や後見人の監督の下に置かれているのであ
る。三それと同じく、わたしたちも子供であった時には、いわゆるこ
の世のもろもろの霊力の下に、縛られていた者であった。四しかし、
時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れ
させて、おつかわしになった。五それは、律法の下にある者をあがな
い出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。六この
ように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中
に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。七した
がって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、
また神による相続人である。

八神を知らなかった当時、あなたがたは、本来神ならぬ神々の奴隷
になっていた。九しかし、今では神を知っているのに、否、むしろ神
に知られているのに、どうして、あの無力で貧弱な、もろもろの霊力

に逆(ぎゃく)もどりして、またもや、新(あら)たにその奴隷(どれい)になろうとするのか。一
〇あなたがたは、日(ひ)や月(つき)や季節(きせつ)や年(とし)などを守(まも)っている。一一わたしは、
あなたがたのために努力(どりょく)してきたことが、あるいは、むだになったの
ではないかと、あなたがたのことが心配(しんぱい)でならない。
一二兄弟(きょうだい)たちよ。お願(ねが)いする。どうか、わたしのようになってほし
い。わたしも、あなたがたのようになったのだから。あなたがたは、
一度(ど)もわたしに対(たい)して不都合(ふつごう)なことをしたことはない。一三あなたが
たも知(し)っているとおり、最初(さいしょ)わたしがあなたがたに福音(ふくいん)を伝(つた)えたの
は、わたしの肉体(にくたい)が弱(よわ)っていたためであった。一四そして、わたしの
肉体(にくたい)にはあなたがたにとって試錬(しれん)となるものがあったのに、それを
卑(いや)しめもせず、またきらいもせず、かえってわたしを、神(かみ)の使(つかい)かキリ
スト・イエスかでもあるように、迎(むか)えてくれた。一五その時(とき)のあなた
がたの感激(かんげき)は、今(いま)どこにあるのか。はっきり言(い)うが、あなたがたは、
できることなら、自分(じぶん)の目(め)をえぐり出(だ)してでも、わたしにくれたかっ
たのだ。一六それだのに、真理(しんり)を語(かた)ったために、わたしはあなたがた

の敵になったのか。一七彼らがあなたがたに対して熱心なのは、善意
からではない。むしろ、自分らに熱心にならせるために、あなたがた
をわたしから引き離そうとしているのである。一八わたしがあなたが
たの所にいる時だけでなく、いつも、良いことについて熱心に慕わ
れるのは、良いことである。一九ああ、わたしの幼な子たちよ。あな
たがたの内にキリストの形ができるまでは、わたしは、またもや、あ
なたがたのために産みの苦しみをする。二〇できることなら、わたし
は今あなたがたの所にいて、語調を変えて話してみたい。わたしは、
あなたがたのことで、途方にくれている。

二一律法の下にとどまっていたいと思う人たちよ。わたしに答えな
さい。あなたがたは律法の言うところを聞かないのか。二二そのしる
すところによると、アブラハムにふたりの子があったが、ひとりは女
奴隷から、ひとりは自由の女から生れた。二三女奴隷の子は肉によっ
て生れたのであり、自由の女の子は約束によって生れたのであった。
二四さて、この物語は比喩としてみられる。すなわち、この女たちは

二つの契約をさす。そのひとりはシナイ山から出て、奴隷となる者
を産む。ハガルがそれである。二五ハガルといえば、アラビヤではシ
ナイ山のことで、今のエルサレムに当る。なぜなら、それは子たちと
共に、奴隷となっているからである。二六しかし、上なるエルサレム
は、自由の女であって、わたしたちの母をさす。二七すなわち、こう
書いてある、

「喜べ、不妊の女よ。
声をあげて喜べ、産みの苦しみを知らない女よ。
ひとり者となっている女は多くの子を産み、
その数は、夫ある女の子らよりも多い」。

二八兄弟たちよ。あなたがたは、イサクのように、約束の子である。
二九しかし、その当時、肉によって生れた者が、霊によって生れた者を
迫害したように、今でも同様である。三〇しかし、聖書はなんと言っ
ているか。「女奴隷とその子とを追い出せ。女奴隷の子は、自由の女
の子と共に相続をしてはならない」とある。三一だから、兄弟たちよ。

わたしたちは女奴隷の子ではなく、自由の女の子なのである。
第五章一自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して
下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきにつな
がれてはならない。
二見よ、このパウロがあなたがたに言う。もし割礼を受けるなら、
キリストはあなたがたに用のないものになろう。三割礼を受けよう
とするすべての人たちに、もう一度言っておく。そういう人たちは、
律法の全部を行う義務がある。四律法によって義とされようとするあ
なたがたは、キリストから離れてしまっている。恵みから落ちてい
る。五わたしたちは、御霊の助けにより、信仰によって義とされる望
みを強くいだいている。六キリスト・イエスにあっては、割礼があっ
てもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によって働く信仰だけで
ある。
七あなたがたはよく走り続けてきたのに、だれが邪魔をして、真理
にそむかせたのか。八そのような勧誘は、あなたがたを召されたか

たから出たものではない。九少しのパン種でも、粉のかたまり全体を
ふくらませる。一〇あなたがたはいささかもわたしと違った思いをい
だくことはないと、主にあって信頼している。しかし、あなたがた
を動揺させている者は、それがだれであろうと、さばきを受けるで
あろう。一一兄弟たちよ。わたしがもし今でも割礼を宣べ伝えていた
ら、どうして、いまなお迫害されるはずがあろうか。そうしていた
ら、十字架のつまずきは、なくなっているであろう。一二あなたがた
の煽動者どもは、自ら不具になるがよかろう。

一三兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るた
めである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって
互に仕えなさい。一四律法の全体は、「自分を愛するように、あなた
の隣り人を愛せよ」というこの一句に尽きるからである。一五気をつ
けるがよい。もし互にかみ合い、食い合っているなら、あなたがたは
互に滅ぼされてしまうだろう。

一六わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して

肉の欲を満たすことはない。一七なぜなら、肉の欲するところは御霊
に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうし
て、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分で
しようと思うことを、することができないようになる。一八もしあな
たがたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいない。一九肉の働きは
明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、二〇偶像礼拝、まじな
い、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、二一ねたみ、
泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったよう
に、今も前もって言っておく。このようなことを行う者は、神の国を
つぐことがない。二二しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、
慈愛、善意、忠実、二三柔和、自制であって、これらを否定する律法
はない。二四キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と
欲と共に十字架につけてしまったのである。

二五もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によっ
て進もうではないか。二六互にいどみ合い、互にねたみ合って、虚栄

に生きてはならない。
第六章 一兄弟たちよ。もしもある人が罪過に陥っていることがわ
かったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人
を正しなさい。それと同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることが
ありはしないかと、反省しなさい。二互に重荷を負い合いなさい。そ
うすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであろう。三もし
ある人が、事実そうでないのに、自分が何か偉い者であるように思っ
ているとすれば、その人は自分を欺いているのである。四ひとりびと
り、自分の行いを検討してみるがよい。そうすれば、自分だけには誇
ることができても、ほかの人には誇れなくなるであろう。五人はそれ
ぞれ、自分自身の重荷を負うべきである。
六御言を教えてもらう人は、教える人と、すべて良いものを分け合
いなさい。七まちがってはいけない、神は侮られるようなかたでは
ない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。八すなわち、
自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊か

ら永遠のいのちを刈り取るであろう。九わたしたちは、善を行うこと
に、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取
るようになる。一〇だから、機会のあるごとに、だれに対しても、と
くに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか。
一一ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字
で、あなたがたに書いていることを。一二いったい、肉において見え
を飾ろうとする者たちは、キリスト・イエスの十字架のゆえに、迫害
を受けたくないばかりに、あなたがたにしいて割礼を受けさせようと
する。一三事実、割礼のあるもの自身が律法を守らず、ただ、あなた
がたの肉について誇りたいために、割礼を受けさせようとしている
のである。一四しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キ
リストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。
この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこ
の世に対して死んでしまったのである。一五割礼のあるなしは問題で
はなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。一六この

法則（ほうそく）に従（したが）って進（すす）む人々（ひとびと）の上（うえ）に、平和（へいわ）とあわれみとがあるように。ま
た、神（かみ）のイスラエルの上（うえ）にあるように。
一七だれも今後（こんご）は、わたしに煩（わずら）いをかけないでほしい。わたしは、
イエスの焼（や）き印（いん）を身（み）に帯（お）びているのだから。
一八兄弟（きょうだい）たちよ。わたしたちの主（しゅ）イエス・キリストの恵（めぐ）みが、あな
たがたの霊（れい）と共（とも）にあるように、アアメン。

エペソ人への手紙

第一章一神の御旨によるキリスト・イエスの使徒パウロから、エペ
ソにいる、キリスト・イエスにあって忠実な聖徒たちへ。
二わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安と
が、あなたがたにあるように。
三ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神
はキリストにあって、天上で霊のもろもろの祝福をもって、わたし
たちを祝福し、四みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の
造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、五わたした
ちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、
御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さっ
たのである。六これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵

みを、わたしたちがほめたたえるためである。七わたしたちは、御子
にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すな
わち、罪過のゆるしを受けたのである。八神はその恵みをさらに増し
加えて、あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり、九御旨の奥義
を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下
さったのである。一〇それは、時の満ちるに及んで実現されるご計画
にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、
ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのであ
る。一一わたしたちは、御旨の欲するままにすべての事をなさるかた
の目的の下に、キリストにあってあらかじめ定められ、神の民として
選ばれたのである。一二それは、早くからキリストに望みをおいてい
るわたしたちが、神の栄光をほめたたえる者となるためである。一三
あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あな
たがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖霊の
証印をおされたのである。一四この聖霊は、わたしたちが神の国をつ

ぐことの保証であって、やがて神につける者が全くあがなわれ、神の
栄光をほめたたえるに至るためである。
一五こういうわけで、わたしも、主イエスに対するあなたがたの信仰
と、すべての聖徒に対する愛とを耳にし、一六わたしの祈のたびごと
にあなたがたを覚えて、絶えずあなたがたのために感謝している。一
七どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵
と啓示との霊をあなたがたに賜わって神を認めさせ、一八あなたがた
の心の目を明らかにして下さるように、そして、あなたがたが神に
召されていだいている望みがどんなものであるか、聖徒たちがつぐ
べき神の国がいかに栄光に富んだものであるか、一九また、神の力強
い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大
なものであるかを、あなたがたが知るに至るように、と祈っている。
二〇神はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみ
がえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、二一彼を、すべての
支配、権威、権力、権勢の上におき、また、この世ばかりでなくきた

るべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれたのであ
る。二二そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上に
かしらとして教会に与えられた。二三この教会はキリストのからだで
あって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかた
が、満ちみちているものに、ほかならない。
第二章一さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死ん
でいた者であって、二かつてはそれらの中で、この世のならわしに従
い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いてい
る霊に従って、歩いていたのである。三また、わたしたちもみな、か
つては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いと
の欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子
であった。四しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下
さったその大きな愛をもって、五罪過によって死んでいたわたしたち
を、キリストと共に生かし――あなたがたの救われたのは、恵みによ
るのである――六キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共

に天上で座につかせて下さったのである。七それは、キリスト・イエ
スにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、
きたるべき世々に示すためであった。八あなたがたの救われたのは、
実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身か
ら出たものではなく、神の賜物である。九決して行いによるのではな
い。それは、だれも誇ることがないためなのである。一〇わたしたち
は神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスに
あって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を
過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。
一一だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によ
れば異邦人であって、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々
からは、無割礼の者と呼ばれており、一二またその当時は、キリスト
を知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に
縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であった。一三ところ
が、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリ

スト・イエスにあって、キリストの血によって近いものとなったので
ある。一四キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つ
にし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、一五
数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、
彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をき
たらせ、一六十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と
和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。一七そ
れから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣
べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。
一八というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中
にあって、父のみもとに近づくことができるからである。一九そこで
あなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ
国籍の者であり、神の家族なのである。二〇またあなたがたは、使徒
たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリ
スト・イエスご自身が隅のかしら石である。二一このキリストにあっ

て、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、二二そし
てあなたがたも、主にあって共に建てられて、霊なる神のすまいとな
るのである。

第三章 一こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イ
エスの囚人となっているこのパウロ――二わたしがあなたがたのため
に神から賜わった恵みの務について、あなたがたはたしかに聞いた
であろう。三すなわち、すでに簡単に書きおくったように、わたしは
啓示によって奥義を知らされたのである。四あなたがたはそれを読め
ば、キリストの奥義をわたしがどう理解しているかがわかる。五この
奥義は、いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに
啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知
らされてはいなかったのである。六それは、異邦人が、福音によりキ
リスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、
共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。
七わたしは、神の力がわたしに働いて、自分に与えられた神の恵みの

賜物により、福音の僕とされたのである。八すなわち、聖徒たちのう
ちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、
キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、九更にまた、万物の造り
主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなもの
であるかを、明らかに示すためである。一〇それは今、天上にあるも
ろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知る
に至るためであって、一一わたしたちの主キリスト・イエスにあって
実現された神の永遠の目的にそうものである。一二この主キリストに
あって、わたしたちは、彼に対する信仰によって、確信をもって大胆
に神に近づくことができるのである。一三だから、あなたがたのため
にわたしが受けている患難を見て、落胆しないでいてもらいたい。わ
たしの患難は、あなたがたの光栄なのである。

一四こういうわけで、わたしはひざをかがめて、一五天上にあり地上
にあって「父」と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。一六
どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあ

なたがたの内なる人を強くして下さるように、一七また、信仰によっ
て、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざ
し愛を基として生活することにより、一八すべての聖徒と共に、その
広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、一九また人知をはる
かに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてを
もって、あなたがたが満たされるように、と祈る。
二〇どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求
めまた思うところのいっさいを、はるかに越えて下さるこ
とができるかたに、二一教会により、また、キリスト・イエスによっ
て、栄光が世々限りなくあるように、アアメン。
第四章 一さて、主にある囚人であるわたしは、あなたがたに勧める。
あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き、二できる限り謙虚
で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互に忍びあい、三平和の
きずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい。
四からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一

つの望みを目ざして召されたのと同様である。五主は一つ、信仰は一
つ、バプテスマは一つ。六すべてのものの上にあり、すべてのものを
貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つで
ある。七しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたし
たちひとりびとりに、恵みが与えられている。八そこで、こう言われ
ている、

「彼は高いところに上った時、
とりこを捕えて引き行き、
人々に賜物を分け与えた」。

九さて「上った」と言う以上、また地下の低い底にも降りてこられた
わけではないか。一〇降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるも
のに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られたかたなのであ
る。一一そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある
人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。一二
それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのから

だを建てさせ、一三わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の
一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリ
ストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。一四こうして、わ
たしたちはもはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々
の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそ
ばれたりすることがなく、一五愛にあって真理を語り、あらゆる点に
おいて成長し、かしらなるキリストに達するのである。一六また、キ
リストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組
み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだ
を成長させ、愛のうちに育てられていくのである。

一七そこで、わたしは主にあっておごそかに勧める。あなたがたは
今後、異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない。一
八彼らの知力は暗くなり、その内なる無知と心の硬化とにより、神の
いのちから遠く離れ、一九自ら無感覚になって、ほしいままにあらゆ
る不潔な行いをして、放縦に身をゆだねている。二〇しかしあなたが

たは、そのようにキリストに学んだのではなかった。二一あなたがた
はたしかに彼に聞き、彼にあって教えられて、イエスにある真理をそ
のまま学んだはずである。二二すなわち、あなたがたは、以前の生活
に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、二三心の深みま
で新たにされて、二四真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られ
た新しき人を着るべきである。

二五こういうわけだから、あなたがたは偽りを捨てて、おのおの隣
り人に対して、真実を語りなさい。わたしたちは、お互に肢体なので
あるから。二六怒ることがあっても、罪を犯してはならない。憤った
ままで、日が暮れるようであってはならない。二七また、悪魔に機会
を与えてはいけない。二八盗んだ者は、今後、盗んではならない。む
しろ、貧しい人々に分け与えるようになるために、自分の手で正当な
働きをしなさい。二九悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出し
てはいけない。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つような言葉
を語って、聞いている者の益になるようにしなさい。三〇神の聖霊を

悲しませてはいけない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊
の証印を受けたのである。三一すべての無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、
そしり、また、いっさいの悪意を捨て去りなさい。三二互に情深く、
あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるし
て下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい。

第五章 一こうして、あなたがたは、神に愛されている子供として、
神にならう者になりなさい。二また愛のうちを歩きなさい。キリスト
もあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、ご自身を、神
へのかんばしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげら
れたのである。三また、不品行といろいろな汚れや貪欲などを、聖徒
にふさわしく、あなたがたの間では、口にすることさえしてはなら
ない。四また、卑しい言葉と愚かな話やみだらな冗談を避けなさい。
これらは、よろしくない事である。それよりは、むしろ感謝をささ
げなさい。五あなたがたは、よく知っておかねばならない。すべて
不品行な者、汚れたことをする者、貪欲な者、すなわち、偶像を礼拝

する者は、キリストと神との国をつぐことができない。六あなたがた
は、だれにも不誠実な言葉でだまされてはいけない。これらのことか
ら、神の怒りは不従順の子らに下るのである。七だから、彼らの仲間
になってはいけない。八あなたがたは、以前はやみであったが、今は
主にあって光となっている。光の子らしく歩きなさい――九光はあら
ゆる善意と正義と真実との実を結ばせるものである――一〇主に喜ば
れるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。一一実を結ばない
やみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。一
二彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事で
ある。一三しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかにな
る。一四明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう
書いてある、

「眠っている者よ、起きなさい。
死人のなかから、立ち上がりなさい。
そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。

一五そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者の
ようにではなく、賢い者のように歩き、一六今の時を生かして用いな
さい。今は悪い時代なのである。一七だから、愚かな者にならないで、
主の御旨がなんであるかを悟りなさい。一八酒に酔ってはいけない。
それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、一九詩とさんび
と霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をう
たいなさい。二〇そしてすべてのことにつき、いつも、わたしたちの
主イエス・キリストの御名によって、父なる神に感謝し、二一キリス
トに対する恐れの心をもって、互に仕え合うべきである。

二二妻たる者よ。主に仕えるように自分の夫に仕えなさい。二三キ
リストが教会のかしらであって、自らは、からだなる教会の救主であ
られるように、夫は妻のかしらである。二四そして教会がキリストに
仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。
二五夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげ
られたように、妻を愛しなさい。二六キリストがそうなさったのは、

水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとす
るためであり、二七また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっ
さいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるため
である。二八それと同じく、夫も自分の妻を、自分のからだのように
愛さねばならない。自分の妻を愛する者は、自分自身を愛するので
ある。二九自分自身を憎んだ者は、いまだかつて、ひとりもいない。
かえって、キリストが教会になさったようにして、おのれを育て養う
のが常である。三〇わたしたちは、キリストのからだの肢体なのであ
る。三一「それゆえに、人は父母を離れてその妻と結ばれ、ふたりの
者は一体となるべきである」。三二この奥義は大きい。それは、キリ
ストと教会とをさしている。三三いずれにしても、あなたがたは、そ
れぞれ、自分の妻を自分自身のように愛しなさい。妻もまた夫を敬
いなさい。

第六章一子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しい
ことである。二「あなたの父と母とを敬え」。これが第一の戒めであっ

て、次の約束がそれについている、三「そうすれば、あなたは幸福に
なり、地上でながく生きながらえるであろう」。四父たる者よ。子供
をおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい。
五僕たる者よ。キリストに従うように、恐れおののきつつ、真心を
こめて、肉による主人に従いなさい。六人にへつらおうとして目先だ
けの勤めをするのでなく、キリストの僕として心から神の御旨を行
い、七人にではなく主に仕えるように、快く仕えなさい。八あなたがた
が知っているとおり、だれでも良いことを行えば、僕であれ、自由人
であれ、それに相当する報いを、それぞれ主から受けるであろう。九
主人たる者よ。僕たちに対して、同様にしなさい。おどすことを、し
てはならない。あなたがたが知っているとおり、彼らとあなたがた
との主は天にいますのであり、かつ人をかたより見ることをなさら
ないのである。

一〇最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりな
さい。一一悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固

めなさい。一二わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、も
ろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の
霊に対する戦いである。一三それだから、悪しき日にあたって、よく
抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につ
けなさい。一四すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当を
胸につけ、一五平和の福音の備えを足にはき、一六その上に、信仰の
たてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消す
ことができるであろう。一七また、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、
すなわち、神の言を取りなさい。一八絶えず祈と願いをし、どんな時
でも御霊によって祈り、そのために目をさましてうむことがなく、す
べての聖徒のために祈りつづけなさい。一九また、わたしが口を開く
ときに語るべき言葉を賜わり、大胆に福音の奥義を明らかに示しう
るように、わたしのためにも祈ってほしい。二〇わたしはこの福音の
ための使節であり、そして鎖につながれているのであるが、つながれ
ていても、語るべき時には大胆に語れるように祈ってほしい。

二一わたしがどういう様子か、何をしているかを、あなたがたに知っ
てもらうために、主にあって忠実に仕えている愛する兄弟テキコが、
いっさいの事を報告するであろう。二二彼をあなたがたのもとに送る
のは、あなたがたがわたしたちの様子を知り、また彼によって心に励
ましを受けるようになるためなのである。
二三父なる神とわたしたちの主イエス・キリストから平安ならびに
信仰に伴う愛が、兄弟たちにあるように。二四変らない真実をもって、
わたしたちの主イエス・キリストを愛するすべての人々に、恵みがあ
るように。

ピリピ人への手紙

第一章一キリスト・イエスの僕たち、パウロとテモテから、ピリピ
にいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、ならびに監督た
ちと執事たちへ。
二わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安と
が、あなたがたにあるように。
三わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、四
あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、五あな
たがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていること
を感謝している。六そして、あなたがたのうちに良いわざを始められ
たかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちが
いないと、確信している。七わたしが、あなたがた一同のために、そ

う考えるのは当然である。それは、わたしが獄に捕われている時に
も、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあ
ずかる者として、わたしの心に深く留めているからである。八わたし
がキリスト・イエスの熱愛をもって、どんなに深くあなたがた一同を
思っていることか、それを証明して下さるかたは神である。九わたし
はこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚に
おいて、いよいよ増し加わり、一〇それによって、あなたがたが、何
が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真
で責められるところのないものとなり、一一イエス・キリストによる
義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように。
一二さて、兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進
に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい。一三
すなわち、わたしが獄に捕われているのはキリストのためであるこ
とが、兵営全体にもそのほかのすべての人々にも明らかになり、一四
そして兄弟たちのうち多くの者は、わたしの入獄によって主にある

確信を得、恐れることなく、ますます勇敢に、神の言を語るように
なった。一五一方では、ねたみや闘争心からキリストを宣べ伝える者
がおり、他方では善意からそうする者がいる。一六後者は、わたしが
福音を弁明するために立てられていることを知り、愛の心でキリス
トを伝え、一七前者は、わたしの入獄の苦しみに更に患難を加えよう
と思って、純真な心からではなく、党派心からそうしている。
一八すると、どうなのか。見えからであるにしても、真実からであ
るにしても、要するに、伝えられているのはキリストなのだから、わ
たしはそれを喜んでいるし、また喜ぶであろう。一九なぜなら、あな
たがたの祈と、イエス・キリストの霊の助けとによって、この事が
ついには、わたしの救となることを知っているからである。二〇そこ
で、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしが、どんなことが
あっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語
ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリスト
があがめられることである。二一わたしにとっては、生きることはキ

リストであり、死ぬことは益である。二二しかし、肉体において生き
ていることが、わたしにとっては実り多い働きになるのだとすれば、
どちらを選んだらよいか、わたしにはわからない。二三わたしは、こ
れら二つのものの間に板ばさみになっている。わたしの願いを言え
ば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方が
はるかに望ましい。二四しかし、肉体にとどまっていることは、あな
たがたのためには、さらに必要である。二五こう確信しているので、
わたしは生きながらえて、あなたがた一同のところにとどまり、あな
たがたの信仰を進ませ、その喜びを得させようと思う。二六そうなれ
ば、わたしが再びあなたがたのところに行くので、あなたがたはわた
しによってキリスト・イエスにある誇を増すことになろう。
二七ただ、あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。
そして、わたしが行ってあなたがたに会うにしても、離れているにし
ても、あなたがたが一つの霊によって堅く立ち、一つ心になって福音
の信仰のために力を合わせて戦い、二八かつ、何事についても、敵対

する者どもにろうばいさせられないでいる様子を、聞かせてほしい。
このことは、彼らには滅びのしるし、あなたがたには救のしるしで
あって、それは神から来るのである。二九あなたがたはキリストのた
めに、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも
賜わっている。三〇あなたがたは、さきにわたしについて見、今また
わたしについて聞いているのと同じ苦闘を、続けているのである。
第二章一そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、
御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、二どう
か同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになっ
て、わたしの喜びを満たしてほしい。三何事も党派心や虚栄からする
のでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者とし
なさい。四おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えな
さい。五キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あ
なたがたの間でも互に生かしなさい。六キリストは、神のかたちであ
られたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、七かえっ

て、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。
その有様は人と異ならず、八おのれを低くして、死に至るまで、しか
も十字架の死に至るまで従順であられた。九それゆえに、神は彼を高
く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。一〇それは、イ
エスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あ
らゆるものがひざをかがめ、一一また、あらゆる舌が、「イエス・キリ
ストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。
一二わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたが
いつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いな
い今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努
めなさい。一三あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、
かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるとこ
ろだからである。一四すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさ
い。一五それは、あなたがたが責められるところのない純真な者とな
り、曲った邪悪な時代のただ中にあって、傷のない神の子となるため

である。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星の
ようにこの世に輝いている。一六このようにして、キリストの日に、
わたしは自分の走ったことがむだでなく、労したこともむだではな
かったと誇ることができる。一七そして、たとい、あなたがたの信仰
の供え物をささげる祭壇に、わたしの血をそそぐことがあっても、わ
たしは喜ぼう。あなたがた一同と共に喜ぼう。一八同じように、あな
たがたも喜びなさい。わたしと共に喜びなさい。

一九さて、わたしは、まもなくテモテをあなたがたのところに送り
たいと、主イエスにあって願っている。それは、あなたがたの様子を
知って、わたしも力づけられたいからである。二〇テモテのような心
で、親身になってあなたがたのことを心配している者は、ほかにひ
とりもない。二一人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・
イエスのことは求めていない。二二しかし、テモテの錬達ぶりは、あ
なたがたの知っているとおりである。すなわち、子が父に対するよ
うにして、わたしと一緒に福音に仕えてきたのである。二三そこで、

この人を、わたしの成行きがわかりしだい、すぐにでも、そちらへ
送りたいと願っている。二四わたし自身もまもなく行けるものと、主
にあって確信している。二五しかし、さしあたり、わたしの同労者で
戦友である兄弟、また、あなたがたの使者としてわたしの窮乏を補っ
てくれたエパフロデトを、あなたがたのもとに送り返すことが必要だ
と思っている。二六彼は、あなたがた一同にしきりに会いたがってい
るからである。その上、自分の病気のことがあなたがたに聞えたの
で、彼は心苦しく思っている。二七彼は実に、ひん死の病気にかかっ
たが、神は彼をあわれんで下さった。彼ばかりではなく、わたしをも
あわれんで下さったので、わたしは悲しみに悲しみを重ねないです
んだのである。二八そこで、大急ぎで彼を送り返す。これで、あなた
がたは彼と再び会って喜び、わたしもまた、心配を和らげることがで
きよう。二九こういうわけだから、大いに喜んで、主にあって彼を迎
えてほしい。また、こうした人々は尊重せねばならない。三〇彼は、
わたしに対してあなたがたが奉仕のできなかった分を補おうとして、

キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになったのである。
第三章一最後に、わたしの兄弟たちよ。主にあって喜びなさい。さ
きに書いたのと同じことをここで繰り返すが、それは、わたしには煩
らわしいことではなく、あなたがたには安全なことになる。
二あの犬どもを警戒しなさい。悪い働き人たちを警戒しなさい。肉
に割礼の傷をつけている人たちを警戒しなさい。三神の霊によって
礼拝をし、キリスト・イエスを誇とし、肉を頼みとしないわたした
ちこそ、割礼の者である。四もとより、肉の頼みなら、わたしにも無
くはない。もし、だれかほかの人が肉を頼みとしていると言うなら、
わたしはそれをもっと頼みとしている。五わたしは八日目に割礼を受
けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル
人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、六熱心の点では教会の
迫害者、律法の義については落ち度のない者である。七しかし、わた
しにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思う
ようになった。八わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエ

スを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思って
いる。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのもの
を、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るた
めであり、九律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰に
よる義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうち
に自分を見いだすようになるためである。一〇すなわち、キリストと
その復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひと
しくなり、一一なんとかして死人のうちからの復活に達したいのであ
る。一二わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になってい
るとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのであ
る。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからで
ある。一三兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。た
だこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向
かってからだを伸ばしつつ、一四目標を目ざして走り、キリスト・イ
エスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているので

ある。一五だから、わたしたちの中で全き人たちは、そのように考え
るべきである。しかし、あなたがたが違った考えを持っているなら、
神はそのことも示して下さるであろう。一六ただ、わたしたちは、達
し得たところに従って進むべきである。
一七兄弟たちよ。どうか、わたしにならう者となってほしい。また、
あなたがたの模範にされているわたしたちにならって歩く人たちに、
目をとめなさい。一八わたしがそう言うのは、キリストの十字架に
敵対して歩いている者が多いからである。わたしは、彼らのことを
しばしばあなたがたに話したが、今また涙を流して語る。一九彼らの
最後は滅びである。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼ら
の思いは地上のことである。二〇しかし、わたしたちの国籍は天にあ
る。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたした
ちは待ち望んでいる。二一彼は、万物をご自身に従わせうる力の働き
によって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同
じかたちに変えて下さるであろう。

第四章一だから、わたしの愛し慕っている兄弟たちよ。わたしの喜
びであり冠である愛する者たちよ。このように、主にあって堅く立
ちなさい。
二わたしはユウオデヤに勧め、またスントケに勧める。どうか、主
にあって一つ思いになってほしい。三ついては、真実な協力者よ。あ
なたにお願いする。このふたりの女を助けてあげなさい。彼らは、「い
のちの書」に名を書きとめられているクレメンスや、その他の同労者
たちと協力して、福音のためにわたしと共に戦ってくれた女たちで
ある。
四あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言う
が、喜びなさい。五あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。
主は近い。六何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝を
もって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し
上げるがよい。七そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのでき
ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスに

あって守るであろう。
八最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、
すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべて
ほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれ
ば、それらのものを心にとめなさい。九あなたがたが、わたしから学
んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさ
い。そうすれば、平和の神が、あなたがたと共にいますであろう。
一〇さて、わたしが主にあって大いに喜んでいるのは、わたしを思
う心が、あなたがたに今またついに芽ばえてきたことである。実は、
あなたがたは、わたしのことを心にかけてくれてはいたが、よい機会
がなかったのである。一一わたしは乏しいから、こう言うのではない。
わたしは、どんな境遇にあっても、足ることを学んだ。一二わたしは
貧に処する道を知っており、富におる道も知っている。わたしは、飽
くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありと
あらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。一三わたしを強くして下

さるかたによって、何事でもすることができる。一四しかし、あなた
がたは、よくもわたしと患難を共にしてくれた。一五ピリピの人たち
よ。あなたがたも知っているとおり、わたしが福音を宣伝し始めたこ
ろ、マケドニヤから出かけて行った時、物のやりとりをしてわたしの
働きに参加した教会は、あなたがたのほかには全く無かった。一六ま
たテサロニケでも、一再ならず、物を送ってわたしの欠乏を補ってく
れた。一七わたしは、贈り物を求めているのではない。わたしの求め
ているのは、あなたがたの勘定をふやしていく果実なのである。一八
わたしは、すべての物を受けてあり余るほどである。エパフロデトか
ら、あなたがたの贈り物をいただいて、飽き足りている。それは、か
んばしいかおりであり、神の喜んで受けて下さる供え物である。一九
わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの
必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう。二〇わ
たしたちの父なる神に、栄光が世々限りなくあるように、アァメン。
二一キリスト・イエスにある聖徒のひとりびとりに、よろしく。わ

たしと一緒にいる兄弟たちから、あなたがたによろしく。二二すべて
の聖徒たちから、特にカイザルの家の者たちから、よろしく。
二三主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるよ
うに。

コロサイ人への手紙

第一章一神の御旨によるキリスト・イエスの使徒パウロと兄弟テモ
テから、二コロサイにいる、キリストにある聖徒たち、忠実な兄弟た
ちへ。
わたしたちの父なる神から、恵みと平安とが、あなたがたにあるよ
うに。
三わたしたちは、いつもあなたがたのために祈り、わたしたちの主
イエス・キリストの父なる神に感謝している。四これは、キリスト・
イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対していだい
ているあなたがたの愛とを、耳にしたからである。五この愛は、あな
たがたのために天にたくわえられている望みに基くものであり、そ
の望みについては、あなたがたはすでに、あなたがたのところまで伝

えられた福音の真理の言葉によって聞いている。六そして、この福音
は、世界中いたる所でそうであるように、あなたがたのところでも、
これを聞いて神の恵みを知ったとき以来、実を結んで成長している
のである。七あなたがたはこの福音を、わたしたちと同じ僕である、
愛するエペフラスから学んだのであった。彼はあなたがたのための
キリストの忠実な奉仕者であって、八あなたがたが御霊によっていだ
いている愛を、わたしたちに知らせてくれたのである。
九そういうわけで、これらの事を耳にして以来、わたしたちも絶え
ずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる
霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り、一〇主のみこ
ころにかなった生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行っ
て実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。
一一更にまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがって
賜わるすべての力によって強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍び、一
二光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下

さった父なる神に、感謝することである。一三神は、わたしたちをや
みの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。
一四わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆる
しを受けているのである。
一五御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたもの
に先だって生れたかたである。一六万物は、天にあるものも地にある
ものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、み
な御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子
によって造られ、御子のために造られたのである。一七彼は万物より
も先にあり、万物は彼にあって成り立っている。一八そして自らは、
そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死人の中
から最初に生れたかたである。それは、ご自身がすべてのことにお
いて第一の者となるためである。一九神は、御旨によって、御子のう
ちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、二〇そして、その十字架の血に
よって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるもの

を、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。
二一あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で
神に敵対していた。二二しかし今では、御子はその肉のからだにより、
その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖な
る、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて
下さったのである。二三ただし、あなたがたは、ゆるぐことがなく、
しっかりと信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望みから
移り行くことのないようにすべきである。この福音は、天の下にあ
るすべての造られたものに対して宣べ伝えられたものであって、そ
れにこのパウロが奉仕しているのである。
二四今わたしは、あなたがたのための苦難を喜んで受けており、キ
リストのからだなる教会のために、キリストの苦しみのなお足りな
いところを、わたしの肉体をもって補っている。二五わたしは、神の
言を告げひろめる務を、あなたがたのために神から与えられている
が、そのために教会に奉仕する者になっているのである。二六その言

の奥義は、代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒
たちに明らかにされたのである。二七神は彼らに、異邦人の受くべき
この奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされ
たのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであ
り、栄光の望みである。二八わたしたちはこのキリストを宣べ伝え、
知恵をつくしてすべての人を訓戒し、また、すべての人を教えてい
る。それは、彼らがキリストにあって全き者として立つようになる
ためである。二九わたしはこのために、わたしのうちに力強く働いて
おられるかたの力により、苦闘しながら努力しているのである。

第二章一わたしが、あなたがたとラオデキヤにいる人たちのため、
また、直接にはまだ会ったことのない人々のために、どんなに苦闘
しているか、わかってもらいたい。二それは彼らが、心を励まされ、
愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義
なるキリストを知るに至るためである。三キリストのうちには、知恵
と知識との宝が、いっさい隠されている。四わたしがこう言うのは、

あなたがたが、だれにも巧みな言葉で迷わされることのないためで
ある。五たとい、わたしは肉体においては離れていても、霊において
はあなたがたと一緒にいて、あなたがたの秩序正しい様子とキリス
トに対するあなたがたの強固な信仰とを見て、喜んでいる。
六このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだ
から、彼にあって歩きなさい。七また、彼に根ざし、彼にあって建て
られ、そして教えられたように、信仰が確立されて、あふれるばかり
感謝しなさい。

八あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされ
ないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろ
もろの霊力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。九キリストに
こそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿って
おり、一〇そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされ
ているのである。彼はすべての支配と権威とのかしらであり、一一あ
なたがたはまた、彼にあって、手によらない割礼、すなわち、キリス

トの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てたのである。一二あなたが
たはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中から
よみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえら
されたのである。一三あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の
割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリス
トと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。一
四神は、わたしたちを責めて不利におとしいれる証書を、その規定も
ろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた。一
五そして、もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあっ
て凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。
一六だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や
新月や安息日などについて、だれにも批評されてはならない。一七こ
れらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある。
一八あなたがたは、わざとらしい謙そんと天使礼拝とにおぼれている
人々から、いろいろと悪評されてはならない。彼らは幻を見たこと

を重んじ、肉の思いによっていたずらに誇るだけで、一九キリストな
るかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、か
らだ全体は、節と節、筋と筋とによって強められ結び合わされ、神に
育てられて成長していくのである。
二〇もしあなたがたが、キリストと共に死んで世のもろもろの霊力
から離れたのなら、なぜ、なおこの世に生きているもののように、二
一「さわるな、味わうな、触れるな」などという規定に縛られている
のか。二二これらは皆、使えば尽きてしまうもの、人間の規定や教に
よっているものである。二三これらのことは、ひとりよがりの礼拝と
わざとらしい謙そんと、からだの苦行とをともなうので、知恵のある
しわざらしく見えるが、実は、ほしいままな肉欲を防ぐのに、なんの
役にも立つものではない。

第三章一このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされ
たのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の
右に座しておられるのである。二あなたがたは上にあるものを思うべ

きであって、地上のものに心を引かれてはならない。三あなたがたは
すでに死んだものであって、あなたがたのいのちは、キリストと共に
神のうちに隠されているのである。四わたしたちのいのちなるキリス
トが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れ
るであろう。
五だから、地上の肢体、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪欲、また
貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。六これ
らのことのために、神の怒りが下るのである。七あなたがたも、以前
これらのうちに日を過ごしていた時には、これらのことをして歩い
ていた。八しかし今は、これらいっさいのことを捨て、怒り、憤り、
悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を、捨ててしまいなさい。九
互にうそを言ってはならない。あなたがたは、古き人をその行いと
一緒に脱ぎ捨て、一〇造り主のかたちに従って新しくされ、真の知識
に至る新しき人を着たのである。一一そこには、もはやギリシヤ人と
ユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隷、自由人の

差別はない。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいま
すのである。
一二だから、あなたがたは、神に選ばれた者、聖なる、愛されてい
る者であるから、あわれみの心、慈愛、謙そん、柔和、寛容を身に着
けなさい。一三互に忍びあい、もし互に責むべきことがあれば、ゆる
し合いなさい。主もあなたがたをゆるして下さったのだから、その
ように、あなたがたもゆるし合いなさい。一四これらいっさいのもの
の上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。一五
キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。あ
なたがたが召されて一体となったのは、このためでもある。いつも
感謝していなさい。一六キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊か
に宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩と
さんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい。
一七そして、あなたのすることはすべて、言葉によるとわざによると
を問わず、いっさい主イエスの名によってなし、彼によって父なる神

に感謝しなさい。
一八妻たる者よ、夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわし
いことである。一九夫たる者よ、妻を愛しなさい。つらくあたっては
いけない。二〇子たる者よ、何事についても両親に従いなさい。これ
が主に喜ばれることである。二一父たる者よ、子供をいらだたせては
いけない。心がいじけるかも知れないから。二二僕たる者よ、何事に
ついても、肉による主人に従いなさい。人にへつらおうとして、目先
だけの勤めをするのではなく、真心をこめて主を恐れつつ、従いな
さい。二三何をするにも、人に対してではなく、主に対してするよう
に、心から働きなさい。二四あなたがたが知っているとおり、あなた
がたは御国をつぐことを、報いとして主から受けるであろう。あな
たがたは、主キリストに仕えているのである。二五不正を行う者は、
自分の行った不正に対して報いを受けるであろう。それには差別扱
いはない。
第四章一主人たる者よ、僕を正しく公平に扱いなさい。あなたがた

にも主が天にいますことが、わかっているのだから。
二目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。三
同時にわたしたちのためにも、神が御言のために門を開いて下さっ
て、わたしたちがキリストの奥義を語れるように（わたしは、実は、
そのために獄につながれているのである）、四また、わたしが語るべ
きことをはっきりと語れるように、祈ってほしい。五今の時を生かし
て用い、そとの人に対して賢く行動しなさい。六いつも、塩で味つけ
られた、やさしい言葉を使いなさい。そうすれば、ひとりびとりに対
してどう答えるべきか、わかるであろう。
七わたしの様子については、主にあって共に僕であり、また忠実に
仕えている愛する兄弟テキコが、あなたがたにいっさいのことを報告
するであろう。八わたしが彼をあなたがたのもとに送るのは、わたし
たちの様子を知り、また彼によって心に励ましを受けるためなので
ある。九あなたがたのひとり、忠実な愛する兄弟オネシモをも、彼と
共に送る。彼らはあなたがたに、こちらのいっさいの事情を知らせ

るであろう。
一〇わたしと一緒に捕われの身となっているアリスタルコと、バル
ナバのいとこマルコとが、あなたがたによろしくと言っている。こ
のマルコについては、もし彼があなたがたのもとに行くなら、迎えて
やるようにとのさしずを、あなたがたはすでに受けているはずであ
る。一一また、ユストと呼ばれているイエスからもよろしく。割礼の
者の中で、この三人だけが神の国のために働く同労者であって、わた
しの慰めとなった者である。一二あなたがたのうちのひとり、キリス
ト・イエスの僕エパフラスから、よろしく。彼はいつも、祈のうちで
あなたがたを覚え、あなたがたが全き人となり、神の御旨をことご
とく確信して立つようにと、熱心に祈っている。一三わたしは、彼が
あなたがたのため、またラオデキヤとヒエラポリスの人々のために、
ひじょうに心労していることを、証言する。一四愛する医者ルカとデ
マスとが、あなたがたによろしく。一五ラオデキヤの兄弟たちに、ま
たヌンパとその家にある教会とに、よろしく。一六この手紙があなた

がたの所で朗読されたら、ラオデキヤの教会でも朗読されるように、
取り計らってほしい。またラオデキヤからまわって来る手紙を、あ
なたがたも朗読してほしい。一七アルキポに、「主にあって受けた務
をよく果すように」と伝えてほしい。
一八パウロ自身が、手ずからこのあいさつを書く。わたしが獄につ
ながれていることを、覚えていてほしい。恵みが、あなたがたと共に
あるように。

テサロニケ人への第一の手紙

第一章一パウロとシルワノとテモテから、父なる神と主イエス・キリストとにあるテサロニケ人たちの教会へ。

恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

二わたしたちは祈の時にあなたがたを覚え、あなたがた一同のことを、いつも神に感謝し、
三あなたがたの信仰の働きと、愛の労苦と、わたしたちの主イエス・キリストに対する望みの忍耐とを、わたしたちの父なる神のみまえに、絶えず思い起している。
四神に愛されている兄弟たちよ。わたしたちは、あなたがたが神に選ばれていることを知っている。
五なぜなら、わたしたちの福音があなたがたに伝えられたとき、それは言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったからである。わたしたちが、あなたがたの間で、みんなのためにどん

なことをしたか、あなたがたの知っているとおりである。六そしてあ
なたがたは、多くの患難の中で、聖霊による喜びをもって御言を受け
いれ、わたしたちと主とにならう者となり、七こうして、マケドニヤ
とアカヤとにいる信者全体の模範になった。八すなわち、主の言葉は
あなたがたから出て、ただマケドニヤとアカヤとに響きわたってい
るばかりではなく、至るところで、神に対するあなたがたの信仰のこ
とが言いひろめられたので、これについては何も述べる必要はない
ほどである。九わたしたちが、どんなにしてあなたがたの所にはいっ
て行ったか、また、あなたがたが、どんなにして偶像を捨てて神に立
ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになり、一〇そして、死人の
中からよみがえった神の御子、すなわち、わたしたちをきたるべき怒
りから救い出して下さるイエスが、天から下ってこられるのを待つ
ようになったかを、彼ら自身が言いひろめているのである。

第二章 一兄弟たちよ。あなたがた自身が知っているとおり、わたし
たちがあなたがたの所にはいって行ったことは、むだではなかった。

二それどころか、あなたがたが知っているように、わたしたちは、先
にピリピで苦しめられ、はずかしめられたにもかかわらず、わたした
ちの神に勇気を与えられて、激しい苦闘のうちに神の福音をあなた
がたに語ったのである。
三いったい、わたしたちの宣教は、迷いや汚
れた心から出たものでもなく、だましごとでもない。
四かえって、わ
たしたちは神の信任を受けて福音を託されたので、人間に喜ばれる
ためではなく、わたしたちの心を見分ける神に喜ばれるように、福音
を語るのである。
五わたしたちは、あなたがたが知っているように、
決してへつらいの言葉を用いたこともなく、口実を設けて、むさぼっ
たこともない。それは、神があかしして下さる。
六また、わたしたち
は、キリストの使徒として重んじられることができたのであるが、あ
なたがたからにもせよ、ほかの人々からにもせよ、人間からの栄誉を
求めることはしなかった。
七むしろ、あなたがたの間で、ちょうど母
がその子供を育てるように、やさしくふるまった。
八このように、あ
なたがたを慕わしく思っていたので、ただ神の福音ばかりではなく、

自分のいのちまでもあなたがたに与えたいと願ったほどに、あなたが
たを愛したのである。九兄弟たちよ。あなたがたはわたしたちの労苦
と努力とを記憶していることであろう。すなわち、あなたがたのだ
れにも負担をかけまいと思って、日夜はたらきながら、あなたがたに
神の福音を宣べ伝えた。一〇あなたがたもあかしし、神もあかしして
下さるように、わたしたちはあなたがた信者の前で、信心深く、正し
く、責められるところがないように、生活をしたのである。一一そし
て、あなたがたも知っているとおり、父がその子に対してするよう
に、あなたがたのひとりびとりに対して、一二御国とその栄光とに召
して下さった神のみこころにかなって歩くようにと、勧め、励まし、
また、さとしたのである。

一三これらのことを考えて、わたしたちがまた絶えず神に感謝して
いるのは、あなたがたがわたしたちの説いた神の言を聞いた時に、そ
れを人間の言葉としてではなく、神の言として――事実そのとおり
であるが――受けいれてくれたことである。そして、この神の言は、

信じるあなたがたのうちに働いているのである。一四兄弟たちよ。あ
なたがたは、ユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会にならう
者となった。すなわち、彼らがユダヤ人たちから苦しめられたと同
じように、あなたがたもまた同国人から苦しめられた。一五ユダヤ人
たちは主イエスと預言者たちとを殺し、わたしたちを迫害し、神を喜
ばせず、すべての人に逆らい、一六わたしたちが異邦人に救の言を語
るのを妨げて、絶えず自分の罪を満たしている。そこで、神の怒りは
最も激しく彼らに臨むに至ったのである。

一七兄弟たちよ。わたしたちは、しばらくの間、あなたがたから引
き離されていたので――心においてではなく、からだだけではある
が――なおさら、あなたがたの顔を見たいと切にこいねがった。一八
だから、わたしたちは、あなたがたの所に行こうとした。ことに、こ
のパウロは、一再ならず行こうとしたのである。それだのに、わたし
たちはサタンに妨げられた。一九実際、わたしたちの主イエスの来臨
にあたって、わたしたちの望みと喜びと誇の冠となるべき者は、あな

たがたを外にして、だれがあるだろうか。二〇あなたがたこそ、実に
わたしたちのほまれであり、喜びである。

第三章 一そこで、わたしたちはこれ以上耐えられなくなって、わた
したちだけがアテネに留まることに定め、二わたしたちの兄弟で、キ
リストの福音における神の同労者テモテをつかわした。それは、あ
なたがたの信仰を強め、三このような患難の中にあって、動揺する者
がひとりもないように励ますためであった。あなたがたの知ってい
るとおり、わたしたちは患難に会うように定められているのである。
四そして、あなたがたの所にいたとき、わたしたちがやがて患難に会
うことをあらかじめ言っておいたが、あなたがたの知っているよう
に、今そのとおりになったのである。五そこで、わたしはこれ以上耐
えられなくなって、もしや「試みる者」があなたがたを試み、そのた
めにわたしたちの労苦がむだになりはしないかと気づかって、あな
たがたの信仰を知るために、彼をつかわしたのである。六ところが今
テモテが、あなたがたの所からわたしたちのもとに帰ってきて、あな

たがたの信仰と愛とについて知らせ、また、あなたがたがいつもわ
たしたちのことを覚え、わたしたちがあなたがたに会いたく思って
いると同じように、わたしたちにしきりに会いたがっているという
吉報をもたらした。七兄弟たちよ。それによって、わたしたちはあら
ゆる苦難と患難との中にありながら、あなたがたの信仰によって慰
められた。八なぜなら、あなたがたが主にあって堅く立ってくれるな
ら、わたしたちはいま生きることになるからである。九ほんとうに、
わたしたちの神のみまえで、あなたがたのことで喜ぶ大きな喜びの
ために、どんな感謝を神にささげたらよいだろうか。一〇わたしたち
は、あなたがたの顔を見、あなたがたの信仰の足りないところを補い
たいと、日夜しきりに願っているのである。
一一どうか、わたしたちの父なる神ご自身と、わたしたちの主イエ
スとが、あなたがたのところへ行く道を、わたしたちに開いて下さる
ように。一二どうか、主が、あなたがた相互の愛とすべての人に対す
る愛とを、わたしたちがあなたがたを愛する愛と同じように、増し加

えて豊かにして下さるように。一三そして、どうか、わたしたちの主
イエスが、そのすべての聖なる者と共にこられる時、神のみまえに、
あなたがたの心を強め、清く、責められるところのない者にして下さ
るように。
第四章一最後に、兄弟たちよ。わたしたちは主イエスにあってあな
たがたに願いかつ勧める。あなたがたが、どのように歩いて神を喜
ばすべきかをわたしたちから学んだように、また、いま歩いている
とおりに、ますます歩き続けなさい。二わたしたちがどういう教を主
イエスによって与えたか、あなたがたはよく知っている。三神のみこ
ころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎
み、四各自、気をつけて自分のからだを清く尊く保ち、五神を知らな
い異邦人のように情欲をほしいままにせず、六また、このようなこと
で兄弟を踏みつけたり、だましたりしてはならない。前にもあなた
がたにきびしく警告しておいたように、主はこれらすべてのことにつ
いて、報いをなさるからである。七神がわたしたちを召されたのは、

汚れたことをするためではなく、清くなるためである。八こういうわ
けであるから、これらの警告を拒む者は、人を拒むのではなく、聖霊
をあなたがたの心に賜わる神を拒むのである。
九兄弟愛については、今さら書きおくる必要はない。あなたがた
は、互に愛し合うように神に直接教えられており、一〇また、事実マ
ケドニヤ全土にいるすべての兄弟に対して、それを実行しているのだ
から。しかし、兄弟たちよ。あなたがたに勧める。ますます、そうし
てほしい。一一そして、あなたがたに命じておいたように、つとめて
落ち着いた生活をし、自分の仕事に身をいれ、手ずから働きなさい。
一二そうすれば、外部の人々に対して品位を保ち、まただれの世話に
もならずに、生活できるであろう。
一三兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいた
くない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむこ
とのないためである。一四わたしたちが信じているように、イエスが
死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている

人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。一五わたした
ちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時まで残
るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであ
ろう。一六すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴
り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリ
ストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、一七それから生
き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、
空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。一八だか
ら、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい。

第五章一兄弟たちよ。その時期と場合とについては、書きおくる
必要はない。二あなたがた自身がよく知っているとおり、主の日は
盗人が夜くるように来る。三人々が平和だ無事だと言っているその
矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅び
が彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してで
きない。四しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだ

から、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはない
であろう。五あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わ
たしたちは、夜の者でもやみの者でもない。六だから、ほかの人々の
ように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう。七眠る者は夜眠
り、酔う者は夜酔うのである。八しかし、わたしたちは昼の者なのだ
から、信仰と愛との胸当を身につけ、救の望みのかぶとをかぶって、
慎んでいよう。九神は、わたしたちを怒りにあわせるように定められ
たのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによって救を得るよ
うに定められたのである。一〇キリストがわたしたちのために死なれ
たのは、さめていても眠っていても、わたしたちが主と共に生きるた
めである。一一だから、あなたがたは、今しているように、互に慰め
合い、相互の徳を高めなさい。

一二兄弟たちよ。わたしたちはお願いする。どうか、あなたがたの
間で労し、主にあってあなたがたを指導し、かつ訓戒している人々を
重んじ、一三彼らの働きを思って、特に愛し敬いなさい。互に平和に

過ごしなさい。一四兄弟たちよ。あなたがたにお勧めする。怠惰な者
を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容
でありなさい。一五だれも悪をもって悪に報いないように心がけ、お
互に、またみんなに対して、いつも善を追い求めなさい。一六いつも
喜んでいなさい。一七絶えず祈りなさい。一八すべての事について、
感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたが
たに求めておられることである。一九御霊を消してはいけない。二〇
預言を軽んじてはならない。二一すべてのものを識別して、良いもの
を守り、二二あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい。

二三どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さる
ように。また、あなたがたの霊と心とからだとを完全に守って、わた
したちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのな
い者にして下さるように。二四あなたがたを召されたかたは真実であ
られるから、このことをして下さるであろう。

二五兄弟たちよ。わたしたちのためにも、祈ってほしい。

二六すべての兄弟たちに、きよい接吻をもって、よろしく伝えてほ
しい。二七わたしは主によって命じる。この手紙を、みんなの兄弟に
読み聞かせなさい。
二八わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたと共に
あるように。

テサロニケ人への第二の手紙

第一章一パウロとシルワノとテモテから、わたしたちの父なる神と
主イエス・キリストとにあるテサロニケ人たちの教会へ。
二父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたが
たにあるように。
三兄弟たちよ。わたしたちは、いつもあなたがたのことを神に感謝
せずにはおられない。またそうするのが当然である。それは、あな
たがたの信仰が大いに成長し、あなたがたひとりびとりの愛が、お互
の間に増し加わっているからである。四そのために、わたしたち自身
は、あなたがたがいま受けているあらゆる迫害と患難とのただ中で示
している忍耐と信仰とにつき、神の諸教会に対してあなたがたを誇
としている。五これは、あなたがたを、神の国にふさわしい者にしよ

うとする神のさばきが正しいことを、証拠だてるものである。その
神の国のために、あなたがたも苦しんでいるのである。六すなわち、
あなたがたを悩ます者には患難をもって報い、悩まされているあな
たがたには、わたしたちと共に、休息をもって報いて下さるのが、神
にとって正しいことだからである。七それは、主イエスが炎の中で力
ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。八その時、主は神
を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない
者たちに報復し、九そして、彼らは主のみ顔とその力の栄光から退け
られて、永遠の滅びに至る刑罰を受けるであろう。一〇その日に、イ
エスは下ってこられ、聖徒たちの中であがめられ、すべて信じる者
たちの間で驚嘆されるであろう――わたしたちのこのあかしは、あ
なたがたによって信じられているのである。一一このためにまた、わ
たしたちは、わたしたちの神があなたがたを召しにかなう者となし、
善に対するあらゆる願いと信仰の働きとを力強く満たして下さるよ
うにと、あなたがたのために絶えず祈っている。一二それは、わたし

たちの神と主イエス・キリストとの恵みによって、わたしたちの主イ
エスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあっ
て栄光を受けるためである。

第二章 一 さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの来臨
と、わたしたちがみもとに集められることとについて、あなたがた
にお願いすることがある。二 霊により、あるいは言葉により、あるい
はわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたと
ふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたり
してはいけない。三 だれがどんな事をしても、それにだまされてはな
らない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現
れるにちがいない。四 彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするも
のに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言す
る。五 わたしがまだあなたがたの所にいた時、これらの事をくり返し
て言ったのを思い出さないのか。六 そして、あなたがたが知っている
とおり、彼が自分に定められた時になってから現れるように、いま

彼を阻止しているものがある。七不法の秘密の力が、すでに働いてい
るのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時ま
でのことである。八その時になると、不法の者が現れる。この者を、
主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろ
う。九不法の者が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆ
る偽りの力と、しるしと、不思議と、一〇また、あらゆる不義の惑わ
しとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるの
は、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報い
である。一一そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送
り、一二こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、
さばくのである。

一三しかし、主に愛されている兄弟たちよ。わたしたちはいつもあ
なたがたのことを、神に感謝せずにはおられない。それは、神があな
たがたを初めから選んで、御霊によるきよめと、真理に対する信仰と
によって、救を得させようとし、一四そのために、わたしたちの福音に

よりあなたがたを召して、わたしたちの主イエス・キリストの栄光に
あずからせて下さるからである。一五そこで、兄弟たちよ。堅く立っ
て、わたしたちの言葉や手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り
続けなさい。
一六どうか、わたしたちの主イエス・キリストご自身と、わたした
ちを愛し、恵みをもって永遠の慰めと確かな望みとを賜わるわたし
たちの父なる神とが、一七あなたがたの心を励まし、あなたがたを強
めて、すべての良いわざを行い、正しい言葉を語る者として下さるよ
うに。
第三章一最後に、兄弟たちよ。わたしたちのために祈ってほしい。
どうか主の言葉が、あなたがたの所と同じように、ここでも早く広ま
り、また、あがめられるように。二また、どうか、わたしたちが不都合
な悪人から救われるように。事実、すべての人が信仰を持っている
わけではない。三しかし、主は真実なかたであるから、あなたがたを
強め、悪しき者から守って下さるであろう。四わたしたちが命じる事

を、あなたがたは現に実行しており、また、実行するであろうと、わ
たしたちは、主にあって確信している。五どうか、主があなたがたの
心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせて下さるように。
六兄弟たちよ。主イエス・キリストの名によってあなたがたに命じ
る。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた言伝えに従わないすべ
ての兄弟たちから、遠ざかりなさい。七わたしたちに、どうならうべ
きであるかは、あなたがた自身が知っているはずである。あなたがた
の所にいた時には、わたしたちは怠惰な生活をしなかったし、八人か
らパンをもらって食べることもしなかった。それどころか、あなたが
たのだれにも負担をかけまいと、日夜、労苦し努力して働き続けた。
九それは、わたしたちにその権利がないからではなく、ただわたした
ちにあなたがたが見習うように、身をもって模範を示したのである。
一〇また、あなたがたの所にいた時に、「働こうとしない者は、食べ
ることもしてはならない」と命じておいた。一一ところが、聞くとこ
ろによると、あなたがたのうちのある者は怠惰な生活を送り、働か

ないで、ただいたずらに動きまわっているとのことである。一二こう
した人々に対しては、静かに働いて自分で得たパンを食べるように、
主イエス・キリストによって命じまた勧める。一三兄弟たちよ。あな
たがたは、たゆまずに良い働きをしなさい。一四もしこの手紙にしる
したわたしたちの言葉に聞き従わない人があれば、そのような人に
は注意をして、交際しないがよい。彼が自ら恥じるようになるため
である。一五しかし、彼を敵のように思わないで、兄弟として訓戒し
なさい。一六どうか、平和の主ご自身が、いついかなる場合にも、あ
なたがたに平和を与えて下さるように。主があなたがた一同と共に
おられるように。

一七ここでパウロ自身が、手ずからあいさつを書く。これは、わた
しのどの手紙にも書く印である。わたしは、このように書く。一八ど
うか、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同と
共にあるように。

テモテへの第一の手紙

第一章 一 わたしたちの救主なる神と、わたしたちの望みであるキリスト・イエスとの任命によるキリスト・イエスの使徒パウロから、二 信仰によるわたしの真実な子テモテへ。
父なる神とわたしたちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とが、あなたにあるように。

三 わたしがマケドニヤに向かって出発する際、頼んでおいたように、あなたはエペソにとどまっていて、ある人々に、違った教を説くことをせず、四 作り話やはてしのない系図などに気をとられることもないように、命じなさい。そのようなことは信仰による神の務を果すものではなく、むしろ論議を引き起させるだけのものである。五 わたしのこの命令は、清い心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て

くる愛を目標としている。六ある人々はこれらのものからそれて空論
に走り、七律法の教師たることを志していながら、自分の言っている
ことも主張していることも、わからないでいる。八わたしたちが知っ
ているとおり、律法なるものは、法に従って用いるなら、良いもので
ある。九すなわち、律法は正しい人のために定められたのではなく、
不法な者と法に服さない者、不信心な者と罪ある者、神聖を汚す者と
俗悪な者、父を殺す者と母を殺す者、人を殺す者、一〇不品行な者、
男色をする者、誘かいする者、偽る者、偽り誓う者、そのほか健全な
教にもとることがあれば、そのために定められていることを認むべ
きである。一一これは、祝福に満ちた神の栄光の福音が示すところで
あって、わたしはこの福音をゆだねられているのである。
一二わたしは、自分を強くして下さったわたしたちの主キリスト・
イエスに感謝する。主はわたしを忠実な者と見て、この務に任じて
下さったのである。一三わたしは以前には、神をそしる者、迫害する
者、不遜な者であった。しかしわたしは、これらの事を、信仰がな

かったとき、無知なためにしたのだから、あわれみをこうむったので
ある。一四その上、わたしたちの主の恵みが、キリスト・イエスにあ
る信仰と愛とに伴い、ますます増し加わってきた。一五「キリスト・
イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」という言葉は、
確実で、そのまま受けいれるに足るものである。わたしは、その罪人
のかしらなのである。一六しかし、わたしがあわれみをこうむったの
は、キリスト・イエスが、まずわたしに対して限りない寛容を示し、
そして、わたしが今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範
となるためである。一七世々の支配者、不朽にして見えざる唯一の神
に、世々限りなく、ほまれと栄光とがあるように、アァメン。
一八わたしの子テモテよ。以前あなたに対してなされた数々の預言
の言葉に従って、この命令を与える。あなたは、これらの言葉に励
まされて、信仰と正しい良心とを保ちながら、りっぱに戦いぬきな
さい。一九ある人々は、正しい良心を捨てたため、信仰の破船に会っ
た。二〇その中に、ヒメナオとアレキサンデルとがいる。わたしは、

神を汚さないことを学ばせるため、このふたりをサタンの手に渡し
たのである。
第二章一そこで、まず第一に勧める。すべての人のために、王たち
と上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、
感謝とをささげなさい。二それはわたしたちが、安らかで静かな一生
を、真に信心深くまた謹厳に過ごすためである。三これは、わたした
ちの救主である神のみまえに良いことであり、また、みこころにかな
うことである。四神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至るこ
とを望んでおられる。五神は唯一であり、神と人との間の仲保者もた
だひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。六彼は、
すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが、それは、定
められた時になされたあかしにほかならない。七そのために、わたし
は立てられて宣教者、使徒となり（わたしは真実を言っている、偽っ
てはいない）、また異邦人に信仰と真理とを教える教師となったので
ある。

八男は、怒ったり争ったりしないで、どんな場所でも、きよい手を
あげて祈ってほしい。九また、女はつつましい身なりをし、適度に慎
み深く身を飾るべきであって、髪を編んだり、金や真珠をつけたり、
高価な着物を着たりしてはいけない。一〇むしろ、良いわざをもって
飾りとすることが、信仰を言いあらわしている女に似つかわしい。一
一女は静かにしていて、万事につけ従順に教を学ぶがよい。一二女が
教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない。むし
ろ、静かにしているべきである。一三なぜなら、アダムがさきに造ら
れ、それからエバが造られたからである。一四またアダムは惑わされ
なかったが、女は惑わされて、あやまちを犯した。一五しかし、女が
慎み深く、信仰と愛と清さとを持ち続けるなら、子を産むことによっ
て救われるであろう。

第三章 一「もし人が監督の職を望むなら、それは良い仕事を願うこ
とである」とは正しい言葉である。二さて、監督は、非難のない人で、
ひとりの妻の夫であり、自らを制し、慎み深く、礼儀正しく、旅人を

もてなし、よく教えることができ、三酒を好まず、乱暴でなく、寛容
であって、人と争わず、金に淡泊で、四自分の家をよく治め、謹厳で
あって、子供たちを従順な者に育てている人でなければならない。五
自分の家を治めることも心得ていない人が、どうして神の教会を預か
ることができようか。六彼はまた、信者になって間もないものであっ
てはならない。そうであると、高慢になって、悪魔と同じ審判を受け
るかも知れない。七さらにまた、教会外の人々にもよく思われている
人でなければならない。そうでないと、そしりを受け、悪魔のわなに
かかるであろう。

八それと同様に、執事も謹厳であって、二枚舌を使わず、大酒を飲
まず、利をむさぼらず、九きよい良心をもって、信仰の奥義を保って
いなければならない。一〇彼らはまず調べられて、不都合なことがな
かったなら、それから執事の職につかすべきである。一一女たちも、
同様に謹厳で、他人をそしらず、自らを制し、すべてのことに忠実で
なければならない。一二執事はひとりの妻の夫であって、子供と自分

の家をよく治める者でなければならない。一三執事の職をよくつと
めた者は、良い地位を得、さらにキリスト・イエスを信じる信仰によ
る、大いなる確信を得るであろう。
一四わたしは、あなたの所にすぐ行きたいと望みながら、この手紙を
書いている。一五万一わたしが遅れる場合には、神の家でいかに生活
すべきかを、あなたに知ってもらいたいからである。神の家という
のは、生ける神の教会のことであって、それは真理の柱、真理の基礎
なのである。一六確かに偉大なのは、この信心の奥義である、

「キリストは肉において現れ、
霊において義とせられ、
御使たちに見られ、
諸国民の間に伝えられ、
世界の中で信じられ、
栄光のうちに天に上げられた」。

第四章一しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、あ

る人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去る
であろう。二それは、良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のし
わざである。三これらの偽り者どもは、結婚を禁じたり、食物を断つ
ことを命じたりする。しかし食物は、信仰があり真理を認める者が、
感謝して受けるようにと、神の造られたものである。四神の造られた
ものは、みな良いものであって、感謝して受けるなら、何ひとつ捨て
るべきものはない。五それらは、神の言と祈とによって、きよめられ
るからである。

六これらのことを兄弟たちに教えるなら、あなたは、信仰の言葉と
あなたの従ってきた良い教の言葉とに養われて、キリスト・イエスの
よい奉仕者になるであろう。七しかし、俗悪で愚にもつかない作り話
は避けなさい。信心のために自分を訓練しなさい。八からだの訓練は
少しは益するところがあるが、信心は、今のいのちと後の世のいのち
とが約束されてあるので、万事に益となる。九これは確実で、そのま
ま受けいれるに足る言葉である。一〇わたしたちは、このために労し

苦しんでいる。それは、すべての人の救主、特に信じる者たちの救主なる生ける神に、望みを置いてきたからである。

一一これらの事を命じ、また教えなさい。一二あなたは、年が若いために人に軽んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい。一三わたしがそちらに行く時まで、聖書を朗読することと、勧めをすることと、教えることとに心を用いなさい。一四長老の按手を受けた時、預言によってあなたに与えられて内に持っている恵みの賜物を、軽視してはならない。一五すべての事にあなたの進歩があらわれるため、これらの事を実行し、それを励みなさい。一六自分のことと教のこととに気をつけ、それらを常に努めなさい。そうすれば、あなたは、自分自身とあなたの教を聞く者たちとを、救うことになる。

第五章 一老人をとがめてはいけない。むしろ父親に対するように、話してあげなさい。若い男には兄弟に対するように、二年とった女には母親に対するように、若い女には、真に純潔な思いをもって、姉妹

に対するように、勧告しなさい。

三やもめについては、真にたよりのないやもめたちを、よくしてあ
げなさい。四やもめに子か孫かがある場合には、これらの者に、まず
自分の家で孝養をつくし、親の恩に報いることを学ばせるべきであ
る。それが、神のみこころにかなうことなのである。五真にたよりの
ない、ひとり暮しのやもめは、望みを神において、日夜、たえず願い
と祈とに専心するが、六これに反して、みだらな生活をしているやも
めは、生けるしかばねにすぎない。七これらのことを命じて、彼女た
ちを非難のない者としなさい。八もしある人が、その親族を、ことに
自分の家族をかえりみない場合には、その信仰を捨てたことになるの
であって、不信者以上にわるい。九やもめとして登録さるべき者は、
六十歳以下のものではなくて、ひとりの夫の妻であった者、一〇また
子女をよく養育し、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人
を助け、種々の善行に努めるなど、そのよいわざでひろく認められ
ている者でなければならない。一一若いやもめは除外すべきである。

彼女たちがキリストにそむいて気ままになると、結婚をしたがるようになり、一二初めの誓いを無視したという非難を受けねばならないからである。一三その上、彼女たちはなまけていて、家々を遊び歩くことをおぼえ、なまけるばかりか、むだごとをしゃべって、いたずらに動きまわり、口にしてはならないことを言う。一四そういうわけだから、若いやもめは結婚して子を産み、家をおさめ、そして、反対者にそしられるすきを作らないようにしてほしい。一五彼女たちのうちには、サタンのあとを追って道を踏みはずした者もある。一六女の信者が家にやもめを持っている場合には、自分でそのやもめの世話をしてあげなさい。教会のやっかいになってはいけない。教会は、真にたよりのないやもめの世話をしなければならない。

一七よい指導をしている長老、特に宣教と教とのために労している長老は、二倍の尊敬を受けるにふさわしい者である。一八聖書は、「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」また「働き人がその報酬を受けるのは当然である」と言っている。一九長老に対

する訴訟は、ふたりか三人の証人がない場合には、受理してはなら
ない。二〇罪を犯した者に対しては、ほかの人々も恐れをいだくに至
るために、すべての人の前でその罪をとがむべきである。二一わたし
は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使たちとの前で、おごそかに
あなたに命じる。これらのことを偏見なしに守り、何事についても、
不公平な仕方をしてはならない。二二軽々しく人に手をおいてはなら
ない。また、ほかの人の罪に加わってはいけない。自分をきよく守
りなさい。二三（これからは、水ばかりを飲まないで、胃のため、ま
た、たびたびのいたみを和らげるために、少量のぶどう酒を用いなさ
い。）二四ある人の罪は明白であって、すぐ裁判にかけられるが、ほ
かの人の罪は、あとになってわかって来る。二五それと同じく、良い
わざもすぐ明らかになり、そうならない場合でも、隠れていることは
あり得ない。

第六章一くびきの下にある奴隷はすべて、自分の主人を、真に尊敬
すべき者として仰ぐべきである。それは、神の御名と教とが、そし

りを受けないためである。二信者である主人を持っている者たちは、
その主人が兄弟であるというので軽視してはならない。むしろ、ま
すます励んで仕えるべきである。その益を受ける主人は、信者であ
り愛されている人だからである。
あなたは、これらの事を教えかつ勧めなさい。三もし違ったこと
を教えて、わたしたちの主イエス・キリストの健全な言葉、ならび
に信心にかなう教に同意しないような者があれば、四彼は高慢であっ
て、何も知らず、ただ論議と言葉の争いとに病みついている者であ
る。そこから、ねたみ、争い、そしり、さいぎの心が生じ、五また知性
が腐って、真理にそむき、信心を利得と心得る者どもの間に、はて
しのないいがみ合いが起るのである。六しかし、信心があって足るこ
とを知るのは、大きな利得である。七わたしたちは、何ひとつ持たな
いでこの世にきた。また、何ひとつ持たないでこの世を去って行く。
八ただ衣食があれば、それで足れりとすべきである。九富むことを願
い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈

ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである。一〇金銭
を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭
を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺
しとおした。

一一しかし、神の人よ。あなたはこれらの事を避けなさい。そして、
義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。一二信仰の戦
いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、
そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのであ
る。一三わたしはすべてのものを生かして下さる神のみまえと、また
ポンテオ・ピラトの面前でりっぱなあかしをなさったキリスト・イエ
スのみまえで、あなたに命じる。一四わたしたちの主イエス・キリス
トの出現まで、その戒めを汚すことがなく、また、それを非難のない
ように守りなさい。一五時がくれば、祝福に満ちた、ただひとりの力
あるかた、もろもろの王の王、もろもろの主の主が、キリストを出現
させて下さるであろう。一六神はただひとり不死を保ち、近づきがた

い光の中に住み、人間の中でだれも見た者がなく、見ることもでき
ないかたである。ほまれと永遠の支配とが、神にあるように、アア
メン。
一七この世で富んでいる者たちに、命じなさい。高慢にならず、た
よりにならない富に望みをおかず、むしろ、わたしたちにすべての物
を豊かに備えて楽しませて下さる神に、のぞみをおくように、一八ま
た、良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与え
ることを喜び、一九こうして、真のいのちを得るために、未来に備え
てよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい。
二〇テモテよ。あなたにゆだねられていることを守りなさい。そし
て、俗悪なむだ話と、偽りの「知識」による反対論とを避けなさい。
二一ある人々はそれに熱中して、信仰からそれてしまったのである。
恵みが、あなたがたと共にあるように。

テモテへの第二の手紙

第一章一神の御旨により、キリスト・イエスにあるいのちの約束に
よって立てられたキリスト・イエスの使徒パウロから、二愛する子テ
モテへ。
父なる神とわたしたちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみ
と平安とが、あなたにあるように。
三わたしは、日夜、祈の中で、絶えずあなたのことを思い出しては、
きよい良心をもって先祖以来つかえている神に感謝している。四わた
しは、あなたの涙をおぼえており、あなたに会って喜びで満たされ
たいと、切に願っている。五また、あなたがいだいている偽りのない
信仰を思い起している。この信仰は、まずあなたの祖母ロイスとあ
なたの母ユニケとに宿ったものであったが、今あなたにも宿ってい

ると、わたしは確信している。六こういうわけで、あなたに注意した
い。わたしの按手によって内にいただいた神の賜物を、再び燃えた
たせなさい。七というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する
霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。八だから、あなたは、
わたしたちの主のあかしをすることや、わたしが主の囚人であるこ
とを、決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ、神の力にささえ
られて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい。九神はわ
たしたちを救い、聖なる招きをもって召して下さったのであるが、そ
れは、わたしたちのわざによるのではなく、神ご自身の計画に基き、
また、永遠の昔にキリスト・イエスにあってわたしたちに賜わってい
た恵み、一〇そして今や、わたしたちの救主キリスト・イエスの出現
によって明らかにされた恵みによるのである。キリストは死を滅ぼ
し、福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのである。一一
わたしは、この福音のために立てられて、その宣教者、使徒、教師に
なった。一二そのためにまた、わたしはこのような苦しみを受けてい

るが、それを恥としない。なぜなら、わたしは自分の信じてきたかた
を知っており、またそのかたは、わたしにゆだねられているものを、
かの日に至るまで守って下さることができると、確信しているから
である。一三あなたは、キリスト・イエスに対する信仰と愛とをもっ
て、わたしから聞いた健全な言葉を模範にしなさい。一四そして、あ
なたにゆだねられている尊いものを、わたしたちの内に宿っている
聖霊によって守りなさい。

一五あなたの知っているように、アジヤにいる者たちは、皆わたし
から離れて行った。その中には、フゲロとヘルモゲネもいる。一六ど
うか、主が、オネシポロの家にあわれみをたれて下さるように。彼は
たびたび、わたしを慰めてくれ、またわたしの鎖を恥とも思わない
で、一七ローマに着いた時には、熱心にわたしを捜しまわった末、尋
ね出してくれたのである。一八どうか、主がかの日に、あわれみを彼
に賜わるように。――彼がエペソで、どれほどわたしに仕えてくれ
たかは、だれよりもあなたがよく知っている。

第二章一そこで、わたしの子よ。あなたはキリスト・イエスにある
恵みによって、強くなりなさい。二そして、あなたが多くの証人の前
でわたしから聞いたことを、さらにほかの者たちにも教えることので
きるような忠実な人々に、ゆだねなさい。三キリスト・イエスの良い
兵卒として、わたしと苦しみを共にしてほしい。四兵役に服している
者は、日常生活の事に煩わされてはいない。ただ、兵を募った司令官
を喜ばせようと努める。五また、競技をするにしても、規定に従って
競技をしなければ、栄冠は得られない。六労苦をする農夫が、だれよ
りも先に、生産物の分配にあずかるべきである。七わたしの言うこと
を、よく考えてみなさい。主は、それを十分に理解する力をあなたに
賜わるであろう。
八ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・
キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である。九
この福音のために、わたしは悪者のように苦しめられ、ついに鎖につ
ながれるに至った。しかし、神の言はつながれてはいない。一〇それ

だから、わたしは選ばれた人たちのために、いっさいのことを耐え忍
ぶのである。それは、彼らもキリスト・イエスによる救を受け、また、
それと共に永遠の栄光を受けるためである。一一次の言葉は確実であ
る。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きる
であろう。一二もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。
もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。一三たとい、わ
たしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽
ることが、できないのである」。

一四あなたは、これらのことを彼らに思い出させて、なんの益もな
く、聞いている人々を破滅におとしいれるだけである言葉の争いをし
ないように、神のみまえでおごそかに命じなさい。一五あなたは真理
の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、
神に自分をささげるように努めはげみなさい。一六俗悪なむだ話を避
けなさい。それによって人々は、ますます不信心に落ちていき、一七
彼らの言葉は、がんのように腐れひろがるであろう。その中にはヒメ

ナオとピレトとがいる。一八彼らは真理からはずれ、復活はすでに済
んでしまったと言い、そして、ある人々の信仰をくつがえしている。
一九しかし、神のゆるがない土台はすえられていて、それに次の句が
証印として、しるされている。「主は自分の者たちを知る」。また「主
の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ」。二〇大きな家には、金や
銀の器ばかりではなく、木や土の器もあり、そして、あるものは尊い
ことに用いられ、あるものは卑しいことに用いられる。二一もし人が
卑しいものを取り去って自分をきよめるなら、彼は尊いきよめられ
た器となって、主人に役立つものとなり、すべての良いわざに間に合
うようになる。

二二そこで、あなたは若い時の情欲を避けなさい。そして、きよい
心をもって主を呼び求める人々と共に、義と信仰と愛と平和とを追
い求めなさい。二三愚かで無知な論議をやめなさい。それは、あなた
が知っているとおり、ただ争いに終るだけである。二四主の僕たる者
は争ってはならない。だれに対しても親切であって、よく教え、よく

忍び、二五反対する者を柔和な心で教え導くべきである。おそらく神
は、彼らに悔改めの心を与えて、真理を知らせ、二六一度は悪魔に捕
えられてその欲するままになっていても、目ざめて彼のわなからの
がれさせて下さるであろう。

第三章一しかし、このことは知っておかねばならない。終りの時に
は、苦難の時代が来る。二その時、人々は自分を愛する者、金を愛す
る者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしる者、親に逆らう者、恩
を知らぬ者、神聖を汚す者、三無情な者、融和しない者、そしる者、
無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、四裏切り者、乱暴者、高言
をする者、神よりも快楽を愛する者、五信心深い様子をしながらその
実を捨てる者となるであろう。こうした人々を避けなさい。六彼らの
中には、人の家にもぐり込み、そして、さまざまの欲に心を奪われ
て、多くの罪を積み重ねている愚かな女どもを、とりこにしている
者がある。七彼女たちは、常に学んではいるが、いつになっても真理
の知識に達することができない。八ちょうど、ヤンネとヤンブレとが

モーセに逆らったように、こうした人々も真理に逆らうのである。彼
らは知性の腐った、信仰の失格者である。九しかし、彼らはそのまま
進んでいけるはずがない。彼らの愚かさは、あのふたりの場合と同
じように、多くの人に知れて来るであろう。
一〇しかしあなたは、わたしの教、歩み、こころざし、信仰、寛容、
愛、忍耐、一一それから、わたしがアンテオケ、イコニオム、ルステラ
で受けた数々の迫害、苦難に、よくも続いてきてくれた。そのひどい
迫害にわたしは耐えてきたが、主はそれらいっさいのことから、救い
出して下さったのである。一二いったい、キリスト・イエスにあって
信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。一三悪人と詐欺
師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。一四し
かし、あなたは、自分が学んで確信しているところに、いつもとど
まっていなさい。あなたは、それをだれから学んだか知っており、一
五また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対す
る信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であること

を知っている。一六聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたもので
あって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。一七
それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備がで
きて、完全にととのえられた者になるのである。

第四章
一神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキ
リスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、お
ごそかに命じる。二御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、
それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めな
さい。三人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をし
てもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、
四そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来
るであろう。五しかし、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者
のわざをなし、自分の務を全うしなさい。六わたしは、すでに自身を
犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。七わたし
は戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守

りとおした。八今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。か
の日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。
わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての
人にも授けて下さるであろう。
九わたしの所に、急いで早くきてほしい。一〇デマスはこの世を愛
し、わたしを捨ててテサロニケに行ってしまい、クレスケンスはガラ
テヤに、テトスはダルマテヤに行った。一一ただルカだけが、わたし
のもとにいる。マルコを連れて、一緒にきなさい。彼はわたしの務の
ために役に立つから。一二わたしはテキコをエペソにつかわした。一
三あなたが来るときに、トロアスのカルポの所に残しておいた上着を
持ってきてほしい。また書物も、特に、羊皮紙のを持ってきてもらい
たい。一四銅細工人のアレキサンデルが、わたしを大いに苦しめた。
主はそのしわざに対して、彼に報いなさるだろう。一五あなたも、彼
を警戒しなさい。彼は、わたしたちの言うことに強く反対したのだ
から。一六わたしの第一回の弁明の際には、わたしに味方をする者は

ひとりもなく、みなわたしを捨てて行った。どうか、彼らが、そのた
めに責められることがないように。一七しかし、わたしが御言を余す
ところなく宣べ伝えて、すべての異邦人に聞かせるように、主はわ
たしを助け、力づけて下さった。そして、わたしは、ししの口から救
い出されたのである。一八主はわたしを、すべての悪のわざから助け
出し、天にある御国に救い入れて下さるであろう。栄光が永遠から
永遠にわたって主にあるように、アァメン。

一九プリスカとアクラとに、またオネシポロの家に、よろしく伝えて
ほしい。二〇エラストはコリントにとどまっており、トロピモは病気
なので、ミレトに残してきた。二一冬になる前に、急いできてほしい。
ユブロ、プデス、リノス、クラウデヤならびにすべての兄弟たちか
ら、あなたによろしく。

二二主が、あなたの霊と共にいますように。恵みが、あなたがたと
共にあるように。

テトスへの手紙

第一章 一神の僕、イエス・キリストの使徒パウロから――わたしが
使徒とされたのは、神に選ばれた者たちの信仰を強め、また、信心
にかなう真理の知識を彼らに得させるためであり、二偽りのない神が
永遠の昔に約束された永遠のいのちの望みに基くのである。三神は、
定められた時に及んで、御言を宣教によって明らかにされたが、わた
しは、わたしたちの救主なる神の任命によって、この宣教をゆだねら
れたのである――四信仰を同じうするわたしの真実の子テトスへ。
父なる神とわたしたちの救主キリスト・イエスから、恵みと平安と
が、あなたにあるように。
五あなたをクレテにおいてきたのは、わたしがあなたに命じておい
たように、そこにし残してあることを整理してもらい、また、町々に

長老を立ててもらうためにほかならない。六長老は、責められる点が
なく、ひとりの妻の夫であって、その子たちも不品行のうわさをたて
られず、親不孝をしない信者でなくてはならない。七監督たる者は、
神に仕える者として、責められる点がなく、わがままでなく、軽々し
く怒らず、酒を好まず、乱暴でなく、利をむさぼらず、八かえって、
旅人をもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、信仰深く、自制する
者であり、九教にかなった信頼すべき言葉を守る人でなければならな
い。それは、彼が健全な教によって人をさとし、また、反対者の誤り
を指摘することができるためである。
一〇実は、法に服さない者、空論に走る者、人の心を惑わす者が多
くおり、とくに、割礼のある者の中に多い。一一彼らの口を封ずべき
である。彼らは恥ずべき利のために、教えてはならないことを教え
て、数々の家庭を破壊してしまっている。一二クレテ人のうちのある
預言者が
「クレテ人は、いつもうそつき、

たちの悪いけもの、
なまけ者の食いしんぼう」
と言っているが、一三この非難はあたっている。だから、彼らをきび
しく責めて、その信仰を健全なものにし、一四ユダヤ人の作り話や、
真理からそれていった人々の定めなどに、気をとられることがない
ようにさせなさい。一五きよい人には、すべてのものがきよい。しか
し、汚れている不信仰な人には、きよいものは一つもなく、その知性
も良心も汚れてしまっている。一六彼らは神を知っていると、口では
言うが、行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者、また不
従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である。

第二章 一しかし、あなたは、健全な教にかなうことを語りなさい。
二老人たちには自らを制し、謹厳で、慎み深くし、また、信仰と愛と
忍耐とにおいて健全であるように勧め、三年老いた女たちにも、同じ
ように、たち居ふるまいをうやうやしくし、人をそしったり大酒の
奴隷になったりせず、良いことを教える者となるように、勧めなさ

い。四そうすれば、彼女たちは、若い女たちに、夫を愛し、子供を愛
し、五慎み深く、純潔で、家事に努め、善良で、自分の夫に従順であ
るように教えることになり、したがって、神の言がそしりを受けない
ようになるであろう。六若い男にも、同じく、万事につけ慎み深くあ
るように、勧めなさい。七あなた自身を良いわざの模範として示し、
人を教える場合には、清廉と謹厳とをもってし、八非難のない健全な
言葉を用いなさい。そうすれば、反対者も、わたしたちについてなん
の悪口も言えなくなり、自ら恥じいるであろう。

九奴隷には、万事につけその主人に服従して、喜ばれるようになり、
反抗をせず、一〇盗みをせず、どこまでも心をこめた真実を示すよう
にと、勧めなさい。そうすれば、彼らは万事につけ、わたしたちの
救主なる神の教を飾ることになろう。

一一すべての人を救う神の恵みが現れた。一二そして、わたしたち
を導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心
深くこの世で生活し、一三祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、

わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むように
と、教えている。一四このキリストが、わたしたちのためにご自身を
ささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、
良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するために
ほかならない。
一五あなたは、権威をもってこれらのことを語り、勧め、また責め
なさい。だれにも軽んじられてはならない。
第三章 一あなたは彼らに勧めて、支配者、権威ある者に服し、これ
に従い、いつでも良いわざをする用意があり、二だれをもそしらず、争
わず、寛容であって、すべての人に対してどこまでも柔和な態度を示
すべきことを、思い出させなさい。三わたしたちも以前には、無分別
で、不従順な、迷っていた者であって、さまざまの情欲と快楽との
奴隷になり、悪意とねたみとで日を過ごし、人に憎まれ、互に憎み
合っていた。四ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが
現れたとき、五わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ

神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、
わたしたちは救われたのである。六この聖霊は、わたしたちの救主イ
エス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた。七こ
れは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされ、永遠のいの
ちを望むことによって、御国をつぐ者となるためである。八この言葉
は確実である。わたしは、あなたがそれらのことを主張するのを願っ
ている。それは、神を信じている者たちが、努めて良いわざを励むこ
とを心がけるようになるためである。これは良いことであって、人々
の益となる。九しかし、愚かな議論と、系図と、争いと、律法につい
ての論争とを、避けなさい。それらは無益かつ空虚なことである。一
〇異端者は、一、二度、訓戒を加えた上で退けなさい。一一たしかに、
こういう人たちは、邪道に陥り、自ら悪と知りつつも、罪を犯してい
るからである。

一二わたしがアルテマスかテキコかをあなたのところに送ったなら、
急いでニコポリにいるわたしの所にきなさい。わたしは、そこで冬

を過(す)ごすことにした。 一三法学者(ほうがくしゃ)ゼナスと、アポロとを、急(いそ)いで旅(たび)につかせ、不自由(ふじゆう)のないようにしてあげなさい。 一四わたしたちの仲間(なかま)も、さし迫(せま)った必要(ひつよう)に備(そな)えて、努(つと)めて良(よ)いわざを励(はげ)み、実(み)を結(むす)ばぬ者(もの)とならないように、心(こころ)がけるべきである。

一五わたしと共(とも)にいる一同(いちどう)の者(もの)から、あなたによろしく。わたしたちを愛(あい)している信徒(しんと)たちに、よろしく。

恵(めぐ)みが、あなたがた一同(いちどう)と共(とも)にあるように。

ピレモンへの手紙

第一章一キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテから、わたし
たちの愛する同労者ピレモン、二姉妹アピヤ、わたしたちの戦友アル
キポ、ならびに、あなたの家にある教会へ。
三わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安と
が、あなたがたにあるように。
四わたしは、祈の時にあなたをおぼえて、いつもわたしの神に感謝
している。五それは、主イエスに対し、また、すべての聖徒に対する
あなたの愛と信仰とについて、聞いているからである。六どうか、あ
なたの信仰の交わりが強められて、わたしたちの間でキリストのた
めになされているすべての良いことが、知られて来るようになって
ほしい。七兄弟よ。わたしは、あなたの愛によって多くの喜びと慰め

とを与えられた。聖徒たちの心が、あなたによって力づけられたか
らである。
八こういうわけで、わたしは、キリストにあってあなたのなすべき
事を、きわめて率直に指示してもよいと思うが、九むしろ、愛のゆえ
にお願いする。すでに老年になり、今またキリスト・イエスの囚人と
なっているこのパウロが、一〇捕われの身で産んだわたしの子供オネ
シモについて、あなたにお願いする。一一彼は以前は、あなたにとっ
て無益な者であったが、今は、あなたにも、わたしにも、有益な者
になった。一二彼をあなたのもとに送りかえす。彼はわたしの心であ
る。一三わたしは彼を身近に引きとめておいて、わたしが福音のため
に捕われている間、あなたに代って仕えてもらいたかったのである。
一四しかし、わたしは、あなたの承諾なしには何もしたくない。あな
たが強制されて良い行いをするのではなく、自発的にすることを願っ
ている。一五彼がしばらくの間あなたから離れていたのは、あなたが
彼をいつまでも留めておくためであったかも知れない。一六しかも、

もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟としてであ
る。とりわけ、わたしにとってそうであるが、ましてあなたにとって
は、肉においても、主にあっても、それ以上であろう。
一七そこで、
もしわたしをあなたの信仰の友と思ってくれるなら、わたし同様に
彼を受けいれてほしい。
一八もし、彼があなたに何か不都合なことを
したか、あるいは、何か負債があれば、それをわたしの借りにしてお
いてほしい。
一九このパウロが手ずからしるす、わたしがそれを返済
する。この際、あなたが、あなた自身をわたしに負うていることにつ
いては、何も言うまい。
二〇兄弟よ。わたしはあなたから、主にあっ
て何か益を得たいものである。わたしの心を、主にあって力づけて
もらいたい。

二一わたしはあなたの従順を堅く信じて、この手紙を書く。あなた
は、確かにわたしが言う以上のことをしてくれるだろう。
二二ついで
にお願いするが、わたしのために宿を用意しておいてほしい。あな
たがたの祈によって、あなたがたの所に行かせてもらえるように望

んでいるのだから。
二三キリスト・イエスにあって、わたしと共に捕われの身になって
いるエパフラスから、あなたによろしく。二四わたしの同労者たち、
マルコ、アリスタルコ、デマス、ルカからも、よろしく。
二五主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるよ
うに。

ヘブル人への手紙

第一章 一神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、い
ろいろな方法で、先祖たちに語られたが、二この終りの時には、御子
によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者
と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。三御子は
神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉
をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終
えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのであ
る。四御子は、その受け継がれた名が御使たちの名にまさっているの
で、彼らよりもすぐれた者となられた。五いったい、神は御使たちの
だれに対して、

「あなたこそは、わたしの子。

きょう、わたしはあなたを生んだ」
と言い、さらにまた、
「わたしは彼の父となり、
彼はわたしの子となるであろう」
と言われたことがあるか。六さらにまた、神は、その長子を世界に導
き入れるに当って、
「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」
と言われた。七また、御使たちについては、
「神は、御使たちを風とし、
ご自分に仕える者たちを炎とされる」
と言われているが、八御子については、
「神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、
あなたの支配のつえは、公平のつえである。
九あなたは義を愛し、不法を憎まれた。
それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、

あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」
と言い、一〇さらに、
「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。
もろもろの天も、み手のわざである。
一一これらのものは滅びてしまうが、
あなたは、いつまでもいますかたである。
すべてのものは衣のように古び、
一二それらをあなたは、外套のように巻かれる。
これらのものは、衣のように変るが、
あなたは、いつも変ることがなく、
あなたのよわいは、尽きることがない」
とも言われている。一三神は、御使たちのだれに対して、
「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、
わたしの右に座していなさい」
と言われたことがあるか。一四御使たちはすべて仕える霊であって、

救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。
第二章一こういうわけだから、わたしたちは聞かされていること
を、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流さ
れてしまう。二というのは、御使たちをとおして語られた御言が効力
を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられた
とすれば、三わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、ど
うして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によっ
て語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、
四さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、ま
た、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたので
ある。

五いったい、神は、わたしたちがここで語っているきたるべき世界
を、御使たちに服従させることは、なさらなかった。六聖書はある
箇所で、こうあかししている、
「人間が何者だから、

これを御心に留められるのだろうか。
人の子が何者だから、
これをかえりみられるのだろうか。
七あなたは、しばらくの間、
彼を御使たちよりも低い者となし、
栄光とほまれとを冠として彼に与え、
八万物をその足の下に服従させて下さった」。
「万物を彼に服従させて下さった」という以上、服従しないものは、
何ひとつ残されていないはずである。しかし、今もなお万物が彼に
服従している事実を、わたしたちは見ていない。
九ただ、「しばらく
の間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえ
に、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神
の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。
一〇なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの
子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をとおして全うされた

のは、彼にふさわしいことであったからである。
一一実に、きよめる
かたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それ
ゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。
一二すなわち、
「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、
教会の中で、あなたをほめ歌おう」
と言い、
一三また、
「わたしは、彼により頼む」、
また、
「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子らとは」
と言われた。
一四このように、子たちは血と肉とに共にあずかってい
るので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、
死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、
一五
死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つため
である。
一六確かに、彼は天使たちを助けることはしないで、アブラ
ハムの子孫を助けられた。
一七そこで、イエスは、神のみまえにあわ

れみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆ
る点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。一八主ご
自身、試錬を受けて苦しまれたからこそ、試錬の中にある者たちを助
けることができるのである。
第三章一そこで、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たちよ。あ
なたがたは、わたしたちが告白する信仰の使者また大祭司なるイエ
スを、思いみるべきである。二彼は、モーセが神の家の全体に対して
忠実であったように、自分を立てたかたに対して忠実であられた。三
おおよそ、家を造る者が家そのものよりもさらに尊ばれるように、彼
は、モーセ以上に、大いなる光栄を受けるにふさわしい者とされたの
である。四家はすべて、だれかによって造られるものであるが、すべ
てのものを造られたかたは、神である。五さて、モーセは、後に語ら
るべき事がらについてあかしをするために、仕える者として、神の
家の全体に対して忠実であったが、六キリストは御子として、神の家
を治めるのに忠実であられたのである。もしわたしたちが、望みの

確信と誇とを最後までしっかりと持ち続けるなら、わたしたちは神
の家なのである。**七**だから、聖霊が言っているように、
「きょう、あなたがたがみ声を聞いたなら、
八荒野における試錬の日に、
神にそむいた時のように、
あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない。
九あなたがたの先祖たちは、
そこでわたしを試みためし、
一〇しかも、四十年の間わたしのわざを見たのである。
だから、わたしはその時代の人々に対して、
いきどおって言った、
彼らの心は、いつも迷っており、
彼らは、わたしの道を認めなかった。
一一そこで、わたしは怒って、彼らをわたしの安息にはいらせる
ことはしない、と誓った」。

一二兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、
不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知
れない。一三あなたがたの中に、罪の惑わしに陥って、心をかたくな
にする者がないように、「きょう」といううちに、日々、互に励まし
合いなさい。一四もし最初の確信を、最後までしっかりと持ち続ける
ならば、わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。一五そ
れについて、こう言われている、

「きょう、み声を聞いたなら、
神にそむいた時のように、
あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない」。

一六すると、聞いたのにそむいたのは、だれであったのか。モーセに
率いられて、エジプトから出て行ったすべての人々ではなかったか。
一七また、四十年の間、神がいきどおられたのはだれに対してであっ
たか。罪を犯して、その死かばねを荒野にさらした者たちに対して
ではなかったか。一八また、神が、わたしの安息に、はいらせること

はしない、と誓われたのは、だれに向かってであったか。不従順な者
に向かってではなかったか。一九こうして、彼らがはいることのでき
なかったのは、不信仰のゆえであることがわかる。

第四章一それだから、神の安息にはいるべき約束が、まだ存続して
いるにかかわらず、万一にも、はいりそこなう者が、あなたがたの中
から出ることがないように、注意しようではないか。二というのは、
彼らと同じく、わたしたちにも福音が伝えられているのである。しか
し、その聞いた御言は、彼らには無益であった。それが、聞いた者た
ちに、信仰によって結びつけられなかったからである。三ところが、
わたしたち信じている者は、安息にはいることができる。それは、

「わたしが怒って、
彼らをわたしの安息に、はいらせることはしないと、誓ったよ
うに」

と言われているとおりである。しかも、みわざは世の初めに、でき
上がっていた。四すなわち、聖書のある箇所で、七日目のことについ

て、「神は、七日目にすべてのわざをやめて休まれた」と言われてお
り、五またここで、「彼らをわたしの安息に、はいらせることはしな
い」と言われている。六そこで、その安息にはいる機会が、人々にな
お残されているのであり、しかも、初めに福音を伝えられた人々は、
不従順のゆえに、はいることをしなかったのであるから、七神は、あ
らためて、ある日を「きょう」として定め、長く時がたってから、先
に引用したとおり、

「きょう、み声を聞いたなら、
あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない」

とダビデをとおして言われたのである。八もしヨシュアが彼らを休ま
せていたとすれば、神はあとになって、ほかの日のことについて語
られたはずはない。九こういうわけで、安息日の休みが、神の民のた
めにまだ残されているのである。一〇なぜなら、神の安息にはいった
者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだか
らである。一一したがって、わたしたちは、この安息にはいるように

努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にな
らって、落ちて行く者が出るかもしれない。
一二というのは、神の言
は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と霊魂
と、関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志と
を見分けることができる。
一三そして、神のみまえには、あらわでな
い被造物はひとつもなく、すべてのものは、神の目には裸であり、あ
らわにされているのである。この神に対して、わたしたちは言い開
きをしなくてはならない。

一四さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司
なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰
をかたく守ろうではないか。
一五この大祭司は、わたしたちの弱さを
思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかった
が、すべてのことについて、わたしたちと同じように試錬に会われた
のである。
一六だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵み
にあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵

みの御座に近づこうではないか。
第五章
一大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のた
めに供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕え
る役に任じられた者である。二彼は自分自身、弱さを身に負うている
ので、無知な迷っている人々を、思いやることができると共に、三そ
の弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪につ
いてささげものをしなければならないのである。四かつ、だれもこの
栄誉ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の
召しによって受けるのである。五同様に、キリストもまた、大祭司の
栄誉を自分で得たのではなく、

「あなたこそは、わたしの子。
きょう、わたしはあなたを生んだ」

と言われたかたから、お受けになったのである。六また、ほかの箇所
でこう言われている、

「あなたこそは、永遠に、

メルキゼデクに等しい祭司である」。
七キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、
ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、
その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。八彼は御子であら
れたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、九そし
て、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠
の救の源となり、一〇神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、
となえられたのである。

一一このことについては、言いたいことがたくさんあるが、あなた
がたの耳が鈍くなっているので、それを説き明かすことはむずかし
い。一二あなたがたは、久しい以前からすでに教師となっているはず
なのに、もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねば
ならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要と
している。一三すべて乳を飲んでいる者は、幼な子なのだから、義の
言葉を味わうことができない。一四しかし、堅い食物は、善悪を見わ

ける感覚を実際に働かせて訓練された成人のとるべきものである。
第六章一そういうわけだから、わたしたちは、キリストの教の初歩
をあとにして、完成を目ざして進もうではないか。今さら、死んだ
行いの悔改めと神への信仰、二洗いごとについての教と按手、死人の
復活と永遠のさばき、などの基本の教をくりかえし学ぶことをやめよ
うではないか。三神の許しを得て、そうすることにしよう。四いった
ん、光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、五
また、神の良きみ言葉と、きたるべき世の力とを味わった者たちが、
六そののち堕落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につ
けて、さらしものにするわけであるから、ふたたび悔改めにたち帰
ることは不可能である。七たとえば、土地が、その上にたびたび降る
雨を吸い込で、耕す人々に役立つ作物を育てるなら、神の祝福にあず
かる。八しかし、いばらやあざみをはえさせるなら、それは無用にな
り、やがてのろわれ、ついには焼かれてしまう。
九しかし、愛する者たちよ。こうは言うものの、わたしたちは、救

にかかわる更に良いことがあるのを、あなたがたについて確信して
いる。一〇神は不義なかたではないから、あなたがたの働きや、あな
たがたがかつて聖徒に仕え、今もなお仕えて、御名のために示してく
れた愛を、お忘れになることはない。一一わたしたちは、あなたがた
がひとり残らず、最後まで望みを持ちつづけるためにも、同じ熱意を
示し、一二怠ることがなく、信仰と忍耐とをもって約束のものを受け
継ぐ人々に見習う者となるように、と願ってやまない。
一三さて、神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うの
に、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、一四
「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言わ
れた。一五このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束
のものを得たのである。一六いったい、人間は自分より上のものをさ
して誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証
となるのである。一七そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、
ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓い

によって保証されたのである。一八それは、偽ることのあり得ない神
に立てられた二つの不変の事がらによって、前におかれている望み
を捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを
受けるためである。一九この望みは、わたしたちにとって、いわば、
たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行
かせるものである。二〇その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデ
クに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、は
いられたのである。

第七章一このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司
であったが、王たちを撃破して帰るアブラハムを迎えて祝福し、二そ
れに対して、アブラハムは彼にすべての物の十分の一を分け与えた
のである。その名の意味は、第一に義の王、次にまたサレムの王、す
なわち平和の王である。三彼には父がなく、母がなく、系図がなく、
生涯の初めもなく、生命の終りもなく、神の子のようであって、いつ
までも祭司なのである。

四そこで、族長のアブラハムが最もよいぶんどり品の十分の一を与
えたのだから、この人がどんなにすぐれた人物であったかが、あなた
がたにわかるであろう。五さて、レビの子のうちで祭司の務をしてい
る者たちは、兄弟である民から、同じくアブラハムの子孫であるにも
かかわらず、十分の一を取るように、律法によって命じられている。
六ところが、彼らの血統に属さないこの人が、アブラハムから十分の
一を受けとり、約束を受けている者を祝福したのである。七言うまで
もなく、小なる者が大なる者から祝福を受けるのである。八その上、
一方では死ぬべき人間が、十分の一を受けているが、他方では「彼は
生きている者」とあかしされた人が、それを受けている。九そこで、
十分の一を受けるべきレビでさえも、アブラハムを通じて十分の一
を納めた、と言える。一〇なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを迎
えた時には、レビはまだこの父祖の腰の中にいたからである。
一一もし全うされることがレビ系の祭司制によって可能であったら
――民は祭司制の下に律法を与えられたのであるが――なんの必要

があって、なお、「アロンに等しい」と呼ばれない、別な「メルキゼ
デクに等しい」祭司が立てられるのであるか。一二祭司制に変更があ
れば、律法にも必ず変更があるはずである。一三さて、これらのこと
は、いまだかつて祭壇に奉仕したことのない、他の部族に関して言
われているのである。一四というのは、わたしたちの主がユダ族の中
から出られたことは、明らかであるが、モーセは、この部族につい
て、祭司に関することでは、ひとことも言っていない。一五そしてこ
の事は、メルキゼデクと同様な、ほかの祭司が立てられたことによっ
て、ますます明白になる。一六彼は、肉につける戒めの律法によらな
いで、朽ちることのないいのちの力によって立てられたのである。一
七それについては、聖書に「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに
等しい祭司である」とあかしされている。一八このようにして、一方
では、前の戒めが弱くかつ無益であったために無効になると共に、一
九(律法は、何事をも全うし得なかったからである)、他方では、さ
らにすぐれた望みが現れてきて、わたしたちを神に近づかせるのであ

る。二〇その上に、このことは誓いをもってなされた。人々は、誓い
をしないで祭司とされるのであるが、二一この人の場合は、次のよう
な誓いをもってされたのである。すなわち、彼について、こう言われ
ている、「主は誓われたが、心を変えることをされなかった。あなた
こそは、永遠に祭司である」。二二このようにして、イエスは更にす
ぐれた契約の保証となられたのである。二三かつ、死ということがあ
るために、務を続けることができないので、多くの人々が祭司に立て
られるのである。二四しかし彼は、永遠にいますかたであるので、変
らない祭司の務を持ちつづけておられるのである。二五そこでまた、
彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼に
よって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。
　二六このように、聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別され、
かつ、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたち
にとってふさわしいかたである。二七彼は、ほかの大祭司のように、
まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげ

る必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをされた
からである。二八律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とする
が、律法の後にきた誓いの御言は、永遠に全うされた御子を立てて、
大祭司としたのである。

第八章一以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたち
のためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、二人間によら
ず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、とい
うことである。三おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけ
にえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もま
た、何かささぐべき物を持っておられねばならない。四そこで、もし
彼が地上におられたなら、律法にしたがって供え物をささげる祭司
たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。
五彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。
それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受
け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」

と言われたのである。六ところがキリストは、はるかにすぐれた務を
得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて立てられ
た、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。七もし初め
の契約に欠けたところがなかったなら、あとのものが立てられる余地
はなかったであろう。八ところが、神は彼らを責めて言われた、
「主は言われる、見よ、
わたしがイスラエルの家およびユダの家と、
新しい契約を結ぶ日が来る。
九それは、わたしが彼らの先祖たちの手をとって、
エジプトの地から導き出した日に、
彼らと結んだ契約のようなものではない。
彼らがわたしの契約にとどまることをしないので、
わたしも彼らをかえりみなかったからであると、
主が言われる。
一〇わたしが、それらの日の後、イスラエルの家と立てようとす

る契約はこれである、と主が言われる。
すなわち、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、
彼らの心に書きつけよう。
こうして、わたしは彼らの神となり、
彼らはわたしの民となるであろう。
一一彼らは、それぞれ、その同胞に、
また、それぞれ、その兄弟に、
主を知れ、と言って教えることはなくなる。
なぜなら、大なる者から小なる者に至るまで、
彼らはことごとく、
わたしを知るようになるからである。
一二わたしは、彼らの不義をあわれみ、
もはや、彼らの罪を思い出すことはしない」。
一三神は、「新しい」と言われたことによって、初めの契約を古い
とされたのである。年を経て古びたものは、やがて消えていく。

第九章一さて、初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、
地上の聖所とがあった。二すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の
場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と
呼ばれた。三また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と
呼ばれた。四そこには金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置
かれ、その中にはマナのはいっている金のつぼと、芽を出したアロン
のつえと、契約の石板とが入れてあり、五箱の上には栄光に輝くケル
ビムがあって、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今
ここで、いちいち述べることができない。六これらのものが、以上の
ように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいって
礼拝をするのであるが、七幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいる
のであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血を
たずさえないで行くことはない。八それによって聖霊は、前方の幕屋
が存在している限り、聖所にはいる道はまだ開かれていないことを、
明らかに示している。九この幕屋というのは今の時代に対する比喩で

ある。すなわち、供え物やいけにえはささげられるが、儀式にたずさ
わる者の良心を全うすることはできない。一〇それらは、ただ食物と
飲み物と種々の洗いごとに関する行事であって、改革の時まで課せ
られている肉の規定にすぎない。
一一しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたと
き、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋
をとおり、一二かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によっ
て、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うさ
れたのである。一三もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人た
ちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、一四永遠
の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリス
トの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り
除き、生ける神に仕える者としないであろうか。一五それだから、キ
リストは新しい契約の仲保者なのである。それは、彼が初めの契約
のもとで犯した罪過をあがなうために死なれた結果、召された者た

ちが、約束された永遠の国を受け継ぐためにほかならない。
一六いったい、遺言には、遺言者の死の証明が必要である。一七遺言
は死によってのみその効力を生じ、遺言者が生きている間は、効力
がない。一八だから、初めの契約も、血を流すことなしに成立したの
ではない。一九すなわち、モーセが、律法に従ってすべての戒めを民
全体に宣言したとき、水と赤色の羊毛とヒソプとの外に、子牛とやぎ
との血を取って、契約書と民全体とにふりかけ、二〇そして、「これ
は、神があなたがたに対して立てられた契約の血である」と言った。
二一彼はまた、幕屋と儀式用の器具いっさいにも、同様に血をふりか
けた。二二こうして、ほとんどすべての物が、律法に従い、血によっ
てきよめられたのである。血を流すことなしには、罪のゆるしはあ
り得ない。

二三このように、天にあるもののひな型は、これらのものできよめ
られる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすぐれたいけ
にえで、きよめられねばならない。二四ところが、キリストは、ほん

とうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらないで、上な
る天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったの
である。二五大祭司は、年ごとに、自分以外のものの血をたずさえて
聖所にはいるが、キリストは、そのように、たびたびご自身をささげ
られるのではなかった。二六もしそうだとすれば、世の初めから、た
びたび苦難を受けねばならなかったであろう。しかし事実、ご自身
をいけにえとしてささげて罪を取り除くために、世の終りに、一度だ
け現れたのである。二七そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さば
きを受けることとが、人間に定まっているように、二八キリストもま
た、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、
彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れ
て、救を与えられるのである。

第一〇章一いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにす
ぎず、そのものの真のかたちをそなえているものではないから、年ご
とに引きつづきささげられる同じようないけにえによっても、みま

えに近づいて来る者たちを、全うすることはできないのである。二も
しできたとすれば、儀式にたずさわる者たちは、一度きよめられた
以上、もはや罪の自覚がなくなるのであるから、ささげ物をすること
がやんだはずではあるまいか。三しかし実際は、年ごとに、いけにえ
によって罪の思い出がよみがえって来るのである。四なぜなら、雄牛
ややぎなどの血は、罪を除き去ることができないからである。五それ
だから、キリストがこの世にこられたとき、次のように言われた、

「あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、
わたしのために、からだを備えて下さった。
六あなたは燔祭や罪祭を好まれなかった。
七その時、わたしは言った、
『神よ、わたしにつき、
巻物の書物に書いてあるとおり、
見よ、御旨を行うためにまいりました』」。

八ここで、初めに、「あなたは、いけにえとささげ物と燔祭と罪祭

と（すなわち、律法に従ってささげられるもの）を望まれず、好まれ
もしなかった」とあり、九次に、「見よ、わたしは御旨を行うために
まいりました」とある。すなわち、彼は、後のものを立てるために、
初めのものを廃止されたのである。一〇この御旨に基きただ一度イエ
ス・キリストのからだがささげられたことによって、わたしたちはき
よめられたのである。
一一こうして、すべての祭司は立って日ごとに儀式を行い、たびた
び同じようないけにえをささげるが、それらは決して罪を除き去る
ことはできない。一二しかるに、キリストは多くの罪のために一つの
永遠のいけにえをささげた後、神の右に座し、一三それから、敵をそ
の足台とするときまで、待っておられる。一四彼は一つのささげ物に
よって、きよめられた者たちを永遠に全うされたのである。一五聖霊
もまた、わたしたちにあかしをして、
一六「わたしが、それらの日の後、
彼らに対して立てようとする契約はこれであると、

　　主が言われる。
　わたしの律法を彼らの心に与え、
　彼らの思いのうちに書きつけよう」
と言い、一七さらに、「もはや、彼らの罪と彼らの不法とを、思い出
すことはしない」と述べている。一八これらのことに対するゆるしが
ある以上、罪のためのささげ物は、もはやあり得ない。
一九兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によっ
て、はばかることなく聖所にはいることができ、二〇彼の肉体なる幕
をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をと
おって、はいって行くことができるのであり、二一さらに、神の家を
治める大いなる祭司があるのだから、二二心はすすがれて良心のとが
めを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に
満たされつつ、みまえに近づこうではないか。二三また、約束をして
下さったのは忠実なかたであるから、わたしたちの告白する望みを、
動くことなくしっかりと持ち続け、二四愛と善行とを励むように互に

努め、二五ある人たちがいつもしているように、集会をやめることは
しないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そ
うしようではないか。
二六もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさ
らに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得な
い。二七ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、
恐れつつ待つことだけがある。二八モーセの律法を無視する者が、あ
われみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せら
れるとすれば、二九神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血
を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い
刑罰に価することであろう。三〇「復讐はわたしのすることである。
わたし自身が報復する」と言われ、また「主はその民をさばかれる」
と言われたかたを、わたしたちは知っている。三一生ける神のみ手の
うちに落ちるのは、恐ろしいことである。
三二あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐

えた初めのころのことを、思い出してほしい。三三そしられ苦しめ
られて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の
仲間にされたこともあった。三四さらに獄に入れられた人々を思いや
り、また、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知って、自分
の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。三五だから、あなたがたは
自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな
報いが伴っているのである。三六神の御旨を行って約束のものを受け
るため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。

三七「もうしばらくすれば、
きたるべきかたがお見えになる。
遅くなることはない。
三八わが義人は、信仰によって生きる。
もし信仰を捨てるなら、
わたしのたましいはこれを喜ばない」。

三九しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に

立って、いのちを得る者である。

第一一章

さて、信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見て
いない事実を確認することである。
二昔の人たちは、この信仰のゆえ
に賞賛された。
三信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉
で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから
出てきたのでないことを、悟るのである。
四信仰によって、アベルは
カインよりもまさったいけにえを神にささげ、信仰によって義なる者
と認められた。神が、彼の供え物をよしとされたからである。彼は
死んだが、信仰によって今もなお語っている。
五信仰によって、エノ
クは死を見ないように天に移された。神がお移しになったので、彼
は見えなくなった。彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかし
されていたからである。
六信仰がなくては、神に喜ばれることはでき
ない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める
者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。
七信仰に
よって、ノアはまだ見ていない事がらについて御告げを受け、恐れか

しこみつつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世
の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった。八信仰
によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこ
うむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。九信仰に
よって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサ
ク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。一〇彼は、ゆるがぬ土台の上に建
てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建
てたのは、神である。一一信仰によって、サラもまた、年老いていた
が、種を宿す力を与えられた。約束をなさったかたは真実であると、
信じていたからである。一二このようにして、ひとりの死んだと同様
な人から、天の星のように、海べの数えがたい砂のように、おびただ
しい人が生れてきたのである。
一三これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは
受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上で
は旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした。一四そう言

いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示し
ている。一五もしその出てきた所のことを考えていたなら、帰る機会
はあったであろう。一六しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと
良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれて
も、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意
されていたのである。
一七信仰によって、アブラハムは、試錬を受けたとき、イサクをさ
さげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげた
のである。一八この子については、「イサクから出る者が、あなたの
子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。一九彼は、神
が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのであ
る。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけであ
る。二〇信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコブ
とエサウとを祝福した。二一信仰によって、ヤコブは死のまぎわに、
ヨセフの子らをひとりびとり祝福し、そしてそのつえのかしらによ

りかかって礼拝した。二二信仰によって、ヨセフはその臨終に、イス
ラエルの子らの出て行くことを思い、自分の骨のことについてさし
ずした。
二三信仰によって、モーセの生れたとき、両親は、三か月のあいだ
彼を隠した。それは、彼らが子供のうるわしいのを見たからである。
彼らはまた、王の命令をも恐れなかった。二四信仰によって、モーセ
は、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、二五罪のは
かない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを
選び、二六キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる
富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。二七信仰
によって、彼は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った。彼は、
見えないかたを見ているようにして、忍びとおした。二八信仰によっ
て、滅ぼす者が、長子らに手を下すことのないように、彼は過越を行
い血を塗った。二九信仰によって、人々は紅海をかわいた土地をとお
るように渡ったが、同じことを企てたエジプト人はおぼれ死んだ。三

○信仰によって、エリコの城壁は、七日にわたってまわったために、
くずれおちた。三一信仰によって、遊女ラハブは、探りにきた者たち
をおだやかに迎えたので、不従順な者どもと一緒に滅びることはな
かった。三二このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サム
ソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すな
ら、時間が足りないであろう。三三彼らは信仰によって、国々を征服
し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、三四火の勢い
を消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者と
なり、他国の軍を退かせた。三五女たちは、その死者たちをよみがえ
らさせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえる
ために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。三
六なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、
投獄されるほどのめに会った。三七あるいは、石で打たれ、さいなま
れ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を
着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、三八（この

世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴と
を、さまよい続けた。
三九さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束
のものは受けなかった。四〇神はわたしたちのために、さらに良いも
のをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにして
は彼らが全うされることはない。

第一二章一こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人
に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、から
みつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え
忍んで走りぬこうではないか。二信仰の導き手であり、またその完成
者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前に
おかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神
の御座の右に座するに至ったのである。三あなたがたは、弱り果てて
意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだか
たのことを、思いみるべきである。四あなたがたは、罪と取り組んで

戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない。五また子たちに
対するように、あなたがたに語られたこの勧めの言葉を忘れている、
「わたしの子よ、
主の訓練を軽んじてはいけない。
主に責められるとき、弱り果ててはならない。
六主は愛する者を訓練し、
受けいれるすべての子を、
むち打たれるのである」。
七あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子と
して取り扱っておられるのである。いったい、父に訓練されない子
があるだろうか。八だれでも受ける訓練が、あなたがたに与えられな
いとすれば、それこそ、あなたがたは私生子であって、ほんとうの子
ではない。九その上、肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼
をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、たましいの父に服従
して、真に生きるべきではないか。一〇肉親の父は、しばらくの間、

自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの
益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。
一一すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲
しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる
者に、平安な義の実を結ばせるようになる。
一二それだから、あなたがたのなえた手と、弱くなっているひざと
を、まっすぐにしなさい。一三また、足のなえている者が踏みはずす
ことなく、むしろいやされるように、あなたがたの足のために、まっ
すぐな道をつくりなさい。一四すべての人と相和し、また、自らきよ
くなるように努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見るこ
とはできない。一五気をつけて、神の恵みからもれることがないよう
に、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多
くの人が汚されることのないようにしなさい。一六また、一杯の食の
ために長子の権利を売ったエサウのように、不品行な俗悪な者にな
らないようにしなさい。一七あなたがたの知っているように、彼はそ

の後、祝福を受け継ごうと願ったけれども、捨てられてしまい、涙を
流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかったのである。
一八あなたがたが近づいているのは、手で触れることができ、火が
燃え、黒雲や暗やみやあらしにつつまれ、一九また、ラッパの響や、聞
いた者たちがそれ以上、耳にしたくないと願ったような言葉がひびい
てきた山ではない。二〇そこでは、彼らは、「けものであっても、山に
触れたら、石で打ち殺されてしまえ」という命令の言葉に、耐えること
ができなかったのである。二一その光景が恐ろしかったので、モーセさ
えも、「わたしは恐ろしさのあまり、おののいている」と言ったほど
である。二二しかしあなたがたが近づいているのは、シオンの山、生
ける神の都、天にあるエルサレム、無数の天使の祝会、二三天に登録
されている長子たちの教会、万民の審判者なる神、全うされた義人
の霊、二四新しい契約の仲保者イエス、ならびに、アベルの血よりも
力強く語るそそがれた血である。二五あなたがたは、語っておられる
かたを拒むことがないように、注意しなさい。もし地上で御旨を告

げた者を拒んだ人々が、罰をのがれることができなかったなら、天か
ら告げ示すかたを退けるわたしたちは、なおさらそうなるのではな
いか。二六あの時には、御声が地を震わせた。しかし今は、約束して
言われた、「わたしはもう一度、地ばかりでなく天をも震わそう」。二
七この「もう一度」という言葉は、震われないものが残るために、震
われるものが、造られたものとして取り除かれることを示している。
二八このように、わたしたちは震われない国を受けているのだから、
感謝をしようではないか。そして感謝しつつ、恐れかしこみ、神に喜
ばれるように、仕えていこう。二九わたしたちの神は、実に、焼きつ
くす火である。

第一三章
一兄弟愛を続けなさい。二旅人をもてなすことを忘れては
ならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使たちを
もてなした。三獄につながれている人たちを、自分も一緒につながれ
ている心持で思いやりなさい。また、自分も同じ肉体にある者だか
ら、苦しめられている人たちのことを、心にとめなさい。四すべての

人は、結婚を重んずべきである。また寝床を汚してはならない。神
は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる。五金銭を愛することを
しないで、自分の持っているもので満足しなさい。主は、「わたしは、
決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われた。六だから、
わたしたちは、はばからずに言おう、

「主はわたしの助け主である。
わたしには恐れはない。
人は、わたしに何ができようか」。

七神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起
しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。八イ
エス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがな
い。九さまざまな違った教によって、迷わされてはならない。食物に
よらず、恵みによって、心を強くするがよい。食物によって歩いた
者は、益を得ることがなかった。一〇わたしたちには一つの祭壇があ
る。幕屋で仕えている者たちは、その祭壇の食物をたべる権利はな

い。一一なぜなら、大祭司によって罪のためにささげられるけものの
血は、聖所のなかに携えて行かれるが、そのからだは、営所の外で
焼かれてしまうからである。一二だから、イエスもまた、ご自分の血
で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。一三し
たがって、わたしたちも、彼のはずかしめを身に負い、営所の外に
出て、みもとに行こうではないか。一四この地上には、永遠の都はな
い。きたらんとする都こそ、わたしたちの求めているものである。一
五だから、わたしたちはイエスによって、さんびのいけにえ、すなわ
ち、彼の御名をたたえるくちびるの実を、たえず神にささげようでは
ないか。一六そして、善を行うことと施しをすることとを、忘れては
いけない。神は、このようないけにえを喜ばれる。一七あなたがたの
指導者たちの言うことを聞きいれて、従いなさい。彼らは、神に言い
ひらきをすべき者として、あなたがたのたましいのために、目をさま
している。彼らが嘆かないで、喜んでこのことをするようにしなさ
い。そうでないと、あなたがたの益にならない。

一八わたしたちのために、祈ってほしい。わたしたちは明らかな
良心を持っていると信じており、何事についても、正しく行動しよう
と願っている。一九わたしがあなたがたの所に早く帰れるため、祈っ
てくれるように、特にお願いする。
二〇永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、
死人の中から引き上げられた平和の神が、二一イエス・キリストによっ
て、みこころにかなうことをわたしたちにして下さり、あなたがたが
御旨を行うために、すべての良きものを備えて下さるようにこい願
う。栄光が、世々限りなく神にあるように、アァメン。
二二兄弟たちよ。どうかわたしの勧めの言葉を受けいれてほしい。
わたしは、ただ手みじかに書いたのだから。二三わたしたちの兄弟テ
モテがゆるされたことを、お知らせする。もし彼が早く来れば、彼と
一緒にわたしはあなたがたに会えるだろう。
二四あなたがたの指導者一同と聖徒たち一同に、よろしく伝えてほ
しい。イタリヤからきた人々から、あなたがたによろしく。

二五 恵みが、あなたがた一同にあるように。

ヤコブの手紙

第一章一神と主イエス・キリストとの僕ヤコブから、離散している
十二部族の人々へ、あいさつをおくる。
二わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試錬に会った
場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。三あなたがた
の知っているとおり、信仰がためされることによって、忍耐が生み
出されるからである。四だから、なんら欠点のない、完全な、でき上
がった人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい。
五あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、
とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるが
よい。そうすれば、与えられるであろう。六ただ、疑わないで、信仰
をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の

波に似ている。七そういう人は、主から何かをいただけるもののよう
に思うべきではない。八そんな人間は、二心の者であって、そのすべ
ての行動に安定がない。
九低い身分の兄弟は、自分が高くされたことを喜びなさい。一〇ま
た、富んでいる者は、自分が低くされたことを喜ぶがよい。富んで
いる者は、草花のように過ぎ去るからである。一一たとえば、太陽が
上って熱風をおくると、草を枯らす。そしてその花は落ち、その美し
い姿は消えうせてしまう。それと同じように、富んでいる者も、その
一生の旅なかばで没落するであろう。
一二試錬を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたな
ら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。一
三だれでも誘惑に会う場合、「この誘惑は、神からきたものだ」と言っ
てはならない。神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら
進んで人を誘惑することもなさらない。一四人が誘惑に陥るのは、そ
れぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。一五欲がはらんで罪を

生み、罪が熟して死を生み出す。一六愛する兄弟たちよ。思い違いを
してはいけない。
一七あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父か
ら下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない。一八
父は、わたしたちを、いわば被造物の初穂とするために、真理の言葉
によって御旨のままに、生み出して下さったのである。
一九愛する兄弟たちよ。このことを知っておきなさい。人はすべて、
聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである。二〇人の
怒りは、神の義を全うするものではないからである。二一だから、す
べての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられてい
る御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたのたまし
いを救う力がある。二二そして、御言を行う人になりなさい。おのれ
を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけない。二三おおよそ御言
を聞くだけで行わない人は、ちょうど、自分の生れつきの顔を鏡に映
して見る人のようである。二四彼は自分を映して見てそこから立ち去

ると、そのとたんに、自分の姿がどんなであったかを忘れてしまう。
二五これに反して、完全な自由の律法を一心に見つめてたゆまない人
は、聞いて忘れてしまう人ではなくて、実際に行う人である。こうい
う人は、その行いによって祝福される。
二六もし人が信心深い者だと自任しながら、舌を制することをせず、
自分の心を欺いているならば、その人の信心はむなしいものである。
二七父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、
やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほ
かならない。

第二章一わたしの兄弟たちよ。わたしたちの栄光の主イエス・キリ
ストへの信仰を守るのに、分け隔てをしてはならない。二たとえば、
あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな着物を着た人がは
いって来ると同時に、みすぼらしい着物を着た貧しい人がはいってき
たとする。三その際、りっぱな着物を着た人に対しては、うやうやし
く「どうぞ、こちらの良い席にお掛け下さい」と言い、貧しい人には、

「あなたは、そこに立っていなさい。それとも、わたしの足もとにす
わっているがよい」と言ったとしたら、四あなたがたは、自分たちの
間で差別立てをし、よからぬ考えで人をさばく者になったわけではな
いか。五愛する兄弟たちよ。よく聞きなさい。神は、この世の貧しい
人たちを選んで信仰に富ませ、神を愛する者たちに約束された御国
の相続者とされたではないか。六しかるに、あなたがたは貧しい人を
はずかしめたのである。あなたがたをしいたげ、裁判所に引きずり
込むのは、富んでいる者たちではないか。七あなたがたに対して唱え
られた尊い御名を汚すのは、実に彼らではないか。八しかし、もしあ
なたがたが、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」とい
う聖書の言葉に従って、このきわめて尊い律法を守るならば、それは
良いことである。九しかし、もし分け隔てをするならば、あなたがた
は罪を犯すことになり、律法によって違反者として宣告される。一〇
なぜなら、律法をことごとく守ったとしても、その一つの点にでも落
ち度があれば、全体を犯したことになるからである。一一たとえば、

「姦淫するな」と言われたかたは、また「殺すな」とも仰せになった。
そこで、たとい姦淫はしなくても、人殺しをすれば、律法の違反者
になったことになる。一二だから、自由の律法によってさばかるべき
者らしく語り、かつ行いなさい。一三あわれみを行わなかった者に対
しては、仮借のないさばきが下される。あわれみは、さばきにうち
勝つ。

一四わたしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称してい
ても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を
救うことができるか。一五ある兄弟または姉妹が裸でいて、その日の
食物にもこと欠いている場合、一六あなたがたのうち、だれかが、「安
らかに行きなさい。暖まって、食べ飽きなさい」と言うだけで、そ
のからだに必要なものを何ひとつ与えなかったとしたら、なんの役
に立つか。一七信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだ
けでは死んだものである。一八しかし、「ある人には信仰があり、ま
たほかの人には行いがある」と言う者があろう。それなら、行いの

ないあなたの信仰なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの
行いによって信仰を見せてあげよう。一九あなたは、神はただひとり
であると信じているのか。それは結構である。悪霊どもでさえ、信
じておののいている。二〇ああ、愚かな人よ。行いを伴わない信仰の
むなしいことを知りたいのか。二一わたしたちの父祖アブラハムは、
その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義とされたのでは
なかったか。二二あなたが知っているとおり、彼においては、信仰が
行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ、二三こうして、
「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」と
いう聖書の言葉が成就し、そして、彼は「神の友」と唱えられたので
ある。二四これでわかるように、人が義とされるのは、行いによるの
であって、信仰だけによるのではない。二五同じように、かの遊女ラ
ハブでさえも、使者たちをもてなし、彼らを別な道から送り出した
時、行いによって義とされたではないか。二六霊魂のないからだが死
んだものであると同様に、行いのない信仰も死んだものなのである。

第三章一わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち多くの者は、教師
にならないがよい。わたしたち教師が、他の人たちよりも、もっと
きびしいさばきを受けることが、よくわかっているからである。二わ
たしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである。もし、言葉の上
であやまちのない人があれば、そういう人は、全身をも制御するこ
とのできる完全な人である。三馬を御するために、その口にくつわを
はめるなら、その全身を引きまわすことができる。四また船を見るが
よい。船体が非常に大きく、また激しい風に吹きまくられても、ご
く小さなかじ一つで、操縦者の思いのままに運転される。五それと同
じく、舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小
さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか。六舌は火である。
不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえら
れたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の
火で焼かれる。七あらゆる種類の獣、鳥、這うもの、海の生物は、す
べて人類に制せられるし、また制せられてきた。八ところが、舌を制

しうる人は、ひとりもいない。それは、制しにくい悪であって、死の
毒に満ちている。九わたしたちは、この舌で父なる主をさんびし、ま
た、その同じ舌で、神にかたどって造られた人間をのろっている。一
〇同じ口から、さんびとのろいとが出て来る。わたしの兄弟たちよ。
このような事は、あるべきでない。一一泉が、甘い水と苦い水とを、
同じ穴からふき出すことがあろうか。一二わたしの兄弟たちよ。いち
じくの木がオリブの実を結び、ぶどうの木がいちじくの実を結ぶこ
とができようか。塩水も、甘い水を出すことはできない。

一三あなたがたのうちで、知恵があり物わかりのよい人は、だれで
あるか。その人は、知恵にかなう柔和な行いをしていることを、よい
生活によって示すがよい。一四しかし、もしあなたがたの心の中に、
苦々しいねたみや党派心をいだいているのなら、誇り高ぶってはなら
ない。また、真理にそむいて偽ってはならない。一五そのような知恵
は、上から下ってきたものではなくて、地につくもの、肉に属するも
の、悪魔的なものである。一六ねたみと党派心とのあるところには、

混乱とあらゆる忌むべき行為とがある。一七しかし上からの知恵は、
第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満
ち、かたより見ず、偽りがない。一八義の実は、平和を造り出す人た
ちによって、平和のうちにまかれるものである。

第四章一あなたがたの中の戦いや争いは、いったい、どこから起る
のか。それはほかではない。あなたがたの肢体の中で相戦う欲情か
らではないか。二あなたがたは、むさぼるが得られない。そこで人殺
しをする。熱望するが手に入れることができない。そこで争い戦う。
あなたがたは、求めないから得られないのだ。三求めても与えられ
ないのは、快楽のために使おうとして、悪い求め方をするからだ。四
不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知ら
ないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするの
である。五それとも、「神は、わたしたちの内に住まわせた霊を、ね
たむほどに愛しておられる」と聖書に書いてあるのは、むなしい言葉
だと思うのか。六しかし神は、いや増しに恵みを賜う。であるから、

「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」とある。七
そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかい
なさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。八神に
近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであ
ろう。罪人どもよ、手をきよめよ。二心の者どもよ、心を清くせよ。
九苦しめ、悲しめ、泣け。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂い
に変えよ。一〇主のみまえにへりくだれ。そうすれば、主は、あなた
がたを高くして下さるであろう。

一一兄弟たちよ。互に悪口を言い合ってはならない。兄弟の悪口を
言ったり、自分の兄弟をさばいたりする者は、律法をそしり、律法をさ
ばくやからである。もしあなたが律法をさばくなら、律法の実行者で
はなくて、その審判者なのである。一二しかし、立法者であり審判者
であるかたは、ただひとりであって、救うことも滅ぼすこともできる
のである。しかるに、隣り人をさばくあなたは、いったい、何者であ
るか。

一三よく聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町へ行き、そ
こに一か年滞在し、商売をして一もうけしよう」と言う者たちよ。一
四あなたがたは、あすのこともわからぬ身なのだ。あなたがたのいの
ちは、どんなものであるか。あなたがたは、しばしの間あらわれて、
たちまち消え行く霧にすぎない。一五むしろ、あなたがたは「主のみ
こころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事この事もしよ
う」と言うべきである。一六ところが、あなたがたは誇り高ぶってい
る。このような高慢は、すべて悪である。一七人が、なすべき善を知
りながら行わなければ、それは彼にとって罪である。

第五章一富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。あなたがたは、自分
の身に降りかかろうとしているわざわいを思って、泣き叫ぶがよい。
二あなたがたの富は朽ち果て、着物はむしばまれ、三金銀はさびてい
る。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがた
の肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、終りの時に
いるのに、なお宝をたくわえている。四見よ、あなたがたが労働者た

ちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。
そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達し
ている。五あなたがたは、地上でおごり暮し、快楽にふけり、「ほふ
らるる日」のために、おのが心を肥やしている。六そして、義人を罪
に定め、これを殺した。しかも彼は、あなたがたに抵抗しない。
七だから、兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、
農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍ん
で待っている。八あなたがたも、主の来臨が近づいているから、耐え
忍びなさい。心を強くしていなさい。九兄弟たちよ。互に不平を言い
合ってはならない。さばきを受けるかも知れないから。見よ、さば
き主が、すでに戸口に立っておられる。一〇兄弟たちよ。苦しみを耐
え忍ぶことについては、主の御名によって語った預言者たちを模範
にするがよい。一一忍び抜いた人たちはさいわいであると、わたした
ちは思う。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いている。また、主
が彼になさったことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみとに

富んだかたであるかが、わかるはずである。
一二さて、わたしの兄弟たちよ。何はともあれ、誓いをしてはなら
ない。天をさしても、地をさしても、あるいは、そのほかのどんな
誓いによっても、いっさい誓ってはならない。むしろ、「しかり」を
「しかり」とし、「否」を「否」としなさい。そうしないと、あなたが
たは、さばきを受けることになる。
一三あなたがたの中に、苦しんでいる者があるか。その人は、祈る
がよい。喜んでいる者があるか。その人は、さんびするがよい。一四
あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老た
ちを招き、主の御名によって、オリブ油を注いで祈ってもらうがよい。
一五信仰による祈は、病んでいる人を救い、そして、主はその人を立
ちあがらせて下さる。かつ、その人が罪を犯していたなら、それもゆ
るされる。一六だから、互に罪を告白し合い、また、いやされるよう
にお互のために祈りなさい。義人の祈は、大いに力があり、効果のあ
るものである。一七エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨

が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上
に雨が降らなかった。一八それから、ふたたび祈ったところ、天は雨
を降らせ、地はその実をみのらせた。
一九わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち、真理の道から踏み迷
う者があり、だれかが彼を引きもどすなら、二〇かように罪人を迷い
の道から引きもどす人は、そのたましいを死から救い出し、かつ、多
くの罪をおおうものであることを、知るべきである。

ペテロの第一の手紙

第一章 一イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、
カパドキヤ、アジヤおよびビテニヤに離散し寄留している人たち、二
すなわち、イエス・キリストに従い、かつ、その血のそそぎを受ける
ために、父なる神の予知されたところによって選ばれ、御霊のきよめ
にあずかっている人たちへ。
　恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。
三ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神
は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中から
よみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける
望みをいだかせ、四あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず
汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのであ

る。五あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、
信仰により神の御力に守られているのである。六そのことを思って、
今しばらくのあいだは、さまざまな試錬で悩まねばならないかも知
れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。七こうして、あなたがた
の信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもは
るかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さ
んびと栄光とほまれとに変るであろう。八あなたがたは、イエス・キ
リストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいない
けれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれ
ている。九それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからであ
る。一〇この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言し
た預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。一一彼らは、
自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに
続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな
場合をさしたのかを、調べたのである。一二そして、それらについて

調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕で
あることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感
じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがた
に告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たい
と願っている事である。
一三それだから、心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリスト
の現れる時に与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望んでい
なさい。一四従順な子供として、無知であった時代の欲情に従わず、
一五むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あ
なたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。一六
聖書に、「わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者にな
るべきである」と書いてあるからである。一七あなたがたは、人をそ
れぞれのしわざに応じて、公平にさばくかたを、父と呼んでいるから
には、地上に宿っている間を、おそれの心をもって過ごすべきであ
る。一八あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来

の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物に
よったのではなく、一九きずも、しみもない小羊のようなキリストの
尊い血によったのである。二〇キリストは、天地が造られる前から、
あらかじめ知られていたのであるが、この終りの時に至って、あな
たがたのために現れたのである。二一あなたがたは、このキリストに
よって、彼を死人の中からよみがえらせて、栄光をお与えになった神
を信じる者となったのであり、したがって、あなたがたの信仰と望み
とは、神にかかっているのである。

二二あなたがたは、真理に従うことによって、たましいをきよめ、
偽りのない兄弟愛をいだくに至ったのであるから、互に心から熱く
愛し合いなさい。二三あなたがたが新たに生れたのは、朽ちる種から
ではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変ることのない生ける
御言によったのである。

二四「人はみな草のごとく、
その栄華はみな草の花に似ている。

草は枯れ、
花は散る。
しかし、主の言葉は、とこしえに残る」。
二五これが、あなたがたに宣べ伝えられた御言葉である。

第二章一だから、あらゆる悪意、あらゆる偽り、偽善、そねみ、いっ
さいの悪口を捨てて、二今生れたばかりの乳飲み子のように、混じり
けのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救に入
るようになるためである。三あなたがたは、主が恵み深いかたである
ことを、すでに味わい知ったはずである。四主は、人には捨てられた
が、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。五この主のみもとに
きて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げ
られ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によろこば
れる霊のいけにえを、ささげなさい。六聖書にこう書いてある、
「見よ、わたしはシオンに、
選ばれた尊い石、隅のかしら石を置く。

それにより頼む者は、
決して、失望に終ることがない」。
七この石は、より頼んでいるあなたがたには尊いものであるが、不
信仰な人々には「家造りらの捨てた石で、隅のかしら石となったも
の」、八また「つまずきの石、妨げの岩」である。しかし、彼らがつ
まずくのは、御言に従わないからであって、彼らは、実は、そうなる
ように定められていたのである。九しかし、あなたがたは、選ばれた
種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、
暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あ
なたがたが語り伝えるためである。一〇あなたがたは、以前は神の民
でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたこと
のない者であったが、いまは、あわれみを受けた者となっている。
一一愛する者たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたは、この世
の旅人であり寄留者であるから、たましいに戦いをいどむ肉の欲を
避けなさい。一二異邦人の中にあって、りっぱな行いをしなさい。そ

うすれば、彼らは、あなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたが
たのりっぱなわざを見て、かえって、おとずれの日に神をあがめるよ
うになろう。
一三あなたがたは、すべて人の立てた制度に、主のゆえに従いなさ
い。主権者としての王であろうと、一四あるいは、悪を行う者を罰し善
を行う者を賞するために、王からつかわされた長官であろうと、これ
に従いなさい。一五善を行うことによって、愚かな人々の無知な発言
を封じるのは、神の御旨なのである。一六自由人にふさわしく行動し
なさい。ただし、自由をば悪を行う口実として用いず、神の僕にふさ
わしく行動しなさい。一七すべての人をうやまい、兄弟たちを愛し、
神をおそれ、王を尊びなさい。
一八僕たる者よ。心からのおそれをもって、主人に仕えなさい。善良
で寛容な主人だけにでなく、気むずかしい主人にも、そうしなさい。
一九もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を
耐え忍ぶなら、それはよみせられることである。二〇悪いことをして

打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しか
し善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、
これこそ神によみせられることである。二一あなたがたは、実に、そ
うするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために
苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのであ
る。二二キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。二三の
のしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすこと
をせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。
二四さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にか
かって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、
あなたがたは、いやされたのである。二五あなたがたは、羊のように
さ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもと
に、たち帰ったのである。

第三章 一同じように、妻たる者よ。夫に仕えなさい。そうすれば、
たとい御言に従わない夫であっても、二あなたがたのうやうやしく清

い行いを見て、その妻の無言の行いによって、救に入れられるよう
になるであろう。三あなたがたは、髪を編み、金の飾りをつけ、服装
をととのえるような外面の飾りではなく、四かくれた内なる人、柔和
で、しとやかな霊という朽ちることのない飾りを、身につけるべき
である。これこそ、神のみまえに、きわめて尊いものである。五むか
し、神を仰ぎ望んでいた聖なる女たちも、このように身を飾って、そ
の夫に仕えたのである。六たとえば、サラはアブラハムに仕えて、彼
を主と呼んだ。あなたがたも、何事にもおびえ臆することなく善を
行えば、サラの娘たちとなるのである。

七夫たる者よ。あなたがたも同じように、女は自分よりも弱い器で
あることを認めて、知識に従って妻と共に住み、いのちの恵みを共ど
もに受け継ぐ者として、尊びなさい。それは、あなたがたの祈が妨げ
られないためである。

八最後に言う。あなたがたは皆、心をひとつにし、同情し合い、兄弟
愛をもち、あわれみ深くあり、謙虚でありなさい。九悪をもって悪に

報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報いな
さい。あなたがたが召されたのは、祝福を受け継ぐためなのである。
一〇「いのちを愛し、
さいわいな日々を過ごそうと願う人は、
舌を制して悪を言わず、
くちびるを閉じて偽りを語らず、
一一悪を避けて善を行い、
平和を求めて、これを追え。
一二主の目は義人たちに注がれ、
主の耳は彼らの祈にかたむく。
しかし主の御顔は、悪を行う者に対して向かう」。
一三そこで、もしあなたがたが善に熱心であれば、だれが、あなた
がたに危害を加えようか。一四しかし、万一義のために苦しむような
ことがあっても、あなたがたはさいわいである。彼らを恐れたり、心
を乱したりしてはならない。一五ただ、心の中でキリストを主とあが

めなさい。また、あなたがたのうちにある望みについて説明を求め
る人には、いつでも弁明のできる用意をしていなさい。一六しかし、
やさしく、慎み深く、明らかな良心をもって、弁明しなさい。そう
すれば、あなたがたがキリストにあって営んでいる良い生活をそし
る人々も、そのようにののしったことを恥じいるであろう。一七善を
おこなって苦しむことは――それが神の御旨であれば――悪をおこ
なって苦しむよりも、まさっている。一八キリストも、あなたがたを
神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々
のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺
されたが、霊においては生かされたのである。一九こうして、彼は獄
に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをさ
れた。二〇これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた
間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものこ
とである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八
名だけであった。二一この水はバプテスマを象徴するものであって、

今やあなたがたをも救うのである。それは、イエス・キリストの復活
によるのであって、からだの汚れを除くことではなく、明らかな良心
を神に願い求めることである。二二キリストは天に上って神の右に座
し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられるのである。
第四章一このように、キリストは肉において苦しまれたのであるか
ら、あなたがたも同じ覚悟で心の武装をしなさい。肉において苦しん
だ人は、それによって罪からのがれたのである。二それは、肉におけ
る残りの生涯を、もはや人間の欲情によらず、神の御旨によって過ご
すためである。三過ぎ去った時代には、あなたがたは、異邦人の好み
にまかせて、好色、欲情、酔酒、宴楽、暴飲、気ままな偶像礼拝など
にふけってきたが、もうそれで十分であろう。四今はあなたがたが、
そうした度を過ごした乱行に加わらないので、彼らは驚きあやしみ、
かつ、ののしっている。五彼らは、やがて生ける者と死ねる者とをさ
ばくかたに、申し開きをしなくてはならない。六死人にさえ福音が宣
べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受ける

が、霊においては神に従って生きるようになるためである。
七 万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎ん
で、努めて祈りなさい。八 何よりもまず、互の愛を熱く保ちなさい。
愛は多くの罪をおおうものである。九 不平を言わずに、互にもてなし
合いなさい。一〇 あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだ
から、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互のために
役立てるべきである。一一 語る者は、神の御言を語る者にふさわしく
語り、奉仕する者は、神から賜わる力による者にふさわしく奉仕すべ
きである。それは、すべてのことにおいてイエス・キリストによっ
て、神があがめられるためである。栄光と力とが世々限りなく、彼に
あるように、アァメン。

一二 愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る
火のような試錬を、何か思いがけないことが起ったかのように驚き
あやしむことなく、一三 むしろ、キリストの苦しみにあずかればあず
かるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろ

こびにあふれるためである。一四キリストの名のためにそしられるな
ら、あなたがたはさいわいである。その時には、栄光の霊、神の霊
が、あなたがたに宿るからである。一五あなたがたのうち、だれも、
人殺し、盗人、悪を行う者、あるいは、他人に干渉する者として苦し
みに会うことのないようにしなさい。一六しかし、クリスチャンとし
て苦しみを受けるのであれば、恥じることはない。かえって、この名
によって神をあがめなさい。一七さばきが神の家から始められる時が
きた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に
従わない人々の行く末は、どんなであろうか。一八また義人でさえ、
かろうじて救われるのだとすれば、不信なる者や罪人は、どうなるで
あろうか。一九だから、神の御旨に従って苦しみを受ける人々は、善
をおこない、そして、真実であられる創造者に、自分のたましいをゆ
だねるがよい。

第五章 一そこで、あなたがたのうちの長老たちに勧める。わたし
も、長老のひとりで、キリストの苦難についての証人であり、また、

やがて現れようとする栄光にあずかる者である。二あなたがたにゆだ
ねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではな
く、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心
から、それをしなさい。三また、ゆだねられた者たちの上に権力をふ
るうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。四そう
すれば、大牧者が現れる時には、しぼむことのない栄光の冠を受け
るであろう。五同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。
また、みな互に謙遜を身につけなさい。神は高ぶる者をしりぞけ、へ
りくだる者に恵みを賜うからである。
六だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしな
さい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。七神は
あなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずら
いを、いっさい神にゆだねるがよい。八身を慎み、目をさましていな
さい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い
つくすべきものを求めて歩き回っている。九この悪魔にむかい、信仰

にかたく立って、抵抗しなさい。あなたがたのよく知っているとお
り、全世界にいるあなたがたの兄弟たちも、同じような苦しみの数々
に会っているのである。一〇あなたがたをキリストにある永遠の栄光
に招き入れて下さったあふるる恵みの神は、しばらくの苦しみの後、
あなたがたをいやし、強め、力づけ、不動のものとして下さるであろ
う。一一どうか、力が世々限りなく、神にあるように、アァメン。
一二わたしは、忠実な兄弟として信頼しているシルワノの手によっ
て、この短い手紙をあなたがたにおくり、勧めをし、また、これが
神のまことの恵みであることをあかしした。この恵みのうちに、か
たく立っていなさい。一三あなたがたと共に選ばれてバビロンにある
教会、ならびに、わたしの子マルコから、あなたがたによろしく。一
四愛の接吻をもって互にあいさつをかわしなさい。

キリストにあるあなたがた一同に、平安があるように。

ペテロの第二の手紙

第一章一イエス・キリストの僕また使徒であるシメオン・ペテロか
ら、わたしたちの神と救主イエス・キリストとの義によって、わたし
たちと同じ尊い信仰を授かった人々へ。
二神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安と
が、あなたがたに豊かに加わるように。
三いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力
によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳
とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである。
四また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたち
に与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅
びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである。五それだ

から、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を
加え、徳に知識を、六知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、
七信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。八これらのものがあな
たがたに備わって、いよいよ豊かになるならば、わたしたちの主イエ
ス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ば
ない者となることはないであろう。九これらのものを備えていない者
は、盲人であり、近視の者であり、自分の以前の罪がきよめられたこ
とを忘れている者である。一〇兄弟たちよ。それだから、ますます励
んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。
そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。一一こうして、わた
したちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あな
たがたに豊かに与えられるからである。

一二それだから、あなたがたは既にこれらのことを知っており、ま
た、いま持っている真理に堅く立ってはいるが、わたしは、これらの
ことをいつも、あなたがたに思い起させたいのである。一三わたしが

この幕屋にいる間、あなたがたに思い起させて、奮い立たせることが
適当と思う。一四それは、わたしたちの主イエス・キリストもわたし
に示して下さったように、わたしのこの幕屋を脱ぎ去る時が間近であ
ることを知っているからである。一五わたしが世を去った後にも、こ
れらのことを、あなたがたにいつも思い出させるように努めよう。一
六わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知
らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。
わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。一七イエスは
父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそ
かな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわた
しの愛する子、わたしの心にかなう者である」。一八わたしたちもイ
エスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。一
九こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになっ
た。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中
を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに

目をとめているがよい。二〇聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈す
べきでないことを、まず第一に知るべきである。二一なぜなら、預言
は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神に
よって語ったものだからである。

第二章一しかし、民の間に、にせ預言者が起ったことがあるが、そ
れと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼ら
は、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって
下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている。二
また、大ぜいの人が彼らの放縦を見習い、そのために、真理の道がそ
しりを受けるに至るのである。三彼らは、貪欲のために、甘言をもっ
てあなたがたをあざむき、利をむさぼるであろう。彼らに対するさば
きは昔から猶予なく行われ、彼らの滅亡も滞ることはない。四神は、
罪を犯した御使たちを許しておかないで、彼らを下界におとしいれ、
さばきの時まで暗やみの穴に閉じ込めておかれた。五また、古い世界
をそのままにしておかないで、その不信仰な世界に洪水をきたらせ、

ただ、義の宣伝者ノアたち八人の者だけを保護された。六また、ソド
ムとゴモラの町々を灰に帰せしめて破滅に処し、不信仰に走ろうと
する人々の見せしめとし、七ただ、非道の者どもの放縦な行いによっ
てなやまされていた義人ロトだけを救い出された。八（この義人は、
彼らの間に住み、彼らの不法の行いを日々見聞きして、その正しい
心を痛めていたのである。）九こういうわけで、主は、信心深い者を
試錬の中から救い出し、また、不義な者ども、一〇特に、汚れた情欲
におぼれ肉にしたがって歩み、また、権威ある者を軽んじる人々を罰
して、さばきの日まで閉じ込めておくべきことを、よくご存じなので
ある。こういう人々は、大胆不敵なわがまま者であって、栄光ある者
たちをそしってはばかるところがない。一一しかし、御使たちは、勢
いにおいても力においても、彼らにまさっているにかかわらず、彼ら
を主のみまえに訴えそしることはしない。一二これらの者は、捕えら
れ、ほふられるために生れてきた、分別のない動物のようなもので、
自分が知りもしないことをそしり、その不義の報いとして罰を受け、

必ず滅ぼされてしまうのである。一三彼らは、真昼でさえ酒食を楽し
み、あなたがたと宴会に同席して、だましごとにふけっている。彼ら
は、しみであり、きずである。一四その目は淫行を追い、罪を犯して
飽くことを知らない。彼らは心の定まらない者を誘惑し、その心は
貪欲に慣れ、のろいの子となっている。一五彼らは正しい道からはず
れて迷いに陥り、ベオルの子バラムの道に従った。バラムは不義の実
を愛し、一六そのために、自分のあやまちに対するとがめを受けた。
ものを言わないろばが、人間の声でものを言い、この預言者の狂気じ
みたふるまいをはばんだのである。一七この人々は、いわば、水のな
い井戸、突風に吹きはらわれる霧であって、彼らには暗やみが用意さ
れている。一八彼らはむなしい誇を語り、迷いの中に生きている人々
の間から、かろうじてのがれてきた者たちを、肉欲と色情とによっ
て誘惑し、一九この人々に自由を与えると約束しながら、彼ら自身は
滅亡の奴隷になっている。おおよそ、人は征服者の奴隷となるもの
である。二〇彼らが、主また救主なるイエス・キリストを知ることに

より、この世の汚れからのがれた後、またそれに巻き込まれて征服さ
れるならば、彼らの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる。
二一
義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒めにそむくより
は、むしろ義の道を知らなかった方がよい。
二二
ことわざに、「犬は
自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中にころがっ
て行く」とあるが、彼らの身に起ったことは、そのとおりである。

第三章
一
愛する者たちよ。わたしは今この第二の手紙をあなたがた
に書きおくり、これらの手紙によって記憶を呼び起し、あなたがたの
純真な心を奮い立たせようとした。
二
それは、聖なる預言者たちがあ
らかじめ語った言葉と、あなたがたの使徒たちが伝えた主なる救主
の戒めとを、思い出させるためである。
三
まず次のことを知るべきで
ある。終りの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分
の欲情のままに生活し、
四
「主の来臨の約束はどうなったのか。先祖
たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからその
ままであって、変ってはいない」と言うであろう。
五
すなわち、彼ら

はこのことを認めようとはしない。古い昔に天が存在し、地は神の
言によって、水がもとになり、また、水によって成ったのであるが、
六その時の世界は、御言により水でおおわれて滅んでしまった。七し
かし、今の天と地とは、同じ御言によって保存され、不信仰な人々が
さばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれて
いるのである。

八愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、
一日は千年のようであり、千年は一日のようである。九ある人々がお
そいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるの
ではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに
至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのであ
る。一〇しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天
は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り
出されたものも、みな焼きつくされるであろう。一一このように、こ
れらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心

に待ち望んでいるあなたがたは、一二極力、きよく信心深い行いをし
ていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けう
せてしまう。一三しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住
む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。
一四愛する者たちよ。それだから、この日を待っているあなたがた
は、しみもなく、きずもなく、安らかな心で、神のみまえに出られるよ
うに励みなさい。一五また、わたしたちの主の寛容は救のためである
と思いなさい。このことは、わたしたちの愛する兄弟パウロが、彼に
与えられた知恵によって、あなたがたに書きおくったとおりである。
一六彼は、どの手紙にもこれらのことを述べている。その手紙の中に
は、ところどころ、わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらな
い者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈を
ほどこして、自分の滅亡を招いている。一七愛する者たちよ。それだ
から、あなたがたはかねてから心がけているように、非道の者の惑
わしに誘い込まれて、あなたがた自身の確信を失うことのないよう

に心がけなさい。 一八そして、わたしたちの主また救主イエス・キリ
ストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい。栄光が、
今も、また永遠の日に至るまでも、主にあるように、アァメン。

ヨハネの第一の手紙

第一章一初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見た
もの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について
――二このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見
て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。こ
の永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れた
ものである――三すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、
あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの
交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、
父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。四これを
書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。
五わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれ

は、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。
六神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いている
なら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているので
はない。七しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中
を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエス
の血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。八もし、罪
がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたした
ちのうちにない。九もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、
神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義か
らわたしたちをきよめて下さる。一〇もし、罪を犯したことがないと
言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたち
のうちにない。

第二章一わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あな
たがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があ
れば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義な

るイエス・キリストがおられる。二彼は、わたしたちの罪のための、
あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりでは
なく、全世界の罪のためである。三もし、わたしたちが彼の戒めを守
るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。四「彼
を知っている」と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者で
あって、真理はその人のうちにない。五しかし、彼の御言を守る者が
あれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それに
よって、わたしたちが彼にあることを知るのである。六「彼におる」
と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである。
七愛する者たちよ。わたしがあなたがたに書きおくるのは、新しい
戒めではなく、あなたがたが初めから受けていた古い戒めである。そ
の古い戒めとは、あなたがたがすでに聞いた御言である。八しかも、
新しい戒めを、あなたがたに書きおくるのである。そして、それは、
彼にとってもあなたがたにとっても、真理なのである。なぜなら、や
みは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。九「光の

中にいる」と言いながら、その兄弟を憎む者は、今なお、やみの中に
いるのである。一〇兄弟を愛する者は、光におるのであって、つまず
くことはない。一一兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩
くのであって、自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目
を見えなくしたからである。
一二子たちよ。あなたがたにこれを書きおくるのは、御名のゆえに、
あなたがたの多くの罪がゆるされたからである。一三父たちよ。あな
たがたに書きおくるのは、あなたがたが、初めからいますかたを知っ
たからである。若者たちよ。あなたがたに書きおくるのは、あなた
がたが、悪しき者にうち勝ったからである。一四子供たちよ。あなた
がたに書きおくったのは、あなたがたが父を知ったからである。父
たちよ。あなたがたに書きおくったのは、あなたがたが、初めから
いますかたを知ったからである。若者たちよ。あなたがたに書きお
くったのは、あなたがたが強い者であり、神の言があなたがたに宿
り、そして、あなたがたが悪しき者にうち勝ったからである。一五世

と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれ
ば、父の愛は彼のうちにない。一六すべて世にあるもの、すなわち、
肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出
たものである。一七世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行
う者は、永遠にながらえる。
一八子供たちよ。今は終りの時である。あなたがたがかねて反キリ
ストが来ると聞いていたように、今や多くの反キリストが現れてき
た。それによって今が終りの時であることを知る。一九彼らはわたし
たちから出て行った。しかし、彼らはわたしたちに属する者ではな
かったのである。もし属する者であったなら、わたしたちと一緒に
とどまっていたであろう。しかし、出て行ったのは、元来、彼らがみ
なわたしたちに属さない者であることが、明らかにされるためであ
る。二〇しかし、あなたがたは聖なる者に油を注がれているので、あ
なたがたすべてが、そのことを知っている。二一わたしが書きおくっ
たのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、それを知ってい

るからであり、また、すべての偽りは真理から出るものでないこと
を、知っているからである。二二偽り者とは、だれであるか。イエス
のキリストであることを否定する者ではないか。父と御子とを否定
する者は、反キリストである。二三御子を否定する者は父を持たず、
御子を告白する者は、また父をも持つのである。二四初めから聞いた
ことが、あなたがたのうちに、とどまるようにしなさい。初めから聞
いたことが、あなたがたのうちにとどまっておれば、あなたがたも
御子と父とのうちに、とどまることになる。二五これが、彼自らわた
したちに約束された約束であって、すなわち、永遠のいのちである。
二六わたしは、あなたがたを惑わす者たちについて、これらのことを
書きおくった。二七あなたがたのうちには、キリストからいただいた
油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この
油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、
偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちに
とどまっていなさい。

二八そこで、子たちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。そ
れは、彼が現れる時に、確信を持ち、その来臨に際して、みまえに恥
じいることがないためである。二九彼の義なるかたであることがわか
れば、義を行う者はみな彼から生れたものであることを、知るであ
ろう。
第三章一わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな
愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、す
でに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知ら
なかったからである。二愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子で
ある。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼
が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを
知っている。そのまことの御姿を見るからである。三彼についてこの
望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをき
よくする。四すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法で
ある。五あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現

れたのであって、彼にはなんらの罪がない。六すべて彼におる者は、
罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこ
ともない者である。七子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼
が義人であると同様に、義を行う者は義人である。八罪を犯す者は、
悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。
神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである。九す
べて神から生れた者は、罪を犯さない。神の種が、その人のうちにと
どまっているからである。また、その人は、神から生れた者であるか
ら、罪を犯すことができない。一〇神の子と悪魔の子との区別は、こ
れによって明らかである。すなわち、すべて義を行わない者は、神か
ら出た者ではない。兄弟を愛さない者も、同様である。一一わたした
ちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞い
ていたおとずれである。一二カインのようになってはいけない。彼は
悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺した
のか。彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである。

一三兄弟たちよ。世があなたがたを憎んでも、驚くには及ばない。
一四わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってき
たことを、知っている。愛さない者は、死のうちにとどまっている。
一五あなたがたが知っているとおり、すべて兄弟を憎む者は人殺しで
あり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいな
い。一六主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それに
よって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたし
たちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。一七世の富を
持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じ
る者には、どうして神の愛が、彼のうちにあろうか。一八子たちよ。
わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とを
もって愛し合おうではないか。一九それによって、わたしたちが真理
から出たものであることがわかる。そして、神のみまえに心を安んじ
ていよう。二〇なぜなら、たといわたしたちの心に責められるような
ことがあっても、神はわたしたちの心よりも大いなるかたであって、

すべてをご存じだからである。二一愛する者たちよ。もし心に責めら
れるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つこ
とができる。二二そして、願い求めるものは、なんでもいただけるの
である。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうこ
とを、行っているからである。二三その戒めというのは、神の子イエ
ス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互に愛
し合うべきことである。二四神の戒めを守る人は、神におり、神もま
たその人にいます。そして、神がわたしたちのうちにいますことは、
神がわたしたちに賜わった御霊によって知るのである。

第四章一愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、そ
れらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くの
にせ預言者が世に出てきているからである。二あなたがたは、こうし
て神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとっ
てこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、
三イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。こ

れは、反キリストの霊である。あなたがたは、それが来るとかねて聞
いていたが、今やすでに世にきている。四子たちよ。あなたがたは神
から出た者であって、彼らにうち勝ったのである。あなたがたのう
ちにいますのは、世にある者よりも大いなる者なのである。五彼らは
世から出たものである。だから、彼らは世のことを語り、世も彼らの
言うことを聞くのである。六しかし、わたしたちは神から出たもので
ある。神を知っている者は、わたしたちの言うことを聞き、神から出
ない者は、わたしたちの言うことを聞かない。これによって、わたし
たちは、真理の霊と迷いの霊との区別を知るのである。
七愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛
は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者
であって、神を知っている。八愛さない者は、神を知らない。神は愛
である。九神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたち
を生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神
の愛が明らかにされたのである。一〇わたしたちが神を愛したのでは

なく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあ
がないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛があ
る。一一愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さっ
たのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。一二神を見
た者は、まだひとりもいない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、
神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全う
されるのである。
一三神が御霊をわたしたちに賜わったことによって、わたしたちが
神におり、神がわたしたちにいますことを知る。一四わたしたちは、
父が御子を世の救主としておつかわしになったのを見て、そのあか
しをするのである。一五もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神
はその人のうちにいまし、その人は神のうちにいるのである。一六わ
たしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ
信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼
にいます。一七わたしたちもこの世にあって彼のように生きているの

で、さばきの日に確信を持って立つことができる。そのことによっ
て、愛がわたしたちに全うされているのである。一八愛には恐れがな
い。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐
れる者には、愛が全うされていないからである。一九わたしたちが愛
し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。二〇
「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現
に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはでき
ない。二一神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、
わたしたちは神から授かっている。

第五章一すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から
生れた者である。すべて生んで下さったかたを愛する者は、そのかた
から生れた者をも愛するのである。二神を愛してその戒めを行えば、
それによってわたしたちは、神の子たちを愛していることを知るの
である。三神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。
そして、その戒めはむずかしいものではない。四なぜなら、すべて神

から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こ
そ、世に勝たしめた勝利の力である。五世に勝つ者はだれか。イエス
を神の子と信じる者ではないか。六このイエス・キリストは、水と血
とをとおってこられたかたである。水によるだけではなく、水と血と
によってこられたのである。そのあかしをするものは、御霊である。
御霊は真理だからである。七あかしをするものが、三つある。八御霊
と水と血とである。そして、この三つのものは一致する。九わたした
ちは人間のあかしを受けいれるが、しかし、神のあかしはさらにま
さっている。神のあかしというのは、すなわち、御子について立てら
れたあかしである。一〇神の子を信じる者は、自分のうちにこのあか
しを持っている。神を信じない者は、神を偽り者とする。神が御子
についてあかしせられたそのあかしを、信じていないからである。一
一そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、
そのいのちが御子のうちにあるということである。一二御子を持つ者
はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない。

一三これらのことをあなたがたに書きおくったのは、神の子の御名
を信じるあなたがたに、永遠のいのちを持っていることを、悟らせる
ためである。一四わたしたちが神に対していだいている確信は、こう
である。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求
めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。一五そし
て、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞きいれて下さるとわ
かれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るので
ある。一六もしだれかが死に至ることのない罪を犯している兄弟を見
たら、神に願い求めなさい。そうすれば神は、死に至ることのない
罪を犯している人々には、いのちを賜わるであろう。死に至る罪が
ある。これについては、願い求めよ、とは言わない。一七不義はすべ
て、罪である。しかし、死に至ることのない罪もある。

一八すべて神から生れた者は罪を犯さないことを、わたしたちは
知っている。神から生れたかたが彼を守っていて下さるので、悪し
き者が手を触れるようなことはない。一九また、わたしたちは神から

出た者であり、全世界は悪しき者の配下にあることを、知っている。
二〇さらに、神の子がきて、真実なかたを知る知力をわたしたちに授
けて下さったことも、知っている。そして、わたしたちは、真実なか
たにおり、御子イエス・キリストにおるのである。このかたは真実な
神であり、永遠のいのちである。二一子たちよ。気をつけて、偶像を
避けなさい。

ヨハネの第二の手紙

第一章 一長老のわたしから、真実に愛している選ばれた婦人とその
子たちへ。あなたがたを愛しているのは、わたしだけではなく、真理
を知っている者はみなそうである。二それは、わたしたちのうちにあ
り、また永遠に共にあるべき真理によるのである。
三父なる神および父の御子イエス・キリストから、恵みとあわれみ
と平安とが、真理と愛のうちにあって、わたしたちと共にあるように。
四あなたの子供たちのうちで、わたしたちが父から受けた戒めどお
りに、真理のうちを歩いている者があるのを見て、わたしは非常に
喜んでいる。五婦人よ。ここにお願いしたいことがある。それは、新
しい戒めを書くわけではなく、初めから持っていた戒めなのである
が、わたしたちは、みんな互に愛し合おうではないか。六父の戒めど

おりに歩くことが、すなわち、愛であり、あなたがたが初めから聞い
てきたとおりに愛のうちを歩くことが、すなわち、戒めなのである。
七なぜなら、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白し
ないで人を惑わす者が、多く世にはいってきたからである。そうい
う者は、惑わす者であり、反キリストである。八よく注意して、わた
したちの働いて得た成果を失うことがなく、豊かな報いを受けられ
るようにしなさい。九すべてキリストの教をとおり過ごして、それに
とどまらない者は、神を持っていないのである。その教にとどまっ
ている者は、父を持ち、また御子をも持つ。一〇この教を持たずにあ
なたがたのところに来る者があれば、その人を家に入れることも、あ
いさつすることもしてはいけない。一一そのような人にあいさつする
者は、その悪い行いにあずかることになるからである。
一二あなたがたに書きおくることはたくさんあるが、紙と墨とで書
くことはすまい。むしろ、あなたがたのところに行き、直接はなし
合って、共に喜びに満ちあふれたいものである。一三選ばれたあなた

の姉妹の子供たちが、あなたによろしく。

ヨハネの第三の手紙

第一章 一長老のわたしから、真実に愛している親愛なるガイオへ。
二愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、
あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わた
しは祈っている。三兄弟たちがきて、あなたが真理に生きていること
を、あかししてくれたので、ひじょうに喜んでいる。事実、あなたは
真理のうちを歩いているのである。四わたしの子供たちが真理のうち
を歩いていることを聞く以上に、大きい喜びはない。

五愛する者よ。あなたが、兄弟たち、しかも旅先にある者につくし
ていることは、みな真実なわざである。六彼らは、諸教会で、あなた
の愛についてあかしをした。それらの人々を、神のみこころにかなう
ように送り出してくれたら、それは願わしいことである。七彼らは、

御名のために旅立った者であって、異邦人からは何も受けていない。
八それだから、わたしたちは、真理のための同労者となるように、こ
ういう人々を助けねばならない。
九わたしは少しばかり教会に書きおくっておいたが、みんなのかし
らになりたがっているデオテレペスが、わたしたちを受けいれてく
れない。一〇だから、わたしがそちらへ行った時、彼のしわざを指摘
しようと思う。彼は口ぎたなくわたしたちをののしり、そればかり
か、兄弟たちを受けいれようともせず、受けいれようとする人たちを
妨げて、教会から追い出している。
一一愛する者よ。悪にならわないで、善にならいなさい。善を行う
者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことのない者であ
る。一二デメテリオについては、あらゆる人も、また真理そのものも、
証明している。わたしたちも証明している。そして、あなたが知っ
ているとおり、わたしたちの証明は真実である。
一三あなたに書きおくりたいことはたくさんあるが、墨と筆とで書

くことはすまい。一四すぐにでもあなたに会って、直接はなし合いた
いものである。一五平安が、あなたにあるように。友人たちから、あ
なたによろしく。友人たちひとりびとりに、よろしく。

ユダの手紙

第一章一イエス・キリストの僕またヤコブの兄弟であるユダから、
父なる神に愛され、イエス・キリストに守られている召された人々へ。
二あわれみと平安と愛とが、あなたがたに豊かに加わるように。
三愛する者たちよ。わたしたちが共にあずかっている救について、
あなたがたに書きおくりたいと心から願っていたので、聖徒たちに
よって、ひとたび伝えられた信仰のために戦うことを勧めるように、
手紙をおくる必要を感じるに至った。四そのわけは、不信仰な人々が
しのび込んできて、わたしたちの神の恵みを放縦な生活に変え、唯一
の君であり、わたしたちの主であるイエス・キリストを否定している
からである。彼らは、このようなさばきを受けることに、昔から予告
されているのである。

五あなたがたはみな、じゅうぶんに知っていることではあるが、主
が民をエジプトの地から救い出して後、不信仰な者を滅ぼされたこ
とを、思い起してもらいたい。六主は、自分たちの地位を守ろうとは
せず、そのおるべき所を捨て去った御使たちを、大いなる日のさばき
のために、永久にしばりつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておか
れた。七ソドム、ゴモラも、まわりの町々も、同様であって、同じよ
うに淫行にふけり、不自然な肉欲に走ったので、永遠の火の刑罰を受
け、人々の見せしめにされている。八しかし、これと同じように、こ
れらの人々は、夢に迷わされて肉を汚し、権威ある者たちを軽んじ、
栄光ある者たちをそしっている。九御使のかしらミカエルは、モー
セの死体について悪魔と論じ争った時、相手をののしりさばくこと
はあえてせず、ただ、「主がおまえを戒めて下さるように」と言った
だけであった。一〇しかし、この人々は自分が知りもしないことをそ
しり、また、分別のない動物のように、ただ本能的な知識にあやま
られて、自らの滅亡を招いている。一一彼らはわざわいである。彼ら

はカインの道を行き、利のためにバラムの惑わしに迷い入り、コラ
のような反逆をして滅んでしまうのである。一二彼らは、あなたがた
の愛餐に加わるが、それを汚し、無遠慮に宴会に同席して、自分の
腹を肥やしている。彼らは、いわば、風に吹きまわされる水なき雲、
実らない枯れ果てて、抜き捨てられた秋の木、一三自分の恥をあわに
して出す海の荒波、さまよう星である。彼らには、まっくらなやみ
が永久に用意されている。一四アダムから七代目にあたるエノクも彼
らについて預言して言った、「見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこ
られた。一五それは、すべての者にさばきを行うためであり、また、
不信心な者が、信仰を無視して犯したすべての不信心なしわざと、さ
らに、不信心な罪人が主にそむいて語ったすべての暴言とを責めるた
めである」。一六彼らは不平をならべ、不満を鳴らす者であり、自分
の欲のままに生活し、その口は大言を吐き、利のために人にへつらう
者である。
一七愛する者たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの使徒たち

が予告した言葉を思い出しなさい。一八彼らはあなたがたにこう言っ
た、「終りの時に、あざける者たちがあらわれて、自分の不信心な欲
のままに生活するであろう」。一九彼らは分派をつくる者、肉に属す
る者、御霊を持たない者たちである。二〇しかし、愛する者たちよ。
あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって
祈り、二一神の愛の中に自らを保ち、永遠のいのちを目あてとして、
わたしたちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。二二
疑いをいだく人々があれば、彼らをあわれみ、二三火の中から引き出
して救ってやりなさい。また、そのほかの人たちを、おそれの心を
もってあわれみなさい。しかし、肉に汚れた者に対しては、その下着
さえも忌みきらいなさい。

二四あなたがたを守ってつまずかない者とし、また、その栄光のま
えに傷なき者として、喜びのうちに立たせて下さるかた、二五すなわ
ち、わたしたちの救主なる唯一の神に、栄光、大能、力、権威が、わ
たしたちの主イエス・キリストによって、世々の初めにも、今も、ま

た、世々限りなく、あるように、アァメン。

ヨハネの黙示録

第一章一イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起
るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリス
トが、御使をつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。二ヨハ
ネは、神の言とイエス・キリストのあかしと、すなわち、自分が見た
すべてのことをあかしした。三この預言の言葉を朗読する者と、これ
を聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいで
ある。時が近づいているからである。

四ヨハネからアジヤにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、や
がてきたるべきかたから、また、その御座の前にある七つの霊から、
五また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の
支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたに

あるように。わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪か
ら解放し、六わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、
祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるよう
に、アァメン。
七見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、ことに、彼
を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族
はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。しかり、アァメン。
八今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者、全能者にして主なる
神が仰せになる、「わたしはアルパであり、オメガである」。
九あなたがたの兄弟であり、共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあ
ずかっている、わたしヨハネは、神の言とイエスのあかしとのゆえに、
パトモスという島にいた。一〇ところが、わたしは、主の日に御霊に
感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような大きな声が
するのを聞いた。一一その声はこう言った、「あなたが見ていること
を書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、

サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤにある七つの教会に送りなさ
い」。一二そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとし
てふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。一三それ
らの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人
の子のような者がいた。一四そのかしらと髪の毛とは、雪のように白
い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。一五その足
は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のと
どろきのようであった。一六その右手に七つの星を持ち、口からは、
鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のよう
であった。

一七わたしは彼を見たとき、その足もとに倒れて死人のようになっ
た。すると、彼は右手をわたしの上において言った、「恐れるな。わ
たしは初めであり、終りであり、一八また、生きている者である。わた
しは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。
そして、死と黄泉とのかぎを持っている。一九そこで、あなたの見た

こと、現在のこと、今後起ろうとすることを、書きとめなさい。二〇
あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台との奥義
は、こうである。すなわち、七つの星は七つの教会の御使であり、七
つの燭台は七つの教会である。

第二章一エペソにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。
『右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燭台の間を歩く者が、次
のように言われる。二わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っ
ている。また、あなたが、悪い者たちをゆるしておくことができず、
使徒と自称してはいるが、その実、使徒でない者たちをためしてみ
て、にせ者であると見抜いたことも、知っている。三あなたは忍耐を
し続け、わたしの名のために忍びとおして、弱り果てることがなかっ
た。四しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの
愛から離れてしまった。五そこで、あなたはどこから落ちたかを思い
起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい。もし、そうしないで悔い
改めなければ、わたしはあなたのところにきて、あなたの燭台をそ

の場所から取りのけよう。六しかし、こういうことはある、あなたは
ニコライ宗の人々のわざを憎んでおり、わたしもそれを憎んでいる。
七耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る
者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆる
そう』。
八スミルナにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。
『初めであり、終りである者、死んだことはあるが生き返った者が、
次のように言われる。九わたしは、あなたの苦難や、貧しさを知って
いる（しかし実際は、あなたは富んでいるのだ）。また、ユダヤ人と
自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくてサタンの会堂に属する
者たちにそしられていることも、わたしは知っている。一〇あなたの
受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなた
がたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あ
なたがたは十日の間、苦難にあうであろう。死に至るまで忠実であ
れ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。一一耳のある者は、御霊が

諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者は、第二の死によっ
て滅ぼされることはない』。
一二ペルガモにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。
『鋭いもろ刃のつるぎを持っているかたが、次のように言われる。
一三わたしはあなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの
座がある。あなたは、わたしの名を堅く持ちつづけ、わたしの忠実な
証人アンテパスがサタンの住んでいるあなたがたの所で殺された時
でさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。一四しかし、あなたに
対して責むべきことが、少しばかりある。あなたがたの中には、現
にバラムの教を奉じている者がある。バラムは、バラクに教え込み、
イスラエルの子らの前に、つまずきになるものを置かせて、偶像に
ささげたものを食べさせ、また不品行をさせたのである。一五同じよ
うに、あなたがたの中には、ニコライ宗の教を奉じている者もいる。
一六だから、悔い改めなさい。そうしないと、わたしはすぐにあなた
のところに行き、わたしの口のつるぎをもって彼らと戦おう。一七耳

のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者
には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この
石の上には、これを受ける者のほかだれも知らない新しい名が書い
てある』。
一八テアテラにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。
『燃える炎のような目と光り輝くしんちゅうのような足とを持った
神の子が、次のように言われる。一九わたしは、あなたのわざと、あ
なたの愛と信仰と奉仕と忍耐とを知っている。また、あなたの後の
わざが、初めのよりもまさっていることを知っている。二〇しかし、
あなたに対して責むべきことがある。あなたは、あのイゼベルとい
う女を、そのなすがままにさせている。この女は女預言者と自称し、
わたしの僕たちを教え、惑わして、不品行をさせ、偶像にささげたも
のを食べさせている。二一わたしは、この女に悔い改めるおりを与え
たが、悔い改めてその不品行をやめようとはしない。二二見よ、わた
しはこの女を病の床に投げ入れる。この女と姦淫する者をも、悔い

改めて彼女のわざから離れなければ、大きな患難の中に投げ入れる。
二三また、この女の子供たちをも打ち殺そう。こうしてすべての教会
は、わたしが人の心の奥底までも探り知る者であることを悟るであ
ろう。そしてわたしは、あなたがたひとりびとりのわざに応じて報
いよう。二四また、テアテラにいるほかの人たちで、まだあの女の教
を受けておらず、サタンの、いわゆる「深み」を知らないあなたがた
に言う。わたしは別にほかの重荷を、あなたがたに負わせることは
しない。二五ただ、わたしが来る時まで、自分の持っているものを堅
く保っていなさい。二六勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち
続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。二七彼は鉄のつえを
もって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。それ
は、わたし自身が父から権威を受けて治めるのと同様である。二八わ
たしはまた、彼に明けの明星を与える。二九耳のある者は、御霊が諸
教会に言うことを聞くがよい』。

第三章一サルデスにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。

『神の七つの霊と七つの星とを持つかたが、次のように言われる。
わたしはあなたのわざを知っている。すなわち、あなたは、生きてい
るというのは名だけで、実は死んでいる。二目をさましていて、死に
かけている残りの者たちを力づけなさい。わたしは、あなたのわざ
が、わたしの神のみまえに完全であるとは見ていない。三だから、あ
なたが、どのようにして受けたか、また聞いたかを思い起して、それ
を守りとおし、かつ悔い改めなさい。もし目をさましていないなら、
わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに
来るか、あなたには決してわからない。四しかし、サルデスにはその
衣を汚さない人が、数人いる。彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩
みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。五勝利を
得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その
名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。また、わたし
の父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう。六耳のある者は、
御霊が諸教会に言うことを聞くがよい』。

七ヒラデルヒヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。
『聖なる者、まことなる者、ダビデのかぎを持つ者、開けばだれに
も閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者
が、次のように言われる。八わたしは、あなたのわざを知っている。
見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開
いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわ
らず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。
九見よ、サタンの会堂に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称しては
いるが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。見
よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたし
があなたを愛していることを、彼らに知らせよう。一〇忍耐について
のわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たち
をためすために、全世界に臨もうとしている試錬の時に、あなたを防
ぎ守ろう。一一わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われ
ないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。一二勝利

を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二
度と外へ出ることはない。そして彼の上に、わたしの神の御名と、わ
たしの神の都、すなわち、天とわたしの神のみもとから下ってくる新
しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを、書きつけよう。一三
耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい』。
一四ラオデキヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。
『アァメンたる者、忠実な、まことの証人、神に造られたものの
根源であるかたが、次のように言われる。一五わたしはあなたのわざ
を知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷た
いか熱いかであってほしい。一六このように、熱くもなく、冷たくも
なく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。一七あなたは、
自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っている
が、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目
の見えない者、裸な者であることに気がついていない。一八そこで、
あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金

を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、
白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を
買いなさい。一九すべてわたしの愛している者を、わたしはしかった
り、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい。二〇
見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの
声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共
にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。二一勝利を得る者に
は、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わた
しが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。
二二耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい』」。

第四章一その後、わたしが見ていると、見よ、開いた門が天にあっ
た。そして、さきにラッパのような声でわたしに呼びかけるのを聞い
た初めの声が、「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に
起るべきことを、見せてあげよう」と言った。二すると、たちまち、
わたしは御霊に感じた。見よ、御座が天に設けられており、その御座

にいますかたがあった。三その座にいますかたは、碧玉や赤めのうの
ように見え、また、御座のまわりには、緑玉のように見えるにじが現
れていた。四また、御座のまわりには二十四の座があって、二十四人
の長老が白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶって、それらの座
についていた。五御座からは、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と
が、発していた。また、七つのともし火が、御座の前で燃えていた。
これらは、神の七つの霊である。六御座の前は、水晶に似たガラスの
海のようであった。御座のそば近くそのまわりには、四つの生き物
がいたが、その前にも後にも、一面に目がついていた。七第一の生き
物はししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生
き物は人のような顔をしており、第四の生き物は飛ぶわしのようで
あった。八この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その翼
のまわりも内側も目で満ちていた。そして、昼も夜も、絶え間なくこ
う叫びつづけていた、
「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

全能者にして主なる神。
昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」。
九これらの生き物が、御座にいまし、かつ、世々限りなく生きてお
られるかたに、栄光とほまれとを帰し、また、感謝をささげている時、
一〇二十四人の長老は、御座にいますかたのみまえにひれ伏し、世々
限りなく生きておられるかたを拝み、彼らの冠を御座のまえに、投げ
出して言った、
一一「われらの主なる神よ、
あなたこそは、
栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。
あなたは万物を造られました。
御旨によって、万物は存在し、
また造られたのであります」。

第五章一わたしはまた、御座にいますかたの右の手に、巻物がある
のを見た。その内側にも外側にも字が書いてあって、七つの封印で

封じてあった。二また、ひとりの強い御使が、大声で、「その巻物を
開き、封印をとくのにふさわしい者は、だれか」と呼ばわっている
のを見た。三しかし、天にも地にも地の下にも、この巻物を開いて、
それを見ることのできる者は、ひとりもいなかった。四巻物を開いて
それを見るのにふさわしい者が見当らないので、わたしは激しく泣
いていた。五すると、長老のひとりがわたしに言った、「泣くな。見
よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、そ
の巻物を開き七つの封印を解くことができる」。
六わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほ
ふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七
つの目とがあった。これらの目は、全世界につかわされた、神の七
つの霊である。七小羊は進み出て、御座にいますかたの右の手から、
巻物を受けとった。八巻物を受けとった時、四つの生き物と二十四人
の長老とは、おのおの、立琴と、香の満ちている金の鉢とを手に持っ
て、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒の祈である。九彼らは新し

い歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を
解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によっ
て、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあ
がない、一〇わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司と
なさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。
一一さらに見ていると、御座と生き物と長老たちとのまわりに、多
くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の
幾千倍もあって、一二大声で叫んでいた、
「ほふられた小羊こそは、
力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、
さんびとを受けるにふさわしい」。
一三またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られた
もの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、
「御座にいますかたと小羊とに、
さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、

世々限りなくあるように」。
一四 四つの生き物はアァメンと唱え、長老たちはひれ伏して礼拝した。

第六章 一 小羊がその七つの封印の一つを解いた時、わたしが見てい
ると、四つの生き物の一つが、雷のような声で「きたれ」と呼ぶの
を聞いた。 二 そして見ていると、見よ、白い馬が出てきた。そして、
それに乗っている者は、弓を手に持っており、また冠を与えられて、
勝利の上にもなお勝利を得ようとして出かけた。
三 小羊が第二の封印を解いた時、第二の生き物が「きたれ」と言う
のを、わたしは聞いた。 四 すると今度は、赤い馬が出てきた。そし
て、それに乗っている者は、人々が互に殺し合うようになるために、
地上から平和を奪い取ることを許され、また、大きなつるぎを与えら
れた。
五 また、第三の封印を解いた時、第三の生き物が「きたれ」と言う
のを、わたしは聞いた。そこで見ていると、見よ、黒い馬が出てき
た。そして、それに乗っている者は、はかりを手に持っていた。 六 す

ると、わたしは四つの生き物の間から出て来ると思われる声が、こう
言うのを聞いた、「小麦一ますは一デナリ。大麦三ますも一デナリ。
オリブ油とぶどう酒とを、そこなうな」。
七小羊が第四の封印を解いた時、第四の生き物が「きたれ」と言う
声を、わたしは聞いた。八そこで見ていると、見よ、青白い馬が出て
きた。そして、それに乗っている者の名は「死」と言い、それに黄泉
が従っていた。彼らには、地の四分の一を支配する権威、および、つ
るぎと、ききんと、死と、地の獣らとによって人を殺す権威とが、与
えられた。
九小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあか
しを立てたために、殺された人々の霊魂が、祭壇の下にいるのを、わ
たしは見た。一〇彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる
主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に
対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」。一一すると、
彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、「彼らと同じく

殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばら
くの間、休んでいるように」と言い渡された。
一二小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が
起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のよう
になり、一三天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り
落されるように、地に落ちた。一四天は巻物が巻かれるように消えて
いき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。一五地の
王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほ
ら穴や山の岩かげに、身をかくした。一六そして、山と岩とにむかっ
て言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と
小羊の怒りとから、かくまってくれ。一七御怒りの大いなる日が、す
でにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」。

第七章一この後、わたしは四人の御使が地の四すみに立っているの
を見た。彼らは地の四方の風をひき止めて、地にも海にもすべての木
にも、吹きつけないようにしていた。二また、もうひとりの御使が、

生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地
と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声
で叫んで言った、三「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印
をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない」。四
わたしは印をおされた者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべ
ての部族のうち、印をおされた者は十四万四千人であった。
五ユダの部族のうち、一万二千人が印をおされ、
ルベンの部族のうち、一万二千人、
ガドの部族のうち、一万二千人、
六アセルの部族のうち、一万二千人、
ナフタリの部族のうち、一万二千人、
マナセの部族のうち、一万二千人、
七シメオンの部族のうち、一万二千人、
レビの部族のうち、一万二千人、
イサカルの部族のうち、一万二千人、

八ゼブルンの部族のうち、一万二千人、
ヨセフの部族のうち、一万二千人、
ベニヤミンの部族のうち、
一万二千人が印をおされた。
九その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、
国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身
にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立ち、一〇
大声で叫んで言った、
「救は、御座にいますわれらの神と
小羊からきたる」。
一一御使たちはみな、御座と長老たちと四つの生き物とのまわりに
立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を拝して言った、
一二「アアメン、さんび、栄光、知恵、感謝、
ほまれ、力、勢いが、世々限りなく、
われらの神にあるように、アアメン」。

一三長老たちのひとりが、わたしにむかって言った、「この白い衣を
身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか」。一四
わたしは彼に答えた、「わたしの主よ、それはあなたがご存じです」。
すると、彼はわたしに言った、「彼らは大きな患難をとおってきた人
たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。
一五それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神
に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張っ
て共に住まわれるであろう。一六彼らは、もはや飢えることがなく、
かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。一七御座
の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導い
て下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐい
とって下さるであろう」。

第八章 一小羊が第七の封印を解いた時、半時間ばかり天に静けさが
あった。二それからわたしは、神のみまえに立っている七人の御使を
見た。そして、七つのラッパが彼らに与えられた。

三また、別の御使が出てきて、金の香炉を手に持って祭壇の前に
立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての
聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのもの
であった。四香の煙は、御使の手から、聖徒たちの祈と共に神のみま
えに立ちのぼった。五御使はその香炉をとり、これに祭壇の火を満た
して、地に投げつけた。すると、多くの雷鳴と、もろもろの声と、い
なずまと、地震とが起った。

六そこで、七つのラッパを持っている七人の御使が、それを吹く
用意をした。

七第一の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、血のまじった雹
と火とがあらわれて、地上に降ってきた。そして、地の三分の一が焼
け、木の三分の一が焼け、また、すべての青草も焼けてしまった。

八第二の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えさかっ
ている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして、海の三
分の一は血となり、九海の中の造られた生き物の三分の一は死に、舟

の三分の一がこわされてしまった。
一〇第三の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのよ
うに燃えている大きな星が、空から落ちてきた。そしてそれは、川の
三分の一とその水源との上に落ちた。一一この星の名は「苦よもぎ」
と言い、水の三分の一が「苦よもぎ」のように苦くなった。水が苦く
なったので、そのために多くの人が死んだ。
一二第四の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の
一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれて、これらのものの
三分の一は暗くなり、昼の三分の一は明るくなくなり、夜も同じよう
になった。
一三また、わたしが見ていると、一羽のわしが中空を飛び、大きな
声でこう言うのを聞いた、「ああ、わざわいだ、わざわいだ、地に住
む人々は、わざわいだ。なお三人の御使がラッパを吹き鳴らそうと
している」。

第九章
一第五の御使が、ラッパを吹き鳴らした。するとわたしは、

一つの星が天から地に落ちて来るのを見た。この星に、底知れぬ所
の穴を開くかぎが与えられた。二そして、この底知れぬ所の穴が開か
れた。すると、その穴から煙が大きな炉の煙のように立ちのぼり、そ
の穴の煙で、太陽も空気も暗くなった。三その煙の中から、いなごが
地上に出てきたが、地のさそりが持っているような力が、彼らに与
えられた。四彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこ
なってはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよ
いと、言い渡された。五彼らは、人間を殺すことはしないで、五か月
のあいだ苦しめることだけが許された。彼らの与える苦痛は、人が
さそりにさされる時のような苦痛であった。六その時には、人々は死
を求めても与えられず、死にたいと願っても、死は逃げて行くのであ
る。七これらのいなごは、出陣の用意のととのえられた馬によく似て
おり、その頭には金の冠のようなものをつけ、その顔は人間の顔のよ
うであり、八また、そのかみの毛は女のかみのようであり、その歯は
ししの歯のようであった。九また、鉄の胸当のような胸当をつけてお

り、その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのよう
であった。一〇その上、さそりのような尾と針とを持っている。その
尾には、五か月のあいだ人間をそこなう力がある。一一彼らは、底知
れぬ所の使を王にいただいており、その名をヘブル語でアバドンと
言い、ギリシヤ語ではアポルオンと言う。

一二第一のわざわいは、過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわ
ざわいが来る。

一三第六の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、一つの声が、
神のみまえにある金の祭壇の四つの角から出て、一四ラッパを持って
いる第六の御使にこう呼びかけるのを、わたしは聞いた。「大ユウフ
ラテ川のほとりにつながれている四人の御使を、解いてやれ」。一五
すると、その時、その日、その月、その年に備えておかれた四人の
御使が、人間の三分の一を殺すために、解き放たれた。一六騎兵隊の
数は二億であった。わたしはその数を聞いた。一七そして、まぼろし
の中で、それらの馬とそれに乗っている者たちとを見ると、乗って

いる者たちは、火の色と青玉色と硫黄の色の胸当をつけていた。そ
して、それらの馬の頭はししの頭のようであって、その口から火と
煙と硫黄とが、出ていた。一八この三つの災害、すなわち、彼らの口
から出て来る火と煙と硫黄とによって、人間の三分の一は殺されて
しまった。一九馬の力はその口と尾とにある。その尾はへびに似てい
て、それに頭があり、その頭で人に害を加えるのである。二〇これら
の災害で殺されずに残った人々は、自分の手で造ったものについて、
悔い改めようとせず、また悪霊のたぐいや、金、銀、銅、石、木で造
られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、や
めようともしなかった。二一また、彼らは、その犯した殺人や、まじ
ないや、不品行や、盗みを悔い改めようとしなかった。

第一〇章一わたしは、もうひとりの強い御使が、雲に包まれて、天
から降りて来るのを見た。その頭に、にじをいただき、その顔は太陽
のようで、その足は火の柱のようであった。二彼は、開かれた小さな
巻物を手に持っていた。そして、右足を海の上に、左足を地の上に踏

みおろして、三ししがほえるように大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つ
の雷がおのおのその声を発した。四七つの雷が声を発した時、わたし
はそれを書きとめようとした。すると、天から声があって、「七つの
雷の語ったことを封印せよ。それを書きとめるな」と言うのを聞い
た。五それから、海と地の上に立っているのをわたしが見たあの御使
は、天にむけて右手を上げ、六天とその中にあるもの、地とその中に
あるもの、海とその中にあるものを造り、世々限りなく生きておら
れるかたをさして誓った、「もう時がない。七第七の御使が吹き鳴ら
すラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになっ
たとおり、神の奥義は成就される」。八すると、前に天から聞えてき
た声が、またわたしに語って言った、「さあ行って、海と地との上に
立っている御使の手に開かれている巻物を、受け取りなさい」。九そ
こで、わたしはその御使のもとに行って、「その小さな巻物を下さい」
と言った。すると、彼は言った、「取って、それを食べてしまいなさ
い。あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い」。一〇わたしは

御使の手からその小さな巻物を受け取って食べてしまった。すると、
わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦く
なった。**一一**その時、「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、
王たちについて、預言せねばならない」と言う声がした。

第一一章 **一**それから、わたしはつえのような測りざおを与えられ
て、こう命じられた、「さあ立って、神の聖所と祭壇と、そこで礼拝し
ている人々とを、測りなさい。**二**聖所の外の庭はそのままにしておき
なさい。それを測ってはならない。そこは異邦人に与えられた所だ
から。彼らは、四十二か月の間この聖なる都を踏みにじるであろう。
三そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六
十日のあいだ預言することを許そう」。**四**彼らは、全地の主のみまえ
に立っている二本のオリブの木、また、二つの燭台である。**五**もし彼
らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵
を滅ぼすであろう。もし彼らに害を加えようとする者があれば、そ
の者はこのように殺されねばならない。**六**預言をしている期間、彼ら

は、天を閉じて雨を降らせないようにする力を持っている。さらにま
た、水を血に変え、何度でも思うままに、あらゆる災害で地を打つ力
を持っている。七そして、彼らがそのあかしを終えると、底知れぬ所
からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。八彼ら
の死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通り
にさらされる。彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。
九いろいろな民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、
彼らの死体をながめるが、その死体を墓に納めることは許さない。一
〇地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互に贈り物をしあう。
このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである。一一
三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、
彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常な恐怖に襲われた。
一二その時、天から大きな声がして、「ここに上ってきなさい」と言
うのを、彼らは聞いた。そして、彼らは雲に乗って天に上った。彼ら
の敵はそれを見た。一三この時、大地震が起って、都の十分の一は倒

れ、その地震で七千人が死に、生き残った人々は驚き恐れて、天の神に栄光を帰した。
一四第二のわざわいは、過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。
一五第七の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、大きな声々が天に起って言った、

「この世の国は、
われらの主とそのキリストとの国となった。
主は世々限りなく支配なさるであろう」。

一六そして、神のみまえで座についている二十四人の長老は、ひれ伏し、神を拝して言った、
一七「今いまし、昔いませる、全能者にして主なる神よ。
大いなる御力をふるって支配なさったことを、
感謝します。
一八諸国民は怒り狂いましたが、

あなたも怒りをあらわされました。
そして、死人をさばき、あなたの僕なる
預言者、聖徒、小さき者も、大いなる者も、
すべて御名をおそれる者たちに報いを与え、また、
地を滅ぼす者どもを滅ぼして下さる時がきました」。
一九そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見
えた。また、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、
大粒の雹が降った。

第一二章 一また、大いなるしるしが天に現れた。ひとりの女が太陽
を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた。
二この女は子を宿しており、産みの苦しみと悩みとのために、泣き叫
んでいた。三また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、
赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの
冠をかぶっていた。四その尾は天の星の三分の一を掃き寄せ、それら
を地に投げ落した。龍は子を産もうとしている女の前に立ち、生れ

たなら、その子を食い尽そうとかまえていた。五女は男の子を産んだ
が、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。こ
の子は、神のみもとに、その御座のところに、引き上げられた。六女
は荒野へ逃げて行った。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養
われるように、神の用意された場所があった。
七さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と
戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、八勝てなかった。そ
して、もはや天には彼らのおる所がなくなった。九この巨大な龍、す
なわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへび
は、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。一〇
その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、
「今や、われらの神の救と力と国と、
神のキリストの権威とは、現れた。
われらの兄弟らを訴える者、
夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者は、

投げ落された。
一一兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、
彼にうち勝ち、
死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。
一二それゆえに、天とその中に住む者たちよ、
大いに喜べ。
しかし、地と海よ、
おまえたちはわざわいである。
悪魔が、自分の時が短いのを知り、
激しい怒りをもって、
おまえたちのところに下ってきたからである」。
一三龍は、自分が地上に投げ落されたと知ると、男子を産んだ女を追
いかけた。一四しかし、女は自分の場所である荒野に飛んで行くため
に、大きなわしの二つの翼を与えられた。そしてそこでへびからの

がれて、一年、二年、また、半年の間、養われることになっていた。
一五へびは女の後に水を川のように、口から吐き出して、女をおし流
そうとした。一六しかし、地は女を助けた。すなわち、地はその口を
開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。一七龍は、女に対し
て怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエス
のあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て
行った。一八そして、海の砂の上に立った。

第一三章一わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。
それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、
頭には神を汚す名がついていた。二わたしの見たこの獣はひょうに似
ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようであっ
た。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。三その
頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってし
まった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、四また、
龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を

拝んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと
戦うことができようか」。五この獣には、また、大言を吐き汚しごと
を語る口が与えられ、四十二か月のあいだ活動する権威が与えられ
た。六そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、す
なわち、天に住む者たちとを汚した。七そして彼は、聖徒に戦いをい
どんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、
国民を支配する権威を与えられた。八地に住む者で、ほふられた小羊
のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、
この獣を拝むであろう。九耳のある者は、聞くがよい。一〇とりこに
なるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつる
ぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。
一一わたしはまた、ほかの獣が地から上って来るのを見た。それに
は小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。一二そして、
先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住
む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。一三また、大

いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさ
えした。一四さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に
住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の
獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。一五それから、その獣
の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるよう
にし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。一六また、小
さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人
にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押
させ、一七この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもでき
ないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字の
ことである。一八ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の
数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、
その数字は六百六十六である。

第一四章 一なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に
立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に

小羊の名とその父の名とが書かれていた。二またわたしは、大水のと
どろきのような、激しい雷鳴のような声が、天から出るのを聞いた。
わたしの聞いたその声は、琴をひく人が立琴をひく音のようでもあっ
た。三彼らは、御座の前、四つの生き物と長老たちとの前で、新しい
歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、
だれも学ぶことができなかった。四彼らは、女にふれたことのない者
である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこ
へでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、
人間の中からあがなわれた者である。五彼らの口には偽りがなく、彼
らは傷のない者であった。

六わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住
む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるため
に、永遠の福音をたずさえてきて、七大声で言った、「神をおそれ、神
に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と
水の源とを造られたかたを、伏し拝め」。

八また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、「倒れた、大いな
るバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、
あらゆる国民に飲ませた者」。
九ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、「おおよ
そ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、
一〇神の怒り
の杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、
聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。
一一そ
の苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝
む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休み
が得られない。
一二ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を
持ちつづける聖徒の忍耐がある」。
一三またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた、「書きしる
せ、『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』」。御霊も言
う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らにつ
いていく」。

一四また見ていると、見よ、白い雲があって、その雲の上に人の子
のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかま
を持っていた。一五すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、
雲の上に座している者にむかって大声で叫んだ、「かまを入れて刈り
取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた」。一六雲
の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のも
のが刈り取られた。

一七また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた
鋭いかまを持っていた。一八さらに、もうひとりの御使で、火を支配
する権威を持っている者が、祭壇から出てきて、鋭いかまを持つ御使
にむかい、大声で言った、「その鋭いかまを地に入れて、地のぶどうの
ふさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから」。一九
そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、
神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ。二〇そして、その酒ぶ
ねが都の外で踏まれた。すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつ

わにとどくほどになり、一千六百丁にわたってひろがった。
第一五章一またわたしは、天に大いなる驚くべきほかのしるしを見
た。七人の御使が、最後の七つの災害を携えていた。これらの災害
で神の激しい怒りがその頂点に達するのである。二またわたしは、火
のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの
海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の
立琴を手にして立っているのを見た。三彼らは、神の僕モーセの歌と
小羊の歌とを歌って言った、
「全能者にして主なる神よ。
あなたのみわざは、
大いなる、また驚くべきものであります。
万民の王よ、
あなたの道は正しく、かつ真実であります。
四主よ、あなたをおそれず、
御名をほめたたえない者が、ありましょうか。

あなただけが聖なるかたであり、
あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。
あなたの正しいさばきが、
あらわれるに至ったからであります」。
5 その後、わたしが見ていると、天にある、あかしの幕屋の聖所が
開かれ、6 その聖所から、七つの災害を携えている七人の御使が、汚
れのない、光り輝く亜麻布を身にまとい、金の帯を胸にしめて、出
てきた。7 そして、四つの生き物の一つが、世々限りなく生きておら
れる神の激しい怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使に渡した。
8 すると、聖所は神の栄光とその力とから立ちのぼる煙で満たされ、
七人の御使の七つの災害が終ってしまうまでは、だれも聖所にはい
ることができなかった。

第一六章 1 それから、大きな声が聖所から出て、七人の御使にむか
い、「さあ行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に傾けよ」と言
うのを聞いた。

二そして、第一の者が出て行って、その鉢を地に傾けた。すると、
獣の刻印を持つ人々と、その像を拝む人々とのからだに、ひどい悪性
のでき物ができた。
三第二の者が、その鉢を海に傾けた。すると、海は死人の血のよう
になって、その中の生き物がみな死んでしまった。
四第三の者がその鉢を川と水の源とに傾けた。すると、みな血に
なった。五それから、水をつかさどる御使がこう言うのを、聞いた、
「今いまし、昔いませる聖なる者よ。このようにお定めになったあな
たは、正しいかたであります。六聖徒と預言者との血を流した者たち
に、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことであります」。七
わたしはまた祭壇がこう言うのを聞いた、「全能者にして主なる神よ。
しかり、あなたのさばきは真実で、かつ正しいさばきであります」。
八第四の者が、その鉢を太陽に傾けた。すると、太陽は火で人々を
焼くことを許された。九人々は、激しい炎熱で焼かれたが、これらの
災害を支配する神の御名を汚し、悔い改めて神に栄光を帰すること

をしなかった。
一〇第五の者が、その鉢を獣の座に傾けた。すると、獣の国は暗く
なり、人々は苦痛のあまり舌をかみ、一一その苦痛とでき物とのゆえ
に、天の神をのろった。そして、自分の行いを悔い改めなかった。
一二第六の者が、その鉢を大ユウフラテ川に傾けた。すると、その
水は、日の出る方から来る王たちに対し道を備えるために、かれてし
まった。一三また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口
から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。一四これらは、し
るしを行う悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き、彼ら
を召集したが、それは、全能なる神の大いなる日に、戦いをするため
であった。一五（見よ、わたしは盗人のように来る。裸のままで歩か
ないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身
に着けている者は、さいわいである。）一六三つの霊は、ヘブル語で
ハルマゲドンという所に、王たちを召集した。
一七第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所

の中から、御座から出て、「事はすでに成った」と言った。一八する
と、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震が
あった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったよう
なもので、それほどに激しい地震であった。一九大いなる都は三つに
裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起し、
これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。二〇島々はみな
逃げ去り、山々は見えなくなった。二一また一タラントの重さほどの
大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害の
ゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである。

第一七章

一それから、七つの鉢を持つ七人の御使のひとりがきて、
わたしに語って言った、「さあ、きなさい。多くの水の上にすわって
いる大淫婦に対するさばきを、見せよう。二地の王たちはこの女と
姦淫を行い、地に住む人々はこの女の姦淫のぶどう酒に酔いしれて
いる」。三御使は、わたしを御霊に感じたまま、荒野へ連れて行った。
わたしは、そこでひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣

は神を汚すかずかずの名でおおわれ、また、それに七つの頭と十の角
とがあった。四この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身
を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を
手に持ち、五その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義で
あって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」
というのであった。六わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の
血に酔いしれているのを見た。
　この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。七すると、御使
はわたしに言った、「なぜそんなに驚くのか。この女の奥義と、女を
乗せている七つの頭と十の角のある獣の奥義とを、話してあげよう。
八あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知
れぬ所から上ってきて、ついには滅びに至るものである。地に住む者
のうち、世の初めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、
この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやし
むであろう。九ここに、知恵のある心が必要である。七つの頭は、こ

の女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。
一〇そのうちの五人はすでに倒れ、ひとりは今おり、もうひとりは、
まだきていない。それが来れば、しばらくの間だけおることになっ
ている。一一昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のもの
であるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには
滅びに至るものである。一二あなたの見た十の角は、十人の王のこと
であって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王
としての権威を受ける。一三彼らは心をひとつにしている。そして、
自分たちの力と権威とを獣に与える。一四彼らは小羊に戦いをいどん
でくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。ま
た、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を
得る」。
一五御使はまた、わたしに言った、「あなたの見た水、すなわち、淫婦
のすわっている所は、あらゆる民族、群衆、国民、国語である。一六あ
なたの見た十の角と獣とは、この淫婦を憎み、みじめな者にし、裸に

し、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。一七神は、御言が成就
する時まで、彼らの心の中に、御旨を行い、思いをひとつにし、彼ら
の支配権を獣に与える思いを持つようにされたからである。一八あな
たの見たかの女は、地の王たちを支配する大いなる都のことである」。

第一八章一この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威
を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明る
くされた。二彼は力強い声で叫んで言った、「倒れた、大いなるバビ
ロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣
くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった。三すべて
の国民は、彼女の姦淫に対する激しい怒りのぶどう酒を飲み、地の王
たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたく
によって富を得たからである」。

四わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、「わた
しの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、そ
の災害に巻き込まれないようにせよ。五彼女の罪は積り積って天に達

しており、神はその不義の行いを覚えておられる。六彼女がしたとお
りに彼女にし返し、そのしわざに応じて二倍に報復をし、彼女が混
ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。七彼女が自ら高ぶ
り、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦
しみと悲しみとを味わわせてやれ。彼女は心の中で『わたしは女王
の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを
知らない』と言っている。八それゆえ、さまざまの災害が、死と悲し
みとききんとが、一日のうちに彼女を襲い、そして、彼女は火で焼
かれてしまう。彼女をさばく主なる神は、力強いかたなのである。九
彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、
彼女が焼かれる火の煙を見て、彼女のために胸を打って泣き悲しみ、
一〇彼女の苦しみに恐れをいだき、遠くに立って言うであろう、『あ
あ、わざわいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわいだ。
おまえに対するさばきは、一瞬にしてきた』。一一また、地の商人た
ちも彼女のために泣き悲しむ。もはや、彼らの商品を買う者が、ひと

りもないからである。一二その商品は、金、銀、宝石、真珠、麻布、
紫布、絹、緋布、各種の香木、各種の象牙細工、高価な木材、銅、鉄、
大理石などの器、一三肉桂、香料、香、におい油、乳香、ぶどう酒、オ
リブ油、麦粉、麦、牛、羊、馬、車、奴隷、そして人身などである。一
四おまえの心の喜びであったくだものはなくなり、あらゆるはでな、
はなやかな物はおまえから消え去った。それらのものはもはや見ら
れない。一五これらの品々を売って、彼女から富を得た商人は、彼女
の苦しみに恐れをいだいて遠くに立ち、泣き悲しんで言う、一六『あ
あ、わざわいだ、麻布と紫布と緋布をまとい、金や宝石や真珠で身を
飾っていた大いなる都は、わざわいだ。一七これほどの富が、一瞬に
して無に帰してしまうとは』。また、すべての船長、航海者、水夫、す
べて海で働いている人たちは、遠くに立ち、一八彼女が焼かれる火の
煙を見て、叫んで言う、『これほどの大いなる都は、どこにあろう』。
一九彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、『ああ、わざわい
だ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおごりによって、海に舟を

持つすべての人が富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰して
しまった』。二〇天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。こ
の都について大いに喜べ。神は、あなたがたのために、この都をさば
かれたのである」。

二一すると、ひとりの力強い御使が、大きなひきうすのような石を
持ちあげ、それを海に投げ込んで言った、「大いなる都バビロンは、こ
のように激しく打ち倒され、そして、全く姿を消してしまう。二二ま
た、おまえの中では、立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッ
パを吹き鳴らす者の楽の音は全く聞かれず、あらゆる仕事の職人た
ちも全く姿を消し、また、ひきうすの音も、全く聞かれない。二三ま
た、おまえの中では、あかりもともされず、花婿、花嫁の声も聞か
れない。というのは、おまえの商人たちは地上で勢力を張る者とな
り、すべての国民はおまえのまじないでだまされ、二四また、預言者
や聖徒の血、さらに、地上で殺されたすべての者の血が、この都で流
されたからである」。

第一九章
一この後、わたしは天の大群衆が大声で唱えるような声を
聞いた、
「ハレルヤ、救と栄光と力とは、
われらの神のものであり、
二そのさばきは、真実で正しい。
神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばき、
神の僕たちの血の報復を
彼女になさったからである」。
三再び声があって、「ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限
りなく立ちのぼる」と言った。
四すると、二十四人の長老と四つの生
き物とがひれ伏し、御座にいます神を拝して言った、「アァメン、ハ
レルヤ」。
五その時、御座から声が出て言った、
「すべての神の僕たちよ、神をおそれる者たちよ。
小さき者も大いなる者も、
共に、われらの神をさんびせよ」。

六わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のよう
なものを聞いた。それはこう言った、
「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、
王なる支配者であられる。
七わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。
小羊の婚姻の時がきて、
花嫁はその用意をしたからである。
八彼女は、光り輝く、
汚れのない麻布の衣を着ることを許された。
この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。
九それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に
招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、
神の真実の言葉である」。一〇そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏
して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことを
してはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエス

のあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神
だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」。
一一またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬が
いた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義に
よってさばき、また、戦うかたである。一二その目は燃える炎であり、
その頭には多くの冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名
がその身にしるされていた。一三彼は血染めの衣をまとい、その名は
「神の言」と呼ばれた。一四そして、天の軍勢が、純白で、汚れのな
い麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。一五その口からは、
諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、鉄のつえをもっ
て諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む。
一六その着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名がし
るされていた。
一七また見ていると、ひとりの御使が太陽の中に立っていた。彼は、
中空を飛んでいるすべての鳥にむかって、大声で叫んだ、「さあ、神

の大宴会に集まってこい。一八そして、王たちの肉、将軍の肉、勇者
の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷
との肉、小さき者と大いなる者との肉をくらえ」。
一九なお見ていると、獣と地の王たちと彼らの軍勢とが集まり、馬
に乗っているかたとその軍勢とに対して、戦いをいどんだ。二〇しか
し、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を
受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕
えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火
の池に投げ込まれた。二一それ以外の者たちは、馬に乗っておられる
かたの口から出るつるぎで切り殺され、その肉を、すべての鳥が飽き
るまで食べた。

第二〇章一またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所
のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。二彼は、悪魔
でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の
間つなぎおき、三そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその

上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないよう
にしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになって
いた。
四また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわって
いた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスの
あかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにお
り、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けること
をしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千
年の間、支配した。五（それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生
きかえらなかった。）これが第一の復活である。六この第一の復活に
あずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人た
ちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストと
の祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。
七千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。八そして、
出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、

彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。九彼
らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都と
を包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。一
〇そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。
そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめ
られるのである。
一一また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたが
あった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。
一二また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前
に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの
書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに
応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。一三
海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、
そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。一四それか
ら、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死であ

る。一五このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に
投げ込まれた。
第二一章一わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と
地とは消え去り、海もなくなってしまった。二また、聖なる都、新し
いエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえ
て、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。三また、御座から
大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が
人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、四人の
目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、
叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。
五すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべて
のものを新たにする」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉
は、信ずべきであり、まことである」。六そして、わたしに仰せられ
た、「事はすでに成った。わたしは、アルパでありオメガである。初
めであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価

なしに飲ませよう。七勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであ
ろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。八しかし、お
くびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、ま
じないをする者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄
の燃えている池が、彼らの受くべき報いである。これが第二の死で
ある」。
九最後の七つの災害が満ちている七つの鉢を持っていた七人の御使
のひとりがきて、わたしに語って言った、「さあ、きなさい。小羊の
妻なる花嫁を見せよう」。一〇この御使は、わたしを御霊に感じたま
ま、大きな高い山に連れて行き、聖都エルサレムが、神の栄光のうち
に、神のみもとを出て天から下って来るのを見せてくれた。一一その
都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。
一二それには大きな、高い城壁があって、十二の門があり、それらの
門には、十二の御使がおり、イスラエルの子らの十二部族の名が、そ
れに書いてあった。一三東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、

西に三つの門があった。一四また都の城壁には十二の土台があり、そ
れには小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。
一五わたしに語っていた者は、都とその門と城壁とを測るために、
金の測りざおを持っていた。一六都は方形であって、その長さと幅と
は同じである。彼がその測りざおで都を測ると、一万二千丁であっ
た。長さと幅と高さとは、いずれも同じである。一七また城壁を測る
と、百四十四キュビトであった。これは人間の、すなわち、御使の
尺度によるのである。一八城壁は碧玉で築かれ、都はすきとおったガ
ラスのような純金で造られていた。一九都の城壁の土台は、さまざま
な宝石で飾られていた。第一の土台は碧玉、第二はサファイヤ、第三
はめのう、第四は緑玉、二〇第五は縞めのう、第六は赤めのう、第七
はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十はひすい、第十
一は青玉、第十二は紫水晶であった。二一十二の門は十二の真珠で
あり、門はそれぞれ一つの真珠で造られ、都の大通りは、すきとおっ
たガラスのような純金であった。

二二わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主
なる神と小羊とが、その聖所なのである。二三都は、日や月がそれを
照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだから
である。二四諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの
光栄をそこに携えて来る。二五都の門は、終日、閉ざされることはな
い。そこには夜がないからである。二六人々は、諸国民の光栄とほま
れとをそこに携えて来る。二七しかし、汚れた者や、忌むべきこと及
び偽りを行う者は、その中に決してはいれない。はいれる者は、小羊
のいのちの書に名をしるされている者だけである。

第二二章

一御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川を
わたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、二都
の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十
二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいや
す。三のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座
は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、四御顔を仰ぎ見るのであ

る。彼らの額には、御名がしるされている。五夜は、もはやない。あ
かりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照らし、そして、彼ら
は世々限りなく支配する。
六彼はまた、わたしに言った、「これらの言葉は信ずべきであり、ま
ことである。預言者たちのたましいの神なる主は、すぐにも起るべ
きことをその僕たちに示そうとして、御使をつかわされたのである。
七見よ、わたしは、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、さ
いわいである」。
八これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。わたしが
見聞きした時、それらのことを示してくれた御使の足もとにひれ伏
して拝そうとすると、九彼は言った、「そのようなことをしてはいけ
ない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この
書の言葉を守る者たちと、同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しな
さい」。
一〇またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならな

い。時が近づいているからである。一一不義な者はさらに不義を行い、
汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖
なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。
一二「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれの
しわざに応じて報いよう。一三わたしはアルパであり、オメガである。
最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである。一四い
のちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいる
ために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである。一五犬ども、
まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拝む者、また、偽
りを好みかつこれを行う者はみな、外に出されている。
一六わたしイエスは、使をつかわして、諸教会のために、これらの
ことをあなたがたにあかしした。わたしは、ダビデの若枝また子孫
であり、輝く明けの明星である」。
一七御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「き
たりませ」と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。い

のちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい。
一八この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは
警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この
書に書かれている災害を加えられる。一九また、もしこの預言の書の
言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書
かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。
二〇これらのことをあかしするかたが仰せになる、「しかり、わた
しはすぐに来る」。アァメン、主イエスよ、きたりませ。
二一主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。